無限にして無窮なる旅人

八神カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限にして無窮なる旅人

【Ｎコード】
Ｎ９０４３Ｌ

【作者名】
八神カイト

【あらすじ】
其は何ぞ？

其は時と次元の狭間を旅する者。

其は宇宙の救世主。

其は世界の破壊者。

其は……【無限にして無窮なる旅人】也。

プロローグ

とある閑静な住宅街。真夜中に、それは突如起こった。
無色のドーム型のナニカが、とある場所を基点にし、徐々に広がりその一角を侵した。そして、その中（セカイ）からはあらゆる音が消え去った。

その無音のセカイ。その宙空に唐突に歪みが生じ、空間が縦に裂けた。裂け目は徐々に拡がり、真円を描いてその成長を留め、成人男性が優に通れる程の大きさになった。

その真円は、まるで何かを振るい落とすかの様に震え始めた。
果たして、その無音の筈のセカイから、何か人の声の様なものが聞こえる。

「……ぅわぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！！！」　ドダッ！
ダッ！　ガッ！　ズシャァァァ！！！「…ってぇ……」

真円の中から出て来たモノ（人）は、まるでギャグマンガの様に地面を派手に転がり、仰向けに寝そべった。
数秒の後、ユラリと立ち上がり自身を吐き出した真円に向かって、怒鳴り出した。

「……てめぇ…毎度毎度、巫山戯（ふざけ）んな！！！！！」
『くっくっく……まぁ、よいではないか…どうせ傷一つ無いのだろう？』
「そういう問題じゃねぇだろうが！！！」
『フン…いつも好き勝手にしてくれてる礼だ。それぐらい構うまい？』
「構うわ！！！ドアホウ！！！！！」

『ハッハッハッハ』
「……テメェ……やっぱり消滅させてやる！！！！！」
『お恐い恐い、消される前にお暇するとしよう……では、又時が来たらな』　ヒュパッ
「あっ！てめぇっ！おいっ！マテコラこの野郎！！逃げんな！！！」

そう言うと、真円の中に居たナニモノカはドーム型のナニカと共に、消え去った。
その瞬間、ヒュ～という風の音と共に辺りに音が戻って来た。

「…チクショウ……にゃろうめぇ…」
と、恨み節を言いながら虚空を睨んでいると、どこからともなく声が聞こえて来た。

（大丈夫？カイト兄ちゃん？）
「…ああ、鋼牙か。大丈夫だよ。」
（全く、私たちのマスターを何だと思ってんのかしらね？）
（細けぇ事は気にすんなよ、水薙。いつもの事だろ？）
（紅蓮、五月蠅い！あんたには聞いてないわよ！！）
「まぁまぁ。…あいつも言ってる様にいつもの事だしな。気にすんなよ、水薙。」
（…でも、ますたぁ……）
（うんうん！あれはいつもの「つうかぎれい」でしょ？それに、カイト兄ちゃんも何だかんだ言って楽しんでるんだし。ね？水薙お姉ちゃん）
（鋼牙…ハァ…分かったわよ……）

（宜しいですか？カイト様）
「ああ、済まない龍斗。何か…いや、何処か解ったかい？」
（はい。ここは海鳴市です。）

「…そうか…又か……はぁ…で、今はいつだ？」
（所謂、【無印】の前ですね。）
「ま・た・か……これで何度目だ？」
（お聞きに成りますか？）　キュピーン
「…いや、いい……やめてくれ」
（そうですか…それではこれから如何なさいますか？）
「聞くまでもないだろう？…それこそいつも通りさ。」

「さて、今は朝までばれない様に寝てるか。…じゃあ、みんな今回も宜しくな。」
（（（（（はい。我等が主。お休みなさいませ。）））））
“ギャ～オ”
「ああ、お休み。みんな。」

そういうと、その人影は何処ともなく消え去った。辺りには、夜の街の音のみが静かに響いていた……。

邂逅（前書き）

初めまして。八神カイトと申します。
自己紹介文にも書きましたが、これは、私の妄想駄々漏れ自己満足主人公最強な小説擬きです。それでも、構わないと仰られる方はどうぞ拙筆を御堪能下さい。

邂逅

海鳴市。その図書館で一人の少女が悪戦苦闘していた。その少女は車椅子に乗っており、自分では届かない所の本を取ろうと必死になっていた。その場所は司書のいるカウンターからは死角になっており、いつもは助けてくれる筈の司書さんも気付く事は無かった。

「よいしょっ……後…もう…ちょっ…あっ！？」　　ガシッ！

本を取る事に夢中になっていたその少女は、自分の状態に気付かず、故に車輪が滑り、前のめりに倒れてしまった。少女は自身に訪れるであろう衝撃に備えて、瞬時に目を瞑り覚悟した。

しかし、一向にその衝撃が来ず、不思議に思った少女は目を開けてみた。

そこには、自分を抱き抱えている男の人がいた。

（…はぁぁ……格好良い人やなぁ……）

少女は、自分を助けてくれた人の顔を、思わずマジマジと見つめてしまっていた。

黒髪黒目で、何処から如何見ても十中八九、『日本人だ』と答えられる容姿ではあるが、何故か不思議と惹き付けられる。そんな雰囲気を醸し出していた。その男の人に声を掛けられるまで、少女は身蕩れていた。

「大丈夫？何処も怪我してない？」

「……へ？…あっ、だ、大丈夫れすっ…か、噛んでもうた……」

「…ぷっ……クスクス…」

「…笑わんといて下さい…恥ずかしいんやから……」

「ゴメンゴメン。つい、余りにも可愛くて…ね。」
／／／かぁっ「……も、もうっ…何かその台詞言い慣れてる気がします／／／」
「……クスクスクス」
「もうっ／／／いつまで笑ってるんや！！」

その後、何とはなしに仲良くなった二人はそれとなく身の上話をしていた。

「へぇ……旅人さんしてるんですか…。」
「うん。色んな事を体験してみたくてね。御陰で今はとても充実してるよ。」
「そうなんですか。…でもそれって要は只のニートですよね？」
「うぐぅ…い、痛いところを的確に突いてくるね？はやてちゃん…。流石漫才師……」
「まだ、漫才師ちゃいます！でもご家族が良く許してくれましたね？」
「あはは（まだ…なんだ…。）……いや家族には許可は取ってないんだ。既に先立たれてしまってね。一応天涯孤独の身なんだ。」
「え？……そうなんですか？わたしと同じですね。わたしも独り身なんです。」
「…そうなんだ……やっぱ独りは寂しいね…。」
「はい…あ、でも通ってる病院の石田医師（せんせい）は優しくしてくれますし、毎月お金を送ってくれてるお父さんの友達もいてくれますから、大丈夫ですよ？」
「……そうか。良かったね、皆優しい人で。」
「うん！」

そんな話をしている内に、夕方になってしまい、二人は一緒に図書

館を出、途次話を続けた。
「この後、カイトさんはどうするんですか？」
「んー…取り敢えず、今は文無しなんで日雇いのバイト辺りを探すかなぁと思ってる。」
「なんや、ニートやなくてプータローやったんか……って文無し！？え？！じゃ、じゃぁ今晩どないするんですか？！ご飯は？寝床は？！」
「ん？まぁ、稼げなければどっか人目に付かない所で野宿…かな？ご飯は別に食べなくても一週間は水だけでも生きていけるしね。」
「あかん！そんなのあかんです！！そんな不健康な生活しとったら！！！」
「いや、まぁねぇ……でもしょうがないさ。こういう人生を選んだのは自分だし。今までも何とか生きて来れたんだしね。何とかなるさ。」
「せやから、それがあかんゆうてるんです！！……むむむ、よしこうしましょう。家に泊めてあげます。部屋なら沢山余ってますし。それなら問題ないでしょう？」

……え？

「……は？いやいや問題大有りでしょう？！見ず知らずの赤の他人を家に上げる所か、泊めるとか何考えてんの？大丈夫？正気？頭どこかで打ってない？」
「…何気に毒舌ですね……大丈夫です。何処も打ってません。カイトさんなら大丈夫だってわたしの勘が言ってるんです。だから大丈夫です。」
「いやいや。だからそれ何の根拠にもなってないからね？」
「ええったらええんです！！家主のわたしがいってるんですから！
……それとも、あれですか？もしかしてカイトさんは、わたしみたいな美少女が射程圏内とか？そうゆー人ですか？」

「……はやてちゃん？もしかして喧嘩売ってるのかな……？」
「売ってるのは喧嘩やのうて、恩義です。じゃ、決定でいいですね？」
「……ハァ……分かったよ。俺の負けだ。じゃぁ、遠慮無く御世話になるよ。」
「うん。宜しい。初めからそう言ってればええんです。」

「ここが私の家です。どうぞ遠慮無く上がって下さい。」
「へぇ…こりゃまた大きい一軒家だな。」
「今からご飯作りますけど、何か食べたい物とかありますか？」
「いや、世話になる身だからね。贅沢は言わないよ。楽しみにしてる。……只、グリーンピースだけは絶対に入れないでくれ……頼む。」
「……くすくす…案外子供っぽいんですね？分かりました。」

はやての料理はとても美味しかったとだけ言っておこう。

「じゃぁ、何処でも好きな部屋使って下さい。」
「有難う。恩に着るよ、本当に。」
「はい。じゃ、お休みなさい。」
「…ああ、お休み。はやてちゃん。良い夢を。」

ｓｉｄｅ：カイトの寝室
「……」
（マスター、今の所順調ですね？）

「……ああ、そうだな水薙。……？何不貞腐れてるんだ？」
（…不貞腐れてなんかいませんよ……フン）
「不貞腐れてんじゃねえか……」
（気にすんなって、相棒。どうせいつもの嫉妬だろ。）
（紅蓮！五月蠅い！！）
（おお、おっかねぇおっかねぇ。）
「余り揶揄ってやるなよ？紅蓮。」
（へいへい。）

（ねぇねぇ、カイト兄ちゃん。）
「…ん？何？鋼牙。」
（僕達の出番マダー？）
「んー……そうだなぁ…今回は早めに出とくか？差し当たっては闇の書のバグをフルボッコする時にでも…さ。」
（え？！本当に！？やったぁ！！また黄宇（こう）お姉ちゃんに会える～！！！）
「……クスクス。まぁその時まで楽しみに…な。」
（うん！！！）

彼等の歓談が終わり、さてもう寝るか、という時にはやての寝室から叫び声が聞こえ、押っ取り刀で駆けつけるが、どうやら悪夢に魘（うな）されていた様だ。ほっとしたのも束の間。尋常ではない魘され方に、いそいではやてを揺り動かした。

「はやて！！はやて！！！」
「うぁぁぁぁぁああああ……ぁ、カイト…さん？」
「大丈夫？！はやてちゃん！？酷く魘されてたぞ？」
「……カイトさん…カイトさん…カイトさん…」
「…はやてちゃん……大丈夫だよ、はやてちゃん。俺はここにい

る。何処にも行かないよ。ずっとここにいる。だから…もう大丈夫だ。…」

「…カイトさん…カイ…ト……さ……スゥスゥ」

「…寝たか。……もう大丈夫だよ、はやて。…もう、君に不幸は訪れさせない。俺が君を守るから。…だから、今はゆっくりとお休み。愛(はやて)しい人。」

…窓から差し込んだ月明かりが、二人のいる部屋を優しく照らす。まるで、全てを包み込む慈母の様に優しく……。

……彼の…いや彼等の旅は、今また始まったばかりだ……。

「で、ほんまにロリコンなん？」
「んなワケあるか！！！」
「なら、ペド？」
「何でやねん！ちゃうわ、アホウ！！！！！」
（でも、マスター昔…）
（シャラップ！！！！！水薙！！！余計なことは言うなよ！？）

兄妹（前書き）

既に、現時点（１９：００）で、もう３５０人程の方が見て下さったそうで、本当に有難う御座います。
今日の投稿はこれで終わりです。ではごゆっくりお楽しみ下さい。

兄妹

ｓｉｄｅ：はやて

チュンチュン　チュンチュン

小鳥が鳴いてる……朝になった様だ。

温い微睡(まどろ)みの中、何故こんなにも温かいのだろうと些か不思議に思ったはやては、何となく目を開けてみた。

「…〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッッッ……」

声を出さなかった自分を誉めてあげたい。何故ここに彼がいるのだろう？何故同じ布団で寝てるのだろう？何故朝一に見たモノが彼のドアップ顔なのだろう？……心臓に悪いにも程がある。……そして、何故自分は彼の服を握り締めているのだろう？何故……

「なんで、こんなに温かいんやろう？」……何故か、一滴涙が溢れ落ちた。

幾分か落ち着いた彼女は、何時まで寝てるんだろう？と思い乍らも、良い機会だから。折角だから。と、何が良い機会で折角なのかは自分でも解らないが、マジマジと昨日からの同居人の顔を観賞する事にした。

「はぁ…ほんまに格好ええなぁ……」

もしかして、もしかしなくても自分はとてもおいしい体験をしてるんじゃないだろうか？と考えながらじっくりと続きを堪能する事に……は出来なかった。

「何時まで人の寝顔を見てるんだ？はやてちゃん。」

ｓｉｄｅ：カイト

朝が来た。又、今日もいつもと変わらぬ朝が来た…と繰り言をそれとなく考えていたら、何か悲鳴の様な、でもそうでもないような声らしきものが聞こえて来た。

……ああ、そういえばいつも最初はそうだったっけ……と、いかん、まだ寝惚けてるなと頭の片隅で考えていると視線を感じた。それは不快な物ではなく、目の前から感じるのがありありと判ったので、放っておいたが、一向に止む気配が無い。そろそろお腹も空いてきたので、声を掛けてみた。……少し悪戯心を発揮しながら。

「何時まで人の寝顔を見てるんだ？はやてちゃん。」

ｓｉｄｅ：三人称

あの後、真っ赤になって慌てふためく可愛い少女を堪能しながら、宥めるのに優に四半刻は過ぎていた。

お姫様抱っこにも抵抗していたみたいだが、無駄だと覚ると大人しくなり、小さな声で「……お願いします」と真っ赤な顔で頼まれた。

そうこうしている内に、朝食が出来上がり、食べ乍ら今日の予定等を二人で話し合っていた。

「はやてちゃんは何か予定か、したい事とかある？」

「いえ、今日は特にこれといって有りませんよ。カイトさんこそ何

かしたい事は有りませんか？」
「う～ん……したい事といってもなぁ…俺昨日この街に着いたばかりなんで良くこの街のこと知らないんだよなぁ。」
「そういえばそうでしたね……すっかり忘れてました。ほんなら、今日は海鳴市の観光案内にしましょうか？」
「うん、そうだね。頼めるかい？」
「はい！任せて下さい！！」

意気揚々とガッツポーズをとっている少女を微笑ましく見乍ら、朝食の片付けを手伝っているとはやてが唐突にポツリと呟いた。
「……あ、そうか…まるで兄ちゃんみたいに思えたからなんや……。」
「ん？はやてちゃんは俺に兄ちゃんになって欲しいのかい？」
「…へ？き、聞こえてたんですか？！い、いやそんなこと頼めませんて！あ、いやでもカイトさんが嫌なワケとちゃいますよ！？寧ろお願いしたいというか何というかその……て、ああ～～～何喋ってるんや私は～～～？！？！？！」

器用に車椅子に乗った儘、ｏｒｚをするはやてに苦笑しながら
「で、結局はやてちゃんは俺に兄ちゃんになって欲しいのかな？それともなって欲しくないのかな？」
「……ぅぅ～～～カイトさんさえよければ……そのぉ……お願いします。」
「クスクス…了解。但し、一つだけ条件がある。」
「何ですか？条件って……ハッ…もしや私の若い体が目当てで…」
「何でやねん！？ちゃうゆうたやろ？！てか、幾ら何でも若すぎるわ！！！」
「……何で私の真似しとるんです？ていうか、その発言、微妙に危ないですよ？」
「……はぁ…真似じゃないって…。条件ってのはだな。呼び方だ

よ。」
「呼び方？」
「そう、呼び方。兄ちゃんになるってーのに、いつまでも敬語やさんづけはおかしいだろ？はやて。」
「え…あ…う、うん……カイト兄。」
「うん。宜しい。じゃあ、支度しよう？俺も着替えて来るからさ。」
「うん！！」

そして、兄妹でのデート（？）中、昼になり、どの店で食べようか話しながら歩き回ってみると、ふと、とある喫茶店が目に入った。
「はやて、あそこの喫茶店なんかはどうかな？何となく俺の勘が美味しそうって告げてるんだが。」
「じゃあ、そこにしよ、カイト兄♪…でも休日の昼間やし、混んでるんとちゃう？」
「う～ん…かもね。でも取り敢えず行ってみようよ。ね？」
「せやね。行ってみないと、こっからじゃ判らへんもん。」

カランカラン　「いらっしゃ～い」
何故か、近くにある小学校の制服に身を包んだ、可愛らしい少女のお出迎えを受けた。

「…二人だけど席空いてる？」
「はい！…お二人様ご案内で～す♪」

「カイト兄……」
「うん？何？はやて。」
「今、あの娘にでれてた。」
「いやいやいや？何故に君は俺の性癖を、そっちの方向に持って行

こうとするのかな？するのかな？」
「二回言わんといて。……だってあの娘、可愛かったやんか…。」
「確かに可愛かったけど、俺にとってはやて以上に可愛い娘はいないよ？」

注文した料理が来るまで、撃沈して真っ赤になってるはやてを、しっかりと堪能していたカイトであった。

「ハァ～……本当に美味しかったぁ～…。」
「うん……ほんまに美味しかった……。」
「クスクス…はやて、必死にレシピ聞いてたね？」
「だって、ほんまに美味しかったんやもん……わたしもあんな美味しい料理作りたい。」
「十二分に俺ははやての料理を堪能してるよ？」
「それでもや。わたしの料理人としての血が騒ぐんや！！！」
「（漫才師じゃなかったのか……）そっか…じゃあ、楽しみにしてるよ。」
「うん。待っててね、カイト兄。」

「はやてちゃん、燃えてるの。」
「あ、なのはちゃん！ほんまに美味しかったよ！！」
「有難うなの！でも私が作ったんじゃないけど…にゃはは。」
「それなら、なのはちゃんも今から頑張ればええんや！お嫁さん修行や！！」
「ふぇぇ、お、お嫁さん／／／」

…高町なのは。喫茶『翠屋（みどりや）』の看板娘。同い年の女の子が車椅子に乗っているのが、気になったらしく、食べている最中に声を掛けて

きた。姉で有る美由希に怒られながらも、その場ではやてと友達になっていた。

（カイト様）
（まだだ…まだ彼女は只の一般人だ。恐らく今夜辺り…だ。）
（じゃあ、私が見てきてあげる。）
（ああ、頼んだ、水薙。但し……）
（解ってるわよ。今回は手を出すな。見守るだけにしろ。…でしょ？）
（ああ。でも不測の事態が起こったら、頼むぞ。）
（了解。マスター♪）

「じゃ、そろそろお暇しようか？はやて。」
「は～い。…ほな、またな？なのはちゃん。」
「うん！またなの！はやてちゃん！カイトさん！」
「ああ。御馳走様。」
「バイバ～イ。」

時間は飛び、その日の夜。少女は運命的な出会いをする。そう…。
それは彼女の人生を全て決める程の運命……。

そして、その少女から遠く離れたビルの上。その暗闇の中に、漆黒よりも尚昏い服を着た、少女とも大人の女性とも見える人が彼女等を睥睨していた。その影は、事が終わると何処ともなく消え去った。

宿泊（前書き）

現時刻（００：００）
ＰＶ３，３５３アクセス　　ユニーク７５５人

……る？

ど、どどどういうこここととととと？あ、あああれか？なのはブランドってこここういいうううここことかかか？
驚きと震えの余り日本語が今一話せませんが、本当に有難う御座います！！！！！
では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

宿泊

今日も今日とて気持ちの良い快晴。
先日から義理の兄妹になった、とある二人は、今日も仲良く朝の挨拶を交わしていた。

「お早う。はやて。」
「…お早うさん。カイト兄。」

今日はいつもと違い、何処かぎこちない…というより、そわそわしている。
……まぁ、無理もない。冥王（なのは）と友達になった日から、殆ど毎日の様に翠屋に遊びにいっており、今ではもうすっかり常連さんになっている。そして、今はやてがこうなっている原因とは…またもや遊びに行った昨日（ある日）の事……

「あら、はやてちゃん達♪いらっしゃい。」
「桃子さん♪今日もお邪魔します。」
「お邪魔します」

……当然、はやてと常に一緒にいる俺も常連さんだ。……まぁ、常連さんになるまでに色々あったが……。主に士郎（この世界最強レベル）さんとか、恭也（シスコン）とかの、手合わせという名のいじめ（フルボッコ）とかとかとか…ｅｔｃ．まぁ、それは別の機会に話そうと思う。……話す気になれば…のハナシだが。

「今はなのは達、部屋にいるわよ？アリサちゃんやすずかちゃん達も一緒にね♪」

「あ、そうですか。ありがとうございます♪」

ガチャッ　「なのはちゃ～ん、又遊びに来たで～。」
「あ！はやてちゃん！！」
「はやて、いらっしゃい。」
「はやてちゃん♪」

上から、はやて・なのは・アリサ・すずか　の順だ。
…そう。上の会話で判る通り、既に二人とも友達だ。…まぁ、毎日通ってれば当然か…。
……そして、淫獣(ユーノ)モドキも、なのはに捕まっていた。
何故か、俺の方を向いて助けを求める視線を出しているが、ここは敢えて心を鬼にして無視している。……俺にはそっち(ショタコン)の趣味は無い。

「カイト兄？また何か変な事考えてるん？」
「いや…。世の無常について、ちょっとな…。」
「「「？？？」」」

少女達には少し難し過ぎた様だ。…閑話休題(それはさておき)。

「で、カイト兄。良いかな？」
「…ん？ゴメン、聞いてなかったよ。どうしたの？」
「…んもぅ、カイト兄ぃ…。」
「にゃはは…。」
「だからね？アタシ達、皆ではやての家に泊まりに行こうって話になったの。で、カイトさんは構わないかって聞いてるのよ。」
「ああ、それなら構わないよ。寧ろこちらからお願いしたいぐらいだ。」

「どうして？カイトさん？」
「クスッ…こう見えてはやては、結構寂しがり屋なんでね。今でも毎晩一緒にねｔ「わーっわーっわーっ」…ということだよ。」
「「なるほど」」
「…ぅぅぅ～っ……カイト兄のバカッ！」
「クスクスクス……」

ということがあり、昨夜からずっとそわそわしているのだ。…幸いちゃんと眠れたらしく、最悪（ねすごす）なことにはならずに済んだが。

「ね、ねぇ…カイト兄ぃ…。」
「ん？何？はやて。」
「なのはちゃん達、まだかなぁ…。」
「……うん…まだだと思うよ。」

因みにこれでかれこれ、１７回目の遣り取りである。八神家（我が家）に来た時のテンションが少々心配になってきた今日この頃。
１８回目の会話を始めようかと身構えていた時、ベルがなった。…と同時にドアが開いた。……どんだけ急いでんねん。でも、そんなとこも可愛いな。流石俺の嫁。…等と微笑んでいると、なのは達を居間に連れてきた。

「「「おじゃましま～す♪」」」
「いらっしゃい。ようこそ、八神家へ。」
「あ～！！カイト兄！それ私の台詞やで！！！」

……で、結局危惧した通り、終始笑顔が止まなかった。……め

がっさ可愛い…。　ウォッホン

そして、はやては今、大興奮している。ちゃんと今日眠れるか心配である。何故か。坊ｙ…いまは自重しておこう。
そのワケは、夕食を食べ終わった後の歓談中のことである。

「ねぇねぇ、はやてちゃん。」
「ん？何？なのはちゃん。」
「あのね？今度皆で温泉に行こうって話に成ってるんだけど…。」
「皆で温泉？皆って何人で行くつもりなんや？」
「えとね？わたしの家族に（＋５）、アリサちゃんに（＋１）、すずかちゃんの家族に（＋２）、ユーノ君（＋１？）♪」
「ほぇ～えらい大人数やなぁ…。」
「うん。それでね？はやてちゃん達（＋２）も来てくれないかなって誘っておいでって♪」
「え！私達も！？」
「うん！」
「え、えぇぇ～っと…いいかなぁ…カイト兄ぃ…。」　チラッ＋コテン
「……ああ、勿論いいに決まってるさ。こちらこそ宜しく頼むよ。なのはちゃん。」
「「「「やったぁ～！！！」」」」（計１０人＋１…１１人？）

（グフッ……はやて…そのコンボは凶悪過ぎるぜ……はやて、恐ろしい子ッ…。）
（お～～い、相棒～、戻って来～～～い。）
（……ハッ…大丈夫だよ、紅蓮。俺もこれから、頑張っていくから。）
（いやいや、全っ然大丈夫じゃねぇぞ？！おい、相棒！マジで戻ってこい、相棒！！？）

皆がはしゃぎ疲れて寝てしまったその夜。
（いや、本当に良かった。相棒が正気に戻ってくれてよ。）
「いや、だから俺は正気だったって言ってるじゃないか。只、はやての余りの可愛さに心の中で身悶えしてただけなんだからさ。」
（（（（嘘だッ！！！）））））
「……ノリノリだね？お前等。」
（とまぁ、戯れ言はここまでにするとしまして。…カイト様。温泉ということは……。）
「ああ、解ってる。…はやて達を痴漢から守る手筈を今の内に整えて置かねばな…。」
（おい！やっぱり戻ってねぇぞ！どうするよ！龍斗！水薙！姉貴を喚ぶか？！？！）
（はぁ……あなたが落ち着きなさい、紅蓮。…私達ではカイト様の許可が無ければ、黄宇姉さんは喚べないでしょう？…カイト様も余りお戯れになりませぬよう…。）
「…ヘイヘイ。……あの娘達の事だろう？」
（はい。どう致しますか？）
「…今回も見送りだ。」
（……宜しいのですか？確かに少々変わって来てはいますが、大筋は同じですが…。）
「…ああ。今回、手を出すのはあの石ころ（ジュエルシード）が暴走する時だ。その前に介入する。」

（畏まりました。…彼女の威嚇はどうなさいますか？）
「……そうだな……お前達に任せてもいいか？」

（え？私達？…ってことは…。）
「ああ、温泉に着いたら、それとなくばれない様に全員に出て貰う。構わないだろう？黄宇。」
（……）
「楽しみにしてるってさ。」
（やったぁーーー！！！！！黄宇お姉ちゃんに会える～♪♪）
「クスクス……あ、でもその代わり、二つ約束だ。」
（約束？…んーと、マスターとお子様厳禁な事をしないとか？）
「…それは当たり前だ。……一つ、旅館や他の客に迷惑を掛けない事。」
（…まぁ、そりゃ当然だよな…。）
（ええ。カイト様に御迷惑をお掛けするワケには参りませんからね。…後、一つとは？）

「…俺と一切関わらない事だ。」
（え！？何で！？そんなのヤダよ！カイト兄ちゃん！！）
「…済まん。まだ俺とお前達が知り合いだとばれる訳にはいかないんだ。……今、この段階でばれてしまうと、はやてを救うのに支障が出る。それだけは避けねばならん。」
（…ええ、そうですね。故にあの猫姉妹（ロッテとアリア）にも好きにさせているのですから）
「…ああ。悪いな、鋼牙。ここは聞き分けてくれ…。」
（……うん、分かった。）
「…有難う。その分、黄宇にたくさん甘えな？」
（…うん！！）

「随分、話こんじまったな。さぁ、夜ももう遅い。今日は寝るとしよう。お休み、みんな。」

（（お休みなさい）♪）（お休み♪カイト兄ちゃん）（当日、寝坊すんなよ？燃やして起こすからな。）

「おお、恐い恐い。じゃぁ、お休み。程ほどにな？紅蓮。」

その日も月夜だった。まるでこれから出会う少女達の幸せを願うかの様に、日の光を優しく照り返していた。

温泉（前書き）

現時刻（１３：４５）
ＰＶ：５６８５アクセス　ユニーク：１２５６人
……
……
……る？
……なのはって人気高いんだなぁ……。
…で、では今話も拙筆をお楽しみ下さい。

温泉

小鳥の鳴き声も聞こえない様な、早朝。誰かに揺り起こされた様に感じたカイトは、まだ重い瞼を開けてみた。

「お早う！！カイト兄！！！」

……矢張り、はやてだった。どうやら、寝付けはしたが、興奮の余り早く目が覚めてしまった様だ。
無理もない。今日は、初めて（？）出来た友達と、その家族達との大人数での温泉旅行当日なのだから。

「ああ、お早う。はやて。」

まだ薄暗い内から、ウキウキワクワク(wktk)している俺の嫁(はやて)を堪能していると、朝っぱらからでかい声が響いてきた。……カイトにだけ。

（よう！！！やっと起きたか！！！相棒！！！！！）
（…～～～～っっっぐ、紅蓮か…；朝っぱらからでけぇ声を出すなよ……）
（え～～～…だって折角の温泉だよ？僕も楽しみで眠れなかったよ！）
（うんうん♪早く黄宇姉と一緒にお風呂に入りたいもんね♪）
（……お前等なぁ……年甲斐も無くそんな子供みたいにはしゃ

ぐなよ……まぁ鋼牙なら解らないでも無いが…。）
（……申し訳ありません…カイト様…私も、実は…。）
（龍斗（ブルータス）お前もか。……ハァァ…俺の従者（家族）達はどうしていつもこう……。）

等と、彼等やはやてと取り留めの無い事を、話している内に丁度良い時間になり、集合場所である『喫茶翠屋』へと向かった。

ｓｉｄｅ：翠屋の前

「お早う御座います。桃子さん、士郎さん。」
「お早うございます♪」
「あら♪お早う。カイト君、はやてちゃん。」
「ああ、お早う。二人とも。」
「今日は、宜しくお願いします。」
「いや、こちらこそ、有難う。来てくれて。」

と、大人の社交辞令を交わしている間。

「はやてちゃん、お早うなの♪」
「あ、なのはちゃん♪お早う♪」
「お早う。はやて。」
「お早うさん。アリサ♪」
「お早う。はやてちゃん。」
「お早う。すずかちゃん♪」

と、子供達はキャッキャウフフしていた。

「カイト。」
「ああ、恭也。お早う。」

「ああ、お早う。カイト。今日も早速向こうに着いたら、勝負するぞ。」
「何の勝負だよ…このバトルジャンキー……今日ぐらいはやめようぜ？」
「駄目だ。勝ち逃げは許さないぞ！」
「いや、勝ち逃げって……お前どう頑張ったって、まだまだ俺に勝てないだろうが……」
「…それはいいね。僕も混ぜて貰おうかな。」
「士郎さん……。」「父さん…。」
「……はぁ……この戦闘民族共は……ｏｒｚで、何で勝負するんです？…卓球でしたらしませんよ？俺は。」
「ん？何故だい？」
「……苦手なんですよ…ああいう細々しいスポーツは……。」

と、戦闘狂達が（俺は違うぞ！！！）……戦闘狂達が勝負方法で話し合っている内に、そろそろ時間がやばくなってきたので、早速旅館に向かう事になった。

「「「「着いた（の）ー！！！」」」」
「あらあら、うふふ。」

……猫の社長でも飼ってそうだな…等と阿呆な事を考えながら、各自、荷物を部屋に下ろし、夕飯まで自由時間ということに相成ったので、散歩する事にした。

鬱蒼（うっそう）と生い茂る木々の中。散策している様には見えない男性が一人、森の奥で何かを確認するかの様に、立ち止まっていた。

「……ここらでいいだろう。」

そう男が言うと、彼を取り囲むかの様に四本…いや、五本の光柱が立ち上った。

ある柱は風が渦巻き。
ある柱は岩が迫り出し。
ある柱は炎が吹き出し。
ある柱は水が溢れ。
ある柱は土が盛り上がり。

それらの光柱が収まると、その中から人らしき、モノ影が五つ顕現（あらわれた）した。

その影達は自身を喚び出した人影に、何事かを幾つか確認すると、まるで姉弟（家族）の様に仲良く姿を消した。

夕飯をしっかり堪能した一行は、皆で風呂に浸かろうと、ぞろぞろと大人数で向かった。

ｓｉｄｅ：男風呂

「……ふぅ……。」

「……はぁ。」
「…うん。良い湯加減だ。」
と、同じ様な感想を漏らしていると、恭也がまじまじとカイトの体を見ている。
「……恭也？俺にそっちの趣味はないぞ？」
「…？……！阿呆！！俺にだって無い！！！」
「…なら、何だってんだ？人の体をじろじろ見るなんてさ……。」
「……何故だ？」
「……は？何が？」
「何故、俺達はお前に勝てない？…一般成人男性程度の普通の筋肉しかない。少なくとも闘う者としての筋肉の付き方じゃない。なのに何故、俺達はお前に勝てない？いや、何故一太刀も浴びせられない？本気で殺っているにも拘わらず…だ。何故だ？」
「ああ、僕と恭也と美由希の三人掛かりでも、全くのノーダメージだ。……僕はこれでも強い方だと多少の自負はある。しかし、君にだけは一向に勝てる気がしない。君の強さは何処から来ている？……いや、そもそも君はナニモノだ？」
「……」
静寂が辺りを包み込む…。その静寂を破るかの様にポツリと彼が呟いた。
「……ナニモノか、か……。」
……その時、彼の雰囲気が変わった。全てを見透かす様な…それ

でいて、全てを包み込むかの様な、得体の知れない神々しさを醸し出していた……。

「っっっ……。」
「くっ……。」

「ナニモノでもないさ…。言ったろう？…俺は只の迷い子（旅人）だよ……。」

その時、タイミングを見計らった様に風呂のドアが開かれ、三人は思わずそちらの方を向いていた。
そして、入ってきたその闖入者を見て三人共固まった。

一人は、紅髪灼眼で如何にも野性的な風貌ではあるが、何処か知性を思わせる様な雰囲気を纏っていた。又、その体躯は筋骨隆々ではあるが、所謂マッチョマンの類では無く、筋肉の付き方に全くの無駄が無い事が、素人目にも解る程であった。

又一人は、碧髪蒼眼で、何故か全く曇らない眼鏡を掛けており、ヒョロッとという程でもないが、余り鍛えられていない…だがしかし、無駄な脂肪もなく綺麗な筋肉が付いており、彼を見た人は皆一様に「文学青年だ」と答える容姿をしている。…本でも小脇に抱えていれば完璧であろう。

最後の一人は、白髪金眼で、如何にも活発そうな少年であった。恐らくなのは達と同じくらい……いや、下手をすれば彼女たちよりも、

幼いかもしれない年の頃。その所為か二人の美丈夫に甘えるかの様にべったりと引っ付いて離れない。

しかし、彼等の纏う雰囲気は常人のそれとはまるで次元の違うものであり、それに気圧（けお）されるかの様に二人と一人はいそいそと風呂場を後にした。

（あ、危ねぇ……済まん、助かったよ三人共。）
（いえ…呉々もお気をつけを…。）
（ああ…。）

ｓｉｄｅ：女風呂

「……」
「……」
「……」
「……どう？はやてちゃん？」
「うん……どうやら出て行っちゃった見たいや…。」
「そっかぁ…何か恋バナでも聞けるかと期待したんだけど……残念。」
「……ねぇ？」
「あ、はい。何ですか？忍さん？」
「…あなた達三人掛かりでも勝てないって…本当？」
「はい、本当ですよ。一度として攻撃を当てられた事は有りませんし。」
「どんな化け物よ……それって……。」

「あはは……。」

どうやら、女性陣は男風呂に聞き耳を立てていた様だ。……普通逆じゃなかろうか？

そんな事でキャッキャウフフしていると、こちらの風呂場のドアも開き、二人程入ってきた。

つい、興味を惹かれてそちらを向いた一行は、入ってきた二人に完全に見惚れていた。

一人は、綺麗な黒い長髪に青い眼。そして出るとこは出、引っ込む所は引っ込んでいる、抜群のプロポーションであった。又、彼女の容姿が、未だ少女の様な、それでいて、もう大人の女性の様な、それらの中間頃の面立ちをしており、それが彼女の妖艶さを惹き出す要因にもなっていた。

又一人は、こちらも綺麗な黄色い長髪に金眼。そしてもう一人の女性をパワーアップしたかの様な容姿をしており、とある者を知っている人が見れば思わず声を掛けるであろう。「何でコスプレしてるんだ？烈火（シグナム）の将」と。

そんな彼女等に見惚れていると、子供達が少し逆上（のぼ）せてしまったようなので、早目に上がることにした。

カコーン　カコーン　カコーン

……只今卓球大会の真っ最中である。因みにカイトは、先の宣言通り参加しておらず、白熱している試合を眺めているだけである。

……彼女等と会話をしながら…。

（で、どうだった？水薙、黄宇？）

（うん、いつも通り突っ掛かってきたから、ちょっと魔力を浴びせてお帰り願ったわよ♪）

（…彼女にばれなかっただろうな？）

（その心配は御座いません。我が主。あのケモノ（アルフ）にのみ照射致しましたので。）

（そうか……。この息抜き（卓球）が終われば、彼女達の戦いが、又、始まるのだな……。）

（はい……。本当に宜しいのですか？我が主。）

（ああ。龍斗にも言った通り、今はまだ静観する…。）

（…では、例の暴走時に…ということで宜しいですか？）

（ああ、そうだ。……だが、いつ抑止力（アホウども）が来るか判らんからな…今晩も頼む。）

（でしたらば、私が参りましょう。）

（頼めるか？龍斗。）

（はい。では。）

その夜。未だ覚悟無き少女達と、悲しみを秘めた少女達の闘いが又、幕を開ける。

……彼女達を包み込む月明かりの下で。

その闘いの最中、木々の中から、蒼い人影が彼女達を監視していた。
それは敗れた少女が、慌てて宿に戻るのを見届けた後、静かに消えていった。
その夜、木々のざわめきが止むことは無かった。…まるで彼女達の悲しみに呼応するが如く……いつまでも…いつまでも……哭いていた…。

温泉（後書き）

私は、『とらいあんぐるハート3』は、知りませんので、美由希と忍の、口調やそれぞれへの呼び方等は、存知ません。
ですので、何か違和感などがありましたら、遠慮無く仰って下さると大変有り難いです。

魔法（前書き）

現時刻（１９：１５）
ＰＶ：８１５６アクセス　ユニーク：１６３４人
……うん。……何だろうね？これは？今日中に一万アクセス行くんじゃない？なのはブランドってもの凄いね？
今日の投稿はこれで終わりです。
では拙筆を、ごゆるりとお楽しみ下さい。

魔法

……時が来てしまった。平穏というものが破られるのは、本当にあっという間だ…。

誰かが言っていた。平和とは、革命の為の準備段階だと…。それは所詮、仮初め。嵐の前の静けさであると。

……よかろう。ならば俺は、その平和を維持しよう。平穏を取り戻して見せよう。例え、万人に……いや、億人に偽善者の極みだ！！と誹られようとも、己を貫いて見せよう。

……俺は、俺自身と、俺の従者（かぞく）と、愛（はやて）しい人の為に、己が全てを掛けよう……。それが、俺が俺自身に懸けた、永遠（ちか）に変わらぬ願い（い）なのだから……。

……今日は、余り快適な目覚めでは無かった…。無理もない…。
今日ははやてに俺の事を、一部とはいえ、話さなければいけないのだから……。
…恐らく、はやては俺を拒絶したりはしないだろう…。いや、寧ろ喜んでくれるかもしれない……。
だが、今までがそうだったからといって、今度もそうとは限らない……。
その僅か1%が…恐い。……情けない事だ。

（…大丈夫？カイト兄ちゃん？）
（……ああ、大丈夫だよ。鋼牙。……何度経験しても、慣れない……いや、拭い切れんな……。）
（マスター……。）
（…フッ……大丈夫だよ、水薙。…俺にはお前達がついてくれてる…。だから、俺は今でも生きていられるし、旅人でもいられたんだから。）
（（（（（（……我等が主の幸せこそが、我等の幸せ。我等が約を違える事も、御側を離れる事も決して有りません…。……どうか、御自愛下さいませ。））））））

“ギャーオ　グワーァ　フシューッ　ウギャアゥ”
（……有難う。…みんな。さぁ、湿っぽい話は、これで終わりだ。後は、覚悟を決めるとしよう。）

「お早う。はやて。」
「あ、お早うさん。カイト兄。今日は、起きるの遅いんやね？」
「ああ。…はやて……食べ終わったら、少し俺の話を聞いてくれるか？」
「う、うん…。ええけど……。」

「御馳走様。はやて。今日も美味しかったよ。」
「はい。御粗末様♪…で、話って何なん？」
「ああ…はやて。はやては気付いていたとは思うが、俺には隠していた事が沢山ある。」
「…うん。何となく、何かあるんやろうなぁとは思ってたけどな。…で、教えてくれるん？」
「ああ。全てとはまだいかないが、幾つかは教えてあげられる。」
「うん。それでもええよ。教えて？カイト兄のこと。」
「うん……俺はね、はやて…。」

「魔法使いなんだ。」

「……へ？」
「ああ、呆然とするのも解る。…何言ってんのこいつ？頭おかしいんとちゃう？と思っているのも解ってる。でも本当の事なんだ、はやて。」
「……カイト兄ぃ？…嘘付くんならもっとマシな嘘を付きぃや？」
「いや、残念乍ら、嘘じゃない。これぱかりは信じて貰わなきゃ始まらないんだ。」
「……確かに嘘を付いてる目やないけど……ほんなら証拠見せて？」
「……解った。…但し今から見せるモノや、俺が魔法を使えるって事は誰にも内緒だ。…そう、親友達（なのはちゃん）にもだ。」
「……う、うん。分かった…。せやから、早く見せて？♪」

はやての好奇心の前には、今は無駄だと覚ったのか、溜息を一つ付き、彼は呪文（キー）を唱えた。

「ファースト・イグニッション」

すると、彼の周りに、赤・青・緑・黄土色・発光しているモノ・白・黒　の七色の球体が浮かび上がった。そして、彼の周りをゆっくりと上下に動きながら、回り出した。

「……か、カイト兄？その…それは…何？」

「だから、魔法。順番に属性を言うと、赤＝炎・青＝水・緑＝風・黄土色＝土・発光しているモノ＝電気・白＝光・黒＝闇　になる。」

「……」↑口をアングリ開けて言葉に成らずパクパクしている。

……可愛い……。

「まず、質問は後。で、はやてはどれがいい？」

「……へ？」

「だから、どの色が欲しい？」

「……ぇぇと…その……し、白と黒かなぁ……。」

「…了解。じゃぁ、もっと面白いものを見せてあげるよ♪」

そういうと、まだカイトの周りを回っていた球体達は、白と黒の球体が彼の目の前に来ると動きを止めた。そして、その二つの球体の前にカイトが手を翳(かざ)し、又、別の呪文(キー)を唱えた。

「ソード・オブ・マナ　　エレメントソード　　ライト&ダーク」

すると、その球状の物体は徐々に形を変え、双剣へと姿を変えた。
だが、まだ終わりではなかった。

「ドラゴン・オブ・マナ　　ミニエレメントドラゴン　ライト&ダーク」

球状の物体が、剣に変化した事に驚いている、はやてを後目に、その双剣がまたもや変化し始めた。
双剣が徐々に縮んでいき、じっと見ていると、段々朧気(おぼろげ)な輪郭がはっきりとし出した。
最終的には、はやての手の平の上に乗れるぐらいの大きさにまで縮んだ。
そして、その形とは……西洋龍とでも言えばいいのだろうか?それに、体の細長い東洋龍?がお供でくっついている。
““クワァァァ～～～””↑大きな欠伸

「……あの～…カイト兄ぃ？これは、一体？」
「ん？だから、さっきの剣だよ？正確には　球体→剣→龍　と変化したんだ。これが、俺の魔法。」

魔法（エレメント・マスター）の体現者

「まぁ、その一部だけどね？」
「……はぁぁぁぁぁ～～～～～……。」
どうやら、驚きの余り感歎の声しか出ないようだ……めがっさ可愛い……チョベリグ。
（……ますたぁ……古過ぎ……。）
（うっさい！！！俺の中ではまだ現役じゃい！！？）

で。はやてが落ち着いた頃。
「それで、カイト兄は、どうして、今私に教えてくれたん？」
と、四匹の龍を、頭や肩、手の平に載せながら聞いてきた。
「ああ、実はな？今晩俺は、ちょっと野暮用があって出掛けてくる。恐らく今日中には帰って来られないと思うんだ。だから、その間はやてが寂しくないようにと思って…な。」
「……必ず帰ってきてな？カイト兄ぃ？」

「ああ、勿論だ。はやて、約束するよ。必ずはやての元に帰ってくると。だって八神家は俺達の家で、はやては俺の妹なんだから…。」
「……うん。」
「……ああ、そうだ。そいつらの名前を教えておくよ。」

「光の西洋龍＝ライト　光の東洋龍＝光龍　闇の西洋龍＝ダーク闇の東洋龍＝闇竜　っていうんだ。宜しくしてやってくれよ?はやて。」
「……うん。」
「……よし!はやて!今日は、はやてのしたいことは何でもしてやるぞ!!何かあるかい?」
「……して欲しい事?……ほ、ほんなら、その…よ、夜まで抱き締めてて欲しいかなぁ……なんて。」
「……ああ、おやすい御用だよ…。はやて…。」

その後、身動ぎ一つせず抱き合っていた兄妹に、注いでいた光も斜陽になり、そろそろ時間となった。

「じゃぁ、行ってきます。はやて。」
「…うん、行ってらっしゃい。カイト兄ぃ。」

妹は、兄の姿が見えなくなっても尚、見送り続け。
兄は、妹の為に自身に出来る最善を尽くす為に。
そして今は、目の前で泣いている少女を救う為に。
彼は介入する。……今までも、あらゆる世界でそうしてきたように。

今夜も月は綺麗に輝いている。…自身の穴だらけ(みにくい)の姿を晒しながら……輝き続けている。

介入（前書き）

現時刻（０１：３５）
ＰＶ：１０，９３９アクセス　ユニーク：２，０６７人
昨日の時点で、既に一万アクセス・二千人に読んで頂いたそうです。
本当に有難う御座います。……まさか、たった二日で一万アクセスに到達するとは夢にも思いませんでした。
改めて感謝致します。……何か、特別企画や、番外編などを書いた方が良いのでしょうか？
求められているかどうかも、微妙ですが……；；；；
では、今話も拙作をお楽しみ下さい。
徹夜などなさいませんよう……皆様、御体にお気を付け下さい。

介入

…ジュエルシード。それは、強大な力を持つ蒼い石。それ一つで次元断層を引き起こす程の力を持つ石。
そして、今夜も少女達はその石を求める。

ある者は、その危険性を知るが故に。
又、ある者は、母の愛を求める為に。
…己が身が傷付く事も厭(いと)わずに、少女達は今日もぶつかり合う……。

だがしかし、その夜からは、様相が異なり、彼女等の対立の構図は脆くも崩れる事となった。
そう……たった一人の得体の知れぬ人間の介入で……彼女等の思惑は全てが崩れ去ったのだ……。
其がもたらすは、幸か不幸か…。生か死か…。彼の者の介入により、真の物語が今、ここより始まる。

宵闇（よいやみ）の中を影が走っていた。それは、人の目には決して認識する事が出来ぬ程の速さで動き、数瞬の後に現場に辿り着いた。……そう。そこは、あの石（ジュエルシード）ころが暴走する処。

悲しい少女（フェイト）がボロボロに傷付く場所……。

「……まだ、少し早過ぎたか？」

何の音沙汰も無い街中で、一人物陰で佇んでいると、唐突に蒼く輝く石が現れた。
その後、結界が張られ少女達は矢張り、闘い始めた…。

その悲しい闘いの最中、ジュエルシードが暴走を始めた。慌てて駆け寄り、傷付きながらも暴走を、己が身で押さえ込もうとするフェイト……の姿を、本来ならば皆見ていた筈だ。……そう、その男が現れなければ……。

「…フレイム　　アムド」
その言葉と共に、物陰に潜んでいた者を光が包んだ。
その光に包まれた者は、ジュエルシードに駆け寄るフェイトより尚速く、その石(ジュエルシード)ころを掴んでいた。

ｓｉｄｅ：フェイト
「……え？」
…判らなかった。いつの間に現れたのか…。何故誰よりも、早く気付いた筈の、自分よりも先にその石(ジュエルシード)を掴んでいるのか…。……何故、その人（？）から、まるで自分を気遣っている様な雰囲気を感じるのか……解らなかった。

「…どいていろ。君には無理だ…。」
唐突に現れた人に、いきなりそんな事を言われても、当然納得出来る筈もない。
「なっ！そんなこと聞けません！！それより、そのジュエルシードを渡して下さい！！！」

「…断る。……黙って見ていろ。」
その反応も予測済みだった。力尽くで盗り返そうとデバイスを構え……られなかった。
ジュエルシードの暴走が、より激しくなったのだ。最早、彼には構っていられない。何とかしなければ…と、彼の持っているジュエルシードを見た儘、固まってしまった。自分の目を疑っていたのだ。
……なぜなら、暴走している筈のジュエルシードが、彼の手の中から、抜け出せずに藻掻(もが)いているのだから…。

ｓｉｄｅ：三人称
彼の姿は、煌々(こうこう)と明るい街中では、はっきりと見えた。
全身鎧とでも、いえばいいのだろうか?彼の体が、鎧で覆われていない処は無く、肝心の顔もフルフェイスで、面立ちの判別は不可能だった。
…その赤々とした全身鎧は、ジュエルシードの魔力の余波によって、翻っているマントですらも、例外無く朱かった。

…そうだ。ジュエルシードだ。あの次元すら断ち切る程の、魔力の暴走を片手で握っているだけで、押さえ込んでいるあの人間は何だ?……まさか、考えたくはないが、あのジュエルシード以上の、魔力を有しているというのだろうか?そんな人間がこの世にいるのだろうか?……いるとすれば、それは最早、人間とは呼べないのではないだろうか?……そもそも、それだけの魔力を持つ者がわざわざ出向いてまで、あの宝石を手に入れる理由とは何だろうか?……考え出したらとても恐ろしくなってしまった…。是非、聞かなくてはならないが、こちらの質問に答えてくれるだろうか?……
…疑問は尽きない。

だが、まずは認めなければならない。…この現実を。現に彼は片手で宝石(それ)を、押さえ込んでいるのだから。　……それが、今この場にいる四人の共通認識であった。

彼女等が逡巡(しゅんじゅん)している時、彼はジュエルシードに向かって、何事かを語り掛けていた。他に何の物音もしないその結界(なか)では、余り大きくない彼の声も良く聞こえていた。

「…聞こえているだろう？ジュエルシード(石ころ)。暴走を止めろ。」

だが、彼の声が聞こえているのか、いないのか、ジュエルシードは更に暴走し、放出する魔力を強めた。

流石に、少女達も迷ってる場合じゃないと思い、駆けつけ……られなかった…。

彼から放出された魔力が、ジュエルシードの比ではなかったからだ。ジュエルシードすら霞む程の、余りの強大なその魔力量に、全員がその場に釘付けになった。

「……聞こえなかったのか？俺は今すぐ暴走を止めろと言った(命じた)んだよ、…路傍の石(ジュエルシード)。」

その瞬間、まるで彼の言を畏れたかの様に、僅かに身動ぎしてその動きを止めた。

未だ、自分達の敵か味方か、判別しかねている少女達に向かって、魔力を抑えた彼の方から、声が掛けられた。

「なのは、フェイト。どちらでもいい。早くこの石ころを封印しろ。放っておけば、又暴走するぞ。」

何故、自分達の名前を知っているのか、疑問に思いながらも、その言葉を聞き、思わず慌てた二人は、同時に封印する事となった。

さて、このジュエルシードをどうしようかと、思わず四人で見合っていると、信じられない事態が起きた。

「封印が終わったか。……では、貴様等のジュエルシード諸共、戴こうか?」

そういうと、彼はアルフとユーノを一瞬で気絶させ、それに少女達が気付いた時には、既に自分達の首元に、何処からともなく取り出した、朱色の双剣が突き付けられていた。

「さあ、ジュエルシードを吐き出せ。レイジングハート、バルディッシュ。主を失いたくは無いだろう?」

数秒の逡巡の後、彼女等から全てのジュエルシードが、吐き出された。

「……確かに、全部だな…。……主思いのデバイスで良かった

な。」

そういうと、その場にある全てのジュエルシードと共に、何処ともなく消え去った。……呆然としている少女達と、気絶しているモノ達を残して。

「さて…ではこの儘、彼女の許へと向かうとするか…。　　パージ　　ライトニング　　アムド。」

……そう言うと、朱い鎧を脱ぎ去った彼は、光の迸る(ほとばし)鎧に着替え、彼方へと消えた。……そう、『時』の彼方へ……。

母娘（前書き）

現時刻（１６：００）
ＰＶ：１４，４３８アクセス　ユニーク：２，７２２人
皆様、本当に有難う御座います。
毎回、ニヤニヤしながら、アクセス解析を見させて頂いておりますw。
では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

母娘

『時の庭園』。悲しき少女（フェイト）の母である、プレシア・テスタロッサの住まう場所。
何者であろうとも侵入を拒む、その監獄（いえ）に唐突に、得体の知れぬ存在が転移（あらわれた）してきた。……それも、家（プレシア）の主の目の前に。

「…夜分の突然の訪問、失礼する。」
そう言ってきた者は、全身を稲光（いなびかり）が迸（ほとばし）る鎧に包まれ、顔の判別も出来なかった。……だが、その身の内から感じる強大過ぎる魔力は、何の予兆もなく、目の前に現れた事に驚いていた、大魔導師（プレシア）の頭を返って冷やすことと成った。

「……本当に失礼ね……あなた…何者？」
「…そんなことはどうでもいい。…取り敢えず、目先に信用して貰う為の手土産だ。……ほら、受け取れ。」
そう言うと、彼の後方に現れた、白い歪みが穴を開け、中からジュエルシードが出て来た。……そう、先程の少女（なのはとフェイト）達から、奪い盗って来たモノだ。

「…確かに本物ね……。これは有り難く頂くわ…。じゃぁ、消えなさい。」
そう彼女が言うと、とても弱っている体とは思えぬ魔力（ちから）で鞭を、目の前の男に叩き付けた。
確かな手応えに、屍を眺めようと思っていた彼女は少なからず、驚愕した。……まるで意に介せず、全くの無傷で平然と立っていた

のだ。
今、自分は全力で叩き付けたのだ。…自身より遙かに強大な、魔力保有者に一切の油断も容赦も無く、人一人を絶命させるには充分過ぎる程の、勢いと威力で打ったのだ……。なのに何故？幾ら自分の体が病魔に侵されているとはいえ、魔力まで劣っているとは思えない。……では、何故……？

困惑しているプレシアを余所に、彼は彼女に近づき話し掛け、彼女を更に混乱させた。
「……プレシア・テスタロッサ。管理局の贄（にえ）にされた者よ……貴様の病（のろい）を治してやる。」
「なっっっ！？何故あなたがそれを？！い、いえそれよりこの病気を治せるですって！！？」
「…ああ、治してやる。……但し、それには条件がある。」
「この病気を治せるのならば何でも良いわ！！早くその条件とやらを、話しなさい！！！」
「…貴様の娘。フェイト・テスタロッサを、アリシアと同様に娘として愛せ。」

「……何ですって？あの出来損ないの人形を……私の可愛いアリシアと同じ様に見ろ…ですって……。」
「…ああ、それが唯一絶対の条件だ。」
「……！！！巫山戯（ふざけ）ないで！！！！！あんなものと私のアリシアを同じ様に比べるだなんて……虫酸（むしず）が走るわ……っっ！！！！」
「…誰が比べろと言った…。……思い出せ、プレシア…。あの日の事を…。」

「…何？何を思い出せというの？！あの娘（アリシア）の事で忘れた事なんて一つも無いわ！！！今でも毎日、夢に見ない日は無いというのに！！！！」

「……いや、貴様は一つ忘れている。…最も忘れてはいけない、彼女（アリシア）との約束を…。」

「……何を言っているの？アリシアとの約束を、この私が忘れる事なんて有り得ない！！！！！……そう……あの子の好きな料理を作ってあげると言った事も…又、ピクニックに行こうと言った事も……次の長い休暇をあの子とずっと一緒に過ごすと言った事も……全部…ゼンブ！！！……だというのに…あなたは！！！！！その私に、思い出せですって！！！！！！忘れているですって！！！！！！！巫山戯ないで！！！！！！！！！！」

「…巫山戯てなどいない。……思い出せ、プレシア。そのピクニックに行った時の事だ…。その時の会話を……。彼女は何が欲しいと言っていた？…何故、貴様はそれを聞いて赤面していた？……思い出せ…母（プレシア）よ。」

ｓｉｄｅ：プレシア

そう。あの日…。私に、ようやっと出来た休暇の日。その日に私は、アリシアと共に、料理をバスケットに詰め、とある野原にピクニックに来ていた。

「ママのお料理、やっぱりおいしい♪」

「ふふっ、有難うアリシア。」

そう。それは何処にでもある風景。母娘の微笑ましい良くある光景。

「ねぇ、ママ…今度のお休みはいつ出るの？」
「…御免なさい、アリシア。又、暫くお仕事が忙しくなりそうなの……。次はいつになるか…まだ判らないの…。」
「……大丈夫だよ、ママ。私、ずっと良い子で待ってるから…だから早く帰って来てね？」
「アリシア……ありがとう。……そうだ！アリシア。何か欲しいものはある？何でもいいわよ？」
「欲しいもの？…うーんとね…えーとね……妹が欲しい！！」
「え？／／／い、妹？／／／」
「うん！！そうしたら、うんと可愛がってあげるんだ！！！」

「…思い出したか？プレシア・テスタロッサ？」
思考の淵に沈んでた意識を、その男の声が引き戻した。
「ええ、思い出したわ。でもそれが何だっていうの？……何も変わりはしない…。」
「…まだ解らないのか？…あの娘（アリシア）と彼女（フェイト）が違うのは当たり前なんだ。…姉妹なのだから。」
「…姉妹……ですって…？」
「…そうだ、姉妹だ。…故に、利き手も違う。…癖も違う。…思考も違う。…当然だろう？」
「……あの人形が…私の可愛いアリシアの妹ですって…！！……冗談ではないわ！！！」

「…そうだ。これは冗談ではない…。……では、聞こう。…彼女（フェイト）の

存在を知ったならば、あの子は何と言うかな?…貴様の知っている優しいアリシアは…彼女の事を何と言う?」

「……そ…それ……は……。」

「……そう。間違いなく『妹』と呼ぶだろうな…。…そして、その待ち望んで止まなかった『妹』を…自分の母が人形等と呼び、虐待していると知ったならば…どう思うだろうな?」

「……あ……あ……。」

「……何より、数多の妹の命を使い捨てて、生き返させられたとして……果たして、彼女がそれで喜ぶと思うか?……あの優しいアリシアが、そんな事で喜ぶと本気で思っているのか!!!答えろ!!!!プレシア・テスタロッサ!!!!!!」

「……ぅぅぅうあああああああああああああああああ!!!!!!」

side:三人称

「…落ち着いたか。」

「……ええ、有難う。」

「…そうか。…では治療を始めるぞ。」

「…まって、矢張り、治療は良いわ…。」

「…何故だ?…フェイトに会わせる顔が無い…等という下らん理由ならば聞かんぞ?」

「……だって!…今更どんな顔をして会えば良いと言うの?!!……もう私は…!あの子を人形とは見れない……!!」

「…それこそ俺の知ったことではない。…では治療を開始する。…水薙。」

「イエス、マスター。」

そう、彼が人の名前の様なものを呟くと、何処からともなく一人の女性が現れた。全身を、真っ黒な服に包んだその女は、プレシアの頭上に手を翳した。

「では、治療を開始致します、マスター。……動かないで下さい…プレシア・テスタロッサ。」

「ま、待って！私はそんなこと望んでないわ！？」

「黙りなさい！！！！！……私はあなたを殺したくて堪らないのよ…？…引き裂いて…噛み千切って…陵辱（はずかしめ）して…貪り尽（むさぼ）くしてやりたいのよ……？…マスターからの命が無ければ…今すぐにでも……！！！……黙って、マスターの言う事に従いなさい…。」

「……っっっっっ！！！」

本能に、魂に直接刻みつけられる様な、根源的な恐怖には、死を覚悟した彼女にも、抗うことは出来なかった。

長い様な、短い様な数秒の後、彼女が呟いた。

「……終わりました、マスター。」

そう言うと、彼女の掌上に浮いていた黒い球体が、跡形もなく消え去った。

その瞬間、プレシアは体がとても軽くなったと感じた。此程、爽快になったのは、一体いつ以来だろうか？……どうやら、本当に我が身を蝕んでいた病魔は、取り除かれた様だ。

「…そうか。…では、戻るぞ。」
「……ハッ……ま、待って…！！」
「…何だ？…俺の方には、もう用は無いのだが…。」
「……何故？…何故、私を助けてくれたの？」
「…勘違いをするな。…貴様を助けたかった訳ではない。…それが、あの娘（フェイト）の為になるからだ…。」
「……フフフッ……そう…解ったわ……そういう事にしておいてあげる。」
「……では、もう行くぞ。」
「…ええ。…最後に一つだけ教えて。……あなたの名前を。」
「……ＺＥＲＯ（ゼロ）…だ。」

そう言うと、光に身を包んだ彼（ＺＥＲＯ）と、彼に傅いていた女性（水薙）は、来た時同様に、唐突に姿を消した。

その後、誰も居なくなった部屋で、妄執者（もうしゅうしゃ）から母へと帰った者が、何を考えていたのか……知るものは誰もいない……。

母娘（後書き）

次回は、あのＫＹが登場致します。
…どう、調教（いじめ）しようかなぁ～♪

番外・壹（前書き）

現時刻（２３：００）
ＰＶ：１７，１９６アクセス　ユニーク：３，１２０人
…毎度、有難う御座います。……何故か軽く聞こえてしまいますね…。
ですが、私の嘘偽らざる気持ちです。大感謝致します。
今回はサブタイトル通り、番外編です。
では、皆様、私の妄想（キャラ）をお楽しみ下さいｗｗ

番外・壱

遅れ馳せ乍ら……

１５，０００アクセス&３，０００人突破感謝記念雑談！！！！！

カイト「という訳で、まさかの特別企画を請け負わされたワケだが……どうしよう？」

龍斗「ここは無難に、私達のプロフィールの紹介辺りで宜しいのでは無いでしょうか？」

カイト「んじゃ、それで。……てか、知りたい奴なんているのか？」

鋼牙「…カイト兄ちゃん……それは思っててても、言っちゃダメだと思うよ？」

龍斗「……（はぁ…今度、人間が使用している胃薬でも、試してみましょうか…。）では、御紹介致します。」

八神カイト

男　肉体年齢：２５歳前後　黒髪黒目　１８０ｃｍ　５８ｋｇ　一人称：俺　イメージｃｖ：石田　彰

はやてＬＯＶＥ至上主義。だが、他の異世界にも、嫁や愛人がたくさんいる。但し、自分から手を出すのは、必ず一つの世界に付き一人だけ。誘われた場合はその限りに非ず。
勿論、長年共にしている、水薙や黄宇とも肉体関係を持っており、はやてに負けじ劣らず、愛している。

『魔法（エレメント）の体現者（マスター）』
始動呪文（キー）：ファースト・イグニッション　※〇＝属性　△＝変化後名（ｅｘ：ガン・ソード・アロー・ドラゴン）
1，七属性の球体を　球→武器→龍　へと変化させ、使役する。
　その際の呪文（キー）は、「△△・オブ・マナ　　エレメント△△〇〇」
　はやてに見せた時に、剣にしたのは、その方が最も効率が良いから。
　因みに、球→龍へと飛ばす事も出来るが、五倍程魔力を喰う。
　無詠唱でも、タイムラグ無く使役できるが、魔力を三倍程喰う。
　……つまり、無詠唱で球→龍にした場合、計十五倍の魔力を消費する。
　龍形態にし、離れて使役していても、その属性を使うのに何ら制限はない。
2，武器形態以外にも、風→翼（ウイング）、闇→収納（ブラックホール）、光→取出（ホワイトホール）の様に、応用も可。
　ジュエルシードを出したのもそれ。
3，形態を問わず、呪文（キー）を唱える事で、全身を覆う鎧と化す。
　呪文（キー）は、「〇〇　　鎧化（アムド）」　脱ぐ時の呪文（キー）は、「解放（パージ）」
　無詠唱は不可。
　一属性に限らず、二属性・三属性と組み合わせられる。
　最強形態時は、七属性を同時に纏う。呪文（キー）は、「第一形態（アインス）　完全鎧化（フルアムド）」

4，『ファースト』の名で解る通り、まだ第一段階。更に上がある。

龍斗「…取り敢えずこの様なところでしょうか？」

カイト「……改めて見ると、万能だな…俺……。それにあの石（ジュエル）ころ（シード）以上の魔力だろう？……中々良いな。」

龍斗「ええ。それに、カイト様自身の特性は、防御能力特化型ですからね。」

紅蓮「おまけに、『攻撃能力は序でに取り敢えず付けといた』とか、言いやがったからな。……俺に喧嘩売ってんのかと思ったぜ。」（ぬかし）

カイト「いや、実際に喧嘩吹っ掛けて来た奴が何言ってやがる。……まぁ、久々に楽しめたから良いがな。」

紅蓮「……にしても、相棒自身の紹介が女の事だけってーのはどういうこった？しかも、ヤリ○ンかよ。他にも色々あんだろう？」

水薙「別にいいじゃない♪私達が愛されている事さえ解ればね♪♪」

龍斗「……はぁ…他のカイト様の情報を流しますと、所謂ネタバレになってしまいますので。」

紅蓮「……限度があるだろ？」

カイト「まぁまぁ、良いじゃねえか、別に。俺は有象無象に何て言われようと気にしねぇよ。大切な者達さえ、解ってくれているならな。」

紅蓮「……まぁ、相棒がいいならいいけどよ…。」

龍斗「…では、次は私達の紹介ですね。…まずは、私から…ですか？……解りました。…では、こちらをどうぞ。」

龍斗
男　肉体年齢：１９～２３歳　碧髪蒼眼　１７５ｃｍ　５０ｋｇ
一人称：私　イメージｃｖ：保志　総一郎

常に眼鏡を掛けており、分厚そうな本を抱えている。その本は、能力発動に必要な物……ではなく、只の記憶媒体。カイトと出会ってからの、異世界の旅路の全てを記録してある。その膨大な量は龍斗にしか捌けない。
基本的に敬語で話す。黄宇がいない時の、基本的な纏め役。……
胃薬いる？

風や空気といった気体と、草花や木といった植物の、全ての声を聞き、操る事が出来る。補助能力特化型。

龍斗達、五人は一応姉弟という事になっている。因みに、龍斗は、二番目・長男
それぞれの呼び方は　カイト様・黄宇姉さん・水薙・紅蓮・鋼牙

カイト「……え？…これだけ？」

龍斗「はい。…これ以上の情報を流しては、私達の正体がばれてしまいますので。」

水薙「でも、賢(さと)い人なら、私達の名前や、容姿、能力でばればれじゃない？」

龍斗「……それでもです。」

水薙「ま、いいわ。お次はっと…鋼牙ね。」

鋼牙

男の子　肉体年齢：６～９歳　白髪金眼　１３０ｃｍ　３０ｋｇ

一人称：僕　イメージｃｖ：大谷　育江

甘えん坊。何にでもすぐ興味を持つ。一番好きな人はカイト。一番好きな事は、カイトに抱き締めて頭を撫でて貰う事。嫌いな人はカイトの敵。一番嫌な事は、カイトに嫌われる事。カイト御一行のマスコット。

岩石や砂礫等や、ダイヤモンド等の鉱石と話が出来、龍斗達同様に、それらを操れる。速度特化型。

カイトがジュエルシードに語り掛けてたのは、その能力に依るもの。

同様に、カイトは他の四人の能力も使える。

又、ヒヒイロカネやオリハルコンといった伝説上のレアメタルをも、生成できる。世界によっては、それで財を成した事も多々ある。

因みに末弟。…って言わなくても解るか。

それぞれの呼び方は　カイト兄ちゃん・黄宇お姉ちゃん・龍斗兄ちゃん・水薙お姉ちゃん・紅蓮兄ちゃん

水薙「……鋼牙自身の紹介なのに、マスターの事だけってのは、どうなのよ？」

鋼牙「カイト兄ちゃ～ん♪」　抱きっ

カイト「……まぁ、いいんじゃないか？」　ナデナデナデナデ

鋼牙「……エヘヘ～～～♪♪♪」

龍斗「…はぁ…では次の紹介と行きましょう。」

紅蓮「ああ…。っと次は俺様か。ほいよ。」

紅蓮

雄　肉体年齢：１８～２２歳　紅髪灼眼　１８８ｃｍ　６３ｋｇ

一人称：俺・俺様　イメージｃｖ：神奈　延年

戦闘好き。馬鹿でも、狂でもないところがミソ。『温泉』でも書いたが、一見野性的に見える。が、粗野な感じは一切無く、寧ろ人並みの知性を持った野獣の主、といった風情。

名前で解る通り、炎と語らい、操る事が出来る。それは、マグマとて例外ではない。攻撃能力特化型。紙装甲。とはいっても、ｅｘレベルの攻撃でなければ、傷一つ付かない。純粋な魔力量的な意味で。

因みに、四番目・次男

それぞれの呼び方は　相棒・姉貴・龍斗・水薙・鋼牙

水薙「何気に、紅蓮の一人称って初公開じゃなかったかしら？」

龍斗「ええ。まだ、本編では話してはいない筈です。」

紅蓮「…ちょっとマテ、オマエラ。俺の性別、一体どうなってやがる！？何だ『雄』ってよ！！？」

水薙「？それを言ったら鋼牙もじゃない。『男の子』って……可愛いからいいけど。」

龍斗「恐らく、野性的だからということでしょう。」

紅蓮「そういう問題じゃねぇだろ？！」

水薙「もう、うっさいわよ！紅蓮！！次は私の紹介なんだから、少しは静かにしてよね！！」

紅蓮「……納得いかねぇ…ＯＴＬ」

水薙

女　肉体年齢：１６～２１歳　黒長髪青眼　１６８ｃｍ　ヒ・ミ・ツ♪　一人称：私　イメージｃｖ：水谷　優子

ボン・キュッ・ボン。マスター至上主義。カイトの幸せが自分の幸せ。カイトの喜びが自分の喜び。カイトの悲しみは自分の悲しみ。カイトの怒りは自分の怒り。……もう一度言おう。カイト至上主義である。

水を筆頭に、あらゆる液体と心を通じ合わせ、自在に操れる。防御・回復特化型。

因みに、三番目・次女

それぞれの呼び方　マスター・黄宇姉・龍斗・紅蓮・鋼牙

紅蓮「……オイ。…テメェも鋼牙と殆ど変わんねぇじゃねぇか、水薙！！！」

水薙「まぁすたぁ～♪♪」　抱きっっ♪

カイト「……まぁ、キニスンナ、紅蓮。…禿げるぞ？」　ナデナデナデナデナデナデ

水薙「……えへへへへ～～～～～♪♪♪♪♪」

龍斗「……ハァァ～～……それでは…」

黄宇「ああ、最後は私だな。」

鋼牙「あ♪黄宇お姉ちゃ～ん♪♪」　ダッ　抱きっっっ♪

黄宇「よしよし♪良い子にしていたか？鋼牙。」　ガシッ　ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ

鋼牙「うん♪♪♪…えへへへへへ～～～～～～♪♪♪♪♪♪♪」

龍斗「…ハァ。…黄宇姉さん、余り甘やかされませんよう…。」

黄宇「まぁまぁ、良いではないか。……こんなに可愛いのだから…♪♪」　ナデ×２０～３０

鋼牙「えへへ（ｒｙ」

龍斗「……」

カイト「…りゅうと……構わんから紹介始めてくれ…。」

龍斗「……はい。…どうぞ。」

黄宇
女性　肉体年齢：２０～２４歳　黄長髪金眼　１７８ｃｍ　…死にたいのか？　一人称：私　イメージｃｖ：清水　香里

水薙を更に、一周り大きく、且つ引き締めた体型。……何処とは言わないが。…え？言ってるのと同じ？……気にしたら負けダヨ♪
性格は、某ピンクのポニーテールとクリソツ。それに、億単位での年数分の経験が加わり、達観……というより、冷静になって落ち着いた感じ。武を志し、より高みを目指す者には、率先して手伝い、成長していく様を見守るのが唯一の楽しみ。…但し、バトルジャンキーではない。

黄宇のみ、喚び出すのに条件がある。
１，四人を喚び出した後、改めて黄宇を喚ぶ。
２，五人同時に喚ぶ。但し、この場合、消費魔力は十倍必要。

大地の声を聞ける。…つまり、星の声を聞け、星の力を操れる。……あれ？生物勝てなくね？

主であるカイトは言うに及ばず、弟妹達も当然愛している。特に鋼牙を溺愛している。

お解りの通り、一番目・長女
それぞれの呼び方　我が主ｏｒ主殿・龍斗・水薙・紅蓮・鋼牙

黄宇「…あの、主殿…一部、何かおかしい所が……。」

カイト「…え?何処?……何処もおかしい所何てないよ?なぁ?みんな?」

「「「「イエス・マスター。」」」」

黄宇「…いえ…あの……もういいです。……後で、覚えていろ…お前達…。」

カイト「さて、取り敢えず、各自紹介は終わったが……この後どうする?」

龍斗「この儘、フェードアウトで宜しいのではないかと…。」

カイト「そうか…。では、又、この世界を救う旅に、舞い戻るとするか。」

「「「「「はい、我等が主の望みの儘に。」」」」」

番外・壹（後書き）

訂正：加藤　英美里→水谷　優子

水薙のイメージｃｖですが、単純に勘違いしていました。済みません。

接触（前書き）

現時刻（１３：００）
ＰＶ：２０，３８９アクセス　ユニーク：３，６５０人
早くも２０，０００アクセス突破致しました。
皆様、この様な駄文を読んで下さり、本当に有難う御座います。
感謝の念に堪えません。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

接触

次元航行艦『アースラ』。その艦内は騒然としていた。…無理もない。
次元震を観測し、現場に急行しようと思った刹那、更に強大な魔力反応をキャッチしたのだから。……しかも、その次元震のすぐ近くで。
…非常事態と判断した、リンディ・ハラオウン提督は、次に巨大な魔力反応が起こった場合に備え、いつでも赴ける様に準備させていた。…そう。『アースラの秘密兵器』である、彼女の息子を。

ｓｉｄｅ：フェイト
プレシアがＺＥＲＯに矯正された数日後。大空を、とある主従が飛んでいた。

「…にしても、あの時は本当に驚いたよ……。一体どうしちまったんだい？あのプレシアは？」
「……アルフ。母さんの事、悪く言わないでって言ったでしょ？……でも、私も驚いた。」

私達は、この数日同じ事を話していた。それは、未だ名を知らぬ彼に、あの少女と共に、ジュエルシードを全て奪われてしまった、翌日の事。
何とか、集めたジュエルシードを全て盗られてしまい、その謝罪と報告に『時の庭園』へ行こうとしていた。…お土産持参で。

「…本当にそんなの食べるのかねぇ？」

「…ダメだよ、アルフ。こういうのは気持ちが大切なんだから。…これなら、きっと母さんも喜んでくれる。」
そう言う私に、心配そうな視線を投げ掛けてくれる、アルフの気持ちも解るけど、でも私は母さんを信じているから…。そんな意味を込めてアルフに笑顔(ほほえむ)を向けると、溜息を付かれた。

「…到着っと。」
「…じゃぁ、行こっか、アルフ。」
「ああ…。本当に大丈夫かい？何かあったら、すぐアタシを呼びなよ？フェイト…。」
「…もう…。心配性だなぁ…アルフは…。大丈夫だよ。」
…そう、大丈夫。…だって、私の母さんなんだから。どんな事をされても大丈夫。
…そう私が考えているのが判ったのか、アルフは今にも泣きそうな顔をしていた。…ゴメンね…アルフ。
そう心の中で、謝ると母さんの居る部屋へと向かった。

「……そう。じゃぁ、今回は一個も、ジュエルシードを持って来れなかった…というのね……。」
「……は、はい…。……ごめんなさい。」
矢張り怒られてしまった…。当然だ。母さんの期待に応えられなかったのだから。…私が悪いのだから。
そう思い、いつもの母さんの鞭打(オシオキ)ちに備えて、カラダを強ばらせていると、思いも掛けない言葉を聞いた。

「…そう。…まぁ、いいわ。あなた達が持っていたジュエルシード

は、彼から全て貰ったから…。」
…驚いた。母さんの口振りから、恐らくあの彼（ZERO）がここに来たのだろう。…だが、どうやって?…あの人は母さんの知り合いなのだろうか?…だとしたら、何故私のジュエルシードまで、奪っていったのだろうか?…思わず聞いてみた。

「…あ、あの……母さん。…あの人とは…お知り合い……ですか?」
…だけど母さんから、返ってきた言葉にはもっと驚いた。
「……いいえ、違うわ。…初対面よ…。昨夜突然現れて、これ（ジュエルシード）を渡して唐突にいなくなったのよ…。」
と、溜息を付きながら教えてくれた。…答えてくれた事は嬉しかったが…彼は何がしたかったのだろう?解らず首を捻っていると、母さんも何処か違う意味で疲れている様に見えた。
そうしていると、母さんの方から声を掛けて来てくれた。

「…フェイト。…その手に持っているものは何…?」
「…あ、あの…これは……母さんが好きかと思って……。」
私はそう言って、買って来たケーキの箱を、母さんに手渡そうとした。
その後の、母さんの行動は…とても不思議なものだった。

その時、母さんは私が手渡そうとしたケーキを受け取らず、…何故か溜息を一つ付いた後、指を鳴らした。
すると、私の後ろ…この部屋の真ん中辺りに、どちらも白い、丸いテーブルが一つと椅子が三つ現れた。
何故、そんなものを取り出したのか解らなかった私は、首を傾げた後、母さんに聞こうと振り返った。
「…あ、あの…母さん…。……これは…?」

その後の、母さんの言葉には、今までで一番驚いた……。

「……アルフも呼んできなさい。……勿体ないでしょう…？」

……え？…暫く、母さんの言っている意味が解らなかった。…でもゆっくり心の中で反芻していると、段々意味が解っていき、ようやっと理解した時には、母さんは既に席に着いていた。…私は笑みを抑えられなかった。

「……うん！！！！！」

私は急いでアルフを呼びに行った。…その時泣いていた所為で、アルフが誤解して母さんに跳び掛かろうとしていた。……危なかった。

そんな事を思い出していると、ジュエルシードの反応があった。

「…！フェイト！！」

「…うん。判ってる。…行くよ、アルフ。」

…待ってて、母さん。…今度は私の手で残りのジュエルシードを全部、集めてみせるから。……そうしたら、又誉めてくれるよね？

…又、いつもの優しい母さんに戻ってくれるよね…？

ｓｉｄｅ：三人称

とある公園。まだ、日も高いというのに、まるで白昼夢を見てるかのようだった。
ある木が一本、蒼く光ったと思ったら、突然巨大化し辺り(コンクリート)に根を生やし始めたのだ。
幸か不幸か、早めに結界を布けた御陰で、余り騒ぎ立てる者はいないだろう。
…そして、矢張りあの少女達は、またもや鉢合わせてしまったようだ。
しかし、今回は暴走を恐れてか、四人で協力するようだ。
……その結界(なか)に招かれざるモノがいる事にも気付かずに。

「撃ち抜いて！　ディバイィーン！」『Ｂｕｓｔｅｒ』
「…貫け、豪雷！」『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

……どうやら、封印も無事済んだようだ。それを確認すると今まで隠れていた者は彼女等の前に姿を現した。…真っ白な鎧を身に纏って。

「…封印、ご苦労。…では、そいつも頂こうか。」

…全員気付かなかった。…何時からそこにいたのか誰にも判らなかったのだ。
「…（ギリッ…！）……またあんたかいっ！！！」
「…又、俺だが、何か問題でもあるか？…アルフ。」
「おおありだっ！！！そもそも、あんたは誰だい？！何でアタシ達の名前を知っている？！！」

「…答える義理はない。」
「このっ……！！」
「それよりも、ジュエルシードを返して下さい！あれはとても危険なものなんです！！」
「…返せ？…まるで管理局だな…。…貴様のものでもあるまい？…ユーノ・スクライア。…そもそも、あの程度の石ころに振り回されている、貴様等では役者不足だ。」
「…あの……。」
「…何だ？…フェイト・テスタロッサ。」
「…ありがとうございます。…母さんにジュエルシードを届けてくれて。…でも、どうしてくれたんですか？」
「…答える義理はない。」
「な！！何だって！！！ジュエルシードを他の誰かに渡したんですか？！あなたは！！？」

「…そうだ。…少々邪魔だったのでな。……そろそろ問答は終いだ。…そいつも貰うぞ。」
そう彼が言った瞬間、既に彼はジュエルシードを手にしていた。…いつの間に？今、自分達は前回と違い、一切の油断なく、彼を見ていたというのに、全く判らなかった。
「…用は済んだ。…ではな。」
そう言うと、彼は消え去……る事は無かった。…話し掛けられて立ち止まったのだ。…空中だが。

「ま、待って！！！」
…その時、彼が笑った事に気付いたものは、幸か不幸か、その場にはいなかった。
「…何の用だ？…高町なのは。」
「名前！！あなたの名前を教えて下さい！！…あなたは私達を知っ

ていても、私達はあなたの名前を知らないの！」
…数秒の沈黙の後、彼は答えた。
「…俺の名は、ＺＥＲＯ（ゼロ）。…又の名を……世界の破壊者（ワールド・デストラクション）。」
「「…ＺＥＲＯ（ゼロ）さん……。」」
「「…世界の破壊者（ワールド・デストラクション）……。」」
「…もういいか？…ではな。」

そう言って消えようとした彼を、またもや闖入者（なにものか）が止めに入った。
「そこまでだ！時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。ここでの戦闘行為を禁止する。全員、話を聞かせて貰うぞ。」
「…だが断る。」
「何っ！！」
「…この俺の最も好きな事の一つは、絶対にＹＥＳと言うと思っている相手に、ＮＯと言ってやる事だ」
「くっ…ならば力尽くでも…！！」
……何故かＺＥＲＯが嬉々としている様に見えるのは、気の所為だろうか？
そんな事を感じていると、彼がＺＥＲＯに行き成り攻撃を仕掛けた。
ＺＥＲＯは微塵も避ける素振りを見せず、彼（クロノ）の放ったスティンガーレイをまともに全弾喰らった。…しかし、全くの無傷で平然と浮いていた。
驚いているクロノを後目に、ＺＥＲＯはまだその場に居た彼女等に、話し掛けた。

「…今のを見ていたな？…奴から行き成り攻撃してきた所を。」
「「…う、うん…。」」
「…では、君達が証人だ。」

そう言うと、ＺＥＲＯの姿が掻き消えた。…と認識した時には、クロノは地面に俯せになり、背中をＺＥＲＯの足で押さえつけられていた。…いつの間にと思っていたら、何処からともなく音が、ドゴォッ！　ドゴォッ！　と立て続けに鳴った。
……そう。ＺＥＲＯの動きが速過ぎて、音が追いついてこれなかったのだ。
そして、クロノを踏みつけているＺＥＲＯは、何処からか取り出した銃をクロノの頭に突き付け、引き金を弾く寸前であった。
「…正当な、自己防衛だ。…運が無かったな。」
と、あわや少女達にトラウマを植え付ける、寸前だったところに、待ったを掛けた者がいた。

「…待って下さい。」
「…何の用だ？リンディ・ハラオウン。…貴様も見ていた通り、貴様の息子から手を出してきたのだ。…誹られる謂われは無いぞ？」
「！！…私達の事を知っているのですか？」
「…俺は何の用だ、と聞いている。…スプラッタの邪魔をしたいだけか？」
「……こちらの非をお詫び致します。ですから、どうか…息子を打つのはお止め下さい……。」
「…そちらの願いを聞いてやる義理は、欠片も無いのだがな？」

「…そちらの要求は、全面的にのみます。……ですから、どうか……。」

「……フン、まあいいだろう。…では、早く行け…フェイト・テスタロッサ。」

「そ、それは…！！」「…それも条件の一つだ。」

「くっ……解りました…。」

「……行くよ、フェイト。」

「…う、うん。…。」ペコリ

頭を下げて退く、フェイト達を見送った一行は、気絶したクロノを抱えて、アースラへと赴いた。

管理局（前書き）

現時刻（１９：３０）
ＰＶ：２３，９７５アクセス　ユニーク：４，１３３人
とうとう、四千人の方に見て頂きました。
皆様、本当に有難う御座います。
では、今話の拙作は覚悟して御覧下さい。

管理局

ｓｉｄｅ：リンディ

リンディ・ハラオウンは困っていた。息子の命を助ける為とはいえ、つい『全面的に要求を呑む』と言ってしまったのだ。…幾ら油断していたとはいえ、あのクロノを一瞬で殺せるであろう者が、どんな要求をしてくるのか……考えただけで頭が痛くなってくる。

「艦長、連れてきました。」

「…そう。入って頂戴。」

……さあ、覚悟を決めなければ。そして、見極めなければ…彼の者を。

ｓｉｄｅ：三人称

ＺＥＲＯに叩き起こされたクロノは、思わず身構えた所をなのはと、人に戻ったユーノに説明を受け、渋々リンディがいる、和室へと彼等を案内した。

「艦長、連れてきました。」

「…そう。入って頂戴。」

そこは完全に和室だった。メカメカしい艦の中の和室……見事なミスマッチングだ…。おまけに、そこには、鎧で完全武装している男が、壁際に立っている。……めっさ違和感バリバリだった……。

「取り敢えず、いらっしゃい。ようこそ、アースラへ。」

そうにこやかに話し掛ける、リンディ・ハラオウン提督。……相変わらず分厚い面の皮である。

「まずは、これでも飲んで落ち着いて。」

「あ、はい。頂きます。」「頂きます。」

「…あなたも、どうぞ?」

「…断る。…自白剤や、洗脳薬が入っていないとも限らんのでな。」

「な!!そんなもの僕達が使う訳がないだろう!!?」

「……いいのよ、クロノ。無理に薦めている訳では無いのだから。」

「…無駄話はいい。…まずは、俺の条件からだ。…解っているな?…リンディ・ハラオウン。」

「…ええ。言質(げんち)は取られているものね…。私達で出来得る事ならば、協力させて頂きます。」

「…フッ。…何、そう難しい話では無い。俺の出す条件とは俺の能力・正体・目的・その他諸々、俺の事に関して追求しない事。

そして、俺のやる事に一切、文句・口出しはしない事

…これだけだ…。…簡単だろう?」

「なっ…!そんな事、認められr」「解りました。その条件を全て呑みます。」「艦長!!!」

「…流石だな。…そこの青二才の小僧と違って、現実が見えている。」

「くっ…!!貴様ッ…言わせておけば…っ!!!」

「やめなさい!!!!クロノ!!!!!この艦を沈めたいのですか

！！！！！」

「なっ…！！か、艦長……。」

「…クロノ。恐らく、彼の力を持ってすればこの艦など一溜まりもないでしょう。私達の命は今、彼の意志一つでどうとでも出来てしまうのです。……あなたの浅慮もこの事態を招いている原因の一つです。…今回は大人しくしていなさい。これは艦長命令です。」

「くっっ……了解…しました……艦長。」

「…それでいい。……今回の事の発端・経緯は彼女等の方が詳しい。…任せたぞ。…なのは…ユーノ。」

「「あ…は、はい。」」

～説明中～

「成る程、そのジュエルシードは、あなたが発掘したのね…。」

「はい…。ですから、自分でなんとかしなければ…と。」

「…確かに、とても立派な事だわ。」

「…と、同時に無謀でもある。」

「……クロノ？」

「…艦長の命令は、大人しくしろとの事です。……話すなとは命令されていません。」

「……ハァ…何処でこんなに捻くれちゃったのかしら…。」

「…あの～……。」

「ん？何かしら？」

「…ロストロギアって何ですか？…後、他にも解らない言葉が沢山あって……。」

「…大雑把に言えば、ロストロギアは、人の身には余る強大過ぎる

力を持つモノ。
…次元震とは……要は沢山の星が消えてしまう現象だ。」
「…本当に大雑把ね…。」
「…九歳児に詳細を伝えたところで、解る筈も無かろう?…ならば、これで充分だ。」
「……まぁ、そうよね…。」
そう言うと、緑茶に角砂糖をわんさか入れた。……相変わらずの劇薬(おぞましさ)である…。なのは達が驚くのも、自明の理だ。

「では、これよりロストロギア・ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権限を持ちます。」
「「…え?」」
「…君たちは、今回の事は諦めて、家に帰るといい。民間人が介入していいレベルの話じゃない。」
「「で、でも!!」」
「まぁ、急に言われても整理がつかないでしょう?今日、一日ゆっくり考えて又、明日結論を聞かせてくれる?」

「…そこまでだ、リンディ・ハラオウン。…それ以上の冒涜は認めない。」
「「…え?」」「…冒涜…ですって?」
「…そうだ、冒涜だ。…年端もいかぬ少女を言葉巧みに操り、手駒として使い捨てようとする。……貴様の所行の何処が、冒涜では無いというのだ?」

「…それは、誤解です。私にそんなつもりは一切ありません。」
「……まだ、白を切るか…俗物が…。…では、聞く。…何故彼女達に考える時間を与えた?…民間人は介入するなと言っておきながら、考えろと言う。…おかしいではないか。」
「「…あ……。」」
「…それは…この件はとても危険な事だからです。…ですが、彼女達は納得していないようなので、納得出来るだけの時間を与えようと……。」
「…そら、もう矛盾している。…危険だと言うのならば、有無を言わさず、止めさせるべきだ。……そもそも、後から来た者が威張り腐って、先に頑張っていた者を全て追い出す…その時点で間違っているだろう?」
「……ですが、彼女達ではジュエルシードは管理出来ません。…ロストロギアの管理が認められているのは、時空管理局だけなのですから。」

そのリンディの発言直後、空気が変わった。……まるで、全てを拒絶するかの様なおぞましい空気に。その部屋に居た四人は勿論のこと、アースラ艦内にいた、すべてのクルーが、そのおぞましさに身震いし、気圧された。……その場にいた少女達だけが、その気迫の意味を理解出来た。

「やはり、管理局(キサマラ)は、一度、壊滅させなければ、目覚(ワカラナイ)めないか……?」
「「っっっっっ!?!?!?!?」」
「「……世界の破壊者(ワールド・デストラクション)……」」
「あの程度の石ころにまで、怯える様な腑抜けた貴様等では、荷が勝ち過ぎている。早々に荷物を纏めて帰れ。役立(かんりきょく)たず共。」

「で、ですが、ロストロギアはとても危険なものです。とても人に管理できる様なものでは……」

「…まだ言うか…。……では、そんな素晴らしい管理局の皆様に、プレゼントをあげよう。……龍斗。」

「はい。ＺＥＲＯ様。」

そうＺＥＲＯが言うと、何処からともなく一人の青年が現れた。

その青年が、小脇に抱えていた分厚い本を片手に持ち変えると、勝手にページが捲られていった。

すると、何も書かれていない真っ白いページで止まった。

青年がその上に手を翳すと、何も書かれていない筈のページが発光し始め、数秒後に収まった。

リンディ達が訝しんでいると、アースラ艦内にいる全てのデバイスに情報が送信され、強制的に開示された。

「「……こ、これ……は…。」」

「…御覧の通りだ。…ジュエルシードを、集めている張本人、プレシア・テスタロッサのデータ。……そして、彼女に纏わる、管理局の為した所行の全てだ。」

「…こ、こんな……こんな馬鹿な事があって堪るか！！！！！！！管理局がこんな事を！！！！！」

「……いえ、充分に有り得るわ……。」

「なっ！！母さん！！！！！」

「…その年で、提督にまで上り詰めたのは、伊達では無いという事か。…その通り。…これが管理局の『闇』。…その本の僅か一部だ。

…因みにアースラ内にある、全てのデバイスに送信しておいた。…末端の雑兵に至るまで、知る事となったな。」

驚愕を通り越して、失望している二人を余所に、ＺＥＲＯは上手く事態を飲み込めていない、二人に話し掛けた。

「…なのは、ユーノ。…この後はお前達で決めろ。…管理局の狗となるか、決別するか。」

「え？……でも…。」

「…リンディではないが、一晩でも二晩でも、じっくり考えて答えを出すといい。…もしも、管理局の下に付きたくないと思ったならば、俺がお前達の味方となろう。…今度会った時に答えを聞く。…ではな。」

そう言うと、彼等は忽然と姿を消した。…後には、混乱（カオス）の艦（シップ）のみが残された。

管理局（後書き）

この話には、賛否両論が多々あると思います。
読み難さと、私の文才の無さの所為でもありますが。
ですが、実はこれでも、設定上では何の問題も無いのです。
何故ならば、これが、この世界のリンディ達なのですから。
見限られる事に恐れながらも、今日はこれでお終いです。
読んで下さり、有難う御座いました。

暗雲（前書き）

現時刻（１３：１５）
ＰＶ：２９，０３３アクセス　ユニーク：４，６９３人
皆様、いつも拙作を読んで下さり、本当に有難う御座います。
この勢いですと、今日中に、三万アクセス＆五千人突破しそうです。
これも、偏に皆様に読んで頂いた御陰です。感謝致します。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

暗雲

ｓｉｄｅ：ＺＥＲＯ

「……やっと、来たか。…ランド　　アムド」

魔力を垂れ流して、待っていた甲斐があったというものだ。

そう北叟笑(ほくそ)むと、黄衣に身を包み、先程得たジュエルシードを片手に、彼女を待っていた。

……さぁ、お前の覚悟(こたえ)を聞かせて貰おうか？…高町なのは。

ｓｉｄｅ：悪魔(なのは)

「ふにゃっ！ち、違うよ！まだ、悪魔でいいなんて言ってないよ！！」

「……急にどうしたの？なのは？」

「…な、何でもないの。…なんかどうしても言わなきゃいけない気がしただけなの…。」

「？？？…そう。」

ユーノ君とそんなことを話しながら、ＺＥＲＯさんのいるところへわたし達は向かっていました。

…だって、あんなに大きい魔力を出せる人なんて、ＺＥＲＯさん以外にありえないと思うから。

あの日…アースラに行ったあの日。…みんながＺＥＲＯさんを警戒してしまった、あの日。

リンディさんや、クロノ君は、危ないから関わるな…って言ってくれたけど……わたしには、そんなに危ない人には見えなかった。

…だって、あの人はわたしを見てくれた。…子供だからと扱うんじゃなくて、ちゃんと高町（わたし）なのはと、話してくれた。
次に会った時に答えを聞くって…。わたしがちゃんと答えを出すまで、待っててくれるって、言ってくれた。

だから、今のわたしが出せる精一杯の答えを、聞いて下さい。…ZEROさん。

ｓｉｄｅ：三人称
落陽も過ぎ、夜の帳（とばり）が訪れた頃。とある林の上空。三人は対峙していた。
片や、黄衣の鎧に身を包み。
片や、純白の衣を身に纏い、友と共に、彼を目の前にして相対していた。
数秒の沈黙後、彼（ZERO）の方から声を掛けてきた。

「…答えは出たか？…高町なのは。」
「……はい。」
「…では、その覚悟（こたえ）を聞こう。」
「わたしは……」
そう言うと、彼女は逡巡……いや、最後の決意を固めた。

「私は、管理局の人達に協力したいと思います。」

「……本当に、それでいいのだな？…それが、どの様な結果を生み出す事になっても、後悔はしないのだな？」
「……はい。…これが私がユーノ君と一緒に、必死に考えた覚悟（こたえ）です。」
「……そうか……。…解った。…では、これを持って行け。…餞別（せんべつ）だ。」
そう言い、彼はその手に持っていたジュエルシードを、彼女に投げ渡した。
「……ではな。」
その言葉と共に、彼は暫く姿を現さなくなった。……そう。最後のジュエルシード達が現れるまで…。

「…ここ暫く、あの人、姿を見せないね？」
「…ＺＥＲＯの事か？」
「うん……。アースラ（このまえ）に来た時は、驚いたし、恐かったけど……。…姿がまるで見えないと返って、とても不気味で不安だよ……。」
「…気にするなよ。エイミィ。…僕達は今、僕達に出来る事を精一杯やればいいだけだ。」
「うん…。そうだね…クロノ。」
エイミィの寝癖を、手櫛で直しながら、慰めるクロノ。そんなクロノに甘えているエイミィ。
仲睦まじい二人を、微笑ましく、誰とも無く眺めていると、警告音が艦内に響いた。

全員、慌ててモニターを見ると、あの少女（フェイト）と、漆黒の鎧を着込んだ件（ZERO）の人が、共に海上に居た。

「…遅かったな。…フェイト・テスタロッサ。」
「あ…ＺＥＲＯ…さん。」
さんはいらない。…とでも言うべきだろうか？…でも俺、何の名人でも無いしなぁ……等と、下らない事を考えてるとは、露知らないフェイト達は、何故ここにＺＥＲＯがいるのか訝しんでいた。
「何で、あんたがこんな所にいるんだい？ＺＥＲＯ。…しかも、そんな馬鹿でかい魔力を、撒き散らしながら…さ。」
「…此処にジュエルシードが、眠っているからだ。…六つもな。…それと、貴様等に気付かせる為だ。」
さんをつけろ、デコスケ野郎…とは言わないでおこうか…。とか、阿呆な事を考えているとは、微塵も思っていない二人は、思わず聞いていた。…ＺＥＲＯなら有り得そうだからと。
「…何時から知っていたんですか？」

「……最初からだ。……俺はこの地にジュエルシードが降る前から、何処に落ちるのか全て知っていた。」
「…！！な…！…何だって！？」
完全に想定外の答えに、驚きを隠せない二人。だが、そんな二人を意に介せず、注意を促した。
「…それよりも、早く構えろ。…管理局がやってくるぞ。」
その言葉を聞き、慌てて準備する二人。……だが、少し遅かった様だ。

「…フェイトちゃん！…ＺＥＲＯさん！！」
「…矢張り来たか…なのは。…命令を無視して来たのか？」

「ふぇぇ？な、何で知ってるんですか？！」

……矢張り、やらかしたらしい。思わず溜息を付きそうになっていると、アルフが威嚇しだした。

「あんたらも来たのかい！…邪魔はさせないよ！！誰にも！！！！」

「…落ち着け、アルフ。…此処にいる誰にも闘う意志は無い。…お前を除いてな。」

「…アルフ。今はこっちが優先だよ。」

「くっ……解ったよ、フェイト…。」

「…もういいか？…では、行くぞ。…我が呼び声に答えよ…ジュエルシード…。…我が命に従え…蒼き輝石よ…。」

そう、ＺＥＲＯが唱えると海中から、まるで六芒星を描くかの様に、全てのジュエルシードが浮上してきた。

その光景を見ていた者は皆、思わずこう呟いていた。

……綺麗……と。

その宝石（きけんぶつ）に見惚れていると、驚愕の情景を目にした。

「…ジュエルシード…封印。」

何と、ＺＥＲＯが全てのジュエルシードを封印してしまったのだ。

今まで彼が、なのは達に封印させて来たのは、自分では出来ないからだろうと思われていたのが、覆されてしまった。……しかし、彼女達が真に驚くのは、これからだった。

「…なのは。…今お前が持っている、ジュエルシードを全て寄越せ。」

そう言いながら、何時の間にか、なのはの隣で銃を突き付けていた。

「……え？…！？……で、でも…。」　プシュッ！

『Ｓｏｒｒｙ，Ｍａｓｔｅｒ．』「レイジングハート！」

「…相変わらず、良く出来たデバイスだな…。…大事にしろよ…なのは。」

ＲＨ（レイジングハート）が吐き出したジュエルシードを、奪ったＺＥＲＯは、先程の六個と併せて、フェイトに全て渡してしまった。

「……え？…な、何で…？」

「…少々邪魔なのでな…。…そもそも、俺には必要ないモノだ。…

……だが、管理局に渡すのは…業腹（ごうはら）なのでね。」

「な！！では、君は自分に必要無いものを、集めて回っていたというのか？！一体何の為に！！？」

その問いに、答えようとしたのか、いつの間にか来ていた、クロノの方に体を向けたと思ったら、急に真上を向いた。

何事かと思って、皆で空を見上げると、雷雲が寄り集まってきた。

……そして、雷が落ちた。

「…ライトニング　　シールド」

しかし、その前に、ＺＥＲＯが空に手を掲げ、呟いた。

その瞬間、その場にいた人、全てを覆う程の、天蓋（てんがい）とでもいうべき

広さの『盾』が張られた。

その『盾』に直撃した雷は、僅かの拮抗すら出来ずに、触れた瞬間消え去った。……どうやら、出量が全く違うらしい。……ＥＸクラスの攻撃ですら、防げるのではないだろうか？そんな途方も無い事さえ、考えられてしまう程の堅固さを感じた。

「…何をしている？…フェイト。…早く行け。」

と、ＺＥＲＯは、呆然としているフェイト達に、声を掛けた。

クロノ達が気付いた時には既に、彼女達の転移は終わっていた。

ならば、せめてＺＥＲＯに話だけでも、と辺りを確認したが、既に居なくなっていた。

辺りには、穏やかに凪(な)いでいる海の音のみが、響いていた。

「クックックック……真逆、あのジュエルシードが、全てあの女の下に集まるとはなぁ……くっはははははは……有り難く利用させて貰うぞ……偽善者(おろかもの)よ……ハッハッハッハッハッハッハッハッ……。」

ナニモノカが哄笑(こうしょう)していた。…まるで、これから我が世の春を謳歌(おうか)するかの如く……。

それは、ＺＥＲＯもしらない、『この世界』へのもう一人の介入者。

……新たな歴史(とき)が動き始めた……。

暗雲（後書き）

恐らく、次話辺りからは、殆どオリジナル展開になると思います。
本筋から、外れる事はありませんが、少々あれな事になってしまうかも知れません。
どうか、寛大な御心で一つ、お許し願いたいと思います。
では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

衝撃（前書き）

現時刻（２０：００）
ＰＶ：３４，５９２アクセス　ユニーク：５，３５５人
皆様いつも有難う御座います。そして、お仕事御疲れ様です。
そして、３０，０００アクセス＆５，０００人突破致しました。
まさか、此程に皆様に気に入って頂けるとは埒外でした。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

衝撃

ｓｉｄｅ：プレシア

……二度目だった。この『庭園（しろ）』に侵入者を、許したのは。

……不注意だった。確かに、そうだった。真逆、彼以外（ZERO）にそんな事が出来る存在（モノ）がいようとは、思いもしなかったのだ。

……その様な言い訳を、したくなるぐらい、今、私は後悔している。

……お願い……此処には…もう来ないで……フェイト…。そんな思いと共に、あの子にありったけの魔力を込めて、攻撃したのに……もう、こうなっては彼に任せるしか、私にはどうする事も出来ない。

……お願い…ＺＥＲＯ……私の娘（フェイト）を守って……。

ｓｉｄｅ：三人称

「…全く！！どういうことだい！！！」

「ま、待って！アルフ！…きっと、何か訳があったんだよ！！」

「母親が自分の娘に、死ぬかも知れない攻撃をする…どんな言い訳があるってんだい！！？」

「…で、でも！」

そんな事を、話しながら荒々しく突き進み、プレシアがいるであろう部屋まで辿り着いた。

「プレシア！！！」　バァン！！

主（フェイト）が止めるのも構わずに、勢いよく扉を開けた。……そして、認めたくない現実がそこにあった……。

「……待っておくれ……フェイト……必ず……助けに…行くから……。」

…そう言いながら、全身傷付いた体を引き摺りながら、女性が何処かへと向かっていた。

ｓｉｄｅ：なのは

その日、アリサちゃんから、『傷付いた大きな犬（こ）を、又拾っちゃった』と聞いて、何か嫌な予感がしたわたしは、何とかその犬さんを見せて欲しいと頼み込みました。

そして、今、その犬さんと向かい合っている処です。

「この子が、そうよ。…一応、ある程度の治療はしたけど…。」

「…本当に大怪我だったんだね……。」

「……。」

やっぱり、アルフさんだった。…何とか二人に言い訳をして、わたしとユーノ君はその場に残りました。

「…アルフさん……。」

「…あんた…なのは……とか、言ったね…。」

「あ、は、はい！！」

「…管理局の連中も、どうせ聞いてるんだろう？…あんたたちの知

りたいことなら何でも話す……。だから……頼む……あの娘を……フェイトを、助けておくれ！！！……お願い……お願いだよ……。」

「…解りました。…管理局(わたしたち)もフェイトさんの救出に全力を尽くします。…ですから、何があったのか、教えて下さい。」

「……ああ、ありがとう…。」

…アルフさんは、泣きながらそう言ってわたし達に話してくれました。…ＺＥＲＯさんが教(みせて)えてくれた事と同じ事を……。

「……そう。彼がくれた情報と寸分違わないわね……。」

「…？……！もしかして、ＺＥＲＯのことかい？…あいつ、そこまで私達のことを知っていたのかい…。」

「…アルフさんは、ＺＥＲＯさんと、お知り合いなんですか？」

「…いいや、全く知らないよ。…突然現れて、ジュエルシードを奪っていったり、渡してくれたり……ホントにワケ解んない奴だよ…。」

「そうですか……。彼については、私達も全力で調べている処です。…その事は、少しは結果が出てから又、お話しましょう。……では、その大怪我をしている理由ですが……？！」

そうリンディが言うと、アルフは牙を剥き出しにし、殺気を隠しもせず、低く唸っていた。

「ひぅっ…！」

「…アルフさん。…なのはさんが怯えています。少し押さえて頂けませんか？」

「…あ、ああ、済まないねぇ…。つい、あの野郎の事を思い出すと

…。」　ガルル……
「ひぅぅっっ…！！」
無限ループになっていた…。

「…では、お話頂けますか…？」
「……ああ。」

ｓｉｄｅ：アルフ
あの時、あたしはもう我慢の限界だった…。こんなに健気に…一途に頑張ってる娘（フェイト）への仕打ちは、もう見過ごせなかった。
その怒りの儘、あたしはプレシアのいる部屋のドアを開けたんだ。
…でも、その時見た光景は、そんな怒りなんかどっかへ忘れちまう程のものだった。

…あのプレシアが、血塗れになって、息も絶え絶えになっていたんだ。そして、その側にいた、見たこともない奴が持っていた剣からは、血が滴っていたんだ。
「……か、母さん！！！！！！」

あたしは、状況が理解できず、完全に固まってしまって、フェイトが、その男に向かっていった事にも、気付けなかった。
「…ああ？…邪魔だよ…テメェ。」
そう男が言うと、向かっていったフェイトが、部屋の真ん中辺りに弾き飛ばされて、動かなくなったんだ。
あたしは、その時になって、ようやっと気が付いて、カァーッとなってフェイト同様、向かって行ったんだが、あっさり返り討ちにあ

ってね……助けを求めようと、命からがら逃げ延びて今に至るのさ。

ｓｉｄｅ：三人称

「…成る程。…解りました。大至急、編成を調え部隊を向かわせます。座標を教えて頂けますね？」

「…ああ、教えるよ。……フェイトを頼む。…傷が治り次第あたしも行く。」

「解りました。必ず助けるとお約束致します。…なのはさん。準備が出来次第、御連絡します。来て下さいね？」

「はい！！」

「…では、アルフさん。…ご養生なさって下さい。」

そう言って、通信を切ると、なのは達も友達の所へ戻って行った。

誰もいなくなった筈の場所で、アルフが建物の影に向かって話し掛けた。

「……そこにいるんだろう？…ＺＥＲＯ。」

「……ああ。」

「…やっぱり聞いて居たんだね…。……ＺＥＲＯ、頼む。恐らくあの連中（かんりきょく）では、あいつには勝てない…。あんただけが頼りなんだ……。」

「……了解した。…彼女達を必ず助けると約束しよう。

……宇宙（そらの）の救世主（メシア）の名に懸けて。」

その日、その男から通信があった。
内容は、なのはとフェイトの一騎打ちだった。……理由は自分が見たいから。
母を人質に取られ、文字通り、死に物狂いで必死に闘う、少女の滑稽さを、嘲笑いたいから……。
そう、その男は言ってきた。……最後に哄笑を残して……。

翌日、指定された時間・場所に二人の少女が相対していた。
一人は、彼女を救いたいが為。
一人は、母が為。
二人の、最後の悲しき物語（たたかい）が、今、始まる。

衝撃（後書き）

因みに、ぶっちゃけちゃいますが、『奴』は、か・ま・せ　です。

どうか、ＺＥＲＯにフルボッコにされる様を、楽しみにお待ち下さいｗ

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

決闘（前書き）

現時刻（１３：４０）
ＰＶ：４０，４５８アクセス　ユニーク：６，０５１人
皆様、いつも有難う御座います。
とうとう、４０，０００アクセス＆６，０００人突破致しました。
…実は、昨日だけで、１０，０００アクセス突破していました。
心底から、感謝致します。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

決闘

ｓｉｄｅ：三人称

晴れとは言い難い、雲量の下、二人の少女が闘っていた。

母を人質に取られ、涙を流しながら、自身の全てを懸けて闘う少女。

そんな悲しい少女を助ける為に、必死に相対する少女。

二人の闘いは悲しい少女(フェイト)が僅かに勝っていたものの、ほぼ拮抗していた。

その闘いを離れた所で、見ていたものがいた。

…アルフとユーノだ。彼等の後ろには、透き通る蒼い鎧に身を包んだＺＥＲＯも居た。リンディ(アースラ内で)達も、モニターで見ていた。

その闘いもそろそろ決着が着きそうだ。なのはがバインドで拘束されたのだ。

「……！！なのは！」

「…待て。」

慌てたユーノが、なのはを助けに行こうとしたが、止めたモノがいた。…ＺＥＲＯだ。

「な！何をするんですか！離して下さい！！なのはが！」

「……馬鹿者！決闘に水を差す気か！…黙って見ていろ。」

叱責を受けたユーノが、渋々退くと、彼女が呪文を唱えだした。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー！！」

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ』

それは、フェイトの最強魔法。三八基ものフォトンスフィアから、秒間七発の魔力弾を、計１０６４発浴びせる魔法。

拘束されて動けないなのはに、躱す事は出来ず、全弾命中してしまった。

皆が、凄惨な状態を覚悟した。……兜の下でほくそ笑んでいる一人を除けば。

弾幕が霽れて、姿を現したなのはに、誰もが驚いた。所々、バリアジャケットは破れてはいるものの、あれだけの攻撃を受けて、ほぼ無傷だったのだ。

自身の渾身の、最強の魔法をまともに喰らっても、尚健在なその姿にフェイトは、大いに動揺した。

そのフェイトに、なのはは声を掛けた。

「今度はこっちの番だよ！ディバイィーン・バスタァーー！！」『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

巨大な桜色の砲撃が、フェイトを襲った。…今度はこちらに対して、皆が息を呑む事となった。

「…くっ……！」

だが、何とかバリアジャケットが半壊する程度で治まった。

そして、目の前を確認するが何処にもいなかった。

しかし、大きな魔力を感じ、彼女の居た遙か上空を仰ぐと、彼女が

杖を構えていた。
…彼女の魔力（ちから）だけでは、考えられない量の魔力を溜めて…。

「…受けてみて！これが、私の全力全開！……スターライトォー……」
避けようとしたが、いつの間にかバインドで拘束されていたフェイトは、今、自身にある有りっ丈の魔力を掻き集めて、何とか、数枚のシールドを直線上に張れた。

「……ブレイカァァーーー！！！」『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』
その瞬間、超巨大な砲撃が彼女から、放たれた。

スターライトブレイカー。自身の僅かな魔力と、周りにある、大量の魔力の残滓があれば撃てる、彼女の代名詞ともなる、最強砲撃魔法。
僅か、数枚のシールドでは、防ぐことは敵わず、ほぼ減衰しない威力の儘、フェイトは直撃を受けた。

ｓｉｄｅ：ＺＥＲＯ
…これで、決着は着いたな。そう思い、フェイトが沈んだ場所へ急行し、引き上げた。…お姫様抱っこで。

文字通り、飛んで来たなのはは、フェイトに声を掛けた。
「…大丈夫？フェイトちゃん？」
「…うん。…大丈夫。」
スターライトブレイカー（あんな）をぶちかました、当人が言う台詞（もの）じゃないな…と思いながらも、フェイトを近くの廃墟の上に横たえ、離れて彼女等の会話を聞いていた。

ｓｉｄｅ：三人称
「良かった……。友達に大怪我させちゃったら、どうしようかと思ったよ…。」
「……え？」
「……あのね？フェイトちゃん。私、どうしてフェイトちゃんの事、いろいろ知りたかったのか…ずっと判んなくて……でも、やっと解ったんだ。」
「…？」
「あのね……」

「私は……フェイトちゃんとお友達になりたいんだ…。」
「…友達。」

その時、雲の隙間から光が差し込み、二人を照らした。…まるで、二人に幸あれと……祝福するかのように……。
…その幻想的な光景に、誰もが見惚れた…。…思わず誰かが呟いた言葉が、奇しくも、皆の心を代弁する事となった…。

……美しい……と。

しかし、その絵画（こうけい）に水を差すものがいた。
突然、空からなのはの放った砲撃（それ）よりも巨大な光柱が、二人に降り注いだ。
突如降って来たその攻撃に、誰もが反応出来ず、呆然としてしまっていた。……一人を除いては。

「…ダーク」
その彼の声が、聞こえたと思ったら、その光柱よりも遙かに広い黒い穴が、彼女等の頭上に拡がった。
すると、その黒穴が光柱を全て吸い込んでしまった。

驚いている二人を、唐突に抱き抱えると、遠く離れた二人（アルフとユーノ）の許へ行き、四人纏めてアースラへと転移した。
……その数瞬後、その場に数十の光柱が突き刺さった……。

リンディがいる管制室。そこへ直接転移し、一瞬その場が騒然となったが、ＺＥＲＯが魔力を解放し、全員強制的に黙らせた。
そうして、落ち着いた頃、アースラの通信に強制的に介入してきたものがいた。…そう、あの『彼』である。
…どうやら、その男はもっと惨めな泥沼のような、ボロボロの戦いが見たかったようで、その不満を管理局にぶつける為に、通信してきたようだ。

一通り言い終えて、ある程度満足したのか、その『彼』は、周りを見回し、とある所に視線を止めた。……どうやら、今度はＺＥＲ

Oに用がある様だ。

「てめぇか……ＺＥＲＯとかいう雑魚は…。……図に乗んのもそこまでだぜぇ…。…聞いたぞ…【あいつら】からなぁ……中々フザケた真似してくれてるみてぇじゃねぇか……あぁん！！！？」

「……。」

「…巫山戯た真似…？」

「…ハッ…てめぇらには関係ねぇ話しだ……。引っ込んでろ！！！

……おい、てめぇ。…いつまでスカしたツラァしてやがる…！！！！」

「……用件は何だ？」

「……チッ…。まぁいい…。…用件は、この女だ！」

そう『彼』が言うと、片手に髪の毛を掴まれ、血塗れのプレシアが引き摺られてきた。

「か、母さん！！！！！！！！！！」

「ウルセェぞ！！クソガキがぁ！！！……おい、テメェの事だ…。どうせ、この女も助けにくるんだろう？……ハヤクコイヨ…？うっかり俺が殺しちまわない内になぁ……ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ……。」

暫し、何の物音もしないアースラ内で、唯一動き出したものがいた。

…ＺＥＲＯである。

それに、いち早く反応できたリンディが、彼に問い掛けた。

「…！何処に行くのですか？」

「……決まっているだろう？…奴の所だ。」

「……！お願い！！ＺＥＲＯさん！！！母さんを助けて！！！！

……お願い……！！」

「…解っている。…アルフとも約束したのでな…。…お前達を必ず助けると…。」
「…で、では、私達も編成が終わりましたので、一緒に…」
「…止めておけ。…お前達では、奴の足止めも出来ん。…無駄に命を落とすだけだ。」
「…で、ですが……。」
「…後で、プレシア達をここへ転移させる。…治療の準備をしておけ。…大至急だ。」
「は、はい…。」

「…ではな。

……宇宙の救世主(そらのメシア)…いざ、参る。」

そう言うと、彼は姿を消した。(ZERO)

後に残されたものは、急いで医務室を、万全の状態にするように指示をしている者達と…。
そして、彼が無事に、プレシアと共に戻って来てくれる事を祈る、少年少女達の姿があった。

そして、場面は、最終局面(ラストフレーズ)へと、突入する。

決闘（後書き）

如何でしたでしょうか？

次はとうとう、スーパーフルボッコタイムで御座いますｗｗｗ

何とか今日中に、書き上げたいと思います。

楽しみにお待ち頂ければ、幸いに存じます。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

蹂躙（前書き）

現時刻（１８：１５）
ＰＶ：４５，３５９アクセス　ユニーク：６，６０６人
皆様、毎度有難う御座います。
そして、お待たせ致しました。
では、どうぞ。御存分に拙筆をお楽しみ下さい。

蹂躙

ｓｉｄｅ：ＺＥＲＯ

「…矢張り、直接奴の所へは、転移出来ない……か。」

…残念ながら、そこまで甘くは無いか。…まぁ、いい。『時の庭園』の入り口には来れた。…後はいつもの様に押し通るだけだ。

幸い、ここは、魔力干渉が出来ない。…つまり、誰にも姿が見られる事は無い。…好きにさせて貰うぞ。

「…パージ　ウインド　アムド　ウイング」

鎧を、フェイトを引き上げる為の水の鎧から、より素早く動く為の風の鎧へと着替え、道を遮る有象無象を蹴散らしながら、進んだ。

そして、大広間に着いたはいいが、およそ千体強程の傀儡兵が蠢いていた。…奴め…面倒臭い事をさせてくれる…。

そう思いながら舌打ちをし、手っ取り早く鎧を着替えた。…この雑魚共を駆逐する為に。

ｓｉｄｅ：三人称

「…パージ　第一形態　完全鎧化」

翠色の鎧を脱いだ彼を、今までで最も激しい光が包んだ。

光が収まり、その中から現れた彼は、一言で言えば、異様な姿であった。

右腕は、燃えているように紅々と。
左腕は、稲妻が迸るように煌々と。
右足は、風が逆巻き、エメラルド色に輝き。
左足は、堅固な岩石に守られ。
頭部は、冷静さを示しているかのように蒼々と。
胴体は、光り輝く鎧に守られ。
身に着けているマントは、漆黒よりも尚昏く。

そして、彼から放たれる魔力は先程の、凡そ五倍程に膨らんだ。

「…フレイム　ソード」
そう言うと、彼の右手に炎の西洋剣が現れ、鞘から抜かずに、腰矯(だ)めに構えた。…まるで居合いを放つ様に。
暫しの硬直の後、傀儡兵が纏めて襲ってきた。…しかし、彼はその儘動かず、あわや攻撃が届く寸前になって、ようやっと動いた。……その巨大な魔力を全身から吹き出しながら、何かを呟いた。

「……灰燼(かいじん)に帰せ…。……奥儀…紅蓮腕(ぐれんかいな)。」
その言葉が終わると、全ての傀儡兵の動きが止まった。
彼の手を見ると、剣を仕舞う寸前だった。…チン…！という音と共に、その場に居た雑魚共(かいらいへい)は皆、真っ二つになった。……だが、真に異様だったのはその後だった。

真っ二つになった筈の傀儡兵達が、更に四つになり、八つになり、十六分割され……次々に斬り刻まれていく…。
そして、最早、細切れ処ではなく、粉状にまでなったところで、その粉末達が全て炎に包まれた。
さながら、煉獄(れんごく)を思わせる様なその光景には目もくれず、彼はとあ…

る所へ向かっていた。

ｓｉｄｅ：？？？

そこは、巨大な廃棄物処理場だった。数多の失敗作（フェイトたち）が打ち棄てられている場所。

そこにナニモノカが現れた。それは、その場所で、何事かを虚空に話し掛け、小さな黒穴の中に何かを入れ、再び、待ち人の許へ向かって行った。

ｓｉｄｅ：三人称

…辿り着いたそこは、本来プレシアが、最期にいる筈だったあの空間。…御丁寧に、カプセル（アリシア）まで置いてある。

「…随分と遅かったじゃねぇか……？何処で道草喰ってやがった…ぁぁあん？……あと少し遅けりゃ、この女を殺しちまうところだったぜぇ……？ヒャーッハッハッハッハッハァ…！！！」

「…何、少し野暮用を…な。…だが、間に合ったようだな…。」

「……にしてもてめぇ…おもしれぇ格好してんなぁ……そいつを俺に寄越しな…！」

「…断る。…彼等に怒られてしまうのでね。……それより、彼女達を返して貰えるかな？」

「…ああ、こいつらか…。…フン、好きにしな。」

そう言うと、彼はカプセル毎、プレシアを投げてきた。ＺＥＲＯは二人を優しく受け止めた後、瞬時にアースラ内に転移させた。…その瞬間、ＺＥＲＯの後ろから剣が突き刺さった。……かに見えた。

「…な！！…てめぇ……！！！」

「…フッ…甘いな。」
どうやら、剣を小脇に抱えられてしまった様だ。彼はあっさり剣を捨てると、彼から遠離った。

「…まぁいい。…俺にはこれがあるからなぁ…！！！！」
彼がそう言うと、彼の周りを２１個のジュエルシードが回り出した。
…すると、ジュエルシードから彼に向けて、魔力が放たれている。
……どうやら、ジュエルシードの魔力を吸収している様だ。

「ヒャーッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！笑いがとまらねぇってぇのはこういうことかぁぁぁっっ！！！！！！！！！！！」
ジュエルシードの魔力を吸い取った彼の魔力は、今や、ＺＥＲＯを越えていた。……そう…今のＺＥＲＯを…。

「すげぇ……これだけの魔力（ちから）があれば、【あいつら】ですら倒せるぜぇ！！！！！ヒャァッハッハッハッハ！！！！！！」
「…そうか。　パージ」
そう、ＺＥＲＯは一言呟くと、鎧を脱いだ。

「…あぁん？…なんだぁ？…俺様に勝てないと思って諦めやがったかぁ？…いいぜ！お前！御褒美に苦しまずに殺してやるよぉ！！！！」

「…では、冥土の土産の前に、幾つか聞きたい。」
「…あぁん？いいぜ！いいぜ！！何でも答えてやらぁ！今の俺様は気分がいいんでなぁっ！！！！！」

「では、まず一つ。…今のお前の力があれば、【あいつら】に勝てると思うか？」
「…はぁ？当たり前だろうが！！！！！これ以上の力を持つ奴なんてこの世にいやしねぇよ…！！ヒャッハッハッハ！！！！」
「…そうか。…では、次の質問だ。お前は、【あいつら】の内の誰かと戦った事はあるか？」
「…あぁ？んなモンねぇよ！！…だけどなぁ、闘わなくったってわからぁ……この俺様がこの世で最強だってなぁ！！！！！！！！！！ヒャァッハッハッハッハッハッハ！！！！！！！！！！！！！」
「……そうか。……道理でな。」
「……ああん？…何が言いてぇ？……それよりもういいか？……この力をさっきから試したくて……ウズウズしてんだよォォオオオ！！！！！！！！！！！！！」
「…ああ、もういい。その程度のチカラに溺れる様な器じゃ、俺は愚か、【あいつら】にすら勝てんからな。」
そう言うと、音も無く、瞬時に肉薄した彼を、まるで埃を軽く払うかの様に、振り払っただけで、彼が優に５０ｍは吹き飛んだ。
「なぁぁぁっっっ！！！！！！！！！！……くっ！！……どういうことだ……てめぇ…一体俺に何シヤガッタァ！！！！！！」
「…何もしていない。敢えて言うなら、ブンブン五月蠅い蠅を、振り払っただけだ。」
「…フザケルナァ！！！！！」
そう彼が吠えながら、向かって行くが、何度やっても触れることす

ら出来ず、自分の傷のみがどんどん増えていくばかり。

「くそっ！くそっ！くそっくそっくそぉおおっっ！！！！！！当たれば！！！当たりさえすれば、てめぇなんかぁっ！！！！！！」

「…ハァ…なら、当ててみるといい。俺はここから動かん。」

「上等だぁぁぁっっ！！！！！」

そして、彼は有りっ丈の魔力を集めて力の限りに、ＺＥＲＯに叩き付けた。

「…くっ…！なんなんだ…なんなんだ！！…一体てめぇは！！！！！」

「何者でもない。俺は…只の旅人だ。」

「フザケンナァ！！そんな奴が、なんで今の攻撃を受けて平然としていやがる！！！！今のは星を壊せるぐらいの魔力を込めたんだぞ！！！！！！！」

そう。宣言通り、ＺＥＲＯは、仁王立ちで彼の攻撃をまともに喰らったのだ。…だが、全くの無傷であった。

「星を壊せるぐらい…？俺に傷を付けたきゃ、銀河程度は破壊して見せろ。」

「くっ……！？」

そう悔しそうに舌打ちをし、ＺＥＲＯから離れた彼は、まるで何かに気付いた様に、笑みを深くした。

「そうか…。まだ、足んねぇんだ……。まだ、吸い取り足んねぇんだァ……。…ジュエルシードォォォォ！！！！！！もっとだァ

ァ！！もっと！！もっと！！！！もっと！！！！！！てめぇらの魔力（ちから）を寄越しやがれェェェェェェェェェェェェ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そうあらん限り叫ぶと、またもや、彼の周りにジュエルシードが現れた。

そして、今度は先程の比では無い量を吸収し始めた。…限界を超えて…。

…一つ。又、一つと、全ての魔力を根こそぎ奪われたジュエルシードは、役目を終えたかの様に、順番に砕け散っていった……。

全ての魔力を吸収し終えた彼であったモノ（バケモノ）は、優にＺＥＲＯ五人分はあろうかという、巨大な怪物になった。

「グハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！ドウダ！！！コレホドノ魔力ヲ感ジタコトナドアルマイ！！！！！！！！オレ様ハ今、神ヲ越エタ！！！！！！！！！！コレデ今度コソ、オレ様ガ最強ダァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！」

そう、叫ぶと突然ＺＥＲＯに向かって行った。……だが、結果は同じだった。

「ナ、何故ダ……サッキノ１００倍ハアルノダゾ？！？！？！何故、平然トシテイラレル？！何故無傷ナノダァァァァァ！？！？！？！？！？」

「確かに貴様の魔力はさっきの１００倍は優に超える。スピードも、パワーも間違いなく遙かに上がっている。」

「デハ何故ダ！！！！！ドウシテ貴様程度ノ、魔力ニ勝テナイ？！？！」

「俺程度の魔力？それは、先程の、鎧に包んだ時の、魔力量の事を言っているのか？

……それとも……

今の俺の魔力量の事を言っているのか？」

その言葉の後、ＺＥＲＯから吹き出した魔力に、バケモノは身動きは愚か、立つ事……いや、声を出す事すら憚られた。
何も話す事が出来ないバケモノに構わずに、ＺＥＲＯは一方的に話し始めた。

「貴様はいろいろ勘違いをしているみたいだな。…いいだろう。では、冥土の土産だ。教えてやる。

まず、一つ。あの鎧はな…。俺にとっては魔力増幅器でも、バリアジャケットでも無い。

単なる拘束具だ。」

驚愕している雰囲気がありありと解る。…それはそうだろう。あれ程の魔力が、制限されたモノ…。つまりＺＥＲＯの魔力の、本の一部でしかないと言うのだから。

「次。二つ目。【あいつら】はな?その気になれば、銀河一つ滅ぼすのは、ワケはない。

幹部に至っては、宇宙を一つ潰せるんだよ。」

驚愕を通り越して、完全に血の気が引いているのが解る。…まぁ、そうだろう。

「最後に。さっき貴様は、『神を越えた』と言ったな?

…たかが神風情を越えたぐらいで俺に勝てると思ったのか?

…俺がいつも【あいつら】と戦う時に、言う言葉を特別に貴様にも教えてやる。

俺に傷を付けたけりゃ、創世神でも連れて来い。

俺を殺したきゃ、俺を喚んで来い。

俺の存在を消滅（けし）させたければ、俺以上（バケモノ）の存在を育ててから来い。
とな。」

……身動き一つ出来ない筈なのに、身震いが止まない様だ。

「さて。貴様の処遇だが……久々に俺をキレさせてくれた礼だ。
……一撃で葬り去ってやる。」

そう言うと、１０ｍ程下がり、両手を高く掲げた。…まるで何かを
掴み取るかの様に。そして、唱えた。

「ソード・オブ・マナ　　エレメントソード　　カイザー（・・・・）」

そのＺＥＲＯの言葉に呼応するかの様に、両手の中に白銀（プラチナ）金に輝く剣が現れた。

「ＥＸカリバーン」

そう呟きながら、剣を鞘から引き抜いた。
鞘を左手に。
剣を右手に。
無造作に構えた。

「カラミティ・エンド」

その声が聞こえた時には、ＺＥＲＯは既にバケモノの後ろ２０ｍ程に居た。剣を半分程、鞘に収めつつ。

「…永遠に沈め…。ディラックの海へ。」

その言葉と共に、剣が鞘に収まると、バケモノの体がある空間が十字に裂け、声に成らない叫び声を上げ吸い込まれていった。

『時の庭園』の外にＺＥＲＯは居た。先程の『剣（ＥＸカリバーン）』を手に持って。
その剣を天高く、まるで神に捧げる様に掲げると、『呪文（キー）』を唱えた。

「ドラゴン・オブ・マナ　エレメントドラゴン　カイザー」

その瞬間、超巨大な質量が存在（あらわれた）した。

そして

『時の庭園』は

その存在を跡形もなく消された。

終幕（前書き）

現時刻（０２：１５）
ＰＶ：５４，６７９アクセス　ユニーク：７，５８５人
皆様いつも有難う御座います。
とうとう５０，０００アクセス＆７，０００人突破致しました。
本当に感謝致します。
…前回がスラスラ書けた分、今回は難産致しました。
お恥ずかし乍ら、今の私ではこれが限界です。
では、今話も拙筆を御覧下さい。

終幕

アースラ内は慌ただしかった。突然、何の前触れも無く、血塗れになったプレシアと、カプセルに液体詰めになったフェイト(アリシア)に良く似た少女が、転送されて来たからだ。

フェイトとアルフ以外は、以前ＺＥＲＯに情報を見せられていたので、まだ何とか二人より早く落ち着けたが……大変だったのはその二人だった。

フェイトは、母(プレシア)を見ると半ば半狂乱になり、すぐ母に縋り付き、泣きじゃくったが、側にある自分(アリシア)が入っているカプセルを見ると、驚愕に眼を開き、フラッと気絶した。

アルフは、そんなフェイトを見て、返って冷静さを取り戻し、フェイトを抱き抱えながら、

「…後で、問い詰めてやる…。」

と、低く唸りながら、ＺＥＲＯに恨み節をぶつけ、運ばれるプレシアの後を追い、共に医務室へと向かった。……カプセルは取り敢えず別室に置かれた。

そして、ＺＥＲＯがいない事に、ようやっと気付いた一行は、まるで状況が解らない、今の状態を掻痒(もどかしく)しく思いながら歯噛みしていた。

……暫く、何の音沙汰も無く、皆が痺れを切らしていると、突如、艦が大きく揺れた。

…彼女達は知る由も無いが、ＺＥＲＯが『時の庭園』を、跡形も無

く消し去った時の衝撃である。その余波が、アースラにまで及んだのだ。

今までに味わった事が無い衝撃に、すわ敵襲か！と皆が、状況判断に努めようとしている時、唐突に管制室に何者かが転移してきた為、その場にいたものが皆、身構えた。
果たして、それは、七色の鎧に身を包み、一種異様な格好をしたＺＥＲＯであった。

誰か判り、皆がホッとし、無事だったかと、声を掛けようとしたのも束の間、彼の方から声を掛けて来た。……切羽詰まった声で。
「リンディ！プレシアとアリシアは今何処に居る？！」
「え？！あ、い、今はプレシアは医務室に。あのカプセルは別室に置いてあります…。」
「解った。今から医務室に行く。連絡を今直ぐに入れて置け！来たい奴は勝手に来るといい。」
そう言うと、急ぎ足で医務室に向かって行った。
その後、慌てて、医務室に連絡するリンディと、数テンポ遅れて、後を着いて行く少年少女達がいた。

医務室。ＺＥＲＯはそこに着き、その中を見渡した。
まず、ベッドにプレシアが、グルグル巻きで横たわっていた。
その隣のベッドで、フェイトがうんうん唸りながら寝ていた。

……何故か、ＺＥＲＯが直立不動で、暫し沈黙の業に入り、その間に追い付いてきた子供達が、訝しみながら、ジーッと見ていた。
…ようやっと、戻ってきたＺＥＲＯは、まずフェイトに歩み寄り、側にいるアルフに容態を聞いた。

「アルフ。フェイトは大丈夫か？」
「ＺＥＲＯ！…フェイトは大丈夫だよ。ちょっと気絶しちまっただけだから。それよりＺＥＲＯ！！一体あれは何……」「ここは、病室だ。静かにしろ。」「ぐっ……。」
「その質問には後で纏めて答えてやる。取り敢えず、プレシアの治療を始める。フェイトを起こしてくれ。」
「……？…解ったよ。」
アルフに揺り起こされた、フェイトはまたもや、母の所に駆け寄ろうとしたが、全員（ＺＥＲＯ以外）に止められた。

「皆、落ち着いたか？…ではこれより治療を始める。…水薙。」
「イエス、マスター。」
そうＺＥＲＯが言うと、何処からともなく、漆黒の服に身を包んだ女性が現れた。
その女性が、プレシアの体に手を翳すと、彼女の体が光輝き、光が収まった時には、怪我は完治していた。
皆が驚いている中、プレシアが目を覚まし、起き上がった所で、ＺＥＲＯが声を掛けた。
「身体に異常は無いか？プレシア。」
「…ええ。無いわ。ＺＥＲＯ。…有難う。」

「礼には及ばない。…それより、歩けるなら、アリシアの所へ行くぞ。……彼女を蘇らせる。」

「な！！！何ですって！！！！！」
「二度は言わん。…リンディ案内しろ。」
「わ、解りました…。」
皆殆ど置いてけぼりな儘、ゾロゾロと、リンディとＺＥＲＯ達の後を追って行った。

「…着きました。此処です。」
「…解った。…では、ユーノとクロノは出ていろ。」
「え！？」「な、何故だ？！」
「……お前等…裸の少女をそんなにマジマジ見たいのか？エロガキ共。」
周りの女性陣に睨まれ、真っ赤になりながら、慌てて扉に背を向ける二人であった。

「…ＺＥＲＯ？本当にアリシアを生き返らせる事なんて出来るの？」
「ああ、恐らくは…な。まずは全員、質問は後だ。…どうだ？水薙。」
「…マスター。少し難しそうです。」
「…矢張り、そうか。……龍斗。」
「はい、ＺＥＲＯ様。」
難しいという、女性の言葉に、少なからず落胆した皆に構わず、ＺＥＲＯが呟くと、又、何者かが唐突に現れた。…それは、以前ＺＥＲＯが、アースラに来た時に現れた、あの彼であった。

その彼が、抱えていた本の白いページを開き、手を翳し暫く唸ると、何かを呟いた。
「……見つけた。」
その言葉と共に、本が激しく輝きだし、本の中から蒼い発光体が現

れた。…それは誰がどう見ても、こう言うであろう。……魂…と。
その魂は、カプセル（アリシア）の上で、動きを止めた。
そして、彼と女性（りゅうと　みずち）がその両脇に立ち、カプセルに手を翳すと、カプセルの中のアリシアが、見えなくなるぐらいに、光り輝き、浮かんでいた魂が、吸い込まれていった。

そして、光が収まると、カプセルからアリシアが排出され、液体は全て女性に吸収された。

「！！アリシア！！！」
「待て！まだ様子を見てからだ。」
思わず駆け寄ろうとする、プレシアを止めるＺＥＲＯ。
そうこうしている内に、モゾモゾとアリシアが動き出し、目を覚ました。
そして、意識がはっきりとしてから、水薙が幾つか質問をした。

「初めまして。私は水薙っていうの。あなたのお名前は？」
「ありしあ…。アリシア・テスタロッサ。」
「そう、アリシアちゃんっていうんだ。今、何歳？」
「五つ。」
「そうなんだ。ねぇ、起きるまで何をしていたか覚えてる？」
「うんとね、お母さんのお仕事している所を見ていたの。そしたら、おっきな光が出て来て、その後は……わかんない。」
「そう。ありがとう。アリシアちゃん。」

「…どうだ？水薙。」
「はい。問題ありません、マスター。記憶の混濁・齟齬も、一切ありません。」

「…そうか。二人共御苦労。…どうやら、蘇生には成功したようだ。」

「ああ……アリシア…。」

「あ！ママ！……どうしたの？なんで泣いているの？ママ？」

「何でもないの……もう、全て終わったの……もう…大丈夫よ……。」

「ママ？……泣かないで…ママ。わたし良い子にするから…だから…泣かないで？ママ。」

「アリシア……。」

「感動の場面に済まないが、まだ用事がある。」

「…え？」

「とあるモノと約束していてな。…プレシア。お前に枷を一つ与える。」

「…枷？」

「ああ、枷だ。アリシアを蘇らせる条件だ。…事後承諾だがな。」

「…構わないわ。こうして、アリシアを蘇らせてくれたのだから。」

「…そうか。助かる。では、出て来い。」

そうＺＥＲＯが言うと、彼の背後の空間に、白い穴が空きそこから、又、魂が現れた。

「…これは？」

「お前と使い魔契約がしたいという、物好きの魂だ。今から強制的に契約させる。…龍斗。」

「はい。ＺＥＲＯ様。」

そう彼が言うと、その魂がプレシアの体内に入り、彼女の魔力を使い、形を成していった。

「……？…！！！リニス！！！！！」
「…お久し振りですね。…プレシア。」
「細かい事は彼女から聞け。契約内容はこうだ。
契約主か自身が死ぬまで共に居る事…だ。解りやすいだろう？
久し振りにじっくりと話すと良い。時間はたっぷりあるからな。」

「では、俺達は外に出ていよう。この部屋は好きに使えばいい。…
構わんだろう？リンディ。」
「……ええ。構いません。」
「という事だ、プレシア。…フェイト、アルフ。しっかりと説明し
て貰え。…全てを…な。」
「…は、はい…。」

「…さて、リンディ。彼女等の扱いはどうするつもりだ？」
「…流石に無罪という訳にはいきません。…ですが、情状酌量の余
地があると思います。」
「……ハァ……矢張りそうか…何処までも貴様等は愚かなのだ
な。」
「……どういうことでしょうか？」
「…解らんか？…資料を見せただろう？彼女等の何処に落ち度が有
る？万人が、管理局に非が有ると、言うだろうな。」
「…ですが、それでは本局が納得しません…。」
「そんなこと、俺は知らん。あの腐った脳味噌共は貴様等で何とか

しろ。」
「（…脳味噌？）…しかし、それでは、あなたが便宜上、一連の事件の犯人に、なってしまう可能性があります。」
「え！！？そんな！！何とかならないんですか！！！」
「…気にするな、なのは。俺は構わない。…管理局（キサマラ）に、滅ぼされる覚悟が有るのならば…な。」
「くっ……！！」
「それに、貴様等は勘違いをしている。」
「…何を勘違いしていると言うのでしょうか…？」

「此処は何処だ？……そう。
第９７管理外世界『地球』。貴様等の法は適用されない。決して犯罪には成り得ないんだよ。
…いや、寧ろ貴様等の方が不法侵入者だな。
他人の星（いえ）に土足で上がり込み、
『此処は俺のシマだ！今から俺に従え！従わなければ一生豚箱だ！！』
と言っているのと同じなのだからな。」

「貴様！！！そこまで管理局を侮辱するのか！！！！！」
「…！！いたのか…！クロノ…。」
「さっきからずっと居た！！！それより、今の言葉を取り消せ！！！」
「だが断る。…それに最も大事な事を忘れている。」
「何だ！？何を忘れているって言うんだ！！？」

「俺がリンディと交わした約定だ。その二つ目。『俺のやる事に一切、文句・口出しはしない事』

彼女等は無罪だと俺が今決めたんだ。一切の文句は許さない。

…それとも……早くも約を違える気か？リンディ・ハラオウン提督。」

「そんな横暴なk」「…解りました。」「艦長！！！！！」

「ですが、せめて事情聴取はさせて下さい。…でなければ彼女等が無罪だという証明も出来ません。」

「…俺は今直ぐ管理局（キサマラ）ごと、ミッドチルダを滅ぼしても構わんのだがな……。」

「……どうか、お願いします。」

「…フン…。まぁ、いいだろう。…だが、もし上層部（クズども）が、俺を次元犯罪者に、仕立てあげる様な事があれば、その瞬間、管理局はこの世界から、完全に消え去ると思え。」

「……解りました。何とか努力してみます。」

「俺は別に構わんぞ？…管理局を滅ぼせる、真っ当な大義名分が、出来るのだからな。」

「……必ず何とかしてみせます。」

「そうか。……では、これにて全て解決だ。後はリンディ提督の手腕に期待するとしよう。」

「あ…ま、待って下さい！！」

「何だ？ユーノ。まだ何か用か？」

「あの…ジュエルシードはどうなったんですか？」

「あの石ころならば、奴に魔力を根刮ぎ奪われて、全て砕け散ったよ。」

「「ええっ！！！！！！」」
どうやら、とても驚いている様だ。リンディ達に至っては声も出ないらしい。
「じゃ、じゃあ、あの人はどうなったんですか？！」
「俺が殺した。あの程度の僅少な魔力では、俺に及ぶべくもないのでな。」
全員絶句していた。…この隙に退散するとしよう。
「ではな。管理局の諸君。近い内に又、会う事になるだろう。…さらばだ。」
そう言うと、彼等は忽然と姿を消した。
…と思ったら、又現れた。
「そうそう、忘れていたよ、クロノ。伝言を一つ頼まれてくれ。」
「で、伝言？…だ、誰に？！」
「ギル・グレアム提督に。妹がいつも世話になっていると兄が言っていたと伝えてくれ。ではな。」
そう言うと、今度こそ姿を消した。
後には、驚くクロノと、呆然としている一行の姿が有った。
その後、友達との一時の別れを、感動の場面と共に見送った後、彼も家に帰った。…そう。彼の帰るべき家へ。

そして、暫く別れていた兄妹は、又、共に暮らし始めた。

泣きじゃくる妹と。

それを優しく、困った顔で宥める兄と。

新しい友と。

新しい家族と。

新たな仲間を加えて。

物語は加速する。

『A's』へと……。

終幕（後書き）

…それにしても、何故忙しい時に限って、急な用事って増えるのでしょう？

皆様、そんな時こそ冷静にならなければ却って失敗致します。お気を付け下さい。

と、愚痴を一つ零した所で、締めとさせて頂きたいと思います。

では、皆様、今話も拙筆を読んで下さり、有難う御座いました。

家族（前書き）

現時刻（０１：００）
ＰＶ：６４，９９９アクセス　ユニーク：８，７２４人
皆様毎度有難う御座います。
６０，０００アクセス＆８，０００人突破致しました。
真逆、一週間で５０，０００アクセスを越えるとは、思いもしませんでした。
心底から感謝致します。
では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

家族

ｓｉｄｅ：カイト

とうとう、この日がやって来た。

…俺の愛(はや)しい人を蝕む

闇の書(ビョウゲンキン)の闇を

跡形も無く屠る始まりの日が。

さぁ……闇よ……

貴様の犯した大罪……

未来永劫償って貰うぞ……。

ｓｉｄｅ：三人称

「…カイト兄ぃ♪」

「は～やて♪」

……どういう状況か、お判りだろうか？
……正解は、カイトの膝上に、はやてが乗り、猫の様にスリスリ甘えているのである。
……カイトは当然デロデロ顔である。

どうやら、先程までの別離の一件で、はやての寂し度が、限界を突破し、甘え度が頂点を越えたらしい。
帰って来て以降、御手洗（トイレ）さん家以外は、片時も離れていない。

……そこ、砂糖吐かない。

「ところで、はやて。明日の誕生日の事なんだけど…。」
「うん。何？カイト兄？…わたしはカイト兄がいてくれれば、それでええよ♪」
「……（グフッ）俺もだよ。はやて♪」

……ダメだ、このバ（バカッポー）……兄妹はやくなんとかしないと……。

従者達の心が一つに（シンクロした）なった。

「でね、はやて。はやてには悪いんだけど、今日、零時まで起きてくれないかな？」
「？わたしは別にええけど、何で？」
「内緒♪…でも、はやてにとっては、とっても嬉しいサプライズだよ♪」
「うん！解った！ほんなら楽しみにしとるよ♪」
「よし！良い子良い子♪♪」　ナデナデナデナデ
「えへへへ～～～～♪♪♪」
「はやてはどうして、こんなに可愛いんだろうなぁ～？♪」
「カイト兄の方が格好ええよ♪」

「はやて♪」
「カイト兄ぃ♪」

……ダメだ、この兄妹(バカ)はやくなんとかしないと……。

……最早、カップルですら、無かった……。

その夜。午前零時。運命の時が訪れた。

で。翌朝。

「テメエ！はやてから離れろ！！」
「ダメだ！はやては俺のだ！！！」
「なら、ジャンケンだ！！」
「上等だぁ！！！！！」　ジャーンケーンポンッ！

「アイムウィナー。」
「くっそー…はやて……。」
「……お前等、仲良いな…。」

…お判り頂けるだろうか？
…どちらがはやてを独占するか、カイトとエターナルロリータが争い、カイトが勝利したのだ。
…大人気ねぇ……。

そして、ボインの姉ちゃんが呆れている図である。

…お前等、仲良いな。

「…さて。落ち着いた所で…。」

「ああ、そうだな…。」

「今日は何して遊ぼっか？」

「ちげーよ！！アタシらに説明すんだろうが！！！！」

「うむ。ナイスツッコミだ。流石は、エターナルロリータ。」

「……てめぇ……アイゼンの消えない染みにしてやろうか……。」

「……そろそろ本題に入っては貰えないだろうか？」

無限ループになり掛けていた所を、眉間を揉み解しながら、何とか抑えるボイン。

……今度胃薬をあげよう。そう、心に決めたはやてであった。

「さてと、しょうがない。…で、何を何処から聞きたい？」

「全部だ。」

「じゃぁ…まず。今日は六時に起きて、はやての顔を一時間程、じっくりと鑑賞して、目が覚めたはやてと、四半刻程いちゃいちゃして、それから……」

「…そういうことではない。…貴様が何者かという事と、何故我等の事を知っていたか。という事だ。」

「なら、始めっからそう言えよな。」

「……頼むから早く答えてくれ。」

「しょうがねぇなぁ…。

まず俺。名は、八神カイト。はやての義理の兄で、魔法使い。力は何れ見せる。

んで、何でお前等の事を知っていたかと言うと……ヒ・ミ・ツダヨb♪」

「（…イラッ☆）…何故秘密にする？我等や主に、言えない事でもあるのか？」

「そりゃ、あるに決まってんだろ？人間生きてりゃ、大なり小なり、他人に言えない事ぐれぇ、あるもんさ。…それに、お前等に言わない理由は、他にもある。」

「…何だ？」

「お前等が、真にはやての家族足り得るか…それを見極める迄は、何も教えてやらん！」

「…カイト兄ぃ…私が頼んでも駄目なん？」　ウルウル＋コテン

「…ヌ、ヌグフゥッ……だ、ダメダ…オシエラレナイヨ？」

「……ケチッ…。ほんなら、わたし、ヴィータのところに行く。」

「しょうがないなぁ！！！教えてあげよう！！！！！」

「……よわっ。」

「そこ、五月蠅いぞっ！…そうだなぁ……じゃぁ、ヒントって事で、俺の二つ名を幾つか教えよう。

『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』

『宇宙（そらの）の救世主（メシア）』

『世界（ワールド・）の破壊者（デストラクション）』

そして、『無限にして無窮なる旅人』……てなところか。」

「…それの何処がヒントだと言うのだ?」

「紛れもなくヒントだよ?…ザッフィー見てみ?」

一同が言われた通り、ザフィーラを見ると、ガクブルしていた。

「な!!!ど、どうした?!ザフィーラ!!?」

「……き、貴様が……い、いや、あなたが…あ、あの…宇宙の救世主にして…世界の破壊者…。」

「え!知ってるの?!ザフィーラ!?」

「あ、ああ。聞いた事がある…。要点だけ言うと、遙か古代ベルカが出来る以前から、あらゆる世界に居て、時代の節目節目に、時と次元を越えて現れるという、神話の伝説レベルの御伽話だ……。」

「ハァ!?そんな奴が何でこんな所にいんだよ?!?!」

「ああ。そんな風に言われてんだ…、俺。」

「…ひ、否定せぇへんの?カイト兄。」

「う~ん……否定というか…まぁ、だいたいあってる…というところか…な?厳密に言えば、殆ど違うけど。」

「どっちやねん。」

「まぁ、どっちでもあって、どっちでもないってとこだね。…んで、もういいかな?」

「いや、まだ…」「ああ、もういい。」「な!ザフィーラ!!何を!?」

「シグナム。彼は我等を見極めると言ったのだ。主に危害を加える事は無いだろう。それに、試されているのは、我々なのだ。ならば、彼に認めさせてやればいい。…違うか?」

「…確かにそうだが……。」

「面倒臭ぇな…もうやっちまおうぜ！」
アイゼンを構えるヴィータ。を抑えようとするザッフィー。
「な！待て、ヴィータ！早まるな！！」
「俺は別に構わんよ…。その方がお前等も、余程納得するだろう？」
「…そうだな。それが最も手っ取り早い。」
溜息を付き諦めるザッフィー。そして、彼女等を後目に、はやてを車椅子に乗せるカイト。

「んじゃぁ、ちょっと待ってろ。今、無人惑星を探している。……
……見つけた。…行くぞ。」
その言葉と共に、はやて家から転移した。

「…此処は？」
「地球とほぼ同じ成分の空気の無人惑星。」
「……良く、そんなとこが見つかったな。」
「ま、御都合主義という事で。」
（本当は、違うんだけどな）ということはおくびにも出さず、はやて達に溜息を付かれていた。

「さて、まずは結界を布いて…と。」
星一つを覆う結界を、一瞬で張ったカイトに驚く一行。だが、この後のカイトの言葉に、もっと驚いた。

「取り敢えず、お前等四人纏めて掛かって来い。様子見なんかせずに、最初からフルパワーでな。こっちはちゃんと手加減してやるか

ら。」
当然憤るバトルジャンキー。
「貴様…我等を侮るか！！！！！」
「いや、それが真っ当な戦力差だから。…悔しいなら、俺に本気を出させて見な？」
「その言葉、後悔するなよ！！！！！」
戦闘態勢に入る四人。

「さて…。いきなり殺しちゃまずいしな……じゃぁ、これで。」
そう言うと、カイトは自身の魔法を発動した。

「ファースト・イグニッション　アクア　アムド　ウイング・ホワイト」

すると、カイトの体を光が包み、蒼色に輝く鎧を全身に着込み、背中からはまるで、天使の様な翼が生えていた。
その美しさに思わず皆、見惚れた。…惚けていると、何時の間にか、自分達の目の前に飛(いた)んで来ていた。

「じゃぁ、やるか。…因みにこれ、一番攻撃力の低い鎧だからな？この程度は、最低でも耐えてくれよ？」
そう言うと、彼から、巨大な魔力が吹き出してきた。…思わず怯む四人。すると、カイトが萎えてしまった様だ。
「おいおい……こんなんで怯むなよ……お前等どんだけ弱いんだよ……マジでやる気無くすぜ。」
その失望の言葉に、自身を奮い立たせ、ようやっと戦闘態勢が整った。

「んじゃ、どっからでもいいから、かかってきな？」
そう彼が言うと、両手をだらんと無防備に下げた。

「くっ…舐めんなぁっ！！！！！」
というヴィータの掛け声と共に、闘いの火蓋が切って落とされた。

結果は、勿論惨敗。初めは全ての攻撃を躱され続け、いい加減切れかけた頃に、全ての魔力を込めた攻撃を、悉く受け止められ、全員一撃で気絶させられた。
そして、家に帰ってきた後。

「なんなんだ！てめえは一体！！！」
「なんなんだって…だからはやての義兄だよ？」
「そうじゃねえ！！！なんでアタシらの攻撃が、全く当たらない上に、全力の一撃をくらっても、無傷なんだよ！！！おかしいだろ！？！？！？」
「いやいや、全然おかしくないって。そんだけお前等が弱いって事だろ？精進しろよ～？」
「ふざけんな！！！！！！」
「いや、大マジだって。」

「てめぇ……まだ」「そこまでだ、ヴィータ。」「シグナム！！！」
「何れにしろ、我々は負けたのだ。それは認めなければならん。」
「くっ……だけどさぁ！！！」
「まぁまぁ。偶に訓練の相手をしてやるからさ。…今日は取り敢えず、家でまったりしようぜ。……後、ヴィータ。今日はやてと一緒に寝るのは俺だからな。」
「なっ！！！ずりぃぞ！！！てめぇ！！！」

「ハッハッハ。勝ってから言い給へ。」

急に騒がしくなった八神家。

この幸せな日々が、いつまでも続くようにと、願う家主（はやて）と。

その願いを叶える為に、己が全てを掛ける居候（カイト）。

そして、新たな家族（ヴォルケンリッター）。

空を見上げれば、遙かな蒼穹が拡がっていた。

休日～戦闘～（前書き）

現時刻（１６：３０）
ＰＶ：７１，８４６アクセス　ユニーク：９，６２４人
皆様いつも有難う御座います。
７０，０００アクセス＆９，０００人突破致しました。
更に、何とお気に入り登録が、５０件突破致しました！！！
皆様、この様な拙作を気に入って下さり、誠に感謝の念に堪えません。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

休日～戦闘～

ｓｉｄｅ：カイト

あれから、一月程経った。その間に色んな事があった。……思い返してみよう。

守護騎士（ヴォルケンリッター）達が、八神家に来た翌日。今度はなのは達が祝いに来て、シグナム達と更に一悶着あった。…子供相手に、警戒し過ぎだろ…あいつら（ヴォルケンリッター）…。

更にその数日後。高町家の近くに、二軒引っ越して来た。一つは言わずもがな、ハラオウン家である。

そして、もう一軒。ハラオウン家の隣の、テスタロッサ家である。

…どうやら、纏めて管理局で買い取った様だ。……やり過ぎだろ？

阿呆共（かんりきょく）……。

んで、久し振りに、喫茶『翠屋』に皆で行ったら、高町家四人揃っての、説教フルコースだった……。

…でも、はやてが泣きっぱだったとか、寝言でカイト兄ぃとしか、言ってなかっただとか、逆にはやてが困り果ててた。……めらっさ可愛いかった……グゥレイト！！！！

で。新たな家族の紹介をし（出自は適当）、ハラオウン家＋エイミ

ィと、テスタロッサ家ともお付き合いする事になった。
因みに、フェイトは、やはりハラオウン家の、養子になる話がある様だ。
結局、保護観察処分扱いになってしまい、どうせなら…という話になっているらしい。
…ちっ…管理局(クズども)が……だが、フェイトは寧ろ、喜んでいるらしい。
母さんや家族が、二つ出来たと…。ええ娘や…ほんまに…。

後、隣同士にしたのは、フェイトがどちらの家にも、来易い様にという配慮らしい。リンディ…GJ。

「…カイト兄ぃ？何時まで現実逃避しとるんや？」
そう。何故、急にモノローグを語り出したか、というと理由がある。
今、バニングス家の別荘に来ているのである。んで、此処は何故か、多対一の戦闘をするには最適な、だだっ広い道場である。
そして、俺の目の前には、戦闘態勢の整った、戦闘民族×３＋烈火の将が居る。
……もう、お判りだろう。…そう。これから彼等と、殺り合うのである。…誤字に非ず。

「もういいかい？カイト君。」
「嫌だっつっても、殺る気満々な人に言っても、意味無いですよね？」
「…そうだ。早く木刀を持って構えろ…カイト。」
「…だが断る。シスコンその一。」
「誰がシスコンだ！！！」
（お前だろ？）と全員、心の中で突っ込んだ。約一名は恥ずかしが

って俯いてた。

「俺の最も好きな事は、絶対にイエ」「それはもういい。早く構えろ。」

「（…俺まだ、お前等に言った事無いよ?）……このバトルジャンキーめ。」

「誰が、バトルジャンキーだ!!!」

（だから、あんただろ?）とは思っても、口が裂けても言えない一同であった。

「…ハァ……解ったよ。やってやる。…但し、俺は得物は持たない。」

「な!!…無手でやると言うのかい……?僕達相手に…。」

「ええ。それぐらいが、丁度いいハンデでしょう?…手加減してあげますよ。…さぁ、誰から稽古を付けて欲しい?」

「くっ……お前…何処までも俺達を舐めるなよ!!!」

「…舐めてねぇよ…。言ったろう?これが正当な彼我差だよ。…さぁ何処からでも、誰からでもいいぞ。…まぁ、メンドイから、纏めて掛かって来てくれた方が、助かるんだがな。…どうせ結果は同じだし。」

「くっ…貴様ぁ!!!」

その言葉と共に、一斉に掛かって来た。

ｓｉｄｅ：三人称

「動きが遅い。」「ぐはっ!」

「練度が甘い。」「きゃぁっ！」
「威力が弱い。」「くぅっ！！」
「隙がでかい。」「くそっ！！」
皆、何が起きているのか、全く解らなかった。
目に見えない速さで、肉薄したと思ったら、四人共一言ずつ貰って、吹っ飛んだのだ。…カイトは微動だにしていないのに。

「ハァ…だから言ったろ？ハンデだって。……でも、これでもまだ駄目か…。…あ。おーい、誰かチョークか水性ペン持って無い？」
その失望の言葉に、何糞と、四人が立ち上がったと同時に、カイトが書く物を要求してきた。
すると、ペンを貰ったカイトが、自分の周りに円を書いて、こう言い放った。

「よし！じゃぁ、俺をこの中から動かしてみ？取り敢えずそこからにしようか。あ、後、俺目隠しするからさ。流石にこれなら、少しは鍛錬になるだろ？」
「な、何ぃ……！！！！！貴様其処迄、我等を侮るか！！！！！」

「……御託はいいから、掛かって来いよ…雑魚共……。こちとら、欠片も楽しくねぇんで、苛ついてんだよ……。少しは、楽しませてみせろよ…。」
その言葉と共に、カイトから、圧倒的な闘気の様な気迫が溢れてきた。
その気迫に押され乍らも、何とか自身を奮い立たし、又、四人は壁（カイト）に向かっていった。

「士郎。体が鈍っている。修行を怠るな。」　ドグッ！「ぐおっ…。」
「美由希。全体的に練度が低すぎる。基礎からやり直せ。」　ドンッ！「かはっ…。」
「シグナム。大振り過ぎ。脇擽るぞ。」　バキッ！「ぐあっ…！」
「恭也。一撃に重みが無い。まだ覚悟が足らんぞ。」　ドゴオッ！「がっはぁっ……。」
…だが、それでも矢張り、一太刀も浴びせられず、ボロボロになっていく四人。

（……ねぇ、ザフィーラ。…カイトの動き見える？）
（……彼等が吹き飛ぶ度に、カイトの腕や足が、僅かにぶれているのが、辛うじて見える。…恐らく、その時に攻撃しているのだと思う。）
（……な、なぁザフィーラ。アタシらと戦っている時にも、思ってたんだけどよ……あいつ、もしかして、物凄く強くねぇか？）
（……強いどころの話ではない。……次元そのものがまるで違う。…奴と敵対する事自体が、そもそも間違いだ。）
（（……。））　ガクガクブルブル
…どうやら、カイトとの模擬戦を思い出している様だ。…よかったね。命があって。
そうこうしている内に、何やらカイト達に変化があったようだ。

「…防御一辺倒もそろそろ飽きたんでな。……俺も攻撃に移らせて貰おう。」

そう言うと、何時の間にか、壁に立て掛けてある、木刀のところにいた。

「取り敢えず、言う事は三つ。

まず、御神流。お前等、神速ですら、まだまだ未熟。全員基礎からやり直せ。

次、シグナム。お前レヴァンティンに頼り過ぎ。自身の剣技をもっと磨け。

……最後に……刮目せよ。…是、神速也。」

そう言い終わると、カイトは既に、彼等の後ろにいた。

そして、カイトが木刀を軽く振り払うと、彼の目の前の壁が、散々に吹き飛び、士郎達はその場に倒れ伏した。

「だから、言ったろ?物凄い手加減だって。……俺弱い物イジメって嫌いなんだけどなぁ…。」

そう言いながら、呆然としている観客席へと戻るカイト。と、途中でアリサに話し掛けた。

「あ、アリサちゃん。ゴメンね?壊しちゃって。直ったら教えて。後で全額払うからさ♪」

「う、うん。わかったわ…。」

「ところで、あの人達あのままでいいの?」

「…へ?」

「…一応手加減はしたけど、放っとくと多分、死んじゃうんじゃないかなぁ？」

その言葉に、慌てて寝転がっている四人に群がる人達。

…そして、はやてに、やり過ぎや！！！！！　と正座で怒られているカイト。

……これ、何て混沌（カオス）？

賑々しくも、幸せな日々。

その幸せも

この平穏も

後、僅かで破られる。

歯噛みしながらも

この温もりを
今は精一杯味わうカイトであった。

遙かな蒼穹の向こうに、暗雲が漂っていた。
ゆっくり、ゆっくりと
こちらに近付いていた。
まるで、これからの未来を
暗示しているかの様だった。

休日～戦闘～（後書き）

如何でしたでしょうか？

何れ、１００，０００アクセスを越えた時にでも

何か特別企画を書こうかと、画策致しております。

何か御要望等が御座いましたらば、遠慮無く仰って下さい。

私に叶えられる範囲で、頑張りたいと思います。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

休日～海～（前書き）

現時刻（１１：２５）
ＰＶ：８１，９０７アクセス　ユニーク：１０，６８９人
皆様、毎度有難う御座います。
８０，０００アクセス突破致しました。
そして、とうとう……ユニーク１０，０００人に到達致しました！！！
皆様、本当に感謝致します！！！！！
では、今話も拙作を御堪能下さい。

休日～海～

ｓｉｄｅ：カイト

…青い空。白い砂浜。照り付ける日差し。…そして、蒼い海。

……そう、何を隠そう…。ここは海。海水浴に来ているのである。

……生きてて良かった。

「……そう、思わないかい？」

「「「……は？」」」「…何がだい？」（…カイトの考えている事はいつも良く解らん……。）

…全く、ノリの悪い奴等め……。

……にしても、女性陣は遅いのう……。

……ハッ！まさか、俺を焦らそうという魂胆か！！！…だが、許せる！！

……と、来たようだな。

「みんな。お待たせ♪」

……うむ。眼福の極み。嗚呼、素晴らしき哉。美しき哉。

美女＆美少女の水着姿よ。

だが、その中でも、はやてが抜きん出て、最強・最高・最上に可愛いという事だけは、特筆しておく。

さて。何故、この様な幸せな一時を、過ごせているかと言うと……

「海水浴？」

「ええ♪折角の夏休みですもの。みんなで行きましょ♪♪」

「良いわね、それ♪」

と、リンディ＆桃子の最強コンビが、決めてた。…逆らえる訳がねぇ……。…逆らう気も無かったが。

メンバーは

高町家（＋５）・ハラオウン家＋エイミィ＋ユーノ（＋４）・テスタロッサ家（＋５）・バニングス家（＋２）・月村家（＋４）・八神家（＋６）の総勢２６人である。……多っっっ！？！？！？

因みに、アリサのとこからは、執事さんが。

すずかのとこからは、前回の温泉の時に、誘ってくれなかったと怒っていた、メイド二人付き。

ハラオウン家に至っては、良い機会だからと、アースラをオーバーホールしてまで来ていた。……阿呆だろ？

では、それぞれの行動を解説しよう。

ｃａｓｅ１．子供達（女）

なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか・アリシア

砂浜で遊んでた。…って城でかっっっ！！！！！

ｃａｓｅ２．母達

桃子・リンディ・プレシア

デッキチェアに寝そべって、しっかり堪能してらっしゃる。

…かと思いきや、ちらちら子供達の方を確認しては、ホッと溜息を付き、優しい微笑みを見せている。

……流石、母親。……何気に、リンディとプレシア、仲良いし。

…因みに、プレシアは、フェイト達にちゃんと、全てを説明したらしい。

流石に、フェイトとアルフは、衝撃を受けたが、今では、ちゃんと受け入れられた様だ。

問題は…アリシアの方だった。彼女は、初めて本気で怒ったらしく、一週間程、プレシアと口を利かなかったらしい。

「…お願い、許して…。」と、涙ながらに、アリシアに許しを乞うプレシア。

「……不覚にも萌えてしまいました……。」と、リニスが言っ

ていたそうな。

case3．戦闘狂達

士郎・恭也・シグナム

遠泳していた。向こうに幽かに見える島まで、泳ぐそうだ。……
…マジで馬鹿だろ？あいつら。

case4．その他

美由希・忍・ノエル・ファリン・リニス・ユーノ・クロノ・エイミィ・ヴィータ・シャマル・鮫島さん・アルフ・ザッフィー

ビーチバレーしていた。組み合わせは以下の通り。

美由希・忍・エイミィ
リニス・ノエル・ファリン
ヴィータ・シャマル・ザッフィー（ｉｎ…狼ｖｅｒ．）
クロノ・ユーノ・鮫島さん（何故？）　の四組。
アルフ（子犬ｖｅｒ．）は応援団長。対戦中じゃない六人と一緒に、わふわふ言ってる。……少し萌えた。

んで、俺はというと……ビーチパラソルの下で、皆の様子を眺め

ていた。…グラサンを掛けながら。

（……平和だな……。）

（……ますたぁ）（……カイト様）（……相棒）（……主殿）

（……いいなぁ……僕も早くみんなと一緒に遊びたい……。）

ドテッ！　…何か転けた音がした様な…；

（…こ、鋼牙ぁ……。）

（…？どうかしたの？水薙お姉ちゃん？）

（…何でも無いわよ…。……ハァ。）

（？？？）

（くっくっくっ……そうだな…鋼牙。…早く皆と一緒に遊びたいよな？）

（うん！！！）

（…なら、この幸せを何としても、守らないとな……。）

（（（（（…はい。我等が主。我等が命に代えても、御守り致します。））））））

（…ああ。……俺は少し眠るよ。何かあったら、宜しく頼む。）

（（（（（（畏まりました。我等が主。ごゆっくり御休みなさいませ。））））））

……ああ……本当に……この幸せは……気持ちが良い……。

ｓｉｄｅ：はやて

「…眠ってもうた。」
「…ホントだ…。カイトさん、ぐっすり眠ってる。」
「全く呑気なモンね。」
「…でも、本当に、気持ち良さそうに眠ってる。」
「…うん。そうだね。」
「何か、凄く幸せそう。」
「…確かに。見てるこっちまで、何かほわっとするわね…。」
「どんな夢見てるのかしら？」

「……はやてといちゃついてる夢じゃねーのか？」
「な！！ななな！！！！！い、生き成り、何言うんや！！！ヴィータ！！！！」
「あ！それ、私も聞きたかったのよ！！…ねぇねぇ、実際どうなのよぅ？」
「ど、どうって……何がですか？リンディさん…？」

「決まってるじゃない！カイト君と　ど・こ・ま・で　いってるか…よ♪」
「ど、どこまでって……わたしとカイト兄は…その……きょ、兄妹ですし…。」
「でも、義理なんでしょ？…血の繋がらない人に、あれだけ、愛情を注がれて、何にも感じない訳は……無いわよねぇ？」

「せ、せやけど……わたしまだ九やし……カイト兄ぃとじゃ、歳が離れ過ぎとるもん…。」
「…その反応はやっぱり、脈大有りね♪……そういえば、カイト

って幾つなの？」

「ん？カイト君なら、前に四半世紀生きてるって言ってたから、今２５歳だね。」

“……ええ”「しーっ！起きちゃうよ！」“～～～～～～っっっっっ”

「……まだ、１０代だと思ってたの…。」

「……うん。思ってたより歳くってたのね…。」

「…で、でも全然そんな歳には見えないよね…？」

「…うん。もっと若く見える。」

「にしても、はやてちゃんとは、１６歳差…かぁ……。」

「はやてが１６の時、こいつは３２か……オジンだなｗ」

「…そういうこと言ったら、駄目だよ？ヴィータ。」

「そうだよ！年の差なんて、愛の前には関係ないよ！！！」

「…エイミィが言うと、実感が籠もってる分、迫力が違うわね…。」

「…ですが、私もその意見に賛成ですね。」

「な！リニスさんまで……；」

「だって……好きなんでしょう？はやてさん。」

「う……！？せ、せやかて……カイト兄ぃから見たら、わたし只の９歳の妹やし……」

「もう！ウジウジしない！好きなら当たって砕けなさい！！それが女の度胸よ！！！」

「…わたし、まだ砕けたくないぃ～～～；」

「…アリサちゃん…言い過ぎなの…。」

「う…！こ、言葉のあやってやつよ！」

「…よし！みんな！私に良い考えがあるわ！！！」

「…本当に大丈夫か？お前のそれは、何かとても危険な気がするぞ…？」

「あ～酷いんだ、シグナム…。間違いなく名案よ♪」

「…ぜってぇ、迷案な気がする……。」

「ヴィータまでひど～い～…。…もういいモン。…いじけてやるモン。」

「まぁまぁ、シャマルさん。一先ず、その案を教えて貰えませんか？」

「……今、丁度カイトがぐっすり寝てるから、はやてちゃんを近付けて…というか、カイトの上に乗っけちゃって、寝惚け眼の処に、色々聞いちゃおうかなぁって。」

「ああ、成る程。それなら、ついいらない事まで、口走ってくれそうですもんね！！！」

「それに、はやてちゃんとカイトさんが、普段どういう事してるのか、見れて参考に出来るの！！」

「…なのは？…何か少し黒いよ？」

「…それ、いいわね♪採用♪♪♪」

…カイト兄ぃ…ゴメン…わたしには止められへんよ……。

ｓｉｄｅ：三人称

鶴の一声で、早速実行に移す、カイト以外の面々であった。

……って、全員?!?!?!お前等暇人だね!?!?!?!?!?

…で。何とか、そうっと、はやてをカイトの上に降ろした処、苦しそうどころか、更に顔がにやついた。

「……はやてちゃんだって、判ってるのかしら?」

「……えへへ～カイト兄ぃ♪」

「…だめだこの兄妹はやくなんとかしないと。」

この場全員の共通意見であった。

「はやてちゃん。そろそろ起こしてくれない?」

「…えへへ～……ハッ!え、あ、は、ハイ!!」

どうやら、みんなが周りにいることを、忘れていた様である。どんだけやねん。

「カ、カイト兄ぃ?ちょっと起きてや?」

「…う、う～～ん……はやて?…は～やて～♪」抱きっ!

「わひゃぁっ!?」ぎゅ

「は～やて～♪♪♪」スリスリスリスリ

「か、か、か、カイト兄ぃ…～～～～～っっっ／／／／／／」

……ダメダこりゃ。…一同がそう思って諦めようとした時、はやてが意を決してカイトに聞いた。

「な、なぁ、カイト兄ぃ?カイト兄は私のこと……どう…思ってる?」

「ん？大好きだよ？」
「……へ？」
あんまりの即答に、周りも聞いた当人も、言葉を失っていた。
「……え、エ～ト…それはどういう意味で？」
「勿論、妹としてだよ。……今は。（ボソッ）」
「なんや…やっぱそうか……って…へ？い、今何て言うたん？！」
「ん？…内緒♪…お休み…はやて……。」

「あ、カイト兄！？……又、寝てもうた……。」
「…はやて。今、カイトさん何て言ってたの？」

「……多分、聞き間違いやなければ……今は…って。」
途端に色めき立つ女性陣。

「今は？！今はって言ったの？！！」
「あらら♪これはもう決まりね♪♪♪」
「でも、今はって事は、現段階ではまだ言わない、ってことでしょ？」
「そうね…まだはやてちゃんが9歳ってこと、気にしてるのかも…。」
「…ようし…そうと判ったらガンガンアタックしちゃいなさい！はやて！！」
「そうね！それがいいわね！」
「え……ええ～～～～！！！」
「大丈夫よ！カイトなら危ない事は、きっとしないから！」
「い、いや、そんな心配してませんよ？！」

…どうやら、完全にイケイケ押せ押せモードになってるらしい。
……当然、耳元でそんな大声で話せば……。

「う…ん……ん?…はやて…?……どわっっ!!!な、な、な、なんなんだ?!一体?!!」

side:カイト

…いや~ビックリした~~~……。あの時、起きたら俺の周りに、全員居て騒いでるんだもんな…。
しかも、はやてが何故か、顔を真っ赤にして、俺に乗っかってるんだからな…。
……まぁ、可愛かったから、いいけどな♪
……にしても、女性陣からの生温かい視線は、一体どういうことだろう???
はやては妙に、俺に引っ付いてくるし…。まぁ、物凄く可愛いからいいけどな♪♪♪

……さて、楽しい時間も、今日で終わりだ……。

愛(はやて)しい人…必ず俺が…俺達が助けてやる。

……そして……闇よ……

俺は…貴様を決して許さない……

未来永劫…後悔させてやろう……

俺の嫁(はやて)に取り憑いた事を……

俺の妹(はやて)を苦しませた事を……

俺の…愛(はやて)しい人を悲しませた事を……

……闇よ……貴様の存在(バグ)を……その魂毎、永久に消し飛ばしてくれる！！！！

その日の夜から、雨が降っていた。

翌日も降り続いた。

真昼なのに、落陽並の暗さだった。

だが、決してその歩みを止める事は無い兄（カイト）。

その兄に、何故か言い知れぬ不安を感じる妹（はやて）。

……今日も雨が降っていた。……そして……昼はより暗かった……。

休日～海～（後書き）

追記：ビーチバレーですが

二人ではなく三人な理由は、私事です。

実は、私が友達と遊ぶ時は、いつも二人ではなく三人で組んでいるのです。

その方が、決着は中々着きませんが、長く遊んでいられますので、

いつも地元では、そうして遊んでいるのです。

疑問に思った方には、申し訳有りませんが、

そういうことですので、御納得いただければ幸いに存じます。

番外・貳（前書き）

現時刻（１８：２５）
ＰＶ：８８，８５５アクセス　ユニーク：１１，５２４人
皆様いつも有難う御座います。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

番外・貳

ユニーク１０，０００人突破記念雑談！！！！！

カイト「…てなワケで、又ポンと任されたんだが……同じでいいんじゃね？」

紅蓮「いやいや、相棒？流石にそれは駄目だろ？！」

カイト「だってメンドイじゃねぇかよ……。どうせ追記とか、新公開情報とかで充分だって。」

龍斗「……（…ハァ…）カイト様さえ宜しいのでしたら、それに致しましょうか？」

カイト「おう！宜しく頼む、龍斗。」

龍斗「はい。…では、まず、追加情報から。」

『魔法（エレメント）の体現者（・マスター）』

※１　各属性を身に纏っている時は、その属性は魔力を消費しない。
故に、最強形態時は、鎧分の魔力しか消費しない。
又、「ウイング・ホワイト」の様に、龍・鎧以外の形態時の色を変えられるが
魔力を倍消費する。所謂、格好付けの為のみ。因みに、「ウ

イング」は、通常時は翠色。

※２　防御能力特化型である為、『盾（シールド）』・『防御障壁（バリア）』といった防御魔法は最も魔力消費の少ない剣（ソード）の１／１０。

又、その強度は、「ファースト」の『盾』一枚で「約束されし勝利の剣（エクスカリバー）」や「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）」と、ほぼ拮抗する。

※３　武器形態変化の際、双剣に出来るのは、「ファースト」のみ。

又、龍形態の時、お供の東洋龍がくっついてくるのも「ファースト」のみ。

因みに、必ず一緒に喚ばれる。

※４　鎧装着時の魔力量は、凡そ以下の通り。

１属性：１００，０００，０００（千億）
２属性：１５０，０００，０００（１，５倍）
３属性：２００，０００，０００（２倍）
４属性：２５０，０００，０００（２，５倍）
５属性：３００，０００，０００（３倍）
６属性：４００，０００，０００（４倍）
全属性：５００，０００，０００（５倍）

この魔力量を超えた場合、自動的に鎧は解放（パージ）される。

因みに、『今』のカイトの総魔力量は、９，０００垓。

※５　『カイザー』について

始動呪文（キー）は、「ファイナル　イグニッション」

その名の通り、最終形態。剣・龍・鎧形態にしかなれない。

剣状態の名前「ＥＸカリバーン」の正式名称は、『選定されし勝利の剣（ＥＸカリバーン）』。

龍形態の大きさについては、今はまだ秘密。『時の庭園』よりは遙かに大きいとだけ言っておく。

龍斗「…とまぁ、これぐらいでしょうか？」

カイト「一応、この世界に於いては規格外の魔力ってことらしいな。」

水薙「ええ。確か、なのはやフェイトが、無印時点で、凡そ１５０万程だったかしら？」

龍斗「正確には、なのはは１２７万以上。フェイトが１４３万以上。クロノが１２７万以下です。ですが、最大出力はその三倍以上は出ると言われていますね。」

カイト「……ってことは…最大で凡そ、４００～５００万か……少なっ。」

紅蓮「おめぇが多いんだよ！！？」

カイト「こまけぇこたぁいいんだよ！」

紅蓮「ところで、９０００垓って、数字にすると、どんだけになるんだ？」

龍斗「９００，０００，０００，０００，０００，０００，０００　です。」

紅蓮「……アホだろ？」

カイト「こまけぇこたぁいいんだよ！」

龍斗「…ハァ。…では、次が新公開情報です。」

『魔法（エレメント）の体現者（マスター）』

1.「ファースト」・「ファイナル」の他に
「セブンス・イグニッション」・「セカンド　イグニッション」の二つがある。
順番は「ファースト」→「セブンス」→「セカンド」→「ファイナル」で全部。
「セカンド」は「ファースト」の、純然たる上位種。
「セブンス」と「ファイナル」は、特殊。
2.「セブンス」は、剣と龍形態にしかなれず、鎧にもなれない。
「ファイナル」は、前述の通り。

龍斗「…取り敢えず、このぐらいに止めて置きましょうか。」

紅蓮「そういや、意外と数は少ないんだな。」

龍斗「ええ。その分強いので問題無いでしょう。」

カイト「…んじゃぁ、これで終わり？」

龍斗「いえ、後もう少しあります。…こちらです。」

カイト：　趣味：皆の幸せを見る事　　特技：場所・状況に関係なく眠れる事

黄宇：　趣味：武を志す者を鍛える事　　特技：料理（衛宮士郎と同レベル）

龍斗：　趣味：読書・ガーデニング　特技：裁縫

水薙：　趣味：恋話と惚気　特技：家事全般

紅蓮：　趣味：戦闘　特技：突っ込み（天然）

鋼牙：　趣味：遊ぶこと　特技：癒し（本人知らず）

龍斗「……以上です。」

紅蓮「……突っ込み所満載なんだが……。」

カイト「うん、よし。これ書いた奴、表出ろ。」

水薙「私は別に構わないわよ？これでも。」

鋼牙「？？？？」

黄宇「…鋼牙は可愛いなぁ…。」

龍斗「取り敢えず、今回はこれだけです。」

紅蓮「…何かやけに適当だな…。」

カイト「まぁ、いいだろ？別に。…次は、ようやっとあいつらを調（オシ）教（オキ）してやれるんだからな…。……クックックックックッ……アーッハッハッハッハッ！！！！！！」

水薙「……なんかマスターの方が、悪役っぽい…。……カッコイイ…。」

龍斗「……はぁ…。では、宜しいですか？カイト様。」

カイト「ああ。では、旅路に舞い戻ろうか。」

従者達「「「「「はい、我等が主。何処へなりとも、御供致します。」」」」」

下準備（前書き）

現時刻（１８：３５）
ＰＶ：９８，２１３アクセス　ユニーク：１２，４４５人
皆様、いつも有難う御座います。
後、もう少しで１００，０００アクセスに到達します。
本当に感謝致します。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

下準備

ｓｉｄｅ：カイト

…さて。少し、時期が早いが、はやてが倒れる前に動かないと、家（ヴォル）族達（ケンリッター）が無茶しだすからな……。

……では

宇宙の救世主（そらのメシア）にして

世界の破壊者（ワールド・デストラクション）

いざ……参る……！

取り敢えず、下準備…っと。

朝食後

「みんな。悪いけど、俺今日は用事があるから、ちょっと出掛けてくる。」

「？何処に行くんや？カイト兄？」

「ん～…今は内緒♪後で教えてあげるよ。…はやてを頼むな。」

「おー。ゆっくりしてこいよ～。その間アタシが、はやてを独り占め出来るんだからな！」
「ぬぐっ……おにょれ～……覚えていろよ…永遠のロリっ娘めぇ～…。」
「あんだと！テメェ！！」
「おっと！はっはっは…んじゃぁ行ってきま～す。」
「「行ってらっしゃ～い♪」」「主の事は任せておけ。」「ヘン！帰ってくんなよ！」（…気を付けろよ、カイト。）
「お～う。（サンキュ。ザッフィー。）」

取り敢えず、路地裏に入って、気配を消して…と。
「…アインス　フルアムド　偏光迷彩（ミラージュ）」

……よし。慌ててる、慌ててるｗｗｗ
んじゃぁ、ちょっと気絶して貰いまひょか♪　ドゴッ！　ドグッ！
さてと。アイツの所に出発～。

ｓｉｄｅ：グレアム

……！アリアとロッテの気配が途絶えた？！…誰だ？誰が一体……！転移反応？！！ここにか！！？

「…！アリア！！ロッテ！！」
「…初めまして。ギル・グレアム提督。」
「！！！…誰だい？君は…。」
「…今はＺＥＲＯと名乗っておこう。…まずは二人を起こす。…フンッ。」

「「あうっ……あ、マスター…ハ！！誰だ？！」」
「…ギル・グレアムにも名乗ったが、ＺＥＲＯだ。…リーゼアリア・リーゼロッテ。」
……驚いた。転移してきたと思ったら、二人が宙に浮いており、何処からともなく、ＺＥＲＯと名乗る、奇妙な配色の鎧を着た者が、現れたのだから。
しかも、私達の名前を知っている。…アリアとロッテの事まで…何処まで知っているんだ？
……だが、私が……いや、私達が最も驚いたのは、この後の事だった……。

「…八神はやての家を監視するのをやめろ、ギル・グレアム。…貴様等では闇の書を封じる事は出来ん。」
「「「な！！！」」」……そういう訳にはいかん…。これ以上の犠牲が出る前に…」
「…出る前に、八神はやてごと闇の書を、永久に封印するつもりなのだろう？…今、言った筈だ。…貴様等には無理だと。…例え、『氷結の杖　デュランダル』があろうとも…だ。」
「何！！！そんなことまで知っているのか？！？！」
「…ああ、知っている。…故に言っている。…貴様等では未来永劫無理だ。…考えを放棄し、妄執と贖罪の念に駆られた老い耄れは、退いていろ。（…魔力全解放（フルパワー））」
そう彼が言うと、突然彼から、とても人間では有り得ない程の、魔力が吹き出て来た。

「ヌ…！！！グッ…！？！？！？！？！？」「「…ア……ア……ア……」」ガクガクブルブル

「次に、そこの下等生物(アリアとロッテ)を見掛けた場合、問答無用で殺す。それと、今度の…土曜だな。休みを取り、クロノ・ハラオウンに連絡を取れ。貴様が殺した、部下の息子に…だ。面白いものが見られるぞ。

…では、確かに伝えた。…忘れるな、ギル・グレアム。…二度は無い。」

そう言いたい事を言って、彼は何の予兆も無く、唐突に姿を消した。

……私達は只、呆然とするしか無かった。

……クロノから、連絡が来たのは、この翌日だった。

ｓｉｄｅ：ＺＥＲＯ

今は…よし、休み時間の様だな…。矢張り、フェイトも共にいるか…。却って好都合だ。

（…聞こえるか？…なのは・フェイト。）

（（え！？…この声…ＺＥＲＯさん？！））

（…そうだ。…今度の土曜、八神家が一家総出で、喫茶『翠屋(ウチ)』に行く。…その時、全員アースラに転送して欲しい。）

（え！？『翠屋』に？！…で、でも何でですか？）

（…訳は何れ話す。…今の内に、クロノに連絡を入れて置いてくれ。…誰を一緒に連れて来ても、構わない。…では、頼んだぞ。）

クックック…なのはは大慌てだな…。フェイトは…なのはの御陰で却って冷静になった、という処か…。
だが、これで、何とか連絡はして貰えそうだな…。
…これで、下準備は終わりだ。
さて、勝負は今度の土曜だ……。

……そして、『運命（どようび）の日』。

side：三人称
「なぁ、みんな。今日は翠屋で食べない？何かあそこのコーヒーが、飲みたくなっちゃってさ。」
「せやね…。そういえば、今週はまだ行ってへんもんね。」
「んじゃぁ、其処に決定だな！」
「にしても、珍しい事も有るもんだな？カイト。お前が、主はやての料理以外を好むとは…。」
「ああ。あそこのコーヒーは格別なんだ。他の料理も旨いんだが、あのコーヒーの味だけは、はやてにも出せなくてな。時たま無性に、飲みたくなるんだよ。」
「そうか…。では、私も今日は飲んでみるかな。」
「ああ。お薦めするぜ？きっと虜になる事、請け負いだ。」

そして、翠屋へ着いた一行。いつも通り、大盛況だ。何とか六人席（五人＋一匹）を作って貰った。

シグナムには、大好評だったらしい。

「ハァ～…喰った喰ったぁ～。」
「うん。ほんまに、ここのご飯はいつも美味しいなぁ…。」
「うむ…。本当に美味だな…。」
「早速虜になってらぁw」
「でも、アタシははやてのメシの方が好きだよ！」
「クスッ…あんがとさん、ヴィータ。」

カランカラン　「いらっしゃい。あら♪フェイトちゃん達♪」
「お邪魔します。」
「あ、フェイトちゃん！」
「はやて。久し振り。元気だった？」
「うん！フェイトちゃんも元気やった？」
「…久し振りって程か？」
「特に親しい人と会った時は、2～3日でも、長く感じるもんだよ。」
「そういうモンか？」
「そういうもんさ。」
「…にしても、テスタロッサ家も勢揃いか…。今日は何か有るのか？」

その疑問も、尤もである。…だがしかし、その疑問の答えはすぐ出た。…思わぬ所から。

「…お母さん。ちょっと出掛けて来ます。」
「…行ってらっしゃい。遅くならない様にね。」
「…うん！」

桃子も何となく、ただ事ではない雰囲気を感じ取っている様だ。…

流石、高町家の裏の支配者。

「…はやてちゃん。それに皆さんも、ちょっといいですか？」
「？…どうしたんや？なのはちゃん。」
「あの…ちょっと…。」
「？」
「どうしたんだよ？いつものお前らしくないじゃんか？なのは」
「まぁまぁ。此処では言い辛いんだろう？取り敢えず、表に出ようぜ？」

そのカイトの言葉に、少々訝しみ乍ら、翠屋を後にする面々。…どうやら、テスタロッサ家も付いて来る様だ。
益々怪しいなのは達に、警戒心を強める守護騎士（ヴォルケンリッター）達。
そして、誰も人が居なくなったところで、立ち止まり、振り向いた。
…そして、一同は驚愕に包まれた。
…約一名、ほくそ笑んでいる事にも気付かずに。

「ごめんなさい！！…この場に居る全員を、アースラ内に転送！」
突然謝られ、首を捻っていると、足下に魔法陣が布かれ、咄嗟の事に反応出来なかった、八神家と共に、光に包まれた。

……光が収まった後には、全てが消えていた。

そして、舞台は移る。

地球軌道上にある、次元航行艦『アースラ』へと。

そして、全てが暴かれる。

世界の真実の全てが。

そして……物語は急激に加速する。

自身の愛しい人を、救いたいが為だけに、全てを擲ち、奔走する救世主（ぜんしゃ）（ぎ）。

その偽善者を、嘲笑うかの様に、物語は様相を変えていく。

又も、新たな『敵』を迎えて……。

下準備（後書き）

今回は連続投稿致します。

闇之書（前書き）

では、次話です。
拙作をお楽しみ下さい。

アースラ内。…どうやら、此処は訓練室の様だ。流石に、この人数（１０人＋２匹）で、転送室に送るのは止めたらしい。

「…くっ……！これは一体どういうことだ！！！高町！！！」
「ひうっ！？…ご、ごめんなさいぃ…た、頼まれたんです…。ＺＥＲＯさんに…。」
「ＺＥＲＯ…？誰だそれは？…そもそも此処は何処だ？」
「…ここは」「此処は次元航行艦『アースラ』だ。」
「…クロノ？何故お前が此処に居る？」
「それは、僕が時空管理局執務官だからだ。」
「「「（何っ！？時空管理局？！？！）」」」……その管理局が、我々に何の様だ？」

「……解らない。」
「「「「（は？解らない？）」」」」
「…ああ、そうだ。僕にはさっぱり解らない。…ＺＥＲＯが君達を、此処に呼ぶ様に、なのはに頼んで来たらしい。」

「…さっきからお前達が言っている、ＺＥＲＯというのは誰なんだ？」
「…正体は不明だ。いつも鎧を着込んでいる。しかもフルフェイスでだ。…オマケにロストロギアの魔力を吸収した奴を、あっさり殺

せる程のチカラを持っている。……正直、僕達でも手に負えない。」

八神家の面々と、それに釣られた、その場に居た全員が、思わずカイトを見た。……作り笑顔（わらっていた）だった。

「取り敢えず、クロノ。何処かでリンディさんが、待っているんじゃないの？待たせちゃ悪いから、案内して貰えない？」

「…あ、ああ。解った。」

（※因みに、はやては既に、魔法について知っています。ヴォルケンリッターが現れた時に、カイトから一通り、説明を受けていました。）

「艦長。全員連れて来ました。」

「…そう。入って貰って。」

「…皆さん、いらっしゃい。アースラへようこそ。

…改めて、次元航行艦『アースラ』艦長　リンディ・ハラオウン提督です。」

「では、改めて聞きたい。私達を此処へ呼んだ理由を…。」

「…御免なさい。恐らくなのはさんから、聞いたと思うけど、私達も知らないのよ。彼（ZERO）から、頼まれて貴女達を、呼んだだけなの。…強引な手を使った事は謝罪します。」

「…いや、それはもういい。…だが、一体何の目的で…？」

そう彼女達が、喧々囂々と議論している所に、クロノに通信があった。…そう。グレアムからである。
…これで、全て準備が整った。……さぁ、開幕(はじめ)しようか…。

「…クロノ。その人って、もしかしてグレアムさんって人じゃない？」
「な!?何故君がそれを知って居るんだ?!」
「やっぱり、そうなんだ。…はやて。あの人がはやてに、いつもお金を送ってくれている、グレアムおじさんなんだってさ。」
「え!?ほんまに!!あ、い、いつもありがとうございます!!!」
「…いや、気にしないでくれ。当たり前の事を、しているだけなんだから。」
「しかもね、はやて。何とグレアムさんって、イギリス出身なんだって。」
「え?わたし達と同じ地球出身なんですか?」
「ああ、そうなんだよ。なのは君。だから、余計に彼女の事が気になってね。」
「…提督?僕は初耳ですよ?」
「…わざわざ言う事でもないだろう?」

「そうそう。わざわざ言う事じゃないよな。…はやてを闇の書ごと、永遠に封印しようなんて事を…さ。」

“何ッ!?!?!?!?!?”

その場に居た全員が驚き、驚愕の顔をしているグレアムと……憎悪の目で嘲弄している…誰も見た事の無い顔をしているカイトを、交互に見ていた。

「…ど、どういうことなん?…カイト兄ぃ?」

「うん?言った通りの意味だよ?はやてに金を毎月送ってた、ギル・グレアム提督は今も毎日、はやての家を自分の使い魔に監視させて、闇の書の進行具合を見て、はやてを殺す機会をずっと伺ってたんだ。」

「……え?…な……なん…で…?」

「グレアムは、闇の書の所為で、自分の部下であり、クロノの父であるクライドを、自分の手で殺したんだよ。…で。その贖罪と、闇の書を葬るという妄執に、取り憑かれているんだ。んで、その結果、はやての許に闇の書が転移した事を突き止めたけど、はやてが病気だったから、闇の書を葬るまでは、はやてに生きていて貰わないといけないから、はやての両親の知り合いと偽って、金を送ってたんだ。

…何処か間違っているかい?グレアムさん?」

余りの事に絶句する皆。そして、問いかけられたグレアムは、顔面蒼白で震えていた。

「……な…何故……何故、君は其処まで…知って居るんだ…?」

「な!!では、お認めになるのですか?!提督?!!」

「……ああ、そうだ。…全て彼の言った通りだよ。……私は、

彼女を闇の書ごと封印する、機会を伺っていた……。」
そう言って、完全に意気消沈して、身を椅子に沈めるグレアム。

「これも又、管理局の闇。その一部って事だね。」
「…管理局の闇?…まるでＺＥＲＯみたいな事を言う……ハッ…
ま、まさか…。」

その言葉を待ってたとばかりに、笑みを深くするカイト。…思わず
皆が戦慄した。

「ＺＥＲＯ?…それは…こんな奴か?」

そして、カイトは……呪文（キー）を唱えた…。

「ファースト・イグニッション　第一形態（アインス）　完全鎧化（フルアムド）」

カイトを光が包み……そして、光が収まったその場には…あのＺ

ＥＲＯが居た。
「…そ、そんな……カイトさんが…あのＺＥＲＯさん…？」
「…嘘……。」
皆、一様に驚きの声しか上げられない。だが、そんな皆を意に介せずに、ＺＥＲＯ…いや、カイトは話し始めた。
「全く、貴様等管理局は、本当に屑だな。
プレシアの起動実験の隠蔽
フェイトを始めとする、人造魔導師の率先的製作
ロストロギア・ジュエルシードを巡っての一連の行動
そして、今回は闇の書だ。
……どうやら、本当に貴様等は一度、完全に潰されなければ、解らないらしいな？」
そのカイトの言葉の後に、人間ではあってはならない、膨大な魔力がこの部屋を満たした。
その、魔力と形容してもいいものか、判らないモノに押し潰されながら、リンディは問い掛けた。
「……くぅっ……で、ですが……闇の書に…ついては…今回は……未然に防げた…筈です。……他ならぬ……あなたの手によって……。」
「…未然に防げた…？…本当に貴様等は何も知らぬのだな。…ならば、教えてやろう。

…だが、その前に…鋼牙。」
「はーい。」

カイトが魔力の放出を止め、何かを呟くと、場にそぐわない、朗らかな声の少年が現れた。…だが、皆が驚くのはこれからだった。

「鋼牙。あそこに居る、グレアムと猫姉妹（アリアとロッテ）を、此処に引き摺り連れて来い。」
「了解♪」
そう言うと、目の前から消え、グレアムが移っている画面の中に現れ、二人を気絶させた後、グレアムごと、戻って来た。
「御苦労、鋼牙。」
「えへへ～。」
頭を撫でられ、満面の笑みで喜ぶ鋼牙。……お前等空気嫁。

「さて、では教えてやろう。これが真実だ。…龍斗。」
「はい。カイト様。」
又、現れた彼（りゅうと）。初めてアースラに来た時、同様に本に手を翳した。
そして、矢張り皆のデバイスに、情報を送り強制的に開示させた。
…デバイスを持っていない筈のはやての前にも。

「……！！？な！！！！？馬鹿な！！？闇の書を改竄したのが、管理局だと！？！？！？！？！？」
「そ、そんな筈は無い！！闇の書を改竄したのは、その時代の持ち主達の筈だ！！！！！」

「じゃぁ、その改竄報告をしたのは、何処の何方さんだい？」
「……！？…あ……ああ……では…私達は……」
「そう。結局管理局の、とばっちりと尻拭いをさせられていたってワケ。ＯＫ？」
愕然とする管理局の皆さん。…そしてこちらにも事実を受け入れられない面々が。
「…ど、どういうことだ…？これは…私達はこんなもの知らないぞ…？！」
「そりゃ、そうだろ。お前等ヴォルケンリッターは改悪されてんだから。」
「「「「な！！！！！」」」」そんな筈は無い！！！何か証拠でもあるというのか！？！？」
「…必死だねぇ…。まぁ、自分達のアイデンティティが崩れそうになりゃ、誰でもそうなるわな。」
「そんなことはどうでもいい！！！証拠はあるのかと聞いている！！！！！」
「あるよ？そりゃ。
まず、一つ。闇の書の正式名称は何でしょう？
次。闇の書を収集した後、一体闇の書はどうなるでしょうか？
最後に。今までの主で、末路を克明に覚えている者は居る？
誰か、どれか一つでも、答えられるかい？」
４人とも完全に沈黙してしまった。…そして、次のカイトの言葉が、

更なる衝撃を全員に与えた。

「大体、お前等がそんなんだから、はやては今、死にかけてるんだぞ？」

全員何を言われているか、解らなかった。だが、理解しても、無言の儘だった。…絶句していたのだ。

それを知ってか、知らずか、カイトは話し始めた。

「あのなぁ…そもそも、それなりに進んでる地球の現代医療で、原因が判らないって時点で、まず疑えよ。…いいか。はやての足の原因は、闇の書だ。闇の書の闇が、徐々にはやての体を蝕んでいき、その内寝た切りになり、死に至る。…そうだな……恐らく今年一杯だろう。」

「な！何ぃ！？なら何故！！！！！！！！貴様はそれを知っていながら何故！！！！！！！！！！主を助けようとしなかった！？！？何故我等にその事を言わなかった！？！？」

「言ったら、お前等、人間からも魔力を収集するだろう？

そうなったら、罪を被るのは、お前等じゃなくて、主のはやてだぞ？

只でさえ、管理局がはやての高い魔力に、目を付けてんのに……囚われて使い捨てられても構わないと…？」

「くっ……でもっ！！！！！」

「そもそも、お前等が気付かなかったのも、原因の一つだぞ？他人を責める前に、己を叱責しろよ。」

「だけど！！！！！そんなの、言われなけりゃ気付くワケ無いじゃないか！！！！！」

「いや、管制人格は知ってるよ？改悪された事も。お前達がしてきた事も。今までの主の末路も。…そして、はやてが死にかけているのも…全部。」

「「「「な！？！？！？！？そ、そんな……。」」」」

……守護騎士（ヴォルケンリッター）は、その場に崩れ落ち、はやてに泣き縋り、謝っていた。

「さて。色々、絶望＆混乱している所悪いが、そろそろ、はやて救出作戦…話して良い？」

“…は？”…シンクロ率４００％を越えていた。

「いや、だから、はやて救出作戦。…何？まさか、救う手筈が全く無いとでも思ってたの？俺（カイト）がはやてを救わないとでも思ってたの？……もしそうなら…お前等本気で殺すよ…？」

“ゴメンナサイ”…はやて以外土下座していた。

「全く…。いいか？はやてを救う方法は二つ。まず、一つ。闇の書による収集。」

「ま、待ってくれ！？それは駄目だ！！そんな事をしたら、闇の書が暴走してしまう…！」

「話は最後まで聞けっつうの。誰が、一気に全部集めるっつったよ。取り敢えず、４００頁。そんだけ集まりゃ、管制人格を呼び出せる。

それからは、呼び出した後で、又話す。」
「ほ、ホントにそれではやてが助かるんだな?!カイト!!」
「ああ、後は、はやての努力・精神・気合次第だな。…あ、後、はやて。」
「……へ?あ、な、何?カイト兄?」
「今言ってる、管制人格なんだけどな?…名前が無いんだよ。だから、はやてが付けてあげてくれ。」
「う、うん…解った。」
「…それで、もう一つと言うのは…?」

「ん?俺が、お前等ごと闇の書を消し飛ばせばいい。はやてを苦しめている根本原因を、取り除けば治る。当然だろ?」
「そ、それじゃぁ…ヴィータちゃん達は…。」
「勿論、諸共に死ぬよ?完全消滅させるんだから。未来永劫再生出来ない。」
「あ、あかん!!!!!そんなん絶対駄目や!!!!!!」
「解ってるって、はやて。そんな事、俺も望んじゃいないよ。だから、それははやての命が危ない時の最終手段。」

「…では、お前なら主はやての命を、救える…と言うのだな。」
「ああ。」
「…解った。もしもの時は頼む。」
「了解。…はやてには内緒な。」
「解っている。…我等も嫌われたくは無いのでな。」

「さて、んじゃぁ、最終確認するぞ。

1．グレアム達は、監視を止めて『デュランダル』製作に全力を尽くす事。

2．俺達は、無人世界の動物から魔力を掻き集める。

3．４００頁集まったら、もう一回連絡を取り合って、此処に集まる。

…と。これでみんなＯＫ？」

“了解！”

「それじゃぁ、今日はみんな家に帰ろうか？色々疲れているだろ？まだ慌てる時期じゃない。明日から頑張ろう！」

“おーーー！！！”

闇之書（後書き）

如何でしたでしょうか？

恐らく、今夜中に１００，０００アクセスは行くと思いますので

何とか、明日中に記念作品を仕上げたいと思います。

雨季様、要。どうか、お楽しみにｗ

番外・休憩（前書き）

現時刻（１６：５０）
ＰＶ：１１０，１５７アクセス　ユニーク：１３，６９８人
皆様、毎度有難う御座います。
到頭、１００，０００アクセス突破致しました！！！！！
これも偏に、この様な駄作を、読んで下さった皆様の御陰です。
心底から、感謝致します。

今回は、雨季様から許可を頂きまして、

『チートじゃ済まない』から、一条要にお越し頂きました。

では、雨季様。

そして、皆様。

今話も拙作を、お楽しみ下さい。

番外・休憩

ｓｉｄｅ：カイト

守護騎士（ヴォルケンリッター）を訓練中（フルボッコ）、それは起こった。
空に巨大な穴が現れ、中から人が落ちてきたのだ。
「……うわぁぁぁぁぁああああああああ！？！？！？！？！？」
「…チッ。…しょうがねぇなぁ…。」
ガシッ！
「お～い、大丈夫かぁ～？」
「……あ、ああ。わるい、助かったよ。」
取り敢えず、訓練（イジメ）は中止し、そいつを地面に降ろした。
「ふい～……ったく、あいつじゃないんだから、落とすなっての…。」
「…取り敢えず、落ち着いたか？」
「ああ。サンキュな。…で、…え～と…ここは何処？」
「地球と同じ成分の無人惑星。」
「……何で、そんな都合のいいもんがあるんだ？」
「御都合主義。」
「……そうか。」
「まずは…初めまして…かな？一条要。…俺は八神カイトだ。」
「あ、ああ。初めまして。俺はいちｊ…って何で知ってるんだ？」

「知っているから、知っている。…そんなことより、何故この世界に来たんだ?要。又、何か事件か?」
「いや、そんなことって……まぁ、いいや。…特に何かの事件があったとは、聞いてないんだが…。」
「ん?違うのか?んじゃ、何故?」
「いや、それがな?」

(以下、回想)
『おーい、要君。元気かい?』
(ん?神様!?…又、何かあったんですか?)
『う~ん…あったというか…これからあるというか…。』
(……何でしょうか?)
『まぁ、取り敢えず、行って来て♪』
パカッ　ヒュ~
(♪…じゃねぇーーー!!!)
(回想終了。)

「…てな、ワケでな。…思い出したら、何かイラッときた。」
「…ドンマイ。……んじゃぁ…どうする?恒例の戦闘…殺る?」
「何か字が違うよ?!」
「ドンマイ♪」
「いや、ドンマイじゃないし!?」
「んー…でもさぁ……

セカンド・イグニッション　第二形態(ツヴァイス)　完全鎧化(フルアムド)

魔力全解放（フルパワー）」

「んなぁ！？！？！？くっ…身体能力１００％解放、魔力１００％解放、アルティメットワン発動。アリストテレス、セットアップ！！！」《セットアップ》

「へぇ……耐えられるんだ……。デコピンで星破壊出来るぐらいの魔力は、解放しているのに。一応は鍛えているんだね。」

「ぐぅっ……なんて馬鹿魔力だ……ＯＲＴを解放しても勝てるかどうか……。」

「…それじゃぁ、殺ろうか？」

「くっ…やるしかないか……ＯＲＴ解ｈ」「なんちゃって♪」「おう…う？」

「だから、冗談だって。解放（パージ）」

「……全解除。」《了解、主。》「…で、どういうつもりだ？カイト。」

「だから、冗談だって。」「それはもういい。」

「……だってよぉ…今（セカンド）のに辛うじて耐えられる程度じゃ、俺と闘えないし。

そうなったら、確実にお前死ぬし。

そうしたら、２００％要のとこの最高神が、出張って来んだろ？

そしたら、最高神まで死んじまうじゃねぇか。それは、流石に困んだろ？」

「いや、確かに神様を殺されたら、困るが……って、神様殺せるの？！？！？！」

「うん、殺せる。…というか消滅（けせる）する。」

「……る？マジ？」

「大マジ。俺の宣伝文句、教えようか？

俺に傷を付けたけりゃ、創世神でも連れて来い。

俺を殺したきゃ、俺を喚んで来い。

俺の存在を消滅させたければ、俺以上の存在を育ててから来い。

ってね。」

「いやいやいやいや。」

「因みにこれ、比喩でも、誇張表現でも無いからね？言葉通りの意味だから。

創世神程度じゃ、俺に傷を付けるぐらいが関の山だし。ましてや、星に縛られてる神々じゃ、話にもならん。」

「いやいやいやいやいやいや。」

「まぁ、そんなワケで、戦闘は止め。取り敢えず、この世界のみんなに紹介するよ。

この際だ。今日ぐらいはゆっくり休んどけよ。そっちは忙しいんだろ？」

「…解った。じゃぁ、お言葉に甘えるとするか。」

ｓｉｄｅ：三人称

紹介後、喫茶『翠屋』へ。

「いやー、久し振りだなぁ…。」

「何だ。やっぱり、暫く来てなかったのか。偶には、連絡ぐらい入れてやれよ。なのは経由で。命令させてさ。」

「いや、そんなこと、命令するなって。」

「何言ってんだ。それぐれぇしなきゃ、あのワーカーホリック共は休まねぇだろ？それに託けて休ませろって事。」

「ああ、そういうことか。それなら、その内言っとくよ。」

「…倒れる前に、早目にな。」
「おう。」

「なんか、とても仲が良いの。」
「…ほんまに仲ええなぁ。」
「はやてちゃん?…もしかして……嫉妬してる?」
「な、な、な!そ、そ、そ、そんなワケないよ?!」
「お、落ち着けって!!はやて!」

「…何か騒いでるぞ?」
「いつもの事だよ。気にしない、気にしない。
…それより、そっちはどうだ?大分忙しいんだろ?レリック騒ぎでさ。」
「ああ。まぁ、何とかやってるさ。一応これでも、三佐だしな。」
(※要が喚ばれた時期は、ホテルアグスタ後の休日辺り。カイトの方は、闇の書事件後です。)
「…そういうカイトはどうすんだよ?これからさ。」

「ふむ……。要だけには教えといてやるよ。

…実はな、……を……して……って……にして、……は……に……出来る……を貰おうと思ってる。」
「うわぁ……(※どん引き中。)無いわぁ…。…所でさぁ…。」
「ん?」

「……って事は、……じゃないの？」
「それは嫌。だから、……なんだよ。
面倒臭い書類処理は、上の奴等にでもさせるさ。…断ったら殺して、首をすげ替えればいい。」
「……ゑ…えげつねぇ……。」

「いやぁ…今日は久し振りにノンビリ出来たよ。アリガトな。」
「気にすんなよ。俺も楽しかったからな。又、来いよ？少しは、俺の相手になれるぐらいになってからな。」
「…そこまでいったら、俺はもう人間やめてると思う。…いや、今も大概だけど。」
「こまけぇこたぁいいんだヨ！」
「ぐりーんだよ？」
「いや、俺のイメージカラーはブラックだから。」
《何？この人達？》

「…そろそろみたいだな。じゃあな、カイト。」
「ああ。またな、要。」
「ああ、また。」　パカッ　ヒュ～　「またかよ～～～！！！！！」
「おお！深いな。」

ｓｉｄｅ：カイト
「……これでいいか？最高神（ゼウス）。」
『うん。助かったよ、【無限にして無窮なる旅人】。

…にしても、最初はヒヤッとしたよ。…全く…君が相手では神々(われわれ)でも、数秒もつかどうか……。』

「ハン！知った事か。唐突にワケ解らん事を、頼んで来た方が悪ぃんだろ？

…何だ？色々と疲れているから、休ませてくれ…ってよ。此処は、楽園(パラダイス)か、何かか？」

『そう言わないでくれよ。あそこじゃ、中々、心休まる時が無いらしくてね。』

「…ったく。……次はもっと早目に連絡を入れろ…いいな？」

『…有難う…助かるよ、【宇宙(そらの)の救世主(メシア)】。…じゃあ、また。』

「…フン。さっさと帰れ。」

番外・休憩（後書き）

如何でしたでしょうか？

雨季様、何か気になる事が御座いましたらば、

遠慮無く仰って下さい。

では、今話も読んで頂き、有難う御座いました。

追記：雨季様から早速、御指摘を頂き訂正してみました。

これで如何でしょうか？

まだ、可笑しい所が御座いましたらば、お教え下さい。

祝福之風（前書き）

現時刻（１９：００）
ＰＶ：１１９，４９３アクセス　ユニーク：１４，９０９人
皆様、毎度有難う御座います。
最近は、投稿直後の一時間程で、３００人前後の方に、読んで頂いているそうです。
思わず、『ふぐるいむぐるな』と叫んでしまう
ＳＡＮ値が絶賛下降中の、今日この頃です。
では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

祝福之風

ｓｉｄｅ：カイト

取り敢えず、現状を整理＆説明しておこう。

ｃａｓｅ１．　グレアム主従

あの後、監視を完全に止め、『デュランダル』製作にのみ、日数を費やし
ついこないだ完成し、クロノに渡したと、連絡が来た。
凡そ一月か……出来るなら、初めからやれよ…。

ｃａｓｅ２．　ユーノ

前回言うのをすっかり忘れていたが、ＪＳ事件後、既に無限書庫に入っていた。
何でも…世の中は、こんなに自分の知らない事ばかりなのか…と、愕然とし
もうこれ以上の悲劇は見たくないと言って、知識を付ける為に、クロノに頼んでた。
その御陰か、なのはとフェイトのデバイスに、カートリッジシステムを導入する事を提案していた。
…俺が言うまでも無かったな。

case3.　プレシア・アリシア・リニス

わたしはお姉ちゃんなのに、何も手伝えないと、歯噛みしていたアリシアに、プレシアとリニスが魔法を教えている。

……実は、蘇生させた時に、少し魔力を加えておいたので、フェイト並の魔力は持っている。

おまけに、始めて一月で、基礎&応用は、ほぼマスターし、今は模擬訓練中らしい。

……矢張り、テスタロッサの血は、争えないという事か。

case4.　なのは・フェイト・アルフ・クロノ・守護騎士

魔力集め。カートリッジシステムは搭載済み。組み合わせは、大体決まっているらしい。

なのは&ヴィータ　フェイト&シグナム　アルフ&ザフィーラ　クロノ&シャマル　だそうな。

…ああ、やっぱり。と思ったのは、俺だけじゃないと思いたい。

近接＋遠距離のなのヴィ

斬り込み隊長とその撃ち零しの掃討担当のフェイシグ

近距離パワー型な従者コンビのアルザフィ

指揮官コンビのクロシャ

……意外とバランスがよかった。

case5.　俺&はやて

皆を見送った後、帰って来るまで、家でいちゃつき中。

“ちょっとマテ”「ぬおっ!?」「わひゃっ!?」
この場にいない奴は、念話や映像通信まで使って、全員でシンクロツッコミして来やがった。
……ぬぅ…益々、出来るようになったな…。
……にしても、はやて。わひゃって何だよ、わひゃって。……
…危うく萌え死ぬとこだったじゃねぇか。
“そのまま死ねばいいのに…”

……何か最近、みんなの俺に対する扱いが、酷くなってる気がする。
“自業自得だと思う”
「ゴメン、カイト兄ぃ。わたしじゃ、フォロー出来へん。」
……いいモン。こうなったら……益々はやてといちゃついてやる。
“だから、ちょっとマテ”

「全く……さっきから何だよ…。そんなに暇なのか?それとも、俺とはやてとのラヴラヴっぷりが、羨ましいのか?妬ましいのか?お前等。」
「……ラヴラヴやなんて……そんなホントの事言うたら、恥ずかしいやないかぁ…カイト兄ぃ♪♪♪」
「は~やて♪♪♪♪♪」
「カイト兄ぃ♪♪♪♪♪」
“……このバカップルは……。”

「んで。一割の冗談はおいといて。一体どうした？」
“九割本気かい！”「…って、どうしたじゃねえよ！何でお前だけ、何にもしてねえんだよ！！！」
「はやてと、いちゃつきたいから。」
“……”
「とまぁ、零割の冗談はおいといて。」
“十割本気かい？！”
「……みんな、ツッコミ鋭くなったなぁ…お兄さん感激だよ。」
“黙れオジン”

「それで、俺だけ何もしていない理由だけど…ぶっちゃけ俺じゃぁ、魔力収集には役に立たん。」
“…は？”
「いやな？俺がやると、相手が粉微塵になるんだよ。それどころか、下手すりゃ、星毎砕き兼ねん。」
“……え？本当（マジ）？”
「大マジ。だから、俺が活躍すんのは、最後。闇の書がピーした後。」
“ピーって何？！”
「な・い・しょ☆」
“…うざっ”

「はやて、みんなが虐める。」
「よしよし。でも、今のはわたしでもフォロー出来へんよ？」
「はやてが虐める。」
「よしよし♪」
“……何？このバカップル？”

みんなが、呆れて通信と念話を止めてから、少し経ち、はやてが聞いてきた。
「…カイト兄…ホンマの理由は何？」
「…みんなに言った通りだよ？俺がはやてと、いちゃつきたいから。
……はやてを…一人にしたくないから。」
「……カイト兄ぃ……わたしに出来る事、何か無いかなぁ？」
「…あるよ。はやてにしか出来ない事。」
「！教えて！カイト兄！！私何でもするから！！！」

「…いつも通りでいること。みんなを笑顔で迎える事。おいしい食事を作ってくれる事。」
「…え？…そんなん、当たり前やないか…。」
「そう、当たり前の事でいいんだ。みんなが頑張ってくれているのは、はやてがいつも通りに、していられる様にと、願っているからなんだからさ。」
「…うん。……でも、わたしもみんなと同じ様に……。」
「…大丈夫だよ、はやて。闇の書の管制人格を呼び出したら、途端に忙しくなるから。」
「……解った。それまで、我慢する…。」

「クスクス…。あ、管制人格の名前、決まった？」
「うん！…でも、まだ教えへんよ？」
「ああ、構わないよ。…楽しみにしてる。」
「うん！！…えへへ～♪」

そうこうしている内に、早くも４００頁集まった。
…お前等そんなに、俺とはやてのラヴラヴ(イチャついてる)を、見たく無かったの…？
“勿論”
「はやて、みんなが虐める。」
「よしよし♪」
“それはもういいから”

「取り敢えず、はやて。管制人格を呼び出して。」
「うん、解った。…けど、どないして呼べばいいん？」
「出てくれって念じればいいよ。」
「…え？そんだけ？」
「そんだけ。」
「…わ、解った。ほないくよ。……。」
そして、はやてが念じると、闇の書が動き出した。
『管制人格へのアクセス確認。規定頁数の確認中……規定頁数の確認。管制人格へのアクセス認可。管制人格呼び出します。』
すると、闇の書の中から、女性が現れた。

「…やっと出て来られたか。調子はどうだ？管制人格。」
「…フッ、最悪だよ。目の前に、お前がいるのだからな。……久しいな、【無限にして無窮なる旅人】よ。」
「ああ。いつ以来だ？…お前等が、まだ‘夜天の書’と名乗っていた頃か？」

「……そうだな…その頃にまで遡るか。」
「…そうか……全く…お互いに歳は取りたくないものだな。……
…見たくないものの方が多すぎる。」
「…それには、大いに同意する。」

「あ、あのぅ…カイト兄?…お知り合い…?」
「ん?うん、そうだよ。結構古い知り合い。」
「結構どころではあるまい。…貴様、幾つと偽っている?」
「２５。」
「……それは、肉体年齢の方であろう?しかも、貴様の肉体は、
永遠に変わらぬではないか。」
「こまけぇこたぁいいんだよ!…それより、はやて。」

「う、うん。……闇の書の管制人格なんて、味気ない名前は、今日
で終いや。わたしが、名前を付けてあげる。

強く支えるもの　　幸運の追い風　　祝福
のエール　　リインフォース」

「……リインフォース。……有難うございます。我が主…。」
「…ようやっと、名を貰えたな…。管制人格…いや、リインフォー
ス。」
「…ああ。……矢張り、これも知っていたのか?…【無限にして
無窮なる旅人】。」

「…さてな。…それより、今の俺は、八神カイト。はやての兄だ。…これからは、お前とも家族になるんだ…名前で呼べ。…いいな？リイン。」

「フフッ…了解した。…カイト」

「なんや、いい雰囲気やな…リイン？」

「な！わ、我が主。…一応我々は家族ですので、仲良き事は良い事かと…。」

「ふ～～ん……。」

「…あ、主…？」

「其処の主従（ふたり）。話戻すぞ～い。」

「まず、状況確認だ。…解っているか？リイン。」

「ああ。私達の、防衛プログラムのバグの事だろう？」

「そうだ。…取り敢えず、最後の数頁まで、収集しておき、準備を調えてから、最終決戦だ。

その為にも、お前にも、やって貰いたい事がある。」

「主を救えるのならば、何でもしよう。…何をすればいい？」

「はやてに、魔法を教えてあげてくれ。…俺の魔法とは、毛色が違うのでな。念話しか、教えられていない。」

「了解した。…他には？」

「後は、常に、はやての側にいればいい。寧ろ、これが、最重要任務だ。」

「……解った。お前に従おう。【宇宙の救世主（メシア）】よ。」

「よし。みんなは、いつも通りお願い。…後もう少しだ。みんな頼む。頑張ろう！」

“おーーー！！！！！”

「…所で、カイト兄？」
「うん？何？はやて。」
「前から気になってたんやけど、カイト兄が良く呼ばれてる‘二つ名’って、どういう意味なん？てか、誰が付けたん？」
「意味は、まだ内緒。呼ばれてるものは、全部【他の奴（あいつら）】に付けられたもの。
唯一呼ばれない【時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）】ってのだけは、自分で名乗ってる。」

闇之書之闇（前書き）

現時刻（０１：２０）
ＰＶ：１２７，２１８アクセス　ユニーク：１５，８９４人
皆様、いつも有難う御座います。
ユニーク１５，０００人突破致しました。
誠に感謝致して居ります。
では、今話も拙作を御堪能下さい。

闇之書之闇

クリスマスイブ。

その運命の日。

その日は曇りだった。

そして、とても冷え込んでいた。

道行く人は、皆厚着をし

震えながら歩いていた。

……そう。

皆、震えていた……。

ｓｉｄｅ：三人称

此処は、地球と似て非なる場所。…そう。以前、カイトが守護騎士達と闘った、あの惑星である。
今、この場には、八神はやてを助ける為に、大勢の人が居る。

なのは・フェイト・はやて・ヴォルケンリッター・リイン・ユーノ・クロノ・アルフ。
そして、衛星軌道上に、リンディの指揮する、アースラが居る。カイトを含めて、総勢１２名＋アースラだ。

「……さぁ、最終確認だ。…まず、リイン。頁数は？」
「…６６５頁だ。後は、この捕まえた生物から、吸い取れば丁度、全て埋まる。」
「よし。…では、作戦の確認だ。」

リイン「まず、私が収集をする。その後、守護騎士達が吸収される。」
カイト「それで、闇の書が暴走したら、俺が軽く攻撃し、闇の書の闇に隙を作る。」
はやて「その隙に、わたしがリインと一緒に、防衛プログラムを切り離して、又、ヴォルケンリッターを召喚する。」
カイト「そして皆で、暴走し切り離された闇の書の闇を、フルボッ

コし、核（コア）を露出させ……」
シャマル「私達が軌道上に居る、アースラの前に転送し……」
リンディ「アースラのアルカンシェルを、直撃させ、核（コア）を完全消滅させる。」

「宜しい。…さてと、皆、準備はいいな？」
「「「「はい！」」」」「「「「「「ああ！」」」」」」「「ええ！」」」

「では、最後の準備と行こうか。……俺も出し惜しみは無しだ。

我、無限にして無窮なる旅人の名に於いて命ずる。

出でよ！！！！四神！！！！！

青龍：：

白虎：：

朱雀

玄武」

「青龍が龍斗。御側に居ります。」

「白虎が鋼牙。見参。」

「朱雀が紅蓮。参上。」

「玄武が水薙。随参。」

「我、無限にして無窮なる旅人の名と四神の名に於いて命ずる。

出でよ！！！黄龍！！！！！」

「黄龍が黄宇。御前に。」

『我等、五行を司りし者。我等が主の命に依り、参上仕りました。』

「五行よ。結界を。」

『はっ！』

その言葉と共に、四神が四方に飛び散り、黄龍がその場に留まった。

『相生にして相克たれ　　我に依りて、永久（とこしえ）なる界を結ばん
　我は五行也。』

その祝詞を唱えると、以前カイトが張った結界の、遙か何万倍もの強度の結界が張られた。

『無事、調いまして御座います。我等が主。』
「御苦労。……では、俺も準備するとしよう。

ファースト・イグニッション

セブンス・イグニッション」

そう、次なる魔法を唱えると、七つの球体が、それぞれ三つずつ分裂し、計２１個の球体となった。

だが、まだそれで終わりでは無かった。……カイトは次なる呪文（キー）を唱えた。

「セブンス　オール　フュージョン

セカンド・イグニッション」

すると、２１個に分裂していた球体が、三つずつ合わさり始め、又、七つの球体になった。

……だが、その球体から感じる魔力は、ファースト等、比べものにならない……いや、比べる事が、烏滸がましいとすら、思える程の魔力量だった。

しかし、それ程のものでも、まだ途中であったのだ。……次なる呪文（キー）が、それを証明していた。

「セカンド　フル　フュージョン

　ファイナル・イグニッション」

漂っていた、規格外の七つの球体が、またもや融合を始め、完全に一つになった。

……そう。それは、見る者全てに、完全と思わせる程に、完成されきっていた。

その白銀金（プラチナ）の球体は、主の命令を待っているかの様に、只管じっとしていた。

……まるで意志があるかの様に、その身の内にある甚大な魔力を秘めながら。

……そして、主から待望の命が下った。

「ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　カイザー

…我が命に従え。『選定（EXカリバーン）されし勝利の剣』

カイザー　アムド」

そう彼が言うと、光に包まれ、収まった後には、余りに神々しい存在（モノ）が存在（いた）した。

その白銀金の鎧を身に纏った者は、呆然と歓喜の涙を流す面々を、訝しみながら声を掛けた。

「…？何故泣いている？…これから始まるのだぞ？…その涙は最後まで取っておけ。」

思わず、慌てて涙を拭う面々であった。

「竟に準備は調った。では、今度こそ始めるとしようぞ。…はやて、覚悟はいいな？」

「は、はい！」

「よし。…では、リインフォースよ…始めてくれ。」

「了解した。」

収集を終え、その数瞬後、闇の書の暴走が始まった。主と管制人格(リインフォース)、そして守護騎士達(ヴォルケンリッター)を飲み込み、管制人格の形を成し、破壊衝動にのみ駆られていた。

「では、行くぞ。…何とか耐えろよ?」

そう彼が呟くと、既に闇の後ろに居り、その儘固まり、十秒程経ってから、闇が後ろに飛ばされ、カイトに受け止められると、ドグオォッッッ!!!!!　という、何か形容し難い殴打音が鳴った。

その後、フラフラになりながら、何とか闇から這い出てきた、はやては、取り敢えずカイトをド突いてから、守護騎士達を呼び出した。

『我等、夜天の主の下に集いし騎士』

『主有る限り、我等の魂尽きる事無し』

『此の身に命有る限り、我等は御身の下に有り』

『我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に』

「夜天の光よ　我が手に集え　祝福の風　リインフォース

セット　アップ！！！」

「…？よし。まずは上々。では、皆、陣を整えよ。」
首を傾げながら、そうカイトが言うと、皆自分の攻撃配置に着いた。
それと同時に、闇の書の闇が、その本性を現した。……まるで醜悪なキメラ…いや、スキュラだった。

「さぁ……宴の始まりだ。皆、存分に舞い踊ろうではないか！！！」
その言葉を皮切りに、闇との終幕（ラストバトル）の幕が上がった。

「チェーンバインド！！」「ストラグルバインド！！」
ユーノとアルフの、バインドと…

「縛れ！！鋼の軛！！！でぃぃぃぃやぁぁぁっっっ！！！！！」
『盾の守護獣・ザフィーラ』の‘鋼の軛’により、周りの触手を斬り裂いて行く。

そして、本格的攻撃の、第一派。

「『鉄槌の騎士・ヴィータ』と『鉄の伯爵・グラーフアイゼン』！！！」『Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ』　ガシャンッ！

「轟天爆砕　ギガント・シュラーク！！！！！」『Ｇｉｇａｎｔ　Ｓｃｈｌａｇ』

その巨大なハンマーにより、一枚目のバリアは破られた。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン！！　行きます！！！」『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』　ガシャンッ！　ガシャンッ！　ガシャンッ！　ガシャンッ！

「エクセリオン・バスターー！！！」『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ』

「ブレイクシュートー！！！！！」

闇の書の闇の抵抗も、意味を成さず、伸ばした触手ごと、二枚目のバリアが破られた。

次なる、第二派。

「『剣の騎士・シグナム』が魂　『炎の魔剣・レヴァンティン』刃と連結刃に続く　もう一つの姿」　ガシャンッ！『Ｂｏｇｅｎ　Ｆｏｒｍ』

「翔けよ隼！！！！！」　ガシャンッ！　ガシャンッ！『Ｓｔｕｒｍ　Ｆａｌｋｅｎ』

『烈火の将』が持ち得る、最強の攻撃に耐え切れず、三枚目のバリアも破られた。……後一枚。

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン　バルディッシュ・ザンバー　行きます！！！」『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』　ガシャンッ！　ガシャンッ！　ガシャンッ！
「撃ち抜け！！！雷神！！！！！」『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ』
向かって来た触手ごと、四枚目のバリアを断ち切り、本体を斬り裂いた。

すると、今更危機感が働いたのか、はやてに攻撃をしようとした……
「『盾の守護獣・ザフィーラ』！！！砲撃なんぞ撃たせん！！！！！」
が、『蒼き狼』に阻まれた。

「彼方より来たれ　やどりぎの枝　銀月の槍となりて　撃ち貫け！！！

石化の槍！！！ミストルティン！！！！！」
その隙を突いて、はやての石化魔法『Ｍｉｓｔｉｌｔｅｉｎｎ』が、闇の書の闇に直撃した。
だが、その下から、更におぞましい怪物が、姿を現した。

「提督……力をお借りします。

悠久なる凍土　凍てつく棺の内にて　永遠の眠りを与えよ
凍てつけ！！！」『Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ』
間髪入れずに、クロノが後に続き、完全に凍らせたが、まだ勢いは

止まらない。

そして、これで最後だという思いを乗せて……

「全力全開！！！スターライトォーー！！！！！」

「雷光一閃！！！！プラズマザンバァーー！！！！！！」

「…ごめんな……お休みな…。響け終焉の笛！！！ラグナロク！！！！！！」

「「「ブレイカーーーーー！！！！！！！！！！」」」

通称：トリプルブレイカー。その威力の相乗効果により、闇の書の闇の体は、殆ど砕け散り、核（コア）が露出した。

そして、その隙を逃さず……

「リンカーコア…抽出……捕まえ…た！！！」

「長距離転送！！！」

「目標！！！軌道上！！！！」

「「「転送！！！！！！」」」

「軌道上に転送！確認しました！！」

「アルカンシェル！起動準備完了しています！！！」

鍵（キー）を差し込み、皆の全ての思いを乗せて…

「アルカンシェル……発射！！！！！」

そして、闇の書の闇。その本体に直撃し、バグは完全に消滅。
エイミィの消滅宣言を皆で聞き、歓喜の声を大々的にあげる

……筈だった。

そう……その筈だったのだ。アルカンシェルを放つ所までは、誰もがその未来を疑わなかった。

だが……其処に居た。

潜伏し、沈黙していた者が……

未だ……

其処に居たのだ。

「残念ですが、それは戴きますわ。」

そのナニモノカの声と共に、アルカンシェルは掻き消され、消える筈だった闇の書の闇は、ナニモノカに吸収された。

「ふぅ…中々に醜悪な味でしたわね……。では、皆様初めまして。

私（わたくし）、全平行世界観測機関【ノルニル】の第９席

セラス＝グランセニックと申します。

世界の破壊者（ワールド・デストラクション）を、消滅（けす）させる為に、参りましたの。」

そのナニモノカは、宇宙空間に生身で浮いていた。

生物では決して有り得ない、その現象に誰もが、信じられず、恐怖に恐れ戦いた。

……只、一人を除いて。

新たな敵を迎え

物語はまた

新たな歴史を刻み始める。

闇之書之闇（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は色々、判明致しましたが……

四神…そして、五行については、皆様にバレバレだったと思います。

そして、遂に登場致しました。

以前、プレシアをボコった、あの名も無き『彼』の言っていた【あいつら】

カイトの真なる敵。

その名も『全平行世界観測機関【ノルニル】』

名前は兎も角、どういう存在か……

お判りになった方はいらっしゃいましたか？

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

世界之破滅者（前書き）

現時刻（１８：１５）
ＰＶ：１３５，６２７アクセス　ユニーク：１６，７７９人
皆様、いつも有難う御座います。

今話は、少し頑張り過ぎた所為か、とても長くなってしまいました。
飲み物片手に、ノンビリ読んで頂きたいと思います。

では、今話も拙作を……

そして、カイトの理不尽さを、御堪能下さい。

世界之破滅者

ｓｉｄｅ：カイト

……矢張り現れたか……

全平行世界観測機関【ノルニル】

幹部である第９席が、出て来たという事は……

……俺もそろそろ覚悟しなければいけないか

まぁいい。……今は……

あの屑をぶち殺す事のみ、考えるとしよう。

ｓｉｄｅ：三人称

「…パージ」

鎧（カイザー）を脱ぎ、カイトは一瞬で宇宙へ上がった。

「あら！わざわざ来て下さったのですね。」

「…此処（うちゅう）の方が、俺達にとっては戦い易いだろう？」

「確かにそうですわね。…改めまして

私、此の度、新しく第９席に任ぜられました

セラス＝グランセニック　と申します。
世界の破壊者（ワールド・デストラクション）……いいえ、
『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』たるあなたを
消滅（けす）させる為に、参りましたの。」

「……そうか。聞いたことの有る名だと思ったら、奴の秘蔵っ子か。…奴は元気か？

あの洟垂れ小僧の　シュガル＝ブラウセス　は…。」

「！！…シュガル様の悪口雑言は、如何なあなたとて許しませんよ……。

今のシュガル様は、畏れ多くも第3席なのですから。」

「……は？今、何つった？」

「フフン…ですから、シュガル様は第3席に、お成り遊ばしましたの。」

…とても、誇らしいのだろう。無い胸を張ってエッヘンとしている。

……だが、彼から返ってきた言葉は、誰も想像だにしていなかった。

「…………ぶっははははははははは！！！！！！！！！あ、あの、ヒッヒッ、甘えん坊の、クックククッ、シュガル坊やが、ブフゥッ！、あの、ゲホッゲホッ！、ハァハァ、洟垂れ小僧が、グフッ、だ、第3席ぃぃぃ？ブハッ！だ、ダメだ、わ、笑いが、お、収まらん…………あはははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！

お、俺を、笑い死に、させるつもりか！！！！！！！！！」

………………………………大爆笑していた。………幾ら何でも、笑い過ぎでは無かろうか？………あれでは、彼女がとても、可哀相に見えてしまう。

…………案の定、激怒していた。

「………何がそんなに可笑しくて？」

「はははは！！！！だ、だってよ、あ、あいつが、だ、第3席とか、ど、どんな手を、使ったんだ？金か？コネか？そ、それとも色仕掛けか？グフッ！そ、想像したら、ま、又、腹が…クックックックック」

「其処迄、侮辱なさいますか。あの方は、紛れも無く実力で、その座を奪い取りましたわ。…あなたがどれ程お強いかは、存知ませんが、決して……決して！！あの方に敵う筈等、御座いません！！！！」

「……は？実力？……あははははははは！！！！！！！！」

またもやの大爆笑に、流石に堪忍袋の緒が切れたかと、思いきや、彼女は攻撃を躊躇っていた。

……先程迄の、馬鹿にした大笑いと、何か違うのだ。…まるで、安心仕切ったかの様な笑いなのだ。

「……」

「ははは……はぁ…そうか。奴は実力で、第3席に収まったのか。」

「…ええ、そうですわ。最早、あなたでは、手も足も出ませんわ。」

「……そうか、奴が第3席か…。

ノルニルも零落れたものだな。あの坊や程度で、第3席になれる

とはな。」

「！！！！！！！！！！」

どうやら、もう耐えられなかったらしい。…無理も無いだろう。
自身の敬愛する者を、幾ら昔からの知り合いとは言え、飽く迄子供扱いし、あまつさえ、雑魚呼ばわりしたも同然なのだから。
だが、その攻撃も只、怒りに任せたものでは、カイトに届く筈も無かった。

「くっ！！！」

「…？どうした…もう終わりか？」

「……ええ。闇雲に攻撃するのは、もうやめにしますわ。」

「そうか。…では、少しは楽しませてくれるのだろうな？」

「ええ、勿論。……そんな暇さえ与えませんわ。」

そう彼女が言うと、途端に光の粒子となり、途轍もない速さで、カイトに向かって来た。

そして、その光の直撃を受けた、カイトの心臓部分から、彼女の腕が生えていた。

光（それ）の粒子をモニターで見ている皆は、カイトなら、楽に躱せると思っていた。…何故なら、カイトの移動スピードは、人では見る事も

気付く事も、出来ないのだから。

……だが、そう安堵していた面々を、衝撃が襲った。…カイトは微動だにせずに、彼女の攻撃を喰らったのだ。

……誰がどう見ても、死んだとしか思えぬ光景が、其処にあった。

……そして、妹（はやて）は半狂乱になった。

「…い、いやあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！

カイト兄ぃいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！！！」

「…ハッ…あ、主！何処へ行かれるのですか！？」

「いやや！！！！離して！！！！！カイト兄が！！！！！！！カイト兄があああ！！！！！！！！」

思わず、宇宙へ向かおうとしたはやてを、その場に居た皆で、何とか抑えていた。

宇宙(そら)で、カイトを殺した事に歓喜している、彼女に歯噛みしながら。

……その場に居る彼の従者達を除いた皆で。

「離して!!!!!お願い!!!!!!!!!離してえええええ!!!!!!!!!!カイト兄が!!!!!!!!!!!!!!カイト兄があああああ!!!!!!!!!!カイト兄ぃぃぃいいいいいいいいいいいい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「…はいよ。ちゃんと聞こえているよ、はやて。……ああ、いってぇ…一回死んじまったじゃねぇかよ。どうしてくれる？」

有り得ない声を聞いた。

side：セラス

シュガル様から、此方に来る数日前に、御忠告を頂いた。

「いいか、セラス。決して奴には関わるな。

もし、奴と敵対する様な事があれば、全てを投げ出して逃げろ。

……恐らく俺でも、奴には勝てん。…解ったな？」

「は、はい！……ですが、宜しいでしょうか？シュガル様。」
「…何だ？」
「はい！…シュガル様でも勝てぬと言うのは、些か過大評価し過ぎなのでは、無いでしょうか。
シュガル様に勝てる者など、第1席様・第2席様以外には、居られないと思いますが。」

「……そうか。貴様は未だ、奴の戦いを見た事は無かったのだったな。
……過大評価どころではない……過小評価も良い処だ。
……俺は、どれ程強くなろうとも、奴と相対出来るとは決して思わん。
…恐らく俺は、一生涯奴には勝てんだろう。……それ程の相手だと言う事だ。
悪い事は言わん。奴には決して関わるな。ましてや敵対などしたら、これが永遠の別れと思え。
資料室に、奴の能力の全てが書かれている。万が一の為に読んで置け。
逃げ延びる際の、一助となろう。良いな？」
「…は、はい……。」

有り得ないと思った。幾ら何でもそんな者が居る筈が無いと。
しかも、全能力が記されていて、それでも尚、決してシュガル様が勝てぬ相手など、居る筈が無いと。
その様な存在等、認めてはいけない……在ってはならないと。

そして、私は結局何も調べず、御忠告を初めて反故にし、奴と敵対し、今、奴を、殺した。

「……あはは………あはははははは！！！ほら！！！御覧なさい！！
！！！

あなた如きが、あの方に敵う筈なんて無いのよ！！！！！

あはははははははは！！！！！！！！

これが、私の能力！！！！『光の粒子（パーティクル・ライト）』！！！！！

もう聞こえていないでしょうけどねぇ！！！！！！！

あはははははははははははははは！！！！！！！！！！！
！！！！！！」

………ああ………何て気持ちが良いのだろう……。

この血飛沫の温かさは、いつ味わっても堪らない………今にも絶頂してしまいそう………。

…そう。この時の私は、得も言われぬ歓喜を味わっていた。

映像通信から聞こえる、彼の妹らしき少女の絶叫も、カンフル剤にしか成り得なかった。

………そう、そうなのだ。それ程、私は興奮していた。

殺した筈の彼の遺体が、その儘、宇宙を漂っている事も………

彼の従者達が、何の心配もしておらず、微動だにしていない事も……

それらが異常な事だと、気付く事も無かったのだ。

……そして、異変は起こった。

「…はいよ。ちゃんと聞こえているよ、はやて。……ああ、いってぇ…一回死んじまったじゃねぇかよ。どうしてくれる？」

……恐らく、私はこの時には、もう後悔していたのだろう。

シュガル様の御忠告を、聞かなかった事を。

彼の者の能力を、一つも調べもしなかった事を。

もしも……本当にシュガル様の、仰る通りの者であれば

私如きがどうあがこうとかなうはずなどナイトイウコトヲ

カンガエモシナカッタコトヲ・・・・・・・・・コウカイシテイタ

side：三人称

「ああ、ホントにいってぇ…にしても久し振りだな、死ぬのは。いつ以来だっけ？龍斗。」

「凡そ、３，４７８，２１６年前です。」

「…相変わらず正確ね…龍斗。」

「凡そ…と言った筈ですよ？水薙。正確に…と言うならば、最低でもコンマ秒数十桁迄は、述べるものです。」

「…うへぇ……相変わらず、龍斗のそれは嫌になるぜ……。」

「…紅蓮？あなたとは、矢張り少し、お話する必要がありそうですね…？」

「…ほう…俺とやるか？龍斗。…お前とやるのも久し振りだなぁ…！！！」

「それは、後にしろ。主殿が呆れていらっしゃる。」

「…ちっ…解ったよ。」「…申し訳ありません。」

「カイト兄ちゃ～ん♪頑張ってね～♪」

「お〜う。任せとけよ〜鋼牙〜〜！」

「…どういう、こと、ですの？…何故、生きているの…？た、確かに、あなたは、私が、殺した、筈、ですわ………。し、しかも、その…魔力は、一体、どういう事？………なんで、先程よりも、増えているの………？どうして…？どうして？どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてなんでなんでなんでなんでなんで！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！そんなことは有り得ない！！！！！！！！！！絶対に有り得ない！！！！！！！！！！在ってはならないのよ！！！！！！！！！！
そんなことはぁぁぁあああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「うぉっ！…取り敢えず落ち着けって…。何をそんなに興奮してんだよ？お前も一応幹部なら、俺の事ぐらいは、知ってんだろう？…それとも真逆、俺の事を全く知らずに、高を括ってお前の独断で来たワケ？…………ゑ？…マジ？………ＯＴＬ」

何故か打ち拉がれている、カイトを気にもせず、半狂乱となったセラスは、カイトにその儘詰問した。

「答えなさい！！！！何故、あなたは私に殺されたのに生きているの！！！！！！何故、先程よりも、優に十倍もの魔力があるの！！！！！！何故、それ程のチカラが有りながら、私達（ノルニル）に手を貸さないの！！！！！！入らないの！！！！！！！！何故、敵対なん

て愚かしい真似をするの！！！！！！！！答えなさい！！！『世界の破滅者』ーーーあああああ！！！！！！！！！！！」

「だーかーらー、落ち着けって…。全く…碌に落ち込む事も出来やしねぇ…。ちゃんと答えてやるから落ち着け。

管理局の連中も、良く聞いておけよ？規模が違うだけで、やってる事も言ってる事も、全く同じなんだから。

まず、一つ目。答えは簡単。

俺には命のストックが、未だ沢山あるから。…後、幾つぐらいだっけ？」

「今、失われたので、後、653，789，256，301，845になります。」

「………結構減ってんな。いつそんなに減らしたっけ？」

「何言ってんのよ、マスター。四百万年程前に、あいつと殺り合って五百兆回ぐらい、殺されたじゃない。」

「ああ、そういや、そうだっけ？すっかり忘れてた…。」

“……は？”

敵も味方も同時に絶句していた。

……まぁ、そうだろう。後、六百五十兆回以上は殺さないと、消滅しないと言っているのだから。

だが、そんな皆を置いてけぼりにして、話を続けるカイト達。

「んで、二つ目。　俺のチカラは本当に強大過ぎるんでな…？

ある一定以上の魔力量に達すると、自身の力を使って、自動的に枷が嵌められるんだ。

それが、命のストックと連動してでな。

解り易く言うと、一回死ぬ毎に、魔力量が十倍になり、全回復するんだよ。」

「故に今のカイト様の本来の総魔力量は、

九千垓×１０の六百五十三兆七千八百九十二億五千六百三十万千

八百四十五乗です。」

“……”

全員絶句を通り越して、呆れていた。

……只一人、彼と相対し、震え続けている、彼女を除いて。

「理解した？お前じゃ、絶対に勝てないよ？」

「…くっ……それでも、私はあなたに勝たなければいけないのよ！！！！！」

そう彼女が言うと、又、光になりカイトに突っ込んで来た。

…だが、今度は違った。彼女がカイトに触れると同時に、人間形態に戻ったのだ。

「な！！！！！どういう事！！！！！何故効かないの！！！！！さっきは確かに！！！！！」

「ああ、さっきのは態と。格の違いと、絶望を見せ付ける為に、態と無抵抗で喰らってやったんだ。

……どうだ？嬉しかっただろう？……そして…恐ろしいだろう？」

「……（ガクガクブルブル）な…なん……で……そんな……こと……を…？」

「…お前、幾ら何でも俺を舐め過ぎ。俺にもプライドってもんが有るんだよ？

……だから、教えてやるよ。……更なる絶望の為に。」

「……な……なに……を……？」

「俺の能力。…俺の二つ名を、知っているだけでいいから、言ってみ？」

「……『宇宙の救世主（そらのメシア）』

『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』

『無限にして無窮なる旅人』　だけ……ですわ…。」

「充分だ。…さて、問題だ。それらの二つ名の意味は何でしょう？」

「……ぞ、存知ませんわ…。た、只の…比喩…だと……思って…ましたもの……。」

「おいおい。その二つ名を付けたのは、他ならぬお前等（ノルニル）だぞ？そんなワケがないだろう？

意味はその儘、ズバリだ。」

「…ど、どういう…こと…ですの…？」

「だから、その儘の意味なんだよ。

世界を破壊する者

世界を破滅させる者

広義的解釈で言えば

宇宙をも内包する、此の世という意味の‘世界’を

そして、狭義的解釈で言えば

人であれ、何であれ、存在という概念

その概念は、それ一つで世界と言える。世界を成しているんだ。

それが、どの様なものであろうとも

‘世界’である限り、俺を縛る事は出来ない。

もっと解り易く言おうか？

どんな能力であろうとも、俺に働きかける能力は一切効かない。
完全無効化出来るんだ。

そして、それは、相手を対象にする事も出来る。

つまり、相手の全ての能力を完全消去出来るんだ。

封印でも、無効化でもなく、消去だ。

ありとあらゆる‘世界’の理を破壊し、破滅させる……それが、
俺の能力

『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』にして

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』」

……もういいっそ、憐れという感情しか、湧いて来ない程に、血の気が完全に引いていた……。

そして、カイトは最後の止めを指した……。

「それから、最後の質問。

俺がお前等と共に歩まぬ理由だが……

それは……

貴様等（ノルニル）に……

娘を

妻と

殺されたからだ。」

……沈黙が辺りを支配した。

風は吹き止み、木々のざわめきは収まり、水の潺（せせらぎ）は止まり、大地の震えは鎮まった。

完全なる無音の世界となった。…だが、誰もその事に気付く事は無かった。

…それどころでは無かったのだ。……衝撃以外のなにものでも無かった。……皆涙を流していた。

「解ったか？俺がお前等と、共に居ない理由が。家族を殺した奴等と、共に居られる訳が無いだろう？」

「……。」

……最早、彼女は完全に、抵抗を無くしていた。

「さて。では、貴様の処遇だが……奴等（ノルニル）への見せしめになって貰おう。」

「…ご、ごめんなさいいいい……お願いいいい……許してぇ…

……も、もう二度と…関わらないからぁぁぁぁぁ……いやぁぁぁぁぁ……助けてぇぇぇ……お願いいいいい……」

「残念だが、これは決定事項だ。あの坊やの忠告を聞かなかった事を、未来永劫後悔するんだな。

来い…四神。」

「「「「はっ！」」」」

そうカイトが言うと、黄宇を残し、四神がカイトの居る宇宙（そら）へと、上がって来た。

「刮目せよ！！！！貴様等では、幾億回転生しようとも、決して拝めぬ光景を！！！！！！

四神・神獣形態（・・・・）」

そのカイトの、宣告後、人型をしていた、四神達が形を変えていく。

真っ蒼な体に、蜷局を巻いた東洋龍。

真っ白な体に、所々金色が鏤められている大虎。

真っ朱な体に、常に燃え続ける羽を持つ大鳥。

真っ玄な体に、蛇の尾、それに体の彼方此方から、羽が棚引いている大亀。

大きさは人並みでは有ったが、彼の者達から感じられる気は、紛れもなく神気。

……そう。彼等は、誰疑う事無き、『神』そのものであった。

だが、その『神』にカイトが更なる命を下した。

「四神・四神形態」

すると、その『神々』は、一声上げると、徐々に体を大きくしていき……

……最終的には……　銀　河　を　越　え　て　い　た

皆、遙かな遠望でしか、その全体像を見る事は叶わず、その足下には銀河が居た。

“ゴオオオーーーーー”

その唸りとしか聞こえない咆哮に、誰もが畏怖し、敬虔の念を抱かずには、いられなかった。

「これが、四神の最終形態…というか、本来の姿だ。

……どうだ？　　美しいだろう？」

…皆、言葉に成らず、涙を滂沱と流す事で、その問いに答えた。

「さて、では処刑執行の時間だ。」
そう言うと、茫然自失の体でいる、セラスの頭をガシッと掴み、真上に放り投げた。
…その速度は、四神の姿と相対するに、明らかに光速を遙かに超えていた。

そして、『四神』の顔の丁度、中間辺りに来た時、カイトが最後の命を下した。

「……四神　　咆吼」

その命が下った直後、セラスはあらゆるものに叩き付けられた。

青龍からは、嵐など生温い程の、猛烈な風が

白虎からは、木星よりも尚大きい岩石の塊が

朱雀からは、煉獄すらも蒸発する焔が

玄武からは、あらゆるものを圧壊する程の水の塊が

四方から、全てセラスに向かい、完全に押し潰され、文字通り、跡形も無くなっていた。

その凄絶な攻撃に、誰もが終わったと思っていた。

……だが、カイトが、そのセラスがいたであろう場所に現れ、虚

空に左手を伸ばし、ナニカをムンズと掴んだ。

……良く見ると、それは魂だった。…恐らくセラスの。

そして、カイトは最期の刑を執行した。

「さあ、これで終いだ。

過去・現在・未来・そしてあらゆる平行世界から完全に消え去れ。

全魔力解放

カオス・エンド」

そのカイトの言葉に呼応するかの様に、カイトの右手が、真っ黒の様な、灰色の様な、ナニカ形容し難い色の球体に包まれ、その球体

を手に乗せた儘、その魂を掴んだ。

……そして　魂は　その球体に　吸収され　今度こそ
完全に　消え去った。

……竟に、【ノルニル】との初戦は、終わった。

余りに多くの驚愕を残して。

その悲しみに呼応するかの様に

『四神』は咆哮した。

……まるで号泣しているかの様に

主が星に降り立つ迄

咆哮（ないていた）……していた。

別離（前書き）

現時刻（２３：４０）
ＰＶ：１５５，３０７アクセス　ユニーク１８，５９２人
皆様、毎度有難う御座います。
１５０，０００アクセス＆お気に入り１００件突破致しました！！！！
心底より感謝致して居ります。
では、今話も拙作を御覧下さい。

別離

ｓｉｄｅ：カイト

……終わった……。

ようやっと……

はやてを救うことが出来た。

これで、管制人格（リインフォース）を救えば、全て万々歳だ。

後は、野となれ山となれ

俺は、どう思われても（なっても）構わん。

せめて、後、少し……

後、少しだけ……

共に居られれば……

それだけで……俺は満足だ。

だから…そんなに咆哮（なくな）するなよ……

四神よ……

黄龍よ……

俺は

本当にそれで

満足なんだからさ……。

……さぁ

……最後の覚悟を決めようか。

ｓｉｄｅ：三人称

カイトが降りて来た。…四神の咆哮（なげき）を聞きながら……。

日の光を背に受けて……まるで天使か、神の様だった……。

先程までの圧倒的な存在の儘に、誰もが声を掛けるのを躊躇っていた。

カイトは、一瞬僅かに、悲しそうな顔をした。……その事に気付けたのは…只一人であった。

そして、いつもと何ら変わりなく、普段通りに声を掛けてきた。

「よお！みんな、お疲れ様。これで、全部終わりだ。…はやて、良

く頑張ったな。」
「……カイト兄？…ほんまにカイト兄なんやな？」
「ん？勿論だよ。俺は、八神はやての兄、八神カイトだ。紛う事無き本物だよ？」
「……カイト兄ぃぃぃ！！！！！」
「…！おっと……はやて…良く頑張ったな…偉いぞ。」ナデナデ
「…カイト兄ぃぃぃぃ……。」

その兄妹の光景に、思わず頬が緩む皆であった。
…だが、妹（はやて）の言葉により、全員が驚く事となった。

「…グスッ……カイト兄ぃ……何で…ヒック……泣いてるん…？」
「…！…何言ってるのさ、はやて。俺は泣いてなんかいないよ…。泣いてるのは、はやてだろう？」
「…わたしはええんや……でも、カイト兄…とても悲しそうな顔しとる……。」
「……気の所為だよ。…はやて。……それよりも、これで完全に終わりだ。みんな、地球へ戻るよ。」

そう強引に、終わらせたカイトは、皆と地球に転移した。

その日は、皆疲れ果て、爆睡していた。

……只一人……

従者（かぞく）と共に、覚悟を固めた者がいる事にも気付かず……

みんな…安心して……

眠っていた……。

そして、その日の夜。

リインフォースは、あの場所に居た。

自身の消滅を願い、寝ていた少女達に頼んだのだ。

「……本当に良いんですか？リインフォースさん…。」

「…ああ。…又、暴走しては、元も子も無いからな…。」

「で、でも！他に何か方法が…！」

「…無い。有れば疾うに試しているさ…。……頼む、やってくれ。」

「…却下する。」

「な！誰だ？！」

「…俺の最も好きな事の一つは、絶対にＹＥＳと言うと思っている奴に、ＮＯと言ってやる事だ。

……その儀式は、させんぞ…管制人格（リインフォース）。」

「くっ！……又、邪魔をするか…『無限にして無窮なる旅人』よ。」

「当然だ。貴様が自暴自棄になり、自身を消滅させようとする限り、俺は何度でも、貴様を止めてみせる。

我は　『宇宙（そらの）の救世主（メシア）』

たるが故に。」

「……ならば、私をも救えるとでも言うのか…偽善者（メシア）よ。」

「無論だ。…今、この時の為に、敢えて今まで、その暴走（バグ）を、治さずにいたのだからな。」

「な！！！！！何故だ！！何故！！！！救えると！！！！治せると言う

のならば！！！何故もっと早く！！！治してくれなかった！！！！何故なのだ！！！！！！

……教えてくれ……カイト…。

」

「……全ては、はやての為だ。…今、この時までに治してしまうと、貴様等は、未来永劫今の主（はやて）に会えない。…故に、放置していた。」

「…何故だ…カイト。…何故、お前は其処まで、主はやての為に尽くすのだ？」

「……俺が…過去・現在・未来　そして、あらゆる平行世界に於いて、永劫愛する者は

唯一　八神はやて　のみ…だからだ。」

そのカイトの、全てを魅了する様な微笑みと共に、語られた言葉は、その場に居た、皆の顔を赤らめさせ、誰をも納得させた。

「…さて、では治療を開始する。」
「…解った。…私は何をすればいい？」
「…何も。ただ、黙って受けていればいい。」
「…了解した。…お前に全てを任せよう。…頼む…宇宙（そらの）の救世主（メシア）。」

その会話の後、誰も声を発する者は居なかった。…施術が終わるまで。

「……ふぅ…終わったぞ。」
「……確かに…完全にバグが消えている…。」
「ああ。バグのみを完全に消し去った。…序でに、今後一切の改悪が、出来ない様にして置いた。…オマケだ、受け取って置け。」
「…感謝する。…カイト。」

「リイン！！！！！」
「！！…主はやて。」
「リイン！！死んだらあかん！！！これからや！！！リインは、これから幸せにならな、あかん！！！」

「…大丈夫ですよ、主はやて。…カイトが全て治してくれました。」
「せやから！……え？…治した？カイト兄が？」
「はい。ですから、何の心配も御座いません。」
「……リイン…！！！」
「…はい、我が主はやて。…これからも…常に御側に居ります。いつまでも……。」
「…うん……うん……！うん！！！」

…皆、泣いていた。

…だが、誰一人、寂しそうに、安堵の溜息を漏らす、彼に気付く者は居なかった。

……そして……

「……これで、もう大丈夫だ。…本当に全てが終わった。」

「うん！！！ほんまにありがとう！！！！！！カイト兄！！！！！」

「…はやて。もう、君を蝕む者は何も無い。…これから君を待つのは、幸福な未来だけだ。

…皆、はやてを頼む。…寂しがり屋の、甘えん坊だからな。…沢山構ってやってくれ。」

「…カイト兄？……どうしたん？……な、何で…そんな……お別れみたいな事言うん…？」

「……はやて……ちゃんとリハビリしろよ？……治るものも、治らなくなるからな。」

「…い、いや……いやぁ……いややぁ！！！そんなの！！！！！何で！！！！！

行かないでぇ！！！！！カイト兄ぃ！！！！！！いややあああ！！！！！！！！！」

「　　はやて……愛している……今までも……そして……これからも……

さ　　よ　　う

な　　ら」

……その言葉と共に

彼は姿を消した

……後には

絶叫し号泣する愛する人と(はやて)

只…その様を黙って見ているしかない

友と

家族が居た

……雪が降って来た

埋まる筈のない悲しみを

埋める様に……

優しく…彼女達に降り積もる

いつまでも……

いつまでも……

降り続いていた……

……そして、十年という年月が経ち

少女達は成長し

またも新たな舞台の幕が上がる……

『Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』という　終章（ぶたい）へと……

別離（後書き）

如何でしたでしょうか？

補足致しますと

カイトは、死んではいません。　ちゃんと生きています。

全ては八神はやての為に。

只、その為だけに生きている…と言っても、過言では有りません。

それ故に、今は離れる事を決意したのです。

ちゃんと、最終的には合流致します。　御安心を。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

番外・異邦人（前書き）

現時刻（１４：２５）
ＰＶ：１６３，０１１アクセス　ユニーク：１９，６７３人
皆様、いつも有難う御座います。

今話は、１５０，０００アクセス記念という名目で、

『魔法先生ネギま！～三人の転生者～』より、

カスミ・ヴェネーラ　近衛　薫　そして＋αにお越し頂きました。

では、秋代様…

そして、皆様。

今話も拙筆をお楽しみ下さい。

番外・異邦人

ｓｉｄｅ：カイト

今は、はやてとの別れから、一年程経っている。

その間に、管理局の奴等の違法施設や、違法実験を物理的に潰している。

大体……２００～３００ぐらい？……あいつら、風呂敷を広げ過ぎだろ…ｊｋ。

そして、今日も、五つぐらい潰してきた帰りなのだが……

「「「待て！！！『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！！」」」

…解って貰えるだろうか？

…そう。ノルニルの阿呆共が、纏めて襲ってきやがっているのだ。

あれから、何度も奴等と遭遇している。…しかも、雑魚ばっか…ｏｒｚ。

んで、今回ようやっと、まともなのが来たかと思ったら、下位幹部三人。

……あれ？俺舐められてる？……何か、腹立ってきたな……殺すか…。

「やっと、諦めたか…。」

「フン！我等を同時に相手にして、逃げられる訳が無かろうに…無駄な事をしたな。

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』」

「いいから、早く殺っちまおうぜぇ！！！」

あ…何か、マジでうざくなって来た…こいつら。……どう料理しy…！！！何だ！？

空間に障子…だと？……誰だ？

「…ねぇ、薫？毎回あのキモイのは、どうにかならないの…？」

「やって、あれ私の能力や無いモン。…それにカスミ、毎回あっさり、殺してるやないの。」

「当たり前でしょ？あんなキモイのが、存在してる事自体が嫌なのよ。」

「あはは。それは、原作に言って貰わんといかんよ？」

「……今度、あの屑（神）に何とかさせようかしら…？」

「いやいや、それは不味いだろ…常識的に考えて。」

「私達に世間の常識が通じると思って？……というか、あんた誰？」

「…それ、俺の台詞なんだけどなぁ……まぁ、いいか。

ようこそ…井上　霞……いや、『カスミ・ヴェネーラ』

そして、山瀬　薫　こと、『近衛　薫』

歓迎するよ……異邦人（エトランゼ）。」

「「！！！！！」……そう…あんたが、あの八神カイト……。」

「ああ。改めて宜しく、二人共。……？今日は、あいつはいないのか？…お前等が懸想してる奴は。」

「懸想言うな／／／」「懸想言わんといて／／／」

「はっはっは…愛い奴愛い奴。あいつも果報者だな。…本人は鈍チンだがな。」

「…いいのよ。あいつは知らなくても。」

「せや！ウチ等だけの秘密やからな！」

「……そうか。」

…うむ。相変わらず、良い奴等だな。

「「「おい！！！無視するな！！！！！」」」

…ちっ……あの雑魚共、未だいやがったのか…。…ったく、良くもまぁ、人の気分を害してくれる…！

「…ねぇ、カイト？」

「ん？どうした？カスミ。」

「あのクズドモ…私達が殺っちゃってもいい？」

「…そりゃ、殺ってくれるのは、有り難いが……しかし、客（ゲスト）に、そんなことをさせるのは、こちらとしては気が引けるんだが……。」

「ウチは構わへんよ？…折角、カイトに会いに来たのに…邪魔や…

あいつら。」
「……そうか…。では、頼む。」
「任されたわ。」「ＯＫや♪」

「…おい、ガウラス……あいつら、余りにも我等を舐め過ぎではないか？」
「…そうだな…少し灸を据えてやる必要がありそうだ。」
「何でもいいからよお！！！早く殺らせろよ！！！グラニス！！！ガウラス！！！」
「…まぁ、いいだろう。好きにしろ…ゲルギス。」

「そろそろいいかしら？……私の相手は…あなたよ。」
「…フン…私に挑むとは……相手の力量も解らぬ愚か者か…余程の命知らずと見える…。」
「…御託はいい。…早く掛かって来い、雑魚が。」
「……その言葉、後悔させてやろう…！！」

「ほな、ウチの相手は…そちらさんやね？よろしゅう♪」
「…我の相手は、こんな小娘か……我も舐められたものだな…。」
「…侮るんは勝手やけど…死ぬのはあんさんやで…？」
「…そうか…では、その言葉に期待するとしよう。」

「…んで。残り物に福がある？」
「俺はラッキーだぜぇ…てめぇと殺りあえるんだからなぁ！！！！！」
「いや、殺り合うのは無理。一瞬で片が付くから。」
「ハッ！！！ほざきやがれえええええ！！！！！！！！！！」

side：カスミ

「では、改めて名乗らせて貰おう。

私は、全平行世界観測機関【ノルニル】　第６席　ガウラス＝ザルニウス

能力は　『真・鉱物使い（マスター・オブ・オリハルコン）』」

「…御丁寧にどうも。では、私も。

改めまして、カスミ・ヴェネーラ……漆黒の吸血姫よ。」

「そうか。…では、行くぞ。」

そうガウラスが言うと、何か金属の様な物を、光速で打ち出してきた。
…でも、たかだか、それだけの物に私が当たる筈も無い。
「フッ…。」
勿論全て躱したが、それだけの能力とは思えない。…その証拠に、奴の表情(かお)に何ら変わった処は無い。

「…それだけ？出し惜しみはしないで貰える？詰まらないもの。」
「…減らず口も其処迄だ。」
そう言うと、さっき打ち出した塊が、いつの間にか私の周りに集まっていた。

「その金属は、そんじょそこらの金属(モノ)とは、訳が違う。
最高の硬度を誇る伝説の金属・オリハルコン！！
その伝説を己が意の儘に操る！
それが、私の能力　『真・鉱物使い(マスター・オブ・オリハルコン)』
さあ、伝説に包まれて、息絶えるが良い！！！」
そして、私を卵の殻の様に覆った。…恐らく窒息でもさせる気なのだろう。

……私も舐められたものだ……。…ならば…与えよう。
……我を侮辱した事の罪と罰を…その死で以て！！！

「フン…所詮この程度か…！何っ！？」
…驚愕されてる。絶対的な自身があったのだろうか…？この程度で

…？

……あ、マジで切れちゃった♪……こいつ絶対にＫＯ☆ＲＯ☆ＳＵ♪

「馬鹿なっ！！！あの伝説のオリハルコンだぞ！？最強の硬度を誇っているのだぞ？！？！

な、何故、それをそんなにあっさり斬り裂けるのだ！！！！！あ、ありえええんん！！！！！！！」

「…黙れ…屑が…。消え去れ…！」

そして、奴の存在の死点を突いた。

「…ちぇっ……私は大外れか……あっちの相手の方が面白そうだったな…。」

あ～あ……何か、無性に貴史に会いたくなっちゃったなぁ……。

そんな事を思いながら、私は二人の闘い（イジメ）を眺めていた。

side：薫

「では、互いに名乗ろうぞ。

我は、全平行世界観測機関【ノルニル】　第８席　グラニス＝ザルニウス

能力は『真・植物使い（マスター・オブ・プラント）』」

「ウチは、炎雷の女帝　近衛　薫。　ほな、よろしゅう♪」

「では、早速だが死んで貰おう。」

すると、生き成り目の前の人から、何や枝か触手みたいなんが、たくさんこっちに来た。

「い・や・や♪」

当然、普通に瞬歩で躱し、さっさと斬り飛ばした。

「始解　斬月　月牙天衝」

真っ二つになって…もう終わりかな？と思ってたら、くっつきよった。

「…残念だが、そなたでは、我を打ち倒す事は出来ぬ。

体の一片でもあれば、瞬時に再生する…それが我の能力

『真・植物使い（マスター・オブ・プラント）』

では、今度こそ我の養分となれ。」

「せやから、嫌や言うたやろ？…幾ら斬ってもあかんのやったら、燃やし尽くせばええんや。

火を点せ…迦愚土！！！

卍解　火之迦愚土大神」

「なぁ！！！！！……あ……あ……」

「これでさよならや。　行け！！！　火之迦愚土大神！！！！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「…ふぅ…終わったえ～。…あ、カスミ～♪」

「お疲れ、薫。」

「カスミもな♪早かったね。」

「全くよ！こっちは大外れだったわ。あっちの方が面白そう…。」

「わ～…ほんまによう燃えとるなぁ～……。」

まるで、季節外れの花火やな～……貴史にも見せたいな～…貴史も連れて来るんやったな…。

ｓｉｄｅ：カイト

「俺は！全平行世界観測機関【ノルニル】　第７席　ゲルギス＝ザルニウス！！！

能力は　『真・火炎使い（マスター・オブ・ボルケーノ）』だあああ！！！！！」

「俺は…名乗らんでも解るよな？」

「勿論だ！！！逝くぜ！！！！！

ヒャッハーーー！！！！！汚物は消毒だーーーーー！！！！！！！！！」

「！！！！！だから、モヒカンなのか！！！！！」

「「ツッコミ所、其処かい！？」」

良い具合にボケも決まった所で、奴が目の前に居た。

「喰ーーーらえーーーーー！！！！！！！」

喰らった。…んで、聞いてみた。

「…？所で聞きたい事が有るんだけどさぁ……。」

「な！！！くっ……何だ！！！！！？」

「お前等って、もしかして……三つ子？」

「違ぇ！？年子だあああ！！！！！」

「「ゑ?!其処強調するとこ!?」」

こいつら面白ぇｗｗｗｗ

「取り敢えず、あいつが五月蠅いんで、喚び出すよ。

セカンド・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　メルト

ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　メルト」

いや～久し振りだな～…このまま喚ぶのは。

ヒマラヤ山脈を、一跨ぎするぐらいは余裕な、巨大な燃え盛る西洋龍が現れた。

「！！！！！！！！！！な……な……な……なぁぁぁあああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「いやな?こいつがさぁ…自分達を差し置いてお前が

『真・火炎使い(マスター・オブ・ボルケーノ)』なんて名乗ってるのが、許せないらしくてさぁ……

まぁ、そういう訳で、悪いけど、燃え散ってくれ。……メルト、好きにしろ。」

“ゴガアアアアーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！”

あ、瞬間蒸発してらぁ。…酷ぇなｗｗｗ

“グルルゥゥ……”

「お疲れさん、メルト。久々に発散出来たか？」

“グワァゥ♪”

全く……可愛い奴め♪

「「…カイト。」」

「ん？おお！そっちもお疲れ。…物凄ぇ弱かっただろ？」

「「うん。」って、そうじゃなくって。…何？その巨大な龍？」

「ウチの火之迦愚土大神より、遙かに大きい……。」

「ハッハッハ…内緒☆」

「「…うざっ」」

「グスッ……いいモン……いつか、はやてに慰めて貰うから…。

それより…お迎えが来たぞ？お二人さん。」

「「え？」」

「…お前等、こんなとこまで来て何やってんだよ…？」
「「貴史！？」」
「よう、お疲れさん。…初めまして、南武　貴史。　八神カイトだ。」
「ああ、はじm……だから、何で知ってんだよ…。あいつも驚いてたぞ？」

「知ってるから知ってる。…それより、このじゃじゃ馬達、ちゃんと繋いどけよな？」
「いや、絶対無理。」
「……鈍っ（ボソッ）。…まぁ、いいや。又来いよ？今度は、お前と喧嘩してみたいしな。」
「ああ。又な。…帰るぞ…カスミ。薫。」
「「は～い♪」」
「……何だ？やけに聞き分けがいいな…何かあったのか？」
「「ん～ん。何も？」」「……マジで鈍っ（ボソッ）。」
「？」
「「何でもない♪」」」
「……。」

「まぁまぁ。…んじゃあ、今度こそ…な。」
「ああ、又、会おう。…次は戦場で。」
「「バイバ～イ♪」」

番外・異邦人（後書き）

如何でしたでしょうか？

秋代様。

何処かおかしい処が御座いましたらば、

御遠慮なく仰って下さい。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

胎動（前書き）

現時刻（０１：３５）
ＰＶ：１７４，４７４アクセス　ユニーク：２０，６０８人
皆様、毎度有難う御座います。
遂に２０，０００人突破致しました！！！
感謝の念に耐えません。
では、今話も拙筆を御覧下さい。

胎動

ｓｉｄｅ：はやて

今日は、記念すべき機動六課の始動初日や。

ビシッと決めなあかんな！

そう…あれから、もう十年も経つ。……カイト兄が、私達の前から消えて……十年…。

本当に色んな事があった。

カイト兄を知っている皆に、カイト兄がもう何処にもいない。どっか行っちゃったと伝えた。

みんな、怒り、悲しみ、嘆き、驚き……そして、泣いてくれた。

…と聞いた。

あの後、わたしは完全に鬱ぎ込んで居て、皆して慰めてくれたけど……それでも、どうにもならなかった。

私自身にもどうにも……でも、そんな私をリインが叱ってくれた。

「主！その様な腑抜けた様を、見る為にカイトは、あなたの命を助けたのですか！！！

あの者は、決して死ぬ事は有り得ません。…生きていれば必ず、又、会えます。…私がそうでした。

しっかりなさい！！！八神はやて！！！！！貴方はそれでも、あの八神カイトの妹ですか！！！

起きなさい！！！立ちなさい！！！いつか彼が帰って来た時に、笑って迎えられる様に！！！！！」

「……りいん……ぅ…ぅぁぁあ……あああああああああああああ！！！！！！！！！」

…そう言われて、わたしは最後に、一晩中大泣きした。…あの後、リインに謝られたけどな…ｗ

その後、みんなに話す事にした。魔法の事。闇の書（わたしたち）の事。カイト兄が教えてくれた事、全部を。

そして、決めたんや。

カイト兄の居場所を守る為に。家族と共に居る為に。私を慰めてくれた皆と一緒に居る為に。

…私は、管理局に入った。…意外な事に、入ると伝えた時、リンディさんから、考え直さないかと言われた。

でも、改めて伝えた。…カイト兄の為に…と。…悲しそうな顔をして、認めてくれた。

そして、此処迄の間にも又、一杯色んな事があった。

……それは、別の機会にしよう。…もう時間や。…ほな、行こか！

私達の本当の初陣や！！！

……見ててね、カイト兄。私が…ううん……私達が必ず、管理局を変えてみせるから。

…そしたら、誉めてくれるかな？…良くやったな、はやて…って、又、頭を撫でてくれるかな？

…は～やて♪…って言って、又、甘えさせてくれるかな？

……ねぇ、カイト兄。

わたしは…いつまでも…待ってるよ……。

ｓｉｄｅ：？？？

…そうか。…今日はもう、機動六課の初日か。……早いものだな。

……はやて……お前に会いたい……愛しい人。

…だが、まだ駄目だ。……そう…未だ。

まだ、終わっていない。だから、未だだ。

……でも、お前の危機には、必ず駆け付けて助けるよ。

だって、俺は…お前のお兄ちゃんなんだから。

side：三人称

時が経つのは早いもので、今日は、新人にデバイスが渡される日だ。

新人達が、デバイスを渡されながら、リインフォースツヴァイの話を聞いていた。

……其処には、あの闇の……いいや、『夜天の書』の管制人格である、リインフォースも共に居た。

そして、フェイトのもう一つの家族である、テスタロッサ家も居た。

……どうやら、皆、引っ張って来た様である。

宙に浮いてるちっこいリインが、新人達に指を立てながら、お話している姿は、とても和むものがあった。

だが、そのほんわか空気も、緊急アラートによって、掻き消される

事となった。

side：魔王（なのは）

「にゃっ！だから、まだその訓練してないよ！？」
「……なのは？どうしたの？急に。」
「何でもないの。何かどうしても言わなきゃいけない気がして。」
「…なのは。疲れてるなら、アタシが行ってくるぞ？」
「大丈夫だよ、ヴィータちゃん。まだ、そんなに疲れていないから…ね？」

……相変わらずのワーカーホリックな、人達であった。
…てか、『まだ』って……する気なのか？…する気なんだな？

「…何か、さっきから、変な電波が飛び交ってるの…。」
「…なあ、なのは。やっぱり、アタシが……」「大丈夫だから、ヴィータちゃん。」
「……そろそろええか？二人共。」
「「は、はい！」」

「今回は、教会本部から、出動要請が来てな？
レリックを輸送中のリニアレールが、ガジェットに乗っ取られてもうたらしいんや。」
「…いきなり、ハードな初出動だね。」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。この子達なら、きっと。私達が鍛えてるんだから。」
「…うん…そうだね、なのは。」
「ほな、みんな頼むな。」
「「「「「了解！」」」」」

今は、ヘリに乗って、現場に急行中です。
「ぶっつけ本番になるけど…訓練通りにやれば、大丈夫だからね。」
「「「はい！」」」「は、はい！」

「…キャロ…恐い？」
「え！？あ、いや、あの…その……。」
「…大丈夫だよ、キャロ。あなたは一人じゃない。ちゃんと皆がいる…念話で私達にも繋がってる。
それに、あなたの魔法は、みんなを助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから…。
だから、何も恐くないよ？キャロ。」
「は、はい！」
「うん♪」

「高町隊長、ハラオウン隊長。現場に着きます！」
「よし！じゃあ、みんな、行こっか！！」
「「「「はい！！！」」」」

「スターズ０１　高町なのは　行きます！」

「ライトニング０１　フェイト・Ｔ・ハラオウン　行きます！」

「スターズ０３　スバル＝ナカジマ　行きます！」

「スターズ０４　ティアナ＝ランスター　行きます！」

「キャロ。一緒に行こう？」

「う、うん！」

「ライトニング０３　エリオ＝モンディアル　行きます！」

「ライトニング０４　キャロ＝ル＝ルシエとフリードリヒ　行きます！」

‘キュクルー’

「…みんな、無事にリニアに取り付けたみたいだね。」

「うん。…じゃあ、私達も頑張ろっか、フェイトちゃん。」

「…うん。行こう、なのは。」

そう、フェイトちゃんと言葉を交わして、私達はガジェットに向かいました。

「…結構、多いね。」
「…うん。ざっと見ても、５０～６０は居るよ。」
「よし！やろう！フェイトちゃん！」
「うん。頑張ろう、なのは！」

フェイトちゃんと、二人で気を入れて、いざ！…と思ったその時でした。

……とても……そう。

……とても、懐かしい声を聞いたのは。

…それは、十年振りに聞いた…優しくて…けれど、とても厳しい声。

「…その必要は無い。

セカンド・イグニッション

メルト　　アムド」

……そう。あの人のみが唱える呪文（キー）。

あの時。十年前のあの時、私達の前から消えていった……

あの人の真っ赤な頼もしい背中が、目の前にありました。

ｓｉｄｅ：三人称

「…退いていろ。…纏めて片付ける。　ソード　　メルト

億物　悉く　灰燼に帰せ　　奥義　　真・紅蓮腕」

その言葉が終わった直後、剣を仕舞った音が聞こえると、ガジェット達が全て真っ二つになっていた。

だが、彼女達が本当に驚くのは、まだこれからだった。

真っ二つになった筈のガジェットが、更に四つになり、八つになり……どんどん斬り刻まれていく。

そして、最早、粉にしか見えなくなってから、彼が、指を天に向けた。

「…刮目せよ。　是　煉獄也。」　パチン

そう、彼が指を鳴らすと、粉になったガジェットが、一粒一粒に至るまで、皆、炎に包まれた。

……正に、煉獄の如く……。

全てが燃え尽きても、まだ、皆惚けていた。

ある者は、その凄惨さに。

ある者は、その強さに。

そして……ある者達は、その懐かしさに……。

「……カイト…さん？」

「……違う。…俺は…『ＺＥＲＯ』だ。…早く新人共の所へ行ってやれ。…なのは。…フェイト。」

「は、はい！…なのは。」

「う、うん…。…『ＺＥＲＯ』さん…。又、一人で居るんですか？」

「…早く行け。」　シュンッ！

「…行こう。なのは。」

「…うん。フェイトちゃん。」

「みんな、お疲れ様！良く頑張ったね。」

「「「「有難う御座います！！！」」」」でも、流石なのは隊長とフェイト隊長ですね。

あれだけのガジェットを、あっさり片付けちゃうんですから。」

「……ううん…違うよ、ティアナ。ガジェットを消したのは私達じゃないよ。」

「「「「え？」」」」

「…うん。あれだけの事を、当たり前に出来るのは……一人しか居ないよ。」

「…なのはちゃん！！！フェイトちゃん！！！」
はやてと、リイン、そして、守護騎士達が挙って駆けて来た。

「！！はやてちゃん…。」「！…はやて。」「「「はやて部隊長！！！！」」」」ビシッ！
「…ハァハァ……ほんまなん？…カイト兄が来たって…ほんまなん！！？」
「…うん。本当だよ、はやてちゃん。…又、ＺＥＲＯって名乗ってたけど…間違いなくあれは、カイトさんだった。」
「…うん。一撃でガジェットを全滅させてた。そんな事が出来る人は、私達は一人しか知らない。」

「……そか。…良かった。カイト兄、やっぱり生きてたんやな…。」
「…はい、我が主。あの者がそうそう簡単に、死ぬ筈が有りません。…何れ又、会えるでしょう。」
「…せやね。カイト兄なら…間違いなく……。」
「「…うん。」」「「「はい。」」」」「…ああ。」（…カイト。）

「あの～……。」
「うん？何？スバル。」
「その…さっきから、隊長達が仰ってる『カイトさん』とか、『ＺＥＲＯさん』って誰なんですか？」

“え？”「……ああ、そっか。スバル達は知らないんだったよね。」
「…そっか。あのね、カイトさんとＺＥＲＯさんは同じ人で、私の命の恩人なんだよ。」
「うん。そして、私達の目標。」
「それで、私の大好きな義理の兄で、命の恩人で、私の惚れとる人や。」
「「「ほ、惚れ…／／／」」」…あ、あの、どんな人なんですか？」

「…えーと、さっきの戦闘資料が…あった。これだよ。」
そうなのはが、言って映し出された映像に安堵と微笑みの溜息を漏らす、隊長組と……
食い入る様に魅入る新人組。

すると、新人達が皆、物凄い勢いで、なのは達に聞いてきた。

「「「「あ、あの！！！この人、他の鎧も着ていませんでしたか！！！！？」」」」

「わっ！う、うん。良く知ってるね、みんな。…はやて、カイトさんの他の資料ってある？」

「勿論や！カイト兄の事は、全部私が管理しているからな。…で、何から見たい？聞きたい？知りたい？」

「「「「まずは、他の鎧を！！！！！」」」」

「……みんな、元気一杯だね？」

「…うん。どうしたんだろう？」

「んじゃあ、まずこれやな。」

そう、はやては言うと、カイトの鎧…七つのファーストを見せた。

「あ！これだ！！！」「…やっぱり、この人だ…。」「…間違いない。」「…フリード。」‘キュ～’

「！皆さんもそうなんですか？もしかして…。」

「え？じゃあ、エリオも？！」

「え？ティアナさんもですか？」‘キュ？’

「じゃあ、ホントにみんなそうなんだ……。」
「？みんな、どうしたん？」

「……僕達、この鎧の人に助けて貰ったんです。」
“え！！！！！本当！？！？！？”

「は、はい。わたしは、この白い人に、フェイトさんと出会う前に、助けて貰ったんです。管理局にも連れて来て貰いました。」
「…そっか。だから、私を指名してくれたんだね…キャロ。…じゃあ、エリオも？」
「はい…。僕は、この光ってる鎧の人に、助けて貰って、フェイトさんを頼れって。」
「…そうなんだ。……又、カイトさんに借りが出来ちゃったな…。」

「…スバルとティアナはいつ？」
「あ、私は、なのはさんに助けて貰った時です！」
「え！？でも、あの時は私以外には誰も……」

「…いえ、すぐ側に居ました。真っ赤な鎧を着て。」
「ど、何処に？」
「…私の隣に…です。なのはさんが助けに来てくれるまで、ずっと側についていてくれました。
それで、なのはさんが来ると、姿を消して、ギン姉を助けに行ってくれたんです。」
「……そうだったんだ……。あの時、すぐ側にいたんだね…。そういえば、確かに一人、どうやって助かったのか、解らない子がいたね。」
「はい。それが、ギン姉だと思います。」
「……そっか。…ティアナは？」

「私は……兄の葬式の時です。…あの時、あの場に居た他の局員を、皆どっかにやったって言って、兄の墓に花を添えに来てくれました。…その翠色の鎧のままで…。」

「…そうなんだ。あの時の管理局員の失踪騒ぎは、カイトさんだったんだ…。」
「…ほなら、気の毒やけど、もう、その時の皆は生きてはおらへんな。」
「「「「え！？！？！？」」」」
「…ええ、間違いありませんね。確実に消されているでしょう。」
「「「「な！！！そ、それでいいんですか？！？！？！」」」」

“まぁ、カイト（さん・兄）だ（や）し”

「「「「…あ、あはは……；；；；」」」」

その日、快晴だった天気は、午後から曇りだった。

遠くでは、雷も鳴っていた。

……まるで、これから起こる事に

空が……

星が……

いや、天が……

震え…恐れ…そして……怯えている様だった……。

因みに翌日、みんなで休日を費やし、一大カイト暴露大会が行われていた事を、当の本人は全く知る由も無かった。

胎動（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、パソコンのユニーク数が、１５，０００人

そして、携帯が１００，０００アクセス突破致しました。

本当に感謝致して居ります。

では、今話も拙作を読んで下さり、有難う御座いました。

再会（前書き）

現時刻（１１：５５）
ＰＶ：１８７，０７４アクセス　ユニーク：２２，０７７人
皆様、いつも有難う御座います。
今回は、塩を用意して頂ければ、幾らか緩和されると思います。
では、今話も拙筆をお楽しみ下さい。

再会

ｓｉｄｅ：三人称

「…派遣任務？」
「しかも、異世界に？」
「そうや。聖王教会からの依頼でな？私達が行く事になったんよ。」
「どうして、私達がわざわざ行く事になったの？私達ってレリック専門じゃあ…？」
「そのロストロギアも、レリックの可能性が有るから、一概には違うとも言えんしな。」
「…では、今回の任務は、管理外世界へ行き、レリックらしきロストロギアを、保護する…という事ですね。」
「せや。」

「それで、はやて。一体何処？」
「……フッフッフ……何処やと思う？」
「もう…勿体振らずに教えてよ、はやてちゃん！」

「フッフッフ……何と！！『第９７管理外世界　地球　日本地区　海鳴市』や！！！」「ですぅ！！」
「「「「え（な）！？本当に（ですか）！！？（主）はやて（ちゃん）！！！！」」」」
「ほんまや！！！せやから、みんな早う準備しぃ？」「地球に帰るですぅ！！！」
「「「「了解！！！！！」」」」

「第９７管理外世界…文化レベルＢ……」
「魔法文化無し…次元移動手段無し……って、魔法文化無いの？！」
「無いよ？うちのお父さんも魔力０だし。」
「確か、スバルさんは、お母さん似…なんですよね？」
「うん♪！！！」
「……何でそんな世界から、なのは隊長やはやて部隊長みたいなオーバーＳランク魔導士が……？」

「突然変異…というか、偶々……かな？」
「へ？あ！済みません！！」
「構へんよ。」
「私もはやてちゃんも、魔法と出会ったのは偶然だしね。」

「……でも、カイト兄は全部知っとったな……。」
“え！？”「…はやて、全部って何処迄？」

「全部は全部や。
なのはちゃんが魔法と出会うのも、フェイトちゃんと戦うのも、私に家族が出来るのも……
恐らく、この機動六課が出来る事も、知っとったん違うかな？」
「！！！幾ら何でも、そんな事……。」「…いや、充分に有り得

る。」
「え?!リインフォースさん…どういう事ですか?」
「…忘れたか?カイトの二つ名を…。」
“あ…。”
「…そうだ。奴の名は『無限にして無窮なる旅人』。……そして、こういう二つ名もある。
『全(オール・ノウレッジ)てを知りし者』と。」
“『全(オール・ノウレッジ)てを知りし者』……。”
「…ほんまにカイト兄らしい、名前やな。」
「…うん。」
「…わたしも早く会ってみたいですぅ…。」
「…そうか。そう言えば、ツヴァイは未だ会った事が無かったな。」
「ハイです!アイン姉様からお話を聞いてから、ずっと楽しみです!!」
「…せやな。早く会いたいなぁ…カイト兄ぃ。」

それから。
昨日から帰っていた、テスタロッサ家と合流し、各自順調に仕事を終わらせた。
途中で、『翠屋』にも寄り、カイトの生存を伝えた。…皆、喜んでいた。

そして、今、昼ご飯を食べ終わり、これから『スーパー銭湯』に行く事になった。

ゑ？飛ばし過ぎ？……こまけぇこたぁいいんダヨ！！！（ＡＡ略

「いらっしゃいませ。……何名様ですか？」
「え～と……何人や？」
「え…と……大人が…
なのは・私・はやて・シグナム・ヴィータ・シャマル・アイン・ティアナ・スバル・プレシア母さん・
アリシア姉さん・アリサ・すずか・エイミィ・美由希さん…の１５人で…」
「子供が…エリオ・キャロ・ツヴァイ・アルフ…の４人だね。」

多っっっ！！！！！

「……子供は五人じゃぁ…？」
「アタシは大人だ！！！」
「まぁまぁ…。」

「うわあ……すっごく広いね♪エリオ君♪」
「う…うん。又、後でね、キャロ。」
「え…何で…エリオ君？」
「あの…ほら…僕、男の子だし…。」
「でも…ほら、エリオ君、あれ！」

注意書きであった。…女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみで、お願いします…と書いてある。

「エリオ君、１０歳♪」
「え…あ……。」
「うん。折角だし、一緒に入ろ？エリオ。」
「フェイトさん！？」
「そうよ、エリオ。久し振りにアリシアお姉ちゃんとも、一緒に入ろ♪」
「ええ。プレシアおばあちゃんとも、一緒に入ってくれる？」
「ええ！！？あ、あのですね、で、でも、アリサさん達や、ティアナさん達も居ますし…。」
「私は別にいいわよ？」
「うん。てか、前から髪洗ったげるって、言ってるじゃん。」
「私達も構わないわよ？ねえ、すずか。」
「うん♪」
「エリオ…諦めが肝腎だよ。」
「そうだよ。エリオと一緒に、お風呂に入るのは久し振りだし…一緒に入りたいなぁ……。」

「あ、あの……お気持ちは……その……あの……済みませ

ん！！！！！」　ダダダッ！

「あ……エリオ…。…行っちゃった……。」
「まぁまぁ、フェイトちゃん。」

「みんなー。全員分、ロッカー確保出来たわよー。」
「ほら。行こう？フェイトちゃん。」
「うん……。」
「……ホントに過保護…というか、親バカね……。」
「あはは……。」

「え～と……。」
注意書きを見ていた。……頑張れ、エリオ。

「何を頑張れば良いんですかー！！！！？」

そんな叫び声が、聞こえたとか、聞こえなかったとか。

「うわぁ～～～ホントに凄いやぁ……。」
見た事無い大きさに、思わず唖然とするエリオ。

キョロキョロしながら、歩いていた為、前から歩いてくる人に、気付かなかった。

「うわっ！」「おっと…。」
「大丈夫か？」
「は、はい。済みません。」
「気にするなよ。ここは本当に大きいからな。珍しがるのもしょうがないさ。」
「あ、ありがとうございます……。」

「クスクス…。何なら、案内しようか？…其処の女の子も一緒に…さ。」
「え？…！キャロ！！」
「エリオく～ん。…来ちゃった♪」
「き、来ちゃった…って……。」
「だって、お店の人が、いいよって言ってくれたから……。」
「き、キャロ～…。」
「クスクスクス……じゃぁ、一緒に案内しようか？」
「「は、ハイ！お願いします！！」」
「うん。良い子達だ。」

「「ハァ～～～広い…。」」
「其処は水風呂だよ？」

「「外にお風呂が有るんですか?!」」
「露天風呂って言ってね…日本の昔からのお風呂なんだよ。」

「「凄く浅いですね…。」」
「其処は足風呂。足だけ浸かる為のお風呂だよ。」

「「今度は凄く深いです。」」
「此処は、大人用の立ち風呂。全身浸かる為の風呂だね。…危ないから入っちゃ駄目だよ?」

「それで、こっちが、子供用のお風呂。まずは此処で遊んでおいで?」
「「はい!ありがとうございます!!!」」
「うん。じゃぁ、又ね。」

「……大きくなったな。…エリオ…キャロ。……フェイトは良い母に、なっている様だな。」

「あ、エリオだ♪♪♪」

「え!?ふぇ、フェイトさん!?な、何で此処に?!」

「子供用は混浴なんだよ?」

「ええ!?」

南無。……てか、リア充爆発しろ。

「いや、助けて下さいよ~…;;」

……リア充核爆発しろ。

そして、エリオが散々玩ばれた後、風呂から上がった皆を、アラートが襲った。

side：???

今、ようやっと、あのスライムを、キャロが封印した処か……。

……では、少し、出しゃばるか。……彼女にも会いたいし…な。

side：はやて

「凄い！もう、一人で封印出来る様になったんだね！」

「えへへ……♪」

「ほんまにな。…それじゃあ、私はこれの護送と報告に行ってくるわ。」

「あ、それなら私達も行くよ。」

「ええって、ええって。なのはちゃん達はゆっくりしてき？」

そう言って、私はみんなを休ませて、一人で持って行こうと、説得していました。

でも……それは……

とても……懐かしくて……

今……私が……一番……聞きたい声に……

はばまれた……

「…いや、それは俺が貰おう。」

その声がした時には、もうロストロギアは、彼の手に収まっていました。

そう……七色の鎧に身を包んだ……彼に……。

“な！！！！？”

「…これは、頂いて行く。　…ダーク」

そう言うと、彼の後ろに空いた黒穴に、ロストロギアが吸い込まれていった…。

……暫く、みんな声が出なかった。

余りにも、驚いて……

余りにも、懐かしくて……

そして……

余りにも……嬉しくて……

「……カイト兄ぃ……。」

「…久しいな…皆。…大きくなった。

…そして……久し振りだな……

……益々、美しくなったな……はやて。」

「カイト兄ぃ！！！！！！」

「……はやて…。…大きくなったな……。」

「カイト兄ぃぃぃ……。」

ｓｉｄｅ：三人称

“カイト（さん）……。”

「…今の俺は、『ＺＥＲＯ』だ。……皆、元気そうで何よりだ。…アイン、その後、体の調子はどうだ？」

「…問題ない。」

「…そうか。」

「あ、あの！」

「ん？…ああ、そうか。もう産まれていたのだな。…『蒼天』リインフォースツヴァイ。」

「は、ハイです！！初めましてです！！！アイン姉様から色々聞いてから、ずっとお会いしたかったです！！！」

「…色々？…一体、何を話した？…アイン。」

「さて…。色々話し過ぎたのでな。」

「……まぁいい。今回、俺が来た理由は、お前だ。…ティアナ＝ランスター。」

「えっ！？」

「…忠告だ。…己が力量を弁えろ。…過信した場合……

友を撃つ事になる。…覚えておけ。」（フレンドリファイヤー）

「！！！は、ハイ！！！！！」ガクガクブルブル

「か、カイトさん…何も其処まで…」「…お前にもだ、なのは。」

「え…？」

「…自惚れるな。…あいつらは、お前の友では無い。…お前の考えなど、露程にも知らん。

…貴様は、獣では無かろう？…必ず、全てを話せ。…でなければ、死ぬのはあいつらだ。

…貴様の所為でな。」

「…わ、解りました…。」

「……そうか？……頑迷固陋な貴様には珍しい、物分かりの良さだな。

……この場限りで無い事を願おう。」

「……むぅ……。」

「…では、用は済んだ。…俺はもう行くとしよう。」

「あ、ま、待って！！！カイト兄！！！！！」

「……。」
「お願い！！カイト兄！！！顔見せて！！！一回でええから！！！！」
「……。」
「グスッ……おねがいぃ……カイト兄ぃぃ……。」

「……ハァ……俺もまだまだ、甘いな。

解放（パージ）」

光が収まった後には、依然と寸分違わぬ、皆の知るカイトが居た。

「…グスッ……カイト兄ぃ…。」
「…はやて。…十年振り…か。…本当に綺麗になった。」
「カイトにぃぃぃ……。」

「…相変わらず泣き虫だな。」
「そんなん…カイトにぃの所為やんかぁ……。」
「…そうか…済まない。」
「…グスッ……カイト兄ぃ？…又、どっか行ってしまうん？」
「…ああ。…未だ、終わっていないからな。…大丈夫だよ、はやて。必ず又、会えるから…。」

「…うん。…なら、これは…保険や。」
「…！……ん……。」

“うわあ！？”“あ！こ、子供は見ちゃダメ！！！”

「……ぅん……こ、これで、や、約束やで／／／／／」
「…クスクス……照れるなら、しなきゃいいのに……。」
「う…五月蠅い！！ええんや！私がしたかったんやから！！……
…あ…／／／／／／／／／／／」
「プッ…クスクスクス……。」

「う〜〜〜………／／／／／／」

「………本当に、可愛いな…はやては………………ん…。」

「ぅん？！…んぅぬ…………ん…………。」

“ま、又？！？！？！”

「………御感想は？」

「うう〜〜〜…そ、そんな事…聞かんといてぇ………／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「…んじゃあ、もう一回………んぅ…………。」

「ぅんぅぅ！…………んんぅ………。」

“まだ、するの！？！？！？！？！？”

「…どうだった？はやて。」

「ぅぅぅ………せ、せやからぁ………聞かんといてぇなぁ………カイト兄ぃ
………恥ずかしいやないかぁ………／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ちゃんと感想言わなきゃ、ダメじゃないかはやて。…もう一回…」

“何時までする気だこのバカップル”

「「ナイスツッコミΣdそれを待ってた！！！」」

“………ホントに、この兄妹は………。”「「「「あ、あははは〜〜〜………はぁ…。」」」」

「………いつも、こうなんですか？」

「………うん。いつもこう。…流石にキスまでするとは思わなかったけど。」

「…何か無性に疲れるですぅ…。それに、色んな幻想が崩れて行く気がするですぅ………。」

「…残念ながら、それは現実だ…ツヴァイ。
…私も初めて知った時は、色んな憧れとか、完全に消え去ったものだ。」

「…アイン姉様もですか？………解りましたですぅ…わたしも色々諦めるですぅ…。」

「…なんや、酷い言い種やな…。

……所でアイン？憧れてどういう事かな？私、初めて聞くんやけど……？」

「う！あ、主…！もう既に、過ぎた事ですから……！！！」

「…そか。…ほなら、後で、じっっっくり話そか…？」

「……はい……。」

「うむ。若干ヤンデレなはやても、凄く可愛いな♪」

“…ダメだこの馬鹿兄…はやくなんとかしないと……”

「はやて、みんなが虐める。」

「よしよし♪」

“え？何？このデジャヴュ？”

「…さて。良いオチもついた所で……俺もそろそろ、行くよ…はやて。」

「……うん。カイト兄。……今度はいつ会えるん？」

「…さてな。そいつは…ジェイルとノルニルに言ってくれ。…愛してるよ…はやて。」　シュンッ！

「……カイト兄ぃ…。」

十年振りの兄妹と家族と友との邂逅。

その賑々しい幸せを、闇から見ている者が居た。

だが、彼に睨まれ、終ぞ介入する事は無かったが……。

……未だ、彼と彼等との戦いは終わっていない……

そう……終わっていないのだ……。

再会（後書き）

如何でしたでしょうか？

……正直、甘いシーンを書くのは苦手です。

因みに、あのスライムを奪ったのは、はやても休ませる為であり

あの直後、ザッフィーに直接渡しています。

その事を、ザッフィーから通信で聞いて、そのまま休暇を取りました。

……こういう事を、中々本編に割り込めさせられないです。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

ホテル・アグスタ（前書き）

現時刻（０４：４５）
ＰＶ：２００，０９７アクセス　ユニーク：２３，２９８人
皆様、いつも有難う御座います。

２００，０００アクセス突破致しました！！！！！

真逆、二十日程で達成するとは、思いもしませんでした。

本当に感謝致して居ります。

一応、記念として、カイト達の能力の総御浚いをしようかと思っています。

もし、何か他に書いて欲しい題目等が、御座いましたらば、御一報下さい。

では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

ホテル・アグスタ

ｓｉｄｅ：三人称

「ホテル・アグスタ？」
「せや。そこで骨董品のオークションがあるんやけど……。」
「…成る程。そのオークションに、ロストロギアが出る為、その警護任務…という訳ですか。」
「相変わらず、理解が早くて助かるわ、アイン。そういう事や。私達、隊長三人が、正装で会場内警護。他のみんなで、会場周りの警護や。
私等は会場内に居る時は、デバイスを持てへんから、みんな宜しくな？」
“了解！！”

「じゃあ、次は私からお話。
今、レリックを狙っていると思われる、次元犯罪者の名前が、ガジェットの残骸から出て来た、ネームプレートから判明したの。
…広域指名手配の次元犯罪者……ジェイル＝スカリエッティ。
こっちは、主に私が捜査しているんだけど…一応みんなも知っておいてね。」

“はい！！”

「……所で…はやてちゃん…。」
「うん？何？なのはちゃん。」
「……カイトさん…来てくれるかな…？」
「……うん……せやね…来て…くれたらええな…。」
「……うん。」

翌日。

早速、会場内に入り、デバイスを取り上げられた。

そして、又、一人…その後から、入った者に提示された
身分証明書を見た受付は、その彼に最大級の敬礼をした。

そんな事など、終ぞ知らない彼女達は
色々と有名で、尚且つ美人な三人組と、是非共、お近付きになりたいという

ハイエナ共に、雲霞の如く、集られていた。

そんな彼女達に、近付く男が又、一人。

その男を見た事が無い、男達（ハイエナ）は、その男を睨み付けて牽制したが
まるで意に介さず、ズンズンと美人組へと、歩みを進めた。

男達は、自分達が見た事もない奴など、どうせ相手にもされないだろうと、高を括っていた。

だが……そんな野郎共を、衝撃の光景が襲った。

……暫く、彼等は、現実を認識する事が困難になり、再起不能になった。

ｓｉｄｅ：はやて

……あ～～～…ほんまにしつっこいなぁ……。

下心丸見えで、近付いてくる男ばっかや……はぁ…。

……？何や、後ろの方が騒がしいけど……私等の方に近付いて来てるみたいやな……。

（なのはちゃん、フェイトちゃん。何や、後ろが騒がしいんやけど…判る？）

（うん……。誰かこっちに来ようとして、他の人に威嚇されてるみたい。）

（……でも、全く気にしてないみたい…。……あ、見えたよ…って……）

（（ええ～～～～～！？！？！？！？）

（んな？！ど、ど、どうしたんや？二人共…。何をそないに驚いてるん？）

（（あ…え、え～～～と……；；；う、後ろ……。））

（？後ろ？）

ｓｉｄｅ：三人称

「Ｌａｄｙ？相席しても、宜しいですか？」

「…此処は、立食パーティーですから、どうぞ、御勝手……に…

……え？」

「クスッ…では、御言葉に甘えて♪」

「あ、カ、カ、カ……」“？…カ？”

「カイト兄ぃ！？！？！？！？！？」“うおっ！？”

「プッ…クスクス……やぁ、はやて。」

「やぁ、はやて。……やない！！こんなとこで何してるんや！！？」

「何って……立食パーティーに出席してるだけ…だけど？」

「せやのうて！！どうやって此処に入り込んだんや！！？」

「？極普通に招待されてだけど？…誰にかは内緒♪」

「うう～～～……何か、納得いかん～……。」

「まぁまぁ…。……とても良く似合ってる。いつもより、更に綺麗だ…はやて。」

「うっ………／／／／／／／／／／／／／／／そ、そんなん…卑怯や………カイト兄ぃ…／／／／／／／／／」

「…本当に可愛いな…はやては。

………なのはも、フェイトも良く似合ってる。今日は一段と綺麗だな。」

「「／／／／／／あ、ありがとうございます………／／／」」

「クスッ…ほら、はやて。…こっちおいで？」　グイッ

そう言い、はやての腰を片手で捕まえるカイト。…周りへの牽制も忘れずに。

「へ？…あうっ………／／／／／／／／／カ、カイト兄…何か手慣れとる………／／／」

「そりゃ、そうさ。…はやての為に練習したからね♪」

「せ、せやからぁ………そういうのぉ………ずるいてぇ…／／／／／／／／／／／／」

「……いかんな………はやて…。」

「／／／／／／／／／な、何？…カイト兄ぃ？／／／」

「…先に謝っとく…。ゴメン。…ん…………。」

「へ？…んぅぅぅ！？／／／……んん！………んぅ／／／…………………。」

（（こ、こんなとこでも、しないでよぉ～～………;;;;;））

「………ん………御馳走様♪」

「…………………はぅぅぅっ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

プシュー…

「あれ？…ありゃ、ショートしちまった…。…まぁ、いいか。可愛いし♪♪♪」

「「／／／／／／／／／か、カイトさ～ん………;／／／」」

「悪ぃ、悪ぃ。…いや、だってな？はやてが、あんまりにも可愛い

反応するもんだからさぁ……。」

「「そ、それはいいですから／／／早くこの場所離れましょう／／／／／／」」

「ほいほい、了解っと。……にしても、息ピッタリだな…。」

「「誰の所為ですか！！！！！」」

そう、騒がしく去って行く四人（一人は殆ど、気絶同然だが）。

後に残ったのは、嵐の前の静謐であった。

その後、有名処の三人と親し気に話す……

しかも、その内の一人…八神はやてとは、まるで恋人の様に接している、謎の無名の男の存在を

その場に居た全ての人が、即座にあらゆる手を尽くして調べたが、何も判らなかった。

……だが、それは……後日、意外な形で、全ての人が知る事となる。

……そう。全ての人が…。

誰も……全く、予期せぬ形で……知るのであった。

…だが、それは未だ先の話。

今は、この会場に話しを戻そう。

オークションが始まった。
壇上に上がって来たユーノに、カイトが手を振ると、思いっきり驚いて、顔をひくつかせていた。
……因みに、はやては未だ、戻って来ていなかった為
もう一回カイトが口を塞いで、正気に戻した。
「ううう～～～…こんな大勢の前でぇ………わたしもうお嫁にいけへん………；；」
「それなら、問題ない。はやては最初から、俺のものだからな。
……他の男になど、世界を滅ぼしてでもやらん！！！！！」
「……カイトさんが言うと、本当にしそうで、とても恐いです………。」
「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」
……返事がない。…只のショートした、はやてのようだ。

……というか……マジで自重してくれ……バカップル……ｏｒｚ

……そんな、周りの声が聞こえてきそうな、殺伐とした雰囲気の中順調にオークションは進んでいた。

…だが、その間にも敵襲は続いていた。

（…はやて。フォワード達は無事か？）
（！…うん。大丈夫や。今の所は問題あらへん。）
（…そうか。…はやて、なのはとティアナは、話したか？）
（？…いや、特にそういう事は聞いてへんけど…。）
（……そうか。《くっ…やはりか…あの筋金入りの頑固者共が……。》）

（…カイト兄？）
（…いや、何でもない。）

（…！？…敵の増援！？更にガジェット１００機程追加やて？！）
（《……矢張り、そうか。……間違いなく奴のようだな。》
…はやて、なのは、フェイト…応援に行く必要は無い。）
（（（な！？何で！！？））））
（…俺が何の対策も無しに、こんな所に来ると思ったのか？）

（（（うん。））））

（……。新人共の所に、俺の従者を一体（ひとり）遣っている。
どんな事が有ろうとも、何の問題も有り得ない。）
（（（…で、でも……。））））
（…偶には、部下を信じて、勝利の報告を待っていろ。…それも、隊長の務めだ。）
（（（（…は、はい。））））

《…後は、頼んだぞ…鋼牙。》

side：ティアナ

「はぁ～…ホントに凄いよね…この部隊……ああ…幸せ。」　ポワワ～ン♪

「……ハァ。」

スバルのミーハー話を聞きながら、私はあの人の言葉を反芻していた。

‘…忠告だ。…己が力量を弁えろ。…過信した場合……

友を撃つ事（フレンドリファイヤー）になる。…覚えておけ。’

……解ってる。…私が凡人だという事ぐらい。

…でも…それでも…！！私はやってみせる！！！

そう密かに、決意を新たにしていた時だった。

「初めまして！お姉ちゃん達！！」

「「「「！！！！！何で、こんな所に子供が？！？！」」」」

「僕、鋼牙って言うんだ！宜しくね！！」

「と、とにかく、この子を何処かに避難させないと…！」

「？？」　コテン

「うっ…可愛い……じゃなくて！…早くしないと何時敵が来るか…！！」

……最悪な事に、このタイミングで敵襲の様だ。

「ヴィータ副隊長！！こっちに民間人の男の子が居ます！！！」

「何ぃ！？何でそんなとこに、民間人がいんだ！？…くっ…何とか、持ち堪えてくれ！！

こっちが片付いたら、直ぐそっちへ行く！！！」

「…よし！みんな聞いた？！ヴィータ副隊長が来るまで、守ってみせるわよ！！」

「「「了解！！！」」」

「クゥッ…！うわぁ！！！」

「エリオ君！！」

「くっ…エリオ、下がって！！私とスバルで行くから！！スバル！クロスシフト、行くわよ！！！」

「うん！！！」

くっ…！維持するのが、かなりきつい……でも、やってみせる！！！

「クロスファイア　シュート！」

！！いけない！！私のコントロールから外れた！？…は！危ない！！！！！

「スバルッ！！！」

「え？…！！！」

ドゴォッ！！

……私は思わず、目を瞑ってしまった。

……だから、何故そんな事になったのか、解らなかった。

……でも…見ていても、恐らく理解出来なかったと思う。

……だって……誰が想像出来るだろうか？

……あの男の子が

……自ら弾に当たりに行き

……しかも……全くの無傷だなんて

……少なくとも……私達には……理解出来(むりだった)なかった……

「駄目だよ…お姉ちゃん。…これじゃあ、このお姉ちゃんが、大怪我しちゃうよ？」

「…え？……な？……ええ？！」

「聞いてる？お姉ちゃん。…カイト兄ちゃんに言われた事、忘れちゃったの？」

「な！！あの人の知り合い！？」

「ねえ…僕の話聞いてる？……カイト兄ちゃんの言った事、どうして聞かないの？

……そう。……それじゃあ……

オシオキが　　必要だね。」

その言葉の後、私の意識は途切れた。

ｓｉｄｅ：三人称

皆、衝撃の光景を目の当たりにした。

確実にスバルに当たると思った弾に、先程の民間人と思われた、男の子が自ら当たりに行き

全くの無傷で立っていたからだ。

しかも、その子はティアナに幾つか質問し、消えたと思った刹那

ドグッ　という鈍い音がしたと思ったら、ティアナが気絶していたのだ。

……皆、戦慄した。…何故なら……

その子供のティアナに対する視線が……

まるで、幾ら言っても聞かない、悪い子（デキソコナイ）を、見ている様だったからだ。

その時、呆然としていた、彼女達に更なる悪報が届く。

……増援が来たのだ。…それも１００機程。

そして、彼に、未だ残っていたガジェットが、増援と一緒になって襲ってきた。

思わず、皆が凄惨な瞬間を覚悟していた。

……しかし、それは杞憂となった。

……彼が、それらを睥睨し、軽く腕を一振りすると

何処からか、鋼やらダイヤやら…その他、見た事もないあらゆる鉱物が、ガジェット達に降り注ぎ

僅か数秒で、全滅していたのだ。

唖然としている面々を、まるで気にせず、彼は虚空に向かって話し掛けた。

「…ねぇ……こんなモノで、僕達を殺ろうなんて……余りにも舐め過ぎじゃない？」

「……そうだな。矢張りあの程度のガラクタでは、無意味…か。」

「…当然でしょ？僕達を誰だと思ってるの？

……あんまり、舐めたことすると……

今、殺すよ？」

そう言うと、彼から生物とは思えない程、強大な魔力と殺気が辺りに充満し、

その余波を真面に受けた新人達は、全員気絶した。

暫し、彼等は睨んでいたが、虚空にいたモノから、引いていった。

そして、ようやっと到着したヴィータとツヴァイ。

ドゴッ！「待たせたな！！無事……！？おい！！！どうした！！お前等！！！！！！」

「あ！ヴィータお姉ちゃん♪」

「は？お姉…？って、誰だテメェ！！まさか、お前がやったのか！！！！！」

「？僕のこと、覚えてない？ほら！カイト兄ちゃんと一緒にいたでしょ？闇の書の時に！」

「何？……あ…。そういやあ…あの時の子供か！！！」

「うん！！！あ、後、これは僕がやったんだよ。

…大丈夫。みんな気絶してるだけだから。

後、ティアナお姉ちゃんが、スバルお姉ちゃんを、間違えて撃ってたよ？」

「な、何！？お前が…！ってか、ティアナがスバルを撃った…だとぉ…！！？」

「うん。カイト兄ちゃんの言うことを、聞かなかったからね。…ちゃんと叱ってよ？」

「当たり前だ！！！スバルは無事なのか！？」

「うん！僕が変わりに喰らってあげたからね♪」

「は？……お前は無事なのか？」

「モチロン♪あれぐらいじゃ、なんのダメージも与えられないよ、僕達には。」

「…そうか。…何にせよ、助かった。部下に変わって礼を言う。」

「ううん。カイト兄ちゃんにお願いされたからね♪……じゃなか

ったら、殺してたよ?僕。」

「うぐぅっ……わ、解った。…解ったから……その、殺気を…収めてくれ……。」

「…わかった。…じゃあね?ヴィータお姉ちゃん。」　ヒュッ

「…っくぅっっ……ホントにバケモンだぜ…あいつら……。」

その後、アイン達に連絡し、現状と事の顛末を伝えた、疲労感タップリのヴィータとツヴァイ。

何とか伝え切った後、気を失ったかの様に、眠った。

それを、念話で聞いていた時、いつの間にか、カイトは消えていた。

たくさんの疑問と、蟠りを残して……

ホテル・アグスタでの戦闘は、終わった。

番外・参（前書き）

現時刻（０９：２０）
ＰＶ：２１６，４２５アクセス　ユニーク：２４，７０３人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、本文にもある通り、長いです。

皆様、飲み物の準備は宜しいですか？

では、今話も拙筆を御覧下さい。

番外・参

祝！！！

２００，０００アクセス突破記念！！！！！！

能力７～８割解説回！！！！！

※今回は、６人の、能力の殆どを、説明＆解説するだけの回です。

正直言いまして……とても、長いです。

飲み物片手に、流し読みするぐらいの覚悟で、お読み下さい。

カイト「……てな訳で、俺達の能力の殆どをバラセ…って事らしいんだけど……」

紅蓮「何処まで話しゃあいいんだ？」

龍斗「一応、私が前情報・追加情報・新情報を、ある程度まで、纏めておきましたので、
そちらを御覧下さい。」

カイト「流石は龍斗。助かるよ。んじゃ、それを公開しようか…
まずは、俺からか……って長っ！！？」

龍斗「カイト様は、色々御座いますので…これでも、大分減らしたのですよ？」

カイト「あはは～……済まん…いつも苦労掛ける。」

龍斗「いえ、お気になさらず。私が好きでしている事ですから。」

カイト「そうか…。有難う。……んじゃあ、改めて……ホイ。」

八神カイト

男　黒髪黒目　１８０ｃｍ　５８ｋｇ　一人称：俺　イメージｃｖ：石田　彰

肉体年齢：２５歳前後　実年齢：十数億歳　妻・娘共に他界

趣味：皆の幸せを見る事　特技：場所・状況に関係なく眠れる事

別名　「ＺＥＲＯ」　「虚無」

虚無とは、文字通りの意味。虚数空間（ディラックの海）を、自由に操れる事から付けられた。

二つ名　『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』

『宇宙の救世主（そらのメシア）』

『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』

『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』

『無限にして無窮なる旅人』　等。

『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』以外は、能力に合わせてノルニルに名付けられた。

能力は、ありとあらゆる世界の理を、破壊し破滅させる能力。又、五行の能力も十全に使える。

此処で言う世界とは、広義的解釈では、宇宙をも内包する此の世という世界。

狭義的解釈では、人間であれ神であれ何であれ、存在という概念。それは一つで世界とも言える。

故に、あらゆる能力・存在の無効化・封印・消去を選択できる。

色々な異世界・平行世界を永の間、旅し、又、渡らされている純然たる人間。

とある理由で、不老となる。

そして、その世界とは……

『なのは』や『ネギま!』・『Ｆａｔｅ／Ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』・『ゼロの使い魔』等の二次元世界

それに、未だ誰も知らないファンタジー世界や、学園世界等の三次元世界にも、及ぶ。

五行とは、その旅の途中にノルニルと出会い、本部で召喚・契約方法を、自分で調べ、自ら契約した。

しかし、妻と娘を殺したのが、ノルニルの所為だと判り、それ以来常に敵対している。

因みに、殺されたのは、五行と契約する前であり、五行達も名前を未だ知らない。

はやてＬＯＶＥ至上主義。だが、他の異世界にも、嫁や愛人がたくさんいる。

但し、自分から手を出すのは、必ず一つの世界に付き一人だけ。誘われた場合はその限りに非ず。

勿論、長年共にしている、水薙や黄宇とも肉体関係を持っており、はやてに負けじ劣らず、愛している。

『魔法（エレメント）の体現者（マスター）』

始動呪文（キー）：ファースト・イグニッション　※〇＝属性　△＝変化後名（ｅｘ：ガン・ソード・アロー・ドラゴン）

1，七属性の球体を　球→武器→龍　へと変化させ、使役する。

その際の呪文（キー）は、「△△・オブ・マナ　　エレメント△△〇〇」

武器形態変化の際、双剣に出来るのは、「ファースト」のみ。

因みに、球→龍へと飛ばす事も出来るが、五倍程魔力を喰う。

無詠唱でも、タイムラグ無く使役できるが、魔力を三倍程喰う。

つまり、無詠唱で球→龍にした場合、掛け算となり、計十五倍の魔力を消費する。

龍形態にし、離れて使役していても、その属性を使うのに何ら制限はない。

又、龍形態の時、お供の東洋龍がくっついてくるのも「ファースト」のみ。

因みに、必ず一緒に喚ばれる。

2，武器形態以外にも、応用も可。一例として……

焔→陽炎　水→霧（ミスト）　地面→足場完全固定（ランド スペース）

風→翼（ウイング）　雷→神経伝達強化　光→偏光迷彩（ミラージュ）　闇→収納（ブラックホール）　等がある。

又、「ウイング・ホワイト」の様に、龍・鎧以外の形態時の色を変えられるが

魔力を倍消費する。所謂、格好付けの為のみ。因みに、「ウイング」は、通常時は翠色。

3，形態を問わず、呪文（キー）を唱える事で、全身を覆う鎧と化す。

呪文（キー）は、「〇〇　　鎧化（アムド）」　二属性の場合は、「〇〇＆〇〇

鎧化（アムド）」

三～六属性の場合は、「〇〇　〇〇　〇〇　鎧化（アムド）」の様に列挙するだけ。

脱ぐ時の呪文（キー）は、「解放（パージ）」

無詠唱は不可。一属性に限らず、何属性とでも、組み合わせられる。

各属性を身に纏っている時は、その属性は魔力を消費しない。

故に、最強形態時は、鎧分の魔力しか消費しない。

最強形態時は、七属性を同時に纏う。呪文（キー）は、「第一形態（アインス）　完全鎧化（フルアムド）」

4，鎧装着時の魔力量は、凡そ以下の通り。

1属性：100，000，000，000（千億）

2属性：150，000，000，000（1，5倍）

3属性：200，000，000，000（2倍）

4属性：250，000，000，000（2，5倍）

5属性：300，000，000，000（3倍）

6属性：400，000，000，000（4倍）

全属性：５００，０００，０００，０００（５倍）

この魔力量を超えた場合、自動的に鎧は解放（パージ）される。

又、『魔力全解放（フルパワー）』とは、装着時の鎧の魔力総量を放出する事。

『全魔力解放』は、その時のカイトの全魔力を、鎧の総量を越えて放出する事。

因みに、カイトの通常時の総魔力量は、９，０００垓（がい）。

九千垓とは、数字にして　９００，０００，０００，０００，０００，０００，０００，０００。

5，防御能力特化型である為、『盾（シールド）』・『防御障壁（バリア）』といった防御魔法は最も魔力消費の少ない剣（ソード）の１／１０。

又、その強度は、「ファースト」の『盾』一枚で「約束されし勝利の剣（エクスカリバー）」や「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）」と、ほぼ拮抗する。

6，龍形態のそれぞれの名前は

フレイム・焔龍（えんりゅう）　アクア・氷龍（ひょうりゅう）　ランド・地龍（ちりゅう）　ウインド・嵐龍（らんりゅう）

ライトニング・雷龍（らいりゅう）　ライト・光龍　ダーク・闇竜

又、それぞれの攻撃力・防御力の差異は

攻撃力　焔＞闇＞雷＞嵐＞光＞地＞氷　防御力　地＞氷＞光＞嵐＞闇＞雷＞焔

この差異は、鎧装着時にも適応される。

又、通常時の大きさは、凡そ、西洋龍が１０ｍ前後、東洋龍が全長２０ｍ程。

ミニ版は、どちらも大体、掌サイズ。

良く、人の頭や肩に乗りたがる。直接飛んで来たり、腕伝いによじよじと登って来たりする。

始動呪文（キー）：セブンス・イグニッションｏｒセブンス

1，ファーストを、細分化且つ尖鋭化したもの。魔力量はファーストの十倍。

剣形態・龍形態にしかなれない。

2，龍形態の呼び名も、又、以下の通りに変わる。

焔（フレイムファイヤー）↓火炎・燃焼（バーニング）・火山（ボルケーノ）　水（アクア）↓雨（レイン）・氷（アイス）・雪（スノー）

地面（ランド）↓砂（サンド）・岩（ロック）・鉱石（ジュエル）　風（ウインドストームハリケーン）↓嵐（サイクロン）・台風・竜巻　雷（ライトニングサンダー）↓雷撃・麻痺（エレキ）・電光（ボルト）

光（ライト）→輝光（ライト）・閃光（フラッシュ）・発光（ブライト）　闇（ダーク）→暗黒（ダーク）・影（シャドー）・死（デス）

※光（ライト）＆輝光（ライト）と闇（ダーク）＆暗黒（ダーク）は

どちらが呼ばれているのか、自分で理解出来る為

只、「ライト」・「ダーク」と呼んだだけで、ちゃんと呼ばれた方が来る。

大きさは、ファーストと変わらず。人懐っこさはファースト以上。

始動呪文（キー）：セブンス　オール　フュージョン　セカンド・イグニッション

orセカンド・イグニッションのみでも可

セブンスを融合させ、又、七つに戻したもの。

だが、魔力はファーストの一万倍。セブンスの千倍（１０×１０×１０）。

１，基本的な用途は、ファーストと同じ。だが、内包・仕様出来る魔力量が、文字通り桁違い。

当然、攻撃力・防御力・強度等、全てに於いて、ファーストの上位・強化版。

又、ファースト時には使えなかった、細かい武器形態へと変化できる。

ex：ショットガン・スナイパーライフル・手榴弾・シザーズアーム・バズーカ・トンファー

2，4，鎧装着時の魔力量は、凡そ以下の通り。

1属性：1，000，000，000，000（千兆）

2属性：1，500，000，000，000（1，5倍）

3属性：2，000，000，000，000（2倍）

4属性：2，500，000，000，000（2，5倍）

5属性：3，000，000，000，000（3倍）

6属性：4，000，000，000，000（4倍）

全属性：5，000，000，000，000（5倍）

鎧が、自動的に脱げる条件は同じ。

又、全属性装着時の呪文（キー）は「第二形態（ツヴァイス）　完全鎧化（フルアムド）」

3，龍形態のそれぞれの名前は

焔熱（メルト）　氷潔（フリーズ）　大地（ガイア）　空気（エアー）　雷迅（プラズマ）　太陽（サン）　陰月（ルナ）

又、大きさは、ヒマラヤ山脈を一跨ぎ…というか、地球を一周するのに、十歩もいらないぐらい。

ミニ版は、大体1，5m～2m程。人間大。良く、セブンスにワラワラと集(たか)られている。

始動呪文(キー)：セカンド　フル　フュージョン　ファイナル・イグニッション

　　orファイナル・イグニッションのみでも可

『魔法の体現者(エレメント・マスター)』の最終形態。

セカンドを更に融合させて、一つに完成させたもの。色は白銀金(プラチナ)。

又、魔力量はセカンドの一万倍以上。

1，剣・龍・鎧形態にしかなれない。

ファイナルのみ、剣の名前があり、正式名称は『選定(EXカリ)されし勝利(バーン)の剣』

又、ファイナルのみ、剣・龍形態からでしか、鎧は纏えない。

呪文(キー)は

「ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　最終形態(カイザー)

我が命に従え　『選定されし勝利の剣(EXカリバーン)』

皇帝（カイザー）　神化（アムド）」

2，魔力量は　９０，０００，０００，０００，０００，０００，０００（九千京（けい））

3，龍形態の名前は、『皇帝（カイザー）』

大きさは、シリウスを手掴みでぶん投げられる程度。

ミニ版は、大体、胴体が地球と同じぐらい。

※地球とシリウスの差異は、調べて見て下さい。Ｙ○Ｕ　ＴＵＢＥやニ○ニコ動画等にも、あります。

※奥義について

炎系統　紅蓮腕（ぐれんかいな）

「灰燼（かいじん）に帰（き）せ　奥儀　紅蓮腕」

対象を粉々に斬り裂き、纏めて燃やす

「億物悉く灰燼に帰せ　奥義　真・紅蓮腕」

対象を粉々に斬り裂き、一粒ごとに、燃やし尽くす

「兆物（ちょうぶつ）一切灰燼たれ　奥義　紅蓮腕・極（きわめ）」

対象を一瞬で焼滅し、消滅させる

風系統　嵐花蒼葬（らんかそうそう）

「自然の怒り　其の身に受けよ　奥義　嵐花蒼葬」
対象を竜巻が襲い、中に有る花片が、対象を完全に肉片にする迄、斬り裂く

水系統　氷華乱舞（ひょうからんぶ）

「永遠（とわ）なる眠りに誘（いざな）われろ　奥義　氷華乱舞」
対象を氷が覆い、完全に凍り付くと薔薇の氷華が咲き、中に閉じ込めたモノ毎、粉々にする

岩系統　鋼角璧礫（こうかくへきれき）

「万物悉皆破砕（ばんぶつしっかい）せよ　奥義　鋼角璧礫」
対象に向かって、あらゆる鉱物が矢雨の様に降り注ぎ、完全に砕け散らす

地系統　星壊鳴動（せいかいめいどう）

「星の嘆きを篤（とく）と聞け！　奥義　星壊鳴動」
対象が居る場所に依って、効果が異なる。
対象が、星内に居る時は、星内のあらゆる自然を操り、死滅させる
　又、対象が星外…つまり宇宙に居る場合、近くにある星を直接ぶつける

龍斗「これぐらいです。」

他「「「「長っっっっっ！！！！！！！！！！！！！」」」」

カイト「…我ながら……幾ら何でも長過ぎだろう？」

龍斗「ですが、これでも未だ全てではありませんよ？
　カラミティ・エンド　カオス・エンドについては、未だ秘密だそうですし。
　それに、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』　『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』
　についてしか、能力を明かしてませんので。」

他「「「「確かに。」」」」

紅蓮「…にしても、これの他に俺達の分も、五人分あんだろう？」

鋼牙「…僕、疲れちゃった……。」

黄宇「ほら…。おいで…鋼牙。」

鋼牙「…うん……。……お休みぃ～……すぅ……くぅ……ムニャムニャ……。」

カイト「……相変わらず、寝付きが良いな。」

龍斗「…では、この儘、進めます。…今度は私達、五行です。…では、私から。こちらです。」

龍斗
男　碧髪蒼眼　１７５ｃｍ　５０ｋｇ　一人称：私　イメージｃｖ：保志　総一郎

肉体年齢：１９～２３歳　実年齢：数千億歳

趣味：読書・ガーデニング　特技：裁縫

その正体は、四神が一。青龍。司るは木行。東方の守護獣。春の象徴。

元々、五行は只の守護獣程度であったが

カイトと契約した事に依り、四神形態で、神を超える迄になった。

……つまり、四神と契約した事により、カイトが強くなった…訳では無く、その逆。

五行が、カイトと契約する事で、強化された。

『神獣形態』　真っ蒼な体に、蜷局（とぐろ）を巻いた東洋龍。

『四神形態』　形はその儘に、大きさが優に銀河１０個分ぐらいはある。

龍斗達、五人は一応姉弟という事になっている。

だが、四神達は、その実、十秒程度ずつしか歳が離れていない。

実質、黄宇＋四つ子。龍斗は、二番目・長男。

それぞれの呼び方は　カイト様・黄宇姉さん・水薙・紅蓮・鋼牙

常に眼鏡を掛けており、分厚そうな本を抱えている。

その本は、とある能力を発動する際には、必要な物であり、記憶媒体でもある。

それを依代とし、魂を呼び寄せられる。

又、カイトと出会ってからの、異世界の旅路の全てを記録してある。

その膨大な量は龍斗にしか捌けない。

基本的に敬語で話す。黄宇がいない時の、基本的な纏め役。

又、意外と照れ屋な口で、カイトに頭を撫でられたり、抱き締められたりすると、真っ赤になり、すぐ慌てる。

その為、その様を見たそちらの方々からは、良く色んな妄想をされている。…本人知らず。

風や空気といった気体と、草花や木といった植物の、全ての声を聞き、操る事が出来る。補助能力特化型。

龍斗「…これぐらいです。」

紅蓮「…流石に相棒程はなかったが、結構な量があんな…。」

水薙「でも、次からは多少は省略出来るでしょ？」

龍斗「ええ。同じ事を延々書き綴る訳にも、いきませんからね。」

黄宇「…それもそうだな。では、次だ。…おお！鋼牙か！…これだ！！！」

鋼牙

男の子　白髪金眼　１３０ｃｍ　３０ｋｇ　一人称：僕　イメージｃｖ：大谷　育江

肉体年齢：６～９歳　実年齢：数千億歳

趣味：遊ぶこと　特技：癒し（本人知らず）

その正体は、四神が一。白虎。司るは金行。西方の守護獣。秋の象徴。

説明は青龍に同じ。

『神獣形態』　真っ白な体に、所々金色が鏤められている大虎。

『四神形態』　大きさは、銀河５～６個分。

末弟。

それぞれの呼び方は　カイト兄ちゃん・黄宇お姉ちゃん・龍斗兄ちゃん・水薙お姉ちゃん・紅蓮兄ちゃん

甘えん坊。何にでもすぐ興味を持つ。

一番好きな人はカイト。一番好きな事は、カイトに抱き締めて頭を撫でて貰う事。

嫌いな人はカイトの敵。一番嫌な事は、カイトに嫌われる事。カイト御一行のマスコット。

但し、他の四人に比べ、幾分か精神的に幼い為、善悪の判断は、カイトに依る処となってる。

岩石や砂礫等や、ダイヤモンド等の鉱石と話が出来、龍斗達同様に、それらを操れる。速度特化型。

又、ヒヒイロカネやオリハルコンといった伝説上のレアメタルをも、生成できる。

世界によっては、それで財を成した事も多々ある。

黄宇「……鋼牙は本当に可愛いなぁ……。」

鋼牙「スヤスヤ……う～ん……カイト兄ちゃ～ん♪……黄宇お姉ちゃ～ん♪……えへへ……。」

黄宇「……グフッ……我が人生に一片の悔い無し！！！！！」

カイト「取り敢えず落ち着け黄宇。……全く……鋼牙が絡むといつもこうだ…。

普段は、凛として綺麗で格好良いというのに……。」

龍斗「……ハァ……では、次に行きましょう。…こちらです。」

紅蓮

雄　紅髪灼眼　１８８ｃｍ　６３ｋｇ　一人称：俺・俺様　イメージｃｖ：神奈　延年

肉体年齢：１８～２２歳　実年齢：数千億歳

趣味：戦闘　特技：突っ込み（天然）

その正体は、四神が一。朱雀。司るは火行。南方の守護獣。夏の象徴。

説明は青龍に同じ。

『神獣形態』　真っ朱な体に、常に燃え続ける羽を持つ大鳥。

『四神形態』　大きさは、銀河7～8個分。

四番目・次男

それぞれの呼び方は　相棒・姉貴・龍斗・水薙・鋼牙

戦闘好き。馬鹿でも、狂でもないところがミソ。

一見野性的に見えるが、粗野な感じは一切無く、寧ろ人並みの知性を持った野獣の主、といった風情。

こと、戦闘センスに関しては、天才と言っても過言では無い。

名前で解る通り、炎と語らい、操る事が出来る。それは、シリウスレベルの恒星とて例外ではない。

攻撃能力特化型。紙装甲。

とはいっても、ＥＸレベルの攻撃でなければ、傷一つ付かない。純粋な魔力量的な意味で。

紅蓮「……俺は、相変わらず『雄』…なんだな……ＯＴＬ」

カイト「……紅蓮…ドンマイ……。」

龍斗「……では、次です。…どうぞ。」

水薙

女　黒長髪青眼　１６８ｃｍ　だから…ヒ・ミ・ツ♪　一人称：私

イメージｃｖ：水谷　優子

肉体年齢：１６～２１歳　実年齢：数千億歳

趣味：恋話と惚気　特技：家事全般

その正体は、四神が一。玄武。司るは水行。北方の守護獣。冬の象徴。

説明は青龍に同じ。

『神獣形態』　真っ玄な体に、蛇の尾、それに体の彼方此方から、羽が棚引いている大亀。

『四神形態』　大きさは、銀河６～７個分。

三番目・次女

それぞれの呼び方　マスター・黄宇姉・龍斗・紅蓮・鋼牙

ボン・キュッ・ボン。マスター至上主義。

カイトの幸せが自分の幸せ。カイトの喜びが自分の喜び。

カイトの悲しみは自分の悲しみ。カイトの怒りは自分の怒り。

……もう一度言おう。カイト至上主義である。

水薙の惚気話は、止まる処を知らず、興に乗ると、カイトとの夜の営み迄、暴露する。…カイト南無。

水を筆頭に、あらゆる液体と心を通じ合わせ、自在に操れる。防御・回復特化型。

龍斗「…という感じです。」

水薙「…何か、私の紹介…微妙に酷くない？」

紅蓮「…あんまり変わんねぇだろ…。…俺達と。」

龍斗「……では、最後です。……黄宇姉さん……そろそろ、戻って来て下さい。」

黄宇「鋼牙は可愛いなぁ……ん？…ああ、もう私の番か。

……しかし、鋼牙の可愛い顔を見れないとは……。」

カイト「……はぁ……あ～…龍斗？」

龍斗「……何でしょうか？カイト様。」

カイト「あ～…うん。…気にしないで、やっちゃえｂ」

龍斗「……ハイ…解りました…。……では…どうぞ…。」

カイト・水薙・紅蓮（（（…今度、龍斗に優しくしてあげよう。））））

黄宇

女性　黄長髪金眼　１７８ｃｍ　……斬る！　一人称：私　イメージｃｖ：清水　香里

肉体年齢：２０～２４歳　実年齢：約八千億歳

趣味：武を志す者を鍛える事　特技：料理（衛宮士郎と同レベル）

その正体は、五行が一。黄龍。司るは土行。中央の守護獣。

説明は青龍に同じ。

※黄龍のみ、召喚条件がある。
1，四神を喚び出した後、改めて黄龍を喚ぶ。
2，五行同時に喚ぶ。但し、この場合、消費魔力は十倍必要。

『神獣形態』　金色の体に、蜷局（とぐろ）を巻いた東洋龍。しかし、優に青龍の五倍はある。

『五行形態』　大きさは、銀河３０個分。

一番目・長女

それぞれの呼び方　我が主ｏｒ主殿・龍斗・水薙・紅蓮・鋼牙

水薙を更に、一周り大きく、且つ引き締めた体型。性格は、烈火（シグナ）の将（ム）とほぼ同じ。

それに、億単位での年数分の経験が加わり、達観……というより、冷静になって落ち着いた感じ。

武を志し、より高みを目指す者には、率先して手伝い、成長していく様を見守るのが唯一の楽しみ。

但し、バトルジャンキーではない。

大地の声を聞ける。…つまり、星の声を聞け、星の力を操れる。

主であるカイトは言うに及ばず、弟妹達も当然愛している。特に鋼牙を溺愛している。

龍斗「……以上です。」

カイト「…龍斗、お疲れ様。…本当に。」

龍斗「……有難う御座います。…カイト様。」

紅蓮「しかし、ホントに姉貴でけぇな…。」

水薙「全くね…。何？銀河３０個分って…。」

黄宇「鋼牙は本当に可愛いなぁ……。」

四人「「「「これが……ねぇ？」」」」

鋼牙「う～～ん……むにゃ？……もう終わったの？カイト兄ちゃん。」

カイト「ああ。もう終わりだよ、鋼牙。さあ、もう起きよ？」

鋼牙「うん…。…ふわぁ～～～っ……あ、黄宇お姉ちゃん。
膝枕アリガト♪すっごく気持ち良かった♪」

黄宇「ああ…。どういたしまして。…鋼牙は本当に可愛いなぁ…」
ナデナデ

鋼牙「♪～えへへ～～～♪♪♪」

カイト「ハァ……さて…と。じゃあ、これでやっと終わりだな？」

龍斗「はい。」

カイト「では、又、世界を救う旅へと、誘われるとするか。」

五行「はい。我等は何時如何なる時でも、我等が主の御側に居ります。」

番外・參（後書き）

如何でしたでしょうか？

これでも、未だ公開していない情報がたくさんあります。

五行の更なる力。

何故、黄宇とシグナムは似ているのか？

カイトが不老となった原因とは？　……ｅｔｃ．

何れ全てを明かす時迄、お楽しみにして頂ければ、幸いです。

では、今話も読んで頂き、有難う御座いました。

悔恨～恐怖～（前書き）

現時刻（１９：５０）
ＰＶ：２２７，２５５アクセス　ユニーク：２５，７３２人
皆様いつも有難う御座います。

さて…。今回は、ある人に悪役になって貰いました。
正直、読んでいて少し辛いかも知れません。
では、皆様。今話はお覚悟してお読み下さい。

悔恨～恐怖～

ｓｉｄｅ：三人称

此処は機動六課訓練所。今日は新人達の、訓練成果を確かめる為にそれぞれチームに分かれて、模擬戦をするのである。因みに会場は廃墟である。壊し放題だ。

「それじゃあ、二人共、準備はいい？」

「「はい！！！」」

「うん、いい返事だ。……さあ、どっからでも掛かってきて！」

その戦いを眺めるフォワード陣。

フェイト・シグナム・ヴィータ・エリオ・キャロの五人であった。

しかし、彼女達の中に、不安そうにしている者が一人……ヴィータである。

彼女は、とある日のなのはとの会話を思い出していた。

「…なぁ、なのは…。やっぱりちゃんと話した方がいいと、アタシ

は思うんだ……。」

「…もう…心配性だなぁ…ヴィータちゃんは…。

大丈夫だよ。ティアナ達なら、ちゃんと解ってくれてる。

…カイトさんは、私達の訓練風景とか見ていないから、心配してそう言ってくれてるだけだって。」

「……そうかな…？…あいつの言う事にはいつも、ちゃんと大事な意味があった。

…今回もそうだと思うんだ。…ティアナの『フレンドリーファイヤー』の事も当たってた。

……何か、とても嫌な予感がするんだ。」

「……ヴィータちゃんの、心配する気持ちも解るけど……でも、私はあの子達を信じてるから。」

「…なのは……。」

（……大丈夫…だよな？…本当に大丈夫なんだよな？……なのは……。）

どうしても、不安を拭えない儘、訓練は始まってしまった。

ｓｉｄｅ：ティアナ

……今のところは順調だ…。…スバルが怒られていたけど……
でも、これでいい。

スバルが何とか、なのは隊長の攻撃を躱してくれてるから、こっちは未だ気付かれていない筈…！

よし！ウイングロードもバッチリ！！これで……いける！！！

「やあああああっっっ！！！！！」　　ガシィッ！

…決まった……と、思った。

でも……

「……二人共……どうしちゃったのかな？……模擬戦は…喧嘩じゃ…ないんだよ？

ねえ……ちゃんと、教えられた通りにやろうよ……

練習だけ真面目にやって……本番で…こんな事するんじゃ……
練習の意味…無いじゃない

私の言う事…私の訓練……そんなに…間違ってるかなぁ……

？」

「くっ…！……私は！！！もう！誰も傷付けたくないから！！！」

そう……もう、誰にも傷付いて欲しく無い。

「失敗したくないから！！！！」

「……ティア……。」

そう……兄さんは…ランスターは失敗なんかじゃない…！！

「だから！！！強くなりたいんです！！！！！」

そう……強くならなきゃいけない……。

「……少し…頭、冷やそうか…？　クロスファイヤー……」

だから！！！！！

「うわあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！ファントムブレイ…」「…シュート。」

「ティアあああああ！！！！！！」

なにか……遠くで……スバルが叫んでる……。

よく…わからない……。なのは隊長もなにかしてる……。

「……よく、見ていなさい。」

なにか…飛んで来た……。

そう思った直後……私は意識を失った……

と、思ったその十数秒後程で、私は目を覚ました。

……よく解らなかった。

なのは隊長の攻撃を喰らって、気絶したと思ったら
全回復して、目を覚ましていたのだから。

……でも……それは……

恐らく……間違いなく……

今、私の目の前にいる、あの人（ZEROさん）がしたのだろう。

だって、他に考えられなかった。

こんな事が出来る人は……私は他に知らないのだから。

ｓｉｄｅ：なのは

……信じられなかった…。

……理解できなかった…。

……考えたく…なかった…。

きっと、解ってくれてると思ってた。

…何も言わなくても、思いは一つだと…。

確かに、朝練とか少しやり過ぎかな?とは思ってた。

…でも、ちゃんと訓練には真面目に出てくれてたし、ノルマもしっかりクリアしてくれてた。

だから、ちゃんと私の思いは伝わってるんだと、信じていた。

だから……今が…信じられなかった……。

……そう…信じられなかった……。

「…やはりな。…今の貴様等では、こうなる以外に他は無い。

…余りにも、愚かしく…余りにも、分かり易過ぎて……

…正直、反吐が出る。」

今、私の、目の前に、あの人が、居るのが、信じられなかった……。

side：カイト

……言わんこっちゃ無い。

…折角、人が忠告してやったというのに……あの阿呆共、完全に無視しやがって……

…こりゃ、少しばかり、あいつらにオシオキが必要だな…。

丁度、今、ティアナが落とされたか。……では、介入（おしおき）するとしよう。

「…やはりな。…今の貴様等では、こうなる以外に他は無い。

…余りにも、愚かしく…余りにも、分かり易過ぎて……

…正直、反吐が出る。」

「……カイトさん…いえ…今はＺＥＲＯさん…でしたか……。

何の御用ですか？…邪魔をしないで貰えます？」

「却下する。…取り敢えず、起きろティアナ。」

「う…う～ん……え？…あ、あれ？…ここは……！ＺＥＲＯさん？！」

「…起きたか。…まず…お前等は邪魔だ。」

「「え？うわっ！？」」

よし。取り敢えずあいつらは訓練室の外に出した。…後は……

「……二人を何処へやったんですか？」

「お前には関係ないだろう？…部下を撃墜する様な、人でなしの隊長殿には…な。」

「……それこそ、あなたには関係ありません。…一民間人が口を挟まないでください。

…不法侵入罪で、逮捕しますよ？」

「ほう！！！今度は俺を犯罪者に仕立て上げるか！！！流石は管理局！！！！！

いやはや、素晴らしい職場だな！！！！！

自分達の言う事を聞かない部下は撃ち落とす！！！！！

自分達の邪魔をする者は誰であろうとも罪を作り逮捕する！！！！！

そして！！！！！！！！！！！……随わない場合は…力尽くで…か？」

「……何の御用ですか？」

「フッ……なぁに……ちょっと、おしおきに来ただけだ。

…年長者の忠告に全く耳を貸さず

自分達の全てが正しいと妄信する貴様等

管理局（ロクデナシ）の傀儡共を…な……。」

「……そうですか…。…つまり、あなたは、完全に管理局と敵対すると言うんですね？」

「…さて。…それを決めるのは、他ならぬお前達だよ…。」

「……解りました。…みんな、聞いたよね？…ＺＥＲＯさんは、私達の敵なんだって。」

“な！？”「ま、待って！！なのは！！！落ち着いて！！！はやてのお兄さんなんだよ！！！！」

「…フェイトちゃん？…私は冷静だよ？…みんなこそ、どうしちゃったの？

…関係無い一般人が、勝手に入り込んでるんだよ？

…しかも、私達と戦うって言ってるのに……何でみんな、庇うの？」

「うっ…そう言われりゃ…そうだが…でも、あのカイトだぞ？！」

「そうだ！高町！！幾ら何でも早計過ぎる！！？」

「…本当にどうしちゃったの？ヴィータちゃん…シグナムさん…。

…あの人は『ＺＥＲＯさん』だよ？

…私達に……管理局に協力しないって言ってる悪い人なんだよ？」

“な！？！？”「なのは！！！ホントにどうしちゃったの！！！！！落ち着いてよ！！！！！」

「……もういいよ。…みんなが戦いたくないっていうなら……私一人で捕まえる。」

「……ほう…。大きく出たな…エース・オブ・エース様？

『非殺傷設定』等という、まやかしを金科玉条にし、

あまつさえ、能力を制限している貴様風情が……たった一人で俺と相対する…？」

「……それが、何か？」

「フッ……ハッハッハッハ……」

アーーーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ……

……

図に乗るなよ小娘」

“～～～～～っっっっっっっっっ……！！！！！！！！！！！！！！”

「貴様等如き矮小な塵芥がこの俺と戦う？対等？相対する？…それが何か？…だと……？」

“ぁ……（パクパク）ぁ……”

「舐めるのも大概にしろよ？この宇宙ごと貴様等を消し去るぐらい何の苦労も蟠りも無いのだぞ？」

“っ……っ……っ……”

「いつまでそうやって喘いでいる？そら…俺を捕まえるのだろう？早く立って捕まえてみろ…

俺に攻撃して見せろよ…なぁ……管理局（デキソコナイ）？何をしている？早くしろ。」

“……”（↑完全に声が出なくなっている）

「何だ？この程度でもう動けないのか？その様でよくもまあ俺と敵対する等と大言壮語を吐けたもんだ

だが、貴様等から言って来た事だ。それなりの覚悟はあるんだろう？

俺に殺される覚悟が。

……妹（はやて）の目の前で兄（カイト）に友を虐殺させる覚悟が。

ちゃ～んと……有るんだろう？」

“ガッ！！！……ぁ……ぁ……ぁ……ぁ……”

「…本当に残念だよ。愛しい妹達と敵対しなければいけないとは。

それもこれも全て貴様等が俺を敵性認定した所為だな。

……ならば、敵らしく……

今殺してお

く

か」

“ガクガクブルブルガクガクブルブル”

「……フン…興醒めだ…。次に会うのは戦場だ。相見えた時、貴様等の命は確実に消え去ると思え。」

ｓｉｄｅ：なのは

恐かった。本当に怖かった。只それしか出て来なかった。

…

あの人が消えてからも、暫くは機動六課は機能を停止していた。

それ程だったのだ。余りにも…余りにも恐ろし過ぎた。

そして、ようやっと自分の意識が…心が戻って来てからやっと理解

出来た。

私は取り返しの付かない事をしてしまったんだと。

もう…はやてちゃんとあの人が笑い合う姿を見る事はもう出来ないのだと。

今、ようやっと理解出来た。

でも……理解出来ても…もう遅い……。

何もかも遅過ぎた。

何で忠告を聞かなかったんだろう?何であんなに意固地になってたんだろう?

何でもっとよく考えなかったんだろう?

何で…何で…何で何で何で何で……何で!!!!!!!!

そんな繰り言ばかりが頭を過ぎる…。

はやてちゃん……ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい……

「はやてちゃん……ゴメンナサイ……ゴメンナサイ……

…あ……ああ……あああああ……

ああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

その日……

私は……

一日中……

哭き続けた……。

悔恨～恐怖～（後書き）

……如何でしたでしょうか？

予め言っておきますと、彼女達とはちゃんと和解させます。必ず。

ですが、今は、相容れる事は有りません。

しかし、カイトがはやての味方である事は、絶対に揺るぎません。

それから、私はなのはは、寧ろ好きな方です。

決して、嫌いでも、アンチでも有りません。

話中、管理局側の悪役をしてくれそうなのが

私の小説では、彼女しか居なかったというだけです。

カイト自身も、彼女の事は、個人的には好ましいと思っています。

休憩～食堂～（前書き）

現時刻（１９：１０）
ＰＶ：２４１，８１３アクセス　ユニーク：２６，８５３人
皆様、いつも有難う御座います。

さて。今回は、ＥＸＡＭ様に、展開を当てられてしまいましたが……

それでも宜しければ……ｗ

どうぞ。今話も拙筆をお楽しみ下さい。

休憩～食堂～

ｓｉｄｅ：なのは

あの後…。カイト（ZERO）さんと、決別してしまった、あの後。

私は一日中、泣き続けた。

…そして、翌日、その儘…泣き腫らした儘、はやてちゃんに、事の顛末を全て話し、謝った。

はやてちゃんは、許してくれたけど……私達が部屋を出た後、廊下まで泣き声が響いていた……。

そして、顔を一応洗ってから、みんなの所へ行き、みんなに謝って回った。

その時、みんなから、励ましの言葉を貰った。

シグナムさん「…過ぎた事を悔やんでも仕方あるまい。これから先、どうするかが問題だ。」

ヴィータちゃん「…なのはに強く薦めなかったアタシにも責任がある。

……だから、あんまり一人で抱え込むな。」

アインさん「それはもういい。だが、カイトが敵に回ってしまったというのは、危険過ぎる。

……しかし、主はやて至上主義の男が…何故だ？

我々と唐突に、敵対しなければいけない、理由とは一体……？」

フェイトちゃん「…大丈夫だよ、なのは。きっと、まだ、話し合えるチャンスがある筈。

だから、諦めないで…なのは。」

そして……ティアナとも、その日、一日掛けてゆっくり話し合った。

その後、みんなで私が大怪我した時の映像を見た。……みんな、ちゃんと解ってくれた。

……やっぱり、カイトさんの言う通り、みんなに話してからにすれば……

…あんな事には…ならなかった……。……いけない。又、同じ事を考えちゃう。

そういえば、後で聞いた事だけど、私がみんなと話していた日、大量のガジェットが現れたそうだ。

何でも、各地に２００～３００機ずつ現れて、全部で１０００～１

５００機程居たそうだ。

でも、その数瞬後、全部纏めて消えたらしく…

機械の故障か、何かのパフォーマンスじゃないか…と思われているらしい。

……違うと思う。きっと、カイトさん達が、一撃で全部壊してくれたんだ。

…みんな同じ意見らしい。……カイトさん……。

私に何が出来るんだろう?…優しいみんなに…。

……そして……裏切らせてしまった…カイトさんに……。

私に出来る事は何だろうか?……今の私には、一つしか無い。

ティアナ達を鍛える事。

決して、間違えず…。

決して、過たず…。

それぐらいしか…私には出来ない。

でも、やり過ぎて、この前倒れた時は、みんなに泣かれて怒られて…散々だったけど…。

それからは、私も決して無理はしないようにした。

……私の贖罪がいつ終わるか…判らないけど……

いつか…許してくれますか……カイトさん……。

ｓｉｄｅ：三人称

只今、冥王（なのは）の地獄巡り（とっくん）中。……新人達、南無。

「よし！じゃあ、今日の訓練は終わり！！」

「「「「ありがとうございました！！！」」」」

「それで…実は今日の模擬戦が、第二段階の試験だったんだけど…。」

「「「「ええ！？」」」」

「でね？…その結果なんだけど……。」

「合格♪」

「「早っ！」」

「てか、アタシらがあれだけ扱いて、合格出来なかったら、大変な事になってたからな。」

「「あ、あはは…。」」

「デバイスも一段階解除するから、後でシャーリーの所に行ってね。」

「明日からは、セカンドモードを基本にして、訓練すっからな～。」

「「「「…明日？」」」」

「そうだ。今日の訓練はこれで終わりだ。」

「明日からは、又、更に厳しい訓練になるから、今日はお休みだよ♪」

「うん。みんな、着替えて街にでも、遊びに行っておいで？」

「「「「やったーーー！！！！！」」」」

そして、ティアナ&スバルは、ヴァイスに借りたバイクで。

エリオ&キャロは、過保護（フェイト）な母親となのはに、見送られ、仲良くお手々繋いで。

街に繰り出していった。

一方、隊長陣。

昼食を採り、談笑しながら、テレビを見ていた。

しかも、管理局でも指折りな、有名処且つ美人達が、一塊になっているその空間は、一種異様だった。

なのは・フェイト・はやて・シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ・アイン・ツヴァイ・アリシア・プレシア　の１１人である。

……色々と、注目を浴びていたが、殆ど気付かれていなかった。

「…しかし、今日もニュースに碌なものが無いな…。」

「…そうね。……あら？…レジアス中将だわ…。」

相変わらずの強行路線で行っているようだ。

「…本当に、この人同じ様な事しか、言わないわね…。」

「…まぁまぁ、アリシア姉さん。…でも、流石にちょっと強引過ぎないかな？」

「レジアス中将は、古くからの武闘派だからな…。」

「武闘派っていうより、あれじゃあヤーサンよ…。」

アリシアのあんまりな台詞に、思わず腹を抱える皆であった。

「…はー……笑っちゃった……あれ？ミゼット提督だ。」

「え！ミゼット婆ちゃん！♪」

ヴィータが嬉しそうな声を上げ、みんなでテレビを覗くと、レジアスの後ろに三人の老人が座っていた。

本局幕議長　ミゼット＝クローベル

武装隊栄誉元帥　ラルゴ＝キール

法務顧問相談役　レオーネ＝フィルス

…そう。…かの伝説の三提督である。

「あ…キール元帥とフィルス相談役も、御一緒なんだ。」

「…伝説の三提督、揃い踏み…やな。」

「もうそろそろ、いいお年なのにねぇ…。」

…あなたが言いますか。プレシア（母）さん…。皆の心がシンクロした。…誰も口にはしなかったが。

「にしても……こうして見てると、普通の老人会だな♪」

「もう…。ダメだよ?ヴィータ。とても偉大な方達なんだから。」

「うん。…管理局の黎明期から、今の形になるまで、整えられた功労者さん達…だからね。」

「でも、アタシは好きだぞ♪この婆ちゃん達♪」

そんなほんわかムードな時であった。

「おばちゃん、俺オムライスね!あ、グリーンピースは抜いてよ!!!」

そんな声が聞こえ、みんな思わず固まった。……でも、聞こえなかった振りをした。

……思いっ切り振り向いて、硬直した一人を除いて。

だって、そうだろう？真逆、昨日の今日で……ハハハ……そんな馬鹿な……ねぇ？

でも、そんな幻想（ユメ）も儚く消えた。

「ほれ、お前等も何か好きなの頼めよ。」

「では、私は…焼鮭定食で。」

「じゃあ、私はボンゴレで♪」

「俺様は、ステーキでな！」

「ふむ…それなら、私は彩御膳（いろどり）を頼む。…鋼牙は決まったか？」

……何で、そんな物迄、あるんだ？…恐るべし、管理局の食堂。

「う～んと…え～と……僕、お子様ランチ！！！」

「いや、流石に無いだろ…。」

「有るよ？」

カ・紅・龍・水・黄「有るの？！」

「今、決めた。」

どうやら、鋼牙が食べたいと、言った瞬間決めたらしい。……鋼牙……恐ろしい子…！！

「わ～い♪」

「…鋼牙は可愛いなぁ……。」

カ・紅・龍・水「結局オチはそれかい」

……流石に、此処まで騒がれると、無かった事にするのは、無理があった。

皆、諦めて、声のする方に首を向けた。

……矢張り、カイト御一行が居た。…しかも、暢気に和気藹々と御飯を食べている。

……まるで、仲睦まじい兄妹…いや、家族の様であった。

…少し、話し掛けるのを躊躇ったが……好奇心(ゆうき)を振り絞って声を掛けてみた。

「……あの～…カイト兄?…此処で何してるん?」

「ん?御飯喰ってるんだけど?」

「……せやのうて……何で昨日の今日で、此処におんねん!!!」

「?だから、腹減ったからだけど?」

「……やのうてぇ……ハァ…もうええわ……。」

「?それより、はやてもこっち来る?」

「…いや……うん……そうやね…。御一緒させて貰うわ。みんなもええやろ?」

そう言って、なのはを態とチラ見しながら、皆に同意を取るはやて。

理由を理解した面々は、多少戸惑いながらも、二つ返事で諒承した。

……凄い面子である。

さっきの面々、１１人に加え、カイト・五行の６人…計１７人である。

てか、テーブル幾つ使うねん。……周りも、何か得体の知れない不穏な空気に、相当気圧されている。

「あの…それでな？…カイト兄。」

「うん♪美味し♪」

「ええ。確かにこれは悪くありませんね。」

「……ガツガツ。」

「紅蓮、もう少し落ち着いて食べろ。…鋼牙、口の周りが汚れているぞ？」　ふきふき

「…ん……ありがとう！黄宇お姉ちゃん！！」

「ああ。……鋼牙は本当に可愛いなぁ……。」

「…黄宇……お前、最近それしか言わないな……。

って、中に緑の悪魔（グリーンピース）が入っていやがるうううう!?!?!?

お～の～れ～……計ったな!!!しゃ……食堂のおばちゃんん!!!!!!」

食堂のおばちゃん「…フッ…。君がいけないのだよ…好き嫌いするから……。」

“……（何だろう?この混沌（カオス））”「あ、あの～…カイト兄?」

「ん?何?はやて。（クイクイ）…うん?何、鋼牙?これ食べたいの?…はい、どうぞ。」

「…モグモグ……ありがとう!カイト兄ちゃん!!!」

「どういたしまして。…もう一回食べる?」

「うん♪!!!……もっきゅもっきゅ……。」

「「……鋼牙は本当に可愛いなぁ……。」」

紅・龍・水「「「ハモんな、そこ」」」

「…お前等、ホントにツッコミ、容赦無くなって来たよね、最近。

…てか、龍斗……口調…。」

「お気になさらず。やる以上は、真面目に致します。」

「……俺が、育て方を間違えたのだろうか…？」

「……我々は皆、カイト様より年上ですが……。」

「あの！！！カイト兄！！！！！」

6人「うん？」

「うっ…！！」

突然の大きな声に、思わず反応し、はやてを見る6人。その威圧感に思わず怯むはやてであった。

「あ、あのな？カイト兄。ちょっと話があんねんけど……。」

「話？」

「うん。…ほら、なのはちゃん。」「う、うん…。」

「？？？」　どうやら、本当に何の用か、判っていない様である。

「……あ、あの……この前はごめんなさい！！！！！」

「……は？いや、唐突に謝られても、何の事か判らないし、困るんだけど？」

「あ、あの！ですから、この前の事です！模擬戦の時の！！」

「……ああ…あれか。…別に、お前さんにゃ関係ない話しだろう？なのは。」

“……え？”「ど、どういう事ですか？」

そのカイトの言葉に意味が解らず、思わず首を傾げ、困惑する一行。

「……ハァ……。…あのな？あの時、俺にメンチ切ったのは、管理局だ。お前じゃない。

あの時、お前は　『管理局の敵になるのか？』　と…そう聞いたろう？

つまり、俺は管理局と敵対しているのであって、なのは…お前個人と敵対している訳じゃない。

故に、お前に謝られる筋合いは全く無い。単に妹の親友というだけだ。

…それとも、何だ？お前は何か、俺に謝らなくちゃいけない事でもしたのか？

………ハ！真逆…！！！！！」

「え？！な、何ですか！？」

カイトの剣幕に思わず怯えるなのは。

「真逆、俺より先にはやてを寝取ったのか！！！…ゴフゥッ………。」

「な、な、何、言うとるんや！！／／／アホ兄貴！！！／／／／／／／／／」

「…ゴフゥ。ナイスパンチだ、我が妹よΣd…違うならいいんだ。はやてとイチャイチャしていいのは、俺だけだからな！！！！」

「うぅぅ～～～………／／／／／／／／／／／／／／／」

「………ん、ゴホン！…にしても、それは幾ら何でもないだろう？」

「問題無い。『屁理屈も理屈』って言ってな。間違っていなければいいんだよ。」

「しかしだな……。」

「はいはい。この話はもうこれでお終い。…それとも何だ?今、此処であの時の続きでもするか?」

そのカイトの言葉に反応して、殺気を浴びせる従者達。

“…!!!い、いえ!!!結構です!!!!!”

当然即答する皆々。収まる殺気。……周りの被害の方が甚大であった。

「なら、そういう事だ。…所ではやて、ちょっとこっち。」

「なんや、今一納得出来へんけど……何や?カイト兄。」

「まぁ、いいからいいから。…ちょっとこっち。」

「?まぁ、ええわ。……(スタスタ)来たで?カイト兄…」…ニヤッ「…ニヤッて…わきゃっ!」

「はやてゲットだぜ！！！」「ゲットちゃうわ／／／何すんねん！！／／／」

「ふっふっふ………ん〜…は〜やて〜♪」スリスリ「わわわ／／／／／／／／／／／」

“又、始まった………ｏｒｚ”

「は〜やて〜♪♪ん〜…柔らかいし、温かい…それに良い匂い♪♪♪」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

完全に、カイトの為すが儘になっている、妹(はやて)であった。

「ん〜…はやては本当に可愛いな………。」

「ぅぅ〜〜〜…／／／あ、あんまりそういうこと言わんといて／／／／／／／／」

「可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い。」

「絶っっっ対言うと思ったわ／／／／／／／／」

「だって、本当に可愛いんだから、しょうがないだろ？」

「せやから…そういうことをぉ…／／／／／／／／／」

「へ？／／／な、何が？／／／／／／」

「………もうだめ。今迄何とか堪えて来たけど、もうだめ。」

「はやての部屋に行こう？極上のデザート食べたい。」

“ブーーーッ！！！”

思わず吹き出す、心は乙女な皆々。………てか、乙女が吹き出すなよな………。

「へ？え？な？ちょっ！ちょっと、待って！？／／／／／／／／／／／／／／／」

「無理。もう待てない。じゃ、行こうか？はやて。」

「せ、せやから、待ってって／／／／／／／／／わたしまだ心の準備が／／／／／／／／／／／／／／／」

そんな、危うく、お子様厳禁な……

ノクターン行きになりそうな、この小説（セカイ）と、はやてを救世主（アラート）が救った。

「ほ、ほら／／／／／／カイト兄／／／／／／／緊急事態やし…な？／／／／／／／／」

「……ちっ。エリオとキャロには、後でおしおきだな……。」

何やら物騒な事を呟くカイトを、皆戦々恐々としながらも無視し、通信を開いた。

物語も愈愈（いよいよ）、中盤に差し掛かる。

保護した児童がもたらした情報とは……？

新たな予言（うらない）とは……？

そして……

蠢き出した……新たな敵とは……。

未だ……誰も知る由もなかった……。

まだテレビが点いていた。

『本日は晴れのち曇り。明日以降は雨が降り易く、不安定な天気です。』

……誰も聞いていなかった。

だが…聞いていれば、何か変わっていたのだろうか……？

……それは、神ならぬ身には、到底判る筈も無かった。

休憩～食堂～（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、書いててちょっと、危なかったです；；；；

……にしても……真逆、展開を読まれるとは……

ＥＸＡＭ……恐ろしい子…！！！

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

戦闘～機人～（前書き）

現時刻（０１：３５）
ＰＶ：２５７，６２４アクセス　ユニーク：２８，４２８人
皆様、毎度有難う御座います。

そして、早くも、２５０，０００アクセス突破致しました！！！！！

何と、１００万アクセスの１／４です！！！！！

このままのペースだと、後、二月程で、七桁行きます！！！！！

ビックリです！！！！！！！！！

本当に、心底より感謝致して居ります！！！！！！！！！！

では。今話も拙筆をお楽しみ下さい。

戦闘～機人～

ｓｉｄｅ：カイト

「こちら、ライトニング０３！緊急事態に付き、現場状況を報告します！

サードアベニューＦ２３の路地裏で

レリックが、入っていると思われるケースと、小さな女の子を発見しました！」

「女の子は意識不明です！」

「指示をお願いします！」

「ティアナ　スバル…悪いけど、お休みは一旦中断。いい？」

「はい！！」「問題ありません！」

…矢張り、ヴィヴィオが保護されるか…。……しかし、腑に落ちん。

幾ら、世界の修正が働いているとは言え、一体何処から……

……いや、誰から逃げ出して来たというのだ…？

……まぁいい。後で、ゆっくり聞けばいいだけだ。取り敢えず、今は……

「良し！全員配置に着いてな。迅速に安全に…絶対に、女の子もレリックも守って見せる！！！
みんな頼むな！！！」
“了解！！！！！”

……うむ。良い返事だな、みんな。はやても、ちゃんと指揮官をやれている。
…ちゃんと、成長している様で、何よりだ。
「カイト兄？ちょっと、頼みたい事が有るんやけど…。」
「…俺は今回は手を出さないよ…はやて。」
「な！何でや！！？」
……おいおい。感心した途端、これかよ。
「いや、そりゃそうだろ。…俺は管理局の敵だぞ？
それが、管理局と一緒に行動してたら可笑しいだろう？」
「い、いや、そりゃそうやけど…でも！今は、そんな事言ってる場

合と違うで!?カイト兄!!」

「…機動六課部隊長　八神はやて二等陸佐。お前はそれでも、管理局の指揮官か？

敵（ZERO）と共に居る事を、跳梁跋扈する上層部（ゴミクズ）に、何と言い訳をすると言うのだ？

……先程の屁理屈にすら、難色を示したお前達が。」

「うっ…!!……せ、せやけど…！今は、人命が掛かっとるんやし!!」

「何時如何なる時であろうとも、命が失われる可能性は常に有る。

益してや、明らかに危険な臭いが、プンプンする所に部下をやるのだ。

それぐらいの覚悟は、お前とてしているだろう？」

「うう～……せやけど……せやけど……!!!」

「ハァ～……俺も本当に甘いな…。

……一回だけだ。本当に危険な時だけ。その一回だけ、助けてやる。

……後は、自分達で何とかしろ。……余り、俺に頼るな。…その甘えは何れ、身を滅ぼすぞ。」

「……解った。それだけでもええ。ほな、その時は頼むで…カイト兄。」

「…了解した。

『宇宙(そらの)の救世主(メシア)』の名に懸けて。必ず助けると約束しよう。」

……よし。これでいい。…では、二人共頼んだぞ。

……果てさて。鬼が出るか蛇が出るか。

……まぁ、邪神や外なる神々（アウターゴッズ）辺りが、出て来てくれた方が俺としては楽しめるんだがなぁ……。

ｓｉｄｅ：三人称

どうやら、皆、現場に着いた様だ。…しかし、其処には、カイトの姿は無い。

「…俺は、機動六課（ここ）に居る。その代わり、俺の従者を一人付けといてやる。」

そう言い、ソファーに凭れた。…だが、その従者の姿も見えない。どうやら、隠れている様だ。

ヘリが今、女の子（ヴィヴィオ）を乗せ、飛んで行った。

……どうやら、地下水路に有るレリックも、序でに頂いて行く様

だ。

……そして、現状。

ｃａｓｅ１　ヴィヴィオ・シャマル・ヴァイス

輸送中。ヴィヴィオ、疲労により睡眠中。シャマル、診断＆治療中。

ｃａｓｅ２　なのは・フェイト・はやて・アイン・シグナム

空は、粗方片付いている。流石、魔王御一行。アインはユニゾン中。

ｃａｓｅ３　新人達＆ギンガ・ヴィータ・ツヴァイ

合流後、地下水路も大分、片付いた。レリックも回収完了。

……皆、順調だった。

…だが、それぞれの帰還中に、出来事は起こった。

「よし！じゃあ、それ持ってとっとと帰るぞ！」《帰るです！》

「「「「「はい！！！」」」」」

チンク「…それは、困るな。」

ウェンディ「あたしらもそれが、必要なんッス。」

セイン「そういう訳で、こっちに貰えないかな？」

ノーヴェ「まぁ、嫌だって言っても、力尽くで貰うけどな。」

“！？！？！？”

青いボディコンスーツに、身を包んだ恥女達が、現れた！

「「「「誰が恥女だ！！！！！」」」」

“？？？”

「「「「いや、気にしないでくれ。」」」」

“う、うん…。”

「兎に角！！…そういう訳で、貰うぞ。そのレリックを。」

「ハン！何処の誰かは知らねえけど、やって堪るかよ！…行くぞ、お前等！！」

“はい！”

…地下で戦闘が始まった。

そして、空中でも又……

「ヴィータちゃん!?どうしたの?!」

（なのはか!敵襲だ!青いスーツを着込んだ奴等が四人だ!!気を付けろ!!）

「了解や!ヴィータも気を付けな!」

（ああ！！！）

「…でも、青いスーツ…？スバル達みたいなの…かな？」

トーレ「…そうか。妹達は奴等に出会えたか。」

セッテ「では、私達もあなた達の、相手をさせて頂きます。」

ディード「余り、早く潰れないで下さいね。」

オットー「……覚悟…。」

……何故か、本来ならば未だ、この時点では、ロールアウトしていない筈の、彼女達まで居た。

……そして……

クアットロ「ディエチちゃん…準備は良い？」

ディエチ「……問題無い。」

とある廃墟の一角に潜み、長距離砲でナニカを狙っていた。

「…本当に良いの？あれ落としちゃっても…。」

「……しょうがないでしょ？…それに、あいつが言うには…

これぐらいじゃ、死なないそうよ…。だから、気にしないで撃っちゃって。」

「……解った。」

……そして……彼女は、躊躇いながらも……そのヘリに向けて…撃った。

《!?高熱源体接近だと!!?……!!!!ヘリが危ない!!!!》

「な、何やて!!ヴァイス陸曹!!!聞こえとるか!!!!緊急回避や!!!!!!」

「くっ…!!!!まずい!?今からじゃ、間に合わない!!!!」

そして……皆の見ている前で……

ヘリに……砲撃が……直撃した……

……かに、見えた。

「残念♪それは頂けないのよね♪」

そんな朗らかな声がしたと思ったら、ヘリの前に女性が現れ、

砲撃の直撃を受けたが、平然とし、愚痴を零していた。

「……何これ？物足り無いにも、程が有るわね……。

……まぁ、ヘリを落とすだけなら、充分なんでしょうけどね。」

そんな事を呟いてる彼女に、戦慄していたディエチ達に、何処からか声を掛けるモノが居た。

（…聞こえていますか？クアットロ。ディエチ。）

「「？！？！」」

（その儘！！反応せずに、何事も無く振る舞って下さい。奴等に気取られます。）

その言葉に、渋々ながらも従う二人。

（…宜しい。では、あの方からの伝言を伝えます。

『これ以上の成果は望めない。もう引け…《戦闘機人（ナンバーズ）》。

【無限の欲望】は、俺が隙を見て助ける。

それまでは、奴に随っている振りをしておけ。』　との事です。）

「……そんな、何処の誰とも解らない人の、言う事を聞け……と？」

（はい。あなた達が、彼を見殺しにする気が、無いのならば。

彼には、【虚無】からの伝言だ…と言えば、信じるでしょう。

……そろそろ、危ないですね。…では、確かに伝えましたよ？）

そう言うと、気配が完全に消えた。

その直後、件の奴から指令が来た。

（聞こえているか？ガラクタども。…もういい。撤退だ。

……本当に貴様等は、使えん屑鉄ばかりの、寄せ集めだな。

己が唯一の存在意義さえも、示せんとは……

つくづく、こちらの期待を裏切り、失望させてくれる……。

……さっさと戻れ。貴様等、屑鉄如きでも、役に立つ事はまだある。

……間違っても、そこのゴミ屑どもになど、捕まるなよ？…その時は自ら、処理しろ。いいな？）

……言いたい事だけ言い、一方的に切られた通信に、本気で歯噛みする、戦闘機人（ナンバーズ）。

……皆、噛み締めた口や、握り締めた手から、流れる血にも構わず、迅速に撤退した。

side：カイト

今、あの女（ヴィヴィオ）の子が入院している、病院になのはと共に、シスターシャッハに案内されて、来ている。

……なのはが、ずっと、恐縮しっ放しなのが気になるが…。

……そして、矢張り逃げ出していた。

「済みません！！！」

「い、いえ！まずは、探しましょう？」

「…ハァ…。取り敢えず、シャッハ。お前は捜索組から、外れる事。」

「な！そんな訳にはいきません！！」

「ダメ。却下。お前、見つけたら、絶対にそのトンファー向けるだろ。

……聖王教会の教義には、子供に刃を向けても、一向に構わない…とでも書いてあるのか？」

「な！？あなたは、聖王教会を侮辱するのですか？！」

「そんな事はどうでもいい。答えろ。構わないと教えているのか？」

…ズンッ！

「グッ…！……いいえ、その様な教えはありません。」

「だが、貴様は確実に刃を向ける。故に待機だ。…解ったな？」

「…で、ですが！！！」

「……ならば、着いてくるといい。

…その代わり、もし、戦闘態勢を執ったならば、問答無用で吹き飛ばす。

苦情は一切受け付けない。文句を言って来た時は、俺と敵対するものと思え。……いいな？」

「……解りました。…そちらに随います。」

「宜しい。…ならば、行くぞ。…さぞかし寂しい思いを、しているだろうからな。」

「「…はい！」」

……矢張り、あの叢に居た。

「……ヴィヴィオ…おいで？」

「……おにいさん……誰？」

「……覚えていないかい？……聖王（ヴィヴィオ）…。」

「……え？……もしかして……救世主（メシア）…様……？」

「ああ…。そうだよ…ヴィヴィオ……。久し振りだね？」

「……グスッ……救世主（メシア）様～～！！！！！」

「…よしよし。……恐かっただろう？…もう、大丈夫だ。」　ナデナデ

「……グスッ……ヒック……。」

「カイトさん！…あ、見つかったんですね。」

「ひぅっ……。」

「…大丈夫だよ、ヴィヴィオ。このお姉さんは、とっても優しくて良い人なんだから。」

「…グスッ……救世主（メシア）様よりも…？」

「…ああ。俺なんかより、よっぽど優しいよ……。…ほら……。」

「…初めまして。私は、なのは…って言うの。…あなたのお名前は？」

「……ヴィヴィオ。」

「そう…ヴィヴィオっていうんだ。可愛い名前だね？」

「……おねえさん…恐くない？」

「！……うん。…恐くないよ？」

（嘘付け。）と、ツッコミを入れたかったが、自重した。

…何にせよ、これで高町母娘（おやこ）の邂逅は済んだ。

……さて。…問題は、此処からだ。

……鬼が出るか、蛇が出るか。

「……ヴィヴィオ。突然で済まないが、君に聞きたい事がある。」

「はい、救世主様（メシア）。なんですか？」

「……君は、一体、誰から逃げて来たんだい？」

「……判りません。……わたしの覚えていることは

あの人が話していた言葉だけです。」

「……どんな言葉か…思い出せるかい？」

「はい…。……『やはり、【世界】でなければ…』とか、

『セラスでは……』とか、『シュガルが……』とか、

後は……

『グラルヴォたる我が……』てぐらいです。」

……矢張り、奴か……。

まぁ、そうだろうな。……あんな巫山戯た事をするのは、奴意外には居るまい。

……相変わらず、自分以外を、屑としか見れない、性根のとことん、枉がり腐った阿呆だな。

……であるならば……これは、早目に救出してやらねば……

……あいつもそろそろ持たんだろう。

……よし。…そうと決まれば……彼等にも表舞台に、出て貰うとしよう。

「……あ、あの……救世主様（メシア）…？…わたしなにか粗相を…？」

「……いや。…とても有益な情報だったよ。…有難う、ヴィヴィオ。」

「は、はい！どういたしまして！救世主（メシア）様！！」

「…うん、良い子だ。…ヴィヴィオ。検査が終わったら、機動六課においで？

……俺も、なのはも待ってる。…そうだろ？」

「はい。…ヴィヴィオ…。ちゃんと言う事聞いてね？そうすれば、早く又、会えるから。」

「うん！なのはおねえちゃん！！」

……何とか、言う事を聞かせ、六課に来る様には、仕向けられたか。

……さて。では、俺も…本格的に動くとするか……。

戦闘～機人～（後書き）

如何でしたでしょうか？

……正直言って、困りました。

私は、ナンバーズは、ラスボスのクアットロと、

可愛いチンクしか覚えていませんでしたので、

外見的にも、戦闘時のスキルも、口調も全く判らず……

調べるのに、一日掛かりました……ｏｒｚ

……さて。皆様、恐らく読んでいて疑問に思ったでしょう。

『ゼストやルーテシア、アギトは何処？』…と。

…勿論、ちゃんと居ます。

彼女達については、次回で明かすつもりです。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

聖王～教会～（前書き）

現時刻（２２：２５）
ＰＶ：２６７，８５６アクセス　ユニーク：２９，５１３人
皆様、毎度有難う御座います。

もう直ぐで、３０，０００人突破致します！！！

皆様、感謝致して居ります。

では。今話も拙筆をお楽しみ下さい。

聖王～教会～

side：カイト

「うわあああああああああん！！！！！！！！！

いっちゃやだあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

………御解り頂けるだろうか？………そう。ヴィヴィオが大泣きしているのである。

そして、矢張りフェイトが、ぬいぐるみを使ってあやしていた。

「…ヒック………グスッ………早く帰って来てね………なのはママ…フェイトママ…。」

「うん。勿論。」

「だから、良い子で待っててね？ヴィヴィオ。」

「じゃ、行って来るな？ヴィヴィオ。（ヴィヴィオの事、頼んだぞ『盾の守護獣（ザフィーラ）』）」

（確と。…そちらも気を付けてくれ。）（ああ。サンキュー。）

「グスッ……救世主（メシア）様も…早く…帰ってきてね？」

「ああ。約束するよ。…行って来ます。」

「……行ってらっしゃい。」

移動中。

「しかし、なのはママにフェイトママ…ねぇ……。」

「……な、何でしょうか…？」

「…いや、やっぱり、お前等ってそーゆー関係？」

「「な！／／／ち、違います！！！／／／／／／」」

「え？今でも、同じベッドで抱き合って寝てるのに？」

「「なぁ！！！／／／／／／何で知ってるんですかぁぁぁ！！！！

！／／／／／／／／／」」

「え？　マジ？　冗談で言っただけなのに………うわぁ………。」

「「／／／／／／／／／／／／／／／」」

「カイト兄。あんまり揶揄ったらあかんで？　…みんな、解ってて黙っとるんやから。」

「「は、はやて（ちゃん）！！！／／／／／／」」

「ああ………やっぱり、そうなんだ。普段もバカップル？」

「せやで。私なんか、身の置き所が無いぐらいや。」

「ああ〜………何か、目に浮かぶよ。

……互いに、心配し合って、額をくっつけて、イチャついてる絵が。」

「………よう知っとるな？　カイト兄。…この前、それ見たばっかりや………。」

「………当てずっぽうなのに………やっぱりお前等、付き合ってるんだろう？」

「「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」」

……八神兄妹（おれたち）に弄られ、真っ赤になっている、親友（バカップル）であった。

ｓｉｄｅ：三人称

「いらっしゃい。なのはさん、フェイトさん、はやて。……そして……何とお呼びすればいいのかしら？」

「……今の俺は『八神カイト』でも、『ＺＥＲＯ』でも無いからな。……そうだな……

『全(オール)てを知りし者(ノウレッジ)』　とでも呼んでくれ。」

「……『全(オール)てを知りし者(ノウレッジ)』……中々、御大層な御名前ですわね？」

「事実だからな。お前の『預言者の著書(プロフェーティン・シュリフテン)』よりは、遙かに確実だ。」

「「「！！！！！」」」……成る程。…その名は、伊達では無い…という事ね。」

「無論だ。…それより、そろそろ座らせては、貰えないかね？このまま話すのは、余りにも無粋だ。」

「あ…これは、失礼致しました。…どうぞ。お掛けになって下さい。」

「……では、改めて。聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアです。」

「高町なのは一等空尉であります。」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。……お久し振りです。クロノ提督。」

「…ああ。フェイト執務官。」

「硬っ…。他人じゃあるまいし。」

「ええ。彼の言う通りです。いつも通りで構いませんよ？」

「…と、騎士カリムが仰せだ。」

「もう、普段通りで構へんよ？」

「じゃあ、クロノ君。久し振り。」

「元気だった？お兄ちゃん。」

「……それは、もうよせ。お互い、いい年だろ？」

「兄妹関係に年齢は関係無いよ？クロノお兄ちゃん♪」

「そうだぞ？大体、心の中じゃ嬉しがってる癖に。シスコンその２。」

「誰がシスコンだ！！！」

「お前に決まってるだろ？シスコン（クロノ）。他には恭也ぐらいしかいないだろ。なぁ？二人共。」

「「／／／／／／／／／／」」

「ほら、同意してる。」

「……全く……君という人は……。」↑こめかみを押さえて

いる

「さて。クロノも揶揄い終わった事だし…本題に入ってくれ、カリム。」

「……解りました。」

説明が始まった。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア・レリックの対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。」

「知っての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム。

それと、僕とフェイトの母親で、上官のリンディ・ハラオウンだ。」

「それに加えて非公式だが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている。」

「更に、噂の域を出ないが、かの三提督が認め…三提督に……

……引いては、管理局そのものに、直接命令が下せるという

『特別大元帥』　なる者も居る。」

「その噂によれば、その『特別大元帥』という方が八年前から三提督に、機動六課のプランを伝えていたそうです。」

「しかし、行き成り未来の事など言われても、信じられ無かったそうだが、近い内に起こる事件や、管理局の失態を全て当てられ、流石に信じる様になったそうだ。」

「……す、凄い人なんやね？その人。」

「……まぁ、所詮は噂の域を出ない眉唾物の話だ。」

「「「……。」」」

何とは無しに、カイトを見る三人娘。……特に表情に変化は無かった。

「…まぁ、それはもういい。本題は此処からだ。」

「その設立の理由の一端となったのが、私の能力…『預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）』。

……あなたは御存知の様でしたが。」

「ああ。…だが、彼女達には説明してやれ。」

「はい。勿論。

この能力は…最短で半年、最長で数年先の未来。

それを詩文形式で書き出した、預言書の作成をする事が出来ます。

二つの月の魔力が、上手く揃わないと発動出来ませんので……

頁の作成は、年に一度しか出来ませんが。」

「預言の中身も古代ベルカ語で…しかも、解釈に依って意味が変わる、難解な文章。」

「世界に起こる事件を、ランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば、

的中率や実用性は、割と良く当たる占い程度。つまりは…余り、便利な能力では無いんですが…。」

「…便利どころか、不便極まり無いだろ。……おまけに、上層部に必ず読ませ、

それに備えさせるとか……端迷惑な事、この上無いな。

レジー坊が嫌がるのも、解るってもんだ。」

「そ、其処まで言わんでも……てか、レジー坊って誰や？カイト兄。」

「ん？レジアス＝ゲイズ中将。幼少時の渾名だよ。」

「……そりゃ、又、似合わん渾名やな……。」

「…お前等、外見や言葉に囚われ過ぎ。今のあいつは、単なる気の良いおっちゃんだよ？

一度、話してみる事を、強く御薦めする。…まぁ、あいつの覇気に耐えられれば…の話だけどな。」

「……まぁ、機会があれば……。」

「ああ。そん時は俺も同席しよう。久々に俺も、あいつと飲みたくなった。」

「…話を戻すぞ。その騎士カリムの予言に、数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている。」

「…『旧い結晶と、無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る
使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち
それを先駆けに、数多の海を守る法の船は砕け落ちる』
だろ？」

「「「な！？！？！？」」」……本当に、何でも御存知なんですね？」

「…ハァ……だから、言っただろう？俺は『全て（オール・ノウレッジ）を知りし者』だと。」

「……カイトさん。その予言って……。」「……まさか……。」

「御名答。ロストロギアを切欠に始まる、管理局地上本部の壊滅。そして、管理局システムの崩壊。

……そう考えて居るんだろう？お前さん方は。……大正解だ。」

「……大正解とは、どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だよ。それが、事実だ。全ては予言通りに事が起

こり、そして……

管理局は崩壊する。これは決して避けられない、単なる歴史上の事実だ。」

「そんな馬鹿な！！！そんな事が起こり得る筈が無い！！！！！」

「……ハァ……いいか？何度でも言ってやる。

俺は『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』だと。……そう。全てを知っているんだよ。

過去…貴様等、管理局と聖王教会、何より最高評議会の為した所行…いや、悪業の全てを。

現在…今、この時に何が起こっているのかを。

そして……未来…これから先、何が起こるのかを。……全て、知っているんだよ。」

「ど、どういう事です？私達、聖王教会が一体何をしたと、あなたは言うのですか！？

事と次第に依っては、只では置きませんよ！！！」

「黙れ小娘。その文句はこれを見てからもう一回言って貰おうか。…龍斗。」「はい。カイト様。」

……一人龍虎王（クロノ）が、又か…。という顔をしている。…又なのだから、諦めて貰おう。

“……。”

「データを見て、絶句しているな。……だが、そんなものは、所詮氷山の一角だ。」

“な?!?!?!”「これだけの事が、氷山の一角やて!?」

「ああ、そうだ。…其処には、お前達…機動六課に属する人間に関する事しか、書いては居ない。

俺は、それの数百倍、数千倍の非人道的研究・施設を潰して来た。

はっきり言って、お前達の見ているそれは、特に生易しいものばかりしか無いぞ?

それから、これが、聖王教会と最高評議会の全データだ。」

“……!!!こ、これは!!!!!?”

「…そう。あの…ジェイル＝スカリエッティも、お前等とその脳味噌共に作られ、

失敗作だと捨てられたクローンだ。誰かを彷彿とさせるな?フェイト・テスタロッサ。」

「……。」

「さて、どうする?お前等のやろうとしている事は、管理局達に捨てられた失敗作を、

犯罪者に仕立て上げ、又、その思いを無下にする事だけだが。」

“……。”

「何だ。途端に黙(だんま)りか。所詮はその程度の覚悟か。

ハッ…。本当に素晴らしい組織だな？お前達は。全く以て、本当に素晴らしい正義だよ。

腐った生ゴミ(じょうそうぶ)の為に己が身を擲ち、命を懸け、

弱者を主張ごと……いいや、存在ごと亡き者にするのだから。

さて。それでどうする？偽善者(セイギ)様方？矢張り、打擲するのかい？」

“……。”

「……フン！だらしないな。直ぐに答えも出せんとはな。…もういい。

そんな事より……又、新たな予言でも出たのだろう？カリム。」

「……え…ええ。……それも、あなたなら解るのでは無くて？」

「フ…ああ。

『無限と無限の交わりし時、人も機械に非ざる者も立ち
救世主は己が楔を解き放ち、真なるメシアとなる
交わらぬ筈の者達は、彼の者を喚び寄せ翼を与え
創造は世界に幻惑され、時間と空間に奪われる』　で、合っているかな？」

「……完璧です。補足まで…。」

「相変わらず、面倒な能力だが、今回は特に分かり易かったな。」

「え!？い、今の意味、解ったん？カイト兄？!」

「ああ。…恐らく、俺にしか全ては、理解出来んだろう。」

「……それで…僕達はどうすればいい？」

「どうも。何もせんでいい。お前達に出来る事は…何も無い。
いつも通り、この腐り切ったごみ組織（かんりきょく）を信奉していろ。
基本的に、役立たずなのだからな。」
「な！？そこまで…」「其処まで…だったろう？」「…くっ…！」

「…どうしてもと言うなら……そうだな……。
はやて。六課隊舎に未だ、空きは有ったよな？一杯。」
「う、うん。未だ、余っとるけど…。」
「なら、１２～１３人分。……いや、更に後…７人……計２０人分程、予定しておいてくれ。」
「「「そ、そんなに！！？」」」
「ああ。……俺は、これから忙しくなる。今の内に新人達を鍛えておけ。
何時、不測の事態が起こってもおかしくない。
クロノ。お前達も、いつでもリミッター解除申請が、通る様にしておけ。それだけで充分だ。」

「…解った。」

「…俺からは以上だ。…後は雑談でもしてればいい。…先に帰る。」

シュンッ！

そう言い、消えたカイトと龍斗。…とてもその空気で、雑談をする気にはなれなかった。

…結局、その場でお開きになり、そのまま皆、帰って行った。

ｓｉｄｅ：カイト

そして、機動六課。

一足早く帰って来た俺は、その足で直接ヴィヴィオのところへ向かった。

「…ヴィヴィオ。」

「あ！救世主様♪！！」　ダッ！　ピョンッ！

「…よしよし。良い子にしてたか？（お疲れ様、ザッフィー。）」

ナデナデ　（ああ。）

「うん♪！！ザフィーラがいっぱい遊んでくれた♪！！！」

「そうか。…ザフィーラも有難う。」「わんっ。」

「…救世主様…。ママ達は？」

「うん？…もう少ししたら、帰ってくるよ。…俺だけ少し早く、帰って来ちゃっただけだからね。」

「……救世主様…。いそがしいの？」

「……ああ。これから、少し忙しくなる。…でも、今日はずっとヴィヴィオと遊んであげられるぞ。」

「わーい♪！！！」

「あ、そうだ。…ヴィヴィオが、良い子にしていた御褒美をあげるよ。」

「ごほうび？」

「ああ。…ほら、これだよ。」

そう言うと、ポッケから、銀色に輝くペンダントを、取り出した。

…ザッフィーが、とても驚いている。

「わぁ……キレイ……。…これ、くれるの？救世主様。」

「ああ。…ほら、掛けてあげる。……うん。良く、似合ってる。」

「わぁ……ありがとう！！！救世主様！！！！！」

「どういたしまして。それは、大切な御守りだから、常に持っていてね。」

「うん♪♪♪！！！！！」

（…カイト。…あれは一体何だ？…内包している魔力が、余りにも異常だぞ？）

（…矢張り、解るか。…あれはな、言った通り、御守りだ。

真中の宝石は、ヒヒイロカネ。それ以外はオリハルコンで、出来ている。

自身に仇為すものは一切を阻む、魔除けの究極版…の様なものだ。）

（……；少々やり過ぎなのでは？）

（こまけぇこたぁいいんだよ！）

（……。）

さて。ヴィヴィオ対策も済んだ。

後は、あいつらだけだな。

だが、今は未だ駄目だ。

…そう。少なくとも、現在（いま）は。

……暫くは、平穏な日々が続くからな。

……この僅かな幸せを堪能させて貰おう。

それぐらいは、罰は当たらんだろう？

なぁ……風音（かざね）。

聖王～教会～（後書き）

如何でしたでしょうか？

……まずは、お詫び致します。

前回、この話でルーテシア達を出すと、申し上げましたが、

御覧の通り、出す事が出来ませんでした。

次の話は、日常編にするつもりですので、

出るのは恐らく、2～3話後だと思います。

期待されていた方には、大変申し訳ありませんでした。

……さて、今回新しい名前が出て来ました。

一応、物語上、重要な役割を担う人です。

『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』中には、誰かは判明する様にするつもりですが…。

果たして、一体どの様な人物なのか……。バレバレですかね…ｗ

では。今話も読んで下さり、有難う御座いました。

愛（前書き）

現時刻（１６：４５）
ＰＶ：２７７，８６３アクセス　ユニーク：３０，４３６人
皆様、いつも有難う御座います。

到頭３０，０００人突破致しました！！

本当に感謝致します。

今回は、タイトル通りです。皆様、塩の用意は完璧ですか？

では、今話も拙作を御堪能下さい。

愛

side：カイト

「ヴィヴィオ、お早う。」

「あ！お早うございます！救世主（メシア）様！」

「……なぁ、カイト兄？前から疑問やったんやけど……。」

「ん？何？はやて。」

「何で、ヴィヴィオはカイト兄の事を、『救世主（メシア）様』て呼んでるん？」

「あー……今はまだ内緒♪」

「……ほうか。ほな、次や。」

「何だ？朝っぱらから、質問攻めか？」

…そう。何を隠そう。只今、朝食中である。何故か、機動六課主要人物全員が、この場に揃っている。

……お前等、訓練はどうした。と思ったら……どうやら、早目に終わり、午後まで休憩中らしい。

……しかも何故か、全員俺とはやての話に、耳を傾けている。

「……お前等……俺の何をそんなに聞きたい訳？」

“全部。”

「……チミタチ…こんな時の団結力はピカイチダネ？」

“エッヘン。”

「……ハァ……んで、次の質問は？」

「では、私から。……その…黄宇という者と、私が似ている理由についてだ。」

「ああ！それ、私も気になってた！」

「うむ。我々と彼女等は何か、関係があるのか？」

「「「「「……！！！ざ、ざ、ざ……ザフィーラが喋ったーー！！！！！」」」」」

「……ああ。お前等知らないんだっけ？

…じゃあ、ザッフィーが狼以外になれるって事も知らない？」

「「「「「え！？狼だったの？！」」」」」

“そこから!?!?”

「……お前等、面白いな。…まぁ、それは後で見せて貰え。……別にいいよな?ザッフィー。」

「……ああ。構わん。……そんな事より、カイト。教えてくれ。」

「…簡単な事だよ。黄宇達が似てるんじゃなくて、シグナム達が似てるんだよ。」

“……は?”

「いや、だからな?お前達、守護騎士(ヴォルケンリッター)達の基になったのが、この五行なんだよ。

シグナムは、黄宇の外見と紅蓮の炎を。

ヴィータは、鋼牙の女体化版。

シャマルは、水薙の回復役と龍斗の補助役の兼任。

ザフィーラは、紅蓮の肉体と水薙の防御役と鋼牙の神獣形態。

んで。アインは、黄宇の纏め役と龍斗の知識。　……まぁ、

皆、劣化版だけど。」

“……マジで？”

「大マジ。……じゃあ、次の質問は？この際だから、ある程度は答えるけど。」

その後、全員から本当に質問攻めに会い、昼頃になってようやく解放された……ｏｒｚ

「……オマエラ……そりゃ、何でも答えるっつったけどさ……容赦無さ過ぎだろ？ｊｋ」

「……アハハ……ドンマイ；…カイト兄。」

「…アハハ；…あれ？ヴィヴィオ、そのペンダント綺麗だね？」

「うん♪！救世主（メシア）様に貰ったの♪！！」

「気に入って貰えて何よりだよ。ヴィヴィオ。」　ナデナデ

「えへへ～～♪♪♪」

「……そうしてると、まるで親子みたいやな？カイト兄。」

「ん？そうかぁ？寧ろ兄妹かと思ってたんだけどな、俺は。」

「それやと、ヴィヴィオが私の妹になって、私がなのはちゃん達の娘に、なってまうやないか。」

「……救世主様（メシア）…ヴィヴィオのお父さん？」

「うん？…いや、違うよ？」

「救世主様（メシア）……ヴィヴィオのお父さんになってくれないの……？」　グスッ

「おいおい…。あーなんだ……ヴィヴィオは俺に、お父さんになって欲しいのか？」

「…グスッ……うん……ヒック……。」

……うむ。まさかそう来るとは思っていなかったな。……あー視線が途轍も無く痛い。

「……ハァ…解った解った。…今から、俺がヴィヴィオのお父さんだよ。」

「…（パァ～）お父さん！！！」　ダッ！　ドンッ！

「ああ…はいはい。」

「救世主（メシア）様がお父さん！！！お父さんが救世主（メシア）様！！！！！」

……まるでエ○ゲのタイトルみたいだな。

「…でもな、ヴィヴィオ。俺がお父さんになると、色々大変な事になるんだ。」

「？……大変な事？」

「そう。俺が、ヴィヴィオのお父さんになるとな？

はやても、ヴィヴィオのお母さんになっちゃうんだ。…それでもいいかい？」

「…はやてママ？」

「そう。………ほら、はやて。」

「／／／／／／う、うん。………ヴィヴィオ。」

「………はやてママ！！」

「…うん。………よしよし。」

………矢張り、女性は母である時が、一番美しいと思うよ。

「あ、ヴィヴィオ。今度から、カイト兄を呼ぶ時は、『カイトお父さん』って呼ばなあかんで？」

「うん♪！カイトお父さん♪！！！」

「はいよ、ヴィヴィオ。」

「えへへ〜〜♪♪♪」

「良かったね、ヴィヴィオ。」

「ヴィヴィオには、ママがたくさん居ていいね。」

「うん！！！………えへへ〜〜ママが一杯♪♪♪」

「…そうだな。他にも、ユーノパパも居るからな。」

「な！／／／何言ってるんですか！！／／／／／／／カイトさん！！！／／／／／／／」

「？何だ。まだあいつ告白してないのか。……まぁ、早いか遅いかの違いだけだし。気にするな。」

「気にします／／／／／／／／／」

「へぇ……気にしてるんだ…。ニヤニヤ。」

「う～～～／／／／／／／／／」

「…？ユーノパパ？」

「ああ。とっても優しいパパだよ。いつか、なのはママが会わせてくれるよ。その時まで楽しみにな。」

「うん！！！」

「ううう～～～～／／／／／／／／／／／／／／／」

「……でも、そうすると、凄いな。ヴィヴィオは。」

「？何がや？カイト兄。」

「家族の数が。知り合いだけでも、

なのは・士郎・桃子・恭也・美由希・ユーノ・忍・すずか・ノエル・ファリン・アリサ

プレシア・アリシア・リニス・アルフ・フェイト・エリオ・キャロ

リンディ・クロノ・エイミィ・カレル・リエラ

はやて・アイン・シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ・ツヴァイ

……そして、俺の、計３１人だ。……って、ホントに多いな！？」

「……良く、それだけ出て来ますね？」

「まぁな。……凄いな、ヴィヴィオ。もう家族が３１人も出来たぞ。良かったな。」

「…かぞく？……みんな家族？」

「…ああ、そうだ。ここに居るみんなが家族だ。勿論ティアナもスバルも…な。」

「うん！」「…ええ。」

…ヴィヴィオが、この場に居るみんなをグルッと見回した。

「……ふ…ふぇっ……ふぇ～～～～ん！！！うあああ～～～～！！！！！」

“ええ？！泣いちゃった！？”

「……大丈夫だ…聖王（ヴィヴィオ）。……もう…大丈夫だよ。」

「ふぁ～～～～ん！！！！」

……俺は…思わず…抱き締め…涙を…流していた……。

「……どうやら、泣き疲れて寝たみたいだな。」

「…うん。……カイト兄。…ヴィヴィオが泣いた理由…解っとったん？」

「……ああ。…この娘は…ずっと一人だったからな。…最愛の者を無くしてからは…ずっと。」

「……そか。」

「……なのは。フェイト。ヴィヴィオの事、頼んだぞ。」

「「…はい。」」

「…うん。……よし！はやて！デートに行こう！！」

「ふぇ？な、何で急に？／／／」

「まぁまぁ、いいから。早く着替えておいで？…あ、グリフィスには、今日は休みって言っといて。」

ｓｉｄｅ：三人称

此処は、ミッドチルダの街中。その時計台の前で、とある男の人が、佇んでいた。

普通の美男子という程度だが、不思議と人の目を惹き付ける、雰囲気を持っていた。

故に色んな人が、寄って来た。……彼の周りには、有象無象が転がっている。……南無。

「あ！カイト兄ぃ！」

そんな不思議な人に、走って来て声を掛ける女性が一人。……皆、その女性に驚いた。

……かの有名な、八神はやてであった。

なのは・フェイト・はやての三人娘は、管理局でも、指折りの美人組として知られ、

そんじょそこらのトップアイドル程度が、十把一絡げになっても、敵わない人気を誇っていた。

その八神はやてが、おめかしして、男と待ち合わせをしている。……どう見てもデートである。

その羨ましい相手に、皆が注目しない筈も無く、益々皆の視線を集めていた。

……だが、当の二人は、まるで気にしている風も無く、極普通に話していた。

「…はやて。」

「…カイト兄？…この人達、どないしたん？」

「いや、なんかな？どうも俺が、気に入らないらしくて、喧嘩吹っ掛けて来たんで、返り討ちにした。」

「うわぁ………そりゃ又、阿呆な事しよるな。…何や同情してまうわ。」

「あはは…。………はやて…今日は、大人の女性って感じだな。…とても良く似合ってる。綺麗だ。」

「う…！／／／／／／あ、アリガト／／／／／／／／／か、カイト兄も格好ええよ／／／／／／／／／／／／」

「クスッ…有難う。………じゃあ、行こうか？」　グイっ

「う、うん／／／／／／／／／」

そのバカップルは、周りなど何処吹く風で、仲睦まじく歩いて行った。

……後日、その時撮られた写真が、メディアに公表され、はやては、大いに慌てる事になるのだが

それは、まだ先の話である。……今は、彼等の後を追う事にする。

……皆、塩の準備は宜しいか？

side：映画館

「…一杯あんなぁ………はやて、何にする？」

「う～ん…私も一杯あって決められんよ。」

「…ふむ。…はやての好みそうなのは…このアクションコメディーか…ラブロマンスってとこかな？」

「………な、何で、ラブロマンス？／／／」

「ん？…はやても女の子だろ？…意外と好きそうかなと思ったんだ。」

「うう～…／／／／／／」

「クスクス………じゃあ、それにしようか？………はやて可愛い。
（ボソッ）」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

周りのカップルの目が言っていた。…このバカップルめ…と。

ｓｉｄｅ：上映館内

「思ったより、人が居るな。」

「せやね…。でも、混んでる訳や無さそうやな。」

「……そうだな。…俺達は、彼処の端っこ辺りにでも行くか。…余り人が居ないし。」

「うん。了解や。」

「……思ったより、画面広いんだな。意外に苦も無く見られそうだ。」

「せやね。少し心配やったけど。…でも、何でこんな端っこなん？」

「……はやて……お前にしても……なのはもフェイトも…もう少し、

自分達が、とんでもない有名人だって事を、意識した方がいいぞ？

只でさえ、お前等…引いては機動六課は、美人・美少女揃いなんだからさ。

何時何処で、送り狼達が牙を磨いでるか、解ったもんじゃない。」

「／／／／／／／／わ、解りました／／／／／／／／／／／／」

「…………ホントに解ってんのかね？…お、始まった。」

「う、うん。／／／／／／」

side：上映中

《…ふーん………思ったより、真面な恋愛物なんだな。王道良き哉良き哉。》

《…け、結構恥ずかしいもんやな…／／／／／す、好きな人と見る恋愛物って／／／

…カイト兄って、意外とこういうのも抵抗ないんやな………なんか、ずるい

…………やっぱり、カイト兄ぃ…格好ええなぁ…………。》

（…はやて。映画より、俺を見たいのかい？）

（ひゃうっ！………き、気付いてたん？カイト兄ぃ／／／／／／／／／／）

（クスクス………はやての事なら、何時でも見ているからね。）

（うう～～～………やっぱり、卑怯やぁ………／／／／／／／／）

（クスクス………それより、はやて。…そろそろ、終盤らしいぞ。）

（…へ？…………………！！！！／／／／／／／な、な、な、なぁぁぁあああ！！！！／／／／／／／／／／）

（…へぇ………まさか、S◯xシーンまで有るとはね。…意外とちゃんと作り込んでるなぁ………。）

（………（パクパク）か、感心しとる場合とちゃうで！カイト兄ぃ！！／／／／／／／）

こ、こ、こ、これぇ！！！／／／／／／／／

何で、普通の映画にこんなシーンがあるんやぁぁぁ！！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

（いや、外人の映画には、意外とこういうのが多いよ？…今度、地球に帰ったら見せてあげよう。）

（み、見せんでええわ！！！／／／／／／／／）

（クスクス………それより、はやて………周りを見て御覧？）

（へ？／／／／／／／………!?!?!?!?!?／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

な、な、な、何してるんやぁぁぁみんなぁぁぁ／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／）

（見ての通り、キスしてる。どうやら、これはそういう為の映画らしいね。

カップルしか居なかったのは、そういう訳か。《成る程。先程から注目を浴びる訳だ。》

………もう何処かで、いたしてる人も、居るみたいだな。）

（な、何でそんなに、冷静に分析してるんや！！！／／／／／／／
／／／／／／／

は、早く出よ？カイト兄ぃ／／／／／／／今直ぐ～／／／／／／／
／／）

（…別にいいけど………今出ると、いたしてる場面に幾度も遭遇すると思うよ………それでもいい？）

（良くないぃ～～～／／／／／／／／／何とかしてや～カイト兄ぃ
………／／／／／／／／／／／／／／／）

（一応、気にならなくする方法はあるけど…………。）
（ほんなら、今直ぐそれやってぇな〜／／／／／／／）
（《…ニヤッ》…了解。同意は得たよ…。）「…んぅ……………。
」
（へ？…どういう……！）「…んん！……んぅぅ………ぅむぅ……
……。」
「…ん……。どう？気にならないだろう？」
「…んぅ……。／／／／／／／／／……カイト兄ぃ…もしかして
……知ってたん？／／／／／／／／」
「いや、全く。………正に僥倖だよ。…ほら、続きしよ？…大丈夫。
最後まではしないから。」
「そ、そういう問題や無いって〜〜〜…／／／／／／／／」
「…でも、しないと、却って逆に変に思われるよ？………此処では
…ね。」
「ぅぅぅ〜〜〜…カイト兄ぃの意地悪ぅ〜………／／／／／／／／
／／／／／／」

「………しょうがないだろ？

………男の子は、好きな子には、意地悪したくなっちゃうんだからさ。……ん…………………。」

「へ？／／／／／／／／／／い、今のもう一回…んんぅ…………………／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

……………………以下、フェードアウト。

side：映画館の外

「ぅぅぅ〜〜〜／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「何だ？まだ恥ずかしがってんのか？」

「ぅぅぅ〜〜〜！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「…解った解った。俺が悪かったたよ。…それより、次行こう次♪…な？」

…手を繋ぐカイト。………勿論、恋人繋ぎという奴で。

「ぅぅ～～／／／／／／／／／／……（コクン）。」

……周りのカップルすらも思っていた。…リア充爆発しろ…と。

Ｓｉｄｅ：ゲーセン

「取り敢えず、適当に見て廻るか。」

「…うん。」

…以下、抜粋。

「うおっ！このゾンビ恐えぇぇ……。」

「わーっ！キャーッ！」

「……楽しんでるなぁ…はやて。」

「リズム感には自信が有るぜ。」

「ま、負けた…ｏｒｚ」

「はっはっは。後、千年は修行して来なさい。」

「いや、その頃、私死んどるし。」

「ＵＦＯキャッチャー…俺、物凄ぇ苦手なんだけどなぁ……。」

「頑張ってカイト兄！」

３０分後……「５，０００注ぎ込んで……ぬいぐるみ一個……orz」

「有難う！！カイト兄ぃ！！！これ、めっちゃ可愛いぃ！！！！！」

「…まぁ、はやてが喜んでるから、いいか。」

「このっ…負けるかぁ！」

「フフン…甘いで！！……ウィナー！！！」

「…正に、レースの女王（クイーン）。」

「オチ付きかい。」

……なんか、そろそろバカバカしくなってきた。

……帰ろうか？みんな。

“は～い”〈…おら！撤収だ撤収！！！〉〈ハァ～…やってらんないわね〉〈なんだかなぁ～〉

〈…まぁ、良いでは無いか…主の幸せそうな姿も、見れた事だし〉

〈…それで済むのはあんたぐらいよ〉

〈今晩、何食べよっかなぁ～…〉〈……あんた、そればっかりね？〉……ガヤガヤ

……何やら、怪し気な騒がしい集団が、纏めて帰って行くのを、街中の人が見ていた。

ｓｉｄｅ：？？？

「……ハァ～～～……楽しかったぁ……。」

「そうか。喜んで貰えて、何よりだ。」

「うん♪♪……ねぇ…カイト兄？どうして急にデートなん？」

「……したかったから……じゃ、駄目かな？」

「駄目や。…何かまだ隠しとる。……カイト兄ぃ？本当の理由は？」

「…それも本当の理由なんだがなぁ……。」

「せやから、もう半分の理由。…あるんやろ？」

「……ハァ……やっぱり、はやてだけは誤魔化せないか。……

……もう半分の理由はな？

……恐らく、俺はこの事件が終わったら、次の世界へ旅立つ事

になる。その為の思い出作りだ。」

「な！！！そ、そんな！！！何とかならへんの！！！カイト兄ぃ！！！！！」

「…無理だ。こればかりは、俺の意志でも、滅多な事じゃ動かない。」

「そんな……嫌や！！！！！私、そんなの嫌やあああああ！！！！！！！！！」

「……ごめん…はやて。」　ギュ…

「グスッ……うぐ……ひっく……いややぁ……そんなの……わたし…いややぁ……」

「……はやて。」

「いややぁ……」

「……はやて。一つだけ…俺が此処に帰ってこれる、可能性がある。」

「え?!…ぐすっ……ほ、ほんまに!?」

「…ああ。でも、それには……はやての……いや、お前達みんなの協力が必要だ。

しかし、僅か1%にも満たない確率だ。……それでも…賭けるか?」

「うん!賭ける!!どんな事をしてでも、必ずカイト兄を此処に戻してみせる!!!

せやから、教えて!!カイト兄!私達は何をすればいいのか!!!」

「……そうか…。有難う。……まずは、これをあげるよ。」

カイトが取り出したものは……

翠・白・朱・青・黄…そして黒の六色が見事に調和し、散らばっているネックレスであった。

「……きれい……これは?」

「俺達だ。…五行の体の一部を宝石にし、更に俺の魔力を込めたオリハルコンを一つにしたもの。

これで、他の平行世界よりも、この世界に来易くなる。……僅か、0，数%だが……。」

「……これが……。〈ギュ……〉それで、私達は何をすればええんや?」

「……次に俺をこの世界に呼べるのは、はやて達が25になった時。

…つまり、今から6年後だ。その時に俺が関わった者達……

機動六課と地球の知り合い、皆で念じれば、それに引き寄せられて、来れる可能性が有る。

人が多ければ多い方が良いが、最低でもそれだけいれば、何とかなるかもしれない。」

「……解った。後、6年後やね?……絶対に、呼び戻しちゃる。

…せやから、カイト兄………。」

「…ん？………何？はやて。」

「………あの………その………ちゃんとした………その………お…思い出………欲しいなぁ…って

………その………ダメ…かなぁ………／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「………ふむ。………まさか、同じ事を考えてるとは、思わなかったな。

…しかも、はやてに先を越されるとは………彼氏失格…かな？」

「へ？／／／あ…あの……それじゃぁ………／／／／／／／／／」

「…ああ。………もう、ザフィーラに連絡してある。今日は帰れない。明日の昼帰りになるとね。」

「／／／／／／／／／ひ、昼て／／／／／／／／／／／／／／／」

「………じゃ、行こうか？…俺の愛しい人。」

「…う／／／／／／／／お、お願いします／／／／／／／／／／／／／／／」

「プッ………クスクス………了解。お姫様。」

翌日。

本当に昼頃、はやて達が帰って来て、みんなに揶揄われたのは、言うまでもない。

そして、真っ赤になったはやてを、カイトが後ろから抱き締め、

逆にみんなを揶揄い、全員真っ赤にさせた事は、更に言うまでも無い事である。

愛（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、この後の展望は、

『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』→『Ｆａｔｅ／Ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』→『ネギま！』→『なのはオリジナル』

と行こうかと、思っています。

……まぁ、途中で気が変わり、『ゼロの使い魔』や『スパロボ』系統の作品に

行く可能性もありますが。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

※最後、少しだけ、脚色を変えてみました。如何でしょうか？

救出～襲撃～（前書き）

残念ながら、アクセス解析に、深刻な障害が発生中により、

数字が二日前までしか、解らないそうです。

早期の復旧を心より、願います。

今回のとある『叫ぶ人』は、ｃｖ：若本規夫さんで、脳内再生して下さいｗ

では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

救出～襲撃～

ｓｉｄｅ：？？？

「クソッ！クソッ！クソックソックソッ！！！！！どいつもこいつもおおお！！！！！

本当に使えんクズドモばかりだあああああ！！！！！！！！！！」

「……気を御鎮め下さい。第二席　ドルゴラ＝グラルヴォ様」

「……気を鎮めろ……だとぉ……これが、落ち着いてなどいられるかあああああ！！！！！

何だ！！！！！あのド屑共は！！！！！！使えないにも程がある！！！！！

この玩具を動かせるのは、あのクズドモだけだと言うからこそ、生かしてやっているというのに！

まるで進まんではないかあああああ！！！！！！！！！！！！！

どううううなっているのだあああああ！！！！！！！！！！！！！

第十席い！　ゼハムス＝カジャルドおおお！！！！！！」

「……只今、鋭意制作中で御座います。どうか、今暫くの御辛抱

を。」

「えええいいいいい！！！！！！聞き飽きたわあああああ！！！！！！！！！

そんな戯れ言おおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

「…グラルヴォ殿。もう少し静かに為された方が、宜しいかと思いますが。」

「何ぃいいい！！！！！！…フン！！！！シュガル小僧か！！！！

一席の信任を得たとて、図に乗るでないわ！！！！！！小僧風情があああ！！！！！！！！！！！」

「……その様な事はありません。……それよりも……

…あの者……放置しておいて良いのですか？」

「んんん？……ああ…あやつの事か…構わん！！！！

どいつもこいつも、あの程度の奴に右往左往されおって！！！！！！情けない！！！！！！！！！！！」

「…第二席は、彼の者と戦った事は、御座いますか？」

「…何ぃ？…何故、我があの様な下賤なゴミクズと戦わねばならんのだ！！！！！！！！！！！

巫山戯るなあああああ！！！！！！！！！！！

そもそも我が勝てぬ者など、あの第一席以外に居らんわ！！！！！！！！！！

……くそっ！全く以て忌々しい！！！！！！！！！！！

我が『創造』でも勝てんのはあいつのみだわ……！！！！！！！！！！！

小僧！！！！！帰ったら貴様からも伝えておけい！！！！！！！！！！！

その席に安穏としているならば、何時如何なる時でも、我が貴様の寝首を掻いてやるとな！！！！！

がっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

《…そうか。矢張り、こいつは、戦った事は無かったか。……まぁ、普通は思わんだろうな。

何千・何万年も最強を誇って来た己が能力が、第一席以外に負ける等とはな……。

……だが、『創造』程度では、永遠にあいつには勝てん。……
…決して…な。≫

ｓｉｄｅ：カイト

「今日から、機動六課に転属になりました。陸士１０８部隊ギンガ＝ナカジマ陸曹です。

宜しくお願いします。」

「もう一人、１０年前から六課（うち）の隊長陣の、デバイスを見て下さっている、

本局技術部の精密技術官。」

「マリエル＝アテンザです。宜しくね、みんな。」

「……それから、何故か、辞令が来た……」

「…あー…ゲンヤ＝ナカジマだ。うちの娘達もこれから御世話になる。家族揃って宜しく頼む。」

「…改めて、質問宜しいですか？」

「…俺に聞かれても、解らんぞ？

…ギンガと一緒に、六課に行って来いって、辞令が突然来て、こっちも参ってんだからな。」

「…引き継ぎとかは、どないなってるんです？」

「……いや、それがな？…どうも、レジアス中将が何か、やらかしたらしくてな……

全部終わってた。」

「は？全部？」「おう。全部。」「……何故ですか？」

「…いや、それがどうもな？更に上から出た命令みたいでな……。」

「更に上？…と言うと…最高評議会ですか？」

「……いいや、もっと上……三提督からの直々の命令らしい。」

“さ、三提督ぅ！！！！？”

「ああ。らしいんでな…俺等下っ端にはどうにも出来ん。…まぁ、諦めが肝腎ってこった。」

“……。”

さて。ようやっと、三人を寄越しやがったか。あの耄碌爺婆共め。まあいい。……これで、俺もフルに動ける。

「…はやて。」

「ん？何や？カイト兄。」

「…一応、後、１７～１８人分は空いてるよな？」

「うん。カイト兄が前に言うとったから、開けて置いたで。」

「そうか、済まない。…んじゃ、ちょっとその空きを埋めてくる。」

「へ？どういう意味や？それ。」

「ん？ジェイルとナンバーズ…戦闘機人を１１人助けてくる。」

“………な…何ぃいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！”

「うおっ！！！びっくりさせんなよ…。」

“それはこっちの台詞だあああああ！！！！！！！！”

「ど、ど、ど、どういう事やねん！！！カイト兄！！！！！」

「いや、だから、ジェイル達を助けて来るから、

そいつらの部屋分、空けといてくれって、頼んでるんだけど。」

「な、何でスカリエッティまで、助けるって言うんですか！！？てゆうか、誰から？！」

「？ジェイルは俺の友達だから。後、ノルニルから。間違い無く、第二席が居る事が解ったからな。

あのスットコドッコイは、俺と五行と第一席以外には、対処出来

ん。」

“と、友達？”

「ああ。飲み友達。…面白いよ？あいつ。」

「あ、あの～……。」

「ん？どうした？ギンガ。」

「あ、あのですね…『ノルニル』って何ですか？」

「……ああ、そっか。お前等知らないんだっけ。……メンドイ。…はやてから聞いといてくれ。

……そろそろ、俺は行ってくる。」　シュン！

「あ！…もう行ってもうた…。」

その後、新人達や出向部隊に、『ノルニル』について、渋々説明するはやてであった。

説明を聞いてる最中、スバルとエリオが、宇宙での戦闘に、目を輝かせていたのは、言うまでもない。

ｓｉｄｅ：レジアス

シュン！「…よお！レジー坊。」

「ぬおっ！……何だ、カイトか…。驚かすな…儂でも寿命が縮むぞ…。後、レジー坊はやめろ。」

「こまけぇこたぁ気にすんなよ。……それより、俺はこれから、奴等の所に行って来る。」

「…！……そうか。到頭、其の時迄来たのだな。」

「ああ。…あいつらにも、連絡しておいてくれ。…『ラストダンス』…だとね。」

「了解した。大至急、連絡するとしよう。…オーリス！」

「はい。只今。」

「宜しくな、オーリス。……ドゥーエ、案ずるな。…この俺が行くんだ。

何の問題も無い。いつも通り、スパイ頼むな。」

「はい……。…ですが、余りその様な事は、言わないで下さい。

只でさえ、その事を知られてから、オーリスに良く、睨まれているんですから。」

「あら?私がどうかしたかしら?ドゥーエ?」

「いいえ?別に。」

「「……（バチバチ）。」」

「……お前さんも大変だね?レジー坊。」

「半分以上は、貴様の所為だがな。…それと、レジー坊はやめろと言っただろう。」

「ドンマイ♪」

「……（何時か、本気で殴りたい。）ハァ…。」

「…んじゃまぁ、行って来る。…お前等も程々になぁ。」シュン！

「相変わらず…勝手な奴だ。」

「…レジアス中将、繋がりました。」

「…解った。……そうだ、儂だ。『虚無』からの伝言だ。…『ラストダンス』…だそうだ。

お前等も覚悟を決めろよ……ゼスト。」

「ああ。解っているさ…レジアス。…彼等にも、ちゃんと伝える。」

ｓｉｄｅ：ノルニル

ドゴオオオオッッッ！！！！！！！！！！！

「な、な、な、何の騒ぎだあああ！！！！！」

「グラルヴォ様！敵襲で御座います！！！」

「なああにいいい！！！！敵襲だとおおお！！！！！！貴様等は何をしておったあああ！！！！！」

「は！申し訳ありません！！！ですが、相手は、

あの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』なのです！！！！！」

「何だと！！！！！奴が、直接この船に乗り込んで来たというのかあああ！！！！！！！！」

「は、はい！！！如何致しますか？！グラルヴォ様！！！」

「おおおのおおおれえええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

あの様な下賤なド屑に、このグラルヴォたる我が、

いいように舐められて堪るかああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「あ！グラルヴォ様！！！どちらへ！！？」

「決まっておろうがああああ！！！！！！！！奴の処だああああ！！！！！！！！」

「あ！グラルヴォ様！！お待ち下さい！！！グラルヴォ様！！！！！」

……第十席の声にも耳を貸さず、ズンズンと我が道を行き、素で道に迷い、

カイトに会えず仕舞いの、第二席であった。

「……来たか。」

「？誰が来たと言うのだね？」

「…奴に決まっているだろう？…白々しい嘘を付くな。…そら、お出ましだ。」

「…呼ばれて飛び出て何とやら…ってな。よう。助けに来たぜ？ジェイル。……それから……

久しいな。　シュガル＝ブラウセス　…もう、禦禍（おしめ）は取れたかい？シュガル坊や。」

「…何時までも、俺を坊や扱いするのは、止せ。…俺はもう、お前が知っている頃の俺では無い。

今の俺は…『空間』と『時間』を操れるまでになった。…早々お前にも負けん。」

「へ～…良く成長したね？只の『風』使いだったお前が。……でも、解っているんだろう？

そんな程度では、俺に勝てない事ぐらい。」

「……ああ。悔しい事にな。……御陰で、セラスの仇も取ってやれん。」

「セラス？……ああ。あん時の嬢ちゃんか。確か、お前の秘蔵っ子だったよな？

なら、止めとけよな？…お前なら解ってたんだろ？あの娘がどうするかぐらい。」

「……ああ。……それはもういい。……それより、早くこいつらを連れて行け。」

そうシュガルが言うと、何処からともなく、ナンバーズが全員出て来た。

「お！準備がいいな。流石はシュガル♪！助かるぜ。んじゃ、有り難く貰って行くな♪

ほら、お前等シャンとしろよ。取り敢えず、こっから逃げるぞ。」

ナンバーズが立ち上がり、ジェイル共々、準備が終わったのを確認し、カイトは機動六課に飛んだ。

「……。」

その後、シュガルが何処かに、連絡を付けていた。

……しかし、それを知る者は終ぞ、誰も居なかった。

第二席すらも、知らなかったのである。

計画は、順調に進んでいた。

……そう。

誰も知らない

計画（はかりごと）が

着々と

進んでいた……。

舞台裏（前書き）

皆様、いつもお読み下さり、有難う御座います。

どうやら、昨日今日では復旧は無理の様です。

今回は、又、少し長いです。飲み物の御用意をお忘れ無く。

では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

舞台裏

ｓｉｄｅ：三人称

「…良し。到着っと。」

「…此処は何処だい？カイト。」

「機動六課訓練所。」

“はぁ？！敵地だとお！！？”

「いや、敵地じゃないし。これから、お前達が住む家だから。」

「巫山戯るな！！！何故、我々が管理局の世話にならねばならん！！！」

「いや、管理局じゃなくて、お前達の姉の父親。」

「何？私達の姉…だと？」

「では！！あのタイプ・ゼロファーストとゼロセカンドが、此処に居るのかね！？」

「ああ。…ジェイル……解剖も解析も無しだぞ？…解ってるよな…？」

「う……わ、解っている……よ？」

「うん、よし。お前、後でおしおきな？（ニッコリ）」

「ひぃぃ…ｏｒｚ」

「…全く……。ん？どした？お前等。」

「……そもそも、お前は誰だ？何故、ドクターと親し気に話している？」

「……は？…おい…ジェイル……。お前、何も話して無いの？」

「う、うむ。…その方が面白いだろう？」

「……ＳＨＩ☆ＮＥ☆」　ドゴオッ！　「へぶっ！」

“ド、ドクター！！？”

「全く…この阿呆は……。」

「貴様！！ドクターに何をする！！！」

「へ？何って…見ての通り、踵落とし。」

「よくも、ドクターを…許さん！！！」

「…は？誰が誰を許さないって？」

「私達が、貴様をだ！！！！！」

「……へぇ……図に乗るなよ？小娘共が。」　ドグォォォッッ！！！！！

その轟音と共に、ナンバーズは全員吹き飛ばされ、壁に強か叩き付けられた。

“グッッハァァ……。”

「余り、調子に乗るなよ？ドン亀のクソガキ共。

貴様等が生きていられるのは、俺による温情の御陰だという事を、忘れるな。」

「…か、カイト…。頼むから、其処までにしては貰えないかね？

…彼女達も、君の強さは、身に染みただろうからね。」

「……そもそも……貴様が言わなかった事が、原因だああ！！！！」　ゴンンンッッッ！！！

「……（ピヨピヨ）」

「…全く！…阿呆共が。」

「あ、あのう……カイト兄？」

「ん？ああ。みんな来てたのか。」

「そりゃ、来るっちゅうねん！あんな大きな音させてからに！！！」

「……ドンマイ♪」

“…うざっ”

「はやて、みんなが虐める。」

「よしよし♪でも、今のは私でも、ちょっとイラッ☆と来たで？」

「はやても虐める。」

「よしよし♪♪」

“……バカップルめ……”

……機動六課は今日も平和である。

で。ナンバーズが、全員気絶していた為、翌日。

「…良し。みんな集まってんな。」

そう。今此処には、機動六課全員&出向組と、ジェイル&ナンバーズが居る。

お互いに睨み合っているが。

「……お前等、そんなに喧嘩したいなら…俺が全員相手してやるが……どうする？」

“す、済みません！！！サー！！！！！！”

「判れば宜しい。…これから、お前達、寝食を共にするんだから、今から仲良くしときんさい。」

“……な、何ぃぃぃいいいい！！！！！！！！！！！！
！！！”

「き、聞いてへんで！？カイト兄！！？」

「ああ。今、初めて言ったからな。」

「………どういう事か…説明して貰えるんだろうな？…カイト。」

「モチのロン。だから、みんなに集まって貰ったんだから。………でも、まだ客(ゲスト)が足りないんだ。」

「ゲスト？…誰だ？」

「ほな…取り敢えず、一人ずつ呼びまひょか。………どうぞ。」

「…………え？………う、嘘………そんな………だって………確かに…………。」

「…いや、何とか、死ぬ前に助けて貰ったんだよ………ティアナ…。」

「ひっく………ぐすっ………兄さん！！！！」

…そう。紹介した一人目。………ティーダ＝ランスター………ティ

アナの兄である。

「……今まで、会えなくて悪かったな…ティアナ。」

「ううん……兄さんが生きていてくれただけで……それだけで、私はいいの……。」

「……ティアナ……。」

「……グスッ…でも、カイト兄?どうやって、葬式誤魔化したん?」

「…ティアナの得意技は何でしょう?」

「…?あ!!幻術!!!で、でも、局員を騙せる程の幻術なんて……。」

「まぁ、俺だし。」

「…それに、納得してまう私が少し、恐いわ…。」

「…ぐすっ……カイトさん…有難う御座います…。」

「…どういたしまして。……んじゃ、次のゲスト。……どうぞ?」

「…？……！！！な！！！！！！そんな馬鹿な！！！！！」

「…え？…嘘……。」

「…ほ、ホントに……ゆ、夢じゃない……の……？」

「…ええ、夢なんかじゃないわ…。…スバル…ギンガ……そして……あなた…。」

「「お…お母さん！！！！！」」「クイント！！！！！」

…二人目。ゲンヤの妻。スバル・ギンガの母。…クイント＝ナカジマである。

「……グスッ……おかあさぁぁぁん……ヒック……。」

「うっうっう……お母さん……。」

「……ごめんなさいね…二人共……。大きくなったわね。……とても、綺麗になったわ。

流石、私の自慢の娘達ね♪」

「「うう……おかあさあああん！！！！……わあああああんん！！！！！」」

「……クイント。」

「……あなた。…ごめんなさい。」

「…いや、いいんだ。…本当に、生きていてくれただけで……

……本当に…それだけで……俺…は……。」

「……私も……とても……会いたかったわ……ゲンヤ…。」

「ううう～～～……カイト兄…この人も……？」

「…ああ。とある事情でな。俺が助けた。……この三人もな。…どうぞ。」

「全く…俺も忘れられてるのかと思ったぞ。」

「まぁまぁ、ちゃんと呼ばれたんだから、いいじゃない。あ・な・た。」

「……ハァ。」

最後のゲスト。ゼスト＝グランガイツ。

そして、何時の間にか結婚していた、メガーヌとその娘、ルーテシアである。

すると、ルーテシアがツカツカと、エリオとキャロの前に行き、二人に指を指し、言い放った。

「…あなた達には負けないから。」

「「…え？？？」」

本気で解らず、困惑する二人。そんな二人に、近付くメガーヌ。

「…ごめんなさいね？…この子ったら、自分と同い年の子が、頑張って働いてるって聞いて、

対抗心燃やしちゃってるの…。もし、良ければ、お友達になってくれる？」

「「は、はい！僕（私）達で良ければ、喜んで！！」」

「…クスッ…だって。ルーテシア。」

「……。」

そっぽを向きながら、スッと手を差し出すルーテシア。若干赤い。

満面の笑みで、その手を取る二人。

……うむ。何時如何なる時でも、子供の笑顔は至高である。

「…さて。皆、落ち着いたかな？ゲストも揃っ……てねえや。まだ。」

「…ま、まだ、誰か居るんかい……。」

「ああ。後、８人。」

「…まだ、８人もおんのかい。」

「……そんな事言ってもいいのかなぁ？」

「うっ…な、なんや？カイト兄。その如何にも悪そうな顔は……。」

「ふっふっふ……お！連絡来たな。」

「又、何か用か？カイト。」

「よう。レジー坊。」

「…レジー坊はよせといっただろう。」「うむ。却下する。」「……はぁ。」

みんな、固まっていた。…無理もない。あのレジアス中将が、今、目の前に居て、

しかもカイトと親し気に話して居るのだから。

「あ、あの…カイト兄？」

「うん？何？はやて。」

「あの～………その～………レジアス中将とは、どういうお知り合いで？」

「「飲み友達だけど（が）？」」

「………そ、そうですか………。」

「…やあ、ドゥーエ。スパイ活動は、上手くやれてるみたいだね？」

“何ぃ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「ど、ドクター！！！！！！！！！！何を行き成り暴露してるんですか！！！！！！！！！！

カイトじゃあるまいし！！！！！！！！！！」

「なんだ…カイトがもう既に、言っているのではないか。なら、何も問題は無いだろう？」

“大有りだ（です）！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「って、スパイってどういう事や！！！！！！！！！！」

「いや、だから、ジェイルの送り込んだスパイ。戦闘機人Ｎｏ．２ドゥーエ。」

「……カイト兄？もしかして…これも知ってたん？」

「勿論。」

「……因みに、何時から？」

「ん？ジェイルが、クローニングされる前から。」

“……はあああああああああ！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？”

「…？あれ？言って無かったっけ？」

“そんな事、聞いてない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「……お前等、意外に団結力高いのね？」

「……色々、ツッコミ所有り過ぎて…どないせぇっちゅうんじゃ！！！！！」

「…そんな事言われても……お！次のゲストか。」

「お次は誰やねん……って…え！」

「クロノ君！？」「リンディ母さんも？！」

「ヤッホー♪みんな久し振り。元気してた？」

「……母さん…もう少し年甲斐というものを…」「…何か言った？クロノ。」「…いえ、何も。」

「これで、後、三人。」

「……なあ、なのはちゃん、フェイトちゃん。…私とても、嫌な予感がするんやけど」

「…奇遇だね、はやて。私もだよ。」

「…うん。……なんか、三人って聞くと…まさかって思うよね？」

「…言わんといて…なのはちゃん。今、その可能性を必死に、否定しとるんやから。」

「いや、それで合ってるよ?…丁度、来たみたいだな。」

「…来てやったぞ、カイト。」

「相変わらず偉そうだな?ラルゴ。」

「…一応、儂等が一番偉いんじゃがな。」

「まぁまぁ…いいじゃないですか。…カイトが面白いものを、見せてくれるって言うんですから。」

「そうそう。ミゼットの言う通りだぞ?ラルゴ。年寄りの言う事は聞くもんだ。」

「どう見ても、儂等の方が年上じゃろうが!!!!!」

「……そろそろ、諦めた方がいいと思うぞ?ラルゴ。」

「クスクス…レオーネの方が、良く解ってるじゃないか……なぁ?ラルゴ。」

「クッ……ええい!!!解ったわい!!!もう好きにせい!!!!」

「どうも♪」

その場に居た全員、絶句していた。……そりゃ、そうだ。あの三提督と親し気に……

しかも、三提督すらも頭が上がらず、軽くあしらわれているのだから。

だが、この後の、ラルゴの言葉に、一部の者は、顎が外れる事となった。

「…………それで？…………一体、儂等に何を見せると言うのだ？　『特別大元帥』　殿。」

“……………は？…………………………………はあああああああああああ
ああああああああああああ
　ああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！”

「……すっげえでけえ声だな？鼓膜破れんじゃねえか？」

“……（パクパク）……。”

「…ふむ。成る程。確かにこれは面白いな。お前が隠していた気持ちも解るな、『特別大元帥』殿。」

「な？だろ？やっぱ、お前なら、解ってくれると思ってたぜ、ラルゴ。」

「…全く……男の人ってどうして、こう…何時までも、やんちゃなのかしらね？」

「……儂は違うぞ？ミゼット。」

「良く言うぜ。…なんなら、お前がこの前の休暇で、何してたか、此処で暴露しようか？」

「な！？や、やめろ！？頼む！！やめてくれぃ！！！！！」

「はっはっは…ほれ、見た事か、レオーネ。」

「…ぐぬぬ………老い先短い老人を、甚振(いたぶ)って楽しいか？」

「何言ってやがる。ファンキー爺共が。」

「………はぁ………やっぱり、同じね………。」

「さてと。取り敢えず、皆、落ち着いて、戻って来た処で………どうすんだっけ？」

“だから、説明すんだろうが！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「うむ。ナイスツッコミDA！！！」

“…………ハァ…………。”

“はやて（ちゃん）何とかしろ（して）…お前（あなた）のよm…旦那だろ（でしょ）？”

「…えへへ…私の旦那様……えへへ～～……。」

「…はやては可愛いなぁ……。」

“……ダメだこのバカップルはやくなんとかしないと。”

奇妙な連帯感が生まれていた。

「さて。話を戻すぞ。…取り敢えず、龍斗。全データを全員に。」

「畏まりました。カイト様。」

この場に居る全員に、モニター越しに見ている相手にも、データが送信される。

「まずは、全員それを見ろ。…話はそれからだ。」

「……皆、見終わった様だな。…御感想は？」

“……”

「…まぁ、出ないよな？…それが、感想って事なんだがな。…で、どうだい？伝説の三提督様？」

こん中の幾つ知っていた？」

「……正直に言えば、話には聞いていた。……だが……まさか…此処までとは……。」

「…じゃあ、まず一つずつ行こうか？

case1　フェイトを初めとする、人造魔導師の製作・普及・拡大

これは、プレシア…お前が一番詳しいな？

……一応、今、この場にはフェイトとエリオの二人が居る。ちゃんと説明してやれ。」

「……解ったわ。」

……プレシアがＪＳ（ジュエルド）事件に至るまでと、事件そのものについて説明中。

「……以上で、全てです。」

「……済まぬ…。儂等にはこれぐらいしか、出来ん。」

「…いえ、お気になさらず。…こうして、私は家族全員と共に、幸せに暮らせて居ますから。」

「……カイト兄ぃ…あの時、私にあの子達を残していったのは、こういう事やったんやね？」

「ああ。……まだ、はやてを巻き込む訳には、いかなかったからな。守護騎士（ヴォルケンリッター）も居なかったし。

……では、次は、その守護騎士（ヴォルケンリッター）…引いては、『闇の書』と呼ばれる様になった『夜天の書』の話だ。

ｃａｓｅ２　『闇の書』事件。…アイン、頼む。」

「…ああ。」

リィンフォース・アインによる、『闇の書』事件の背景と、あらましが語られた。

「……以上だ。」

「…その後、カイト兄は私達の前から、消えたんや。」

「……そうか。では、そのすぐ後だったのだな？儂等の所に来たのは。」

“え？！”

「ああ。直接、このボケ共のとこへ行って、色々、

管理局の失態と、これから起こる事件と、その被害を全部伝えた。」

「……その後、お前は何をしていたんだ？カイト。」

「……非人道的な施設・研究・組織を片っ端から、潰していった。
手遅れな奴等は、老若男女問わず、俺がこの手で殺した。
その途中に、ティーダ達を助けて、レジー坊に預けた。…何時何処で、どんな目に遭うのか……
俺は、お前達が産まれる前から、知っているからな。」

「……では、私達の事も？」
「…ああ。そうだ、クイント。…俺は、お前が産まれる前から、お前の遺伝子から、ギンガとスバルが、造られる事を知っていた。」
“な！？”
「まぁ…だから、ジェイルも、スバルとギンガの親という事になるな。」
“冗談じゃない！！！！！”
「？何で怒るんだ？」
「当たり前です！！！！！」

「私達のお父さんは、ゲンヤ＝ナカジマだけよ！！！」

「？…別にいいじゃねえか。父親が二人いたって。それに言うだろ？

『生みの親より育ての親』ってな。…何より、ナンバーズは一応、お前等の妹になるんだからな？

スバル…可愛い妹…欲しくない？」

「うっ…！……そ、そりゃ……欲しい…けど……。」

「可愛いぞ？こいつら。」

「ううっ……。…ガクッ。」

「スバル買収完了ｂ」

“待たんかい”

「…まぁ、後は、そっちで勝手に揉めてくれ。ちゃんとレジー坊とも話せよ？

俺に示せるのは、道だけだしな。」

「……なぁ、カイト兄ぃ？何でカイト兄はそんなに、色んな事、

知ってるん？」

「……うむ。幾ら何でも知り過ぎている。まるで、儂等の人生を見て来たかの様じゃ。」

「…クックック……良く解ってるじゃないか？ラルゴ。……その通りだよ。

もう一度、俺の二つ名を知って貰おうか……。

『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』

『宇宙の救世主（そらのメシア）』

『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』

『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』

『無限にして無窮なる旅人』　と、これぐらいでいいか。」

「たくさんあるんですね？」

「ああ。んで、何で俺が色々知ってるかと言うとだな…最初の二つ名が答えだ。」

「最初のって…『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』…ですか？」

「そう。…まぁ、分かり易く言うとだな？俺はこの世界出身じゃない。別の地球で産まれたんだ。」

“えええええ～～～～！！！！！！！！！！！”

「その上、俺は、あらゆる時代・次元・平行世界を、旅している旅人なんだよ。

だから、俺は全てを知っている。数多の事を経験しているからな。」

「……そっか。カイト兄は、今まで何度も、色んなとこの私達と会ってるんやね…。」

「そういう事。…これでも、慣れるまで結構辛かったんだぜ？

何せ、昨日まで笑い合ってた奴に、不審な目で見られ、

『初めまして』から、始めなきゃいけないんだからな。」

「うっ…確かにそれは辛いな……。」

「まぁ、流石に十数億年も、生きてりゃ慣れるけどね。」

“……じゅ、十数億年んんん!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?”

「ああ。龍斗達は数千億年……黄宇に至っては、約八千億年生きてるからな？」

“はあああ～～～～……”

「……では、他の二つ名にも、相当な由来があるのか？」

「まぁ、それなりに…な。ヴィヴィオが言ってる『救世主（メシア）様』ってのは、それから来てる。」

「？そもそも、何でヴィヴィオはそれを知ってるの？」

「ああ。それは、ヴィヴィオは聖王のクローンだからだよ。」

“……！！！！！！！！！！！！！”

「…まぁ、細かい事は、ジェイルに聞け。造った張本人だからな。

……待てよ？……そうなると、ヴィヴィオはスバル達の妹になり、

俺やなのは達は、スバル達の親になり……と、メンドクサイな！！！！おい！！！！！！」

“……ホントに……。”

「……良し。これは、皆を造ったジェイルに、責任を取って貰おう。……後は、頼んだ。」

「ちょっ！君は何を勝手な事を、言っているんだい？！……き、君達？一体何を？

な、何故デバイスを、構えているのかね？…え？ちょっ…ちょっ……！！！

た、た、助け……。」

……見せられないよ！……子供達には、親達が、目隠しと耳栓代わりをしていた。ＧＪ

「良し。ジェイルへのオシオキも終わった所で、今日はお開きと行

こう。

各自、良く休み、広く深く交流を深める様に。以上！！！では、解散！！！！！」

何か、消化不良のまま、強引に終わらされていた。

しかし、皆、今日は不思議と、不安を抱きながらも、幸せに包まれ、眠った。

日常其之壱（前書き）

現時刻（２２：３０）※但し二時間前
ＰＶ：３０８，９９３アクセス　ユニーク：３２，７２３人
皆様、毎度有難う御座います。

上記の通り、どうやら、二時間遅れ…でなら、動かせる様です。

そして、３００，０００アクセス突破致しました！！！！！

皆様、本当に感謝致して居ります。

では、今話も拙作をお楽しみ下さい。

日常其之壱

『日常1．救世主（カイト）に助けられし者達』

ｓｉｄｅ：三人称

「所で、兄さん。今まで、何をしていたの？」

「そうそう！お母さん達もだよ！すっごく気になる！！」

只今、ロビーにて休憩中。ティアナは、ティーダと向かい合って座り、ニッコニコ。

スバルとギンガは、クイントにべったり甘えている。ゲンヤもそれを見て、ニッコニコ。

うむ。幸せ家族、良き哉良き哉。

「…え～と……言ってもいいのかな？カイトさん。」

「ああ。構わないよ。」

「有難う。…まず、俺は、彼に助けて貰った後、レジアス中将の許に連れて行かれ、

中将の下で、諜報や事務など、裏方の仕事をしていたんだ。」

「私達も同じよ。…とある任務で、私とゼスト・メガーヌが一緒に、調査に赴いたのだけれど、

その時、何者かに襲われて、瀕死の重傷を負い、三人揃って助けられたの。」

「ええ。何故、私達が狙われたのか…。そして、あの施設に何が有ったのか……

結局判らなかったのだけど。」

「ああ、そりゃ、管理局の仕組んだ事だよ。」

“な、なんだってー！！！”

「……まず。管理局は、戦闘機人である、クイントを毛嫌いしている。

只の駒なら、有用だったが、ギンガとスバルを、養子にした事により、

尚更、管理局に目を付けられ、管理局の施設に調査に向かわせ、待ち伏せしていたんだ。

お前達を襲った奴等は、その違法実験の失敗作。

まぁ全部、俺が消滅(けし)させといてやったけど。

んで、ルールーが次に狙われるのは、目に見えていたんで、序でに助けといた。」

「……そうか。…そういう事だったのか……。俺はてっきり……。」

「…レジー坊の仕業だとでも、思ったか？」

「……ああ。」

「まぁ、強ち間違っちゃいないがな。」

「！？…どういう意味だ？」

「レジー坊は、その任務が、管理局の罠だって、知ってたって事さ。」

「な?!本当か!?」

「モチ。だから、俺に頼んで来たんだよ。

『俺にはどうする事も出来ん。……頼む……カイト…助けてやってくれ……。』ってね。」

「……そうか。」

「ああ。今度一発ぶん殴っといてやれ。それで充分だろ?お前達は…さ。」

「……ああ。改めて礼を言わせて貰う。……有難う。救世主(カイト)。」

「……どういたしまして。」

『日常2.スカリエッティが助けられるまで』

side:三人称

「いやぁ…それにしても、助かったよ、カイト。」

「…何だ?突然?到頭イカレたか?キ○ガイ。」

先程の歓談中に、馬鹿(マッド)が乱入して来た。

「……君はいつも、辛辣だね？

……そうじゃない。あの監禁生活から、救い出してくれた事だよ。」

「…ああ、その事か。別に気にするなよ。ノルニル（あいつら）に、戦力を与えたく無かっただけだ。」

「…君は、何て言うか…その……あ、あれだ！『ツンデレ』と言う奴だね？」

「……（プチッ）＃」　ドゴオッ！！！　「……。」

↑馬鹿気絶中。

「……全く、ドアホウが…。」

「……；；；…でも、何で黙って、監禁されてたんですか？」

「ああ、そりゃ、お互いに人質になってたからだろ？」

「？？どういう意味ですか？」

「ん？だからな？ナンバーズには、この馬鹿を殺すと脅し、

この馬鹿には、ナンバーズを解体（バラす）すると脅したんだろ？

だから、お互いに人質。……阿呆だな。」

『日常3．ナンバーズとの再戦（手加減）』

ｓｉｄｅ：三人称

「貴様！！！数々の我々への侮辱！！！もう我慢出来ん！！！！！」

今度は、ナンバーズが乱入して来た。

「……今度はお前等か…。…何だ？まだ、甚振られ足りないのか？……マゾ？」

“違う！！！！！！！！！！”「貴様に、我々との再戦を要求する。」

「いいよ。」

「そう言うとおもっｔ……いいのか？」

「ああ。特に断る理由無いし。…まぁ、流石に手加減はするけどな。」

「くっ…！何処までも舐めやがって！！！」

「待て！ノーヴェ！！……訓練所の使用許可は得ている。…今直ぐ来い。」

「準備のお宜しいこって。んじゃ、行きますか。…みんなも来るか

？証人は多い方がいいしな。」

ｓｉｄｅ：訓練室

「……何故に、ほぼ一同勢揃い？」

“まぁ、細かい事は気にせず。”

「……ハァ……どうせ、ナンバーズの実力と能力確認。それと俺の強さ再確認。

最後に、はやて主催のトトカルチョ…ってとこだろ？」

“ゲ！！！全部バレてる？！”

「……はやて？賭け事はダメなんだぞ？」

「ま、まぁまぁ…ちょっと軽いもんやし…な？ちょっとぐらいええやん…ヴィータ。」

「…主はやて？私も居る事をお忘れ無く。」

「う……か、カイト兄！助けてぇな！！！」

「……ハァ…。シグナム、ヴィータ。それぐらい見逃してやれ。

どうせ、はやては勝つんだし。それが、八神家の家計に入るんだろうし……なぁ？はやて？」

「…う、うん。も、モチロンやで…？」

「「……（ジトー）……ハァ……。」」

「……そろそろいいか？」

数字戦隊ナンバーズが、現れた！

「ん？…ああ、済まない。目的を忘れるとこだった。まずは……っと。

ファースト・イグニッション　アクア　アムド」

「…！！！…フン。手加減と言っておきながら、本気を出す訳か。」

「…いや、それは違うぞ。トーレ。」

「…？どういう意味だ？シグナム。」

……因みに、こいつらバトルジャンキーは、早速闘い、既に強敵（とも）になっている。

「……その鎧は、カイトにとって、只の拘束具だ。……それも対人戦闘特化型の。」

「…ああ。本気で掛かれよ？お前等。そんで、マジで一回、自信を完全に壊されろ。」

「……うむ。我等も、制限の掛かっていない時に、本気で戦ったが、只の一撃も入れられず、

又、全魔力を込めた攻撃も、悉く受け止められ、挙げ句の果てに一撃で沈められた。」

「……しかも、その鎧は私達が戦ったのと同じ鎧で、一番攻撃力が低いそうよ。

……大丈夫。こんな事もあろうかと、保健室は改築済みよ♪」

“何時の間に！？！？！？”

「……まぁ、俺の台詞は、全て取られたが、そういう訳だ。

さぁ……どっからでも掛かって来い。薄鈍中古品共（うすのろナンバーズ）。」

“くっ…！貴様ぁぁぁあああ！！！！！！！！！！”

「ほらほら、どうした。まるで陸亀だな？トーレ。」　「クソオッ！！！」

「バレバレだぞ、セイン。せめて気配ぐらい消せ。」　「ど、どうやってぇ！？」

「近距離戦闘ぐらい想定しておけ、チンク。懐ががら空きだ。」　「グフゥッ！」

「まだまだ、精度が甘いぞ、オットー。ちゃんと修行しとけ。」　「……っ！」

「攻撃が単調だぞ？ノーヴェ。手数か精度を上げろ。」　「チクショーッ！！！」

「収束が遅すぎるぞ、ディエチ。…そらっ！」　「…！うわぁっ！」

「まるで能力を生かせてないぞ、セッテ。隙をみつけろ。」　「クッ！」

「ウェンディ、それでは宝の持ち腐れだ。使えないなら、捨てろ。」　「…無理っスよ～！！」

「ほら、ディード。足下がお留守だぞ？」　「…強過ぎる…！」

「クアットロ…何で隠れて逃げてんだ。……オシオキだな……。」
「ひ、ヒィッ！！！」

「セカンド・イグニッション　アロー・オブ・マナ　エレメント・アロー　エアー」

そう言うと、カイトの手に、風が渦巻き、何か透明な、弓矢の様な物が現れた。

それを空に向け、番えていた一本だけ放ち、頂点に達して落ちる寸前に……唱えた。

「……そうら、隠れてみせろ。……　ビリオン・ダラー」

その言葉の直後、一本しか無かった筈の矢が、突然数多の矢に増え、

空を覆い尽くし、轟音を響かせた。

「はっはっは………ビリオンの名が示す通り、１０億本の空気の矢だ！！！

上手く躱してみせろよ！！！！！！！！」

“む、無理ぃぃぃ～～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

………その容赦の無い、攻撃にナンバーズは全員、当然の如く保健室送り。

そして、暫く自信を喪失し、カイトははやてに又、正座で説教されていた。

………因みに、ナンバーズに守護騎士達が同情し、却って仲良くなっていた。…余談である。

『日常４．機動六課主要メンバーとの初模擬戦』

side：三人称

……そう。実は、なのは達との模擬戦は、初めてなのである。

「んじゃ、序でになのは達、機動六課主要メンバーにも、稽古付けてやるよ。さっさと準備しな？」

“ゑ？”

「ゑ？…じゃねえよ。早く用意しろって。お前等、弱過ぎんだから、少しは真面にしてやる。

あ、その前に……おーい！アギトー！！」

「…何だよー！カイトー！！」

「ちょっとこっち来ーい！」

そう言うと、ゼストの側に居た、ツヴァイと同じ、赤いユニゾンデバイスが飛んで来た。

「何の用だよ、カイト。」

「ああ。…待たせたな、アギト。お前の真のロードを紹介してやる。」

「え！！お前が言っていた奴か！！！どいつだ！！？」

「そう焦るなよ。…シグナム！！！こっち来てくれ！！！」

「……どうした？カイト。」

「アギト、こいつがお前のロード…烈火の将シグナムだ。

シグナム。こいつは、お前専用のユニゾンデバイス…烈火の剣精アギトだ。」

「……こいつが？」

「…どういう事だ？」

「まぁまぁ、まずはユニゾンしてみなって。」

「「……これは……。」」↑ユニゾン中

「な？言ったろ？アギトのロードで、シグナム専用だ…と。

んじゃあ、そのままで戦闘開始するぞ。…ほれ、お前等も準備しな？」

ようやっと戦闘態勢に移行する、面々。

「あ、それと。俺の権限で、ノーカウントで、制限解除な。後、ファイアリングロックも、俺との戦闘中は解除しとくから。」

“そ、そんな!!!”

「……は？何を心配してる訳？……まさか……

貴様等如きに、この俺がダメージを負う……とでも？

……お前等……本当に一回死んでみるか…？」

“い、いえ!!!滅相も有りません!!!!!!サー!!!!!!!!!!!!”

「…なら、何も問題無いな。取り敢えず…っと。

セカンド・イグニッション　　プラズマ　　アムド」

そして、カイトは全身稲光が走り、光り輝く眩しい鎧に着替えた。

「……こいつは、雷（ライトニング）の上位版だ。

……フェイトとエリオには、少し辛いかな？

因みに、スピードは、セカンド中、Ｎｏ．１だ。

……さぁ……殺ろうか？」

その言葉を合図に、一斉に雷神（カイト）に襲い掛かった。

「エリオ、行動が遅いぞ！一々確認するな！！その間に三人は死ぬぞ！！！！！」
「は、ハイッ！！！」

「キャロ！皆への補助が足りない！もっと気合いを入れろ！！龍達の補助も忘れるな！！！」
「わ、解りましたぁ！」

「フェイト！！！何を躊躇っている！！！いい加減、覚悟を持て！！！！！
だから、お前は遅くて弱いんだ！！！！！」「くぅっ！」

「なのは！！！何で後方支援のお前が、前に出るんだ！！！同じ轍を踏む気か！！！！！！
馬鹿たれ！！！！！！」「ご、ゴメンナサイ！！！」

「はやて！！！収束が遅すぎる！！！もっと早く、練度を上げろ！！！！！！
臨機応変に対応しろ！！！！！！仲間が死んでもいいのか！！！！！」「は、はいいっ！！！」

「シグナム！！！隙がでか過ぎる！！！戦場を舐めてんのかああ！！！！！
お前の騎士道程度で、人を救えるか！！！！！！」「くそおっっ！！！」

「ヴィータ！！！何時までちんたらやっている！！！攻撃までタイムラグが有り過ぎだ！！！！！！」
「グッ！解ってるよ！！！」「口答えしている暇に攻撃しろ！！！馬鹿者！！！！」「ぐあっ！！！」

「スバル！！！直線的過ぎる！！！！もっと左右に動け！！！！！！」「ど、どうやって…！」
「考えろ！！！考えて攻撃しろ！！！！出来なきゃ死ぬだけだ！！！！！！」「ガハアァッッ！！！！」

「ティアナ！！！幻術がまだまだ甘い！！！もう振れているぞ！！！もっと集中しろ！！！！！！
攻撃も忘れるな！！！」「は、はい！！」

「ギンガ！！即席でもコンビネーションぐらいしてみせろ！！！それじゃあ無駄死にだぞ！！！」
「そ、そんな無茶な！」「無茶の一つも出来ないならやめちまえ！！！！！」「ぐふっ！！」

「ザフィーラ！！！それでも盾の守護獣か！！！そんな紙っぺら防御でどうする！！！！！
そんなもので、敵の攻撃が防げるかあああ！！！！！！！」「うがっ！」

「アイン！ツヴァイ！アギト！それでも、ユニゾンデバイスか！！！まだまだ補助が甘い！！！
甘過ぎるぞ！！！全力も出せないのなら、貴様等の主（ロード）が死ぬだけだ！！！！！」
「「「ま、まだまだあああ！！！！！」」」「その意気だ！！！！！」

「どうしたあああ！！！貴様等！！！！！もうへばったのか！！！！

動きが鈍った瞬間に、味方から死んでいくんだぞ！！！！！解っているのか！！！！！」

“は、はい！！！！！！！！！！！”

「良し！！！！なら、これで終いだ！！！！全員、耐えて見せろ！！！！！

永遠（とわ）なる眠りに誘（いざな）われろ！！！！

奥義！！！！

氷華乱舞（ひょうからんぶ）！！！！！！（超手加減）」

……そして、全員氷付けになり、氷が砕け散ると、皆倒れ伏した。

「ちゃんと、手加減はしてやった。…シャマル！！！早く手当してやれ！！！！！

この儘だと、疲れとダメージと、何より凍傷で死ぬぞ！！！！！」

大急ぎで、全員保健室に運ぶ六課隊員。

……但し、はやてだけは、カイトがお姫様抱っこで運んでたが。

……というか、どんだけ改築したんだ？保健室？

……と思ったら、軽傷の人は、ロビーに寝かせてた。……ですよねー。

その日から、カイトの名は、泣く子も黙って更に泣く。とまで言わしめた。

日常其之壱（後書き）

如何でしたでしょうか？

次も、日常編の続きです。

その次辺りにでも、３００，０００アクセス突破記念に、

ノルニル新旧幹部の、プロフィール公開…と、行きたいと思います。

恐らく、『番外・参』の様に、

単なる、キャラ別能力解体新書になってしまうかと、思いますが…

……。

では、今話も読んで下さり、有難う御座いました。

日常其之弐（前書き）

現時刻（１３：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３２２，５１３アクセス　ユニーク：３３，６１８人
皆様、いつも有難う御座います。

どうやら、まだ、二時間遅れは直せない様です。

今回も題名通り、日常編の続きです。

更に、今回はＥＸＡＭ様から、題目を一つ頂きました。最初のがそれです。

改めて。ＥＸＡＭ様、有難う御座います。

では、ＥＸＡＭ様。

そして、皆様。

今話も拙筆を御堪能下さい。

日常其之弐

『日常5．聖王ヴィヴィオ』

ｓｉｄｅ：三人称

先程の戦闘から、数日後。ほぼ毎日、カイトにボドボドにされる、六課＆ナンバーズ。

そして、一汗掻いたカイトの前に、ヴィヴィオが仁王立ちしていた。

……とても可愛らしかったが、本人はとても怒っていた。

「……どうした？ヴィヴィオ。」

「むーー！！！カイトパパ！！！いつもママ達、虐めちゃメ！！！！」

「…いや、全く以て虐めて無いんだが……；」

「むーーー！！！！むーーーーー！！！！！ダメったらダメなの！！！！！！！！！！」

「…益々、なのはの娘らしくなってきたな。……主に口調とか。」

「／／／／／／ヴィ、ヴィヴィオ？私達、別に虐められていないからね？」

「ううぅぅぅ〜〜〜〜〜………

わたしが、ママ達みたいに、大きかったら、助けてあげられるのに………。」

その微笑ましい言葉に、ほんわかする一同。………一人を除いて。

「うん？ヴィヴィオは大きくなれるよ？何時でも。」

“………へ？………………ええええええ〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！！！！！！”

「わたし、ママ達みたいに大きくなれるの！？カイトパパ！！！」

「ああ。何時でもなれる。………でも、その為にはちょっと所じゃないぐらい、

辛い思いをする必要が有るけど………それでも…大きく成りたい

？」

「……うん！！！ママ達を助けてあげたい！！！わたし頑張る！！！！！」

「ちょっ！ちょっと待って下さい！！！」

「そうですよ！ヴィヴィオも何言ってるの！！あのカイトさんが辛いって言ってるんだよ！！！

きっと物凄く危ないよ！！？」

「せやで！？まだ、ちっちゃいヴィヴィオにそんな危ない事はさせられんで！！！

そもそも、大きく成るってどういう意味や！！カイト兄？！」

「その儘の意味だけど？……ヴィヴィオは聖王のクローンだ。

つまり、聖王の記憶と能力を持っている。それを呼び起こせば、所謂『聖王モード』になれる。

元々、ジェイル達はそれを目論んで、狙ってたんだからな。」ポンポンッ　ナデナデ

「？？？それになれば、ママ達を助けてあげられるの？カイトパパ。」　コテン

「……ああ。だが、これは本当に辛いぞ？どんなに泣き叫んでも、誰も助けてあげられない。

それに、もし、途中で止めたら……恐らく、ヴィヴィオは死に掛ける。」

“な！？！？！？ぜ、絶対にダメえええ！！！！！！！！！！！！！”

「……わたし……やる。…恐いけど……でも、やる！！！！！

カイトパパ、おねがい！！！！！」

“ヴィ、ヴィヴィオ？！？！？！”

「……解った。ヴィヴィオの、その勇気に俺も応えよう。…龍斗。」「…はい、カイト様。」

「…こっちおいで？ヴィヴィオ。」

「う、うん…。」

“ヴィ、ヴィヴィオ！！！！！”

「…じゃ、龍斗。やってくれ。」「はい。……終わりました。」

“……へ？”

「…もう終わったの？カイトパパ？」

「ああ。もう終わってるよ。」

「でも、何処も痛くなかったし…それにわたし、まだ子供だよ？」

「クスッ…じゃあ、大人になった自分を、想像して御覧？ママ達を参考にでもして…さ。」

「う、うん。……ママ達みたいな美人さん……え？！わああっ！！」

「「「／／／／／／／／／！ヴィ、ヴィヴィオ！！！」」」

律儀に照れる、三人娘を後目に、突然光り出すヴィヴィオ。そして、光が収まった後には……

「……わああ♪おっきくなっちゃった♪！！！」　ピョン！ピョン！

「ほ、ホントにヴィヴィオ？」

「うん♪なのはママ！！」

「…す、凄い…本当に大人になっちゃった…。」

「えへへ～…凄いでしょ！フェイトママ！！」

「ほんまになぁ……流石は私等の娘やね♪」

「うん♪えへへ～～♪♪もっと誉めて誉めて♪♪♪」

“……”

ビックリ仰天している他の人。

「よしよし♪偉い偉い♪♪…でも、カイト兄？何処が辛いん？」

「ん？ああ。あれ、嘘。」

“……ハァァァァ！？！？！？嘘おおお！？！？！？”

「うん。嘘。あの脅しは、ヴィヴィオの覚悟を聞いたまで。御覧の通り苦痛は一切無い。

何時でも、ヴィヴィオの意志で戻れる。後、魔力が無くなったり疲れても戻る。…ほら。」

シュゥゥゥン……「…あ、あれ？……もう、ちっちゃくなっちゃった……。」

「…ヴィヴィオはまだ、魔力のコントロールが出来てないからな。すぐ戻っちゃうんだ。

…大丈夫だよ、ヴィヴィオ。ヴィヴィオも頑張って訓練すれば、より長く大人になれるから。」

「ホントに！！！カイトパパ！！！！！」

「ああ。」「わーーーい♪！！！がんばるぞーーー！！！おー！」

「…でも、カイト兄？ヴィヴィオ、訓練にどんだけ耐えられるん？」

「ん？ヴィヴィオは強いよ？…多分、なのはの全力全壊スターライトブレイカーぐらいじゃないと、一撃では、倒せないんじゃないかな？」

“え……ええええええ～～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「な？益々、なのはの娘らしいだろ？」

“うん。”

「………末恐ろしい娘なんやね？」

「うう～～…娘には負けられないよ………。」

「えへへ～～………おっとな♪おっとな♪♪」

……密かに、愛娘に対抗心を燃やす、魔王（なのはママ）であった。

そして、後日、急に大人になったヴィヴィオにビックリし、カイトに猛抗議する、

保母さんのアイナとリニスであった。

『日常６．五行達の日常』

ｓｉｄｅ：三人称

……さて、諸君。今日は、カイトの従者達、『五行』について、

ストーｋ……いやさ、スニーキｎ……でも無くて、調査しようと思う。

では、まず、黄龍・黄宇殿から。

「黄宇殿。今から、又、一手御指南頂けるか？」

「無論だ、烈火の将。何時如何なる時でも、私は構わぬ。」

……その後、訓練所が借りられる時間一杯まで、闘っていた。…

……調査班、乙。

次。玄武・水薙ちゃん。

「…でね？マスターったら、その時……」

「うっそー！！！……なんか、見る目、変わっちゃうかも……。

」

「まだまだ、それだけじゃ無いのよ？実はね……」

「ええ～～～…それは流石に嘘でしょ？」

「私も最初は、目を疑ったわ。でもね？マスターに聞いたら……

間違いないって！！！」

“キャー！信じらんない！！？”

……どうやら、女性同士で、キャッキャウフフな話をしている様

だ。……カイト南無。

……後日、何故女性陣から、奇異な目で見られるのか、全く判らないカイトが居た。

……調査員、ちゃんと女性だよな？……え？違うの？……誰か始末よろ。ーアイサーー

ー始末完了しました。サーー…御苦労。

次。朱雀・紅蓮。

「何だ！お前等！！もうへばったのか？だらしねぇな？！」

「…くっ！…お前が化け物過ぎるのだ！！」

「……ほう？それだけの口が利けるなら、まだ出来るよな？」

「うっ…！……しまった……ｏｒｚ」

「さぁ……続きと行こうか？」

「くそっ！…こうなったら、覚悟を決めてやる！！！来い！！！！」

「……良い心懸けだ！！！！！！！！！」

……お判り頂けるだろうか？……Ｈな事じゃ無いよ？…只今、戦闘（いじめ）中である。

そう。紅蓮とナンバーズが、闘っているのである。……一方的にだが。

その日、六課内で悲鳴が響き渡っていた。……ナンバーズ、南無。

次。白虎・鋼牙たん。

「あ！エリオ！キャロ！ルー！ヴィヴィオ！あーそーぼー！！！」

「あ、鋼牙！…ごめんね…。僕達、まだ仕事終わってないんだ……。」

「ええ～～……カイト兄ちゃん～……。」　うるうる

「はいはい。…ほら、エリオ、キャロ、ルールー。今日の仕事は終わり。遊んでおいで？」

「やったーーー！！！！！」

「「ええーーー！！！で、でも、仕事はどうするんですか？！」」

「ああ。龍斗に頼むよ。…だから、遊んでおいで？てか、今日は仕事禁止。俺の権限で。」

「ありがとう！！！！！カイト兄ちゃん！！！！！早くあそぼ♪♪♪！！！！！」

「「「「うん♪♪♪！！！！！！！！！」」」」

……一見、横暴に見えるカイトの権限発動だが、その實、子供達が元気に遊ぶ姿を、良く見れて、

心が癒される…と、却って大好評なのであった。

……ハァハァ、鋼牙たん可愛いお…グシャッ！↑危険過ぎる為、皆に制裁を受けた調査員。

……てか、誰だよ！？こいつを調査員に選んだ奴？！

最後。苦労人こと、青龍・龍斗様。

……もう、嫌な予感しかしないな。……一応、報告を聞こう。

「龍斗。」

「如何致しました？カイト様。」

「ああ。悪いけど、エリオ達の分の書類、片付けてくんねぇか？」

「……ハァ…又、ですか？」

「ああ。」

「……解りました。……終わりましたよ。」

「相変わらず、早いな。…いつも助かるよ、龍斗。」　ナデナデ

「な／／／／／／／／／／／！！！か、か、カイト様／／／／！！

そ、それは、お止め下さいと、何度も申し上げているでしょう／／／／／／／！？」

「ん？でもさぁ、…嫌がってもいないのに、止めろって言われても…ねぇ？」　ナデナデ

「で、ですから…カイト様／／／／／／／／／／」

「クスクス……本当に、お前は可愛いねぇ…ほれ、ギュってしちゃる♪」　ギュッ

（ブバッ！！！）↑誰かが鼻血を噴いた跡。

「か、か、か、か、カイト様／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！！！！」

「……プッ……クスクス……。」

「…／／／／／／余り、御戯れに為りません様、申し上げた筈ですが？／／／／」

「くっくっく………まずは、その真っ赤な顔を何とかしないと、全く迫力無いぞ？寧ろ可愛い♪」

「…／／／／／／／／カイト様／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「あははははははははは………………。」

「全く………／／／／／／／」

………以上です。………………“ぐはぁっ！！！”………………↑女性陣全滅。

………な、何だ？その今時、カップルでも、やらない様なバカップル振りは？

※因みに、その時の絡み(シーン)を一部始終見た、他の女性局員がビデオに収め、

そのビデオが裏で、高額で取引され、殆どの女性局員と、一部の男性局員に買われ、

……そういう目で見られている事に、終始気付かなかった二人であった。

………何にしても、これで調査は終わりだ。皆、御苦労だった。―サーイエッサー―

「……そうか。それで私達の何が判ったのだ？」

…………………………ゑ゛？

「…俺様達を付けるとは、いい度胸してやがんな？」

「……そうね。これは、流石に見逃せないわね………。」

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん達の変態。」

……グハァッ！！！↑鋼牙の『変態』発言に、本気で身悶えしている変態達。

「……カイト様の御手を、煩わせる事無く、迅速に処理しましょう。」

「「「「さぁ………懺悔の時間だ…。」だぜ！」よ！」だよ♪」です。」

……………………ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！！！

今日も、六課に悲鳴が響き渡る。

「…今日も、良い悲鳴が上がってんなぁ……。」

……最早、名物であった。……知らぬは、本人ばかり也。

『日常7．カイトとはやて（バカップル）』

ｓｉｄｅ：三人称

※……題名通り。読んで字の如しで有る。この先は、多糖警報が発令中です。

各自、海水を汲んでから、お読み下さい。

「は～やて♪」

「あ♪カイト兄♪♪どうしたん？」

「うん。はやて、今からしよ？」

“ブフーーッッ！！！！！！！！！”↑聞いてた管理局員。

「へ？／／／か、カイト兄…／／／／／／／／／で、でも、まだ仕事残ってるしぃ／／／／／／／／／」

満更でも無いはやて。………と言うか、仕事が無かったらOKなんかい。

「ああ、それなら大丈夫。今日は龍斗に、全書類仕事を頼んどいたから。もう仕事は終わりだよ？

ねぇ？は～や～て♪？」

「せ、せやけどぉ…／／／／／／／／／／／ま、まだ明るいしぃ／／／／／／／／／／／／／／／／／／恥ずかしいしぃ／／／／／／／／

そ、それにみんなの手前…やし／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「大丈夫だって♪細かい事は気にしない♪♪♪トップはもっと、どっしり構えていないと♪」

「え～～～／／／／／／／でもぉ～／／／／／／／／／／／／」

………………うざっ…………………全局員の気持ちが、一つになった瞬間であった。

「まぁまぁ♪んじゃ、はやてゲットだぜ♪！！！ザッフィー、グリフィス、龍斗！！！

後、宜しくね～♪♪♪」　シュンッ！↑我慢出来ず、早速、自分の部屋に転移。

……その後、皆から同情の視線が寄せられ、肩を叩かれ、慰められる龍斗達であった。

……翌日。はやては、完全に腰砕けになり、業務が一切出来なかった。

故に、翌日も一日休んだのだが、同じ事を一日中いたして居り、又、翌日も休んだ。

流石に、その後は、三日程、皆に禁止された二人であった。……ナニがとは言わないが。

『LAST．襲撃後のノルニル』

side：三人称

「おおおおおおのおおおおおれええええええええええ！！！！！！！！！！！！！

ここまでえええええ！！！！ここまでえええええええええええ！！！！！！！！！！

奴如きにいいいい！！！！いいよおおにいいいされええるぅぅぅうううううううう

とおおおおはああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

シュガああああああああルうううううううう！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！

きいいいさあああまあああ！！！！！！！！！！一体いいいいい
い！！！！！！！！！！

なああああにいいいいいをおおおお！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！

しいいいいてええええおったああああああああああ！！！！！
！！！！！！！！！」

「………申し訳無い。グラルヴォ殿。だが、今は過ぎた事よりも、
先の事を考えるべきだと、思われるが………如何か？」

「きいいいいさああああまあああああにいいいいい言われるう
うううまあああああ

でもおおおお無いわあああああああああ！！！！！！！！
！！！！！！！！！」

「………（ハァ…馬鹿には付き合ってられん。）第四席カルラド＝
ハルシアス。」

「呼んだか？シュガル。」

「第五席テブダル＝ビャルザド。」

「……ここに居る。」

「第十席ゼハムス＝カジャルド。」

「はい。シュガル様。」

「第十一席ユニゲム＝ドラルザグ。」

「…やっと、オレ様の出番かぁ？」

「……御覧の通り、第二席は怒り心頭で在らせられる。

…大至急、この『翼（おもちゃ）』を使える様にしてくれ。

俺は、あっちのガラクタを量産してくる。」

「フン……。それこそ無駄なのでは無いか？あやつには、そんなモノ無意味だろう？」

「ああ。あいつにはな。……だが、他の者はどうだ？奴が大切にしている者達は？

このガジェットというガラクタ……億や兆単位で襲って来ても、捌けるかな？

何より、あいつがそれを、黙って見ているとでも、思うか？…カルラド。」

「……そうか。確かにな。それならば、僅かとは言え、奴の動きを制限する事が出来る…か。」

「…そういう事だ…テブダル。あの程度のガラクタでも、使いよう…という事だ。」

「解りました。では、私達はこの『翼』を、使える様にすれば、いいのですね？」

「…そうだ。…やり過ぎて壊すなよ？ユニゲム。第二席が五月蠅いからな。」

「…ちっ…解ったよ。あの五月蠅え声で毎日騒がれちゃ、碌に眠れもしねぇ。」

「そういう事だ。では、皆、宜しく頼む。」

“了解。”

……敵の準備も着々と進んでいた。

……平穏な日々は、もう幾らも無い……。

運命の刻まで……

後、もう僅か……。

その刻まで……

刻一刻と近付いていた……。

日常其之弐（後書き）

如何でしたでしょうか？

……さて。今回私が、一番書きたかった話は、どれでしょう？

はい。バレバレですね。そうです。七話目。はやてとのイチャラヴです。

他の話は、その為だけの布石…と言っても、過言ではありません。

…まぁ、最後のは本編に絡みますが。

次回は、遅ればせながら、３００，０００アクセス突破記念と表しまして、

『ノルニル幹部の秘密を大公開』回にしようかと思います。

……そもそも、そんなに需要あるのでしょうかね？

では、今話もお読み下さり、有難う御座いました。

番外・肆（前書き）

現時刻（０６：３５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３３９，８５５アクセス　ユニーク：３４，７５９人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、遅ればせ乍ら、３００，０００アクセス突破記念と表しまして、

ノルニル幹部プロフィール大公開回です。

今迄で、最長の長さとなってしまいました；

皆様、手元にペットボトルは御用意されましたか？

では、今話も拙筆を御覧下さい。

番外・肆

祝　300,000アクセス突破記念！！！！！！！！
！！

ノルニル　解体新書！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！　の巻

カイト「…………なぁ…………何で、俺等の敵を、俺達が説明しなきゃいけないんだ？」

龍斗「…そう仰られても………【あのモノ】からの指示でもありますので…。」

カイト「…ちっ…【あいつ】か………。しゃあねぇなぁ………敵の

御浚いでもすっか。」

龍斗「はい、カイト様。…では、まず【ノルニル】という組織そのものからです。…どうぞ。」

全平行世界観測機関【ノルニル】

とある平行空間に、本部が存在する。支部は無い。

平行空間とは、数多の平行世界に行ける…所謂、ラグランジュポイントの様なもの。

又、本部内には、何億何兆の人が住んでいる。

数多の施設が充実して居り、自分達の能力で、何かしらの生計を立てている。

無能力者は、純粋な労働力として使われているが、奴隷の様な扱いは一切無く、

他の能力者とほぼ遜色無く暮らしている。故に、まず不平不満が出る事は無い。

偶に自信の能力を鼻に掛けた、勘違い野郎が居るが、皆で挙ってフルボッコにしても構わない。

そもそも、第二席の様な者は、最初からそんな所には行かないので、滅多に無い。

その目的は、本来は各世界に介入し、数多の不幸や、イレギュラーを排除する事であった。

しかし、何時からかその目的も失われ、己の能力を高め、且つ試す為だけに、

介入する様になってしまった。

更に、自分達に随わない、組織や世界は必ず殲滅している。

そして、今の主な目的は、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』にして『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』である、

八神カイトを抹殺する事である。

理由は、表向きには危険だから。本当の理由は、自分達が活動するのに、最も邪魔だから。

因みに、一般人には、今でも当初の目的のまま、活動していると思われている。

又、ノルニル幹部は全部で１３人。第一席のみ、創設当時から変わらず。

実力主義で有り、家名主義でも有る。何故ならば、家名＝能力だからである。

能力を持たずに産まれた子は、そのまま捨てられるが、
ある一定期間様子を見、発現した場合、家に戻し、家名を与える。
又、何かの突然変異で、本来の能力の上位能力が現れた場合、他家に養子に出される事も有る。
だが、シュガルの様に、己が実力だけで、席次に上がる事もある。
しかし、上がれるのは第三席まで。第一席と第二席は、必ず決められている。

龍斗「……以上です。」

カイト「……チッ……相変わらず、巫山戯た組織に、成り下がりやがって……。」

龍斗「……次からは、ノルニル幹部達の、プロフィールです。
私達が知っている限りで、申し訳有りませんが……。
第十三席から、順番に公開していきます。……では、どうぞ。」

第十三席　レリエル＝サルデス　『死（デス）』
女の子　黒髪黒眼　１４５ｃｍ　……。　一人称：私　イメージｃｖ：桑島法子

肉体年齢：１０～１２歳前後　実年齢：一億歳以上

好きなモノ：死（無機有機問わず）　嫌いなモノ：生（無機有機問わず）

好きな食べ物：躍り食い　嫌いな食べ物：調理されたモノ（既に死んでいるから）

好きなタイプ：簡単に死なない人　嫌いなタイプ：すぐ死ぬ奴

趣味：何かを殺す事　特技：何でも殺せる事

第十三席は、暗部専門。故に、幹部が一堂に会する席でも、常に一つ空いている。

滅多な事では、姿を見せず、見た者は殆ど死んでいる。

能力：死を司る。対象は選ばない。

所謂、直視の魔眼も使えるが、生物ならば、基本的には耳元で「死ね」と言うだけで、殺せる。

今の彼女に殺せない者は、第一席～第四席迄。

第一席は、尊敬故に、対象にならず。他の三人は、純粋な実力のみで。

一言「……お前に、死を、与えよう。」

紅蓮「…おっかねえな…。こいつ……。」

カイト「まぁ、俺等にゃ、無意味だけどな。」

五行「それもそうだ。」

龍斗「…ゴホン！…では、次です。」

第十二席　コルニス＝アルガザス　『真・宝具使い（マスター・オブ・ファンタズム）』

女性　金髪紅眼　１７５ｃｍ　刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）！　一人称：私

イメージｃｖ：伊藤静

肉体年齢：１８～２２歳前後　実年齢：一万歳強

好きなモノ：価値の有る宝　嫌いなモノ：価値の無いモノ
好きな食べ物：美味しい料理　嫌いな食べ物：不味い料理・グロイ料理
好きなタイプ：ユニゲム＝ドラルザグ　嫌いなタイプ：ユニゲムに敵対する者
趣味：宝具集め　特技：家事（良く、意外だ…と言われる）

第十二席は、十三席が暗部な為、基本的に位は最も下。

第十一席である、ユニゲム＝ドラルザグとは、婚約している。

自身達の能力と相俟って、ほぼ常に一緒に行動し、そのコンビネーションは、第二席をも圧倒した。

今回、別々に行動している訳は、彼女（コルニス）が本家に呼ばれ、結婚の段取りを、決めているからである。

ネタバレながら、当然彼（ユニゲム）の死亡フラグである。……南無。

因みに、ノルニル幹部内で結婚すると、姓は両方付く。但し、席が低い順になる。

つまり、ユニゲム＝A（アルガザス）＝ドラルザグ　となる。

更に、子供の場合は、第一子は、席順が上の方を名乗り、第二子は下の方を名乗る。

第三子以降は、どちらでも好きな方を名乗れる。

因みに、此処で言う第一子とは、産まれた順では無く、能力が発現した順である。

故に、長子が3歳で、次子が１５歳と言う事も良く有る。

能力：その名の通り、宝具使いである。全ての宝具を十全以上に扱える。

つまり、宝具本来の能力の限界以上を、引き出す事が出来る。

普段の戦い方は、第十一席の呼び出したサーヴァントに、使い捨ての宝具を幾つも持たせ、

自身も宝具を使い、縦横無尽に全フィールドを使って戦う。

因みに、サーヴァントに持たせた宝具には、それ自体に魔力が籠もって居り、

サーヴァントの魔力は、一切消費しない。正に、使い捨てである。

一言「あなたの帰りを、待っていますよ……ユニゲム。」

龍斗「……以上です。」

カイト「……なぁ……何か、死亡フラグが立ち過ぎて、却って殺し辛くなってるんだが…

……ユニゲムだけ、殺した振りしようか？」

龍斗「駄目です。きっちりしっかり、回収して頂きます。」

カイト「……お前って…やっぱり意外と鬼畜なのな…？」

龍斗「……カイト様？」

カイト「さあ！！！次行こうぜ！！！次！！！！！お次はこいつだあああ！！！！！」

龍斗「……ハァ……。…どうぞ。」

第十一席　ユニゲム＝ドラルザグ　『真・召喚使い（マスター・オブ・サーヴァント）』

野郎　朱髪金眼　１８５ｃｍ　７８ｋｇ　一人称：オレｏｒオレ様

イメージｃｖ：伊藤健太郎

肉体年齢：２２～２５歳前後　実年齢：六百万歳弱

好きなモノ：強い奴・自分の言う事を聞く奴　嫌いなモノ：弱い奴・自分の言う事を聞かない奴

好きな食べ物：見た目がごつい物（強そうだから）　嫌いな食べ物：ふにゃふにゃした物（弱ｒｙ）

好きなタイプ：コルニス＝アルガザス　嫌いなタイプ：コルニスに近付く奴等

趣味：神話や伝説の類の書物を漁る事　特技：古語の解読

第十一席は、良く第十二席と、一緒に扱われる事が多い。

第十二席である、コルニス＝アルガザスとは、婚約している。

そして、死亡フラグが、びんびんに立っている。……もう一度、南無。

コルニスは、ユニゲムによって、産まれた頃から育てられて来た、純粋培養の娘である。

所謂、光源氏計画、大成功。……但し、本人達には、その意図は全く無い。

紅蓮と違って、粗野では有るが、意外な事に、古の文物にとても詳しい。

何故なら、自身の能力を十全に発揮する為に、古書を漁っていたら、自然と詳しくなっていった。

故にか、意外と古風な男であり、結婚するまでは…と言い、まだコ

ルニスには手を出していない。

能力：読んで字の如し。所謂、『Ｆａｔｅ』のサーヴァントを召喚し、手足の如く操れる。

それは、登場していない他の神話・伝説・神々に干渉し、召喚する事も出来る。

しかも、喚ばれたサーヴァントは、唯一戦う事しか考えられない様に、されている。

又、自身がサーヴァントに憑依し、その能力を十全以上に使う事も出来る。

本来の戦い方は、それである。

一言「オレ、この世界から帰ったら、コルニスと結婚するんだぜ。」

龍斗「……以上です。」

カイト「…態とか？…あの馬鹿は、態と死亡フラグを、立て捲ってやがんのか？」

水薙「……；どうなんだろう？確かに沢山立てれば、却って生き残れるとは思うけど……；；」

カイト「……よし、決めた。死亡フラグが引っ繰り返った、生存フラグを、

バキバキに折ってやろう。」

紅蓮「……相棒の方が、よっぽど鬼畜だぜ……；；；；」

龍斗「……ハァ…では、次です。」

第十席　ゼハムス＝カジャルド　『真・磁力使い（マスター・オブ・マグネット）』

男　白髪茶眼　１７０ｃｍ　５０ｋｇ　一人称：私　イメージｃｖ：杉田智和

肉体年齢：２０歳前後　実年齢：百万歳超

好きなモノ：癒し　嫌いなモノ：胃潰瘍

好きな食べ物：温かいもの（ホッとするから）　嫌いな食べ物：冷たいもの（ゾッとするから）

好きなタイプ：大人しい人　嫌いなタイプ：騒がしい人

趣味：何かに没頭する事　特技：人の仲を取り持つ事

第十席は、下位幹部である第六席以降を取り持ち、纏める役目を担う。

基本的に、ノルニル幹部達は、余り仲が良くない為、良く胃潰瘍に悩まされている。

因みに、独身。優男の風体な為、お姉様方に良く揶揄われ、弄られている。

休暇には、主にボトルシップ等といった、チマチマした個人趣味に没頭している。

能力：人の体に流れている、微弱な磁力をも操れる。つまり、人の意識はその儘に操れる。

又、自身の体の磁力も操作し、神経を活発化させて、常人以上に動く。

だが、基本的に攻撃に回る事は少なく、主に補助・補佐を担当する。

某超電磁を使った、竜巻を良く使う。又、超電磁砲（ハイパーレールガン）の命中精度は、ゴ〇ゴ１３の百倍はあると言われて居り、本人はとても恐縮している。…但し、事実である。

因みに、同様に電気も操れ、良く幹部家庭に招かれ、電池補給等をしている。

一言「…あたたた……胃薬、又、買って来なくちゃ……。」

龍斗「……私の分も、御願いします。」

五人「いつも、ゴメンナサイ」↑正座中

龍斗「……ハァ…では、次です。」

第九席　セラス＝グランセニック　『光の粒子（パーティクル・ライト）』

女性　金髪茶眼　１６０ｃｍ　閃火以外には教えません。　一人称：私　イメージｃｖ：雪野五月

肉体年齢：１５歳　実年齢：享年１５歳

好きなモノ：シュガル（尊敬してるから）　嫌いなモノ：シュガルに仇為す者（尊敬しｒｙ）

好きな食べ物：紅茶（特にストレート）　嫌いな食べ物：生温い物

好きなタイプ：月光閃火　嫌いなタイプ：なよなよしている奴

趣味：お人形遊び（但し、誰にも秘密）　特技：料理

故人。シュガルの秘蔵っ子。月光閃火様の嫁（公式）。

彼女達は、シュガルに孤児院に集められ、能力を発現するまで養われている。

又、その能力を高める為に、他の幹部にばれない様に、研究もされている。

だが、非人道的な事は一切させていない。辛い実験の際は、必ず本人に確認を取っている。

しかし、彼女達はシュガルへの恩に報いたいと、必ず肯く為、シュガルの悩みの種になっている。

その中でも、セラスは特に抜きん出て居り、唯一実力で席次に付いた、初めての女性であった。

故に、期待も一入だったが、シュガルの為…と勇み足をし、早々と散って行った。

そして、月光閃火の嫁である。

能力：読んで字のｒｙ。自身を光に変え、正に『光速』で相手に接近し、体を貫く。

体の一部分を飛ばして、攻撃も出来る。血を浴びると良く興奮する。

まだまだ、精神的にもヒヨッコな為、これから応用・その他の能力

強化を行う処であった。

一言「…閃火、愛しています…（ポッ）。」

龍斗「……。」

カイト「……なぁ……これ、誰へのサービスだよ……orz」

龍斗「……では、次に行きましょう。」

第八席　グラニス＝ザルニウス　『真・植物使い（マスター・オブ・プラント）』

男　緑髪翠眼　１９０ｃｍ　８５ｋｇ　一人称：我　イメージＣＶ：小野建一

肉体年齢：３０歳前後　実年齢：享年約二百万歳

好きなモノ：植物　嫌いなモノ：火

好きな食べ物：野菜・果物　嫌いな食べ物：肉

好きなタイプ：自然を愛する人　嫌いなタイプ：自然を破壊する者

趣味：ガーデニング　特技：サバイバル

故人。第六席～第八席は、代々ザルニウス家が務める事になっている。

今回のザルニウス家は、純然たる年子である。因みに、グラニスは次男。基本的に仲は良い。

本来は、グラニスが第七席だったが、三男のゲルギスが炎使いだった為、席を譲った。

グラニスは、良く暴走するゲルギスと、しょっちゅう憤慨するガウラスのストッパー役。

『魔法先生ネギま！～三人の転生者～』の近衛薫によって、燃やし尽くされた。

能力：読んでｒｙ。自身が植物と一体化…というか、植物そのものになる事で、

途轍も無い生命力を誇る。自身の体を伸ばしたり、種を飛ばして相手の体に植え付け、

内部から、体そのものを奪う。

一言「……自然は大切にしろよ。」

龍斗「以上です。…最後の言には、同意致します。」

カイト「…薫も手加減しなかったからな。」

紅蓮「俺様の焔とどっちが強ぇかな……試して見てぇな……。」

カイト「…まぁ、又、こっちにでも来たらな。」

龍斗「……次も紅蓮が暴れそうですので、抑えて置いて下さい、カイト様。では、どうぞ。」

第七席　ゲルギス＝ザルニウス　『真・火炎使い（マスター・オブ・ボルケーノ）』

野郎　赤髪朱眼　１７５ｃｍ　６０ｋｇ　一人称：俺　イメージｃｖ：千葉繁

肉体年齢：２５歳前後　実年齢：享年約二百万歳

好きなモノ：火炎　嫌いなモノ：水・土

好きな食べ物：生肉（自分で焼く為）　嫌いな食べ物：調理された物（焼けないから）

好きなタイプ：情熱的な奴　嫌いなタイプ：大人しい奴

趣味：火遊び　特技：キャンプファイヤー

故人。三男。モヒカン。毎日、髪をキチンと整えるのに、一時間掛けている。

カイトの龍達の一体、焔熱（メルト）に瞬間蒸発された。

能力：ｒｙ。無機有機問わず、熱を奪い、その熱を使って敵を燃やし尽くす。

要は、相手の体の熱を奪い、その熱で燃やす。意外にえげつない。

一言「ヒャッハーーーーー！！！！！！！！汚物は消毒だーーーーー！！！！！！！！！！！！！！」

龍斗「……以上。」

カイト「……お疲れ様。龍斗。」

水薙「…ていうか、あいつ、同じ事しか言わないの？言えないの？どっち？そして短いわね。」

紅蓮「…どうでもいいが……この程度の奴じゃ、俺は燃えらんね

ぇな…。」

鋼牙「…むーーー……僕、あのおじちゃん、嫌い……。」

龍斗「…そうですね、鋼牙。私も嫌いです。……では、次です。」

第六席　ガウラス＝ザルニウス　『真・鉱物使い（マスター・オブ・オリハルコン）』

野郎　白髪銀眼　１８５ｃｍ　１００ｋｇ　一人称：私　イメージｃｖ：子安武人

肉体年齢：３０歳前後　実年齢：享年約二百万歳

好きなモノ：鉱物・光沢　嫌いなモノ：火・汚い物

好きな食べ物：岩塩　嫌いな食べ物：海水

好きなタイプ：味のある奴　嫌いなタイプ：味の無い奴

趣味：石磨き　特技：石当て

故人。長男。基本的に幹部以外には、負ける筈が無いと思っている為、他の者を皆見下している。

重い理由は、普段から鉱物になってるから。唯一、第二席ドルゴラと仲が良い。同類故。

『魔法先生ネギま!～三人の転生者～』のカスミ・ヴェネーラの直視の魔眼によって、

存在ごと、抹消された。

能力：ｒｙ。自身がオリハルコンと一体化…というか、オリハルコンそのものになる事で、

最強硬度を誇る（と、本人は思っている）。自身の体から、オリハルコンを飛ばして、

相手の周囲を覆い、中に完全に閉じ込めて、呼吸出来なくさせる、残酷な殺し方を好む。

一応、相手の体そのものを覆い尽くして、瞬間窒息させる事も出来るが、

オリハルコンを破壊出来る者など、有り得ないと信じている為、

どっちにしろ変わらないと思っている。つまり、過信家。

一言「ハッハッハ……私が、最強最硬だ!!!!!」

龍斗「…以上です。……どうしました?鋼牙。」

鋼牙「……ちょっと、あのおじさんとO☆HA☆NA☆SHIしてくるね♪」　シュンッ！　ゴキュッ！

カイト「……何か、今、聞いちゃいけない快音が……。」

鋼牙「ただいま～♪♪♪」

水薙「…鋼牙？今、何して来たの？」

鋼牙「うん♪！ちょっと、あのおじさんとO☆HA☆NA☆SHIして来たの♪♪♪

ちゃんと解ってくれたよ？♪」

カイト「……そうか。良かった？な、鋼牙。」

鋼牙「うん♪♪♪！！！！！」

黄宇「…取り敢えず、こっちにおいで？鋼牙。その真っ赤なナニカを拭いてあげるから。」

鋼牙「うん！！黄宇お姉ちゃん♪！！！」

龍斗「……ゴホン！…では、これで下位幹部は終わりです。」

カイト「結構、量があったな。」

間違い無く今回が、今迄で最長の長さに、なるでせう。

龍斗「……？……では、これから、残り上位幹部、五人の情報を公開致します。…どうぞ。」

第五席　テブダル＝ビャルザド　『重力（グラビティ）・引力（アフィニティ）』
男性　銀髪玄眼　１８５ｃｍ　５８ｋｇ　一人称：私　イメージＣＶ：森川智之

肉体年齢：２５歳前後　実年齢：八千万歳強

好きなモノ：カリスマ・第一席　嫌いなモノ：嫌われ者・第二席ドルゴラ＝グラルヴォ

好きな食べ物：見た目が美味そうな物　嫌いな食べ物：見た目が不味そうな物

好きなタイプ：カリスマ性のある奴　嫌いなタイプ：全く人望の無い奴

趣味：人材発掘　特技：人材引き抜き

第五席より上を、上位幹部と言う。以前カイトが言っていた、

『幹部に至っては、宇宙を一つ潰せる』というのは、彼等、上位幹部の事を指す。

第一席を、最も敬愛し、第二席を最も毛嫌いしている。

シュガルに何か、光る物を見付けて以来、彼が幹部になる前から、交流を深めている。

能力：『重力』で対象を星に縛り付け、『引力』で星同士の間に挟み込み星毎、圧壊させる。

その能力を増大させ、星同士→銀河同士→宇宙同士（イマココ）を、圧壊させるまでに至っている。

一言「貴様に私を従えられるだけの器が有るか？」

龍斗「以上です。」

カイト「やっっと真面な奴が、出て来たな。」

龍斗「全くです。」

水薙「アハハ…；；；じ、実感籠もってるわね？」

龍斗「……誰の所為だと…」「さあ！次行って見ようか！！なあ！龍斗！！！」←カイト

龍斗「……ハァ……解りました。…では、次です。」

第四席　カルラド＝ハルシアス　『幻惑（イリュージョン）』
男性　青髪灰眼　１８０ｃｍ　５２ｋｇ　一人称：我（オレ）　イメージｃｖ：関俊彦

肉体年齢：２５歳前後　実年齢：一億歳弱

好きなモノ：魔術・嘘・詐欺・ギャップ　嫌いなモノ：バレバレなモノ・変化が無いモノ

好きな食べ物：味と見た目が全く違う物　嫌いな食べ物：味と見た目が殆ど同じ物

好きなタイプ：意外性の有る者　嫌いなタイプ：想定内の奴

趣味：手品・マジック　特技：手品・マジック

庶民人気Ｎｏ．３。シュガルの親友。歳は離れているが、お互い全く気にしていない。

元第三席。しかし、シュガルに実力で負け、何の蟠りも無く、素直に第四席に座っている。

因みに、第五席ビャルザド家と、現第四席ハルシアス家はライバル同士だが、

当の本人達は、割と良い友達関係である。

本来の第四席は、第二席ドルゴラの腹癒せに家ごと、物理的・社会的に潰されている。

因みに、ドルゴラには、何のお咎めも制裁も無かった。それが又、彼が嫌われる要因でもある。

能力：相手の脳に直接、幻覚を見せ、脳自体を死滅させる。

相手の脳内では、「チャージなどさせるものか！」とか「それが人の夢！人の業！！！」

とか、某誰かさん達のオンパレードで、フルボッコに遭っている。

更に、『幻惑』の定義を広げ、銀河…引いては宇宙に働き掛け、宇宙の形をも自在に変えられる。

一言「幻に喰われて朽ちるがいい！！！！！」

龍斗「…以上です。」

カイト「四席・五席は大分真面なんだな…。」

龍斗「その様ですね。……では、お次は…。」

カイト「…？おお！シュガル坊やか！！どれどれ……」

第三席　シュガル＝ブラウセス　『時間（タイム）・空間（スペース）』

男性　銀髪紅眼　１７５ｃｍ　５０ｋｇ　一人称：俺　イメージＣＶ：櫻井孝宏

肉体年齢：２６歳頃　実年齢：百万歳強

好きなモノ：孤児院の子供達・第一席　嫌いなモノ：弱い者虐め

好きな食べ物：子供達の作った料理　嫌いな食べ物：格好だけ付けた料理

好きなタイプ：自分を慕ってくれる者　嫌いなタイプ：子供達に害を為す者

趣味：子供達に勉強を教える事　特技：隠れて暮らしている子供達を見付ける事

庶民人気Ｎｏ．２。元々、只の風使いだったが、鍛錬の結果、風→空気→空間と進化していった。

又、風→加速→時間短縮→時間という風に、二つの能力を己が物に

した。

ノルニル幹部内では、二番目にカイトの事を理解している人物。一番は第一席。

又、上位幹部内では、最も若いが、最も信任されている。第二席もそれは認めている。

第一席の一番のお気に入り。人間的・性格的な意味で。

彼が孤児院の子供達の事を、特に気に掛けるのは、彼も孤児院出身だからである。

自分を育ててくれた恩に報いる為に、自分が育った孤児院に孤児達を集め、金も労力も惜しまず、

育てている。しかし、それを他人に覚らせた事は無い。故に周りには只の気紛れと思われている。

しかし、子供達は何となく勘付いている。理由を知っているのは、カイトと第一席だけである。

カイトと出会ったのは、彼がまだ孤児院に居た頃である。

第一席と共に来たカイトに、憧れと畏敬と恐怖の念を抱き、カイトに師事を願い出た。

カイトがシュガルを坊やと、子供扱いするのは、それ故でも有る。

能力：時間そのものを止め、自分以外動けなくする。
又、空間そのものを切り取り、身動きを取れなくさせる。
つまり、第一席・第二席・第四席と、カイト以外ならば、瞬殺出来る。

一言「……俺は、何時か貴様を越えてやる！！待っていろ！！！カイト！！！！！」

龍斗「…との事です。」

カイト「へぇ……あのシュガル坊やがねぇ……面白い！俺は何時でも待っているぞ、坊や！」

紅蓮「おお…！久し振りに燃えてるな！相棒！！！」

カイト「おおよ！僅かな期間とは言え、俺が育てた弟子が、俺を越えたいと言って来てるんだ。

　嬉しいに決まってるさ。……良いライバルに育ってくれよ？シュガル坊や。」

龍斗「……では、次です。」

水薙「…次って……うげっ！あいつぅ…？！私嫌よ？こんな奴

と戦うの……。」

五人「全くだ。」

カイト「…ハァ……まぁ、心配すんな。こいつと戦うのは俺だからな。」

鋼牙「？どうして？カイト兄ちゃん。」

カイト「……ちょっと…な。……どうしても、こいつに聞きたい事があるんだよ。」

黄宇「……主殿？」

カイト「……。」

龍斗「……では…どうぞ。」

第二席　ドルゴラ＝グラルヴォ　『創造（メイク）』

糞野郎　黒髪赤眼　２１０ｃｍ　１２０ｋｇ　一人称：儂　イメージｃｖ：若本規夫

肉体年齢：４０歳頃　実年齢：５億歳強

好きなモノ：権力・自分　嫌いなモノ：自分以外・特に第一席

好きな食べ物：ドリアン（王様だから）　嫌いな食べ物：庶民が食する物

好きなタイプ：自分を妄信する者　嫌いなタイプ：それ以外・特に第一席

趣味：弱者（クズ）を甚振る事　特技：拷問

庶民人気皆無。庶民にも慕われているノルニル内でも、最も嫌われている人物。

尤も、本人は意に介していない。自分以外の人間は皆、只の屑だと思い、又、信じ切っている。

それは、第一席も同様。幾度と無く戦いを挑み、悉く負け続けている為、

第一席を最も毛嫌いしている。美人・美女・美少女には目が無い。

実は、最もカイトに因縁深い人物。本編中に明かされるが……。

能力：自身の命すらも創造してしまう為、例え幾度殺されようとも、余人には無駄。

何とか出来るのは、ノルニルでは、第一席のみ。

因みに命のストックは、カイトより遙かに少なく、数万程度しかない。

これは、自分が殺される事など、絶対に有り得ない…という思い込みと、これ程の命を持つ者は、

自分以外には、絶対に有り得る筈が無い…という確信（爆笑）に依るもの。

つまり、絶対的・究極的な過信者。某金ピカも真っ青。

一言「ぶううるうううううううらあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

龍斗「………（キーン……）以上です………。」

全員「五月蝿い（ぇ）！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

鋼牙「………ううう～～～………カイト兄ちゃん…ホントにこんなのと戦うの？止めないの？」

カイト「………いや、こいつとだけは、止める訳にはいかないんだ………。

　　有難うな？鋼牙。………そう………こいつだけは………絶対に………。」

五行「……。」

カイト「……いや、済まない。…じゃあ、次行こうか？」

龍斗「……はい。…次は……いえ、次で最後ですね。」

紅蓮「お！やっと、第一席って奴かよ。」

水薙「…みたいね。私達も、知らないのよねぇ……。マスター、どんな人？」

カイト「う～ん……そうだなぁ……一言で言うなら……。」

五行「一言で言うなら？」

カイト「聖人君子が服着て生きている感じだ。」

五行「？？？……本当に？」

カイト「ああ。そのまんまだ。……まぁ、こいつを見れば、少しは解るかな？…ほれ。」

第一席　アルニス＝カイゼル　『世界（ワールド）』

男性　金髪金眼　１８０ｃｍ　５０ｋｇ　一人称：私　イメージｃｖ：速水奨

肉体年齢：２０歳　実年齢：三百億歳程

好きなモノ：人間　嫌いなモノ：敵・人々に仇為す者

好きな食べ物：全て　嫌いな食べ物：無し

好きなタイプ：全ての人々　嫌いなタイプ：無し

趣味：人々の幸せを感じる事　特技：人々を幸せにする事

庶民人気Ｎｏ．１。ノルニル創設当時から居る、唯一の当事者。

因みに、実質的に創設したのはアルニスと初代第二席。初代は女性。ドルゴラは、三代目。

ノルニルとカイトが敵対してからは、滅多な事じゃ会えないが、極偶にカイトがノルニルに、こっそり忍び込んだ時とかに、直接迎えに行ったりする。

アルニスとカイトは、個人的には、特に何の蟠りも無い。寧ろ、マブダチに近い関係。

因みに、シュガルと会ったのは、ノルニルと敵対してからである。

カイトの奔放さが良く解る。それに付き合える、アルニスもアルニスだが。

シュガルが憧れたりしたのは、誰からも尊敬され、敬語を自然と使

ってしまう程の相手に、

極普通に気軽に話し掛け、肩に凭(よ)り掛かったり、ド突いてたからである。

だが、その際に第一席に、無礼を働く者として、途轍も無い大騒ぎになった。……そりゃそうだ。

単純に凄いと思ったのが、発端らしい。因みに、その騒ぎは、カイトが魔力を放出し物理的に、

そして、アルニスが教え諭して、精神的に抑え付けて、何とか大事に為らずに済んだ。

能力：???何か世界を操れるらしい。詳細は不明。

一言「カイト。久し振りに、遊びに来て下さい。私も貴方が余り来てくれないと、寂しいです。」

龍斗「……これで、以上です。」

カイト「龍斗お疲れ様。いや、本当に。ゆっくり休んでくれ。」

龍斗「……有難う御座います。カイト様。」

カイト「…にしても、アルニスめ……相変わらず、恥ずかしい事を平然と言いやがる……。」

水薙「ハァ……何にしても、これでやっと終わった訳ね？」

龍斗「…ええ。取り敢えず、これが今、判る範囲です。…何れ増えると思いますが。」

カイト「まぁ、取り敢えず今回はこれでいいさ。」

そうそう。到頭一万字超えちゃったしね。

カイト「……やっぱり、疲れてるんだな。」

鋼牙「？どうかしたの？カイト兄ちゃん。」

カイト「いや、何でもないよ。…良し、今日はこれで終わり。みんなぐっすり寝ようぜ！」

五行「はい。お休みなさいませ、我等が主。良い夢を。」

番外・肆（後書き）

……如何でしたでしょうか？

今回は１２，０００字を超えていました……

皆様、良くぞ読んで下さいました。本当に有難う御座います。

次回は、決戦前日。

そして、その次。決戦。

最後に、決戦後……到頭、後三回程で、『なのは』の世界も終わります。

では、皆様、その刻迄……そして、その後も、お付き合い頂ければ幸いです。

決戦前日・前編～驚愕～（前書き）

現時刻（１９：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３４９，６７９アクセス　ユニーク：３５，６５０人
皆様、いつも有難う御座います。

……では、今話も拙作を御覧下さい。

決戦前日・前編～驚愕～

side：ノルニル

「………フ………フハハハ………フハハハハハハハハ…………」

フハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

遂に！！遂に！！遂に！！！！！完成したぞおおおおお！！！！！！！！！！！！」

「（貴様は何もしていないだろうに………）…グラルヴォ殿。」

「おお！！！！シュガルゥ！！！！でかしたあああああ！！！！！！！！！！」

「………有難う御座います。…グラルヴォ殿。」

「うむ！！！うむ！！！！！これで、ようやっと！！！ようやっとおおお！！！！！！！！

あやつに一泡吹かせてやれると言ううううものよおおおおお！！！！！！！！！」

「（相変わらず不快な声だ………）………では、グラルヴォ殿。

………奴に、宣戦布告と致しましょう。」

「おお！！！！！そうだなあああ！！！！！！！！！！奴の悔しがるううう姿があああ！！！

目えええにいいい見えええるううわああああああ！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！

ハーーーッッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ

ッハッハッハッハッハッハ

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！」

（（（（（五月蝿い。）））））

side：三人称

今日も今日とて、騒がしい機動六課。その機動六課に緊張が走った。
未だ、機動六課の皆しか知らない、未知なる敵……【ノルニル】が、
全次元世界に通信を繋ぎ、
宣戦布告して来たのだ。………こんな感じで。

「フハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！
儂は！！！！！全平行世界観測機関【ノルニル】幹部！！！！！
第二席！！！！
ドルゴラ＝グラルヴォ様だ！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！
無意味で無価値で、儂に支配されるしかない、脳も使い道も全く無い、
屑でゴミで無能で愚民なクズドモ！！！！！！！！！！！！
！！！！！
今からこの世界は儂の物だ！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！

儂に今直ぐ平伏せ！！！！！怯えろ！！！！！！！竦め！！！！！！！崇め奉れ！！！！！

儂が貴様等クズドモの神で支配者であるぞ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

儂に逆らう事はこの儂が許さぬ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

！！！」

“……（ポカーン）……”

余りのインパクトの為、（内容はさておき）あんぐりする一同であった。…一人を除いて。

「……なぁ、カイト兄ぃ？…ノルニルってみんな、あんなんなん？

ていうか、クズて二回言うとるし…。……カイト兄…？」

普段なら、間違いなく乗ってくれる筈のカイトが、まるで聞こえていない様に、

第二席（グラルヴォ）の映っている、画面を見て……いや、睨んでいる。

そして、徐に話し掛けた。

「……久しいな…ドルゴラ。……二億年振りか…？」

「…！…フン！其処に居たか！！！『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！！

今度こそ貴様も終わりよ！！！！！今までこの儂相手に好き勝手にし！！！！！

あまつさえこの儂を……このグラルヴォたる儂を！！！！！！！！！！！！！！！！

虚仮にしてくれた礼はあああああ！！！！！！！！！！！！！！きっちりいいいいい！！！！！

させて貰うぞおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！」

「…知った事か、雑魚が。高々、『創造（グラルヴォ）』程度で図に乗るな。井蛙風情が。」

「！！！！！！！！！！きいいいいいいいいさあああああああああまあああああああああ

！！！」

「………気をお鎮め下さい、グラルヴォ殿。」

「何ぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！シュガルゥゥゥゥゥ！！！！！！！！！！

貴様如きがあああああ！！！！！！！！！！この儂にいいいいいい！！！！！！！！！！

いいいいいけえええんんんんするうううかああああ！！！！！！！！！！」

「いいえ。…ですが、このままでは、こちらの話も出来ませんので。」

「ヌゥウウウウウウウ〜〜〜〜〜〜〜……………………勝手にせい！！！！」

「…ハッ。有難う御座います。……では。

俺は、ノルニル第三席　シュガル＝ブラウセス　だ。……改めて久しいな、カイト。」

「…ああ。少しはマシになったか？シュガル坊や。」

「…坊やと言うな。……ああ、そうだ。他の者も序でに紹介しよう。」

「第四席　カルラド＝ハルシアス　だ。…まだ、生きていたか。『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。」

「ああ。御陰様でな、カルラド。お前等の所為で、おちおち死ぬ事も出来ん。」

「フン！…良くも言う……相変わらずの減らず口の様だな。」

「…其処迄にしておけ…カルラド。第五席　テブダル＝ビャルザドだ。

……そうそう何時迄も、貴様の専横が許されると思ったら、大間違いだぞ……。」

「…フッ……何も間違えてなど、いないさ。他ならぬこの俺が許しているんだ。

……そら、何の問題も無いだろう？」

「てめぇ！！！！！何時迄も調子放くんじゃねぇぞ！！！！！！固羅ぁ！！！！！」

「調子は何時でも抜群だぞ？第十一席　ユニゲム＝ドラルザグ。女とのお別れは済んだか？」

「てめぇえええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「…落ち着いて下さい、皆様。益々、相手の術中に嵌っています。」

「……チッ…。」

「…有難う御座います。…では、改めてお話させて頂きます。…あ、申し遅れました。私は…」

「第十席　ゼハムス＝カジャルド　だな…苦労人で有名な。」

「…御紹介、有難う御座います。…では、こちらの要求を伝えます。

1．この‘世界’の次元世界の全てが我々、ノルニルに付き従う事。

2．管理局は即刻、解体し我々の傘下に全て入る事。

3．その際、現上層部は、全員死んで下さい。億害有って一利無し故。

4．最後に…これが最重要の要求です。『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』を引き渡しなさい。

生死は問いません。この世界に居る、全ての人間達で奴を捕まえ、殺すのです。

そうすれば、幾らか条件を、緩和して差し上げる用意が、此方には出来ています。

……返答は如何ですか？彼を匿っている、管理局の諸君。

あ、因みに。もし彼を庇う様な発言が、一度でも有った場合、即時に、管理局を此の世から消滅させます。…どうですかね？」

……モニターを通して見ている全員が、絶句していた。その理由はそれぞれだが、

そんな余りに一方的な、決定事項（ようきゅう）を伝え、又、それを当然の様に思っている、

彼等に戦慄していたのだ。……しかし、その当人は…というと…

……

「…フワァ～～～……んで？それだけ？もう終わり？」

……暢気に欠伸をし、眠そうな顔で、聞き返していた。

「……はい、そうです。…どうですか？『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。貴方の大切な彼女達の為にも、黙って此方に随っては頂けませんか？」

「頂けませんよ～…ノシ何で俺が、お前等超絶雑魚共の、言う事を聞かなきゃいけねぇんだよ？

それを言うなら逆だろ？普通。お前等が、俺にお伺いを立てて、

『これで宜しいでしょうか？カイト様。』って、諂(へつら)ってへーコラすんのが筋だろうが。」

「……矢張り、貴方と交渉するのは、不可能な様ですね。

……其方はどうですか？管理局の皆さん。貴女達も彼を、庇い立てする気ですか？」

「あ、当たり前や！！！！カイト兄は、私達を影に日向に助けてくれたんや！！！！！」

「そうだ！！！！私達の命の恩人を、得体の知れない貴様等に、どうしてやれるか！！！！！」

「そうだよ！！！！みんな、カイトさんに助けて貰ってるんだ！！！！

貴方達の言う事を聞く道理なんて、全く無いよ！！！！！」

皆、そう口々に言い、誰一人カイトを差し出すと言う者は居なかった。

そんな皆の口上を、黙って聞いている、ノルニル幹部達とカイト。

……だが、とあるはやての言葉が、その彼等の沈黙を破った。

……破って……

……しまった……。

「そもそも、カイト兄の奥さんや娘さんを殺しといて、良くもそんな口が利けるで！！！！！

恥を知りや！！！！！！！！！！！」

「……何？……奴の女と娘を……我々が殺した……と？」

「せや！！！！！あんたらに殺されたから、カイト兄はあんたらと敵対してるんやろ！！！！！！」

「フ……フハハハ…………フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!ハハハ!!!」

……まるで、狂ったかの様に笑い続ける、第二席。

その第二席に、カイト以外、皆、顔を顰め、馬鹿笑いが収まるのを、ずっと待っていた。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

…………あーーーっっっ…………笑った…………笑った…………。

こんなに笑ったのは、久方振りだぁぁぁ。……おい、其処のクズ女ぁ……

この儂がぁぁ誉めて遣わすぞぉぉ……光栄に思い、末代迄、讃えるがぁよいぃぃ…。」

「…な、何がそんなに可笑しいんや！！！！！」

「おおおお可笑しいにいいいきいいまってええるうううう！！！！！！！！！！

儂等がぁぁぁ………そやつのぉぉ………女とぉ…娘をぉ………殺したぁ！…だとぉ………

勘違いも甚だしいぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！

女と娘を殺したのはぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！

他ならぬ……貴様だろう？……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。」

“……え？”

分からなかった。

判らなかった。

解らなかった。

理解（わから）できなかった。

認めたくなかった。

認識出来なかった。

信じられなかった。

「……そうだ。

八神：風音（かざね）と我が娘

八神……

はやて……

我

を

が

妻

の

は

殺

し

た

れ

こ

だ」

の

お

……誰もが……信じたく（わかって）……なかった（しまった）……。

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

滑稽だぁぁぁ！！！！！！！！！！じいいいいつううううにいいいい！！！！！！！！

滑稽だあああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！

貴様！！！！！己が手で殺したモノを！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

儂等の所為にして！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

今迄！！！！！！！！！！敵に回っておったのかあああああああああああああああ

！！

いやはや！！！！！実に滑稽！！！！！滑稽の極みだわいいいいいい！！！！！！

フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハ

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「………では、明日、同じ時間に御返答を頂きます。

色好い御返事を期待致して居りますよ？『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』………。」

そう言い、ノルニルは通信を切った。

第二席の高笑いを耳に残しながら……皆、カイトと、切れたモニターを呆然と見ていた……。

決戦前日・前編～驚愕～（後書き）

……如何でしたでしょうか？

何故、カイトは己が妻と娘を、殺さなければいけなかったのか……。

シュガルは一体、何処の誰と連絡を取っていたのか……。

そして……カイトとドルゴラの因縁とは……。

それらは全て、次回にて明かされます。

……では。今話もお読み下さり、有難う御座いました。

※今更ですが、今話と次話の題名を少々、変更致しました。

決戦前日・後編～真実～（前書き）

現時刻（０２：５０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３６０，７１５アクセス　ユニーク：３６，３７６人
皆様、いつも有難う御座います。

……これが、真実です。

……では、今話も拙作を……そして…真実を御覧下さい。

決戦前日・後編～真実～

ｓｉｄｅ：はやて

あの後。みんなが有り得ない程の、衝撃に襲われた後。

カイト兄は、黙って自分の部屋に、戻ってしもうた。……従者達も、置いて行って。

……そして、誰かがポツンと呟いた。

「……どういう……こと……？」

……それから、みんなが思い思いに、一言一言呟き出した。

「……う、嘘……だよ……ね……？」

「……ハハ…ハ……まさか……あの…カイトさんが……そんなこと……

するワケ……ないじゃない……。」

「……でも……カイト自身が……認めて…しまった……。」

「……あの…カイトさんが……自分の…奥さんと……娘さんを……？」

「……それが……もしも……本当…ならば……あいつは

……一体……

今まで……どれ程……辛い…思いを……クッ……」

「……私達が……お母さんに…甘えている時……どんなこと…

……思って……

考えていたんだろう……。」

「……なんで……カイトさんは……いま……笑って……

…いられるんでしょう…？」

「……アイツ……何で……そんな……クッ……クソ

オッッッ！！！！！」

「……カイト……。」

「……で、…でも…！きっと！なにか…！事情が…！！！」

「判っている！！！そんな事は！！！みんな判っているんだぁ！！

！！！」

「……だが……奴が……自身の手で……殺めた事に……変

わりは……無い。」

みんな……認めたく無かった。…でも、認めるしか……無かっ

た。

だって……だって……当の本人が認めたんやからぁ！！！

！！！！！！！！！！

……。

……でも。

……そう。…でも。……だからこそ。

「…私、カイト兄に聞いてくる。……みんな、部隊長権限で、全オープンチャンネルや。」

そう言って、私は、カイト兄の、居る部屋に、駆け出した。

ｓｉｄｅ：五行

……何故…私は…気付かなかった……その可能性に……。

……何故…私は…悟る事が……出来なかったのでしょう……。

……何で…僕は……カイト兄ちゃん……。

……何故…俺は……くっ……相棒…！！！

……どうして……私は……どうして……ますたあ……。

何故！！！！！我々は！！！！！何故！！！！！！！！何故！！！！！！！！！

何故！！！

「………でも………。」

「………だからといって………。」

「………いや、だからこそ………！」

「………俺達は…………！」

「行かなきゃ！！！カイト兄ちゃんの所に！！！！！」

「「「「「我等が主の御座す御所に！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

　我等は主を守護し奉る守護獣故に！！！！！！！！！！

　我等が主の大恩に報いる為に！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」

side：カイト

………さて。必要な物は何も無い。許より、俺は一人…裸一貫だ。

………そろそろ……か。

「カイト兄ぃ！！！！！」

……少しばかり、遅かった様だな。

「……何の用だ？八神はやて。」

「……え？」

「……特に用が無いのならば、出て行け。」

「…よ、用なら……あるで。」

「……なら、手早く済ましてくれ。…俺は、今忙しい。」

「よ、用は…つまり……その……。」

「主殿！」「カイト様！」「マスター！」「相棒！」「カイト兄ちゃん！」

「……ハァ……お前等まで来たか……。

どうせ、全員オープンチャンネルにして聞いてんだろ？」

“うっ…！”

…全く……どいつもこいつも……。　ドカッ！

「…ほれ、言ってみろ。」

“…え?”

「…だから、俺に聞きたい事があるんだろ?受付時間は、明日のタイムリミットまでだ。

さっさとしろ。」

……本当に……

「…あ、有難う!!!カイト兄!!!」

「じゃあ、僕から!!!」

「あ、狡い!!鋼牙!!!まずは私でしょ!?」

「いや、やっぱ此処は俺様からだろ?」

「紅蓮…姉を差し置いて…いい度胸だな?」

「…はぁ…皆さん、落ち着いて下さい。…では、まず私から…」

「「「「龍斗(兄ちゃん)!!!ずるいぞ!!!!!」」」」

「みんな、何ゆうてるんや!!!此処は、彼女の私が最優先やろ!

！！！！」

「あ！狡いよ！はやて！！私達だって聞きたいんだから！！！」

「そうだよ、はやてちゃん！！！ジャンケンで決めようよ！！！」

ギャーギャーギャーギャー……。

「……フッ……。」

……本当に……とても……一人には……なれないな……。

side：三人称

「……んで？落ち着いたか？お前等……＃」　ピキッ…！ピキ

ッ…！

“……はぃ……ゴメンナサイ……。”

……あの後、騒ぎ過ぎた為、皆、カイトから全魔力放出（おせっきょう）を浴（さ）びたのであった。

「……はぁ……全く…。おちおち、一眠りも出来ん。」

“……へ？”「……あの～……カイト兄ぃ？」

「ん？何だ？はやて。」

「……カイト兄、みんなを放って置いて、今から一人で、行くつもりやったんや無いの？」

「……は？何故に？」

「…いや、みんなして、絶対そうやと思って、慌てて来たんやけど……。なぁ？みんな。」

“うんうん。”

「……あ、そう。ふ～ん……俺ってそんなに薄情者に思われてるんだぁ～……

ふ～～ん……へぇ～～～～……ほぉぉぉ～～～～……

……。」

“う……ゴメンナサイ。”

「…全く。…んで？まず何から聞きたい？…時間は有限なんだからな。」

……ようやっと、質問大会が始まった。

「じゃ、じゃぁ、先ず私から。…カイト兄の、奥さんが…その……私（はやて）って、どういう事なん？」

「どういうって、そのままの意味だよ。数多の平行世界を渡っている最中で、

初めて救えた世界で、恋に落ちた相手が、八神はやて。…つまり、平行世界の君（はやて）だった訳。」

「じゃぁ、次は私♪マスターとはやてちゃんと…風音ちゃん…だっけ？

その娘達と、どのくらいの間、一緒だったの？」

「う～～ん……大体……数百兆年ぐらい…だったかな？」

“……はぁ？！？！？！”「え？ゑ？Ｅ？…だ、だってますたあ十数億歳だって……。」

「ああ。それは、お前等と出会ってからの年数。初めて逢った時、２５って言ったろ？」

「……はい。間違い有りません。……では、カイト様？

今の貴方の、本当の年齢は御幾つなのですか？」

「…フッフッフ…じゃあ、一つ問題だ。龍斗…俺の普段の魔力。何故、九千垓なんだと思う？」

「…何故…ですか？…恐らくそれぐらいが丁度使い易いから……な訳は、有りませんよね。」

“うんうん。”　……そんな莫大な丁度良いは、ミトメタクナイ

！ミトメタクナイ！

「…………では、一体…………！！！そんな……まさか…………いえ……
……でも……。」

「クスクス……龍斗。恐らくそれが答えだよ。」

「な！？！？！？ほ、本当ですか？！カイト様！？」

「ど、どういう事？龍斗。」

「……………恐らく、普段保有している、カイト様の魔力量が、
カイト様の実年齢です。」

“…………ゑ？…………ええええええええ〜〜〜〜〜〜〜
〜！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！”

「クックック……大正解♪。今の俺の歳は、
９０１，２６４，７３０，８１３，１０９，４２８，３７５，６
２０歳って事さ♪♪♪」

“はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜…………………”

「…では、カイト様は、妻子が亡くなられてから、とても永い間、一人で居られたのですね？」

「ああ。…まぁ、だから、逆に言えば気楽な一人旅では、あったんだけどな。

……一度でも、共に居る暖かさや、嬉しさを思い出すと…な。もう、今の俺には、無理だよ。……お前達を置いて行く…なんて真似は…さ。」

“……有難う御座います……我等が主。”

「……グスッ……では…次は私から…。……主殿……

何故、奥方と御息女を、己が手で殺めたのですか？」

……それは、誰もが、始めに聞きたかった事。……そして、誰もが聞きたく無かった事。

「……聞きたいか？」

“うん。”

「……どうしても……か？……正直に言えば、俺は絶対に話したくは無い。

……それでも……俺の思いを踏み躙ってでも……聞きたいか？」

“……聞きたい。”

永い……とても……長い……永い……沈黙が流れた。

そして……

「……ハァ。…ったく、俺の負けだ。話してやる。

……その代わり、途中で止めるのは無しだ。…覚悟を持て。…

……話すぞ。」

“……はい…！！！”

side：カイト

……あれは……俺が、まだ、遙かに未熟だった頃だ。

まだ、あの頃の俺は、その世界々々に居る、『最強』共に勝つ事が至難だった。

そして……

「又、負けたん？カイト兄。」

「ああ……中々、強くはなれないな……。」

「そりゃ、そうだよ。お父さん。そんなに早く強くなっちゃったら、面目丸潰れだって。」

「その前に、俺の面が潰れちまうよ、風音。」

そう。あの日、俺達はいつも通りに、ノンビリと話していた。当然、気を張り詰める事無く、

油断仕切っていたんだ……そんな時だった。

俺は、何者かに気を失わされ、妻と娘は、何処かに連れ去られた後だった。

俺は、必死に探した。【あいつ】にも頼み込んで、必死に。

……そして……

とある世界で……

見付けたんだ……

「……はやてぇ……かざねぇ……済まないいいい……」

「……かいとにい……やっと……あえた……」

「……おとうさん……あいたかった……」

……俺が見付けた時、はやてと風音は……

何百年も……心身共に……陵辱され尽くしていた……

……。

……そして……

「かいとにい……おねがいや……もう……わたしたちは……
……かいとにいと……

いっしょには……いきていけん……やから……ごしょうや
……かいとにい……」

「……おとうさん……おねがい……わたしたちを……
……

し

「て

こ

ろ

「……………ぅわああ！！」

「ありがとう……かいとにい……かいとにいと……であえて……しあわせやったよ……

あいしてる……わたしの……だんなさま……

……」

「おとうさん……わたしと……であって……くれて……ありがとう……

だいすきだよ……おとうさん……どうか……

しなないで……」

ｓｉｄｅ：三人称

「……その後、俺は二人の亡骸を腕に抱えた儘、その世界が滅びる迄、延々哭き続けた。

そして、滅んだ後、俺は自責の念に駆られ、まるで狂った様に…

……

いや、実際狂っていたんだろうな……渡った世界を次々と、問答無用で滅ぼし続けた。

俺がその時に滅ぼした世界は、恐らく１０の億乗は軽く超えるだろう。

それだけの数を延々と壊し続け、気が付けば……

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』なんて名前を、頂戴するまでになっていた。

そう。俺の二つ名は、能力に由来するんじゃない。俺のしてきた、行動そのものに付けられた

言わば、俺の業の証だ。故に、俺は名付けられた業を……その全てを受け入れ、

全てを背負って生きていくと決めたんだ。」

……ぅぅぅっっ……グスッ……お〜〜ん……うぁぁぁっ……ああぁっ……

皆……泣いていた。

カイトの話が終わっても……尚……皆……涙が……嗚咽が……慟哭が……

止められなかった……止めたく……なかった……。

「……そんな……そんな……事って……」

「……そして、俺は、ノルニルの存在を知り、お前達五行と契約し、

今までの自分を捨て、新たに『渡り鳥（カイト）』として、もう一つの生を始めた。

……その後だった。……俺が……知ったのは……

妻と娘を陵辱したのは、ノルニルのとある幹部と、その下っ端共だと…知ったのは………。」

“!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

皆の目が驚愕に染まり、次いで、激しい憎悪の目に変わっていく。

「駄目だ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

“！？！？！？！？！？”

カイトの突然の大音に驚き、一瞬思考が停止する面々。

「……駄目だ。復讐心に囚われては、駄目だ。…それでは、俺の二の舞になる。

それだけは駄目だ。俺は、お前達に、そんな事をさせる為に、話したんじゃない。

その思いを成就させるのは……俺の……俺だけの役目だ。

何者であろうとも、俺の邪魔だけは、させない。」

カイトの迫力に、誰もが声を失っていた。……その中で一人……。

「……誰なん？……その幹部って……一体、誰なん！？！？！？」

「……それは……恐らく……

第二席　ドルゴラ＝グラルヴォ　奴だ。

それを確かめる為にも、奴とは……奴だけは……俺が戦う。

これで、俺の話は全てだ。……皆、今日はゆっくり休め。期限は明日までだからな。」

そう言い、五行以外を各部屋に転送し、自身もベッドに深く沈み込んだ。

その日、機動六課から、一晩中、啜り泣く声が、聞こえていた。

決戦前日・後編～真実～（後書き）

……次回……決戦……。

※今更ですが、今話と前話の題名を少々、変更致しました。

宇宙之救世主～真なる救世主～（前書き）

現時刻（２３：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３７５，７７９アクセス　ユニーク：３７，６０４人
皆様、いつも誠に有難う御座います。

では……今話も拙作を御覧下さい。

宇宙之救世主～真なる救世主～

ｓｉｄｅ：カイト

……いい天気だ……。今日は絶好の洗濯・散歩日和だな……。

「……お早う。黄宇。龍斗。水薙。紅蓮。鋼牙。」

「お早う御座います。我が主。」

「お早う御座います。カイト様。」

「お早う♪マスター。」

「おう！相棒！！」

「お早う♪カイト兄ちゃん♪♪」

…ああ。今日も良い返事だ。……そうだな。……俺はもう、一人じゃない。

「…さて、行くか。五行（かぞく）よ。……決戦だ。」

“はい。我等（ちちうえ）が主。いざ、参りましょうぞ！”

side：三人称

「よお！みんな、お早う！！」

……シーン……。

「……あ、あれ？……どした？みんな。」

「……え～～と……あの……カイト兄？」

「ん？はやて。お早う。…みんな、どうしたんだ？…何で固まってんの？」

「い、いや、あのな？カイト兄。……その……大丈夫なん？」

「？？？何が？」

「せやから……その【あいつら】と戦うのに…や。

……なんや、もっとピリピリしてるもんかと、思っとったんやけど……。」

「へ？俺が？……アハハハハハハハハ……！！」

突然の爆笑に、驚く者、憤慨する者、そして、何故か安堵する者。

…様々な反応を見せた。

「もう！カイト兄！！！みんな、心配してるんやで！！！笑うなんて酷いやないか！！！！！」

「クックックック……い、いやぁ…悪ぃ。……そうか……皆、心配してくれてたのか。」

「せやで！！！」

「そうか、そうか。……有難う…みんな。」

……まるで慈母の様な…全てを包み込むかの様な微笑みに、皆、心を奪われて惚けていた。

「…クスクス……。大丈夫だよ、俺は。みんなが居てくれるし。……何より、今の俺には、

五行（かぞく）と、勝利（はやて）の女神が付いて居てくれるしな。」

“……主……。”「……カイト兄ぃ……。」

「…大体だな？……この俺が、あんな超絶雑魚共に、負ける訳がないだろう？

ちゃんと、まだまだ隠し球もあるしな。……お前達にも、頑張って貰うぞ？五行。

丁度お誂え向きに、奴等も六人だからな。一人一殺。…しくじるなよ？

シュガル坊やが相手でも、遠慮はいらんぞ。存分に叩きのめしてやれ。」

“畏まりました。我等が全力を以て迎え撃つと、御約束致します。”

「期待している。」“はっ！！！！！”

そんな主従達が、友が互いの絆を、確かめ合っていた時だった。

……又、全次元世界に通信が入った。

「皆様…如何お過ごしですか？

全平行世界観測機関【ノルニル】　幹部　第十席　ゼハムス＝カジャルド　です。

……では、この世界の……そして、管理局の皆様。御返答をお聞き致します。

我々の出した決定事項(じょうけん)…呑んで頂けましたね？」

“だが断る！！！！！！！！！！”

「……何ですと？…もう一度仰って頂けますか？」

“何度でも言ってやる！！！だが断る！！！！！！！！！！”

私（俺・僕）達の最も好きな事の一つは、絶対にＹＥＳと言うと思っている相手(おおばか)に

ＮＯと言ってやる事だ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

彼を！！！！！私（俺・僕）達の救世主（メシア）を、お前達（ノルニル）なんかには、渡さない！！！！！”

「…………そうですか。…………美談……結構な事です。
…………ですが、貴方達はとても愚かな選択をしました。
…………残念です。…………全く以て…………とても、残念です。」

「…………その残念な理由は…………これか？」

そう言うと、カイトは何か…………いや、誰かを取り出した。

「…！！！な！！！！！そ、そんな馬鹿な！！！！！！！！！！」

「クックック………そんなに驚いてくれたなら、僥倖だな。………御覧の通り………

　暗部専門の　第十三席　レリエル＝サルデス　は、俺が捕獲してある。」

「馬鹿な………彼女に気付ける者など、第一席様以外には有り得ない筈…！！！」

「…だからな？お前等、俺を舐め過ぎ。アルニス程度が判るのに、俺が判らない訳無いだろう？」

「貴様…！！！！！あの御方を其処迄、侮辱するかぁぁぁ！！！！！！！！！！」

「…はぁ…侮辱じゃねぇっての………。アルニスの阿呆め…ちゃん

と部下を躾けておけよな…。

今度、遊びに行ったら、ちょいと説教してやるか…。迷惑蒙るのは、いつも俺なんだし。」

「……分かりました。貴方との交渉は、此方から打ち切らせて頂きます。

第一席様を、其処迄、虚仮にする様な者とは、永遠にお話出来ません。」

「……ああ、はいはい。どうぞ、御勝手に。どっちにしろ、お前等は、

俺に皆殺しにされる事には、変わらないんだしな。

アルニスのバカタレに、何か遺言があるなら、今聞いちゃるぞ？」

「……その必要はありません。我々が、貴方を八つ裂きに致しますから。」

「おお、こえぇこえぇ。（ヘラヘラ）…んじゃあ、今からそっち行くわ。

取り敢えず、その玩具起動させとけよ～。場所判り難いだろ？」

「……今、起動しました。…どうぞ。何時なりとお越し下さい。」

プツン！

「ありゃりゃ…。切れてやがんの。」　アッハッハッハ……

大爆笑するカイト。取り敢えず、ドロップキックを咬ますはやて。

直撃した。

「ブゲラァッ！……なんばしょっとね？！はやて！！！」

「いや、何となくむかついたんや。」“うんうん。”皆して深く頷いていた。

「……ののののののの」

「の字を書いてる場合と違うで？カイト兄。…私等は、何すればええんや？」

「……グスッ……。……まず、全員、リミッター解除。クロノ大至急。」

「もう解除してある。」

「Ｎｉｃｅ　ＫＹ．」「誰が、ＫＹだ！！！」「じゃあ、ＡＫＹ．」

「……もう、勝手にしてくれ……。」

「それと、カイト兄。…その子、どないするん？」

「ん？殺すよ？今。」

そうカイトが言うと、彼女を又、収納した。…中から、ゴキッ！グシャッ！という音がする。

「はい。これで、御陀仏。」

“……。”……ブルブルッ！

皆……本気で戦慄した。

「取り敢えず、今戦えるのは、俺達以外には……

なのは・フェイト・はやて・アイン・シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ・ツヴァイ・

アギト・ティアナ・スバル・エリオ・キャロ・ギンガ・クイント・プレシア・アリシア・

ゼスト・メガーヌ・ルーテシア・ナンバーズ（ウーノ&ドゥーエ以外）・ティーダ

……ぐらいかな？」

「……結構おんな…。……総勢……32人？！

……なんや、豪(えら)い人達が集まってもうたなぁ……。

そんで？私等は何処で、どうすればええんや？」

「ああ、ガジェット退治。」

“え？そりだけ？”

「そりだけ。」

“……。これだけ集まってガジェット退治？”

「そう。これだけで、ガジェット退治。でも、約千億～一兆程有るけどね。」

“……一兆！？！？！？！？”

「うん。大体、そんぐらい。あいつらなら、造作も無いからね。あの程度のガラクタを造るのは。」

「が、ガラクタって……一応、僕の技術が結構詰まってるんだけどねぇ……；；；」

「ドンマイ♪」「……成る程。確かにこれはイラッ☆とくるね……。」

「まぁ、そういう訳で、ガラクタ潰しよろ。あ、ＡＭＦは無いから安心していいよ。」

「それは有り難いんやけど……カイト兄？何でそんな事まで知ってるん？数もや。」

「ああ。それは忍び込んで来たから。」

“ゑ　？何時の間にぃ？！”

「何日か前。こっそりと。シュガル坊や以外には、気付かれていないよ？」

「気付かれとるやないかい！！！」

「うむ！ナイスツッコミだ！！！流石、マイラバーはやて。

まぁ、あいつは黙って見過ごしてたけどな。ていうか、場所と状況を教えてくれた。」

「…何で？」

「さあ？」

……沈黙が漂った。

「さてと。あちらさんも、そろそろ痺れを切らしてるところだな。……行くか？みんな。」

“了解！！！！！！！！”

「ぶるううううううううらあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

おおおおおおそおおおおおいいいいいいぞおおおおおおお！！！！！！！！！！

いいいいったあああいいいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

どおおおこおおおおでええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

なああにいいいをおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

しいいてえええおおおおおるうううううう！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

（（（（（五月蠅い！！！！！！！！！！）））））

「…………グラルヴォ殿。落ち着いて下さい。…奴等が来ました。」

「なあああにいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

やああああっっっっっとおおかあああああ！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！

おおおおそおおいいいいぞおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！

まあああああち草臥れたあああわああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

（（（（（…だから、五月蠅いって………。）））））

シュンッ！

「………待たせたな。………さぁ、殺ろうか？雑魚共。…蹂躙の始まりだ。」

「ふんん！！！！図ううううにいいいのおおるううなあああ！！！！！！！！！

わーあああるうう」

「五月蠅ぇよ、クズ。いい加減黙れっての。みんな、てめぇの無駄に苛つく馬鹿声に、辟易してんだからよ。というか、てめぇの様なずんぐりむっくりと同じ空気吸ってるかと思うとそれだけで強烈な吐き気を催すぜ。なぁ…頼むから死んでくんない？その方がみんなの心の安寧の為にもなるしさぁ。絶対満場一致どころか一億％の支持率を得られるぜ？なぁ、頼むから早く死んでくれよ。此の世のみんながそれを望んでるんだからさぁ…ほれ！さぁ！！早く！！！今直ぐ死んでくれ！！！！なぁ解ってる？お前の存在そのものが公

害で億害有って一利無しで無意味で無価値で俺に支配されるしか脳も使い道も全く無い屑でゴミで無能で愚民なクズなんだよ？なぁ頼むから人間の言語ぐらいは理解してくれない？井蛙…………………………」ペラペラペラペラペラペラペラペラ………………………

黙っていれば、延々と喋っていそうな程、ずっと一人で、意外とえげつない事を吐いている。

まぁ、誰も止める者は居なかったが。

そして、当然の如く切れる井の中の蛙（グラルヴォ）。

「きいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

さああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

まああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああ」「五月蝿ぇ。無音（サイレント）。」

「…………！！！」↑何か言ってるが聞こえない。

「…はぁ………これで、やっと話が出来るよ。」

「全くですね。では、最後にお聞きします。管理局の皆様。彼と敵対する気はありませんか？」

“無い！！！”

「………全く以て残念です。………では、此処で始末致しましょう。」

そう言うと、唐突に彼等の後ろに、『聖王の揺り籠』が現れ、その中から、大量のガジェットが出て来た。

「はぁ〜〜〜…よくまぁ、あんだけ詰め込めたなぁ………。」

「あの大量のガジェットを搭載する為に、内部を伽藍堂にしてあります。

全部で凡そ、一兆程は有ります。全てあなたを無視する様に、設定致しました。

さて……あなたの力で、私達と戦い乍ら、全てを守れますかね？」

「うん。簡単だけど？でも、俺は助けないよ。」

その言葉に、色んな意味で、敵も味方も驚いた。

「……では……あなたは、彼女達を見捨てると言うのですね？」

「何でやねん。」

そのツッコミに、益々意味が解らず、混乱する皆々。

……だが……

「もう一度、言うぞ？俺は助けない。何故なら、俺の従者達がみんなを守るからさ。」

……その彼の宣言後……皆は……目撃する事となる……

「さあ！！！！！御披露目と行こうか！！！！！！！！！！！！

第一席　アルニス＝カイゼル　以外！！！シュガル坊やも、見た事が無い！！！！！

我が『宇宙（そらの）の救世主（メシア）』たる所以を！！！！！！！！！！」

……真なる救世主の姿を……

「ファースト・イグニッション！　ソード・オブ・マナ！　エレメント・ソード！　第一形態(アインス)！

ドラゴン・オブ・マナ！！　エレメント・ドラゴン！！　第一形態(アインス)！！」

“ギャアアアアアーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

カイトが呪文（キー）を唱えると、十四体の１０m以上もある龍達が、現れた。

「さあ！！！お次いぃ！！！！！

セブンス・イグニッション！　ソード・オブ・マナ！　エレメント・ソード！　虹色形態（セブンス）！
ドラゴン・オブ・マナ！！　エレメント・ドラゴン！！　虹色形態（セブンス）！！」

“グワオオオオォォォォーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

更に、ほぼ同じ大きさの龍達が、二十一体。……だが、驚愕はまだ始まったばかりだった。

「さあて！！！こっからだ！！！！！

セカンド・イグニッション！　ソード・オブ・マナ！　エレメント・ソード！　第二形態（ツヴァイス）！

ドラゴン・オブ・マナ！！　エレメント・ドラゴン！！　第二形態（ツヴァイス）！！」

“ゴオオオオオオオオオーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

……正に……『雲を突く』と言う表現が、正しく思える程の巨大な龍が又、七体。

「そんで！！！！！こいつだ！！！！！！！！！！

ファイナル・イグニッション！　ソード・オブ・マナ！　エレメ

ント・ソード！　最終形態（カイザー）！

我が命に従え！！　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』！！！！　行くぞ！！！！！

ドラゴン・オブ・マナ！！！！　エレメント・ドラゴン！！！！　皇（カイ）帝（ザー）！！！！！！」

……そして……最後の一体が……現れた。

……しかし、その場に居る誰にも、知覚する事が出来ず、

その事を理解していたカイトは、遙かな遠望でその全容を見せた。

……巨大……いや、余りにも……広大な体を持っていた。

“ウオオオオオオオオオーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！”

唸り声にしか聞こえないその叫びは、聞く者全てを恐怖で縛り付けた。

だが、皆が驚きを通り越して、呆けるのはこの後の出来事だった。

［グルルル～～～……我が主カイトよ。

皆のみならず、我をも喚び出すとは、思いもよらなんだぞ。］

“……りゅ……龍が喋った！？！？！？！？！？！？”

敵も味方も皆、同音同句を叫んだ。……まぁ、ですよねー。

「ああ。久しいな……皇帝（カイザー）。皆がこうして揃うのは、何時以来かな？」

［そうさな……ざっと、2～3億年振りか……。］

「そっか。……ほれ。お前達、今の内に、カイザーに甘えとけ。」

“グーーーーギャーーーーー♪♪♪♪♪！！！！！！！！！！！”

カイトに感謝の言葉を述べ、喜び勇んでカイザーの許に転移する龍達。

……意外に可愛かった。…とは、とある召喚少女達の言である。

「…よしよし。…取り敢えず、そいつらが、お前達を守ってくれる

からな。

お前達もちゃんと、あのガラクタをぶっ壊せよ～……。

俺達が、あの雑魚共を殺し終わる前になぁ～……。」

「…くっ……貴様……何処迄も、我等(オレ)を舐めおって……。」

「いや、舐めてんじゃなくって、純然たる戦力差って奴だよ。

……嘘だと思うんなら、シュガル坊やに聞いてみな？

…なぁ…シュガル坊や？お前…６ｖｓ１で、俺を殺せると思うか？

…その程度で、この俺相手に、本当に、僅かでも勝機がある…とでも思っているのか？」

「何を馬鹿な事を言っている！！！勝利以外の解など、有る訳無かろうが！！！！！！！！

言ってやれ！！！！！シュガル！！！！！！！！！！……シュガル？」

「……断言しよう。……絶対に無理だ。

我々だけでも、勿論、ノルニルが、その存在の全てを掛けても、恐らく奴には勝てん。」

そのシュガルの思い掛けない言葉に、皆、驚き、戸惑い、愕然とし…そして……肯いた。

「良く解っているじゃないか。…流石は、俺の弟子だな。

お前には未だ、全ての力を見せた事は無いが、ちゃんと感じ取れてはいた様だな。」

「……ば、馬鹿な…！！！！！！そんな事が有る筈が無いだろう！？！？！？！？

臆したか！！！！！！シュガル！！！！！！！！！！！！」

「……いいや。……紛れも無い…厳然たる事実だ。……だが、俺は戦う。

この戦いだけは……負ける訳にはいかん！！！！！！！！！！」

そのシュガルの気迫に、カイトに押されていた面々が、ようやっと気勢を盛り返した。…が…

「…全く……。ようやっっっと気合いを入れやがったか。遅ぇ…遅過ぎるぞ…お前等。

……未だ、俺の御披露目は終わって無ぇんだから…さ。」

……その言葉によって……

「んじゃあ、行くぜ？覚悟はいいか？テメェラ！！！！！！！！！！」

…………更なる恐怖が…………待ち受けている事を…………

知った…………

「五行よ！！！！！我が命に随い！！！！！己が力を、我が前に示せ！！！！！！！！」

“御意！！！！！！！！！”

「五行！！！！！神獣形態！！！！！」

五行が、神性を帯びた存在（ケモノ）に変化する。……そして……

「五行！！！！！四神形態！！！！！」

五行の内、四神のみが皇帝（カイザー）を超える程大きくなり、黄龍のみ、その儘カイトの側に傅いていた。

「さあ！！！皆様！！！！お立ち会い！！！！！！！本世界初公開！！！！！！！

今から魅せるもの！！！！！！！これこそが！！！！！！！真なる神性（チカラ）だ

！！！！！！！！！！！！！

四神！！！！！！！！！！四霊（しれい）形態！！！！！！！！！！！！！！」

その命を享け、姿を変じ、更に大きくなる四神。

その変化が完了し、現れた神々は……

「四霊が一……応龍（おうりゅう）。」

“ギャアアアアアーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

その姿は、青龍の体を更に増大させ、より神々しく輝きを放つ………紛れも無い神。

「四霊が一……麒麟。」

“クァァァァアアアアアーーーーーン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

その姿は地球では御馴染みの、あの麒麟である。…しかし、その神々しさは言葉では語れない。

「四霊が一……鳳凰。」

“キェェェェェエエエエエーーーーーン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

その姿は、これ又、地球上では御馴染みの燃え盛る鳳（おおとり）。

だが、誰も彼の者を鳥等と思う者は居なかった。

「四霊が一……老亀（ろうき）。」

その姿は、玄武であった際、体より映えていた羽が、更に大きく広く……

そして…神々しく煌り輝き、顔を覆う迄になっていた。

「そして……これで最後だ。

黄龍

五行形態。」

最後の命を享け、傅いていた黄龍がその真の姿を顕した。

その姿は、四神の凡そ二倍はあろうかという、四霊をも遙かに越え、

四神の三倍程の大きさ……凡そ、銀河３０個分程で留まった。

“グギャアアアアアーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

「これが黄龍の真の姿だ。

計４３体の龍に加え

四霊

そして

黄龍

これが、俺の全戦力。あらゆる規模の害敵に対し、如何なる対応でも出来る。

大地を　空を　星を　銀河を　宇宙を　世界を　そして　人を

此の世の、ありとあらゆるものを、守り救う存在

これが…俺が『宇宙（そら）の救世主（メシア）』たるその所以

これこそが…『真なる救世主（メシア）』の姿だ。」

“ゴオオオオオオオオオーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！”

その彼の従者達の唸りに、皆、恐れ、怖れ、畏れ、懼れ……そして……敬(おそれた)った。

「此方の準備も、今、調った。……さあ。始めようか？……た(ワン)たかい(サイドゲーム)を。」

世界の命運が決まる真なる戦いが……今、幕を開ける。

宇宙之救世主～真なる救世主～（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回も、未だ決戦には至れませんでした。

皆様、申し訳ありません。

……次回。

……決戦。

……そして……

……決着。

では、皆様。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

決戦・前編～死合開始～（前書き）

現時刻（１７：００）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３８６，６５９アクセス　ユニーク：３８，５５２人
皆様、毎度御読み頂き、誠に有難う御座います。

ボリュームが増え過ぎた為、今回も二回に分けました。

皆様、幾度も申し訳ありません。

では。今話も拙作を御堪能下さい。

決戦・前編～死合開始～

ｓｉｄｅ：三人称

それは正に異様だった。他に言い様が無いくらい……いや、他に言えるとすれば……

それは……余りに神性であった。神聖にして真性。

神々ですら、ここまで神々しくはあれないであろう…と、いう程の神性であった。

「さて……殺るか……？」

その言葉に、本気で戦慄し、身構えるノルニル幹部達。……だが、

「……でも、それじゃ、つまんないよなぁ？……だから、提案しよう。」

「……提案……だと？」

「そう。提案。内容は簡単だよ。こっちは６人。そっちも丁度お誂え向きに６人。

だから、１ｖｓ１のバトルを計６回行う。勝敗方法は、どちらかが死ぬか完全消滅するまで。

こっちは、一体でも負けたら、その時点で俺達の全面敗北でいいよ。

俺の命もくれてやる。……どうだ？破格だろう？」

その言葉に思わず、構えを解いてしまった。

「……何を企んでいる？……その様な条件など提示してくるとは……。」

「いや、だから言ったろ？只、潰したんじゃつまんないし、味気無いってさ。

あ、因みに、もし他の奴が乱入して１ｖｓ２になったら、問答無用で俺が殺すから。

余計な手出しは一切禁止だ。……ね？簡単（かてるわけないだろ）でしょう？」

「……くっ……おのれ……何処までも我等を舐め居って……（ギリギリ）」

「……いや、その条件…呑もう。」

「な!?シュガル!!!正気か!!!」

「無論だ。…奴の方から、提示して来たのだぞ?しかも、此方に圧倒的に有利な条件で。」

「むぅ……だが…しかし……。」

「…カルラド…テブダル…。プライド等というモノに、今は拘っている場合では無い。

奴は、それ程までに、凶大で恐ろしい敵なのだ。」

「……分かった。今は、お前に従おう。第三席　シュガル＝ブラウセス。」

「「異議無し。」」

「……有難う。皆。」

「おーい。……意見は纏まったか～…?」

「…ああ。そちらの提示条件を、全面的に呑む事にした。」

「ＯＫＯＫ♪そう来なくちゃなぁ♪♪断ってたら、今この場で、全員八つ裂きにしちまうとこだったぜ♪」

……嗚呼……受けて良かった。

……思わずそう思ってしまった自分達に、身震いしてしまった、ノルニル幹部達であった。

「んじゃあ、席次が低い順からで良い？その方が楽しめるだろ？」

「……構わない。問題無いな？第十一席　ユニゲム＝ドラルザグ。」

「当たり前だぁ！！！！！始めにオレ様と戦う事を、後悔させてやる！！！！！」

「んじゃあ、試合会場は、無人の平行世界で良いな？…ほれっと。」

そうカイトが言うと、ユニゲムと五行の一体が、別の世界に転移した。

その戦いを、カイトが全世界にモニターしている。

「さあさあ、皆様…御立ち会い！！！これから御覧に入れますは、

世にも珍しい、ノルニル幹部と救世主（メサイア）達との、世界を掛けたフルバトル！！！！！

是非共、お楽しみ下さい！！！！！

箸休めに、管理局＆龍達ｖｓガジェット一兆も有りまっせ！！！！！！！！！

その結末！！！！！確かと、御覧下さい！！！！！！！！！！！

では！！！！！始まり始まり～～～！！！！！！！！！！！」

余りに巫山戯た、カイトの全世界への台詞。

……だが、其れを咎める者は、誰一人として居なかった。

皆、目の前の敵に、それどころでは無かった。

……そして……それ以上に……誰もが見たかったのだ。

……圧倒的な……真のチカラというモノを……。

ｓｉｄｅ：はやて

……たはは……相変わらず、飛ばしとるなぁ…カイト兄。

「遠き地にて　闇に沈め！　デアボリック・エミッション！！！」

又、目の前のガジェットを纏めて、何十体と落とした。

「スターライト……ブレイカー！！！！！」

「ジェットザンバー！！！！！」

「劫火一閃！！！！！」

「ギガントハンマー！！！！！」

「一撃必倒！！！ディバインバスター！！！！！」

「クロスミラージュ！！！」

「ストラーダ！！！」

「フリード！！！ヴォルテール！！！！！」

みんなの一斉攻撃で、更に数千体は纏めて落とした。……でも……

「…うわぁ……まだまだ、うじゃうじゃいるよぉ～……ティア～～……。」

「解ってるわよ、スバル…。泣き言言うんじゃないの。……私だって辟易してるんだから。」

「うう～～～……早く片付けて、カイトさん達の戦闘見たいよ～……。」

「……ハァ……それには、全く以て同感ね。」

そう。あんなに強力な攻撃を、幾らしても、次から次へとウジャウジャワサワサと、

後から後から、湧いてくるのだ。自分達が一体、どのくらい落としたのか、

まるで覚えられないぐらい、沢山……本当～～～～～に沢山いるのだ。

正直、スカリエッティをボコボコにしたいぐらいに、いるのだ。

そろそろ、みんなに泣きが入りそうになってる時（一部はもう既に入っているけど；）……

「……え？！……あ、は、はい！！！」

キャロが、突然大声を出した。

「…？どうしたん？キャロ。」

「あ、あの！！！ツヴァイスさん達が、ガジェット達を少しは削ってくれるって、言ってます。

だから、あの…もう少し頑張れって。」

「……ほうか。ほな、頼むで…って言ってくれへんか？キャロ。」

「は、はい！！！解りました！！！」

キャロが、ツヴァイス達と話している間に、みんなに念話で、状況を伝えといた。

「…はい！御願いします！！！…皆さん！！！ツヴァイスさん達が、攻撃します！！！

下がって下さい！！！！！危険ですぅ！！！！！！！！！！」

そのキャロの言葉に慌てて、下がり、一塊になる私等。…てか、狭っ！！！

……とか、思てると物凄い光景を目にした。

“ゴガアアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！”

……ガジェットが、あっちゅう間に、消し飛んでしもうた。…まだ、うじゃうじゃ居るけど。

そんな光景を、呆然と眺めていると、又、キャロが話し始めた。

「……！…は、はいぃ！！！！み、皆さん！！！！今の吐息（ブレス）で、

凡そ二千億強は、吹き飛んだそうですぅ！！！！！！」

……全員、本当に固まった。…え？吐息？要は、只の息？

吐いただけで、二千億も吹っ飛ぶもんなん？そんなら、私等いらないんと違う？

そんな疑問を、本気で抱いていた時やった。……彼から話し掛けられたのは。

［……諦めるな。我が主が何故、わざわざ御主等に戦わせていると、思ってる？］

「！！！！！……え、ええと……メンドクサイ…から？」

［……それも有るには違い無いが。事実は違う。これは、御主等に課せられた試練だ。］

“試練？”

［…そうだ。どれ程数多の敵であろうとも、挫けない心。

どれ程、強大な敵であろうとも、立ち向かう勇気。

どれ程、疲れ果てようとも、決して諦めない気力・精神。

それらを、この世界を任せられるに、足るだけのものを、御主等が持っているかどうか。

これは、それを確かめる為の試練だ。」

……嬉しかった。私等を試すとは言っているが、

その実、出来ると信頼してくれてるからこその言葉。

そして……奮い立った。……これが……私等の試練だと言うのならば……

乗り越えてやろう！！！みんなで！！！

「……よし！！！気合い入れるで！！！みんな！！！

やってやろうやないかぁ！！！！！！！！！！」

“おおおおおおーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

［その意気だ。後、約七千五百億機だ。我が確と見届けようぞ。魔力が尽きたのならば、我が回復してやる。我が主の命だ。存分に己が力を振るえ。］

「あんがとさん！！！ほな、みんな行くで！！！！！」

“了解！！！！！！！！！！！”

この戦い！！絶対に負けられへん！！！！！見ててな！！カイト兄！！！！！

「響け！！！終焉の笛！！！！！　ラグナロク！！！！！！！！！」

side：カイト

……フッ……どうやら、やっと火が着いた様だな。……さて。
では、俺も頑張りますか。

「まずは、第一戦目。

ノルニル　第十一席　ユニゲム＝ドラルザグ　ｖｓ　四霊　鳳凰
戦闘（ファイト）開始」

ｓｉｄｅ：試合会場

宇宙。其処に、対峙しているモノ達が居た。片や、豆粒…いや、蚤未満程の人間。

そして、片や、翼を畳んだままでも、尚その威容を誇る巨躯を持つ

大鵬。

「………ぐっ………反則にも程が有るぜ………何だ………この畏れ………いや………

この神々しさは………只、向かい合ってるだけだってぇのに………。」

「………諦めよ。最早、其方の死は免れ得ぬ。」

「…ちっ………舐めるなぁぁぁあああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

そう吠え、己を奮い立たせると、何処からともなく、多数の人を喚び出した。

その人々は…アーサー王・ヘラクレス・イスカンダル・大小スペッキオ…等々々。

数多の、伝説・神話の類に伝承される英雄・豪傑達であった。

しかし、その双眸には、只、貪欲に戦う相手しか映っていない。

「フン！これが、俺の能力！　『真・召喚使い（マスター・オブ・サーヴァント）』！！！

さあ！！！伝説の英雄達よ！！！己が力を示せ！！！！！」

そうユニゲムが言うと、英雄達が一斉に鳳凰に襲い掛かり、自身はヘラクレスと、同化した。

その豪華絢爛な英雄達に、さしもの鳳凰も……と、一部の人は思った。

……しかし……

「……そうか。……では、さらばだ。

そう鳳凰が唱えた瞬間……

永遠（エターナル）なる聖炎（ブレイズ）」

召喚された者達は言うに及ばず……

……ユニゲムすら……いや……

世界そのものが、その瞬間、完全焼滅した。

Ｓｉｄｅ：カイト

「お帰り。鳳凰。」

「は。我が主。…あれで、宜しいので？」

「ああ。無問題だ。良くやった。」

「は！御誉めに与り、光栄至極。」

よしよし。…お？今頃、後悔してるのかな？ビビってやがらぁｗｗｗ

「んじゃあ、次。二回戦、行っくぞぉ～…。ほいっ。

第二回戦　第十席　ゼハムス＝カジャルド　ＶＳ　四霊　老亀

戦闘（ファイト）開始」

行ってらっさ～い…ノシノシ！

ｓｉｄｅ：再び別の試合会場

「……ぐぅっ……成る程……こ、これは……凄まじい程の……神性だ……。」

今、ゼハムスの前に、超巨大な…まるで老人の様な髭を蓄えた亀が在る。

恐らく、あの風貌が、その名の由来なのだろうと、ゼハムスならずとも思った。

「……では、何処からでも、掛かってくるが良い。」

「…くっ……では、遠慮無く！！！『真・磁力使い（マスター・オブ・マグネット）』参ります！！！！！」

「くそおっ！！！！！！」

あれから、幾十回も攻撃を繰り返しているが、一向に効かない。…いや、届かない。

手を変え品を変え、直接攻撃は疎か、周りの空間に作用させても、まるで意に介していない。

こんな化け物相手に、勝てる奴など居るのか？…そう思ってしまう程、余りに強過ぎた。

……そして……

「……もう終わりか？……存外だらしないのだな。

……もう良い。……永遠に休め。

混沌（カオス）たる奔流（ウェーブ）」

その咆哮によって、生じた……いや、喚び出された大波が、あらゆるモノを押し潰し……

その世界ごと、圧壊し尽くした。……

ｓｉｄｅ：カイト

「御苦労。老亀。」

「ははっ！我が誉れの極みに御座います。」

よしよし。良い具合だ。

「ほい、次。さっさと行くぞ～。…ほれっ。

第三回戦　第五席　テブダル＝ビャルザド　ＶＳ　四霊　麒麟

戦闘（ファイト）開始」

又、あっさり終わっちゃうかな？

ｓｉｄｅ：又々別の試合会場

「……くっ……私を、他の下位幹部共と、同じにされては困るぞ。」

「…御託は良い。さっさと掛かってくるが良い。」

「その言葉！！後悔せよ！！！！！」

「行けい！！！星々よ！！！！！！奴を圧壊せしめよ！！！！！！」

そう彼が言うと、麒麟の周りに在った銀河群が、麒麟に向かい押し寄せ、押し潰した。

「……フン！それ、見た事か！！！幾ら、四霊等と言っても、

所詮、我等上位幹部の敵では無いわ！！！……！！！！！

な、な、な……そ、そんな……そんな馬鹿な！！！！！！！！！

全くの無傷だとおおおおお！！！！！そんな馬鹿な事があって堪るか！！！！！！！！！！」

そう。数多の星々…いや、銀河群に押し潰された筈の麒麟が、全くの無傷で未だ存在(そこにいた)していた。

自身のほぼ全力を懸けた一撃が、完全に無意味に終わった事に愕然と戦慄していたテブダル。

……そして……

「…？何だ。これが貴様の最も強い攻撃だったのか？

……全く以て興醒めだ。……もう良い。

寸断する一角（カラミティ・ホーン）」

その麒麟の宣言後、テブダルは……いや……

テブダルの居た空間を……宇宙を……そして……

世界を完全に寸断し……世界は瞬く間に……崩壊した。

side：カイト

「お帰り、麒麟。…少しは遊べたか？」

「…は。我が主。」

「……正直に言っていいぞ？」

「は！では、畏れながら。…正直に申し上げまして、全く以て無価値でした。

多少の鬱憤は晴らせましたが。」

「…そうか。まぁ、多少でもストレスが発散出来たなら、それで良しとしようや。な？麒麟。」

「ははぁ！！許より、我等に否やは是一切御座いません。我が主。」

「ああ。お疲れ。麒麟。」

「はっ！恐悦至極！！！」

うむ。……さて…と。

「さぁさ！！！皆様！！！！！！これにて、前哨戦……いやさ……

デモンストレーションは終わりだ！！！！！！

次なる戦いに！！乞う御期待！！！！！」

→後編に続く

決戦・前編～死合開始～（後書き）

次回。

到頭。

決着。

決戦・後編～欲望～（前書き）

現時刻（１１：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３９９，６１３アクセス　ユニーク：３９，４２７人
皆様、いつも御覧頂き、誠に有難う御座います。

お待たせ致しました。今回も又、とても長くなってしまいました。

では。今話も拙作を……そして、彼の旅の、一つの終着を御覧下さい。

決戦・後編～欲望～

ｓｉｄｅ：カイト

さてさて？あっちの方はどうなってるか……な？……って、おいおい……。

「……派手に暴れてやがんなぁ……。」

あっちこっちで爆発や消滅している。

全く……幾ら、無制限にしてやってるとは言え……って……まじかよ……ｏｒｚ

ｓｉｄｅ：カルラド

「くっ……！！！」

危なかった…。突然、巨大なビーム砲の様なものが、我等（オレ）に向かって飛んで来た。

どうやら、あの小娘共が放ったモノの様だ。

……あれ程の力が有るとは……少々、見くびって居た様だな。
……しかし……

「…フン！　奴も存外間抜けな最期だったな。……己が守りし者に殺されるとはな。」

そうだ。奴は、あのビーム砲擬きを、避けられずに真後ろから直撃したのだ。

幾ら、奴が強いと言っても、全くの無防備であれだけの砲撃を喰らえば、

例え奴とて無事には居れまい。……何いぃぃ！！！！！！！！！！！！

「ば、馬鹿な！！！！！！無傷…だとぉおおおおお！！！！！！！！！！！！！！」

ど、どういう事だ…？奴は事前に、防御魔法か何かでも使っていたのか？

……い、いや、そんな気配も動きも、全く無かった。……ならば……奴は……

「……真逆……素であの攻撃を喰らっても尚……無傷だと…
……言うのか……

……馬鹿な……そんな事……化け物でも無ければ……無理だ……。」

……我等（オレ）は……一体……どの様な存在（バケモノ）と……対峙している
と言うのだ……。
我（オレ）は……我知らずに震えが止まらなかった……いや……止め
られなかった……。

ｓｉｄｅ：カイト

全く……。トリプルブレイカー（全魔力＋カートリッジフルリロ
ード＋ファイアリングロック解除）の直撃とか……俺じゃなかっ
たら、普通に死んでたぞ？

「……皇帝（カイザー）…。」

［…うむ。彼の者達から、詫びの言葉が来ている。］

「んじゃあ、一言言っといてくれ。次やったら、Ｏ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆
ＫＩだ…ってな。」

［……う、うむ。了解した。確かと伝えておこう。］

「ああ、宜しく。…あ、後、俺が勝つ前に倒さないと、同様だっつ
っといて。」

［……了解した。］

「お～う。……んじゃあ、次、いっちょやるか！　……ってあれ？　どしたの？　お前等。」

「「い、いや、何でも無い。」」

「……あ、そう。じゃ、次行くぞ？…ほれ。

第四回戦　第四席　カルラド＝ハルシアス　ｖｓ　四霊　応龍

戦闘開始（ファイト）」

けっぱれ～～～ノシノシ

ｓｉｄｅ：四度別の試合会場

「……くっ……成る程な……シュガルが彼処迄、怯える訳だ……。」

今、彼は四霊が一…応龍と対峙している。

……その威容は、あらゆる敵を、絶望の淵へ叩き落とすモノに相違無い。

「……さあ……其方も……彼の者達の許へ逝くが良い。」

「…ぐっ……ほざけぇぇぇえええ！！！！！！　我(オレ)は負ける訳にはいかんのだ！！！！！！」

「我が『幻惑（イリュージョン）』の前に平伏せ！！！！！」

すると、彼の周りの空間が歪み出し、姿が見えなくなった。

と思っていたら、何と何時の間にか応龍の頭に居た。

「さあ！！！　これで終いだ！！！！！　我が『幻惑（イリュージョン）』に喰われて朽ちるがいい！！！！！」

そう言い、応龍の頭に手を翳すと、応龍の身体が激しく光り……

そして……

“グギャアアアーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！”

咆哮の様な…絶叫の様な音(こえ)を上げた。

……その大音にさしもの応龍も落ちたか……と思われた……

が……

「フン！　そら、見た事か！！　油断大敵と言う事だ！！！　見よ！！！

この巨躯がのた打ち回る滑稽な姿……を……そんな……馬鹿な……。」

「……もう、終わりか？……真逆……高々、この程度の幻風情で、この応龍たる我が

どうにかなるとでも……本気で思っていたのではあるまいな…？」

……そう。まるで効いてはいなかった。

どうやら、さっきの咆哮は、ちょっとした悪戯の様である。……意外と茶目っ気が有った。

そして、そんな茶目っ気を発揮した応龍とは逆に、

己が自慢の『幻惑（イリュージョン）』を幻風情と、あっさり片付けられた事により、

すっかり自信を喪失してしまった、カルラドに待っていたのは……

「……なんだ？その真逆だったのか……。我も舐められたものだな……。

……では、その罪……其方の命で償って貰おうか……

無限なる吐息（インフィニティ　ブレス）」

そう応龍が言うと、全身を震わせ……その余波で、周りの星々や銀河が砕け散り……

カルラド毎、世界を吐息で圧壊し尽くした。……だが……その瞬間……

（……これで、我（オレ）も終わりか……む？……お前は……

……

そうか……そういう事か……判った……持って行け……

確かとこの茶番……

完遂して魅せろ……より高みを目指せよ……親友……）

ナニモノカの介入を受けていた……。

side：カイト

「御苦労、応龍。」

「はっ！　畏れ入ります！！！　……しかし、宜しいのですか？　我が主。」

「……ああ、構わない。……下がってくれ。」

「ははっ！！！」

何を考えている…？　……まぁいい。好きにすればいいさ。

「さて。では次……準備はいいかい？　シュガル坊や。」

「…坊やと呼ぶなと言っている。……問題無い。此方は何時でも構わない。」

「ほいほい。んでば、行きまっせ～。あらほらさっさ～。

第五回戦　第三席　シュガル＝ブラウセス　ｖｓ　五行が長　黄龍　戦闘（ファイト）開始」

果てさて……一体、何を企んでいるやら……。

ｓｉｄｅ：五度違う試合会場

「……。」

「……貴様が何を考えていようと……我等には関わり無い……

さあ……掛かってくるがよい。」

「……第三席　シュガル＝ブラウセス　間使い（はざま）……いざ参る。」

「時よ止まれ…奴の周囲の空間よ……凝固せよ。」

その宣言後、黄龍の動きが止まった……だが、その刹那……

パリンッ！“グゴガァァァアアアアーーーー！！！！！！！！！！！！！！”

それをあっさり破り、咆哮を浴びせられたシュガルは、思わず恐怖に震えた。

……そして……

「我が主の弟子とは言え、手加減はするなと厳命されている。

では。篤と拝むが良い。

ノ」

銀河を覇滅（アトミック　ギャラクシ）せしモ

その瞬間……その世界に有った星々全て……いや、全銀河が己が最期に打ち震え……

粉々に砕け散り、宇宙ごと世界そのものを圧砕した。

side：カイト

「……我が主。」

「……よい。構わぬ。御苦労だった。下がって良い、黄龍。」

「……はっ！」

……本当に何を考えているんだか…な……。

……どうやら、あちらも粗方片付いた様だな。

……では……こちらも……最終決戦と行きますか。

「待たせたな……グラルヴォ……？　……あ……済まん。忘れてた。」

そう言えば、五月蠅かったから、サイレント掛けてたんだっけ……。

すっかり静かなんで忘れてたよ……；；；

「ほいほい。騒音開始（サイレントかいじょ）。」

「ぶうううううううううらあああああああああああああああああああああああああああああ

きいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいいいい

さああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ

まああああ」「あ、やっぱ五月蝿ぇ。静音（サイレント）」「………!!!!!
!」

「はぁ………しょうがねぇ………このまま行くか。

………お前達、後の事は頼んだぞ。

では。　最終決戦　第二席　ドルゴラ＝グラルヴォ　ＶＳ　『宇宙（そら）の救世主（メシア）』　八神カイト

復讐(ファイト)遂行」

side：最終決戦地

「………さて。此処ならいいだろう。騒音(かいじょ)開始。」

「きいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

さああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

まああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ずううううううううううううううううううううにいいいいいいいいいいいいいいいいい

のおおお」

「………グラルヴォ………貴様に聞きたい事が有る。」

「………この儂に聞きたい事だと？」

「ああ。幾つか有る。戦うのはその後でも構うまい？………冥途の土産だ。」

「フンンンッッッ！！！！！　自ら買って出るとは殊勝な心掛けだ。良し！！　許そう！！！！

何なりと聞くが良いいいいい！！！！！！！！！！！！！」

「では、遠慮無く。まず一つ。我が妻と娘を陵辱したのは…貴様か？ドルゴラ。」

行き成り核心から聞いて行くカイト。……そして……

「……くっくっく……今頃気付いたのか？　そうおおおだあああ！！！！！！！！！！！！！！

この儂が！！！！！！　貴様の女と娘を喰らってやったのよ！！！！！！

だというのに今の今迄気付かなんだとは！！！！！！！！！！！！　滑稽にも程が有る！！！！！

……しかし、貴様の女と娘は美味かった。そうだな……それだけは、あのクズドモは

評価してやっても良いぞ？この儂に評価されるのだ！！！！　末代迄誇るが良い！！！！」

その余りに非道な台詞に……聞いていた皆には……

恐怖と怒りと憎悪以外の感情は……湧き出て来なかった。

……しかし……当の本人は……というと……

「……そうか。では、次だ。」

「…むぅ？未だ聞く事など有るというのか？」

「…ああ。実はこれからが本題だ。」

「…ふむ。……構わぬ！！！　聞くが良いいいい！！！！！！！！！！」

「……では聞く。……貴様はナニモノだ？」

その問いに皆、首を傾げた。

何者って……ノルニル幹部第二席ドルゴラ＝グラルヴォだと、自分で言ったでは無いか。

……しかし……問われた本人には、意味が解っている様だ。

ニタァ……という……余りにも邪悪な……邪悪過ぎる笑みを浮かべていた……。

その笑みを見た者の大半は、余りの気持ち悪さに直視出来ず、思わず嘔吐(えず)いた。

……そして、問われたそのナニモノカは……

「【……何時気付いた？】」

ドルゴラの声に重なって、ナニモノカの声が聞こえた。

……その声は、聞く者全てを恐怖に陥れる……

いや……恐怖という感情しか湧く事が出来なかった。……一人を除いて……。

「……ドルゴラが犯人だと聞いた時からだ。」

「【……。】」

「情報源は【奴】なのでな。信憑性は保証出来る。だが…なればこそ、辻褄が合わない。

ドルゴラは、未だ五億歳程度。我が妻と娘が陵辱されたのは、軽く垓単位は越える程昔だ。

明らかに年数が合わない。であるならば……考えられる可能性は幾つも無い。」

「【……聞こうか…？】」

「……一つ。ドルゴラが、自身の歳を偽っている可能性。…だが、それは有り得ない。」

「【…何故だ？】」

「奴は、自己顕示欲の塊だ。その奴が、権威の象徴の一つでもある歳を誤魔化す意味が無い。」

「【……。】」

「…次。……と言っても、これが結論なんだが……別のナニモノカが、常に誰か……

いや、ナニカに憑依しながら、生き存えている。」

「【……フ……フハハハ……フハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハ】」

……そのナニモノカは……まるで狂っているかの様に……

いや、事実、ソレは狂っていた。……そして、狂ったまま……

「【そうだ！！！！！！！！その通りだ！！！！！

流石！！！！！！！いやいや！！！！！！！流石は！！！！！

本当に素晴らしいな！！！！！！！！！！！！！！貴様は！！！！！！！！！！！！！！

真逆！！！！！！！真逆！！！！！！！！！！！！！！真逆！！！！！！！！！！！！！！

我が！！！！！！！我の正体が明かされるとは！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

夢にも思っていなかったぞ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！

嗚呼……嗚呼……！！！嗚呼……！！！！！嗚呼……

素晴らしい！！！！！！！！！！本当に貴様は！！！！！！！

！！！！！！！！

素晴らしいぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！】」

「………歓喜している所に済まないが………再度聞きたい。」

「【うむうむ！！！！！　構わぬ！！！！！　構わぬ！！！！！！！！！

なんなりと聞くが良い！！！！！！！！！！

貴様からの問いであれば！！！！！！！！！！！！！！！

我は何んんんでも！！！！！　応えようぞおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！】」

「……では。改めて聞こう。我が妻と娘を陵辱したのは……キ：サマ……か？」

「【おお！！！おお！！！！！！そうだ！！！！！！そうだとも！！！！

！！！！！！！

最高だ！！！！！実に最高だったぞ！！！！！！！！！！

貴様の妻と娘の味は！！！！！！！！！！！！！！！

じいいいつうううにいいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

美味かったあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！】」

……皆……おぞましさに戦慄した……。

彼の妻子は……あの様な得体の知れない……まるで恐怖の権化の様な存在に……

いいように玩ばれたと言うのか……何年も……何十年も……

そして……何百年も

その言い知れぬ絶望に……誰もが涙せざるを得なかった。

「………そうか。………では、最期の問いだ。………貴様の名は何と言う？」

「【何？！我の名か！？！？！？！？！？我の名を聞いたのか！？！？！？！？！？

おお！！！！！おお！！！！！！！！！！おお！！！！！！！！！！！！！！！

嬉しいぞ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

我の名を呼んでくれるか！！！！！！！！！！呼んでくれるのか！！！！！！！！！！】」

「………ああ、呼んでやる。………教えろ。貴様の名は？」

「【おお！！！！！おお！！！！！！！！！！おお！！！！！！！！！！！！！！！

呼べ！！！！！！！！！！呼んでくれ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

我が名を！！！！！！！！！！我が名は！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

【欲望（ディザイア）】！！！！！！！！！此の世全ての欲望を司る！！！！

！！！！！！！！！！

【欲望（ディザイア）】也！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！

さあ！！！！！　呼べ！！！！！！！！！！　我が名を！！！！！

！！！！！！！！！！

誰もが、その余りの渇望による咆哮に、恐怖した。怯えた。打ち震

我が名！！！！！！【欲望（ディザイア）】をおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！」

えた。

……だが……それは……彼の者の咆哮に依るものでは無かった……。

「……そうか。分かった。これで問答は終いだ。では、呼んでやろう。」

「【おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！

さあ！！！！！呼んでくれ！！！！！！！！！！！！！！我が名を！！！！！！！！！

《真なる救世主（メシア）よ》！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！】」

「……違う。今の俺は、『真なる救世主（メシア）』でも『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』でも無い。

俺は……

……

八神風音の父……そして……八神はやての夫……

……

八神カイトだあああああああああああああああああああああああああああああああああああ

！！！

【欲望(ディザイア)】あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

！！！

！！！」

……彼の……八神カイトの……涙の咆哮に……皆……

心から……悲しんだのだ……。

圧倒的だった。余りにも圧倒的過ぎた。

彼が一撃殴る度に…一発蹴る度に……周辺の銀河が数十個は消し飛ぶのだ。

余りの凄まじさに、誰もが固唾を呑み、魅入っていた。

だが、その攻撃を享けている当の本人？は笑っていた。

「【フハハハハハハハハハ！！！！！！！！！素晴らしいな！！！！！！！！！！

貴様の憎悪は！！！！！！！！！心地好い！！！！！！！！！

実に心地良好いぞ！！！！！！！我を殺したいというその渇望！！！！！！！

実に心地好い！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！】」

その言葉にも一切反応せず、次々と『欲望（ディザイア）』を殺していく。

……何十回も……何百回も……何千回も……そして……

「……これで、後一度殺せば、貴様は消え去る。」

「【…そうか……それは楽しみだ（ニタァ）。】」

【欲望（ディザイア）】は、まるで……自分が死ぬ筈が無いと

確信しているかの様な、邪悪な笑みを浮かべていた。

……だが……

「……出て来い、坊や。」

「……何時から、気付いていた？」

……闖入者によって、その処刑は先送りとなった……

「…初めからだ。……さっさとしろ。こいつの能力も吸収するのだろう？」

「……やはり、其処迄判っていたか。」

「早くしろと言っている…。もう殺すぞ?」

「……分かった。少し待て。」

すると、シュガルは、ドルゴラであったモノから、何かを吸い取った。

「……完了した。」

「……ならば、早く退け。巻き添えを喰いたくなければ…な。」

「……分かった。」

「……さて。ではいいか?」

「【…その前に…奴は何をした?】」

「貴様の…ドルゴラの『創造』を吸収した。カルラドの『幻想』も吸収していたな。」

「【…！！……そうか。…まぁいい。…早く殺してみせろ……（ニヤァ）】」

「……矢張りな。……貴様、【欲望（ディザイア）】の名が示す通り、

欲求を持つ者…特に殺意を抱く者の手によっては、決して死なないのだろう？」

そのカイトの言葉を、肯定するかの様に【欲望（ディザイア）】は笑みを深くした。

「……そうか。……だが、残念だったな。」

その言葉に、皆のみならず【欲望(ディザイア)】も意味が解らず、不思議そうな顔をした。

「…貴様が欲望を糧に生きていけるならば、俺の中の貴様への殺意も見える筈だ。良く見ろ。」

「【…フン。そんなものわざわざ見ずとも、判るに決まっ……て……】」

言葉を途中で止め、急に沈黙し狼狽する【欲望(ディザイア)】。…そして……

その後、【欲望（ディザイア）】が発した言葉に、全ての人が驚かざるを得なかった。

「【…な……！！！！！馬鹿な！！！！！！な、何故だ！！！！！！！！！！

何故！！！！！！貴様！！！！！！我への殺意が無いのだ！！！！！！！！！！

有り得ん！！！！！我は貴様の大切な者を陵辱し続けたのだぞ！？！？！？

それなのに何故！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？】」

「…その答えは簡単だ。貴様が消える事は決定事項。只の事実。

単に遂行者が俺だと言うだけの話だ。故に、其処に一切の感情が挟まれる事は無い。

だから……貴様はもう、生き続ける事は出来ないんだ。此処で死ぬんだよ。」

「【そ、そんな馬鹿な！！！そんな事が有る筈が無い！！！！！

わ、我が消え去る等！！！！！そ、そんな事が有っていい筈が無い！！！！！

そんなこｔ】」「もういい。黙れ。無音（サイレント）。」

「もう貴様の御託はいい。後は、刑を執行するのみ。

『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』　カラミティ・エンド」

空間ごと十字に刻まれる【欲望（ディザイア）】。

……だが、真の処刑執行はここからであった。

「まだだ。全魔力解放。　カオス・エンド」

更に、その十字に吸い込まれる前に、ドルゴラごと右手にある球体で掴むカイト。

そして……皆は更なる驚愕を目の当たりにする事になる。

「時間停止（ストップ）。空間静止（ロック）。」

“何っ！？”

……そう。カイトが、シュガルの使っていた、『時間』と『空間』を使ったのだ。

「【……！！！！！】」

「……矢張り、驚くか。俺が使えないと思っていたんだろう？

ならば、逆に聞こうか？なぁ……アルニスやシュガル……

いや、ノルニル程度に使えるモノを、何で俺が使えない……なんて思った？」

「【……。】」

「ようやっと理解したか？…そう。俺は、お前等ノルニルの保有する全能力を使えるんだよ。

それだけじゃない。俺はありとあらゆる平行・異世界の全ての生物の能力を

一切の制限無しで使えるんだよ。それも、十全は疎か、正に万全に使えるんだ。

それが、俺の能力の一つ。『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』。」

誰しもが驚愕を通り越していた。彼の言った事を要約すると……

要は、自分がどんなに強力な力を……能力を持とうとも、それと同等……いや……

それ以上の力を得て、立ち開(はだか)ると言うのだ。

そんな卑怯な能力……絶対に勝てる筈が無いでは無いか。

「さて。では、理解して貰った所で。最期の処刑執行と行くか。

その瞬間、数多の鎖が無理矢理引き千切られる様な、音が幾重にも

リミッター解除。一兆（トリリオン）・鎖解放（フルバースト）」

響き渡った。

……そして……

「【……（ガクガクブルブルガクガクブルブル）】」

「……どうした？何をそんなに怯えて居るんだ？……ああ、安心しろ。

苦痛は一切無い。本の瞬間で終わるよ。……じゃあ、さよなら。

全魔力解放・全魔力放出・全魔力消費・全魔力固定。

右手に永遠

左手に無限

ニティ・エンド」

エターナル・エンド　インフィ

そして……【欲望（ディザイア）】は此の世から『永遠』に『無限』に……『完全』に消え去った。

今、此処に

永きに渡る

彼の復讐劇（たたかい）は

幕を下ろしたのであった。

無限にして無窮なる旅人（前書き）

現時刻（２３：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：４１２，２８８アクセス　ユニーク：４０，３７５人

皆様、今まで、どうも有難う御座いました。

『なのはシリーズ』も、今回…４８話目で終わります。

皆様が、一月もの間、ずっと読んで下さった御陰です。

誠に、感謝の念に堪えません。

……では、皆様。

『なのはシリーズ』最終回。

どうぞ。今話も、拙作を御堪能下さい。

無限にして無窮なる旅人

Ｓｉｄｅ：カイト

……終わった。

竟に……終わったんだ……。

「……終わったよ……はやて……風音……これで……やっと……」

……終わったんだ……。

「……う…………おおおおおお……………………おおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ

！！」

俺は……心の望むままに叫んだ…………。

ｓｉｄｅ：はやて

……カイト兄が叫んどる……ううん。あれは……働哭（ないて）している。

「……カイト兄ぃ……。」

……みんなも……カイト兄が働哭（ないてる）してるのが判ってるみたいや……。

アレは……止めちゃいけない……私等が介入しちゃいかんもんや……。

「……カイト兄……。」

……気の済むまで慟哭（ないて）して……そんで……戻って来て……カイト兄ぃ……

私は……何時までも……待ってるから……だから……必ず……

私の許に……戻って来てね……カイト兄ぃ……。

ｓｉｄｅ：三人称

「……済まない。待たせたな。」

「……ううん。私達は別にええよ。……カイト兄ぃこそ……もうええの？」

「……ああ。……別れは済ませて来た。もう、平気だよ……はやて。」

「……ほんまに？……カイト兄ぃ……ほんまに…もう大丈夫なん？」

「ああ。答えは得ている。……大丈夫だよ、はやて。俺は……これからも、頑張っていけるから。」

……その光景を見た者は……皆……とても美しく……又、とても愛おしいと思った。

「みんな、済まない。……そして……有難う。」

“……／／／／／／／／／”

カイトからの微笑み付きの謝辞に、思わず照れてしまった面々であった。

「??……！！……来たか。」

「へ？来たって…何が？……！！！な、何や！！！あれ？！」

そのカイトの言葉に呼応するかの様に、突如カイトの目の前の空間が縦に裂け、

その穴が真円を描くと、中から何か得体の知れない……

いや、知ってはいけないモノが顕れた。

【……まずは、おめでとう……と言うべきかな？】

「…うげっ……やめてくれ……お前が祝ったら、呪いになっちまわぁ……ＯＴＬ」

【クックック……中々言うでは無いか……。】

「…フン！……もう時間か？」

【……そうだ。次なる旅（セカイ）に行くぞ。】

「な！！！も、もう行ってしまうん？！」

「……ふぅ……俺も……少し甘くなっちまったかなぁ……。

……おい。……もう、一～二日居ても構わんだろう？」

【……貴様……己が何を言っているのか……判っているのだろうな？】

「ああ。十二分に解っている。……だから、一～二日と言っている。

祝儀代わりだ。……寄越せ。」

【……最大４８時間だ。それ以上は待てんぞ？】

「ああ。助かる。……と言う訳だ。はやて。」

「…へ？な、何が？」

……どうやら、話の展開に着いて行けて無かった様である。……全員。

「……いや、だからな？後、丸二日は、この世界に居られるってさ。」

「ほ、ほんまに！？ほんまに未だ居られるん？！」

「ああ。」

「……カイト兄ぃ……！！！」

「おっと……はいはい。」なでなで

「……うう～～……／／／」

「……じゃあ、又、二日後な。」

【約は違えるなよ？旅人よ。】

「無論、承知。」

【ではな。】

「ああ。」

「……じゃあ、はやて。みんなの所に戻ろうか？」

「うん♪♪♪！！！！！」

ｓｉｄｅ：機動六課隊舎前

そして二日後。

あれから、相当慌ただしかった。実は今でも未だ、事後処理は終わっていない。

しかし、皆、自分の仕事を押っ放り出して……基（もとい）、部下に押し付けて見送りに来ていた。

“カイト（さん）……。”

「おいおい。まるで、葬式だねぇ……。俺は何処に見送られるんだか……。」

そんな、いつもと変わらぬカイトに、誰とも無く失笑が漏れた。

「……カイト兄ぃ……。」

「おいおい……何だよ…はやてまで……。」

「…うう～～～……せやかてぇ～……。」

「…ハァ～……はやてには教えたろ？俺をこの世界に呼び戻す方法。」

「…う、うん。……聞いたけど……でも……。」

「何だ？今になって、弱気の虫が出たか？」

「…………ううう〜〜〜…………やってぇ〜〜…………寂しいんは変わり無いもん…………。」

「…………全く。昨夜、あんなに可愛がってあげたろ？」

「わーー！わーー！！わーーー！！！／／／／／／／／／／／／／／／」

「大丈夫だよ。気にするなって。みんな知ってるから。」

「へ？／／／／／／／／／み、みんな？／／／／／／／／／」

「おう、そうだよ。なあ、みんな？」

“うん（／／／／／／／／／／／／）。”

「因みに、一部赤くなってる人は、昨夜声を聞いていた人達です。」

「な！／／／／／／こ、こ、こ……声………／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」プシュー……

「…？ありゃ……又、ショートしちまった。」

「お帰り、はやて。」

「ううう〜〜〜〜〜／／／／／／／／／／／／／／／」

「……未だ、微妙だな………もっかいキスするか…？」

「！？も、もう平気ダヨ？！」

“ダメじゃん。”

「………みんな…………ホントにいいツッコミする様になってくれたなぁ………

お兄さん、感激だよ………；；」

“黙れ。耄碌爺。”

【…ふむ。確かにタイミングは申し分無いな。】

「な？だろ？」

突然現れた、【そいつ】に皆してビックリ仰天した。

【さて。そろそろだ。…準備は出来たか？】

「ああ。もう大丈夫だ。………はやて。俺の言った事…忘れないで

くれよ。」

「う、うん！！！勿論！！！絶対、忘れたりなんかせえへんよ！！！！」

「……ああ。……後、はやての部屋のベッドの近くの引き出しに、

俺が、とある事を書いた紙が有る。それを、俺が去った後、一人で見てくれ。」

「う、うん。…分かった。」

「よし。……じゃあな……みんな……。」

“……はい。今まで、有難う御座いました！！！！！！！！！！”

ビシッ！

「ああ。…いい敬礼だ。……はやて。」

「……カイト兄ぃ……」

「……はやて。……そう時化た顔をするなよ。

……もう、お前一人の身体じゃ無いんだからさ。（ボソッ）」

「…グスッ……へ？…あ。か、カイト兄！！い、今のどういう…！」

「クスクス……じゃあな！！はやて！！！今度は、三人で逢おう！！！！！！！！！！！」

【もう、良いな。では、行くぞ。】

「ああ！！さあ、行こう！！！次なる旅路へ！！！！又、数多の世界を救う旅へ！！！！！

いざ、舞い戻ろうぞ！！！！我は！！！！！！救世主（メシア）たるが故に！！！！！！！！！！」

……そして……

救世主（メシア）は……

再び旅人（カイト）に戻り……

又、宛の無い旅を始める。

何処かで、誰かが助けを求めている限り……

彼の旅路は、決して終わらない。

彼は……いや、彼こそが『真なる救世主（メシア）』たるが故に。

彼の旅路は永遠に…永久に終わらない。

……それが……彼が……『無限にして無窮なる旅人』が所以……いや、由縁也。

side：はやて

あれから、あっという間に時間は過ぎ……

今、機動六課は解散する。

「みなさん。今まで、本当に、良く頑張ってくれました。

私は、隊長としては、とても至らない事ばかりでしたが、

良く着いて来てくれました。…改めて、感謝します。」

「……（オロオロオロオロ）は、はやて…も、もう、その辺で……ね？」

「そ、そうだよ、はやてちゃん。…な、何か有ったら……ね？…ね？…ね？！」

「そうだよ！はやて！！も、もう、そんなにお腹大きくなってんだからさぁ…！？」

「そ、そうです。主はやて。万が一という事も有ります。今は絶対安静が大事かと…。」

「え、縁起でも無い事、言わないで!?シグナム!!?」

「す、済まん…。だ、だがしかし……;;;;;;;」

「……みんな……幾ら何でも、慌て過ぎやで?」

……そう。今、私は妊娠している。もう、お腹が張って来ている。

見慣れてる人で無くとも、妊娠していると、一発で判るだろう。

それが、判明してからは、みんな大慌て。

既に、見た事がある筈のフェイトちゃんですら、この慌て様。

御陰で、今の私は、大分ちやほやされ捲りである。

「……ふぅ…全く……あ♪」

「な!ど、ど、どうしたの!はやて!!?何かあったの!?!?!?」

「え?!た、た、た、大変だ!な、な、何とかしなきゃ!!!」

その言葉に、何故か全局員、大パニックである。

「待たんかい！！！！！！！！！！」……キーン……

マイクを使って、大音量で皆の動きを止めた。

「……ハァ……妊婦にこんな事させんやないで……全く。

今のはな？……お腹の赤ちゃんが、私のお腹を蹴ったんや……

…。」

そう言った数瞬後、大歓声が上がった。……あー…びっくりした。

「ほ、ほ、ほ、本当に！！！」「ちょ、ちょっと触らして！！！」「ま、待って！先ず音聞かせて！！！」「ぼ、僕も聞きたいです！！！！」「「「わ、私も！！！！！」」」「わ、だ、駄目だよ！みんな！そんなに来たら、赤ちゃん潰れちゃうよ！？！？」「あ、危ない！！！」

その言葉に、一糸乱れず、瞬間的に離れるみんな。…何で、それを普段から発揮せえへんのやろ？

「まぁまぁ…順番に聞かせてあげるから…な？」“はい（うん）！！！！！”

……せやから、それを普段から……いや、もうええわ。

それから、子供達から、順番に触って聞き始めた。……って列長っ！！！！！

そう、心の中で「いや、全部声に出して言ってるよ？はやて。」…心の中で、言ってると……

「あ、あのう……」「ん？どうしたん？キャロ？」

「は、はい！あの！名前ってもう決まってるんですか？」「あ、そ

れ私も聞きたい！」「うん。決まって無いなら、みんなで決めたいしね♪！」「うんうん！どんなのがいいかなぁ～♪」

みんな、ノリノリみたいやな……でも……

「……ごめんな？みんな。もう、名前は決めてあんねん。」“ええ～～～……。”

……一部から、不満の声が出た。此処はしょうがない。我慢して貰おう。

「そ、それで！どんな名前？！てか、男の子？！女の子？！」

「フッフッフ……実はこの前の検査でな…？ようやっと判ったんや！！！」

“で！！！どっち？！？！？！”

「……どっちやと思う？」“焦らさないで！！！！！お願い！！！！！！！！！！”

「……女の子や。」“いやった～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！”

どうやら、嬉しい声が圧倒的に多いみたいやな。「そ、それで？！何て名前？！」

「……実はな？カイト兄がもう名付けてたんよ。」

「え？カイトさんが？」「せや。」「……何時の間に？」

「……カイト兄が、旅立つ前に、私の部屋の引き出しの中に、紙を入れてたんや。」“紙？”

「うん。その紙にな？産まれてくる子は、きっと女の子に違いないから、

こういう名前にしてくれって書いてあったんや。……しかも、その名前がな？

私が、カイト兄との子供が出来たら、こういう名前にしよう…

って思ってたのと同じ名前やったんや。」

「……凄いね……。」

「……うん。正に一心同体だったんだね……。」

「こ～ら！なのはちゃん！！！フェイトちゃん！！！

私とカイト兄との絆は、未だ繋がってるんやで？」“え？それ、どういう意味？”

「……今は、未だ内緒や。でも、時が来たら教えてあげるで♪」

「もう……はやてちゃんの意地悪。」

「まぁまぁ…なのは。楽しみに取っておこうよ。」

「…うん。そうだね、フェイトちゃん。」

「あ、あのう……それで、はやてちゃん。子供の名前。な～に？」

「あ、せやったね。……あのな？」“うんうん！！！！！”

「カイト兄の娘さんの名前から、一文字貰ってな？

「

風美（ふみ）っていうんよ。

……そうして……今、又……一つの世界が……救われた……
……。

無限にして無窮なる旅人（後書き）

皆様。長い間読んで頂きまして、改めて感謝致します。

『なのはシリーズ』最終回。

如何でしたでしょうか？

次なる世界は、『Ｆａｔｅ／Ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』です。

果てさて、如何なる旅路にあいなるやら……。

では、又、冬木市で御会い出来る事を願いまして、締めとさせて頂きます。

それでは、皆様。今話まで、御覧頂き、誠に有難う御座いました。

又、次回からも、宜しく御付き合いの程を、御願い申し上げます。

運命・開始（Ｆａｔｅ／ｐｒｏｌｏｇｕｅ）（前書き）

現時刻（０１：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：４２７，３８１アクセス　ユニーク：４１，５３４人
皆様、いつも有難う御座います。

遅れ馳せ乍ら、４００，０００アクセス＆４０，０００人突破致しました！！！

心より感謝致して居ります。

今回からは、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』の世界に参ります。

果てさて、どの様な物語に相成ります事やら……。

では。今話も、拙筆を御楽しみ下さい。

運命・開始（Ｆａｔｅ／ｐｒｏｌｏｇｕｅ）

Ｓｉｄｅ：アルニス

「……お疲れ様でした。……シュガル。」

「……はっ。」

「……あなたも、嘸辛かったでしょう……。」

「…いえ。アルニス様の御為ならば……。」

「…有難う、シュガル。……彼は元気でしたか？」

「……はい。……余りに圧倒的でした。」

「…そういえば、あなたは、あれを見たのは初めてでしたね。」

「……はい。……あれは……人ならざるモノであろうとも、勝てはしないでしょう。」

「…そうですね……。……シュガル。これから、皆に話をします。

……その後は……分かっていますね？」

「…はっ。大至急、残りの席を埋められる様、人材の発掘・育成に心血を注いで……」

「違いますよ、シュガル。それでは有りません。」「…はっ？」

「そちらは、慌てずゆっくりなさって下さい。時間はたっぷりありますから。」

「はっ。……では……一体何を？」

「おや？もう忘れてしまいましたか？以前話した、私の休暇についてです。」

「…はっ。いえ、覚えて居りますが……それが…？」

「ですから、それです。皆にも説明しますが、私は今回の件で休暇を執ります。」

「……は？」

「今回。彼の所為で我々は数多の人材を失いました。

しかし、それは第二席が彼の妻子を殺めたからです。

ですから、皆は彼を恨んではいけません。

そして、私は新たな人材を見付ける為、少し色んな世界を見て回って来ます。

その間、第二席であるシュガルを長としなさい。……という事で、宜しいですね？」

「な？！しょ、少々御待ち下さい！！アルニス様！！！」

「待ちません♪では、これから、皆にその様に話して来ます。

あなたはこれからは暫定的ではなく、歴とした第二席です。胸を張って務めなさい。」

「な！！！お、御待ち下さい！！！アルニス様！！！！！アルニス様！！！！！！！！！」

ふっふっふ…♪♪待ってて下さいね？カイト♪これから、そちらに遊びに行きますから♪

ｓｉｄｅ：三人称

冬木市。魔術師が収め、龍脈が通ずる街。

今、その街に異変が起きている。

如何なる魔法使いにも判らぬ、謎のドーム型の結界が張られ、

その中の空間が割れ、縦に裂かれた亀裂が真円を描き、その中から人が振るい落とされた。

「のわぁぁぁぁぁああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ドダッ！　ダッ！！　ガッ！！！　ズッシャァァァアアア！！！！！

「………ぐふぅっ…………………。」

その人は、思いっ切り転げ回り、俯せに滑って止まった。

そして、ユラリと立ち上がると、自身を吐き出した真円に向かって怒鳴り付けた。

「…………てんめぇぇぇ…………………ここんとこ、毎回じゃねぇかぁ！！！！！

マジで喧嘩売ってんのかぁ？！オラァアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

【…気の所為では無いのか？】

「んなワケ有るかああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

てめえ、あれか？！！！！！あの時の事、未だ恨んでやがんのかぁ？！？！？！」

【…………何の事だ？】

「やっっっっっぱり、そうかあああああ！！！！！！！！！！！！！

ちゃんと断っただろうが！！！！！！！！

大体、祝儀代わりに寄越せっつったのに、何で未だ文句付けやがんだよ！！！！！！！！

ドンだけ恨みがましぃんだよ？！てめぇはあああ！！！！！！！！！！」

【……仕方無かろう？次々と新しい世界が出来、彼方此方からせっつかれておるのだ。】

「ぶっちゃけたな？！？！？！今、到頭ぶっちゃけやがったな？！？！？！？！」

【…………！おっといけない。他の所からのＳＯＳだ。それではな。】

「おいいいいい！！！！巫山戯んなああああああああああ！！！！！！！！！

何んんんんだあああ！！！！その棒読みはあああ！！！！

！！！！！
嘘だろ！？！？今のそれ、絶対嘘だろう？！？！？！？！？！」
【はっはっは。何の事やら。…では、又、時が来たらな。】　シュウゥウン……

「あ！！！！！逃げんな、てめえええええ！！！！！！！！！
やっぱりそうかあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！
覚えてろよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
てめえええええええええええええええええええええええええええええええええええええ
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

その絶叫も虚しく響き渡るだけであった。

ｓｉｄｅ：カイト

「……ハァハァ……あの野郎……ぜってぇ…何時か…殺しちゃる……。」

（……だ、大丈夫？マスター……；）

「……ハァハァ……ああ、水薙か。大丈夫だよ……今は…な。」

（…アハハハ……。）

「所で、龍斗。…此処は？」

（……今、判りました。……冬木市です。）

「…ちっ……又か。…で、現在（いま）は？」

（所謂、『原作』の凡そ一年前ですね。）

「……結構前だな。…こりゃ、今回は思ったより、愉しめそうだ……。」

（…では、今回は……？）

「……ああ。早目に、あいつ等に接触しておこう。

……お前達も、早くから出して置くよ。今回は、ノンビリ羽を伸ばしてくれ。」

（やったぁ～～～！！！！）

（久し振りね♪ゆったり出来るのは♪♪）

（おお♪美味いメシが鱈腹喰えるぜ♪♪♪）

（…では、我が主。私も…？）

「ああ。お前もだ、黄宇。……龍斗。済まないが……。」

（はい、解って居ります。）

「…済まんな。頼む。……じゃあ、今日はもう此の儘寝るとしよう。

朝になったら起こしてくれ。」

（（（（（（はい。我等が主。良い夢を。）））））

「ああ。お休み。」

そして、彼等は、又、出逢う。

彼は、この物語を救わんが為に。

彼は、救世主たるが故に。

彼は、世界に介入する。

今、又、新たな物語が幕を開ける。

運命は、今、此の夜より始まる。

Fate/stay night

運命・開始（Ｆａｔｅ／ｐｒｏｌｏｇｕｅ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、プロローグという事で、短く致しました。

これから、彼等は誰と接触し、どう物語を紡いでいくのか……。

どうか、今後も御付き合い頂ければ幸いです。

では。今話も御読み頂き、有難う御座いました。

衛宮家の日常（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ）（前書き）

現時刻（２１：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：４３８，９６８アクセス　ユニーク：４２，６９７人
皆様、毎度有難う御座います。

今回で５０話目になります。

これも皆様が、いつも読んで下さっている御陰だと思って居ります。

改めて、感謝致します。

では。今話も、拙筆を御楽しみ下さい。

衛宮家の日常（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ）

ｓｉｄｅ：士郎

「……にしても、ホントにビックリしたよ……。

学校から帰って来たら、家の前で人が行き倒れているんだもんな……。」

「いやぁ！！！スマンスマン！！！でも、本当に助かったよ…。

もう腹減って死にそうだったからなぁ……。」

「……あの場面を目撃した身としては、それを否定出来る要素が見当たらないよ……。」

そう。あの時、俺が学校から、今日は部活が無かった桜と一緒に、買い物してから帰って来ると、

衛宮（ウチ）家の前に人が倒れていた。何事かと思って駆け付けると……

『……は……腹……減ったぁ……。』

と言って、助けを求めて来たのだ。取り敢えず、夕飯前なので、軽目の賄い物を作ってあげた。

そして、今かっくらっている真っ最中だ。……にしても、良く喰うな。

「……ハァ～～～……喰った…喰ったぁ……。御馳走様ぁ～……。」

「はい。御粗末様。……本当に良く喰ったなぁ……全く……ちゃんと後で桜に謝っといてくれよ？あの時すんごい慌てまくってたんだからな。」

「分かってるって。（……にしても、流石は衛宮士郎。素晴らしい腕前だ。）」

「……さて。落ち着いた所で聞かせて貰えるか？」

「うん？何を？」

「家（あんなとこ）の前で倒れていた理由だよ。」

「ああ。……そもそも、俺は旅人でな？色んなとこを旅しているんだよ。」

「へぇ～……それで、金も尽きてメシも食えなくなり、彼処で倒れていた…と。」

「そ。…思ったより、勘は良いんだな？……魔術使い？」

ガタッ！「！！！……。」

「…落ち着けって。桜が怪しむだろ？…取り敢えず座りな？」

「……それで？…あんたは一体誰なんだ？何の目的で家に来た？」

「ふむ……。まぁ、まずは自己紹介と行くか。

俺の名は、八神カイト。歳は２５。お前の養父…衛宮切嗣の知り合いだよ。」

「え？！爺さんの！？」

「ああ。旅の途中で偶然会う機会が有ってね…。あいつの話は、終始お前の自慢話だったよ。」

「……そうか……爺さんの……。」

「クスッ……ああ。いやぁ…色々聞かせて貰ったぞ？

何時頃迄おねしょしてたとか、自分とは違って意外と朴念仁だとか、

とある子の処分を巡って、街のガキ大将の女の子と大喧嘩を繰り広げた……とかとかとか。」

「うっ……／／／／／／も、もう、それぐらいで止めてくれ……。

全く……何って事を人に話してんだよ…あの爺さんは……。」

「クックック……そんだけ、お前さんの事が好きだったんだろうよ。

話している間中、ずっと満面の良い笑顔だったからな。

まるで世界中の人に、『自分の息子はこんなに素晴らしいんだ！！！』って、

誇って言っている様だったよ。あれは、聞いている方が羨ましく感じる類の惚気だったな。」

「……そうか。……爺さん……。」

「……フッ…。…なぁ、士郎。線香…。上げていってもいいかな？」

「……ああ。こちらからも頼む。…俺も一緒に上げるよ。」

爺さん……。良かったな……。俺達以外にも、爺さんを偲んで

くれる人が居てくれたよ。

その日、俺達は、一晩掛けて爺さんの事について語り明かした。

……勿論、鍛錬はカイトが寝入ってから忘れずにやった。

「お早う！士郎！！！」

「ああ。お早う。藤ねえ。」

「お早う。お寅さん。」

「……（プルプル）」

「…？あれ？どしたの？お寅さん。お早うってばさ。」

「ウガアアーーーッッ！！！！！！！！お寅さんって言うなー

ーーーー！！！！！」

「気にスンナってお寅さん。……大体、昨日完膚無きまでに俺に負けて渋々……

基、泣く泣く諦めてたじゃないか。」

「ううう～～～～……あんなの反則だよぅ～……。」

「何を人聞きの悪い。ちゃんと正式な勝負だったろ？しかもこちらの盛大なハンデ付きでさ。」

……今、こんなに藤ねえが暴れているのには訳が有る。

昨日、藤ねえが帰って来た後の事である。カイト（本人がそう呼べって言ってた）が藤ねえに

『お。よお！お寅さん！！！』……何て、良いやがった。

俺は、誰の事か判らず、理解するのに時間を費やし、

早々と理解した桜は、吹き出すのを必死に堪えて、キッチンで肩を震わせていた。

言われた当の本人はというと……相変わらず謎の行動をして、やっと理解したかな？

……と思った瞬間、爆発した。

『だああれえええがああああ…………お寅さんかあああああああああ

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！』

『え？いや、だから、あんた。藤村大河センセ。』

当然の如く、更に爆発した。そして、剣の勝負にて決着を着ける事になった。

……夕飯を食べてから。

そして………結果は、藤ねえの惨敗だった。………いや、ほんとに無惨としか言い様が無かった。

カイトは、ハンデとして自分の周りに半径３０ｃｍぐらいの円を書いて、尚且つ目隠しをして、

『俺をこの中から動かせたら勝ちで良いよ？』

と宣（のたま）いやがった。流石に幾ら何でもそれは無いだろう？

所がどっこい、酷い事に藤ねえは嬉々として、その条件に飛び付いた。

……あんた、それでも、人に教え導く職種の人か？……だが、直ぐに結果は出た。

一合も剣を合わさず、対峙して数秒後、藤ねえがギブアップしたのだ。

「ううう～～～～……あんなの無理だよぉ～～～～……あんな所に飛び込んだら、

一瞬で魂毎真っ二つにされちゃうよぉ～～～～……。」

「ドン☆マイ♪…敗者は黙って勝者の言に従うもんさ。ハッハッハッハ……。」

「よよよよよ～～～～……。」

……何だろう？あの寸劇は？

桜も同じ事を思っていたのか、顔を見合わせるとお互い苦笑してしまった。

そして、朝食中。

「あ。そう言えば、忘れてたんだけど、カイトが家に来た目的って結局何なんだ？」

「ん？…ああ。分かり易く言えば士郎の様子見。切嗣に頼まれていたんでね。」

「……そうだったのか。」

「ああ。だから、士郎には悪いが、もう少し此処に居させて貰えないかな？」

「……ああ。勿論良いよ。部屋ならまだ沢山余っているからな。」

「さんきゅー。恩に着るよ。……あ、そうだ。なぁ、士郎。

ちょっと御願いがあるんだけどさぁ。」

「ん？何だ？俺に出来る事なら何でも言ってくれ。」

「いや、実はな？俺が無事着いた事を、昨日家族に知らせたらな？

今日、早速此処に来るって言うんだよ。」

「へ？家族？お前独り身じゃないのか？」

「違うよ？んでな？済まないんだが、そいつらも俺が居る迄此処に居たいって言うんだが……」

構わないかな？」

「そういう事か。俺は構わないよ。何人だって。桜と藤ねえはどうかな？」

「え？…え、ええと……わ、私は別に構いませんけど……。」

「うん。私も良いよー。賑やかな方が楽しいしねー。」

「…だってさ。家族の了承も得たし、問題無い。…で、何人、何時頃来るんだ？」

「五人。大体昼頃…かな？……皆、有難う。少しの間だが、家族共々宜しく頼む。」

カイトの綺麗な礼儀に、思わず背筋を伸ばし、居住まいを正してしまう衛宮家であった。

そして、学校が終わり、帰ろうとしていた時。

「おい、衛宮。」

「ん？どうした？一成。又、何か頼み事か？」

「む…。……うむ。まぁ、頼み事と言えばそうなのだが……。」

「？何だ？妙に歯切れが悪いな？どうしたんだ？そんなに頼み辛い事なのか？」

「うむ……。ある意味では頼み辛くもあり、

又、ある意味では頼み辛くも無し…と言った所だ。」

「……おいおい、一成。俺はお前と禅問答する気は無いぞ？」

「うむ。……ぶっちゃけて言うとだな……今晩奢ってくれ。」

「…は？……何故に？柳洞寺で何かあったのか？」

「うむ。……とある縁故のある寺から送られてきた牡蠣にな。皆、当たってしまったのだ。」

「……うわぁ……。で、何でお前は平気なんだ？」

「うむ。俺がそれを食す前に全て喰われてしまってな。御陰でこう

して無事にいる訳なのだが。

人間万事塞翁が馬…と言う事だな。かっかっか……喝。」

「……そりゃ又、御愁傷様な事で。いいよ。別に。

今日は客が沢山来るから、丁度荷物持ちが欲しかったんだ。」

「ふむ。荷物持ちに否やは無いが、客が来るのか？ならば俺は今日は…。」

「いや、構わないよ。少し長い間こっちに滞在するみたいだしさ。」

「そうか。では、有り難く御相伴に与るとしよう。」

「おう。んじゃ、行くか。」

んで、帰宅後。

「よお！衛宮。お邪魔してるよ。」

「あれ？美綴。どうしてお前が此処に？」

「何よ、水臭いわねぇ。桜から聞いたわよ。今日は何か盛大にパーティーするそうじゃない。

折角だからってアタシもお呼ばれしたってワケ。」

「…成る程ね。桜伝(づて)だったか。……じゃあ、あいつも？」

「……らしいわよ？桜がどうしてもって言って連れて来たらしいわよ？」

「…ふ～ん……。おーい、慎二～。」

「……何だよ、衛宮。余り馴れ馴れしく僕を呼んで欲しく無いなぁ。」

「まぁまぁ。…それより、良く来てくれたな。お前が家に来るなんて珍しいと思ってさ。」

「フン…。桜がどうしてもって言うからさ。ちゃんと御馳走してくれるんだろうな？」

「ああ、勿論さ。久々にゆっくりしていってくれ。」

「…フン。僕を失望させないでくれよ、衛宮。

お前にはそれぐらいしか取り柄が無いんだからな。」

「ああ。期待していてくれよ、慎二。」

「……フン。余り待たせるなよ。」　ドカッ！

「……衛宮。あんた、ホント良くあんなのと付き合えるわね？」

「……あれでも良い奴なんだぞ？多少ぶっきらぼうで口も悪いけど。」

「……その時点で、色々アウトでしょうに……普通。ホントにお人好しなんだから。」

「まぁまぁ。」

「……所でさぁ……彼処の超絶美形軍団は何処の何方さん？」

「ああ。お客さんだよ。暫く衛宮家に滞在するんだってさ。今日はその歓迎会なんだよ。」

「成る程。…そういう訳だったか。……っとこっちに来た。アタシは逃げるからね。んじゃ。」

「では、荷物は台所に置いておくぞ。衛宮。」

「あ…おう。頼んだ、一成。」

「初めまして。黄宇と申します。あなたが、衛宮士郎さんですね？」

「あ、は、はい！初めまして。（何だ……ものすんごく緊張するんだが……；；；；）」

「フ…御緊張なさらずに。我々が客なのですから。」

「いえ…そういう訳では……。」

「…ふ。取り敢えず、紹介します。…皆。」

「はい。初めまして。龍斗と申します。」「あ、はい。初めまして。」

「私は水薙よ。宜しくね♪」「あ、うん。宜しく。」

「俺様は紅蓮だ！宜しく頼むぜ！！！士郎！！！」「お、おう。宜しく。」

「僕、鋼牙って言うんだ♪宜しくね♪士郎お兄ちゃん！！！」「ああ。宜しく、鋼牙。」

「お！自己紹介は終わったみたいだな。」

「ああ、カイト。」

「…にしても、今日は又、千客万来だな？ひのふの……１２人か。材料間に合うか？」

「問題無い。……よっし！！！腕の見せ所だな！！！桜！手伝っ

てくれ！！！！！」

「は、はい！先輩♪！！！！私も頑張っちゃいますから！！！！！」

「ああ！その意気だ！！いっちょやるか！！！！！」

さぁて……やってやるぞーーー！！！！！

夕食後

「「カァーーーーッ……喰った喰ったァァァーーーーッッッ！！！！！」」

「主殿、紅蓮。行儀が悪過ぎます。もう少し、行儀良くなさい。」

「「無理。」」

「……ほほう……。」

「「冗談です。黄宇様。」」

「……宜しい。」

「……はふぅ……美味しかったぁ……。僕、明日は黄宇お姉ちゃんの料理が食べたい！！！」

「そうか。では、明日は私が作ろう。」

「え？！い、いえ！そんな！お客様にそんな事させられませんよ！？」

「何、お気になさらず。今日は客として持て成されたが、明日からは我々もこの家の住人。

働かざる者喰うべからず。明日からは、私と水薙もサイクルに加わらせて頂きたい。」

「……で、でも……。」「…じゃあ、御願いするよ。」「せ、先輩！！？」

「桜。黄宇さんも言ってたろ？俺達は、少しの間とは言え、家族として暮らすんだ。

なら、遠慮は無用だ。何よりあっちから申し出てくれたのに、断っちゃ却って失礼だろ？」

「……で、ですけど……。」

(それに、私達が作っている間、士郎と二人っきりになれるわよ？)

(な！！！／／／／／／／／／／き、き、気付いてたんですかぁ／／／／／／／／／水薙さん／／／／／／／／／)

(……あれで、気付かない方がどうかしてるわよ…。本人以外、みんな判ってるわよ？)

(／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／)

(うむ。……まぁ、そういう意味も含めて…だ。我々も担当する。構わんだろう？)

(／／／／／／／／／は、はい／／／／／／お、御願いします／／／／／／／／／／／／／／／)

((うむ。任された。)♪)

「………？桜？」

「ひゃ、ひゃい！！！わ、私は大丈夫れすよ？しぇん輩／／／／／／／／／」

「………本当に大丈夫か？思いっ切り噛みまくってるぞ？」

「だ、大丈夫…です。ですから、黄宇さん達にも加わって貰いましょう！！！！！」

「…お、おう…。……？んじゃあ、黄宇さん。これから、御願いします。」

「ああ。任せてくれ。」

「よーーーし！！！！！今日は、女の子同士で色々、語り合っちゃおう！！！！！」

「「「「賛成♪♪♪！！！！！」」」」

「……んじゃあ、こっちは野郎同士で……枕投げでもすっか？」

「「「「「だが、断る！」」」」」「……僕、もうねむい……フワァ～……ムニャ。」

「…しょうがないか。……ほら、鋼牙、おいで。今日は俺と一緒に寝ようか？」

「…うん。かいとにいちゃんとねるぅ～……。」

「…よしよし。……んじゃあ、みんな悪いな。俺達はもう寝るわ。お休み～ノシ」

“お休み（なさい）。”

「……じゃあ、俺達ももう寝るか。」

「うむ。俺も既に寺に連絡は入れてある。問題無い。」

「…まぁ、偶にはこの荒ら屋に寝てやっても構わないよ。」

「ああ。じゃあ、布団を用意してくるよ。紅蓮と龍斗も少し待ってくれ。」

「申し訳有りません。御願いします。」

「おう！慌てなくていいからな！！」

「ああ、ありがとう。んじゃ、今、敷いてくる。」

その夜、女子組の部屋の明かりが消える事は無く、

男子組からは、盛大な鼾が聞こえてきましたとさ。

そして、今日のこの日から……

新たな衛宮家の日常が始まった。

遠坂凛（Ｓｉｓｔｅｒｓ）（前書き）

現時刻（２３：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：４５４，９３８アクセス　ユニーク：４３，８２２人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

遠坂凛（Ｓｉｓｔｅｒｓ）

ｓｉｄｅ：三人称

あの歓迎会から、数日後の休日。早くもすっかり家族として馴染んでいるカイト御一行。

黄宇の料理と水薙の家事能力に、ライバル心を燃やす師匠（しろう）と弟子（さくら）。

紅蓮に扱かれてヘロヘロになる士郎。

龍斗の知識と、教え方の巧さに感動している士郎達（こうこうせい）。

鋼牙に萌えてホンワカする一同。

……そして……

「で。お前は何かしてるのか？」

「ん？毎日喰っちゃ寝してるだけだけど？」

「みんな、何かしらしてるっていうのに……ニート街道驀地（まっしぐら）かよ。」

「働いたら負けかなと思ってる。」

“働け（いて下さい）！！！！！”

「……みんな本当に良いツッコミするね……完璧だΣｄ！！！」

“ダメだこいつ（この人）早く何とかしないと……ｏｒｚ”

「…ハァ……しょうがねぇなぁ……。ちょっくら、金策に走るか。

…お～い…桜～。」

「あ、はい。…何ですか？」

「ちょっとあっちで内緒話。…ＯＫ？」

「…はい……いいですけど……。」

「どもども。お前等、こっちくんなよ～。特に士郎。…いいな？」

「…分かったよ。……でも、何で特に俺なんだ？」

（鈍っ…。）全員の心がシンクロした。

「……それで、何の御用ですか？」

「…ああ。ちょっと、間に立って紹介して欲しいんだ。」

「……誰を……ですか？」

「……遠坂凛。…お前の姉さんだよ。……遠坂桜（いもうとさん）？」

「…！？！？！？……。」

「ああ…あの妖怪糞虫爺の方じゃない。俺は、宝石翁の知り合いだよ。」

「！！！！！！！！！！！！……そうですか。でしたら、御自分で話し掛ければ良いのでは？」

「……見知らぬ男が行き成り、『御宅の御先祖と御知り合いだからお話しましょ？』

……っつっても、門前払いが関の山だろ？だから、妹のお前に頼んでるんだ……桜。」

「……私は……もう…あの人の妹では、ありません。……私は、間桐ですから。」

「……はぁ……。ったく、しょうがねぇなぁ…この似た者頑固姉妹は。」

「……？似て…いる？私と……ねえ…あの人が？」

「ああ。そっくりもそっくり。ホントにまるで双子だよ。性格も間逆なだけだ。」

「……そうですか…。」

「……はぁ…。……じゃあ、交換条件だ。凛の秘密を一つ教えてやる。

その代わり仲介役を頼む。」

「……秘密ですか？」

「そう、秘密。…絶対喜ぶと思うけどなぁ……（チラリ）。」

「……分かりました。本当にそれで、私が喜べるなら。」

「ＯＫ♪商談成立だな♪…んじゃあ、教えてやる。……あのな？……。」

「……え？…ほ、ほんと…ですか？本当に！？」

「勿論♪本人はきっと否定するだろうけどな。今度しつこく聞いて見？姉さん？って言ってな♪」

「……そ、その内聞いてみます。」

「じゃ、紹介頼むな？」

「……分かりました。約束ですから。……ですが、この事は……。」

「解ってるよ。ちゃんと黙ってるさ。凛にもお寅さんにも……何よりも士郎に……だろ？」

「…う／／／／／／……や、やっぱり……判っちゃいますか？／／／／／／／／」

「寧ろ、何故ばれてないと思えるのか…それについて、小一時間程問い詰めたい気分だ。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「クスクス……じゃ、凛の件頼むぜ？明日学校帰りにでもな。」

「…は、はい／／／／／／／／分かりました／／／／」

「お。終わったのか？」

「ああ。問題無い。」「は、はい／／／／／／」

「そっか。……所で、桜。顔赤いぞ？ホントに何もされなかったのか？カイトに。」

「は、はい！大丈夫です／／／…ちょっと、家の中掃除してきます／／／」　パタパタ……

「……本当に何もしなかったんだろうな？カイト。」

「モチのロン。ありゃ、寧ろお前の所為だ。」

「…へ？俺の所為？……俺、何か桜にしちゃったかな？」

「…いや、寧ろ何もしてないからだろ？」

「？？？」

「……ダメだ、この朴念仁。早く何とかしないと……。」

「……む。」

「……はぁ……。切嗣。今日もお前の息子はダメダメだったよ。……およよよ……。」

「……むむむ。」

今日も衛宮家は平和である。

side：桜

翌日。学校も終わり、下校時刻になりました。そして今、私は遠坂先輩の教室の前に来ています。

…そう。カイトさんからの頼まれ事をする為です。……あの話は少々半信半疑ですが……。

「…済みません。遠坂先輩はいらっしゃいますか？」

「あら。間桐さん。少々御待ち下さいね。…皆さん。御免なさい。ちょっと失礼しますね？」

「……それで？何の御用かしら？」

「…………ちょっと、仲介を頼まれた人がいるんです。」

「…………仲介？あなたに？私との間に？」

「……はい。（…………間桐の私に、遠坂凛を紹介して欲しいって。）」

（！！…………誰？その人？遠坂の事を知っている人？）

（…………はい。遠坂姉妹の事を知っていました。…………それに……
…。）

（…………それに？）

（……………………宝石翁の知り合いだそうです。）

（！！！！！！！！！！！！な、何ですって！！！！！！！！！！！！！！！
！！！

そ、それ、ホントなの?!桜!!!)

(は、はい…。…本人がそう言っていましたから。)

(……何者?そいつは……。)

(今、先輩の家に居候している人です。他に御家族の方も一緒にいらっしゃいます。)

(…先輩?……ああ、衛宮士郎の事ね。……そう。

……そいつは何処で待ってるって言ってた?)

(……?……あ!……聞いてませんでした……orz)

(……;……まぁ、いいわ。彼は衛宮君家に居るのね?)

(…;;は、はい。恐らく、ずっと家に居ると思います。)

(……そう。……分かった。私も、彼の家に行く。)

(……えええ~~~!?!?!?!?

な、ね、と、せ、遠坂先輩も来るんですかぁ？！？！？！）

（………何よ…。私が行っちゃいけない？………あ。…そ・れ・と・も

私が居ると何か気まずいのかなぁ………桜は………）ニヤリ

（う………そ、そんな事はありませんけど………／／／）

（クスクス………大丈夫よ、桜。あなたから、奪っちゃったりなんかしないから。）ニヤニヤ

（／／／／／／／／／／／／／／／／）

（クスクス………じゃあ、ちょっと待っててね。今、支度するから。）

（／／／は、はい。）

もう………姉さんのバカ………／／／／／／

そして、今は二人並んで帰っている途中です。

「……それにしても、驚いた。…まさか、桜の方から声をわざわざ声を掛けて来るなんて。」

「……彼に頼まれましたから。」

「本当に、それだけ？何か私に、他に聞きたい事でも有るんじゃないの？」

流石は遠坂凛（ねえさん）だ。どうやら、ばればれだったらしいです。

「……実は、ちょっと……。」

「何よ。私は構わないから聞いて？…じゃないと、却ってこっちが気になっちゃう。」

「……クスッ。……実はですね？とある人から、面白い事を聞きまして♪」

「……それって、件の男？」

「はい。……それでですね？その内容がとっても可愛らしくて、とっっっても嬉しい事だったんです♪」

「……何か物凄く嫌な予感しかしない……。」

「逃げちゃダメです。ちゃんと聞いて貰います。言い出しっぺは遠坂先輩ですから♪♪」

「う……わ、分かったわよ。……すぅ……はぁ……。さぁ、良いわよ。

どっからでも、掛かってらっしゃい！！！」

「……クスッ……あのですね？その話とは。

とあるお姉さんが、自分が気遣ってる事を知られたくないと、いつもとある道場の外から、自分の妹を眺めているって話なんですけど……。」

「うっ……！！！……そ、そう。……それで？」

「それだけですよ？…ね？とても可愛らしい話だと思いません？姉さん。」

「……そ、そうね。……結構、素直じゃない人なのね…そのお姉さんって。」

「はい♪♪♪……ですから、その事を人伝に知ったその妹は……

泣きたくなっちゃう程に、とても喜んだそうです。」

「……そう。……でも、その妹はそんなお姉さんは、面倒臭いと思うでしょうね。」

「いいえ。寧ろ、そんな不器用さが、却って愛おしく、その妹さんは前よりも、もっとお姉さんが好きになっちゃったそうです。」

「……そう。……幸せね……そのお姉さんは…。」

「……そう……思って……くれているでしょうか？」

「当たり前じゃない！！！妹に好かれて喜ばない姉が居る訳無いでしょ！？！？」

「……姉さん。」

「…あ……。…ゴホンッ！……と、兎に角！！！そんな馬鹿な事は考えないの！！

きっとその人は嬉しいに決まってるんだから！！！……いい？！分かった！！！！？」

「……クスッ……はい。分かりました。お姉さん。」

「……フンッ！／／／／／／／／／／」

クスクス……確かに、とても可愛らしいですね？カイトさん。

私は、とっても幸せな気持ちに包まれて、久し振りの姉さんとの会話を楽しんだ。

ｓｉｄｅ：三人称

…ガラガラ

「ただいま♪」「お邪魔します。」

「おっ！…帰って来たみたいだな。」

「ああ……。…で？結局、誰なんだよ…その客ってさ。」

「クックック……言ったろ？お前が恐らく、最も喜ぶ相手だって。」

「？？？」

「あ、先輩。…あの、実は……。」

「ああ。カイトから聞いてる。お客さんだろ？入って貰ってくれよ。」

「……お邪魔しますね。衛宮君。」

「……え？……遠……坂？」

「ええ。こんにちは、衛宮君。」

「……。」

「…？あら？…衛宮君？……どうしたの？衛宮君。」

「……と、と、と、遠坂あああああああーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

「ブワッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ……！！！！！！！！！！！！！

ヒィーッヒッヒッヒッヒッヒ……！！！！！！！！！！！！

は、は、腹痛ぇ……クックックック……。」

「……。ちょっと、衛宮君？人の名前を大声で叫ぶなんて、失礼じゃない？」

「え？な、何で、ここに、遠坂が？え？て、てか、…え？……え？」

「落・ち・着・け♪」　ドゴッ！　「…いてぇっ！！！」

「落ち着いたか？」「……お、おちついた。」

「では、改めて。…お邪魔しますね？衛宮君。」

「は、はい、よ、ようこそ！！！」

「ぷっ…緊張しすぎよ？」

「クックック……全くだぜ……。んじゃ、士郎。部屋、一つ借りるな？」

「お、お、おう。」

「…それでは。」

「士郎。メシ宜しくなぁ～…。」

「……先輩の馬鹿っ。」

「へ？あ、ちょっ、さ、桜？……何で、怒ってたんだ？あいつ。」

“……ハァ～～～……。”

余りの朴念仁振りに、溜息を付きながら頭（かぶり）を振る五行であった。

「……それで？あなたが、桜の言ってた人？」

「ああ。」

「……そう。」

「え…と。…こちらが、遠坂先輩。私の……姉さんです。

そして、こちらが、八神カイトさん。……では、私は夕飯の支度がありますので。」

桜が、紹介を終えて部屋を出、二人が畳の上に座り、話が始まった。

「……さて。で、私に一体何の用？」

「おろ？猫被りは止めたんだ？」

「……魔法使いの知り合いが相手じゃ無意味でしょ？」

「然り然り。流石は、真紅の悪魔（アシュタロテ）。遠坂の名は伊達じゃ無いな。」

「お世辞はいいわ。……何用？」

「うむ……。一応幾つかあるんだが、今日の用は、２つだ。」

「２つ？…行き成りずうずうしい話ね。」

「まぁまぁ、結論は話を聞いてからと言う事で。ＯＫ？」

「……いいわ。聞いてあげる。…どうぞ？」

「どうも。じゃ、商談と行こうか。まずは、これを只であげよう。」

そうカイトが言うと、床の上に、どれも拳大の大きさの何かが転が

った。

エメラルド・ルビー・サファイア・ダイヤモンド・ターコイズ・オパールｅｔｃ

沢山の鉱物だった。それが、４０～５０個程はあるだろうか？

「……凄い……。これだけの物を只でくれるですって？

……どれだけの事を頼まれるのかしら？」

「まず、確認。お前の周りに、宝石・鉱物を買い取ってくれる知り合いは居る？」「いるわ。」

「次。どのくらいの期間で金が手に入る？」「…大体、一週間前後。」

「次。その中に現生で出せる人はどれくらい居る？」「…２～３人。」

「最後。実際信頼できる人はどれくらい居る？」「……ゼロよ。」

「…ふむ、成る程。了解した。じゃ、俺からの頼み…一つ目だ。

宝石・鉱物を売ってくれ。値段の多寡は問わない。ぼっても構わない。」

「……それだけ？しかも、ぼってもいいとか……本気？私、本当にやっちゃうわよ？」

「それだけ。一向に構わないよ。存分に貯蓄に回してくれ、万年金欠魔術師さん。

あ、それと。もし、相手がどうしても欲しい宝石・鉱物があれば、言ってくれ。

種類・大きさに関わらず、何でも用意出来るから。」

「……くっ！！……じゃあ、例えば、百カラットのダイヤとか言っても？」「問題無い。」

「……。」

「あ、後、取り分だけど……どれくらい欲しい？」「……最低五割は欲しいわね。」

「じゃ、七割やるよ。こっちは三割でいい。」「……は？本気？」「本気。」

「……本当にそれでいいの？」「ああ。滞在中のみ、金が必要なだけだから。」

「……解ったわ。商談成立よ。」

「さんきゅー。あ、基本的な受け渡し場所は衛宮家（ここ）な？」「……何故？」

「俺、基本的に此処から動かないからさ。……年寄りにはきついんだよ。彼方此方動くの。」

「……そう。構わないわよ。」

「ああ、助かるよ。……それにお前もいいだろ？ここにすれば、桜の様子も見れるし。」

「……まぁね。」「それに……姉妹して気になってる男と一緒に居易いしな？」

「な！？！？／／／な、なんで…それを……」「…知ってるかって？」「……そうよ。」

「俺は何でも知ってるんだよ。『全て（オール・ノウレッジ）を知りし者』たる我が身には隠し事は不可能だ。」

「『全(オール)てを知り(ノウレッジ)し者』……御大層な名前ね？」

「只の事実なんでな。しょうがないさ。」

「……そう。……次のは？」

「あ、そっちの方が難しいと思うんだがなぁ……最後の頼みは……桜と仲良く。」

「…は？」

「いや、だから、桜と仲良く。折角の姉妹なんだからさ。もっと、きゃいきゃいしとけ。」

「きゃいきゃいはさておき。……それなりに仲は良いと思うんだけど？」

「まぁ、ある程度はな？でも、お前等一線所か、三線ぐらい引いてるからな？

端から見てると、余りにぎこちなさ過ぎ。不審極まりないぞ？」

「……しょうがないじゃない。あの子は……間桐なんだから。」

「でも、お前の妹だろ？それじゃあ、時臣も葵も悲しむぞ？」

「な？！両親を知ってるの！？！？」

「知ってるよ？宝石翁を知ってんだから、当然だろ？」

「……そう。でも、無理よ。桜は…」

「ああ。慎二のバカタレと臓硯の糞虫が文句言って来たら、俺が締めとく。」

「……あの糞爺まで知ってるのね。」

「当然。だから、もっと仲良くしておけ。普段ぐらい構わんだろう？魔術師でもさ。」

「……分かったわ。少しは近付いてみる。」

「ＯＫ。んじゃ、話は終わり。…そろそろ、飯が出来る頃だ。お前も喰ってけよ。」

「え？でも、私はそんなつもりは………。」

「問題無い。お前の分も、用意してあるから。飯ぐらい喰ってけ。

……それとも、あれか？妹や男に、料理の腕で負けたと思いたくないから、逃げるのかな？」

「………（プルプル）上等よ！！！！其処迄言うのなら、食べてってやるわよ！！！！

今度、私の料理で吠え面掻かせてやるわよ！！！！！！！！」

「そうかい。それじゃ、胃薬用意しとかなきゃな。」

「くぅっ………。…いいわ。今の内に言っていなさい！！！

絶っっっ対にギャフンと言わせてやるんだから！！！！」

「ギャフン。」「今言ってどうすんのよ！！！！！！！！！！！！」

「クックック………ホントに面白ぇ………。揶揄い甲斐あるねぇ…お前。」

「………ちょっと、あんた。さっきから、『お前』ってしか言って

ないじゃない。

私の名前は『お前』じゃ無いわよ！！！」

「そりゃ、そうだ。でも、名前で呼んで良い…って言われていないからねぇ………。

あ、俺はカイトで良いよ？」

「な！！…ぐっ…。………私も好きに呼べばいいでしょ？！？！」

「あんがとさん。んじゃ、凜で。……ああ。本当に君にこの名は良く似合うな。

響きも美しい。実に君らしいな。凜。」

「んな！？！？！？！？／／／／／／／／／／／／／／／くっ……／／／／／／／／／

も、もういいでしょ！！！／／／／／／／私はもう行くからね！！！／／／／／／／／／」

「はいよ。でも、まずはその真っ赤な顔をどうにかして行きな？」

「／／／／／／わ、分かってるわよ！！！！！／／／／／／／／／」

「クスクス………。」

一頻り、凛を揶揄い終わると、丁度良いタイミングで、桜が御飯に呼びに来た。

そして、衛宮家に、又、新たな家族が加わった。

遠坂凛（Ｓｉｓｔｅｒｓ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

少々（？）無理矢理な感が否めませんが……。

早目に凛を衛宮家に馴染ませようと思ったら、こういう流れになりました。

私の文才では、これが限界です。申し訳ありません。

あ、後、凛はカイトには靡きません。士郎一筋になって貰います。

では、今話も御覧頂き、有難う御座いました。

衛宮家の日常弐（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　２）（前書き）

現時刻（１７：００）
ＰＶ：４７０，６０８アクセス　ユニーク：４５，３３７人
皆様、いつも有難う御座います。

今回から、暫く日常が続きます。

では。今話も拙筆を御楽しみ下さい。

衛宮家の日常貳（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　２）

『衛宮家之日常１．遠坂家の遺伝子（うっかり）』

Ｓｉｄｅ：三人称

「士郎、醤油取って。」

「はいよ。…次は桜に渡してやれよ。」

「分かってるわよ。…はい、桜。」

「ありがとうございます。遠坂先輩。」

「桜ちゃん！次ワタシね！！♪」

「はい。…どうぞ、藤村先生。」

「次俺な～、お寅さん。」

「絶対にＮＯ！！！！！」

「なんでやねん。」

「大河お姉ちゃん、僕には……？」　ウルウル

「う……も、勿論、鋼牙ちゃんにはあげるわよ？」

「やったー♪ありがとう、大河お姉ちゃん♪♪」

“鋼牙（ちゃん）は可愛いなぁ（わねぇ）……。”

……御判り頂けるだろうか？……そう。

何を隠そう、衛宮家之日常・朝食版ｉｎ平日なのである！！！！！
（ババァァァン！！！！！）

……ごほん。……そして、上記の通り、既に凛の猫は取っ払われている。

な・ぜ・な・ら・ば！……まぁ、カイトの所為である。要約すれば、こんな風に。

「凛、その醤油瓶。中身はソースだぞ？」

「え?!ホント!?」

「嘘。」

「……ダーーーーッ!!!!!何であんたはいつもいつもそんな事ばっかり……」

「……と…遠坂?」

「……あ。」

「大成功。」

他にも色々あったが、これが一番致命的だった。

結局、凛は諦め、士郎は失望&絶望し、普段通りに過ごす事と相成った。

只今、食後の休憩中。虎は弟(しろう)に急かされ、とっくに学校に行っている。

「あ、凛。」

「ん？何？カイト。私、忙しいんだけど。」

「直ぐ済む。忘れていたが、お前、綺礼に俺の事話したか？」

「いえ、まだだけど？それが？」

「なら、丁度良かった。あいつには俺の事は黙っててくれ。色々メンドイんでな。」

「？……分かったわ。取り敢えず黙っておいてあげる。」

「ああ、助かる。」

「話はそれだけ？」

「ああ。引き留めて悪かった。そろそろ時間だ。急げよ？」

「解ってるわよ。」

しかし、結局、言峰にバレはしなかったものの、『うっかり（かんづかれてしま）』発動な凛（う）であった。

『衛宮家之日常2．衛宮家の災難』

side：カイト

「「行って来まーーす！！！」」　ドタバタ　ガラガラ　ガシャンッ！！

“行ってらっしゃい。（（♪♪））”

丁度今、学生達が学校に行った所である。朝は本当に忙しい。少し懐かしく思える。

「……さて。やっと、ノンビリ出来るぞー。」

「カイト兄ちゃん！今日は、縁側で日向ぼっこしよう♪♪♪」

「お、いいな。じゃ、そうしよう。お前達はどうする？」

「では、私も御一緒させて頂きます。」

「俺様も同じだな。」

「では、私は居間で読書致します。」

「じゃ、私はちょっとお掃除してくるわね♪」

そう口々に言い、ホントにノンビリする俺達であった。

そうして、1～2時間程経った頃……水薙が叫び声を上げた。

「…！あああ～～～～！！！！！！！！！！！」

「！！！どうした！！水薙！！！！！！」

「ま、ますたあ……こ、これ……。」

「？…どうし……た……あ。」

「ん？どうしたんだ？相棒……ありゃ。」

「……これはいけませんね……。」

「…ふむ。……矢張り届けるべきなのでしょうか？」

「……あ！じゃあ、みんなで行こうよ！！！」

「……そうだな。それも面白いだろうな。よし！んじゃあ、行くか！みんなで。」

“了解！！（（♪♪♪））”

……その頃、士郎達は、理由も判らず、思わず身震いしていたそうな。

ｓｉｄｅ：校門前

その時、守衛さんは圧倒されていた。何故かは判らないが、彼等には、どうしても逆らえない雰囲気があったのだ。

「済みません。この学校の守衛さんですか？」

「……そ、そうだが……き、君等は一体誰だね？！」

「あ、これは申し遅れました。私は黄宇。この学舎の生徒…衛宮士郎の家族です。」

（あの衛宮君の御家族か……。）　そう聞いた守衛さんは幾分かホッと安堵した。

……どうやら、彼は守衛さんのお手伝いも良くしている様である。流石は正義の味方（えみやしろう）。

「……その、衛宮君の御家族が、一体何の用だい？」

「はい。実は、彼がお弁当を忘れてしまった様なので、届けに来たのです。」

「成る程。それなら、私が届けておくよ。」

「…御言葉は大変有り難いのですが……実は、この子…鋼牙がどうしても、

高校というものを見てみたい…というものですから……その序でに…と思いまして。

もし宜しければ、校内見学をさせては頂けませんでしょうか？」

「……おじさん……おねがい……。」　うるうる

「う…！！！……まぁ、衛宮君の知り合いならば問題も無いだろう。

少し待ってくれ。先生方に連絡するから。」

さしもの守衛さんも、泣く子と鋼牙には勝てない様である。

「有難う御座います。」「ありがとう！！！！！おじさん！！！！！」

「……ああ。少し待っててくれよ、僕。」「うん♪♪♪！！！！！」

「…藤村先生にお取次願えれば、幸いなのですが。……彼女のお弁当もありますので。」

「……何？藤村先生のお弁当？……彼女が、御飯を忘れたのかね？」「はい。」

「大至急連絡しよう！！！！！先に入ってくれて構わない！！！！！大至急だ！！！！！」

「有難う御座います。……さぁ、行こうか？鋼牙。」

「うん♪！！！ありがとう！！！おじさん！！！！！」

「失礼します。」「アリガト、おじ様♪」「さんきゅー。」「邪魔するぜ。」

そして、慌てて職員室に連絡する守衛さん。

……どうやら以前、虎が弁当を忘れて暴れた事が、少々トラウマになっている様だ。

連絡を受け取った教師が顔を青ざめ、全教師に御触れを出していた。

……お前等、どんだけ怖いねん。

ｓｉｄｅ：職員室

只今、休み時間。職員室に戻った虎を衝撃が襲った。

「……お、お、お……お弁当が無いいいいいーーーーー！！！！！！！！！」

そんな虎の咆哮に教師達が怯えていると、誰かが入ってきた。

「失礼します。藤村大河先生はいらっしゃいますか？」

「……あ…あ…あ……え？私の事、誰か呼んだ？」

「はい。藤村先生。」

「…あれ？黄宇さんだ。…何してるの？こんな所で。ダメだよ？部

外者が入って来ちゃ。」

「大丈夫です。守衛さんに許可は取ってありますので。それと……
…はい。御忘れ物です。」

「？……あーーーーっっっ！！！！！私のお弁当！！！！！！！！！

有難うーーー！！！！！！黄宇さんんん！！！！！！」

「どう致しまして。それと、鋼牙が校内見学をしたいそうなので、
御許可を頂きたいのですが。」

「うんうん♪♪いいよ勿論♪♪♪鋼牙ちゃんなら、オールオッケー
！！！！！！」

「有難う御座います。」「ありがとう♪！！！大河お姉ちゃん♪♪
♪！！！！！！」

「よしよし♪どう致しまして♪…鋼牙ちゃんはホントに良い子だね
ぇ♪♪♪」　ナデナデ

「……えへへ～♪♪♪」

「…では、私達はこれで。」「又、後でね～大河お姉ちゃん♪」

「バイバ～イ！！！又、後でね～ノシノシ！！！！！」

台風一過。……そんな言葉を思い浮かべた教職員達であった。

そして、特大の嵐が来る事を未だ知らない、憐れな羊が三匹……

…南無。

ｓｉｄｅ：桜の教室

「……あれ？……いけない…お弁当忘れて来ちゃった……。」

ようやっと、昼食を忘れて来た事に気付いた桜。しかし、丁度その時、誰かが教室に入って来た。

「失礼します。間桐桜さんは居りますか？」

入って来たのは、美形の文学青年。しかも、１年のアイドル・間桐桜を御指名である。

俄に色めき立とうかという刹那、当の本人が即座に気付いた。

「あ、龍斗さん。どうして此処に？」

「はい、忘れ物だよ。桜お姉ちゃん♪」

次に現れたのは、凄く母性本能を擽られる様な可愛い…とても可愛い男の子だった。

「あ、私のお弁当。ありがとう、鋼牙ちゃん♪」　ナデナデ

「えへへ～…♪どういたしまして♪♪」

鋼牙の笑顔に、全女生徒がキュン…と胸を鳴らした。

「龍斗さんもわざわざ、有難う御座います。」

「いえ、お気になさらず。他の方も忘れていらっしゃいましたので。今、カイト様達がそちらに向かっています。」

「……そうでしたか。済みません。」

「お気になさらず…と言った筈ですよ?私達は家族なのですから。

……では、行きますよ?鋼牙。」

「うん、龍斗兄ちゃん♪じゃあね、桜お姉ちゃん♪又、後でね♪♪」

「うん♪又、後でね。鋼牙ちゃん。」

「では、失礼します。」

お互い手を振り合い、出て行く鋼牙と、頭を軽く下げ退室する龍斗。

教室の扉が閉まり、途端に騒ぎ出すクラスメイト。

……その日から、暫く『あの人は誰？どんな関係？紹介して？あの男の子頂戴！！！』と、

引っ切り無しに迫られ、かなり辟易する桜であった。

ｓｉｄｅ：士郎の教室

「……げ…。」

「む？どうした？衛宮。奇っ怪な声を出しおってからに。」

「……弁当忘れた。」

「……それは、又……何とも、御主らしからぬ失態で御座るな？衛宮殿。」

「……後藤。又、時代劇見てたな？」

「左様。しかし、どうするで御座るか？昼餉は……む？誰か来たで御座る。」

「おーーい！士郎は居るかぁーー！！！」

そうがなり立てて入って来たのは、がっしりした体育会系の真っ赤な兄ちゃんであった。

「こら！紅蓮！！！そんな入り方は失礼でしょ！！！」

その兄ちゃんを叱りながら入って来たのは、

幾分か幼い容姿ながら、妖艶さを醸し出している美少女であった。

「いいじゃねえか、別に。用はそれを渡しゃいいんだろ？」

「そういう問題じゃ無いってば。…全く……あ、士郎～。」

「……どうしたんだ？紅蓮。水薙。こんなとこに来るなんて。」

「何言ってるのよ。士郎達が忘れ物をするからでしょ？…はい。」

「あ、弁当。…わざわざ届けに来てくれたのか。有難う…水薙、紅蓮。」

「気にすんなよ。全員忘れてたからな。今頃、相棒達が届けてるぜ。」

「……そっか。済まない。苦労掛けて。」

「いいわよ、そんなの。家族でしょ？…それに、鋼牙が学校見てみ

たいって言うからね。」

「そうそう。まぁ、序でみたいなもんだ。」

「そっか。……それで、鋼牙は？」

「多分、マスターの所だと思うわ。私達もこれから、そっち行くから。」

「分かった。じゃあ、又、後でな。」

「ええ。じゃあね。」「又、後でな！」

またもや、乱暴に扉を閉め、水薙に怒られてる紅蓮であった。

……そして、皆に関係を聞かれ、困っている所を一成に助けられる士郎であった。

ｓｉｄｅ：凛の教室

「……あら？」

「ん？どうしたのさ、遠坂。」

「……いけない…。…お弁当忘れて来ちゃったみたい。」

「……珍しいわね～……あの優等生の遠坂さんが忘れ物をするなんて………。」（ニヤニヤ）

「………五月蝿いわよ…綾子。………ん？何だろ？」

「…ホントね。やけに廊下が騒がしいけど………何かあったのかな？」

その答えは直ぐに出る事となった。………最悪な形で。

「失礼します。遠坂凜さんはいらっしゃいますか？」

そう丁寧に入って来たのは、綺麗な長い髪を棚引かせている途轍もない美人であった。

誰もが、その超絶美人に見惚れて呑み込まれていた。……そう、御指名をされた凜ですらも。

「……？どうかしたのですか？皆さん。」

「……そりゃ、お前に見惚れてるんだろ？黄宇。」

そう言って現れたのは、余りパッとしない青年。しかし、何処か人を惹き付ける容姿をしていた。

「な／／／／／／！！！あ、主殿／／／／／／／／／余りその様な事で揶揄わないで下さい／／／／／／／／」

「いや、んな事言われても、只の事実だし。……ほれ、凛ですら、見惚れてるじゃねぇか。」

「／／／／／／／／／／／／／／／ん…ゴホン。……凛。…少々宜しいですか？／／／／／／／」

……真っ赤になって照れてる超絶美人さんに萌えてた一同は、その黄宇の咳によって現実に引き戻された。……未だ、赤かったが。

「あ、は、はい。ちょっと、失礼。……なに？どうしたの？突然、こんなとこに来たりして。……ビックリしたじゃない。」

「クックック……ビックリしたのは、違う意味で…じゃないのか？」

「あ、主殿／／／／／／／／／／／も、もう、それぐらいにして下さい／／／／／／」

「クックックック……本当に可愛いねぇ…お前は……。」

「……あ…主殿……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……何？わざわざ、惚気を見せ付けに来た訳？」

「いんや？それは只の副産物だよ。本命はこ・っ・ち。…ほれ。」

「…？…あ、お弁当。……わざわざ届けに来てくれたの？」

「そういう事。序でに鋼牙が、校内見学したいって言うんでな。皆して来た。」

「…そう。……取り敢えず、お礼は言っておくわ。…有難う。」

「クスクス……どう致しまして♪」

「……それで？他のみんなは？」

「…ああ。もうすぐ来るよ。お前等全員、忘れて行ったからな。」

「……そっか。ゴメン…手間掛けさせちゃって。」

「気にすんなよ。家族だろ？一応さ。変な気は遣うなよ。」

「……分かった。」

「宜しい。……お？来たな。」

「カイト兄ちゃ～～ん♪♪♪」　ダッ！　ピョンッ！　ガシッ！！！

「おっと…。……よしよし、鋼牙。…どうだ？楽しめたか？」　ナ

デナデナデナデ

「……えへへへ～～～～～♪♪♪♪♪♪うん♪！！！楽しいよ♪♪♪！！！！！」　グリグリ

「そうか…それは良かった。」　ナデナデナデナデ

「えへへへ～～～～～～♪♪♪♪♪♪♪」　グリグリスリスリ

「……カイト様。こちらは終わりました。」

「私達もちゃんと渡したわよ。マスター♪」ギュ！

「お疲れ様、皆。……そろそろ帰るか？鋼牙。」

「…うう～～～……もうちょっと、遊びたい。」

「……しょうがないなぁ……お寅さんにでも頼むか。」

「うん♪♪！！！！！」

「んじゃな～、凛。又、後でなぁ～。」

「では、失礼します。……凛？そろそろ、授業が始まりますよ？」

そう言って、ぞろぞろと去って行くカイト御一行。

その後、授業そっちのけで質問会が開かれ、切れかけている凛と、

涙目になっている教師を助ける為に、一肌脱ぐ綾子であった。

その後、更に一悶着も二悶着もあるのだが……それは次の機会に。

衛宮家の日常参（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　３）（前書き）

現時刻（２３：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：４８７，２１９アクセス　ユニーク：４６，８８０人
皆様、毎度有難う御座います。

今回も日常の続きであり、又、非日常の始まりです。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

衛宮家の日常参（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　３）

『衛宮家之非日常３．暴露されし魔術師達』

ｓｉｄｅ：三人称

「魔術師が三人も雁首揃えて、何言ってやがんだよ。」

あのお弁当騒動から、数日後。凛のカイトへの愚痴もようやっと収まり、

又、いつもの衛宮家の日常が戻って来た……筈だった。

「ちょ、ちょっと！！！アンタ！？！？！？」

「か、カイトさん！！！！！」

「な!?そ、それじゃあ……!?!?」

……だが、この日を境にその日常は様相を変えていった。

……では、何故この様な事になったのか……

説明する事にしよう……。

問題の日の前日…その夜。

「マ～スタ～～……今日は私と一緒に寝よ♪」

士・凛・桜・虎「「「「ぶっ!!!!!」」」」

「ああ、そうだな……黄宇、お前も一緒に寝るか?」

「はい、主殿。御一緒させて頂きます。」

「「「な、何ぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！」」」

「？　どうしたんだ？　お前等。」

「ど、ど、どうしたって……アンタ………；；；」

「そ、そうですよ……じょ、女性と同衾するなんて……それじゃぁ……まるで………；；」

「そ、そうだそうだ！……もうちょっと言い方ってものをだな……
…；；；」

カ・黄・水「「「？？？」」」

「………ま、まさか………ホントに…そういう意味？」

「「「…そうだけど（ですが）？」」」

「だ、だ、だ………ダメ～～～～～～～～！！！！！！！！！！
！！！！！！！！」

そ、そんなの絶対にダメ～～～～～～～～～！！！！！！！！

！！！！！！！！！！」

「……何故に？健全な男女なら、当たり前だろ？」

「う……そ、それはそうだけど……で、でも、高校生だっているんだし！！！！！」

「いや、高校生なら、結婚も出来るし充分大丈夫だろ？

士郎達だって、もう子供じゃないんだし、在校中には致すんじゃね？

特に士郎は、さっさと済ませちゃいそうだな。」

「「「「な！？！？！？！？」」」」

「ど、ど、どーゆーことよ、士郎！！！ちゃんと説明しなさいよ！！！！！」

「そうですよ、先輩！！！どういう事ですか！！！！！」

「そうよ！！！お姉ちゃん、何にも聞いてないわよ！？！？！？！

？！？」

「い、いや、俺は何もしてないって！！！あ！カイト！！逃げんな！！！」

そうして、士郎を人身御供に差し出したカイトは、まんまと二人と寝たのだった。

で、翌日。問題の日である。

「おーい…そろそろ飯が出来る………ぞ…………／／／／／／／／／」

「…ん………ああ……もう、そんな時間か………おい、起きろよ…黄宇…水薙…。」

「…う…ん………主殿ぉ…………。」　きゅぅ　スリスリ

「…………んふふ～…………ますたぁ………もっとぉ…………。」

ぎゅぅ　スリスリ

「こら、お前等。……もう、朝だぞ？そろそろ起きないと、飯抜き

になるぞ？」

カイトの言葉に、もぞもぞと動いて起き上がる二人。士郎は既に居間に逃げて現状を説明中。

さっと、シャワーを浴びて、さっぱりしてからの朝食後。因みに今日は土曜日。

虎は休日出勤の為、とっくに食べて学校に行っている。教員も忙しい。南無南無。

「……にしても、寝惚けるまでとか……どんだけしてたのよ（ボソッ）……。」

「取り敢えず、朝ぼらけになるまではしてたけど？」

「「「……へ？」」」

「…で、でも、私が側を通った時には、何の物音もしませんでしたが……；；」

「そりゃ、当然だろ？」

「「「当然？何で（よ）？」」」

「遮音結界を張ってたに決まってるじゃねぇか。」

「「「は？……結…界？」」」

「そう、結界。…何だ？お前等……もしかして、俺がそんな事も出来ないとでも思ってた訳？」

「い、いえ、その……そういう事ではなくて……；；」

「その……結界って……一体……？」

「おいおい……勘弁しろよなぁ？……魔術師が三人も雁首揃えて、何言ってやがんだよ。」

「ちょ、ちょっと！！！アンタ！？！？！？」

「か、カイトさん！！！！！」

「な！？そ、それじゃあ……！？！？」

「そういう事。まぁ、士郎が気付かないのは当然だが。」

『衛宮家之非日常４．衛宮士郎強化計画』

ｓｉｄｅ：引き続き居間

「……どういうつもりよ…アンタ……」

「いやな？そろそろ士郎を強化・矯正しとこうかと思ってさ。」

「……俺を？」

「そう。序でに出来れば、凛に士郎の師匠になって貰いたいんでね。」

「……そりゃ、俺は遠坂がなってくれるなら、有り難いけど……でもなぁ……。」

「……何よ……私じゃ役者不足だって言いたいの？」

「寧ろ、役不足だな。……士郎には勿体ないぐらいだが……他に頼めるのもいないんでな。」

「……士郎の出来次第で、考えてあげなくもないわよ？」

「…だとさ。士郎、取り敢えず、お前の鍛錬を見せてやんな。……お前等は絶対邪魔するなよ？」

そして、士郎のいつもの鍛錬が始まった。初めは何をしているか、理解出来なかった凛達も、

解った瞬間、止めに入ろうとしたが、逆にカイトに止められ、

姉妹揃って只管終わるのを待ち続けた。

「……ふう……取り敢えず、終わったけど……。」

「…………こんの…………大馬鹿！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「おわっ！…………ど、どうした？遠坂。」

「どうしたじゃないわよ！！！！！突っ込み所がありすぎてどうしろってぇのよ！？！？！？」

「クックック…………しょうがないさ。こいつは本当に才能が無い上に、大分特殊なんでな。」

「……ハァハァ…………特殊？」

「ああ。…倉庫見て来な？中身の無い投影品（ありえないもの）がゴロゴロしているから。」

そして、倉庫に移動し、暫くしてから険しい顔で戻って来る遠坂姉妹。

「…………士郎…………あれは一体何？」

「さっき、カイトが言ってた奴か？あれなら、強化が上手く出来ない時に、骨休めする為に…」

「…………アンタ…………自分がどんだけとんでもない事言ってるか………分かってる？」

「…え?……とんでもない事?」

「まぁ、分かり易く言えば…だ。お前の事を教会が知ったら、封印指定を貰うってこった。」

「……ふ、封印指定?!え!?だ、だって、これぐらい、遠坂だって……。」

「……無理よ。……こんな出鱈目な奴見た事無いわ。」

「……まぁ、凛に見て欲しいのは、基礎的・基本的な事だけだ。今の士郎は、強化と中身の無い投影しか出来ないへっぽこ(おちこぼれ)魔術師だからな。

取り敢えず、宝石でも呑ませて魔術回路を強制的に開かせてやってくれ。話はそれから。」

「……分かったわ。……士郎、これから準備するから明日の晩、私の部屋に来なさい。」

「う……わ、分かった…。」

「……クックック……ありゃ、相当怒ってんな…。」

「…？なんでさ……。それにしても……桜も魔術師だったんだな。」

「…は、はい……。御免なさい…先輩。」

「謝る事は無いさ。魔術師は秘匿するのが当たり前らしいしな。家の爺さんは違ったみたいだけど。」

その後一日掛けて士郎と桜は色々話し合い、凛は準備に勤しみ、カイト達は日向ぼっこしていた。

んで、翌日。

「……何で、アンタまでいんのよ……。」

「ん？どうせなら、変人に詳しい奴が居た方がいいだろ？桜が今、お寅さんを抑えてくれてるし。」

「誰が変人だ！！！」

「……まぁ、そうね。…じゃあ、御願いするわ。」

「……やっぱこいつら酷い……。」

……そして、時間は跳び、今ようやっと士郎の回路が開き、精神も安定して来た頃である。

「……どうやら、安定して来た様だな。」

「……ああ。……未だ、身体は熱いけどな……。」

「……そんだけ話せれば充分よ。……それで？教えて貰いましょうか？」

「ん？何を？」「全部よ。」

「……ふむ。……じゃ、話せる範囲でって事で。…ＯＫ？」

「……まぁ、いいわ。」

「んじゃ。取り敢えずは……そうだな……士郎の特殊性からでいいか？」

「……ええ。」「……俺も知りたい。お前は俺の何を知っているんだ？カイト。」

「まず、一つ。士郎の強化・投影はとある魔術が劣化した結果、出来てるものだ。

……それが、一体何か……解るか？」

「判らないから聞いてるんでしょ？」「……左に同じく。」

「……答えは……魔術の究極。誰もが極めたいものだ。」

「……！！！……ま……まさか……。」

「…大正解。……そう。衛宮士郎が使える……いや、衛宮士郎に許されたたった一つの魔術。

それは……固有結界。」

「！！！！！！！！！！！！！！……固有結界ですって！？！？！？！？」

「？？固有結界って何だ？」

「詳しい事は、後で全部凜に聞け。

……つまり、士郎に出来る事は、己が内からあらゆる物を幻想し模倣し創造する事のみ。

……後は、構造解析ぐらいだな。……しかも、それだけじゃない。」

「……未だ有るの？」

「ああ。士郎は、御存知の通り、何年もスイッチを作れ無かった。

故に、凡そ２５００回程は魔術回路を鍛ち続け、通常の数倍の魔力を通せる。

士郎の回路数は２７。単純計算で大体１００～１３０程の魔術回路を持ってる事になる。

しかも、一つ焼き切るつもりで使えば、更に１０倍程の魔力は出せるだろうな。」

「……本気で反則じゃない……。」

「それだけじゃないぞ？……士郎の魔術回路はその有り様も特殊でな？

２７有る魔術回路。その全てが、神経と繋がっていてな。

……つまりだ。自身の体を厭わなければ、人間に有る全神経を、

魔術回路として励起させる事が理論上出来るんだ。……な？出鱈目だろう？」

「……最早、只の化け物ね。封印指定も当然だわ。」

「……俺って、そんなに異常……なのか…？」「「何故に疑問系？！」」

「……まぁ、そういう訳だ。細かい事は、凛に全部教えて貰え、士郎。」

「……あ、ああ……。」

「……それで？何でアンタはそんな事まで知ってるのよ？」

「……言ったろ？俺は『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』だって。

全てを知っているんだ。凛……お前の親の仇もな。」

「！？！？！？！？……誰なの？！……今直ぐ教えなさい！！！！！」

「却下。今のお前じゃ返り討ちに遭うのが関の山だ。それに、そいつは士郎の仇でもあるしな。」

「「！？！？！？！？！？」」

「ま、そういう訳で、今は二人共鍛錬に励めよ～。その内教えてやっからな～。ノシ」

そう言い、部屋を出るカイト。暫く呆然としていた二人は我に返るまで、四半刻は費やした。

その後、色々説明する為に情報を整理する為、今夜はこれでお開きとなった。

『衛宮家之日常5．衛宮家之ペット』

side：居間

そして、翌日。又も休日出勤の為、虎は居ない。御都合主義万歳。

そして、朝から士郎と、何故か桜にも、凛（眼鏡付き……萌え）が色々魔術について指導中。

そして、相変わらず日向ぼっこをしているカイト御一行。

……その内、何かに気付いた様にカイトが手を打った。……嫌な予感がした士郎達。

「ああ、こっちは気にしないでいいよ。講義を続けてくれ。」

その言葉に渋々続ける……事はしなかった。カイトの行動に興味を惹かれたらしい。

「……まぁ、いいや。お前達……ペット…欲しくないか？」「「「欲しい。」」」

その言葉に同時に頷く三人。凛も既に家族として馴染んで来た様だ。

「……しょうがねぇなぁ♪♪……なら、しっかり見とけよ？一生拝めないからな。」

そう言うと、カイトは中庭に出て何やら唱え始め……その場に居た全員を驚かせた。

「ファースト・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　第一形態（アインス）

ドラゴン・オブ・マナ　ミニエレメント・ドラゴン　第一形態（アインス）」

“クアアアァァ～～～～～……。”

そうカイトが呪文を唱えると、小さな掌サイズの龍達が１４体、欠伸をしながら現れた。

そして、カイトを見付けると、嬉しそうに皆してカイトに擦り寄って来た。

「よしよし。……取り敢えず、黄宇達の所に行ってな？」

“クァァァーーー！！！”そう一斉に叫ぶと、大人しく黄宇達の許に飛んで行った。

「んじゃ、次。

セブンス・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　虹色形態（セブンス）

ドラゴン・オブ・マナ　ミニエレメント・ドラゴン　虹色形態（セブンス）」

“クワァァァ～～～～～……。”

今度は、さっきと同じ龍達が２１体も現れ、アインス達と同様に欠伸をし、カイトに群がった。

「よしよし。…ほれ、アインス達の所に行っておいで？」

“クワァッ！クワァッッ！！クワァァッッ！！！”

そう口々に言うと、黄宇達の側に居るアインス達同様に、彼女達に群がった。

「んじゃ、最後。

セカンド・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　第二形態（ツヴァイス）

ドラゴン・オブ・マナ　ミニエレメント・ドラゴン　第二形態（ツヴァイス）」

“グワァァ～～～～ッッッ……。……グワッ？”

次に出て来たのは、凡そ一体２ｍ前後はあろうかという大きな、これまた龍が七体。

そして又、カイトに群がり、今度は一緒に黄宇達の許に向かった。

「ほれ。お前達、暫く此処で遊んでな？」

“グワッ！　クワ～～ッ！！！　クワッ！クワッ！”

そう、バラバラに言うと、ツヴァイスは庭に横たわり、セブンスはツヴァイス達の上に乗り、

背中を滑ったりして遊び、落ちたセブンス達をツヴァイスが尻尾等で、背中に戻したりしていた。

そして、アインス達は、士郎・凛・桜の許へ行き、三人の頭・肩・腕等に乗り、思いっ切り甘え、

その可愛さに、メロメロになった魔術師達は今日の抗議を中止し、一日中龍達と戯れてた。

「……宜しいのですか？主殿。」

「…そうだよ、カイト兄ちゃん。……辛くない？」

「…大丈夫だよ、これぐらいはな。」

「……でも、ますたあ……。」

「……ほれ、あいつらの楽しそうな顔を見てみろよ。……お前達なら、解るだろう？」

「……はい。……ですが、カイト様……あの『欲望（ディザイア）』との戦いの時に、

既に、一兆と十個程、命を失われています。……それでは、本末転倒ですよ？」

「……何、構わんさ…それぐらいはな。悠久の時を生きるからこそ、現在（いま）が大切なんだ。

その為ならば、数兆やそこらの命等、惜しくは無いさ。」

“……。”

「……折角の休養だ。お前達も存分に寛げよ。勿体無いだろ？」

“……はい。我等が主もどうか、御寛ぎなさいます様…。”

「ああ。……今、俺は充分、幸せだよ。……有難う……お前達（かぞくよ）。」

“……はっ。……我等は、何時何時迄も、御側に居ります。我等が主。”

……新たな絆を、更に深める主従達であった。

その後、帰って来て、

「な、な、な……何じゃ、こりゃあああああーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！」

と咆哮した虎を、カイトがあっさり言い包め、

衛宮家のペットとして正式に認定されたのであった。

今、此処に、４２体のペットが新たに衛宮家の家族として加わった。

……大丈夫か？衛宮家のエンゲル係数。

衛宮家の日常参（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　３）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、少々強引になってしまいました。申し訳ありません。

次回は、あの小悪魔が登場する予定です。どうか、御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

衛宮家の日常肆（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　４）（前書き）

現時刻（２１：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５０１，８１１アクセス　ユニーク：４８，３８７人
皆様、いつも御覧頂き、本当に有難う御座います。

御陰様で、竟に５００，０００アクセス突破致しました！！！！！！！！

これも偏に、この様な稚拙な文章を読んで頂いた皆様の御陰と思っています。

重ねて御礼申し上げます。

では。今話も拙筆を御楽しみ下さい。

衛宮家の日常肆（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　４）

『衛宮家之非日常６．アインツベルン』

ｓｉｄｅ：三人称

衛宮家に大量のペットが襲来し、エンゲル係数が大じょ……いや、超上昇した、翌週の土曜日。

いつもの様に、龍達との戯れに心惹かれ乍ら、凛の講義を受けている二人。

そんな気も漫ろ（そぞろ）な士郎に、カイトが珍しく話し掛けた。

「あ、士郎。俺、今日はちょっと出掛けて来る。」

「…珍しいな。お前が出掛けるなんて。」

「おう。そろそろ、俺も動かないといけないんでな。」

「？…まぁ、いいや。遅くなるのか？」

「…う～ん……判んねぇや。一応、連絡は龍斗に付けとく。

もし何も連絡が無かったら、俺の分はいいや。」

「分かった。気を付けて行けよ？」

「ああ。…んじゃ、行って来る。」

ｓｉｄｅ：アインツベルンの森

「……相変わらず、メンドイ結界だねぇ……。まぁいいや。お邪魔しま～す。」

独り言を呟き、中に入るカイト。当然の如く結界が発動する……筈が、全くの無反応であった。

「よしよし。ま、俺がこの程度に引っ掛かる訳も無し…と。」

そう言い、カイトは姿を消した。

そして、アインツベルンの城。

人造生命体（ホムンクルス）が住むその城に、突如全く予期せぬ侵入者が現れた。

「よっと。…やっぱまずは玄関から入らないとね♪……っと、行き成りのお出迎えかい？」

「……あなたは誰？どうやってこの結界を潜り抜けたの？」

「普通に入って来たけど？後、中に入ってから、此処に転移してきた。」

「……そんな事、出来る訳ないでしょう？…それに転移って何？」

「いや、出来るに決まってるだろう？転移って～のは、要は瞬間移動のこった。」

「！！！！！……あなた、本当に何者？」

「……俺は、アイリスフィール＝フォン＝アインツベルンの知り合い。

又、衛宮切嗣の知り合い。……そして、宝石翁の知り合い。

人は我を……『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』……と呼ぶ。」

「……そう。魔法使いの知り合いなら、結界も擦り抜けた事も納得ね。

それに……その名も伊達では無さそうね。」

「まぁな。…改めて、初めまして。イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルン。

俺の名は、八神カイト。お前に話があって登城した。」

「……私に話？」

「そう。どっか、ノンビリ寛げる場所無い？なんなら、バーサーカー喚んでもいいし。

あ、後、リーゼリットとセラも呼んどいてくれ。」

「……分かったわ。付いていらっしゃい。ちょっと無粋だけど、お客様なら一応歓迎するわ。」

「サンキュー。」

ｓｉｄｅ：イリヤの私室

「……此処ならいいでしょ。」

「…おいおい。此処、お前の私室だろ？いいのか？見ず知らずの男を連れて来ちまってさ。」

「…構わないわよ。……そんなに変態さんには見えないし。」

「そりゃ、どうも。」

「……それで?私に話って何?…それとお前って言わないで。イリヤ…で構わないわよ。」

「これはこれは、光栄の至り。……では、本題と行こうか?イリヤ。」

……そして、中途半端に知っているイリヤに、正しい事実を色々と教えてあげたカイト。

「……そう。そんな事があったの。」

「そういう事。寧ろ、イリヤの仇は言峰綺礼ってこった。……でも、お前は殺すなよ?」

「どうして!?!?私の親の敵なのよ!?!?!?」

「お前の義弟…衛宮士郎の仇でもあるからだ。…それ以上に、あの言峰綺礼（リビングデッド）を消滅（けす）させるのは、

俺の役目だ。……お前達姉弟には悪いが…な。」

「……分かったわ。譲ってあげる。

その代わり！！！！！絶対に仕留めなさい！！！！！失敗したら、許さないから。」

「委細承知。……大丈夫さ。此の世界に居る限り、俺から逃げられる事は絶対に有り得ない。」

「……随分な自信ね。」

「只の事実なんでな。他に言い様が無いのさ。」

「……そう。……それで、リズやセラも呼んだ理由は何？」

「…ああ、それはな……お前達、三人にも、衛宮家に来て欲しいからだよ。」

「「「!!!!!!!!!!!!!!!!」」」

「まぁ、当然異論・文句は有るだろうけどな。一切受け付けんぞ？来れば分かるのでな。

何故、俺がお前達をあの家に招待したのか…がな。」

「じょ、冗談では無い!!!!!何故、御嬢様がその様な下賤な者の所に

行かなければいけないのですか!!!!!!!!!」「………。」ブンブン↑首を振ってる

「だから、言ったろ？異論・文句…そして、反論は受け付けない…と。」

「な!?!?ふ、巫山戯ないで!!!!!」「……………。」ブンブン!↑激しく首を振ってる

「……私は別に構わないわよ？」

「な！！？お嬢様？！」「……？」↑首を傾げている

「一応、私の義弟ってのも、見てみたいし…ね。」

「よし。んじゃ、決定。お前等も着いて来いよ？」

「わ、分かっています！！そんな所に御嬢様を御一人で行かせられる訳が無いでしょう！！！」

「……リズも行く。」

「よっし。なら、善は急だな。今から、行くぞ……支度しろよ～。」

「分かったわ…じゃ、出ていて貰える？その間、バーサーカーを話し相手にでもしてて。」

「了解。御姫様。」

ドッタン！バッタン！　あーでもない！こーでもない！

「……相変わらず騒がしいねぇ……。

……にしても……久しいな…ヘラクレス。息災か？…と言うのも変だな。」

「……。」

「ああ。俺は死人じゃ無いよ。ちゃんと生きてる。お前達とは少々在り方が違うのでな。

無駄に長生きしちまってるだけさ。」

「……。」

「はっ！気にするな。俺はこれでも、充分愉しく、幸せに生きてるんでな。」

「……。」

「まぁな。……今日は珍しいな。やけに饒舌じゃねぇか。」

「……。」

「ああ、判ってるさ。任せろよ。俺の二つ名……忘れた訳でも有るまい？」

「……。」

「……承知した。『宇宙（そらの）の救世主（メシア）』の名に懸けて彼女達を助けると誓おう。」

「……ーーーーー！！！！！！！！！！！！！！」

……まるで、感謝の涙を流すかの様に、バーサーカーの咆哮（なきごえ）が響き渡った……。

「……終わったわよ。……それにしても、バーサーカー？さっきはどうしたの？

何か泣いている様だったけど……。」

「……。」

「……そう。何でもないならいいわ。……じゃ、行きましょ？」

「おう。歩いて行くのか？」

「当然よ。少し街並みとか見てみたいもの。」

「では。エスコート致しましょう…御嬢様。」

「宜しく御願い致しますわ……ジェントルマン。」

ｓｉｄｅ：衛宮家

「……此処？ホントにこんな襤褸っちい家が衛宮家？」

「イエスマム。…まぁ、入ってみりゃ判るさ。」

「……成る程ね。来る者拒まず、去る者追わず…ってとこかしら。」

「御名答。…っと、来たぞ?」

「いらっしゃい。カイト達から、話は聞いてるよ。ようこそ、衛宮家へ。」

「まぁ、取り敢えず入ってくれ。話は中でな。」

「改めまして…。イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンです。今日は御招き頂き、有難う御座いますわ。」

「……あ、ああ。…衛宮士郎だ。宜しくな?イリヤ。」

「ええ。」

「後、こっちの二人は…」「知っているわ。遠坂凛と間桐桜…でしょ?」

「え?お前達知り合いだったのか?」

「……ええ。会うのは初めてだけどね。」「……はい。そうです。」

「それで、こっちが、リーゼリットとセラよ。」「「……。」」（ムスッ）」　ペコリ

「ど、どうも……。（何で睨まれるのさ…？）」

「取り敢えず、龍斗に伝えた通り、お前の義理の姉弟（きょうだい）という事になるからな…士郎。」

「……ああ。まさか、爺さんにこんな小さな娘さんが居るなんてな…。」

「……まぁな。ちゃんと仲良くしろよ？」

「ああ、勿論だよ。……義理とは言え、俺達は兄妹（きょうだい）だ。改めて宜しくな？イリヤ。」

「……うん…お兄ちゃん♪」

（……やっぱり、勘違いしてるなぁ……イリヤも敢えてそれを狙ってるし。）

……で。衝撃に打ち震えているお寅さんを何とか宥め賺し、事無

きを得、

その日は衛宮家に泊まっていった。……凛と桜も、何か危機を感じたのか、一緒であった。

そして、翌日もその儘衛宮家で遊び、夕飯後流石に帰る事になった。

「…やっぱり帰るのか？」

「……うん。お家に帰らないと、みんな心配するから。」

「……そっか。……何時でも好きな時に遊びに来いよ？此処もイリヤの家なんだからさ。」

「……うん！！！お兄ちゃん！！！！！」

「うん。…じゃあ、カイト。妹（イリヤ）を頼んだぞ？」

「ああ、任せておけ。……んじゃ、行くか？イリヤ。」

「……うん。…又、来るね？お兄ちゃん。」

「ああ。待ってるよ…イリヤ。」

ｓｉｄｅ：城

「…で、どうだった？御感想は。」

「……聞かなくても、あなたなら判るでしょ？」

「クックック……そりゃそうだ。」

「…フン。……まぁ、偶には遊びに行ってあげてもいいわよ？」

「……そうか。……有難うな…イリヤ。」

「…別にあなたの為じゃないわよ。……それより、もういいわよ？お城に着いたのだから。」

「ああ。…でも、後一つ用事があるんだ。」

「……用事？」

「そう。ちょっと、バーサーカーを喚んでくれ。」

「……いいわよ。…バーサーカー。」

「……。」

「ああ。解ってるよ。それじゃない。」

「……？」

「……まぁ、ちょっとしたプレゼントだ。有り難く受け取ってくれ。」

そうカイトが言いバーサーカーに手を翳すと、バーサーカーの身体が輝き出し、直ぐ様止んだ。

「……良し…完了だ。」

「……？何？一体、私のバーサーカーに何をしたの？」

「……主の言う通りだ…『宇宙（そらの）の救世主（メシア）』よ……」

私に一体……何！？！？！？！？」

「「「な!?!?!?!?!?ば、ば、バーサーカーが喋った?!?!?!?!?!」」」

「プレゼントだって言ったろ?……他の能力はその儘に、お喋り機能だけ付けといた。」

「……確かに。他の能力には何の変わりも無い。」

「……ほ、ホントに……?ホントに言葉を話せるの?バーサーカー……。」

「うむ…我が主。これからは何時(いつ)何時(なんどき)でも話し相手になろうぞ。」

「……バーサーカー!!!!!!!!!!」　ガシッ!!

「……主の分も含めて感謝する。『宇宙(そらの)の救世主(メシア)』よ。」

「…何、気にすんな。この程度ならば、然したる苦労も無いさ。

…んじゃな。又、遊びに来いよ……？…イリヤ。」

そして、衛宮家に転移するカイト。

後には、父親（バーサーカー）に抱き付き、中々泣き止まない娘（イリヤ）と、

それを驚きと、温かい気持ちで見守る三人の者が居た。

『衛宮家之日常7．危うし！！衛宮家のペット達（ドラゴンズ）』

ｓｉｄｅ：衛宮家

イリヤ達が遊びに来てから、二～三週間程経ったと思いねぇ。

その間に、ほぼ毎日衛宮家に遊びに来ては、凛達を引っ掻き回して喧嘩したり、

鋼牙や龍達と戯れ、皆をほんわか和ませたりと、もう完全に衛宮家の住人として馴染んでいた。

そして今日も又、イリヤが平日に遊びに来て、鋼牙達と共に中庭で戯れていた。

そうこうしている内に、士郎達が帰って来た……と思いきや、何やらドタバタしている。

そして、カイトに三人して頼み込んだ。

「「「御願いします。龍達を隠して下さい。」」」

「だが、断る。…てか、そもそも何故に？唐突に？Ｗｈｙ？」

「いや、実はな……。」

ふむふむ…。士郎達の話を要約すればこういう事らしい。

「つまり…だ。今日はこれから、一成と綾子と、何故か仲良し三人娘まで来る事になり、

龍達が居ると、言い訳とか色々大変だから、今日一杯は隠しておいてくれって事か。」

「「「「……！！」」」」　ブンブン！！！↑同時に激しく首を振っている

「ならば、もう一度言おう。だが断る。」

「「「何で？！？！」」」

「俺の最も好きな事の一つは、絶対にＹＥＳと言うと思っている相手に、ＮＯと言ってやる事だ。

……まぁ、それはさておき。……別に見られても構わんだろう？お寅さんと同じ様に言い包めればいいんだからさ。」

「「「…そ、それはそうだけど……。」」」

「大丈夫だって。何とかなるだろ。ハクナマタタ…って奴さ。」

そうこう言っている内に、五人が纏めてやって来た。

「「「「「お邪魔します。」」」」ま～す。」」」

「……いらっしゃい。」

「む？…どうした、衛宮。今日はやけに大人しいではないか。」

「…そ、そうか？…まぁ、気にせずに…どうぞ。」

そして、居間に通される五人。そして、庭を見て固まる五人。そして、士郎に詰問する五人。

「「「「「あれは何？！？！？！？！」」」」」

「何って……；；；；；；；カイト！！！頼んだ！！！！！！！！！」

「あらほらさっさ。……さあさ、皆さんお立ち寄り。遠からん者は音に聞け！！

近くば寄って目にも見よ！！彼等の事を聞きたいならば、おいらが教えて進ぜよう！！！」

余りにも怪しすぎるカイトの口上に、少々……基、どん引きしながらも、

一応大人しく話を聞く為、カイトの許に集まる五人。

「…さてと。……んで、どうすんだっけ？」

“だから、説明すんだろうが（でしょう）！！！！！！！！！！”

「うむ。良いツッコミだ。Ｎｉｃｅ　ＴＵＫＫＯＭＩ！！！」

“……ダメだこいつ（この人）早く何とかしないと……ｏｒｚ”

「……さて。皆が一致団結した所で……『説明しよう！！！！』」

“……何故にエコー？というか、どうやって？”

「こまけぇこたぁいんだよ！！！！！…んじゃ、説明すっぞ～。まず、あいつらは龍じゃない。」

“んな訳無いだろ（でしょ）。”

「チガウヨ？ホントダヨ？だって考えてもみてくれ。

龍。人間が考え出した想像上・空想上の生物。……つまり、現実には決して存在し得ないもの。

だから、あいつらは龍じゃない。大体、お前等その歳になって龍とかｗｗｗｗ

恥ずかしくね？ｗｗテラワロスｗｗｗ」

「……何か、意味は解んないけど、物凄く腹が立つのは気の所為かな？」

「…いや、気の所為では無いだろう。俺も非常に腹が立って来た。何故かは解らないが。」

「………カイトさん…と仰いましたか？」

「イエスマム。何じゃらほい？」

「………では、あれらが龍では無いのだとしたら、一体何なのです？」

「さあ？」

“…は？”

「いや、だから判んない。限りなく龍に近い、龍でない何か。一応蜥蜴の亜種って事になってる。

便宜上、龍（ドラゴン）って呼んでるだけ。要は只の珍種。大体、こんな小っさい龍…居るか？」

“…クワァ？” コテン

“…………可愛い！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「因みに、もしお前等が龍だ！！！と騒ぎ立てれば、こいつらは此処に居られなくなり、

皆の見せ物となり、こうして自由に遊ぶ事も、お前達と触れ合う事も出来なくなるんだが…

「…それでも、こいつら龍だと思う？」

“クワァ〜………。”　ウルウルウルウル

“……思わない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

「んじゃ、それで良いな？」

“Σd!!!!!!!!!!!!!”

「…あ、これにて〜…一件ん〜〜あ、落着ぅぅ〜〜〜………!!!」

鋼牙「わ〜〜〜!」　パチパチパチパチパチ

こうして、他の衛宮家に関わり有る人達にも龍達（ペット）の存在を認められた衛宮家は、

別名『楽園（パラダイス）』と呼ばれる事になり、疲れた人には素晴らしい癒しが与えられる……と言う事で、

知る人ぞ知る、有名な癒しスポットとして、名を馳せる事に相成るのであった。

士郎「……ホントにこれでいいんだろうか？」

カイト「こまけぇこたぁいいんだよ！！！！！」

士郎「……それにしても……食費がえげつない事に……
…；；ＯＴＬ」

カイト「ドン☆マイ♪」

士郎「……いつか、こいつを本気で殴りたい……。」

衛宮家の日常肆（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　４）（後書き）

如何でしたでしょうか？

後一回、日常生活を書いてから、月光閃火様が考えて下さった、オリジナルキャラを番外編にて出したいと思っています。

月光閃火様。どうか、後2～3日御待ち下さいｗ

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

衛宮家の日常伍（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　５）（前書き）

現時刻（１５：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５１２，８３９アクセス　ユニーク：４９，４９０人
皆様、毎度有難う御座います。

今回で日常話は終わりです。次々回から、本編に入りたいと思います。

では。今話も拙作を御堪能下さい。

衛宮家の日常伍（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　５）

『衛宮家之非日常８．世界来襲（アルニス）』

ｓｉｄｅ：衛宮家

第二次ペット騒動とでも言うべき、アレが終わった日から、更に一月程。

今の現状に最早完全に慣れ切り、凛達の講義を聞きながら、

皆して中庭で遊んでるちびっ子達と龍達に萌えて癒されていた。

そんな毎日を送っていた士郎達。しかし、とある日。今日も今日とて全員集合な日であった。

その日は、一般人も居る為、講義はせず皆して龍達と戯れていた。

「……はぁ……いいねぇ……この風景……和むねぇ……幸せだねぇ……。」

「……はい…主殿……。」

「……もうすぐ夏休みだなぁ……そろそろ海水浴でも……ん？……何だ？」

そうノンビリしていると、何かが上空から降って……否、降りて来た。

それは、光を全身に纏いながら、そっと…静かに中庭に降り立った。

「……ふう……。……あ、カイト♪良かった……探しましたよ？」

そう言う彼の微笑みに、誰もが見惚れ呆然としてしまった。

「………は？アルニス？」

「はい♪御久し振りですね♪カイト。」

そう言い、カイトに近付くアルニス。それを迎える為に立ち上がり、これ又近付くカイト。

そして、にっこり微笑み手を差し出すアルニス。そして、地面に沈み込むアルニス………え？

「こ〜〜んの〜〜〜………バカアルニスゥゥゥーーーーー！！！！！！！！！！！

てめぇ！！！こんな所で何してやがる！！！！！」

「………ぅぅぅ〜〜……痛いじゃないですか〜…カイト。」

どうやら、思いっ切り拳骨を喰らわしてやったみたいだ。皆、ポカーンとしてる。

「ええから、答えんかい！！！どうせ、シュガル坊やに全部押し付けて来たんだろうが！！！」

「おお！その通りです♪良く解りましたね。流石はカイトです♪」

「ド喧しいわ！！！！！アホニス！！！！！！！！！！」　ドゴッ！！！！！

「……ぅぅ～～～…だから、痛いですよ～…カイトぉ…。…クスン。…大丈夫ですよ、シュガルならば。彼は、もう第二席にまでなっているのですから。」

「そういう問題じゃねぇ！！！！！……ああ、そりゃ大丈夫だろうさ！！！！！

年がら年中、お前の突飛な発言・行動に振り回されて、収拾に大童だからな！！

そりゃ、年期入ってる分、伊達じゃないわな！！！！！……と、そうだ…。

おい！！アホニス！！！てめぇだろ！？坊やに『吸収』付けやがったのは！！！！！」

「はい♪！そうですよ♪？流石は、カイト。彼の事ならば、最も良く知っていますね♪♪♪」

……ブチッ。「……。」

「……？……あ、あれ？か、カイト？……な、何か……怒っていますか？；；；；；；」

「……そう思うなら……ちょっと飛んで来い♪♪♪♪♪」

カイトはそう言うと、某ゴンさんキックを咬まし、アルニスの姿が一瞬で消えた。

その十数秒後、落ちて来た。

「…ぅぅぅ〜〜〜〜……酷いじゃないですかぁ〜〜……。」

「ド喧しい！！！！！ドアホニス！！！！！！！！！

曲りなりにもてめぇは、第一席だろうがあああ！！！！！それでも、組織の長か！！！

少しは自覚を持てと、何億年も前から散々言ってんだろうが！！！！！！！！！」

その後、アルニスを中庭に正座させた儘、延々と説教を続けるカイト。

それを困った顔をしながらも、嬉しがって聞いているアルニス。……マゾ？

一成（……いや、どうやら、違う様だな。）

凛（……ええ。……あれはカイトが大好きで、

彼に構って貰えるのが、嬉しくてしょうがないって感じね。）

桜（……そっち系の人って事…ですか？）

綾子（……いや、違うわね…。……あの喜び方は…子犬ね。）

楓（……子犬？）

鐘（……ああ、成る程。……確かに、何か尻尾を激しく振ってる様が幻視されるな。）

由紀香（……何か、とても可愛く思えて来ちゃった……。）

等々、外野が喧々囂々している内に、何時の間にか説教は終わっていた。

「…ぅぅぅぅ～～～……痛いですよぅ……カイトぉ～～～……。」

「知るか。サボって抜け出して来た相応の罰だ。」

「ぅぅぅぅぅ～～～～～～……；；」

「アルニス兄ちゃ～ん♪」

「ぅぅ～～～……ぅ？…おお！鋼牙じゃないですか♪！御久し振りです♪」

「うん♪♪♪久し振り♪！！！」

「……全く……あなたがこんなとこに居ては、ノルニルも大慌てでしょう？」

「大丈夫ですよ、龍斗♪その為にシュガルが居てくれるのですから♪♪」

「よっし！その曲がった根性、俺様が叩き直してやろうか？アルニス。」

「嫌ですよ…紅蓮。あなた、殆ど手加減してくれないじゃないですか。」

「何言ってんだ…ちゃんと手加減してやってんじゃねぇか？」

「……あれは、手加減とは言いませんよ……。」

「まぁまぁ、戦闘バカは放っといて……おひさ～アルニス♪」

「はい。お久し振りですね、水薙。相変わらず、カイトとラブラブしていますね。」

「モッチのロンよ♪私とマスターは、何時如何なる時でも、一心同体なんだから♪♪♪」

「羨ましい事です♪」「……アンタにはあげないからね…アルニス。」「…残念です。」

「……鋼牙もやらんぞ？アルニス。」

「……あなたも相変わらずですねぇ…黄宇。溺愛振りは健在の様で一安心です。」

「全くだ。俺が鋼牙と一緒に居ても、偶に鋼牙しか目に入ってない時があるくらいだからな。」

「あ、主殿！？」

「それは、いけませんねぇ……。いっその事、暫く鋼牙と接触禁止にしてみたらどうです？」

「な！？！？！？！？！？！？そ、そ、そ、そんな非道な！！！！！！！！！」

「………ふむ………それもいいかもしれんな…。」「あ、主殿！？！？！？！？！？」

「………冗談ですよ♪…カイトも悪乗りし過ぎですよ？♪」

「いや、済まん。余りにも、揶揄い易かったモンでな。」

「………じょ、冗談……ですか…？」

「「おう（ええ）。勿論♪」ですとも♪」

「………………。」　チャキッ……

「取り敢えず落ち着け、黄宇。……まぁ、許せよ。今晩一人で可愛がってやるから。」

「……約束ですよ？／／／／／／／／／／／／／／／」「ああ。…てな訳で、済まんな、水薙。」

「……しょうがないわねぇ…。その代わり、明日は私一人だからね！マスター！！！」「了解。」

「……そう言えば、龍達も全員居るんですね……。」

「いや？カイザーは居ないぞ？あのでかいのが居たら、地球じゃ大騒ぎになっちまうからな。」

「……そうですか……。…それにしても、大丈夫ですか？カイト。幾らあなたでも、これだけの従者を一斉に喚んでいては……。」

「ああ…まぁな。二回程、死んだが……まぁ、そんぐらいで済めば御の字だろ。」

「……カイト……。」

「別に構わんだろう？滅多な事じゃ一緒には居られないんだからさ。こういう時でもない限りは…な。俺が気にして無いんだ。

……お前等も気にするな。……いいな？」

「……分かりましたよ…カイト。…本当に、あなたは頑固なんですから。」

「…フン…。……で？」「…はい？」

「…それで、何しに来やがった？…真逆、本当に只、サボって来た訳じゃぁねぇよなぁ…？」

「はい。勿論、違いますよ？私は今、有給休暇を執っているんですから。」

「……。」　ドゴッ！

「……痛いです……カイト。」

「五月蠅ぇ！！！！！この糞忙しい時期に休暇を執るトップが何処に居るか！！！！！」

「此処に居ますよ？」「…。」　ゴスッ！！

「……だから、痛いデスヨ……カイト……。」

「……あ゛？！」

「……ぅぅ～～～カイトが恐い……。……この時期だからこそ休暇を執ったんですよ？

あなた達が、私達幹部を殆ど皆殺しにしちゃいましたから、今、人材確保に勤しんでるんです。

今、残っているのは、第一席の私と、第二席となったシュガルと、

第十二席のコルニス＝アルガザス　しか居ませんから。」

「…十二席って言やぁ……確か、十一席のユニゲムと婚約してたよな？」

「はい。…あなたが殺しちゃいましたけど。御陰で、彼女は今大変なんですよ？

あなたを殺す為に、日々力を磨いているそうですから。」

「ハ！どんだけ磨こうが、小石風情じゃぁ緋々色金は傷付けらんねぇよ。

……まぁ、楽しみにしてるさ。どんだけ高みに昇れるか…な。」

「……そんな事ばかり言っているから、皆に勘違いされて嫌われるんですよ？」

「フン…俺は別に構わんさ。誰に嫌われ様とな。」

「又々…♪あなたが誰よりも、星々を、銀河を、宇宙を、世界を…そして、人を愛している事を

私達はとても良く知っていますよ？…全く……本当にツンデレなんですから♪

この御茶目さん♪♪♪♪♪」

ブチッ……！！！「……。」

「……？……あ、あれ？……あ、あの～～……カイト？」

「死に晒せ」

「へ？…あ、ちょ、ちょっと、待って、待って下さいよ…か、カイト？」

五行“南無。”

「ゑ　ぇ？…あ。」

そして、アルニスはお星様になりましたとさ……まる。

「私は未だ死んでませんよ～～～……；；」

で。結局、アルニスはその儘、衛宮家に居候する事になった。

部屋割りで「カイトの隣がいいです。」と言い放って、揉めたのは言う迄も無い。

『衛宮家之日常9．夏休み～龍達の危機?!～』

ｓｉｄｅ：変わらず衛宮家

只今、夏休みである。扇風機とエアコンと風系・水系の龍達が大人気である。あつはなついねぇ。

夏休みに入ってから、衛宮家は来客が引っ切り無しであった。

そして、今日は不思議と皆して集まって来、かなりごちゃっとしていた。こんな感じに。

衛宮家：士郎・凛・桜・虎・イリヤ・セラ・リズ・カイト・黄宇・龍斗・水薙・紅蓮・鋼牙

そして、ペット達…４２体。

客：一成・綾子・慎二・由紀香・鐘・楓・アルニス

総勢２０人＋ペットの龍が４２体である。…え？そんなに人が入れないだろうって？

チッチッチ…甘い…甘いねぇ……。カイトが凛に頼んで売らせた宝石の売り上げにより、

既に改築済みである。更に大きくなっている。士郎も、きょうｈ…

……説得済みであ～る。

何より、ツヴァイス達に寄り添っているのは、セブンス達だけでは無いのであ～る。

何人か、凭れ掛かったり上に寝そべったりしている為、実は意外と空いているのであ～る。

そして御覧の通り、今日は珍しく普段はいない慎二まで来て居り、本当の全員大集合である。

そう。実は、慎二は初めの歓迎会以来、来て居なかったのであ～る。

……作者も暑さの為か、少々テンションがおかしいので、見逃して頂けると非常に助かるのであ～るぅ～……。

閑話休題（それはさておき）。只今、暑さの為、皆バテバテである。

そして、そろそろ昼食なのだが、皆余り食欲が無かった。要は夏バテである。

すると、カイトが黄宇に何かを渡して、何やら頼んだ様である。黄宇は苦笑しながらも頷いた。

んで、数十分後。何かを作り終えた黄宇が居間のテーブルにそれを置いた。

どうやら、料理を作っていた様だ。士郎達も悪いとは思いながらも、任せていた。

「皆さん。主に頼まれまして、精の付く物・滋養強壮に良い物を作りました。

この様な熱い日にこそ、御食べ下さい。」

苦笑しながらも、皆に料理を振る舞う黄宇。皆して、まるでゾンビの様にモゾモゾと這い擦り、

料理に向かって匍匐前進していた。そして、席に着き、行儀良く『頂きます』を一斉にした。

「…美味いな、これ。」

「…ええ、そうね。これ、一体何のお肉かしら?」

「……鶏肉の様な…そうでも無い様な……不思議な食感ですね…。」

「美味ければ何でもいいだろ、そんな事。いらないなら、僕が貰うよ。」

「あ！こら、巫山戯んな！慎二！！それはアタシのだ！！！」

「うむ。しかし、本当に美味いな。」

「…うん。……これ、一体どんな味付けをしてるんだろう？この調味料も初めて見た。」

「相変わらず、由紀香は料理になると目が変わるねぇ…。」

「蒔の字。早く食べないとなくなるぞ？」

「がつがつむしゃむしゃ……。」

さっきまでの元気の無さは何処へ行ったのか、むしゃむしゃと食べるＦａｔｅ組。

そして……

「がつがつむしゃむしゃがぶがぶごっくん……。」

「紅蓮…もう少し落ち着いて食べなさいよ……慌てなくても未だ沢山あるんだから。」

「…ほら、鋼牙。口の周りが汚れてるぞ？」　ふきふき

「…んぅ……ありがとう！！黄宇お姉ちゃん！！！……パクパク…
…むきゅむきゅ」

「「鋼牙はホントに可愛いなぁ……。」」

「……ハモらないで下さい、御二人共。」

「……。」

「ん？どした？アルニス。味濃かったか？」

「…いえ、とても美味しいです。……それよりも、カイト……これは？」

「うん。そうだよ？お前も喰った事あるだろ？」

「……矢張りそうですか……。」

「…？アルニスさん。これ、何の肉か知ってるんですか？」

「……はい。これは……龍の御肉ですね。……それも、何万年も生きた古代龍の。」

“…モグ…ゴックン……りゅ…龍の肉ぅぅぅ～～～！？！？！？！？！？！？”

「はい。間違いありません。昔、カイトに良く御馳走になりましたから。

私も食べるのは久々ですが……カイト？

同族の黄宇に調理させるのは、如何なものかと思いますよ？」

「同族ったって、片や神獣。片や只の生物。位が違わぁ。」

「……そちらは、百歩譲ったとしても、彼等に仲間の御肉を食べさせるのは？」

「そもそも、あいつらは龍であって龍じゃない。俺の魔力で産み出された、

言わば単なる魔力の塊だ。只、その量が膨大な為、ああして、

魔力のみで身体を構成出来るだけだ。故に、あいつ等は龍属では無く、只の魔力。」

「……だから、ああして、御肉を貪っているのですね？」

「そゆ事。龍肉は他の生物に比べて、特に魔力保有・回復量が桁違いなんでな。」

「何か、色々と気になる台詞オンパレードだけど、その前に！ドラゴンズ！！！集合！！！」

“…？グワァ～～……。……グワッ？”コテン

“うっ…可愛い～……。”

何故か、凛が龍達を呼び寄せ、龍達の仕種に皆してメロメロになっていた。

……お持ち帰りは許しません。

「……はっ……じゃないわよ！ドラゴンズ！！！点呼開始！！！！！」

“グワッ。　グワァ。　グワァッ。　グゥ。　グゥ？　グワッグワッ。　グルゥ。”

「よし！アインス達はＯＫ！　次、セブンス達！！！」

“グワゥ。…以下省略。”

「よし！！セブンス達もＯＫ！！！　次、ツヴァイス達！！！！！！」

“グヲゥ。　グゥワ。　グワァゥ。　グワォゥ。　グガォ。　グルルゥ。　グルァゥ。”

「よし！！！全員確認完了！！！！！」

“よ、良かったぁ～～～……。”

「お前等、そんな心配してた訳ね……；」

その後、衛宮家で龍肉を出す事は禁止されましたとさ。……表向きには。

実は、黄宇や水薙が料理当番の際、今迄もこっそり入れていたのだ。

その事を知らなかった衛宮家の面々は、その後もカイトがばらす迄、
ずっと食べ続け、

御陰で何とか夏バテを乗り切れたそうな。カイト達、乙。

衛宮家の日常伍（Ａｌｗａｙｓ　Ｄａｙｓ　５）（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、アルニスはキャラ崩壊はしていませんよ？カイトが絡むといつも、あんな風になります。

さて。次回は、月光閃火様が考案して下さった、オリジナルキャラが到頭、登場致します。

どうか、御楽しみに御待ち下さい。

では、今話も御読み頂き、有難う御座いました。

番外・同胞～心友～（前書き）

現時刻（１８：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５３０，０１７アクセス　ユニーク：５０，８４８人
皆様、いつも有難う御座います。

そして…月光閃火様。御待たせ致しました。

今回は、月光閃火様が御感想１００個目記念に考えて下さった、

オリジナルキャラの回です。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

番外・同胞～心友～

ｓｉｄｅ：三人称

只今、夏休み中。あの龍肉騒動から、２～３週間程経ったある日。

アルニスが唐突に何事かを思い出し、浮き浮きとカイトに話し掛けた。

「そう言えば♪カイト…此処に来る前に懐かしい人に会いましたよ？♪」

「懐かしい人？……誰の事だ？」

「アキシオンです。」

「アキシオン…？……あ。トキヤの事か？」

「はい、そうです。アキシオン……あの渡良瀬トキヤです。

彼に、此処に来る前にノルニル本部で会ったんですよ♪」

「へぇ…あいつがねぇ……。元気だったか？あいつ。」

「はい。何ら御変わり無く。あなたの事を気にしてましたよ？」

「なら、序でに連れて来いよな？」

「あなたならそう言うと思いまして、御誘いしたのですがねぇ……
…断られちゃいまして。」

「……そうか。……まぁ、あいつにも色々あるからなぁ……。」

「おや。何か知っているんですか？」

「いや？今、あいつが何を抱えているかは知らんさ。」

「…何か、含みの有る言葉ですねぇ……まぁ、詮索は無しにしましょう。」

「……ああ…そうしてくれ。……あいつにも…な。」

「はい。解っていますよ。」

「……あの…主殿？」

「ん？どうした？黄宇。…お前等も。」

「…その……アキシオンという方は一体何方なのでしょうか？」

「へ？……ああ、そうか。お前等はあいつと会った事が無かったんだっけ？」

「はい。…ですので、もし宜しければ、その方の事を教えて頂きた

いのですが……。」

「そっかぁ……あいつと最後に会ったのは……かれこれ百数十億年ぐらい前だしな。」

「もう、そんなに経ちますか……時が経つのは早いものですねぇ……。」

「……全くだな…。」

「「…ハァ……。」」

それを見ていた全員が、何故か唐突に、老けたおじいさん達の溜息に見えてしまった。

「……あの…それで…主殿？」

「…ん？…ああ、説明だな？別に構わんよ。……お前もいいだろう？アルニス。」

「ええ、構いませんよ。…さて…何処から御話しましょうかねぇ……。」

ｓｉｄｅ：カイト

あいつと出会ったのは……そうだな……久し振りにノルニルに遊びに行った時の事だ。

「よお、アルニス。何か面白い事でもあったか？」

「お。カイト♪いえ、残念ながら、あなたの喜びそうな事は……ああ、そうだ。」

「ん？何かあんのか？」

「ええ♪あなたの気に入りそうな人が一人、今訪ねて来てるんですよ。御紹介しますね。」

「そりゃ、楽しみだ。」

「失礼します。アキシオンは居ますか？」

「？……あ、アルニス様！？！？！？！？！？は、はい！！！！！

お、居ります！！！！！

只今、直ぐに呼んで参ります！！！！！！！！！！！！！！……あ、アキシオン様ぁ！！！！！」

「……相変わらず…何と言うか……アレだな？」

「…言わないで下さい、カイト。私の可愛い人々なんですから。」

「……了解。」

「…呼んだか？アルニス。」

「あ、アキシオン。覚えていますか？以前私が話した人です。」

「？……ああ、何か言ってたな。……そいつがそうか？」

「ええ。紹介しますよ。こちらが、通名アキシオン。本名は渡良瀬（わたらせ）トキヤです。

そして、こちらが、八神カイト。ノルニルでの名は『世界の破滅（ワールド・ディザスター）者』の方が

有名だと思いますよ。」

「…ああ。あの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』か。……思ったより、弱そうだな。」

「そうか？」

「まぁまぁ。…アキシオン？カイトは、私でも瞬殺される程とても強いんですよ？」

「！！！…お前が、瞬殺？……少し贔屓し過ぎじゃないか？」

「いいえ。純然たる事実です。既に経験済みですので♪」

「……。」

「ま、そういうこった。取り敢えず宜しくな、トキヤ。」　ガシッ！

「……俺は宜しくするつもりは無いんだがな。」

「…てな感じでな。」

「……余り友好的では無かったのですね。」

「そう言えば、カイト。良く、あの時喧嘩しませんでしたね？」

「ああ…まぁな。何となく、シンパシーと言うかな…？何か似通ったものを感じたんだよ。」

「…そうでしたか。……だからですか？彼と戦った時、手加減してたのは…。」

「……まぁ、色々だ。」

「クスッ……あの時の彼の怒り様は凄かったですねぇ……♪」

「全くだ。殺す訳にもいかねぇし…かと言って、それなりの攻撃でも殆ど効かねぇし。

ホントにお手上げだったぜ……俺、あいつとはもう闘りたくねぇな……メンドイ。」

「クスクス……本当に珍しいですねぇ……あなたが殺しもしないで、

只、宥めているだけでしたからね。余程、彼が気に入ったんですね？」

「…まぁな。……何よりだ。……あいつ、切れると顔がメッチャ怖ぇんでな。正直見たくない。」

「……そんな理由ですか？」「おう。そんな理由だ。」「……

……。」

「まぁ、そんな訳で、何度か喧嘩したり、殴り合ったり、殺し合ったりしてる内に、

何となく仲良くなってたんだよなぁ……。」

「ええ。大体その辺りですかね…。彼が、色々と為出来（しでか）す様になったのは……。」

「…ああ、そうだな。その辺りから、大分、奇妙な名前が付き始めたんだよなぁ……。」

「そうですねぇ……彼は、あれらの名前を結構嫌がってましたね。」

「そうそう…俺等があれらの名前を冗談でも口にすると、瞬間的に切れかけるからなw」

「ええ、ええ。あの時も酷いものでしたっけ……w」

「…あの我が主?…その名前というのは、一体…どういうものなのですか?」

「ん？…ああ。幾つかあるんだけどな？…ええと……確か、一つが……

『必決！御仕置き人』だな。」

“……ひ……『必決！御仕置き人』？”

「そう。ノルニルの幹部未満の下位共が、悪さをする度に御仕置きしてたら、

何時の間にか、あいつらからそう呼ばれる様になってたんだよな。」

「ええ。それと合わせて

『呑鬼（のんき）な断罪執行者（エクスキューショナー）』というのもありますね。」

「ああ、あったあったw…でも、何と言っても面白いのは……やっぱ、アレだなｗｗｗ」

「ああ、アレ…ですね？……クスクス……アレを聞いた時の彼の反応は、

とても素晴らしいものでしたねぇ……ｗｗｗ」

「…あ、あのぅ……その…アレ…とは、一体…？」

「クックックック……いやぁな？それが…

“『性別変換（セクシャライズ・）の悪戯神（ロキ）』っつうんだよｗ」

“『性別変換（セクシャライズ・）の悪戯神（ロキ）』？”

「そう。昔な？あいつが間違って、性転換の薬を飲んじまってな？

その時に惚れた野郎共が、相手が男だと知って、皆挙って絶望してなぁ……ｗｗｗｗ」

「笑ったら失礼ですよ？カイトｗ…それでですね？その時の皆に恨みを込めて呼ばれたのが…」

「『性別変換（セクシャライズ・）の悪戯神（ロキ）』……ですか？」

「「そう。」」です。」

「…そ、それは…又、何とも……；；；」

「……ですが、それ以来、実はこっそり他の世界で同じ事をしているそうですよ？」

「…まぁ、あいつは第一印象は大分アレだが、根は結構気さくな奴だしな。」

「ええ。あなたに負けじ劣らず、御茶目さんですからね♪」

「ハッハッハ……殺すぞ？」

……ミセラレナイヨ？

「……グ…グフッ……ま、まぁ…それはさておき。

……久し振りに又、三人でのんびりしたいですねぇ……。」

「……まぁな。…今、あいつ何処で何してんのかなぁ……？」

side：アキシオン

……俺は、あの時の事を思い出していた。

「…あ！アキシオンじゃないですか♪御久し振りですね♪」

「…ん？…ああ、アルニスか。…久しいな？」

「ええ♪あ、そうだ！♪♪アキシオンも一緒に来ませんか？

これから、カイトの所に行くんです♪♪♪」

「……カイトの所に…？…お前、又、シュガルに押し付けたな？」

「いやですねぇ…私は単に休暇を消化しているだけですよ♪

それに、シュガルなら無問題ですよ。」

「それはそうだろう。いつも、お前とカイトの騒動に巻き込まれているのだからな。

自然と対処法も身に付くというものだ。」

「…むぅ……あなたまで、カイトの様な事を言いますか…。」「当然だ。」

「……むむぅ……。……それはさておき。…では、一緒に行きましょ？♪」

「……いや、俺は一緒には行けない。」

「……何故…と聞いても、宜しいですか？」

「……。」

「……分かりました。では、又、今度という事で。」

「……ああ。……済まない。」

「いいえ、御気になさらず。…ですが、カイトには伝えても宜しいですね？」

「……ああ。……ではな。」

「…はい。……御気を付けて。」

「……ああ。…そちらも……な。」

「……はい。」

……しかし…随分、懐かしい顔に出会えたもんだ。

……カイト……か……。

あいつならば…頼めば来てくれるだろう。…それも、恐らくだが…嬉々として。

…だが……だからこそ、頼めん。……これは…俺がやらねばなら

ぬ事だからな……。

……カイト……もしも、お前がこの世界に来て……俺と対峙する様な事になれば……

…俺は……俺は……！！！！

……カイト……どうか…お前だけは…この世界には…来てくれるなよ…。

……頼むぞ……心友（カイト）よ……。

……カイトの与り知らぬ処で

……様々な事が

……蠢き始めていた……。

……それは……カイトを……

……数多の世界を……

そして……何より……

……彼（カイト）の心友達を巻き込み……

……救世主（カイト）を……

……今にも崩壊せしめようとしていた……。

……今……この時にも……

……世界は……軋み続けていた……。

……今は未だ……彼等は……その事を知らない……。

……そう。……未だ……誰も知らなかった……。

……誰も……知る事が……出来なかったのだ……。

番外・同胞～心友～（後書き）

如何でしたでしょうか？月光閃火様。

御待たせしておきながら、この様に短くて申し訳ありません。

ですが、彼は今後本編上で、大事な役割を担う為に、今回は顔見せだけに致しました。

……とは言っても、暫くは出ては来られませんので、忘れた頃に

『…？……ああ、そう言えばそんなのも居たな…。』

……的な事になってしまうかも知れませんが……；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

聖杯戦争開始（Ｆａｔｅ／ｓｔａｒｔ　ｎｉｇｈｔ）（前書き）

現時刻（００：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５４３，４５３アクセス　ユニーク：５２，２５５人
皆様、毎度有難う御座います。

さて。今回から、やっと原作に入ります。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

聖杯戦争開始（Fate／start night）

side：三人称

騒がしくも、楽しい夏休みも終わり、秋が過ぎ…冬になり………一人…又、一人と……

衛宮家に来なくなっていった。

「………凛もすっかり来なくなったな。」

「……家庭の事情じゃ、しょうがないさ…。」

「………まぁな。………学校じゃいつも通りなんだろ？」

「…ああ。いつも通り、猫を被って高嶺の花だよ。」

「クックック……お前にとっても……だろ？」

「な！？／／／／／／……う、五月蝿い…／／／」

「…まぁ、又、家に遊びに来る様になった凛に、怒鳴られない様に鍛錬しとけよ？」

「…分かってるさ。……じゃ、ちょっと蔵に行って来る。」

「お～う…頑張れよ～～……。」

「………気ぃ抜けるなぁ………；」

「……カイト。」

「…ああ、分かってるさ。…それこそ…な。」

「…イリヤも既に離れ、間桐慎二も寄り付かなくなりましたね。」

「…ああ。凛も来なくなった。……後は、士郎がセイバーを喚び出すだけだ。」

「……矢張り、彼を見捨てるのですか？」

「見捨てるとは人聞きの悪い。単に一度死に掛けて貰うだけさ。大丈夫だ。士郎は死なない。

凛が死に物狂いで助けるからな。例え、助けられなかったとしても、俺が此岸に喚び戻す。

あいつには、一度ならず、死の恐怖というものを実体験して貰わないとな。

衛宮士郎が、正義の味方になる為に必要な通過儀礼なのでな。」

「……分かってはいますが、私は反対です。」

「…相変わらずの聖人君子だねぇ……。流石はノルニル第一席様。」

「カイト。」

「へいへい…悪うござんした。」

「……。」

「…まぁ、そろそろさ。……弓と槍（アーチャーランサー）が喧嘩をおっ始め、士郎が死に掛け、凛が助け、槍（ランサー）に再度襲われ、セイバーを召喚し、士郎に令呪を使わせる。…計画通りに行けばな…。

……俺が、本格的に介入するのは、そこからだ。」

「……では、彼女にそれまで、あの苦痛を味わわせておく…と？」

「…まぁな。あれは、あいつ自身の責も多少はあるんでな。

……俺は、お前と違って聖人君子には成り得ない。……故に相応の罰と、然るべき救いを。

無条件に救いを与えるのは、大馬鹿のやる事だ。…それも極み付

けの大馬鹿の……な。」

「……カイト…。」

「…アルニス。…解ってるとは思うが……手を出すなよ？……お前と言えど、俺は容赦しない。」

「……ふぅ……判っていますよ……救世主（メシア）様。」

「……アルニス。」

「…御互い様ですよ？カイト。」

「……フン…。…まぁ、今はノンビリと寝てるさ。……士郎が死に掛けて帰ってくる迄…な。」

side：士郎

「……結局、あれは一体何だったんだろう…？」

俺は、あの時の事を考えていた。……カイト達は既に寝ているらし

く、紅蓮の鼾も聞こえる。

…もう一度、思い出してみよう。……確か、俺は忘れ物を取りに来て……それから……そうだ。

赤い奴と青い奴が殺し合ってて…それで、俺はそいつに見付かって、校舎に逃げ込んで……

でも、結局逃げられずに……

「…殺された……筈…だよな？」

……うん。…間違いない。…でも…だったら、何で俺は今、生きてるんだ？……それに……

「このペンダント…誰のだろう？」

…そう。俺が倒れていた所に落ちていた…赤いペンダント。…何故か遠坂を連想させた。

……にしても、訳が分からない事ばかりだ…。

カイトなら何か知ってるかもしれないけど……！？…誰か居る。

……手元にあるのは……このカレンダーぐらいか？…取り敢えず強化して……来た！？！？

「グッ！！！」

「……へぇ……どうやってかは知らねぇが、本当に生きてるみたいだな。

……だが、ボウズ…運が無かったな。又、オレに殺されるハメになるとはな。」

「くそっ！！！」

「おっと…逃がさねぇよ。」

「ぐはっ！！！！！」

「……チッ…少しは気張るかと思ったが、興醒めだ。テメェは此処で死にな。」

…！今だ！！！

「このぉっ！！！！！」

「……フン…。そうこなくっちゃなぁ！！！！！」

取り敢えず、こっちに逃げ…？！　「ぐあああぁぁっ！？！？」

ドガアァッ！！！

「……残念だったなぁ…ボウズ。…これで終いだ。」

くそっ…俺は…こんな所で死ぬのか……いや…まだだ…俺は未だ死ねない……

死ぬ訳には…いかない！！！！！…？！何だ？一体……？！

「――問おう。あなたが、私のマスターか？」

「…え？……ます…たー…？」

……そう。俺はこの時、見惚れていたんだ。

…月夜に照らされて…綺麗に光り輝いた…その佳麗な存在に……俺は、見惚れていた……。

side：ランサー

「…ちっ……嫌な命令しやがるぜ…あの野郎…。」

…あの小僧が生きているらしい。コトミネの野郎が止めを指して来いとか抜かしやがった。

丁度、今そいつの家に着いたトコだが……フン…成る程。どうやってかは知らねぇが、

本当に生きてやがるみてぇだな……。ホントに運が無ぇなぁ……俺も…お前も…。

……全く、運が無ぇ…。真逆、この小僧がマスターだったとはな…。

…しかも、こいつ……強ぇな……。あの野郎に制限されてなきゃ、愉しめただろうによ…。

…だが…負けねぇぜ?…俺にはこいつが有るんでなぁ…!!!

「…ならば、享けてみるか?…わが無双の槍を…。」

「……来い。」

…へっ……良い度胸だぜ…！！！！！

「喰らえ！！！刺し穿つ……！！！！」

……だが、討てなかった。……途中で介入を受けたからだ。

……俺にとって、有る意味、あのコトミネ以上にいけ好かない奴にな。

「…其処迄だ。ランサー。セイバー。この勝負、俺が与る。」

side：カイト

…フン。ようやっと、ランサーの襲撃を受けたか。……今、セイバーを喚んだな。

では、俺もそろそろ出張るとしようか。

宇宙（そら）の救世主（メシア）……推して参る。

「…其処迄だ。ランサー。セイバー。この勝負、俺が与る。」

「「何!?何者だ!!!!!!」」

「…俺を忘れたか?…獅子に…狗よ。」

「「……。」」

「……そうか。そう言えば、お前達には、俺の素顔は見せた事は無かったのだったな。

ならば、見せてやる。刮目せよ…英雄共よ。そして、思い出せ…我が名を。

ファースト・イグニッション　第一形態（アインス）　完全鎧化（フルアムド）」

「「な?!?!?!テメェ（あなた）は!!!!!」」

「…ようやっと、思い出したか。」

「『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』！！！！！」「『宇宙（そら）の救世主（メシア）』！！！！！」

「な！？あなたも知ってるのですか？！ランサー！」

「…テメェもか…セイバー…。」

「…さて。懐かしい再会もした所で…。今、言った通りこの勝負…俺が与る。

文句は一切無しだ。…いいな？」

「…その様な事…従える訳が無いでしょう？」

「…ああ、そうだ。幾らテメェでも、聞けねぇ事がある。」

「…ランサー。能力が制限されている今の状態で、最優良サーヴァントである

セイバーに勝てる…とでも？貴様の宝具でも、彼女の加護には勝てん。止めておけ。」

「……貴様…俺を侮るか……。」

「厳然たる事実だ。どうしても不満ならば、俺に八つ当たりするといい。

最盛期の貴様でも俺には傷一つ付けられれん。」

「……貴様…！！余程命がいらんと見えるな……！！！」

「勝手にしろ。…セイバー、貴様もだ。」

「…何がですか？『宇宙（そら）の救世主（メシア）』」

「…貴様とて、万全では無かろう？

…ましてや、只の愚かしい妄執にのみ囚われている貴様では、存在そのものが無意味だ。

出直せ…未熟な糞餓鬼が。」

「……。」

「…フン。相変わらずの生粋の頑迷固陋だな。

…ならば、その幻想…粉々に打ち砕いてくれる。

面倒だ。貴様等二匹共、纏めて掛かって来い。

躾けてやろう…畜生風情が図に乗らぬ様にな。」

「「貴様あああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」

「そらそら、どうした。動きが止まって見えるぞ？最速のサーヴァントよ。」

「グッ……テメェ……！！！！！」

「…フン。その程度の技量で最優良？…笑わせてくれるな、セイバー。

まるで只の小五月蝿（こうるさ）い小蝿だな。」

「クッ…おのれ……！！！！！」

「なんだ？恨み節しか出て来んか？いやはや…何ともお粗末だなぁ…えぇ？英霊様達よ…。」

「「貴様ぁ！！！！！」」

「…もう、好い加減飽きた。…飛んで行け……槍（ランサー）らしく…な。」

ブンッ！！

「な！？…ぐ……ぐあああぁぁぁ……。」

「……彼を何処へやったのです？」

「奴の今のマスターの所へだ。直接ぶん投げてやった。」

「……相変わらず、何でも御存知なのですね？」

「無論だ。…それより、もう一組近付いているが…どうするつもりだ？」

「…聞くまでも無いでしょう。……こうするのです！！！」　ザザッ！

「…！な！？…ど、何処行くんだセイバー！！！」

「早く追え！士郎！！あいつは、凛を殺すつもりだぞ！！！」

「何？！？！そんな事させて堪るか！！！！！！待て、セイバー！！！！！」

……良し。計画通り、令呪を使ったな。これで、ようやっと俺の思惑通りに事が運べそうだ。

…まぁ、まずはとても不満そうにしている凛達と……士郎達に説明してやらねばな。

これから、忙しくなるな。……この僅か１５日。……いつも通り、俺の遣るべき事をやろうか。

それが……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』たる…俺の使命なのだから。

今度も、救って見せるぞ…お前達（ひとびと）を。俺の愛する存在（セカイ）を。邪悪を討ち滅ぼして…救って見せる。

聖杯戦争開始（Ｆａｔｅ／ｓｔａｒｔ　ｎｉｇｈｔ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は会話文で長くなるかと思いましたので、少々短いですが、此処で擱筆致しました。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

※少々、題名を変えてみました。

宣戦布告（Ｆｉｇｈｔ／ｓｔａｒｔ　ｎｉｇｈｔ）（前書き）

現時刻（１３：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５５１，６１４アクセス　ユニーク：５３，０８７人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

宣戦布告（Ｆｉｇｈｔ／ｓｔａｒｔ　ｎｉｇｈｔ）

ｓｉｄｅ：衛宮家の居間

「……さて。何処から話そうかな？」

「最初から全部だ。…全く……訳解らない事ばかりだ…。」

「そいつは御愁傷様なこって。…取り敢えず、凛…硝子の修復ぐらいしてやれ。」

「…言われなくてもするわよ…それぐらい。」

「……本当に凄いな…遠坂は。」

「…出来ないあんたの方が異常なのよ……このへっぽこ。」

「…相変わらず酷いな…ｏｒｚ」

「…フン。…そんな事より、カイト。…あんた、何処迄知ってるの？」

「ん？全部だけど？」

「……だから、その全部ってのは何処迄なのかって聞いてるのよ。」

「全部は全部だ。全てのサーヴァントの正体も。マスターが誰かも。何処に陣取っているかも。

そして……この第五次聖杯戦争の結末も……何もかも全てな。」

「「何!?!?!?!?!?」」

「…凛は驚かないんだな?」

「……充分に驚いているわよ。……まぁ、でも恐らく、それぐらいは知ってそうだったもの。」

「…ちぇ…詰まらん。」

「……所で、何でアーチャーには聞かないの?」

「ん?言ってもいいのか?アーチャー。」

「……。」

「…ほら、やめてくれ…ってさ。」

「……アーチャー？」

「……自分の真名すら忘れた者が、覚えている訳無いだろう？」

「…ああ、そう言えば、そういう事にしてたんだっけ？

……クックック…何とも、壮大な八つ当たりだねぇ……。」

「……。」

「…まぁ、いいわ。…士郎。取り敢えず、付いて来なさい。途次教えてあげるから。」

「え？こんな時間に何処に行くんだ？」

「……教会よ。…あんたがマスターになった報告をしないといけないからね。」

「そう言うこった。ほれ、行くぞ？士郎。今日は俺も付き合っちゃるからさ。」

「……却って不安な気がする。」

ｓｉｄｅ：教会

「…着いたわよ。」

「…マスター。私は、外に居ます。何かあれば呼んで下さい。」

「…え？……分かった。…じゃあ、ちょっと行って来る。」

「んじゃ、俺もお邪魔しようかね。…お前等喧嘩すんなよ？」

「来てやったわよ、綺礼。」

「…相変わらず、師に対する礼儀のなっていない弟子だな。」

「フン…お生憎様。あんたなんかに礼を尽くしたら、呪われるに決まってるでしょ？」

「…ふん。口が達者なのも相変わらずと言う訳か。……ああ、失礼した。

では、改めてようこそ。新たなマスターよ。……それにお客人も…な。」

「……。」

「どもども。…取り敢えず、こいつに教えてやってくれ。聖杯戦争とは何なのか…をな。

俺の用件は、それが終わった後でいいから。」

「ふむ…。よかろう。…では、説明するとしよう。」

「……と言う事だ。…理解して貰えたかな?」

「……ああ。」

「では、改めて問おう。…衛宮士郎。お前はどうする?」

「……俺は……聖杯戦争を止める。」

「…では、聖杯戦争に参加する…という事でよいのだな？」

「…ああ。俺は、セイバーのマスターとして、この馬鹿気た戦いを止めてやる。」

「宜しい。では、此処に聖杯戦争の開幕を宣言する！！！存分に戦い給え！マスター達よ！！」

「……じゃあ、私達は外に出てるわよ？…カイト。」

「ああ。頼む。士郎も少しの間、待っててくれ。」

「……分かった。…余り話し込むなよ？外は寒いんだからな。」

「了～解。…盗み聞きはすんなよ～？」

「するか！！！！！」　ガチャッ！　バタン！

「クックック……おお、恐ぇ…怒ってやがんの…クックックック……。」

「……それで？私に一体何の用かな？お客人。」

「……あ？…てめぇにゃ何の用も無ぇよ。…生ける屍（リビングデッド）如きが俺に話

し掛けんじゃ無ぇよ。

耳が腐るだろうが。己が分と身の程を弁えろよな?腐乱死体風情が。」

「……何?では…一体、何の為に此処に残った?」

「……話し掛けんなっつたろうが!!!ドクズがぁ!!!!!!!!!」　ドゴォッ!!!

「グハァッ!!!」

「…フン。産業廃棄物にも劣るセカイの公害が。…俺が用があんのは、てめぇじゃ無えよ。

……居るんだろう?出て来いよ…ギルガメッシュ。」

「……誰だ?我(オレ)を呼ぶ無粋な愚民は…?」

「…よう。俺が判るか?ギル。」

「……貴様……王たる我(オレ)の名を軽々しく……ん?待てよ……

その不遜な態度……貴様、もしや……？」

「…フ…思い出したか？ギル。…そうだ…俺だ。『宇宙（そら）の救世主（メシア）』だよ。」

「…矢張りか。…久しいな？我が宿敵（とも）よ。…到頭、我（オレ）に殺されに来たか？」

「いいや？今日は只の宣戦布告だよ。今回の聖杯戦争…この俺が大々的に介入させて貰う。」

「…ほう。…貴様がな。……良かろう。ならば、其処で伸びているだらしないマスターに代わり、

我（オレ）が貴様の宣戦布告とやらを請けてやろう！」

「そいつはどうも。…今の内に、地下に居る餌共から養分を吸収しておけよ？

いざ、俺と闘う時に魔力不足を言い訳にされたんじゃぁ、興醒めなんでな…。

余り俺を失望させないでくれよ？英雄王（ギルガメッシュ）。」

「…フン！良かろう！！！貴様との最期の戦に向けて、我も魔力を蓄えて置こうぞ。

貴様こそ、我に負けた際の命乞いでも考えて置くのだな…ハッハッハ！！！！！！！！！！！」

「はいよ。…んじゃな？又、遊びに来てやるよ…闘い抜きでな。

…精々、嗅覚の鋭い番犬にばれない様にな？もし、ばれてランサーを殺す様な事があれば、

その時は、大聖杯諸共、貴様を未来永劫消し去る。……解ったな？」

「……フン。良かろう。他ならぬ貴様の頼みだ。受け容れてやろう。感謝しろよ？」

「はいはい。あんがとさんよ。…今度こそ、じゃあな？

其処のクズを精々利用して、雀り採ってやれ。」

「…未だ、こいつには利用価値が有るのでな。…一応はこれでも我のマスターだ。」

「……相変わらず、気に入った奴にはキチンと肩入れするねえ……まぁいいや。バイビー。」

「……真逆、『宇宙（そら）の救世主（メシア）』が我が前に顕れるとはな……。

これも神の思し召しとやらか？……いや、違うな。

奴ならば、寧ろその神ごと理を変えるであろうな。……フフフ…

何にせよ楽しみだ……。

フフフ……フハハハハ……待っていろよ…宿敵（とも）よ…！！！！！

フハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！」

「……何だ？コトミネの野郎。…今日はヤケに機嫌が良いな？」

……意外と気付かれなかった英雄王であった。

ｓｉｄｅ：三人称

カイトが外に出て来た時、既に皆は居なかった。

余りの遅さに、もうとっくに帰ってしまっているらしい。

そんなに話し込んで居ただろうか？思わず首を捻りながら、帰途に着くカイト。

だが、どうやらそれは違ったらしい。遠くで轟音が響いている。…イリヤが仕掛けたみたいだ。

「……成る程。痺れを切らして、直接此処に乗り込んで来たのか。」

どうやら、墓石群から少し離れた所に、アーチャーが見える。カイトは一瞬でその側に行った。

「…よう、エミヤ。」

「……矢張り、貴様だったか…カイト。」

「クスクス…まぁな。…どうだ？絶望の味は？少しは俺の気持ちも

理解出来たかい？」

「……。」

「クックック…だから、言っただろう？今のお前では無間地獄に陥るだけだと。

年上の言う事は聞くモンだぞ？…ホントに主従揃って頑固者だねぇ……。」

「……過ぎた事だ。」

「…そうかい。……そろそろ、『偽・螺旋剣（カラドボルグ）』を撃つ頃合いだぞ？」

「……解っている。邪魔はするなよ？」

「しないさ。…お前なら、無事だろ？」

「……フン…。」

『偽・螺旋剣（カラドボルグ）』がバーサーカーに命中するも、ほぼ無傷に終わる。

そして、皆が衛宮士郎の異常性…その一端を目の当たりにし、イリヤは帰って行く。

（…サンキュー、イリヤ。）

（……本当にこれで良かったの？……それに、幾ら何でもおかしいわよ？…士郎（あのこ）…。）

（まぁな～……これも、あいつが全てを失った代償であり、切嗣の咎でも有る。）

（……ホントに、あなたの言う通りだったわね……。）

（何だ？信じて無かったのか？）

（……あんなに幸せな時間を味わっておいて、誰がそんな事信じられると思う？）

（……でも、あいつはあれを幸せとは思っていないよ。）

（……何ですって？）

（…いや、正確に言えば、『俺はこんな幸せを甘受してはいけない。俺にはそんな資格は有りはしないんだ。…だから、これは所詮仮初めのものにしか過ぎない。

俺はみんなが幸せで居てくれるだけでいい。俺が幸せであってはならない。』

……と思っている。…それが、お前の義弟…衛宮士郎の本音だ。）

（……馬鹿な子。……本当に…バカ……。）

（…まぁな。…だから、お前や凛達の様な支えと道標が必要なんだよ。）

（……ようやっと、この前あなたが言っていた意味が解ったわ。

……こんな壊れた人間…とてもじゃないけど、この儘にしておく訳にはいかないわ。）

（……では、どうする？

……殺すか？）

（……いいえ。…殺さないわ。……あれでも、私の可愛い弟ですもの。

……でも、今はダメよ。……未だ、戦争は始まったばかりだもの。）

（…そうか。…了解した。……では、又、近い内に…な。）

（…ええ。又…お会いしましょう？…救世主（メシア）様。）

仕組まれた闘いにも気付かず、撤退するイリヤ達を呆然と見送った後、帰途に着いた、皆々。

それぞれの思惑が複雑に絡み合いながら、波乱に満ちた聖杯戦争の幕は今、開けられた。

救世主（カイト）の思惑は誰も知る由も無い。

そして、裏で蠢く邪悪共の跳梁跋扈も又、誰にも知られる事無く……

……着々と進んでいた。

宣戦布告（Ｆｉｇｈｔ／ｓｔａｒｔ　ｎｉｇｈｔ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、前回思っていた量より、短く収まってしまいました。済みません。

あ、因みに、『カイト』は言峰が大嫌いです。

ですが、『私』は大好きです。中の人も含めてｗ

順番で言えば、凛≧士郎＆アーチャー≧綺礼≧セイバー≧不可越壁≧その他ぐらいです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

※少々、題名を変えてみました。

協力者（Ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ）（前書き）

現時刻（２２：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５６８，３５９アクセス　ユニーク：５４，２３４人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

協力者（Ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ）

ｓｉｄｅ：三人称

イリヤの襲撃から、辛くも逃れて、今ようやっと家に着いた所である。

「何はともあれ、大丈夫か？士郎。」

「…あ、ああ。……もう大丈夫だ。」

「……それで？何であんな危ない事をしたの？…衛宮君。」

「…いや、何て言うか…こう…咄嗟に？」

「わたしに聞いてどうすんのよ？！」

「まぁまぁ。まずは落ち着いて状況を整理しようぜ？…茶でも飲みながらさ。」

ホッと一息中。

「……ふぅ……って和んでる場合じゃ無いわよ！！！カイトの言

う通り、状況整理するわよ？

……何か癪だけど。」

「…お前、俺に何か恨みでもあんの？」

「……何で無いと思えるのか、是非共聞いて見たいわ。」

「「うんうん。」」

「……はやて助けて…みんなが虐める……ｏｒｚ」

「…誰よ、それ？……まぁ、いいわ。まず確認よ。士郎？…あんた、本当にマスターになって

この聖杯戦争に参加するのね？」

「……ああ。俺はこの戦争に参加する。…セイバーのマスターとして。」

「……。」

「…分かったわ。じゃあ、これで私と貴方は敵同士ね。」

「え？ちょ、ちょっと待ってくれよ…！俺は遠坂の敵になるつもりは無いぞ！？」

「……やっぱり何も分かってなかったみたいね…。…いい？これは戦争なの。

何処か一組しか生き残れない、命を懸けた、文字通りの『戦争』。

自分と自分のサーヴァント以外は全て敵なの。例外もあるけどね。

でも、基本的には殺さなければいけない相手。でなければ……死ぬのは貴方よ？…衛宮君。」

「…でも、遠坂は俺を助けてくれたじゃないか…。」

「……それも今日迄よ。これからは、敵同士。例え、魔術の師弟であっても手加減は加えない。

もし、ノコノコとサーヴァントも連れずに一人で学校に来てみなさい？

その時は、真っ先に私が貴方を殺してあげる。…感謝する事ね。」

……どうやら、本気の様子の凛に、やっと事態が飲み込めた士郎。

脂汗を掻きながら、どうにか凛と敵対せずに済む方法は無いか考えている。

そんな時、士郎に天啓が与えられた。

「…なあ、所で、イリヤはどうする？」

「…え？……そうね。……どうしようかしら？」

「…なら、俺から一つ提案が有るんだが…。」

「…提案？」

「イエス。士郎達と凛達が手を組むんだ。」

「……理由を聞かせて貰えるかしら？」

「一つ。あのバーサーカーに勝つのは至難だ。だが、其処にセイバーの力量があれば鬼に金棒。

剣と弓（セイバーアーチャー）なら、二人で何とか出来るだろう。イリヤの方は、士郎に説得させればいい。」

「……そうね…確かに。…他には？」

「二つ。今、学校に結界が張ってある事は解っているな？」

「…ええ。」

「…なぁ……結界って……あの甘ったるい空気の事か？」

「……！…一応は分かってたのね…。」

「士郎は空間や世界の異常には敏感なんだ。…二つ目の理由はそれだ。」

「…成る程……衛宮君にあの結界の基点を探して貰う…って事ね。」

「そういうこった。互いの利害は一致しているだろ？其程悪い提案じゃ無いと思うが？」

士郎にも、一応急造だが、セイバーに稽古を付けて貰う予定だし。」

「…待って下さい。私は、その様な約束はしていません。」

「でも、何れする事になるし。だったら早い方が未だいいだろう？」

「……又、それですか…。理由は聞かせて貰えますか？」

「…今日の戦いで判ったと思うけど、こいつは英霊相手でも突っ込む大馬鹿だ。

もし、この儘にしておけば、確実に只の一要因（マイナス）にしか成り得ない。

ならば、少しでも実戦経験を擬似的に積ませて、殺気や死の危険を回避して貰った方が、

未だ戦い易いだろう？」

「……相変わらず、話の持って行き方が御上手ですね？『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。」

「えっへん。」

「……ちょっと待って。…セイバー？貴女、こいつを知っているの？」

「…ええ。恐らく、全ての英霊が知っていますよ…アーチャーのマスター。」

「エッヘン。」

「……あんた、本当に何者？」

「な☆い☆しょ♪」

“うざっ”

「……ううう～～～……はやてぇ～……；；OTL」

「……はぁ……まぁ、いいわ。カイトの提案ってのだけが気に入らないけど、乗ってあげる。

…いい？士郎。一応、今から一時的にだけど協力関係になるわ。」

「ああ。……有難う、遠坂。」

「…勘違いしないでね。ずっと御仲間になる訳じゃ無いのよ？飽く迄も一時的にだけ。

学校の結界破壊とバーサーカー退治が終わるまでよ。…その後は、もう敵よ。」

「ああ、分かってる。…それでも、今は遠坂と戦わずに済む。…それで充分だよ。」

「……フン。…今日は疲れちゃったわ。……今から戻るのも億劫だし、泊まらせて貰うからね。」

「…あ、ああ！勿論、いいさ。部屋は何時でも使える様に掃除してあるから。」

「……そう。…準備の宜しい事で。…じゃあ、御休みなさい…衛宮君。」

「…ああ、御休み…遠坂。」

「……カイト？…何時迄打ち拉がれているんだ？…；；；」

「…うっく……グスッ……ヒック……ぅぅぅ～～～（ＴωＴ）ｏｒｚ」

「……本当にあなたが、あの『宇宙（そら）の救世主（メシア）』なのですか？」

「……ぐすっ……うん……そうだよ……。」

「……；；；；；…な、なぁ、セイバー？」

「…はい…何ですか？マスター。」

「ああ、うん。…取り敢えず、そのマスターってのは止めてくれ。俺の事は士郎でいいからさ、セイバー。…あ、そういや、セイバー…でいいのか？

一応、本当の名前とかあるんだろ？」

「…はい。ですが、どうか私の真名はお聞きにならないで下さい。もし、マスター…いえ、

シロウの頭の中を覗かれたりした場合、危険ですので。……申し訳ありません。」

「あ、うん。それは構わない。…確かに、俺じゃそういう事は防げないもんな。」

「……はい。申し訳ありません。」

「だから、いいって。……それじゃ、改めてこれから宜しくな、セイバー。」　スッ

「……はい、シロウ。」　ガシ…。

「……で？ホントに何時迄そうやってるんだ？」

「……（ＴＡＴ）」

「「……。」」

「……もう良いモン。…明日、お寅さんが来ても、何のフォローもしてやんないモン。」

「…あ。……ちょっ、ちょっと待ってくれ…。た、頼むよ、カイト…な？な？」

「……良いモン。……有る事無い事全部ばらしてやるモン。

……皆して虎に捕食（死んじゃえ）されちゃえバインダー。」

その後、謎の言葉を延々と呟くカイトに少々……基、多々辟易しながらも、どうにか宥め賺して

何とか、大河を説得して貰う約束をした士郎であった。

で、翌朝。

「士郎ーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

また女の子連れ込んで来ちゃったのーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

虎の咆哮に揺れる衛宮家（わがや）。そして、説得に入るカイト。

「まぁまぁ。取り敢えず落ち着こうよ…お寅さん。」

「…む。……又、そう言って言い包めるつもりね？…今度はそうはいかないんだから！！！」

「言い包めるとは人聞きの悪い。俺はいつも只の事実しか言ってないよ？」

「むむむ……。」

「…まぁ、まず言っとくと、この娘…セイバーは切嗣に用があって訪ねて来たんだ。」

「……切嗣さんに？…ホント？セイバーちゃん。」

「……はい。…私はどうしても切嗣に聞きたい事があって、こちらにやって来ました。」

「…む…本当みたい。」

「…なんだが、御覧の通り切嗣は亡くなっていてな。…でも、幸か不幸か、

セイバーの知り合いである俺が、この家に居たんでな。

……なら、暫く此処に住まわせて貰おう…ってな事になってな。士郎に許可を取った。」

「……でも、何時の間に？私達が帰った頃には居なかったわよ？」

「ああ、夜遅くに訪ねて来たんだよ。此処いらの地理には詳しく無いらしくてな。

大分迷って、ようやっと着いたんだとさ。」

「……むう……辻褄は…合うわね…。」

「だから、本当の事だって。……あんまりしつこいとバインダー攻撃しちゃうぞー？」

「ぅぅぅ～～～……空鍋恐い…空鍋恐いよ～……。」

「はっはっは…正義は勝つ。完（KAN）。…なんつって。」

「……本当にこれでいいんだろうか？」

「……いいんじゃない？」

「……あはは；；；」

こうして、又、家族が増え、エンゲル係数が跳ね上がった事に絶望する士郎であった。

今日は休日朝練の為、朝早くから出掛けた桜と虎。

凛は、色々と準備がある為、一旦遠坂家に帰り、後程、戻って来る…という事であった。

そして、我等がカイト達は…と言うと……

「……暇だなぁ…。」

「……そうですね…。」

「……士郎はぼこられてるしなぁ…。」

「……ホントに弱いわね…。」

「……俺等なら、対峙した瞬間死んでそうだな…。」

「……全くだな…。」

「……暇だな…。」

「……暇ですねぇ…。」

「「其処！外野五月蠅い！！！」」

「「「「「だって暇なんだもん。」なのです。」なのよ。」なんだよ。」なんです。」

「……鋼牙は？」

「「「「「遊んでる。」」」」」

「「……。」」

そう。只今、絶賛セイバーにボコられ中なのである。そんな時…

「士郎兄ちゃ～ん…電話だよ～…大河お姉ちゃんから～…至急だって～。」

「ああ、今行くよ。…セイバー済まない。」「はい。」

「…セイバー、ごめん。俺、今から、学校行かなきゃいけないんだ。続きは帰って来てからでもいいかな？」

「…学校…ですか？……シロウ？昨夜凛に言われた事を、もう御忘れですか？」

「いや、覚えてるよ。…でも、みんなも居るし。何より、危なくなったら、

ちゃんと令呪でセイバーを呼ぶから…大丈夫だよ。」

「……分かりました。」

「…そうか。…良かった。…それじゃあ……」「ええ。私も行きます。」「……え？」

「ですから、私も共に行きます。それに、例の結界の件もあります。今日はそちらを先にどうにかしましょう。」

「……なら、遠坂も一緒の方がいいよな…。」

「…そうですね。…その方が良いでしょう。」

「いや、あいつは今日、戻って来るの遅くなるよ。」

「「…え？」」

「…いや、実はな？あいつ整理整頓ってーのが、まるっきり出来なくてな。

所謂、自分ルールって奴で彼方此方置いてるんだよ。だから見付ける迄、ものっそい掛かる。」

「……凄い意外だ……。」

「クックック…だろうなぁ……。何れ、お前等が整理整頓しといてやれよ。

セイバーなら、特に城の片付けとかで慣れてるだろ？」

「……其程（それほど）…なのですか？」

「ああ。正直、えげつない…っつった方が分かり易いと思う。表面上じゃ判らんだろうがな。」

「「……；；；」」

「ま、そういう訳なんで、今日は遠坂の協力は諦めた方がいいな。」

「……カイト兄ちゃん。」

「ん？どうした？鋼牙。」

「…僕も又、学校に遊びに行きたい。」

「……んじゃ、一緒に行くか？」

「うん♪♪♪！！！！！！！！！！」

「…て訳で、俺と鋼牙も行くから。…士郎、セイバー。早く準備してくれよ。」

「……；龍斗達はどうするんだ？」

「勿論、御留守番。…頼むな？お前達。」

「「「了解。」」」

「ほら、ＯＫ。早くな～…ノシ」

「到着～♪」

「取り敢えず、俺は弓道場に行くけど、お前達はどうする？」

「私はマスターと共に。」

「僕も一緒に行く～～～♪♪♪」

「てワケで俺も御一緒だ。」

「じゃ、みんなで行くか。」

「…あ。……先輩♪…あ、あの、もしかして……」

「ああ。藤ねえに頼まれて弁当届けに来たんだ。…又、暴れて無茶難題言っているんだろ？」

「…あ……そ、そうですね。……そうですよね（ボソッ）。」

「？？…取り敢えず、藤ねえは何処に居るんだ？桜。」

「…あ、はい。…せんせー！！！お弁当届きましたよーーー！！！！」

「あ、士郎♪遅いよ～～……。」

「文句言うなら、持って帰るぞ？折角、わざわざ作って来たってのに。」

「あ、うそうそ。有難う～♪優しい自慢の弟を持ってお姉ちゃん、誇らしいなぁ～。」

「…全く。…ほら、早く食べて迷惑行為を止めてやれよ。」

「うんうん…？……ま、いいや。みんな、休憩して良いよ～。いっただっきま～す…♪♪♪」

「……ねぇ…所で、衛宮？」

「ん？何だ？美綴。」

「彼処に居る、物凄い美人さんは一体誰よ？」

「…あ。；；；；……カイトの知り合いなんだ；」

「……じとー。」

「…本当だぞ？嘘だと思うんなら、カイトに聞いてみてくれ。；；；；」

「…私、何も言って無いんだけどね？」

「……；；；；；；；」

「……わぁ～～～……広～～い……♪♪♪」

「こらこら、鋼牙。あんまりはしゃぐなよ？他の人に迷惑が掛かるからな。」

「は～～～い♪♪！！！」

部員Ａ「……ねぇねぇ、桜ちゃん。」

「あ、はい。何ですか？」

「…あの子って、大分前に学校にお弁当届けに来た子じゃない？」

「あ、はい…そうですよ。あの子、あの一緒に居る男の人…カイトさんの御家族なんです。」

部員Ｂ「へ～……あの子…可愛いわね……。」

「はい♪とっても可愛いですよ。とても人懐っこいですし、こう…

凄く母性本能を擽るんです♪」

部員C「……うん。…物凄く解るわ。…だから、御願い。」

「……はい？」

部員D「あの子、モフらせて？」

「……いえ……あの……私に言われても……；；；；」

「桜お姉ちゃ～ん♪」

「…鋼牙ちゃん。……タイミング悪いなぁ…；（ボソッ）」

「？？？」

「…ううん…何でもないよ？…今日はどうしたの？」

「うん♪あのね？セイバーお姉ちゃんが学校を見てみたいって言うから、僕も来たいって言ったら

カイト兄ちゃんと士郎お兄ちゃんが良いよって♪♪♪」

「そうなんだ。じゃあ、今日は一日学校で遊ぶの？」

「うん♪♪♪！！！！！」↑超満面の笑み

全部員“か、可愛い～～～～～♪♪♪♪♪！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

その日一日で、鋼牙が弓道部のアイドルになった事は言う迄も無かった。

そして、セイバーは士郎と共に、他に異常は無いかと校内を見回った。

だが、結界の他には、何の異常も見られなかったらしい。

結局、結界の遅延・破壊は、明日以降、凛と共に行うという事で、
今日はこの儘帰る事にした。

そして、帰る時に、全弓道部員によって、

鋼牙を引き留めようと一騒動があった事は、公然の秘密と相成った。

協力者（Ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに。今、ちょっとプロット…と言いますか、全体的な流れの計画表を確認した所、

凡そ、後、２０話強程で終わりそうです。

一日一話という単純計算で、大体八月半ば頃でしょうか。

その後、何処に行くかは未だ、決めて居ません。

もし、『此の世界に行って欲しい』等という御要望が御座いましたらば、

何時成りとも受け付けて居りますので、どうぞ、遠慮無く御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

他者封印・鮮血神殿（Ｂｌｏｏｄｆｏｒｔ　Ａｎｄｒｏｍｅｄａ）（前書き）

現時刻（０９：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５７５，２２９アクセス　ユニーク：５５，０９１人
皆様、いつも有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

他者封印・鮮血神殿（Ｂｌｏｏｄｆｏｒｔ　Ａｎｄｒｏｍｅｄａ）

ｓｉｄｅ：三人称

「……で？…結局、何の異常も見られず、すごすごと帰って来た…という訳ね？」

「う……ま、まぁ、そうとも言う……。」

「…そうとしか言わないわよ…このへっぽこ落ち零れ。」

「うぐっ……相変わらず酷い……。」

「…全く……。それじゃ只、遊んで来ただけじゃない。」

「…済まない、凛。…私にも特に、他には異常は見当たらなかった。」

「セイバーは良いのよ。…曲りなりにも私の弟子が、異常を見付けられても、御手上げな事が、

許せないだけよ。…これなら、未だ犬の方が有用かもね。」

「ううう……悔しいけど、何も言い返せない……。

で、でも、異常を感じる場所は全部把握して来たぞ？」

「それぐらいは当然でしょ？その為の協力関係でも有るんだし。」

「……はい。」

……可哀相なぐらいに落ち込んでいる士郎。

…そう。今は、今日学校であった事を、凛に報告している最中である。

そして、今、師匠（りん）にボッコボコにされている弟子（しろう）の図が、目の前で繰り広げられていた。

「まぁまぁ、それぐらいで。…取り敢えず、明日の結界除去はスムーズに行くだろうから。

それで、一旦勘弁してやんな。それ以上やると、首を吊り兼ねん。」

「する訳無いでしょ。絶対に。」

「まぁ、する訳ないけどな。絶対に。」

「ええ。する訳がありませんね。絶対に。」

「……お前等、本当に酷いよな？」

「「士郎（シロウ）程じゃ無い。」わよ。」です。」

「……（ＴωＴ）」

「さて。一頻り士郎を揶揄った所で…まずは、明日の結界基点破壊後、奴がどうするか…だな。」

「……やっぱり、誰がマスターか知ってんのね？アンタ。」

「モッチ。…一応、あいつのしそうな事は三つ…かな？」

「三つ？……聞かせて貰えますか？『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。」

「ああ…先ず一つ。この儘、鼬ごっこを続ける。…つまり、又、別の所に基点を設ける。」

「…まぁ、それが一番可能性が高そうね。…他は？」

「次二つ目。基点を破壊された不完全な儘、問答無用で結界発動。当然一切の加減は無い。」

「……その可能性も充分にありそうね。」

「まぁな。あいつは凄い癇癪持ちなんでな。オマケにプライドがバカ高い。

だから、自分の思い通りに事が進まないと、令呪を使ってでも発動させるだろうさ。」

「……そう。真っ先に排除しなきゃいけないタイプのマスターな訳ね。」

「そういう事。まぁ、マスターとしては、ブンブン五月蠅い羽虫レベルだが。」

「……それで？最後の手段は？」

「最後は……消費した魔力を補う為、サーヴァントに街の人を襲わせる。」

「「「な！？！？！？」」」

「…もう、既に犠牲者は出てるからな。一回でもやれば、後は済し崩し的に転がり落ちるさ。」

「……あのガス事故ね？」

「そう。ＴＶでやってるだろ？都心での謎のガス爆発事故。あれだよ。」

「……そんな事はさせない。…絶対に倒さなくちゃな。」

「…ま、そういうこった。…んじゃ、頑張れよ？俺は偶にしか手を貸さんからな。」

「分かってるよ。…これは俺達の問題だからな。

カイト達の様な、関係ない人達を巻き込む訳にはいかない。」

「もう充分、巻き込まれているけどな？」

「うっ……そ、それでも…だ。」

「はいはい…。あんがとさん。…んじゃ、俺はもう寝るよ。黄宇と水薙が待っているんでな。」

「「「………お、お休み…／／／／／／／／」」」

「クックックック………はいよ、御休み。」

そして翌日、目ぼしい箇所を全て潰して行き、結界の甘ったるい匂いも大分薄まった。

これなら、相当躍起にならないと、結界の発動は未だ先に延びるだろうと、皆で確認した。

……だが……その翌日。

ｓｉｄｅ：学校

「……どういう事よ…これ。」

「……そんな馬鹿な…。……昨日より、匂いがきつくなってるじゃないか……。」

…そう。昨日、あれだけ沢山基点を潰したのにも拘わらず、

昨日よりも確実に匂い……結界の強度・濃度が上がっている。

「……士郎。」

「…ああ、分かってる。こんなモノ…放っておけるか！！！」

「ええ。…何とか、授業中の皆には気付かれない様にしましょう。」

「何でさ?！そんな事をしている間に…！」

「落ち着きなさい、士郎。……いい?もし、私達が大々的に動けば、敵は却って焦って、

直ぐ様結界を発動してしまうわ。…だから、極力ばれない様に、確実に一つずつ潰すのよ。

少しでも、効力を落として、みんなが意識を保てる様に。」

「……くそっ……分かった。…なら、早く行こう。グズグズしてらんない。」

「ええ。士郎、急いで案内して?一応、連絡したけど……

今はアーチャーは居ないから、私達で何とかしましょう。」

「分かった。……こっちだ、遠坂。急ごう。」

「………所で、聞いても良いか？遠坂。」

「…何よ？」

「何で、今アーチャーが、居ないんだ？」

「………私の家に居るからよ。」

「……何故に？」

「………家事。…それと、片付け。……あいつ、英霊の癖に、やけに家庭的なのよ。」

「…………………………;;;;;;;」

「………これで、大分みんな楽になる筈だけど…。」

「…そうね。思ったよりは多く潰せているわね。」

「……ああ。…一番手っ取り早いのは、この結界を張ってる奴を見付ける事なんだけどな…。」

「…しょうがないわよ。…今、私達に出来る事をしましょう。」

「……ああ、そうd…！！！遠坂！！！！！」

「…ええ！！到頭、痺れを切らして発動させた様ね！！！」

士郎達の周りの風景が赤く…まるで血の様な色に変わり、途端に身体が重く感じる。

……結界が発動したのだ。

「…遠坂、令呪の使い方を教えてくれ。」

「…使うなら、私が使うわよ。」

「…いや、ここはセイバーを呼んだ方が良い。

そうすれば、最悪カイトが気付いて、助けに来てくれるかも知れない。」

「……そうね。…解ったわ。…一つ借りとくわね。」

「…本当に律儀だなぁ…遠坂は。…早速教えてくれ。」

パリン！…空間が、まるで硝子が割れるかの様に音を立てて、砕け散った。

その中から、蒼銀の鎧に身を包んだ騎士王が飛び出して来た。

「マスター。私を令呪で呼び出す程の緊急事態なのですね？」

「ああ。この結界を破壊したい。お前の力を貸してくれ、セイバー。」

「承知致しました。…それで、私は何をすれば？」

「…そうね……まず、一番結界の気配が濃い所を私と士郎で壊すわ。

セイバーは、敵の気配がする所に行って頂戴。」

「了解しました。」

「…じゃあ、俺達は……下…一階だな？」

「…シロウ。どうやら、敵も其処に居る様です。恐らく私達を待ち構えて居るのではないかと。」

「……そうなのか？」

「はい。…間違い無く、下から気配…殺気を感じます。」

「……そう。…なら、このまま一塊になって行きましょう？セイバー、先頭頼める？」

「はい。何時成りとも。」

「じゃあ、士郎は殿（しんがり）を御願い。私は二人のサポートに回るから。」

「分かった。…頼むぞ、セイバー。」

「はい、お任せを。……では、行きます！！」

「……一階にまで来たけど、何の邪魔も入らなかったわね…。」

「…ええ。ですが、油断大敵ですよ？凛。」

「…分かってる。…只、ちょっと拍子抜けしちゃっただけ。気は緩んでないわ。」

「…良い心懸けです。……居ました。」

「……。」

「……誰だ？」

「……あれは……恐らく、ライダーでは無いかと。」

「……。」

「…どうやら、当たりみたいね…。殺気が膨れて来ているわ。」

「……おいおい。…何でこんな所にお前達が居るんだよ？衛宮…それに……遠坂！！！」

「「…え？……慎二？」」間桐君？」

「……何でこんな所に居るんだって僕は聞いてるんだけど？」

「……成る程ね…カイトの言っていた人物像にピッタリ当て嵌まるわね…。」

「…慎二……本当にお前が…この結界を張ったのか？」

「…ちっ……ああ、そうだよ！！！僕が、ライダーに命令してこの結界を張らせたのさ！！！

…だっていうのに……お前等が余計な事をするから、計画が狂って来ちゃったじゃないか……

どうしてくれるんだ？……ええ！！？」

「……慎二…。今直ぐ、この結界を止めるんだ。」

「……僕に命令するなよ。……衛宮の分際で！！！僕に命令するな！！！！！」

「……慎二。これが、最後の警告だ。結界を止めろ。」

「……フン。止められるもんなら止めてみろよ。…殺せ！！ライダ

ー！！！！！」

「……ライダー。接近戦で、この私に勝てるとでも？」

「……いいえ、難しいでしょう。…ですが、この結界が完全に発動仕切れば、

その時点で私達の勝ちです。……では、行きます！」

「…愚かな！」

キィン！　ガキィン！　ザッ！　ドゴッ！　ガッ！　ブンッ！

ライダーとセイバーが闘っている間に、凛は士郎に教えられた最も甘ったるい基点を壊しに、

そして、士郎は慎二に直接向かっていった。

「慎二ぃ！！！！！！」

「ひっ！！！な、何をしているんだ！？ライダー！！！このクズを早く殺せよ！！！

何をもたついているんだ？！何時迄も遊んでるんじゃない！！！！！」

「慎二！！！！今直ぐ、この結界を止めろ！！！さもないと……。」

「がっ！！！……さ、さもないと…何だよ？…僕を殺す…っての？

……ははっ…お前にそんな事が出来る訳が無いだろう？」

「……いいや、俺は、お前を殺す。」

「……ぐぅっ！！！……ほ、本気か？…本気で僕を殺すつもりで…？」

「……。」　グッ…！

「ぐっ！……くそっ！！……ライダー！！！早く結界を止めろ！！！僕が死んじゃうだろ？！」

…そう。本来ならば、此処でライダーが結界を解き、慎二が解放される筈だった。……だが……

「……申し訳ありません、マスター。この結界は一度発動すると、私でも、どうにも出来ません。」

「「な!?!?」そ、そんな馬鹿な!!!」

「…もし、どうしても壊したいならば、全ての基点を完全に壊さなければなりません。」

「……士郎!!!どういう事?!あの基点を壊しても、殆ど変わらないわよ!?」

「…ライダーが、結界は一度発動すると、全ての基点を壊さないと、どうにもならないって…。」

「な?!そんな事している暇は無いわよ!?…もう、危ない人が沢山居るのに!?!?」

「……では、私達はこれで退散させて頂きます。」

「な！？ぐあぁっ！！！！！！」　ドガッ！！！

何時の間にか、慎二の側に来ていたライダーに蹴飛ばされる士郎。

そして、ライダーが自分の持っている鉄杭を、己が喉に突き立てようとした時であった。

「…その必要は無い……ライダー。…無駄な魔力を使うな。」

誰もが、その光景に……その発言に……その行動に……驚愕以外の感情を示せなかった。

side：カイト

……セイバーが強制召喚されたか。…ならば、俺もそろそろ、本格的に介入するとしようか。

まずは、手始めに、あいつらを救うとしよう。そして……奴を滅

ぼすとしよう。

では。『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』…目標を駆逐する！！！

「…その必要は無い……ライダー。…無駄な魔力を使うな。」

「「「「「「！？！？！？！？！？」」」」」」

それは…異様と言っても差し支えないだろう。

何故なら、まるで統一性の無い、七色の鎧を身に纏い、

彼等のほぼ中間……いや、宙間に浮いているのだから。

「……貴方は……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。……御久し振りですね？」

「…ああ。…お前も息災だったか？…姉達も…な。」

「…ええ。御陰様で。」

「…そうか。…それは良かった。」

親し気にライダーと話すカイトに、皆驚き、思わず話し掛けるのを躊躇ったが、

しかし、この儘ではどうにもならないと思い、何故か気合いを入れて話し掛ける凛。

「…ええと、カイト？…あんた、ライダーとも知り合いなの？本当に？」

「…ん？…ああ、そうだ。…俺は、聖杯戦争に参加している全ての英霊と知り合いなのでな。」

「「な！？！？！？！？！？」」

「……そ、そう。…やっぱり…ね……アハハハ；；；；」

「？……それより、邪魔だな…この結界。…ライダー、別に壊してしまっても構わんのだろう？」

「……ええ。どうぞ、御好きに。貴方の行動を止められる者等、此の世には居ませんから。」

「…そうか。…では……ふん！」

ツパァァァンン！！！！！

……何かが盛大に弾ける様な音がしたと思ったら、その真っ赤な世

界は、

瞬間的に元の色に戻って行った。……そして……この後のカイトの発言に、誰もが耳を疑った。

「…これで、いいだろう。……では、ライダー……早く行け。」

「「「「「な！！！！！！！！！！！？！？！？！？！？」」」」」

その場に居る全員が驚いた。…それはそうだろう。何せ、士郎の味方だと思われていたカイトが

ライダーを逃がすと言っているのだから。…当然、怒る者…訝しむ者…そして、疑問に持つ者…

皆がほぼ同時にカイトに尋ねた。

「何を言っているんだ!!!カイト!?!?」

「アンタ、自分が何言ってんのか分かってんの?!」

「正気ですか?!『宇宙(そら)の救世主(メシア)』!!!私達の敵になると!?!?」

「……何を考えているのですか?『宇宙(そら)の救世主(メシア)』…。」

「…お前、衛宮達の味方じゃ無いのか?」

「…はぁ……。取り敢えず、一人ずつ答えるぞ?

まず、凛。当然理解している。故の台詞だ。

次、セイバー。勿論正気だ。そして、敵でも無い。俺はお前達の味方だ。

で、慎二。今、言った通り、俺は紛れも無く士郎達の味方だよ。

最後に、士郎とライダー。答えは一つ。……ライダーに死んで貰っては困るのでな。」

一つ一つ、全てに答えたカイト。…しかし、皆、同じ疑問を持った。代表して、凛が聞いた。

「…何で、ライダーが死ぬと困る訳？」

「…別にライダーに限った事では無い。……俺は、そもそも……

誰一人、サーヴァントを失わせずに聖杯戦争を終わらせる為に、

此処に居る。」

今度こそ、本当に皆が驚愕した。カイトが有り得ない宣言をしたからだ。

その様な事、出来る筈が無い。そもそも、それでは、聖杯戦争の意味も、意義も無い。

今、カイトは全サーヴァント&マスターに対する、宣戦布告に等しい発言をしたのだ。

「…まぁ、そんな事はどうでもいい。…さっさと行け、ライダー。」

「……今は、恩に着ます…『宇宙（そら）の救世主（メシア）』…行きましょう…慎二。」

「…フン。覚えていろよ、衛宮!!!遠坂!!!」

セイバーが慌てて後を追おうとするも、カイトに阻まれ、捕り逃がした。

「……どういうつもりですか？……返答次第では……。」

「…返答次第では？……俺と闘うつもりか？…この俺と？……

余り図に乗るなよ？小娘風情が」

その瞬間、その一角のみ、圧倒的な魔力の塊によって、押し潰される寸前にまで行った。

「全盛期の貴様ですら、俺に一太刀も浴びせられなかったと言うのに、

力の制限されている……おまけに妄執に取り憑かれている、今の貴様がこの俺と闘う？

寝言は寝てから言え。己が力量すら見極められぬ者が、騎士を名乗るか？

分を弁えろ…英霊風情が……愚かしいにも程が有る。

……どうした？俺と闘うのだろう？…早く立って、構えろ。…

…何時迄這い蹲っている？

……闘う気が無いのなら……

今この場で殺すぞ？」

「……フン。気絶したか……存外だらしないのだな？……まぁいい。『解放（パージ）』

……さっさと起きろよ？……然もなくば、全生徒が死ぬぞ？」

……その後、何とか起き上がれたセイバーが、凛と士郎を揺り起こし、

凛が教会に連絡し、何とか皆の一命は取り留める事は出来た。

……しかし……三人の帰宅への足取りは……とても……重かった。

他者封印・鮮血神殿（Ｂｌｏｏｄｆｏｒｔ　Ａｎｄｒｏｍｅｄａ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

所で、前回の後書きに書いた件ですが、今頂いている御意見は、

『スーパーロボット大戦ＯＧシリーズ』・『ドラゴンクエスト世界』です。

御要望は、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』の世界が終わる迄、受け付けて居りますので、

何時でも御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

マキリの最後…？（Ｔｈｅ　ｅｎｄ…？）（前書き）

現時刻（１３：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：５９６，１２８アクセス　ユニーク：５６，６３２人
皆様、いつも有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

マキリの最後…？（Ｔｈｅ　ｅｎｄ…？）

ｓｉｄｅ：三人称

あの後、途中で合流し謝って来た弓（アーチャー）とは然程会話もせず、何とか衛宮家に這々（ほうほう）の体で帰って来たのだが……

つい、衛宮（ウチ）家の門の前で立ち止まってしまう、三人であった。

「…？どうした。…入らないのか？」

「……五月蠅いわね。…分かってるわよ……入ってやるわよ！女は度胸！！行くわよ！！！」

……だが、気合いを入れた三人とは裏腹に、肝心の相手…カイトは居なかった。

思わずホッとする自分達に、嫌気が差してしまった三人であった。

では。…その時、カイトは何処で何をしていたのか……。

「……フン。どうやら、ちゃんと気が付いた様だな。……それでは、俺も向かうとするか。」

……どうやら、セイバー達が起き上がって、助けを呼ぶ迄、遠くでしっかりと見ていたらしい。

そして、充分に確認した後、何処かへ去って行った。

side：間桐家

「…おい！！ライダー！！！あれは一体どういう事なんだ！！！！！」

「……あれ…とは、どれの事でしょうか？」

「決まってるだろ！？あの結界の事だよ！！！危うく僕が殺される所だったじゃないか！！！」

「……。」

「おい！！！何とか言ったらどうなんだ！？！？」

「……兄さん。…それぐらいにしてあげて下さい。」

「……桜。…お前も僕に命令するのか…？」

「…いいえ。…私は只、御願いしているだけです。」

「……巫山戯るなよ…何奴も此奴も……！！！！！おい！！！ライダー！！！！！

お前のマスターはこの僕なんだ！！！僕の命令には絶対に従って貰うからな！？！？！？」

「…いやいや、それは無いだろ。ライダーのマスターは、桜以外には有り得ないって。」

「！！！！！…だ、誰だ！？！？…今、僕をバカにした奴は？！」

「やっほー。元気にしてたか？桜とメデューサ。……後、死んじゃえ、馬鹿慎二。」

「「「！！！！！か、カイトさん！？」……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』…？！」お、お前…！？」

「取り敢えず……俺が此処に来た訳は……誰か、判るかな？」

「「「……。」」」

「…ありゃま。だ～れも分からんの？……しょうがないなぁ～…教えて進ぜよう！！！」

……いつものテンションに、少しホッとする反面、意図が全く読めず、余計に訝しむ三人。

そして、その後のカイトの言動に、三人共驚愕し、誰も何の反応も出来なかった。

「俺は、お前達…桜と蛇（メデューサ）を助けに来たんだよ。…そう言ったろ？ライダー、慎二？」

「「「……え？」」」

「まずは、慎二が持って居るその『偽臣の書』を、消して…と。」

すると、慎二が片手に抱えていた『偽臣の書』が、一瞬にして崩れて行き、

マスター権が桜に戻った。慌てて、慎二が再度『偽臣の書』を造れと命じるが、

桜は無駄だと断った。例え造っても、直ぐ様カイトに消されると。

もう、諦めろと。

だが、魔術師の道を諦めきれない慎二は、桜に食って掛かるが、

カイトに一蹴され、庭に転がされた。……そして、桜と蛇と共に外に出、桜と向き合った。

「……桜。……大人しくしていろ…臓硯にばれるとまずいのでな。…いいな？」

「……。」

「合意と見做す。……見付けた…。……良し。ＯＫだ。」

何かを探す様に、桜の胸の前に手を翳していたカイトが、アクションを起こしたと思ったら、

その手の中に、とある虫が浮いていた。……そう。桜の心臓に取り付いていた害虫（ぞうけん）である。

「…ほれ。これで、もう大丈夫だ。」

「……一体、どうやって……いえ、何で…知ってるんですか…？」

「俺の名は『全て（オール）を知りし者（ノウレッジ）』。何でも知っているのさ。」

「『全て（オール）を知りし者（ノウレッジ）』……。」

「そう。所で、桜……家、燃やしても良い？」

「「…は？」」

「いや、だから。…これから臓硯…あの糞害虫をぶち殺すから、その際、家燃やしても良いか？

…って聞いてるんだけど。」

「……あ、あの……？」

「ん？何？何か、取って来たい物でもあった？士郎との写真とか？」

「…ええと、それはありますけど……あの……お爺様を…その…殺す…って……。」

「うん。殺すよ？だってアレ、只の害虫の塊だろ？」

「……；；；；；」

「って事で、燃やして良い？」

「……ええと……；；；」

「…まぁ、特に持ち出す物が無いならいいや。纏めて燃やし尽くす

から。」

「「……；；；；；；；；；；；；；；；」」

「ま、それはさておき。最初の目的は、まだ終わってない。」

「「…え？」」

「取り敢えず、桜…虫を全て出せ。…２１匹全部だ。」

「「……。」」

「…桜。……彼ならば大丈夫です。」

「……ライダー……分かりました。」

ザザザザッッッ！！！

まるで無数の虫の群れが集まって来た様な音がし、

桜の周囲に２１匹の魔力の桁が違う存在が現れた。

「……これで全部です。」

「……確かにな。……では、施術する。大人しくしてろよ？」

そうカイトが言い、撫ぜる様に桜の虫達に手をさっと翳すと、途端に虫達が苦しみ始めた。

“ぎ、ぎ、ギイイイィィィィィ？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！”

「な！？何をしたんですか？！カイトさん！！！！！」

「大人しくしろと言ったろ！！心配するな、死ぬ事は無い！！！直ぐ終わる！！！！！」

その言葉はどうやら正しかった様で、直ぐに終わり、虫達は正に虫の息で、グッタリしていた。

「……良し。…もういいぞ、桜。虫達を戻してくれ。……しっかり覚悟しろよ？」

「……？…分かりました。…みんな、戻って……！？！？あ、あ、あああああああああああ

ああ

！！」

「さ、桜！！！！！」

虫達を自身に戻した桜が、途端に苦しみ出し、絶叫を上げて気絶した。

「…一体、桜に何をしたのですか！？『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』！！！！」

「桜には何も？」

「では、この苦しみ様は一体？！？！」

「…ふむ。……説明をするのは吝かでは無いが……今は未だその時では無い。時を待て。

ライダーのサーヴァント…メデューサよ。」

「……命に別状は？」

「それは無い。…只、少々身体に激痛が走ったのでな。……起きるまでに少しの間掛かるだろう。その間、衛宮家に匿って貰え。

既に俺の従者達に連絡してある。この俺が許す。士郎達にも何れ話す。お前も覚悟しておけ。」

「……分かりました。……感謝します。『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。」

「…気にするな。……早く行け。此処は汚臭が酷い。」

「はい。…御武運を。」

「フン。誰に言っている？無用な気遣いだ。」

「……そうでしたね。…では。」　ヒュッ！

「……行ったか。…では、本気（マジ）で、あの害虫を駆逐するとするか。」

「……貴様…何者じゃ？」

「…何だ。そっちから来てくれるとは…かなりサービスが良いな？御陰で探す手間が省けたぜ。」

…そう。今、ライダーを見送った直後、カイトの居る庭に間桐臓硯が、現れたのだ。

「……儂は何者じゃ…と聞いているのじゃがな……？

どうやら、余り老人を労ってはくれんらしい。」

「何を阿呆な事を言ってやがる…妖怪虫人間が。大体、俺の方が年上だ。

もっと敬えや。……一億年も生きてない、糞餓鬼風情が。」

「……本当に何者じゃ？貴様。」

「敬えっつってんだろう？…ったく。……俺は宝石翁の知り合いだ。因みに、目的は貴様の駆除。…どうだ？嬉しいだろう？

その無駄な生に、ピリオドが打てるんだからな。」

「……ふぉっふぉっふぉっ……この儂を、殺す…と、そう言ったのかえ？

例え、魔法使いの知り合いだとて、儂は殺せんよ。」

「……桜の心臓に取り付いていた虫なら、俺が消滅させたぞ？

序でに、貴様が桜に埋め込んだ２１匹の虫共から、聖杯の欠片のみを取り除いた。

残念だったな？貴様の望みは、今此処で絶たれたばかりだ。」

「な、何ぃ！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？

き、き、き、きさま……い、いいい、一体…………？」

「…俺の名は『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』……貴様を破滅させる者だ。本当に残念だったな？

俺と敵対した時点で、既に貴様が此の世から消滅する事は、決定事項だ。

……そして……今が、その瞬間（とき）だ。

空間固定（ロック）　無音（サイレント）」

「…！！！！！！！！！！！」

「…どうだ？…他の虫に意識を移す事も出来まい？…では、地下のゴミ虫共々、消えて貰おう。

空間切断（カット）　転移。」

「…ほら、着いたぞ？」　ブンッ！　ドゴッ！！

空間ごと固めた臓硯を、無造作に地下の無数の虫が蠢く中に、放り

投げたカイト。

すると、臓硯が居る空間の周りに、群がって集まる悪虫達。

「!?!?!?!?!?……!!!!!!……?!?!?!?!?!」

何かを言っているのだが、全く聞こえない。…どうやら、虫達が自分を捕食しようと、

近付いて来る事に対して、恐怖に怯えている様だ。

「…何を怯えている？…貴様が常日頃から、人に対してやっている事だろう？

当然、その報いが自分に返る事ぐらい、想定していただろう？

……では、公開処刑だ。

消去（イレイザー）」

カイトが、何事かを呟くと、臓硯の躯が白く輝き、光りが収まると、

躯が自由に動かせる様になっていた。

慌てて、臓硯は魔術を行使したが、虫達は一向に構わず、自分に向かってくるではないか。

何度、呪を編んでもまるで利かない。その時、臓硯は、ハッと気付いた。先程の光か！？

臓硯が苦々しくカイトを見上げると……それに気付いたかの様に……

カイトは、ニヤッ……と、２００年以上生きて来た臓硯が、見た事の無い程の……

……偸閑（あからさま）な愉悦に顔を歪めた……邪悪な笑みを浮かべていた。

「……ようやっと、気付いたか？……そうだ。俺が今、貴様の全ての魔術能力を消去した。

故に、その害虫共は、貴様の命は一切聞けず又、御存知の様に只喰らい尽くすしか脳がない。

……どうだ？嬉しいだろう？今度は自分がその虫達の餌になれるんだから…な。」

その言葉に待ち構えていたかの様に、絶望した臓硯に虫達が襲い掛かり、

次々と臓硯の躯を喰らい尽くして行く。

「や、や、やめろぉぉぉぉ……！！！わ、儂に近寄るな…！！

ええい、この愚かで下等な虫共風情が…！！！ぎ、ぎゃぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

陸続と集り、臓硯の躯を喰らい尽くして行く虫達。

そのおぞましさに顔を顰(しか)めながら、何かを取り出し、ソレに魔力を込めるカイト。

「……うげ……相変わらず、気持ち悪いな……。もう聞こえてないだろうけどな……

一つだけ教えといてやるよ……俺はな？

……此の世のあらゆる虫類が……

……

大っっっっっっっっっっ嫌いなんだよ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

真名解放！！！！！『禍喚ぶ業火の魔剣（レーヴァテイン）』！！！！！！！！！！！」

真名を解放した瞬間、間桐家は地獄の劫火に包まれ、轟轟と燃え上がった。

その炎の中から、虫達の断末魔が数多聞こえてくるが、『災厄(レー)を撒き散らす(ヴァティン)魔剣』は、

一度でも捕らえた獲物は、決して逃がすまいと、全てを焔に巻き込み、燃やし尽くす。

「……これなら、もう助からんだろう。……んじゃ、俺は帰るとしよう。

早いとここんな所から、オサラバしたいしな…。」　シュッ

カイトが去った後も、焔は燃え続け、消防車が多数駆け付ける騒ぎになったが、

三日三晩、焔は全く沈静する事無く、燃え続けた。

その後、ようやっと焔が沈静した跡には、何も残って居なかった。

……そう。燃え滓や灰すら、全く残って居なかったのだ……。

……だが……

カイトは、此処で失態を犯していた。

完全消滅した処を見届けず、帰ってしまったのだ。

……故に、その後、ナニモノカが炎の中から、

ナニカを引っ張り出した事に、気付かなかった。

……そのナニモノカは、ナニカを何かに包んだ儘、何処かへ去って行った。

「ク、クカカカカ……まだじゃ……まだ……儂は死なん……死ぬ訳にはいかんのじゃ……

そう、天が儂に言っているのじゃ……覚えておれよ……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』

クカカカカカカカカカカカカカ……。」

……悪夢は……未だ……終わらない……。

マキリの最後…？（Ｔｈｅ　ｅｎｄ…？）（後書き）

如何でしたでしょうか？

前回・前々回の後書きに対し、沢山の方から、御言葉・御意見・御要望を戴きました。皆様、誠に感謝致して居ります。

先ず、今現在の決定事項を御伝え致します。

現在、行く世界で決まっているのは、『ネギま！』・『ゼロの使い魔』です。

『ネギま！』は、最後に渡る世界の、前の前の世界にしたいと思います。

『ゼロ魔』は、『Ｆａｔｅ』の次か、次の次の世界にしたいと思っています。

『ゼロ魔』に関しましては、御要望が多ければ早く、少なければ遅くなる……

という程度の差異ぐらいです。

他の未だ、決まっていない候補と致しましては、

『スーパーロボット大戦ＯＧシリーズ』※鋼鉄神・ＬＯＤ・エヴァが入る可能性有り

『ドラゴンクエスト世界』※？・？・？・？の何れかｏｒ幾つかです。

次点と致しまして、

『封神演義（藤竜・漫画版）』・『スクライド』が有ります。

他にも、『月姫』と言う御要望も御座いましたが、皆様は如何でしょうか？

もし、書くとするならば、この儘続けて……但し、聖杯戦争後に、

『Ｆａｔｅ』のキャラと絡ませて、少々戦わせたり、遊ばせたりする……

という程度になってしまいますが……；；；

皆様に、沢山の御要望を戴いておきながら、極僅かしか、御期待に応えられず、

誠に申し訳ありません。

今後も、御言葉・御意見・御要望、何れも御待ち致して居ります。

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

救世主之暗躍（Ｍｅｓｓｉａｈ　ｅｎｇａｇｅｄ）（前書き）

現時刻（２２：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：６１３，０３７アクセス　ユニーク：５８，１０４人
皆様、毎度有難う御座います。

早くも、６００，０００アクセス突破致しました！！！！！

皆様、この様な駄文を幾度も御覧頂き、本当に感謝致します。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

救世主之暗躍（Ｍｅｓｓｉａｈ　ｅｎｇａｇｅｄ）

ｓｉｄｅ：士郎

俺達が学校から帰って来て、ホッとした後。黄宇達が未だ、居間に居る事に気付いて、

思わず固まって緊張しちまったけど……どうやら、黄宇達は学校での事を未だ知らないらしい。

「？…お帰りなさい……士郎、凛、セイバー。」

「「「…た、只今…；；；」」」

…どうやら、俺達三人共考えてる事は同じだったみたいだ。

……そして、何時も通りに六人共接してくれた。……だからこそ、苦しい。

「……みんな、聞いて欲しい事がある。」

「シロウ！！？」

「…俺には、このままでいるのは耐えられない。」

「……気持ちは分かりますが……。」

「……まぁ、いいわ。…好きにしたら?此処は衛宮君のお家なんだし。

家長の決定には逆らえないわね。」

「凛!?」「……有難う、遠坂。」

「……ふん。さっさと済ませちゃいなさい。」

「ああ。」

「…それで?…御話とは一体何でしょうか?」

「……実は……」

「……という事なんだ…。……みんな済まない。」

「……そうですか。……それで？…士郎達はどうするのですか？」

「…俺は……カイトと話し合いたい。

あいつが何を知っていて、今、何をしようとしているのかを。」

「……凛・セイバー・アーチャーは如何です？」

「私も士郎と同意見ね。こうなったら、あいつが何を考えてるのかトコトン問い詰めてやる！！！」

「……私は、それがマスターの決定ならば従うまでです。」

「……それが、サーヴァント故に…な。」

「……判りました。では、もう少々、御待ち下さい。

もうすぐ、桜がライダーに担がれて、こちらに運び込まれて来ますので。」

“…え（何）？どういう事（だ・ですか）？”

「そのままの意味です。私達とカイト様が、連絡を取り合える事を御忘れですか？

既にあなた達の状況は、リアルタイムで存知ています。」

「……じゃ、じゃあ、何でわざわざ俺達の話を…？」

「あなた達が、何処まで状況を把握しているか……更に、それを受けての覚悟の程。

それらを確認する様に…。との、カイト様からの御命令でしたので。」

「……なら、何時も通りに接して来た訳は？」

「？家族なのですから、帰って来た者を出迎えるのは当然でしょう？」

“……あ、あはは……；；；”

……どうやら、俺達の杞憂だったらしい。……全く……気合いを入れて損したよ……；；；

でも、ホッとしたのも束の間。

その直ぐ後に、気絶した桜がライダーにお姫様抱っこで、家に連れて来られたんだ。

「……。」

「な!?ライダー!!!」「……。」

「待ちなさい!!!セイバー!アーチャー!!今、聞いた事をもう忘れたの?!」

「くっ…!ですが、凛!!!」

「君こそ忘れたのか?凛。今は聖杯戦争中だぞ?……警戒するに超した事は無い。

……そうだろう?ライダー。」

「……私に戦う気はありません。セイバー、アーチャー。

それよりも、桜を休ませて頂けますか?彼によれば、暫く目を覚まさない様ですので。」

「構いませんよ。…どうぞ、此方へ。準備は既に出来ていますから。」

「……恩に着ます。救世主(メシア)の従者。」

「…その呼び名は、我々は構いませんが、カイト様は嫌がられますので、御気を付け下さい。」

「……本当に良いのですか？マスター。」

「…ああ。セイバー達には悪いが、桜の身の安全の方が大事だ。…済まん。」

「……いえ。…御気持ちは分かります。」

「……！？な、何だ？！この馬鹿でかい魔力は……！？」

「……くっ……これは……桜の家の方角…！？…アーチャー！！！」

「……待て、凛！私ならば、彼処なら此処の屋根からでも見える！」

そう言うと、奴は家の屋根に一跳びで上がり、桜の家を観察した。

その直後に、巨大な炎の柱が上がった。

“な！？何だ、あれは？！？！？！？！”

「……どうやら、桜の家が出火元らしい。…しかも、あれは……地下から出ているな？」

「…地下？…あの家に地下なんてあったのね……如何にも間桐家らしいわね…。」

「……結局、一体どういう事なんだ？」

「……全く判らん。……カイトが帰って来てから、問い詰めた方が良さそうだ。」

「……そうね。そうしましょう。」

「じゃあ、俺は消防車を……。」

「…その必要は無いわ。…もう既に誰かが呼んだみたい。」　ウ～…ピーポー…

「……ほんとだ。……じゃあ、俺達はカイトが帰って来るのを待とう。」

ｓｉｄｅ：三人称

「…ＷＡＷＡ忘れ物～……只今～！……ん？どしたん？みんな。鳩首凝議しよってからに。」

「……；；；…い、いや、まさか玄関から普通に入ってくるとは思わなくて；；；」

「何でやねん。出掛けたら、玄関から帰って来るのは当たり前じゃろがい。俺は鳥か何かか。」

「……強ち間違って無いわね…。」

「酷ぇ。」

「……それより、カイト。……聞きたい事が有るんだ。」

「へいへい。…まずは上がらせてくんね？」

「あ、そうだな、済まない。…じゃあ、居間で。」

「あいあいさー。」

「ん～♪…鋼牙は可愛いなぁ～……♪♪♪」

「えへへへ～～～♪♪♪♪♪♪」

……御分かり頂けるだろうか？……そう。

憎いアンチクショウが、一人で鋼牙をモフっているのである。……死ねばいいのに。

……俺にもモフらせろ！！！！！という、読者の方々からの苦情が殺到中である。……筈。

「……何か、変な電波が飛び交って無い？士郎。」

「…そうか？気の所為じゃないか？カイト。」

「……そうか……気の所為か……俺も疲れてるんかな…？」

「…大丈夫？カイト兄ちゃん。」

「ああ、問題無い。……こうして、鋼牙と戯れているだけで、元気百倍だ♪」

「えへへへ～～～～♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

“……。”

どうやら、作者・読者だけでなく、他の面々からも、苦情が殺到しそうだ。話を進めよう。

「んで？何を聞きたいんだ？」

「……先ず、桜についてだ。…あれは……」

「それは、内緒。」「何でよ!?」

「未だ、時期尚早。…取り敢えず、死ぬ事は無いさ。

まぁ、目覚めるのは、明日明後日になりそうだがな。…お前等、ライダーと喧嘩するなよ?

彼女のマスターである桜が悲しむぞ?」

“な、何だ（です）って!?!?!?!?!?”

「どういう事よ?!ライダーのマスターは慎二じゃないの?!」

「んな訳無いだろう?魔術回路の無い奴がマスターになれる訳が無ぇだろうが。

お前、何学んでんだよ?それでも、魔術師か?馬鹿たれが。」

「う……だ、だって！！じゃあ、何でライダーは黙って慎二に従ってたって言うのよ！？」

「魔術道具を使ったから。『偽臣の書』…令呪を一つ使用する事により、

マスター権を他の者に委譲させる本。それを聖杯戦争に参加したくない桜に命じて、

臓硯が作らせた。んで、それを慎二に与えたってな訳さ。」

「……そう。……そういう事。……で？その慎二は何処？」

「さあ？放り出したまんまだけど？」

「じゃあ、今、何処に居るか判らないのね？」

「いや？検討は付いてる。その後のあいつの行動も…な。」

「……教えなさい。」

「却下。慌てるな。どうせ、何れ向こうから、お前に近付いて来てくれるから。」

「……どうして、そんな事が言えるの？」

「……御存知の通り、あいつはプライドの塊だ。それが、只の御人好しでありながら、

自分にはない魔術回路を持っている衛宮士郎と……お前は覚えてないだろうがな？

一応告白した事もあり、未だに懸想している遠坂凛にコテンパンにされたんだ。

そりゃもう、今のあいつの心の中は嫉妬と憎悪で、腸煮えくり返っているだろうよ。」

「……そう言えば、されてたわね…。…どうでもいい事だから、すっかり忘れてたわ。」

“酷い（ぇ）。”…みんなの心が一つになった瞬間である。

「……でも……まさか…俺にも嫉妬してたなんて……。」

「……お前ね？…自分じゃ全く気付いて無いだろうが、途轍も無く

恵まれてるんだぞ？

一体、どんだけの人に現状を羨ましがられていると思ってる？」

「……え？」

「……まぁ、だろうね。俺からは、何も言わないよ。自分で気付くか、他の奴に教えて貰え。」

「……。」

「（この大馬鹿者め…。）まぁ、そういう訳さ。黙ってたって向こうから来る。

その時には、好きにすればいいさ。殺すも良し。生き地獄も良し。無間地獄も良し…ってな。」

「……分かったわ。……でも、その時邪魔したら……アンタでも許さない。」

「ああ、分かってるよ凛。慎二に関しては、俺は一切手を出さんさ。

今、言った通り…好きにすればいい。」

「……そう。」

「では、次だ。…あの間桐家の火事。……貴様は何を知っている？」

「ああ。あれ、やったの、俺。」

“……は？”

「いや、だから、あれやったの俺。ちょっと、とある処から、宝具をちょっぱって来て使った。」

「……ちょっぱ……い、いや、それよりも……ほ、宝具？……一体、誰の？」

「ん？これだよ。…ほれ。」

すると、カイトが何処からか、何か禍々しい雰囲気を感じさせながらも、神性を感じ取れる

剣を取り出した。……士郎とアーチャーが、驚きながらも食い入る様にソレを見詰めている。

「……で？これは一体何？」

「……え？これ程の物が判らないのか？遠坂。」

「知らないわよ。…私、宝具に詳しくなんて無いもの。……士郎…
…これ、判るの？」

「…名前とか、そういうのは知らない。……でも、これが紛れも無
い超一級品である事は判る。」

「……何それ？どういう事？一体。」

「……それは、恐らくレーヴァテイン。……この名ならば、お前も
聞いた事が有るだろう？凛。」

「な！？…れ、レーヴァテイン…ですって…！？それ、神話時代レ
ベルの宝具じゃない！？

そんな物の担い手が居るっていうの？！」

「いいや？担い手は居ないよ。…俺は、そいつの持ち主から、ちょ
っぱって来ただけ。」

「……？担い手でも無いのに、持ってる？……どういう事？」

「今は未だ、内緒。…その内、判るさ。……嫌が上でもな。」

“……。”

「ま、現状で、俺が話せるのはこれぐらいかな？……あ、後一つあ
った。」

「……何？」

「間桐臓硯なら俺が殺して来たよ。あの焔の柱の中だ。因みに三日三晩程は、焔は消えないよ。

んじゃ、御休み～。お前等も早く寝ろよ～～…。」

色んな意味で、驚愕している四人を後目に、カイト主従はさっさと寝ていた。

……因みにアルニスは、カイトが帰ってくる前に寝ていた。……良い子？

その夜。……まるで、何者かに操られる様に、フラフラとパジャマ姿で街中を歩く者が居た。

その者は、とある寺の門内に入ると、途端に目を覚ました。

「……ハッ!!……こ、此処は?!俺は…確か、寝ていて……それで……。」

「……まさか、こんなに簡単に引っ掛かるなんてね?…ちょっと拍子抜けしちゃったわ。」

「!!?誰だ、お前……!」

「あらあら……威勢の良い坊やだ事。……そうね……キャスターって言えば判る?」

驚愕している士郎を、まるで意に介せず、ゆっくりと士郎に近付くキャスター。

……そんな士郎を庇うかの様に、助けに入るアーチャー。

「……お前、何しにこんな所まで来たんだ…？」

「……マスターからの命でな…。間抜けな、協力者を助けろ…とさ。」

「……。」

助けに来たというのに、一触即発な二人。そんな二人を意に介さず、遙か上空から、魔力弾を浴びせ掛けるキャスター。

相変わらず二人は、何とか躱しながら、お互い罵り合っている……まるで、子供の喧嘩だ。

その内、痺れを切らしたのか、士郎を蹴り飛ばし遠くにやってから、弓（アーチャー）が反撃に転じた。

「……戯け…躱せと言ったのだ、キャスター！！」

「？…！！！きゃあああ！！！！！」

「な！？！？」

敵に対し、躱せと言うアーチャーに驚く士郎。だが、本当に驚くのはこの後だった。

「……そう。私と手を組まないかしら？と聞いてるの。」

「巫山戯るな！！！俺はお前みたいな奴とは絶対、手なんか組まない！！！！！」

「…そういう事だ。私達と手を組みたいのならば、もう少し、貴様の利点を主張するべきだな。」

……そう。アーチャーは、条件さえ調えば、協力すると言っているのに等しいのだ。

しかも、そのままキャスターを逃がして仕舞った。後を追おうとする士郎を抑え付けて。

「……お前！！！何を考えてるんだ！！！何で、あいつを逃がした！！！！！」

「…フン。貴様といい、凛といい、余りにも甘い。……いや、温過ぎると言ってもいいだろう。」

「何！？」

「勝つ為ならば、如何なる手であろうと、使うべきだ。それを、やれ汚いだの、卑怯だのと……

勝負…いや、戦争という名の殺し合いを舐めているとしか思えん。」

「……てめぇ……。」

「……。」

「…？……！！ぐぅっ！？！？！？」

「……外したか……。俺の狙いが甘かったのか…それとも、貴様が躱したのか……まぁいい。

何れにしろ、次で確実に殺せばいいだけの事だ。」

「……てめぇ……。」

「…甘ったれた理想にのみ獅噛付く衛宮士郎は、只の害悪でしかない。

その考えを改める気が無いのならば、今、此処で抹殺する。

――理想を抱いて溺死しろ。」

「くっ！！」　ガッ！

「…フン。一応、逃げ回れるだけの知恵は有る様だな。」

「!?し、シロウ!!!」

「あ…ぐ……せ、セイバー……。」

「クッ……。どういうつもりですか……アーチャー!!!」

「…どういうもこういうも無い。…邪魔だから、斬ったまでだ。」

「貴様ぁ!!!!!」

「…セイバー。…我を前にして、それは些か失礼というものだぞ?」

「!!……クッ……。」

「……興が削がれた。……今宵は帰れ、セイバー。」

「……今は恩に着ます、アサシン。」　ザッ!

「…逃がすと思うか…!?……キサマ…。」

「……何のつもりかな?…私は、彼女を逃がすと言ったのだぞ?

……それに不法侵入者を逃がすつもりもない。」

「……門番風情が……。」

「……フ…。」

「…其処迄だ。アサシン、アーチャー。その勝負、俺が与る。」

「「!?何っ!!?誰だ?!」」

「……久しいな?小次郎。……何時以来か?」

「……?……もしや……救世主(メシア)…か?」

「…そうだ。…取り敢えず、今は戻れ。こいつは俺が責任を持って与る。」

「……承知した。……汝に従おう。……あの女狐めに一泡吹かせてくれた礼だ。」

「……何のつもりだ?…カイト。」

「…さて…ね。」

「……何故……とは…聞かんのだな。」

「まぁな。俺は、理由を知ってるし。……だから、言ったろ?無間地獄を見る…とな。

そんな事より、早く戻るぞ。…凛がカンカンだからな。長説教は覚悟しとけよ~?」

「…グッ……死徒等よりも、そちらの方が余程厄介だ……。」

深夜だというのに、お構いなしで大爆笑しているカイト。

……それに釣られて思わず笑みを浮かべるアーチャー。

……まるで、長年の友の様に二人で楽しく話しながら帰途に着いた。

……その後に待ち受けている、凛の長説教を忘れたいかの様に……。

ゆっくりと……ノンビリ歩いて帰った……。

その帰途の最中、カイトはアーチャーと話ながら、誰かと念話していた。

（…これでいいのかしら？…『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』。）

（ああ、充分だ。御苦労、メディア。）

（……全くよ……。何？あいつら…。本当にそっくりよ？魔力の色…というか形というか……）

（……そりゃそうだろ。……お前にだけは教えといてやろう。
あいつらは……同一人物だ。…正確に言えば、あの英霊は、あいつの未来の姿だ。）

（!?!?……そう。…そういう事なのね。……道理で、似通っている訳だわ。……？
でも、待って。……ならば何故、あの子達は、殺し合ってるの？同じ存在なのでしょ？）

（いいや？似て非なる存在だ。飽く迄、あいつは可能性というだけの話だ。故に……未来。）

（……成る程ね。……その為に、あなたが暗躍しているという訳ね？）

（まぁ、その内の一つというだけだがな。）

（……？他にも何か有ると？）

（当然。…あれは、その副産物…言わば副次的なものだ。俺の本来の目的では無い。

……まぁ、何かは未だお前にも教えんよ。……何れ時を待て。その内教えてやる。）

（……別に私はいいわよ？然程知りたいとも思わないし。）

（……生憎と、そういう訳にもいかん。これは、全てのサーヴァントに関わる事なのでな。

もし、聞けないというのであれば、もう二度と葛木とは会えんぞ？）

（……例え、貴方でもあの人に手を掛けたら……許さないわよ……。）

（おお、怖ぇ怖ぇ。……幾つになっても恋する乙女は恐ろしいねぇ……。

まぁ、幸か不幸か、俺は何もしないよ…あいつには…な。）

（……では、一体誰が？）

（……未だ……と言ったろう？）

（……そう。…分かったわ。その代わり必ず話しなさい。……いいわね？）

（委細承知。…大丈夫だ。必ず、お前達にも話してやる。……此の世界の真実とやらを…な。）

（…そう。…なら、私はこれで退散させて貰うわ。……あの人が待っていてくれるもの。）

（へいへい。…どうぞ、ご自由に。…ではな、メディア。）

（ええ。……一応、貴方には感謝しているわ。…『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。…ではね。）

救世主（メシア）の暗躍は止まる事を知らない。

……だが……次なる策謀の前に……

恐ろしい『真紅の悪魔（アシュタロテ）』の長説教が待ち構えている事を、

すっかり忘れていた、救世主（カイト）と弓兵（エミヤ）であった。

救世主之暗躍（Ｍｅｓｓｉａｈ　ｅｎｇａｇｅｄ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回、不満を持たれた方もいらっしゃるかと思います。

『何で、あの盛り上がるシーンを省略するんだ！！！』…と。

……ぶっちゃけますと、原作を読んで下さい。

カイト達が出ない場面等は、基本的に『Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｂｌａｄｅ　Ｗｏｒｋｓ』√で進みます。

文章等もその儘なので、要は只、転載する事になってしまいます。

それはいけません。ですので、これを一つの機会と致しまして、

是非共、原作を（未だお読みになられていない方は）読んで下さい。

では、販促を締めと致しまして。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

投影　開始（Ｔｒａｃｅ　ｏｎ）（前書き）

現時刻（１６：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：６２９，６９８アクセス　ユニーク：５９，６１８人
皆様、いつも有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

投影　開始（Ｔｒａｃｅ　ｏｎ）

ｓｉｄｅ：学校の屋上

只今、昼休み中。士郎と凛は、屋上にて逢い引ｋ「巫山戯ンじゃないわよ！！！」……基。

今後の計画を相談中である。……いや、極普通に見たら、只の逢い引きダヨ？

「だから、違うってば！？」

「……と、遠坂？……どうしたんだ？急に叫んだりして…。……大丈夫か？

疲れてるんなら、別に今じゃ無くても……。」

「大丈夫よ。ちょっと変な電波を受信しちゃっただけだから。気にしないで。」

「……そ、そうか……；；；；；；」

「……。」

「……。」

「……。」

「……；；；……あ、あの……遠坂？」

「……分かってる。……ふぅ……。…取り敢えず…ごめん、士郎。」

「…えっと……昨夜の事？」

「そう…その事よ。……その……アーチャーが先走っちゃったみたいで……ゴメン。」

「……いや、別に気にしてないよ。……確かにあいつが言っていた様に、

今の俺じゃ、まだまだ足手纏いだからな。」

「うん……それはそうなんだけど……。」

「……相変わらず酷いなぁ……；；」

「え？…あ、いや…そういう意味じゃないのよ？

……取り敢えず、アーチャーには、もう手を出させない様に令呪をかけといたから。

……これでお相子って事にしといて。」

「ああ。……本当に、律儀だなぁ…遠坂は。」

「……それよりも……あの馬鹿達……あの後、何時頃帰って来たと思う？」

「え？……さあ……結構遅かったんじゃないか？」

「結構所じゃ無いわよ！！！！！3時よ、3時！！！！！

しかも、二人して笑いながらノンビリ歩いて帰って来てたのよ！？！？

そりゃもう、当然ぶち切れたわよ！？ええ！！！」

「……そりゃ又、何とも；；；；…それでか……朝から、カイトが正座させられて、

アルニスに説教されてたのは……；；；あれは、中々に珍しい光景だったな…。」

「そりゃ、説教もするってもんよ！！！私だって、御陰ですっかり今日は寝不足よ！！？」

「……；そ、そうか……お疲れ様…遠坂…；；；」

「……全く……。……ねえ、士郎？」

「ん？何だ？遠坂。…未だ、何か愚痴でも零すのか？」

「違うわよ。……あいつ……一体、何を考えてると思う？」

「あいつ…って……アーチャーの事か？」

「……それもあるけど……カイトの事よ。」

「…ああ、カイトか。……全く以て解らん。」

「……そうよね。……そもそも、あいつって一体何者なのかしら……。」

「……確かにな……。聖杯戦争に参加している全ての英霊と知り合いとか言ってたし……。」

「…そうね…。オマケに、全てのサーヴァントの正体とマスターを知っているとか……。」

「そうだったな……。しかも、セイバー達ですら闘う事も出来ずに、あっさり気絶させられた。」

「……本当に、とんでもない化け物ね……。」

「……なぁ……実は、あいつも英霊だ……なんて可能性は無いか？」

「無いわ。私も、その可能性を考えてみて、暫く観察していたんだけど……

あれはどう見ても、只の人間よ……。まぁ、本当に只の人間が、英霊をどうにか出来る訳は無い筈なんだけど……。絶対なんか、秘密が有る筈よ…！」

「…まぁ、だろうなぁ……幾ら魔法使いの知り合いだからといって……

彼処迄の理不尽な強さは、有り得ない。」

「……考えられるとしたら……恐らくは、圧倒的な程の膨大な魔力を保有してる…とか……。」

「……成る程……確かに、小さいとは言え、龍を同時に４２体も召喚して、維持出来るんだから

相当なもんだろうとは思っていたけど……。」

「そうね……常時４２体の召喚龍を維持している上に、

セイバーすらも、あっさり気絶させられる程の膨大な魔力……

…どれだけ化け物なの…？」

「……俺、他にも気になる事があるんだが……。」

「……もしかして、カイトの二つ名について？」

「……ああ。……あいつ、セイバー達に色んな呼び方されてるだろ？

一体、どういう意味なんだろう……って思ってさ。」

「……そうね。……私達が知ってるだけでも……

『宇宙（そら）の救世主（メシア）』・『全（オール）てを知りし者（ノウレッジ）』……。」

「後は……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……ぐらい…か。」

「…それ、どういう意味？」

「さあ？ランサーがそう言ってたんだ。そっちも初めて聞いたぞ？

…そのオール…何とかって。」

「…『全（オール）てを知りし者（ノウレッジ）』よ。…前にカイトが言ってたでしょ？……

もう忘れたの？」

「……ああ……そういや、何となく聞いた事が有るような……

…？」

「……まぁ、あんた、あの時魔術回路を開いたばっかで、

余り意識は、はっきりしてなかったのかもね。…『全て(オール・ノウレ)を知りし者(ッジ)』

…意味は、恐らくその儘でしょうね。……全てを知りし者……。

…士郎の事と言い……本当に何でも知ってるみたいね。」

「……あいつだけは、絶対に敵に回したくないな……色んな意味で。」

「……それには、心底同意するわ……。」

結局、カイトについては、何にも分からず仕舞い。

……改めて、カイトの謎が浮き彫りになり、その不気味(こわさ)さに、思わず震える二人であった。

その後、一旦カイトの事は忘れて、授業をサボって二人で情報を纏めていた。

「…え？ホントに、カイトがそう言ったの？」

「ああ、間違いない。…俺も、もう一度聞き返したけど、やっぱり同じだった。」

「……そう。……未だ、この学校にマスターが居るのね……。」

「ああ。……情報源が情報源だから、信憑性は確実だと思うんだが……。」

「……ええ。それについては、一切疑ってはいないわ……。

確かにあいつは、訳分かんなくて不気味だけど、嘘だけは付いた事は無いもの。」

「……そう言えば、そうだな。……はぐらかされる事は良く有るけど、嘘だけは……無いな。」

「そう。…だから、その情報は、ほぼ１００％正しいと見て、間違いないわ。」

「……？何で、１００％じゃ無いんだ？」

「……はぁ……。…いい？士郎。此処の学校関係者である事は１００％間違いない。

でも、そいつが今も学校に来ているとは限らない。

自分の隠れ家に籠もっているかもしれないでしょ？だから、ほぼ１００％。…分かった？」

「おう。……それで、どうやってそいつを割るんだ？」

「…其処は私に任せなさい。……伊達に優等生はやってないわよ。」

「……その優等生がこんな所で、堂々とサボってるけどな。」

「……いいのよ、それは！！一々、突っ込まない！！！分かった？！」

「…い、イエス・マム。」

「…フン！！」

「……ホントに……アカイアクマ……だったんだな。（ボソッ）」

「ん？！何か言った？！士郎！！？」

「いえ、何も。」

……矢張り、端から見れば只のバカップルの痴話喧嘩にしか見えない二人であった。

「だから、違うって言ってんでしょ！？！？！？！？」

で。その翌日。またもや、バカップ「……＃＃」……士郎と凛が屋上でサボっていた。

「……；；；…と、遠坂…？」

「……何でもないわ。……そんな事より……分かったわよ。」

どうやら、もう一人のマスターが判明した様だ。……良く二日で分かったね？

「御都合主義よ。」

「……遠坂？……ここんとこ、本当に何か変だぞ？お前。……疲れてるんなら、無理すんなよ？」

「……大丈夫よ。……それよりも、今夜急襲するから、準備しといて。」

「…え？行き成りか？」

「当然。気付かれてからじゃ遅いのよ？」

「……分かった。」

その夜。とある街角で待ち伏せしていた、士郎・セイバー・凛。

どうやら、アーチャーは置いて来た様だ。…流石に昨日の今日で、会わせるつもりは無いらしい。

その内、のこのこと現れた待ち伏せ相手。先ず、凛がガンドを撃つ。その対応如何によっては…

そして……矢張り現れたサーヴァント……魔女（キャスター）。瞬時に戦闘態勢に移行する皆。

キャスターのマスターであった葛木が、セイバーと対峙した。

カイトじゃあるまいし、幾ら何でも無謀だ…と思ってた士郎達を衝撃が襲った。

……セイバーが負けたのだ。…その隙を突いて、士郎が吹き飛ばされ、凛が襲われている。

「……くっ……俺は……俺は…！！！俺に凛を助ける力を！！！！！

俺には無いと……持ってないと言うならば……持ってくるだけだ！！！

――投影（トレース）　開始（オン）」

そして凛を助ける為に、士郎が投影したものは……干将莫耶。

あの弓兵（アーチャー）が愛用している夫婦剣である。

しかし、矢張り急造な為か…構造が甘かった為、あっさり数合で壊された。

だが、それで充分だった。…その間にセイバーが回復出来たのだから。

状況を不利と悟ったキャスター達は、撤退し柳洞寺に籠もりっ切りになった。

そして、帰宅後。ランクが低いとは言え、宝具を投影した士郎に、調子の程を問う凛。

身体に異常は見られない事に安堵する一行。最後に士郎に注意を促して寝る二人。

さしもの士郎も、今日は鍛錬は止めて寝ようとさっさと床に着いた。

……その夜、地獄を味わった。

そして、その翌朝。……案の定、身体に異変が起きていた。

いつもの士郎に有るまじき行動…皿を幾つも割っていた。…流石に食事当番を交代させられた。

そして、学校を暫く休む事を虎に伝えた士郎。桜の看病を続ける様に頼まれ承諾を得た。

その後、蔵に入りいつもの鍛錬を始めようとするが、セイバーに乱入され、中断した。

セイバーと話してる内に、お互いの望みの話になった……。

何故か……とても不穏な空気になっていた時、今度はアーチャーの乱入を受けた。

あの不意打ち以来、初の顔見せだ……当然、一日二日ではその嫌悪感は払拭出来ない。

何用か分からず警戒していると、突然アーチャーが士郎にアドバイスと手助けをして来た。

……これ以上の足手纏いになられるのは御免だと言って。……ツンデレ？

士郎の治療が終わった後、アーチャーが先程の会話について吐露した。

……お前達の望みは間違っていると。……それでは、自分達が救われないと。

己すら救えない者には、誰も……何者も救えないと…。

そう言い、彼は又、屋根に登り監視を続けた。……後に残された主従を置き去りにして。

……そして。無言で遙か遠くを見詰めているアーチャーに話し掛ける者が一人。

「よう。」

「……カイトか。……何用だ。」

「いや？特には。…只、単にお前と話しに来ただけさ。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……カイト？…私と何か話しに来たのでは無いのかね？」

「ああ、そうだよ。」

「…では、早く話してくれ。……流石に、気が散るのでな。」

「へいへい。……相変わらず矛盾してるね？お前。」

「……先程の事か？」

「…まぁな。……まぁ、理由も……その気持ちも分かるけどな。」

「……。」

「…万全の状態でない自分と闘っても、何の鬱憤も晴らせない。

それでは、八つ当たりに来た意味が無い……と。」

「……貴様も八つ当たりしたのだろう?…オレよりも遙かに残酷に。」

「ああ。……だから言ったろう?気持ちは分かると。」

「……ならば……邪魔をする気か?」

「いいや。……まぁ、頑張って思いを成就させればいいさ。……出来ないけどな。」

「……『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』……か。」

「そういう事。……お前も、矢張り間違っているという事さ。

……まぁ、俺からはそれ以上言わないよ。後は自分で気付きな。」

「……。」

「……本当にお前等主従は頑迷だねぇ……だが。……一つ言うとしたら。」

「……何だ？」

「お前達は確かに正しい。……だが、その正しさは間違っている。
今度こそ正しく間違えろ。

……それが、お前達三人の使命であり、宿命だ。

篤と胸に刻め……運命（Ｆａｔｅ）に抗いし子等よ。」

そう言い、アーチャーの返事も聞かず、さっさと下に降りる救世主（カイト）。

「……カイト……矢張り……お前は……。」

その言葉の後に、どんな言葉を続けたかったのか……

それは……未だ答え無き迷い子（アーチャー）には……分からなかった……。

デート……そして……（ＳＨＩＲＯＵ’ｓ　ｄａｔｅ　…ａｎｄ…）（前書き）

現時刻（００：５０）
ＰＶ：６５０，２９８アクセス　ユニーク：６１，３５８人
皆様、いつも有難う御座います。

御陰様で、６０，０００人突破致しました！！！！！

最近、隔日で投稿する事が多くなってしまいました。

それと、良く見直したら、５０，０００人突破した際、特に何も言ってませんでしたｏｒｚ

併せて、陳謝致します。それと同時に、ユニーク御礼申し上げます。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

デート……そして……（ＳＨＩＲＯＵ，ｓ　ｄａｔｅ　…ａｎｄ…）

ｓｉｄｅ：衛宮家

士郎達三人が、答えを得られないで居る内に、時は徒に過ぎ行き夕方頃、桜が起きた。

「……救世主（メシア）。桜が起きました。」

「お。そうか！んじゃ、ちょっくら士郎達を呼んで来るよ。」

「……先輩。」

「おう、桜。本当に良かった……。大丈夫か？何処も身体に異常は無いのか？」

「……はい。……済みません。御心配をお掛けして……。」

「ばか、何言ってるんだよ。家族なんだから、心配するのは当たり前だろ？」

「……はい……ありがとうございます。」

「……桜？…一応、士郎だけじゃなくて、私達も居るんだけど？」

「…あ。……済みません，……お早う御座います…遠坂先輩。セイバーさん。」

「はい、お早う。桜。」

「お早う、桜。」

「……。」

いつもの桜の優しい微笑みに、皆ホッと安堵した。

「……桜。」

「あ……ライダー……。……そう……もう……遅いのね。」

「……桜。気絶する前の事を覚えていますか？」

「……ええ。……カイトさん？あの時、一体私に何をしたんですか？」

「ん？……未だ、内緒。まぁ、後で桜とライダーには教えてあげるよ。」

「……いいから教えなさい、カイト。」

「……未だ、内緒……つったろ?何れ話してやるよ。少しくらい待とうや。」

「……聞こえなかったの?私は教えなさいって言ったのよ?貴方の知っている事の全てをね。」

「だが断る。」

「……！！！」　ドンッ！

「……無駄だぞ?凛。俺には、宝具すらも無意味だ。」

「……クッ……！この化け物……！！！」

「……オイ、テメェ……今、相棒になんつった?」

「…え？」

「今、何て言ったって聞いてるんだよ？」

「あ……え…と……その……。」

「テメェが相棒の何を知っている？……糞小娘風情が……それとも……

えそかんな？」に死にて

“あ……あ……あ……”　ガクガクブルブル

「……其処迄にしておけ、紅蓮。」

「……相棒。」

「俺は別に気にしちゃいないさ。……だから、お前等も気にするな。……これは命令だ。」

「……ちっ……分かったよ、相棒。」

“……ハァハァ……。”

「まぁ、という訳だ。済まんが、今は未だ話せない。…勘弁しろよ？」

“……。”

「んじゃ、ゆっくり休んでな、桜。後で黄宇にお粥か何か作って貰うからさ。」

「……あいつら……本当に、一体……何者なの……？」

「……ライダー達、サーヴァントまで身動き出来ないなんて……。」

「……。」

「……それより、桜。…大丈夫ですか？……相当強烈な怒気でした。身体に差し障りは有りませんか？……未だ病み上がりなのですから。」

「…私は大丈夫よ、ライダー。……先輩……済みません。」

「ん？ライダーの事か？……確かにそれなら、凄く驚いたけど…でも問題無い。

俺は気にしてないよ。ライダーなら、桜が目覚める迄、ずっと大人しくしていてくれたから。」

「……そうですか……。有難う御座います…先輩、ライダー。」

「…ああ。」「……お気になさらず、桜。」

その後、黄宇がお粥を持ってくる迄、喧々囂々と六人でカイト達について鳩首凝議していた。

その日の夕御飯で、回復祝いとして大虎が大暴れした事は、特筆するまでもない。

そして、翌日。大事を取って桜はお休み。士郎も引き続き休んだ。
凛は登校。

因みに。虎が学校で、桜が目覚めた事を大々的に言った為、見舞い組が殺到しそうになったが、

虎の咆哮で、全員押し止まった。その代わり、衛宮家の電話がほぼ引っ切り無しに鳴り続き、

皆、少々ノイローゼ気味に成り、帰って来た虎はしっかり制裁(メシヌキだ)されたとか。

その夕食後。

「ぅぅぅ～～～……わたしのごはん～～～……（〒Ａ〒）」

そう唸りながら、床に転がっている虎を尻目に、皆して会話していた。

「所で、みんな明日何か予定ある？」

「…明日……ですか？……私は特に有りませんけど……。」

「私も特には無いわよ。……又、何か企んでるの？」

「まぁまぁ。…桜と凛はおｋと。士郎とセイバーは？」

「俺も特には……何時も通りだ。……セイバーは？」

「私も同様です。……メｓ……カイト。……今度は一体何を…？」

「いや、何。ふと思い付いたんだが……士郎、明日誰かとデートして来いよ。」

“な、何ぃぃぃーーーー！！！！！！！！！！”

「な、な、な、お、お前、何を行き成り……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「いや、だからデート。ってか逢い引き。そろそろいいかな…って。」

「…主殿。少々、時期尚早では？」

「え～…もういいじゃない、黄宇姉。私も、もう焦れったくってさぁ……♪」

「ああ。だから、まぁ、いっちょデートでもして来い。」

「で、でも……一体、誰と…？」

「いや、それぐらい自分で決めようぜ？女性陣は、今か今かと待ち構えているけど？」

「……え？」

そう言って、三人を見る士郎。俯きながらも、意味を理解したのか、微妙に顔が赤いセイバー。

そっぽを向きながらも、頬が赤くなってる我等が凛様。……アカイアk…プゲラッ！？

……ゴホン。そして、真っ赤になって俯くも、耳の赤さはしっかり見える桜。

しかし、三人共、士郎の事をチラ見し、ナニカに期待しているのは、モロバレだった。

……ゐ？私情が入ってるって？……ソンナコトアルワケナイジャナイカ。ハッハッハ。

「うっ……；；；；；；」

「な？早いトコ決めてやんな。此処で焦らすのも逃げるのも、反則だぞ？」

「ううう……；；；；；；；；；；；；；；；」

「……ハァ……どうしても決められない、優柔不断な士郎に良い案が有るんだが…。」

「頼む！！！教えてくれ！！！！！」

「……おまえ……まぁいいや。……ゴニョゴニョ……でどう？」

「……ソレ……今以上の地獄じゃ無いだろうか？；；；；；；；；；；；；；；；；；」

「うむ。間違いなく、お前の精神のライフポイントはもう既に０だな♪」

「……他に手は……？」

「無い。」

「……分かった。……俺はもうそれで諦めるよ。」

※→までの会話は、全て小声です。凛達には聞こえてません。御都合主義万歳♪♪

「……セイバー。」「は、はい！／／／／」

「……遠坂。」「……何よ。／／／／」←萌え

「……桜。」「ひゃい！！／／／／／／」

「……ええと。……四人で遊びに行こうか？」

「「「「「……。」」」」」

「……；；；；；あ、あの～……；；；；；；；；；；」

↑大蛇（ヒロイン）三匹＆蛇（メデューサ）に睨まれた蛙（シロウ）

「……はぁ……まぁ、シロウですから。」

「……士郎だものね。」

「……本当に、先輩ですね。」

「ううっ……こ、これでも一生懸命考えたんだぞ？；；；；；」

「どうせ考えたのはカイトでしょ？」

「ですね。シロウに其処迄、気の利いた事が出来るとは思えませんし。」

「……まぁ、先輩ですから…。」

「ううぅっっ……ｏｒｚ」

「……まぁ、私は別にそれでもいいわよ？」

「うぅ～～～……え？」

「……わ、私も……です。……先輩達と一緒に居られるのは、それだけで楽しいですから／／／」

「……私は……シロウを守るのは、私の役目ですから。」

「あ、ありがとう…みんな。」

という事で急遽、明日の士郎とセイバー・凛・桜のカルテットデートが決定した。

後に、隅でこっそり震えているアーチャーの肩を、カイトが叩いて慰めていたとかいないとか。

そして、そのカイトを、女性陣が全員で○時間掛けて、代わる代わる説教していた。

で。翌日。

ｓｉｄｅ：街中

「……どうしましたか？シロウ。」

「…？どうしたの、士郎。」

「…？……あ、あの……先輩？」

「……え？…あ、いや……うん。…何でもない。」

「「「？？？」」」

……どうやら、当日になって、事の重大さに気が付いた様である。

……遅っ…てか、鈍っ。

只今、新都心に来ている。「どうせ、デートプランなんて考えてないんでしょ？」

と、朝駆けに凛に言われ、あっさり降伏した士郎は、

今日のデートプランを完全に凛に任せていた。…ヘタレ乙。「しょうがないだろ!?」

「…シロウ?どうかしたのですか?急に大声を出したりして。」

「……いや、何でもない。……何か、今、無性にカイトを殴りたくなって来ただけだ。」

「私は何時でも、殴り飛ばしたいわよ…あいつだけは。」

「心底から同意します、凛。」

「……アハハ……;;;;」

「へーちょ。」

「……；；；何つう嚏（くしゃみ）をしてるんだよ、相棒。」

「え？これは、あずまｎ」「ストップです、カイト様。それ以上は。」「サーイエッサー。」

「……それで？何故に私まで、この様なストーカー紛いの事をしなければならないのかね？」

「うむ。要約すれば、こまけぇこたぁいいんだよ！…って事で。」

「…アーチャー？私の桜が、何処の馬の骨とも知れない輩に、絡まれても構わない…とでも？」

「……ハァ。」

「……アーチャー。……今日は飲みましょうか？」

「……ああ、龍斗。トコトン飲もうか。」

何故か、がっちり握手している弓兵（ツッコミよういん）と龍斗であった。

「それよりも、あいつら……動くぞ……！」

「よし。では、追い掛けようか。」

「……何気に黄宇姉もノリノリよね…；」

「水薙お姉ちゃん！急がないと、見失っちゃうよ！」

「そうそう！行こうぜ、水薙！！」

「……鋼牙に紅蓮もか……；；；；」

「……諦めましょう、アーチャー。私は既に諦めています。」

「……；；；；；本当にそれでいいのか？」

「……アレでも、一応家族ですので。」

「……了解した。私も諦めて、協力するとしよう。」

「……感謝します。」

その後、一瞬で姿と気配を消した一行……八人程が、皆の注目を浴びてる四人を尾行（デバガメ）していた。

ｓｉｄｅ：喫茶店

「……つっ……疲れた～～～……ｏｒｚ」

「…だらし無いわねぇ……。未だ、二～三店見回ったばかりよ？これぐらいでへこたれないの。」

「……無茶言うなよな……。」

「…せ、先輩……大丈夫ですか？」

「ああ。……ありがとう、桜。」

「……；凛……本当にシロウは大丈夫なのですか？」

「大丈夫大丈夫♪男の子なんだし。それに未だ、無理な事はしてないもの♪♪」

「……同じだろうに……（ボソッ）」

「あら。無茶と無理は違うわよ？」

「……どう違うってんだよ…？」

「無茶は愉しんでするもの。無理は苦しんでするものよ？」

「……ハァ……。」

只今、喫茶店でお休み中。……此処に来るまで……それはそれは、とても悲惨な事態だった。

普段は、極力意識しない様にしていたが、其の実、とても注目を浴びまくっていた。

蒼金に純白がとても映える、清楚な雰囲気のセイバー。

真紅に身を包んだ、美人としか言い表せない、無（？）邪気な雰囲気の遠坂凛。

黒と紫でコーディネートされた、幼さの中にも妖艶さが垣間見える間桐桜。

三者三様の色取り取りの華が、彼方此方歩き回る度に、注目↓固まる↓溜息↓シロウガン見の四連コンボが、常に付き纏った。カイトの言った通り、３０分程で、精神がへたれた。

「……もう……情けないわねぇ……。」

「……。」

到頭、無言の行に突入した士郎。……まぁ、無理も無い。

今、士郎は改めて、三人の美少女達とデートに来てると、実感して縮こまっているのだから。

「……あの……先輩？…やっぱり楽しくありませんか？」

「…え？い、いや、そんな事無いさ。うん。充分楽しんでるよ。」

「……でも……そもそも、カイトさんが言い出した事ですし……先輩には迷惑だったんじゃぁ…。」

「いや、それは違うぞ、桜。……確かに、言い出しっぺはカイトだったけど、

デートしたいって思ったのは、紛れも無く俺の意志だ。俺は本当に楽しんでる。

だから、そんな事は無い。気にし過ぎだぞ？桜。」

「……はい…。ありがとうございます……先輩。」

「…大丈夫よ、桜。こいつ、只、単に気後れしてるだけだから♪」

「……え？気後れ……ですか？」

「そう。…どうせこいつの事だから、今まで大して意識しない様にして来たんでしょうけど、

デートって事になって、改めて良く考えたら、自分の周りには美少女三人組みが居た。

それに気付いて、ちゃんと女の子と遊んだ事無いのに、どうしたらいいんだろう？

……ってな所じゃない？し・ろ・う？」

「…………そうだよ。悪いか？女の子と遊んだ事が無くて。」

「……／／／／／／／／／」「……／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……へぇ……♪♪」

「…な、何だよ……その物凄く嬉しそうな、良い玩具を見付けた♪って顔は……。」

「あら、珍しい。当たったわよ？そのものズバリ♪」

「…………何が言いたいんだよ？…てか、何で、セイバーと桜は顔が赤くなってるんだ？」

「だって……士郎……私達が美少女って事は否定しなかったもの♪♪」

士「うっ……／／／／／／」セ「／／／／／／／／／／／／／」桜「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ねぇねぇ……そこんとこどうなの？」ニヤニヤ

「…………ああ、そうだよ！お前達三人共、綺麗で可愛くて美人だから、

気後れしてるんだよ！！！悪いか！？／／／／／／／／／／」

「あ～あ…。到頭、耐え切れなくて、ぶっちゃけちまいやがった。」

「…全く情けないわねぇ……。いい？鋼牙。あーゆー情けない男の子になっちゃダメよ？」

「は～い♪」

「……おいおい。鋼牙にあんま変な事、吹き込むなよな？水薙。」

「うっさいわよ！紅蓮。……それにしても、可愛いわね…あの娘達。」

「……確かにな。真っ赤になって思いっ切り照れている。……士郎共々。」

「……これはダメですねぇ……本末転倒も甚だしい。」

「……お前、意外と厳しいのな？龍斗。」

「飽く迄も只の経験則です。……あなたとて、分かるでしょう？紅蓮。」

「いや、そりゃ分かるけどもよ……。」

「……桜……とても可愛いです。」

「……やっぱ、凛が一番可愛いな♪」

「…む…。」「…何…？」　バチバチ

「やりますか？」「やらいでか。」　ガシッ！！

「止めなさい、二人共。」　ゴン！　ゴインッ！！！

「「痛い……。……ゴメンナサイ。」」

「宜しい。」

「…てか、黄宇？俺の時だけ、威力高くない？」

「愛故です。我慢なさい。」

「そうか、愛か。愛ならばしょうがない。」

「……ホントに良いのか？それで……；；；；；；」

「ぴぴるぴるぴｒ」「カイト様。」「アイアイサー。」

「……。」

「お～い…アーチャー……。何時迄落ち込んでんだよ。」

「……。」

「……そうか。」　ポンポン

落日（アーチャー）の弓兵の肩を叩いて、慰めるカイトであった。

その後、喫茶店を出た面々は、当初の凛の予定通りに辺りの店を見て回った。

アクセサリー店では、凛と桜の競艶に見惚れ。

縫いぐるみ店では、獅子に食い付いたセイバーの可愛さに、改めて惚れ直し。

……そして今、公園で、疲れ果てた士郎が寝そべり、それを見て微笑む三人娘。

……うむ。士郎……というか、リア充核爆発すればいいのに。

「……（ぶるるっ！）？」

「？どうしました？先輩。」

「いや……なんか、非常に寒気が……？」

「…大丈夫ですか？シロウ。」

「…ああ。……多分、気の所為だと思う。」

「……全く……。それじゃ、お昼にしましょ♪」

そう言って、自分がシロウに持たせたバスケットを開かせる凛。

そして、昼食中、士郎を肴に盛り上がるガールズトーク。

昼食後、疲れの為か、小一時間程、寝てしまった士郎。

そんな士郎を、優しい微笑みで見る三人。

そして、士郎を起こさない様に、順番にそうっと膝枕をしつつ頭を撫でる三人。

そんな光景を見て、歯噛みする他の人達。

独り身は勿論、カップル迄も羨ましがってた。……いや、ならお前等もやれよ。

「……士郎兄ちゃん……気持ち良さそう。」

「……ほら、鋼牙。…おいで？」

「うん♪……黄宇お姉ちゃんの膝枕…気持ち良い♪♪♪」

「……そうか…。」　さら……さら……

「……えへへへ～～～♪♪♪♪♪♪」

「……ああ……桜。……あれだけで満足出来るとは……そんな奥床しい所も素適です。」

「……凛……そのツンデレっぷりが最高だ……ＧＪΣｄ！！！！！！」

「…む…。」「…ぬ…。」　バチバチバチバチ

「やりますか？」「やらいでか。」　ガシッ！！

「……御二人共、御止め下さい。」　ゴインッ！　ガゴンッッ！！！！

「「……痛い……ゴメンナサイ。」」

「分かって頂ければ、宜しいのです。」

「……なあ、龍斗？」

「？何でしょうか？カイト様。」

「……最近、お前等……俺に対するツッコミに容赦無い…って言うか……酷くなってない？」

「それも、カイト様への愛故です。御諦め下さい。」

「愛ならばしょうがない。」

「いいのかよ。」

「……それにしても……龍斗？……お前が『愛』……ねぇ……？」

「……な、何か？」

「いやいや？……ねぇ？」

「……ですから、何でしょうか？」

「いやいやいやいや？…………お前は本当に可愛いなぁ…と思ってね♪」

「……余り、御戯れになりませんよう／／／／／／／／／」

「くっくっくっく………その赤い顔をどうにかしたらな？」

「か、カイト様！！！／／／／／／」

「……ね？萌えるでしょ？ライダー。」

「………はい。とても素晴らしいですね。」

「………おまえら………。」

「………。」

「……お～い…アーチャー…………お前も顔真っ赤だぞ？……思い出したのか？」　ニヤニヤ

「…………………／／／ん、ゴホン！」

「くっくっく……お前等、ホントに可愛い奴等だねぇ………。」

その後、ようやく起きてテンパった士郎を、皆で揶揄いながら宥め賺し、デートの続きをした。

ゲーセンにバッティングセンター、洋服売り場に下着売り場、化粧品屋に眼鏡屋……ｅｔｃ．

色んな店を渡り歩き、夕暮れ過ぎ、そろそろ藤村先生もお腹が空く頃だと桜が言い、

デートはお開きにし、衛宮家に帰る事にした。

……そして……

そんな和気藹々とした浮かれた気分の儘、衛宮家に帰った皆を待っていたのは……

「あら。……意外と遅かったのね？貴方達。……もう少し遅かったら、殺しちゃう処だったわ。」

……誰もが、認めたくない現実だった。

「藤村先生！！！」

「大丈夫。眠ってるだけよ……今は…ね。」

「……キャスター。……藤ねえを返せ。」

「さて。……どうしましょうかしら？」

「……俺が代わりに人質になる。……だから、藤ねえを放せ。」

「……そう。……なら、おいで？坊や。」

「「「シロウ（士郎・先輩）！！！」」」

「……ゴメン、セイバー、凛、桜。」

そう言い、キャスターに近付く士郎。

「…ほら、これでいいだろ?…早く藤ねえを放せ。」

「…ぷっ……アハハハハハ……あなた、本当にお馬鹿さんなのねぇ!!…いいわ。

あなたのその馬鹿さに免じて放してあげる。」

「藤村先生!!!」

「……じゃあ……さようなら。」

そう言い、手に持ってる歪な剣で、士郎を突き刺そうとした……

…が……

「シロウ!!!!!」

「な!?セイバー!!!!!」

「…あ……アハハハ……アハハハハハハハハ……!!!!!これはいいわ!!!!!

思わぬ獲物が引っ掛かってくれたわね!!!!!…さあ、セイバー!!!!

貴女の手で、自分のマスターを殺しなさい!!!!!」

「くっ……セイバー!!!!」

「……し…シロウ……逃げて……逃げて……下さい…!!!!!

！」

「士郎！！！今は、逃げるわよ！！！！！」

「先輩！！！！！」

「くっ……くそおおおっっ！！！！！」

ガラッ！「どうした！！！士郎！！！！！」

「カイト！！！！！！セイバーが！！！！！！」

「何っ！！……！キャスター！！！！！」

「クッ……！……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』が相手では……流石に分が悪いわね……。

……まぁ、いいわ。此方の目的は達成出来たのだから。」

その言葉と共に、姿を消す、キャスターとセイバー。

「……セイバー！！！！！！必ず…必ず助けてやるからな！！！セイ

バー！！！！！！！！！」

「あんた達！！！一体、今まで何処で何やってたのよ？！？！？！？！」

「その話は後だ！！！恐らく、今のあいつらの陣地は教会だ。」

「教会！？何でよ？！あいつらの陣場って居る処は柳洞寺でしょ？！」

「いや、彼処は、他の奴の襲撃によって既に落とされた。今は、教会に立て籠もっている筈だ。」

「何処の教会よ!?」

「……言峰綺礼の居た教会だ。」

「な!?そ、それじゃあ、綺礼は?」

「……言ったろ?落とされた…って。」

「それがどうし……はっ……まさか!?」

「……そう、その通り。柳洞寺を落としたのは、ランサーのマスター…言峰綺礼だ。

そして、その無人の教会にキャスター達が逃げ込んだんだ。」

「……そう。……そういう事だったのね……。あの野郎……。」

「詳しい事は後だ！今は、急いで、教会に行くぞ！！黄宇！お前達五人は、此処に残ってくれ。

今の二の舞は避けたい。お寅さんに、桜とライダーも守ってやれ。命令だ。」

「「「「「畏まりました。我等が主。」」」」」

「……主…ってどういう事だ？…お前達、家族じゃ無いのか？」

「話は後だと言ったろう！！！…行くぞ、教会に！準備は良いか？！」

「こっちは大丈夫だ！」

「私もよ！アンタは？！」

「無論、何時でも戦闘に入れる。」

「では、行くぞ！士郎、凛、アーチャー！！言峰教会へ転移する！！！！！」

……物語も……到頭、終盤に差し掛かって来た……。

果たして……救世主（カイト）達は……

誰をも……何者をも……

そして……全てを救えるのか……。

空は……俄に……雷雲の様相を呈して来た。

デート……そして……（ＳＨＩＲＯＵ，ｓ　ｄａｔｅ　…ａｎｄ…）（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、アルニスは襲撃頃、不貞寝してましたｗ出歯亀に対する、ストの様なものですｗ

まぁ、カイトが居れば、大丈夫だと言う、信頼の表れ故…でもあるのですが。

それと、次世界への御要望・募集については、未だ御待ち致して居ります。

何方でも構いませんので、どうぞ、御気軽に御一報下さい。

その為だけの御感想でも、一向に構いませんよ？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

廻り出す運命（Ｆａｔｅ／ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ）（前書き）

現時刻（０９：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：６６８，１３２アクセス　ユニーク：６２，９４２人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

廻り出す運命（Ｆａｔｅ／ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ）

Ｓｉｄｅ：教会

「…着いたぞ。」

「セイバーは一体、何処なんだ？！」

「落ち着きなさい！士郎！！」

「…クッ……！！分かってるけど…！でも！！」

「…カイト！何処か分かる？！」

「……ああ。恐らく、こっちだ！来い！！」

「……此処だな。……下から、魔力が漏れ出しているのを感じる。……恐らくセイバーだろう。」

「良し、分かった！行こう、みんな！！」

「……済まんが、俺は此処に残る。」

「「な!?何故?!?!」」「……。」

「何時、他の敵が漁夫の利を狙って攻めてくるか分からない。その対策だ。

助けられたとしても、出口を塞がれては意味が無いだろう?」

「……分かったわ。…じゃぁ、そっちはお願い。…行くわよ!士郎、アーチャー!!」

「分かった!」「……了解した、マスター。」

「……さて。上手くやってくれよ…?メディア。……そして……

ちゃんと裏切れよ?……正義の味方(アーチャー)」

「……くそっ……。」

「…ん？…どうした、士郎。……アーチャーも居ないが…？」

「……アーチャーなら、私達を裏切って、キャスター側に着いたわ。」

「……そうか。」

「……驚かないのね。」

「……まぁな。……あいつならば、しそうな事だからな。」

「……カイト！！！分かってたなら、何で！！！！！！……いや……済まない……。」

「……気にするな。……取り敢えず、家に戻るぞ。」

「「……分かった（わ）。」」

「…あ！先輩！！！……セイバーさんは…？」

「……済まない……桜。」

「……いえ。……先輩達が無事に戻って来てくれただけで……私は充分です。」

「……ごめん。」

「……それで？……これから、どうするつもり？カイト。」

「…何故、俺に聞く？」

「どうせ、アンタの事だから、次の手も、次の次の手も考えて居るんでしょ？」

「……まぁな。」

「やっぱり。…だから、それを早く教えなさいって言ってるの。…余り時間は無いんだから。」

「……判った。……次の手は……イリヤだ。」

「…イリヤ？……そうか！バーサーカー！！！アイツが仲間になってくれれば！！！」

「……そう上手く行くかしら？…忘れた？士郎。最初に襲って来たのはイリヤよ？」

「……分かってるさ。……でも、あいつは俺の妹だ。話せばきっと解ってくれる。」

「……全く。……アンタのお人好しには、ほとほと参るわよ。」

「……ゴメン、遠坂。……でも、俺は……。」「はい、ストップ。」

「…え？」

「……誰も反対なんて言って無いでしょ？……現状では、それが恐らく、最もベターよ…。」

「……そうか。……有難う……遠坂。」

「……別に、アンタの為じゃ無いわよ。……セイバーを助けて、あ（ア）の糞（ーチャー）バカをぶっ飛ばす為よ。

其処ントコ、勘違いしないようにね？」

「…ああ、分かってるよ。……遠坂が本当は、優しい女の子だって事ぐらいは。」

「だ、だから、違うって言ってんでしょ!?／／／／／／」

「ああ。……それじゃぁ、行こうか。……カイト?……どうかしたのか?鼻なんか抑えて。」

「……グフッ……い、いや……何でもない。」　ツンデレＧＪΣｄ!!!

「……そうか?……なら、早く行こう!」

「ちょっと待った。士郎。」

「何でさ!早く行かないと!!」

「…凛。セイバーは後、どれぐらい持ちそうだった?」

「……恐らく……持っても後、二日以内よ。」

「……なら、明日の朝一番に行くぞ。」

「何でさ!!!セイバーが助けを待ってるのに!!早く行かないと、セイバーが!!!!!」

「馬鹿者！！！！！落ち着かんか！！！！！！戯けが！！！！！！！！！！！！！

己が身体の現状すら理解出来てない阿呆共が！！！！！！！！！！！！！

今の、貴様等など、囮にすら使えんわ！！！！！一晩休んで、英気を明日の為に養え！！！！」

「そんな悠長な事…！」

「……分かった。私はもう寝るわ。」「遠坂！！！！」

「カイトの言った通りよ。…今の私達は、少し疲れ過ぎている。これでは、却って足手纏いよ。」

「でも！！！」

「……カイト。」「…了解した。……水薙。」

「イエス、マスター。……聞き分けの悪い子は眠りなさい…。」

「な!?……くっ……くそっ……。」

「……こいつは、俺が運んで見張っておく。……お前も、眠らせて貰うか?凛。」

「…結構よ。……じゃ、そいつは頼んだわよ?……お休み。」

「ああ。…お休み、凛。」

そして、翌日。

「……ん……ここは……はっ!そうだ!!セイバー!!!」

「落ち着け」　ゴンッ!

「痛ぇっ!!……カイト?……俺は……何で……?」

「……覚えてないのか?お前が独りで出て行きそうだったから、水薙に命じて眠らせたんだ。」

「…そうだった…。…！セイバーを早く助けないと！！！」

「だから、待たんかい。」　ドゴッ！

「……痛い……。何すんだ！カイト！！！」

「ド阿呆！！！急いて失敗しては、元も子も無かろうが！！！戯けが！！！！！」

「くっ……分かってる……分かっているけど……！！！」

「……ならば、今は俺の指示に従え。まずは、顔を洗ってから、飯を食え。話しはそれからだ。」

「……くそっ…！！！……待っててくれよ…セイバー…。必ず、お前を取り戻すからな…！！！」

「……良し。皆、飯喰ったな？トイレ、手洗いは済ませたな？ハンカチも持ったな？」

“何処に遠足に行く気だ（ですか）！！！！！！！！！！！”

「うむ。いいツッコミだ。どうやら、調子は万全の様だな。」

“……他の方法で確認してくれ（下さい）……ｏｒｚ”

「ほれほれ。項垂れていないで。……そろそろ、行くぞ？」

“…了解。”

「では、黄宇達は引き続き、家の護衛を頼む。……序でに、藤村家もな。」

“畏まりました、我等が主。”

「良し。……では、行くぞ。士郎、凛。」

「ああ！！」「ええ！」

side：アインツベルンの城

今、この城に、招かれざる敵が来ていた。

「……あなた……何者？」

「…フン。器風情が……我（オレ）に誰何するな。分を弁えろ、雑種が。」

「……いいわ。あなたみたいな、失礼な人なんて、知りたくもないわ。

やっちゃいなさい！バーサーカー！！！」

「了解した、主！行くぞ！！！ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

「…馬鹿な！？！？バーサーカーが言葉を話す…だとぉ…！！！！」

「ウオオオオ！！！！」　ドゴガオォォンッッッッッ！！！！

「……オノレ、雑種！！！！天の鎖（エルキドウ）！！！！」

「グゥゥゥ！！！！この様なもの…！！！！何？！！…引き千切れん…だと……！？」

「答えろ！雑種！！！！何故だ……何故、バーサーカーたる貴様が、言葉を語れるのだ？！！」

「グゥゥ……貴様も知っているであろう……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』からの賜物だ。」

「…何ぃ……?!……そうか……奴か……。なれば、貴様も……という事か?」

ギルガメッシュが、何かを考え、ヘラクレスへの攻撃を躊躇っていると……

「……そういう事だ。……ギル。そいつも、殺して貰っては困るのでな。」

当の本人から、その答えを聞いた。

side：森の手前

「…着いたぞ。」

「……此処は……森の手前？」

「…何で、中に直接入らないんだ？」

「…まぁ、礼儀みたいなもんだとでも、思ってくれ。…んじゃ、入るぞ。」　スッ…

「…それじゃ、俺も。」　スッ…バチッ　「…つっ……？何だ？今の。」

「…そいつは、訪問客を知らせる、言わば呼び鈴の様なものだ。

……今ので、イリヤに俺達が来た事を知らせたんだ。」

「……そういう事か。……？なら、何でお前の時は何でも無かったんだ？」

「俺は既に一度来ているのでな。……俺には、二度同じ方法は効かないんだよ。」

「……成る程。……それで、私達に此処の結界を潜らせようと画策

した訳ね？」

「そういう事。……お前も早く潜んな。」　（ニヤッ）

「……まぁいいわ。……！！アババババ！？！？！？」

「と、遠坂！？！？！？！？！？」

「ぶわっはっはっはっは！！！！！！！！！！！！！！や、やっぱりな！！！！！

絶対そうなると思ったぜ！！！！！！アッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！！！！！！」

「……一辺、死になさい？カイト。」　ドドドドドドドド！！！！！

「…ヒーッヒッヒッヒ……だ、だが、こ、断る……ブフゥッ！！」

「くそっ…！！！このトンでも出鱈目化け物！！！！！！！！！！」

「あ～～～……マジ腹痛ぇ……ｗｗｗｗイリヤ、ＧＪΣｄ！！！！！！！！！！！！！」

キラッ☆　　――何故か、空にイリヤの幻影が浮かんで見えた士郎と凛であった。

……無茶しやがって……。

「……取り敢えず、この怒りはイリヤにぶつけるとしましょう…。」

「……ええと……遠坂さん？……あの、一応、俺達、協力を頼みに来てるんだけど……；；；；」

「……何か？」

「イエ、ナンデモゴザイマセン。」

「……カイト。行くわよ……早くしなさい。」

「アイアイマム。…んでば、城前まで、ちょっくら転移…っと。」

「…到～ちゃ～く。……ん?…どうやら、お取り込み中らしいな。」

「……そうみたいね。」

「……バーサーカーは判るけど……あいつは……一体何者なんだ?」

「……人間……にしては……何か変ね……。…?……カイト?」

「……あのバカタレめ……。……出張るなと釘を刺すべきだったか……。」

「……カイト……お前、あいつを知ってるのか？」

「……ああ……良く知っている。……あのド戯けめが。ちょっと、行って来る。」

「あ、ちょ、ちょっとカイト？！」「お、おい！！待てよ！！！」

「…何ぃ……？！……そうか……奴か……。なれば、貴様も……という事か？」

「……そういう事だ。……ギル。そいつも、殺して貰っては困るのでな。」

「何?!……貴様……救世主(メシア)!!!」

「……ギル。……今、お前が思った通りだ。……此処は退け。」

「……そうか。……だが、我(オレ)にも事情があってな。」

「…事情？……其処で怯えて震えている、糞の役にも立たん羽虫の事か？……なぁ？慎二。」

「……オマエ……巫山戯るなよ！！？」

「「な！？慎二（間桐君）！？！？」」

「……ギル。貴様ともあろう者が、そんな木っ端風情の言う事など聞くな…戯けが。

……まぁ、貴様がそいつを気に入るのは、分からいでも無いが……

それは、貴様の格を貶めるだけの、碌でもない代物だぞ？

……貴様にそれぐらい、判らない筈も無かろうが。……幾ら何でも道楽が過ぎるぞ？」

“それこそ、幾ら何でも言い過ぎじゃ無いのかな？；；；；；；；”

……その言葉を聞いた全員が、思わず慎二に同情してしまった。

しかし、そんな周りの思いにも構わず、話しを続ける、救世主（カイト）と英雄王（ガメッシュ）。

「…まぁ、そう言うな救世主（メシア）よ。これも、マスターからの命だ。…

…それに、貴様の言う通り、

我（オレ）は、此奴の在り様は気に入っているのでな。……まぁ、許せ。」

あの高潔で傲慢な英雄王が、言葉だけとは言え、謝意を示した事に驚く慎二。

……だが、矢張り皆を無視して話は続けられる。

「……フン。理解しながらも、従うか。……まぁいい。それは貴様の勝手にすればいい。

…だが、ギル。……此処は退け。……聖杯ならば……貴様の直ぐ側に有ろう？

嘸かし、貴様等にとっては極上のモノとなろうぞ。……まぁ、一滴も注がせる気は無いがな。」

「……成る程な……。確かにそうだ。……我(オレ)も、一度奴の元へ戻り、聞いてみるとしよう。」

「ああ…そうするといい。……イリヤとバーサーカー達は、俺が貰って行くぞ。……いいな？」

「構わん。……貴様に匿われては、こちらもおいそれと手は出せぬな。それも伝えておこう。」

「……早く行け。……其処の二人にも手を出すなよ？……ギル。」

「分かっている。……行くぞ、慎二。」

「な！？お、オマエ！？この僕に命令するのか？！今のマスターはこの僕なんだぞ？！？！」

「……慎二よ。…今は退くのだ。今の我（オレ）では、奴には勝てん。

その為にも、あいつに我（オレ）の力を高める方法を、一つ試して貰うのだ。

……今の儘では、犬死にだぞ？死にたいのならば構わんが……此処は素直に退いておけ。」

「くっ…！！！……分かったよ…。その代わり！！！次は必ず勝てよ！！！！！」

「了解した……マスター…。……そういう事だ。……ではな?……宿敵(とも)よ。」

「ああ。……我等の決着は、相応しき舞台にて。……忘れるな?ギルよ。」

ｓｉｄｅ：引き続き、アインツベルンの城

アイツ(ギル)が慎二と共に去り、急にシンと静まり返った玄関。

すると、未だ天の鎖(エルキドゥ)に繋がった儘のヘラクレスを一瞥し、舌打ちをして近付くカイト。

「……あのバカタレめ……少し待っていろ、レス。……どうだ？」

「……うむ。……これで、ようやっと動ける。」

「「ば、バーサーカーが喋った！？！？！？！？！？」」

「……は？……何だ？イリヤ。…お前、あの時レスに話させなかったのか？」

「……ええ。その方が面白いでしょ？……所で、レスって何よ。」

「え？こいつの愛称。ヘラクレスだから、レス。」

「……救世主（メシア）よ。……その呼び名は止めて貰いたいと、頼んだ筈だが…；」

「だが断る…と言ったろう？……大体、お前等、神話時代の奴等は名前がメンドクサイ。

最高神（ゼウス）やその妻（ヘラ）ぐらいならば、まだ呼び易いが、主神（オーディン）や天照大神なんかメンドイ筆頭だ。」

「……あの方々にそんな事が言えるのは、我が知ってるだけでは、其方ぐらいなものだ…；；」

「フン！！高々、星に縛られている下等神風情が、威張り腐ってる方がどうかしている。」

“…………;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;”

この星(セカイ)の、最高神達を下等神だとばっさり切り捨てるカイトに、皆して滝汗を流していた。

「……そんな事より……其処に居るんだろう？…出て来いよ…ランサー。」

「……チッ…。やっぱり、バレてやがったか……。」

“え?!ランサー!?!?”

唐突の闖入者に驚く面々。しかし、矢張り周りを意に介さず、話し始めるカイト。

「当然だ。……大方、今は敵とは言え、曲りなりにも自分の弟子である凛を守れと
命令されたんだろう?……貴様のマスター…言峰綺礼に。」

「……チッ！……相変わらず、気持ち悪ぃぐらいに何でも知ってやがんなぁ…テメェ。

……ああ、そうだよ！あのコトミネの糞野郎が、令呪まで使いやがって、

其処の嬢ちゃんを守れ…だとさ。…まぁ、オレにも久々にやる気になれる命令だったんでな。

有り難く、言う事を聞かせて貰ってる…という訳さ。」

「……相変わらずの苦労人だねぇ……お前。」

「ホットケ。……んで？……どうすんだ？……どうせ、テメェの事だ。

これぐらいの事は考えてあるんだろう？……オレをお仲間にするかどうか…な。」

「……まぁな。……だが、此処は凛達に聞く事にしよう。……どうする？お前等。」

突然、話を振られた凛達。……だが、想定内だったのか、直ぐに答えが返って来た。

「……私は構わないわよ？……士郎は？」

「……俺は……お前に一度ならず殺され掛けた。……だが、今は猫の手も借りたいくらいだ。

お前が、俺達と一緒に戦ってくれるなら、とても心強い。」

「…だそうだ。…イリヤとレスはどう思う？」

「……私達？」

「ああ、そうだ。俺達は元々、お前に協力を頼みに来たのだからな。クーの件は只の僥倖だ。」

「……そう。……所で、クー…って……もしかして…？」

「ダァーーーッ！！！テメェ！！！！！！その名前でオレを呼ぶなっつったろうガァ！！！！！！」

「だが断る。一々、クー・フーリンなんて言い辛ぇだろうが。クーで充分だ、クーで。」

「……テメェは、やっぱ何時か殺ス！！！！！！！！！！！！」

「さてさて。文字通り、負け狗の遠吠えはおいといて。……どうだ？イリヤ、レス。」

「……；；；……私は、別に良いわよ？」

「…それはどっちに対してだ？」

「……両方よ。構わないわよね？バーサーカー。」

「……然り。我は、我が主の命の儘に。」

「……と言う事よ。……感謝してよね？お兄ちゃん。」

「……ああ。…有難う、イリヤ。」

「…だそうだ。どうやら満場一致で、お仲間決定だそうだぞ？クー。」

「…テメェはどうなんだよ？」

「……言ったろう？満場一致だ…と。」

「……フン。…まぁいい。……んで？これから直ぐ行くのか？」

「ああ。……皆、これから、直ぐにセイバーを助けに、教会に殴り

込みに行く。内訳はこうだ。

恐らく、アーチャーは外で俺達を待ち伏せて居るだろう。相手はクーに頼む。」

「任せろ。あの糞野郎とは、一度、本気で決着を着けたかったんだ。

有り難く、乗らせて貰うぜ。」

「ああ、頼む。士郎と凛は葛木とキャスターを頼む。…あの程度の壁ぐらいは越えて見せろ。」

「……分かった。俺が、葛木を抑えればいいんだな?」

「そうだ。……お前もそろそろ、投影魔術になれろ。干将莫耶程度は何時でも創れる様にな。」

「……ああ。」

「…それで、私があのキャスターね?」

「そうだ。……油断はするなよ?あいつは、全聖杯戦争の中でも、紛れも無く最強の魔女だ。

お前も、魔術を極めようとするならば、あの程度は越えられねば、

第二魔法には決して届く事は無い。……宝石翁よりの試練の一つだとでも思え。」

「……分かったわ。…兎に角、要はあいつをぶちのめせばいいのね？」

「その通りだ。どんな手を使おうが構わん。叩きのめせ。」

「……そう。…解ったわ。」

「…それで？私達は何をすればいいの？」

「ああ。…イリヤには、入り口を見張っていて貰いたい。」

「……それだけ？」

「そうだ。……何時、綺礼やイレギュラー達が攻めてくるとも限らんのでな。

それに、レスの巨躯では、あの地下が幾ら広いとは言っても、少し無理がある。」

「……確かにそうね。……分かったわ。…正直、とても不満だけど。」

「済まないな。…此処は、堪えてくれ。」

「……それで？……私達への指示は良いけど、アンタはどうするのよ？」

「…俺か？」

「当然でしょ？……で？どんな事をしてくれるの？」

「俺は、お前達が戦っている間に、セイバーを守っていよう。」

「……なんですって？」

「俺は、セイバーを守っていると言ったんだ。…キャスターの魔術は相当なものだ。

下手に弄くると、却って危険だ。……故に、セイバーに危害が及ばぬ様、守る。」

「……つまり、アンタは基本的に何もしない…って訳ね？」

「ああ、そうだ。……俺の役割は道を示す事のみ。後は、お前達が自ら、道を切り開け。

それが……お前達の運命（Ｆａｔｅ）だ。」

「……ふん。上等じゃない。……幾らでも、抗ってやるわよ…その運命（Ｆａｔｅ）とやらにね。」

「ああ。只黙って、やられてやる訳にはいかない。俺は必ずセイバーを助けると約束したんだ。」

「……まぁ、どうせ私が勝つ事は決まってるんだし。

……少しくらいなら、遊んであげてもいいわよ？」

「……我は主の命に随う迄だ。」

「ハッ！！…まぁ、オレら英霊にゃあ、あんまり関係は無ぇが……

何処の誰とも分からんモノに、決め付けられるのは気に入らねぇなぁ…！！！」

「……その意気だ。……準備は万全か？士郎・凛・イリヤ・レス・クー。」

“おう（ええ）！！！！！”

「では、行くぞ。……教会前へ、直接転移する。」

……今、又……

新たな運命（Fate）が……

廻り始（うごきだし）めた……。

廻り出す運命（Ｆａｔｅ／ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、リズとセラは、カイトがアルニスに頼み、転移後直ぐに、衛宮家に連れて行って貰っています。

それと、最後のアレは、その場のノリと勢いです。

後で、その時の事を思い出して、

「何であんな恥ずかしい事しちゃったんだろう／／／／／／」

と言って、照れて悶えてる凛を見て、揶揄うイリヤ。

……あ、いかん。自分で書きながら想像してたら萌えて来ちまった……。

……と、私が悶えてる所で締めと致しまして。

今話も御覧頂き、有難う御座いました。

固有結界『無限の剣製（Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ）』（並

現時刻（０３：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：６８８，０３７アクセス　ユニーク：６４，４００人
皆様、いつも有難う御座います。

そろそろ、聖杯戦争も終盤です。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

固有結界『無限の剣製（Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ）』

ｓｉｄｅ：教会前

「…着いたぞ。」

「……相変わらず、便利な能力持ってやがるよな…テメェは。」

「まぁな。」

「……全くだ。御陰で、こちらは休む暇さえ、碌に取れん。」

「……早速のお出ましか。……では、ランサー頼んだぞ。」

「ああ、任せな。」

「……通すと思っているのか……と言いたい所だが、流石にその人数では私にも無理だな。

況(ま)してや、イリヤにバーサーカー……果ては貴様まで居るのだからな……カイト。」

「…まぁ、そういう事だ。此処は素直にランサーと闘ってやれ、アーチャー。」

「……了解した。」

「…という事だ。俺達は、セイバーの所に行くぞ。」

「……分かったわ。……ランサー。あのバカをコテンパンに伸しちゃって。」

「……へっ……言われるまでも無ぇぜ！！！！！」

「…こっちだ。」

「流石は、士郎だな。もう、構造を把握しているとは。」

「……じゃぁ、行って来るわ。イリヤ…此処はお願いね。」

「誰に言ってるの？リン。任せなさい。……いいわね？バーサーカー。」

「…御意。」

「……ハハ……これ以上頼もしい味方はいないな。」

「……さて。和んだ所で行くか。……あちらさんは、もう既に待ち構えている。」

「…ああ！」「…ええ。」

ｓｉｄｅ：教会地下

「あら。本当に戻って来ちゃったのね…。折角拾った命を、投げ捨てるなんて……お馬鹿さん。」

「生憎と、私はあんたと違ってまだまだ若いの。

だから、こんな所で死ぬ訳にはいかないのよ、オバサン。」

「……余程、命がいらないみたいね？……小娘風情が…。」

「……女の争いは恐ろしいねぇ……。士郎達も準備は完了しているな。

……無事か？セイバー。」

「……救世主（メシア）……ですか……？」

「ああ。……良く耐えたな。後、もう少しだ。……士郎達が助けてくれるまでな。」

「……救世主（メシア）……貴方…なら……キャスターの……魔術を…解く……ぐらい……

……容易い……筈…です……！！……何故……？！」

「……確かに、その程度は容易い。だが、それでは、あいつらは何の成長もする事が出来ん。

……そんな事では、俺が此の世界（このば）に居る意味が無いのでな。」

「……救世主（メシア）……貴方は……矢張り……何処まで…いっても……。」

「……お喋りは其処までにしておけ。……そろそろ、話す気力も辛いだろう。

今は、耐える事に精を出せ。……アルトリア・ペンドラゴン。」

「……はい。」

side：教会前

ヒュッ！　ガッ　ガッ　ガッ　ガキィンッ！！　キィンッ！

ザッ！

「……解せんな……。」

「……何がだ？」

「……貴様……弓兵の身でありながら、オレと白兵戦で相対出来る程の実力……。

一体、何処の英霊だ…？」

「……さてな。…弓兵とて、剣を持つ事もあれば、槍を扱う事もあろう。」

「…戯れ言を…。……貴様程の力量があれば、

キャスターの軍門に下らずとも、奴等を倒す事が出来よう。

……確かに、戦上手の貴様が採った方法ならば、より確実に勝利を掴めよう。

……だが、その闘いは正道では無い。貴様の剣には、決定的に誇りが欠けている。」

「ああ、生憎と、誇りなど微塵も持ち合わせていないのでな。…だが、それがどうした？

正道？誇り？…ハッ！笑わせないでくれよ…？ランサー。

その程度の汚れなど、成果で幾らでも洗い流せる。

……そんな余分なプライドは……

そこいらの狗にでも喰わせてしまえ。」

「狗と言ったな……アーチャー。

ならば、この一撃……手向けとして、受け取るがいい…！！！

突き穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）！！！

！！！！！！！」

「I am the born of my sword.

熾天覆う七つ（ロー・アイアス）の円環」

side：教会地下

「…くっ……やっぱり、強い……。でも…俺は……！！！！！」

「……。」

ガインッ！　ガッ！　ゴッ！　ガシッ！　ドゴッ！

「……くっ……流石に、最強のキャスターの名は伊達じゃないわね……。」

「あら。有難う、子猫ちゃん。」

「…言ったのは私じゃ無いわよ。……其処で遊んでる、私が一番ぶん殴りたい奴よ。」

「……。その意見にだけは、とても同意するわ。……それにしても……

あなたも、中々やるじゃない。この私と僅かの間とは言え、魔術戦が出来るなんて。」

「それはどうも。……でも、まだ終わった訳じゃ無いわよ…！！！」

「どっちも頑張ってるなぁ～……。それいけ、やれいけ、どんといけ～……。」

「……救世主（メシア）……あなたって……人は……本当に……
……ｏｒｚ」

片膝を立てて座り込み、囃し立てるカイト。

その側には、何故か力を無くして項垂れるセイバーが居た。

ｓｉｄｅ：教会前

「……キサマ……一体、何者だ…？」

「…さてな。……それより…気付いたか？…ランサー。

キャスターめ……存外に苦戦していると見える。こちらに回していた監視が消えた。」

「…チッ！…そうかよ……そうじゃねぇかと思っていたが……

テメェ、やっぱりそういう腹だったか…！！！」

「無論だ。…君が言った事だろう?私の方法ならば、より確実に勝利を掴める…と。」

「……ケッ……トコトン気に喰わねぇ野郎だな……テメェ。……勝手にしな……。」　ドサッ

side：???

「……ホントに来たのね……。」

「……流石はカイトだ。……君達を此処に配置するとは…な。」

「……構わないわ。…行きなさい。」

「……何？」

「…そのカイトからの頼みよ。……あなたが、ランサーとの闘いの後、必ず此処に来るから、

その時は通してあげてくれ…ってね。」

「……。」

「……でも、シロウを殺したら、絶対に許さないわ。例え、あのカイトを敵に回したとしても。」

「……了解した。……ゴメンな……イリヤ。」

「……まさか……あの子って……。」

side：教会地下

「ぐあっ！！！」　ドゴッ！！！

「……此処までだな…衛宮。」

「ぐふっ……ま、まだまだ……！！」

「……。」

「……どうやら、手持ちの札は全部尽きたみたいね。」

「……。」

「まぁ、それでも、少しは楽しめたわ。この私と魔術戦が出来たのだから、誇りに思いなさい。」

「……。」

「…あら。もう、話す気力も無いのね。……じゃ、さよなら。」

「……！！…隙有り！！！」　ヒュッ！　ドンンッ！！

「な！？……ガハッ…！！！」

「流石に言峰仕込みの中国拳法は違うな。年期が入ってらぁ。」

「取った！！！」

「…いや、そこまでだ…遠坂。」　ドンッ！

「ぐぅっ！！！」　ダンッ！！

「遠坂！！！」

「……キャスター……見括ったな…。」

「…も、申し訳有りません…ソウイチロウ。」

「……もう、いいだろう。…キャスター、セイバーを開放しろ。」

「……分かりましたわ。……残念だけど……此処までね。」

「…ああ。それが、後、数秒程早ければ…な。

――投影（トレース）開始（オン）」

その場に居た皆が、その魔術行使に反応出来た。……だが、一人……魔術師でない者が……

「ハッ！…ソウイチロウ！！！」

キャスターが葛木を庇い、その投影に串刺しにされ……る筈だった。

「させる訳、無ぇだろうが。　ランド　盾（シールド）」

そう。……かの救世主（メシア）の介入が無ければ。

side：カイト

…ったく。あいつの奇襲はいつも、タイミングがやば過ぎる。

御陰で、常に気を張ってなきゃいけなかったぜ。……流石は弓兵と言った所か。

「…どうした？アーチャー。そんなに、必殺のタイミングを止められた事が悔しいか？」

「……ああ。……まさか、あのタイミングで防がれるとはな……。

だが、それ以上に驚いたのは……。」

「……ああ。…俺がキャスターの味方をした事か？」

「……そうだ。お前の性格ならば、キャスターは寧ろ滅ぼす敵だろうと思ったのだがな。」

「いや？それは無いさ。只の色惚け娘を甚振る趣味は、俺には無いよ。

御苦労さん、メディア。もう、セイバーの呪縛は解いていいよ。」

「……分かったわ。……これで、もう大丈夫よ。」

「……ッハァハァ……。」

「せ、セイバー！！！」

「……。」　ヒュッ！

「！！グアッ！！！」

「…チッ…。又、外したか。」

「……アーチャー……あんた……まさか……。」

「……そうだ。…お前の掛けた令呪があっては、私の目的は達成出来んのでな。」

「やっぱり……何でよ、アーチャー！！！アンタ、未だ士郎を殺すつもりなの…！！？」

「……そう……自らの手で衛宮士郎を殺す。

……それだけが、守護者と成り果てた俺の……唯一つの願望だ。

その為だけに、俺はこの聖杯戦争に参加したのだからな。」

「……アーチャー……貴方は……まさか……。」

「…そうだ。……何時か言っていたな…セイバー。俺には英雄としての誇りは無いのか…と。

……無論だ…！そんなものが有る筈が無い！！……今、此の身を埋めるのは後悔だけだよ。

……俺はね…セイバー。……英雄になど……ならなければ良かったんだ…。」

「何と言う事を…。……アーチャー、貴方の望みは間違っている…！

何故……何故、その様な結末を望むのですか！？そんな事をしても、貴方は…！！！」

「……ふん……間違えている…か。……それは此方の台詞だ、セイバー。

君こそ、何時まで間違った望みを抱いている…？　カイトにも、言われたろう？

『只の愚かしい妄執にのみ囚われている』と。その願望（のぞみ）は、只の幻想に過ぎないと。」

「……くっ……だが、それでも……私は……！！！グッ！！」　ギィンッ！

「今の貴様では、碌に戦えまい。……大人しくする事だな。」

「私達の事を忘れてるのでは無くって？アーチャー！」

「……いや、計算通りだ。」

ドンッ！　ドドドドドドドドド！！！！！

「…フン。この程度の剣ぐらいで…。」

「いや、動かない方がいいぞ、メディア。その剣群は全て造りモノ。しかも爆発する。

お前は無事でも、葛木までは間に合わん。おまけに、この剣群が同時に爆発すれば、

確実に、全員生き埋めだ。……今は、止めておけ。」

「……そういう事だ。今は大人しくして貰おう…キャスター。」

……さて。舞台は調ったぞ。……さあ、お前達にも上がってきて貰おうか。

「――告げる！！！

汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！

聖杯の寄る辺に従い、此の意、此の理に従うのなら――

――我に従え！！　ならば此の命運、汝が剣に預けよう……！！！！！」

「…！セイバーの名に懸け誓いを受ける……！！

貴方を我が主として認めよう、凛――――！！！！！」

……ようやっと……相応しい主の許に辿り着けたか。

「！！！しまった…！！再契約か！！！」

「…これで、形勢逆転しましたね…アーチャー。」

「……勘違いして貰っては困る。」

「……どういう意味です？アーチャー。」

「オレは弓兵（アーチャー）だぞ？許より剣で闘う者では無い。」

体は剣で出来ている。

《I am the bone of my sword.》

「セイバー……何時か、お前を解き放つ者が現れる。」

心は硝子。

血潮は鉄で

《Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ.》

「それは今回では無い様だが……」

幾度の戦場を
越えて不敗。
《I have created a thousand blades.》

「恐らくは次も……お前と関わるのは……私なのだろうよ。」

只の一度も敗走はなく、只の一度も理解されない。

《Ｕｎｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｄｅａｔｈ. Ｎｏｒ ｋｎｏｗｎ ｔｏ ｌｉｆｅ.》

「……だが、それは飽く迄、次の話。」

彼の者は常に独り
剣の丘で勝利に酔う。
《Have withstood pain to create many weapons.》

「今のオレの目的は、衛宮士郎を殺す事だけだ。」

故に、生涯に
意味は無く。
《Yet, those hands will never hold anything.

≫

「それを阻むのならば……この世界は、お前達が相手でも容赦せん。」

その体は、きっと剣で出来ていた。

《So as Ip ray, unlimited blade works.》

――固有結界――『無限の剣製：《Unlimited（アンリミテッド） blade（レイド） works（ワークス）》』

自身の心象世界を現実世界に顕現させ、浸食する究極の魔術。……禁忌の魔術。

「……そう…そういう事。つまり…アンタは……。」

「そうだ。オレは弓兵でも、況してや剣士でも無い。オレは生前魔術師だったという訳だ。

故にオレに、自身の正体が判ってしまう宝具などというモノは無い。

……いや、敢えて言うならば、この『固有結界（アンリミテッド・ワークス）』こそが、オレの宝具だ。」

「……こんな……こんな荒れ果てた世界が……

あなたの世界だと言うのですか……アーチャー！！！！！！！」

「……抵抗はするな。運が良ければ即死する事も無い。

事が済んだ後、お前のマスターに癒して貰え。

……躯すのも良いが……その場合、背後の男は諦めろ。」

「……ふざけ……てんじゃねえ……テメェ！！！！！」

パリィィンッ……！！！！！

「……チッ。…。」　シュッ…　トンッ！

「え…あ……。」　ドサッ！

「な！？遠坂！！！」

「此処は退かせて貰おう。……此処で死んでは許も子も無いのでな。

」

「……ならば、アインツベルンの城に行け。今、彼処は無人だ。誰にも気兼ねする事は無い。

……今、イリヤに連絡を取り、許可を得た。……行け、アーチャー。」

「……今は、礼を述べておこう。……早く来いよ。……オレももう、長くは持たん。」

剣群も消え去り、後に残ったのは……数多くの疑問と……僅かな蟠りであった。

正しき間違い（Ｔｈｅ　ｒｉｇｈｔ　ｍｉｓｔａｋｅ）（前書き）

現時刻（０３：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：７０４，２８３アクセス　ユニーク：６５，８６７人
皆様、いつも有難う御座います。

御陰様で、早くも７００，０００アクセス突破致しました。

今回、最速の１００，０００アクセスでは無いでしょうか……。

では、今話も拙筆を御堪能下さい。

正しき間違い（Ｔｈｅ　ｒｉｇｈｔ　ｍｉｓｔａｋｅ）

ｓｉｄｅ：教会地下

「……取り敢えず、皆此方へ集まれ。多少は魔力を回復してやれる。」

そのカイトの言葉に従い、彼に近付き、

葛木は体力を、他の面々は魔力を満タン以上に回復して貰った。

「……これ程とは……。」

「……これの一体、何処が多少なの？救世主（メシア）。

……この私ですら、許容量をオーバーしそうになったわよ。」

「その程度の魔力など、俺にとっては兆分の一にも満たん。

寧ろ、許容量を超えずに与える方が、却って精神を使って余計に疲れる。

お前等……幾ら何でも、少な過ぎだ。」

“……………………………………………………”

カイトの出鱈目な魔力量に、改めて驚愕し、絶句する面々であった。

「…それよりも、外に出るぞ。先ずは、上に居るイリヤ達と合流する。」

「……それにしても……まさか、キャスターとグルだったとは……気付きませんでしたよ。

……相変わらず、謀がお好きなのですね……救世主（メシア）。」

「謀とは人聞きの悪い。俺は只、メディアに頼んだだけだ。

それを実行するかどうかは、メディア自身が判断する事。あっしにゃあ、関わり無ぇこって。」

「な!?それは、卑怯よ!!救世主（メシア）!!?

大体、貴方キッチリ、私を脅していったじゃない!?!?」

「ん～?……知らんなぁ……。何か証拠でも有るのかえ?キャスターよ。」

「……むむむむ～～～～……!!!!!」

“酷い。”……満場一致の思いであった。

「…本当に酷いわね?……カイト。」

「よお、イリヤ。アーチャーの件は助かったよ、あんがとさん。」

「……完全にスルーなのね。……まぁいいわ。……それで?これか

ら、どうするの？」

「そりゃ勿論、一旦家へ帰って、みんな連れて城へ殴り込みだ。……だが、その前に。キャスター。」

「……何よ。」

「不貞（ふて）腐れるのは後にしろ。……お前にどうしても聞きたい事が有る。」

「……何かしら？」

「お前達が居た、この地下。……他に何も無かったのか？」

「……何も…って、どういう意味でかしら？」

「そのままの意味だ。……何か他に、魔術の残り香等は何も無かったのか？」

「いいえ。特には何も無かったわ。」

「……それは間違い無いか？……何か見落としは無いと断言出来るか？」

「ええ、出来るわ。……私をだれだと思っているの？

殊魔術に関して、私の右に出る者は居ないわ。

……間違い無く、この地下には何も魔術の痕跡は見当たらないわ。」

「……そうか。……ならば、アレは……？ハッ！！

まさか……いや、それは無いな……。……奴も存在を肯定していた。

……なればこそおかしい……一体、何処に……。」

「さっきから一人で、何をぶつぶつ言ってるの？只でさえ、アレなのに、益々怪しいわよ？」

「……ああ、そうだな。……取り敢えず、此処は…ん？……どうした？士郎。」

「……何か変だ。」

「変？……一体どういう事ですか？シロウ。」

「いや、その……何て言ったらいいのか分からないんだけど……何かが変なんだ。」

「……！！！…士郎。変と言うのは、もしかして、この教会の構造が…か？」

「ああ。……初めて来た時とは……何かが微妙に違うんだ。

……空気の流れというか……この教会そのものが、何か別のモノに変わった様に思うんだ。」

「……そうか。……そういう事か。……士郎。

恐らく、何処か一ヶ所、他に開いている地下への道が有る筈だ。それを探してくれ。」

「救世主（メシア）！！！それよりも先ず、凛を助けないと…！！」

「……ゴメン、セイバー。俺も、どうしても気になるんだ。」

「……シロウ。……分かりました。では、とことん調べ尽くしてから凛を助けましょう。」

「…ああ。……済まない、セイバー。」

「それで、士郎。一体、何処か判るか？」

「……ああ。……恐らく、こっちだ。……何か判らないけど、俺を呼んでる気がする。」

「ならば、そちらに行こう。……それで間違い無いだろう。」

「……ああ。」

「……此処だ。」

「……そうか。…矢張りな。……おかしいとは思っていたが……新たな玄室を拵えていたか。」

「……救世主（メシア）。貴方は一体、何を知っているのですか？」

「全てをだ。……士郎、セイバー。先頭を頼む。

イリヤ、レス、葛木、メディア。お前達も続いてくれ。殿は俺が務める。」

「……救世主（メシア）。」

「……分かった。…行こう、セイバー。」

「……分かりました。」

「……行くわよ、バーサーカー。」

「御意。」

「では、ソウイチロウ。」

「ああ。私が先に行こう。」

「……お願いします。」

ｓｉｄｅ：教会地下玄室

「……これは……。」

「……酷いわね。」

「……醜悪にも程があるわ……。」

「……この様な暴虐が……此の世にあろうとは……。」

「……。」

「……まさか……。」

「その真逆だよ。…衛宮士郎。」

“！？！？……言峰綺礼！！！！！！！！！！！”

「……どうだ？衛宮士郎。同類との十数年振りの再会だ。……もっと喜び給え。

それとも……又、己のみが助かった事に嫌悪感でも抱いているのかね？」

「……言峰……お前が……。」

「……。」

笑みを昏(ふか)くし、同意の意を表した綺礼に、戦慄と憎悪の念が皆に湧き立った時だった。

「……矢張りな。此方に玄室そのものを移していたか。」

“救世主（メシア）（カイト）…。”

「……ああ、そうだ。……どうだね？中々に素晴らしく醜悪な芸術品だとは思わんかね？」

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』」

“……『世界の（ワールド）……

……破滅者（ディザスター）』……？”

「……その名を知っているという事は……ソイツに聞いたか……死に損ない。」

「……素晴らしかった。とても素晴らしかったぞ。……貴様の味わったその絶望。

そして、その名が記す業。……本当に素晴らしい。」

「……。」

「だが、メインディッシュは後だ。今はオードブルを楽しもう。

……念の為聞くが……よもや、邪魔をしたりすまいな？…『世界（ワール）の破滅者（ド・ディザスター）』よ。」

「せんよ。存分に抉るといい。……貴様程度の言すら越えられんのであれば、

何れにしろ、これから先、生き残る事は出来ん。」

「それを聞いて一安心した。……では、待たせたな……衛宮士郎。」

「……何の用だ、言峰。」

「何…、そう大して難しい話では無い。……問おう。聖杯が欲しくはないかね？」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。……お前が望めば、今、直ちに聖杯を与えようと言っているのだ。」

“な、何ぃ！？！？！？！？”

その綺礼の言は、皆を驚愕させるには、余りあるものだった。

「どういうつもりだ。」

「何、私はこれでも神に仕える身だ。

……救済を求める者を目の前にしては、放っては置けなくてね。

究極の願望器である聖杯を使えば、全てを遣り直せるのだ。

お前が亡くした両親も、友も、記憶も……そして、今此処に居るこの者達も……。

全てを一から遣り直し、本来お前達が歩む筈だった歴史を……世界を歩み直す事が出来る。

さあ……どうだ？……聖杯を欲するか？…正義の味方（えみやしろう）よ。」

それは余りにも……余りにも、甘美な響きだった。……しかし……

「……いらない。……そんな事は、望めない。

……そうだ。やり直しなんか、出来ない。死者は蘇らない。起きた事は戻せない。

……そんなおかしな望みなんて、持てない。」

「その望みを叶えられるのが、聖杯だ。

この力を使えば、お前の望んでいた、全ての人を救済する事が出来るのだ。」

「……だとしても…だ。その為に過去を変えてはいけない。

それでは、自分の人生を否定する事になる。俺と関わった人達の思いを否定する事になる。

俺は……その道が、今までの自分が、間違っていなかったって信じている。」

「そうか。……つまり……お前は……」

士郎は……

「ああ。聖杯なんていらない。俺は、置き去りにして来たものの為にも……

自分を枉げる事なんて出来ない。……してはいけないんだ。」

その悪魔の囁きを……撥ね除けた。

「……ふん……つまらん。では、セイバー…お前はどうだ？小僧は聖杯などいらぬと言う。

だが、お前は違うのでは無いか？……お前の願いは聖杯に依る世界の救済だ。

よもや、英霊であるお前まで、小僧の様にエゴは翳すまい？」

「……そ……それ…は……」

「…ふむ……。では、交換条件だ。セイバー……其処の小僧を殺せ。

その暁には、聖杯を直ぐ様授けよう。」

「……え……？」

綺礼から持ち出された条件に、思わず困惑し、士郎と綺礼を交互に見るセイバー。

しかし、当の士郎は、何も言葉を発せず、只セイバーをその双眸で見詰めているだけだった。

「……どうした？……何を迷う事が有る。

其奴は、自身の願いの為に、お前の願いを完全否定したのだぞ？」

「…わ……私……は……」

聖杯が手に入る。自身が望み続け、前回、後一歩の所で、惜しくもマスターの裏切りによって

失った……あの聖杯が手に入る。……だが……それには……士郎を……

「どうした？何を躊躇っている。聖杯と引き換えなのだぞ？

交換条件としては、破格だと思うのだが…？」

「……私……私は……」

セイバーは今、揺れに揺れていた。もう後一押しで、彼女は己が目的を達成するだろう。

その場に居た皆が、そうほぼ確信し、身構えていた。……そう……只二人を除いて。

視線を彷徨わせていたセイバーの目が、初めて士郎を……その双眸を直視した。

そして……

「……そう……か……。それは違う……そういう事なのですね……シロウ。」

そして……士郎と……カイトは、強く肯いた。

「ああ……私が…愚かだった……。

求める必要など無かった。

私の欲するものは……何時でも、直ぐ側にあったのだ…。」

「……では、答えを聞こうか……セイバー。」

「…聖杯は欲しい。……だが、シロウは殺せない。」

「……何？」

「判らぬか？下郎。そんなものより、シロウが欲しいと私は言ったのだ。

聖杯が私を汚す物ならばいらない。私が欲しかった物は、初めから全て揃っていたのだから。」

「……セイバー。」

「…済みません、シロウ。気付くのが遅れてしまいました。

……ですが……今、私は答えを得ました。」

「……ああ。」

「ふん。主従揃って、愚か者共が。……では、お前はどうだ？イリヤスフィール。」

「……私？……あなたが何を言っているのか、分からないわ。

……何をどうしようとも、最後に勝つのは私って決まってるのに。

」

「……では……その必要は無い……と言ったら？」

「……何ですって？」

「お前が犠牲になる必要は無くなったと言ったのだよ。……故に問おう。

まともな人間に成りたくはないかね？……元・聖杯の器……アイ（ホ）ムンクルス

ンツベルンよ。」

「……一体どういう事かしら……説明して貰える？」

「何……簡単な事だよ。……もっと聖杯に相応しい器があったのだよ……。

そして……その器に魔力が満ちずとも、聖杯を降臨させる事が出来るのだ。」

「……有り得ないわ。」

「……信じるかどうかは、お前の自由だ。……さあ、どうする？

人間に戻るか……それとも、その不完全な身体のままで、残り僅かな余生を過ごすのかね？」

「……。」

あのイリヤですら、迷っていた。……自分がお爺様から聞いている話では、

自分はこの聖杯戦争後は、余り長く生きられないらしい。……でも……

綺礼の言う事が本当ならば……今、此処で、その聖杯を使えば……自分も……

士郎達と同じ時を……何時迄も……共に歩む事が出来るかもしれない。……だけど……

「では、改めて答えを聞こう。……汝、聖杯を欲するか？

イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルン。」

「……結構よ。私も、そんなものいらないわ。」

「……では、貴様も……」

「ええ。私の幸せは、今、此の時。……私の大切な弟達と共に居る、今、此の時よ。

長ければ良いというものでは無いわ。限られた時間の中で、どれだけ思い出を作れるか。

どれだけ、楽しくて、美しくて、濃い時間を送れるか…よ。

その私の思いを……幸せを妨げるものなんか、こちらから願い下げよ。」

「……貴様もか。……では、貴様等はどうだ？

バーサーカーよ。貴様の受けた難行。……その全てを無くす事が出来るのだぞ？

キャスターよ。貴様も、裏切りの魔女などと言う呪縛から、解き放つ事が出来るのだ。

キャスターのマスターよ。貴様とて、人を殺さずに生きていけるのだぞ？……どうだ？」

「…我の答えは、主と共に有る。……貴様の戯れ言になど、乗る訳が無かろう。」

「私の願いは、今、正に叶っているの。……今更、これ以上の願いなど有り得ないわ。」

「……私は、自身の人生を後悔した事など、一度たりとも無い。

……何より、生徒達の事もある。……未だ、採点が終わっていないのでな。」

悉く否定された綺礼は、途端に聖職者の皮を剥ぎ、碌でも無いモノを見ているかの様に、

侮蔑の表情を浮かべた。……そして……その矛先が、カイトに移り

……

「……詰まらん。……全く以て、貴様等は本当に詰まらん。……もういい。

オードブルは終わりだ。……さあ……メインディッシュといこうではないか。」

「……。」

「『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』よ……。貴様の業は、とても……そう……とても冥（ふか）いな……。」

「……。」

「数多の星々や銀河を滅ぼしただけでは飽き足らず、世界の殆どを殺して来たそうだな。」

「……。」

「そして……極み付けが……貴様の妻子だ。……相当無惨な状態だったそうだな。」

「……。」

……妻子？……無惨？初めて聞くカイトの事情に皆、驚愕と疑問を持ったが、

とても、割って入って問える様な空気では無く……カイトが何も言葉を発しない以上、

綺礼の言葉を只、黙って聞くしか無かった。……そして……

「……ああ……可哀相に……全く以て、可哀相に……。あの様な無惨な最期を遂げるとは……。

貴様とて、嘸、幾度も思ったろう?後悔したろう?…何故…と。
…どうして…と。

叶うならば、蘇らせたいと……あの忌まわしき出来事を無かった事にしたいと……。

何故ならば……貴様の妻子は……。」

皆、何故か身体が震えて来た。寒気か、はたまた怖気か……。

何かとても形容し難い空気に、この空間が包まれている。

皆、思った。……聞いてはいけない。……此処から先は聞いてはいけない……と。

今直ぐ、この場から立ち去り、何事も無かった事にしなければ…と。

……だが……それは……遅過ぎた……。

「……ああ、そうだ。

我が妻　八神　はやて　と　我が娘　八神　風

音　を　殺したのは

他ならぬ……この俺だからな。」

……そう……もう……遅過ぎたのだ……。

“……え？”

皆、彼の……カイトの言った事が理解出来なかった。……いや、違う。

理解したくなかったのだ。……だが……

「……。」

綺礼の喜悦に歪んだ表情に、その言が紛れも無く彼の口から発せられたモノであり……

紛れも無い事実であると……理解してしまった。

「ああ、そうだ。確かに、貴様の言う通り……願った……思ったさ。

幾百……幾千……幾万……幾億……幾兆……幾京回……最早数え切れない程に……。

今でも覚えている。この手で、妻を……娘を……貫いた感触を……その時の思いを……。

二人に『殺してくれ』と懇願された時の……嘘であってくれという……俺の切望を……。

今でも覚えている。……彼女達と共に歩んで来た……全ての思い出を。

今でも……何時でも……鮮明に思い出せる。今以てしても、片時も忘れる事は無い。

永遠に……永久に決して忘れる事は無い。俺がはやてと風音を、未だ愛して居る事を。」

「……。」

もう、これ以上は無いであろうと思われる程に、更なる喜悦に笑みを歪ませた綺礼は……

止めの言葉をカイトに告げた。

「なればこそ、お前に与えよう。……万物の……あらゆる望みが叶う聖杯を！！！！！」

皆、諦めた。……それ程の事を、無かった事に出来ると言うのであれば……

幾らカイトとは言え……最早、抗う術は無いと……。

……だが……

「……所で……貴様の言いたい事は…それで全部か？」

カイトの問いに、些か首を傾げながら、綺礼は答えた。……己が感情の赴くままに。

「……ああ、そうだ。……さあ……！！！望め！！！その手に取れ！！！！！

己が願望の全てを叶えてくれる……聖杯を！！！！！！！！！」

「……だが、断る。」

「……何？」

「聞こえなかったのか？……ならば、何度でも言おう。……だが、断る。」

「……何故……と……聞いても……差し支えないかね……？」

「理由か？それならば、答えは一つだ。

俺は、絶対にＹＥＳと言うと思っているドアホウに、ＮＯと言ってやるのが、最も好きなんだよ。」

「……。」

「何だ？本当に俺が、ＹＥＳと言うと思っていたのか？……クックックックック……

アッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

！！」

唐突な、カイトの大音による馬鹿笑いに、地下の狭い空間では、反響して酷い事になっている。

只一人、平然と……いや、呆然としている者を除いて……。

「……何がそんなに可笑しい？」

「クックックック……可笑しいに決まっている……。

貴様……俺が何も知らないとでも思ったのか？……『全て(オール・ノウ)を知り(レッジ)し者』たるこの俺が……。

俺は既に、死者蘇生程度ならば、何時でも使える。その気ならば、既に蘇らせているよ。

そもそも、はやてと風音は俺が殺した時に、魂毎、完全に消滅させている。

例え、万物願望製造器である聖杯と言えど……

魂という存在そのものを消された者は、蘇らせられない。

何故なら、蘇生の際の拠り所となる魂が無いと言う事は、そもそも存在しない事になるからだ。

ましてや、そんな欠陥品程度では、絶対に不可能だ。」

色々と、驚愕の事実のオンパレードで、却って絶句し何も言えなくなった一行であった。

「まぁ、そういう訳だ。……思ったより時間を喰ったな。仕方が無い。今日は、是までとしよう。

ではな、言峰綺礼。精々、その僅かな仮初めの命……堪能しておけ」

けよ。」

その言葉を以て、カイト達は全員、その場から姿を消した。

後に残された綺礼は……絶望と……裏切られたという、憤怒に焔(も)えて居た。

「ランサー。」

「ん？何だ…結構時間掛かったな。……どうしたんだ？ソイツら。」

「まぁ、気にするな。後で分かる。……それよりも、アーチャーが裏切った。」

「……どういう事だ……言え。」

「まぁ、分かり易く言えば、アーチャーが凛を人質にし、士郎との一騎打ちを望んで来た。」

「……アノヤロウ……気に入らねぇとは思っていたが……其処迄性根が腐ってやがったか。

……気が変わった。オイ！救世主（メシア）！！オレも奴の所に連れて行け！！！」

「許よりそのつもりだ。……では、一旦衛宮家へ帰る。」

「…何？今直ぐ行くんじゃねぇのか？！」

「いや、皆、色々と憔悴しきっている。……今日はここまでだ。明日、朝一番で行く。

お前も、今日は家に泊まっていけ。明日は恐らく忙しくなる。

アーチャーならば、大丈夫だ。……士郎が来るまで、決して凛を手に掛ける事は無い。

この俺が保証しよう。……今は、俺の指示に従ってくれ。……頼む。」

「……チッ。……分かった。……だが、明朝…グズグズしてやがったら、殺すぞ。」

「了解した。……感謝する……クー。」

「……早くしろ。」

「…ああ。」

未だ、救世主（カイト）の想いを知らざりし者達は、彼に疑念を抱き。

救世主（カイト）の思いを知りし者達は、彼に尊敬の念を抱き。

『世界（カイト）の破滅者』を恨み、殺意を向ける者共は……如何なるのか。

それは……『全（カイト）てを知りし者』にも、知り得ない……。

正しき間違い（Ｔｈｅ　ｒｉｇｈｔ　ｍｉｓｔａｋｅ）（後書き）

……如何でしたでしょうか？

次回は、到頭、『あの場面（シーン）』です。

今迄で一番長くなってしまうかと思いますので、投稿出来るのは……恐らく、明日か……下手をすれば、明後日になってしまうかも知れません。

予め、陳謝致します。申し訳ありません。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

衛宮士郎（Ｈｅｒｏ）（前書き）

現時刻（０７：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：７２９，６５３アクセス　ユニーク：６７，９０８人
皆様、何時も有難う御座います。

そして……御待たせ致しました。皆様、御待ち兼ねのあの場面（シーン）です。

今回も、長くなり過ぎた為、二つに分けました。直ぐに、次話も投稿致します。

では、今話も拙筆を、御堪能下さい。

衛宮士郎（Ｈｅｒｏ）

ｓｉｄｅ：衛宮家

夕方を過ぎても、誰も戻って来ず、多少不安になりながらも、少々手持ち無沙汰で待っていると、

黄宇達…カイトの従者達が、一斉に中庭に目を向けた。その数瞬後、カイト達が突然現れた。

しかも、自分達には見覚えの無い人達も引き連れて。

「！！せ、先輩！！！」

「……桜……。」

「……お帰りなさい……先輩。」

「……ごめん。……未だ、ただいま…とは言えないんだ……。」

「え？……そう言えば……先輩？……あの…遠坂先輩は？」

「……ごめん。アーチャーに連れて行かれた。……これから、助けに行くんだ。」

「いや、今日はお休みだ。…さっき言っただろ？士郎。」

「カイト！！！！！」

「文句も抗議も一切受け付けん。

黄宇は、みんなの分の飯を。龍斗・水薙・紅蓮は、全員分の寝床を、用意してくれ。」

「「「「了解。」」」」致しました。」」

「カイト！！！何時も何時も！！！！！今度ばかりは、お前の言う通りには出来ないぞ！！！」

「ふむ。ならば、そのボロボロで何の魔術行使も出来ない身体で、むざむざ、無意味に殺されに行く…と言うのだな？」

「くっ……！！だけど！！！！！それじゃ、遠坂が！！！！！」

「恨むなら、非力で無力な己自身を恨むんだな。……何れにしろ、今日はこれ以上外出禁止だ。

……既に結界は張ってある。例え、霊体化しようとも抜けられん。

今日は是にてお終いだ。皆、飯喰って糞して風呂入って寝ろ。話

はそれからだ。」

「……では、その準備が終わる前に、お聞きしたい事があります。」

「……ええ。私も是非聞きたいわ。」

「ん？別に構わんが、短く済む奴で頼むぞ。」

「……貴方が、自らの手で、己が妻子を殺めたと言うのは、本当なのですか？」

“な（ええ）っっ！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？”

あの場に居らず、未だその事を聞いて居なかった面々は、突然の驚愕に見舞われた。

「…何だ、その事か。……ああ、本当だ。俺がこの手で、己が妻子の心の臓を貫いた。」

「……何故…？……『救世主（メシア）』とも呼ばれている貴方が……何故！！！！！」

「……では、聞くが…『救世主（メシア）』とは……どういう意味だ？」

「……全てを救う存在だと……。」

「そうだ。その通りだ。……では、新たな質問だ。

……『救い』とは何だ？……何を以てして、『救い』と為す？」

「……それは……。」

「一般的には、此の世の嘆き悲しんで居る人々を、全て守り救う存在を『救世主』と呼ぶ。

だが、お前達…英雄も、数多の人を殺し尽くし、自国を繁栄させた故『救世主』と呼ばれる。

……では、後者は『救世主』たり得ないとでも言うのか？……いや、言わぬだろう。

紛れも無く、その國にとってはお前達は、英雄であり……『救世主』だ。

では、前者はどうだ？その者達の行動は単なる偽善か？……いや、違う。

彼等をこそ『救世主』だと言う者が、圧倒的多数だろう。

……例えその行為が、本当に偽善であったとしても。人が救われた事には、変わりない。

……では……その『救い』とは何だ？……どちらも正しいと言えるのか……？

……はたまた、どちらかのみが正しいのか……？

……それとも……どちらも間違っているのか……？

その何れでも無いと言うのであれば、一体『救い』とは何なのだ？

……もしも、今夜眠れないのであれば、それを一晩考えてみるといい。

そして、自分なりの答えを探すと良い。……俺に言えるのは、それだけだ。」

その言葉の後、カイトは何時も通り、居間に寝転がりながら従者達（主に鋼牙）と戯れ、

その言葉を享けた者達は……カイトを少々警戒しながらも、同じく居間にて、

少し遅い夕飯が出来上がるのを、静かに待っていた。

夕飯を済ませ、順番に風呂に入り始めた頃。カイトが、又、皆を驚かせた。

「あ、士郎。俺、ちょっと出掛けて来るから～。風呂は最後でいいよ～～。」

「ああ、分かった……ぁ？…って、チョットマテ。」

「ん？どした？何か、買って来る物でも有ったか？」

「あ、そういや……とか……とか、有ったら買って来てくれ。」

「了～解。んじゃ、行って来るよ。」

「ああ、行ってらっｓｈ…じゃなくてぇ！！！どういう事だ！！カイト！！！！！！」

「んあ？何が？」

「んあ…じゃ無ぇよ……お前！！此処から出られないって言ったじゃないか！！！

あれは嘘だったのか？！」

「うんにゃ。本当だよ。」

「でも、今、お前出掛けるって……！」

「……はぁ……あのな？結界張った本人に、如何斯う出来ない訳無いだろう？

そんな奴は、只のド三流だ。…てな訳で、少し遅くなる。……んじゃ、行って来ま～～す。」

そう言い、さっさと出て行くカイト。後を追うも、結界に阻まれ、弾かれる士郎。

「くそっ！！……寄り道だけはするなよーーーっっ！！！！！」

士郎の言葉にずっこける面々。後ろ手に、手を振るカイト。

彼が、買い物袋を引っ提げて、戻って来たのは、明日になる僅か四半刻前だった。

そして、翌日。

side：衛宮家の庭

皆で、早目の朝食を採り、準備も調え、今、庭にて転移（そ）の時を待っていた。

「良し。皆、準備はいいな？歯磨いたか？トイレは済ませたか？ハンカチは持ったな？」

“それはもういいから。”

「……何だ、つまらん。」

「……所で、救世主（メシア）よ。…これから、我等は何処へ行くのだ？」

「ん？ああ。アインツベルンの城。凛が、アーチャーに拉致られたんで、助けに行くんだ。」

「そういう事か。」

「ああ。納得して貰えて何よりだ、小次郎。」

「「…？……！！って、ちょっと待ちなさい！！！救世主（メシア）！！！」」

「んあ？どうしたん？…あ、トイレ？」

「「違う（わよ）！！！何故、此処にアサシンが居るの（ですか）？！？！」」

「あ。そういや、そうだ。何時の間に連れて来たんだよ、カイト。余りにも自然にしてたから、つい気付かなかったけど。」

「夕べ。俺、帰り遅かったろ？あの時に、キャスターの契約を解除して、連れて来た。」

「そ、そんな！？一体、どうやって！？」

「内緒♪…まぁ、後で教えてやるよ。今は、俺に不可能は無いとだけ言っておこう。

……所で……此処に居る全員が行く……という事でいいのか？」

「……あいつが待っているのは、俺だからな。」

「……私は……シロウの闘いを…この目で見届けたい。」

「……私も……遠坂先輩を助けたいですから。」

「……桜が行くのであれば、当然私も一緒です。」

「シロウに何かあったら、私が絶対に許さないわ。

だから、何があっても大丈夫な様に、私達が見守らないとね。」

「…我は、主の命に随う迄。」

「お、御嬢様が危険な場所に向かわれると言うのに、私達だけがジッとしてる等、出来ません！」

「……ホントは、セラもシロウが心配（ボソッ）。」

「何か、言いまして？リズ。」「……（ブンブン）。」↑首を横に振っている

「あの嬢ちゃんを守れと、マスターに命令されてるんでな。

……それに何より……あの糞野郎は、一度ぶん殴らねぇとオレの気が済まねぇ…！！！」

「……そうね。アーチャーが何故、あんな事をしたのか…私も興味が有るわ。」

「……キャスターが行くのならば、私も行こう。…それに、生徒を見守るのは教師の役目だ。」

「……そうさな。…あの者が、一体何を考えて居るのか……それを確かめるも、又、一興。」

「……そうか。……アルニス。お前も……来るよな。」

「無論です。私一人、置いて行くのは、酷いですよ…カイト。」

「了解した。……では、城の前に直接転移する。…皆、良いな？」

“おう（はい・ええ）！！！！！！！！！！”

ｓｉｄｅ：アインツベルンの城

「……着いたぞ。」

「……外観は、其程壊れてはいないようね。」

「ああ。昨夜来て、直しといた。凛も無事だったぞ。てか、五月蠅

かった。」

“……って、来てたの？！”

「当然だろ？安否は確認しとかないと。」

「なら、どうしてその時に助け出さないのですか？！救世主（メシア）！！！」

「え？だって、そしたら士郎とアーチャーが闘う理由が無くなるじゃん。だから、放置。」

“貴方（お前）って人（奴）は………”

「いやぁ……そんなに誉めるなよ。…照れるだろ？」

“誉めてない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

「うむ。素晴らしい、一体感D☆A　Σd！！！！！」

“……………今直ぐ、こいつ（この人）を（ぶん）殴りたい”

「さて。良い具合に緊張も解れた所で、突入するとしますか。」

“……頼む（お願いです）から、他の方法でしてくれ（下さい）……。”

そう言わずにはいられない、皆々であった。

side：城内

総勢１８人（但し、ライダー・クー・レス・キャスター・小次郎は霊体化）が、

玄関に雪崩れ込むと、其処には階段の上に佇む、弓兵が独り。

「……思ったより、遅かったな。少々待ち草臥れたぞ。……やけにギャラリーが多いな？」

「まぁな。みんな、お前達の闘いを見届けたいんだとさ。」

「……酔狂な事だ。」

「全くだな。……では、紅蓮・水薙。凛は頼んだ。……構わんだろう？アーチャー。」

「「ハッ！！！」」「ああ。好きにするといい。」

「…所で、相棒。」

「ああ、それこそ構わんよ。……お前達の好きにするといい。俺が許す。」

「「了解！！！」」♪」

「……さて…と。アーチャー、少し待っててくれ。…皆、済まないが、こちらに集まってくれ。」

カイトの指示に訝しみながらも、従う面々。……そして……

「では、皆には特等席を用意しよう。

足場完全固定（ランド スペース）

空間固定（スペース ロック）

空間切断（スペース カット）」

すると、何と皆の姿が一瞬にして消えてしまった。

驚く士郎とアーチャーを後目に、カイトが軽く手を振り払うと、何も無くなった筈の空間から、

セイバーとイリヤが、まるで吐き出される様に、飛び出して来た。

「な！？！？こ、これは一体どういう事なんだ？！カイト！！！」

「そう、慌てるな。今のは、分かり易く言えば、位相空間をずらしただけだ。

今も其処にみんな居る。これなら、視線も気配も感じず、闘いに集中出来るだろ？

それに、お前達の闘いや会話は、リアルタイムで見聞きしている。心配するな。」

「……相変わらず、出鱈目な能力だな……カイト。」

「まぁな。……それよりも……待たせたな。存分に闘うといい。

エミヤシロウ。」

「……。」

「……やっぱり、そうだったんだな。お前は……。」

「……ああ、そうだ。……凛は、英霊召喚の際、何の触媒も持ってはいなかった。

故に自分とは何の関係もないと思い込んだ。……だが、偶然で喚び出される英霊などいない。

喚び出す方に何も無ければ……持っているのは、召喚された方だ。」

「……そういう事か。……このペンダントは、確か遠坂の親の形見。

それを俺は……。」

「そうだ。……そのペンダントが誰の物か判らず、生涯持ち続けた。

……故に、彼女に喚び出される事となった。」

「……そう。つまり、お前は……未来の俺であり、不完全な俺の能力を完成させた……

英霊エミヤ。」

ｓｉｄｅ：凛の居る小部屋

其処には椅子に縛られている凛が居た。……そして、今は、闖入者も居た。

「……アンタ……未だ、しぶとく生き残ってたのね……流石はゴキブリね。」

「う、五月蠅いぃ！！オマエ……今の状況、分かってるのか！？」

「アンタの金切り声に比べれば、遙かにマシよ。……一体、こんな所に何の用？

早く、教会にでも逃げ帰りなさい。アンタみたいな羽虫程度が居てもうざったいだけよ。」

「……お、オマエエエエ！！！！！！！！！！」

「其処迄にしておけ、シンジ。」

「……オマエ……サーヴァントの癖に、この僕に逆らうってのか…？！」

「いいや？……だが、その女はあの救世主（メシア）が気に入っている女だ。

下手に手を出せば、未来永劫、死ぬことすら出来ぬ、無間地獄を彷徨う事になるぞ？

それでも構わぬという程の、気概でもあれば話は別だが……止めておけ。」

「くぅぅぅっっ……糞っ！糞っ！糞っっ！！糞ぉぉぉっっっ！！！！！

ドイツもコイツも！！！！！カイトだ、メシアだのってぇ！！！！

そんなにみんなあいつが恐いのか！！！！！」

「……それは……お前の方が良く分かっているのでは無いのか？シンジ。」

「くぅぅぅっっ……！！！！！！！！！！」

何故かは分からないが、あのギルと呼ばれたサーヴァントが、カイトの名を上げて、シンジの横暴を止めている様だ。

……今までの分を帳消しには出来ないが、少しは許してやろう……と思った、凛であった。

「……ええい！！！もういい！！！あんな訳分からない奴なんか、僕の知った事か！！！」

そう突然叫んで、凛に襲い掛かる慎二。……だが。

「……残念だったな、シンジ。少々遅かったらしいぞ？」

「「そういう事だぜ（よ）！！！！！」」

「ぐあああぁぁぁ……！！！！！！！！！！！」　ドンゴオォォォウッッッ！！！！！！

可成りえげつない効果音が鳴り響き、慎二が壁に叩き付けられた。

「お待たせ♪凛♪♪」

「お待たせ♪…じゃ無いわよ、水薙。……遅過ぎよ？」

「ゴメンゴメン♪マスターからの許可が、中々出なかったのよ。」

「そう。やっぱり私、あいつ最低一回は殺すわ♪♪」

「アハハ……；」

「おーい、水薙！！！早くしねぇと、俺様がこいつ殺っちまうぞー！！！！！」

「んもう…せっかちねぇ……。あんまり早い男は、嫌われるわよ？紅蓮。」

「へッ！！！良く言うぜ！！お前だって相当早いらしいじゃねぇか…。

相棒が前に酒飲んで、笑いながら言ってたぜ？」

「凛。私も手伝うわ。一緒にマスターを殺しましょ？♪♪♪」

「ええ♪勿論、歓迎するわ…水薙♪♪♪」

……その時、何故か背筋に寒気が走ったカイトであった。……南無。て言うか自業自得？

「おい、水薙。早くしねぇなら、俺がやっちまうぞ？」

「もう……慌てないでって言ったでしょ？……未だ、こいつだって残ってるんだし。」

「あ？……別にいいだろ…そんな雑魚。…おい、お前！！

別に構わねぇから、さっさと相棒の処にでも行ってな！！！」

「……キサマ……まぁ致し方あるまい。……あの救世主（メシア）の従者ではな。……分かった。

では、我（オレ）は宿敵（とも）の許へ行っていよう。……短い間ではあったが…さらばだ、シンジ。」

――ミセラレナイヨ――

殺されはしなかったものの……後に、とある者達に回収された時の慎二は、

既に虫の息であり、回復させられても尚、下半身不随は治らなかった。

ｓｉｄｅ：玄関前

アーチャーの正体に、皆驚きを隠せず、絶句していた。

だが、エミヤが階段を、ゆっくりと降り始めた事で、意識を戻した。

……そして……

「……一つ、聞かせて下さい。……何故、貴方はシロウを殺そうとするのですか？」

「何故も何も。…そいつがオレを認められない様に、オレもそいつが認められないだけだ。」

「そんな筈は！！！…貴方はシロウだ。

エミヤシロウという人物の理想……英雄となった姿が貴方では無いのですか…？！」

「……何故そう思う？今、其処に居る未熟な衛宮士郎と、エミヤと呼ばれ、英雄になった私は違う存在だ。

……そうでなければ、同時に存在する事など出来ないだろう？」

「それは貴方がサーヴァントになったからでしょう？！

時間軸に囚われない守護者ならば、自身が生きた時代に喚び出される事もあると聞きます。

……貴方はシロウだ。シロウがずっと思い描いて…努力して叶えた姿が貴方の筈だ！！！

なのに……なのにどうして……！！！！！！！！！！」

……そんな違うモノに……。……セイバーの心の声が、皆に聞こえた気がした。

「……何故なのです……アーチャー。…私には分からない…。

守護者とは死後、英霊となり人間を守るものだと聞いた。……その英雄が何故……！？」

「……守護者？……違うよ…セイバー。守護者は人間を守るものではない。

……アレは只の掃除屋だ……！オレが望んでいた英雄などでは…断じて無い…！！」

階段の途中で立ち止まり、自らへの憎悪と嘲笑を籠め……吐き出された言葉に皆、驚愕した。

「ああ……確かに幾らかの人間を救って来たさ。

自分に出来る範囲で多くの理想を叶えて来もしたし、

世界の危機とやらを救った事だって有ったよ。

……英雄と……遠い昔から憧れていた地位にすら、終に

は辿り着いた事さえ有る。」

「…な、ならば、貴方は報われたのですね…？

少なくとも、此処に居る貴方は、エミヤシロウの理想を叶えられたのでしょう…？」

「……ああ、確かに理想は叶ったさ。……だが……

その果てに得たモノは後悔。……残ったモノは……死……

…のみだった……。

……殺して…殺して…殺し尽くした…！！己の理想を貫く為に、多くを殺し……

無関係な人間の命なぞ、どうでも良くなるぐらい殺して……！！！

……その殺した数の数千倍もの人間を救った。」

これまで、顰めっ面で黙って聞いていたイリヤでさえ、

信じられないものを見たかの様に、眼を広げてアーチャーを凝視していた。

そして、エミヤは立ち止まっていた儘の階段を、又ゆっくりと降り始めた。

「……そう……そんな事を何度、繰り返したかも分からないんだ……セイバー。

……オレは求められれば何度も戦い、争いが在ると知れば命を賭して戦った。

……仕方が無いじゃないか……。何を……そして、誰を救おうとも……

……救われない人間は出るし……戦いは何時迄も起こり続ける。

……そんなものが在る限り、正義の味方は在り続けるしか無いんだから。

……だから……殺したよ。一人を救う為に、何十もの願いを踏み躙(にじ)り……

その踏み躙った者を救う為に、更に多くを踏み躙った。

……今度こそ終わりだ……今度こそ誰も悲しまない……と、詰まらない意地を張り続けた。

……だけど終わらなかった。……争いは何処にでも目に付いた。

……何も全く争いの無い世界迄をも、望んだ訳じゃない……。

オレは責めて…自分の知り得る世界では、誰にも涙を流して欲しく無かっただけなのにな。

……だけど、一人を救えれば視野が広がってしまうんだ……。

一人を救えれば十人…。十人救えれば、次は百人…。……そして…千人…と……。

……其処で……ようやっと……

衛宮士郎の抱いていたモノは……都合の良い理想論だ…と気付いた。」

絶句している皆を気にもせず…一息置いて又、エミヤは話し始めた。

「大勢を救うのが正義の味方だろう?だから、オレはそれに成ろうとした。

……誰も死なない様にと願いながら、多くの為に一人には死んで貰った。

……誰も悲しまない様にと言いながら、何人かには絶望を抱かせた。…その内それにも慣れ、

オレは、自分の救おうとした人間だけを助け、敵対した者は速やかに皆殺しにした。

犠牲になる誰かを容認する事で、曾(かつ)ての理想を守り続けた。

……それが英霊エミヤの正体だ。

……そら……そんな男は今の内に死んだ方が、世の為だとは思わないか？……セイバー。」

「……それは嘘です。……例えそうなったとしても……

貴方はその誰かを貴方自身にして、理想を追い続けたのでは無いですか？

……貴方は理想に反したのでは無い。

理想に裏切られて道を見失っただけでは無いのですか？

……そうでなければ……自分を殺して、罪を償おうとは思わない筈です…！！」

その時、まるで時間が止まった様に、エミヤが無表情になり……次いで……

「…く……くく……くはは……ははははははははははは！！！！！！！！」

突然、まるで可笑しいと……狂っていると見せ付けるかの様に、笑い出した。

行き成り、脈絡も無く笑い出したエミヤに皆、思わずキョトンとしてしまった。

……士郎とカイト達を除いて。

「くくく……これは傑作だ…！オレが自分の罪を償う？…馬鹿な事を言うなよ、セイバー。

オレには償うべき罪など無いし、そんな無責任なモノを誰かに押し付けた事も無い。

……ああ…そうだったよ、セイバー。

……確かに、オレは何度も欺かれ裏切られた。救った筈の相手に罪を被せられた事も有る。

死ぬ思いで争いを収めてみれば、争いの張本人だと押し付けられ……最後には、絞首台だ。

……そら……オレに罪が有ると言うのならば、その時点で償っているだろう…？」

「な……嘘だ……アーチャー……貴方の……最期は……」

……幸か不幸か、アーチャー達には聞こえていないが……

もう我慢仕切れずに……啜り泣く声が聞こえていた。

「…まぁ、そういう事だ。……だが、オレは感謝なんていらなかった。

英雄などという称号も、正直どうでも良かった。

只、みんなが幸福だという結果さえ有れば、それで良かったんだ。

だから、オレは守護者に成った。そうなれば、より多くの人達を救えると思ったから。

……だが……その願いは叶わなかった。……生前も……その死後も……。」

「……どういう事ですか……？……アーチャー……。」

「……守護者はな……？……只単に、起こってしまった事をその力で無に帰すだけ……。

その事とは一切関係無く、生を謳歌する者を生存させる為だけに、
それに関わった者を全て皆殺しにして、世界を守る為だけの只の掃除屋だ…。

……それが……今迄のオレと何の違いが有る…？

……オレは……何度も…何度も…此の手で守りたいと、願った筈の人達を焼き払ったよ…。

……そう……何度も……何度も……だ…。

……ぁぁ……それは違う……オレが望んだのはそんなモノじゃない……！！

オレはそんなモノの為に守護者に成ったんじゃない……！！！

オレは……俺は……！！！守護者に成れば、きっと多くの人間を救える……！！！

衛宮士郎では出来なかった事が出来ると信じて！！！守護者に成ったんだ！！！！！！！！」

アーチャーの……英霊と……守護者と成り果てた……独りの男の慟哭が……

今、この場に斃（こだま）した。

「……俺は人間の後始末など真っ平だ。

……だが、守護者と成ってしまった以上、今更、理から外れた此の身に逃れる術は無い。

……そう……。唯一つの例外を除いて……。もしも……自身の手により、自身を殺せば……

可成りの歪みになり……英霊エミヤは消える事が出来るかもしれない。

俺は……只それだけを希望として……今まで守護者を続けて来たのだ……。」

「……ですが……そんな事は、分からない……でしょう…？」

「ああ、そうだ…セイバー。……此は只の八つ当たりだ。

何れ道化と成り下がる……衛宮士郎に対しての……な。」

そうエミヤが語っている内に、階段を降り切っていた。

もう後、数歩で間合いに入るという時に、今まで沈黙していた士郎が、エミヤに一言聞いた。

「……アーチャー。お前……後悔しているのか……？」

「無論だ。オレ……いや……お前は、正義の味方になぞ成る可きでは無かった。」

「……そうか。それじゃあ、やっぱり俺達は別人だ。」

「……何？」

「俺は後悔なんてしないぞ。どんな事になっても、後悔だけは絶対にしない。

だから、絶対にお前の事も認めない。……お前が俺の理想だって言うんなら……

そんな間違った理想は……俺自身の手で叩き出してやる！！！」

そして。

悲しくも、異質な闘い（やつあたり）は……

今、此処に幕を開けた。

衛宮士郎（Ｈｅｒｏ）（後書き）

直ぐに次話を投稿致します。少々、御待ち下さい。

決着（Ｐｅｒｉｏｄ）（前書き）

では、次話です。

どうぞ、拙筆を御堪能下さい。

決着（Ｐｅｒｉｏｄ）

ｓｉｄｅ：アインツベルンの城玄関

その闘いはとても異質なものだった。互いに無手のまま対峙し、その手の中に剣を出現させ、

それを目の前の相手（じぶん）に叩き付ける。それが破壊されようが、残るまいが構わず、

振るい終わった剣は、一切の躊躇も無く投げ捨て、新たな剣を造り出す。

そして、全く同じ剣で打ち合い、同じ剣技・剣筋で闘い……それを幾度も繰り返す。

……だが。…幾ら、同じ事をしていても、エミヤは未来の士郎であり……その完成形だ。

未だ、確かと成功した事の無い士郎には、その壁に挑むには早過ぎた。

一撃もエミヤに与える事は出来ず、悉く打ち砕かれて行く。

そして、休む暇も…傷が癒える暇も無く、次々と投影していかなけ

ればならない。

倒れる度に、血溜まりが出来…それでも尚、立ち上がる士郎に、エミヤが問い掛ける。

「……其処迄しても、尚立ち上がるか。……ならば問おう。

お前は本当に『正義の味方』に成りたいのか？」

「何を今更……！！俺は…成りたいんじゃ無い……！絶対に成るんだよ……！！！」

「そうだ……絶対に成らなければならない。

何故ならそれは……衛宮士郎の唯一つの感情だからだ。

逆らう事も、否定する事も出来ない…いや、許されないその感情……。

……例えそれが、自身の内から現れたモノでは無いのだとしても…だ。

……オレには最早、お前であった時の記憶など疾うに無い。

……だが……。それでも……あの光景だけは覚えている。

一面の焔と充満した死の匂い…。絶望の中で助けを請い、叶えられた時の感情。

……そして……衛宮切嗣と言う男の、俺を助けた時に見せた……あの安堵の顔を……。」

「っっ！！！」

「……そうだ。……お前は唯一人助けられた事で……

助けられなかった人々に、後ろめたさを感じていた訳じゃない。

……只、切嗣に憧れただけだ。あの男の…お前を助けた顔が余りにも幸せそうだったから……

自分も、そう成りたいと思っただけ……。」

……エミヤの一撃一撃が、苛烈さを増して行く……。

「正義の味方だと?笑わせるな…!誰かの為に成ると……。

そう言い、繰り返し続けて来たお前の想いは……決して、自ら生み出された物では無い…!!

……そんな男が、他人の助けに成るなどと……思い上がりも甚だしい!!!!!」

……自分の想いを、全て吐露するかの様に……

「……そうだ！！誰かを助けたいと言う願いが、綺麗だったから憧れた！！！」

……憎悪と憤怒と……慟哭（なげき）を込めて……

「故に……！！己から零れ落ちた感情（きもち）など、始めから無い！！！！！

これを偽善と言わずに何と言うのだ！！！！！」

……過去(えみやしろう)の自分に、全力で叩き付けている……

「此の身は誰かの為にならなければならないと…！！！脅迫概念に突き動かされて来た…！！

それが苦痛だと思う事も…！！破綻していると気付く事も無く…！！只、奔り続けた！！！」

……悲しき自傷行為(やつあたり)は未だ止まらず……

「……だが、所詮は偽物だ！…そんな偽善では何も救えない…！！

否！！！！！許より！！！何を救うべきかも定まらない……！！！！！」

……最早、士郎にはまともに打ち合える力など、残っていなかろうとも構わず……

「その理想は破綻している…！自分より他人が大切だと言う考えなど…！！

誰もが幸福であって欲しい願いなど…！！！所詮、空想の御伽噺だ！！！！！

そんな夢想を抱いてしか生きられぬのであれば……！！！！！！

……抱いたまま溺死しろ。」

……士郎の流している血が……エミヤの血涙に見えるのは、目の錯覚であろうか……？

……だが……幾十度、叩き付けられ、床に転がされようとも……士郎は立ち上がり……

「……ざけんな……。」

「……何？」

「ふざけんな！！！バカヤロウ！！！！！そんな事は分かってるんだよ！！！！！！！！！」

――――体は剣で出来ている――――

「お前には負けられない…！例え、誰に負けてもいい……。でも！！！

お前には……自分自身だけには……絶対に負けられない！！！！！」

……何があったのだろうか？……先程までは、まるで歯が立たなかったというのに。

「……ない……じゃない……！」

「…何っ…？」

何かを一心不乱に呟きながら、エミヤと打ち合う士郎。

……そして……

「……そう。……そういう事なのね……キリツグ……シロウ……。」

「……ああ。……そうだ、士郎。……それで、いい。……それが、答えなんだ。」

今まで、全く言葉を発しなかった二人……イリヤとカイトが……ポツリと呟いた。

「……じゃない……！……なんかじゃない……！！」

「……そうよ……シロウ。」

「……そうだ……士郎。」

士郎の呟きに合わさる様に、イリヤとカイトの呟きも、段々大きく…士郎に合わさって行く。

「ちぃっ！！！」

「……間違いなんかじゃない……！！！」

「そうよ…シロウ。……その想いは、間違ってなんかいないわ。」

「そうだ…士郎。……その夢は、正しい。」

士郎達の呟きが、大きく…そして近付くにつれ……士郎の投影精度が上がっていっている。

……そして……

「っっ……！！其処迄だ！！！！消えろ！！！！！！」

「「アナタ（お前）の想い（夢）は間違っていない（正しい）…！！」……そう。」

「「「決して！！！間違ってなんかいないん（の）だから！！！！！！！！」」」

「俺の勝ちだ。」

「ああ。……そして……私の敗北だ。」

今、此処に……悲しき復讐劇（たたかい）は、幕を閉じた。

「……アーチャー。」

「……凛か。」

「マスター。」「相棒。」

「二人共、御苦労だった。」

「「ハッ！！」」

「……奴はどうした？」

「「９／１０殺しに。」」

「宜しい。」

「「ハハッ！！！」」

「……アーチャー。もう一度、私と契約しましょう。」

「……全く……熟々甘いな……君は。

もう少し非道な人間ならば、私も曾ての自分になど、戻らなかったものを……。

何にせよ、決着は着いた。お前を認めてしまった以上……

エミヤなどと言う英霊は此処には居られん。……敗者は、早々に立ち去るとしよう。」

……そのアーチャーの言葉に悲しみながらも、

これでようやく終わったんだ…と皆が安堵した瞬間だった。

「ならば、我(オレ)が引導を渡してやろう…贋作者(フェイカー)！！」

ドンッ！　ドンッ！　ドドドンッッ！！　ドドドドッッッ！！！

突然、宝具の雨がその場に降って来た。自分の近くに居た、士郎と凛を突き飛ばし、

雨霰と降る宝具の嵐を、その身に一心に受け……

彼が全ての咎を受け容れ、独り串刺しにされている様を誰もが、幻視した。

……だが……それは……飽く迄、幻視に止まった。……何故ならば……

「……！？！？！？バカな……！！！」

「……そ、そんな！！！！！」

「……う、嘘……でしょ……？」

「……何故、貴方が……？！？！」

「……何故だ……何故……！！キサマが其処に居るのだ！！！！！」

救世主（メシア）アアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「……グ……グブッ…………ゴボッ…………。」

……そう。アーチャーが、宝具に串刺しになる前にカイトが飛び込み、

代わりに全弾、その身に受けたのだ。……そして……

「……グゥッ……言った筈だ……俺は……この聖杯戦争……一人たりともサーヴァントを……

失わさずに……終わらせる……為に……此(このば)の世界に居る…と……
……。」

「キサマ…！！！我(オレ)との約定を忘れたか！！！！！」

「……いいや……覚えて…いる…さ……。……俺と……闘いたい…
んだろう…？」

「そうだ！！！だというのに……キサマは…！！！！！」

「……ごぼぉぅっ……。」　どさっ……

自らの血溜まりの中に倒れ、沈み込むカイト。……皆、とても信じられない思いだったが……

カイトの使った魔法が解け、位相空間にずらされて居た観客（ギャラリー）が皆、現れた。

……今、カイトが死んだ、紛れも無い証拠であった。

「……くっ……愚か者が……！贋作者（フェイカー）如きを庇ってくたばるなどと……！！！！！」

「……何故……何故、貴方が此処に居るのですか……アーチャー！！！！！」

「……セイバーか。……本来、貴様も我（オレ）の物にするつもりであったが……

我が目的の殆どを占めていた救世主（メシア）が死んだ今は……お前と事を構える気は無い。」

「……再度、問います。何故、貴方が今、此処に居るのですか？」

「……我（オレ）は……前回の聖杯戦争の最後。……あの時に、聖杯の中身を浴びた。

その際に受肉したのだ。……止まる為の魔力は、甚だしいがな。」

「…一体、どういう事なの？セイバー。」

「…彼は、第四次聖杯戦争の時に、アーチャーとして喚び出された英霊です。」

“な、何？！”

「……何故、貴方がそれを知っているの？セイバー。」

「……それは……私も、前回の聖杯戦争の最後に参加していたからです。

衛宮切嗣のサーヴァントとして。」

“ええっっっ！？！？”

「……全然知らなかった。……じゃあ、カイトが言ってた事って……。」

「…はい。……殆ど事実です。」

「……あいつ、何でそんなに色んな事知ってたのかしら……？」

「……みんな、待って。…おかしいわ。」

「……何がですか？イリヤスフィール。」

「……何で、死んだ筈のカイトの従者達が、未だ此処に居るの？」

“……え？”

……確かに……黄宇達は、微動だにせずに、その場に佇んでいる。

まるで、何事も無かったかの様に。……その意味を理解した者達は……

思わず、カイトの死体を凝視した。……果して……

「……グッ……ああ～～～！！！痛ぇなぁーーーッッ！！！！！」

突然、大声を出しながら、行き成り起き上がり、皆を吃驚仰天させた。

“え？……ええええええええーーーーーーーッッッッッッ！！！！！！！！！！！”

「良し。ドッキリ大成功Σｄ！！！！！どう？驚いただろうｗｗｗｗ」

“そりゃ（それは）、驚くわ（きます）！！！！！！！！！！！”

「ハッハッハッハ…。…てな訳だ、ギル。ちゃんとお前とも、戦ってやれるぞ？」

「……くっ……クックックック……くははははははは！！！！！！！！

そうだ！！！！！！矢張り！！！！貴様はそうで無くてはな！！！！！！！！

その理不尽の塊こそが！！！！！！何より救世主（メシア）である証拠だ！！！！！！！！！！

嬉しいぞ！！！！！！！！！！！！宿敵（とも）よ！！！！！！！！！！！！！！！！

此程嬉しい事は、今迄に味わった事は無い！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！」

「そうか。喜んで貰えて何よりだ。」

「……カイト？」

「んあ？」

「……流石に、そろそろ教えて貰えないかしら？」

「何を？」

「……貴方の事をよ。……幾ら何でも有り得ないわ…。間違いなく、貴方は今、死んでいた。

なのに……今はこうしてピンピンしている。……一体どういう事？……貴方…死人？」

「いや？極普通の人間だよ？……只、ちょっと長生きして、色んな力を身に着けているだけ。」

「……いや、死んだのに生き返れる奴を、普通の人間とは言わないぞ？

流石に、それは俺も引く……；；；」

「……ＯＴＬ」

「……はぁ……。いいから、説明しなさい。……色々、全部。

アンタ、何かこの聖杯戦争の事も、色んな事を知ってるんでしょ？」

「……まぁ、いいか…もう話しても。……ん～……でもなぁ……。」

「…何よ。未だ、何か有るって言うの？」

「……有るって言うか……結構長いんだよなぁ……俺の事も話すとなると。

一日目一杯使って、何とか…ってぐらいかな？……だから、今から話すと、確実に徹夜だ。

お前達……その疲れ切った身体で、徹夜して聞ける自信…有る？」

“うぅぅっっ……。”

「…まぁ、そういう訳なんでなぁ……。……んじゃ、こうしよう！！」

「……何か嫌な予感がする。…ていうか、嫌な予感しかしないけど……どうするんだ？」

「簡単な事さね。取り敢えず、これから帰って、今日は飯喰ってみんなお休み！！！

んでもって、明日一日掛けて、じっくり話そうや。どうせ、時間はタップリ有るんだしさ。

あ、後、ギルも来いよ。お前の分専用の飯と寝床を用意してやるからさ。」

“な、な、何ぃぃぃっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

皆、カイトの言った事が信じられなかった。

たった今、自分を殺した者を家に泊めるなど……だが、しかし……当の本人は……

「ほう！貴様が自ら、我(オレ)を持て成す…と？……面白い！！！貴様の事にも興味が有る！！！

此処は、貴様の提案に乗ってやろうではないか！！！！！！！！！」

……何気に、物凄いノリノリであった。

「おう、そうか。……まぁ、飯と寝床用意すんのは、黄宇と水薙だけどな。

んじゃま、誰一人欠ける事無く、みんなで無事凱旋しようか！！！」

“……お、お～～～……。”

「声が小さい！！！！！！そんなんじゃ、お前達、送ってやらんぞ！？！？

もっと声を張り上げろ！！！！！！！行くぞ！！！！！！！！！！

さあ！！！誰一人欠ける事無く、無事凱旋しようか！！！！！！」

“おーーーーーッッッ！！！！！！！！！！！！！！！”

「宜しい！！！では、衛宮家へ転移する！！！！！！」

……波乱含み所では無く、可成り色々と引っ掻き回していったカイト達。

本来歩む筈の歴史とは、まるで違う形になっていってる此の世界。

その結果、もたらされるものは……幸か……不幸か……。

それを決めるのは、他ならぬ自分達である事を……

今はまだ分からない、士郎達であった。

……まぁ、何はともあれ。今は、魔術師（マスター）達に休息を。

そして……サーヴァント（せんし）達に、安らぎを。

……物語（Ｆａｔｅ）は、まだ終（あきらめて）わっていないのだから。

決着（Ｐｅｒｉｏｄ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回も恐らく、結構時間が掛かると思います。明日か…明後日か……。

では。今話も続けて御覧頂き、有難う御座いました。

聖杯戦争の真実～救世主の名～（Ｆａｔｅ／Ｍｅｓｓｉａｈ'ｓ ｍｅａｎｉｎ

現時刻（１１：４５）※但し二時間遅れ

ＰＶ：７６５，２９９アクセス　ユニーク：７０，３１５人

皆様、いつも有難う御座います。

御待たせ致しまして、申し訳ありませんでした。

そして、ユニーク７０，０００人突破致しました！！！

改めて、感謝致します。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

ｓｉｄｅ：衛宮家

絶望と希望の闘いの後…。皆で家に戻って来た後。皆が英雄王を警戒するも、

敵の筈のギルと、何故か死んだ筈で、今生きているカイトが親しく語り合う様を見て、

一旦は落ち着いた…風にした。その間に、黄宇が飯を作り、水薙がギル用の寝床を用意し、

桜が慌ててそれに参加し、他の皆は取り敢えず居間にて腰を落ち着けた。

そして、飯が出来る間に、ギルが鋼牙に飛び付いて黄宇に吹っ飛ばされたり、

士郎がボロボロの儘で、手伝いに入ろうとして、皆に力尽くで抑えられたり……ｅｔｃ．

んで、飯後。用を足して、風呂に入って、消灯して……

皆して、ギルやカイト達を未だ警戒しながらも、疲れ故かグッスリ寝入っていた。

そして、翌日。

「……みんな、おはようさ～ん……。」

そう寝惚け眼の儘で、のっそり起きて来たカイトの首筋に赤い斑点が沢山。

そして、シャワーを浴びて来た黄宇と水薙は腰を押さえて入って来た。

“……又、ヤってたのか……こいつら……;;;;”

そんな顔をしていた。……していたので、答えたカイト。

「…ん?……うむ。当然シテたよ?昨日は頑張ってくれたからな。

労いに対して褒美を与えるのは、主の仕事だ。…ま、単に俺がイタしかっただけだけど。」

相変わらずのカイトの台詞に、みんなが呆れていた。そして……。

「……まぁ、それは置いといて。……その…主…ってどういう意味だよ、カイト。

お前達、家族じゃ無かったのか？」

「……それに、今は居ないけど、あのチビ龍達…４２体も同時召喚するなんて……

一体どんだけ出鱈目な魔力を持ってるのよ？」

「……それに、私達…神話時代の者と関わりが有ると言うのに、貴方は今以てして生きている。

……一体、どういう事なのですか？……救世主（メシア）。」

「うむ。……幾ら其方とは言え、バーサーカーとして喚ばれた我を話させる様にするなど、

常軌を逸している。……得心出来る説明を望む。」

「…それに、コトミネキレイが言ってた…『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』ってどういう意味？

それと、貴方の業ってのにも興味が有るわ。」

「……そして何より、貴方が……己が妻子をその手で殺めたという訳も是非、知りたい。」

「ちょっと！！！セイバー！！それ、どういう事？！」

「……分かりません。あの言峰がそう言い、救世主（メシア）がそれを認めたのです。」

「……益々、色々聞かなきゃいけないようね。……さあ！キリキリ吐きなさい！！！

アンタが、今日必ず話すって言ったんだからね！！？全てキッチリ答えて貰うわよ！！！」

「へいへい。…んじゃぁ、聖杯戦争の真実よりも先に、俺の事を聞くんだな？」

“然り（そうよ・そうだ）。”

「了解。……んじゃま、どっから話そうかねぇ……。」

長々と、カイトの一生を纏めた話を聞きながら、黄宇や水薙が持って来た茶や茶請けを戴き、

時に驚き、時に興奮し、時に涙して、皆して聞き入っていた。

「……まぁ、大体俺の話はこれぐらいかな？」

“……うっうっうっ……ぐすっ……くぅっ……うっ…くっ……ぐぅおぉっ……。”

……今、丁度カイトが、妻子の仇を討った話が終わった所である。

皆、嗚咽し…号泣し……慟哭していた。

……英霊達も、泣かない迄も眉間に皺を寄せ……誰も暫く、言葉を発せずに居た。

……そんな状態が、何十分続いたろうか……？誰とも無く呟いた。

「……何故？……何故、貴方はそんな目に遭いながらも……何故？」

「何故…と言われてもなぁ……まぁ、救世主（メシア）故に…としか言えんなぁ…。」

「……救世主（メシア）……。……一つ聞いても宜しいですか？」

「この際だし、何なりと。」

「……貴方は以前、私達に問いました。…『救世主とは……救いとは何か？』…と。」

「ああ、聞いたな。……自分なりの答えは出たか？お前達。」

……誰もが俯き、首を横に振った。

「……そうか。」

「…それ故に、貴方に聞きたい。……貴方にとって、救世主とは…救いとは何なのですか？

……どうか、是非共お聞かせ下さい……救世主（メシア）よ。」

「…う～ん……そんなに御大層な事じゃ無ぇんだけどなぁ……。

……なぁ、お前等。俺の二つ名…どれぐらい知ってる？」

“…え？”「……ええと……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』だろ。」

「それから、『世界（ワールド）の破壊者（デストラクション）』とも呼ばれています。」

「私には、『全（オール）てを知りし者（ノウレッジ）』って名乗ったわね。」

「……そして、コトミネに『世界（ワールド）の破滅者（ディザスター）』って言われていたわ。」

「他には、『真なる救世主（メシア）』・『無限にして無窮なる旅人』。

それと、カイトが唯一自分で名乗っている『時と次元の狭間を旅（のじ）する者（ゆうにん）』等も有ります。

基本的に、カイトの二つ名は私達【ノルニル】が名付けました。」

「……【ノルニル】？…何、それ？」

「まぁ、その話は後にしましょう。今は、カイトの話を。」

「……分かったわ。……それで？……色んな二つ名が有る様だけど…それがどうしたの？」

「ああ……それじゃ、それらの意味は何だと思う？」

“…え？意味？”

「そう。…意味だ。無意味な二つ名など此の世には無い。では、その意味・意図は何だと思う？」

みんなで必死に考えるが……どれも正解では無かった。

「……もう！じゃあ、一体どういう意味だってぇのよ！？」

「まぁまぁ、そう怒るな。……んじゃ、正解発表といくか。まずは『宇宙（そら）の救世主（メシア）』からだ。

……これはな？俺は今まで数多の世界を救って来たが……

その実、未だ完全には救われていない世界が沢山在る。

それ故、そういう世界に、再び舞い戻る事も少なくない。……

…だが……その中には、

舞い戻った時には、既に遅く、もう数多の人々が無惨な状態になっている事が多い。

その為、それらの人々を苦痛から解放する爲に、一度ならず救った人々を……

この手で幾度も、滅ぼさなければならなかった。……星ごと……世界ごと…な。

その結果、残ったものは静寂なる宇宙のみ。宇宙しか救えぬ鍍金（メッキ）の救世主。

故に名付けられたものが……『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。

俺の救世主（メシア）と言う名はな?…助けた筈のセカイをこの手で改めて殺し尽くした事に対する……

自身への戒めだ。……その業故に、俺はその二つ名を享け容れている。」

……その……カイトの二つ名に籠められた余りの空しさ……凄絶さに絶句する皆。

だが、カイトは構わず、続けて他の二つ名の由来を話した。

「御次は『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』・『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だ。

これは、先程話したが……俺の妻子を俺が殺した後、次々と数多のセカイを滅ぼし出した。

その時、初めの内に呼ばれていたものが『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』。

そして、その名が付いた後も只管、セカイを破壊し続け……

名付けられた名が『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だ。

まぁ、後者には、俺という存在が此の世に在る限り、滅ぼされないセカイは無いという

皮肉も多分に入っているがな。」

……又も、カイトの妻子の事を思い出し、涙する面々。

そして、矢張り皆に構わず話し続けるカイト。

「そんで、『真なる救世主（メシア）』・『無限にして無窮なる旅人』は、名付けたのはアルニスだ。

その意味は……俺も実は知らん。……まぁ、想像は付くがな。」

「では、御教え致しましょう！！」

何故かは判らないが、妙に嬉しそうに胸を張ったアルニスが、説明し出した。

「先ず、『真なる救世主（メシア）』ですが…。

これは、『宇宙（そら）の救世主（メシア）』が、多分に皮肉的な意味を含む事に対して……

カイトがその名を甘んじて冠しても尚、諦めず、絶望せずに、

数多のセカイを救い続けた事に対する尊称です。

……私は、カイト以上に『救世主（メシア）』の名に相応しい人を知りませんから。」

その、微笑みと共に告げられた言葉に、心から納得する一同であった。

「……フン。……だそうだ。…もう一つの方は？」

「はい。『無限にして無窮なる旅人』の方ですね。そちらは読んで字の如しです。

決して、終わる事も、止める事も、諦める事も無い。限りも、尽きる事も無い。

そして何より、カイトは救世主（メシア）として、決して威張る事も、驕る事も有りません。

常に一人の人間として。常に、第三者である旅人として。皆を…遍し（あまね）存在を救う者。

……故に『無限にして無窮なる旅人』。

……どうです？最もカイトに相応しい名だと思いませんか？」

皆、深く頷く事で、同意の意を表した。

「そして、カイトがその名を恥ずかしがって自分で名乗ったのが……。」

「……『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』……って訳ね？」

「はい、その通りです。」

「ド喧しい。はい。…じゃねぇよ、バカアルニス。」

「またまた～……相変わらず、お茶目なツンデレさんなんですから…カ・イ・ト・は♪」

「……うん、良し。取り敢えず、トンデケ、アホニス。」

「え？……。」　ドヒュウウウーーーン……。

その後、アルニスの姿を見た者は誰も居ｎ「だから、ちゃんと生きていますってば！！！」

……チッ。……訂正。結局、数十秒後にボロボロになって戻って来たアホニスであった。

「……も～～～……全く酷いんですから……カイトってば。」

「五月蠅ぇっ！！！テメェがアホな事ばっかり言うからだろうが！！！！！アホニス！！！！」

「……本当にカイトってば、つんd…あ、嘘です、嘘ですってば！」

“……アハハ……；；；；；；；”いつもの光景に、安堵しながらも呆れる面々であった。

「全く……。んで、残った『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』ってのはだな。

……俺がこういう人生を送る切欠になった【奴】に付けられた、単なる能力名だ。」

「能力？……何か、可成りえげつない能力名なんだけど……；；；；」

「まぁな。その能力は、読んで字の如しだ。
あらゆる平行・異世界の全ての生物の能力を、十全を越えて万全に使える能力。
まぁ、つまり、お前達の英霊としての能力も、宝具も一切を十全以上に使えるって訳。」
“……ハアアアアァァァァァ！？！？！？！？！？！？！？”
絶叫する皆々。そりゃそうだ。だが、未だカイトの説明は続き、皆の顎は外れた儘になる。
「他の二つ名も業と共に、その能力故に由来する。
『宇宙（そら）の救世主（メシア）』は、黄宇達…五行と契約し、使役出来る能力。
『真なる救世主（メシア）』は、４３体の龍達と、五行の真の力を解放・維持・使役出来る能力。
『世界（ワールド）の破壊者（デストラクション）』は、相手の攻撃や、俺自身に働き掛ける能力を無効化する能力。
『世界（ワールド）の破滅者（ディザスター）』は、相手の能力そのものを、封印・消去する能力。

『無限にして無窮なる旅人』は、数多の平行・異世界や時を渡る力。

一応、自分でも出来るが、メンドイんで主に【奴】にランダムに任せてる。

より危機に瀕している世界へ、優先的に行ける様に、【奴】が調整している。

……但し、これらは俺が一から作り上げた俺だけの能力。【奴】は一切関与していない。」

可成りの出鱈目な能力に、全員絶句を通り越して脱力している。

……何故か、何人かから乾いた笑いも漏れている。……デスヨネー。

「まぁ、俺に勝てなくても気にするな。創世神だって俺にゃあ、傷一つ付けるのが関の山だ。

況してや、セカイに縛られているお前達英霊程度じゃ、絶対に不可能だよ。」

「……ねぇ……そんなんで闘って楽しい？」

「うんにゃ、全く。だから、お前達も見た事のある、あの鎧を着てるんだよ。」

「……？どういう事？」

「いや、だからな？あの鎧は、俺の強過ぎる力を抑える為の、言わば拘束具なんだ。

基本的に、対人戦はあの鎧類を着ないと一切出来ん。

だってお前等、星が消えたら死ぬだろ？俺は平気だけど、相手がまず無理。

だから、極力星を壊さない様に鎧を着て尚且つ手加減して、それでようやっと、対人戦が適う。

……という訳だから、恨むなよ？ギル。」

「……う、うむ。……そ、それならば、し、仕方ない。」

……自分達は一体今まで、どんなバケモノを相手にしてたんだ？；；；；

良く生きてイラレタナー……。……敵にならなくて良かったぁ～～
……；；；；；；

等々。みんな思い思いに、ホッとしていた。……と、何かに気付いた凛がカイトに聞いた。

「……って、ちょっと待って。……アンタ、今説明中に、黄宇達の事、何て言った？」

「あ、やっぱ気付いた？……絶対スルーするーと思ったのに。……なんちゃって☆」

「死ね。……じゃなくて、アンタ五行って言ったでしょ！？」

「……シクシク……言ったヨ？……ソレガナニカ？」

「そんな事で拗ねるな！！それが何かじゃないわよ！！五行って言ったら有名な神獣じゃない。

つまりよ？アンタの能力はその契約によって強くなったの？」

「うんにゃ、逆。」

「は？…逆って……え？……ま、まさか……？」

「そう。俺が強くなったんじゃなくて、五行が強くなったの。俺と

契約した事で。

本来こいつらは、凛の言う通り、神獣程度の力しか無かった。

でも、俺との契約により、龍斗達は四神…そして、更に上の位の四霊に成り、

黄宇は五行の長に相応しい力を身に付けた。故に今のこいつらの力は、創世神以上だよ。」

……普段からのほほんとして居り、今もカイトの膝上に座る鋼牙や……

べったり側に引っ付いている水薙や、僅か数ミリ程度しかカイトから離れていない黄宇達が、

実は、この星の神々や創世神よりも、位も力も上などと誰が信じられようか？

「……そう。まぁ、アンタの事は、大体判ったから、もういいわ。……納得いかないけど。」

「へいへい。……んじゃ、次は……。」

「ええ。……【ノルニル】についてよ。」

「ありゃ。それもか？……本当に、凄く長くなるぞ…？話が。」

「構わないわよ。……こうなりゃ、毒を食らわば皿迄よ！！

……ほら、キリキリ答えなさい…アルニス。【ノルニル】って一体、何？」

「……では、御話致しましょう。カイトの話にも出て来ましたし…ね。

取り敢えずは……。」

「……取り敢えずは……？」

「……御昼御飯を食べましょう♪黄宇、御願いします♪♪」

“ズコッ！！”……素で、全員同時にずっこけた。……まぁ、確かにもう昼ではある。

「……主殿。」

「……ハァ……頼む、黄宇。作ってやってくれ…全員分。」

「畏まりました。」

昼食後。トイレも済まし、飲み物と御茶請けを用意し、話を続けた。

「……ふぅ…。では、私達【ノルニル】について…でしたね？」

「ええ。……じっくりと聞かせて貰うわ。」

「……では、多少掻い摘んで御話すると致しましょう。」

……説明中、色々と皆を驚愕させていた。アルニスが、黄宇達にも歳を偽っていたり、

その所為で、ドルゴラも余計に図に乗ったとして、カイトにＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩされたり、

そのドルゴラの所の話では、激昂した何人かに胸座を掴まれたり…

…ｅｔｃ.

「……と言う所でしょうか？今は、私の代行として、第二席となったシュガルが務めています。

……それにしても……痛いですよぅ～……カイトぉ……グスン；；」

「知るか！！！超絶ドアホニス！！！！！……真逆、鯖読んでるとは……。

あ～～頭が痛くなって来た……。」

「ぅぅぅ～～……だって、だって！！カイトだって……何時も２５だっ…て、

嘘付いているじゃないですかぁ。カイトばっかりずるいですから、私も若くしたんです。」

「……ドアホウ……俺の歳とお前の言ってる歳じゃぁ、まるっ切り意味が違うだろうが……。」

「……；；；；；；；；；；；；と、所で、結局アルニスは幾つなのですか？我が主。」

「……ん？今、大体５００垓ぐれぇだろ？」

「はい、そうですね。…貴方と、凡そ８５００垓強程、離れて居ますから。」

「まぁ、そういう事だ。……今ントコ、此奴が一番俺と長い付き合いだな。

次が、この前話した、アキシオンこと渡良瀬トキヤ。んで、その次がお前達五行。

最後が、シュガル坊やだな。……今、生きてる奴等の中では…な。

」

“やっぱり、此奴も人外以上のバケモノだったか……；；；；；”

……改めて、出鱈目さに驚く面々であった。

「所で、貴方がさっきから言っている【奴】って一体、ナニモノ？」

「あ～～……まぁ、今は内緒。」

「何よ？いいから答えなさい。全部話して貰うんだからね？」

「……いや、これは、今は言えん。まぁ、俺が此の世界を去る際には教えるよ。

嫌が上にも知るしな。只、一つだけ今言える事は……。」

“……言える事は……？”

「……【あいつ】は、俺でも絶対に勝てん。

俺の存在の全てを擲(なげう)って掛かれば、何とかなるかもしれんが……

そうでもなければ、絶対に勝てん。精々がセカイを渡る際に、抗う程度が関の山だ。」

“……。”

……あの絶対強者とも呼べるカイトですら、抗う程度しか出来ない程の存在……。

……一体、それは何程(どれ)の存在なのだろうか……。

……皆、余りの恐ろしさに、思わず身体が震えて来た。

「まぁ、そういう訳なんでな。【あいつ】に関しては、最後迄待っててくれ。何れ話すから。」

“……りょ、了解。”……何れ知らなければならないのか……。

その時の事を想像して、少々……いや、多々暗澹たる気持ちになってしまった面々であった。

「んじゃ、御次はやっと、聖杯戦争についてだな。……お前等……話を聞く覚悟は十全か？」

“……然り（勿論・当然）！！”

「宜しい。ならば話そう。……そもそもの事の始まりは、第三次聖杯戦争の時だ。

その際、アインツベルンが召喚した英霊。クラス名はアヴェンジャー。

真名は……アンリ・マユ。」

「あ、アンリ・マユですって!?それ、神の名じゃない!!!」

「そう、神の名だ。……だが、彼は神では無かった。

……彼は、只、悪で在れと願われただけの、単なる人間だった。

……故に真っ先に狙われ、真っ先に倒された。……だが、それからが、問題だった。

万能願望製造器であった聖杯に吸収された後、その器を壊され大聖杯に吸収された。

そして、大聖杯はその『悪で在れ』という《願い》を享けた。

今の大聖杯及び聖杯は、その願いを破壊・破滅という形でしか叶えられない欠陥品なんだ。」

「ちょ、ちょ、ちょっと待って!?!?色々と理解出来ない事のオンパレードよ?!」

「そうです!聖杯に吸収されるとは、どういう事ですか?!」

「大聖杯って何だよ?!そもそも聖杯の器って壊せるのか?!」

「あ～……そっからか。……まぁ、いいや。全部纏めて答えるぞ。

……斯く斯く然々……以上だ。」

「……そんな……。」

「……成る程ね……。確かにそれなら、辻褄が合うわね。」

「……真逆、柳洞寺にそんな物が在ろうとは……。」

「……ハッ!?一成達は?!一成達は無事なのか?!」

「ああ、それならば問題無い。既に避難させてある。」

「そ、そうか……良かった…。」

「では、話を続けるぞ。結局、第三次では決着は着かず、次回へと持ち越しになった。

そして、第四次聖杯戦争が始まる。

この時、衛宮切嗣に召喚されたのが、不完全な英霊であるセイバーことアルトリア。

アルトリア・ペンドラゴン。……騎士王アーサーだ。」

「……。」

「……アーサー王。……道理で……最強のセイバーという事ね。……でも、不完全って?」

「ああ。アルトは死の一歩手前でセカイと契約していて、聖杯を受け取ってから死ぬんだ。

だから、今の彼女は半英霊とでも言うかな?霊体化出来ないのは、そういう訳だ。

肉体を中途半端ながらも持っているのでな。不可能なんだよ。」

「救世主（メシア）。私をその名で呼ばぬ様に御願いした筈ですが？」

「だって、メンドイんだもんよ、お前達の名前。いいじゃん、判り易くてさ。

騎士王（アルト）・蛇女（デュー）・魔女（ディア）・大英雄（レス）・光の皇子（クー）・英雄王（ギル）・小次郎・エミヤ。……な？判り易いだろ？」

“…確かに。”“確かにじゃない（ねぇ）！！！”

「まぁ、それはさておき。んで、その時、遠坂時臣に召喚されたのが、当時のアーチャー。

英雄王・ギルガメッシュ。…こいつだ。」

今、初めて正体を知ったセイバーを始め、皆、色々と驚愕していた。

「んで、話を端折って最後の決戦。この時生き残ったのが、切嗣とセイバー。

……それと……。」

「……それと……何よ？カイト。」

「……お前の父を裏切った言峰綺礼と、そいつのサーヴァントになったギルガメッシュだ。」

「な……なんですって！！！！」

「ほう！あの時臣の娘であったか。……ふむ。あやつよりも、素質はある様だな。」

「……アンタが……アンタが御父様を！！！！！」

「落ち着け、凛。お前じゃどうにも出来ん。」

「…くっ……でも！！！！！」

「そいつは、後で俺がフルボッコにしておくから、其処迄にしておけ。

……それとも……お前は魔術師である事を止めるのか？……それならば構わんが。」

「……分かったわ。その代わりギッタンギッタンにしないと承知しないからね！！！！！」

「……了解。……だとさ、ギル。ボコボコにしろってよ。」

「……；；；；；；」

冷や汗を思わず掻いていたギルであった。……だって目がマジなんだモン。ｇｋｂｒ。

「話の続きだ。セイバーは未だ正体の判らぬギルと戦い、切嗣は綺礼と戦い、

セイバーの鞘…『全て遠き理想郷（アヴァロン）』をその身に埋め込み、幾度も殺されながら、

最後には綺礼を殺した。……そして、聖杯の正体を知った切嗣は、

令呪を使ってセイバーに命じた…『聖杯を壊せ』と。だが、聖杯の正体を知らないセイバーは

切嗣に裏切られたと思い、その思いを抱えた儘、士郎のサーヴァントとして喚ばれた。」

「……。」

「そして、セイバーの宝具が発動し、聖杯の器になったアイリスフィールを破壊した。

その結果、この街は焼かれ、士郎は親・友・記憶の全てを失った。

その時、士郎も虫の息だったが、偶然発見した切嗣によって、助けられた。

……何故か解るか？」

「……もしや……鞘が……？」

「正解だ。…そう。切嗣は自身に埋め込んでいた聖剣の鞘を、士郎に埋め込み助けた。

その後、士郎は切嗣の養子になり……その後の士郎は、お前達も知っての通りだ。

つまり、士郎が今回の聖杯戦争のマスターになるのは、必然だったという訳さ。」

「……成る程…。じゃあ、私が幾ら頑張っても、セイバーは召喚出来なかったって訳ね。」

「そういう事だ。まぁお前の場合は、エミヤと言うほぼ確実に喚ばれる英霊が居るからな。

先ず、それ以外は喚べんよ。」

「……そう。…所で、何で綺礼は生きてるの？殺したんでしょ？」

「あいつが今生きてるのは、聖杯の力の御陰だ。今、心臓に聖杯の泥が入っている。

まぁ、放っておいても、この聖杯戦争が終わったら、自動的に死ぬんだがな。」

「……私は……私が……シロウの仇……そう思われても仕方無いのですね……。」

「な！？何バカな事言ってるんだ、セイバー！！！俺はそんな事、絶対に思ってないぞ！？」

「ですが！！！！！……私は……私達の戦いが、貴方から全てを奪った事は……事実です。」

「だから、気にして無いって。……そもそも、覚えていないんだから。

セイバーが気に病む事は無いんだって。俺は、爺さんに出会えて良かったと思ってるし、

何より、その御陰でセイバー達に出会えた。……だから、いいんだ……セイバー。」

「……シロウ……。」

「未だ、話は終わりじゃ無い。そして、この第五次聖杯戦争。先ず、桜についてだ。」

「か、カイトさん！！！！！」

「却下する。必要不可欠な話なのでな。間桐家に養子に出された、凛の実の妹…遠坂桜。」

「な！？桜が遠坂の妹ぉ！？！？」

「ああ。まぁ、詳しい事は、後で凛と桜から聞け。……では、話を続ける。

養子になった桜は、間桐家の魔術に馴染ませる為、臓硯に虫を身体に埋め込められ、

強制的に身体を造り替えられた。……そして、臓硯は桜を間桐家の聖杯にした。」

“な！？！？！？！？！？”「どういう事よ！！！カイト！！！！！」

「……臓硯が桜に埋めた２１匹の虫。それに聖杯の欠片を埋め込んだんだ。

それに馴染ませる為に、養子に迎えて直ぐ間桐家の魔術に汚染させた。

桜の髪の色が変わったのが、その証だ。」

「……桜……。」

「……。」

「まぁ、今の桜は聖杯では無くなったが。俺が聖杯の機能は消しといた。」

「……一応、妹に代わってお礼は言っとくわ。…有難う。」

「どう致しまして。で、間桐家が着々と準備を調えている間に、綺礼も色々と画策していた。

本来のランサーのマスターを後ろから不意打ちし、令呪ごと手を

切り落とし、

自分が改めてマスターになった。……切り札にギルを残してな。」

「……。」

「……。」

「其処、睨み合うな。あ、それと、クー…朗報だ。」

「……何だ？下らねぇ事なら、殺すぞ？」

「お前の元マスター…バゼット・フラガ・マクレミッツだが……生きてるぞ。」

「……そうか。……生きてたか。……良い情報だ。」

「まぁ、大まかな話の流れはそんな所だ。これ以上細かく話すと、本当に時間が足りん。

取り敢えず、ギル。お前は綺礼の許へ戻れ。明日、大聖杯を壊しに行くから。」

「……そうか。貴様の言っていた舞台と言うのは……。」

「そうだ。明日、大聖杯の前で、俺とお前…そして、綺礼と士郎で大立ち回りだ。

……彼処はそれなりに広い。俺達には、最も相応しい舞台だろう？」

「良かろう！！！では、明日だ！！！今度こそ、違えるなよ？……宿敵(とも)よ。」

「ああ。……楽しみにしていてくれ。」

「フハハハハ……ではな！！！」

「まぁ、そういう事だ。皆、色々と禍根は有るだろうが、此処は堪えてくれ。

俺が居なくなった後にでも、存分に殺し合ってくれ。」

「カイト！！！」

「ヘイヘイ。まぁ、それはさておき。明日の為の準備だ。士郎。」

「……何だよ、カイト。」

「アルトリア。」

「…何でしょうか？救世主（メシア）。」

「凜。」

「…何よ？私も何かするの？」

「ああ。お前が最も重要だ。……そして、桜。」

「…は、はい。」

「うむ。お前達、睦め。」

「「「…………は？」」」

「だから、ぶっちゃけ、S◯Xしろっつってんの。」

「「「な、な、なぁぁぁぁぁ!?!?!?!?!?／／／／／／／／／／／／／／／／／／」」」

「一応、理由は有るぞ？凛には、士郎に魔術回路の一部を渡して貰って、凛とのパスを作る事。

それによって、士郎の固有結界が使える様になる。

アルトは、士郎と繋がりを深める事によって、士郎の鞘の力を高める事。

桜は、さっき言った間桐の魔術の所為で、そろそろ身体が危ない。

だからだ。」

「「「「で、でも！？！？！？！？！？／／／／／／／／／／／／／／／」」」」

（お前達、士郎の事好きなんだろう？）

（（（／／／／／／／／／／／／／／／）））

（こうやって、無理矢理にでも機会を作らないと、一生恋仲にはなれんぞ？）

（で、ですが／／／／／／／／／）（だ、だけど／／／／／／／／／）（で、でも／／／／／／／／／）

（…………まぁ、どうしてもダメならしょうがないがな。

その時は、士郎が死ぬだけだし。俺には関係無いし。）

（（（！！！！！！！！！！）））

「まぁ、後はお前達の好きにしな。自分達で話して答え出しな。…
…時間は余り無いがな。」

……その夜、士郎達がどうしたか……それは、闇夜に照らされた月のみが知る事である。

如何でしたでしょうか？

ダラダラと済みませんでした。どうにも、説明回は長くなってしまいます。

多少（多々？）無理矢理にですが、士郎ハーレム√……これで確定デス。

次回は、大聖杯を前にしての、決着（けじめ）です。恐らく二回に分けられると思いますが。

今まで、空気だったあの人が、到頭、活躍致します。どうぞ、御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

最後の聖杯戦争（Ｆａｔｅ／ｆｉｎａｌ　ｆｉｇｈｔ）（前書き）

現時刻（１１：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：７８６，７１８アクセス　ユニーク：７１，８６８人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

最後の聖杯戦争（Ｆａｔｅ／ｆｉｎａｌ　ｆｉｇｈｔ）

ｓｉｄｅ：衛宮家

カイト達から、聖杯戦争＋αの事を聞いた翌日。皆が陸続と起きてくる中、

最後にのっそりと起きてきた人達が四人。……そう。士郎達である。

どうやら……というか、やっぱり、カイトに吹っ掛けられた通り、四人で致していた様である。

リア充核爆発して死ねばいいのに。

「……よお……おそよう。」　ニヤニヤ

「……お、おはよう。」

「……。」　ニヤニヤ

「……な、なんだよ……？；；；；；；；；；；；；」

「……なぁ、士郎？知ってるか？」　ニヤニヤ

「………な、何を？」

「ん？……英雄(ヒーロー)の英語の綴り。」

「へ？……ええと、h・e・r・oだろ？」

「…正解だ。」　ニヤニヤ

「……？一体何が言いたいんだ？」

「いやな？…英雄と言われてる奴等は、総じて『H(エッチ)』で『ERO(エロ)』い…って話♪」

「グッッッ！？！？！？／／／／／／／／／／／／／／／」

「まさか、初体験で三人同時とはねぇ……焚き付けた俺が言うのも何だが……どんだけ～？」

「「「「／／」」」」

「…………シロウのH。変態。お兄ちゃんなんて大嫌い。」

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！！！！！！！」

妹（イリヤ）に、変態と言われ、あまつさえ嫌われてしまい、悶絶して倒れ伏した士郎であった。

そして、そんな士郎にもお構い無しに、声を掛けるカイト。

「……んで？…どうだった？」　ガシッ！　ニヤニヤ

「……な、何がだよ？／／／／／／／／／／／／」

「勿論、ちゃんと首尾良くイったのか？…って聞いてるんだけど？」
ニヤニヤ

「んなぁっっ！！／／／／／／／／／／な、な、な、何て事聞いて来るんだ！！お前は！！！／／／／／／／」

「ん～？……俺は、凛との契約の事と、鞘の力は強まったか？って聞いたんだけど……

一体、士郎君はどんな事を聞かれたと思ったのかなぁ～～～……？」　ニヤニヤ

「あ…う…ぐっ……ひ、卑怯な……／／／／／／／／」

「卑怯とは、人聞きの悪い。…チミが勝手に勘違いしただけでがしょ？…んで？どうだった？

良かったんか？上手くイったんか？満足イク結果やったんか？」
ニヤニヤ

「／／／／／／／／／／／／くっ……ああ、上手くいったよ！！！ちゃんと凛とも契約出来たし、

セイバーの御陰で、鞘の力も強まったそうだ！！！これで満足か！！？／／／／／／／／／／／／」

「そうか、そうか。しっかり満足してたんか。……へぇ～～～～……。」　ニヤニヤ

「／／／／／／／ぅ……だ、だから、なんだよ！？！？」

「いんやぁ……？で、こっからが本題なんだが……。」（キリッ

「！……なんだ？」

「うむ。……で、御感想は？」（キリッ

「……は？」

「いや、だから感想。……初体験で、王様と姉妹丼を同時に戴いた御感想は如何？

嘸かし幸せな時だったろうとな…。……で？どうなん？」　ニヤニヤ

「／／／／／／／／／／／／／／お、お、お、おま、お前、やっぱりそうかあああぁーーーー！！！！！

やっぱり、さっきから聞いてたのは、それかああああああーーーーー！！！！！！！！

い、言えるかあああ！！！そんな事ーーーー！！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「あれ？何？幸せじゃ無かったの？気持ち良くなかったの？がっかりしてたの？

うわぁ〜〜〜…………最低だな…お前。」　ニヤニヤ

「なぁぁっっ！！！！そ、そ、そんなワケ無いだろ！？！？……

……あ／／／／／／／／／／／／／／／／」

「…………（ニヤニヤ）だってさ、御三方。最高に至福の刻だったってさ。」

「「「／／」」」

カイトに散々揶揄われて、これ以上無いくらいに真っ赤っかになる、四人であった。

「シロウ(ヘンタイ)お兄ちゃんなんて、死んじゃえばいいのに。」

「ＮＯＯＯ！！！！！！！！！！」

そして、改めて義姉(イリヤ)に嫌われ、またもや悶絶する士郎であった。

「お～～～い……大丈夫かぁ～……生きてるかぁ～？」

「……な、何とか……ＯＴＬ」

「そうか。そんじゃ、そろそろ行くぞ～い。

取り敢えず、士郎・凛・桜・アルニス。それと、サーヴァント達は全員、一緒に来て貰う。

お前達はどうする？イリヤ・セラ・リズ・葛木。

此処に残って吉報を待つか、それとも最後まで見届けるか。」

「当然、行くに決まってるでしょ？……貴方達は残っていなさい……危ないんだから。」

「……御嬢様……どうか、御許し下さい。私達も、最後まで見届けたいのです。」

「……（コクコク）。リズもセラと一緒。イリヤ達と一緒に行く。」

「……もう。ホントに知らないからね？」

「はい！」「……（コク）。」

「…そうか。……葛木はどうする？」

「……キャスターが行くのならば、私も共に行こう。

……何より、生徒の成長を見守るのは、教師の役目だ。」

「……そうかい。んじゃ、全員行くという事で良いんだな？」

“ああ（ええ・はい・うむ）！！！”

「では、いざ参ろうか！！！決戦の地……大聖杯が鎮座する柳洞寺の地下へ！！！！！」

side：柳洞寺

「……着いたぞ。」

「……此処は？」

「柳洞寺の参道を外れた場所に在る処だ。……この目の前に在る岩の先に洞窟が在る。

其処を辿って行くと、大聖杯がデン！と置いてある大空洞に着く。其処が決戦場だ。

これが、最終確認だ。……皆、準備は良いな？おさおさ怠りは無いな？」

“ああ（然り・無論・無い）！”

「では、いざ！！始まりにして終わりの地へ！！！」

ｓｉｄｅ：英雄王（ギルガメッシュ）

……何時振りだろうか。……此程に気分が昂揚しているのは。……全く以て久しいな。

……救世主(メシア)よ。……此の刻を……其方との戦いを……如何程待ち侘びただろうか……。

「……ギルガメッシュ……奴等が来たぞ。」

「……そうか。」

「……仕挫(しくじ)るなよ？ギルガメッシュ。」

「……貴様こそな……綺礼よ。」

……さあ……！！早く来い！！！！救世主(メシア)よ！！！！！！我は此処に居るぞ！！！！！！

ｓｉｄｅ：柳洞寺地下・大聖杯の在る大空洞

「……此処まで、トラップの類は一切無かったわね…。」

「そりゃ、そうだろうなぁ。最終決戦の地にそんな無粋なモノ付けようものなら、

俺がぶち切れる事は、ギルなら知っている。そんな事はさせないだろうよ。

……例え綺礼がどうしようとも、ギルが壊してるさ。

……それより……出るぞ。」

……其処は、昏(くら)い……そう、とても冥(くら)い……開けた空間だった。

そして、最上段……頂上に大聖杯が鎮座して居り、その前にギル(ラス)と綺礼(ボス)が居た。

「待たせたな……ギル。幾百…幾千の時を経て、約束を果たしに来た。

……さあ……いざ、尋常に……存分に勝負しようぞ！！！」

「然り！！！……と行きたい所だが、マスターがどうしても……と言うのでな。許せ、救世主（メシア）。」

「構わんさ。此方とて、同じ事を言うつもりだった。……凛、存分に呪え。」

「……言峰綺礼……！！！アンタ……良くも、お父様を！！！！！」

「……ふ。やっと気付いたそうだな？凛。矢張り、貴様もあの男の娘という事か。

肝心な所でいつも詰めが甘い。何より、人に甘い。……少しは疑う事も学ばねば…な。」

「……ええ。御陰様で、警戒心と……憎悪という感情を覚えたわ…。」

「そうか……それは何よりだ。」

「……言峰綺礼……。」

「……衛宮士郎か。……衛宮という名は、いつも私を失望させ……そして、愉しませてくれる。」

「……お前は……お前だけは……！！俺が、この手で倒す！！！」

「……。」　ニヤァ……

「遠坂。……俺に、力を貸してくれ。」

「ええ。幾らでも持って行って構わないから、あの糞馬鹿をぶっ飛ばしちゃいなさい！！！」

「……了解した…。」

体は剣で出来ている。

≪Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.≫

「……邪魔はするなよ?…ギル。……俺達には舞台が必要だ。……最高の舞台がな。」

「フン！良かろう。……贋作者（フェイカー）の造り上げた舞台が如何なるモノか……篤と鑑（み）てやろう！！！」

血潮は鉄で
心は硝子。
《Ｓｔｅｅｌ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｆｉｒｅ ｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.》

「……何をする気だ？……衛宮士郎。」

幾度の戦場を
《Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａ
ｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ.》
越えて不敗。

「……シロウ。」

「……先輩。」

「……シロウ。……頑張りなさい……私の可愛い義弟（おとうと）。」

只一度の敗走もなく、只一度の勝利も無し。

《Ｕｎａｗａｒｅ ｏｆ ｌｏｓｓ.　Ｎｏｒ ａｗａｒｅ ｏｆ ｇａｉｎ.》

「……くっ……！……まさか……こんなに魔力を喰うなんてね……。

……でも……耐えてみせる！！！士郎！失敗したら許さないからね！！！！！」

担い手は此処に独り。

剣の丘で鉄を鍛(う)つ。

≪With stood pain to create weapons. waiting for one's arrival.≫

（……魔力(チカラ)が溢れてくる。……やっぱ、遠坂は凄いや。……遠坂も頑張ってくれてる。

俺は……こんな所で挫ける訳にはいかない…！必ず、お前を倒す！！言峰綺礼！！！）

ならば、我が生涯に意味は不要（いら）ず。

《Ｉ ｈａｖｅ ｎｏ ｒｅｇｒｅｔｓ．Ｔｈｉｓ ｉｓ ｔｈｅ ｏｎｌｙ ｐａｔｈ．》

「……そうか。貴様は、矢張り……私とは似て非なる存在（モノ）なの

だな……。

……ならば、見せてみろ……越えてみせろ……！！この私を！！！衛宮士郎！！！！！！」

此の体は、無限の剣で出来ていた。

《My whole life was, unlimited blade works.》

side：固有結界『無限の剣製：《Unlimited（アンリミテッド） bla
de（ブレイド） works（ワークス）》』

其処には、無数の剣が突き刺さっている、荒涼とした紅い丘のみがあった。

固有結界『無限の剣製：《Unlimited（アンリミテッド） blade（ブレイド） wo
rks（ワークス）》』

衛宮士郎の人生を体現したモノ。その全てが此処には在り、全てが此処には無かった。

「固有結界……だと……！！」

「そういう事だ。此処ならば、お前がどれだけ暴れようとも、一切外界には影響が無い。」

「……貴様……矢張り知っていたな？」

「無論だ。……さあ……舞台も調った。……今度こそ、死合おうぞ！！！ギルよ！！！！！」

「……クックックック……救世主（メシア）アアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

救世主と英雄王の戦いが始まった頃、此方でも今、正に戦いが始まろうとしていた。

「……待たせたな……言峰。」

「……貴様……真逆、固有結界の担い手とは…な……。しかも……此処にある此の宝具群。

正に素晴らしいの一言に尽きるな。」

「……此処に有る物は、全て贋作だ。……だが、俺はこれらは使わない。」

「……何？」

「……言った筈だ。お前だけは、俺がこの手で倒すと。

……行くぞ……言峰綺礼。……大聖杯の加護は、十全か？」

「来い…！！！衛宮士郎ォォォ！！！！！！！！！！！！！」

今、此処に、最後の聖杯戦争が、幕を開けた。

最後の聖杯戦争（Ｆａｔｅ／ｆｉｎａｌ　ｆｉｇｈｔ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

申し訳ありませんが、今回は連続投稿では有りません。

少々、焦らしてしまいますが、遅くとも明日迄には、必ず投稿致しますので、どうか、御待ち下さい。

さて、次回は、カイトｖｓギル　＆　士郎ｖｓ綺礼　そして、英霊達は……　の三本ですｗ

果たして、どの様な結末が待っているのか……。御楽しみにして頂ければ幸いです。

では。今話も拙作を御覧頂き、有難う御座いました。

聖杯戦争終結（Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ）（前書き）

現時刻（１７：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：８１２，５１０アクセス　ユニーク：７３，４９８人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、８００，０００アクセス突破致しました！！！！！

……真逆、たった五話で１００，０００アクセスも行くとは……。

では、御待たせ致しました。今話も、拙作を御堪能下さい。

聖杯戦争終結（Fate／stay night）

side：救世主（カイト）vs英雄王（ギルガメッシュ）

「……クックック……救世主（メシア）アアアアアアアアアアア！！！！！！！！
！！！！！！！！！！」

『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』から、宝具を取り出そうとするギル。……だが…。

「……おっと。……そう慌てるな、ギル。昨日の話を忘れたか？」

「…何？昨日の…？」

「そうだ。……言った筈だぞ？…俺はこの儘では、対人戦が出来ぬ故、鎧（よろ）うと。」

そう、カイトに宥められ、肩すかしを食った様に、宝具はその儘に一旦攻撃を中止するギル。

「では、疾く鎧え。」

「ああ。……まぁ、本来……お前達英霊相手ならば第一形態（アインス）でも事足りるのだが……。」

「……キサマ……我（オレ）を侮辱するか……！！！」

「いいや。……故に。俺を『宿敵（とも）』と呼ぶ貴様に敬意を表し……俺も少し、本気を出そう。

セカンド・イグニッション　第二形態（ツヴァイス）　完全鎧化（フルアムド）」

「ヌ…！！！グッ……！！！！！」

その姿は、異様を通り越して神々しかった。

右腕（メルト）は、煉獄すらも蒸発するかの如く、焔え盛り。
左腕（プラズマ）は、雷すらもまるで静電気に思える程の雷撃を、青白く発光しながら放ち。
右足（エアー）は、完全に空気と同化しているかの如く透明で、動く際僅かに周りの空間が歪むのが見え。
左足（ガイア）は、堅固な岩石を中心に、紅（マグマ）・白（クラウド）・青（シー）・緑（フォレスト）に彩られ、それ一つで世界を成す程に美しく。
頭部（フリーズ）は、如何なる時でも惑わされずに、瞬時に判断が下せるかの様に、蒼白く冷酷に。
胴体（サン）は、全てのモノを、優しく…且つ厳しく包むかの様に、煌々と。
マント（ルナ）は、漆黒の中にも、太陽の光に照らされて、反射して仄かに輝き。

「……貴様達、英霊には未だ見せた事は無かったな。

……これが、お前達が見て来た第一形態（アインス）の、純然たる上位種。…
…セカンド（ツヴァイス）の最終形態だ。」

「……クッ……成る程……。此程の力ですらも、制限されたモノ……。

正しく……救世主……という訳か！！！嬉しいぞ！！！救世主（メシア）よ！！！！！」

「……では、俺と闘う必須条件だ。…これに耐えて見せろ。

魔力全解放（フルパワー）」

「！！！！！！ヌ……！！！！ヌグォォォォォ……！！！！！！！」

その瞬間、常人にはとても耐え難い魔力の塊（プレッシャー）が、その辺り一帯に伸

し掛かった。

「……ざっと、第一形態（アインス）の一万倍だ。……矢張り耐えられぬか？ギル。」

「グォオオオオ……！！！！！！！！！！」

「……ギルよ。何時迄、跪いている？…それでも、英雄王か？……そのザマで……

この俺を宿敵（とも）などと呼べると思うのか？……俺を宿敵（とも）と呼ぶのならば……！！！！！

貴様の意地を！！！王たる所以を！！！！！俺に見せてみろ！！

！！！！！！

英雄王！！！！！ギルガメッシュよ！！！！！！！！！！」

「……ウゥォォォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！
！！！！！！！！！！！

救世主(メシア)アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！
！！！！！！！！！」

自らを叱咤激励させ、多少ふらつき乍らも立ち上がり、威厳を……
宿敵(とも)たる証を見せる英雄王(ギルガメッシュ)。

そして、その様を見て、莞爾と微笑む救世主(メシア)。

「そうだ……それでいい。……さあ……掛かって来い…ギル。……我が友よ！！！！！」

「ヌォォォオオオオオ！！！！！！！！！アアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「救世主（メシア）アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

救世主と英雄王の真なる戦いが、今此処に幕を開けた。

ｓｉｄｅ：正義の味方（えみやしろう）ｖｓ悪の味方（ことみねきれい）

今、衛宮士郎は干将莫耶を手に。

言峰綺礼は無手で。

互いに対峙している。

微動だにしない二人の沈黙を、綺礼の方から破って来た。

「……衛宮士郎。無手の相手に武器を用いるとは……それでも、正義の味方かね？」

「……お前は、遠坂に拳法を教えた、武術の師と聞いてる。

……ならば、無手で挑むのは、無謀だ。……だから、こいつを持っている今の時点で、

ようやっと、互角になれる。……言峰。…お前の毒はもう、俺には効かない。…後は……。」

「……後は、只、雌雄を決するのみ…か……。良かろう。もう、一切の小細工は無しだ。

……掛かって来い。……正義の味方(えみやしろう)よ！！！！！」

「行くぞ！！！言峰！！！！！」

「フンッ！！！」

「ぐぁっ！！！」

矢張り、綺礼は強かった。

士郎は、殆ど攻撃を入れられずに、逆に綺礼の攻撃を幾度も喰らっている。

しかし、士郎とて黙ってやられている訳では無かった。

「くっ…このぉっ！！」

「ぬ！…ぐぅっ……！！」

幾度もカウンターや追い打ちを掛けられながらも、必死に反撃し、何度も斬り付けている。

そんな攻防が幾十度続いたろうか…？又、士郎が攻撃に移った。

干将を下から振り上げ、綺礼を斬り上げた。その刃の腹を、手の甲で払い除ける綺礼。

しかし、それを囮にし、左の莫耶で横っ面を叩き付けた。だが、更に莫耶の内側に入り……

「…ヌンッ！！……む…？」

「ごはぁっ…！！！」

正拳突きを叩き付けた綺礼が、吹き飛ばされた士郎を意に介せず、自身の手を見る。

……手応えに違和感が生じた訳が分かった。手が血塗れになっていた。

だが、何時の間に?……その疑問をぶつけようと士郎を見た綺礼は、問うのを止めた。

……何故ならば、聞く迄も無かったのだ。……士郎の身体から、刃が生えていたのだから。

side：観客（ギャラリー）

こちらは、騒然となった。突然、士郎から刃が生えて来たのだから。

すわ！他の敵からの攻撃か！？…と俄に騒（ざわ）ついたが……

何処にも敵影は、影も形も気配も見えない。

「……一体、どういう事?!」

「何故、シロウの身体から剣が…?!」

「せ、先輩ッ!!!!!!!!!!」

「…しかも、アレ……まるで身体の内側から生えて来たみたいに、出て来たわよ?」

そんな、皆の口々に話す言葉に、一人、事態を理解している者が答えた。

「……その通りだ…イリヤ。アレは、奴の身体から生え出て来たモノだ。」

“な!?!?!?!?!?”

驚愕している皆に構わず、話し続けるアーチャー。

「アレは、自身の命が脅かされると、身体の内側から勝手に飛び出そうとしてくる。

固有結界の暴走…。それを抑えられなければ、身体の裡(うち)から、自身の剣群によって、

五体を散々に斬り裂かれる。故に、オレ達の『体は剣で出来ている』。

それが、オレ達の固有結界…『無限の剣製(アンリミテッド・ブレイド・ワークス)』」

皆、その恐ろしさに絶句していた。……だが……。

「そ、そんな!?それじゃあ、先輩は、今!?!?」

「そうだ。……奴の命も、風前の灯火だと言う事だ。」

「くっ……士郎!!!」

「止めぬか!!!戯け!!!!!!」

「……アーチャー…!!」

思わず飛び出そうとした凛を、叱責するアーチャー。

「…あれは、男と男の勝負などというものでは無い…!……アレは……。

正義の味方と悪の味方との、自身の正義（いのち）を懸けた戦いだ。

……その邪魔をする者は、何人たりとも、私が許さん！！」

裂帛の気合いを以て、皆の前に立ち塞がるアーチャー。

「……随分な御言葉だけど……幾ら貴方でも、これだけの人数を相手には出来ないでしょ？」

「……忘れたか？凛。私が何者なのかを…。そして、此処が何処なのかを…。」

「…え？……！！！！！」

「……やっと、気付いた様だな。そう……私…いや、オレもエミヤシロウであり、

此処は、固有結界『無限の剣製（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）』。……故に……此処はオレの世界でも有る。」

そうアーチャーが言うと、彼の周りの剣群が一斉に持ち上がり、皆の方にその鋒（きっさき）を向けた。

「再度、宣言しよう。彼等の戦いを妨げる者は、何人たりとも通さん。

それでも尚、加勢するなどと無粋な事を言うのであれば……覚悟して貰おう。

君達の相手は、此の世界そのものだ。……世界に抗う覚悟は万全か？」

皆、今度こそ本気で怯んだ。……その自身の命すらも厭わない覚悟に。

そして……。

「……分かりました…アーチャー。」

「!?セイバー!!!」

「…凛。此処はアーチャーの言う通りにしましょう。

……あの決闘は私達が入っていいモノでは無い。

私達に出来るのは、シロウの勝利を信じて待っている事だけです。」

「……くっ……士郎。……分かったわよ。

……どうせ、あいつなら、ボロボロになりながら、

結局笑いながら、勝って来るに決まってるんだから！！！」

「……笑いながらって言うのはどうかと思うけど…でも、ワタシもリンの意見に賛成よ。

ワタシの弟だもの。あんな程度の奴に負ける筈が無いわ。」

「…そうですね。……私達が先輩を信じないと！必ず勝って帰って来てくれるって！！！」

「……シロウ。……待っています。……貴方が勝って帰って来るのを。……何処迄(いつ)も。」

その言葉に、警戒心は解かずとも、剣群を降ろしてアーチャー自身も、

その戦いの決着を見届けていた。

「……さあ、見せてみろ……衛宮士郎。……貴様の正義を……その覚悟(おもい)を……！！！」

side：再び救世主(カイト)vs英雄王(ギルガメッシュ)

ドドドドドドドドドドッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

『王の財宝（ゲート・オヴビロン）』から、数多の宝具を射出する英雄王。

「そうだ！！！その意気だ！！！！！！もっとだ！！！！もっと！！！！！

貴様の力を見せてみろッ！！！！！ギルーーーッッ！！！！！！！！！」

そう叫びながら、両手に持っている二つの槍で、迎え撃つ救世主。

左手には、青白いプラズマ（プラズマ）が迸る長柄（ランス）の槍。それを片手で器用に回し、盾代わりにして、

飛んで来る数多の宝具群を、一切寄せ付けない。

そして右手には、透明な…恐らく長い槍。その槍を使って、右に上に下に後ろに、

縦横無尽に突き捲って宝具群を叩き落とし、遠く離れた距離を、少しずつ詰めて行く。

「…クッッ……！流石は、救世主！！！この程度では、足止め程度にしかならんか！！！！！

……ならば…！！！！救世主よ！！！！！

我が最強の一撃！！！！！！其の身に享けて見るか！！！！！！救世主よ！！！！！！！！」

そう叫び、宝具群による一斉砲撃を止める英雄王。

そして、その叫びに答え、双槍を仕舞う救世主。

「良かろう！！！但し！！出し惜しみや、後の事を考えたり等するなよ！！？」

「無論だ！！！戯けめが！！！！！！その様な興の冷める事！！！！！！

頼まれてもやらぬわ！！！！！！！！！！！！案ぜぬとも良い！！！！

貴様の望み通り！！！！！！我が全力で討ち果たしてやるわ！！！！！！！！！」

「そうか！！！ならば！！！！！掛かって来い！！！！！！！！！！貴様の全て！！！！！此の救世主（メシア）たる我が、余す事無く享け止めてやろうぞ！！！！！！！！！」

「ハッハッハッハッハ！！！！！！！！！！愉快！！！愉快だ！！！！！

実に、愉快だぞ！！！！！！！！！！救世主（メシア）！！！！！！！！！！！！！！！

此程、愉快な気分を味わったは、何時以来か！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

感謝するぞ！！！！！救世主（メシア）アアアアアアアアアア！！！！！！

！！！！！！！！！

我が力（オモイ）！！！！！享け取れエエエエエエエエエエ！！！！！！！！
！！！！！！！！」

「来い！！！！！！英雄王・ギルガメッシュ！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！
！！！！！！！！！

『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』ウウウウウウウウウウ！！！！！！！！
！！！！！！！」

ｓｉｄｅ：再び正義の味方（えみやしろう）ｖｓ悪の味方（ことみねきれい）

未来（アーチャー）の自分の解説を聞く迄も無く、分かっていた。……他ならぬ自分の身体だ。

……先程から、ギチギチと五月蠅く頭に響いている。

……でも……！！！俺は負ける訳にはいかない！！！！！

俺の事を信じて、見守ってくれている皆の為にも！！！

何より……！！正義（おれ）の味方は！！！悪（こいつ）にだけには！！！負けられない！！！！！！！

「……くっ……はぁはぁ…………ぅくっ……!!…………ハァ〜〜〜ッ…!!!

オオオオオオオオオオッッッッッ!!!!!!!!!!

言峰綺礼ィィィィィィィィィィ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ムゥ……!!!!!ヌゥゥゥゥゥ!!!!!!!!!!

衛宮士郎ォォォォォォォォォォ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

……此の様を壮絶と言うのだろうか？……その様な光景が目の前で繰り広げられている。

綺礼が、殴り、穿ち、叩き、蹴り、吹き飛ばし……攻撃が当たる度に、士郎が血反吐を吐き。

士郎も負けじと、斬り、刺し、抉り、叩き付け……その度に、綺礼の身体から血飛沫が上がる。

何時、どちらが倒れ伏しても可笑しくない状態の儘、戦い続けている。

しかし、誰一人目を背ける事無く、見続けている。

握っている拳から……噛み締めている唇から……血が垂れ流れても、一切構う事無く。

只管……見守り続けていた。

……そうしている内に、士郎達に変化が起きた。

……到頭、士郎が項垂れ、顔を上げる事が出来なくなってしまったのだ。

「……っはぁはぁ……衛宮……士郎。……此処まで…だ……はぁはぁ……。」

「……ハァハァ……ハァハァ……ッハァハァ……。」

最早、答える気力も無いのか、綺礼の言葉にも一切返事をせず、必死に意識を保つので、精一杯の様だ。…………そして、綺礼は……………。

「……嘸、苦しかろう…………さぁ……これで……終わりだ……！！！！！

死ねぇ！！！衛宮士郎！！！！！！！！！！！！！！！！！」

自身に残っていた最後の気力を振り絞り、士郎の命を刈り取ろうと、肉迫して来た。

……だが……それは……士郎に残った、最後の勝機となった。

「……ざけるな…！……ふざけるな！！俺は……！こんな所で死ねないんだよ！！！！！」

「何！？未だ、そんな気力が有ったか！！！存外しぶといな！！！！

だが、これで終わりだ！！！！！！！！！！」

士郎の目前まで迫っていた、綺礼の全力の一撃を避け……。

「ウオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

その胸に、背中に隠し持っていた、凜から渡されたアゾット剣を突き刺し……！！

「何！？！？！？！？！？……こ、これは……何故……貴様が………！？」

そして、振り向き様に、自身の有りっ丈の力（おもい）を拳に込め……！！

「レストオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

その剣に……叩き付けた。

「……何故……貴様が……これを……？」

「……それは、俺のじゃない。……遠坂に貰ったものだ。」

「……そうか……確か…昔……気紛れで……娘に…やった…事が…
……

私も……老いたな……。」

……そして……正義の味方は……悪に……打ち勝った。

side：三度救世主（カイト）ｖｓ英雄王（ギルガメッシュ）

それは凄まじかった。……そう、凄まじいとしか形容のしようが無

い光景だった。

乖離剣（エア）による攻撃を、カイトがその場で仁王立ちし、一身に享け止めたのだ。

「グゥゥゥゥゥ……！！！！！ヌゥゥゥゥゥ……！！！！！！！！！！」

「ヌォォォオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

英雄王の自身の命を削ってすらいる攻撃に、さしものカイトも拮抗していた。

……だが…………結果は……出た。

「ヌオオオオアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

バガアアアアアアアアアアンンンッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！

世界を揺るがすかの様な、凄絶な轟音が響き渡り…………

『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』は…………敗れ去った。

「……ッッハァッハァ……マサカ……我が…最強の一撃が……破れようとは……。

流石は……救世主（メシア）……と、言った所か……。」

「……いや。……お前も中々の強さだった。……見てみろ、ギルガメッシュ。」

「何？……それは……。」

……そう。カイトの来ていた鎧……第二形態（ツヴァイス）が、ほぼ半壊していた。

全身、何処かしらが壊れており、最低でも、傷か罅（ひび）が入っていた。

どれ程、全てを擲（なげう）った攻撃だったかが良く解る。

「……良くやった、ギル。真逆、この鎧を此処迄崩壊させられるとは……

微塵も思いもしなかったぞ。……本当に良くやった。

貴様は紛れも無く、我が友と呼ぶに相応しい。」

「……フ。……それこそ真逆だ。……貴様から、その様な言葉が聞けるとは、思わなんだ。

永久の誉れとなろうぞ。」

カイトからの思い掛けない言葉に、本当に心底から、満足した顔をしている英雄王。

「…では、その敬意に表して、今度はこちらからいくぞ。」

「む？……次は何を見せてくれる…救世主（メシア）よ。」

「……本来、コレは対人戦には使うモノでは無いのだが……特別だ。貴様には見せてやる。

篤と拝め！！！我が最強の、対軍兵器にして対城兵器を！！！！！

アロー・オブ・マナ！！！　エレメント・アロー！！！　七（ツヴ）色（アイス）！！！！！」

その宣言後、カイトの手に虹色に輝く弓と、その弓に番えるであろう七色七本の矢が現れた。

果たして、その矢を七本とも弓に番え同時に放ち……放物点の頂点に達すると、唱えた。

「さあ……全てを喰らい尽くせ！！！！！

エレメント・アロー！！！！！　トリリオン・ダラー！！！！！！！！！」

その瞬間、頂点で静止したかに見えた七本の矢が、僅かに震えたかと思うと、空が落ちて来た。

……いや、正確に言えば、数多の矢に分裂して降って来たのだが、その量が余りに多い為、

まるで空がその儘、落ちて来たかの様な錯覚に囚われたのだ。

「トリリオンの名が記す通り、一兆本の矢雨だ！！！！！

しかも、そいつらは、セカンドの各属性を七つ！！！全て兼ね揃えている！！！！！

さあ！！！ギルよ！！！！！！それらの矢！！！！！

躱すなり、撃ち落とすなりして、見事生き残って見せるがいい！！！！！！！！！！」

「……ぅ……ぅぉぉおお……ヌォォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

結果から言えば、無理だった。……まぁ、そりゃそうだ。

そして、今、カイトの目の前で、何で生きてるのか解らないぐらいにボロボロになっているギルが、横たわっていた。

「……よお、ギル。……話せるか～…？」

「……ぁ……め……救世（メシ）…主（ア）……。」

「良し。何とか、話せはするみたいだな。……取り敢えず、文句は後で聞く。

……癒せ。…そして、受け取れ。」

すると、見るも無惨な姿になっていたギルの身体が、完全に回復し、魔力も満タンを越えていた。

「……どういうつもりだ…救世主（メシア）…！！！キサマ……我（オレ）に情けを掛けるつもりか…！！！！！」

「文句は後だ…と言った筈だ。……取り敢えず、あちらも片が付いた様だしな。合流するぞ。」

その証拠に、固有結界もその形を失った様である。

カイトは、ギルの答えを聞かずに、士郎達の許へ向かった。

ギルも渋々ながら、訳を聞く為か、はたまた敗れた故か、素直にカイトの後に付いて来た。

ｓｉｄｅ：三人称

「…お～い。……みんな、御疲れ様。……良くやったな…士郎。」

「…あ、ああ。…有難う……カイト。」

「ハッ！テメェも、そっちで大分暴れてたみてぇじゃねぇか…。」

「まぁな。…何れ、お前とも遊んでやるよ、クー。」

「…ハッッ！！！吠えたな…救世主（メシア）！！！その言葉、後悔させてやるぜ！！！！！」

「まぁ、それは後にするとしよう。……アルニス。」

「はい、カイト。…勿論、解っていますよ。」

「ああ。……頼んだ。…アレはお前にしか出来ん。」

「…またまた、御謙遜を。」

「……お前は解っている筈だ。……俺には、ソレをする資格は無い。……頼んだぞ、アルニス。」

「……分かりました…御任せ下さい。他ならぬ、貴方の頼みです。必ず遂行致しましょう。」

そう言うと、アルニスは、大聖杯の下へ一人で向かった。

流石に皆、心配になり、カイトに問うた。

「な、なぁ、カイト。…大丈夫なのか？ホントに、あいつ一人で行かせて。」

「大丈夫所(どころ)か。アルニスは、此の世で、俺の次に強い奴だぞ？

俺が唯一、この俺と相対するに相応しいと認めている男であり、

俺にとって、二人しか居ない、心友の内の一人だ。心配するだけ、野暮ってモンだ。

黙って、落ち着いて、安心して見てな。……二度と拝めないぜ？」

そう言うカイトの言葉に、些(いささ)かならず驚愕していると、アルニスが何かやらかしている。

此処は、カイトに従ってみよう。…と、皆の心がシンクロした。

……何とも、好奇心旺盛な人達である。

「……貴方達も、嘸苦しかった事でしょう…。……もう、大丈夫です。

何も、心配する事も、怯える事も、恨む事も、呪う事も、慟哭する事も、有りません。

……今、私が、貴方達を解放して差し上げます。……。」

何の物音もしないこの空間では、アルニスの言葉が良く響いていた。

その言葉が終わった瞬間、アルニスの身体が光り輝いたと思ったら、

何と!!大聖杯の中身が、全てアルニスの身体に吸い込まれていった!!!

だが、アルニスはそれを、微塵も苦にした風も無く、次々とその身に、吸い込んでいる。

……暫く経った後、全てを吸い込み終わったアルニスは、何故か……

今まで誰も見た事の無い程の、険しい顔で、カイト達の許へ戻って来て、カイトに話し掛けた。

「……カイト。」

「……アルニス……真逆……？」

「……はい。……済みません。」

「……そうか。……アルニス。……今度ばかりは、お前とて一切庇えんぞ？」

「……分かっています。……カイト。」

「……分かっている。……元々、俺の所為でも有る。……任せろ。」

「……御願いします。……此処は済みました。…後は、御任せ致します。」

「ああ。……御疲れ様……アルニス。…今は、ゆっくりと休んでくれ。」

「……はい。……有難う御座います…カイト。」

カイトとアルニスだけが通じる話に、痺れを切らした面々が話し掛けて来た。

「…なぁ、カイト！俺達にも分かる様に説明してくれよ。」

「……いや、済まない。……未だ、言えん。……何れ、来るべき時に話す。」

「…何？…又、秘密って訳？」

「……ああ。……まぁ、今は、俺のすべき事をしよう。」

そう言うと、カイトは、空になった大聖杯の前に来た。

そして、皆を振り向き、おもむろに話し掛けた。

「……皆、これから見せるモノを、篤と刮目しておけ。……一生拝めんからな。」

そう言うと、カイトは又、大聖杯に向かい、虚空に向かって手を伸ばした。

「ファイナル・イグニッション

ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　最終形態（カイザー）

我が命に従え　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』

皇帝（カイザー）　神化（アムド）」

そして、カイトは白銀金（プラチナ）の鎧を身に纏った。……そして……

「……出でよ……『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』　魔力全解放（フルパワー）」

そのカイトから吹き出した、余りと言えば余りな圧倒的な魔力に、皆、怯え、畏れた。

「……これで、さらばだ。……貴様等の妄執。……今、此処で、我が手にて断ち切る…！！

……さあ……虚無へ還れ……カラミティ・エンド……。」

その瞬間、大聖杯が鎮座していた空間が十字に裂け、その中に完全に飲み込まれていった。

今、此処に…救世主（メシア）の宣言通り……万能願望器（せいはい）を巡る戦争は……

…終結した。

ｓｉｄｅ：柳洞寺境内

あの後…。大聖杯をカイトが消滅させた後。……何故か、カイトが皆を此処に集めた。

一体、これから、何が始まるのか…？誰も、まるで何も判らず、皆で立ち尽くしていた。

「……さて。……サーヴァント八人…全員居るな。」

「…？……！？ちょ、ちょっと待って！？な、何で、未だみんな居るの？！

大聖杯もカイトが壊しているっていうのに！？」

「あ。…そう言えば、そうだ。…カイト？又、お前が何かやったのか？」

「やった…と言うか、現在進行形でやっている。

今、セカイに働き掛けて、座に還る迄の時間を延ばしている。」

「……アンタ……本当に出鱈目ね？……もう、何があっても全部納得しちゃいそうだわ。」

その凛の言葉に、全員納得の肯きを返した。

「そうか。…ならば、これからする事も、特には驚かれないかもな。

……さて、今からとある事を行おうと思うのだが……その前に聞いて置きたい。

……英霊達よ。……其方達……座の残席を望むか？」

“……は？”

皆、問われた事が理解出来なかった。……今、こいつは何と言った？

座の残席を望むか…と、そう聞いたのか？……え？

……そう。英霊達は、その言葉の意味を、理解してしまった…。故に、再度絶句した。

「……どうやら、その意味が理解出来たようだな。……では、再度問おう。

古の……そして、未来の英霊達よ。……其方達……座の残席を望むか否や？」

問われた曾ての……そして、これからの英霊達は、再度意味を斟酌した後、声を揃えて応えた。

“否。
”

「……三度。…そして、最後の…覚悟への問いだ。座の残席は皆、望まぬのだな？」

“然り。”

「心得た。…なれば、其方達を救おうぞ！！！我は救世主（メシア）たるが故に！！！！！」

そして、カイトは……『真なる救世主（メシア）』としての務めを果たす。

「リミッター解除。千条（サウザンド）・鎖解放（フルバースト）

全魔力解放・全魔力放出・全魔力消費・全魔力固定。

……お前達も耐えろよ？

……我！！『真なる救世主（メシア）』の名に於いて！！！！！

此の者達の戒めを此処に解かん！！！！！」

その瞬間、英霊達から、何か得体の知れないモノが抜け、急激に力が衰えていった。

「グッッ！！！！！！……矢張り、抵抗するか…！！！

だが、その程度の命など安いモノだ！！！！！！幾らでも、持って行け！！！！！！！！！！！！

さあ、次だ！！！！！！此処からが、最もキツイぞ！！！！しっかり耐えろよ！！！！！！

『真なる救世主（メシア）』の名に於いて命ずる！！！！！！！！！！

セカイよ！！！！！！彼の者達と、契りを結び給え！！！！！！！！！！

我が命に随い！！！！！！契約を交わせ！！！！！！！！！！！！！！

……うっぐぅぅぅっっっっっ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

巫山戯るなよ……貴様(セカイ)に！！！否やなど！！！！！言わせて堪るかあああああ！！！！！

契約…………！！！！！！！！！！成立だ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

その瞬間、英霊達は皆、倒れ伏し、救世主は跪き、幾度も血反吐を吐き、何とか堪えていた。

「……ぐぅっ……ハァハァ……。今、此処に、セカイとの契約は成った。

我が名、『真なる救世主（メシア）』の名に於いて、証明し、約定する。」

そのカイトの宣言後、倒れていた英霊達の身体が、光に包まれ、収まると同時に、

辺りに蔓延していた、恐ろしい魔力は消え去った。

その後、何とか持ち直したカイトと、元マスター達によって、英霊達は衛宮家に押し込められ、

皆、眠る様に、床に着いた。

その夜は、とても静かだった。

……まるで、戦い終わった戦士達を癒すかの様に……。

戦いに生き残った者達に、褒美を与えるかの様に……。

静寂なる安穏が……続いていた。

……だが、それが、嵐の前の静けさだと気付いていた者は……

……

只二人……カイトとアルニス以外には……誰も気付けなかった。

しかし、今の皆には関わり無き事。

今は、只、そっとしておこう。

紛れも無く……聖杯戦争は……

たった今……確かに……

終わったのだから…。

聖杯戦争終結（Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、プロット上だと、後三話で『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』の世界も終わりです。

何とか、当初の予定通り、八月中旬には終われそうです。

其処で、皆様に御聞きしたい事が二つあります。

1．以前（と言うか、今も未だなのですが；）、皆様に次なる世界について、御要望を御聞き致しました。

その結果、特に他に御要望が無ければ『ゼロの使い魔』にしようかと、思って居ります。

只、そうすると、形態は違うものの、三連続で魔法に関する世界になってしまいます。

その為、少々（多々？）食傷気味になってしまうかもしれません。

故に、今一度、皆様の御意見を頂きたく思います。もし、特に無ければ、上記の様に致します。

2. 『月姫』も加えて欲しいという御言葉を以前、戴きました。
その場合は、次の話を投稿した後、『月姫』のキャラを混ぜて、
数話、何かの話を上げるだけという事になってしまいますが……。
それでも宜しいと仰るのであれば、頑張ろうかと思います。

『そんなモンええから、早よ次行かんかいワレ!!儂ゃタバサが見
たいんじゃボケ!!!』

と仰るのであれば、申し訳ありませんが、激しく同意致しますので、
『月姫』は無しで行こうと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

願いの果て（Ｗｉｔｈ．．．）（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：８４７，２４４アクセス　ユニーク：７６，５２４人

皆様、御待たせ致しまして、誠に申し訳ありません。

そして、いつも有難う御座います。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

願いの果て（Ｗｉｔｈ．．．）

ｓｉｄｅ：衛宮家

あの凄絶な戦いの後、皆、正しく死んだ様に眠っていた。

その様を示す様に、みんなが起き出したのは、昼を過ぎてからだった。

しかし、それでも未だ休み足りないらしく、欠伸する者が多かった。

その前に起きていられたのは、カイト・アルニス・五行達のみであった。

故にか、既に少々胃持ちの良い、朝・昼兼用の食事が用意してあった。

「ほれ。お前達、寝惚け眼の儘で良いから、のんびりちゃんと喰え。」

そうカイトに言われ、皆、鈍鈍（のろのろ）と食べ始めた。

食事後、栄養を補給したからか、何とか意識もハッキリして来た皆は、改めてカイトに聞いた。

「……で？昨日のアレは一体、何だったの？」

「…そうね。何で、未だセイバー達は此処に居られる訳？」

「それに、アルニスが大聖杯にした事も、全く判らないし。」

「……それに、アルニスさん。その後、カイトさんと何を話してたんですか？」

「……相変わらずの質問攻めだねぇ……。ま、いいけど。んじゃ、一つずつ答えるとするか。

先ず。昨日、アルト達にした事だが、分かり易く言えば、受肉させたんだ。全員。」

“……な、何ィィィィイイイイイイイイイ！？！？！？”

考えもしなかった答えに、朝……いや、昼間っから絶叫する面々。

だが、それも、これから始まる驚愕の事実の、本の序章だった。

「正確に言えば、先ず、英霊達が存在していた‘座’を消去し、セカイとの繋がりを一旦断った。

その後、俺の名…『真なる救世主（メシア）』の名に於いて、

此方に、一方的に有利に成る様に、契約した。

……まぁ、その際、セカイに抵抗されて、更に数百ばかり命を失ったが。」

先ず、皆、絶句した。自分達を助ける爲に、千と数百もの命を失ったのだ。……無理も無い。

その反応を理解しているらしく、少々ばつが悪そうに、頭を掻きながら、続きを話した。

「……あ～……まぁ、あれだ、気にするな。どうせ、未だ千兆以上、ストックは有るんだから。

んで、話を戻すが、取り敢えず、お前達の契約内容だ。

1．お前達の肉体は、既に滅んでいる事になっているので、それ以上老いる事は無い。

2．不老では有るが、不死では無い。但し、死んでも直ぐ様、セカイによって、蘇る。

3．もし、自身の消滅を望む場合は、只、願えば良い。

その後、セカイが意志を再確認して来るので、その時に、再度‘是’と答えれば良い。

4．後、当然肉体を持っているので、子を成す事が出来る。皆、励め。

5．他の特典として、肉体を持ち乍らも、霊体化出来る。後で試してみると良い。

6．それから、お前達の魔力は、セカイから無限に供給されている。

7．最後に、俺の名でセカイと契約しているので、セカイ自身から、お前達に干渉する事は、

一切、出来ない様にしてある。今まで、扱き使われた分、散々扱き使ってやれ。

……とまぁ、こんな所か…な？他に質問は無いか？」

……皆、質問所では無かった。その提示された契約内容が、余りと言えば余りだったのだ。

一言で言えば、“酷い”で済むのだが、その為に、千数百の命が無くなったとあれば、

そんな暴言を吐ける訳も無く、皆、感謝を示す為、只、黙って頭を垂れるのみだった。

その誠意を享けたカイトは、続けて先の質問に答えた。

「……質問が無いなら、次の話に移る。さて……アルニスがした事と、話の内容だが……。

アルニス、任せた。」

「はい。任されました♪では、御話致しましょうか。

先ず、私が大聖杯にした事ですが……アレは、大聖杯の中に在った、悪で在れ、という願いを

全て、私の中に吸収し、その願いそのものを変えたのです。」

「変えた？……願いそのものを？」

「はい。……それが、私の能力…『世界（ワールド）』。…その一端です。」

どうやら、アルニスの能力も、可成りの出鱈目さを誇っている様で、何人か顔が引き攣っている。

そして、それが判っているのか、アルニスは、ふ…と微笑み、続きを話した。

「それで、私があの時カイトと話した内容ですが……。」

其処で言葉を止め、カイトの目を見、その儘の状態で何かを確認していた。

それも済んだのか、互いに頷き合い、アルニスが皆に改めて向き直り、続きを話した。

「…御話しましょう。直截に言いますと、あの大聖杯の中身が、少し減っていたのです。」

「減っていた？……どういう事？」

「つまり。完全には未だ、救えてはいない。……大聖杯の中身が何処かに有り……

誰かに汲み取られ、持ち去られているという事です。」

「……じゃあ、もしかして……？」

「……はい。聖杯戦争は、真の終結をみていない。

……未だ、戦争は続いている…。という事です。」

“そ、そんな！？！？！？”

皆、差異は有れど、驚くしかなかった。

もう、終わったと思っていたのに……！！！

そんな事が出来る者が居るなんて……！！

何が目的で…？……ｅｔｃ．

様々な驚愕の仕方を見せる面々に、アルニスは、更なる事実を教えた。

「……そして、それを遂行した者は、判っています。

……第十二席　コルニス＝アルガザス　……彼女でしょう。」

「……何故、その人だと判るの？」

「そんな事が出来る人は限られていますから。

……更に、その目的も鑑みると、彼女しかいません。」

「……目的って？」

「……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』……カイトを抹殺する事です。

彼女は、自分の婚約者　第十一席　ユニゲム＝ドラルザグを、カイト達に殺されていますから。

例え、それがカイト自身の手によるモノでは無くとも、今の彼女には関係有りません。

どの様な手段を使おうとも、機会を伺って必ず、カイトを消すつもりなのでしょう。」

“……。”

思い掛けない伏兵に、皆、何と言ったら良いのか分からなかった。

「……まぁ、そういう訳だ。そいつが何時動くか、俺にも解らんのでな。

皆、その時に備えて英気を養え。お前達にも手伝って貰うやもしれんのでな。

……取り敢えず、説明はそんな所だ。後は、俺の用事だが……

イリヤ・セラ・リズ。ちょっと、こっちへ来い。」

又、何かするのか……少々辟易しながらも、一応カイトの指示に従う三人。

「…それで？今度は何をするつもり？カイト。」

「ああ。お前達を、ホムンクルスから、人間にしてやる。

……まぁ、お前達が望むのならば……という、条件付きだがな。」

“えええええええええ！？！？！？！？”

……まぁ、そりゃ驚く。当然、カイトを問い詰める面々。

「ど、どういう事?!私達を人間にするですって?!そんな事出来る訳ないじゃない!!!」

「そ、そうです!!!そんな自然の摂理に反した事、出来る訳が…!!!!

い、いえ、そもそも!!そんな事、例え出来たとしても!!して良い訳が無いでしょう?」

「…（ブンブン）。」↑首を上下に激しく振っている

「何を阿呆な事を。そんな常識など、俺に通用するものか。……お前等、俺の名を忘れたか？

……そう。我が名は『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。世界の‘理’を、破壊し破滅させる存在。

その程度の自然の‘理’程度で、この俺を妨げられるとでも？

セカイ風情が、この俺に抗い、逆らうなど、驕り高ぶりにも程がある。

……さて。では、理解して貰った所で、再度問おう。汝等…人間（ヒト）に成るや否や。」

そんなカイトの言葉に愕然としながらも、三人共顔を見合わせて、同時に頷き、応えた。

「御願いするわ。……私達三人共ね。」

「其方達の願い。確かと受諾した。……では、早速執り行う。

その儘じっとしていろ。直に終わる。……ッッッ！！！！！！グブッ…！？」

イリヤ達に手を翳したと思ったら、突然血を吐いたカイト。慌てふためく周り。

「…グッ……騒ぐな！！！……良し。これで終わった。

今、此処に、イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルン・リーゼロット・セラを……

人間に組み替えた事を、我…『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』の名に於いて、宣言し、証明する。」

その宣言の瞬間、イリヤ達の身体が目映く輝き、三人共倒れ伏した。

騒然とする皆に、叱責するカイト。

「落ち着かんか！！！戯けどもが！！！！！

何故、貴様等は、一々倒れたぐらいで、騒ぎ立てる！！！少しは冷静になれ！！！！！」

「そうですね。皆それでは、カイトの事を全く信用していないと言っているのと同じ事ですよ？

カイトは、自身の命を惜しげも無く使って、貴方達により良い幸福を……

と願って行動しています。それでは、救世主たるカイトの面目が丸潰れですね…。

……今迄、彼が貴方達にした事は、迷惑な事でしたか？」

そのカイトの叱責と、アルニスの教え諭す言葉に、しょんぼり項垂れる皆。

そんな皆とアルニスに、カイトが言った。

「……俺は、そんな事までは言っていないのだがな…？アルニス。

……まぁ、いい。

これは、飽く迄、俺の独善だ。俺がそうしたいと思って故の行動に過ぎん。

迷惑ならば、構わんからそう言え。直ぐ様、元に戻そう。

……特に何も無ければ、納得したものとして、その儘で生涯を過ごして貰う。

それと、遅くなったが、イリヤ達ならば、何の問題も無い。

只、人間の身体に馴染む為に、少々時間が掛かるのでな。恐らく今日一杯は起きんだろう。」

そのカイトの言葉に、皆、ホッと安堵の溜息を漏らした。

「では、これで最後だ。……取り敢えず、この聖杯戦争を生き延びたお前達に褒美だ。

……と言っても、数人にしかやる物は無いが。」

カイトからの、突然の褒美と言う言葉に、訝しむ面々。

だが、当然の如く、意に介せず話を続けるカイト。

「先ずは、メデューサ。……ほれ、これだ。」

「……これは？」

「見ての通り、眼鏡だ。但し、俺の魔力を加えたオリハルコニウムの特別製でな。

お前の自己封印（ブレーカー）・暗黒神殿（ゴルゴーン）の上位版の魔眼殺しだ。

序でに、お遊び機能として、持ち主の望み通りの形に変える事が出来る。

まぁ、後で、試しに遊んでみな。」

行き成り、オリハルコニウムなどという物が出て来、これから先、どんなトンデモビックリメk…基、褒美が出るのだろうかと、戦々恐々とする一同。※脚色有り

「では、次…クー・フーリン。お前には、これとこれだ。」

「あん?……何だ?この槍は?」

「な!?こ、この槍は!?!?」

「あ?知ってんのか?セイバー。」

「流石に気付いたか。……そうだ。

これは、前回の聖杯戦争のランサー……ディルムッド・オディナの持っていた槍。

そいつは、傷に治癒不可の呪いを掛ける『必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）』。

んで、そっちが『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』。接触した物の魔力を打ち消す槍だ。

その効力は、お前の『突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）』とて例外では無いぞ？

まぁ、どれでも好きな物を、好きな時に使え。」

「……そうかい。こいつは、良いモンを貰ったぜ。」

ランサーを戦力ＵＰさせたカイトは、次なる戦力も増やした。

「お次は……アルトリア、お前だ。」

「私に…ですか？一体、何を？」

「見当は付いているのでは無いか？……そら。こいつらだ。」

「な！？！？こ、これは！？！？！？！？」

「そう。曾てお前が失いし、二つの宝具。

『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』と『全て遠き理想郷（アヴァロン）』だ。

紛れも無い本物だぞ？今度こそ失うな……騎士王よ。」

「……はい。……感謝致します……『真なる救世主（メシア）』。」

そう言い、『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』を抜き放ち、アーサー王は現代に蘇った。

皆、居住まいを正し、笑みを湛（たた）えて、今、此処に讃（たた）えた。

「さて。残念乍らこれで最後なのだが……凛。ちょっと、これには、条件が必要だ。」

「今度は私？しかも条件付きなの？……まぁ、いいわ。借りを作りっ放しじゃ、私の気が済まないもの。……それで？私は何をすればいい訳？」

「ああ。条件自体は簡単だ。綺礼の後釜に、カレン・オルテンシア……綺礼の娘を呼んで欲しい。」

“……は？……こ（き）、言峰（綺礼）の娘エェェ！？！？！？！？”

「……何故にそんなに驚く?奴とて人の子だぞ?…一応。

妻とは死別しているが、娘は余所に預けられているのでな。その少女を呼んで欲しい。

因みに、埋葬機関の第六位としても働いている。

宝石翁の名を出せば、少しは交渉し易いだろう。交渉自体は凛に一任する。」

相変わらず、色々と驚愕のオンパレードに、どう頑張っても慣れない皆であった。

「……；；；；；；ま、まぁ、何とかやって見せるわ。……私も綺礼の娘ってのを見てみたいし。」

「……そうか。……まぁ、それは会って見てのお楽しみという奴だな。

では、その手間賃だ。……受け取れ。」

「……え？……こ、これって？！？！？！？！」

「ああ。その通りだ。これは……

宝石剣　キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。第二魔法を体現した物だ。

あ、士郎達は絶対に解析するなよ？今のお前達では、その瞬間に廃人確定だから。」

そんな物を、あっさりポイッと放り渡すカイトに、呆れた顔をする以外には出来なかった。

「まぁ、取り敢えず、これぐらいか。他に欲しい物があれば随時言ってくれ。

どんな宝具・神具等であろうとも、生成してやる。

……さて。後は、奴等が動き出すのを待つだけだ。今は、皆休め。」

そして、呆然としている皆をその儘に、又もや鋼牙と戯れ始めるカイト。

その後、皆が意識を回復するまで、優に四半刻は越えていた。

そして……それからの数日間は、中々に慌ただしかった。

凛は教会への交渉の為、暫く家を空け、その間、アーチャーが独りで遠坂家に住み着き、

ギルは、教会で一人暮らして居り、葛木・メディア・小次郎は柳洞寺に戻り、

イリヤ達は、結局あの城には、荷物を取りに一度戻ったっ切りで、衛宮家に住み着き、

教会の地下に居た、衛宮士郎の同類達は、アルニスによって全員、浄化・救済された。

……そして……。

「只今～……。」

「お帰り、遠坂。」

「ああ～～……やっぱ、衛宮家はホッとするわね～……。」

「お疲れ、凛。…で、首尾はどうだった？」

「バッチリ。完璧よ。後、数日もしたら、こっちに来るって。」

「そうか。…有難う、凛。」

「……いいわよ、別に。対価は充分過ぎる程、払って貰ったんだし。」

「……そうか。」

結果報告も終わり、ホッと一息付いて、わいわい話していた夕飯時だった。

冬木市が、巨大な結界に覆われたのは。

「……ようやっと、準備が調った様だな。」

「そんなノンビリ言ってる場合か！？早く皆と連絡を取らないと…

…！」

「その必要は無い。もう既に、俺の従者達が、各英霊達の許へ行った。……そろそろ来る頃だ。」

そのカイトの言葉通りに、十数秒後に、全英霊達が衛宮（このば）家に集合した。

「……皆、集まった様だな。取り敢えず、質問・説明は後だ。先ず、結界の最大の基点。

あの公園に行くぞ。……全員転移する。」

皆の言葉も待たず、一瞬であの公園……、衛宮士郎、が始まった公園に転移した。

その公園の中心には、余りに毒々しい色の光柱が聳え立っていた。

その光柱の中には、車椅子に乗った間桐慎二と、上半身だけになった間桐臓硯と……

ノルニル第十二席　コルニス＝アルガザスが浮いていた。

「……コルニス。……矢張り、貴女でしたか。」

「……アルニス様。……申し訳ありません……。

私には、もう、こうするしか……他に、どうする事も出来ないのです。

……今の私には、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』を、此の世から消滅させる事でしか……

この命を永らえる理由が、見付けられないのです。」

「……今、この場に居る私は、彼の……八神カイトの友です。

故に、貴女に加勢する事も、貴女を庇う事も出来ません。

……ですが……貴女も、私（ノルニル）の可愛い民で在り、子でも在ります。

……どうか、それだけは……忘れないで下さい。

……貴女の願いの果てに、救いが在ります様……。」

「……アルニス様。……有難う御座います。

……この結界は、六芒星を二つ重ね合わせ、東西南北に各三点、基点を設けた。

これらの基点を同時に壊せなければ……この結界は、

瞬時にこの世界の人々の命を、無作為に喰らい尽くす。

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』よ。……貴様に、此の世界の人々が救えるか。」

「……救って見せようぞ。我は、『真なる救世主（メシア）』たるが故に。

青龍。アルトリア。エミヤ。東方を。　白虎。ギルガメッシュ。メディア。西方を。

朱雀。クー・フーリン。ヘラクレス。南方を。　玄武。メデューサ。小次郎。北方を。

それぞれ、頼む。合図は、黄龍に任せる。その時、同時に自身の持ち得る最強の攻撃を。

恐らく、それらの基点は、聖杯の中身によって強化された、臓硯の虫だ。

一切、侮る事無く、全力を叩き込め。大地…いや、地球は俺が修復する。

四神・神獣形態。……では、頼む。」

side：東方

「騎士王、其方は左を。守護者よ、其方は右を。何時でも、討てる様に、準備せい。

我の攻撃に巻き込まれぬ様にな。」

「承った。」「了解した。」

自身の主の、全ての人を助けたい……という願いに忠実に……。

ｓｉｄｅ：西方

「英雄王、其方は右へ。魔女よ、其方は左へ。合図を待たれい。」

「……ああ、エンキドゥ……。」「あんなに可愛かった子が……。」

「……後で、主に頼んで遊んでやろう。今は、こちらに集中せよ。」

「良かろう！！！」「分かったわ！！！」

又、自身の楽しみの為に……その幸せの為に……。

ｓｉｄｅ：南方

「皇子、其方は左を。大英雄よ、其方は右を。合図を待ち、確かと

討ち果たし給え。」

「いいぜ。……その代わり、後でテメェと闘わせろ。…いいな？」

「構わぬ。我も主に許可を取ろうぞ。」

「ハッ！！……楽しみだぜ…！！！」

「……では、行こうか。我が主も、痺れを切らしていそうなのでな。」

此方も、再戦を約し……その後の為に……

ｓｉｄｅ：北方

「女王よ、其方は左側を。剣客よ、其方は右側を。確かと、仕留めよ。」

「……判りました。」

「…ふ。華やかな花に囲まれる戦いも、又一興…か。」

そして……準備は、調った。

ｓｉｄｅ：公園中央

「我が主。準備、滞り無く、只今、調いまして御座います。」

「御苦労。……では、合図は任せる。黄龍。」

「はっっ！！……皆の者……さあ、盛大な花火を打ち上げてや

ろうでは無いか！！！

放てエエエエエッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

その瞬間……四神と、英霊達の最大攻撃が、解き放たれた。

「無限（インフィニティ）なる息吹（ブレス）」

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！！！！」

「虚・螺旋剣（エクスカリバー？）！！！！！」

「寸断する牙（カラミティ　ブレイド）」

「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！！！！！」

「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）！！」

「永遠なる業炎（エターナル　ブレイズ）」

「突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）！！！！！」

「射殺す百頭（ナインライブズ）！！！！！」

「混沌たる濁流（カオス　ウェーブ）」

「騎英の手綱（ベルレフォーン）！！！！！」

「燕返し！！！」

そして……結界は、破壊された。

「……さあ、これで貴様達を守る物は、何も無くなったぞ。

掛かって来い。第十二席　コルニス＝アルガザス。……貴様の相手は、この俺だ。」

「…………『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

――そして、終に――――

――――最後の運命（Last Fate）の刻が――――

――――訪れる。

願いの果て（With・・・）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回も皆様に、沢山の御指摘・御要望・御感想を頂きました。誠に、感謝致して居ります。

それでは、此処で、決定事項等を、幾つか御伝え致したいと思います。

1．カレン＝オルテンシアについて。

彼女の名前が、今回出ましたが、恐らく次に出るのは……

最後……カイトが此の世界を離れる際に、少し出る程度です。

期待された方には、此処に謝辞申し上げます。

2．『月姫』について。

『月姫』につきまして……続きとして、書く事に致しました。

一応、プロット上、5～6話分程度は考えましたが、

もし、何か…『～な話を読みたい』等と仰って頂ける方が、いらっ

しゃいましたらば、

私に出来る範囲で、書いてみたいと思います。

因みに、鋼牙の出番も少し増やす予定ですw

3．次の世界『ゼロの使い魔』について。

まず、ヒロインはタバサです。基本的にカイトの好みは、私と同じですのでw

それで、タバサなのですが……外伝について、全て書くつもりは今の所、有りません。

精々、2～3話程度です。……ですが、もしどれか、『これだけは、必ず書いて欲しい』

……と言う御要望が御座いましたらば、遠慮無く仰って下さい。

一応、全巻揃っていますので、何とか書けるとは思います。

4．御指摘について。

今回、『！』や『？』が多く、見難いと御指摘を戴きました。

実は、それについては、私も常々思ってはいたのですが、他に表現

方法も知らず、

『特に何も言われないなら良いか♪』と放置していました。

ですので、御指摘を戴きまして、早速、今回、本来の投稿文章から、２００字分程、減らしてみました。

如何でしたでしょうか？何分、未熟の極みですので、善し悪しの判断が私には付きません。

ですので、今回程度の数で、多いか、少ないか、丁度良いぐらいか……。

御意見か、若しくは他の方法を御教授頂ければ、幸いに存じます。

因みに。今回のタイトルですが……もし、両方の元ネタが御判りになった方は、

『Ｆａｔｅ』通と言っていいかと思います。……私は、どちらも調べましたからｗ

長文、大変失礼致しました。では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

きらめく涙は星に（ｄｉｓｉｌｌｕｓｉｏｎ）（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：８６３，２３３アクセス　ユニーク：７８，０１５人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

きらめく涙は星に（ｄｉｓｉｌｌｕｓｉｏｎ）

ｓｉｄｅ：公園中央

「…………『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「おっと…。そう、慌てるな。俺達が此の場で戦えば、此の星が只では済むまい？」

「……………ならば、どうすると言うのだ…!!!宇宙（そら）にでも昇（あ）がる気か…?!」

「いいや?もっと、俺達に相応しい舞台だよ。……特別に見せてやろう。

我が名にして能力…『全てを知りし者(オール・ノウレッジ)』たるその所以……その一端を!!!!!!

発動　固有結界『無限の剣製』」

side：固有結界　『無限の剣製：《Unlimited（アンリミテッド） blade（レイド） works（ワークス）》』

「な!?ば、バカな!!?こ、これは固有結界?!?!

し、しかもこれは衛宮士郎の……!?!?!?何故だ?!何故!!?

貴様が、コレを!!!!!!」

「言った筈だ。我が名は『全(オール・ノウレッジ)てを知りし者』。貴様とて、我が能力(チカラ)……調べて来たのだろう？」

「……くっ……成る程な……。その名……正しく……伊達では無い…と言う事か！！！」

「然り。……さあ、これにて舞台は調った。…いざ、舞い踊ろうか…。

道化師の舞を…！！！……『真・宝具使い(マスター・オブ・ファンタズム)』よ。……幻想の貯蔵は十分か？」

「ほざけえええええっっっっ！！！！！！！！！！」

ｓｉｄｅ：三人称

それは、凄まじかった。……いや、凄まじいと言うのにも、語弊が有ろう。

敢えて言うならば……そう……素晴らしかった。

数多の宝具群が飛び交い、又、その宝具の真名開放による花火祭り。

百花繚乱。正に此処に極まれり。

……だが……。それは、余りにも凄惨で……又、余りにも一方的だった。

……攻撃しているのは、彼女（コルニス）だけだったのだ。

カイトは、その宝具による攻撃の数々を、只、黙って受けているだけだった。

時に、飛んで来た宝具を無造作に振り払い。

時に向かってくる斬撃や衝撃波をデコピンで弾き飛ばし。

それにも飽きたのか、欠伸をしながら、只その身に享け。

……しかし、その身には、傷一つ付いては居ない。

更に、カイト自身は、只の一度も攻撃をして来ないのだ。

この固有結界に在る数多の宝具群を本の一粍(ミリ)たりとも、動かしてすらいないのだ。

これには、流石のコルニスにも堪(こた)えた。

「きっ……貴様アアアアアアアアアアアアッッッッッッッッッ!!!!!!!!

私を舐めてるのかアアアアア!!!虚仮にしているのかアアアアア!!!!!!」

「いんや？しょうがねぇだろ？是が実力の差って奴だ。」

「只、防ぐだけが、貴様の能かアアアアアアアアア!!!!!!!

！！」

「んな訳なかろうもん。俺が攻撃なんぞしたら、お前程度じゃ、此のセカイ毎、

散々に跡形も無く吹き飛ぶからな。」

「ならば！！！私の様に、宝具を使えば良かろう！？！？

此の場に数多在る！！！！！！此の宝具共を！！！！！！！！」

「だから、その宝具を使ったら…の話をしているんだよ。」

「……何いいい……？！？！」

そのカイトの言葉に、流石に気になったのか、此の間も続けていた攻撃を止めた。

それを、話を聞く合意と受け取ったのか、カイトは話し始めた。

「そもそも。お前も、俺の能力の一つ…『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』も見て来たのだろう？

その説明を見て可笑しいと思わなかったのか？……恐らく、ソレにはこう書かれて在ろう？

『あらゆる平行・異世界の全ての生物の能力を、十全を越えて万全に使える能力』

若しくは、『～、十全以上……万全に使える能力』……と。」

「……ああ。そう、書いてあった。我等が、【ノルニル】の貴様の全能力が書かれた書籍に。

……だが、それがどうした！！！要は、完璧に使えると言う事を強調したいだけであろう！？」

「……矢張りか。…お前達は勘違いをしているのだな。

……まぁ、単純な読解の問題なだけなのだがな…。」

「……勘違い……だと？……何を言っている？貴様。」

「……そう……勘違いだ。十全とは、完全である事。そして、万全とはこれ又、完全である事。

もし、完璧に扱えるだけと言いたいだけならば、両方使う必要は無い。

『完璧』の一言で事足りる。……そうであろう？……では何故、双方並び併せて使ったか？

……答えは簡単だ。その『十全』・『万全』という言葉は……文

字通りの意味だからだ。」

「……どういう意味だ？」

「未だ解らんか？……お前の宝具（チカラ）で恐らく、本来の力の2～5倍程の威力は出て居ろう。

だが、所詮はその程度。俺の宝具（チカラ）はな……？……文字通り、万の力で使えるんだ。

もっと解り易く言おうか？お前達が使う、宝具の真名開放。その力を‘一’とした時、

俺が使う際の宝具の威力は、通常時で‘十’の力を、全力時で‘万’の威力を発揮する。

……故に、『十全』にして『万全』。……否、『十全を越えて万全』。

それが俺の能力…『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』。その真の能力（チカラ）だ。」

そのカイトの説明に、コルニスでさえも、驚愕し絶句した。

……だが、その発言の矛盾（なか）に気になった事があった。

凛は、それを聞いてみた。

「……ん？ちょっと、待って。カイト、アンタ確か……

間桐（マキリ）家を宝具で焼き払ったって、言ったわよね？

もし、それが本当なら、今頃私達、地球ごと燃やされて無い？」

「ああ。本来ならばそうだ。……だから、大変だったんだぞ？
宝具に籠める魔力も、本の……僅か本んんの一滴にして、尚且つ、
威力を俺に出来る最小限に迄下げて、それでようやっとあの程度で済んだんだ。
虫が大っっっっっ嫌いな俺が、あの有象無象の虫共を前に、良く自制出来たものだと、
我ながら褒め称えたい。嗚呼、是非共、褒め称えたい。」

“……………………;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;”

全員、冷や汗を垂れ流した。要は、本の一瞬でも、カイトの気が緩んでいたら、

自分達は今、此処にこうして生きてはいられなかったのだから。

本来なら、畏れて震えるべきなのだろうが、カイトのその仕種……と言うか、その表情に

思わず、苦笑と冷や汗という形となって、顕れた。

「……さて。では、そろそろ退屈して来たのでな。俺も、攻撃に移らせて貰おう。」

「…！！！」

「どうやら、余り俺の能力を信じては貰えないらしいのでな。此処は、試しにその力を使おう。

此の場は、丁度お誂え向きに、衛宮士郎の世界。固有結界：無限の剣製。

ならば、そのセカイ（ソレ）を使わせて貰おう。……そう……セカイと言う名の幻想をな。

では、さらばだ。　全平行世界観測機関【ノルニル】　第十二席　コルニス＝アルガザス。

「破滅せし幻想世界（ブロークン・ファンタズムワールド）」

その瞬間、世界が……爆ぜた。

side：公園中央

一面、真っ白な世界に成ったかと思ったら、又、あの公園に戻って来ていた。

しかも、あの毒々しい光柱の前には、半死半生の儘、ボロボロになったコルニスが居た。

彼女の周りには、恐らく盾であった物が転がっていた。

「……ほう。咄嗟に、熾天覆う七つの円環・万難排す魔除けの楯（アイアス）・全て遠き理想郷（アヴァロン）を出したか。

……だが、出すのもそれが、精一杯だった様だな。まぁ、良く生き残れたと褒め称えよう。」

「……。」

「……ふむ。声を出す事すら最早、出来ぬ…か。

……ならば、今、此処でその妄執、断ち切ってやろう。あの世で、ユニゲムにでも謝るんだな。」

「…………………………………………!!!!!!!!!!」

そのカイトの言葉……ユニゲムに反応したのか、コルニスが蠢き出した。

そのコルニスに呼応するかの様に、その場に様々な思いが、集中していった。

怨念が…恨みが…妬(ねた)みが…嫉(そね)みが…羨望が…失望が…絶望が…数多の負の感情が……

今、此処に集まり、集(つど)い、集(たか)り、悪意が膨れていった。

その悪意が、未だ立ち上っている光柱……その中に居た、臓硯（マキ）と慎二（リ）を中心にし、

コルニスをも巻き込んで、その肉を……その容貌（かたち）を変えていく。

……そう。カイト達は失念していた。……あの時……結界を破壊した時。

只、破壊したのみであった。……聖杯を媒介にしたと解っていながら、浄化しなかったのだ。

……故に……彼の者は……誕生した。

「……。」

「……そうか。……アレは態(わざ)と壊させたのか。……故に、弱点を惜しげも無く曝(さら)け出した。」

そう……此の世全ての悪を担う神…。それを体現した宝具……大聖杯(アンリ・マユ)は……

今……此処に……微睡みから……覚醒（めざめた）したのだ。

side：三人称

皆……恐怖に打ち震えていた。それは、どんなに頑張って抑えようとも抑え切れない……否。

抑える事など不可能な……本能に刻み付けられた、根源的な恐怖……。

それが……今……自分達の目の前に存在(いる)して居る。

その名は、アンリ・マユ。６０億の命を只、呪い殺すだけの存在。

只、その爲だけに産み出された宝具。……此の世全ての悪……究極の悪神。

『復讐者(アヴェンジャー)アンリ・マユ』。

その悪に立ち向かうは、彼の救世主……『真なる救世主(メシア)』。……

……そして……。

「……成る程な…あの儀式。そして此の場に残っている、前回の聖杯戦争による犠牲者の想念。

そして、何より、マキリの憎悪・怨念。それと、コルニスの妄執。

それらを組み合わせて、『復讐者（アンリ・マユ）』を顕現させたか。……だが、所詮は６０億程度。

高々その程度で、この俺を呪い殺せるとでも思ったのか？……思い上がりも甚だしい！！！

……せめてもの情けだ。一切苦しませずに、黄泉路へと送ってや

ろう。」

そう言い、魔力を昂(たか)め始めるカイト。……だが……

「……カイト。少々、待って頂けますか？」

それを、アルニスが止めた。

「……アルニス。判っているのか？変貌したとは言え、あいつはお前の可愛い民（こども）だ。

お前は、己が子を殺せるのか？」

「……ええ、判っています。……解っていますとも。

ですからこそ、私がしなければいけない事なのです。……カイト

……御願いします。」

「……好きにすると良い。……だが……分かっているな？アルニス。」

「……はい。私に出来なかった、その時は……御願いします。」

「……了解した。」

そう、カイトとアルニスの間で言葉が交わされ、

カイトは皆の元へ戻り、代わりにアルニスが前へ出て来た。

……どうやら、今度はアルニスが戦う様だ。

皆、アルニスが戦う姿は初めて見る為、興味は惹かれている様だが、矢張り少々心配な様だ。

しかし、カイトが以前言っていた、『自分の次に強い男』と言う言葉を思い出し、

アルニスの戦いを見守る事にした。……多分に興味の方が勝ってる気は、無きにしも非ずだが。

「……では。改めまして、私が御相手致します。

……コルニス……いえ、『復讐者（アヴェンジャー）アンリ・マユ』。

【ノルニル】第一席　アルニス＝カイゼル　推して参ります。」

その戦いは異様だった。……いや、それを戦いと呼んで良いものなのだろうか……？

復讐者（アンリ・マユ）から伸びた影が、アルニスを捉えようとするが、アルニスの周りのナニカに阻まれ、

全て弾き返される。そして、当のアルニスは、ゆっくり……まるで散歩でもするかの様に、

復讐者（アンリ・マユ）の下へ歩いて行き、何もされていない筈の復讐者（アンリ・マユ）が、後退りながら攻撃している。

しかし、アルニスには矢張り、一切通じない。次第に、彼我の距離を詰められて行き……

あっと言う間に、目の前迄、来られてしまった。

……すると、アルニスは、皆が思いも掛けない事をした。

「……アンリ・マユ。……嘸、御辛かったでしょう。……もう、何も苦しむ事は有りません。

今、私が、貴方をあらゆる呪縛から、解放して差し上げます。」

そう言い、復讐者（アンリ・マユ）を抱き締めたのだ。突然の抱擁に驚く、復讐者（アンリ・マユ）と面々。

その皆に補足する為に、カイトが説明した。

「……あれは、アルニスの癖だ。又、これから能力を発動する…と言う証でもあるがな。」

「能力？……確か……『世界（ワールド）』って言ってたわよね？」

「……寧ろ、私は、癖って言うのが気になっちゃうんですけど……；；；」

「まぁ、癖については気にするな。ちゃんとあいつにも惚れていた女性は居た。

そちらの意味は全く無い。……良く勘違いされ易いのだがな。

まぁ、それはさておき。奴の能力…『世界（ワールド）』についてだが……。

あれは、その名の通りの能力だ。」

「……名の通り？……世界……え？……ま、まさか……？！」

「流石に凛は気付いたか。……そうだ。…お前の思った通り。……
アルニスの能力。

それは、世界の‘理’を操る事。もっと詳しく言えば……

世界の因果律・結果・事実・真実・歴史・未来……その他。

ありとあらゆるモノの‘理’を捻じ枉げる能力。それが、アルニスの能力…『世界（ワールド）』だ。」

「捻じ枉げるとは酷いですよ、カイト。私は、皆の救いとなる事にしか、

自分の力を使った事は有りませんよ?ちゃんと、‘理’を導くと言って欲しいです。」

「何を阿呆な事を。貴様の能力はそんな可愛いモンじゃ無かろうが、戯け。」

「……本当に酷いです……カイトのイケズ。」

「何とでも言え、アホニス。……まぁ、そう言う訳だ。

つまり、アルニスは、アンリ・マユの『悪で在れ』と言う願いを……その‘理’を変えて、

『悪で在る』と言う呪いから、解き放とうとしている訳だ。」

「はい。そういう訳です。……解って頂けましたか？アンリ・マユ。

今から、貴方を救います。……少し時間が掛かりますから、ジッとしていて下さいね？」

それは、不思議な光景だった。恐怖の権化であった筈の復讐者（アンリ・マユ）から、光の粒子が立ち上り、

次々と、夜空へと吸い込まれていく。その量も、初めは余りに大量で、アルニスや復讐者（アンリ・マユ）の姿も、

全く見えなかったのだが、時間が経つに連れ、その量も徐々に減って行き……

今はもう数える程しか、見えない。……そして……。

「……さあ、これで残るは後、貴方一人だけですよ？アンリ・マユ。」

「……へっ……真逆、このオレを救える奴が……いいや、

本当に救うような大馬鹿がいやがるとはな……全く考えもしなかったぜ。」

“あ、アンリ・マユが喋った!?!?!?!?!?”

「そら、喋るだろうよ。お前達には話しただろう？あいつは、元は只の人間。

只、『悪で在れ』と願われて生け贄にされただけの……単なる普通の人間なのだから。」

「……。」

「……アンリ・マユ。……申し訳ありません。…もっと、早くに私が来て居れば……。

ですが、もう大丈夫です。……これで貴方は救われます。何か言い遺す事は有りませんか？」

「……じゃあ、二つ聞きたい。」

「はい。どんな事でも御答え致します。…何でしょう?」

「先ず、一つ。……アンタ、一体、どうやってオレを救えた?

あの『悪で在れ』という願いは、一体何処へ消えた？」

「……それは……」「それは、俺が答えよう。」「……カイト。」

「其奴の最後の願いだ。否やは言わせんぞ、アルニス。

……その答えは簡単だ。今、その願いの全てはアルニスの中に在

る。

……今、此の時も、アルニスの中で浄化されているんだ。

アルニスの行う救済とは、全ての悪しきモノ……つまり……

此の世の全ての、怪我・病・悪しき感情・悪で在るという人の本質でさえも、

本人が望めば、全てアルニス自身の裡に吸収し、押し留め、浄化し、昇華する事を言う。

だから、俺は先程言ったのだ。……此奴の能力は、そんなに可愛いモノでは無い…と。」

……アルニスの、その己を一切厭わぬ……或る意味、究極の…
…自己犠牲と言う救いに、

絶句しない者は居なかった。

「……本当に、カイトは御喋りさんなんですから。

……それで、アンリ・マユ？次の質問は何ですか？」

「……あ、ああ。……次の……最後の問いは……俺は、お前に救われた後、どうなる？」

「……貴方が望むのならば、再び転生出来ます。

今度は、極普通の平凡な家庭に産まれて、誰しもが送れる辛くも楽しい日常を過ごし、

当たり前に恋をし、普通に子を設け、賑やかな家庭を持ち、沢山の孫達に囲まれて……

……幸せに、その一生を終えるのです。」

「……ああ。……それは……本当に幸せだろうなぁ……。」

「はい。……貴方がそれを望むのならば。私ならば、それを叶える事が出来ます。

アンリ・マユ。……貴方は……幸福を望みますか？」

「……オレは……なれるのなら……幸せになりたい。」

「……分かりました。貴方の『願い』……確かと、承りました。貴方を救います。

……セカイよ…。此の世を統べしセカイよ…！……彼の者に救いを……！！

『復讐者（アンリ・マユ）』に終止符（すくい）を！！！『此の世全ての悪（アンリ・マユ）』に終極（すくい）を！！！！

貴方が、与えぬと言うのならば！！！！！！私が彼に与えよう！！！！！！！！

『幸せになるべき者（アンリ・マユ）』に幸福（すくい）を！！！！！！！！！！！！」

そして……最後に残った……アンリ・マユも光に包まれた。

「……ああ。……ありがとう。……アルニス＝カイゼル。……貴方に無上の感謝を。

あのコルニスとか言うねーちゃんが、そう言ってくれってさ。」

「……クスッ。……そうですか。……有難う御座います、アンリ・マユ。」

「…ああ。……さ…て。……次の……俺の……人生…は……どう…なってる……かなぁ。」

そうポツリと零し、僅かに溢れた涙と共に……夜空に還っていった。

――きらめく涙の如き数多の光の粒は星に還り――

――瞬く月明かりは夜空を飾り尽くした。

――『救われし者（アンリ・マユ）』に祝福在れ（すくい）――と。

――今――此処に――聖杯戦争は――

――真の終結を――迎えた。

1992

きらめく涙は星に（ｄｉｓｉｌｌｕｓｉｏｎ）（後書き）

……如何でしたでしょうか？

これで、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』編は終了です。

次回から、『月姫』編になります。凡そ、５～６話程度ではありますが、御付き合い頂ければ、幸いです。

所で。前話の、答え合わせ（？）ですが……。

『願いの果て』は、ＴＶアニメ版『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』の２２話タイトル。

『Ｗｉｔｈ．．．』は、劇場版の『Ｕ・Ｂ・Ｗ』の記念に作られた、総集編である『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　ＴＶ　ｒｅｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ』のＥＤテーマでした。

何れも御判りになった方は、正直凄いと思います。

そして、今回のタイトルは……言う迄も有りませんねｗ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

遠野家の日常（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ）（前書き）

現時刻（１８：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：８８８，１２９アクセス　ユニーク：７９，９４７人
皆様、いつも有難う御座います。

今回から、『月姫』編開始です。鋼牙の出番も増えていますので、
そちらも御楽しみにｗ

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

遠野家の日常（New always days）

side：公園中央

……今、アンリ・マユが救われて空に還って行った。

皆、その光を見送り、涙を流して彼の幸せを願い、星空を何時迄も眺めていた。

その後。どれ程経っただろうか？……一時間…二時間……いや、もっとだろうか？

気が済んだのか、見上げていた顔を下げて、口々にアルニスに感謝の言葉を述べた。

「……ありがとう。」と。……又、口には出さないまでも、頭を下げ謝意を示した。

……何か感じ入る事が有ったのか、あのギルガメッシュですら、頭を垂れていた。

それに対して、アルニスは、莞爾と笑み、その謝意に応えた。

「……では、帰りましょうか。……いいですよね？カイト。」

「ああ。……良し。これで此処の浄化も済んだ。」

アルニスの問いに答え、カイトが地面に手を翳すと、公園全体が光り輝き、直ぐ収まった。

「……さて。では、皆、帰ろうか。皆の……帰るべき場所（いえ）へ。」

その夜。冬木市では、此処最近、類を見ない程の、数多の綺麗な星空が観測出来（みられた）と言う。

ｓｉｄｅ：衛宮家

翌日。殆どの人が、布団に沈んで居た。昨夜、帰って来てから、皆で酒盛りをしていたのだ。

あの後、皆を家に帰すとカイトが言ったのだが、結局全員揃って、

衛宮家で飲んでいた。

しかも、英霊達に、士郎達をも巻き込んでの大宴会となった。
（※未成年者は飲んではいけません！）

故に、今も其処彼処で、呻き声が響いている。

英霊達の一部や無事な人達が、対応に大童であった。……二人を除いて。

「……みんな、大変そうだな？鋼牙。」

「うん…。……ホントに大丈夫なの？カイト兄ちゃん。僕達、手伝わなくても…。」

「ああ、いいんだ。」

「……いいんだ……じゃねぇよ……お前も手伝えって……カイト…。」　ズキズキ……

「だが断る。……まぁ、冗談抜きでな。今日は来客があるんだ。だから、それに備えてるのさ。」

「……来客？……（ピンポーン♪）お。誰か、ホントに来たみたいだな。」

「…ああ。済まんが、士郎。お前が迎えに行って呉れないか？」

「……何か、物凄く嫌な予感がする。……まぁ、お客さんを待たせるのも不味いし……。

それじゃ、行って来る。…何か気を付ける事は？」

「…あ～……んじゃ、喧嘩は売るな。文字通り、瞬殺されるから。」

「……益々、行きたくなくなってきた……。」

「おい！！居るかーーー！！！『旅人』！！！！返事をせい！！！！！」

「お～～～……こっちだ～。」

バンッ！「おー！此処に居たか！！！！『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』！！！！！！」

「え？！……あ、ホントだ。お久、ワーデス！！！」

「よう、放蕩爺。……後、略すなと、昔から言っとろうが。アホクエイド。」

「何よ。アンタだってみんなの事、渾名で呼んでるじゃない。て言うか、アホ言うな！！！」

「アホだろうが。じゃあ、某七位みたいに、アーパー吸血鬼とでも呼んじゃろか？」

「……アナタ……よっぽど死にたいの？」

「はっ！高々真祖風情が、この俺に勝てるとでも？未だ寝言をほざける程、寝惚けてるのか？」

「？？？…喧嘩はメッ！」↑コテン＋人差し指を立てて一言言う鋼牙。

「……仕方ない。鋼牙の可愛さに免じて、此処は退いてやろう。」

「……意味は分からないけど……いや、分かるんだけど……；；；

ま、まぁ、アンタから引くって言うなら、それでもいいわ。」

2001

「?…喧嘩はだめだよ?カイト兄ちゃん。」　ぎゅ…。

「ああ、大丈夫だよ…鋼牙。鋼牙の御陰で、喧嘩はせずに済んだから。」　ナデナデ

「…えへへへ～～～…♪♪♪」　むぎゅぅ…！

“鋼牙はホントに可愛いなぁ……。”

「……それで?今度は何用だ?放蕩糞爺。」

「そうよ、爺や。私も何にも聞いてないんだけど?…早く志貴の所に行きたいのに。」

「うむ。…まぁ、その遠野志貴の事でな。

……ちと、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』に頼みたい事があるのだが。」

「成る程、だが断る。」

「そうか、やってくれるか！！有り難い！では、早速……。」

「やらん言うとるだろうが、ド阿呆が！！！てめぇの脳味噌には、血しか溜まってねぇのか！！

どうせ、志貴に何かさせる際の護衛にでもするつもりなんだろうが！！！」

「おお！！流石は、『全て（オール・ノウレッジ）を知りし者』！！！良く判っているな！！！」

「分からいでか！！！！！とにかく、俺はやらんぞ？其処のアーパー真祖にでもやらせろ。

死徒（ORT）第五位とかでも無い限りは、鎧袖一触だろうが。」

「……いや、アルクェイドは連れて行けん。何せ……（ゴニョゴニ

ヨ）じゃからな。」

「……本気か？宝石翁（キンゼルルュボインオーグ）。益々キ○ガイ染みて来たな？」

「はっはっは……誉め言葉として、受け取っておこう。…まぁ、そういう訳なのでな。

出来れば、御主に宜しく頼みたいんじゃが……。」

「……良かろう。その代わり、今から提示する条件を全て呑んで貰うぞ？」

「おお！！引き受けてくれるか！！構わん、構わん！何でも構わん！！！

では、頼んだぞ？こう見えて、儂も結構忙しいのでな。」

「…はっ……。どうせ、高い塔の上で、姉ちゃんとしけ込むだけだろうが。」

「……相変わらず、本当に何でもお見通しじゃのう……。まぁ、そういう訳じゃ。ではの。」

「……で？結局、私、何にも判らなかったんだけど…？」

「……だから、アーパー吸血鬼って言われるんだよ…。」

「む～～～～～……！！！！！」

「ぬ～～～～～……！！！！！」

「？？？」　コテン

「……ハァ～～……。」　ズキンズキン

睨み合う、真祖と救世主。首を傾げながら、カイトに抱き付く鋼牙と、痛む頭を抑える士郎。

何とも、奇妙な光景が、皆がのそのそと起きて来る迄、続けられたそうな。……士郎、御愁傷様。

ｓｉｄｅ：衛宮家の居間

「……では、改めて紹介しよう。真祖の吸血鬼…アルクェイド＝ブリュンスタッドだ。」

「ど～も～♪」

“……”

「……ねぇ、ちょっと。みんな、何の反応も無いんだけど…何で？」

「何でもへったくれも無かろうが。目の前に、伝説の真祖が居りゃぁ、誰でも声を失うっての。」

「……アンタは別にそんな事、無かったじゃない。」

「そりゃそうだ。俺は別に恐くないもん。……とまぁ、そんな事より…だ。

取り敢えず、アルク。あの放蕩爺からの依頼でな。俺等の内の何人かで、

志貴んとこへ、明日遊びに行く事になったから。今の内に帰って、

志貴達に伝えといてくれ。」

「え？ホントに？遊びに来るの？」

「ああ。……てか、彼処はお前の家じゃ無かろうが。」

「まぁまぁ、細かい事は気にしない♪んじゃ、先に行って志貴に話して来るね～♪」　ピューン…

「本当に分かってんのかねぇ…アイツ？；」

「……で？アンタは何で、アンナノとまで、知り合いなのよ？！？！

御陰で、こっちは寿命が縮み捲ったわよ！？！？」

「アンナノとは、酷ぇなぁ…。あいつは只の、色惚けアーパー吸血鬼だぞ？

何か文句行って来たら、志貴に言ってやれば良い。直ぐに大人しくなるから。」

「……その志貴…って何者？何で、その人なら、あの真祖を止められる訳？」

「ん？……まぁ、一番の理由は、アルクが志貴に惚れてるから……だな。」

「……まぁ、それはいいわ。……ちっとも良くないけど…。

そ・れ・よ・り・も！！！…アンタがさっきから言ってる放蕩爺って、もしかして……。」

「ああ、そうだよ。キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグ。…お前のご先祖様だ。

他に居なかろう？偏屈で変人の窮みの放蕩爺なんぞ。」

「……アンタが私に最初にした挨拶って……本当の事だったの

ね……；；；；」

「何だ、信じて無かったのか。」

「……普通、信じられるワケ無いでしょ？」

「酷ぇ。…まぁ、いいや。そーゆー訳でな、何人か一緒に来て貰いたい。因みに選抜済みだ。

士郎・凛・桜・アルト・エミヤ・デュー・俺・鋼牙だ。文句は一切受け付けないので、ヨロ。

んじゃま、何とか今日一日で、酔いを覚ましてくれ。明日行く所は、人外魔窟だからな。」

そう皆に言って、又、鋼牙と戯れるカイト。……の所に、話し掛ける人が一人。

「……カイト。」

「アルニスか。……もう行くのか？」

「……はい。彼女（コルニス）の事も伝えなければいけませんし。
…何より、そろそろシュガルが危険信号を出す頃合いですからね。」

「……そうか。ならば、坊やに宜しく言っといてやってくれ。
政務・公務にばかり明け暮れて、修行を怠るな。
次、会った時には、成長具合を見る為に、フルボッコにする……
とな。」

「はい、確かと。……では皆さん。唐突で申し訳ありませんが、私は此処で御暇させて頂きます。

皆様にも、祝福が訪れますよう…。極めて近く、限り無く遠い地（セカイ）より、祈って居ります。」

そう言い、アルニスは忽然と姿を消した。

……皆、二日酔いで頭をふらつかせ乍らも、アルニスの居た場所に頭を下げ、心で見送った。

2012

で、翌日。鋼牙を必死に引き留めようとする、ギルとメディアを振り切り、目的地に着いた。

ｓｉｄｅ：遠野家

「……いらっしゃいませ。八神カイト様と御連れ様ですね？…どうぞ。」

「ああ。あんがとさん、翡翠。」

「……。」

「…ん？何だ、アルクェイドから俺の話は聞いてなかったのか？」

「…い、いえ…。…正直、話半分で聞いて居りましたので…。」

「あ～…まぁ、しょうがない。一応、あのアホの言ってる事は、大概本当だと思っといてくれ。」

「畏まりました。……志貴様、秋葉様。八神様達が、御見えになられました。」

「ようこそ、遠野家へ。遠野家当主、遠野秋葉です。」

「ああ、宜しく。八神カイトだ。…志貴も宜しくな。」

「…本当に何でも知ってるんですね…。改めて、初めまして。遠野志貴です。」

「ああ、宜しく。…みんなも自己紹介しときな。」

――――自己紹介中――――

「……ふわぁ～～……お。ようやっと、終わったか。

鋼牙なんか待ち草臥れて、すっかり御睡(おねむ)になっちまったぜ？」

「……くぅ～……すぅ～……むにゃ……ふにゅ……うにゅぅ～……。」

“……可愛い……。”

「あーーー！！！やっと来た～～！！もう、遅いよ！ワーデス！！！」

「……お前……俺が、明日行く…っつったの聞いて無かったろ？後、ワーデス言うな。」

「あれ、そうだっけ？まぁ、いいや。いらっしゃい♪」

「「だから、お前（あなた）の家じゃ無かろうが（無いでしょう）。」！？」」

「…むぅ……意外と息が合う…。いいじゃない、細かい事は。」

「良くねぇよ。……本当にお前は昔から変わらんなぁ……。

もう少し、ヒトというものに対して斟酌せんかい。」

「やぁよ、そんなの。人間なんて直ぐ死んじゃうのに、意味無いじ

ゃない。」

「…ほお……。んじゃぁ、志貴が困っててても御構い無しだと…？

へぇ……それじゃぁ、直ぐに志貴に見捨てられちゃうかもなぁ…

…？

本当にそれでもいいのかなぁ？」

「うぐっ……；；；；」

「志貴がいつも喧嘩しないで欲しいなぁ…と思ってるのに、お前達がそれじゃぁなぁ……。

……なぁ、どう思う？其処で隠れて隙を伺ってる……埋葬機関・第七位さん？」

“…え？”

「……貴方、何者ですか？今、私は気配を完全に断ってた筈ですが…。」

「ん？只の旅人だけど？詳しく聞きたきゃ、其処のアホクェイドにでも聞けば？」

「アホって言うな！！……えっと、ワーデスは『ワーデスと言うな。』……むぅ。

じゃぁ、何て呼べばいいのよ？」

「普通に名で呼べ。カイトで構わん。」

「んじゃ、それで。カイトはね？私が相手でも、瞬殺されるぐらいには、強いよ？

多分本気で掛かっても、秒殺されちゃうんじゃない？」

「ああ。まぁ、大体そんぐらいかな？況してや、未だ力が完全に戻っていないお前じゃ、

確実にどうにもならんな。血も吸っていないんだろう？」

「……ええ。」

「大変だねぇ…吸血衝動を抑えんのは。俺は人間だから、解らんけ

ど。」

（相変わらずの）カイトの出鱈目さに、驚愕している遠野家組と、最早慣れっ子の衛宮家組。

真祖（アルク）と救世主（カイト）の話を、冷や汗を垂れ流しながら聞いていると、何かがモゾモゾと動き出した。

「……ぅ…ん……むにゃ……ふわぁ～～……おはよう、かいとにいちゃん。」

「お。起きたか、鋼牙…お早う。」

「…ぅん……むにゅ……。」↑目を擦ってる最中

「あらら、未だ寝坊助さんかな？」

「…ううん……もうおきるぅ…。…んにゅ…くぅ～～……！！…起きた！」↑背伸び

「良し。改めて、お早う…鋼牙。」　ナデナデ

「エへへ～～…♪うん！！おはよう、カイト兄ちゃん♪♪♪！！！」むぎゅぅっ！

「ほら、鋼牙。みんなに挨拶。」

「あ、うん！…（とてとて）みなさん、初めまして…鋼牙です！！」ペコリ

“……か、か、可愛いぃぃ～～～♪♪♪♪♪♪！！！！！！”　ドドドッッ　ナデナデナデナデ

「うわっ…。……エへへへ～～～♪♪♪♪♪♪……あれっ？…わぁ～…♪♪」

鋼牙が女性陣に群れられて、遊んで貰ってる時に、何か発見したようだ。

その視線を皆して辿って見ると……黒猫が居た。

「わぁ～い♪猫ちゃんだぁ～～♪♪！！あ～そ～ぼ～♪♪♪」

そう言って、黒猫の所にとてとて…という擬音を出しながら、近寄って行く鋼牙。

それに萌える一同。……だめだこいつらはやくなんとかしないと。

それはさておき、その黒猫は志貴に顔を向け、

何かを確認するかの様な仕種をした後、自分から鋼牙に近付いて行った。

「わ～い♪♪…よしよし♪」

黒猫を必死に抱き抱えて、頭をナデナデする満面の笑みの鋼牙。それに萌える一同。

だめだこいつらはやｋ（ｒｙ。そんな鋼牙に声を掛けるカイト。

「良かったな、鋼牙…懐いてくれて。」

「うん♪♪！」

「その娘は、レンって言って、志貴の使い魔でな…余り人には懐かないんだとさ。」

「へぇ～……。エヘヘ…♪♪レンちゃんって言うんだ♪一緒にあそぼ♪♪レンちゃん♪♪♪」

その日、一日…鋼牙とレンが遊ぶのを、笑顔でキュンキュンして眺

めていた一同であった。

……だが……。

「……兄さん？どういう事か……説明して頂けますね？」

「……；；；；；；あ、あの……秋葉…？少し、髪が朱くなってきてるんだけど……；；；；」

「……私もお聞きして宜しいですね？志貴様。」

「アハハ……正直にお話して下さらないと、お注射しちゃいますからね♪♪♪」

「……志貴君？さぁ、キリキリ吐いて貰いましょうか？」

「あ♪面白そう♪♪私もやるぅ♪♪♪」

「ヒィィィ……！！！！！」

その日、志貴の姿を見た者は、誰も居なかった。

2023

遠野家の日常（New always days）（後書き）

如何でしたでしょうか？

鋼牙に萌えて頂けましたか？w

一応、私は『月姫』・『月姫＋』・『歌月十夜』迄は、プレイ済みです。

ですが、プレイしたのが可成り前ですので、今一朧気です。

ですので、志貴達に何か違和感等が御座いましたらば、遠慮無く御教え下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

2024

遠野家の日常貳（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ　２）（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：９０６，３９２アクセス　　ユニーク：８１，７４１人
皆様、毎度有難う御座います。

そして、９００，０００アクセス＆８０，０００人突破致しました！！！！！

後、もう少しで１，０００，０００アクセスの大台に突入します！！！

皆様、本当に感謝致して居ります！！！！！

……さて。今回は、とても危険な回です。……主に、版権的な意味で。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

2025

遠野家の日常貳（New always days 2）

side：遠野家

志貴が再起不能になり、何とか此岸に戻って来られた日の翌日の事。

「よお、志貴。どうやら何とか生きてるみたいだな。」

「……ええ。…御陰様で。」

「おいおい、自業自得だろう？逆恨みや八つ当たりはよせって。」

「……ええ。分かっています。……分かっていますけど……くっ！！！」

とまぁ、何だかんだで無事だった志貴に、更なる凶報が舞い降りた。

「ああ、そうそう。志貴…今日は客人が三人程来るそうだぜ？」

「客人…ですか？」

「そう、客人。お前の知ってる人達だぞ？」

「……なんか、とても嫌な予感しかしないんですけど……；；；」

2026

「……まぁ、そうだろうなぁ……お。早速、来たようだぞ？」

その場に居た全員に、何故か怖気が立った瞬間……それは現れた。

「志貴、久し振りね…元気だった？」

「え？！せ、先生！？！？」

……そう。今日初めの招かれざる……いや、招いてはいけない客一人目……。

『ミス・ブルー』・『破壊の女王（クイーンオブカタストロフィ）』こと蒼崎青子。

「…へぇ……。ミス・ブルーが最初にお出ましとはね。」

「……誰？アンタ。」

「ん？あの放蕩爺から聞いてないのか？」

「……ああ。じゃあ、アンタがあの『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』？」

「ああ、そういう事だ。改めて始めまして…『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』こと、八神カイトだ。」

「……そう。…あの爺さんが怖がってたから、どんな奴かと思ってたら……意外とアレね？」

「そうか？そいつは面目ない。期待に応えられず済まなかったな？」

「まぁ、いいわ。人は見掛けに依らないって言うし。」

平然と魔法使い(ミス・ブルー)と話をするカイトを、ハラハラしながら見ている魔術師(しろう)達。

そんな皆々に、更なる凶報が舞い降りようとは、一体誰が想像していたであろうか？

「確かにな。お前達も見目と強さが比例してるのかもな。……どう思う？ミス・レッド。」

「な！？！？」

「……ちっ。……何で貴様が此処に居る？」

……そう。招いてはいけない客二人目。

『傷んだ赤（オレンジ）』・『最狂（マッド・）の人形遣い（ドールマスター）』こと、蒼崎燈子。

……そして、蒼崎青子（ミス・ブルー）の実姉。此程有名な不倶戴天の敵同士も無かろう。

「……それはこっちの台詞よ。何で姉貴までこんな処に居るのよ？」

「先に聞いたのはこっちだ。答えろ。」

「……ふん。招待されたのよ…あの宝石翁にね。…答えたわよ…そっちは？」

「…何だ、貴様もか。…私も同じだ……全く…何を考えているんだ…あの糞爺は。

……で？貴様は何者だ？返答如何では、即座に殺す。」

そんな厄介事（アオザキ）の代名詞達の、姉妹喧嘩に皆で戦々恐々としていた。

そんな所に割って入る勇気も無く……指名されたカイトに十字を空に描く人まで居た。

「何だ…お前も聞いてないのか？あの放蕩爺に。……俺が、『世界（ワール）の破壊者（ド・デストラクション）』だ。」

「……何？…貴様がか？……もっとアレな奴かと思ったんだが……。

まぁ、いい。人は見掛けに依らんからな。」

「……姉妹揃って同じ事言うねぇ……。ホントは仲良いんじゃね？お前等。」

「「巫山戯るな（んな）！！！誰がこんな奴（姉貴）なんかと！！！！」」

「息もピッタシだな。良い漫才コンビになれるんじゃないか？」

「……キサマ……私に喧嘩売っているのか…？」

「……今日だけは、手伝ってやっても良いわよ？姉貴。」

そんな今世紀最大の戦いになりそうな、一触即発の中。……最後の凶事が顕現した。

「……何やら騒がしいのぉ…。しかも、客人を出迎えぬとはどういう訳じゃ？」

「ええ？！アルトルージュまで来たの！？！？」

……最後の招いてはいけない客三人目。

『血と契約の支配者』・『黒血の月蝕姫』こと、アルトルージュ・ブリュンスタッド。

真祖の姫君こと、アルクェイド・ブリュンスタッドの姉とも言える存在。

「む…？姉を名指しとは、穏やかでは無いの？アルクェイド。」

「…むぅ……。」

こっちでも、最悪の姉妹喧嘩が勃発しそうになっていた。

今、此処は正に人外魔境…いや、人外魔窟であった。

そんな魔王や冥王ですら、命乞いをして裸足で逃げ出しそうな場の中。

愚かにも、動き出した者が居た。……しかも、それは……全てを敵に回して……。

「……ハァ…。こら、ルージュ、アホク。こんなとこで喧嘩すんな。家が無くなるだろうが。

蒼崎姉妹…お前達もだ。喧嘩したいなら、俺が今直ぐ相手してやる。全員表出な？」

side：遠野家の庭

今、此の場には有り得ない重圧が圧し掛かっていた。…それも致し方ない。何せ、今から……

世界が崩壊しても可笑しくない程の大戦が、目の前で勃発しようとしているのだから。

片側には、『マジックガンナー』蒼崎青子，『最も有名な封印指定』蒼崎燈子，更には……

『真祖の姫君』アルクェイド・ブリュンスタッド，

『真祖と死徒の混血』アルトルージュ・ブリュンスタッド。

最狂最悪の四人が揃って、共闘している。

その相手は……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』こと、八神カイト。

カイトの圧倒的な強さを知っている面々でさえも、

流石にこの４人ｖｓ１人では、カイトの生存は絶望的では無いかと思っていた。

「それで？あれは一体何者なのじゃ？」

「え！？知らないで戦おうとしてたの？！」

「仕方なかろう?突然彼奴から戦うと言い出したのじゃから。…で?誰じゃ?」

「……『世界の破壊者(ワールド・デストラクション)』よ。聞いた事ぐらい有るでしょ?」

「何と!あの者がのう…。妾は初めて素顔を見たのでな……判らぬのも道理じゃな。」

「…ふ~ん。……あ、そう言えば。御供達はどうしたの?」

「む?黒騎士と白騎士かえ?彼奴等ならば、プライミッツの世話役に置いて来たぞ。」

「…あっそ。……アイツラが居れば、もう少しマシな戦いが出来たかもしれないのに…。」

その妹(アルク)の言葉に、首を捻る姉(ルージュ)。

そんな二人の会話を後目に、何とカイトから、行き成り発破を掛けて来た。

「……んじゃ、そろそろ痺れを切らしてるみたいだし……。いっちょ殺りますか。

『全(オール)てを知りし者(・ノウレッジ)』　八神カイト　いざ　尋常に参る。」

そのカイトの名乗りに、殺気を漲らせ、本気で構える四人。……すると……。

「此処で俺達が殺り合うと、地球が壊れそうだしな。先ずは舞台を造ろう。

士郎！！！お前達の世界！！又、借りるぞ！！！

発動　　固有結界『無限の剣製』」

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』

“な！？何！？！？”

「……まさか、固有結界を持ってるなんてね……。」

「いいや？これは、俺の固有結界じゃ無い。今言った通り、其処に居る…衛宮士郎達の物だ。

お前等、あの貴重な存在（サンプル）を弄くるなよ？精々修行を付ける程度にしてやれ。」

「……ふん。まぁ、いいわ。取り敢えず、此処なら全力をどんなに出しても問題無いって事ね？」

「ああ、その通りだ。……さて。お待たせしたな…レディース？

さあ……狂艶の始まりだ…！！！」

そして……狂想曲が……鳴り響いた…。

ズドォーンッッッ！！！　ドゴォォーンッッ！！！　物凄い快音が鳴り響いていた。

青子が穴を穿ち、燈子の使い魔？達が辺りの剣群を薙ぎ倒し、

アルクが地面を抉り、ルージュが周りの存在など一切気にせず、攻撃を仕掛けている。

しかし、一撃たりともカイトに掠りもせず、又、渾身の力を込めた攻撃は悉く受け止められた。

初めの内は、只の腹癒せ程度に攻撃していたが、流石にカイトの強さに気付いたのか、

2～3回攻撃しただけで、完全に戦闘態勢へと移行した。……だが、無駄だった。

「…くっ……！！本当に何なんだ！！キサマはァァァ！！！」

「まさか、アタシ達の攻撃が全く効かないなんて……一体どんなカラクリッ？！」

「だから言ったじゃない！！御供連れて来なさいってぇ！！！」

「そんな事聞いておらんわ！！！第一、奴が相手では、彼奴等では、役者不足じゃ！！！」

各々、喧々囂々と叫び出す。…大分苛立っているようだ。

それを見かねたのか……カイトが動きを止め、四人に話し掛けた。

「大分お疲れだねぇ…お嬢さん方？」

“五月蠅いっっっ！！！！！”

「おお、怖ぇ。あ～あ、やだねぇ…ヒステリックな女性は…。」

“キサマ（アンタ）ァァァァッッッッ！！！！！！！！！”

「…ああ？五月蠅ぇな……。こちとら、テメェラが余りにも弱過ぎ

るんで苛ついてンダヨ…。

下らねぇ御託並べてねぇで、さっさと本気を出せ。……でなけりゃ……

マジで消滅(けしと)させるぞ？」

そのカイトから噴き出して来た裂帛の殺気に、思わず動きが完全に止まってしまった四人。

その様を見て、詰まらなそうに鼻で笑い、殺気を収めたカイトは、四人に提案し出した。

「……ハァ～……もういいや。…もう…あれだ。これじゃ、俺が余りにも詰まらなさ過ぎる。

だから、此処で提案だ。俺が今から、約２０回程攻撃する。

お前等、それに耐えるか、避け続けろ。誰か一人でも、最後に立ってりゃ、お前等の勝ち。

……もう、それでいいだろ?テメェラ程度じゃ、後、一兆回やっても俺にゃ、攻撃は効かん。」

そのカイトの、白地(あからさま)に溜息を付き肩を落とし乍らの提案に、思わずカッとなったが、

この儘じゃ埒が明かないのは、目に見えていたので、その提案に乗る事にした。

「……んじゃ、良いか？こっからは、俺のターンだ。一応、手加減はしてやる。

だから……まぁ、あれだ。……死ぬなよ？」

そして、『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』の名。その一端を皆、垣間見る事になった。

ｓｉｄｅ：三人称

……全く。やれ魔法使いだの、真祖だの、死徒だの言うから少しは楽しみにしてたのに……。

まぁ、いいや。取・り・敢・え・ず♪何から使おっかなぁ～♪

……と、結局楽しそうに何かを考えている事が、モロバレなカイトであった。

「先ずはこれだ！　ベギラゴン！！　マヒャデドス！！　メラガイアー！！

　イオグランデ！！　ギガデイン！！　バギムーチョ！！　んで、メテオ！！！」

その瞬間、大地は凄惨を通り越した状態になった。

突然、地面を炎が這い回り、飛び上がった所を、冷気と巨大な氷の塊が襲って来、

それが砕け散り、氷の破片が全身を貫こうとし、それを何とか防いだら、

四人共飲み込んでも、お釣りが来るぐらいの巨大な炎の玉が、頭上に浮かんでいた。

それに皆が気付いた刹那、猛スピードで垂直落下してきた。

それもどうにか躱したが、熱に煽られ意識が朦朧とした所に、

何処からともなく、全てを包み込む程の超巨大な爆発が起き、

全員、一瞬意識を失ったが、続けて喰らった雷撃によって、

電気ショックを受けた状態になり、何とか、意識は回復した。

だが、体力を回復する間も無く、自分達を中心に現れた嵐に翻弄され、空へと舞い上がり、

落下中に顕れた隕石群の直撃を喰らい、地面に叩き付けられた。

……皆、思わず息をするのを忘れていた。カイトの攻撃が一旦止んだらしく、

空気が少し弛緩した瞬間に、見学組が「…ハァァァ～～…。」と深い息を付いていた。

そして、倒れ伏している四人にカイトが話し掛けた。

「…おいおい……何時まで寝てやがんだ?ちゃんと手加減してやってんだ。

そんなにダメージは、喰らっちゃいねぇだろうが。」

“あれだけの攻撃をしておいて、何を言ってるんだ?こいつ。”

そんな心の声が聞こえそうな顔をしている見学組。……だが。

「あ、やっぱりばれた?」

“……ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっっっっっっ！？！？！？！？！？”

そう言い、むくりと起き上がるアルク。それに続いて、三人共平然と立ち上がった。

見た目は可成りボロボロなのだが……どうやら、本当に然程ダメージは負っていない様だ。

「……確かに…自分で思っていたよりは、ダメージが無いな…。」

「そりゃ、そうだろ。普通に使ったら、最初のベギラゴンで、この世界が焼滅してるし。

一応、それで、一億分の一の威力だ。……次からは、一万分の一で攻撃するぞ？」

その言葉に、身構える四人。そして、更に遠くへ避難する見学組。

第二ラウンドが始まった。

「取り敢えず、今ので七回攻撃したから、後、１３回ぐらいだな。

そうだな……じゃぁ、来い！斬月！！　卍解！　天鎖斬月！！！」

カイトが、何かでかい剣を持ち出したと思ったら、その剣が形態を変え、

カイトの装束共々黒くなり、小さく纏まった。

そうアルク達が認識した瞬間、カイトの姿が消えた。

「……こっちだよ。……月牙天衝！！！」

そのカイトの言葉が聞こえた瞬間、突然巨大な衝撃に襲われた。

それに気付き、後ろを必死に振り返ると、地面から遠く離れていた。

……どうやら、この背中にある斬撃によって飛ばされている様だ。

何とかそれを振り切り、一息付いたは良いが、カイトの姿が見えない。

何処に行ったかと探していると、真上に影が差した。その事に気付いた時にはもう遅かった。

「遅ぇよ、お前等。鉄砕牙！　金剛槍破ぁ！！！」

カイトの手にした、巨大な妖気を発している大剣から、金剛石の欠片が、雨霰と降って来た。

完全に油断していた一同は、まともにそれを喰らいながら落下して行った。

そしてその落下先には、先回りしていたカイトが、手に炎を纏わり付かせ乍ら待ち構えていた。

「…ほうら……炎のレーザー光線だ…！喰らいな！！

漆式　虚空！　壱式　崩！！」

カイトが、その言葉通りに空に文字を描くと、火の玉が沢山浮いて現れた。

１０個……１００個……１０００個……。落下中のアルク達を取り囲んだ。

そして、カイトの号令一下の下、レーザー光線と化した焔球が、アルク達を貫いた。

しかし、其処は敵も然る者、引っ掻く者。直撃を何とか避け、ほぼ全て掠り傷で済ませていた。

何とか、炎の弾幕を潜り抜け、地面に降り立ち、直ぐ様態勢を立て

直す四人。

しかし、その時、辺りが余りにも明るい事に気付いた。……どういう事だろう？

それを探ろうと、周りを見渡したアルク達は驚愕した。

自分達の後ろに居たカイトが、持っている本が放つ光。

……只それだけで、自分達の周りが明るくなっていたのだ。

……一体、どれ程の魔力をあれに籠めているのか……考えるだに恐ろしい。

……そして……。

「…さぁて……そろそろ、フィナーレと行こうか！！！

出て来い！！！　シン・ベルワン・バオウ・ザケルガァァァッッ！！！！！！」

カイトが、今までに無いぐらいの叫び声を上げると、持っていた本から、超巨大な龍が現れた。

その龍は、どうやら魔力を帯びた電気で構成されているらしく、圧倒的な存在感を放っていた。

だが、どうやら、未だそれで終わりでは無かったようだ。

「未だだ！！！　ちゃんと喰えよ！！シン・バオウ！！！

ザグルゼム！　ザグルゼム！　ザグルゼム！　ザグルゼム！　ザグルゼム！

ほうら！！　こんだけありゃ、十分だろう！！！」

そう言うと、カイトは何と、その雷龍に電気の塊をぶつけ出した。
……だが……。

それは攻撃では無かった。その雷球を、雷龍が自ら喰らいに行ったのだ。

すると、只でさえ巨大で圧倒的な存在が、更に形態を変化させ……更に巨大化したのだ。

「取り敢えず、五発程度で止めてやったぞ！！この巨大な龍の化身！！！！

避けられると思うな！！！止められるものならば、止めてみせるがいい！！！！！！

さあ！行けぃ！！！シン・バオウよッッ！！！！！」

《ゴガアアアアアアアーーーーーーーーッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！》

まるで意志を持っているかの様に、一直線にアルク達の許へ向かって突き進む雷龍（シン・バオウ）。

「……くうっっ！！其処どいて！姉貴！！！こんなもの…アタシが…！！！」

その威圧感に圧され乍らも、果敢に立ち向かう青子。……だが……。

「…このぉっ…！！…このアタシに壊せないモノなんてぇっっ…！！！」

「はっっ！！！本来の担い手ならば兎も角、この俺の魔力を籠めているんだぞ？

高々、魔法使い風情に壊せるはずが無かろう？……そうら…。もう一発だ！！

ザグルゼム！！！」

更に強化されたシン・バオウに抗う術は無く、一同纏めて直撃し、吹き飛ばされた。

そして、空中に飛んでいた儘、何かに拘束された。

「くぅっ！！！こんなもの……！ナンダコレハッッ！！！」

「くそっ…ビクともせんぞ！！！」

「壊せない…！！このアタシがぁっ！！？」

「何で……！！こんな変なものが…！！！」

「変なモノ言うな。そいつはな？ストラグルバインドって言ってな。
今、俺の妻と娘が生きている異世界で使われている、拘束具みたいなモノだ。

……まぁ、俺の魔力で編まれているから、創世神レベルじゃねぇと壊せないがな。」

色々と、驚愕の事実をさらっと零し乍ら、淡々と説明するカイト。
……そして……。

「さあって！そんじゃ、これで最後とするかぁ！！！

来い！！！レイジングハート・エクセリオン！！！！！」

そう言うと、カイトの手に何か機械の……杖の様な物が現れた。

「ほうら…行くぜぇ…！！！レイジングハート！！３６０度！フルビットォォッッ！！！」

すると、空中で拘束されているアルク達の周りに、無数の自律機械が漂い始めた。

「やっぱ、締めはこれだよなぁ…！……さあ……！！

この俺と相対するなんてバカな事を考えた奴等は……

少し……頭を、冷やそうか…？

全力全壊ッッッッ！！！！！スターライトッッッ！！！！！！！！！

ブレイカーーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！！

フルッッッ！！！！！バーーーァァァストーーーーーォォォォォッッッッッ！！！！！」

その瞬間、全方位から無慈悲で非情な一斉砲撃が浴びせられ……アルク達は沈んだ。

「……ハッ！！！……どうだ？美しい明星は見えたか？」

最早、答える者は誰も居ないフィールドに響いたその声に、誰もが思った。

“……こいつ（この人）を敵に回すのだけは、絶対に止めよう”…と。

そして、結局この後、鋼牙に『めっ！！！』とされ、渋々みんなを介抱するカイトであった。

因みに。遙か先の話になるが、はやての許に戻ったカイトが、この時の事も含めて、

色々とはやてに話した時、『やり過ぎや！！！！！』と又、正座で叱られるのであった。

……だが、それは、まだまだ先の話。今は未だ、救世主の足跡を追う事としよう。

遠野家の日常貳（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ　２）（後書き）

如何でしたでしょうか？

後、一回程、日常編を書いた後、『月姫』編の目的…宝石翁の目的を果たそうと思います。

……所で。皆様には、非常に申し上げ難いのですが……

今日明日は、ちょっと投稿出来る状況に、なりそうも無く……。

申し訳ありませんが、次の投稿は、明後日以降になってしまいます。

重ねて御詫び申し上げます。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

遠野家の日常参（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ　３）（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：９２４，９１０アクセス　ユニーク：８３，３６６人
皆様、いつも有難う御座います。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

遠野家の日常参（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ　３）

ｓｉｄｅ：遠野家

カイトにフルボッコされた翌日。四人共目を覚まし、カイトに詰問した。

赤曰く、「何なんだ！？お前は一体！！！！！」とか、

白曰く、「ちょっと！！！異世界ってどういう事よ？！」とか、

青曰く、「アンタ、妻子持ちだったの？！ていうか、アンタ幾つ！？」とか、

黒曰く、「御主、人間では無かろう？！…そうじゃ！！絶対そうに違いない！！！」とかとか。

「メンドクセェ……ｏｒｚ」とか言いながら、結局全員に答える、我等がツンデレカイト。

何故か唐突にイラッ☆としたカイトを後目に、答えられた言葉に流石に驚愕する面々。

しかし、更に何事か聞きたいのか、何故か身構えている遠野家＋α。

……って、オマエラも？！

……そんな訳で、龍斗を呼び出して、皆への説明を頼んだカイトは、

溜息を付いている龍斗を尻目に、鋼牙と一日中戯れてた。

その日、鋼牙が一日中、満面の笑顔だった事は言う迄も無い。

……そして、そんな鋼牙にみんな萌え死んで居たのもこれ又、言う迄も無い事である。

ｓｉｄｅ：三人称

その後、結局一日掛けて、カイトの（龍斗による）説明が終わり、皆幾分か満足した顔で、

そして、龍斗は疲れた顔で、又泊まって行き、その儘、暫く居着く事になった。

その事を伝えられた時の秋葉達の顔が、余りにも可哀相だったので、カイトが常時泊まり込み、

姉妹喧嘩に備え、衛宮家の内、何人かが代わる代わる、遠野家に来て遊ぶ様になっていった。

その間に、全・元サーヴァント&元マスターが、遠野家に紹介された。

……ギルだけは、カレンに首輪を付けて引っ張られて来てたが。……まぁ、ギルだし。

然う斯うしている内に、幾日、幾週間も経って居り、只今冬休み。

今日も今日とて、遠野家に遊びに来ている、士郎ラバーズ&志貴ラバーズの皆さん。

当然の如く、既に他の志貴ラブの女性方とも面識済みである。シオンやさっちんも今日は居る。

そして、今は夕飯後。今日は、黄宇と水薙も来ている為（紅蓮と龍斗は衛宮家で御留守番）、

今、鋼牙は黄宇に取られて居り、カイトは久し振りにノンビリと一人で、部屋で寛いで居た。

……そんな時。カイトの客室のドアがノックされた。

「……？…どうぞ。」

「…済まない、失礼するよ。」

「…悪いな、カイト。」

そう。訪問客は、志貴と士郎であった。しかも、手には、何やら酒と肴も持っている。
（※諄(くど)い様ですが、お酒は二十歳になってからです！！！！！）

「珍しいな。お前達が、わざわざ俺を訪ねに来るなんて。」

「いや……実はな？…カイトにどうしても相談したい事が有ってさ。」

「うん。ちょっと俺達の話を聞いて貰えないかな？カイトさん。」

「……ふむ。成る程ね。女性陣に対する相談か。良いよ、其処に有

る椅子にでも座ってな。」

そう言い、何処かから、酒肴を追加で出すカイト。

あっさり、相談事を当てられ、お互いに苦笑しながらも席に着く、士郎と志貴。

今夜は徹夜になりそうだな…。等と思いながらも、

それも又、一興…と、男三人で乾杯するのであった。

ｓｉｄｅ：女性陣ｉｎ居間

何やら、女性陣がほぼ全員、居間に集まり、鳩首凝議中であった。

「…それで、琥珀？一体どういう訳か…兄さんには聞けたの？」

「いえ…それが、上手くはぐらかされちゃいまして……；」

「……貴女なら、それぐらいどうにか出来そうなモノだけど？」

「……姉さん…？あの後、２時間程姿が見えませんでしたが……志貴様共々。」

「……琥珀？」

「……；；；；；；あ、アハハハ……；；；；」

「……後でオシオキね？琥珀。」

「……ハィ。」

既に、ラバーズ同士、仲良くなっている。流石に、吸血鬼やら、英霊やらと紹介された時は、

お互い毎回驚き、初めの内こそ色々警戒していたものだが、今となってはもう懐かしい。

……オバンか。凛達も、魔術師としての好奇心はさておいて、今は友達として……

何より、お互いラバーズ（カイト命名）として、事態の把握に努めている真っ最中であった。

そして、これ又、何故か唐突に、イラッ☆と来た面々は、話を続けた。

「それはどうでもいいの！！…いや、良くないけど。

それより！…志貴君は一体、何で琥珀さんにおつまみを頼んだの？」

「だから、士郎達と飲み明かすつもりなんでしょう？…吸血鬼ってやっぱ、バカばっかなの？」

「それぐらい、私にも判るってばぁ！！そうじゃ無くってぇっ！！！」

「一体、どういう理由でコソコソと私達に隠れながら、それをしているのか…。

と言いたいのでは無いですか？さつき。」

「そうそう！ソレが言いたかったの！！ありがとう、セイバーさん！」

「……ハァ…さつき？それが判らないから、こうして皆で話してい

るのでしょう？」

「……さつきさん……。」

「……ううっ…ｏｒｚ」

皆から、憐れみの視線を受け、自沈するさっちん。……ギャグじゃナイヨ？

「…はぁ。取り敢えず、もう一度経緯をお浚いしましょう？」

「……そうね。先ず、兄さんが琥珀に酒肴を頼んだのよね？」

「……はい。その後、士郎さんが来て、自分が作るから良いと、断られまして…。」

「…で。問い詰めようとしたら、志貴にマンマと手籠めにされて、逃げられた…と。」

「……ハィ。」

「……まぁ、琥珀は後でオシオキするとして。……それ自体は特に問題無いのだけれど…。」

「…そうね。一番の問題は、何でコソコソと、私達に隠れる様にしていたのかって事よ！！」

「……で、でも、それも、琥珀さんの思い違いかも知れませんし…；

」

“女の勘よ（ね・です）。”

「……そ、そうですか…；；；」

同時に答えられ、タジタジになる桜。

「…それにしても……一体、男同士で何をコソコソ話しているのでしょうね？」

「……むぅ……思い当たる節は無きにしも非ず…。」

「……姉さん…それって、確か絶対にあるっていう強調表現じゃぁ……；；；」

「……そうとも言うわね…。」

「……ふむ。つまり、この場に居る全員が、何か男同士で話……

いえ、この場合は相談でしょうか？…される様な事に思い当たると……？」

“うっ……；；；”

「故に、それを問い質して、更にとっちめてやろう…と？」

“ううっ……；；；；；；”

「だが、それをすると流石に嫌われるのでは？殿方には殿方の話というモノも有る事だしな。」

“……ぐふっ……ｏｒｚ”

ライダー・水薙・黄宇に立て続けにツッコミを入れられ、倒れ伏すラバーズ軍団。……憐れな。

「……そんな皆さんに、朗報です。此処に、立派な水鏡が有ります。」

そう水薙が言うと、何時の間にか水薙の横に、大きな水の塊が浮いていた。

「…水薙。流石にそれは、主殿とて見過ごされぬぞ？」

「大丈夫だって、黄宇姉。……そ・れ・に♪もしばれちゃっても、マスターから特別にオシオキして貰えるモン♪♪♪」

「……ハァ。」

若干、ピンクモードに入った水薙に頭を抱えながら、諦める黄宇。

……黄宇も何気に興味は有る様だ。……このムッツリスケベめ。

何故か微妙に怒ってる黄宇はさておき、水薙がその水塊を平べったくして、大きく広げた。

「さ、これでマスター達の居る部屋の様子が、良く見えるわよ～♪」

すると、その水塊だったモノが綺麗に光り出し……カイト達が乾杯する様子が映し出された。

ｓｉｄｅ：男性陣ｉｎカイトの客室

取り敢えずは、普通に飲み食いしているだけの様だ。

「お、これ、旨いな。」
「…へぇ……こんな料理法も有るんだ。」
「…うむ。流石は黄宇だ。」

三者三様の感想を漏らしている。

士郎の作った賄い物や、カイトが取り出した出来立ての料理に、舌鼓を打っている。

特に士郎は、カイトの取り出した料理に興味津々らしく、事細かに聞いている。

カイト自身は料理に詳しくは無い為、調理法は語れないが、何処の誰が作ったかは教えている。

だが、それが、異世界の料理だったり、実は自分の平行存在が作っ

た料理だと知ったら、
色々と驚き、又、悔しがっていた。
……余談だが、この時女性陣も、黄宇や水薙に聞いて、メモを取ってたりしていた。
そして、大分酒も回り、肴も半分程無くなった所で、ようやっとカイトから切り出した。

「……それで？お前達、一体どんな事を相談しに来たんだ？」

「……ああ。…まぁ、ばれてるからもう言うけど……セイバー達の事で、ちょっと…。」

「うん。俺も、ちょっとアルクェイドや秋葉達の事で、相談が……。」

「……それで？」

……詳しい会話内容はさておき。

どうやら、士郎と志貴は、自分達が複数の女性を愛している事について……

どうしたものか、カイトに相談しに来たらしい。要約すると以下の様な感じだ。

カイトに、「ならば遊びか？」と聞かれ、即座に首を横に振り、激しく怒った。

「では、身体だけが目当てか？」と再度聞かれ、胸座を掴み、悪鬼羅刹の形相で詰め寄った。

「では、皆好きなんだな？」と改めて聞かれ、瞬間的に赤くなり、手を放しながら、

「「……まぁ……。」」と、二人同時にそっぽ向いて答えた。

「では、皆愛しているか？」と聞かれ、更に真っ赤になりながら、

「「……じゃなけりゃ、手は出さない。」」と二人同時に言い切った。

「ならば、何も問題は無いな。」と笑顔で言い切られ、二の句の継げない二人であった。

……因みに、この時、盗撮していた女性陣は、全員真っ赤になり悶

絶していたそうな（水薙談）。

「だけど……。」「でも……。」と何か言いた気な二人。

……どうやら、世間体等が、少し気になっている様だ。

「ちゃっかりハーレム作っといて、今更世間体もへったくれも無いだろう？

その儘、突き進め…奈落の底まで…な……鬼畜共♪♪♪」

と、一番言われたく無い人物に満面の笑みで言われ、完全にＯＴＬ状態になった二人であった。

……しかし、どうやら、その御陰（所為？）で色々吹っ切れた様で、その日は三人で明け方まで飲み続け、起きたのは昼だった。

ｓｉｄｅ：三人称

翌日。昼頃、二日酔いで鈍鈍と起きて来た二人に、皆文句一つ言わず、甲斐甲斐しく世話をし、

二人に、却って気味悪がられていた。……いや寧ろ、どんな要求をされるのかと、怯えていた。

……しかし、幾ら構えていても、一向にその兆候が見えない。

訝しみながらも、それに素直に甘えていた二人に、まさか凶報が届けられようとは……。

今は、夕食後。何とか、みんなの献身的な介護の御陰で二日酔いも収まり、

ホッと一息付き、みんなに礼を言い終わった……そんな至福の時だった。

敢(A)えて空気を読(Yな)まなかったカイトの言葉に、その場が完全に凍り付いた。

「あ、そうだ。俺達の会話を盗撮した感想はどうだった? 女性陣。

……って聞く迄も無かったな。その態度を見ればな。」

“……ば、バレテル！？！？！？！？”

「あちゃ～……やっぱりばれてた…；」

「……ハァァ…。だから言っただろう？水薙。私は知らないぞ？」

「「何……だと……！？」」

「いや、だからな？昨日の俺達の会話を、リアルタイムで完全中継済みだって事。」

「……そういう事か…。……何か、妙に何時もより優しいなぁ…と

思ってたら……。」

「……セイバー、遠坂、桜。……俺が今、何を言いたいか判るか？」

「「「……うぅっ……；；；；；；；；；；；；；；；」」」

士郎が腕組みをし、三人を正座させ、説教中である。そして、又、一方は……

「……アルクェイド、秋葉、翡翠、琥珀さん、シエル先輩、弓塚、シオン。」

「「「「「「「「「……はい。」」」」」」」」」

「……俺はね？みんなには、とても感謝している。……でもな？今回だけは頂けない。」

「「「「「「「「「……はい。」」」」」」」」」

志貴も絶賛説教中であった。……しかも、静かに教え諭す様に。

……これが正直、一番利くんだよなぁ……色々とゴメンナサイｏｒｚ

……と、作者が色々思い出してｏｒｚしている間に、水薙と黄宇が泣き頽(くずお)れている。

どうやら、こちらは、オシオキが完了した様だ。

「ううううっっ……一週間もマスターに触れられないなんてぇ……;;;;;;;」

「……まさか、私まで巻き添えを喰うとは……ＯＴＬ」

「いやいや。お前、何気にしっかり愉しんでただろ?黄宇。殆ど無表情に見せてたけど、

時折、微妙に笑んでたり、顔赤らめてたからな?他の人は騙せて

も、俺にはバレバレだぞ。」

「……しかも、完全にバレテルぅぅぅ～～～……シクシク；；；；；；」

「寧ろ何故に、俺にばれないと思ったのか、最低小一時間以上は問い詰めたい。

完全にお前達の一挙一動、丸見えだったからね？

流石に士郎と志貴には見えて無かったけど。

と言うか、もし二人にも見えてたら、期間は一月にしていたな。」

「「……ひぎぃ…。」」

……と、言う事らしい。その後、

「流石に居間でこの儘、続けるのはアレだから、各自の部屋で説教の続きをしな。」

…と言う、カイトの言を入れ、士郎と志貴に連れられて行く、各々のラバーズ。

……勿論、ＢＧＭはドナドナで。

翌日。起きて来たのは、士郎と志貴だけだった。

「……ふむ。士郎、志貴。二人共、首筋のキスマークは隠せよ？」

「「えぇぇっっ！？！？」」

「……やっぱりね。」

「「…あ。騙したな！！！」」

「騙したとは、人聞きの悪い。……只の事実だぞ？」

「「……え？……あ、ホントだ。……え？」」

お互いの首筋を指して確認していた。どうやら、本当に付いていた様だ。

……つまり、説教はちゃんとしていた様だが、何時の間にかそういう事になっていた…と。

「……まぁ、いいけどな。ちゃんと、昨日の借りは返せよ？」

そう言って、黄宇と水薙が作った料理を指差すカイト。……どうやら、先読みしていた様だ。

真っ赤になりながら、イソイソと料理を運ぶ二人。それをクスクス笑いながら見送るカイト。

そして、カイトに触れようとしながらも、その都度、手を引っ込める水薙と黄宇。

世は斯くも平和である。

因みに。あの後、料理を全員に食べさせてあげた士郎と志貴。

しかし、口移しやら何やらと要求された二人。若さには抗えず、又、事に及んだそうで。

結局、女性陣が起き出して来られたのは、その更に翌々日だった。

その後、イリヤとレンに、「……鬼畜。」と罵られ、悶絶する二人

が見られたそうな。

改めて、再度言おう。世は斯くも平和である。

遠野家の日常参（Ｎｅｗ　ａｌｗａｙｓ　ｄａｙｓ　３）（後書き）

如何でしたでしょうか？

……実は、今回さっちんとシオンは、出すつもりは全く無かったんですが……

何故か、急に喋り出しちゃいまして……；；どんだけ出番が欲しいんだ？あの娘。

所で…今回で、日常編は終わりです。次回より、戦闘編…とでも申しましょうか。

後、２話程で『月姫』編も終わります。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

腑海林～ｖｓ　ＯＲＴ～（Ｅｉｎｎａｓｈｅ～ｖｓ　ＯＲＴ～）（前書き）

現時刻（０２：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：９４１，９１９アクセス　ユニーク：８４，６３８人
皆様、毎度有難う御座います。

今回で『月姫』編は終了です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

腑海林～ｖｓ　ＯＲＴ～（Ｅｉｎｎａｓｈｅ～ｖｓ　ＯＲＴ～）

ｓｉｄｅ：三人称

一騒動、二騒動と色々有ったが、もう冬休みも後、二週間程残すのみとなった或る日。

その日は、珍客が遠野家に来ていた。

「『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』は居るか？」

「…え？…！！！だ、大師父！？」

「おろ？放蕩爺じゃねぇか。お～い、此処だ、此処。」

「おお！其処に居たか！！…む？……遠坂もか。……ふむ、ならば尚の事、都合が良い。

……所で『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。」

「あん？何だ？碌で無し。」

「……儂が頼んだ依頼はどうなった？」

「…………………………あ。……忘れてた。」

“おいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！”

その場に居た全員が、素で突っ込んだ。……まぁ、しょうがない。

「アッハッハ……いやぁ、済まん。素ですっかり忘れてたぜ。…休み終わんの後、どんぐらい？」

「……後、二週間ぐらいよ。間に合うの？」

「まぁ、俺一人で行けば、２０～３０分程度で終わるんだが……ダメ？」

「駄目じゃ。ちゃんと依頼通りにして貰うぞ。」

「……ちぇっ…ドケチめ……これだから、魔法使いや魔術師連中ってぇのは……ブツブツ。

まぁ、いいや。取り敢えず、志貴…七つ夜取って来な。

俺はその間に、何人か連れて来るから。」

そう言い、何処かに転移するカイト。急いで、自室に在る七つ夜を取りに行く志貴。

戻ってみると、既にカイトが全員連れて戻って来ていた。

「おう、志貴。取って来たか。んじゃ、今から言う奴等でちょっとある所に行こうと思う。

士郎・凛・アルト・エミヤ・志貴・シエル・俺・龍斗だ。」

「何で、その選抜？それと何処へ行くの？」

「選抜理由は爺の依頼。シエルが居る理由は、これから行く場所に関係するから。

んで、これから行く場所とは……。」

“…行く場所とは？”

「腑海林。死徒27祖・第七位ことアインナッシュの地に行く。」

“……し、死徒おおおお～～～～！！！！！！！！！！！”

「ああ。だから、アルクは連れてけ無いし、シエルは教会側としての名目上必要ってこった。

んじゃ、理解して貰った所で、早速行くぞ～…。」

“ちょぉぉぉっっ！！！！！納得してないってばぁぁぁ（ですよぉぉぉ）～～～！！！！！”

断末魔にも近いドップラー悲鳴を上げながら、カイト共々、転移されていった。

流石に皆して呆然と見送るしか無かった。

ｓｉｄｅ：腑海林の前

「到着っと。……大丈夫か？おまえら。」

“……これが大丈夫に見えるのか（んですか）？”

「うんにゃ、全然。」

“……なら、聞かないでくれ（下さい）……。”

大分、意気消沈している様である。……まぁ、無理も無い。

何せ、今目の前に、ナニカが蠢いてる森が居るのだから。

みんなが鬱になってる所にもお構いなしで、カイトが話し掛ける。

「取り敢えず、この中でお前達に十日程、過ごして貰う。飯や水分に関しては龍斗に任せてある。飲み食い出来る植物を龍斗に教えて貰え。

先ずは、奥へ奥へと進んで貰う。纏まって全員で行くも良し。手分けして進んでも良し。

慣れたら、一人で徘徊するも良し。あ、後、お前達には制限を設ける。」

“……せ、制限？”

只でさえ、この中に入るだけでも鬱、窮まってるのに、更にどうしようと言うのか？

「ああ……まぁ、大したものじゃ無い。士郎とエミヤは、固有結界禁止。

アルトは真名開放禁止。凛は今迄に俺から手渡された宝石の使用禁止。

志貴は死点を突くの禁止。シエルは第七聖典（セブン）禁止。

但し、どうにも出来ない絶体絶命の時のみ、最大三回それらの使用を許可する。

……とまぁ、こんなもんだ。…どうだ？簡単だろう？」

“何処がだ（ですか）！！！！！！！！！！！！！”

……最もである。可成りえげつないのでは無かろうか？

しかし、当然の如く、一切意に介せず士郎達を腑海林に放り投げるカイト。

「せめて此の程度は、耐えろよな？……んじゃ、行って来ーいっ！！！」　ぽぽぽーい！

“そんな殺生なーーーッッ！！！！！！！！！！！！！”

「……おお。良く飛んでるなぁ……。」

「……カイト様？」

「ん？どした、龍斗？」

「……あれでは、皆バラバラになってしまうのでは？」

「……あ。……てへっ☆」

「……はぁ。」

……龍斗の気苦労は永遠に絶えなそうであった。

ｓｉｄｅ：士郎

「……ぅぅわぁぁぁあああああっっっっっ！！！！！！！！！！！！
（ひゅ～…ドサササッ！！）

……な、何とか助かった……いや、助かって無いのか…？」

取り敢えず、現状確認だ。……身体に怪我は無い。魔術回路も順調。

どうやら魔術行使に影響はないらしい。……にしても、カイトの奴～～…！！

‘皆さん、聞こえますか？聞こえたら、声に出さず、頭の中で返事をして下さい。’

‘この声は…龍斗か！？龍斗！聞こえるか！！俺は無事だ！！！’

少し、タイムラグでも有るのか、ちょっと龍斗の返事が遅れて返って来た。

‘……はい。皆さん、どうやら全員御無事の様ですね。先ずは幸先が良いですね。’

“何処が！！！！！”

……何か、全員の声が聞こえた気がしたんだけど……；；；；

‘……まぁ、それはさておき。先ず現状を説明致します。

少々長くなりますので、周りに御気を付けを。’

龍斗が長いって言うぐらいだからな……気を引き締めないと。

‘皆さん、宜しいですね？……では、御話致します。

先ず、今皆さんは、全員一人です。【…カイト様の所為で。】↑

強調

ですので、先ずは誰かと合流して下さい。でなければ、直ぐ死んでしまいますので。

それから、飲食出来る植物は、話し終わった後、皆さんの脳内に姿を送ります。

それを御参考になさって下さい。但し、似せ物には御注意を。

最後に。もし、万が一何か皆さんに伝えたい事や、イレギュラーがあった場合、

私の名前を呼んで下さい。何処であろうとも、直ぐに駆け付けますので。

後、無いとは思いますが、もし巫山戯て私の名前を試しに呼ぶ様な方は、

此の森に未来永劫置いて行きますので。……では、皆様……御武運を。'

……成る程。つまり、このまま此処に留まってたり、誰かに合流しないと、直ぐ死ぬ…と。

“……えええええええええええーーーーーーーーーっっっっっ！！！！！！！！！”

腑海林に絶叫が響き渡った。

side：三人称

「……こちら、メシア。応答しろ、スネーク。」

「……。」

「…ん？どうした、スネーク。応答しろ、スネーク。」

「……。」

「…スネーク？……ハッ！？まさか……渡したカップラーメンが腐ってやがったのか！？

スネーク！！応答しろ、スネーク！！！スネーークーーーーッッッ！！！！！」

「……ハァ……カイト様？」

「ん?どうした、スネーク。ちゃんと、応答しなきゃダメじゃないか……段ボールも無いのに。」

「誰が蛇(スネーク)ですか。私は、青龍(ブルドラゴン)です。……って、そうでは有りません。……カイト様?本当に宜しいのですか?このまま、彼等を一人のままにさせておいて。」

「ああ、構わん構わん。少しは良い修行になるだろ。…それよりも、あいつんとこへ行くぞ。」

「……ハァ…。畏まりました。では、参りましょう…此の森の中心…アインナッシュの所へ。」

「よっし。アインナッシュから、放蕩爺の依頼の実も貰ったし。後は依頼の半分。……士郎達がどう成長するのかを見守るだけだな。」

「……カイト様。あれは、貰ったのでは無く、脅して奪い取ったと言うのでは？」

「こまけぇこたぁいいんだよ！！…それに、一応、眠らなくても良い様に計らってやっただろ？

等価交換って奴だ。何の問題（ノー・プロブレム）も無い。」

「……それも、彼に眠られては士郎達の修行にならないから…という事でしょう？

こちらには、一切、何の損失も無いのですが……。」

「一切の損害無く、利を手に出来たんなら、万々歳じゃねぇか。無問題（モウマンタイ）だな。」

「……ハァ。取り敢えず、現状です。

士郎は、アルトリアと合流後、凛達を探しています。

凛はエミヤと合流後、こちらも士郎達を探しています。

志貴はシエルと合流後、士郎か凛と合流する為、動いています。

このままだと恐らく、今日中には全員合流出来るでしょう。」

「……へぇ…。もう2~3日は掛かるものと思ってたんだが……中々如何して♪」

「そうですね…。これから十日程……それなりに楽しめそうです。」

「ああ。……まぁ、そう簡単に強くなって貰っちゃぁ困るが……少しは、実戦が味わえるからな。

それなりには成って、帰って来る事を期待しようや。」

「はい。……では、私達は如何致しますか?」

「……そうだなぁ……うん。アインナッシュに頼んで、中心の樹上に寝床を作ろう!!」

「……。」

「さてさて…♪そうと決まったら、又、アイツに頼みに行かないと

なぁ～…♪♪♪」

「……ハァ。」

流石に、アインナッシュに、同情せずには居られない龍斗であった。

side：日記調

【一日目】先ず、士郎とアルトリアが合流。次いで、凛とエミヤが、最後に志貴とシエルが合流。

そして、夕刻過ぎに士郎組と凛組が合流。闇夜が差し掛かった頃、士郎達と志貴組合流。

その日は、協力して即席テントを作り、各自合流途中で持ち寄った餌を、六人分に手分けする。

アルトリアとエミヤが霊体化するからいらないと言ったが、士郎が頑なに反対した為である。

その日の不寝番は、エミヤが樹上でアルトリアが、テント周りの地上を警戒。

しかし、夜明け過ぎに、樹群が蠢き出し、エミヤが皆と逸(はぐ)れる。

【二日目】逸れたエミヤを皆で探し出し、何とか夜半前には合流。

その晩は、エミヤのみで地上の不寝番。

【三日目】テント周りで吸血植物達を相手に戦闘訓練。

少しずつ、植物達の特徴も判って来、対応もし易くなって来た。

翌日からは、奥に進んでみる事になった。協議(ジャンケン)の結果、今日の不寝番は志貴とシエルになった。

ちゃっかり、皆の隙を伺って致してた。後程、ラバーズに報告。シエルオシオキ&志貴…南無。

【四日目】昨日の結論通り、奥に進む事に。しかし、腑海林を甘く見過ぎていた事を自覚。

全く見た事の無い植物の群れや、人を幾人も丸呑み出来る程の巨大な植物?に遭遇。

流石に、宝具と第七聖典(セブン)を使用し、何とか倒すものの、次々現れ尻尾を巻いて逃げる。

結局、昨日のテントより、１００ｍも行かない所に、宿泊地を作る。

今日の不寝番は、アルトリアと凛。途中で、凛が疲れと眠気に負け、アルトリアの膝枕で就寝。

【五日目】早々と起きた凛が、アルトリアに謝り、一日士郎使用権を本人の与り知らぬ所で譲渡。

慢心・油断せず行こう!を、合言葉に、更にゆっくり奥へ進む。…テニヌ?

今日は前日に比べて大分進めた。前回の巨樹?等も、時間は多少掛かるが安全に倒せる様に。

今日の不寝番は、士郎と凛。当然の如く、皆の隙を伺って、若気の至りに。

【六日目】大分、食糧擬きも心許無くなって来たので、龍斗に他に無いか確認。

今日一日、周辺を漁って食糧・水分擬きを確保。特に進展無し。

今日の不寝番は、エミヤとシエル。特に何も無し。寧ろ、セブンがエミヤに興味津々だった。

【七日目】流石にサバイバル生活にも慣れて来たのか、皆ぐっすり眠れる様に成って来た様だ。

只、女性陣はとても風呂に入りたがっているが、後…幾日と数えて、我慢している様だ。

今日は、食糧・水分擬きも確保した事により、更に先に進む事に。

今迄で、今日は一番進めた。

今日の不寝番は、士郎とエミヤ。……空気を察したのか、植物達も何時もより、遠離っていた。

寧ろ、凛達や、事前に説明をされていた志貴達の方が気になって、余り寝付けなかった様だ。

【八日目】矢張り、先に進む一団。更に的も強くなり、段々と進み辛くなって来ている様だ。

その日は、早目に即席テントを張り、此の先どうするか協議に。

各自一人になるのは、流石に無謀だと全会一致した。

グループ分けも又、逸れる可能性が高い為、却下。

結局、このまま全員で固まって、更に先に行く事に。

今日の不寝番は、アルトリアと志貴。特に何も無し……と思いきや、意外と話が弾んでた。

【九日目】昨日の協議の結果通り、又、更に先に進む事に。

流石に、ガタが来たのか……志貴が直視の魔眼をフルに使い倒れたので、

昼過ぎだが、即席テントを張り、志貴を介抱。何とか、夜には呼吸も落ち着き、皆安堵する。

今日は、昼間は全員で警戒し、不寝番は士郎とアルトリア。

ホッとして箍が外れたのか、やっぱりこっそり致してた。後程、凛共々、黒桜にオシオキ。

しかし、アルトリアも士郎一日使用権だけは、死守。そして自分だけ酷いと泣き付いた凛に負け、

結局、一日ずつ朝昼夜デートを敢行。……士郎、南無。

【十日目】最終日。志貴が回復した事を確認すると、行けるだけ行ってみようという事に。

流石に、アルトリアも宝具を更に一回、エミヤが固有結界を一回、第七聖典（セブン）を残り二回全て、使う羽目に。しかし、相当奥まで進めた。

そして、何時カイト達が来るか判らないので、即席テントを張る事に。

最後の不寝番は、士郎と志貴。二人で色々と語り明かして夜も明けた。

主にカイトへの愚痴だったらしいが。……まぁ、しょうがない。

ｓｉｄｅ：三人称

「……さってと。もうそろそろ、いいかな。……にしても、結局一人行動もしなかったし、

グループ行動も最初の日だけだったな。……又、此処に寄越そう。

後で、アインナッシュにも、話を通しておかないとな♪……まぁ、今はいいや。

取り敢えず、迎えに行くか…龍斗。」

「はい、カイト様。…では、参りましょう。」

「……ふわぁ～……おはようぅ～……しろう…。」

「クスッ……お早う、遠坂。…相変わらず、朝は弱いなぁ…。」

「……しょうがないでしょうぉ～……。」

「はいはい。…取り敢えず、これで顔でも洗えよ。」

「…ああ、ありがとう……。」

「……シロウ、お早う。」

「ああ、お早う…セイバー。…どうしたんだ?今日はヤケにご機嫌だな?」

「…はい。何せ、今日でこの生活も終わり、又、シロウの御飯が食べられるのですから♪」

「……ああ、成る程;…如何にもセイバーらしいや…;;;;」

「志貴君。お早う御座います♪特に何も有りませんでしたか?」

「お早う、シエル先輩。うん、特に何も無かったよ。」

「そうですか…。それにしても、士郎君と志貴君って仲良いですよね?」

「そうかな…?……うん……そうだね。…俺もそう思うよ。」

「はい。…素直な子はお姉さん、大好きですよ♪♪」

「うっっ……／／／／／／…せ、先輩!!!」

「クスクス……♪♪♪」

「……フッ……！警戒しろ！！何か来るぞ！！！」

「よお。元気か？お前達。」

“カイト（救世主（メシア））！！！！！”

「皆様、御疲れ様です。これで、今回の宝石翁よりの依頼は完了です。

依頼の詳細内容は……朝食後、帰ってからに致しましょう。」

そして、カイトと龍斗の分も増やした朝食後。

「……さて。…じゃあ、みんな帰るか。」

そう言って、カイトがみんなを腑海林から転移させようとした時だった。

「……ん？……何用だ？……！！！何！？それは本当か！？！？」

どうやら、誰かと念話しているらしく、それが終わるとあのカイトが驚愕し、焦っていた。

そして……腑海林がまるでナニカに怯える様に騒(ざわ)めき出し、大地が震え……

皆に、最悪の凶報が届けられた。

「龍斗！！！皆に結界を張れ！！死徒第五位…ＯＲＴが目覚めてこちらに向かっている！！！

後、十数秒でこの腑海林に着陸するぞ！！！！！！！！！！！」

“……な……！？！？！？！？”

全員言葉を無くし……理解出来ぬ間に……彼の者は……顕現した……。

「Ｇｒｒｒａｒｒａｒｒａａａａａａ！！！！！！！！！！」

死徒第五位・ＯＲＴ。巨大な蜘蛛の様なバケモノ。タイプ・マアキ

ユリー。……恐怖の権化。

「くっ…！厄介な…！！！！……分かっている、アインナッシュ！！！今、どうにかする！！！

龍斗！！！士郎達を、空に上げてお前が守れ！！俺は、あの糞害虫を退治する！！！」

「はっ。畏まりました、カイト様。」

そう言い、士郎達六人を何か透明な球体に包み込み、空へと自身と共に押し上げて行った。

「…良し。……一番メンドイのは、あの水晶渓谷だな…。

全く……アイツじゃ無い分、未だ殺し易くはあるがな。」

「Grrr………Gyaaaaaaaaa!!!!!!!!」

「…ハッ!!!どうした、ORT。お前が目覚めるには、未だ早いぞ?寝惚けて出て来たのか?」

「GYAAAAAAAAA!!!!!!!!GRRRrararaaaaaaa!!!!!!!!」

「おっと!…危ねぇなぁ……。人が話してる時は…!よっと。ちゃんと聞けよな!…っと。

変身中は、変身ヒーローに攻撃しないって御約束知らねぇのか！！！…っわっとととと。」

ＯＲＴがその巨大な足でカイトを攻撃するも、悉く躱される。それに対しカイトが説教？中。

まぁ、当然の如く意味は無い。しかも、更にアインナッシュから、どうにかしてくれ……

と責付(せっつ)かれる有り様。ちょっと、プチッと切れたカイトは…。

「……ああ、もうおおおお！！！！！！！！！何奴(どいつ)も此奴(こいつ)も五月蠅ぇよ！！！！！

分かったよ！！！どうにかすればいいんだろ！！！

水晶渓谷　完全消去（フルデリート）！！　ＯＲＴ　世界間移動（ムーブ）！！！」

その瞬間、カイト共々、ＯＲＴが姿を消した。

ｓｉｄｅ：龍斗

カイト様が、他世界に移動なされた様ですね。ちゃんと水晶渓谷も完全に消え去っていますし。

……と言う事は、ＯＲＴは確実に葬り去られるでしょうね。

……しかし、良いのでしょうか？他のタイプ・惑星達が黙っていなさそうなのですが……。

まぁ、流石に世界を越えて迄は来られないでしょうし……そちらも問題は無いのでしょうけど。

「……！龍斗？！カイトが何処かに消えちまったぞ！！？」

……ああ、そう言えば、士郎達はアレを見るのは初めてでしたね。

「問題有りません。あれは世界間を移動しただけです。」

「世界間の移動？……何処の世界に行ったって言うの？」

「何処にも属さない世界です。何処の平行世界とも関わり合いが無く、

又、何処の異世界とも繋がりが無い……完全に独立した無人……いえ、無生物世界。

カイト様や私達が、全力に近しい威力を発揮する際にのみ使用される世界。

カイト様が自ら作り上げられた、カイト様にしか導く事の出来ぬ世界。

言うなれば、『独立した新世界（オンリー・ワン）』とでも申しましょうか。」

どうやら、皆さん驚いている様ですね。…まぁ、普通の方々には想像も付かないでしょうしね。

カイト様。……御早い御帰りを御待ち致して居ります。

ｓｉｄｅ：『独立（オンリー・ワン）した新世界』

「……ほらよ、ＯＲＴ。此処でなら、存分に戦えるぜ？」

「Ｇｙａｒｙａｒｙａｒｙａａａａａａａａａａ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「……ったく、ホントに五月蠅ぇ奴だな……。

どうせ、俺の存在（イレギュラー）辺りにでも釣られて目覚めたんだろうがな……

残念だったな。

抑止力程度（カウンタガーディアン）じゃ俺は除去（デリート）出来ねぇよ。

……さて。今、此処には小五月蠅い五行達も居ないしな。……ちょっと、やらかすか。

ファイナル・イグニション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　皇帝（カイザー）

顕れろ　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』。」

そして、皇帝（カイザー）を喚び出し、自身も『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』を構えた。

「……解っているな？皇帝（カイザー）よ。」

「うむ。委細承知して居る。……五行方にも内密なのだろう？」

「…ああ。あいつらにも、余り心配ばかり掛けたくないのでな。」

……では、行くぞ。先方が先程からお待ち兼ねだ。」

「GRRRRRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ＯＲＴが、その巨体からは、想像も付かないスピードで、カイトに接近して来たが、

カイトは微動だにしない。……その内に、もう目の前にまで迫って来て、足を振り下ろした。

その凶器（あし）が当たった瞬間に、カイトの周りのナニカにその毒（カラダ）が弾き飛ばされた。

何事か判らず、訝しんでいるＯＲＴに向かって、カイトが最後の言葉を告げた。

「……残念だったな。今のが、最後の攻撃のチャンスだったんだがな。……では、さらばだ。

『皇帝（カイザー）との破滅（カオティック）せし終焉（エンド）』」

その宣言後、皇帝（カイザー）が世界が怯え震え出す程の息吹を叩き付け、

カイトが『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』を、ＯＲＴに突き出して、突き抜けた。

流石に恐怖に打ち震えたＯＲＴが抵抗しようとしたが、その隙も与えずに繰り出された攻撃に、

一切為す術無く……圧迫され…圧縮され…圧壊され……その存在を跡形（ほしごと）も無く消滅させられた。

その後、その『世界』に皇帝（カイザー）の勝利の雄叫びが轟いた。

side：三人称

その後、戻って来たカイトは、龍斗達と合流し、遠野家に戻って行き、

腑海林（アインナッシュ）は何処かへ去って行った。

そして、シエルは教会側に…凛は協会側に…それぞれ、

死徒第五位・ＯＲＴの消滅を報告しに、一時期日本を離れた。

目的のアインナッシュの実は、宝石翁に手渡し、成長具合を結果報告し、依頼は完遂された。

――――そして――――。

腑海林～ｖｓ　ＯＲＴ～（Ｅｉｎｎａｓｈｅ～ｖｓ　ＯＲＴ～）（後書き）

如何でしたでしょうか？

本来は、この話は二回に分けて書くつもりでしたが、切り所が見付からず、

結局、一話に纏めてしまいました。申し訳ありません。

所で、実は今回の話は、私は全く存じませんので、ｗｉｋｉ情報のみで書いてみました。

もし、何か矛盾点等が御座いましたらば、是非共御教え下さい。

さて。前書きにも書きました通り、今回で『月姫』編は終了です。

……はい。もう一度言いますが【『月姫』編が終了】です。

後一話、実はオマケ話が有ります。それを書き終わった後、

到頭、次なる世界『ゼロの使い魔』に渡ります。次なる世界でも、又、宜しく御願い致します。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

卒業試験～フルバトル～（Ｍｅｓｓｉａｈ　ＶＳ　Ｆａｔｅ　&，　Ｔｓ

現時刻（２０：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：９５４，４０５アクセス　ユニーク：８５，６８３人
皆様、毎度有難う御座います。

そして、総合評価が１，０００ｐｔを越えました！！！！！

皆様、此の様な拙作を気に入って下さり、誠に心底から感謝致します！！！

さて、今回は……『ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ』編とでも、申しましょうか？

少々、短いですが一応、タイトル通りのフルバトルではある筈です；

では、今話も拙筆を御覧下さい。

卒業試験～フルバトル～（Ｍｅｓｓｉａｈ　ＶＳ　Ｆａｔｅ　&ａｍｐ；　Ｔｓ

ｓｉｄｅ：終わりにして始まりの公園

あれから色んな事が有った。士郎達も無事三年へと進級出来、何処から漏れたのか、

士郎が、凛と桜と二股掛けているという噂が噴き出し、混乱の最中、実は三股だという、

更なる驚愕の事実が発覚し、士郎がズタボロにされたり。

結局、居着きはしなかったものの、しょっちゅう遊びに来る事になった、ルージュと蒼崎姉妹が

志貴と、三人共関係を持ってしまい、秋葉達やアルクによって地球が崩壊するか……

という程の大騒動を巻き起こし、その火消しに躍起になったり。

ギルが子供になり、普段とのギャップに皆が悶絶していたり。

バゼットとクーを引き合わせる為だけで又、一騒動・二騒動あったり。

鋼牙を我が物にせんと企む、悪共（ギルモディア）を退治したり……ｅｔｃ．

本当に書き切れないぐらい沢山有った。――そして――時は経ち――。

今日は、士郎達の卒業式。そして今、居る場所は、衛宮士郎、が始まりし、あの公園。

逢魔が時も過ぎ去りし夜中。人気も全く無いその場所に、今、沢山の人が集まって居る。

「……で？今日は一体、何の用？全員を集めるなんて。」

そう。今、此の場所には此の世界にカイトが入ってから、関わった人の殆どが集っている。

士郎・凛・桜・イリヤ・全、元サーヴァント・カレン・バゼット

志貴・秋葉・アルク・シエル・さつき・シオン・ルージュ・燈子・青子・宝石翁

計２４名。他の呼ばれていない人達は、それぞれ家で御留守番である。

「ああ。……済まないな。突然、呼び付けて。……だが、何故カレン迄居る？

俺は、お前迄は呼んでいないんだが？」

「お気になさらず。只の散歩です。」

そう言い、ギルに付けられた首輪を引っ張るカレン。……憐れな。

「……そうか。だが、今は外して置いてやってくれ。」

「……仕方ありませんね。……ほら、ポチ。」

「……犬の散歩か。」

“南無。”　全員の声が重なった。

「……皆、ちゃんと得物は持って来てる様だな。……まぁ、恐らくお前達の想像通りだ。

これから、お前達全員で、俺と戦って貰う。……俺からの卒業試験だ。」

“卒業試験？”

「ああ、そうだ。……お前達は忘れてるかもしれんが、俺は元々旅人であり、救世主だ。

本来ならば、アルニスがアンリ・マユを救った時点で、次の世界に行く筈だったのだが、

俺の我が儘でな。……士郎達が卒業する迄、此の世界に留まっていたのさ。」

「……我が儘…って……；；；それ、ペナルティとか無いのか？」

「勿論有る。今、こうして話している間にも、俺の命は削れて行っている。

一千兆程有った命が、今は半分程には減っているしな。

これが、救える筈の世界を救わずに、救い終わった一つの世界に、何時迄も留まる代償だ。

まぁ、直ぐに溜まる分、随分と安い代償だがな。

……だが、それもそろそろお終いだ。最近は大分、減り方も激しく為って来たのでな。

……残念ながら、士郎達がロンドンに行くのを、見送る事は出来ん。

その前に俺は、世界を渡らなくてはならない。恐らく明日辺りが限度だろう。

だから、これが最初で最後の俺からの試験。

どれだけお前達が成長してくれたかを見る――卒業試験だ。

これから、お前達には一切の手加減無しで、

今、お前達の持てる全力で、この俺と１ｖｓ多数で戦って貰う。

……準備は良いか？」

カイトの覚悟に驚きながらも、その期待に応える為、本気で戦う事を誓う皆。

それを認識したのか、嬉しそうに微笑み……皆を転移させた。……

あの場所へ。

「……良し。では、場所を移そう。此処では、此の星が可哀相だ。

……転移（ムーブ）。」

side：『独立（オンリー・ワン）した新世界』

「……全員、配置に着いたか？」

此の世界に着き、直ぐ様、己に最も有利なポジションを構える面々。

“ああ（ええ・然り・勿論）！！！”

「そうか。……戦闘不能になった者は、速やかに五行達が守ってくれる。案ずるな。

後の事なぞ、一切考えるな。今、此の時に己が全てを懸け、我に挑め。

では、改めて名乗ろうか。

にして『真なる救世主（メシア）』

ト　　いざ参る。」

『世界（ワールド）の破滅者（ディザスター）』

八神カイ

そして――ＬＡＳＴ　ＢＡＴＴＬＥ――が始まった。

side：三人称

その戦いは熾烈を極めた。……否、正に豪華絢爛とでも言うべきか。

真っ先に、英霊達に依る宝具の一斉真名開放。そして、それをカイトが防いでる間に、

エミヤに依る、固有結界発動。全方位からの、士郎・エミヤ・ギルの宝具群の雨霰。

その弾幕を避け切った所に待ち伏せて居た、蒼崎，ブリュンスタッド姉妹・さつき・シオンと

アルト・クー・レス・小次郎達の、一瞬の隙も逃さない剣・斬・打撃の大嵐。

だが、それすらも凌ぎ切ったカイトに、今迄ずっと詠唱していたメディアに依る特大魔術行使。

その超巨大な焔球が、カイトに迫ったと思ったら、自爆し、人間大の炎球になり、

拡散ホーミングで、カイトに一切の休みも与えず責め続ける。

だが、それすらも尚、カイトには無意味だった。その炎球の群れを気合い一つで吹き飛ばした。

その一瞬の硬直を見計らって、シエルの第七聖典（セブン）と、凛の虎の子の特大宝石を、

桜の虚の魔術に依って拘束されたカイトに、直撃させた。

だが、その姿を確認する事もせず、続けてバゼットの斬り抉る戦神（フラガラック）の剣と、

宝石翁と凛の宝石剣からの幾重にも重なった斬撃が加えられた。

流石に、これなら少しはダメージが与えられるだろうと思い、煙が霽れるのを待ったが、

現れたのは、完全無傷で直立不動しているカイトの姿であった。

そして、その瞬間、ずっと隙を伺っていた遠野兄妹に依る、略奪と死を振る舞ったが、

あっさりカイトに捕まり、皆の許へ投げ飛ばされた。

一幕が終わったのか、皆その場を動かずに、カイトの動向を伺っていた。

すると、カイトが徐に話し出した。

「……威力・タイミング・連携……どれをとっても申し分無い。素晴らしいと言えるだろう。

では、何故俺には、一切攻撃が効かないか……解るか？」

全員、カイトから目を離さずに、僅かに首を横に振る。

その警戒に、満足した様な笑みを見せ、その答えを教えた。

「答えは簡単だ。俺が本気のギルと戦った時ですら、俺が着ていたのは、第二形態（セカンド）。

そして、あの時は只、第二形態（ツヴァイス）が半壊したのみ。俺自身には傷一つ付いてはいなかった。

つまり。俺は、一度たりとも、俺自身の本気を出した事も、見せ

た事も無いと言うだけだ。」

言われて気付いた。……それが顔に露わになり、驚愕し、何人かの顔には絶望が見えた。

そして、それを証明するかの様に、カイトがその全貌を顕(あら)わにした。

「――そう――つまり――今から、俺が魅せるものが――本当の俺の本気と言うワケだ。

―全魔力解放―。」

その瞬間、世界は恐怖に塗り潰された。

それは、余りと言えば余りであった。……人の……いや、生物の身にあってはならない魔力。

物質化し、目にハッキリ見える程の魔力に覆われた此の世界。

正気を保つには、気を狂わせるしか無い。そんな矛盾を常識にしてしまう程の魔力（チカラ）。

それに耐え切れず、例え力を持っていても、只人の身には辛過ぎるのだろう。

何人かが、抵抗らしい抵抗も出来ず、あっさりと気絶していった。

今、此の場に立ち、戦闘が出来るのは……

英霊達８人，蒼崎姉妹，アルク・ルージュ姉妹，宝石翁だけだった。

他の何人かは辛うじて意識は保っているものの、戦闘は明らかに不可能だった。

「……ほう。……成る程……戦闘出来るのは、これだけ居るか。

……戦えん奴等は、此処で退場だ。鋼牙・水薙、連れて行け。」

「「はっ！！」」

「さて。……では、そろそろ俺も攻撃させて貰うとするか。

流石に攻撃だけは手加減させて貰うぞ。本気でやると、世界群が消滅してしまうのでな。」

「世界群？……聞き慣れん言葉じゃな？」

「それは、そうだろうな。分かり易く言えば……俺の力は御存知の通り強過ぎるのでな。

此の世界で生じた衝撃の余波が、他の世界に伝播し、此の世界共々崩壊してしまうんだ。

……まぁ、俺の造語だ。知らぬのも無理は無い。」

「……何という……出鱈目な……いや…出鱈目ですらない……本物のバケモノじゃな……。」

「……フッ。……では、行くぞ。……先ず、一人目だ。」

“何っっ！？！？”

そうカイトが言うと、ヘラクレスの巨体が突然傾ぎ、倒れ伏した。

「……い、今……何をした……？」

「腹パン一発。喰らわした瞬間、此の場に超光速で戻って来ただけだ。」

「……あ、あの…バーサーカーを……只のパンチ一発……だと……！？」

「…さて。では、次だ。……ほら。二人目・三人目ダウン。」

そして、認識する間も無く、メディアとアルトルージュが気絶した。

「…！！！くっっ！これは不味過ぎる！！皆、散々（バラバラ）に散れ！！！」

その号令一下の下、全く同時に動く皆々。……しかし……。

「……何処に逃げても同じだよ？」

「！？！？何いいいっっ？！？！？！」

最も遠い場所に避難した筈の、宝石翁の真後ろにピタリと付いて居た。

「ほい。……これで、五人目。」

“……？…何時の間に！？！？”

順番に言えば四人目では無いか？……その皆の疑問は、瞬間的に氷解した。

宝石翁と同時に、燈子も倒れ伏していたのだ。

「……後、八人だ。……そして、これで五人。」

その言葉が終わると、小次郎，メデューサ，クー・フーリンが同時

に倒れ込んだ。

全く、動きも気配も見えないその恐ろしさに、

今迄、感じた事の無い……本物の恐怖を今、味わっている。

武者震いとは違う、本能に訴え掛ける根源的な恐怖に、

何とか抗おうと自らを奮い立たせるが……間に合わなかった。

「……では、これで最後だ。……皆、眠れ。」

その瞬間、全員何が起こったのか、一切理解出来ずに気を失った。

「……此の俺相手に良くやった。充分、褒め称えるに足る成果だ。

……合格だ。これで、俺も安心して旅立てる。」

そして、卒業試験の名を借りた、一方的な戦闘は終わり……。

――翌日――終に、カイトが旅立つ日が訪れた。

卒業試験～フルバトル～（Ｍｅｓｓｉａｈ　ＶＳ　Ｆａｔｅ　＆ａｍｐ；　Ｔｓ

如何でしたでしょうか？

一応、オマケと言う事ではありますので、少々短くてもいいか♪と思い、擱筆致しました。

次回、到頭『型月』世界、最終話です。

そちらも短くなってしまうかと思いますが、どうか最後まで御付き合い頂ければ、望外の喜びです。

所で。私事で大変申し訳ないのですが、私が此処で書いている事を知っている友達に頼（せが）まれまして、

非常に乱雑ではありますが、私の『型月』世界のプロットを、活動報告に載せる事に致しました。

何分、然程考え無しに書き綴った為、少々際疾（きわど）い言葉等も有るかと思います。

ですので、大変な御目汚しになってしまいますが、それでも宜しければ、御覧になって下さい。

一応、『型月』世界の最終話を投稿した後に、載せる予定です。

何かの御参考、若しくは一助になれれば幸いです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

運命・終幕（Ｆａｔｅ／ｅｐｉｌｏｇｕｅ）（前書き）

では、『型月』世界、最終話です。

どうぞ、拙作を御覧下さい。

運命・終幕（Ｆａｔｅ／ｅｐｉｌｏｇｕｅ）

ｓｉｄｅ：衛宮家

昨日、カイトと戦い、完膚無き迄にコテンパンに伸された皆も、流石に今日ばかりは、気合いで起きて来た。

そして、今、此の場に、カイトを見送ろうと全員が集った。

「……みんな、そんなに無理しなくてもいいのに…。」

「バカ言うな。俺達は、カイト達に何時も助けられて来たし、カイト達と一緒に居て、とても楽しかった。……それに何より、カイト達は俺達の家族だ。

家族との別れを見送らない訳が無いだろう？」

「……そうか。……有難う…士郎。」

「う…／／／／／／い、いや、別に当たり前の事を言ってるだけだし……。」

カイトの心からの笑みと、感謝の言葉に、思わず照れてしまう士郎であった。

「……にしても……ギル…おまえ……結局、最後まで犬だったな…？」

「五月蠅い！！我（オレ）とて、此の様な境遇なぞ望んでおらぬわ！！！」

「……お座り。」

「ヌグッ！！！」

“……；；；”　周りの同情の視線が、余りにもイタ過ぎた。

「……あ～……カレン？…これで最後なんだから、今だけは許してやってくれ。」

「……しょうが無いですね。……ほら、立ちなさい…ポチ。」

「…グッ……。」

「お疲れさん…ギル。……余り、他人（ヒト）に迷惑掛けるなよ？」

「フン！雑種の事など、我の知った事か！！！……だが、貴様がどうしてもと言うのならば、

聞いてやらん事も無いが…。」

「ああ、どうしてもだ。頼むぞ…ギル。」

「……良かろう。…他ならぬ、貴様の頼みだ。少しは受け容れてやろう。

……では、達者でな…救世主（メシア）……いや、我が友…カイトよ。」

「……はっ…。ようやっと、俺を名前で呼びやがったか。……じゃあな、友（ギル）よ。」

そんな風に、最後の別れを惜しんで歓談していると……

カイトの隣の空間が罅割れ、中から得体の知れない……いや知ってはいけない存在が顕れた。

【……もう良いか？】

「……ああ。…あ、そうだ。…凛、約束だ。良い事教えてやるよ。」

「約束？……何かあったっけ？……まぁ、いいわ。早く教えなさい。」

「ああ。……まぁ、凛に限らず…魔術師，魔法使いの皆。刮目して聞きな。

コイツ……この罅割れた空間に居る奴。……コイツこそが……

一にして全。全にして一。全ての理の始まりにして祖。太極にして陰陽。

……此処まで言えば、流石に解るだろう？」

「……あ、あ、あ、も、もしかして……。」

「……御名答。お前達魔術師が目指す根源。

そして、俺がこの旅を始める切欠になった原因。

――――その存在の名。

コイツこそが――――

【原初】だ。」

全員沈黙した。その中でも普通に会話を始める……【原初】と【救世主（メシア）】

【メシア。……キサマ……。】

「別にこれぐらい構わんだろう？…俺は、只、名前を教えてやっただけだ。

それに、これは一応約束なのでな。……救世主（メシア）が約束を破る訳にはいくまい？」

【……フン。……まぁ、いい。…もう行くぞ。】

その言葉で、我を失っていた皆が、意識を取り戻した。

「ああ。……さて、これで本当にお別れだ。……一人一言、言う時間も無いのでな。

纏めて言わせて貰おう。……士郎。そして……運命（Ｆａｔｅ）に抗いし子等よ。……良くやった。

俺に導ける道は、此処までだ。これからの運命（みち）はお前達が探し、決めて行け。」

「……ああ。」

「……志貴。そして、アルクェイド達。

俺はお前達の救世主（メシア）には成れなかったが……一つだけ言える事が有る。

お前達は独りでは無い。必ず誰かと繋がり、誰かに守られている。

地球の子等（おまえたち）は独りぼっちじゃない。……月はいつもそこにあるんだ。

それを……決して忘れないでくれ。」

「……分かった。」

「……カイト。」

「ん？……何だ、エミヤ。」

「……この様な事を言う資格は、私には無いのだろうが……だが、言わせてくれ。」

「……ああ。…何だ？」

「……カイト…有難う。……俺は、お前の御陰でこれからも頑張って行ける。……だから……

本当に、有難う。……救世主（メシア）にヒカリ在れ。」

「……ああ。……こちらこそ……有難う……シロウ。」

【……では、良いな？もう、行くぞ。】

「ああ。……では、又、舞い戻ろうか。……旅人として。……そして、救世主（メシア）として。」

――そして――救世主（カイト）は――此の世界から――旅立った。

皆――いつまでも――いつまでも――空を見上げていた。

side：空港

今日は、士郎・凛・アルトリアがロンドンに渡英する日である。

「……先輩。」

「…桜。先に行って待ってるからな。」

「……はい。」

「……ほら、其処！何時迄も見詰め合ってんじゃ無いわよ！！！」

「……いいじゃないですか……私は、これから、一年も先輩と会えないんですから。

……姉さんばっかりずるいです。」

「…うっ……しょ、しょうがないでしょ！？そ、それに、セイバーだって一緒に居るんだし…。」

「……。」

「……うっううっうっ……しろう～……ほんとうにいっちゃうのぉ～…？（ＴＡＴ）」

「……今更、何言ってんだよ、藤ねえ。…それに、前に言った通り、ちゃんと帰って来るから。」

「……ううう～～……。」

「……ハァ。…シロウ。タイガの事は私に任せなさい。……しっかりね。」

「ああ。……衛宮家の事は宜しく頼むな…イリヤ。」

「勿論よ。……私はシロウのお姉ちゃんなんだから。……行ってらっしゃい、シロウ。」

「……ああ。……行って来ます。…姉さん。」

「…士郎!!」

「…え?…志貴!…もしかして、わざわざ来てくれたのか?」

「当たり前だろ?友達なんだからさ。」

「そうか…。有難う。」

「ああ。……気を付けろよ?英国(あっち)は魔都って言うぐらいだ。

……まぁ、セイバーさんが居るなら、安心だけどさ。」

「ああ、肝に銘じるよ。」

「……それより、彼は何で行かないんだ?」

「……ああ、アーチャーの事か。……いいんだアイツは。遠坂が居ない間の家の管理もあるし。

何より……アイツには、アイツの運命(みち)が在る。…それは、アイツ

が決める事だ。

アイツが行かないって言うなら、それでいいのさ。」

「……そうか。……士郎、帰って来たら又、二人で飲み明かそう。」

「ああ。その時を楽しみにしてるよ。……っと、そろそろ時間だ。……またな、志貴。」

「ああ、またな、士郎。」

そして、士郎達は、飛行機に乗り、英国へ渡って行き、

志貴達は、それを地上から、見送った。

願わくば……彼等の未来に……

輝かしい運命（みち）が開かれる事を、切に願う。

――そして、また世界が一つ救われ――

――今――此処から――

――新たなＦａｔｅ（みち）が拓かれるのであった。――

運命・終幕（Ｆａｔｅ／ｅｐｉｌｏｇｕｅ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回で、『型月』世界は終わりです。

『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』２６話＆『月姫』４話＋α２話＝計３２話でした。

次なる世界は『ゼロの使い魔』です。

未だ、完結していない世界ですので、少々難しいですが、頑張らせて頂きます。

では、今話…そして、今世界も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

幕間（前書き）

今回は、タイトル通りです。

大変短いですが、後の重大な伏線です。

では、拙筆を御覧下さい。

幕間

ｓｉｄｅ：？？？

何者かが、窓から外の景色を見ていた。……とても綺麗な景色だ。

此の様を楽園と言うのだろう。

「……カイト。」

その何者かは、窓からの景色を眺めながら、ポツリと誰かの名前を呟いた。

その小さな声は、他に誰も居ない此の部屋に融けて消える様に、零された。

コンコン。…その何者かが居る部屋の扉が、ノックされた。

その何者かは、誰が来たのか判っている様で、振り返りもせず、返事をした。

「……構わない。」

「…失礼致します。」

入って来た者は、妙齢の女性だった。清楚な色気とでも言えば良いのだろうか？

そんな雰囲気を纏わせている彼女の耳は、尖っていた。……そう。彼女はエルフであった。

エルフは、その後ろを向いている何者かに頭を下げ、報告をし出した。

「……先程、最高評議会G9（ギルヂイン）が終了致しました。何時も通り、何の滞りも無く…。」

「……そうか。御苦労だった。」

「……はい。」

その何者かは、何時も通り、言葉少なにそのエルフに答えた。

……しかし……何時も、その何者かを見詰めていたそのエルフには、何時もと違う事が判った。

……今迄、一度たりとも聞いた事の無い、その僅かに憂いを帯びた声に思わず声を掛けた。

……僅かな嫉妬も伴って。

「……どうなされたのですか？」

「……何がだ？」

「……今日の御声には、何時もと違い、とても憂いが秘められて居ります。

……何か、粗相でも有りましたでしょうか？」

「…いや。……只……友が…な……。」

「……友？……友が居られたのですか？」

「…フッ。…俺はそんなに孤独に見えるか？」

「い、いえ！滅相も御座いません！！大変失礼致しました！！」

「…何、構わんさ。……一度も話した事など無いからな。……そうだ、友だ。

俺の唯一無二の……心友。」

「……。」

それこそ、今迄自分との情事の時でさえ聞いた事が無い程の、愉しそうな……

とても楽しそうな声に、嫉妬よりも、驚愕を先に覚えた。

「……フッ。男相手に嫉妬なんぞするな。……案ずるな。俺が愛しているのは、お前だけだよ。

……トレス。」

「…あ……／／／／／／あ、アキシオン様…／／／／／／／／／／」

そして……影が重なった。

カイト……頼む……此処にだけは……此の世界にだけは……来ないでくれ……頼む……。

此の……『グランギルズ』にだけは……。

俺は……お前とは……そして、何より……此の世界でだけは……戦いたく無いんだ……。

頼むよ……心友……。

幕間（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、現在『グランギルズ』に関して、既に一万字程は、書き溜めて有ります。

それと、今話せる範囲では、エルフである彼女の本名ぐらいですね。

彼女の名前は、トレスエイデス＝エルフェスト　と言います。

一応、活動報告の『ネタバレ～どうでしょうか？～』に、國名のみ載っていますので、

もし、気になられる方は、どうぞ御覧下さい。

読んで堪るか！！！と仰る方は、このまま本文のみ、御覧頂きたいと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

ゼロの物語（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：９８０，７７１アクセス　ユニーク：８７，０６３人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、今回から『ゼロの使い魔』の世界に入ります。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

ゼロの物語

ｓｉｄｅ：【原初】

今、又、メシアが世界を救って来た……か。最近は、大分ペースが速くなって来たな。

この前、休みを執らせたのは……ふむ。あの【ノルニル】とかいう小娘が来たあの世界以来。

……成る程……凡そ、５００兆年程前か。……ならば、そろそろ又、与えてやるとするか。

……む？……何だ？……くっ…！！……どうやら、思ったよりも……。

致し方無い。……暫くは、我も時間を稼がんとな……。

【……メシアよ。】

「あん？何だ？……珍しいな…お前が、渡界中に話し掛けて来るなんざ。」

【……何…我とて、気紛れぐらい起こすさ。】

「はっっっ！！何、阿呆な事、言ってやがる。テメェは、年がら年中気紛れだらけだろうが。」

【貴様にだけは、言われたく無い言葉だな。】

「……ぁあん？！テメェ…やっぱり喧嘩売ってやがんのかぁ！！！！

ゴルラアアアアァァァ！！！！！！！！！！！！」

【……相変わらず騒がしい奴よの……。】

「誰の所為だ！！！誰の！？！？！？」

【……まぁ、良い。それより、そろそろ次の世界へ着くぞ。】

「あっ！！テメェ！！！！又、誤魔化しやがったなぁぁっっっ！！！！！」

【ハッハッハッハ……一体、何の事やら。……さて、それでは、又……な…。】

「おいッ！！！こるらァァァァッッッ！！！！！

やっぱり、テメェはいつか殺すゥウウウウウウウウウウウッッッッッ！！！！！！！！！！」

【…………いつか……殺す……か。…………………そうだな。……何れ来たるその時を……。

愉しみにしているぞ…………救世主（メシア）よ。】

【原初】が、何処か……そして、何故か自嘲する様に、ポツリと漏らしたその言葉は……

誰にも、聞かれる事無く……又、誰にも、その意味を知られる事も無く……

昏き闇へと、吸い込まれていった。

【……フン。まぁ、いい。……我とて、そう易々とはいかんぞ…？

さて。少しは、我もどうにかせねば…な。……では、此の世界の事は頼んだぞ？

……我に抗いし存在よ……。】

そう言い、何処かへと去って行った。

【原初】の、その行動の意味を……いや、その行動そのものをカイトが知るのは……

未だ未だ、遙か先の事である。今は、救世主が墜ちた先の世界を、観る事としよう。

ｓｉｄｅ：三人称

此の世界は、『ハルケギニア』。そして、此処は『トリステイン魔法学院』。

そしてそして、今は、使い魔召喚の儀式…『サモン・サーヴァント』の真っ最中である。

そしてそｓ（ｒｙ、丁度今、とある少年（ヒラガサイト）が、桃色髪の美少女に召喚された所であった。

「……ミスタ・コルベール！！！」

すると、生徒に陰で、コッパゲと揶揄されている、ジャン・コルベールが、

人垣を押し退けて現れた。

「何だね？ミス・ヴァリエール。」

どうやら、ヴァリエールと呼ばれた少女は、儀式の遣り直しを頼んでいる様だ。

しかし、決まりだから…と言う事でダメらしい。

一人呆然とする才人を後目に、結局その儘、続けられる事になったらしい。すると……？

「……ねぇ。」

「はい？」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生無いんだから。」

そう言うと、訝しんでる才人を意にも介さず、何か宣言し出した。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

そう呪文を唱えると……何と、才人にキスをしたのだ。

思いっ切り狼狽え、慌てる才人。

すると、そのルイズ…何たらとか言う少女が、皆に揶揄われ始めた。

……それをボーッと眺めていると、突然身体が焼かれる様に、熱くなり出したのだ。

思わず立ち上がって、叫び出す才人。しかし、それも本の数秒程度で収まった。

ホッと一息付くと、コルベールと呼ばれた御禿げ様が、才人に近付き……

才人の左手に現れた……何か、記号の様な、古代文字の様な文様を繁繁と眺め、

何かを確認すると、才人の怒鳴り声にも一切反応せず、飛び立……とうとした。

……そう。皆して、それを思わず止めたのだ。

才人は何が起こったのか、まるで分からず訝しんでいると……

自分の後ろ１００m程度だろうか、その空間に罅が入り、縦に裂け穴が開き出したのだ。

しかも、それは、徐々にでかくなり、人間大の大きさの真円にまでなると、成長を止め、

何かを吐き出す様に、穴が震え出した。……その全てを吸い込むかの様な、昏暗（くらやみ）から、

何か……ケモノの様な……人の様な音…いや、声がする。其処の様を全員で伺っていると、

果たして、何か叫び声と、ゴロゴロ……という何かが、転がっている音が聞こえる。

何が飛び出して来るか分からず、警戒していると……声が大きくなり、何（ヒト）かが吐き出された。

「……ぬうううぅおおおおぉおおおおおおおおおおっっ

っっっ！！！！！！！！！！」

ゴロゴロゴロゴロ……ドダッ！　ガッ！！　ズシャァッ！！！　ドザーーッッ！！！

“……ぅわぁ……。”

思わず声を揃えてしまう程の、豪快な素っ転び方をして現れた人に、皆、本気で同情していた。

その何者（ヒト）かは、ピクリとも動かず、だが少し経った頃に、ゆらりと立ち上がり……

自身を吐き出した真円に向かって、喚き散らした。

「…………テンメェ……毎度毎度毎度毎度毎度毎度毎度毎度……！！！！！！！！！！

やっぱり！！！！！絶対！！！！！今直ぐっっ！！！！！！！！！！

殺すウウウウウウウウウウウウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！！！！！！」

そう、その男が叫んだ瞬間、生物では有り得ない程の魔力が、辺りを包んだ。

その余りの膨大な凶大さに、コルベールでさえ、膝が地に着き、意識を保つので精一杯だった。

況してや、生徒達ではどうしようもない。全員失神した。中には、恐怖の余り失禁する者も居た。

……だが、何か彼の様子が変だ。魔力を開放したは良いが、何の攻撃もせず……

どうやら、只その儘で、穴を見詰めているだけの様だ。

……そう様子を伺っていると、彼がその穴に向かって、何か話し出した。

「……おい？……どうした？……！？　おい！！！　どうしたんだ！！！！！

応えろ！！！！！　【原初】！！！！！！！！！！」

彼が、何度かその穴に話し掛けたが、何の反応も得られず、彼も訝しんでいると、

唐突にその穴が閉じ出し、彼の呼び声にも一切応じず、完全に閉じ切ってしまった。

「……一体、どうしちまったんだ？……まぁ、しょうがねぇ。

今、考えても、どうにかなるワケじゃねぇし……埒が明かねぇだ

ろうしな。」

そう独りごちた彼は、開放していた魔力を収め、辺りを見回し始めた。

そして、コルベール達に目を留めると、少し驚いた様に目を開き……

まるで、誰かに何かを確認する様に、暫し黙考すると、こちらに歩み寄って来た。

あれ程の膨大過ぎる魔力の持ち主。……しかも、全く得体の知れない存在と来ている。

警戒しない方が可笑しいだろう。……そして、今、彼がコルベールの目の前に来て、

その歩みを止め、コルベールと相対した。益々、警戒している所に、彼から声を掛けられた。

「よお、ジャン！悪ぃな、儀式の邪魔しちまって。でも、確かもう終わりだろ？

そろそろ、学院に戻ろうぜ？あの色惚け爺が、一応、待ってるだろうからな。」

「……君は……そもそも、誰だ？」

「…おぉぅ。済まん、俺とした事が忘れてた。……初めまして、八神カイトだ。

こちらの世界風に言えば、カイト・ヤガミ…かな？」

「……カイト・ヤガミ…？……聞いた事の無い名前だが……君は私達を知っているのか？」

「モッチロン♪……ダングルテールの英雄さん♪（ボソッ…）」

「！！！！！……キサマ……！！！」

「おっと…。ストップ、ストップ。……こんなとこで、殺り合う気かい？

安心しなって。誰にも言う気は無ぇよ。（……何せ、仇と付け狙う姉ちゃんが居るしな。）」

「……見ず知らずの君の言を、どう信じろと？」

「どう…って言われてもなぁ……。敢えて言うなら、今此処で、声を大にして言わなかったろ？

まぁ、でもどう言い繕うとも、信じて貰うしか無ぇんだけどな。」

「……今直ぐ、君を信じる事は出来ない。

……取り敢えずは、一緒にオールド・オスマンの所へ来て貰おうか。」

「ああ、それでいい。……もし、今此処で信じるとか言い出したら、そのコッパゲを、完全なツルッパゲにしていた所だ。それに、あの色惚け爺にも用は有るしな。」

「……。」

「そう怒るなって。ちょっとした、ブラックジョークだろ？

それより、ガキンチョ共、起こそうぜ？」

「……ブラック…？……まぁ、いい。…確かに君の言う通りだな。彼等を起こそう。」

「なら、俺に任せな。一人一人起こすのは、面倒だろ？」

「…む？……一体、何をする気だ？……もし、生徒達に危害でも加えようものならば…！！」

「だ～い丈夫だって。大体、ガキンチョ共は、わんさか怪我してナンボだ。

ほ～ら…いくぜぇ……フンヌラバァ！！」　ドズゥ……ン！

カイトが、何処かで聞いた様な気合いを入れると、

鈍い音が響き、地面が揺れ出し、気絶していた生徒達が、驚いて全員飛び起きた。

……そう。生徒達は……。

「……何で、お前は未だ寝れんねん。……ほれ、才人…起きろ～い。

……O☆KI☆RO♪」　ゴンッ！！

「痛ぇぇっっ！！！！！！！！！」

「良し、起きたか。…ヨッス、才人。」

「……あ、ああ…ども。……？って、アンタ誰？」

「俺は、八神カイト。まぁ、詳しい事は、学院に戻ってからにしようや。」

「…学院？……て、そうだ…！一体、何処なんだ？！此処は！！？」

「……あ～～……うん。…ま、取り敢えずだな？」

「……？…！……。」　トンッ…。

「……話は、起きてからだ。……それじゃ、戻ろうか？ジャン。…学院にさ。」

「……あ、ああ。……みんな！！戻りますよ！！！彼は、私が学院長の所へ、連れて行きます。

各々、部屋へ戻っていなさい！！！」

そして、コルベールの号令一下の下、学院へと飛んで帰って行く生徒達。

そして、残った才人・ルイズ・コルベール・カイトは……。

「……では、ミス・ヴァリエール。君は、自分の使い魔を連れて部屋に。」

「え?!この平民を、私が連れて行くんですかぁ!?」

「当然です。人間とはいえ、彼は貴方の使い魔なのですから。」

当然、文句タラタラなルイズと、説教モードに入り掛けたコルベールを、カイトが驚かせた。

「ああ、その必要は無いよ。俺が、お前達を纏めて転移するから。」

「「…転移?」」

「おう。……ほいっと。」

その掛け声の後には、何もその場所には残っていなかった。

ｓｉｄｅ：ルイズの部屋前

「到着っと。……ほれ、ルイズ。お前の部屋の前だぞ？……どした？お前等。」

「……い、今のは？」

「？だから、転移。分かり易く言えば、瞬間移動？かな。」

「……。」

「ほれほれ、それより、さっさと才人を中に運びな。…俺は、ジャンに付いてくからさ。」

「……わ、分かったわ。……では、ミスタ・コルベール。これで失礼致しますわ。」

「…あ、ああ。……では、行こうか？……え～と……？；；；」

「カイト。カイト・ヤガミだ。」

「そうか。…では、カイト。一緒に来てくれ。」

「了解。……と、言いたかったんだが……ちょっと、野暮用を先に済まして来ていいか？」

「…野暮用？……そう言って逃げる訳では、有るまいな？」

「無いよ。本当に、只の野暮用だ。……好きな女に声を掛けて来るだけだからな。

それぐらいは、見逃してくれても、罰は当たらんだろう？」

「…む。……ゴホン！……此処は、神聖なる学舎ですぞ？……余り不埒な真似は許しません。」

「だから、声を掛けるだけだって。『初めまして、元気か？』って二・三言、言うぐらいだよ。

大丈夫だって。……お前さんにも、その内、べっぴんの嫁さんが、現れるからさ♪」

「ほ、ホントですか？……い、いや、ゴホンッ！！……兎も角！！私も同行致しますぞ！！」

「ああ、それぐらいなら構わないよ。……でも、会話を盗聴とかするなよ？」

「するワケが無いでしょう！？」

「そうか。それを聞いて安心した。…信用してるぜ？ジャン。…んじゃ、行きますか。」

何か、誘導されるかの様な会話の流れに、少々首を捻り乍らも、

先に行ってしまったカイトの後を、慌てて追うコルベールであった。

ｓｉｄｅ：タバサ

……とても、驚いた。…あれだけの魔力を持っている人が居たなんて。

でも、あの人は一体何者なのだろう？

……彼の来ていた服は、ヴァリエールの三女が召喚した、あの少年に似ている気がした。

……恐らく、同じ系統の服なのだと思う。

「キュゥ～…キュルゥ～……。」

どうやら、『そよ風（イルククゥ）』と名乗った私の使い魔も、彼にとても怯えている様だ。

「……大丈夫。彼には、邪な気配は感じなかったから。」

「きゅい。」

どうやら、この子もそれには同意の様だ。

それにしても、本当に彼は一体……？……此の時、気付いた。

何故、私は彼の事ばかり、考えているのだろう？…彼の魔力が余りにも強大だったから？

彼が、何処か異質だから？……何故だろう？学院に着いても、ずっと考えていた。

「よお、タバサ。」

「！！！！！！！！！！」

とても、驚いた。本当に、今の今まで、ずっと考えていた人が、自分の目の前に現れたのだから。

思わず警戒して、杖を構えてしまったが、彼の後ろに確か……コルベール先生が居たので、

警戒はそのままに、彼の用件を聞こうと思った。

「お。少しは話し合ってくれるか？」

「……用件は？」

「まぁ、取り敢えず……そっちの隅っこ行っても良いか？

一応、ジャンは話は聞かないって言ってるけど、念の為な。」

「……分かった。」

「……それで？」

「うん？何が？」

「……。」

「ああ、はいはい。……全く、冗談が通じないねぇ…。」

「……。」

「分かった、分かった…そう睨むなって。取り敢えず、自己紹介だ。初めまして、八神カイトだ。……こちら風に言えば、カイト・ヤガミだ。」

「……タバサ。」

「おう、宜しくな。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……それで、用件は？」

「ん？只、タバサと話したかっただけだよ？」

「……何故？」

「何故も何も無いさ。好きな女に声を掛けちゃいけなかったか？」

「……え？」

「ん？どした？……そんなに意外だったか？」

「……何を考えているの？」

「特に何も？今、言った通り、好きな女（ひと）に声を掛けただけ。ん～…そうだな。

どうしても、気になるって言うなら……二つ程、言っても良い？」

「……（コク）。」

「タバサの使い魔。あのイルククゥって風韻龍の名前。俺も良いと思うぞ？シルフィードで。

とても、綺麗であいつにはお似合いの名前だと思う。風の妖精（シルフィード）。良いセンスだ。」

「！？！？！？！？！？何故！！！！！」

「おいおい……北花壇騎士（シュヴァリエノドルパルテル）ともあろう者が、それぐらいで狼狽えるなよ。

あ、それともう一つ。次の任務で行く村なんだがな？

人間のヨシアと翼人のアイーシャが、結ばれたがってる。

それを何とかすれば、任務完了だ。しっかり、頑張れよ？

無事に任務を終わらせて帰って来たら、お前の母ちゃんの治し方、教えてやるから。」

「……あ、貴方は……一体……？！それよりも、母様を治せるって！？！？」

「うん、治せるよ？今は未だ内緒だけど。んじゃな。

……あの色惚け糞爺（オールド・オスマン）が、そろそろ痺れを切らす頃だしな。

まぁ、ちょっくら行って来る。どうせ、俺はこのまま魔法学院に居座るつもりだし。

何か、他に聞きたい事が有るなら、任務後にでも俺を探しな。」

そう言って、彼はコルベール先生と一緒に、オールド・オスマンの所へ行ってしまった。

……彼には必ず、話を聞かなくては。……しかし、次の任務？何時来るのだろう？

……（バサバサ）え？……これの事？

今、来た任務を彼は、どうして知っているのだろう？

……だが……今は先ず、この任務を熟さなくては……。

……母様……待ってて…母様。必ず、どんな手を使ってでも、治してあげるから……。

少女の悲しくも、固い決意。

救世主の思惑。

そして、召喚されてしまった少年と、

少年を召喚した少女。

其其(それぞれ)の様々な思いが、複雑に交錯し絡み合う世界。

今、又、此処から、新(ゼロの)たな物語が始まる。

ゼロの物語（後書き）

如何でしたでしょうか？

御覧の通り、ヒロインはタバサです。頑張って落としたいと思います。……ぐっへっへ。

それはさておき。此の世界『ゼロの使い魔』は、未だ完結していない物語です。

恐らく、私の更新速度では、小説が完結する前に、此の世界を旅立ってしまうと思います。

ですので、特に最後らへんは、原作と確実に異なると思いますので、何卒、其処に関してだけは、御容赦願います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

救世主と人形（カイトとタバサ）（前書き）

現時刻（１７：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：９９９，２５７アクセス　ユニーク：８８，５９９人
皆様、毎度有難う御座います。

もう１，０００，０００アクセス目前です！！！！！

皆様、重ねて御礼申し上げます！！！！！

これも、皆様が陰に日向に、この様な駄文を読み続け、支えて下さった御陰です。

何か、私に出来る事があれば、何なりと仰って下さい。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

救世主と人形（カイトとタバサ）

ｓｉｄｅ：学院長室

其処には、如何にも私が長です！…とでも言いたそうな御髭の御爺ちゃんがでんと座って居た。

だが、その爺ちゃんは只、座って居る訳では無かった。

自分の使い魔の二十日鼠のモートソグニルに命じて、

つい最近雇った、ミス・ロングビルの下着を覗かせていたのだ。

「……ふむ。純白とな？……うむ。ミス・ロングビルには黒が似合うと思わんかね？」

偵察完了した使い魔（ねずみ）と、色々と話し合う色惚け糞爺を、無言で立ち上がり蹴り回すロングビル。

「ごめん。やめて。痛い。もうしない。ほんとに。」

しかし、構わず蹴り続けるロングビル。自業自得である。

その時、学院長室の扉がノックされ、瞬時に二人共席に戻り、業務を続けた。

……なんなんだ、アンタら一体。

それはさておき。カイトを伴い、コルベールが入って来た。

「失礼します、オールド・オスマン。彼を連れて来ました。」

「うむ、入りなさい。」

そして、入って来た開口一番から、カイトは皆を驚かせた。

「よう、色惚け糞爺。久しいな……未だ生きていたか。」

「む？……其方は誰じゃ？儂には、初対面で無礼を働く知り合いなぞ、居らん筈じゃが？」

「あん？何だ？俺を覚えて居ねぇのか？……って、ああ、そうか。

お前にも、俺の素顔見せた事無かったっけ。……ええ、と……これで良かったかな？

ファースト・イグニッション　フレイム　アムド」

そう彼が何か呪文を唱えると、彼が真紅の鎧に身を包んで現れた。

「……この姿ならば、流石に思い出せるのでは無いか？……オスマン坊や。」

「…！！ぬおっ！！！！！お、お前はっっ……！！！『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』！？！？！？」

「…何だ、ちゃんと覚えているじゃ無いか…オスマン坊や。」

「……坊やは止めてくれんかのう……流石に儂ゃ、もうそれなりの歳だし……。」

「何を阿呆な事を言っていやがる。一億年程度も生きてねぇ奴等なんぞ、坊やで充分だ。」

「いや、普通一億年も生きられんじゃろ？；；；；」

「俺、普通じゃねぇし。」

「……いや、其方を基準にされても…のう…？；；；；；；」

何やら、とても親し気に（？）話す、カイトと言う青年とオールド・オスマン。

少々尻込みしながらも、聞いてみるコルベール。

「……あの……オールド・オスマン？」

「ん？何じゃ……えーと……誰じゃったかの？」

「コルベールです！！お忘れですか！？」

「おお、そうじゃった、そうじゃった。んで、彼の事じゃがのう……ミス・ロングビル。

済まんが、ちと、出ていて貰えんかのう？」

「はい。」

そう言って、退席するロングビル……を引き留めたカイト。

「あ、ちょっと待ちな。……ほれ、これくれてやるよ。」

そう言って、小さな袋を手渡すカイト。訝しみながらも、それを受け取り中身を確かめ、

更に訝しむロングビル。当然の如く聞いてみた。

「……これは一体？」

「見ての通り、宝石…ダイヤモンドだ。それを売るなり、加工する

なりして、

弟妹達に何か、くれてやんな。」

「!?!?……アナタ……?!」

「まぁ、そういう事。……テファに宜しくな。」

「……!!!……分かりました。……では。」

一瞬、剣呑な雰囲気を見せたロングビルだが、大人しく引き下がった。

思わぬ所で冷や汗を掻いた、オスマンとコルベールだが、一先ず話の続きをする事にした。

「……ふう。で、話を続けるがの、彼は儂が……そうじゃのう……

大体１０代～２０代のピチピチした頃に、初めて会うてなぁ…。

いやはや、その頃から神出鬼没での?十年・百年単位等、珍しく無い程の頻度で現れては、

色々と引っ掻き回していったもんじゃ。……まぁ、素顔を見たのは、今が初めてじゃがの。」

「まぁな。　解放（パージ）　っと。そういう訳だジャン。少しは俺の存在について納得して貰えたかな？」

「……は、はぁ……；」

「それで？今度は何用じゃ？『世界（ワールド・）の破壊者（デストラクション）』。事と次第に依っては、儂等は御主と対立せねばならんのじゃが…？」

「それ、寧ろ俺の台詞じゃねぇ？……まぁ、いいや。俺の用事は至って簡単だ。

俺、今日からこの学院に住むから。あ、寝床は中庭借りるから、いいよ。

一応、オスマン坊やの知己って事で、客員扱いで頼まぁ。ま、何も教えないけど。」

「……儂、物凄く嫌なんじゃけど……どうせ聞いてくれんよね？」

「もち。んじゃ、そういう訳で。俺は、才人の所へ行って来るよ。」

そう言って、出ようとしたカイトが、何事か気付いた様に留まり、振り返ってこう言った。

「あ、そうそう、忘れてた。ルイズが喚び出したあの少年…サイト・ヒラガだがな。

彼は、虚無の使い魔…神の左手こと『ガンダールヴ』だ。少しは、調べて置きな。」

その置き土産は、忽然と消えた彼を、只、見送る事しか出来ぬ程、二人を驚かせた。

ｓｉｄｅ：ルイズの部屋

今、ルイズはとても悩んでいた。……自分は、何故魔法が碌に使えないんだろう？

どんな系統も駄目。毎回、爆発して失敗するし……『サモン・サーヴァント』は時間掛かるし、

オマケに、ようやっと召喚したのが、こんな見た事も無い平民。

……平民を使い魔にするなんて、聞いた事が無い。

あのツェルプストーに絶対笑われるに決まってる。

「……ハァ。……アンタ、いつまで伸びてんのよ……。」

さっさと起きて貰わなくては、八つ当たりも出来ないでは無いか。

そんな事を熟熟（つらつら）と考えていると、ドアがノックされた。……そうやら、あの青年の様だ。

何の用か分からないけど、取り敢えずこの平民を起こして貰う為に

も、彼を部屋に招き入れた。

「……自分で入れてくれって言っといて、何だけどさぁ……

そんなに簡単に、男を部屋に上げるのはどうかと思うぞ？」

「……何言ってるのよ、平民が貴族を襲うなんて、百年早いわよ。

そんな事より、アンタが気絶させたんだから、アンタが責任持って起こしなさいよ。」

「……へいへい。…ほれ、起きな、才人。」

「……う…ん……此処は？」

「よお、お早う、才人。此処はルイズの部屋だ。」

「…え？アンタは……あっ！！そうだ…俺は確か……変なコスプレ集団に捕まって……。」

「あ～…まぁ、何つうかな？此処はハルケギニアつってな、魔法使いの住む世界だ。

その証拠に月が二つ在る。」

「……ゑ”？……マジ？」

「大マジ。……残念ながら、これは現実だ。お前は、所謂テンプレの異世界召喚を
絶賛体験中と言う訳だ。……済まんが、現実逃避はさせんぞ？話が進まんのでな。」

「……うっうっうっ……それで？俺は何時どうやって帰ればいいんだ？」

「いや、無理。もう二度と帰れないし（いや、俺が『世界扉（ワールド・ドア）』使えば今直ぐ帰れるけど）、
契約を解除するには、死ぬしか無いし（蘇生呪文、そんなに魔力消費しないけど）、
つまり、永遠に此処で暮らすしか無い訳だが（ルイズやテファが『世界扉（ワールド・ドア）』覚えれば、
何時でも帰れるけどな）。そういう事だ……ｏｋ？」

「ＯＫなもんか！！……ちくしょう……でも、どうにもなんないんだろ？」

「ああ。どうにもなんない（いや、どうにでもなるけどな）。」

そんなカイトの思惑も、考えている事も、勿論ツッコミも分からない才人には、為す術無く。

「……分かったよ。……何とか、此処で頑張ってみる。」

「ああ、頑張ってくれ。ある程度は俺も協力するからさ。」

「……ある程度かよ。」

どうやら、話が一段落したらしいと思ったルイズは、彼に聞いてみた。

「……で？アンタ、一体何者？」

「うん？只の旅人だよ？」

「……旅人？……胡散臭いわね……。」

「クスクス……そうかい。……まぁ、いいや。そろそろ、俺も寝るよ。

あ、俺、暫くこの学院に居る事になったから、何かあったら、中庭に来てくれ。

大概其処に居るからさ。んじゃな～…お休み。」　ノシノシ

そう手を振って、忽然といなくなるカイト。

思わず呆然と見てた二人だが、二人して我に返ると言い争いを始め、

結局、床に敷き詰められた藁に、毛布を一枚掛けただけのベッドで、

精神的な疲れの為か、ぐっすり寝ていた才人であった。

ｓｉｄｅ：中庭

「……此処いらで良いかな？　取出（ライト）　っと。　ホイッ。」　ポイッ

！　ドオォォン…

カイトが、自分の真後ろに現れた白い穴から、何か小型の三角形を取り出し、

掛け声と共に、放り投げると、人が4~5人程は入れそうな、大きなテントが立った。

「よっしゃ。……んじゃ、今日は寝るとしますか。」

そう言って、テントの中に入ろうとした時だった。……誰かに引き留められたのは。

「……待って！」

「んお？……ああ、タバサか。」

そう。声を掛けて来たのは、任務を終え、今帰って来たタバサであった。

「お疲れさん。……で、どうだった？任務完了か？」

「……（コク）だから、約束。…教えて、母様の治し方を！！」

「そうだな。……他人に話を聞かれると不味いし、中に入るか？」

「…（コク）。」

side：テントの中

「ほれ、取り敢えず、水でも飲みな。」

「…いい。先ずは母様の事を。」

「いいから、飲め。気が急き過ぎて、思考が空回りしてるぞ？ちゃんと教えてやるから、先ずは水でも飲んで、一旦心を落ち着かせな。」

「……分かった。…（ごくごく）飲んだ。教えて。」

「……ダメダコリャ。……まぁ、いいや。取り敢えず座んな。立ったまま人の話を聞くのは、流石に失礼だ。……少なくとも、俺の国ではな。」

「……分かった。」

「よしよし。……んじゃ、教えてやる。お前の母ちゃんを苦しめているのは、エルフの飲み薬だ。

それで、心を狂わせられているんだ。……つまり……治す方法は、分かるな？

……そう。作らせたエルフに、解毒薬を作らせて飲ませる事だ。」

「……エルフ。……そう。」

「ああ。……確か……ビダーシャルとか言ったかな？あのエルフ。

でも、他にジョゼフの雇ってるエルフは知らないし、合ってると思うけど。」

「…！！ジョゼフ……父さまの仇…！！！」

「ああ、止めとけ、止めとけ。お前さんじゃ、命が幾つ有ったって勝てないよ。

あいつは、虚無だぞ？しかも、『加速』だ。
どんなに強力な攻撃だろうとも、当たらなければ意味が無いだろう？」

「…！！！虚無……そんな……まさか……。」

「事実だ。……あいつの使い魔は、神の頭脳『ミョズニトニルン』。名は、シェフィールド。
人間を使い魔に出来るのは、唯一虚無のみ。……何よりの証拠だ。」

「……虚無……。」

「まぁ、そういう訳だ。……今は、未だ止めときな。助ける前に、死んじまうぜ？」

「……分かった。……ありがとう。」

「何、気にすんな。俺は、何の解決策も示して無いしな。只の事実を並べただけだ。」

「…それでも。……今までは、何も判らなかった。それに比べれば、分かっただけでもいい。」

「……そうか。……所で、今更だが、一言言ってもいいか？」

「？……（コクン）。」

「…あのな？夜中に、男の部屋に一人で入って来るってーのは、そ
ういう意味だと取られるぞ？

お前……母親の事で頭一杯で、丸で考えてもいなかったろう？」

「……あ／／／」

「……全く。……だから、落ち着けっつったんだ。

しかも、相手はお前に惚れてると公言した奴だぞ？流石に、俺でも傷付くぞ？

オマケに無防備過ぎ。それじゃ、襲ってくれって言ってる様なもんだぞ？」

「……。」

「ん？杖が有るから、大丈夫ってか？じゃあ、昼間みたいに気絶させられたら？

もし、俺が無詠唱魔法を使われるより、速く動けるとしたら？

もし、俺がシルフィードすら、一撃で殺せるぐらいのチカラを持ってたとしたら？

今、自分がどれだけ絶体絶命か……解ってる？」

「……でも……何となく……あなたなら、大丈夫だと思ったから……。」

「……何となく……ねぇ……。……これでもそう言えるか？」

そう言って、タバサに全く気付かせずに、彼女を引き寄せ抱き締めたカイト。

驚いて慌てるタバサ。しかし、どれだけばたついても、一向に抜け出せない。

その内、更に強く抱き締められ、思わず観念しそうになったが……

……何かが違った。

所謂、本で読んだり、友達の話に聞いた…そういう荒々しい男の抱き方では無く、

何処か……自分を心配する様な…優しく包み込む様な抱擁だった。

訝しみながらも、思わず力が抜けたタバサを、更に強く……でも、苦しくない程度に、

抱き締め直し、左手で背を、右手で頭を撫でられ、その心地良さに思わず身を預けてしまった。

しかし、何を言うでも無く、そのまま無言の時が流れていった。

……どれ程、経ったろうか?只、撫でられる儘にしていたタバサに、

ポツリとカイトが零した。……いや、それは、今思うに、独り言だ

ったのだろう。

「……こんな小さな身体に……色んなもん、全部背負い込みやがって……。

……バカヤロウ……。」　ギュゥ……

「……何故？……あなたは…泣いてるの？」

「……アホウ。……そういう事は、分かってても言わない御約束なんだよ。」

「……分かった。」

そして、又、無言の時が流れる……と思っていたが、流石に任務後という事もあって、

少し眠たくなってきたようだ。……もう、大分深夜でもある。

「……もう眠いか。……流石に夜も遅いしな。……なら、このまま眠ると良い。

後で、部屋に運んでやる。……今は……ゆっくり…眠れ。『スリープ』」

「……。」

「……寝たか。……せめて、夢の中では……良い夢（しあわせ）を。

ファースト・イグニッション　ミニエレメント・ドラゴンウインド

……ウインド・風龍。外に居る、タバサの使い魔・シルフィードに状況の説明を。

気になるなら、テントの隣で寝て貰ってくれ。……頼んだ。」

‘クワァ。’‘クゥ～…。’

彼女を起こさぬ様に、そう小さく返事をし、外に出て行った。

「……シャル。……俺の愛しい人。……安心してくれ。

……君を悲しませている現実は、俺が悉く変えてみせる。

だから……今は、ぐっすりと御休み。……愛しているよ……シャル。」

そう言い、彼女の額にキスするカイト。

その後、テントに残された彼等が物音を立てるのは、日が昇ってからだった。

救世主と人形（カイトとタバサ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

所で、百万アクセス記念ですが、私に考えられる事としては、改めたキャラ紹介とか、

幕間の出来事を、もう少し、詳しく書くとか、それぐらいです。

その何れか、若しくは両方で良いと仰るのでしたら、その様に致します。

「そんなモンいらんわい！こっちを書かんかい！！！ワレェ！！！！」

と仰るのなら、その題材を御願い致します。

何方からも、何れも無い場合は、私の独断で、勝手に書いちゃいます。

※カイトの恋愛癖について。御不満に思われる方も、いらっしゃるかと思われますので、

改めて、追記致します。

1．カイトは、外見で惚れる人では、有りません。彼は、その高潔な魂に惚れます。

故に、９歳児に惚れる事も、９０歳に惚れる事も有ります。

当然の如く、容姿も一切関係有りません。火傷で皮膚が爛れた女性に惚れた事も有ります。

故に、ロリ・ペド・ババ専などと謗られても、一向に気にしません。

2．浮気は、妻公認です。既に許可は取っています。当然、後程ちゃんと謝らせますが。

一応、最初のキャラ紹介にも、カイトの女性癖について、しっかり書いてあります。

以上です。どうか、御諒承頂ければ幸いです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトの騒動（前書き）

現時刻（１５：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，０１５，７６７アクセス　ユニーク：８９，８８３人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、御覧頂きました通り、到頭１，０００，０００アクセスを超えました。

改めて、皆様に心から御礼申し上げます。

前話の後書きについて、活動報告にて、改めてアンケートを採らせて頂いて居ります。

どうぞ、御気軽に御越し下さい。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

カイトの騒動

ｓｉｄｅ：テントの中

チチチチ……どうやら、朝の様だ。……何処の世界でも、小鳥が朝を告げてくれるのだな。

そんな事を思いながら、自分の腕の中で、寝息を立てている小さな少女の髪を梳いた。

「……う……ん……ここは……？」

「お早う、お姫様。……どうやら、ぐっすり眠れた様だな。何よりだ。」

「……あなたは……ハッ！？……んぅ…！……。」

「おいおい。そんなに慌てんでも良かろうに。何にもして無いよ。着衣の乱れも無いだろ？」

「……確かに。」

「じゃ、改めて、お早う。…朝、起きたら先ず、挨拶からだぞ？」

「……おはよう。」

「ああ。ほれ、外でシルフィードが待ってるぞ？早く行ってやれ。」

「……うん。」

一緒に外に出ると、タバサに飛び付くシルフィード。そして、シルフィードを慰めるタバサ。

朝から、良い物が見られた。と、御満悦なカイトであった。

「あ、そうだ。タバサ、今度の任務、俺も行くからな。」

「……何故？」

「ん？今度の相手は吸血鬼だからな。俺が居た方が、お前の身はより安全だしな。」

「……べｔ「あ、因みに、決定事項だから。嫌が上にも付いてくぞ？」……。」

「んじゃ、そういう事で。俺は、才人とルイズの所へ行ってくらぁ。」

そう言って、タバサ達の意見も聞かず、才人の所へ向かう……のを止めたカイト。

「あ、そうそう、忘れてた。……寝顔、とっても可愛かったぞ、シャル（ボソッ）。」

「…！！！（バッ！！）／／／／／／／／／／」

「クスクスクス……。じゃぁ、又、ヴェストリの広場でな。」

「……／／／／／／／」

「キュゥ？」　ニヤニヤ

「……（ポカポカ）なんでもない。」

「きゅぅ～…キュッ！」

「……？ヴェストリの広場？……任務じゃなく…？」

「キュゥ～……キュゥッキュ♪♪♪（お姉様♪とっても可愛いのね♪♪♪きゅぃ♪）」

未だ顔の赤いタバサが、小首を傾げた時の可愛さに、

こっそり悶絶していたシルフィードであった。

ｓｉｄｅ：ルイズの部屋

今、此の部屋に、あの憎きツェルプストーの女……キュルケが絶賛訪問中であった。

「あっはっは！ホントに人間なのね！凄いじゃない！」

「五月蠅いわね。」

どうやら、才人におっぱい星人とか（心の中で）言われたキュルケは、

只、自分の使い魔を自慢して、見せびらかしに来ただけの様だ。

すげえ。モンスターだー。ファンタジーだー。とか、才人が驚いていると……。

「…お。何だ、キュルケ、もう来てたのか。フレイムも元気そうだな。」

そう言って、部屋の中にカイトが、唐突に現れた。現れたから驚いた。

“うわっ！”‘キュルゥーッ！’

「あ、済まん、済まん。取り敢えず、四人共、お早う。」

「あ、ああ。お早う……って、四人？」

逸早く、反応出来た才人が、遂、気になり、聞いてみた。

「？何か可笑しい事言ったか？今。」

「え？…だって、此処には……俺、え～と、この人（キュルケ）、それと、俺のご、ご主人様？」

それと、アンタだけだろ？」

「何言ってんだ。…其処に居るじゃないか。フレイムが。」

‘グル？’

「……いや、こいつは人じゃ無いだろ。」

「「うんうん。」」‘グルル。’

皆、同意した。

「俺にとっちゃ、同じだよ。人もサラマンダーもドラゴンもエルフも吸血鬼も……な。」

当然の如く、皆その意味が解らず、首を捻るが、その思考もカイトの言に阻まれた。

「そんな事より、そろそろ飯の時間だぜ？早くしないと、喰えないぞ？」

慌てて、食堂に駆け込む三人であった……が、才人だけをカイトが引き留めた。

「はいはい、お前さんは、こっち♪」

「な！？お、おい！俺を何処に連れてく気だよ！？飯ぐらい喰わせろよぉ！！？」

「だから、こっちだよ。お前、ルイズに付いて行ったら、どんな食事になると思ってる？

此処は地球でも、況してや日本でも無いんだぞ？

自分の常識だけで物事を考えたら、あっと言う間におっ死ぬぞ？」

「うっ……。……因みに……どんな食事？」

「みんな、椅子に座ってる中で、床に這い蹲って小皿一杯のスープと、糞固いパン二切れ。」

「……宜しく御願いします。」

「宜しい。素直な奴は好きだぞ？……ほら、こっちだ。」

そう言って、カイトが連れて来た場所は、食堂裏の厨房。其処に居た給仕に声を掛けた。

「済まない。ちょっといいか？」

「あ、はい。何でしょうか？」

「この少年、ミス・ヴァリエールに召喚された平民なんだが、昨日から、何も食べてないんだ。賄い物で構わないから、何か食べさせてくれないか？」

「あ、あなたが……。分かりました、少々御待ち下さい。」

そう言って、奥に引っ込み、何やらガタイの良いおっちゃんに話し、何かを持って来た。

「…どうぞ。……済みません、今ちょっと忙しくて、こんなものしか出せませんが……。」

そう言って、持って来てくれたのは、出来立てホカホカの温かいスープだった。

「……有難う……本当に、有難う…；；」

旨い旨いと言って、泣きながらスープを啜る才人。それを微笑みながら、見ているカイト。

そのカイトに、声を掛ける給仕。

「あの……あなたもどうぞ？こんなもので宜しければ。」

「……ああ、有難う。…でも、俺の分は才人にあげてくれ。俺はその気持ちで充分だ。」

「……でも……。」

「気にするな、シエスタ。……それなら、後で…そうだな、昼間辺りにでも厨房貸してくれ。

取って置きの料理人を紹介するから。それで、お相子だ。」

「…は、はい。…分かりました。」

「じゃあな。俺は、中庭辺りに居るから、何か用が有ったら、そっちに来てくれ。」

と言って、厨房を出るカイト。……その後を見送る才人とシエスタ。

そして、二人で顔を見合わせ、改めて互いに自己紹介した。……その時、やっと気付いた。

（……あの人、どうして私の名前、知ってたんだろう？）

……何時か聞いてみよう…。と、小さな決意をしたシエスタであった。

ｓｉｄｅ：中庭

「さてさて。……先ずは何しようかねぇ……ん？」

中庭に到着し、暫し沈思黙考しようとしたカイトを、誰かが引っ張った。

「…お、フレイムか。…どうした？」

‘グル。’

どうやら、カイトを何処かに誘導しているらしい。他にする事も無いカイトは、

フレイムの後に従って行った。……すると、才人を除いた使い魔達が、勢揃いしていた。

流石のカイトも、これには驚いたが、彼等からは、特に敵意も感じなかったので、

その儘、フレイムに連れられて、彼等の許へ行った。

「……それで？一体、何の用なんだ、お前達。」

「なn「喋るな、イルククゥ。何時何処で誰が聞いてるか分からないんだぞ？」キュ…キュゥ。」

「安心しろ、お前等の言葉は解るから。その儘、話せ。」

‘キュゥ！　キュルル！　ゲコッ。　グルゥ。　モグゥッ！！’

「成る程。全く判らん。」

“グルァァァ！！！”

「…冗談だ。因みに、今のは『固〝羅ぁ』で合ってるよな？」

“グルッキュモゲコ。”

「……同時に言ってるから、物凄い表記になりそうだな。」

‘キュ？’

「いや、何でもない。……要は、こうだな？

俺がお前達の主人に、仇成す存在かどうかの確認。

それと、俺の中に居る存在の確認。

最後に、何で俺がタバサに惚れてるか、聞きたいっと。

……シルフィード。お前、後でオシオキな♪ちゃ～んと、タバサに伝えて置くから♪♪♪」

‘キュッ！キュッ！キュッ！！！’

「どんなに泣いても鳴いてもダ☆メ♪……まぁ、シルフィードはさておき。

取り敢えず、俺の事が知りたいんだな？お前達。」

“…（コクン）。”

「なら、適任が居るぞ。……龍斗。」

「はい、カイト様。」

突然現れた、その存在に驚く使い魔達。しかし、気にせず話し続けるカイト達。

「龍斗、済まんが、こいつらに俺の事、説明してやってくれ。俺はタバサの所に行って来る。」

「はい、畏まりました。行ってらっしゃいませ、カイト様。」

「ああ、頼んだ。」

そう言って、忽然と姿を消したカイト。残された龍斗が説明をする

まで、

少し時間が掛かったのは、御愛嬌と言う事で。

ｓｉｄｅ：二年のとある教室

その日のその教室は、不穏な空気に包まれていた。

本来、一緒にいる筈の自分の使い魔達が、何処にもいないのだ。

「……全く、何処行っちゃったのかしら……私のフレイム。」

「……。」

「ねぇ、タバサも気にならない？私達の使い魔が何処に居るのか。

……なんか、ラインも繋がらないのよね……。」

「……大丈夫。あの人と一緒。」

「……あの人？……もしかして、今朝のあの人かしら？……ねぇ、タバサ？

あなた……何か知ってるんでしょう？」

「……内緒。」

「あ、ずる～い…！私にも教えてくれないの？」

「……。」

他にも其処彼処で、喧々囂々と騒がしくしていたが、先生が入って来た途端に、ピタリと止んだ。

「皆さん……？使い魔はどうしましたか？」

「それが……何処にもいないんです。」

「……いない？……貴方達、ちゃんと契約出来たのですか？」

「勿論です。……でも、何か今、ラインが繋がらないんです。」

「……ふむ。……何か、あったのでしょうかねぇ……。」

そう言って、生徒と共に考え出す、先生。当然、生徒ですら無い才人には珍紛漢紛だった。

そんな混乱の最中、突然現れた存在に、皆、思わず沈黙した。

「…よっと。……おろ?…何だ?未だ、授業してねぇのか。」

“……っ!!!”

「あ、俺の事は気にしないでくれ。只の客人・暇人・御用心な旅人だ。」

そう言い、手をヒラヒラと振りながら、とある所へ近付いて行くカイト。

「よう、タバサ。」

「え？タバサ……貴方、この人と知り合いなの？」

「（ブンブン）……どうして此処に？」

「いや、暇だから「そうじゃない。」ん？どういうこった？」

「…私の使い魔が言ってた。…貴方に話しを聞きたいと。他の使い魔達を全員連れて聞くと。

だから……何故此処に？」

そのタバサの言葉に、自分の使い魔達が何処で何しているのか、やっと分かった生徒達。

「……ああ、アレはそういう事か。それなら、今、俺の従者が対応している。

みんな、中庭をちょっと行った先に居るよ。」

その言葉を聞いて、教室を抜け出して使い魔を連れ戻しに行く生徒が多数……出られなかった。

「何処へ行く！！！！！！馬鹿者共がああああっっっっっ！！！！！！！！！」

そのカイトの出した、突然の大音に、みんなビビって思わず立ち止まってしまった。

中には、ビビリ過ぎて、短く悲鳴を上げて、腰を抜かす者まで居た。

「授業を抜け出して、私事を優先するとは何事だ！！！戯け共がっっっ！！！！！

それでも、曲りなりにも栄えある、トリステイン魔法学院の生徒か！！！！！！

恥を知れ！！！！！！！！！！！！！」

その叱責に、己が行状を恥じ入る生徒が大多数。怖くて、言う事を聞く生徒がチラホラ。

まぁ、恥じ入るだけの最低限の矜持があるなら、未だ大丈夫だろうと、カイトは思った……が。

「そ、そうですよ、皆さん。幾ら使い魔がいないからと、授業を抜け出すなど以ての外です。」

その無責任な言葉に、思わず切れ掛けたカイトであった。

「……シュヴルーズ。許はと言えば、貴様が碌に生徒も叱らず、ボーッとしていた所為だろう。」

「な!?何と無礼な…!」

「……無礼……だと……？……巫山戯るなああっっっっっっっっっっ！！！！！！！！！！！！！」

「ヒィィィッッッ！？！？！？！？！？！？」

「貴様等は何様のつもりだっっ！！！！生徒の好き勝手も止められず！！！！

生徒を抑え付け！！！！生徒に笑われても、一向に気にせず！！！！

それでも貴様等は教師かっっっっ！！！！！！教師を一体、何だと思っているっっ！！！！！！

子供を教え導く存在だろうがっっ！！！！！！！！それが、欠点を指摘しただけで無礼だと…！！

図に乗るのも大概にしろっっ！！！！！！！！！！！」

「……な、な、な、あ、あ、あなたのような、へ、平民にそのようなこと……！？」

「平民！？そんなもの関係あるかぁぁぁっっっっっ！！！！！！！！！

ガキを叱るのは大人の役目だろうがっっ！！！！！

それに、貴族も平民も関係あるかっっ！！！戯けがっっっっっっ！！！！！！！！！！！！

俺は、オスマン坊やに、貴様等の躾けも頼まれている。

俺が居る内は、無法なんぞ一切させんぞ？文句がある奴は、何時でも掛かって来い。

未来永劫、友にも、家族にも、愛しい人にも、会えぬ様に、魂ごと消滅させてやろう。」

そのカイトの宣言に、一切の物音がしなくなった教室。其処に響くは唯一カイトの声のみ。

「……どうやら、理解して貰えた様だな。…では、授業を始めろ、シュヴルーズ。

……これ以上、無駄な時間を増やすのならば、無能の烙印をオスマン坊やに押させるぞ？」

その言葉に、慌てて授業を始めるシュヴルーズ。そして、素直（？）に受ける生徒達。

その厳正粛々とした雰囲気に、全生徒が思わず、居住まいを正しながら受けていた。

そして、何とか、授業も軌道に乗り始め、今、ルイズが練金して爆発させた所である。

当然の如く、無事な人達から、罵詈雑言が浴びせられる。……其処に。

「アッハッハッハッハッハッハッハッハ……。」

皆の喚き散らす声を掻き消す程、大きい声で、カイトが笑い出した。

その笑いに、皆がキョトンとし、ルイズのみムスッとしていた。

その笑いも収まると、カイトが驚く事を言い出した。

「クックック……いやいや、流石はルイズだ。素晴らしい爆発だったぞ。

因みに、今、俺が笑ったのは、ルイズと、元々魔法を知らない才人……以外の人、全てだ。」

“……え？”

カイトの言葉に、便乗して笑おうと思った生徒達は、カイトの後の

言葉の意味が解らなかった。

「矢張り、皆、意味が理解出来んか？……では、聞こう。この中の誰でもいい。

誰か、何かの呪文に失敗して、一度でも爆発を起こした事がある者。名乗り出てみな？」

すると、誰も名乗り出ない。当然の如く、話しを続けるカイト。

「どうだ？誰もいないだろう？当然だ。ルイズの魔法は、一度も失敗などしていないのだから。

確かに、練金は失敗した。だが、ルイズの魔法自体は、何時でも大成功してるんだよ。

何故なら、『爆発』という結果を出しているのだから。

……魔法は、失敗したら何のアクションも起こせない。

……だが、ルイズの魔法は必ずと言っていい程、爆発する。

……それが、どういう意味か……此処迄言えば解るかな？」

その言葉に、沈黙する生徒達。……それでも理解出来ない生徒が、未だチラホラ。

「……何れにしろ、ヒントは此処迄だ。……さて、才人、ルイズ。教室を片付けようか？」

その言葉に、鈍鈍と片付けの準備を始める、才人とルイズ。そして、教室を出る生徒達。

カイトの居る所、常に騒動有り。

……そんな、噂が流布するのに、そんなに時間は掛からなかった。

ｓｉｄｅ：教室……だった所

只今、絶賛片付け中。黙々としていても暇な為、カイトと才人が話しながら片付けていた。

ルイズは沈黙の行に入り込んだ。

「所で、才人？」

「うん？何だ、カイト？」

「もし、ルイズを馬鹿にしたり、侮辱する様な歌を歌ったら、殴るから♪」

「げっ……何で分かった？」

「判らいでか。……兎に角、絶対に歌うなよ？それが、お前の役目だ。」

「……意味が解らん。」

「今は、分からなくてもいいさ。只、覚えて置きな。

どんな事があろうとも、お前だけはルイズの味方をしてやれ。

それが使い魔の、唯一にして絶対守らなければいけない役目だ。

……まぁ、ルイズも使い魔というものを、丸で理解していないからなぁ……。」

「……理解していないってどういう事よ。要は、私の手足となって働くものでしょ？」

「……ほら、これだよ。……まぁ、気長に頑張んな、才人。」

「……ハァ……分かったよ。」

「良し。粗方片付いたな。んじゃ、才人、先に厨房に行っててくれ。俺は後で行くから。」

「ああ、分かったよ。」

「…ちょっと、何でそんな所に行くの？それに朝は何処に居たの？何で食堂に来なかったの？」

「食堂に行っても、碌な物は喰えんだろう？だから、厨房で賄い物を喰わせて貰った。

今から行くのは、その時の約束だ。他人（ひと）との約束は、守らんとな。

……使い魔に碌でもない餌を与える主人は、直ぐに使い魔に見捨てられるぞ？じゃぁな。」

「あ、ちょっとっ！待ちなさいよっ！！！……何なのよ……もう…。」

未だ、使い魔の意味も、カイトの言葉の意味も、確かと理解出来ないルイズには、

只、己の劣等感を、更に広げるだけであった。

ｓｉｄｅ：三人称

只今、教室をでたみんなが、それぞれの使い魔を連れ戻した後である。

そして、その貴族の坊ちゃん嬢ちゃんが、御休憩中でござ～い。

それを、「……うざっ。」という目で見ながら、給仕をしている才人が居た。

……あの後、才人が厨房で賄い物を頂いてる時に、又、あのメイド

さんが現れ、

何かと話しをしている内に仲良くなり、食事のお礼として、給仕を手伝う事になったのだ。

……その時に、カイトが連れて来た別嬪さんに、皆驚き、

又、その料理の腕前に更に驚き……といった事(ハプニング)もあったが。

そして、給仕の最中、あの是非共死んで欲しい部類のレベルを、遙かに超越している気障男が、

何か落とした。……どうやら、小壜の様だ。才人は嫌々ながらも、それを拾って返した。

「おい、ポケットから壜が落ちたぞ。」

しかし、ガン無視する気障男(ギーシュ)。再度、声を掛ける才人。

「落とし物だよ、色男。」

と言って、テーブルの上に置く才人。

「……これは僕のじゃない。君は何を言ってるんだ?」

他の生徒達が、それを見付けた途端に騒ぎ出した。……どうやら、二股を掛けていたらしい。

そして、どうやら、その小壜を送った相手に振られたらしい。

……駄目だよ？もっと上手くやんないと。カイトを見習って――（検閲が入りました）――。

へっ…ざまぁ。とか、才人が思って給仕に戻ると、気障男が声を掛けて来た。

「待ち給え。」

「……何だよ。」

「君が軽率に、香水の壜なんかを拾い上げた御陰で、二人のレディの名誉が傷付いた。

……どうしてくれるんだね？」

「二股掛けてるお前が悪い。」

皆に笑われる気障男。そして、才人を窘(たしな)めてる内に、

才人が『ゼロのルイズ』に喚び出された、平民である事に気付いた。

その言い様に、当然、かちんと来た才人は、思わずこう言った。

「五月蠅ぇ、気障野郎。一生薔薇でもしゃぶってろ。」

「……どうやら、君は貴族に対する礼を知らない様だな？」

「生憎。貴族なんか、一人もいない世界から来たんでね。」

「良かろう。君に礼儀を教えてやろう。丁度良い腹熟（ごな）しだ。」

「……面白え。」

どうやら、此処では無く、ヴェストリの広場という所で闘うらしい。

シエスタの許に戻って来た才人に対し、ブルブル震えながら、「……殺される。」と言って、

シエスタが逃げ出してしまった。思わず首を捻った才人に、ルイズが駆け寄って叱咤した。

「あんた！何してんのよ！見てたわよ！」

「よお、ルイズ。」

「よおじゃ無いわよっ！」

尤もである。……てか、お前も見てたなら止めろよ。とか思わずには居られないが、黙って置く。

そして、子供の口喧嘩を始める二人。だが、一向にルイズの言葉を、聞く気の無い才人。

「……聞いて?メイジに平民は、絶対に勝てないの!!」

「……ヴェストリの広場って何処だ?」

「こっちだ、平民。」

ルイズとの口喧嘩を止め、才人が逃げないか監視していた貴族に、場所を聞き其処に向かう。

「ああ、もう!ホントに!使い魔の癖に、勝手な事ばっかりするんだから!!」

文句を叫びながら、才人の後を追うルイズ。

平民と貴族の、前代未聞な決闘が、始まる。

カイトの騒動（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、私の小説は、アンチ系の小説ではありません。

今回の叱責などで、そちらを期待された方には、陳謝致します。

この『ゼロの使い魔』に、私は、嫌いなキャラはいませんので。

……一部、憐れに思うキャラはいますが…。精々その程度です。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

ヴェストリの決闘（前書き）

現時刻（２２：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，０３６，１７０アクセス　ユニーク：９１，３５０人
皆様、毎度有難う御座います。

そして、９０，０００人突破致しました！！！！！こちらも次の桁迄、カウントダウンです！！！

本当に感謝致します！！！！！

では、今話も拙筆を御覧下さい。

ヴェストリの決闘

ｓｉｄｅ：ヴェストリの広場

今、此の広場にて、平民扱いの才人と、貴族のギーシュの決闘が行われようとしていた。

「諸君！決闘だ！」

歓声が上がった。生徒達が、やんややんやと騒いでいる。よっぽど娯楽に飢えている様だ。

「取り敢えず、逃げずに来た事は、誉めてやろうじゃないか。」

「誰が逃げるか。」

「……さてと、では始めるか。」

言うが早いか、才人がギーシュに突進したが、ギーシュが喚び出した甲冑人形に阻まれた。

「な、何だこりゃ！！」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。……よもや文句は有るまいね？」

「て、てめえ……。」

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』……『青銅』のギーシュだ。

従って、青銅のゴーレム…『ワルキューレ』がお相手するよ。」

「えっ？……ゲフッ！！」

ｓｉｄｅ：壁側

その様を離れてみている者が二人。……キュルケとタバサであった。

「……やぁねぇ……私達（ゲルマニア）と、どっちが野蛮なのかしら。」

「……。」

其処に、乱入する者一人。勿論、カイトである。

「よう、タバサ、キュルケ。……あっちは、早速やってるみたいだな。」

「！！あ、あなた……！」

「……。」

「……あなた、一体何者？せめて名ぐらいは名乗りなさい。」

「おろ？……ああ、そういやぁ、お前さんにゃ未だ名乗って無かったっけ。

改めて、初めまして。八神カイトだ。こちらの流儀に合わせれば、カイト・ヤガミだ。」

「……キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。

二つ名は『微熱』。……って、あなた平民だったわね。」

「まぁ、こちらの基準に合わせればな。一応、二つ名も幾つか有るが。」

「……幾つか？……因みに、その幾つか……教えて頂ける？」

「構わんよ。『宇宙（そら）の救世主（メシア）』・『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』・『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』

『全（オール）てを知りし者（ノウレッジ）』とかだな。他にも有るが、未だ、今のお前等では、知るに足りん。」

「……意味の解らないものも有ったけど……中々御大層な名前ね？」

「まぁな。だが、只の事実だ。」

「……オール・ノウレッジ？」

「ああ。全てを知りし者。……故に、お前に纏わる全てを知っている。

……これから、お前達に待ち受けている運命も…な。」

「……。」

「どんなに睨まれ様とも、未だ全ては教えんよ。……言ったろう？

知るに足りん…と。

お前に足りないのは、覚悟じゃない。『気付く』事だ。未だ、余りにも少ない。

もっと沢山の事に気付け。そして、色んな事を知るといい。

最も大事な事に気付けた時。……その時こそ、俺は全てをお前に話し、

……真にタバサの……いや、シャルロットの救世主となろう。」

「……私はタバサ。……もう、シャルロットじゃない。」

「……ならば、それでいいさ。俺は人形（タバサ）の救い主には成れん。繕うのは苦手なんだ。

俺には精々、壊れたり、解れたりしない様に、外敵から身を守るだけしか、出来んからな。」

「……何々？一体、何の話？……あなた、タバサの何を知ってるの？」

「全てを。……まぁ、今は内緒だ。取り敢えず、決闘でも見ようか。」　ナデナデ

「……。」　ムスッ……

カイトに頭を撫でられ、何となく不機嫌になるタバサ。でも、撫でられる儘でいるのであった。

（……あら。……珍しいわねぇ……この子が、こんなに不機嫌顔するなんて……♪

……で・も♪♪）　そう思いながら、対抗心を燃やすキュルケ。

抱きっ　「……貴方には、負けないわよ？この子は私のものなんだから。」

「構わんよ。親友の座は、キュルケには決して勝てんからな。」

ナデナデ

「……フフン。「……だが。」…え?」　ギュ…

「だが、その代わり、恋人の座は頂くぞ?名実、共に…な。」　ナデナデ

「……貴方……もしかして、そういう趣味だったの?」　ギュゥ…

「いいや?偶々、惚れた相手がシャルだったと言う訳さ。」　ナデナデ

「……タバサ。」　ポカポカ

「分かった、分かった。偶々、惚れた相手がタバサだったと言う訳さ。」　ナデナデ

「……二回も言わないで貰える?……というか、貴女も否定しないの?タバサ。」　ギュゥ

「……告白はされた。でも、それだけ。」

「……本当に?…いえ、貴女が嘘は付かないの知ってるけど……本当に?」　ギュ

「本当だよ?未だ、返事は貰って無いし、今、貰うつもりは無いけどな。

『はい』か『うん』以外は、受け取る気は無いし。」　ナデナデナデナデ

「タバサ。今直ぐ返事しちゃいなさい。私はあなたなんか大嫌いですって。」　ギュゥゥ…

「……。」

自分の事で有りながら、殆ど本人をそっち除けで、取り合うカイトとキュルケ。

でも、撫でる手と、抱き締める力は変わらず、矢張りどちらも優しく感じる。

その心地良さに甘えながらも、何となく決闘の行方を観るタバサであった。

その時の、タバサの僅かな微笑みに気付いた二人が、

微笑み合った事にタバサは気付かなかった。

ｓｉｄｅ：決闘中の広場

ほんわかしたタバサ組とは違って、こちらはギーシュのワルキューレによって、凄惨な状況だ。

幾度も殴り飛ばされ、右腕は折れ、頭は足で踏み付けられ……気絶しても尚、闘る気の才人。

そんな才人に、流石にルイズも我慢出来ずに、間に入り込む。

「……お願い……もう、止めて。」

「……もう、終わりかい？」

「……ちょっと、待ってろ……休憩だ。」

「サイト！！」

未だ、しっかり闘る気の才人に、ギーシュが一本の剣を出し、才人に向かって投げ、

その剣は才人の横に突き刺さった。

「君。これ以上続ける気が有るのなら、その剣を取り給え。
そうじゃ無かったら、こう言い給え。……ごめんなさい……とな。
それで、手打ちにしようじゃ無いか。」

未だ甚振る気の有るギーシュに、ルイズも耐え切れず怒鳴り付ける。

「ふざけないで！！！」

だが、そんな事は何処吹く風と気にもせず、寝転がっている才人に話し続けた。

「……分かるか？剣だ。つまり『武器』だ。

……平民共が、せめてメイジに一矢報いようと磨いた牙さ。

未だ噛み付く気が有るのなら、その剣を取り給え。」

そのギーシュの挑発に、気合いを入れ右手を伸ばすが、折れてる為、力が丸で入らない様だ。

その右手を掴み、押し留めるルイズ。

「ダメ！絶対ダメなんだから！！それを握ったら、今度こそギーシュは容赦しないわ！！！」

「俺は元の世界にゃ、帰れねぇ。……此処で、暮らすしか、無いんだろ？」

「……そうよ。それがどうしたの！今は、関係無いじゃない！！」

「……使い魔でいい。寝るのも床でいい。飯は……シエスタがくれるけど。

下着だって、洗ってやるよ。……生きる為だ。しょうがねぇ。……でも……！！」

「……でも…何よ……。」

「下げたくない頭は……！！！　下げらんねえ！！！！！！」

そして、最後の気力を振り絞り……

立ち上がった才人が、剣を握った瞬間……左手のルーンが光った。

「先ずは、誉めよう。此処迄メイジに楯突く平民が居る事に、素直に感激しよう。」

そう言って、手に持った薔薇(つえ)を振った。これで終わりだと思ったのだろう。

故に、彼は……いや、彼のみならず、其れを観ていた全ての人が驚いた。……只一人を除いて。

「…！！何ぃっ！！！！！！…くっ！」

今迄、才人を一方的にボロボロにしていたワルキューレが、一瞬の内に真っ二つにされたのだ。

慌てて、自分が召喚出来る残りのワルキューレを、全て喚び出した……だが。

「……邪魔だぁっ！」

悉く、散々（バラバラ）にされるワルキューレ。残った一体を、自分の盾にするが……。

「ひっ！！」

その最後の一体もあっさり斬り裂かれ、顔面を蹴られ翻筋斗（もんどり）打った所に、才人が跳躍して来た。

やられる…！と思ったギーシュは、咄嗟に頭を庇ったが、その瞬間、ザシュッと音がした。

恐る恐る目を開けてみると、自分の真横に剣が突き刺さっていた。

「……続けるか？」

「……ま、参った。」

平民（サイト）が、貴族（ギーシュ）に勝った、瞬間だった。

周りが歓声に埋め尽くされる中、ギーシュの剣を手放した才人は、

フラフラと、ルイズが近付いてくるのを見ていた。

自分がどういう状況かは判らない。だけど、勝った事だけは覚えている。

その事を、駆け寄って来るルイズに伝えようとした才人は、途端に倒れ込んだ。

……しかし……。

「……良くやったな。……お前の勝ちだ。…今は、ゆっくりと休め、才人。」

「……ぁ…か……カイ…ト……へっ……あと…は……たn……。」

「……ああ。任せろ、才人。」

「サイト！！！」

「…大丈夫だ。疲れて寝ているだけだ。」

「……サイト。…バカ。」

「……彼は何者なんだ？」

「……只の平民でしょ。」

「只の平民に、僕のゴーレムが負けるなんて思えない。」

「……あんたが、弱かっただけじゃないの？」

「……こいつは平民なんかじゃないよ。」

「「…え？」」

「……こいつは…臆病で…頑固で…少しスケベで…ちっぽけな……只の人間だ。」

“……。”

そのカイトの雰囲気に、皆、思わず口を閉じてしまった。……それが、どの程度続いただろうか。

カイトが、腕に抱えていた才人を地面に下ろした。

「さて。……では、治療するか。……流石にこの儘では、才人も死に兼ねん。」

そう突然言われ、思わず慌てるルイズ。しかし、それを宥め……カイトが又、皆を驚かせた。

「落ち着け、ルイズ。ちゃんと、今、俺が治してやるから。

ファースト・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　アクア」

カイトが何か始動キーの様なものを唱え出し、手に蒼く透き通った剣を喚び出した。

すると、その剣を寝かせたカイトの上に置き、その剣の上に手を置いた。

「……さぁ、頑張った御褒美だ…受け取れ。　アクア　　癒せ。」

そうカイトが命じると、その剣が形を崩し、剣の形をした水の塊になり、

その儘、才人を包み込み……その液体が消えると、才人の怪我も、衣服も全て修復していた。

“　!?!?こ、これはっっ!?!?!?!?”

「……良し。これで、明日迄には目を覚ますだろうよ。『レビテーション』」

“えええええっっっ!?!?!?”

皆、とても驚いた。何と、杖も使わずに、魔法を唱えたのだから。

しかし、全く気にもせず、ルイズに才人を押し渡して言った。

「ほれ、しっかり受け取れ、ルイズ。一応、お前への侮辱に対しても怒ってたからな。

少しは、才人の事も考えてやれ。魔法使いと使い魔は一心同体。

それは、使い魔を只、私（わたくし）する事では無い。……一度、良く考えてみる事だな。」

そして、ルイズの返答も聞かず、壁に凭り掛かり、

フクロウ?から何か受け取っている、タバサの許へ歩いて行った。

ｓｉｄｅ：壁側

「タバサ。……早速来たか。」

「……（コク）。……何故、あなたは知ってるの?」

「知ってるから。…今は、それしか言えないよ?タバサ。」

「……。」

「じゃ、先に行っててくれ。俺は、ちょっとオスマン坊やの所へ行って来るから。」

「……（コク）。」

「……ちょっと、ちょっと。一体、何の話？又、私に内緒なの？」

「な～に、ちょっと、タバサとデートして来るだけだよ。」

「なぁ！？ちょっ！！ほ、ホントなの？！タバサぁ？！？！」

「……。」

「だ、ダメよ！！？考え直しなさい！私がもっと良い男、探して来てあげるからぁっ！！！

ねっ？ねっ？ねぇっ？」

「……。」

「……プッ……じゃ、じゃあ又、後でなタバサ。……空のランデブーと洒落込みますかねぇ。」

そう言って、又、忽然と居なくなるカイト。しかし、今回ばかりは、どうでも良かったらしい。

親友のタバサを、悪魔からの誘惑（カイト　と　デート）から逃そうと必死なキュルケには、些事の様だった。

「……（クスッ）。」

「あ、タバサ。今、笑った?笑ったわね?絶対笑ったでしょぉ!?」

「……（ブンブン）。」

「嘘！絶対嘘よ！今、絶対笑ったわ！タバサの意地悪ぅ！」

と、キャイキャイ戯(じゃ)れ合う、仲睦まじい、姉妹の様な親友が見られたそうな。

ヴェストリの決闘（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、話の関係上、次話を投稿の後、１，０００，０００アクセス記念作品を仕上げたいと思います。

申し訳ありませんが、後少し、御待ち頂ければ幸いです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトとタバサと吸血鬼（前書き）

現時刻（１４：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，０４７，４１４アクセス　ユニーク：９２，４０８人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、思ってた以上に長くなってしまいました。皆様、飲み物の用意は万全ですか？

では、今話も拙筆を御覧下さい。

カイトとタバサと吸血鬼

ｓｉｄｅ：学院長室

今、此の部屋に二人の教師が居た。オスマンとコルベールである。

「……勝ってしまいましたね。」

「うむ。」

「……矢張り、あの少年は…彼の言った通り、伝説の『ガンダールヴ』！」

興奮している二人が、侃々諤々話していると、又、突然カイトが現れた。

「此の件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール。」

「は、はい！畏まりました！」

「賢明な判断だな、オスマン坊や。」

「ぬおっ!?」「うわっ!?」

「毎回、こんな事で驚くな。好い加減、慣れろよな?」

「「無理じゃ（ですよ!）。」」

「ヤック・デカルチャー。」

「「???」」

「まぁ、それはさておき。遠見の鏡で観た感想はどうだ?」

「……ぬぅ。……矢張り、知っておったか。」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている?」

「……それよりも、其方に一つ聞いておきたい。……『ブリミルの

友』たる其方に。」

「な?!お、オールド・オスマン!!?その名称は一体?!」

「その名の通りじゃ。此の者は、儂が産まれた頃から、その様に呼ばれていたそうじゃ。」

「……そ、そんな……まさか……。」

「まぁ、その真逆だ。しかし、あの坊やが神扱いとはね……時が経れば変わるもんだな。

……それで?一体、何が聞きたいんだ?オスマン坊や。」

「……儂、もうお爺ちゃんなんじゃがのう……ゴホン。聞きたい事とはのう……。

御主……初代『ガンダールヴ』がどの様な存在か……存じておるのかの?」

「勿論、知ってるけど……いいの?言っちゃっても。

言っとくけど、ハルケギニアの存在を、根底から覆す程の事実だけど?

ぶっちゃけ、ロマリア…消えて無くなるかもねw」

「……マジ？」

「大マジ。……はてさて……その老肩に、此の重大な事実……担えるのかな？」

「……相分かった！では、此の件は此処迄としよう。」

「な！？オールド・オスマン？！」

「よいのじゃ。彼がわざわざ忠告すると言う事は、今の儂等が知るには、早過ぎると言う事じゃ。

彼の者は適切な時期に、必要な…そして、大切な事を教えてくれる。

先行して知るには、相応以上の覚悟が必要じゃ。……君は、只、興味心のみで言っておろう？

……此のハルケギニア……全てをその身に背負えるのかね？」

「……む…ぅ……。」

「……そういう事じゃ。今は引きなさい、ミスタ・コルベール。」

「……話は纏まったかな？……所で、一つ聞いていいかな？ジャン。」

「……何でしょうか？」

「うむ…一応、俺の事は信じて貰えたのかな？ダングルテールの英雄さん。」

「……。」

「クスクス……そう睨むな。……只、気を付けろよ？

お前が助けたあの少女が、お前を仇と付け狙っているからな。」

「!?……あの少女が……そうか。」

「……わざわざ探すなよ?お前達は何れ出会う。望むと望まざるとに関わらず……な。

……さて。そろそろ、俺は行くよ。愛しのタバサが俺を待ってるのでな。」

そう言い、背を向けたカイト……が、何か思い出した様に、半身だけ振り返った。

「そうそう。お前達に、二つ、良い事教えてやるよ。

一つ。‘白炎’のメンヌヴィルが、生きて今、傭兵をやっている。

……その内、お前とも顔を合わすかもな、ジャン。

そして二つ。ブリミルの死因……知ってる…訳無いよな。何故か神扱いになってるしな。」

「う、うむ。……聞いても良いのかの？」

「それぐらいなら、別にいいだろ。……で、何で死んだか…だけどな……。

……殺されたんだよ。ズブリっと心臓を貫かれてな。　んじゃぁな～。」　ヒラヒラ

「「……。」」

その余りの衝撃の事実に、カイトが何故、わざわざ扉から出たか…

…等という些事には、

全く、思い至らなかった二人であった。

ｓｉｄｅ：？？？

カイトが廊下を歩いていた。……自分の足音に合わせて、誰かが後を付いて来ている。

その事に北叟笑(ほくそ)みながら、廊下の角を曲がる。……追跡者も角を曲がった所で声を掛けた。

「……よう、マチルダ。俺に何用だ？」

「！？！？……そう……気付かれてたって訳ね。」

「そりゃ、そうだ。俺に判らない事など無い。……で、何用だ？」

「……それなら、あたしの用も判るんじゃ無いのかい？」

「まぁな。俺が何者なのか。何故、自分やティファニアの事を知っているのか。等々だろう？」

「……ああ、そうさ。……全部教えて貰おうじゃないのさ。」

「ふむ。教える事自体は吝かでは無いが……未だ、時期では無いのでな。

まぁ、安心しな。誰にも言わないよ……土くれのフーケさん♪」

「……信じられるとでも？」

「だって、誰の口の端にも上って無いだろう？そもそも言う意味が無い。

……取り敢えず、これぐらいで納得しときな。」

そう言って、以前渡した袋より、少し大きめの袋を渡した。

……中を覗くと、十個程のダイヤが、又、入っていた。

「……これは、有り難く貰っておくけど……アンタ、一体何処からこんなに大量の？」

「ん？俺が生成しているだけだが？」

「……は？」

「だから、それらは、俺が作った本物の鉱石。

俺は、金・銀・銅・金剛石、それから、伝説上・想像上のあらゆる金属・鉱物を生成出来る。

それの元は、俺の魔力だが、ちゃんと本物の鉱物だ。無から有を産み出しているに過ぎん。」

「……アンタ……出鱈目にも、程があるだろう？」

「そうか？……まぁ、いいや。ちょっと、今急いでるんだ。愛しのレディが待ってるんでな。」

そう言って、マチルダに手を振って転移しようとして、何か思い出したのか、

一言告げてから、タバサの許へ移動した。

「あ、そうそう、マチルダ。後で、テファの所に一人、女の子送ると思うから、

お前からも、宜しく言っといてくれ。一応、真面目に仕事してるって伝えとくからな～。」

「な！？ちょっ、ちょっと！待ちなよ！！……全く……勘弁しておくれよ……。」

そう独りごちたマチルダの言葉は、もしその言葉を聞いた者が居たら、

思わず肩を叩いて、慰めずにはいられない程、とても疲れ切った声をしていた。

ｓｉｄｅ：王都リュティス　宮殿ヴェルサルテイル・ｉｎガリア

此処は、その煌びやかな宮殿より外れた、森の中。其処に先ず、カイトは転移した。

何故なら、シルフィードが心配しながら、宮殿を睨み付けているからである。

「……よっと。」

「あ！あなｔ「喋るなと言っただろう、イルククゥ。」……きゅい。」

「……よしよし。分かってる。お前もシャルが心配なんだろう？任せておけ。

少し、あの王女様に一泡吹かせてやるさ。戻って来たシャルの僅かな笑顔でも堪能してな。」

「きゅいっ！きゅいっ！！」

side：宮殿内

「……ふん。これが最後の任務にならなきゃいいね。

精々、無事を祈らせて貰うわ、シャルロット。」

そう言って、イザベラが書簡を手渡した直後だった。

「よっと。……よう、遅れて済まんな、シャル。」

「な!?何者っ!!!」

「……大丈夫。もう終わった。」

「……アンタの知り合い？」

「……。」

カイトを見て、同意を得るタバサ。頷いたカイトに、頷き返し、イザベラに応えるタバサ。

「……求婚された。でも、返事は未だしてない。」

「……それはまた、奇妙な物好きもいたもんだね。……もう、只の人形だってのに。

アッハッハッハッハッハ……！！！」

「（ポンポン）んじゃ、行くかシャル。シルフィードも待たせてるしな。」

「……（コクン）。」

そう言って、イザベラなど歯牙にも掛けず、タバサの許に歩いて行き、

頭を軽く撫で叩き乍ら、外に出ようとするカイト。

しかし、その前に、無視された事に立腹しているイザベラに振り向き、声を掛けるカイト。

「……イザベラ。ジョゼフには近付くな。あいつの狂気を浴びたら、お前では一溜まりも無い。

……それに、あいつには、死相が出ている。自身に関わる者を、死に追いやる程の死相だ。

……お前も……早く『エレーヌ』と、元の様に呼び合えるといいな。」

そう微笑み、皆の目の前から忽然と姿を消すカイトとタバサ。

「あ！ちょっとっ！！……なんなのさ……一体……。」

そう独りごちるイザベラが、歳相応の少女に見えたメイド達は、とても驚いたそうな。

「きゅいきゅい！！お姉様！何となく嬉しそうなのね！！」

「そうだろう、そうだろう。」

「……。」　ポカポカポカポカ

「痛い！痛いのね！！」

「はっはっはっは。……ん～～……やっぱ可愛いなぁシャルは♪♪」　抱きっ　ギュゥッ…

「……。」　ムスッ…

「……お姉様……微妙に顔赤いのね♪」

「！！！！／／／／／／」　ポカポカポカポカ

「痛い！痛い！痛いなのねーっ！！！」

「よしよし♪♪♪」　ナデナデナデナデ　スリスリスリスリ

「……。」　ムスゥッ……

そんな微笑ましい遣り取りが、上空で交わされている事は、誰ぞ終ぞ知らなかったのであった。

side：サビエラ村

その依頼された村から、程遠く離れた森に着陸したシルフィード達。

取り敢えず協議をし、タバサの計画を踏襲して、少し？変更点を加えた案にする事にした。

待ってる間、シルフィードは、カイトから大きな美味しいお肉を貰って、大満足だったらしい。

因みに、後でタバサに「……甘やかし過ぎ。」と怒られたそうな。

そして、村に着いたカイトとタバサ。タバサは平服に着替え、杖をカイトに預けていた。

「……今度の騎士様は、あんな弱っちそうな優男かよ…。」

「……呆れた。しかも、子供連れよ？」

どうやら、カイトとタバサを見て、ダメダコリャと諦めているらしい。

村人達が、カイト達が居てもお構い無しに、喧々囂々と誰が犯人だと騒ぎ出す。

しかし、全く意に介さない二人は、村長の家の一階の居間に通された。

「ようこそいらっしゃいました、騎士様。」

「ああ。ガリア花壇騎士、カイト。‘風’のスクウェアだ。」

「何と！スクウェア！！……ははぁ……有難うございます。」

「流石に吸血鬼が相手の上に、既に騎士が一人殺られているからな。俺が出張って来た。

では、経緯を教えてくれ。」

「は、はい。では、御話致します。」

――説明中――

カイトは事情を知っているが、タバサは知らない。

それに、何か自分の情報と違うかもと思い、真剣に聞いているのであった。

「……と言う事です。」

「成る程。俺が聞いた情報と寸分違わないな。」

「では、御頼み申し上げます。」

「任された。……だが、その前に一つ訂正して置こう。」

「……は？訂正……で御座いますか？」

「ああ。吸血鬼の中にはな……ハイデイライトウォーカーと言ってな？

昼日中（ひるひなか）でも普通の人同様に出歩ける、高位の吸血鬼も居る。

外に出ないからと言って、吸血鬼だと決め付けるのは、

余りに浅薄で愚かと言わざるを得ない。

……まぁ、村の長老程度では、知らぬのも無理は無いが。」

「……そ、その様な恐ろしい存在が……。」

「そうだ。過去に実際、何年も住んでいた村の者が、実はハイデイライトウォーカーで、

気付けば、村一つが屍人鬼（グール）化していた事も有った。……まぁ、その村は俺が焼き払ったが。」

「で、では！」

「ああ。俺は吸血鬼専門のメイジなんだ。任せておけ。」

「あ、有難う御座いますじゃ！何と頼もしい御方が……。」

泣き崩れる程に喜ぶ村民達に、少し心の顔を顰めながらも、救世主としての責務を果たすカイト。

村長との話が終わると、ヒョコッと小さな女の子が顔を出した。

「……。」

「…？……おお、エルザ！さあ、お入り。騎士様に御挨拶なさい。」

「ん？……エルザ？…エルザじゃないか！こんな所に居たのか！！」

「え？…騎士様……エルザを御存知なのですか？」

「ああ。彼女の両親とは、実はちょっとした縁で知り合ってね。…良かった、無事だったのか。

メイジに襲われたと聞いて、急いで探したんだが見付からなくてなぁ……。

本当に良かったよ。……と言っても、エルザは俺を知らないだろうけどな。」

「……そうでしたか……。エルザ、何をしている？早く入って来な

さい。」

「…！！！」　ダダダッ！

「あ…エルザッ！？」

恐怖に顔を歪ませ、一階の自分の部屋へ逃げたエルザ。平身低頭で謝る村長と宥めるカイト。

「……申し訳御座いません。御覧の通り、メイジの方をとても怖がって居りまして。」

「まぁ、無理も無い。ならば、杖は俺の従者に預けて置こう。これなら、少しは大丈夫だろう。」

そう言って、彼女の部屋へ行くカイト。すると扉の前で止まり、振り返って皆に一言伝えた。

「あ、そうそう。ちょっと彼女に、両親の事で聞きたい事があるんだ。

済まないが、聞き耳を立てるのは、遠慮して貰えないか？何れ彼女から話すだろうから。」

「はい。畏まりました。」

「ああ、頼む。それと、村人には、絶対に暴走しない様に言っておいてくれ。

明日には、解決させるから…と。」

「は、はい！必ず御伝え致します！宜しく、御願い致します！！」

それ以上はもう何も言わず、扉を閉じて、エルザの居る部屋に行くカイト。

その後、物音がする迄、タバサはその場で差し出されたムラサキヨモギを、次々平らげていた。

次にカイトの姿が見れたのは、翌朝エルザと一緒に出て来た時であった。

ｓｉｄｅ：村の広場

其処に、村人のほぼ全員が集まっていた。何やら、騎士様から大事な御話が有ると言う事で、

皆、自分の仕事を一旦、さておいて、その御話を聞きに来たのだ。

その騎士様の近くには、従者と思われる子供と、何故かエルザが居た。

「……さて。では、皆居るな？」

「あ、あの…騎士様？」

「ん？どうした？」

「あの……占い師の親子が、来て居りませんのです。」

「やっぱり、あの親子が吸血鬼だったんだ！！」

そのレオンの言葉を皮切りに、口々に言い始めた。終いには、家ごと燃やそうと言い出した。

好い加減、耐え兼ねたカイトは、その不愉快な騒(ざわ)つきを、大音の叱咤で掻き消した。

「……落ち着かんか！！戯け共がっっ！！！それが吸血鬼の狙いだ

と、何故気付かん！！！

レオン！！！何より、貴様だっ！！！何処が村一番の切れ者だっ！！！

貴様の言の一つ一つが、吸血鬼の一助となっているのだぞ！！

貴様は、悪戯に村人を扇動しているだけだっ！！！

今後、俺の前では口を開く事を永久に禁ずる！！！

もし、息を吸う事以外で口を開けば、その瞬間、遺体も残さず消し飛ばす……分かったな？」

“……。”

そのカイトの裂帛の咆哮に、皆、口を閉ざした。

「……そうだ、それでいい。今後、一切の反論を禁ずる。もし、何か言いたい時は手を挙げろ。

その時は、発言を許す。因みに、アレキサンドルとマゼンダは、俺が来ない様に言い付けた。

今の貴様等では、確実に殺されるからな。彼等の無実を証明する為に、これから説明しよう。」

カイト達は、今、最近村に来た、占い師親子の家の前に来ていた。

あの後、説明すると言いながら、「付いて来い。」と言って、此処迄来たのだ。

皆、とても不信の目で見ていた。すると、カイトがエルザに何か話し掛けた。

「……では、エルザ。」

「……はい。……おいで……私の僕。」

エルザが何か言うと、荒(あば)ら屋からすっかり変貌したアレキサンドルが出て来た。

……そう、彼は屍人鬼(グール)になっていたのだ。怯え、逃げ惑う村人。……しかし、何か様子が変だ。

屍人鬼(グール)らしき凶暴さは、今は形(なり)を潜め、大人しくなって居た。

しかも、更に驚く事が村人の前で起こった。……何と、カイトの前に屍人鬼(グール)が膝を突いたのだ！

何事が起こったか理解出来ない村人の前で、カイトは屍人鬼(グール)に杖を翳し、こう告げた。

「……嘸(さぞ)、辛かっただろう。……もう、大丈夫だ。……今、俺がそ

の苦しみから助けてやる。

屍人鬼化（グール）　消去（デリート）　癒せ。」

「グッ!?グワアアァァァ……。」

すると、屍人鬼が光り出し……その長い発光が収まると、元に戻っ（アレキサンドル）ていた。

「……起きろ、アレキサンドル。」

「……う……ううっ……此処は……！騎士様！！！」

「ああ、起きたか。…気分はどうだ?」

「……は、はい。…何か、前より大分、気分が落ち着いた気がします。」

「そうだろうな。……今迄、お前は屍人鬼（グール）化していたんだから。

だが、もう大丈夫だ。今、俺が治した。」

「な！？ええっ！！！お、俺が屍人鬼（グール）？！し、しかも治したって…？！」

「ああ。どうせ、屍人鬼（グール）は一度なったら元に戻れないとか思われてるんだろうが、

そんな事は全く無い。……今、お前が経験した通り…な。

今迄、そう言われて来たのは、その魔法が余りに高度で、誰にも使えなかったからだ。

世界というのは、お前達が思っているより、遙かに凄く、もっと広いんだよ。」

“……。”

完全に言葉を無くす、村人達とタバサ。そして、アレキサンドルに、未だ話し掛けるカイト。

「さて。次は、お前の母親の病気を治すぞ。……案内してくれ。

タバサ、治療に杖はいらない。お前が少しの間、預かっててくれ。」

「……（コクン）。」

「では、行こうか…アレキサンドル。」

「へ、へい！こっちです！おねがいします！」

そう言って、タバサに杖を預け、エルザと共に、家の中に案内されるカイト。

少し経った後、部屋が光ったと思ったら、号泣する声が聞こえ、直ぐに出て来たカイト達。

そして、その儘タバサの許へ歩み寄り、皆に聞こえる様に告げた。

「マゼンダの病も治った。これであの親子を蝕む物は何も無い。……貴様等、村人以外はな。」

「……あ、あの……。」

そう言い、怖ず怖ずと手を挙げる村長。その発言を認めるカイト。

「あ、有難う御座います。……そう騎士様は仰いますが、私達にはそんな事、全く判る筈も無く、

ですからこそ、こうして騎士様に御頼み申し上げました次第でして……。」

その発言に、カイトは今度こそ不機嫌な顔を顕わにした。

その余りの恐ろしさに、村人達は挙って悲鳴を上げた。

「……貴様等は何時もそうだ。仕方無いと……しょうがないと逃げる。

無知は罪という言葉を知っているか？……『知らないと言う事は、只それだけで罪である。』

……確かに、無知は罪だろう。……だが、問題は其処では無い。最も許せないのは……

その無知を良しとし、あまつさえ、それを金科玉条（あたりまえ）としている所だ。

『知らないのだから、自分は悪くない。知らないのだから、何も謝る事など無い。

知らないのだから、何がどうなろうともしょうがない。だって知らないのだから。』

……そんな事が、本当に良い事だと思うのか？……動物でさえ、詫びる行動は各々有る。

だと言うのに……貴様等は何だ？悪い事をしたら、謝るのが常識だろう。

其処に貴族も平民も関係無い。貴様等のその甘ったれた根性は、

生物として……そして何より、人間として最も最低な、人で無しの所業だ。

再度言おう。貴様等が、その巫山戯た考えを捨て去らない限りは、この親子達にとって、

最も恐ろしい敵は、吸血鬼では無い。……他ならぬ貴様達だ

よ。」

そのカイトの、怒鳴るでも、怒るでも無い叱責に、皆、更に口を噤んでしまった。

だが、そんな村人達に悔恨する暇も与えずに、カイトは更なる驚愕を与えた。

「……もう、此処には用は無い。此(エルザ)の娘は、俺が両親の知人の許へ送ろう。

……吸血鬼ならば、既に俺が昨日の内に殺しているのでな。それは安心するといい。

では、行くぞ?タバサ。シルフィードを呼んでくれ。」

そのカイトの言葉に、皆驚いたが、タバサが呼んだシルフィードという竜が現れた事により、

その思考も一時中断してしまった。その隙に、カイト達は竜に乗り、彼方へと飛び去って行った。

……その後、結局その親子は、サビエラ村を出て、他の村に居着いたと風の噂に聞いた。

ｓｉｄｅ：上空

其処は、風韻竜シルフィードの背中。その上では、空からの景色に燥ぐエルザ。

そして、片手でエルザを抱き締めながら、もう片方の手でタバサを抱き締めるカイト。

最後に、されるが儘のタバサ……が、カイトを睨んでいる。

その意味が解っているカイトは、何処吹く風で、タバサの髪にニコニコ笑顔で頬擦りしている。

……って、テメェ！俺のタバサに何をしｔ――《検挙されました》

――。

……と、作者（達？）が暴走していると、タバサが痺れを切らしてカイトに話し掛けた。

「……どういう事？」

「ん？何が？何で俺がシャルに惚れてるかって事？」

「違う。……何故、あんな嘘付いたの？」

「嘘？どの嘘？沢山付き過ぎて分かんないや。」

「この子の両親と知り合いと言った事。……吸血鬼は死んだと言った事。」

「ああ。その答えはたった一つだよ。……此の娘……エルザが吸血鬼だからだ。」

「「！？！？！？！？！？」」

「……えへへ…。」

流石に、タバサも吃驚して、目を見開いている。

シルフィードに至っては、青い顔が、更に蒼白になっている。……物凄く恐いらしい。

そんな二人を宥めるカイトと、謝るエルザ。

「まぁまぁ、大丈夫だって。因みに、両親と知り合いと言ったのは、

その方が此の娘と、二人きりで話し合えると思ったからだ。」

「……ごめんなさい……お姉ちゃん達。」

「……何故？」

「ん？何故庇ったかって？理由は後で判るだろうさ。……それに、俺にとっては同じなんだよ。

人間も、吸血鬼も、エルフも、サラマンダーも……風韻竜も…な。」

「……。」

「そう怒るな。既に此の娘は知ってるよ、俺が教えたからな。……

……だから、怒るなって。

大丈夫。ちゃんと対策は講じてある。篤と仕上げを御覧じろ…ってな。

シルフィード、此の儘アルビオン方面の、サウスゴータ地方にある森に迄、飛んでくれ。

姿は俺が隠しとく。細かい場所への誘導も俺がやるから。…頼んだ。」

「きゅいっ！！」

その日、ハルケギニアの上空では、猛烈な突風が吹いたとか。

side：アルビオンのとある森

その森の中程に降り立ったタバサ達は、エルザを警戒しながら、カイトのする事を眺めていた。

「さて…っと。……シャル、シルフィード。此処から先、見た事は一切、他言禁物だぞ？」

「……（コク）。」「分かったのね。」

「良し。……では、約束通り……エルザ。君を吸血鬼から、人間にする。…覚悟はいいな？」

「う、うん。」

「宜しい。……我が名…『真なる救世主（メシア）』の名に於いて、世界に命ずる。

彼の者の存在を、その理を変えよ。彼の者に洗礼を。彼の者に祝福を。

我は此処に世界に命じ、宣言する。彼の者を吸血鬼より、只人にする事を！」

その宣言後、途端にエルザが苦しみ出し、カイトも血を吐き、膝を地に付けた。

思わず慌てたタバサとシルフィードだが、カイトの手に止められ、その成り行きを見守った。

すると、エルザの絶叫が止み、光に包まれると倒れ伏し、カイトが更に血を大量に吐いた。

「…！？……。」

「…大丈夫だ。……我が名…『真なる救世主（メシア）』の名に於いて、此処に宣言し承認する。

彼の者……エルザは、これから人間として、その与えられた生を生くと。」

そうカイトが締め括ると、エルザの身体が又、光り始め……間も無く光も収まった。

「……一体、何をしたの？」

「……なぁに…簡単な事だよ。……此の世界に命じて、

エルザを吸血鬼という存在から、人間に変えただけさ。

……少しばかり代償は支払ったが……まぁ、此の程度は些事だ。気にするな。」

「……代償？」

「ああ。……まぁ、何れ教えるよ。今は未だ、その時じゃ無い。……先ずは、此の娘をちゃんと安全な所へ連れて行かないとな。シャル。……付いて来るか？それとも、此処に残るか？」

「……行く。」

「分かった。シルフィード、済まないが、暫く此処で待機していてくれ。

一応、無いとは思うが、万が一の場合も有る。気を付けておいてくれ。」

「……きゅぃ。」

ｓｉｄｅ：サウスゴータ地方　ウエストウッド村

「……済まない。誰か住人は居るか？」

「……ど、どなた……ですか？」

「俺は、マチルダの知り合いだ。……ティファニアか？マチルダから話は聞いているよ。」

「え？マチルダ姉さんの知り合い？」

「ああ。ちょっと、君に頼みが有って、此処迄来たんだ。ちょっと出て来て貰えないか？」

すると、大きな帽子を目深に被った、金髪の美少女が現れた。……成る程。

才人が惑わされるのも道理だ。……いや、俺は違うぞ？はやて、風音、風美、シャル。

と、一体、誰にしているのか判らない言い訳を、心の中で呟いていると、

何も言わないカイトを不審に思ったのか、益々、帽子を目深に被ってしまった。

「……ああ、済まない。少々、考え事をね。では、初めまして、八神カイトだ。

此方風に言えば、カイト・ヤガミだ。宜しくな、ティファニア。」

「……タバサ。」

「……よ、宜しく。……ティファニアです。」

「早速で悪いが、此の娘を何処かに寝かせて貰えないか？」

「あ、は、はい！こっちへ。」

家に招かれ、ベッドにエルザを寝かせたカイトは、エルザが起きる迄、

テファに、タバサと一緒に色々と話をした。マチルダの現況。外（ハルケ）の世界（ギニア）の事。等々。

流石に眠くなった二人の為に、話は一旦区切り、又、明朝と言う事になった。

翌日。自分のベッドで、カイトが一緒に寝てた事に気付いたタバサが、

顔を真っ赤にして、カイトを杖でボコボコ殴った事を、追記しておく。

エルザが起きたのは、そんな騒がしくも楽しい朝が、少し過ぎた頃だった。

「お早う、エルザ。気分はどうだい？」

「……うん。何か、少しからだが重い気がする。……それに、声も聞こえないの。」

「それが、人間だ。……お前が望み、俺に願った……人間だよ。」

「……そう……なんだ。」

「ああ。……では、これから最後の仕上げをする。……テファ、二

つ頼みが有る。」

「あ、はい。……なんでしょう？」

「一つ。此の娘を此の村に住まわせてやって欲しい。

二つ。……お前の忘却魔法で、此の娘の記憶を忘れさせてくれ。」

「！？……な、なんで……その事、知ってるって……。」

「俺は誰にも聞いちゃいないよ、安心しな。でも、知ってる理由は未だ、内緒だ。

それより、頼む。今の此の娘には、此迄の記憶を持たせているのは、少々酷だ。」

「……分かりました。」

そう言うと、杖を持って来て、長々と呪文を唱えた後、エルザ達に杖を振り下ろした。

「……有難う、テファ。これで此の娘も大丈夫だろう。」

「え?!……な、なぜ……?」

「ん? 何で、俺達に聞かないかって? 答えは簡単だ。俺には、此の世界の魔法は一切効かん。

そして、タバサには、俺が防護魔法を掛けておいた。

例え、国が滅ぶ程の巨大な威力の攻撃でも、完全に無傷なレベルの…な。だから、効かない。

……理解して貰えたかな？……では、俺達はもう、行くとしよう。その娘は頼んだぞ。

何か、マチルダに伝える事は有るか？……特に何も無いのなら、これで一旦お別れだ。

……又な……ブリミルの子孫……虚無を担いし者よ。」

そう言い、忘却魔法が効かなかった事に、気が動転しているテファの前から、忽然と姿を消した。

その後、一日餌無しで放って置かれた事に、怒ったシルフィードを宥めるのに、

少し時間を要したのは、蛇足である。……竜だけに。

そして、任務結果を報告後、学院に戻って来たカイト達が、

更に、一騒動・二騒動巻き込まれるのだが、それは、又、別の機会に。

カイトとタバサと吸血鬼（後書き）

如何でしたでしょうか？

これで、一旦本編は御休みです。

次話からは、２～３話程ですが、１，０００，０００アクセス記念作品を投稿致します。

今の所、雨季様と、七つ夜＆夜つ七様の小説とのコラボ話と、幕間の話を企画致して居ります。

一応、カイト達の能力の、完全総御浚いも考えていましたが……もしも、

「どんなに長くても読んでやらぁ！掛かって来んかいぃ！！ワレェッ！！！」

と、仰る方がいらっしゃいましたらば、頑張ってみたいと思います。

もし、他に御要望があれば、何なりと仰って下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・神々の悪戯～前編～（カイトとかなめとせつな）（前書き）

現時刻（１６：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，０６５，２７０アクセス　ユニーク：９３，５９８人
皆様、いつも有難う御座います。

さて、遅れ馳せ乍ら、今回から１，０００，０００アクセス記念と題しまして、

２～３話程度ですが、記念作品を投稿したいと思います。

今回は、雨季様、七つ夜＆夜つ七様から御許可を頂き、

『チートじゃ済まない』から　一条　要達。

そして、『俺の異世界物語』から　如月　刹那に出て頂きました。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

番外・神々の悪戯～前編～（カイトとかなめとせつな）

ｓｉｄｅ：中庭ｉｎ魔法学院ｂｙ三人称

今日は、タバサの吸血鬼任務が終わった翌日である。

そして、今、此の場でカイトはノンビリしていた。……そう、正に午睡（シエスタ）中であった。

そんな一見、無防備に見えるカイトを、皆、それとなく、見るとも無しに、じっくり見ていた。

すると、僅かに微笑みを浮かべながら、揺蕩（たゆた）っていたカイトが、急に顰（しか）めっ面をした。

一体、何事があったのかも分からず、戦々恐々としていると、途端に立ち上がり、叫び出した。

「……！！巫山戯んな！！！糞神共が！！！！！

何が悲しくてガキの御守何ぞ、俺がせにゃならんのだ！！バカも休み休み言いやがれ！！！

……ぁあん？……ぬぅわんだとぉっっ！！？…！あれかっ！！！」

そう一人で叫ぶと、突然姿を消した……と思ったら、上から、子供達の叫び声が聞こえる。

……上から？……子供達？…思わず空を見上げると、本当に子供達が空から降って来た。

皆が驚いて居ると、その子供達を何時の間にか空に居たカイトが、難なくキャッチした。

皆の口から、安堵の溜息が漏れる。すると、又、何時の間にか地に着いて居たカイトが、

二人の子供を地面に降ろし、何事か話し掛けている。その内、カイトが頭を抱え始めた。

その様を珍しがって眺めて居ると、途端に辺りに物凄い魔力が伸し掛かって来た。

子供達も泣き出してしまった。その子供達をあやすカイト。

すると、辺り一帯に伸し掛かっていた魔力が消え去った。……どうやら、源はカイトらしい。

子供達が泣き止むと、カイトが又、何か子供達に話し、カイト達の姿が忽然と消えた。

その後、カイト達の姿が見えたのは、夕方過ぎ……日が傾き闇夜に染まり始めた頃だった。

ｓｉｄｅ：カイト

「……あの糞神共めぇ……ぜってぇ何時か殺しちゃる……！」

俺は、改めて、あの時の巫山戯た会話を思い出していた。

……あの大馬鹿共への恨みを、忘れぬようになぁ……！！

ｓｉｄｅ：回想中ｂｙカイト

‘やぁ、『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。今、少し暇かい？’

‘ぁん？……最高神（ゼウス）か。……見て判らんか？今は絶賛午睡（シエスタ）中だ。大いに忙しい。帰れ、ド阿呆。’

‘そう言わないでおくれよ。実は、こっちに居る一条要君が小っちゃくなっちゃってね。’

‘小っちゃいって事は良い事だね。……って、某女神達も言ってたろ？気にするな。

どうせ、あいつらの薬とかだろ？放っとけば、その内、元に戻るだろうさ。’

‘いや、それがね？オーディーンの所の、如月刹那君も小さくなっちゃったらしくてね？’

‘それこそ、正にあの『歩く無法地帯』の薬の仕業だろうが。俺の知った事か。

お前等が何とかしろよな。曲りなりにも神だろ？最高神（ゼウス）に主神（オーディーン）が雁首揃えて怠けんな。’

‘……相変わらず、手厳しいね…。……で・も♪ごめんね？

もう、そっちに二人共送っちゃったんだ。’

「……！！巫山戯んな！！！糞神共が！！！！！！

何が悲しくてガキの御守何ぞ、俺がせにゃならんのだ！！バカも休み休み言いやがれ！！！」

‘そう言われても、既に事後だしさ♪……それより、いいのかな？’

「……ぁあん？」

‘そっちに送りはしたけど、中途半端に送っちゃったんで、多分空から落ちてくると思うよ？’

「……ぬぅわんだとぉっっ！！？…！あれかっ！！！」

‘んじゃ、宜しくね～♪『宇宙（そら）の救世主（メシア）』♪♪♪’

‘テメェェェッッ！！！！！　覚えてやがれよぉぉぉっっ！！！！！

！！！！！！，

……オマケに、その後が…………此のガキ共だよ…………ｏｒｚ

「「…………ぅわぁぁぁぁあああああっっっっっ！！！！！！！！！」」

「…くっ……っと。大丈夫か？二人共。」

「「…………。」」

「まぁ、いいや。…………っと、良し。立てるか？お前等。」

「あ、ありがとう、カイ兄。」

「なんだよー！もっと早くたすけろよなー！じじい！！」

「……お前達……本当に、要に刹那か？」

「う、うん。僕せつなだよ？」

「おう！おれがかなめだぜ！」

「……性格違い過ぎるだろ？……所で、お前等、何でこうなったか、覚えてるか？」

「うん、覚えてるよ？」「もちろんだぜ！」

「じゃあ、済まないが、その時の事、教えてくれるか？」

「いいぞ！じゃあ、おれからだ！」

ｓｉｄｅ：かなめ

おれは、あのとき、なのはたちといっしょに休んでたんだ。そしたらかみさまが来て、

‘要君。ちょっといいかな？’

‘……神様？……又、何ですか？物凄く嫌な予感しかしないんですが……。’

‘うん。君の予感も大分、神染みて来たね♪ちょっと、救世主（メシア）の所へ行って欲しいんだ。’

‘救世主（メシア）？……ああ、カイトの所ですか。……って、あいつの所なら、

わざわざ俺が行かなくても、何の問題も無いでしょ？あいつ以上のバケモノ何ていませんよ？’

‘うん。そうだね……神々（われわれ）でさえも、彼にだけは絶対に勝てないしね。……で・も♪

今回はちょっと、訳有りでね。……済まないが、強制的に行って貰うよ。’

‘……ハァ。分かりましたよ。’‘……子供の姿でね。’

‘……ぬ？……そ、それだけはいｙ’‘行ってらっしゃ～い♪’ノシ

「……ってことなんだ。」

「……あの屑神め……。」

「じゃあ、次は、僕！」

ｓｉｄｅ：せつな

あのね？僕は、フラウお兄ちゃんと遊んでたの。そしたら……

プルルルル「……何の用だよ？ディン。」

『うん。君、暇でしょ？ちょっと行って貰いたい所が在るんだ。』

「やだ。俺は今、変態ロリコン王子を虐めるのに忙しいんだ。他を当たってくれ。」

『だ・め♪……（アイツを困らせたいのにそれじゃこっちが困るし）だから行って来て♪』

「いやいや、『だから』に続く文脈がスッポ抜けてるよ？！」

『細かい事は、気にしない。……それとも……犬がいい？猫がいい？』

「すいません。俺が悪うございました。行きますから勘弁して下さ

い。」

『よしよし♪素直な子は好きだよ、刹那。』

「……所で、何処にどうやって行けばいいんだ？」

『ああ、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』の今居る世界だよ。私が送ってあげるから、気にしないで。』

「……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』？誰だ、それ？」

『あれ？君も知ってる人だよ？ゼウスの所の要の世界で会っただろう？…確か……カイト。』

「……カイト？……あ、もしかして、要が言ってたアイツか。

『チートを超えたチートを更に超えたバケモノ』とか言ってた…

……って、ゑ？

……そんな奴の所に行くの？俺。……これから？」

『そういう事♪じゃ、行って来てね？……子供の姿で。』

「……え？子供？……ゑ？…ぇぇぇえええええっっっっっ！？！？！？！？」

『バイバ～イ♪♪♪（……クックック……これで……あの救世主（メシア）も……ｗｗｗｗ）』

ｓｉｄｅ：再びカイト

「……だって。」

「……そうか、そうか。あの屑神共……どうやら、余程死にたいと見えるな。

クックックック……一回では飽きたらんなぁ……。

二十回……三百回……四千回……五万回……六億回……七兆回……八京回……。

クックックックック……。」

「「ヒィィッッ！！！……ウェェエエエンッッッ！！！！！！！！」」

おっと、いけない、いけない。つい、箍（たが）が外れ掛けちまったぜ。

「あ～……よしよし。大丈夫、大丈夫だ。……もう恐くない、恐くないぞ。」

強く優しく、二人を抱き締めながら、そう耳元で静かな声で言って、頭と背中を軽く叩き撫でる。

大概の子供は、これで泣き止むんだよなぁ……ものの数分ぐらいで（実体験話）。

流石は、はやて直伝。良く、これで風音をあやしたもんだ。……っと、泣き止んだな。

「よしよし、ちょっと恐かったな、ごめんな。……俺の話を聞いてくれるか？」

「「……グスッ……ぅん。」」

「そうか、ありがとう。取り敢えず、お前達を元の世界に戻すよ。その為に一旦、かなめの世界に行くけど、良いかな？せつな。」

「うん。」「おれもいいぜ！……で、いつ行くんだ？」

「ん？これから行く……前に、ちょっと伝言しとかないとな。一緒に来てくれるか？」

「おう！」「うん！」

「よし！じゃ、転移。……っと……よう、シャル。読書の邪魔して悪いな。」

「……誰？」

「俺の知り合いの子供だ。間違っても俺の子供じゃ無いから、安心してくれ。」

「……別に。……何の用？」

「あ、そうそう。俺、今日、ココに一日居ないからさ、その報告に来た。」

「……そう。」

「ああ。……あ、それと……。」

「……何？」

「うん。俺がココに戻って来られる様に、目印を置いとこうと思ってね。

済まないが、預かってて貰えないか？」

「……構わない。……どれ？」

「今、出すよ。　ファースト・イグニッション

ドラゴン・オブ・マナ　ミニエレメント・ドラゴン　ウインド」

“……フワァ～……きゅい？…きゅ～い！”

「……。」

「クスクス……どうやら、気に入って貰えた様だな。……手と身体が引き寄せられてる。」

「！！／／／／／／／／」

「いやいや、気に入って貰えて嬉しいよ。そいつらは、俺の分身みたいなもんだからな。

じゃ、今日一日だけだが、そいつらを宜しく頼む。

因みに名称は、『ウインド』に『風龍』だ。可愛がってやってくれ。又、後でな、シャル。」

その龍達を残して、又も忽然と目の前から消えたカイト。

そして、自分を見詰める二匹の掌サイズのチビ龍達。

“……きゅ？”と小首を傾げられては、流石のタバサも陥落してしまった様だ。

その日一日、タバサは本も読まずに、龍達と遊んで居たそうな（ウインド&風龍談）。

その時のタバサの笑顔が見られなかった事だけが、唯一残念だったと、カイトは後に語った。

ｓｉｄｅ：要の世界の機動六課

「……要さん……何処行っちゃったんだろう？」

「……うん。…突然、私達の目の前から消えちゃって……。」

「本当に……帰ったら、問い詰めてやんなくちゃな……？はやて。どうしたんだ？」

「うん。何か、転移反応があってな。特に次元震も魔力も無かったらしいんやけど、

何があるか分からんからな。一応、気は付けてな？」

「「「「了解！」」」」

「……ふむ。そいつは困るな。俺は只、届け物を渡しに来ただけなんだが。」

“！？誰（だ）！！！”

「八神カイト。要の友人だ。久し振りだな、みんな。」

「……あ、カイトさん。お久し振りです。確か、此の前の温泉以来でしたよね？」

「ああ、そのくらいになるか。」

「あの……所で、届け物……って？」

「ああ、こいつらだ。……ほら、出ておいで。」

「こんにちわ！」「よお！」

挨拶した二人に、目も心も奪われる女性局員。一部の男性局員も可成り危ない目をしている。

“……か、か、か、可愛いいいいいいいいいいいいいっっっっっ！！！！！！！！！”

そう叫んで、二人に殺到する女性局員一同。血走った目で見ている

一部の男性局員。

「「ぅ、ぅわあああぁぁぁぁぁぁ……。」」

そして、突然揉みくちゃにされる二人。鼻血などを噴き出して悶絶する一部の男性局員。

「……やっぱりな。……って、やばいな。そろそろ……。」

そして、吃驚して泣き出す二人。それに萌えてる一部の男女局員。

「「ウエエエェェェェンッッッ！！！！！！！！！！！！！！」」

「……ヤッパリ。……ハァ……黄宇。」

「はい、我が主。……構いませんか？」

「ああ。スッパリサッパリやっちゃえ。」

「畏まりました。……キサマラアアアアアアアアアッッッッ！！！！！！！！！！！」

その日、真の修羅が降臨したと、機動六課のとある局員が、日記に記していたそうな。

番外・神々の悪戯～前編～（カイトとかなめとせつな）（後書き）

如何でしたでしょうか？

申し訳ありませんが、今回は連続投稿では、ありません。

次話は、何とか、明日中には仕上げたいと思います。

雨季様、七つ夜&夜つ七様。今の所、違和感等は御座いますでしょうか？

何か、間違い等が御座いましたらば、御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・神々の悪戯～中編～（カイトと五行と機動六課）（前書き）

現時刻（２３：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，０８２，６４２アクセス　ユニーク：９５，１４４人
皆様、毎度有難う御座います。

ちょっと、次話の戦闘場面が、可成り長くなりそうでしたので、
誠に申し訳ありませんが、今回も少々短くさせて貰いました。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

番外・神々の悪戯～中編～（カイトと五行と機動六課）

ｓｉｄｅ：要の世界の機動六課

只今、機動六課の局員全員が現在進行形で、

黄宇による説教を、正座で受けている真っ最中である。

その傍らには、「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。」と只管呟くなのはと、

綺麗に焼け焦げているフェイトと、何かとても暗くなって沈んでるはやてが居たが、

皆して目を逸らし、視界に入れない様にしていた。

それが、２～３時間程続いた後、カイトに止められ、ようやっと解放された局員達であった。

「所で、はやて。残ってる仕事は、書類仕事や事務だけか？」

「……ぅぅぅ…………ふぇ？…う、うん……今日は模擬戦の申請も無いし……それだけや。」

「そうか……じゃあ、今日は序でにお休みにしますか。…龍斗。」

「…はい、畏まりました、カイト様。…………終わりました。」

カイトに名を呼ばれた龍斗は、自身が持っていた本に手を翳すと、その本が光り出し、

光が収まると、カイトに結果報告をした。

「そうか、御苦労様。……はやて、今、機動六課の今日の事務・書類処理、全部終わったぞ。」

「…………へ？……終わった？」

「ああ。確認してみな？……愛しのグリフィスにな♪」

「うぅっ／／／／／／／／……ぐ、グリフィス？…き、今日の仕事、終わってる？」

「……はい。どうやら、全局員の書類・事務の仕事が終了している様ですね。」

次々、何事か……という連絡が来ています。」

「……ホンマかいな……；…あ～…え～と……今、カイトさんの家族の人が、

どうにかしてくれたみたいや。せやから、今日は実務・修理等以外の人はお仕事終了や。

そう、全員に伝えてくれるか？グリフィス。」

「はい、分かりました。……では、はやてさん。又、後で。」

「……う、うん／／／／／／」

その通信が終わった後、皆にニヤニヤ顔で迎えられたのは、言う迄も無い。

その後、どうにか泣き止んだかなめとせつなを連れて、機動六課の人達に説明した。

全員、とても驚いたが、あの『歩く無法地帯』の仕業だと言うと、皆得心したのか、

手を打って「成る程。」と、素で受け容れてた。……どんだけやねん。

「んじゃまあ、これで今日一日、お休みって事で。

……鋼牙。せつなとかなめと一緒に遊んでおいで。」

「うん♪！！せつな！かなめ！一緒にあそぼー♪♪！」

「うん、こー兄♪」

「いいぜ！なにしてあそぼっか？」

「…え～とね～……鬼ごっことか、かくれんぼ！」

「じゃあ、鬼ごっこやろうぜ！おれが鬼だ！い～ち…に～い…さ～ん……。」

「うわわっ！早く逃げなくちゃ！」

「行こう！せつな！」

「うん！こー兄！」

「よしよし。矢張り、子供は元気が一番だな。」

「じゃ、私達はあっちでお喋りでもしましょっか♪
え～と……なのは・フェイト・すずか・ヴィータちゃん・スバル
…よね？」

「……な、何がですか？」

「要を好きな女・性♪♪♪」

「「「「／／／／／／／／／／／」」」」

「はいは～い…♪じゃ、ちょっっと、あっちで私とお話しましょう
ねぇ～♪♪♪」

「……相変わらずだねぇ…水薙は。」

「それでは、私はちょっと、シャマルの所へ行って来ます。」

「ああ、ちょっと待ちな、龍斗。……ほれ。」

「……これは？」

「ん？写し鏡。どうせなら、二人同時の方がいいだろ？」

「……有難う御座います、カイト様。……では、私はこれで。」

「……あの～…カイトさん？」

「ん？どうした、はやて？」

「龍斗さん、どこ行きはったんですか？」

「ああ、保健室。シャマルの所だ。」

「……え？龍斗さんって、もしかして……？」

「いや、そうじゃなくてな。彼処に居る、まーくんとまーちゃんに会いに行ったんだ。

龍斗の奴なぁ……珍しいあいつらに、物凄く興味を惹かれてる様でなぁ。」

「……ああ、成る程。あの、奇妙な植物達ですか……；；；」

「そういう事。……まぁ、序でに、シャマルに植物の育て方とか、みっちり仕込むつもりなんだろうけどさ。」

「……仕込むって、何かェロイ響きですよね？」

「それには、激しく同意する。……何れ、あいつに嗾（けしか）けてみよう（ボソッ）。」

「んじゃ、俺様は残った奴等に稽古つけてやるよ。」

「……稽古……だと？」

「おうさ、シグナム。お前等、あんまりにも弱過ぎるからなぁ……。安心しな、ちゃんと手加減はしてやるよ。

じゃねぇと、弱っちぃテメェラじゃぁ、すぐ死んじまうからなぁ……！！」

「……キサマ…！我々を愚弄するか！！」

「はっ！只の事実だろう？……文句があるなら、掛かって来な？テ

メェラ纏めて相手してやるよ。

それぐらいが丁度いいハンデだろう？」

「良かろう！！その言葉…後悔させてやろう…！！！」

「……だそうだぞ？はやて。許可頼む。ちゃんと、手加減させるからさ。」

「……ホンマに大丈夫なんですか？ウチの子達も、大分強いですよ？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。寧ろ、死なずに済む事を祈ってた方が良いぞ？

ぶっちゃけ、紅蓮は要より強いから。」

「……ゑ？……マジデスカ？」

「大マジ。……まぁ、諦めてくれ。……それより、愛しのグリフィスが来たぞ？」

「…ふぇ？／／／／／／」

「…はやてさん、お待たせしました。」

「あ、いや、う、うん／／／／／／ほ、ほな、カイトさん。私等はこれで……／／／／／／／／／／」

「失礼します。」

「おう。……ごゆくり～（ボソッ）♪」　ノシノシ

「「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」」

「クックック……真っ赤になってやがんの……。」

「……主殿。」

「ん？どうした、黄宇？」

「……宜しいのですか？…彼女は、主殿の……。」

「……いいんだ。彼女の幸せが俺の幸せ。それはどの平行世界に於いても変わらない。

だが、それが必ずしも、俺の手に依るもので無くとも良い。

只、彼女が幸福であるという、その結果のみがあれば良いんだ。

だから、此の世界のはやてが、グリフィスと共に居る事が、最も幸福だと言うのならば、

俺はそれを只、応援するのみだ。……それが、俺の彼女への愛だ。」

「……主殿……。」

「……案ずるな、黄宇。俺なら、大丈夫だ。……お前達(かぞく)が常に、俺と居てくれるからな。」

「……はい。我等は、何時何時迄も、御身の御側に…。」

「ああ。……有難う、黄宇。」

そっと寄り添う二人には、誰もが声を掛けるのを、断念したそうな。

side：水薙

「……でね？マスターったらさぁ、その時……。」

「ええ～…うっそぉ……ホントにぃ？」

「モッチロンよ。だぁって、本人に直接聞いたんだから。」

「…ぅげぇ～……マジかよ……；」

いやぁ～……やっぱ、マスターの話は盛り上がるわねぇ♪話しのネタには困らないし♪

「……ねぇ……水薙さん。」

「んぅ？なぁに、なのは？」

「あの……その……。」

「？どうしたの？フェイトまで。……何か聞き難い事でもあるの？」

「ううん。そうじゃなくてね？……ほら、あっち。」

「あっち…って……ああ。そういう事ね。」

「……ああ。……いいのか？お前だって……その……す、好き…なんだろ？／／／」

「ええ、勿論。心から愛しているわ。例え誰が相手であろうとも、私のマスターへの想いは、決して誰かに劣るものでは無いわ。

私の身も心も、肉の一片、血の一滴、私を形作っている全てが。

‘私’という存在そのものは、全てマスターの為だけに在るのだから。」

……そう。例え、マスターの妻子、恋人、愛人が相手であろうとも。

……私の想いは負けない。

……って、あら？……あらあら……みんな、真っ赤になっちゃって

……可愛い♪♪

「……あの……そのぅ……それなら……あれは、いいんですか？」

「ええ、いいのよ、黄宇姉だもの。」

「……何でですか？」

「……黄宇姉はね？私達と違って、中々マスターとは会えないの。私や龍斗とかは、結構頻繁に会えるんだけど、黄宇姉だけはちょっと事情が有ってね。

だから、ああやって偶に会えた時には、思いっ切り甘えるの。……私は何時でも甘えられるから。……偶には、姉孝行もしないとね♪」

「……水薙さん。」

「……もう。そんな暗い顔しないの！私達がマスターに愛されてる事は、間違い無いんだから。

だから、私は黄宇姉がマスターにくっついてても安心出来るし、こうしてみんなと、のんびりお話していられるんだから。

……いい？貴女達も要からの愛情を疑っちゃダメよ？それは、要に対しても失礼なんだから。」

「「「「「……はい（うん）。」」」」」

その後も、マスターや要の色んな事で、沢山盛り上がっちゃった。

……マスター。……私達も、貴方を愛している事……ちゃんと理解してくれてるわよね？

疑ってたりなんかしたら、絶対に許さないんだから！

ｓｉｄｅ：カイト

「……主殿。」

「……ん…黄宇。」

……ハァ……偶には、いいねぇ……こういうのも。

鋼牙は、ドタバタいってるから、あっちこっちでかなめやせつなと、楽しく遊んでるみたいだし。

龍斗も……多分充足してるんだろう。……何かさっき、「私の出番は～…；；」とか、

誰(シャマル)かが叫んでた気がしたけど……きっと気の所為だろう。……うん、気の所為だ。そう決めた。

紅蓮達は……まぁ、ドンガン大きな音してるから、愉しんでるんじゃ無いかな？

水薙達は何か、さっきからこっちをチラ見しよってからに。……まぁ、楽しんでるからいいか。

……ハァ……幸せだねぇ……。　――ＷＡＲＮＩＮＧ――　……ん？アラート……だと？

「……みんな！何か超巨大なもんが、ミッドチルダに出現したらしいんや。

詳細は未だ判らへんけど、みんな、何時でも出動出来る様に準備しててな。」

“了解！！”

うむうむ。キビキビとしてるな。良い判断もしている。……だけどなぁ……。

「……はやて、グリフィス。せめて、服はちゃんと着ようぜ？」

「「なあっ！？／／／／／／／／／／」……って、これ、音声オンリーやんかっ！！！」

「良いツッコミだが……今の反応で、ナニしてたか、バレバレだぞ？……エッチ。」

「どっちがやぁぁぁっっ！！！！！／／／／／／／／／／」

さてさて。はやても揶揄った所で……と。

「龍斗。何か、判るか？」

「少々、御待ち下さい、カイト様。……？！これは……。」

「……どうした、龍斗？」

「……カイト様。どうやら、少々面倒な相手の様です。」

「……何？」

‘ミッドチルダ市内に、超巨大な魚が出現！繰り返す！ミッドチルダ市内に巨大魚が出現！！’

その放送に、皆がミッドチルダ方面を見た。

「……あ、あれは……一体？」

「……ちっ……。本当に面倒臭い奴が現れやがったぜ……。

『タイプ・ヴィーナス』……か。」

タイプ・サターンに続き、タイプ・ヴィーナスまでもが顕れた。

……果たして、ミッドチルダは？……要の世界の平和は守られるのか？！

要が、子供の今！頼れるのは、我等がカイトしか居ない！

ガンバレカイト！！　負けるなカイト！！

次回！！！　『せめて、惑星らしく……』　乞う御期待！！

「……何だ？この超絶嘘予告は……；；；；；；；」

「まぁ、偶にはいいんじゃない？こういうのも、面白くて。……私は結構好きよ？」

番外・神々の悪戯～中編～（カイトと五行と機動六課）（後書き）

如何でしたでしょうか？

所で、次話は前に書いた『月姫』編以上に、版権に喧嘩を売りたいと思います。

今も、戦々恐々としながら書いていますが……まぁ、いいよね？一応、キーワードには書いてるし♪

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・神々の悪戯～後編～（カイトとアリストテレスと機動兵器）（前書き）

現時刻（００：１５）
ＰＶ：１，０９６，９８８アクセス　ユニーク：９６，４５７人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、今回は前話の後書きで申し上げました通り、以前の比では無い程、版権に喧嘩を売っています。

……故に、只今ガチでガクブル中で御座います。……まぁ、キーワードに書いてあるからいいよね♪

では、今話も拙作を御堪能下さい。

番外・神々の悪戯～後編～（カイトとアリストテレスと機動兵器）

ｓｉｄｅ：要の世界の機動六課

ミッドチルダ市内に、超巨大な魚が現れた。その姿が機動六課からもハッキリ見えた程だ。

その大きさに、皆が驚愕していた。……あのカイトでさえも。

……駄菓子（だがしかし）菓子、どうやら驚き方が皆と違う様だ。何時の間にか、隣に居た龍斗に聞いていた。

「……なぁ、龍斗。タイプ・ヴィーナスって、あんなに大きかったっけ？」

「いいえ。確かデータ上では、１，０００ｍ程度という事になっています。」

「……アレ、どっからどうみても、１，０００ｍ所じゃねぇだろ……。

確実に、１００ｋｍ前後は有るぞ？」

……そう。そうなのだ。本来のアリストテレスの大きさでは無く、遙かに巨大化していたのだ。

故に皆、驚愕して固まっていたのだ。……そんな中、動いた者が居た。……そう、カイトである。

「……しょうがねぇなぁ……ちょっとメンドイが、殺って来るか。……丁度、鬱憤も晴らせるし。」

そう言って、一瞬で姿を消したカイト。……その事に皆が驚いていた刹那に、

あの超巨大な魚擬きも、跡形も無く消えてしまった。何事が起こったか判らず、混乱していると、

龍斗が、説明してくれた。……何故か、精神的にボロボロになってるシャマルが一緒だったが。

「皆様、落ち着いて下さい。アレは、カイト様が、別の世界に連れて行きました。

一応、巨大モニターにて観賞出来ますが……御覧になりますか？」

“勿論（当然だ・見たい）！！！！！”

「では、こちらです。……どうぞ。」

そう言って、龍斗が出して見せたスクリーンには、先の巨大魚と……

……

何か良く判らない、巨大な人型機械が対峙していた。……良く判らなかったので、聞いてみた。

「……龍斗？……アレは何だ？それと、カイトは何処に居る？」

「アレは御覧の通り、人型の巨大兵器です。カイト様でしたら、あの中に居ます。」

“……え？”

龍斗のその言葉を証明するかの様に、

恐らくは、その機体のスピーカーから大音量で、カイトの声が聞こえた。

「……ハッハッハ！！！久し振りの鬱憤晴らしだぜ！！！

……さぁ、キサマは何処迄耐えられるかな？

アリストテレスッ！！！　タイプ・ヴィーナスゥゥゥゥゥッッッ！！！！！」

side：カイト

「……はぁぁぁ……やっぱり、明らかにデカ過ぎだよなぁ……？」

なんでやねん。何で百倍ぐらいになっとんねん。ワケワカランわい。

……まぁええわ。

「……ほな、いきまひょか。　タイプ・ヴィーナス　存在ごと転移」

ｓｉｄｅ：『独立（オンリー・ワン）した新世界』

「……さってと…。……しっかし、ホントにでっけぇなぁ……。」

そう言って、空中に漂っている、タイプ・ヴィーナスを地面から眺めるカイト。

「本当に有り難ぇぜ……！何せ…御陰で、久し振りにコイツラが使えるんだからな…！！！」

そう叫ぶと、掌を上に向け、ナニカを喚び出した。

「出て来い！！！　フルアーマーＺＺガンダム！！！」

それは、巨大な、人型機動兵器だった。その中に吸い込まれる様に、

カイトが入り込んだ。

すると、それに呼応したのか……将又（はたまた）、恐れを成したのか……

タイプ・ヴィーナスが、自身の翼の羽の様な胞子を、数多放出して来た。

「……ハッハッハ！！！久し振りの鬱憤晴らしだぜ！！！

……さぁ、キサマは何処迄耐えられるかな？

アリストテレスッ！！！　タイプ・ヴィーナスゥゥゥゥゥッツツ！！！！！！

俺は……！！！最初っから最期まで……クライマックスだぜぇっっ！！！！！

いけぇっ！ＺＺ（ダブルゼータ）！！フルパワーでハイメガキャノンだ！！！奴等に打（ぶ）ち噛ませぇっ！！！」

その宣言後、ＺＺの額から巨大なビーム砲が放たれ、

襲って来た沢山の、まるで天使の様な捕食端末を叩き落とした。

しかし、本来の姿でさえ、数億は有ると言われたその数。

肥大化した今の姿では、果たして、何千億……何兆……何百兆……何京……。

その膨大な数を前にしても尚、舌舐（なめず）りをするカイト。……どうやら、余程嬉しい様だ。

「……へっ……そうじゃ無くっちゃなぁ…！舌舐りをするのは三流

とか、誰かが言ってたがな、

超一流（オレ）を超えた存在にゃぁ、そんなの関係無ぇんだよ！！！

戻れ！　ＺＺ！！　来い！！　ゼロ！！！」

次に顕れたのは、美しい翼をはためかせている流麗なフォルムの機体。

――ウイングガンダムゼロカスタム――

「さってと……ゼロシステム起動。」　ｐｐｐｐｐｐｐｐｐ！！！！

電子音がコクピット内に鳴り響く。

「やっぱ、コイツに乗ったら、コレを言わなくちゃなぁ！！！

…攻撃指令、任務了解。内容……敵機の撃墜。」

その言葉の後、翼を広げ空に舞い踊るゼロ。そして、空中で止まり翼を目一杯に広げ、

ツインバスターライフルを構え、溜め始めた。

「ツインバスターライフル……最大出力。……ターゲットを破壊する。」

そして、放たれた黄色い閃光が、数多の天使擬きを薙ぎ払って逝く。

……だが。

「……ふん。まだまだ、てんで減らんな。……まぁいい。

こちらもそんなに早く終わって貰っては、つまらんからな。

戻れ！　ゼロ！！　来い！！　ＤＸ（ダブルエックス）！！！」

次に顕れたのは、既に両肩に長距離砲を構えている……ガンダムダブルエックス。

「端っから、フルチャージだぜっ！！　過ちは繰り返させんぞっ！！！

ツインサテライトキャノン　発射ぁぁぁぁっっっ！！！！！」

巨大な二本のビーム砲が、その直線上に居た存在、全てを消し去った。

「まだまだ、お次ぃっ！　戻れ！　ＤＸ！！　来い！！　Ｆ・（ファイナル）断空我（ダンクーガ）！！！」

今度、喚び出したモノは、今迄とはデザインを異にした、真っ黒に身を包んだ野性的な存在。

その最終形態……ファイナル・ダンクーガ。

「愛の心にて、悪しき空間を断つ。……名付けて、断空光牙剣！！！

やあああぁぁぁぁっっっっってやるぜえええぇぇぇぇっっっ！！

！！！！！！！！」

手に持った剣から、真っ赤な光が伸び行き、その剣がその儘、振り下ろされ、

その光に飲み込まれたモノは、悉くその存在を消滅させられた。

「はぁい、お次ぃっ！　戻れ！　Ｆ・断空我！！　来い！！　ライディーン！！！」

次いで顕れたは、勇者の名を冠するに相応しい雄々しく神々しい姿をしていた。

「ゴォォォッッッドッッッ！！！　ラ・ムゥゥゥゥゥゥッッッッ！！！！！

うわあああああっっっ！！！！！……って、オレにダメージ全く無いけど。」

それを見てた機動六課の人達を転けさせたその攻撃は、天使達を数多叩き落としていた。

「……埒が明かんな。そろそろ、飽きて来たし、メンドイから一気に片付けるか！

戻れ！　ライディーン！！　来いっっ！！　G（グレート）・ゼオライマーッッッ！！！」

そして、次に顕れたモノは、今迄の比では無い程の、圧倒的な存在

感を放って居た。

其は、天、を……いや、、烈、を司りしモノ。冥府の王。その究極にして、最終形態。

――グレート・ゼオライマー――

「オラァァッ！！！此処からは、冥王による、蹂躙祭りだぜぇっっ……！！！！！

先ずは、コイツだぁっ！！　　アトミック・クエイク！！！！」

その瞬間、超巨大な地震が起き、タイプ・ヴィーナスの下の地面が悉く隆起し、

その真下に居た天使擬きを押し潰し、両足から射出された核ミサイルの雨霰が、

同時爆発による連鎖反応を引き起こし、その場は爆音以外の音は消え去った。

その音と煙が霽れた後には……未だ沢山の捕食端末と、全く無傷の本体が存在(いた)して居た。

その健在の様を見て、驚愕する機動六課の皆々と、より一層、笑みを深くするカイト。

「……そうそう…！そうこなくっちゃなぁっっっ…！！！続きだぁあっ！！！

デッド・ロン・フーン！！！　トゥイン・ロード！！！」

猛烈な嵐によって薙ぎ払い、何時の間にか分身していたG・ゼオライマーによる挟み撃ち。

火と水による、二つの相反する力の衝突により起きた大爆発に、本体ごと巻き込んだが、

矢張り無傷だった。少々訝しんだが、その検証をする前に、敵が攻撃態勢に移行出来た様だ。

何と、魚擬きの口に光を溜めている。……どうやら、巨大なビーム砲でも撃つ気らしい。

「ハッ！どんな魔改造を受けたか知らねぇがなぁ……

チャージなど、させるものか！！！　Ｊカイザー！！！！！！」

すると、タイプ・ヴィーナスから放たれた砲撃と、Ｊカイザーが真

正面からぶつかり、

僅かの拮抗の後、諸共に消滅した。……どうやら、ほぼ同程度の威力らしい。

「……ったく、ホントにどんな魔改造うけやがったんだ？

……どうせ、あのバカ神共の嫌がらせなんだろうけどよ。……まぁ、いいや。

こいつなら、流石に少しは応えんだろ。　オメガ・プロトン・サンダー！！！！！」

周囲の物体を全て微粒子化してしまう、原子核破砕砲。

その絶大な威力に、残った天使擬き達は、後、本の僅かになってしまった。……しかし……。

「……何ッ？！未だ尚、無傷だとッッ！！？……もういい。…
…もうメンドクセェ…。」

……そう。あれだけの攻撃を喰らっても、何処にも損傷が無いのだ。

その様を見たカイトは、G・ゼオライマーをタイプ・ヴィーナスの目の前に転移させ……

その最大にして、最強の攻撃を発動させた。

「もう、テメエラ……纏めて消し飛べやぁぁぁっっ！！！！！」

⊃烈⊂　《メイオウ》

ゼオライマーよりも、強力なチカラ。八卦ロボの究極体から放たれた攻撃は、

本体を巻き込むのは無論の事、全ての捕食端末を完全に消滅させた。

……しかし、それでも尚……。

「……何……だと……っ?!これでも、未だ無傷……矢張り、何か可笑しいな……。」

そう、幾ら何でも可笑し過ぎる。あれでは、まるで……ッッッ!!!!

自問自答している内に、とある事に気付いたカイトが、ほぼ確信を持ったかの様に動き出した。

「戻れ！！　G・ゼオライマー！！！　征くぞっっっ！！！

祈りの空より来たりて……切なる叫びを胸に……我は明日への道を拓く

汝、無垢なる翼……デモンベインッッッ！！！！！」

その存在は、あの無貌の神（ナイアルラトホテップ）をも屠った……最も新しき神。旧神。

「フングルイ・ムグルウナフ・クトゥグア・フォマルハウト

・ンガア・グア・ナフルタグン・イア・クトゥグア

逝け、クトゥグア。奴を貪り尽くせ。」

炎の化身。其は炎獣の形を取りて、明星（ヴィーナス）を喰らい尽くし、貪り尽くす。

……だが、それでも……いや、違った。タイプ・ヴィーナスの周りの空間が歪んでいる。

それを注意深く観察していると、とある一部分が、パリンっという音を立て、割れたのだ。

しかし、それも本の一瞬。直ぐに又、その部分は修復された……が、

カイトにはそれで充分だった様だ。……何か声を押し殺した様な、

くぐもった笑い声が聞こえる。

「戻れ、クトゥグア。……クックックックック……そうか……そういう事か……。

真逆……『神々の加護（いましめ）』迄をも付けているとはなぁ……。

……わかった……ワカッタヨ……。

ナラバ、オレモホンキデキサマラヲ、コロシテヤロウジャナイカ。」

ｓｉｄｅ：再び、要の世界の機動六課

何か、先程とは明らかに感じが違い、豹変してしまった様子のカイトに、怯える皆々。

しかし、その恐ろしい訳を五行の呟きで知る事が出来た。

「……あっちゃぁ……相棒、久し振りにマジギレしちまってるぜ……；；；；；；」

「……ど、どうやら、その様ですね……；；；；どうしましょうか？；；；；；」

「……ぅぅぅ……カイト兄ちゃん……怖い……。」

「……本当に久し振りじゃないかしら……マスターがあんなにブチキレルのって……；；；；；；」

「……うむ…；我々ですら、冷や汗が止まらん……。だが、そうも言ってられん。

他の世界に累が及ばぬ様、皆で何とか被害を食い止めるぞ！！！」

「「「「承知！！！」」」」

そして、彼方此方（あちこち）に散る五行達。

その様とモニターを、はやて達は只、黙って見てるしか無かった。

ｓｉｄｅ：再び『独立（オンリー・ワン）した新世界』

「イクゾ、デモンベイン。詠唱破棄（エイショウハキ）。輝クトラペゾヘドロン（シャイニング）。」

そうカイトが何事か呟くと、デモンベインの手に超長大な……

剣の様で、剣では無い……剣らしきモノが顕れた。

「貴様等ニ見セテヤル。此ガ担イ手ヲ超越シタ存在ノ、真ノ使イ方ダ。

トラペゾヘドロンヨ。奴ノ『神々ノ加護』ノミヲ時ノ彼方ヘト封印シロ。」

そして、その超長大な剣の様な物体を、タイプ・ヴィーナスに突き付けると、

タイプ・ヴィーナスの周りに憑き纏っていたモノが剥がれ落ち、

それらが全て何か筐体の様なモノに、吸い込まれ封じ込められた。

すると、タイプ・ヴィーナスも流石に危機を感じたのか、その巨体でのたうち回り、暴れ出した。

……しかし、ぶち切れてるカイトには全く意味を成さず……。

「戻(モド)レ、デモンベイン。……オ前(マエ)モ動(ウゴ)クナヨナ……狙(ネラ)イガ外(ハズ)レルダロウ？

最大出力(サイダイシュツリョク)。　D(ドゥルケ)・TENERITAS(テネリタース)」

暴れに暴れていたタイプ・ヴィーナスが、ナニカ青い球体にその超巨大な全身が包まれ、

一切、身動きが出来なくなった。……そして……。

「……サテ……此(コレ)デ最期(サイゴ)ダ。　誕生(ウマレイデ)セヨ……。　ディス・アストラナガン。」

そうカイトが言うと、何と地面に文様が描かれ、その円の中から、手が飛び出して来た。

機動六課の面々が、“ヒィッ！？”と思わず悲鳴をあげる程に、禍々しい気を放ちながら、

文様から抜け出た手で、地面を鷲掴みし、徐々にその全身を顕した。

……まるで、悪魔と見間違うかの様な全容に、誰もが思わず怖気を震った。

「……ブラック・バレルトハ違(チガ)ウガ、コイツモ銃神(ジュウシン)ニハ違(チガ)イナイノデナ。……マァ、諦(アキラ)メロ。」

そう言うと、胸部装甲を両開きにし、中からナニカ……銃身の様なモノが出て来た。

「インフィニティー・シリンダー始動(シドウ)。　ソシテ、灯(トモ)レ……ディ

ス・レヴノ火(ヒ)ヨ。」

すると、その銃身の様なモノが回り出し、その前に又ナニカ、文様が顕れた。

「……サァ……甘美(カンビ)ナ優(ヤサ)シサニ抱(イダ)カレテ……還(カエ)ルガイイ……虚無(キョム)ヘトナァ…！！！」

アイン・ソフ・オウル！！！！」

そして、タイプ・ヴィーナスは、巨大な爆発と共に……虚無（ゼロ）へと還って逝った。

ｓｉｄｅ：三度要のきｄ（ｒｙ

「……じゃ、俺達はこれで帰るわ。」

「ああ。……いや、今回は済まなかったな、カイト。何から何まで……。」

「気にすんな。俺も少しは鬱憤晴らしが出来たからな。」

“……少しかよ;;;;;;;;”　思わず異口同音に突っ込んでしまった面々であった。

「……いや、本当に悪かった。俺まで世話になっちまって……。」

「言ったろう?気にするなよ、刹那。……中々に可愛かったぞ?お前達。」　ニヤニヤ

「「う、五月蠅いっっ!!!／／／／／／」」

「クックック……。」

「……ハァ……にしても、お前ホントに、アレだな。

……まさか、俺達二人共同時に元に戻すなんて……。

（一応、俺達の変化って、神様がやった筈なんだが……；；；）」

（ハッ…！要には前にも言ったがな。高が神風情のやった事程度に、

この俺が、どうにか出来ない訳が無いだろう？

俺の手を煩わせたいなら、創世神でも連れて来な。）

（（いやいやいやいや。））

（まぁ、安心しな。あのバカガミドモには俺がキッチリ落とし前付けて来てヤルカラサ。）

（（ま、未だ、微妙に切れかけてるなぁ……アハハハ；；；；；））

「じゃ、刹那。さっき言った通り、要に帰して貰えよ？ちゃんと、転移座標は残ってるんだろう？」

「ああ、問題無いぜ。」

「……じゃあな、カイト。」

「ああ、又、会おう……要、刹那。救世主（メシア）の名に於いて……神が子等に祝福が有らん事を。」

そう言い残し、カイト達は要の世界から去って行った。

その後、要達はマスコミへの事情説明などに大童だったとか、何時もの事とか言われて、特に問題視されなかったとか、何とかかんとか。

ｓｉｄｅ：とある天界

「……で、どうだったの？ゼウス。」

「うん。矢張り、其処は流石の救世主（メシア）だね。あっさり片付けちゃったよ。」

「……な～んだ……やっぱりダメだったかぁ～……。そうだよねぇ～……。

あの救世主（メシア）だもんね～……。私達の加護ぐらいじゃ、無理だよね

え～……。」

「……まぁね。結果は分かっていたとは言え……。でも、まぁいいじゃないか。

少しは神々（われわれ）も楽しめたし、何より、少しは好き勝手にしている救世主（メシア）に、

意趣返しが出来たと思えばさ。」

「……ま、いっか。それで良しとするしか無いよね。

……あの救世主（メシア）に、これ以上の深追いは……私達でも流石にキツイしね。」

「……そうか、そうか。やっぱり、アレはお前達の仕業だったか。」

「「！？！？！？！？」」

「そうじゃないかとは思ってたが……やっぱりそうだったか。ゼウス、オーディーン。」

「「メ、救世主(メシア)?!な、なんで天界(ここ)にぃっ?!?!」」

「何で?……そんなもん、決まってるダロウ?……キサマラニオシオキスルタメダヨ♪

サァ……小便(ショウベン)ハ済(ス)マセタカ?　神様(ジブンタチ)ヘノ御祈(オイノ)リハ?

天界(テンカイ)ノ隅(スミ)デガタガタ震(フル)エテ、命乞(イノチゴ)イヲスル魂(ココロ)ノ準備(ジュンビ)ハOK(オーケー)カ?」

「「ひ、ひ、ヒィィィィッッッッ!!!!!!!!!!」」

「サテ……スコシノアイダ、オレトO☆HA☆NA☆SHIショウカ♪♪♪♪♪」

その後、天界のとある隅っこで、ボロボロになってガタガタ震えている二神が居たそうな。

番外・神々の悪戯～後編～（カイトとアリストテレスと機動兵器）（後書き）

如何でしたでしょうか？

スパロボファンの方ならば、一応全て判る程度のネタにはしてありますが……。

因みに。どうでもいいかも知れませんが、私の好きなガンダムは……

1．ウイングガンダムゼロカスタム
2．ガンダムＤＸ＋Ｇファルコン
3．Ｖ２アサルトバスターガンダム　Ｘ１ガンダムフルクロスです。

更に、好きなロボは……

1．ウイングガンダムゼロカスタム　デモンベイン　真・龍虎王　グレート・ゼオライマー

次点：カンタロス　アースガルズ　スーパーメガロキング　スーパーマネキングＩＩＩ　等です。

……次点のネタ、全部判る人、居るんですかね……？；；；；

後、某千両小判を鼻から出すロボットも好きなんですが、

彼はインパクト星人という驚愕の事実が判明していますので、除外しました。

インパクトと言えば……ボンボンのヤエちゃんって、可愛くてェロイですよね。

ヤエちゃん達が、本社に突撃して、洗脳されて服を脱がされるシーン。

あれが、私の性の目覚めでしたね……（遠い目）。……って、何書いてんだ…？俺ｏｒｚ

次回は、１，０００，０００アクセス記念、第二弾。月光閃火様とのコラボ作品です。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・人狼との遭遇（前書き）

現時刻（０１：０５）
ＰＶ：１，１１８，２７０アクセス　ユニーク：９８，２１７人
皆様、いつも有難う御座います。

早くも、又、十万アクセス超えました。皆様、本当に感謝致して居ります。

さて、今回は月光閃火様の『ＷＯＬＦＡＮＧ－ウルファング－　～狼男は不良青年～』とのコラボ作品です。

しかも、私としては初の試み。後書きにての初ゲストです。

ぶっちゃけ、本編より、後書きの方が本編です。

両方合わせれば、今迄で一番、文字数が多いのでは無かろうか？

では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・人狼との遭遇

ｓｉｄｅ：三人称

ゼウスとオーディーンのバカ神達による、碌でも無い騒動から、二～三日程経った今日。

本来ならば、地下水との戦闘で大怪我を負っている筈のタバサの許に一匹の梟が飛んで来た。

「……。」

「…ん？シャル、又任務か？」

「……そう。」

……御判り頂けるだろうか？今、カイトはタバサと共に居るのである。……しかも……

その体勢が、ベッドの上で本を読んでるタバサを、後ろから抱き締めていやがるのである。

「ちょっと、その場所を代わりやがれ！！！」……と、憎いアンチクショウに、

呪いの言葉を掛けている、作者＋読者諸君の願いも虚しく、その儘で話し続けている。

「今度の任務は何だっけ……スキルニルだったかな？」

「違う。」

「……え？違う？……どんな任務内容だっけ？」

「……人狼（ワーウルフ）の討伐。」

「……な……に……？」

その後、直ぐにタバサとシルフィードを連れて、ヴェルサルテイル

に転移した。

「イザベラッッ！！！」

「うわっっっ！！！な、な、な、何だいっ！？……又、アンタかい……。」

「そんな事はどうでもいい！！任務内容の書簡は何処だ！！！」

「……ほら、こいつだよ。」

その剣幕に押されたのか、素直に……基、多少逡巡しながらも、書簡を渡すイザベラ。

そして、それを必死に読んでいるカイトの顔が、徐々に曇って行く。

「……イザベラ、任務遂行に当たって注意事項は？」

「ハッ！知るもんか。……例え、知ってたって、アンタなんかに誰がおｓ」
「イザベラ、注意事項は。」

「……フン。人狼は、一匹だけじゃなく、何十匹という群れを形成してるってさ。

これで、アンタも到頭、年貢の納め時かね？……アッハッハッハッハッハ……！！！！！」

そのイザベラの高笑いにも全く反応せず、顰めっ面を崩さず、タバサを連れて目的地へ向かった。

ｓｉｄｅ：上空

「……どうしたの？」

「……何がだ？」

「明らかに、何時もと貴方の雰囲気が違う。……何か気付いたの？」

「……これは、イレギュラーだ。」

「イレギュラー？」

「ああ、そうだ。……つまり、本来起こる筈が無い出来事が起きている。

しかも……いや、これは止めておこう。未だ、予測・推測の域を出ない。」

「……。」

その後、目的地に着く迄、全員ずっと無言だった。

side：ウォルフィ村

「……え？ホントにこれが村の名前？この、此見よがしな名前が、本当に村の名前？」

「は、はい…そうですじゃ。……何か、御不都合でも有りましたじゃろうか？」

「いや、気にしないでくれ。ちょっと、先の展開とか色々読めちゃった気がするだけだから。」

「は、はぁ……。」

「……話の腰を折っちゃだめ。もう一度、初めから説明を。」

「あ、はいはい。何度でも御説明させて頂きますじゃ。

此処一ヶ月程でしょうか…。この村の付近に人狼（ワーウルフ）が現れては、周りの動物達を殺して、

その死骸を貪り喰っていて非常に不気味だと、村人からの訴えが多々ありましてな。

その調査を騎士の方々に御依頼したのですが、来られた方々は皆、人狼（ワーウルフ）の群れに殺されてしまいましてな。又、改めて御願い申し上

げました次第で御座ぇます。」

「……あなた達はどうして無事だったの？」

「さて……それが又、全く判らんのですじゃ。儂等は皆、家で震えて居っただけですが、

奴等は的確に、騎士様達のみを狙って殺して行きましてな。」

「……此処には、昔から人狼（ワーウルフ）が？」

「いえ……実は、此の村は昔から人狼（ワーウルフ）と深い関わりが有ると、伝えられて居りましてな。

ですが、儂等が子供の頃から、人狼（ワーウルフ）など見た事は只の一度も有りませなんだ。

所が、此処最近になって突然、此の村付近に出没する様になりまして……はい。」

「成る程。それで、各家々に狼の毛皮が壁に掛かっている訳か。」

「あ、はい。……此の村は、５０人も居ない程の、本当に小さな村ですじゃ。

ですから、儂等にはこういう時には本当にどうしようも無く、途

方に暮れて居りました。」

「……良く、そんな状態で国に連絡出来たな？」

「はい。儂等が飼ってる伝書用の鳥が居りまして……それに、手紙を書いて飛ばしたんですじゃ。

本に、届いて良かったですじゃ。万が一の神頼みでしたので……はい。」

「……そうか。それで、件の人狼（ワーウルフ）達は何処で見掛けたんだ？」

「は、はい。恐らくボスらしき人狼は何時も、村の北側の森から現れますじゃ。

他の群れは、村の西から別れてやって来ますのじゃ。……どうか、御願い致しますじゃ。」

「……分かった。なら、今から行って来る。誰か、森に詳しい人を……。」

「それならば、必要無い。俺が解る。飛んで来た時に、既に地形は把握して置いた。」

「おお！それは何とも頼もしい御言葉ですじゃ！……では、宜しく御頼み申しますじゃ。」

「ああ。……早速行こう、タバサ。」

「……分かった。」

ｓｉｄｅ：北側の森

「……何故、あんな嘘を？」

「ん？どれだ？」

「案内がいらないと言った事。……もう迷ってる。」

「ああ。その訳なら後で少し種明かしするよ。それと……今は別に迷っている訳じゃ無いぞ？

ちゃんと目的に向かって進んでいる。……そら、そろそろ接触するぞ？」

「……え？」

「……グルルル……グガアアアアアッッッ！！！！！！！！」

「……ほら……大本命の御出ましだ。」

「！？……人狼（ワーウルフ）…！」

そう。それは正に、紛う事無き人狼（ワーウルフ）だった。驚愕に対応が遅れたタバサを狙ったのか、

人狼（ワーウルフ）が真っ直ぐ此方に突っ込んで来た……が、その突進もカイトに止められた。

「取り敢えず、落ち着けよ……輝刃（きば）。俺達はお前の敵じゃ無い。お前を迎えに来たんだ。」

「……何？」

「……え？」

「取り敢えず、人間に戻って呉れ、輝刃。シャルが怯えているからな。話が、し辛い。」

「……分かった。……どうやら、お前は他の奴とは少し違う様だ。」

そして、人狼化（ワーウルフ）を解く輝刃と呼ばれた人物（？）。そして、改めて話し合いの場が設けられた。

「じゃ、改めて始めまして、月臣輝刃（つきおみきば）。八神カイトだ。」

「ああ、俺はつｋ……マテ。何故、キサマは俺を知っている？俺はキサマなぞ知らんぞ？」

「まぁ、気にするな。俺は全てを知っているだけだ。…んで、こっちがタバサだ。」

「……タバサ？……さっき、キサマは……シャル……とか言ってた筈だが？」

「……。」

「まぁ、色々と事情が有るのさ。済まんが細かい事情は詮索無しで。」

「……つまり、キサマの事もか？」

「輝刃が聡明な奴で助かったよ。」

「……ふん。ならば、交換条件といこう。俺の身に起こった事、その全てを教えろ。

全てを知っていると言っている以上、それぐらいは分かっているのだろう？」

「ＯＫ。その条件を呑もう。……なら、お前の状況から話してくれ

るか？その後で結論を話そう。」

「……良いだろう。」

――説明中――

「……成る程な。それで大体判った。では、状況を整理しよう。

先ず、依頼終了後の帰宅途中だった輝刃は、裏路地を曲がった瞬間に此の森に着いていた。

原因は判らないが、恐らく此の世界に通ずる異世界への扉が、開いてしまったんだろう。

で、此の世界の言語が理解出来ずに迷っていた所、見知らぬ者に何か聞かれたが、

その意味が解らず、咄嗟に身を隠した……と。

で、その直後、そいつらが人狼の群れに嬲り殺された。其れが大体、二十日程前。

そして、暫く此の森で過ごして居たと。……これで合ってるかな、輝刃？」

「……ああ。概ねその通りだ。……それで？何か判ったのか？俺を元の世界に戻す方法は？」

「ああ。これで得心した。あ、輝刃を帰すだけなら、今直ぐにでも出来るんだけど……♪」

「……俺に何をさせたい？」

「本当に助かるよ、輝刃。理解が早いのは良い事だよね。

んで、頼み事なんだけど……って事で、宜しく。」

「……本気か？」

「大いに本気だ。」

「……分かった。その代わり、必ず俺を元の世界に帰せよ？

もし駄目なら、キサマを喰らう。」

「分かっているさ。任せておけ。」

「……私にも説明を。」

「ああ、勿論だ。シャルにも是非手伝って欲しいからな。

……所で、シャル。人間が、人狼（ワーウルフ）……いや、狼男になる方法って知ってるか？」

「……月を見る……特に満月の夜には、その力を最も発揮出来る。」

「流石は、シャル……博識だな。……だが、それだけじゃ無い。他には？」

「……他？」

「そう。……流石に其処迄、詳しくは無いか。実は、他にもな？

この輝刃の様に、自分で覚醒をコントロール出来る存在もいれば、

月を見る方法以外でも、狼男になれたりするんだよ。」

「……他の方法？」

「そう。……実はな……出来るんだ。」

「……そんな事、聞いた事も読んだ事も無い。」

「そりゃ、そうだ。狼男について書かれた……本当に古い初期の文献ぐらいにしか、

載っていない事だからな。寧ろ、知ってる方が珍しい。」

「……じゃぁ、本当にそんな事で？」

「そう、なれるんだ。狼男……いや、『人狼（ワーウルフ）』に。」

「……そう。それで私のすべき事は？」

「……シャルには、輝刃が……している間、……をして貰いたい。……頼めるか？」

「分かった。」

「有難う。……じゃ、早速やろうか。」

ｓｉｄｅ：再びウォルフィ村

「おお！これはこれは、従者様。如何致しましたかな？」

「ああ、実は人狼を捕まえたのでな。目撃した村人に確認して貰いたいのでな。

済まないが、広場辺りに全員集めて欲しい。」

「おおおお！！！な、何とっ！？こんなに早く、捕らえられたので？！

か、畏まりましたっ！直ちに村の者を全て集めます！！！」

そして、十分と経たぬ内に、村人全員が広場らしき村の中心場に集まった。

流石は、５０人に満たない程の僻村だな……とカイトは思った。

その傍らには、鎖で繋がれた人間らしき者が転がっている。

「……所で、村長。皆が各自で持ってる、その毛皮はどういう意味だ？」

「これは、先程申し上げました通り、儂等の御守りで御座ぇますだ。何卒、御目零しを。」

「……まぁ、いいか。……早々と集まって貰って何よりだ。御覧の通り、人狼（ワーウルフ）は捕まえた。

……だが、こいつが件の人狼（ワーウルフ）かどうかは未だ判らない。

故に、村人全員に確かめて貰いたい。あ、済まないが、余り近付かないで貰えるか？

今は、何とか抑えていられるが、何時又、暴れ出すかも分からんのでな。」

「は、はい。……皆の者。少し離れて確認しなさい。」

そして、遠巻きにして見ながら、グルグルに縛られている輝刃を確認する村人。

確認した者から村長に耳打ちして報告し、全員から確認が取れると、村長が代表して言った。

「……間違い御座ぇませんだ。此の者が間違い無く、村付近で確認された人狼（ワーウルフ）ですだ。」

「……そうか。」

「は、はい。では、従者様。誠に有難う御座ぇますだ。所で、騎士様はどちらにおられますか？

是非、騎士様にも御礼を申し上げたいのですが。」

「……そうか。そうやって、輝刃に全てを擦（なす）り付け、騎士を従者ごと殺すつもりか。

人狼（ワーウルフ）の群れ……いや、村よ。」

“！？！？！？！？”「な、何の事やら、儂等にはさっぱり……；；；；」

「ああ、言い繕う必要は皆無だ。此処には、俺とこいつしか居ないのでな。」

そう言いながら、カイトは輝刃の縛めを解いた。だが、その事に村人が驚く暇も無く、

カイトが言い終わった後、村人の雰囲気が一変した。今迄のほんわかした雰囲気が、

冷たく全身を刺し貫くかの様な空気になったのだ。……そう、殺気だ。

その殺気の儘、ドスの利いた恐ろしい声で、村長が聞いて来た。

「……何時気付いた？」

「最初からだ。村の名前からして可笑しかったからな。確信したのは、その毛皮だ。」

「……此の毛皮？……血の臭いが染み付いていたとでも言うのか？儂等でも判らぬ程の臭いが？」

「いんや。……今時の伝承では、人狼（ワーウルフ）…狼男は月を見ると変身すると書いてあるが、

本当に古い文献……狼男について書かれた初期の文献では違う。

狼男とは……狼の毛皮を纏う事によって、ソレに擬態するんだ。

……恐らく、思い込みの一種だとは思うが、事実それによって身体能力は跳ね上がる。

そして、此の村の各家々には、その毛皮が御守りとして壁に掛けてあった。

……つまり、此の村は遙か昔からの、人狼（ワーウルフ）達だけの村だった。

其処に、運悪く此の国の騎士が辿り着いてしまい、今日の様な自体に相成ったと言う話だ。

何処か間違っているかい……人狼（ワーウルフ）の長？」

「……いいや、全て間違いない。……それで、儂等をどうするつもりだ？」

「そうさな……俺を信じてくれるなら、誰にも騒がれない所への引っ越しを手伝っても良い。」

「……その条件は？」

「条件は只一つ。俺を信じる事だ。……そう。例え、これから先、どんな事が有ろうとも…だ。」

「……見ず知らずの貴様の言葉を……信じろ…と？」

「ああ。……お前達も古い種族ならば、聞いた事が有るのでは無いか？

救世主（メシア）の名と……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』という名を。」

「……そう言えば、遙か昔の伝承に聞いた事が有るような気はするが……？……！！！

ま、まさか……キサマが……！？」

「そう。俺が、その『救世主（メシア）』だよ。」

「……そうか。分かった。ならば、儂等は其方の言う事を全て信ずる事としよう。」

“?!?!?!”「お、長っ!?何故、急にその様な事をっっ!!!」

「……儂等、各種族の長にのみ伝えられる伝承でな。こういう言い伝えが有る。

『救世主(メシア)には決して逆らってはならん。破滅を望まぬのならば、決して逆らうな。』

……とな。現に儂等の目の前に、その御伽話とすら思われていた存在が居るのだ。

儂等には、只黙って従うしか無い。もし、逆らえば此の世の破滅を招く事になる。」

人狼(ワーウルフ)達は皆、その長の言葉に恐れを成した。……たった一人を除い

て。

……そう。今、長に叫んだあの青年である。……可哀相に彼の末路は、今決まってしまった。

「フザケルナッッッ!!!そんなワケの分からんヤツの言う事なんか従えるかっ!!!!

俺がこいつらを殺すッッッ!!!!」

そう言って、毛皮を被りカイトに攻撃する人狼(ワーウルフ)。……しかし……矢張り無意味だった。

「なッ!?!?」

「……長よ。これは、人狼(ワーウルフ)達の総意か?それとも……コイツは村の者では無いと認めるか?」

「……それは……総意では……無い……。」

「なにぃッッッ!?!?お、長よ!!俺を見捨てるのかっ!!!!自分の息子をっっ!!!!」

「残念だが、もう遅い。」

その瞬間、長の息子であった人狼（ワーウルフ）は跡形も無く消え去った。

「……愚か者めがっ……。」

「では、残りの者は俺に従うのだな？」

「……うむ。」

「そうか。では、少し待て。直ぐに移動させる。……輝刃。俺に掴まれ。」

「……分かった。」

ｓｉｄｅ：村の上空

真下に空（こちら）を仰いでいる人狼（ワーウルフ）達が居る。……その様を悲し気な瞳で睥

睨しているカイトが居た。

「……カイト……どうした？」

「何でも無い。輝刃、空に居るシャル（シルフィード）の龍に乗せて貰え。……此処から先は、お前達は見るな。」

「……分かった。」

輝刃をシルフィードに乗せ、先にヴェルサルテイルに向かわせた。

……カイト一人残して。

「……行ったか。……では、彼等を救うとするか。……俺なりのやり方で……な。」

そう独りごちたカイトは、片手を地面……人狼（ワーウルフ）達の居る村に向け、

一言……こう呟いた。

「……済まないな……お前達。　詠唱破棄　『おわるせか（コズミケー・カタストロフェーい）』」

その瞬間、人狼（ワーウルフ）達は村ごと氷漬けになり、その存在を跡形も無く消滅させられた。

「……じゃぁな。今度生まれ変わった時は、普通の人間になってる筈だよ。

……又、会えたら良いな。……さようなら……此の世界の人狼（ワーウルフ）達。」

side：三人称

「……色々と世話を掛けた様だな。……済まない。」

「いや、気にしないでくれ。……それより、そろそろ元の世界へ帰すぞ、輝刃。」

「ああ、頼む。……じゃぁな……カイト。」

「ああ、又会おう。異世界の人狼（ワーウルフ）の末裔よ。救世主（メシア）の名に於いて、祝福が有らん事を。」

「……いいの？」

「……何がだ？」

「……彼と。……あれだけでいいの？」

「いいんだ。……何れ、又、何処かで会うかもしれない。

……世界は無限に在る。そして、時間は無窮だ。

……此の長い人生。何が起こるか分からないから、面白いんだからさ。

何れのその時を、楽しみに出来ればいいのさ。」

「……そう。」

「ああ。……心配してくれて有難うな、シャル。」

「……別に。」

そして、ヴェルサルテイルに任務報告をした後、更に新たな任務を言い渡され、

それも直ぐに済ませ、学院に戻った翌日。何時も通りに過ごして居た二人に、

キュルケが強襲して来、一悶着あった後に、才人達の後を追う事になった。

……その後、とある剣とカイトの間に、更に一悶着、二悶着有るのだが……。

それは又、次の機会に。……今は、此処で幕引きとしよう。……人狼達の冥福を祈りつつ。

番外・人狼との遭遇（後書き）

如何でしたでしょうか？

月光閃火様。何か、違和感・間違い等御座いましたらば、御一報下さい。

さて。今回、私にとっては初の試み。此の後書きにて、初ゲストの登場です！

「月臣輝刃だ。改めて、宜しく頼む。」

「元【ノルニル】第九席　セラス＝グランセニックよ。」

「同じく、元【ノルニル】第十一席　ユニゲム＝ドラルザグだ！」

「同じく、元【ノルニル】第十二席　コルニス＝アルガザスです。」

「やふ～。作者の月光閃火です。」

※以下、月光閃火：月，輝刃：輝，セラス：セ，ユニゲム：ユ，コルニス：コ，で御送り致します。

皆様、ようこそ御越し下さいました。

月「いや～どう致しまして。前から此処には来てみたかったんですよ～♪」

セ「……私達は正直、来たくは無かったけどね。」

ユ「……ああ……オレ達は、此の世界であっけなく殺されてるからな……ｏｒｚ」

コ「貴方は未だ良い方よ。……私なんて……ｏｒｚ」

……；；；；；；そ、それより！みんな今日はコスプレで来てるんですよね？

セ「え、ええ。私は陣代高校の制服ね。……かなめ役って事かしら？」

ユ「オレ様は、大十字九郎のマギウス・スタイルだな。」

コ「私は、桂ヒナギクのコスプレって事かしら？……でも、これちょっと胸がきついわね。」

輝「そして俺が、ユニコーンガンダムのコスプレだ。……というか、俺だけ生物外…？」

セ「それで閃火が……？」

月「遠野志貴だよ。この前、最後の感想の時に着てた服のままなんだ。」

セ「……でも、格好良いわよ、閃火♪」

月「え?……えへへへ／／／／／／」

……まぁ、バカップルはさておき。先ずは御疲れ様でした、輝刃。

輝「ああ、有難う。……しかし、吃驚したぞ?真逆、覚醒しているオレの攻撃を
　受け止める事が出来るなんて。」

セ・ユ・コ「「「だって、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だし。」」」

作者・月「「まぁ、カイトだし。」」

輝「……お前達……いや、いい。」

月「……でも、二十日程も居なくなってて、元の世界では大丈夫だったの、輝刃?」

輝「……まぁ、時期は明確には書かれていないしな。」

ええ。大体、夏休み頃の話で、大怪我を負って、依頼も受けられなかった……。
…って言っておけば、大丈夫かな?…って、考えていまして。

月「あ～そっか。それなら、何とかなる……かも?」

輝「まぁ、その補完をする為にも、早く俺の話の続きをだな。」

月「……ｏｒｚ」

ま、まぁまぁ；；；色々と事情ってのが有るんだから。
でも、私達読者が続きを待っているのは事実ですから。首を長くして、何時迄も待っていますよ。

月「……うっうっうっ……有難う……きっと、その内、続きを書いてみせるよ；；；
　只、今はちょっと忙しくて……ゴニョゴニョ。」

セ「大丈夫よ、閃火。私なら、本当に何時迄でも構わないわ！」

月「……セラス。」

セ「……閃火。」

はいはい、バカップルは後にして…と。所で、皆さんに御願いしたい事があります！

“御願い？”

はい。前回の後書きに書いた次点の元ネタなんですが、友達に全く判らないから、教えてくれと頼まれまして。

セ「え？又？……その友達、図々しいわね……。」

いえいえ、以前の友達とは別の人ですよ。

ユ「……お前、意外と友達って居るんだな？」

まぁ、それなり・人並みに?それはさておき。頼まれ事を皆に手伝って貰おうと思いまして。

コ「……まぁ、それはいいですけど……私達、その元ネタ知らないですよ?」

それなら無問題(モウマンタイ)。此処にカンペが用意してあるから。

月「……準備がいいんだね?……;」

こんな事も有ろうかと。……こんな事も有ろうかとオオッ!!!

輝「……ど、どうした?…;」

いえ、某奥さんに顔を引っ掻かれた、テラザウラーの声の人の真似を。

月「……判り難い……;……;;;」

細かい事はいいんです。……では、御願いします。

セ「はいはい。じゃあ、先ずは私ね。……ええと?
最初のカンタロスは、ボンボンのメダロット漫画のりんたろうの主人公機ね。」

ユ「次はオレ様だ!アースガルズってぇのは、WA(ワイルドムズ)シリーズってゲームに出て来る、
ロボットみたいなモノらしい。」

コ「次は私ですね。スーパーメガロキングと言うのは、大貝獣物語

2というゲームに出て来る
　ボス名だそうです。……え？……これ以上はネタバレで駄目だそうです。」

月「じゃあ、最後は自分だね♪スーパーマネキング？と言うのは、
　天外魔境ＺＥＲＯと言うゲームに出て来る、これもボスだって。
　しかも、とある条件を満たすと、敵なのにプレイヤーとして使えるんだって。」

ええ、そうです。良く、友達と対戦したり、一方的に味方機をフルボッコにしたりと、
可成り楽しいゲームです。未だに私にとっての、ＮＯ．１ゲームですね。
更に、大貝獣物語２の、鬼を超越しているエンカウントの御陰で、
どんなＲＰＧであろうとも、エンカウントは一切気にならなくなりましたし。
更に更に……。

月「ああ、はいはい。ストップ、ストップ。それ以上は止まらなくなっちゃうよ？」

あ、済みません。ついつい。……あ、そろそろ、最後のゲストが来そうです。
では、私はこれにて退散致します。セラス達も逃げた方が良いですよ？では、アデューノシ

月「あ……行っちゃった。……此のコーナー、どうしようか、セラス？」

セ「そうですわね……いっその事、私達で奪っちゃいましょうか？」

月「ええ！？そ、それは流石にダメだよ、セラス……；」

輝「そうだぞ？未だ、ゲストとやらも来ていないんだし。
　せめて来てからでも、遅くは無いだろう？」

ユ「別に良いじゃねぇか、そんな奴。本当に乗っ取っちまおうぜ？」

コ「……ユニゲムがそう言うのなら、私は協力するわよ？」

セ「じゃ、本当にそうしちゃいましょうか♪」

月「ちょ、ちょっと！？；；；せ、セラスぅ～……；；；；；」

？？？「……ほう。この俺を差し置いて、乗っ取ろうだなどと、良くもまぁ……
　そんな大それた事を考えられたな？元【ノルニル】下位幹部風情が。」

“ッッッッ！？！？！？！？！？”

カイト（以下：カ）「よう…。ゲスト様の御登場だ。元気に死んでたか？オマエラ♪」

セ・ユ・コ「「「ヒイイイィィィィィッッッ！！！！！」」」

月「セラスに手は出させないぞ！！」

セ「閃火……／／／」

カ「おうおう、勇ましいこって。……よう、輝刃。さっき振り。ちゃんと帰れたか？」

輝「あ、ああ、さっき振り。……御陰様でな。……まぁ、澪織（みおり）には怒られたが。」

カ「そうか、そうか。良い事じゃないか。ちゃんと、お前にも心配してくれるコが居るんだから。」

輝「……あれは、心配と言うのとは何か違うと思う；；；；」

カ「ツンデレか？」

輝「断じて否。」

カ「そうか。非常に残念だ。」

輝「……何でだよ；；；；；；」

月・セ・ユ・コ「「「「「……あ、あのぅ……？；；；；；；」」」」」

カ「んあ？……ああ、未だやってたの？」

月・セ・ユ・コ「「「「「……酷い……。」」」」」

カ「ドン☆マイ♪」

“一発で良いから殴りたい”

カ「何言ってんだ、セラス。お前は一回、俺を殺しているダロウ？♪」

セ「ヒイイィィィィッッッ！？！？！？！？！？」

月「セラスには、一切手は出させないって言っただろっ！
『万達者（オール・マスター）』！！……さあ、これでもう大丈夫だよ、セラス。」

セ「……閃火／／／／／／」

カ「……えいっ。」　蹴りっ

月「ゲフッ！！……え？……え？……な、何で？……も、もう一回！
『万達者（オール・マスター）』！！！……今度こそ、大丈夫！」

カ「ちぇりゃっ。」　踏みっ

月「ウゲッ！！……な、な、何でぇっっっ？！？！」

カ「あのね？色々勘違いし過ぎ。俺、今ね？【原初】とほぼ同程度の力を持ってるの。
　判る？【原初】。【ＯＮＣＥ】の事だよ。あいつと大体、力が拮抗してるの。今の俺。」

月「…………………ゑ゛？」

カ「だって、考えても見？俺が士郎達の世界に行く迄、
　大体はやての世界から数億〜数十億年しか経ってないんだ。それで増えたストックが約五百兆。
　今回の世界に移動するまでの時間が約五百兆『年』。……さて、ここで問題です。
　俺の今のストックは一体、幾つでしょうか？」

月「………………………………；；；；；；；；；；；；；；」

カ「更に。今、俺は【原初】と同程度って言ったよね？
　確か月光閃火って【奴】に操られてたよね？今なら【奴】に逆らえる？無理だよね？
　【奴】とほぼ同格の俺の攻撃を何故防げると思ったの？俺が成長してないと思った？」

月「………………………………い、いや、そんな事は…………；；；；；；」

カ「最後に。『万達者（オール・マスター）』ってさ……ちゃんと理屈が有るんだよね？

‘理’で編まれているんだよね？俺の二つ名……覚えてる？
……そう。『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』に『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。
　つまり、‘理’を破壊し破滅させる存在。だから、例えそれが
どんな理屈で有ろうとも、
　‘理’が関係し、‘理’で編まれている以上、俺の攻撃を防ぐ
事は絶対に不可能なんだよ？」

月「…………………………………………………………
……

…………………………；；；；；；；；；；；；；；；；；；；
；」

カ「でね？状況を整理すると。先ず俺は今、現時点で【原初】とほ
ぼ同格で、同程度の能力。
　そして、例えどんな能力で有ろうとも、それが‘理’で編まれ
てる以上、俺には無意味。ＯＫ？」

月「…………………………………………………………
……

　そ………それで………自分達に何を………？；；；；；；；
；；；；；」

カ「うん。まぁ、あれだ。月光閃火には、何の文句も無いんだけど、
一応連帯責任って事で、
　乗っ取りを企んだ、其処の逃げだそうとしている馬鹿共諸共、
オシオキネ？♪♪♪♪♪」

“い、いや（だ）ぁぁぁ～～～…………！？！？！？！？！？”

カ「ま～とめ～て、吹っっ飛べ～～♪♪♪バスターァァァッッホームラランンンッッッ！！！！！！」

月「嘘だあああぁぁぁぁぁーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！」

セ「私、又……いやぁぁぁ～～～……！！！！！！」

ユ「そういや、オレあいつと闘った事無かったっけぇぇぇっっ……！！！！！！」

コ「ユニゲム～～～っっっっ……！！！！！！」

輝「何故に俺までっっっっっ！！！！！！！！！！！！」

カ「……ふう。おっしっっ！任務完了！！あ、じゃ、みんな、またな！！！♪♪♪♪♪」

如何でしたでしょうか？月光閃火様。

ちょっと、カイトの現状を説明する為に、

申し訳ありませんが、月光閃火様には犠牲になって貰いました。

どうか、記念作品と言う事で、此処は一つ御目零しを頂ければ、望外の喜びです。

長々と、失礼致しました。では、今話も御覧頂き、有難う御座いました。

幕間２（前書き）

現時刻（００：１０）
ＰＶ：１，１３２，８４７アクセス　ユニーク：９９，４５４人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、今回は、最終世界の一歩手前。オリジナルであって、オリジナルでは無い世界。

『グランギルズ』……その何(いず)れ渡る世界の國名・位置関係・各國々の長の名前の紹介です。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

幕間2

ｓｉｄｅ：？？？

今、此の部屋の寝具に一組の男女が包まっていた。……どうやら情事後の様である。

その彼の方は、徐に女性の方に問い掛けた。

「……所で、トレス。……今回の会議内容を聞かせてくれるか？」

「……は？……アキシオン様……先程、私が申し上げました通り、何時も通りの内容で御座いました。特に御耳に入れる事など、御座いませんでしたが…。」

「…何、構わんさ。……ちょっとした、気紛れだ。」

「……はい。……では、少々長くなりますが……宜しいですか？」

「ああ、頼む。……（恐らく時間稼ぎにしか、ならんだろうからな。）」

彼の思惑は、誰知らず……トレスと呼ばれたそのエルフは、話し始めた。

ｓｉｄｅ：最高評議会『Ｇ９（ギルヂイン）』

その日は、一日中派手なパレードで、國中賑わっていた。

今年の最高評議会『Ｇ９』の開催國……獣人國『ビストレオ』。

各國の王やら代表やらが、一堂に会するこの儀式が如き祭典。

毎年、開催國では、各國のトップが自身の國の程を見せ付ける為に、派手な催し物が行われる。

……もし、日本の歴史を少しでも囓った者が見れば、恐らくこう思うのでは無いか？

……これは、参勤交代に近しいのでは無いか…と。

そう思わせる程に派手なこの見せ物（パレード）。その見た目とは裏腹に、

トップ達が一堂に会したこの部屋には、何時もの如く、剣呑で重苦しい雰囲気が漂っていた。

「……では、始めるとするか。」

そう宣言するは、今年の開催國……中央大陸の真ん中に位置する、獣人國『ビストレオ』の皇。

獣皇(じゅうおう)ガウレイズ＝ビストレオ。

「……それでは、先ず私から。……我が國は、相も変わらずですね。特に変化は有りません。」

そう、真っ先に発言したのは、獣人國の真上に在る浮遊大陸の國。

鳥人國『バーデスト』の女王。鳥王(ちょうおう)イーグリッツ＝バーデスト。

「ふむ。……我が國も然程、変わって居らんな。

強いて言うならば、我が國の人材が、ＳＳＳ(トリプルエス)ランクに成った事ぐらいか。」

そう言って、胸を張ったのは、東方の大陸全土を支配する、三つ在る人間國の内の一つ。

大地國『ラングランド』の王。大地王グラレス＝ガレアル＝グランド。

「フン。何を戯けた事を。その者が大地國出身というだけで、貴様の國には、何ら関わり合い等無いではないか。到頭、耄碌したか？」

「何をぉぉっ！！！」

そう言って、大地王を挑発するは、これ又、三つ在る人間國の内の一つ。

大地國の周りの海域、全てを支配する海國『シーガリアン』の王。

海王シー＝ブルーウェル＝ボレアヴ。

「…ハッ。相変わらず、下界の猿共は五月蠅いのだな。」

「「何だとッッッ！！！！！」」

その発言で、更なる挑発をしたのは、最後の人間國。

大地國と海國の、双方の空域を全て支配している、大地國の真上に在る浮遊大陸の國。

空國『ミスカイル』の女王。空王セレアス＝スカイ＝スカーレル。

「ハハハハッッッ！！！！！良いぞ、キサマラ！！！

そんなに戦いたいのならば、我が國と戦でもしてみるか！！？」

そう言い、更に嗾(けしか)けるのは、最も西側に在る、孤島で在りながら大陸でも有る魔人國。

魔人國『デモニアン』の皇。魔皇(まおう)ギグドラム＝デーモニック。

「まぁまぁ…待ちなさい、其方達。余り、その様に啀(いが)み合うものでは無い。

二代目魔皇よ。其方も、そう軽々と戦を仕掛けるで無い。」

「……フン！！日和見主義の耄碌爺風情が！」

「良いでは無いか。何事も平和が一番よ。カッカッカ……！！！」

その魔皇の罵詈雑言にも笑って返し、皆を窘めた好々爺は、中央大陸の西側を治める竜人國。

竜人國『ドラグレス』の王。竜王ドラゴニス＝ドラグレス。

「ですが、竜王の言にも一理も二理も有りますね。

我が國と致しましても、人間國と戦をされるのは、好ましく有りませんので。」

そう発言し、竜王に同意を示したのは、中央大陸東部に位置する妖精國。

妖精國『フェアレイス』の女王。妖精王フェリアン＝フェアレイス。

「フン！！！揃いも揃って馴れ合い共が！！！！！……貴様はどうだ？最長老よ。

我が國と戦をしてみる気は無いか？」

「……断る。……相変わらず、下らぬ事ばかりにのみ時間を割くのだな？貴様等は。」

そう魔皇に返答するは、未だ誰にも、その居場所を知られていないエルフ國。

エルフ國『エルフェスト』の最長老こと、トレスエイデス＝エルフェスト。

「全く！！！！！何奴も此奴も！！！！腑抜けばかりだわ！！！！！

……もう良い、早々と終わらせろ。」

「……では、これから、会議を始めよう。…因みに、我が國も特に変わり無しである。」

そして、各々國内の状況を話せる範囲で話し、此の会議に唯一参加しない、

宗教國『アガシオン』への対策や、近年増えつつ有る魔物対策、

更に勢力を広げ続けている、『ギルド』への対応……等々。

或る意味で何時も通りの……そして、毎回違う会議が行われた。

side:???

「……以上です。何時も通り、何一つ変わった事等、御座いませんでした。」

「……そうか。……ギルドに支配されし大地……『グランギルズ』……か…。

……フッ。……皮肉なものだな。アイツが聞いたら、どう思うか……。」

「……アキシオン様？」

「……いや、何でもない。」

「……はい。……あの…。」

「……ん？…何だ、トレス。何か聞きたい事でも有るか？」

「……はい。……先程、アキシオン様が仰った……友と呼ばれた方について……。」

「気になったか？」

「……はい。」

「……そうか。……まぁ、いいだろう。噂をすれば影とは言うが……

それぐらいならば、構うまい。……それで、何から聞きたい？」

「アキシオン様との馴れ初めと、その方がどんな方なのかを。」

「……分かった。……可成り長くなるぞ？時間は有るのか？」

「構いません。アキシオン様との時間に勝る事項など、有り得ませんもの。」

「……そうか。……では、どの辺りから話そうか……。」

そして、彼の話は、ほぼ丸三日程経って、ようやっと彼女の知りたい事が、全て聞けたのだった。

その間、彼が良く笑みを零し、その度にその友（カイト）に嫉妬を覚えるトレスであった。

しかし、友（カイト）との思い出に馳せて居た彼（アキシオン）が、その事を知るのは、もう大分、後の事であった。

幕間2（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、今後もちょこちょこ細かい設定などを、公開して行こうかな？と思っています。

何か、疑問・御質問などが御座いましたらば、御一報下さい。話せる範囲で、御応え致します。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

『土くれのフーケ』の襲撃（前書き）

現時刻（１５：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，１４９，６６０アクセス　ユニーク：１００，９３１人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、到頭ユニークも１００，０００人突破致しました！！！！！
真逆（マサカ）の十万人。……本当に、真逆（まさか）の十万人です。皆様には、感謝してもし足りません。

今の所、特に企画等は考えては居りませんが、何か御要望が有れば御一報下さい。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

『土くれのフーケ』の襲撃

ｓｉｄｅ：タバサ

今日は虚無の曜日だ。此処一週間ばかり、ほぼ常に一緒に居た彼（カイト）も、今日は居ない。

彼曰く「偶には、一人が良いだろ。今日はゆっくり読書でもしていてくれ。」だそうだ。

何時もなら全くお構いなしに、私の部屋に来て、読書中の私の後ろに回って、

私を抱き締めながら、頭を撫でたり、頬擦りして来たりと、色々してくるのに……

今日に限って、偶には一人が良いだろ？…等と言って来るのは、どういう訳だろう？

でも、折角の久し振りの一人だし……今日は心行く迄、本の世界に浸ろう。……でも……。

何故か、少し物寂しい気がするのは何故だろう？

自分も大分、彼に毒されてしまったのだろうか？……そうだ、その彼だ。

普段から、他に人が居ようが、場所が何処だろうが、一切お構いなしで告白してくる。

「シャル、好きだ。」とか「シャル、可愛い～♪」とか「シャル、愛してる。」とかとか。

正直……とても…その……困る。私は、もうシャルロットじゃない……タバサだ。

それを知っていながらも、殆どの場合に於いて、私をシャルと呼んでいる。

今の私は只のお人形。母様を取り戻す迄は……只の人形(タバサ)だ。

だから……そういうモノに現(うつつ)を抜かしてはいけない。……恋愛などというモノには。

今の私では、例えどんな事が有ろうとも、彼に応える事は出来ない。だって私はお人形。

人形は、自分で口を開かない。……只、一身に愛情と……暴力を受けるだけ。

だから……今の私には、彼の告白を、受ける勇気(コト)も、断る勇気(コト)も持ち合わせてはいない。

「……いけない。…又、彼のことばかり考えてる。」

そう。そうなのだ。最近、私は事ある毎に、彼の事しか考えていない。

カイト・ヤガミ。私に初対面から告白して来た人。私の考えを先読みしているかの様な返答。

母様の状態(コト)を教えてくれ、父の仇(ジョゼフ)の事を教えてくれた人。何時も、私の側に居る人。

何時の間にか……側に居るのが苦痛では無くなった人。

……未だ、一週間程しか共に居ないと言うのに。もう、私は彼に心を開き始めている。

こんな事は初めてだ。どうしたらいいのか、全く分からない。

親友(キュルケ)に聞く手も考えたが、そうすると、きっと大騒動になるだろう。だから、聞けない。

こうなったのは……この前の人狼(ワーウルフ)の任務以来だろうか？

何と言うか……その……彼の顔を直視し辛くなって来た。別に嫌いになってる訳じゃない。

寧ろ……その……うぅんっ！／／／／／／　と、兎も角。何となく、彼と顔を合わせ辛いのだ。

「……ハァ。これじゃ、本は読めない。」

折角、本をゆっくり読める機会を、彼が作ってくれたと言うのに、その彼の所為で、本が読めないとは……何と言う皮肉だろうか…。

もう、今日はいっその事、読書は諦めて、彼の事を考察でもしてみようか？

……それも中々に面白いかも知れない。そう考えて居た時だった。

……来訪者が現れたのは。

ｓｉｄｅ：三人称

タバサが、そんな事を考え、我知らず微笑んで居ると、突然扉を叩かれた。

思わず、タバサが警戒し、杖を手元に引き寄せると同時に、鍵を掛けた扉に『アンロック』が掛けられ、来訪者が勢い良く部屋に入って来た。

「タバサ！今から出掛けるわよ！早く支度をして頂戴！」

「虚無の曜日。」

それから、キュルケがやいのやいの捲し立て、タバサがそれに、二・三返答し、結局頷いた。

そして、口笛を吹き、シルフィードを呼んで……才人達を追わず、中庭に降り立った。

「ちょっ、ちょっと！タバサ！どうして、こんな所に？

私は彼とヴァリエールを追って欲しいって頼んでるんだけど？」

「彼なら、多分知ってる。」

「え？彼って誰？ちょっと、何処行くのよ、タバサ！其処には、テントぐらいしか無いわよ？！」

「そのテントの中。彼が居る。」

「だから、その彼って誰よ？！あ、待ってって！ねぇっ！タバサってばぁ！！」

「……居た。」

「え？……彼って……彼の事？」

「そう。……起きて。聞きたい事が有る。」

「んあ？……シャル？……ふわぁぁぁ～～っ……っふぅ。んで？どうした？

今日は虚無の曜日だろ？そんな日に俺にわざわざ話し掛けて来るなんざ、珍しいな。

又、梟でも飛んで来たのか？と言うか、読書はどうした？

久々に一人になれる様に……と思って、今日は声を掛けずに我慢してたって～のに。」

そう一気に話し掛け、タバサを掴まえて抱き締めるカイト。為すが儘のタバサ。怒るキュルケ。

「ちょっとっっっ！！！私のタバサに何してるのよ！！離れなさいよっ！！！」

「だが断る。シャルが『嫌だ、どうしても離れてくれ』とでも言わない限りは離さないよ♪」

「タバサ。早く教えてあげなさい。『私はあなたなんか大ッ嫌い！近付きたくも無い』って。」

「……。」

「はっはっは。残念だったな、キュルケ。もうシャルは俺のもんだ。

後は、シャルの口から、俺の告白に対する『諾』の一言を聞くだけだからな。諦めるんだな♪」

「バカ言わないで!!私のタバサがアンタなんかに靡(なび)く訳が無いでしょっ!?

タバサも早く離れて!そんな奴の所にこれ以上居たら、汚れちゃうわ!!!」

タバサの取り合いで、口喧嘩をしている二人。その様をいつもの無表情で見ているタバサ。

……何故か、その顔が楽しそうに見えるのは、気の所為だろうか?

そして、そろそろ、物理的にタバサの取り合いになりそうな頃、タバサはカイトに聞いた。

「貴方に聞きたい事が有る。」

「ん?…ああ、そう言えば、そうだったっけ。……で?何を聞きたい?

才人とルイズの行方か?それとも、何をしに行ったか…か?

将又(はたまた)、この後に起こる事件の事か?

……ああ、お前達の運命については未だ教えられんぞ？時期尚早過ぎる。」

「何か、色々と聞き捨てならない台詞のオンパレードね……。でも、今聞きたいのは、

彼……サイトの行方と何をしに行ったかよ！早く、教えなさい！

そしたら、直ぐにでもタバサを、アンタから引き離してやるんだから！」

「……しょうがねぇなぁ。行った場所は、ブルドンネ街・ピエモンの秘薬屋の近くの武器屋。

目的は勿論、剣を買い与える事。……才人の終生の相棒となる剣をな。」

「終生の相棒？」

「ああ、そうだ。始祖ブリミルの使い魔『神の左手（ガンダールヴ）』の左手。真の相棒。

インテリジェンスソード。名をデルフリンガー。ブリミルを弑(しい)せしめた剣だ。」

「「……え？」」

「只の事実だ。口の堅いお前達だからこそ教えた。それ以外は未だ秘密だ。もう行け。」

side：中庭

二人が驚愕の事実に見舞われるも、何とか再起動し、才人達を追っ

た。

そして、今は、キュルケが買って来た装飾剣と、デルフを賭けて勝負中である。

才人は当然、塔に括り付けられ宙ぶらりん。タバサは読書中。カイトはタバサを愛でている。

「コラ、其処っ！私のタバサに余り近付かないでっっ！！！」

「だが断る。シャルに嫌がられない限りは、俺は側に居るぞい。」

「……もう、初めてもいいかしら？」

「……そんな事よりも、俺を早く降ろしてくれ～～……；；」

……とまぁ、こんな状態である。そして、決闘？が始まり、予想通り、キュルケが勝った。

そして……矢張り、現れた『土くれのフーケ』。ロープが解けず藻掻く才人とルイズ。

あわや、二人が踏み潰されそうになった瞬間であった。

タバサが口笛を吹くよりも速く、二人の元へ潜り込んだ者が一人。

「よう、二人共、お疲れさん。」

「「カイト!?」」

「ほれほれ。俺がこいつを支えてるから、さっさと連れて行きな。」

そう。カイトは片手で、その巨大なゴーレムを止めていたのだ。

そして、二人が何とか抜け出すと、フーケが秘宝を持ち出すのを黙って見ていた。

「ちょっと、アンタ！何で、みすみすフーケを見逃したのよっ！！
アンタなら捕まえられたでしょ！！！」

「ああ、勿論簡単だよ？でも、それじゃ面白く無い。それに俺は目的も正体も知ってるしな。」

「なら、早く行って捕まえなさいよっっっ！！！！！！」

「だが、断る。俺の最も好きな事の一つは、
絶対にＹＥＳと言うと思ってる大馬鹿に、ＮＯと言ってやる事だ。」

「……かっけぇ。」

「「何処がよ！！」大体！アンタ、平民の分際で貴族に逆らう気？！無礼にも程が有るわ！！」

「バカタレ。俺は、平民でも貴族でもない。魔法も使えるしな。」

「じゃあ、何だって言うのよっっ！！！零落（おちぶ）れた元貴族っ？！」

「いいや。俺は、救世主。遍く世界を救うべく存在する……救世主（メシア）だ…。」

「「……救世主（メシア）？」」

「そうだ。詳しい事は、オスマン坊やに聞け。どうせ、翌朝辺りに事情聴取だからな。」

部屋に戻る途次（みちすがら）。タバサを巡って口喧嘩しているカイトとキュルケを余所に、

自分の前を歩いているルイズに、才人は自分の疑問を投げ掛けた。

「……なぁ、ルイズ。」

「……何よ。」

「さっき、俺があのでかいゴーレム？に潰されそうになった時。…何で、逃げなかったんだよ？」

「何故？当たり前でしょ。使い魔を見捨てるメイジは、メイジじゃ無いわ。」

「……ルイズ。」

振り返って、自分に向かって言い放ったルイズの、その意志の強さと表情に。

……その眩しさに、思わず目を細めてルイズに見惚れていた才人であった。

ｓｉｄｅ：学院長室

翌朝。カイト・才人・ルイズ・キュルケ・タバサの五人は、オールド・オスマンに呼ばれた。

『土くれのフーケ』の所為で、てんやわんやの騒ぎになったからである。

よりにもよって、秘宝を奪われてしまった。

衛兵は何をしていた！当直は誰だ！……とまぁ、自分を棚上げしての各々の罵声に、

オールド・オスマンの斜め後ろの壁に凭り掛かっていたカイトの、堪忍袋の緒も切れ掛けだった。

「……そろそろ黙れ、ギトー。そもそも、誰一人として、

真面目に当直をしていた者等、居らんだろうが、戯けが。」

「なっ！？……そ、そもそも！キサマは誰だ！誰の許可を得て此の場に居るのだ！！」

「俺が許可して、俺がオスマン坊やに命じさせた。俺達と貴様達を此処に呼ぶ様にと。

そして、俺が何者かは……坊や、お前が話せ。」

「な?!ほ、本当なのですか!!オールド・オスマン!!!
此の様な、得体の知れない奴の言う事を聞くなどと!!?」

「口を慎まんか!戯けがっ!!!」

そのオールド・オスマンの、何時に無い喝に、教師達は無論、ルイズ達も驚いた。

「……此の者はな?此の儂が産まれる遙か昔より存在し、此の世界を破壊し救う存在と、
伝説・伝承・口伝・御伽話によって、知る人ぞ知る……バケモノじゃ。」

「バケモノとは、酷い言い種だな?俺は、只の人間だぞ?才人と同じ國出身のな。」

「え?!カイトも日本人だったのか!?」

「まぁな。何の因果かは知らんが、平々凡々なサラリーマンが、こんな途方も無い旅人になっちまっただけだ。……あんのバカタレの所為でな（ボソッ）。」

「……そ、そうなんだ……；；；；」

「で、話を戻すがな。そろそろ、ロングビルが情報を持って駆け込んで来る頃だ。

話はそれからでも、構うまい？」

「……う、うむ。」

そう言ってた矢先だった。……ミス・ロングビルが、本当に駆け込んで来たのは。

「遅れて申し訳有りません。実は……。」

「分かっておる。朝から、『土くれのフーケ』について調査して居ったのじゃろう？」

「は、はい。……流石はオールド・オスマン。素晴らしい洞察力ですわ。」

「……いや、残念ながら、これは彼の救世主（メシア）による言じゃ。」

「救世主（メシア）？……ああ、貴方の事でしたか、カイトさん。」

「……まぁ、そういう事だ。先ずは報告をしな、ロングビル。」

――報告中――

「……成る程のう。相分かった！では、早速捜索隊を募るとしよう。我と思う者は杖を掲げよ！」

しかし、矢張り、誰一人として杖を掲げる者は居ない。その内に、ルイズが真っ先に杖を掲げた。

「ミス・ヴァリエール！何をしているのです？！貴女は生徒ではありませんか！」

「誰も掲げないじゃないですか。」

「……っ…！」

続けて、キュルケ・タバサと杖を掲げた。それに対しても、尚文句タラタラな教師陣であったが、

オールド・オスマンが、タバサが『騎士（シュヴァリエ）』の称号を賜っていると言い、

又、他の者もそれなりにやれると褒め称え、他の教師陣を黙らした。

そして、いざ、オールド・オスマンが皆に頼もうとした時であった。

……クックックと、噛み殺した様な笑い声が、部屋に響いたのは。

「……クックックック……。」

「な、何が可笑しい！？」

「…クックック……可笑しくもなるさ。……ジャンは未だ、過去の事に踏ん切れていないから、

解らなくは無いがなぁ……いやはや何とも……スバラシイセンセイ達だな？坊や。」

「ぬ……むぅ。反論出来んのが、何とも痛いのう……。それと、坊やはやめてくれんかの？」

「だが断る。そんな事より……俺も行ってやろう。タバサが協力するならば、俺も共に行く。

構わんだろう？オスマン坊や。」

「う、うむ。其方が行って呉れるならば、此程力強い援軍も無い。是非共頼む。

……というか、其方一人で充分過ぎるじゃろ？其方が行くのであれば、

生徒達をわざわざ行かせる必要は無いのでは…？」

「おいおい。俺の話を聞いて無かったのか？俺は『タバサが協力するならば、俺も共に行く。』

……と、そう言ったんだぞ？タバサが行かないのに、俺が行く訳無いだろう？」

「む……ぬ。……救世主よ。其方は、ミス・タバサに何か思い入れでも？」

「……は？……それこそ、おいおいだぜ。お前とジャンには言っただろう？

タバサは、俺が懸想している女だ。惚れた女（ひと）が行くと言うのに、共に行かない選択肢は無い。

今も、絶賛口説き中なんだからな。……しょっちゅうキュルケに邪魔されるが。」

「当たり前でしょ！？私のタバサをアンタなんかにどうしてやれるもんですか！」

「ガルルルル……！」

「グルルルル……！」

「……喧嘩しない。今は此方が先。」

「……しょうがない。タバサの為にも、此処は一時休戦といこうじゃないか。」

「……いいわよ。タバサの為ですものね。」

ガシッ！　……ンギギギギ……！！！

“……ダメダ、こいつら。”　思わず、そんな感想を異口同音に漏らした面々であった。

「……ハッ！ん、んんっ！……では、改めて。

魔法学院は、諸君等の努力と貴族の義務に期待する。」

「「「杖に懸けて。」」」

「おうおう、けっぱれ～。」

「……其方は何も懸けてはくれんのかのぅ？」

「懸ける程の相手じゃ無いし。そもそも、俺はフーケを捕まえるなんて、只の一度も言ってない。

俺は、『タバサに協力する』と、そう言ってるんだ。……事と次第に依っては、見逃すぞ？」

そのカイトの言に、驚き気勢を削がれた追い打ち組。そして、憤慨する教師陣。

「ふ、巫山戯るな！！！キサマ！賊の肩を持つと言うのか！！！」

「持つよ？『正義の反対は又、別の正義』と言う言葉を知ってるか？誰しも事情は有る。

……まぁ、今回はちょっとばかしやり過ぎな感は有るがな。」

「おのれ……！そうか、分かったぞ！キサマ、賊の仲間だな！？裏から手引きしたのだろう？！

でなければ、あの厳重に守られている塔が破られる筈が無い！」

そのギトーの言葉に、俄に騒(ざわ)つく室内。不穏な空気が漂い、皆、杖を手に警戒心を顕わにした。

それに戦くは、只一人。……オールド・オスマンだけであった。

……最も、タバサだけは、それは有り得ないと思っているのか、警戒心は微塵も無かったが。

そして……そのオールド・オスマンの恐怖を証明するかの様に、カイトの雰囲気が変わった。

「……そうか……つまり、貴様等は此の俺と敵対する…と……そう言うのだな？」

「……到頭、自白したな！矢張り、貴様も一味だったか！」

「ば、バカモノ！！！止めぬか！！！」

慌てて、止めに入るオールド・オスマン。……しかし……少し、遅かった。

「……余り、図に乗るなよ？人間風情が。」

その瞬間、その場に居た者……いや、魔法学院全てをカイトの膨大な魔力が覆い、押し潰した。

“！？！？！？！？！？”

「…貴様等、貴族は本当に救い様が無いな。自分達を絶対的な強者と決め付け、

それに従わない者には、制裁されて然るべきだと。死んで当然なのだと。

余りにも……余りにも、驕り高ぶり甚だしい。高が魔法使い風情が。

己よりも尚。貴様等が神と崇め奉る、あのブリミルよりも尚。格上の存在が居る事も知らず。

無知とは罪だ。……貴様等は貴族なのだろう？罪を……生き恥を曝して生きるよりは、

今此の場にて、潔く自決しろ。……それこそが、最も貴族らしいとは思わんか？」

「……め……救世（メシ）……主（ア）……よ。……な、何と…か……此処は……一つ……

い、怒りを……鎮めて……！！！」

「オスマン坊や。何故、よりにもよって、こんな碌でも無い奴等ばかり集めた？

耄碌したでは済まされん失態だぞ？」

「……ぐ……ぬ……そ…それ……は……！…あ、相……済まぬ…。」

「……フン。もういい。貴様等はホントに、毎度毎度、俺を失望させてくれる。」

そう言って魔力を収めるカイト。気の弱い教師と、大半の生徒達以外は、何とか意識は保てた。

その後、思わずオールド・オスマンが呟いた一言が、皆の心を代弁していた。

「……ふぅ…。何と言う恐ろしさじゃ…。矢張り、幾度体験しても、慣れんわい。

これなら、エルフ全てと一人で戦争した方が余程マシじゃわい。」

「……ぁあん？俺も舐められたもんだな。高がエルフ風情全てと比べられるとはな。

……俺と比べるのなら、最低でも此のハルケギニア全ての生物と戦うぐらい言え。」

「……エルフ一人でも、儂等にとっちゃ脅威なんじゃがのぅ。」

「ハン。それはテメェラが弱過ぎるだけだろうが。もっと鍛えろ、戯け共。」

「…む……ぬぅ。……其方が強過ぎるだけじゃと思うの、儂だけ？」

「……だらしねぇなぁ、おい。……ハァ、まぁいいや。取り敢えず、俺も行ってやる。

そして、捕縛には手を出さん。……後、其処で伸びてるギトーには、オシオキしておけ。

以上だ。……ほれ行くぞ、お前達。杖を掲げたなら、せめて部屋を出る迄はしっかりしろよ？」

「「「誰の所為だ（よ）！！！！」」」「誰の所為！」

珍しく、タバサまで語気を荒げ、カイトに怒った面々。それに爆笑するカイト。

「それだけ、元気が有るなら大丈夫だ。ほれ、さっさと行くぞ?奴が逃げないとも限らん。」

その言葉に、慌てて部屋を出る皆。

そして、ロングビルの誘導によって、フーケと相見えるのであった。

フリッグの舞踏会（前書き）

現時刻（２２：５０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，１６８，２００アクセス　ユニーク：１０２，４１６人
皆様、毎度有難う御座います。

今回で、ようやっと一巻が終わります。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

フリッグの舞踏会

ｓｉｄｅ：馬車上

今、『土くれのフーケ』の潜伏先に、馬車で向かっている最中である。

馬を操っているのは、ミス・ロングビル。荷台に座って居るのは、カイトと生徒達である。

ロングビルを背にして座って居るのが、カイト。そのカイトに抱き締められているタバサ。

そして、そのタバサの隣に陣取っているのがキュルケ。自分の隣に才人を連れ込み、

才人を口説きながら、タバサを愛でるカイトを牽制し……と、大忙しである。

その才人は、キュルケから貰った装飾剣とデルフを担いで、

自分の隣に居るルイズの顔色を伺いながらも、キュルケの口説き落としにデレデレであった。

当然、ルイズは面白くない。自分の使い魔は言う事聞かないわ、

しかも口説かれている相手が、あの仇敵のツェルプストーだわで、むんつくれている。

そんな、剣呑ながらも、何処か賑々しく楽しい雰囲気の下、不意にタバサがカイトに問い掛けた。

「……聞きたい事がある。」

「ん？何だ、シャル。」

「…タバサ。」

「へいへい。んで？何を聞きたいんだ、タバサ？」

「貴方は『土くれのフーケ』の正体を知ってると言っていた。」

「ああ、言ったけど……知りたいの？」

「……（コク）。」

「ん～～……他ならぬタバサの頼みなら聞いてあげたいんだが……どうする？ロングビル。」

「……どういう意味でしょうか？」

「いや、その儘の意味だよ。……言っても良い？ダメ？」

「……私のどんな返答を期待しているのですか？」

「ん～～～……だそうだよ、タバサ。本人が未だ、バラしちゃダメだってさ。」

“……え？……本人？”

「おう。紛れも無く、『土くれのフーケ』本人だ。

だから、さっきから聞いてるんだけど、梨の礫でなぁ。どうしたもんかねぇ……。」

「……あの……そういう根も葉も無い、荒唐無稽な話は止めて貰えませんか？」

「別にもういいじゃねぇか、マチルダ。ちゃんと、『破壊の杖』の使い方は教えてやるからさ。

早く置いてある小屋に連れてっておくれな。

どうせ、アレを使えるのは、俺と才人しか居ないんだし。」

「……へ？俺も使えるの？俺、魔法なんて知らないよ？」

「いやいや、アレ魔法なんかじゃ無いし。歴とした科学だし。」

「……は？」

「あ～……才人、耳貸せ。実はな……なんだよ。」

「……嘘だろ？」

「大マジ。因みに、今現在確認されているのは、他にティーゲルとか、日本刀（ポントウ）とかも有る。」

「……何で？」

「さあ？召喚し易いんじゃない？」

「……マジかよ…。」

「ちょ、ちょっと！何、二人だけで密談してるのよ！私達にも教えてよ！気になるじゃない！」

「いや、説明してもお前達にゃ解らんよ。着いたら見せてやるさ。

マチルダ…威力見せてやるから、着いたら特大ゴーレム出してくれ。一撃で吹っ飛ばすから。」

「……私は、ロングビルですわ……カイトさん。」

「へいへい。まぁ、遅くなればなるほど、その分タップリとタバサを愛でられるから、

俺はどんだけ時間が掛かっても一向に構わないけど。」

「ちょっと、ミス・ロングビル！！もっと早く急いでくれない？！」

またもや、色々と気になる台詞のオンパレードではあったが、

どうせ追求しても、応えては呉れないんだろうなぁ……。

と短い期間ながらもカイトを理解した皆は、敢えて何も聞かず、着く迄馬車に揺られていた。

ｓｉｄｅ：森の中の空き地にある小屋……改め、廃屋

見た目通りであった。あれを小屋と呼ぶのは些か違和感がある。どう見ても、もう廃屋だろう。

廃屋（ハイオク）だけに……ハイオクだけに……ダメだ何も、ネタが出て来（こ）ん。

そんな下らない事をカイトが考えているとは皆、露知らず、

ズカズカと家？の中に入るカイトを、黙って見ていた。

……すると、僅か数秒程で出て来た。その手に、『破壊の杖』らしき箱を持って。

「……それが、『破壊の杖』？」

「ああ、そうだ。……ほれ、才人。開けてみな？……紛れも無く本物だ。」

「あ、ああ。」

そうカイトに促され、箱を開けて見る才人。

「……これが、『破壊の杖』？変な形ね。」

「でも、間違いないわよ？あたし、宝物庫を見学した時に見たもの。」

今迄、見た事も無い不思議な形をした『破壊の杖』を、繁繁と眺める魔法使い達。……一方。

「……凄ぇ……本当に本物だ……！」

「な？本当だったろ？」

「あ、ああ。……でも、本当に何でこんな物がこんな所に？」

「ん～……まぁ、その訳は後でオスマン坊やが説明してくれるよ。」

『破壊の杖』……その正体に驚いている才人と、何故か楽しんでいるカイト。

どうしても『破壊の杖』の正体が気になったルイズ達は、カイト達に話し掛けた。

「ね、ねぇ……コレ…一体なんなの？」

「ん？……まぁ、百聞は一見に如かず。んじゃ、マチルダ。早速だが、ゴーレム頼む。」

「ですから……ハァ……あ～……もういいや。分かった、分かったよ！！

出せば良いんだろ！！！　お望み通り、特大の物を出してやるよ！！！　出て来な！！！」

そう言って、切れたロングビル……基、『土くれのフーケ』は、特大ゴーレムを出した。

「ＯＫＯＫ。んじゃ、才人ソイツでさっさとぶっ飛ばしちまいな。」

「あ、ああ。……しっかし、何で俺にコレの使い方が解るんだろう？…まぁ、いいや！

みんな、コイツの後ろには立つな！！　噴射ガスが行くぞ！！！」

そして、放たれたロケットランチャーによって、一撃で崩れ去るゴーレム。

「た～まや～～…とくらぁ。いやぁ、相変わらず、気持ちの良い威力だねぇ。」

「「……嘘……。」」

「……凄い。」

「……は……ハハハ…本当に使えちゃったよ…；；；；」

「……な、何て巫山戯た威力だい……；；；；；；」

その威力に驚愕している魔法使い組と、使えた事に感動している才人。後は……まぁ、いいか。

みんなが再起動する前に、才人の許へ行き、『破壊の杖（ロケットランチャー）』を受け取り、又、箱に仕舞うカイト。

「どうだ、マチルダ。物凄ぇ威力だったろ？」

「……全くだね……。それを手に入れられたら、もっと最高なんだけどね…！」

そう言って、身構えるフーケ。ルイズ達も身構え、才人とカイトは身構えない。

「別に渡しても構わんが、これもう使えんぞ？」

「「「「……え？」」」」

「これ、単発式だから、一発しか撃てないんだよ。今、もう俺が撃っちゃったし。」

「だから、これはもう只の鉄の塊。オスマン坊やの思い出の品ってだけ。」

「思い出？」

「ああ。後で、坊やに直接聞きな。」

「……分かった。」

そのカイト達の台詞に、何だかなぁ……という気持ちで皆、矛（つえ）を収めていた。

「……はぁ。これじゃ、一体何の為に、あたしがこんなお芝居染みた事までして……ｏｒｚ」

「まぁまぁ。これを汐にテファの顔でも見に行って来いよ。ほれ、餞別。」

「何だい……又、あの鉱物かい？」

「いや、今度はもうちょい色取り取りにしといた。子供達にでもくれてやんな。」

「……ハァ。まぁ、有り難く頂いておくさ。」

「ああ。……何なら、送って行こうか？一瞬で着くぞ？」

「……いいや、遠慮しとくよ。他にも寄りたい所も有るんでね。」

「そうかい。んじゃ、又会う時までな。」

「……正直、もうアンタとは会いたく無いんだけどねぇ……。」

「あ、それ無理。お前にその気が無くとも周りが放って置かないさ。お前さんは知らんだろうが、意外とお前の名前は有名なんだぞ？」

「……マジかい…。」

「大マジ。……まぁ、ドンマイ？」

「……ハァｏｒｚ」

何故か、思いっ切り肩を落としたフーケに、思わず同情してしまう皆であった。

「……ハァ。んじゃ、あたしはもう行くよ。」

「はいよ。……ああ、一つ言い忘れていた。マチルダ、朗報だぞ。」

「……今度は一体何だい？」

「お前の故郷だがな。……もう直ぐ、滅ぶぞ？」

「……何だって？」

「ああ、お前の聞き間違いじゃ無いよ……マチルダ。

お前の生まれ故郷は、もう直ぐ物理的に崩壊する。……良かったな？」

そのカイトの核爆弾並の発言に、その場に居た全員が固まってしまった。

事情が良く分からない才人も、国が滅ぶと言う事に、吃驚仰天していた。

「まぁ、と言っても、一応血筋は残して置くけどな。俺が直(じか)に助けるし。」

「……アンタ……一体……。」

「クスクス……さてな。一応、お前さんにとっちゃ朗報だろう？……そろそろ行きな。」

「……礼は言わないよ。」

「構わんよ。……又、会おう……マチルダ。」

「……フン。」

そう言って、さっさと姿を眩ます『土くれのフーケ』こと、マチルダ。

その後ろ姿を黙って見送るだけの才人達。……結局、その儘全員で帰る事になった。

ｓｉｄｅ：学院長室

只今、説明が終わった所である。ちゃんと全て包み隠さず伝えた。カイトが彼女（フーケ）を逃がした事も。

「……成る程、相分かった。彼の者を逃がしてしまったとは言え、『破壊の杖』はこうして取り戻して来てくれたのじゃ。それで良しとしよう。

君達の『騎士（シュヴァリエ）』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。

じゃが、ミス・タバサは既に『騎士（シュヴァリエ）』であるから、精霊勲章の授与を申請しておいたぞい。」

「「「……え？」」」……あのぅ……本当にいいんですか？

私達、『土くれのフーケ』を捕まえていないんですけど……；」

「何、構わんよ。これも一つの景気付けじゃ。

それと、今日の『フリッグの舞踏会』じゃがの。予定通り、執り行う事に相成った。

今日の舞踏会の主役は君達じゃ。用意をして来給え。精々着飾るのじゃぞ。」

「はい！」「はいっ！！！」「はい。」

「……あの…サイトには、何も無いんですか？」

「……残念ながら、彼は貴族では無い。」

「…俺は何もいらないよ。……それより、カイトには？」

「……うむ。彼の事は宮廷には何も言っておらぬ。言った所で、あの堅物共には理解出来ぬし、

何より、無用な混乱を招くだけじゃ。其方達も余り、公には口にせぬ様に。」

「ほう。少しは知恵が回る様になって来たじゃないか。それでいい。俺を知るには、お前達ではまだまだ早いからな。」

「……相変わらず厳しいのう…。少しぐらいは誉めてくれても良いんじゃない？」

「ハッ！甘えんな、阿呆が。あの碌で無し教員共を雇ってる時点で、既に大一（マイナス）だっちゅーの。」

（やっぱ、マスター古～い…。）

（ソコ、五月蠅いよ！？水薙！）

そんな漫才を、主従がしているとは知らず、才人を残して、四人共退出した。

ｓｉｄｅ：舞踏会会場

とても賑やかな雰囲気で、皆大いに楽しんで居た。……極一部を除いて。

その一部である才人はバルコニーにて、抜き身の相棒…デルフリンガーを相手に、

ちびちびと酒を飲みながら愚痴ってる。（※諄（くど）い様ですが、お酒は二十歳からです。）

それに対してキュルケは、沢山の男子に囲まれて、オッホッホ……とやっている。

やっているが、時折……基、しょっちゅう自分の親友…タバサの方へ目をやり、

彼女にちょっかいを出している、一人の男を監視していた。

……そう。勿論、皆さん御判り頂いているだろう。当然、カイトである。

執事服の様なタキシード……執事服でいいか。…を着て、タバサの所に直行していた。

「よう、シャル。……似合ってるぞ。……とっても綺麗だ。」

「……ありがとう。…後、タバサ。」

「大丈夫だよ、誰も聞いちゃいないさ。既に確認済みだ。

どうしても気になるなら、遮音結界でも張ろうか？」

「……遮音結界？」

「ああ。文字通り音を遮る結界。つまり、俺とシャルの声以外、俺達には聞こえなくする物だ。」

「……。」

「とは言っても、今言った様に、誰も俺達の話なんか聞いていないさ。

……全く、みんなバカだよなぁ…。こんなに可愛くて綺麗なシャルに気付かないなんて。

まぁ、その御陰で、俺がシャルを独り占め出来るんだから、逆に感謝するべきなんだろうけど。」

「……／／／。」

「……シャル…顔、赤いぞ？」

「／／／／／／な、何でもない。」

「そうか。……シャル、可愛い（ボソッ）。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「クスクス……。」

可愛く、顔を赤らめているタバサを愛で、堪能しながら歓談していると、

何処からかの視線が厳しくなって来た。…それに苦笑しながらも、その相手を手招きして呼んだ。

「……キュルケ…。その睨み付ける様な視線……そろそろ、止めてくんない？」

「お断りよ。私の大事な親友に、変な虫が付かない様にしないとね。良い事？タバサ。

私が、もっと良い男を探して来てあげるから、早くこんな奴とは手を切っちゃいなさい。」

そう言って、タバサの頬に一つキスを落とし、カイトを睨み付けるのも忘れず、

男達の許へ戻って行った。……それに苦笑しながら、当然懲りもせずタバサに話し掛けるカイト。

「……ありゃりゃ…。トコトン警戒されてるねぇ…。……にしても、愛されてるな…シャルは。」

「……友達。」

「クスッ……勿論、分かってるさ。一番大事な親友だろ？キュルケは。」

「…（コク）。」

「……良かったな。大事な……唯一無二の生涯の友が出来て。……大切にしな…シャル。」

「……うん。……貴方にも居るの？」

「……ああ、居る。俺にも、唯一無二の心友がな。と言っても、二人だが。」

「……そう。」

「ああ。……？どうした、シャル？」

「……な、なんでもない。」

まさか、その心友を思い浮かべていたであろう時の笑顔に、思わず見惚れていたとは言えないタバサであった。

そろそろ宴も酣（たけなわ）となった頃、ルイズが着飾って現れた。皆、挙ってルイズに声を掛けていたが、

悉くあしらわれ、ルイズは真っ先にバルコニーに向かった。

それを見送ったカイトは、ハシバミ草と格闘しているタバサに話し掛けた。

「……さて。所で、シャル。少し、いいか？」

「……何？」

「……シャルロット・エレーヌ・オルレアン嬢。私（わたくし）めと踊って頂けますか？」

「……私は…。」

「……解っているさ。でも、今ぐらいは……少しぐらいは羽目を外

しても罰は当たらないよ。

……シャルロット。改めて……俺と…踊ってくれないか？」

「……お願い……します。」

「……有難う……シャル。」

そうして、踊ろうとしていた所に、無粋にも梟が舞い込んで来た。

「……。」

「シャル。それは後回し。俺の方が先約だろう？」

「……でも、これは任務。」

「大丈夫。一踊り終わったら、俺が一緒に、一瞬で連れて行ってあげるから。」

「……でも……。」

「……シャル…。御願い。」

「……分かった。……一曲だけ。」

「ああ……有難う。……クスクス…ほら、見てみな…？　ルイズと才人も踊ってる。」

「……うん。」

「……では、御手を…Ｌａｄｙ。」

「……はい。」

その晩の二人のダンスは、見ていた者全てを惹き付ける程、楽しそうで……綺麗だったそうな。

そして、それを眺めていた親友は、多分に悔しい気持ちは大きかったものの、

その表面に浮かんでいた笑顔は、彼女に懸想していた者を……その事を忘れさせる程、

穏やかに……綺麗に微笑んでいたとか。

フリッグの舞踏会（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、タバサの冒険を挟んで、二巻に少し入ります。

ようやっと、本格的に物語が始まり出しました。……思ってた以上に長かったなぁ……；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトとタバサとギャンブラー（前書き）

現時刻（００：５０）
ＰＶ：１，１９４，３０８アクセス　ユニーク：１０４，３８６人
皆様、いつも有難う御座います。

そして皆様、大変御待たせ致しました。

では、今話も拙作を御覧下さい。

カイトとタバサとギャンブラー

ｓｉｄｅ：プチ・トロワｉｎヴェルサルテイル宮殿

イザベラが余りにも暇で、メイドを弄って遊んでいる所に、突然、目の前にカイトとタバサが、おめかしして現れた。

「…ッッ！！……何度見ても慣れないねぇ…。そろそろ、それ止めないか？」

「だが断る。驚き顔のイザベラなんて、滅多に拝めないからな。…中々に可愛いじゃないか。」

「なッッ！？／／／ば、馬鹿な事言ってんじゃないよっ！！／／／

……ったく…アンタと話していると、ホントに調子狂うよ。」

「ハッハッハ…まぁ、シャルも可愛い嫉妬してくれたし、良い事尽くめだねぇ。」

…そう。実は、今カイトが「イザベラが可愛い」と言った瞬間に、タバサがカイトを横から抓っていたのだ。

タバサもそれに気付き、慌てて手を離した。……どうやら、無意識にしていたようだ。

その様を思わず微笑ましく見ていたメイド達。

それに気付きながらも、先ずはカイトに突っ込むイザベラであった。

「……アンタ、前にその人形に求婚してるとか言ってたけど……アレ、本当にしていたのかい？」

「御覧の通りだ。今の所、どうやらまずまずの成果の様だな。

シャルと何時も一緒に居たのは、無駄では無かった様だ……うむうむ。

後、もう一押し……いや、二押し半……って所かな？……ソコントコどうなん？シャル。」

「……知らないっ／／／」

「……ふむ。どうやら、満更でも無い様だね。いや、良かった良かった。

嫌がられていたらどうしようかと思っていたが、その心配はしなくても良いみたいだな。」

「……／／／／／／」

タバサが珍しく……いや、人形（タバサ）となってからは、初めて皆に見せた赤ら顔に、萌えるメイド達。

カイトが、皆に向けて立てた親指に、思わず同じ反応をしてしまっ

ていた。

そして、イザベラは、そんなタバサに吃驚仰天していて、それ所では無かったそうな。

「……はっ！…ゴホンッ！！そんな事より……今日は偉くおめかししてるねぇ？

そんな上等な物が買える様な金はやってない筈だけど？……盗んだのかい？」

「母様のお下がり。」

「……そりゃ、又、なんでそんな物を着てんだい？」

珍しく、そんな余計な事を聞いて来るイザベラに、タバサも少なからず驚いていた。

……無表情だったが。それを、微笑みながら聞いていたカイトが、イザベラに代わりに答えた。

「ああ、今日は『フリッグの舞踏会』って言ってな。トリステイン魔法学院の踊りの日なんだ。

それで、俺とシャルがこの一張羅を着て、今迄一緒に踊ってたって訳。」

「……今迄？」

「そう。本の直前。……ほれ、見てみ？未だ、若干シャルの頬が上気してるだろ？」

言われてやっと気付いた。……成る程。確かに、少々赤い。先程の照れとは少し違う赤さだ。

「いやぁ、本当は一曲だけにするつもりだったんだけど、ついつい……ねぇ？」

「……。」

「……で？結局何曲踊って来たって？」

「ん～？……ん～～…三曲？か、四曲か五曲ぐらい…かな？

……いや、だってさ…しょうがないだろ？　ほれ、今のシャルを見てみな？

普段でさえ凄く可愛いのに、更にこんなに綺麗になって、益々可愛くなってさぁ……。

そりゃ、歯止めも利かなくなるってもんさね。……なぁ？分かるだろう？」

“はい！勿論っっっ！！！！！……あ。”

カイトに振られたメイドさん達が、挙って異口同音に答えた。……イザベラが溜息を付いた。

「……はぁ。もういいよ。……ほら、これが今回の任務だよ。」

そう言って、任務の書簡をタバサに手渡すイザベラ。

……その気落ちした姿に、何となく同情しそうになったメイド達であった。

「……。」

「……ああ、そういや、今回の任務はギルモア撲滅運動だったな。」

「…なんだ、アンタ知ってんのかい。…なら、話は早いさね。」

「ああ。今回の任務は非常に簡単だな。シャルの博才と、シルフィードの協力があれば直ぐだ。」

「……あの子が？」

「ああ。大いに役に立つぞ。…と言うか、今回のキーマンはあいつだ。」

「……そう。」

「……まぁ、いいさ。期待しないで待ってるよ。それと、賭博場では、

お前はド・サリヴァン伯爵の次女、マルグリットと名乗りな。……いいね？」

「……分かった。」

「んじゃ、早速行くか。取り敢えず、向こうに着いたら着替えるか。向こうで二～三日ぐらいはノンビリ出来るしな。」

そう言って、又もや忽然と姿を消すカイト達。……やっぱ、慣れないよねぇ……と、

もう半ば、諦め掛けているイザベラなのであった。

ｓｉｄｅ：ベルクート街ｉｎリュティス

ガリア首都に於ける繁華街。その通りをとある三人が歩いていた。

「御姉様、今日もとっても可愛い！　きゅい！」

「全く以て、シルフィの言う通りです。御嬢様は、今日も大変可愛くあらせられます。

……それにしてもシルフィ？　少々、燥(はしゃ)ぎ過ぎですよ。」

「……やっぱり、その喋り方……気持ち悪いのね。……絶対、慣れないのね。きゅい…。」

「……同感。」

「おや。それは又、酷い御言葉。私(わたくし)は何時も通りに、話して居るだけで御座いますよ？」

「……本性を知らなかったら、絶対に騙されてるのね。」

「……（コクコク）。」

……御判り頂けるだろうか？　今、馬鹿丁寧な敬語を話している奴が、カイトである。

何故、こんな事に成っているかと言うと、以下の通りである。

ｓｉｄｅ：回想ｉｎ空中

只今、件の宝石店が在る、ベルクート街に向かっている最中である。

矢張り、タバサを後ろから抱き締めながら愛でていたカイトが、思い出した様に話し出した。

「あ、シャル。俺、今回はシャル付きの執事役に徹するから。シルフィードも頼む。」

「きゅい。御姉様の役に立てるなら、わたしはいいの！」

「……この子に何をさせるの？」

「ん？それは、向こうに着いてからのお楽しみ♪先ずは、シャルが賽子博打で大儲けしてくれ。

そうすっと、ギルモアがトーマスを連れて現れるからさ。その口車に乗って、一旦休憩だ。

そうしたら、後はシルフィードの出番だ。それ迄は、シャルの独擅場だな。」

「……トーマス？」

「ああ。オルレアンの屋敷でコック長だったドナルドの息子だ。

……良く遊び相手になってくれたろう？　ペルスランの目を盗んでさ。」

「……思い出した。……でも、何故？　何故、貴方はそんな事まで知っているの？」

「内緒♪　その内、教えるよ。んで、通された部屋で休憩中に、トーマスが、ギルモアの目を盗んでシャルに接触してくるから、好きに語らうと良い。

取り敢えず、そんな所かな。」

「……そう。…トーマス。」

「……任務の事を考えるのも良いけど……今は、俺と一緒に居る事に、集中して欲しいな。」

「……。」

その言葉に返答こそしなかったものの、カイトに預けていた背に、体重を更に掛けた。

それに微笑みながら、タバサの髪を優しく撫で、着く迄の僅かな間を堪能した二人だった。

ｓｉｄｅ：宝石店内

そして……執事に徹した結果がこれだよ！……そんな声が何処からか聞こえて……来ないか。

まぁ、そんな訳で、只今タバサ主従は、物凄い気持ち悪さを絶賛体験している真っ最中である。

そんな、微妙にどんよりした雰囲気の儘、とある宝石店に入って行った。

そして真っ直ぐに、一際大きなブルーダイヤモンドの許へ直行した。

「いらっしゃいませ、御嬢様。本日は何を御探しですかな？」

「これ。」

「…御嬢様。失礼とは存じますが、その宝石は売り物では御座いません。」

「これが欲しい。」

「……二千万エキューは致しますが……。」

「買った。」

「では、手付けを頂きますが……。」

手付けとして、銅貨三枚を手渡すタバサ。……本来ならば、怒鳴られる様な金額だが……。

「確かに頂きました。……では、こちらへ……。」

その儘、地下へ通される一行。カイトをチラ見した後、杖をドアマンに預けるタバサ。

……そして……扉が開け放たれた。

ｓｉｄｅ：地下賭博場

其処は正に賭博場だった。眩い光、人々の喧噪、酒やパイプ煙草の匂い……。

「地下の社交場『天国』へようこそ！」

その名とは、程遠く離れた檻の中であった。

その光景を、タバサとシルフィードが、物珍しく見回していると、支配人のギルモアが現れた。

「これはこれは、御嬢様。ようこそおいで下さいました。当支配人のギルモアで御座います。」

そして、聞いてもいないのにペラペラと、此処は合法の場だとタバサに話している。

その内、タバサの身元を確認し、その確認が取れた後、ようやっと博打が打てる様になった。

……そして、タバサが選んだものは……自身が最も得意とする賽子（サイコロ）博打。

得意と言うだけあって、巧みに賭け時を狙い、チップを次々に増やしていく。

然（そ）う斯（こ）うしている内に、タバサに近付く男が一人……そう、件のトーマスである。

「御嬢さん、凄いじゃないですか。何か御飲みになりますか？」

「……。」

「私は、御客様御相手係の……。」「…トーマス。」

「…！！！…お、御嬢様……わ、私の事を……？」

「……忘れていた。……でも、彼が教えてくれた。」

「……彼？」

「私（わたくし）めで御座います、トーマス様。」

「……貴方は？」

「私（わたくし）は、マルグリット御嬢様付きの執事のカイトと申します。……トーマス様…此処では他人（ひと）の目が御座います。……御嬢様との御話は後程…。」

「……畏まりました。……では、御嬢様……。」

「スパークリング・ワイン。」

「……は？」

「飲み物。」

「……畏まりました。少々御待ち下さい。」

そう言って去って行く、トーマスの後ろ姿を、何となく目で追うタバサ。

それを微笑ましく見守るカイトと、タバサの事を心配しながら、警

戒しているシルフィード。

そうしていると、隣のテーブルで乱痴気騒ぎが起こった。

どうやら、賭に負け、イカサマだ！と叫んでいる。だが、支配人に軽くあしらわれた様だ。

しかし、外に出て行ったと思ったら杖を手に、特攻して来た。

……が、あっさりとトーマスに下された。忌々しげに舌打ちをし、賭博場を後にした。

貴族の苦々しい顔と、平民の拍手喝采に迎えられるトーマスであった。

時は経ち、夜も更けた頃、タバサは大勝していた。思わずギルモアが仲介に入る程だった。

「御嬢様……、これはこれは大変な大勝で御座いますな。

さて、そろそろ夜も更けて参りましたが……。」

「続ける。」

そのタバサの言葉に響動(どよ)めく観客。待ってましたとばかりに目を細めるギルモア。

タバサに大負けしたシューターを下がらせ、更に大口の賭けに乗らせようとするギルモア。

当然それに乗っかるタバサ。しかし、シルフィードが否やを唱えた…が、カイトに窘(たしな)められた。

そして、続けて席を用意しようとしたが、タバサが休憩したいと言い、一旦お開きになった。

ｓｉｄｅ：休憩室

可成り上質な部屋に通された。……どうやら、上客を持て成す為の部屋らしい。

大勝したタバサをこの儘、逃すつもりは無いと言う事だろう。

「……さて。魔法による盗聴も無し。聞き耳を立ててる者も無し…と。やっと普通に話せるぜ。」

「……やっと、気持ち悪さが収まったのね……きゅぃ。」

「ん？何か、変なモンでも喰ったのか？」

「……違う。貴方の話し方。」

「ああ。……しょうがねぇだろ？　今の俺は執事なんだからさ。まぁ、諦めるこったな♪」

「「無理（なのね）。」」

「……酷ぇな、お前等。所で、何故に俺には敬語が似合わないと思っているのか、

小一時間程、本気で問い詰めたい。……嗚呼、是非にも問い詰めたい。」

「何故、其処に疑問を持つの？」「どうしてそんな当たり前な事聞くのね？　きゅい。」

「……OTL」

一頻（しき）りカイトを揶揄い、少々鬱憤を晴らしたタバサ主従は改めて、

落ち込んでいるカイトに、御構い無しに聞いてみた。

「……それで、この子に何をさせるの？」

「きゅいきゅい！　そうなのね！　シルフィも物凄く気になるのね！」

「……シクシク……。ハァ……今回シルフィードに手伝って欲しいのは、獣探しだ。」

「「獣探し？」」

「そう。ギルモアは、古代の幻獣エコーの子供を人質……いや、獣質？にしてな。

その大人達を脅してカードに化けさせて、客から金をわんさか巻き上げてるのさ。

んで、そのエコー達を同じ古代種であるイルククゥに探して、助け出して貰いたい。」

「何て酷い奴なのね！　シルフィの遠い遠い親戚みたいな仲間達を使うなんて！！

絶対に見付けて助け出してあげるのね！　そんでもって、絶対に許さないのね！　きゅい！！」

「ああ、全くだな。本人はトーマスには喜捨院だとか嘯いているが、真っ赤な偽り。

全額自分の懐にチャックポックズンだ。」

「ちゃk……？　……意味は全く分からないけど、酷い奴なのは間

違い無いのね！　きゅい！」

「……その事を、彼に…。」

「いやまぁ、トーマスも薄々勘付いているだろうさ。……だが……。ギルモアも一応は、あいつにとっては命の恩人には違いないからな。

……シャル。今回、お前の前に立ち塞がるのは、あいつだ。……闘えるか？」

「……闘う。」

「……そうか…まぁ、ガンバレ。あ、それとシャル。明日の賭はチマチマと賭けた方が良いぞ。

シルフィードがエコー達を見付ける迄、結構時間が掛かるだろうからな。」

「分かった。」

「シルフィード。今回はお前が如何に早くエコー達を助け出せるかが鍵だ。

そうしないと、負けず嫌いのシャルの事だ。

金を全部擦った後、自分の着ている物迄、絶対に確実に賭けるだ

ろうしな。」

「分かったのね。確かに、御姉様の負けず嫌いは直し様が無いのね。きゅい！」

「……。」　ポカポカポカポカ！

「痛い！　痛いのね！　きゅいきゅい！　ゴメンナサイなのねーッ！！」

そんな和気藹々としていた中、不意にドアがノックされた。……どうやら、トーマスの様だ。

互いに目配せし、彼を迎え入れた。

「……トーマスで御座います。御嬢様、御飲物を御持ち致しました。」

「……どうぞ。」

「失礼致します。」

そう言って入って来たトーマスは、側に居た執事（カイト）ともう一人（シルフィード）に、僅かに目を見開いたものの、

ワインの壜をテーブルに置き、タバサの足許に跪いた。

「……シャルロット御嬢様。御久し振りで御座います。」

「……トーマス。」

「……はい。御懐かしゅう御座います。

……所で、御嬢様。申し訳ありませんが、御付きの方は……。」

「構わない。此の二人は、私の事を知っている。」

「何と！」

「その通りで御座います、トーマス様。どうか、私共（わたくし）の事は御気に為さらず、

マルグリット……いえ、シャルロット御嬢様と、ごゆっくりと御歓談為さって下さい。

時間ならば未だ、御座いますので。」

「……分かりました。今は、その御言葉に甘えさせて頂きます。」

そのカイトの機転に感謝するも、矢張りその敬語に慣れず、少々顰めっ面な主従であった。

ｓｉｄｅ：厨房ｉｎ賭博場

その後、暫し互いに語らい、手形を渡して裏口から逃げる様に、御願いしたトーマス。

しかし、その2～3時間程経った後、タバサがカイトだけを伴って現れた。

その事に驚き、愕然とするトーマスと、満面の笑みで迎えるギルモア。

タバサの指定で、場所を誰もが見張れる厨房に移し、

ギルモアを相手に、『サンク』と呼ばれるカードゲームを始めた。

「……所で、御嬢様。もう一人の御付きの方はどうなさいましたかな？」

「御嬢様に代わって私（わたくし）めが御説明致します。

実は、その連れが此処を見学して回りたいと突然言い出し、

勝手に部屋を出て行ってしまいまして。

幸い、その者は何とか捕まえる事が出来、今は御用意頂いた部屋に縛り付けて居ります。」

「……ああ、成る程。その御付きの方を探すので、今迄時間が掛かって居られた訳ですな？」

「はい。誠に申し訳ありません。……いや、貴方様が大変御聡明な方で助かりました。

私が細部迄、御説明申し上げる手間が省けました。誠に有難う御座います。」

「はっはっはっは……いやいや、何の何の。

……いやはや、御嬢様の執事は、中々に人を煽てるのが御上手な様だ。」

「……。」

実は、何気にタバサも驚いていたのだが、何時ものポーカーフェイスで事無きを得ていた。

そんな下らない事を話しながらも、着々とタバサの負けは続いていた。

チマチマと賭けるタバサに少々苛々はしているものの、

一応勝ってるからか、少しは何とか抑えられている様だ。

「おやおや。先程の賭け方とは又、打って変わって随分御慎重なのですなぁ？」

「……別に。機を伺っているだけ。」

「それはそれは。大変失礼致しましたな。……さて、では続けましょうか？」

そう言って、タバサの掛け金（チップ）を根刮ぎ奪い去ろうとしていた時だった。

「ちょっと待つのね！！」

ようやっと、シルフィードがエコー達を助け出して来た。

そして、今迄のその種を明かし、カードに化けていたエコー達は、その子供の元に戻った。

それを見ていた他の客達が、ギルモアを吊し上げようと飛び掛かったが、

トーマスに塞がれ、怯んだ瞬間にトーマス諸共、文字通り煙に巻かれて逃がしてしまった。

ｓｉｄｅ：抜け道

「……クソッ！　何でばれたんだ…！　エコーの声など、人間には聞こえないと言うのに…！！」

「……ギルモア様、こっちです。」

只今、逃亡真っ最中。……だがしかし、カイト達から逃げ果(おお)せる訳も無く。

「……やっほー。トーマス＆河豚(ふぐ)豚ギルモアちゃん？」

「「!?!?」」

「ちゃんとか、付けないで欲しいのね。物凄ーーーく気持ち悪いのね。」

「同感。」

「そうかい。そいつは失敬。んじゃ、改めて、ヤッホー。トーマス&家畜。」

「「前より酷くなった（のね）。」」

「でも、何の問題も無いだろう?」

「「勿論（なのね）。」」

そんな三人の漫才に、ぶち切れ掛けているギルモア。
そして先程迄と、雰囲気が丸で違うカイトに警戒しながらも、タバサに問うトーマス。
「……御嬢様。どうやって此の場所を？」
「風を辿った。……それより、シレ銀行の鍵を。」
「エコー達から事情は全て聞いてるのね！　お前が稼いだ金は全部懐に入ってるのね！
それで好き放題に使い捲ってたのね！！」
「当たり前だ！　誰が貯めた金を配る様な真似をするか！　そんな事して堪るか！！
トマ！　奴等を片付けろ！！！」
「トーマス。」
「……薄々と判って居りました。……ですが……それでも、ギルモア様は……
私を拾ってくれた恩人なのです。……シャルロット様。御嬢様は王政府の人間ですか？」

「……そう。」

「何故ですか？　どうして御嬢様は、御父上を御殺めになった王政府に協力するのですか？

……私には、其方の方が理解出来ませぬ。

……貴族では無い私には、御嬢様の考えが解り兼ねます。

……シャルロット御嬢様……どうして？」

「今の私は人形（タバサ）。……未だ、シャルロットじゃ無い。」

そう言って、お互いに身構えた二人と、見学組の二人を併せた四人の耳に、

低く、くぐもった笑い声が聞こえた。……そう、カイトだ。

「ククク……。何故もへったくれも無いさ。母親を人質に取られれば、従わざるを得ないだろう？

それより、シャル。もう、争う必要は無いぞ？　今、俺が鍵を盗ったからな。」

“な!?　い、何時の間に?!”

そう。カイトの手には、既にシレ銀行の貸金庫の鍵と思われる物があった。

「さて。……で、御覧の通り鍵は此処に有る訳だが……未だ遣る気か?　トーマス。」

「あ、当たり前だ!　何をやっている、トマ!　さっさとそいつから鍵を取り替えさんか!!」

「はい、ギルモア様。……あなたも先程とは雰囲気が丸で違いますね?　其方が本性ですか?」

「御覧の通りさ。んじゃ、シャル。そいつに引導を渡してやれ。あの家畜はその後、俺が殺る。」

「……分かった。」

「……御嬢様と事を構えなければならないとは……これ以上悲しい事は御座いません。

……しかし……ギルモア様を殺させる訳にはいきません。」

そして……結果、タバサがトーマスの手品を見切り、気絶させた。

「な!?　と、トマッ!!　な、何を寝ているか!　早く起きてこいつらを……ヒィッ!?」

「さてさて。……所で、シャル。こいつの処刑方法……俺に任せて貰っても?」

「……殺す必要は…。」

「ダメ。こいつは此処で逃がしても、後々碌な事はしないと分かってるから、今此処で殺すの。

これは決定事項。だから、聞いてるんだ。……コイツの始末は俺に任せてくれるか?…と。」

「……分かった。…但し、私も立ち会う。貴方の力に興味が有る。」

「へいへい。……まぁ、いいや。そう言う訳でな。……まぁ、もう諦めろや。」

「い、嫌だっ!　わ、私に出来る事なら、な、何でもするから……

殺さないでくれ…！」

「聞こえなかった？　あ・き・ら・め・ろ♪

ファースト・イグニッション　ガン・オブ・マナ　エレメント・ガン　ライトニング」

そうして現れた銃は、バチバチと雷がその周囲を走っている……奇っ怪な銃だった。

しかし……その内包されている魔力量に、タバサの目が見開かれた。

「まぁ、偶にはこいつも使ってやらなきゃな。……じゃ、さよなら。

雷霆（ライトニング）　暴発（バースト）」

その銃から放たれた光線……電磁砲（レールガン）は、ギルモアを一瞬で包み込み、瞬間的に蒸発させた。

その威力に驚愕し、瞬きも出来なかったタバサとシルフィード。

「良し。お疲れさん、ライトニング。……さ、これで任務は完了だ。帰ろうか……シャル♪」

そう言って、振り返ったカイトの笑顔に、思わずホッと安堵した二人であった。

ｓｉｄｅ：空中ｏｎシルフィード

只今、任務報告完了後である。何時も通り、カイトがタバサを後ろから抱き締めていると、

その後ろから、呻き声が聞こえて来た。

「……ぅ……うぅ……ッ！？　…こ、此処は……？！」

「……私の使い魔の上。」

「……シャルロット様？…何処に…！　貴様は！！」

「よう、トーマス。起きたか？　……おっと、此処で暴れるなよ？落っこちて死ぬぞ？」

「…くっ……！」

……そう。カイトの後ろで呻いてたのは、あのトーマスであった。

その後、カイトに抱き締められた儘のタバサが、気絶していた間の事情をトーマスに話した。

そして、すっかり意気消沈したトーマスに、カイトがとある条件を出した。

「所で、トーマス。一つ、提案があるんだが……聞くか？」

「……何でしょうか？」

「今、シャルはトリステイン魔法学院に居る。……お前も其処で働いてみないか？」

「……どういうつもりですか？」

「どういうも、こういうも無ぇさ。ギルモアはもう居ない。……俺が殺したからな。

もう、お前の居場所は何処にも無い。……だから、シャルの側で仕えてみないか？…とな。

一応、元コック長の息子だ。或る程度の料理ぐらいは出来んだろ？

序でに、その手品で皆を楽しませてやれよ。料理長には、俺から言ってやるさ。」

「……御嬢様。……私は……。」

「……私は未だ、一度しか貴方の手品を見破ってない。」

「……ぁぁ……お、御嬢……様……くぅぅっ……！」

その後、一週間と経たずに、トーマスは魔法学院で人気になっていたそうな。

カイトとタバサとギャンブラー（後書き）

如何でしたでしょうか？

前回、二巻に少し入ると言いましたが、御覧の通り未だ入れませんでした。申し訳ありません。

次回も、タバサの冒険になってしまうと思います。……次こそは二巻に……次こそはァァァッッ！！

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトとタバサとミノタウロス（前書き）

現時刻（０３：３５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，２１６，５４４アクセス　ユニーク：１０６，２５３人
皆様、いつも有難う御座います。

御覧の通り、又、早くも、１００，０００アクセスを超えました。
心より感謝致します。

では、今話も拙作を御覧下さい。

カイトとタバサとミノタウロス

ｓｉｄｅ：空中ｏｎシルフィード

今日は、トーマスを魔法学院に紹介してから2～3日程経った、とある任務の帰り。

早くも、トーマスは自信の得意な手品で、魔法学院に溶け込み始め、ホッと一安堵したタバサ。

そして、何時も通りにタバサを後ろから抱き締めながら、空の遊覧を楽しむカイト。

そんな頃だった。シルフィードが騒ぎ出したのは。

「御姉様、お腹が空いた。お腹が空いたのね、きゅいきゅい！」

「我慢して。」

「我慢出来ないのね！　お腹が空いたのね！　きゅい！」

「だめ。時間が無い。」

「シャル、俺も腹が減った。」

「……。」

「まぁまぁ、偶には寄り道してもいいじゃん。もし、どうしても時間が無い時は、

俺が一足飛びで連れて行けるしさ。…なぁ、シルフィード？」

「きゅいきゅい！　そうなのね！　いざって時は頼めば良いのね！　御姉様、お腹空いたのね！」

「……ハァ。」

「しょうがないってさ、シルフィード。……丁度お誂え向きに、彼処に良さ気な街が在るぞ。」

「…ホントなのね。尖塔とか寺院とか在って、割と素敵な街なのね、きゅい！

シルフィは彼処が気に入ったのね。あの街に決めたのね。きゅい！」

そう言って、近くの森に急降下し、人間化するシルフィード。

浮き浮きとしながら、街に向かうシルフィード。溜息を付き、本を読みながら後を追うタバサ。

そんなタバサの頭を撫で、愛でながら一緒にゆっくりと後を追うカイトが居た。

ｓｉｄｅ：宿場街

主要な街道から外れたこぢんまりとした宿場街。其処の酒場に入った。

その酒場に入って来た不相応な三人を見て、客も店主も一瞬眉を顰(ひそ)めたが、

貴族(タバサ)に直ぐに気付いて、店主が寄って来た。

……尤も、中に居た老婆を見て、北叟笑(ほくそ)んだカイトには誰も気付けなかったが。

「これは貴族様。こんな辺鄙な場所に又、珍しいこって。」

「わたし達はとてもお腹が空いてるのね！

何でも良いから美味しい物を持って来るのね！　きゅい！」

「あいさ。生憎と貴族様をお迎え出来る様な上品な店じゃ無ぇが、此の辺りでは割と評判でね。

まぁ、取り敢えず空いてる席に座って、待っててておくんな。」

席に着いて少し待っていると、次々と出来立ての料理を持って来た。

割と評判と言うだけあって、どれも中々に美味しかった。

「どれも美味しいのね！」

「…もきゅもきゅ……（コク）。」

「成る程……これは悪くない。」

三者三様に誉めながら、ムシャムシャと料理を堪能していると、

タバサ達の食べっぷりをジッと見ていたとある老婆が、よろよろと来てタバサの足許に跪(ひざまず)いた。

「騎士様！　騎士様に御願いが御座いますのじゃ！」

「おい、婆さん！　そういう事は余所でやってくんな！　商売の邪魔だ！」

「お前に話してる訳じゃ無いよ！　黙っててておくれ！　…！　ごほ

っ！　ごほごほ…！」

「飲んで。」

「ごほっ！　…あ、有難う御座ぇますだ……。……ふぅ。

……この婆の頼みを聞いてくれますか…？」

「放っときなせぇ！　この婆さん、昨日ふらりとやって来たと思ったら、

来る客来る客に同じ事を話すんで、こちとら商売上がったりでさぁ！！

薄気味悪いったら、ありゃしねぇ！！」

その店主の言葉に、又、喰って掛かろうとした老婆を引き留めたのは、とある声…言葉だった。

「ああ、そうだな…話す必要は無い。

エズレ村のドミニク婆さん。依頼内容は、ミノタウロスの討伐。

……相違無いか？」

「へ？……へ、へい。間違い御座ぇません。……な、何故その事を御存知で？」

「ハッ！　一日ずっと同じ事言ってりゃ、誰かからは聞けるだろうよ！」

「それは無い。私達は、此の辺りに来たのは今日が初めて。……やっぱり知ってたの？」

「まぁな。……やっぱ気付いてたか？シャル。」

「……珍しいとは思ってた。……でも、それだけ。」

「そうか……相変わらず鋭いな、シャルは。」　ナデナデ

「……。」

カイトに頭を撫でられる儘でいるタバサに、少々躊躇(ためら)いながらも声を掛ける老婆(ドミニク)。

「あ、あのぅ……そ、それで……御依頼の方は……？」

「ああ、構わないよ。高がミノタウロス風情なら、俺のデコピンで消し飛ぶさ。」

“……は？”

そのカイトの台詞に、全員が凍り付いた。……誰もが知るミノタウロスの恐怖。

それをまぁ、あっさりと雑魚呼ばわりしているのだから。

流石に、今の言にはシルフィードも、タバサに代わって異を唱えた。

「きゅい！　貴方、ミノタウロスの事、どれだけ知ってるのね？　闘った事でもあるのね？」

「まぁ、有るっちゃぁ有るがなぁ……あれはあんまり参考にはならないしなぁ。」

「……どんな闘いだったのね？　きゅい。」

「ん？　……ん～……ミノタウロスの群れ数千頭を一撃で消し

飛ばしただけだが。」

“……。”

今度こそ、全員本当に絶句した。でも、少し気になった事があったシルフィードは聞いてみた。

「……因みに、どんな理由で闘ったのね？」

「邪魔だったから。」

「……は？」

「いや、だから、通行の邪魔だったから、纏めて吹き飛ばした。……それがどうかしたのか？」

「……いや、何でも無いのね。……御姉様、この人恐過ぎるのね。……きゅぃ。」

「……。」

タバサは既に静観を決め込んでいる様だ。それを知ってか知らずか、カイトがタバサに聞いた。

「まぁ、そういう訳で俺はドミニク婆さんに付いて行くけど……シャルはどうする？」

「……私も付いて行く。」

「……わたしも恐いけど、御姉様が行くなら、わたしも行くのね……きゅい。」

「そっか。……んじゃ、そういう訳で、このメシ全部喰ったら行こうか。」

そう言ってメシを食い始めるタバサ御一行。次々と料理を平らげるタバサ達に唖然とし、

自分達の料理を食う手が止まっている事に、彼等が出て行く迄、気付かなかった面々であった。

ｓｉｄｅ：エズレ村

先程の宿場街から、三時間程歩いた先に在る寒村。獣避けの柵に囲まれた村があった。

その村に在った、門とも呼べない門を潜(くぐ)ると、彼方此方(あちこち)から村人が集まって来た。

「みんな、騎士様達を連れて来たよ！」

“おおおーーーーッッッ！！！”

歓声が上がるも、騎士と紹介されたタバサを見ると、皆、目に見える様にガックリと肩を落とした。

「何でぇ……子供かい……。」

「こ、子供と言ったって、騎士様には変わるまいよ！」

そうドミニクが騒いだが、皆、意気消沈して家へ帰……ろうとした時だった。

「シャル。彼処の木に向かって何か魔法撃ってくれ。」

「……分かった。　ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ。」

すると、指定された木に、カカカカッッ！　と派手な音を立て、幾つもの氷の刃が突き刺さった。

その威力に皆、声を上げて驚き歓迎……しようとしたが、

その場に居合わせた人達は、更なる驚愕に包まれる事になった。

「んじゃ、次は俺の番だな。　ファースト・イグニッション　ランド　鎧化（アムド）」

その言葉の後、カイトが光に包まれ、それが収まると光の中から、黄衣の鎧を纏って現れた。

「……そ、それは…？」

「……そう言えば、シャルに此を見せたのは初めてだったな。……まぁ、見ていろ。」

そう言うと、氷刃が突き刺さっている木の前に行き……構えた。

「ソード　ランド　　灰燼(かいじん)に帰(き)せ　　奥義　　紅蓮腕(ぐれんかいな)。」

腰だめに構える……所謂居合いの構え。…しかし、此の世界(ハルケギニア)に馴染みの無い、

その不思議な構えから放たれた攻撃は、誰の目にも映(うつ)る事無く……

只、剣が仕舞われた音のみ谺(こだま)し、

対象となった憐れな木が散々（バラバラ）にされ、完全に焼滅した結果のみが只、其処に在った。

「……一応、手加減はしておいた。取り敢えず、この程度が俺達の実力…その一端だ。

……少しは、任せて貰える気になったか？」

皆、唯々首（ただただ）を上下に振る事しか出来なかった。

その後、鎧を脱いだカイトとタバサ主従を、ドミニクが自身の家へ招き、大いに歓迎した。

翌日、朝になっても目を覚まさず、夜になってようやっと、

むっくり起き出したカイトと、カイトに抱き締められた儘のタバサ。

未だ、それでも眠りこけているシルフィードを叩き起こし、作戦を決行した。

ｓｉｄｅ：ミノタウロスの居る洞窟

其処の前に縛られ転がされている人影が一人。……その者は、

生贄になる筈だった娘（ジジ）の衣装を着、髪を染めて只管、ミノタウロスが来るのを待った。

そして、現れたミノタウロスに担がれ、元来た方向に戻って行った。
その後をこっそりと追う影が三つ。その内、明かりを中心にした場所に人が居た。
併せて五人程。その内、とある男が担いで来た生贄が、件のジジでは無いと知り、声を荒げた。
「おい！　こいつはあの娘…ジジじゃ無いぞ！」
「何ぃッ!?　……本当だ、あの別嬪姉ちゃんじゃねぇぞ！」
「待て。……だけど、この姉ちゃん……あのジジなんかより、遙かに色っぽくて別嬪だぜ？」
「……確かに。……こいつは凄ぇ……！　此処迄の上玉には、お目に掛かった事が無ぇな！」
「……おい、ちょっと俺達で摘み食いしちまおうぜ？」
「お、おい…やめろよ、バカ！　旦那に殺されちまうぞ!?」
「なぁに、未だ来ねぇよ。……それより、こんな美人に触れる機会なんて滅多に無いんだぜ？」
「そ、それはそうだが……。」

何やら、思い思いに好き勝手な事をほざく、ミノタウロスの被り物をしている人売り達。

そんな事をしていれば、そりゃ影に潜む者には気付かない。あっさりと捕縛された。

そして、ジジの代わりに生贄にされた別嬪さんが、縄を解かれた瞬間、カイトに抱き付いた。

「え～～～ん、ますた～～～……；；　私、こんな下衆共に穢されたぁ～～……；；」

「ああ、はいはい。後でちゃんと慰めてやっから。兎に角、お疲れさん、水薙。」

「うぅぅ～～～……；；」

「……（ムスッ）。」

そう。何を隠そう。人質の代わりになったのは、カイトの従者、水薙であった。

それを決める時にも、実は一悶着あった。……こんな風に。

ｓｉｄｅ：回想ｂｙ三人称

只今、洞窟前。ジジの服も借りずに、洞窟の前迄来てしまったが、どうするのだろう？

全く、何も聞かされていないタバサ達には、一抹の不安があった。

「さて…と。　水薙。」

「イエス、マスター。」

そして突然現れた女性に、主従して思いっ切り驚いたが、その後の二人の言葉に更に驚いた。

「事情は判ってるな？　……頼むぞ？」

「……マスター？　マスターこそ、判ってるわよね？

私がマスター以外の有象無象の男に触られるのよ？　しかも、あんな下衆共によ？

オマケにそれだけじゃ飽き足らず、私の象徴（ゲンブ）である、此の黒髪迄染めろと言ってるのよ？

それが、此の私にとって、一体どれ程の苦痛か……本当に分かってるんでしょうね？」

「分かってる、分かってるって。後で、ちゃんと相手してやるから……頼むよ、水薙。」

「……ハァ。まぁ、私がマスターの頼みを断る訳は無いんだけど……それでもね？

それでも……！ってーのが有る訳よ。……其処んとこ……ホントに分かってくれてる？」

「勿論だ。……水薙、俺のお前達への想いを疑うか？」

「真逆。そんな事、それこそ天地が引っ繰り返っても有り得ないわ。

……だからこそ、聞いてるんじゃない。私をそんな目に遭わせて

も平気なの？ってね。

だから、マスター？　もし、マスター達の救出が遅かったら、私が皆殺しにするからね。」

「ああ、解ってる。そうならない様に、馬脚を現したら、隙を見て直ぐに助けるさ。」

「……もう、しょうがないわねぇ。……ちゃんと約束は守ってよ？」

「無論だ。約は決して違わんさ。…では、早速……チェンジ。」

その言葉の後、水薙と呼ばれたその女性は、髪の色を変え、服も着替えて、

猿轡縄目（さるぐつわなわめ）にて、洞窟の前に転がされたのであった。

……だが、其処に事情が解らず納得していない人が二人……。

内、一人は、若干の嫉妬混じりでカイトに詰め寄った。

「……。」　くいくいっ！

「ん？　どうした、シャル。……何故に怒ってらっしゃるので？」

「怒っていない。それよりも、あの人は誰？」

「きゅい！　そうなのね！　あの得体の知れない恐い女は誰なのね！
御姉様と言う女性（ひと）が居ながら、あの人とも関係を持ってたのね？
きゅいきゅい！！」

「ああ、彼女は水薙。俺の従者の一人だ。一応、家族でもある。」

「……従者？」

「きゅい？　此の前、突然現れた男の人も従者って言ってたのね。
……一体、何人居るのね？」

「後三人。男が二人で、女が一人だ。皆、俺の家族であり、従者でもある。」

「……それだけ？」

「ん？　それはどういう意味でかな？　もしかして……

……その言葉は嫉妬によるものだと、俺は期待していいのかな？　いいのかな？」

「……二回も言わないで。」

「クスクス……否定はしないんだな？　シャル。」

「……／／／」

「クスクスクスクス……シャルは物凄く可愛いな。どうして、そう何時も男心を操る事ばかり、してくれちゃうんだろうねぇ…。御陰で、俺は何時でも我慢しっ放しなんだが……一体、何時発散させてくれる？」

「…／／／／／／／／し、知らないっ！／／／／／／／／／／／」

「そうか、未だ駄目か。そりゃ、非常に残念だ。……早く、応えてくれよ？

俺だけの愛しのシャルロット（ボソッ）。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

　ボフッ！

　そう耳元で囁かれた、カイトの甘い声に、瞬時に真っ赤になるタバサであった。

「……きゅい。で、結局、貴方の従者が代わりの囮になるって事で良いのね？」

「ああ、そうだ。此の事件の犯人は、人売りがミノタウロスに化けて攫っている。得物を持った破落戸（ならずもの）が五人。零落（れいらく）した貴族が一人の、計六人だ。」

「……そう。他には？」

「きゅい？　他にって、まだ何か有るの？　わたし恐いのは嫌よ、御姉様。きゅぃ…。」

「流石に、シャルは気付いたか。そう、本物のミノタウロスも居る。

そいつらを捕縛したら、後でそいつの塒（ねぐら）に行って……殺すよ。

只まぁ……一応、シャルの修行の為にな。そいつはシャルに殺して貰う。

せめて、ミノタウロスぐらいは殺せないとな……此の先はもっと辛いぞ？

何せ、ドラゴンとも闘うんだからな。此の程度は難なく熟（こな）せないとな。」

「きゅい！　貴方、ミノタウロスの怖さを知ってるのね？！　しかも御姉様とは相性最悪なのね！

お、オマケに……ど、ドラゴンなんて……きゅいきゅい！！　恐いのね！　恐過ぎるのね！」

「いや、お前もドラゴンだろうに。しかも、風韻竜…古代の眷属。

そんじょそこらの竜なんざ、十把一絡げだろうに。……幾ら幼生とは言ってもなぁ…。」

「む、無理なのね！　そ、そんなの相手にするなんて、シルフィは絶対に嫌なのね！　きゅい！」

「……まぁ、ドンマイ？　人生、何事も諦めが肝心ってこった。」

「シルフィは人間なんかじゃ無いのね！　きゅ～い～！！」

「……！　静かに。誰か来た。」

そして、回想前に戻るのである。

故に、水薙がカイトに引っ付いてる事が面白くなく、

タバサとしては珍しく、頬を膨らませて、不貞腐れているのである。

それを萌え～とか思いながら眺めている馬鹿（カイト）が一人。

それ故に、後ろから近付く影に、タバサとシルフィードは気付けなかった。

「……御巫山戯（おふざけ）は、其処迄にして貰おうか。」

「「！？」」

その言葉と共に飛んで来た氷の礫は、正確にタバサを狙っていた。

だが、それに気付くのが遅れ、呪文も間に合わず……思わず目を閉じた。

……が、一向に衝撃は来ない。……訝しんで目を開けて見ると……。

「残～念。それは頂けないのよね～♪」

「……え？」

「な！？　そ、そんな馬鹿な！！！」

「馬鹿はテメェだよ。斬り裂け　ソード　ウインド」

「！？　グワアアァッッッッ！？！？！？！？！？」

そう。タバサの目の前に、あの水薙が居た。彼女が守ってくれたのだ。

しかも、彼女はその魔法の直撃を受けた……筈なのだが、完全に無傷だった。

その事に驚愕している元貴族に、後ろからカイトが翠の双剣で斬り付け、

杖を持っていたその両腕を、斬り飛ばしたのだ。

そして、のたうち回る元貴族の頭を踏み付け、踏ん縛った。

「……あ、ありがとう。」

「どう致しまして、タバサちゃん♪　でも、お礼はマスターに言ってね？

マスターが私に、貴女を守る様に命令したんだから。女冥利に尽きるわね～。

マスターに其処迄、愛して貰えるなんて。……ねぇ、未だ決心は付かない？」

「……わ、私…は……。」

「こ～ら、水薙。俺のシャルに変な事、吹き込むなよ？」

「もっちろん、分かってるわよ？　マ・ス・タ・ー♪」

「……本当かねぇ？」

「うふふ……さぁて、どうでしょう？♪」

「……全く。ほれ、シャル。さっさとこの馬鹿共を村に連行して、役人に突き出すぞ。」

「……あ、う、うん…。」

その後、水薙を引っ込め、その人売り達を村に突き出し、その日は村を挙げての大宴会だった。

流石に寒村だけあって、料理は御世辞にも豪華とは言えなかったが、

心からの持て成しに、有り難く頂戴した三人であった。

そして、翌日。役人に引き渡す為、街に行く村人達とは別れて、洞窟に戻った三人。

ｓｉｄｅ：ミノタウロスの洞窟

「……こ、恐いのね…。ほ、本当に御姉様にミノタウロスと闘わせるのね？」

「勿論だ。この程度の雑魚ぐらいは殺せなきゃ、これから先、どうにもならん。」

「……きゅぃ。」

「……私なら、大丈夫。……此処で待っててて。」

「……きゅぃ。恐いけど、御姉様を置いて一人でなんていられないのね！　わたしも行くのね！」

「……そう。」

「んじゃ、早速行くか。……丁度、アイツも中で待ち構えている様だしな。」

洞窟の中は、意外と広かった。カイトが出してくれた明かり（ライト）で、中が良く見えるのだ。

どうやら、此処は鍾乳洞らしい。鍾乳石や石英等が、光の反射で、綺麗に照らされている。

その光景に、溜息を付いて感歎していると、奥からくぐもった声がしてきた。

「……何者だ？」

「ヒィッ！　み、み、ミノタウロスなのねーッ！　ほ、本物のミノタウロスなのねーーッ！！」

「…！！」

「……待ってくれ！　私には、君達と争う理由が無い！」

「……え？　な、何か此のミノタウロス……様子が変なのね…。」

「……君達は……確か、あの人売り達を捕縛した子だね？」

「そういうこった……未だ、生きていたんだな…ラルカス。」

「……君は……誰だ？　私は君の事など知らないが…？」

「まぁ、そうだろうな。……でも、俺はお前の事を知っている。

十年前、ミノタウロスを窒息させて殺し、

その死骸に、不治の病に冒され死に掛けていた自身の脳を移植し、

生き存(なが)えた。

……だが、本能に理性が負け、近隣の子供達を攫って食べている

……怪物。」

「……違う。私はそんな事はしていない。」

「なら、其処ら辺の柔らかい土の辺りを掘ろうか？

新しい子供の頭蓋骨がわんさか出て来るぞ？」

「……違う。……そ、それは……ワ、私では……ナイ…！」

「ほうれ、ほうれ。どんどん、人間の言葉が喋れなくなってきた。

……もう、お前は只の怪物だよ。後戻りなど……もう、完全に不可能だ。」

「…ち、チガウ。オ、オレハ……ソ、ソンナコト……オ、オマエ…ウマソウダナ。タベル。」

「……残念だよ、ラルカス。……さぁ、シャル。修行開始だ。方法は問わない。奴を殺すんだ。

……もう、アイツをこの苦しみから、解放してやってくれ。」

「……分かった。」

簡単に結論だけ言おう。タバサが勝った。

地面に叩き付けられ、彼方此方擦り傷などの怪我は負ったものの、彼の内臓を、ウィンディ・アイシクルで寸寸（ズタズタ）に斬り裂き、何とか勝利を得たのだ。

「……ハァハァ……ッハァハァ……。」

「……お疲れ様、シャル。良く、頑張ったな。……今は、もう休むと良い。

此処は危ない。外に出て、シルフィードと少し待っててくれ。」

「……ハァハァ……う、うん。」

そして、主従共に外に出て、カイトが出て来るのを待っていた。

「……さて。彼女達はもう行ったぞ、ラルカス。……未だ、少

し息があるだろう？」

「……さ、流石に……お、お見通し…だった…か。」

「ああ。……最後の願いだ。何でも良い。どんな無茶な願いでも聞いてやるぞ。」

「……ど、どん…な？　……出来る……のか？　ゴボッ！！」

「ああ。どんな事でも出来る。……言え、ラルカス。お前の望みは何だ？」

「な、ならば……二つ……頼み…たい。」

「……構わん。言え。」

「……あ、あの子の……な、名前…を…。」

「……シャルロット。シャルロット・エレーヌ・オルレアン。ガリアのお姫様だ。」

「……そ、そうか……。さ、最後……に…。」

「……ああ……何だ？」

「……あ……あの…少女に……あの…し、少女…を……ま、守って……。」

「……ああ。勿論だ…任せろ。彼女は……彼女の全ては…此の俺が守ってやる。

救世主（メシア）の名に懸けて。……今は、もう眠れ。……さようなら、ラルカス。」

「…！　……何を話してたの？」

「……シャル。気付いてても、それは聞いちゃいけない。野暮ってもんさ。」

「……そう。」

「ああ。……それより、彼を荼毘（だび）に付そう。……誰にも知られずひっそりと…な。」

「……（コク）。」

そして、学院に戻ったタバサ達に、又、新たな事件が関わり、巻き込まれるのだが……。

それは、次回からの御楽しみに。……今は、彼の冥福を祈るとしよう。

カイトとタバサとミノタウロス（後書き）

如何でしたでしょうか？

残念ながら、今回も二巻には入れませんでした……が、次話からは確実に入ります。

書く迄気付かなかったのですが、意外と『タバサの冒険』ってボリューム有るんですね……；；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトの存在（イレギュラー）（前書き）

現時刻（０３：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，２３１，５８５アクセス　ユニーク：１０，７５７７人
皆様、毎度有難う御座います。

今回から、ようやっと二巻に入ります。これから、少しずつ原作とは違って行きます。

どうか、その違いを楽しんで頂ければ幸いです。

では、今話も拙筆を御堪能下さい。

カイトの存在（イレギュラー）

ｓｉｄｅ：教室

フリッグの舞踏会から、一週間程経った今日。トーマスの存在も、学院で大分有名になった頃。

教室に、ルイズとその使い魔の才人犬が現れた。

そして、恒例のキュルケとの喧嘩が始まり、才人犬を躾（しつ）けた。全員ドン引きだった。

それを呆れた顔で見ながら、タバサを抱き締めているカイトが目に映った。

映ったので、才人犬は思わず助けを求めた。

「わ、わんわんっ！」

そして思わず、犬語になっていた。しかし、それでもカイトには通じた様だ。

「え？　頼むから助けてくれって？」

「わんっ！」

「だが断る。」

「わぅっ！？」

「いや、だって、どうせお前の事だから、ルイズのベッドに入り込んで襲い掛けたんだろう？

流石にそれは弁明の余地は一切無いな。諦めて、躾と言う名の調教を受けな。」

「わ、わぅぅん……。」

「全く……駄目だねぇ…。女の子にはもっと優しくしなきゃ。

……なんなら、俺と競争でもしてみるか？」

「わう？」

「そう、競争。才人がルイズを惚れさせるのが先か。俺がシャルを口説き落とすのが先か。

因みに、俺の方が五歩ぐらいリードしているがな。

後は、シャルの口からＯＫと言う言葉を待ってるだけだ。後は、野となれ山となれ。」

「わうっわうっ！」

「え？　それじゃぁ、最初っから勝ち目が無いって？　いやいや、そんな事は無いぞ？

シャルもこう見えて意外と強情でな。最近は良く甘えて来てくれたりはするんだが、

中々、好きだとかは未だ、一度も言ってくれなくてな。今ん所、只の我慢大会中だ。

俺はノンビリと、シャルがイエスと言ってくれるのを待ってるだけだし。

才人が頑張ってルイズを口説き落とせれば、お前の方が余程勝算は有るぞ？」

「わぅ～……わうっ！！」

「そうか、やるか！　んじゃ、今から勝負だ。負けんぞ？」

「わうわうっ！」

「「勝手な事、言わないで！！」」

「……ハァ、男って本当にどうして、こう……どうしようもないのかしら…。」

「男ってのはな。こういうどうしようもない事にこそ、自身のプラ

イドも命も惜しまないものさ。

例え、それが何の意味も無くとも、例え空振りに終わろうとも…

…それでも、走り続ける。

……それが、漢（おとこ）。男が漢（おとこ）たる所以だ。」

“……格好良い。”

“何処がよ！！！”

男と女の明確な差（バカ　げんじつ）が出た瞬間であった。

そんな騒ぎの最中、丸でタイミングを計ったかの様に、ミスタ・ギトーが入って来た。

そして、生徒が一斉に席に着いたのを見届けたギトーは、授業を始めた。

「宜しい。では、授業を始める……前に。……君は、何故此処に居る？

君は此の学院の生徒では…いや、そもそも関係者ですら無いだろう。

今直ぐ出て行きなさい。」

「おろ？　何だ、ギトー。オスマン坊やから聞いて無いのか？

俺は、お前等教員の御目付役だ。お前等が余りにもどうしようもないのでな。

一応、俺の扱いはオスマン坊やの客員だが……

その態度はオールド・オスマンに対する批難と、受け取っても宜しいかな？」

「…くっ……！　ならば、私の授業の邪魔だけはしない様に！！」

「ああ、勿論だ。俺とてそれは本意では無い。……お前が、それ相応の事をしなければ…な。」

「……！！！　……フゥ…では、改めて授業を始める。

私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ。

……所で、最強の系統は何か知ってるかね？　ミス・ツェルプストー。」

「『虚無』じゃ無いんですか？」

「私は伝説の話をしている訳では無い。現実的な話をしている。御伽話は余所でしたまえ。」

「……『火』に決まっていますわ…ミスタ・ギトー。」

「残念ながらそうでは無い。試しに、此の私に君の得意な火の魔法をぶつけてきたまえ。」

「……火傷じゃ済みませんわよ？」

「構わん。本気で来たまえ。その有名なツェルプストー家の赤毛が飾りでは無いのならね。」

もう我慢の限界だったキュルケは、特大の炎玉を放ったが、

ギトーの烈風により、あっさりと掻き消され、キュルケも吹き飛ばされた……が、

何時の間にか、後ろにいたカイトによって壁に叩き付けられずに済

んだ。

「……あ、ありがとう。一応、お礼ぐらいは言っておくわ。」

「そりゃ、どう致しまして。」

「諸君、『風』が最強たる所以を教えよう。簡単だ。御覧の通り、風は全てを薙ぎ払う。

『火』も『水』も『土』も、『風』の前では立つ事すら出来ない。

残念ながら試した事は無いが、『虚無』でさえ吹き飛ばすだろう。それが『風』だ。」

そう得意げに語るギトーを、不満気に見るキュルケの後ろから、突如笑い声が聞こえた。

「……ぷっ…あっはっはっはっは……。」

「……何が可笑しいのかね？」

「いやいや、何……俺の従者がどうしても許せないって言ってるもんでね。

その負けず嫌いに思わず、笑っちまっただけさ。」

「ほう。……君も使い魔を……宜しい。ならば、その使い魔とやらの言葉を聞こうか。」

「ん？　良いのか？　……だってさ、紅蓮。」

「おうよ！　ちぃ～～っとばかし、今の台詞は許せねぇなぁ……！」

そう言って、突然現れた男は、全身真っ赤な服を着、髪も目も赤く燃え滾（たぎ）っていた。

「……？！　き、君は誰だね？」

「ぁあん？　相棒から今聞いただろうが。俺が、その使い魔とやらだよ！」

「は？　……ミス・ヴァリエールに引き続き、君も人間を使い魔に

したのかね？」

「あ〝！！？　……おい、相棒。」

「紅蓮、流石にそりゃ駄目だ。」

「相棒。」

「……紅蓮……自重……出来んか？」

「無理だ。」

「……ハァ。しょうがねぇなぁ…。　紅蓮　神獣形態」

「はっ！！！」

その瞬間、紅蓮と呼ばれたその男の身体が光り輝き、収まった場に

は……炎の鳥が居た。

“…！！！！！　な！？　ふ、不死鳥（フェニックス）！？！？”

「左様。我を高が人間風情と一緒にされては困る。」

“しかも、喋った！？”

皆の驚愕の声も何の其の。バッサバッサとギトーの側の教壇に降り立ち、

自身の羽根を嘴（くちばし）で繕いながら、ギトーを睨み付けた。

只、それだけでギトーは得も言われぬ恐怖に襲われ、脂汗と冷や汗を大量に流し、

今にも、気が狂いそうな程、怯えていた。……そんな時だった。

不似合いな鬘を被って、コルベールが駆け込んで来たのは。

「皆さん！　今日の授業は中止ですぞ！って、ふ、フェニックス！？　な、何故こんな所に？！」

「ふむ。我の事は気にせずとも良い。疾く話せ。」

「し、しかも、喋った！？」

何処かで見た様な遣り取りをコルベールがしているのを見て、皆幾分か落ち着いた様だ。

人の振り見て我が振り直せとは、得てしてこういう事であろうか。

そんな事をつらつらと誰とも無く考えていると、カイトがその不死鳥に命令した。

「……あ～、取り敢えず、此の儘じゃ埒が明かんな……もう戻れ、

朱雀。」

「しかし、我が主。未だ我は、此の戯け者に知らしめては居りませぬ。」

「いや、もう充分だろうさ。いいから、もう戻りな。」

「ですが、我が主……！？」

「……朱雀。俺の命が聞けぬか？」

「は、はっ！！　め、滅相も御座いません！　出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありませぬ！」

そう言って、教壇から直ちに降り、床に平伏した後、

僅かな火種を残して姿を消し、その気配が消えると同時に、残った

火種も消えた。

あの圧倒的な存在感を放っていた不死鳥が、直ぐ様平伏し、

あっと言う間に消え去った事に、皆、本気で恐怖を覚えた。

只一人、才人のみが不思議と首を捻っていたが。

（……あれ？　すざく？　……何か、どっかで聞いた事あるような…無いような……？）

そんな皆の思いはさておき、一早く我に返ったコルベールが告げた事態……。

トリステインの姫…アンリエッタが、魔法学院に行幸すると聞き、皆、慌てておめかしし出した。

ｓｉｄｅ：魔法学院

今、街道からアンリエッタを乗せた馬車が、魔法学院の門を潜って来た。

その正門を潜った先にある本塔の玄関前に、

オールド・オスマンがアンリエッタ姫を迎える為に立っていた。

……しかし、その顔には歓迎の喜色(いろ)と、とても心配そうな憂色(いろ)の双方が浮かんでいた。

その訳は……今、最前列で、オールド・オスマンを見ながらニヤついているカイトの所為である。

そう。この整列している生徒達の最前列に、才人・ルイズ・キュルケ・タバサ……

そしてカイトが居たのである。……そのカイトが、姫達が来る前に、手を振って来たのだ。

それはもう、カイトの性格を或る程度知ってるオールド・オスマンは気が気でない。

嫌な汗で、だらっだらなのだ。……しかし、残念ながら、それは杞

憂では済まなかった。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下おなーーーりーーーーッッッ！！！！！」

しかし、真っ先に出て来たのは、嫌われ者の枢機卿マザリーニだった。

白地（あからさま）にガッカリした皆の声も我知らずとばかりに、馬車の横に出、手を差し出す。

その手を取って、ド本命…アンリエッタ姫が馬車から降りて来た…瞬間、大歓声が上がった。

その人気に嫉妬してか、キュルケが才人に自分とどっちが綺麗かと尋ねるが、

決め倦（あぐ）ねる才人。悩んでいる内に、何気なくキュルケを見ると、既に才人を見ていない。

物の序（ついで）にと自分に言い訳しながらルイズの方を見ると、これ又、自分を見ていない。

二人の見ている方向を見てみると、凛々しい御髭（おひげ）の御貴族様が居るではありませんか。

ぐぬぬ…と言いながらも項垂れていると、隣で我知らずと、本を読み耽っているタバサと、

そのタバサを、可愛い可愛い♪　と抱き締めているカイトが居た。

その相も変わらぬ二人を見て、溜息を付きながら、思わず愚痴を零（こぼ）した。

「……お前等は相変わらずだな…。」

すると、タバサが本から面を上げ、才人を見、キュルケを見、ルイズを見、又、才人を見た。

そして、カイトと異口同音に言った。

「「三日天下。」」

「ＯＴＬ」

そんな漫才をしていたカイト達を、ハラハラしながら見るとも無しに、

しっかり観察していたオールド・オスマンは、今の所何の問題が起きる気配も無く、

少しホッとしていた。……そんな時だった。……ソレが杞憂で無くなったのは。

「ぬ？　お、おい！　何処へ行く！　何処へ行こうというのだ！　私の言う事を聞かんか！」

突然騒ぎ出した髭貴族に、皆注目した。…どうやら、自身が降りたグリフォンが、

主の制止も聞かず、何処かに向かおうとしているらしい。

しかも、それに呼応してか、何とアンリエッタの馬車を牽(ひ)いていたユニコーンも共に動いた。

何事が起こっているのか分からず、トリステイン始まって以来の珍事に、皆慌てふためいている。

だが、その謎も早々と解決した。……だが、それによって更なる混乱が起きた。

何と、そのグリフォンとユニコーンがとある人物の前に来て歩みを止め、

二匹揃って、足を折り、頭を深く垂れたのだ。……そう、カイトの前でだ。

「……あぁ…。」と天を仰ぐオールド・オスマンや生徒達諸共を其(そ)方(ち)退けにし、

カイトがタバサを抱き締めていた手を、二匹の頭に置き、微笑みながら撫でた。

「よしよし。良い子だな、お前達。でも、主の制止を振り切って迄、来ちゃいかんぞ？

ユニコーンも。今は行幸中だ。お前は面倒臭いだろうが、人間にとっては大事な儀式だ。

ちゃんと、彼等の言葉も聞いてやれ。……悪い様にはされていないんだろう？」

「ぶるるっ。」

「そうかそうか。そいつは良かったな。」　ナデナデ　ナデナデ

「「きゅ～ん……♪」」

皆、唖然とした。それはもう驚いていた。言葉では言い表せない程、驚愕していたのだ。

この一大事、どうしたものかと周りを見回しながら、頭を悩ませていたマザリーニは、

只一人、天を仰いでいるオールド・オスマンを見付け、彼に問い質した。

「……オールド・オスマンよ…。彼は一体、何者なのだ？」

「これは、枢機卿。彼の事についてですが……

『救世主（メシア）には決して逆らうな。破滅を望まぬのならば、決して逆らうな。』

という伝承……貴方ならば、聞いた事が有るのではありませんかな？」

「ふむ……それは確か…人狼（ワーウルフ）などの人語を解する種族にのみ伝わる、伝承・御伽話の類ですな。それが一体どうした……と……まさか……。」

「そう。そのまさかですじゃ。彼の者こそが、その救世主にして、破滅させる者。

『宇宙（そら）の救世主（メシア）』にして『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』ですじゃ。」

「そんな……バカな……！　あ、あれは、只の伝承か御伽話では無かったのか？！」

「いいや、違いますぞ。現に今、儂等の目の前に居りますしの。

何より、此の儂も十代～二十代の若き頃、実際に会って居りますのでな。」

「む……ぬぅ……！　では、その彼が何故、今頃このトリステインにいるのだ？」

「さて……。彼の者の心は、只の人間である儂等には、到底理解の及ぶ所ではありませんのでな。只一つ、言える事は……。」

「何だ？　何でも構わん。奴の事で分かる事ならば、何でも良い、教えて欲しい。」

「……では、御忠告申し上げよう。彼の者が此処に居る理由。その一つとして、

彼は、あの共に居る少女……タバサと申す者に懸想しておるらしいのじゃ。」

「……何？　……懸想？　そんな理由で、此の場に居ると？」

「左様。故に、もしあの少女に何か危害が加えられようものならば、その日の内に……いや、傷付けられた瞬間、此の国は一瞬で滅び去るであろう。」

「……それは、幾ら何でも言い過ぎであろうに。」

「いいや、紛れも無い事実と成ろう。今、此の場ではっきり申し上げるが、

儂は、彼の者と敵対するぐらいならば、今直ぐエルフと全面戦争するも厭わぬ。

……彼は、その方が余程天国じゃと思える程に、恐ろしいのじゃ。」

「……そんな……ばかな……。」

そのオールド・オスマンの言葉に驚愕の色を隠せないマザリーニに、カイトが顔を向け、ニヤリと笑った。……その笑顔に……思わずゾッとした二人であった。

その後、ユニコーンとグリフォンが大人しく、馬車と主の許へ戻り、一騒動は済んだ……かに見えた。……だが、本当の騒動は、その翌日から…。

その前夜に、アンリエッタ姫がルイズ達の部屋を訪ね、

二人……いや、三人に頼んだとある事を切欠として、新たな騒動の幕が開けたのであった。

side：タバサの部屋

その部屋に突如、来襲者が現れた。その者は、ベッドに寝ている者達を見付けると、

憤怒（ふんぬ）の形相で布団を引っ剥（ぺ）がした。

……一応、服はお互いに着ている。どうやら、そういう事では無いらしいが……

それでも、自分の親友と一緒に寝るなど、到底許せる事では無かった。

「ちょっと！！　アナタ！　早く起きなさいよ！　何時迄も、私のタバサに引っ付かないで！」

「……んぁ？　…………ふぅ…！　んぁぁあああ〜〜…！！　っと。

…ふぅ。

ようお早うキュルケ。……シャルに何か用か？」

「ええ、そうよ。だからアナタはお呼びじゃ無いの。分かって頂ける？

分かって頂けたなら、さっさと私の親友（タバサ）から離れて下さらない？

汚れちゃうわ！」

「そいつは酷い言い種だこと。第一、添い寝に関しては、シャルの方から頼んで来た事だぞ？」

「そんな訳無いでしょ！」

「本当だって。何なら、今からシャルに聞いてみようか？」

「ええ、勿論。ちゃんと問い質さないとね。アナタのこれ迄の所業をね！」

シャル。

「こりゃまた、酷い。……まぁ、いいや。……シャル。……ほら、起きて……俺の可愛いシャル。……シャル……早く起きないと…

…キスしちゃうぞ？」

「…！！／／／／／／／／／／」　ガバッ！！

「やっぱり起きてた。しかし、狸寝入りとはねぇ……そんなに俺にキスされるの……嫌？」

「当たり前じゃない！　嫌に決まってるでしょ！　ねぇ、タバサ。」

「……／／／／／／」

「ふむ。どうやら、只、単に恥ずかしいだけの様だな。」

「何、変な妄想してるのよ。優しいタバサの事だから、言い出せないだけでしょ。

だから、私が代わりに言ってあげる。早く、タバサから離れなさい！」

「だが、断る。……だって、シャル、温かくてスベスベで触れてるだけで気持ちいいんだもん。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……男が『もん』とか言わないでくれる？　正直、気持ち悪いわよ？」

「あ、そう？　だが、私は謝らない。」

又、始まったカイトとキュルケの口喧嘩。最早、此の学院では名物となったソレは、

未だ寝惚け眼だったタバサの脳を覚醒させるには、充分な喧噪だった。

だが、何となくこの関係も心地良いと感じていたタバサは、

未だ自分を抱き締めているカイトに、更に凭り掛かり、カイトの体温を感じていた。

その事に気付いたカイトは北叟笑み、キュルケは益々憎々し気にカイトを睨んだ。

しかし、二人共決してタバサに危害が及ばぬ様に、口喧嘩だけに留めていた。

お互い、特に談合した訳でも、示し合わせた訳でも無いが、自然とそうなっていた。

その内、又ウトウトとし出したタバサは、カイトの胸を枕に、又寝入ってしまった。

それを、思わず微笑みながら眺めていた二人は、暫し休戦し、その寝顔を堪能していた。

……大体、四半刻強程経った頃。タバサが身動ぎし、起き出した。

背伸びをし、未だ若干の寝惚け眼で二人を見、何気なくカイトを見上げ、小首を傾げた。

その可愛さに耐え切れ無くなった二人はタバサに抱き付き、「「可愛い～～♪♪」」と言い乍ら、

撫でたり頬擦りしたりと、十分程寝起きのタバサを堪能した。

然う斯うしている内に、ハッと本来の目的を唐突に思い出したキュルケが、タバサに頼んだ。

「……～♪　……ハッ！　そ、そうだ、いけない！　タバサを愛でてる場合じゃ無かったわ！

タバサ！　御願い！　私のダーリンが又、あのルイズと一緒に何処かに出掛けちゃったの！

貴女のシルフィードじゃ無いと、もう追い付かないわ！　御願い、私の恋を助けて！」

「……（コクン）。……貴方は？」

「ああ、んじゃ、俺も行こうかね。事情の全てを知ってる人間が居るのが一番望ましいだろ。」

「私にとっては、最も望ましく無いんですけど？」

「まぁ、あれだ。気にしたら負けだと思ってる。」

「……少しは気にしなさいよね。」

「……同感。」

「ドン☆マイ♪」

「……こんなに本気で殴りたくなったのは、一体何時以来かしらね……！！！」

「……我慢。」

巫山戯ているカイトを後目に、何とか怒りを堪えて、支度を済ませるタバサ達なのであった。

ｓｉｄｅ：港町『ラ・ロシェール』の入り口

今、才人達は奇襲を受けていた。崖上から松明（たいまつ）を投げられ、馬から転げ落ちた所に矢を射られ、

何気に、絶体絶命に近かった。慌てて久し振りにデルフを引き抜いたは良いが、

どうしたもんかと考えていると、崖上の更に上から羽音がする。男達の悲鳴も聞こえる。

その様を訝しんで居ると、今迄見た事も無い、大きな龍が二体も現れた。

何者かの奇襲の次は、龍二体か！　と恐れ戦いていると、その龍から赤い髪の女が顔を出した。

キュルケだった。どうやら、この龍は誰かの使い魔の様だった。

その龍の背中から、更に一回り…二回り？　小さい竜……シルフィードが現れた。

それを見てホッとした才人達。更にそれを見て、仲間だと理解したワルドは構えを解いた。

「ダーリン♪　お待たせ♪　助けに来たわよ♪♪」

「ちょっと、ツェルプストー。あのね？　これはお忍びなのよ？」

「お忍び？　なら、初めからそう言いなさいよ。」

そう言って、又、口喧嘩を始める仇敵同士（ルイズとキュルケ）。

てか、さっきカイトとあんだけ口喧嘩しておいて未だするの？　…

…まぁ、それはさておき。

ギーシュが襲って来た彼等を尋問しようとしたが、カイトに止められた。

「では、僕が早速彼等を尋問するとしようか。」

「いや、その必要は無いよ、ギーシュ。」

「……何？　では、君は彼等が何者で、何を目的として、

我々を襲って来たのか……知っているとでも言うのか？

……もしかして……君が、彼等を使って我々を襲わせたのでは無いだろうね？」

「何で、俺がそんな回り諄（くど）い事をせにゃならんのじゃい、ワルド。

こいつらは只の物取りだ。……そういう事になっている。」

「……そうか。そういう事か。」

「ああ、そういう事だ。まぁ、そういう訳でな。こいつらには、今、此処で死んで貰う。」

「な!?　ちょ、ちょっと待ってくれ、カイト!　な、何も命を取られた訳じゃ無いんだし……

別に見逃したっていいじゃないか!　あ、そ、そうだ。役人に突き出せば、それで……。」

「却下。こいつらは、この先も碌な事しないって分かり切ってるんでな。

今、此処でその禍根の根を断って置くのさ。

あ、ちょっとスプラッタ入るから、耐性がない奴は見ない方が良いぞ?」

「……では、私が見届けよう。」

「そうかい。んじゃ、ワルドが見届け人って事で。

みんな、今の内に俺の龍……ウインドと風龍に乗って、先に行ってな。直ぐ追い付く。」

「……分かった。先に行ってる。」

「ああ、頼んだよ、タバサ。」

未だ、文句を言っていた才人をシルフィードが咥えて、カイトの龍に乗せて連れて行った。

「……さて。んじゃ、早速、殺しますか♪」

「んな!?　じょ、冗談じゃねぇのか!?　ほ、本当に俺達を殺す気なのか?!」

「うん。勿論、本気で殺す気満々だよ?寧ろ何で、今更そんな当たり前な事に疑問を持つのか、

俺としては其方の方を、小一時間程、逆に問い詰めたい。」

「う、嘘だ……や、止めてくれ!　こ、こんな事になるなんて聞いてないぞ!

お、俺達は、只、雇われただけなんだ!　あの馬を狙ってくれって!

只、それだけなのに！　何で、俺達が殺されなきゃなんねぇんだよぉっ！！」

「何でってなぁ……。でも、お前達あの儘だと、あいつらを殺してたよ？

それについての弁明は？」

「そ、それは……しょ、しょうがねぇだろ！？　俺達だって生きるのに精一杯なんだよ！？」

「そりゃ、勿論そうだろうさ。でも、それは人の……

生き物の命を身勝手に奪って良い訳には一切、ならないんだよね～♪　こ・れ・が♪♪♪」

「……い、いやだ…！　お、俺はまだ死にたくねぇ！　た、頼む！助けてくれ！

お、俺に出来る事なら何でもするから…！　だ、だから頼む！助けてくれ！」

「ん？　……ん～……じゃあ、今迄殺した人達を生き返らせてくれ。

そうしたら、殺さないでやるよ。」

「な！？　そ、そんな事出来る訳無いだろ！！？」

「そうだよねぇ。でも、それが出来ないと分かってて殺してるんだよね？

こういうの何て言うか知ってる？　自業自得って言うんだよ？

……さぁ、もう懺悔の時間は終わりだ。もう、こいつら殺しちゃってもいいよね？　ワルド。」

「……構わないだろう。もう、こいつらには何の価値も無いだろうしな。」

「んでば、オイラの技の御披露目と行きまっしょい。

万物悉皆破砕（ばんぶつしっかいはさい）せよ　　奥義　　鋼角壁礫（こうかくへきれき）」

その瞬間、何処からとも無く、あらゆる鉱物がその破落戸（ならずもの）達に振って来、

彼等を肉塊に……いや、最早肉塊ですら無く、只の蠢（うごめ）く肉の一片に

変えてしまった。

その余りの威力に、驚愕を通り越し、完全に青ざめているワルド。

だが、カイトはそんな彼にお構いなしで、声を掛けた。

「よっし、駆除完了。……んじゃ、街に早速行きますか。みんな、もう待ってるだろうしな。」

「……あ、ああ。」

「…っと、その前にっ……と。よし、これで完全に完了だ。」

「……今、何をした？　彼等の肉体が光った瞬間に消え去ったが……？」

「ん？　ああ、彼等の魂を天に召したんだ。これで彼等は、新たな命として転生出来る。

　これで後は、今度こそ真っ当な人生を送れる様に、願うだけさ。さ、行くぞ。」

そう言って、ワルドの答えも聞かず、今回の宿泊宿（しゅくはくやど）に転移するカイトとワルド。

突然現れた二人に、驚愕する店内。その収拾に時間を要したのは、言う迄も無い。

只……その時の事でカイトを警戒し、敵対しようと臍（ほぞ）を固めた者が一人。

だが、残念ながら、その事が……カイトと敵対した事が、何よりの最大の間違いだったと、彼が気付くのは、大分後の話。

可哀相に……憐れなその男は、現時点ではその事に気付く筈も無く……。

今日を始まりとして、永の間道化を、心ならずも演ずる事と、相成って仕舞うのであった。

カイトの存在（イレギュラー）（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、とあるイベントを入れ、タバサのデレ度を、大幅ＵＰさせる予定です。

少しでも萌えて悶えて頂ける様、頑張りたいと思いますｗ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

舞台は廻り、役者は謡い、道化は踊る（前書き）

現時刻（０８：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，２５１，９７２アクセス　ユニーク：１０９，０１５人
皆様、毎度有難う御座います。

今回も又、大分長くなってしまいました。

皆様、休憩時間などに飲み物片手に、ごゆっくりなさって下さい。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

舞台は廻り、役者は謡い、道化は踊る

ｓｉｄｅ：『女神の杵』亭ｉｎラ・ロシェール

港町ラ・ロシェールで一番上等な宿。その評判は伊達では無く、可成り豪華な造りであった。

テーブルなどは、自分の顔が映るぐらいに、ピカピカに磨かれていた。

そんな事に感心していると、乗船の交渉に行っていたワルドとルイズが戻って来た。

「アルビオンに渡る船は、明後日にならないと出ないそうだ。」

「急ぎの任務なのに……。」

「あたし、アルビオンに行った事無いから分かんないんだけど、何で明日は船が出ないの？」

「明日の夜は『スヴェル』の月夜。月が重なる夜だ。

その翌朝、アルビオンが最もここ…ラ・ロシェールに近付く。」

成る程…。と、事情を知らない一同。それで気が抜けたのか、全員に疲労の色が見える。

「さて……では、今日はもう寝よう。部屋は既に取ってある。キュルケとタバサ、そしてギーシュとサイトが相部屋、最後に僕とルイズが同室だ。」

「そ、そんな、駄目よ！　未だ、私達結婚してる訳じゃ無いし…！」

「……大事な話があるんだ。是非共、二人きりで話したい。」

ワルドの真剣な様子に、文句を言おうとした才人も、思わず押し黙った。

「……どうやら皆、納得して貰えた様だな。……所で、カイト。」

「ああ、頼んだ通りにしてくれたか、ワルド？」

「ああ。……だが、一体どういう事だ？　二人分とっておいてくれとは……。

誰かと此処で待ち合わせて居るとでも？」

「うんにゃ。待ち合わせじゃ無いが、そうした方が混乱も誤解も少ないと思ってな。」

「？　……一体、何の事だ？」

「こういう事さ。……水薙。」

「イエス、マスター。」

“な!?!?”

突然、何処からとも無く現れた妙齢の見目美しい女性に驚く一同。

……一人を除いて。

「……そ、その女性は…一体?」

「ん?　俺の従者。昨日だったか、お前達が会った紅蓮の姉だ。」

「どうも~♪　マスターの従者で、家族で、恋人で、愛人で、性奴隷の水薙よ♪」

「って、オイコラ！　何をとんでもない事、言うちょるか！」

「え～…だって、殆どホントの事じゃ無い。このう・わ・き・も・の♪」

「浮気者言うな。後、言うタイミングを考えてくれ。

折角、タバサが俺に大分靡いてくれたってーのに、これじゃ益々、俺から遠離（とおざか）る。」

「あら。私にとっては好都合よ？　だって、ライバルは少ないに越した事は無いもの♪」

「……水薙。」

「フフン。マスターへの愛なら、私は誰にも負けないわよ♪

それじゃ、早速、明日の夜まで、二人だけでしっぽりしましょ♪♪」

「……ハァ。んじゃま、そういう事で。

済まないが、特に大騒ぎでも無い限りは、こっちの部屋に来ない方が無難だぞ？」

「みんな、おやすみ～♪♪♪」

そう言って、腕を組みながら去って行く二人。台風一過の様相を呈していたその場は、

一人、我知らず嫉妬に怒っていたタバサが、音を立てて立ち上がり部屋に行った事により、

固まった空気が緩み、皆やっと動き出し、今日はこの儘、お開きと相成った。

ｓｉｄｅ：ベランダｂｙ才人

「……ハァ。家に帰りたいなぁ…。」

ギーシュ達は、下でどんちゃん騒ぎ。カイトは宣言通り、今日は一歩も部屋を出て無いらしいし。

……何か、タバサが物凄い不機嫌になってたけど。……ちょっと…いや、凄く恐かった。

……にしても……明日…か。

俺に一体何が出来るって言うんだ。あのワルドに勝てなかった俺に……。

ルイズの婚約者があんなに強いなら、俺なんて別に居る必要無いじゃないか。

……はぁ、どうしよう。……もう…なんか、俺……惨めだよなぁ……。

「……サイト。……負けたぐらいで泣かないでよ、みっともない。」

……ルイズか……。

「ちがわ。……帰りたくて泣いてたんだ。」

「……悪いとは思ってるわよ。」

「どうだか……犬扱いの癖に。」

「仕方無いじゃないの。私は貴族なんだから……外聞が悪いじゃない。」

「……ハァ……。どうやったら帰れんだろ……もう、こんなとこには居たくねぇよ。」

「……何よ、私だって迷惑よ。」

その後はもう、売り言葉に買い言葉で、いつもの口喧嘩……。

そして、その挙げ句の言葉が……その結果がこれだよ。

「……ワルドに守って貰えばいいだろ？」

「呆れた。負けた事を未だ気にしてるの？

あんたは私の使い魔でしょう？　負けたって胸を張りなさいよ。

そんな情けない顔してたんじゃ、ラ・ヴァリエールの名に傷が付くわ。」

「……。」

「……分かったわ。いいわよ、好きにすればいいわ……ワルドに守って貰うから。」

「……そうしろよ。」

「あの人、頼り甲斐があるから、きっと安心ね。
……別に使い魔のあんたに言う事じゃ無いけど……今、決心したわ。
私、ワルドと結婚する。」
「……。」
「……ワルドと…結婚するわ。」
「……っ……。」
「……！　アンタなんか一生そこで月でも眺めてればいいのよ！！」
……そうか。何となくそう思って、言われた通り、月を見ようとしたら……！
「うわっ！！」
な、なんだ?!　この巨大な影……こいつ…動くぞ！　……ん?
あの影は……！

「フーケ！」

「あら、感激。覚えていたのね？」

「どうしてアンタが此処に…？　カイトに言われて故郷に帰ったんじゃ無いのか？！」

「帰ったわよ？　帰った後で、雇われたのよ。」

「雇われた？」

「そう。……あんた達をぶちのめす様にってねぇ！」

糞っ！　何とかこいつから逃れないと…！

そう思ってルイズの手を引っ張り、一階に逃げたら……其処も戦場になってたんだ。

でも、其処にカイトが来てくれて、どうにか助かったんだ……けどな？

……カイト。……頼むから上着か、せめてシャツぐらいは着て来てくれよ……。

ｓｉｄｅ：『女神の杵』亭　一階

何とかフーケのゴーレムの攻撃を掻い潜って、才人達も一階に来たはいいが……。

其処も修羅場と化し、椅子やら机やらを防波堤にして、睨み合いをしていた。

無関係な客達は其処彼処で震え怯え、店主は襲って来た傭兵に食って掛かったが、

逆に矢を射られ、腕を負傷しさっきから床をのた内回っている。

「……参ったね。」

「……ええ。やっぱり、この前の連中は、只の物盗りじゃ無かったみたいね。」

「ああ。しかも、この店を襲うには不釣り合いな程、数が多いな。

……あのフーケが居ると言う事は、アルビオン貴族が後ろに居ると言う事か……。」

あーでもない、こーでもないと、みんなが侃々諤々している所に、KY（カイト）が現れた。

「ふわぁ～～っっ……。　おろ？　みんなして何してんの？　戦闘ごっこ？」

“どんな遊びだ（よ）！！”

思わず、ワルドまで一緒になって突っ込んでいた。

「というか、カイト！　お前、せめて上着かシャツぐらい来て来いよな！」

「んあ？……ああ、済まん。今の今迄シテいたんでな。丁度、一っ

風呂浴びて来た所なんだよ。」

……成る程。言われてみれば、身体から上気が立ち上り、何時もに無い男の色気が有る。

だが、そんな事よりも、つい男にとって大事な事が気になってしまうのが男の性。

「……なぁ、カイト。」

「ん？　どした？」

「あの女性は一体、今どこに居るのかね？」

「……ああ、水薙なら今は、疲れてココに居る。」

そう言って、自分の胸を指差すカイト。そして首を傾げる一同。

“ここ？”

思わず、戦闘中と言う事も忘れて、異口同音にカイトに聞く面々。

「そう。ココ……俺の中。あいつらは俺の従者にして、使い魔の様なものだからな。」

皆、色んな意味で有らぬ想像をしていた。自分の使い魔とそういう事をしている想像。……

思わず、ブルッとしていた。……尤も、ルイズと才人だけは、顔を赤らめていたが。

しかし、そんなカイト達の漫才に痺れを切らしたか、

傭兵達が唯一立った儘のカイト目掛けて、矢を射て来た。……が、あっさり全部掴み取られた。

“……は？”

皆、驚いて口をあんぐり開けていた。何せ、才人達に顔を向けて話していたにも拘わらず、

見向きもせずに、全ての向かって来た矢を手掴みしていたのだから。

しかし、相変わらず一向に気にしないカイトは、その儘でワルドに話し掛けた。

「なぁ、ワルド。あいつらどうする？　捕まえる？　それとも、用済みとしてもう殺しちゃう？」

「……何故、私に？」

「何故もへったくれもねぇだろ。お前が一応は、才人達のリーダー扱いだろ？

だから聞いてんのさ。……んで、どうする？　もう殺っちゃっていい？」

「……好きにするといい。あれだけの数をどうにか出来るのであればな。」

そう。本来ならば、精々２０人前後程度の数の筈。だが、今は、明らかに４０～５０人は居る。

一体、何処からこんだけ雇って来たのか謎だが、しかし現に此処に居る事には違いない。

どうするのかと、皆カイトを注視していると、先ず未だのた打ち回

っていた店主に近寄り……。

「今治すから、大人しくしていてくれ。　癒せ。」

すると、店主の身体が光り出し、それが収まると身体が完全に癒えて居た。

だが、店主はカイトに礼を言うでも無く、「……せ、先住魔法…！　ひ、ヒィィッッ！！」

と叫んで、店を放っぽり出して、逃げてしまった。怯える傭兵。呆れるカイト。

「おいおい……。俺の魔法を、あんなエルフ風情の魔法擬きと一緒にしないで欲しいなぁ…。」

あの恐ろしいエルフを扱き下ろすカイトにも驚いたが、杖も無しに魔法を使った事に、

本当に先住魔法では無いのか？　という疑問が頭を擡げて来た。

そんな疑念が渦巻く最中、カイトが傭兵達に身体を向けた。傭兵達の身体が我知らず跳ねた。

そして……カイトの宣言によって、彼等に絶望の鎌が振り下ろされる事となった。

「さて…と。まぁ、そういう訳でな。残念だが、もう死んでくれ。

ファースト・イグニッション　ライトニング　鎧化（アムド）」

誰とも無く、思わず突っ込もうとしたが、その瞬間カイトが光りに包まれ……

その光が収まると、代わりに光の逆る全身鎧が現れた。

皆、その変容に思わず唾を飲み、呆けていた。

「？　……そう言えば、シャル以外に、これらの姿を見せるのは初めてだったか…。

少しは加減せねば、ならぬのでな。……さて。では、死刑執行と行こうか。

さぁ……小便は済ませたか？　神（ブリミル）への御祈りは？

街の片隅でガタガタ震えて、命乞いをする心の準備は完了か？まぁ、もう出来んがな。」

皆、カイトの変貌に……そのおぞましさに思わず身震いした。

……そして、逃げ出そうとする者が出て来た。……だが、もう遅かった。

「……残念だが、もう遅い。

永遠（とわ）なる眠りに誘（いざな）われろ　奥義　氷華乱舞（ひょうからんぶ）」

その瞬間、逃げ出した者も含めて、全ての傭兵が、巨大な氷に覆われた。

そして、その氷が徐々に形を成していき、最終的には綺麗な薔薇の彫刻が出来上がった。

「……過分な氷棺に感謝しな。」　パチンッ！

そう言って、天に掲げた指を鳴らすと、その氷薔薇が完全に砕け散り、

中に閉じ込められ固まっていたモノ……その全てが、諸共に氷の粒と化した。

皆、その余りの威力、凄惨さ……そして何より……その美しさに、呆けていた。

そして、皆が呆けている内に、何かに気付いたカイトが、空に視線を向け、飛び去った。

……と思いきや、直ぐ戻って来た。……フーケをお姫様抱っこしながら。

その腕の中で、真っ赤になって暴れているフーケを気にもせず、そっと地面に降ろすカイト。

「礼なんか絶対、言わないからね！／／／」とか言いながら、そそくさと逃げるフーケ。

上半身を折り曲げながら、小刻みに揺らしている。……恐らく笑っているのだろう。

然う斯うしている内に、カイトが辺りを見回し……危険は無いと確信したのだろうか？

自身が着ていた鎧を脱ぎ、才人達に笑顔を見せた。

その何時もと変わらぬカイトの笑顔に、才人達はホッと一安堵し、外に出て来た。

「お～い。」と手を振りながら、才人達の許へ歩み寄るカイト。

――刹那――そう――正に、その瞬間だった――

「……ぐっ……ごぼっ…！！」

――カイトの胸から、杖が突き出たのは――

ｓｉｄｅ：三人称

皆、一体何事が起こったのか分からなかった。

自分達に手を振って来たカイトの胸から杖が出ている。

そして、カイトの胸と口から、血が大量に吹き出た。

其処迄経って、ようやっと事態を理解した。次の敵襲に備えて、辺りを見回すワルド。

デルフを抜き、一目散にカイトに駆け寄る才人。それに続くタバサ・キュルケ・ルイズ。

だが、その隙を狙って、その襲撃者は才人目掛けて『ライトニング・クラウド』を唱えた。

「！！　いけねぇ！　相棒！　『ライトニング・クラウド』だ！」

「！　ぐぁぁあああああ！！！！！」

『ライトニング・クラウド』が才人に直撃したが、

辛うじて左腕がほぼ焼け焦げる程度で済んだ。本来ならば、確実に死に絶えていた程の威力。

理屈は解らないが、寧ろ、その程度で済んだ事に感謝すべきであろう。

その謎の襲撃者は、ワルドの『エア・ハンマー』によって、崖下…奈落に落とされたが。

しかし、普通ならば失神しても可笑しく無い程の、その大火傷の身体を引き摺り、

才人は、胸から血を止め処(ど)無く流し続けているカイトの元へと、這い寄った。

其処では、タバサが泣きながら、カイトに獅噛(しが)み付いていた。

もう胸が上下していない……呼吸していないのだ。……誰がどう見ても、明らかに死んでいた。

皆、愕然としていた。あれだけの強さを誇っていたカイトが、こうもあっさり死んでしまうとは。

未だ、信じられなかった。……それでも、タバサの号泣が……その事実を物語っていた。

キュルケが、そのタバサの肩を叩き……慰めた。

「……もう、行きましょう、タバサ。此処で泣いていても、彼は帰っては来ないわ。

後で、此処に戻って来て、それから彼の遺体を受け取りましょう？」

……が、それを……親友の手をタバサは払い除けた。……驚き、思わず固まるキュルケ。

今迄で、初めての拒絶。友として……親友となって、初めての事。戸惑いは隠せなかった。

……だが、その訳も……その余りの慟哭の訳も……彼女の嗚咽混じりの独白で、理解出来た。

「……ヒック……ウグッ……ど、どう…して……どうして……

……わ、私の……

私の……大切な…人たち…は……みんな……みんなぁ……いなくなるの……？

ど…どうして……みんな……私から……離れて…いっちゃう…のぉ……ヒック……

また……グスッ……ま…またぁ……守れな……かったぁ……。

うぅっ……。

また……わたし……また……も、もう……ひとりは……ひとりぼっちは……

もう……いやぁぁぁっっ！！！！！　あ、あ、ぁぁぁあああああ！！！！！！」

「……タバサ。」

「……くっ……くそっ……！　くそっくそっ！　くっそぉおおおおっっっ！！！」

「……カイト……タバサ……サイト…。」

「……これでは……余りにも…悲し過ぎるじゃないか……。始祖ブリミルよ…。

これが……貴方の試練だとでも言うのですか……！　始祖ブリミルよ！！」

皆、そのタバサの慟哭に同調し、悲しみを更に深め、同様に慟哭した。

……だが、時は待っても、止まっても……巻き戻ってもくれない。

「酷な様だが、もう時間が無い。急がなければ、船に乗り遅れてしまう。」

「で、でも、タバサが…！」

「済まない。こちらも極秘の急務なのだ。どうしてもと言うのならば、彼女は置いて行く。

君達も、彼女と共に残るといい。彼女一人では、心配だろうからな。」

そう話していた時だった。……皆が、真の驚愕の光景を目の当たりにしたのは。

「……ぅっぅっ……また……わたしの……たいせつな……ひと……（ポンッ）…え？」

「……そうか、そいつは済まなかったな。

真逆、其処迄想って貰えてるとは、思いもしなかったよ……シャル。」

“な、な、な、なぁぁぁぁぁああああああああッッッッッッッッッ!?!?!?!?!?”

「……う…そ……いきてる？　……生きてるの？」

「ああ。御覧の通りだよ。……よっと。」

そう言って、半身を起こすカイト。

確かに良く見ると、胸に空いた穴は何時の間にか塞がって居り、血も止まっていた。

……そして、カイトは泣き腫らしたタバサの目を拭い、自分の胸にタバサの頭を掻き抱いた。

「……ほら、シャル。俺の鼓動がちゃんと聞こえるだろう？

紛れも無く、俺は今、此処に生きているよ。」

「……きこえる……ホントに……聞こえる……ぅぅっ……ぅぁぁあああ……

うわあああああああああッッッ！！！！！」

「……ゴメンな…シャル。心配掛けて。もう、大丈夫だよ…俺は何処にも逝かない。

シャルを置いて、決して何処にも逝ったりなんかしないよ。

俺は、何時何時迄(いついつまで)も、シャルと一緒だ。……ずっと……ずっと……何時迄も。

だから……もう安心してくれ…シャル。……今は、好きなだけ泣くといい。」

皆、カイトが生き返った事に、非常に驚きはしたものの、死んでなかった事。

只、その事実が嬉しくて、今はその疑問は後回しにしようと思った。

……だが、それが出来ない者が一人。……どうしても、納得出来ない者が其処に居た。

ｓｉｄｅ：ワルド

……ば……バカ……な……！？！？！？！？

た、確かに…私は……いや、私の遍在（ユビキタス）は奴の心の臓を貫いた筈だ…！

ま、間違い無く、奴は確実に死んでいる……ならば何故？！

何故、奴は今生きている？！

死んだ振りでは決して無い。そんな事に今、此の時点では全く意味は無い。

では、実は死人？　アンデット？　い、いや、真逆、不死の生物？！

そ、それとも……真逆、生きていると私達が錯覚させられているのか…！？

い、いや、そんな事はそれこそ有り得ない。……では、何故？　何故、奴は生きている？

今、こうして、私の目の前に居て、動いている？！　な、何故だ…

…何故なのだ！！！！！

わ、分からない……私には……奴が……こいつが分からない……！
！　何故なのだ…！！

「……な、何故だ？」

「……どうした、ワルド。此の俺が生きている事が、そんなに不思議か？」

「……あ、当たり前だ。……貴様は…確かに心の臓を貫かれていた。間違い無く、死んでいた。それは間違い無いのだ。……ならば…何故？

何故、貴様は今、生きている？　どうして、死んだ筈の人間が…生きていられるのだ…？！

き、貴様は…一体、何者……なのだ…？！　何者なのだ…！　答えろ…！

答えろ…！！！　答えぬかぁぁぁぁぁッッッッ！！！！！！！！！！」

「わ、ワルド？　い、一体、どうしたの？　よ、様子がおかしいわよ？」

「ルイズ、下がってろ。……さて。俺が何者か……と言う事だが……。

残念ながら、それを話すには、今は時間が足りない。

……が、何故生きているか……それだけは教えてやろう。

早朝出航する迄には、丁度それぐらいの時間は有るだろう。」

「では、早速教えて貰おうか。何故、貴様は未だに生きていられるのだ？」

「その答えは簡単だ。俺は少々特殊な存在でな。俺には命のストックという物が有る。」

「……命のストック……だと？」

「ああ。分かり易く言えば、俺は幾度殺されようとも、

そのストックが有る限り、何度でも生き返れる。

そしてその数は、お前達が俺を殺す事にその人生の全てを懸けたとしても尚、

殺し切れない程の、膨大な貯蓄が有る。……まぁ、そういう訳さ。」

「……そ、そんな能力……い、いや、そんな存在など……私は……聞いた事が無い……。」

「そりゃそうだろ。どんな世界にだっていねぇよ。

こいつは俺だけの、俺の為だけにある、俺以外には扱えない能力だからな。

只の人間……いや、生物風情には、決して俺の域には近付けない。」

「……き、貴様は……い、一体……何者なのだ……何者だと言うのだッ！

貴様は……神だと……神だとでも言うのかッッッ！！！」

「は？　……おいおい、巫山戯るなよ？　高が神風情と此の俺を比べるな。

あんな雑魚ゴミ共と比べられるなど、虫酸が走る。俺は神を創りし神を越えし者。

我は、『宇宙（そら）の救世主（メシア）』にして『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』

……否。『真なる救世主（メシア）』にして『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』也。」

カイトから唐突に醸（かも）し出された……皆が初めて味わう神気と言う物に、皆敬（おそれた）った。

「……さて。そろそろ、良い頃合いだな。急いで船へと向かうぞ。皆、当初の目的を忘れるな。

残りの俺の話は、船の中でしてやる。……それで構わんだろう？ワルド。」

「……分かった。では、早速船へと行こう。」

「ああ。……ほら、シャル。もう行くよ？　立てるかい？」

「……グスッ（コク）。」

「…良し、良い子だ。さぁ、みんな行こう。浮遊大陸アルビオン迄は、もう目と鼻の先だ。」

ｓｉｄｅ：マリー・ガラント号船内

船が繋留（けいりゅう）してある岸に着いたは良いが、どうやら少々早かった様だ。

しかし、気が急いていたワルドは、足りない風石分は自分が働くと言い、金もたんまり出した。

交渉が成立した船は、早速、未だ夜も明け切っていない空を飛び始めた。

そして、船内に案内され、ようやっと人心地着いた一行は、ふとした疑問を漏らした。

「……そう言えば、ワルド……貴方のグリフォンはどうしたの？」

「……そうだ。そう言えば、カイトが連れて来た、あのでっかい龍達も居ないぞ？」

「そう言えば、そうね。…タバサ、貴女のシルフィードも何処に行ったの？」

矢継ぎ早の各々の質問に、各自順番に答えた。

先ずワルドが口笛を吹くと、何処からともなく、グリフォンが甲板に降り立った。

次にカイトが、「あいつらは、水薙と同じで俺の使い魔だからな。俺の中に居る。」と答え、

最後にタバサが、一時でもカイトとは離れたく無いのか、カイトの耳元に小声で話し、

それをカイトが皆に伝えた。……苦笑混じりで。

「もう、既に甲板に居るってさ。みんなより一足先に来させてたって。

ヴェルダンデも一緒に咥えて来たってさ。安心しな、ギーシュ。」

「そ、そうか！　よ、良かったぁ…。後で、僕の愛しのヴェルダンデに会いに行こう…。」

「相変わらず、先を読んでるわね…。……にしても……ちょっと引っ付き過ぎじゃない？」

そうなのだ。あの後、タバサがカイトに泣き縋(すが)った後、

ずっと片時も、タバサがカイトから離れないのだ。

当然、カイトとしては、惚れてる相手に獅噛み付かれるのは嬉しい限りなのだが……。

その突然と言ってもいい豹変振りに、少々戸惑い気味なのだ。……だが。

「……離れなきゃ…ダメ？」

などと、瞳を潤ませて懇願されてしまえば、そりゃ逆らえる訳も無く。

流石のキュルケも、無理矢理引き剥がす事も出来ず……まぁ、元々するつもりも無いが。

「……そんな訳無いだろ？　タバサの好きなだけ、一緒に居ていいよ。」

「……シャル。」

「ん？」

「……いつも、あなたがそう呼んでくれた。……そう、呼んで欲しい……。」

「……分かったよ……愛しい俺のシャル。」

「／／／／／／／／／／／／／／／」　ぎゅぅ…！

「……ん……。」　ぎゅ…

……とまぁ、バカップル顔負けの、皆など何処吹く風の二人に、皆は当然の事、

さしものキュルケも、少々……基、可成り嫌気が差す程の甘々過ぎる空間だった。

……どの程度かと言うと、あのワルドですらも、声を掛けるのを本気で断念した程である。

……さて。そんな超絶バカップポー空間とは対極なのが、もう一方のカップル？

ｓｉｄｅ：才人

「……ねぇ、サイト……傷は大丈夫？」

「……触んなよ。」

「何よ！　心配してあげてるのに！」

そう言った後、ルイズの所にワルドが来て何か話し合ってる。

……全く……本当に情けない。……また……まただ。又、俺はルイズを助けられなかった。

カイトも……偶々、不思議な奴だったから助かったものの……普通なら、その儘死んでる。

……敵もワルドが倒しちまったし、その前の傭兵達はカイトがあっさり片付けちまったし……

ホントに、良い事無しだ。オマケに、この大怪我……ハァ……本当に…不甲斐ない。

俺は……俺は……どうしたらいい？　……どう……したいんだろう？

そんな事を考えていたら……何時の間にか……寝ちまってたみたいなんだ。

ｓｉｄｅ：三人称

翌朝。浮遊大陸アルビオンのその大きさに驚く才人達。然う斯うしている内に、空賊に襲われた。

……え？　空賊？　そして、カイト（バカップル）とタバサは相変わらずイチャついてる。

……え？　空賊？　大事な事なので、にｋ（ｒｙ　それはさておき。

甲板に居た使い魔達も眠らされ、何とか抵抗しようとするも、ワルドに止められる。

そして、カイトとタバサは、矢張り抱き合ってイチャついている。

で、結局、全員揃って杖と剣（デルフリンガー）を取り上げられ、船倉に放り込まれた。

そして、やっぱりバカッポーは（ｒｙ

その内、才人が顰めっ面をし出した。どうやら、傷が未だ痛む様だ。

痩せ我慢をする才人を抑え付け、ルイズが服をたくし上げると、

才人の左腕が、肩から先に掛けて、巨大な蚯蚓（みみず）腫れになっていた。

思わず悲鳴を上げる、ルイズ・キュルケ・ギーシュ。

慌てて、誰でもいいからと呼び付け、才人の治療を頼むも、本人に断られ、泣き出すルイズ。

そして才人に促されてルイズを慰めるワルド。床に寝転がる才人。
バカップｒ（ｒｙ

そうしていると、スープを持って入って来た男が一人。

「何しにアルビオンに来た？」と詰問して来た。

……もうそろそろいいだろうと、バカップルの片割れがやっと動き出した。……引っ付いた儘。

「なあ。ちょっといいか？」

「ぁん？　なんだおめぇ……。女といつまでも抱き合いやがって……俺達への当て付けか？」

「ふむ。それもいいかも知れんが、それは目的じゃない。」

「じゃぁ、一体、どんな目的で来やがった？」

「お前達に会う為さ。」

「……何？」

「改めて言おう。此方に御座すは、ラ・ヴァリエール公爵が三女。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢。その目的は、アルビオン王国皇太子…ウェールズ・テューダー殿下に会う事。」

“な!?”

行き成り、とんでもない事を空賊に暴露するカイトに、みんな吃驚仰天。

……しかし、当の空賊は、カイトの意図を計り兼ねているのか、顰めっ面を崩さない。

そして、カイトは更なる暴露を続けた。

「そして、殿下に会う目的は、殿下の従妹にして、殿下の想い人。アンリエッタ・ド・トリステイン姫殿下からの密書を手渡し、

又、殿下から、姫殿下が殿下に宛てた恋文を返して貰う事。

そして、あわよくば殿下にトリステインに亡命して貰う様、説得してくる事。

最後に、此方が本物の大使である証拠に、

ラ・ヴァリエール嬢が姫殿下から水のルビーを預かっている。

殿下の持っている風のルビーと示し合わせれば、虹の架け橋が出来上がる。

それが何よりの……そして、絶対の証拠となろう。

以上、今言った事の全てを、空賊ごっこをしている君達の頭領……ウェールズ・テューダー殿下に、一字一句間違えずに伝える様に。」

言わんでもいい事まで暴露してしまったカイトに、皆其々（それぞれ）、呆れと驚愕と……

まぁ各々、色々綯（な）い交ぜな表情を見せていた。

暫し待てとの、空賊の言葉の後、大分経ってから、先程の空賊が現れ、

全員を頭領の居る所へ連れて行った。……そして、矢張りカイトの言った通りの事が行われた。

その後、正体を現したウェールズと密会する大使役のルイズ。

……そして、舞台は浮遊大陸『白の国（アルビオン）』へと移って行く。

……其処で起こる、幾つもの裏切りを……誰も決して知り得ない儘……。

舞台は回り、役者は謡(うた)い、道化は踊る。そして観客は狂喜乱舞する。

それが……遙けき高みより、操られし糸繰り人形だと言う事を誰も知らず……気付かず。

舞台は回る。回る。謡う。謡う。踊る。踊る。それらが皆、定められた運命とも知らず。

そして……それらの運命もまた、自身が操られている事にも、永遠に気付かず。

舞台は回る。回る。謡う。謡う。踊る。踊る。只一人の思惑の為に。
只一人の女性の為に。

世界は動き、定められ、廻り、只、続けて行く。……新たな歴史（シナリオ）を。

舞台は廻り、役者は謡い、道化は踊る（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、これを切欠に、タバサはデレ一直線になります。しかし、未だ一線は引いた儘。

その一線を完全に越える時は、勿論、彼女の全てを救ってからです。

ですが、それまでは基本バカップルでごーごー。

……しかし、現時点でこれでは、一線を越えた後は想像も付きませんね……；；；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトとガンダールヴとデルフリンガー（前書き）

現時刻（０４：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，２８０，７３６アクセス　ユニーク：１１１，３５８人
皆様、いつも有難う御座います。

さて、今回。ちょっと区切り所が判らず、続けて書いていたら……
うん。

間違い無く、今迄で最長ですね。一万五千字って……１５，０００字って……ｏｒｚ

と言う訳ですので、皆様。御飲物は御用意なさいましたか？

では、今話も拙筆を御堪能下さい。

カイトとガンダールヴとデルフリンガー

ｓｉｄｅ：ニューカッスル城内ホールｉｎ白の国（アルビオン）

只今、パーティーの真っ最中。今月今宵（こよい）のこの月を限りに、皆、最期の晩餐（ばんさん）を楽しんでいる。

明日は、暴虐（ぼうぎゃく）の最中（さなか）に飛び込むと言うのに……いや、だからこその賑わいであった。

そして、戦の最中にわざわざ死地にやって来た大使達を、物珍しく思いながらも、

皆、思い思いに誰かに話し掛け、最後に「アルビオン万歳！」と叫んで、離れて行く。

タバサを除いた皆は、未だ味わった事の無い、戦場・戦争……しかも敗残軍の空気に戸惑い、

物悲しさと怖れを抱いていた。だがその内、キュルケとギーシュは、最早何か割り切ったのか、

自分に発破を掛けると、その歓談の輪の中に自ら入り、共に飲み食いし始めていた。

そして、カイトは矢張りタバサと常に共に居、周りに揶揄（からか）われながらも、ずっと満面の笑みで、

真っ赤になっているタバサを抱き締めている。

……しかし、そんな中にも割り切れない者が二人。……そう、才人とルイズである。

二人共、顰(しか)めっ面で皆の様子を見ながら、憂鬱な気分に浸っていた。

そんな二人に声を掛ける者が一人。……座の真ん中で歓談していたウェールズであった。

「やぁ、御二人共。……余り、この宴席は楽しんでは貰えていない様だね。」

「……。」

「……無理ですよ…。」

益々俯(ますますうつむ)くルイズと、丸で懇願する様に愚痴を零(こぼ)す才人。それに思わず苦笑するウェールズ。

そんな二人とどう話そうか……どう慰めようかと考えていた所に、又もや声を掛ける者が……カイトが近寄って来た。傍(かたわ)らに、真っ赤なタバサを抱き締めながら。

「よう、ウェールズ。ちゃんと楽しんでるか？」

「やぁ。……君は確か……カイト…と言ったね。ああ、大いに楽しんでるよ。…でも……。」

少し眉を曇らせ、今話していた二人を見るウェールズ。それを見、ああ…と声を漏らすカイト。

「何だ、才人、ルイズ。お前等ももっと楽しめよ。これが最期の晩餐なんだぞ?

皆、明日、これから死にに行くってーのに、それじゃ縁起が悪かろうもん。」

「「…!!!」」

そのカイトの無遠慮な言葉に、思わずキッと睨む二人。だが、それも束の間。

ルイズがもう耐えられないとばかりに、今にも泣きそうに顔を歪めて、駆け出してしまった。

ありゃりゃと言うカイト。何も言わないタバサ。仕方ないとばかりに肩を竦(すく)めるウェールズ。

逃げ出したルイズと、そんな三人を見て、思わず更なる愚痴を零す才人。

「……何で、そんなにみんな笑っていられるんだ……。死ぬのが怖く無いんですか?」

「怖い？」

「……そうです。だって、みんな明日死んじゃうんでしょ？　……俺にはとても笑えない。」

「……案じてくれるのか…私達を。……君は優しい少年だな。」

思わず微笑むウェールズ。……そして、自分は今は此処に居るべきでは無いと思ったのか…。

笑みを一つ零しながら、タバサを促して、そっとその場を後にするカイト。

……その向かう先は……玉座。アルビオン王。ジェームズ一世の御座す場。

「どうだ、王よ。大いに楽しんでいるか？」

礼儀など丸で気にもせず、王に気軽に話し掛けるカイト。

幾ら大使一行だからとて、その余りの不敬振りに思わず激昂仕掛ける臣下一同。

だが、それも王が、己が手を臣下に向け制止させた事によって、難儀にならずに済んだ。

「うむ。最期の晩餐である故にな。其方も楽しんでおられるか？大使殿の連れよ。」

「ああ、存分に楽しんでるさ。この最期の豪奢……楽しまねば罰が当たろうぞ。」

「ふむ。真に以て然るべし。……共に楽しんで頂ける事に、感謝致す。」

「何の。その様な無粋は無用と言うもの。今は只、共に飲み、喰らい、笑うのみ。

そして、唯々、明日への英気を養うのみ。……違うか？　王よ。」

「……うむ、然り。では、改めて共に騒ごうぞ。」

「ああ、共に。最期の日ぐらいは、互いに年甲斐も無く燥ごうぞ。」

そして、そんな周りの空気など何処吹く風かとばかりに、初対面の王と親し気に話すカイトに、

家臣一同はカイトを睨み付け、ギーシュ達はカイトの一挙一動にハラハラしながら見ていた。

そんな中、カイトが王の耳元へ顔を近付け、何事かを暫しの間、囁

いていた。

その囁きが終わると同時に、今迄細めていた目をカッ！　と驚愕に見開き、

マジマジとカイトを凝視する王。

すわ何事か…！　と緊張に場が静まった時、真剣な眼差しに戻り、カイトの手を借り、ヨロヨロと……しかし、確固として立ち上がった。

「あいや、皆、驚かせて済まぬ。朕は少々、この者と話がある。後程戻るが、一旦此の場を離れる。ウェールズよ。客人方を退屈させぬ様、確かと持て成せ。」

「は、ははっ！　……父上？　なればせめて、誰か供の者を……。」

王に命ぜられ承るも、矢張り一人では心配だと、供を付ける事を願う皇太子他、家臣一同。

しかし、それも王の言葉によって止められる。

「ならぬ。案ぜずとも良い。此の者は、朕には決して危害は加えぬ。

少々、長話になるやも知れぬ故、朕には構わず、各々楽しむが良い。」

“ははっ！　アルビオン万歳！！”

「……うむ。」

「……では、行こうか、王よ。足許には気を付けられよ。」

「うむ、済まぬ。……所で、その娘は…？」

さて、臣下も説得し、いざ行こうと思ったが、カイトの傍らに居た少女に目が留まり、

彼女は如何するか、カイトに問うた。

「ああ……済まぬが、この娘も同伴しても宜しいか？」

「……其方（そなた）に縁（ゆかり）の者か？」

「ふむ……或る意味、縁は有るが……彼女が真に縁が有るは、俺では無い。……反乱軍（レコン・キスタ）だ。」

「何と！？　……相分かった。では、共に参ろうぞ。……其方…名は？」

「……。」

王に名を問われるも、何と答えたものか…返答に困り、思わずカイトを見るタバサ。

それに応え、王に答えるカイト。

「それは後程。少々、この娘も訳ありでな。今は許せ。」

「……相分かった。なればこそ、急ごうぞ。時は待ってはくれぬのだからな。……此方(こちら)だ。」

カイトとタバサに支えられながら、二人を別室へと促す王。それを黙って見送る一同。

一方、才人達は、何故にタバサまで一緒なのか疑問には思ったが、どうせカイトが、「一緒じゃ無きゃヤダ」とかごねたんだろうと、見当（違い）を付け、

或る意味での納得をしていた。

……その後、宴も酣(たけなわ)を過ぎ、そろそろ終(しま)いにしようかという頃に戻って来た王は、

如何にも憔悴(しょうすい)し切って居たが、しかし何処かすっきりして居り、

希望に満ち溢れている顔をしていた。

その突然の王の変わり様に、何事があったのか丸で分からず、訝しんだ一同が王に問い質すも、一切はぐらかされ、

結局、終ぞ王以外……後にウェールズがカイトにその詳細を聞かされる迄、

誰一人として知る事は無かった。

ｓｉｄｅ：脱出用難民船『イーグル』号の列中

其の中に、才人・キュルケ・ギーシュ・ヴェルダンデが居た。……そう。

何故かキュルケもその場に一緒に居た。普通に考えれば、カイトとタバサを取り合ってた仲だ。

きっとタバサと共に居て、又、カイトと彼女を取り合ってると思っていたのだが……。

そう、疑問に思ったギーシュは、自分の使い魔（ヴェルダンデ）を愛（め）でながら聞いてみた。

「……？　ミス・キュルケ。君はミス・タバサと共に居なくても良いのかね？」

「……良いのよ。タバサが彼と一緒に居たいって言うんだもの。

親友である私としては、一応はタバサの初恋を応援してあげたい気持ちもあるの。

……尤も、未だ任せると決めた訳でも、あの人を信用してる訳でも無いけどね。」

それに、あのベッタリ振りじゃ、引き離せないでしょ？　と呆れて肩を竦める始末。

その言葉に、そりゃそうだ……と、何となく納得してしまい、苦笑する二人であった。

戻る手段も、どうせカイトの事だから、何かしら有るんだろうと言う事で、結論が出た。

そして又、会話が無くなり、自分達の耳が周りの喧噪（けんそう）に支配される。

……その間、矢張り暇なので才人は自分の剣（デルフリンガー）と話していた。

だが会話が終わっても尚、未だ列が動く気配が無い。周りの人も更

に増えて来た様な気がする。

この世界にも、未だこんなにも人が居たのか…。と、日本の通勤風景を何となく思い出していた。

……そんな時だった。……才人の左目から見える風景が、歪んで見え出したのは。

ｓｉｄｅ：礼拝堂

その神聖なる場で、ウェールズは皇太子の礼装に身を包み、新郎と新婦を佇んで待っていた。

……無駄な事を……憐れな。…ゴホンッ。

そして、その場には参列者として、カイトとタバサも同席していた。

その中でタバサは、自分もこんな所でカイトと結婚を……と、夢を妄想(みそう)しながら、

カイトの事をチラチラ見ては、顔を赤らめていた。当然、カイトは

それに気付いていたが、

敢えて気付かない振りをし、タバサが自分を見ていない隙を見て、こっそり盗み見しては、くすりと笑っていた。……自分と風音母（はやて）との結婚式を思い出しながら。

然う斯（バカップル）うしている内に、主役（笑）が来た。

入って来た二人は、対称的な顔をしており、とてもこれから結婚する二人には見えなかった。

どんな感じかと言うと、ワルドが厳正な顔をしているのに比べ、ルイズは……

昨夜の才人との口喧嘩によって、半ばの自暴自棄に加え、若干の茫然自失の体を為していた。

そのルイズの様子を、事情を知らないワルドとウェールズは緊張しているものと思い、

早速、ワルドの為すが儘のルイズ共々、準備が調った新郎新婦（笑）の式を挙げる事にした。

「では、式を始める。新郎～……。」

ウェールズが誓いの詔（みことのり）を読み上げ、ワルドが皇太子の前で、始祖と杖に誓った。

それにウェールズは笑顔で頷き、次にルイズに視線を向け、詔を朗々と読み上げ始めた。

その時になってようやっとルイズは、今、此の場が結婚式の最中だと気付いたが、

慌てるでも無く、詔を聞いてる風でも無く、何事かをじっと考えている。

……一方。参列席のカイトとタバサは…と言うと……。

「……私も……。」

「…ん？」

「……私も……あんな風に…貴方と……／／／／／」

ポツリと零したタバサの言葉に反応して彼女を見ると、

顔を赤らめ瞳を潤ませながら、上目遣いでカイトに縋(すが)って居た。

「……そうか。でも……。」

「……でも？」

カイトの台詞に、思わずビクッと身体を竦ませながらも、恐る恐る続きを促すタバサ。

それに苦笑混じりで微笑みながら、応えるカイト。

「でも、未だシャルとは結婚出来ないな…。」

「……どうして…？」

「だって、未だ恋人になったばかりだからね。逢い引きもしていないのに、結婚は早いだろう？

まだまだこれから、沢山色んな所を二人で回って遊んで、色んな経験を積んでいきたいし。」

「……／／／／／／」

「だからね？　未だ、結婚は出来ない。……でも…。」

「…？　でも？」

「……でも、君に愛を誓い、君と愛の言葉を交わす事は出来るよ……愛しい俺だけのシャル。」

「……ぁ／／／／／／／／／…………ぅ…………／／／／／／／／／」

「……シャルロット。……貴女を愛している。」

「……わ、私も……貴方を愛しています……カイト／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ん。……………ぅん………………。」

「……んぅ！？／／／／／／…………ん……／／／／／／／／／」

「……あ～…んっ…んんっ！　ゴホンッ！！」

「「…ん？　……あ。」」

「御二人共？　此の場にて愛を語られるのは実に結構な事であり、又、とても喜ばしい事では有るのだがね？

新郎新婦よりも先に、口付けを交わされるのは如何なものかな？」

敢えて空気を読まなかったウェールズによって、その甘やかな雰囲気は壊されてしまった。

「ぁ……ぅ……／／／／／／／／／／／／／／／／」

「あいや、これは失敬。いや、余りにも、我が愛しの君が可愛らしかったものでね。

つい、我慢が出来なんだ。許されよ、殿下…子爵。

……それに、殿下とて我が気持ちは理解して頂けるであろう？

己が愛しの君の、大変可愛らしい姿を目の前にして、

我慢しろなどと言うは、無粋の極みでは無いか？」

「む……ぬぅ…。ま、まぁ、その気持ちは察するが……／／／

今、此の場では、その御気持ちは一旦、控えては頂けぬかな？」

「うむ、そうだな……未だ、主役の出番は終わっておらぬ事だしな。

相分かった。今は、何とか辛抱するとしよう。……所で…。」

「うん？　何かな？　カイト殿。」

「……キスもダメ？」

「……ダメだ。」

「どうしても？」

「どうしてもだ。」

「いや、声は出さないからさ。此の参列席で大人しくしてるからさ。……ダメ？」

「……ダメだ。寧ろ、その接吻を控えられよと私は申しているのだが？」

「……え～～～……。」

「……駄々を捏ねてもダメだ。」

「……ドケチ（ボソッ）。」

「……何か？」

「いいえ、何でも。あ、式の続きをどうぞ。俺は彼女とキスしてるから。」

「うむ。それでは……って、待ちなさい！　だから、それは止めなさいといっているだろう！」

「……チッ…引っ掛からなかったか…。へ～～い。」

「……全く。油断も隙も無い。」

カイトとウェールズの、妙に息の合った漫才に唖然とするルイズ・ワルド・タバサ。

……てか、お前等、戦争の最中に良くそんな余裕持てるな？　……カイトは兎も角。

そんな、天からのツッコミが入ってるのにも気付かず、結局、式は続けられた。

（……さて。時間は稼いだぞ。……早く来いよ……主役。）

カイトの思惑……誰(たれ)ぞ知るか…。その儘、式は続けられた……が。

「……ワルド…ごめんなさい。私、貴方とは結婚出来ない。」

「……ルイズ？」

「新婦？　……新婦はこの結婚を望まぬのか？」

「はい、その通りで御座います。御二方には大変失礼を致す事になりますが……御許し下さい。

私はこの結婚を望みません。」

そう、ハッキリ、キッパリとルイズが断ったのだ。

それに対し見るからに狼狽え、ルイズに詰め寄るワルド。

それをウェールズが制止するも、一顧だにせず、ワルドは叫び続ける。

しかし、頑として断るルイズ。今度はウェールズにまでその牙を剥くワルド。

呆れ返っているカイトにも気付かず、驚愕しているルイズ・ウェールズ・タバサ。

そして、どう頑張って説得（？）しても無駄だと悟ったのか、恐ろしい形相から一転して、

表面上だけは何時も以上の優しい微笑に変わり……最後の説得も虚しく潰えると……

唇の端を吊り上げ、禍々しく歪んだ笑みを浮かべ、ルイズ達は恐怖

に戦いた。

「……こうなっては仕方無い。ならば目的の一つは諦めよう。」

「……目的？」

「そうだ。この旅における僕の目的は三つあった。

……その二つが達成出来るだけでも、良しとしなければな。」

「……達成？　二つ？　どういう事？」

「先ず一つは君だ、ルイズ。君を手に入れる事だった。

……しかし、これは果たせない様だがね。」

「当たり前じゃないの！」

「次…二つ目の目的は……ルイズ。君のポケットに入っている、アンリエッタの手紙だ。」

「……ワルド……貴方……！」

「……そして、三つ目。」

その瞬間、『閃光』の二つ名通り、ウェールズが勘付いて杖を振る

うよりも尚早く引き抜き、

呪文の詠唱を完成させ、ウェールズの胸を刺し貫……く事が出来なかった。

「は～い、残念。ウェールズは殺させる訳にはいかないんだなぁ…こ・れ・が♪」

「な！？　ば、バカな！　こ、この私よりも早く……！？」

そう。正にワルドがウェールズの胸を貫く瞬間。ウェールズの服に杖が触れた瞬間。

……未だ、タバサを抱き締めた儘のカイトによって、杖を手掴みされて止められたのだ。

「……ば、バカ…な……！　い、いま…今の今迄、貴様はあ、あそこに居た筈だ……！

な、なぜ、ここにいる？　何故…間に合う？！　何故だ！？」

恐怖と驚愕に打ち拉がれているワルドに、カイトが死刑宣告にも等しい言葉を投げ付けた。

「何故もへったくれも無いだろう？　あの距離、タイミングで間に合ったと言う事は、

俺はそれだけ早く動けるって事以外の何物でも無いだろうが。」

「……そ、そんなバカな……そんな筈は無い…！

この『閃光』たる私よりも、尚早く動ける者など……い、居る筈が無い…！」

「ハッ！　『閃光』？　高々、光程度の速さで、この俺にスピードで勝つつもりだったのか？

本物の馬鹿だろ……お前？」

「……あ、有り得ない……有り得ない……！！！」

「はいはい。道化はもう好い加減、黙ってな。……そろそろ、主役

の御出座(おでま)しなんだからさ。」

「……何？　主役……だと…？」

そのカイトの言葉に呼応するかの様に、礼拝堂の正面扉が開け放たれた。

「……遅ぇぞ？　……才人。」

「悪ぃ。ちょっと渋滞に巻き込まれちまってな。……でも、何とか間に合ったみたいだな。」

才人(しゅやく)も登場し、ついに舞台も終幕に差し掛かった。

「……ハァハァ……きゅ、急にどうしたんだね…一体…。

突然駆け出したりして…御陰でもう船には乗れないじゃ無いか…。」

「あれ？　なんだ、ギーシュ。お前も来ちゃったのか。追って来んなっつったのに。」

「そういう訳にもいかないだろう？

第一、平民を置き去りにして逃げたとあっては、貴族としての僕の沽券（こけん）に関わる。」

「……ツンデレか。」

「……ツンデレだな。男のツンデレはキモイな。」

お前が言うか、カイト。そんなツッコミが何処からか聞こえたが気にしない。

「タバサ！　大丈夫？　アイツに変な事、されてない？」

「大丈夫。……変な事は……されてない／／／」

「……ちょっと。貴方、私のタバサに一体何をしたの？！」

「何って…何も？　精々、シャルのファーストキスを先程、戴いただけさ♪」

「な！？　ちょっ、ちょっと！　私のタバサに何してくれてんのよ！」

「何って…だからキス？　いやぁ、シャルからせがまれちゃってさぁ…♪」

「ぐぬぬぬぬ……！！」

「／／／／／きゅ、キュルケ…落ち着いて…？」

「……うぅぅ……私のタバサが穢(けが)されちゃったぁ…；；」

「いや、未だ其処までしてないよ？」

「未だって何よ…未だって…！！！」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……ぇえいッッッ！！！　五月蠅いぞ！！　小僧共がぁぁッッッ！！！」

“……あ。未だ居たの？”

「き、貴様等ぁぁぁぁぁあああああッッッッ！！！！！！！！！！！」

ワルドの存在をすっかり忘れて思わず話し込んでいた皆に、無視されて切れたワルドが叫んだ。

しかし、あっさり虚仮（こけ）にされ、又もや切れるワルド。……て言うか…。

お前等戦争中で何で其処までノンビリと…？　……まいっか、カイトが居るし。

そんなツッコミを誰とも無くしていると、ワルドがルイズと才人に杖を向けた。

「くっ……まぁいい。……ガンダールヴよ。良く来たな。」

「……テメェ…良くもルイズを騙したな…！！」

「フン…！　目的の為には手段は選んでは居れぬのでね。」

「ルイズはテメェを信じてたんだぞ！　婚約者のテメェを…！　幼い頃の憧れだったテメェを！」

「……サイト…。」

「信じるのは其方（そちら）の勝手だ。私の知った事では無い。

……まぁ、有り難く利用させては貰ったがね。」

その言葉にカッとなり、飛び掛かろうとした才人を、カイトの言葉が留めた。

「待て、才人。未だ早い。」

「な!?　カイト!　何で止めるんだ!　一体、何が早いって言うんだ!」

「……デルフリンガーが…だ。何時迄そうしている?」

カイトに問い掛けられたデルフリンガーが、何故か苛(いら)つきながらカイトと話し始めた。

「……何の事だ?　テメェは一体何を言ってやがる?　大体てめぇは何者…いや、何なんだ?」

「フッ……お前が元の姿に戻れば少しは思い出すだろうさ。」

「元の姿…?　テメェ、一体何言っ…て……って、あああああ!!!!!」

「う、うおッッッ!?　な、何だ!?　い、一体どうしたんだ、デルフ?」

カイトとの会話中に突然大声で叫び出すデルフに皆、驚くも、気にせず独り言を呟くデルフ。

「そうだそうだ。思い出した!　そうか、ガンダールヴか!　いやぁ、すっかり忘れてたぜ。

何せ、六千年も前の話だからな。いやぁ、そうか…ガンダールヴか。

懐かしいねぇ…。泣けるねぇ…。そうか、相棒…ガンダールヴか！」

「？　何だ？　何を言ってるんだよ、デルフ？　俺にはさっぱりだ。」

「嬉しいねぇ！　そうこなくっちゃいけねぇ！　俺もこんな格好してる場合じゃ無ぇなぁ！」

「デルフ？　はい？」

そして、ガンダールヴの相棒…『神の左手の左手』…デルフリンガーは、その真の姿を顕した。

「ようやっと、思い出したか。お前自身の本当の姿を。」

「……おうよ。……すっかり思い出したぜ。

……テメェが…！　…テメェが！！　ブリミルを見殺しにした事

もなぁ！！！

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！！」

「……クックック……これは…又……。真逆、全てを思い出したのか？

初代ガンダールヴ……サーシャの事も。……そして……『リーヴスラシル』の事も。」

「……ああ。全部思い出したよ。テメェの顔を見たら全部なぁ…！

……何でだ……何で…！　何であの時！　ブリミルを見殺しにした！！

テメェなら、助けられただろ！　例え、死んでもテメェなら生き返らせられただろうが！！

何でだ…！！　何で……何でだ！！！！！」

「……運命だからだ。奴は死ぬべき運命。例え、あの場で俺が助けたとしても、奴は必ず死ぬ。

必ず殺される。初代ガンダールヴ……いや、リーヴスラシルとなったサーシャに。

それが運命。其処に俺が介入したとて、何も変わらん。未だ、その時では無いからだ。」

「……何が……！！　何がその時だ……！！！　何が救世主（メシア）だ……！！！！！

テメェの様な人殺し……！！　……俺には分かんねぇ……！！！

テメェの様な人で無しを、友に選んだブリミルが……俺にはサッパリ分かんねぇ……！！！！！」

「……。」

本来の姿に戻ったデルフリンガーと、カイトとの誰も知らない…誰にも分からない話に、

皆、唖然・呆然・愕然……何も言えなかった。…否、言ってはいけなかった。

デルフの……声を絞りに絞った……その嗚咽……嘆息……慟哭。

もし、彼に涙腺が有るのならば、自身が錆びる程に、

滂沱の涙を流したであろう程の、その嗄(しゃが)れ声。

事情の丸で分からぬ皆を置き去りにして続けられた、二人のその話。

それを打ち破る空気を読まない阿呆が一人。

「……そろそろ、いいかね？」

「……空気嫁。」

そう、ワルドである。もう外から、小さな鬨（とき）の声が聞こえて来ている。

どうやら、そろそろワルドも退きたいらしい。

……だが、只で逃げるつもりは無く、手土産を御所望の様だ。

「ガンダールヴよ。お前達にも聞こえるだろう？　我がレコン・キスタの軍靴（ぐんか）の音が。

もう時間が無い。其処で、貴様に決闘を申し込もう。伝説たる貴様の首が手土産だ。」

「……上等だ！！　いくぞ、デルフ！　あの野郎に、ルイズと俺の分の怒りをぶちまけてやる！」

「…チッ。分かったぜ、相棒！　やい！　『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！テメェ、逃げんなよ！！　後で色々とタップリ聞いてやらぁ！！！」

「ハッ！　しょうがねぇなぁ……！

なら、さっさと其処の空気の読めない雑魚をぶっ飛ばして来いよ！！！！」

「「言われるまでもねぇ！！！！！！」」

「キサマラ……この私を侮るか…！　この閃光のワルドオオオォォォッッッッ！！！！！」

その闘いは、熾烈を極めた。本体を含んだ五体のワルド……風の最強魔法『遍在（ユビキタス）』。

対するは、伝説の使い魔『神の左手（ガンダールヴ）』。そして、その相棒『神の左手（デルフリンガー）』。

ワルドの魔法は全てデルフが吸い込み、杖を中心にしたエア・ニードルからは、

致命傷だけを避け、何とか反撃を試みるも、矢張り敵も、最強の名は伊達では無い。

中々、反撃を加えられず、自身の擦り傷、刺し傷のみ増えていく。

その様（ザマ）に幾分か余裕を得たのか、ワルドが才人に攻撃しながら、話し掛けて来た。

「中々如何（どう）して…。平民にしてはやるではないか！　流石は伝説の

使い魔と言った所か…。

しかし、矢張りは只の骨董品である様だな。私の遍在（ユビキタス）に手も足も出ぬ様ではな！」

「五月蠅ぇ！　おい、デルフ！　お前、伝説の剣なんだろ！　何か、無ぇのかよ！

こう…必殺技みたいなもんが…何かさぁ！」

「んなもんねぇよ。おりゃぁ、剣だってのよ。」

「使え無ぇなぁ！　何が伝説だよ！！」

「いやまぁ、その程度だって。」

伝説同士の漫才を後目（しりめ）に、益々ワルドの攻撃が激しくなって来る。

そして調子が良い事を示す様に、更に饒舌（じょうぜつ）になったワルドが話し掛ける。

「フン！　どうして死地に帰って来た？　お前を蔑（さげす）むルイズの為に、どうして命を懸ける？

……全く…平民の思考は理解出来ぬなぁ！！」

才人を嘲笑し、挑発するワルド。その挑発に乗り、吠える才人。

……どうやら、ルイズが直ぐ側で、自分達の会話を聞いて居る事を、二人共忘れているらしい。

「じゃあ何で貴様はルイズを裏切った?!　婚約者だろうが!」

「……ほほう…矢張りお前……ルイズに恋していたのか?　適わぬ恋を主人に抱いたか!

滑稽な事だ!　あの高慢ちきなルイズが、貴様に振り向く事など有り得まいに!

細(ささ)やかな同情を恋と勘違いしたか!　愚か者めが!!　実に滑稽だ!!!」

「なっ…!!」

そのワルドの物言いに、思わず激昂し、杖を取り出すルイズ。

しかし、それも決闘の最中だと思い直し、自身で杖を降ろす。

「恋なんかしてねぇよ!　……唯…!」

「唯……何だね?」

「……ドキドキすんだよ!」

「……何だと?」

「ああ！　顔見てるとドキドキすんだよね！　理由なんかどうだっていい！

だからルイズは俺が守るんだ！　ルイズを悲しませる奴は、俺が全部ぶっ飛ばす！

俺がそうしたいからだ！　だから、先ず初めに！　お前をぶっ飛ばすんだよ！　俺が！！！」

「……ぅ…／／／／／／」

その才人の絶叫（こくはく）に、思わず顔を赤らめるルイズ。それを目に留め、揶揄（からか）う仇敵（キュルケ）。

「……あらあら。良かったじゃない。あんなにダーリンに思われて。

あ～あ…振られちゃったなぁ…。真逆（まさか）、よりにもよって、ヴァリエールに負けるなんてね…。」

「う、五月蠅いわね！／／／　べ、別に、あんな犬の事なんか何と

も思って無いわよ！／／／／／／」

「……そんな真っ赤な顔で言われても説得力無いわよ？　寧ろ、逆の方に説得力が有るわね。」

「ぅ～～～……！！　ぅぅ～～～～……！！！！！！」

どうやら言葉にならず、手をブンブン振って、怒ってる事を表しているらしい。

……いや、それ寧ろ肯定と言うか、却って可愛らしく映るだけなんだがなぁ……見た目は。

そんな事を皆が思っているとは露知らず、ルイズは抵抗を続けている。

その微笑ましい光景も直ぐ様、注目を浴びなくなった。……デルフが強く輝き出したのだ。

「いいぞ！　いいぞ、相棒！！　そう！　その調子だ！　今度こそ思い出したぜ！

俺の知ってるガンダールヴ……サーシャも、そうやって力を溜めてた！　いいか、相棒！！」

そうデルフが一人で叫んでいる間に、ワルドの遍在が一体、倒され

た。

「……なぬ？」

残ったワルドが揃って、驚愕に顔を歪めて呻(うめ)いた。……キモッ。

「ガンダールヴの強さは心の震えで決まる！　怒り！　悲しみ！　愛！　喜び！　何だっていい！

とにかく、心を震わせな！　俺の相棒(ガンダールヴ)！！」

そして、又一体、消滅した。残りは三体。

「…！　き、貴様…！！」

「忘れるな！　戦うのは俺じゃあ無ぇ！　俺は唯の道具に過ぎねぇ！」

空高く飛び上がり、剣を振り被(かぶ)り構える才人。呼応してワルドも飛び上がり歪笑(わいしょう)して叫ぶ。

「空は『風』の領域…！　貰ったぞ！！　ガンダールヴッッッ！！！！」

三方向から、ワルドが迫る。しかし、デルフを風車の様に振り回して迎撃する才人。

「戦うのはお前だ！　ガンダールヴッ！！　お前の心の震えが、俺を振るんだッッッ！！！」

そして、全ての遍在（ユビキタス）は斬り裂かれ……残った本体のワルドは……左腕を切り落とされた。

しかし、才人も力を使い過ぎ、疲れ果て一歩も動けない。……勝負は引き分けと相成った。

「……くっ……！　真逆、一つの目的も果たせず、おめおめと逃げ帰る羽目になろうとは……！

だが、もう軍は其処まで近付いている！

ここは貴様等の死体でも眺めて、私の鬱憤を晴らすとしよう！

愚かな主人共々、灰になるがいい！　ガンダールヴ！

そして……！　『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』よ！！！　ハッハッハッハッハッハ……！！！！！」

そう捨て台詞を残して逃げ去って行くワルド。残された皆で、さてどうするか考え出した。

「……僕は、突撃するよ。一人でも多くの敵兵を倒さねばならないからね。

それが王族としての……最後に残ったアルビオンの誇りとしての義務だ。」

「あ、それ却下で。」

「な！？　何故だ！！」

「訳は後。先ずは、気絶してくれ。」　トンッ…

「！　……ぅっ……。」

「よし。」

“よし。じゃ無いッ！！”

「うおっ！？」

行き成り、説明も無しにウェールズを気絶させたカイトに、皆で同時に突っ込んだ。

しかし、皆への説明もせず、アンリエッタにウェールズを引き合わせてから、全てを話すと言い、

皆を、軍靴鳴り響き、もう然程（さほど）遠くも無い距離に敵軍が居る外へと連れ出した。

「おお～……いやぁ、壮観だねぇ…。」

“感心してる場合かッッッ！！？”

相変わらずの、抜けてると言うか、安穏としたカイトの台詞に突っ込まずにはいられない面々。

しかし、矢張り其処は気にしないのがカイトクオリティー。

徐(おもむろ)に皆に振り向くと、カイトが脱出方法を説明した。……あっさりと。

「よし。んじゃ、これから脱出するぞ。俺の龍達に乗って。」

“……は？”

「まぁまぁ、百聞は一見に如(し)かず。後は結果を御覧(ごろう)じろってな。

セブンス・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　虹色形態(セブンス)」

“グギャァァァァアアアアアアアーーーーーーーッッッッッッッ！！！！！！！”

１０ｍ前後は有ろうかと言うドラゴンが、計２１体も現れた。

その壮麗さに、敵も味方も唖然・呆然としていた。

そして、カイトが皆に早くどれかに乗れと促す。取り敢えず、身近にあった龍達に乗り込んだ。

使い魔も主人達同様に、恐る恐る乗り込んだ。……どうやら、本能的に強さが解るらしい。

カイト達、人間七人と使い魔二匹を乗せた龍達が一斉に飛び立った。

総勢２１体もの、色取り取りの龍達が並んで飛行する様は、とても壮大であった。

特に説明も無く、言われるが儘……促される儘に龍に乗った才人達は、

確かに凄いけど……これでどうやって脱出…？　……マサカ…ハハ…そんな馬鹿な……ねぇ？

という思いに駆られていたが……残念ながら、その予想はドンピシャリだった。

「おーし。んじゃ、此の儘、あの大軍の上を突っ切るぞー。」

“マジで（か）！！！”

「おー。大マジだ。んじゃ、セブンス達。あいつらの上を悠々と飛び去って行こうぜ。」

“グオオオオオーーーーーーッッッッ！！！！！”

最早、カイトの無茶には慣れっこの龍達は、何一つ文句を言うでも無く、大軍の上を飛んでった。

しかし、可哀相な事に、それに気付き慌ててセブンス達に向かって攻撃するレコン・キスタ。

「……あ～…メンドクセェなぁ…。まぁ、いいや。

セブンス、一斉咆哮。ちゃんと手加減しろよ？」

“グギャアアアアーーーーーッッッッ！！！！！”

２１体もの、巨大な龍達による、一斉ブレス。……只の一撃で、軍隊はほぼ壊滅状態に陥った。

その後、反乱軍（レコン・キスタ）を尻目に、カイトの宣言通り、

悠々とアルビオンを後にし、トリステインへと帰る一行であった。

カイトとガンダールヴとデルフリンガー（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、今、現在出版されている所（１９巻）迄の情報で、書いていますが……。

今回、ちょっと色々と強行軍にしてみました。しかも独自の類推・解釈付き。

いや、だって原作読んだ限りじゃ、どう考えてもそうでしょ？　リーヴスラシルって。

一応、今回で二巻は終わりです。

次からは、恐らく原作とは色んな所が変わって来るかと思います。

……多分。

所で、今回、ちょっと会話文が多過ぎると御指摘を頂きましたので、早速、地文を増やして、会話文を少し減らしてみました。

（寧ろその御陰で文字数が増えた様な……；；；）

これで少しは会話文も、埋もれているかと思います。……如何でしょう？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

虚無と真実と御話（前書き）

現時刻（１６：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，３００，５９９アクセス　ユニーク：１１２，９８２人
皆様、毎度有難う御座います。

最近、１００，０００アクセスも増えるのが、とても早くなってる気がします。

皆様、心より感謝致して居ります。

さて。今回は、ほぼ単なる説明回です。しかも長いです。

一応、原作の御浚(おさら)いにはなるかと思います。皆様、御飲物は宜しいですか？

では、今話も拙筆を御覧下さい。

虚無と真実と御話

ｓｉｄｅ：トリステイン王宮

其処では途轍(とてつ)も無い騒ぎになっていた。

何せ、今迄ハルケギニアでは、まるで見た事も無い龍の群れが襲って来たのだから。

総勢、２１体。色取り取りの龍達が並んで飛び交う様は壮観だったが、今はそれ所では無い。

勇敢と無謀を履き違えた何人かが、愚かにも彼等を制止させようと、マンティコアに乗って飛んで来たが、丸で意に介されずあっさり突破された。

そして中庭の上空辺りに全員揃うと、忽然と消え失せ、ゆっくりと何者か達が降りて来た。

青年一人、少年少女五人、気絶してる者一人、使い魔二匹。直(す)ぐ様、取り囲まれた。

「な、何者だ貴様等！　杖を捨てろ！」

その高圧的で一方的な物言いに、一同カチンと来たが……

「宮廷。」

と言う、タバサの一言に、皆しょうがないとばかりに、自棄（ヤケ）のヤンパチで、杖を放り投げた。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。触れを知らんのか？

そもそも、あの龍の群れは一体何処へやったのだ？」

その隊長らしき人の言葉を確認する為に、カイトに聞いてみた。……嫌な予感付きで。

「……そうなのか？　カイト。」

「ああ、そうだよ？」

「……貴方、それを知っていながら、態（わざ）と飛んで来たの？」

「おうさ。その方が騒ぎになって、アンリエッタも気付き易いだろ？」

“アンタ（貴方・お前・君）って人（奴）は……orz”

矢張り、予想通りの答えに、地面に思わず膝を付いた面々。

しかし、そんな脱力した面々とは逆に、魔法衛士隊は途端に警戒し出した。

何せ、自分達が守るべき王族…それも、お姫様を呼び捨てにする得体の知れない奴等。

寧ろ、警戒しない方がどうかしてる。故に、詰問(きつもん)し誰何(すいか)した。

それに答応(とうおう)するは、ルイズ&才人。しかし、才人の言葉には、無礼者と取り合わない。

カチンと来た才人が、剣(デルフ)に手を掛けかける。

しかし、それもタバサとイチャコラしていやがったカイトに止められる。

「……あ？　高が貴族風情がこの俺に声を聞かせるな。」

その瞬間、魔法衛士隊は全員気絶した。突然の事に絶句する面々。

しかし、気にせず大声を張り上げるカイト。

「アンリエッタッッッ！！！　何時迄隠れているッ！　さっさと出て来いッ！

気付いて無い訳が無かろうがッ！！！　貴様の愛しい人は要(い)らぬと言うのだなッッ！！！」

皆の制止を振り切って、慌ててルイズ達の許(もと)へ駆け込み、自室へと通すアンリエッタであった。

side：アンリエッタ私室

其処（そこ）のベッドに、未だ気絶しているウェールズを寝かせて居る。

今、この場には本来、謁見待合室に居る筈のギーシュ・キュルケ・タバサも居た。

そして、此の間（かん）の経緯、説明をカイトとタバサを除いた皆でしていた。

正確には、ルイズと才人がした説明を、ギーシュとキュルケが補足説明していた。

一通り説明も終わり、傍らでイチャコラしていたカイトにアンリエッタが目を向け、問うた。

「……あのう……所で、貴方は？」

「ん？　何だ、オスマン坊やから聞いて無いのか？」

「……ぼ、ぼうや？　って……あ。……貴方が……あの…？」

「何だ、やっぱり聞いてんじゃねぇか。そう。俺が、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』だ。

まぁ、俺についてはウェールズが目を覚ましてから、少しは話してやるよ。

……そら、もう目を覚ますぞ。」

少しかよ…と誰かが突っ込む間も無く、ウェールズが身動(みじろ)ぎ出した。

思わず、顔を覗き込むアンリエッタ。少しの間、固唾(かたず)を呑んで見守っていると、目を覚ました。

目を覚ましたウェールズが、最初に見たのが愛しのアンリエッタの顔なので、

此処が天国か……と勘違いしたり、アンリエッタが抱き付いて泣き出したりと、

一悶着、二悶着あったが、何とか二人＋α（周囲）が落ち着き、ようやっと話す体勢が整った。

「さて。では、皆いいかな？」

“は、はい……／／／”

どうやら、少し騒ぎ過ぎた事に、恥じている様である。

「宜しい。では……どうすんだっけ？」

“だから、話すんだろう（でしょう）？！”

「うむ！　良いツッコミだ！　Ｎｉｃｅ　Ｔｕｋｋｏｍｉ！」

“……。”

「さて。では緊張も解れた所で……何から話す？」

カイトの何時もの漫才が終わり、脱力し過ぎた皆が、もうどうでもいいという顔をしたが、

そういう訳にもいかないので、幾つか気になる事、聞きたい事を矢継ぎ早に話した。

「先ず、君が父と話した内容について聞きたい。」

「そもそも、カイト……貴方、何者なの？」

「そうね……何か、私達の運命がどうのとか言ってたけど、一体、私達の何を知ってるの？」

「後、デルフと話してた事とか……もう、俺にはさっぱりだよ。珍粉漢粉だよ……。」

「最後に、俺っちとの話だ。テメェには聞きてぇ事が山程有らぁ！」

「……こりゃ又、大変だねぇ……。ん～……龍斗、頼める？」

「……カイト様？　偶(たま)には、御自分で御話なさっては如何でしょうか？」

カイトが誰かの名前らしきモノを呼ぶと、突然本を小脇に抱えた美青年が現れた。

「え～……いや、だってメンドイじゃんかよぅ……。」

「ブー垂れないで下さい。少なくとも、彼(か)の王となさった御話は、御自分ですべきかと。」

「ちぇ～……なぁ、龍斗？　最近、みんなちょっと反抗期っぽく無い？」

「気の所為(せい)です。」

「え～～～……そうかぁ～～～……？　紅蓮は、最近更に生意気になってる感じだし、

水薙は、最近矢鱈(やたら)と危ない発言してくるし、鋼牙は何か、前以上

に黄宇にべったりだし、

龍斗は、ツッコミ鋭く成り過ぎだし、黄宇は、最近何かと厳しいしさぁ……。」

「……駄々っ子ですか……。」　ズキズキ……

微妙に、龍斗と呼ばれた美青年に甘えている様子のカイトに、頭が色んな意味で痛むのか、

本を持っていない方の手で、頭を抑える龍斗。……その気持ちは良く判る。とても良く判る。

そんな事を言いた気な顔の面々。……と言うか、何人か頷いていた。……誰とは言わないが。

しかし、二人の漫才と言う名の話し合いが終わり、結局カイトが全部話す様だ。

その証拠に、龍斗が消え、カイトが溜息を付き、何処からか全員分の椅子を取り出して

皆に座るよう促した。……どうやら、相当な長話になる様だ。……しかし、その前に…。

「しょうがねぇから、これから色々話すが……

その前に、リッシュモンとアニエスを大至急呼ぶ様に。勅命でも何でも良いから使って。」

「それは構いませんが……もし、忙しくて来られない時は、どうします？」

「……何を勘違いしている？」

「……勘違い？」

「俺は、呼べと命令してるんだ。御願いでも頼みでも無い。命令だ。俺の命令は、国の事項よりも、大地の意志よりも、世界の思惑よりも優先される。

三度（みたび）は言わん。大至急、有らゆる手を使って二人を此処へ、今直ぐ呼び寄せろ。」

「……は、はい。わ、分かりました。直（ただ）ちに。」

そのカイトの何時に無い、言う事を聞かざるを得ない雰囲気に、従うアンリエッタ。

アニエスは直ぐ来たが、リッシュモンは未だ少し掛かる様だ。

その間に、カイトが皆に、諸々を話す前の注意事項を伝えた。

「取り敢えず。お前達の要望通り、或る程度は話す。だが、全ては未だ話さん。」

「……それは、何故？」

「未だ、今のお前達では話すに足りんからだ。」

「……話すに足りない？　……どういう意味よ、それ？」

「その儘。読んで字の如しだ。未だ、お前達には話せるだけの、知識、度胸、覚悟、勇気、経験、実力、その他、有りと有らゆるモノが足りない。

何の地盤も無く、碌なモノも無い今の貴様等では、話せる事等、余りにも限られている。」

余りのカイトの物言いに、苛っと来た皆を代表して、キュルケが挑発した。

「……では、そんな未熟な私達に、一体、何を御話して下さるのかしら？」

「そうさな…。先ずは、ウェールズ…お前の父との会話内容。

その後、此の世界についての真なる知識。そして、俺の事を幾分か。

最後に、デルフの問いに答えよう。否やは聞かん。

では、良いな？　先ずはジェームズ一世との話だ。」

そして、長い……とてもとても長い話が始まった。

ｓｉｄｅ：回想

「……さて。では、済まぬが時間が惜しい。

早速、其方(そなた)が此の国に来られた訳……御教え願いたい。……『宇宙(そら)の救世主(メシア)』よ。」

「良かろう、アルビオン王、ジェームズ一世よ。

俺が此の国に来た理由は、貴様の息子、ウェールズ＝テューダーを生かす為だ。」

所で、此処はアルビオン國。ニューカッスル城の王の自室。其処に三人腰掛けて居た。

一人は、アルビオン王、ジェームズ一世。今一人は、『宇宙(そら)の救世主(メシア)』こと、カイト。

最後の一人は、カイトにベッタリなタバサ。……否、シャルロット＝エレーヌ＝オルレアン。

今は、最期の酒宴の最中でありながら、カイトが何事かを王に耳打ちし、此処に連れられた。

恐らく、王族……いや、王となる者には伝えられているであろう、その自身の名前を告げて。

その後、取り敢えず席に着くや否や、息を付く間も惜しいという風に、王が問うて来た。

そして、それに応え、カイトも救世主(メシア)として、彼に答えた。

「……な、何と…！　我が息子の命を助く為となな?！　それは又、何故に?」

「結論から言えば、アンリエッタを拐かされぬ為だ。

そして、あの姫が女王とならぬ為。あの娘には王の器は無いのでな。」

「ふむ……残念ながら詳しく聞く時間も無し。

其方の深遠なる思惑は、凡人たる朕には遠く理解出来ぬ。故に、その言に従うとしよう。」

「理解が早くて助かる。それで、此の娘が共に居る理由だが……。」

そう言葉を句切って、タバサを見、何かを確認している。

そして、カイトをジッと見ていたタバサは、何かを覚悟した顔をして、一つ頷いた。

「では、話そう。此の娘。今の名はタバサと名乗っているが、それは判る通り、偽名。

本名は、シャルロット。シャルロット・エレーヌ・オルレアン。

彼の王弟（おうてい）、オルレアン公シャルルの一人娘。ガリアの無能王ジョゼフの姪だ。」

「な、何とッ！？　……そうか。あの聡明なオルレアン公シャルル殿の……。」

「然り。……さて、では何故、此の場にて彼女の正体を明かしたか……解るか？　王よ。」

「……まさか……レコン・キスタとは……！？」

「良く気付いたな。……その通り。何の力も持たない平民のクロムウェルに力を授け、

虚無と偽らせ傀儡（かいらい）として、裏からレコン・キスタを操るは、ガリア。

ガリアの『虚無』である、無能王ことジョゼフ一世。そして、その使い魔。

『神の頭脳』…ミョズニトニルンことシェフィールド。」

「な、な、何と……！！！　きょ、虚無……だと……！？　そ、そんな馬鹿な……！

あ、あれは伝説だ……只の伝説に過ぎぬ話の筈では……！！！」

「現に存在する以上、伝説では無いな。何より、俺の此の世界での名称……忘れたか？」

「……！！　ぶ、『ブリミルの友』……。で、では、その名は……！」

「そう。それこそ伝承では無い。只の事実だ。」

「……何と……。」

完全に絶句し、最早何も言葉にならぬといった風情の王。そして話を続けるカイト。

「別に其処迄、驚く事でも無い。虚無は何も一人では無い。

『四の四』が揃わなければ、何の事は無い。只の第五系統というだけの話だ。」

「……『四の四』？」

「ああ。シャルは何処かで聞いたか……若しくは読んだ事は無いかな？

四人の虚無。四人の使い魔。四つのルビー。四つの秘宝。

それらが全て揃って初めて、虚無は真の力を発揮する。

その四とは、トリステイン、ガリア、ロマリア……そして、アルビオン。」

「な、何と！？　このアルビオンにも虚無が！？　そ、それは誰だ？　ま、まさか息子が！？」

「いいや、違う。アルビオンの虚無は、他ならぬ貴様が、命を絶てと命じ、追放した。

つまり、貴様は自ら、己が命運を決めたのだよ。

その瞬間から、この国は滅び去る事が決まっていたのだ。」

「……誰だ？　一体、誰が虚無だと……？」

「……モード・オブ・プリンス。貴様の弟に、エルフの愛妾（あいしょう）が居ただろう？」

「……う、うむ。故に朕は再三追放せよと命じたが、一向に聞かぬ。故に……！？」

「気付いたか？　そう。その愛妾との間には娘が一人出来た。そのハーフエルフの娘。

今は、ウエストウッド村という所に住んでいる、ティファニアと言う少女。

その娘こそが、アルビオンの血を引く……『虚無』だ。」

「……何と……何と言う事だ……！　ま、まさか……エルフの血を引く者に虚無が……。」

「別に不思議な事では無い。虚無の伝説ならば、エルフにもある。それも悪魔（シャイターン）では無く、勇者や良き伝説として伝わっている。

何より……初代の『神の左手』……ガンダールヴはエルフの少女だ。」

“……。”

今度こそ、皆絶句した。……そう、皆だ。その回想を聞いている皆も、同様に絶句していた。

「さて。では、大分話が脱線して来たのでな。そろそろ話を最初に戻そう。

俺がウェールズを助けるには、一つ条件がある。」

「……聞こう。朕等に出来る事であれば、何なりと。」

「良い覚悟だ。何、簡単な話だ。貴様達が犠牲になればいい。」

「……何？」

「正確に言おうか？　ウェールズを除いた全アルビオン軍、その全ての命と引き換えに助ける。

……そう言っているのだ。」

「……全アルビオン軍？　……全王軍では無いのか？」

「ああ。何れそう遠くない内に、神聖アルビオンことレコン・キスタはジョゼフに命ぜられて

戦争を仕掛ける。その時、出陣したアルビオン軍、その全ての命

と引き換えだ。

その中には、この国の民も居ようが、関係無い。全てを殺戮（さつりく）する。他ならぬこの俺が。

それが、ウェールズを助け、このハルケギニアを救う唯一の条件だ。……呑むか？

この魂をも侵し尽くす、猛毒すらも生温（ぬる）い、其方の身体と魂を未来永劫蝕（むしば）む毒を。」

「……呑もう。」

「良かろう。其方（そなた）の覚悟は聞いた。なれば我は誓おう。

救世主（メシア）の名に懸けて、ウェールズを……そして、このハルケギニアを救うと誓おう。」

ｓｉｄｅ：再びアンリエッタの私室

「……以上が、話の内容だ。」

“……。”

……只管（ひたすら）、沈黙がその空間を支配した。余りの事実に皆、絶句していたのだ。

タバサがガリアのお姫様？　いや、それよりも、初代ガンダールヴがエルフ？

いやいや、それよりも、あの無能王が、虚無？　しかも虚無が四人も？

……というか、王に命令出来るこいつは一体…？

いやいやいや、それよりも、アルビオンが戦争を仕掛ける？　しかも、殺戮する？

ウェールズの生存が、ハルケギニアを救う？　……もう、解らない事だらけであった。

それを解っていたのか、カイトは淡々と続きを述べた。

「……だから、言っただろう？　今の貴様等では知るに足りんと。

高々その程度も知らず、知っても尚、その様に戸惑い混乱している様では、

とても全てなど、話せる訳が無かろうが。己が無知を恥じよ、戯（たわ）け共が。」

最早、反論する者など居なかった。しかし、その代わりに質問する者が一人……才人だ。

「……あのう……それで、残りの虚無と使い魔ってのはどんな人？」

「ああ。もう一度言うとだな。

アルビオンの虚無は、今言った通り、ティファニア。モード大公の愛妾の娘。

つまり、アンリエッタの従妹という事になるかな？　因みに使い魔は未だ居ない。

何せ、本人も自身が虚無だとは知らないからな。そもそも、虚無の名を知らん。」

「……そうなんだ。」

「ああ。で、ガリアの今の虚無は、ジョゼフ一世。シャルの伯父。

使い魔は『神の頭脳』ミョズニトニルン…シェフィールド。能力は、有らゆる魔道具（マジック・アイテム）を操る。」

「……。」

「そして、ロマリアの虚無は、ヴィットーリオ・セレヴァレ。教皇の聖エイジス３２世だ。

その使い魔は『神の右手』ヴィンダールヴ…ジュリオ・チェザーレ。

その能力は有らゆる幻獣を操り、本来の力を発揮させる。」

「何と…！　あの教皇が……！？」

「そうだ。……そして、最後……トリステイン。

使い魔は、御存知『神の左手』ガンダールヴ…平賀才人。こちらでは、サイト・ヒラガだな。

その能力は、有らゆる武器を手足の様に操る能力。

その左腕に『神の左手の左手』デルフリンガーを。

その右腕に、その時代時代に於ける最強武器を。

……そして、その担い手……トリステインの虚無は……。」

皆の目が、ルイズに向いた。驚きで目を、それこそ目一杯に見開いていた。

「そう。ゼロのルイズ。虚無のルイズ。……お前だ。」

「……わ、わた…し……？　私が……虚無…？」

「そうだ。だから、言っただろう？　お前の魔法は常に成功していると。

お前が起こす爆発。それは虚無魔法の初歩の初歩の初歩。『爆発（エクスプロージョン）』という魔法だ。」

「私……虚無……私が……？　で、でも！　私、他の魔法は何にも…！」

「一つでも虚無魔法をちゃんと覚えれば、他のコモンマジックも普通に使える様になる。

その為にも……アンリエッタ。」

「は、はいっ！」

突然、思いがけず声を掛けられ、背筋を伸ばし、緊張するアンリエッタ。

「お前達の持っている『始祖の祈祷書』をルイズにあげな。あの真っ白の奴だ。

あれは、虚無の担い手にしか読めない。故に真っ白なんだよ。

それと、水のルビーもその儘くれてやれ。と言うか、その二つが無いと虚無は覚えられない。」

「わ、分かりました！　だ、大至急持って来させます！」

その慌てように、ツッコミを入れる様に、注意を促すウェールズ。

「もう少し、落ち着きなさい。アンリエッタ。

第一、今更だが彼の言う事が、事実だと言う保証は何処にも無いだろう？」

「そ、それもそうですわね……。」

「なぁに、持って来てルイズに見せれば分かるさ。百聞は一見に如かず。ほれ、早う。」

少し時間が経ち、持って来た『始祖の祈祷書』をルイズに手渡す。

ルイズはそれを必死になって読むも、何も見えないし、何も読めない。

何だとガッカリする一同。そして、カイトに詰め寄る一同。しかし、何故か笑っているカイト。

「ルイズ。虚無の魔法は、その呪文を必要とする者にしか教えてくれない。

お前は、今どんな魔法を覚えたい？　何の為に、その魔法を覚えたい？

それが何も無く、只知りたい、覚えたいでは応えてはくれないぞ？

何でも構わん。俺を思いっ切りぶっ飛ばしたいとかでもいいさ。

そう強く念じれば、お前にだけ読める文字が浮かび、呪文が使える。やってみな。」

結果だけ言おう。大成功だった。だが、唱えはしなかった。カイトに説得されたのだ。

未だ不満顔ではあったが、使う機会は有ると渋々、無理矢理納得させたのだった。

然う斯うしている内に、リッシュモンがようやっと来た。

「……姫様。私を緊急の御召しとは、何事で御座いますかな？

ん？　こ、これは！　ウェールズ殿！？　な、何故、この様な所

に！！？」

「やぁ、リッシュモン殿。御目に掛かるのは初めての筈だがね？」

「う……い、いえ、貴方様は有名で有りますので……。」

「……クックック……取り敢えず、その冷や汗を拭け、リッシュモン。

因みに、お前を呼んだのは、アンリエッタでは無い。この俺だ。」

「……貴様は誰だ？　貴族では無いな……高が平民風情が……。

貴族への口の利き方を知らんのか？」

「……はっ。貴族風情がこの俺にタメ口か？

どうやら、最近の貴族とやらは、口の利き方も知らん様だな。」

「……何？　何者だ？　貴様など、私は知らんぞ？」

「リッシュモン高等法院長、控えなさい。彼はこのハルケギニアの救世主なのですよ？」

「は？　……姫様。何を仰(おっしゃ)って居られるか…御自覚為さって居られますかな？

この得体の知れぬ者が救世主？　しかもこのハルケギニアの？

寝言は寝てから仰るものですぞ？」

「……聞こえなかったのですか？　リッシュモン。これは主命です。控えなさい。」

「……はっ。」

そう言われたリッシュモンは、流石に主命に従わない訳にはいかず、不承不承ながらも、その言葉に従った……が。

「さて。そういう訳でな……先ずは、お前の杖を寄越せ、リッシュモン。」

「……貴様……一度ならず二度までも……！！　無礼千万なッ！！」

流石にその言葉には耐え兼ねたのか、杖を引き抜きカイトに構えるリッシュモン。

……地べたに這い蹲りながら。

「寄越せと俺は命じた筈だが？」

「な?!　い、何時の間に?!　か、返せ!　私の杖を返せ!!」

「だが断る。……アニエス。」

「は、ハッ!　何でしょうか?」

唐突に声を掛けられたアニエスは、今度は自分が標的かと怖れた。

……が。

「こいつが、『ダングルテールの虐殺』の首謀者であり、お前の最たる仇だ。……討て。」

“な!?”

「な、何故、それを……!　い、いや、それよりも……間違い無いのか?」

「ああ、間違い無い。しかも、こいつは神聖アルビオンの手先だ。
因みに間諜とは何時も、タニアリージュ・ロワイヤル座の劇場で待ち合わせだ。
商人風の形(なり)をしている。後で、さっさと誰かに捕縛させて来い。
だが……今は、お前の復讐を遂げな。」
「……感謝する。」
そして、剣を抜き突き刺す……前に、止められた。
「……っと、ちょっと待った。」
「……！！！　何だ！！」
「いや、忘れてたけど、此処アンリエッタの私室だし。廊下で殺り

な。」

「……分かった。」

そして、廊下に連れ出され絶叫するリッシュモン。

あっと言う間の出来事に、止める事も出来ず只、呆然とするアンリエッタ一同。

戻って来たカイトとアニエスにも、廊下にも返り血などは、不思議と無かったが……。

何となく、どういう顔をしたらいいのか分からない……と言いた気な皆の顔を見、

敢えて無視して、アニエスに話し掛けるカイト。

「お疲れさん。あ、それと、もう三つ良い事教えてやろう。」

「……何だ？」

「一つ。仇がもう一人、このトリステインに居る。

一つ。もう一人の仇が、アルビオンに雇われて、このトリステインに攻めて来る。

一つ。お前の命を助けた恩人も、このトリステインに居る。……こんなもんだな。」

「……そうか。貴重な情報に感謝する。」

「……自分で言っといて何だが……そんなに簡単に信じてもいいのか？」

「構わぬ。此処で、敢えて嘘を付く必要も無い。それに、何となく貴方は嘘を付いてはいない。

……そう、何となく……思ったのだ…。」

「……そうか。なら、それでいい。」

その後、カイトに最敬礼し、又、アンリエッタの護衛として戻るアニエス。

皆、唖然、呆然の儘であったが、カイトに声を掛けられ、何とか正

気に戻った。

「……さて。では、俺の事を聞きたいのだったな……。

面倒だが、しょうがない。俺が話すか……俺の話せる範囲でな。」

カイトの話は、常に驚きの連続だった。カイトの実年齢。これまでの旅の中身の一部。

使い魔達の正体。しかも、それが神だったと言う事。更に、その上、龍達が４３体?!

もう、何もかもが桁違い、格が違い、スケールも違った。もうあんぐりするしか無かった。

……但し、カイトは、自身の妻子の事は、敢えて話さなかった。

「……まぁ、こんな所か。以上、質問は？」

“……。”

出る訳が無いだろう…。それどころじゃねぇよ…。寧ろ有り過ぎて困るんだがね…。

……そんなみんなの想いはカイトには届かず、次の話に移った。

「そんで……最後にデルフの聞きたい事だそうだが……？」

「おおよ！　テメェには聞きたい事がタップリ、山程有るんでいっ！！！」

「そうか。……ならば、デルフ。俺に握られろ。それで、全てが分かる。」

「おお！　上等だ！　此の俺様を握って貰おうじゃねぇかぁ！　テメェの全てを見てやらぁ！

相棒！　俺をアイツに渡してくれ！」

「あ、ああ……分かったよ。……ほら、カイト。」

「ああ、サンキュー、才人。……さあ、じっくりと見ると良い。

俺の考え、想い……そして……俺の過去を……。」

「……。」

カイトに握られた途端に、黙り込み、何も喋らなくなるデルフとカイト。

どれくらい、そうしていただろうか……10分とも、2時間とも、半日ともとれる時間。

ふ……と、まるで夢から覚めたかの様に、二人共、突然動き出した。

そして、互いに見合う事、凡そ30分ばかり。デルフの方から、カイトにポツリと話し掛けた。

「……そうか。そういう事か、テメェ。」

「ああ。どうやら、全てを理解して貰えた様だな。」

「……ああ。全く、これっっっぽっちも納得はしてないけどな。……まぁ、理解は出来た。」

「そうか、それは重畳。では、デルフ……もういいかな?」

「……チッ。ああ、もういいよ。早く、相棒の所に返してくれ。」

「了解。……ほれ、才人。」

「……あ、ああ。……デルフ？　一体、何を話してたんだ？」

「……済まねぇ、相棒。いつかちゃんと全部話す。でも、今はちょっと待ってくれ。

俺っちも、少し考えたい事が有るんだ。」

「それは構わないけど……まぁ、いいか。デルフが話したく無いならそれで。

いつかは話してくれるんだろ？」

「……ああ。いつか、必ず…な。」

「なら、それでいいや。」

「……アンタも相当軽いわね…。」

そうして一通り話も終わり、皆疲れただろうと言う事で、労を労(ねぎら)う意味でも客室を用意した。

その翌日。昨日話した事は必ず内密に。どんなに親しい人であろうとも、

決して話してはならないとカイトに釘を刺され、重々しく首肯する皆。

その後、アンリエッタは、ウェールズが居る事を、カイトの協力を得て、

堅物だらけの宮廷貴族達に、渋々ながらも認めさせ、絶賛バカップ

ル堪能中。

そして、才人達は事情を或る程度、差し障りの無い程度に話を聞いた、

オールド・オスマンによって、追求も特にされず、情報規制もされ、

何とか平穏無事に、学生生活を続けていた。

……カイトの宣言通り、新生にして新政……神聖アルビオンが宣戦布告をして来る迄は。

虚無と真実と御話（後書き）

如何でしたでしょうか？

次々回からは、やっと本格的に三巻に入り、諸々、今回以上に引っ掻き回す予定です。

故に、大分原作からは、離れた話になってしまうかと思います。

少なくとも、早目に真実を知り、又ウェールズも生きている事で、自然と色々変わって来るでしょう。

さて、次回は１００話目記念と言う事で、幕間の話を投稿しようかと思います。

……其処、又か……とか言わないで下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

幕間3（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，３１１，４０３アクセス　ユニーク：１１３，８０４人
皆様、毎度有難う御座います。

今回で、到頭百話目です！！！　これも、偏に皆様が御愛読下さった御陰です。

誠に、心より、感謝致して居ります。

では、今話も拙作を御堪能下さい。

幕間3

Ｓｉｄｅ：？？？

「……違う……違う……俺は……。」

「……いいや、違わねぇ。」

「……違うんだ……カイト……！」

「……違わねぇなぁ…！」

「…違うんだよ……！！」

「何も違わねぇんだよ…！！」

「……っ！！　カイトォォォッッ！！！」

「…トキヤァァァッッ！！！」

「グッ……！！！　黙れ…！　黙れ……！！　だまれ……！！！　ダマレ……！！！！！！

黙れ黙れ黙れだまれだまれだまれダマレダマレダマレ……！！！！！！

ダマレエエエエエエエエエエエエエッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！

カイトオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！」

「ハッ！！　なら……黙らせてみせろやァァッッッ……！！！！！

トキヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！」

side:???

「……ぐっ……はっ！！！」

ガバッと跳ね起きた彼は、汗だくになっていた。息も荒い。動悸も中々収まらない。

どうやら、先程のは夢……それも悪夢の様だ。暫く経って、ようやっと動悸も収まった。

「……はぁ…又か。……恐らく……これは予知夢…なのだろうな。

矢張り……何れ(いず)…俺はお前と、戦わねばならぬ運命だ……と言う事か…。」

一息付く為にベッドから降り、窓の外から見える景色を……己が心と真反対の景色を……。

丸で楽園であるかの様な、その光景を……唯々眺めていた。……彼女が入って来るまで。

「……失礼致します……？　アキシオン様……如何致しました？

大分、御顔が優れぬ様ですが……又、悪夢でも御覧になったのですか？」

「……トレス。何用だ？」

「は、ははっ！　し、失礼致しました。

先程、‘彼等’より『候補者』が一人現れたとの報告が御座いました。如何致しますか？」

「……そうか。その件については、‘彼等’に一任してある。良きに計らえ。」

「はっ。では、その様に……」「…だが。」「……はっ？」

「だが。余り遣り過ぎるな……と伝えておけ。

《奴》の様になりたくは無いだろう……？　とな。」

「は、ははっ！　確かと、皆に御伝え致します。」

「……ああ……トレス。」

「……はい？　何で御座いましょう？」

その部屋を出ようとして、ドアノブに手を掛けたトレスを、彼が呼

び止めた。

「……今日の予定はどうなっている？」

「は？　本日の御予定は特に御座いません。‘彼等’との会合は、未だ先の事ですし……。」

「……いや、違う。……お前の予定だ。」

「……私（わたくし）の……ですか？　私の予定でしたら、アキシオン様の御言葉を‘彼等’に伝えた後は、

特には何もありません。恐らくは、何時も通りの業務と相成るかと思いますが……。」

「……そうか。では、‘奴等’に伝えた後は、真っ直ぐ此処に戻って来てくれ。」

「はっ。それは構いませぬが……アキシオン様？」

何時もと明らかに様子の違うアキシオンに、少し躊躇い勝（が）ちに伺うトレス。

それに、珍しい苦笑顔で、こう…トレスに言った。

「いや、何……お前の言う通り、少し嫌な悪夢を見たのでな。お前に側に居て貰いたいだけだ。……頼めるか？　トレス。」

「……あ、アキシオン様…／／／／／／　は、はい。私で良ければ、何時なりとも……／／／」

「ああ。お前が良い。お前で無ければ、駄目なんだ。」

「は、はい…／／／／／／／／／／／／／／」

「では、頼む。……早く戻って来てくれよ…トレス。」

「は、はい！　た、直ちに行って参りますっ！！／／／／／／／」

ガチャンッ！　バタンッ！！　急いで閉められた扉の音に、思わず忍び笑いをするアキシオン。

しかし、それも直ぐに止んだ。苦笑顔も沈痛な面持ちに変わる。……とても辛そうに歪む。

「……カイト。

……カイト……矢張り、俺達は戦わなくてはならないのか…？

俺は……お前とだけは……戦いたくなんて無いのに……どうしても……どうしてもか…！

カイト……！！　俺は……！！！　俺は……一体、どうしたらいいんだ…！！！

誰か……！　頼む……誰でもいい……！　誰か……！　教えてくれ……！！！

俺は……一体どうしたらいいんだ……！！！　誰か……！！

カイト……！　アルニス……！　お前達ならば……何と言う…？
どう答えてくれる…？

どんな事を、教えてくれる…！！　お前達なら…！　何を…！
言ってくれるんだ…！

頼む……！！　教えてくれ……！！！！　心友（とも）よ……！！
！！！！

俺は……俺は……！！　俺はぁ……！！！！　俺はァァアッッ
！！！！！

どうしたら、いいんだァァアァッッッッ……！！！！！！

カイトォォォォォォォォォッッッッッッッッッッ……！！
！！！！！！！！！！

……頼む……誰か……教えて……くれ……！　頼む
ッ……！　誰かァッ…！」

……その余りの慟哭は……誰に聞こえるでも無く……只、その部屋に谺（こだま）し……。

そして……誰にも届かず……只、吸い込まれ……消えて……行った……。

ｓｉｄｅ：大地國ラングランド.ｉｎグランギルズ

本筋の街道から外れた、とある未だ整備されていない道。其処で、何者か達が闘っていた。

方や、長く重い銀製の槍を片手で軽々と振り回し、もう片手には攻防用の盾を持っている。

方や、双剣を持ち、片方で、片手で振り回しているとは思えぬ程重い一撃を繰り出す槍を防ぎ、

もう片方で、盾による奇襲を難なく去(い)なしている。しかし、未だ攻撃に移る気配は無い。

双剣を使っている男は、凡そ１８０ｃｍ弱、筋肉質な風体で、僅かも表情が変わらない。

槍と盾を使っている男は、２mは優に超え、振り回すと言う言葉が如何にも似合いそうな風体。

そして、何より注目すべきは、その容貌。

肌は浅黒く、耳は尖り、真っ赤な目は爛々（らんらん）とぎらつき、獰猛（どうもう）に牙を剥（む）き出している。

彼は、魔人族。それに対するは、他の種族に比べ劣ると……脆弱（ぜいじゃく）だと言われている人間。

もし、第三者が見ていれば、明らかに人間に同情するであろう、その闘い。

しかし、実際に押されていたのは、魔人の方であった。

彼には、その事実を認める事が出来ず、その人間に向かって言毒（げんどく）を吐いた。

「……クッ……！　フン！　成る程…流石はＳＳＳ（トリプルエス）。その肩書きは伊達では無い様だな。

だが、所詮は人間。所詮は其処までの器よ！　俺の攻撃に手も足

も出ず防戦一方か！

そらそらそら！！　その鉄壁の防備が崩れるのも時間の問題よ！

高が鉄の壁程度…！　この『雷礫（らいれき）のグルガ』が突き崩してくれるわッッッ！！！」

「……。」

しかし、その宣言通りにはいかず、その鉄壁は一向に崩れる兆しが見えない。

『雷礫のグルガ』と名乗った、その魔人の挑発、咆哮にも一切反応せず、

彼は、淡々とその攻撃を去なしていく。

その余りの無表情振りに、少し気味悪くなり、彼から、思わず距離を取るグルガ。

……残念ながら、その行動が彼の……『雷礫のグルガ』の命運を決めてしまった。

「クッ……！　何と気味の悪い……！？」

「……離れたな？　これで終わりだ。『二刀流・乱れ打ち』」

「な！？　ぐあああああぁぁぁぁぁ……！」

「……最後の任務完了。ランクＳ＋（エスプラス）『雷礫のグルガ』の死亡を確認。」

グルガの死体を、何の感慨も無く見下ろす彼。その彼に何処からと

も無く、声が掛けられた。

「御目出度(おめでと)う！！！　良くやったな！！！」

「……言われた通り、依頼は全て遂行した。……これでいいのか？」

「……無論。貴様、加入。我等、同志。」

「ええ、そうねぇ。一応、ノルマは達成しちゃったんだし……いいんじゃなぁい？」

「ハッ！　そうだなぁ……久々に強そうな奴が現れたようだぜぇ……！」

何時の間にか、彼の周りには、最初に声を掛けた者を含め四人……彼を取り囲んで居た。

一人は、人懐っこく、彼に警戒心無く近付き、親し気に話し掛けている。

一人は、丸で片言(かたこと)を話しているかの様に、漢字を羅列(られつ)している様な口振りだ。

一人は、見た目は明らかなオジサンなのだが、その言葉はオネエ言葉。正直、気持ち悪い。

一人は、如何にも好戦的な風貌(ふうぼう)、言葉、雰囲気を醸(かも)し出している。

「……それで？　俺はこれからどうすればいい？」

「何、それはこれからじっくりと話そうじゃないか！　時間はまだ

まだ、タップリと有るんだ！」

「そうねぇ。ま・ず・は♪　私達の御部屋に行きましょ♪　そ・の・あ・と・は……うふふ…♪」

「……却下。悪寒、危険。御話、優先。」

「んーーーまっっっ！！！　ホンッットに酷い事言うわね…ゴルゴルったら、もう！！！」

「ハッ！　喧嘩なら向こうへ行ってからしようぜぇ…！　此処じゃ俺達にゃ狭過ぎるぜぇ！」

「まぁまぁ、みんな。もう忘れたのかい？

【あの御方】から、『遣り過ぎるな』と御忠告を頂いただろう？

マサカ……破る気じゃ無いだろうね？」

「「「……。」」」

「うん！　良かった！　それじゃ、早速行こうか！

……あ、そう言えば未だ、僕達の名前を言ってなかったね。先ずは名前の交換が先だよね！

何せ、これから僕達は仲間であり、家族であり、同志になるんだからさ！

僕は、バシレウス。バシレウス＝グランティードって言うんだ。グランって呼んで欲しいな♪

あ、因みに、竜人族で、みんなのリーダーを【あの御方】から仰せ付かってるんだ。」

「……我、名前。ゴルドラス。ゴルドラス＝アースガルズ。獣人族。」

「私は、フラウレス。フラウレス＝フェイゼルド。フェイって呼んでね♪

ち・な・み・に♪　花も恥じらうハーフフェアリーよん♪♪♪」

「ハッ！　俺は、メルフレム！　メルフレム＝マグファイズ！　魔人族だ！　覚えておけよ！」

「……そうか……グラン、ゴルドラス、フェイ、メルフレムだな。……覚えた。」

「うん、流石だね！　もう僕達の名前を覚えちゃうなんて……凄いな！

あ、それと、一応、僕達は知ってるけど、これもけじめって事で、君も自己紹介して貰えないかな？」

「……クラウド。クラウド＝ディアレイズ。大地國の人間だ。」

「うん！　有難う！　それじゃ、早速行こうか！　クラウド！　我等が新たなる同志よ！

僕達の居場所！　僕達の家！　僕達の拠点！　『其（ザ・ヘヴン）が楽園』へ！！！」

そして、又、一人。ＳＳＳ（トリプルエス）ランクが消え去り……。

『ギルド』の二つの空席を、又、皆で争い合い、逆に活発化する事と相成った。

幕間3（後書き）

如何でしたでしょうか？

因みに、今のペースで書いて行けば、全ての話が終わるのに、大体２５０話前後になる筈です。

どうか、其処迄、御付き合い頂ければ、望外の幸せです。

所で、今回出た新キャラですが……その六人の内、五人程、名前に元ネタが有ります。

２～３人は、殆どその儘なので、知ってる人ならば、簡単に判るかと思いますが……

全員判ったら、凄いですね。正直、１～２人は絶対に判らないと思います。

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

バカップルと火竜と卵（前書き）

現時刻（１５：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，３３２，７２７アクセス　ユニーク：１１５，３４２人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、今回はあっさり最長記録を抜いてしまいました。

一万七千字って……１７，０００字って……ＯＴＬ　皆様、
水分補給は御忘れにならぬ様…。

では、今話も拙筆を御堪能下さい。

バカップルと火竜と卵

ｓｉｄｅ：三人称

さて。先(ま)ずは、ハルケギニアの現状を説明しよう。

本来アンリエッタの婚姻を餌にして、ゲルマニアとの軍事同盟を結ぶ手筈になっていたが、

ウェールズがトリステインに（無理矢理）亡命して来た事により、アンリエッタが駄々を捏(こ)ね、

しかも、カイトの説得（という名の脅迫）によって、ウェールズの亡命を認めてしまった。

それ故に、重婚となってしまうので、同盟は御破算になってしまった……かに思えた。

その頃、アンリエッタが駄々を捏ねている間に樹立した、

神聖アルビオン帝国から特使が派遣され、不可侵条約の締結を打診して来た。

……が、ほぼ即答したゲルマニアと違い、トリステインは『諾(だく)』と言う迄(まで)、時間が掛かった。

ウェールズとアンリエッタが難色を示したのだ。

周りは、滅ぼされた国の王子とその恋人故……と思っていた。

確かにそれは有ったが、それ以上に、新生したアルビオンの正体を知っていた為、

そう安易に事を運ぶのは危険だと思っていたからであった。

勿論、二人共、トリステインには、アルビオンに抗うだけの力が無い事は知っている。

故に、とある手を打った。一度、御破算になったゲルマニアとの軍事同盟である。

そして、打診への返答を渋っている間に、カイトの協力を得、使って良い切り札を確認し、

アンリエッタとウェールズの二人で、秘密裡にゲルマニアとの軍事同盟に成功し、

アルビオンに、ようやっと、『諾』との返事をしたのだった。

……それでも、戦力的には劣っていたが、同盟出来ぬよりは遙かにマシではあった。

その為に、切り札を、一つ、二つ切ってしまったが、然程の問題は

無いと判断出来た。

その後、正式に国内外に、ウェールズがトリステインに亡命した事が発表され、

尚且つトリステインに婿入りし、アンリエッタと結ばれる事が決まり、国民の多くが喜んだ。

……そう、多くが。矢張り、それに渋る者、反対する者もそれなりに居た。

アルビオンに攻められるのでは？　亡命して来た亡国の元王子と婚約して何の利が有ろうか？

俺達の姫様に手を出しやがって……！　よくも私達のウェールズ様に……！

……と、極一部謎の集団混じりで、一部の平民を含んだ人達には祝福はされていなかったが。

しかし、その事で神聖アルビオンからは、ウェールズの身柄受け渡しを再三要求され、

将来の王代理は渡せぬと、三度とも断ると、一切の音沙汰が無くな

った。

その為、国境間では、若干の緊張が続いては居るものの、

一応、表面上ではハルケギニアは平和に見えた。

その中でも特にトリステインは、アンリエッタの婚約に向けて、

そんな緊張など何処吹く風か……とばかりに、国を挙げての結婚ムード一色になっていた。

……少なくとも、多くの平民や、一般貴族には、緊張など皆無であり、

暫しの間、平和と言う名の日常を、平穏無事に過ごして居た。

ｓｉｄｅ：トリステイン魔法学院

カイトから、数多（あまた）の衝撃の事実が告げられてから、数日が過ぎてい

た。

その間に、世界の情勢だけで無く、カイト達の周りも色々変わっていた。例えば、才人。

今迄、着替えやら何やらと、家事の一切を才人にさせていたが、それを全くさせなくなった。

……どうやら、ワルドとの闘いの際、才人が叫んだ言葉が、ルイズの意識を変えた様だ。

偶(たま)に才人を見ている時、顔が若干赤いのである。しかし、そんな事には丸で気付かない才人は、

以前自分が襲った事が原因で、警戒されて嫌われていると勘違いしていた。

……何とも、擦(す)れ違っている二人であった。

次に変わったのが食事事情。何時も、裏の厨房に直行するのだが、学院に帰ってからは、

何故かルイズと一緒に、隣の席で他の貴族と同様に食事する様になった。

当然の如く、平民が席に着く事を良しとしない連中が大勢居たが、オスマンの策略で、

実は才人が伝説の使い魔だ、とか言う情報が何処とも無く飛び交い、皆、怖がっていた。

怖がっていたので、迂闊に強気にも出られず、不承不承ながらも、一緒に食べていた。

次は、授業。尤も、これに関しては、才人と言うよりはルイズなのだが。

そう、授業。つまり魔法を使うのである。其処で、皆は超驚愕の光景を目の当たりにした。

本来ならば、『ゼロのルイズ』には爆発しか起こせない筈なのだが……何と！！！

あのルイズが、簡単なコモン・マジック程度だけだが、全く失敗しなくなっていたのだ。

益々、この数日間に何処で何をしていたのか、聞きたくなった生徒達であったが……。

実は、授業前にも一番口を割り易いギーシュを取り囲み、

あの手この手で煽てて、情報を聞き出そうとしたのだが、

カイトの一睨みと、事の重大さを思い出したギーシュの自制によっ

て、結局聞けなかった。

故に、授業後、早速又、ギーシュに問い質(ただ)そうかと思ったのだが、

何と、授業後に、そのギーシュがカイトの許へ行き、「済まなかった。」と、

頭を下げて謝ったのだ。……あのギーシュが!?　その行動に、余程の大事だと思った皆は、

巻き込まれたくないと思ったのか、もうそれ以来、一切、聞く事は無くなった。

そして、最後。何と言っても劇的に変わったのが、寝床である。

今の今迄、床の一角に敷(し)き詰めた藁束(わらたば)で寝ていたのだが、

何故かルイズが同じベッドで寝る様に言って来たのだ。

才人は期待するやら、逆に申し訳無いやらで……まぁ、ぶっちゃけキモかった。

……尤も、作者的には可愛かったが。……え？　可愛いよね？

モグラ才人って、最萌えキャラだとおもわｎ（ｒｙ　……以下、自主規制。

……ゴホン。そういう訳で、知ってる身からすれば、端から見ると、

可成りニヤニヤ出来る状態になっている二人であった。

さて、一方。我等がカイトは……と言うと……。

「……ん……ん…シャル？」

「…ん……ン……何でも…ない……あの……もう…一回……ん…／／／／／／」

「…ん……んぅ……ん♪……。」

……御判り頂けるだろう。説明などしたく無いので割愛（かつあい）するが。

あ～あ……なんか苛（いら）つくなぁ……色々設定とか変えちゃおっかなぁ～……

とか、作者（達）が色んな意味での愚痴を零（こぼ）す程に、バカップルしていた。

そう。ガチでバカップルしていたのである。どんなモンかと言うと、

←こんな具合にである。

ｅｘ．１　食堂にて。

「始祖ブリミルに～…。」「頂きます。」

椅子を完全にくっつけ合って座っている。食事の前の挨拶が終わると、先ず……

「シャル。…ん……。」

「……ん／／／／……ん……／／／」

「御馳走様♪」

「…ま、未だ食べてない……／／／」

「じゃぁ、もっと食べていい？　…ん……。」

「そ、そっちじゃ…！　……んぅぅ……／／／／／／／／／／／／／／／」

長い時は、料理が冷め掛けた事も有るとか、無い事も無いとか、

寧(むし)ろ、しょっちゅう過ぎて皆、慣れたとかとか。

ｅｘ．２　教室にて。

「…ん……。シャル、次の授業って誰だっけ？　…ん……。」

「…んぅ……／／／／／／／　…た、確かコルベール先生の…んふぅ……／／／／／／／」

「…ん……。そうか、次はジャンか。……ん～……♪♪

なら、爆発したりして、シャルの綺麗な髪が汚れない様に、気を付けないとな。…ん……♪」

「…んんぅ……／／／／　…そ、そんな事には、もうならないと思うけど……んっ……／／／／／／／／／／」

暇と隙さえ有れば、誰の授業であろうと、何処であろうと、何であろうと、キスしていた。

ｅｘ．３　タバサの私室にて。

それ以外は、もう殆どタバサの部屋で、二人でノンビリ過ごしていた。……任務が来る迄。

どんな風にノンビリかと言うと、言わずもがなであった。

「……ん……♪」　むぎゅっ……　ナデナデ…

「……ん……ん～～……。」　とさっ…　スリスリスリスリ……

おわかｒ（ｒｙ　……したくも無いが、一応説明しよう。

先ず二人共、ベッドの上に座って居る。

そして、カイトが後ろからタバサを抱き締めながら、頭を撫でている。

一方、タバサは本を読みながら、カイトに背を完全に預けて、

時に撫でられる儘、抱き締められる儘に身を委(ゆだ)ね、

時折、本を読むのを止め、カイトの胸に頬や身体を擦り寄せ、思いっ切り甘えているのである。

「……んぅ……ん……んふぅ……。」　スリスリスリ……

「……ん～～♪♪♪　……ん……シャル？　本は読まなくてもいいの？」　ナデナデ…

「……ん……む～～……。」　むにっ…！

脹れっ面で頬を摘むタバサ。どうやら、折角の甘い一時に無粋は無用と言いたいらしい。

それに対し、如何にも微笑ましいという、満面の笑顔で応えるカイト。

「はいはい♪　んじゃ、その本はこっちに置いて…っと。…シャル～♪　ん～♪♪♪」

「……ぅ～……／／／　んぅ……ん…ちゅ……んん～……／／／／／／」

……で、『我等がカイト～…』に戻るのである。

そんな、超絶バカップル空間をぶっ壊してくれた英雄がいた。……例の梟である。

「……む……。」

タバサにしては珍しく、少し不機嫌になったが、母親の事を思い出して、再度考えを改めた。

「ハァ……全く、無粋な梟だこと。そう、思わない？　シャル。」

「……クスッ……うん。」

自分と全く同じ事を思っていた事に、不謹慎とは思いつつも、

思わず笑みを零してしまったタバサであった。

ｓｉｄｅ：空中ｏｎシルフィード

「きゅいきゅい！　何これ！　騙された！　物凄く美味しくないのね！　きゅい～～！！

……御姉様？　あのね？　そりゃ、シルフィは御姉様には恋人が出来た方が良いとか、

思ったり、言ったりした事はあります。……でもね？

……シルフィの上でまで、バカップルしないで欲しいのね～～～～！！！！！」

「……んぅ……／／／／　んふぅ……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「…ん～～♪♪　んちゅっ……んぅ～～～～♪♪♪」

そう。何時(いつ)でも、何処(どこ)でもバカップル全開な二人であった。

因(ちな)みに。今は、ガリア王都リュティスに向かっている途中である。

その上空でシルフィードが暴れている理由は二つ。

一つは、御覧の通り、自分の背中での主人達(バカップル)の行為の中止要求。

もう一つは、今シルフィードが咥(くわ)えている、庶民用の肉擬(もど)きの文句である。

「ほら、御姉様。これ食べてみるのね。」

そう言って、飛びながら器用に首を動かして後ろを確認し、身体を捻って、

カイトとタバサがキスしている間に、無理矢理捻じ込んだ。

「……むぅ～～～…………。」

どうやら、カイトとの一時を邪魔された事が、少々不満らしい。

しかし、言われた通り、ももむむと食べるタバサ。それを眺め、萌え～とか思ってる二人。

「あ、シャル。それ、俺にも頂戴？」

「……ももむむ……もむ？」

「そう、それ。…あ、いいよ……その儘、戴くから…♪　……ん………御馳走様♪」

「もむぅ…！／／／／／／　……んぅ…………／／／／／／」

「とっても甘かったよ……シャル…♪」

「……………バカ……／／／／／／／／／／／／」

「……その肉擬きが甘い訳が無いのね。甘いのはシルフィの背中の空気だけなのね。

というか、うざったいのね。甘ったる過ぎるのね。もう色んな意味でやってらんないのね。

このピンクな空気、早く誰か何とかして欲しいのね……きゅい。

……こうなったら、一刻も早くあの嫌み王女の居る所へ行くのね。

……でも……今、気付いたけど……どっちにしろ苦痛なのね。……きゅい……。」

そんなシルフィードの虚(むな)しい愚痴(つぶやき)は、悲しい哉(かな)、

又もや、いちゃつき空間に入ったバカップルには、全く聞こえていなかったとさ。

ｓｉｄｅ：火竜山脈

ガリアの南西…ガリアとロマリアの国境に位置する山脈。

今回の依頼は、其処に住む極楽鳥の卵を採って来る事。

只それだけではあるが、そんな簡単な任務をあのイザベラが回す訳が無い。

此の時期の火竜（ファイアドラゴン）は、丁度子育ての時期で、只でさえ気性の荒い竜が、半端無くなっている。

故に、此の時期の極楽鳥の卵は、『幻の卵』とさえ呼ばれている。

正に嫌がらせである。

そう。所で、そのイザベラだが……今、タバサ主従とカイト達は、それをネタに笑っていた。

「きゅいきゅい！　シルフィも見たかったのね！　あの嫌み王女の吃驚顔、見たかったのね！」

「いやぁ……本当に珍しいもんが見れたぞ！　なぁ、シャル？」

「……／／／／／／／／／／」

どういう事かと言うと、バカップル空間の儘、イザベラの許へ行った二人。挑発も何の其の。

寧ろ目の前でキスして見せたら、真っ赤になったタバサに驚き、眼を完全に見開いていたのだ。

……あれじゃ、瞳孔開きっ放しだろう。みょんな事が気になるカイトであった。

そして、翌日。何とか山麓に着いた一行。山をえんこらせよっこいせと登りながら、

今の様な話をしては気を紛らわせていたタバサ主従。それ程迄に此の時期の火竜は怖いのだ。

タバサの体力と、シルフィードの人間形態の不慣れさを鑑みて、十

五分毎に休憩を取っている。
その度に、シルフィードの愚痴を聞いたり、カイトとタバサのバカップル空間が入る。
例えば、こんな風。

ｅｘ．１

「……所で……何で、貴方は汗一つ掻いていないのね？　何か秘密でもあるのね？」

「秘密と言うか……何と言うかなぁ……。」

「何かあるなら教えるのね！　シルフィはもう、こんなに熱いのは嫌なのね！　きゅい！」

「いや、何と言うかな？　俺は、とある理由でな、一切の自然環境の影響を受けないんだよ。」

「な、何それ！　ずるい！　ずるいのね！　ものすごくずるいのね！　きゅいきゅい～！！」

「……（コクコク）！」

「いや、そんな事言われてもなぁ……；；；」

汗は掻かないが、冷や汗はしっかり流れるカイトであった。

ｅｘ．２

「……なぁ、所でシルフィード。……気付いているか？」

「……勿論なのね。……アレの事なのね？」

「……ああ。アレの事だ。……何と言うか……こう……こう……！
……素晴らしいな！！」

「きゅい！　全く以てその通りなのね！　きゅいきゅい！」

息ピッタリな二人に、怪訝そうな顔をするタバサだが、

それよりも火竜に気付かれては一大事と、二人に向けて、口に人差し指を立てる。

「……？　……しっ。火竜に気付かれる。」

「…！　むぐっ……もぐっ……。……でも、物凄く言いたくなっちゃうのね。」

「ああ。ビバブラボー。汗って良いよね☆」

「普段はとても嫌だけど、今回ばかりは激しく同感なのね！　きゅい！」

「………何の事？」

しかし、それでも二人の息の合い様も、お喋りも止まらず、

どうしても少し気になったタバサは二人に、何を話しているのか聞いてみた。

「「シャル（御姉様）のシャツが、汗で張り付いて、物凄く艶（なま）めかしいんだ（のね）。」」

「！？！？／／／／／／／／／／／」

「「そんな仕種（しぐさ）が又、萌えるんだ（のね）♪」」

「……ば、バカッ……／／／／／／」

何について二人で話していたのか理解すると、思わず羽織っていたマントで、前を隠した。

……だが、そんな仕種が余りにも年相応の可愛さだった為、

タバサラブの二人（＋作者＋読者）は、揃って悶絶していた。

「……しるふぃ。もう満足なのね。こんな可愛い御姉様を見られただけでも、

この山に来た甲斐はあったのね。きゅ～～い……。」

「……なぁ、シャル？　それは……あれか？　俺を誘ってるのか？

そんな扇情的な言動・行動・その他諸々……絶対、俺を誘ってるだろ？

俺をピンポイントで狙って誘ってるんだろ？　つまり、これはあれか？　あれだな？

所謂ゴーサイン。喰べちゃってもいいよ的な？　寧ろ、今が喰べ頃ですよ、旬ですよ的な？

つまり、あれですね、分かりますん。では、早速戴きます。」

「な！？／／／／／／／／／／／／／／／／ち、違うっ！／／／／い、今はダメ！！　ここじゃヤダ！！／／／／／／／／」

「……なぬ？　つまり、あれかい？　あれですかい？　麓（ふもと）に降りればもういいですよ？

あれですか？　降りる迄が任務ですか？　その後は俺の好き放題、し放題？

あ～んな事も、こ～んな事も、ヤリたい放題って事で、ファイナルアンサー？」

そして、そんな超絶可愛いタバサに耐え切れ無くなったシルフィードは気絶し、

カイトは、危うく獰猛（どうもう）な狼一歩手前で、何とか踏ん張って堪えている状態であった。

「……ぅ……／／／／／／／／え、えと……あの……と、取り敢えず、正気に戻って…？／／／／」

「大丈夫。無問題（モウマンタイ）。オールオッケー。俺は何時でも正気だ。寧ろ瘴気だ、山だけに。

さあ、いざいかん、天津国（あまつくに）へ。快楽の楽園へ。さあ、いざ。いざ

いざいざッッッ！」

「お、御願いだから、元に戻って……。」

「……なぁ、涙目のシャルって物凄く可愛いとは思わないか？　しかも、上目遣いで……だぞ？

今、俺は限界も臨界も突破した。突破し尽くした。さぁ、ここから先は阿修羅（あしゅら）の領域ぞ。」

全く以て、何処をどう見たら大丈夫で正気なのかと疑わざるを得ないカイトの言動・行動に、

本気で涙目になるタバサ。そして、本気でリミッター解除したカイト。

逃げてタバサ。本気で逃げてタバサ。超本気で逃げてタバサ。命を懸けてでも逃げてタバサ。

いや、寧ろ、捕まってくれ……ハァハァ……。という外の人達の危ない声が聞こえ……ナイヨ？

「……あ、あの……？　……カイト…？」

「…………もう、ノリが悪いなぁ…シャルは。しょうがない。

此処は、汗だくの扇情的なシャルとのフレンチキスで、この劣情を抑えるとしよう。」

「え？　れ、劣情って…／／／／／／…んんぅっ…！／／／／／／／／／／／／……んぅぅ…………。」

しかし、残念ながら、自分と言う名の理性で、何とか本能を抑えられたカイトによって、

冗談と言う事に相成った。……助かってよかったね、タバサ。

……え？　でも、時間の問題だよね？　……だって？　気にしたら負けダヨ？

…………的な事があり、実質的には、本来の休憩時間よりも、1～2時間は多く取っていた。

そんなこんなで、色んな意味で真っ赤なタバサと、他二人はやっとこさ卵の有る所に来た。

早速、こっそりと親鳥にも気付かれ無い様に、卵を盗りに掛かるが、直前に気付かれた。

当然の如く、鳴き喚(わめ)いて威嚇(いかく)するも、一向に止める気配が見えないと悟った親鳥は、

上空高く飛び上がり、更に甲高(かんだか)く鳴き始めた。それに嫌な予感を感じたタバサは杖を構えた。

果たして、靄(もや)の中から巨大な影……火竜……しかも雌(めす)が現れた。

以前、タバサ達が見た…というか乗った、あのカイトの龍達以上の巨体である。

明らかにその火竜の相手にタバサでは役不足だが、カイトは敢えて動かない。

それを理解したタバサは、瞬時に思考を花壇騎士のそれに切り替え、

火竜と対峙した。

そして、なるべくでかい自身の得意魔法の一つ……『氷の槍（ジャベリン）』を作り、竜に放った。

……だがしかし、本の一瞬……僅（わず）かの拮抗（きっこう）も出来ずに、火竜のブレスで消滅してしまった。

その余りの威力に、思わず狼狽（うろた）えるタバサ。何とか『氷の壁（アイス・ウォール）』は張れたものの、焼け石に水。

あっさりと、火竜のブレスに飲み込まれ、巻き添えを喰らったシルフィード共々、気絶した。

「……矢張り、未だ無理だったか。……まぁ、少し竜を舐め過ぎの感があったしな。」

そう独りごちるカイト。その目の前には、二人に止めをさそうとしている火竜がいる。

当然、そんな事をさせる訳も無く……。

「……おい、火竜…其処迄だ。今回はお前の勝ちだ……退(の)け。」

そう言って、火竜の前に立ち塞がった。

……だが、火竜にとっては、只の邪魔な人間が一人増えただけであった。

故に、火竜は何の躊躇いも無く、力を溜めたブレスを吐き出した。

間違い無く、これで生きている事は有り得ないと、誰であろうとも思わせる程のブレス。

周りの岩も、その余りの温度にほぼ完全に溶け切っていた。……所がどっこい。

その炎が消えた後には、全くの無傷のさっきの人間が、二人を庇(かば)って居た。

火竜には、その光景が理解出来なかった。

最強種たる自分のブレスを、生身で受けて平気な生物など、有り得る筈が無いと。

……だが、どうやったかは解らないが、現に自分の目の前に、その

存在が居るのである。

その存在に対し初めて感じた、恐怖という知らない感情に支配されながらも咆哮した。

……しかし、そんな行動も完全に無意味だった。……何故なら……。

「……聞こえなかったのか？　火竜よ。　『退け』　。」

大した声量も無い、そのたった一言。最後に彼が放った最後の一言を聞いた瞬間、

火竜は、全てを投げ出して、自身の巣に、文字通り尻尾を巻いて逃げ去ったのだから。

此の世界に於ける、絶対最強種たる火竜が初めて味わう……死……殺される恐怖であった。

ｓｉｄｅ：隠れ家

此処は、魔法によって岩に偽装されたテントの中。其処に寝かされている二人が目を覚ました。

「……ん……此処は…？」

「きゅーーーいーーーーーッッッ！！！　か、火竜がーーーッ！　こ、怖いのねーーーッッ！」

「よう、起きたか二人共。あと、落ち着けシルフィード。」　ボコッ！

「痛ッ！　痛いのね！　……あれ？　此処は一体何処なのね？」

あんまり五月蠅いと、場所がばれるので、拳骨で黙らせたカイトであった。

「あ、気付かれましたか？　御身体は大丈夫ですか？」

そのタイミングを見計らって声を掛ける、このテントの持ち主……リュリュ。

「……大丈夫。……貴女が助けてくれたの？」

「あ、いえ、私では無く、其方（そちら）の方が、どうやってかあの恐ろしい火竜を追い払ったとかで……。

私の此の場所を偶然見付けて、運び込んで来られたんです。」

「……そう。……また、知ってたの？」

「ああ、勿論。リュリュの居場所も、シャル……お前が負ける事も全部な。」

「……そう。」

「そうなんです！　私の名前を、名乗ってもいないのに言い当てたりして、吃驚したんですよ！」

そのリュリュの言葉に、又か……という想いを、久し振りに思い出した主従であった。

「まぁな。……シャル。今回はお前の弱点が、見事に露呈（ろてい）した結果だったな。」

「……弱点？」

「そうだ。お前は、人並み外れて頭が良い上に、常人よりも強い。相応の自信も有る。

故に、常に二手三手先を読んで、行動しているだろう？

だが、それが一手でも……しかもそれが、自分の全く予想外・想定外の事が起きると、

判断を誤り易い……つまり、混乱し易い傾向に有るんだ。……自分でも判っているだろう？」

「……っ……！」

余程悔しいのか、下唇を噛むタバサ。だが、それも直ぐ様、カイトに止められる。

その跡が残りそうな噛み方をした、タバサの唇を指でそっとなぞり、優しく諭した。

「……シャル。その負けず嫌いな所は大変可愛らしいが、相手と自分の実力差はちゃんと認識しておかないとな。……じゃないと、直ぐ死んじゃうぞ？」

「……分かった。」

「うん、宜しい。……それに何より……。」

「……？」

「……そんなに強く噛んだら、その可愛い唇が、腫れちゃうだろ？……ん……。」

「ぇ？　……んぅっ！　……んぅ……／／／／／／」

「あ、あわわわわ……／／／／／／／／／／／／／／」

「……あちゃぁ……また、始まっちゃったのね……きゅい…。」

その儘、後２０～３０分程、続けられたそうな。

「さて。シャルもじっくり堪能出来た事だし。
お互いの自己紹介も終わった所で、火竜対策しようか。」
「……誰に説明してるのね？　きゅい。」
「ん？　いや、改めての只の確認だよ。他意は一切無いさ。」
「……はぁ…。あ、あのぅ…それで、私の錬金が上手くいかない理由と言うのは……？」

其処で、仕切り直しとして、リュリュがどうしても聞いて置きたい事を聞いた。

「ああ、そりゃ簡単だ。アンタが、唯の一度も飢餓を味わった事が無いからだよ。

想いだけでも、力だけでも、どうにもならない。味わわなけりゃな。

何せ、こんな所に一月も居られるんだろ？

その間、食事を抜いたり切り詰めたりしてた訳じゃ無いんだろ？

それじゃ、絶対に無理だ。

ん～…そうだな……言わば、あれだ。

好きな時に、好きな飯が食える奴に、『一日ぐらい飯喰うの我慢しろ。』

とか言われても、只、腹が立つだけだろ？　食材も一緒だよ。言い換えるなら、こうだ。

『肉の有難(ありがた)みを知らない奴に、肉を理解されて堪るか！』って感じかな？　分かる？」

カイトの長説明で、自分の錬金が上手くいかない理由については理解出来た。

しかし、納得は出来ない。それでは、まるで、自分には作る資格が無いみたいでは無いか。

そんな、自分でも薄々勘付いていた事を改めてハッキリ言われ、思わず愚痴を零した。

「……そういう事ですか。でも、私だって好きで裕福な家庭に産まれた訳じゃ無いんです！」

「そら、それだよ。それが先ず、行き成りいかん。裕福だろうが関係ないさ。

自分にその気があれば、何時如何(いついか)なる時でも、断食(だんじき)ぐらい出来ただろ？

そうしてりゃ、今頃、とっくに出来上がってるさ。でも未だまるで出来ない。

それはつまり、仕送りに甘えてるからだ。いざとなればそれが有る……ってな。

そんな、度胸も、勇気も、覚悟も、気概も無ぇ奴が人の為なんざ、ちゃんちゃら可笑(おか)しくって臍(へそ)が茶ぁ湧かすってぇもんだい。

人に文句やら愚痴やらブー垂れるぐらいなら、先ず己を鑑みねぇとな。

知ってるか？　反省だけなら猿でも出来るんだぜ？　況(ま)してや、アンタは人間だろう？

こんだけ言やぁ、もう十分だろう。後は、どうするか自分で考えて自分で決めな。」

「……はい。」

しかし、その愚痴も、カイトの長説教によって、あっさり言い負かされてしまった。

自分でもそれは理解してただけに、本当にぐうの音も出なかった。

「……思ってた以上に饒舌(じょうぜつ)なのね？　きゅい…。」

「時と場合にもよりけりさ。言葉が必要な相手には言葉で。行動が必要な奴には行動で。

どちらでも無い奴には、何らかの切欠(きっかけ)を与え、若しくは、時間を掛ける。

十人十色、千差万別……いやさ、万差億別(ばんさおくべつ)……ってな。人其(そ)れ其(ぞ)

れって事さ。」

「……意外と深いのね……きゅい。」

普段は巫山戯（ふざけ）て、おちゃらけているイメージの方が強い二人にとって、

自分達が思っていた以上に、色んな事を考えていたカイトの評価は鰻登りだった。

タバサに至っては、目が潤んでる。てか、顔が赤い。ギャップですね、分かりますん。

まぁ、冗談はさておき（ぇ。早速、『幻の極楽鳥の卵奪取作戦（もうこれでいいや）』をカイトが提案した。

「まぁ、あれだ。もうメンドイんで、こうしよう。

シャルが極楽鳥の卵を採る。俺が火竜共からシャルを守る。

それで、あのでかい火竜が現れたら、シャルが一度対峙する。その間、卵は俺が持つ。

で、シャルが一度でも、あの火竜のブレスを防ぎ切ったら俺達の勝ち。

又、吹き飛ばされたら負けって事で。その間、リュリュとシルフィードは此処で待機。

以上、何か文句は……あっても受け付けないんでヨロ。」

「「受け付けないんですか（のね）！？」」

「……分かった。頑張る…！」

「よしよし……良い子だ、シャル。」

「「聞いて下さい（なのね）！！！」」

結局、その儘の案で行く事になった。火竜の恐ろしさを知るリュリュは止める様、懇願したが、

カイトの強さ……と言うか出鱈目（でたらめ）さを知ってる二人は、

カイトが守ってくれるなら、寧（むし）ろ安全だと思い直し、多数決で決定した。

ｓｉｄｅ：極楽鳥の巣

早速着いた、極楽鳥の巣。今、周りの火竜共は、カイトが側に居る事で、近寄れない。

そして、只今、現在進行形で、タバサが卵を『念力』でピキピキドカーンと拾い上げ中である。

「お～～い、シャル～……卵は採れたか～～……。」

「……問題無い。今、何とか…！！？」

卵を何とか拾い上げて籠（かご）に入れ、さて帰ろうかと後ろを振り向き掛けた瞬間に、

あのでかい雌火竜が現れ、ブレスを吐いて来た。

事前に、『フライ』を掛けていたタバサが横っ飛びで避け、

籠は当初の予定通り、カイトに投げ渡した。

タバサが火竜と対峙した刹那、火竜は己が尻尾で叩き付けて来た。

その衝撃で、タバサの居た所の岩が砕け散った。

何とか、辛うじてその岩礫（いわつぶて）は避ける事が出来たが、無数の飛礫（ひれき）によって掠（かす）り傷は沢山出来た。

その小さな獲物に向かって、火竜は遠慮仮借（かしゃく）する事無く、全力の咆哮を浴びせた。

……とある者が言っていた。真の勇者とは、竜と相対（あいたい）する事が出来る者だと。

竜は、先ず相手の心を折る。己が咆哮によって。その眼力によって。その異常な力によって。

それを受けても尚。喰らっても尚。浴びせられても尚……立っていられた者。

それでも尚、竜と真正面から、向かい合う事が出来る者。それをこそ、真の勇者と呼ぶのだと。

なればこそ、言おう。今のタバサは……否。彼女こそが、真の勇者であると。

火竜は、自身の咆哮を浴びたにも拘(かか)わらず、未だ立ち上がって来るその不遜(ふそん)な獲物に、

今度こそ止めを指す為に、再度咆哮し力を溜めた。その存在を消す為に。

骨すらも溶かし尽くす為に。跡形も残さず、完全に消し去る為に……力を溜めた。

その余りの威力を示すであろう現象……その火竜の周りの空気が揺らめいている。

一体、どれ程の熱量なのか……想像したくも無い。タバサは今、初めて理解した。

竜が最強と呼ばれる所以（ゆえん）を。その真なる恐怖を。戦慄（せんりつ）というものを。初めて味わった。

……だが、自分もこんな所で終わる訳にはいかない。そう臍（ほぞ）を固めたタバサは……。

「ラグーズ・イス・イーサ・ウォータル……！！！」

自身の有りっ丈（たけ）の魔力を籠めて、以前に放った物とは比較にならぬ程、

太く…大きな……『氷の槍（ジャベリン）』を作り上げた。

……そして、火竜のブレスが放たれ……本の一瞬でブレス諸共

に消滅した。

火竜は、理解出来なかった。あのブレスを防ぎ切った事が理解出来なかった。

しかし、事実、こうして自身の目の前に立っている事は理解しなければならなかった。

同じだと。あの者と同じだと。あの何者かに感じた、謎の感情……いや、現象と全く同じだと。

その自身が知らぬ感情……『恐怖』……それを、この短い間に二度も味わう事になった。

その理解し難い感情に、その自尊心故に、全てを無くす為に、火竜は再度ブレスを吐いた。

……しかし……。

「其処で終わりだ、火竜よ。一度でもブレスを防がれた時点で、お前の負けだ。」

ｓｉｄｅ：雌火竜

又、あの何者かに防がれた。これで三度目だ。もう理解したくも無かった。

今度こそ、全てを消し去る為、火竜は力の限り、彼に突進していった。

だが、その力の限りを尽くした突進も、彼の指一本で止められた。

どれだけ押してもビクともしない。その内、彼が呟いた。……しょうがないなぁ……と。

そのたった一言で、背筋に得も言われぬ程の、謎の悪寒が走った。身体が何故か震えている。

然う斯うしていると、彼が何か呟き、彼の後方に出来た黒い穴に、手に持っていた卵を入れた。

その瞬間、自分は天を仰いでいた。何が起きたのか、全く分からなかった。

だが、数瞬後自分の視界に入った者によって、その訳が語られた。

「……どうだ？　最強種の自分が、仰向けに引っ繰り返された気分は？」

……どうやら、自分はこの目の前に居る、小さき何者かに仰向けにされているらしい。

その証拠に、自身の逆鱗（げきりん）……喉下（のどした）にある逆立った鱗……を踏み付けられているのが分かる。

思わずカッとなり、起き上がろうとしたが、蠢（うごめ）く事しか出来ない。
どうにも出来ない。

意味が解らない。自分の身体は一体どうしてしまったんだ？　理解出来ない。

「……起き上がれんか？　まぁ当然だな。俺がお前の身体を抑えつけて居るからな。足一本で。」

……益々理解出来る訳が無かった。高が脆弱（ぜいじゃく）な生物の足一本で？
この最強種たる自分が？

しかし、現に自分の身体は動かない。どんな絡繰（からく）りが有るにせよ、それは事実であった。

そう……自分が理解するのを見計らった様に、彼が話し掛けて来た。

「……何と言うか……あれだ。少し、お説教と言うか、調教とでも言うかな……。

まぁ、身の程を知る良い機会だと思ってな。上には上が居ると言う事を知れ。」

そう言うと彼は……恐怖の権化（ごんげ）を喚（よ）び出した。

「セカンド・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　メルト」

その瞬間、この火竜山脈に影が差した。……そう。火竜山脈全てに影が差したのだ。

その影は、遙か上空の雲を突き破り、その雲を引き連れて……顕現（あら）われた。

初めは、ソレが何なのか全く判らなかった。だが、ソレから発せられた空気……否、息。

それで、ようやっと理解する事が出来た。これは顔だ…と。何か巨大な生物の顔だと。

それにしても、こんな巨大な生物とは一体……マテ…。……今、彼は何と言った？

ドラゴン……と……そう言わなかったか？

……つまり、今、自分の目の前にある……いや、目の前に居るこの顔は……。

‘グゴガアアアアアアーーーーーーーーッッッッッッッッ

ッ！！！！！！！！，

…………………そう。紛（まご）う事無き、龍であった。その咆哮を浴びる迄、理解出来なかった。

……否。理解する事を本能が拒否したのだ。

ソレを龍と認識した瞬間、自分の近くに居る者に目を向けた。そして、気付いた。

その自身を抑え付けている、何者かの内側に見え隠れするナニモノカ達を。

……何故、今迄気付かなかったのだろうか。

こんな……こ、こ、こんな…しょ、正真正銘の、ば、ば、バケモノ

に……じ、自分が……

竜如きが適(かな)う筈が……そんな事が有り得る訳が無いのだと言う事を。

そう思った瞬間、身体の震えが止まらなくなった。……いや、一層激しくなったのだ。

それを理解したのか、彼はにっこり笑ってこう言った。

「お。そうか……ようやっと、理解してくれたか。これで解ったろ？

この広い世の中、まだまだ自分より強い者、恐ろしい者、あらゆる意味で巨大な者は居ると。

良かったな。高々百年かそこら程度で、知る事が出来て。

その程度で、最強とか井蛙(せいあ)にも程が有るしなぁ。やっぱ若い内に経験は積まんとな。

こういう事は、子供の時分に知っとかんとな。」

……そして、解放された瞬間、自分は文字通り、尻尾を巻いて飛んで帰って逃げたのだ。

今、この時程、自分に命がある事を嬉しく……そして、歓喜する程に泣いた事は無かった。

ｓｉｄｅ：空中ｏｎシルフィード

只今、ガリアに戻っている途中である。

因みに、シルフィードは既にガーゴイルとして紹介済みである。

その上で、先程のあの竜とも呼べない巨大な生物は何かと問われ、

自身の使い魔の内の一体だ。と答えたカイトに、益々、恐怖と興味が湧(わ)いた一行。

その一行が、折角採ったのだからと、カイトに諭され自身に足りない物を理解したリュリュが、

早速、その『幻の極楽鳥の卵』を茹(ゆ)で卵に錬金し、三等分し、カイト以外で別(わ)けた。

カイトは、その味を知ってるからいいと言い、知らない三人で食べなと勧(すす)めたのだ。

そして、その感想は……。

「……その……ちょ、調理方法が悪かったんでしょうか…？」

「……そんな訳無いのね…。単純な調理方法こそが、その素材の味を最大限に引き出すのね。

この季節の卵は……どうにも、食用に向かないらしいのね。」

「……そうなんだ。つまり、この時期の極楽鳥の卵は一言で言うと……。」

「……不味い。」

三人とも、盛大に爆笑した。タバサも、クスクス笑っている。……

そして。

「あ、シャル。俺にもそれ頂戴♪」

「え？　これ？」

「そう。勿論、口移しでね♪」

「……え？／／／　あ、あの、そ、それは此処ではちょっと……／／／／／」

「じゃぁ、しょうがない。卵は諦めよう。……んぅ…………♪」

「え？　寧ろ、こっちを…！　……んんっ！　……んぅふぅ／／／／／／／／／　……ん…／／／／／／」

「はわわわわ～～～…………／／／／／／／／／／／／」

「……あっちゃぁ～……又、始まっちゃったなのね。

……あの我が儘姫のがっかりする顔が、これからみれるのは楽しみなんだけど、

それまでの間、このピンクな空気に耐えられる自信が余り無いのね。

……正直、シルフィ、もうヤなのね。恋人作れなんて言うんじゃ無かったのね。…きゅい。」

そんな愚痴を零しながら、早くこの空気から逃れる為に、全速力で急ぐシルフィードであった。

しかし、帰りはリュリュが居ない分、もっと濃く甘い空気になるであろう事を、

すっかり考えていなかったシルフィードであった。

学院に帰って来たシルフィードが、使い魔達に挟(はさ)まれてさめざめと泣いていた事は、

使い魔達（才人除く）の公然の秘密である。

バカップルと火竜と卵（後書き）

如何でしたでしょうか？

まぁ、今話は一言で言うなら、シルフィード乙。……ですかね？ｗ

あ、因みに、カイトは基本的には戦争には参加しません。だって戦場にはタバサは居ませんからね。

それと、前回の幕間の答え合わせですが……今回は致しません。判った方のみ、ニヤリ…として頂ければ、それでオッケーですｗ

もし、どうしても気になる方、知りたい方は、メールにて御一報下さい。御教え致します。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

『竜の羽衣』とゼロ（前書き）

現時刻（１４：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，３５３，２８９アクセス　ユニーク：１１６，７９７人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

『竜の羽衣』とゼロ

ｓｉｄｅ：トリステイン魔法学院

アルビオンから帰って十日程。バカップルが任務から帰って来てから更に数日が経っていた。

そんな頃、ヴェストリの広場のとある片隅に、テントが張られていた。

カイトが暫く中庭で生活していた時に使っていた奴である。

因みに、今カイトは、ほぼ常にタバサと共に居る。そう、ほぼ常に……である。

朝起きては、ベッドの中でお早うのキス。食堂では、口移し。授業中はしょっちゅうキス。

任務中は、シルフィードの上でちゅっちゅ。それ以外は、タバサの部屋で抱き締め合い、キス。

夜は夜で、互いに抱き締め合い、どちらか（主にタバサ）が眠くなる迄、キスしっ放し。

バカップル、ガチで死ね。主にカイト。

……まぁ、そんな状態であった為、才人がカイトに掛け合い、只で譲って貰ったのだ。

因みにこんな感じで↓。「カイト！　中庭にあるテントくれ！」「もってけどろぼーｂ」

それで、ヴェストリの広場に五右衛門風呂を作っていた才人は、テントを其処に持って来た。

そして、今、ルイズの部屋を勘違いで追い出された才人は、そのテントに住み着き、

日々飲んだくれながら、くだを巻いているのである。

その中には、才人の相棒デルフと、キュルケの使い魔フレイム。

そして、今、ギーシュが探しているヴェルダンデが捕まっていた。

「ヴェルダンデ！　此処に居たのか！」

「モグラ、おいで。俺とお前は友達だろ？」

「……何を……しているんだね？　君は…？」

「……おいで、モグラっち。俺にはお前しか心許せる友達がい

ないんだよ…。」

「こら！　だから僕の愛しいヴェルダンデを連れて行くな！」

そんな漫才が、二～三日続けられたそうな。

そして、日数が経ち、漫才も諦めた日の、夜も更けた頃。

才人と一緒になって、モグラになって酔っていたギーシュ。

その二人の酔いを、キュルケの炎が醒まし、途中乱入したシエスタ共々、

一緒になって宝探しをする事になった。

……その夜、タバサの寝室に乱入したキュルケとカイトの間に、

又もや、一騒ぎあった事は言う間でも無い。

だが、それも、真っ赤になったタバサの「……彼と一緒じゃ無きゃヤダ…。」の一言で、

タバサの萌えっぷりを再認識した二人が、三十分程掛けてタバサを堪能した後、

しょうがないと、カイトも来る事を諦めたキュルケによって、一応は落着した。

その後、才人は「……あれ？　カイトの意志は無視？」とか思ったが、

タバサと戯れているカイトを見て、「……ま、いっか。カイトだし。」と、

羨ましくも、妬ましく想い、改めて思い直したそうな。

ｓｉｄｅ：とある廃墟

此処にもお宝が有ると地図に書いてあったので来てみた。そしたら、何故かモンスターがいた。

それも沢山。ミノタウロスやらコボルドやらゴブリンやらオークやら70～80体ぐらい。

みんな、思わず回れ右をしたくなったが、出口にも、何時の間にか湧いて出てた。

……今の状況を三行で説明すると、こんな所である。今北産業の方、分かったかなー？

「……どうしたの？」

「……いや、何でもない。ちょっとした電波が頭を過ぎっただけだよ、シャル。」

「……？」　コテン

「「……可愛い。」」

「……其処のバカップルとキュルケ。真面目にどうするか考えようぜ……；；；；；；」

「ま、ま、全くの同意見だよ、うん！」

何となく分かると思われるが、説明しよう。つまり、前門の虎、後門の狼であった。

前方には、沢山のモンスター集団。後方には、強力なミノっちや、オークっち。

瓦礫やら柱の陰やら階段の下やらに隠れて、何とか見付からずに済んではいるのだが……。

もう、色んな意味で笑うしか無かった。でも、笑ったら見付かって殺されるので、黙ってた。

「……それで？　一体どうすんだよ、この状況…。」

「そうねぇ……ギーシュのワルキューレが囮になって逃げるのが一番じゃ無いかしら？」

才人が、何か手は無いかキュルケに尋ねる。それに応じ、一つ案を提示するキュルケ。

「……シャル～♪　本当に可愛いなぁ…♪♪」

そして、バカップル全開でタバサに頬を擦り寄せているカイト。

「……立ち塞がる奴は、俺が斬ればいいか……。」

「……そうね。只、ミノタウロスには気を付けてね？　物凄く、あ

いつら固いから。」

敢えて、それを見て見ぬ振りをし、話を続け、その案で行く前提で話をする二人。

「……ん……カイト……／／／」

そして、カイトに甘え捲るタバサ。顔は赤く蕩け切ってる。

「……そ、それじゃぁ、僕のワルキューレ達を何処に配置すれば良いんだい？」

「……そうねぇ……階段下に、2～3体、あっちに2体、そっちに2体かしら？

階段下のは、勢い良く階段を駆け上がった後、それぞれ別々バラバラに動いて貰うの。」

「……成る程。そうやって戦力を拡散する訳だな。確かに、それなら何とかなりそうだ。

なぁ、カイト達は……どう……。」

そして、矢張りガン無視して、その案の儘話し続け、結局それで行こうと決めた。

そんで、カイトとタバサに意見を聞こうと、話を振った三人の見たものとは……！！！

「……ん〜……♪　……シャル〜♪　……ん〜〜……本当に可愛いなぁ……ん〜♪♪♪」

「……ん……／／／　……んんぅ……んハァ……／／／／／／……ん……／／／／／／／／／／／／」

バカップル超全開で、周りなど何処吹く風か、キスし捲っていた。

そして、当然の如くブチ切れる三人。……ま、そりゃそうだ。しかし、それが不味かった。

「「「好い加減にしろ（しなさい・したまえ）！！！　バカップル！！！！！」」」

「「……ん……しーっ…！」」

「「「……あ。」」」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！！！！！

そう。此処はモンスターの巣窟。其処でそんな揃って大声を出せば、当然の如く、こうなる。

「……だから、ダメだって言ったのに……。」

「全く……ちゃんと人の言う事聞かないとダメなんだぞ？」

「「「誰の所為だとおもってんだ（のよ・だよ）ーーーッッッッ！！！！！」」」

「ドン☆マイ♪」

それについて駄目出しをするバカップル。当然怒る三人。お茶目なカイト。切れる三人。

「……なぁ、代わりにあいつを餌と言う名の囮にしないか？」

「……それいいわね。私は大賛成よ？」

「僕も同意見だ。さぁ、多数決で決まった事だ。さっさと行って貰おうか♪」

力では適わない事を理解していたが、三人はカイトに処理するか処理されるかの二択を迫った。

当然、カイトの選択肢は一つ。

「だが断る。」

「……御願い、カイト。」

「任せろ。」

二つ目は、直ぐ近くにあった。

半分ノリで答えたとは言え、救世主（メシア）が嘘は付けないよなぁ……と、過去の自分を棚上げし、

タバサをキュルケに一旦預け、束になって襲い掛かるモンスター達に真正面から向かい合った。

後ろで「怖ぇぇぇ～～……！？」とか、怯えてる奴等はさておき。

仕方なく準備し構えた。……彼等に、死と言う名の救済を与える為に。

「……ハァ。……ごめんな、お前等。

セカンド・イグニッション　第二形態（ツヴァイス）　完全鎧化（フルアムド）　ソード第二形態（ツヴァイス）」

そして、顕れた彼は、異色の鎧に身を包み、七色に輝く剣を手にしていた。

そして、その剣を腰矯（だ）めに構えると、微動だにしなくなった。

モンスター達が、近付いて来ているのにも拘わらず、一向に動かない。

それに焦ったギーシュとキュルケは、カイトを促そうとするが、それぞれ止められた。

ギーシュは、その居合いの構えの意味を知る、唯一の人間……才人に。

キュルケは、その攻撃の威力の程を知る、唯一の人間……タバサに。

そして、もう目の前……あわや衝突する寸前に動き……その瞬間、全てが終わっていた。

「兆物一切灰燼(ちょうぶついっさいかいじん)たれ　奥義　紅蓮腕(ぐれんかいな)・極(きわめ)」

その言葉が、此の場に響いた瞬間、モンスター達は一瞬炎に包まれたかと思った刹那、

完全に跡形も無く、何処(いずこ)かへと消え去った。

その後、カイトが呟いた言葉を理解してしまった事によって、

四人共、心底(しんてい)より戦慄せずにはいられなかった。

「……全く……手加減するのも楽じゃない。……危うく、目の前全てを消し去る所だった。

……いや、そもそも極(きわめ)は必要無かったか……。……いかんな……最近、どうにも暴れ足りん。

……こういう時こそ、アルニスやトキヤがいれば、少しは楽しめるのだろうがな……。

……全く……肝心な時に限っていないものだ……あのバカタレ共は。」

自分達では、到底辿り着けないであろう域ですら、限りない手加減……？

……最早、生物の域を越え切っていると理解させるには、十分過ぎ

る事実であった。

その後、その廃墟を漁(あさ)りに漁ったが、結局見付かった物は、金貨数枚だけであった。

そして、次なる寺院跡では、オーク鬼２０匹前後と闘ったが、

結局得た物は、ボロボロの飾り数点でしかなかった。

ｓｉｄｅ：寺院跡の側

只今、夕飯中。もう十件弱になるのに、何のお宝も見付からず、不貞腐れているギーシュ。

しかし、文句を言いながらも、シエスタが作ってくれた美味しい料理を、

皆で突っつきながら食べていると、そんな事もすっかり忘れていた。

何とも単純である。

「……これ、美味しいわね。何て料理？」

「『ヨシェナヴェ』っていう、私の村の料理なんです。」

しかし、其処に、この料理を知っている者から訂正が入る。

「いや、違うから。これは寄せ鍋だから。俺と才人の国の、或る意味伝統的な料理の一つだ。」

「あ、やっぱりこれ寄せ鍋なんだ。……道理で懐かしい味がすると思ったよ。

……ん？　あれ？　でも、何で日本料理がこんな所に…？」

「……才人。シエスタを見て何か気付かないか？　初めて見た時、懐かしく感じなかったか？」

「あ、思った思った。何か、物凄くホッとしたんだよな。何だ、日本人居るじゃんってさ。

でも、名前とか風習とか聞くと、ああ、やっぱり俺とは違うんだって、

残念に思ったんだけど……って……え？　も、もしかして…

…！？」

「まぁ、当たらずとも遠からずだな。それも全部、シエスタの村に行けば分かるさ。

ラ・ロシェールの向こう。シエスタの故郷、タルブの村。

『竜の羽衣』と言う名の、才人の武器が在る村へ……な。」

才人とカイトの、皆を置いてけぼりにした会話に、誰も入っていけなかったが、

自分が話題に出たり、自分の村の名前が出た事で、吃驚仰天するシエスタ。

一方、キュルケも『竜の羽衣』という名前に聞き覚えが有り、宝の地図を漁ると出て来た為、

「お宝、お宝♪」と、何かウキウキ喜んでた。

そして、タバサはやっぱり……と、何か予感めいたモノを感じていたらしく、

（皆からすれば）珍しく、溜息を付いていた。

最後にギーシュは…と言うと……良く分からず、ヴェルダンデと戯れていた。

ｓｉｄｅ：タルブの村

シエスタの故郷。その近くに在る寺院。その中に『竜の羽衣』は安置されていた。

その寺院を見た才人は懐かしさに目を細め、そして、『竜の羽衣』を見て、

驚きに眼を見開き、感動に目を潤ませ、暫し呆然と見上げて固まった。

しかし、その存在を知らないキュルケとギーシュはブチブチ文句を垂れ、

タバサはどうやら興味深い様で、彼方此方見て廻っている。カイトはそれに萌えている。

……だめだこのバカップルはやくなんとかしないと。

そして、シエスタは…と言うと……微動だにしない才人を心配して、声を掛けた。

「……あ、あの……サイトさん…？　本当に大丈夫？」

しかし、才人はそんなシエスタの様子には気付かず、シエスタの肩を掴んで詰め寄った。

「シエスタ。お前の曾爺(ひい)ちゃんが残した物は他に無いのか？」

「えっと……後は…大した物は……；　お墓と、遺品が少しですけど……。」

「それを見せてくれ。」

そして、墓に行き、カイトと二人で手を合わせ、『竜の羽衣』……いや、『ゼロ戦』を、

シエスタの家族に断り、シエスタの曾祖父……佐々木武雄海軍少尉の遺言通り、

その遺品のゴーグルと共に、才人が頂く事となった。

その日はその儘、村に泊まり、学院から来た梟便に顔を青ざめた二人＋一人の為に、

翌日、直ぐ様帰る事と相成った。

そして、持ち帰る際、運ぶ手間賃が惜しいと言って、カイトの召喚した龍に運ばせたのだが、

唐突に顕れた何体もの大きな龍に、村の皆は挙って腰を抜かしたそうな。

ｓｉｄｅ：三人称

その後の経緯を、簡単に綴(つづ)ろう。その理由はそれこそ簡単だ。

その後に起きた戦争に、カイトは一切関わらなかったからである。

相談や助言を求められても、一切応じなかったのである。

何・故・な・ら・ば！

……あの阿呆は、タバサとイチャコラするのに忙しいと言って断っていたのである。

実際、ずぅぅぅぅっっっっっと、カイトは唯唯、タバサとバカップルしていただけであった。

……あの『水兵(セーラー)服騒動』が起きる迄。なので、其処迄は基本割愛で話そう。

先ず、あの『竜の羽衣』を魔法学院の中庭に置き、飛んで来たコルベールに頼んで、

ガソリンを造って貰い、ルイズと才人は雨降って地固まり、三人＋カイトは罰掃除。

その間もバカップル全開。肩身の狭い二人に同情する者多数。しかし、身代わり皆無。

然う斯うしている内に、ガソリンは出来上がり、アンリエッタとウェールズの結婚は間近。

すると、何を考えているやら、神聖アルビオンが唐突に、式に参列したいと言って来た。

当然渋る当の本人達であったが、流石に二人だけでは断り切れず、結局承諾した。

そして、式の三日前、祝いに訪れた神聖アルビオン艦隊。それを出迎えたトリステイン。

しかし、その両者の間に待ち構えていたのは、一方的な虐殺であった。

先ず、神聖アルビオン艦隊からの礼砲。それに対し、答砲としては、格式の低い七発に留めた。

……問題は其処で起きた。

砲弾など込められていない筈の答砲で、神聖アルビオン艦隊の後方の船が一隻撃沈したのだ。

何事かと思っていると、神聖アルビオン艦隊から打電が有った。

『タダイマノ貴艦ノ砲撃ハ空砲ニアラズ。我ハ貴艦ノ攻撃ニ対シ応戦セントス。』

……そして、トリステイン艦隊は、降伏したモノも含めて……全滅した。

そう。これは神聖アルビオンの謀略であった。トリステインの答砲に合わせ、

敢えて、一隻をその為だけに爆破し、戦争の火種としたのだ。

因みに、乗組員は皆脱出させている。人材は国の宝であるからして。

しかし、トリステイン貴族は、自身の保身に務め、極力戦争をする事を避けている。

それに痺れを切らした、アンリエッタとウェールズは、先駆けて勇み、出陣した。

マザリーニを初めとし、未だ腐らずに居た貴族達は、挙ってその後

を追って行った。

一方。学院長室にて、聞き耳を立てていたルイズと才人は、話を聞くと外に飛び出した。

何と、戦場はタルブ地方。今、シエスタが帰省している村が在る場所である。

慌ててゼロ戦に乗って、戦場に向かおうとする才人。それを止めるルイズ。

しかし、振り切ってコルベールにガソリンを貰いに行き、風の助力を得て飛ぶ『ゼロ』。

……中に、闖入者（ちんにゅうしゃ）が居るとは気付かず。

そして、戦場に来た才人の目の前に広がっていたのは……

あの、綺麗な草原が焼かれている場面であった。

強く噛み締めた唇から流れ出る血にも構わず、竜騎士達に向かうゼロ戦。

誰もが思った。あんな見た事も無い、不思議で不格好な竜擬(もど)きに誰が負けるか……と。

だが、結果は完敗。完全なる惨敗であった。

１２分で、屈強なアルビオン竜騎士２０騎が全滅！？　バケモノか…！？

しかし、纏(まと)わり付く羽虫(りゅうきし)を幾ら落としても、巣(レキシントン号)を落とさなければ意味が無い。

だが、その屈強な巣(レキシントン号)は、ゼロ戦ですら近付く事すら出来ない。

しかし、そんな時、闖入者が提案してきた。こんな時こそ自分の…『虚無(ゼロ)』の出番だと。

その言葉に乗っかり、船の死角……真上を旋回する。

そして風防を開け、呪文を唱え始めるルイズ。……其処に邪魔者が現れた。……ワルドである。

そのKY（ワルド）は、ゼロ戦の後ろにピッタリくっついて離れない。……ストーカーかッ！

しかし、其処は此方も伝説。あっさりとゼロ戦の得意技を披露する。

壜（びん）の内側を浚（さら）う様に機体を流し、後ろに付く。そして、機関銃の一斉掃射。

邪魔者（ワルド）も墜ち、ルイズの『虚無（ゼロ）』も完成し……艦隊を『爆発（エクスプロージョン）』が包み、艦隊のみを墜とした。

それを眺め呆然としていたトリステイン軍。それに一早く気付いたマザリーニの発破（はっぱ）によって、

奮起したトリステイン軍は、突貫していった。

そして、始まりの戦争は、トリステインの大勝に終わった。

それを受けてゲルマニアは、正式にトリステインと軍事だけでは無い、確かとした同盟を結び、

ウェールズはアンリエッタと無事に式を挙げ、将来出来る二人の子

供を王に据える為の、

一時的な措置による王代理として、少なくともトリステインとしては、異例中の異例である、

他国の者が国の代表になる事になり、又、新たな火種が燻る事になるのだが……。

それは又、別の話。今、生を歓喜し、勝利に凱歌を挙げている皆には関わり無き事であった。

そして、幾日か時は経ち……。

未だ戦勝に沸く城下町にて、才人が見付けて来たモノによって起きた大騒ぎ。

『水兵服騒動』……後にこう呼ばれた騒動から、次の物語は紡がれるのである。

『竜の羽衣』とゼロ（後書き）

如何でしたでしょうか？

あっさりと、三巻も終わりました。次はタバサの実家に御挨拶に行きます。

執事「貴様に御嬢様はやらん！！！」カイト「其処を何とか！　御爺様！！！」ですね、分かりますん。

まぁ、冗談はさておき。基本的にルイズ達の動きは、原作の儘と思って下さい。

只、早目に事実・真実・その他を知っているので、

そういう事に関する時は、少しは、思慮深くなっている筈です。

……所で、何故セーラー服騒動から始まるのか……御判りになりますか？

……そう。そうです。その通りです。恐らく、皆様も妄想なされたかと思います。

何故だ…！　何故、『彼女』が着ないのだ……！！　と、さぞかし、血の涙を流された事でしょう。

……分かります。ええ、そりゃもう、勿論、とても良く分かります

ともさ！！！

故に、書きましょう！！　『彼女』のその相応しさを！！！　『彼女』にこそ相応しいと言う事を！！！！！！

……残念ながら私には絵心が全く無く、絵に描いて御見せ出来ないのが……

とても……そう、とても……ッ！！　悔しいですッッッ！！！

故にッ！　何とか文章で、少しでも『彼女』の更なる魅力を御見せ出来る様、精進致しますので……

今暫く……どうか、今暫くッ！　御待ち下さいッッ…！！

妄想中の為、興奮しながらですが、今回は此処迄。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

萌えとタバサとセーラー服（前書き）

現時刻（０２：５０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，３６７，２８４アクセス　ユニーク：１１７，９１８人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、今回はギャグ回です。それも紛う事無き、２００％ギャグのみの回です。

そして、何より、この回は作者の願望と妄想が本気で駄々漏れな回です。

もし、その様な御巫山戯（おふざけ）回が苦手な方は、次話を少々御待ち下さい。

では、今話も拙作を御堪能下さいｗ

萌えとタバサとセーラー服

ｓｉｄｅ：王宮前　ブルドンネ街ｉｎトリステイン

「……お……おお……おおおお……！！！！！」

「……何？　どうしたの、一体？　……服？　アンタ、服が欲しいの？」

今は、アンリエッタとウェールズの許へ赴き、事情を説明し、『虚無』を発動した事を、報告に来た帰りであった。

そして、その帰り道。又もや喧嘩しつつも、デート紛いをしていた

二人は、

キャッキャと買い物などをし、何気に楽しんでいた。

そんな時であった。……才人がとある店舗で目に留まった物にフラフラと近寄り、

手に取った儘、呻き声を上げて、動かなくなったのは。

それを少々、気味悪く思いながらも、声を掛けるルイズ。

しかし、才人は答えない。それ所では無かったからである。

……そう。此の時の才人は、愛しのルイズの声も聞こえない程に、興奮していたのである。

故に、その勢いの儘、店主に問い掛けた。

「……これ、幾ら!?」

「お！　お客さん、お目が高いねぇ…！　これなら、三着で1エキューでいいよ。

今なら、一着おまけしてやるよ。姫様の結婚祝いだ。」

「買ったッッッ……！！！」

これが、後に言う『水兵服騒動』の発端である事を、今、此の時、誰一人知る由も無かった。

ｓｉｄｅ：トリステイン魔法学院

その日、才人は地面に這い蹲り、身悶えしていた。しかも、何かブツブツ呟いていた。

「……震えろ、鼓動のビート。……高鳴れ、望郷のハート。

もっともっと熱く震えて、俺の天才を祝福してくれ……。」

何処からどうみても、７２０。見回しても、危ない変態キ○ガイさんであった。

それもその筈。何せ、今、彼の目の前には天使が居た。……いや、正確に言おう。

セーラー服に身を包んだ、シエスタと言う名の、女神が居たのだ（才人視点）。

「……ぅっ……くっ……！　……俺……生きてて……良かったァァァーーーッッ！！！」

「ヒィッ！？」

……ああ、まぁ、どっちも気持ちは分かる。取り敢えず、モチツケ才人。

そんな興奮し切っている、危ない人？　に近付く者が三人。

「……才人。良くぞ、それを見付けて来てくれたな。」

「……それは、何だね？　その服は何だねッ！」

「……けけ、怪(け)しからん！　全く以て怪しからんッ！　そうだなッ！！　ギーシュッ！！！」

「……ああ。……ああ！　こんな……こ、こ、こんな怪しからん衣装は見た事が無いぞッ！！」

「ののののッ！　の……ののの脳髄をッ！　直撃するじゃないかッ！！！」

（……わ～んッ…！　頭痛いの増えた～～～……！！！）

そう。何を隠そう……カイト・ギーシュ・マリコルヌである。

……いや、寧ろ、お前等は隠せよ……色んな意味で。とか、其処突っ込まない。

とまぁ、そんな訳で（…どんな訳だ？）、目敏(めざと)くセーラーシエスタ

を見付けた三人は、

才人の許へ歩み寄り、才人の肩をガッシと抱いた。そして、こう囁いた。

「……なぁ、才人？　もしこの事をルイズが知ったら何て言うかな？」

「此処に、後三着有る。好きに使ってくれ。」

「「「流石は才人（サイト）。良く分かってるじゃ無いか。」」」

「……しっかし、あれは確か水兵が着ている服だろう？

それが女の子が着るだけで、あんなに魅力的に映るとは……不思議だ…。」

「「当然だ。俺達の故郷の、魅力の魔法が掛かってるんだからな。」」

ｓｉｄｅ：タバサの部屋

今、タバサは少し不機嫌である。少しとはいえ、カイトが自分と離れて居たのだから。

……でも、それだけならまだいい。もっと甘えれば済む事だから。不機嫌な理由は別にある。

実は、カイトが自分に服をくれた。……でも、何故か水兵服だった。今一(いまいち)センスが解らない。

どうやら、あのルイズの使い魔の少年が買って来た物を、貰って来たらしい。

……でも、それがどんな物であれ、くれるのなら嬉しい。……問題は、その後だった。

「……どうだ、水薙？　注文通り出来そうか？」

「モッチロンよ♪　私に任せて、マスター♪♪
　マスターの想像以上の素晴らしい出来に、仕立て上げちゃうんだから♪♪♪」

「そうか……うんうん。そうか、そうか。それは非常～～～に楽しみだ♪♪♪♪♪」

……そう。もう御判り頂けるであろう。何の事は無い。タバサは只、嫉妬しているだけである。

今、水薙と呼ばれたあのカイトの従者が、タバサに上げると言った服を繕(つくろ)い、

タバサの身の丈に合う様に、仕立て上げてくれているらしい。

それも、カイトが何やら、あれやこれやと注文を付けて、なんやかんやと協議し、

今、ようやっと最終決定し、その従者が作り始めている。

それを、タバサがカイトに抱き締められながら、眺めている。……

少し、眉を顰(ひそ)めながら。

その後、その服が完成し、実際にタバサに着て貰った。……そして、カイトは……。

……

ソレを見た瞬間、鼻血を大量に噴き出し、危うく気絶仕掛け、命を一つ失う所だったそうな。

side：教室

その日、教室はとても騒がしかった。いや、寧ろ静かだった……と言うべきだろうか……。

何故ならば、モンモンことモンモランシーが、あのセーラー服を着て来たのだから。

当然、野郎共はその魅力に釘付け。才人はガクブル。ルイズは訝しむ。才人更にガクブル。

しかし、然う斯うしていても、一向に先生は来ない。

又、キュルケだけは気付いていたが、タバサも未だ来ていない。

……どうせ、カイトとしっぽりして遅れているのだろうと、検討を付けていた。

……だが、その見込みは、脆くも崩れ去る事と、相成ったのだ。

あ、因みに。どうでも良い事だが、次の授業担当のギトーは、誰かに気絶させられていた。

ガララ……　誰か来た様だ。先生か？　……いや、違った。カイトであった。

何だ……と思ったみんなはその後、そう思った自分を挙って自ら叱責したのだった。

「……ほれ、さっさと入って来なって……シャル♪」

「……や、だ、だって……こ、この格好は……い、幾らなんでも……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

？？？　……どうやら、カイトは誰かと一緒に来たらしい。

と言っても、カイトが一緒に来る相手なんて、たった一人しか居ないのは学院でも有名だが。

だが、その相手が珍しく、中に入るのを渋っている。……本当に珍しい。

親友であるキュルケでさえ、そう思うその行動は、その教室に居た全ての人を注目させた。

……恐らくそれが、何よりいけなかった……いや、事件の発端と言うべきなのだろう。

何故ならば……その御姿（みすがた）を拝めば、例えどんな状況であろうとも、その騒動が起きるは、確実に必至であっただろうから。

「だ～い丈夫だって。……ほら、見てみ？　モンモンだって着て来てるんだしさ。……な？」

「……ほ、ホント？　本当に……こ、こんなので？　……だ、大丈夫……なの？」

「ああ、勿論さ。俺がシャルに嘘を付いた事が、一度でも有ったかい？」

「……ぅ……そ、それは……無い……けど……で、でも……／／／／／」

「だろ？　問題無いって。そんなもの有ろう筈も無いさ。こんなに可愛いんだからさ。」

「……ぅぅぅ……で、でも……わ、私は……貴方だけで良いのに……／／／／／／」

「まぁまぁまぁまぁ……♪　俺だけで味わうなんて勿体無いじゃ無いか…こんなに可愛いのに♪」

「……ぅぅぅぅ……わ、分かった。……が、我慢……する…／／／」

「うん、有難う、シャル。……さぁさぁ、皆さん……御注目！！！」

ようやっと、話が付いたのか、カイトが手を打って迄、みんなの注目を集めた。

……尤も、そんな事をする迄も無く、もんのすんごい程の全注目が集まっていたが。

「さあさ、皆さん、御立会(おたちあい)！！　今から御見せ致しますは、一目見たら忘れられない！！

正に可憐！！　正に神秘！！　正に是が……是(これ)こそが美！！　美なり！！！

その体現！！　この姿こそが真の妖精！！　さあ！　今こそ、その両目に焼き付けよ！！！」

そして……その紹介が終わると共に入って来た者……其処に、真の妖精が佇んでいた。

皆、思わず呆けて居た。入って来た少女には、男女共、可愛いの一言しか出て来なかったのだ。

それは何の変哲も無い水兵服。……そう。それは只の水兵服であった……筈だった。

しかし、その少女が着た瞬間、それは大変素晴らしき衣装に早変わりした。

先ず、パッと見は何も変わっていない。

精々が、胸元に小さな可愛らしいリボンをあしらっただけである。

しかし、それでも十二分に可愛らしさが溢れている。

だが、上半身で注目すべきは其処では無い。

注目すべきは……袖。そう。何を隠そう……いや、寧ろ隠れているのである。

少し、長めの袖に、本のちょこんとだけ出ている可愛らしい指。其処だけで、袖を掴んでいる。

何故かは判らない。何故かは判らないが、只それだけで破壊力は抜群であり、

既に、それだけで沈んでる可哀相な奴等が居た。

そして、次。注目するは、下……下半身。

……今、いやらしいとか思った奴、後で体育館裏。……それはさておき。

下半身は、何処から調達して来たのかは分からないが、スカートを履いていた。

しかも、膝上より少し上。所謂、黄金比率。

例えスカートがフワリと翻っても、下着が見えない位置。

水薙は本当に良い仕事をしてくれた。しかも、足も素足では無い。
……白ニーソである。

もう、その筋の人達には堪(たま)らん事になっている。又、此処で何人かが沈んだ。

……愚かな。此の後の真の天国も知らずに墜ちるとは……。

そして、何より注目すべきは……その格好である。頬を微妙に赤らめ、少し俯(うつむ)き加減。

その赤い色合いが又、タバサの肌の白さと相俟(あいま)って、益々引き立ち、尚良い！！！

そして、手には不格好な大きな杖。それを、時々両手共々、後ろ手にやって、モジモジ。

又、それを前に持って来ては、杖を抱き締めながら、未だかな～…
とカイトに上目遣い。

……くっはぁぁぁ～～～……！！！！！　良い！　もう、物凄く良い！！！

にしても、幾らカイトに或る程度自身の氷を溶かされたとは言え、そんな劇的に変わる物か？

……そう思った貴方。そんな野暮な事は考えちゃぁいけやせんぜ？

此処はそういう空間なんでさぁ……！！！　さて、野暮天への注意はさておき。

「しかも……しかもだ！！　見よ！　この少し赤らめた頬を！！！

皆…思い出せ……。シャルはこんな娘だったか？

この程度で顔を赤らめてしまう様な……それ程に周りの目を気にする様な娘だったか…？

否！　断じて否！！　この娘は無口無表情の言うなれば、クール系だ。

……それがどうだ？　見ろ！　見てみろ！　この頬の赤らめ方を！！！

これが『デレ』だ！　そして、この娘の様なタイプをこう言うのだ…！　『クーデレ』と。

どうだ！　見よ！　見よ！　普段、全くの無表情の娘が頬を赤らめる様を！！

このギャップを！！　その威力を！！！　どうだ！　これが『ギャップ萌え』だ！！！」

御解り頂けるであろうか？　萌えは当然の事ながら、実は今迄の説明は、

カイトが一から十まで、全て事細(ことこま)かに解説していたのだ。

その解説が進む度に、自分が今、どんな格好をしているか、赤裸々に理解し、

益々顔を赤らめ、俯くタバサ。そして、更に涙目になり、早く終わってと懇願する様に、

カイトに何度も上目遣いで抗議するタバサ。

最早どうにもならない。もうどうにも出来ない。そりゃもう、色んな意味で。

「……まぁ、解説するとしたら、こんな所だ。……どうだ、野郎共。そして、女子よ。

改めて言おう。……これが…！　これこそが……！！　『萌え』D☆A！！！！！」

“……萌え……これが……これが……！！！　萌

え！！！！！
”

「そうだ！！！　これこそが、真の萌えだ！！！！！　さぁ、みんなも言おう！！！！！！

ジーク・モエ！！！！！！」

“ジーク・モエ！！！　ジーク・モエ！！！　ジーク・モエ！！！
ジーク・モエ！！！
”

「未だだ！！！　未だ！！　声が小さい！！　もっとだ！！　もっと、声を張り上げるんだ！！

震えるぞハート！！！！　燃え尽きるほどヒート！！！！　刻むぞ血液のビート！！！

さぁ、みんなも力の限り、心を……魂を込めて三唱するんだ！！！　さぁッッッ！！！」

“震えるぞハート！！！　燃え尽きるほどヒート！！！　刻むぞ血液のビート！！！

震えるぞハート！！！　燃え尽きるほどヒート！！！　刻むぞ血液のビート！！！

震えるぞハート！！！　燃え尽きるほどヒート！！！　刻むぞ血液のビート！！！”

「うむ！　素晴らしいな！　誠に以て素晴らしいなッ！　そう思わんか！　同志諸君！！！」

“イエス！！　ユア！！　ハイネス！！！！！”

最早、混沌（カオス）の坩堝（るつぼ）と化していた。しかし、その事に疑問を持つ者は……

極少数しか、いｎ……基（もとい）、誰も居なかった……と言う事にした。だってその方が面白いじゃん。

その勢いの儘、カイトが、皆に号令一下。とある命を下した。

「皆の者！！！！！　着たくは無いか！！　見たくは無いか！！　この可憐なる衣装！！！

女子よ！！！　己が身に付けたくは無いか！！！　更に可愛くなりたくは無いか！！！！！」

“なりたいですッッッッ！！！！！”

「男子よ！！！　己が恋人に！！

又、将来の居るかも知れない伴侶の為に欲しくは無いか！！」

“物凄く、欲しいですッッッッッ！！！！！！”

「そして、マリコルヌを始めとする極一部の男子！！！

自分で着て見たくは無いか！！！！！」

“物凄く着たいですぅぅぅッッッッッ！！！！！　……あ。”

その一部の男子は、自身の性癖を、思わず白日の下に曝（さら）し、ｏｒｚしていた。

……尤も、マリコルヌは一早く立ち直り、寧ろ開放し出した。……逞（たくま）しいな、アイツ。

「では、逝けぃッッッッッ！！！！！　目標はブルドンネ街！！！

直ちに逝って、輝かしいセーラー服を！！！　その栄光を己が手に掴んで来い！！！！！」

“おおおおおおおおおおーーーーーーーーーーッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！”

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！

そのカイトの激励により、極一部を除いたほぼ全生徒が、街に繰り出した。

後に残るは只、静寂のみ。そして、真っ赤になったタバサとカイトと、その友人達。

そして、その後、カイトがポツリとタバサに零した言葉が、この事件の真相を語っていた。

「よしよし。みんな上手く居なくなってくれたな。

これで、今日の授業は中止になって、シャルとゆっくりしっぽり出来るぞ♪」

「……アンタ……そんな事が目的で……？　こんな騒動を引き起こしたの？」

「無論の事。尤も、それは副産物に過ぎないけど。」

「……じゃぁ、どうして？」

「ん？そんなの決まってるじゃ無いか。セーラー服を着た、可愛い可愛い俺だけのシャルを、

みんなに見せびらかす為。そして、そんなシャルを俺だけがじっくり堪能する為だよ。」

「………………／／／／／／／／／／／／　……そ、そんなに……見たかった…の……？」

「勿論さ！　シャルｖｅｒ．セーラー服。言うならば、セーラーエレーヌを見たかった。

ああ、是非共見たかったのさ！！！！！　それも、心の奥底からなぁ！！！！！

そして……今、此処に……。我が積年の野望は成就した…………！！！！！！！！！！」

「…………そんなに泣く程、タバサのソレが見たかったの……？」

「……何故、そんな当たり前な事に疑問を持てるのか……その訳を寧ろ俺は知りたい。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

“はいはい、御馳走様。”

そう言って、もう本気で馬鹿馬鹿しくなった他の友人達もみんな、どっかへ行ってしまった。

そして、残された二人は……と言うと…………。

「……もう、しょうがないなぁ……。んじゃ、シャル。早速部屋に戻って、二人だけで、ゆっくりしっぽりしようか？♪♪」

「／／／／／／／／／／／／／／／……もう……バカ……／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

結局、翌日の帰省の用意を、寝る直前迄、すっかり忘れる程、バカップルしていたのだった。

萌えとタバサとセーラー服（後書き）

此処を読み始める前に言っておくッ！　俺は今、此の物語を、本のちょっぴりだが書いてみた。

い…いや…書いてみたというよりは、全く理解を超えていたのだが……。

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！

「俺は此の話で、タバサの実家迄行こうと思ってたら、何時の間にか、その前に終わっていた。」

な……何を言っているのか解らねーと思うが……。

俺も、どうしてこうなった♪　のか解らなかった……。頭がどうにかなりそうだった……。

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ、断じて無え。

もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ……。

如何でしたでしょうか？ｗ

言いたい事は、→に全て書いてありますw

あ、後。もし、どうしてもこんな服装の方が良い！　と仰る方。

書き直すつもりは、何時でも万々(まんまん)にありますので、詳細に教えて下さい。

私は、服への造詣(ぞうけい)は、完全皆無ですので。

……さて。次こそは、実家に御挨拶の回です。

執事「ロードローラー！！！」カイト「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！！！！」

的な展開は御座いませんので、悪しからず。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

救世主と虚無とカトレア（前書き）

現時刻（００：３０）
ＰＶ：１，４２４，５５８アクセス　ユニーク：１２２，２６３人
皆様、いつも有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

救世主と虚無とカトレア

ｓｉｄｅ：街道

只今、ガリアへの帰省中である。馬車に揺られるは、タバサとキュルケの二人のみ。

……そう。この帰省には、何故かカイトが付いて来てはいなかった。タバサが涙目＋上目遣いとかいう究極コンボを発動したのにも拘わらず、断ったのだ。

……まぁ尤も、途轍も無く困った顔をして、激しく葛藤していたが。でも結局、駄目だった。

断られると思っていなかったタバサは勿論の事、キュルケも珍しいと思った。

しかし、親友（タバサ）と二人きりになるのは、久し振りだ。何せ、何時もカイトと一緒に居るのだから。

有り難く、この機会を有意義に使うとしよう。そう……キュルケも始めは思っていた。

しかし、今はそんな燥（はしゃ）ぐ気は毛頭無く、静かに景色を眺めていた。

…タバサを抱き締めながら。

何故かと言われれば、そんな雰囲気では無い事に、即座に気が付いたからだ。

馬車に乗ってすぐ、何時も通りに本を読み出したタバサだったが、どう見ても、頁（ページ）が全く捲（めく）られる様子が無い。……どうやら、何か考え事をしている様だ。

若（も）しかして、カイトの事か？　と一瞬、正義感（しっと）に駆られたが……どうも違うらしい。

……確か、前にカイトがタバサはガリアのお姫様だと言っていた。

……なら、それかな？

……成る程。どうも、この帰省は余り嬉しいものでは無いらしい。

でも、そんな事は自分には関係ない。タバサが例え、本当にお姫様であろうとも、

何か、自分にすら話せない様な事を抱えていたとしても、自分達の友情は些細（ささい）かも揺るがない。

……そんな想いを込めて、タバサを軽く抱き締め、頭を撫でてあげてると、

始めは驚いていた様だが、その想いに気付いたのか、幾分か雰囲気が和(やわ)らいだ。

そんな儘(まま)で揺られる事、如何程(いかほど)か。目の前に、大きな御屋敷が現れた。

×印が刻まれた……ガリア王家の紋章を掲げた立派な……そして、閑散とした屋敷が。

ｓｉｄｅ：カイト

「……いやぁ～～～……しっかし、アレはやばかったなぁ～……。

危うく、その儘、押し倒しそうになっちまったぜ……。シャル……恐ろしい娘(こ)っ！」

……ふぅ～…。取り敢えず、何とかシャルの誘惑は、撥(は)ね除(の)けられ

たな。

さてさて、ではそろそろ俺も動くとするかな。先ずは……コレをアイツに渡しに行くか。

その後は……うん、そうだな。アイツラの所へ行って、少し揶揄うとするか♪

それから……ああ、アイツの様子見と、顔見せだな。

良し！　そうと決まれば、早速それに相応しいモノへと着替えるか。

『真の虚無』にして『ＺＥＲＯ』たる者として……な。

「ファースト・イグニッション　ランド　鎧化（アムド）」

さて。先ずは、ガリアに一っ飛びだ。……シャルは元気にしてるかなぁ…？

ｓｉｄｅ：ガリア

その日も、無能王と周りに蔑まれている、ガリア王ジョゼフ一世は物憂げな日々を過ごしていた。

レコン・キスタは自分の思惑通りに動いてはくれるが……矢張り、物足りない。

ウェールズも殺せず、オルゴールも未だに、自分の手元には来ない。

……一体どういう事か？

……考えていてもしょうがない。それに関しては、自身の使い魔に一任しておこう。

さて……。では、今日も煩わしい愛妾の相手と、チェスにでも興じて、暇を潰そうか。

……そう、思っていた矢先だった。……その部屋に、突如闖入者が現れたのは。

……そして……この日を限りに、物憂げな日々から開放されるとは、

このときのジョゼフは、未だ夢にも思っていなかった。

「……唐突の訪問、失礼する。」

「!?　何者だッ!!」

「……俺の名を明かす前に、人払いを頼む。俺は、ジョゼフ……お前以外に聞かせる気は無い。」

「なりませぬ、陛下!!　この様な得体の知れぬ者……危険です!!」

「何、構わぬよ。……無能王たる余が死ねば、其方達も余程安心するのでは無いか?」

「そ、その様な事は……!」

「……良い、構わぬと言った。疾く下がれ。余が部屋を出る迄、誰も近付けるな。……良いな?」

「……はっ。」

そして、全ての人……愛妾をも外に出すと、ジョゼフの方から話し掛けて来た。

……それも、まるで少年の様に、ウキウキワクワクといった雰囲気を隠しもせずに。

「……さて。それで？

貴様は一体誰だ？　何者なのだ？　一体、余に何の用だ？　何を話してくれる？

余は今、とても退屈している。それを紛らわしてくれるモノならば、何でも良いぞ。

さあ！　早く話してくれ！　余の退屈を、一体どの様に癒してくれるのかを！！」

「……まぁ、待て。先ずは落ち着け。それでは、話せるものも話せんでは無いか。」

「ここまで来て焦らすでない。余は今、とても退屈していると言っておろう？

さあ！　疾く話すと良い！」

落ち着けと言うナニモノカの言にも耳を貸さず、さあ！　早く！　もっと！

と、せがんで来るジョゼフに、溜息を付いてその要望に応じるナニモノカ。

「……全く、しょうのない奴だ。……っと、良し。これでいいだろう。」　パキンッ…！

「……？　今、何をしたのだ？」

「遮音結界。……音を一切外部に漏らさない様にする結界だ。

これで、何を話そうとも、誰にも何も聞かれる事は無い。」

「おお！　それは素晴らしい！　では早速、胸襟（きょうきん）を開いて話し合おうでは無いか！」

益々、興奮し出すジョゼフに、（あ、ダメだこりゃ。手付けられんわ。）と諦めるナニモノカ。

「……良かろう。では、先ずはコレを受け取れ。」　ポイッ…

「む？　……こ、これはっ！？」

何か四角い箱の様な物を、ジョゼフに投げ渡すナニモノカ。

それを受け取り、それが何かを認識した後、驚愕するジョゼフ。

「…ああ、お前が欲しがっていた『始祖のオルゴール』だ。くれてやる。……ガリアの虚無よ。」

「……成る程。何と無く読めて来たぞ。所で、そろそろ其方（そち）の名前を教えては貰えんかね？」

その言葉に、何となくそのナニモノカの正体が読めて来たジョゼフ。

問われたナニモノカは、素直に自分の正体を明かした。

「……俺の名は……ＺＥＲＯ。『真なる虚無』にして、救世主（メシア）なり。

……お前も王ならば、恐らく先王から聞いているだろう？」

「……ふむ。確か……こうだったかな？

『救世主（メシア）には決して逆らうな。破滅を望まぬのならば、決して逆らうな。』

……成る程、成る程……！　貴様がそのメシアと言う訳か！！

これは素晴らしい！」

その何処かで聞いた事のある名に、自身の記憶を探り、どうにか思い出したジョゼフは、

その僥倖に心から、今迄祈った事も無い神に感謝した。

「……其処迄歓喜するか。……余程退屈だったと見えるな。

……まぁ、いい。そろそろ本題に入るぞ？」

「うむ！　構わぬ、構わぬ！　何なりと疾く話すが良い！　余は今から興奮が抑え切れぬわ！」

何せ、御伽話や神話の類だと思われていた伝説の存在が、今自分の目の前に確かと居るのだ。

これで興奮するなと言う方が、余程無理な話だ。その興奮の儘、ＺＥＲＯに詰め寄った。

「……何、聞きたい事と報告したい事が有るだけだ。

先ず一つ。今、レコン・キスタはどうなっている？」

「ふむ。矢張り、余が裏に居る事を知っていたか。流石はメシアよ！

さて、今アレがどうなっているかだったが……。

確か、四万程いたアルビオンへ攻撃した軍は、一万程しか残っては居らなんだ。

しかし、その後更に軍備増強し、今は十万は優に超えていると聞いて居るよ。」

あっさり、軍内の極秘情報を教えるジョゼフ。

それを予想していたのか、その事には驚かなかったＺＥＲＯだが、ジョゼフの言葉には少々違和感を覚えたので、再度聞いてみた。

「……聞いている？　お前の指示では無いのか？」

「いや、違う。あれはクロムウェルが勝手にやっている事だ。

大方、アルビオン戦での大損害を怖れているのだろうよ。

その証拠に、雇った大半は人間では無く、異種族やら、エルフ以外の異人が殆どだそうだ。」

つまり、どうせ沢山死ぬならば、人間よりもそれ以外（バケモノ）の方が余程良い……と。

「……成る程。あの時、手加減したのが却（かえ）って拙（まず）かったと言う訳か。」

「ぬ？　では、報告にあった、２１体もの竜が忽然と現れたと言うのは……若しかして貴様の？」

「……ああ。俺の使い魔達……その一部だ。」

その事実を聞き、殊更（ことさら）歓喜の表情に満ちるジョゼフ。

「そうか、そうか！　その使い魔達、一度で良いから見てみたいものよ！」

「……何、慌てるな。何（いず）れ必ずお前は見る機会が来るさ。

……此の儘、レコン・キスタを操り戦争を拡大していけばな。」

その事は嬉しいと無邪気には喜んだが、少々気になる事があった。

「……ふむ。所で、此方からも一つ質問しても良いかね？」

「……構わんよ。何だ？」

「其方（そなた）、救世主（メシア）などと言われて居る癖に、余の戦を止めようとはせなんだな。何故だ？」

そう、そうなのだ。救世主と言いながらも、この者は決して戦争を止めようとはしていない。

いや、寧ろ奨励しているかの様な印象すら受ける。

この者は救世主では無かったのか？　好奇心を抑え切れず、それを聞いてみた。

「……俺は救世主足り得ぬ。宇宙（そら）しか救えぬ、鍍金（メッキ）の救世主（メシア）だ。故に戦争を止める気は無い。

俺は、万物・万人を救う存在では無い。救えるが救う気は毛頭無

い。

俺は、俺が救いたい奴等のみを救う。それも、無条件には決して救わん。

数多（あまた）の艱難辛苦（かんなんしんく）を味わい、努力を只管（ひたすら）積み重ね、それでも尚、絶望に抗う者。

そういう者のみに、俺の『救い』は与えられる。例え、本人が望んで居なくとも、与える。」

「……成る程。如何にも、上に立つ者の傲慢な目線と考えだな。

余程、多くの敵を今迄作って来たのでは無いのか？　救世主（メシア）よ。」

「……然り。故に俺は救世主足り得ぬ、鍍金の救世主（メシア）。だが、それが俺だ。

今更、この歳になってそれを変える気など、それこそ今更、毛頭無い。」

そのＺＥＲＯの言葉に、幾つか問いたい事はあったものの、

どうやら、もうそれ以上は教えては貰えない様だ。

それを雰囲気から悟ったジョゼフは、話を変えた。

「そうか。……所で、報告したい事とは一体何だ？」

「……お前の弟。オルレアン公シャルルの娘を覚えているか？」

「おお！　覚えているとも！　余の可愛い姪では無いか！　それがどうした？」

「……彼女の現状は把握しているか？」

何故、わざわざそんな事を聞いて来るのか、

今一つ意図は分からないが、知ってる事を素直に話した。

「無論だ。余のイザベラの指揮の下、北花壇騎士（シュバリエ・ドールパルテル）の七号として、

日々活躍していると聞いて居る。

そして、今はトリステインに在る魔法学院に在学中だ。それがどうした？」

「……うむ。其処迄判って居るのならば、話が早い。報告と言うのは他でも無い。

その娘。シャルロット・エレーヌ・オルレアンの事だ。」

「ふむ。我が姪が一体、どうしたと？」

そして、ジョゼフはその人生で1，2を争う程、驚愕した。

「……何、つい最近、俺が彼女と恋仲になったものでね。その報告に来たと言う訳だ。

何せ、報告すべき父はお前が殺してしまったし、

母はお前の雇っているビダーシャルによって、心を惑わされているしな。

他に報告すべき相手は、オルレアン家の執事と、お前の娘イザベラぐらいだからな。

……因みに、イザベラには既に報告してある。目を真ん丸に見開いて驚いて居たぞ？」

そう言い、クックック……と笑うＺＥＲＯ。ジョゼフも驚愕に眼を、目一杯に見開いている。

それを見、更に笑い出すＺＥＲＯ。思わずムッとなり、問い質すジョゼフ。

「……メシアよ。何がそんなに可笑しい？」

「クックックック……いや、何。矢張りお前達は親子だと思ってな。」

「何？　どういう事だ？」

「……いやいや、イザベラにも同様の事を話して、目の前でシャルロットと接吻をして見せたら、

今のお前と、全く同じ反応をしたのだよ。

その驚き方も、表情も、仕種も……殆ど同じだった。お前達も、親子なのだな。」

その予想だにしなかったＺＥＲＯの言葉に、何となく不機嫌になるジョゼフ。

お前には何も特別な所など無く、只の普通の人間だ。……そう言われた様な気がしたからだ。

「……フン。アレは余を父となど思ってはいまいよ。余とて同じよ。

アレは確かに余の血を継いではいるが、その力はシャルロットに遠く及ばぬ。

アレよりも、シャルロットの方が余程、女王に向いているのでは無いか？」

「……ジョゼフよ。お前は其処迄、特別に拘るか？

其処迄……シャルルに劣等感を抱いていたのか？」

自分の娘（イザベラ）をアレと呼ぶジョゼフ。其処迄して、家族との繋がりを持ちたくないのか。

それを、簡潔に……そして、その本質そのものを、ＺＥＲＯは明確に言った。

自身の本心をズバリと言い当てられ、ジョゼフは思わず感情の儘、激昂し赫怒（かくど）した。

「……貴様……！　今度は余を侮辱するかッッッ！！！」

「……否。……貴様達は悲しいな。」

「……今度は、余を憐（あわ）れむか……！　……待て。余達とはどういう事だ？」

そのＺＥＲＯの言葉に、思わず聞き返してしまったが、何となくジョゼフは感じていた。

これはいけない、これは聞いてはいけないと。自分が崩れる……自分が壊れると。

しかし、刻は既に遅かった。

「……そうだ。お前達兄弟の事だ。他の誰よりも、お前の事を理解し畏れていたシャルル。

弟故に、誰よりも兄を理解していたシャルル。故に、彼は知っていた。お前が王になる事を。

だから、誰にも見えない様、陰で文字通り必死の思いで努力し、実力を身に付け、

誰にも良い顔をし、その裏では金を回して皆の心を掴み、

自身が王になる為の画策に奔走した。

それも全てお前が王に、誰よりも、自身よりも相応しいと、

何よりシャルル自身が理解していたからだ。」

そのＺＥＲＯの口から語られた言葉は、到底ジョゼフには理解出来ない……

絶対に受け容れられない……受け容れてはならない事実であった。

「……お前達も、一度……。たったの一度でも良いから腹を割って話し合えば……。

ただそれだけで良かったのに。それで済んだのに。それだけであの悲劇は避けられたのに。

……お前は……自身のその手で、自らの最大の理解者を葬ってしまった。

お前達は……本当に悲しく……可哀相な兄弟だ。……最早、どうにもならないがな。」

「……。」

最早、何の言葉も出せず、何も言葉に成らず、只管沈黙するしかなかったジョゼフ。

しかし、そんなジョゼフにお構い無しに、ＺＥＲＯは話し続ける。

「……さて。俺の用は済んだ。ビダーシャルにも宜しく言っておいてくれ。

……ではな、ジョゼフ。又、戦場にて相見えようぞ。」

『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……否、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』からの伝言だとな。

そう一方的に言い、現れた時同様に、又、忽然と消えた。それと同時に遮音結界も消滅した。

後に残されたジョゼフが何を思ったかは、誰にも分からない。

……只、そのジョゼフの居城には、その日何時迄も高笑いが響いていた。

その声は……まるで泣いているかの様に……慟哭しているかの様に、何時迄も笑っていた。

side：宗教庁inロマリア連合皇国

今、此処はとても緊張していた。何せ真っ赤な鎧に身を包んだ、得体の知れない者が突然現れ、

行き成り、話があるからと言って、教皇に人払いを頼んだのだ。当然それを拒む皆。

しかし、何かを悟ったのか、教皇は皆に部屋を出、決して聞き耳など立てぬ様、厳命した。

その教皇の不用心な命令に、反対を唱える者多数。

しかし、再度の厳命により、皆、歯噛みし乍ら、ジュリオを残し退出した。

「……さて。御待たせ致しました。では、御話して頂けますか？『宇宙（そら）の救世主（メシア）』よ。」

「……ほう。流石は、その歳で教皇になっただけはある。

俺の事が直ぐに分かるとは……勤勉だな。先程会ったジョゼフは、一目では判らなかったぞ？」

救世主（メシア）からの誉言（よげん）に少し喜ぶも、聞き捨てならない言葉があった。

故に確かめる教皇。

「ジョゼフ？　あのガリアの無能王の事ですか？　彼が、今ロマリアに居るのですか？」

「いいや。奴はちゃんと、今もガリアでチェス遊びをしているよ。言わば、ガリアからロマリアに、瞬間移動して来ただけだ。」

しかし、自分達が思っていた事態とは違い、それ以上の驚きを迎えたのだった。

それに、思わずジュリオが救世主（メシア）に喰って掛かろうとする……が。

「……そんなばかな…。そんな事が出来る訳が……！」

「……いいえ、ジュリオ。彼の所行は、我々の想像の及ぶべく所には無いのでしょう。

我々の常識のみで彼を計るのはお止しなさい。

でなければ、その瞬間、骸（むくろ）となっているのは、間違い無く貴方ですよ？

私は貴方を失いたくはありません。此処は自重して下さい。」

「……はい、御主人様（マスター）。」

だが、自身の主であるヴィットーリオに窘(たしな)められ、渋々(しぶしぶ)乍らも、此処は引き下がる使い魔(ジュリオ)。

「……では、もういいか？」

「はい。此方は構いません。それで……一体、私達に何の御用でしょうか？」

「……何。幾つかとある事を教えてやろうと思ってな。それと一つ条件付きで協力してやろう。」

「……条件付き……ですか？　それもたった一つ？

それは果たして私達にも有益な事なのでしょうか？」

自身達に何の益も無ければ、例え救世主(メシア)と言えど、一切応じない。

そういう強固な意志が、瞳の奥に宿っていた。

だが、それはつまり、益さえ示せば話に乗ると言う事に他ならない。

少なくとも、ヴィットーリオはその腹積もりの様だ。

……その事に北叟笑(ほくそ)んだ救世主(メシア)に誰が気付いたろうか。

「……紛れも無く有益だ。……では、其方（そちら）から先に話そうか。
俺が協力する内容とは……ジョゼットのガリア女王即位だ。」

「「！？！？」」

「……何を驚いている？　あの陸の孤島……セント・マルガリタ修道院に居るのだろう？

『竜のお兄様』？」

何故、そんな事を知っているのか…？　二人は思わず狼狽えた。

……だが、その後に発せられた救世主（メシア）の挑発に、思わずカッとなるジュリオ。

「！！！　……キサマ……！！」

「落ち着きなさい、ジュリオ！　……『救世主（メシア）は全てを知る者にして、謀（はか）る事決してならぬ』

確か、その様な一文も在りました。……あれはこういう事だったのですね。

それでは、今の私達の思惑も全て御見通しなのですか？」

しかし、それもヴィットーリオの制止によって止められ、敢えて逆に質問をした。

……だが、それが尚、いけなかった。今迄で、一番の衝撃を受けたのだ。

「……無論だ。聖戦と言う名でエルフと戦をするのだろう？

地下の風石が飽和状態を超えて、ハルケギニア全体がアルビオンの様になりそうなのだろう？

その爲に、先ずはガリアと戦をし、ジョゼフ達を殺して、ジョゼットを虚無にし、

シャルロットを先んじて女王にし、ジョゼットと入れ替え、傀儡政権にする。

そして、その傀儡ガリアとロマリア、それにトリステイン等の他国家と手を組み、聖地奪還。

……それがお前等のシナリオだ。……違うか？」

「「……。」」

完璧に、全ての思惑・シナリオ・目論見（もくろみ）を言い当てられ、絶句する二人。

どうやら、此処迄（ここまで）完全に知られているとは思って居なかったらしい。

其処（そこ）に、救世主（メシア）より、更なる追撃が加えられた。

「……だが、残念ながら、その思惑は脆（もろ）くも崩れ去る事になる。」

「……どういう……意味でしょうか？」

その救世主（メシア）の言葉に、未だ何かあるのか……と、少し辿々（たどたど）しくなってしまった。

「……何、簡単な事だ。シャルロットは俺の恋人なのでな。

この俺が彼女をあらゆる全てから守っている。……それとなくな。

つまり、彼女への一切の謀略の類は無意味であり、貴様等の思惑は其処で終わりだ。

……故に、この俺がその即位に関して協力してやろうと言っている。」

「……それは一体、どの様にして？」

「……それはその時になってから話すとしよう。取らぬ獣の皮算用（かわざんよう）では、話になるまい？」

「……成る程。確かに、それはその通りですね。……それで、その条件と言うのは？」

圧倒的に、此方が不利な条件下での、願っても無い協力の申し出。

なればこそ、どんな飛んでもない条件か……と、少々戦々恐々とした。

……所が、その条件と言うのは、自分達の予想の範疇を超えていた。

「……何、それこそ最も簡単な事だ。ジュリオ……お前次第なのだからな。」

「……僕が？　……一体、僕に何をしろと？」

その向けられた矛先は、何とジュリオ。一体何事を言うのか？

「……条件は只一つ。ジョゼットを確かと女性として見、若しもその気があるのならば、愛せ。

……なぁ、簡単だろう？　彼女を只の道具として見るのでは無く、女性として見るだけだ。」

「……そんなに簡単に言わないでくれ。それが出来るのならば、とっくにしている…！」

「……いいや、お前は只、逃げているだけだ。自身の使命とやらに託けて。失うのが怖いから。

別に良いでは無いか。元の生まれの差は有れど、共に孤児院育ち。後には、片や教皇の側近にして伝説の使い魔。方や、ガリアの元王女にして女王様。

十分、それなりに釣り合いはすると思うが？　どう思う？　ヴィットーリオ。」

その突き付けられた条件に驚く二人。しかし、どうやら、ジュリオにも葛藤がある様だ。

だが、それも救世主（メシア）にその心根を見破られ、思わず言葉に詰まっていると、

今度はヴィットーリオに、話を振った救世主（メシア）。

「……そうですねぇ。私は、ジュリオには何時でも好きな様にして良いとは言っているのですが。

……如何せん、ジュリオは私の命を忠実に熟（こな）す事にのみ感（かま）けているのですよ。

私としては、ジュリオに愛しい人が出来るのは、とても喜ばしい事なのですけどねぇ……。」

「なっ!?　せ、聖下?!　何を仰ってるのですかっ!!」

「何って……前から言ってるじゃ無いですか、ジュリオ。

貴方にも好い人は居ないのですか？　……と。これは、寧ろ此方から御願い致しましょうか？」

「せ、聖下ッッッ!!?」

どうやら、何時もの戯（じゃ）れ合いが始まったらしく、

救世主（メシア）がゴホンッ…と一つ咳をする迄、続けていた。

「「……あ。…す、済みません…／／／」」

「……いや、何。仲が良いに越した事は無い。取り敢えず、俺の条件はそれだ。

受けるか否か……答えよジュリオ。」

「……聖下…。」

思わず答えに窮し、ヴィットーリオに声を掛けるジュリオ。その想いに答えるヴィットーリオ。

「……貴方の好きになさい。私は貴方のその想いまで縛る気は、毛頭有りませんよ？」

「……はい。……その条件、有り難く承ります。」

「……そうか。それは良かった。では、次……報告と言うより、情報提示だな。」

その条件が呑まれると、次の話……いや、情報を開示し出した。……一方的に。

「……先ず一つ。お探しの炎のルビーだが、アレは探す必要は無い。お前が求めずとも、何れ向こうからやって来る。

……次。その炎のルビーだが……ヴィットーリオ。お前の母を焼いた者がそれを持っている。」

「……そうですか。……それは確かに、大変有り難い情報ですね。感謝致します。」

「……ああ。…後は……そうだな。ジュリオ。

今度のガンダールヴ……サイト・ヒラガは、お前の最も良い友になってくれると思うぞ。

少なくとも、ライバルには充分だ。……奴の成長……楽しみにしていると良い。

何れ、お前とも腹を割って話し合ってくれるだろうさ。」

「……そうかい。まぁ、余り期待せずに待ってるよ。」

「……さて。一通り、言いたい事は言ったな。もうこれで、暫く此処には用は無い。

……ではな、ロマリアの虚無とその使い魔よ。又、聖戦にて相見えようぞ。」

そう言い、又、現れた時同様に、唐突に目の前から消え去った。

後に残された二人は、自分達の計画に大いに狂いが生じたが、

その分は、救世主（メシア）にカバーして貰う事で、何とかなりそうだ。

もう少し、肝心な所を基本から修正し直そうと、改めて二人で協議し直すのだった。

……その後、今迄以上に頻繁に某孤児院へ顔を出す、

竜に乗った月目の美少年の姿が、良く目撃されたそうな。

ｓｉｄｅ：ラ・ヴァリエール領

その部屋では、動物達が犇(ひし)めき合っていた。しかし、誰一人として騒ぎ立てるものはいなかった。

まぁ、少しはゴロゴロ転がったり、戯(たわむ)れたり、にゃんにゃんしてたが。

だが、そんな癒しを体現したかの様な空間が、途端に騒がしくなった。

……何処からとも無く、唐突に何者かが現れたのだ。

臆病な動物達は、泣き喚(わめ)いて隅っこに逃げ出し、勇敢な動物達は、その場にて威嚇した。

だが、その現れた何者かが、自分達の知る者だと判ると、途端にその何者かに擦(す)り寄って来た。

すると、今迄その様子を見守っていたその部屋の主と、その主に甘えていた子供も、他の動物達と共に、その何者かに寄って来た。

「……あらあら…♪　誰かと思ったら……。いらっしゃい、ＺＥＲＯさん。」

「……ああ、久しいな、カトレア。１～２ヶ月振りか？」

「ええ。もう、それくらいになっちゃうかしらね？」

ルイズの姉。カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌ。

ラ・フォンティーヌの当主にして、ヴァリエール家の次女。……何やらＺＥＲＯと面識が有る様だ。

しかも、本人の雰囲気故か、将又（はたまた）、他の所以か、とても親しい様子だ。

すると、カトレアの横から勢い良くＺＥＲＯに抱き付いて来た者がいた。

「ＺＥＲＯ兄ちゃ～～～ん♪♪♪♪♪♪」　ダッ！　ピョンッ！　抱きッ！！　ガシッ！！！

「……よしよし。元気にしてたか？　鋼牙。」

「うん♪♪♪！！　僕、とっても元気だよ♪♪♪♪♪！！！

公爵のおじちゃんも、カリーヌお母さんも、エレオノールお姉ちゃんも、すっごく優しいよ♪

でも、カトレアお姉ちゃんが一番優しくて、温かくて、気持ち良くて、僕一番好き♪♪♪

……だけど……やっぱり、ＺＥＲＯ兄ちゃんに会えないのは寂しいよぅ……グスン…。」

そう。何を隠そう、鋼牙である。

「……そうか。ゴメンな……鋼牙。もう暫くの辛抱だ。

そうすれば、又、みんなと何時もみたいに遊べるからな。

それまでは、カトレアの側に居てやってくれ。……カトレアもその方が良いだろう？」

「ええ、確かに、鋼牙ちゃんが一緒に居てくれると、とても嬉しいのだけれど……。

本当に良いのかしら？　鋼牙ちゃん、とっても貴方に会いたがってたのよ？」

……所で、此の世界に来てから、只の一度も鋼牙が出ていない事に、気が付いた方は、何人いらっしゃるだろうか？

……そう、そうなのだ。何故ならば、実は今の今迄、鋼牙はカトレアと共に居たのである。

その間に実は何気に、ヴァリエール家にお邪魔して、カトレアの病を治していたのである。

その時に、偶々（たまたま）運の悪い事に居合わせたルイズ以外の家族にバレ、

皆しての滂沱（ぼうだ）の涙と共に感謝され、

更に、その場にて鋼牙と面通しをさせ、大層気に入られ、今も可愛がられている。

で、その時にＺＥＲＯは鋼牙をカトレアの話し相手として、ヴァリエール家に置いて来たのだ。

そして、今日に至る迄の間、一度もヴァリエール家には寄って居らず、

1～2ヶ月振りの、鋼牙との再会と言う訳である。

そりゃもう、鋼牙はＺＥＲＯが恋しくてしょうがない。

そんな訳で、只今、鋼牙は絶賛甘え中なのである。

当然、その間、どれ程自分がＺＥＲＯを好きなのか沢山聞かされていたカトレアは、

そんな二人を又、自分の所為で引き離すのは忍びないと思い、改めてＺＥＲＯに確認したが……。

「解ってる。俺とて、何時でも共に居たいのは変わらんさ。何せ、掛け替えの無い家族だからな。

……だが、今は未だダメだ。時期尚早なんだ。……済まないな、鋼牙。」

「……ううん。ＺＥＲＯ兄ちゃんが頑張ってるのは知ってるモン。だから、僕は大丈夫だよ？　こうして偶にでも、会いに来てくれるから。

それに、カトレアお姉ちゃん達も、とっても優しくしてくれるし、此処には、沢山の動物達も居るしね♪　……うん。だから、大丈夫だよ？」

その鋼牙の健気なセリフにキュンと来た二人（＋作者＋読者？）は、胸が痛みながらも、思わず微笑んだ。

そんな微笑ましい雰囲気の儘、ＺＥＲＯはカトレアに肝心な事を聞いた。

「……そうか。……所で、カトレア。聞くのが遅れたが、身体の方はどうだ？

特に異常は無いか？」

「ええ。もう、すっかり♪　御陰様でね。……本当に有難う。

貴方の御陰で、私も……私達、家族もどれ程感謝したか……。」

「……何、気にするな。物の序でという奴だ。」

「……フフッ……。本当に素直じゃ無いのね？　貴方って。」

何の問題も無いと、ＺＥＲＯに改めて感謝の言葉を述べるカトレアに、

その感謝を素直には受け取らないＺＥＲＯ。

思わず笑ってしまったカトレアに、少々不機嫌な雰囲気を見せる我等がツンデレＺＥＲＯであった。

「……フンッ…言っていろ。……それよりも……今日は家族は居ないのか？」

「ええ。父様は、宮殿に何か御用がお有りの様だし、母様は私の土地の領地問題でお泊まり。

エレオノール姉様は、アカデミーで研究に掛かりっ切り。ルイズは学園だし。

今日は又、鋼牙ちゃんと、この子達と……って何時も通りの人達よ？」

今日は、誰も他に家族が居ない。そう聞いたＺＥＲＯは、少し考える仕種を見せると、

二人が驚き、又喜ぶであろう事を提案した。

「……そうか。ならば、丁度都合が良い。俺も泊めて貰えるかな？」

「「え♪♪♪！？」……私は構わないけど……お部屋はどうするの？」

「何、この部屋の隅っこでも貸して貰えれば、それでいいさ。

流石に、女性の部屋に男が寝泊まりしているのがばれるのは不味いだろう？

……しかし、それでも尚、鋼牙とも久し振りにゆっくりとしたいからな。」

思わず一瞬警戒してしまったカトレアだったが、どうやらそういうつもりの雰囲気は見えない。

それならば……鋼牙ちゃんの為にも……と思い、それを承諾した。

「……そう、解ったわ。貴方なら、私の身の心配はしなくて済みそうだものね。」

「……まぁな。俺にも愛している女性(ひと)達が居るのでな。

そうホイホイと誰彼(だれかれ)引っ掛ける訳にはいかんさ。」

「あら。複数なのね？　いけない人。」

「……何、問題は人数では無い。どれだけ深く愛せるか……さ。」

「あらあら。行き成り惚気(のろけ)られちゃった♪　……所で、一つ聞いて良い？」

「……何だ？」

自分(カトレア)の無意識の警戒に苦笑している、ＺＥＲＯとの軽口を少し楽しむも、

一つだけ……そう、たった一つだけ、どうしても気になった事があり、聞いてみた。

「……その鎧。今日、寝る時もずっと着けてるつもりなの？」

「……しまった。」

「あらあら……クスクス……。意外とうっかりさんなのね？　……それで、どうするの？」

「……仕方ない。但し、これは秘密だぞ？

もし何かの際に、素顔の俺に会ったとしても、知らんぷりして貰う。……出来るか？」

「ええ、勿論♪　私も伊達に公爵家の娘じゃ無いのよ？　そのぐらいは容易（たやす）いわ。」

「……そうか。ならば、それを信じるとしよう。　解放（パージ）」

実は、何気にドジっこ属性も兼ね備えているＺＥＲＯに、思わず笑みが溢れるカトレア。

そのカトレアを少々睨む様な雰囲気を醸し出しながらも、仕方ないと鎧を脱ぐＺＥＲＯ。

……勿論、自分の素顔を見た際の手も打った上で。

そして、ＺＥＲＯの素顔を見た彼女の感想が←（これ）だ。

「……あら。あらあらまあまあ♪」

「……その表現は、俺は喜んで良いのか？　まぁ、いいや。ほら、鋼牙お出で？」

「うん♪♪♪　え～と……ＺＥＲＯ兄ちゃん？」

「いや、もう構わないよ。鎧も脱いでるしな。」

「うん♪♪♪！！　カイト兄ちゃん♪♪♪♪♪♪！！！」

……まぁ、笑顔なのだから良い反応なのだろうと、自分を納得させるカイト。

そして、早速カイトに甘え捲る鋼牙。

ハートマークやら♪が飛び交っているのが、何故か視覚的に見える……気がする。

それに嫉妬なんかよりも、微笑ましさを覚えたカトレアはコロコロと笑い、鋼牙に話し掛けた。

「あらあら。早速べったりしちゃって……。本当に、鋼牙ちゃんって貴方の事が好きなのね。」

「うんっ♪♪♪！！　カトレアお姉ちゃんも大大大好き♪♪♪♪♪！！！！」

「あら♪　有難う、鋼牙ちゃん。私も鋼牙ちゃんの事、大好きよ？」

「……えへへへ～～～♪♪♪」

結局、此の晩、ＺＥＲＯ（カイト）は、カトレアの部屋に誰にも気付かせずに泊まり込み、

翌朝、オルレアン家に向かい、其処で鉢合わせたタバサに、女の勘で問い詰められ、

少々、タジタジになりながらも、何とかその矛先をキスで躱（かわ）す事に成功し、事無きを得た。

そして、その儘、執事のペルスランと火花を散らせながら、オルレ

アン家に滞在する事になった。

救世主と虚無とカトレア（後書き）

如何でしたでしょうか？

さて……此の度は、投稿が大変遅れまして、誠に申し訳有りませんでした。

詳細については、活動報告に書いてありますので、其方を御覧下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

救世主の事情と水の精霊（前書き）

現時刻（０１：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，４４５，０２４アクセス　ユニーク：１２３，８４７人
皆様、いつも有難う御座います。

何と、お気に入り登録の件数が５００件を突破致しました！！！！！

皆様、この様な拙作を気に入って下さり、誠に感謝致して居ります！！！

では、今話も拙筆を御覧下さい。

救世主の事情と水の精霊

ｓｉｄｅ：ラグドリアン湖

あの後、執事のペルスランに正式に、タバサの恋人として紹介され、火花を散らし。

トーマスの存命と、所在を伝え。カイトは居候し、タバサとキュルケは任務に赴いた。

……そして、その翌晩。

惚れ薬を飲んだルイズ一行とタバサ達が闘い、合流した事を知らせに来たシルフィードと共に、

皆の許へ向かい、皆の前で嫌と言う程、バカップルを更に又、見せ付けた翌朝の事である。

「……それじゃ、もう一度ロビンに水の精霊を呼んで来て貰うわ。」

「いや、その必要は無いよ。俺が呼び出すから。」

水の精霊を、自分の使い魔に呼んで来て貰おうとしたモンモンを、カイトが遮った。

「え？　貴方も、水の精霊と契約していたの？」

「いいや？」

「……は？　あのねぇ……契約もしていないのに、精霊を呼び出せる訳ないでしょ？

……全くもう……無駄な時間取らせないでよ……。

只でさえ、こっちは早く帰りたいって言うのに……。」

しかし、カイトの事を良く知らないモンモンは、突然しゃしゃり出て来た良く分からない奴に、

自分のお株を奪われた様で面白くない。だが、話を聞くに、別に契約してる訳でも無く、

只、自分が呼び出したいと言ってるだけの様に聞こえた。

そんな無意味な我が儘に付き合う気は無いと、ばっさり切り捨てたのだが……。

其処で、思わぬ援護射撃に見舞われた。

「い、いや、モンモランシー。此処は彼に任せた方が良いと僕は思うよ、うん。」

「はぁ？　アンタまで一体、何を言ってるのよ、ギーシュ。」

「モンモン。いいから、此処はカイトに任せてみようぜ？」

「モンモンって言うな！　何よ……あんたまで……え？　何？　みんなそうなの？」

“うん（ええ）。”

「……分かったわよ。出来るもんならやってみなさいよ。」

ギーシュを筆頭に、才人達がモンモンを説得しに掛かったのだ。

皆のその微妙な必死振りに、少し不気味さと、興味を惹かれたモンモンは、その説得に折れた。

そして……この後の出来事は、恐らく誰一人忘れる事は出来ないだろう。

「はいよ。んじゃ、いっちょやるか。……聞こえるか？　水の精霊よ。

この俺の声が聞こえるのなら、さっさと出て来い。余り手間を掛けさせるな。蒸発させるぞ？」

そのカイトの、余りに不敬な呼び出し方に、水の精霊を怒らせた実績のある家の娘モンモンは、

驚愕と恐怖に震え、カイトを大声で叱責し、

流石にその物言いは不味いと思ったギーシュと才人も、カイトを咎めた。

「ちょ、ちょっとぉっっっ！！！　あ、あ、アンタッッ！！

せ、精霊に何て口利いてんのよォォォッッッッ！！！！！」

「そ、そうだぞ、カイト！　幾ら君でも、それはあんまりだ！」

「そ、そうだよ！　もし、それで水の精霊が臍を曲げたらどうすんだよ！？」

「だ～い丈夫だってばさ。……ほれ、見てみ？」

しかし、そんな皆の恐怖も何の其の。

そのカイトの言葉に釣られ、湖を見てみると、水面が波打ち、精霊が現れた。

「我を呼び出すは何者か？」

「俺だよ、精霊。……よもや此の俺を忘れたとは言わせんぞ？　水の。」

「……其方（そなた）……もしや、救世主（メシア）か？」

「然り。久しいな、水の。」

「うむ……其方（そなた）と前に会ったは、果たして幾つ月が交差した頃だろうか。

其方（そなた）も息災の様で何よりだ。」

「まぁな。お前は……まぁ、災難だったな。」

「……矢張り、存じていたか救世主（メシア）よ。」

「無論だ。それに関しては心配するな。俺がどうにかしてやる。」

「それは有り難い。では、我は引くとしよう。」

「ああ、そうしてくれ。」

その二人（？）の周りを置いてけ堀にして、ポンポンと弾み、終わり掛けた会話に

思わず、待ったの声を掛けるモンモン。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

「んあ？　どした、モンモン？」「何だ？　単なる者よ。」

その少々脳天気な返答に、思わず相手が誰かも忘れ、怒鳴ってしまったモンモン。

「ど、どうしたじゃ無いわよっ！　な、何でアンタ、そんな親し気に精霊と話せるのよ?!

精霊よ、精霊！　アンタ、誰と話してるのか分かってんの?!」

「勿論だ。水の精霊だろ？　お前等にとっちゃ、精霊様でも、俺にとっちゃ高が精霊だ。」

「うむ、そうだ、単なる者よ。彼の救世主（メシア）はお前達、単なる者は勿論、我々精霊とも位が違う。

この大地も、空も、海も、この世界そのものですら、決して逆らえぬ……否。

逆らってはいけない……高次などと言う次元を、遙かに超越した存在なのだ。

お前達が彼の者と対等に話せるは、救世主（メシア）の温情によるものぞ？」

“……。”

その水の精霊の余りの物言いに、思わず絶句する皆。だが、それを当の本人（カイト）が窘（たしな）めた。

「……オイコラ。誰が何時そんな阿呆な事を言ったんだよ、ドアホウ精霊が。

キサマ風情の下らん一方的な考えで、俺を語るな。

ぞ

？

消

す

」

「…！！！　む……ぬ……あ、相済まぬ。確かに、我の身勝手な考えであった……。」

「……フン。まぁ、いい。次、下らねぇ事言ったら、問答無用で消し飛ばすからな？」

「……う、うむ。承知した。」

“……。”

水の精霊を脅し、命令して、水の精霊が自ら謝った。

……その有り得ない現象に、顎を外す以外の表現方法を知らなかった。

そして又、皆を置いてけ堀にして、どこか人間らしい水の精霊とカイトが話し始めた。

「……取り敢えず、精霊の涙だっけか？　ソイツをくれてやれ。後、湖もな。」

「う、うむ。相分かった。……では、受け取れ、単なる者よ。」

「……へ？　あ、は、はいッ！　……ど、どうも……。」

「それと、湖の水も引いてやろう。我の望みも、救世主（メシア）が叶えて呉（く）れる様なのでな。」

「……有難う。」

何だか良く分からない内に、色々解決してしまったみたいだ。

それじゃ、さっさと帰ろうか……と思ってた皆は、思わず足を止めた。

……何故なら、水の精霊が発した言葉に、物凄く興味を惹かれてしまったからだ。

「……所で、失礼を承知で聞くが……救世主(メシア)よ。其方(そなた)、供の者はどうした？」

「……供？　若(も)しかして、ブリミルに会わせる前にも、お前達に会ってたっけ？」

「然り。……確か、其方(そなた)の側に単なる者が、後二人居た筈だが……どうしたのだ？」

「……あ～～……それ、前に説明しなかったっけ？」

「否。そのブリミルと言う単なる者と共に来た際には、其方(そなた)ははぐらかしていたのでな。」

「あ～～～……そうだったっけ？　と言うか、良く覚えてるな？」

「当然だ。幾つ月が交差したかは忘れてしまったが、記憶はしてい

る。」

「……あ～、そう言えばそうか。モンモンの事も、お前覚えていたしな。」

「然り。故に、再度聞きたい。……其方の供……確か……妻と娘と言っていたか？

一体、どうしたのだ？」

“……えええええええええええーーーーッッッッッッッッッッ！？！？！？”

その水の精霊が発した驚愕の事実に、

思わず全員（ルイズ除く）大声を上げ、カイトは頭を抱えた。

「……ハァ、又、何と言うタイミングで聞いて来るかなぁ……。」

「む。……又、何か障る事でも言ってしまったのだろうか？　なれば、再度陳謝しよう。」

「いや、別に気に障った訳じゃ無い。……只、ちょっと時期尚早だっただけさ。」

「ふむ？」

困った顔のカイトに、不思議そうな雰囲気を見せた水の精霊にも構わず、

全員で、カイトに事の真相を確かめようと詰め寄った。……タバサを中心にして。

「ちょっとッッッ！！　アンタ、一体どういう事よッ！　アンタもギーシュと同類？！」

「き、君は妻子持ちだったのかね？！　と言うか、モンモランシー？

僕と同類って、一体どういう意味かな？」

「言葉通りの意味よ。この浮気者。」

「い、いや、僕は別に……！」

「お前等の痴話喧嘩なんか、今はどうでもいい！　そんな事より説明してくれ、カイト！」

「そうよ！　あなた、タバサとの事は遊びだったって言うの！？」

「……御願い……教えて……！」

「あ～～～……取り敢えず、落ち着けお前等。そんなんじゃ、話すに話せないだろうが。」

“良いから早くッ！！！”

「……ハァ……はいはい。先ず、その妻子の事だがな？」

“……（コクッ）。”

「……当の昔に死んだよ。……と言うか、殺された。」

“……え？”

「……まぁ、そういう訳だ。仇も既に討ったしな。……もういいか？」

だが、絶句してる皆には、何か言える訳も無い……所に、思わぬ所から言葉が掛けられ……それが又、更なる混乱を引き起こす事となった。

「……殺された？　救世主（メシア）よ。其方（そなた）、確か魂を現世（げんせい）に呼び戻せる筈では無かったか？」

「……いや、あの頃の俺は未だ、死者蘇生は使えないのでな。何より、二人共、魂ごと消滅している。最早、蘇らせるのは不可能だ。」

「……其方程の力が有りながら、見す見す殺されるのを黙って見ていたと言うのか？」

「……ああ、まぁな。本の一瞬……気を抜いた隙を突かれて、二人共攫われてな。

その後、俺が見付けた場所で、殺された。」

「……そうか。」

その二人（？）の会話に、思わず皆、押し黙った。……が、しかし、一人だけ。

一人だけ、とある小さな事が気になった者が居た。

「……待って。一つ聞きたい事が有る。」

「ん？　……どうした、シャル。」

……そう。タバサである。今のカイトの台詞の中に、一つどうしても気になった事があったのだ。

「……貴方は今、『見付けた場所で殺された。』……と、そう言った。」

「ああ。確かにそう言った。……それがどうかしたか？　何か、矛盾点でも見付けたか？」

「普通、そういう場合、『殺されていた』と言うと思う。でも、貴方は『殺された』と言った。

つまり、貴方が其処に駆け付けた時には……未だ二人は生きていた……？」

“……あ。”

その小さな……どうでも良いような、誰も気付かないであろう、小さな違和感。

……そう。カイトでさえも、言われて初めて気が付いた程の、小さな矛盾点。

「……ああ、成る程。確かにそうだな。そいつは気付かなかった。ならば、次からは気を付けるとしよう。」

「……じゃぁ……？」

「ああ、そうだ。俺が二人を見付けた時には、未だ二人共、生きていたよ。

確かに、あの時の俺なら、その場に居た者全てを殺し尽くして、二人を生き存(なが)えさせるぐらいは出来ただろうな。」

「……でも、二人共、殺されてしまった。」

「ああ、そうだ。」

今度は、タバサとカイトが、皆を置いて二人で話している。それを皆が真剣な顔で聞いている。

一字一句逃すまいと……。そして、会話は更に続く。……核心に…

…確信に至る迄。

「……一体、誰に？」

「……さて、誰だと思う？　……シャルならば、恐らくもう見当は付いてるんじゃ無いか？」

「……え？　そ、そうなの？　タバサ！？　誰、それ？！　私達の知ってる人？！」

「……じゃ、じゃぁ……やっぱり……？」

「……ああ、そうだ。恐らく、お前の想像通りの奴が、俺の妻子を殺した犯人だよ。」

「……そ……そんな……。」

「……だ、誰？　誰なの、タバサ？　ねぇったらっ！　一体、誰なのよ？！」

その事実を受け容れたくない……認めたくないと言う様に、絶望に満ちた顔をし、

首を幾度も左右に振り、何度も……何度も、自分で否定するが、

カイトは決して否定の言葉を吐かない。……否定……してくれない。

そのタバサの何時にない、尋常では無い様子に、何か途轍も無く、嫌な予感しかしない皆は、

思わず、タバサに詰め寄り、事の真相を問い質した。

……この恐ろしい……おぞましい悪寒が間違いで……嘘であってくれと願いながら……。

……だが、その願いは、粉々に打ち砕かれた。

「……貴方の……カイトの……妻子を殺した……人は……自身。」

……

“……え？”

「……そうだ、その通り……大正解だよ、シャル。

俺の妻子を殺したのは……他ならぬ、この俺自身だ。

……俺が……妻、はやてと……娘、風音の心の臓を、この手で貫き、殺した。」

「……な、なぜ？」

「……聞きたいのか？　俺の触れられたくない傷を、自分の興味の為だけに、わざわざ抉り抜いて迄……聞きたいか？」

「……私は……聞きたい。

それでも……貴方の口から……貴方の言葉で……真実を聞き

たい。」

「……シャル。」

今迄、全員完全に絶句していたが、そのタバサの言葉・覚悟・決意を皮切りに、
次々に話し出した。

「……お、俺もだ。俺も聞きたい…！　こうなったら、毒を食らわば皿までだぜ！」

「う、うむ。そうだな。僕としても此処迄聞いたのだから、是非共最後まで聞いておきたい。」

「……私も当然聞くわよ。タバサが、決意してるのに、私が臆する訳にはいかないでしょ？」

「……何よ……みんなして……。私一人だけ仲間外れは狡いわよ？私も、ちゃんと聞かせて貰うからね！」

「……私も才人がそうするなら……。」

「……そうか。……分かった。…先ずは……精霊よ。もう戻って構わない。」

「……分かった。相済まぬな……救世主（メシア）よ。」

「何……気にするな。どうせ、何れ話さねばならぬ事。その機会が只、早まっただけの事よ。」

「……うむ。……ではな。」

その言葉を最後に、湖の底に戻る水の精霊。そして、皆に振り返るカイト。

「よし。では、先ずは落ち着ける所……そうだな……シャル。お前の実家に行っても良いか？」

「構わない。」

「ならば、其処でじっくりと話そう。恐らく、明日明後日は学院には帰れんだろう。

オスマン坊やには、俺から後で言っておいてやる。……行くぞ。」

そして、直接オルレアン家に転移し、モンモンの驚愕を余所に、中に入る皆。

その後、ペルスランに、タバサが改めて皆を紹介し、居間に通した。

タバサの正体に薄々気が付き、思わず押し黙るモンモンに、一応軽

く説明をし、

そして……一日掛けて、カイトの事情をほぼ説明し終えた。

誰もが……もし我が身に起こったら……と思い、身体を震わせながら、

その残酷な運命に……心から涙した。

その翌日。他言無用と釘を刺された皆々は、ルイズを元に戻す為に、先に学院に戻り、

カイトは、何事かペルスランと話し込み、更にその翌日になって、帰って来たのだった。

その後……戦が始まる迄の束の間。……そうとは知らず、皆、平和な日々を過ごして居た。

そうと知る者が……たった一人しかいない……この嵐の前の静けさの中で。

救世主の事情と水の精霊（後書き）

如何でしたでしょうか？

少々、駆け足でしたがこれで四巻、完結です。

これで、重要人物の約半分程が、カイトの事情をほぼ知る事となりました。

これが、後にとある人に、とある所で利いてくる……筈です。

果たして、カイトの事情を知った人達が、今後カイトに対してどの様な想いを抱くのか……。

上手く描ければ良いのですが……矢張り、文才って欲しいですよね……。

次話は、五巻のとある話と、六巻に少し入りたいと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

カイトと、微熱と雪風の友情（前書き）

現時刻（１７：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，４６７，７２３アクセス　ユニーク：１２５，４４３人
皆様、毎度有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

カイトと、微熱と雪風の友情

ｓｉｄｅ：トリステイン魔法学院

今は夏休み。ほぼ全ての生徒が帰省している為、魔法学院の寮塔は伽藍堂(がらんどう)だ。

そして、夏だけあって、只今、猛烈に暑い。兎に角熱い。只管(ひたすら)に熱い。……何故かと言えば。

「ん～～～♪　シャル～♪♪♪」

「ん……カイト……／／／」

「……貴方達……只でさえ暑いんだから、いちゃつくの止めてくれない？」

……と言う訳である。あのオルレアン家での話で、

モンモンは偉い事を知ってしまったと、何日か寝込んで、ギーシュに介抱して貰い。

タバサは、又一つ、カイトの事を知れたと、益々カイトにベッタリになった。

当然、それが面白くないキュルケは幾度と無く……と言うかほぼ毎日お邪魔しに来てるのだが、

一向に功を成さない。だが、それでもキュルケは諦めず、今日もお邪魔していた。

「ねぇ、タバサ。御願いよ。さっきみたいに風を吹かせて頂戴？冷たいのがいいわ。

キンキンに冷えたのが。貴女の渾名(あだな)みたいに。」

「……（コク）。」　フッ…

そんな状態でも、キュルケの話はちゃんと聞いてくれてるみたいで、キュルケの我が儘な要求にも、いちゃついていても、直ぐに応えてくれる。

親友からの、特別という想いに、少々……基、多々優越感を感じながら、

その想いの儘、カイトにフフン……という笑みを向けるが、

カイトは、寧ろそれに更に笑みを増して返し、タバサを更に猫っ可愛がりする始末。

又、そのカイトの笑みが悪意や悪戯心の全く無い、純粋な笑みだから困ったものだ。

そして可愛がられているタバサの蕩けそうな笑顔も、又、どうしようもない。

思わずキュルケが溜息を付いた直後であった。階下から悲鳴が聞こえて来たのは。

結局、あの悲鳴は、ギーシュとモンモンの、別のバカップルのいちゃつきの悲鳴だった。

馬鹿馬鹿しい小騒動に呆れた三人。そんな時、キュルケが提案した。街に繰り出そうと。

そんな勝手に決めて……後ろのバカップルはどうするのか？　とモンモンが聞けば、

チラッと、カイトといちゃついてるタバサを見て、二人共行くと判断したキュルケ。

そんなんで判るのか？　と聞き返すも、判るに決まってるでしょと、当然の口振り。

不思議に思いながらも、バカップルの片割れが呼んだ風竜に皆乗り、城下街に飛んでいった。

ｓｉｄｅ：『魅惑の妖精亭』

先ず、ブルドンネ街に着いた一行だったが、カイトがお薦めの店が在ると言って、皆を先導し、

着いた先が、此処。花の色町チクトンネ街でも有名な此の店。『魅惑の妖精亭』。

「お。在った、此処だ此処♪」

「……え～……本当にこんな所が有名処？　如何にも怪しさ全開じゃないのよ……。」

「まぁ、いいじゃない。入ってみましょ。どうせ暇なんだし。」

「あ、おい！　……全く……しょうがないなぁ…♪」

「そうよねぇ……って、こらギーシュ！　待ちなさい！　こんな所に置いてかないでよーっ！」

ズカズカと二人の意見も聞かず、我先にと入って行くキュルケと、その後を追う四人。

それを出迎えるは、がっしりとした体格に、如何にも男らしい髭面の……。

「はぁい♪　いらっしゃいませ～～～♪♪　あら、此方お初？　し・か・も貴族のお嬢さん！

まあ綺麗！　何てトレビア～ン！　ウチの店の女の子が霞んじゃうわ！

あ、私は店長のスカロンよ♪　今日は是非共楽しんで行って頂戴ね♪♪♪！！」

……オカマ言葉のテンチョーさんだった。

思わず回れ右したギーシュとモンモンを、カイトがガッシと掴まえ、案内された席に着いた。

そして給仕に来た、何処か見覚えの有る桃色髪の少女に鎌を掛け、キュルケとタバサの名コンビネーションで自白を迫るも、中々吐かず仕方なく諦める一行。

そして、ほっと一息付いたルイズを放っといて、カイトに事の真相を問う皆。

「だが断る。」

「……御願い、カイト。」

「よし、教えてあげよう。」

最早、パターン化している遣り取りであった。

「でも、その前に……。」

「そうよ、タバサ。」

「……？」

「「呪文を使うと、髪とマントが乱れる癖をどうにかしないとな（なさいな）。」」

「折角、可愛いんだからさ。……まぁ、俺だけが知ってれば良いんだけどな……グルルル…！」

「女は見栄え。頭の中身は二の次よ？　只でさえ、貴女可愛いんだから……ガルルル…！」

「……うん。でも、喧嘩はダメ。」

「しょうがないな。『俺の』シャルがそう言うのなら。」

「そうね。『私の』タバサがそう言うのならね。」

二人共、タバサに話しながらも、お互いに牙を剥いて威嚇する始末。

しかし、タバサの髪や服装を直し、撫で付けるその仕種は本当に優しく慈愛に満ちている。

どうやら、本気で啀み合ってる訳では無く、只の戯れ合いの様だ。

……その訳には、自棄に敵意が籠もっている様な気が……；；；；

そんな何時もの光景に見慣れてない面子がホッと一安堵し、

ギーシュが何か聞きたそうな顔をしていると、新たな客が来た。

どうやら、その王軍の士官らしい連中は、口々に店の女の子の品評会を始めた様だ。

その内、キュルケにも目敏く気付き、態と声を大きくし、此方に聞こえる様に話している。

その様子にオドオドし始めたギーシュに溜息を付くモンモンとカイト。

そんなギーシュに、カイトが思わず説教した。

「……ハァ。おい、ギーシュ。」

「ん？　な、何だね？」

「何だね？　じゃねーよ。お前がそんなにオドオドしてどうすんだよ。お前は男だろう？

しかも、お前の側に居る女の子は、お前の好きな娘なんだろう？」

「……う、うむ。確かにそうだが……。しかし、少し相手が悪過ぎるのでは……。」

「バカタレ。男なら、相手が誰であろうとも、惚れた女を守り抜け。それが男の役目だ。

……でなけりゃ……俺の様になるぞ？」

「……分かったよ。確かにそうだ。確かに、君の言う通りだよ、カイト。

僕は、此の命を懸けてモンモランシーを守ると、此の薔薇に誓おう。」

「……ギーシュ…／／／」

「いやいや……薔薇に誓ってどうすんだよ……。誓うなら、モンモンだろうに。

……まぁ、いいや。本人達が納得してるならそれで。…ん～……シャル～～♪♪♪」

ギーシュへの説教も終わり、又タバサと戯れ始めたカイト達の許へ歩み寄る者が一人。

先程の士官の一人だ。どうやら、何とかキュルケを口説きに来たら

しい。

……だが、当然の如くあっさりあしらわれ、侮辱の言葉を大声で言いながら席に戻る。

それに、あっさりプッツン来たキュルケは、早速杖で以て全員に侮辱仕返した。

人三倍プライドだけは高いトリステイン貴族は、挙って立ち上がり決闘を受け容れた。

その少し前。

「シャル。借りを返すか？」

「……（コク）。」

「そうか。……頑張って『親友』の借り。ちゃんと返してやれよ？」

「……うん。行って来る。」

「……タバサ？　貴女はいいのよ、座ってて？　直ぐ終わるから。」

「……（フリフリ）。」

只一人立ち上がったタバサに、座る様に促すが、首を横に振って断られた。

「む…。何？　私じゃ無理だって言うの？」

「違う。でも、私が行く。」

「貴女には関係ないじゃない。」

「一個借り。」

そのタバサの言葉に、一瞬驚き顔をした後、誰もが魅了される程、綺麗に微笑んだ。

「それはまた、随分と昔の話ね。」

その後、キュルケの代わりが小さい子供だと言われ、更に激昂した士官達だが、

タバサが騎士（シュヴァリエ）だと知ると、多少不承不承ながらも承諾し、外に出た。

そして、幾らも経たない内に外で歓声が上がり、タバサが戻って来た。

客の一人が外を確認すると、士官達が皆、這々（ほうほう）の体（てい）で逃げていく所だった。

その後、店内でも盛大に歓声が上がるも、それは一向に気にしないタバサ。

そんなタバサに、キュルケが杯にワインを注ぎ、カイトが頭と服を撫で付けて直している。

そして乾杯の音頭を合図に、カイトの口を塞ごうとするルイズを皆で抑え付けて、

カイトが、ルイズと才人の事情をあっさり喋った。

そして、打ち拉がれている二人に構わず、ギーシュは先程から抱えていた疑問を口にした。

「……なぁ、キュルケ？　どうして君達はそんなに仲が良いんだい？　いや……カイトは必死にミス・タバサを口説いていたので、誰もが周知しているが……。

少なくとも、君とミス・タバサでは丸で性格が違うじゃ無いか。」

「気が合うのよ…！」

未だ、カイトとタバサを取り合っている最中に話し掛けられたので、少し言葉に気合いが入っていた。

「君等ってそんなに仲良かったっけか？　確か入学当初は決闘騒ぎまで起こしたじゃないか。

一体、何があったんだい？　是非共、教えてくれよ。」

「そうよ、教えなさいよ。凄く気になるじゃない。ねぇ、一体何があったの？」

その二人の催促の言葉と、別の一組からの視線を受け、タバサを確認するキュルケ。

相変わらずカイトといちゃついているだけだったが、キュルケが一

つ頷いた。

「タバサが良いって言うから、教えてあげるわ。……大した話じゃ無いんだけどね。

まぁ、細かい補足とかは、どうせ貴方がしてくれるんでしょ？カイト。」

「ああ。幾らでもしてやれるぞ？

嫉妬少女……トネー・シャラント達やド・ロレーヌの心情付きでな。」

「そ。では、御話致しましょうか♪」

～おはなしちゅう～

「……と言う訳なの。」

「そうだったのね。彼女等が、髪と服を燃やされて、塔から逆さ吊

りになってたあの事件は、

アンタの所為だったの。」

「成る程なぁ。確かに可笑しいとは思ったんだよ。彼女等が助け出された後、

みんな挙って、自分達が勝手にぶら下がった、って震えながら言い張るもんだからさ。」

ようやっと、一年越しで疑問が解消し、良かった良かったと納得する生徒達であった。

「まぁ、そういう訳よ。でも……そんなちっぽけな下らないプライドで、

アタシ達に喧嘩を売るなんて、命知らずも良い所ね。そう思わない？　タバサ。」

「……。」

カイトから、犠牲者達の心情を聞き、鼻で笑い、タバサに同意を求めるキュルケ。

「クスクス……そうよね。やっぱり貴女もそう思う？

……にしても、貴方も良くそんな事迄知ってたわね？

未だあの頃、貴方学院に来ていないでしょ？」

「ああ、勿論だ。もし来ていたら、確実に真っ先にシャルを口説きに行ってるからな。」

しかし、矢張り何も言わずカイトといちゃつくタバサ。

それでも、キュルケは謎の電波でも受信してるのか……と思えるかの様に、

タバサを理解しているみたいだ。……相変わらず、カイトに威嚇しつつ。

「別にそんな事は聞いて無いわよ。……でも本当にどんな事でも知ってるわよね、貴方って。」

「まぁな。特にシャルの事ならばどんな事でも知ってるぞ？

最近、少し身長が伸びた事とか、少し眼鏡の度が悪くなって来た事とか、

少し胸が大きくなった事とかとか。」

そう言うカイトの言葉に釣られて、本人諸共にとある一点を注視するが、相変わらずであった。

そして、思わず発した言葉が…………。

“…………え？　それで？”

「それで言うな。お前達じゃ気付かんかも知れんが、毎日一緒に居る俺には判るのさ。

少し膨らみを帯びて来てる。……俺、未だシャルとはそういう事はしてないからなぁ……。

恐らく純粋に成長期なんだろう。……ルイズを抜くのも、時間の問題だな。」

「…………そ、そういうこと／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ああ。まぁ、御覧の通り、言葉だけで真っ赤になる年頃だしな。

シャルとそうなるのはまだまだ先の話だな。……残念な事に。」

カイトの言葉に轟沈したタバサを余所に、皆でルイズのとある一点を見、

思わず、その皆で首を横に振り、溜息を付いた。そして、才人がど突かれていた。

最底辺の惨めな闘いに思わず同情する、或る程度は有るモンモンと、でっかいキュルケ。

その二人に思わず目が釘付けになる、ギーシュと才人。……言わずもがな、二人共…南無。

そんな漫才にも飽き飽きしたのか、疲れてもう寝ると言い出し、又もやルイズのツケで、

二階に在るベッドに泊まろうとするキュルケは、タバサを魔(カイト)の手から救い出そうと必死だ。

又、ギーシュとモンモンは、そのタイミングで思い出した才人に、

貸した金返せよと、詰め寄られている。

夜の店らしく（？）色々と騒いでいると、又、来客が現れた。先程逃げ出した貴族達の様だ。

すると、未だ下に居たキュルケ達を見付けたその先頭の貴族は、改めて決闘を申し込んで来た。

「……なぁに、貴方達？　未だ何か用なの？　若しかして、未だ甚振られ足りなかった？」

「グッ……キサマ……！！！　いや何、是非共我等、先程の御礼を申し上げたいと思ってな。

しかし、我等だけでは十分な御礼が出来そうも無いので……

ほら、彼の様に三個中隊を引っ張って来た。」

……成る程。確かに、外には千人を超える兵隊達が犇き合っている。

……あれ？　確か、此処って一個中隊しか来ないんじゃ無かったっけ？

とか、カイトは思ったが、どうやら余程虫の居所が悪かったのか、自分の動員出来る兵数を限界迄、揃えて来た様だ。……結構お偉いさんだったのね。

だが、流石にその人数には冷や汗を流し、緊張するキュルケ一行。
その様に北叟笑む貴族達。……だが、残念な事に、彼等には見落としがあった。

「んじゃ、こいつらの相手は俺がしてやるよ。」

そう、此の場にはカイトが居た。しかし、当然こんな下っ端が知ってる筈も無く……。

「……何？　誰だ貴様は？　……見た所、貴族では無いな……。

高が平民風情がでしゃばるでないわッ！！！」

「あ〝？　高が棒切れを振り回すしか藝も能も無い、お飾りの貴族風情が、

此の俺に舐めた口を利くんじゃねぇよ。貴様等諸共に、貪り殺すぞ？」

「な、な、何いいいッッッ！！！！！　平民の分際で……我等を侮辱するかッ！！！

良いだろう……其処迄言うからには、貴様には我等全員と戦って貰おう…。但し一人でだ！」

「問題無い。良いから早く外にでろ、薄鈍盆暗共(うすのろぼんくら)が。俺が外に出れねぇだろうが。」

「結構！　では、貴様が外に出次第、我等全員で掛からせて貰おうかッッッ！！！」

そう言い放ち、ドカドカと、外に出る貴族兵達。

その様を見遣(みや)った、店長のスカロン一同は、思わずカイトに駆け寄り、声を掛けた。

「ちょ、ちょっと、貴方！　ど、どうするのよぅっ！　相手は貴族なのよ?！

貴方、貴族じゃ無いんでしょ?！　ねぇ、ルイズちゃん、又、貴方がどうにか出来ない？」

「……無理よ。カイトには、王や教皇でさえも命令出来ないんだか

ら。」

“……え？”

その思い掛けないルイズの言葉に、思わず聞き返す一同。其処に、才人達から声を掛けられた。

「店長！　じゃ無かった。ミ・マドモワゼル！　カイトなら絶対大丈夫ですって。

俺は寧ろ、カイトに喧嘩を吹っ掛けたあの兵隊さん達に同情しちゃうよ……。」

そう言って、彼等に向けて手を合わせる才人。それに何度も頷く、カイトの実力を知る皆。

そんな訳無いだろう？　幾ら何でも、貴族を馬鹿にし過ぎだ……！

と言う声が彼方此方から聞こえ、驚愕の表情が見えるが、一向に気にした風も無いカイト。

すると、話が終わったと判断したのか、皆に向かってカイトが話し掛けた。

「もう良いかな？　所で……お前達に、一つ聞きたいんだが……。」

“俺（僕・私）達に？”

「ああ。誰か見に来る？　少しは遊んでやろうかと思ってるんでさ♪」

思わず、うわぁ……と漏らす面々。

結局、キュルケとモンモンは疲れたと言って、二階の部屋へ行き、才人とギーシュは好奇心から、タバサは心配と興味から見学に回る事となった。

ｓｉｄｅ：『魅惑の妖精亭』前の広場

其処には、千人超の兵隊が犇めき合い、憎き（にっく）敵が出て来るのを今か

今かと待っていた。

始めの内は、上司に命令されて眠いのに……とか思いながら渋々従っていたが、

突入して戻って来たその上司から聞いた敵の言葉に、

全員眠気も完全に吹き飛ぶ程、喚起（かんき）した。

そして、今は一分一秒ごとに敵意を募（つの）らせながら、待ち構えていたのである。

然う斯うしている内に、件の敵が出て来た。……供の少年少女を引き連れて。

何だ助っ人かと思わず拍子抜けしたが、この人数相手では無意味だなと再度構え直した。

しかし、助っ人と思われたその子供達は、その敵に何事か声を掛けると、後ろに引っ込んだ。

……どうやら、只の見学……乃至（ないし）は、文字通りの応援部隊らしい。

そして、件の敵が前に出て来、開口一番こう言った。

「……待たせたな。それじゃぁ始めようか……塵芥共（ちりあくた）？」

皆の怒りは頂天に達し、一斉にカイトに襲い掛かった。

……それが、彼等の死亡フラグだとも気付かずに。

ｓｉｄｅ：三人称

それは異様な光景だった。カイトの言葉を皮切りに、十人・二十人単位で向かって来るのだが、

誰一人として攻撃出来ず、皆カイトに触れる直前に吹っ飛ばされるのだ。

幾度かそれを繰り返す内に、流石に不気味になったのか攻撃が止み、

誰かがポツリと漏らした。

「……何で誰も攻撃出来ないんだ…？　……も、若しかして先住魔法…！？」

そして、騒(ざわ)つく兵隊達と見学人。

それと、そうだよなぁ……やっぱそう思うよなぁ……。うんうん。と頷くタバサ達。

闘う度にほぼ毎回言われ、流石に好い加減切れ掛けたカイトから、膨大な魔力が溢れて来た。

「……テメェラ、好い加減五月蠅ぇなぁ…！

自分に理解出来ない事が有ると、直ぐエルフだの、先住魔法だのと……。

何奴(どいつ)も此奴(こいつ)も、馬鹿の一つ覚えみたいにぬかしやがって……！

他に言葉を知らねぇのか…！　俺はもう好い加減、聞き飽きたぜ……！！」

あ、やばい。と才人達が思った時には、もう遅かった。

「少しは加減してやろうかと思ってたが止めだ。纏めて消し飛べ。

さぁ……雷帝の雷霆だ。畏れ、敬い、崇め奉り、跪け…！

詠唱破棄　『千の雷』！！！」

その瞬間、広場に数多の雷が轟音と共に降り注ぎ、それを受けた者は皆、再起不能になった。

それを見ていた者は、夜中だというのに、丸で真っ昼間の如き明るさに、皆戦慄していた。

その後、雷も止み、一人佇んでいた者がポツリと零した。

「……ちっ。高が貴族風情が俺に喧嘩を売るなんて、一垓年早ぇんだよ、糞餓鬼共が。」

そう言い捨て、『魅惑の妖精亭』へ、皆を置いてけ堀にして、一人戻るカイト。

慌てて後を追うタバサ達。それを呆然と見遣る見学人達。

その後、誰かが王宮に連絡したのか、魔法衛士隊が来て彼等を引き取って行った。

結局、その貴族兵達はカイトに手加減されたのか、

十日程、一切身動き出来ないだけで済み、辛うじて命は存えたのだった。

その後、何やかんやで色々あったが、基本的には何時もの夏休みの日常だった。

才人とルイズの微妙なツンデレカップルに、

最近はシエスタも入って来ての、新たな三角関係に更にニヤニヤし。

ギーシュとモンモンの何時もの諍(いさか)いに呆れ。

カイトとタバサの超絶バカップルに、キュルケが割り込んでの、奇妙な三角関係を楽しみ。

そんな、平穏で平和な日常を送って居た。……そう。あの日が来る迄。

アルビオン侵攻作戦が、魔法学院に発布される迄は。

……皆、薄々と束の間の平穏だと分かっていながらも、その平和を味わっていたのだ。

そして、一人……。又、一人……と。

運命の波に翻弄され、何とか必死に抗いながらも巻き込まれていく。

未だ、物語は始まってすらいなかった。……一体、誰が想像しえただろうか？

今迄の事が、全てこれからの為の布石であり、未だ序章であった事に……。

そう。虚無（ゼロ）の物語は、今これより、真に始まる。

幕間４（前書き）

現時刻（０８：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，５４８，７７１アクセス　ユニーク：１３１，８８５人

皆様、此の度は、私事で大変御迷惑・御心配を御掛け致しまして、誠に申し訳有りませんでした。

御覧の通り、何とか早くも再投稿する事が出来、私自身もホッとして居ります。

未だ、御見限りでは御座いませんのでしたら、どうぞ今後共、宜しく御願い致します。

そして、早くも１，５００，０００アクセス突破致しました。

長期更新停止と言ったにも拘わらず、見て下さった方々。

更に、応援・激励等の御言葉を掛けて下さった方々。

此の場を借りまして、改めて御礼申し上げます。

さて、今回は丁度切りも良いという事で、幕間に致しました。

その分、改めての投稿と致しましては、とても短いので大変恐縮ですが、

明日、続けて本編の続きを投稿致す所存です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

幕間４

ｓｉｄｅ：獣人ギルド本部ｉｎビストレオ

今、其処に一人の少年が、入って来た。歳の頃は……恐らく１４・５。

如何にも無邪気で、人懐っこい感じが表面にありありと見える。

そして、耳をピコピコさせ、尻尾もフリフリさせていた。……どうやら、犬の獣人らしい。

その場に既に居た者達が、その見慣れた獲物を品定めしているのに気付いていないのか、

ウキウキと鼻歌迄歌って、スキップしながら受付に向かった。

「受付のおねぇさ～ん♪　依頼熟（こな）して来たよ～♪　ランクアップの申請、早く早く♪♪」

「はいはい。そう慌てないでね、アル。はい、ちゃんと規則通り確認。」

どうやら、そのアルと呼ばれた獣人は、受付の美人な狐耳のお姉さんと知り合いらしい。

「もう、固いな～…僕達知らない仲じゃ無いんだしさぁ～……ね？お願いだよぉ～…。

僕、もう待ち切れ無いんだよ～…は～や～く～ぅ～……お・ね・が・い♪♪♪」

「……うっ……ど、どんなに可愛く言ってもダメですっ。規則は規則なんですから。

大体、ちゃんとしないとランクアップの申請も出来ないわよ？

この『魔法球』にはバレバレなんだから。

第一、そんな事万が一、私の独断でしちゃったら、後で上司に大目玉食っちゃうわ。」

目をキラッキラさせながら、上目遣い＋涙目で懇願され、

思わずその誘惑にたじろぐも、何とか理性を保った受付のお姉さんであった。

……尤も、此の後の夜には、確実にその理性は崩れ去るだろうが。

「ちぇ～……。全く、毎回メンドクサイなぁ……このやりとりぃ～～……。

もう、一体、誰だよ……こんなメンドイ仕様にした奴ぅ～……！」

「もう……ぶつくさ文句ばかり言わないの。

……ほら、早く証の魔法印と、解決済み依頼書を見せて？」

「はぁ～い……。」

そう心底面倒臭そうに言うと、自身の魔法印が刻まれている右肩を見せて、

紛れも無い本人である事を確認して貰い、更に左腕に付けていた腕輪を取って、

魔法球と呼ばれた、硝子玉（ガラスだま）の様な真球に、腕輪に唯一付けられた宝石部分を近付ける。

すると、その魔法球が光り出し、受付の所に有る……パソコンの様な木彫りの筐体（きょうたい）の画面に、

その腕輪から送られた情報が、全て映し出される。

それを確認する受付のお姉さんと、ワクテカしながらその報告を待つアル。

元気に尻尾をブンブン振ってる様を、しょうがないなぁ……と困った顔で見ていると、

その筐体から、赤信号が来た。……どうやら、ランクアップには足りなかったらしい。

それをアルに話すと、見る間に耳は垂れ、尻尾は元気を無くして、落ち込んでしまった。

その様に、皆して萌えていると、元気を直ぐ様取り戻したアルが勢い込んで聞いて来た。

「むぅ～～……おっかしいなぁ……確かに、間違い無く２０件有る筈なんだけどなぁ……。

ねぇ、もう一度確認し直しても良い？」

「ええ、良いわよ。丁度、今は誰も用が無いみたいだしね♪」

と、ウインクを一つ溢した後、二人して筐体の画面を注視する。

一つ一つ確認していくと、とある所にアルの目が留まった。

「あ、これ！　これだ！　これのランクが間違ってるんだよ！」

「どれどれ……あ、成る程、これね。……あら？　でも、これ別に間違って無いわよ？」

「えええ～～！　そんな訳無いよぉ～…！

だって、ちゃんとランクを何度も確認してから、依頼を受けたんだから！　絶対間違い無い！」

「……ふむ。なら、細部まで確認して見ましょうか？」

そう言って、アルの訴えを再確認する為に、詳細データを呼び出した。

それを又、一つ一つアルに確認していく内に、原因がやっと判った。

「……先ず、結論から言うわね。このランクは正しいわ。間違い無

く、これはＢ－（マイナス）の任務よ。」

「え～……じゃぁ、依頼書の方が間違ってたの？」

「いいえ、それも正しいの。貴方が戦った相手って、このパグーレンジャーでしょ？」

「うん、そうだよ？　しかも、うじゃうじゃと２０～３０組ぐらい居たんだよ？」

「……でしょうね。本来、これはＣランク……下手をすればＣ－ランクの依頼だもの。」

「ええ～～～……それじゃぁ、骨折り損の草臥（くたび）れ儲けじゃ無いか……ハァァ……。

……え？　待ってよ。なら、何でＡ－ランクになってたの？　可笑しいよ！　詐欺だよぉ～！」

「……いいえ、そうじゃ無いわ。彼処には昔から、魔王が封印されていると言われているの。

だから、もしその魔王の力を浴びて強くなっているのだとしたら、Ａ－は納得よ？

恐らく、依頼主はその可能性を考えて、Ａ－に設定したのね。

一応、後で此方から依頼主に、聞いておくわ。」

原因が判ったのは良いが、それは詰まる所……。

「……何だ、そういう事だったのか……。……じゃぁ、ランクアップは……。」

「残念ながら、アウトね。

後、もう一件Ａ－の依頼を熟(こな)して来て貰わないと、申請は許可出来ないわ。」

「な～んだぁ～……ガックシ。折角、今日は進級祝いだぁーって、思いっ切りお姉さんと騒ごうと思って来たのに～……。」

その落ち込み様と、言葉に思わず萌えて照れるお姉さん。

「…あ、あらあら／／／／／／／　もう、ホントに可愛いわね、貴方って／／／

慌てなくたっていいから、明日何か依頼を受けていらっしゃいなさいな。

私なら何時でも空いてるもの♪　何時でも待ってるわよ？」

「……うん。」

しかし、落ち込み様は変わらない。仕方ないなぁ…と溜息一つ零すお姉さん。

「……もう。しょうがないわねぇ……。それじゃぁ、これから私の部屋にいらっしゃいな♪

ちゃ～んと慰めてあ・げ・る・か・ら♪♪♪」

「え？　ほ、ホントに？　で、でも僕、未だランクアップとか、プレゼントとか何も……。」

「いいのよ。それはあ・と♪　……それとも、私と一緒に居たくない？」

「……（ブンブン）！」

そのお姉さんの言葉に、本当に嬉しそうな顔をし、

今迄垂れていた耳と尻尾も、元気を取り戻したみたいだ。

それを見て微笑むと、奥に向かって大声で誰かに声を掛けた。

「そ♪　なら、早速行きましょ♪　あ、ミーナァー！　此処お願いねぇー！！」

「あーーッ！　ちょっとーーーッッ！！　自分だけ狡いわよーーッ！　コラーーーッッッ！！！　聞いてるのーーッ！　リーナァーーーッッッ！！！」

「……あ、あの……良いの？　あんなに妹さん叫んでるけど……？；；；」

「いいのいいの。早いとこ行きましょ？　じゃないと、ゆっくり出来ないもの♪」

「……う、うん！」

何とか、ミーナと呼ばれた妹さんから逃げ果(おお)せた二人だったが、

翌日、リーナと呼ばれた受付のお姉さんだけは、ベッドから起き上がれず、

結局、上司に大目玉を喰ったのであった。

幕間４（後書き）

如何でしたでしょうか？

改めまして、此の度は大変御騒がせ致しまして、誠に申し訳有りませんでした。

もし、私の事情を未だ御存知では無い方がいらっしゃいましたらば、私の活動報告を御覧下さい。其方に、此の度の事由を書かせて頂きました。

今後は一身上の都合も有り、何時もの様な更新速度では投稿出来なくなってしまいます。

それに付きましてはどうか、皆様に御諒承頂ければ、幸いで御座います。

さて、今回初登場致しました、アルという少年。

彼は、此の世界『グランギルズ』における、主人公の内の一人という位置付けです。

取り敢えず、もう後、二話分程、彼と彼の仲間達が登場致しますので、どうか御楽しみに。

では、又明日、本編にて。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座

いました。

ＺＥＲＯと鋼牙とヴァリエール家（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，５６１，３１３アクセス　ユニーク：１３３，１３０人
皆様、改めまして有難う御座います。

前話を投稿した途端、以前と変わらぬ程の数の方々が、読んで下さいました。

皆様、誠に心底より感謝致します。

さて、今回は凡そ半月振りの本編です。又、少々長くなってしまいました。

御飲物を片手に、どうぞ御緩(ゆる)りとなさって下さい。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

ZEROと鋼牙とヴァリエール家

ｓｉｄｅ：トリステイン魔法学院

今、此処はとても閑散としていた。それもその筈。

……戦争の為、学徒動員が為されたのだから。

当然、一部（コルベール）の教師や、オールド・オスマンは大反対したが、

それもカイトの鶴の一声で、諦めざるを得なかった。

「この戦争は必然だ。それにアルビオンを滅ぼす必要は無い。幾つかの戦場で勝てれば良い。

これは、ジョゼフのお遊びだ。只の暇潰しの飯事（ままごと）。そして、準備の為の期間だ。

或る程度勝ち続けるか、大敗北を喫すれば、ジョゼフが飽きてアルビオンを滅ぼす。

此の戦争はな…？　俺とジョゼフが争う為だけの、序盤戦というだけだ。

別に此処で断っても構わないが、その場合、此のハルケギニアそのものが、

憤怒（ふんぬ）の劫火（ごうか）にて、焼き尽くされるだけだ。それでも構わないのならば、好きにしろ。」

そのカイトの言葉で、自分達は只、踊らされてるだけかっ！　と憤ったが、

ハルケギニアを危機に陥れる訳にはいかず、不承不承ながらも認めざるを得なかったのだ。

結局、夏休みが終わった二ヶ月程経った頃、正式に学徒動員が発布された。

その結果、男子生徒はほぼ皆挙って士官し、今魔法学院に居るのは女生徒ばかりであった。

そんな中でも、変わらない人達が居た。……そうカイト達である。

例え人が居ようと居まいとお構いなしに、バカップルを繰り広げている。

話のネタになっているもう一組のカップル、才人とルイズは、シエスタを巻き込んで、

実家からの招集者である、長女のエレオノールに連れて行かれて、今は居ない。

故に、今の女生徒達の話題は、男子達が無事で戻って来られるかと言う願掛け紛(まが)いの話と、

こんな状態でもいちゃつけるバカップル達の、空気の読まなさと嫉妬で持ち切りであった。

当然、それでも気にしない二人＋一人は、広場に一人いたモンモンと少し話した後、

火の塔辺りをぶらついていた。

……そして今、コルベールが研究に没頭している所に訪れた所であった。

「……お忙しそうですわね？　ミスタ・コルベール。」

「ん？　おお、ミス。ミス・ツェルプストー。カイトにミス・タバサも居るのか。

……ああ、そう言えば、君に何時か、火の使い方について講義を

受けた事が有ったな。」

「……ええ。」

キュルケは、（誰もが戦争に従事しているのに、この男は戦争から逃げている。）

……そう思うと、同じ『火』使いとしてとても情けなく、非常に不快であったのだ。

故に、皮肉混じりに、且つ不快感を露(あら)わにして話しているのだが、一向に気にせず、不思議そうな顔をしている。それが又、更にキュルケを苛立たせた。

「？　どうしたね？　ミス。」

「……貴方は、王軍に志願なさいませんでしたのね？」

「ん？　……ああ……戦は嫌いでね…。」

その言葉が、はっきりその男の口から出た事により、益々不快になり、

思わず思った事をその儘、口にした。

「……！　同じ『火』の使い手として、恥ずかしい限りですわ。」

「……ミス。いいかね？　火の見せ場は……。」

「戦いだけでは無い。……そう仰りたいのでしょう？　……正直、聞き飽きましたわ。」

「……そうだ。使い方次第だ。破壊するだけが……！」

「臆病者の戯言（たわごと）にしか聞こえませんわ！」

最早、顔も見たくないと言う様に、さっさと歩き去って行く。すると……。

「……シャル。俺はジャンと少し話が有る。済まないが、先にキュルケと一緒に行っててくれ。」

「……分かった。」

「ああ、食堂に行くんだろう？　少しの間、待っててくれよ。どうせキュルケの事だから、

怒りながら自棄食いしてそうだからな。ちゃんと止めてやってくれよ？」

カイトの言葉に、一つ頷くとキュルケの後を追って、普通に歩いて行った。

それを確認すると、悲しそうな顔でキュルケの去った後を見遣るコルベールと向き合った。

「……さて、カイト。何か私に話が有ると言う事だが、一体何かね？

……又、私の事を只、揶揄いに来た訳じゃ無かろうね？

今は、時期が時期だ。その様な冗談は、特に止めて貰いたい。

……今の私では、その怒りを抑えられるかどうか分からないのでね。」

そうカイトに先んじて話すと、『炎蛇』の二つ名に相応しい、冷たい笑みを浮かべた。

しかし、カイトはそれを見ると、寧ろ笑みを浮かべ、首を横に振っ

た。

コルベールが訝しんでいると、カイトは真顔になり……こう、語り出した。

「……ジャン。もうすぐだ。もうすぐ、お前も運命の輪廻に巻き込まれる。

それは、決して逃れ得ぬモノ。お前の罪。お前の贖罪。お前を裁く者。

そして、お前の過去の清算。それらが、これからお前の身に降り掛かる。……覚悟しておけ。

これから……この戦争からが、お前にとって最も辛く、そして、最も救われる日々になろう。」

カイトから語られた言葉は否応無く、あの日のおぞましい……決して忘れられないあの光景を、

思い起こさせるには、充分過ぎる程の台詞だった。

思わず、顔を盛大に顰め、口を押さえ掛けるも、呻き声一つ漏れては来なかった。

そんなコルベールの様子に一つ頷くと、最後に一言だけ言い置き、カイトはさっさと、タバサ達の許へ向かった。

「……ジャンよ。忘れるな。お前は死を望んでいても、お前に死んで欲しくないと思っている奴が、少なくとも一人以上は居ると言う事。

……決して、忘れるな。それを忘れた時、お前は永遠に贖罪する事能わぬ。……忘れるな。」

その後、コルベールは、とある引き出しから出した、炎の様に真っ赤なルビーを手に取り、

椅子に深く身を沈めながら、何事かを考えていた。

その瞳が、何かを決意した様に、静かにぎらついた事を知る者は、誰も居なかった。

ｓｉｄｅ：ラ・ヴァリエール領

才人はルイズの実家に来てから、もう衝撃の連続だった。

自分の領地に入ったのに、実家に着くのに更に半日？　更に、この宿での歓迎のされ様に、

ルイズが生粋の御嬢様である事を、改めて再認識したのだ。……しかも、それだけじゃない。

「まあ！　見慣れない馬車を見付けて立ち寄って見れば、嬉しいお客だわ！」

エレオノール姉様！　帰ってらしたの？」

「……カトレア。」

「…え？　ちいねえさま！」

「ルイズ？　いやだわ！　私の小さいルイズじゃないの！　貴女も帰って来たのね！」

「はい！　御久し振りですわ！　ちいねえさま！」

そう。新たに現れたのは、ルイズをパーフェクトボディィに仕立て上げ、性格を完璧にした、

才人の好みをモロに直撃している、次女のカトレアであった。

その瓜二つの成長前後と呼んでも差し支えない、姉妹が戯れているのを見ていると、

ふと、カトレアの横に居た少年に目が留まった。……ルイズ共々。

「……ねぇ、ちいねえさま？　其処にいる子供は？」

「ええ、この子はね？　私の命の恩人の御家族なの。
ちょっと事情があって、私とお友達になってくれたの♪」

「……命の恩人？　どういう事？　ちいねえさま。……もしかして又、何か危ない事したの？」

「クスクス……いいえ、違うわルイズ。……あのね？　落ち着いて聞いて欲しいんだけど…。」

何やら、真剣な様子のカトレアに、思わず唾を飲み込み、真剣に聞き入る事情を知らない人達。

「あのね？　……私、病気が治ったの。」

「……え？　い、今、何て仰ったの？　ちいねえさま？」

「ええ、貴女の聞き間違いじゃないわ。私の可愛いルイズ。
私の病気はもう、すっかり治っちゃってるのよ？　この子の、御家族が治して下さったの。」

「……ほ、本当に？　本当に、ちいねえさま……もう大丈夫なの？」

「ええ、もう本当にすっかり。元気一杯よ？　今日も、ちょっと遠出して来た帰りなの♪」

そう言って、ペロリと舌を可愛らしく出すカトレア。……しかし、ルイズはそれ所じゃ無い。

思いっ切りカトレアに獅噛(しが)み付くと、辺りを憚(はばか)る事無く、わんわん泣き出した。

その様に、思わず皆、貰い泣きしてしまった程だ。

然う斯うしている内に、泣き止んだルイズがカトレアにあやされていると、

先程の少年が何処かに行ってしまった様だ。

キョロキョロ探していると、驚愕の光景を目にした。

エレオノールの膝にちょこんと座って、甘やかされている。

自分ですらそんな事された覚え無いのに。

そう思ったルイズは、エレオノールの顔を見て、更なる驚愕に包まれ、目を見開いた。

何と、今迄誰も見た事が無い様な顔で、微笑んでいるのである。

思わず、誰もが見惚れてしまった程だ。

……そういう顔の一つでも見せれば、婚約解消なんて事には。

そう思わずにはいられない程の、綺麗な微笑みであった。

だが、ルイズは違った。……何時の間にかみんな、自分の知らない家族になっている。

カトレアの病気が何時の間にか、治ってる。それは良い。……でも、アレは頂けない。

何だアレは？……あんな綺麗な微笑は自分は見た事が無い。……自分の記憶には……無い。

その事実に愕然とすると、その名も知らない少年に対し、激しい嫉妬感に駆られていた。

しかし、そうとは知らず露知らず、エレオノールと鋼牙をニコニコ笑顔で見ていたカトレアは、

「それじゃ、此の儘みんなで一緒に帰りましょ♪」と言い出した。

一人、ルイズの状態を理解していた才人は、駄々を捏ねるのでは……と心配していたが、

渋面を作りながらも素直に馬車に乗ったので、よっぽどちいねえさまって人が好きなんだな。と、

何故かは判らないが、少し嬉しく思ったのだった。

ｓｉｄｅ：御城ｉｎラ・ヴァリエール領

最早、そうとしか呼べなかった。……これじゃ本当に、本物の御嬢様じゃねぇか……。と、

改めて、ルイズと自分の価値観や距離感の違いに、頭を抱えて悩む才人であった。

そんな中、車内では……。

「お城に帰るの、久し振りだね、カトレアお姉ちゃん♪」

「ええ、そうね、鋼牙ちゃん♪」

と、鋼牙と呼ばれたその少年が、エレオノールの膝上に座りながら、カトレアと談笑している。

尤も、自分もカトレアに抱き締められながら、頭を撫でられているので、未だ良いが。

その間中も、エレオノールは綺麗な微笑の儘だ。……何かやっぱり面白く無い。

と、結局嫉妬していたルイズだったが、気付けばもう家に着いていた様だ。

そして、一行が向かった先の食堂にて、才人とルイズは更なる驚愕に包まれる事となった。

「あ、カリーヌお母さんだ♪」

「あら、鋼牙。お帰りなさい。」

「……。」

思わず、帰りの挨拶も忘れ絶句していた。何故なら、あの母が綺麗に微笑んでいるのだから。

……確かに、少ないながらも自分も、母や長姉の笑みは幾度か見た記憶が有る。

しかし、あれ程慈愛に満ちた綺麗な微笑は、終ぞ見た事が無い。

あの少年は、一体何者？　カトレアを治した誰かの家族……ってマサカ？！

と考え、とある人物に思い至ったルイズは、

同時に自分と目を合わせた才人と、何事かアイコンタクトを交わすと、お互いに頷いた。

（（間違い無く、カイトの仕業だ。後で戻ったら問い詰めよう。））

だが結局、未だルイズの父親は帰って来ては居らず、話は翌日帰って来てからと相成った。

……そして、翌朝。ドタバタと五月蠅い使用人達の足音で目が覚めた才人は、

ルイズの父親が帰って来たのだと、その寝惚けた頭の儘で認識した。

「……全く、あの鳥の骨め！」

「……どうかなさいましたか？」

「どうもこうも無いわ！　此の儂を態態（わざわざ）トリスタニアに呼び付けて何を言うかと思えば、

『一個軍隊編成されたし。』だと！？　巫山戯おって！！！」

一人息巻く、ルイズの父…ラ・ヴァリエール公爵に皆恐懼（きょうく）し、夫人との会話のみがその場に響いていた。

「……承諾なさったのですか？」

「する訳無かろう！　既に儂はもう軍務を退いたのだ！

儂に代わって兵を率いる世継ぎも家には居らぬ。何より……儂は此の戦に反対だ！！」

「でしたね。……でも良いのですか？　祖国は今、『一丸となって仇敵を滅すべし』との、

枢機卿の御触れが出たばかりじゃ御座いませんか。

ラ・ヴァリエールに逆心有りなどと噂されては、社交もし難（にく）くなりますわ。」

「あの様な鳥の骨を『枢機卿』などと呼んではいかん。骨は骨で十分だ。

……全く、血気盛んな若造風情に絆(ほだ)されおって！　骨らしく、中身などスカスカだったわ！」

「おお、恐い。宮廷の雀達に聞かれたら、只じゃ済みませんわよ？」

「フン！　是非共聞かせてやりたいものだ！！」

どうやら、ようやっと話は一段落したらしく、ルイズが父親に話し掛けた。

「……と、父様に伺いたい事が御座います。」

「良いとも。だがその前に、久し振りに会った父親に接吻してはくれんかね？　ルイズ。」

何か機先を制された感じだが、素直にそれに従い父の頬に一つ唇を落とし、改めて聞いた。

「……どうして、父様は戦に反対なさるのですか？」

その後、父の正論に完膚無き迄に叩きのめされたルイズだったが、家族の反対を押し切っても尚、戦争に参加すると言い張る。

当然認める訳にはいかない父は、『ゼロ』のお前が行っても意味は無いと言う。

だが、ルイズは姫も王代理も自分の力を認めてくれた。自分が必要だと言ってくれたと言う。

そのルイズの何時に無い剣幕に、何事か勘付いた父はルイズを問い詰める。

「……お前、得意な系統に目覚めたのかね？」

「……はい。」

「四系統のどれだね？」

「……。」

ルイズは答えられず、暫く俯き何かを考えていた。何と答えれば良

いのか……。

考えた末、自分の最も得意な魔法『爆発（エクスプロージョン）』から、『火』と言う事にしようと思った。

そして答えようとようやっと顔を上げ、ずっと待っていた父に向けて口を開き掛けた。

……が、ルイズは話す事は出来無かった。……闖入者によって。

「おっと、そいつはいけねぇなぁ、ルイズ。親に嘘を付くのは感心せんぞ？」

“！！　誰（だ）ッ！！？”

「俺だ。……と言っても、判らないか。よう、ルイズ2～3日振りだな。」

「カイト？！　アンタ、一体何しに家に迄、来てんのよ！？」

そう。カイトであった。しかし、当の本人は中空に浮いた儘で、周りの警戒なんぞ、何の其のとばかりに、ゆっくり降りて来た。

「何しにって、事情を説明しに来たのと、後、もう一つ。」

「……もう一つ？」

そのカイトの言葉に、訝しみながら、首を傾げながら聞き返すと、カイトに突撃する影が一つ。

「カイト兄ちゃ～～～ん♪♪♪」

「おっと…。よしよし、鋼牙。元気にしてたか？」

「うん♪！！」

「そうかそうか。……取り敢えず、カトレア…大事無いか？」

あっさり、その襲撃者を抱えると、今度はカトレアにその矛先を向けた。

「え、ええ。私は大丈夫だけど……あの……良いの？」

「ああ、構わない。ちょっと予定が変わってな。

打ち合わせ通りにするには、タイミングが悪過ぎるんだ。」

「……あら、そうなの。……ちょっと残念ね。私、少し楽しみだったのに……。」

……が、どうやら、二人は知り合いの様だ。しかも、大分親しい。

もしやこれはフラグか！？

と、合ってる様で外れている親の勘など丸で気付かずに、会話は続く。

「そいつは済まなかった。文句はジョゼフに言ってくれ。

あのバカタレの所為で、少し計画が狂ってな。……これからちょっと説教しに行く所だ。」

「まあっ！！　一国の王に説教だなんて！　貴方、実はとても偉い

人？」

「うんにゃ、全然？　だが、王だの教皇だのエルフ風情だのに命令される覚えは毛頭無いがな。」

所が、そんな阿呆な思惑など、何処かにすっ飛んで行ってしまった。

何せ、その得体の知れない輩の口から名指しの呼び捨てで、ガリア王の名が出て来たからだ。

しかも、よりにもよって、『エルフ風情』等と迄、言う始末。

もう、吃驚仰天。しかし、会話はまだまだ続く。

「……それでも、充分に凄いわよ？　大体、そんな事大っぴらに言っちゃっていいの？

貴方、不敬罪で捕まっちゃうわよ？」

「ハッ！　この俺に不敬罪？　それこそ、俺に対する最大級の侮蔑だな。

そんな巫山戯た事をしようものならば、今直ぐにこのハルケギニア、滅ぼしてくれようぞ。」

「まあ、恐い！！　いやねぇ……ルイズ？　貴女、お友達選びはち

ゃんとしなきゃダメよ？」

「……え？　あ、は、はい、ちいねえさま……。」

本当にポンポンと弾む、二人の会話への割り込む場が見付からず、只黙って聞くしかない面々。

だが、好い加減此の儘ではいけないと、今更乍（なが）らに誰何（すいか）し詰問し出した、父親であった。

「……あ～～コホンッ！！　所で、貴様は何者かね？

何やら、我が娘と随分と親しい様だが……一体、何用あって当家に参った？」

「ん？　何用って……だから、今言っただろ？　ルイズが戦争に行きたがってる事情説明と、

鋼牙を返して貰いに来たんだ。」

「……何？　生憎と、何処の誰かも判らん輩の言葉など、信用など出来る訳も無く、

聞くには一切、値せんな！　それと、その子供は我等が恩人より任されし子ぞ？

残念ながら、貴様が連れて行く事は、此の儂が認めん。」

伊達に名誉ある一家の長では無く、その威厳には、十分な迫力があった。

しかし、それに溜息を付くカイトとカトレア。その二人の態度に訝しむ父。

「……あの、カイトさん？」

「……ああ、頼む。俺じゃ埒が明かん。お前が説得してくれ、カトレア。」

「はい。……あの、父様？　少々、宜しいでしょうか？」

「……うむ。一体、何だね？　カトレア。」

そして、カイトと呼ばれた奴と、2～3言話すと、自分に向かって話し掛けて来た。

何事を話されるのかと身構えると……カトレアの口から、驚きの言葉が出て来た。

「……此の方が、あのＺＥＲＯさんです。」

“……何？”

「とまぁ、そういう訳だ。よもや娘の言迄（げん）、信じぬとは言わぬよなぁ？　公爵よ。」

「……む……ぬぅ……。……では、何か証拠を見せて貰おうか？」

「はいはい。ファースト・イグニッション　ウインド　鎧化（アムド）」

その言葉に応じると、緑色の鎧に包まれた人が、光の中から現れた。

自分達が見た鎧姿とは、色は違えど意匠は同じだった。それを見て、

ようやっと理解した。

「……これでどうだ？」

「……うむ。間違い無く、其方（そなた）があのＺＥＲＯだったか。……いや、誠に済まなかった。」

「……何、気にするな。お前達に素顔を見せたのは、今日が初めてだからな。

知らぬのも無理は無い。……カトレアに事前に知らせておいて良かった。」

「まあ！　では、あの時のうっかりさんは計算尽く？」

「……いいや、あれは本当のうっかり、偶然の賜物だ。……まぁ、結果オーライと言う奴だ。」

解放（パージ）と呟き、鎧を脱いだカイト。それで、ようやっと警戒心たっぷりの雰囲気が解かれた。

しかし、そんな雰囲気とは別に、まるで事態が呑み込めていない者が一人。

「……ちょ、ちょっとぉっ!!　わ、私、一体何が何だか、全然分かんないんだけど!?

アナタ、何をしたのよ?!　答えなさいよ、カイトッッ!!!」

そう、ルイズだった。彼女一人だけが、何の事かまるで判らず、置いてけ堀にされていたのだ。

その事をすっかり失念していた皆は、先ずルイズに謝り、カトレアが事情を説明した。

「そうだったわね。貴女は、未だ知らなかったのよね。ごめんなさい、ルイズ。…あのね?

貴女が学院に居た頃にね…彼が此処に来て、私の病気をあっさり治していってくれたの。

その時にね、あの鎧の色違いを着てたの。それで、父様達は誤解だって解ったのよ。」

「……そ、そうだったの。で、でも、なら何で直ぐに教えて下さらなかったの?!」

「……それは、私が悪いの。きっと貴女は夏休み中に帰って来ると

思って、

その時に驚かせちゃおうと思って、態と秘密にしてたの。……本当にごめんなさい。」

「……ううん。それは、もういいの。ちいねえさまが元気になってくれれば、それで。」

「……有難う。私の可愛いルイズ。」

そう言って、ルイズを優しく抱き締めるカトレア。それを優しく見守る一同。

そう一段落が付いた所で、改めて事の次第を……ルイズの事情を聞く父。

「……うむうむ。……所で、ＺＥＲＯよ。……いや、カイトと呼んだ方が良いのかね？」

「ああ。素顔の時はカイトで構わない。……ルイズの事情だろう？」

「そうだ。娘の命の恩人の言葉だ。どの様な事情でも、信じよう。さあ、教えてくれ。」

「……そうだな。ならば、本人から聞いてみるのはどうだ？」

そう言われて皆、未だカトレアに抱き締められた儘のルイズを注視する。

その視線に、言うべきかどうするか、葛藤しながらカイトを見る。

そして、カイトの首肯によって、最後の決意と覚悟を決めた。

「……ルイズ。」

「……父様。今から、私の言う事は、始祖ブリミルに誓って嘘偽りは有りません。」

「……うむ。教えてくれ、ルイズ。一体、どうして戦に行くなどと言い出したのかね？」

「それは、私の目覚めた系統が……『虚無』系統だからです。」

“……なん……だと……？”

「……はい、御聞き間違いでは有りません。

私の系統は、彼の失われし第零系統の『虚無』なのです。」

ルイズの告白を聞いた途端、皆沈黙の行に入った。

そして、その沈黙をあっさり破る男が一人。……まぁ、お解りだろう。そう、カイトである。

「まぁ、そういう訳だ。虚無には虚無をぶつけるのが定石だからな。」

「……今……何と……？」

「虚無には虚無をぶつけるのが定石だと言ったんだ。虚無は一人では無いのでな。

だが、４の４が揃わぬ虚無など、高が知れている。

敢えて言うなら、只の五つ目の系統。第五系統というだけだ。戦（おのの）く様なものでは無い。」

みんな、カイトの言っている事が理解出来なかった。まぁ、それもそうだ。

既に事情説明を受けているルイズにも、未だに丸っ切り解らないのだから。

「……其方の言っている事が、儂等には全く理解出来ん。

恐らく、今の儂等には、それを理解する事は難しいのだろうな。

だが、例え我が娘が彼の伝説の虚無だからとて、儂は戦場に送る気は毛頭無い。」

「父様！！」

「ルイズ。もう一度、良く考え直しなさい。お前は、婚約者のワルドの裏切りに続いて、

その様な重責を担った故、落ち着いた思考が出来ないのだろう。

……だから、婿を取れ。」

「……婿？」

しかし、例え理解していたとしても、決して親として戦争（それ）参加を認める事は出来なかった。

故に、何か他の手を……と模索した所、とある一つの手が浮かんだ。

……そう、新たな婿取りである。

「そうだ。共に居られる相談相手が居れば、お前も少しは落ち着けるだろう。

それまでは、この城から出る事を禁ずる。

例え、王代理や姫の招致であろうとも、我がヴァリエール家は一切是に応ぜん。

ジェローム。至急、王宮に使いを出せ。

もし、我が娘の身が欲しくば、相応の覚悟を示されよ。……とな。

」

「畏まりました、直ちに。」

「父様！！！！！」

「……これは命令だ。違える事は許さぬ。良いな、ルイズ。皆の者。」

「……！！！」

しかし、親の心子知らずとでも言うか……ルイズには、その父の想いは伝わらなかった様で、

只、家族にすら拒絶された事が何より悲しくて、思わず零した涙にも気付かず、

その場を全速力で逃げ出してしまった。慌てて呼び止めるも、もう耳には入って居なかった。

「あ、ルイズ！！！　……父様。あれでは、ルイズが余りにも可哀相ですわ…。」

「……仕方無かろう。ジェローム、城の者にルイズの捜索をさ

せろ。大至急だ。」

「畏まりました。直ちに、総動員して御捜し致します。」

「……うむ。……ああ、御見苦しい所を見せて申し訳無い。して、カイトよ。

もう一つの用件とは一体、何かね？」

「（まぁ、同じ人の親として解らいでも無いがな……。）……いや、気にするな。

もう一つの用件とは……鋼牙の事だ。この子を返して貰いに来た。」

“……何（え）？”

カトレアからの珍しい批難の言葉に、流石に遣り過ぎたと思っても、もう後の祭り。

今の自分にはどうにも出来ず、只、使用人達に捜して貰う他には、手は無かった。

そう溜息を付いていた時、ようやっと傍らでずっと黙っていた客人？　に気が付いた。

気を取り直し、改めて用件を聞くも又、更に驚くべき言葉が彼の口から発せられた。

「そろそろ、時期が来るのでな。もう、余り離れても居られんのだ。……それにオレの家族からも、早く鋼牙に会わせろと大分催促が来ていてな。

まぁ、そういう訳だ。余り事情は話せぬが……許せ。」

「う……む……。いや、本来この子は、其方より一時預かりの身。それも道理だな。

相分かった。だが、今日一日ぐらいは、別れの機会を貰えんか？」

「いや、済まんがそれは無理だ。今日即日にも引き取る。……そんな顔をするな。

何も今生の別れと言う訳では無い。偶には、顔を出しに来る。」

「そ、そうか！　いや、それならば、非常に名残惜しいが、致し方無い。

……では、鋼牙よ。又、会おう。御家族と仲良くな。」

「うん！！　公爵のおじちゃんも、カリーヌお母さんも、エレオノールお姉ちゃんも、

カトレアお姉ちゃんも、お城のみんなもバイバーイ！！　又、会おうね♪！」

そうして、唐突の鋼牙との別れに悲しむも、再会の約をカイトから取り付けた一同は、

渋々ながらも、一時の別れを承諾した。……丁度、その時だった。

ルイズが、使い魔の少年と共に見付かり、船の上でイチャコラしている場面が目撃されたのは。

その様を見たヴァリエール一家は、鋼牙の事もすっかり忘れ、

執事のジェローム達使用人に、ルイズの監禁と才人の獄門打ち首を即刻命じた。

二人はその中を、カトレアが何時の間にか用意していた竜の馬車を、牽(ひ)いて来たシエスタに促され、急いでヴァリエール領を脱出した。

臍(ほぞ)を噬(か)むヴァリエール公爵達が気付いた時には、既にカイトと鋼牙も居なくなっていた。

時は経ち。魔法学院へと舞台は移る。

そして……カーテンコールは流れ出し、役者は再びその身を舞台へと躍らせる。

又、一人……運命の輪に囚われた男が、舞台袖より、役者として舞い踊る。

その事を知る者は、今は只一人。此の世界（ハルケギニア）の運命を北叟笑（ほくそ）む者が一人。

だが、彼自身の運命は、果たして彼にどの様な試練を齎（もたら）すのか……。

それを知る者は、今は未だ誰も居ない……。

只、【原初】のみを除いて。

ＺＥＲＯと鋼牙とヴァリエール家（後書き）

如何でしたでしょうか？

原作上では、此の後、戦争が始まる年末まで、一気に時間が飛びます。

ですので、誠に申し訳有りませんが、その間の時間繋ぎと致しまして、

再び幕間を、二話続けて投稿したいと思って居ります。

恐らく又、大変短い文章が続いてしまうかと思いますが、どうか御諒承下さい。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

幕間5（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，５７５，２６７アクセス　ユニーク：１３４，３７０人
皆様、いつも有難う御座います。

さて、今回からは、丁度切りも良いので、二話続けて幕間を投稿したいと思います。

その為、大変短い文章が続いてしまいますが、どうか御諒承頂ければ幸いです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

幕間5

ｓｉｄｅ：ガウレイ街道ｉｎビストレオ

「……ったく、本当に酷い奴だな、お前は。」

「アハハ……ホントにゴメンね？　エル。」

「まぁまぁ。アルの行く場所なんて判り切ってるんだから、未だ良い方じゃない。……ね？」

「そうは言うがな？　アレスト。

こう、ほぼ毎回の様にやられては、此方としては堪ったもんじゃないぞ？」

「……エルレイド。そう余りガミ付くな。アルとて解っているだろう。

アルもだ。余り、俺達に心配を掛けるな。アレストも大分慌てていたんだぞ？」

「ちょっ、ちょっとっ！　オルクスッッ！！　それは言わない約束でしょうがッ！！！」

「……済まん。忘れていた。」

「……あれすと～～～♪♪♪　やっぱ、僕もアレスト大好き～～♪♪」

「う、うわっ…！　ちょ、ちょっとやめなさいよっ！　は、恥ずかしいじゃないのよっ／／／／／／」

「「……また、始まったか……。」」

今、騒いでるこの連中は、アルのパーティー四人組。

そして、此処は獣人國ビストレオの、首都である『ビストレス』に続く主街道。

実は、アルが依頼を解決した後、皆を置いてけ堀にし、自分一人だけ街に蜻蛉返り(とんぼ)した為、

パーティーメンバーに怒られていたのだ……が、矢張り何時も通り、なあなあになっていた。

そして、彼等はその儘、アルの為に次なる依頼を熟(こな)しに、首都から出て来た所である。

さて、では此処で彼等の紹介をするとしよう。

「う～～♪♪　あれすと～～～～♪♪♪」

アレストという少女に、抱き付いて甘えているこの少年は、アル＝ブレスト。犬の獣人。

ギルドランクはＢ＋（ビープラス）。このメンバー中では最年少であり、最もランクが低い。

「もう……好い加減離れなさいよねっ…／／／」

そう言いながらも、満更では無く照れている、紅一点の少女。アレスト＝コーレイル。

空國『ミスカイル』の人間。ギルドランクはＡＡ＋（ダブルエープラス）。

アルに次いで若いが、実はメンバー中では二番目に強い。

「……全く……何時迄そうやって騒いでる気だ？　此処は天下の往来だぞ？」

そう溜息混じりに二人に御小言を並べる男は、エルレイド＝ボルニウス。

鳥人國『バーデスト』出身。ギルドランクはＡＡ。主にメンバーの

保護者的存在。

因みに、メンバー唯一の妻子持ち。偶に一人で帰っては、家族サービスをしている。

「……余り、そう言ってやるな、エルレイド。彼等も未だ子供なのだから。」

そう言って、エルレイドを宥(なだ)めている男は、オルクス＝ガルネイド。妖精國『フェアレイス』在住のハーフエルフ。ギルドランクはＳＰ(セミプロ)。

因みに、アレストの従兄であり、何気に恋人でもある。メンバー公認。

さて。メンバー紹介が終わった所で、幾つか補足説明しておこう。

1. ハーフエルフの彼が妖精國に在住している理由

一般的に、ハーフエルフやハーフフェアリーは、純然たるエルフや妖精族には嫌忌されている為、

そういう所を追い出された者は皆、妖精國に身を潜めるのである。

故に、妖精國の現人口構成は、ハーフ族８割、純然な妖精族２割で構成されて居り、

妖精族と、その他ハーフ族は完全に区切られて過ごして居る。

何故、妖精國では受け容れているのかは、又別の機会に。

2．ギルドランクＳＰ（セミプロ）とは一体何か？

ＳＰとは、ＡＡＡの上位ランクであるＳランクに、実力は有るのになれなかった者達。

若しくは、Ｓランクから落とされてしまった者達。

そういう者達は皆、ＡＡＡランクになるのだが、実力が本来のＡＡＡランクとは桁が違うので、

ＡＡＡランクと区別する為に、同情・侮蔑・純粋な尊敬等を込めて、そう呼ばれるのである。

尤も、前者の二つが圧倒的に多いが、オルクスの場合は、純粋な強さへの尊称である。

Ｓランク以上への特殊ルールや、名の由来については、これ又、別の機会に。

3．アル達はこれから、何をしようとしているのか。
それについては、彼等の会話を聞いて貰うとしよう。

「……ねぇ、アル。所で、今度は一体どんな依頼を請け負って来たの？」

「あのね？　モンスター退治♪　今度こそ間違い無くＡ－以上の奴だよ♪♪」

「ほう……どれどれ……って、お前……。」

「ふむ……成る程。確かに、これならばＡ－以上のモンスターだな。」

「えへへ～～でしょ？　最低ランクがＡ－の魔物をやっつければ、絶対大丈夫だもんね♪

僕ってあったま良い～♪」

「「この大馬鹿（者）！！！！！」」

「……ふぇ？　何で？」

「……まぁ、請け負って来たのでは仕方が無い。どうしても、アルに手に負えないのであれば、

私達がどうにかしよう。それがチームと言うものだろう？」

「……オルクスはアルに甘過ぎるわよ……。まぁ、それでアルのランクが上がるんなら、

私達も幾分か楽になるから、良いんだけどね……。」

「……ハァ。仕方無い。メンバーの意向に従うとするか。……ほら、アル行くぞ？」

「うん♪！！　有難う！　オルクス！　アレスト！　エル！」

「「「……全く。」」」

と言う事である。つまり、Ａ－ランクに後一つ、熟(こな)した依頼数が足りなかったアルの為に、

皆で協力して、何とかＡ－ランクの依頼を終わらせてしまおうと言う話である。

しかも彼等は皆、Ａランク以上の実力者なので、
アル以外には、ランクへの付加価値としては無価値である。
故に、これは純粋にアルの為だけの依頼なのだが……本人は至って暢気（のんき）である。

「……しかし……この敵ではＡ－所か……。」
「ええ……。何処かの魔王によって強化されていたら、最悪Ｓランク近くは行くわよ？」
「……ふむ。……百の魔獣の王……キングレオか……。」
「……ふ～ふふ～～ん♪♪♪」←スキップ中
「「「……駄目なんじゃ無いか？　この依頼……。」」」

そして、彼等は止む無く依頼を熟(こな)しに、討伐対象の許へと向かうのであった。

彼等の戦いについては、又何(いず)れ。

幕間5（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回出た敵の名前に、「は？」と思われた方も多くいらっしゃると思いますが、

それは次話の後書きにて、少し御説明させて頂きたいと思います。

ですので、どうか今回はスルー推奨で御願い致します。

それ以外の御質問でしたらば、どうぞ何なりと。

何とか明日迄には、続きを投稿出来る様にしたいと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

幕間６（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，５９２，３１７アクセス　ユニーク：１３５，４５１人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、前回宣言致しました通り、二話続けての幕間です。

少々、食傷気味かもしれませんが、どうか御付き合い頂ければ幸いです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

幕間6

ｓｉｄｅ：とある廃城

主街道を大分外れた先に在る、何百年も前に魔物に依って滅ぼされた廃城。

其処に、住み着いて居る魔物……百の魔獣の王……キングレオ。

今、アル達は、その城の主と対峙していた。

「……くそっ！　やっぱり、こいつ強過ぎるぜ…！！」

「だから、言ったじゃない！　この大馬鹿ってぇ！」

「五月蠅ぇ！　今、それ所じゃ無ぇや！

文句や愚痴は後でたっぷり聞いてやるから、今はこっちに集中しろぃ！」

……御判り頂けるだろうか？　最初に喋っていた乱暴な言葉遣いの男がアルである。

実はアルは、戦闘時にのみ口調と性格が変わる、二重人格者なのである。

そして、或る意味何時も通りに、アレストと口喧嘩をしながらも、敵の攻撃を避け、

的確に急所を突いたりして、ダメージを与えてはいるが、丸で堪えた様子が無い。

どうやら自動的に傷が治っている様だ。

こんなチマチマしたものじゃ無く、一発でかいのじゃ無いと意味が無い。

その事に気付いたアル達は、オルクスとエルレイドの詠唱時間を稼ぐ為、

敵の注意を引き付けて居た。そして、今その準備も完了し、何時でも撃てる態勢になった。

「言われなくても！　オルクス！　エル！　そっちはどう！？」

「……問題無い。……今、終わったぞ！」

「ああ、此方は何時でも準備万端だ！」

「良し！　それじゃあ、早速行くわよ！！」

「「「ああ（おお）！！！」」」

そのアレストの掛け声を合図にして、其れ其れ散々に散らばる。

その様を黙って見ていたキングレオが、今迄の沈黙を破り、猛り吠えた。

「……フン！　小賢しい人間の小娘風情の策謀など、我が力で粉々に粉砕してくれるわッッ！！」

「ヘッ…！　そうやって吠え面掻いていられるのも、今の内だぜ…ッ！！！」

「……我が呼び声に応えよ…！　彼の者に天罰を与え給え……！！！」

「……風よ…！　我が声が聞こえたならば、我の求めに応じよ……！！」

そのキングレオの言葉に、更に挑発して来るアル。思わず激昂し掛けたキングレオだったが、

突然聞こえて来た、呪文詠唱の言葉に気を静め、攻撃対象を定め直した。

「ヌ…！　魔法か…！　その前に殲滅してくれるわッ！！　コオオオォォォーーーッッッ！」

そして、キングレオの大口から、身を切り刻む程に凍て付いたブリザードが吹き出た。

「クッ…！　あれは……輝く息！？　そんな馬鹿な？！

キングレオがあんな上位ブレスを使える筈が…！！」

「忘れたの？！　きっと近くに魔王が居るのよ！　気を引き締めなさい！

あいつは、恐らくSランクは優に固いわよッ！！」

「……チッ…！　やっぱ、楽にはいかねぇか…！！」

どうやら、想定していた最悪の事態……何処ぞの魔王に依る強化が為されていた様だ。

ランク上では、自分達よりも圧倒的に強いと判断した四人は、

一切遠慮仮借する事無く、今、自分達に使える最強の攻撃を放った。

「……その吹雪ごと斬り刻んでやるッ…！　魔力覚醒…！　バギムーチョ！！！」

「……天に押し潰されろ…！　メテオ！！！！！」

「…！！　ヌウウウウウ…！！！！　グアアアアアアアアアア！！！！」

エルレイドの、魔力覚醒によって威力を底上げされた、最強真空魔法バギムーチョが、

輝く息ごとキングレオを包み込んで斬り刻み、オルクスのメテオに依る追撃で、

体力を大分削った。……後は、最も威力のある接近戦による奥義で仕留めるだけ…！！

「……これで、墜ちなさい。……ギガスラッシュ！」

「ヌグアアアァァァァ！！！！！　……ゥグゥゥ……ま、未だだ……未だ終わらん…！？」

アレストに依る、横薙ぎの強烈な一閃が直撃し、さしものキングレオの巨体も吹っ飛び、

吹き飛ばされた先で膝を付けたが、何とか堪え切る事が出来た様だ……が。

「……いいや、これで終わりだよ…！　バティカル…！　フレアァァッッッ！！！！！」

「何ッ！？　グオオオアアアアァァァァーーーーーッッッッッッ！！！！！！

こ、このオレが……！　こ、こ、こんな所で…終わる筈は……ぁぁぁぁッッッ！！？」

「……これで、止めだ。あの世で闇魔様に土下座でもして来な…！！

ギガ…！　ブレイクッッッッ！！！！！！！！！！」

「グギャアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーッッッッッッ！！！！！」

「……Sランク討伐目標、キングレオ。討伐完了。」

そして、城の主を倒された配下の者共は、恐れを成して、全て城か

ら撤退していった。

ｓｉｄｅ：三人称

「……アル。御疲れ様。」

「あ、あれすと～♪　やった、やったよ～♪♪　あのキングレオを倒しちゃったよ♪♪♪！！」

「え、ええ……そうね。……やっぱ、この変わり様は絶対に慣れないわよっ（ぼそっ）。」

「？？？」

「「「いや（いえ）、何でも無い（わよ）…。」」」

何はさておき、勝利を喜び合う四人。そして、戦闘が終わると直ぐ様、何時ものアルに戻る。

その変わり身の早さに絶対、生涯慣れる事は無いと、改めて確信した三人であった。

そして、一人判らず首を傾げているアルに、三人して苦笑しながら、一緒に街に帰って行った。

ｓｉｄｅ：首都『ビストレス』ｉｎビストレオ

今、このギルド員専用の酒場でアル達は、アルのギルドランクＡ一昇格祝いを盛大に祝っていた。

「まぁ、何はともあれ、おめでとうアル君♪」

「うん♪！　ありがとう、お姉さん♪♪♪」

「……私達が祝ってあげた時より、よっぽど喜んでるわね。」

「……まぁ、良いじゃないか。ちゃんとＳランク認定もされて、僕達の糧にもなったんだから。」

「……まぁ、いいんだけどね…。」

「……フッ。所で、エルレイド。次の目的地は何処にするんだ？」

「そうだな……そろそろ、私も妻と息子達の顔を見に行きたいんだが……。」

「じゃあ、次はバーデストに決定ね。」

「お、おい…。……本当にいいのか？　そんなに簡単に決めてしまって……。」

「良いのよ。……ぶっちゃけ此処じゃ無ければ。」

「「……ああ。」」

「えへへへ～～～♪♪♪♪♪♪」

「よしよし♪♪♪♪♪」

「……あのバカップルは、流石に見ていて目に毒だもの。」

「「……確かにな。」」

「それに、それだけじゃ無いのよ？」

「？　というと？」

「……さっき、知り合いの情報屋から聞いた話なんだけどね？　何でも、バーデストで魔物が大量発生して来ているらしいの。今は、丁度ＧＩＲＬＳＮＩＮＥ（ギルズナイン）の真っ最中でしょ？　そんな時に、魔物の大量発生。

……なんか焦臭（きな）いと思わない？」

「……流石に、それは穿ち過ぎじゃ無いか？　偶々、時期が一致しただけかも知れないし…。」

「それでも良いのよ。どっちにしろ、この國から離れられる理由にはなるし、

何より、エル。アンタだって、早く奥さん達の顔みたいでしょ？」

「ま、まぁ……そりゃそうだが……。」

「……では、今度こそ其処に決定だな。」

「……済まないな、みんな。」

「何、気にするな。それで、出発は何時にする？」

「……そうだな……荷物やら、別れる迄の期間やらを鑑みて……三日後かな？」

「……そうだな。それぐらいあれば、十分だろう。」

「じゃ、それで最終決定ね♪　……後は……あの阿呆をどうするか…ね……。」

「「……それがあった……ｏｒｚ」」

「えへへへ～～～～～♪♪♪♪♪　お姉さん大しゅき～～～～♪

♪♪♪」

「うふふふ～～～♪♪♪♪♪♪　私も大好きよ♪♪♪♪　アル君～♪♪♪♪♪」

“バカップル、自重しろ。”

店内に居た客・従業員の全員でツッコミを入れたとか、呆れて入れる気にもならなかったとか。

で、結局、三日後。受付のお姉さんと別れるのを、もんの凄く嫌がったアルを連れ出すのに、

まる六時間程、掛かったそうな。その間、周りの好奇と生温かい目にずっと晒されたそうな。

「では、行こうか。皆、転移装置に乗ってるな？」

「ええ。」「ああ。」「……うん。」

「……そろそろ、機嫌を直せ、アル。

今度戻って来た時に、もっと強くなって驚かせてやればいいだろ？　きっと喜んでくれるぞ？」

「……本当に？」

「……ああ。……多分な（ボソッ）。」

「……うん、解った。僕、頑張る！」

「よし、その意気だ！　では、改めて行こうか！
いざ、我が故郷……鳥人國『バーデスト』へ！！　転移装置起動！
目標、バーデストが首都！　『バーデニウム』へ！！！」

『目標。鳥人國バーデスト。首都バーデニウム。了解致しました。
……転移。』

そして、アル達の冒険は、鳥人國『バーデスト』へと、その舞台を移す。

だが、アル達の御話は、一旦これまで。又の機会を御楽しみに。

次なる冒険者……その主役は……。

「……久しいな。一体、何時振りか……。此処に帰って来るのは……。

我が故郷……魔人國『デモニアン』に帰って来るのは。

あいつは、今も元気にしているだろうか……フッ。考えるだけ野暮ってもんだな。

あいつが、そう簡単に死ぬ訳は無いからな。早く、お前に会いたいな。

早く会って、久し振りにゆっくりと酒を交わし合いたいものだな……。

『デモニアン』魔皇……クルセイド＝デモニアンよ。

貴様の親友（とも）……ガルスラム＝グラジルドが、今帰って来たぞ…！！」

独り、時に残された者が目にした光景とは……。

そして、彼が起こしたとある行動とは、果たして……。

初代魔皇クルセイド＝デモニアンが親友（とも）。ガルスラム＝グラジルドが織り成し、紡ぐ次なる物語。

その幕が上がる日を、どうか御楽しみに。……今は、一先ず、これまで。

幕間6（後書き）

如何でしたでしょうか？

これにて、暫く幕間は御休みです。次からは、又本編に戻ります。

さて。今回、皆様が何処かで見た事が有る技名が、幾つか出て来ましたが……。

まぁ、そういう訳です（どんな訳だ？）。

はっきりと技名を宣言していますので、確と原作名として三つのゲーム名を登録致しますが、

正式な登録をするのは、此の世界『グランギルズ』に来てからと致したいと思っています。

どうか、それまでヤキモキ乃至（ないし）は、ワクテカして頂ければ幸いですw

それと、ちょっと今週必死に上げ過ぎた為か、少々ヘマをしてしまいまして、

今月、投稿出来るのは、後1～2話程度になってしまいます。申し訳有りません。

これからは、大分ペースも落ちてしまうと思いますが、どうか末永く御付き合い下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

炎蛇とダングルテールと、そして……『究極の創世』（前書き）

現時刻（１６：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，６４７，６３４アクセス　ユニーク：１３９，０２１人
皆様、いつも有難う御座います。

御待たせ致しました。凡そ十日振りの本編です。

来月も、恐らく一～二本上げられれば良い方なぐらいの、
ペースになってしまいますが、どうか御諒承下さい。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

炎蛇とダングルテールと、そして……『究極の創世』

ｓｉｄｅ：魔法学院

戦争が始まった。そう皆が、如実に認識したのは……

才人達がゼロ戦と呼んでいるあの『竜の羽衣』に乗って、前線に行ってしまってからだった。

其処で初めて皆、これが現実に起こっている話なのだと。

……これから、沢山の人達が誰かを殺し、誰かに殺されるのだと、ようやっと認識したのだ。

しかし、どれ程そんな恐怖に怯えていようとも、

自分達に出来る事は只、皆が無事に帰って来てくれるのを祈るのみ。

そして、時間は何時迄も待っていてはくれない。今日も、大幅に減った授業の時間が来た。

……だがしかし今日からは、その何時もとなってしまった風景も、様変わりしていった。

ドカドカッ！！

「きき、君達は、な、何だね？！」

「アンリエッタ王女の銃士隊だ。王女と王代理の名に於いて諸君等に命令する。

これより授業を中止して軍務教練を行う。正装して中庭に整列。」

「……何だって？　授業を中止する？　巫山戯（ふざけ）るな！」

「……私だって子守などしたくは無いが……これも命令でね。」

女生徒達も、命令では仕方ないとぶちぶち文句を垂れながらも皆、次々と席を立ち始めた。

慌てて、皆を先導するアニエスの前に立ち塞がり、引き留めるコルベール。

「こらこら！　未だ授業は終わってはおらんぞ！」

「王女と王代理の命令だと言っているだろうが。……聞こえんのか？」

「誰の命令であろうが、今は授業中だ。

後、十五分は生徒を学ばせる為に、その王女から与えられた私の時間だ。

貴女に命令される謂われは有りませんぞ。諸君！　教室に戻りなさい！

後十五分、きっちり学びますぞ！　戦争ごっこはそれからでも十分だ！」

毅然（きぜん）とした態度でアニエスの前に立ち塞がり、皆を叱責して引き戻そうとするコルベール。

しかし、その言葉の中には看過出来ぬものも有り、アニエスはそれに過敏に反応した。

「……教練を戦争ごっこと言ったな。本職を愚弄するか？

ミスタ。此方がメイジでは無いと思って、余り舐めた態度を取られるな。」

「べ、別に舐めては……。」

流石に、剣を喉元に突き付けられては、コルベールも勢いを落としてしまった。

その様を、軽蔑するかの様な目で見詰める、生徒達とアニエス。
その儘、アニエスが更なる侮蔑の言葉を吐き付けようとした時。
そんな時であった。……彼に止められたのは。

「アニエス、其処迄だ。それ以上は言い過ぎだぞ？」

「…！　誰だッ！！　……貴方か……カイト。」

またか……と思う女生徒達とは裏腹に、
自身の仇を教えて貰い、又、その機会も作ってくれたカイトには、
アニエスとしては幾分か恩義も感じて居り、その恩人の言葉を無碍（むげ）にする訳にもいかず、
何の用かと、アニエスの方から問い掛けた。

「カイト。貴方も矢張り、メイジの味方をなさるか？」

「いいや？　俺は寧ろ威張り腐ってるメイジ連中は、基本的には大嫌いだからな。

お前の気持ちの方が余程分かるし、大いに共感出来るさ。」

「……そうか。ならば一体、何用あって貴方も私を止める？」

「何……今、ジャンも言っていただろう？

この授業時間は、ジャンがアンリエッタより下賜（かし）されたものだと。

それに何より、学生の本分は学ぶ事。

その時間を奪う事は、お前達から剣を取り上げ、無手で剣の型を学べと言うのに等しい。

後、如何程（いかほど）の時間であろうとも続けさせるべきだ。

……それとも、教官殿はそれぐらいの時間すらも待てない程、昂揚でもしておいでかな？」

「……結構！　ならば、終わり次第、直ぐにでも着替えて参加して貰おう！

それで良いな！！」

「ああ、それで構わぬよ。……ほら、ジャンよ。何を呆けている？　折角、時間を返してくれたのだ。さっさと、授業の続きを始めようじゃないか。」

「……！　あ、ああ。そうだな…。うん、そうだ。さぁ、皆さん！　時間は待ってはくれませんよ。早く席に戻りなさい。私の授業は未だ終わってはいませんよ！」

そう活気を取り戻したコルベールに言われ、渋々と席に戻る女生徒達。

結局、五分程度しか時間は残ってはいなかったが、ちゃんと職務を全うしたコルベールであった。

「……カイト。」

「ん？　どうした、ジャン。」

授業後。珍しくコルベールが、カイトを引き留めた。

「……いや……先程は有難う。只、その礼を言いたくて…な。」

「何、構わんよ。言ったろう？　学生の本分は学ぶ事だと。

それに、この戦争の、この現状の一旦は、お前達も知っての通り、俺にも責が有る。

だから、礼を言われる筋合いでは無いさ。寧ろ責めを享ける方だろうさ。」

「……そうか。そう言えばそうだったな。」

「ああ、そう言う事だ。……それより、あの『白炎』がもう直ぐこの魔法学院に攻めて来るぞ。

アニエス達、銃士隊が来たのは却って僥倖だったな。

……ジャンよ。覚悟は出来たか？　過去を曝け出し、過去を清算する覚悟は？」

「……。」

「もう、余り時間は無いぞ？　早い内に臍を固めておけ。」

そう言い、キュルケの側に居るタバサの許へと歩いて行くカイト。

誰も居なくなった廊下で、コルベールが一人天井を仰ぎ慟哭していた事を知る者は誰も居ない。

丁度、ダータルネスに幻影が現れた頃。未だ朝日も昇らぬ……そんな早朝頃だった。

……彼等が魔法学院に到着したのは。

そして、彼等の迅速な行動により、未明の内に女生徒達がほぼ全て捕らえられてしまっていた。

……そう、ほぼ。これから、逃れられた彼女達の反撃が始まるのであった。

「食堂に籠もった連中！　聞け！　我々は王女殿下の銃士隊だ！」

ｓｉｄｅ：タバサの私室

今日も今日とて、カイトといちゃつきながらその儘眠りに堕ちるという、

至福の時を味わったタバサが不意に目覚めたのは、妙な気配を感じたからだ。

少しの間悩んだが、先ずはカイトを起こそうとした。……だが、その必要も無かった。

「……起きたか、シャル。」

「……うん。じゃあ、やっぱり……。」

「ああ、敵さんのお出ましだ。ようやっと来やがったか……さぁ、シャル。

さっさとキュルケを起こして逃げようか。」

「…（コク）。」

そして、直ぐ様キュルケの部屋へ向かい、彼女を叩き起こして窓から飛び降りて、茂みに身を隠した。……未だ、日の光は見えなかった。

その後、傭兵部隊と大声で交渉していたアニエスの声を聞き付け、コルベールと、カイト達が合流した。そして、作戦が話し合われた。

……只二人。カイトとコルベールという、最大戦力を宛てにしない方法での作戦を。

ｓｉｄｅ：アルヴィーズの食堂

其処では今、正に奇襲作戦が行われようとしていた。

黄燐を詰めた紙風船を、タバサの風で食堂内へと送り、キュルケの火でそれを爆発させる。

そして、敵の目が眩んだ隙に銃士隊が突入し、賊を殲滅する。……そういう作戦であった。

だが、その目論見は、爆発までは上手くいった……のだが、突入する事が出来なかった。

突然、光の中から幾つもの炎の弾が、キュルケ達目掛けて飛んで来たのだ。

真逆の事態に、咄嗟に反応出来なかった皆は、その炎弾の爆発の衝撃により、

ほぼ全員、一時戦闘不能になった。

「惜しかったな。光の弾を爆発させて視力を奪う迄は良かったが……。」

「…！　貴方……もしかして…目……。」

そう。伝説の傭兵。『白炎』のメンヌヴィルは、両目とも焼かれ、失明していたのだった。

だが、彼は長の間戦場に居る内に、温度を数値で正確に当てられる様になり、

今は人の見分けさえ付く程に迄、なっているのであった。

そして、何より彼が戦場に長く居た最たる理由は……

人の…生物の焼き焦げる臭いが、大好きであったからだった。……故に。

「……嗅(か)ぎたい。」

「……え？」

「お前の焼ける香りが、嗅ぎたい。」

「……。」

「今迄、何を焼いて来た？　炎の使い手よ。今度はお前が燃える番だ。」

キュルケは恐怖した。カイトに感じた、本能に直接刻み込まれる様な、根源的な恐怖では無い。

今、自分の目の前に現れている、『死』という紛れも無い現実に、丸で、年相応の少女の様に、怯え、震え……そして、『死』を覚悟した。

……だが、その死神の劫火（ごうか）は、別の炎によって遮（さえぎ）られた。

「私の教え子から離れろ。……副長。」

「おお、お前は……！　お前は！　お前は！！　お前は！！！

探し求めた温度では無いか！　お前は！　お前はコルベール！！！

懐かしい！　コルベールの声では無いか！　俺の事を覚えていてくれたか！　隊長殿！！」

「……。」

「懐かしい！　本当に懐かしいぞ！　何年振りだ？　なあ！　隊長

殿！

……そうだ。二十年だ！　そうだ！　懐かしいなあ！　隊長殿オオ！！！」

「……。」

隊長？　傭兵と知り合い？　それに、何か何時もの先生とは違う……。一体、どういう事？

生徒達の間に、動揺と騒(ざわ)つきが走り、その言葉を聞き付けたメンヌヴィルが、

とある言葉に反応し、大声で馬鹿笑いをした。

「……何だ？　隊長殿！　今は教師なのか！　これ以上可笑しい事は無いぞ！

貴様が教師とな！　一体何を教えるのだ？　『炎蛇(えんじゃ)』と呼ばれた貴様が……？

は、はは…！　ははははははははははははははッッッッッ！！！！！！！！！！！！！」

心底可笑しいと、そう嘲笑うかの様に、哄笑し続けるメンヌヴィル。

「君達に説明してやろう！　この男はな、曾(かつ)て『炎蛇』と呼ばれた炎の使い手だ。

特殊な任務を行う隊の隊長を務めていてな……。

女だろうが子供だろうが、構わずに燃やし尽くした男だ。」

皆の目がコルベールに向けられた。誰もが信じられない想いで、彼を見詰めた。

「そして、俺から両の目を……光を奪った男だ！！！」

その歓喜混じりの咆哮が終わった刹那、コルベールの杖から、巨大な炎の蛇が躍り出、

隙を伺って、呪文を唱えようとしていたメイジの杖を、一瞬にして焼き払った。

そして、二つ名の通り、爬虫類を思わせる感情の無い冷たい笑みを浮かべながら、

傍らに居るキュルケに問い掛けた。……噛み締めた唇から、血を流

しながら。

「……なぁ、ミス・ツェルプストー。

『火』系統の特徴を、この私に開帳してくれないかね？」

「……情熱と破壊が、『火』の本領ですわ。」

「……情熱はともかく。『火』が司るものが破壊だけでは寂しい。そう思う。

この二十年間、そう思って生きて来た。……だが、君の言う通りだ。」

互いに、臨戦態勢となった。……もう戦う準備は整ったのだ。

常とは違う、戦場の静寂が辺りを支配した。

……だが、その一触即発の空気に、決して囚われ得ない者が一人。

「ふむ。成る程。ちゃんと、覚悟の程は間に合った様だな、ジャン。」

「……カイトか。」

そう、当然の如くカイトであった。この真っ暗闇と静寂と言う名の緊張の中、

丸で風に漂うかの様に、微塵も気にせずほぼ真っ直ぐに、

倒れ伏しているタバサの許へと歩いて行き、抱き起こして介抱し始めた。

そして、その儘コルベールと会話を続けた。

コルベールももう慣れたものなのか、カイトの行動は気にせず、

メンヌヴィルへの意識は一切緩めず、カイトと話し続けた。

「ああ、そうだな。私は、今になってようやっと覚悟した。……いや、覚悟を決めたのだ。

『火』の破壊と言う本領。私はそれが嫌だった。只、それだけである事が、何より恐かった。

……だが、それでは駄目なのだ。事実から目を背けては決して先に進む事は出来ないのだと。

だから、私は覚悟を決めた。全てを終わらす爲に。」

「……ふむ。まぁ、お前がそうと決めたのならば、別に俺は構わんさ。

好きにするといい。……だが。」

「……何かな？　カイト。生憎（あいにく）とこのけじめだけは是非共、私に付けさせて貰いたいのだがね？」

「いや、何。その邪魔は一切せんよ。只、単に協力してやろうと言うだけだ。」

「……協力？」

「そう、協力だ。お前達が決着を着けるに、相応しい舞台にしてやろうと思ってな。」

シンと静まった中。その二人の声だけが響くこの中で、続けられるその会話。

唐突に現れ、一瞬で場を支配してしまったカイトに、不気味さを覚

えたとある傭兵が、

可哀相な事に、その本能を抑え切れず、思わずカイトを制止しに掛かってしまった。

「……！？！？　お、お前ッッッ！！！　い、い、好い加減にダマレッッッ！！！！！！」

「あ〝？　邪魔だよ、てめぇ。人が話してる時に横槍入れんじゃ無ぇよ。

『雷の斧（ディオス・テュコス）』」

「……は？　ッッッ？！？！」　ザンッ……！

“……。”

カイトに突っ掛かったその憐(あわ)れな贄(にえ)は、唐突に自身の頭上に現れた雷光迸(ほとばし)る斧に、

真っ二つにされた後、別たれた左右共に、雷撃に依る追撃にて真っ黒に焼き焦げた。

それ程の呪文を、一切の詠唱無しに使ったカイトに、全員絶句した。

……カイトの実力を知っていた二人でさえ、改めてカイトの出鱈目さに驚愕していたのだから。

「さて。少々邪魔が入ったが、改めてお前達に相応しい舞台を用意するとしよう。

篤(とく)と拝むと良い。……コレを見せるのは、貴様達が初めてなのだからな。

我が身は世界
《Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ
ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｗｏｒｌｄ.≫」
を成す。

唐突に、朗々と始まったカイトの、初めて聞く詠唱に皆、思わず固(か)唾(たず)を呑んだ。

……そして、瞳から涙が溢れて来た。

力は破壊のみ、

心は破滅故。

《Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｄｉｓａｓｔｅｒ ｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.》

その詠唱の意味が……何故か、理解出来てしまったから。

だからこそ、彼女達は涙を堪（こら）え切れ無かった。

数多の世界を

救いて尚。

《Ｉ ｈａｄ ｓｅｖｅｄ ｏｖｅｒ ｔｈｅ ｉｎｆｉｎｉｔｙ ｗｏｒｌｄｓ.》

こんな悲しい詠唱(うた)が……寂しい人生が有るのだと……既に知るが故に。

一度も認められない。

只一度も受け容れられず。只

≪Ｈａｔｅ ｏｕｔ ｏｆ ｗｏｒｌｄ. Ｎｏｒ ａｃｃｅｐｔ ｔｏ ｅｘｉｓｔｅｎｃｅ.≫

故に、モンモランシーはその様な悲しみを許せず。キュルケはその凄絶（せいぜつ）な人生に涙し。

創世と消滅を繰り返し、
我等は我等の途を征く。
《Ｏｖｅｒ ａｎｄ ｏｖｅｒ ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｎｅｗ ｗｏｒｌｄｓ．ｇｏｉｎｇ ｔｏ ｏｕｒ' ｓ ａｒｒｉｖａｌ．》

コルベールは、カイトの詠唱（うた）の裡（うち）に込められた固い決意と覚悟と、その人生に驚愕し。

我が生涯は艱難辛苦に彩られ。

唯、混沌在るのみ。

《I have calamity. This is the only chaos.》

そして、タバサは……改めて、カイトの支えに成りたいと……。

故に我が尽きぬ望みは、世界の極みにより創られる。

《So my eternal wish, Ultimate World Works.》

その望みを叶えてあげたいと、切に願った。

s:ide：固有結界『究極の創世：《Ultimate(アルティメット) World(ワールド) Works(ワークス)》』

真っ白な光に包まれた皆が、次に目を開けた時には、その風景は様変わりしていた。

何処迄も、先が全く見えぬ程に広い大草原。そして、其処を吹き抜ける春を思わせる風。

其処彼処（そこかしこ）に散見される岩。潺（せせらぎ）も聞こえる事から、何処かに川なども在るのだろう。

だが、そんな風景だからこそ、最も異様と思えるものが此処には在った。

……否、無かったと言うべきだろうか。……そう。この世界には、『空』が無かったのである。

唯唯、只管（ひたすら）、真っ白な空間が、『空』が在るべき空間に広がっていた。

その気味悪さに、思わず顔を顰（しか）める者。……果ては蹲（うずくま）って嘔吐する者すら居た。

そんな奇異な中。一人、中心と思われる位置に佇んでいる者が居た。
……カイトである。

その側には、タバサが居た。……他の女生徒達は、アニエス達の側に。

そして、傭兵達は何時の間にか、既にカイトの手に依ってか捕らえられて居り、

肝心のコルベールとメンヌヴィルは、皆より少し離れた位置にて、

互いの距離を保った儘、対峙していた。……そうして互いの位置をほぼ全員が確認し終えた頃。

タバサに聞かれ、カイトが徐(おもむろ)に皆に向けて、此の世界の説明を始めた。

「……カイト……此処は一体……？」

「……此の世界は、固有結界。『究極の創世(アルティメット・ワールドクス)』。

固有結界とは、術者の心象世界を具象化し、現実世界に浸食させる究極の魔術にして禁術。

つまり、分かり易く言えば、此の世界は、俺の心の風景。

俺の心を、形にして現実世界に顕した物。言わば、俺の全て。俺そのものと言う訳だ。」

「……この……世界が……貴方そのもの？　……こんな……。」

「……こんな不気味な世界が……か？」

「え？　……あ、そ、そういう意味じゃ無くて……。」

「いや、何構わんさ。シャルにも解る通り、此の世界は未だ不完全。未だ俺の心は、確(しか)と定まってはいないのさ。詠唱自体も覚悟も出来上がってはいるのだがな。

如何せん、未だ形として成すには修行が足りん。まぁ、だがそれ

は、何れ出来るだろうさ。」

「……そう。」

どうやら、一見清浄そうな此の不気味な世界は、未だ不完全故の弊害らしい。

それを聞いてタバサはホッと一安堵した。此の世界が未だ発展途上だと知ったから。

それならば、未だ大丈夫だと。未だ望みは有るとそう思った。

何故ならば、真っ白な空さえ見なければ、此の世界……この大地はとても綺麗なのだ。

そして、目を瞑ればとても良く解る。……此の世界はとても気持ちが良い。

吹く風の心地良さも。吸う空気の美味しさも。草が戦ぐ優しい音も。

それらの心地良さがタバサを優しく包み込む。だから、大丈夫だと思った。

こんなにも、温かくて、心地良くて、優しい世界が、破壊と破滅に彩られる事は決して無いと。

そんな僅かな幸せを、タバサが堪能していると、カイトがあの二人に話し掛けた。

「さあ。これにて、舞台は調った。存分に戦い、最初のけじめを付けるがいい、ジャン。」

その言葉を皮切りに、『炎蛇』と『白炎』の炎舞（えんぶ）が繰り広げられた。

結論から言えば、コルベールの圧勝であった。

巧みにそれと気付かせずに誘導し、誰も巻き込まぬ様に、皆から更に離れた所で、

『火』＋『火』＋『土』のトライアングルスペル……『爆炎』を使い、只の一撃で殺した。

そして、その死体を何の感慨も無く冷えた目で見下ろし、戻って来たコルベールを迎えたのは、

アニエスに依って、喉元に突き付けられた剣であった。

「な!?　貴女、一体何を…！」

「……貴様が、魔法研究所実験小隊（アカデミー）の隊長か？　王軍資料庫の名簿を破ったのも貴様だな？」

「……そうだ。」

突然のアニエスの行動に、思わずキュルケが声を荒げたが、一向に気にもせず、

何事かをコルベールに、確認するかの様に問い質し、それにコルベールが応えると、

殺気が溢れ出て来た。……アニエスからだ。

「……ならば、教えてやろう。私は『ダングルテール』の生き残りだ。」

「……そうか。君が……。」

「何故、我が故郷を滅ぼした？　答えろ！」

「……命令だった。」

「命令……だと？」

そして、コルベールの口から紡がれた言葉は……

その真実は皆を驚愕させるには、充分過ぎる程の威力を伴っていた。

「……ああ、そうだ。……疫病が発生したと告げられた。焼か

ねば被害が広がると。

……その様に告げられた。故に、仕方なく焼いた。」

「バカな……！　それは嘘だッ！！」

「……ああ。後になって私も知った。要は……アレは『新教徒狩り』だったのだ。

私は毎日罪の意識に苛(さいな)まれた。あいつの……メンヌヴィルの言った通りの事を私はしたのだ。

女も子供も、見境(みさかい)無く焼いた。……許される事では無い。忘れた時など只の一時とて無かった。

私はそれで軍を辞めた。二度と炎を……破壊の爲には使うまいと思った。」

そう言い、首を振り、コルベールは自身の思いの丈を……贖罪(しょくざい)を求める様に、更に話を続けた。

「……私は研究に打ち込んだ。一人でも多くの人間を幸せにする事が私に出来る贖罪と考えた。

……いや、贖罪などとは傲慢だな。これは、『義務』なのだ。

私にとって、生きて世の人々に尽くす事は『義務』なのだ。

私には『死』を選ぶ事すら、赦されないのだ。」

「……貴様は、生きて世に尽くせば、罪が消えるとでも思っているのか？

貴様が世に尽くす事で、私の家族の、友人の無念が張れるとでも言うのか…！」

そして、コルベールはこれが最後だと……杖を置き、床に跪いた。

「晴れぬ。晴れる訳が無い。罪は決して消えぬ。何時迄も消えぬ。

此の身が滅んでも消えぬ。

罪とはそういうものだ。私はだから、貴官に私の『死』を委ねる。

私にとっては『死』を選ぶ事すら傲慢だが……唯一、私の『死』

を決定出来る人物が居る。

……貴官だ。あの村の唯一の生き残りである貴官だけが、

私を……彼等の慰めの爲に、殺す権利を持って居るのだ。」

その言葉が終わると、もう話す事は何も無いと……。只、裁かれるのを待つ罪人の如く。

……そして。

「……そうか。では……死ね。」

周りの者が止める間も無く……アニエスの剣は、誰に阻まれる事無く、

コルベールの胸に吸い込まれていった。

誰も、言葉が出なかった。キュルケはコルベールの遺体に泣き縋り、女生徒の大半は気絶した。

当の討った本人は呆然とし、銃士隊の面々は声を掛けられず……

そして、カイトがタバサを伴い、皆の許へと来、アニエスに声を掛けた。

「アニエス。仇を討ち終わった感想はどうだ？」

「……討ち…終わった……？」

「ああ、そうだ。首謀者のリッシュモンと、最たる実行者のジャンはお前が殺し、

副長は、元隊長の手によって処刑された。他の面々も皆、駒として使い捨てられたか、

何か名目を作って既に全て殺されている。今此処に、お前の復讐は完全に相成った。

故に、再度聞こう。復讐を遂げた今の感想はどうだ？

嘸（さぞ）かし至福の時を味わっているのだろうと思ってな。」

「……至福……だと？　巫山戯るな！！！　これが……！　こんなものが……！！

至福などであって堪るかアアアアッッッッ！！！！！

……なんだ…これは…ッ……！　一体、なんなのだ……この空しさは…！

この空虚さは……！？　私は……私は……こんな想いをする爲に、生きて来たのか……！！」

「……ふむ。仇を取った事に依る、友や家族への慟哭よりも、先ず先に空しさが募（つの）ったか。

成る程。つまり、お前にとって、最早復讐は二の次になっていたと言う訳だな。」

「……（ギリッ）！！！　貴様に……！　貴様に何が解るッ！！」

「解るともさ。俺とて、既に復讐を終えた身だ。」

「……な……ん……だと……？」

「まぁ、そういう訳なのでな。故に経験者から聞いているのさ。復讐を遂げた感想は？　……と。」

その二人の会話に誰も入っていけず、只、黙って聞いていたが、到頭耐えられなくなったのか。

とある一人が眦（まなじり）を上げて、二人をキッと睨み付け、言葉を荒げた。

「……巫山戯ないで…！！　何が復讐よ…！　そんな下らないもの…クソ喰らえだわ…！」

「……何？　貴様の様な小娘に解ろう筈も無い。黙っていろ。」

「解りたくも無いわよ、そんなもの！　彼を殺して何になるって言うの！

それで誰かが生き返るの！？　それで誰が喜ぶの！？　それで誰が幸せになれるの！？」

「綺麗事だな。所詮は御貴族様の……それも子供の戯言だ。」

「……そう。ならば結構…！　私も、貴女を殺させて貰うわ。」

「……ほう。何故？　……と聞いても良いかな？」

「……先生の仇を生徒が取るのは、そんなに不自然かしら？」　スッ……

「……成る程。確かにそれならば自然だな。」　チャキッ……

互いに、杖と剣を掲げて一触即発の状態。皆がハラハラしている最中。

「……あ～～……盛り上がってる所、悪いんだがな？」

「「何よ（だ）ッッッ！！！」」

「いや、そろそろジャンを生き返らせても良いか？　って聞きたいんだが。」

“……え？”

皆、カイトが何を言ったのか、全く理解出来なかった。

しかし、誰よりも早く我に返った者が、カイトに問い質した。

「救世主(メシア)よ！　今の言葉は真か！？　『炎蛇』を蘇らせられると言うのは！！」

「あん？　……何だ、オスマン坊や。お前居たのか。」

……どうやら、今頃になって、ようやっと皆に気付いて貰えた様である。

※因みに。オールド・オスマンの状況を説明すると。

メンヌヴィルの炎弾の内の一つが、不幸にもオスマンにも衝撃を与え、気絶していたのだ。

そして、目が覚めてみると、目の前にはコルベールの遺体。

そして、その側では、女生徒(キュルケ)と銃士隊隊長(アニエス)が殺気を漲(みなぎ)らせて一触即発。

良く混乱しなかったと、我ながら誉めてやりたい。そんな時に、カイトの言葉が聞こえ今に至る。

「……酷い。……儂、もう泣いちゃう…。って、

それ所では無いわッ！！

救世主（メシア）よ！　今の御主の言葉の真意を聞きたい。」

「は？　真意もへったくれもねぇよ。生き返らすっつったんだ。他にどんな意味に聞こえるよ？」

改めてのカイトの言葉に、誰しもが信じる事など出来なかった。

しかし、その皆の反応が解っていたのか。

気にせず、コルベールの許にしゃがみ、その身体の上に手を翳（かざ）し、皆へと言葉を向けた。

「モンモンは……一応起きているか。なら、まぁいいや。良く見ておけ。

これが治癒魔法の究極。蘇生呪文だ。蘇れ……『炎蛇』ジャン・コルベールよ。

『ザオリク』。」

そう最後に一言呟くと、コルベールの身体が光りに包まれ、頬に赤みが差し込み、

胸が上下し始めた。……間違い無く、今、彼は生き返ったのだ。

その後。何時の間にか、消えていたカイトの固有結界。

そして、捕らえた者達を王宮に引き渡す為に、未だ夜明けが来たばかりの中、

完全に意気消沈したアニエスに肩を貸しながら、銃士隊は引き上げていった。

……何時の間にか、カイトが生き返らせていた、他の銃士隊の面々を更に抱えながら。

そして、他方。生き返ったばかりのコルベールは、

カイトとキュルケの勧めで、一旦、ゲルマニアに身を潜める事になり、

オールド・オスマンと、目覚めた女生徒達に断りを入れ、キュルケと共に向かった。

その後。一週間程後、タバサの許に立て続けに来た任務を熟(こな)し、学院に戻った。

尤も、その前にキュルケとコルベールの、何とも言えない凸凹カップル？　を見て来たが。

こうして、又一人。役者は舞台に上がった。

次なる運命に翻弄されるは……果たして誰か。

その運命は……世界は……。

今は、只、安穏と過ごして居る少女に、その狙いを定めて居た。

そして、又一人。次なる役者が……新たな主役が舞台にて舞い踊る日を……。

世界は、今も雌伏の時を虎視眈々と狙い続け、只管（ひたすら）に待ち続けている。

只、その爲だけに、彼が舞台から引き摺り下ろされる事になるとも知らず……解らず……。

今、その少年は、友と、戦友と、恋人と共に……。只、日々を暮らしていた。

炎蛇とダングルテールと、そして……『究極の創世』（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回も少々強行軍にて、押し進めました。これにて、何とか第六巻は終わりです。

次回は、第七巻。早くも、その終盤辺り。

私がこの『ゼロの使い魔』にて、一番書きたかった話の内の一つです。

果たして、どの様な結末に相成るのか……どうぞ御楽しみに。

あ、因みに、伏線も一つ、その話にて回収致します。……一体、何人判る事やら……；；；

さて。今回、初めて出て来ました。未だ不完全なカイトの固有結界。

その名も、『究極の創世：アルティメットワールドワークス』。

その効用は如何に！？　……因みに、未だ内緒です。

残念ながら、この『ゼロの使い魔』の世界では、その力を御見せする事は出来ません。

恐らく早くても、この次と目論んでいる世界。その最終話辺りでしょうか……。

あ、それと。私は英語にも全く造詣が有りませんので、

「此処が可笑しい」とか「此の文・単語・熟語が間違っている」等の御指摘が有りましたら、

どうか、是非是非御願い致します。……まぁ、と言っても元ネタが元ネタですので、

少々御察し下さいという内容では有るのですが……；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

才人と戦争とサウスゴータ（前書き）

現時刻（１７：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，７０９，２７２アクセス　ユニーク：１４３，６０３人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、御久し振りです。…凡そ、半月振りですね。

誠に申し訳有りませんが、これからは恐らくは、

此の様な更新速度になってしまうかと思いますが、

どうか、これからも、宜しく御願い致します。

さて。今回は、此の『ゼロの使い魔』にて、私が最も書きたかった話の内の一つです。

正直に申し上げまして、此処の話と、後一つ。

それらを書きたいが爲に、此の作品に手を出したと言っても過言ではありません。

……大分、前置きが長くなってしまいましたので、此処迄と致したいと思います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

才人と戦争とサウスゴータ

ｓｉｄｅ：三人称

現在の戦線状況を説明しておこう。

前回。魔法学院に敵が攻め入って来た頃。

ルイズは戦線指揮官によって命ぜられ、ダータルネス方面に幻影（イリュージョン）による大軍を作り出し、

敵の大部隊を其方（そちら）に引き付け、アルビオンの港町ロサイスを占領した。

その後、シティオブサウスゴータ……そう…。

あの『土くれのフーケ』こと、マチルダ・オブ・サウスゴータの故郷を占領した。

その際、あのギーシュが褒章を享け、家族に祝福される様を見、ルイズが歯噛みしていたが。

しかし、そのシティオブサウスゴータには、食糧が一切無かった。

全てアルビオン軍が掻っ攫っていったのだ。戦争の常套手段では有る。

その爲、トリステイン・ゲルマニア連合軍の兵糧・資金等は危機に瀕していたが、是非も無し。

だが、敵も然る者、引っ掻く者。この時期を見計らって休戦を申し込んで来た。

この時期……『始祖の降臨祭』と呼ばれる、言わば御正月の様なものである。

その期間は、例え戦争中であろうとも、休む事が慣例となっている。

今から休戦するとなると、凡そ二週間程。

その間、借金を積み重ねて得た自軍達の兵糧にて、賄わなければならない。

思わず反対仕掛けたウェールズ夫婦だったが、兵や民の事を思い直し、渋々ながらも承諾した。

そして、その休戦の真っ最中。ルイズと才人が仲違いした。

今迄、感じていた違和感の正体に気付いた才人が、魔法を使う者ほぼ全員を敵に回したのだ。

もう、皆と会話をする事すら苦痛になった才人は、皆の制止を振り切り外に出た。

その後直ぐ、シエスタが後を追い……暫く才人は、ルイズの許へは戻らなかった。

side：とある山中

一方、その頃。シティオブサウスゴータから三十リーグ程離れた、その場所。

其処(そこ)をとある一団が歩いていた。……シェフィールド一行である。

マチルダに道案内されて行く目的地は、とある水源。

其処は、シティの三分の一程の水源を賄っている場所。そして、その場所に辿り着いた一行。

するとシェフィールドが、懐(ふところ)からクロムウェルが持っていた『アンドバリの指輪』を取り出した。

怪訝(けげん)に思ったワルドとマチルダの問いに何度か答えると、彼女の額が光り出した。

……何時ぞや、とある少年の左手に見た、あのルーンに似た文字を

伴って。

その後の彼女等の問いにはもう答えず、『アンドバリの指輪』に精神を集中し出すと、

『アンドバリの指輪』が溶け出し、それから零(こぼ)れ落ちた一滴が水源に波紋を描いた。

事は済んだとし、いざ帰ろうとした時だった。……彼の襲撃を受けたのは。

「……ふむ。もう、ソレの用は済んだな？　では、返して貰うとするか。」

“！？　誰だッ！！！”

「……久しいな？　マチルダ、ワルド。

そして、御初に御目に掛かる。神の頭脳(ミョズニトニルン)　シェフィールド。」

「な!?　き、貴様!!?」「……はぁ。又、あんたかい。」

「……一体、何方(どなた)かしら?　自分の名を名乗る前に、人を名指しするなんて失礼じゃ無くって?」

「……ん?　何だ……お前の主人から聞いていないのか?　あの『無能王』から。」

「……貴様…!」

「……まぁ、そんな事は今はどうでもいい。取り敢えず、その指輪を返して貰うぞ?

水(ヤツ)の精霊と約束したのでな。救世主(メシア)が約を違える訳にもいくまい?」

そう言い終わると、彼の手元には、既に『アンドバリの指輪』が有った。皆、当然驚愕した。

今の今迄、彼女の指輪(シェフィールド)に嵌(はま)っていた物が、

皆が一動作も見逃す事無く気を張っていた筈が、気が付けば既に彼が所持していたのだから。

だが、そんな一団の驚愕を余所(よそ)に、彼が一言言い放ち、さっさと皆の前から姿を消した。

「……ふむ。確かに、本物の『アンドバリの指輪』だな。では、これにてオサラバだ。」

後に残された者は皆、その早業に思わず茫然自失し、我に返る迄、暫く掛かったそうな。

side：シティオブサウスゴータ

今、この街は混乱の坩堝（るつぼ）と化していた。何故ならば、自軍が反乱を起こしたからであった。

ロッシャ連隊、ラ・シェーヌ連隊等、街の西区に駐屯していた連隊

や、

一部ゲルマニア軍が、まるで何者かに操られるかの様に、自軍と交戦し出したのだ。

今日は折しも、降臨祭の最終日。

最後の休戦日として、皆が最後に浮かれ過ぎていたのも手伝い、あっと言う間に、その混乱は伝播（でんぱ）していった。最高指揮官が真っ先に戦死したのも大きかった。

辛うじて生き残った、参謀総長のウィンプフェンがロサイス迄の、撤退命令を出した。

一方。街中にて、その混乱を間近に見ていた二人がいた。ルイズと才人である。

才人はあの後、降臨祭が始まって二日目に、ルイズの許に戻って来た。

だが、その後も一切、御互いに口を利かず、凡そ十日振りに会話らしきものを始めた。

「……何処が名誉の戦だよ。……周りを見ろよ。

何奴も此奴も、自分が生き残る事しか考えてない。

昨日迄、『王軍の勝利万歳！』だの『我等の正義は絶対に勝つ！』だの

『名誉の戦死を遂げてやる！』とか息巻いてた連中が…だぜ？」

その才人の言葉に、何も言い返せず歯噛みしながら俯くルイズ。

自分の友人達を気にしながらも、自身の気の滅入りを隠すかの様に、更に捲し立てる才人に、ようやっと絞り出す様にルイズが口を開いた。

「……屈辱だわ。」

「屈辱？　俺はこっちの方が好きだな！

やれ『名誉の勝利だ！』、『正義だ！』なんて騒いでるより、

よっぽど正直で、本当って感じがするよ。」

「……屈辱だわ。」

「……。」

もう一度、同じ事を繰り返し言ったルイズに、今度こそ才人は黙った。

……自分も、好い加減貶(おとし)めるのに、嫌気が差して来ていたからだった。

ｓｉｄｅ：港町ロサイス

其処に、退却して来た連合軍が陸続と、何とか集結しつつあった。

しかし、訳も解らぬ反乱によって、半数以下に減ってしまった自軍。

その上、この大逆転敗戦ムードでは、今更気勢を盛り上げる事も能(あた)わず……。

どうしようかと考え倦(あぐ)ねていた時であった。

臨時司令官となったウィンプフェンが、唐突にとある事を思い出したのは。

撤退の爲の乗船を待つ天幕の中に居た、ルイズに伝令の兵士が勢い込んで駆け込んで来た。

……その後、ルイズが受けた命は、至極簡単に想像の付くものであった。

『己が命と持てる術を全て掛け、殿(しんがり)を務め全軍を撤退させよ。』

……要は、自分達が助かる迄の贄(にえ)……いや、捨て駒となれと命ぜられたのだ。

当然、納得いかない才人。しかし、ルイズの決心は変わらない。

……そして。

才人も覚悟を決めた。

ｓｉｄｅ：とある寺院

その中に、二人は居た。側の空き地に有った補給物資からワインをちょろまかして。

何故、この最中にこんな所に居るかと言えば、才人の提案からだった。

「俺の世界には、こういう時、乾杯して別れるんだ。未だ、時間は有るだろ？」

そして、ルイズからも一つ才人に願いを聞いて貰う事にし、二人で此処に来たのであった。

誰も居ないその寺院内の荘厳な雰囲気に宛てられ、二人共余り言葉を話せなかった。

しかし、この儘では埒が明かない。時間ももう余り無い爲、準備の終わったらしい才人に、ルイズから話し掛けた。

「……このグラス、どうしたの？」

「其処の祭壇に飾ってあった。神様用のだけど……いいよな？　こういう場合だし。」

「……。」

思わず微笑むルイズに、才人が目を細めて呟いた。

「……二回目だ。」

「…？　何が？」

「……お前が俺に笑ったの。あんだけ一緒に居て、たった二回だぜ？　そんな相手と結婚したいだなんて……どうかしてるよ。」

そう。ルイズが才人にした御願いとは、一度でいいから結婚式をしてみたいというものだった。

……どうしても、素直になれないルイズの精一杯の告白であった。

しかし、才人はそれには気付かず、素直にその儘の意味で受け取っていた。

ルイズもそんな才人に気付いたのか、少し元通りになれた才人と、最期の会話を楽しんでいた。

「……言ったじゃない。してみたいだけよ……って。

……アンタが帰る方法……探してあげられなくて…ごめんね？」

「……気にすんな。……それより、結婚式ってどうやるんだ？」

「……私も詳しくは知らないわ。」

「……いいのかよ、そんな適当で。」

「いいのよ。……どうせあんただし。」

取り敢えず、御互いの手を握る二人。そして、互いに手に持ったワ

インを飲み干した。

「……誓いの言葉……言わなくちゃ。」

「でもあれって、神官が居なくちゃ締まらねぇよなぁ…。」

「……もう。文句ばっかり言わないで。じゃあ、どうするのよ？」

「……俺は、お前が好きだよ。ルイズ。」

「な……なによ……ばか……／／／　誓いの言葉、言わなきゃ、ダメじゃないの…／／／／／／」

「嘘じゃない。俺はお前に会えて良かった。……本当にそう思う。」

「わ、わたしも……あ、あれ…？　わ……わた…し……。

あんた……ワインに……。」

そう。才人は、以前シエスタから貰った眠り薬を、ルイズに渡したワインに入れていたのだ。

崩れ落ちたルイズを抱き抱え外に出ると、辺りはもう薄暗く、夕日も落ち切れていた。

思わず、寒さと心細さに震えた才人に、声を掛ける者が居た。

「やあ、使い魔君。」

「……なんだ、お前か。てか、お前も使い魔だろうに。その呼び方はやめろよな？」

そう、あのジュリオであった。

才人達は既にカイトから、彼の正体を聞いていた為、然程（さほど）の警戒心は持っていなかった。

才人に至っては、凄くいけ好かなかったが、何故か、何処かに親近感を持っていた為、

何となくだが、彼に使い魔と呼ばれるのを嫌がった。

ジュリオも、それを判っていて、偶（たま）に態（わざ）とそう呼んで揶揄（からか）っていたのだった。

「……お前、覗いていたのかよ。趣味悪いなぁ。」

「全く……式を挙げるなら、僕を呼んでくれよ。これでも、一応神官なんだぜ？」

「……そういや、そうだったっけ。まぁ、いいや。……そうだ、丁度良い。ルイズを頼む。」

「……任せておいてくれ。無事に船に送り届けるよ。」

「……有難う。……じゃぁな。」

ルイズをジュリオに預けた才人は一人、馬に跨(またが)りこの薄暗い中、何処かへと行こうとしていた。

「……何処に行くんだ？」

「……逃げるんだよ。」

「方向が逆だな。そっちはアルビオン軍だぜ？」

「そうだな。」

馬上の人となった才人に、ジュリオが少し名残(なごり)を惜しむ様に、話し掛けた。

「一つ、聞きたいんだが……。」

「……なんだよ。」

「どうして行くんだい？　はっきり言うが、君は確実に死ぬよ？

『名誉の為に死ぬ』……そんなのはバカらしいんじゃ無かったのかな？」

「……言っちまったからなぁ…。」

「…？　何を？」

「好きだ……って、言っちまったから。」

何が可笑しかったのか、思わず皆聞いた事が無い程に、大爆笑するジュリオ。

そして、矢張りムスッとする才人。

「あっはっはっはっは……！！　ぼ、僕達、ロマリア人の様な男だな、君は！」

「……五月蠅ぇ。……でも、やっぱ好きな女の為って言うよりは、自分の為な気がする。」

「ほう……。良ければ、その意味が知りたいな。」

「……此処で行かなかったら、好きって言ったその気持ちが嘘になる様な気がするんだ。

……自分の言葉が嘘になるのは許せない。自分の気持ちが嘘になるのは……堪(たま)らない。

……俺、可笑しい事を言ってると思うか？　ジュリオ。」

「……いや……。君は貴族では無いし、君も知っての通り、僕も貴族では無いが…。」

「……うん。」

「その考え方は、とっても貴族らしい……と、そう僕は思う。」

「……褒めてんのか？　それ。」

そう苦笑しながら言い捨て、馬の腹を蹴り、暗闇に支配されつつある道を、

ルイズの向かう逆方向へと、駆け出して行った。

その背を見送りながら、ぽつりと、ジュリオが彼に言いたかった一言を呟いた。

「……さあてね。…随分と不器用だね……ガンダールヴ。」

その誰にも聞かれる筈の無い独り言に、反応を返す者が一人。

「……お前もな、ヴィンダールヴ。」

「!?　誰だ!!　……って、貴方か。今度は一体、何用ですか？」

「いや何……。中々、良い友達関係になってるじゃないか。」

そう…彼の揶揄う様な声色（こわいろ）の問いに、面白くなさそうな顔をしたジュリオ。

「……そうですか。でも、それも今日迄ですね。間違い無く彼は、明日、死ぬのですから。」

「……まぁ、そうだな。普通は、どう考えても死ぬな…アレは。」

ジュリオの言葉に同意しながらも、何処か楽しそうな声で話す彼に訝（いぶか）しむジュリオ。

「……本当に、一体、今度は何を考えているんだよ……アンタは。」

「……さてな。後は、結果を篤と御覧じろという所さ。

それよりも、ルイズを船に乗せたら、さっさとヴィットーリオの許へ行って報告して来い。

『神聖アルビオン共和国は、ガリアの虚無に依って滅ぼされました』……とな。」

「……。」

ジュリオは、身震いした。何故、彼は其処迄未来の事が判るのだろうか…と。

思わず、本能が恐怖という感情に反応し、我知らず身体が震えたのだった。

その恐怖の対象である彼が、喜悦も顕わに笑んだ事は、

彼の従者以外誰一人知る由も無かった。

ｓｉｄｅ：とある小高い丘の上

シティオブサウスゴータから南西、凡そ百五十リーグ程離れた其処。

暗闇に光が差し込み始めた朝ぼらけの中。眼下に綺麗な草原が広がっていた。

一晩中、馬で駆けて来た才人は、妙な興奮に包まれていた。

疲れている筈の身体は、朝日を浴びて気力も体力も回復して行く様だった。

草を食(は)む馬の横に座って居た才人は、

朝靄(あさもや)の中から、緩い地響きを伴って現れた大軍を見届けると、

その一晩限りの相棒を、尻を叩いて元来た方向へと逃がしてやった。

「……何でぇ…馬は使わねぇのか？」

「…あいつも生きている。道具じゃねえ。」

「……優しいねぇ……相棒。」

未だ、地響きの緩い内に、才人には一つ、デルフに聞いておきたい事があった。

「……なぁ、デルフ。ガンダールヴは千人の軍隊を壊滅させたんだろ？

……十万でも何とかなるかなぁ…？」

「……ああ、それなんだけどよ…。伝説っつうのは、尾鰭（おひれ）が付くからなぁ…。

まぁ、何だ。あんまり期待されてもなぁ。千人は…確か…無かった。うん。」

「……おいおい、何だよそれ。嘘吐きやがって。つうか、本当の事言うなよな。

どうせなら、最後迄騙しておいてくれよ……。」

そんな取り留めの無い事を終生の相棒と話していると、軍隊が確(しか)と視認出来る様になった。

才人は知る由も無いが、本来ならば七万であった軍勢は、

先のアルビオン戦にて、焦ったクロムウェルによって増強され、

亜人を多く雇い入れ、今は凡(およ)そ十万強に迄、膨らんで居た。

その大凡(おおよそ)の数だけは事前に聞いていた才人は、思わず恐怖に身体が打ち震えて来た。

しかし、その声色は最早恐怖を通り過ぎ、淡々と愚痴を零すかの様に呟いていた。

「……はぁ…。何で俺、あんなのに突っ込まなくちゃならねぇんだろ…。」

「…解ってて聞くかねぇ？　味方が船で撤退しようとしているからだろうが。

どうしても時間を稼がなくちゃならねぇんだろ？」

「いや、そうじゃ無くてさぁ……まぁ、いいや。

……前、アルビオンに行った時は、カイトが助けてくれたけど……。

今回は、流石に無理だろうなぁ…。何か、学校も大変だったらしいし。」

「……さぁてな。アイツの事だから、分かんねぇがな…。

でも、期待だけはしない方が良いぜ、相棒。」

「……そうか。やっぱ、そうだよなぁ……。参っちまうなぁ……。」

「……相棒。兎に角、真っ直ぐに突っ込め。こうなったら、どっから行っても同じだからよ。

でもって、指揮官を狙い捲れ。頭をやれば身体は混乱する。歩みも止まる。

況してや、あの大軍だ。態勢を整えるのにも時間が掛かるだろうよ。

一日ぐらいは、足止め出来るだろうよ。」

「……そうか。……なぁ、デルフ。小さい頃の話…していいか？」

「ああ、いいぜ。」

段々と近付いてくる軍隊を目の前に、才人は昔語りを始めた。

……殆ど、誰しもが、一度ならず経験した事が有るだろう。

とあるお婆さんが、不良達に絡まれていた。しかし、自分には助けに行く勇気も力も無かった。

只、嫌だなぁ…と見ているだけしか出来なかった。自分には力が無いからと、自分に言い訳して。

もし、強かったら助けにいかなければいけない。でも、助けられるとは限らない。

だから、例え力を付けても、強くなってもしょうがないんだ……と。

だが、今の自分はどうだ？　大分、力も付けて来た。そして、何より、今の自分は強い。

……強くなってしまった。もう、一切、何の言い訳も出来ない。

……しかし、その強さは外面だけだ。内面は全く変わってはいない。

正直言って、覚悟なんか出来ない。恐くて怖くて仕方が無い。嫌だ。死にたくない。

今直ぐ、何もかも捨てて、投げ出して、逃げ帰りたい。……でも、もう、出来ない……と。

「……相棒はてんで義理堅ぇや…。」

「…損な性分だな……本当に。……損過ぎる。

……なぁ、デルフ？」

「……何だね？」

「……俺、やっぱ死ぬのかなぁ？」

「……多分。」

「……。」

「……まぁ、何だ。どうせなら、格好付けな？」

「……何で？」

「…勿体無(もったいね)ぇだろ？」

最早、自分にとっては眼前と言って良い距離に迄、敵が来た。

デルフの言葉には返答せず、その相棒を握り締め、十万の大軍目掛けて駆け出した。

ｓｉｄｅ：三人称

一言で言えば、アルビオン軍は、大混乱に陥(おちい)った。

その混乱の様がどの程度かは、大将である自分(ホーキンス)の許に来る伝令が物語っていた。

曰く、敵は単騎である。曰く、メイジである。曰く、十数騎の一部隊である。

曰く、エルフの魔法戦士であった。曰く、エルフの一部隊であった。

……等々。

しかし、それは飽く迄、部隊の混乱。総大将である、ホーキンスは敵に気付いていた。

敵は単騎である。風の様に早く。火の様に強く。土の様に動じず。水の様に臨機応変だ…と。

「……気に入らないな。」　……自分が思い描いた『英雄』に、思わず嫉妬し、呟いた。

しかし、そんな『英雄』も所詮人の子。雨霰（あめあられ）と降ってくる魔法に、徐々に体力を奪われている。

「…！？　ぐぁぁぁっっ！！！」

「……相棒、左か？」

「…くっ……ああ、ダメだ…動かねぇや。」

しかし、片腕一本で更に動きを激しくする才人。

……だが、それと比例して、ダメージも増えていった。

そして、やっとの思いで、敵軍の総大将らしき将軍を見据えた才人。

その彼に向かって、真っ直ぐに向かう才人に、やらせまいと魔法の矢が数多降り注いで来る。

剣に吸い込みきれずに、身体に吸い付く魔法の矢にも構わず、尚、突っ込む才人。

最早、間に合わずあわや！　と、誰しもが思った。

……しかし、その切っ先が彼に触れる事は無かった。

「御無事ですか！　閣下！！」「ホーキンス将軍！」

「……大丈夫だ。戦闘は終了した。損害を報告しろ。」

慌てて駆け寄る、自分の部下達に無事を伝え、報告を待つホーキンス。

その彼の許に届けられた報は、驚愕せざるを得ないものであった。

下級・上級併せた指揮官クラスの士官：三十数名　各科兵隊：凡そ三百～五百名程

……それが、彼一人に被(こうむ)られた重傷者の数であり、損害であった。

おまけに、その混乱に興奮し、亜人達の一部が未だ興奮冷めやらず、暴れていた。

最早、一日での収拾は付かないであろうと思われた。

今日、此の場にての野営は確実であろうと思ったホーキンスは馬から降り、

自分達を此処迄追い詰めた、件の『勇者』を眺めた。

「……未だ、少年では無いか。……羨ましいな。」

「……は？」

側に居た副官が、そのホーキンスの言葉に思わず反応した。

「単騎良く敵軍を止める…か。最早、歴史の向こうに消えた言葉で言うならば…『英雄』だ。

……出来得るならば、私も将軍では無く、『英雄』になりたかった。」

「……ですな。釣り合う勲章が存在しない程の戦果ですな。

……残念なのは、彼が敵だと言う事です。」

「……敵とは言え。……又、貴族では無いとは言え。

勇気には、それに応じた賞賛と敬意が払われるべきだと思う。」

「……賛成です。」

そして、その場に居た幾人かで『勇者（サイト）』に最上級のアルビオン式の敬礼を行った。

……だが、異変は此処から起きた。

最早、虫の息であった筈の彼が、俄（にわか）に飛び起き、一目散にその場を

逃げ出し、
近くの森へと、逃げ果(おお)せたのであった。

ｓｉｄｅ：森の中

暫く、瀕死状態の才人が進んだ森の奥。
その中で、唐突に糸の切れた人形の如く、才人は倒れ込んだ。
「全く……『使い手』を動かすなんて、一体何千年振りだ？」

……そう。デルフリンガーの能力の一つ。
『吸い込んだ魔法の分だけ、自身の使い手を動かす事が出来る。』
それに依って、何とか此処迄運んで来たのだった。……だが。
「……しかし、相棒…ボロボロだねぇ……。……なぁ、相棒、起きてるか？
お前さん、頑張ったから、良い事教えてやるよ。……だから、ちょっと起きてみようぜ？」

……しかし、デルフを握る力は徐々に失われていき……。

「……ちぇ。もう…聞こえねぇか…。」

酷く惜しむ様な、彼の声のみが、その森に吸い込まれていった。

……そして、その数瞬の後、その一角は、綺麗な水色の光に包まれた。

ｓｉｄｅ：三人称

一方。瀕死の重傷であった筈の彼が、突然動き出した事で、又もや混乱仕掛けるも、

ホーキンスの一喝にて、それも何とか事無きを得、皆の混乱も収束

しつつあった時であった。

……『彼』の襲撃を……その悪夢を目の当たりにしたのは。

「おうおう。こりゃ又、大分派手にやったみたいだな、才人の奴。」

「!?　誰だ!!」

「やぁ、初めまして、ホーキンス将軍。俺はカイト＝ヤガミ。人は俺を救世主（メシア）とも呼ぶ。」

「……救世主（メシア）？　そのメシアとやらが、一体何の用だ？」

「…何、用件はたった一つ。それも実にシンプルで、単純で、簡単なものだ。

俺は、お前達を、全員……殺しに来ただけなのだからな。」

そのカイトの言葉を聞いた瞬間、待ち構えていたメイジ達から、一斉に魔法が浴びせられた。

「……愚かな。」と、思わず呟いたホーキンス達の目の前に、驚愕の光景が待ち受けていた。

「……さて。では、もうそろそろ、此方からも攻撃してもいいかね？」

“な!?!?　ば、バカな?!?!”

そう。彼には傷一つ付いて居らず、それ所か、衣服の解(ほつ)れすら無かったのだ。

その皆の驚愕を、まるで始めから解っていたかの様に……彼は一方的に話し始めた。

「さてさて。では、アルビオン前王ジェームズ一世との約定（やくじょう）だ。

ホーキンス。お前と、其処の副官を残して、全て俺が、今此の場にて殺させて貰う。

恨むのならば、その約定を交わした前王を恨むが良い。貴様達が、惨状の証人だ。」

そう言うと、ホーキンスと副官の二人の姿が忽然と消えた。

巻き添えを喰わない様、位相空間をずらしたのだ。しかし、そんな事は知らない皆は動転する。

だが、カイトは一向に構わず、軍隊の最前線の真ん前に来て、

後方部隊にも聞こえる様に、文字通り風に声を乗せて、宣言した。

「では、神聖アルビオン国軍。これから、俺は君達を殺す。それも一人残らずだ。

残念ながら、懺悔の時間は与えてやれん。

アルビオンに荷担した己を恨むか……無事に転生出来る様、神にでも祈れ。」

そして……殺戮劇が幕を開けた。

「……さて。本来、これは高々十万程度の端数に使うものでは無いのだがな。

……まぁ、示威行動は必要だろう。では、今度こそサヨウナラ…

だ。

万物悉皆破砕せよ　奥義　鋼角璧礫」

その瞬間、彼等の頭上から、数多の鉱石が雨霰と降って来、彼等を悉く押し潰した。

そして、それから逃げ惑う他の兵達を逃がすまいと、巨大な鉄塊が彼等の逃げ道を塞ぐ。

然う斯うしている内に、カイトが次なる業を繋げた。

「未だ、始まったばかりだぞ？　もっと楽しめ。

自然の怒り　　其の身に受けよ　　奥義　　嵐花蒼葬（らんかそうそう）

」

何とか、その巨大な鉄塊（てっかい）から抜け出た兵や亜人達を待ち享（う）けていたものは、

視認出来ぬ程に巨大な竜巻であった。その暴虐（ぼうぎゃく）に曝（さら）された者達は皆、空に舞い上がり、

その嵐と硬化された花片（はなびら）に依って、身体を斬り刻まれ、バラバラになって鉄塊壁の中に落ちた。

「だから、言っただろう？　決して逃がさないと。皆殺しにすると。では、次だ。

永遠なる眠りに誘われろ　　奥義　　氷華乱舞

」

そして、絶望した皆に与えられたものは、見事な薔薇の氷棺（ひょうかん）だけであった。

その華が満開に咲き誇った時には既に、カイトの手には剣が握られており、構え終えていた。

「さて。では、これにて終いだ。

灰燼に帰せ　奥義　紅蓮腕　」

その瞬間、氷薔薇は中身ごと粉々に斬り裂かれ、朝日の光を浴び反射して、

きらきらと生命の光を輝かせていた。……しかし、その現象はこれで終わりでは無かった。

その粉々に、バラバラに刻まれた氷の欠片達が、未だ地に落ちず、浮遊した儘……。

まるで、時が止まったかの様に、宙空に漂っているのだ。

そして、カイトはというと……鞘を自身の眼前に突き出し、剣を仕舞う寸前で止まっていた。

「……これぞ、我が窮（きわめ）。

『窮極技（アルティメット）・四神極壊（しじんごっかい）』　也。」

その宣言後、まるで十字を刻むかの様に、剣を静かに仕舞い、

只、チンっ…という音のみが谺（こだま）した……その瞬間だった。

今迄、漂っていた氷の欠片が、全て光の粒へと変わり、皆空へと吸い込まれて消えて行った。

その後。カイトに解放された二人は、

その儘、直にクロムウェルの許に転移させられ、彼に事情を話した。

……が、そんな事は理解出来ないクロムウェルは、二人を拘禁し、本国に送り返した。

……そして。

クロムウェルは自身の人生の中で見た、最も美しい光景の中で、その生涯を終えた。

ｓｉｄｅ：ウエストウッドのとある村

「ティファニアお姉ちゃん！」「テファお姉ちゃん！」「お姉ちゃーん！」

「あらら。ジャック、サム、ジム、エマ、サマンサ、エルザ。みんな勢揃いね。お早う。」

“お早う！！”

「……あ、あの……。」

「どうしたの？　エマ。何か私に言いたそうね？」

「あ、あのねー……あのねー…。森で…人が倒れてたのー…。」

「あら、いけない。それじゃ、急いで手当してあげないと。エマ？その人は一体、何処？」

「こっちー！」

「……この人ー。」

「……成る程。……あら？　でも、この人……何処も怪我していないわよ？」

「そうなの？」

「ええ。服は所々、ボロボロにはなっているけれど……身体には傷一つ無いわ。

でも、こんな所にいたら、危ないわ。村に運びましょう。みんな、手伝って？」

“はーーーい！！！”

（……外国人だわ。でも、トリステイン人でも、ゲルマニア人にも見えない。

……一体、何処の人なのかしら？　私の様に、遠い異国の血を引く人間かしら？

……いえ……。私は……異国の血…というより、異人の血を引くのよね……。）

運命は、未だ、彼を休ませてはくれないらしい。

そして、新たな主役の登場に、舞台は否応無しに盛り上がりを見せる。

しかし、今はそっとしておこう。……戦士に安らぎを。そして……
最後の平穏を。

才人と戦争とサウスゴータ（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回、私が書きたかった事は、二つ。

一つは、カイトの業。『窮極技（アルティメットアーツ）・四神極壊（しんごっかい）』の存在。

つまり、カイトは今の己の強さに慢心せず、更なる強さを求めて、日々精進していると言う事を、言いたかったのです。

そして……二つ目。中程にある、才人の昔語りと言う名の独白。

恐らく、殆どの方が覚えがあるでしょう。

私は、幼少期は虐めっ子であり、大きくなってからは、虐められっ子でした。

故に、どちらの気持ちも判ります。……まぁ、このドキュンは判りませんが。

（故に……という表現は、傲慢でしょうが、私自身、語彙が少ない為、敢えて使わせて頂きます。）

だからと言って、何かを言いたい訳では有りません。台詞自体も、ほぼ原作の儘ですしね。

ですから、もしも、拙作を読んで下さった方の内、何方か一人でも、何かを思って、何かを感じて頂ければ、それで構いません。

私の申し上げたい事はそれだけです。

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。

メシアとカイトとシャルロット～前編～（前書き）

現時刻（００：１５）
ＰＶ：１，７４１，２３３アクセス　ユニーク：１４５，９４２人
皆様、いつも有難う御座います。

今回は、タイトル通り、前・後編にて御送りしたいと思います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

メシアとカイトとシャルロット～前編～

side:???

「…なぁ……。俺は、君を何て呼べばいいんだ?」

「……私…?　……私…は……わたしは……っ…!?」

「……シャルロット・エレーヌ・オルレアン。君は、一体誰に、どうして欲しいんだ？」

「……わ……わた…し……わたし……は……私は……っ……！！！」

「……クッ…！　ええいっ！！　一体、何時迄、逡巡しているッッ！！？

さっさと、そいつを殺しなさい！！　貴女の母がどうなっても良いの？！

さあッ！！　早くッッ！！！　殺しなさいィッッ！！！！！

殺セエエエエエェェェェッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！」

「…わたし……私は……ッ！　私はァァァッッ！！！」

何故……此の様な事になってしまったのだろうか……。

それを知る爲には、此処迄の経緯を説明するしか無いだろう。

始まりの刻は、『始祖の降臨祭』の最終日の翌日から始まる……。

ｓｉｄｅ：三人称

ルイズが目覚めた場所は、戦場から撤退する最終船の上であった。

目覚めて真っ先に才人の姿が無い事に気付き、直ぐ様探したが何処にもない。

丁度その時、甲板で話している声が聞こえ、

その話に依ると、誰(サイト)かが単騎で敵軍に突撃したらしい。

皆は有り得ないと一笑に付したが、ルイズとギーシュのみは間違い

無いと確信していた。

その後、学院に帰って来た皆の内、二人程常とは違う行動を取り始めた。

ルイズは、帰って来て早々、タバサといちゃつきながら皆を出迎えたカイトを見咎め、

彼の許へ赴き、行き成り詰問し出した。

「カイトッッッ！！！　何でよッ！　何で、アイツを見殺しにしたのよ！！

　何でアイツを助けてくれなかったの！！！」

「……は？　行き成り帰って来て、何を言うかと思えば……何言ってんだ？」

「惚(とぼ)けないで！！　アンタなら、才人が危ない目にあわずに済ませるぐらい出来たでしょう！？」

カイトは、（他人から見れば）理不尽な事を突然責められ、

そのルイズの言葉に呆れた顔になり、ルイズの問いに答えた。

「……ハァ。本当に一体何を言うかと思えば……。何で、俺がそんな事せねばならんのだ？」

「……ぇ？」

「だって、そうだろ？　何で、俺がそんな無意味な事やらにゃならんのだ？

お前達に……誰かに助けを求められた訳でも無いのに。お前達、何か勘違いしていないか？

俺は、便利屋でも、萬屋でも、求めれば何時でも助けてくれる神様でも無ぇぞ？

何故、お前等の都合に併せなきゃならん？　何故、お前等の望み通りにしなけりゃならん？」

「……アンタ……！」

そのカイトの物言いに、流石にルイズならずとも驚愕した。

そして、その後のカイトの言葉に、皆思わず口を噤(つぐ)み、押し黙ってしまった。

「それともアレか？　『アンタ達、仲良かったでしょっ！？』ってか？

『友達じゃ無いの？！』って？　だったら、何でお前達は今、此処に居る？

何でその大事な友達を助けに行かなかった？　何故、見殺しにした？

少なくとも、俺にはそんな義理も義務も無い。」

「……このっ……！！　人殺しッッッ！！！

……デルフリンガーの言ってた意味が、今やっと解ったわ…。

アンタみたいな人で無し……！！！

何で、アンタみたいな人で無しが居て……アイツが居ないのよッッッッッ！！！！！」

カイトの余りの言葉に、ルイズは涙が溢れるのも構わず、カイトに自分の思いの丈をブチ撒け、

カイトの言葉も聞かずに、自分の部屋に閉じ籠もってしまった。

確かにルイズの物言いもあんまりでは有ったが、皆にも少なからず同意出来る所も有り、

思わず似た様な目でカイトを見ていた。……が、当の本人は一向に気にした様子も見せず。

「……ハァ、おいおい。自分の言いたい事だけ言って、行っちまったよ。

……まぁ、いいや。俺達も部屋に戻ろうか、シャル。」

「……うん。」

そう独りごちると、皆の目など、まるで何処吹く風かと言った具合に、

タバサと一緒に、彼女の部屋に何時も通りに戻って行った。

その後、数日程経ち、ジュリオが学院に訪ねて来た。……どうやら、ルイズに話があった様だ。

その時のジュリオの助言に従い、その直後入れ違いに入って来たモンモンとギーシュを証人に、

『サモン・サーヴァント』を唱えた。

……もしも、才人が生きているのならば、呪文は完成しないのだから。

……しかし、現実は残酷だった。……ゲートは開いてしまった。

絶望に崩れ落ちたルイズを、二人は支える事も出来なかった。

……そして。ルイズは、益々鬱(ふさ)ぎ込み、もう誰も部屋に入る事は出来なかった。

一方、もう一人。

ギーシュは、ルイズのカイトへの台詞を聞き、自分も何か思う所があったのか、

夕刻頃など、余り人が来ない時間を見計らって、使い魔(ヴェルダンデ)に集めさせた土を使い、

魔法を使わず、自分の手でその土を捏(こ)ね、何かを作り始めた。

ｓｉｄｅ：首都ロンディニウム　ハヴィランド宮殿ｉｎアルビオン

終戦から、凡そ一月程経った頃。第二の月（ハガル）、第一週（フレイヤの）。

諸国会議と言う名の戦後処理（えさのきりとり）をする為、各国の代表が次々と集まって来た。

トリステインからは、元アルビオン皇太子・現トリステイン王代理ウェールズ＝テューダー。

その付き添いに、アンリエッタ王代理妃とマザリーニ枢機卿。

ゲルマニアからは、皇帝アルブレヒト三世。

ロマリアからは、本来大使が来る筈であったが、どんな気紛（きまぐ）れか、教皇・聖エイジス３２世。自らが、自身（ジュリオ）の使い魔を伴って席に参列していた。

そして、此の場には未だ揃っていない一人と、

御供の二人を除いた、ウェールズ・アンリエッタ・アルブレヒト三世・ヴィットーリオと、

アルビオン代表のホーキンス将軍の五人が既に席に着いて居た。

アルブレヒト三世の皮肉な挨拶をアッサリと躱(かわ)しながら、教皇と話すウェールズ。

面白くないと鼻白みながらも、同様に教皇と話し始め、

ホーキンスは、それらの話を只、黙って聞くのみであった。

然(そ)う斯(こ)うしている内に、ドカドカと品の無い足音を立てながら、美丈夫が現れた。

……そう。ガリアの代表にして、今回の戦の功労者……ジョゼフ王である。

来て早々、ホーキンス以外の四人共に、ストレートな皮肉を込めた言葉で祝辞を告げ、

その一瞬で、此の場の雰囲気を持って行ってしまった。

只それだけで、皆が警戒するには、充分過ぎる事態であった。

そして、その日は結局、何の話もしない儘、

只、ジョゼフが持って来た料理に舌鼓を打つだけに終わった。

……その後、ウェールズとアンリエッタは、

アルビオン全権大使に任ぜられたホーキンス将軍に依って、撤退戦の真実を知るに至った。

一人の少年に依って、行軍が確実に一日以上遅れていた事。

……そして。たった一人の者の手によって、十万もの軍隊が、消え去った事を……。

その翌日も、その翌々日も、会議は只、踊り続けた。

然う斯うしている内に、一週間が過ぎ去ろうとしていた。

もう好い加減、痺れを切らしたゲルマニア皇帝が、

今度こそ呑まれてなるかと、決意を新たにした翌日。

今迄とは打って変わって、真面目一辺倒になり、突然会議を始め出した。

その何時に無い威圧感に、（コイツも王か……）と、皆の認識を改めさせた。

だが、その席中。皆が揃って居るにも拘わらず、一つ明いている席が有る事に気付いた。

機先を制された皇帝が、場を断ち切る爲にも、話の途中でそれをジョゼフに問い掛けた。

「少し待って貰おうか、ジョゼフ王よ。」

「む？　一体、どう致した？　皇帝閣下よ。花でも摘まれにでも行かれるのかな？」

「…クッ…！　いや、何。其処に置いてある一脚の椅子が気になってな。

それは、其方が自ら運んで来た物であろう？　一体何方が来るのかと思ってな。

どうせ始めるのならば、その者が来てからでも遅くは有るまい？」

「……ああ、それならば、何も気にする必要など無い。何れ来る。

それに、彼の者に説明など不要だ。我等が把握している事など、当の昔に存じて居る。」

「……何？　一体、何者だ、そいつは。」

ジョゼフが態態（わざわざ）、自ら抱えて持って来た椅子に、興味津々な様子を見せるゲルマニア皇帝。

しかし、気にするなと梨の礫（つぶて）なジョゼフに、益々訝しみ更に何者かと聞こうとする…が。

「……『そいつ』などと呼んでは、ゲルマニアが滅ぼされてしまいますよ？　皇帝閣下。」

「何？　我が国が滅ぼされるとな？　それは又、大きい口を立てたな、教皇？

果たして、我が国に戦を仕掛ける命知らずとは、一体何処の何方かな？　うん？」

警告する教皇の言葉に、舐められる訳にはいかないと、胸を張る皇帝。

……だが、その様に『彼』の存在を知る二人は、憐れみの視線を向ける。

「……知らぬとは、此程迄に幸せな事なのだな。余としては、真に羨ましい限りだよ。」

「……貴様…！　この私を侮るかッ！！！」

「いいえ、違いますよ皇帝閣下。それは只の事実ですから。……ですよね？　救世主（メシア）。」

「……何？」

そして、当然の如く、その憐れみの視線に皇帝が憤慨するも、教皇の言葉に依って、空いていた筈の椅子に、全員で目線を向けた。

「……そうだな。此の俺と敵対したのならば、今、此の瞬間にも消えているだろうがな。」

「？！？！　だ、誰だッ！？　何時の間に、其処に座って居るのだ？！」

すると、何時の間にか、ついさっき迄誰も居なかった筈の椅子に、全身真っ白な鎧を着込んだ見知らぬ輩が座って居た。

驚きに驚いたゲルマニア皇帝は、思わず叫んで詰問したが……。

「…まぁ、俺の事は気にするな、ゲルマニアの。俺の用は、其処に居る虚無二人なのだから。」

「……何？　い、今、何と言った？」

「……五月蠅ぇな、いいから黙ってろよ。てめぇは及びじゃ無ぇんだよ。

一応、皇帝らしいから、話を聞く権利は与えてやってんだ。大人しくしていろ、俗物が。」

「き、きさまッッッ！？　この私を其処迄侮辱するかッッッッ！！！」

「……チッ。邪魔すんなつったろうが。空間（ロック）固定。」

自分を無視して話を進めようとする、救世主（メシア）と呼ばれた何者かが腹

に据え兼ねた皇帝は、
杖を引き抜いて救世主（メシア）に向けるが、一瞬にしてその動きを止められた。
驚いた皆を代表して、今迄黙っていたアンリエッタが彼に問い掛けた。

「……メ、救世主（メシア）様？　い、今のは、一体？」

「あ？　空間を固定して、一切の動きを止めただけだ。呼吸ぐらいは出来るから、死にはせん。
そんな事より、そろそろ本題に入るぞ？　俺は早く帰って恋人といちゃいちゃしたいんだよ。」

「「「「……」」」」

救世主（カイト）のその苛々していた理由に、皆思わず呆れながらも、
本題に入ると言う事には同意した。
……ホーキンスは、自身が入っていい話では無いと、早々に気付き押し黙った。

「……フゥ。では、救世主(メシア)よ。本題に入ると言っていたが、一体何から話すというのかね？」

「ああ、先ずはジョゼフ…お前に用が有る。」

「何？　余に？」

「そうだ。今、お前に聞きたい事は二つ有る。

先ず一つ。お前の手下にいる、エルフのビダーシャルが作りし火石。幾つ出来た？」

「「「な！？！？　え、エルフだって（ですって）？！」」」

そして、始まった救世主(メシア)の会話。その中で唐突に告げられた事実に、誰しもが、驚愕と恐怖と嫌悪が沸き出した。

しかし、問われた当の本人は一向に気にせず、極普通にその問いに答えた。

「……ああ、それならば、今ようやっと一つ出来上がりそうな所だよ。」

「そうか。存外遅いな？　もう少し早目に多く作らねば、俺への対応策にはならんぞ？」

「そうか。ならば、アレに急がせるとしよう。」

「ああ、そうするといい。アイツは未だ、お前が虚無とは知らんからな。

そうと知らせれば、少しは働きに磨きが掛かるんじゃ無いか？」

「……そうなのか？　疾うに知っているものだと思っていたが……。

では、其方に従うとしよう。」

ようやっと、一つ目の質問が終わったらしい。

だが、未だあと一つ有るのかと思うと、げんなりする四人であった。

「では、次だ。そのビダーシャルに、俺の事は告げたか？」

「何？　其方の事を？　……いいや？　知らぬ方がより楽しめるだろうと思ってな。」

「……ハァ…矢張りか。此の戯けめ。ならば、もういい。
今度、貴様が自身が虚無だと告げた時にでも、序でに知らせろ。
今度こそいいな？」

「うむ。相分かった。確と知らせるとしよう。」

どうやら、終わったらしいその会話は、皆の神経をこの上無く磨り減らしてくれた……が。

「では、次だ。ヴィットーリオ。」

「……今度は私ですか……救世主（メシア）。」

そう。次なる標的を見定め、まだまだ話が続く様だった。

「ああ、お前だ。お前に聞きたい事はたった一つだ。

『アクイレイアの加護』は受けられそうか？」

「……貴方も、解っていてそういう事を聞きますか？　……未だ無理そうですよ。」

「フッ……。矢張り、未だ無理か…。まぁ、そうだろうな。だが、そんな様で大丈夫なのか？

聖戦と言う名の、エルフ虐殺劇は、そう容易（たやす）くは無いぞ？」

「「「な!?!?　聖戦だと（ですって）?!　しかも、エルフを虐殺?!?!」」」

今度の話からも又、とんでもない言葉が飛び出て来た。

その台詞に、さしものジョゼフも驚かずにはいられなかったらしい。

だが、彼も伊達に二十歳の若さで、教皇にまで上り詰めた訳では無いらしい。

例え、自分達の計画がばらされようとも、気にした風も無く話を続けた。

「……はぁ。全く…貴方に会ってからというもの、此方は常に計画の変更を余儀無くされて、

すっかり天手古舞(てんてこま)いですよ？　一体、どうしてくれるんです？」

「どうするもへったくれも無いさ。ちゃんと、協力はすると言っているだろう？

只、単にお前達の意に沿う形には成り得ない…と言うだけの話さ。」

「……そうですか。

ですが、私はちゃんと事情を話せば、皆が私に賛同して頂けると確信していますよ。」

「ああ、まぁな。アレは、他の皆には大変極まりない事だろうからな。」

「……ええ。貴方と違って…ね。」

……どうやら、自分達には、未だ到底分かり得ぬ事を話している様だ。

だが、その話ももう終局らしい。

救世主（メシア）が、椅子から立ち上がり、ゲルマニア皇帝の拘束を解いたのだから。

「……ふむ…。まぁ、いい。何れにしろ、俺の話はもう終わりだ。後は好きにしろ。

後、ヴィットーリオ。解っているとは思うが、アレは話すなよ？未だ時期尚早だ。」

「ええ、話し所は弁（わきま）えていますよ……救世主（メシア）。」

「そうか、ならばいい。『解除』…ではな、皆の衆。」

そう言うと、救世主（メシア）は又もや、忽然とその姿を消した。

呆然とした皆が、再び会議を始める迄に、丸一日要したそうな。

そして……次なる刻は、

生存が確認され、再度使い魔（ガンダールヴ）となって帰って来た、

才人の御話から始まる。

メシアとカイトとシャルロット～前編～（後書き）

如何でしたでしょうか？

今話はカイトの裏でのちょっとした暗躍を書いてみました。

さて、次話は、才人がテファの指輪を使わずとも、何故無事だったのか。

そして、今話の冒頭のような事態に、何故なったのか……。

果たしてその後、一体どうなったのか……。

どうか、御楽しみに御待ち下さい。

それと、その続きですが、明日…と言うか今日ですが、

何とか休みになりましたので、今日中に書き上げたいと思います。

但し、投稿出来るのが、今日中に間に合うか、明日の深夜になるかは未定ですが…；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

メシアとカイトとシャルロット～中編～（前書き）

現時刻（２１：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，７５０，４６６アクセス　ユニーク：１４６，９８９人
皆様、毎度有難う御座います。

先ずは、前回の前書きの訂正をさせて頂きたいと思います。

題名を御覧の通り、今回は前・中・後編の三編になってしまいました。誠に申し訳御座いません。

その爲か、今回は少し短めになってしまいました。どうか、御諒承下さい。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

メシアとカイトとシャルロット～中編～

ｓｉｄｅ：三人称

さて。先ずは、才人が森の中程にて倒れた所から、話すとしよう。

精も根も尽き果て、才人の心臓が停止した瞬間の事であった。

デルフの惜しむ声と共に、才人の身体が水色に光り輝き、見る見る間に傷が癒えて行き、

終いには、止まっていた筈の心臓迄が又、動き出した。

何事が起こったのか解らずとも、自身の相棒が生き返った事に喜んだデルフの目の前に、

小さな、水色の竜らしきモノが二体顕れ、‘キュ～ィ’と一声鳴くと、唐突に姿を消した。

その龍達を一度ならず見た事のあるデルフは、何故『彼』がそんな事をしたのか疑問だったが、

今は先ず、自分の新たな相棒が無事だった事を、今は亡きブリミルとサーシャに感謝した。

そして、その数刻後。才人は、森の住人に助けられ、暫くその村に身を置く事となった。

その後。ウェールズとアンリエッタの命で、才人を捜しに来たアニエスと、

才人が生きている事を、頑なに信じたシエスタに説得されたルイズが共に訪ねて来、

シェフィールドの襲撃があったものの、何とか此を退け、再度使い魔の契約を交わし、

才人はガンダールヴに戻り、テファ達と名残惜しみながらも別れ、学院に戻って来た。

その際、ヴュセンタール号……才人達が戦争中に乗っていた船……の出迎えを受け、

宮殿にて、簡易ながらも『騎士（シュヴァリエ）』の称号を受勲し、学院に凱旋して来た。

その様（マント）に歓喜し、感謝感激の嵐にて、才人の帰還を皆で祝福した。

その時、生徒達の話にて、コルベールが重傷を負ったと聞き、慌てに慌てた才人だったが、

何とか生き存（なが）えて、今はゲルマニアにて治療中だと聞くと、ホッと一安堵した。

その際、コルベールの事を告げる皆の様子が、何かおかしかったとか、

広場にある、何かでっかい自分の像（サイト）とか気になる事は幾つかあったが、

取り敢えずは、デルフの頼みを聞く事にし、カイトの許にルイズと共に赴いた。

side：タバサの部屋

「ん～♪　シャル～～♪♪」

「……ん…／／／　カイト……♪」

コンコン…　「……ん？　誰だ、一体？　折角のシャルとの一時を邪魔するとは……。」

……相変わらずタバサといちゃついていたカイトは、

空気の読まない不意の訪問者を追い返してやろうかと思ったが、

外にある知っている気配に、我知らず頬を緩ませ扉を開けた。

「……失礼しま～す…。って、うわっ！？　か、カイトか…。嘸(おど)かすなよなぁ…。」

「クスクス……まぁまぁ。取り敢えず、才人。」

「え？　な、何？」

「……お帰り。」

「……うん。只今、カイト。」

カイトから伸ばされた手を握り、掛けられた言葉に才人は、
自分は本当に此処に戻って来れたんだと、今になってようやっと安堵の溜息が漏れた。

「さて、挨拶も終わった所で、中に入りな。俺に話があるんだろう？　……デルフ。」

「あ、ああ。何かそうらしいんだ…けど……いいのか？　タバサに許可取らないで。」

「ああ、それなら問題無い。もう既に許可は取ってある。」

「……え？　そうなのか？　タバサ。」

「……（コク）。」

「と言う事さ。さ、遠慮無く入りな。」

「あ、ああ。んじゃ、お邪魔しま～す…。」

何故か、少し恐る恐る入る才人…と、何故か物凄く入り難そうにしているルイズ。

「……ん？　どうしたんだ、ルイズ？　早く入れよ。」

「……ぅ…わ、分かってる…わよ……。」

そう才人に促され、背中に隠れながらそろそろと入るルイズ。

そんな何時に無い様子を訝しむも、背中のデルフに責付(せっつ)かされ、早速本題に入った。

「…取り敢えず……ほら、デルフ。何か、カイトに話があるんだろ？」

「ああ、済まねぇな相棒。……やい、『世界(ワールド)の破滅者(ディザスター)』！！！

てめぇ…一体どういう了見だ！！！」

「ん？　もしかして、才人のアレか？」

「おうともよ！　テメェ……！　ブリミル達は見捨てた癖に、どうして相棒は助けたんだ！！」

「……え？　俺を助けてくれたのって、テファじゃ無いの？」

そんな才人の素っ惚けた台詞に、思わず溜息を漏らしながら、デルフが再度、才人に当時の状況を説明した。

「……おいおい、相棒。あの嬢ちゃんに聞いただろ？　相棒が、あの嬢ちゃん達に見付かった時には、もう既に傷は全部癒えてたってよぉ。」

「……ああ、そういや、そうだったっけ。……え？　じゃぁ、誰が？」

「だから、それがコイツの仕業って言ってんだろう？」

「あ、ああ…そういう事か…。……って、え？　カイトが？　俺を？」

「……ああ、あれは間違い無くコイツの仕業だ。……おい、好い加減黙って無いで答えろ！」

そのデルフの言葉の数分程後、只タバサを愛でていたカイトが、溜息を付きつつやっと応えた。

「……はぁ…全く。俺は、そういう事をバラすのは好きじゃ無いんだがなぁ……。

んで？　俺は一体、何処から話せばいいんだ？」

「全部。最初からだ。一体、何時から相棒に、テメェのドラゴンを忍ばせていやがった？」

「「……へ？　ど、ドラゴン？　俺（サイト）の中に？」」

「ああ。相棒が死んじまった時に、相棒の身体の中から、コイツの使役している龍が出て来て、

相棒の身体を癒して、止まってた心臓迄動かしていきやがった。

……てめぇ、一体、何考えてやがる？」

デルフが話したその時の真実に、二人共…いや、三人共驚きながらカイトを見た。

仕方ないとばかりに、カイトは諦めの溜息を又、零しつつほぼ洗い浚い話した。

「……ハァ……。んじゃ、最初っから話すぞ？

先ず、才人にアイツラ…アクア達を仕込んだのは、ヴェストリ広場での決闘後だ。

あの時に、才人を癒すと同時に、アクア達に保険として中に居させておいた。

何れ、アルビオンの大軍に才人が一人で突っ込む事は、既に知っていたからな。

その爲の、一度切りの保険。言わば、俺の祝福（メシア）…と言った所か。」

そして、カイトから話された事に、皆してあんぐりして口を開けて居た。

所謂、開いた口が塞がらない状態である。

真逆、そんな始めの頃からとは思いもしなかったからであった。

「アンタ……そんな事してたのね……。って、じゃあ何でその事教

えてくれなかったのよ!?

知ってれば、私だってあんな事……！」

「……あんな事？　ルイズ。お前、もしかして、カイトに何かやっちゃったのか？」

「ぅ……な、何でも無いわよっ！　アンタは知らなくて良いのッ！！」

そのルイズの剣幕に、思わず怯む才人。そんなルイズに追い打ちを掛けるカイト。

「全く酷いもんだ。態態、俺がそんな事をする必要は無い。

と教えてあげたのにも拘わらずの、暴言だったしなぁ。」

「嘘付かないでよ！　そんな事、一言も言ってなかったじゃないっ！！！」

「何言ってんだ？　ちゃんと言ったじゃねぇか。

『何で、俺がそんな無意味な事やらにゃならんのだ？』ってな。

アクアがいんのに何で又、俺が更に助けなけりゃならん？　な？

無意味だろ？」

「「「分かるか、そんなもん！？！？」」」

全く以て、同意である。しかし、どうやら話はもう終わりにしたいらしいカイトは、

さっさと部屋を出る様にと、二人を急かし、出ると直ぐ様、鍵を掛けてしまった。

これじゃあ、もう聞きたくても聞けないだろうなと思った二人は、その儘部屋を後にした。

そして、時は経ち、水精霊騎士（オンディーヌ）隊の結成も決まった。

皆が何とかして、才人と同じ騎士（シュヴァリエ）であるタバサを引き入れようかと考えたが、

何時も彼女の側に居るカイトからの、『近付くなオーラ』が凄まじい為、断念した。

その後も、やれ、超巨大な怪鳥が現れただの。やれ、今度の舞踏会で誰が誰になるのかだの。

どうでもいい話もしながら、何時も通りの日常を、皆して過ごしていた。

……そんなとある日。カイトが所用で出掛けた隙を、丸で狙ったかの様に、

タバサの許に、烏を摸した魔法人形が降り立ち、指令を与えた。

……それを、決してカイトに知らせず……悟らせずに……。

そして……刻は、運命の日。『スレイプニィルの舞踏会』へと進む……。

ｓｉｄｅ：スレイプニィルの舞踏会会場

其処では色んな人達が、各々思い思いの理想とする姿で仮装し、舞

踏会を楽しんでいた。

才人も、ちゃんと舞踏会の趣旨を聞いて居り、おまけにカイトにもしっかりと釘を刺され、

キチンとルイズを見付ける事が出来、何とか又怒られる事には成らずに済んだ様だ。

そして……舞踏会会場は、今夜も盛大に。且つ、皆が羽目を外さずに楽しめる様に。

程良い緊張の中で行われていた。

……其の中に居そうな二人が居ない事に、誰も気付かぬ儘……。

ｓｉｄｅ：ヴェストリの広場

以前、才人とギーシュが決闘騒ぎを起こした場所。

其処のベンチに、カイトとタバサは寄り添って座って居た。

舞踏会会場から離れた此の場所でも音楽は聞こえてくる様で、

タバサが時折楽しそうに、体を動かしていた。

それを、カイトも微笑みながら楽しみ、舞踏会が始まって少し経つと、

カイトが立ち上がり、タバサに手を差し伸べてこう言った。

「……カイト？」

「……シャルロット・エレーヌ・オルレアン嬢。私めと踊って頂けますか？」

「……クスッ……はい、喜んで。」

何時ぞやの『フリッグの舞踏会』と同じ台詞を言ったカイトに、思わず笑みを零しながら、

タバサはその手を取り、遠くから聞こえる舞踏会の音楽に合わせて、

綺麗な双月をライトとし、さざめく草木の音を観客にして、踊り始

めた。

ｓｉｄｅ：タバサ

……一体、どれくらい踊っただろう。二曲？　三曲？　いいや、もっとかもしれない。

カイトとの踊り（ダンス）は、時を忘れるくらい本当に楽しい。彼が上手な事も一因としてあるだろう。

カイトとのダンスが終わる度に、彼からキスしてくれた。……とても嬉しい。

未だ少し肌寒い今夜。程良く身体も暖まり、抱き締められているのも又、心地良い。

どれくらいそうしていたんだろう。不意にカイトが身体を離して、私の顔を覗き込んで来た。

「……カイト？　どうしたの？」

「…うん？　……いや、シャルは本当に可愛いな…ってね。…ん…。」

「……んぅ……チュッ……ん……／／／」

……や、やっぱり、何回しても、恥ずかしいものは恥ずかしい／／／

でも、それでも、やっぱり、カイトとは未だずっとしていたい。

……そう、思っていた時だった。

カイトがキスを止め、私の頬を一度……まるで壊れ物を扱うかの様に優しく……。

慈愛に満ちた表情で、そっと撫でると、私から身体を離し、少しづつ離れていった。

「……カイト？」

「……本当に可愛いな……シャルは。」

そして……。

「……今、大体2～3曲ぐらいは、踊れたな。」

「……うん。」

「……なら、身体も暖まり、大分解れただろ？」

私は……。

「……カイト？　一体…どう……した…の……？」

「……うん。だから……。」

その言葉によって……。

「もう、殺し合おうか。北花壇騎士（シュバリエ・ドール）・人形七号（セブンスドール）……タバサ。」

現実に引き戻(ゆめからさめた)された。

メシアとカイトとシャルロット～中編～（後書き）

……如何でしたでしょうか？

何故、カイトはタバサと殺し合う事にしたのか。その思惑とは。

そして、タバサの受けた命令とは。彼女の想いは如何に。

それらも全て、次話にて明かされます。……何か前回の後書きでも似た様な事書いたような……。

いえ、今度こそは本当ですよ？　……本当ですからね？

次話も、何とか明日中に仕上げて投稿したいと思います。

引っ張ってしまい、申し訳有りませんが、後一日程、御待ち下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

メシアとカイトとシャルロット～後編～（前書き）

現時刻（１７：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，７６０，６７０アクセス　ユニーク：１４７，７８４人
皆様、いつも有難う御座います。

さて……大変、御待たせ致しました。

では、今話も拙作を御覧下さい。

メシアとカイトとシャルロット～後編～

ｓｉｄｅ：ヴェストリの広場

今、其処で二人が対峙していた。

方や、漆黒の衣を風に棚引かせて翻しながら。

方や、雪の様な真っ白な顔を、更に青白くさせながら。

「……か、カイ……ト…？」

「うん？　どうしたんだい、タバサ？　杖は構えないのか？」

「……な、なん…で？」

「何でって……だって、指令を受けただろう？

『救世主（おれ）を殺す様に』ってさ。そうすれば、お前の母を癒して貰えると言われて。

だから……さぁ、殺し合おうか……お人形（タバサ）さん。」

そして……殺劇の舞踏が繰り広げられた。

ｓｉｄｅ：三人称

それは果たして、異様な光景だった。……これが、戦闘と呼べるものなのだろうか？

少女は自身が持つ、不相応な程に大きい杖から生まれ出ずる、大小の氷の粒を操り攻撃する。

青年は、そんなものなどまるで微風（そよかぜ）かの様に、振り払う事もせず、その直中（ただなか）を歩いて行く。

彼我の距離が、最初に対峙した距離の半分程になった時。

彼の背後に、全くの無音で巨大な氷槍（ジャベリン）が作られ、彼を刺し貫いた……かに見えた。

「……ぇ？」

「ん？　何だ？　もしかして、こんなもので此の俺が殺せると本当に思ったのかい？」

「だ、だって……あの時……。」

「あの時？　……ああ、もしかして俺がワルドに殺されてやった時の事か？」

「……え？　……じゃ、じゃあ……もしかして…あの時は……。」

タバサの顔が驚愕と……絶望の色に染められて行く。

真逆、あの巨大な氷槍（ジャベリン）が、彼に触れた瞬間に粉々に消え去るとは、思いもしなかったのだから。

それが始めから解っていたのか、カイトは微塵（みじん）も気にせず淡々と話し続ける。

「ああ、態（わざ）と殺されてやったんだ。」

「……な、何で？　何で、そんな事を…？」

「ん？　今のタバサみたいに、

『一度でも殺せたんだから、どうにかなるだろう』と思った阿呆に、絶望を与える爲にだよ。

大体、可笑しいとは思わなかったのか？

あのワルドより早く動けるこの俺が、高がワルド風情に殺されるなんて…さ。」

その言葉に、考えもしなかった自分を叱責したタバサは、改めて困り果てた。

何故なら、今の魔法（ジャベリン）に自分の半分程の魔力を注ぎ込んだのだ。

それですら全くの無意味なのでは、どういう攻撃をしても効果は無いのでは無いだろうか。

そう思ってしまうと、焦りに身体が支配され思い通りに動いてくれない。

……以前、カイトに言われた通り、想定外の事が起きると起こる…

…自分の弱点だ。

思わず歯噛みしていると、カイトの方から彼女に話し掛けて来た。

「どうした？　雪風の七号様？　もう手品（まりょく）の種は尽きたのかい？」

「……クッ…！」

「……ふむ。ならば一時休戦として……幾つか聞きたい事が有るんだが、構わないかな？」

「……何？」

カイトは、空を仰いで上空を旋回している魔法人形（ガーゴイル）を見ると、突然そんな事を言い出した。

タバサも釣られて、上空を仰ぎ、その存在を確認すると、頷いた。

「ああ……そうだな。その前に、俺は君を何と呼べば良い？」

「……え？」

彼は何を言っているだろうかと、彼女は訝しんだ。

先程から、散々人形（タバサ）と……敵だと、自分で言っているでは無いか。

……そして、彼女は、彼の言葉に、激しく動揺した。

「父を殺し、母の心を侵した、伯父のジョゼフを殺さんと虎視眈々と狙っている、

シャルロット・エレーヌ・オルレアン王女か。

将又（はたまた）、命令を忠実に熟（こな）す北花壇騎士七号（シュバリエ・ゲーム・セット）の人形（タバサ）か。

……それとも。俺の恋人である愛（シャル）しい人か。

……君は一体……誰だ？

……なぁ……。俺は、君を何て呼べばいいんだ？」

「……私…？　……私…は……わたしは……っ…！？」

彼の懇願する様なその声に、双つの月明かりに照らされたその悲し気な顔に、

少女（タバサ）は思わず言葉に詰まった。

……その問いは、指令を受けた時から、自分で自分に問い掛けていた事だったから……。

しかし、何時になっても答えが出て来ないタバサの様子を見て、カイトは質問を変えた。

「……そうか。では、別の質問をするとしよう。……君は一体、誰と戦っている？」

「……え？　誰…と？」

「……そうだ。

シャルロット・エレーヌ・オルレアンの伯父と対立している『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』か。

若しくは、人形（タバサ）を救おうとしている『宇宙（そら）の救世主（メシア）』か。

それとも……俺（シャル）の愛しい人の恋人である『カイト』か。

今の君にとって、俺は一体誰なんだ？」

「え……？　あ、あなた…は……あなたは……わ、わたしの……？」

その問いは、どうやら彼女の思いもしなかった問いだった様で、

今、考えている真っ最中で答えに窮している様子が、在り在りと見て取れる。

そんな事をして、一向に戦う気配の見えない様子の二人に、

痺れを切らした者が、魔法人形（ガーゴイル）を使って未だ悩んでいる少女に、檄（ミョズニトニルン）を出した。

「……ッッッ！！！　ぇえいっ！　一体、何時迄、何をやっているッ！？

さっさとソイツを殺しなさいッ！！　貴女の母とその男と、一体どちらが大事だと言うの！！」

「ッッ！？　……私……私は……ッ！」

「……。」

魔法人形（シェフィールド）からの叱咤に本来の目的を思い出すも、勝てないだけでは無く、

本当に此の儘、戦ってもいいのだろうかと、自身に誰何し続けて居り、

未だ、戦闘に踏み出す事が出来無いで居た。

そしてカイトは、タバサを嗾（けしか）ける声を気にもせず……最後の問いを投げ掛けた。

「……シャルロット・エレーヌ・オルレアン。

君は、今、何故、此処に居て、誰と戦っている？

君は、一体誰に、どうして欲しいんだ？」

「……わ……わた…し……わたし……は……私は……っ……！！！」

「……クッ…！　ええいっ！！　一体、何時迄、逡巡しているッッ！！？

さっさと、そいつを殺しなさい！！　貴女の母がどうなっても良いの？！

さあッ！！　早くッッ！！！　殺しなさいィッッ！！！！！

殺セエエエエエェェェェッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！」

「…わたし……私は……ッ！　私はァァァッッ！！！」

カイトからの、大事な事を…大切な事を気付かせようとする、自身の心根を揺さぶる問いに。

魔法人形（シェフィールド）からの、母を人質にした、本来の目的を忘れまいとさせる恫喝に。

何方にも応えられなかった少女は完全に泣き崩れ、もう立ち上がる事が出来なくなっていた。

「……クッ…！！　ええい、もういい！！！　貴様など、もう不要だ！！

人形の変わりなど、幾らでも居る！　だが、もう二度と、貴様は母とは会えぬと知れ！！！」

そう言うと、上空を旋回していた魔法人形はその姿を消した。

……辺りには、少女の啜り泣く声のみが響いていた。

「……ヒック……ッ……うぅっ……ヒッ……ッック……グスッ……。」

「……。」

だが、カイトは彼女に近付こうともせず、只、少女が啜り泣くのを黙ってみているだけだった。

そう……只、黙って、その場に立っているだけであった。

……まるで、少女からの言葉を待っているかの様に。

……そして。

「……グスッ……ヒック……カイ……トぉ……。」

「……なんだ？」

「……たす……けて……お願…い……私を……私達を……助けてぇ……お願い……

カイト……助けて……。」

そして、少女は、自身の愛しい人に、助けを求めた。……求める事が出来た。

「……ぁぁ…。……勿論だ。必ず、君達を助けるよ、シャル。救世主（メシア）の名に懸けて。

……有難う、シャル。」

「……ヒック……ぇ？」

そう言って、タバサを抱き締めたカイトは、彼女に『有難う』と礼を言った。

当然、意味が解らず困惑するタバサに、優しく微笑みながら涙を拭い、その理由を教えた。

「本当は、もっと早く……。シャルと出会った時から、君達を助けてあげたかった。

でも、それは俺個人の望み。救世主（メシア）としては、それは出来無かった。

未だ、助けを求められてもいないのに、人を勝手に助ける事は出来なかったんだ。

でも、シャルは今、俺に助けを求めてくれた。

これで、俺もやっとシャルを本当の意味で、助けてあげられる。

……だから、有難う。俺に、シャルを助けさせてくれて。」

「……カイトぉ……ん……。」

又、泣きそうになったタバサに苦笑しながら、頬を一撫でしながら、一つ唇を落とした。

そして、一分程抱き締めた後、カイトはタバサから離れた。

「え……や……いやっ…！」

「……大丈夫だよ、シャル。もう、居なくなる事も、敵対する事も絶対に無いから。

……シャル。もう君は、人形（タバサ）じゃ無い。

人形（タバサ）であった君を、俺が今から殺しにいってくる。全てを助ける爲に。」

「……ぅん……うん…！」

「うん、良い返事だ。　五行　」

“ハッ。”

「シャルを頼む。少し身体が冷えている様だ。暖めてやってくれ。

俺は少し、出掛けてくる。」

“畏まりました、我等が主。行ってらっしゃいませ。”

思わず、嫌だと追い縋（すが）ったタバサに、嬉しいけど困ったという複雑な表情をし、

自身の従者達を喚び寄せ、自身の愛しい人を頼んで、何処かへと消えた。

ｓｉｄｅ：ヴェストリの広場

又、その広場に在るベンチに、タバサは座って居た。……側に、愛しい人の従者を侍(はべ)らせて。

先程よりかは、幾らか涙は止まって来た様だ。

そうして心が落ち着いて来ると、ふとした疑問が湧き上がって来た。

彼は今、何処に何をしに行ったのだろうか……と。

何となく、手持ち無沙汰になったタバサは、側に居る彼の従者に聞いてみた。

「……あ、あの……彼…は……？」

「ん？　主殿の事か？　……心配か？」

「い、いえ……心配は心配だけど……その……今、彼は何処に…？」

「ん～、そうねぇ……まぁ、マスターの事だから、大体想像は付くけど♪」

「……え？」

「だな。どうせ、オマエの母ちゃんの所にでも行って、掻っ攫って来るんだろうぜ。」

「紅蓮。言葉を慎みなさい。それでは、まるでカイト様が盗人かの様に聞こえるでしょう？」

「カァーーッ！　相変わらずお堅いねぇ…龍斗は。」

その問いに、各々思い思いに応える五行に、少しタジタジになるタバサ。

五人の話し合いを黙って聞いてると何故か、何時の間にか一触即発の空気になっていた。

「……紅蓮。真逆、カイト様を侮辱する御積もりで？」

「……ヘッ。そんなつもりは毛頭無ぇが……俺は間違った事は言っちゃいねぇだろうがよ？」

「……矢張り、あなたとは一度徹底的に御話死合った方が宜しい様ですね。」

「ほう！　俺は一向に構わないぜ？

この前もその前もその前の前も、テメェとは喧嘩せずじまいだったからなぁ…！！」

「……喧嘩などでは無く、御説教です。御間違えの無い様…！！」

あわや、決闘が始まるかという時に、天の声が入り二人を力尽くで止めた。

「止めんか、戯(たわ)け共！！！！！」　ガインッ！！　ゴインッッ！！

「ヌグッ…！？」　「イテェッッ！！？」

「この愚弟共めが！　主殿の命をもう忘れたか！

護衛対象を放って置いて、好き勝手に闘いを始めるとは何事だ！
この戯け共がッ！！！」

「ぅ……済みません…。」ズキズキ…！　「……悪かったよ……。」ズッキンズッキン…！！

「……全く……この愚弟共は……。」

「ま、まぁまぁ…黄宇姉。二人共、一応反省はしてるんだし……ね？」

「……しかしだな、水薙？」

未だ、説教が続くかと思われたが、其処に天使が現れ、諍(いさか)いをあっさり収めてしまった。

「……もう。龍斗兄ちゃんも紅蓮兄ちゃんも、喧嘩しちゃメッ！

黄宇お姉ちゃんも、あんまり殴ったりしちゃ、二人が可哀相だよぅ……。」

「うむ、分かった。もう、これ迄としよう。説教はお終いだ。な、鋼牙？」

「うんっ！　黄宇お姉ちゃん、やっぱり大好きっ♪♪♪」

「うむうむ。私も大好きだぞ、鋼牙♪♪♪♪♪」

「「「……ハァ。やっぱり、こうなるんですね。」のね。」んだな。」

何時もの遣り取りに、呆れながらもホッとする三人であった。

しかし、そんな彼等にとっては何時もの光景に馴染めない者が一人……タバサである。

取り敢えず、問題は収束したかに見えたが、本当にそれでいいのかと思わず聞いてみた。

「……あ、あの……。」

「ん？　どうかした？　タバサちゃん。」

「……い、いいの？　今の…は？」

「ああ、いいのいいの。どうせ何時もの事だもの。黄宇姉は鋼牙には特に甘いから。

鋼牙が白と言っちゃえば、黒でも白にしちゃうからね。

……まぁ、そんな事、鋼牙は絶対にしないし、言わないけどね♪」

その朗らかな様子に、本当に何時もの事だと……家族の戯(じゃ)れ合いなのだと分かった。

その後も、取り留めの無い話を続けながら、その場にてカイトが帰ってくるのを、

六人で身を寄せ合いながら、ずっと待っていた。

ｓｉｄｅ：オルレアンの屋敷ｉｎガリア

カイトが、そのタバサの実家に来た時は、其処は未だ無事な様子だった。

この際、礼儀は後回しにしたカイトは、乱暴に扉を開け、執事のペルスランを呼び出した。

「ペルスラン！　ペルスランは居るか！」

「……はい。……おや、貴方様は、何時ぞやの…。」

「ああ、ペルスラン、緊急事態だ。

もう直ぐ、ジョゼフに雇われたエルフが此処に攻め入り、シャルの母を奪いに来る。

大至急、必要な物を纏めてくれ。時間が無い。母親は俺に任せろ。」

「畏まりました。直ちに！」

そう言って、ペルスランは急いで荷物を纏めに掛かる。

カイトは、結界を張り、その外でビダーシャルの来訪に備えていた。

……そして、荷物を纏め終える凡そ十分程前に、招かれざる異邦人を出迎えた。

「……む？　貴様は誰だ？　この家の客人かな？」

「ん？　何だ…未だ、ジョゼフから聞いていないのか、ビダーシャ

ル？

俺が、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だ。『ネフテス』よ。」

「な？！　き、貴様が…！？　クッ……！　何と言う事だ…！

あの伝説の災厄が又、復活したというのか…！！！」

「復活とは、酷いな。俺は、一度たりとも滅んだ事など無いぞ？

只、此の世界に居なかっただけだ。……まぁ、お前達に到底理解出来る話では無いがな。」

「……その尊大で、傲慢な、訳知り顔な台詞……どうやら、間違い無い様だ。」

「……どういう判別の仕方しとんねん、オマイラ。

てか、俺の一体何処が、尊大で、傲慢だと？」

「……其処に疑問を持つのか？」

ビダーシャルの強烈な一撃が決まり、崩れ落ちたカイト。

取り敢えず、どう扱うべきか分からないビダーシャルは、

その儘立ち尽くして、カイトが復活するのを待っていた。

「うっくぅ……何奴も此奴も……酷かタイズメントばい……！
ｏｒｚ」

“いや、意味分からんから。”

というビダーシャル（＋読者）のツッコミを無視し、カイトは立ち上がり話を続ける。

「……ハァ。ま、取り敢えず…だ。此処は退け、ビダーシャル。聡明なお前の事だ。俺と戦う無謀は心得ているだろう？」

「クッ……しかし…！」

「ジョゼフには、俺が邪魔したと言え。そうすれば、奴は否やは言えんよ。」

「……分かった。此処は貴様の言う通り退くとしよう。……貴様の存在を本国にも知らせねばならんのでな。」

「ああ、そうしろそうしろ。……是非共な。」

「……貴様の思惑など、知りたくも無いが……。

事と次第に依っては、我等とて相応の覚悟はしている。それを忘れるな…！

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！！」

そう捨て台詞を残して、ビダーシャルはあっさり撤退していった。

その後、準備を終えた執事（ペルスラン）と、病んだ母を連れてその場を後にした。

ｓｉｄｅ：三度、ヴェストリの広場

六人が身を寄せ合って、十分程経つか経たないか…という頃。

目の前に、大きな荷物を抱えたペルスランと、気絶している母が唐突に現れた。

驚くタバサを後目に、母を草上に寝かせると、水薙を側に喚び寄せ

た。

その後、母の身体が水の膜に覆われ…暫しの後、その身体の中から何か黒い物が出て来た。

すると、水の膜と共にその黒い物体は母の身体から離れていき、それをカイトが消し去った。

そして、この後のカイトの言葉を聞き、タバサは泣き崩れた。……歓喜の声を上げながら。

「……よし、これでもう大丈夫だ。シャル……君の母を患わせていた原因は取り除いた。

もう、これで、アイツに従う理由も無い。君達は、完全に自由だ。」

その後、シャルロットの母を部屋のベッドに寝かせ、今日は母娘水入らずにし、

オールド・オスマンに訳を話し、シャルロットの母の滞在を認めさせ、

自身は久し振りに、才人が持って行ったテントに寝泊まりするカイトであった。

翌日。目覚めた母に、感謝の言葉を貰うと同時に、既に娘が話していたのか、

此方から言う前に交際を認めて貰った、少々情けない彼氏が居たそうな。

メシアとカイトとシャルロット～後編～（後書き）

如何でしたでしょうか？

カイトが殺す者……それは、シャルロット本人では無く、人形であった『タバサ』そのものです。

この話…『無限にして無窮なる旅人』は、

必ず、全てハッピーエンドで終わらせますので、皆様が危惧した様な事は、絶対に有り得ません。

それを、此処に改めて明記させて頂きます。……え？　遅いって？

気にしたら（ｒｙ

それはさておき。これにて、タバサは完堕ちです。

この後は、あ～んな事も、こ～んな事もやり放題……ぐっへっへ……ごほんっ、失礼。

とまぁ、この三部作にて、八～十巻迄終わりました。……え？　十巻の内容が無いようって？

実は、もう既にコルベールのイベントは終わっています。

原作を持っている方は、コルベールのとある台詞に気付かれたと思いますが…ソレです。

タバサももう助けましたし、態態アーハンブラ城に行く必要も有りませんし。

既にルイズの家族は、彼女が『虚無』である事も知っていますし…ね？　終わってるでしょう？

次は、新学期に入ってテファを、トリステインに迎える所でしょうかね…。

何とか、今月中に後一本ぐらいは投稿したいとは思うのですが……。

さて。タバサが完堕ちした記念と致しまして…。

少々気が早いですが、次なる世界について御話したいと思います。

今、考えている次なる世界とは……。

『スーパーロボット大戦ＯＧサーガ　無限のフロンティアＥＸＣＥＥＤ』です。

それも、途中参加。時期は、未だ内緒ですが。因みに、プロットは既に出来上がっています。

『そんな中途半端なら、やめやがれコンチクショー！』とかいう御意見が無ければ、

このプロットの儘、頑張りたいと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

忘却と大蛇と永遠（前書き）

現時刻（０２：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，７９２，２２３アクセス　ユニーク：１５０，２１９人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、ユニーク総数１５０，０００人突破致しました！！！

皆様、此の様な駄作を幾度も御読み頂きまして、誠に感謝致して居ります。

さて。今回は、ちょっと途中の文が読み難くなって居ります。
一応、演出の爲なのですが、精神の弱い方は少々不安定になってしまう恐れが有ります。

どうか、御一読なさる際は、充分に御気を付け下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

忘却と大蛇と永遠

ｓｉｄｅ：三人称

カイトとタバサの決闘の翌日。オールド・オスマンの情報操作に依って、

タバサの母がカイトの手で助け出され、学院にて保護したとの情報が流布された。

その際、何処から漏れたのか、タバサが実はガリアの御姫様だと言う事もバレた。

その爲、とあるお爺ちゃんと、薔薇を咥えた某青銅がカイトに御仕置きされたが。

そして、その日の朝。大怪我を負った筈のコルベールがキュルケと共に、

東方号（オストラント）で中庭に降り立ち、その場は暫しの間騒然となったが直ぐに収束した。

その際、その船から降り立ったコルベールの姿を見止めた才人が思わず駆け寄り。

「……先生。俺…先生が大怪我して、死に掛けたって聞いて…それで……。」

「……どうやら心配を掛けてしまった様だね。御覧の通り、私はピンピンしているよ。」

「……先生…良かった……本当に…良かった……お、俺…先生に何かあったらと思ったら…。」

「おいおい…どうした！　何を泣く！　私なら大丈夫だ。もう死ぬものか。

何せ未だ、君の国へは行っていないのだから。

約束しただろう？　何時か、私も君の世界へ…君の国へ共に行きたいとな！」

「……ぅっ……くっ……先生…！」

生徒（さいと）も無事先生（コルベール）と再会出来。自身の進むべき道を見出した炎蛇は決意を新たにし。

その後は、特にこれといった事件も起きず……只、平凡で何物にも代え難い日常を送っていた。

そして、時は新学期を過ぎた頃に、話が飛ぶ。

……え？　何？　……で、肝心の二人はどうしたのかって？　……聞きたいの？

……本当に聞きたいの？　……お兄さん、知らないよ？　一応、忠告はしたからね？

……では、どうぞ←。

ｓｉｄｅ：タバサの部屋

「……えっと……シャル？　ちょっとトイレに行きたいんだが…？」

「……や。」　むぎゅ。

「……あの～……シャルさん？　そろそろ危ないかもしれないんだけど……；」

「……だめ。それなら私も一緒に行く。」　ぎゅぅ～。

「いやいやいやいや？　君、女の子。俺、男。解る？　流石にそれはダメでしょ？」

「……じゃ、ダメ。」　ぎゅむ…！

「；；；；；；　……ナンテコッタイ。」

……御判り頂けるだろうか？　あの一件以来、タバサの方が寧ろ片時も離れたがらず、

そのべったりっぷりに、カイトの方が却って驚いている始末である。

その余りのバカップル振りに、一応祝福していたキュルケもうんざり顔。他は言わずもがな。

因みに。タバサの母は、カイトが学院長（オールド・オスマン）を脅し、

隣室を宛（あて）がっている為、タバサも一安心の様だ。

更に因みに。以前、カイトが才人犬と『どちらが先に墜とすか』と言う下らない賭をした時。

それに乗って、周りの生徒達もこっそりしていたのだが、殆どの人が賭に勝った様である。

後にその事を知った才人が、苦笑いで悔しがっていた事は特筆すべき事でも無かった。

ｓｉｄｅ：三人称

取り敢えず、時間の経過と共に何が有ったか、簡潔に伝えて置こうと思う。

新学期……要は新年度を迎え、最上級生は卒業し新入生が入って来た。

水精霊騎士隊（オンディーヌ）の名前は、良くも悪くもそれなりに知れ渡って居り、新入生にも一応それなりに人気だった。その最たる要因は、副長である才人であった。

サイト＝ヒラガの名は、名こそ余り正確には伝わってはいないものの、

その功績は、貴族・平民問わず知れ渡って居た。

曰く、『土くれのフーケ』の撃退。曰く、アルビオンより、密命を無事果たし生還。

曰く、神聖アルビオン軍の竜騎士隊全滅。曰く、撤退戦の際十万超の軍隊の足止め……等々。

何処から漏れたのか判らないが、何故か密命の事迄流布されていた。

デマだと嘲笑う者。平民風情が…！　と憤る者。拍手喝采で迎える者。様々であった。

だが、独占欲の塊である彼の主人（ルイズ）は当然、面白く無い。

……が、丁度その時、彼女の精神力が切れてしまった。

思わず力が抜け、ふにゃふにゃになった虚無（ルイズ）ではあったが、

カイトにアドバイスを受け、何とか再度、魔法が使える様になり、

又、皆が才人に同情し、掌を併せる光景が其処彼処（そこかしこ）で散見されていた。

その後、カイトが押し付けがましく貸し一つと言い、ルイズに才人に字を教える様に言った。

どうやら、才人には此方へのゲートを潜った時に、翻訳機能が標準装備されていた様で、

基本的な文字一つ一つと、幾つかの単語を覚えただけで直ぐ様文章が読める様になっていた。

この能力が、地球（むこう）でも使えれば……と才人が悔しがった事は言う迄も無い。

そして、相変わらずの超絶バカップルに辟易しながらも、日常生活を楽しんでいると、

アンリエッタから、直々に水精霊騎士隊に命令が下賜された。

命令の内容は至って簡単。もう一人の虚無にして、自身の従妹ティファニアを、

子供達諸共、トリステインにて引き取りたいと言うものだった。

カイトからも「良いんじゃないか？」と許可を貰い、

ルイズ・才人・ギーシュ・キュルケ・タバサ・カイトの六人で、早速迎えに行く事となった。

その際、行きはカイトの龍達で一っ飛び。

帰りは、外の世界を全く知らないテファや子供達の為、トリステインの船で送る事になった。

ｓｉｄｅ：ウエストウッド村

其処は、才人・ルイズ・カイト・タバサらが、以前見た時と何等変わらずに佇んで居た。

その道中に才人から聞いたテファの容姿に、キュルケは対抗心を燃やして居り、

ギーシュは、胸が可笑しいと言う言葉にワクテカしながら興奮していた。

そして、勢い込んで家の中に入ったギーシュが、思わず固まった。

それを不思議に思ったキュルケが続いて覗き込んで固まり、

ルイズと才人も顔を見合わせて、それに続いた。その様をクスクス笑うカイト。

訝しんだタバサが、カイトと一緒に入ると皆が固まった理由が判った。

「フーケ。」

そう……あの『土くれのフーケ』が其処にテファと並んで座って居り、食事を取って居たのだ。

思わず剣（デルフ）に手を掛け斬り掛けようとした才人を、テファが獅噛み付き、カイトが掌で制した。

「な!?　テファ?!　カイトも!　何するんだよ!!」

「止めて!　サイト!　その剣を仕舞って!　御願いよ!!」

「……テファ…?」

「才人。マチルダはテファの姉か母の様なものだ。少なくとも、今はデルフを仕舞え。」

「……本当に?　……テファ。」

「う、うん、本当よ。だから御願い…。二人共…戦わないで……。」

泣き出してしまったテファに、慌てて剣を仕舞って大丈夫だからと諭す才人。

未だ少し緊張しているものの、すっかり毒気が抜かれた様子のフーケことマチルダに、

皆の肩からも幾分か力が抜け、取り敢えずテーブルに着いて話し合いを始める事にした。

……テファの料理を堪能しながら。

因みに。その際も、タバサは頑としてカイトの膝の上から動こうとはしなかった。

食事をしながら、バカップルの片割れのカイトから或る程度マチルダとテファの関係を聞き、

尚且つ、マチルダに此方の要望と理由を話し、テファとマチルダの二人から承諾を得た。

その後、マチルダの現況を聞き、泣き疲れたテファを寝かし付け、話を再開した。

「……さてと。一応、トリステイン側としての話はこれぐらいだ。」

「……ハァ。やっぱり、アンタは未だ話が有るんだろうね？」

「ああ。まぁたった一つだけだがな。」

「……それでも、物凄く聞きたくないって私の本能が警告してるんだけど…どうしてくれる？」

しかし、そんなマチルダの願いも虚しくカイトは躊躇させる暇も無くあっさり質問を口にした。

「まぁ、諦めろ。聞きたい事は、今言った通りたった一つ。……ワ

ルドは元気か？」

“な！？！？　何だって！！？”

「……ハァァ…。あっそう…やっぱり知ってたんだね、アンタ。」

「当たり前だろう？　俺を誰だと思っている？

お前達がロマリアの一体何処を拠点にしているか。そして、其処で一体何をしているか。

俺は全て知っている。勿論、ヴィットーリオも知って居るぞ？

お前達が教皇庁の書物を盗み見し、物に依っては持ち運んでいる事もな。」

そのカイトから聞いた台詞に皆、吃驚仰天。

才人も何か良く判らないけど、やっちゃいけない事だと言うのは、何となく解った。

“えええ？！？！”

「……マジかい。あの兄ちゃん…伊達に教皇じゃ無いんだねぇ……。

フン…。一応、アイツにも言っといてやるよ。監視されてるってね。」

「そうだな……それが良いだろう。賢明な判断だ。流石は名うての盗賊だな。」

「……此処でその名を出すんじゃないよ。例えアンタに殺されても、アタシはアンタを殺すよ？」

「…これは済まん、俺が迂闊だったな。」

「……アンタでも謝る事が有るんだね……驚いたよ。」

そのマチルダの言葉に、皆激しく同意した。

その皆揃っての同時の頷きに、一瞬ピクリとカイトの蜂谷（こめかみ）が動いた気がしたが、

どうやら気の所為だった様で、ほっと一安心した皆であった。

……尤も、タバサだけは、微妙にカイトの手に力が入っているのを見ていたが。

「そうか？　まぁ、それはいい。取り敢えず、明日の朝一頃には彼女達を連れて行くぞ？」

「ああ、構わないよ。アタシも伝える事はもう伝えたしね。
……但し。あの娘を泣かせたり悲しませたりしたら……絶対に許さないよ。」

「ああ、任せろ。極一部を除けば、皆気の良い友達とお子ちゃま達だけだからな。」

そのカイトの台詞に、同意と若干のブータレが混じっていたが、概ねその通りらしい。

それを聞き、もう話す事は無いと思ったのか、マチルダは後ろの森を向いていった。

「……そうかい。それじゃぁ、私はもう行くよ。」

「何だ……明朝行くのかと思ったが…？」

「……あの娘の泣き顔を又、見たくないからね。……行き難くなるだろう？」

そう言うと、マチルダは勝手知ったる薄暗い森の奥へと入って行った。

そして、その夜。才人はテファに虚無の『忘却』を掛けられ、失神した。

だが、翌朝になっても才人の目が覚めなかった為、後に残ったカイトとタバサに任せ、

皆は、テファと子供達を連れて先に行っていた。

……そして。皆が行ってから数時間程経った頃。

「……ぅ……う～ん……ん…？　……此処は…。ああ、そっか…俺は…。」

そう言って目が覚めた才人の目に飛び込んで来たのは、

人が寝ている前で、いちゃつきながらキスしている超絶バカップルだった。

「……お、オマエラなぁ……。」

「…ん……お、やっと起きたか寝坊助さん。」

「……どう？」

最早、羞恥心がどっかいったかの様な態度のタバサの質問に、少々引きながら答える才人。

「…あ、ああ。…何かすっきりした気分だけど……。これってテファの呪文の所為なんかな？

たっぷり寝た所為の気もするし……良く分かんねぇ。

何時もと変わらん気がするけど……でも、やっぱり何か消えたのかな？」

「……そう。」

「……うん。……皆は？」

「俺が先に帰した。俺達なら直ぐに追い付くからな。

今頃、ノンビリ物見遊山でもしてるだろうさ。」

「……そうか。薄情な連中だな。

人に変な呪文掛けといて、置いてけ堀な上、自分達は物見遊山かよ。」

恨み節を愚痴りながらカイト達と話す才人。

その才人に、カイト達から何とはない質問が出た。

「まぁ、そう言ってやるな。……それで？　今、お前は何がしたい？」

「味噌汁が飲みたい。」

「……それは何？」

「ああ、俺の世界の飲みモンで……スープみたいなもんかな？　……ッッッ！？！？！？」

才人がそう何気なく答えると、突然頭を抱え込み悶絶し始めた。

唐突に堰を切ったかの様に、とある感情が一斉に襲って来たのだ。

その名は『郷愁』……そう。

才人は、使い魔の契約（サモン・サーヴァント）に依り、主人の都合の良いように記憶を変えられていたのだ。

使い魔が最後には、自身の主人と一心同体となるのはそれが所以である。

だが、それは皆と何等変わらない人間の才人と……何よりルイズにとって酷な事であった。

その為、ルイズはテファに頼み、テファの虚無…『忘却』に依って、才人の中に有った『こっちの世界に居る為の偽りの動機』だけを消して貰ったのだ。

そして今、それ故に抑え付けられていた感情が、怒濤の如く押し寄せて来ているのだった。

「……どうしたの？」

「……帰りてぇ。帰りてぇよ……。ぅっく……。」

「……構わんよ、才人。今此処には、お前以外誰もいない。

お前がどんなに大声をあげようが、どんな言葉を泣き叫ぼうとも聞いている者は誰もいない。

だから…………今は……我慢するな。」

「ぅっ……くぅっ……ぁ、ぁ、ぁぁあぁ…………ぁああああ…………ああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

才人は、今迄で一番、大きな声で…。一番、長く泣き続けた。

「……ぐすっ…………ぁ〜〜…………。」

「…………もういいのか？」

「…………ずずっ…………ああ。…………ハァ〜……。」

「ん？　どうした？」

泣き止んだ才人が、途端にがっかりした声を出した為、思わずカイトが聞いてみた。

「いや……みっともない所見せちまったなって…さ。それに……ルーンも消えてないや。」

「なぁに…みっともないのは、今に始まった事じゃ無いさ。

それに言っただろう？　今、此処には誰も居らず、誰も何も聞いていない…とね。」

「…有難う、カイト。」

「……それと、ティファニアが消したのは『偽りの動機』って奴だけさ。

お前さんの使い魔としての能力には、全く関係無ぇよ、相棒。」

「……そっか。……なぁ、カイト。」

何か残念そうな……それでいて何処かホッとした様な……そんな一

言。

そんな感想を漏らした才人が、不意にカイトに、とある事を聞いて来た。

「俺の……ルイズへの気持ち……って言うか…さ。

それもやっぱり『使い魔のルーン』が寄越した、偽りの感情だったんかな？」

「…さてな。それを決めるのは、俺でも、デルフでも、ルイズでも無い。

他ならぬ、お前自身。お前がお前の心に自分で問い掛け、自身で確かめるしか術は無いよ。」

「…そっか。……もし……本当にそうだったとしたら……。

俺はどうすりゃいいんだろうな……。」

「それこそ、お前自身が考えるしかない。

頑張って苦悩して、泣いて、怒って、笑って、死ぬ程の大怪我をした、喜怒哀楽な此迄の道。

お前のその道が……例え正しく無くとも良い。

只、間違ってさえいなければ、自(おの)ずと答えは出て来る。俺はそう

思う。」

「……そっか。」

カイトからの言葉に、ようやっと出て来た一言は、今迄のどの台詞よりも綺麗に聞こえた。

「……さて。好い加減行かないと不味いぞ。そろそろ、ルイズ達が襲われている頃合だ。」

「な?!　そ、それを早く言えよ!!　い、急いで行かないと!タバサ、頼む!」

「…（コク）分かった。……ピィー…っ……。」

ホッとしたのも束の間。

カイトの言葉に大慌ての才人は、タバサに頼みシルフィードを喚んで貰い、現場に急行した。

「シルフィにお任せなのね！　久し振りの出番に、シルフィ大張り切りなのねーっ！！！」

その日。ウエストウッドの森の上空では、一陣の烈風が舞ったそうな。

「……え？　シルフィの出番ってこれで終わりなのね？　そ、それは無いのねーーーっっ！！

もっと出番寄越すのねーっ！　シルフィ、もっともっと喋りたいのねーーーッッッ！！！」

とまぁ、何処(さくしゃ)かの誰かに何か…愚痴を言うシルフィードに首を傾げる三人であった。

ｓｉｄｅ：港町ロサイスへの街道

今、皆して、全速力で逃げている真っ最中である。…え？　何からって？

それは……ズシーン……ズシーン……と、今響いている音で御判り頂けるだろうか？

凡そ二十数メイル程の、大きな一つ目の巨人ゴーレム…『ヨルムンガント』からである。

『神の頭脳（ミョズニトニルン）』の操るソレは、火（キュルケが）で燃やしても効かず、戦乙女（ギーシュ）の攻撃も効かず。

ルイズの虚無は又、使えなくなって居り、皆して只管（ひたすら）逃げていた。

だが、敵とは歩幅がまるで違う。その抵抗も虚しく、あっさりルイズが捕まってしまった。

しかし、どうやら敵には、今は未だルイズを殺す気は無い様だ。
敵の言動を察するに、どうもルイズの虚無（エクスプロージョン）を強度試験用に試したいらしい。
だが、虚無（エクスプロージョン）を撃てないルイズは何とか誤魔化してみたが、あっさりと見破られてしまった。
そして、用済みだと放り投げ捨てられたルイズを、一陣の風が通り抜けた。

「……何やってんだよ。」

「……サイト？　あ、あんたこそ何やってんのよ！　呼んでないでしょうが！

全く…！　ティファニアの魔法は効かなかったみたいね！

このバカ、こうやって又、来ちゃうんだもん…。」

結局又、何時もの通りに戻ったか。誰しもがそう思った。
しかし、この後のサイトの台詞には誰もが驚いた。

「…効いたよ、効き捲りだよ。正直、俺は寝惚けていたみてぇだな。
こっちの世界で出来る事ぉ？　インターネットも無いのにぃ？
無理！
テリヤキバーガーも無いのにぃ？　不可能！！
ああ、酔っぱらっていたとしか思えねぇ…恥ずかしい。
これも全部、お前の所為だかんな…ゼロのルイズさんよぉ！」
「……え？」
驚くルイズ達を後目に、才人の口は未だ止まらない。
「しっかし……全く余計な事しやがって……。今よりそっちの方が
未だマシだったぜ。
なーーーにが、虚無だっつーの！　なーーーにが、偽りの記憶消
去だっつーの！
御陰で散々思い出したよ……一年分思い出しちまった。
見ろ！　わんわん泣いちまったじゃねぇか！　帰る方法が見付か

らないのに！！」

「……よ、良かったじゃない。これですっきり帰る方法を探しに行けるわね！」

後はもう、売り言葉に買い言葉の唯の痴話喧嘩。

今が戦闘中だと言う事も忘れて、二人の痴話喧嘩を聞きながら、皆して（特にカイトが）大爆笑していた。その中でも、

「……あのなぁ……。

あんだけ、好き好き言ってるのに、応えてくれない女を好きになる奴なんていねぇよ！！

いたら、勲章くれてやるから、連れて来いよ！！！」

と言う、才人の心からの叫びに、皆して激しく頷いた事は、想像に難くない。

その最中に、痺れを切らしたシェフィールドが、再びギーシュ達を襲い出した。

慌てて助けに行こうとする才人達を、カイトが止めた。

「…って、囮のギーシュがやべぇ！　行かなきゃ…！　っとと。何すんだよ、カイ…ト……？」

「……あいつは俺がやる。お前達は手を出すな。それと近付くな。巻き添えを喰うぞ。」

「え？　……か、カイト…？」

「…分かったな？　忠告はしたぞ？　出来るだけ遠くへ離れていろ、シャル。」

「……分かった。」

その言葉の後、今迄シルフィードに座って居たカイトが消え、その場にキュルケとギーシュが、入れ替わりに座り込み、テファと子供達は、遙か先へとカイトの手に依って、転移させられていた。

それを見届けたタバサは、全速力でテファ達の所へ行き、直ぐ様その場を離れた。

その数瞬後。ヨルムンガントは、虹色の光に包まれ跡形も無く消え去った。

……そして、その後見た光景を、皆は生涯忘れる事は出来無かった。

side：三人称

「……行ったか。……フン。『大蛇（ヨルムンガント）』の名に相応しく、おぞましいな。」

「フン！　貴様がどれだけ強いか知らないが、この伝説（きょむ）と先住（エルフ）の二つを組み合わせた

最強の『ヨルムンガント』を舐めるな！！！　やれ！　『ヨルムンガント』！！」

そう言い放ち、カイトを踏み潰そうとするヨルムンガント。…が、途中で動きが止まった。

思わず慌てるシェフィールドに、カイトが低く静かな声で呟いた。

「……無知は罪……とは良く言ったものだな……本当に。一つだけ教えてやろう。

貴様等の敗因はたった一つのシンプルな理由だ。

――――テメェラは――――俺を怒らせた。

此の俺に又、愛しい人を、此の手に掛けさせようとした。」

その瞬間、この一帯にのみ膨大…と呼ぶには余りにも凶大過ぎる魔力が満ち溢れた。

「その大罪。高が『死』程度で購(あがな)えると思うな！

俺は完全にキレたぞ…！！　神の頭脳(ミョズニトニルン)…ッッ！！！！！！」

そして、彼女(シェフィールド)は、真の恐怖を味わった。

「全魔力解放！　全魔力放出！　全魔力消費！　全魔力固定！

さあ……これが真の『虚無』だ…！　篤と味わえ！　そして、永劫へと回帰しろ…！！

右手に永遠…！！！　エターナル・エンドォォッッッ！！！！！」

辺り一帯を埋め尽くし、外に溢れ出んばかりの超膨大な魔力が、カイトの右手に収束して行き、

凡そ掌大の、虹色に光り輝いた、その七色が流動する球体に纏まった。

そして、その球体をヨルムンガントの胴体に押し込んだ瞬間、

其処を中心とした魔力で支配されていた一帯を、七色のドーム型球体が包んだ。

……直ぐ側で隠れていた神の頭脳（ミョズニトニルン）をも巻き込んで。

ｓｉｄｅ：神の頭脳（ミョズニトニルン）シェフィールド

「グッ……！？　な、何だ…これは……これは、一体、何なんだァッ？！？！」

突然、色取り取りの球体に囚われた瞬間、思わず目を瞑った私が次に目を開けた時には、

辺りは一変していた。……いや、一変などというものでは、決して言い表せないであろう。

何せ……周りの空間……上も下も右も左も前も後ろも……何もかも……

その全てが、先程の七色の光に充ち満ちた、何も無い空間しか無かったのだから。

自分が今、一体どんな状態になっているかも判らず、此処が何処か

も当然判らない為、

辺りを警戒しながら見回していると、途端に眩暈（めまい）がして来た。

つまり、これは幻惑の類か。ならば、自意識をしっかり保たねば。

何処かに、抜けられる道の様なものが有る筈だ。……そう思っていた…始めの内は。

「……む？　何だ…？　……！？　な、何だ？！　何なのだ…一体…コレは？！？！」

唐突に、頭の中に大量の情報…？　いや、コレは……記憶…か？が流れ込んで来たのだ。

一体、誰の、どんな時の、どういう、記憶なのか、全く、定かでは、無く……？

何、だ？　思、考が、途切、れ途切れ、になって、いく…！？

「だ、誰だ……オマエハ…！　チガウヨ！　私ジャナイ！　僕ト遊ボウ？　俺ジャ駄目カ？

な……何……だ？　わ、私ハ…な、何ヲ言ッテ、イル……？　わ、

私ハ誰ダ？

一体、何が、何だ、か、わ、わ、わ、ワカラ、判らない……ィィィィィッツッツッ！？！？！？！？」

わ、私は、自分ガ、何を言って、イルのカ、いヤ、何か、ヲ言っテ、イるノ、カサえ、

全ク、判ラナ、くなっ、テぃタ。

コ、こレハ、一体イツマで続クノか……もウ、誰ニも、何ニモ、ワカラナク………。

も、もう、ヤメて、助ケて、誰カ、私を、助けテ……ワタシ？　ダレ？　ワタシってイッタイだレナの？

私わたしワタシワタシワタシワタワタワタワワワワワワタタタタタシシシシシィィィィィィィィィィ

ィィィィィィィィィィィィィィィィィッツッツッツッツッツッツ！？？！！？？？！？

ダ、ダレカ、ワタシヲ、シッテイル、ヒト、ワタシヲ、タスケテ。

side：三人称

それはとても綺麗な光だった。七色に光り輝く大きな球体。

遠目からでもはっきりと見えるソレは、僅か数分程でその大きさを縮めて行き、

十分と経たず、消え去って仕舞っていた。

何故かその中心に、完全に死に体となっているシェフィールドが倒れ込んで居た。

カイトは、虫螻(むしけら)でも見るかの様にソレを睥睨(へいげい)すると、ソレの上に掌を翳(かざ)した。

すると、彼女の身体が淡く光り出し、その淡さの儘数分が経つと光が止み、

カイトも手を彼女の頭上から退けた。

その数秒後、彼女の身体が大きく撥ね目を醒ますも、目の前に居たカイトを見据えると、

恐怖に顔を醜く歪め、その場を這い擦りながら逃げ出そうと藻掻いた。

しかし、カイトはそんな事は赦さず、彼女の髪の毛をムンズと無造作に掴み、

顔を自分の方へと向けさせ、更なる恐怖を与えた。

「貴様……真逆、此で終わりだと、勘違いしているのか？

それとも……此の俺から逃げられるとでも、思って居るのか？

未だ、宴は終わっていないぞ？　これから始まると言うのに……

そんな様では、いかんな。

未だ、オマエは真の恐怖を味わってはいないと言うのに……。なぁ……そうだろう？」

「ヒッ…！　ヒィィィッッッッ！？！？！？　た、た、タスケテェェッ？！」

しかし、その命乞いはカイトへの恐怖を更に深めるだけになってしまった。

何故なら、その言葉を聞いたカイトは、喜悦に顔を歪め、優しく諭す様に、

恐怖を、絶望を、本能に直接刻み付ける様に、囁いたのだから。

「残念ながら無理だ。もう遅い。遅過ぎるんだよ。では、開幕だ。

ファースト・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　第一形態（アインス）」

そう言うと、髪の毛を掴んで持ち上げていたシェフィールドを無造作に放り投げると、

腰が抜けて動けない彼女を一顧だにする事無く、彼だけに許された呪文を唱え始めた。

すると彼女の周りに、１４体もの先程のヨルムンガントよりは一回り程小さい龍が召喚された。

それだけでも、もう既に充分怯え過ぎていた彼女であったが、更にカイトは恐怖を加えた。

「何を怯えている？　ソイツラは最も小さく弱い存在だぞ？

セブンス・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　虹色形態（セブンス）」

そして、その１４体の龍の周りに、更にほぼ同じ大きさの龍を２１体召喚した。

……しかし、未だ終わりでは無かった。いや、寧ろ始まりであった……のだが、幸か不幸か。

「そして……真に大きいと言うのは、これぐらいからを言うのだよ。

セカンド・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　第二形態（ツヴァイス）」

そして顕れた、雲を突くという表現が真に正しい存在を7体も、文字通り目の当たりにした彼女は、今度こそ完全に気絶し、失禁までしていた。

その様に呆れ返り、少しは持つかと思っていたカイトは失望し……とある事を思い付いた。

「…ハァ……仕方無い。……あ、そうだ。龍斗。」

「はい、カイト様。此方で宜しいでしょうか？」

「ああ、流石は龍斗。準備がいいな。」

「御褒めに預かり、恐悦至極です。」

「さてさて……♪　きゅっきゅ…の～きゅっとくらぁ～♪

よし、これでいいだろう。では、又会おうか。その時迄、その精神が保てば…な。転移。」

シェフィールドに何かをしたカイトは、その儘北叟笑(ほくそ)みながら彼女を主の許へ転移させた。

その後。油性ペンで額に『肉』と書かれた無能王(シェフィールド)の使い魔が見付かるも、

意味は解らずとも、何となく滑稽なその文様に、暫く物笑いの種になっていた事は余談である。

その後、皆の許に合流したカイトは、只「ヨルムンガントは倒した」とだけ言い、

皆からの何事か聞きたそうな雰囲気を、一刀両断した。

そして。ティファニアという薄幸（と思われている）の美少女を迎えた学院は、更に活気付き、

その彼女を巡って、更に一騒動、二騒動有るのだが……それは又、次回にて。

忘却と大蛇と永遠（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応これにて、１１巻は終わりです。次回は、１２巻。ひょっとしたら二分割になる……かも？

さてさて。今回、ようやっと判明致しました業…『エターナル・エンド』。

第４７話『決戦・後編～欲望（ディザイア）～』にての初御披露目以来の登場にして、初解説です。

『エターナル・エンド』：魂を根底から冒して、侵して、犯し尽くす窮極の精神波。

ゼウスやオーディン、天照大神等を創り給うた創世神ですら、その存在を自ら消滅させた程のおぞましい業。掠（かす）ったただけでもアウト。

です。因みに、もう一つの業…『インフィニティ・エンド』は未だ内緒です。

何時か再発動するその時迄、御楽しみにして頂ければ、望外の幸いです。

あ、因みに因みに。『彼女』は大丈夫と言う事になっています。

一応、額に肉を書いている最中に、脳を弄(いじ)くって記憶を消去させていますから。

ですが……人の記憶って、そう中々簡単には消えませんよね？　……ウフフのフ♪

では。色々と又、フラグを増やしつつ。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

金色の妖精と、水精霊騎士隊の騒動（前書き）

現時刻（１６：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，８２９，５２３アクセス　ユニーク：１５３，８４３人
皆様、いつも有難う御座います。

そして、大変御待たせ致しました。

では、拙作を御覧下さい。

金色の妖精と、水精霊騎士隊の騒動

ｓｉｄｅ：魔法学院

今、其処の食堂のとある一角は大混雑していた。……そう、ティファニアの居る所である。

彼女の容姿は、男女関係無く良くも悪くも注目を浴び、極一部を除き大人気であった。

だが、極度の人見知りな彼女は、困り果てそれぞれへの応対に大童（おおわらわ）であった。

その困った顔が又そそると言う、バカ野郎共が更に又、群がり…と見事な悪循環を成していた。

そうして、才人達が彼女を眺めていると、先程迄、阿呆な事を延々と論議していた、

ギーシュとマリコルヌが席を立ち、テファの許へと歩いて行った。

曲りなりにも三年生であり、又、水精霊騎士隊（オンディーヌ）でもある二人に文句を言える者は少なく、

皆、不承不承(ふしょうぶしょう)ながらも、肩と胸を張って歩く二人の前を空け、自然と道を作っていた。

それに更に気を大きくするバカ二人が、彼女の許へと辿り着き彼女に向かって一礼した。

何事かと思って皆が見ていると、何とテファの胸へと手を伸ばそうとした。

思わず立ち上がった才人は、途中で止まった。

何故なら、ギーシュがその場に拳骨(げんこつ)にて沈み、マリコルヌが吹っ飛ばされたからだった。

「こんの、ドアホウ共が！　真っ昼間から酔っ払った挙げ句、

婦女子に手を出すとは……恥を知れ！　戯(たわ)け共がッッッ！！！」

そう。カイトに依る制裁を受けたのだった。

その一喝に依って、周りに群がっていた者達も、思わず怯(ひる)み数歩下がった。

その様を見届け、フン！　と一つ鼻息を鳴らすと、小さなボディー

ガードを喚び出した。

「全く……。これじゃ、却(かえ)って逆効果だ…。鋼牙。」

「は～い♪」

“え!?　い、何時の間に?!”

「済まないが、暫くテファの護衛をしてくれ。」

「了～解♪　って事で、テファお姉ちゃん、宜しくね♪」

「え、ええ。宜しく、コウガ。」

その後、テファにべったりな甘えん坊の男の子が付き人になり、その所為か、男子生徒よりも、（鋼牙目当ての）女生徒の友達が多く増えた事に、

テファは全く気付かず、素で喜んでいた。そして……。

「おーい、才人!　ちょっとこっち来ーい!!」

「お～～……。どうしたんだ、カイト。」

「ああ、お前はこれから、俺が説教しちゃる。」

「は!?　な、な、何故に!?　全く身に覚えが無いんだけど……;」

「ドアホウ!　お前に恋愛の駆け引きなど百年早いわ!!

俺自ら、しっっっかり躾けてやるから覚悟しておけ。」

「な!?　え?!　えええええーーーーッッッ!?!?!?」

ズ～ル…ズ～ル…

“……ナム～。”

叫びながらカイトに引き摺られて行く才人を、才人達の真似をして合掌する全生徒達であった。

その夜。カイトに説教と言う名のアドバイスを受けた才人が、ようやっとルイズと結ばれた。

又、その最中に目を覚ました、王代理妃（アンリエッタ）の直接の辞令で才人付きの給仕係となり、

寝食をほぼ共にするシエスタとも、コトに及んだ事は想像に難くない。

その翌日。ベッドから起き上がれなかったルイズが、

キュルケに散々揶揄（からか）われた事も想像の範囲内である。

ｓｉｄｅ：三人称

さて此処で、字数かｓ……ゴホン。読者の皆様の、鋼牙をもっと見たいという要望に御応えし、

鋼牙が一体どの様にしてテファを守っているのか…。その一部を御紹介しよう。

ｃａｓｅ１：とある男子生徒

「ミス・ウエストウッド。」

「あ、はい。」

実は、テファは此処では、自身が生まれ育った森の名前を姓にしていた。

実際、自身の出生を隠す爲、偽名を名乗る貴族は多く彼女も特に何も詮索される事は無かった。

そして、件の話し掛けて来た男子生徒達は、側に居る鋼牙（ガキ）の事など歯牙にも掛けず、

唯只管（ひたすら）、テファを自身の得意の文句（爆笑）で口説いていた。例えば、こんな風に←。

「白の国（アルビオン）から来られたレィディ。貴女の肌はその御国の名前の様に白く透き通る様で、

余りにも眩しくて、目が焼けてしまいそうです！　さて、何か御

飲物を御持ちしましょうか？

何なりと、このシャルロに御申し付け下さい。」

（その儘、焼け爛（ただ）れてしまえ。）↑作者の声

「いやいやいや！　是非共僕に、その大役を任せて下さい！」

（飲物運ぶだけで大役とか……どんだけドジッ子なんだ、オマエハ。）

「ではでは、午後になったら私と遠乗りなど如何ですかな？」

（ですかな？　……て、お前は何処のカイゼル髭のおっちゃんだよ。）

等々である。一応、失礼にならない様、丁重に御断り申し上げているのだが、

彼等はその事は敢えて無視し、更に口説こうと必死に、且つ躍起（やっき）になっていた。……が。

彼等の最大の誤算は、自身達が黙殺していた小さな護衛（ナイト）の存在であった。

彼等の思惑は、そのナイトに依って悉く潰えたのである。……こんな具合に。

「あ、テファお姉ちゃん。はい、飲物♪」

「え？　これは？」

「あのね？　カイト兄ちゃんから教えて貰ったの。テファお姉ちゃんは、みんなと一杯お喋りしたりしてきっと喉が渇くから、常に水筒で、飲物を持っていなさいって。それで、水薙お姉ちゃんに御願いして用意して貰ったの♪」

「そうなの…。有難う、コウガ。」

「うん！♪　どういたしまして！♪」

とか。（……ええ子や、ほんまに。）

「テファお姉ちゃん。お馬さんとかに乗りたいなら、僕に言ってね？
僕がテファお姉ちゃんを、何処にでも連れて行ってあげるから♪」

「……そ、そう言ってくれるのは嬉しいのだけれど……；
コウガでは、ちょっと難しいわよ？　だからその気持ちだけ、有り難く受け取っておくわ。」

「え～……大丈夫だよぉ～。ほら、こんな風に！♪」

そう言うと、鋼牙の身体が光り輝いた。“うおっ！　まぶしっ！？”

「……グルルルル……。」

“ええっ！？　と、と、虎ぁぁぁっ？！？！”

そう。その眩しい光が止み、彼等が恐る恐る目を開けると、

其処には凡そ2～3メイルはあろうかという、大虎が居た。

その白と金に彩られた荘厳な大虎は、ふいっ…と自身の背中をテファに向けると、こう言った。

「さあ、ティファニアよ。我が背(せな)に乗るが良い。」

“えええええッッッ!?!?　し、しゃ、喋ったぁぁ～～ッッッ!?!?”

「あ、あなた……本当に、あのコウガ?」

「然り。我は、白虎の鋼牙。我が主に命ぜられ、其方を守護するもの。さぁ、乗るが良い。」

「は、はい……。」

そして、テファをその大きな背中に乗せると、背上にいるテファに一切振動を与えず、

皆をその威圧感で退けさせ、のっしのっしと優雅にその場から去って行った……そうな。

そのギャップに皆驚き、少しの間距離を取っていたらしいが、

矢張り人型の時の鋼牙の可愛さに耐え切れず、結局又戻って来たのであった。鋼牙、恐るべし。

ｃａｓｅ２：とある女子生徒

今テファは、ヴェストリの広場に在る、火の塔近くの噴水の縁(ふち)に、鋼牙と共に腰掛けていた。

この僅か半月ばかりの時間を過ごしただけで、物凄く疲れてしまったのだ。

只でさえ、見る物聞く物全てが珍しく、且つ目まぐるしく過ぎ去る日々に天手古舞(てんてこま)いだった。

特に一番困ったのは、自分の容姿に依る弊害である。

森で子供達と一緒にいる間は、全く意識もしていなかったそれに依って起きた、

要らぬ嫉妬とちょっかいの所為で、可成りの心労を患(わずら)いホームシックになっていた。

だが、今は自分と共に居てくれる鋼牙と、友達の才人やルイズ達の御陰で何とか堪えてはいた。

そんな風に、落ち着く暇も無く、ここぞとばかりにホッと一息付いていた時だった。

彼女達に話し掛けられたのは。

「ミス・ウエストウッド？　貴女、此方の方を御存知（ごぞんじ）？」

「あ、こんにちわ。…ご、ごめんなさい。お名前をまだ伺って無かったわ。」

「貴女…此方の御方を何方（どなた）と心得るの？　未だに御名前さえ御存知無いなんて！

本来なら、編入初日に挨拶があって然るべき御方よ？　コホン…！　いいこと？

此方の御方は、ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ様に在らせられるわ。」

クルデンホルフ。時のトリステイン王より、大公領を賜った小さいながらも独立国である。

その名はトリステインでは、一応それなりに知られて居り、

例え名目上とは言え、礼式上ベアトリスも妃殿下と呼ばれるべき立場の人であった。

又、伊達に一国を構えている訳では無く、金も可成り持っている爲、ほぼ同格といっていい筈のグラモン家やモンモランシー家は、その領地経営の下手さ故に、

クルデンホルフ家に多額の借金をして居り、そうそう簡単には頭が上がらないのであった。

だが、そんな事は生粋の純粋箱入り娘のテファが知っている筈も無く。

「まぁ、それはそれは。宜しく、クルデンホルフさん。」

と、極普通に挨拶をしただけであった。

暫し沈黙の時間が流れ、再稼働した取り巻き達が慌ててテファを窘(たしな)めるも、

外交上・政治上の事など全く分からないテファには、

何を言われているか、はぁ～さっぱりさっぱりぃ～……であった。

その内、謝るのに帽子を被った儘なのか。と問い詰められ、帽子を脱ぐ様催促されたが……、

それを脱ぐと言う事は、自身にエルフの血が混じっている証拠であ

る、長耳を曝す事になる。

それは、特にエルフに敏感なこのトリステインでは自殺行為に近い為、

自身の肌が白い事を利用し、日に焼け易いと言う事で、

今迄ずっとそれを避け、何とかなっていたのだが……。

絶世の美少女であるテファに、嫌われては大事！　として、全く手が出せない男共とは違い、

同性である彼女達には然程の躊躇も無く、実力行使をしようとし手を出して来た。

……だが。彼女の側に居た小さなナイトの存在を、

うっかり失念していた彼女達は、痛い目を見る事となった。

「……ねぇ、お姉ちゃん達。テファお姉ちゃんが嫌がってるよ。止めてあげてよ。」

「え？　なぁに、この子供。馴れ馴れしく話し掛けないで頂戴！」

「……ねぇ…。どうしても、止めてくれないの？」

「諄いわ。死にたくなかったら、私に意見などしないで。」

「……そう。それじゃあ……。」

そう鋼牙が言った直後、沢山の鉱物が十重二十重と彼女達を取り巻き、

その鋭い切っ先を、３６０。全方位から自分達に向け、僅かでも身動ぎしようものならば、

その瞬間串刺しになる事は、火を見るよりも明らかであった。

何事が起こったのか訳が解らない皆をさておき、鋼牙は一人言い聞かせる様に言葉を紡いだ。

「自分達が死んでも、文句は言えないよね？　お姉ちゃん達。」

“……ぇ？”

「ダメだよ？　自分達に全く、殺す覚悟も、死ぬ覚悟も無いのに、そんな事を言っちゃ。

……だから、これはオシオキ。……バイバイ♪」

そう言い放ち、応えも聞かずに上げていた腕を振り払い、

漂っていた鉱石が彼女達目掛け、突進した……が。チン……という金属音が鳴ると同時に、

串刺しにする筈の鉱石達が身動きを止め、バラバラになった。

その内、彼女達の頭上にあった鉱石の欠片がその儘降って来、

その衝撃に依って、一瞬で緊張の糸が切れた彼女達は腰が抜け、その場にてへたり込んだ。

「こら、鋼牙。」　ぺしっ…！

「あうっ！　……ぅ～～こうおねえちゃん～……。」

「鋼牙。主殿の命を履き違えるな。主殿はティファニアを守護せよとは仰せになられたが、

敵対する者を殺せとは仰られ無かっただろう？　それは主殿の命に反するぞ。

そもそも、何故彼女を護衛する様、主殿が仰られたのか……解らぬ訳ではないだろう？」

そう。その鉱石達を切ったのは、黄宇であった。

偶々、彼女達の喧噪を見咎めた黄宇が、これは不味いと止めに入ったのだ。

そして、今は御覧の通り、鋼牙を絶賛説教中である。

「ぅぅぅ～～～～……はぃ…ごめんなさぃ。」

「謝る相手は私では無いだろう？　鋼牙。」

「……ぅん。……テファお姉ちゃん…ごめんなさい。」

「……え？　あ、う、うん。私は、いいのだけれど……。」

そう言う彼女の視線は、今腰を抜かしている少女達に向けられていた…が。

「ああ、彼女達は気にするな。これも自業自得というものだ。

幸か不幸か、傷一つ付いてはいないのでな。問題は無いだろう。

さ、行こうか……鋼牙、ティファニア。」

「…うん♪」

「は、はい……。」

一瞥(いちべつ)もせずに、にべも無く気にするなと返した黄宇に若干怯みつつ、此の場を後にした。

その後、騒ぎを聞き付けた才人達が、遅れ馳(ば)せながらテファの許に駆け付け、

彼女を彼等に託した黄宇は、又何処かへと行き、鋼牙が辿々(たどたど)しくも一部始終を皆に語った。

それを聞いた才人は、自分達が何とかするとは言ってみたが、
ギーシュやモンモンが余り乗り気では無く、中々に難しい外交問題になると知り頭を抱えたが、
その様を見たテファが、何かを決意したかの様に一つ頷くと、
才人達に断りを入れて、その場を小走りで後にした。

ｓｉｄｅ：ルイズの部屋

その夜、才人は昼間に、鋼牙から聞いたテファの件を、ルイズに相談していた。
どうにかしたいと言う才人と反対に、それぐらい自分でどうにか出来無ければ、
この先生きて行く事など出来ず、又『虚無』などという重責は担えないと断ずるルイズ。

ルイズの今迄の境遇や、想いを知っている才人には、それ以上強くは言えなかった……が。

矢張りどうにかしてあげたいと、思い悩む才人の横で、

こっくりこっくりと船を漕ぎ始めるルイズ。

「……お前なぁ…。人が真面目な話してるのに、寝るなよ…。」

「……一体、誰の所為で寝不足だと思ってんのよ。この万年発情駄犬。」

「へ？」

「アハハ……私もちょっと、腰が痛くて……。」

「……え……っと……その……あのぅ……スミマセンOTL」

「……フン！／／／／／／」

世は斯(か)くも平和であった。

ｓｉｄｅ：一年の教室

その日は、一限からテファの姿が見えなかった。何事があったのかと訝しむ生徒達と、

極一部の意地悪な生徒達でその騒つき方に違いがあったが、

皆がテファの話題に集中している事には、変わりなかった。

然う斯うしている内に、件の彼女が遅れてやって来た。……見慣れぬ服を着て。

流石に自由に服装まで着替えても良いなどという規則はないので、

シュヴルーズが咎めるも、テファの決意は変わらず……その帽子を脱いだ。

そして、その場は一瞬にして混乱の坩堝と化した。

「エ、エ、エ、エルフ！！！！！」

“ヒイイイィィィィィッッッッ！？！？！？”

皆、慌てて席から、その場から立ち去り、シュヴルーズは腰を抜かした。

テファは大丈夫だと宥(なだ)めるも、エルフの恐怖に怯える皆には全く聞こえない言葉だった。

そんな混乱の中、一人彼女を詰問する者が現れた。……そう、あのベアトリスである。

以前、あっさり腰を抜かされ恥を掻かされたと、

復讐心に燃えていた彼女には、絶好の機会であった。

……尤も、その問い詰める声は、隣に居た鋼牙の睨み付ける眼に怯えて、半ば震えていたが。

「み、みなさん！　騙されてはいけませんわ！

ハルケギニアの歴史は、エ、エルフとの抗争の歴史！

どんな事情があろうが、か、彼女は我々の仇敵ですわ！」

だが、テファとてそれぐらいの言葉を言われる覚悟はしてきた。

だからこそ、自分の想いを素直に打ち明けた。

「確かにエルフは、ハルケギニアの人々と対立して来たわ！　でも私の父と母は違う！

父は母をとても愛していたし、母も父を愛していた！

私はこの身体に流れる母から貰ったエルフの血も、父から貰った人間の血も愛している！」

「……何よ、あなた。ハーフなの？　エルフに魂を売った人間の娘？

只のエルフよりも性質（たち）が悪いわ！！」

だが。如何に覚悟して来たテファでも、その言葉だけは許す事は出来無かった。

今、初めて彼女は、その言葉に怒りを覚えた。

「父を侮辱しないで！！！」

その瞬間、鈍い青色に光る甲冑を着込んだ騎士団……クルデンホルフの私兵騎士団。

『空中装甲騎士団（ルフトパンツァーリッター）』が飛び込んで来た。シュヴルーズは気絶した。

しかし、話に聞いていた鋼牙を警戒してか、余り側には近寄らなかったが、

その威圧感は、並の人間ならば萎縮（いしゅく）する事請（う）け合いだった。

それはテファとて例外では無く、怖い…と純粋に恐怖で怯えていたが、

自分の側に居る小さなナイトが握ってくれた、小さな手の温もりに勇気を貰い、

再度、誠実を以て皆と仲良くなりたいと訴えた……が。

エルフというだけで怯える皆にはその声は届かず、

寧ろ虐める良い機会だと北叟笑んだベアトリスによって、悪魔の証明をさせられる事になった。

「では、あなたにそれを証明して貰いましょう。」

「……証明？」

「そうよ。そうね……あのね……そう！　異端審問を受けて頂きましょうか！

私は始祖ブリミルの敬虔なる僕。

洗礼を受けた日に、宗教庁からクルデンホルフ司教の肩書きも頂いてるの。

異端審問を行う権利は、十分に持っていてよ！」

ｓｉｄｅ：魔法学院外の草原　天幕前

鋼牙が共に居た爲、余り乱暴には出来無かったが、何とか此処迄連れて来る事は出来た。

……一人、高を括ってテファに乱暴しようとした若い奴が、一瞬で殺されたが。

それはさておき。今、テファの目の前にお湯が煮え滾っている大釜がある。

どうやら、異端審問とやらは、その釜の中に浸かって一分間耐えるというものらしい。

それを声高らかに説明する彼女の眼には、何時ぞや母を殺したあの兵達の様な憎しみは無い。

只、自分の思い通りに進んでいる事に対する愉悦しか見てとれなかった。

「……可哀相な人。」

「……なんですって？」

「全部が自分の思い通りにならないと、気が済まないのね。子供なのね、あなた。」

「！！！！！」

思わず、手を振り被ったベアトリスだったが、直ぐ側で殺気を浴びせられ、腰が抜けた。

しかし、何とか虚勢を張って直ぐ様実行する様、騎士団に命じた。

……が、危機一髪、其処に騒ぎを聞き付けた才人達が慌てて駆け込んで来た。

しかし、他の生徒達…友達に羽交い締めにされ止められた。

「な！？　何すんだ、お前等！　離せ！　テファを見殺しにすんのかよ！！」

「そうじゃない……そうじゃないんだよ、サイト。アレは不味い。実に不味いんだ。」

「何がだよ！！！」

どうやら、聞説（きくならく）。異端審問は邪魔した者を皆、異教徒と認定し、一族郎党皆同一視するらしい。

流石に、家族にまで累が及ぶとならば、皆の雰囲気も分かるが……しかし。

それでも、抗う才人を見ていたベアトリスは、今直ぐ帰れば不問に処すと言い放った。

……誰もが、その提案を呑むしかないと思った。……だが。

「……いや。絶対にいや。」

「……な！？」

「私、外の世界を見てみたいって、ずっと願ってた。

そして其処に居るサイト達が、私のそんな夢を叶えてくれたの。

だから帰らない。

あなたみたいな卑怯者に、帰れと言われて帰ったら、サイト達に

合わせる顔が無いわ。」

その毅然（きぜん）とした態度。何処迄も真っ直ぐな口上に、その場は拍手喝采の歓声が響いた。

それが尚々面白くないベアトリスは、問答無用で実行させようとした。

其処に滑り込む者が一人。……才人である。その英雄の登場に更に沸く野次馬。

一体、どんな立ち回りを見せてくれるのだろうかと、皆が期待していた……が。

才人のとった行動は、その場に居た誰一人として予想だにしないものだった。

「ええと、その、クルデンホルフ姫殿下？　お願いだ。テファを連れて来たのは俺だ。

全ては俺の責任だ。だから、許してやってくれ。」

才人はその場で土下座したのだ。何とか、謝り倒して許しを乞おうとしたのだが……。

生憎と、相手は只の我が儘な子供。英雄と呼ばれている貴族擬(もど)きが自分に土下座した事で、

却って気を大きくしてしまい、益々手が付けられなくなってしまった。

結局駄目だった才人に襲い掛かる魔法の矢を、青銅のゴーレムが我が身を犠牲にして防いだ。

と、同時に大釜を引っ繰り返し、中の湯を全てその場にぶち撒(ま)けた。

「ミスタ・グラモン？　一体どういうおつもり？

まさか、このクルデンホルフ大公家に逆らう気かしら？」

「いや、その、ええと……；」

「はっきりおっしゃいなさいな。」

「はぁぁあああああ……。参ったなぁ……。異端審問だっていうのに……。

ああ、参ったなぁ……おまけに空中装甲騎士団（ルフトパンツァーリッター）まで控えてるっていうのに……。

ダメなんだよ……こんなに観客が居ると、ボクはダメなんだよ……。

格好つけないと気が済まないんだよ……。ボクはバカだ。大バカだ。」

「……ミスタ・グラモン？」

その呼び掛けが彼の覚悟を決めさせたのか……。

一つ深い溜息を付くと、襟を正し背筋を伸ばした。彼も、貴族なのだ。

「婦女子や友を見捨てては騎士の恥。かと言って、異端審問で果てるは武門の名折れ。

となれば、杖で白黒つけねばなりますまい。

グラモン伯爵家　四男　ギーシュ。謹んで御相手仕る。」

「水精霊騎士隊！！！　杖とれぇぇえええええ！！　隊長に続けえええッッッ！！！」

その隊長の覚悟に発奮（はっぷん）された水精霊騎士隊の面々は、マリコルヌの叫びに呼応し、

一斉に杖を構え、ハルケギニア最強の一つと名高い空中装甲騎士団（ルフトパンツァーリッター）に対し臨戦態勢をとった。

益々、自分の思い通りの展開にならない事に耐え切れ無くなったベアトリスは、

今度こそ命令を下した。

「空中装甲騎士団（ルフトパンツァーリッター）、前（フォー）へ！！！」

「……学生の騎士ごっこ風情が。怪我で済むと思うなよ？」

「御気遣い痛み入る。さて、ボクの戦乙女（ワルキューレ）に、何処を突いて欲しいのか言い給え。」

何時ものなよっとした笑みでは無く、才人を痛め付けていた時の冷酷な挑発する笑みを受け、

戦闘が始まった……かに見えた。

「其処迄だ。この勝負、俺が預かる。双方、杖を収めろ。」

“なにっ！？！？！？”

そう、カイトが此の場に乱入し、互いに放たれた魔法を全て掻き消してしまったのだ。

突然の乱入者に驚く空中（ｒｙと、又か……と最早諦めモードの生徒達。

しかし、カイトの存在を知らない一年生のベアトリスは頭を抱え、狂ったかの様に騒ぎ出した。

「ぁぁあああああ～～～～～！！！！！！　もうーーー！！！！　なんなのよ！！！

一体、なんなのよアンタは！！！　今度は一体なんなのよ！！！

何で、みんな私に逆らうのよ！！　私はクルデンホルフ大公家なのよ！？！？」

だがしかし、カイトはガン無視し他の皆に声を掛ける。

「才人、良くやったな。彼処で土下座するなんて、普通は出来無いぞ。本当にお前は偉いよ。

それと、鋼牙。始めの内は少々頂けなかったが、最後はでかした。良くテファの意志を尊重して我慢したな。偉いぞ。」

「そ、そうか？　そう言われると、何か、て、照れるな／／／」

「……えへへ。」

「……キサマ、一体何者だ？　決闘に割って入るとは無粋な。名を名乗れ。」

「貴様等、有象無象（うぞうむぞう）に名乗る名前は持ち合わせておらんよ。

それよりも……三度は言わん。これが最終通告にして、最後の命令だ。

杖を収めろ。」

「フン！　キサマの様な平民風情に命ぜられる謂われなど無いわ！」

可哀相な事に、その瞬間彼等の運命は決定した。

「そうか、残念だ。では、疾く失せろ。

詠唱破棄　『千の雷（キーリプル・ストラペー）』」

その刹那、杖を構えていた全員が巨大な雷に打たれ一瞬で気絶した。

それを初めて見た皆は、腰を悉く抜かし（ことごとく）、その場にへたり込んだ。

ベアトリスは、何が起こったのかまるで理解出来ず、その場に立ち尽くした。

……が、それも直ぐ様解けた。カイトが話し掛けて来たのだ。

「……さて。では、ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフよ。

貴様の過ちを悉く正そうか。」

「……！？　な、き、き、貴様ですって！？　平民風情がこの私に貴様？！

しかも過ちを正す…！？　ぶ、侮辱ですわ…！　無礼にも程があるわッッッ！！！！！」

激昂するベアトリスを微塵も気にせず、カイトは一つ一つベアトリスの間違いを指摘し、

彼女を追い詰めていった。

「先ず一つ。これは異端審問だと聞いたが……。」

「え、ええ、そうよ！　あなたも名前くらいは聞いた事があるでしょう？

もしあなたも、彼女を庇うのならば異教徒と見做してよ？」

「では、司教の免状は？」

「え？　……じ、実家に置いてあるのよ！」

「成る程、お前司教というのは嘘だな。」

「な、な、何ですって!?　クルデンホルフ大公家のこの私を侮辱しただけでは飽き足らず、

あまつさえ嘘吐き呼ばわりとは……！　あなたには何れ神罰が下るわ!!!!

あなたの様な無礼の極みの者など、始祖ブリミルが見逃す筈が無いわ!!!!!!」

「何を阿呆な事を。あのうだつの上がらないブリミル坊やが、そんな事出来る筈も無かろうが。

そんな事よりも、異端審問には司教の免状だけでは無く、

ロマリア宗教庁の審問認可状が必要だが。それも知らないとはな。どう考えても嘘だろ。」

「ぅ……。そ、それは……！」

「因みに、此処トリステインでは、司教を騙(かた)った場合、火刑に処される。……覚悟は良いか？」

そのカイトの最後の言葉が決めてとなり、腰を抜かして皆同様にその場にへたり込んだ。

すると、この時とばかりに周りが腰を抜かした儘、やいのやいのと喚き立てる。

それを、カイトが一睨みで大人しくさせると、とととととと、とテファが駆け寄って来た。

みんな、絶対にテファがベアトリスに死刑宣告をするものだと思っていた。

……しかし、その後の言葉に皆、驚きの余り茫然自失になった。

「……お、お友達に…なりましょう？」

“……へ？”

「あ、あの、ミス・ウエストウッド？　貴女には、彼女を裁く権利があるんですよ？」

「ここは学院でしょう？　学舎で裁くの裁かないのなんておかしい

わ。

それに私……ここにお友達を作りに来たの。敵を作りに来たんじゃ無いわ。」

その言葉に、思わず皆して口を噤(つぐ)んでしまった。

その僅かの静寂を、ベアトリスの泣き声が破った。

「ひ……ひう……ひっぐ……ぅ、ぅう、うえ〜〜〜〜ん!!!!」

所詮、子供の我が儘。その我が儘に始まり、泣き声で終わる。良くある一風景。

もうなんか、みんなの色んな意味でのやる気も削がれ、誰とも無く溜息が零れた。

すると、生徒達の間から、ぬっとオールド・オスマンが出て来た。

「……もう、終わったかの？」

「遅ぇよ、オスマン坊や。」

「そう言わんといてくれるかのぅ？　結構時期を見定めるのって難しいんじゃよ？」

「フン、まぁいい。それより、お前の出番は無いぞ、坊や？

未だ俺の話は終わっていないのだからな。」

「……ぇえっと……出来れば、余りそういう事は言わないで貰えると助かるんじゃが……；；」

「だが断る。もう別に秘密にしとく理由も無いんでな。」

「いやいや、特に理由など無くとも秘密にしといた方がいい事も……じゃな？」

「ハッ！　テメェラの都合など、俺の知った事か。そんなもん、テメェラで何とかしろ。

取り敢えず、ベアトリス。お前の過ちは未だ正し終わってはいないのでな。

話を続けるぞ。」

オールド・オスマンとの遣り取りが終わると、もう話す事は無いとばかりに無視し、

ベアトリスに身体を向け、彼女の言を又、一つ一つ訂正し始めた。

「では次だ。先程、お前はハルケギニアの歴史はエルフとの抗争の歴史と言ったが、

それは何時からだ？」

「え？　い、何時からって……そ、そんなの始祖ブリミルの頃からに決まっていますわ！」

「残念ながら、それは違う。それが二つ目の誤りだ。

ブリミルはな。只の一度たりともエルフと争った事など無い。

寧ろ、エルフこそが、あいつの友であり、家族だ。」

“……
…は？
”

当然、誰一人として理解出来る者は居なかった。

事前に聞いていた者達のみ、あっちゃぁ～……と額に手を当て、頭を抱えていただけだった。

「その証拠がエルフの伝承だ。

あいつらの伝承にも、英雄としてガンダールヴ……神の左手の英雄譚が残っている。

何故ならば、初代ガンダールヴのサーシャは……エルフの少女だからだ。」

もう理解とか何とかの範疇（はんちゅう）を超えていた。最早理解する事を、脳が拒否した者も居た。

しかし、次の言葉には皆、如実（にょじつ）に反応した。

「そして、次の過ち。これもさっき、テファの父を大分扱き下ろしていたが……。

テファの父は、あのモード大公だぞ？　紛れも無いウェールズとアンリエッタの従妹だ。

その血筋を侮辱する事は、アルビオン・トリステイン両王家を敵に回す事になる。

その覚悟がある者のみ、口にするといい。

釜茹で・火刑どころでは無く、即座に御家取り潰しになるだろうがな。」

その言葉で、御近付きになりたがった男共は、不敬罪にて摘発される自分達を幻視し、

彼女に快くない感情を抱いていた者達は、即座に顔を青ざめ…を通り越し、真っ白になり、

遠巻きに見ていたその他の連中は、その神秘的な美しさに高貴さを

足して、

益々憧れと羨望と、フィルターを重ねていった。

そして、一人、また一人と彼女に近付き、挨拶と握手を求める人達で溢れ返った。

テファも、涙を堪えながら一人一人握手し、応えていった。

その様を眺め　うむうむ　と頷く年寄り二人。

或る程度、その波も収まった頃、オールド・オスマンが徐(おもむろ)に又、喋り出した。

「我々も、助けが遅くなって済まなかったの。

只、普通に助け船を出しては、中々真の友というのは作り辛いからの。

……特に、お前さんの様な、エルフの血を引く者ではの。」

「……いえ。」

「おほんっ。さて。最後に一つ、お前さんに尋ねたい事がある。」

「……はい？」

「非常に大事な質問じゃ。学問というのは真、命懸けじゃのぅ……。儂の全存在を懸けて質問するぞ。きちんと答えるのじゃ。」

「は、はい。」

何を言うのかと訝しむ生徒達と、カイト。

何か嫌な予感がしたカイトが、ウォーミングアップをしているのを、眼の端に捉えながらも、

それでも尚、オールド・オスマンはその口を開いた。己が結末を理解しながら。

「それはホンモノかの？」

「……はい。そうです。」

「もっとはっきり、この年寄りに聞こグボッ！？！？！？」

「何を阿呆な事を口走ってやがる！　このド色惚け爺が！！！」

テファの胸の異常過ぎる大きさに、自身の全存在を懸けて聞くも、その途中で夢半ばで倒れた。

何故ならば、カイトの踵落(かかと)としが見事に決まり、オールド・オスマンは一撃で沈んだのだ。

その潔さに、男子生徒は親指を立て、彼の健闘を讃(たた)えた。

オールド・オスマンの株が上がった瞬間でもあった。

その阿呆と言う名の英雄を足蹴(あしげ)にしながら、カイトはテファに忠告した。

「いいか、テファ。お前の胸は何もおかしくなんてない。

だから、罷(まか)り間違っても友達に確かめて貰おうなんて、バカな考えはするなよ？」

「え？　ええと……その……はい……／／／」

「よし、宜しい。」

その瞬間、舌打ちした男女併せた何人かが、その場に一瞬で沈んだ事は御愛嬌である。

色々と、波瀾万丈なティファニアを巡っての騒動は、結局彼女を受け容れる事で話が付いた。

その日は快晴だった。綺麗な澄んだ空と、嗅(か)いだ事の無い違う匂いの温かい風に身を包まれ、

テファは、これからの本当の学舎生活に思いを馳せ、我知らず綺麗に微笑んだ。

金色の妖精と、水精霊騎士隊の騒動（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、１２巻の続きと……何とか１３巻に少し入りたいと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

男の性～前編～（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，８８８，１６３アクセス　ユニーク：１５９，６０１人

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして有難う御座います。

凡そ一月振りの更新となってしまいまして、申し訳御座居ません。

今後も恐らくこのぐらいの不定期更新になってしまうかと思いますが、どうか御諒承下さい。

さて。クリスマスプレゼントと致しましては、可成り無粋な物では有りますが、

そのつもりでの、今話と次話の二話連続投稿を致します。

……それにしても人間って、その気になれば何とか時間って作れるものなんですね。

まぁ、来週は可成りの地獄になりそうな予感がビンビンしてますが。っと、それはさておき。

今話は、普通のギャグ回と次回の為の前哨戦です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

男の性～前編～

ｓｉｄｅ：水精霊騎士隊（オンディーヌ）

あのクルデンホルフの騒動から数日後。

諍（いさか）いも過ぎたベアトリス達とテファは、今迄の確執も何のその。とても仲良くなっていた。

又、一方。ハルケギニア最強の一角として名高い『空中装甲騎士団（ルフトパンツァーリッター）』に、

勇敢にも立ち向かった、水精霊騎士隊の団員の名声も尚々高くなり……。

所謂、皆にモテ期が来ていた。

その証拠に、今も何時もの溜まり場に来て、机上に色んな女生徒から貰ったプレゼントを乗せ、

それを眺めて肴にしながら、今日も今日とて真っ昼間から酒をかっ喰らっていた。

「おいギーシュ！　凄い花束だな！！」

「いやぁ、考え物だな！　モテ過ぎると言うのも！！！」

「やぁ、サイト！　これ、どうだい？　似合うかい？　……え？　似合うって？

アッハッハ！　参ったなぁ！　どうしても着てくれって言うんだよ！

いやぁ、モテるって辛いね！！！」

「……いや俺、何も言って無ぇよ；；；；」

とまぁ、それぞれに春が来ているらしく、何とも賑やかで楽しそうな雰囲気ではあった。

そんな時だった。いつもは豪快なギムリが、突然低く小さな声で問いを投げ掛けて来た。

「……所で、諸君。皆、それぞれ一様に春を迎えている訳なのだが……、

実は、この中に一人だけ裏切り者がいる。……一体、それが誰だか……判るか？」

「？　行き成り、何を言い出すのかと思いきや……一体全体、どういう事だい？」

「……それは……ずばり、お前だ！　サイト＝ヒラガ！！！」

「……は？　お、俺？！　俺、何かしたのか？」

「……未だしらばっくれるか。この水精霊騎士隊で唯一！　君だけが！　君だけが…！！！」

「……お、おいおい；；；；　そ、そんなに涙を流す程の事を、彼がしたと言うのか？」

そう。今、ギムリは血涙を流しながら、

その裏切り者である才人をこれから弾劾しようと言うのだ。

だが、果たして才人は、一体何をやらかしてしまったのか？

誰も、当の本人も判らない儘、皆してギムリの次の言葉を待っていた。

「……そ、そうだぁ；；；　こ、こいつは……こいつだけが……わ、我々の中で唯一……！

唯一、女性というものを、物理的に知っているんだ！！！！！」

“な、何だってーーーっっっ！？！？”

「んなっ！？／／／／／／　そ、そういう事か……／／／」

ようやっと、才人並びに仲間達はギムリの言いたい事が判った。

要は、才人一人だけが、既に初体験を済ませており、それが悔しいと言うだけの事だった。

ＤＴ乙。……というか、ギムリはその情報を、一体何処から仕入れて来たのだろうか？

その事に思い至った者は、今此の場には誰一人として居なかった。

「お、おいっ！　サイト！　い、い、いい、一体どういう事なのか、説明し給え！！」

「い、いやぁ……どういう事って言われても……；　た、只、ルイズと……その……／／／

うぅんっっ！！／／／　まぁ、そのアレだ、うん。まぁ、そういう訳で／／／」

「くぅぅぅ～～……ま、まさか、サイトに先を越されるなんて……！！！」

「しかも！　それだけじゃぁない！　な、な、何とコイツはぁ……！！！」

「ま、未だ何かあると言うのかね？！」

「こ、こ、ここここ、コイツはぁ……！！！　何と、御付きのメイドに迄手を出し！

夜な夜な、三人で組んず解れつしているそうじゃ無いかぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

そのギムリの魂の絶叫に、誰しもが驚いた。……うん、色んな意味で。

“な、な、なな、何だってーーーーーーーーーッッッッ？！？！？！？！？！”

「うげっ？！／／／／　な、何でそんな事迄、ばれてんだよっ！！？／／／／／／」

「で、で、では、君は、今彼が言った事を事実と……そう認めるのかね？！」

「う……／／／　ま、まぁ……その……ぅん／／／」

その才人の肯定に、瞬間的にその場に殺気が膨れ上がった。

思わず、その殺気にたじろぐ才人。そんなみんなに、ギムリが更に声を掛けた。

……どうやら、ようやっとこれから本題に入るらしい。

「……という訳だ、諸君。

彼一人だけが、これ程迄に春を謳歌するのは不公平だとは思わないかね？」

“然り！　然り！　然り！”

「其処でだ。今、此処に一枚の地図の写しがある。これが一体何か……誰か解るか？」

「む？　……これは……ま、マサカッ？！」

「そう。そのマサカだよ、ギーシュ君。これが……これこそが…！！」

図書館にあった、女子風呂のある本塔の地図の写しなのだよ！！」

つまり、ギムリは才人だけ女性の裸が見放題なのが気に食わないから、

みんなで見に行こうじゃ無いか！　と、誘(いざな)っているのであった。

皆、この機会を逸してなるものかと、挙(こぞ)って諸手を挙げて賛成した。

一人反対したレイナールも、マリコルヌの真理を突いた言葉に頽(くずお)れ、参加する事になった。

「……なぁ、別に俺いなくてもいいよな？」

「何を馬鹿な事を言っているんだ、君は。君の所為でこんな事になっているんだぞ？

つまりだ。僕達に何かあった時、君がその全責任を取る爲にも、君にも来て貰わなくちゃいけないだろう？　……それに君だって、興味はあるだろう？」

「酷ぇな、おい；；；；　……ま、まぁ、無い訳じゃ無いけど……。」

男とは、斯くも悲しい生き物であった。

「あ、そういやさぁ、ギムリ。」

「ん？　何だい、サイト。」

「……何で、お前、あんなに俺の事詳しかったんだよ？　もしかして、お前ストーカー？」

「何を馬鹿な事を。全て彼から聞いたんだよ。あのカイト＝ヤガミ氏にね。」

「……カイトォォォォォオオオオオーーーーーーーーッッッッッ！！！！！

お、お前かぁぁぁぁぁああああああああああーーーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！」

そんな才人の絶叫は空に吸い込まれ、本人には残念ながら届かなか

ったそうな。

そして何故か、空にて笑顔でサムズアップしているカイトの姿を幻視した。……無茶しやがって。

因みに。その当の本人は現在進行形で、文字通り恋人と組んず解れつしていたそうな。

そして、その翌日。計画実行日が来た。

ｓｉｄｅ：発掘現場

「……ここだ。ここから後は、ギーシュの使い魔に道形（みちなり）に掘り進ませれば……。」

「……辿り着くは桃源郷。楽園はもう目の前と言う訳だね？

宜しい。ならば早速作業を開始しようじゃないか。ヴェルダンデ！　頼んだよ。

この作戦には君の力が、何より必要不可欠なのだから！」

「モグ……モグ……モグッ！」

「……それにしても、まさかアンタまで参加するとは思わなかったよ。」

「何、阿呆な事言ってやがる！　男なら一度は拝みたいと思うだろうがよ！

全く……この俺様に声を掛けないなんて、水臭いにも程があるぜ！！！」

「……炎の鳥に水臭いとはこれ如何に。」

「お。言うねぇ……こりゃ一本取られたな！　ガッハッハッハ……！！！」

……とまぁ、ヴェルダンデの気合いも充分に、何故か共に居た紅蓮も加え、

早速行こうと意気込んだ皆の前に立ち開（はだか）る者が居た。

「……矢張り、来たか。」

「お前……カイトかっ！！？」

「そうだ。お前達ならば、きっと必ずこうするだろうと思ってな。」

「……君は、僕達の邪魔をすると言うのかい？」

「……ああ、そうだ。本来ならば、俺も共に楽しんでいたのかも知れないがな。

……だが、今回だけは絶対に駄目だ。」

「……何故だ？！　何故！　認められないなどと……！！」

そう。皆の目の前に立ち塞がったのは、あのカイトであった。

どうやら、行動を先読みし、既に先回りして待ち受けていたようである。

だが、同じ男としての訴えをする皆に、カイトはその理由を述べた。

「……当たり前だろう？

何故ならば……今、この時間帯はシャルも一緒に入ってるんだからな！！

お前達、お子ちゃま共に俺のシャルの裸体など、罷り間違っても見せて堪るものか！！！！！

況してや、今回は水薙や黄宇も一緒に入ってるんだ。

尚更駄目に決まってるだろうが、戯けが！！！」

「な、何とっ！　あ、あの、水薙さんや、黄宇さんまでもが……！

これは、益々君を退けなければならなくなったね。」

「……ほう。この俺と相対すると……そう言うのか、貴様等は。

思い上がりも甚だしいとは、貴様等の所行の事を言うのだぞ？」

その理由を聞いた皆は、更に燃え上がる事となった。

実は、カイトの従者の水薙と黄宇は、その容姿・気さくさ・親しみ易さから可成り人気があり、

事実、懸想している者も少なからず居るのであった。だが、当の本

人達はカイト一筋の爲、
幾人もの貴族達が、夜な夜な枕を血涙で濡らしていたのだ。

だが、何と今回は彼女達の裸身も見られると言うではないか！
これで発奮しない者は男……否！　漢では無いと、皆心を奮い立たせた。

そして、眼前に立ち開る最強の怨敵に対し、身構えたその時であった。

皆の中から、一人勇敢にも真っ先に飛び出した者が居た。

……そう。何を隠そう、かの紅蓮であった。

「……ハッ！　相棒！　今日ばっかりは俺も手加減出来無ぇぜ！！」

「ほう！　紅蓮、貴様そちら側に付くとはな。余程、命がいらぬと見えるな。」

「けっ。言ってやがれ！　今日の俺様は、そうそう簡単にはいかねぇぜ？」

「……いやな。どっちにしろ、後で確実に龍斗と水薙と黄宇と俺に依る説教フルコースと、

鋼牙に思いっ切り嫌われる事は確定済みだからさ。

……寧ろ、今からお前に同情するよ、俺は。」

「……し、しまったぁぁぁーーーーッッッ！！！！！

ま、全く、それを考えてなかったアアアアーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！」

「……阿呆、此処に窮まれりだな。」

その場に居る皆からの同情と憐愍（れんびん）の視線を、盛大に浴び捲る紅蓮であった……が。

何かを決意したかの様に、雄々しく立ち上がると唐突にカイトに啖呵を切った。

「ＯＴＬ　……くっ…！　だが！　此処迄来たら、もう後には退けねぇ……。

何としてでも、テメェを突破して、桃源郷を拝んでやるぜ！！！」

「ほう。いい度胸だ。覚悟を決めたか。ならば、俺も本気を出すとしようか。」

「……いえ、カイト様が御自ら御手を下される迄も御座いません。

この不届き者は、私が確実に成敗致しましょう。」

だが、勢い込んで迎え撃とうとしたカイトの前に龍斗が立ち塞がり、紅蓮の後始末は自分がやると言い出し……、

普段の龍斗からは考えられない程の怒気と闘気が、その身の内から溢れ出ていた。

その啻(ただ)ならぬ雰囲気に、紅蓮も狙いを龍斗に変え、互いに敵と認識した。

「そうか。なら、紅蓮はお前に任せるよ、龍斗。」

「はい畏まりました、カイト様。完膚無き迄に、あの大馬鹿めに思い知らせてやるとしましょう。」

「ハッッッ!!!　上等だ……！　やっぱ、テメェとは一度、

本気で決着を付けねぇといけねぇと思ってた所だったんだよ……!!!!」

「……奇遇ですね。珍しく意見が合ったじゃ無いですか。

……私も、この機会をずっと待っていたのですよ……！！！」

「……龍斗。今度ばかりは、燃え散らす程度じゃ済まねぇぜ……？」

「……紅蓮。貴方のチョロ火を、今度こそ掻き消して差し上げますよ……！」

「……よし。ならば、思う存分に戦って来い。転移（ムーヴ）！」

正に一触即発の空気の二人を、どうやらカイトが別の場所に移動させた様だ。

それにホッとしたのも束の間。

再び対峙する事になった緊張感を解す為に、一つの疑問を尋ねた。

「……なぁ、カイト。あの二人……あの儘にして本当に良かったのか？」

「ん？　ああ、勿論だ。前から色々と燻ってたからなぁ。

こういう機会の内に、少しでも発散させてやらないとな。

あ、当然、最低限の制限は付けさせてるからな。この世界が滅ぶ危険は無い。問題無いぞ。」

「……そ、そうか；；；；　……それより、カイト。

どうしてもお前は、俺達の前に立つんだな？」

「諄（くど）い。寧ろ、それは俺の台詞だ。……貴様等、諦める気は無いんだな？」

“然り！！！”

「良かろう。ならば、戦争（クリーク）だ！　だが、此の場で戦うには互いに些か不便だろう。

故に！　今から、それに相応しい舞台へと移そうでは無いか！！

詠唱破棄。　固有結界『無限の剣製（アンリミテッド・ワークス）』！」

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』

「……さて。ここにある、神剣・魔剣・宝剣、その他の武器の

類は何れも好きに使うといい。

貴様等が今から挑む者は、世界最強にして最凶の壁だ。

では、征くぞ。――――水精霊騎士隊よ。女子風呂を覗く準備は万端か？」

「……逝くぞ！　奴に我等の絆の強さを見せ付けてやるのだ！

水精霊騎士隊！　声を上げろ！　心を震わせろ！　吶喊（とっかん）あるのみだ！！

ガンホー！　ガンホー！！　ガンホー！！！」

“ぅぅぅうおおおおおおおおーーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！！！！”

今、漢と男のプライドと意地を掛けた（阿呆な）闘いが始まった。

ｓｉｄｅ：独立（オンリーワン）した新世界

今、この何も無く、何でも在る世界に只、二人のみの生物が対峙していた。

「……フン！　前から、テメェのその糞お堅い性格が気に食わなかったんだよ……！！

相棒には感謝しねぇとな…！　御陰で存分にテメェをブッ飛ばせらぁ！！！」

一人は、炎の化身にして、荒ぶる鳳――――紅蓮。

「……その言葉、そっくり其の儘、御返し致しましょう。

私も、貴方のその粗暴で乱雑な所が昔から気に入らなかったのですよ……！！！

丁度良い機会です…！　貴方に物事の道理と言う物を解らせて差し上げましょう！！」

もう一人は、植物や風の化身にして、雄々しき龍――――龍斗。

「――上等だ。相棒からは、程々になんて言われちゃいるが……
…テメェは一度ブッコロス。」

「――結構。私とて、貴方にあっさり死なれては興醒めですからね。
……精々、抗って下さいよ。」

「――――龍斗ォォォォォオオオオオーーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！」

「――――紅蓮ンンンーーーーーーーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！！」

そして。こちらでも又、宇宙を……世界中を震撼させる兄弟喧嘩が勃発した。

男の性～前編～（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、ガチバトル回です。そして、本文でもカイトが言っていますが、

あの二人には、この機会に今迄に溜った鬱憤を存分に霽（は）らして貰いましょうｗ

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。そして、又直ぐの次話にて。

男の性～後編～（前書き）

皆様、何時も有難う御座います。

さて。前話から連続投稿の二話目です。

そして、今回は前話にて宣言致しました通り、ガチバトル回です。

カイト達の闘いの行方は？　兄弟喧嘩の決着や如何に?!　そして、その頃風呂場では。

の三本にて御送り致しますw

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

男の性～後編～

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』

今、この空間では激しい剣戟の音と共に、戦舞が繰り広げられていた。

ギーシュが召喚した戦乙女（ワルキューレ）に、近場にあった剣を持たせ、突貫させると同時に、

それを盾にして、その後ろから皆でカイトに群がった。

又、それらの邪魔にならない様に、普段の特訓の成果を見せるかの様に、

遠距離からの的確な援護射撃を繰り出す。その連携振りにカイトも感歎の声を上げた。

「……ほう！　中々どうして。しっかり、連携出来ているじゃ無いか。うむ、悪くない。

只、無駄に毎日遊び呆けているだけでは無かった様だな。感心感

心。

……だが、未だ甘い。そんな脆弱なカトンボレベルでは、一矢も報(あた)いる事能わぬぞ？」

しかし、そんな素晴らしい連係プレイもカイトから見れば、未だ赤子の遊びの様であった。

戦乙女(ワルキューレ)は皆、一撃で悉く壊され、先発隊もその殆どがあっさり沈められてしまった。

何とか才人だけは、それから逃れる事が出来たが、不利な状況には微塵も変わりがない。

次々と魔力が尽きて倒れて逝く中、残り僅かとなった水精霊騎士隊(オンディーヌ)は、

最後の作戦に討って出る事にしたらしい。

その作戦内容が固まる迄、カイトは待っていた。……どうやら、迎え撃つ様だ。

そして、みんなで最後の力を振り絞って、絶対無敵にして完全無欠の存在に向かって、

元気を爆発させて、最強の熱血を燃やし尽くす爲に、特攻した。

ｓｉｄｅ：独立（オンリーワン）した新世界

「オラァァァ！！　消し飛べやァァァァァ！！！！　『焔龍風破（えんりゅうふうは）』！！！！！！」

「未だ未だ、甘いですね！！　諸共に喰らいなさい！！！！　『嵐鳥（らんちょ）炎破（うえんぱ）』！！！！！！」

風に依る後押しをされ、更に燃え上がった炎の塊を打ち出した紅蓮。

その焔塊（えんかい）の直撃を受けた道には、植物は愚か地面すらも抉（えぐ）れていた。

それに対して、更に猛烈な暴風を叩き付け、巻き付いていた風ごと掻き消した龍斗。

その通り道には、全ての風も空気も無く、只真空のみが其処に在った。

そんな、余人ならば一撃必殺レベルの攻撃が、数多飛び交うこの戦場。

この様に、互いに拮抗する力を持つが故に、一進一退の攻防を只管（ひたすら）続けていた。

そんな様に、好い加減飽き飽きしたのか、紅蓮が動きを止め、力を溜め始めた。

「チィッッッ！！！　埒が明かねぇや…！　もうこれで好い加減、クタバレ！！！！！

我が劫火よ。空劫（くうこう）を経、成劫（じょうこう）に到り、住劫（じゅうこう）を過ぎ、壊劫（えこう）に還りし劫火よ。

今こそ、その煉獄をも熔かし尽くす永遠なる業炎にて、悉皆灰燼に帰せ。」

その紅蓮の詠唱が響き渡り始めると同時に、

紅蓮の周りを煉獄すらも低温火傷かと見紛う程の焔が、逆巻きながら渦巻き始めた。

「結構！　ならば、こちらも本気で征きましょう！

我が迅嵐（じんらん）よ。雄々しく猛々しい力強き迅嵐よ。

荒れ狂う無限の暴嵐となりて、その悉くを薙ぎ払い、塵芥へと還せ。」

又、紅蓮に呼応し龍斗も詠唱を始め、

それと同時に、龍斗の周りに正に荒れ狂う嵐が巻き起こり始めた。

そして、互いに力が溜まり切ると同時に、文字通りの己が『必殺』業を解き放った。

「焔え散りやがれヤァァァァァァァァァァーーーーーーーーーッッッッッッッッッッ！！！！！

『焔帝散華（えんていさんげ）』！！！！！！！！！！」

「塵と消えなさいッッッッッ！！！！！！！！！

『龍塵暴嵐（りゅうじんぼうらん）』！！！！！！！！！！」

焔帝散華……焔の神ですらも、瞬間的に蒸発してしまう程の豪熱にて、世界諸共焼滅させる業。

紅蓮のその大技に対するは、これまた龍斗の大技。

龍塵暴嵐……荒れ狂う龍が如き暴嵐により、触れるモノ全てを薙ぎ払い世界諸共塵に還す業。

その二つが真正面からぶつかり合い……世界は炎と衝撃と……光に包まれた。

ｓｉｄｅ：女子風呂

一方、その頃。標的にされた女子風呂の方は……と言うと。

「っふぅぅ～～～……暖まるぅ～♪　気持ちいいぃ～♪」

「ふぅ。全くだな。……だが、水薙。余り、その様な艶(なまめ)かしい声を出すものでは無いぞ？

此処は公共の場なのだから。最低限、辨(わきま)えねばならぬぞ？」

「はぁ～～い。でも、気持ちいいものはしょうがないじゃない。……ねぇ、黄宇姉？」

「……程度の問題というだけの話だ。其処迄無粋な事を言うつもりは毛頭無い。」

「えへへ～♪　ん～～～……！　っふぅ。はぁ～～～……ホントに気持ちいい。」

「……ああ、そうだな。」

と言う訳である。（何がだ？）　御覧の通り、すっかり寛いでいた二人であった。

又、その傍らには、子供だから問題無しとされた鋼牙も共に入って居り、

早速、他の女子生徒に連れて行かれ、可愛がられている。
流石に風呂場に於いては、さしもの黄宇も自身の快楽を優先する様だ。
又、一方……。

「……あ、あの……ね、ねぇ、タバサ？」

「……？　何？」

「そ、その……タバサは……カイトと、その……あの……し、してるのよね…？」

「？　……貴女もサイトとしている事？」

「はうっ！／／／／　ま、まぁ、そういう事なんだけど……／／／／／／」

「……それが、何？」

「あ、あのね？　……その、タバサは、カイトとどれぐらいしてるのかな……って。」

「……殆ど何時もだと思う。」

「……ふぇ？　い、何時も？」

「……そう。御互いに時間があれば、殆どいつもしている……と思う。でも、何故？」

「え……あ……あの、その…ね？

他の人って普段どれくらいしてるのか、ちょっと気になっちゃって／／／」

そう。ルイズが珍しくタバサに声を掛けた理由とは、普段自分達が才人と致してる回数とか、

ちょっと多過ぎやしないかと思い、他の人の意見を参考にしようと思ったからであった。

所がどっこい。いざ聞いてみると、自分達など歯牙にも掛けない程の話であった。

……そして。この後、ポツリと呟かれたタバサの言葉に、藪蛇所では無く、

伝説や神話の類にある、大蛇の化身が飛び出て来た様な錯覚に襲われるルイズであった。

「……そう。因みに、私達は最低でも、毎日十回ぐらいはしてる。」

「じゅ、じゅ、じゅうううう？！？！？！」

「……そんなに驚く事？」

「……え？　だ、だ、だって……つ、疲れない？」

「……鍛え方次第。それに、もし疲れたら、その度にカイトが回復してくれるから……大丈夫。」

「そ、そう……。す、凄い……のね？　貴女達って；；；」

「……そう？　でも、キュルケもそれぐらいする時もあるって言ってた。」

「……そんな……嘘でしょ？」

「……でも、私達はそう。」

「……。ちょっと、キュルケ！　こっちに来なさいよっ！！」

「何よ、ルイズ。お風呂場で大声出さないでくれる？　声が反響して五月蠅いじゃない。」

「そんな事はどうでもいいのっ！　いいから、答えて！！」

「何？　何か、あんまり穏やかじゃないわね……何時にも増して。何かあったの？　タバサ。」

「……聞けば解ると思う。」

「ふ～ん。まぁ、いいわ。それで、用件って何？」

とまぁ、こんな風に喧しく、皆キャイキャイと楽しんでいた。

黄宇達に見蕩(みと)れ逆上(のぼ)せる者、多数。

ルイズ達の進んだ会話に妄想して真っ赤に逆上せる者、殆ど。

といった、甚大な被害は出ているが。……まぁ、楽しんでいるのだろう。

そして、今この時。

地上で起こっている阿呆な闘いを知っている者は、今、この場には居なかった。

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』

再び、場面は固有結界内に移る。

其処では、残り僅かとなった水精霊騎士隊が、最後の作戦を敢行している真っ最中であった。

だが、それは作戦と言っても、とてもシンプルなものであった。

残った魔法使い全員で遠距離から、魔力が尽きる迄魔法を浴びせ続け、

その隙間を掻い潜りながら、才人がカイトに肉迫して斬り倒すというものだった。

そんな作戦とも呼べない様な陳腐なものだったが、

カイトは微動だにせず、その魔法を全て其の身に受けた。

そして、煙が霽(は)れた瞬間、その場に才人が飛び込みカイトに斬り付けた……が。

「……どうした？　これでもう終わりか？

……お前達の女子風呂に掛ける情熱は、所詮はそんなものか。

ならば、もういい。これにて終焉だ。

破滅せし幻想世界(ブロークン・ファンタズムワールド)　……超手加減（ボボソッ）」

そして、地上に於ける決着は、カイトの完全勝利という結果に、相成った。

side：独立（オンリーワン）した新世界

そして再び、カイトの創りし世界。

超大な衝撃と、凶大な焔と、激烈な光に包まれたこの世界は、

今はもう、見るも無惨な姿へと変わり果てていた。

美しかった海は、完全に蒸発し切り、後に残る筈の塩の塊すらも、その存在を残せなかった。

戦（そよ）いでいた木々も、完全に薙ぎ倒され、最早木屑にすらなれない程、粉々にされていた。

そんな正に地獄絵図の中。その世界の中心に佇む者が二人……そう、紅蓮と龍斗である。

二人の業がぶつかり合った結果のこの惨状には、二人共目も呉れず互いを睨み付けていた。

確かに、互いに同じ四神である故、力は拮抗しているのは理解している。

だが、それでも、自身の『必殺』業が破られた事に、互いに憤怒していた。

――――故に。そう、故に。

「……チッ。この世界ももう保たねぇか。……なら、この一撃にて終わらすか。」

「……いいでしょう。その案には私も賛成します。」

「フン、祝(ほ)ざけ…！　我が鎗撃(そうげき)……そう簡単に防ぎ切れると思うなよ？」

「そちらこそ。我が銃撃……貫き通せるなどと、安易に思わぬ事ですね…。」

そう言い合うと、互いに距離を長く取り、それぞれ自身の最も得意とする得物を手に、

構えを取り、微動だにせずに、唯々只管（ひたすら）に力を溜め続けた。

「――――受け取れ。我が最強の一撃を。」

「――――篤と拝みなさい。我が最大の一撃を。」

「

貫き穿て

「『紅蓮葬鎗（ぐれんそうそう）』」

撃ち貫け

「『龍嵐斗絶（りゅうらんとぜつ）』」

紅蓮は自身の手に握った、身の丈の三倍程は優に有る長大な鑓を構えて助走を付け、

その鑓ごと自身を突貫させた。その際の摩擦熱や衝撃に依って、

灼熱に焔え上がる鳥が己自身をも纏って顕現する程の力と共に。

自身と自身の鑓を焔の鳥と化し、一体化する事で突貫し全てを刺し穿ち貫く極技。

それこそが、『紅蓮葬鎗』。

そして、龍斗は並の人ならば数人が両腕で抱える程の、超長大な銃を真正面で構え、

その先端から迸る暴虐と化したエネルギーを、只管(ひたすら)その時迄抑え付け、

最大迄矯(た)め切った後、その力を解き放った。

その膨大なエネルギーと荒れ狂う時化の如きうねりに依って、

まるで龍が顕現したかの様な錯覚を伴って。

自身が持ち得る最強の銃の先端に全ての力を籠めそれを解放し、全

てを撃ち貫く極技。

それこそが、『龍嵐斗絶』。

「オラァァァアアアアアーーーーーーーーーーーーッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！」

「ハァァァァァアアアアアアーーーーーーーーーーーッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！」

「「オオオォォォォォォォオオオオオオオオオーーーーーーーーッッッ！！！！！！！！！！！！！」」

――――そして――――――世界は爆ぜた。

ｓｉｄｅ：発掘現場

固有結界も解け、辺りには死屍累々と呼んでも差し支えない程の、真っ黒に焼け焦げた、無謀なる若者達の姿があった。

その余りの憐れさに……思わず一句を詠むカイトであった……が。

「春満ちて　兵共が　夢の跡　ってな所か。……ん？」

そんな阿呆な光景を眺めていると、何か物凄い振動が起きた。

すると、その衝撃から幾秒も経たぬ内に空間が裂け、その中から衝撃と共に、

衣服をボロボロにし、彼方此方（あちこち）擦り傷切り傷だらけになっている紅蓮と、

衣服の殆どが焼け焦げ、自身も又程度の差はあれ、身体の多くを火傷している龍斗が顕れた。

……どうやら、最後の攻撃も御互いに相打ちになったらしい。

一部始終を唯一理解していたカイトは、二人を回復させた後、

遣り過ぎだと、喧嘩両成敗の意味も含めて二人に拳骨を落とし、それで終わりにさせた。

斯くして、多大な損害を出したこの阿呆な闘いは、

男共の間でのみ、英雄譚として語り継がれる事と相成ったのである。

……訳も無く。

しっかり女性陣にバレバレであり、

暫くの間水精霊騎士隊は、不潔で不浄な嫌われ者と相成ったのであった。

男の性～後編～（後書き）

如何でしたでしょうか？

これにて、ようやっと十二巻も終わりました。

次なる十三巻迄には原作の時間経過分で、凡そ1～2ヶ月程の期間が空いています。

ですので、次話は久し振りに幕間の話にしようかと思っています。

今回の幕間に関しましては、話の都合上、何話か続けて投稿する事になってしまいますが、

どうか御諒承下さい。

因みに。カイト達の普段、最も得意とする武器ですが。

カイトは西洋剣の双剣・黄宇は日本刀一本・龍斗は双銃

水薙は複数の短剣&ダガー・紅蓮は長鑓（ながやり）・鋼牙は三つ叉の双サイです。

これらが、後程赴くグランギルズに於ける彼等のメイン武器でもあります。

では、皆様に良いクリスマスが訪れる事を願いまして。今話も御覧

頂き、有難う御座いました。

そして、良い御年を。又、来年御会い出来ますよう。

幕間7（前書き）

現時刻（１２：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，８９５，８６１アクセス　ユニーク：１６０，２９２人
皆様、毎度有難う御座います。

さて。今回から、又もや幕間の話です。あ、其処。飽きたとか言わないで下さい。御願いします！

さてさて、では気を取り直しまして。今回の舞台は魔人國『デモニアン』。

そして、今度の主役はガルスラム＝グラジルド。先代魔皇クルセイド＝デモニアンが親友（とも）です。

今回の一連の話では、世界の情勢・國の事情・諸々の関係性等を明かして行きたいと思っています。

此の様にして、少しずつ此の世界『グランギルズ』の情報を小出しにして行く予定ですので、

どうか長々と御付き合い下さい。

そして、今回も連続投稿致します。ガルスラムの話が終わる迄の二話分を一挙放出致します。

では、今話も拙筆を御覧下さい

幕間7

ｓｉｄｅ：ガルスラム

「――――これは……一体、どういう事だ？」

俺は、この上無く驚愕していた。何十年振りか、修行を兼ねた諸国巡りの旅を終え、

帰国の途に着いた俺を待ち受けていたのは、荒れ果てた故郷だった。

……確かに、我が國『デモニアン』は然程裕福な國でも無く、國土に栄養が有る訳でも無い。

故に、大地が荒れ果てている事自体は納得がいく。……だが、この惨状は何だ？

これは、只大地が荒れ果てたというだけでは決してない。これは……。

「これは……戦闘の跡だ。それも、可成り上位に位置する存在同士の……血闘。」

何が起こったのか皆目検討が付かなかったが、

何事か……余程の事があったのだと言う事だけは理解出来る。

それを確かめるべく、俺は近くに居た我が國に住み着いている悪魔かモンスターを掴まえ、

聞いてみる事にした。……どうやら、丁度良い所に一匹だけいる様だな。

「おい、其処の下級悪魔。」

「ぁあ〝ん?!　……げぇっ！　が、ガルスラム＝グラジルドぉぉお?!?!?!

い、生きてヤガッタのか……!?」

「……俺が生きていると、何か不都合でも有るのか?

……それにしても、最近の悪魔共は口の利き方も碌に知らんらしいな。

この俺に向かって、敬語の一つも使えんとはな。少し、痛い目を見て貰うとするか。」

「……へ、へっへっへ……。そうはイカネェなぁ！

そうヤッテ粋がってイラレルのも、今の内ダゼ！

テメェが生きテイタ事を、今の魔皇様に知らせてヤリャァ、テメェなんぞ一コロよ！！！

アーバヨーーーっ！！！！！」

「ぬっ！　待てぃ！！　……くっ……逃げ足だけは、一等級だな。

……だが、待てよ。……今、奴は何と言った？　……『今の魔皇様』……だと？

……一体、どういう事だ？　真逆、あのクルセイドが殺られたとでも言うのか！？

……そんな馬鹿な。何れにしろ城に確認に行かねばなるまいな。」

ｓｉｄｅ：首都デーモニック　クルセイド城　ｉｎ　デモニアン

「これは……何と言う事だ…！！！　何だ、この首都の荒れ様は！

何なのだ！　あの……無惨にも壊されたクルセイド城は！！！

一体……！　一体、私がいなかったこの数十年間に何があったと言うのだ！！！！！」

想像以上だった……。首都である筈のその場所には、最早住む者は誰一人として居らず、

又、首都の中心に在る筈の、慄然（りつぜん）と佇むあの雄々しく美しいクルセイド城が、

見るも無惨な姿に成り果てているではないかッッッ！！！！！

最早、俺の理解の範疇を越えている……。

これはもう、直接あの城に乗り込み、我が目にて確かめるより他に

手は無いな。

そう思い、懐かしき……されど見覚えの無い城に帰還する為、乗り込もうとした時だった。

「……ん？　あれは……もしかして、ガルス？　ガルスラム＝グラジルド？」

「……ん？　あれは……エアステート・ボードか？　この様な所に有ると言う事は……。

もしや、エドガー？　エドガー＝タービュランスか？」

「やっぱり、ガルス！　ガルスじゃないか！　今迄、一体何処に居たんだよ！

ずっと捜してたんだぞ？！　全く音沙汰無いからもしかして、

何処かで野垂れ死んだんじゃ無いかってすら、思ってたんだからなっ！！！」

我がもう一人の親友（とも）……エドガー＝タービュランス。此又（これまた）、行き成り懐かしい顔に出会えたな。

どうやら、彼にも多大な心労を掛けてしまった様だな。いやはや面目無い。

「済まない、心配掛けた様だな。御覧の通りピンピンしている。少し長旅をしていたのでな。

それよりも、この有り様は一体何事だ？　俺が居ない間に一体、何があったのだ？」

「そうそう、それだよソレ！！！　その爲に、俺はずっと方々を捜し廻っていたんだからな！！

君に一刻も早く、事態を知らせる爲に。だって言うのに、君は何十年も行方不明になるし！

……って、愚痴ってる暇は無いよ！　早く隠れないと！

ガルス！　今は黙って俺に付いて来て！　急いで、早くっ！！！」

「む……解った。」

side：エドガーの隠れ家

「先ずは、君が生きて帰って来てくれた事を、何より素直に嬉しいと思う。お帰り、ガルス。」

「ああ、有難う。……まぁ、余り帰って来た気はしないがな。」

「そうだろうね……。御互い、色々と積もる話はあるけれど、先ずは君の知らない、この『デモニアン』の現状から話そうと思う。構わないかい？」

「ああ、勿論だ。是非にも頼む。もう、何が何だかさっぱりだ。」

あれから、一体どれ程歩いただろうか？　一時間か……いやもっとか。

それぐらい動き続けて、ようやっとエドガーの隠れ家に着き、今、腰を落ち着けた所だった。

そうやって一息付いた所で、エドガーから飲物を貰い、互いの無事を喜び合い……。

そして、到頭本題に入る事となった。

「うん、解った。少し長い話になるから、御茶でも飲みながらゆっくり話そう。

順番に時系列順に追って話すね。あ、質問は後。全て聞き終わってから受け付けるから。

先ず、君が放浪の旅に出た……その一年程後。

初代魔皇クルセイド＝デモニアンが、現二代目魔皇ギグドラム＝デーモニックと、

その座を懸けて血闘をし、破れて死に絶え、代が交代したんだ。」

「……な……なん……だと……？！

そ、そんなバカな！！！！！　あ、あのクルセイドが負けた…！死んだだと！！！

しかも、相手はあのギグドラムだとぉ！！！！！　巫山戯るな！！！！！！！！！！」

「落ち着いて、ガルス！！！　君の気持ちは十二分に解る。僕達も最初聞いた時はそうだった。

……いや、今だって、未だ信じられない。でも、これは紛れも無い事実なんだ。

だから、落ち着いて最後迄聞いてくれ……頼む。」

「……クッ！　そんな……バカな……！　あのクルセイドが……！！！」

「……話を続けるよ。

その時の二人の血闘で、首都は壊滅的な被害を受け、城は徹底的に破壊された。

その際、住民は他の都市へと移り、一応難を逃れはした。

……でも、御察しの通り、ギグドラムは只管（ひたすら）軍備にのみその国庫を傾け、

今以てしても尚、首都も城もあの通りの儘だ。本人も未だにあの城に住んでるらしいけどね。」

「……矢張り、そうだったか。奴が二代目魔皇に就いたと聞いた時から予想は出来たが。

所で、難を逃れた皆は一体何処へ行ったのだ？　他の都市へ移ったとは聞いたが。」

「うん。凡そ四割は、最も首都に近い軍事都市『フレムレス』に。

三割程は、次に首都に近い商業都市『メルテスト』に。

二割ぐらいは、最も首都から遠い農業都市『マグファルム』に。

残り一割前後は、それぞれ自分の故郷に帰っていったよ。」

「……そうか。見事に散(バラ)けた結果になったな。だがまぁ、それならば未だいい。

一つ所に集中して、問題になるよりは余程マシだ。」

「……そうだね。」

その後。俺達は、この数十年間の積もる話を、寝る間も惜しみ夜を徹して話し合い、

久し振りに充実した、親友（とも）との時を楽しんだ。

……直ぐ側に忍び寄る、敵意を潜めた敵が居る事にも気付かずに。

――――そして。

――――今迄停まって居た俺の刻は。

――翌朝――――奴等の襲撃を受けた日。

その日から、真に動き始めるのだった。

幕間7（後書き）

如何でしたでしょうか？

それでは此の後書きにて、本編では説明されない補足事項を付け足させて頂きたいと思います。

補足1．エアステート・ボードとは

主に空國『ミスカイル』にて使われている、空中移動用の乗り物です。

それなりに持続力に優れ、空國内ならば一度の燃料（要は魔力）補給で端から端迄、一っ飛び。

しかし、一旦空國を出ると途端に出力が落ち、１０ｋｍと保たず燃料不足に。

理由は未だに解っていない爲、それを研究する者が後を絶たない。

……が、進歩は未だ無し。

故に、他國へ渡る手段は、地続きで歩くか転移装置に依る物のみになります。

補足2．エドガー＝タービュランスとは

昔から『グランギルズ』に住み暮らす若者。

青年と少年の中間の様な容姿だが、童顔な爲どちらかと言えば、少年寄りと言える。

但し、定住の地は持って居らず、常に何処かを飛び回っている。

見た目に反して、実は相当な歳。本人も幾つか忘れてしまっている。

唯一エドガーのみ、エアステート・ボードで國を跨いで、自由自在に乗り熟(こな)せる。

その特性を生かして、郵便配達・情報伝達・情報交換等を生業(なりわい)として生きている。

因みに、何故自分にのみ乗り熟せるのかは、本人にも解っていない。

その爲、空國に行く度に研究させろと学者共に詰め寄られるので、空國にだけは余り行きたがらない。

実は、所謂時空漂流者。しかし、その時の衝撃で本人はそれ迄の記憶を失っている。

と言った所でしょうか。長々と、大変失礼致しました。

そして、エアステート・ボードの発想と、エドガーのキャラを考えて下さった月光閃火様には、

此の場を借りて御礼申し上げます。誠に有難う御座います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。そして、又直ぐの次話にて。

幕間８（前書き）

幕間８

皆様、毎度有難う御座います。

では、連続投稿二話目です。今話も拙筆を御覧下さい。

幕間8

ｓｉｄｅ：クルセイド城

「……それは事実か？」

「は、ハイッ！！　ま、まま、間違いゴザイマセン！！！　奴自身もそれを認めましたンデ！」

「……そうか。奴が……クルセイド＝デモニアンが右腕にして、最愛の親友（とも）たる奴が。

ガルスラム＝グラジルド……あの亡霊めが我が國に舞い戻って来たか……。」

「……あ、あの～……そ、それで、魔皇様。」

「……ああ、そうだったな。報告してくれた褒美をやらねばな。」

「へ、へイッ！　オマチしておりやしたぜ……へっへっへ。一体、何貰えるんかなぁ……ｗ」

「……そら、褒美だ。受け取れ！」

「へっ？　なぁぁぁっっっ？！？！　な、何で？！　お、オレは教えてやっただけなのにぃ！

ぎ、ギャァァァァ！！！！！　だ、だ、ダレカ…！　タ……ス……ケェ……！」

「……フン！！　下等悪魔風情が。この俺様に要求等、驕り高ぶりも甚だしいわっ！！！

……しかし、奴が生きて舞い戻って来おったか。なれば、早々と始末しておかねばな。

厄介な事になる前に、目障りな者共は排除しておくか。……奴等諸共……な。」

side：ガルスラム

「……って事があってさー。いやぁ、あの時は参ったよ。」

「ハッハッハッハッハ……！！！　そ、そうか、そうか…！　いやいや、難儀だったな。」

「全くだよ……。もう酷い何てモンじゃ無かったよ。でも、そっちだって……。」

「いや、こっちはな……。」

今、俺は我が親友（とも）エドガーとの何十年振りかの会話を、夜を徹して愉しんでいた。

その爲か。俺達は全く気付いていなかった。外にある気配に。其処から漏れ出していた殺気に。

……だが。

ガタッ「……ん？　今、何か物音がしたな。」

「そうみたいだね。何か落ちたのかな？　……！　逃げてガルスッッッ！！！

既に此処は包囲されているっ！！！！！」

どうやら、その様だな。中に……三人。外には……凡そ五～六人。

大体十人程……何れも手練れの暗殺者……と言った所か。

成る程。どうやら、今度こそ本気で俺を消したいらしいな。

「そうか……包囲されていると言うのならば、もう既に遅い。

此処は奴等を迎え撃つ以外に、俺達が生き延びる術は無いだろう。」

「でも…！　……分かったよ。流石に、此の段階ではもう無理だよね。」

「ああ。……済まんな。どうやら、俺の迷惑に巻き込んでしまった様だ。」

「ううん、そんな事は無いよ。俺もずっと前から、今の魔皇（ギグドラム）には目

を付けられていたからね。」

――――さて。では、御互いに覚悟も決まった所で……行くとするか！！！

「我が名はガルスラム＝グラジルド！　魔皇クルセイド＝デモニアンが親友（とも）なり！

俺は何処にも逃げも隠れもせん！　何時なりとも存分に掛かって来るがいい！！！

魔皇（ガルスラム）の右腕の名が伊達では無い事を、其の身に存分に刻んでくれようぞ！！！！！」

side：???

「……全くもう！　本当に吃驚したんだからなっ！！！

行き成り暗殺者に啖呵切るアホなんて、君以外に見た事も聞いた事も無いよっ！！！！！」

「う……まぁ、そう言うな。こうして御互い、無事に脱出出来ただろう？」

「それは結果論だろッッッ！！！！！　大体ねぇ！

俺は、君と違って戦闘力なんて殆ど無いんだよ？！　そこんとこ、本当に分かってる？！」

「……さて。では、取り敢えず何処に行こうか。」

「……誤魔化したな。誤魔化したね？　今、確実に絶対的に徹底的に誤魔化したね！？」

「……。」

とまぁ、こんな感じで何とかあの暗殺者共は纏めて撃退し、今はこうして逃亡の身だ。

だが少なくとも、もうこの國には居られん。既に彼方此方手配が廻っているだろうしな。

故に、何処の國に潜伏するか、今移動しながらエドガーと話し合っている最中なのだが。

「……もうっ！　やっぱり、俺の話を聞いて無いよ。もう、いいよ……ｏｒｚ」

「……まぁ、済まん。それよりも、一体何処に行くべきか……。」

「……ハァ。やっぱ逃亡すると言ったら、妖精國『フェアレイス』だけど、

彼処は、ハーフじゃ無いと少々住むのには苦しいしね。……俺達、純粋な魔人族と人間だし。

竜人國『ドラグレス』は、一番魔人族を敵対視してる國だからアウトでしょ。

人間國は、空・陸・海何れも、人間以外に対しては何処か冷たいし。

鳥人國『バーデスト』だと、俺達じゃちょっと空気が薄くて生き難いし……。

となると消去法で、どう考えても残る一國。獣人國『ビストレオ』しか無いでしょ。」

と、エドガーが指折り数えながら一つ一つ駄目出しをしていく。

その結果は、俺が考えていたものと全く同じだった。……が、一つ気になる事があった。

「……矢張り、そうなるか。……所で。そう言えば、あの國はどうだ？

と言うか、あの國は今どうなっている？　昨夜聞くのをすっかり忘れていたが。」

「あの國って……ああ、宗教國『アガシオン』の事？

そう言えば話して無かったっけ。因みに、ガルスは何処迄知っている？」

「何処迄……と言われてもな。俺は御存知の通り、余り世界情勢は知らんのでな。

……確か、國代表である二代目現法王の名がグルゲイズ＝ドライゼル。

竜人族の小生意気な小僧だったと覚えているが。」

そう俺が言うと、エドガーは顰めっ面をして余り話したくないと言う様な雰囲気になった。

だが、俺が続きを促す様な仕種をすると、溜息を一つ付きながら話を続けた。

「……うん、やっぱりそうか。実はね。そのグルゲイズ＝ドライゼルなんだけどさ。

丁度五年程前かな。病死してね。今は大地國の人間が三代目法王になっているよ。」

「何？　あのグルゲイズがか？　殺しても死にそうに無い程の、悪たれ小僧だった筈だが。」

「……まぁね。口さがない連中の間では、三代目に殺されたなんて話もあるけど。

ま、その二代目も先代……初代の法王サルフィー＝エレイセスを殺したって、

有名な話があるけどね。それも全て知ってるのは、現法王のみらしいけどね。」

初代法王……確かエルフの女だったか。その後釜に突然収まったあの竜人族の小僧。

ソイツに殺されたと当時の奴等は散々騒いでいたが……

その当人が殺されたとは笑い話にもならんな。

「……そうか。それにしても、あの竜人族の小僧がなぁ……。しかも、真逆人間に殺されるとはな。……油断でもしてたのか？」

「さあ？　それこそ俺達には判りっこ無い事さ。」

「……まぁ、それもそうか。所で、その三代目……現法王は何と言う名だ？」

「あ～っと、確か……ベルジラス。

ベルジラス＝アガシウスって名前だったと思う。」

「ベルジラス＝アガシウス……か。成る程、覚えておこう。暫くはビストレオに潜むんだ。

何れ何らかの形で、関わりたく無くとも関わる事も有るだろうさ。」

「……そうかもね。それじゃまぁ、取り敢えずは当初の目的通り、ビストレオに行こうか。」

「ああ、そうだな。少なくとも、今はこの國に長居するべきでは無いしな。」

「うん、そうだね。良し！　久し振りにフルスロットルと行くか！！

じゃぁ、俺に掴まってよ、ガルス！　飛～～ばすぞーーーーッッッッッ！！！！！

行ッッッけぇぇぇぇーーーーッッッ！！！　俺の『イカロス』！！！！！」

エドガーのエアステート・ボード……『イカロス』に我が身を預け、一路、進路を獣人國『ビストレオ』に向け、未だ朝ぼらけの中、俺達は奔り出した。

幕間8（後書き）

如何でしたでしょうか？

更に補足説明をさせて頂きます。

補足3．『イカロス』について

イカロスとは、エドガーが名付けた自身のエアステート・ボードの名前です。

但し、その性能や外見は他の一般的なエアステート・ボードと何も変わらず。

只、愛着がある為、名前を付けているというだけです。

補足4．ガルスラムの台詞について

「しかも、真逆人間に殺されるとはな。～」という言葉ですが、

この世界に於いて、人間は全種族中最も非力な存在です。エルフや妖精族には魔法がありますので。

故に他の種族に対抗する為、技術が異様な迄に発達しています。

ですが、それでも尚、未だ勝てない存在。それが人間と他種族との

差。

ですから、以前の幕間にて登場致しましたＳＳＳ（トリプルエス）ランクのクラウドは、

人間にとっては最上級レベルの憧れであり、そして他種族にとっては最も忌むべき存在なのです。

どの程度か分かり易く言いますと、

例えば魔皇の右腕であったガルスラムの強さは、あの英雄王ギルガメッシュを軽々と瞬殺出来ます。

ギルドランクにして、凡そＳＳ（ダブルエス）程度。ＳＳＳは更にその二ランク上。

更に更に、クラウドはそのＳＳＳランクの中でも最強の存在でした。

と言った所でしょうか。では、今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。

幕間９（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：１，９２８，６４４アクセス　ユニーク：１６２，５４０人
皆様、明けまして御目出度う御座います。

昨年は僅か半年程の間に、凡そ２，０００，０００アクセス弱＆ユニーク１６０，０００人強。

そして、総合評価１，５００ｐｔという大変な記録を作って頂きまして、誠に有難う御座いました。

心より感謝致して居ります。

今年は去年よりも遙かに更新速度は落ちてしまいますが、

どうぞ今年も拙作とカイト達一行を宜しく御願い致します。

さて。新年入って最初の話が又もや幕間で大変恐縮ですが、

どうか最後迄、御付き合い下されば望外の幸いです。

今回は、幕間二話と本編二話の、計四話連続投稿を致しますので、

どうぞ御楽しみに。

では、今話も拙作を御覧下さい。

幕間9

ｓｉｄｅ：？？？

「……クッ！　これで……ラスト…っ！！！　よし……そっちはどう！？」

「……こっちも、これで……終わりだっ！！！　……っと、ふぅ。どうだ、オルクス？」

「……ああ。今、丁度倒し切った所だ。残るは……アルだけか。」

「そうね……。早い所、合流しましょう！　あのバカ……無茶やってなきゃいいけど。」

此処は、鳥人國バーデストが首都バーデニウムから、幾分か離れた所に在る洞窟。

其処に突如沸いて出た、魔物の群れを狩り尽くせという依頼を享け、絶賛遂行中である。

そしていざ行ってみると、その余りの大量のモンスター達に分断された後に囲まれてしまった。

しかし、幸いなるかな。敵はそれ程強い者達では無く、精々Ｂ＋（ビープラス）程度が関の山だった為、

各自でモンスター達を或る程度引き受け、然程時間を掛けず丁度今、屠り終わった所であった。

だが、残る一人……アルのみが、親玉の気配を感じ取り奥へと進んで行ってしまったのだった。

故に、皆して心配しながら急いで彼の後を追い、駆け足で奥へと進んで居た。

「……剣戟の音が聞こえるな。……こっちだ。」

「……こういう時って、やっぱエルは頼りになるわよね。」

「……そうだな。……やっと俺にも聞こえて来たが……ん？どうやらもう止んだ様だな。」

「え？　本当？　それなら、アイツもう勝ったのかしら？　……ま、まさかそれとも……？」

「……大丈夫だ、アレスト。アルならば、そうそう簡単にやられたりはしないさ。

それを確認する爲にも早く行こう。」

「……ええ、そうね。」

そして、やっと洞窟の奥に辿り着いたアル以外の一行。

其処には、地べたに座り込んで肩で息をしているアルと、

傍らにどっと倒れ伏している巨大なドラゴンと、その周りに散乱している卵の殻が有った。

慌ててアルに駆け寄り、回復呪文を唱えるエルレイドと、状況を聞きながら拳骨をするアレスト。

そして、その敵や卵等を具(つぶさ)に観察するオルクス。取り敢えず、皆無事ではあった様だ。

「もう……このバカアルッッッ！！！！！

アンタは一体、どんだけアタシ達に心配させれば気が済むのよっ！！！」

「うぅ……だからぁ……ゴメンってばぁ…あれすとぉ……；；」

「全くもうっ！　本当ぉぉぉぉにこの大バカアルは……！！！」

「うぐぅ……あぅぅ……。」

「……っ…くっ……（だ、だから、そういう可愛い仕種はやめなさいって言うのにっ）／／／／／／」

「……これは……確か、バトルレックス…と言ったかな？

……そうか。丁度、今頃が産卵の時期だったのか。それでこんなに大量のモンスターが。

普段ならばもっと奥地で産む筈が……何の因果か、首都の近くの洞窟で産む羽目になったと。

その所為で討伐されてしまうとは……何ともはや。」

「うん。流石にお母さんだけあって、物凄く強かったよ。子供達を守るのに必死でね。

でも僕達だって生きるのに必死なんだし。ま、しょうがないよね。

」

「……アンタって、本当そういう所はちゃんと割り切るのね。」

「???」

「……まぁ、それはいいさ。それよりもさっさと帰って、ギルドに報告しよう。

そろそろ、お腹も空いて来た頃だしな。」

「うんっ！♪　一杯やっつけたから、沢山美味しい御飯食べられるかなぁ♪」

「……どうだろ？　確かに沢山やっつけたけど、殆どCランク前後だしね。

一番強い雑魚でも精々B＋程度だったし。……まぁ、このお母さんはもっと上だろうけどね。」

然う斯う話している内にアルの傷も癒え、

今迄ずっと呪文を唱えていたエルレイドも、ようやっと一息付けた様だ。

「……よし。これで傷は殆ど癒えたぞ、アル。」

「うんっ！　ありがとう、エル♪　そんじゃ、早速帰ってみんなで御飯食べよう！

えいえいおー♪♪」

「……全く、お気楽極楽なんだから。」

「……まぁ、それが何よりのアルの取り柄だからな。」

「……まぁね。……ハァ。私達も早く行きましょうか？　アルに置いて行かれちゃうわ。」

「フッ……そうだな。少し急ぐか。」

モンスター達の死骸をその儘に、一行は首都にある鳥人國ギルドの本部へと急いだ。

ｓｉｄｅ：首都バーデニウム　鳥人國ギルド本部　ｉｎ　バーデスト

「……はい、有難う御座います。
それでは只今から、モンスター達の査定を致しますので、少々御待ち下さい。」

「……さて、一体幾ら程になるやら。」

「……そうねぇ。大体五百万ギルいけば儲け物じゃない？」

「え～……もっといってるよぉ～。」

丁度今、受付のお姉さんに各々の身体に刻み込まれた魔法印を、備え付けの魔法球に照会し、

その結果を待ち侘びながら、ギルド本部一階にあるギルド員専用ロビーにて談笑中であった。

その話の内容は、勿論値段の多寡と、どれ程倒せたかについての良くある他愛ない話だった。

「そうかな？　俺は二百万かそこらな気がするがな。……まぁ、多いに越した事は無いんだが。」

「まぁね。エルは奥さん達の事も有るしね。」

「ああ。少しでも多く貰って妻に生活費を渡さないとな。どやされ

てしまうよ。」

「……フッ。その様な女性でもあるまいに。

あれ程に淑やかな女性はそうそう御目に掛かれないぞ？」

「……ま、まぁな／／／」

「あ、エル、顔真っ赤だぁ～♪」

久方振りに故郷へと帰って来たエルレイドを揶揄いながら、今か今かと結果を待ち望んでいた。

因みに、何時も鳥人國に居る間は、四人共エルレイドの家に厄介になっている。

一応、それなりに稼ぎはある爲、泊まる人が四人程度増えた所で、何の苦も無い程度の広さは持っている。しかも庭付きの上、子供が三人。リア充爆発しろ。

「……ごほんっ！／／／　お、どうやら来た様だぞ？」

「……誤魔化したわね。」「あ、誤魔化した。」「……誤魔化す様な事か？」

「お前達、五月蠅いっ／／／」

「クスクス……とても仲が御宜しいんですね。」

「ええ、まぁ。それで、結果はどうなりました？」

と、エルレイドが咳で誤魔化している間に、結果が判った様だ。

早速聞こうと思った所、受付のお姉さんから一言勧められた。

「はい。えっと……あ、細かい内訳も御聞きになりますか？」

「あ、それは是非御願いします！」

「え？　別にそんなの聞かなくてもいいだろう？　総合したものだけ聞けば。」

「だって気になるじゃないの。誰が一番倒せたのかって。純粋な興味って奴よ。」

「……全く、しょうがない奴等だな。それでは、済みませんが御願いします。」

どうやら、細かい内訳……と言うか、それぞれの個人成績は聞くか

？　という話だった。

パーティー内で競い合う所もとても多く、こういう事で喧嘩する事も頻繁にある為、

寧ろギルド側から自発的に勧めている様だ。当然の如く、それに乗っかるアル達であった。

「はい♪　では……先ずはアル＝ブレスト様。」

「はいっ　ノ！♪」

「（……可愛い）アル様は、Ｃ－（シーマイナス）が五匹。Ｄが八匹。Ｄ－（ディーマイナス）が十一匹。

そして、ＡＡ－（ダブルエーマイナス）のバトルレックスが一匹。計２５匹ですね。

額にして……１，０３，８５００ギルになります。

あ、それと、今回の依頼でＡ＋へのランクアップ申請が出来ますが……如何致しますか？」

「勿論、するするぅ～♪　やったぁ！　これで又一つ上がったぁ♪」

「クスッ……♪　では、後程報賞金を戴いてから、申請を行って下さい。」

「ハ～イ　ノ！！♪」

「……（あ～……もうっ！　本当に可愛いわね、この子。……食べちゃダメかしら？）。」

先ずはギルドランクの最も低いアルから……というよりも、ギルドランクアップ申請が必要な人から話して行く様だった。

そして、案の定メンバーが危惧した通り、此処の受付のお姉さんも御多分に洩れずアルを気に入っているらしい。

しかし、メンバーは全く気付かない振りをして、続きを促した。

「……それじゃ、次は私ね。どんだけ倒せたかなぁ？」

「あ、はい。アレスト＝コーレイル様はですね……。

Ｂ＋が三匹。Ｂ－が五匹。Ｃが二匹。そして、Ｄが百三十二匹。

計１４２匹ですね。

額にして……1，００２，０００ギルになります。」

「う～……私の方は雑魚ばっかうじゃうじゃ来てたのね……ハァ。」

どうやら、今一期待していた戦果では無かった様で、少し落ち込み気味のアレスト。

そんなアレストを慰めているオルクスに代わり、エルレイドが次に聞いた。

「それじゃ、俺の方はどうなっている？」

「はい、エルレイド＝ボルニウス様はですね……。

Ｂが三匹。Ｃが七匹。Ｃ－が二十二匹。Ｄが五十一匹。計８３匹です。

額にして……５３１，０００ギルになります。」

「そうか……通りで。妙に数が少ないと思ったら、本当に俺の所には余り来て居なかったんだな。

……と言う事は？」

先程の戦闘中に思ってた違和感にようやっと得心がいったエルレイド。

そして、丁度落ち込んだアレストを慰み終えたオルクスの番となった。

「最後に、オルクス＝ガルネイド様はですね……。

Ｂ＋が七匹。Ｂが二十匹。Ｂ－が二十四匹。

Ｃが三十七匹。Ｃ－が六十二匹。Ｄが二百五十匹。

計、丁度４００匹です。額にして……５，５３０，０００ギルになります。」

「「「……え？」」」

「……ふむ、そんなものか。確かに結構魔法を乱発したからな。」

「そして合計致しますと、総討伐数６５０匹、総報賞金額８，１０１，５００ギルとなりますね。」

「「「……ええええええ?!?!?!」」」

どうやら、三人共完全に想定外の金額だったらしく、思わずフリーズしてしまった様だ。

そんな三人を後目に、オルクスは一人で何処かへ行き、手続きをさっさと済ませ、

皆のフリーズが溶ける頃にはもう既に、報賞金を受け取り終わっていた。

「……ふわぁ～～……ビックリしたぁ～～～……。」

「……全くよ。」

「……ま、まぁでも、これで少しは……いや、可成り面目を立てる事が出来るよ。」

「……そうか。取り敢えず、貰った金を分けるとしよう。」

そう言うと、オルクスは右手首に嵌めていた腕輪を取り外し、ギルド員ならば全員が身に付けている、各々のアクセサリーにソレを近付けた。

アルの左腕にある腕輪、アレストの右耳のイヤリング……そして、エルレイドのネックレスに。

それらに唯一嵌め込まれている宝石同士を合わせ、丸でデータを送信するかの様に、

貰った報賞金をそれぞれ均等に分配していった。……それでも、エルレイドには少し多目に。

アル達の中では、それは暗黙の了解となって居り、エルレイドとしては恐縮しているのだが、

しかし、その好意を有り難く受け取り、妻子へ具(つぶさ)に伝え渡しているのであった。

それも終わり、早速家に帰ってパーッと派手に騒ごう！　と皆で意気込んだ時であった。

「……あ、あのぅ……。」

「……ん？　もしかして、私達に何か御用ですか？」

「は、はいっ！　あ、あの…ですね。その……あのぅ……。」

「……何だかはっきりしないわねぇ。いいからさっさと言っちゃいなさい！」

「は、はいぃぃっ！！！　あ、あのっ！！

みみ、皆さんにお、御願いしたい事がごじゃっ……痛い……舌、噛んだぁ……；；」

「……御願い？」

「は、はぃ…。あ、あの……！　皆さんっ、世界樹様に来て頂けませんかっ！！？」

「「「「……世界樹…？」」」」だと……！？」

突然の謎の人物からの御誘い。そして『世界樹』と言う言葉。

何やら焦臭（きなくさ）い事が待ち受けていそうだと、漠然とした嫌な予感を感じたアル一行であった。

幕間9（後書き）

如何でしたでしょうか？

実は、可成り実力のある、アルパーティー。そして、謎の人物の言う『世界樹様』とは果たして？

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。又、直ぐの次話にて。

幕間１０（前書き）

では、連続投稿二話目です。

今話は、単なる説明回です。主に此の世界（グランギルズ）に於ける『世界樹』についてのみの話ですので、

原作のゲームを御存知の方には、とても退屈な回だと思います。

一応、世界構成や話の都合上、相違点も幾つか御座いますので、其処を楽しんで頂ければ幸いです。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

幕間１０

ｓｉｄｅ：エルレイドの実家

「……ズズッ……プハァ～……。あ、有難う御座います…。」

「いいえ、どう致しまして。落ち着いたら、一緒に御夕飯食べましょ？

貴女の分も用意してあるから……ね？」

「え？　あ、で、でも、其処迄して頂く訳には……；；；」

「いいのよ。だって、もう用意しちゃったもの。寧ろ食べて頂かないと私が困ってしまうわ。」

「ぅ……わ、分かりました。あ、あの……そ、それでは……戴きます。」

「ええ。それじゃぁ、飲み終わったら食堂の方にいらしてね」

どういう状況か御判り頂けるだろうか？

あの後、『世界樹』なるモノに誘いに来た少女と、何処か落ち着いた所で話そうと言う事になり、

折角だからと、エルレイドの家に招き、一緒に夕飯を食べてからのんびり話す事に相成った。

そして、可成りオドオドと怯えながら一緒に家迄来たが、エルレイドの妻と話している内に、

それも幾分か緩和されており、何とか夕飯を一緒に食べる事ぐらいは可能な様だった。

……そして、夕飯後。

ｓｉｄｅ：ロビー

「さて。では、落ち着いた所で。事情を説明して貰えるかな？」

「は、はい…。あ、あの……実はですね。

その、皆さんに世界樹様の下に来て頂けませんかという御誘いでして……。」

「……さっきから気になってるんだけど、その『世界樹様』ってのは、

あのド真ん中にでっかく聳え立ってる樹の事？」

「あ、はい、そうです。私はその世界樹様の下にある『ハイ・ラガード公国』に住んでいます。」

「『ハイ・ラガード公国』？　オマケに高が樹に『様』って……私には何の事か珍紛漢紛よ。」

「せ、世界樹様は世界樹様ですっ！　高がなんて、そんな失礼な事言わないで下さい！！」

「……失礼って……只のでっかいだけの樹に、良くもまぁそんなに信奉出来るわね。

私には全く理解出来無いわね。」

「……ぅぅ……！！！」

最初の説明から、行き成り喧嘩腰になるアレストと少女。

この儘では埒も明かない為、何とか皆で二人を宥めて話の続きを促

した。

「ま、まぁまぁ。取り敢えず話の続きをしてくれないか？

その『世界樹様』とやらの下に行ったとして、俺達は何をすればいいんだい？」

「……何を…と言われましても。

世界樹様の下に来られたらする事は一つしか有りませんよ？」

「？　一体、どういう事？」

「え？　どういう事って……勿論、世界樹様の中に入って、その中を探検するんですよ。」

「は？　あのでっかい樹の中って空洞（スカスカ）な訳？　良くそんなんで倒れないわね。」

「世界樹様が倒れるなんて、そんな事ある訳無いじゃないですか！」

またもや激昂し始めたその少女を見兼ねたのか。

将又（はたまた）、全く要領を得ない自身のパーティーの爲か。

今迄、ずっと沈黙を保って来たオルクスがその重い口を開け、皆に事情を説明し出した。

「……取り敢えず双方落ち着け。

先ずは御互いに事情を説明する事から始めなければいけない様だな。」

「え？　オルクス、アンタ何か知ってんの？」

「……そう言えば、最初オルクスだけが『世界樹』と言う言葉に、異常に反応していたな。」

「ねぇ、オルクス。一体、どういう事？」

「……そうだな。先ずは世界樹の事から話そうか。とても長い話になる。

皆心して聞く様に。……いいか？」

「「「「……はい。」」」」

そして……長い長い、オルクスに依る双方への説明が始まった。

ｓｉｄｅ：三人称

「……では、今し方言った様に、世界樹の事から説明しよう。

先ず、世界樹と言う物は全部で三つある。」

「三つ？　そんなにあるの？」

「ああ。一つ目は、此処バーデストからも見えるあの世界樹……通称『諸王（しょおう）の世界樹』。」

“『諸王の世界樹』？”

全く聞き慣れない言葉に、少女以外の皆が首を傾げ御互いに顔を見

合わせた。

「……そうだ。その名の訳は、東を妖精國（フェアレイス）。西を竜人國（ドラグレス）。南を獣人國（ビースト）。

そして北を宗教國（アガシオン）に囲まれているからだ。その中央のみ地図上に於いて空白の土地がある。

其処が彼女の言う『ハイ・ラガード公国』だと、彼女達は公称している。」

「あ～……確かに、彼処だけ何かポッカリと穴が開いてたわね。」

「成る程な。……ん？　ちょっと待ってくれ。今、彼女達はって言わなかったか？」

「そ、そうですよ！　べ、別に私達に限定しなくても、何方でも御存知の筈ですっ！」

オルクスのその言葉の意味する所に何となく不吉な予感がした少女は、

思わず食って掛かったのだが……。

「……ああ、そうだな。だが、その話は又、後だ。色々と混乱させてしまうだろうからな。

先ずは残りの世界樹について話そうと思う。」

「……分かりました。」

「では、続きだ。二つ目は大地國の左端に在る……通称『星海（せいかい）の世界樹』。」

“『星海の世界樹』？”

「……そうだ。その名の訳は、そこら一帯のみ空気や水がとても澄んでいて、

特に深海から覗いた空の景色が、丸で星の海を泳いでいる様に見える事から名付けられた。

この世界樹は、それぞれ大地國（ラングランド）と海國（シーガリアン）が大体二分割して治めている。」

「へぇ～。まぁ、彼処は何時でも何処でも争っているからね～。」

空・陸・海の人間國（ミスカイルングランドガリアン）が各々争い合い、常に三つ巴で睨み合い、

御互いが御互いを監視し牽制し合っている事は、世界中（グランギルズ）に於ける周知の事実である。

故に其処に説明は不要であった為、直ぐに次の説明に移った。

「そして、最後の三つ目の世界樹。それが竜人國に在る……通称『真・世界樹』。」

“『真・世界樹』？”

「……そうだ。

名の由来は……あそこが三本の世界樹の中でも、最高難易度を誇っているからだ。」

「最高難易度……って事は、他の二つも微妙に違うの？」

「ああ、全く違うと言っても過言では無い。

分かり易く言うならば、『諸王の世界樹』は初心者・中級者用。

『星海の世界樹』は中級者・上級者用。……そして。

『真・世界樹』は……Sランク未満の立ち入りを一切禁止されている。」

“え、Sランクだって（ですって）？！”

その言葉だけで、一体どれ程危険なのか全員瞬時に理解した。人外の存在。人知を越えし者。

Sランクという存在は、只それだけで畏敬の念を持たれているのであった。

そして、自分達が必要とされている世界樹が最も初心者向けだと言う事で、

幾分かの安堵と、舐められているのかという少々のプライドにも引っ掛かっていた。

「世界樹の説明は以上だ。では、次はその周辺についての説明だ。」

「……ふぅ～。一応、此処迄は理解出来たけど……やっぱ未だあるのね。」

「……ああ。未だ三分の一程度だからな。」

“……うげぇ～……;;;;;;;;”

「……さて、では続きだ。先ずは各世界樹周辺には、それぞれの名称がある。」

「それぞれの名称？　……あ、それがこの娘が言ってた……。」

「そう。それが、『ハイ・ラガード公国』。『諸王の世界樹』周辺の名だ。

そして、『星海の世界樹』は、大地國が支配している都市周辺を『海都（かいと）』。

海國が支配している都市周辺を『深都（しんと）』と言う。

最後に、『真・世界樹』の周辺を……『エトリア』……と、そう呼ぶ。」

「……エトリア。何か、悪夢に魘（うな）されそうな気がする名前ね…。」

エトリア。その名前に何か不吉な予感を覚え、不意に皆の身体に悪寒が走った。

しかし、それはさておきとして、『ハイ・ラガード公国』というモノは判った。

だが、それと同時に又、新たな謎が幾つか増えた。

「……さて。次は、君には是非にも聞いて置いて貰わねばならない話だ。

尚、心して聞いてくれ。」

「……分かりました。しっかりとお聞きします。」

「……ああ。では、先ずは先程の私の発言。『彼女達は公称している』という言葉の意味だが。」

「……。」

「そもそも基本的に、この世界……グランギルズに於いて、G9（ギルズナイン）に参加していない所は、

國として正式に……世界には認められてはいないのが現状だ。」

「……え？」

オルクスの言っている言葉が少女には解らなかった。……いや、解りたく無かった。

解ってしまったら……全てが崩れ去る様な気がして……どうしても認める訳にはいかなかった。

「……そう。つまりは、ハイ・ラガード公国もエトリアも海都も深都も、

一切國としては世間に認められておらず、只の一自治体程度の認識でしかない。

あの宗教國『アガシオン』ですら、國とは認めない者とて未だに数多く居るのだからな。」

「……そ、そんな……う、嘘ですっ！！　だ、だって、私達はずっと……！」

「……その気持ちは分かるがな。だが、これが事実だ。

その証拠として、今此処に居る者は私を除いて皆、その存在を今日に至る迄、

全く知らなかった。それは君が今、目の当たりにしたばかりだろう？」

「そ、そんな……そんな……そんなぁ…！！！」

絶望に打ち拉(ひし)がれる少女には、何と声を掛けていいやら分からず、

只眺めるしか出来無かった。

其処で、場を持たせる爲にも、気になっていた事を二つオルクスに聞いてみた。

「……あ、そう言えば、公称してるって意味は分かったけど、何で私達はそれを知らなかった訳？

少なくとも、噂とか何か一つの情報ぐらいでもあっても良さそうじゃ無い？」

「ああ、それはな。各国が情報操作をして、一切の情報が入らない様にしているだけだ。

『國ですら無い所の事等、一般市民風情が知るべきではない。分を辨（わきま）えて貰わねば。』

と言う事でな。Ｇ９以外の國が出来た最初の最高評議会にて、いの一番に決まった議決だ。」

「……高度な政治判断とでも言う気かしら。……気に入らないわね。」

「……そうだな。だが、これは本の極一部しか知らない最高機密（トップシークレット）だ。

誰に知られる事も、騒がれる事も、文句を言われる事も無く、

極自然に成立してしまった事実であり、今日に到る迄ずっと続い

て来ているものだからな。」

そのオルクスの話に憤慨すると同時に皆、納得した。

自分達がその事に就いて、全くの無知であった理由に。

だが、其処で最後の……最大の謎に辿り着いた。

「ふぅん……成る程ね。……それで？」

「……それでとは？」

「……しらばっくれないで。何で、アンタはその最高機密（トップシークレット）とやらを知ってる訳？

そう言えば、今更だけど私達って、私達が産まれる前のアンタの事って全く知らないのよね。

恋人になってからも、パーティーを組んでからも、オルクス自身の事は全然話してくれないし。

……ねぇ、オルクス？　あなた……一体、何者なの？」

「……済まん。今は未だ何も言えん。

……だが、何れお前達には必ず話す。だから、それまで待っていてくれ。頼む……。」

「「「……。」」」

頭を深々と下げ、三人に頼み込むオルクス。その初めて見た彼の姿に驚く一同。……そして。

「……ハァ。しょうがないわねぇ……もう。」

「……アレスト。」

「まぁ、オルクスには何時も助けて貰っているしな。

それに生きている限り、隠し事の一つや二つぐらい、誰にだってあるものさ。」

「……エルレイド。」

「大丈夫だよっ♪　僕達、みんなオルクスのこと、信用してるモンっ！！」

「……アル。」

「……そういう事よ。その代わり、ちゃんと！　必ず！！　……何時か話しなさいよ。

……分かったわね？」

「……ああ、有難うアレスト……有難う、みんな。」

新たに謎が追加されたものの、改めて自身達の絆を深めるアル達一行であった。

そして、何とか落ち着けた少女に一行は、『諸王の世界樹』に行く事を伝え、

翌日、早速『諸王の世界樹』への直通転移装置に乗り……新たな冒険の旅路へと向かった。

幕間１０（後書き）

如何でしたでしょうか？

これが、カイト達が『グランギルズ』に来てから登録する、四つ目の原作シリーズです。

ええ、そうです。ドMホイホイとか言われている、あの鬼畜（？）ゲームです。

因みに、実は私は一切未プレイです。

全シリーズ、某笑顔になる動画での実況プレイ動画しか見ていません。

まぁ、他の三作品同様、敢えて明記は致しませんが。御存知で無い方は、どうぞ御楽しみに。

一応、後二つ程を原作に、と考えているのですが……。

これらって他の三作品と結構似通っているんですよねぇ……。

果てさて、一体どうしてくれようかと、現在本気で思案中。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。又、直ぐの次話にて。

集いし虚無（前書き）

では、連続投稿三話目です。今話も拙作を御覧下さい。

集いし虚無

ｓｉｄｅ：三人称

「きゃぁあああああああ！　破廉恥（ハレンチ）騎士隊だわ！」

「皆さん！　お逃げになって！　大変だわ！」

何事かと、他の生徒が彼女達が叫びながら逃げ出して来た方を見ると……、

その理由が直ぐに解った。

『あの』覗きをやろうとしてとちった、水精霊（オンディーヌ）騎士隊の面々が列を成して行進していた。

「全隊！　止まれ！　騎士隊！　構え！

目標！　アウストリの広場のゴミ各種！　掃討せよ！　掃討せよ！！！　掃討せよ！！！」

あの覗き未遂に依る罰で、放課後の広場掃除を命ぜられた水精霊騎士隊。

しかし、どんな事をしていようとも、破廉恥騎士隊の汚名は中々雪ぐ事は出来ず……。

才人達は周りの罵倒と喧しい叫び声に、顔を顰めながら必死に我慢し、

毎日溢れんばかりに出るゴミ達と格闘しているのであった。

丁度、その頃。コルベールがオスマンから、王宮の決定事項を聞き項垂れている所であった。

※因みに。ジェシカがシエスタに渡したあの禁制の惚れ薬は、既にカイトが没収し処分している為、『某ナイスクリーム』はありません、悪しからず。

その後、コルベールが才人に事情を説明しに行った。

その夜、才人は自身が持って来たノートパソコンを、コルベールに手慰みとして渡した。

そして、そのほぼ同時刻。カイト（タバサ）の部屋にも、非公式な訪問客が来ていた。

ｓｉｄｅ：東方号甲板上（オストラント）

その深夜に珍客を迎えた才人は、その懐かしい顔から齎（もたら）された手紙を開封し、

中に書かれていた辞令を皆に伝え、二日後の今日。

東方号に乗り込み、その重大任務をこれから皆に伝える所であった。

「諸君！　これは名誉挽回の好機であるっ！！」

“うぉおおおおおおお！！！！！”

「……汚名返上の間違いじゃ無いのか？」

「……サイト。君は一体、誰の味方だね？　おほんっ！　それはともかく。

諸君！　我々は悲しい事件に依り、誇りと名誉を傷付けられた……。

あの儘では我等の尊厳は地に落ち、子々孫々迄恥が残った事であろう……。

だがっ！！　神はそんな我々を御見捨てにはならなかった！

王代理は、我々に名誉回復のチャンスを下さったのだっ！！！」

“うぉぉおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！”

「……うむうむ。では、副隊長。みんなにこの壮大なる任務を話してやってくれ。」

「へいへい……。

これは、アルビオンで一緒に戦ったルネ＝フォンクから、二日前に貰った手紙なんだけどさ。

一字一句その儘読むぞ。……。」

要は、水精霊騎士隊にルイズとテファの、ロマリア迄の護衛任務を

命ずるものだった。

因みに、方法等は一切書かれて居らず、その為最も速い東方号を使って護送しているのだった。

更に言えば公式な訪問でも無い為、向こうに着いたら、

可成り面倒臭い事に巻き込まれる可能性も考慮されたが、何故か同乗しているカイトが居た為、

皆、然程気にもせずに、ノンビリと船旅を楽しみ寛いで居た。

ｓｉｄｅ：ロマリア

トリステインを発(た)ってから凡そ三日後の事。

ロマリアに付いた一行を迎えた者達、つまり堅物官吏達と早速揉めに揉め、

終いには、剣(デルフ)を背負った才人と揉み合いになり、デルフがロマリア神官に啖呵を切った為、

危うく異端扱いされ、戦闘になろうかという惨事に成り掛ける事態に迄至った……が。

「喧しいわッッッ！！！　有象無象風情がッ！　ジュリオッッッッ！！！！！！

聞こえてるだろうっ！　さっさと巫山戯（ふざけ）た芝居は止めて出て来いッッ！！！

然（さ）もなくば、この国が丸ごと地図上から消滅する事になるぞっ！！

構わんかッッッッッ！！！！！！！！！！！」

カイトはそう有らん限り叫ぶと、自身の魔力に依って周りに群がった神官共を失神させ、

天に向けた掌上（しょうじょう）に、巨大な燃え滾（たぎ）る焔の玉を突如展開させ、

それを直視した者を全て一切の例外無く、戦慄と恐怖の色に染め上げた。

その数瞬後、こっそり陰から成り行きを見守っていたジュリオが慌てて飛び出し、

その場に平伏して詫びを入れ、即座に全員を教皇の許へと案内した。

side：大聖堂

「ぁあ、救世主様。良く御出で下さりました。」

「夜夜中に、代理とはいえ王自ら直々に訪問されての依頼ではな。流石に断る訳にもいかんさ。」

「あ、それで俺達と一緒に付いて来たのか。」

「まぁ、そういう訳だ。単に俺だけならば、転移の一っ飛びで済んだんだが、

まぁ、示威行動は必要だしな。それに、案の定揉め事を起こしやがったからなぁ。」

「申し訳御座いません。それにつきましては、私の方からも改めて御詫び申し上げます。」

「全くだ、阿呆が。己が使い魔の手綱すら握れん奴が虚無を名乗り、

オマケに聖戦を掲げてエルフに侵攻するとは……もう、諦めた方がいいんじゃないか？

先行きが白地に不味いだろ？」

「いえいえ。寧ろこの程度で済むのであれば、却って僥倖というものですよ。」

「……逞(たくま)しいねぇ。ま、流石にこんぐらいじゃめげねぇわな。」

「はい。御褒めに預かり、恐悦至極です。」

「……褒めてねぇよ。……あ～、何かお前と話してると、あのアホニスを思い出して、無性にぶん殴りたくなるぜ……。」

“……？；；；；；；”

と言う事である（何がだ？）。つまり、あの日の夜。

カイト（タバサ）の部屋に無粋にも訪問した客とは、お忍びで来ていたウェールズであった。

そして、彼直々にカイトにロマリアに来て欲しいと頼み、それにカイトは快諾したのであった。

「…おほんっ。では、改めまして。初めまして、我が兄妹達よ。

私はヴィットーリオ＝セレヴァレ。教皇聖エイジス３２世を拝命致して居ります。

そして、こちらは私の使い魔『神の右手ヴィンダールヴ』のジュリオです。」

「ジュリオ＝チェザーレです。以後御見知り置きを。

……と言っても、殆どの人は御存知でしょうけどね。」

「そして、此の場には三人の担い手と、二人の使い魔。」

「それと、三つの指輪と一つの秘宝が揃っていますね。」

と、現状をまるで独り言の様に皆に聞こえる大きさで呟いて、確認した……が。

「戯け。後一つ秘宝が有ろうが。隠すな、ド阿呆が。」

「……はて、何の事でしょうか？」

「……貴様。この俺に隠し事が一つでも出来るとでも、本気で思っているのか？

下らん時間稼ぎは結構。さっさとワルド達を監視させてるミケラか、ジュリオに

今直ぐ貴様の書斎に有る『始祖の円鏡』を持って来させろ。

それで、秘宝は二つ揃う。」

「……矢張り、貴方だけは絶対に敵に回したくは無いですね。

ジュリオ。済みませんが、始祖の円鏡を持って来てくれますか？」

「……はい、直ちに。」

カイトの何もかも御見通しな言動に、安堵の溜息を漏らす才人達一行と、

深い溜息を漏らす教皇達とで、その差が明白であった。

「……よし、持って来たな。取り敢えず、隣室に居るジャンと外に居るアニエスを呼び付けて、

火のルビーを教皇に返させな。後は、各々指輪を嵌めて、その二

つの秘宝を回し使えばいい。

そうすりゃ、今お前達が使える呪文の全てと、新しい魔法が幾つか使える様になる。

特にテファとルイズ。お前達が次に覚える魔法は恐らく、『世界扉（ワールド・ドア）』だ。」

「「『世界扉（ワールド・ドア）』？」」

「そうだ。それをお前達がしっかり覚えさえすれば、何時でも何処からでも、

才人は自分の家に帰れるし、お前達も才人の世界に行き来出来る様になる。」

“ええええええええええッッッッ？！？！？！？！？！”

そのカイトの言葉に教皇達主従以外、一も二も無く全員飛び付き、

急いでコルベール達を呼び寄せ、さっさと全員で新しい魔法を覚える事にした。

……そして、その結果。

「――――ぁぁ。間違い無い。此処は……俺がサモン・サーヴァントで喚ばれた場所。

東京の秋葉原だ。」

「……確かに、こんだけ煌(きら)びやかなアキバは東京にしか無いがな。

とまぁ、こういう訳だ。後は、お前達の気力・精神力次第で、何時でも才人は帰れる。

……が。今は未だ無理みたいだな。」

「……みたいね。今の私じゃ、こうやって光景を写すぐらいが関の山だもの。

……それにしても、物凄く綺麗。……あんなに理路整然と並んでいて……。」

「まぁ、あれが魔法が使えない人々が作り上げた技術の結晶。その一端と言う訳だ。

どうだ、ジャン。才人が生きて来た街並みを見た感想は？　美しいだろう？」

「……ああ、ああ！」

「……でもなぁ。科学技術が発展すると同時に、自然環境が益々劣悪になっていってしまってなぁ。

まぁ、そこら辺は色々と面倒で大変な問題なんでな。その話は又、今度だ。」

「……分かった。後でじっくり聞かせてくれ。」

「……龍斗に頼んどこっと（ボソッ）。」

一同、才人の生まれ故郷……地球の街並みに魅入り、感動して殆ど声が出ない状況であった。

才人はその懐かしさの余り……そして、帰れるという希望（かのうせい）が目の前に出て来た事に涙した。

「……所で、カイト。アンタの事だから、もしかしてこの魔法も使えるんじゃないの？」

「ん？　ああ、使えるよ勿論。

何十年でも何百年でも何千年でも何万年でも、ずっと開いていられるけど。」

「なっ？！　そ、それなら何で、最初の時に言ってくれなかったん

だよっ！？」

「何で……って、あのなぁ。いいか？

使い魔と一度でも契約したら、その使い魔が死なない限り再契約は出来無い。

そして、お前がその儘帰って仕舞ったら、ルイズは一生再契約が出来無くなり、

とっくに誰かに殺されてるか、捕虜になって慰み者になってる可能性が高かった。

……それでもお前は帰せと……そう声高に叫ぶつもりか？」

そのカイトの言葉と思惑に、皆顔を青ざめるか、納得したかの様に一つ深く頷いた。

そして、カイトの最後の言葉……その提案にみんなやる気になり、

又同時に、ゲンナリした事は言う迄も無い。

「何はさておき。これから始まるガリアとの戦争が終わったら、俺がお前達を地球に連れてってやる。ちゃんと、日本語に通じる様に魔法も掛けてやる。

だから、取り敢えずはヴィットーリオに協力してやれ。話はそれからだ。

あ、後ジュリオ。才人とジャンと他有志を『槍』の許へ連れてってやれ。

それと、これからお前の即位三周年記念式典やるんだろ？

その最終日辺りにジョゼフが喧嘩売ってくっから、俺はそれ迄シャルといちゃいちゃしてる。

お前達もそれなりに羽目を外して遊んどけよ～。滅多に無い式典だからな～。　ノシ」

ｓｉｄｅ：？？？

「……カイト、此処は？」

「此処は御覧の通り、ロマリアの裏通り。

教会側が光なら、こちらは影……いや、闇と言った所か。」

「……ロマリアの闇。……そう。」

「ああ。何処にでも在る……とは言え、此処はその差が余りにも顕著過ぎるのでな。

曲り形（なり）にも救世主（メシア）を名乗っている以上、こういうモノは見過ごせ無くてな。

只でさえ、此の世界は救うと決めたんだ。……尚々余計にな。」

「……カイト。それで、どうするの？　私は何をすればいいの？」

「……正直に言えば、シャルは俺の側に居て欲しい。只それだけだ。

後は近寄って来る子供達の相手をして欲しい。

俺だけでは、子供達の相手迄は手が回らないからな。」

「……分かった。でもいいの？」

「ん？　ああ、俺がやった事でも、ヴィットーリオがやった事にな

ってしまうって？」

「……そう。貴方が、救われた結果が有ればいい、と思っている事は知ってる。……でも。」

「……何、気にするな。シャルも言った通り、皆が救われたのなら ば、俺はそれでいい。

――――さて。では、救世主（メシア）として、この式典中に出来るだけ多くの人を救いますか。」

「……うん。私も頑張る。」

「……ああ、頼りにしているよ。俺の愛しいシャル。」

「……ぅん／／／」

その後。式典の最中に、裏通りの人々の生活基準が、一段階も二段階も上がった事は、

後に教皇聖エイジス３２世の御業（みわざ）と噂され、益々その威光を強める事になる。

そして、その真実を知る者達は極僅かしか居らず、教皇を含めた皆が、

改めてカイトに感謝するのであった。……だが、それは既にカイトが去った、後の祭りの話。

今は、『槍（ティーゲル）』に感激し興奮している人達と、祭りに向け色々と準備する人々と。

それらの喧噪を何よりも楽しんでいる学生達を眺めて、我々も楽しむとしよう。

――――そして、時は飛び。

――――式典も終わり掛けの日。

――――その日は、到頭来てしまった。

集いし虚無（後書き）

如何でしたでしょうか？

ようやっと十三巻に入り、十三巻が終わりました。

はい、そうです。実は、これで十三巻はお終いなんです。

そして、次話は直ぐ様十四巻。愈々（いよいよ）物語も佳境に入って参りました。

これからは、基本的にトントン拍子で話が進むと同時に、色々な独自解釈が入って来ます。

特にエルフのとことか、シャイターンの門とかとか。

……だって、完結してないんだもん。しょうがないよね。

改めて申し上げますが、

この話は現時点（１／１）で出版している十九巻＋外伝三巻にて書き上げて居りますので、

後々続刊が出た際に、私の解釈が事実と異なる場合が御座います。

それに関しましては、どうか御諒承下さい。

……まぁ、二月には二十巻が発売されますので、最後はそれに因り

けりでしょう。

二十一巻が発売される頃には、

私の小説ではゼロ魔の世界はもう既に終わっているかと思いますので。

では。今話も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。又、直ぐの次話にて。

前哨戦（前書き）

では、連続投稿四話目です。今話も拙作を御覧下さい。

前哨戦

side：虎街道（ティグロスド・ルート）

ガリアの背骨とも言われる火竜山脈。

その火竜山脈を下った先の、内海に面した土地にあるアクレイアの街。

その僅か十リーグ北方の所にある、火竜山脈を南北に突き破る街道。

それが此処、『虎街道（ティグロスド・ルート）』と呼ばれる、間を谷に挟まれた細長い街道である。

此処は、常に行き交う商人や旅人で人が溢れて居り、それを狙って虎などの野生動物や、

山賊等が数多跳梁跋扈して居り、それらを代表して虎街道と、誰とも無く呼ばれる事になった。

さて、その虎街道だが。今、其処のガリア側の関所では、人が群がり溢れ返って居り、

ちょっとした困った騒ぎになっていた。

「……何？　通れねぇ？　……お役人さん、一体どういう了見だい？！」

「……通れぬものは通れぬのだ。追って沙汰が有る迄、待っておれ。」

「おい、待ってくれよっ！！

明日の晩迄に此の荷をロマリア迄運ばないと、こちとら大損扱いちまう！！！

それとも何だ！？　あんたが代わりに荷の代金を払ってくれるとでも言うのか？！」

「……バカを申すな！！」

「教皇聖下の式典が終わってしまうだよ！

この日をどれだけ私が楽しみにしていたのか、あんた達に分かるもんかえ！！」

「サルディーニャに嫁いだ娘が病気なんだよぉ…！！！」

「……ええいっっ！！！　私だって知らんっ！！

御上からは、街道の通行を禁止せよ！　との命令以外、何も受けておらんのだっ！！

何時になったら此の封鎖が解かれるのか、私の方が知りたいくらいだッッッ！！！！！！」

とまぁ、ぶっちゃけた役人の言う通り、突然関所の封鎖命令が出、困惑するも、

命には逆らえない下っ端達は、意味も分からずにその命に唯々諾々と従っていたのだった。

――――そして。急報が鳴り響き、戦が始まり……。

ガリアの……虚無（ジョゼフ）と先住（ビダーシャル）を組み合わせた、前代未聞の存在に皆為す術無く、

只、虐殺と言う名の陵辱を其の身に受け続けるしか無かった。

ｓｉｄｅ：三人称

「救世主様（メシア）！　到頭、戦が始まってしまいました！　ああ……どうしましょう…！」

「……そんなに取り乱すな、アンリエッタ。別に驚く事でも無いだろう？

　これは予め定まっていた事。予定調和にして、決定事項なだけだ。」

「……とは仰いますが……！　今この間も人命は失われているのですよ！？」

「まぁ、そりゃそうだろうな。何せ、これは戦争であるからして。人の命が失われていくのは当たり前だな。……だが、それがどうかしたのか？」

“なっ！？！？”

突然入った、戦の開幕を告げる報に、慌てふためく教皇とその従者以外の面々。

思わずカイトに助けを求めるも、寧ろそれでいいとばかりに言うカイトに、

皆、驚きと共に、益々カイトの真意が分からなくなっていった。

だが、そんな皆の心情を理解していたのか、いいタイミングでカイトから言い出した。

「……フン、まぁいい。始まったのなら、もう無駄に死なれても無意味だ。

才人。『槍』の準備は万全か？」

「あ、ああ。もう、何時でも出せる様にはなってるけど……。」

「なら、早速その『槍』の出番だ。

『奴等』を『槍』の力が最大限に発揮できる平原に誘い出すから、其処で迎え撃て。

シャル、才人を助けてやってくれ。五行、シャルを頼む。俺は『奴等』の囮になってくる。

では、今言った通りにな。皆、急げよ？

でないと、こうしている間にも死人は弥増（いやま）す事になるぞ？」

そう一方的に言うと、カイトは五行を置いてさっさとその場を去り、その場に置いて行かれた皆は、暫し呆然とした後、慌てて全員で準備に掛かるのであった。

ｓｉｄｅ：再び虎街道

「――――ほう。二十体ものヨルムンガントを造り出したか。成る程、成る程。

中々に頑張ったみたいじゃないか。

……だが、真逆高々この程度でこの俺と相対出来るとは、流石に思ってやしないだろうな？

……もし、そうだったのならば、もう少しＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩが必要かな……？

……クックック…！！！　……ん？　おっといかんな。少し妄想し過ぎたかな？」

そう言うカイトの目の前には、巨大で身軽なヨルムンガントが本来の数の倍程が居た。

それらが理路整然と行進しながら、空中に飛び上がったりして戦艦の群れを叩き落としていた。

……そう。その大きさも本来の凡（おょ）そ、視認出来るレベルでも１．５倍程になっていたのだ。

より強者を。そう常に求めるカイトが、その光景に思わず笑みを漏らしてしまうのも、

致し方ない事ではある。……あるのだがしかし。

カイトを除いた皆の目には、それは只の恐怖以外の何物でも無かった。

その事を思わず忘れて、少々悦に入っていたカイトは自身を軽く叱責し、

颯爽とその巨人達の前に立ち塞がり、教皇の命だと言って混乱している艦隊を下がらせた。

その様を見ていた『神の頭脳（ミョズニトニルン）』は何故か身体の震えが止まらなくなっていたが、

敬愛するジョゼフの爲にという一念発起で、何とかその震えを小さく抑え、

只一人向かって来た、ジョゼフから話に聞いていた（だけと思っている）存在を目の前にし、

少々嫉妬混じりで、頭に血を上らせながらカイトにヨルムンガント達を差し向けて来た。

案の定な神の頭脳（ミョズニトニルン）の行動に、気付かれない様にこっそり北叟笑（ほくそ）みながら、

まるで逃げ帰る様に偽装して、全てを目標の場所へと巧みに時間を使って誘（おび）き寄せた。

「……さて。そろそろ、指定の場所の筈だが……お、いたいた♪

お～い、才人。ちゃんと全部連れて来てやったぞ～～～。」

「……ああ、カイト。んじゃ、早速全部やっつけちまいますか！

タバサ！　先生！　キュルケ！　頼んだぜ！！」

「……分かった。」「うむ。もう、これ以上の犠牲は出させんぞ！」

「任せてよ、サイト！」

「……そんじゃ、派手に一発目……打ち上げと行きますか！！！」

――――そして、人間側の反撃が始まった。

ｓｉｄｅ：三人称

それは、驚くべき光景であった。

ハルケギニアに於けるどんな強力な砲撃も、どんな魔法をも通さぬ鉄壁の存在が、

見た事も無い、只の鉄の箱の様な塊が打ち出した砲弾。そのたった一発で。その一撃のみで。

完全に崩れ去り、その圧倒的な存在を次々に減らしているのだから。

『アクイレイアの聖女』として、教皇の思惑に乗り、旗印として共に来たルイズを始め、

『槍（ティーゲル）』に乗り込んでいるタバサ達をしても尚、その余りの豪力（ごうりき）に我が目を疑った程であった。

しかし、その結果を当然のものとして知っているカイトと才人は、その気持ち良さに気が昂ぶり、益々ノリノリになっていった。

そんな状態であった為、カイトは思わず才人にとある提案をした。

「……なぁ、才人。俺は今、何となくとある言葉を叫びたくなったんだが。地球人代表として。」

「お、奇遇だな。気が合うじゃ無いか。……って、地球人？」

「忘れたか？　俺もお前と同じ星出身だぜ？　ま、次元は違うがな。」

「……ああ、そういやそうだったっけ。すっかり忘れてたよ。

――――んじゃ、一緒に言うか。」

「ああ、そうするとしよう。」

御互いの息が合った事を確認し合った二人。

――――そして。

「――――ボケが、人型が戦車に勝てるワケねえだろ。」

「――――図体がでかいんだよ…！」

「――――無駄に高いんだよっ……！！」

「「地球ナメんなッッ！！！　ファンタジーーッ！！！！！！」」

そして。一体も逃す事無く、全て撃滅し終えた才人達を拍手喝采の音が包み込み、

何時迄も……ロマリアに戻る迄、才人達を褒め称える声は止まなか

った。

「……でもさ。カイトの使ってるのって、バリバリファンタジーな魔法だよな？」

「……それは言ったらダメ。カイトがいじける。」

「いいオチも付いた所で、さっさと帰りましょ。此処の人達、五月蠅くて適わないわ。」

「……そうね。私、出来るだけ早くこういう人達とオサラバしたいわ。」

「……まぁ、世の中とはそういうものだよ。」

「……イジイジ。」

「……か、カイト。後でカイトの好きな事、何でもしてあげるから……ね？／／／」

「オレ、復活。」

その後。カルカソンヌにてガリアとロマリア連合軍は、互いに睨み合いを続け、

暫し、最前線の状況とは裏腹に、平穏な日々が続いていた。

ｓｉｄｅ：カルカソンヌ

ガリアの王都リュティスから西に四百リーグ程離れた、ガリア南西部に位置する城塞都市。

城塞都市の名を謳（うた）ってはいるが、その正体は小規模の長城とでも言えば判り易いだろうか。

その色・外観から『赤蛇（セルパンルージュ）』と言う異名を持っている。

その街の北方に流れるリネン川を挟んで、両陣営は対峙していた。

……と言っても、互いの間を飛び回っているのは、矢玉や魔法では無く、罵倒の言葉であった。

その内、それもヒートアップしていき、終いには決闘騒ぎとなり、掛け試合が始まった。

因みに。その際、皆に背中を押されて試合に出た才人はボロ勝ちし、可成り懐が潤ったとか。

その後。何度も色んな手を使って、タバサをさっさと女王に戴冠させようとする

ロマリアの手をその都度防ぎ、その合間を縫ってみんなと馬鹿騒ぎしたり……と。

一体、幾日過ぎただろうか。数日？　いや、一月？　いやいや、三月程？

そんな感覚が少し薄れて来た頃の事であった。

――――カイトの許に、ジョゼフから送られて来た『十全』と一言認められた封筒を、

ガリアのガーゴイルが持って来たのは。

ｓｉｄｅ：三人称

「さて。皆に集まって貰ったのは他でも無い。俺はこれからジョゼフと戦争をしに行く。

その爲にも、余計な奴等にいられては面倒なのでな。

周辺に展開している艦隊全てを、このロマリアに迄後退させろ。

然もなくば、諸共に全てが巻き添えを喰い、文字通り欠片も残らず消滅する。

それでも構わないというのであれば、好きにすると良い。

高を括(くく)っているのであれば、それこそ俺の知った事では無い。

だが、今から指定する者達には必ず来て貰う。東方号(オストラント)に乗ってな。

因みに人員は、水精霊騎士隊全て・虚無達・ジュリオ・ジャン・キュルケ・シャルだ。

お前達は、俺の従者達が必ず全てから守り切る。

一切、質問も否やも聞かない。さっさと支度しろ。全て今日中にだ。

以上、俺は先に行って待っている。」

カイトは皆を集め、それだけの事を捲(まく)し立てて伝えると、

誰の何の意見も聞かず、独りで何処かへと消えた。

此処迄の傍若無人をされ、皆思いっ切り不信に陥ったが、

その場に置き去りにされた五行の無言の圧力と、タバサが唯々諾々と従っている姿を見て、

取り敢えず今は従っておいて、後程しっかり問い質そうと心に決め、

不満タラタラながらも、早速準備を始めるのであった。

――――そして、翌日。

全てがカイトとジョゼフの思い描いた通りに動き……。

ジョゼフは、己が欲望を……唯人でありたいという己が望みを叶える爲に。

そしてカイトは、救世主（メシア）としてそんな叶いもしない望みを抱き続ける、迷える子羊を救う爲に。

此処――――カルカソンヌの上空を舞台に。

――――今、愚かな悲しき戦いが幕を開ける。

前哨戦（後書き）

如何でしたでしょうか？

ようやっと十四巻に入り、十四巻が終わり、十五巻に入りました。

……え？　早過ぎる？　急ぎ過ぎ？

ですが、実はこの間は特に書く事が殆ど無いんです；；；；

才人は何時でも帰れる様になりましたし、因ってテファの忘却を使う必要も全く有りません。

祭りの際の話とかは限（キリ）が無いですし、裏の話等カイトにとっては殆ど意味が有りませんしね。

次回は、到頭ジョゼフとカイトとの決戦です。果たして、カイトの思惑とは。

皆との齟齬（そご）は修正されるのか。そして、決戦の行方は如何に！　それは次回の御楽しみに。

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。

今年も皆様にとって良き年で在ります様、心より願って居ります。

救世主の思惑と最終決戦（前書き）

現時刻（０４：５０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：１，９４７，０６１アクセス　ユニーク：１６３，８６５人
皆様、毎度有難う御座います。

さて、御待たせ致しました。カイトとジョゼフの最終決戦です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

救世主の思惑と最終決戦

ｓｉｄｅ：カルカソンヌ上空

今、此の場に二人（十一人）の人物が対峙していた。

「――――ようやっと来たか。待ち草臥（くたび）れたぞ。」

一人は、八神カイト。救世主（メシア）にして、世界を破壊し破滅させる者。

目前の巨大な艦を前にしても尚、雄々しく慄然としている。

「――――待たせた様だな。だが、もう待つ必要は無い。一切、全てなぁッッッ！！！！！」

一人は、ガリア王ジョゼフ一世。無能王と揶揄（やゆ）されるガリアが虚無。

そして、傍らに僅かに震えながら控える使い魔『神の頭脳（ミョズニトニルン）』こと、シェフィールド。

共に、巨大な艦に乗り、その広大な甲板の上に立ち、中空にいる救世主（メシア）と睨み合う。

「……所で、救世主（メシア）よ。貴様の後ろに居るのは、一体何だ？」

「ん？　ああ、あれは観客だ。俺が呼び付けた。終幕（フィナーレ）を飾るには観客が必要だろう？

安心しな。ちゃ～んと、彼処にはシャルロットも居る。」

「……そうか。だが今は、そんな事はどうでもいい。重要な事では無い。

今、俺達に最も必要な事は……戦うのに必要な舞台のみだ！！！」

「然り。故に気にするな。今し方言った通り、アレは観客だ。

一切の手出しもさせず又、何等戦場に於いて影響を及ぼすモノでも無い。

――――さて。貴様の憂いも無くなった所で……そろそろ闘るか。」

「然り！　さぁ救世主（メシア）よ！　俺を楽しませてくれ！！

此の俺に！　俺自身が人間だという証を見せてくれ！！！」

――――そして、虚無（ジョゼフ）と救世主（カイト）……二人だけの舞闘劇（いくさ）が。

その最終幕（フィナーレ）の緞帳（どんちょう）が静かに……そして、激しく音を立てて上がり終えた。

ｓｉｄｅ：三人称

「救世主（メシア）よ！　よもや如何なる手段を用いようとも卑怯等と言いはすまいな！！」

「無論だ。あらゆる手を使って、この俺に挑んで来い。

だが、人質を取る等という興醒めな事だけはするなよ？」

「見縊(みくび)るな！　此の俺がその様な戯けた真似、今更此の期に及んですると思うたか！！！」

「それは失礼した。では、さっさと掛かって来い。
先ずはお前の攻撃……その全てを受け止めてやろう。」

「フン！　その言葉、後悔するなよ！！　ミューズ！」

「ハッ！　行けェッッ！！　ガーゴイル達よ！！！」

大小様々な火石を持った、凡そ二十数体のガーゴイルがカイトの周りを囲む様に飛び交った。

カイトは宣言通り微動だにせずに、寧ろ楽しむかの如く笑みを浮かべながら、

その光景を只、眺め続けていた。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤンクルサ
オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド
ベオーズス・ユル・フヴェル・カノ・オシュラ

ジェラ・イサ・ウンジュー・ハガル・イル・ベオルク……！！！」

ジョゼフは『爆発（エクスプロージョン）』が完成すると、最も巨大な火石に向けて撃ち放った。

それが連鎖的に大爆発を起こし、辺り一帯は灼熱に侵された。

その威力の程は、何分経っても尚衰える事も無く、

未だに内部で連鎖爆発が起こっている様であった。

その熱で城壁は灼け、草原は焔え尽き、その周辺の気温は何度上昇したか最早解らず、

遠くからその光景を見た皆は、此の世の終末が訪れたと愕然と膝を付く者、多数であった。

さしものカイトもあれでは生きてはいられないだろうと、カイトを知る才人達ですら絶望した。

……だが。唯一人、カイトの生存を頑なに信じている者がいた。……タバサである。

そして、当然の如く、五行も平然としていた。

その六人を見た才人達は、真逆?!　という思いで、その爆発をじっと見続けた。

……すると、どうした事だろうか?　何か人影の様なモノがその爆発の中を動いてる様に見える。

……果たして。それは、紛う事無きカイトの影であった。

「あ、ほ～れ、ス～イスイっと。」

“…?!”　ズコッ!!!!!

……どうやら、その爆発の中を遊泳していた様だ。

ジョゼフとシェフィールドを除いた皆は、思わずズッ転(こ)けてしまった。

だが、よろよろと無気力に成り掛けたモノを振り絞って、

何とか立ち上がった後、皆は改めてその出鱈目さに驚愕した。

何故ならば、今言った通り、カイトは爆発している中を涼し気に泳いでいるのだ。

「ば、ばか……な…っ……？！？！　あ、あの爆発の中を……？！

あ、あれだけの攻撃を受けて……！！！

ば、バケモノ……あれが……本物のバケモノなのか……！？」

「フッ……フハハッ……フハハハハハハハッッッッ！！！！！！！！！！」

「…！！？　……じょ、ジョゼフ……様？」

常人であれば、とてもでは考えられない状景に、

シェフィールドは思わず戦意喪失してしまいそうに成る程、恐れ戦（おのの）いた。

……だが。ジョゼフの突然の大音での笑い声に、何とか我を取り戻すと同時に、

空恐ろしく感じてしまったジョゼフに、恐る恐る声を掛けた。

「そうだ……そうだそうだ！　そうで無くてはなぁッッッ！！！！！

それでこそ伝説にすら謳われている救世主だ！！　そうで無くては意味が無い！！！

いいぞ……いいぞ、救世主よ！！　もっとだ！　もっと、俺に貴様を！！

貴様の凄さを！　貴様の出鱈目さを！！　貴様の化け物振りを！！！

見せろぉぉッッッ！！！！！

見せてくれェェェェッッッッッッッッ！！！！！！！！！！」

「……見たければ、より非常識でより悍（おぞま）しいものをやって来い。

そうすれば、尚々貴様の求めるものが見られるぞ？」

「ああ、いいだろう…！　いいだろうとも！！！

貴様であれば、そうだろうと思ってなぁッッッ！！！　あのエルフに、命じたのよ！

このハルケギニアをも滅ぼして余りある程の巨大な火石（モノ）を造れとなぁ！！！

少なくとも、この地域一帯を全て焼滅させるぐらいは容易（たやす）いぞ！！！！！」

「そうか……それは楽しみだ。……所で、ビダーシャルは死んだか？」

「……いいや。今は床に伏せって養生して居るだろうよ。それがどうかしたか？」

「いいや、何でもない。……では、続きだ。疾く構え。」

ジョゼフはそれでこそ！　と歓喜の声を。カイトは尚足りぬ！　と切望の声を互いに上げ。

その会話中には既に、カイトを包んでいた爆発の連鎖は止んでいた。

すると、一体何処に隠し持って居たのか。

十体ものガーゴイルで持ち運ぶ程に巨大な火石を、艦の中から取り出した。……十個も。

「……さて、救世主（メシア）よ。これが、俺の持ち得る最大の威力よ！

貴様を屠る事さえ出来れば、我が身がどうなろうとも構わぬ！！！

全て！！　諸共にいッ！！！　滅べェェェェッッッッッッッッ

ッッ！！！！！！」

その巨大な火石に、絶望し顔を青ざめる才人達。更に遠くから観戦していた連合軍も同様に。

――――だが、当のその矛先を向けられたカイトは――――。

「……そうか。ならば、早くするといい。」

――――如何にも詰まらなさそうに、吐き捨てる様に言った。

だが、ジョゼフは昂揚し過ぎていた爲か、そんなカイトの様子には全く気付かず……。

「言われずともォッッ！！！　この業炎にて諸共に消え去るがいいィィィッッッッ！！！！！」

――――そして、辺りは瞬間的に光で包まれ、その獄焔（ごくえん）に依って全てが焔き尽くされた。

――――かに見えた。

「――――――ば、バカな――――――」

「――――どうした？　他ならぬ貴様が望んだ事であろうに……なぁ、ジョゼフ？」

俄には信じ難い光景であった。

ジョゼフの『爆発（エクスプロージョン）』が火石に放たれ、火石が爆発すると同時に、

その異常な迄の爆発を遙か上空に一瞬で転移させ、それを只の一撃で消し飛ばしたのだ。

その早業と圧倒的な迄の力に、思わず心の声が漏れてしまったジョゼフであった。

……が。その言葉は、誰しもが感じた同じ気持ちを、代弁したものであっただけだろう。

「あ、あれは……文字通り、このハルケギニアを完全に焼滅させる程の威力を……！

それだけの力を発揮出来る様、俺のほぼ全魔力を籠めたのだぞッッッ！！？」

「……フン、所詮はその程度だったか。貴様も矢張り……只の人よな。」

「……何ぃ？」

「今更だが、敢えて教えてやろう。舐めるな、驕るな、侮るな。

貴様等風情の常識で此の俺を計るな。――その結果がコレだ。

……事の序でだ。貴様に、真の力というものを見せてやる。」

そのジョゼフの驚愕を見たカイトは、余りにも呆れたという声を出し……。

曾て傍らに居るシェフィールドに見せた、あの光景を再度認識阻害結界を張らずに魅せ始めた。

「ファースト・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　第一形態（アインス）

セブンス・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　虹色形態（セブンス）

セカンド・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　第二形態（ツヴァイス）」

“グギャァァァーーーーーーーーーッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！”

凡そ１０m程の龍が２８体、その倍程もある細長い龍が7体。

そして、文字通り雲を突く巨大過ぎる龍が更に7体。

計、４２体もの大小様々な龍がジョゼフ達の周りを取り囲み、一斉

に叫んだ。

その鳴き声の斉唱に、思わず腰を抜かす才人達とシェフィールド。

ジョゼフは恐怖よりも感動が先立った様で、滂沱（ぼうだ）の涙を流し続けていた。

「……あ……あ……！　こ、これは……い、一体……！？！？！？」

「何だ、未だ思い出せないのか？　神の頭脳（ミョズニトニルン）よ。

……成る程。ちゃんと記憶操作は上手くいっている様ではあるが……。

完璧過ぎるというのも、問題だな。今度から、もう少し欠陥部分を作って置くとするか。

だが、それは又後だ。――――メルト。」

‘グワアゥッ！’

「今、お前の視界から見える程度の、彼処の海を消し飛ばせ。

但し、大陸には一切傷一つ付けるな。……それぐらいの加減は出来るだろう？」

‘グゥアアアッッ！！

グゴガアアアァァァーーーーーッッッッ！！！！！’

そのカイトからの命を受けた、メルトと呼ばれた巨大な紅い龍が一声咆哮すると、

同時に放たれた灼熱の息吹（ブレス）が、目の前にあった海を一瞬で消し飛ばしてしまった。

――――そう。気体になる余韻も与えず。塩が産まれる仮借をも許さず。

海という存在そのものが、その一瞬……その一撃で消え去ってしまったのだ。

……その後、海が元の水位に戻ったのは幾百・幾千年経った後であった事は余談である。

「……う、海が……じょ、蒸発した……
……。」

「蒸発？　いいや、違うな。アレは文字通り消し飛ばしたんだよ。海という存在そのものをな。」

「あ、あの光の玉……龍……七色……あ、ぁあ……あああああ？！？！？！

あぁああぁぁぁあああ……ぁぁぁあああああああああッッッッッ？！？！？！？！？！」

その有り得ない光景に、誰とも無く漏れ出た言葉を訂正するカイト。

それ以外には、誰一人として言葉を発する事が出来る者が居なかった。

何故ならば、その誰かが漏らした言葉が、今此の場に居る人間の総意の感想であったからだ。

だが、そんな皆が呆然としていた時、唐突に叫び出したシェフィールドに、

珍しく驚いた表情を見せるジョゼフと、訝しむ皆。

そして、そのシェフィールドの変容に北叟（ほくそ）笑む者が居た。――――

そして、カイトは。

「ようやっと思い出したか？

ならば後押しをする爲にも、もう一度……いや、何度でも言ってやろう。

貴様等の敗因……それはたった一つのシンプルな理由だ。

――――テメェラは――――――俺を怒らせた。

此の俺に又、愛しい人を此の手に掛けさせようとした。

その大罪……『死』等と言う安らぎが、そうそう簡単に与えられると思うなよ……！！

ジョゼフ……そして、神の頭脳（ミョズニトニルン）シェフィールド……！

オレはなぁ……！！　疾っくの疾うに、ブチキレてんだよッッッ……！！！！！！」

そう、才人達の誰もが聞いた事が無い程、カイトの感情を籠めた叫びと共に、

カイトは、自身の全魔力を開放した。

「こ……こ……ん……な……バ……カ……な……ぁ……！！！」

「あ……あ……あ……あぁ……あぁ……あぁ……あぁぁ……！？！？！？」

「――――オレは言った筈だ。貴様等風情の常識で、此のオレを計るな……と。

……此の儘、貴様等を縊り殺すのは容易極まりないが……だがそれでは、何の意味も無い。

そして、オレは曲り形にも救世主であるからして……な。

貴様等にも最後の救いを与えてやろう。黄宇、シャルロットを此処へ。」

「はっ。仰せの儘に。」

そう言うと、解放した魔力はその儘に、黄宇に守られたタバサがカイトの許に連れられて来た。

「……あの……カイト？」

「シャル、黄宇の側から離れるな。お前では、その瞬間に気絶する。仇は後で討たせてやる。今は辛抱しておけ。」

「……分かった。」

「よし。では、ジョゼフよ。貴様に真実を見せてやる。

詠唱破棄　『記憶（リコード）』」

そして、カイトの『虚無魔法』が発動した。

それから、一体どれぐらい経った事であろうか？

唐突にジョゼフの目から涙が滂沱と流れ、まるで徐々に憑き物が落ちて行くかの様に……。

涙を延々と流していながらも、次第にその顔に充足感が満ちて行き

……、

最後には、本来の顔であっただろう優しいモノに変わって行った。

気が付いた頃には、既にカイトの魔力も収まっていた。

「……救世主（メシア）よ。其方は真に救世主だったのだな。

……よもや、誰よりも疎ましく、そして嫌悪していた虚無が俺を救うとは……。

……ハハ……ハハハ……シャルル……俺達は本当に愚かな兄弟だったなぁ……。」

「……何が、あったの？」

そのタバサの声に、今初めて気付いたかの様な反応をしたジョゼフは、

その晴れやかな顔をタバサに向け、涙もその儘に冠を脱ぎ、笑顔の儘、頭を深々と下げた。

「……シャルロットか。長い事、大変な迷惑を掛けた。真に済まなく思う。

詫びの印にもならぬが……受け取ってくれ。お前の父の物に成る筈だった物だ。

……これで終わった。全ては終わったのだ。俺はもう地獄を見る必要は無くなった。

後は、お前が気の済む様に扱えば、それで良い。」

「……話して。一体、何があったと言うの？」

「……（フルフル）。」

「…！！　一体、何があったと言うの！！！」

唐突なジョゼフの謝罪と独白に訝しむタバサ。思わず声を荒げてその真意と、

何があったのかを詰問するも只、首を振るだけで一向に話す気配が無い。

すると、カイトがタバサをあやすかの様に頭に手を置き、少し落ち着かせて言い聞かせた。

「シャルロット。それは何れ俺が教えてやる。今のお前が受け容れるには、未だ早過ぎる。」

「……。」

「それよりも、シャルロット。今此の時を於いて、ジョゼフに復讐する機会は一切無い。

此処を逃せば、お前は二度と親の敵を討つ事は出来無い。

お前の手でジョゼフを殺すには、今を於いて他には無い。さぁ、殺れ……殺るんだ。

シャルロット＝エレーヌ＝オルレアン！！！」

納得は全くいっていないタバサではあったが、今はカイトの言うことを聞いて置こうと思ったのか、

追求の声は止んだ。……だが、その直後。

今迄ずっと虎視眈々と狙って来た機会を、今改めて目の前にして、思わず身体が固まった。

しかも、カイトから仇を今直ぐ討つ様に催促して来た。……自分は一体、どうしたいのだろうか？

今更、此の期に及んで、突然に訪れた機会（チャンス）に躊躇してしまったタバサであった……が。

「……カイト。一つ聞いていい？」

「ん？　ああ、構わんぞ。好きなだけ聞くといい。」

「……じゃぁ……カイト。カイトは自身の妻子を自身の手で殺した時、どう思った？」

「……それは勿論、後悔したさ。此の上無くな。」

「……それなら……今はどう？　今もずっと、その時の事を後悔している？」

「当たり前だろう？　己が妻子を己が手に掛けて置いて、何故それを忘れる事が出来ようか。」

「……それだけ？　本当に今、貴方の想いを占めているのはそれだけ？」

「……フッ、それこそ真逆だ。

あの時、俺がはやてと風音を殺していなければ、俺は今の家族達には会えず……。

又、コレ程強くなどなってはいない。

今の俺の力はな……俺が妻子を殺した事に依って得たモノなのだからな。」

「――――そう。分かった。」

――――カイトとの問答でどんな答えを得たのか。

しかし、タバサの顔からは迷いは一切消えていた。

――――そして、彼女は決断した。

「それなら……私は、貴方を殺さない。母様も既に元に戻ってくれた。

父様は帰っては来ないけど……でも、もう私は復讐には身を焦がさない。

もっと、大事なモノに……もっと大切な事があると、気付いたか

ら。

それを、カイトが教えてくれたから。だから、私は貴方を殺さない。

貴方は生きて……ずっと生きて生き続けて、自分のした事の責任をちゃんと償って。」

「……そうか。お前がそう決めたのであれば、俺はそれに従おう。」

「……ならば、私が殺すッ！　…！？　あうっ…？！」

タバサの言葉に、更に涙を溢れさせ頭を垂れその全てを受け容れたジョゼフ。

だが、それを認めぬ……許せぬ者が居た。――――そう、シェフィールドである。

その彼女が、懐に隠し持っていた毒塗りの短剣をジョゼフに突き立てようとした。

だが、その魔手もとある者……黄宇によって阻まれた。

「――虚(うつ)けが。何の為に我が主が、私を此処に呼び寄せたと思うておる。

只、シャルロットを守護する為では無い。……万が一、ジョゼフが死なぬ場合。

貴様がその様な暴挙に出る事くらい、主殿は先刻御見通しで在らせられる。

故に、貴様を警戒する様に、私を此の場に御遣わしになったのだ。案の定であったな。」

「くっ……！！！」

そう。カイトが態々黄宇を呼び寄せたのは、その為でもあったのだ。

「……だがまぁ、案ずるな。

貴様やシャルが殺さずとも……。

――――此の俺が二人共殺してやるからな。」　ドンッ…！　ザシュッ…！

「「「「――――え（なに）？　……？！？！」」」」

「「グ……グッ……ゴボッ…！？」」

「あ、主殿？！」「か、カイト……！？」

皆、何が起きたのか……何故こうなったのか、微塵も理解出来無かった。

自分達の、今目の前で起こった光景も。何故、カイトがそんな事をしたのかも。

その何もかも一切、全てが分からなかった。彼（カイト）の従者（ごぎょう）達でさえも。

「……あ、主殿？　一体何を……？」

「何って……今、お前達が見た通り、ジョゼフを斬り殺し、シェフィールドを銃殺したんだ。

他にどんな風に見える？」

「その様な事を聞いているのではありません！
何故、今更此の期に及んで二人を殺されたのです？！
それ程迄に許せなかったと……そう仰るのですか！！？」

「まぁ、それもあるっちゃぁあるけど、本音は違うな。てか、お前も分からんのか？　黄宇。」

「……は？　他に何か意図があると仰せで？」

思わず詰め寄る黄宇に、呆れ顔と声を出すカイトに益々訳が解らなくなる皆であった。
それを確認すると、愈々以て白地に溜息を付き、腰に手を当て顰っ面をした。

「……何だよ、お前等。本当に分からないのか？　……ったくしょうがねぇ奴等だなぁ。
取り敢えず、お前等コッチ来い！」

「うわっ……と…！　か、カイト…；　突然転移…だっけ？　それすんの止めてくれよな；
物凄く驚くじゃねぇか；；；」

「こまけぇこたぁいいんだよ！　それよりも、おいジュリオ！　さっさとジョゼットの所に行くぞ！！」

「は？　……別に今、慌てて行く必要は無いんじゃないかな？」

「何、阿呆な事言ってやがる。いいからさっさとジョゼット……シャルの双子の妹の所へ行って

この大地のルビーに、次の虚無と認めて貰いに行くぞ。

じゃねぇと、ジョゼフを生き返らせられねぇじゃねぇか。」

“……
……は？
”

今度こそ、全員理解不能だった。生き返らせる？　誰を？　ジョゼフを？

と言うか、ジョゼットって誰？　タバサの双子の妹？　……私、そんな子知らない。

確実に大混乱を来している事は、一目瞭然であった。……但し五行を除いて。

五行は、カイトのその言葉に依って、ようやっとカイトの目的と真意を理解出来たのだった。

「……では、主殿。この二人の遺体は我等に御任せを。」

「ああ、頼んだ。んじゃ、早速行くぞジュリオ。」

「え？　あ、ちょっと待っt…！」

「あ、行っちゃった。」

その後。カイト達が戻って来る迄の数分間で、セント・マルガリタ修道院が、

曾て無い程の混乱に包まれた事は、想像に難くない。

ｓｉｄｅ：カルカソンヌ側の草原

「あ、あの……竜のお兄様？　此処は一体？　それにこの人達は何方？」

「あ～……うん、一体何処から説明したらいいんだろうね。で、どうするのさ、救世主（メシア）。」

「取り敢えず、ジュリオ。お前がジョゼットにその指輪を嵌めてやんな、今直ぐ。」

「……分かったよ。僕の愛しいジョゼット。いいかい？」

「……は、はぃ／／／／／／　あ……あんなに大きかったのに……嵌っちゃった。」

「ああ。君の指に合う様に魔法が掛かっているんだ。」

「……綺麗／／／」

何か、バカップルの空気を何所と無く醸し出している二人に、カイトが此の儘じゃ埒が明かんと声を掛けた。

「……ハァ。取り敢えず、その邪魔な十字架は壊すぞ。」

「え？　きゃっ！？　……い、一体どうしたの？」

“……ええっ？！　た、タバサ？！　タバサが……もう一人居る！？”

「……カイト？　これは……一体……？」

「まぁ、詳しい事は自分の母親に聞け。簡単に言えば、この娘の名はジョゼット。

シャルの双子の妹で、産まれて直ぐ修道院に裏のルートを使って預けられたんだよ。

そして今、ジョゼフが死んだ事に依って、

ジョゼットが次なる虚無だと、指輪に認められたと言う訳さ。」

カイトがジョゼットの首に掛かっていた十字架を壊すと、

ジョゼットに掛けられていた魔法が解けて、変化した容姿は……タバサそっくりであった。

その訳を尋ねるも、後で母に聞けの一点張りであった。

そしてカイトは、混乱している皆を其方退けにして、ジョゼフ達の遺体の許へ行った。

其処で初めて気付いたのか、ジョゼットが血を流している遺体を見、小さく悲鳴を上げ、必死にジュリオに獅噛み付いていた。

しかし、そんな事は全く気にもせず、カイトは二人に手を翳し、何事かを呟いた。

すると、ジョゼフ達の身体が光り輝き、すっかり血の気の引けた顔色をしていた二人が、

突然赤みを帯び、手や瞼が動き出すと突然ガバッと起き出した。

“……えええええええええッッッッッ?!?!?!”

「……これは……一体、どういう事だ？　俺は……死んだ筈だ……。」

「……わ、私は……一体……？　…！　じょ、ジョゼフ様…！！」

「起きたか、お前等。」

「……救世主（メシア）？　これは一体、どういう事なのだ？　俺達は確かに

お前に殺された筈だ。」

「ああ。確かに、俺が殺した。んで、俺がお前達を今、生き返らしたんだ。」

「「……何？」」

これには、皆驚いた。当の生き返った本人達は言うに及ばず。

一度、カイトが蘇生させた瞬間を見た事のあるキュルケやタバサでさえ、改めて驚いた程だ。

初めて見た他の皆は推して知るべしであった。

説明を求める皆とジョゼフ達をさておいて、カイトはその側の空いている場所で、

龍斗を呼び寄せて更に何かを始め出した。

「……どうだ、龍斗。見付かりそうか？」

「……少々御待ち下さい。……」

……在りました。」

「そうか！　では、今直ぐにソレを此処に喚び寄せてくれ！」

「畏まりました。……来ました。」

「良し！　そんじゃ、早速やるとしますか！

……シャルロット＝エレーヌ＝オルレアンとジョゼット＝オルレアンが父。

シャルル＝オルレアンの魂よ。

地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道の六道を輪廻せし魂よ。

我が声、我が求めに応じるのならば、我が名を以て、今一度其方に生を授けよう。

我は『宇宙（そら）の救世主（メシア）』也。

我が名を以てしても尚不服と言うのであれば、更なる名を以て汝等に告げよう。

我は【原初(ワレハゲンショナリ)】也。」

すると、どうした事であろうか。

カイトの目の前に、突然キラキラ輝く光の粒子が顕れたかと思うと、

それが次第に人へと形作って行き……息を呑む皆の声と、

信じられないという、震えとも戦慄(わなな)きともとれる不思議な声を出す者が数名。

――――そして。カイトの宣言通り、カイトの目の前に顕れた人物とは……。

「御父様！！！！！」

「しゃ……シャルル…！！」

「……バカな……！？」

「……そ、そんな……こんな……事が……？！」

「……うっそぉ……；；；；；；」

「……有り得ねぇだろ；；；；；；；」

「……救世主（メシア）。人に限らず、全ての存在の生殺与奪の権を持つ……救世主。」

そう。彼のオルレアン公。タバサの父にしてジョゼットの父。シャルル＝オルレアンであった。

しかし、彼はその姿を形を取ると、その場にて倒れ伏した為、

慌ててタバサとジョゼフが駆け寄り、その安否と真実を確かめるもどうやら只寝ている様である。

その安らかな寝顔にホッと一息付くと同時に、力が抜けその場にへたり込んだ。

それを見ていた皆の肩からもホッと力が抜け、その場に同様に座り込んだ。

それを最後迄見届けたカイトは、此処では何だからと、

此の場に居た全員を大聖堂に転移させた。

……当然、転移先の大聖堂では、突然現れた聖下達に大混乱を来した事は言う迄も無い。

――――そして。ジョゼフによる、ハルケギニア全てを巻き込もうとした人間同士の戦争は、

今此処に、真に終演を迎えたのであった。

救世主の思惑と最終決戦（後書き）

如何でしたでしょうか？

少々駆け足の感が否めませんが、これにて十五巻も終わりました。

此の結果に持って行く爲に、今迄書いて来たと言っても過言では有りません。

……まぁ、クオリティの低さには目を瞑（つむ）って頂きたいのが本音ですが；；；；；；

次話は、生き返ったジョゼフ達と、タバサ達へ説明するだけの回になる予定です。

そして、残るは戦後処理とジョゼフ達の処遇。

それと、十六巻以降の内容と、カイトが約束していた地球への観光旅行と才人の帰宅。

後は、エルフとの仲とシャイターンの門と風石の問題。それぐらいですかね。

概算で、凡そ十話前後。それで、此の『ゼロの使い魔』の世界も終わります。

次の世界は以前も御伝え致しましたが、

『スーパーロボット大戦ＯＧサーガ　無限のフロンティアＥＸＣＥＥＤ』です。

あ、因みに幕間の話は『グランギルズ』に行き着く迄は、延々と続きますのでどうか御諒承下さい。

一応の予定としては、是非共今月中に終わらせたいのですが……難しいかなぁ；；

今回も色んな合間を縫いに縫って、睡眠時間も削って……ようやっと書き上がりましたからね；；；；；；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。そして、御休みなさい。

ハルケギニアの真実（前書き）

現時刻（２０：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，０６７，４５３アクセス　ユニーク：１７３，８２１人
皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

そして、到頭２，０００，０００アクセスを超えました！！！！！
これも偏に拙作を、幾度も読んで下さった皆様の御陰と、感謝致して居ります。

その際の記念作品は、雨季様が考えて下さった題目で書かせて頂きます。

もし、他にも何か御要望等が御座いましたら、感想・メール何れでも構いませんので、御一報下さい。

さて、改めまして御久し振りです。凡そ一月振りとなってしまいました。

何とか１８巻も件の友達から返して貰い、これからも更に頑張って集中して書き続ける所存です。

今回は、前回の後書きにて申し上げました通り、説明回です。

久し振りの投稿としては退屈な話かとは思いますが、どうか御付き合い下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

ハルケギニアの真実

ｓｉｄｅ：大聖堂　ｉｎ　ロマリア

其処に突然転移させられた、才人達。

一体、何が何だか判らない儘、流れに逆らう事無く、只、その身に受けていた。

「取り敢えず、俺はシャルの母親と、逃げたイザベラを此処に連れ戻して来る。

それ迄に、シャルル達に一室与えて休ませて置けよ、ヴィットーリオ。

あ、それとみょんな事しない様に、黄宇を付けておくからな。

殺そうとしたり、利用しようと近付いたりすんじゃねぇぞ？

今度は斬り殺されても、俺は生き返らせてやんねぇからな。頼んだぞ、黄宇。」

「はい、畏まりました。主殿も御気を付けて、いってらっしゃいませ。」

「ああ、んじゃ、ちょっくら行って来る。」

「と、忘れてた。ミケラに、ワルドとマチルダも連れて来させろよ、ヴィットーリオ。

あいつらにも、一応関係ある事ではあるからな。んじゃ、今度こそ行って来る。」

と、一言言い忘れていた事を告げ、今度こそ、目的地へ飛んで行った。

side：トリステイン魔法学院

「……よっと。取り敢えず……よし、ちゃんといつもの所に居るみたいだな。」

ヴェストリの広場に唐突に転移して来たカイトは、皆の驚きなど何の其の。

一人呟いた後、何処かへ足早に去って行った。

side：タバサの母の部屋

「おい、居るか。」

「あら、救世主様。いらっしゃい。珍しいわね、貴方が一人で此処へ来るなんて。」

「話は後だ。ちょっと俺と一緒に来て貰う。何かシャルルの形見とか持って行く物はあるか？」

「え？　……いえ、特には無いけれど……？」

「そうか。なら、さっさと行くぞ。……あ、その前のオスマン坊やに一言言っておくか。」

そう言い、突然学院長室に転移したカイトは、

本当に一言「ちょっと、連れて行く」とだけ言い残し、即座に又、違う所へ転移した。

残されたオールド・オスマンが、「……またか。」と頭を抱え込んだ事は、想像に難くない。

side:???

「……ハァッ……ハァッ……！？」

「お、早速見付けた。こいつは僥倖だな……久し振りだな、イザベラ。」

「……だ、誰……？」

「誰って……お前が散々シャルに命令した時、いつもその側に居ただろ？」

「……ま、まさか……あ、あのタバサの……？」

「そう、そのシャルロットの恋人のカイトだ。

ちょっと、お前にも来て貰う所があるのでな……探してたんだよ。」

「……ど、何処に連れて行く気…？　わ、私を拷問しても、意味がないわよ？

私は……本当に何も知らない、只のお人形だったのだから……。」

「……まぁ、そんな事はどうでもいいんだ、問題じゃない。取り敢えず、さっさと行くぞ。

皆を待たせているんだ。シャルもシャルの母も其処にいる。……ジョゼフもな。」

「……え？」

そう言い放ったカイトは、驚くイザベラを余所に、さっさとその場所から転移した。

その爲、彼女を殺そうと捜していた者達が、地団駄を踏んで悔しがった事は言う迄も無い。

ｓｉｄｅ：大聖堂のとある一室

「よ…っと。ほれ、お前等。最後の一人、連れて来てやったぞ。」

「え？　此処は……ッッッ！？！？！？　う……嘘……しゃ、シャルル伯父様？！」

「少しは静かにしとけよ、イザベラ。未だシャルルは生き返ったばっかで、

殆ど病み上がりみたいなものだからな。ま、と言っても、未だ目覚めちゃいねぇが。

取り敢えず、今の俺の役割は此処迄だ。今日明日かけて、のんび

り存分に話し合えよ。
　時間はこれから幾らでもあるんだ。んじゃ、シャル。又、明後日な♪」

そう言ってカイトは、その部屋をさっさと後にした。

……だが、結局、一日二日では話し足り無かったらしく、

翌日目覚めたシャルルの件もあり、暫くその部屋からは歓談の声が途切れなかった。

そして、その数日後。到頭痺れを切らした才人達やヴィットーリオ達がカイトに詰め寄り、

どうなっているのか、と問い質され、已む無く渋々といった感じで、カイトは未だ物足り無さそうにしているタバサ達を呼び寄せ、ようやっと諸々を話し始めた。

ｓｉｄｅ：三人称

「……ちゃんと全員揃っている様だな。果てさて……一体何処からどう説明したものやら。

……龍斗？」

「御断り致します。細かい補足は私が致しますので、肝心な所はカイト様が御願い致します。」

「……ドケチ。」

「……何か？」

「イヤナニモ。……ハァ～～～……ったく、しょうがねぇなぁ。

んじゃ、取り敢えず順番に話してくぞ～。」

そんな気の抜けた声と共に、長い長い話が……ハルケギニアの真実が語られた。

「ま、取り敢えずだ。身体の方は大事無いか、シャルル？」

「……ええ、御陰様で。改めて、有難う御座います救世主（メシア）様。私を再び、家族と会わせて頂き……感謝の言葉も出て来ません……。」

「何、気にするな。当初からの予定事項だったからな。」

「予定事項？　それに当初とは一体何時頃からの話なの？」

「ん？　最初にこの世界……ハルケギニアに来た時からだが？　その時から決めてただけだ。」

「……何と……。で、では、あのサモン・サーヴァントが終わった時には既に？」

「いや、その時じゃないぞ、ジャン。当初とは、俺がブリミル坊やと初めて会った時からだ。

俺がこの世界（ハルケギニア）に来るのは、これで二度目だからな。」

“……。”

カイトのその台詞に、思わず全員が絶句した。改めて聞くと、矢張り物凄い事である。

何せ、この時代に於いて最早、神と崇め奉られている存在（ブリミル）が生きている頃からの知り合いで、

況してやその神を坊やと呼び……。更にはその時、既にこの世界（ハルケギニア）の在り様を理解し、

この世界（ハルケギニア）をどう救うか……それを考えていたと言っているのだから。

「そんで、現況を改めて説明すると、だ。

先ずジョゼフとシェフィールドが一度死に、それぞれ虚無とその使い魔では無くなった。

そして、その虚無はセント・マルガリタ修道院に預けられていた、

シャルの双子の妹、ジョゼットに受け継がれた。……此処迄はいいな？」

「……なぁ、カイト。何でタバサの、その双子の妹は修道院に預けられてたんだ？

育てる金が無いとか言う事は無いだろうし……。」

そう才人が聞いてきた。その疑問は尤もだ。……ガリアという国を深く知らぬ者達にとっては。

そして、カイトは答えた。ガリア王族の闇を白日の下に曝(さら)け出す事によって。

「ああ、それはな。ガリアでは、王族に双子が生まれた場合、後の王位継承の際の火種とならぬ様に、その何れかを殺す慣習があるんだ。

だが、シャルの母はそれを拒み、秘密裏に修道院に逃がしたんだよ。」

「……何だと？」

「まぁ、そういう訳でな。ジョゼットは今の今迄、自分が只の捨て

子だと思ってた訳だが……。

とんだ醜い家鴨（アヒル）の子だった訳だ。今度からは、そんな巫山戯た慣習なんぞ、無くせよ？」

「……はい。」

「……それはいいのですが……救世主（メシア）？　貴方はこの戦争の始末をどう付ける御積もりで？」

忌まわしきガリアの慣習を、改めて廃止する様に命ずるカイト。

それに深く頷くガリア王族達。一応の段落は見せた物の、ヴィットーリオが敢えて口を挟んだ。

確かに、それは誰もが危惧し、何より気を揉んでいる事であった。

それに対しカイトは、自身の考えを述べた。

「そうだな。先ずはガリア王国。王には、ジョゼットになって貰おう。初のガリア女王だ。

んで、シャルルは、長期病気療養で、それが治ったと言う事にしておこう。

明日をも知れぬ重病だった爲、万が一の爲に死んだ事にしておいたって事で。

んで、ジョゼットの存在を公にする爲にも、シャルの母がガリア王族の忌まわしき慣習を、

公の場で、敢えて自ら公表する事。それで、廃止する事を改めて宣言すればいい。

反対した者は、この戦争を導いた原因の一味だとして、断罪しちまえばいい。

細かい事は抜きにして、それで衆愚の大半は納得する。」

んな無茶な。誰もがそう思った。色々とツッコミ所は多かったが、一番気になった事を、ヴィットーリオが聞いてきた。

「……救世主（メシア）？　色々とアレなのですが、先ず一つ聞かせて下さい。反対した者が、戦争の原因とは一体どういう事なのですか？」

そう。カイトは、「戦争の原因として断罪すればいい。」……と、

そう言った。

だが、それでは誰も理解出来無い。何故、それが戦争の原因に繋がるのかを。

そして、カイトは改めて説明の続きを話した。

「ああ、俺が考えたのはな。そういう巫山戯た慣習や、ガリア国内部に蔓延(はびこ)る膿を出し切る為に起こしたのが、今回の戦争だと。

その断固たる意志にロマリアが賛同し協力して、戦争という形で色々秘密裡に行ったとな。

そして、その責をジョゼフが一身に背負い、人身御供として死ぬまで只働きして貰おう。

シャルル達の補佐としてな。あ、只、お前達は魔法が使えなくなってるから気を付けろよ？

で、取り敢えず、今は御互い休戦って事にして、後は同盟を結ぶなり好きにすればいい。

戦争なんてのは、何でもいいから御名目さえ立っちまえばいいんだからな。

後は時代がどうにかしてくれる。大綱としてはこんな所だ。

本当に細かい所は、それこそお前達で詰めてやればいい。俺は全てをやらんからな。」

誰もが思った。（丸投げかよ。そして、そんなバカな。）だが、どうやらカイトは本気の様だ。

仕方なく、遣る瀬無く皆が思わず同時に溜息を付いていた。……その時であった。

怖ず怖ずと一人、誰とも無く発言した者がいた。

「……あの、それで私はどうしたらいいのでしょうか？」

「……あ、忘れてた。」

すっかり毒気を抜かれ、大人しくジョゼフの側に寄り添っていたシェフィールドであった。

どうやら、カイトは素で忘れていたらしく、又、皆から盛大な溜息が零れた。

「……あ～……まぁ、お前はジョゼフの嫁にでもなればいいんじゃねーの？

ジョゼフ、お前側にいた愛妾、殺しちまったんだろ？　なら尚更丁度都合がいいじゃねーか。

な？　おし！　それで決まり！」

「……そ、それで本当にいいのですか？　貴方は確か私達に怒っていた筈では……？」

どうしても、とある事が気になったシェフィールドは、

思わず、言わんでもいい事を聞いてしまった。それが、カイトの逆鱗に又、触れてしまった。

「あ〝？！　……テメェ……人（オレ）が折角、個人的な感情を我慢して押し殺して、

救世主（メシア）としてテメェラも救ってやろうとしてんのに、一々掘り返すんじゃネェヨ！！

テメェ……マジで死にてぇのか、あ〝ぁ〝ん〝！？」

「ヒィィッッ！？！？　い、い、いえ、な、何でもありません！！！」

「……ったく。そういう事だ。俺としては、今直ぐこの世界諸

共に消し飛ばしてぇ所だが、

しょうがねぇから、救ってやるって言ってんだ。余り細けぇ事はツッコムんじゃねぇよ。」

それ、抑(そもそ)も根本的に拙くないか？　誰もが思わずにはいられなかったが、

カイトの忠告通り、敢えて誰も突っ込まなかった。そして、カイトの長い長～い話は未だ続く。

「取り敢えず、戦争関係のゴタゴタはこんなモンでいいだろ。後はお前等でどうにかしろ。

俺はな……政治とかそういうメンドイ事は、大ッッッッッ嫌いなんだよ……！！！

……フゥ～。んで……後は何だっけ？　……ああ、そうそう。思い出した。

おい、ウェールズ、アンリエッタ。」

「「は、はいっ！！」」

カイトのぶっちゃけた叫びに、皆して呆然としてたら、

突然声を掛けられ驚いた、トリステイン国王代理夫妻であった。

一体何事かと思わず身を竦め、少々胃が痛くなって来た気がした二人であった。

「今回の戦争功労者として、ド・オルニエールの領地をくれてやれ。彼処の年収、確か一万二千エキューぐらいって言われてるんだろ？」

「……え、ええ。確かに……彼処は今、丁度領主が居ませんからね。私達は構いませんが……どうでしょうか？　サイト殿？」

「……へ？　え……と、つまり……？」

「……だから、アンタが領地持ちの貴族になるかって聞かれてるのよ。」

「……領地？　……って、領地ぃっ！？　お、俺がぁッッッ？！？！」

「……そうよ。真逆とは思うけど……断ったりなんかしないわよね？」

「……ハィ、有り難くお受けしましゅ。」

早くも尻に敷かれている才人に、思わず皆の口から、クスリと笑いが漏れる。

だが、そんな安息の空気をカイトの一言がぶち壊した。

「まぁ、一万二千エキューと言っても、今やそれも只の形骸化しちまってるがな。」

「……え？　それ一体どういう事だ、カイト？」

「ああ、ド・オルニエールってーのはな。領主が死んだのはもう十年も前の話でな。

今や彼処は、若者が誰一人居らず、老人が数十人で耕しているだけの、

閑散とした農村みたいなモンでな。一応屋敷はあるが、オンボロ屋敷でなぁ……。

当然、豊かな畑も、牧用地も、養魚池も、何も無い。

まぁその分、毎日身体を動かせて、いい鍛錬にはなるだろうがな。」

「……そんな殺生なｏｒｚ」

それは、皆も全く同じ意見であった。一応、カイトはフォローはするが……。

「まぁ、そんなにしょぼくれるな。田舎だけあって、自然は綺麗で空気も美味いぞ？

それに何て言ってもな。あの屋敷には途轍も無い秘密があるんだ。」

「……秘密？」

「そう。アンリエッタ、お前の自室に大きな姿見があるだろ？」

「え！？　……え、ええ。ありますけど……それが何か？」

「実はな……彼処の壁、ぐるりと廻る仕掛けになっていてな。

その先が、ド・オルニエールの屋敷の地下と繋がってるんだ。

それなら、ルイズは毎日アンリエッタの所に遊びに行けるし、もし万が一何か有った時は、

誰よりも、いの一番に駆け付けられるし、逃げ込む隠れ家にも使えるって優れ物だ。

だからこそ、誰よりも信用の置ける才人達にくれてやった方が、何かと都合が良いだろう？」

「……そ、そんな仕掛けが……？　全く気付きませんでしたわ……。」

「だろうな。ディテクト・マジックに何も引っ掛からなかったら、何も無いと思い込むのは、

お前達、魔法使いの何よりも悪い癖の一つだしな。」

そんな物があったなんて。最後のカイトの言葉に、思わず苦虫を噛み潰した様な顔をする皆。

そして、ホッとカイトが一息付き、何時の間にか龍斗が持って来ていた紅茶に口を付けた。

その時を見計らって、今迄ずっと黙っていた少女が初めて口を開いた。

「……ぁ、あのっ！」

「……ふぅ～。ん？　どうした、ジョゼット？」

「あ、あ……あのっ！　な、何で、私が、その王様にならないといけない……んですか…？」

段々と声が小さくなるジョゼットに、思わず寄り添うジュリオ。

それを眺めたカイトが、フッと軽く笑んだ後、またもや深い溜息を付いた。

「……ハァ～……。一番メンドイ事を話さにゃならんのか。なぁ、龍斗。」

「断固御断り致します。」

「……お前等、真逆、ジョゼフ達黙って殺した事、未だ怒ってんの？」

「……マサカ怒ってなどいませんともええ勿論です私が怒る筈など無いじゃないですか。」

「あ～……分かった分かった。俺が悪かったよ。」

「……ですから、別に私は怒ってなどいませんよ？」

「……さて。じゃ、話を続けるぞぉ～！」

龍斗の平然とした顔の片隅に浮かぶ『＃』に、誰もが目を背けた後、話をする事に同意した。

「んで、ジョゼットを王に推した理由だがな。それはワルドの母とも関係がある。」

「……何？　私の母とか？　一体どういう事だ？」

「お前の母親は、早い内にとある事実に気付いた。それを日記に書いてたろ？

そして、それから逃げる術が思い付かず、考え過ぎて気を狂わすしか無かったのさ。」

「……それは……一体、どういう事なのだ……！　答えろ、救世主（メシア）！！！」

「慌てんな。だから、今からそれを教えてやるって言ってんだ。

って、其処。一々、ワルド達を睨むな、才人にルイズにトリステイン夫妻。

後、ヴィットーリオとジュリオも一々俺を睨むな、鬱陶しい。」

とまぁ、現状はそんな感じで、余り話し易い雰囲気とは言えなかったが、

収まる気配など微塵も無かった爲、カイトは（抑も）気にせずに話し続けた。

「んで、ジョゼットを王にした理由はな。

虚無であるお前が王として居た方が、色々と民衆を説得し易いからだ。」

「……説得？　どんな事を説得すればいいんですか？」

「ん？　このハルケギニアから、大地が半分以上失われると言う、厳然たる事実をさ。」

“……え？”

「「……。」」

皆、何を言われているのか……カイトが何を言っているのか、全く解らなかった。

ただ……ヴィットーリオとジュリオの二人を除いて。

「所で、お前達。アルビオンは元々、このハルケギニアの一部だったって事、知ってるか？

アレは、その大地の一部だった場所が大隆起を起こし、浮遊大陸として現在に残った、

その名残の一つだ。アレも軈（やが）ては力を失くし、再び大地に戻る事になる。

では、ここで問題だ。一体、アレはどういう原理で浮いているの

でしょうか？」

「……え？　は？　え、えっと……？」

「因みに答えは聞いてない。だって、聞いても埒が明かないだろうしな。

で、答えは簡単。浮き上がらせる物と言ったら……そう、風石だ。

あの浮遊大陸は、風石の力だけで浮いているんだ。」

その事実に驚き、改めて精霊の力の強大さに恐れを抱いた面々。

風石を始めとする精霊石は、平たく言えば何万年も掛けて培われてきた精霊の力の結晶の事。

その力が集合すると、大陸を一つ持ち上げる事が可能になるのだ。

怖れぬ方が可笑しい。

……だが、待て。何故カイトはそんな話を態々、今したのだろう？

何か嫌な予感がしたタバサ達は、急かす様にカイトに続きを促した。

「……それで、カイト。それとジョゼットの女王戴冠と何の関係があるの？」

「ああ、ぶっちゃけるとだな。実はハルケギニアの地下には大量の風石が眠っていてな。

んで、その風石ってのは、何万年に一度って周期で、地面を持ち上げ始めるんだ。

そして現状、そのハルケギニア中の地下にある風石の殆どが飽和状態でな。

いつ、その風石の力が爆発するか、全く解らん。

もし、その風石が全て一斉に隆起すると、このハルケギニアの少なく見積もっても、

五割以上は確実に浮遊大陸と化す。まぁ先程も言った様に、後にまた地面に落ちて来るが。

だが、もしそれだけの大地が浮き上がるとなると、残った土地を巡って争いが勃発する。

ヴィットーリオ達はそれを怖れて、土地を得る為にエルフに聖戦を仕掛けようとしてる訳だ。」

全員、絶句どころでは無かった。中には、絶望して思わず気絶してしまった者もいたぐらいだ。

そいつらを周りが叩き起こして、改めてカイトから話の続きを聞いた。

「……で、もういいか？　話を続けるぞ。……そういう訳でな。

衆愚に説明するには、それなりの力と理由付けがいる訳だ。

だからこそ、虚無であるジョゼットの名を大々的に使い、ロマリアと協力しようって話だ。

何せ、ガリアの初女王が伝説の虚無となりゃぁ、衆愚は諸手を挙げて喜ぶだろうさ。

そして、ロマリアの若き教皇（ヴィットーリオ）も虚無。

そして、トリステインは、彼の有名なヴァリエール（ルイズ）が三女が虚無。

最後にアルビオンは、王族にしてエルフの血を引く、双方（ティフ）の橋渡しとなる者（アニア）が虚無。

人間側を説得するには、十二分過ぎる大義名分だろう？」

“……成る程。”

ようやっと、ヴィットーリオ達の思惑が理解出来、聖戦の意味も心底から理解出来た一同。

しかし、最大の難問が未だ待ち受けていた。……そう、その聖戦の相手であるエルフである。

「あ、テファで思い出した。おい、ジョゼフ。ビダーシャルは、今どこにいる？」

「む？　確か未だ余の命じた所に居る筈だが……どうするつもりなのだ？」

「ん？　単にここに連れて来るだけだ。そろそろアレも起きそうなのでな。

いっその事、現物を見せてやれば、あの評議会の堅物共も少しは理解出来るだろう…とな。

んじゃ、ちょっくら行って来る。」

そう言い、カイトは姿を消し……本の数十秒程度で戻って来た。

……傍らに件のエルフを引き連れて。そして、一瞬にして、その場はパニックに陥った。

「……クッ！　一体、何の真似だ！　『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』！！！」

「そう尖んなって。ああ、お前等取り敢えず紹介しよう。

『ネフテス』のビダーシャルだ。正真正銘のモノホンのエルフだぞ。」

「……フン。何だ、生きていたのか……悪魔（シャイターン）よ。」

「……ああ、救世主（メシア）に生かされた。」

「……生殺与奪の権を全て担うか。相変わらず、全ての生物を冒涜する存在だな、貴様は。」

「エッヘン！　どうだ、すごいだろう！」

「褒めてなどおらぬわ、戯けが！！！」

カイトとエルフの漫才に、戦々恐々としていた面々が思わず噴き出し、

どうやら、ビダーシャルを除き、皆少しは肩の力が抜けた様だ。

それを見計らったカイトが、その場でビダーシャルと二人で話し合い始めた。

「でだ、ネフテスの。これから、面白い見せ物があるんだが、見に行かないか？」

「……今度は何をしようというのだ、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。」

「いやいや、今度のは俺は何にも関係ねぇよ。

このハルケギニアという世界そのものが、只破滅に向かっているという証拠を見せるだけさ。」

「……何？　貴様が直接手を下さずとも、この世界は破滅すると……。

その様な戯言を言いたいのか、貴様は！　その様な訳が無かろう！！！」

「だから、その証拠を見せてやるって言ってんじゃねぇか。間違い無く一見の価値ありだぜ？」

「……良かろう！　其処迄言うのならば、見てやろう。だが、もしそれが……。」

「ああ、大丈夫大丈夫。ほれ、承諾したんなら、もうブツブツ言わずに行こうぜ？

ほら、お前達も行くぞ？　何やってんだよ、そんな所で。さっさと行くぞ～！」

そう言い、カイトはその場に居た全員を一瞬で、件の場所……火竜山脈に転移させた。

其の後、何の連絡もしなかった爲、ロマリアでは教皇誘拐事件として、騒然としたそうな。

後程、カイトがこっぴどく怒られた事は、想像に難くない。

ｓｉｄｅ：火竜山脈の側

「……さてっと。そろそろ始まる頃だ。」

「……カイト、一体何が始まるの？」

「ん？　見てれば解るさ。可成り壮観な、一大スペクタクルだぞ？」

「……それ、言葉が被ってる。」

「なら、強調表現って事で。……お、始まった。」

カイトはこの場所に着くと、全員を空に浮かせ防御膜で覆った。

そして、カイトがタバサと話していると、突然地面が揺れ出した。

それも過去に無い規模で。

最早、人が立っている事など到底出来無い程の揺れになり……そして、皆は我が目を疑った。

何と、自分達の目の前にある火竜山脈が……山脈そのものが浮き上がり始めたからだ。

誰もが何の言葉も発する事が出来無かった。それが、何より皆の感想を物語っていた。

「……か、カイト……アレは……一体？」

「だから言っただろ？　アレがヴィットーリオが聖戦をエルフに仕掛けた理由。

そしてこの先、ハルケギニアには滅亡しか待っていないと、俺が言った……原因だ。」

「……嘘……だろ……？　だってあれ……山なんだぜ？」

「……只の山じゃない。幾つもの大きな山が連なっている山脈だ。只の山一つとは規模が違う。」

「……ぉお、神よ……！　これが我等に与え給うた試練だと言うのですか！

これ程迄の……苛烈な試練を……！　おお……おお……神よ！！！」

誰もが恐怖に打ち震えた。カイトの言った言葉が、ようやっと現実味を帯びたからだ。

言葉で言われても、意味は解っても、どういう事かは今一つ想像出来なかった。

だが、これで理解した。成る程……これは聖戦を叫ばずにはいられない。

だが、相手はエルフ。例え聖戦を起こしたとしても、勝ち目は限り無く低い。

前門の虎後門の狼……否、八方塞がりとでも言うべきか。

ワルドの母が発狂した理由も解り過ぎる程に解る。これは……現実から逃げたくもなる。

そう皆が思い思いに想い、思わずほぼ同時にカイトの近くにいたエルフ（ビダーシャル）を見た。

彼の顔も一様に青褪（あおざ）めていたのが印象的だった。エルフも顔色が変わるのだと、思った。

「……さて。本来ならば、あれはロマリアとガリアの領土問題だ。

双方が話し合って取り分を決める物なのだろうが……生憎とそれは出来無い。」

「……どうして？」

「ちょっとな……物足りない分の腹癒せに、アレ……消してくる♪」

“……え？”

そう一人勝手に言うと、カイトは皆を置き去りにして、浮き上がった火竜山脈の側に行った。

そして……皆は心底から驚愕する。改めて思い知る。カイトの……救世主（メシア）の力を。

それですら、尚限りない手加減だと……言われても理解出来無い程のチカラを。

「さぁ～～～ッッて！！！　ストレス発散といきますか！

詠唱破棄！　『えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリュスタレ）』！！！」

そうカイトが声高に叫ぶと、火竜山脈は唐突に全て完全に凍り付いた。

「さて、お次ぃ！　詠唱破棄！　『千の雷（キーリプル・ストラペー）』！！！」

無数の雷が空から降り注ぎ、その永久凍土を氷ごと……大地ごと粉々に砕いていった。

「ほい、ラストォッ！！　詠唱破棄ィィッ！！　『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』！！！！！」

そして……その粉々になった全ての破片は、巨大な太陽によって完全に消し飛んだ。

「……～～～ッッ！　プッハァ～ッ！！！

いやぁ、やっぱこの呪文は気持ちいいなぁ～！！！

まぁ、加減しないといけねぇのが玉に瑕（きず）だが……こんぐれぇなら、気分がいいや♪♪！！！」

カイトのその発言に身体を震わせたとしても、一体誰が責められようか。

……だが、ニッコニコ笑顔で戻って来たカイトに、思わず皆の肩から力が抜け、

又、タバサを抱き締めながら、頬擦りしているカイトを見ていると、何だかバカらしくなってきた。……極一部を除いてだが。

それでも、カイトは自然とそういう気分になってしまう……そういう気分にさせてくれる。

そんな人だった事を、改めて皆認識したのであった。

その後。騒乱の大聖堂に戻ったカイト達は、ヴィットーリオがその騒乱を鎮め。

ビダーシャルはカイトと何事かを、綿密に話し合い。

才人達はド・オルニエールの領地に向かい、その荒れ果てた様に驚愕し。

タバサ達は、改めてじっくりと御互い存分に語り合い。

各々、思い思いの日々を過ごした。……そして、その数日後。

ド・オルニエールの領地にて、この世界に於いては奇妙な格好をした幾人もの男女が、

忽然と姿を消し……その更に数日後。又、忽然とその姿を現したそうな。

彼等に一体何があったのか……。

それを知る者は彼等以外にはいないが、一つだけ言える事がある。

彼等は、その十日ばかりの間に、４～５ｋｇは軒並み太ったそうな。

その内の一人から発せられた言葉が、その全てを物語っていると言えよう。

「……トーキョーって、あんなに恐ろしい所なのね。サイトって凄かったのね……。」

「いやいやいやいや。アレ、単にお前達が、燥(はしゃ)ぎ過ぎただけだからな？」

ハルケギニアの真実（後書き）

如何でしたでしょうか？

何分こちらは久し振りの執筆でしたので、

クオリティーが下がっていやしないかと、戦々恐々としていますが……；；；；；；

因みに。幾つか敢えて説明しなかった箇所などありますが、それは後の爲に敢えてとっておきました。

と言っても、特にフラグだとかいう訳では無いのですが、話のつｇ……流れとして、どうか御諒承下さい。

所で、才人達の地球帰還＆見学回なのですが……書いた方がいいでしょうか？

いえ、正直これだけで終わらしてもいいかなぁ？　とか思ってる今日この頃。

もし、御希望の方が一人でもいらっしゃった場合は、頑張って書きます。

雨季様から御提案頂いた記念作品は、その後という事になってしま

いますが、どうか御諒承下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

東京見学～お上りさん編～（前書き）

現時刻（２０：５０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，０８２，５７３アクセス　ユニーク：１７５，１９２人
皆様、毎度有難う御座います。

さて。今回は、御要望がありましたので、初の地球見学回です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

東京見学～お上りさん編～

ｓｉｄｅ：ド・オルニエールの屋敷前

「よし、みんな揃ってるな。じゃあ、改めて大事な事を確認するぞ。

先ず一つ。向こうでは決して魔法を使わない事。

唯一使って良い時は、喧嘩を売られた場合のみ。それ以外は、一切禁止。

二つ目。こっちの常識は向こうの非常識だ。

例え貴族であろうとも、そんな事は微塵も関係無い。もし、余り騒ぐ様なら強制送還するから。

三つ目。絶対に離れて歩かない事。必ず一塊になって一緒に行動する事。

四つ目。金は一切俺が持つから、どうしても欲しい物があった時は、必ず俺を呼ぶ様に。

但し！　ちゃんと節度を持って欲しがる事。

数字ぐらいならお前達にも理解出来るだろうから、それを見て或る程度自粛する様に。

基本的に五桁以上は却下。その分、飲食物については或る程度は許容する。

最後に。各々、剣（デルフ）と杖は布等で包んでおく様に。

才人はばれない様に、懐に短刀でも忍ばせておいておけよ。

……取り敢えず、こんな所か。他にも何かあったら、その都度言うから、そのつもりで。」

何処に遠足に行くのかは知らないが、開口一番、カイトから厳命が皆に下った。

しかも、長々と今した説明を、栞を作って態々ハルケギニアの言葉にして書いて渡していた。

皆、それを見ながら楽しみで楽しみでしょうがない雰囲気が、在り在りと伝わって来る。

当初は、今皆が来ている、この世界に於いては奇妙奇天烈極まりない洋服に対して、

可成り渋っていたのだが、それも今となっては、最早お気に入りの服の一つとして、

あっさり接収されていった程である。……因みに、全て水薙が夜鍋して作った特注品である。

因みに、今ここにいる人達とは。

才人・ルイズ・タバサ・キュルケ・ギーシュ・コルベール・シエスタの7人であった。

トリステイン代表としてルイズが。ガリア代表としてタバサが。ゲルマニア代表としてキュルケが。水精霊騎士隊（オンディーヌ）の代表としてギーシュが。

トリステイン魔法学院代表としてコルベールが。そして、平民代表としてシエスタが。

それぞれ何故か秘密裏に使命を受けて、今日に挑んでいた……筈なのだが。

最早そんなものなど何処吹く風か。すっかりウキウキ気分で楽しんでいた。

……実は、アンリエッタが物凄く来たがり、今迄で一番駄々を捏（こ）ねたのだが、

カイトとウェールズの御説教により、ショボーンとしながら渋々諦

めたのであった。

……ちゃっかり、ルイズに御土産をより多く頼んではいたが。それぐらいは許容範囲内だろう。

そして、当日である今日。このド・オルニエールの才人の屋敷前に皆が集まって来たのだ。

その前日に配られた栞に各々夜通し目を通し、その興奮の儘ここに来ている爲、結構やばい。

いや何がやばいって……徹夜した経験がある方ならば、御判り頂けるであろう。

あの深夜越しの謎の超ハイテンションを維持した儘なのである。

始めにカイトが忠告した事ですら、仕方ないとあっさり承諾した程に危険だ。

と、言う訳で、無理矢理全員を2～3時間眠らしたカイト。

そして、大体昼間の今頃。ようやっと、地球行きの往復切符が切られたのであった。

ｓｉｄｅ：都内某所　ｉｎ　地球

「……っと着いた。ほれ、先ずは家族に挨拶してきな、才人。」

「お、おおう！　い、い、行って来るぜ……！」

「……何、緊張してるんだか。ま、いいや。お前等も行って来い。俺はちょっとやる事があるから。」

そう言って、カイトはさっさとその場を後にした。

其の後、平賀家で起こった途轍もない騒動は……敢えて明記せずにおこうと思う。

幾つか、特筆して羅列するとしたら……。

抱擁。嫁紹介。友人紹介。魔法証明。現況説明。覚悟完了。母、気絶&号泣。父、激怒。以上。

そして、その日は才人とルイズが、平賀家に泊まる事となり、

他の皆は、後から湧いて出て来たカイトが用意したビジネスホテルに泊まる事となった。

で、結局。その日は、一日掛けて今迄あった事を事細かに家族に話していた。

翌日。名残を惜しむ家族と一旦別れ、ようやっと本来の目的。都会見学と洒落込むのであった。

ｓｉｄｅ：都内某所

「……あの大きい建物は何？」

「あれはビルって言って、皆が働く場所の一つだ。一つにつき何百人が。

でかい所だと、何千・何万の人々が汗水垂らして、快適な場所で働いている。」

「……魔法も無いのに、どうやってあんな巨大なものが建てられるのだ？」

「科学技術で。細かい事は、後で図書館にでも連れてってやるから、それで調べな。」

「……あの猛スピードで動いてる奇妙なものは何？　馬車とも何か違うみたいだけど……。」

「あれは自動車。要は、馬の不要な高速馬車だ。

当然の事だが、走ってるアレに触れたら、可成りの確率で死ぬから気を付けろよ。」

「……な、なぁ。あの高い所を走ってる、長くて大きい蛇みたいなものは一体何なんだ？」

「あれは電車だ。沢山の人を乗せて走る高速馬車その二。

今からあれ乗るぞー。お前等ちゃんと着いて来いよ～。」

「ほれ。お前等、これを絶対に失くすなよ？」

「……何コレ？」

「ああ、それは切符って言ってな。それが無いと電車に乗れないんだよ。」

「こんなのが？」

「そう。それが要は電車に乗ってもいいっていう許可証みたいなもんなんだよ。」

「……成る程。で、これを一体誰に見せればいいのかね？」

「ああ、見せなくてもいいんだ。才人、手本。」

「ああ、解ったよ。……っと……久し振りだから、ちょっと手間取っちったか；」

「……とまぁ、あんな感じで機械の口の隙間に差し込むんだ。

そうすると勝手に先の方に運んでくれるから、それを取りながら中に入る。おｋ？」

「……わ、分かった……と思う。では、早速私から行ってみよう。

……うおっ！？　……こ、これは……凄い…！！」

「……真逆、改札口で感激するとは……っておい、ルイズ。機械と睨み合うな、阿呆か。」

「な、何と言う、早い乗り物なのだ……。」

「いえ先生。これ物凄く遅い方ですから。」

「何と！　これで遅い方だと言うのかね？！」

「そうだな。新幹線とかなら、お前等目ん玉飛び出ちまうだろうしなぁ。」

「シンカンセンとな？　それは一体、何だね？」

「ん～……超高速馬車って言えば分かるかなぁ？」

「ま、後で現物見せてやるさ。今回は乗りはしないがな。」

「それは、是非共お願いする！　……むむむ……真逆、此程の物とは。」

「……そうかな？　てか、オマエラ！　座席で遊ぶな！　他の人に迷惑だろ！」

「先ずは腹拵えだ。才人、テリヤキバーガー喰いに行くぞ。」

「おおお！！！！！　い、行こう！　今直ぐ！！」

「……ケリアギ？」

「テ・リ・ヤ・キ・バーガー。才人の大好物だ。ジャンクフードと呼ばれる食べ物で、御手軽・安い・旨い・早いを基本信条として、万人に提供してる食い物の総称だ。

まぁ、百聞は一見に如かず。文句や疑問は後にして、取り敢えずは喰ってみな。」

「……分かった。任せてもいい？」

「ああ、勿論。何なら一通り全部頼んじまうか。金ならふんだんに有るし。」

「……で、これどうやって食べるの？」

「それはな。才人みたいに齧（かぶ）り付いて喰うんだ。コラ、久々だからってがっつくな。

……ほら、言わんこっちゃない。そんなに詰め込めば、喉に詰まるに決まってるだろ？」

「むぐぅっ！　……ングッ……ングッ……プッハァ～！！！」

「……そんなに美味しいの？」

「まぁ、喰ってみれば分かるさ。ほれ、みんなでせーので喰ってみようぜ？　せーの……。」

「……カイト。これ、後幾つ食べていい？」

「……お、お土産用に、二十個ぐらいは買っていってあげてもいいんじゃない？」

「此程の物が……いつでも手軽に食べられるとは……。」

「何でもかんでも驚き過ぎだ、ジャン；　って、おい。

だから、そんなにがっついたら喉に詰まると言っただろうが、ギーシュ。ほら、水。」

「……ここは？」

「通称電気街。色んな機械の部品が売ってる所。今は主に漫画・小説その他が売ってる。

此処だけは、他の街とは色んな意味で一線を画していてな。

数多の外国の人も集まって来る、或る種の聖地みたいなものだ。

因みに、ちょっとした裏通りにケバブという食い物が売ってるが、チリソースは認めないぞ？

ケバブにはヨーグルトソースを掛けるのが常識だ。

いや、常識というよりも、もっとこう……そう。

ケバブにヨーグルトソースを掛けないなど、その料理に対する冒涜に等しい。」

「……カイト。もう、あいつら行っちゃったぜ？」

「……よし、上等だ、テメェラ！　その場に正座しろ！　地べたに這い蹲(つくば)れ！！　説教だ！！！」

～一時間後～

「……よし、これぐらいでいいだろう。余りうろちょろするなよ？行きたい所には、全部連れて行ってやるから。」

“……はぁ～ぃ。あ、足が……orz”

「……な、何で俺まで……orz」

「自業自得だ。ほれ、行くぞ。」

「……所で、カイト。みんな、何を一体こっちに向けてるの？　害は無いの？」

「……ああ、あれか。アレ自体には一切の害は無い。後で、アレが何なのか教えてやるよ。」

「……うん、楽しみ。本当に、ここに来てから、色んな楽しみばかり。」

「そっか。そいつは良かった。……そろそろ、少し休憩挟むか。ほれ、お前等。ちょっとそこらの茶店入るぞ～。」

「……サテン？」

「ああ、喫茶店の略称。所謂、休憩所だ。好きなモン幾らでも頼めよ。」

「……ねぇ、サイト。この並んでる三角形のモノは何？」

「それはケーキって言って、とっても甘くて美味しいお菓子だよ。

殆どの女の子はそれが大好きで、それに目がないんだ。」

「……へぇ～。それなら、私も一つ食べてみようかな？　……この白と赤のがいい。」

「じゃ、それにすっか。すいませーん！　このショートケーキと、チョコケーキ下さい。」

「シャルは何にする？」

「……ん。」

「これか？　……え？　違う？　……真逆、この棚の全部って事？」

「……ん。（コク）……ダメ？」

「……いや、一向に構わないんだが……まぁいいか。余ったら持ち帰るとしよう。

おじさん、この棚にあるの、一通り頂戴！！」

ΩΩΩ＜ざわ……ざわ……　ざわ……ざわ……

「……さて。結局、頼んだ奴全部喰い切っちまった訳だが……未だいるの？」

“勿論（当然）！！！”

「……オーケーオーケー、スウィートトラベラー。

んじゃ、おじさーん。この棚にある奴、ホールで全部頂戴！！！」

ΩΩΩ＜ざわ……ざわ……　ざわ……ざわ……ざわ……

ざわ……ざわ……

「しっかし、本当に良く喰ったなぁ。まぁ、金は未だ潤沢にあるからいいけど。」

「……そういや、気になったんだけど、どうやってソレ調達して来たんだ？」

「ん？　手元にある鉱石を、闇ブローカー達にその場で払える額で売り捌（さば）いて来た。」

「……や、闇？；；；；；；」

「そ。だから、気にするな。無駄に金、余ってるから。」

「……そ、それで、次は何処に行くつもりなんだ

？」

「ん～……そうだなぁ。ここはもうジャン以外、興味を示さないだろうし。

んじゃ、新幹線でも見に行くか。……乗らないけどな。」

「……こ、これが、そのシンカンセンとか言う乗り物なのかね？」

「ああ、そうだぞ。あ、余りべたべた触るなよ。一応、所有物では有るんだからな。」

「む……わ、分かった。

……しかし、此程に長大な物体が、本当にそんなに君達の言う程早いのかね？」

「言ったろ？　百聞は一見に如かずってな。先頭で見てれば少しは分かるだろ。」

「……分かった。先ずは君達の言う通りにしてみよう。」

「……何だね、アレは？」

「だから新幹線。分かり易く言えば、超高速馬車。いや、乗合馬車って言った方が良いのかな？」

「……マサカ、アレ程とは。」

「いや、未だアレ最高速度になってないからな？」

「……バカな。」

「なら、もっと凄い所に連れて行ってやろう。」

「……それで、此処は何処なの？　と言うか、あの鉄の鳥は何？」

「アレが飛行機だ。正確には旅客飛行機とでも言えばいいか。」

「……あれがヒコーキ？　サイトの乗ってる物とは、全く形も大きさも違うわよ？

それに……どう見ても、あれじゃ空中で戦えそうにないし。」

「そりゃそうだ。今、言っただろ？　旅客飛行機だと。要は、あれも人間運搬用の乗り物だ。」

「……あんなにでっかい物が乗り物？　さっきのシンカ……何とかって奴よりも短いけど、

それでも、あんなに大きい物で運んだら、幾らなんでも遅過ぎるんじゃない？」

「何、見てれば解るさ。丁度、御誂(おあつら)え向きに一機、これから飛ぶみたいだぞ？」

“……飛ぶ？　アレが？”

「で、御感想は？」

“……何で、あんなでっかい鉄の塊が飛べるの？”

「それが科学技術って奴さ。魔法が無い代わりに発達したこちらの世界の技術だ。」

「……流石に、これは驚かざるを得ないわね。」

「お～い、シエスタ～。いい加減、起きようぜ～。」

「……キュゥ～。」

「……真逆、目を回す程に驚くとは思いもしなかった；

ゼロ戦で絶対慣れてると思ったんだがなぁ；；；」

「……所で、アレは一体どれ程早いのだね？」

「ん？　ん～……取り敢えず、お前達の国同士の距離なら、掛かっても精々一時間程度だろ。」

“……。”

「お、そろそろ夜か。良い頃合いになって来たな。丁度、今日は良い具合に快晴だしな。」

「良い頃合い？　何か夜の見せ物ってあったっけ？」

「何言ってんだよ、才人。お前があっちに行った時、驚いたモノ……もう忘れたか？」

「へ？　え～と……魔法に、杖使って空飛んで……あ！」

「気付いたか？　なら、少しは見晴らしのいい所へでも行くか。」

「そうだな。ここが間違い無く、俺の世界だっていう、何よりの証明をしに♪」

“？？？”

「……さて、ここらぐらいならいいだろう。……ほら、見えた。」

「……嘘。」

「……月が、本当に一つしかない。」

「……きょ、今日は偶々月が重なる日だったとか……違うのかい？」

「「違うよ。」」

「……本当だったんですね、前にお風呂でサイトさんが言ってた事って。」

「ああ。やっぱ、こういうのはどんなに口で言っても、直接見なきゃ理解出来無いよな。」

「……本当に、これは信じるしか無いわね。ねぇ、ジャン。」

「……ああ。だが、何故だろうか？　たった一つしか無いと言うのに……あんなに綺麗なのは。」

「……本当に綺麗。」

「そうだな。何処の世界に行っても、月の綺麗さは変わらないな。星々の美しさも。」

「……カイト……ん。」

「ん？　……ん……。月夜の下でのキスってのも、中々にロマンチックだな。」

「……うん／／／」

「それにしても、ここから見える下街は凄く綺麗ね。」

「まぁな。街そのものが一日中明るいから、夜中でも人が溢れてるんだよ。」

「……よし。んじゃ、お前等ちょっとそこに集まれ。……そうそう、そんな感じで。

ほれ、ずっとこの小さい奴を見てろよ。……（カシャッ！）よし、おk。」

「……な、何、今の？」

「ん？　まぁ、待ってな。今、現像すっから。……よし、出て来た。」

「……これは……何と精巧な絵だ。」

「因みに、写真と言う。今現在の光景・風景を、その場ですぐに収める事が出来る代物だ。

昼間に、あいつらがしてたのは、お前達の写真を撮ってたって訳さ。」

「……成る程。だが、何故に見ず知らずの私達を、その……トル必要があったのかね？」

「ああ、そりゃ珍しかったからだろ。少なくとも、傍目から見りゃ奇妙な集団だろうしな。」

「……そういうものかね。」

「そういうモンさ。」

其の後。こちらに居る間は、才人・ルイズ・シエスタは才人の家に逗留する事になり、

カイトその他は、カイトが用意したビジネスホテルに泊まる事になった。

因みに、カイトが買った御土産は、結局持って帰る前に全てタバサ達に食べ尽くされ、

改めて買い直された、カイトのダークの中に入れられた御土産は、

全て出来立ての儘で食べられ、ハルケギニアに一大食ブームを巻き起こしたそうな。

そんなこんなで、ルイズ達の初東京見物珍道中は、

ずっと騒がしい儘、ほぼ食べ歩きしただけで終わってしまっていたのであった。

東京見学～お上りさん編～（後書き）

如何でしたでしょうか？

私の力量では、この程度が限界でした。少しでも楽しんで頂けたのであれば、幸いです。

さて次話は、雨季様から御提案頂いた、２，０００，０００アクセス記念作品です。

こちらも、只今鋭意創作中ですので、遅くとも三連休中には投稿できるかと思います。

そちらも楽しみにしていて下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・従者達の日常～五行・水薙編～　ｉｎ　ハルケギニア（前書き）

現時刻（０４：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，１０１，５３４アクセス　ユニーク：１７６，７７４人
皆様、何時も有難う御座います。

さて。今話から、２，０００，０００アクセス突破記念と題しまして、

今更乍らに、記念作品を投稿したいと思います。

内容は単純。カイト達が地球見学に行っている間にハルケギニアであった、

ちょっとした騒動を、短編集として書いてみました。

全六話。二時間毎に一話ずつ予約投稿していきます。

そして、この案を御提案下さった雨季様には、心より感謝致して居ります。

改めまして、有難う御座いました。では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・従者達の日常～五行・水薙編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：水薙

はぁ～い？　みんなのアイドル、水薙（みずち）よ～？　お久～♪　あ、初めましての人は初めまして？

私のマスターこと八神カイトの、家族兼従者兼愛人兼お嫁さん兼性奴隷の水薙でぇ～っす？

「おい、水薙。お前、又、妙な事考えてないか？」

「妙な事？　ううん、何も？」

「……そうか？　……まぁ、それならいいんだが。お前、あの後大変だったんだからな？

シャルに色々と誤解を与えない様に説明するの。」

「……私、マスターの自業自得だと思うの。」

「……サーセンｏｒｚ」

ふぅ……危なかったわ。マスター、あれで何気に勘が物凄いのよね

ぇ……。

あれが恋愛関係に向いてなくて、本当に良かったわ。

もしそうだったら、今頃もっと酷い事になってたもの。

だって、今だってタバサの事しか頭に無い上に、他の子の視線に全く気付いて無いんだもの。

……ほら、今だってあの子も、あの子も……あ、あの子も惚れてたのね……；；；；

あ～あ、可哀相に。それ、絶対に叶わない想いよ？　……教えてあげないけど。

あ、そうそう。因みに、あの後って言うのは、

第９７話『舞台は廻り、役者は謡い、道化は踊る』を読んでね♪

私も出てるから♪

でね？　ヴェストリ広場でマスターと二人でデートしてたんだけど。

それで、何かマスターが私に話があるって言うの。一体何だろ？

改まって告白してくれるとか！？　キャーッ！！　もし、そうだったらどうしよう？／／／／

……何て事は、勿論全く無くて。

「……おい、聞いてるか、水薙？」

「……もう、聞いてるわよ、マスター。今度の地球見学用の洋服を全員分作ればいいんでしょ？」

「……あ、ああ。……何故に不機嫌？」

「……さぁ？　マスターが胸に手を当てて考えてみたら？　……フンッ！」

……八つ当たりなのは分かってるんだけどね？

でも、それでも言って欲しいなぁと思うのが、乙女心ってな訳よ。分かってくれるでしょ？

なのに、マスターったら……もう、バカッ。

「？　水薙が何に怒ってるか全く解らないんだが……でも、怒ってる水薙も可愛いな。

そういう脹れっ面の水薙も、俺は大好きだぞ？」

「……／／／／／／／」

もう……本当にバカなんだから／／／／／／／

と言う訳でね。今、私は頑張って徹夜して夜鍋して、全員分の服を作ってる最中なの。

もう……こんなに頑張ってるんだから、マスターが帰って来たら、暫くマスター貸して貰わないと割に合わないわ！

こんだけ頑張ってるんだから、流石に黄宇姉もタバサも文句は言えないでしょ。

もしそれでも言って来たら、マスターに泣き付いてやる。フンだ、いいじゃない。

何よ……ちょ～～～っと、２～３日分、７０時間程度借りていくだ

けじゃない。

よぉ～～～し！　そうと決まったら、もっと頑張ってマスターに色々と褒めて貰おうっと♪

燃えた。燃えたわ……真っ白にね。いえ、私の場合、真っ玄（くろ）と言う方が正しいのかしら？

まぁ、そんな訳でね。頑張って全員分作り終えて、

マスターに報告してその日は一日中爆睡したのよ。

流石にね。私達だって、特に人間形態を執ってる時は、眠いし疲れるのよ。

……ま、まぁ、終わった後、マスターに抱き締められて頭を撫でて

貰ったから良かったけど／／／

はぅ～……／／／／／／　って、本題はそこじゃ無いのよっ！／／／／

あのね？　実は私と黄宇姉って、何気にこの魔法学院でモテルのよ。

特に黄宇姉なんかは、殆ど女子から。……多分、格好良いとか思われてるんでしょうけどね。

……鋼牙にメロメロな所とか、結構ショタコンな所があったりとか、マスターにデレッデレな所とか、実は何気にドジっ娘属性持ってたりとか……ｅｔｃ。

普段の黄宇姉を知ってる私達からすれば、本当に苦笑しか出て来ないのにね……。

紅蓮のバカなんか、そういう黄宇姉のコンプレックスって言うか、本人が一番気にしてる事を、

さらっと口にしたりツッコミ入れたりしてるから、しょっちゅう黄宇姉に吹っ飛ばされるのよ。

バカに付ける薬は無いって言うけど、あれ本当ね。

人間って本当に上手い事考えるわ。そういう所だけは、心から感心するもの。

って、私何愚痴ってるんだろ。そうじゃなくてね？　何が一番言いたいかって言うと……。

まぁ、口で説明するよりも、実際に見て貰った方が早いわね。

「あ、水薙姉様！　これ、御姉様が仰られた通りに、作ってみましたの。

あの、宜しければ味見して頂けませんか？」

「（私、貴女達のエルダーになった覚えが全く無いんだけどっ？！）ええ、有り難く頂くわ。

……あら、結構美味しいじゃない。でも、もう少ししっとり感が欲しいわね。

次も期待しているわ。」

「は、はいっ！　……ぽわぁ～ん／／／／／／／／／／」

「（……擬音を口にするって言うのはどうなの？）ん？　あら、どうしたの？」

「あ、あの……こ、これ……／／／／／／」

「？　……あら、このお人形、解れちゃってるのね。分かったわ、貸して御覧なさい。

すぐに直してあげるから。」

「は、はいっ！　お、お願い……します……っ！」

「うん♪　……はい、お終い。」

「……ほ、本当に……早い。す、凄い凄い！　正に神業ですわっ！！」

「（……まぁ、本当に神様の一人ではあるんだけどね）ふふっ。

貴女も頑張れば、これぐらい出来るわよ。精進してね？」

「は、はいっ！／／／／／／／／／／」

（あっちゃぁ～……しまった。又、一人増えちゃった。）

……と、こんな感じな訳よ。もう、中庭でも、お風呂でも、誰と居

てもこんな調子。

特に黄宇姉と一緒に居た日なんか、そりゃもう大変なんだから！

黄色い声が！！

そんな訳でね……私が今、何に非常に困ってるか、分かってくれたと思うんだけど……。

一人になる時が全く無いの！！！！！

あのね？　そりゃ私だって、好意を持って接して来てくれるのは、何より嬉しいんだけどね？

私だって一人になりたい時があるのよ。だからといって、この子達を邪険にも出来無いし……。

え？　ならしたい様にすればいいじゃないって？　……それが出来ればとっくにやってるわよ。

あのね？　これでも私達って何気に制約が多いのよ？

この子達を邪険に出来無いのもその一つ。他にも細かい事言ったら

キリが無いくらい。

それでも、マスターが私達と契約してくれたから、こうして大分自由に出来るけど。

本来なら、私達ってこんなに簡単に、自分の意志で外界に出て来ちゃいけないのよ。

本当にマスター様々ね。戻って来たら、改めて一杯サービスしてあげなくちゃ♪

て、又、愚痴になっちゃった。でも、少しは聞いて貰ってスッキリしちゃった。

ありがとね♪　何だかんだ言っちゃったけど、一応この子達も可愛いのよ？

親馬鹿みたいなものなんだけどね。慕ってくれる子達は、やっぱり結局可愛いのよね。

そんなこんなで、ずっと私はこの子達と一緒にお喋りしたりしてたの。

だから、あんな事があったなんて全く知らなかったのよ。

……まぁ、知ったからって、私が何かしたとは到底思えないんだけどね。

え？　で、何があったのかって？

……それは、私よりもアイツの方が詳しいんじゃ無いかしら？

ってな訳で、私からは敢えて何も言わないわ。その事はあのバカから聞いて頂戴ね？

私、これからマスターを迎えに行くの。今夜から、ウフフ……だもんね？？？

それじゃ、又　お会いしましょ♪　チャオ♪

番外・従者達の日常～五行・水薙編～　ｉｎ　ハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

次は一体誰の話になるのか……御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。二時間後の次話にて、又。

番外・従者達の日常～五行・龍斗編～　ｉｎ　ハルケギニア（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、２，０００，０００アクセス突破記念作品第二弾……『龍斗編』です。

今話も拙作を御覧下さい。

番外・従者達の日常～五行・龍斗編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：龍斗（現在１）

皆様、御久し振りですね。おや、そちらの方々は初めましてですね。

カイト様こと八神カイトの従者、龍斗（りゅうと）と申します。

あ、いえ、八神カイトの家族……と訂正させて頂きます。カイト様に怒られてしまいますからね。

因みに、今私が何をしているかと言うとですね。

「……って事があったのね♪」

「そうですか。それは良かったですね。

その少女とは、将来に渡って良い御友達になれそうですね。」

「うんうん♪　良いお友達になれそうなのね♪　シルフィ、すっっっごく嬉しいのね～♪」

と言う訳です。え？　詳しい説明が欲しいのですか？　……仕方ありませんねぇ。

此処は、トリステイン魔法学院の外れの森です。

そこで、木々や動物達と語らっていた所に、

タバサ……いえ、もうシャルロットと呼ぶべきでしょうか？　まぁ、本人の希望でタバサと。

それで、そのタバサの従者のイルククゥ……基、シルフィードが遊びに来たのです。

そして、今迄ずっと御話していたのですよ。え？　デートみたいですって？

あははは……それこそ見当違いですよ。私達は本当に御友達ですから。

格や種類は違えども、私達は同じ龍属ですからね。色々と気が合うのですよ。

その証拠に、シルフィードは黄宇姉さんとも仲が良いですからね。

それで、今日のシルフィードの話では、以前森の中で仲良くなった少女の話でして、

どうやら、到頭自分が話せる事を打ち明けたら、最初こそとても驚

いていたものの、

結局、みんなに内緒と言う事で、二人だけの秘密を抱えた事により、更に仲良くなり、今迄以上により頻繁に会う様になったという御話です。

我々龍属は、基本的には誰からも怖れられる存在ですからね。

その我々と仲良くなれる人間など、此の上無く珍しいものです。

……私がカイト様と初めて出会った時を思い出します。

「カイト？　アイツと出会った時に何か有ったのね？」

「あったと言いますか……まぁ、確かにありましたね。……とても嬉しい事が…ね。」

「うんうん♪　で、一体何があったのね？♪」

「そんなに面白い話ではありませんが……そうですね。偶には思い出話などもいいでしょう。

あれは……。」

ｓｉｄｅ：龍斗（回想壱）

此処からは少し長い昔話になります。……おや、貴方方も聞いていかれますか？

ええ、構いませんよ。何も御持て成しは出来ませんが、どうぞ聞いていって下さい。

あれは、カイト様がアルニスと出会ってから、数百億年程経った頃と伺って居ります。

その頃には、既にノルニル内の図書館の本を全て読破されたそうです。

元々カイト様は読書家だそうで、その全てを記憶されているとの事です。

幸か不幸か。その最後に読まれた本に、私達五行の事が書いてあったそうです。

その本を幾度か全て読み直した後、とある所にて、私達を召喚する儀式をなさったそうです。

私達を喚び出す条件は幾つかあり、その全てを満たさない限り私達と契約する事は出来ません。

一つ。私達を使役するに相応しい力を持っている事。

二つ。その心が正しい事。清くある必要は有りません。正しければいいのです。

基本的にはこの双方を満たせば、四神の内誰かと契約は出来ます。

因みに、二つ目の条件が揃わぬ場合でも力尽くで従える事で契約は出来ますが、

その場合は、私達には一切の自我が無く、只、暴れ狂う暴虐の塊になってしまいます。

それと、四神全てと契約する場合のみ、三つ目の条件が付与されます。

そして、その三つ目とは……私達四神と、４ｖｓ１で戦い、見事実力で勝つ事です。

因みに、カイト様は私達を全て只の一撃で叩き伏せられました。…

…流石はカイト様です。

其の後、黄宇姉さん……黄龍とも契約なさいました。

彼女と契約出来た人間は、後にも先にもカイト様、唯、御一人のみです。

黄龍と契約する条件は二つ。一つ目は、私達四神の認識・承認が先ず必要です。

つまり、私達を力尽くで抑え付け契約した場合、黄龍との契約はその時点で永遠に不可能です。

二つ目は、その契約者の魂を黄龍自身が気に入る事です。

例え、どれ程清く美しい魂を有していようとも、黄龍が袖にすれば、その時点で終わりです。

その点、カイト様は実に天然な誑(たら)しな方でした。

ｓｉｄｅ：龍斗（現在２）

「むむむ……何やら、物凄く難しいのね。そんなにめんど……大変だったのね。」

「ええ、私達に会うだけでも、非常に門の狭い通り道なのです。ですから、カイト様に出会えた私達は本当に恵まれた幸福な世代だったと言えますね。」

「世代？　……リュート達にも、親がいたのね？」

「いえ、そういう訳ではありません。私達には親子と言う概念は無いのです。

基本的に私達は生まれ変わりですからね。

それまでの記憶と引き換えに、それまでに得た知識や経験をその儘に、

一から……赤子から生まれ変わるのです。」

「……それを拒否する事は出来無いのね？」

「不可能ですね。基本的に代替わりするのは、契約者が死んだ時のみです。

因みに、私は三代目。水薙と紅蓮は四代目。鋼牙は五代目に当たります。

私達の兄弟順もそこから来ています。あ、黄宇姉さんだけは初代です。

何せ、初めての契約者がカイト様ですからね。
恐らく、私達はもう永遠に変わる事は無いでしょう。」

「……結構大変なのね、神様っていうのも。」

「ええ、中々に大変で楽しいものですよ。」

「……シルフィにはちっとも分かんないのね、きゅい。」

「あはは……まぁ、これは私達だけの制約みたいなものですからね。
貴女が気にする必要はありませんよ、シルフィード。」

「きゅい……あ、そうなのね。そう言えば、未だリュートの言う嬉しい事を聞いてないのね。」

「おや、そう言えばそうでしたね。私とした事がついうっかり。では、御話するとしましょう。」

ｓｉｄｅ：龍斗（回想弐）

その嬉しい事と言うのは、実は黄龍との契約の際の誑しと言う事にも関わりがありまして。

これは、私達の契約時の会話その儘なのですが……。

「――お前達が、四神……か？」

「「「「はい、我等が主。」」」」私が青龍。」

「我が白虎。」

「我が朱雀。」

「私が玄武で御座います。我等が新しき主よ。」

「そうか……改めて宜しく頼む。俺の名はカイト。八神カイトだ。」

「「「「はっ。我等が新しき主、八神カイト様。何なりと御命令を。」」」」

「そうだなぁ……それじゃ、先ずはお前達の名前から決めるとしよう。」

「「「「「……はっ？」」」」」

「だから名前だ。四神の名はお前達の総称であって、お前達自身の名では無いだろう？

だから、お前達を個別に区別する為の名だ。」

「……我々は、それぞれ四神としての名が御座いますが……。」

「だからそれじゃダメだ。と言うか俺が嫌だ。俺は抑(そもそ)も、従者としてのお前達は求めていない。」

「「「「……何ですと？　では、一体何故に私達と契約をなさったのですか？」」」」

「俺がお前達に求めるモノは、家族だ。これから、永遠に永劫共に生きていく家族だ。

故に、お前達に名前が必要なのさ。他ならぬ、俺の為にな。……

……さて。

それでは、一体どんなものがいいかな？　あ、そうだ。お前達、他の姿形は取れるのか？」

「……あ、はい。可能ではありますが……。」

「なら、早速それ見せてくれ。」

「「「「は。畏まりました。……如何でしょうか？」」」」

「ふむ……成る程。よし、決めた。」

「「「「決められたとは、一体何をでしょうか？」」」」

「何をって……だから、お前達の名前だよ。

先ず、青龍。お前が龍斗（りゅうと）。斗（たたか）う龍と書いて龍斗だ。

で、次。玄武。お前は水薙（みずち）。水を薙ぎ払うと書いて水薙。

それから、朱雀。お前は紅蓮（ぐれん）。紅蓮の炎の紅蓮。

最後に、白虎。お前は鋼牙（こうが）。鋼の牙と書いて鋼牙だ。」

「……龍斗。」

「……みずち……水薙。」

「紅蓮…か……。」

「……コウガ？　……こうが……鋼牙！」

「ああ。どうだ、お前達……不満か？　それなら、もっかい考え直すが。」

「……いえ。とても……良い名前だと……思います。」

「ええ。悪く無いんじゃないかしら？」

「そうだな。中々に格好良い名前だと思うぞ。」

「鋼牙♪　鋼牙♪」

「そうか。気に入って貰えたなら、幸いだ。」

ｓｉｄｅ：龍斗（現在３）

「……と、言う事があったのですよ。」

「ふぇ～……最初からそういう名前だった訳じゃ無かったのね。カ

イトも中々やるのね。」

「ええ。その時、私達は決めたのです。この方が死ぬまで……いや、死しても尚、

その想いが成就されるその日まで、この方に永遠についていこうと。

どの様な艱難辛苦が待ち受けていようとも、必ず守ってみせようと。

まぁ、現実はそんなに甘くありませんでしたがね。」

「きゅい？　どういう事なのね？　充分にリュート達は強いと思うのね、きゅい。」

「ええ、そうですね。ですが、その強さもカイト様と契約したからこそ手に入れた力です。

それに、その当のカイト様は更に遙かに強くあらせられた。

守るどころか、私達が逆にカイト様に守られてしまう始末。

挙げ句の果てに、どんな艱難辛苦から守ろうと覚悟したにも拘わらず、

当の艱難辛苦は既に、私達と契約する以前に訪れていると言う訳です。

あの時程、私達は自分達の無力を思い知らされた時はありませんでしたね。」

「……きゅい。」

「……まぁ、だからと言って何時迄も悄気(しょげ)てばかりもいられませんからね。」

「きゅいきゅい、そうなのね。いつまでも悩んでたって、何にもならないのね、きゅい。

それよりも、何でカイトが誑しになったのか未だ聞いてないのね。」

「おっとそうでした。では、話を続けるとしましょう。」

ｓｉｄｅ：龍斗（回想参）

「カイト様。改めて我々に名を与えて下さり、誠に有難う御座います。

　では、先ず何をなさいますか？　命を頂ければ、我々は何事であろうとも随いましょう。」

「それじゃ、先ず最初の命令は……そうだな。俺と、お前達四神を家族と思う事だ。」

「「「「……は？

　わ、我々と、我等が主を家族と思え……と、それが命令で御座いますか？」」」」

「ああ、そうだ。随ってくれるんだろう？」

「「「「……は、ははっ！　畏まりました。これより、我々は家族で御座います。」」」」

「よしよし。なら、そんな堅っ苦しい喋り方は却下だ。フランクに頼むぜ？」

「じゃあ、御言葉に甘えて……こんな感じでいい？　マスター。」

「ああ、グッジョブだ、水薙。」

「じゃ、俺様も相棒って呼ばせて貰うぜ。構わねぇよな、相棒？」

「勿論だとも、紅蓮。」

「じゃ、じゃぁ、僕も……カイト兄ちゃんって呼んでいい？」

「当然だ、鋼牙。」

「……では、私はカイト様と。宜しいでしょうか？」

「……ま、いいか。一人ぐらいストッパーは欲しいしな。お前の好きにすればいいさ、龍斗。」

「はい、有難う御座います。では、お次はどうなさいますか？」

「そうだなぁ……あ、そうだ。お前達、四神であると同時に五行なんだよな？」

「はい、そうです。」

「ならさ、黄龍にも会いたいんだけど、どうすればいい？

お前達を召喚する本に載って無かったんだよ。俺は五行全員と契約したいんだ。」

「畏まりました。では、黄龍との契約が可能な様に、直ちに取り計らいましょう。」

「……出来ました。では、カイト様。御準備は宜しいですか？」

「ああ、こっちはいつでもいい……早速頼む。」

「はい、では。」

「「「「……我等、四神の名を以て、彼の者を喚ばん。彼の者の名は黄龍。

我等が長にして、我等を束ねる者。五行の長、黄龍よ。

我等の呼び声に応えよ。」」」」

「……久しいな、四神よ。我を喚ぶ程の者が現れたか。ん？珍しいな。

貴様等四神が、人の姿形を象っているなど……果たして、誠に何時以来か。」

「ええ、黄龍。先ずは、彼の者の話を聞く事を御勧め致します。」

「ほう……青龍、お前がそこまで言う程の物か、この人間が……

…よかろう。

人間、名は何と言う？」

「カイト……八神カイトだ。宜しくな、黄龍。」

「八神カイト……か。して、八神カイトよ。其方は我に何を望む？」

「俺と、こいつら四神達の家族になってくれ。」

「……何だと？」

「だから、家族だよ家族。五行って事は……親子じゃ無いだろうから、兄弟になるのかな？

それになって欲しいのさ。俺が望むものは、お前達が俺の力になる事じゃない。

俺がお前達の力に……家族になりたいんだ。ダメか？」

「……青龍よ。この者の精神は正気か？　我等に会うて気でも狂ったのではあるまいな？」

「いいえ、黄龍。間違い無く、彼は正気ですよ。まぁ、或る意味可笑しいとも言えますが。」

「何だよ、それ。酷い事言うなぁ、龍斗は。」

「……何？　今、何と言った？」

「ん？　だから、龍斗。青龍の名前だ。

他にも、玄武は水薙。朱雀は紅蓮。白虎は鋼牙って名付けた。

一応、みんな喜んでくれたぜ？」

「……。」

「ええ、事実ですよ、黄龍。ですから、もう一度言いましょう。

彼の話を聞く事を御勧め致しますと。」

「……フフッ……フハハハ……フハハハハハハハハハハ……！！！！！

いい！　いいぞ、人間！　いや、八神カイトよ！　よかろう！

我が初めての契約者よ！！！

五行が長、黄龍！　其方と永遠に契ろうぞ！！！」

「本当か！　有難う、黄龍！　あ、そういや、お前の名前も決めなきゃな。

そうだ、お前も人間形態になってくれよ、黄龍。それで決めるからさ。」

「相分かった。……これでいいか？」

「ああ……って、え？　し、シグナム？　どういう事だ、一体？」

「……其方が何を言っているのか、私には判らぬが、私のこの姿と似ていると言う事は、

いずれかの人間が、私のこの姿を真似てその者を作ったのであろうよ。」

「……そ、そうなのか。お、驚いた……。……うん、よし。お前の名前を決めた。

……黄宇（こう）。黄龍の黄に、宇宙の宇で黄宇だ。どうかな？」

「こう……コウ……黄宇。うむ、中々に悪くない。

では、黄龍の黄宇。これから、四神共に宜しく頼むぞ、我が主殿。」

「ああ、宜しく頼むぜ、黄宇。」

ｓｉｄｅ：龍斗（現在４）

「……と、言う事があったのですよ。

恐らく、私達をまるで人間の様に名付けてた事が、余程面白かったのでしょうね。

それに何より、私達と家族になる事が、間違い無くカイト様の本心からの御望みでしたから。

考えるに、それが私達も黄龍も何より嬉しかったのだと、今更ながらに思いますよ。」

「……きゅいきゅい！　でも、普段はそんな風には見えないのね、みんな。」

「それはそうです。普段からは言いませんよ。恥ずかしいですしね。

ですが、皆の思いは間違い無く一緒ですし、

カイト様にもその想いは確実に伝わっていると、私達は誰よりも確信しているのですよ。」

「きゅいきゅい！　羨ましいのね！　シルフィもご主人様への想いじゃ負けないけど、

そこまで胸張って言えるのは、とても羨ましいのね、きゅい！！

……でも、いい話だけど、長い話聞いてたら眠くなっちゃったのね、きゅぅぃ。」

「おや、それは済みません……長話に延々と付き合わせてしまいまして。

どうしても昔話というのは、長語りになってしまうのが、難点ですねぇ。」

「きゅぃ……別にいいのね。とても良い話だったのね。それは間違い無いのね。

……でも……ふわぁ～……とても眠くなっちゃったのね。」

「では、一眠りするとしますか。まだまだ時間はたっぷりとありますから。」

「きゅぃ～……。お休みなさいなのね～……クゥ。」

おやおや、何とも寝付きの良い。フ……私も流石に、今日は少し御喋りが過ぎましたかね。

ああ、皆様も、私の長い長い昔話に御付き合い下さり、誠に有難う御座いました。

しかし、これ程の麗(うら)らかな日差しの中では……。

そう思いながら、私も、彼女の寝息に促されてウトウトとし出した時の事です。

「おい、龍斗!!!」

……全く、この愚弟は。人が寝掛かった時に……しかも大声で。

何と言う無粋極まりない。それに何より……、

折角気持ち良さそうに眠っている彼女が、起きてしまうでは無いですか。この大馬鹿者。

それを含ませる様に、彼に告げると何度目かの会話で、ようやっと気付いてくれた様です。

……全く、本当にどうしようもない弟ですねぇ。

どうせ又、カイト様を怒らせる様な真似でも為出来(しでか)したのでしょう。

……仕方ありませんねぇ。私もカイト様を御心を患わせるのは本意ではありませんからね。

ですが、その前に腹癒(はらい)せとして、この御馬鹿な愚弟を揶揄(からか)うぐらいは許されるでしょう？

結局。私達の努力も虚しく、紅蓮はカイト様に説教されていました。

え？　それで、何があったのか……ですか？

それは、紅蓮か鋼牙に御聞きになられた方が宜しいかと思います。

何故ならば、シルフィードはまだ寝ていますからね。

ここで又長話をしてしまうと、今度こそ彼女を起こしてしまいますからね。

では、皆様、御元気で。また、御会い出来る日を楽しみにしていますよ。

番外・従者達の日常～五行・龍斗編～　ｉｎ　ハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

実は、この龍斗編が一番困りました。何せ過去編ですからね。

書こうと思えば、何万字でも書けてしまうのが、何よりの南天喉飴。

何とか、多少無理矢理縮めて書き終えても尚、約七千～八千字……

……ｏｒｚ

実際に、余りに多過ぎたので、二万字程消して書き直しましたからね……（遠い目）

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、二時間後にて。

番外・従者達の日常～五行・紅蓮編～　ｉｎ　ハルケギニア（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、２，０００，０００アクセス突破記念作品第三弾……『紅蓮編』です。

……そこ、天元突破しそうとか言わないで下さい。では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・従者達の日常～五行・紅蓮編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：紅蓮

よお！　久し振りだな、お前等！　ぁん？　初めましてだ？　何だよ、つれねぇなぁ。

ま、いいや。俺様は紅蓮（ぐれん）！　相棒こと八神カイトの従者にして家族だ！　宜しくな！

んで、今俺様が何をしてるかって言うとだな……あ～……口で言うより見た方が早ぇか。

俺は龍斗と違って、そういう事を説明すんの苦手なんだよ。んじゃま、見てくれや。

「ほれほれ、オマエラどうしたぁ！　こんなモン序の口の序の口の、その又序の口だぜ！！」

「ひ、ひぃぃぃ！？！？　だ、誰だよ、一体！！　あの人に訓練頼もうなんて言った奴はぁっ！」

“お前だろうがっ！！！！！”

「そ、そうだった！　ぼ、僕だった……！」

ドゴォォォーーーン！！　「ぐわぁぁぁっ！！！！！」

“ぎ、ギムリィィィィッッッ！！！！！”

「……ぅぅっ……ゴメンよ、ギムリ。僕が彼に戦闘訓練を頼んだばっかりに……。」

「……い、いいんだ……レイナール。

これは……きっと……俺達に……必要な…こ……と……

……。」

「……ぎ、ギムリィィィィィィィィィッッッッ！！！！！」

「……お～い、そろそろいいかぁ？」

とまぁ、そんな訳だ。……あぁん？　判り辛えだぁ？　……ったく、しょうがねぇなぁ。

要はだな。こいつら……才人やギーシュを抜いた他の水精霊騎士隊（オンディーヌ）が、

俺に稽古を付けてくれって頼みに来たんだよ。んで、今その稽古の真っ最中ってな訳だ。

……にしても、こいつら情けねぇなぁ。折角、この俺様が火傷程度で済む様に、

態々力を一億分の一以下にまでセーブしてやって、オマケに避け易くしてやってんのに。

もしかして、アイツラ俺がこれで殆ど手加減してねぇとか思ってんじゃねぇだろうな？

……だったら、ちょっとオシオキが必要だな……少しは嚇(おど)かしておくか♪

「おい、オマエラ。ちょいと聞きてぇ事があんだけどよ。」

「？　は、はい。何でしょうか？」

「もしかしてだが……オマエラ、これで俺があんまり手加減してねぇとか、

遣り過ぎだとか思ってんじゃねぇだろうな？」

“……え？　違うんですか？”

「……クッ……クックックック……ハァーッハッハッハッハ！！！！」

“……あれ？　何か拙いスイッチ入っちゃった？；；；；；；；”

おい、相棒。俺は今、ようやっと少しだけだが、お前の気持ちが解った気がするぜ。

これは、本当にイラッとするなぁ……！！　今度からお前には、もう少し優しくしとくよ……！

「……アッハッハッハッハ……クックック……オーケー、オーケー。

テメェラ、この俺様に喧嘩売るたぁ、いい度胸だぁ…！！！」

“ひ、ヒィィィィッツツ！？！？！？”

「一つ言っておくがなぁ……今、俺様は一億分の一以下の力でやってやったんだよ。

オマケに、態々避け易い様に間隔開けたり、狙わずにいてやったりなぁ……！

だって言うのに、テメェラときたら……上等だ。ああ、上等だ。

その喧嘩買ってやる。」

“ひ、ヒィィィィィィィィッッッッ！？！？！？！？！？”

「――八神カイトが従者が一。朱雀の紅蓮……いざ参る。」

さぁ……火祭り・血祭り・村祭り（？）のお時間だぜぇ……！！！！！

……あ～まぁ、結果から言うとだな。遣り過ぎちまったぜ……てへっ☆

地面はあっちこっち、ボコボコで見るも無惨な姿になっちまってなぁ。

いやまぁ、そんぐれぇなら未だいいんだ。……そう、それぐらいなら未だ良かったんだよ……。

……ガクガクブルブル……え？　一体何故震えてるのかって？

……ま、まぁ、例によって例に如く見て貰えりゃ分かるだろうさ……ハァ。

「オラオラオラオラ！！！！！　テメェラ、何逃げてんだよ！！！！

ハッ！！　だが、逃げ足だけは速くなったみてぇだなぁ！！！！！」

“うっひいいいいっっ！！！　お、お、お助けをぉぉぉぉぉーーーーー！！！！！！”

「んなモン、ダメに決まってんだろうがよおおおぉぉぉぉぉ！！！！！」

“うっひゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ！！！！！！！！！！”

バッツッゴォォォォーーーーーーーーーーッッッッンンン！！！！！！！！！

「ぁん？　……っチッ！　アレを避けるとはな。

勢い余り過ぎて建物壊しち……まっ……た……ぜ……。」

「あれ？　……あ、あそこって確か……？」

「……うむ。ミス・タバサの寝室だったな。」

「そして、今あそこに住んでいるのは……彼女と、その恋人だったな。」

「そうだな。つまりは……。」

“……カイト＝ヤガミ氏？！　あれ？　僕達死亡フラグ立ってね？”

と、言う訳だ。ああ勿論、俺達……今此の場にいる奴全員に、

本物の死亡フラグがビンビンに立っちまってる訳だが……マジでドウシヨウ；；；；；；

こうなったら……！　仕方ねぇ！　アイツラに頼むしかねぇか……

俺の命の爲に！！！

「おい、オマエラ！　アレは俺が何とかする！
その代わりテメェラは、ここの抉（えぐ）れた地面を何とかしてくれ！
頼んだぞ！！！」

そう言って、俺様はアイツラの言葉など聞かずにさっさとアイツラを探して走り出したのさ。

何処だ何処だ！　一体、アイツラは何所にいやがる！

俺達はこの学院にいる間は、御互いの交信を断ってるからなぁ。あ、相棒の命令でな。

まぁ、俺も同様に断ってるから、アイツラの事をとやかくは言えねぇんだけどよ。

って、そんな事を言ってる間に、見付けたぜ！！

今、一番会いたくなくて、一番頼みたくない奴をよぉ！！！

「おい、龍斗！！！」

「……一体、何ですか紅蓮。相変わらず貴方は騒々しいですねぇ。

森の動物達が怯えていますよ？　もう少し、教養や礼儀を学ばれては如何です？」

「うっせぇな！　開口一番がそれかよ！？　やっぱテメェ、俺に喧嘩売ってんだろ！！？」

「真逆。貴方の様な野蛮人に喧嘩など売ったら、私まで同類と見做されてしまうじゃないですか。

そんな愚かな事、する訳無いでしょう？　もっと常識で物事考え

て下さい。」

「――――テメェ。……ん？　ああ、そういう事か。そいつは済まなかったわ。」

「……分かって頂ければ幸いです。それで、私に一体何の御用ですか？

貴方が周りに気付かないのは何時もの事ですが……それにしても、それ程焦っているのは珍しいですからね。何か余程の事でもあったのでしょう？」

とまぁ、そういう訳でな……あ？　何があったのか全く分からないってか？

何だよ……ったくメンドイなぁ、お前等。しょうがねぇなぁ……一応説明しとくとだな。

今、龍斗の奴がいやがるのは、この学院の外にある森ん中だ。

んで、そこで森の動物達や、木々と座り込んで話し合ってた訳だ。

んで、龍斗の膝を枕にして寝てるのが、シルフィードだ。どうも最近コイツラ仲良いよなぁ。

つまりだ。龍斗の奴がいつになく辛辣な言葉を使ったのは、コイツを起こしちまうだろうが！

って言う、龍斗なりの警告と言うか、まぁ怒ってた訳だ。だから、テメェのは判り辛ぇんだよ！

まぁそんな訳で、ようやっとソレに気付いた俺が一応謝っとくと、ようやっと怒気を収めて、

俺の話を聞く態勢になりやがった訳だ。

「おお、そうだそうだ！　頼むから何も言わねぇでこっちに来てくれ！」

「御断りします。言ったでしょう？　何があったのか話しなさいと。で？　今度は一体、何をやらかしたのですか？」

「んぐっ……いや、実はな……ってな訳なんだよ。」

「……はぁ。

熟々（つくづく）貴方という人は、学習しないと言うか……騒動の好きな人ですねぇ。

そんなにカイト様にオシオキされたいのですか？

何時の間にマゾヒストになどなったのです？」

「違っげぇよ、バカタレ！！！　俺様だって好きでやってんじゃねぇんだよっ！！！！！

って、そんな事より、マジで頼むわ！　部屋の修復してくれ！」

と言う訳なのさ。そうそう、その通り。今度こそ俺が言わなくても分かってくれたか！

そうなんだよ……あの部屋を直して貰うのに、コイツと鋼牙の力が必要なんだよ。

だから、こうして下げたくない頭を下げて、頼みたくない奴に頼んでる……ってのによぉ！！！

「では、改めて言いましょう。御断りします。」

「……は？」

「ですから嫌だと言ったのですよ、紅蓮。

貴方がカイト様に怒られようがどうしようが、私には一切関わり合いの無い事です。

寧ろ気味が良い事は間違い無いでしょう。さ、理解したのならさっさと向こうに行って下さい。」

「ぐぬぬぬ……！」

こんにゃろうめぇ……！　イイ笑顔で言いやがって……！　やっぱこいつ大ッッッ嫌いだ！！！

……くっ……だが、ここは背に腹は代えられねぇしな。

しょうがねぇ、俺のプライドなんかはこの際、どうでもいい！！

「ぐっ……頼む、龍斗！　この通りだ！　部屋を直してくれ！！」

「……紅蓮。……ふぅ……しょうがありませんね。

貴方に土下座してまで頼まれては、如何な私でも断れませんよ。」

「そうか！　済まねぇ、助かるぜ！」

「ですが、勘違いなさらないように。全てはカイト様の御為にする事です。分かっていますね？」

「おお、あたぼうよ！

相棒に寒風の中で寝さすのも、手間を掛けさすのも俺達の本意じゃねぇからな。」

「ええ、それが分かっているのであれば、構いませんよ。では、先に鋼牙を探して来て下さい。

私は、シルフィードを起こして説明してから行きますから。」

「ああ、頼んだぜ……っと、そうだ。鋼牙の行きそうなとこって、お前なら何処だと思うよ？」

「そうですねぇ……。まぁ、女性が集まっている場所を探せばすぐ見付かるのでは？」

「やっぱそうだよなぁ。んじゃ、手当たり次第に探してみるぜ！んじゃな！」

「ええ。勢い付け過ぎて更に被害を広げない様に。」

「うっせぇ！　お前は何時でも一言以上多いんだよっ！！！」

よし！　龍斗の奴は気に入らねぇが、こればっかりは我慢するしかねぇしな。

後は鋼牙だ！　アイツ……一体何処にいやがるんだ？

あ、俺は鋼牙を探すんで忙しいから、これでバイバイだ。んじゃな！

え？　で、結局どうなったのかって？　……んなモン、誰が言うか！

どうしても聞きたかったら、他の奴に聞けよな……。

鋼牙とか龍斗とかによ。あいつらなら、嬉しがって話すんじゃねーの？

……いいか？　どう～～～～しても聞きたかったらだからな？

無理して聞くんなら、聞かなくていいからなっ！？　……ったく。

んじゃ、又なっ！！

番外・従者達の日常～五行・紅蓮編～　ｉｎ　ハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

紅蓮は私の脳内では、基本アホの子で通っています。でも、頭は悪くないガキ大将という感じ。

果たして紅蓮は一体、どうなってしまったのか。次話を御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、二時間後の次話にて。

番外・従者達の日常～五行・鋼牙編～　ｉｎ　ハルケギニア（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、２，０００，０００アクセス突破記念作品第四弾……『鋼牙編』です。

ショタ萌えバッチコーイの回……になっている筈です。では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・従者達の日常～五行・鋼牙編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：鋼牙

んにゅ？　あ、お兄ちゃん、お姉ちゃんたち、久し振り～♪

あれ？　そっちの人たちは初めまして？

僕は、カイト兄ちゃんこと八神カイト兄ちゃんの従者で家族の、鋼牙だよ。

えへへ……宜しくね♪　あのね。それで、今僕が何をしてるかって言うとね。

「ハイ、鋼牙ちゃん。あ～～ん……。」

「あ～ん……んきゅんきゅ……美味しい！」

「あらそう？　良かったわ、鋼牙ちゃんに喜んで貰えて。」

「うん♪　あ、お姉ちゃん、こっちのもちょ～だ～い♪」

「う、うん／／／　……あ、あ～ん……ど、どうかな？」

「んにゅんにゅ……ぅんにゅ！　すっごく美味しい！！

お姉ちゃん、もう一個ちょーだーい！」

「あ、うん！／／／　はい、どうぞ♪／／／」

「んにゅにゅ……むっきゅんきゅ……。」

“ぅぅ～～～……か、可愛いいいいいいいいいい～～～～～！！！！！！！！！！！”

って言う事なの。え？　分かりにくかった？　なら、教えてあげるね♪

あのねあのね。この学校の……じゃなかった。この学院のお姉ちゃんたちがね。

お菓子とか、美味しい紅茶とかたくさん作ってくれるんだ♪

それがね、すっっっっごく美味しいんだよ♪！！　えへへ……僕、お姉ちゃんたち大好き！

（→餌付け完了の図也）

？　それでね。今日も、お姉ちゃんたちと一緒に美味しい物、たくさん食べてたの。

……え？　カイト兄ちゃんたち？　あのね。カイト兄ちゃんは地球に行ってるの。

才人兄ちゃんとか、タバサお姉ちゃんとかと一緒にね、地球見学して来るんだって。

それで大体、数日帰って来れないんだって。……僕、ちょっと寂しい。

でも、僕我慢出来るモン。いつもカイト兄ちゃん、物凄く頑張ってくれてるから、僕も頑張る！

だから、寂しいけど我慢する！　でも、帰って来たら、ちょっとぐらい甘えたっていいよね？

あ、それでね。他の僕の家族なんだけどね。

龍斗兄ちゃんは、いつも森で小鳥さんとかリスさんとか、森の木たちとかとお話してるの。

いいなぁ……僕も小鳥さんたちとかとお話してみたい。でもいいモンね。

僕だって、石たちや岩たちや鉱石たちとかと、たくさんお話出来るモン。

エッヘン！　どうだ、凄いでしょう！　僕は、これでも四神の白虎なんだからね！

あと、水薙お姉ちゃんは、ここにいない他のお姉ちゃんたちと一緒にお喋りしてるの。

水薙お姉ちゃんも黄宇お姉ちゃんも、すっごく色んなお姉ちゃんたちに人気なんだよ！

でねでね。黄宇お姉ちゃんはちゅーぼーでみんなにお料理教えてるの。

黄宇お姉ちゃんって、とってもお料理が上手で、本当に美味しいんだよ！！！

だから僕、いつも黄宇お姉ちゃんの料理がとっても楽しみなんだぁ～♪

あ、そうだった。あとね、あと一人、お兄ちゃんがいるんだけど……そのお兄ちゃんがね。

「お、いたいた！　こんな所にいやがったか、鋼牙！！！」

「あれ？　紅蓮兄ちゃん。どうしたの？」

この人、紅蓮兄ちゃん。僕たちと同じ四神なんだよ。それでね。

えとね、紅蓮兄ちゃんって……暴れん坊で、抑えが効かなくて、柄が悪い人……なんだって。

でも、とっても家族想いの、僕達には優しいお兄ちゃんなんだよ？

それでね？　何か紅蓮兄ちゃんが言うには、タバサお姉ちゃんの部屋を壊しちゃったから、

僕と龍斗兄ちゃんにお願いして、直して欲しいんだって。

「うん、分かったー。カイト兄ちゃんも寒い中じゃ寝られないモンね。」

「そうそう。そういう事だからよ。済まねぇが、早速来てくれ。

龍斗の奴は、シルフィードに事情を説明してから来るって言ってたからよ。

悪いが、お前から先に頼むわ。」

「うん、おっけーだよ！　じゃ、急いで直しちゃお、紅蓮兄ちゃん。早くしないと、また紅蓮兄ちゃん、カイト兄ちゃんに怒られちゃうモンね。」

「……うぅっ……お前は本当に良い子だなぁ、鋼牙…」

「うにゅ？　……エヘヘ……♪」

うにゅにゅ♪　紅蓮兄ちゃんに頭をグリグリって撫でられるの、すっごく気持ち良いんだぁ～♪

あ、いけない。お姉ちゃんたちにちゃんとお礼と、用事が出来た事言わないと。

ちょっと待っててね、紅蓮兄ちゃん。

ちゃんと順番を守らないとダメだって、カイト兄ちゃんが言ってたから。

「……うわぁ……。こんなに壊しちゃったの？　ダメだよ～ちゃんと手加減しないと。

僕たちの力じゃ、物凄く手加減しても普通に星とか壊れちゃうんだからね？」

「ううっ……わ、分かってるよ……。

只、ちぃっとばかし、挑発に乗ってやっちまっただけなんだって。」

「……もうっ。これじゃ、カイト兄ちゃんじゃなくても、僕だって怒っちゃうよ。

こんなにボロボロになって……石さんたち可哀相。」

「うっ……わ、悪かったって。ほ、ほら、だからな？　早く治してやらねぇと……な？」

「……うん、そうだね。早く治してあげよう。

あ、でももうすぐ龍斗兄ちゃんも来るんじゃないの？」

「ん？　……ああ、どうやらそうみたいだな。なら、アイツが来て

からにすっか。」

「うんっ♪　どうせなら、一緒に治してあげた方が、この子たちも喜んでくれるモンね♪」

「……それで、この惨事ですか。貴方……本当にバカですね。」

「う、うっせぇっ！！！　いいから早いとこ、ここ頼むぜ。」

「……はぁ。全く、何で私達がこのバカ愚弟の尻拭いをしなければいけないのか、

本気で理解に苦しみますが……まぁ、カイト様の御為と割り切りましょう。」

「ぬぐっ……ホントにテメェはいつもいつも一言二言三言と多いなぁ！

ええ、コンチクショウ！！！」

「人はそれを自業自得と言うのですよ、紅蓮。

良かったですね、御勉強が出来て。これで又一つ、御利口さんになりましたね♪」

「……ギリギリギリギリギリギリギリ……！！！！！！！！！！

コロス……ゼッテェあとでコロス……コロスコロスコロスコロス……！！！！！」

「……ぅ〜〜……もう、二人共っ！　喧嘩しちゃメッ！　って言ったでしょ！

もし、そんな事したら、本当に僕がカイト兄ちゃんに言っちゃうからね！！」

「「うっ……済みません（済まねぇ）……ｏｒｚ」」

もう……本当は二人共、仲が良いんだよ？　良く二人して笑ってたりしてるんだから。

でもね？　何でかわからないけど、すぐこうやって喧嘩しちゃうんだ……。

本当にもう……今度、こっそりカイト兄ちゃんに相談してみようっと。（↑二人の死亡フラグ）

？？　それでね。結局このあとも、何度か二人で喧嘩しながら、僕たち三人で部屋を治したの。

僕、いっぱい頑張ったよ！　二人の喧嘩をちゅーさいしたり、怒ったりしてさ。

そしたら、全部終わるまでにお日さまが半分近く沈んじゃってたんだ。

でも、そのあと、二人共、僕にごめんなさいってしてくれたからいいんだ。

それに、二人して僕の頭撫でてくれたり、ぎゅってしてくれたからね♪　エヘヘヘ～♪♪♪

でも、結局、紅蓮兄ちゃん、カイト兄ちゃんにバレちゃって怒られちゃったんだ。

何でだろ？　やっぱり、カイト兄ちゃんに隠し事って出来無いんだね。

（※→自覚無し。紅蓮達も、鋼牙の善意でした事なので、怒るに怒れないのであった、丸。）

？？？　ふにゅ？　それで、黄宇お姉ちゃんはその間、何してたのって？

う～んとね……え～っとね……アハハ……僕わかんないや……。

あ、それじゃ、お兄ちゃんお姉ちゃんたちが、黄宇お姉ちゃんに聞いてみて！

僕も聞いてみたいから、一緒にお願いしよっ♪

でも、僕今日頑張ったから、もう眠たくなっちゃった……。

それじゃ、みんなお休みなさ～い。また明日、一緒に遊ぼうね～♪

番外・従者達の日常～五行・鋼牙編～　ｉｎ　ハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

結局、説教される紅蓮でありましたｗ

しかし、地球に行っても、ハルケギニアに戻って来ても説教するカイト。

私自身で書いておきながら何ですが……疲れないんですかね？

さて。騒動自体は終わってしまいましたが、話は未だ続きます。もう少し、御付き合い下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、二時間後の次話にて。

番外・従者達の日常～五行・黄宇編～　ｉｎ　ハルケギニア（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、２，０００，０００アクセス突破記念作品第五弾……『黄宇編』です。

今回が一番短い回だと思います。では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・従者達の日常～五行・黄宇編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：黄宇

……む？　お前達か、久しいな。おや？　そちらは初めましてかな？

私は、主殿こと八神カイトの従者にして家族、その長姉である黄宇（こう）だ。以後、宜しく頼む。

ん？　今、私が何をしているか……だと？　妙な事を気にするのだな、お前達は。まぁいい。

気になるのならば、見ていくといい。私は余り、そういうお喋りとかは苦手なのだ。

「おう、黄宇の姉ちゃん。こいつならどうでい？」

「ふむ……うむ、中々に悪くない。大分良くなってきてはいるようだな。

だが、未だ……何か足りないな。

……そうだな、今度主殿が地球から買って来る調味料を使ってみるとよりいいだろう。

この味付け方ならば……七味唐辛子ならば合うのでは無いかと思う。

取り敢えず、私の持っているのを貸してやる。これを少量入れて味付けしてみるといい。」

「お、いつも済まねぇな。んじゃ、ちょっくら、もっかい作ってくるわ。」

「ああ、いつも楽しみにしている。」

「あ、あの……こちらも出来上がったみたいなんですけど……。」

「ん？　どれどれ……ほぅ。これは中々に完成度が高いな。この儘でも悪くないが……。

そうだな。ワンアクセントとして、極少量のチョコレートなど入れてみてはどうだ？」

「ちょ、ちょこれーとですか？　あの物凄く甘くて美味しいお菓子の？」

「ああ、そうだ。辛い物に甘みを入れるとより深みを増すものもあるんだ。

まぁ、何でもいい訳でもないが、これになら少し入れた方が、よりいいだろう。」

「は、はいっ！　い、今直ぐ、持って来ます！」

「ああ。慌てて転ぶなよ。」

と言う訳だ。何？　今一つ判らない……だと？　どういう観察眼をしているんだ、お前達は。

……全く、しょうがない奴等だな。ならば、説明してやる。

いいか？　私は一度しか言わない。しっかり聞く様に。

要は、だ。今、私は料理をここの皆に教えているのだ。どうだ、判ったか？

判ったのならばもういいだろう。私は、未だ自身の料理の研究があるんだ。

これでも、まだまだ腕を磨いている最中でな。

主殿や鋼牙達弟妹の喜ぶ顔を見たくて、こうして、日夜修行に明け暮れている訳だ。

菓子では、まだまだ水薙に一日の長があるが、こと普段の料理ではそうそう負けん。

私とて、始めの内はそれはそれは酷いものだった。

そもそもにおいて、主殿が食に対する頓着が全く無いのが、何よりの発端だったのだ。

流石に、我等が主に何も食べさせない訳にもいくまいとして、

何故か私が代表して料理を作り始める事になったのだが……中々どうして、これが奥が深い。

一体、何度途中で投げ出そうとした事か。

しかし、その度に主殿から御優しい御言葉を掛けて頂き、

その度に一念発起して又やろうと頑張れたのだ。

何より、主殿はどんなに不味くとも、必ず残さずに食べ切って下さったのだ。

『心の籠もった料理は、どんなに高くて美味しい料理よりも、贅沢な御馳走だ。』

あの時、私達五行ですら吐き出す程に不味い、料理とも言えぬモノを食べ切った後、

そう満面の笑みで仰って下さった言葉を、私は永劫忘れる事は無い……いや出来ぬであろう。

私は、あの時初めて主殿に心から惚れ込み、初めて一人の男性として見始めたのだ。

……っと、一体何を話しているのだ、私はっ／／／／／／／／／／

……っごほんっ！　と、ま、まぁ、そういう訳でな。もうお喋りは終わりだ。

私は、料理に集中するのでな。許せよ……ん？　何だ、今の爆発音は？

「おわっとっと。何だ何だ、いってぇ、今のでっけぇ爆発の音はよお！」

「ま、マルトーさん。どうやら、生徒さんの部屋が一つ吹っ飛んじゃったらしいです。

何か、水精霊騎士隊（オンディーヌ）の皆さんが、必死に抉れた地面とかを元に戻

してました。」

「あぁん？　また、あの貴族の坊ちゃん連中が、何かやらかしたのか。

カァーッ！　全く懲りねぇ奴等だなぁ、おい！　アッハッハッハ……！！！」

「ふむ。その騒動の元は恐らく、我が愚弟の紅蓮だろう。

何やら、今朝彼等に戦闘訓練を頼まれていたらしいのでな。

あのバカの事だ。どうせ、下手な挑発紛いにカッカして、手加減でも誤ったのだろう。」

（→大当たりです。）

「そ、そうなんですか？　……あ、あの……お手伝いとかした方がいいんでしょうか？」

「いや、その必要は無いさ。あのバカはあれで中々に頭は悪くない。

もし、何か私達の助力が必要ならば、奴の方から言ってくるだろう。

だから、私達は何も気にする必要は無い。

ほら、それよりも作り掛けの料理がおじゃんになってしまうぞ？」

「あわわわわ！！！」

「……クスクスクスクス。」

「にしても、アンタラ変わってるよなぁ。何か普通の家族ってぇのとも違うみたいだしよう。」

「そうかな？　まぁ、私達の場合は少々特殊だからな。

だが、何処の誰よりも、堅く決して千切れない絆で繋がっている事は断言出来る。

それは、我々が……そして何より、主殿がそれを理解して下さっている。

我々にとって、主殿の従者である事は何よりの誉れであり、

彼に『家族』と……そう呼ばれる事は、至上の幸福なのだ。」

「へぇ～……普段、地べたに正座させて説教したり、

我が儘に怒ったりしてても、やっぱ家族って奴なんだなあ。

結局何だかんだ言って、あのカイトってあんちゃんに惚れてるってな訳か。ガハハハハ……！」

「……ああ、そうだな。

私は……私達は、誰よりも主殿に……八神カイトという男に惚れ込んでしまっているのさ。

だからこそ、今、私は、私達はここにいる。……ここにいられるのだ。」

そう。だからこそ、私達は主殿に感謝し、誠心誠意尽くし、誰よりも愛すると誓ったのだ。

……今日は珍しく、少し饒舌になってしまった様だな。

その後は、私は暫く無言で料理を作り続けていた。

……何でも、後で聞いた事なのだが、その間中、私はずっと笑顔だったらしい。

……うむ、ま、まぁ、しょうがないな、うん／／／

そ、そんな訳でな。その日、あのバカ愚弟が何を爲出来したのか、全く知らなかったのだ。

真逆、本当に私の言った通りの様な事になっていようとは。……本当にアイツは阿呆だな。

龍斗と鋼牙に手伝って貰って部屋を直したはいいが、鋼牙経由であっさりバレたらしい。

で、結局主殿に長説教をされる羽目になったのだ、戯けが。

む？　これで話は全部終わりか？　……だと？　何を言っているんだ、お前達は。

お前達と一緒にずっと話を聞いていた者達がいるだろう？

未だ、そいつらの話を聞いていないじゃないか。何？　本当に誰か判らないのか？

全く、本当にしょうがない奴等だな、お前達も。

……まぁいい。次の奴等で、私達の話も終わりだ。長々と付き合わせて済まなかったな。

では、今は一旦さらばだ。又、相見えようぞ。

番外・従者達の日常～五行・黄宇編～　ｉｎ　ハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

今話は黄宇の想い。その暴露大会とでも言うべき回でした。

さて。残すは後一話のみになってしまいました。果たして誰達の回か……判りますか？

答えは二時間後です♪　後少し……どうか最後迄、御付き合い下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、二時間後の記念作品最終話にて。

番外・従者達の日常～魔法の体現者（エレメント・マスター）編～　ｉｎ　ハルケギニア

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、２，０００，０００アクセス突破記念作品最終編……『魔法（エレメント）の体現者（マスター）編』です。

皆様、予想は当たりましたか？ｗ　私にとっては、今回が今迄の話で、間違い無く一番苦労した回です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

番外・従者達の日常～魔法の体現者（エレメント・マスター）編～　ｉｎ　ハルケギニア

ｓｉｄｅ：魔法（エレメント）の体現者（マスター）

あ、皆様初めまして。え？　あ、御久し振りの方もいらっしゃるんですか？

って、ボク達が誰か判ります？　……そうです。僕達の主こと八神カイト様の従者。

あのドラゴン達です。総称を魔法（エレメント）の体現者（マスター）と言います。主共々、宜しく御願いします。

あ、因みに基本的に地の文（ナレーター）は、ライトことボクと、ダークこと僕が担当してます。

え？　ボク達が今、何をしているかですか？

説明してもいいんですが、そうすると僕達だけしか喋れないんで、敢えて何も言いません。

ですから、ボク達や、僕達の会話を聞いて下さい。お願いします。

何か、みんなも色々喋りたいみたいなんで、聞いてあげて下さい。

あ、後、多分、誰が誰か判り難いと思うんで、今回だけは台詞の前に名前を書くそうです。

何の事かボク達や、僕達には解りませんが、そういう事らしいです。

読み難かったらゴメンナサイ。あ、それじゃ、どうぞ。

（※以下の［］は全て龍達の会話です。が、カイトと五行以外の皆には、

ギャアギャア言っているだけにしか聞こえません……悪しからず。）

水（アクア）［はぅ～……今日も水薙様は御綺麗だわ～？？？］

氷龍（ひょうりゅう）［全くですね、アクア様。］

地面（ランド）［ま～た始まったよ、アクア達の水薙様自慢。］

水［何よ……何か文句ある？］

地龍（ちりゅう）［いえ、文句などはありませんが……。］

風（ウインド）［おいおい、地龍よ。それじゃ、文句があると言っている様なものだぞ？］

嵐龍（らんりゅう）［そうだぜ、地の。］

雷（ライトニング）［……余り、そう揶揄ってやるな。］

雷龍（らいりゅう）［そうです、皆様。何も本意で嫌がっている訳では無いのですから。］

焔（フレイム）［お！　何だ何だ！　喧嘩か？　なら、俺も交ぜろよ、お前等！！］

焔龍（えんりゅう）［火事だ！　喧嘩だ！　俺達の領分だぜ、ヒャッハーッ！！！］

水［もう、一々喧嘩吹っ掛けて来るんじゃ無いわよ、この脳筋達！！］

光（ライト）［まぁまぁ、みんな落ち着いてよ。］

闇（ダーク）［そうだよ。喧嘩はやめようよ。］

光龍（こうりゅう）［然り。］

闇龍（あんりゅう）［然り然り。］

今、喋ってたのが、ボク達と僕達。ファースト・イグニッションで、カイト様に喚び出され、

第一形態（アインス）って呼ばれる龍達、１４体です。みんなとっても仲良しなんですよ♪

それで、今話してる内容はですね。

水薙様がこの学院の女子生徒達と御話している御姿を見た、ボク達と僕達の感想です。

アクア達は、ボク達や僕達の中でも特に水薙様が大好きなんです。

実はボク達や僕達にも好みってあるんですよ？　御存知でした？

例えば、ランド達ならカイト様が大好きで、全員集合すると必ずカイト様に突撃するんです。

他にも、フレイム達は紅蓮様。ウインド達は龍斗様。ライトニング達は鋼牙様。

そして、ボク達と僕達は、黄宇様が大好きなんです。ああ……凛々しく御美しい……ハッ！

ご、ごほんっ！／／／　そ、そんな訳でして。

良くボク達や僕達の間で、そういう口喧嘩が多く勃発するんです。

でも、結局皆様、御美しく、格好良いと言う結論で終わるんですけどね♪

雷撃（サンダー）［何だ何だ、お前等またそんな事で口喧嘩してんのか。］

麻痺（エレキ）［本当に懲りないよねぇ。また痺れさせて強制的に終わらせちゃおっか？］

電光（ボルト）［おいおい、今度は俺にやらせろよ。いつもお前ばっかじゃねぇか！］

嵐（ストーム）［何を阿呆な事を言っている、ボルト。］

台風（ハリケーン）［そうだそうだ。お前がやっちまったら、痺れるだけじゃ済まねぇだろうが。］

竜巻（サイクロン）［そういう事だ。もう少し、手加減というものを学習してから言うんだな。］

電光［ああん？！　おい、隙間風ども！　テメェラ、俺に喧嘩売ってんのか、おお！！？］

輝光（ライト）［全くもう……もう少し落ち着きなよ、ボルト。］

閃光（フラッシュ）［そうそう。それじゃ、いつもの通り、元の木阿弥だぜ？］

発光（ブライト）［……そうだ。もう少し節度と冷静さを持って欲しい。］

暗黒（ダーク）［そうダーそうダー。］

影（シャドー）［シャッシャッシャッ！　それでも、我等が主の御供シャ？］

死（デス）［……そうデス。……もっと自覚を持って欲しいデス。］

電光［……チッ。分かったよ……相変わらず、五月蠅ぇ奴等だな。］

鉱石（ジュエル）［あははは……ボルトも、ライダー達に掛かっちゃ形無しだね♪］

（※ライダー＝ライト&ダークの略称。区別の為、主にセブンス達六体の総称に使われる。）

岩（ロック）［全くでごわす。尤も、雷には抑も形は無いでごわすがな。］

砂（サンド）［アッハッハッハッハッハ……！　やっぱロックは上手いな！　座布団あげる！］

火炎（ファイヤー）［チッ！　なんでぇなんでぇ！
　折角喧嘩が始まるかと思って、楽しみにしてたのによお！！！！！］

燃焼（バーニング）［全くだぜ！　全くテメェラは、本当に燃えねぇなぁ！］

火山（ボルケーノ）［……矢張り、未だ鳴動せず……か。仕方あるまいて。］

雨（レイン）［大体、なんでこんな話になってんのよぅ。］

氷（アイス）［そうじゃ。そも、妾達の姫たる水薙様の美しき御姿の御話であったじゃろうが。］

雪（スノー）［そうだよ♪　みんな、本題から離れ過ぎ♪　でも、そんな所も面白いけど♪♪♪］

そう口々に言って、ワラワラと出て来たのが、セブンス・イグニッションで、

カイト様に喚び出され、七色形態（セブンス）って呼ばれてる、龍達２１体です。

一応、格って言うか強さとしては、僕達よりも上なんですけど、

本人達がこんな調子なんで、ボク達も殆どその儘の口調で喋ってます♪

あ、いけない。何かあっちで紅蓮様が何かやらかしてしまったみたいです。

ちょっと、今からみんなで見に行きましょう。

「……あっちゃぁ～……こいつはマジで拙ったなぁ。」

焔［紅蓮様、紅蓮様。また何かやらかしたんですか？］

「ん？　おお、フレイム達か。

いやなぁ……またちっとばかし遣り過ぎちまったみたいなんでな。

今、龍斗の奴と鋼牙を探してるとこなんだよ。お前等、何処にいるか知らねぇか？」

やっぱり、また紅蓮様は何かやらかしたらしい。本当に懲りない御方だよね。

でも、そんな所がまた格好良くてフレイム達はいいんだって。ボクや僕には解んないや。

それで、紅蓮様から御質問を頂いて、今ボク達や僕達が何だかんだと話してるんだけど、

中々、答えみたいなのが出て来ないんだ。

でも、紅蓮様ってこういう時、絶対に急かさないで、

じっとボク達や僕達の答えが出る迄、待って居て下さるんだ。

とても普段の御姿からは想像も付かないんだけどね。

やっぱ、そこは四神様としての貫禄だよね。紅蓮様は、一番誤解され易過ぎだと思うんだ。

それで、ボク達や僕達が物凄く困ってたら、あの方達が来て、助けてくれたんだ。

太陽（サン）［おや、紅蓮様。それに、第一形態に七色形態もいるのか。］

陰月（ルナ）［一体、どうなされたので？　先程の爆発音と何か関係でもありそうですが。］

「ん？　おお、第二形態達か。いや、実はな……って訳

なんだよ。」

雷迅（プラズマ）［ははぁ……成る程。つまり、またやらかした訳ですな？］

「……うっせぇよ。それよりもお前達、アイツラどっかで見なかったか？

それか、何処かアイツラが行きそうな、居そうな場所に心当たりは無ぇか？」

そう、そうなのです。今、話し掛けて下さったのが、セカンド・イグニッションで、

カイト様に喚び出され、第二形態（ツヴァイス）と呼ばれていらっしゃる、七体の龍達です。

その第二形態様達が、御珍しく全員揃って来られたのです。

そして、紅蓮様の御言葉に暫し黙考なさり、徐に顔を上げられて御答えになりました。

大地（ガイア）［恐らくですが、龍斗様でしたら、森にいらっしゃるのでは無

いかと。」

空気（エアー）［最近は特に、森でシルフィードと語らう姿を御見掛けすると聞いて居ります。」

氷潔（フリーズ）［鋼牙様でしたら、恐らく中庭辺りにいらっしゃるかと思われますわ。」

焔熱（メルト）［相も変わらず、女生徒達にチヤホヤされていらっしゃるそうで。ほぼ間違い無いかと。」

「おお、そうか！　成る程な……助かったぜ、お前達！！　んじゃな！」

焔熱［おやおや。相変わらず、即断即決の御方だな。行動が素早い。」

氷潔［ま、その分、多少猪突猛進の嫌いがあるけどね。」

焔熱［フリーズよ。貴様、紅蓮様を愚弄するか？」

大地［そうすぐに熱（いき）り立つな、メルト。
　フリーズとて、その様な意図で言った訳では無い事は明々白々であろう？」

焔熱［……チッ。その様な事、言われずとも解っている。少し揶揄

ただけだ。」

雷迅「……全く、相変わらず素直じゃ無いな、お前は。」

焔熱「……フン、勝手にほざいていろ。」

光「あの……所で、第二形態様。
どうして、第二形態様方が、この様な所に一緒に居られたのですか？」

闇「そうです。大変御珍しいと思われますが。」

光龍「然り。」

闇龍「然り然り。」

太陽「ん？　なぁに、ちょっとした日光浴をしていたのさ。
それが偶々、みんなのタイミングが一致したと言うだけの話さ。」

陰月「本当にな。第一形態達の言葉じゃ無いが、珍しい事もあるもんだ。」

水「あら、そうでしたの。それは、本当に御珍しい現象ですわね。」

氷潔「ま、ね。それよりも、紅蓮様の後、追って行かない？　何か面白そう♪」

水［あら、いいですわね。私もそう思って居りましたの♪］

大地［……全く、皆して暇龍（ひまじん）と言うか、好奇心旺盛とでも言うか。……仕方ない。

では、行くぞ。皆、遅れず逸（はぐ）れずについて来いよ。］

第一形態・七色形態・第二形態［［［おーーーーっっっ！！！！］］］

で、事の展開などは、紅蓮様達の御話を聞いて頂ければ御判りになると思いますので、

ボク達や僕達からは、敢えて何も言いません。御自分の目で確かめて見て下さい。

結局、紅蓮様はカイト様に怒られてしまい、黄宇様達に呆れられてしまいました。

あ、でもボク達や僕達はとっても楽しめましたから、いいですよね♪

では、皆さん。今迄、御付き合い下さり有難う御座いました。

ボク達や僕達とは、これで一旦御別れです。それでは、又、何処かで再会出来る事を信じて。

皇帝（カイザー）［む？　我の紹介は無し……か。まぁ、よい。これで、連続投稿も終いじゃ。

今迄、長々と付き合わせてしまって、済まなかったのう。

主殿から宜しく言ってくれと頼まれておるのじゃ。

で、どうじゃった？　少しは楽しんで貰えたかのう？

それならば、我等も主等に話した甲斐があったと言うものじゃ。

む？　我の紹介はしないのかじゃと？　必要無かろうて。

己が手と眼で調べるが良い。

我とて、出番が増えるのは嬉しい限りじゃが、それとこれとは別じゃからのう。

ではな、皆の衆よ。又、何処かの地で、相見えようぞ。」

番外・従者達の日常～魔法の体現者（エレメント・マスター）編～ ｉｎ ハルケギニア

如何でしたでしょうか？

ぶっちゃけ、ちゃんとキャラ付け出来ているのが大体、十体程度。

私の脳内では、同じ口調でもしっかりキャラ分けが出来ているのですが、

それが表現出来無いのが、私の今の文章能力の限界と諦めましたｏｒｚ

普段、グギャァとか、ゴガァとか言ってるのも実は、

カイト達には言葉としてちゃんと聞こえていたのです。ΩΩΩ＜な、なんだってー！

そして、概算ですが後五話程で、この『ゼロの使い魔』の世界も終わります。

どうか、もう少しの間、ゼロ魔の世界に御付き合い下さい。

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

カイトとエルフと後始末（前書き）

現時刻（０３：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，１４０，３２９アクセス　ユニーク：１７９，１４５人
皆様、何時も有難う御座います。

御待たせ致しました。ようやっと解決編～前編～とでも言いましょうか。

では、今話も拙作を御覧下さい。

カイトとエルフと後始末

ｓｉｄｅ：大聖堂　ｉｎ　ロマリア

あの地球見学関係の一連の騒動から、更に数日後。

このロマリアの大聖堂に、何時ぞやの人達が集まっていた。

才人・ルイズ・ティファニア・キュルケ・ギーシュ・コルベール・ウェールズ夫婦

・タバサ始めガリア王族・シェフィールド・ヴィットーリオ・ジュリオ　の計１６人である。

そして、開口一番、ヴィットーリオが困った顔でカイトに、集まった訳を尋ねた。

「それで、一体何の御用ですか？　しかも、又これだけの人を集めるなどと……。

それに、何故にここ……大聖堂でなのですか？」

「行き成り質問攻めかい。まぁ、いいけど。

先ず、ここに居るのは、前にジョゼフの件が終わった後に、諸々の説明をした連中だ。

んで、ここにしたのは、お前が基本的にここから動けないからだろうが、ヴィットーリオ。」

「む？　だが、救世主（メシア）よ。以前、アルビオンと戦をした際、教皇は来たではないか。」

「ああ、あれは俺が命令したからだ。その方が色々と楽だったんでな……俺が。」

「……そ、そうでしたね；　それで、救世主（メシア）よ。結局、何の御用なのですか？」

「ああ、それはな……この前の話の続きだ。」

“続き？”

「そうだ。言っとくがな、未だ俺の話は終わっちゃいねぇからな？

一度に全部話しちゃ、流石に混乱するだろうと思って、

敢えて、必要な優先度の高い順から話しただけだからな。

まだまだ、話してない事は幾つもある。それをこれから話す。今日の事由は理解したか？」

と、言う訳である。因みに、流石に水精霊騎士隊(オンディーヌ)全員は多過ぎると言う事で、

代表してギーシュが聞いて来、後で皆にそれを話すと言う、以前説明した時と同じパターンになっている。

そして、カイトの改めての長話が、又、始まった。

「先ずそうだな……あ、そうだ。おい、イザベラ。」

「え？　な、何？」

「お前の配下に、汚れ仕事でも何でも引き受ける奴等いただろ？確か……『元素の兄弟』。」

「え、ええ。確かにいたけど……でも、この戦争が終わると同時に

雲隠れしてしまったわ。

今、どこにいるか、私にも行方が解らないの。」

「ああ、だろうな。……おい、地下水、聞いてるんだろ？　お前は何か知ってるか？」

カイトが、そう扉の向こうに居る誰かに声を掛けた。

すると、その扉をガチャリと開けてその誰かが入って来た……のだが。

「……ミケラ？　一体どうしましたか？」

「……いえ、存じません。」

「……ミケラ？」

「ああ、そいつは今、地下水って奴に身体と意識を乗っ取られてるんだよ。」

“……ええっ？！”

「お前等だけに教えてやるがな。そいつの腰に差してる短剣あるだろ？　そいつが地下水だ。

インテリジェンスソード。その能力は今言った通り、触れた者の意識と身体を操る事。

今迄、一応そいつにシャルの母の身を守る様に、俺が指示してたんだ。

で、地下水。改めて聞くが、本当に特に何も情報は掴んでないのか？」

「はい、間違い無く。彼等は、私以上のプロ中のプロです。恐らく、私では役者不足かと。」

その事実と正体に皆して驚くも、結局カイトの質問の意図が全く以て見えない。

しかし、一部……ガリア王族やヴィットーリオ達は何かに気付いた様で、

カイトに話の続きを促し、改めて確認してきた。

「それで、救世主（メシア）。その彼等が一体どうしたと言うのです？」

「ああ……実はな。その元素の兄弟に、殺しを頼んだ奴がいてな。その標的が才人と……俺な訳だ。」

“……嘘ッ！？”

「大マジだ。まぁ、才人だけならまだしも、この俺に喧嘩売りやがったんでなぁ。

その阿呆には少ぉぉぉぉぉし痛い目に遭って貰うけどな♪」

「……ち、因みに、その依頼人は誰か判っているのですか？」

「勿論。他ならぬ、お前の国の住人だよ……誰か判るか？　トリステイン国王代理夫妻よ。」

「……済まない、僕には誰かさっぱり。」

「……それは、私達も知っている者なのですか？」

「そりゃ知ってるだろうさ。

何せ、トリステイン王立魔法研究所（アカデミー）の評議会議長のゴンドランだからな。

因みに、ルイズ。お前の姉、エレオノールの上司でもある。」

「な、何ですって!?　そ、そんな奴がエレオノール姉様の?!」

「……そんなバカな。な、何か証拠は？　彼がそうだと証明出来るものは?」

「あ?　俺が言ってるんだ。それが何よりの証拠であり、証明だ。

それとも何か?　お前達は俺が嘘を付いているとでも?　間違っているとでも言うつもりか?」

「……いえ。しかし……まさか、あの気弱そうな方が……未だ、信じられない。」

「何、お前等は気にする必要は全く無いさ。あいつらは、俺がキッチリ始末しておくから。

あ、今の内から、早く後釜を決めておけよ。後、一月もしたらいなくなるから。

此の世から、物理的に。」

「「……わ、分かりました……。」」

何とも波乱の幕開けだった、カイトが話し始めた最初の話。

次の話では、一体どれ程の事が待ち受けているのか。

早くも戦々恐々とし、もう既に何人か嫌気が差して来た面々であった。

「んじゃ、今の話は終わって……次。

ジョゼットが居たセント・マルガリタ修道院だが……其の後、どうなっている？」

「……そうですね。彼女の事を契機に、次々と修道女として暮らして居た者達が、

家族の許へと帰って行っていますよ。それがどうしましたか？」

「ふむ……それは、希望した者だけか？　強制的に全員連れ去っている訳では無いな？」

「ええ、違いますよ。勿論、残りたいと言った者には、その儘そこに残って貰いました。」

「……ならばいいか。所で、ヴィットーリオ。

貴様、ここロマリアの貧民街の様子は知っているか？」

「……はい、存じております。……それと、修道院と何の関わ

りが？」

「つまりだ。飽く迄、俺の考えだが……、

貧民街の子女を修道院に放り込んで、教養と飯を与えて仕事が出来る様にさせたらどうだ？

最悪何も無かったとしても、教会の雑用ぐらいは出来るだろう？

それならば、親に金を送る事が出来る。その間の最低限の生活の保障もしてやれ。

そういう事をすれば、益々威光は高まるだろうさ。」

「……成る程。ですが、それを出来るだけの資金がありません。

何せ、この聖戦で使う食糧などを大量に購入しましたから……

…真逆！？」

「御名答。その食いモン、少しは分けてやれ。何も、金だけが全てじゃない。

抑（そもそ）も一番必要な金は、飯代なんだからな。その手間を省けばいいだろ？」

「何を莫迦な事を……貴方は、聖戦など必要ないと……そう仰るつもりですか？

それこそ御話になりませんね。……もう、結構。

貴方は政治に口を挟んではいけない事は良く分かりました。それだけで充分ですね。」

「そ、そうだよカイト。確かに、それが出来ればいいとは俺も思うけどさ。

でも、現実として、これから戦争とかしなきゃいけないんだしさ。

その爲の費用とか、今使っちゃったら……。

下手したらハルケギニアそのものが失くなっちゃうかもしれないんだろ？

……その貧民街の人達には悪いと思うけど、流石にそれは拙いんじゃないのかな？」

「……アンタも、そういう事は考えられるのね。」

「……お前も相変わらず酷いな。」

ヴィットーリオの言葉もあり、才人の後押し（漫才含む）もあり、皆してその言葉に頷いた。

だが、それを見たカイトは盛大に溜息を付いて、白地（あからさま）に莫迦にした様な視線を皆に向けた。

「……ハァ。『何を莫迦な事を言っている？』はこっちの台詞だ、バカモノ共が。」

“……は？”

「……あのな、テメェラ。この俺を誰だと思っていやがる？　曲り形（なり）にも救世主だぞ？

極端な話だ。今直ぐにでも、この世界中にいる全ての生物に、一生喰い切れない食い物と、

一生使っても使い切れない金と、全ての存在する病気の完全治癒と、一生健康な身体と、

その他諸々、皆が望む物を何から何迄、その全てを俺は与える事が出来る。

エルフを全て此岸から消滅させる事も出来るし、お前達人間も同様に消せる。

俺はそういう存在なんだよ。だが、それじゃ何の意味も無ぇ。

俺は飽く迄も救世主。万能願望製造器じゃ無ぇ。

故に、貴様等自身に世界を救わせなきゃいけねぇんだよ。

ぶっちゃけな。諸々メンドイから俺が全部やっちまった方が、遙かに早ぇんだよ。

一日も掛からず全ての問題が解決出来っから。

でも、それは出来無ぇし、しちゃいけねぇんだよ。

だから、俺は絶対に無理な事は言えねぇし、酷過ぎる無茶も言えねぇんだよ。

つ・ま・り・だ。俺がやれ乃至(ないし)はやれると言った事や、提案した事ってーのはな。

頑張れば必ず出来る事か、俺がそれを出来る様に少しは協力してやるって意味なんだよ。

少しは理解したか？　……ったく……あ～……喋り疲れた。

龍斗、御茶ッ！」

「はい、カイト様……どうぞ。」

「ん……ズズッ……っあ～っっ……美味い。」

“……

…:::::;;;;;”

カイトのその何時にない吐き出すかの様なべしゃくりに、内容共々思わず圧倒される面々。

またまた何時の間にか居た龍斗から、湯気が立ち上っている熱い御茶を美味そうに啜(すす)るカイト。

その幸せそうな一息が終わると、またもや溜息を付いて話し始めた。

「んでだ。修道院と貧民街の方は、とにかく何とかしろ。

折角あるんだから、何かに有効利用しろよな。費用の方も問題無い。

聖戦用に取っておいた奴、使え。それ、もう必要無いから。

この前ん時な。ビダーシャルの奴と色々話をしてだな。

俺が直接エルフ共に命令しに行く事になった。聖地にある魔法装置だっけか？

それを壊すから、テメェラも人間に少しは協力しやがれってな。」

「……そんな……そんな事しては、このハルケギニアの大地が…！！！

それにエルフの協力など……！！　出来る訳無いでしょう！！！！」

思わず立ち上がったヴィットーリオ。その無体な言葉に激昂するのも、充分に解る。

幾らなんでも、それは無理だろうと。その言葉を聞いた誰もが、驚愕した。

カイトはハルケギニアを救う気が無いのかと。前（さき）の言葉は嘘なのかと。

だが、カイトはそんな皆の気持ちをあっさり一蹴して、話の続きを始めた。

「話は最後迄聞け、バカタレめ。抑（そもそ）も魔法装置なんざ必要無ぇんだよ、俺達がいるんだから。」

“……は？”

「……あのなぁ。だからな？　俺達が地下の風石、全部取り除いてやるって言ってんだよ。」

“……本当（マジ）ですか？”

「当たり前だ。言わなかったか？　俺はな、未来の事については嘘は付けねぇんだよ。

言った以上は必ずやらなきゃいけねぇし、そうなる様にしなきゃいけねぇんだよ。

まぁ、そう言う訳でな。俺はこの後すぐ、エルフの所に行って来る。

ネフテスの奴が先に行って、今か今かと待ってるいやがるからな。

多分、一週間前後は掛かるだろうから、それまでに貧民街と修道院、考えておけよ。

風石を取り除くのは、その後だ。その際には、エルフの奴等も何人か見学させてやるからな。

少しぐらい、心構え程度はしておけよ。心臓が止まらないぐらいにはな。」

カイトは、相変わらず一方的にそう言って、さっさと姿を消して言ってしまった。

一方、唐突に飛んでもない事を言われた才人達は何が何やら、混乱した儘でその日を終えてしまったが、何とか翌日にはその皆の混乱も或る程度収まり、

改めてカイトから言われた事を整理し直す面々なのであった。

side：砂漠（サハラ）

エルフ。人間を蛮族と呼び、憎み蔑（さげす）んで憚（はばか）らない種族の住み暮らす地。

その国の内の一つ。名をネフテス。その入口と呼べる所にカイトは居た。

そして、その眼前には眉間に皺（しわ）を露（あら）わにしているビダーシャルと、数百人程の屈強なエルフの兵隊であろう者達が、戦闘の構えを各々執（と）っていた。

「……おい、ビダーシャル。これは一体どういうつもりだ？」

「……済まぬ、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。

我もネフテスの一人。評議会（カウンシル）の決定には逆らえぬのだ。」

「……ハァ……おい、ビダーシャル。俺は言ったよなぁ？

そういう自己保身のみに感（かま）ける老害共を残らず駆逐する為に、俺に協力しろと。

然（さ）も無ければ、エルフに未来など無いと。俺は、確かにお前にそう言ったな？」

「……ああ、間違い無い。私もそれに同意した。」

「……それがこの結果か、戯けが。では、もう一度聞こう。

貴様は、エルフの未来を取るのか。それとも、今の貴様の地位に獅噛(しが)み付くのか。どっちだ？」

「……私は……。」

儘にならない自分が悔しいのか、ビダーシャルは唇を強く噛み、その唇から血が流れ出ていた。

そして、カイトはそんな葛藤しているビダーシャルに一切声を掛けず、

只、じっとその場に立ち尽くし、彼(ビダーシャル)の答えを待っていた。

……だが、残念な事に、その場にはカイトとビダーシャル以外にも居たのだ。

「……っクッ！　黙って聞いておれば、蛮人風情がッ！！　いつまで図に乗っている！！！」

「その通りだ。ビダーシャル様もビダーシャル様ですぞ。

あの様なひ弱な蛮人風情に、何を良い様に言われていらっしゃるのです！

フン！　何が『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』だ、蛮人如きが巫山戯（ふざけ）おって！

行くぞ皆の者！！　あの蛮人を生贄として、我等の狼煙を上げるのだ！！！」

“おおおおーーーーーーーーーーッッッッ！！！！！！！！！！！！！！”

「なっ…！！？　や、やめろ！　やめるのだ、皆！　無駄死にするつもりかッッ！！！」

鬨（とき）の声を上げて、カイトに掛かるエルフ達。と言っても、エルフは直に攻撃するのでは無く、

各々契約した精霊達に命じて、攻撃させるのだが。だが、そんなものがカイトに通じる筈も無く。

「おい、ビダーシャル。これは一体、本当にどういう事だ？

貴様……真逆、俺の事を何も言わなかった訳ではあるまいな？

事と次第によっては、今此の場で有無を言わさずに、貴様（エルフ）等を殲滅するぞ？」

「ま、待て！　頼む、待ってくれ！！」

「ッッッ！？　なっ……い、何時の間に、後ろに……？！」

何時の間にか、門前に居たビダーシャルの真後ろに居たカイトに驚くエルフ達。

だが、そんなエルフ達を一顧だにする事無く、カイトは怒気と共にビダーシャルを問い詰めた。

そのプレッシャーに冷や汗を大量に流しながら、ビダーシャルは慌てて収めようとしている。

その普段に無い異常な光景に、思わず二の足を踏むエルフ達。

そのエルフ達をビダーシャルの側から、丸で下等生物を見るかの如く睥睨（へいげい）するカイトに、

更に激昂するエルフ達とは対称的に、冷や汗を弥増（いやま）すビダーシャル。

だが、そんな状態もカイトの思い付きの様な一言で、俄（にわか）に変じた。

「あ、そうだ。おい、ビダーシャル。」

「な、何だ……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』。その笑顔は、逆に不気味なのだが。」

「お前に最後のチャンスを与えてやる、有り難く思えよ？」

「……最後のチャンス……だと……？」

そうビダーシャルが言うと、カイトは丸で大悪魔すら心底から命乞いをするかの様な、

極悪な笑みを浮かべると、ビダーシャルに正に悪魔の様な選択を強（し）いた。

「そうだ。次の内の二つからお前が選べ。

一つ。そこのエルフ共を犠牲にする代わりに、エルフの存続を望むか。

二つ。そこのエルフ共を庇って、貴様諸共エルフ族全てが消滅す

るか……今直ぐ決めろ。」

「なん……だと……！？」

「何れにしろ、こいつらが生き残る術は無い。

貴様が、俺の事を間違い無く言ったと言うのならば、

その忠告を無視してでも、この俺と敵対したのだろう？

……ならば、その時点で既に死亡確定（ゲームオーバー）だ。

さて、では改めて聞こうか？　エルフの存続を願うや否や。……即断即決でな。

もしも、貴様が躊躇（ためら）って答えが出ない場合、俺が即座に誘（いざな）う事になる……滅びの道へとな。」

「クッ……おのれ、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』め……！！」

「クックック……その怨嗟の声も慣れれば心地良いものだな。

それで？　貴様が答えぬと言う事は……エルフは滅びの道を歩むと……それでいいのだな？」

「クッ……クゥッ……済まぬ、皆の者。私は、エルフ

の存続を……願う。」

「なっ!?　び、ビダーシャル様?!　わ、我々を裏切る御積もりですかッッ!!?」

「……済まぬ。……エルフの未来の爲だ、その礎となってくれ……。」

そのビダーシャルの言葉に、エルフ達の誰もが信じられないと……裏切られたと言う気持ちで、

彼を見詰め……そして、側にいるカイトには、此の上無い程の激しい憎悪の目で睨み付けた。

だが、その視線などまるで微風（そよかぜ）の如く、カイトは気にもせず。

「……良かろう、では消え失せろ。

魔力解放　　魔力拡散　　魔力固定

爆発（バースト）」

突然、カイトの周りに数百とも数千とも付かない数の大小様々な灰色の球体が浮き出して来た。

すると、カイトが宣言した瞬間にその球体達が、件の構えているエルフ達に向かい突撃し、

身体のどこか一部に触れた瞬間に、そのエルフ達を一呑みで覆ってしまった。

阿鼻叫喚などと言う生易しいものでは無い。

存在も尊厳も何も無く、本の一瞬で魂ごと命を……その存在そのものを奪い去って行く。

恐怖以外感じられない灰色の球体。……真に恐るべきは球体そのものよりも、

その光景を見ても尚、平然としてるカイトの方では無いだろうか。

そう思わざるを得なかったビダーシャルは只、呆然とその様を見てるだけしか出来無かった。

その数瞬とも数時間とも思われた命への冒涜は、その実、僅か数十秒で終わって居り、

其の後カイトは、声を掛けられてようやっと正気に戻ったビダーシャルと共に、

評議会（カウンシル）の連中が集まっている会議場へ、直接転移した。

ｓｉｄｅ：評議会（カウンシル）議場

其処に唐突に転移して来た存在に、評議会（カウンシル）の老人共は飛び上がらんばかりに驚いた。

何故なら、ここには自分達以外許可を与えない限り、

誰も入れない様に自分達と契約した精霊達が守っていたからだ。

だと言うのに、何の支障も無く自然と、しかも何の物音もさせず入って来た闖入者に、

驚かざるを得ずにはいられなかったのである。……だが、それも束の間。

すぐに、何とか自意識を戻して、その謎の存在を詰問した。……傍らのビダーシャルに。

「……!?　なっ……?!　……ビダーシャルよ。その者は一体何者だ?」

「……彼は……彼が『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』です。」

「な、何ィッ!?　こ、こいつが……あの『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……否!!

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だと言うのか……!!!　ええい、兵共は何をしておった!!

入り口にて、こやつを待ち伏せて始末しろと言ったであろうが!!!」

「ああ、そいつらなら、たった今俺が殺して来たよ。」

「……何……だと……?!　そ、そんなバカな!

あの者共は、我がエルフの中でも屈強な者共ばかりを集めたのだぞ？！」

「は？　……おいおい、あの程度でかよ。エルフも高が知れてるな……失望したよ。」

「き、貴様……！　我等を愚弄するか！！！」

この儘では埒が明かないと思ったのか、その評議会（カウンシル）の連中の中で、ど真ん中にどっかと座って居た老人が皆を制止して、カイトに厳かに尋ねた。

「まぁ待て皆。先ずは、こやつに話を聞いてからでも遅くはあるまい。

ここは我等の領域内。我等が城。我等の家じゃ。その気になればどうとでもなる。

……して、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』よ。一体何用あって、この地に再び舞い戻った？」

「とある要求があって来た。一応、コイツ(ビターシャル)に言付けを先にして貰ったんだが？」

「ふむ……確かに聞いたとは思うが、双方に齟齬(そご)があっては困るであろう。

もう一度、其方の口から言っては貰えぬかな？」

「おいおい、それじゃ先にこいつをやった意味が無ぇだろうが。……まぁ、いっか。

要求は次の二つ。一つ。シャイターンの門の破壊。これは俺がやる。

二つ。エルフと人間の間で同盟乃至(ないし)は協力態勢を調える事。

双方却下した場合は、問答無用で俺が一人で決める。以上だ……改めて理解したか？」

そのカイトの言葉一つ一つに、逐一反応し激昂する評議会(カウンシル)の面々。

その言葉が終わると、話を聞いていた唯一の老エルフは、深く頷くとカイトに宣言した。

「ふむ……其方の要求は分かった。だが、それを受け容れる事は出来ん。

例え人間が滅びようとも、我等には一切関わりない事。

ましてや悪魔（シャイターン）が再臨している現況では、猶（なお）の事聞けぬ相談だ。」

「……だろうな。だから、態々俺が出向いた訳だ。

今の要求が呑めぬ場合、エルフは俺の命令・指示に全て従って貰う。

それもビダーシャルから聞いているだろう？」

「……貴様！　黙って聞いておれば図に乗りおって！！！」

「……お前等って同じ事しか言えないの？

さっきの奴等と全く同じ事言われるこっちの気分にもなってみ？」

「おのれ……何処迄も我等を舐めおって！　もう我慢がならぬ！！

精霊よ！　彼の者を捕らえよ！！！」

そう一人の老エルフが叫ぶと、全員で自身が契約した精霊に対し言霊を唱え出した。

すると、壁やら床やらが変化し、グニョグニョと触手の様になってカイトの手足を縛り付けた。

その様を見て、カイトを蔑みの目で見下し始める評議会の面々。

そして、それを非常にハラハラした表情で見守るビダーシャル。

彼のその様子に怪訝な気はしたものの、

現状を鑑みるに覆されはしないだろうと思ったのだろう。

カイトに対し、勝ち誇った様に死刑宣告を言い放った。

……それが、自分達の遺言になるとも知らずに。

「ふ……フハハハハ……！！　どうだ、見てみろ！！！

蛮人風情が何時迄も図に乗っているからだ！！！　ハッハッハッハッハ……！！」

「所詮は蛮族よな。我等と精霊との契約の前には手も足も出んとはの。」

「フン！　何が『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だ。

先人達は只の臆病者であった事がこれで証明出来た訳だ。」

「ビダーシャルよ。貴様が起こしたこの事の責任……後でしっかり取って貰うぞ？」

「……これこれ、皆の者。余りそう燥（はしゃ）ぐでない。

その様な節度の無さでは蛮人と見做（みな）されてしまうぞ。」

「おっと、これは失礼した。

折角、蛮人の手本が目の前にいるのだ。有り難く、反面教師にしなくてはな。」

そう口々に笑い合い、散々にカイト（達）を罵っている評議会（エルフ）の面々。

それを少しの間眺めたカイトが、徐（おもむろ）にビダーシャルに向けて言葉を掛けた。

……人はそれを死刑宣告と言うらしい。そう、後にビダーシャルは学ぶのであった。

「ビダーシャルよ。貴様が守りたかったのは、こんな下衆（ゲス）な連中なのか？

これが、最後の審判だ。……どうする？」

「……済まぬ。『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……否。『宇宙（そら）の救世主（メシア）』よ。エルフを……我等を救ってくれ。この儘ではいかぬ……！」

「……了解した。救世主（メシア）としてエルフを……お前達も救ってやろう。」

「……貴様達、一体何を言っている？　己が現状に、到頭気でも触れたか？

ハッハッハッハ……な……なん……だ……と……？」

エルフ達の笑い声が消え、驚きの声と共に静寂がこの場を支配した。

……それも道理だろう。

何故ならば、今迄カイトを捕らえていた触手擬(もど)きが全て、まるで自らの意志で動いたかの様に、

勝手に解(ほど)けていったのだから。無論、自分達(エルフ)が命じた筈も無く。

その様子に、カイトは呆れて溜息を深く付き、訳が解っていないエルフ達に説明した。

絶望の二文字と共に……真の強者の存在を。

「あのな。高が精霊程度でこの俺をどうにか出来ると、真逆本気で思ってたのか？

言っとくけどな。精霊どころか、この大地も、海も、空も、星そのものも。

この星を、世界を作った神々、その神々を作った創世神ですら、俺の前には跪(ひざまず)くんだ。

分かるか？　俺は、神々を足蹴に出来る存在であり、

星や世界の一つ程度はな、只の指パッチンでも消滅させられるんだよ。」

「な、な、何を……そ、そんな事が……そんな巫山戯た事があって堪るか！！！！！

ええい、精霊よ！　もう一度だ！　もう一度あやつを捕らえよ！！！」

しかし、全く何の反応も無い。他の者も幾度も呼び掛けるが、一向に何の変化も起きない。

次第に顔が青褪(あおざ)めていくエルフ達。その様に、再度溜息を付いて語り始めるカイト。

「だから言っただろ？

精霊程度じゃ俺に逆らう事は出来無いし、そもそもこの俺に刃向かうなんて愚かな事を……。

そんな自然の摂理に逆らう事を、自然そのものである精霊がする訳ねぇだろうが。

さっきのはな。俺が自分で態とやってやったんだよ。」

“……。”

全員顔から完全に血の気が失せ、この先に自分達に待ち受ける絶望と、

自分達の思い描いていた、エルフの未来が轟音を上げて崩れていく音を耳元で聞いていた。

その様を見て、今度こそカイトは本当に見下した目で睥睨し、

再度の溜息と共にビダーシャルに振り向き、宣言した。

「……ハァ、本当にダメだこりゃ。おい、ビダーシャル、もうこいつらいいだろ？

後釜はお前が決めろ、いいな。……正直、俺はもうこいつらの顔も見たくもない。」

「……相分かった。私には同胞をこの手に掛ける事は出来無い。済まないが……。」

「分かっている。全ての咎は俺が被るさ。言っただろう？　俺は救世主（メシア）なんだよ。

……と言う訳だ。エルフの未来はお前達が思い描いていた物とは全く違う物になるが……。

まぁ、確実に言える事は、存続は出来るって事だ。良かったな？

じゃあ、理解して貰った所で御別れだ。折角だ……お前達自身の力で死ぬといいさ。

精霊達よ。こいつらの口を塞いで窒息させな。其の後、死体を其処等に放り捨てろ、いいな？」

その瞬間、必死に部屋の中を逃げ惑う評議会の連中に、四方八方から触手が絡み付いて、

口を塞ぎ、手を塞ぎ、足を塞ぎ……完全に魂が消え去ってから、外に放り出された。

其の後、ビダーシャルの手によって、改めて評議会の改革と、

エルフの今後を決める新たな評議会の収集がなされ、

カイトによるハルケギニアとブリミルと虚無の真実の話を条件に、人間と協力する事が決まった。

その決定に、未だに納得が全くいっていないエルフ達も大勢いたが、そこは長年の習慣である、評議会の決定には逆らえないという身に染み付いたものによって、

取り敢えずの暴動は起きずに済みそうであった。

……尤も、一番血気盛んな者達は、前（さき）にカイトの手によって消滅してしまった訳だが。

そして、ビダーシャル達の見ている前で、シャイターンの門はカイトの手によって、

跡形も無く消し飛ばされ……これまでずっと守って来たエルフの役目は、

今此処にその長（なが）の役目を終えたのであった。

――――そして。

エルフ達の混乱も収まり掛けた、凡そ数週間後。

そのエルフ達を引き連れて、ハルケギニアに来たビダーシャルも共に。

ジョゼフとカイトが争った、あの地で。

あの平原にて、カイト達のこの世界に於ける最後の。

そして、最大の大仕事が始まろうとしていた。

カイトとエルフと後始末（後書き）

如何でしたでしょうか？

最近は特に徹夜でもしないと、最後まで書き切れず……ぶっちゃけものっそい眠いＤｅａｔｈ　ｏｒｚ

さて、これでエルフの問題も終わり、諸々残っていた問題も後一つ。風石だけになりました。

……御判り頂けただろうか？　はい、そうです。前回、後数回とか言っていましたが、

計算し直した所、残り二回以内で終わるという結果が出ました！

効果音（バァーン）！

……その程度の計算ぐらいちゃんとしとこうぜ、俺ＯＴＬ

と言う訳で、次回の風石フルボッコ回とその次、最終回のお別れ回のみとなりました。

……あれ？　でも風石の回ってそんなに文字数必要無いし……

あれ？

ひょっとしたら、後一回？　……だ、大丈夫ダヨ；

；；

私の小説を読んで下さってる方々は、何故か妙に優しい方々ばかりだから、

きっと色々と許してくれる筈……ですよね；；；；；；

あ、許すと言えば、一つ皆様に御聞きしたい事が御座いまして。

今回、初めて出ました、カイトに喧嘩売った元素の兄弟なんですが……。

戦うシーンって書いた方がいいんでしょうか？

いえ、ぶっちゃけですね。私、早く次の世界行きたいんです（核爆）

それに、どうせカイトに鎧袖一触されるだけだし、

オマケに長男と長女の戦い方、未だ謎だし。てか、二十巻未だだし。

だから、数行で終わらせちゃってもいいかなぁ？　とかって思ってる訳ですよ、ええ。

ですので、皆様に御聞きしたいんです。……正直に言って読み

たいですか?

もし、書く事になっても、文字数が増えるだけで、話数は間違い無く増えません。

あ、因みに、申し訳有りませんが、今回は多数決と言う事にさせて頂きたいと思います。

感想・メール双方共受け付けて居ります。一見さんも勿論、大大歓迎です。

色々と長々と失礼な事を申しましたが、どうか宜しく御願い致します。

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

救われしハルケギニア（前書き）

現時刻（００：１０）
ＰＶ：１，２５１，７８７アクセス　ユニーク：１８０，０６２人
皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

御待たせ致しました、解決編～後編～です。

あ、因みに元素の兄弟は、厳正なる（？）投票の結果、

必要票０票・不要票４票という結果になりました為、一行で終わりますｗ

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

救われしハルケギニア

ｓｉｄｅ：三人称

カルカソンヌの草原側。其処は以前カイトとジョゼフが戦った、最後の人間同士の争いの場。

その場に、才人達を始めとする人間達と、ビダーシャルを代表とするエルフ達が、

カイトの仲介によって、長年の遺恨は未だ冷めやらずも、奇跡的に一堂に会していた。

既に元素の兄弟もゴンドランもカイトが屠って居り、最早一切の後顧の憂いも無くなっていた。

「さて。では、時間も惜しい。早速風石を取り除く作業を始める。皆、異論や意見は無いな？」

「……然り。」

「……ほら、才人も何か言いなさいよ。エルフなんかに負けないで。

」

「え？　お、俺が？　……え、ええっと……だ、大丈夫だと…思う、うん。」

「……何よ、はっきりしないわね。」

「しょ、しょうがないだろ！　なら、お前が言えよな！」

「わ、私は……いいわよ。」

「何だよ！　ほら、お前だってそうじゃんかよ！」

「う、ウルサイわねっ！　いいのよ、私はッ！！」

と、何時もの喧嘩を始めた才人とルイズ。

そのいつもの光景をやんややんやと囃し立てる水精霊騎士隊（オンディーヌ）と、

その他、国の代表達もあらあらうふふと、その微笑ましい光景を眺めていた。

……一方、エルフ達は。

「……ねぇ、叔父様。人間って、みんなあんなに口喧嘩が多いの？」

「いや、その様な事は無い。我等とて、口五月蠅い者も居るだろう？　それと同じだ。」

「そうなんだ……一応、私達と似てる所はあるのね。」

「似てるだなんて言うなよ、ルクシャナ。それは、僕達エルフに対する侮辱に等しいぞ？」

「あら、アリィー。貴方、叔父様の御言葉をもう忘れちゃったの？」

「忘れてなんかいやしないさ。人間と共存共栄の道を考え探し出せ……だろ？

僕は初めて聞いた時は、到頭ビダーシャル様も気が触れたのだと思ったがな。

――――だがそれ以上に。あの蛮人は、テュリューク統領閣下達を殺した張本人だぞ？」

「しょうがないじゃない。この儘じゃエルフも滅ぶって言われたのでしょう？

改革には犠牲が付き物よ？　そう人間達の本で読んだわ。間違っていないでしょ？」

「……そういう問題じゃない。これは、僕達エルフの誇りの問題だ。」

「……アリィー？　私、貴方のそういう清廉潔白な所は好きだけど、余り頑固過ぎるのは嫌よ。

そういう事ばかり言ってるなら、もう婚約解消するからね。」

「ぬ……ぐ……ハァ。分かった分かった、もう僕の負けでいいよ。」

「ふふ、騎士（ファーリス）の称号を持つアリィーに勝っちゃった♪」

「……全く。君は本当にエルフらしくないエルフだな。」

「あら、有難う♪　それは私にとっては素晴らしい褒め言葉よ♪」

「……全く。」

「……こら、お前達。余り燥（はしゃ）ぐな。救世主（メシア）が集中出来無かろう？」

「はぁ～い。」「……済みません。」

ちゃっかり、こちらも充分に燥(はしゃ)いでいた。

矢張り未だに、人間を蛮人と蔑み歩み寄るつもりの全く無いアリィーの様な者もいたが、

ルクシャナの様に、寧ろ人間に興味津々な変わり者もいる事で、

何とかバランスだけは保っている様だ。後は、ビダーシャルの腕一つという所だろう。

それを改めて認識したカイトは、少々低めの声で、双方に声を掛けた。

「……で、もういいのかな？　いいのかな？」

“……はい。済みません（ゴメンナサイ）。”

「んじゃ、ちゃっちゃとやっちまうぞ～。」

と言う事で、改まってカイト達は一大作業を始め、皆は只、その様を眺めているだけだった。

「よし、先ずは黄宇。地中にある風石の位置と数を、概数で構わないから探ってくれ。」

「畏まりました。」

「次、龍斗。黄宇が或る程度判明させたら、正確な風石の数と位置を頼む。」

「はい、御任せを。」

「次、鋼牙。可能ならば、地中に在る儘で風石と交渉してくれ。消滅させてもいいかどうか。

あ、一人で無理なら、黄宇と龍斗に手伝って貰えよ。」

「は～い♪」

「よし、良い子だ。次、紅蓮。黄宇が風石を探る際や、俺がそれらを除去する際に、

火山や地下のマグマ層が暴れ出さない様に、抑えておいてくれ。」

「ハッ、任せな！　キッチリ、締めておくからよ。」

「ああ、頼んだ。で、最後、水薙。ひょっとしたら、海中や湖中に風石が在る可能性もある。

その際は、波間をコントロールしてくれ。決して津波など起きない様に。

それ以外では、風石を除去する際に、怪我人等が出た場合頼む。」

「了～解♪　御仕事はきっちり熟(こな)さないとね♪」

それぞれに指示を出すカイト。その指示に応え、各々の持ち場に着くカイトの従者達。

その一糸乱れぬ行動と素早さに、思わず感歎の息を漏らす皆であった。

だが、そんな感激の一幕も束の間。何故か、黄宇達の顔が険しくなり出した。

何事かと思っていると、黄宇が代表してカイトの許に戻って来た。

「ん？　どうした、黄宇。何か問題でもあったか？」

「はい。どうやら、我々が思っていた以上に広範囲に、且つ大量の風石が眠っている様です。

主殿。申し訳有りませんが、御許可を。」

「それは構わんが……そんなに難しいか？」

「いえ、この儘でも可能では有りましょうが、事が事です。念には念を入れておきたいと。」

「分かった。ならば、早速解放させよう。お前達もいいな？」

「「「「「はい、我等が主。」」」」」

「では。　五行　神獣形態。」

「「「「「「ハッ！！！」」」」」」

“……なん……だと……！？”

そう。黄宇達がカイトに頼んだ事は、神獣形態への解放許可だった。

どうやら、思っていた以上に多く、又、広大な範囲に在る様で、

人間形態では細かい作業は出来ても、

其処迄広大な範囲は未だカバー出来無いと言う事らしい。

そこで、カイトは五行達を本来の姿……の縮小版にし、より遣り易くしたのであった。

だが、見学していた面々はとても驚いていた。

何人かは白虎や朱雀の姿を見た事のある者は居るものの、

基本的に、殆どの者が初見であった爲、単なる人間だと思っていた者達が、

その実は人間では無かったと言う事に驚きを隠せず、又、その者達から発せられる神気に、

信心深く無い者であろうとも、思わず膝を突き頭を垂れずにはいられなかった。

その様を一瞥し、小さく鼻を鳴らすと、五行達は改めてカイトに一言告げて、

各々喧嘩しぃしぃ、配置に着いた。

「……フン。では、我等が主。我等は己が役目を果たして参ります。

しくじるなよ、白虎。」

「それはこちらの台詞だ、朱雀よ。我等が主に余り心労を患わせるなよ。」

「……貴様、言わせておけば。」

「フン。始めに言い出したのは貴様だろう？」

「止めぬか、戯け共が。我等が主に御迷惑を掛けるなと、前々から散々言っておろうが。」

「……フン、青龍如きに窘められるは業腹だが、今は致し方あるまい。」

「貴様等、さっさと配置に着け。黄龍もそろそろ我慢の限界らしいぞ？」

「……相分かった。直ちに向かうとするか。」

そんな戯(じゃ)れ合いをしながら、各々指定された場所に行き、俄に集中し始めた。

そんな様を見て、カイトは溜息を付きながら皆の作業が終わるのをじっと待っていた。

「……全く、相変わらず仲が良いんだか、悪いんだか。

ん？　……どうやら、分かったみたいだな。どうだ、青龍。」

「はい、我が主。どうやら……の様です。

そして、……と……の辺り、それから……です。」

「……うげ、そんなにあんのか。こいつはちと骨が折れそうだなぁ……まぁ、しゃーねぇか。

で、どうだった白虎。風石は何て言っている？」

「はい……どうやら、彼等は只、力を持て余しているだけの様です。

風の精霊からの許可も得た様で、御好きな様に……と、そう申し上げて居ります。」

「そっか。んじゃ、一切気兼ね無く出来るな。御苦労、三人共。」

「「「ははっ！　有り難き御言葉。」」」

カイトが、三神からそう報告を聞くと更に皆から少し離れ、地面に手を突いて、

更に何事か自身で確認し始めた。それが何十分掛かっただろうか。

何時間にも、何日にも感じられたその間隔が、丸で糸が切れた様にフッと途切れると、

徐にカイトが顔を上げ、空高く居た朱雀と玄武とに、何事かをアイコンタクトで話し合い、

其の後、再度黄龍・青龍・白虎を見、全員で頷き合った。

――――その瞬間だった。

このハルケギニアを、膨大な……余りにも凶大な魔力が覆ったのは。

side：ビダーシャル

「くっ……な、何だ、これは……！？」

「……まさか……そんな……こんな……有り得ない……！！？」

「……グッ……カイト……少しは……手加減……しろ……よ…な……。」

「……クゥッ……バカな……！　い、以前、私と……相見えた…時……よりも…！？

は、遙かに……膨大な……！」

「こ、こんな事……あって…いい……筈が……ぁ……ぁ……！」

「……わ、私達……こ、こんな……バケモノと……敵対してたって……言うの……？」

何が起こったのか、すぐに理解するのは不可能だった。

何故なら、自意識を保つので皆、精一杯だったからだ。

とてもでは無いが、この様な巫山戯た魔力（モノ）を有している者が存在するとは……、

俄に信じ難いが……事実、現に我々の目の前にその存在がいるのだ……信じざるを得まい。

真逆、これ程の……こんなモノに私達は逆らっていたというのか……何と愚かな。

これが絶対的な力というものなのか……。私は今に至って、初めてその意味を思い知った。

救世主（メシア）が、自身のあの従者としている神々と、何事かを確認し合った、その刹那であった。

救世主（メシア）の身体から、物理的な視覚効果を持った、余りにも膨大過ぎる魔力が噴き出して来、

この大地を、空を、海を……否。恐らくは、この世界の全てを覆ったのだろう。

その余波を……影響を、一番近くに居た我々が受け、既に何人も気絶している。

……人間側も、被害は甚大の様だな。流石にこればかりは同情せざるを得ん。

――――こんなモノに耐えられる者など、そうそう居るまい。

そう思っていたのだが……どうやら、その認識も甘かった様だ。

救世主（メシア）の言葉が、その我々の考えを言下に否定していたからだった。

「……こんなモンでいいか。……チッ、極力影響無い様に大分減らした筈だが……。

未だ足りなかったか。これだから、貧弱な魔力しか持たない奴等はメンドくて困る。

……まぁいい。ようやっと、この世界中（ハルケギニア）を俺の魔力で覆えたみたいだしな。

よし、ではやるぞ、五行よ！　この世界、最後の大仕事だ！

救うぞ！！！　この世界も！！！！！」

「「「「「ハッ！　我等が主の仰せの儘に！　我等が主の望みは我等が望み故に！！！」」」」」

そして……私達は見た。

決して忘れる事は出来ぬであろう……あの光景を。

――――感激と言う名の――――――傍沱の涙を流した事を。

ｓｉｄｅ：三人称

カイトは先ず、その場で呪文を詠唱した。

「ファイナル・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　最終形態（カイザー）

我が命に従え　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』　皇帝（カイザー）　神化（アムド）」

白銀金（プラチナ）の鎧を装着したカイトは、手にした剣を地面に突き刺し、精神を集中した。

そのカイトの様が、合図だったのか。五行達も次々と己が役割を果たして行く。

「我、黄龍が命ず。大地よ……己が胎内（うち）に抱きし風精のチカラを、今こそ解き放て！！！」

「我、青龍が命ず。風精のチカラを宿せしモノよ……その姿を我が前に示せ！！！」

「我、白虎が命ず。風石よ……その飽和せしチカラの全てを我に預けよ！！！」

「我、朱雀が命ず。火山よ……地下に蓄えられしマグマよ……！

我が命に随いて、そのチカラを収めよ！！！」

「我、玄武が命ず。荒ぶる波よ……その怒り……その思いを鎮めよ！！！」

その瞬間であった。突然、大地が鳴動したかと思うと、地面が眩(まばゆ)いばかりに光り輝き、

その光と共に、数え切れんばかりの……正に数多の風石が地面を透過して空に舞い上がり、

その世界中の風石が、白虎の許に一箇所に集まり、一塊になって空中に静止した。

一方、そのチカラの余波によって世界中で暴れ出した、火山は全て

噴火する直前で引っ込み、

湖面や海面は荒れ狂うかと思われた直後、穏やかに凪ぎ始めた。

その一連の騒動が、僅か一瞬で収まり……それを見届けた白銀金（プラチナ）の救世主（メシア）は――――。

「我、『真なる救世主（メシア）』が命ず。この世界（ハルケギニア）に蓄えられし数多の風石よ。

本意では無い、己が魔力（チカラ）の暴発……今、我が手にて救おうぞ！

我が命に随え！　選定されし勝利の剣（EXカリバーン）！！！　魔力全解放！！！

カラミティ・エンド！！！　フルクロス！！！！！」

カイトが地面に突き刺していた剣を空高く掲げると、ＥＸカリバーンと呼ばれた剣が、

突然、天高く雲を突き抜ける程に、超長大な剣となり。

その剣を、カイトはその場で、十字に。そして、X字に空中を斬り裂いた。

すると、その斬り裂かれた空間同士が融合し、グルグルと回転し乍ら風石に向かって突撃した。

その異常な回転スピードによって、自身の外側に円を描き出し、

空気ごと空間ごと斬り裂いて進み、風石に当たった瞬間、その斬り込みが口を大きく開け、

数多一塊となっていた風石全てを、一口で丸呑みにしてしまった。

そして天に向かって、まるでゲップをするかの様に、空気を一塊吐き出すと自然に消えていった。

その余波によって生じた魔力の残滓（ざんし）が、陽光に光り輝いて大地に降り注いだ。

まるで、カイトの偉業を讃えるかの様に。救われた大地を祝福するかの様に。

「……ふぅ、解放（パージ）。

よし。これで、このハルケギニアの問題も全て解決だ！

後は、お前達の頑張り次第でどうとでもなる。しっかりやれよ！」

そう振り返ったカイトの眼には、滂沱の歓喜の涙を流す……皆の笑顔が映っていた。

釣られて満面の笑みを返すカイトに、更に皆の顔から笑顔が零れた。

以前、カイトに母を救われた時の事を、思い出さずにはいられなかったタバサがいた。

救われしハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は、到頭『ゼロの使い魔』最終回です。……いやぁ、長かった。此処迄本当に長かった。

でも、きっとネギま！　の方がもっと長いであろう罠。……いかん、もう気力が萎えて来始めたｏｒｚ

一応、今日の昼頃には次話……最終回を投稿したいと画策して居ります。

……飽く迄も、予定ですからね？　無理だった場合は、十二時間ずつずれるかも？

もしも上げられた場合は、その翌日の００：１０頃に、次の世界の第一話……否。

第零話を投稿したいと思っています。

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

ゼロから始まるハルケギニア（前書き）

現時刻（１２：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，１５６，７４０アクセス　ユニーク：１８０，５８５人
皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて、大変御待たせ致しました。ゼロの使い魔編、最終話です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

ゼロから始まるハルケギニア

ｓｉｄｅ：？？？

風石の騒動が終わってから、凡そ半年が経った。あの後も、色んな事があった。

王代理妃が身籠もった事が判明し、王代理は正式にトリステイン国王と成った。

アルビオンは未だ他国に占領された儘、王国復活の兆しは見えていない。

ロアリアは若き教皇の宣言の下、エルフとの交易を一身に引き受け、他国との仲介を率先してやっており、益々国全体が潤い、貧民街も大分形（なり）を潜めた。

ガリアは忌まわしき王族の因習を捨て去る事を宣言し、ジョゼットが正式に初代女王となった。

その傍らには、何時も月目の美男子が側に居り、常に教会との間を忙しなく行き来していた。

その他の王族達も、皆彼女を補佐する為、西に東にお稽古にと奔走していた。

……唯、一人を除いて。

国の事項としてはこの様な所だ。後は、各々個人的に起こった事を話したい。

先ず、キュルケが正式にコルベール先生と結婚した。

一番戸惑っていたのは、他ならぬ先生自身だった事を、特筆しておこうと思う。

そして、どうでもいい事だが、ギーシュとモンモランシーが正式に婚約したらしい。

これで、少しは浮気も減るとか言ってたけど、そんな事は無いと私は思う。

他には……あ、水精霊騎士隊（オンディーヌ）が正式に国の栄誉軍隊として、各々精霊勲章を貰ってた。

細かい所はこんな所だろうか？　又、何か思い出したら、追加して書こうと思う。

あ、そうだ。アレを忘れてた。何と言っても大変だったのが、サイトとルイズの事だった。

サイトが、ラ・ヴァリエール家にルイズをお嫁さんに欲しいと願い出た所、

大勘気を被ったらしい。主に、彼女の母と長姉から。次女は諸手を挙げて賛成したらしい。

父親は、怒りの余り、血管が切れ掛けて倒れ伏したらしい。

何とか、カイトが治してあげたそうだ。それをネタにして、サイトを許す条件にしたらしい。

結局、間にカイトが仲人の役割も兼ねて仲裁に入り、後にサイトが彼女の父と決闘して、

コテンパンにして勝った為、何とか今は正式に許して貰っている状態らしい。

今は、最低限貴族として恥ずかしくない様に、礼儀・作法・嗜み等を厳しく躾られているそうだ。

サイトも、ルイズと一緒にいられるならと、必死に覚えているそうだ。

今は、その度胸と本気の様子を買われて、少しはルイズの家族とも

仲良くなっていると聞いた。

因みに、サイトは曲り形にも領主と言う事で、ド・オルニエールにルイズの長女と次女が、一時的に住み込みで教え込んでいるらしい。

其処には、あのメイドとティファニアも一緒に住んでいた。

始めは、大反対をされていたけど、それもカイトの取り成しで何とか受け容れて貰っていた。

――――そして。そのカイトは……私の最も愛しいあの人は。

実は、もう既にこの世界（ハルケギニア）にはいない。

ｓｉｄｅ：三人称

実は、あの後一番大変だった出来事とは、才人とルイズの騒動では無く。

……←これの事だったりする。

「……いや、だから、あのな、シャル。」

「……や。」

「……いや、だから『や』じゃなくてな。」

「……や。」

「……だから、その「や。」……。」

「……ダメ？」

「……うっ。」

「……ダメ……なの？　どうしても……ダメ？」

「……ククッ……！　た、耐えろ俺……此処で耐えねば、全てが水泡に帰す！」

御判り頂けたであろうか？　では、説明しよう！

実は、カイトがもうこの世界には長居出来無いと知ったタバサが、イヤイヤをしているのだ！

いつも以上に必死に粘るタバサに、何とかしてあげたいとは家族共々思っても、

これぱかりは、流石に儘ならぬ相談。

どうにか宥めようと、カイトも必死にしているのだが……如何せん、梨の礫（つぶて）。

妥協点として、世界を旅立つ迄はカイトを一人独占して、部屋から一歩も出なかったのだが。

それも時が経てば終わり……今、旅立つ時になって、又もやイヤイヤをし始めたのであった。

「……ふぅ～。ゴメンな、シャル。

これぱかりは流石に、俺でも本当にどうにも出来無いんだ。

とてもじゃないが、今のシャルでは俺達の旅には耐えられない。

とても過酷なんだ。」

「……貴方と一緒に居られるなら、大丈夫。どんな苦難でも耐えられるし、乗り越えられる。」

「……あ～……もう一日ダメ？」

【ダメに決まっておるだろうが、戯けめが。一体何時迄待たせる気だ。

こうしている間にも、本来救われた筈の世界が、又一つ失われていっておるのだぞ。】

タバサの健気な言葉に思わず理性が崩れそうになり、駄目元で【原初】に御伺いを立てるも、

その【原初】から珍しく叱られると、渋々といった感じで諦めるカイト。

「……ちぇっ、分かってるよ……言ってみただけだろ。

と言う訳でな、シャル。本当に済まないが……これで御別れだ。」

「……カイト……やだ……いやだ……！」

「……シャル。……一つだけ。

たった一つだけだが、俺ともう一度会える方法がある。」

「…！　教えて！　どんな事でもするから！　お願い！！」

藁にも縋り付かんばかりのタバサの勢いに耐え切れず、思わず残酷な方法を話すカイト。

矢張り、それに食い付くタバサであった。

だが、その様を見ても猶、躊躇わざるを得ないカイトであったが……。

「……だが、それも俺に会える確率が、他の世界よりも僅かに上がるだけだ。

もしかしたら、俺が消えた直後に……下手したら永遠に会えないかもしれない。

只、期待だけを永遠にさせるだけになる……残酷なものだ。それ

でも……。」

「それでも構わない！　だからお願い！　……おねがい……カイト……！」

「……分かった。それなら、このネックレスを受け取ってくれ。」

「……綺麗。これをどうすればいいの？」

「それを只、持っていてくれてればいい。それだけで、俺と又、会える可能性が高まる。

……他の世界に比べて、僅か１％程度のものだがな。」

カイトから渡されたネックレスを胸に愛おしそうに掻き抱き、

涙を眼に一杯溜めながらも、満面の笑みでカイトに微笑みながら、

タバサは言った。

「……それでも構わない。

それに……貴方が私に会いに来られないと言うのなら、私から会いに行く。

だって、私には貴方が……貴方の存在が、何よりも絶対に必要だから。」

「――――シャル。……良かった、俺が愛したのがお前で。

……陳腐な台詞かも知れないが、敢えて言わせて欲しい。

さようならは言わない。――――だから、また、会おう。」

「……カイト。うん、また……きっと、必ず、また会うから。

絶対に、私から会いに行くから！　だから――――！」

「……ああ。勿論、何時迄も待ってる。何せ、俺は寿命なんて無い様なモンだからな。」

二人は、最後の抱擁と接吻を終えると、自然と離れて行き……。

「じゃあな、みんな。才人、ルイズ。御互い仲良くな。」

「勿論だ！　ズズッ……！」

「……ええ。」

「……っ。キュルケ、シャルを頼む。」

「任せなさい。伊達に親友は名乗って無いわよ。」

「フ……頼もしいな。ギーシュ、浮気は程々にな。」

「ああ、もうモンモンに愛想を尽かされるのは、僕もゴメンだからね。」

「全くだな。ジュリオ、ちゃんとジョゼットを守ってやれよ。」

「……アンタに言われるまでもないよ。」

「そうか、それならば良かった。ジャン、余りそう自分を苛むなよ。」

「……ああ、分かっている。有難う、カイト……いや、救世主（メシア）。」

「フ……ビダーシャル、エルフを頼むぞ。」

「……うむ。救世主（メシア）に幸あれ！！」

「――――じゃあな、シャル。また――――。」

「――――うん、また――――。」

【……もういいか？　では、さっさと行くぞ。】

「ああ、済まん。では！　いざ舞い戻ろうか！！　数多の世界を救う旅路へと！！！！！」

ｓｉｄｅ：？？？改めタバサ

こうして、彼は私達の許から旅立っていった。

……其の後、私は暫くその場に泣き崩れていた。

――――でも。

「でも、大丈夫。みんな、私を応援してくれるから。私は、必ず貴方に会いに行くから。

もしも、どんなに、誰に無理だって言われても、私は諦めない。

それが、貴方に会える唯一の方法だと言うのなら。頑張ってみせる。

……だから、貴方も私に会いに来て。

――――カイト、貴方を永遠に愛してる。」

そう言って、私は身に付けていた、ネックレスにキスをした。

ネックレスが光った。私に応えてくれた――――そんな気がした。

――――そして。

――――世界が、又一つ救われ。

――――1（ファースト）から改めて……否。

――――0（ゼロ）から、新たに世界（ハルケギニア）は歩み出したのであった。

ゼロから始まるハルケギニア（後書き）

如何でしたでしょうか？

最後のタバサの台詞で御解りになられたかと思いますが……はい、当然フラグです。

後々、彼女も再び物語に参加する予定です。果たして、一体何時頃になるのか……御楽しみに。

多分、ほぼ全員が忘れた頃になって、ポッと出て来るかと思いますｗ

さて。今回にて、実に凡そ半年と、長々と続いた『ゼロの使い魔』世界も終了致しました。

『ゼロの使い魔』本編３３話＋『タバサの冒険ゼロの使い魔外伝』４話＋α２０話＝計５７話でした。

……あれ？　α……って言うか番外編多いな、おい！？

って、幕間だけでも１０話？！　……そりゃ多いわな、うん。

そう言えば、ゼロ魔だけで百万アクセス記念と二百万アクセス記念

の両方書いてるんですよね。

……アレ？　って事はつまり、ゼロ魔だけで百万アクセスいってるって事ですか！？

流石は『ゼロの使い魔』……人気度が物凄いですね；；；；

さてさて。次なる世界は『スーパーロボット大戦ＯＧサーガ　無限のフロンティアＥＸＣＥＥＤ』です。

しかも、途中介入。果たして、一体どこの場面から介入するのか、御楽しみに。

え？　ヒントが欲しいんですか？　しょうがないなぁ、もう。（訳：言わせて、御願い！）

ヒントは、一つ。次回のヒロインは、メインが小牟（シャオムウ）でサブがＫＯＳ（コスモス）ＭＯＳです。

それでは十二時間後の次なる世界にて、再び御会い出来る事を祈りまして、

締めとさせて頂きたいと思います。

今話……そして、今世界も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

第零話【誘われし無限の開拓地～静かなる戦術（タクティクス）～】（前書き）

現時刻（００：１０）
ＰＶ：２，１６９，８２８アクセス　ユニーク：１８１，１９５人
皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて。今回から、到頭次なる世界に入ります。

次なる世界は『スーパーロボット大戦ＯＧサーガ　無限のフロンティアＥＸＣＥＥＤ』です。

そこ、名前長っ！？　とか言わない。

略称は、前作は『ムゲフロ』もしくは『ムゲフロ無印』。

又、今作は、前作と区別して『ムゲフロｅｘ』とか『イクシード』とも言います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第零話【誘われし無限の開拓地～静かなる戦術（タクティクス）～】

ｓｉｄｅ：？？？

「……はぁ～～～……参ったなぁ……。」

【……救世主（メシア）よ。未だ、前（さき）の事でウジウジと悩んでおるのか？】

「……当たり前だろうが。つうか、テメェにゃ永遠に解んねぇ事だから、気にスンナ。」

【そうは言うがな、救世主（メシア）よ。こう毎回、世界を渡る度に溜息と共に言われては、

気にするなと言う方が無理と言うものだろう？】

「あ？　そんなに毎回言ってねぇよ、俺は。」

【……因みに、この遣り取りだけで、既に一千兆回は超えておるぞ？】

「あぁん？　そんなん、テメェの数え間違いなだけだろ。俺は言ってねぇよ。」

【……まぁよい。順調に世界も救われていっている様だしの。
さて、では次に言って貰う所は……ぬ？】

「……ハァ～～～……ん？　どうした？」

【……何者かが、我に敵意を持って攻撃して来ているらしい。】

「……は？　【原初（テメェ）】にか？
そりゃ又、飛んでもない命知らずもいたもんだ。一体、何処の阿呆だ？」

【……それが、解らぬ。】

「……は？　【原初】たるテメェが解らねぇ奴だと？　……益々気になるな。
おい、【原初】。先に、俺に闘らせろ。どうせ最期はテメェが喰っちまうんだろ？
その前に、俺に少しは楽しませろよ。」

【……ぬ！？】

「あ？　……おい、どうした？　真逆、テメェともあろうものが苦戦してる訳じゃねぇだろ？」

【……むぅ！　中々に煩わしい……！　救世主よ。其方が居ては少々邪魔だ。

暫し、近場の世界へと行って貰うぞ。】

「は？　おい、今何て言いやがった？　って、おいっ！　ちょっと、マテコラ！！

テメェ、糞【原初】！！！」

another side：？？？

「……どうやら、上手い事、彼をあの世界へ誘き出せた様ですわね。」

「うんっ♪　でも、いいの？　ラフィ姉様。あの娘に任せちゃって。アタシ、ちょっと心配よ？」

「大丈夫ですわよ、ガブちゃん。幾ら、あの娘でもそうそうヘマはしないでしょ。」

「……もう。ラフィ姉様は本当にあの娘に甘いんだから。」

「あら。それは貴女も同じじゃなくって？　ガブリュース？」

「……まぁ、そりゃ……ね。それよりも……もう、こっちに来ちゃったね。」

「あら、お早い事。長持ちしない男性は嫌われますわよ？」

「……アイツに、性別の概念とかあるの？」

「……さぁ？」

「……まぁ、いいや！　そんじゃ、ガブリュース＝シュレスト！　行ッきま～すッッ！！！」

「あらあら、相変わらず堪え性の無い娘ねぇ。ラフィレス＝シュレスト、参りますわ。」

第零話【誘われし無限の開拓地～静かなる戦術～】

そして、物語は……今、又、新たに始まった。

第零話【誘われし無限の開拓地～静かなる戦術（タクティクス）～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

今話は御覧の通り、プロローグ。実質的な本編は次話からです。

次話も大体、今日の昼頃に投稿予定です。

そして、又、新たなキャラが登場。果たして彼女達は一体、何者なのか。

乞う御期待……出来たらいいなぁ……。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

※少々、タイトルを変えてみました。

第壱話【招かれざる異邦人（エトランゼ）～そして今、衝撃（インパクト）～】

現時刻（１２：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，１７５，９７２アクセス　ユニーク：１８１，７７５人
皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて。今回から、ようやっと本格的に素晴らしき新世界へと突入します。

この世界では、色んなネタがふんだんに盛り込まれています。何せ、原作からしてアレですからねｗ

もしも、全てのネタが分かった貴方！　私と御友達になりませんか？　いや、可成りマジで。

では、今話からも新たな世界を御楽しみ下さい。

第壱話【招かれざる異邦人（エトランゼ）～そして今、衝撃（インパクト）～】

ｓｉｄｅ：？？？

「……丁度良い。此処に在るクロスゲート……これを使って、私の召喚術をお見せしよう。

……出でよ、『新世界の魔獣』！　歳を経て、強い力を得た獣よ……！

我が前にその姿を見せよ！！」

その如何にも敵だと言わんばかりの風貌と、紫色の流しソーメンの様な髪をした男が、

そう唐突に宣言すると、その男の後ろに在ったクロスゲートと呼ばれるモノが起動し、

その中から、宣言されたモノが一人現れた。

「な、なんじゃなんじゃ！？　ここは何所じゃ！？　わしは一体……？」

「……あらら。これは……。」

「よく来た、異世界の獣よ。我が命に従うのだ。」

「なんじゃ、ぬしは！　わしは小牟（シャオムウ）。齢７６５歳を数える仙狐（せんこ）じゃ！

気安く使おうなどとするでない！！」

そこから現れたのは、小牟と名乗る自称７６５歳の狐の妖怪……仙狐であった。

そして、現れた先で以前、共に戦った仲間達と久々に戯（じゃ）れ合っていた。……が。

「どいつもこいつも、駄狐駄狐と言うでない！　この駄ベソ鬼共めが！

ちゅうか……もしかしなくても、ここはエンドレス・フロンティアなのかの！？」

エンドレス・フロンティア……其は無限の開拓地。

いつからかそう呼ばれる様になったこの土地。

そこに集った、数多の種々様々な戦士達。

この物語は、そんな彼等が集いしこの大地で、
彼女……小牟という腐女狐様が呼ばれたその時。
その歴史が変わった時から、全てが始まるのである。

……え？　説明が所々酷いって？　大体合っているので、全く問題有りません！

ここは、エンドレス・フロンティア。全てを内包し、その全てを受け容れる箱庭。

故に。大丈夫だ、何も問題は無い（筈な）のである。

第一話【招かれざる異邦人（エトランゼ）～そして今、衝撃（インパクト）～】

「あん、そういう事みたい。私達の世界とこの世界……意外と近いみたいじゃ無くて？」

そう艶粧（つやめか）しい声で、小牟と名乗った狐耳と尻尾を生やした外見の少女に、声を掛けた者は……。

「沙夜（さや）！？　ぬしもおるんかい！　こんな所で何をしとるんじゃ！」

そう。彼女の名前は沙夜。

小牟が所属する『森羅（しんら）』と古くから敵対している、『逢魔（おうま）』のエージェント。

エージェントといっても、彼女以外の幹部は目下確認されてはいないが。

本来ならば、部下に毒牛頭（どくごず）・毒馬頭（どくめず）という御供がいる筈なのだが、

今回はその姿が見えない……どうやら、単独行動の様だ。

と、作者が説明している間に、どうやら漫才（ツッコミ含む）も終わった様だ。

「ふむ、強い魔力を持っている様だが……こちらの言う事を聞かないのであれば、意味がない。

クロスゲート……どうやら、まだ研究の余地がありそうだな。」

と、話に入れなかった件の紫ソーメンが独りごちた……そんな時であった。

「む？　な、何だ……何なのだ、この絶大なる魔力は……！！？」

「ああっ！？　あ、あそこ……クロスゲートが！！！」

「ッッ！？　何だ……あの禍々しいまでの、漆黒は……？」

「ああ……。神夜（かぐや）の様に霊力とかを持たない俺にも分かる。……あれは……マズイ…！」

「そんな……バカな……じゃ、じゃが、あやつは……あやつが、こ

んな所になぞ……！？」

そんな、ざわ……ざわ……している中、クロスゲートの前面に唐突に漆黒の真円が現れた。

……否、果たしてそれを『円』と呼んでいいものなのだろうか？

本来ならば『円』であったろうその存在は、その輪郭を……形を止め得ぬ儘、波打っており、

その儘の状態が数十秒続き、その間、皆が感じている絶大にして凶大なる魔力は増大し続け、

最早物理的に、その場に居る皆の身体を抑え付け、

息をするのも儘ならない状態に迄なっていた。

だが、それはあっと言う間に消えた。その『円』の様なものから、人が吐き出されたのだ。

否、排出されたと言う方が正しいのであろう、出方をしていた。

ソレは排出されると同時に起き上がり、その『円』であったものに猛スピードで取り付き、

唐突に辺り憚(はばか)る事無く、叫び出した。

「くっ……！　おい、テメェ！！　一体、これはどういう事だ！？　どうなってやがる！！！

おい！　コラ、【原初】！！！！！　……チッ！　閉じやがった……か。

本当にどうなってやがる……。まぁ、【アイツ】なら何があろうとも大丈夫だろうが……。

一体、何所のアホウだ？　【あの野郎】に喧嘩吹っ掛けるなんざ……まぁいいや。」

そう、その青年と思しき者が自己完結し終えると同時に、辺りを見回した。

……どうやら、自分の現在の状況を確認している様だ。

何人かを目に止め、少し驚きの顔を見せた。それを見せられた当人達は何が何だかさっぱりだ。

……だが、それも十秒足らずの事。

どうやら必要な情報を収集し終えたのか、一つ頷き話し掛けて来た。

「成る程、大体の事は理解した。取り敢えず……久しいな、逢魔の沙夜。息災か？」

「……貴方……もしやと思ってたけど、まさか本当に救世主（メシア）？　本物の『宇宙（そら）の救世主（メシア）』な訳？」

「そうだ。どうやら、今回も散々な結果になってる様だな？

『九十九計画』は零児達森羅と、その仲間達の手によって潰え、

そして今『白夜計画』もこうして、そこのロック・アイによっておじゃんになっている訳だ。

因果だな。そろそろいい加減に諦めたらどうだ？

そうすりゃ、もう俺にも遭う事もなくなるだろうに。」

「……その尊大な口調。何もかも知っている、その博識振り。間違い無く本物の救世主（メシア）ね。

改めて御久し振り、救世主（メシア）様。それで、今回は一体何の御用かしら？　救済のお仕事？

それとも……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』として、全てを消滅（けし）させに来たのかしら？」

「……どいつもこいつも、俺の第一印象って……ｏｒｚ　……

……まぁ、いいや。

いやな？　ぶっちゃけ、今回ここに来たのって、事故なんよ。」

“……は？　事故？”

「そう、事故。本来ここに来る予定は全く無かったんだが……。

【あの野郎】が、何所ぞの自殺志願者の阿呆に喧嘩吹っ掛けられてなぁ。

そんでその逆打（とばっち）うけて、こっちにドカンッ！　だよ。いや、もう参った参った。」

その余りに軽い物言いに、皆思わずポカンとしてしまった。……唯、一人を除いて。

「んで……おろ？　あいつは何所に……あ、居た。ひさっ…！

プゲラッ！？」

バキィィッッッッ！！！！！　“え？　……ええええええええええ！？！？！？”

快音を響かせたのは、たった今喚ばれた小牟だった。カイトがキョロキョロと辺りを探し、

自分の真正面……というか、真下に屈み込んでいるのを見付け、

声を掛けようとした瞬間の出来事であった。Ｎｉｃｅ　ｕｐｐｅｒ（アッパー）　ｃｕｔ（カット）．

皆、当然の如く大いに驚いていたが、そんな事を微塵も気にする事も無く、

つかつか……否、ズカズカと大股で頬を抑えているカイトに近付いていった。

「いってぇなぁ……シャオ。行き成り何すんだよ？」

「喧しいわ、このバカイト！！！！！　今更ノコノコとわしの目の

前に現れおって！

一体どの面下げて来たんじゃ、戯け！！！」

「そう言うなって。今言ったろ？　こいつは不慮の事故なんだってば。

本来、俺が来る筈の世界じゃ無かったしな。まぁ、或る意味、僥倖ではあったがな。」

「何が僥倖じゃ！　あれから一体、何百年経ってると思うとるんじゃ！！」

その小牟の何時に無い剣幕に誰もが何の口も挟めず、

只二人の会話を聞いているしか無かった。

「……そうか。こっちでは、そんなに経ってたか。そいつは済まなかったな、シャオ。

でも、俺の言った通りだったろ？」

「何がじゃ！！！」

「お前には、俺よりも相応しい生涯の伴侶となる者が何れ現れる……と。な？　現れたろ？」

「……あれ、ぬしが付いたその時紛れの嘘じゃ無かったのかの？」

「んな訳無かろうが。俺は、そういう未来の事に関しては、嘘は付かんよ。」

「……む、むむぅ……。」

どうやら、頭では理解しているが、納得がいっていないだけの様子の小牟に、

思わず笑みが漏れるカイトであった。そして……。

「くっくっく……まぁまぁ、昔は昔って事でな。……何はともあれ、久しいなシャオ。」

「ぬ……ふにゅ……って、撫でるでないわっ！／／／　昔から言っとろうが！！／／／」

「はいはい。ん～……やっぱ、シャオの頭撫でるの、気持ちいいなぁ～♪」

「ふにゅ……んみゅぅ……って、だ、だから……！！

／／／／／」

「あ～……もう我慢出来ん。ん～～～……やっぱ、シャオの抱き心地最高だなぁ～？？？」

「ぬあっ！？／／／　じゃ、じゃから……だ、抱き付くな、と……ぅ～～～／／／／／／／／／」

どうやら、痴話喧嘩（？）も終わったらしく、小牟を撫で繰り回した挙げ句、

それだけでは物足りなかったのか、更に抱き付いて頭を撫でながら、

狐耳や尻尾を撫で付け捲り、完全に小牟は腰砕けになっていた。

あれ？　これなんてエロゲ？　な状況になっていた爲、

何人か顔を赤らめていた事は余談である。

それも或る程度済んだのか、はふぅ～……と一つ息を付くと、

自身に凭(もた)れ掛かった小牟をその儘に、唖然としていた沙夜と紫ソーメンに向かって、話し掛けた。

「沙夜、ロック・アイ。ここは退け。もう既に此処には用は無かろう？」

「……はっ！？　な、何を言うかと思えば……そもそも、貴様は一体何者だ？」

「……ロック様。悪い事は言わないわ、ここは素直に退きましょう。」

「沙夜？　突然どうした？　真逆、怖じ気付いたとでも言うつもりかね？」

「……ええ、その通りよ。彼が現れてしまった以上、改めて策を一から練り直さなきゃ……いえ。

例え、万全の上に万全を重ねたとしても、まだまだ足りないくらいよ。

死にたくなければ、今直ぐここを撤退する事をお薦めするわ。……彼はそういう存在なのよ。」

「何をバカな事を。冗談にも程が……。」

ロック・アイと呼ばれた件の紫ソーメンが、言葉を途中で途切れさ

せたのも無理は無かった。

何故ならば、彼の蜷谷（こめかみ）には、翠の銃口が。傍らにいた沙夜には、朱色の剣が。

それも、彼等の真後ろから突き付けられていたからだった。

それを只、傍観していただけの者ですら全く見えなかった。誰もが驚きに目を見張っていた。

「だから言っただろ？　さっさと帰れと。ちゃ～んと手下の言う事は聞かなきゃダメだぜ？」

「……クッ！　い、何時の間に……？」

「もういいから、本当にさっさと帰れ。あ、後、伝言も頼むぜ？」

「で、伝言……だと……？」

「ああ。お前等の王に……『諦めろ。救世主（メシア）からの伝言だ。』……そう一字一句違えずにな。」

「な、何だと……！　その様な戯言、我が王に御伝えせよと……そう言うのか、貴様！！？」

「その通りだ。まぁ、あの糞餓鬼の事だからな。間違い無く、尚の事、頑なに進めるだろうがな。

一応は忠告だ。確かに伝えたぜ？　頼んだぞ、メッセンジャーボーイ。」

そう最後通牒だと警告した後に、唐突に消え去った二人。

……どうやら、カイトが自ら二人を転移させた様だ。と言う事を後々知った皆であった。

何はともあれ、襲撃は招かれざる異邦人（エトランゼ）の手によって未然に防がれ、事無きを得たのであった。

ｓｉｄｅ：かくしかタイム　ｂｙ　三人称

「改めて初めまして。八神カイトだ。救世主（メシア）などと良く呼ばれるが、まぁ、気にしないでくれ。」

「……ムッスゥ～……。」

「……そう何時迄もむんつくれるなって、シャオ。ちょっと久々過

ぎて、加減を誤っただけだろ？」

「限度があるじゃろが！！　何でわしが腰砕けになる迄、止めんのじゃ！！　この戯けが！！！」

「しょうがねぇだろ？　シャオが可愛いのがいけないんだからさ。」

「じゃ、じゃから、そういう事をシラフで言うでないわッッッ！！！！／／／／／／／／／／／／」

又、さっきの二の舞になりそうな気がした皆は、さはさせじと、敢えて声を掛けた。

「あ、あの～～……。」

「ん？　ああ、済まん済まん。ついつい懐かしくてな。」

「いえ、それはいいんですけど……；；；；」

「取り敢えず、その駄目な狐ちゃんとどういう関係なのかが一番気になる所ね。」

「あ、それ、私も聞きたーーーい！」

「別に大したモンじゃないぞ？　単に、元カレでシャオの最初の男ってだけだ。」

ΩΩΩ“な、何だってーーーーッッッッ！？！？！？”

「ＭＭＲ乙。それはさておきだ。取り敢えず、色々と聞いておきたい事があるんじゃ無いのか？

なぁ、シャオ。……だから、何故に今更、そんなに顔を赤らめる？」

「う、五月蠅いわいっ！／／／／／／／／　ぬ、ぬしには一生解らんわいっ！！！／／／／／／／／／／」

「……所で、カイト……と言ったか。その口振り、物言いからすると、

アンタは聞く必要が無いとも聞こえるんだが……？」

「ああ、俺は全てを知っているのでな。態々、今更改めて聞く必要は全く無い。」

「……全てを？　そりゃ又、大層な言葉だねぇ。
どんだけ知ってるのか、気になるじゃないのさ。」

そのカイトの言葉に、思わず顔を顰める者、逆に興味津々な者等、様々であった。

その期待に応えるべく、カイトは敢えて皆がする筈だった説明を引き受けた。

「んじゃ、俺が代わりに説明するとしようか。先ずは順当に人物紹介かな？

先ず、流離いの賞金稼ぎ、バウンティーハンターのハーケン・ブロウニング。」

「ほう、俺も大分有名になったって事かな？」

「私は全く存じませんでしたけどね。」

「……アンタは三年間、この世界にいなかっただろうが。」

「お次は、Ｗ０７。ハーケンの育ての母親兼家族。
ゼロ・ナンバーズ唯一にして、Ｗシリーズ初のＤＴＤ搭載型、アシェン・ブレイデル。」

「おっす、Ｗ０７ッス。」

「毒舌吐かせれば、世界一。こいつは本当にロボなのかと疑う程。」

「腕なら、結構伸びまっせ。ビヨヨ～ンとね♪」

「んで、お次は、神楽天原（かぐらあまはら）の姫。楠舞羽衣（なんぶうい）の娘、楠舞神夜。」

「は、はいっ！」

「んで、ハーケンの将来の嫁……と。せめて家事ぐらいは人並みにしとけ。

その内、ハーケンが死んじまうぞ？」

「……ど、努力します。」

「お次は、同じく神楽天原の式鬼の姫。守天の嫁こと、錫華（すずか）姫。

と、その御供？　の邪鬼銃王（ジャキガンオー）。」

「ふむ、よいよい。苦しゅうないぞよ？　しかし、守天の嫁とは…ちと語弊があるぞえ？」

「ああ、じゃあ、守天を尻に敷いてる、文字通りの鬼嫁……でいいか？」

「……まぁ、それぐらいなら良かろうて。」

「んで、特殊任務実行部隊オルケストル・アーミー。戦前は後方支援に従事していた再編成組。

戦術砲機『ブロンテ・クラフト』の使い手、キュオン・フーリオン。」

「……く、詳しい……。もしかして、キュオンのストーカー？！」

「ねーよ。因みに、神楽天原の牛乳には乳を増やす成分は含まれていない。

神夜のアレは、自前……というか、只の遺伝だろ。」

“な、何だってーーーーー！？！？！？”

「で、引き続き、同じく特殊任務実行部隊オルケストル・アーミー

の副長にして、

ジャイアント・マーカス号の長、カッツェ・コトルノス。」

「……成る程。全てを知ってるってのは、伊達じゃ無いようね。」

「因みに男性である。男の子は、近付いたら性的な意味で喰われるので、気を付ける様に。」

「……貴方、アタシに喧嘩売ってんの？」

「後は……ああ、サイレント・ウォークス号の船長にして海賊団、アン・シレーナ。」

「おや、アタシの事も知ってたのかい。」

「面倒臭くなると何もかも吹き飛ばす事に定評がある。因みに副長はボニー・マクシマド。

更に言えば、エンドレス・フロンティアで一番大きいと言われている。ナニがとは言わないが。」

「ま、鰓（エラ）も鱗も付いてない奴等に見られたって、何とも思わないけどね。」

「それと、神楽天原の自称良心塗（まみ）れにして、悪心の塊、悪徳商人の

琥魔（コマ）。」

「あぁん？　いてもうたろか、ワレ？」

「何だ、店の物、総浚いして買ってやろうかと思ってたのに、残念だなぁ。」

「お客様は神様ですにゃん♪」

「御覧の有り様だよ！　それから、エスメラルダ城塞の城主、ドロシー・ミストラル。

通称、ドロボー・ミストラル。」

「む。貴方如きに呼び捨てにされる覚えはありませんわ！」

「因みに、ハーケンの養父、ジョーン・モーゼスに熱烈に片思い中。銅像を造る程に。」

「あ、あれは、銅とかが余ってしまったから、何となく作っただけですわ！／／／

た、ただそれだけなんですからねっ！／／／　変な勘違いをなさらない様に！！！／／／／／／」

「そして、御覧の通り、典型的なツンデレである。誰かさんと丸被り。」

「それは一体、誰の事かしら!?」

「で、今ツッコミを入れて来た自己主張の激しいエルフが、エルフエテイル北部の姫。

ネージュ・ハウゼンだな。」

「オーホッホッホ!!!　その通り、頭が高くてよ!」

「そして、御覧の通りツンデレ……っぽい、ツンデレ気取りだったりする。」

「お黙りゃっ!!　誰がツンデレ気取りですかっ!」

「そして、最後。修羅が一人、影業（えいごう）のシンディことシンディ・バードが愛弟子。

覇皇拳（はおうけん）と機神拳（きしんけん）の使い手。剛錬（ごうれん）のアレディこと、アレディ・ナアシュ。」

「いえ、私などまだまだ修行が足りません。」

「そういう謙虚な所が、気に入っているんだろうよ、シンディもな。」

「……恐縮です。」

「……てな所か。何か間違いは有るか？」

「……色々とツッコミたい所は山程有りましたが……まぁ、大体合ってましたわ。」

「そうだねぇ。しっかし、本当に良く知ってたねぇ……驚いたよ。」

「其程でもないさ。この程度なら常識の範疇だ。……っと、肝心な奴を忘れてた。

ゲシュペンスト・ハーケン。」

「!?　何ッ?!」

その長ったらしい説明も終わり、ようやっとその事実を証明し終えた時であった。

唐突にカイトが、ハーケンの御供をしていたでかい人型ロボットを喚び出した。

ゲシュペンスト。通称、ファントムｏｒ黒い亡霊。正式名称は、ゲ

シュペンスト・ハーケン。

その名の通り、ハーケン専用機であり、又同時にハーケンを守護するものでもある。

その爲、彼に命ずる事が出来るのは、ハッキングさえされなければ、唯一ハーケンのみである。

故に、ハーケンのみならずとも、その事実を知っている者達は、皆驚愕した。

何の抵抗も無く、ファントムがその喚び出しに応じたからである。

しかし、当のカイトはその驚愕を微塵も気にせず、ファントムに話し掛けた。

「ゲシュペンスト……否、この世界では、ファントムと呼ぶ方が正しいか？」

俺が言うまでも無かろうがな。……アイツの息子と娘達を頼むぞ？」

「……。」

まるで、旧友に頼むかの様なカイトの台詞にファントムは、
僅かに自身の眼の光を明滅させて、それに応えた……かに見えた。

ｓｉｄｅ：三人称

「さて。これで各自の自己紹介はもう済んだな。んじゃ、早速行こうか。」

「って、ちょっと待ちなさい！　まだ話は終わってませんわよ！」

「ああ。何でアンタはそんなに俺達の事に詳しいのか、まるで謎だ。」

「それに救世主（メシア）ってのも、気になるわね。」

「何より、何で十年戦争の事まで知ってるのか……私はそれが最も気になるのだけど？」

「……ふむ。」

さっきの奴等など何所吹く風か。今、目の前にいるカイトの謎に皆して興味津々だった。

カイトも何処迄話すべきかと、少々腕を組みながら考えていた……のだが。

「……まぁ、こやつにも色々とあるのじゃ。それよりも、修羅だの妖精族の姫だのと……。

こりゃまた、濃いメンツじゃのぅ。」

「貴女に濃いとか言われたくありません。……何なの？　そのキャラ作り。」

「お婆ちゃん、必死なんだから……空気を読んであげなよ。」

「……そうなのですか。大変なのですね。」

どうやら、空気を読んだ小牟が敢えて話をずらした様だ。

皆も多少訝しみながらも、一応はそれに乗っかった様で、又いつもの漫才が始まっていた。

「可哀相な人っぽく扱うでない！　特にキュオン！　ぬしに言われとうないわ！

大体、わしがお婆ちゃんなら、カイトはどうなるんじゃ！

大爺様ですら足りないぐらいの年寄りなんじゃぞ？！」

“……は？”

「……一つ言っておくがの。わしがこのバカイトと初めて会った時には、

もう既にウン千兆歳は超えていたからの？」

ΩΩΩ“……な、何だってェェェェーーーーッッッッ！？！？”

「因みにカイトよ。今、ぬし幾つじゃ？」

「ん？　あ～……っと？　幾つぐらいだっけ、龍斗？」

「……凡そ、９１００垓歳程ですね。ついこの間、超えられたばかりです。」

「お、そうか。だとさ、シャオ。」

「……がいってなに？」

「ん？　……ああ、垓ってーのはな。億の兆倍。兆の億倍。京の万倍。それが『垓（がい）』だ。

で、俺は更にその９１００倍って訳だ。中々、次の位にはいかねぇモンだな。」

「……カイト様。抑（そもそ）も、元の値が大きい事にそろそろ気付いて下さい。」

小牟を始め、皆あんぐりと口を大きく開け、驚愕の意を示していたとさ。

……まぁ、そりゃそうだ。誰がそんな長い間、生きている生物がいるなどと思うものか。

「……あ、所で、カイトよ。その優男（やさおとこ）は一体誰じゃな？」

「ん？　ああ、こいつは龍斗。俺の従者にして、家族の一人だ。」

「皆様、初めまして。龍斗と申します。

これからカイト様が、大変な御迷惑を御掛け致しますが、どうぞ今後共宜しく御願い致します。」

「……なぁ、龍斗？　やっぱ、最近のお前等、俺に対して何か酷くね？」

「気の所為です、カイト様。少々被害妄想気味になって来られたのでは？」

「……ぜってぇ、違うｏｒｚ」

部屋の片隅でいじけ始めたカイトに溜息を一つ零して、

龍斗と呼ばれた青年は一瞬で消え去った。

その後に残った微妙すぎる空気は、恐らく想像を絶したであろう事は、想像に難くない。

side：???

「……以上です。申し訳有りません、我が王よ。」

「……何、気にする事では無い。既にその者についての報告は受けている。

……真に其方の言う通りであったな。」

「……は？」

そう、機械の身体を有した、王と呼ばれた存在が、唐突に自身の後ろに話し掛けた。

すると、何時の間に居たのか……人影が突然現れた。

「フフン。だから言ったでしょぉ？　あたいの言う事に間違いは無いってさ！

あたいの姉様達が、【とある奴】を止めてるから、あいつはこっちに来るより他は無いよって。」

そう自慢気に言ったその少女……否、敢えて言おう……幼女であると！！！

で、その幼女は自身の身体に不釣り合いな程、撓(たわ)わで巨大な胸を物の見事に弾ませながら、

エッヘン！　と更に大きく、その自慢の胸を張った。

その様に、顔を隠しもせず顰めながら、話を聞くロック・アイ。

一体何を勘違いしたのか、その様子に益々気を大きくする幼女であった……が。

「……しかし……そうか、あの救世主（メシア）が……。」

「？　……御存知なのですか、我が王よ。」

「うむ。以前……未だ我が、王と呼ばれる以前。彼の者と出会った事がある。

その時に言われたのだ。『貴様は、何れ王になる者だ』……と。」

「！？　な、何と……！」

「そして、同時にこうも言われたのだ。

『貴様が王となった時、アグラッドヘイムの在り様を変えぬ限り、俺が貴様の敵となる』とな。」

「……何と。その様な事が……。」

「……うむ。……ついに我の敵となるか。

何れ相見える……その時を何よりも楽しみにしておるぞ……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。」

そう言いながら不敵に微笑み、まるで旧友と会うかの様な楽しそうな様子の王に、

思わず目を見張る、アグラッドヘイムの幹部達であった。

「……ぅ～、何よ何よ、何なのよさ！　みんなしてあたいの事、ムシしちゃってぇ～！

いいモンいいモン！　こうなったら、あたいがあいつを一人でギャフンと言わせて、

姉様達を出し抜いて、ブラウセス様に褒めて貰っちゃうんだからぁ～！！！

ムッフフフ……♪　ブラウセス様ぁ～？　あたいの大活躍見てて下さいね？

このN・N（ネオ　ノルニル）第八席　アリエル＝シュレストが、みんな、みんな、みぃ～～～んな！

やっちゃうんだからぁ！！！」

そして、幼女と言う、又新たな敵が、カイト達の前に立ち塞がったのであった。

……誰が予想出来たであろうか？　今迄の出来事が、全て只の序章であったと言う事を。

彼女達の出現により、彼の物語は、真の意味で動き出したと言う事を……。

そして。序章（プロローグ）は、今此処に終わり……真なる新章が、今、正に始まろうとしていたのであった。

「……こんな始まり方で本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、何の問題も無い。」

「……あやつはホンマに人の話を聞かんからのぅ。」

「貴女は人じゃありませんけどね。」

第壱話【招かれざる異邦人（エトランゼ）～そして今、衝撃（インパクト）～】

如何でしたでしょうか？

ヒロインの名前は小牟（シャオムゥ）。通称、駄狐（だぎつね）とかダ・フォックスとかお婆ちゃんとか呼ばれています。

他にも腐狐（ふぎつね）とか……腐ってやがる、早過ぎたんだ……外に出すのが。

因みに、一番呼ばれているのは零児の嫁。これは、絶対に誰もが譲れない一言です。

例え、私の様に小牟にマジ惚れしていても、その不文律は絶対に変えません。

それは当然、この小説に於いても同様です。……でも、ちょっとの間くらいならいいよね？

それをしたいが為だけに書く、この世界だったり。

それにしても、N（ネオ）・N（ノルニル）って、一体どんな組織なんでしょうね？　全く以て謎の組織ですね。

あれ？　ブラウセス？　どっかで見たか聞いたか山高（やまたか）さんした様な気が……きっと気の所為デスネ♪

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・伍（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：２，１８５，４７３アクセス　ユニーク：１８２，３７６人
皆様、何時も有難う御座います。

さて。今回は、常の回とは違います。詳細は本文にて。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

※２０１１／０４／２５　能力の変更、及び追加事項を加え、修正しました。

番外・伍

※今回は会話も一切無い、只の能力説明回です。

現段階に於けるカイトと五行の能力更新事項と、

あれば新たな能力追加乃至(ないし)は能力公開の回です。

所謂、作者を含めたカイト達の現状確認と能力整理の為だけの回ですので、

大変につまらない内容となっております。疑念や確認事項が発生した場合のみ御覧下さい。

ここを見ても猶(なお)疑問や、却って疑念が湧いた場合は御遠慮無く、

感想乃至(ないし)はメッセージにて御一報下さい。

出来得る限りでは有りますが、全て必ず御応え致します。

……では、どうぞ。御随意に、御好きな所から御読み下さい。

八神カイト　実年齢：９１００垓(がい)飛んで数十歳。

今迄隠していた自身の人生のほぼ全てを、到頭従者達に語った救世主。

それによって、益々従者達との絆が深まった。結果オーライと思っている。

妻と娘の敵も討った今は、可成り自由奔放に世界を旅しながら、

今日も今日とて世界を救い続けている。又、同様に世界を消滅させる事も増えた様である。

『型月』世界にて、自身の二つ名について色々と語ったが、実際は少々違う。

細かい説明が非常に面倒だった為、敢えて大雑把に説明した。

タバサとのフラグが立ちっ放しな為、未だに頭を抱えてはやてへの弁解の言葉を思案中。

しかし、後に更にフラグが増える事を、今の彼は未だ知らない（核爆）

カイトが不老な理由が不明だったりと、未だ謎が沢山有る存在でもある。

二つ名　【詳細説明】

1.　『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』

【【原初】によって与えられた、最初にして唯一の能力。

この能力は、実は二つの力を有している。

先ず一つは、あらゆる異世界・平行世界の技・能力・武器その他諸々のチカラを、

本来の担い手の力の最大の威力を一とした場合、通常時で十倍。

そして、全力時で万倍の力を発揮出来る能力。

逆に言えば攻撃系の能力であれば、極力力を抑えない限り、

星や銀河があっさり消滅してしまう為、

実は、可成り繊細な魔力コントロールが必要なのだが、カイトは特に苦も無くやっている。

二つ目は、カイトが常に維持している、命のストックを溜めたり解放したりする能力である。

それ故に、カイトは今迄本来の自身の力だけでは勝てなかった相手にも、

最終的には何とか或る程度は勝つ事が出来たのである。

又、カイトのストック数が急上昇し始めたのは、

妻のはやてと娘の風音（かざね）を自身の手で殺めた後からである。

それまでの上昇率は非常にチマチマとしたものだった。

何故、その時から急上昇したのかは未だ不明。少なくとも、感情に左右された結果では無い。】

2.『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』

【相手の攻撃そのものや、カイト自身に働き掛ける能力を完全無効化する能力。

解り易く言えば、完全完璧なる絶対防御。

破れるのは【原初】と、カイトとほぼ同等の力や同等の『格』を持つ者のみ。

正確に言えば、『理』で編まれたものや、『理』が僅かでも関係しているものは、

攻撃・補助・結界等々、その一切を問わず、完全に無力化される。

この能力故に、カイトはあらゆる自然環境の影響を受けない。】

3.『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』

【相手のチカラや能力そのものを、永遠に封印・消去する能力。言わば、絶対無敵な補助能力。

正確に言えば、『理』で編まれたものや、『理』が僅かでも関係している能力は、

その一切を問わず、完全に無力化される。逃れる術？　死以外に何があると？】

4．『宇宙（そら）の救世主（メシア）』

【五行と契約し、使役出来る能力と説明した。だが、正確には少々違う。

正しく言えば、魔法の体現者（エレメント・マスター）を自由自在に使い熟（こな）し、

且つ五行と契約し、その能力を自身の力として十全に使役出来る能力である。

主な金策はこの能力による、白虎の能力『鉱石精製』に主に依拠している。

どうやら、何処の世界に行っても、鉱石に価値がある事は変わらないらしい。】

5．『真なる救世主（メシア）』

【アルニスが名付けた二つ名その壱。

４３体の龍達と、五行の真の力を解放・維持・使役出来る能力と説明したが、これも実は違う。

正しくは、４３体の龍達の同時召喚と、五行の真の力を解放・維持出来る能力である。

使役する能力自体は、対象がどんな状態であろうとも全て『宇宙（そら）の救世主（メシア）』に依拠する。】

6．『無限にして無窮なる旅人』

【アルニスが名付けた二つ名その弐。

数多の平行・異世界や時を渡る力と説明したが、これを細かく言えばこうなる。

正確には、数多の異世界・平行世界をタイムラグ無く安全無事に渡り切る能力である。

本来、世界間を渡る際は、可成りの過負荷が掛かるものであるが、この能力があるが故に、カイトと、カイトと契約している五行は、何の影響も無く、又、何の誰からの阻害を受ける事も無く、渡れるのである。】

7．『時と次元の狭間を旅する者（のじゅうにん）』

【カイトが自身で名付けた唯一の二つ名。

特に能力の説明はしていなかったが、当然無意味な訳も無く。

そのチカラとは、時間や次元の狭間を自由に行き来出来る能力である。

この能力が故に、カイトは虚数空間、又はディラックの海と呼ばれる、

魔法も何もかも無効化される空間に於いても、その能力の制限を一切受けず、

又、実際に過去に飛んで直接干渉し、何の影響も受けずに未来を覆す事が出来る。】

『魔法の体現者（エレメント・マスター）』　【追加＆変更点】

1．長年の修行により、全ランクのどんな仕様に於いても、詠唱が必要無くなった。

つまり、以前説明した様に、無詠唱の際に必要な魔力量の増加

が無くなったのである。

だが、時と場合とカイトの気分によって、詠唱を最初から行う事も、稀に良くある。

但し、ファイナル・イグニッションのみ、未だ完全な詠唱が必要。

2．各龍達の本来の大きさに変動あり。

第一形態（アインス）は、西洋龍は１５ｍ程に。東洋龍は３０ｍ程に。七色（セブン）形態も同様に。

第二形態（ツヴァイス）は、基本五割り増し。皇帝（カイザー）はシリウスを指で摘（つま）める程度。

『本来』と銘している通り、チビキャラモードには特に変更点は無い。

3．各形態の呼び方。

第一形態（アインス）を完全鎧化（フルアムド）した状態を、第一形態完全体（フル・アインス）

第二形態（ツヴァイス）を完全鎧化（フルアムド）した状態を、第二形態完全体（フル・ツヴァイス）　と、特別に呼び表す。

4．何やら修行によって、新たな力を色々と身に付けたそうだが……。

果たして御披露目の機会はあるのだろうか？　乞う御期待。

業（わざ）【追加事項＆詳細説明】

1．『究極（アルティメッ）の創世（ワールド・ワークス）』

【カイトの固有結界。未完成の為、空が無いという不気味極まりない様相を呈していたが……。

修行の結果、何とかモノに出来たらしいが、果たしてその全容とは一体……。】

2．『破滅（ブロークン・）せし幻想世界（ファンタズマワールド）』

【本来、壊（ブロークン・）れた幻想（ファンタズム）とは、幻想を膨らませて魔力を爆発させる技である。

これは、カイトが作り上げた世界という、限定された空間のみで使用可能なカイトの専用技。

その効果は、対象をカイトが選び、世界の崩壊を魔力の爆発という絶大な威力に変換して、

全方位から攻撃する、絶対回避不可能な技である。

一応防ぐ手立てはあるが、防御系統の宝具の三強とも言える、熾天覆う七つの円環（アイアス）・万難排す魔除けの楯（アイギス）・全て遠き理想郷（アヴァロン）を全て出しても、

瀕死で何とか済む程度の威力である。第７４話『きらめく涙は星に（ｄｉｓｉｌｌｕｓｉｏｎ）』参照。

但し、これは魔力の暴発に慣れている事が、そもそもの大前提である。

本来ならば、一瞬で魂ごと持って行かれるレベルの即死技である。

】

3．カラミティ・エンド

【カイトの使用する全７つのエンド技の内の一つ。効果対象は基本的に一人。

使用条件は一つ。選定(EXカリバーン)され勝利の剣を使う事のみ。

その効果は、完全に脱出不可能な虚数空間を作り出し、

対象を魂ごと、そこに永劫放り込む残虐無比な技である。

前述した通り、どれ程のチカラを持っていようとも、虚数空間の中では全くの無意味な為、

只管(ひたすら)、自身に死が訪れるのを待ち続けるしかないと言うえげつない技である。

因みに、カラミティ・エンドの場合、剣は常に右手に持ち構える。

又、基本エンド技は全て球体にする事が出来る。カラミティ・エンドは漆黒の球体。】

4．カラミティ・エンド　X(クロス)

【カラミティ・エンドの応用版その壱。効果対象は一人～複数。

使用条件は通常のカラミティ・エンドと同じく、選定(EXカリバ)され勝利の剣(ーン)を使う事である。

単体では未使用。作中に於いて、フルクロスを放つ際に使用。

その効果は、通常のカラミティ・エンドが十字に斬り裂くのに対し、こちらはX字に刻む。

そして、何故かこちらの方が吸引力が強い為、複数人を屠るのに丁度良かったりする。

十字に刻むつもりが、うっかり斜めに斬ってしまったら出来てしまった、そんな技である。】

5．カラミティ・エンド　フルクロス

【カラミティ・エンドの応用版その弐にして、最上位版。効果対象は一人～複数。

使用条件は通常のカラミティ・エンドと同じく、選定されし勝利(EXカリバーン)の剣を使う事である。

通常のカラミティ・エンドとカラミティ・エンドX(クロス)の複合技であり、その威力はX倍である。

その効果は、米印の形に融合した通常のカラミティ・エンドとカラミティ・エンドX(クロス)が、

超光速回転しながら、対象に突貫していく技である。

その異常過ぎる回転スピードにより、真円の輪郭が描かれていき、対象に衝突した瞬間、

その真円が対象を覆い尽くし、真円の中の切れ込みが口を開いた

かの様に大きく内側に開き、

対象とその周りにあるものを一切の区別無く、全て吸い込み尽くす技である。

その真円の中も、当然カイトによって作られた虚数空間であり、脱出は基本不可能である。

因みに、その大きさと対象の数は、カイトが斬り付けた空間の線の長さに比例する。】

6．カオス・エンド

【カイトの使用する全7つのエンド技の内の一つ。対象効果は一人。

基本的にカラミティ・エンド以外は、魔力云々～の詠唱が必要である。

その効果は、対象を魂ごと存在ごと完全完璧確実に葬り去る、文字通り必殺の技である。

因みに、カオス・エンドは常に左手に生成される。

又、カオス・エンドは、灰色の球体。】

7．カオス・エンド　爆発（バースト）

【カオス・エンドの応用版。効果対象は複数～世界。
爆発（バースト）のみ、カラミティ以外の他のエンド技とは詠唱が異なる。
その効果は、カイトの周りにカオス・エンドを数多浮き上がらせ、対象に突撃させ、複数にカオス・エンドと同等の効果を与える技である。
因みに、消費する魔力はカオス・エンドとほぼ同等である。
何故ならば、この技は本来のカオス・エンドに必要な魔力量を分散させて、
数を増やしているからである。故に、一発一発にはそれ程の威力は無いものの、
許がえげつない程の魔力量である為、例え分散しても億単位兆単位の生物を葬り去る事は、
御茶の子さいさいで、容易（たやす）い事此の上無いのである。】

8．エターナル・エンド

【カイトの使用する全7つのエンド技の内の一つ。対象効果は一人～世界。

一回の使用に、カイトの通常時の全魔力を必要とする。

その効果は、対象の精神を悉く完全に破壊し破滅させる究極の精神技である。

その効果範囲はカイトの意志一つで決める事が出来、

範囲が広ければ広い程その効果は薄まる。

又、相手が壊れ掛ける寸前で止める事も出来る、意外と自由度の高い技でもある。

因みに、無機物の様に対象に精神が無いと見做されている場合は、その対象物は、身体が音も無く崩れ去るだけである。

更に因みに、エターナル・エンドは常に右手に生成される。

又、エターナル・エンドは、虹色の球体。】

9.紅蓮腕（ぐれんかいな）・極（きわめ）

【カイトの使う通常技。その応用版であると同時に最上位版でもある。対象効果は複数～世界。

紅蓮腕や真・紅蓮腕とは違って、『極』のみ、使う為には、とあ

る条件が必要となる。

その条件とは、使用する剣が以下の四本である事。

エレメント・ソード　アインス　　エレメント・ソード　セブンス

エレメント・ソード　ツヴァイス　選定されし勝利の剣（EXカリバーン）　の何れかである。

因みに、エレメント・ソード　～形態（ス）というのは、そのクラスの全属性を兼ね備えた、

七色に光り輝く、各クラス最強の剣である。】

１０．その他

【他のエンド技は、未だ見せた事の無いものもある為、今は秘密である……らしい。

又、氷華乱舞（ひょうからんぶ）に代表される、カイトの他の通常技も更にパワーアップする……予定らしい。】

追加事項&変更事項は以上です。五行達には、特に変更点等は有りませんので、悪しからず。

後程、何か思い出した場合、加筆修正するかもしれませんが、現状では以上です。

冒頭でも申し上げましたが、理解し難い箇所や、疑問等が御座いましたら、

御遠慮無く、御一報下さい。

番外・伍（後書き）

如何でしたでしょうか？

少しでも皆様の疑問に応えられたのであれば、幸いです。

そして、これが現世界に於ける、カイト達の能力の全てです。

ひょっとしたら、この世界の内に新たな能力を御見せするかもしれませんが、

その場合は、次なる世界の冒頭にて又、今回の様に変更事項のみを書こうかと思います。

では。今話も長々と御覧頂き、誠に有難う御座いました。

第貳話【混沌を望む声～ＲＡＩＬ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＤＡＮＧＥＲＺＯＮＥ～】

現時刻（１９：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，２０３，５７８アクセス　ユニーク：１８４，０４４人
皆様、何時も有難う御座います。

今回は、ドゥルセウス封墓～龍寓島です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

第弐話【混沌を望む声～ＲＡＩＬ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＤＡＮＧＥＲＺＯＮＥ～】

ｓｉｄｅ：ドゥルセウス封墓

「ううっ……シャオぉ～。」

「ええい！　じゃから、引っ付くなと言うとるじゃろうが！！　重いわ！」

「う～……重力操作（グラビティ）ィ～　１ｇ（グラム）ぅ～。」

「うおっ、軽っ！？　って、そういう問題とちゃうわっ！　鬱陶しい！！」

「う～……いいじゃんかよぉ～……別に、乳繰り合ってる訳でも無いし、

胸揉んでる訳でも無いんだしさぁ～……モフモフ。」

「んなっ！／／／　じゃ、じゃからそういう事を言うでないと言うとるのにっ……！

ちゅうか、モフモフすなっ！／／／　わしの頭を撫でるでないわっ！！／／／／／

って、本当に聞いとるのか！　こら、バカイト！！！／／／」

御判り頂けるだろうか？　実は……カイトが小牟に乗っ掛って運ばれているのであるッ！

結局あの後、部屋の隅っこでいじけているカイトを、どうにか小牟が叩き出したのだが……。

すると、カイトが駄狐様に抱き付き出し、それが振り払われると今度は背中から抱き付き、

おんぶされたその儘で、ズ～ルズ～ルと地下迄引っ張って来られたのであった。

当然、その間小牟は戦闘に参加する事は出来ず、皆からの生温かい眼差しを受け続け、

可成～～～り苛ついていたりしていた。そして、→の会話である。

そろそろ本気と書いてマジで、ダ・フォックスの怒りが有頂天に達しそうになった時であった。

どこからとも無く、とても甘い……香（かんば）しい匂いが立ち込めて来た。

「……全く、このバカップルは。

せめて、もう少し人目の付かない所でイチャついてくれないものかしら？」

「……同感だな。俺達も身の置き所が無いぜ。」

「大体、あの筋肉質な格好良い彼……パートナーがいるのにねェ。」

「……完全完璧に浮気だね。」

「んなっ！　ち、違うに決まっておろうが！！／／／　こりゃ、バカイト！

一体、いつまで人にぶら下がっておるか！！！／／／／／／」

「い～じゃんか～……減るモンじゃね～し～。てか、お前人じゃねーだろ？　モッフモフ～♪」

「ウルサイわいっ！　って、じゃから、モフモフすなっ！！！／／／」

「……もう勝手にして。それにしてもさっきから……何か甘い匂いが凄くないかしら？」

「魅惑的極まりない匂いがモンモンとしてます……／／／」

「それはそうでしょうねェ。ここはお菓子のカタマリだもの。」

どうやら、ここはカッツェ達商人が、お菓子を仕入れている場所の様だ。

女性ならばその殆どが誘惑される匂いに、

多分に漏れずこちらのメンバーも何人かやられていた。

……そして、もう一人。お菓子にメロメロなモノが一人……。

「お菓子と聞いて！　ん～～～♪　すっっっっごく良い匂いな事、窮まりないわねっ！」

「ですよね、ですよね♪」

「うんうん♪　女の子なら絶対に負ける事、間違い無い匂いね♪　ねぇねぇ、ますた～♪　これ、どれぐらい食べていい？　ねぇねぇねぇったらぁ～♪」

「……ダメに決まってんだろ、水薙。一応、これらは売りモンなんだから。

どうしても欲しかったら、後で買ってやるから、それで我慢しな。

お前が食い始めたら、ものの四半刻程度で食い尽くしちまうだろうが。」

「え～……精々、９／１０程度だってぇ～♪」

「……あの～……所で、その人は一体？」

「ん？　ああ、こいつは水薙。俺の従者にして、家族の一人だよ。」

「ど～も～♪　初めまして。マスターの家族兼従者兼せいｄ「言わせねぇよ？」……チッ。」

「……おい、水薙。今、お前舌打ちしなかったか？　て言うかしたよな？　絶対にしたよな？」

「まっさかぁ～♪　それじゃね～みんな♪　あ、マスター、お菓子忘れずに買ってね♪」

「あ、おい、水薙！　……ったく、あのアホウめ。」

「……な、何か……嵐の様な人でしたね；；；」

「……まぁ、そんなアホポン共はともかく。これはやりすぎな気もしますけど？

買い付けも何も……持って行き放題ですわよ？」

「う～ん、板チョコとチョコチップでチョコがダブってしまった……。」

「そこ、早速床をはがして持ち帰ろうとしないで下さい。」

「零児が居ない狐なだけに、『狐』独なグルメってか？」

「……誰が上手い事を言えと言ったのよ。」

だが、どうやら魚乳と駄猫には、生魚の方が良かったらしい。

あ！　も……もう臭っ、魚臭い！！　と言わざるを得ない（キリッ

そんなワイワイガヤガヤしながら、何故かお菓子を壊しながら、

封墓管理人（クレオ・グレーテル）本人の銅像にアイテムを填（は）めながら進んで行くと、

その部屋に入る途中に在った三つの蛇の銅像が壊れ、入り口が見えた。

（……と言うか、こんなに壊し捲（まく）って大丈夫なのか？　此処、一応墓なのに。）

そんなカイトの（珍しく真っ当な）思いとは裏腹に、ズンズカ進む一行。すると……。

「ようやくついたわねェ。はぁい、クレオちゃん？」

「前の部屋で見た銅像と同じく……下半身が蛇なのですね。」

「ま、この世界じゃ珍しくないけどね。」

「いわゆるゴルゴンっちゅうやつかの？」

「ラミアとも言いまする。」

「……おまーが言うなし。」

「？？？」

「ま、そんな事はともかく。この娘が管理人なのよね？

ちょっとクロスゲートについて訊きたいことがあるんだけど……。

」

他にも幾つか質問をするが、今ひとつ反応が薄い。何事かと訝しんでいると……。

「ここは通せないんだよ？

アレディ・ナアシュを通すなと、ヘイムレン様に命じられているからね。

通りたければ腕ずくになるけど、ウチを倒せればってことになるから。

このドゥルセウス封墓の管理人こと……お菓子大好き、クレオ・グレーテルをね♪」

「……ッ！　操音のヘイムレン……やはりここを越えて行ったか。」

「ワタクシも似たようなことを言わされた記憶がありますわねえ。」

「……あのチョコバナナ、マジで碌な事しねぇなぁ、おい。」

またか……と、げんなりする一行。そして、デジャブを感じる某二人。

汚いなさすがチョコバナナきたない。そんな思いを抱く皆であった。

「敵の術中にまんまと落ちるとは……商売人として恥ずかしくないんかニャ。」

「操られてもいないのに、嬉々として飛び掛かってきたそちが言うでない。」

「でも、金貰って依頼を受けた訳だから、商売人としては正しいんじゃね？」

「ぬ……む、確かに。」

「……納得してどうすんのよ。」

「あぁん？　ゴマ擦っても安くはしてやらんニャ。」

「……そんな事されたら、天変地異が起きるより怖ぇよ。」

「……確かに。」

「……だから、納得……出来るわね、今のは。」

「流石は悪徳塗れの猫商人琥魔。歪みねぇな。」

「寧ろ、歪みに歪んでおるぞな……。」

「歪み過ぎて、却って真っ直ぐになってる訳だな。金の亡者として。」

「……だから、誰が上手い事を言えと……。」

「……皆さん、そろそろそこまでに。どうやら、向こうは準備が整ったようです。」

「じゃ、恒例だけど、ちゃきちゃき目を覚まして貰うよ～ん！」

「そうですね。初対面で申し訳ありませんが、正気に戻っていただきます……！」

～フルボッコ中～

「ううん……。あれ！？　ウチ、なにやってたの？」

「正気に戻られたようです。大丈夫ですか？　クレオ殿。」

「ん？　あれ……？　誰？　ああ、買い付け業者の人？　新人さんだね！」

「え？　……あ。では、師匠に何か包んでいただけますか？」

「何やってるの、アレディ。お師匠様へのおみやげを買う前に、やることが山ほどあるでしょ。」

「シンディの分は、俺が水薙の分を買う時に、序でに買ってやるから。」

「……済みません、御手数を掛けます。」

「……ＯＫ、キャンディガール。騒がせて悪いな。」

「あら？　よく見たら……ハーケンとかカッツェ兄さんとか、見覚えのある人たちがいるねぇ。

何でも聞いてよ。わかる範囲で答えるから！」

と言うので、色々と聞いてみた。

？妖精族のロボ……フェイクライドについて、今北産業。

「急にゲートが動いた。不安定になった。怖いので、見に行かずに道を塞いだ。」

小牟曰く「まぁ、わからんでもないがのう。

わしも何年か前に、部屋の冷蔵庫を開けたらエラいことになっとったんで、

それっきり開けておらんからのう。」

「な、何か謎の生物が生まれても知りませんよ？」

「おまーが言うなし、神夜。……にしても、零児の苦労が偲ばれるな。つーか、シャオ。

だから、あんだけ俺が口を酸っぱくして、少しは整理整頓しろって言っただろうが。ド阿呆。」

「ぅ……し、仕方ないじゃろが！　わしには他にする事が、沢山あるんじゃ！！」

「……プロレス観戦と、おこちゃま厳禁なサイトを覗く事がか？」

「……バレテル……じゃと……！？」

「寧ろ何故ばれないと思ったのか、小一時間問い詰めたい。

まぁ、いいや。今、零児に変わって俺がオシオキしておこう。」

「は？　や、やめいっ！　ヌシの仕置きは、本気でシャレになって……！」

「ハイハ～イ、ちょっとこっちおいで～♪」

？アグラッドヘイムの情報は？　今北産業。

「チョコバナナに笛吹かれて意識朦朧。知～らない↑結論。あ、後ろの扉から先に進めるよ♪」

「それと、エレベーターも頼むぜ。ここから歩いて地上に戻るのも大変なんでな。」

「はいよ♪　ちょい待ってね～。んっと……で、これを……っと、よっし♪

後は後ろの扉を進めば、新ロストエレンシア大陸へ上陸できるから。」

「ありがとうございます、クレオ殿。」

「これで先に進めるってことね。時間を取られちゃったけど。」

ネージュのちょっとした嫌みに、思わず頬を膨らます可愛いクレオ（↑主観）。

すると、何かを思い出したかの様に、笑顔になる可愛いクレオ（↑主観）。

「そんなに根を持たないでよ。

ん～、そうだなあ……しょうがないから、ウチのお菓子箱を見せてあげようか。

お菓子ショップ『ファッティ・ヘンゼル』の店開きといくよ♪」

「いよっ、待ってました！」

「そうそう、そうこなくちゃねェ。」

そして、財布がレイフ○される瞬間である（ゲーム的な意味で）。

水飴五万とかおまェ……ｏｒｚ

まぁ、鋼の魂に比べれば可成り安いけど……消耗品だし……

…七十万ェ……ｏｒｚ

そんな悲しい現実とは裏腹に、何人かが大喜びする中で、喜びそうな女性陣はと言うと……？

「“お菓子専門”……。……乙女の敵ですわね。」

「あ……ああ……な、なんという強敵……！」

「ぐっ……！　揺れるな、わしの心……！　おやつは覚悟を鈍らせる……！　アイタタタ……。」

「わらわは負けぬぞよ？

この格好で下腹が出っ張ったりしたら、惨劇としか言いようがないのである。」

どうやら、己が体型と相談して、可成り渋っている様である。

そこに、ＡＫＹカイト（あえてうまをなかった）が、皆が激震する言葉で突っ込んだ。

「まぁ、お前達じゃ、どんなに心が揺れても胸は揺れようが無いがな。」

「バカイト……ちょっとツラ貸してくれるかの？」

「ふむ……わらわも手を貸そうぞ。本気での。」

「キュオンも容赦しないよ！」

「ハッハッハ……さあ、逝くぞ皆の衆。当方に体重計の用意あり。覚悟完了？」

「ぐ……ぐはっ！」

「……な、何と……恐ろしい……！」

「ま、まさか……こんなに早く最終兵器を持ち出して来るなんて……！！」

「……汚い……！　さすがバカイトきたない！！！」

思わず本気で切れ掛かった俎板女性陣達からのＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩも、

カイトの最強業……『体重計』によって、無惨にも戦う前から敗北を喫していた。

「フッ……我ニ敵ナシ。」

「全く……にしても、姫さんたちは特に気をつけた方がいいんじゃないのかい？」

「でも……ほんのドちょっとくらいなら……。」

「そうですよね♪　ちょっとくらいなら大丈夫でぶ！」

「いや、もう始まってない！？」

他にも色々と彼(あれ)や是(これ)やツッコミ所は満載だったが、流石にそれでは話の収拾が付かないので、

ハーケン達によるストッパーが入り、買い物をするカイトを残して、

皆さっさと、ここを抜けた先にある龍寓島(りゅうぐうとう)に向かった。

その隙に、ちゃっかりカイトが賞金首を狩っていた事には気付かなかった面々であったとさ。

「うおっ、眩しっ！」

「言うと思った！　絶対に言うと思ったわい！！」

「んじゃ、こっちかな？　うーーーみーーーー！！！！」

「喧(やかま)しいわっ、バカイト！！」

「お店♪　お店♪」

「……お前達、燥ぐ気持ちは判るが、もう少し落ち着けよ。
にしても……ようやく新ロストエレンシアに戻ってこれたか……やれやれだな。」

「ここにも黒ミルトカイル石が現れてるのねェ。」

「……わらわがこすもすと一緒にこのあたりまで来た時にはなかったぞよ？」

「じゃあ、つい最近出現したってことね。」

「む？　それが砕かれまくられてないということは……。」

「はい。ヘイムレンはまだ北へは行っていないということになります。」

「思ったよりも離されてないのかもしれませんわね。」

「お店♪　お店♪」

「あの……琥魔さん、お話聞いてます？」

「まぁまぁ、積もる話は後にして、取り敢えず休もうぜ～。琥魔もこう言ってるんだしさ～。」

「ＯＫ、ダ・キャット&ミスターヘタレ。わかったよ。

取り敢えず、リューグー・アイランドで装備を整えるとするか。」

～Ｂａｔｔｌｅ　１～

「剛錬のアレディ……相手になる！」

「ぬしのその手が、真っ赤に燃える！」

「勝利のために轟き、破壊する！」

「俺のこの手が光って唸る！　お前を倒せと輝き叫ぶ！　フハハハハ……！

これが、シャイニングフィンガーというものだ！！！　フハハハハハハ……！！

我が世の春が来た！　私は今、絶好調であーーーーーるぅーーーーー！！！！！」

「……良い事、アレディ。あれは遣り過ぎと言うの。ああいう風に

は決してならない様にね。」

「……は、はい。あの域に達するにはまだまだ……！　ですが、又一つ、貴女に教わりました。」

「……では、勝利者インタビューを。」

「え？　あ、え～と……勝ちました。と言いますか、アシェン殿。勝ったのはカイト殿では？」

「……あの状態のヤツに近付けと？」

「……誠に申し訳有りません。」

「謝っちゃった！？」

ｓｉｄｅ：龍寓島

「これで一息つけるぜ。……軽く情報を整理しようか。」

と言うハーケンの言葉に従い、改めて敵と現在の目的、その他諸々を確認しよう。

敵：ゲルダ一派の修羅（凍鏡（とうきょう）のゲルダ、操音（そうおん）のヘイムレン、？？？、？？？）

　アグラッドヘイム（？？？、ロック・アイ、沙夜、？？？、？？？、？？？×？

　ヴァナー・ガンド、ヘラ・ガンド、ジョーム・ガンド）

　シャドウミラー（Ｗ０３＆Ｗ０６＆？？？）

　Ｔ－ｅｌｏｓ（テロス）

目的：ゲル（ｒｙ＝目下、ヘイムレンがアルクオンをストーカー中。

　アグラ（ｒｙ＝現在、波国（はこく）へは不干渉。魂云々発言も謎。

クロスゲートが目的？

　影鏡＝何事か暗躍中。警戒するに越した事は無い。

　Ｔ－エロス＝邪神（モッコス）様の後を追って、シュラーフェン・セレストへ。

「それだけの数の敵が……この大陸に？」

「あ～、面倒くさいねえ……。片っ端から送り返した方がいいんじゃないのかい？」

「送り返して貰いたい所じゃが……

沙夜がこちらに来ているというのでは、黙って返るわけにものう。

あと、ＫＯＳ－ＭＯＳも来ておるんじゃったな。……じゃから、引っ付くなバカイト！！／／／／／／」

「……いつまで、何をやっておるか。それに、あやつはさすがにもう帰ったと思うぞよ？」

もう話す事は無いかな？　と、そう思われた時。唐突にハーケンが後ろを振り返り、

既に、殆どマスコットと化している駄狐と戯れていたカイトに問い掛けた。

「と言う事だが……どうだい、カイト？」

「ん？　何で俺に聞くん？」

「アンタ、俺達に初めて会った時に言っただろ？　『俺は全てを知

っている』ってな。」

「まぁ、言ったけど……ま、いっか。どうせ分かる事だし。」

「……やっぱ、何か知っているのか？」

そのカイトの言葉に、思わず双眸を鋭くさせるハーケン達。

一字一句逃すまいとしている皆を気にもせず、カイトは衝撃の事実を告げた。

「ん～。取り敢えず、少し休憩したら、急いでシュラーフェン・セレストに向かった方がいい。

未だＫＯＳ－ＭＯＳ帰って無いし。早くしないと、Ｔ－ｅｌｏｓと鉢合わせしちまうからな。」

「なんとな！？　あれから、もう随分経っておるぞえ？」

「例え転移出来たとしても、どうせエンドレス・フロンティアに戻される。

今のこの世界はそういう仕組みになっているからな。」

「……そりゃまた、何で？」

カイトの意味深な台詞に、益々疑念を深めて訊ねるが……。

「ん～？　まぁ、おいおい分かるだろうさ。そう慌てんなよ。

あ、それから、チョコバナナの方は気にする必要は全く無いぞ。

どうせ、ゲルダ程度じゃアルクオンはどうにも出来んよ。ましてや木っ端のヘイムレンじゃな。

アグラッドヘイムとWシリーズは、弥(いや)が上にも関わらざるを得ないからなぁ。

ま、今は気にする必要は皆無だな。そっちもどうせ何れ分かるし。」

「……で、それだけの事を知ってるアンタは、本当に何者なんだ？」

余りにも、色々と知り過ぎているカイトに否応にも警戒する皆。

だが何より、外(はぐ)らかされるのはゴメンだと、改めて問い直そうとした所、

別方向からストップが入った。

「……ちょっと待って。彼が言ってる事が本当とは限らないのでは無くって？」

「……いや、間違い無いだろう。……まぁ、俺の勘だがな。

少なくとも、嘘を付いてる様には見えないし、

何より、今の段階で俺達を騙して得する事はカイトには何も無い。」

「……まぁ、確かに。」

「こいつのアホさ加減はともかく。少なくともこやつの、未来が関係する知識の豊富さは、

間違いないのじゃ。それだけは、わしが保証するでの。」

小牟の援護もあり、一旦は騒つきも収まった一行。
結局、結論はハーケンに委ねられる事になったが……。

「……で、どうするの、ハーケン？」

「……ＯＫ。取り敢えず、アンタを信じよう。いや、正確にはアンタを信じる小牟を……だ。」

「了～解。ほんじゃ、少し休むかすぐ出発するか、どっちかにしようぜ。

休むんなら、琥魔の店で買い物もしてやらんとな。一応、約束したし。」

「休みましょう♪　休みましょう♪　お店♪　お店♪」

「……ＯＫ、イービル・マーチャント。じゃ、ＫＯＳ－ＭＯＳには悪いが、少し休ませて貰うとするか。」

其の後、皆の分の買い物も済ませ、ホクホク顔でいる常に猫撫で声の琥魔という珍しい姿も見。

……どの程度だろうか？　三十分……否、一時間だろうか？

その程度休んだ後、当初の目的地……ＫＯＳ－ＭＯＳの待つ、シュラーフェン・セレストに向かった。

カイトへの疑念は未だ晴れぬ儘であったが、敵が味方になる例は今に始まった事じゃないと、

各々、敵であった者も改めて考え直し、何時も通りにカイトと接するのであった。

……いや、カイト敵じゃ無いからね？

と言う作者の声が、聞こえる筈も無かったのは言う迄も無かった。

第貳話【混沌を望む声～ＲＡＩＬ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＤＡＮＧＥＲＺＯＮＥ～】

如何でしたでしょうか？

道中の通常戦闘は、本文の様に　～Ｂａｔｔｌｅ　Ｘ～　として、会話文だけをネタ天こ盛りで書いて行きたいと思っております。

ボス戦も大して重要では無い物は、基本的にスルーで行きたいと思っております。

一部、そもそもボス戦自体出来無い箇所も有るし……；；；；

べ、別に戦闘描写が苦手だから、書かなかった訳じゃ無いんだからねっ！

そ、そこんとこ、勘違いしないでよねっ！！

次話は邪神様こと、ふつくしいあの御方の登場です。私の小説におけるサブヒロインでもあります。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第参話【力への意志～混沌へと続く行列（マトリックス）～】（前書き）

現時刻（００：５５）
ＰＶ：２，２１６，０３６アクセス　ユニーク：１８５，０６６人
皆様、何時も有難う御座います。

今回は、龍寓島～シュラーフェン・セレスト前編です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

第参話【力への意志～混沌へと続く行列（マトリックス）～】

ｓｉｄｅ：シュラーフェン・セレストへの道中

カイトの言葉に取り敢えず従って道形（みちなり）に進み、

ＫＯＳ－ＭＯＳが未だ居ると言うシュラーフェン・セレストに向かって進む一行。

その途中、山を隔てた隣の大陸から猛烈な寒気が吹いて来、

思わず身を縮（ちぢ）こまして立ち止まる面々。良く見ると、どうやら、山脈自体も凍っている様だ。

「ひゃあっ！　寒っ！　何ですか、急に！　氷！？」

「ああ、ここ最近……急にこのあたりが寒波に襲われてな。」

「そうでございます。夜は特に冷え込みが激しく、暖房が欠かせません。」

「もしかして、これもアグラッドなんとかの仕業かい？」

「……。……修羅かもしれません。」

「おいおい、どういうことだ？」

「敵対する修羅……ゲルダ・ミロワールは、あらゆるものを凍てつかせる覇気の使い手です。」

「いくらなんでも、この規模は無理がありすぎでしょ。シュラは関係ないんじゃない？」

「……と言う事だが、どうなんだ、カイト？」

「ん？　ああ、そうだよ。こいつはゲルダの仕業だ。

メイシスのヤツは、ペイリネスを使って同じレベルだから、

ひょっとしたらゲルダの方が修羅としては上かもな。

……いやでも、ゲルダもアレ使ってるし……結局どっこいだな。」

「……メイシス？」

「ああ。お前等とは違う国……羅国の出身の修羅の一人だ。

ま、この世界には関係無いし、気にすんな。」

「……分かりました。ですが……矢張り、凍鏡のゲルダの仕業でしたか。」

「……修羅ってのは、また大変な連中だな。」

「これが、沈黙（ゲルダ）する者の属性（アラインメント）……氷雪って所か。

果たして、雪解けの詩が聞こえて来るのは一体何時になるやら。」

「もう、何時迄も駄弁（だべ）ってないで！　ほらほら、ド寒いし！　早く行きましょ！」

「そうだな……では、行くか。静寂なる……否、静寂であるべき舞台……悠久の楼閣へと。」

第参話【力への意志～混沌へと続く行列（マトリックス）～】

～Ｂａｔｔｌｅ　２～

「私のギリギリ感を見てみる？」

「魅惑の腰つきねェ。でも、負けないわよ？」

「その腰……言うだけのことはあるようね。」

「ほっほっほ……わらわの腰にはついてこれまい？」

「その挑戦、受けてもよろしくてよ！」

「ほれほれ、わしの脚線美も見よ！」

「ほ～っほっほっほ！　その役目もいただきよ♪」

「私だって負けないんだから！　マスター！　見ててね～♪」

「お～！　いーぞー、おまえらー！！　ひゅ～ひゅ～♪♪

にしても……みんな、一体何と闘っているんだ？」

敵「「それ、俺達の台詞ナンスケド……ｏｒｚ」」」

“ですよねー。”

「ま、結果オーライってとこか。」

「課題の残る闘いでした……。」

「男どもの中では、そちはまともよな。」

「何？　俺がまともじゃないだと!?　では、誰が一番まともだと言うんだ?!」

「チッチッチ……フッ！」↑人差し指を左右に振った後、自分に親指を向けた

“……え？　ないわー……ハーケンはないわー。”

「……そこはノーコメントにしとくぜｏｒｚ」

「終わり良ければ一件落着です♪」

「ま、少なくとも、カイトがまともだけは絶対に有り得ませんわね。」

“うんうん。”

「……シャオ～、みんなが虐める～；；　モフモフ～；；」

「だあっ！／／／／　じゃから、引っ付くなと言うとるじゃろうが！！／／／／／／

泣きながらモフモフすなっ！／／／／　鬱陶しいわっ！！！／／／／」

「世の中そんなものである。……にしても、戯れがすぎるのではないかえ？」

ｓｉｄｅ；シュラーフェン・セレスト

道中、漫才と言う名の戦闘も交えつつ、意外とあっさりと辿り着いた。

その様は、まるで半身を埋められた戦艦が、砲身を天に向かって突

き出しているかの様な、
そんな馬鹿でかい様相を呈している遺跡であった。

「でかっ！　これが……。」

「うむ。シュラーフェン・セレスト……古代の頭脳戦艦じゃ。
こんな場所に融合したんじゃのう。」

「ガルっと唸るんだな、分かりますん。」

「……どっちだよ。」

何時も通りの漫才を繰り広げていると、アレディが何かに反応した。
どうやら、何者かが既に中に潜んでいる様である。

「む……っ！？」

「どうしました？　何か感じまくりだったりしましたか？」

「はい。覇気の残滓を感じます。……もしや、あの男が……？」

「流石は覇気センサー、パネェ。大正解だ。」

「……では、矢張り……。」

「ああ。アルクオンを追ってな……今、この中に入り込んでるよ。」

「……！　そうですか……アルクオンも。」

そのカイトの言葉に、改めて気を張るアレディ。

それを確認したカイトが、何時も通りに巫山戯た調子で。

……しかし、声色は真面目にしてアレディに問い掛けた……が。

「ああ。どうだ、アレディ？　少しは臍も固まったかい？」

「……。」

「ま、いいや。そう慌てる事も無いさ。取り敢えずさっさと入ろうぜ。アイツ達が待ってる。」

「すんなりとは帰れそうにないぞよ？　駄狐よ。」

「まあ、そんな気はしておったがのう。何せ、このバカイトもおる

事じゃしのう……。」

「……（アイツ達？　ＫＯＳ－ＭＯＳだけじゃ無いのか？）ＯＫ、がっかりフォックス。

腹をくくって行くしかないぜ。」

ｓｉｄｅ：シュラーフェン・セレスト内部

中に入って、少し進んだ先。その更に上部を眺めて、思わずハーケンが舌打ちをした。

既にシュラーフェン・セレスト内部も増殖した黒ミルトカイル石によって、

あちこち出入り口などを塞がれていたのだ。

「ちっ……なんてこった！」

「あれはミルトカイル石！　こんな所にも生えてるのね。」

「このシュラーフェン・セレストは、ミルトカイル石が多くてな。それ自体は珍しくないんだが……。」

「これじゃ先に進めないね……。」

「ふむ……わらわがこすもすと一緒にここに来た時、こんな所には生えていなかったぞよ？」

「これも、外の黒石と同じく、最近生えたということでございましょう。」

「壊されていないということは、ヘイムレンは奥には進んでいない……？」

「そういうこった。だから言っただろ？　慌てる必要は全く無いって。」

「……では、ヘイムレンは何処に？　この中にいる事は間違い無いのですが……。」

「まぁ、それも何れ分かるさ。取り敢えず、先に進もうぜ。」

「そうだねえ。それに、こっちにとっちゃ、都合がいい話じゃない

かい？」

「その通りです。このスベリギツネを転移装置に放り込み、スイッチを入れれば済みます。」

「人を洗濯物みたいに扱うでない！　あとスベっとらんわ！」

「いやいや、だから言っただろ？

今のこの世界では、向こうから来る事は出来ても、元の世界に来る事は出来無いってな。」

「……む、そう言えば、そうでございやがりました。」

すっかり忘れていた面々。結局、ＫＯＳ－ＭＯＳを迎えに来ただけの格好となったが。

……そんな時であった。ドロシーが一つ咳払いをして、皆の注目を集めたのは。

「おほんっ。皆さん、ひとつ大事なことを忘れておりません？

ミルトカイル石を壊すオズマゴスが手元にない今、

これ以上先に進むことはできないんですのよ？」

「あ、そうでした。どうしましょう……。一度引き返しますか？」

「心配無用だぜ、ボンバーガールズ。まだ手はあるんでな。」

「抜け道的なものがあるってこと？　カウボーイ。」

意気消沈ムードが流れた時、ハーケンが待ったを掛けた。どうやら、何とかなるらしい。

（ドロシー本人はボンバーでは無いな。勿論、下衆な意味で。）

そう思ったが、決して口には出さなかったカイトであった。

「そういうことさ。左奥の壁を見てみな？　こっちにもエントランスがあるのさ。

この先のエリアには、ブリッジへの直通エレベーターがある。」

「アラ、そんな便利なものが？」

「以前、オヤジが封鎖していたシークレットルートさ。

ＫＯＳ－ＭＯＳを迎えに行くならこっちの方が、却って都合がいいだろ。

アシェン、解除コードを送信してくれ。」

「ラジャーなのです。」

解除コードを受信した扉が、あっさりと開いた。それに驚愕するカイト。

「……バカな……！　アシェンが真面目に仕事をした……だと……！？」

「……後で、ねじって、ひねって、ヘシ折ります。」

「言いたいことは終わりまして？」

「いいから、先を急ごうぜ？」

～Ｂａｔｔｌｅ　３～

「ＯＫ、暴れん坊。好きにしていいぜ？」

「なんだかドキドキ極まりないです。」

「ＯＫ、興奮プリンセス。始めようぜ。」

「……で、神夜とはよろしくやっとるのかの？」

「そこはトップシークレットさ。」

「どう聞いてもエロく聞こえる罠。人、それを神鳴る音と言う！」

「どこの鎖を解き放ってるんじゃ、戯けが！」

「Ｌｉｍｉｔ　Ｏｖｅｒなら得意分野だぜ！」

「え？　これ、何てＣＨＡＯＳ？」

「時間がかかりすぎだな。」

「今の戦い……何を感じましたか？」

「ん？　まあ……ハラが減ったかな。」

「ふむ、マーボーカレーをおごっちゃるぞ？」

「それは……なんともおいしそうですね。」

「キュオン、おやつ食べた～い！」

「勝利の油揚げを先にいただくぞ？」

「働いてから言いやがりください。」

「とりあえず、一杯やらないかい？」

「それはいいですけど、お腹すきません？」

「出張商店、猫騒動（ねこそうどう）をよろしく！」

「真逆、食い物迄売ってるのか？　汚いなさすが琥魔きたない（褒め言葉）！！」

～Ｂａｔｔｌｅ　４～

「まずは、軽くたんざく斬りです♪」

「ぶった斬ってやってくださいませのです。」

「わかりましたでやんすのことです♪」

「悪党どもに情なぞかけぬぞ？」

「まさに情け無用じゃ！」

「イェイイェイ！　流離(さすら)いの無頼(ぶらい)共が驀進(ばくしん)するぜ！！！」

「うむ！　超破壊的戦闘集団、出動じゃ！」

「なんだか、すごく極悪な感じです……。」

「もう、汗疹(あせも)ができちゃいます……。」

「もうさ、出しちゃってもいいんじゃない？」

「さ、さらりと言わないでください！」

「ふむ、わしは阿波踊りでも踊るかのう。」

「アワオドリ……？　いやらしい感じである。」

「貴女達……もう少し、恥じらいというものをね。」

「うう……なんか腹立たしいですぅ。」

「軽く舞っただけでこれとは……。」

「ま、世の中そんなもんじゃて。」

邪魔っ気な雑魚共をやいのやいのと騒ぎながら薙ぎ倒して行くと、目の前にエレベーターの様なものが在る部屋に着いた。どうやら、これに乗って行く様だ。

早速、また邪魔が入らない内に、さっさと乗ってブリッジに向かう面々であった。

ｓｉｄｅ：シュラーフェン・セレスト　ブリッジ

そこには、カイトの言っていた通り、ＫＯＳ－ＭＯＳがいた。

どうやら、只管コンピューターに向かって、何かを打ち込んでいるようである。

「……。」

「なんとな？　こすもす！？　本当におったぞよ！？」

「おいおい、本当にまだ帰ってなかったのか？

いや……それとも、帰れなかったのか？　ロボビューティー。」

「この方がコスモス殿……。本当に機兵なのですか？

（これは……覇気？　いや、この感じは……なんだ？）」

何かを感じたアレディ。しかし、その事に誰が気付くでも無く。

ＫＯＳ－ＭＯＳが改めて自己紹介をし出した。

「私はＫＯＳ－ＭＯＳ。ヴェクター・インダストリー製、対グノーシス専用ヒト型掃討兵器。

この躯体（くたい）は、私の開発者であるシオン・ウヅキの手によるバージョン４です。」

「ふむ、相変わらず的確であるな。どこかのポンコツとは雲泥の差である。」

「緑のやつがアレな感じだから、もっとアレかと思ってたけど、いい感じじゃない？」

「そりゃ、較べる方が酷ってもんだろ。

と言うか、アレンと博士とスコットクン涙目だな、おい。」

「二人まとめて、ヘソにカラシとかを塗りこんでくれる。

それから、そこのヘタレは後で髪を引き千切ります。」

「だが断る。」

何時もの止まらない漫才に、流石に自分の事が関係すると少しは自身を律するのか、

小牟が、珍しく真っ当なツッコミを入れ、話を修正した。

「何をやっとるんじゃ、ガヤガヤやる前に、訊くことがあるじゃろうが。のう、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「シャオムゥ？　どうしてあなたが、この世界にいるのですか？」

「話せば長くなるんじゃが……この世界に召喚されてしまってのう。

え～と……そういうことなんじゃ。」

「みじかっ！」

「本当にどうしてくれようか、この駄狐。取り敢えず、後でお尻ペンペンだな。」

「ぬあっ！　じゃ、じゃからやめいと言うとろうが！

ヌシのはホンマにシャレになっとらんのじゃ！！」

「だからやるんだろ。先ずは、バカイトと言った数×百回かな？」

「じゃからやめんか、バカイト！！　……あ、し、しまった！」

矢張り、駄狐は駄狐だった。そのダ・フォックスの言葉に、珍しく険のある顔をしたＫＯＳ－ＭＯＳ。

何故か小牟と戯れているカイトをじっと見詰め……少し経った後、ハッとした表情になった。

それを待っていたのか、カイトが口の端をニヤリと持ち上げ、改めてＫＯＳ－ＭＯＳに向き合った。

すると、ＫＯＳ－ＭＯＳの瞳が赤から青に変わっていた。……誰一人、気付く者も無く。

そして、今迄の機械的な話し方から一転、実に人間味を帯びた話し方になった。

「――――もしや、救世主（メシア）？　本当に……あの救世主（メシア）なのですか？」

「ああ。ようやっと思い出したか、ＫＯＳ－ＭＯＳ。いや……マリア。」

「……御懐かしゅう御座います、救世主（メシア）。幾星霜振りで御座いましょうか？」

「さて。俺とお前達では時間の進み方が違うのでな。

だが、お前達の時間帯で言うと……凡そ数千年振りか？」

「はい……凡そ、そのくらいかと。御健勝な御様子……一安心致しました。」

「そうか。まぁ、取り敢えず立つといい。何時迄もその儘で話すのは、俺も億劫なのでな。」

「はい、では御言葉に甘えさせて頂きます。」

“……ポカーン。”

カイトを沙夜同様救世主（メシア）と呼び、表情豊かになったＫＯＳ－ＭＯＳに驚く皆を置いてけ堀にして、

唐突にカイトの目の前で片膝を突き、

まるで彼の騎士であるかの様に敬愛の礼をとるＫＯＳ－ＭＯＳ。
最早開いた口が塞がらない皆を其方退(そっちの)けにし、旧知の仲であるかの様に親しく会話する二人。

「所で救世主(メシア)。貴方がいらっしゃるという事は……。」

「そういう事だ。この世界からは出られない……お前も、Ｔ－ｅｌｏｓも。入る事は出来るがな。」

「……矢張り……御存知でしたか。」

「まぁ、積もる話は後だ。先ずは、今やるべき事をやらねばな。話は追々(おいおい)、道中でしよう。」

「はい。私もその方がいいと思います。」

「んじゃ、取り敢えずアシェン。今迄の情報(データ)をＫＯＳ－ＭＯＳに転送してやってくれ。」

その余りにも考えられなかった光景に、思わず一時思考停止していた面々であったが、
カイトに水を向けられた事で、何とか意識を此岸に戻せた様だ。

そのカイトからの唐突な指示に思わず躊躇うアシェンであったが……。

「……艦長、宜しいので？」

「……ああ、やってくれ。」

「畏まったりしちゃうのです。では、行くぞＫＯＳ－ＭＯＳ。うりゃさ～！」

～ダウンロード中……完了～

「……そうですか。矢張り、Ｔ－ｅｌｏｓも既に……。」

「そういうことである。……というか、会っておらんのかえ？」

「艦内では、転移装置から現れたと思われるグノーシスを確認していますが、

……Ｔ－ｅｌｏｓは未確認です。」

「おかしいねえ。

アンタを壊しに行くって、ドロシーの城をノリノリで出て行ったんだけどねえ。」

「ここは黒ミルトカイル石が多い。意外と足止めを食ったりしてるのかもな。」

「え、何？　つまり、涙目で『壊れろ黒石！』とかってＴ－ｅｌｏｓが暴れてるって？

何その歩く萌えっ娘？　ちょっと、一体御持ち帰りしたいな。本気と書いてマジで。」

そのカイトの空気を読まない台詞に、思わずげんなりする一行であった。

結局、話題はその儘逸(そ)れ、ＫＯＳ－ＭＯＳを再度仲間に引き入れ、先に進む事になったのであった。

第参話【力への意志～混沌へと続く行列（マトリックス）～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓの関係、そして『マリア』という言葉の意味。

それらは、原作『ゼノサーガ？・？・？』をプレイして下さい。

『？』はＰＳ２のみですが、『？・？』だけならば、ＤＳでセットとして売っていますので、

興味を持たれた方は是非共、御購入下さい。

ぶっちゃけ、私も原作は未プレイなので、推測でしか知り得ません。

ですので、何か間違い等が御座いましたら、どうか御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第肆話【それぞれの大儀のために～戦う者たちの思惑～】（前書き）

現時刻（２１：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，２３１，６０２アクセス　ユニーク：１８６，２０３人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、シュラーフェン・セレスト前編～中編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第肆話【それぞれの大儀のために～戦う者たちの思惑～】

ｓｉｄｅ：シュラーフェン・セレスト　内部

駄狐がカイトにオシオキされ、ＫＯＳ－ＭＯＳがカイトを認識した後。

改めて、ＫＯＳ－ＭＯＳが現状を説明し出した。

「元の世界に戻る手段だった転移装置が、システムダウンを起こしてしまったのです。

その再起動には、ブリッジで認証コードを入力する必要があった為、

この場で作業をしていました。」

「ま、だろうな。この世界が回帰を拒んでいるからな。

さっきＫＯＳ－ＭＯＳが言った通り、グノーシス等喚び込む事は出来るが、その逆は不可能だ。

まぁ、何にしても他にする事も無いし、とっとと電源でもポチっと押しに行きますかね。」

「……ああ、そうだな。余りまごまごしてる時間は無さそうだ。取り敢えず、転移装置を起動させに行くか。何か変わるかも知れない。

……いいな？　ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「はい。状況を考慮すれば、仕方がありません。

ですが今現在、再起動に必要なブリッジの電源供給が一部断たれています。」

「そうなると、ジェネレータールームに行く必要があるな。」

「よいよい。で、その『ぜねれーたーるーむ』とやらは、どこにあったかの？」

「すぐそこさ。ここから左に出た所にある、エレベーターを下りるだけさ。

さ、行こうぜ、ＫＯＳ－ＭＯＳ。……カイトもいつまでも、ダ・フォックスと遊んでないで、な。」

「了解です。作戦行動として、戦列に加わります。」

「ウィ～ッス。」

「誰も遊んでなどおらぬわっ！　って、じゃからダ・フォックスを定着させようとすなっ！！！」

「もう手遅れだろ、常識的に考えて。」

“うんうん。”

「……ヌシら……後で覚えちょれよ！」

其の後、ワイワイガヤガヤと更に喧しく進み、すぐ側にあったエレベーターに乗り込んだ一行。

その下りた先に待ち受けていた者とは――――。

様々な思惑が交錯する場――――シュラーフェン・セレスト。

この悠久なる楼閣に、憩いが訪れる日は来るのだろうか。――それは未だ、誰にも分からない。

第肆話【それぞれの大儀のために～戦う者たちの思惑～】

「……。」

「……ッ！」

「アレディ、この男は！」

「なにっ！？　知っておるのか、アレディ！」

「……アグラッドヘイムの名を聞いた時から、会うことになるだろうと思っていました。」

「む？　貴公は……シュラの若者か。名は確か、アレディ。アレディ・ナアシュ……。

我が名はリグ。アグラッドヘイムの門を守る、リグ・ザ・ガード。

なるほど、報告にあった敵対者とは貴公のことであったか。」

その場に居た者の名は、リグ・ザ・ガード。本人が名乗った通り、アグラッドヘイムの門番。

同じくアグラッドヘイムの幹部、ロック・アイの唯一無二の友。

そして、何人たりとも侵入を許した事の無い、覇龍の塔への侵入を許した唯一の豪敵である。

「アグラッドヘイムのリグ……。ロックちゃんが『我が友』とか言ってたヒトね？

ウフフ……。ねェ、アレディ。どんなカ・ン・ケ・イなのかしら？」

「……。波国がこの世界に瞬転する前……アグラッドヘイムとの戦いにおいて、

唯一、覇龍の塔に踏み込んだ男。」

「因縁の相手ってことみたいだねえ。」

「そういうこと。その時は私も一緒に戦ったけど……かなりド手ごわい男よ。」

「あの時、師匠がいなければ……私はここにはいなかったでしょう。」

カッツェ達が隙を伺いながらアレディに話し掛ける。しかし、一部の隙も見えない。

アレディやネージュの言葉もあって、益々警戒する皆。

そんな中、当時を思い出して悔しがるアレディの、言葉の中に出た名前にリグが反応した。

「貴公の師……シンディ・バードか。かの闘士もこの世界に？」

「はい。覇龍の塔を守っています。」

「そうか。我らの計画が成就する前に……雌雄を決さなねばなるま

いな。」

「次は、そちがわらわたちの質問に答える番である。ここで何をしているのかえ？」

「……。」

自身が聞きたい事を聞いた後は、又、直ぐに黙り（だんま）を決め込んだ。

何とか口を割らせようとしたのだが……。

「この艦の転移装置……あなたの目的はそれではないのですか？」

「ツルっと口を滑らせちゃいなって！」

「我が目的を知ってどうする？」

「キュオンたちは転移装置を使って、ＫＯＳ－ＭＯＳたちを元の世界に戻せるか試すつもりだから、

キミの目的とかぶってたりしたらマズいじゃん？」

「ちょ、ちょっと！　キュオンちゃん！」

「……やはり、この艦には異世界とつながる門が存在するということか。」

「あ……。」

残念な事に、敵は内側にも居たのであった。

あっさり情報を漏らしたキュオンが、アレディにオシオキされている効果音が狭い場所に響く。

何か、疲れた雰囲気を見せるリグにも御構い無く、掌打（しょうだ）は続いた。

「……アレディ、掌打。」「仕方ありません……！」「はひぃ！」

「え？　何？　この『チャッヒ○ー、餌！』的な流れ？　マジ完璧過ぎね？」　パシンッ！

「情報の漏洩（ろうえい）には細心の注意を払うべきです、キュオン。」　ビシィィッ！！

「……その通りだ。語るべきことは拳で語ればよいだけのこと。

……違うか？　シュラの若者よ。」　パシィッッッ！！！

リグに話し掛けられ、何とか一時的に掌打もし終え、一息付くアレディ。

一体、何の修練なのか。そんな野暮な事を言う者は、ここには一人もいなかった。

そして、戦闘が始まった。

「……ふぅ……その通りです、リグ・ザ・ガード。

あれから、私も修練を積みました。……その力、お見せしましょう。」

「……いいだろう。我もあの時の戦いでシュラの業は盗ませてもらった。」

「……！」

「我らアグラッドヘイムに仇成す者たちよ。……覚悟してもらう！」

～ＴＡＣＯ・ＮＡ・ＧＵ・ＲＩ！　中～

「グウッ！　……腕を上げたな、アレディ。
そして、これほどの戦力を手中に収めていようとは……誤算だった。」

「協力者である、この世界の闘士の力があってこそです。……私の力ではありません。」

「いやぁ、それ程でも。」

“お前（貴方）は何にもしてないだろうが（でしょう）！！！”

「　ののののののののの（´・ω・`）」

「……うざっ。」「……くっ……！　萌えたら負けじゃ……負けじゃと言うのに……ッ！」

つい、ノリで言ってしまったカイトに、総ツッコミをする皆々。

思わずショボーンとなって、隅っこで地面にのの字を書き始めるカイト。

殆どの者が思った事をネージュが代弁し、極一部の者の感想を小牟が代弁していた。

それを見て、尚疲れが増した様な感じを見せるリグ。

だが敢えてそれを無視して、アレディに話し掛けて来た。彼と相対した誰もが言う、同じ言葉を。

「……それが貴公の『迷い』か？　……違うな。

以前の貴公は、今より未熟なれど……拳に迷いはなかった。」

「……。」

「まあいい。我が使命……すでに終わっている。

この艦に……『大規模な門』を開く力は残っていない。」

「……この艦の主砲のことだな？」

「……そうだ。」

「主砲？　ここには何があるのです？」

「正確には『あった』でしたのです。」

其処で一旦言葉が途切れ、ハーケンの視線が未だ地面にのの字を書いてるカイトに向けられ、

それに合わせて皆の視線もカイトに集中した。
その視線に気付いたのか、それともショボくれるのにもう飽きたのか。
よっこらせっと言って立ち上がって、何事も無かったかの様に徐(おもむろ)に解説を始めた。

「まぁ、分かり易く言えばだ。
アインストっていう、ホームシックに罹(かか)ったガキんちょ共がいる所へ繋がっててな。
そこに、ツァイト・クロコディールごと突っ込んで、敵の親玉をハーケンがぶっ飛ばし。
で、今に至るってな訳だ。でもまぁ、今はもう、あの主砲ぶっ壊れてて使えないけどな。」

「……その通りだ。主砲は使えなくなった。焼き切れたか、破損したのだろう。」

「でも、それを調べてどうするの？　口は滑らないの？」

「語る必要はない。……だが、戻る前に一つ、貴公に聞きたい。」

「……あん？　俺？　何か用か？」

もう話は終わりだろうと、誰しもが思っていた所、唐突にリグがカイトに話し掛けて来た。

どうやら、カイトもそれは想定外だった様で、不思議がりながらもその問い掛けに答えた。

「……何故、今の戦いに加わらなかった？　貴公は戦えぬ訳ではあるまい。

いや、寧ろ限り無く強き者であろう。何故……何故、今、我と豪拳を交え無かった？」

「何故って……お前、あのなぁ。

白地（あからさま）に実力が見え見えの雑魚相手に、俺が戦う訳が無ぇだろうが。

俺はな、弱い者虐（いじ）めは嫌いなんだよ。」

「嘘じゃな。」「救世主（メシア）、嘘はいけません。況（ま）してや、貴方がついては猶の事です。」

「よし、其処な二人共。お前等、後で体育館倉庫の裏な。」

「救世主（メシア）……この世界（エンドレスロンティア）には体育館というものは、無いと思われます

が。」

「え？　そこ？　ツッコミどころ、そこなの？」

矢張り始まる、何時もの漫才。だが、今回ばかりは流石のカイトも自重する様だ。

珍しく……と言うか、この世界に来て初めて皆にツッコミを入れ、話の軌道を修正した。

「お前等、少しＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ。まぁ、そういう訳だ。

俺と闘いたかったら、ノンビリ門番なんぞしてねぇで、少しは己が腕を磨け。」

「……相分かった。

では、また会おう、シュラの若者よ。そして、救世主（メシア）……否、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。

……共にふさわしき舞台で。」

「……。」

そう言い残して、さっと姿を消したリグ。

その最後の言葉に、何か不吉な予感を感じながらも、その姿を黙って見送る一同。

そして、その姿が見えなくなってから、誰とも無く話し出した。

「行っちゃいましたね。謎めいてること極まりないです。」

「はあ、先に進めば進むほど、面倒なことに首を突っ込むことになってないかい？」

「片っ端から片付けていくしかないんじゃないかしら？」

「賛成でごわす。

まずは、転移装置を起動させる為にも、ブリッジの非常電源を入れましょうなのです。」

「そうそう、さっさと行こうぜ。何せ、アイツがずっと待っててくれてるんだからな。」

「（……アイツ？　まだ、シュラ以外に何かいるのか？）そうだな。

この左右の通路のどちらかにあった筈だ。手分けしてスイッチを入れて来るか。」

～Ｂａｔｔｌｅ　５～

「軽～く、千ヒットはぶち込むよん！　と言う事で、二万発くらい先に叩き込んで下さい。」

「私では百発が限度。情けない……！」

「フルボッコにしちゃろうかのう♪」

「はい、全力で打ち込みます……！」

「痛み……それは私にとって……。」

「む？　何故コスモス殿から覇気が……？」

「ヒャッハーーーッッ！！！　軽～く、一億発ぐらいぶち込むぜ！

ヤーーーハーーーー！！！！！

って言うか、何気にマリアのM発言に、お兄さんビックリだ！？」

「……救世主（メシア）？　後で少し、宜しいですか？」

「……テヘペロ☆」

「楽して勝つのはいちばんいいです。」

「終わりか。これでは修練にならない。」

「とんだ修行マニアでござんすですね。」

「敵も味方もザコぞろいだったニャ。」

「何か言いましたか？　腐れ腹黒猫。」

「ほれほれ、勝利のおたけびじゃ！」

「イィーーチバーーーーン！」

「ヤマザキは何処だ？！」

“……誰？　ヤマザキって？”

～Ｂａｔｔｌｅ　６～

「わらわの舞いを見せつけてくれよう。」

「修羅の戦い、お見せしましょう。」

「うむ。目にもの見せてやるがよい。」

「思い知らせちゃいまするか？　艦長。」

「ブロウニング・ファミリーのやり方ってやつをな。」

「猫の手も借りたりしちゃいますのです。」

「手でも足でも腰でも貸すわよぉ？」

「では、腰を振り始めてください。」

「わらわのうねりに驚くがよい。」
「錫華は不思議な踊りを踊った。カッツェは不思議な踊りを踊った。
敵は恐れを成して逃げた。
今北産業の方、分かったかなー？」

「煮えきらぬ相手であったな。」
「優雅さがまだまだじゃないかしら？」
「何を言うか。雅まくりである。」
「鏡玉とかはやりすぎかと……。」
「ちょっと刺激的すぎたかしら？」

「錫華よ、ちとサービスしてやれい。」
「かまわぬぞ？　っていうか、狂喜乱舞？」
「本気のダンスを見せてほしいね。」

「やったら通報されるのでダメである。」

「はいはい、お開きの時間ですわよ。」

電源を入れ、ブリッジで操作をして転移装置を作動させた一行。

それと同時に、奥のエレベーターの電源も入ったので、それに乗って下に下り、

辺りを何人かで物色しながら更に先に進むと、或る程度開けた場所に来た。

其処には様々な、見る人が見なければガラクタにしか見えない物が散乱していた。

そのお宝に目を爛々に輝かせる、プロの盗掘団。

そして、そのガラクタらしき物を一つ一つ確認していくカイトの姿があった。

「OK、エブリワン。ここが転移装置ルームさ。」

「なにこれ？　ド汚い部屋ですこと！」

「見る目がありませんわね。ここにあるお宝の価値もわからないとは！」

「物の価値のわからない方でございます。さすがは持ち腐れ姫。」

「何が持ち腐れ姫か！」

「アタシ、ここに入るのは初めてだけど……ナルホド、なかなか魅力的ねェ。」

「あたしもだよ。ロストエレンシアとは交流がなかったからねえ。

……ちょいちょい洗えば、商売になりそうじゃないか。」

「なんか、皆さん目がギラギラしてます……。」

「そりゃみんな商売人だからね♪　仕入れにはうるさいプロの目だよん。」

「艦長、このプロの盗掘団ども、まとめてどこかに転移させた方がいいのでは？」

「まあ、今回は大目に見るさ。先にやることもたくさんあるしな。」

「ここにある大量の品は、すべて異邦の地から瞬転してきたものなのですか？」

「そういうことさ。だが、ほとんどまともに動いてなくてな。

……ミスター・カイト。アンタなら、何か知ってるんじゃないか？」

ハーケンに水を向けられ、落ちている物を改めて見回すカイト。

其の後、カイトがこの部屋に在る物を確認しながら列挙していくと、その名前の内の幾つかに、反応を示す者が数人居た。

「……そうだな、ここに在る物を列挙するだけでも……。

アウセンザイターの頭部、アルトアイゼン・リーゼのリボルビン

グ・バンカー、

ラーズアングリフの頭部、あのＢＦのパーツは……コンパチブルカイザーの胸部かな？

それにアレは……どの種類かは判らないが、恐らくゲシュペンスト系統の頭部だろう。

後は……ああ、アレらはＷ１７のアンジュルグの弓と剣だろうか？

それから、あの斬艦刀は参式？　いや、ダイゼンガーのかも知れんな。

取り敢えず、パッと見で判るのはそれぐらいか。」

「――――アルトアイゼン……ですって……？　それって、まさかナハトの……？！

で、でも、色が……？」

「ゲシュペンスト……系統……だと？　……ファントムは一体だけじゃ無いのか？」

「Ｗ１７？　……Ｗシリーズには、未だ後継機があったのか？」

「ざんかんとう？　私の刀と同じ……？」

「ま、疑問にはその内、幾つか答えてやるよ。取り敢えず、今は先に進もうぜ。」

「……分かった。今は先を進むとしようか。」

渋々ながらも、言質（げんち）は取ったとして、先に進もうとするハーケン達。

だが、そこに待ったが掛かった。

「む？　しかしチャラコフスキーよ。どれもまともに動いておらぬと申しておったな？」

「心配無用さ、腹プリンセス。

この先のブロックに、ビッグサイズの転移装置がある。目的地はそこさ。」

「……。その場所に興味を持つ者がいるようです。」

「アレディ？　もしかして……。」

「はい。羅刹機アルクオン……あの機兵の覇気を感じます。」

「だから、言っただろう？　待ち人が居るってな。

早く行こうぜ。アイツもそろそろ待ち草臥れて居る頃だろうしな。」

先程からカイトが言っていたアイツとは、アルクオンの事だったのか。

やっと、その意味を理解した一行は、アレディの覇気センサーとカイトの言葉に導かれるが儘に、

先に進……もうとした、その時だった。

「おっと、ちょっと待っていただこうかねえ。

まさか、僕よりも早くここにたどり着くとはねえ。……剛錬のアレディ君？」

「やはりここに来ていたか、操音のヘイムレン。」

「ほほう、この男が敵の修羅であるか。線の細いヤサ男であるな。」

「なるほど、チョコバナナ……理解しました。」

「ようこそ、シュラエネミー。話は良く聞くが、顔を合わせるのは初めてだな。」

「これはご丁寧に。アレディ君が世話になっているようで。

あとはネージュ姫様に……他にも、どこかでお会いした覚えのある女性もいるようだねえ。」

そう、待ったを掛けたのは、敵の修羅。操音のヘイムレンだった。

何人かが初めての挨拶をし、何人かが復讐心を燃やしていた。

……そして、唯一人。苛付いている者が居た事には、誰も気付いていなかった。

「そりゃどうも。アンタには会いたかったんだよ。ぶっ飛ばしてやりたくてさ！」

「まったくですわ。人を操るだけでは飽き足らず、城までメチャクチャにしたその罪……。

その頭のバナナに、火薬をパンパンに詰めた上で点火して差し上げますから覚悟おしッ！」

「こ、怖っ！」

「情けは無用ニャ。女心を惑わす外道を許すわけにはいかんニャア～。」

「あなただけ雇われてたでしょうが。」

「ヘイムレン、償いをする必要があるようだな。」

「これも男の勲章というやつだよ。それにしても……いつの間にか大所帯だねえ、アレディ君？

君はいつでも一人ではなかったかな？　やはり君は修羅として甘くなった。

……僕は以前の君の方が好きだねえ。」

「ああら！」「う、うほっ！」「そのような意味ではないと思いますが。」

何時もならば、真っ先にツッコミを入れているか、更にボケ倒す筈のカイトが、

只管（ひたすら）沈黙している事に少々訝しみながらも、話を続けた。

「この方々には、それぞれの目的がある。私が共にいるのは、偶然

に過ぎない。」

「そうかな……？　以前の君は、人を近づけることを恐れていたように感じたんだけどねえ。」

「愛想がなかっただけよ。私が何度も怒ったからか、最近はそうでもなくなったけど。」

「……。やはり、姫様のせいか。」

「関係ない。……ヘイムレン、話をするためにここに来たわけではないだろう。」

「僕の目的は、君と一緒さ。説明をする必要などないだろう？　それに、今の僕にもアルクオンの覇気を感じる。……そこをどいてもらおうかな？」

そのヘイムレンの言葉に身構える面々。

しかし……その必要は無くなった。否、出来無かった。

ヘイムレンの眼前で身構えていたアレディを押し退けて、カイトが前に出て来たからだ。

……誰の目にも判る程の、怒気と険しい顔を伴って。

「――――全く。ここは忌むべき訪問者が多くて困る。」

「ん？　……一体誰かな、君は？」

「『宇宙（そら）の救世主（メシア）』にして『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』、八神カイトだ。

キサマの主、ゲルダ・ミロワールならば、名前ぐらいは知ってるだろう。

そんな事よりも、疾く退け。今の貴様には、アルクオンを追う他にすべき事があるだろう？」

「……さて、そんなものがあったかな？

取り敢えず、今の僕の目的はアルクオンと、アレディ君と死合う事だけさ。

済まないが、そこをどいて貰えるかな？」

動揺なぞおくびにも出さずに、そう言い返すヘイムレン。

すると、カイトは益々苛立ちを顕わにして、ヘイムレンに最後通牒を突き付けた。

「聞こえなかったのか、ヘイムレン・シルバート？
三度は言わない。疾く退け。」
「……聞けるとでも？　何なら、力尽くでも退かしてみるかい？」
その瞬間であった。ヘイムレンの姿が唐突に消えたと思ったら、
ヘイムレンが入って来た入り口の、遙か上部の壁に叩き付けられて
居り、
その儘、重力に任せて自由落下していた。
皆がその事に気付けたのは、落ちた後に鳴り響いた轟音によるもの
だった。
「――――だから、言っただろう？　三度目は無いと。
相手の力量も見極められん雑魚が、図に乗るな。」

「――――――――いま、なにを？」

「只、蹴っ飛ばしただけだ。一応、手加減はしてやった。あの程度で死ぬならば、その程度と言う事だろう。それよりも先に行くぞ。」

そう言い放ち、唖然としている皆を置いて行き、さっさと先に進もうとするカイトだったが、

その途中で立ち止まり、忌々しそうに舌打ちをした。

「……チッ！　おい、そこのガラクタに紛れて隠れている奴。さっさと出て来い。」

「ギ……ギギ……ギガゴグガガッ！」

「！？　賞金首のゴルトアクシスか！」

「金剛機兵……こんな所に…！」

「キサマも俺の邪魔をするか？　それとも、黙ってそこに這い蹲(つくば)っているか……どっちだ？」

「ギギ……グガアァーーーッッ！！！」

そうカイトが問い掛けた後、少し逡巡……いや、怯んだ後、突然襲い掛かって来た。

全員慌てて構えようとしたが、それも途中の状態で止まり、皆の目が見開かれた。

何と、ゴルトアクシスの動きが空中で止まっているのだ。

その周りには、透明な糸が張られており、まるでその糸に縛られているかの様だった。

「キサマも邪魔をするか……。その儘、絡み付けクリスタルネット。」

そうカイトが呟くと、光に照らされて僅かに見える透明な糸が、

ギチギチとゴルトアクシスに纏(まと)わり付いて、一切の身動きが出来な

くなっていた。

「疾く消え失せろ――――雷光放電（ライトニングプラズマ）。」

その瞬間、カイトの手が消え、それと同時に光の線が無数に現れて、ゴルトアクシスを、見るも無惨な程に粉々にしてしまった。

だが、それでも尚、カイトは未だその一角に目を向けていた。

皆が思わず訝しんでいると、何と粉々になった筈のゴルトアクシスの部品が蠢（うごめ）き出し、

段々と中央に集まって再生……いや、融合をし出したのである。

それをカイトが確認した瞬間、バラバラになった部品がある空間全てが一瞬で氷漬けになった。

「……フリージングコフィン。ならば、再生など出来ぬ煉獄へと誘(いざな)おう。

今度こそ、永劫消え失せろ。――――星明識延(スターライオタスティンクション)。」

数多の光が全ての部品に飛んで行き、氷ごと何処(いずこ)かへ消えて行ってしまった。

唖然呆然とする皆に僅かに振り向き、不機嫌な声を隠そうともせずに言い放った。

「――――何をしている？　アルクオンが待っていると言っただろう……さっさと行くぞ。」

果たして、アルクオンとカイトの関係とは？　八神カイトとは、一体何者なのか。

何もかもが謎の、カイトのその出鱈目な強さと不気味さに、

警戒心を改めて持ち、彼から距離を取ったとて、一体誰が責められようか。

……そう。たった二人を除いた皆が、そう思ったとしても。

第肆話【それぞれの大儀のために～戦う者たちの思惑～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、アルクオン戦からです……が、

例によって例の如くボス戦はすっ飛ばしです。どうか、御諒承下さい。

果たして、カイトとアルクオンの関係とは一体？！

……まぁ、そんな大したものじゃ無いんですけどね；

あ、ヘイムレンｏｒ杉田智和さんファンの方、御免なさい。

私の小説の流れ上、ヘイムレンに見所は全くと言っていい程ありません。

アルクオン戦一戦目同様、どうか御諒承下さい。

……だって、ぶっちゃけアイツ、邪魔なだけなんだモン。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第伍話【呪われし闘士（ヘラクレス）～闘志、果てなく～】（前書き）

現時刻（０１：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，２３９，８９６アクセス　ユニーク：１８６，９９６人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、シュラーフェン・セレスト後編のみです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第伍話【呪われし闘士（ヘラクレス）～闘志、果てなく～】

ｓｉｄｅ：シュラーフェン・セレスト　転送ルーム

僅かに不機嫌なカイトを先頭に、スタスタとあっさりここまで来た。

道中、何体か敵の姿が見えたが、カイトの怒気を恐れてか……。

それとも、先程のカイトの攻撃を見たからか……物陰に潜んで出て来ようとはしなかった。

「……。」

「……アルクオン。」

「……。」

「ようやく会えたな、漆黒の羅刹機よ。……む？」

「……。」

「――――何――だと――――？」

初めてアルクオンを見た皆からは、その雄々しき姿に感歎の声が漏れた。

だが、自身に問い掛けるアレディィに構わず、

何故か入り口近くの壁に凭(もた)れ掛かって居たカイトに近付き、その目の前に跪(ひざまず)いた。

それはまるで忠節の臣であるかの様に、頭を垂れて臣下の礼を取っていた。

そして、同様にそれに応えるかの様に、カイトもアルクオンに声を掛けた。

「ああ、久しいな……アルクオン。息災だったか？」

「……。……。」

「そうか……ああ、大丈夫だ。今、お前の身に起こっている事は分かっている。

案ずるな、問題は無い。今は、その声に従って行動しておけ。何れ、お前も解き放たれる。」

「……。」

「フッ……そうだな。まぁ取り敢えず、そこに居る修羅と戦っておけ。

今は未だ限り無く未熟だが……何れ王（ナアシュ）と成る者だ。今の内に器の程を計っておけよ。

いつか来たるべき日のために……な。」

「……！　……。」

カイトからの労いの言葉に、僅かに身体を沈ませたアルクオン。肯定の意を示している様だ。

其の後、その姿勢の儘で頭のみを上げ、カイトを見上げた。

どうやら、何事かをカイトに訴えている様だが、皆には全く分からない。

だが、カイトだけには解る様で、アルクオンに言葉を掛けた。

すると、目に見えてアルクオンの雰囲気が和らいだ。

そして……カイトの言葉に従ったかの如く、

アレディの目の前に漆黒の修羅神が立ち塞がった。

第伍話【呪われし闘士（ヘラクレス）～闘志、果てなく～】

「くっ……！　これは一体どういう事だ……カイト？」

「どういうって……見たまんまだぞ？　アルクオンがお前達の実力を見たいんだってさ。

特に、アレディ・ナアシュ……お前の実力をな。」

「……。」

「……俺には、アンタがアルクオンっていう臣下に、命令してた様に見えるんだがね。」

「ん～……細かく言うと違うんだが、まぁ似た様なモンさ。

アルクオンの方から、勝手に俺を慕ってくれてるだけだからな。

そんな事より、好い加減構えた方がいいぜ？

そろそろ、アルクオンも痺れを切らしている様だしな。」

「……！！」

カイトの元を離れたと思ったら、今度は自分達の目の前に立ち開(はだか)るアルクオンに、

戸惑いを隠せない儘、カイトに詰問する一同。だが、カイトは寧ろ不思議そうな顔をし、

ハーケンからの問い掛けにも、何の気も無しに普通に答えていた。

そして、カイトの言葉に促されアルクオンを見ると、

まるで形を持ったかと誰しもが錯覚する程の猛烈な覇気と明確な敵意を伴って、

アルクオンが今か今かと身構えていた。

「……どうやら、このラセツキをどうにかしないと、ここは切り抜けられなさそうだな。」

「わかりました！　ここは不退転極まりなく参ります！」

「アレディ！　今度こそ目にもの見せて、バチっと決めておやりなさい！」

「羅刹機アルクオン、我が覇気を見せよう。

それがおまえに相応しいか否か……その目で、その覇気で確かめるがいい。

いくぞ……ッ！」

～覇気検定中～

「……。」

「アルクオンよ。我々の争覇は。異邦の地にて行うべきものではない……！

我が師が護る『覇龍の塔』……おまえがあるべき場所に帰るのだ！

漆黒の羅刹機、アルクオンよ！　我が覇気に応えよ！！」

「……。」

「空間の歪曲を確認。」

「いかん……！　転移装置が作動している……！？」

何とか、アルクオンに膝を突かせる事は出来たが、アレディの言葉には耳を貸さず、

結局その儘、何処かへと転移してしまった。……去り際に、僅かにカイトに視線を向けて。

その刹那、カイトが頷いたのを認識していたのは、唯一ハーケンのみだった。

「瞬転した!?　アルクオンッ!」

「もう少しだったのに!　機械が止まっていなかったってこと!?」

「おい、まさか……異世界へ転移したんじゃないだろうな?」

「……その可能性は低いと思われます。転送時のエネルギー反応は、通常転移のものです。」

「そうそう。行き場所は判ってるから、そう慌てんなよ。」

「……そうか。ま、だが行き先ついでに一応、転移装置を調べておくか。」

「あ、それ無理だから。」

「?　どうして?」

「見てれば判るさ。なぁ、マリア?」

行き先が判らず、別世界へと転移してしまったのかと危惧する一行だったが、

ＫＯＳ－ＭＯＳとカイトの言葉により、一旦はホッとした。

……だが、いざ転移装置を調べようとしたら、カイトから待ったが掛かった。

また、何を企んでいるのかと訝しんでいると、ＫＯＳ－ＭＯＳが何かに反応した。

「……！　エネルギー反応確認。」

「な、なんですか！？　すごい力を感じます！」

「次元転移反応です。異世界から、何かが転送されてきます。……ッ！　この反応は……。」

「エンセフェロンダイブを強制解除。通常モードへの復帰を最優先。」

「モモ……！？」

「ＫＯＳ－ＭＯＳさん、こんな所にいたんですね！　見つかってよかったです！

さあ、早くシオンさんたちの元へ……。」

「こりゃ……まさかの客じゃのう。黄色い瞳のストレンジャーじゃな。」

「……って、ここはどこですか？　あれ？　……シャオムゥさん！？

ここは、どこなんでしょう？　モモは……どこへ来ちゃったんですか？」

アルクオンが転移した装置から現れたのは、Ｍ・Ｏ・Ｍ・Ｏ・。

ＫＯＳ－ＭＯＳと同じＴ・Ｃ・４７００年代の世界から来た、

百式汎観測用レアリエンのプロトタイプ。所謂、合成人間である。

どうやらＫＯＳ－ＭＯＳを迎えに来た様だが、小牟など見知った人はいるものの、

殆ど見知らぬ人ばかりの場所に、戸惑いを隠せず僅かに怯えてすらいる様だ。

「コスモス殿、小牟殿。この少女のことを知っているのですか？」

「はい、彼女はモモ。私と同じ世界……T．C．４７００年代の世界の仲間です。」

「なんともプリティなリトルガールだ。こっちの世界へようこそ。」

「あ、はい。こんにちわ……。」

「……。この覇気の流れ……。あなたは『人にも機械にもあらざる者』ではありませんか？」

「え！？　あの……モモは……その……。」

相変わらずの覇気センサーにズバリ言い当てられ、思わず狼狽（うろた）えるM．O．M．O．だったが……。

「相変わらずパネェな、覇気センサー。そう、アレディの言う通りだ。

百式汎観測用レアリエンのプロトタイプ。要は合成人間って奴だ。」

「あの……モモ、その呼ばれ方、好きじゃないです。」

「心配しなくても、そんな面倒くさい呼び方はしないから安心おしよ、モモ。」

「はいです……！」

カイトの説明によりやっと誰だか判明し、ホッと一息付いた面々。

改めて、M．O．M．O．に何事か問い掛けようとした所……。

「そんなヒラヒラスカートと、モフモフ帽子でカワユサをアピールとか、キュオン、許さないよ！」

「え？　あの……な、なんですか？」

「ふむ、ヘソのひとつも出さず、勝負をしようなどと片腹痛いぞな。」

「おへそって……あ、あの……それ……恥ずかしくないんですか…？

もっとちゃんとした方がいいと思います。」

「ぐっ……！」

「この二人には、危機感があるだけだと思われます。気にする必要などはありません、モモ。」

「なっ……！　この、邪……！」

自身のアイデンティティーの危機感を感じ、思わず食い掛かったロリペタ達だったが、

Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．の真っ当な答えと、ＫＯＳ－ＭＯＳの追撃もあり、呆気無く撃沈した二人。

思わずとある言葉を言い掛けたキュオンだったが、その後を次いでしまった者が居た。

「流石は邪神モッコス。えげつないな。」

「……救世主（メシア）。後で、少し御話があります。宜しいですね？」

「……サーセンｏｒｚ」

「……メシア？

あ、もしかして、ＫＯＳ－ＭＯＳさんが前に何度もお話してくれた、あの救世主様なんですか！？」

ＫＯＳ－ＭＯＳ達の漫才に驚いていたＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．が、ＫＯＳ－ＭＯＳのとある言葉に反応した。

その瞬間、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．のカイトを見る目が、知らない人→憧れの人のソレに変わっていた。

その余りの変わり様に流石のカイトも少し驚き、ＫＯＳ－ＭＯＳに訳を問い掛けた。

「ん？　まあ、そうだと思うけど……何だ、マリア。お前、何か俺の事でも話してたのか？」

「はい。貴方の冒険譚（ぼうけんたん）などの一部を、良く話しました。」

「はい！　いっぱいお話聞きました！」

「……また、何を話したんだか。まぁ、いいや。余りマリアの側を離れるなよ、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．。」

「はい！　あ、あの……それで、何とお呼びすれば……。」

「ん？　あ～……まぁ、好きに呼べばいいさ。八神でもカイトでも救世主（メシア）でもな。」

「は、はいです。あの……そ、それじゃ、ヤガミさん……でもいいですか？」

「ああ、勿論だ。これから当分宜しくな、M・O・M・O・。」

「はいです！」

のほほんとした空気が漂う中、改めてM・O・M・O・に現状を説明した。

其の後、何時もの漫才も繰り広げられ、結局誰も倒せず、何一つ解決もしない儘、

壊れてしまった転移装置を直して貰う為にも、

ハーケンの母艦ツァイト・クロコディールに居る筈の、澄井鞠音（すみいまりおん）に会いに行く一行であった。

～Ｂａｔｔｌｅ　７～

「わしが、わしが！　わしが小牟じゃ！」

「スーパーオルケストル・マシーンです。」

「おまえ、アシェンじゃろ！」

「仕方ない、それでいいでゲス。」

「まじめにやらんと、尻を叩くぞ！」

「は、はいです！　ターゲットロックです！」

「よし、撃てい！　サイバードール・ＫＯＳ－ＭＯＳ！」

「了解。ガトリングガンをセット。これより敵を排除するにゃ。」

「いいでしょう。おまかせするにゃん。」

「いまどき、そのキャラ作りはないニャ。」

「コマさん、何かおっしゃいまして？」

「わしらの怒りは頂点に達した！」

「問題の排除を提案します。」

「流石はマリア。一応、味方まで撃つとは……汚いなさすが邪神きたない！」

「……全兵装のセイフティを解除。敵性体への攻撃を開始します。」

「ちょ、おまっ！　俺、敵じゃ無いって……！　たわばっ！！？」

「ニャニャーン！？！？」

「ほんじゃま、勝利のポーズじゃ！」

「ＯＫ、おばあちゃんフォックス。お疲れだな。」

「なめるな小僧！　わしはまだナウい！」

「了解です。分析を最優先します。……サンプリングは順調ですにゃ。」

「にゃんとかなるものですわね！」

「これしきの相手には負けません。」

「このボウズ、まるで弾丸じゃな。」

「ちょっと無駄弾が多かったか？」

「許容範囲内です、ハーケン。」

「火の鳥にもなれないＢＵＬＬＥＴ　ＳＴＲＩＫＥＲに、意味はあるのか……？」

「いいでしょう……。それが宿命ならば！」

「それもまた一興……ということか。ふむ、これも戯れになろう……やってしまうがよい。」

「しょうがない、付き合ってあげるよ。それじゃ、ドーンといっちゃおう！」

「了解。作戦行動に移ります。」

「そうですね、頑張りましょう！　バックアップは任せて下さい！」

「あらまあ、やる気満々。命知らずなヒトたちねェ。」

「にゃんとも物騒な方々ですねえ。」

「まったくもって同感ですわ。」

「う～ん、そううまくいくんでしょうか……？」

「逝(ほとばし)っとるのう。若い若い♪」

「え？　何この流れ？　まあいいや。逝くぞアレディ。当方に火気の用意あり。覚悟完了？」

「クッ……！　まだ私には、覚悟が足りない……！」

「はいはい、おしゃべりはそこまで。」

「気持ちはわかるが、余り燥(はしゃ)ぐなよ。」

「よいよい、思ったより盛り上がったぞよ？」

「無駄口はいいから行きましょう。」

～Ｂａｔｔｌｅ　８～

「戦闘システム、オールグリーン。」

「十字邪光線で薙ぎ払え！」

「了解。Ｘバスター、スタンバイ。」

「おしゃれストッキングなど、認めません！」

「そ、そんなこと言われても困ります……。」

「わらわも装着変身するしかあるまいな……！」

「え？　ドレスアップ出来るんですか？」

「コードＤＴＤ！　ドレスアーーーップ！」

「そ、それは神秘の力なんですか？」

「限界を超えるんじゃ！　モモ１２０％じゃ！」

「は、はいです！　１２０％です！」

「ＯＫ、リトルガール。緊張するなよ？」

「あ、あの……とくに緊張してないですけど……。」

「何か鉱石を使って変身してるんですか？」

「モモはエーテルで変身するんです。」

「ド変身……！　そうですか、その手が！」

「ネージュさん、どうしたんですか？　怖いです……。」

「わしも変身じゃ！　小牟、降臨（こお～りん）！」

「シャオムゥさん、何に変身するんですか！？」

「ならば私も、アンドロイドガールに変身だ。」

「あの、最初からアンドロイドですよね？」

「……機嫌が悪いんでな。さっさと行くぜ？」

「了解。ひねり潰すということで。」

「まあまあ、お気楽にいきましょうよ♪」

「ならず者戦闘部隊、出撃じゃ！」

「一人を生贄にして敵を一体屠（ほふ）るんですね、解ります。

……って、え？　俺ェッ！？　むじゃぱーーーッ！！？」

「戦闘モードを解除、調整の必要性を認めます。」

「コードＤＴＤ、やってみる～？」

「失うものが多い為、拒否します。……戦闘終了にゃん。先へ進むにゃん。」

「にゃんにゃん……なんかムフフじゃのう♪」

「言語中枢エラー、修復不能にゃ。」

「にゃんてこったい！」

「気分爽快でやがりますのですぅ！」

「喋り方でアピールする奴多すぎじゃろ。」

作者『ハァハァ……翠の子超可愛いよ翠の子。』

「……今、何か通って行かなかったか？」

「……気にしたら負けじゃと思うぞ？」

「……そうか……うん、そうだな。」

例によって例の如く、阿呆な会話を繰り広げながらズンズン進み、

シュラーフェン・セレストの外にようやっと出られた一行。

さて、ではどうやって黒石に阻まれている道の先に進もうかと思っていた時であった。

Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．とＫＯＳ－ＭＯＳが何かに反応した様だ。

「あ……！　三時の方角から高エネルギー反応を感知しました！」

「すぐに消失しましたが、反応はミルトカイル石と同じもののようです。」

「ああ、そりゃヘイムレンが部下を呼んで、自分を連れて行かせたんだろ。

それとM．O．M．O．。そっちは九時の方角だぞ？」

「え？　あ、スイマセン！」

「いや、気にすんな。その程度は可愛い間違いだからな。次、気を付ければいいさ。な？」

「は、はいです！」

「よしよし、素直な良い子だ。どっかの照れ屋な駄狐とは大違いだな。なぁ、マリア？」

「ダメです、救世主（メシア）。モモはプロトタイプですので、一体しかいません。

それに、シオンが悲しみます。」

「ちぇっ……じゃ、しょうがない。今、可愛がれるだけで良しとするか。」

道中、そんなのんびりと会話をしながら、エネルギー反応のあった所へ向かう一行。

そこには、カイトの言った通り、黒石が何者か……。
恐らくは、ヘイムレン達によって壊された跡があった。

「ビンゴだ。黒ミルトカイル石が壊されてるな。」

「ワタクシのオズマゴスを自由自在に使いこなすとは、屈辱ですわ！」

「それだけ、ドロシー殿の技術が優れているということです。」

「フォローはいいから！　行こうよ！」

「……何気に嬉しがっているドロシーなのであった。」

「べ、別に褒められたからって、安くなんかしてあげませんからねっ！／／／」

「ツンデレ、マジ乙。」

その儘、黒石の間を通り抜けようとした所、

何と電波障害の激しい黒石の真っ直中（ただなか）で、通信が入った。

何事かと思い受信した所、何と件の澄井鞠音（すみいまりおん）博士からだった。

矢張り今一つ電波が悪く、余りハッキリとは聞こえなかったが、

辛うじて『ネバーランド後部』と言う言葉だけは判った。

多少不安になりつつも、目標の居るネバーランド後部に向かう一行であった。

第伍話【呪われし闘士（ヘラクレス）～闘志、果てなく～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

みんなの妹、M．O．M．O．ちゃんが、ついに登場です！

信じられるか……？　この娘……ヘラ・ガンドと同じ声なんだぜ？

私が初めて宍戸留美さんを知ったのはムシキングでした。

おんぷちゃんも可愛かったですね。でも、私はあいこちゃん派。

次話は、ついにあのみんな大好きバカップルの登場です。御楽しみにw

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第陸話【解くべき方程式（イクエイション）～それは失われた記憶（メモリー）】

現時刻（２１：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，２５１，２９５アクセス　ユニーク：１８７，８７９人
皆様、毎度有難う御座います。

今回は、ネバーランド後部・前編のみです。尚、今話はバトル描写は一切ありません。

ほぼ、会話と説明文のみで構成されておりますので、
少々退屈かと思われますが、どうか御諒承下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第陸話【解くべき方程式（イクエイション）～それは失われた記憶（メモリー）】

ｓｉｄｅ：ネバーランド後部

正式名称は三葉虫級万能ステルス母艦。

シャドウミラーが、『向こう側の世界』からシステムＸＮによって一番最初に転移させた艦である。

恐らく、ＸＮとはＸＮガイストの略称であろう。詳しくは英雄戦記を宜しく！

そして、鞠音博士からの通信を受け、その安否を確認する為に、早速、其処に乗り込もうとする……前に、改めて現状を話し合う一行であった。

「これがネバーランド。異邦より来たりし船の……後ろ側ですか？」

「ザッツ・ライト。前に入った前半分……その後ろ側さ。」

「正式名称は、トライロバイト級万能ステルス母艦。

『向こう側の世界』からシステムＸＮで転移して来た、一番最初の艦だ。

Ｗ０６が世界が融合する以前、そんな事を言っていただろう？」

「……ああ、確かに……な。そして、やっぱりアンタは何もかも御存知って訳かい？」

「そういうこった。

あ、因みに、所有者という意味じゃ、或る意味アクセルがこの艦の持ち主だぞ。

尤も、今の本人にその記憶は全く無いがな。……だろ？」

「……ああ。」

相変わらず、何でも知っていると言うカイトに僅かな警戒心を抱きながらも、

再度、現状を確認し合う一行。

「それで、鞠音めはここにいるのであったな？　何かあったと言っておったが……。」

「場所から考えると……W03。あのグリーンソルジャーの可能性が高いな。」

「ビンゴだ。早い内に突っ込んだ方が良いかもな。

あんまりモタモタしてると、取り返しの付かない事に成り兼ねないしな。」

「……どういう意味だ？」

「ん？　言葉通りの意味さ。まぁ、いけば判るさ。

いざとなれば、俺が何とかしてやらなくもない。」

「……まぁ、余り当てにせずに行くとするか。」

「あらら。まぁ、いいや。んじゃ、さっさと行こうぜ。

……って、落ち込むなよ、カッツェ。後で、お前んとこでもわんさか買って行くからさ。」

「ああら！　それじゃ、急ぎましょ、急ぎましょ♪」

「……商人ってーのは、どうしてこう現金なのかね？

まぁ、商人だけに現金なのは正しいのかもな。」

何だかんだ言いながら、中に突入する一行。

取り敢えず、入り口辺りに全員が入り終える迄、中の様子を確認するアシェンとＫＯＳ－ＭＯＳ。

或る程度、確認し終えたと判断したハーケンが、改めてアシェンに現状を問い掛けた。

「どうだ？　アシェン。」

「……。ここも、ネバーランド前部と同じく、

各システムが動いているようでございましたりしましています。」

「……妙だな。」

「鞠音殿が先行しているのならば、おかしくはないのでは？」

「侵入者排除用の防衛システムが起動しているのが問題だと思われます。」

「そういうことです。こんな場所をウロウロしていたら……。」

「なるほど、うろつき博士は間違いなく黒コゲか、ハチの巣じゃな。」

「鞠音さん、大丈夫なんでしょうか？　……心配なこと極まりないです。」

「まあ、簡単には死なないタイプだと思うけど。」

「システムを起動させたのは誰なんでしょう？　心当たりはあるんですか？」

「あるぜ、ベレーガール。君と同じく、クールな帽子を被った奴さ。」

「大正解。Ｗ０３……ピート・ペインの仕業さ、これがな。」

「では、彼が連れていた機兵達もここに？」

「……多分な。ここには、Ｗナンバー……『ゼロ・ナンバーズ』の調整室がある。

メンテナンスにも困らないからな。」

「私のベッドもここにありまする。ほっときっぱなしですが。」

「あとは……「マリア。」……いえ、済みません。」

「……。まあ、その話は長くなるから、後にしようぜ。」

「うむ、チャランコフの話なぞ、今はどうでもよかろう。

よいよい、目的ははっきりしておる。早いところ先へ進むぞよ？」

「その通りですわ。ここのお宝を目指して行きましょう♪」

「その通りでございます！　たとえ火の中、水の中！」

「草の中、森の中、土の中、雲の中、あの子のスカートの中ってな。

お宝なんてのは何処にでもあるものさ。」

「……一部の人が目的を理解してないっぽいけど、これはいいの？」

「ＯＫ、ディギング・シーブズ。遺跡発掘はほどほどに頼むぜ？」

「とにかく、成すべきことは鞠音殿を見付けること、ですね？」

「ああ。ここからすぐのところに、さっき言ったＷナンバーの調整室がある。

そこも覗いていこう。敵の動きが知りたいからな。

……まあ、カイトがそれを教えてくれれば、その手間も省けるんだが……？」

「やだぷ～。」

「……という事さ。仕方がないから、行くとしようぜ？」

とまぁ、入り口でやいのやいの言い合い、その儘道形（みちなり）に進むと調整室がすぐ目の前にあった。

……だが、どうやら扉がロックされているだけでなく、侵入者用の電磁バリアも張られて居り、

何か嫌な予感しかしない一行。取り敢えず、ロックを解除する為に、隣の部屋にある非常用の解除コンソールを弄り、さっさとロックを解除し中に入ったのであった。

第陸話【解くべき方程式（イクエイション）～それは失われた記憶（メモリー）～】

その儘、電磁バリアの無い方へ進んで行き、真っ直ぐＷ０７……アシェンの調整室に来た。

だが、そこには何か違和感があった。……そう。

アシェンがこの場に居るにも拘わらず、調整用ベッドの蓋が閉まっているのだ。

皆、思わず身構えながら慎重に蓋を開けると、其処には……。

「Ｗ０９、０８……そしてここがＯ７。アシェン、あなたのベッドね？」

「ＫＯＳ－ＭＯＳさんの調整ベッドに似てますね。」

「なんじゃ、中を見てやろうかと思ったが、閉まっちょるのか。」

「……む、どうして閉じている？　以前来た時には、開いていた筈だが。」

「……怪しいな。開けられるか？　アシェン。」

「ロックを解除しまする。」

「ぷはあっ……！　よかった、開きましたの。」「ラッキー。」

「人の寝床で何してんすか？　男はボコボコにし、女はブーメランを引き千切ってくれる。」

「了解です。オートセイフティ、解除。」

「つまり、アレだな。ゆうべはおたのしみでしたね。」

「ちょ、ちょっと色々と待って欲しいんだな、それは！」

「また、なんかちっさいのが出て来た！」

「これ以上、わらわたちの立ち位置を脅かす存在を許すわけにはいかぬ！

めっちりと責め立ててくれるから、モモともども、そこに直るぞよ！」

「そんな、ご無体ですの！」「モ、モモもですか！？」

極一部のアレな人達を除き、警戒心を顕わにしている一行。

その雰囲気に、思わず焦って待ったを掛ける謎のイチャつきバカップル。

そんな一触即発（？）な雰囲気に、ハーケンが止めに入った。

「ウェイトだ、責めガールズ。ゲストには優しくしてやれよ。」

「ゲストですって？　もしかして、このヤサ男と小娘って……。」

「ああ。以前から話してる『記憶喪失の二人組』ってやつさ。」

「異邦から来た方々なのですね？」

「そういうこと。俺はアクセル・アルマー。こっちの子がアルフィミィさ。」

そう。アクセル・アルマー。その正体は……今はまだ秘密である。

記憶が戻っているアクセルと区別をつける為、通称アホセルとも言う。

一方、新たなロリっ娘アルフィミィ。その正体は……今は（ｒｙ。

こちらも記憶が一部欠如している為、自身が何者なのかは未だ思い出せてはいない様だ。

只、自分が人間では無い何者かだ、と言う事だけは覚えているらしい。

だって、（この世界の）人間は空飛べないしね、普通。

「騒がせて悪いな、アクセル、アルフィミィ。」

「それにしても、こんな所でお楽しみとは、なかなかやりおるのう。わしも若い頃は体育倉庫とかで……。」

「いやいや、閉じ込められただけだって。」

「まったくもって、そうですの。」

「っつーか、シャオ。お前の若い頃って、そもそも体育倉庫無いだろうが。

主に、俺が張った結界の中でとかだったろ？　真っ昼間の青空の原っぱでとか。

屋敷の片隅の誰も来ない所とか。皆が寝静まった真夜中にとかとかさぁ。」

「ぅわあーーっ！　わあーーーっ！！　わあぁあーーーーーッッ！！！！！／／／／／／／／／／／／／／

な、な、なんでぬしはいつもそう、節操と言うか、デリカシーが無いんじゃ！！／／／／／／／／／

この…………ド戯けがッッッッ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「…………真逆、シャオの口からデリカシーとか言う言葉が出て来るとは……世も末か。」

「…………オイ、バカイト。後で、ちょっとツラ貸すんじゃ…………よいの？」

「…………ハィ。（しまった、久々にマジギレしてるしｏｒｚ）」

カイトの自業自得な爆弾発言に、思わずジト目になり、少々距離を取る面々。

キョトンとして、首を傾げている何人かに癒されながら、話を続けた。

「……ごほんっ、話を戻すぞ。

それで、閉じ込められたって言ってたが、そもそもどうしてこんな所にいるんだ？」

「ハーケンさんの戦艦にいらっしゃるって聞いてましたけど？」

「まさか、敵と通じてるとか、笛で操られてるとかじゃないでしょうね？」

「もしそうなら見逃すことはできんニャア～。」

「待ってくれ、おれはまともだって！」

「そうそう。アクセル達がまともなのは、俺が証明してやるからさ。記憶喪失だけど。」

「……また余計な事、言ったら今度こそ、本気でしばいちゃる

ぞ？」

「アイ・アイ・マム。ま、取り敢えず、ちゃっちゃと現状説明からしとこうか。」

～カクシカタイム発動中～

「なるほどね、みんな大変だな。ＫＯＳ－ＭＯＳちゃんにモモちゃんに、小牟お婆ちゃん。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳでかまいません。」

「帰る方法、見つけましょうね。」

「お婆ちゃんっちゅうな！　この記憶喪失コンビめが！

と言うか、このバカイトの方が、わしよりも遙かに歳上じゃっちゅーの！！」

「……え　？　そうなの？」

「「そうなの。（じゃっ！！！）」」

そう言えばそうだったと言う顔をする一行。どうやら、素でみんな忘れていた様である。

……確認って大事ダヨネッ☆　と言う事で、アクセルが（改めて）、カイトに聞いてみた。

「……ちなみに、どんぐらい年上？」

「相当歳上。分かり易く言うなら、一億歳程度も生きてない奴等は、俺にとっちゃ、赤ん坊と全く同じ感覚だな。」

「……じゃ俺達、みんな赤ちゃんに見えるとか？」

「ん～……まぁ、未熟と言う意味じゃ、みんな似た様なモンだな。あんまし、変わらん。」

「……おっし、んじゃさっさと行くか！」

カイトの台詞に、改めて皆一時思考停止していたが、偶々早く思考復帰したアクセルが、

先頭切って掛け声を出し、何とかみんなも元に戻って来た。

さて、いざ進もうとした時、アシェンが唐突に思い出した様に、二人に訊ねた。

「所で、まさかとは思いますが、この艦の防衛システムを動かしたのは、

あんたたちだったりしますのか？」

「防衛システム……？　私たちがここに来た時は、特に何も動いてはおりませんでしたの。」

「そんで、おれたちの後から、この部屋に誰かが入って来たんでさ。そいつが、どうにも嫌な予感がしてここに隠れたんだけど、外からロックがかかっちまってさ。」

「で、事に及んでいたと。誰が来たのかはわからないのでございますか？」

「残念ながら……ですの。」

基本的にイタした前提で話す皆。否定するのも疲れたらしい二人の話から推測するに、

どうやらほぼ間違い無く、あのＷ０３ことピート・ペインが来ている様だ。

取り敢えず、話は一段落ついたらしく、改めてアクセル＆アルフィミィを連れて行く事になった。

色んな誘惑に晒されつつも、御互い改めて自己紹介をする面々であった。

「そういうわけで、アクセルさん、アルフィミィちゃん、よろしくお願いしますね♪

私、楠舞神夜といいます！　他の人も、道中で説明しますね♪」

「こりゃ丁寧にどうも。ナンブ・カグヤちゃん……ん……？　ん～～？」「あら……？」

「ど、どうしたんですか？」

「……。いやあ、こんな美乳ちゃんにそう言われちゃったら、

ついて行くしかないなあとか思ったのさ、これが！」

「びにゅう……も、もう、不埒です……／／／」

アホセルはやっぱりアホセルであった。

全開で駆け抜ける（フル・スロットル）アホセルに、一部を除いて総ツッコミをする面々。

人、それを慢性的ツッコミ欠乏症候群と言う。……長っ！？

「……アクセル。」

「修羅場になる前に、とっとと先に進むのがよさそうぞよ？　この赤スケベが。」

「こんな軽薄なワカメ人間を連れていく意味があるのかしらね。」

「通報してくれようか。」

「神夜ちゃん以外はひどいな！」

「仲良くしろよ、おまえら。とりあえず、調整ベッドを見て回ろう。」

（……。おれの記憶、この場所、アルフィミィ。

そして、ハーケン・ブロウニングにナンブ・カグヤ……か。

気になる事が多すぎる。これからどうなることやら、こいつは。）

（……ふむ。ナンブ……そして、ブロウニングの名を聞いても思い出せない……か。

分かってはいたが、こいつは矢張り相当な重症の様だな。ヤック・デカルチャー。）

思わず溜息を付き、皆に先を促すハーケン。そろそろ胃袋がマッハでやばい頃かも知れない。

そんなハーケンの内心とは裏腹に、各々様々な事を思う面々であった。

そして、全員の紹介をする為、のんびりと歩きながらＷ０６の調整室を過ぎ、

全員が隣の調整室へと向かおうとした時である。

「おわっと、なんだ!?」

「電磁バリアです。このラインを通過すると起動するようになっていたようです。」

「何者かが、罠を張っていたと?」

「ブービートラップか。まいったね、こいつは。」

「ふむ、飛んで火に入る夏のウシ……っちゅうやつじゃな。」

「……カグヤさん。」「許すまじですの。」「私はなにもやってませんよ！」

「ＯＫ、バッファローガール。だが、これでアクセルたちの後ろから来た奴が誰なのか……。

俺たちの予想通り……そして、カイトの言う通りだったな。」

「ほほう、チャラッピよ。断言出来るわけを話してみるがよいぞえ。」

「イージーな答えさ。この艦の機構を知ってる奴と言えば、俺たち以外はＤｒ．マリオンと……。」

「Ｗナンバーの誰か、ということになりまするのですのやんす。」

「Ｗナンバー……ねえ。会ってみたいな、そいつに。」「オイッス。Ｗ０７です。」

「いやいや、そのピートって奴にだよ。

とにかく、今は記憶が戻りそうなキーワードを集めないとな。」

「前向きな記憶喪失者だぜ。……仕方ない、行くとするか。」

「退路を断つ罠を張ったということは、敵の仕掛けは早い筈です。皆さん、油断はなさらずに。」

唐突に、今来た道が電磁バリアによって塞がれ、完全に後戻り出来無くなってしまっていた。

突然の罠に驚きを隠せない一行。何があるか分からない為、慎重に進む一行の目の前に、

慄然（りつぜん）と佇（たたず）む、紺碧（こんぺき）の機兵の姿があった。

「……。」

「……って、アレディ！　仕掛けが早すぎませんこと！？」

「そう申されましても……む？　これは羅刹機……！？　いや、異邦の機兵か！」

「馬鹿な……アークゲイン！」

「カッツェ、この青ロボを知っているのかしら？」

「……フォルミッドヘイムの前王が、護衛として使っていたものなのよネ。」

「えっと、そのあと……制御不能になって逃げ出したんだよね？」

「そして、この前の戦で、わらわたちが引導を渡した筈である。どうしてここに？」

その存在を知る者は、皆一様（いちよう）に驚愕した。それもその筈。

フォルミッドヘイムとしては、何処かへと雲隠れしてしまった王の護衛機体。

そして、ハーケン達にとっては、既に止めを指した筈の亡霊の様な物だ。

その疑問、疑念に全て答えた……応えられた者が居た。……そう、カイトである。

「フン……矢張り、再ロールアウトされていたか……Ｗ１０（ダブリューワンゼロ）。」

「……今、何て言った？」

「このトライロバイト級万能ステルス母艦……『楽園（ネバーランド）』の名を持つ箱船（アーク）の守護者。

Ｗ１０　アークゲインだ。こいつは、Ｗ０３の手によって再ロールアウトされた二機目だろう。」

「チッ……やはり、そうか……こいつもＷシリーズ……！

しかも、再ロールアウト済みとは……道理で新品のようにツヤツヤしてるわけだ。」

「……クッ……！　次から次へと……ここはおれの記憶を擽（くすぐ）ることばっかり起こるな。」

「……。」

「あ、対象のエネルギー反応増大！　来ます！」

「おっと、受けて立つぜ……！　おれの記憶を取り戻すカギになりそうなんでな！」

「ＯＫ、バトルワカメ。……俺達もこいつは野放しには出来無いんでな。」

「来たるべきアルクオンとの戦い……その修練となりましょう。紺碧の機兵よ、勝負ッ！」

「さて、やろうか……！」

～経験値稼ぎ中～

「……。」

「ベイビー、いい子だ。おとなしくしてくれよ？」

「……。」

「あ！　青ヒゲ、逃げたよ！」「瞬転……！？」

「転移の反応は、ネバーランドの前半分でナハトが撤退した時と同じものです。」

「転移座標、確認できませんでした。目標をロストです……。」

何とか、暴れ回るアークゲインの動きを抑え付けられた一行だったが、

どうやら、Ｗ０３が事前に備えさせていた緊急転移装置により、逃げられてしまった様だ。

慌てて跡を追うも間に合わず、プッツリと跡が途絶えてしまった。

「ちっ、やられたな。仕込みがしてあったのか。」

「負けた場合、逃げられるようにしてあったってことね。まったく、用意ド周到ですこと。」

「まあ、作ったばかりのものをいきなり壊されては堪らん……といった所でございましょう。」

「……戦力を使い捨てるつもりはないって事じゃないか？

Ｗナンバーは少数精鋭だから……って、少数精鋭なのかい？」

「聞かれても。まあ、記録上ではＷ００から１０までの１１体しかいない……筈でしたが、

どうも、そこなＫＹヘタレによると、Ｗ１７までの１８体の様でおじゃりまするのです。」

「……Ｗ……１７……グウッ……！　……っチッ！

本当に、中途半端にしか反応しやがらない……！」

済んだ事を悔やんでも仕方がない。カイトの言葉とアクセルの意味深な台詞も相俟って、

兎にも角にも先に進む事にした。取り敢えず、Ｗ１０が居た場所の左奥のコンソールを弄り、

電磁バリアを一部解いて、他のＷシリーズの寝床も確認しながら、ぞろぞろと進む一行。

「ここがＷ０３の調整用ベッドか。」

「Ｗ０５の調整用ベッド同様、ここも開いてごじゃるでおじゃりまする。」

「ピート殿の姿は見えないようですね。」

「そりゃ、こんだけ騒いでるのに、呑気にグーグー寝てないでしょ。」

「……いえ、そうでもないようでありんす。」

「なんとな？　ポンコツよ、もしや……。」

「はい。使用した形跡があります、ペタ寸胴姫。」

「調整の為か？　……だが、あいつはダメージを受けたりはしてない筈だろ？」

ピートの寝床を調べる面々。……ガサゴソガサゴソ……中はゴミ……も無かった。

流石に、本人の姿は無い様ではあるが、どうやら使用した形跡があるらしい。

だが、ピートとは未だ闘った事も無く、ダメージも特に負っている訳では無い筈だ。

一体、何の為に使ったのか、各々が訝しんでいると、ＫＯＳ－ＭＯＳがとある可能性を指摘した。

「外装のメンテナンスではなく、データの更新なども考えられます。」

「大正解だ。Ｗ０３はここでとある目的の為に、データを更新していた。

アレは更新が完了するまで時間が掛かるからな。

そっちを急いでた為に、アクセル達の事は後回しにしてたのさ。」

「……カイト。そろそろ、いい加減に何か教えて欲しいんだがね。」

「ん？　何かって、何をだ？」

「……色々……さ。出来れば全てを知りたい所だが……取り敢えずは、Wシリーズについて。

アンタの知っている事を、洗い浚い吐いて欲しいんだがね。」

もし断れば、どうなるか……そんな一触即発の空気の中、

ん～……と言いながら、どうすっかなぁ～とのんびり考えているカイト。

本当に空気が読めないのか、それとも……相変わらず良く分からないカイトに、

警戒心を緩めずに間断無く、皆でカイトの答えを待っていると、

何の予兆も無く、誰にした訳でも無く、一つ首肯してからその答えを告げた。

「ん～……まぁ、いっか。それなら、少しは教えてやるよ。……だが、ここじゃぁダメだ。」

「……何か不都合でもあるのかい？」

「不都合っていうより、ここから南のブロックにデータルームが在るだろ？

其処で各種データを見ながらの方が、より解り易いだろうと思ってな。

取り敢えず、其処迄行こうぜ？　その後は、のんびり幾つか教えてやるよ。

――――この世界の真実――――その一端を――――な。」

カイトが最後に残した一言に、一瞬何か背筋が凍る様な感覚を味わった面々。

果たして、カイトの口から出た言葉の意味とは一体何なのか。

これから自分達に待ち受ける、文字通りの『未知』の恐怖に、

我知らず、勝手に身体が震え出して来た一行であった。

第陸話【解くべき方程式（イクエイション）～それは失われた記憶（メモリー）】

如何でしたでしょうか？

次回は、今話にも増して説明回です。

スパロボＯＧに関する説明も少しするかと思いますので、

スパロボを御存知無い方の、何か御参考の一助にして頂ければ幸いです。

それと、字数が少なければ、併せてアーベント戦も書く予定です。

ひょっとしたら、久し振りに一万数千字を超えるかも？

何れにしても、次回は飲物の御用意を、どうぞ御忘れ無く。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第漆話【極めて近く、限りなく遠い世界に～楽園からの追放者～】（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：２，２６７，０８７アクセス　ユニーク：１８９，１６２人
皆様、何時も有難う御座います。

さて、今回はネバーランド後部・中編です。

そして、御待たせ致しました。初の戦闘シーン……ヴァイスリッター・アーベント戦です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

第漆話【極めて近く、限りなく遠い世界に～楽園からの追放者～】

ｓｉｄｅ：ネバーランド後部　データルーム

カイトとハーケンを先頭に、ぞろぞろとここまでおっかなびっくりで着いて来た一行。

どうやら、先程のカイトの最後の言葉が、依然尾を引いている様だ。

データルーム自体は無事な様だが、電源は落とされていた。

「さて、ここがデータルームだ。電源は落とされているようだが……。」

「ああ、それなら問題無い。龍斗、頼む。」

「畏まりました、カイト様。」

「……又、どこからともなく……毎回脅かすな、アホウが。」

「まぁ、そう言うなって。お、点いたみたいだな。」

「なるほど……これは便利なものですね。」

「読み取るとなると、少々面倒だがな。」

巨大なモニターが目の前に表示され、

初めて見る面々は、おおっと思わず内心で声をあげていた。

只、その量が相当多い為、ハーケンの言う通り、可成り面倒だと思われた。

「まぁ、細かい操作は龍斗に任せればいい。

さて、諸君……覚悟はいいかな？　『知る』という最も恐ろしい行為を行う覚悟は。」

“……（コクン）。”

「……ああ、頼む。アンタが知っている事……俺達が知らない事。

そして、今この世界で何が起こっているのか……教えてくれ。」

「――――いいだろう。では、奏でようか。

世界の真実。その一端という……これから先に待ち受ける、激闘への間奏曲を。

貴様等の耳朶に心地良いかどうかは、俺は知らん。それは各々が判断するといい。

さて――――語ろうか。」

第漆話【極めて近く、限りなく遠い世界に～楽園からの追放者～】

「とは言っても、どこから話したものか。そうさな……取り敢えずは現状確認から行こうか。

龍斗、Ｗナンバーズを出してくれ。」

「畏まりました。」

「……モニター上で確認出来る事は、Ｗ０１、０２、０４、０８、０９は、

２３年前から未稼働で現在に至り、Ｗ０３……コードネーム『ピート・ペイン』は、

９０日程前に稼働開始と言う事です。」

「三ヶ月程前……って、この世界が融合した頃ってことかしら？」

「いや、その前に既に可動済みだ。そうだろ、ハーケン？」

「……ああ、間違い無い。確かに、既にベッドはオープンしていた。」

「じゃ、あのピートってイケメンロボは、以前の戦いの時から動いていたってこと？」

「ふむ……しかし、あの時は世界を渡り歩いていたが、一度も会っておらぬぞよ？」

「そりゃそうだ。基本的にWシリーズは、裏工作がメイン活動だからな。

誰にもバレずに任務を遂行させるなんてのは、アイツラにとっちゃ朝飯前だ。

そうだろ、アクセル？」

「その通りなんだな、これが。……ん、あれ？　何で、おれそんなこと知ってんの？」

「……こりゃ、ダメね……相変わらず。カイト、続きをお願い。」

相変わらず、戻っていそうで全く戻っていないアクセルの記憶。

揃って溜息を付きながらも、今自分達が敵対しているWシリーズの主行動が裏工作だと知り、

此の上無く、面倒臭そうな顔をする一行であった。

「ああ。先ず、今現在判明しているWナンバーズは、W03『ピート・ペイン』。

そして、そのW03と行動を共にしている、W06『カルディア・バシリッサ』。

同じく、そのW03に再ロールアウトされた、W10『アークゲイン』。

それから、ハーケン達と共に居る、W07『アシェン・ブレイデル』。

最後に、W05『ギムノス・バシレウス』……アグラッドヘイムに持って行かれた奴だ。」

「持って行かれた……だと?!」

「ああ。アグラッドヘイムの王、ガグン・ラウズはとある理由で、自身の体を失くしててな。

その魂だけになった存在を、ロック・アイがちょっぱってきたW05に融合させて、

今、自身の仮初めの身体としている訳さ。」

アグラッドヘイムの王……ガグン・ラウズ。

初めて聞くその名と、Ｗ０５が失われていた訳を聞き、驚愕する一行。

皆の疑問にも逐一答えながらも、カイトの話はまだまだ続く。

「だが、魂を融合させるなどと……そんなことが可能なのですか？」

「普通は可成りの拒否反応が出るものだが、ことＷ０５は別物だ。

アレとＷ１５『ウォーダン・ユミル』は、分かり易く言えば、

データをダウンロードさせて、その人格そのものにするタイプだ。

故に、何の障害も無く器にすんなりと受け容れられたって訳さ。」

「なるほどね……ん？　Ｗ０５とＷ１５……どちらも５……か。何か意味でもあるのか？」

「恐らくな。例えば、Ｗ０６とＷ１６『エキドナ・イーサッキ』は、

何等一切、指令・命令に疑問を持つ事無く、必要とあらば自身の命をも惜しむ事が無い程に、

冷静沈着に的確に……且つ確実に自身の任務を熟す感情のないタ

イプだ。」

「……何ともはや……。」

その余りにも悲しい存在に、以前のカルディアを知っている者は、その事を思い出して悲しみ……知らぬ者は、少なからず憤りを感じていた。

「そして、Ｗ０７と……最後のＷナンバーズであるＷ１７『ラミア・ラヴレス』には、

コードＤＴＤ……Ｄｕｓｔ（ダスト）・ｔｏ（トウ）・Ｄｕｓｔ（ダスト）が備え付けられている。

この発動は、あらゆるコード・命令よりも優先される。塵は塵に……と言う事でな。」

「……つまり、あらゆる命令を掻き消せる最優先コード……と言う訳ですか。」

「そういうこった。特に七番台は、開発者であるハーケンの母。

レモン・ブロウニングに可愛がられててなぁ。

そのコードはお前の開発者……いや、お前の母親からの……な。

唯一、授ける事が出来た愛情なんだよ。」

「…？！　レ……モン……！！　グッ……！

……どうも……はっきりしてくんねぇな、おれの記憶も……。」

多少なりとも語られた、アシェンの出生時の秘密に思わず皆、ほっこりすると同時に、

知る人ぞ知る……実は、ハーケンの母がアシェン達の生みの親という事実に驚愕していた。

そして……矢張り、思い出しそうで思い出せないアクセルの記憶。

どうにも儘成らない事に、何より本人が一番苛立っている事は、明らかだった。

そして、カイトの話はまだまだ続く。

「……それで、モニターからの情報はもう終わりですの？」

「いえ、まだあるようです。

そのピート・ペインについて、特殊プログラムの解除申請記録が残っています。」

「ああ、強制介入コード。コードＰＴＰ……Ｐｌａｙ（プレイ）　ｔｈｅ（・ザ・）　Ｐｕｐｐｅｔ（パペット）。人形遊びって意味だ。」

「あら？　アシェンさんにそんなのついてなかったかしら？」

「ボクのはコードＤＴＤだよん♪　後、ＡＴＡって自爆コードもあるけどね♪」

「……で結局、どういうコードなんだ？」

そして、カイトの口から語られたピートの目的に、皆驚愕と憤りを隠せなかった。

「強制介入コード。人形遊び。このキーワードで、未だ解らないか？」

「……強制……人形……！？　ま、まさか……このコードはッ！！？」

「そう……その通り。このコードは、言葉通り有無を言わさず強制的に相手に命令出来るもの。

つまり、それを使いＷ０６、Ｗ１０……そして、Ｗ０７。

アシェン……お前をも味方に引き込み、ハーケン達と同士討ちさせる事も出来る。」

「……何て……何て、卑劣な……！！」

「もっと簡単な方法は、アシェン達を操った後、即座に自爆コードであるコードＡＴＡ……。

コードＡｓｈ（アッシュ）・ｔｏ（トウ）・Ａｓｈ（アッシュ）を発動させれば、その場でハーケン達は木っ端微塵だ。

七番台はＷナンバーズに於いても尚、特殊なその構造上、最も強力なＡＴＡが仕込まれている。

ハーケン達を纏めて部屋ごと吹っ飛ばすのは、非常に容易い程度の威力だ。」

「クッ……！　そんなフザケた真似……させるかよッ！！」

ピートのやろうとしている事……その一端をようやっと知り得た一行。

憤怒（ふんぬ）……驚愕……悲哀……憐愍（れんびん）……皆、様々な表情を見せていた。

思わず語気を荒げるハーケンであったが、カイトは尚も現実を突き付ける。

「だが、既に申請は通っている。後は、自身へのダウンロードを完了させるだけだ。

当然、邪魔を入れられない様に、幾つか罠を張っているだろうな。

それらを退け、尚且つ本来の目的である鞠音を救出し、

最後にコードＰＴＰのダウンロードが終わる前に、Ｗ０３を叩き壊す。……出来ると思うか？」

「出来る出来無いじゃない……やるんだ！

俺のファミリーには、手を出させない……！　絶対にだ！！」

ハーケンの台詞という後押しもあってか、他の皆の目にもやり遂げるという意志と覚悟が見えた。

それらを、それとなく確認したカイトは徐に皆の背後……先に進む道を指した。

「そうか。現段階で話せる事は、大体終えた。であるならば……そろそろ先に進むか？

丁度、そこの部屋にヴァイスリッター・アーベントがいる。

勝っても負けても、自爆する様にＷ０３に命令された、黄昏（たそがれ）の堕天使が……な。」

ｓｉｄｅ：ネバーランド後部　サブ調整室

先程のデータルームから、南に直進した先の部屋。其処には、カイトの言っていた通り、

ヴァイスリッター・アーベントが一体……自身の武器（パルチザン・ランチャー）を携えて、待ち構えて居た。

「……。」

「パーソナルトルーパー・アーベント……！」

「……カイトの言った通り……か。」

「この機体が……アーベント……？　（なんですの……？　胸がモヤモヤいたしますの……。）」

「これが……ハーケン殿たちが使役する機兵……その最後の一機ですか。」

「ええ。過去の１０年戦争で、フォルミッドヘイムが使用した機動兵器ですわ。」

「耳が痛いわねェ。……じゃ、責任を取る意味でも、返して貰うとしましょうか！」

そのカッツェの言葉に反応したからなのかは定かではないが、
アーベントから、駆動音が唸りを上げた。どうやら、向こうは戦闘準備が整った様だ。

「……ヘイ、Ｍｒ．ファントム。どうにか、アイツを仲間に出来無いか？」

「……。」

「……。」

「あ、それ無理。当然の如く、Ｗ０３がハッキング対策を講じてあるから。」

「チッ……やっぱり、ダメか。まぁ、元々ダメもとで言っただけだからな。」

矢張り、どうにかして倒してから進むしか道は無さそうだ……と、その時。

ハーケン達が何をしていたのか、全く判っていなかった者達から質問が来た。

「ハーケン殿。一体、何が起きているのですか？」

「私たちを置いてけぼりとは、いいド度胸をしておりますことね！　く、悔しくなんてありませんからね！」

「ソーリー、エトランゼ・コンビ。

簡単に言うと、ファントムには『メカニック同士で仲良くしようぜ』って言う、

命令を送信する機能があるのさ。そいつを試そうと思ったんだが、どうもダメらしい。」

「機兵に効果のあるヘイムレンの笛……そのようなものですか？」

「そんな認識でいいんじゃないか？　俺も専門的なことはよく知らないけどな。」

「電子戦の装備ってことか。」

「……綿のことでしょうか？」「それは脱脂綿です、カグヤ。」

「さすがは特注のゲシュペンスト……高性能なんだな、これが。……って、あれ？　特注なの？」

「ああ、間違い無く特注だよ。なぁ、ハーケン？」

「……ああ、そうだな。」

丁度、話も一段落着いた時だ。先程から唸っていたアーベントの駆動音が、更に大きくなった。

話し込んでいた連中も思わず咄嗟に身構え、警戒し出した。

「……ほれ、お喋りはそこまでにせい。紅白ロボ、そろそろウズウズし始めちょるぞ？」

「……ああ、どうやらそうらしいみたいだな、これが。」

「仕方ありません、止めるまで。ハーケン殿、カイト殿、いいですね？」

「ＯＫ、シュラソルジャー。無傷で取り戻したいが……そう簡単にはいかないだろうな。」

「んじゃ、俺は例によって例の如く、のんびり見学してるわ。みんな、けっぱれ～　ノシ」

“……真っ先にアイツを殴りたい……！”

そんなみんなの思いとは裏腹に、カイトはのんびりと壁際に向かって歩き出し。

アーベントは、二体の手下を従えて。

ハーケン達は、臨戦態勢に入り。

そして……アルフィミィは。

「……。」

「む？　アルフィミィよ、戦いが始まるぞよ？　ぼんやりするでない。」

「このロボットから、何か……不思議な力を感じますの。どこか覚えがあるような……。」

（……フッ、流石は『上位種』だ。記憶は失えど、同類の気配にだけは敏感……か。

伊達に『監視者』から直接産み出された訳では無いな。

だが……どうやら、未だ記憶が戻るには早そうだな。

……まぁ尤も。戻らない方が、彼女にとっては未だ幾分か幸福で

いられるのかもな。）

各々の思惑も絡みつつ、逢魔（おうま）が時に現れた白銀の堕天使（ルシファー）との戦闘が始まった。

ｓｉｄｅ：ヴァイスリッター・アーベント戦？

「……！」

真っ先に仕掛けたのは、アーベントだった。

皆が一丸と纏（まと）まっていた所に、実弾を雨霰（あめあられ）と打ち出して来たのだ。

「！　邪鬼銃王（ジャキガンオー）！！」　「月鱗（がちりん）、お願い！！」

側面から、錫華が邪鬼銃王でその弾を撃ち落とし続け。
その弾幕を擦り抜けて来た無数の弾を、神夜が斬冠刀から飛ばした小型の刃で、
咄嗟に、皆の周囲に衣の様に纏わりつかせて護った。

「へっ！　攻められてばかりも性に合わないんでな！　烈火刃！」
「黄泉路ですの……！」

何とか攻撃を凌ぎ切った瞬間、アクセルとアルフィミィが飛び出し、攻撃し返した。
だが、その攻撃を真横に動いて躱したアーベント……だったが。

「逃がさないよ！　バブル・カノンッ！！」

その場所に既に待ち構えていたアンが、手持ちの大砲をぶっ放した。
その爆風に一瞬怯んだ隙を突いて、月鱗を斬冠刀に戻した神夜が攻撃に転じた。

「行って、月鱗！　如来の鉢！！」

再度、月鱗を飛ばし空中に少しの間固定させた後、近付いて斬り飛ばした。

其処に背後に回っていたハーケンが、待ってましたと言わんばかりに猛攻を加えた。

「ナイスタイミングだ。ステーク！　フル・ハウス！　ハイロー・ドロウ！

　こいつもオマケだ、とっときな！　テキサス・ホールデム！！」

ナイトファウルのステーク部分で打ち付けて、飛んで来た勢いを無くし。

一瞬浮き上がった所にブレードで何度も斬り付け、そのブレードごとアーベントを空高く打ち上げ、

即座に銃を抜き放って、落下するアーベントとナイトファウルを同時に撃ち、

撃ちながら斬るという何とも器用な芸当を見せ。

最後に、もう一度落ちて来たブレードを受け取って即座に斬り上げ、

ステークで壁側とは反対の方向に吹き飛ばした。

「コードＤＴＤ発動！　龍の鱗、発射ぁ～♪　悪魔の槍だ、受け取れッ！！　回れ、ミラージュ！」

其処には熱暴走させた為に、身体の塗装が剥げ落ちて緑色から肌色に変じた、アシェンがいた。

そして、身体から沢山のミサイルを打ち出して、組んだ両手を飛ばして空高く打ち上げた。

その落下に合わせて、連続で蹴り付けて更に蹴り上げた。

更に再度落ちて来るのに合わせて、回転しながら遠心力を付けた蹴りを何度もお見舞いした。

「まだだ！　ゲンブ・スパイク！　……！？　くっ……逃がすか！　タイグレス・バイトッ！！　吹っ飛べ！！！」

だが、流石に攻撃され続けるのは嫌気が差したのか。アーベントは全力で逃げに徹する様だ。

更に追撃しようとして飛ばした拳を躱されたが、アシェンが猛ダッシュで追い掛けて、

連続で殴り飛ばした後に、壁に思いっ切り蹴り付けた。

しかし……壁に叩き付けられたアーベントが立ち上がった時、身体への傷は然程（さほど）ついている様には見えなかった。

どうやら、以前戦った時同様、自動修復機能は未だ付いている様だ。

その事実に、思わず何人か舌打ちをしながらも改めて皆、身構えた。

……どうやら、第二ラウンドの開始の様である。……一方、御供の方はと言うと。

ｓｉｄｅ：雑魚Ａ戦

「覇皇剛衝殻（はおうごうしょうかく）！　ハアァァッ！！」「ああら！　いいタイミング♪」

「はいはーい♪　極限・招き猫……参りまーす！」「こっちも負けてられませんわっ！」

「まだまだ、詰めが甘いわね！　ベノム・カーマイン！　シルキィ・レース！」

どうやら、それぞれ二手に分かれて戦闘していた様だ。

先ず、アレディが敵に近付き背中から体当たりした後、連拳を繰り出して、

再度、背中からの体当たりで吹っ飛ばした。

その先にいたカッツェの蹴り技と、琥魔の妖刀『猫正（ねこまさ）』で挟撃されピヨっている所に、

ドロシーから爆弾やら何やらを散々に投げ付けられ、えげつない暴風に曝（さら）された。

何とか、辛うじてそこまでは耐えられたものの、

更にネージュの追撃に遭い、殆どボロボロになっていた。

「これで終わりだッ！　覇皇空円脚（はおうくうえんきゃく）！！　機神乱獣撃（きしんらんじゅうげき）ッ！！！」

そこに、アレディが止めとばかりに追撃の手を緩めずフルボッコにし、

雑魚Ａは、完全に機能を停止した。

ｓｉｄｅ：雑魚Ｂ戦

「水憐（すいれん）・時雨（しぐれ）の型！　続けて参の型でバッサリ！　ごっついタイガーバズーカもオマケじゃ！」

「モモも行きます！　撃ちます！　凍り付いて下さい！　ウインドミキサーもおまけです！」

「よいよい、わらわも雅に舞い捲（まく）ろうぞ。それ、美糸（ビイト）である。撃ち捲るが良い、弾鎖（ダンサー）♪　そして……邪・鬼・銃（ジャ・キ・ガン）・梵破（ボンバー）♪」

「キュオンもノリノリでいっちゃうよ～♪　ブロンテ・クラフト最大出力！　いっけぇ～！」

敵のガードを朱雀刀（すざくとう）の連撃で弾き飛ばし、

尚斬り付けてから虎の顔の形をした、気功砲の様なもので吹っ飛ばすと、

Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．も追撃し、矢を撃ち、凍り付かせてから、竜巻で氷ごと再度打ち上げた。

その落下物を錫華が物の見事に拾い上げ、丸で道化師の如く空中で踊らせ続けた。

そして、再々度吹き飛ばした先には、最大まで力を溜め込んでいたキュオンの戦術砲機（せんじゅつほうき）が、

唸りを上げて敵をその光の中へと誘（いざな）った。

それでも未だ、辛うじて形を伴って動いていた……が。

「これで終わりにしましょう。ＶＡＬＫＹＲＩＥ（ヴァルキリー）。ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）・ＴＯＯＴＨ（トゥース）。Ｘ（エックス）・ＢＵＳＴＥＲ（バスター）、発射。

胸部装甲展開……Ｄ（ドゥルケ）・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ（テネリタース）。――――お眠りなさい、甘美な優しさの中で。」

更なるＫＯＳ－ＭＯＳの猛追撃により、敵は存在そのものを完全消滅させられた。

ｓｉｄｅ：ヴァイスリッター・アーベント戦？

御供二体も倒し終え、全員がアーベントと対峙し、第二ラウンドが始まった。

すると、アーベントが唐突に、片手に構えていたパルチザン・ランチャーをあらぬ方向に向けた。

皆が何事かと訝しんでいると、全体を嘗（なめ）す様に極太ビームを部屋全体に照射して来た。

「チッ！　みんな、散れッ！！」「クッ……！」「わわわっ……！」「なんのっ！」

何とか全員逃れはしたものの、連携し易かった陣形を崩されバラバラになってしまった。

その隙を突いて、もう一体……増援が来た。

明らかに時期を見計らっていたとしか思えないそのタイミングに、誰もがその行く手を遮る事は出来無かった……が、その敵が向かった先は何と、

あろう事かカイトのいる方であった。案の定、触れる事は愚か近付く事すら出来ず、

カイトが手を患わしそうに振っただけで、あっと言う間に消え去ってしまっていた。

「……憐(あわ)れな。自ら死凶星(しきょうせい)の招く方へと赴くとは。」

「……流石に、あれにはちょっと同情しちゃうかしら。」

「だが、御陰で助かったな。どうやら、もう相手は打ち止めみたいだしな。

残るは――――後、一体――――。」

そうハーケンが言うと同時に、各々自身が最も攻撃し易い位置に動き。

アーベントはどうした訳か……その配置が終わる迄、じっとその様を見詰めているだけだった。

そして、皆の配置が済んだと思しき頃、又もやアーベントから聞こえる駆動音が、

更に激しく、今迄以上に唸りを上げ出した。……どうやら、向こうはやる気満々らしい。

前大戦時。あの十年戦争時に猛威を振るったパーソナルトルーパー・アーベント。

どうやら、御互いに相手に不足は無い様だ。そして今、再度新たに干戈（かんか）を交えた。

「先手を取りますっ！　おおおッッ！！！　機神乱獣撃！！」

「私も続きましてよ！　ハンターズ・マーシィ！」

「こっちも頼むぜ、Ｍｒ．ファントム。ニュートロン・ブラスター！」

「わらわもノルとしようぞ。邪鬼銃王、一斉掃射！」「Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ最大出力。」

「吹っ飛べ！　玄武剛弾（げんぶごうだん）！」「黄泉路にて、参りますの……！」

「こっちだって負けてらんないよ！　ブロンテ・クラフト！　もっかい、最大出力でゴー！！！」

「……！！」

飛び道具を持つ者、全員で先制攻撃を掛けた。

流石にこの人数相手では、撃ち合いでは負けると思ったのか、全速力で、その砲撃の網を何とか潜（くぐ）り抜け、逆に砲弾の嵐を撃ち降らして来た。

慌てながらも辛うじて躱す事は出来、何とか致命傷は免れた。

その隙を突いて、斬って、蹴って、殴りに掛かった者達が居た。

「一番ノリは戴きよッ！　ラウンド・エイティ！」

「わしじゃって、まだまだ若いもんには負けんぞ！　時雨の型ッ！」

「お願い、届いて！　蓬莱（ほうらい）の大枝！！」「商売人を舐めたらいかんニャッ！」

「面倒だねえ、もう……吹き飛ばしちゃおうかねえ。セイレーン・ダガー！」

「……！！！」

左右からの複数による挟撃に、後ろに下がらざるを得ないアーベント。

当然、其処には待ち構えていた者が居た。

「良い子だ。セブン・スタッド！！　そっち行ったぞ！　アクセル！　アルフィミィ！」

ハーケンの七連撃……否、九連撃により、アクセルのいる方へ吹っ飛ばされるアーベント。

待ってましたとばかりに、ミズチ・ブレードと鬼蓮華（おにれんげ）を構えるロス

ト・メモリーズ。

「ＯＫだ！　水流爪牙（すいりゅうそうが）！」「連続斬りですの。」

「まだまだ！　地斬疾空刀（ちざんしっくうとう）！！」「魂断（まぶいたち）ですの。やあっ、やあっ！」

「ＫＯＳ－ＭＯＳ！」

二人の武器で交互に斬り付けた後、その衝撃波で今度はＫＯＳ－ＭＯＳの方へ再度吹き飛ばした。

其処には、既に武器を転送し終えたＫＯＳ－ＭＯＳが待ち構えていた。

「了解、追撃します。Ｇ・ＳＨＯＴ（ジー・ショット）一斉掃射。ＳＴＯＲＭ・ＷＡＬＴＺ（ストーム・ワルツ）。ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ。

カグヤ、併せて追撃を。」

両手に装着したガトリングガンを一斉掃射し、即座にアーベントに近付いて氷塊を出し、

その氷塊を砕きながら、コインを辺りにばら撒いて、それに銃弾を跳弾させて攻撃し、

最後には、巨大なビームセイバーによる連続斬撃で空高く舞い上がった。

「了解です、こすもすさん！　叩き落とします！　燕の介！

俳浪華札！　ジャンジャンバリバリ♪　月鱗発射！　……チェストッ！　アシェンさんっ！！」

其処には、既に飛び上がっていた神夜が斬冠刀を構えていた。

そして、その儘斬り付けて真下に叩き落とし、更に再度斬り上げた。

その儘、重力に任せて落ちて来たアーベントを真横に斬り付けて、

再度地面に叩き落とし、

今度は、月鱗を射出し、アシェンがいる方へと斬り飛ばした。

「任せるでごわす、乳牛姫。見極められるか、この神の槍を！　ディバイン・ランサー！

後は頼んだでござる、爆発ちょんまげ。」

足にある火薬をふんだんに使い、神夜達の連続攻撃によって脆くなったアーベントの装甲を、

何度も蹴り砕いた後、蹴り飛ばしてアレディに丸投げした。

「はい！　我が轟魔（ごうま）にて打ち砕きますっ！！　機神剛鉄甲（きしんごうてっこう）！

　おおおおッッッ！！！　覇皇ッ！　両断刀（りょうだんとう）！！」

さしものアーベントも、この連続攻撃を受けては、自動修復も追い付かなくなって来た様だ。

アレディ達の猛攻についに耐え切れず、反応が鈍くなった間隙を突かれ、

パルチザン・ランチャーを持っていた左腕を、両断刀で斬り落とされてしまった。

その瞬間、攻撃していたアレディ諸共、アーベントの周りから誰もいなくなった。

訝しんだアーベントが、左肩の辺りを右腕で庇いながら正面を見据えると、

ハーケンが、クロンダイク・モードをセットしたロングトゥーム・スペシャルを構えて居り、

既にパワーは溢れんばかりに溜め切っていた。

「こいつで……フィニッシュだ……！！！」

そして。パーソナルトルーパー、ヴァイスリッター・アーベントは

――――敗北した。

第漆話【極めて近く、限りなく遠い世界に～楽園からの追放者～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、私の脳内ではハーケン達が縦横無尽に動き回っていたのですが、皆様は如何でしたか？

想像ｏｒ妄想して頂けたのであれば、作者冥利に尽きます。

全く出来無かった方には、誠に申し訳有りません。

今後尚々精進致しますので、今回は一つ平に御容赦を。

因みに、一応計算上なのですが。他にも、幾つか戦闘シーンは頑張って書くつもりですが、

アーベント戦が終わった今、残っているのは後、１３戦＋αです。

果たして、一体何処でどんな風に戦うのか。それは、本文中の戦闘にて。どうぞ、御楽しみにｗ

あ、それから。アーベントとは独語で、

Ｗｅｉｓｓｒｉｔｔｅｒ（ヴァイスリッター）：白い騎士　　Ａｂｅｎｄ（アーベント）：夕方という意味です。

序でに。ナハトの方も同じく独語で、
Ａｌｔ（アルトアイゼン）　Ｅｉｓｅｎ：古い鉄　　Ｎａｃｈｔ（ナハト）：夜という意味で、女性名詞だそうです。

……って、え？　女性？　女性型なの、アルト？

つまり……身持（ガード）ちが堅いと言う事か……！

汚いな……流石はアルト汚い！　まさかロボっ娘だったとわ！？

これでは、益々戦いにくいじゃないかっ！！

いえ、まぁ、フルボッコにしますけど。某エルザみたいに。エルダー様可愛いよエルダー様。

では、作者が乱心する前に締めと致しましょう。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第捌話【「かつて」と「これから」～黄昏の堕天使（ルシファー）～】（前書き）

現時刻（１８：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，２８３，１７２アクセス　ユニーク：１９０，４９３人
皆様、何時も有難う御座います。

御待たせしました。今回は、ネバーランド後部・中編２です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第捌話【「かつて」と「これから」～黄昏の堕天使（ルシファー）～】

ｓｉｄｅ：サブ調整室

其処には、ハーケンのロングトゥーム・スペシャルの直撃を喰らい、全身から煙を噴き上げ跪くアーベントが、ハーケン達の眼前にいた。

「……。」

「やっとおとなしくなったか……。」

「ですが、片腕を切り落とされても尚、闘志は衰えず。

……機兵ながら天晴れ、としか言いようがありません。」

「少なくとも、制御系を奪われたままでは、連れて行くのは無理でありやんすのです。」

「……仕方ない……か。おれの記憶を取り戻す、切欠にでもなるかと思ったんだけどな。」

「……。（アクセルの為にも……何とかしてあげたいですの……。）」

「え……？　アルフィミィさんからエネルギー反応が……？」

片腕を切り落とされ武器も敵に取り上げられても尚、向かって来る勇気に敬意を表しながらも、

結局、味方に出来無いのであれば、壊すしかないという結論に達せざるを得ない。

だが、アクセルの記憶を取り戻す一助になれないかと、アルフィミィは願った。

その時であった。アルフィミィの身体を光が包み、それと同種のものがアーベントを包んだ。

その光が収まると……どうした事か。何故か、アーベントへのアクセスが可能となっていた。

「……！」

「あなたからは……何か私と似たものを感じますの。

私たちに、力を貸していただきたいですの……。」

「これは……覇気!?　いや、何か全く別の……？」

「……。」

「む!?　艦長、アーベントから、制御プログラム受信用のシグナルを確認しちゃったりします……！」

「プロテクトを外したって事か？　よし、頼むぜ……！　コール・ゲシュペンスト！」

「……。」

「……！」

そして。パーソナル・トルーパー、ヴァイスリッター・アーベントは味方になった。

「ファントム、アーベントのハッキングに成功したようでございます。」

「うまくいったのはいいが……急に何が起こったんだ？」

「アーベントから検出されていたエネルギー反応と同等のものが、アルフィミィから発せられたようですが。」

「……。」

「アルフィミィちゃん、一体どんな魔法を使ったんだ？」

「そうじゃな。とんだマジックの妖精じゃぞ？」

「糸も使わずにからくりを操るとは、何とも驚きの能力である。……これはまずいぞよ。」

「しかも魔法まで……。やはり早めに芽を摘んでおくべきかも。」

通称、第三次ロリショックが起きた……かどうかはさておき。

アーベントから検出されていた、謎のエネルギー反応と同じ物がアルフィミィから検出された。

アーベントが急にコントロール可能となった事といい、一体何事かと皆が訝しむ。

それに、悲しそうな顔と声でアルフィミィは応える。自分は……人

間では無いから……と。

「どうやったかは、わかりませんの。ただ……なんとなく、このロボットはお仲間さんのような気がして……。

私は人間ではございませんの……。だから、こんなことができたのかもしれませんの。

それが、なぜか寂しいんですの。自分が何者なのか、わからないのが怖いんですの……。」

「アルフィミィちゃん……。」

「人間じゃなくたって……人間らしく生きればいいんです、アルフィミィさん。」

「モモ……。」

「それが大事なんだって、パパも言ってましたから。」

「……ありがとうですの、モモ。」

「……。」

「それに、そもそも人間なんて特にいいモンでもね～しニャ。」

「そうだねえ。ウロコの一つもないしさ。」

「インターネットを作ったことだけが、人類の功績じゃ。」

「モモちゃんの言ってること、そういう意味じゃないと思うんですけど……。」

「イイ話が台無しなのはどうなのよ。この猫科と魚類と女狐は。」

「ワタクシたちも妖精ですけどね。」

「人間少ないな！」

衝撃の事実である。そして、本当にどうしてくれようかコイツラ。

因みに、目下人間と目されているのは、ハーケン・神夜・アレディ・アクセル・カイトである。

現在１７人＋機兵２体中、人間は五人。実質、大体２５％程度である。

折角イイハナシダナーで終わりそうだったのを、

敢えて乗ったのか、空気を読まなかったのか。
恐らく後者であろうが、駄人外共によって完全に台無しであった。

「アタシたちらしくていいんじゃない？　ねェ、アレディ？」

「……大切なのは、生き方だと思います。己を信じるのもまた、修練です。

アルフィミィ殿。あなたは何者でもなく……『あなた』として生きればいいのです。」

「そうだな。要は、自身の在り様だ。

己を自分自身でバケモノだと思ってしまえば、その時点でそいつはバケモノになってしまう。

又、俺の様に、人にしては過ぎたる力を持っていても、

自身を人だと思っていれば、何時迄も人の儘で居る事が出来る。

自身の心……魂の拠り所を確と見極められれば、

例え、お前がどんな力を持っていようとも、どんな存在であろう

とも。

お前は人間そのものだ……アルフィミィ。」

「アレディ……カイト……ありがとうですの……。」

（……いいこと言うじゃない、アレディ。カイトも珍しく……ね。）

珍しく、カイトが綺麗に締め、結局いい雰囲気で話を終える事が出来た様だ。

しかし、未だ目的も、目標も、何も片付いてはいない。

「ＯＫ、ナイスボーイ＆ガールズ。いい雰囲気だが、まだやるべきことは終わってないんだ。

アーベントを支援用に調整して、先に進むとしようぜ。」

「はいですの♪」

「んじゃ取り敢えず、ヴァイスの腕を治して、序でに仕掛けられた

爆弾でも取り除きますか。

あ、それから、其処な駄人外共。後でお前等纏めて、尻を百叩きだ。」

“な、何だって（ですって）ーーーーーーーーーー！！！！！”

後にハーケンは語る。あの時の皆の大絶叫は、きっとピートにも届いていただろう……と。

（黒ミルトカイル石のこと。そして、アインストの技術が入ったアーベントとの共鳴……。

本人の記憶はロストしているが……。

アルフィミィの正体が、ほぼ確定したのは気になるところだな。）

（ふむ……成る程な。確かに女王蜂であるノイ・レジセイアが死んだ今、
最上位種であるアルフィミィが、仮の女王蜂として認識されているだろうからな。
……まぁ、何にせよ……だ。
少なくともハーケンには、アルフィミィの正体がこれでバレただろうな。）

ハーケンは、皆に気付かれない様に、カイトに視線を向けた。……どうなんだ？　と。

視線を向けられたカイトは応えた。誰にも見せずに、ニヤッ……と笑顔だけで。

だが、それでハーケンには充分だった様だ。帽子を普段より、少し目深に被り直していた。

第捌話【「かつて」と「これから」～黄昏の堕天使（ルシファー）～】

～Ｂａｔｔｌｅ　９～

「記憶がなくても、やるこたやるぜ！」

「記憶喪失とは、どれくらいまでかの？」

「俺が男だってことくらいはわかるぜ？」

「記憶はどのくらい戻ったのですか？　アクセル。」

「それがさっぱり、まろやかに忘れたままなんだな、これが。」

「盗られた記憶なら、奪還なされたら？」

「ん～、勝手になくなった記憶だからなあ。むむむ……その髪……そして、ナンブ？　う～ん。」

「あ、あんまり見ないで下さい／／／　あの……アクセルさん。記憶喪失って大変ですか？」

「慣れれば楽しいもんさ、これが。でも、キミを見てると記憶が戻りそうだ！　頼む！」

「え、え～と……こうですか！？／／／」

「では、挟み殺して下さい。」

「え？　ど、どうやってですか？」

「神夜よ、そちのうねりも見せるがよい。」

「え～？　うねらなきゃダメなの？」

「……ゴクッ。悪いな、いただくぜ？　ハーケン。」

「おっと、神夜もいいところも譲らないぜ？」

「バカップル、ガチで自重しろし。」

「良くも悪くも、ムードが肝心じゃぞ？」

「勝った拍子に記憶も戻らねえかな。いつまでも記憶がないってわけにもな……。」

「ＯＫ、記憶喪失ガイ。悩むなよ、記憶が無くても生きてはいけるさ。」

「微妙な慰め方だな、そりゃ。」

「記憶喪失！？　男か女か確かめないと♪」

「よ、よせ！　そこまで忘れてないから！」

「じゃ、ついでにぶん殴って、記憶を戻してみよう！」

「ま、待て待て！　軽く言うなよ！　ふぅ……なぁ、記憶を戻す薬とか……売ってないか？」

「……コイツを騙して一儲けというのもアリだニャ……。」

「ならば、記憶回復の舞いを踊ってしんぜようか？」

「そんなピンポイントな踊りがあるの！？　なあ。ところで、俺はこんな喋り方だったか？」

「今のアクセルもいいですの、これが♪」

「え？　今更？　そして、バカップルその二、マジで自重しる。」

ｓｉｄｅ：ＬＥＶＥＬ３前

ネバーランド後部に於ける最重要施設、ＬＥＶＥＬ３。今、その扉の前に一行は来た。

しかし、どうやら扉は閉まっている様で、

ハーケンがカードキーを何度も差し入れて開けようとしていた。

「ピートが向かったとしたら……ここだろうな。
『レベル3』ブロック……この艦のトップシークレットがあった場所さ。」
「『あった』と言うのは？」
「重要なブツは、２０年前に持ち去られているんでな。」
「まあ……そうですね。」
含み……いや、言葉を濁しながらも肯定するアシェンの台詞の裏の意味に、
違う方向に反応する駄目な人外達。一応、神夜もフォローはしたが……。
「ニャんと意味深な物言い……。」「んもう、ドやらしいことね♪」
「モヤモヤしますの♪」
「え～と、そっち系ではなくてですね……。」
「ＯＫ、フォローピーチ。おいおい説明するさ。この場でやると長くなるからな。」

「……その秘密と、さっきのピートって奴……関係があるのかい？」

「奴の目的が『ネバーランドに関する機密の抹消』である限り、ここは絶対さ。」

「この艦の中枢部みたいだねえ。

……って、さっきから何をガチャガチャやってるのさ？　ハーケン。」

ようやっと、アンがハーケンの行動を聞いて来た。

どうやら、認証コードが変えられている様で、キー・コードを変えないといけない様だ。

仕方なく、当初の予定だった鞠音博士を迎えに行く序でに、コードの変更を頼む事にした。

「……。扉をオープンさせようと思ってるんだが、どうも開かなくてな。

カード・キーのキー・コードが変更されてるな、こいつは。」

「ああ。Ｗ０３が既に先に中に入って、コードを書き換えたからな。

取り敢えず、先に鞠音の所へ行った方がいいな。

コードの変更を頼む必要もあるし、ここからなら連絡も取れるだろ？」

「……そうか、そうだな。ここにはミルトカイル石もないしな……通信も繋がるだろう。

ハロー、Ｄｒ．マリオン。こちらハーケンだ。」

「遅い！！　遅過ぎますわよ、艦長っ！　一体、今迄どこで油を売っておいでですかッッ！！！」

「うわっと！？　ビックリしたぁ～。無事みたいじゃない？　今、どこにいるの？」

「『居住ブロック』におりますわ。防衛システムが働いているので、外に出られないのです。」

「ＯＫ、了解だ。すぐ行くから、もう少し待っててくれ。」

「分かりました。では、早く来て下さい。」

「……さて。じゃあ、ドクター救出といこうぜ。序でにキー・コードも解析して貰わないとな。」

鞠音の怒鳴り声から察するに、どうやら思っていた以上に待たせてしまったみたいだ。

だが、元気な様子にホッと一安堵するハーケン達。

そして、ここから南にある居住ブロックの何処かに居るとの事。

早速、手当たり次第、虱潰(しらみ)しに各部屋を覗きながら鞠音を探す一行であった。

～Ｂａｔｔｌｅ　１０～

「私とアクセルなら大丈夫ですの！　アクセル、私についてくるですの。」

「リードされるのも悪くないな、これが。」

「お二人の連携、見せていただきます。」

「はい、濃厚にまいりますの！」

「男連れとは、侮れぬ娘であるな。」

「それも成り行きですの、これが。」

「アクセルとはヨロシクやってんの？」

「結構フクザツな関係ですの……。」

「アクセルとはどういう関係なのですか？」

「話せば長くなるので、あとでですの。」

「わしと零児も、前はペアだったのじゃ。」

「一体、なんのことですの？」

「シャオ、メタ発言すんなし。

てか、何故にどいつもこいつも同じ事を聞きたがるのか、是非共小一時間問い詰めたい。」

「全く、みんな子供なんですから。」

「グダグダ言ってないでさっさとやるニャ。」

「こう見えて、意外と凄いんですの♪」

「あっついね！　アルフィミィも脱げば？」

「現時点でもう限界ですの。でも、涼しい姿なのに、熱いんですの？」

「めんどくさいから、どっちでもいいよ！　さあ！　抱き合って、勝利を祝おう！」

「ちょっと！　熱いですよ！　そ、それに、アルフィミィちゃん、その格好は……。」

「私はいつだって勝負ですの♪　それに、私の格好も貴族っぽいですの。」

「貴族はそんな風に丸出しません。て言うか、その格好……ド恥ずかしくありませんの？」

「みんな似たり寄ったりですの♪」

「ですが、その装備は戦闘には不向きです。」

「おしゃれは大切にしたいですの。それと、そのヒラヒラ……ちょっと興味ありますの。」

「私はそのスケスケが気になりますけど？」

「では、次は更にスケスケのシルクなどいかがでしょう？」

「お、大人な感じですの……／／／」

「……随分とアナーキーな格好になるな……更に。」

「この世界の人たちも相当なものですの♪」

「あたしも水着ってのを着けてみたいよ。」

「これは水着ではございませんけど……なるほど……スパッツもアリですのね……。」

「あの……何を納得してるんですか？」

「しかし、それでも下段の守りが薄すぎでは？」

「それはそれで攻撃的ですの♪」

「……で。一体、何時になったら終わるんだ？　この会話。」

「やれやれ、やりたい放題じゃのう。」

「ちょいとハッスルしすぎだぜ？」「私もそう思いますの。」

「……おまーらが言うなし。」

ｓｉｄｅ：居住ブロック　南西の部屋

最後に全員で押し入った其処の部屋に鞠音は居た。

他の部屋に落ちていた使えそうなアイテムを拾ったり、

いつぞや、神夜が寝ていたベッドに寝ていた賞金首を狩っていたら、

尚遅くなってしまった。

怒鳴られる事を覚悟しながらも、みんなでドカドカ入っていった。

案の定、先頭のハーケンを見た瞬間、柳眉を逆立てたが、

何故か暫くその状態で固まり、次第に呆れた顔になり眉間の皺を解していた。

「艦長……暫く見ない内に、随分と大所帯になりましたわね？」

「中々賑やかだろ？　プリティガールも盛りだくさんさ。」

「プリティなのは当然として、早いところ用事を済ませたら？」

「用事？　何かあるんですの？」

「ああ。『レベル３』ブロックなんだが、キー・コードが変えられちまってな。」

「そこに侵入した者がいるようなのです。」

鞠音の呆れ声に少しホッとした一同。

相変わらずのネージュのツッコミもあり、さっさと用件を済まそうとする一行であった。

「成る程。あそこのドアロックについては、解析が出来ておりますわ。」

「流石はマッドサイエンティスト。節操なく調べておるのう。」

「褒めても何も出ませんわよ？」

「……褒めてるかなあ、これ。」「アクセル、ご機嫌を損ねてはいけませんの。」

「ではドクター。カード・キーの更新、よろしゅうに。」

「わかりましたわ。そこの端末でやってしまいましょう。」

褒め……？　決してツッコミを入れてはいけない深淵の世界である。

そして、アシェンからカード・キーを受け取った鞠音が、

部屋にあった端末でカチャカチャやっていると、一瞬電源が落ち、直ぐ様又、電源が付いた。

どうやら落ちた瞬間に、非常用電源が付いた様である。

そんな事を考えながら、鞠音は速攻でデータの更新を終えた。

「艦長、書き換えが終わりましたわ。これで開く筈です。」

「ああ、サンクス。なあ、ドクター……今、一瞬電源が落ちなかったか？」

「ええ、落ちましたわね。そして、直ぐに付きました。艦内で何かが行われたようですわね。

そして恐らく、電源が落ちた瞬間に、誰かが非常用電源を入れたのでしょう。」

「落ちた瞬間？　そんな早業を出来る奴なんて……カイト？」

「ん～。龍斗、御苦労様。」

「はっ。有り難き御言葉、痛み入ります。」

“うわっ！？　い、いつのまに……？；；；；；；”

「……やっぱりか。」

「ああ。龍斗に頼んでな、非常電源の所に待機してて貰ったんだ。」

何時に無く（？）用意周到なカイトに驚く一行。

尤も、一番驚いたのは、音もなく現れた龍斗にだったが。
そして、鞠音にこれからどうするのかとハーケンが聞いた。

「……珍しく用意がいいな、カイト。それで、ドクター。

俺達は『レベル3』のブロックに用がある。先に戻ってくれないか？

シュラーフェン・セレストの巨大転移装置の修理の話なんかもあるんでな。」

「……転移装置？　わかりました、詳しくは後で聞きますわ。」

「レディを送っていきたいんだけど、すまないな。」

取り敢えず、話は一段落したが、鞠音を一人で送り出すのは忍びないと思いながらも、
事が事だけに、誰も抜け出せない一行。その為に、カイトがその役を買って出た……が。

「そんじゃ、俺が護衛を喚ぶとしますかね。構わないだろ、ハーケン？」

「……ああ。ドクターさえ良ければ、俺は構わないが。」

「宜しいですわよ？　ちゃんと使える護衛ならばね。」

「それならば、何の問題無い。俺の折紙付だ。おいで、鋼牙。」

「はーい！！♪」

「……子供？」

カイトの喚び掛けで現れたのは、どうみても5～6歳くらいの男の子であった。

いかにも元気そうで、人懐っこそうな様子は、見ている者をほわっと和ませるが、

今、カイトが喚んだのは和ませる為ではなく、護衛の為である。

思わず、どういう事かとカイトに詰め寄るのも、無理は無いだろう。

「ちょっと。私は、護衛を呼ぶと聞いていたのですけれど……これ

は一体何のおつもり？」

「いや、だから護衛だって。まぁ、見た目で判断すりゃ、不安に思うかもしれんがな。

こんな形（なり）でも、俺の従者だぞ？

この部屋にいる奴等、一秒以内に皆殺しするぐらいは容易い力を持っている。」

「……こんな子供が？」

矢張り、鋼牙の実力を知らない彼女達ではどうしても不安が拭えないらしい。

鋼牙の悲しそうな顔を見て、思わず諾と言いそうになったが、事は命が掛かっているのだ。

ならばと、カイトは再提案をした。もう一体付けるか？　と。

「ああ。……どうしても不満なら、もう一体護衛を付けるけど？」

「……別に構いませんが……今度は女の子とかだったら、許しませんわよ？」

「ああ、それならば猶の事問題無い。

セカンド・イグニッション　　ミニエレメント・ドラゴン

プラズマ」

‘グガアアアアァァーーーー！！！！！’

“んなっ！？！？　りゅ（ド）、龍（ドラゴン）？！”

そうして、現れたモノに皆、目を白黒させた。何と、龍！

それも、凡そ２ｍは確実に超えているであろうその体躯に、狭っ苦しい部屋の事も忘れて、

思わず魅入ってしまっていた。そして、呆然としている皆に、カイトが徐に声を掛けた。

「ソイツも一緒ならいいだろ。んじゃ、鋼牙、プラズマ。鞠音を頼むな。

送り先はアブリエータ城。ここを出て北上した所にある、狼のマークが特徴の城だ。」

「はーい！♪　じゃ、行こ？　マリオンお姉ちゃん♪」、グガァ、グガァ。，

「……ふぅ、分かりました。では、艦長。私は先に行っています。」

「……あ、ああ。分かった、気を付けてくれ。それじゃ、また後でな。」

「ええ。」

そう言って、妙齢の女性と男の子と全身がバチバチいっている龍とが、

仲良く（？）手を繋いで出て行った。

その様を、未だ呆然と見送っていた皆は、カイトに促されてようやっと動き出し、

ＬＥＶＥＬ３の扉の前迄、ようやっと来た。

第捌話【「かつて」と「これから」～黄昏の堕天使（ルシファー）～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、ついにあの名場面が……！！！　……あるのかなぁ？；；；；；；；

しかし、『みんな似たり寄ったりですの♪』には、デスヨネーと同意せざるを得ない（キリッ！

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第玖話【ＭＡＲＩＯＮＥＴＴＥ　ＭＥＳＳＩＡＨ～試される戦略（ストラテジー）～】

現時刻（００：０５）
ＰＶ：２，３０８，５８０アクセス　ユニーク：１９２，１８６人
皆様、何時も拙作を御覧下さり、有難う御座います。

此の度、皆様も御存知の通り、大規模な地震が発生致しました。

幸い、私と私の家族、私の友人達は無事でした。

ですが、私の親戚は宮城、しかも仙台・泉区。そして、気仙沼に住んでいます。

こちらも幸いなるかな。何とか連絡も付き、皆無事だという情報は得ていますが、

どうやら未だ、ほぼ断水状態の様で余り救援らしい救援も来ないそうです。

今の私に出来る事が何も無いのが、何より悔しい限りですが、

せめても……と、私の小説が皆様の心慰みになれば幸いかと思い、投稿致します。

私の拙作を御覧になって下さっている、被災地の方々。

どうか、めげずに希望を持って頑張って下さい。どんな絶望の中に

も、希望は必ずあります。

今の私には、こんな事しか言えませんが、心より皆様の無事を御祈り致して居ります。

さて、大変御待たせ致しました。

到頭……御存知の方は待ち侘びていらっしゃったであろう、『あの』場面です。

果たして、彼女達はどうなるのか……。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第玖話【ＭＡＲＩＯＮＥＴＴＥ　ＭＥＳＳＩＡＨ～試される戦略（ストラテジー）～】

ｓｉｄｅ：ネバーランド後部　ＬＥＶＥＬ３

今、ハーケン達は鞠音に更新して貰ったカード・キーを片手に、ＬＥＶＥＬ３の扉前に来ていた。

当の鞠音は、カイトが喚んだ鋼牙とプラズマによって護衛されて、ここより北に在るアブリエータ城へと向かった。

「カード・キーの認識は……よし、ノー・プロブレムだな。」

「この先に、ピート殿が？」

「あのソルジャー・ベレーだけとは限らないけどな。……行って、確かめるだけさ。開けるぜ。」

そう言って、ハーケンは扉を開けた。その儘、連なる扉を悉く潜り抜けて、

驚愕の表情を見せるＷ０３と、相変わらず無表情な儘のＷ０６の居

る、最奥部に到達した。

（先程の落ちた電源が証明した通り、既にＰＴＰはダウンロード済みだろう。

……さてさて。ハーケン達は、一体どうやってこの苦境を乗り越えるつもりかな？

……まぁ、アクセルがいれば、どうにかなるとは思うが……。

曲り形にも、救世主（メシア）たる俺がいる以上、そうそう犠牲者は出せないしな。

ま、最悪。万が一の場合は、俺が何とかしてやるしかないか。）

カイトの思惑もいざ知らず。

今、操り人形（マリオネット）達は眼前にいる因縁の敵と、遂に対峙した。

第玖話【MARIONETTE（マリオネット） MESSIAH（メサイア）～試される戦略（ストラテジー）～】

「よう、ミスター。また会ったな。」

「……貴様ら、どうやってここに？」

「ここは前回の戦いで来た場所でな。ロックを開けるのには手間取ったが。」

「知り合いに極級のハッカーがおってのう♪　ちょちょいのちょいじゃ♪」

苦虫を噛み潰した様な顔で、ハーケン達を見据えるピート。

一方。もう一人……否、もう二人のWシリーズは。

「……。」

「カルディア。やはり、お前もここに居たか。」

「W07と言ったな。私の任務を妨げるのならば、排除する。」

「……お前の任務とは、何だ?」

「W03の命令を実行することだ。」

「……。」

最早、『本来の任務』も思い出せず、ただW03の指揮の下でしか動けないカルディナ。

こちらでも、悲しい戦いが始まろうと、一触即発の空気が漂っていた。

丁度その時。ピートが普段の冷静な声の儘で、皆に問い掛けた。

「ひとつ聞きたい。

……ゲシュペンストＭｋ－？には、戦闘終了後に自爆するプログラムが入力されていた筈だ。

どうやって回避し、回収した？」

「……。」

「……チッ。やっぱり、カイトの言った通り、仕込んでやがったのか。」

「……カイト殿の助言とアルフィミィ殿がいなければ、危ういところだったのですね。」

「本当に、アルフィミィの不思議パワーのお陰ね。」

「よくわかりませんけど、運がド良かったのですの。」

ハーケン達から得た言葉の中に、気になる台詞があった。

（『助言』だと……それではまるで……。）

自分達の行動が筒抜けであったかの様な言葉ではないか。

「不思議な力だと……？　いや、それよりも助言……？

……まさか、Ｍｋ－？にセットした自爆プログラムを感知したとでも言うのか？」

「感知？　そんな事を態々する必要など無いさ。お前達の手口はとても分かり易いのでな。

そんなもの調べる必要も無い。お前が、この後する事……しようとしている事も全て……な。」

「……どういう意味だ。」

「言った通りの意味さ。

俺は……誰よりも、お前達『シャドウミラー』の行動原理を知っている。

ヴィンデル・マウザーよりも、お前達Ｗシリーズよりも、レモン・ブロウニングよりも。

……と、そう言っているのさ。」

「……貴様……！！」

カイトが出した最後の名前に、如実に反応したピート。

そして、カイトの言葉の中の名前……『シャドウミラー』と『ヴィンデル・マウザー』。

その二つの聞き覚えの有る名前に、またもや頭を抱えて苦しむアクセル。

しかし……残念ながら、未だ記憶は完全に戻っては来ない様だ。

悔しそうに舌打ちをするアクセルを見たカイトは、アクセルを見下すかの様に目を向け、

思わず出てしまったと言う風に、溜息混じりにアクセルに声を掛けた。

「――――シャドウミラー。ヴィンデル・マウザー。レモン・ブロウニング。

Ｗ１５ことウォーダン・ユミル。Ｗ１６ことエキドナ・イーサッキ。Ｗ１７ことラミア・ラヴレス。

……これだけ聞いても未だ、何も思い出せない……か。

それとも、思い出したくないのか？　其程に衝撃的だったか？

貴様達の理念・理想の全てだったシャドウミラーが壊滅した事が。

……ふん。だとしたら、情けない限りだな。……まぁいい。

今は、こんな腑抜けの事などどうでもいいしな。」

「グッ……！　テ……テメェ……！！」

カイトの言葉に、流石にアクセルも腹を立てたが、頭が混乱している為か……。

立ち上がっても千鳥足で、アルフィミィに支えられないと、確と一人では立てない程だった。

それを眺めたカイトはアクセルに背を向け、

先程から、普段の彼からは想像も付かない程の形相で、

ずっとカイトを睨み付けているピートに振り返り、不敵な笑みで話し掛けた。

「さてと。まぁ、そういう訳だ。既に、ヴァイスの自爆装置は取り除いてある。諦めるんだな。」

「……Ｍｋ－？はそもそも不安定な状態だった。失敗作は直接

破壊すればいい。

それよりも、応えて貰おう。シャドウミラーが壊滅したとはどういう意味だ？

そして、貴様は何故それを知っている？　……何より……貴様は、一体、何者だ？」

“……。”

そのピートの疑問は尤もだ。……何より、皆の気持ちも、彼と全く同じだったからだ。

何故、其程迄に自分達の事を知っているのか？　其程の強さの秘密は一体何だ？

そして……ＫＯＳ－ＭＯＳが言っていた『救世主（メシア）』とは。

沙夜が……自らが言っていた『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』とは、一体どういう意味なのか。

味方である（だと思っている）自分達ですら全く分からず、寧ろ時には不気味に思う程なのだ。

そのカイトと敵対しているピート達の感じているものは如何程か。

その様な思いと眼で、ハーケン達もカイトを見詰め、見定めていた。
だが、カイトは不敵な笑みを全く崩さず……否。更に深めて、
その問いに応えた。

「何故も何も無いさ。俺は全てを知っているからだ。
『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』……データに無いか？　レモンの事だ。
その程度の俺の情報ぐらいは、お前になら入れている筈だと思うがな、Ｗ０３。」

「『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』……データ検索……データ照合。
……検索完了。全てを知りし者。オール・ノウレッジ。
あらゆる世界のあらゆる知識と、あらゆる能力を同時に併せ持つ救世主。
Ｗシリーズの根幹・基礎部分の構築に関する技術・材料の最大提供者。
（『――――そして。絶対に逆らってはいけない存在。もし、彼と敵対した場合。

任務の如何に関わらず、即座に降伏し全権を任せよ。

これは、あらゆる任務・指示に於いて、最も最優先とされる命令である。』

……だと？　……バカな！）」

此の場に居た皆は、ピートから得た情報に驚愕を隠せなかった。

そして、ピートも敢えて口にしなかった内容に、誰よりも自身が一番驚いていた。

その指令に疑問を持った事も。否定した事も。そして、何より――――。

自身達の生みの親であるレモン本人が、その様な命令を……プログラムを残していた事に。

その事をも知っているのか。ピートの驚愕の表情を見て白地（あからさま）に揶揄（からか）う様に、

今迄崩さなかった不敵な笑みを、ニヤッと意地悪な……、

まるで悪戯（いたずら）をした子供を見る様な笑みで、カイトはピートを眺めていた。

「さて……では、質問の続きだが。俺が何者か……それは、今お前が言った通りだ。」

「……何？　どういう意味だ？」

「どういうも何も。今、お前が自分で言ったばかりだろう？　俺は救世主……『メシア』だと。

そして、シャドウミラーが壊滅したとは……その儘の意味だ。

だが、そんな事は今の貴様等には何の関係も無い。……そうだろう？

創造主であり、生みの母でもあるレモンの指令を拒否し、無視したＷ０３、ピート・ペイン？」

「……キサマ……！！！」

そのカイトの言葉に、更に又激昂するピート。訳が分からず困惑する一行……だったが……。

驚愕の目でピートを見るハーケンとアシェン。そして、目の色が青く変わったＫＯＳ－ＭＯＳ。

様子を見る限り、どうやらハーケンとアシェン、そしてＫＯＳ－ＭＯＳだけは、

その言葉……カイトの台詞の意味と、ピートが何を隠し、何に抗ったのかを察した様だ。

だが、この儘では埒が明かないと思ったのか。

ハーケンがその流れを切る様に、ピートに話し掛けた。

「――――まあ、カイトにはこっちも聞きたい事が幾つもあるし、アンタも色々あるだろうがな。

今度は、こっちからの質問だ。ここ……ネバーランドのＬＥＶＥＬ３に来たのは、

『ＷＯＯ（ダブリューゼロゼロ）』を捜しに来たんじゃないのかい？」

（ゼロゼロ……。Ｗナンバーの……プロト……。ちっ、本当に記憶が混乱しすぎるぜ……。

まさか、カイトの言った通り……？　一体、俺の記憶に何があったっていうんだ……？）

「……。このブロックには、『ＷＯＯ』の保護カプセルがあった筈。……どこにある？」

ハーケンからの問いに、自分達の目的が筒抜けだと言う事にほぼ確信を持ったピート。

実際には少々違うのだが、メンドイのと都合が良いのでその儘にしておくカイト達であった。

だが、それだけでは納得……と言うか、理解が出来てない者も多く、ハーケンに訊くも……。

「ちょっとちょっと、何のこと？」

「若干ややこしいので、後で教えてあげますよ、ネージュさん。」

「ま、そういう事でな。あんたの後ろにあったんだけどな。

誰も居なかったんで、もう撤去しちまったのさ。

……つまり、アンタがデリートするって言ってるネバーランドの機密は、

もうここには無いって事さ。」

「……。」

（俺についてのデータは無いようだな。カプセルを片付けといて正解だったぜ。）

（……フン、成る程な。矢張り、転移の際のショックでデータを幾つか破損していたか。

アクセルに反応しない事と言い、ＷＯＯについてのデータの欠如と言い……間違い無いだろう。

さて。目標が無いと認識した今、次の行動は一つしか無いだろう。

果たしてハーケン達は、どうするのかな？）

そうカイトが現状を確認していた時だ。

どうしても腑に落ちない事があったらしく、一つカイトとピートの双方に質問が飛んで来た。

「その機密……。アークゲイン……Ｗ１０って名前だったかしら？

アレについて、ちょっと疑問があるのよねェ。どうして作ったのか……ってネ。」

「ピート殿は以前……『この艦に関わるものを抹消する』と言っていた筈です。

だとすれば、あの紺碧の機兵を再生した事は……その言動と矛盾します。」

「そんなこと言ってたねえ。自分で機密とやらを増やしちゃ意味無いんじゃないのかい？」

「Ｗ０５を奪還する為に必要だからだ。全てが終われば、コードＡＴＡを発動させれば済む。」

「ＡＴＡ……自爆コードですか。」

「奪還……矢張りか。Ｗ０３、お前はＷ０５について、どこまで知っている？」

或る程度、想像通りの答えに少々げんなりしている一同。

その理由に一早く気付いていたのか……、アシェンがピートにその詳細を訊くが……。

「答える必要は無い。」

「それはずるいですの。」

「だけどドロシーちゃんの予想、当たってたんじゃないか？」

「誰かに持ち去られた……って事かしら？」

「ファントム、アーベント、そしてＷ０７。それも貴様らに奪われたと言える。」

「――――プッ。くっくっくっく……アーーーッハッハッハッ！！！！！！！！！！！！！」

「…！？　……一体、何が可笑しい？！」

ピートの台詞に、思わず耐えられないといった感じで、思いっ切り噴き出したカイト。

思わず何事かと、全員でカイトを見、ピートは何か苛付いた様子でカイトに問い詰めた。

だが、その馬鹿笑いは暫く続き、腹を抱えて苦しそうに引き攣って笑いながらも、

未だ止まらず、それから凡そ十分程か……。

それだけの間、笑い続けた後、思いっ切し咳き込みながらも、ようやっと収まった様だ。

目に涙を溜めながら、ピートの問いに答え……果たして、一体何度目か。

最早、数えるのも億劫（おっくう）になる程、またもや皆を驚かせたのであった。

「ヒーッヒーッヒーッ……！　あ～……マジ腹イテェ。こんなに笑ったの久し振りだなぁ。

いやいや、ありがとう、Ｗ０３ピート・ペイン！

本当に久し振りだよ……こんなに心の底から笑ったのは……。」

「……何が可笑しいと聞いている…！」

「そりゃ、可笑しくもなるさ。

これ程の道化を……操り人形（マリオネット）を見たのは、幾星霜振りだからな。」

「道化……だと？」

その言葉を聞いた誰もが、首を傾げた。

果たして、一体何処に笑う要素があったのか。何故道化などと言う

言葉が出て来たのか。

そして……カイトの口から、世界の真実……その一端が、又語られた。

「ああ、紛れも無い道化だよ、お前達……いや、特にお前はな。W03ピート・ペイン。」

「……どういう意味だ？」

「どういうもへったくれもねぇよ。抑（そもそ）も。ファントムも、ヴァイスも、アルトも。

そして、アークを始めとするWシリーズの全ても、本来はハーケンの所有物なのだからな。」

「……何！？」

「尤も、或る意味ではアクセルのモノでもある訳だが……まぁ、今のコイツじゃ豚に真珠だな。

（まぁ、細かい意味では、どちらも実際には違うんだが……。

少なくとも今のコイツラには、必要無い話だしな。勘違いしていて貰おう。）」

「……どういうことだ？」

「だから、言っただろうが？　どういうもへったくれもねぇんだよ、その儘の意味なんだから。

ま、尤も。ザンガイスト……いや、システムＸＮによる転移の際のショックで、

データが幾つも破損しているお前達には、もう全く関係無い事ではあるんだがな。

……ったく。アポロンの奴も、好い加減なモン作りやがったぜ。

敢えて欠陥を残しておくなんざ……御陰で、こっちが七面倒な事になっちまってやがるしな。

今度、あのタコに会ったら、一発ぶん殴ってやる。」

「……。」

カイトの呟きの様な台詞に、相変わらずの驚愕と怪訝と不安の色が、皆の顔から読み取れた。

しかし、もうカイトは何も言う気が無いのか。ピートの視線もガン

無視し、欠伸をしていた。
流石にこの儘では、何も始まらないと思ったハーケンは、
溜息を一つ態と大きく付いて、もうこの話を終わらそうとピートに話し掛けた。

「……フゥ。まぁ、そういう訳らしい。
因みに、アシェンは俺のファミリーさ……生まれた頃からのな。
奪うも何も無いのさ。」

「艦長を守るのは、私の役目でしたもんで。」

「（艦長を……『守る』？）……ファミリー？　我らWシリーズは、ただの道具に過ぎん。

指令を受け、任務を果たす……それだけの存在だ。」

「そんなの……悲しすぎます……。あなたはそれでいいんですか！？」

「……自分の任務に疑問が発生するようなプログラムはされていない。」

「ハッ。レモンからの最優先指令を拒否し、放棄した奴がよくもまぁ、ほざけるもんだ。」

アシェンの台詞に疑問を持つも、相変わらずのポーカーフェイスのピート。

M．O．M．O．の言葉にも、カイトのツッコミにも、最早ブレる事は無く冷静に対応していた。

そして、もう話す事は無いと判断したピートは臨戦態勢に移行した。

「……情報収集は終わりだ。これよりミッションを開始する。」

「おれたちを始末しようってかい？　たった二人じゃ厳しいんじゃないか？」

「……いや、三体だ。アーベントは誤算だったがな。」

「……！？　マズイ！　アシェン…！！」

「もう遅い。コードＰＴＰ発動。……Ｗ０７、自分の指揮下に入れ。貴様に拒否権はない。」

「くっ……これは……強制介入用の特殊コード！？

コードＰＴＰ……Ｐｌａｙ（プレイ）　ｔｈｅ（・ザ・）　Ｐｕｐｐｅｔ（パペット）か！」

矢張り、危惧していた通り、発動してしまったコードＰＴＰ。

そのコードを受信してしまったアシェンが、ハーケン達の静止の声も届かず、

Ｗ０３ピート・ペインの元へと歩いて行った。

「コードＰＴＰ発動中。Ｗ０３の指揮の下、作戦行動を継続する。」

「コードＰＴＰ発動中。Ｗ０３の指揮の下、作戦行動を継続する。」

「……任務を続行する。」

「クッ……!?　おい、アシェン！」

「……。」

「チッ……！　間に合わなかったか……いや！　まだ、手はある筈だ……！

まだ、何か……！！」

ハーケン達の声も聞こえず、ただＷ０３の指揮の下、臨戦態勢にて構えるアシェン。

何とか元に戻す方法は無いのかと、必死に模索するが中々方法が見付からない。

自分達が余りにも甘く見ていたと、思わず舌打ちをする者、多数であったが……。

「でも、どうしてですか！？

アシェンさん、あの『楽しくなる形態』で命令は効かない筈じゃ……！」

「そのＤＴＤをも乗り越えるものが、強制介入コード……コードＰＴＰと言う事さ。」

「……その通りだ。自分がここへ来たのは、ＷＯＯを回収する為だけでは無い。

……コードＰＴＰの解除には、『レベル３』での認証が必要だったのでな。」

「じゃあ、さっき居住ブロックのコンソールが一瞬落ちたのは、もしかして……！」

「その認証が完了した証ってワケか……！」

「パソコンしつつ、電子レンジで夜食をチンしたら、

ブレーカーが落ちた……みたいなもんじゃったか……！」

「……シャオ。後で、お尻ペンペンな。」「な、なんでじゃー？！」

「……。」

「経緯などはどうでもよい！　これポンコツ！　しっかりせい！」

多少の漫才があっても、一切和めない空気の中。

他の皆からも、何度も声を掛け自意識を取り戻そうとするが、梨の礫。

さっきのアーベントの様に、何とか出来無いかと画策するが……。

「こうなったら、アーベントの時と同じ方法を取るしか無いようね。アルフィィ……！」

「いや、それ無理だから。」

「な！？　そんな事、やってｍ「やらんでも分かるっての。なぁ、

ハーケン？」……え？」

「……ああ。残念ながら、そいつは無理だろう。アーベントの時とは訳が違うんだ……。

だが、それぐらいにしか、頼れるものは無い……！

先ずは、アシェンを止める……！　話はそれからだ。頼むぜ、みんな……！」

「わかりました……！」「……うまくいけばいいんだけどな、これが。」

「戦闘開始。」

「……。」

「甘く見ない事だ。……コードＰＴＰをな。」

そして、Ｗシリーズとの戦闘が始ま……る事が出来無かった。

全員、その場で動きを止めた。否……動く事が出来無かったからだ。

「――――ハァ、ったく。情け無ぇなぁ、どいつもこいつも。無駄な戦いばっかりしやがって。

それとも、何だ……アレか？　そんなに俺に滅ぼされてぇのか？　この世界はよ。」

カイトの怒気……プレッシャーだった。

それが、ハーケン達は愚か、Wシリーズ達の動きをも、完全に止めていた。

誰もが理解せざるを得なかった。――――今、動いたら、その瞬間殺される――――と。

完全に動きが止まっているハーケン達を押し退けて、カイトがピート達の眼前に来た。

「で、何だっけ？　ＰＴＰを甘く見るな、だっけか？

取り敢えずは、テメェのその下らない幻想をぶち殺すとするか。

強制介入用コード、コードＰＴＰを強制解除。同時に、Ｗ０６並びにＷ０７に、

対コードＰＴＰ用オートガードプログラムをダウンロード……

……完了。」

“なっ！？”「バカな……！？」

「序でだ、救世主（メシア）が命ずる。Ｗ０６、今後ハーケンからの指令を最優先指令事項とする。

これは、あらゆる指令・命令・任務内容に於いて優先される。」

「――――了解。今後、ハーケン・ブロウニングの指令を、最優先

事項とする。」

「よし、良い子だ。ほれ、ハーケン。何をボケッとしてるんだ、さっさとカルディアに命令しな。」

「……！！　あ、ああ……カルディア、アシェン！　こっちへ来い！」

「「了解。」」

「オマケだ。Ｗ０３、Ｗ０６、Ｗ０７に命ずる。コードＡＴＡ、永久凍結。

今後、救世主（メシア）からの命が無い限り、何人たりともＡＴＡの発動は出来無い。」

「「「了解。コードＡＴＡ、永久凍結……完了。

今後、救世主（メシア）の命以外でのコードＡＴＡの解凍は不可。」」」

「宜しい。」

誰もが、今何が起きたのか……何が起こっているのか、理解出来無かった。

只一つ、理解出来た事は、アシェンは元に戻り、カルディアも仲間になった。

そして、コードＡＴＡ……自爆は、一切出来無くなったと言う事だけだった。

カイトからの命を受けたピートは、我に返ると片手で顔を覆い、その儘の状態でカイトを睨みながら、詰問した。

「――――グッ！？　き、キサマ……！　一体、我々に何をした……？！」

「ＰＴＰの解除。対ＰＴＰ用のオートガードプログラムのダウンロード。

Ｗ０６の最優先命令事項の変更。Ｗ０３、Ｗ０６、Ｗ０７のＡＴＡ永久凍結。

……以上だ。他に質問は？」

「……何故……何故だ……！　何故…！！

Ｗシリーズでも無い貴様が、我々に介入出来る？！」

「おいおい……。貴様等Wシリーズの基礎構築をレモンに教えたのも。

その作業の全てを手伝ったのも。

そして、貴様等を造るのに必要な材料の全てを揃えたのも、他ならぬこの俺だぞ？

貴様等の事ならば、レモン以上に良く知っている。この程度は容易い事極まりない。」

皆、初めて見た。ピートの驚愕の表情を。そして……絶望という感情の現れ方を。

そして、この後のカイトの言葉には、誰もが想定出来ず、皆絶句した。

「まぁ、取り敢えず……だ。ここでも貴様の役目は終わった。何処へなりとも行くが良い。」

「……何？」“……バカな（そんな）！？”

「いいから、お前等そこをどいてやれ。ピートも逃げにくいだろう？

態々、鼠一匹逃がすのに、泰山を鳴動させる必要は無い。

憐れな、夢破れたピーターパンに追い打ちを掛けるのも、余りと言えば余りだ。……なぁ？」

「クッ……！　……ッッッ！！？」

そう言いながら、ピートに近付き憐れみの表情で、丸で可哀相な子を宥め賺す様に肩を叩いた。

だが、流石にそれには耐え兼ねたのか……。

肩を叩いた後、後ろを振り返ったカイトに、ピートは音も無く襲い掛かった。

だがしかし、それは叶わなかった。

ピートが腕に付いている、カリング・ブレードを展開させた瞬間、

ピートの周りにどこからとも無く五人の人が現れ、その動きを強制的に止めさせた。

眼前に朱鎗を突き付けている筋骨隆々たる青年。

同じく眼前の首筋に、黄色い柄の日本刀を当てている絶世の美女。

その真下に、双サイを僅か１ｍｍの距離で構えている子供。

そして背後には、後頭部に蒼い銃を突き付けている青年。

最後に、背中と後ろの首筋に短剣の様な物を僅かに肌に食い込ませている、こちらも美女。

それぞれ、何の物音も立てず、誰もが認識出来無い儘に此の場を完全に支配していた。

「――――だから言っただろう？　さっさと逃げ帰れと。

貴様程度を破壊する事など、いつでも出来る程に容易いんだ。

分かるか？　これは、俺からの温情でもあり、また懲罰でもある。

理解したのならば、慰み用にＷ１０でも連れてさっさと脱兎の如く逃げ出すといい。」

「……くぅっ…！　……作戦を変更し……この場を撤収する……！！」

「ああ、それでいい。さあ、とっとと何処へなりとも行け。」

「……キサマ……！　キサマは……キサマだけは……！！
『全て(オール)を知り(ノウレッジ)し者』……カイト＝ヤガミ！　キサマだけは、絶対に許さん！！！
キサマだけは……！　絶対に……！！」

憤怒の表情で。怨嗟の声を吐きながら。ピートは此の場を去って行った。

その後ろ姿を見送りながら、クックック……と不敵な笑みを又零して、カイトは呟いた。

「……あ～りゃりゃ、俺が恨まれちまったよ……ま、いいか。」

「我らが主。御怪我は御座いませんか？」

「ああ、問題無い。そちらも大事無いか？」

「「「「「はっ。有り難き御言葉、痛み入ります。」」」」」

「ああ。鋼牙、鞠音とプラズマはどうした？」

「はっ。両名共、既に外には出て居ります。そろそろ、プラズマも御身に戻られる頃かと。」

「そうか……ああ、今来た。どうやら、丁度今し方送り届けて来た様だな。

良くやった、鋼牙、プラズマ。」

「ははっ！　有り難き幸せ！」‘グワァウッ！！’

カイトが自身の従者達と話している間、誰もがその場を動けなかった。

従者達が醸し出す得も知れぬ威圧感に、誰しもが圧され身動き一つ出来無かったのだ。

その従者達との話も終わったのか。今迄カイトの眼前に跪いていた従者達が忽然と消え失せ、

それを見届けたカイトがこちらに振り向き、

綺麗な……誰もが思わず見惚れる様な笑顔でこう言った。

「よしっ！　んじゃ、ここでやる事も全部終わったし。

鞠音が居るアブリエータ城にでも行くとするか！　な？」

その清々しいとも言える程の笑顔に、思わず毒気を抜かれた一行。

全員で同時に溜息を付き、緊張も何となく解れて行き……。

その儘、やいのやいのと又、御互いに騒ぎながら出口へと皆で歩いて行った。

元に戻ったアシェンと、カルディア・バシリッサという新しい味方と共に。

第玖話【ＭＡＲＩＯＮＥＴＴＥ　ＭＥＳＳＩＡＨ～試される戦略（ストラテジー）～】

如何でしたでしょうか？

はい、御覧の通り、カルディアは助けました。ええ、勿論当然ですとも！

実は、一番最初のプロットでは、

このネバーランド後部から、カイトが介入するつもりだったのです。

ですが、小牟ともっともっと長くイチャイチャしたかった為に、

ドゥルセウス封墓からにした次第だったりします。

次回は、ツンデレウルフの憎いアイツの登場です。マジでガチツンデレ乙。

て言うか、アイツのツンデレとか誰得？ｗ　……いえまぁ、俺得ですがｗｗｗ

では。今話も御覧頂き、誠に有難う御座いました。

第拾話【ほんの少しの休息（ティータイム）～いつか聴いた夜想曲（ノクターン）】

現時刻（２１：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３２４，２４９アクセス　ユニーク：１９３，４７３人
皆様、何時も有難う御座います。

さて、今回は　ネバーランド後部・脱出時～アブリエータ城　迄です。

申し訳有りませんが、今回も戦闘は有りません。ほぼ、会話のみです。

次回こそは、少しは戦闘がある……といいなぁ。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾話【ほんの少しの休息（ティータイム）～いつか聴いた夜想曲（ノクターン）～】

ｓｉｄｅ：ネバーランド後部

「ふぃ～。いやぁ～、ようやっと出れたずぇ～。」

「全くだな。飛んだ寄り道になっちまったもんだぜ。

……改めて、良く戻って来たな、アシェン。」

「イエス！　艦長！」

「カイト。色々と言いたい事はあるが、取り敢えずは俺からも礼を言わせて貰うぜ。

アシェンのみならず、アシェンの姉妹のカルディアも助けてくれた礼をな。」

「何、気にすんな。その程度は造作も無い事だからな。

一応、アシェンだけならアクセルとアルフィミィでも助けられたんだけどな。

流石に、カルディアは無理だったろうしなぁ。いやはや、何とも。

」

（……。Ｗ０３、ピート・ペイン……。

俺のファミリーに手を出そうとした落とし前……必ず付けさせてやるぜ。）

帽子を取り、改めてカイトに礼を言うハーケン。

それをにぱ～と言う擬音でも付きそうな笑顔で、応じたカイト。

心の内は怒りで煮え滾（たぎ）ってはいたが、取り敢えず内側でその怒りも留めて置いた。

「……ふう。それよりも、アシェン、カルディア。

お前達もちゃんとカイトに礼を言っておけよ？」

「ありがとうございやがりました、ナイスヘタレ。」

「……感謝する……？」

「うむ。苦しゅうない、苦しゅうない。」

「これ、ちゃんとお礼してるんでしょうか？」

相変わらず毒舌のアシェンに、礼は一応言ったものの無表情の儘、首を傾げるカルディア。

だが、それでもカイトには充分だった様で、呵々大笑していた。

思わず、ツッコミが入るが尚笑いが増えるだけだった。

「……さてな。ま、カイトは構わないみたいだし、いいんじゃないか？

しかし、シュラもラセツキも絡んでなかったのに、

付き合わせちまって悪かったな、サムライボーイ。」

「いえ、私は構いません。今回の戦い……何より、アシェン殿が無事で良かった。そう思います。

それに、カルディア殿も仲間になってくれました。悪い事とは思いません。」

「ご心配かけました、ヤシの木小僧。」

「勘違いするな。私は、ハーケン・ブロウニング艦長の指揮下に入っただけだ。

貴様らの仲間とやらになったワケでは無い。従って、貴様らの指

示に従う必要も無い。」

矢張り絶口調なアシェンと、融通の利かないカルディアのツンデレ（？）っ振りに、

あはは……；；；　と、困った笑顔と大きな汗マークを貼り付ける一行であったそうな。

「……。……ド珍しいじゃない？　アレディ。あなたがそんな事を言うなんて。」

「……？　どういう事ですか？　ネージュ姫殿。」

「あなたが波国にいた頃は、傷付いた修羅の人達には冷たかったじゃない？」

「そう……でしたか？」

「そうよ。『弱いからそうなる』みたいな感じで。」

「……済みません、ネージュ姫殿。余り覚えていません。」

「……何年も経っていないでしょうに。……まあ、いいけど。

ほら、北のアブリエータ城に行きましょ。」

「……。（師匠……私は……）」

「……ＯＫ、エブリワン。それじゃ、行くとしようぜ。ドクターの居るアブリエータ城へ……な。」

ネージュとアレディの会話も終わり、皆もやっと動く気になったのか。

各々もぞもぞと動き出すのを見たハーケンが号令一下、先導して行くのであった。

第拾話【ほんの少しの休息（ティータイム）～いつか聴いた夜想曲（ノクターン）～】

「艦長、遅いですわね。待ち草臥れましたわ。あら？　そっちのロボ娘は確か……。」

「そう言うなよ、ドクター。あの後、こっちは大変だったんだぜ？　それに、この通りカルディアも仲間になってくれたしな。」

「現在、ハーケン・ブロウニング艦長の指揮の下、共に行動している。」

「……ああ、そうだカルディア。

ドクターの澄井鞠音と、リィ・リー副長、それから親父のジョーン・モーゼスとアシェンと俺。

それが、俺達ブロウニング・ファミリーだ。こいつらの言う事には、従ってくれ。

最後に、俺の事はハーケンか艦長で構わないぜ。」

「了解。Ｄｒ．マリオン・スミイ、副長リィ・リー、ファザージョーン・モーゼス。

W07アシェン・ブレイデル、ハーケン・ブロウニング艦長改め、艦長。

以上、五名の指示に従います。」

相変わらず堅い事務口調ではあったが、取り敢えずファミリーへの危機は去った様だ。

それを確認したハーケン達はホッとし、カイトは笑顔になった。

（ま、今直ぐには無理でも、ハーケン達と接していく内に少しは感情も……。

少なくとも対応の仕方は覚えてくるだろう。）

「ところで、ドクター。

色々あって、カルディア共々メンテをお願いしたいのでありますのですが。」

「こちらも色々あるのですわ。それを確認しない事には、ツァイト

には戻れません。」

「ここに来る途中、西側へ繋がる橋が壊れてたけど……もしかしてそれかい？」

言われて、皆思い出した。そう言えば、確かに壊れていた。

しかも、あれは自然な壊れ方では無く、誰かに力任せに破壊された……そんな壊れ方だった。

「そう言えば……そうだったな。あれは一体、誰の仕業なんだ？ドクター。」

「詳しい事は判りませんが、渡って来た者達がやったようですわね。」

「……ヘンな話だな。そっちから来た連中が、自分で橋を落としたって事かい？」

「何故退路を断つ様な事を……？　あの橋の向こうには、どのような国が？」

「新ロストエレンシア……。

俺のオヤジが代表をやってる街、トレイデル・シュタットがある地方さ。

最近は、街の南側が凍って来てるとかで頭を悩ませてるようだがな。」

「龍寓島（りゅうぐうとう）の西側に広がる雪原でございますね。御陰でコタツが手放せない毎日ですが。

……これじゃ、商売あがったりやっちゅうんニャ。」

「……あの場所ですか。」

以前、カイトが言っていた通り、どうやら修羅、凍鏡（とうきょう）のゲルダの一派の仕業の様だ。

又あのチョコバナナか……と、げんなりする一行であったとさ。

そんな時であった。丁度辺り一帯をサーチし終えたＫＯＳ－ＭＯＳが疑問を呈した。

「東側の門が閉鎖されているのは、侵入者をこの区域に封じ込める為なのですか？」

「既に門は越えて行ったようですわ。閉じたのは戻って来れないようにする為かと。」

「でも、開けて貰わないとね。ここを通らないと、フォルミッドへ

イムに戻れないし……。」

「どなたに言えば、開けてもらえるんでしょう？」

「そりゃ、この城のウルフキング……ルボール・ククルスだろうな。」

「ウルフ……狼さんなのですの？」

「ウルフ……ウルフねえ。な～んか、イヤな感じだな、これが。」

「ま、血の気の多い、ブラッディなウルフなのは確かじゃが。」

ルボール・ククルス。此処、アブリエータ城の城主にして、元エルフェティル北部の出身であり、未だバリバリ現役な王様である。

そして、リィ・リー副長の元相棒でもあり、今も昔もブイブイ言わせていた様である。

前回……エンドレス・フロンティアを巻き込んだあの戦いの時、幾度もハーケン達と相見え、その度に闘った相手でもある。

故に、彼を知っている者は、『あいつか……』と顔をゲンナリと顰

めながら肩を落とし。

彼を知らない者は、皆の様子にキョトンとし、色々な意味で首を傾げていた。

そんな時、ポツンと懐かしむ様に、ネージュが一言漏らした。

「ルボール王……久し振りね。」

「一国の王に、簡単に会えるものなのですか？」

「お子様ねえ、アレディ。こっちにはドセクシャルな姫が三人もいるのよ？」「……は？」

「よいよい、せくしゃるであるぞよ？」「よくわからないけどそうで～す♪」

「ムサい王一人と姫三人……比べて御覧なさい？　これで謁見が出来無いわけがないでしょ！」

「……意味がわからないのですが。」

流石にアレディでは荷が重かったのか、ド姫達のボケには対応出来無かった様だ。

それを見兼ねた……と言うか、時間が惜しいであろうドロシー達が間に入った。

「アホポン達の相手はしなくても結構ですわよ、アレディ。」

「そうよ？　ルボちゃんとアタシ達、結構親しいんだから。」

「良く言うぜ。ルボルボに元オルケストル・アーミーって事がバレて、

大分、目の仇にされてる癖に。」

「いやん♪　それは言っちゃ……ダ・メ♪」

そんな事を言い合いながら、ルボールの居るであろう、城の中へと入り、

城中の人に案内されて、城主の元へとぞろぞろ向かう一行。

その一行の眼前に、非常に不機嫌極まりない、どっからどうみても狼なワンコが、

傍らに自身の武器であるガンランスを立て掛けてある、大きな椅子

の目の前に立って、
先頭にいたカッツェと、その後ろにいた一行を睨み付けていた。

「戻って来たハウゼン家の小娘と……ハコクのシュラだと？
そんな話をいきなり信用しろってのか？　あ？　オルケストルの猫野郎。」

「少なくとも、ハウゼン家のお姫サマについては真実を証明出来てよ？」

「……お久し振りね。成り上がりの獣人王……ルボール・ククルス。」

「……ハッ！　ハウゼン家の連中は『１０年戦争』で全滅したと思ってたんだがな。

ネージュ姫さんよォ。……いいトシして、ガキとつるんで何やってやがる。」

「レディに向かって！　ド失礼なケダモノね！」

取り敢えずの面会＆挨拶も済んだ頃、皆ちょっと気になる事があっ

た。

あったので、聞いてみた。

「へ？　ネージュちゃん、いくつなんだい？」

「花も恥じらう１１７歳よ♪」

「……あの、アレディさんは？」

「齢（よわい）１７になります。」

「ず、すいぶん……年上ですの。」

「ネージュ姫殿……妖精族の方々は長命であると聞いています。師匠からはご老人は労（いたわ）るもの、と教えられています。大丈夫です。」

「大丈夫って何がよ！　言葉からして全然労れてなくない！？」

「つーか、百年以上咲いてる花なんざ、悄々（しおしお）とか枯れてるとかいうレベルじゃなくて、

跡形も無く、消え去ってるレベルだろ。常識的に考えて。」

「お黙りゃッ！！　て言うか……！」

“お前（あなた・アンタ）が言うな（言わないで下さい）！！！”

「（´・ω・`）ｒｚ」

「……はぁ。歳の差コントは後にせい。他にやる事があるじゃろが……。」

漫才も一通りやり終え、しょぼくれているカイトもさておいて。

改めて、ルボールへの用件を伝えた一行。

「まあ、あのアホポンはどうでもいいとして。

単刀直入に言うと、東の通用門を開けて欲しいのですわ。」

「……チッ、どいつもこいつも人のナワバリをチョロチョロしやがって。

しかも、素性がよくわからねェ奴等も混じってるそうじゃねェか。」

「いや、こりゃお恥ずかしいやね。」「お恥ずかしいですの♪」「（´・ω・`）＜呼んだ？」

「テメェらの事じゃねえ!!　ついさっき、謁見させろと飛び込んで来た奴から聞いた話だ。

猫野郎にしろ、こいつにしろ……ブンブンと集(たか)って来やがって。」

恒例のボケにツッコミを入れた所で、溜息を付いたルボールが顎で柱の物陰をクイッと指した。

すると、何時の間にかそこに寄っ掛かっていた誰かが、背にしていた柱から身を起こし、

一行の方に近付いて行きながら、今のルボールの言い種に物言いを付けた。

「ブンブンとは印象が悪いんじゃないかい？　他に言い方があるだろうに。」

「あれ!?　ヘンネ?」「黒い翼……？　その服装を見る限り……カッツェ殿?」

「そ。アタシ達のお仲間よ。ヘンネ・ヴァルキュリア。

見た目はイジワルそうだけど、イイコよ?」「……大きなお世話だよ、副長。」

「アネさんは、フォルミッドヘイム内のクロスゲートの調査に、

回っていた筈でございましただったのでは？」

「……アネさんとも呼ぶんじゃないよ。前にもそう言っただろうが、アシェン。」

キャー！　アネサーン！　でお馴染みの、ヘンネ・ヴァルキュリア。通称、フォルミッドヘイム唯一の常識人。だって、後は天然・オカマ・口の軽いロリっ娘だもの。

ね？　居る訳無いでしょう？　そんな姐さんが、困った様な疲れた様な表情をしている。

どうも、雰囲気（ふいんき）（何故か変換出来た）から察するに、カイト達の漫才に呆れた訳では無さそうだ。

何があったにせよ、先ずは聞いてみない事には何も始まらない。

「……で、一体どうしたんだ？　ダークウイング。伝書バトのアルバイトでも始めたかい？」

「腹立たしいけど、近い事さ。エイゼルから、ここの王サマに伝言があってね。」

「……黒ミルトカイル石の影響か。相変わらず長距離の通信手段は

使えないみたいだねえ。」

「そういう事。

さっき、ルボール王には伝えたけど……フォルミッドヘイムが……封鎖されたよ。」

「封鎖ですって!?　どういうこと?」

皆、驚愕した。誰もが思っていた以上の、異常事態であったのだ。

前(さき)の『１０年戦争』で猛威を振るい、又、前回のエンドレス・フロンティアを巡る戦いで、

ハーケン達を大いに苦しめた、あのフォルミッドヘイムが封鎖……鎖国したというのだから。

「……敵の襲撃を受けてるらしいのさ。」

「らしい……?　不確定情報なのですか?」

「……それが、あたしにも良く解らなくてね。エイゼルから、すぐに脱出しろと指示されてさ。

あたしが外に出てすぐに、電磁バリアで国を覆っちまったよ。」

「国を電磁障壁で……！？　それで、ルボールさんへの伝言って何ですか？」

「『敵』に警戒しろって話だ。……あのガイコツ野郎、ナメやがって。

　オレが遅れを取るとでも思ってるのか。」

「敵……心当たりが多過ぎますが、何と言う名前の方ですか？」

「ああ、そりゃアグラッドヘイムだ。今、ガンド三兄弟が乗り込んでる。

　その内、ガグン坊やとロック・アイも、エイゼル坊やの所に来るだろうよ。

　ついでに、Ｗ０３もＷ１０を引き連れて、情報収集をしながら向かってる途中だろうしな。」

「……アンタ、何か知ってんのかい？　今の内に洗い浚い吐いちまいな。」

「やだぷ～。七面倒な事は俺はパ～ス。適当にハーケン達にでも聞いといておくれな。

　大体、今、お前等に言った所で何の意味も無けりゃ、何も出来無いだろ？

悪い事は言わねぇよ、やめとけやめとけ。」

またか……。そんな顔をして、そんな空気が流れ出す一室。

だが、そんなものは御構い無しとばかりに、ルボールに気さくに話し掛けるカイト。

「そんな事よりもさぁ、どっか休めるトコ無いか？　城下街の宿でも、城の一室でもいいからさ。

どっか安めで休めるとこ、紹介してプリーズ。……あ、今の面白いかも。」

「……下らねェ。宿を紹介するぐれェは構わねェがな……。

その前に、テメェの知っている事を全部吐いてからにしやがれ。それが条件だ。」

「だが断る。俺の最も好きな事は、絶対にＹＥＳと言うと思っている奴に、ＮＯと言ってやる事だ。」

「……なら、宿も無しだ。テメェだけ、外で野宿してな。」

「え～～～……そんぐらいケチケチすんなよ、ルボルボ。」

珍しいルボールからの交換条件も、あっさり袖にしたカイト。
当然の如く話にならないと、宿の紹介はしないと言い切るルボール。
しかし、冗談めかしてカイトが言った名前に、
只でさえプライドの高い一匹狼が反応しない訳は無く。

「……テメェ……このオレに喧嘩売ってやがんのか？」

「は？　喧嘩？　誰が誰に？　俺がお前に？　……おいおい、冗談は顔だけにしてくれよ。

この世界に於ける誰にも、俺が喧嘩を売って意味の有る奴なんかいねぇし、

当然、俺に喧嘩を売れる奴なんか居る訳無ぇだろうが。

お前……もしかして、俺を笑い死にさせるつもりか？」

「――――上等だ。そうだよなァ、ゴチャゴチャ言わずに力尽くで吐かせりゃいいんじゃねェか。

それに……イイ加減、椅子に座ってばっかも飽きて来た所なんでなァ……！！」

「――――ほう、この俺と闘り合うつもりか。ならば、殺ってみるか？　――――ワンコロ。」

自身の側にあったガンランスに手を掛け、カイトに敵意を向けたルボール……だったが。

そのカイトに睨まれた途端、今迄威勢の良かったルボールがガンランスを引っ込めて、

大量の冷や汗を流しながら、カイトに最大級の警戒の唸りを上げていた。

「ガルルルル……！！！！！！

（な、何だ……何なんだ、コイツは……！！？　このオレが怯えている……？！

い、いや……怯えなんてモンじゃねェ……！

アイツと敵対する事を本能が拒否してやがる……くっ…！
こんな大量の冷や汗なんて、一体何年振りに掻いたんだ……？）
」

「――――どうした？　掛かって来ないのか？　それなら、俺から行っても構わないんだが？」

「……チッ……勝手にしやがれ。おい！　誰か、こいつを寝床に連れて行け！！」

「あ、出来れば、四人部屋で頼む。駄目なら、せめて三人部屋で。」

「……好きにしろ。」

結局、耐え切れ無かったルボールが折れ、カイトの部屋を融通する事になった。

厚かましくも、更に要求するカイトに多少げんなりしながらも、それに応じるルボルボであった。

「おう、さんきゅ～。ほれ、お前等、宿取れたぞ～♪」

「……カイト様。あれは少々、強引過ぎでは？」

「「こまけぇこたぁいいんだよ！！」」

「……紅蓮迄、一緒になって……本当に子供なんだから。」

「うにゅ？　カイト兄ちゃんも紅蓮兄ちゃんも子供？」

「そうだな。鋼牙の方が、余程大人だな。」

「えへへ～♪　わ～いわ～い♪　僕、大人だ～♪」

「うむうむ。「矢張り、鋼牙は可愛いなぁ……。」」

「「「だから、ハモんな。」」」

唐突に何処かからか出て来た五人。そんな彼等とわいわい燥(はしゃ)ぎながら、部屋に向かうカイト達。

思わず呆然とそれを見送り、彼等が去った後、今迄の経緯と併せて、カイト達の事を詳しく聞こうとするルボールと、自分達も気になって仕方が無いハーケン達。

思わず皆で、小牟とＫＯＳ－ＭＯＳを問い詰めるも、言葉を濁して何も教えては貰えなかったそうな。

結局。経緯を説明し終わった後は銘々（めいめい）で城内の客室に通され、その日は一日休む事になった。

御互い、情報・状況の整理や、今迄取れなかった旅の垢などを取って、休養を取る為に。

そして、翌日。ヘンネを加えた一行は、ルボールに開けて貰った東の通用門から、

ツァイト・クロコディールと、その先のミラビリス城に向けて、歩を進めるのであった。

第拾話【ほんの少しの休息（ティータイム）～いつか聴いた夜想曲（ノクターン）～】

如何でしたでしょうか？

次は、一部で評価がグン上がりして、その他全てで評価が底辺に迄下がった、あの御仁ですｗｗｗ

第一次デレデレボンバーが見たい人は、要注目ですｗ

そして……その次は……到頭、皆様御待ち兼ねの、あのお城ですね！

ですが、彼が登場する迄は、未だもう2～3話程ある予定。

皆様、もう暫しの間、首を長くして御待ち下さいｗ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾壱話【笑う悪魔の教義（ドクトリン）～ＢＥ　Ａ　ＰＥＲＦＥＣＴ～】（前）

現時刻（０１：２０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３３２，６２０アクセス　ユニーク：１９４，１５２人
皆様、何時も御覧頂き、有難う御座います。

気が付けば、早くも１５０話目です。

此処迄続ける事が出来たのも、偏に皆様の御陰です。誠に心より、感謝致して居ります。

ですが、現在（ここ）でも尚『無限にして無窮なる旅人』は、折り返し地点にすら辿り着いてはいない始末。

まだまだ、これから先も長く長く続きます。どうぞ、今後共カイト達を宜しく御願い致します。

さて。今回は、ツァイト・クロコディール～ミラビリス城直前　迄です。

残念ながら、今回も戦闘は皆無の会話のみの回です。ですが、次回からは寧ろ戦闘メイン……の予定。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾壱話【笑う悪魔の教義（ドクトリン）～ＢＥ　Ａ　ＰＥＲＦＥＣＴ～】

ｓｉｄｅ：ツァイト・クロコディール

アブリエータ城の東の通用門を抜け、橋を二つ程渡った先に、真っ赤な戦艦が鎮座していた。

ツァイト・クロコディール……先代ジョーン・モーゼスから受け継いだハーケンの艦。

初見の誰もが、お～……と言いながら、その戦艦を見上げていた。

「これが、ハーケン殿の地上戦艦……。」

「ああ。……取り敢えず、敵に襲われたりはしてないみたいだな。副長に話を聞いてみようぜ。」

辺りを見回しながら、そう言うハーケンに先導されて、ぞろぞろと皆で戦艦内に入って行った。

すると、虎の顔と身体をした筋肉質の漢が、ハーケン達を出迎えた。

「お帰りなさい、艦長。」

「ああ、今戻ったぜ、副長。」

「へえ、いい艦じゃないさ。水中もいけるのかい？」

「よっ、副長さん。勝手に抜け出して悪かったな！」

「ハーケン殿、これ程の艦をお持ちとは。」

「何言ってるの。これってお古でしょ？　先代『さすらいの賞金稼ぎ』の。」

艦（ツァイト）の中に入った一行は各々、感想や挨拶を述べていた。

リィはそれを黙って聞きながら全員を見回して、

皆の騒付（ざわつ）きが止んだ頃、ハーケンに話し掛けた。

「ハッキリ言って……困りますな、艦長。」

「……ああ、ちょっとゲストが多過ぎるか。ゾロゾロと連れて来ちまったからな。」

「違いますよ。……柔らかいのと硬いのは、ちゃんと分別して貰わなければ。」

「肉なの!?　それは肉として!?」「リィだけはガチじゃ。全然本気じゃから気を付けい。」

「虎の獣羅……？　……かなりの使い手とお見受けしますが。」

「いえ、そんな事は。まあ……若い頃は暴れてましたがね。」

「ウチの副長、リィ・リーだ。仕事の出来るタイガーマンさ。」

今更ながらに副長の紹介をしたハーケン。リィ・リー……元、ルボール・ククルスの相棒。

だが、先代のジョーンに惚れ込み、自ら手下になった。

そして今、二代目のハーケンになっても副長を務め、全幅の信頼を置いている。

因みに、リィの柔硬判断は、決して性的な意味では無く、文字通り食用としての意味である。

すると、そのリィの後ろから、又一人、別の人がハーケンに話し掛けて来た。

「……それで、俺の紹介はしてくれないのか？　ハーケン。」

「オヤジ……！？　どうしてあんたがツァイトにいるんだ？」「お父さんですの？」

「ジョーン・モーゼス！？

あなた、『さすらいの賞金稼ぎ』……ジョーン・モーゼスですの！？」

「オーライ、ボンバーガール……久し振りだな、ドロシー・ミストラル。

『１０年戦争』が始まる前だから……１３、４年振りか？」

ハーケンの養父、先代ツァイト・クロコディール艦長ジョーン・モーゼス……その人であった。

今は、新ロストエレンシアにある、トレイデル・シュタットの長を務めて居り、

現在は既に流離（さすら）ってはいない為、『さすらいの賞金稼ぎ』と言うその名は、

義理の息子であるハーケンに譲り渡している。

又、彼が若かりし頃に、ドロシーとは何度もお宝を巡って争っている仲であり、

久方振りに会う彼の老いた姿に、驚きを隠せないドロシーであった……が。

「……。……また老いましたわね、あなた。」

「それはそうだ。妖精族と違って、俺達は生き急いでいるからな。がっかりしたかな？　マドモアゼル。」

「……いいえ。前よりも、少し素敵になりましたわ。」

（ふう……これも愛ね。）（……何、このバカップル？）（……マスターが言わないでよね。）

貴重過ぎるドロシーのデレデレであった。

もうお前等結婚しちゃえよとは、此の場に居る殆ど誰もが思った。

（当然、画面の外の全プレイヤーが思った事であろう。作者も御多分には洩れては居ない。）

と、御互い自己紹介が終わった頃、ハーケンが忘れてたと言う風に

リィとジョーンの二人に話し掛けた。

「そうだ。オヤジ、副長。二人に紹介したい奴が居るんだ。」

「何だ、嫁さんか？　それなら既に紹介して貰ってるじゃないか。なあ……プリンセス・カグヤ？」

「ふぇ？／／／　そ、そんな……私、その……まだ心の準備が……／／／／／／」

「お熱いですなあ、艦長。私は出来れば食用になる方が良いのですが。」

「……アンタらなあ……ハァ。違うよ、新しいファミリーの紹介だ。

カルディア・バシリッサ。アシェンの……まあ、姉みたいなもんだ。」

ハーケンが二人に呆れながら、自分の後ろに居るカルディアを親指で指差した。

すると、ずっとハーケンを守るかの様に後ろに張り付いていた、

身体の特徴等がアシェンに良く似た女性が、前に出て来て二人に自己紹介をした。

「Ｗ０６カルディア・バシリッサ。救世主（メシア）による最優先命令事項の変更により、

ハーケン・ブロウニング艦長以下、ブロウニングファミリーの五名の命令にのみ従います。」

「……ふむ、成る程。オーライ、クイーン・オブ・ハート。

俺がジョーン・モーゼス。其処にいるハーケン・ブロウニングの父親だ。

ようこそ、我がファミリーへ。我々は君を歓迎する。宜しく、マイ・ドーター。」

「副長のリィ・リーだ。以後、宜しく頼む。」

「ファザー、ジョーン・モーゼス。副長（サブキャプテン）リィ・リー。認識しました。

Ｗ０６カルディア・バシリッサ……以後、艦長以下の指揮下に入ります。御命令をどうぞ。」

「……むぅ……。ハーケン、これは？」

「……どうやら、メモリーがロストしているみたいでな。
まあ、俺達と一緒にいる間に、アシェン……みたいにはならないで欲しいが、
それなりに喋れる様にはなってくれるだろうさ。」
「そうか……オーケーだ、マイ・サン。」
取り敢えず、カルディアとの面会も終わり、正式にファミリーとして認められた様だ。
それを皆で確認した後、改めてジョーンに何故ここに居るのかを問うた。
「……ところで、ハーケン殿の父上がどうしてここに？」
「それなんだが……と、その前に。プリンセス・カグヤ、私の右に。」
「はい？　これでいいですか？」
「プリンセス・ネージュ。戻って来られて何よりだ。……私の左に。」

「別にいいけど、何かしら？」

「……うむ。で、俺がここに来た理由だが……。」

「……何やってるんだ、ジジイ。」「す、すげえ……！」

「……カネ取った方がいいんとちゃうか？」「……はあ。前言撤回ですわね。」

流石はハーケンの父である……と言わざるを得ない。

だが、そんなジョーンに対抗しようとする者が一人居た。

「――――フッ。甘い……甘いぞ、ジョーン・モーゼス。

その程度で満足してしまうとは……それでも、元『さすらいの賞金稼ぎ』か……情けない。」

「――――何？」

「取り敢えずだ。シャオ、マリア、M・O・M・O・。悪いが、ちょっとこっち来てくれるか？」

「何じゃ、一体。」「如何しましたか、救世主（メシア）？」「ヤガミさん、

何の御用でしょうか？」

「まあまあ。取り敢えず、マリアは俺の後ろに来てくれ。後、シャオとM．O．M．O．は俺の前に。」

「私は構いませんが……。」「……嫌な予感しかしないのう。」「……い、一体何を……？」

「よしよし。んじゃ、水薙、黄宇。俺の隣にな。」

「はいは～い、マスタ～♪」「畏まりました、主殿。」

その配置を完成させたカイトが、ジョーンに対してイイ笑顔のドヤ顔を見せ付けて、

まるで世界全てに宣言するかの様に、高らかに言い放った。

そして、その場に居た全ての者を驚愕せしめたのである！　……色んな意味で。

「どうだ、ジョーン。これこそが、パーフェクト・ペンタゴンクロスだ！！！！！」

「なん――――だと――――？　バカな……こ、これ以上の至福の空間を作り出すとは……。」

「ハッハッハ……！　どうだ！　特大・大・中・小・無の全てを取り揃えたこの完璧な布陣は！！

此処迄、目指してこその漢（おとこ）と言うものだろう！！！」

「くっ……俺の……負けだ。」「ああ……そして、俺の勝ちだ。」

“ダメだこいつら、はやくなんとかしないと。”

全員の気持ちが、この瞬間、間違い無く完全にシンクロしていた。

しかし、そんな皆を完全に置いてけ堀にした二人の漢（おとこ）達は、

何時の間にか溜息と共に消えていた、黄宇と水薙に気付く事無く、

更に熱く語らっていた。

「だが、ジョーンよ。これでも俺は未だ満足してはいないぞ。」

「何ッ！？　ま、未だ……極める余地があると言うのか！？」

「勿論だとも。例えば、そうだな……うむ。

錫華・キュオン・アルフィミィ・M・O・M・O・を四方に配置したインペロリアルクロス等もある。」

「……パーフェクトだ、ウォルター。」

“……誰（何方）だよ（なの・でしょうか）、ウォルターって？”

因みに、Ｗ０６カルディア・バシリッサ・Ｔ－ｅｌｏｓ・ＫＯＳ－ＭＯＳ・Ｗ１６エキドナ・イーサッキでならば、

インペリアルクロスｖｅｒ．鈴木麻里子……略して、Ｉ・Ｃ・Ｓ・Ｍである。（ダカラナンダ

一文字違うだけで、或る意味核兵器以上に危険な代物になっていた。（ダカラナニガダ

そんな訳で（どんな訳だ？）、若干（？）人格崩壊したかの様な様子を見せ、

大地……基、床に片膝を付けて涙を流すジョーンに、手を差し伸べるカイト。

引き上げた後は、御互い固い握手をがっちりと交わしていた。美しい漢の友情である。

……周りの冷めた視線さえ無ければ……の話であるが。

「改めて名乗らせて貰おう。トレイデル・シュタットの長、元『さすらいの賞金稼ぎ』。

ジョーン・モーゼスだ。」

「では、こちらも。八神カイト。そちらの流儀に合わせれば、カイト・ヤガミだ。

救世主（メシア）なんて呼ばれちゃいるが、実質、旅人なんてものをやっている。」

「救世主（メシア）……成る程。先程、カルディアが言っていた救世主（メシア）とは、君の事か。

いや、息子と娘達が世話になった様だ。改めて、感謝する。」

「何、気にすんなよ。単に、俺の趣味と暇潰しでやっただけだからな。」

「……フッ、そうか。ではそういう事にしておこう。」「ああ、そういう事だからな。」

何かが共感したのか、再度……今度は、冗談抜きの雰囲気で改めて握手し直していた。

御互い、ようやっと自己紹介が完結した所で、改めて理由と用件を

ジョーンに尋ねた。

「……ゴホン。ここ最近、トレイデル・シュタット周辺に出没するアウトロー達……。

こちらの方に流れて来ているようでな。」

「荒くれ者達とな？　ジョーンよ、どのような輩であるか？」「もしや……。」

「人間と獣人が入り交じった見慣れぬ格闘集団だ。……やってる事は山賊に近いがな。」

「……やはり修羅。私達と同じく、動き始めたようですね。」「やれやれ、次から次へと。」

やっぱりか……。そんな皆の思いが、溜息となって表れた。

それを見たジョーンは、自身の得ている情報と照らし合わせて、どうやら確信に至った様だ。

「お前達が追っている連中らしいな。

落とされた橋の修理が完了し次第、トレイデル・シュタットに戻り、対策をするつもりだ。

……だが、まずはどうするべきか。ナイスなアイディアはあるかね？　プリンセス・カグヤ。」

「ええと、用心棒さんを雇うとかはいかがでしょう？」

「成る程、良い考えだ。……俺の用心棒も反応しそうになった。」

「うるせえぞ、クソジジイ。」

「……流石は元祖『さすらいの賞金稼ぎ』だ。」「……上手い事言いますわね。」

「いや、カイト、ドロシー……完璧なまでのドセクハラだし、上手くもなんともないから。」

やっぱり、全てが台無しである。そして、ドロシーのデレデレも相変わらず絶好調であった。

そんなドロシーに萌えながらも、ちゃんとツッコミが決まると、又、何事も無かったかの様に会話が続けられた。

……オマイラ、スルースキル本当に高いな、おい。

「シュラがこっちにねェ。でも、この辺りにそんな気配は無いけど？」

「関係あるのかは分からないんですが……、

すぐ東のミラビリス城に、エネルギー反応があるんです。

ドクターが戻られたら、調査を御願いしようと思ってたんですが。」

「エネルギー反応、か。『ゲート』だな、恐らく。」

「ゲートって……転移装置みたいなものですの？」

「うむ。ミラビリスっちゅう城には、異界と繋がる扉があってのう。

以前、わしらはその『ゲート』を通って、この世界にやって来たんじゃ。

しかし、それが反応しちょると言う事は……どういう事じゃ？」

「異邦への扉……それが稼働しているとなれば、少し気になります。」

「シュラーフェン・セレストで、リグとかいうアーマーファイターが調べてたな。

……異世界へ繋がるゲートを。」

「ゲートか……怪しいね。エイゼルもクロスゲートをかなり気にしていたしさ。」

「なら、行ってみないか？　ゲートってのにも興味があるし。」

どうやら、話は纏まり、行き先も決まった様だ。

今迄、黙って聞いていたジョーンも、取り敢えず自分の今すべき事を心得た様である。

「……オーライ、状況はわかった。俺は橋が修復されるまで、ここで待つ。

調査を頼むぞ、ハーケン。」

「がんばってくださいね♪」「オジサマぁ。私、ハンドバッグが欲し～い♪」

「なんと不健全な……。」「アレディ、構わねえから、二人に掌打。

」

「……い、致し方ありませんッ！！／／／」「「ハヒィッ！！？」」

「……そこなノリノリで、絶賛尻ビンタ中のダブル駄乳。

悪い中年とヘンな遊びしてないでちゃんと来やがりください。」

「「は、はぁ～ぃ……アイタタタ……ｏｒｚ」」

何気にノリノリなW駄乳に、掌打を噛ますアレディ。

そして、何気に頬を赤らめているのは御愛嬌である為、皆黙って見て見ぬ振りをしていた。

そんな皆の頓痴気(とんちき)騒ぎを余所(よそ)に、ブロウニングファミリーはファミリーで、話し合っていた。

「では艦長、よい報告を待ってますよ。」

「まったく、相変わらず人使いが荒いぜ。ＯＫ、ダディ＆サブキャプテン。

ミラビリス城を見て来るぜ。」

「……。……少し嫌な感じがする。気を抜くなよ、ハーケン。まあ、ミスターカイトがいるから、余程の事が無い限り大丈夫だとは思うがな。」

「……ああ、わかってるさ。どっちもな。」

「オーライ、それでこそ俺の息子だ。」

「フッ……ああ、そうだ……カルディア。」「はい。」

「済まないが、暫くオヤジの警護をしていて貰えないか？　何があるか分からないんでな。」

「了解。ファザーの警護に就きます。ですが艦長、私に対する謝罪は無用です。

指揮官が部下への過ちを認めては、全体の指揮に関わります。」

「……そうかい。まあ、その内意味も分かるさ。取り敢えず、オヤジの警護、頼むぜ。」

「……？　了解です。」

相変わらず、無表情の儘で不思議そうに首を傾げるカルディア。

一行と一緒に連れて行くと、悪影響でも出ると思ったのか、敢えて自身の側から離すハーケン。

何より、今は道中も物騒なのは間違い無い。

本人は未だ大丈夫だとは言っているものの、寄る年波には勝てないだろう。

そんな事を少し思いながら、カルディアをツァイトに残して、

一行はミラビリス城……の真北にある御地蔵様に先に御参りし、

道中の敵から奪った大量の御地蔵様グッズで埋もらせ、御地蔵様を怒らせてから城に向かった。

side:???

其処には、大きな機械の身体の男と、如何にも狡賢(ずるがしこ)そうな優男がいた。

その優男が大男の眼前に傅(かしず)き、何事かを報告していた。

「ロックよ……時は近い。『樹』も『乾いて』おる……。首尾はどうなっている……？」

「はっ……。フォルミッドヘイムですが、特殊な電磁バリアにより、封鎖されました。」

「……。」

「……それにより、クロスゲートの調査を打ち切らざるを得ませんでした。

フォルミッドヘイムの王……名をエイゼル・グラナータ。中々思い切った手を打つものです。」

取り敢えずの現状を報告した時であった。唐突に、大男の後ろから少女の声が聞こえた。

そう、何を隠そう……何時ぞやのあのロリ巨乳な幼女である。

「ハン！　だから、あたいが言ったじゃ無いのさ！　早くしないとムダになるってね！！」

「……貴様か。」

「まあ、いいわ。どうせ、【アイツ】は姉様達が足止めしてくれてるし。

その間に、あいつをこのあたいが消せれば、それで全ては済むんだからね。」

「……相変わらず、何を言っているやら。

まあ、我らの邪魔さえしなければ、何をやろうとも一向に構わんのだがな。」

誰に聞かせる訳でも無く、自分の言いたい事だけを言っている。

毎度の事とは言え、矢張り面白く無いと言う顔をしている優男に、

今度は別方向から、これまた艶(なま)めかしい声が聞こえて来た。

その、服に押し込め切れない程に食(は)み出している豊満な胸は、

見る者の殆どを釘付けにさせる程に、強烈・凶悪であった。

「うふふふ……それで、こちらは何も手を打たないのかしら？
ロック・アイ様。」

「……もう打ってあるのだよ。古代の巨大戦艦から戻ったリグも、既に次の行動に移っている。

私も、あの『異界の装置』について研究を進めている。直に解明出来るだろう。」

「あらやだ、流石はロック様。」

「……所で、君には指令を与えていた筈。いつまで油を売っているのかね？」

「あら、それはごめんなさいね。これから出ようと思っていたところなの。」

その女性からの揶揄(からか)う様な言葉に、その優男は少々眉を顰(ひそ)めながら窘(たしな)めていた。

「……あの『ゲート』は、クロスゲートとは異なった使い方が出来る筈。

……時は近い。使えるように調整しておくのだ。」

「そのゲートについてなんだけど、そこで召喚された『彼女』を連れて行っても構わない？」

「……好きにしたまえ。

あの『異界の装置』のシステムの解析が終われば……あの女には、もう用はない。」

「あらあら、怖い御方。……では。」

「……ブツブツ……あ、待ちなさいよっ！　あたいも行くんだから、置いてくなっ！！」

「何……？　君も行くと言うのかね？　正直、そこまでする必要は無いと思うのだがね。」

取り敢えず話も終え、早速どこかに向かって行こうとする女性。

その姿に、未だブツブツ言っていた幼女が気付いて、後を追おうと急いで同道した。

その珍しい様子に、少し驚いた優男が、幼女に声を掛けた。

すると、その幼女が白地（あからさま）にバカにした様に……いや。

実際、憐れな愚か者を見ている目で優男を睥睨（へいげい）し、

呆れた声で、盛大な溜息と共に捲（まく）し立てて、さっさと行ってしまった。

……もうこれ以上、顔も見たくもないとでも言いた気な様子で。

「……アンタ、あれだけあいつに実力差を見せ付けられといて、まだそんな寝言ほざいてるの？

そんなんだから、なんでオーサマがあたいを側に置いてるか理解出来無いのよ。

下らない、嫉妬に目が眩んでね。……あ～あ、ヤダヤダ。

男の嫉妬ほど、みっともないものは無いわよ？

あたいが帰って来るまでには、少しは考えを改める事ね。

もし、何も変わってないようだったら……あたいがアンタを殺しちゃうかもね♪」

その幼女が行った後、必死に我慢していた優男が、到頭我慢仕切れず、

側で只管（ひたすら）沈黙を保っていた大男に、不敬とは判っていながらも、詰

め寄った。

「……！！！　我が王よッ！！　何故ですッ！！！　何故……！！！

あの様な痴れ者などを御側に……！！！」

「……それも全ては、我らがアグラッドヘイムの為。そして、我らが『樹』の為。

今は、耐えるのだ、ロック・アイ。いずれ、彼奴も屠る日が来よう。」

「……御意ッ……！！」

「……うむ。それよりも、計画は順調に進んでいるようだな。

我は体を馴染ませるまで、今暫くかかる。」

「……お任せを。……ですが、新しい機械の御体、拒否反応などは起きていないようですが？」

御互いの心の内を察した二人であった。そして、優男が身体の調子を訊ねた。

すると大男が、自身の真後ろに聳え立っていた、余りにも巨大過ぎ

る巨木に目を向け、

その巨木を眺めた状態の儘で、優男と話し合った。

そして……話し終わってもまだ、彼のみはその巨樹を見詰め続けていた。

「『この樹の力』を我が物として行使するには、まだ足りぬ。

失われた我が肉体……。異界の機械技術に頼らねばならぬとは、歯痒いものだ。」

「そちらも研究を進めております。御待ち下さい。

我がアグラッドヘイムの王……ガグン・ラウズ様。」

「うむ、早々にな。でなければ、あやつと相見えた時、申し訳が立たぬわ。」

「……はっ、畏まりました。」

各々の様々な思惑が、またもや絡み合う。

その舞台となる鏡の世界に移る姿は……神か、悪魔か……

それとも？

新たな一つの運命が交差する鏡の国（ミラビリス）に迷い込んだ兎（アリス）は、果たして誰か。

それは、未だ紡がれぬ物語では、分かり様も無い答えであった。

第拾壱話【笑う悪魔の教義（ドクトリン）～ＢＥ　Ａ　ＰＥＲＦＥＣＴ～】

第拾壱話【笑う悪魔の教義（ドクトリン）～ＢＥ　Ａ　ＰＥＲＦＥＣＴ～】（後）

如何でしたでしょうか？

申し訳有りませんが、今回はミラビリス城は御預けです。

ですが、次からは到頭、城内に突入。久し振りの戦闘です……

が。

彼が出て来るのは、恐らくもう二話程先になるかと……もう少々御待ち下さいｏｒｚ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾貳話【無限の国のアリス～機械仕掛けの幻想～】（前書き）

現時刻（１９：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３４６，９９５アクセス　ユニーク：１９５，２４８人
皆様、何時も有難う御座います。

さて、到頭今話からミラビリス城内です。今回はミラビリス城・前編～中編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾貳話【無限の国のアリス～機械仕掛けの幻想～】

ｓｉｄｅ：ミラビリス城

その城に入った一行を歓迎し、大いに驚かせたのは、
城内部にびっしりと蔓延(はびこ)っている黒ミルトカイル石だった。

「こいつは……暫く見ない内に、随分ミルトカイル石が増えたな。」

「なぜか……くらくらいたしますの……。」

「……この辺りはミルトカイル石が多いぞな。わらわの城、滅魏(めぎじょう)城も苦労しておる。」

「そう言えば、撤去してるとか言ってましたのですのことでしたね。」

「ふむ。守天めがサボっておらねば、黒石以外はキレイに片付いておろう。」

「……何でも男任せはどうなんだい？」

「男は女に使われて磨かれるのさ。ウチの副長も、そりゃあよく働くよ？」

「私の師匠も厳しい方でした。幼い頃の修練を思い出します。」

「……アレディだけ、意味が違くない？」

「……アレディのお師匠さん、絶対にそういう意図で鍛えたんじゃないと思うけど。」

何時ものグダグダ会話になっていた。

すると、今迄何度も頷きながら黙って聞いていたカイトが、徐に呟き出した。

それは、皆の会話に加わると言うよりも、昔を懐かしむ様に沁み沁みと言葉にしている様だった。

「そうだなぁ……俺も良く、はやてや風音に、あれやれこれやれ……って言われてたっけ。」

「はやて……かざね……聞いた事の無い名前だが、どういう関係だい？」

「ん？　俺の妻と娘の名前だが？」

“……つ、妻と娘ぇぇぇえええええーーーーー！？！？！？！？”

「……あれ？　言ってなかったっけ？　俺、一応これでも妻子持ちなんだが。」

“聞いてないッッッ！！！！！”

「でも、ジョーンは気付いてたけど？」“なん……だと（だって・ですって）……？！”

衝撃の事実がハーケン達の耳に届いた。あ～……、そういや言ってなかったっけ？　と、

最近自分がボケ始めたのでは無いかと、今更ながらに気にするカイトであった。

「……と、とにかくだ。アンタ、家族がいながらこんなとこでブラブラしてていいのか？」

「そ、そうですよ！　早い内に帰って奥さんや娘さんを安心させてあげないと！」

「あ、それなら大丈夫だ、問題無い。」

「……それはまた、どういう意味ですの？」

「ん～……まぁ、二人共、既に死別してるんでな。」

“――――――――――ぇ？”

「だがまぁ、新しく出来た今の家族とは何時も一緒にいるから、俺なら大丈夫だ。気にするなよ。」

更に衝撃の事実。だが、いや～な、静かな空気になる前に、カイトがばっさりと切り捨てた。

それを察したハーケンやアクセル達が、しんみりとした空気に戻る前に、会話を戻した。

「……そうか、それならいいんだが。しかし、本当に良く話が脱線するな。」

「全くだぜ。……なんで黒石の話から、こういう話になるんだか。」

「……く、黒ミルトカイル石も凄いですけど……このお城はずいぶん奇妙な……というか、

独特の雰囲気がありますね。」

「そんな気を遣った言い方をしないでも、悪趣味なだけでしょ？

……自分の銅像をド堂々と正面の玄関に置くなんてね。」

「自分の銅像ねえ。……もしかして、この並んでるウサギみたいなのがそうかい？」

「真ん中の、タマゴ型極まりない人でしたよね？」

「そうよ。城主……ハーム・ダーム。中々食えないオジサンだったけどネ。」

「副長、このヒト……っていうかこのタマゴ、知ってるの？」

そのキュオンの言葉に、カッツェの雰囲気がガラリと変わった。

今迄のおちゃらけたものではなく……オルケストル・アーミーの副長としての顔に。

「それはそうよ。……だって、『10年戦争』末期……処断したのはアタシだもの。」

「え!?　カッツェ、あなた……。」

「そうか……こいつもアインストだったんじゃないかい？　副長。」

「こいつも……？　大将、どういうことだい？」

少し時間は掛かるかと思われたが、事情を説明する為にも少々簡易的ではあるが、

エンドレス・フロンティアに関する歴史のお勉強会を開く事になった。

「アインストは、フォルミッドヘイムの前王、シュタール・ディー

プに変身して、

『１０年戦争』を起こしたのよ。

それで、今の王サマ、エイゼル・グラナータが退治して……戦争は終わったのよネ。」

「……ハウゼン家にド協力的だったハーム・ダームが、

あの戦争で突然フォルミッド側に寝返ったのって……。」

「既にカレもカレでなく……アインストが化けたニセモノだったってワケ。」

「アインスト……。」「それが……あの戦争の真実なのね。」「ネージュ姫殿……。」

「……とんだ歴史のお勉強になってしまいましたわね。」

未だ少し話し足り無さそうな雰囲気だったが、何時迄もこうして話している訳にもいかない。

多少気が引ける所はあるものの、今は取り敢えず先に進む事にした。

「思うところがあるのは分かるが、スタディの時間はここまでだ。

……目指すはこのキャッスルの最奥部にあるゲートだろ？」

「そうですね。起動しているという異邦への扉……やはり、少し気になります。」

「そうじゃのう。……しかし、ここに来て思い出したんじゃが、沙夜の奴めは今頃、何処で何しとるんじゃろかのう？」

「……私も、未だＴ－ｅｌｏｓを見付けていません。」

「あのエロス狐にしても、Ｔ－エロスにしても、見付けたら縛り上げて置きましょうなのです。」

「……テロス殿は分かりませんが、沙夜殿はアグラッドヘイムと行動を共にしています。

彼らがこの城にあるという『異界への扉』を調べているのならば……沙夜殿も、或いは。」

「ま、そんなに調子良くはいかぬじゃろうが……期待するのはタダじゃからの。」

「ＯＫ、ダブル・フォックスに期待しよう。その為にも、早いところゲートに辿り着かないとな。」

「うむ。……黒石の所為で、正面の扉には入れぬ。左側にあるハシゴから下に降りるぞよ？」

「……のう、カイト。」

「ん？　どした、シャオ。」

「……あやつは……零児（れいじ）は、来てくれると思うかの？」

「……当たり前だろ？　忘れたのか、シャオ。英雄（ヒーロー）はいつでも遅れてやって来るものなんだぜ？

何より、ここは不思議な鏡の国。……主人公（アリス）が来るには、格好の場所だと思わないか？」

「……そうじゃの。期待するのはタダじゃからな。」

「大丈夫だよ、シャオ。零児なら必ず来る。

もし、あいつが自分自身で来られなかったとしても、俺が無理矢理連れて来るさ。

俺は、救世主（メシア）で、お前の元恋人だ。惚れてる女が泣いている姿を何時迄も眺めていられる程、

俺は悪趣味じゃない。……そいつも忘れてたかな？」

「……戯けが。フン……まぁ、それなりには、聞いといて

やるわい。」

第拾貳話【無限の国のアリス～機械仕掛けの幻想～】

～Ｂａｔｔｌｅ　１１～

「モモ、一生懸命応援します！」

「人間じゃない可愛いコが多いねえ。」

「は、はいです。ありがとうございます……／／／」

「むふふ……可愛がっちゃるかのう♪」「いい子いい子とグリグリいたしますの♪」

「では、こぶしを回して下さい。」

「んん～～にゃ！　って、どうして!?」「フーー！　ダンスィンオゥルナイ!」

「ヒューー！　フィーバーフィーバー！　ヒャッホイ！　ヒャーウィーゴー!」

「OK、ヒートアップ・ガール。いくぜ!」

「ほれほれ、わしらの光弾が!」

「あなたの胸に迫りますの♪」

「見せてやるとしようぞ?」「1ドットのエクスタシーをのう♪」

「なんだか……胸がモヤモヤしますの。」「なんだって?　どれどれ……?」

「ハーケンさん、ちょっと……。」

「ウェイト、シュラバ・ノーだぜ、カグヤ……。」

「……急所を一突きすれば勝てますよ？♪」「……戦う女は怖いねえ。」

「おっと、こりゃ分の悪い博打だな。」

「分の悪い賭けは嫌いじゃありません♪」

「分の悪い賭けは……大好きですの？」

「はい！　凄く胸がドキドキしますよね♪」

「ドキがムネムネ……はぁ～、さっぱりさっぱり～♪」↑大根を両手に持っている

「あ、ストッキングが伝線しちゃった……。」

「うう……足が冷えて来ましたわ。」

「モモヒキでも履くがよかろう。それにしてもちと冷えるぞな。腹巻きを持てい。」

「自分で持ち歩いとけよ。」「おなかくらい隠さないと！」「錫華姫殿、腹部は急所が……。」

「重心が崩れるからダメである。それと、丸出しでしか得られぬものもあるのでな。」

「……寒くないの、その格好……？」

「女は時にヤセガマンであるぞよ？　むむ？　着物の裾が汚れていたぞよ？」

「ルックス低下。洗浄が必要です。ジャキガンオーにも整備が必要だと判断します。」

「何処迄も気が利くからくりよな。では早速、邪鬼銃王の手入れでもするか。」

「なあなあ、それってワックスとかいるのか？」

「ルックス、１０％低下にゃ。洗浄の必要性ありと判断します。」

「おしゃれにはこだわるようにゃん？」「石鹸とかでもいいですか？」

「ルックス、１００％低下。」「それでは完全に黒一色です。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳはメンテナンスしなくていいの？」

「オートメンテナンス機能があります。」

「よいよい、気分はどうであるか？　こすもす。」

「私にそのような感情はありません。」

「あの、早く先に進んだ方が……。ヤガミさんが、もう飽きて遊んじゃってますし……。」

～Ｂａｔｔｌｅ　１２～

「……これもまた、運命なのだろうな。」

「まさかオルケストル・アーミーだったとはね。」

「これも罪滅ぼしだ。……アタシなりのな。」

「なれば、鬼の力を貸してやっても良いぞ？」

「なんの、アタシには猫の手がある！」

「男っぽいほうがかっこいいですよ？」

「この喋り方、結構クセになってるのよネェ。」

「ちょっと面倒くさくないか～い？」

「ボクもめんどくさい！　帰る～？」

「気分が乗りませんので、ご自由にどうぞ？」「えっ？　始まりますよ！？」

「……また戦闘とは、飽きてまいりました。」

「寝ててもいいですが、殴られまする。」

「……いいトコに当たってくれよ！」

「ど、どこを狙っておりますの！？」

「ハートを狙い撃ち……とか言ってな！」

「いやん、ちょっとキュンとしましたの／／／」

「カッコいいとこ見せてネェ？　カウボーイ♪」

「うっ、今回はちょっと手を抜くか……。」

「では、軽くドひどい目にあわせておやり。」「加減しつつ、殲滅（せんめつ）します。」

「金目の物が残る程度でお願いしま～す♪」

「了解です、コマ。出力をセーブします。」

「手加減には定評のある俺が通り過ぎて行って来ます。」

“何処に!?　そして、何をしに!?”

「アタシ、シャワーを浴びたいわぁ……んー！　もうガマン出来無い！

ああら！　鍛えてるわねェ。特にその腹筋……ウフッ♪」

「……あ、ありがとうございます。カッツェ殿。」

「もう困っちゃうわねえ。……イイオトコばかりで♪」

「……敵のじゃなくて、俺らの事かよ。」

「あらまあ！　ステキよ、ハーケンったら、もう！」

「俺にホレるなよ?　……本当に頼むぜ。」

「今回はカップリングが楽しめるのう♪」

「ご機嫌ちゃんですね、ＢＬギツネ。」「うむ。男が増えて、多少は楽しめるぞな。」

「……俺たちの何を楽しんでるんだ？」「ハーケン・クロス・零児もアリじゃな……。」

「……いい加減にしとけよ、腐れフォックス。」

「アクセル・クロス・アレディィじゃろ！」「アレディ・クロス・アクセルですの。」

「え？　どっちも受けじゃないの？　ねぇ、マスター？」

「俺に聞くな。俺の場合は寧ろ、攻めになる方が多いと思うがな。相手が龍斗だとさ。」

“成る程。”「……成る程ではありません。カイト様も乗らないで下さい。」

「……全く、空気の読めない連中だぜ。」

「なにごともムードが大切ですの♪」

「わしもかなり熱くなって来おったぞ？」

「な～に～？　そういう時期～？　ほらほら！　ボクもモヤモヤし

て来たよ！」

「それは単なる湯気ですの。」「アシェン殿から……覇気が……！？」

「ざんね～ん！　湯気だよ～！　覇気全開～！　ホワッチャー！」

「……アシェン殿、それは勘違いです。」「……手からもいろいろと出せますのね。」

「……ぬしもいろいろと出ておるのう。後は毒霧とかあれば完璧じゃな！」

「そしたらウィザードかバズソーですの♪」

「レッツゴー！　行っくぽ～～ん！」「ふむ、中々魔法使いっぽいのう。」

「魔法使いキュオン！　次回もお楽しみに！」「私だったら、魔法妖精アルフィミィですの♪」

「あら？　貴女魔法が使えるのかしら？」

「女のコはみんな魔法使いですの♪　アルフィミィが貴女に問いますの。其は何ぞ？」

「わしは小牟。森羅のエージェントなり。わしが汝に問う！　其は何ぞ？」

「俺は八神カイト。『宇宙（そら）の救世主（メシア）』にして『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』也。

……って何？　このマジカ○バナナ的流れは？」

ｓｉｄｅ：ミラビリス城内

長い梯子を登って降りて、面倒なトラップに阻（はば）まれるも、四つの動く銅像を壊したのが今し方。

全部壊した時に現れた階段を下り、ホッと一息付きながら進む一行の目の前に、

つい先程、話していた件の人……Ｔ－ｅｌｏｓが向かい側から現れた。

「……。」

「あ……っ！」「Ｔ－ｅｌｏｓ……！？」「ヒュウ。こいつはウワ

サをすれば……って奴だな。」

「こりゃまた……凄いのが出て来たな。ぜひとも紹介して欲しいね、これは♪」

「……全く、見境の無いナンパ男であるな。」

「いやあ……こやつはやめといた方がいいじゃろ。『ツン殺』っちゅう奴じゃぞ？」

「『デレ』はないんですのね……。」

「……アクセル殿、この方が……先程話に出ていたテロス殿です。かなり手強い機兵です。油断はなさらぬよう。」

「機兵って……アシェンちゃんみたいなアンドロイドって事かい？」

「私の方が強さもキュートさも上です。」

「……無意味に張り合うんじゃないよ。同じロボットって事だろ？」

「アンドロイドとは少し違います。彼女の身体は……。」

何故か何時の間にか、Ｔ－ｅｌｏｓの品評会が始まっていた。

相変わらず脱線し捲る一行の会話を黙って聞いていたＴ－ｅｌｏｓだったが、

ＫＯＳ－ＭＯＳの訂正しようとした言葉には流石に黙ってはいられなかったのか、

到頭、Ｔ－ｅｌｏｓの方から話し掛けて来た。

「相変わらず無駄口の多い連中だな。鬱陶しい。」

「無駄口が多い事には、激しく同意する。」

「ほう……少しは話が分かる奴がいるじゃないか。」

「……Ｔ－ｅｌｏｓ、どうしてここにいるのですか？

私よりも先に、アレディ達と出会った事は聞いています。

ですが、あなたは私がいたシュラーフェン・セレストには現れませんでした。」

「そうだったねえ。てっきりやり合ってると思ってたのにさ。」

そのＫＯＳ－ＭＯＳの台詞に、少々苦虫を噛み潰した様な顔をして、Ｔ－ｅｌｏｓは呟きで応えた。

「……邪魔な黒石に阻まれたのさ。」

「何言ってやがる。物理法則を書き換えられるお前に、斬れない物なんて殆ど無ぇだろうが。

況(ま)してや、ゾハルよりもポテンシャルの低いアインストの余剰石(よじょうせき)程度……。

お前ならさっさとバラバラにして、先に進めるだろう？　なぁ……マリアの肉体よ。」

「――――貴様、一体何者だ？　何故、マリアの事を知っている？」

「Ｔ－ｅｌｏｓ……貴女も御存知の筈……この方が、救世主(メシア)様です。」

「めしあ……メシア…？　……！！　救世主(メシア)だと！？　こいつが……！」

「そういう事だ。これで、少しはこちらの話も聞いてくれる気になったかな？」

「……フン。」

カイトの正体を聞いて驚愕の表情を見せていたＴ－ｅｌｏｓだったが、

すぐに冷静さを取り戻し、カイトの言葉通りに少しはこちらの話…質問にも答えてくれる様だ。

「……Ｔ－ｅｌｏｓ。貴女は、何故シュラーフェン・セレストに留まらなかったのですか？

貴女が追跡行動を途中放棄するとは考えられません。

……他に優先すべき事態が生じない限りは。」

「……ＫＯＳ－ＭＯＳ。では、貴様は何故ここにいる？　しかも、仲間の小娘を連れて。」

「そ、それは、モモのせいで、転移装置が……。」

「貴女の所為ではありません、モモ。あれは不可抗力です。」

そのＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．とＫＯＳ－ＭＯＳの言葉で確信に至ったのか。
溜息を一つ落とし、苛付いた声で自身が得た結論を漏らした。

「……やはりな。『この世界』が我々の回帰を阻むか。」

「!?　……貴方も気付いていたのですか、Ｔ－ｅｌｏｓ。」

「……流石に貴様も気付いていたか。その魂を宿しているのは、伊達ではないようだな。」

「……いえ、私も気付きませんでした。ですが、救世主（メシア）からの言で知りました。」

「……そうか。一応は、本物の救世主様……と言う訳か。」

「ま、そういうこった。取り敢えず、今は退けＴ－ｅｌｏｓ。

貴様とて、ここで朽ちるは本意では無かろう？　先にエスピナ城に行っていろ。

この世界が回帰を阻む理由……その力の一片がある。貴様なら、それも理解出来るだろう。」

「……いいだろう。今は、貴様の言う事に従っておいてやる。

だが、ＫＯＳ－ＭＯＳ……忘れるな。

貴様の魂は、こんな世界に良いようにされていい程、安っぽいモノでは無いと言う事を。」

そう最後に言い放ち、何故かヒルベルト発動モードになってその場から足早に去って行った。

後に残された一行は、ハッと我に返ると即座にカイトとＫＯＳ－ＭＯＳ達に詰問した。

「ちょ、ちょっと、今のド意味深な言葉はどういう意味！？

と言うか、私の城がどうしたって言うの？！」

「貴女達と言い、Ｔ－ｅｌｏｓと言い、言う事が一々意味深過ぎますわっ！

特に、カイト！　貴方です、貴方っ！！　もう少し、私達にも解る様に御話なさい！」

「やだぷ～。」

“……こっの……！　こいつ～～～……！！！！！”

相変わらず惚けた……と言うか、人をおちょくった様なカイトの態度に、イラッとする一行。

しかし一転。カイトは真面目な顔付きになると、一行に先を促す様に話し掛けた。

「……まぁ、冗談は抜きにしてだ。今、知る必要は無い。この儘、進んで行けば自ずと解るさ。

取り敢えず、今するべき事はこの先……ミラビリス城の最奥部に進む事だろ？

なぁ、シャオ、ハーケン。早く、アイツに会いたいだろう？」

「……う、うむ／／／」「アイツ？　……！？　まさか……！」

「クックック……。まぁ、そういう事だ。ほれ、さっさと行こうぜ？

みんなが待望のツッコミ役が、出待ちしてるからさ。」

そのカイトの言葉に、彼を知っている者は、皆少し浮き足立っている様だった。

一行が目指す目的地……この不思議な鏡の国の最奥部。

其処に、何が……誰が待ち受けているとも知らずに。

第拾貳話【無限の国のアリス～機械仕掛けの幻想～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

残念ながら、今回は彼の出番は未だでした。次回を是非共、御楽しみにｗ

そして、何やら不穏な空気……果たして果たして……。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾参話【ゆらぎの街のアリス～必勝への軌跡～】（前書き）

現時刻（０２：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３５６，６５６アクセス　ユニーク：１９６，０３８人
皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて、皆様。大変御待たせ致しました。タイトル通り、到頭、あの彼の登場です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

第拾参話【ゆらぎの街のアリス～必勝への軌跡～】

ｓｉｄｅ：ミラビリス城内

Ｔ－ｅｌｏｓと闘わずに、カイトの言う儘に外に出て行った彼女を見送った一行は、

彼女が来た方向へと歩を進め、城内のうんざりする程面倒な、様々なトラップを潜り抜けた。

～Ｂａｔｔｌｅ　１３～

「あたしの空中殺法を見せてやるよ。」

「よいよい、そちも空中でくねるがよかろう。」「……そんなことしたら墜落するよ。」

「ならば、そちもくねらせていくがよい。」「……そんなにシェイクしたら自爆しますわ。」

「仕方無いのう……では、撃って撃って撃ち捲るぞよ！」

「デンジャラスな午後じゃのう。では、フィーバーして確変といくかのう♪」

「打ち止めになるまで舞ってくれようぞ♪」

「ド派手なアクション、決めますから！」「怒濤の嵐を巻き起こしちゃる！」

「寄らば斬るなり、斬冠刀！」

「後は撃つなり、邪鬼銃王。」

「伊達や酔狂で、こんな刀は使いません！」「チョウのように舞い、ハチのように……ですの。」

「アルフィミィ、準備は出来てるか？」

「はい、問題ナッスィングですの！」

「ＯＫ、ショウタイム！」「お楽しみはこれからじゃ♪　わしのフルパワーを見せちゃろうかのう！」

「ファスナー全開くらいじゃ足りないよ？」

「不用意だな。射程内だ……！」

「刀が届くということですのよ？　アクセル、さくっといきますの♪」

「ああ。この切っ先、触れれば切れるぜ。んじゃ、アルフィミィちゃん、カタをつけようぜ？」

「ラジャー了解しておりますの！」「アクセル、ぬしのいいトコ見せてみい。」

「よぉ～し、ぶったまげるなよ？　それで、今回のポイントマンはどうする？」

「わしとアクセル、アルフィミィでやる！」「ここはひとつ……がんばってみますの♪」

「デキによっては、オヒネリを挟んじゃるぞ？」

「近接戦闘モードで行動開始。」「後はぶん殴るのみですたい。」

「逃げるなよ？　弾がもったいないからな。」

「その通りです。ターゲットをロックオン。」

「メカバトラー・ＫＯＳ－ＭＯＳ！　やったれい！」

「対グノーシス専用人型掃討兵器、ＫＯＳ－ＭＯＳです。」

「では、まとめていきますの、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「了解、全方位攻撃をスタンバイ。」

「ところで、その翼……どこに注文すればいいのかしら？」

「これは自前だよ！　……失礼な姫だね。しかし、羽も無いのに飛び回るとはねえ……。」

「これも乙女のパワーですの♪」

「全く……ヒラヒラフワフワと、どうなってるんだ？」

「企業秘密にて、あしからずですの♪」

「ファースト・イグニッション！　ウイング・モード第一形態（アインス）！飛び捲るぜ！！」

「……アレはどう説明なさるおつもり？」

「……あんな非常識な奴を基準にしないでおくれよ。」

「この戦力差じゃ負けようが無いね。……しかし、みんな纏めて、ウチの隊に欲しいねえ。」

「これにて一件落着っ♪」

「うむ！　桜吹雪が目に沁みるのう。見事な幻影闘技じゃったな、アレディ。」

「機神拳と覇皇拳です、小牟殿。それにしても、この機神拳と覇皇拳、使い分けねば……。」

「ボクの使い分けもイケてるっしょ！　……むむむ。も～、アレきゅんはマジメちゃん！」

「……貴女はもう少し真面目にすべきです。」

「ストイックなのにも程がありやんす。」

「己を律するのもまた、修練です。そして、積み重ねた勝利が血肉となる。

今の一撃ならば立てまい……！」

「はい。動体反応、消失しています。高度なコンビネーションでした、アレディ。」

「ありがとうございます。ですが、まだまだ……何発か無駄な打撃があった……。」

「ラストの二発……あれが効いたのう。新たなる闘魂神話の始まりじゃな。」

「神話に相応しい舞いを見せるぞよ？　ほ～っほっほ！　血が滾るぞよ！」

「ストレスでも溜まってるのか？　お疲れだったな、プリンセス。」

「まだまだ行けますよ、ハーケンさん♪　はぁ～、いい汗掻けました！」

「……スポーツ感覚で戦うなよな。ＯＫ、いいフィニッシュだったな。」

「はい！　ＯＫ極まりない感じでした♪　ふう、これで少し痩せられるといいけど……。」

「ＯＫ、ダイエットガール。大変だな。しかし、見慣れない技が増えたな？」

「剣術の修行は続けてますから♪　それで、どうでした？　ハーケンさん。」

「見所満載だったぜ？　いろいろと……。中々、良い眺めだったぜ？」

「後日、請求書をお送りしますので。次はもっと早くね。いいこと？」

「ＯＫ、命令ガール。仰せのままに。」

「ご主人様ぁ、イマイチでした！」

「……せめて褒めろ。ムカつくぜ。」

「もう少しド上品に振る舞えませんこと？」

「じょ、上品な感じはしませんけど……。それにネージュさん、ちょっと出し過ぎじゃ……。」

「貴女に負けてはいられませんから。まあ、私程ではありませんが、お見事。」

「は、はあ……ありがとうございます……。ふう……汗は掻かないんですか？」

「発汗機能は積載されていません。コンディションチェックを開始。」

「右よーし！　左よーし！　……暑いでしょう、煽ってやりまする。」

「ど、どこを煽るおつもり！？／／／　全く……野蛮ですこと／／／」

「人のことは言えんなりよ、ハレンチ姫。それにしても、見事な頭

突きでしたのです。」

「そんな技は使っておらぬ。モタつきおって、ポンコツめが。ぐずぐずするでない。」

「胸の海苔を締め上げた後、ヘソのゴマを取り尽くしてくれる。

あ、そうだ♪　ヘソを穿(ほじく)ってもい～い？　もしくは指突っ込んでい～い？」

「よ、よさぬか／／／　気絶してしまうぞな……／／／」「どういう意図でかしら!?／／／」

「頑張ってよ？　オルケストル見習い君？」

「昇進の暁には、下克上をします。見さらせ！　コードＤＴＤの力を！」

「う～ん、簡単に使い過ぎじゃないか？　そういやコードＤＴＤ以外にも……なんかあったよな？」

「うん！　爆発する奴があるよ！　でも、カイトに止められちゃったけどね！」

「あ～、そうだっけ？　にしても、そのモード、付き合う方も疲れるぜ。」

「女のコは幾つも顔があるんだよ♪」「そう言えば、その熱暴走っ

て、熱くないんですか？」

「ホット&エキサイティン！　イエー！」「全く……暑苦しい格好ですこと。」

「物理的にもあっついけどね！」「キャラ付けが極端過ぎるんじゃない？」

「人のことは言えないでしょうなのです。」

「……あの～……それって、疲れませんか？」

「声の使い分けがめんどくさい！」

“――――へ？”

「七色の声を持つ男が呼ばれて飛び出てジャジャジャジャ～～～ン！！！」

さくｓｈ……基、天の声『中の人ネタはそろそろ危ないので止めるでおじゃる。』

“はぁ～～～い！”

銅像に隠れて奇襲を狙った敵達。それらの敵も銅像も全て壊して初めて作動する仕掛け。

～Ｂａｔｔｌｅ　１４～

「戦術砲機ブロンテ・クラフト、起動！」

「武器に頼りすぎはよくない、キュオン殿。」

「強いからいいの！　こんの爆発チョンマゲ！　あ！　その鬼の面、オプションにしていい？」

「鬼菩薩は私のオプションですの。」「いざとなったら鏡玉を出すぞよ？」

「あんなでっかいの帽子から出せないよ！」

「ホウキに乗った魔女か……やれやれ。」

「なあに？　戦術砲機に文句ある？　色々出す勝負なら負けないんだから！」

「目的は敵の殲滅です、キュオン。」

「わかってるって！　やっちゃうよん♪　ギリギリギリギリ……！」

「あ、あの……キュオンちゃん？　私が……何か？」

「新しい姫の登場で、アンタも終わりニャ。」

「え？　ええ～～！？　こ、困りますぅ！　ここは失敗出来ませんね……。」

「はい。しくじったら、絞ります。」「私達で何とかするしか無いですね！」

「はい。殲滅戦を開始します。」「さくさく、ザクザクまいりますの♪」

「切り刻むんですね！　分かります！　あ、斬冠刀も使ってみますか？」

「でかくて、厚くて、重くて、大雑把だな。姫さん、スマートに行こうぜ！」

「その言葉、女のコには地雷よ？　まず、敵をしっかりと押さえ付けて。」

「俺ごとやるつもりじゃないだろうな？　さて、ここはどう切り抜ける、アレディ？」

「我が手、我が足、我が覇気にて……！　懐に飛び込めれば、或い

は！」

「ＯＫ、考えすぎるなよ、修羅ボーイ。銃の方がラクだぜ？　遠くまで飛ぶしな。」

「覇気を放てば問題ありません。我が覇気を止められるか！」

「まずはちゃんと当てるようにしなさい？　では、貴方のハシン拳、見せて差し上げなさい？」

「覇皇拳と機神拳です、ネージュ姫殿。……！？　足から覇気を放てるのですか！？」

「火薬でズルをしとりますのことよ。ＫＯＳ－ＭＯＳもパーッとやんなよ！」

「了解です。リミッターを解除します。下がって下さい、カグヤ。」

「刀が届かないから下がれません！　敵が来ましたね。寄らば斬ります！」

「その上でグリグリいたしますの♪　ハーケン、ご活躍に期待しておりますの♪」

「ＯＫ、エトランゼガール。見てなよ？　高飛車プリンセス、用意はいいかい？」

「構いませんことよ、勘違いハンター。バウンティーハンターのお

手並み拝見。」

「仕方ないな、見せてやるか。ショウタイムといこう。アーユーオーケイ？」

「まったくキザな男だ、こいつは。ま、なるようにならあね。」

「そのような心掛けでは勝てません。」

「あし～た～がある～さ♪　明日がある～♪　なん～と～かな～る♪　なん～と～かな～る～♪

なん～と～か～な～～あ～る～～う～さ～～～～♪」

「……あそこで、歌いながら次々敵を倒してる奴は、何なんだ？」

「……カイト殿は特別です。あの方を基準に当て嵌めてはいけないと思います。」

「だらしないなあ。欲求不満だよ～……まあ、ただ暴れてただけだけどね～。」

「手品で倒せる相手だったな、これが。」「ああ、ホウキに任せり

ゃいいからラクだな。」

「キュオンを馬鹿にしたな、この赤タレ目！　キモキザ！　これには微妙な操作がいるの！」

「勝利の舞である。ほら演出、早くせい。」

「キュオンの技は舞台装置じゃないよ！」「飛ぶわ、ワープするわ、と芸達者だな。」

「あたし達を芸人みたいに見るんじゃないよ。」

「お疲れだな、ヴァルキリーガール。」

「ま、これも仕事さ。選り好みは無しだよ。しかし、異世界のゲストも大変だね。」

「大丈夫、ゲストと言えば私ですの♪」「俺もゲストだな、一応。大丈夫だ、問題無い。」

“いや、大問題だよ！！？”

「ふむ、意外と順応しておるな？」

「郷に入っては非難ごうごうですの。では、次回の活躍にご期待下さいですの♪」

「……何となく不穏なアオリじゃの……。強くなければ生き残れないのじゃ。」

「中々真理を突いてるな、シャオムゥちゃん。しかし、キツネの妖怪ねえ。ちょっとめくってみ？」

「仕方ないのう……って、セクハラじゃろ！　クリティカルブロウ・フィニッシュ！」

「致命的強打による決着です。スズカ、敵を殲滅したにゃ。」

「わらわ的に、無理な個性付けは好かぬ。」

「おまーが言うなし。」

そして、大きなブロックを押して、所定の場所へと動かす事によって移動する床……等々。

～Ｂａｔｔｌｅ　１５～

「私の妖刀『猫正』が唸ります♪　では、お得意の舞をどうぞ！

ペタ腹姫♪」

「む？　琥魔よ、今なんと申した？　……まあよい。偶にはゆったりと舞うも良かろう。」

「アルフィミィちゃんとチークでも踊るか。ま、ラクにいこうぜ？　アレディ。」

「それでは覇気が揺らぎます。ここは私が。下がって下さい。」

「お若いのに、感心ですの。女は義理堅くいきますの。」

「ギリギリね？　自信ありましてよ？　やるなら、ド艶（あで）やかにね。」

「ほっほっほ、ド任せるが良いぞ♪　ギリギリ感ならば負けぬ。」

「ほ～っほっほ！　私が一番ですから！　私を応援するならタオルにしなさい？」

「この扇子こそ至高である。そちも腰がウリなら気張るがよい。」

「とくにそういうつもりはございませんの。でも、くねくねダンス、楽しみにしておりますの♪」

「敵も味方も、存分に楽しむがよいよい♪　アクセルよ、そちの舞も見せてみい。」

「俺のダンスはちと激しいぜ、これが。さて、パーッとやろうぜ、

スズカちゃん。」

「わらわの本気に腰を抜かすでないぞ？　こすもす、そちも軽く舞ってやるがよい。」

「了解。戦術舞踏を開始します。敵性体と接触。アクセル、どうしますか？」

「軽く脅かして、お帰り願おうかね。タイミングを合わせてくれよ？」

「いっせーのーせ、でいいですの？　では、ハチのように舞い、チョウのように……。」

「蝶は刺しません、アルフィミィ。ターゲットを確認にゃ。」

「わらわ的に準備は出来ておるぞにゃ。よいよい、近う寄るがよい。」

「剣が届くところまでお願いしま～す♪　やっぱり猫耳、可愛いこと極まりないです♪」

「これは各種センサーですにゃん。敵性体接近。警戒して下さいにゃ。」

「ぬしもその喋りには警戒しろにゃん。こうなったら、野球拳で勝負じゃ！」

「それ、こっちが不利ですよぉ！　それなら、今回はがんばっちゃいます♪」

「はみだし姫、意外と情熱系じゃの。じゃが、押す時は押さないとダメじゃぞ？」

「ま、まだ心の準備が……／／／／／／　あ、でも、キツネ耳、なんかいいですね！」

「ぬしにはウサギ耳がぴったりじゃ。いざという時は、鎧をパージじゃぞ？」

「パージ出来る程着ておりません。しかし、片足だけとはケチくさいことね。」

「出しゃいいってもんとちゃうぞ！　大体、そのスカート、短すぎじゃろ。」

「この中は夢がぐるぐるしておりましてよ？　見せて差し上げてもよろしくてよ！」

「ヒュウ！　いいぞ、お姉ちゃん！　真っ正面から行かせて貰うぜ！」

「ドストレートなのも、偶には、ね。私の脚線美に酔いなさい！」

「ちょっと悪酔いしそうだな、こいつは。動くなよ？　弾が外れるから！」

「ん？　銃持ってないんじゃないか？　ま、いいか。バトル猫耳ガール、頼んだぜ？」

「了解。オートセイフティー解除にゃ。敵性体との戦闘に入るにゃ。」

「コスモス殿。万全で無いなら退いて下さい。錫華姫殿も、無理はなされないよう。」

「そちはどこまでもいい子であるな。」

「何の！　いい子ならば、ウチの鋼牙の方が遙かに上だ！」

「ふみゅ？　僕、いい子？　……えへへ～♪」

“鋼牙（ちゃん）は本当に可愛いなぁ（わねえ・ですねえ）。”

「……結局、オチはそこですか。」

「まあまあ、気にしたら負けだって。」

「……アクセル。貴方に言われると、紅蓮に言われた気がして、とても嫌なのですが。」

「……ひでえｏｒｚ」

「琥魔……琥魔、恋に落ちそうです……／／／　あ、それはそうと、お買い物はいかがです？♪」

「中々のサービスです、ドロシー。」

「まだまだ！　第一段階に過ぎませんわ！」

「くっ、もってくれ、わらわの腰よ……！」

「それ、死亡フラグじゃぞ！？」

「では、腰に貼る湿布などいかがでしょう？

それと、この新発売の『油揚げパフェ』などもいかがでしょうか？」※本当にある商品です

「琥魔よ！　……一つ貰うぞよ。」「ば、馬鹿な……そんな夢の組み合わせが！？」

「なぜか……お腹がすいてまいりましたの。そろそろ、おやつにしたいですの。」

「ＯＫ、腹ぺこギャル。片付けようか。」「う～ん、ちょっとだけですよ？」

「あ、カグヤちゃん、この後お茶でもどう？」「私はそう簡単に引っ掛かりませんよ！」

「……おほんっ。では、おやつの時間……いえ、ティータイムと参りましょうか。」

「わらわ的には昆布茶を所望いたす。」「呑気な奴め！　……わしにもよこさんかい！」

「さあ、お茶の時間よ。準備なさい！」

「畏まりました、御嬢様。……って、俺がやるの！？　んんっ！　お帰りなさいませ、御嬢様。」

「おほっ！　ぬしもイケるクチじゃのう！」

「では、御嬢様。いかがなさいますか？」

「まずはフロ！　そしてメシじゃ！」「キザったらしくてカッコイイですの♪」

「おい、微妙に悪口入ってないか？」

「なんだか、胸がモヤモヤしますの。やっぱり、貴方、どこかアクセルと似ておりますの。」

「よう、ベイビー。俺はあんなに軽くないぜ？」

「それも一理ありますの。ところで、一体何を食べたら、そんな風になりますの？」

「え～と、牛乳を飲むといいですよ？」

「あのさ、オススメの牛乳ってどれ？」

「楠舞印の無添加がオススメです♪」

「よ～し、勝利の牛乳持って来～い！　ほら見習い君！　牛乳持って来て！」

「ぬしだけずるいぞ！　わしにもくれ！」「ヨーグルト状になった奴でいいですか？」

「みなさん、がんばり屋さんですの。」

「わんぱく極まりない感じでしたね。アルフィミィちゃんも、えらいえらい♪」

「……子供扱いはやめていただきたいですの。」

「ところで、サービスは無いのかい？　ツンプリンセス。」

「私のデレはド高くつきますけど？　まあ、いいですわ。貴方にしては、まあまあかしら？」

「デレるなら、ちゃんとやってくれよ。ふう……疲れたぜ。休みたいんだな、これが。」

「ウダウダ言わず、もっとキリキリ働けなのです。」

「……結局、売り上げはこんなもんかニャ。シケシケにゃ。」

「……商人と言うよりは盗賊だな。」

「んじゃ、残り全部売ってくれ。丸ごと買い占めるから。」「カイト様が一番の神様にゃん♪」

“変わり身、早ッッ！！？”

黒ミルトカイル石によって阻まれた、限られた道を何とか通りながら、

今、此処……ミラビリス城内の最上階へと、ようやっと辿り着いた。

「やっとここまで来たか。手間取ったぜ。」

「前に来た時と、仕掛けが全然変わっていて驚いたぞよ？」

「城主ハーム・ダームは、怪し気な仕掛けがド好きでしたから。」

「それにしても怪し過ぎまするのでした。」

「まあ、いいんじゃないの。……で、この先が目的地かい？」

「これ以上おかしな仕掛けがなければ、その筈じゃ。」

取り敢えずホッとした一行。流石にこれ以上仕掛けがあるのは、面倒な事この上無い。

だが、アレディがどうも先程から神妙な様子で考えている。

どうしたのかと思い、様子を少しの間伺っていると、徐に喋り出した。

「……。……気を付けた方がいいかも知れません。」

「何かあるんですの？　アレディ。」

「この階層に入ってから手合わせした者達……アグラッドヘイムの兵達でした。」

「……では、もしやこの先には？」「……恐らくは。」

「先を越されたかもしれないって事か。ＯＫ、エブリワン。ここまで来たんだ。

腹を括って進むとしようぜ。」

そして、一行は眼前にあるワープゾーンに入り、最上階に入った。

其処には、大きな時計型の転移装置を目の前にして、誰かと何かを喋り合っている沙夜と、

後ろ姿からでも判る程にグラマラスな見知らぬ女性。

それと、その転移装置の真下に、座り込みながら片膝を立てて、

こちらを……否。とある一人のみをじっと不敵な笑顔で見詰めている幼女が居た。

「――――やっと来たわね。本当に愚図（グズ）で鈍間（ノロマ）なんだから。」

「あら、お客さん？　……というか、もしかして、サヤ？」

「そういうことよ。私達の邪魔をしている一団に間違い無いってこと。」

「……アレディの読みがドンピシャじゃの。沙夜めとバッタリとは。」

「Ｔｅｌｏｓは見逃しましたが、この女狐はふん縛ってくれようぞ。」

「沙夜殿の隣にいる翼が生えた女性……お会いするのは初めてですが、この装束は……！」

「ＯＫ、グラマラスウィング。フルネームを聞かせてくれないかい？」

ハーケンが、そう謎の女性に聞くと、女性が口を開く……前に、カイトが横槍を入れた。

何時に無く険しく……普段からは想像も付かない程に……誰の目にも判る程に、

一切の油断も無く、とある一点……とある一人のみを睨み続けながら。

「ヒルド・ブラン。アグラッドヘイムの魂請負人（うけおいにん）。

シュテルベン・シュロスに聳（そび）え立つ『ヴェルトバオム』に、魂を届ける……所謂配達人だ。

そして、沙夜は言わずもがな。世を混沌に陥れる逢魔に於ける唯一の幹部。

――――それで――――貴様は、誰だ？」

「フン。あたいに声を掛けるのが遅過ぎるわよ。……まぁいいわ。

その容姿……その知識……その如何にも傲慢そうな物言い。間違い無いわね。

間違い無く……アンタが、本物の『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』ね。」

その言葉を聞いた瞬間、カイトから唐突に得体の知れないプレッシャーが湧き出て来た。

……その名は、敵意。今、この瞬間、カイトは明確にその幼女を『敵』と認識・認定したのだ。

敵意が形を成し、誰もを畏怖させる此の場に於いて、唯一幼女のみが平然と嘲笑(わら)っていた。

それだけで、誰にも理解出来た。この幼女は……いや、この幼女も見た目通りの存在ではない。

――――こいつもバケモノなのだと。

それを周りが理解した頃合いを見計らって、幼女が徐にカイトに話し掛けた。

「で、あたいが誰かって話だけど……。

正直、アンタなんかにあたいの名前なんて教えたくも無いのよね。」

「……。」

「だけどまぁ……しょうがないから、これだけは教えておいてあげるわ。

あたいは――――此の世で唯一、アンタの存在を消し去れるモノよ。」

「――――なん――――だと？」

「信じる、信じないはそっちの勝手だけどね。……もうこれ以上の問答をする気は無いわ。

ヒルド。さっさと魂をあの独活（ウド）の大木にくれちゃいなさい。

アイツはあたいが抑えとくから。」

「……出来ると思うのか？」

「当たり前でしょ？　さっきのあたいの言葉……ブラフかどうか、

その身で味わうといいわ。」

「――――上等だ。この俺に、その不遜な態度、言葉遣い……調教する必要がある様だな。

セカンド・イグニッション　第二形態（ツヴァイス）　完全鎧化（フルアムド）　魔力全解放（フルパワー）」

「……ハッ！　このあたいにそんな張りぼてで闘り合おうっての？

――――舐めんのも、大概にしてよね。エモノ風情が。」

その瞬間、二人の姿が消えた。と同時に、この部屋一帯に凄まじい轟音と衝撃波が荒れ狂った。

しかも、その衝撃波も、決して皆に当たらぬ様……全てが誰も居ない所に向かっていた。

それを僅かの間に認識したヒルドは、皆の気が逸れている内に、件の転移装置を起動した。

……本来の用途とは違う……彼女の名……『魂請負人』の名に相応しい用途で。

「……！？」

「チッ、面倒な！」

「ヘン！　そんなうっっっすい煎餅の様な防御幕なんかで邪魔はさせないよっ！！」

「！！？　俺の防護障壁（シールド・フィールド）が、一瞬で消されただと？！　バカな……！！？」

「だから、言ったでしょう？　あたいはアンタを唯一消滅させられる存在だってね！！！」

「チッ……！　益々面倒な……！！」

一方で、そんな攻防が繰り広げられている最中、地上ではアレディ達が魂を吸い上げられ、

二進（にっち）も三進（さっち）もいかなくなっていた。

「ううっ！？　な、なんだ……身体の力が……抜ける……！？」

「す、吸い取られて……おりますの……！　私達の……心と、体が……！」

「これは……奪氣（だっき）の型とも……違う……！　な……なんじゃ……！

？」

「……私は魂請負人。彼がそう言ってたでしょう？　このゲートは転移だけじゃなく、その魂だけを『送る』ことも可能なの。」

「送る……だって！？　ふざけるんじゃ……ないよ……！　どこへだい……ッ！」

「あらやだ、それもさっきの彼が言ってたじゃない。もう忘れちゃったの？

――――私達のお城……シュテルベン・シュロスに聳える『ヴェルトバオムの樹』によ。」

「ヴェルト……バオム……！？　うぐっ……！」

（……魂を集める樹……？　霊力を集める……不死桜と……同じ？）

「……ぐっ……アシェン……！　あのデンジャラスゲートを止めろ……！

おまえやＫＯＳ－ＭＯＳ……そしてパーソナルトルーパーなら……動ける筈だ……！！」

「……。」「……。」

「それが……ダメダメっす……艦長……。
あのゲートからは……強力な電磁波も……発せられて……おりまし……。」
「こういう時に……限って……使えぬ……ポン……コツめが……！」
魂を集めるのであれば、機兵であるアシェン達ならば大丈夫だろうと思われたが、
どうやらその対策……電磁波による阻害準備も完了していた様だ。
思わず誰とも無く、現状に対して舌打ちが出た。
カイトも何とか、皆を救おうと何度かハーケン達の許へ向かおうとするが、
その度に、幼女に阻まれ近付く事も容易では無かった。
「クソッ……！　邪魔をするな、クソガキがッッ！！！」
「アハハハッッッ！！！！！　これは面白いね！
あの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』が、あたいに手も足も出ないなんてさあッ！！！！」

「……チッ、図に乗りやがって……！

（こいつの能力の正体さえ判れば、何とでも出来るんだが……。

それまでは、余り迂闊な事が出来ない！　下手をすれば、この世界ごと消え兼ねん……！）」

カイトの葛藤を余所に、魂の収拾は今も続いている。皆の悲鳴や叫びが聞こえる度に、

忸怩たる思いで、自身と謎の幼女に対して舌打ちを頻発していた。

「た……魂が抜かれて……しまいますう！」

「ワタクシの魂は……安くは……ありませんわよ！」

「ううっ……やめてよっ！　この……サド乳……！　キャラ被り！」

「こりゃ……ヤバいよ……！」

「……Ｔ－ｅｌｏｓ……救世主……『魂』を招く樹……貴方達が言っていたのは……この事……。」

「コ……ＫＯＳ－ＭＯＳさん……！？」

「うう……苦し……い……。アレ……ディ……。」

「ネ……ネージュ姫殿……！　ぬううッ！　我が覇気よ……！！」

「あらやだ、まだ動けるの？　……かなり強い魂を宿しているようね。

さすが、リグが一目置くボウヤってところかしら？」

「あん、鍛えれば……相当な使い手になったでしょうね。」

「……より強い魂を宿す器。ならば、生かしておくのも……。」

「いいえ、ここでお終いにすべきよ。

若い芽は確実に摘んでおかないと、後で痛い目を見る事になるから。」「くっ……なに……！」

「……うふふ、なあに？　若いコ相手に火遊びでもしたの？」

「……１０年程前に、ね。御陰で、肝心なところで結構なヤケドを負わされた事があるのよ。

だから、もう甘さは出さないようにしてるの。」

「……ぐ……。まだ……わしは……！」

「貴女も厄介だから、ここは確実に仕留めさせて貰うわね。
……呆気ないものね、おチビちゃん。こんな場所で、いきなり決着がついてしまうなんて。」

「くっ……！　やめろ、沙夜！！　テメェも好い加減、其処を退きやがれ！！！」

「ハンッ！　退かしたかったら、力尽くで退かしてみなっ！！」

「……あらまあ。ぼうやと言い、救世主（メシア）と言い、モテモテね……おチビちゃん。」

「……フン。わしがおらんでも……『あやつ』がおる。

ぬしら……『逢魔』が何を……企んで……いようと……必ず……あやつが……！」

「……さよなら。あのぼうやも……同じ所へ送ってあげる。いつか、会えるといいわね。」

「……零……児……。」

「（くっ……！　こうなったら拘（こだわ）ってはいられん！

面倒だが、久々にあの力を使うしか……！？）

……ようやっと、来たか。

遅ぇぞ、英雄（ヒーロー）さんよ。」

「待て……ッ！」

「……うっ！？」「だ、誰っ！？」

「……ふう。何となく、嫌な予感はしてたけど、ね。」

「木よ、火よ。土よ、金よ。そして水よ！　世を司るすべての事象よ、我に味方せよ！」

「……ッ！！」

「……やはり、ね。ヒーローはいつだって、最後に現れるものだから。

そうでしょ？　……ぼうや。」

「あらやだ。サヤ、これはどういうこと？　貴女、このことを知っていたの！？」

「……。やっぱり、ぬしは……わしのヒーローじゃな、零児。」

「……有栖流・鬼門開放ッ！

結果は重畳だ。

……小牟、待たせたな。」

「……今の登場、ちいとばかしキュンとしたぞ？」

第拾参話【ゆらぎの街のアリス～必勝への軌跡～】

「ぼうや、どうやってここに？」

「『森羅』の諜報部を舐めるなよ。この世界へ通じる『ゆらぎ』の存在は既に確認されている。

後は小牟の妖気を頼りに、鬼門開放を成功させればいい。」

「出来ておる。出来ておるのう、零児は♪」

（異界への鬼門を通り抜けられる確率……そんなに高くはないでしょうに。無茶をするものね。）

「零児さん！　感謝感激、極まりないです！」

「全く、ナイスタイミング過ぎるぜ。……無事で何よりだ、Ｍｒ．アリス。」

「もしかしなくても、出待ちっすか？　出待ちっすね。」

「たまたまさ。だが、危ないところだったようだな。」

「この方が、小牟殿の……。」

「何だ、思ったよりはマトモじゃない。

二色メッシュは、おしゃれとしては若干勘違いっぽいけど。」

「これは俺の所為じゃない。……昔、そこにいる女に付けられた傷の所為さ。」

「サヤ、10年前の『若い芽』って、もしかして……？」

「正解よ。……彼は有栖零児（ありすれいじ）。私達『逢魔』と対立する組織、『森羅』のエージェント。

いつもいいところで邪魔をする……可愛いけど、可愛くないコよ。」

「お前の好きにはやらせん。今度は何をしようとしているんだ？」

皆の危機に颯爽と現れた我らが主人公（ツッコミ）・有栖零児。

沙夜と側にいるヒルドを睨み付けながら、懐かしい面々と旧交を軽く温めていた。

一応、或る程度挨拶が済んだ所で、今度は沙夜に問い掛けた。

だが、沙夜が口を開こうとした時であった。今迄ずっと黙っていた……否。

怒りを必死に堪えて来たあの幼女が、その怒りを唐突に爆発させた。

「あぁぁーーーーッッ！　もうッッッ！！！！！！　ヒルドッ！！　沙夜ッ！！

あんたらがグズグズしてるから、結局ダメになっちゃったじゃないのさ！！　この鈍間ッ！

あ～もう、本当にメンドクサイ……。もういいわ……闘う気も無くしちゃったし。」

「――――――――――逃がすと思うのか？　解除（パージ）

ファイナル・イグニッション　ソード・オブ・マナ　エレメント・ソード　最終形態（カイザー）

我が命に従え　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』　皇帝（カイザー）　神化（アムド）

顕れろ　『選定されし勝利の剣（EXカリバーン）』　魔力全解放（フルパワー）」

「……フンッ！　アンタも懲りないわねえ。

あたいにはね……アンタなんかの攻撃は一切効かないのよッ！！！」

今迄着ていた七色の鎧を脱ぎ、新たに白銀金（プラチナ）の鎧を纏い直し、更に魔力を増大させたカイト。

だが、周りの皆がその強大さに恐懼（きょうく）し、地に平伏しているにも拘わらず、

その幼女だけは、つまらなさそうに鼻で笑い、またもやカイトと対峙した……瞬間であった。

ヒルドと沙夜の真後ろに、ロックが白夜を二機連れて唐突に転移して来たのだ。

それに一瞬注意がいった幼女の脇を擦り抜けて、白夜の真後ろに降り立ったカイト。

何が起きたのか分からないロックとヒルドは、邪魔だと言わんばか

りのカイトの蹴りに飛ばされ、
二人共、逆方向の壁に叩き付けられ、一瞬で気を失った。

「……白夜（コイツラ）も邪魔だな。消え失せるといい。

カラミティ・エンド・クロス　」

「――――だから、言ってんでしょうが。

アンタの攻撃は、一切効かないんだってさあッッ！！！」

白夜を二機共、諸共に消し去ろうとしたカイトだったが、
その攻撃も、幼女の手に顕れた杖の様な棒っ切れから出た砲撃によって、掻き消された。

流石のカイトも驚愕し、動揺を隠せなかったようだ。
その刹那の隙を狙われ、カイトの後ろに回った幼女に蹴り飛ばされて、
ハーケン達とは離れた場所に、吹っ飛んだ。

「ぐうっ……！！　……真逆、カラミティ・エンドまで掻き消されるとはな……。
――――貴様、本当に一体何者だ？」

「アンタもほんっっっとにしつこいわねっ！！！
――――いいわ。なら、あたいの力……その一端だけだけど、見せてあげるわよっ！

フォーム・アップ！

モード・『夜天の魔導書』！！！」

「なっ……！？　ば、バカな……！！？」

其処にいたのは、紛れも無く八神はやてのバリアジャケットに身を包んだ、幼女の姿だった。

事情を知らないハーケン達は、何故カイトがそれ程に……、

誰の目にも、傍目（はため）にも解る程に驚愕しているのか、解らなかった。

だが、その訳も、その後の幼女の言葉で理解した。……せざるを得なかった。

「ハンッ！　アンタが撒き散らした、この部屋中に漂っている魔力！

そして、アンタの妻、八神はやての魔法！

この二つを使って、今からアンタを殺してあげるわよ！！

アンタが、自分の妻と娘を殺した様にねえッッッ！！！！！！

塵と消えなッッッ！！！！！　デアボリック・エミッション！！

！！！！！！！！！！」

「……！？！？！？！？！？」

漆黒の球体に包まれたカイト。その内部で激しい何事かの音が鳴り響いている。

その球体が消えた瞬間現れたカイトの姿に、誰もが絶句していた。

着ていた鎧は完全に形骸化しており、身体中の関節やらが折れ曲がり、

あちこちから骨が食み出ており、誰がどうみても生きているとは思えない状態であったのだ。

だが、その姿を見た幼女は、またも面白く無さそうに鼻を鳴らし、その死体に言葉を掛けた。

「……フン。アンタ、いつまでそうやってんの？

一応、今十回ぐらいは殺してあげたけど、アンタそれぐらいじゃまだまだ消えないでしょ？」

「――――そいつも知っていたか。益々、貴様の正体が気になる所

だな。」

“……えええええええええええ!?!?!?!?!?”

今、確実に死んでいた筈のカイトが、まるで何事も無かったかの様にむっくりと起き上がった。

その時には既に、身体は元通りになっており、鎧も脱ぎ去った後であった。

そして、平然としながら、幼女と会話をしていた。

「……アンタも本当に懲りないね。なら、交換条件といこうよ。

ここにいる沙夜を除く他の奴等を、オーサマの許に戻すのを黙ってて見てたら、

あたいの名前ぐらいは教えてやってもいいわよ?」

「……それはまた、破格の条件だな。だが、何故沙夜は除外する?」

「何故も何も無いでしょ。もう、沙夜はアグラッドヘイムには協力しないでしょうに。

で、どうすんの? 呑むの? 呑まないの?」

「――――分かった、呑もう。さっさと連れて行け。」

「……フ～ン、一応は話が分かるのね。ま、いいわ。ほら、さっさと帰りなさい。」

そう言うと、先程から持っていた杖の様なものを軽く一回振り払うと、

沙夜と自身を残して、全て姿を消した。……どうやら、転移した様だ。

それを確認した後、先程から着ていたはやての服を脱ぎ、元の服装に戻った。

そして――――約束通り、名前を名乗って、彼女自身もその場から消え去った。

「なら、条件通り、あたいの名前を教えてやるわ。

あたいは、アリエル＝シュレスト！

アンタを、此の世で唯一殺し切り、且つその汚れた存在を消し去れる唯一の存在（バケモノ）よ！！！

今日は単なる顔見せ！　次こそは完全に殺し尽くしてやるわっ！！

その時まで、震えながら怯えて待っていなさい！

アンタが全ての世界から消え去るその日をねッッ！！！　『世界（ワール）の破滅者（ド・ディザスター）』！！！！！！」

其の後。何事かを問いたい皆の目と雰囲気を完全に無視し、

カイトだけ先にさっさと城を出て行った。

後に残った微妙な空気の中ではあったが、一応沙夜が自身の現状を説明し、

零児の勧めもあって、白夜を全て破壊するという名目で、一行の仲間に加わる事になった。

だが、誰よりも先に城の外に出たカイトが、

誰にも聞こえない様に、バレない様に必死に堪えていた為、

彼が肩を震わせて、愉快そうに笑い続けていた事を知る者は、彼の従者以外には居なかった。

第拾参話【ゆらぎの街のアリス～必勝への軌跡～】（後書き）

――――如何でしたでしょうか？

いやあ、やっぱり零児の登場シーンは、何回見ても格好良いですよねっ！！

本当に惚れ惚れしますよね！　胸キュンしましたよね！！！

そして、あのカイトが、文字通り手も足も出なかった幼女。

その名もアリエル＝シュレスト。

果たして、彼女は一体何者なのか。そして、彼女の能力とは？

それは、彼女が再登場する回まで御待ち下さい。

残念ながら、もう暫く彼女は出て来ませんので、悪しからず。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

第拾肆話【鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）～流れゆく硝煙（ガンスモーク）～】

現時刻（０２：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３７４，６５１アクセス　ユニーク：１９７，３１７人
皆様、何時も御覧頂き、有難う御座います。

さて。今回は、滅魏城・前編。そして、アルトアイゼン・ナハト戦です。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

第拾肆話【鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）～流れゆく硝煙（ガンスモーク）～】

ｓｉｄｅ：ミラビリス城

ハーケン達が沙夜を仲間にして、ゾロゾロと外に出て来た。……少し警戒しながら。

だが、警戒していた相手……カイトが何処にも見当たらない。

訝しんでいると、神夜・錫華・アシェン・ＫＯＳ－ＭＯＳ・Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．等、

霊力・妖力やその他の力のセンサーが働く者達が、唐突に怯えながら身構えた。

何も解らないハーケン達は、一体何事かと更に警戒を強めていた。

「……一体、何処に行ったんだ？　……！？　神夜、一体どうしたんだ？」

「……あ……こ、これは……この、強大な力は……一体……？」

「……こ、これは……余りにも……余りにも恐ろしいぞよ……。」

「……艦長。先程の八神カイトから検出されたエネルギー以上のエネルギー反応を、

感知いたしちゃったりなんかしちゃってるのでござりまする。」

「……！　上空に、超巨大なエネルギー反応確認。」

「あ！　あそこにヤガミさんがいました！　その隣にいるナニモノカから検出されています！」

そう言われて皆が見上げた先には、辛うじて人の形が分かる程度の遙か上空に、

カイトと思われる人影と、黄色い蜷局（とぐろ）を巻いたかの様な長い巨体をくねらせている、

謎の存在がいた。その二人（？）は何かを話し合っている様な雰囲気だった。

カイトがその黄色いナニモノカに首肯した後、その存在は消えエネルギー反応も消え去った。

どうやら、間違い無くその存在から検知されていた様だ。

そう思っていると、何時の間にかカイトが皆の目の前に降り立っていた。

「何だ、遅かったなお前等。そんなに面倒な敵が残ってたっけ？」

“……。”

「ん？　どうかしたんか？」

「……いや。益々アンタがワケわかんなくなっちまっただけさ。」

「そうか？　まぁ、細かい事は気にするなよ。その内、ちゃんと話してやるさ。

そんな事よりも、ほれ。あっち……滅魏城の方に何か感じないか？　アルフィミィ。」

「え？　……あら、ホントですの。

何か……大きな力が更に大きくなっていくのを感じますの。」

皆、余りにも聞きたい事が多過ぎたのだが、またもや、その質問をはぐらかすカイト。

しかし、そのはぐらかし方は、一行の何人かを過剰に反応させるだけの事態であった。

どうやら、滅魏城の方で何事かが起こっている様である。

一行は、取り敢えずカイトの事はさておいて、急いで滅魏城の方へと向かった。

……しかし、カイトへの警戒はそれ程緩めずに。

第拾肆話【鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）～流れゆく硝煙（ガンスモーク）～】

ｓｉｄｅ：滅魏城門前

其は鬼の城。

錫華姫と守天が収める、元神楽天原に慄然と聳え立っていた、曾ての野望の牙城。

其処の門が、何故か開いていた。誰が望んだ訳でも無いのに。

その常には無い状景に、訝しさと不安を掻き立てられるのも無理は無いだろう。

「む？　どうして門が開いておるのか！？」「……これは不用心でございますねえ。」

「掃除中だから……などというワケはありませんわよね。」

「……。錫華姫殿……急いだ方がいいと思います。」

「ぬ？　アレディよ、もしや……。」

「はい、強い覇気を感じます。……恐らくは、羅刹機アルクオン。」

「シュラーフェン・セレストから転移したあいつか。……ここにワープアウトしたと？」

「鬼ヶ島には相応しいデザインのロボじゃがのう。……どうしてじゃ、カイト？」

「ん？　ああ。今、滅魏城の地下には黒ミルトカイル石が富士壺（フジツボ）の様にビッシリと生えていてな。

それを探し回っているのさ、アルクオンは。その行き着く先にいる奴に誘（いざな）われて……な。」

「矢張り……。では、それを追い、ヘイムレンら修羅がこの城に雪崩れ込んでいると……？」

「ま、そういう事だな。そろそろ、あいつも傷が少しは癒えている頃だろうし。」

今、滅魏城で何が起こっているのか、理解した一行は気を引き締めた。

すると、今迄黙っていたアルフィミィが徐に話し出した。

「さっきから感じてる不思議な力……この先から感じますの。

もしかして、アインストも混じってるかもしれませんの。」

「ええい、どいつもこいつも、わらわの城で好き勝手はさせぬ！

参るぞよ、皆の衆！！」

そう叫ぶ錫華と、何かを感じているアルフィミィ・アレディを先頭に、

一行はいざ、鬼の城へと勇んで入って行った。

ｓｉｄｅ：滅魏城々内

「やはり、強い覇気を感じます。」

「やっぱり、強い力を感じますの。」

「間違い無く、この奥に……います。」

「間違い無く、この奥にありますの。」

「おまえら、態とやってるだろ。」

「アレディ……貴方最近、毒されておりませんこと？」

我らが零児兄さんからのツッコミが入りました。

そして、ネージュからも危惧の声が聞こえて来た程である。

しかし、当人達は大の大真面目。それらのツッコミにも少し焦りながら、説明していた。

「い、いえ、そういうわけでは……。覇気の残滓を感じるのです。これは不思議な力では無く……修羅、もしくは羅刹機のものです。」

「そうですの。強い力が……流れ込んで来ておりますの。ここは……カイトの言っていた『どこか』とつながっていますの。」

「一体、どこにつながっているんでしょうか？」

「コンビニとかだと便利じゃがの。夜中にお菓子とか買いに行けるでな。」

「後はエステとか、クラブとかもいいんじゃない？」

「人の城を、勝手に楽し気な場所に繋げるでない。」

「其処の駄狐二匹、ちょっと来い。纏めて、尻叩き二百発だ。」

「はひぃっ！！」「あ、ああら……；；；」「カイトがいると、俺も楽が出来るな。」

ダメな狐が二匹共、掌打されているのを尻目に、

アシェンが、ＫＯＳ－ＭＯＳが何かを感知したとハーケンに報告した。……いや、お前も探知しろよ。

しかし、みんな諦めているのか、もう何も言わない様である。汚いなさすがアシェンきたない。

「艦長、こちらも新情報がありやんすのです。」

「何だ？　まだあるのかよ。報告してくれ、アシェン。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳ、お前が検知した例のアレについてだが。」

「はい。推進剤の残留反応があります。」

「スイシンザイ？」

「え～と、ロボとかが飛ぶ時に、背中から火を吹くでしょ？　あれの燃料のことだよん。」

「過去のデータに一致するものがありました。……アルトアイゼン・

ナハトです。」

そのＫＯＳ－ＭＯＳの言葉を聞き、皆如実に反応した。

パーソナルトルーパー、アルトアイゼン・ナハト。『１０年戦争』で猛威を振るったもう一体。

ヴァイスリッター・アーベントと組み、エルフェティルを恐怖のどん底に陥れた青き闘士。

前回のエンドレス・フロンティアを巡る戦いで、一度はこちら側に味方に付けたものの、

またもや敵に奪われ、今またこうして敵対している、重厚な孤狼である。

「鋼鉄の孤狼!?」

「アルト……アイゼン……!?　ぐっ……！　ベーオ……ウルフ……？　何だ？　おれは……。」

「アクセル、あなた……記憶が？」

「……おれにとっても、何か感じるものがあるみたいだな、ここは。」

「ナハト……あれはＷ０３、ＰＴＰベレーに奪われた筈だ。」

「いいや。その後、アインストに介入されて、暴走の末、Ｗ０３の手を既に離れている。

あいつは今や、文字通りの一匹狼だよ。Ｗ０３も把握していない。」

「シュラに、謎のパワーに、暴走したパーソナルトルーパー？

笑っちゃうくらいいろいろあるわねェ。」「こりゃあの筋肉ダルマもおしまいだニャア。」

「守天はここの城主。そう簡単に屈服したりはせぬ。」

「……これも修練です。進まなければ、真実は見えて来ません。」

「うむ、参るとしようぞ。

この城で何が起こったのか確かめ……不届者は全てもっちりと責めてくれようぞよ！」

ｓｉｄｅ：滅魏城々内　エレベーター前

そこに慄然と立ち開（はだか）っている者がいた。……件のアルトアイゼン・ナハトである。

その姿を認めた一行は、瞬間に身構え直ぐ様臨戦態勢に移行した。

「……。」

「やはり、おりましたわね！　パーソナルトルーパー・ナハト！」

「にゃんと！　いきなりでございます！」

「こやつ、前回の戦いの時も、この滅魏城で悪さをしておったな。わらわ的に、これ以上好きにはさせぬぞよ！」

「……。」

「む？　挙動が以前と違う……？　やはり、カイト殿の言う通り……。」

アレディがナハトに何かを感じていた時であった。

アクセルが、まるで時間が止まったかの様に、ナハトに釘付けになったと思った瞬間、

呻(うめ)き声を上げながら、その場に蹲(うずくま)ってしまった。

「こいつは……！　ううう……頭が……！」

「アクセル!?　アクセル！」「ん？　おい、どうした？」

「あん、まるでぼうやの傷みたいねえ。……ちょっと、大丈夫かしら？」

「確か、彼は記憶喪失だったな。何か思い出したのか？」

その零児からの問い掛けにも応えず、アクセルは何かをゆっくり思い起こすかの様に、

何事かを呟いていた。誰にも……いや、唯一人にしか解らない言葉を……。

「……亡霊……。進む先にあるもの……全てを……喰らい尽くす……狼……。

そうだ……『奴』は……ナンブ……。」

「アクセルさん、しっかりして下さい！　『おおかみ』……！？
それに『なんぶ』って……。」

（……時折見せるWシリーズに関する知識。そして、カイトがアクセルに言った言葉（キーワード）。

……ビンゴだな。この二人がやって来た世界は……！　そうなんだろ、カイト？）

（矢張り気付いたか、ハーケン。『ブロウニング』の名は流石に伊達では無い様だな。

だが、今はそれを言うべき時では無い。それぐらいはお前にも分かっているんだろう？）

「……艦長、カイト。どうかいたしてしまいましたか？」

「……いや、何でもないさ。」「そういうこった。」

アルトに過剰反応したアクセルの様子を見たハーケンは確信した。
アクセルの本来の立場を……そして、アルフィミィと二人、一体何処の世界から来たのかを。

それを、皆に気付かれない様に、カイトにアイコンタクトで聞き、
カイトから、『大正解だ』と言わんばかりの頷きと笑顔で以て、答えを得た。
その不審な動きに気付いたアシェンが二人に問い掛けるも、
今は未だその時では無いと判断した二人は、
まるで示し合わせたかの様に、互いに何でも無いと言い合った。

「ハーケン。ナハトですが、救世主（メシア）が仰っていた様に、
制御不能になっている可能性が高いと思われます。」

「……そうか。」

「はい。以前、アインストの制御下にあった時と同様のエネルギー反応が検知されました。」

「そんなことまで分かるんだ。ＫＯＳ－ＭＯＳ、やっぱりすごい♪」

「私もそんな気がしなくもなかったですが、言わなかっただけです。」

「いや、お前は嘘だろ。」

「……後でヘシ折ります。」

「アインスト……！」「あの羅刹機ちゃんがいるって話、どうやら本当みたいネ。」

「ふむ。制御が外れておるっちゅうカイトの言葉が本当なら、今がこのアームドアーマー・ナハトを取り返すチャンスじゃぞ？」

「そのようですわね。……直接向かい合うと、『１０年戦争』を思い出しますわ。」

「私のフェイクライドと、ド迫力バトルを繰り広げたものよ？

（妖精機フェイクライド……今はどこにいるのかわからないけど……。）」

皆の準備も整った様だ。今迄ずっと蹲り、沈黙を保って来たアクセルが徐に立ち上がった。

……雰囲気が明らかに今迄のソレとは違うのに驚きながらも、ハーケンが声を掛けた。

「……。」

「……アクセル、やれるのか？」

「……ああ、大丈夫だ。少し頭痛がするくらいだ、これがな。……流れを失いたくない。

貴様の方はすぐ仕掛けられるんだろうな？　ハーケン・ブロウニング。」

「（……む？）ＯＫ、ノープロブレムさ。早いところ始めようぜ？」

「ああ、やろうか……！」

「（少しは記憶が戻ったか？　……いや、残念ながら一時的なものだろうな。

まあいい。今の段階で記憶が戻られても、却ってこちらが少し遣り難くなるのでな。）

沸いて出て来るアインスト共は、俺に任せろ。お前達はアルトだけに気を向けていろ。」

そして、再び暴走した鋼鉄の孤狼が、何時明けるとも知れぬ闇夜を携えて、襲い掛かって来た。

ｓｉｄｅ：アルトアイゼン・ナハト戦？

「……！」

アーベントと同じく、先に仕掛けたのはナハトだった。

まるで仰け反るかの様にその巨躯を後ろに傾けたと思った瞬間、

両肩の蓋を全開にし、その中に仕込まれていたベアリング弾を撃ち出して来た。

それと呼応して、地中から、後ろから、壁から、アインストが次々湧き出て来た。

先ずはそれを何とかしようと、錫華が邪鬼銃王で撃ち落としている中、

溢（こぼ）れ弾を避けながら皆が動いた所、カイトが待ったを掛けた。

「何の！　撃ち合いなら負けぬぞよ！　邪鬼銃王！　ジャンジャンバリバリであるぞよ！！」

「雑魚の相手は俺がすると言っただろう？　こちらは気にせず、アルトにのみ気を配れ。

ファースト・イグニッション　ライトニング　鎧化（アムド）

――――失せろ、ナマモノ。　『雷光雪花（らいこうせっか）』」

カイトの姿が消えたと同時に、地上に光の線が迸（ほとばし）った。

その瞬間、全てのアインストが電子分解したかの様に、光の粒子となって空に消えて行った。

――――そう。まるで、雪で出来た花の如く。

見る者全てを惚けさせる程に綺麗な華を咲かせて。

そんな、思わず皆が惚けた瞬間を狙って、ナハトが錫華に特攻して来た。

錫華が気付いた時には既に遅く、もう後？の所まで来ていた。

思わず目を瞑り、覚悟した錫華だったが、何時迄経っても何の衝撃

も来ない。

恐る恐る目を見開いてみると、自身の眼前にナハトのリボルビング・バンカーがあり、

それを素手で掴んで止めている、雷光迸る鎧を着込んでいるカイトの姿があった。

驚きに目を大きくさせていると、カイトから錫華……のみならず、皆に声を掛けて来た。

「……何を呆けている？　敵は目の前にいるんだ。

アインストは任せろとは言ったが、御守迄する気は毛頭無い。

次は無いぞ？　さっさと打ち倒せ。アインスト共は無限に湧き出て来るんでな、厄介なんだ。」

「む……済まぬ。では、仕切り直しといくぞえ。」

一応、カイトの言葉を信じ、一同はナハトにのみ集中する事にした。

ｓｉｄｅ：アルトアイゼン・ナハト？

「……！！」

どうやら自動生成しているらしく、既に次弾の装填（そうてん）は終えていた様で、

またもや、ベアリング弾をバラ撒きながら猛烈な勢いでナハトが突っ込んで来た。

「チッ……！　あのバラ撒きをどうにかしないと、近付く事も出来無いぜ……！」

「くっ……！　わらわの邪鬼銃王だけでは、限界があるぞえ！？」

「何とか、巧い具合にナハトの懐に飛び込めればいいんだが……。」

「それには、誰かが気を引き付ける囮にならないといけませんわね……。」

「なら、アタシが行くさね。いざって時はワープで逃げればいいんだからね。……行くよっ！！」

そう叫んで、ヘンネがナハトの真後ろにワープして背中を斬り付けた……が、

ナハトの装甲の堅さに逆に剣が弾かれ、

僅かに付けられた傷も、謎のアインストパワーで忽ち癒えてしまった。

仕方ないとばかりに上空から狙い撃ちで羽を撃ち捲るも、効果は余り見られなかった。

「くっ……！　分かっちゃいたけど、何て堅さだい！

しかも、この回復力……こりゃ、シャレになってない相手だよ！？」

「姐さん、頑張ってくれでごんす。

こちらも先程から隙を狙ってるのでありんすが、無理でござわす。」

「諦めんじゃないよ！　後、姐さんって呼ぶなって何度も言ってるだろう……！？　がっ！！」

思わずアシェンにツッコミを入れた瞬間を狙われ、ベアリング弾を何発か喰らってしまった。

堕ちて行く獲物（ヘンネ）には構わず、再びハーケン達に向かって突進して行くナハト。

ハーケンがロングトゥーム・スペシャルで応戦するも、構わずビームの中を潜って行き、

ハーケンにその勢いの儘に、リボルビング・バンカーを叩き付けた。

何とか、ロングトゥームで防いだものの、ロングトゥームは壊されてしまい、使えなくなり、

ハーケン自身もその衝撃と負った手傷で、暫く動けそうに無かった。

「チィッ！　……ぐふっ……。こいつは……キツイぜ……！？」

「退いていろ、ハーケン！　行くぞ、アルフィミィ……！」

「ラジャー、了解ですの……！」

「ミズチ・ブレード展開！　噛み砕け……！　舞朱雀（まいすざく）！！」「やあ

っ！　バッサリですの！」

「……！」

「攻撃する隙など与えん！　光刃閃（こうじんせん）！！」「二人の共同作業ですの♪」

「……光刃にて、魂（まぶい）を断つ……！」「……！？」

ナハトが一瞬、気が緩んだ隙を逃さず、アクセルが斬り込んだ。

何とかベアリング弾で応酬したものの、その隙も縫って来られ、連続して斬り付けられた。

反撃する間も無く、肩部の装甲を再び開く事も出来ず、必死に耐えているナハト。

その後を追って、零児達が続けて攻撃に加わった。

「その隙は逃さんっ！！　地禮（ちらい）！　火燐（かりん）！！　弐の型！　燃え上がれ！！！」

「もうちょっとだけ続くんじゃ！　シャオムゥ・ウェイブ・フェノメノン！！！

こいつに触れる事は死を意味するッ！！」

雷を纏わせた刀で幾度も斬り付け、その刀を仕舞ったと同時に炎を纏わせた刀で斬り上げた。

その背後から小牟が飛び上がり、居合い斬りでの風の刃を繰り出し、妖術によって空中にナハトを固定させた。

「まだだ！　二丁、樹金道（じゅごんどう）！　二刀、戒刀乱魔（かいとうらんま）！！　でやぁぁぁぁあああ！！！」

「あん♪　いいとこ、貰っちゃうわね♪　まずは楔（くさび）♪　銃は？よ。黒土（くろつち）

お次は氷に焔（こおり ほむら）！　最後は、鎬（しのぎ）を御覧（ごろう）じろ……何てね♪」

ナハトが小牟の妖術の中にいる間に、

携えた二丁の銃……柊樹（ハリウッド）とゴールドで連続して撃ち据え、

地禮と火燐の二刀で交互に回転させる様に何度も斬り付けた。

その高く上がった隙を突いて、沙夜が自身の三本の刀と銃を使い、最後に毒手の鎬で締めた。

「これで最後だ！　電鋼刹火（でんこうせっか）！　斬！！　これで止めだ！　零（ゼロ）に還れ！　爆砕ィィッ！！！！」

先程の戒刀乱魔で使った二刀と柊樹で、何度もナハトを撃ち付け、火燐で斬り上げた後、

蹴りを叩き込み、最後に渾身の力を火燐に加えて、力の限りに斬り飛ばした。

その飛ばされた先で、踏鞴（たたら）を踏みながらも着地したナハトが、

自身を修復しながら攻勢に転じようとしたところを狙って、皆で更なる追撃を加えた。

「……！！！」

「そうは問屋が卸しません！　ジェラス・クイーン！」

「！　そうだ、一斉に爆風で覆って、開かせないようにするんだ！　ファイヤー・マウス！」

「了解。ミサイル発射ぁ～！」「よいよい♪　邪鬼銃・美糸（ビイト）である♪」

「玄武炸（げんぶさく）じゃ！　めいっぱい、く～らえ～！！」

「私も負けていられませんわ！　爆弾の数なら、負けませんわよっ！！」

爆風の雨霰により、肩部のクレイモアを開く事が出来ず、

何とか抜け出そうと爆風の外に出た所に、アクセルとアルフィミィが待ち構えていた。

「……！？」

「さあ……！　これで終わりにしようか……！！」「やっつけまくりますの♪　黄泉路（よみじ）ですの！」

「喰らい付く……！！」「鬼蓮華（おにれんげ）のサビにしますの！」

「今だ、アルフィミィ！」「抉（えぐ）ってしまいますの♪　よいしょ、よいしょ♪　えいっ♪」

「貫け……！　奴よりも……早く……ッ！！　真・麒麟極（しん・きりんきわめ）ッ！！！」

「……！！！」

アルフィミィのヨミジでナハトを吹き飛ばし、その後を追撃し二人で交互に斬り付けた後、

アクセルのミズチ・ブレードでナハトを固定し、グリグリ腹部を抉

って斬り上げ、

ナハトの落下に、アクセルのミズチ・ブレードを合わせて、

リボルビング・バンカーのある右腕を斬り落とした。

辛うじて、バランス取って立てたナハトだったが、その先には既に準備万端な神夜が居た。

「鋼鉄の孤狼よ……これにて幕引きです！　月燐（がちりん）、巻き上げて！！

松に鶴！　桜に幕！　もっと！！

届いて！！　雲耀（うんよう）の速さまで！！！

チェストオオオオォォォーーーーーッッッ！！！！！！！！！！！！！

――――我が斬冠刀に断てぬモノは有りません」

――――そして。パーソナルトルーパー、アルトアイゼン・ナハトは、完全に沈黙した。

第拾肆話【鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）～流れゆく硝煙（ガンスモーク）～】

如何でしたでしょうか？

思っていたより、あっさり片付いてしまったアルト戦でした。……

もっと精進しなければ。

所で、一つ御話……と言いますか、注意事項が御座います。

それは、錫華の台詞。

『もっちりと云々』の所ですが、原作では『すべからく』と彼女は言っています。

御存知の方々には誠に愚問でしょうが、この用法は誤用です。

この場合、彼女の言いたい事を表すならば、正しくは『全て』ｏｒ『当然の如く』辺りでしょう。

もしも『須く（すべから）』と使いたい場合は、往々にして語尾に『べし』を使うのが本来の用法です。

良くある日本語の誤用の典型例ですね。

曖昧表現が美徳とされている日本語ですが、

それは意味さえ通じれば、間違って使ってもいいと言う意味ではありません。

まぁ、確かに現代では日常会話でも、社会に於いても滅多に使われない言葉ですので、

不要と言われてしまえばそれまでなのですがね。ですが、言葉としてそれが存在している以上、

日本人として最低限知っておくべきだと私は思って居ります。

……以上、作者の現代に対する不満、その壱でした。

長文、大変失礼致しました。では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾伍話【レアハンター～Ｗｈｏ　ｌａｕｇｈｓ　ｌａｓｔ？～】（前書き）

現時刻（１５：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，３９３，４９０アクセス　ユニーク：１９８，９４２人
皆様、何時も御覧頂き、有難う御座います。

昨日迄に間に合わなかったで御座る……ｏｒｚ

とまぁ、それはさておき。今回は滅魏城・後編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾伍話【レアハンター～Ｗｈｏ　ｌａｕｇｈｓ　ｌａｓｔ？～】

ｓｉｄｅ：滅魏城々内　エレベーター前

今、一行の目の前には、片腕を斬り落とされ、膝から崩れ落ちて身動き一つしない、パーソナルトルーパー、アルトアイゼン・ナハトの姿があった。

「対象、ジェネレーター出力低下。無力化に成功しました。」

「……ふう。俺の頭痛も何とか無力化出来てきたぜ。」

「肝心の記憶の方はいかがでございましょう？」

「無力化されたままなんだな、これが♪」

「ダメだ、こりゃ。分かっちゃいたけど、やっぱりダメだこりゃ。」

辛うじてナハトも動きを止め、アクセルの異変も収まり、ホッと皆で一息付いていた。

だが、何時迄もこうしている訳にもいかない。
先ずは、自分達の目の前にある青カブトムシをどうにかしたい。

「気楽なもんだな。……ところで、ナハトはどうするんだ？」

「……アーベントと同様で、腕も吹き飛んでいる上に、今度は完全に機能も停止しているしな。

こいつ、もう動けないんじゃないか？　ハーケン。」

「……いえ。動力はまだ生きておらっしゃるでごんす。」

「何？　本当か、ＫＯＳ－ＭＯＳ？」

「はい。アシェンの言う通り、動力の心臓部は幸いながら無傷のようです。

ただ、暫く戦闘行動は一切出来ませんが。」

取り敢えず、その破壊された見た目からは、もうダメだと思われたナハトだったが、

珍しく真面目に仕事をしたアシェンと、ＫＯＳ－ＭＯＳからの確かな情報により、

何とか生きてはいる様だ。その事が分かり、別の意味でもほっとした一同であった。

だが、それも束の間。動けないとはいうものの、自律回復機能を持つ今のナハトでは、

いつまた動き出し、自分達の敵となるかも知れない。

「……そうか、それは良かった。だが、ここでの一番の問題は、

アーベントと同じく、ハッキングが出来無いだろうと言う事だが……。

アルフィミィ、頼めるか？」

「そうじゃの。ここはやはり前回同様、

マジカルキッズ・アルフィミィの乙女パワーに期待するしかないかのう。」

そう、ハーケンと小牟に請われ、アルフィミィが皆の前に出てナハトと改めて対面した。

ハーケンは確信を持って。小牟達は、期待とワクワク感を持って。

そして、カイトは……。

「……。」

「……。あなたは、どうしてここにきたんですの？　私に教えて下さいませですの……。」

「……！」

「あなたは私の……お友達ですの。私たちに力を貸していただきたいですの。

アクセルの記憶も……戻してあげたい。」

「アルフィミィちゃん……。」「……。」

アルフィミィの想いが通じたのか。

ナハトと共鳴するかの様に、アルフィミィも互いに光に包まれ、

アルフィミィの言葉に、ナハトが如実に反応を示した。

「ナハトより、制御プログラム受信用のシグナルを確認。」

「（……やはり、そうか。そういうことか……。）ＯＫだ……、コ

ール・ゲシュペンスト！

ファントム、お前のフレンドだ。説得を頼むぜ？」

「……。」

「……。」

そして。パーソナル・トルーパー、アルトアイゼン・ナハトも味方になった。

「……出力が安定しました。成功したみたいです！」

「……いやいや、大したもんだねえ。」

「さすがだぜ、マジカルガール。ホレちまいそうだ。」

「私にほれるなよ？　ですの♪」「ちょっと。……ハーケンさん。」

「え？　なにこの三角関係？」

「……禁断のプレイ中に悪いけど、そんなことしてる場合じゃないでしょ？」

「バカな……！　あの沙夜が、ツッコミを入れた……だと……！？」

「……ちょっと、救世主様？　それは一体どういう意味かしら……？」

「……さて。俺は、アルトの修理でもしてくっかなぁ～…っと。」

「……ふむ、カイトの奴めの事はさておき。

鋼鉄の孤狼を始め、曾てのアインストの残党が息を吹き返しているようであるな。」

「……今のナハトの取り巻きもそうだし、新種っぽい連中も出て来てるからね。」

「では、アルクオンもそのアインストという存在に？」

ナハトも仲間に引き入れ、やっと一安堵した所で、

改めて現状を把握しようといつもの話し合いが始まった。

だが、ナハトを修復しながら耳を傾けていたカイトが、その場で話し合いに加わった。

「うんにゃ。あいつは、そのアインストの呼び声に応えて、大ボスの元へ向かっているだけさ。

まぁ、あいつ自身も、今は結構迷ってるみたいでな。

取り敢えずは、そいつの声に応えて会ってみようかってな所だろ、今の心境としてはな。

あ、ハーケン。お前の武器も渡してくれ。今、ちゃっちゃと直しちまうから。」

「あ、ああ。……あんたの物言いからすると、

アルクオンは自意識を持っているように思えるんだが？」

「ああ。尤も、自意識と言うよりは、魂を宿している……と言った方が、正確かな？

だがそれは、俺よりもそろそろ、アレディの方が分かって来てるんじゃないか？」

「……いえ……私は……。」

ナハトと同時にハーケンの武器も修理しているカイトに水を向けられるも、何も言葉が出て来ず、

己の拳を握り締め、ただその己が拳を見詰め続けているだけのアレディであった。

何となく、またいや～な空気が漂い始めた頃、カイトが唐突に背伸びをして大声をあげた。

「……う～～ん……！　終わったぁ～！！　ほれ、ハーケン。お前さんの武器だ。」

「……あ、ああ。……これは……完璧だな。

今度からは、毎回アンタに整備を頼みたいぐらいだぜ、ミスター・クリエイト。」

「だが断る。ほれ、ナハトもパーペキに直ってるぞ。戦闘にもちゃんと参加出来る。」

「……チッ。ま、とりあえず、サンキューと言うところだな。」

「……ふむ。では、一段落付いたところで、さっさと上に行くぞよ？

正面の昇降機に乗れば、すぐであるからな。」

完全に修理が完成したナハトと、ハーケンに手渡された彼の武器を見た一行は、

錫華の言う通り、ナハトが通せん坊していた昇降機に乗り、階上へと上がった。

其処には、眼前に黒ミルトカイル石に覆われた一角があり、

其処を過ぎたもう一つの広間らしき場所に、錫華の恋人である守天が待ち構えていた。

「守天！」

「おう！　錫華か！」

「ああら！　イイ筋肉！」

「むふふ……そうであろう、そうであろう♪　……などと、言っておる場合では無かったの。

無事であったか、守天。なによりであるぞよ？」

「ああ、俺様は別になんともねえが……情けねえ話さ。

ヨソモンに、城内で好き勝手に暴れられちまってる。」

守天。錫華の恋人にして、滅魏城々主。

以前のハーケン達との戦いの際に、自身の蟠(わだかま)りを捨て去る事が出来ずに、

幾度も錫華達と敵対し合い、その野望を悉(ことごと)く撃ち貫かれて敗北した、業鬼(ごうき)。

その暴れに暴れ回った曾ての強敵が、悔しそうに目を瞑(つむ)り自身の不甲斐無さに歯噛みしていた。

だが、聞かねば何も始まらない。そして、知らぬ儘では先に進む事は危うい。

「余所者どころか、鬼の人たちもガンガン襲って来るのでございますが？」

「そうよ？　お仲間じゃないのかしら？」

「ああそりゃ、あのチョコバナナの所為だよ。つーか、他に考えられないだろうに。」

「……ああ、そういやそうだったねえ。

暫く見てないと思ったら……相変わらず大活躍だねえ、あの兄さんは。」

「……操音のヘイムレン。やはり、城内にいるのですね。」

「そいつを知ってんのか？　小僧にひょろ助。

……って、錫華よお。いつの間に、こんなに子分共を増やしたんだ？」

「ほぉ～っほっほっほ！！　これぞ、わらわの人徳と、魅惑の腰付きが生み出した奇跡である。」

「勝手に子分にするんじゃない。」

「てか、このパーティー、基本的に人徳ある奴なんて抑（そもそ）も殆どいねぇだろうに。

それ以前に人間少ねぇし。精々、神夜と零児とＫＯＳ－ＭＯＳぐれぇだろ、ＪＫ。（常識的に考えて）

だが、腰付きに関しては激しく同意と言わざるを得ない。」

「あ、ありがとうございます／／／

す、錫華ちゃん、面倒臭がらないで、ちゃんと説明して貰える？／／／」

「……ふむ、仕方あるまい。」

そして、恒例のカクシカタイムに入り、守天にも現状皆が知っている事を、

自身達の確認も併せて、ほぼ洗い浚(ざら)い話して聞かせたのであった。

第拾伍話【レアハンター～Ｗｈｏ　ｌａｕｇｈｓ　ｌａｓｔ？～】

「ふむ、成る程の。ちゃんとわらわの言った通り、

ミルトカイル石を砕くという仕事はしていたようであるな、よいよい。」

「そして、その最中に見たことも無い新種のアインストの出現……か。」

「ああ。そのアインストどもの討伐に追われて、城門の守備が手薄になっちまったんだ。

それでこのザマよ。『修羅』……とか言ったか？　侵入者は。」

「はい。魔笛（まてき）にて、人の心を縛る修羅……ヘイムレン・シルバートの一派に間違いありません。」

どうやら、守天達がアインストに掛かり切りになっている隙を狙って、雪崩れ込んだ様である。

汚いなさすがヘイムレンきたない（褒め言葉）。

これは、ほぼ確実に彼と鉢合わせする可能性が高いだろうと思い、その行方を聞いてみたのだが……別の情報が入り込んだ。

「で、そいつらは何処にいるんだ？　Ｍｒ．マッスル。」

「……分からねえ。部下に追わせたが、見失っちまった。
だが、風神みてえな『戦術からくり』なら俺が直接相手をしたぜ。」
「それは……！　白髪の黒い機兵ではありませんか！？」
「ああ、そんな奴だった。
危なくやられるところだったが……戦いの途中で、あのからくり野郎……！
俺様を無視して奥へスッ飛んでいっちまいやがった。」
「急ぎの用でもあったのかのう。先というのは、この先をまっすぐかの？」
「ああ、水上庭園の方だ。」
「……このお城の入り口でも感じた、不思議な力……ますます強くなっておりますの。
もっともっと、深淵に流れ込んでいくような……そんな力の流れが……。」
「特に変わったエネルギー反応は検知できませんけど……。」
「物理的なエネルギーではなく、妖気や霊的なものかもしれん。」

「で、あの髪モサモサロボは、そこを目指してるんだよね？」

「さっき引き入れたナハトも、同じ場所を目指してエレベーターに乗ろうとしてたってことか。」

「まぁ、大体そんなもんだ。正確に言えば、城に入る前に言った様に、

この滅魏城の地下にある黒ミルトカイル石の水路から、

今はフォルミッドヘイムにある、ヴィルキュアキントに向かってるのさ。」

「……おい、そこのひょろ助。てめえ、何か知ってやがるな？全部、吐いちまえ。」

「やだぷ～。ほれほれ、そんな事よりも、さっさと先にいかねぇと、チョコバナナがアルクオンにちょっかい出しちまうぞ？」

またもや、小出しに新情報を出すカイト。最早慣れっ子の一行だったが、

守天はそのチビチビとした遣り方に苛付いた様で、カイトを問い詰めるも、

外にはみ出させていた儘のシャツを軽く風に浮かせながら、その守天の追求の手からさっさと逃れ、一人先に進んで行ってしまった。

「あ、おい！　テメェ！　待ちやがれ！　……チッ！　おい、錫華！　何だ、あいつは！？

……あんな得体の知れねえ奴と一緒にいても大丈夫なのかよ？」

「……ふむ、まあの。とりあえず、今のきゃつにはわらわ達と敵対する意志は無さそうなのでの。

それに、何やらいろいろと知っているらしくての。」

「……少なくとも、今のあやつがわしらに敵対することは、絶対に無いと言っても構わんじゃろ。」

カイトの存在を危惧する守天に、一応は大丈夫だろうと……。

それに、カイトは自分達にとっては有益な存在であるからと言う錫華。

その言葉に小牟も乗っかり、間違い無いと確信を持って応えた。

小牟が、カイトの秘密の何を知っているか全く判らない一行は、その根拠を聞いた。

「何故、断言出来るんだ？　小牟。」

「……零児。ぬしがこちらの世界に来た時に、カイトが戦ってた奴がおるじゃろ？」

「……ああ、あの少女か。そいつがどうかしたのか？」

「……うむ。あの時……あの小娘めが、カイトに『とある言葉』を言っておった。

その時点で、今、あの小娘と敵対しているわしらには、牙は向けん。あやつはそういう奴じゃ。」

「……ええ。何より、彼は……いえ。

今は救世主（メシア）にも、守るべき存在（モノ）がいるようですから。」

小牟の沈鬱（ちんうつ）な雰囲気に加え、ＫＯＳ－ＭＯＳの慈愛に満ちた表情に何も言えなくなった一行。

矢張り心配だからと、錫華達に付いて行こうとする守天を錫華が窘（たしな）

め、

守天に城内の事は任せ、一行は進んだ道の先で欠伸をしているカイトの許へと向かうのだった。

其の後、カイトと合流した一行は、黒ミルトカイル石に阻まれた不自由な水上通路を潜り抜け、

ヘイムレンとアルクオンが向かい合っている場面に出会(でくわ)した。

ｓｉｄｅ：滅魏城々内　大門

大きな鬼の面を持つ大扉を、高い階段を幾段も上った頂上に持つ場所。その階下。

未だ瓦礫(がれき)や毒の沼地が其処彼処(そこかしこ)に散見される中、大門から真っ直ぐに見下ろせるその真下。

其処に存在する、今は場所が変わった為地、下に水を湛えた広間。
その地下水路への道を挟んで、操音のヘイムレンことヘイムレン・シルバートと、
羅刹機アルクオンが対峙し、睨み合っていた。

「……とうとう追い付いたよ、羅刹機アルクオン君？
その手に持っているもの……僕に見せてくれないかな？」

「……。」

「あの猫の姿をした戦車から持ち出したのはそれかい？　……そして君はここまで来た。
ここに何があるんだい？　僕だけに教えてくれないかな？」

「……！」

「……ん？　僕に……では無いな。上……？　…！」

何も応えないアルクオンに対し、一方的に話し掛けるヘイムレン。

そうこうしている内に、アルクオンが唐突に何かに反応し、大門の方を見上げた数瞬後、

その場にて片膝を地に着け、頭を垂れた。

自身への行動かと一瞬勘違い仕掛けたヘイムレンだったが、

流石に其処迄は自惚(うぬぼ)れてはいなかった様で、アルクオンが直前に見上げた方へと視線を移し、

一瞬驚いた顔をした後すぐに不敵な顔を以て、その来客(ゲスト)を出迎えた。

「そこまでだ、ヘイムレン……！」

「これはこれは……剛錬のアレディ君。もうこんな所まで来てしまったのかい？

しかも……また随分と人数が増えたものだねえ。」

「俺たちも驚いてるところさ。すっかり馴染みのメンツが揃ってな。」

「この勢いで、そこのラセツキも戴いちまおうと思ってね。」

「そう言うわけで、そこをドどき頂けないかしら？」

「どかすだけでは済まさぬ！　人の城で大暴れしおって……そち、許さんぜよ！」

いざ一行が来てみると、何故かアルクオンが平伏していた。

一応、あの時の現場を見た一行の内から、その話を聞いていた後から合流したメンバーは、

それは、カイトに対してだと検討が付いていた為に、敢えてその状態の彼には触れずに、

ただヘイムレンとだけ対峙していた。……カイトの行動も目の端に捉えながら。

「これは失礼を、鬼の腹姫様。羅刹機アルクオンを捕らえ次第、すぐに退散致しますよ。」

「ド阿呆。貴様程度にアルクオンがどうこう出来る訳など無かろうが、戯けが。

貴様といい、ゲルダといい、相手の実力も計れん程度の器風情が、図に乗るな。」

「……貴様…！　僕のみならず、我が主までをも愚弄するかっ！！！」

「あ〝？　あの程度の蹴りも見極められんクソガキが、この俺に口答えするか？

今度は五体バラバラに斬り刻まれたいか？

分を弁えろ、戦う事しか頭に無い脳筋の極みの修羅風情が。」

だが、当のヘイムレンは相変わらずの殷懃無礼振りで、のらりくらりとしていた。

しかし、カイトの言葉は、そのヘイムレンをして激昂し嚇怒させた。

そして、最後のカイトの言葉によって、ヘイムレンは問答無用でカイトに仕掛けた……が。

「ぐっ……！　き、貴様ぁぁぁぁぁ……！！！」

「……俺に触れるな、汚らわしい。　これ以上、舐めた態度をとる様ならば、

今直ぐこの銃で撃ち抜いて、貴様の脳漿をぶち撒けても構わんのだぞ？」

その直後に地面に叩き付けられて転がり、身体を踏み付けられて身

動きが出来なかった。

何故ならば、その頭にどこからともなく取り出した長身の銃が突き付けられていたからだった。

その銃を突き付けた儘、カイトはヘイムレンに顔を近付け耳元で囁くかの様に、

死神が如き様相を顕し、ヘイムレンを凍り付かせた。

「……ふん。貴様程度の雑魚を滅ぼした所で、面白くも何とも無い。

尻尾を巻いて逃げ帰るなり、アレディ達と死合（爆笑）を繰り広げるなり、好きにしろ。

――――ああ、アルクオン。もう構わんぞ。‘可能性（やつ）’の許へ行って来い。

そして、良く考えるんだ。貴様の望みと……その‘可能性’、その真の意味を。」

「……。」

「……!?　力が……『呼び声』がまた強くなりましたの……！

地下……いえ、正面の水の中から！」

「対象、ラセツキ・アルクオンのエネルギー反応増大。」

ヘイムレンから足と銃を放し、心底つまらなそうに鼻を鳴らし、睥睨(へいげい)するカイト。

すると、思い出したかの様にアルクオンに顔を向け、

先程からずっと膝を付いた儘の彼に、言葉を掛けた。

その言葉を聞き終えると、アルクオンは更に少し深く頭を垂れ、

自身の眼前にある巨大な水溜まりの中に飛び込んだ。

「何と……！　アルクオン!?」「ゆ、床が抜けましたよ!?」「カイト殿、これは……！」

「これはまさか……あの男の言う事に、あのアルクオンが従ったとでも言うのか……!!?

……貴様は……貴様は、一体何者だ……!?」

「あ゛!?　……だから俺は、救世主(メシア)だっつったろうがよ。

……ぁんだぁ？　テメェ、まだあの勘違い盆踊り人形に聞いてねぇのか？」

「……貴様ぁ……！！　一度ならず、二度までも我が主を……！！！」

「あ～はいはい、忠犬君は律儀ですね～、お利口さんでちゅね～……勝手に憤ってろ、タコ。」

何と言う口の悪さ。思わずヘイムレンに同情せざるを得ない一行であった。

最後に罵り終わったカイトが、つまらなさそうに欠伸をした後、近場にあった黒ミルトカイル石に凭(よ)り掛かり、それを背にして座り込んだ後、寝息を立て始めた。

え？　寝た？　この状況で？　て言うか、この空気どうしてくれるのよ？

そんな各々の思いが詰まった視線を沢山受けても、ずっと寝っ放しのカイトであったとさ。

「……仕方ない。

ならば、アルクオンの行った道……この僕の剛拳で打ち砕いて進むしかないか。」

「何が剛拳ニャ。ネタは上がっとるんニャ、黒バナナが。」

「貴方が黒石を壊せるのは、

ワタクシの対ミルトカイル破砕グラブ『オズマゴス』の御陰でしょうに！」

「このカヌー頭！　それをとっとと返してよ！　そしておしおきの百叩きだよ！」

「……返却も仕置きも御断りするよ。

アルクオンの追跡が困難になった今、手持ちの物は大事にせねば……ね。

そろそろ、こちらも戦力を増強しないといけないのでねえ。」

弛緩しそうになった空気だったが、ヘイムレンが行動を起こしたことによって、

またもや緊張の空気が瞬時に張られた。そう言えば、『オズマゴス』を盗られていた。

そんな事を、今更乍らに思い出した一行であったが、？（おくび）にも出さなかった。

「さて、羅刹機アルクオンはとりあえず諦めるしかないが……。
君達の持っている機兵も……中々強そうだねえ。」
「「「……。」」」「何でも人の物を欲しがるんじゃありません！」
「あん、手っ取り早くて合理的な方法ではあるけど、ね。」
「操音のヘイムレン……。お前が勝ったなら、持って行けばいい。
……勝者が全てを得る。それが修羅の掟故に。」
「……いい言葉だ。
楽し気に旅をしている割には、修羅の本分までは、まだ忘れてないようだねえ。
安心して、君を屠(ほふ)れるというものだよ。剛錬のアレディ……！」
～修羅シュシュシュ中～

「……やれやれ、ここまで来ると、流石に戦力差は歴然か……。」

「……まだ傷の癒えていない、そんな身体で戦えば敗北は必定。

……何故、戦おうとした……ヘイムレン？」

「……何故？　――――フッ。ただ確認したかっただけさ。

和気藹々と、唯々旅を楽しんでいるだけの君の……牙が抜け落ちた様の確認をね。

だが、それも僕の杞憂だったようだ。

力そのものは衰えてはいないようだ……以前程の怖さは無くなってしまったがね。」

「……。」

手下の修羅達や鼠達も悉く地に倒れ伏し、ヘイムレンも地に膝を着け肩で息をしていた。

そのヘイムレンにまた、同じ様な事を指摘され、唇を噛むアレディ。

その様を見て、少しは安堵したらしいヘイムレンは、息を整えると

すっくと立ち上がり、
此の場を足早に立ち去ろうとした。

「……まあいい。僕もゲルダ様と合流し、そろそろこちらも手駒を揃えないとねえ。」

「ちょっとお待ちなさい！　こっちが勝ったんだから、『オズマゴス』は置いて行きなさい！」

「勝った者が全てを得る……とか言ってただろ、アンタ。」

「僕はまだ生きているし、奪い取られたわけでは無いからねえ。」

「そんな屁理屈、聞き入れるわけには参りません！」

「……では、ごきげんよう。」

「ま、待って下さい……！」

「まだ何かあるのかな？　……君、その帽子……素敵だねえ。」

「あ、ありがとうございます。

え～と、あのう……スターウインド・ドレス・アーーップ！

レア・ハンター！」

「……。」「……。」

「……今、何かしたかな？　お嬢さん。」

「おいおい、リトルマジシャン。なんなんだ？　今のは。」

「足止めの攻撃技とも違うようでしたが？」

「糸でヘイムレンを捕縛するつもりかと思いましたが……。」

「どの道、そんな細い糸で僕を捕えることなどは出来無いけどねえ。
では、失礼するよ。」

「待て！　ヘイムレン……！」

アレディの制止の声にも耳を貸さず、未だ眠り転(こ)けているカイトに
鋭い一瞥(いちべつ)をくれてから、

さっさと此の場を後にしてしまった。

しまった……！　という雰囲気が流れた後、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．に一体何をしていたのか聞いてみた。

「……ふう。」

「ふう、じゃないじゃろ！　賢者になっとる場合とちゃうぞ、モモ！」

「ん……？　おい、前にこんな事無かったか？」

あれ？　そう言えば……？　そんな事を思い出しそうになった森羅組。

そんな二人の記憶を頼りに、解説待ちの一行。そして、解説しようとするＫＯＳ－ＭＯＳ。

そんな皆を大いに驚かせたのは、今迄ずっと寝ていたと思われたカイトの唐突の大爆笑だった。

「……プッ…！　ブワッッハッハッハッハッハ……！！！　アッハッハッハッハ……！！！」

“…うわぁっ！！？　お、驚かすな（さないで下さい）っ！！”

「イーッヒッヒッヒッヒ……！！！　いやいや……M・O・M・O、偉いッ！　でかしたぞ！」

「は、はいですっ／／／　ありがとうございますっ。」

「うんうん。……くくっ……『今何かしたかな？（キリッ』だってお！

アッハッハッハッハ……イーーーッヒッヒッヒッヒッヒッヒ……！！！！！

は、は、腹……痛ェ……！！」

大爆笑しながら涙を沢山零した儘、辛うじて片目だけを開けて、M・O・M・O・の頭を帽子を上から撫で捲るカイト。

多少乱暴ではあったが、それでもM・O・M・O・は十分嬉しい様だ。

その様をKOS－MOSが慈愛の眼差しで見詰めていると、またもやカイトが大仰（おおぎょう）に笑い出した。

誰もがイラッとする顔で、本当に痛そうにお腹を抱えながら目に涙を浮かべて、笑い続けていた。

「今、何かものっそいイラッとする顔をしたの、こやつ。」

「そうですわね。何か、物凄くぶん殴りたくなりましたわ。」

「……こやつ、別に殺ってしまってもよいのであろう？」

「……殺すな……気持ちは解るがな。とりあえず、カイト。好い加減笑うのを止めてくれ。」

「……くっくっく……む、無理ぃ……！！　アッハッハッハッハ……！！！」

“ダメだ、こりゃ。”

何時迄も大爆笑しているカイトを放っておき、

再度Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．に何をしたのか聞いてみる事にした一行。

「あの……これを……。」

「これは……間違いありませんわ！　対ミルトカイル破砕グラブ……『オズマゴス』！」

「もしかして、さっきの釣竿みたいなもので……？」

「はいです！　レアアイテムを奪取する、特殊な技なんです。」

「エーテル・サーキットを使用した、スターウインド・モードの特殊兵装、

『レア・ハンター』です。」

「へ、変身する意味ってあるんですか？　可愛かったですけど……。」

「スパッツで一本釣り……。なるほど、盲点でしたの……。」

「ぬうう……どこまでも忌々しい！　もう脱ぐくらいしか……ッ！」

「いやいや、張り合わなくていいから。」「あん、若いコにだけ許された必殺技ねえ。」

「経過はどうあれ、お手柄じゃないの、モモちゃん。カイトが笑い転げるのも分かるわネ。」

「ありがとうございます！」「……あれは、流石に笑い過ぎだとは思うがな。」

笑い過ぎて、思いっ切り咽せて咳をし始めたカイトが、はぁはぁと息を整えてから、

ようやっと皆の会話に加わった。……じとー……という眼差しの中で。

「はぁーっ……はぁーっ……。あ～、久し振りに笑った笑った！

んじゃ、M・O・M・O・の御陰で『オズマゴス』も盗り返した事だし、

さっさとエスピナ城にでも行きますか！　あ、アルクオンの事は放っといて構わないぞ。

どうせ何れ又、必ず出会う事になるだろうし。何より、あいつにも考える時間は必要だからな。」

「……そうか。まあ、アンタがそう言うんなら、先に進もうか。」

「この次でしたら、カイトが言った通り真南に進んだ先に、

黒石にて道が塞がれたエスピナ城がありんすでごわす。」

気になる事だらけだったが、カイトが先に進もうと珍しく催促して来る。

どうせ聞いても教えてくれないだろうなあと、好い加減その思考にも慣れて来た一行。

次の目的地の名前を聞いて、一斉にその視線がネージュの許へと降り注いだ。

ネージュは……感慨深そうに目を閉じ、ポツンと一言漏らした。

「……そう。やっと……帰れるってことね。」

「ネージュ姫殿。では、ついに……。」

「あちこち寄り道したけど……。

覇龍の塔でお願いした、護衛のお仕事……そこでおしまいよ、アレディ。」

「……分かりました、ネージュ姫殿。最後まで、御供いたします。」

「エスピナ城から、新フォルミッドヘイムまではすぐだから、

アタシたちも送っていってあげるわ。」

「カッツェ……。みんなもいいの？」

「私たちは百夜を追わないと、ね。」

「ああ、その為にもアグラッドヘイムと関連がある国……フォルミ

ッドヘイムに行くつもりだ。」

「……まあ、あいつらがあたしらと無関係ってことは無いだろうからね。」

「……救世主（メシア）の言により、エスピナ城にＴ－ｅｌｏｓがいる事は確実です。

私は、彼女を元の世界へと連れ帰らねばなりません。」

「まあ、結局そっちにはぞろぞろと行くことになりそうじゃ♪」

「……か、勘違いなさらないでよね！　別に嬉しくなんかないんですからねっ！／／／」

「はいはい、お約束が終わったら、参りますわよ？」

「では、妖精の姫のド凱旋とシャレ込みましょう♪」

そして、一行は守天を城に残す事にし、滅魏城を後にした。

その先に何が待ち受けているとも知らず……判らず。

まだまだ、彼女達の珍道中は終わらない。

そして――――彼の救世（メシア　たび）も。

第拾伍話【レアハンター～Ｗｈｏ　ｌａｕｇｈｓ　ｌａｓｔ？～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回から、エスピナ城編。多少予想外な事もある……かも知れないかも……？

あ、戦闘シーンは二回あります。正確には三ヶ所……かな？　御楽しみにｗ

所で、今更ながらの話が幾つか。

1．え～、本文を御覧になって下さった方々には御解りかと思いますが、

　カイトは修羅が大嫌いです。あ、私（作者）は好きですよ、修羅。

　その理由は……まぁ、分かり易いかとは思いますが、また何れの機会に。

2．実は、この小説に於けるこの世界『ムゲフロ』での主人公はアレディではありません。

原作をプレイなされた方は気付かれたかと思いますが、小説本文上ではアレディの台詞を沢山削っています。

それは、進行上の都合も多少ありますが、基本的には彼が主人公では無いからです。

では、主人公は誰か？　カイト？　いいえ、違います。

実は、カイトもこの世界に於いては主人公の限りではありません。では、果たして誰か？

それは、最後まで読んで頂ければ判って頂けると信じ、今は敢えて伏せさせて頂きます。

3．これこそ今更なのですが、皆さんのカイト達の服装等のイメージってどんなのなんでしょう？

因みに、私のイメージは、無地の黒いシャツを下に着込み、ジーンズか、もっとラフな、これまた黒いズボンを履き、上に、黒いYシャツの様なものを羽織っているという感じの真っ黒な軽装です。

まるで、ちょっと其処のコンビニにでも行くかの様な、気軽な死神イメージです。

一応、鋼牙や黄宇達、五行全員或る程度服装イメージは決まっ

ているのですが……。

この詳細って、何処かで細かく書いた方がいいんでしょうか？

……まぁ、とは言っても私は服には全く造詣が無いので、非常に説明し辛くはあるのですが；；；；

てな所です。３はひょっとしたら、グランギルズ辺りで、少し書くかも……？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾陸話【我が望むは勝利の福音（ゴスペル）～魔女は妖艶に踊る～】（前書き）

現時刻（２０：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４０１，０６５アクセス　ユニーク：１９９，７９１人
皆様、何時も有難う御座います。

さて、今回はエスピナ城・前編です。

申し訳ありませんが、今回は戦闘シーンは有りませんので、御諒承下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾陸話【我が望むは勝利の福音（ゴスペル）～魔女は妖艶に踊る～】

ｓｉｄｅ：滅魏城

今、その城門前で守天が錫華達を見送る為、迎えに出ていた……が。

「……本当にいいのか？　錫華よお。」

「わらわを見縊（みくび）るでない。それに、そちがここを離れたら、誰が滅魏城を守るのであるか。」

「まあ、そりゃそうなんだが……。」

「心配するなよ、オーガボス。オーガプリンセスは、俺たちがしっかりガードするからさ。」

「……確かに、それも心配だ。だが、それ以上に俺様が危惧してるのは……あいつだ。」

そう言って守天が遙か上空へと顔を向けた先には、

空中に漂いながら、エンドレス・フロンティアを一望しているカイ

トの姿があった。

それを皆で同時に見、同時に顔を守天に戻すと、皆一様に何とも言えない顔付きをしていた。

恐らく、皆思う事は同じなのだろう。

それを理解した守天は、もう何も彼について言うことは無かった。

「……そうか、分かった。だが、錫華を危ない目に遭わせたら承知しねえぞ、てめえら。」

「既に何度も遭ってますが、了解いたしましたのですのことです。」

「じゃあ、守天さん、行きますね。」「しっかりと、わらわたちの城を守るのであるぞ?」

「おうよ！　心配するなって！　……早く帰って来いよ、錫華。」

そう言って、守天は城内に入っていった。

皆のニヤニヤ顔と視線を受けて少々赤くなりながらも、軽く悪態を付く錫華であった。

「……全く、いつまで経ってもわらわ離れ出来ぬ男である……／／／」

「男は、大丈夫だって言う女程、心配になるものなんだな、これが。」

「なるほど、お勉強になりますの。」

「そういうものなのですか？　私にはよくわからないのですが。」

「男のエゴだとは思うがな。」

「守られるばかりは嫌だと言われても、つい守り通してやりたくなるのが、男の性ってもんさ。

これぱっかりは……な。本能に刻み込まれてるもんだから、どうしようもないんだ。」

「な、何だか難しいです……って、いつのまに降りて来たんですか？」

「ん？　つい今さっきだが。それがどうかしたか？」

「……い、いえ……別に……あはは；；；」

リア充達の惚気話に、何だか変な空気とムードになりそうだったが、

一刻も早く家に帰りたいネージュが、そんな空気をあっさりばっさり切り捨てた。

「ほらほら、生臭い話はそこまでにして。次は……いよいよ私の城よ？」

「場所は、先程確認した通り、ここから南ですね。」

「おっと、その前に……すぐ東にある黒石を壊して、港を開放してくれないかい？」

「お安い御用じゃ。ドロシーパワーグローブで割り捲(まく)りじゃぞ？」

「ほ～っほっほっほ！　ドロシーのしわざ、篤(とく)とご堪能あれ♪」

「では、港を開放しつつ、ネージュ姫殿の城へ急ぎましょう。」

そうして滅魏城を出た後、西側……滅魏城に向かって東側にある黒石で塞がれた港を開放し、

アンの船中で少し休みながら装備を整え、その足で一行は一路エスピナ城へと向かった。

第拾陸話【我が望むは勝利の福音（ゴスペル）～魔女は妖艶（ようえん）に踊る～】

ｓｉｄｅ：エスピナ城

其は妖精の住まう城。曾てのエルフェティル北部の名家、ハウゼン家の城。

そして、１０年戦争時の舞台役者にして、今は既に誰も居ない蛻（もぬけ）の城。

今ここに、妖精の姫の帰還が無事になされた……が。

「とうとう……帰って来れたのね、私のエスピナ城に。」

「いや、何と言うか……暮らし難そうな城だな、これは。」

「あん、何か悪の総本山って感じでステキじゃない？」

「最初からこういう悪者っぽいデザインだったわけじゃありません。」

「ネージュさん、この紅いトゲトゲって、もしかして……。」

「……お察しの通りよ、カグヤさん。エスピナ城は、私たちがシュラの国に転移するド直前に、

紅いミルトカイル石で覆われた……あの時のままね。」

曾(かつ)ての荘厳な城。だが、その様相は紅いミルトカイル石にて覆われ、見る影も無く佇んでいた。

その或る意味趣(おもむき)のある城。その中心部らしき場所より、虹色の光柱が立ち上っていた。

「中央から聳(そび)え立つ……虹の柱のようなものは何ですか？」

「さっきから、私も気になってたんだけど……何？　あれ。」

「知らぬのかえ？　てっきり、舞台装置の一つかと思っておったが。」

「私がオルケストル・アーミーに出向中、ルートが塞がる前に一度調査に来ましたが……、

その時には、こんな虹は出ていなかったのであり申しました」

「もしかして虹の橋……なんですか？」

一見、ロマンティックが止まらなそうな感じの光柱であったが、よくよく見て感じてみると、中々に禍々しい気で溢れている様に感じる。

どうやら、自分達の知っている様な虹の橋では無い様だと、森羅組やＫＯＳ－ＭＯＳ達が改めて認識していた時、カイトが何の気成しに普通に説明し出した。

「橋と言うよりは柱だな。謁見の間にな、植え付けてあるんだよ。ヴェルトバオムの芽がな。……いや、もう既に蕾（つぼみ）になっているだろう……あの規模ならばな。

あの虹はそっから出てるんだ。ヴェルトバオムが魂を吸い取る根

城の一つとする為にな。」

「なっ！？　……そんな暴挙、許すわけには参りません！　ましてや、私の城でなどと！！」

「ヴェルトバオム……確か、ミラビリス城でアンタや、あのグラマラスウイングが言っていた言葉だったな。一体、なんなんだ？」

「ん？　アグラッドヘイムの中心部、シュテルベン・シュロスに聳え立つ巨樹の名称だ。

アグラッドヘイムは、その根を彼方此方（あちこち）全ての世界へ生やして、その世界の魂達を養分として育ち、ただ只管（ひたすら）育てる為だけに存在してるんだ。」

「そんな……！　何と言う、傍迷惑な……！！」

「……いいのかい、カイト？

今迄ずっと黙って来たアンタが、そんな重要な事をベラベラと喋っちまって。」

「ああ。別に抑（そもそ）も隠す必要は微塵も無かったし、単に俺の気紛れなだけだったからな。

いや、ほらあるじゃんか。聞かれると言いたくないけど、聞かれないと言いたくなるって奴。」

「……こ、子供の我が儘みたい……；；；」

神夜の台詞が、皆の気持ちと意見を代弁していた。

だが、教える気になっている今の内にと、ハーケンは他の質問もしてみた。

「それじゃ、もう一つ聞きたいんだが……。

このキャッスルのミルトカイル石は、どうしてまだ消えて無いんだ？」

「ああ、そりゃアインストが未だ滅んで無いからだよ。

滅魏城にも未だ多少は残ってたし、何よりヴィルキュアキントが未だ存在してるだろ？

それに、ノース・オリトリアにも未だヴェーゼント・リヒカイトの残留思念が残ってるし。

第一、ヴァールシャイン・リヒカイトは、肉体こそハーケン達に滅ぼされたものの、

その精神……魂は未だ、あの場所に残ってるからな。

アルクオンは、その魂の呼び声に反応して其処へ向かっている途中な訳だし。」

「……ヴェーゼント・リヒカイト？」

「ん？　……ああ、偽シュタール・ディープの名前だよ。

まぁ、もうあの封印されていた場所にはいないけどな。

疾くの疾うに、ヴィルキュアキントに逃げ出して、今は其処で網を張ってるけど。」

「……そ、そう……か。」

“……。”

いざ、カイトから聞いてみると、飛んでもない台詞のオンパレードだった。

カッツェ達オルケストル・アーミーは、その事実に顔を青くし。

ネージュ達は、現状に憤慨し。

ハーケン達は、今度こそは確実にアインストを葬る決心をし。

そして、アルフィミィは……自身の胸にチクリとした、微かな痛みを覚えた。

「……はあ。折角帰って来たってのに、大分面倒なことになってるねえ、姫さん。」

「全然気にしないから！　ただいま～♪　……なんて雰囲気にはとてもなれないわね。」

「……入ってみましょう、ネージュ姫殿。これでは、貴女を送り届けたことにはなりません。」

「アレディ……べ、別にありがたくなんて……／／／「はいはい、入りますわよ？」」

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内

城内に入り込んだ一行を出迎えたのは、赤と黒のミルトカイル石に侵された見るも無惨な姿と、

床も壁も天井も、その至る所に穴が開けられ、

最早その形を思い出すのも難しい程に、荒れ果てた惨状だった。

そんな城内を、沈痛な面持ちで眺めながら進む一行に、突如襲い掛かるものがいた。

アシェンやＫＯＳ－ＭＯＳ、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．のサーチにも反応しなかった為、

誰もが即時に反応出来無かったが、その数瞬後、カイトの手によって全て消滅していた。

「……あ、危なかったあ～……。どうなることかと、ヒヤヒヤしたよ～……。」

「有難う御座います、救世主（メシア）。しかし、今の敵性体は……グノーシス。どうしてこの場所に？」

「ああ。どうせ、ヴェルトバオムの芽に引き寄せられて集まって来てんだろ。

アインスト共もちゃっかり其処等にいるしな。揃いも揃ってまぁ……。」

「あん、正に悪の巣窟って感じね。外観と言い……中々ステキじゃない？」

「……誰に同意を求めているんだ。それにしても……これは荒れ過ぎだな。」

「……全くね。そりゃ、二年も三年も放置すれば、或る程度は荒れるでしょうけど……。」

「……この無秩序に開けられた穴は……何でしょうか？」

「ふむ、これがほんとのアナーキー。なんちて♪」

「……アレディ、久し振りに掌打。」「仕方ありません……！」「はひぃッ！　き、厳しい！」

「……やっぱ、アホだろお前。」「カイトにアレディもいると、俺は大分楽が出来るな。」

駄狐の自業自得っ振りを眺めながら、改めて城内を見回すと殊更その荒れ果てた様が良く判る。

未だ続けられているダ・フォックスへの打擲（ちょうちゃく）をＢＧＭにして、話は続けられた。

「だが、本当にこの空洞はなんだ？」

「……規模は違うけど、この光景、見たことがあるわねェ。」

「はい。このエンドレス・フロンティアに瞬転してしまった……我が波国の大地と似ています。」

「そりゃそうだ。この穴は全部、ヴェルトバオムの力の余剰分によるものだからな。

正確に言えば、何処か別の異世界へと、刳り取った部分を転移させてるだけだけど。」

「余剰分……！？　余った力だけで我が波国のみならず、この城にまで……！」

「まぁ、その内この穴凹も世界中にその規模を広げるだろうけどな。

だが、今急いた所で何が出来る訳でも無いしな。取り敢えずは先に進もうぜ？」

そう言うカイトが向けた視線の先には、先程から誰の視界にも入っていた、

奇妙な芽の様な種の様な物体が部屋の中央に置かれていた。
取り敢えず、その物体の側へと皆で歩を進めた。

「……これは一体何だ？　置物にしては、この城にはそぐわない感じだが。」

「……枯れた植物の芽と言うか、花の蕾みたいだけど……。」

「ご存知ないんですの？　ということは、これは……。」

「そう。これがヴェルトバオム。正確には、その蕾から飛び出した芽と言う所だ。

言わば、魂を集める集積場への中継地点の様な物だな。」

「……これが……これを排除するには、どうすれば良いのですか？　カイト殿。」

「ん？　ただぶっ壊せばいいだけだ。

序でに今迄の恨みも込み込みで、一発思いっ切りぶん殴ってやれ。」

「……分かりました。では、力の限りに……！！　ぬぅぅぅんっっっ！！！」

アレディの覇気を込めた一撃を喰らって、ヴェルトバオムの芽は跡形も無く完全に消し飛んだ。

遣り過ぎだろ。てか、意外とストレス堪ってたのかな？

誰もがそう思ったが、敢えて口にしなかった。

その様を見届けた後、何か考え事をしていたネージュがポツンと独り言を零した。

「……一応、城内の様子を彼女に『訊いて』みようかしら？」

「ネージュさん？　もしかして、ハウゼン家に代々伝わるという…アレですの？」

「そうよ、ドロシー。『魔倣の鏡』に、よ。ま、カイト程では無いでしょうけど、

城内でどんな事が起こっているかぐらいは判るでしょう。」

「マホウノカガミ？　マジック・ミラーってことかい？」

「『封印の間』に安置してある、強い魔力を持った鏡のことなの。

詳しくはそこで話をするから、先を急ぎましょう。場所は地下一

階よ。」

そして、一行は地下一階へと足を運んだ。しかし、扉が開いていない。

仕方なく、その階にある仕掛けを作動させて、扉を開け中へと入って行った。

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　封印の間

其処には、眼前に巨大な鏡が一つ。その周り……後方に幾つもの小さな鏡が整列していた。

恐らくは、眼前にある巨大な鏡が、件の『魔倣の鏡』であろうと誰もが見当を付けた。

「ここが『封印の間』よ。フェイクライドもここに安置されていたんだけど……。

都合良く、戻って来てる……なんてことはないみたいね。」

「いや、戻って来てるぞ？　ネージュ。今、丁度お前の部屋にいる。」

「な、なんですって!?　そ、それは本当なの？」

「ああ、勿論本当だ。早速訊いてみな？　魔倣の鏡に。同じ答えで教えてくれるだろうさ。」

「……でかっ!?　こ、これが……？」

「そう、これが『魔倣の鏡』。

ハウゼン家に先祖代々伝わる、由緒ド正しいマジック・アイテムよ♪」

「凄く立派な鏡です!」「ふむ、振り付けの確認などはし易そうである♪」

「これでお化粧とか、落ち着かない感じだけど……実際はどうやって使うの？　お姫様。」

「こうやって質問すればいいのよ。

鏡よ鏡。行方不明の妖精機フェイクライドがどこにいるのか、居場所を調べて。」

鏡に間近に近付き、誰もがその大きさに驚嘆した。

人の身長は愚か、機兵達をも優に遙かに超える超巨大な鏡。

その鏡に、ネージュは訊ねた。妖精機フェイクライドの行方を。

カイトの言葉が、本当に真実かどうかを。

そして……『鏡』は応えた。

〔……お答えします、ネージュ・ハウゼン姫。〕

「鏡が喋った……!?　なんと面妖な……。」

〔フェイクライド……ハウゼン家に伝わる王族用妖精機。……
……。〕

「ん？　おい、黙ったぞ？」「流石に、少し時間が掛かるみたいね。」

〔……この城の中にいます。〕

「まさか……！　本当に……戻って来ているの!?　それで、どこ?!　どこにいるの!?」

〔……それは分かりません。

妖精機フェイクライドの魔力を城内から感じる事は出来ますが……。

現在、城内には魔力を放出する物品が多数存在する為、場所を特定する事は出来ません。〕

「魔力を放出する……さっきの芽や虹の柱、それにカイトが言ってた蕾とかのことかい?」

「多分そうだと思うけど……魔倣の鏡よ、教えて。今、この城に起こっていること、その全てを。」

カイトの言葉が、間違い無く事実だと分かった。

この調子でどんどんいっちゃお～、とばかりに矢継ぎ早に質問をし出……そうとしたが、

それにカイトが待ったを掛けた。

「やめとけやめとけ。どうせ、何も判らん。」

「……それは、一体どういうことかしら？」

「今、この城にはヴェルトバオムの蕾が植え付けられていると言っただろ？

その所為で、魔倣の鏡も力を阻害されて発揮出来無いんだよ。

この鏡の力を使いたいんだったら、真っ先にフェイクを取り戻して、

謁見の間に張られているバリアをぶった切って、中に生えている蕾をどうにかしないとな。」

「……それ程の力を……蕾の段階で放出していると？」

「ああ。下手に壊すと後始末が面倒なんだが……まぁ、神夜もいるし何とかなるだろ。」

「わ、私ですか？　……が、頑張ってみますっ。」

ヴェルトバオムの力の強大さに恐れながらも、

神夜のがんばりポーズに、一行（特に男連中）が癒されていると、

何となく、何時もの雑談が始まり出した。

「それにしても謁見の間とは……宝物庫とかなら大歓迎でございましたのに……。

気の利かない鏡でございます……けっ。」

「おし、そこの駄猫。ちょっとこっち来い。」

「はひぃ！　じょ、冗談でございますよ、カイトさｍ……ってアッーー！」

「……何でも知っているというより、分析した結果を教えてくれる装置……ってところか。」

「身動きが取れない、でかいＫＯＳ－ＭＯＳということでございましょう。」

「アシェン、分析ならば、貴女も出来る筈ですが。」

「それだけじゃないのよ？　この鏡には、他にはマネできない、トンデモ能力があるのよ♪」

「とんでもない能力……ですの？」

「トンデモな戦士でも召喚するのかの？　のう、零児。」

「俺に訊かれても分からん。」

「あ、シャオムゥおしい！　それはね……♪」

そんな感じで、雑談が続いていた時だった。

唐突にカイトが如何にも不機嫌そうに舌打ちをし、顔を顰め出した。

一体何事かと皆が思った時、一行の後ろから声が掛けられた。

その覇気を感じた時、アレディは矢張り来たか……と、確信にも似た気持ちで来訪者を迎えた。

「その『魔倣の鏡』……渡して貰うわ、妖精族の姫よ。」

「……とうとう、出陣したのですね。」

「この勘違いセレブ、知っておりますのでしょうですか？」

「はい、彼女は……修羅。我が師、シンディ・バードの剛敵です。」

「……私はゲルダ・ミロワール。アイスベルク監獄の獄主を務める……凍鏡のゲルダ。

ヘイムレンから報告は受けているわ、剛錬のアレディ。

……修羅の面汚しが。師弟揃って、我らの邪魔をしようと言うのか。」

ゲルダ・ミロワール。二つ名は凍鏡……凍鏡のゲルダ。

ヘイムレンが仕える唯一無二の主にして、アレディが師、シンディ・バードの剛敵。

アイスベルク監獄の獄主を務める彼女が、

態々自身の根城を離れ、自ら此処迄出向いて来たと言う事は……。

「己の争覇も成し遂げず、異邦の地に闘争を広げる……それこそ修羅の恥ではないのですか？」

「ほざくな、剛錬の。戦いに種類などはない。

剛力を持ち、敵を殺め、戦の中に生きる……それが修羅の生きる道だ。

影業のシンディ……その一派こそが恥曝しなのだ。」

「……凍鏡のゲルダよ。私のことならば何とでも言えばいい。

……だが、我が師を愚弄することは許さん……！！」

「熱くなっちゃダメよ？　アレディ。」

「アレディ、アセラナイデマケルワ。」

「気持ち悪い。」「地獄に堕ちろ。」「……ヒドイワッ！」

カイトのボケと、カイトへのツッコミも決まり、何となく空気が弛緩すると、

ゲルダが、カイトに鋭い眼差しで目を向け、成る程と一つ頷き話し掛けた。

「……そうか。お前が『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……八神カイトか。

成る程……確かに、貴様の力の程がまるで分からん。

あのヘイムレンを一撃で打ち倒したというのも、満更では無いようだな。

貴様程の剛敵と相見える事が出来たのは僥倖だが、生憎と今日はそれが目的ではない。」

「あ〝あ〝ん〝！？　何を自己完結してやがんだ、勘違いセレブ盆

踊り人形風情が。

人様の言葉を勝手に喋ってんじゃねぇよ、黙ってペットボトルのキャップにでもなってろ。」

「……聞きしに勝る口の悪さだな。」

誰もが全く同時に思い、誰もが全く同時に頷いた。

て言うか、ペットボトル分かるのか、修羅?!　とか言う疑問はさておき。

もうカイトに用は無いとでも言うのか、視線をカイトからハーケン達へと向けた。

「……話からして、貴女が修羅の親玉の人のようですね。」「前、開けすぎですの。」

「……お前は下開け過ぎだろ、常考。」「これは生き様ですの。」

「……パネェ。」

「……OK、コールドミラー・ゲルダ。あんたら一派の悪名は聞いてるぜ?

新ロストエレンシアで暴れるだけじゃなく、凍り付かせているのもあんたの仕業らしいな。」

「御陰で、龍寓島（りゅうぐうとう）が寒くてコタツが仕舞えないのでございます！」

「……お前達のこともヘイムレンから聞いている。

そして、異邦の地からやって来た者達のこともだ。」

「あんたらの戦いに関わりたいとは思わないけど……成り行き上、仕方ないんだな、これが。」

「……本来ならば、先んじて使命を果たし……ここを去るつもりだったのだが。

そう簡単にはいかないようね。異邦の業により、黒い鉱石を撃砕する術も奪われたからな。

……まあいいわ。今日の目的はその鏡を戴くこと。

その邪魔をするのならば、諸共に撃砕してくれる……！」

「何ですって！？　どうして、シュラの貴女がこの鏡を欲するの！？」

「波国がこの世界に瞬転する前……、

妖精族たちと接触を持っていたのは、シンディの一派だけではな

いわ。

その中で、この城の『鏡』についての情報は得ていた。

その能力は非常に興味深い。……この世界で、新たな争覇を始める為にもね。」

「……アグラッドヘイムと言い、修羅と言い、何ともハタ迷惑な者たちであるな。」

「それが我らの生き様だ。

さて……では、掛かって来ないと言うのならば、用を片付けるとしよう。

お前達、鏡を運び出すのよ。」

もう話す事は何も無いと思ったゲルダは、手下の者を呼び寄せた。

その二人（？）組を見た一行の反応は綺麗に二つに割れた。

彼等を知っている者は、沙夜に視線を向けながら、皺になっている自身の眉間を抑え。

知らぬ者は、また奇妙な奴が出て来たと、何となく屈強そうな外見から警戒していた。

「むっ！？」「……あん。」「あっ……！」

「俺は毒馬頭（どくめず）。ゲルダ様の忠実なる部下だ。」

「オレは毒牛頭（どくごず）。ゲルダ様の忠実なる部下だぜ！」

「毒牛頭よ、我らは自分の使命をはｔ「そこの女！　オレの為に味噌汁を作ってくれ！」……。」

「きゅ、求婚した！？」「わ、私、お料理はちょっと苦手なこと極まりないですけど……／／／／／／」

「これは、新手の獣羅……！？　猛牛と……荒馬か！　……それも上級獣羅と見ました。

このような者たちを育成していたとは……」「フフフ……。」

「いや、このプロポーズ・ブルとピンク・ホースは……。」

訂正しようとしたハーケンだったが、

今迄ずっと黙った沙夜を睨み付けていた零児が、一言喋った。

その後は雪崩の如く、彼らを知ってる者からの更に厳しい視線が沙夜に寄せられた。

知らぬ者達は、何事かと訝しんでいたが、その後の言葉でようやっと納得した。

「……。」「……おい、沙夜。」「……。」

「……む？　どうしたのですか？」

「あの牛と馬……沙夜の部下だ。」

「え？　そうなの！？」

「こりゃ、説明せい、沙夜！　……つーか、黙っとったな！

バカイトもじゃ！　どうせ、ぬしも知っとったんじゃろ！」

「あん、だって聞かれなかったし、ね。」「右に同じく。」

「……修羅を探る為か？」

「ぶっちゃけちゃうと、そんなところよ。私がこっちに召喚された後、

アグラッドヘイムの戦力として……片那（かたな）ちゃん達と一緒に喚ばれ

たのよ、ね。

その間に、修羅にも潜り込ませていたんだけど……。」

「そう。我が居城、アイスベルク監獄を嗅ぎ回っていたのよ。

始末しても良かったが……我が軍の獣羅共を上回る力量を持っていたのでな。」

「……ヘイムレンの業を使ったか。」「……あの笛か。男にも効くんだねえ。」

驚愕の事実！　ヘイムレンの笛は男にも効くのだった！！　と言うか、万能過ぎるだろ、常考。

そんな事を考えながらも、何とかあのバカ牛&馬をどうにか出来無いかと画策してみたのだが。

「そのコたち、私のカワイイ部下なの。返して下さらない？」

「私は構わないわ。……ただ、本人たちがどう言うか。」

「我が主はゲルダ様のみ！　下品な毒狐はこの場から去るがいい！！」

「いつもコキ使いやがって！　若作りしてんじゃねェぞ！！　ババ

ァ！！！」

「……ぼうや。二、三百発引っ叩いてやりなさい。

……あそこでお腹抱えて喘ぎながら大爆笑している、救世主（メシア）も一緒にね。」

「気が乗らん。それに、自分の部下の落とし前は自分で着けろ。

カイトは……放っておけば、勝手に咽せて止まるだろう。」

案の定、床に転がりながらオーバーアクションで、涙をボロボロと流しながら笑っているカイト。

余程ツボに入ったのか、咽せて咳をしていても、尚笑いが収まらない様子で、

腹筋を引き攣らせ、呼吸困難になりながらも、ずっと笑い続けていた。

そんなカイトの笑い声をＢＧＭにしながら、話は続けられた。

「……その通りだ。私も操音のヘイムレンが手間取っているからこそ、自分で出向いたのだ。」

「……あの男は、今どこに？」

「……態々語ることもあるまいが。随分とお喋りになったものだな、剛錬のアレディ。

すぐに飛び掛かって来るものと思っていたわ。」「……。」

「気の抜けた修羅と、これ以上遊ぶつもりは無い。来ないのなら、こちらから行くまで。

剛錬のアレディ、この場でお前を撃砕する……！　毒馬頭・毒牛頭よ。分かっているな？」

「ゲルダ様、仰せのまm「ヒャッハァー！！」……。」

「……凍鏡のゲルダ、そして異邦の獣羅達よ。受けて立とう……！」

「アッハッハッハ……げほっげほっえほっ……っくっくっくっくっ……！！！

あはっ…あっはっはっはっは……！！！　イィーッヒッヒッヒッヒ……！！！

は、は……腹…が……くっくっくっく……よ、よ、捩(よじ)れるぅ……！　アッハッハッハッハ！！」

“……ウルサイ。”

～オシオキ中～

「こ、ここまでとは……！　不覚……ッ！！」

「……な、何で、俺まで……がくっ…ｏｒｚ」

“自業自得だろ、常識的に考えて。”

「だ、大丈夫ですか？　ヤガミさん。」

「あ～……Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．は本当にいい子だなぁ、カワイイなぁ。よしよし、お兄さんがナデナデしてあげよう。」

「あ、う、そ、その……ありがとうございます／／／」

「……何故じゃろ。微笑ましい光景の筈なんじゃが……全部、バカイトの所為じゃな。」

誰もが同意した。そんな感じで、のの字を床に書いていじけているカイトはさておき。

皆は改めて、地に膝を着けているゲルダと向き合った。

「……成る程、ヘイムレンの言う通り……よい闘士を集めたものだな、剛錬の。

機兵も含め……新たな争覇でも始めるつもりか？」

「……。」

「まあいい、今回は挨拶代わり。その『鏡』だけは貰っていくわ。やれ……！」

「そうはさせなくてよ！」

「「よっしゃあ（お任せを）！！　ぶはあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」」

ゲルダが命じると、毒馬頭と毒牛頭が前に出て来、その名の如く毒の霧を吐いた。

部屋中紫色に染まり、右も左も分からない状態になっていた。
霧がようやっと霽(は)れた頃には、もう既にゲルダ達の姿は、影も形も無かった。

「ゴホッ！　ゴホッ！　何これ！　何が起こったの！？」

「うっ！　ネージュ姫殿！　『鏡』がッ！」「な、無くなってる！？」

「盗むにしても、鮮やか過ぎないかい！？」「担いで逃げたようでございます！」

「なるほど、その為に力持ちのあのコたちを連れて来たわけ、ね。」

「あのブル＆ホースにパワーがあるからって、限度はあるだろ。」

「んなモン、取り外した後、速攻で転移したに決まってるじゃねぇか。

逢魔は其処等辺(そこらへん)は、突飛(とっぴ)てるからな。洗脳して扱(こ)き使ってんなら、容易だろ。」

成る程、と一行は思った。確かに修羅には瞬転の技術は無くても、

逢魔にならばある。

そして、その幹部の部下が操られているのであれば、ほぼ確実であろうと。

取り返したくはあるものの、この城に起きている事を放っておいては先に行けない。

結局、一行はカイトの言う通り、先にフェイクライドを取り戻し、謁見の間に進んで、ヴェルトバオムの芽を駆除する為にも、取り敢えず、カイトの指示したネージュの私室へと向かう事にした。

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　二階回廊　謁見の間前

私室へ向かう道中。其処には、先程カイトが言っていたバリアが張られていた。

その光景に目を丸くして驚くネージュと、さもあらんと納得する一行がいた。

「本当に張ってあったねえ。これは……電磁バリアみたいなものかい？」

流石は城の中枢……ガードが堅いね。」

「いえ、こんな魔法壁……この城には無くてよ？」

「え？　じゃあこれは誰が？」

「だから、ヴェルトバオムの蕾だってヴァ。そいつの力で張ってんだよ、コレ。」

「……何とも厄介な。」

「……歯痒いねえ。明らかにこの奥にそいつがあるっていうのに、調べにも行けないなんてさ。」

誰かが、舌打ちやら歯軋りやらを鳴らしていた。誰もが同じ気持ちなのだろう。

仕方なく、このバリアをどうにか出来ると言うフェイクライドを求めて、

一行は、一路ネージュの私室へと足を向けたのだった。

後々、カイトはこの時の行動を悔やむ事になる。

あの時、悪巫山戯（わるふざけ）などをせず、ちゃんと真面目に彼女達の邪魔をしていれば、

……あんな事にはならなかったものを……と。

だが、今のカイトは笑っていた。此の場に居るのが楽しいと。この旅は……心地良いと。

この先に何が待ち受けているとも知らずに……。

救世主（かれ）への試練は、まだまだ終わらない。

第拾陸話【我が望むは勝利の福音（ゴスペル）～魔女は妖艶に踊る～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

ボイス付き求婚＋沙夜への台詞で、暫く腹筋崩壊したのは私だけじゃないでしょうｗ

次回は、機兵の魂。当然、戦闘シーンもありますので、御楽しみに。

所で、ムゲフロ世界に入ってから、お気に入り登録数が２５人程減ってる件について。

……いえまぁ、私の文才の無さ故なんでしょうけど。……もっと精進しなくては。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第拾漆話【Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～奇跡を呼ぶＩＭＰＡＣＴ　ＰＯＷＥＲ

現時刻（０３：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４１０，０５５アクセス　ユニーク：２００，４８１人
皆様、何時も拙作を御覧頂き、誠に有難う御座います。

等々、ユニーク２００，０００人超え＆２，４００，０００アクセス突破致しました！！！！！

これも偏に、皆様が拙筆に飽きずに読んで下さっている御陰です。
心より感謝致して居ります。

さて、今回はエスピナ城中編～後編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾漆話【Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～奇跡を呼ぶＩＭＰＡＣＴ　ＰＯＷＥＲ

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　ネージュの部屋

眼前には、何十人分の宴会が出来そうな程とても大きなテーブル。

そして、幾つもの豪奢（ごうしゃ）な調度品。

成る程……これが姫の部屋か、と誰もが理解した程である。

その部屋に真っ先に入り、くるりとスカートを翻（ひるがえ）しながら皆に振り返り、

ドヤ顔に近い笑顔でネージュは一行を歓迎した。

「ようこそ皆様！　ここが私の部屋よ♪」

「くっ！　流石ハウゼン家の姫ですわね。いいお部屋を持ってるじゃないの。」

「あん、素敵なリビングじゃない♪　パーティくらい出来そうね。」

「そうだねえ、この戦いが終わったら……ここでパーティをしようじゃないのさ。」

「わし、この戦いが終わったら……絶対にパーティに参加するんじゃ……。」

「俺、この世界を救ったら、はやてにもっかい告白するんだ……。」

「……お前ら、いい加減にしろ。」

零児にスパンキングされてる小牟と、逃げ出したカイトはさておき。

改めて、部屋を見回し、感嘆の声をあげる皆。ネージュも、その反応を楽しんでいた。

「でも、本当にいい部屋でございます！　お宝も山盛りという感じですニャア。」

「元々は母様（ははさま）の部屋だから、広いのは当然よ。」

「取り敢えず、そこな反省してない駄猫、ちょっとこっち来い。」

「ちょ、ちょ、ちょっと、冗談でございますよ、カイト様ぁ～……；；；」

“お前（貴方が）が言うなよ（言わないで下さい）。”

「しかし、ストゥーラ・ハウゼン……あの御転婆娘か。
確か10年戦争中だったな、亡くなったのは。」
「え!?　は、母様を知ってるの!?」
「当たり前だ。お前さんは知らんだろうがな、俺は赤ん坊の頃のお前を抱いた事もあるんだぞ?」
“……は?”
「……は?　じゃねぇよ。俺が幾つだと思ってんだ?
9100垓年も生きてんのは伊達じゃねぇんだよ。
ったく、あの時の赤ん坊がこんなハチャメチャな御転婆なド姫に育つとか……。
ストゥーラの奴、大いに喜んでただろう?」
「ええ、それはもう♪　……じゃなくて!　……は、母様も御転婆?」
「……お前の母親だぞ?　そっくりな事、此の上無ぇよ。
まぁ、后になってからは大分その性格も性分も、自粛してたみた

いだけどな。

……さて、昔話はここいらでストップだ。さっきから、ずっと待ち侘びている奴がいるからな。」

そう言うカイトが向けた視線の先……ネージュの寝室。

そこから、ネージュにとっては懐かしい霊気が……フェイクライドの霊気が感じ取れた。

恐る恐る、彼女の寝室へと足を踏み入れる一行の目の前に、

フェイクライドが部屋の中央に、構えて立ち尽くしていた。

「……。」

「フェイクライド……！　本当にこんな所に……！？　でも、どうして……？

貴女が帰るべきは、『封印の間』な筈……！」

《……立ち去りなさい。》

「にゃ、にゃんと、喋ったんでございますが！？」

「おいおい、フェアリーロボ……高性能過ぎるだろ。」

「違う……！　これは……！」

《立ち去りなさい。ここは我が娘……ネージュの部屋です。
あの子が戻るまで……侵略者たちよ。この部屋を荒らすことは許しません。》

「この部屋を守っている……！？　それに、今……『我が娘』と？」

「この声は……母様……！？」

「何ですって！？　まさか、この機体にはストゥーラ・ハウゼンの意思が！？」

《この場所は『絆』……私と、あの子との……。》

「フェイクライド……いえ、母様！　私よ！　ネージュ・ハウゼンよ！」

《……立ち去りなさい。ここは我が娘……ネージュの部屋です。

あの子が戻るまで……侵略者たちよ。この部屋を荒らすことは許しません。

この場所は絆……私と、あの子との……。》

「む？　同じことを……？」

「あの、これは……プログラミングされたものみたいです。」

「え？　録音ってことかい？」

「侵略者という表現からすると……録られたのは戦時中か。」

「それが異世界に転移して……私の城で再起動してから、ここへ！？」

「どうして、今になって！？」

フェイクライドが突然喋り出した訳は判った。だが、何故今になって？

そう誰もが考えていたその時、今迄ずっと黙っていた零児達が、ぽつりと零した。

「……器物にも魂が宿る。」

「え……？」

「長い年月を経た物や……人の想いが込められた物には、ね。」

「この妖精のからくりにも、であるか？」

「可能性はあるじゃろな。万物には、八百万の神が宿る故にの。」

「そう、それは……魂（こころ）。」

「呼び起こされたマシン・ソウル、か。」

《立ち去らぬならば、この妖精機が御相手をします。……ハウゼン家の誇りに懸けて。》

「……。」

「ネージュさん、妖精機と戦いましょう。

お母さんの想い……ここに縛られた想いを、解放してあげなくちゃ……！

それは、とても大切なものだから……。」

「……証を立てましょう、私がネージュ・ハウゼンである証を。

私も……ハウゼン家の誇りを懸けて。

フェイクライド……！

貴女の中にある、母様の想い……その魂は、私が引き継ぎます……！

そのマシン・ソウル、私（わたくし）にド預けなさいっ！」

第拾漆話【Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～奇跡を呼ぶＩＭＰＡＣＴ　ＰＯＷＥＲ～】

ｓｉｄｅ：フェイクライド戦

互いに臨戦態勢になった。真っ先に仕掛けて来るかと思われたフェイクライドだったが、

何かを感じたのか、ネージュ達の準備が完全に整うまで待っている様だ。

しかし、当のネージュは、自分達家族の問題だから、

自分一人に任せて欲しいと、皆に頼んだのだが……。

「……みんな、悪いけどここは私一人にｍ「戯けがッ！！」…！？」

「何故、フェイクライドが……ストゥーラが、唯一人で此の場に来たと思っているッ！

何故、貴様を守ろうとしていると思っているッ！！

何を聞いていた……！　今、ストゥーラの言葉の何を聞いていたのだ、貴様はッ！！

その程度の事も考えられんのか……ッ！　大戯けがッッ！！！」

「……そう、そういう事……だったのね。

……ごめんなさい、カイト。ごめんなさい、みんな。……ごめんなさい、母様。

お願い、みんな。私に力を貸して。」

“無論（はい・勿論・ＯＫだ）！”

「……！」

「…！？　来るぞ…っ！」

改めて、皆に協力を頼んだネージュ。それを認識したのか、皆が頷いた直後、

フェイクライドが駆動音を激しく唸らせ、皆に向かって突進して来た。

辛うじて、皆躱（かわ）す事は出来たが、機兵であると言うのに、その異常な速さに目を丸くした。

「くっ……！　ちょこまかと……！　バブル・カノンっ！」「私も！　ポッピー・タイフーン！」

「まだ避けるか！　フェーダー・レイ！」

「キュオンも行っちゃうよ！　ブロンテ・クラフト！！　行っけぇ～！」

「鋼鉄の孤狼よ！　積層指向性地雷（せきそうしこうせいじらい）を！　バラ撒いて！！」

「……！！」

何とかその動きを止めようと、各々フェイクに向けて攻撃するも、

全て合間を縫って躱され、
逆に、ツイステッド・レーザーによる反撃をされ、何人かはその直撃を喰らって気絶していた。

「キュオン！　ヘンネ！　……くっ、よくもやってくれたな！　スクラップ・キック！

続けて、ラウンド・エイティよ！」

「加勢します、カッツェ殿！　覇皇空円脚！！」

「ナイスだ、カッツェ、アレディ！　ハイロー・ドロウ！」

「あん、お邪魔しちゃおうかしら♪　楔！　氷に焔！」

「続けて行くぞ！　地禮！　火燐！　電鋼刹火ァッ！　小牟！」

「うむ！　わしのレシーブを篤（とく）と見よ！　龍虎乱砲（りゅうこらんぽう）！　きゃおらっ！　って、うわっ！！」

「……！　……！！！」

カッツェの猛撃に合わせて、アレディにハーケンや沙夜達による連撃を加えるも、

小牟の僅かな攻撃の隙を縫って、その包囲網を突破し、リファインド・スウェイヤーで反撃。

その儘、また高速度を生かして攪乱（かくらん）して来た。

「チッ……！　アーベント！　追い付いて、撃ち落とせ！」

「……！」「……！！」

「……狙って撃ったんじゃ、またすぐに抜けられちまう……！　なら……！！」

「お任せですの…！　……そこ！　ヨミジですのっ！」「烈火刃もオマケだァッ！」

フェイクライドとヴァイスリッターの高軌道戦闘が上空で繰り広げられている中、

その隙を伺っていたアルフィミィとアクセルが仕掛けた。

フェイクを直接狙うのでは無く、その軌道上目掛けて黄泉路と烈火刃を見舞ったのだ。

「……！？」

「今だ！　畳み掛けろ！　金（ゴールド）！　柊樹（ハリウッド）！」「？！（くろつち）」「銀（シルバー）に白金（プラチナ）じゃ

！」

「ナイス・コンビネーションだ、レイジ！　カード爆弾だ、こいつも受け取りな！」

「俳浪華札（はいろうはなふだ）！　ジャンジャンバリバリ！」

「わらわも参るぞ、邪鬼銃王！　邪鬼銃・魔波邪（マハージャ）！！」

「動きを止めます！　フリーズ・ショック！」「キャノン、ＶＡＬ（ヴァ）ＫＹＲＩＥ（ルキリー）、Ｇ・ＳＨＯＴ（ジー・ショット）、一斉掃射。」

「ナハト、アーベント。ターゲットロック、一斉掃射。

ボクも行っくよ～ん！　ドラゴン・スケイル！」

アクセルとアルフィミィの攻撃が上手い具合に、丁度フェイクライドの軌道上に乗ったらしく、

当たる寸前で、フェイクライドの動きが急停止した。

そこ目掛けて、攻撃を仕掛けられる全員での連続一斉攻撃で、逃げる隙も与えず……。

「ぬぅぅん！　機神……朧撃拳（ろうげきけん）！！　ネージュ姫殿！」

「……！？」

「ええ！　ベノム・コーム！　ロイヤル・キッス！　ベノム・カーマイン！　まだよ！！」

「……！！！」

「シルキィ・レース！　ハンターズ・マーシィ！　ベレイシャス・ミラー！！　これでトドメよ！

これぞ、王家の最大奥義……！

フェイスレイヤー……フルバーストッ！！

フェイク……いえ、母様。　これが今の私の……全力全開よ！！！

キュートクラウン・ブレイカーッッッ！！！！！」

そして――――フェイクライドは紫電を上げながら、静かに駆動音を鎮めた。

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　ネージュの部屋

身体中から紫電を上げながらも、まるで母の魂（ストゥーラ）が乗り移ったかの様に、

慈愛の瞳で娘（ネージュ）を見詰める母親（フェイクライド）の姿が其処にあった。

「……。」

「フェイクライド……。」

《ネージュ……私は貴女に何もしてあげられなかったけれど、

この戦争が一日も早く終わり……貴女が幸せに過ごせる時が来るのを祈っています。≫

「母様……ありがとう……。」

「フェイクライドの出力低下……安定しています。」

「……ああ、役目を果たしたようだな。」「……見事じゃったのう。」

「……。」

「フェイクライド……私の言うことを聞いてくれるのね？」

そうして、妖精機フェイクライドは、ネージュに従い、一行に加わった。

「よかった……！　よかったですね、ネージュさん！」

「……ありがとう、カグヤさん。貴女も、もしかして……。」

「……死んだ人は帰っては来ないし、起きてしまったことを無くすことは出来ない。

……そうですよね、ネージュさん。」

「……そうよね。フェイクライドは戻って来てくれた……今は……それでいいの。」

「マザーの愛、か。……悪くないもんだ。」

「戦を乗り越えるもの……必ずしも武力では無いのである。」

「……ネージュ姫殿。この妖精機を作った方は、もしや……？」

「設計は……母様よ。」

「だから、今回みたいなことが起こったんですの……？」

「作った人の心と言うか、想いが乗り移ってたってことさ。

……何故か、解るような気がするんだよな、これが。」「……。」

フェイクライドも取り戻し、母……ストゥーラの想いも受け取り。

これで、ようやっと先に進める。いざ、謁見の間へと一行は進む事になった……筈だったのだが。

「ド世話を掛けてしまったようね、みんな。……でも、もう大丈夫。」

「この城を本当の意味で解放する爲に……行きましょう、ネージュ姫殿。」

「そうね。目指すは『謁見の間』よ。フェイクライドの力で、障壁を破らないとね。」

「……！？　ま、待って下さい！　フェイクライドが……！」

「！？　ま、まさか、まだ……！？」

「……いえ、違うと思います。これは……恐らく、まだ録音が残っている為かと。」

「え？　他にもまだ伝言が残ってたの？」

《……シ…ア……メ……ア……救世主（メシア）。

貴方も……そこにいるのでしょう？　救世主（メシア）……御願いです。

あの娘を……ネージュを、守って。そして、このエルフェテイルを……。

この……エンドレス・フロンティアを……守って……。

それが……出来……るのは……貴方……だ……け……。》

「これは――――。」

「メシア……と言うことは、これはカイトに宛(あ)てたものか。」

「……貴方、本当に母様と知り合いだったのね。……それで？」

「ん？　それで、とは？」

「ですからっ！　……母様の御願い……勿論、聞いてくれるんでしょ？」

「……さてな。それを決めるのは、俺じゃない。

他ならぬ、お前達だよ……お前達、無限の開拓者達だ。」

「……？　それは一体、どういう意味だい？　Ｍｒ．ミステリアス。」

「……フッ、言葉通りの意味さ、世界（ハーケン）を作り替えた男（・ブロウニング）。」

「……。」

「それよりも、さっさと先に行くぞ。何時迄も、あの蕾をのさばらせて置く訳にもいかんのでな。」

そう言って、誰の応えも待たずに、カイトは言葉通りさっさと先へ行ってしまった。

後ろにフェイクライドが付いて来る事を確認しつつ、

慌ててカイトの後を追う、ネージュ達であった。

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　二階回廊　謁見の間前

道中の図書館を軽くスルーし、然程（さほど）の敵とも会わずあっさりと此の

場迄着いてしまった。

そして一行は、ネージュとフェイクライドの後ろへ下がり、二人に障壁を任せた。

「じゃあフェイクライド、お願いね。

リファインド・スウェイヤー、展開！！　ド派手にぶち破りなさい！」

「……。」

ネージュの掛け声に呼応して、フェイクライドは力を溜め一気に解放して、

一撃で電磁バリアを破った。伊達では無かったハウゼン家の至宝、面目躍如（めんもくやくじょ）である。

「凄い……！　一撃で障壁を打ち砕くとは……！」

「当〜然よ♪　ハウゼン家の至宝を舐めないで頂けないかしら？

……さて。愈々（いよいよ）、『謁見の間』ね。……行きましょう。」

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　謁見（えっけん）の間

其処に入った途端、この部屋が巨大な気で溢れているのが誰にも解った。

何故ならば、入った瞬間誰もが目にした、眼前にある途轍も無く巨大なものから、

その得体の知れない巨大な力が溢れ出していたからである。

「これは……！　これが……蕾！？」

「バカな……！　こんな巨大な物体が……この大きさで、『蕾』……だと……！？」

「凄い……凄い霊力を……！　ここを中心に、巨大な霊力が渦巻いています……！

いえ……渦巻いていると言うより……集まって来ている……！？

精霊に邪霊……死霊……！？　いろいろなものが……！！」

「魂を呼び寄せる樹……グノーシスを惹き付けた理由……。

そして、救世主（メシア）がＴ－ｅｌｏｓをここに向かわせた理由……これが……。」

「……来たか。」

「……！？」

一行がその存在を初めて目の当たりにし、その危険性を認識していた時だった。

どこからともなく聞いた事のある声が聞こえると同時に蕾が発光し、その中からリグ・ザ・ガードと百夜……そして、あの幼女……アリエル＝シュレストが現れた。

「……侵入者は貴公らだったか、アレディ・ナアシュよ。」

「リグ・ザ・ガード……！　その蕾……ヴェルトバオムなるものだと言うことは判っています。

そして、その力の程も……アグラッドヘイムの目的も。」

「……聞いたか、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』に。」

「……はい。」

「私たち『逢魔』から、その百夜ちゃんを盗んだのは、この蕾の大本とリンクする為かしら、ね。」

「……そうだ。……この機械はよく出来ている。

次元に穴を開ける事により、ヴェルトバオムの『樹』と『芽』……否。

これは既に『蕾』……か。それらの同調を安定させる。」

「同調……だと……？」

「……確か、シュテルベン・シュロスだったかしら？　そのヴェルトバオムの本体がある所は。

そことの連結をスムーズにさせられる……ってことみたいネ。」

どうやらアリエルは、リグとアレディ達の会話が終わる迄、何もしない様だ。

カイトもそれに合わせ何も言葉を発せず、アレディ達の会話が終わるのを只じっと待っていた。

「それが、よりにもよって私の城でなどと！」

「ここは、曾て異界との接点となった場所。そのような場所には、様々な思念、霊体が集まる。

……ヴェルトバオムの成長に欠かせぬ、言わば『食物』が。」

「……格好の餌場……と言うことですか。」

「そうだ。……む？　どうやら、ヴェルトバオムの蕾も貴公らの魂を欲しているようだ。

……若きヴェルトバオムよ。貴公の望む『魂』はどこにある？」

そうリグがヴェルトバオムの蕾に語り掛けると同時に蕾が発光し、ＫＯＳ－ＭＯＳと自身の力を同調させようとした。

「システムエラー。制御系に異常が発生しました。

この『樹』は……魂を捕らえ……変換する……力を……。」

「な、何かＫＯＳ－ＭＯＳがビクビクンしてるけど！？」

「我々アンドロイドに『魂』の概念は無い。どうして、ＫＯＳ－ＭＯＳが……！？」

「ぬう……？　この者の中には……いや、この者自身が……器？」

「ＫＯＳ－ＭＯＳさん！？」

その光に宛てられたＫＯＳ－ＭＯＳは、皆の驚愕と引き留める声の中、

ゆっくりとリグ達の方へと歩いて行き、アレディ達と敵対するかの様に、対峙した。

「……私は……。」「……捕らえたか。」

「どういうことです！　リグ殿！」

「この者の中に眠る……『魂』。ヴェルトバオムは甚く気に入ったようだ。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳにも宿っていると言うのか……！？　マシン……ソウルが！？」

「先程のフェイクライドと同じとは思えませんわ！　ＫＯＳ－ＭＯＳ！　ちょっと！！」

どんなに皆で呼び掛けても、一向に反応が無い。どうするかと考え倦ねていた時だった。

……『彼女』が、声を荒げ加勢しに来たのは。

「……。」

「どうした、マシンビューティ！　目を覚ますんだ！」

「いや、この者は……目覚めている。」

「……！？」「私は……。」

「だらしないぞ……ＫＯＳ－ＭＯＳッ！　貴様の『意識』は……いや『魂』は！

そんなザコ共に好きにさせていい代物では無い筈だッ！！」

「テ……Ｔ－ｅｌｏ……ｓ……。」

「Ｔ－ｅｌｏｓ!?　今まで何処に……！」

「ガタガタ抜かすな、小僧が。ＫＯＳ－ＭＯＳを叩き起こす。

協力してやらんこともない。今すぐ決めろ。」

「アリスさん、ヤガミさん……！　ＫＯＳ－ＭＯＳさんを……！！」

「くっ、しかし……！」「……。」

今迄が今迄だっただけに、沙夜とは手を結んだ零児も流石にＴ－ｅｌｏｓとは躊躇（ためら）っている様だ。

そして、カイトもＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．に助けを求められるも一顧（いっこ）だにせず、話を聞いているのかも怪しい。

そこに助け船が来た……同じ穴の狢（むじな）から。

「いいんじゃない？　テロテロは強いし、ね。」

「……見下げ果てたものだな。すっかり馴れ合いか、サヤ。」

「あん、利用してるだけよ♪　使うだけ使ったらポイ、ってね♪

ま、尤も……救世主（メシア）に逆らう気が無いっていうのもあるけど、ね。」

「……フン、成る程。それなら分かるわ……どちらもね。」

「分かるな分かるな、腹黒共めが。っちゅーか、好い加減何か応えんかい、バカイト！」

そう小牟に水を向けられ、ようやっとカイトは……いや、カイトとアリエルは喋り出した。

「――――そうさな。やっと、役者も揃った。

もう、そろそろいいだろう……なぁ、アリエル＝シュレスト？」

「――――気安くあたいの名前を呼ぶんじゃないわよ。でもまあ、それについては同意するわ。

好い加減、アンタの顔を見るのも飽き飽きしてた頃だし……もう、死になさい？」

「……フン。未だ二回しか会ってもいないと言うのに、何とも気の早い小娘だ。

だがまぁいい。そちらがその気ならば、こちらもその気になろうか。」

「なら、さっさと用意しなさい。――――あたい達が殺し合うに相応しい舞台をね。」

「言われずとも。

――――詠唱破棄。固有結界……『無限の剣製』発動。」

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』

突如風景が一変した。否、世界が変じた。

今迄の穴凹(あなぼこ)だらけの部屋から突如、一面荒れ果てた荒野が広がる世界になったのだ。

そして、その世界には殊更不釣り合いなヴェルトバオムの蕾のみが、慄然(りつぜん)と立っていた。

だが、それよりも何より、至る所……其処彼処(そこかしこ)の地面に刺してある刀剣やあらゆる武器の類。

それらから感じ取れる余りに強大な魔力や霊力、妖気といったチカラ。

それら全てに、驚きを隠せない一行。

しかし、そんな一行を置いてけ堀にして、カイトとアリエルの話は続けられた。

「――――アンタ、こんな借り物の世界であたいと殺り合おうって言うの？」

「フッ……何、気兼ねなく暴れられればいいのだろう？

ならば、この世界でも構わんのでは無いかな？」

「……まあいいわ。アンタの墓標には実に相応しい場所だものね。」

「……減らず口だけは一人前だな。今度は、もう少し身体も大人に近付いてみせたらどうだ？」

「余計な御世話よ。――――それよりも、もういいかしら？」

「ああ。俺ならば、何時でも構わん。」

だが、いざ！　と言うその瞬間に、とある所から待ったが掛けられた。

思わず出鼻を挫かれたカイトは踏鞴（たたら）を踏み、アリエルはその声を掛けた人物を睨み付けた。

「あ、あのっ！」

「おっとっと……どうした、神夜？」「一体、何なのよさっ！」

「……あ、あのう……この『世界』は一体、何なんでしょうか？」

「……ああ、そっか。そういや、お前達は『これ』見た事無かったんだっけ。

これは固有結界。術者の心象世界を現実世界に浸食し具現化する

究極の魔術。

ま、分かり易く言えば、術者の心の風景を現実に形を伴って表す、究極の力、その一つだ。

因みに、これは俺の固有結界では無い。他人の世界をちょこっと借りてるだけだ。」

「……こんな荒れ果てた世界が……人の心の風景……？」

「あ～……まぁ、コイツはちぃっとばかし、特殊な環境で育っててな。

そんでこんな風になっちまったってだけだ。まぁ、あいつも既に救われた身だし、気にすんな。」

「……はい。」

「……もういい？　好い加減、あたいもやってらんないんだけど？」

「ああ、済まん済まん。もう大丈夫だ。……そんじゃ、殺ろうか？」

「

そうね。一応、ちゃんと名乗っ

てはあげるわ。

リエル＝シュレスト　　第八席　　ア

せられるバケモノよ」

『世界（アンタ）の破滅者』を唯一此の世から消滅さ

N・N（ネオ・ノルニル）

（N・N（ネオ・ノルニル）……だと……

！？

「

……そうか、そういう事か。それならば、

全てに合点がいく。）

『宇宙（そら）の救世主（メシア）』にして『世界（ワール）

の破壊者（ド・デストラクション）』

八神カイト　　推

して参る」

N・N第八席アリエル＝シュレストと、八神カイトの一騎打ちが、今此処に幕を開けた。

一方、アレディ達は……。

「……成る程、これは興味深い。面白くなったとは思わないか

？　剛錬のアレディよ。」

「……そんなもの、戦いには必要ありません。戦い、勝つ。それだけです。

その上で、コスモス殿を返して頂く……！！」

「……。」

（……ＫＯＳ－ＭＯＳ、あわよくば、ここで……！）

一方、こちらも激戦の様相を呈して来た。

事態はＫＯＳ－ＭＯＳの救出のみならず、想像を絶する様な激闘の予感を……。

波乱の幕開けを告げるかの如き大嵐に、世界が見舞われようとしていた。

第拾漆話【Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～奇跡を呼ぶＩＭＰＡＣＴ　ＰＯＷＥＲ

如何でしたでしょうか？

ストゥーラの設定やヴェルトバオムの成長具合など、

少々原作とは異なるオリジナル要素も入れてみました。

それに合わせて、前話も一部書き換えてありますので、宜しければ
そちらも御覧になって下さい。

……と言っても、殆ど『芽』と『蕾』を入れ替えただけですけどね。

次回は、？カイトｖｓアリエル　？リグ＆百夜ｖｓアレディ達　？
ＫＯＳ－ＭＯＳｖｓＴ－ｅｌｏｓ達

以上、三試合の戦いに挑戦してみようと思います。

前回、アリエルに文字通り手も足も出なかったカイト。

果たして、今回はリベンジなるか！？　乞う御期待！

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

第拾捌話【魔力使い（ザ・マジックマスター）～勝利と敗北の狭間で～】（前書き）

現時刻（０４：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４２５，０９５アクセス　ユニーク：２０１，５８１人
皆様、何時も御覧頂き、有難う御座います。

さて、御待たせ致しました。今回は、エスピナ城・後編です。

戦闘シーンのみと言っても過言ではありません。

それに伴い、読者の方の中には少々気分を害する可能性のある箇所が御座います。

御覧になられる際は、十分に御注意下さい。

改めて、申し上げます。この小説はＲ１５で御座います。

そして、久々に頑張り過ぎた為か、とても長くなってしまいました。

更に今話は、後書きも相当長くなって居りますので、御飲物の御用意をよしなに。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

第拾捌話【魔力使い（ザ・マジックマスター）～勝利と敗北の狭間で～】

ｓｉｄｅ：固有結界『無限の剣製』　カイト　ｖｓ　アリエル？

リグ＆百夜と対峙しているアレディ達や、ＫＯＳ－ＭＯＳと戦っているＴ－ｅｌｏｓを巻き込まぬ様に、

彼等とは遙かに離れた場所でぶつかり合っているカイトとアリエル。

その場に荒れ狂っている、常人では近付いた瞬間発狂し悶死するレベルの、

膨大を超越した魔力。その魔力がぶつかり合う衝撃の余波だけで、

大地は底が見えぬ程抉れ、空は修復出来ぬ程欠け、

大気は、自身が侵され続けている事に震え戦(おのの)いていた。

そんな常人では考えられない責め合いが幾十……いや、幾百・幾千合続いたのだろうか？

ふとした拍子に途切れ、今迄文字通り影も形も見えなかった両者の動きが、

中央で衝撃波が弾け飛ぶと同時に、互いに左右へと別れ遂にその姿を現した。

片方……カイトは身体中から血を流し、既に何度か死んでいるらしい。

一方……そのカイトと対峙しているアリエルは……全くの無傷であった。

「――――チッ。ったく、こいつは一体どういう事だ？ダメージが少ないと言うのならまだしも、全くの無傷と言うのは。」

「……フン。だから、前にも言ったでしょ？

アンタなんかの攻撃なんか、あたいには一切効かないってね。」

「……それにしても限度があると思うがな。

何度か死に、更に魔力量の上がった俺の攻撃の一切が、完全に無効化されるとは……な。」

「――ハッ！　どんだけ力が上がろうと、増やそうと、あたいには一切関係なんか無いのよ！」

そう叫ぶと、アリエルは再度カイトに肉迫し、持っていた自身の杖を押し当て、

零距離で魔砲をぶっ放した。直撃を喰らったカイトの肉体は吹き飛び、再度生き返った。

その際の回復しパワーアップした全魔力を拳に籠めて、力の限りにアリエルに叩き付けた。

しかし、それでも尚、先程と何も変わらず全くの無傷……寧ろその反撃で再度殺されていた。

相手の能力も判らず、自身の攻撃の悉くが無意味に終わっている。

果たして、カイトに勝つチャンスは未だあるのだろうか？

それは、今此の場にいる誰にも……カイトを含めた誰にも分かりはしなかった。

カイト達の戦いは――――今は未だ、始まったばかりである。

第拾捌話【魔力使い（ザ・マジックマスター）～勝利と敗北の狭間（はざま）で～】

ｓｉｄｅ：リグ＆百夜　ｖｓ　アレディ達？

今、此の場でリグ、そして、百夜と対峙しているのは、アレディ・ネージュ・フェイクを筆頭に、

零児・小牟・ナハト・アーベント・沙夜・カッツェ・ヘンネ・キュオン・アンらが、共にいた。

残りの仲間は皆、ＫＯＳ－ＭＯＳを正気に戻す為に、そちらへ行っていた。

「……また、貴公らと相見えようとはな。」

「……貴方が以前言っていた事です。『共に相応しき舞台で、また会おう』……と。」

「……そうだな。確かにそう言った。……だが、此処は相応しき舞台では……まだない。」

「む……？　それは一体、どういう意味なのですか？」

「最早、語る事は何も無い。行くぞ……！　剛錬のアレディ……！

リグ・ザ・ガード……いざ、参る……ッ！」

「む……ッ！　剛錬のアレディ……！　いざ、御相手仕る（つかまつ）！」

互いに名乗り合った直後、激しく拳が交わされた。

その戦いを邪魔してはいけないと思い、一人見守るネージュとネージュを見守るフェイクを残し、

それ以外の全員で百夜を破壊する事になった。

「あん、じゃちょっとゴメンしちゃおうかしら、ね。最終地獄……！　……な～んて、ね♪」

「わしもやっちゃるぞ！　奪氣の型じゃ！」

「九字の型！　物忌の型！　桔梗印の型！　行くぞ……ッ！　二刀！　戒刀乱魔ァッ！！」

「どきな、レイジ！　バブル・カノン・アラウンドッッ！！！」

「キュオンも負けてらんないよっ！　ブロンテ・サンダー！　ブロンテ・ブリザードッ！」

「あら♪　いいタイミングネ♪　ヘアー・ハンティング！　スクラップキックよ、ヘンネちゃん！」

「ああ、分かってるよ副長。フリューゲル・ショットッ！！」

「あうっ……！　まだ……。」

「追撃だ、アルトアイゼン！　撃ち貫けぇっ！！！」「ヴァイスリッター、ゴーゴー！！」

「ぐっ……！」

百夜を中空の結界×2に閉じ込めての、全員参加のフルボッコタイム。

しかし、さしもの百夜も然る者。伊達に逢魔の秘密兵器なだけは無く、中々に頑丈だ。

パーソナルトルーパーの二機による、追連撃でもまだ破壊仕切れない様だ。

手を休めずに、更なる追撃を計ろうとしていた時だった。

横から、アレディが吹き飛ばされ、零児達に衝突して来たのは。

少し時間は遡り、リグとアレディの戦いに戻る。

「むぅん……っ！　シュラ・ナックルッ！」「何の！　機神連拳（きしんれんけん）！！」

「まだだ！　ガーディアン・ナックル！！」「まだまだ！　機神剛（きしんごう）鉄甲（てっこう）おっ！！」

「まだ抗うか！　グルトップ・フォワード！」「負けません！　機神乱獣撃（きしんらんじゅうげき）ィッ！！！」

「アレディ……負けないで。」「……。」

互いに拮抗（きっこう）している。力では若干、アレディの方が勝ってはいるものの、

業の巧みさ、隙の無さでは、リグの方が多分に一日の長があった。

しかし、そんな拮抗も僅かな隙を突かれ、すぐに破られてしまう事になる。

「……成る程、貴公は確かに強くなった。

何かに迷いながらも、尚強さを追い求め力を付けている。だが……それが己だけだと思うな！」

「む……！」

「――――むぅんッ！　ふっ、はっ、せぃやっ！

戦場（いくさば）の笛を吹け――――！　ギャラー・ホーン！！！」

「ぬぅっ……！　ぐっ！　くっ……！　ぬおっ……！　ぐはぁぁああッッッ！！！」

「あ、アレディィッッッ！！！！」

アレディの真覇龍撃烈破（しんはろうげきれっぱ）を真似、彼から習得したリグ専用の業、ギャラー・ホーン。

その最後の蹴りに吹き飛ばされた先に、零児達がいた。……否。

零児達がいる方へと、リグが蹴り飛ばしたのだった。

そして、時は今へと戻る。

「何っ！？　ぐっ……！　アレディ……無事か！？」

「くっ……！　は、はい。申し訳ありません……少々、不覚を取りました……。」

「いかんっ、零児！　百夜が動き出すぞ！？」

「……遠雷（えんらい）……豪炎（ごうえん）……強化・豪炎。」

「何ッ！？　しまっ……ぐわっ！！？」「れ、零児っ！　うわっ！」「あんっ……！」

「にゃうん！」「うわぁっ！」「ひゃうぅっ！！」「しまった……っ！」

「くぅっ……！！」「アレディ……！　みんなっ！！　……フェイクッ！　御願いっ！！」

「……！！」「…！？　あうっ……。」

飛んで来たアレディに皆の気が向き、結界が解けられてしまった。

身動きが出来る様になった百夜は危機を感じたのか、真っ先に零児を攻撃し、

其の後、他の連中へ纏めて攻撃し、更なる追撃もして来た。

しかし、三撃目はネージュの命を受けたフェイクライドによって防がれ、

何とか互いに再び立て直す事が出来た。

そして、場面はＫＯＳ－ＭＯＳ達へと一旦移る事になる。

ｓｉｄｅ：ＫＯＳ－ＭＯＳ　ｖｓ　Ｔ－ｅｌｏｓ達？

ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓが互いに銃を撃ち合い、

M．O．M．O．がハラハラと、その様を不安そうに心配そうに伺っている此の場に、

遅れ馳(ば)せながら到着したのは、ハーケンやファントムを筆頭に、

神夜・アシェン・錫華・アクセル・アルフィミィ・琥魔・ドロシーが、共に来ていた。

「ＭＡＧＤＡＬＥＮ(マグダレン・シックスティーン)１６！！！」

「キャノン、ＶＡＬＫＹＲＩＥ(ヴァルキリー)。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳさん……っ！！　Ｔ－ｅｌｏｓさん……っ！！」

「くっ……！　未だ目が覚めないのか、マシン・ビューティーは……！

アシェン、どうにかならないか？」

「……残念ながら、無理でごわす、艦長。少なくとも、一旦動きを止めて大人しくさせないと、

ハッキングも何も出来んのでごわしまっしゃいまする。」

「てろすさん！　私達も加勢します！　一緒にこすもすさんを！」

「ちっ……！　なら、グズグズするな！　早くしろ、小娘ども！っ！？　ぐぅっ……！！」

「Ｔ－ｅｌｏｓさんっ！？　ＫＯＳ－ＭＯＳさん！　もうやめて下さい！！」

「……Ｍ．Ｏ．……Ｍ．Ｏ．……私……は……。」

「チッ……！　アシェンの言う通り、あのブレイン・コントロールをどうにかしないとな……。」

Ｔ－ｅｌｏｓと撃ち合っていたＫＯＳ－ＭＯＳが、彼女が神夜達と話していた僅かな隙を狙って接近し、

ハーケン達の方へと蹴り飛ばした。辛うじて着地したＴ－ｅｌｏｓの前に、アクセル達が出て来た。

「取り敢えず、ＫＯＳ－ＭＯＳの動きを止めればいいんだな？　アルフィミィちゃん！」

「ラジャー、了解いたしましたの！　白虎咬（びゃっこうこう）……せーの、せっ！」

「邪鬼銃・騎駆（きっく）である！」「ファントム！　一緒に蹴ってやれ！」

「……！」

「ボクもいっちゃうよん！　ディバイン・ランサー！！」

「うっ……！　くっ……！　かはっ……！！」

「ＫＯＳ－ＭＯＳさん……！　ＫＯＳ－ＭＯＳさん……っ！！」

ＫＯＳ－ＭＯＳの躯体（くたい）を極力こわさぬ様、適度に加減し斬ったり蹴ったりしてはみたものの、

先程とは余り変わった様子も見えず、相変わらず洗脳された儘の様だ。

「……モモちゃん。何時迄も叫んでるだけじゃ、何も変わらないぜ？」

「ああ……酷なようだがな。……大丈夫だ、モモ。コスモスなら、絶対に戻って来る。

いや、必ず戻して見せる……！　勝つと決めたからには、オールベットだ……！」

「アクセルさん……ハーケンさん……。

そう……ですね……そうですよね。モモも変わって行かないと……！

ＫＯＳ－ＭＯＳさん……！　必ず、モモ達が、元に戻してみせます！」

Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．の新たな決意と共に、第二ラウンドの鐘が、この戦場全てに鳴り響いた。

ｓｉｄｅ：カイト　ｖｓ　アリエル？

アレディ達やハーケン達が仕切り直していた時。丁度、こちらでも一旦戦闘が止まっていた。

……いや。正確には、先程から常に攻撃し続けていたカイトの攻撃が止んだのだ。

少々訝しんだアリエルだったが、自分がする事は決まっている。

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』八神カイトを消滅させる事……唯、それだけ。その一つのみだけなのだから。

そう思い直し、油断だけはしない様に、カイトの一挙一動を見定めていた。

「――――急に動きを止めたりして……一体、何のつもり？」

「……いや、何。何時迄も、只殴り合い蹴り合いもつまらないと思ってな。」

「あっそう。まあ、別にあたいはどうでもいいけどね。

どうせ、アンタだけが死ぬって事に、変わりないんだし。」

「――――そうか。ならば――――全魔力解放。カオス・エンド・バースト。」

そう言うと、カイトの周りに灰色の大小様々な球体が現れた。

すると、その球体が勝手に動き回りアリエルを囲む様に回り出した。

「喰らい尽くせ――――何もかも。カオス・エンド……クラッシュ。」

そうカイトが命令すると、アリエルを取り囲んでいた大小様々な球体が急にその動きを早め、

灰色の球体の全てが一斉にアリエルに取り掛かり、

その小さな姿を、寄り集まった灰色の球体の中に押し込めた。

するとその球体が、中に何かが、誰かが入っているとは到底思えぬ程、小さく圧縮され、

その瞬間、猛烈に膨れ上がり、中から轟音と共に球体そのものが破裂した。

誰もが、生存は絶望だと思う程のその激烈な威力。――――だが、しかし。

「……何？　このチンケな技？」

「……矢張り、これでも未だ足りんか。ならば、これではどうだ？

リミッター解除。百条（ハンドレッド）・鎖解放（フルバースト）

全魔力解放　全魔力放出　全魔力消費　全魔力固定

右手に永遠　エターナル・エンド」

その瞬間、アリエルを虹色の球体が包み込んだ。だが、その瞬間。

パリンッと言う軽い音と共に、その虹色の球体が音も無く崩れ去って行った。

その中からは先程と何等姿形も、その表情も変わる事の無い、

先程通りの不満そうな顔を顕わにした、アリエルの姿が見て取れた。

「……チッ。これでも、未だ駄目……か。」

「――――――――ねえ。もう、いい？　好い加減、あたいも飽き飽きしてんのよ。」

「……フン、祝(ほ)ざいていろ……乳臭い小娘風情が。

（……これも効かん……か。未だ、奥の手は幾つか残ってはいるが……。

果たして奴に効くかどうか……。だが、或る程度の検討は付いた。

恐らく奴(アリエル)の能力は、アレだろう。問題は、それを奴の口からどう割らすかだが。）」

「――――上等よ。

アンタみたいなクソジジイなんか、ブラウセス様の御手を患わせるまでもないわ。

今、此処であたいがぶち殺してあげる。」

（フン……ブラウセス……か。矢張り、坊やが一枚噛んでいやがったか。

だがまぁいい。御陰で少しは楽しめるからな。……さて。次は一体どうしようか……？）

それぞれの思惑も然(さ)る事乍(なが)ら、激烈な衝突は未だ冷めやらぬ様である。

ｓｉｄｅ：リグ＆百夜　ｖｓ　アレディ達？

その頃。丁度、互いに態勢を整え直し終え、又互いに対峙していた。

だが、今度は先程とは違い、リグをアレディ一人に任せるのでは無く、

何人かで別けて、それぞれ対応する事になった。

「良い事、アレディ？　事はもう、貴方一人の問題じゃ無くなってるんだから、協力しなさい？」

「……分かりました。致し方ありません。」

「大丈夫よ、アレディ……そんなにショボくれなくたって。

今、一番の最優先は百夜ちゃんの破壊でショ？」

「ま、そうね。私はそうしてくれる方がありがたいけど、ね。」

「……何れにしろ、アレは野放しには出来ん。奴から速攻で片を付ける。いいな、みんな？」

「合点じゃ、零児！」「ま、ここは素直に言う事を聞いておくよ、うん♪」

「よし、行くぞ……！」

零児の号令一下の下、リグに対応する組と、百夜を破壊する組に分かれた。

リグには、アレディとオルケストル・アーミー、それにネージュとフェイクライドが。

百夜には、森羅＆逢魔組と、その他支援組が。それぞれ担当する様だ。

「む……？　今度は、纏めて来るか……！」

「先程の様には参りません！　おおおっ！！　機神朧撃拳んっ！！てぇりゃぁっ！！！」

「ヌウッ……！！」

「その隙は頂くよ！　シュナーベル・セイバー！！」「ブロンテ・ソードッ！」

「あらあら♪　無防備過ぎじゃ無くって？　マウス・イーター！」

「フェイク！　ダンシング・ドライバー！　私も追撃よ！　ベレイシャス・ミラー！！」

「グウゥゥッ……！！　ぬおあぁっ！！！」

さしものリグも、下から、背後から、上から、横からの同時連撃には対応出来ず、

ガードは辛うじて出来てるものの、そのダメージは大きい様だ。

何とか地に足は着けられたものの、踏鞴（たたら）を踏み、足が少々覚束（おぼつか）無い様子を見せた。

その瞬間を待ってましたとばかりに狙って、更に飛び出した者が居る――――。

丁度、その頃――――百夜側では。

「強化……防御……豪炎。」

「先に仕掛けるッ！　白虎……青龍……玄武……朱雀……！　これぞ、天地真命なり……！！」

「よしっ！　一気に行くよっ！　セイレーン・ダガー！！　ほらほらほらっ！！」

「水憐！　時雨の型！　オラオラオラオラ！　無駄ッ！！」

「アルトアイゼン！　レイヤード・クレイモヤだ！！」

「アーベント！　こっちもパルメザン・ランチャーじゃ！！

わしもまだまだ負けんぞ！　朱雀刀（すざくとう）！　玄武炸（げんぶさく）！　青龍槍（せいりゅうそう）！　白虎砲（びゃっこほう）！

鬼門に封じ滅却する……！　ウィザードじゃ！

ぬしは何処に堕ちたい？

小牟パイルドライバーで締めじゃ！」

「あん、最後は戴いちゃうわ、ね。

木は土に。

土は水に。

水は火に。

そして火は――――

――金に克(か)つ。

……終刀(しゅうとう)

瞬華(しゅんか)――

これが、世

を司る理なり」

百夜からの猛撃を避け、零児が真っ先に皆の気力を回復し。

アンから始まる一連の攻撃の流れを作り、締めに小牟の四神争応からの、沙夜の后業(ごぎょう)抜刀法。

流石の百夜も耐え切れず、機能停止寸前だった。――――丁度、その時。

「今よ、フェイク！　私に合わせて！」「……！」

「妖精の舞……魅せてあげるわ！　はぁっ！　えいっ、えいっ！」

「……！」

「ぐあっ……！　何いっ！？　ぬぐっ……！」

「まだよ！　もっと！　ええいっ！」「……！」

「これでフィナーレを飾りましてよ！　ロイヤル・ハート……ブラスターーァァァッ！！」

「グ……グアアァァッ……！！　ぬ、抜かったぁぁーっ！！」

「……！？　あうっ……！　ああっ……！！　……機能……停止……。」

「――――妖精の舞、楽しんで頂けた？」

ネージュとフェイクライドのコンビネーションにより、

リグを百夜諸共巻き添えにして、同時ダブルＫ．Ｏ．にしたのだった。

――――此処に、一つの戦いの決着は着いた。

――――一方、その頃。ＫＯＳ－ＭＯＳは……と言うと。

ｓｉｄｅ：ＫＯＳ－ＭＯＳ　ｖｓ　Ｔ－ｅｌｏｓ？

こちらが対ＫＯＳ－ＭＯＳ用の対策を講じようと、皆と警戒しながら協議している最中だった。

ＫＯＳ－ＭＯＳの方からこちらに向かって来た為、皆で慌てて散開した。

しかし、大筋はもう決まっていたのか。ハーケンがざっと皆を軽く

見渡し、一つ頷いた。

すると、皆もそれに合わせて頷き、笑み、鼻を鳴らし、各々意気込んだ。

そうこうしている内に、ＫＯＳ－ＭＯＳからまた仕掛けて来た。狙う先は……Ｔ－ｅｌｏｓであった。

「ＳＴＯＲＭ（ストーム）・ＷＡＬＴＺ（ワルツ）。」

「くっ！？　舐めるな！　ＭＡＧＤＡＬＥＮ（マグダレン）！！」

ＫＯＳ－ＭＯＳが放った跳弾を、Ｔ－ｅｌｏｓも自分の銃で全て撃ち落とした。

その儘、Ｔ－ｅｌｏｓに接近したＫＯＳ－ＭＯＳが、接近戦に切り替えて来た。

「ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）・ＴＯＯＴＨ（トゥース）。Ｓ（エス）・ＳＡＵＬＴ（ソルト）。」

「チィッ……！　Ｌ（エル）・ＢＬＡＤＥ（ブレード）！　Ｔ（トリプル）・ＳＫＹＬＬＡ（スキュラ）！」

ＫＯＳ－ＭＯＳのビームセイバーが、Ｔ－ｅｌｏｓのブレードで叩き折られるも、表情は全く変わらず、

更にその剣を潜って蹴りを入れて来たＫＯＳ－ＭＯＳを、

同様に蹴り返してその儘、蹴飛ばしたＴ－ｅｌｏｓ。

しかし、それも想定内だったのか、ＫＯＳ－ＭＯＳから膨大なエネルギーが観測された。

：：

アレを撃つつもりだ、と誰もが理解した。

だが、それと同時に、Ｔ－ｅｌｏｓもエネルギーを溜めていた。同じ事を考えていた様である。

そして、溜め切るのも同時ならば、撃つタイミングも全くの同時であった。

「「Ｄ／Ｕ（ドゥルケウルティム）・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ（ネリタース）。」！」

同時に放たれた、ほぼ同格同威力の、互いの相転移砲が中央で激しくぶつかり、爆発した。

その衝撃の余波で、ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓは、その場から大分後方へと弾き飛ばされた。

傷付いたＴ－ｅｌｏｓの回復と、皆への準備を調えようと放った、神夜の秘奥義を受け、

ハーケン達は吹き飛ばされたＫＯＳ－ＭＯＳへと、猛追を掛けた。

「楠舞霊術奥義……月魅酒！」

「――――よし！　行くぞ、みんな！」

「よいよい。まずは牽制と行こうぞ？　邪鬼銃・封印破（フィーバー）！」

「よし！　突っ込むぜ、アルフィミィちゃん！」「了解ですの！」

「私も参ります！」「皆さん！　ＫＯＳ－ＭＯＳを壊したらワタクシが許しませんわよ！」

「そんな余裕はあらっしゃいませんでございましまする。……むっ！」

「気孔掌（きこうしょう）。」

各々、そんないつもの様な会話をしながら、ＫＯＳ－ＭＯＳに一斉に躍り掛かった。

しかし、全員分のデータを有しているＫＯＳ－ＭＯＳは、

その各々の攻撃の癖による隙や合間を縫って躱(かわ)し、逆に全員吹き飛ばした。

「チッ……！　流石はコスモスだな……。俺達の癖を完璧に見切ってやがる。」

「それなら……！　手数と連携を増やすまでです！」

「では、まずは誘き出すぞえ。邪鬼銃・梵破(ボンバー)！」

「その隙、貰ったニャ！　真説・『招き猫』！！　ニャニャニャニャッ！」

「続けて行くぞよ！　邪鬼銃・美糸(ビート)！」

「こっちも乗っかるぜ！」「雷刃閃ですの♪」

「甘いっ！　タイグレス・バイトッ！！　まだだっ！　デモンズ・ランサー！！」

神夜の合図と共に、錫華が飛び出してＫＯＳ－ＭＯＳに弾幕を見舞った。

当然の如くそれを避けるＫＯＳ－ＭＯＳだったが、当然こちらもそれは想定内。

そこに待ち構えていた琥魔が自身の妖刀で連続で斬り付け、

その儘休む間も無く、錫華とアクセル&アルフィミィの追撃。
それに合わせて、アシェンの追撃も加わった。しかし、まだまだ攻撃は終わらない。

「くっ……！　キャノン、転送……。」

「させません！　蓬莱の大枝！」「……！？」

「今です！　アロー！　当たって下さい！　フリーズ・ショックです！　ドロシーさん！」

「お任せですわ！　行きますわよ、モモ！」「はいです！」

「ポッピー……！」「ミキサーですっ！」

「…！？　くっ……！！」

空に打ち上がったＫＯＳ－ＭＯＳが転送したキャノンで、落下の衝撃を抑えると同時に攻撃しようとしたが、それも神夜によって壊された。

その隙を狙い、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．が矢を撃ち出し、氷塊で足止めをし、

ドロシーと協力して、ダブル竜巻で再度ＫＯＳ－ＭＯＳを打ち上げ、休む暇を与えない。

「これで、最後だ！　行くぜ、ファントム！」「……！」

「カード・スラッシュだ！　頼むぜ、Ｍｒ．ゴースト！　究極！ゲシュペンスト・キック！！」

「……！！！」

「ぐっ……！　あぐっ……！　……うあっ！」

「……頼むから、壊れてくれるなよ……コスモス。

こいつで、締めだ……ッ！　ファントム・ホールデム！！！」

「ああ……ッ！！　……システム……ダウン……。」

最後に、ハーケンとファントムの合体攻撃によって、ＫＯＳ－ＭＯＳは戦闘行動は不可能になった。

何とか、辛うじて壊れる事無く、無事に戦闘を終了出来た彼等だったが……。

「……どうだ？」

「恐らく、大丈夫だと思いますわ。今までもぶっ飛ばせば、大体元に……！」

「自動……メンテ……ナンス……開始……。終了……後……戦闘……。」

「いやいや、戻っておらぬぞな！」

突如動き出したＫＯＳ－ＭＯＳの口から飛び出た言葉は、とても戻ったとは思えぬ言動だった。

これでもまだダメか……！　その様子に焦る一同。しかし、唯一人……いや、二人だけは。

「……。」

「……テ……ロ……Ｔ－ｅｌｏｓ……。」

「いいザマだな、ＫＯＳ－ＭＯＳ。この場で決着を着けてやろうか

？」

「……。……ならば……早く……。」

「……ッ！」「何を言っているんだ……っ！　コスモス！？」

その言葉には、誰しもが驚いた。

ＫＯＳ－ＭＯＳは、一刻も早く自身を殺せ……と、仇敵にそう言ったのだ。

流石にその言葉には誰も従えず、また誰にも従わせず……だが……。

「この……ままでは……『あの方』の……『こころ』が……消えて……しまう……。」

「テ、Ｔ－ｅｌｏｓさん！　ＫＯＳ－ＭＯＳさんが苦しそうです……！

助けてあげられないんですか！？　あなたと、ＫＯＳ－ＭＯＳさんは……！」「……。」

「Ｔ－ｅｌｏｓ……早く……私を破壊……して下さい……。

救世主（メシア）に……頼れぬ……今……貴女……しか……。

それに……そうすれば……私と……貴女は……。
」

「くそっ！！　こんな時にこそ、カイトがいたら……！」

「肝心な時に、役に立たないヘタレニャッ！」

思わず、カイトに対して悪態を付いてしまう程に、焦りを顕わにしている面々。

確かにこの儘では、ＫＯＳ－ＭＯＳが何かとても危ない事になりそうな予感に、誰しもがビンビンだ。

だが、だからと言って、自分達には何がある？　自分達に何が出来る？

何も手立てが浮かばない儘、徒(いたずら)に時間が過ぎる現状に、弥増(いやま)してイライラが募(つの)る。

――――そして。

「Ｔ－ｅｌｏｓさんっ！　Ｔ－ｅｌｏｓさん……っ！」

「……チッ！」

「……。」

「この光……！　こすもすさんの魂の揺らめきが……消えました！」

「コスモス！　無事か！？」

「……Ｔ－ｅｌｏｓ。」

泣きそうな程に自分に縋り付くＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．と、覚悟を決め目を瞑っているＫＯＳ－ＭＯＳ。

その二人の行動に何を感じたのか。

Ｔ－ｅｌｏｓが急に光に包まれると、ＫＯＳ－ＭＯＳも同種の光に包まれた。

その光が収まると、ＫＯＳ－ＭＯＳの機能も正常化し、元に戻っていた。

「……ふん。……やはり、完全にシステムダウンさせなければ、『統合』は成らないか。」

「何故です、Ｔ－ｅｌｏｓ。貴女は私を……。」

「……貴様には前回の戦いでの借りがある。これで全て返したわ。」

「Ｔ－ｅｌｏｓさん……ありがとうございます……！　本当に……！」

「……。」

「Ｔ－ｅｌｏｓ……貴女や救世主（メシア）が危惧していたこととは、このことだったのですか？」

「グノーシス、そして我々。恐らくは、他の異邦人（ヤツラ）もそうだろうが……。

この世界……エンドレス・フロンティアが、我々の世界に干渉し、回帰を拒んでいる。

……ならば、それは断たねばならない。不確定要素を排除する為に。

永劫への回帰の為にだ、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「私たちは、その時こそ……『統合』を果たさねばならないのですね。」

何やら、とても難しい言葉を言い合うＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏ

s。

だが、残念ながら今は未だ、そうゆっくりと会話が出来る状況では無い。

何せ、カイトはあのアリエルとか言う幼女と、未だ戦っている最中なのだから。

「ＯＫ。ミステリアス・ロボッツ。難しい話の最中に悪いが、そこまでにしてくれよ。」

「投合とか怪奇とか……頭がこんがら状態ですの。」

「ま、それもあるがな。……一応この後、あんたも一緒に来てくれるんだろ？

イビル・ビューティ？」

「……勘違いするな。ＫＯＳ－ＭＯＳが二度とこんなザマにならぬよう、監視をする為だ。

貴様らを助ける為だなどと思うなよ？　ザコ共が。」

「Ｔ－ｅｌｏｓ、感謝します。」「……ふん。」

「……ＯＫ、ヴァイス&シュバルツロボ。どうやら、アレディ達の方も終わったようだ。

後は……カイトだけか。まずは、アレディ達と合流するとしようぜ。」

Ｔ－ｅｌｏｓも取り敢えずは仲間に加わり、リグ達との決着が着いた様子のアレディ達と合流し、

カイトの戦いが終わるのを、全員で見守り続けていた。

そして――――当のカイトは、と言うと。

ｓｉｄｅ：カイト　ｖｓ　アリエル？

あれからもずっと、カイトはアリエルに攻撃し続けていた。そして、その度に殺されていた。

その数、優に数千回。好い加減飽きたと言う、アリエルの言葉も分からいでは無いが、

しかし、カイトの命のストックはまだまだある。

正確な数は不明だが、少なくともデータ上にある、京や垓の値は優に超えていよう。

溜息を付きながら、アリエルが後何回だろうかと数えるのも億劫になって来た時だった。

「……あーーーっ!!!　もう、ヤメだヤメだヤメだ!!!」

「……？　何よ……一体どうしたって言うのさ、突然。」

「いやなぁ。もう何やっても効かねぇし、何やっても防げないし、意味無ぇじゃん。

つーか、俺がつまんねぇし。だから、もうヤメだヤ・メ。

お前も飽きたろ？　好い加減、俺殺すの。

俺の命、後どんだけあると思ってんだよ……俺の方が却ってメンデェよ。」

「そんな事、あたいが知る訳無いでしょ。……ま、でも、殺し飽きたってのには同意するわ。

つまり……何、アレ？

アンタ、もう抵抗すんの止めて、あたいに素直に消されるって言いたい訳？」

「あ～……まぁ、ぶっちゃけそれでいい。って言うか、どうでもいい。好きにしな。」

「あっそ。なら、お望み通りにしてあげるわ。」

唐突にカイトが、大の字になって地面に寝転び、大声でヤメヤメと叫び出した。

まるで駄々っ子の様なその仕種。その台詞。誰もが気が抜けても仕方無いだろう。

実際、カイトからは既に先程の闘志は愚か、戦意も、敵意も、殺気も、魔力でさえも感じ取れず、

完全に油断……どころか、所謂戦意喪失の体を成していたのだ。

そんなカイトに、攻撃が幾ら効かないとは言っても、一応警戒しながら近付くアリエル。

「あ～……せめて、もっかいはやてに逢いたかったなぁ。……ぐふっ！？」

「……フン。一応は、もっかいぐらい殺しておくわ。罠でも張られてたら面倒だからね。」

「ぐぅっ……っはぁっ……勝手にしろよ。もう、めんどくせぇ。」

「……そ、殊勝な心掛けね。……ま、あたいは優しいからね。

一応、アンタの遺言届けてあげるわ。言いなさい？」

「（優しい……？　まぁ、突っ込んだら負けか。色々な意味で。）

あ～……なら、遺言じゃ無くて、冥途の土産が欲しいんだが。

あっちのキャバクラとかで話題にする為に。」

「……ま、いいわ。それで？　何、聞きたいの？」

「ん？　お前の能力。その名前と解説。ヨロ～。」

「……！」「ん？　……ぐぶっ…！？」

「……フン、まぁ、いいわ。今更、知った所で何が出来る訳でも無いんだし。

いいわよ、教えてあげる。本当の冥途の土産に、ね。」

「ぐっふっ……あ～……んじゃ、頼む。はやてと風音にいい土産が出来そうだからな。」

「いいわ。その血だらけの汚い耳、掻(か)っ穿(ぽじ)って良く聞きなさい。」

そして――――アリエル＝シュレストの、その恐るべき能力が、本人の口から語られた。

side：N(ネオ)・N(ノルニル)　第八席　アリエル＝シュレスト

「あたいの能力……その名も『魔力使い（ザ・マジックマスター）』よ。」

「ザ・マジックマスター？　魔法使いと言う事か？」

「……えいっ。」「ぐはっ！？」

「あたいが喋ってる時に、口を出すなっ！　次言ったら、また殺すからね！！」

「ぐふっ……りょ、了解。」

「じゃ、続き話すわよ。因みに、今の答えは不正解。あたいの力は魔力使い。

この能力は、その名の通り、僅かでも魔力が通ったものならば、あたいには一切効かないの。

僅かって言うのはどれくらいかって言うと、一般人が持ち得る平均的な魔力量。

つまり、自身に魔力がある事に気付かずに一生を終える人間程度の魔力。

その千マイクロ分の一程度の魔力でも通っていれば、

それが如何なる物質であろうとも、それが例え何の形も持っていなくても、

あたいには一切効かない。何の影響も齎（もたら）さない。

そして、あたいのする事は相手は一切防御する事が出来無い。それは、逆も当然。

アンタが今絶賛体験中の様に、どんなに高い魔力を持っていても、それが魔力である限り、あたいには絶対に無意味なのよ。どう、理解した？」

それが、例えどんなもの……例えば、攻撃であり、防御であり、補助であり、回復であろうとも、

それらが魔力に僅かでも触れていれば、関わっていれば、それだけで彼女には無意味となる。

その全てが無効化され、無碍（むげ）にされ、無意味にされ、無価値にされ、彼女は無敵と化す。

それが、彼女……アリエル＝シュレストの能力――――『魔力使い（ザ・マジックマスター）』。

『魔力使い（ザ・マジックマスター）』。その名の通り、魔力を持つ者にとっては最大の天敵。

彼女は北叟笑(ほくそえ)んでいた。きっと、自分のこの能力に恐れ戦(おのの)いている事だろうと。

先ず間違い無く、彼は青褪(あおざ)めた顔をしているだろうと。八神カイト

そして、今自分は何よりも、誰よりも得意気な顔をしているだろうと。……だが、違った。

彼は――――八神カイトは――――嗤(わら)っていた。

「――――え？」

「いやいや、有難う……アリエル＝シュレスト。

いやまぁ、或る程度の目測は立てていたし、検討もそれなりに付いてはいたんだが、

どうにも確信に迄は至れなくてね。こうして、一芝居打たせて貰った訳なんだが……。」

「――――な、何を――――――？」

アリエルは、今迄の人生の中で一番狼狽えていた。

だって、今の今迄こいつは、生きる事を完全に諦めていて、

それで自分に何度も殺されても無抵抗で。だから、解らない。何で、こいつが立ち上がったのか。

何で、そんなに自信満々な顔をして、自信満々な気を全身に漲らせていられるのか。

何で、そんなに既に勝ち誇っていられるのか。何で……何で――――。

「まぁ、分かり易く言うとだな。

――――チェックメイトだって、言う事さ。」

「――――――あ。」

何で――――――自分が、地面に減り込んでいるのか。

全く、訳が、意味が、解らなかった。

side：三人称

誰もが自身の目を疑った。先程から、何度もただ殺され続け、終い

には地面に平伏したカイトが。

大声で自分は生きる事を諦めると、そう言った言葉を何度も口にしていたあのカイトが。

その恐ろしい能力を自慢気に、誇らし気に語ったあの幼女（アリエル）を。

今度は、カイトが一方的に攻撃している、今の様を。疑わずにはいられなかった。

「どうした？　何時迄、そんな所に減り込んでいる？」

「…！？　な、何が……一体、何がどうなってんのよ……っ！

い、いや、きっと、今のはあたいが油断したから……ちょっと気を抜いちゃったからよ。

そうよ……でなけりゃ……！！

アンタなんかの攻撃が、あたいに通じるワケ無いじゃないのよッッ！！！！！」

そう言い、アリエルは自身の杖の先に、特大の魔力の固まりを集め、それをカイトに放った。

――――だが。

「そうか、それは残念だったな。」

「――――そんな――――うそ――――――。」

カイトは、その凶大な魔力砲をまるで五月蠅い蠅を振り払うかの如く、

軽く手を振っただけで、その砲撃の軌道を枉げてしまった。

絶句しながら、自身の砲撃の行方を目で追う事しか出来無いアリエル。

そんな彼女の目の前に、何時の間にか降り立っていたカイト。

「――――ッ!?!?」

「ん？　どうした？　一体、何を驚いているんだ？　真逆、全く予想もしていなかったのかな？」

「……だ、だ、だって、アンタ……そんな、だって……ウソ…

…ウソよ、そんな……。」

「……果てさて。一体、何に対してウソだの何だの言ってるのかは知らんが……。

残念だが、これが現実だよ。ネオ・ノルニル……いや。

新生ノルニル　第八席　アリエル＝シュレスト

これは、奴の……シュガル坊やの差し金かね？」

「…！！！！！　あ……ぁあ……。」

カイトが発した言葉……では無く、それと同時に噴き出した闘気、敵意、殺意……それと。

全く以て得体の知れない……新（ネオ）・全平行世界観測機関（ノルニル）の幹部たる自分達でさえ……知らない。

そんな謎の力を、先程の魔力とほぼ同等量、身体から出している、

目の前の存在。

それに、アリエルは、今初めて恐怖と言う感情を……そして、無謀と言う言葉の意味を知った。

「さて。色々と、何か勝手に思い知っている所に済まないが、未だ終わりでは無いのでね。」

「――――――ぇ？」

「先ずは、先程からの罵詈雑言（ばりぞうごん）の礼だ。」

「――――――ぁ。かはっ……！？！？」

そうカイトが言った瞬間、カイトはアリエルの右横にいた。

そして、彼女の小さなお腹には、カイトの握られた左拳が減り込んでいた。

その突然の予想していなかった衝撃に、彼女はモロに喰らい、息が詰まっていた。

「そして、これは俺を何度も殺してくれた礼。」

「ぁっ……。」

今度は、お腹を抱えた儘、フラフラと蹌踉(よろ)めく彼女に、右足で蹴りを入れ上空に蹴り上げた。

その瞬間、カイトの姿がその場から消えていた。慌ててその姿を探す、アレディ達見物人。

すると、一早くカイトのエネルギー反応を追っていたＫＯＳ－ＭＯＳが気付いて、上を見上げた。

その先には、既に足を振り上げた姿勢で止まっているカイトの姿が見て取れた。

その姿勢から行われる次の行動に、誰もがゾッと背筋が凍えた。

その考えられる威力も然る事ながら、それ以上に――――。

カイトの表情に、戦慄したのである。

「最後に。これは――――――――仮初めながら、俺にはやてと対峙させてくれた礼だ。」

「か……は……っ……！？」

そう言い、カイトは垂直に上げていた足を力の限り振り下ろした。

その瞬間、地面からは朦朧(もうもう)とした土煙が遙か高く巻き起こり、

その筋道には、幾条(いくじょう)もの摩擦熱によって生じた煙が中空に立ち上っていた。

誰もが思った。――――これでは、生存は絶望的だ、と。

どうやら、カイトもそのつもりだったらしい。

降り立って、彼女を地面から摘み上げたカイトは、少し驚きの表情を見せ、こう独りごちた。

「――――ほう。存外に身体は丈夫な様だ。今のは、ほぼ確実に殺すつもりで蹴ったのだがな。

まぁいい。それならば、一つ愉しい玩具が壊れずに済んで良かったと、思う事にしよう。」

「――――――――――ば、バケモノ。」

そのカイトの呟きに、誰とも無く声が漏れた。誰の心をも代弁する一言を。

カイトがその声に反応し、丁度アレディ達に振り返った時だった。

今の今迄気絶していたリグが、意識を取り戻し呻き出したのは。

「――――ぬっ……ぅぐっ……どう、なった……？」

「……ああ、ようやっと起きたか、リグ・ザ・ガード。」

「む……？　貴様は……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』。して、その手に掴んでいるのは……あの幼子（おさなご）か？」

「そうだ。殺すつもりだったのだが、存外しぶとくてな。

この玩具、壊すには少々もったいないと思ってな。持って帰れ。」

「……そうか。我らは敗れたのだな。百夜も……既に残骸となっている様だ。」

「そういう事だ。理解したのなら、さっさとコイツを受け取って帰れ。

後、ガグン坊やに伝言だ。『殺すな、壊すな、触れるな』とな。それで、奴ならば解る。」

「……承知した。……確かに受け取った。だが、この世界から出られる、と？」

「……チッ、そう言えばそうだったな……面倒な。固有結界、解除。

これで、いいだろう。では、疾（と）く去（い）ね。」

「……撤退する。」

こうして、アグラッドヘイムとの一戦は、一旦その幕を降ろした。

ｓｉｄｅ：エスピナ城々内　謁見の間

ヴェルトバオムの蕾。芽から、其処迄成長していた物の目の前に、神夜だけが立っていた。

その後方、段を一つ下りた所に、他の皆がいた。……カイトも、一緒に。

あの後、カイトは今迄発していた荘厳な、畏敬の念を抱かずにはいられない程の力を収め、

何時も通りの今一つ冴えない表情でアレディ達に近付き、

「よっ、お疲れさん」

と、極普通に挨拶をした。緊張に緊張していた一行の内、殆どがその場に素でズッ転けていた。

其の後、不思議そうな顔をしたカイトはそんなみんなに構わず、

「良く、頑張ったなM．O．M．O．！　偉いぞ！」

と言って、彼女の頭をグリグリと優しく、それでいて力強く撫でていた。

その撫でられているM．O．M．O．の嬉しそうな笑顔を見て、一行は何だか力が抜けてしまい、

結局、例によって例の如く、なあなあでその儘になっていたのである。

そんな風に作者が解説をしている間に、神夜の方は準備が整ったらしく、蕾に語り掛けていた。

「……霊樹よ……。その身を鎮め、永久の眠りの中に微睡み給え。

……ふう……。」

「一体、何を爲出来したの!?」

「見事な乙女パワーですの……!」「やったのう！　カッコイイー♪」

「この樹は、不死桜と『逆』の力を持っているんです。」

「逆？　どういうことだい？　プリンプリンセス。」

「不死桜は、異界の門を『閉じる』ことが出来ます。この樹は……『開ける』為のものなんです。

ですから、私の霊力と同調させて、封印を施しました。

これで、この樹が成長することはもう無いですよ♪」

「流石カグラアマハラの姫。

無駄肉をぶら下げているだけでは無かったのでありましたのですね。」

「……ありがとう、カグヤさん。」

「いえいえ♪　これで妖精族の人達も戻って来れますね♪」

「そうね、フェイクライドも帰って来てくれたし、万事ド丸く収ま

った……と言う感じね。」

そのネージュの言葉に、本当にようやっとエスピナ城での騒動は終わったのだと実感した。

そう、皆の安堵の溜息と共に、皆の肩から力がようやっと抜けていた頃だった。

またもや、カイトが動き出したのは。

「よいしょっ……と。」

「ん？　カイト……ぬし、何やっとるんじゃ？」

「ん？　ちょっと、このヴェルトバオム、消し飛ばそうと思って。」

“――――はぁ？”

「いや、だからな？　ヴェルトバオムという質を神夜に経験させる役目も終えたし。

ちゃんと同調もして、今眠ってる所だし。今なら、面倒も少なく

て済むからさ。

だから、邪魔だし消し飛ばそうと思って。構わないだろう、ネージュ？」

「……え？　そ、それは、片付ける手間が省けていいけど……。

私のお城を壊されるのは、ゴメン蒙りますわよ？」

「ああ、それなら大丈夫だ。

俺が消すのは、ピンポイントでこの蕾だけだからな。何の問題も無い。」

「……そう。それなら、お願いするわ。その代わり、失敗したでは済まされませんわよ？」

「問題無い。一番良い装備で挑もう。」

“……不安だ。此の上も無く、非常に不安だ。”

そんな、みんなの心配も余所に、カイトはよっこらせっと年寄り染みた台詞を吐きながら、

何故か手と足を使って壇上に攀じ登り、ヴェルトバオムの前迄歩いて向かった。

そして、一行は……カイトの力……その一端を、間近で目の当たりにする。

「……いよしっ。んじゃ、一丁、やりますか。

全魔力解放。カオス・エンド・バースト。

――――逝け。」

その瞬間、カイトを中心に膨大な魔力が部屋中……否、城中に犇(ひし)めき合い、荒れ狂った。

だが、それも本の数瞬の事。

物質化する程の魔力によって、文字通り圧殺されそうになった瞬間、その魔力が一瞬にて消え去っていた。だが、皆がホッとしたのも束

の間。

カイトの周りに、数多の大小様々な球体が浮かび上がり、彼の周りを漂い始めた。

其の後、球体は或る程度秩序良く回った後、カイトの号令一下、蕾に群がった。

或る程度、蕾に引っ付いた頃、その魔力に喚起されたのか……蕾が起きてしまった。

だが……そんな抵抗など、カイトの前には、全くの無意味である事は、誰もが理解していた。

そして――――――――――。

「抗うな、絶望しろ。

自身の消失と言う確定された未来に。

ディス・カオス・エンド」

全て灰色の球体によって、覆い尽くされてしまったヴェルトバオムの蕾は……。

その球体であったモノに喰われていくかの様に、徐々にその大きさを縮めていき……。

最終的には、完全にその姿を無くしてしまった。

最後に灰色のナニカが消滅する際に鳴った、キュポッ、と言う音が、まるでゲップに聞こえてしまったのも、仕方の無い事であろう……あの光景を見た者としては。

こうして、エスピナ城での騒動……そして、戦闘は完全に終わりを告げたのであった。

蕾が消え去った後に残った天井の穴。

其処から差し込んだ光が、丁度カイトが居る位置を照らすかの様な時間になっていた。

果たして。その光に照らされたカイトを見た皆は、どう思ったのだろうか？

――――天使――――

――――神――――

――――救世主――――

――――それとも。

――――それは、誰にも。自分達にすら分からない、不思議な感覚であった。

第拾捌話【魔力使い（ザ・マジックマスター）～勝利と敗北の狭間で～】（後書）

如何でしたでしょうか？

当初の予定では、二万五千字前後は覚悟していましたが、辛うじて二万字以内に収まり……ｏｒｚ

さて。今回、色々と判明致しました。

アリエルの能力。そして、Ｎ・Ｎの意味。

更に、新たな技追加と共に、更に更に謎が深まったカイトの能力。

『魔力使い（ザ・マジックマスター）』：物体であろうと無かろうと、魔力が僅かでも含まれていれば、

例え、魔力を伴わない攻撃であろうとも完全無効化する能力。更なる詳細は本編にて。

……チートですねぇ。紛う事無く、本物のやってはいけない部類のチートですね；；；

特になのは世界とか、ネギま！世界とかでは、絶対にどうにも出来無いレベル。

ですが、カイトはその超チートをも軽く超えるバケモノという……。

いいのかなぁ、俺？　こんなの作っちゃって……。

『N・N（ネオ　ノルニル）』：新生ノルニル。その詳細、どう新しくなったかは未だ不明。

まぁ、これは一番バレバレだったと思いますw

元第三席にして、現第二席シュガル＝ブラウセス。フルネーム覚えてた方、いるんでしょうか？

私は素で忘れてました；　なのは世界の話を総浚いして、ようやっと思い出した程ですから；

で、そんなチート能力持ち幼女であるアリエルすらフルボッコにするカイト、マジパネェ。

一体、どんな理由なんでしょうね？　直前迄フルボッコされてた奴が、

唐突にフルボッコ仕返せる能力って。まぁ、未だ秘密ですが。

次のアリエル戦で、それを明かしたいと思います。ま、当分先の話ですが。

『カオス・エンド・クラッシュ』：カオス・エンドのバリエーションの一つ。

カオス・エンド・バーストの亜種。効果は、作中の通り。

カオス・エンドとして消滅させるのではなく、只の魔力の固まりとして、

完全に相手を覆い尽くして、逃げ道を無くさせてから爆発させるえげつない技。

『ディス・カオス・エンド』：カオス・エンドのバリエーションの一つ。

カオス・エンド・バーストの亜種。効果は作中の通り。

カオス・エンドでは覆い尽くせない程に大きい物体に対してのみ使う、

カオス・エンドと同等の効果でありながら、威力は更に上。

とまぁ、解説はこんな所でしょうか。

長文の序でに、細かい豆知識……と言うか、比較的どうでもいい話を幾つか。

?零児の天地真命。それと、小牟の四神争応。実は、これ四神の順番が逆なの御存知でしたか?

作中でも書きましたが、零児は白虎→青龍→玄武→朱雀と言う順番。

これは、技を使うと、一定確率でこう叫んでくれます。

一方、小牟は、朱雀→玄武→青龍→白虎と言う順番で、最初に技を使います。

今度良く観察してみて下さい。後、多分ですが最後のコーナーポストが、

それぞれ四神に対応しているのでは無いかと私は思っています。

因みに。カイトが以前使った超厨二病な技、『四神極壊(しじんごっかい)』。

これも、実は零児と同じ白虎→青龍→玄武→朱雀と言う順番だったりします。

偶然、何かと重なると嬉しいものですよねw　ましてやそれが自分の好きなものだったら尚更w

?も一つ、森羅&逢魔から。零児と小牟の使うのは『護業』抜刀法。沙夜が使うのは『后業』抜刀法。そして、カイトの従者は『五行』。どれも読みは『ごぎょう』ですが、字が違います。紛らわしいですね；；；；

?最後も森羅&逢魔から。零児と小牟の理は五行相生。対する沙夜の理は五行相克。

詳しい説明をすると、それこそ半端無い文字数になってしまいますので、敢えてしません。

もし、違いが気になられた方は、ヤフるか、ググるか、ウィキって下さい。

今の時代でしたら、十分な量を得られるかと思います。

とまぁ、こんな所でしょうか。超長文、大変失礼致しました。

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。

第拾玖話【ＶＩＯＬＥＮＴ　ＢＡＴＴＬＥ～往く先は風に訊け～】（前書き）

現時刻（００：１５）
ＰＶ：２，４４７，２９６アクセス　ユニーク：２０３，２０８人
皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、今回はフォルミッドヘイム・前編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第拾玖話【ＶＩＯＬＥＮＴ　ＢＡＴＴＬＥ～往く先は風に訊け～】

ｓｉｄｅ：エスピナ城

フェイクライドを伴い、ようやっと城から抜け出た一行。

その城の様子を外から改めて見てみると、虹の柱が消えていた。

どうやらあの虹の柱は、矢張りヴェルトバオムの蕾から出ていた様で、

入る前から感じていたあの奇異な不思議な力も既に感じなくなっていた。

「とんだプリンセスのご帰宅だったな……疲れたぜ。」

「む？　虹の柱が……。」「あら？　消えてる……？」

「……やはり、あの蕾から出てたんですね。」

「……カッツェよ……。」

「……ッ！？」

「……カッツェ、ヘンネ、キュオンよ……。」

そんな時であった。どこからともなく、カッツェ達の耳に声が聞こえてきた。

フォルミッドヘイムの新王、エイゼル・グラナータである。

どうやら、蕾が消え去り通信が或る程度可能になったらしく、連絡して来た様だ。

「これは……念話……！　エイゼル！」

「あれ？　通信や念話系は、全部ダメだったんじゃないの？」

「フォルミッドヘイムを覆っていた障壁が、先程突然弱まった。」

「それも、神夜が封印しカイトが滅ぼしたあの蕾の所為であるか？」

「そうなんだろうね。エイゼル、そっちはどんな状況なんだい？」

「……何者かに攻撃を受けている。

我がフォルミッドヘイムの大地は穿(うが)たれ、刳(く)り抜かれているのだ。

」

「刳り抜かれている……！？　それは、もしや……！」

その話に割り込んで来た者がいる。……カイトである。

「ああ、そうだ。ヴェルトバオムの余剰分の力が溢れて出ている証拠だ。

どうやら、益々力を蓄えている様だな。……未だヤツラも取り込んではいないと言うのに、

一体どこから魂を調達して来ているんだか……なぁ、不思議に思わないか？　エイゼル坊や。」

「……ぬ？　もしや、其方（そなた）……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』か？」

「御名答～♪　久しいな、エイゼル坊や。しっかしまぁ、あの坊ちゃんが王様になるたぁな。

どうだい？　王様生活は頑張って堪能しているかい？」

「……我は只、自らの使命を全うするのみだ。

それよりも、其方に訊ねたい……否、訊かなければいかぬ事がある。

……貴様は、今何者だ？」

唐突にカイトに向けられたエイゼルの問い。誰もが意味が解らず首を傾げるが、唯一人。

問われた当人にだけは通じていた様で、ふっと意味有り気な笑みを一つ零すと、笑顔で応えた。

「……フッ。少なくとも、今の俺は救世主（メシア）だよ。尤も、この後どうなるかは俺も知らん。

他ならぬ、貴様等次第さ。それぐらいは、聞かずとも知っているだろう？」

「む……。そうだ……そう言えば、貴様は……其方はそういう存在だったな。」

「そう言うこった。ま、そういう訳でな。これから、皆してそっちへいく。

メンドイからバリア外しておけよ。」

「承知した。」

「あ、それと。大体、俺達がそっちに着く少し前にガグン坊やとロック・アイが着くだろうから、

一言、『俺が着く迄待っていろ。』とだけ伝えておけ。

恐らく、貴様以上に俺の事を知っているだろうからな。それで充分意味は通じるだろう。

ガグン坊や……いや、アグラッドヘイムの王ガグン・ラウズには、な。」

「……相分かった。では、『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……否、『宇宙（そら）の救世主（メシア）』。

そして、カッツェよ。……済まぬが、頼む。」

その言葉を最後に念話が途切れた。どうやら、敵の妨害によるものだと思われた。

「アンタ……ウチの王様とも知り合いだったのかい？　節操が無いって言うか、何て言うか。」

「で、結局エイゼルが言ってた言葉の意味って何だったの？　副長、判った？」

「さあ？　アタシにもさっぱりよ。

ま、でも今はカイトがお仲間ってことが、再認識出来ただけでい

いんじゃない？　ネェ？」

「……そうだな。しかし、今フォルミッドヘイムに攻め込んでいるのはアグラッドヘイムか。

どうやら、本格的に動き出したとみていいようだな。」

「ああ。これは益々急がないと拙いかもしれないな。」

「よぉ～し！　エイゼルを助けるよん！」

「ええ、行きましょう。アグラッドヘイム……必ず追い詰めてみせます……！」

アレディの言葉を皮切りに、皆でゾロゾロと揃ってフォルミッドヘイムへ向かう一行。

唯一人、複雑な表情をしていたネージュだったが、何かを吹っ切ったのか。

俯けていた顔を再び上げた時には、先程迄の翳（かげ）っていた躊躇いは既に無くなっていた。

こうして一行は、一路電磁バリアの解除されたフォルミッドヘイムへと歩を進めるのであった。

第拾玖話【ＶＩＯＬＥＮＴ　ＢＡＴＴＬＥ～往く先は風に訊け～】

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　オリトリア北西塔

最初に見えた塔の中に入り、その儘道形（みちなり）に進むとＫＯＳ－ＭＯＳの調整槽（ちょうせいそう）があった。

だが、其処に着いた誰もがそれ以上の出来事に驚きを隠せなかった。

何故ならば……本来あるべきモノが無かったのだから。

「クロスゲートが無くなってる！？　こいつはどういうことだい！

？」

「ここにあるのは、ＫＯＳ－ＭＯＳの調整槽だけか。」

「こいつもアグラッドヘイムの連中の仕業か。……本当に碌なことをしないな。」

「そうねェ。……これは本当に、早く先に進んだ方がよさそうネ。」

そう。クロスゲートそのものが無くなっていたのだ。

流石にこれにはカイト以外の誰もが驚かずにはいられなかったが、だからと言ってここで議論をしていても返って来る訳でも無い。

結局、ＫＯＳ－ＭＯＳの調整槽はその儘に先に進み、

邪魔な黒石や電磁バリアを発生させている臨時装置を覇壊し、

オリトリア西塔へと一行は足を踏み入れた。

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　オリトリア西塔（ウエスト・オリトリア）

そこに入った一行は、一端とは言え、見て来たフォルミッドヘイム

の様子を、
今迄の情報と照らし合わせて、一旦整理し直した。
「しっかし、ここに来るまでの地面の穴……かなりデカいのが開いてたな。」
「うむ、物凄い地雷が使われたようじゃの。……アレで余剰分とは俄には信じられんのう……。」
「ですが、エスピナ城に仕掛けられていた『ヴェルトバオムの蕾』と呼ばれていた植物の、
周りに開いた床の穴……そして、彼らとの交戦中に瞬転した、我が波国の大地……。」
「共通点や類似……いえ、酷似している点が多すぎて、否定する方が却って大変ネ。
アグラッドヘイム……全く、好き勝手やってくれちゃってるわねェ。」
道中出会(でくわ)した敵兵も然(さ)る事乍(なが)ら、このフォルミッドヘイムの大地に穿たれた穴を見るに、
アグラッドヘイムがフォルミッドヘイムに何かを仕掛けているのは

明々白々であった。

そんな風に改めて確認していると、ＫＯＳ－ＭＯＳがカイトに問いを投げ掛けて来た。

「救世主（メシア）。彼らの目的とは一体、何なのですか？

貴方は先程、アグラッドヘイムの王がエイゼルの元へと赴くと仰っていました。

ならば、目的も御存知なのでは？」

「あん、そう言えばそんなことも言ってたわ、ね。そこんとこ、どうなの？　メ・シ・ア・様？」

「あ～……ま、いっか。あいつらの今回の目的は、一つはエイゼルへの顔見せ。

それと使用可能なゲートの確保と宣戦布告だな。……まぁ、今更だが。」

「全くだよ！　先に言ってくれればキュオン達だって、準備出来たのにぃ～！」

「……それをさせない為に、宣言前に攻撃して来たんだろ？　それで、他には何がある？」

「後は、ヴェーゼント・リヒカイトの解放だな。アレの魂が欲しいんだよ、あいつらは。

強力で上質な魂だからな。ヴェルトバオムを成長させるには格好の獲物って訳さ。」

「ヴェーゼント……ってことは、前王シュタール・ディープの！？」

「そういうこった。以前のオルケストル・アーミーの全てを死に至らしめ、

辛うじて封印出来た時には生き残っていたのは隊長のエイゼルと、

そこから逃げ出した副長のカッツェだけだったという、シュタールの糞餓鬼の偽物だ。」

「く、くそ……って……。　アンタ……まさか、前王とも知り合いだって言うのかい？」

「……まぁな。そんな事より、好い加減先へ行くぞ。

何時迄もエイゼル坊やを待たせる訳にもいかんからな。」

「……そうね。さっきから何度も念話を試しているんだけど、

全然通じないみたいで、エイゼルったらうんともすんとも言わないのよネ。」

「通常通信も妨害されているみたいです……。」

「あらら。完全に敵の懐に入っちゃったようね。本当に大丈夫なのかしら？　ガイコツさん。」

「カレは頑丈だからちょっとやそっとなら問題はないけど……一応先を急ぎましょ。

バレリアネア塔は、この塔の南側を出てすぐよ。」

一方その頃。当のアグラッドヘイムでは。

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　某所

「何よ……！　何なのよ……！　一体、何だってんのよ、アイツはアアアアア！！！！！！」

「少しは落ち着け、アリエル＝シュレスト。余り騒いでは、ヴェルトバオムに障る。」

「ウルサイわよっ！　あたいがどうしようと、あたいの勝手でしょ

っ！！

こんな枯れ木なんかに身も心も捧げてるような気持ち悪い連中が、気安くあたいに声を掛けないで！　あたいは今、それどころじゃないんだからっ！！

アーーーーーッッッッッ！！！！！　もうっ！　何度思い出しても！　何度思い出してもッ！！

腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ！！！！！！」

荒れに荒れているアリエル。どうやら、先程のカイトとの一戦が余程腹に据え兼ねている様だ。

あの後。リグが息も絶え絶えの彼女を運んで来た後。

気が付いた彼女は、直ぐ様自身を魔法を使って完全に回復した。

だが、あの時の恐怖と気分だけは回復出来無かった様で、

その双方を紛らわす為に、今こうやって暴れ捲っているのである。

「ふむ……どうやら、余程手酷く負けたと見えるな。」

「はっ。私は不覚にも気絶していた為に、詳細は解りませぬが、相当かと……。」

「フン。少しは痛い目を見た方が、却って彼女の為には良かったのでは無いかね？」

「あら、意地悪な言い方ね。それよりも、そろそろ行かなくても宜しいの？　ロック様。」

「む……そうだな。我が王よ、そろそろ彼の者に御会いに行かれますか？」

「うむ。いざ往かん、我らの戦場へ。

待っていよ、フォルミッドヘイムの王、エイゼル・グラナータ。

そして……その時こそ相見えようぞ……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』よ。」

「アーーーッッ！　もうっ！！　今度こそ！　今度会った時こそ、覚えてなさいよ！！

『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』！！！！！！　今度こそ、アンタの力を理解して、絶対に……絶対に！！！！

手加減なんか最初っから抜きで、アンタを殺し尽くしてやるんだから！！！

この！！　あたいが！！！　絶対にィィィィッッッッ！！！！！！！！！！」

その最後の絶叫をして、ようやっと少しは気持ちも収まった様で、今度は何かブツブツと呟きながら、彼への対策を講じる為に何処かへと去って行った。

それ以来、彼女はアグラッドヘイムの前にその姿を現す事は無く…次に彼女が姿を現した時。

彼女（アリエル）は、後悔と言う言葉の真の意味を初めて知る事になった。

しかし、それは今は未来の話。今は、再度彼等へと視点を戻そう。

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　オリトリア南西塔

～Ｂａｔｔｌｅ　１６～

「邪魔をするなら容赦はせん！　天よ地よ、火よ水よ……ッ！」

「むっ！？　この覇気……！　出来る！」

「はあ～！　私の覇気はいかがかしら？」

「やや高飛車な感じです、ネージュ姫殿。」

「では……はああ～！　わらわの覇気はどうかえ？」

「コクとキレがあります、錫華姫殿。」

「はああっ！　私の覇気、どうですか？」

「可憐だと思います、神夜姫殿……／／／」

「はあ～！　私の覇気はいかがですの？」

「可愛らしいと思います、アルフィミィ殿。」

「はあああっ！　……俺の覇気はどうだい？」

「極普通です、ハーケン殿。」

「はあああっ！　俺の覇気を見ろ！」

「まあまあです、アクセル殿。」

「覇気がスカートの中に充満してますわ！」

「ドロシー殿、覇気とはそういうものでは……／／／」

「それを言うなら火気だな、常考。ふんぬらばっ！　おいどんはどうでっしゃろ？」

「……余りにも桁外れです。もう少し手加減をお願いします、カイト殿。」

「……余り気負い過ぎるな、アレディ。あいつはまともに相手にしていては身が持たん。」

「……はい、分かっています。……大丈夫です。覚悟は出来ています、零児殿。」

「……そうか。気合いを入れていけよ。」

「はい、退くわけにはいきません……！」

「……一体、何の話だ？」

“アンタ（お前・貴方）の事だ（です）よ、アンタ（お前・貴方）の……。”

「……？？？」

“……ダメだこりゃｏｒｚ”

「ちっ、梃摺（てこず）ったか……訓練が足りんな。……少し動きが荒かったな。」

「十分、器用に動いてましたけど？」

「では、勝利のメイク・ラブといくかの？／／／」

「……は？　何がしたいんだ？」

「そりゃ、ナニにきｍ……モガモゴグガ……！」

「……ふう、キモを冷やしましたの。」

「……お前は腹が冷えただけだろ、アルフィミィ。」

「軽く捻ってやったにゃ。」

「待て、アシェンっぽくなってないか？」

「状況分析はめんどくさいので省略。」

「……前から思ってたが、それでいいのか？　……ん？　どうした？　また反省点が？」

「……はい。覇気に乱れがありました。」

「そうか……なら、もっと気合いを入れないと拙いな。」

「ああ、ガール達に押され気味だしな。」

「……そういう意味では無いんだがな。……錫華姫も程々にな。腰を痛めても知らんぞ？」

「まだまだグイングインいくぞよ～♪」

「う～ん……私も刀を沢山持とうかしら？」

「……そんなもの二本も三本も持てないだろ。……ふぅ。姫さんの相手は、全員疲れるな。」

「ん？　何か仰いまして？」

「いや……もう少し、可愛気があってもだな……。」

「それはなぁに？　美味しいのかしら？」

「そんじゃ、わしの『嫁入りの型』を教えちゃろうか？」

「花嫁変化、お色直し！　……いけそうです！」

「うふっ♪　この流れで、どちらが女らしいか勝負ネ♪」

「ど、どんな手を使っても負けられないですっ！」

「やりゃあいいと思ってませんか？」

「な、何か厳しいですぅ……。」

「あ、それで気になってたんだけど……お洗濯、苦手？」

「こ、これは縮んだわけじゃ無いんですけど……。」

「少しは隠す努力をせい。」

「この服だと、流石に限界が……。」

「では、ファスナーをゆっくり降ろして……。」

「ちょっとだけじゃぞ～？　ってコラ！」

「シャオのストリップと聞いて！」

「誰がするかーーーッ！！

って、何を白地（あからさま）に舌打ちしとるんじゃ、このバカイトめがッ！／／／／／／

あ、コラ待てッ！　逃げるなッ！　待たんかい、このバカイトーーーッッッ！！！！！」

道中に電磁バリアを又一つ壊し、ドロシーの城……エスメラルダ城塞への道も開け、

一つ又ホッとした所で、さっさと先へ進んだ一行。

そして辿り着いた一行の眼前に現れたのは、

フォルミッドヘイムの中央に聳え立つ最も巨大な塔……バレリアネア塔、その威容だった。

「ここですね、バレリアネア塔……。」

「ああ……門がぶち壊されてるね。遅かったか……！」

「始めから、こちらは後手に回っている。ガタガタ言っても始まらないわ。」

「ドライな読みだけど、まあその通りなんだろうな、これが。」

「だからって、ここでノンビリしてるわけにもいかないでしょ？」

「全くだ。早いところ駆け上がって、骸骨キングを助けるとしようぜ。」

そう皆が意気込んでいざ塔に入ろうとした所、アクセルの様子が妙だった。

他の皆が先に行っている間に、ハーケンと零児がその場に残りアクセルに話し掛けた。

「……。」

「ん？　どうしたんだ？　アクセル。」

「……いや、どうも嫌な予感がするのさ。落ち着かない感じなんだな……これが。」

「……そうか。確かに中で何が起こっているか全く解らない状況だからな。

警戒するのに越した事は無いだろう。……行こうぜ、アクセル。」

「……ああ、行こうか。……この嫌な予感を確かめる為にも。」

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　バレリアネア塔

警戒しながらも勇んで入った一行を迎えたのは、

ガンド兄妹の内、長男のヴァナー・ガンドと長女ヘラ・ガンドだった。

「……また侵入者かい？」

「あ！　貴女は不死桜を襲った……ヘナさん！」

「……ヘラ、だよ。あん時の姫さんかい？　……随分仲間を増やしたもんだねぇ。」

「やはりここまで来てしまったか。アレディ・ナアシュ。」

「ガンド三兄弟……！　やはり、この塔は既に敵の手に落ちていましたか。」

そのアレディの言葉で何人か気付いた。そう言えば、後一人いない……と。

「あら？　一人少なくないかしら？」

「あの髪の毛を逆立てた、龍の人ですよね？」

「ああ、末弟のジョーム・ガンドな。

アイツは今、ヴィルキュアキントに泳いで向かってる真っ最中だよ。」

「およっ……！？　あ、あそこまでどんだけ距離があると思ってん

の！？」

「ん～、ま、大丈夫だろ。身体だけは丈夫だし、体力も有り余ってるからな。」

だが、ヴァナー達が何か言う前に、カイトがあっさりとバラしてしまった。

その余りの確信に満ちた言い方に、そして皆のそのあっさりとした信じ方に、

最早隠しても無駄だと諦めたが、何故自分達しか知らないその事を知っていたのか、

これは、問い質しておかねばなるまい。事と次第によっては……。

「……貴様、何故その事を知っている？」

「ん？　何だ、お前等。俺の事、ガグン坊やから聞いてないのか？」

「何……ッ！？　……その物言い……もしや、貴様が？」

「ウチの王様が言ってた、あの『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』だって？　こんな奴が？」

「……見た目で判断してはいかん、妹よ。奴からは、何か得体の知れない力を感じる。」

「……ホントかい？　あたいには何にも感じないんだけどなあ……。」

ヘラの何とも警戒心の足りない言葉とは裏腹に、長兄（ヴァナー）は誰よりも何よりも、

カイトに最大の警戒心を持って相対していた。……尤も、当のカイトは相変わらずだったが。

そこで、一旦話は区切りが付いたと思ったのか、改めてガンド兄妹に話し掛けた。

「……それで、アンタらはここで門番をやってるってわけかい？」

「悪いケド、そこを通して貰いたいのよネ。」

「そうはいかないよ。これはあたいらの仕事だからねえ。」

「……その通りだ。」

早くも戦闘になろうかと言う空気の中。

アレディが先程耳にした言葉の中で、気になる台詞を見付け問うてみた。

「……ヘラ殿、貴女は最初に『また侵入者か』と言っていました。……我々以外に、誰が？」

「あん、そう言えばそうね。アレディちゃん、お利口さんじゃない♪」

「ちぇっ、言ったっけ？　そんなこと。」

「貴女の言動は記録しています。確かに発言していました。」

「口は災いのモトだよん。叩かれてしまうがいいよ！

そのうちに、キュオンたちは……モゴモゴ……！？」

「お前が言うなし。取り敢えず、零児頼む。」「解った。」「はひぃ！！　は、早い！？」

危うく滑りそうになったキュオンの口を速攻で塞いだカイト。

其の後、零児（スパンキングマスター）にバトンタッチし、キュオンの啼き声と叩く音がＢＧＭに加わった。

その状態で、更に会話は続けられた。

「……あ、危なかったぞえ。」

「キュオン殿の罰に免じて……先に侵入したという者のこと、教えては頂けないでしょうか？」

「答える必要は無い。貴様らを排除し、追うだけだ。」

「ＯＫ、ガンド・ブラザーズ。だが、一つアンタ達は忘れてやしないかい？」

「……何？」

「こっちには、アンタらの行動は全てお見通しなカイトがいるんだぜ？」

「……！？　くっ……！」

「残念だったな。アンタ達の目論見も、既に全てカイトから聞いてるんでな。

……ヴェルトバオムを世界に広げさせはしないぜ。」

「……そこまで知っていたか。やはり、貴様らは早々に始末しなければいかぬようだな。」

「おっと。そう簡単にはやられてやれないぜ？」

「序でにアンタらに掛かっている賞金ってのも、戴いちまおうかね♪」

「賞金……そうらしいね。話は聞いてるよ……こいつからね。」

「まだお仲間さんがいらっしゃるんですの？」

「さあ、出番だよ！」

その言葉に誰もが訝しんだ。他に敵が……？　だが、現れた者を見て、多くの者が驚いた。

特に彼を知っている者程……彼の性格を知っているカイトを除いて。

「やれやれ。やっとオレの出番だな。身体が鈍（なま）ってしょうがない所だったんだ。」

「マークハンター……!?　なんで、あんたがアグラッドの連中と？」

「え？　あの……誰ですか？」

「艦長の知り合いだ。ヴァルナ・ストリートで会って以来でありますねんな。」

「チャラ太郎と同じ賞金稼ぎ……ということであったな？」

「って、ちょっと！　すぐ横に賞金首がおりますでしょ!?」

「こいつはあたいを追って、ノコノコやって来たのさ。

賞金よりも高い金額で雇うって言ったら、あっさり強力してくれたよ。」

「ったく、買収されるんじゃないよ。」

「オレの名はマークハンター。あんたらとは違って、柔軟なのさ。」

「それは、節操が無いと言うのでございます！」

「どっかの駄猫と同じレベルだな……って、だからおまーが言うなし。」

「……フッ、関係無いな。金さえ貰えりゃあ、誰だってお得意様さ。」

「ちっ……バウンティーハンターの風上にも置けないな。」

「ノット・バウンティーハンターっちゅう奴じゃのう……。」

「どうせ殺り合うんだ。ザコの一匹や二匹増えたところで関係無いわ。」

「……果たして、ザコで片付くかな？　この男、実力はある。

我が弟、ジョームの代わりは十分に務まると踏んでいるがな。」

「……成る程。戦うしか無いようですね。」

「では、始めよう。……マークハンター、いいな？」

「オレの名はマークハンター。用意は出来てる。いつだっていいぜ。……で？　いつやるんだ？」

「今からだよ！　アニキが始めようって言ったろ！？」「……。」

「……バウンティーハンターって、みんなあんなんなの？」

「心外だぜ。……ただ、気を付けろ。ブラザーウルフの言う通り、

実力はあるぜ？」

「フッ……。さて、一丁やるか。」

～オレの名はマークH．U．N．T．E．R～

「よい手駒を集めたものだな、アレディ・ナアシュ。」

「貴方方アグラッドヘイムに引けを取らぬ闘士達が集まりました。」

「そういうことさ。このエンドレス・フロンティアで好き勝手はさせないぜ？」

「さが、まだ負けたわけではない。」

「全く、ザマぁないな、あんたら。」

「いや、お前もだろう。」「あんたもやられただろ！」「……。」

敵味方双方でのツッコミも入り、尚且つヴァナーの沈黙が全てを物

語っていた。

「そんなことより！　さあ、話して貰おうかしら？　ここで何をしていたのか！」

「……アニキ、どうすんだい？」

「……時間だ。我々の役目は済んだ。後はロック様たちに任せ、ジョームからの連絡を待つ。

それにどの道、我々が話さずとも『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』が話すだろう。」

「あ、そっか。じゃ、あたいらが態々言う必要も無い、か。……悔しいけどね。」

「うむ……。だが、これぱかりは致し方あるまい。」

その長兄の言葉に渋々ながらも納得し、溜息を盛大に付いてようやっと諦めたヘラ。

「……分かったよ。じゃあマークハンター、ご苦労だったね。」

「おっと待ちな。約束通り金を貰おうか。」

「……ボコボコにされといて、どのツラ下げてそういうこと言うんだい？　あばよ。」

「何？　待ちやがれ！！」

だが、そのマークハンターの言葉を聞く事無くあっさりと袖にして、アグラッドヘイムへと帰還したガンド兄妹であった。

その場に残った微妙過ぎる空気は、何とも言い難いものであった。

「敵性体の反応をロストしました。」

「全く、ついてねえや。タダ働きになっちまったぜ。」

「あれで、どうして報酬が貰えると思ったんだ。」

「ＯＫ、アンラッキーハンター。何か知ってることを話してくれないか？

……どうも、カイトが気乗りじゃないみたいなんでな。」

「へ？　……あ。」

「ぐぅ～……すぅ～……くかぁ～……。」

ハーケンが親指を立て後ろに向けて指した。一同が目を向けたその先には、

座り込みながら壁に凭(よ)り掛かって鼾(いびき)を掻いているカイトの姿だった。

“……寝てるッ！？”

「……どうも、今の戦闘に飽きてたみたいでな。始まってすぐに寝てたぜ？」

「……では、先程のヴァナー殿への台詞は……。」

「勿論、半分ハッタリさ。どうせ、カイトのことだ。気分次第で話したり話さなかったりするだろうからな。」

「……それは……確かに。」

「だから、聞ける内に聞いておきたいのさ。で、マークハンター……どうなんだ？

アンタ、何か知ってることはあるかい？」

爆睡しているカイトに呆れながらも、視線をマークハンターに戻して改めて聞き直す一行。

「そうそう。例えば……ガンド三兄弟は、ここで何をしようとしてたのかしら？」

「オレの名はマークハンター。あんたらとは違って、ヤボな詮索なぞしないのさ。」

「いや、雇い主のことくらい聞いておけよ。」

「アンタ、分かってんのかい？　奴らは、この世界を自分達の苗床にする気なんだよ？」

「成る程な……確かにそいつは相当なワルだな。金も支払わないぐらいだしな。」

「やっぱり、結局そこかよ。歪みねぇな、さすがマークパンサー歪みねぇ。」

何時の間にか、唐突に起き出したカイトの第一声がそれだった。

皆の肩から力が抜けるのも道理である。

だが、その言葉の中にどうしても聞き入れられない台詞があり、

マークハンターはカイトに食って掛かった。……のだが。

「おい、そこのお前。オレの名はマークハンターだ。間違えるんじ

やねえ。」

「分かってるって。パークマンサーだろ？」

「オレの名はマークハンターだ！」

「分かった分かったって、そう怒鳴るなよ。マックンハンター。」

「俺の名は……マークハンターだッ！！」

「だから、さっきからそう言ってるだろ？　パックンハンター。

あれ？　いや、ソックスハンターだったっけ？　あ、いや、トレジャーハンターか。」

「……テメェ……！！！！！　オレの名は……！　マークハンターだッッ！！！」

「……ねえねえ。あれって、絶対ワザとだよね？」

「……そうね。間違い無く、楽しんでるわね。て言うか、起きた第一声がアレって……。」

「……いつまで遊んでるんだ、お前ら。」

「いや、だって、マーケティングハンターがずっといちゃもんつけ

て来るからさぁ。」

「だから、オレの名はマークハンターだっつってんだろうが！！！」

どうやら、絶対に訂正する気の無いカイトにマークハンター以外のみんなは諦め、

それを完全に無視して話を続けた。

「……ところで、マーク殿。先に入った侵入者と言うのは？」

「ああ　？！　……ああ、オレが武器を磨いていたら、横を通り抜けて行った奴のことか？」

「怖っ！　……って、通り抜けて行ったぁ！？　誰が！？」

「緑のベレー帽を被った兄ちゃんと……青いロボットだったな。」

「……！　おい、そいつらってまさか……！」

「Ｗ０３ピート・ペイン……そして、Ｗ１０アークゲインに間違い無いでございましょうですする。」

「あ、あの……侵入者を防ぐのがお仕事じゃなかったんですか？」

「その通りさ、お嬢ちゃん。侵入して来る奴は容赦しねえ。
だが、既に侵入している奴をどうするかは仕事料に含まれていなかったんでな。」

「いや、そこは融通利かせなよ！」「……そりゃアグラッドヘイムの連中も怒るでしょ。」

「ねーよ。」「ダメだこの人……早く何とかしないと。」

皆からの総ツッコミが入るも、梨の礫（つぶて）のマークハンター。
一通り話も終わると、何処かに行こうとするマークハンター。

「まあいいさ。次の仕事のアテもあるんだ。そっちに行くぜ。」

「フッ、悪名高いあんたをまだ雇おうなんて奴がいるんだな。顔を見てみたいぜ。」

「トレイデル・シュタットで、バウンティーハンターを募集してるのさ。
初代さすらいの賞金稼ぎ……ジョーン・モーゼス直々のアナウンスでだぜ。」

「ハッ！　どこのどいつだい？　そいつは。」

「……オヤジだｏｒｚ」

「……そう言えば、ハーケンの戦艦でおねだりされておりましたの。」

「な、何となく言っただけなのに、本当に実行したんですね。」

「全く……魔性の女ですこと。」

「……ぬしもハンドバッグとかねだってたじゃろ。」

「じゃあ、オレは行くぜ。まあ、死なない程度に精々頑張るんだな。」

「はい、死すつもりはありません。マーク殿も御気を付けて。」

「ああ、オレの名はマークハンター。気を付けて行くぜ。それから、そこのお前！

いいか？　二度とオレの名前を間違えるんじゃねえぞ！　俺の名はマークハンターだ！！！」

最後に立ち去る際に、カイトに態々指を指して迄、名乗って行ったマークハンター。

その後に残されたのは、微妙に疲れた雰囲気の漂う空気のみであった。

「……やはりどうにも……独特の疲れが残る男であるな。」

「面倒臭過ぎて疲れるってのも、何か新鮮だけどねえ。」

「……バカイトの所為で、カオス度が弥増(いやま)してるのが尚更応えるのう……。」

「私、あの方とは仲良く出来そうでございます♪」

「全く……面倒な奴だな、バイクマンサー。」

「……どうしてもマトモに言う気は無いんだな。」

「まあ、いいんじゃない？　カレの御陰で侵入者の正体も判ったことだしネ。」

「Ｗ０３……あのベレーの兄ちゃんか。……暫く見掛けなかったけどな。」

「何を企んでるのかは知らんが、厄介なイレギュラーには違いないぜ。

況(ま)してや、あいつはカイトを目の敵にしてたからな。」

「……彼の最後のあの台詞ですか。」

「《『全(オール)てを知(ノウレッジ)りし者』……カイト＝ヤガミ！　キサマだけは、絶対に許さん！！！》

……それがデータベースに残っている、Ｗ０３ピート・ペインの最後の台詞です。」

「そういやそうだったな。……ま、いいさ。取り敢えず、さっさと先に進もうぜ。」

「お～！　……って軽っ！？」

「……何れにせよ、進まねば何も解決しません。最上階へ急ぎましょう。」

ガンド兄妹……そして、マークハンターをも退け、先へと只管(ひたすら)進む一行。

彼等の向かう先に待ち受けているモノとは果たして……。

第拾玖話【ＶＩＯＬＥＮＴ　ＢＡＴＴＬＥ～往く先は風に訊け～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は、皆様御待ち兼ね。Ｗシリーズとの戦いです。

ちゃんと戦闘シーンもありますので、御楽しみに。

あ、因みに、私はマークハンターが大好きです。ええ、それはもう大好きです。

もう二号の事は許してあげて下さいｏｒｚ

それにしても、神夜のあの台詞がフラグだなんて、

当時のプレイヤーの内、果たして一体誰が気付いただろうか……。

とまぁ、それはさておき。実はこの話で、ムゲフロの世界の話が大凡（おおよそ）半分程になりました。

プロット上、後大体二十話前後。エピローグ含めて最終的に４０話前後で終わる予定です。

大体、ＯＧ外伝よりちょっと多目の話数。そんな感じです。

では、折り返し地点に来た事で、より一層気を引き締めつつ。

今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第弐拾話【ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ，ｓ～Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～】（前書き）

現時刻（０７：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４５８，３９１アクセス　ユニーク：２０４，０９４人
皆様、何時も御覧頂き、有難う御座います。

さて、今回はフォルミッドヘイム・中編です。ほぼ長々とした戦闘オンリーです。

そして皆様、御待ち兼ね。Ｗシリーズとの（私の小説では）ようやっとの初戦闘です。

ですが、今回は私自身少々遣り過ぎではないかと思う部分が御座いますので、

不快感を感じられる方もいらっしゃるかと思いますので、どうか御注意下さい。

どうしても耐え切れ無かった場合は、私に苦情なり何なり御一報下さい。

少しは気が晴れるのでは無いかと愚考致します。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第弐拾話【ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ，ｓ～Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～】

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　バレリアネア塔

ガンド兄妹とマークハンターを退け、毒の溜まり場の様な場所を抜け、

不気味な像が乱立している広間に一行は足を踏み入れた。

其処には、Ｗ１０アークゲインに何か細工をしているＷ０３の姿があった。

「……追い付いて来たか。」「……。」

「よう、久し振りだな、アーミーベレー。

（ん？　ピートの奴……今、アークゲインに何かをしていた？）」

「それと、確かアークゲイン……ですの。」

「Ｗ０３……だったな。今まで何処にいたんだい？」

「って言うか、ここで何をしてるの!?　ここはキュオンたちの家なんだから!」

「……やはり、ここまで来たか。自分がここにいる理由……貴様らに話す必要など無い。」

矢張り、相変わらずの一点張り。だが、そんな強情も彼の前では無意味であった。

「ああ、お前さんは話す必要は無いぞ、俺が話すから。」

「『全(オール)てを知りし者(ノウレッジ)』……カイト＝ヤガミ……!!!」

「……で、どんな理由なんだ?」

「W03は特に情報収集能力に長けていてな。

ここ……フォルミッドヘイムにアグラッドヘイムが攻め込んだと言う情報を何処かから仕入れ、

W05の身体を使っているガグン・ラウズも恐らく来るだろうと踏み、

コードPTPを使ってガグンを操る為に護衛&逃走用のW10を伴って来たのさ。」

「……ボスを抱き込むとか、とんだロマンじゃのう。」

「……ん？　……待てよ。
敵のボスを仲間にするつもりって事は、別に俺達が邪魔する必要は無いんじゃ……？」

そのアクセルの言葉に思いっ切り此見よがしに溜息を付き、
Ｗ０３の真の目的を……その恐るべき計画を皆に告げた。

「あのなぁ……。一体、何の為に態々Ｗ０３が、
ガグン坊やを仲間に引き入れようとしてると思ってるんだ？」

「それが分かれば……それこそ、態々あんたに聞きはしないさ。」

「……ったく。今、Ｗシリーズに課せられている任務は、Ｗシリーズに関する機密事項と、
それに関わったモノ全ての抹消だ。現段階で、それを最も簡単に成し遂げられる方法とは？
ヒントはＷ０５、そしてコードＰＴＰ、アグラッドヘイム、の三つだ。」

「……Ｗ０５のボディ……コードＰＴＰ……ッ！？　ま、まさか……ッッ！！？」

カイトからヒントを与えられたハーケンは、呟きながら考えた。

だが、考えれば考える程最悪な答えしか出て来ない。

そして、ハーケンの顔色が悪化するたびに、ニヤニヤが増していくカイトの嫌らしい笑顔。

ようやっと答えに辿り着いた様子を見せるハーケンに、カイトが到頭答えを告げたのだった。

「そう、そのマサカ。Ｗ０５にコードＰＴＰで命じさせ、アグラッドヘイムそのものを、

ここエンドレス・フロンティアに墜とし、諸共に消滅・抹消させるのが、奴の目的だ。」

「……バカな……ッ！！！」

「……な、なんちゅうワルじゃ……！　そこまでやるのかの！？」

「オマケに、それでも尚全て滅ぼせなかった場合は、それを切欠として戦争を誘発させて、

その混乱に乗じて全て滅ぼせばいい。な？　シナリオとしては、しっかりしてるだろ？」

「……アンタ、そんな事を考えているのか……本当に……ッ！？」

カイトからの言葉を受け、声を荒げたハーケンの問いに、

今迄黙ってカイトを睨み続けていたＷ０３が、観念したかの様にその重い口をようやっと開いた。

「……そう、その通りだ。Ｗ０５には、コードＰＴＰへの耐性が未だ無い事は既に調査済みだ。

ならば、『全て(オール)を知りし者(ノウレッジ)』に先んじて、Ｗ０５を支配下に置けば全ての事は成る。」

「まぁ、そんな小細工幾らしたって俺には全く以て無意味だけどな。」

「……では、試してみよう。

コードＰＴＰ……プレイ・ザ・パペット発動。Ｗ０７、自分の指揮下に入れ。

……最大出力で、速やかにコードＡＴＡを発動せよ。自分とＷ１０のことは気にするな。」

突然、そんな命令を出したＷ０３。誰もが驚き慌てふためいた。

……以前、カイトが施したプロテクトの事もすっかり忘れて。

「にゃ、にゃんとっ！」「い、行き成りなこと極まりないです！」

「これは……特殊な周波数のハッキングプログラムか？　厄介な……。」

「アシェンたち、対Ｗシリーズ専用のものです。私たちには影響はありませんが……。」

「だ、ダメです！　アシェンさん！」

「そりゃダメでしょ。ＡＴＡなんて発動したら、みんなぶっ飛んじゃうじゃん？

て言うか、カイトが凍結しちゃったしさ～。今、使えないんだよね～♪」

「その通りである！　だから……だから……ぁ？」

「……お前等。俺が、アシェン達にプロテクト施したの、すっかり忘れてただろ？」

“――――あ。”

「“――――あ。”……じゃねーよ……ったく。

伊達や酔狂で、アイツに睨まれてる訳じゃねーんだっつーの。」

「……正に、カイト様々だったって訳か。こればっかりは、本当に感謝しないとな。」

「ウィッス！　あんがとさん！　ヘタレキング！」「おう♪」「……感謝……なのか？」

そんな漫才の中。余り落胆した様子も見せないＷ０３。どうやら、駄目で元々でやった様だ。

結果が判明し、方法が限られたＷ０３は即座に、次に最も可能性の高い方法を模索した。

だが、その言葉……そして、その結果だけは……絶対に受け容れられない。

「……やはり、無理だったか。……ならば、直接戦闘にて貴様を破壊するのみだ……Ｗ０７。

最悪、貴様の側でＷ１０にコードＡＴＡを発動させれば、諸共に何人か抹殺出来るだろう。

これ以上、我々の邪魔はさせない。……全員、この場で覚悟して貰う。」

「……いい加減にしろよ。

俺のファミリーに手を出そうとした落とし前、安く上がると思うんじゃねえぞ……！

ピート・ペイン……ッ！！」

第貳拾話【ＤＡＲＫ（ダーク）　ＫＮＩＧＨＴ（ナイツ），ｓ～Ｒｅｖｅｎｇｅｒ（リヴェンジャー）～】

side：W03　ピート・ペイン戦？

「W07……そして、『全てを知りし者（オール・ノウレッジ）』……！　貴様らを排除する！」

「む……！」「させるかよ……ッ！！」

「あ？　……おいおい、この俺と闘り合おうってか？　そいつは無謀にも程があるだろ。」

「好きにするといい。結果は変わらん！　ロストボーイ・シューター！」

アシェンとカイトを態々指名して来たW03。

だが、それに応じるアシェン&ハーケンと、遣る気も無く、全く応じないカイトに分かれた。

しかし、そんなものはお構いなしとばかりに、全員に攻撃を仕掛けて来た。……なら、聞くなよ。

「わわわっ!?　キュオンのブロンテ・クラフトが何か変だよぅ!?」

「……？　…ファントム!?　どうした?!」

「む……？　…！　艦長！　これは、音波によるものと思われまっする。

我々では近付いた瞬間、粉々にされ兼ねませんでおじゃりまする。」

「ちっ……厄介だな。」

「なら、使わせないようにすればいいだけの話さね。シュナーベル・セイバーを喰らいなっ！」

「むっ！？　カリング・ブレード！　カリング・シューター！」

「何っ！？　チッ……！　面倒な……！！」

どうやら機械にとっては可成り有害な電波が、

Ｗ０３の両腕に着いた機械から発せられている様だ。

その為、アシェンやファントムは愚か、キュオンも近付いては戦えないらしい。

ならば使わせなければいいと、ヘンネがワープで一瞬にして近付いて斬り付けたのだが、

それを予測していたのか……。

Ｗ０３が自身のブレードで受け止め、更にその刃を何枚も射出して来た。

どうやら、自動生成されている様で、制限無く何枚も連続射出し、近付く事が逆に出来無い。

「来ないのならば、こちらから行くぞ。フェアリー・ガスト！　斬り込む！」

「マズイ……！　散れっ！」

「逃がすと思うか！　フェアリー・ガスト最大出力！　カリング・シューター全方位射出！」

「わきゃっ！」「あうっ！」「にゃうん！」「きゃあっ！」「ぐっ……！」「ぅあっ……！」

Ｗ０３が自身の両腕を前面に出し、特攻を仕掛けて来た。

その音波には余り近付くと、生身にも大いに影響する事は明らかであった為、

急いでその場……Ｗ０３から離れたのだが、最大出力によって範囲が広まった音波によって、

此の場に居た全員の動きが鈍くなり、飛ばされた刃に其の身を彼方此方斬り刻まれていた。

「次は貴様だ！　ふっ！　はっ！　ロストボーイ・スローター！　デッド・エンド！！」

「おっとと……で？　もう終わりかい？」

「な……っ！？　バカな……！」

其の後、その攻撃から唯一逃れたカイトを目敏く見付け、自身の最大威力を以て攻撃した。

……だが、当然カイトにその程度の攻撃で通じるワケも無く、平然としていた。

「取り敢えず……お前邪魔。」

「ぬっ！？　ぐ……ッ！！」

「……おい、お前達。一体何時迄其処で寝っ転がってんだ？　さっさと起きろよな。」

「くっ……済まん、カイト。アシェン、神夜、カッツェ、ヘンネ、キュオン。無事か？」

「……損傷軽微。問題はナッスィングなり。」「だ、大丈夫ですっ。」

「こっちも平気だ……！」「ああ……いつでもいけるよ。」「キュオンだってへっちゃらだよ！」

「……仕方ない。俺も少しは手伝うか。

ファースト・イグニッション　ウインド　鎧化（アムド）」

カイトに吹き飛ばされ、床に転がるＷ０３。

彼が立ち上がる迄の合間にハーケン達に声を掛け、態勢を整えさせたカイト。

不甲斐無いと思ったのか。カイトは一つ溜息を付き、自身も翠の鎧に着替え、

Ｗ０３とハーケン達の前に立ち塞がり、加勢するのだった。

ここに今、再度ＧＯＮＧの鐘が鳴り響いた。

ｓｉｄｅ：Ｗ１０　アークゲイン戦？

「紺碧の機兵……再び相見えるとは……。修練の成果を試すには、丁度良い相手です！」

「全く……これだから、戦闘種族は……。私も一応援護してあげない事も無くてよ？」

「……何か、こいつは特に妙に気に掛かるんだよな、これが。」

「アクセルの記憶を取り戻す切欠になるかもしれませんの。がんばりますの！」

「よいよい。わらわも滾(たぎ)って来ておるぞよ？　どうやら、闇騎士もその気であるようであるな。」

ナハト・アーベント・フェイクライドもそれぞれ準備も配置も完了した様だ。

それを只眺めていただけのアークゲインも、ようやっとエンジンが掛かったのか、

ファイティングポーズを構え、唸りを上げて襲い掛かって来た。

「……！！」

「来ました……！　むぅん……！　覇皇剛衝殻(はおうごうしょうかく)！！　機神連拳(きしんれんけん)！

機神剛鉄甲（きしんごうてっこう）！！」

「……！！！」

「ぬっ！？　ぐあっ！！」

アークゲインが一番近くにいたアレディに、最初に仕掛けて来た。

対するアレディも早々に待ち構えて居り、舞朱雀（まいすざく）・断（だん）にはその勢いを潰す為に剛衝殻を。

続けて来た白虎咬（びゃっここう）・連（れん）×２には、剛鉄甲・連拳にてそれぞれ拳を打ち付け合った。

だが、アレディの隙を見付け縫って来た再度の舞朱雀・断に、斬り飛ばされてしまった。

「アレディ！？　このっ……！　シルキィ・レース！！　フェイクもっ！」

「……！」「……！？」

「わらわも援護するぞよ！　邪鬼銃王！　弾鎖（ダンサー）である！」

「こっちも負けてらんないぜ！　アルフィミィちゃん！　いけぇっ！　ナハトッ！！」

「はいですの♪　アーベントもご一緒ですの！」「……！」「

……！！」

それを見たネージュが、アレディの援護に回りフェイクライドと共に斬撃で攪乱（かくらん）した。

錫華の援護射撃を受け、ネージュの攻撃に追随するアクセルとアルフィミィ。

そしてそれは、ナハト&アーベントvsアークゲインの因縁の対決でもあった。

「……！　……！！？」

「そう簡単にはいかないぜ？　……舞朱雀ッ！」「斬りますの。えいっ、えいっ♪」

「バッサリだ！　続けて白虎咬！　アルフィミィちゃん、合わせてくれ！」「カミカミですの♪」

アクセル達が向かって来た事を認識したアークゲインは、急いで態勢を整えようとしたが、

そうは問屋が卸さないアクセル&アルフィミィ。

ミズチ・ブレードで低姿勢から右に左にとアルフィミィ共々動いて何度も斬り付け返し、

休まずに、連続して打ち付けてアルフィミィとの合気弾で空高く打ち上げた。

「うまぁーいっ！　ナハトッ！！」「……！」

「これも纏めて喰らうがよい。邪鬼銃・封印牙（フィンガー）！！」

そこを更に続けて、ナハトのクレイモヤとバンカーで何度も打ち付けた。

そのナハトの追撃と同時に錫華の邪鬼銃王とで、ダブルで壁際に押し込んだ。

「ナイス、ナハト！　錫華ちゃん！　でも、まだだぜ？　水流爪牙！」「やっつけまくりますの♪」

「もいっちょだ！　地斬疾空……烈火刃！！」「えいっ、やあっ……黄泉路ですの！」

「……！！　……！」

「…な……ッ！？　うわっ！　ぐぅ……っ！！」「きゃぁっ……！」

近付いて来たアクセルとアルフィミィの連続攻撃の僅かな合間を見付け、

そこを的確に突き、自身の連続攻撃……麒麟（きりん）・暁（あかつき）で反撃して来、その勢いの儘に、ようやっと壁際からのリンチから抜け出せたアークゲインであった……が。

「アクセル殿！　アルフィミィ殿！　くっ……！　ネージュ姫殿！」
「ええ！」

「わらわが隙を作るぞえ！　邪鬼銃・封印破（フィーバー）！　続けて冥土麗（メドレー）である！」

吹き飛ばされた二人を助ける爲に、アレディとネージュが直ぐ様飛び出そうとした。

だが、その前に突進して来るアークゲインの勢いを削（そ）ぐ為に、邪鬼銃王の連続ガトリング&ボンバー射撃で、僅かの間防御姿勢を取らせた。

「今よ！　ベノム・コーム！」「行きますッ！　覇皇空円脚（はおうくうえんきゃく）！！」

「まだ！　レッドホット・パンプス！！　……アレディ！」

「その隙……貰ったぁッ！！　覇皇……轟雷脚（ごうらいきゃく）！！！」

そのアークゲインの死角を突いて爆風の横から二人で挟撃し、

更に驚いて怯んで防御し直した隙を狙い、ネージュの靴から噴き出した炎で連続して蹴り上げ、

浮き上がり落ちて来たアークゲインを、アレディが誰もいない先へと蹴り飛ばした。

「御無事ですか！　アクセル殿！　アルフィミィ殿！」

「あ、ああ……何とか、おれは大丈夫だ。アルフィミィちゃんは？」

「私も……掠り傷ぐらいですの。問題ナッシングですの。」

「よいよい。頑丈なのは何よりの取り柄であるぞよ。」

「そうね……。取り敢えずは、仕切り直しってところかしら、ね。」

「はい。……これぐらいで、あの紺碧の機兵が倒れるとは思えません。」

「……。」「……。」「……。」

「……。」

蹴り飛ばした直後、二人の元へ駆け寄るアレディとネージュ、そして錫華。

何とか、二人共致命傷は免れていた様で、ホッと一安堵はした。

だが、ネージュとアレディの台詞の様に。こちらの機兵達が未だ駆動音を鎮めない様に。

彼の機兵（アークゲイン）は、再びゆっくりとその巨躯を立ち上がらせ、アクセル達に対峙した。

こちらでも、Ｗ０３同様、第二ラウンド開始のＧＯＮＧが響き渡った。

ｓｉｄｅ：雑魚（ＷＲ・ゴールド重装型）戦

又一方。こちらは、Ｗ０３が何処からともなく呼び出して来た敵の増援に対処していた。

対処……していた……筈、なのだが。

「チッ……。こんなザコ共が相手だとはね。興醒めにも程があるわ。」

「Ｔ－ｅｌｏｓ、油断は禁物です。」

「大丈夫です！　Ｔ－ｅｌｏｓさんとＫＯＳ－ＭＯＳさんの援護、モモ頑張ります！」

「フン……好きにすればいいわ。」

「あらあら、テロテロもすっかり丸くなっちゃったわ、ね♪」

「……サヤ。貴様、今直ぐ絞り殺されたいのか？」

「あらやだ、怖い。坊や～、助けて～♪」

「知るか。……それと、坊やと呼ぶなといつも言っているだろう、沙夜。」

「そうじゃ、そうじゃ！　ちと馴れ馴れしいぞ、沙夜！　敵じゃぞ、わしらは！」

「それこそ、今更だと思いますけどね、ワタクシは。」

「あ～……もうメンドクサイから、勝手に始めちゃってもいいんだ

ろ？」

「そうですとも！　早いトコ倒して、金目の物を引っ剥がしちゃいましょう！！♪」

とまぁ、いつものグダグダな会話が繰り広げられていたりする。

……但し。敵の攻撃を避けながら、尚且つ敵に適当に攻撃しながらではあったが。

既に会話を初めてから、五体程倒している。だが、更に後三体程未だ残っている様だ。

「フン……好い加減、こいつらも目障りになって来たわね。」

「あん、それには同感、ね。じゃ、手っ取り早く殺っちゃいましょうか♪」

「それなら、まずはワタクシから。纏めて爆破いたしますわ！　ウィッチ・ボンバー！！」

「チッ……分かれたか。だが、この方が却って好都合だ。

こっちの一体は俺達がやる！　ＫＯＳ－ＭＯＳ！　そっちの二体は任せた！」

「了解です、レイジ。Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．、準備はいいですか？」

「はいです！　モモ、いつでも準備オッケーです！」

ドロシーの爆弾で、一体と二体に分かれた敵。

ならばこちらも、と二手に分かれて迎撃する事にした。

一体の方には、零児・小牟・沙夜・琥魔が。

二体の方には、ＫＯＳ－ＭＯＳ・Ｔ－ｅｌｏｓ・Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．・ドロシー・アンが。

ｓｉｄｅ：雑魚Ａ

「あん、それじゃ、後腐れ無くばっさりと逝きましょうか、ね♪　せぇいっ！」

「お得意様の沙夜お姉様の援護をさせて貰いま～す♪　にゃっにゃっ、にゃにゃっ！！」

「俺達も負けていられないぞ、小牟。」

「勿論じゃとも！　行くぞ、零児！」

沙夜が先ず先に敵に突撃し、銃弾を避けながら銃口を纏めて斬り落とした。

其の後、直ぐ後を追って来た琥魔が、腕を両方ともこれまたばっさりと綺麗に斬り落としていた。

その事実に狼狽えた敵の目前には、既に零児と小牟が迫って来ていた。

「行くぞ、小牟！　遅れたら尻叩きだ！」

「いやん♪　合点じゃ、零児！　シャオムゥゥゥゥゥゥェィィイイイイブゥゥ！！！！！」

「柊樹（ハリウッド）！　火燐（かりん）！　地禮（ちらい）！　金（ゴールド）！　小牟！！」

「シャオムゥゥゥざぁぁぁぁあああああんん！！！！！　この瞬間が気持ち良いんじゃよ♪」

そして、森羅の……零児と小牟の奥義・『真羅万象（しんらばんしょう）』にて、雑魚Ａは滅せられた。

ｓｉｄｅ：雑魚Ｂ＆ａｍｐ；Ｃ

「今度こそ、逃がしませんわよ！　モモ！」

「はいです！　また一緒です！」

「ポッピー・タイフーン！」「ウインド・ミキサーです！」

「おっと、そう簡単に落としちゃやらないよ？　バブル・カノン・アラウンド！」

「そこです！　爆発。イナズマ・ブロー。Ｘ（エックス）・ＢＵＳＴＥＲ（バスター）発射！　Ｔ－ｅｌｏｓ。」

今度こそ当ててやる！　そう意気込んだドロシーに釣られて気合いが入るＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．。

その勢いと気合いの儘、二人で一緒に、一人一体ずつ空へと竜巻で打ち上げた。

其処から落ちて来る所を、アンがバブル・カノンで撃ち回り捲った。

その二体がごっつんこした瞬間、ＫＯＳ－ＭＯＳが二体の真ん中を狙って攻撃を仕掛けた。

纏めてＸ・ＢＵＳＴＥＲで吹き飛ばされた先には、ＫＯＳ－ＭＯＳが叫んだ通りＴ－ｅｌｏｓが待ち構えていた。

「言われる迄も無い、騒ぐなＫＯＳ－ＭＯＳ。目障りな……すぐラクにしてあげるよ。

Ｕ（ウルティム）・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ（ネリタース）！！　ヒャーッハッハッハッ！！！

……なんだ、もう終わりか。……つまらん。」

憐れな敵二体は、Ｔ－ｅｌｏｓの相転移砲……Ｕ・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳによって消滅させられたのであった。

そして、どうやらこれにて敵の増援も完全に打ち止めの様だ。

続けて、Ｗシリーズへの支援に行こうと思い、足と目を向けた零児達は、動きを止めていた。

何故なら、既にその時には戦闘は終了していたからである。

ｓｉｄｅ：Ｗ１０　アークゲイン戦？

少し前……凡(おお)そ雑魚敵が分かれたばかりの頃に時は戻る。

ゆらりと立ち上がり、何事も無かったかの様にファイティングポーズを取るアークゲイン。

しかし、何カ所か紫電を上げている箇所もあり、無傷でいるという訳では無い様だ。

「……？　……！？　これは……！」

「ちょ、ちょっと、シャレになってないわよ！？」

「チッ……こいつはマズイぜ……！」

「先に撃って気をそらしますの！」

その様子を伺っていると、アークゲインが何か大きく力を溜めるかの様に、身体を後ろに引いた。

其の後に感じたとても大きな力に、何かヤバイものが来る……！と察知したアレディ達は、

先んじて攻撃しようと、全員の遠距離攻撃をアークゲインよりも尚早く撃った。

「同感である！　邪鬼銃王！　全砲門解放！　魔波邪（マハージャ）！！」

「機神乱獣撃（きしんらんじゅうげき）！！」「ハンターズ・マーシィ！　最大出力よ！！」

「烈火刃！　玄武剛弾もオマケだ！　ナハト！　撃ち尽くせぇっ！！」「……！」

「ヨミジですの！　アーベント、行きますの！」「……！！」

その危険察知力が功を奏したのか。アークゲインの乱黄龍（みだれこうりゅう）とほぼ同時に撃ち合い、

全員分の攻撃と、ほぼ同威力だったそれは打ち消す事が出来た。

しかし、こんなものを何度もやられては叶わない。

そう即座に判断したアクセル達は、アークゲインに猛攻を仕掛けた。

「あんなの、一発だって喰らえないぜ！？」

「ならば、撃たせないまでです！　ネージュ姫殿！　錫華姫殿！　援護を！」

「宜しくてよ！」「よいよい、わらわに任せるがよい。邪鬼銃王！　梵破（ボンバー）である！」

「これもおくらいなさい！　ベノム・カーマイン！！」

「……！　その隙、貰ったぁッ！　覇皇両断刀（はおうりょうだんとう）！！　はぁぁぁっ！！！」

錫華とネージュの爆破援護によって、姿を隠せたアレディがアークゲインの死角から接近し、

アーベントの腕を切り落とした様に、アークゲインの腕も狙ったのだが、

既（すんで）の所で躱（かわ）されてしまった。

……だが、それすらも計算の内だとは、アークゲインには解らなかったのだろう。

「イイタイミングだぜ、アレディ！　烈火刃！　噛み付くぜ！」「せーの、せっ！」

「喰らえ！　風刃閃だ！！」「ええいっ。」「てりゃぁっ！！」「アーベント……！」

「……！」「……！　……！！？」

爆煙とアレディの攻撃から逃れたアークゲインの逃げた先には、

待ち構えていたアクセルとアルフィミィがいた。そして、二人に打ち付けられ打ち上げられ、

終いにはアーベントによる砲撃の雨霰（あめあられ）が降って来た。

「おわっと!?　な、な、何だ、一体!?」

「あれは……アシェン殿の腕?!」

「ええっ!?　ど、どんだけ伸びてるのよ!?」

……だが、更に追撃しようとしたアクセル達の目の前に、

唐突に伸びに伸びて来たアシェンの腕が現れ、

アークゲインを捕まえ、自分の方へと引っ張って行った。

その後、とても鈍い音がしたと思ったら、アークゲインが腕を負傷して飛んで戻って来た。

何が起こったのか、今は分からないがこの隙を逃す訳にはいかない!

「……!?　アクセル殿!　アルフィミィ殿!　今です!!」

「…!?　よ、よ～し!　良く分かんないけど、行くぜアルフィミィちゃん!」

「ラジャー、了解ですの!　先ずはヨミジですの!」

「よし！　斬って斬って斬り捲るぜ！　アルフィミィちゃん！」

「いい子、いい子とグリグリいたしますの♪　よいしょ、よいしょ♪　えいっ♪」

「こいつで、締めだ……！　でぃぃぃぃぃぃぃやッッッ！！！！！」

「……！！！！！」

こうして、謎の攻撃も相俟（あいま）って、Ｗ１０は戦闘行動は不可能になり、機能を停止させた。

では、果たしてその時、アシェン達は何をしていたのか……又少し時間を遡って見てみよう。

ｓｉｄｅ：Ｗ０３　ピート・ペイン戦？

翠の鎧を着込んだカイトは、誰にも解る程の力とプレッシャーを伴って、皆の眼前に立っていた。

いや、正確には皆にもようやっと理解出来る程度に迄力を抑えた……と言う方が正しいのだが、

今の彼等には、その恐るべき事実を知る必要は無いであろう。

その皆から、改めて恐れられているカイトが、

振り向きもせずに自分の後ろにいるハーケン達に向けて告げた。

「……おい、何を呆けているんだ？　早速仕掛けるぞ？　俺は基本的に補助に回るからな。

余り、俺に期待はするなよ？」

「あ、ああ、分かってる。済まないが頼む。」

「了解した。行くぞ、Ｗ０３。当方に迎撃の用意有り。覚悟完了。貴様は、覚悟が出来ているか？」

「……何を戯れ言を。口だけのつもりならば、こちらから行くぞ……！」

「……何を勘違いしているかは知らんがな。……既に、俺はお前に攻撃し終わってるぞ？」

「――――何？　……！？　ぐ……ぐ…は……っ……！？！？」

“な（ええ）っ！？”

誰もが驚愕した。……それはそうだ。

何せ、今、カイトと話していただけの彼が、唐突に腹を抑え苦しみ出したのだから。

一体何時、どうやって、彼に攻撃したと言うのだ？　全く以て誰にも見えなかった、その攻撃。

だが、一番驚いているのは他ならぬ本人だろう。何せ、触れられた感覚すら無かったのだから。

「……ば、バカな……！　一体、何時の間に……？」

「お前が話している間に、だ。

そんな事よりも、折角俺が攻撃のチャンスを作ってやったと言うのに、何を呆けている？」

「い、いや……幾らなんでも、あれにはすぐには対応し難い……。」

「……全く、注文の多過ぎる奴等だな。なら、今度は補助に徹するから、さっさと行って来い。」

「……ああ、分かった。みんな、行くぞ！」

その掛け声で、ようやっとみんなの意識も戦闘に向いた様だ。

そして……これから、ハーケン達の反撃が始まろうとしていた。

「先ずは、あの音波が邪魔なのだろう？

ならば、俺が相殺しているから、さっさとケリを付けて来い。

あんまり長引く様ならば、俺が直接ぶちのめすからな。」

「……全く、戦闘となると厳しいな、アンタは。まぁ、いいさ。頼もしいことには変わりない。」

カイトがフェアリー・ガストから発せられる超音波を、どんな方法かは判らないが、

しっかり無効化している為、アシェンにファントムを始めキュオンも戦える様になった様だ。

「はい！　じゃ、キュオンちゃん、援護お願い！」「ファントムも頼むぜ？」

「りょう～かいっ♪　ブロンテ・クラフトが使えるなら、何でもしちゃうよ～ん♪

ブロンテ・クラフト、最大出力！！　いっけぇ～！！」「……！！」

「参りますっ！　如来の鉢！　龍顎門（りゅうあぎと）の珠（たま）！！」

「くぅっ……！　ぬぐっ！？　抜かった……！」

早速、キュオンとファントムが砲撃を撃ち神夜を援護し、

神夜を始めとして皆でＷ０３に襲い掛かった。

月燐（がちりん）の渦に巻き込まれたＷ０３は、まさか無効化されるとは思っていなかった様で、

想定外の事に一瞬戸惑い、その隙を突かれて諸に攻撃を浴びてしまった様だ。

「よし、反撃開始といくよ！　フェーダー・レイッ！！」

「こいつも貰ってけ！　ジャック・ポット！！」

「ぬ……ぐっ……！　くそっ……！」

「あら、その隙も戴きよ♪　ラウンド・エイティ！！　アシェン！」

「了解、副長。斬り刻まれろ！　スラッシュ・リッパー！！」

「ぬぐぁぁっ！！？　Ｗ０７……！　キサマ……！！」

ヘンネ、ハーケン、カッツェ、アシェンの連続攻撃には、流石に為す術が無いらしく、

必死に防御して耐えているＷ０３。

アシェンに恨み節を向けるが、そんな事で攻撃の手を緩める気は全く無い。

「……今だ！　コード・アンフィスバエナ！！　うんにゅぅぅぅ～～～～～……！！！

つっかま～えたっ♪　よいっしょっ！　ゴッチ～～～ン！！」

「ぬ……ぅぉお……！　ぅぉぉぉあああああ！？！？」「……

……！」

「……うわぁ。」「アークゲイン諸共……。」「あれ……いっ

たそ～……。」

「……だ、大丈夫なんでしょうか？　あれ？」「……ま、同情はしないがな。」

そう。実は、アシェンの腕が現れた理由はこれだったのだ。

コード・アンフィスバエナ。

遠心力を利用して勢い良く両腕で捕まえた者達を、ゴッツンコさせる見てる方が痛い技である。

それが終わった後、アシェンはブン！　と両腕を勢い良く振り、アークゲインとＷ０３を自身の両腕からさっさと振り落とした。

しかし、それでも尚未だ戦意も戦闘能力も然程衰えてはいないＷ０３。

その様子に更に警戒し、追撃しようとしたハーケン達に待ったを掛けた者が居る。

……痺れを切らしたカイトであった。

「……お前等、遅い。遅過ぎる。何をこんな超絶雑魚風情に時間掛かってやがんだよ。」

「い、いや……そうは言うがな、カイト。」

「……もういい。俺がさっさと片付ける。前にも言っただろう？

ガグン坊やとエイゼル坊やが、俺を待ってるんだ。こんな所で時間を喰ってる暇は無い。」

「……キサマ……！！　言わせておけば……！」

「……貴様も少し、調教してやらねばならんしな。

先ずは、俺と貴様の実力差を思い知って貰うとしよう。」

そう言うと、カイトは自身の爪先を何度もカッ、カッ、と地面に打ち付けた。

そして……ここからハーケン達は、一瞬も瞬きする事無く、カイトを見続けていた。

「この鎧は、ファーストの中でも二番目に速い……つまり、一番速いものは他にあるのだが。」

「……それがどうしたと言うのだ……！」

「だがこの鎧は、実はな。色々と利点が多くてな。特に、こういう能力とは相性が良いんだ。

モード：アルター……ラディカル・グッドスピード。」

「……む？　鎧の上に、更に走甲を装着したのか？　……それがどうした？」

「ん～……こういう事さ。ヒール・アンド・トゥー。」

「な！？　ぐはっ！！」

流線型でありながら、鋭いフォルムの足装甲を着けたカイトは、更にスピードを増し、

目に見えぬ……いや、目に映らぬ速度でＷ０３を蹴り飛ばした。

誰にも一体何が起こったのか判らなかった。

唯一判ったのは、カイトが足をＷ０３に向けた姿勢で固まっている為、

彼を蹴ったのだと言う事が漠然と理解出来た、と言うだけ。

どう蹴ったか。何回蹴ったか。そう言う事は全く、何一つとして理解出来無かった。

「……ば、バカな……！　な、何だ、今のは?!　先程の攻撃と言い……貴様、一体……!?」

「……だから、何度も言っただろう？　俺は……救世主（メシア）……だと。」

「……くっ！　だが、これならばそう簡単には抜けられまい！

フェアリー・ガスト！　最大出力で超高音波、放出。」

「……愚かな。無駄だと言う事が……まぁ、分かってたら抑（そもそ）もしてない、か。憐れな。」

「……な……に……？」

ハーケン達が思わず耳を押さえて蹲（うずくま）る様な状態の中、

カイトは平然とＷ０３の元へと歩いて来ている。

全く以て、自分の理解が追い付かない。何だ……何なんだ、コイツは!!

こんな存在……データには……否。例えデータ上であろうとも、あってはいけない……！

しかし……そんなＷ０３の思いも、残念ながらカイトの前では儚く散る運命にあった。

「さて……では、そろそろ真面目に本気で行くとするか。……ふっ。」

「!?　ど、何処へ消え……！　ぐはっ！　どこかr……うぐぁっ!?」

「どうした?　未だこの程度は序の口だ。まだまだこれから更に更にスピードをあげるぞ?」

「……バカな……！　こ、これ以上……だと……!?」

「ほらほらほらほら……！　そらそらそらそらそらそらそら!!」

「グッ…ぁぁっ！　……ぐ…ぐぐっ……ぐぁぁぁぁぁあああああ!?!?!?!?」

「足りない。足りない足りない！　余りにも、貴様には足り無さ過ぎる!!!!

情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ……そして、何よりも……!!

速さが足りない！

！！！！」

「ぐっはぁぁぁあああああ！！！！！」

姿が完全に消え、只言葉のみが谺（こだま）する此の場。最後の叫びと同時に現れたカイト。

そして、それと同時に何故か遙か上空へと吹き飛ばされたＷ０３。

だが、未だ界渡の攻撃は終わった訳では無かった。

「まだだ。未だ終わりでは無い。……言った筈だ……これは『調教』だと。

アルター解除。アルター発動：シェルブリット。」

そうカイトが言うと、足の装甲が解除され、それと同時に今度は右腕に装甲が加された。

後ろに羽が三枚付いている、黄色い装甲。

それが何を意味しているか……解る者は、今此の場には一人も居なかった。

「さあ……！　何処迄耐えられるのか……見物だな。最後迄耐えて魅せろよ……？」

「ぐ……はぁっ……はぁっ……な、何を……する……つ、つも、り……だ……？」

「そんなもの、決まっているだろう？

どうも貴様は、トコトンその身体に刻み込まなければ理解出来無い様だからな。

イイ機会だ……少し、その貧弱な身体に教えてやる。物事の道理と言うモノを……な。

先ずは、一発目。衝撃のぉぉぉ……ファーストブリット！！」

「……ッッッ！！？　ぐっっはぁぁぁ……！！！！！」

カイトの死刑宣告に、誰もが顔面蒼白になった。同情などと言うレベルでは無い。

もう止めてくれ。そう懇願する程の声無き声で、カイトを見詰めた。

……しかし、カイトは解っているのか、いないのか。全く止める気は無い様だ。

そう皆が思った瞬間、カイトは自身の右手に握り拳を作ると同時に背中の羽根を一つ消費した。

その刹那、Ｗ０３の居た所には、カイトが拳を振り抜いて止まって居り、

肝心のＷ０３は、遙か先の壁に激突し、身体が完全に埋まっていた。

「どうした？　もう終わりか？」

「ぅ……ぁ……か、かはっ……はぁ、はぁ……は……ぁ……っ……。」

「何だ、未だ生きているじゃ無いか。ほら、続きだ。」

そう言ってカイトは、息も絶え絶えなＷ０３を壁の中から引き剥がし、

態々体力も含めて怪我を全回復させ、空へと放り投げた。

……未だ、彼の意識は混濁していると言うのに。

「次だ。撃滅のぉお……セカンドッ……ブリットォォォッッ！！」

「ぐっ……ハァーーーーッッッッ！？！？」

更に空高く打ち上げる様に、真下から殴り付けたカイト。

天井擦れ擦れ迄上がった所で、何時の間にか居たその場に居たカイトが受け止めた。

そして……。

「良かったな……これで、終いだぞ？」

「ぁ……ぁ……は……ぁ……っ……か……ふ……ぁ……。」

「じゃあな。輝け……もっと、もっとだ……！　もっともっと

……輝けぇぇぇ！！！！！

抹殺のォォォォォ……！！　ラストォォォッッ！！！

ブリットォォォォォオオオオッッッッ！！！！！！！！！！！」

「……ッ。」

その場所から、パッと手を離され重力に任せて自由落下するＷ０３。

その彼を追う事もせず、その場で何かをブツブツとずっと呟いていると、

カイトの右腕が激しく輝き出した。そして、最後の羽が消え去ると同時にカイトの姿は消え、

激烈な叫びと、轟音を遙かに超えた超音波の域に達しようかという程の轟音が谺し。

煙が霽れた先にあったのは、地面に叩き付けられ鋼鉄の床に減り込んでいるＷ０３と、

そのＷ０３の腹に文字通り拳を減り込ませているカイトの姿だった。

しかし、どうやらそんな状態でも辛うじてＷ０３に息はあるらしく、

掠れた呼吸音だけは聞こえて来る。

その姿を睥睨（へいげい）したカイトは右腕の装甲を解除し、
まるで吐き捨てるかの様に、Ｗ０３へと言葉を投げ掛けた。

「――――貴様に最も足り無かったのは、俺の戦闘能力という、分析結果だったな。

これに懲りたのならば、少しは自重し、相手を見極める事だ。

それが出来無ければ――――又、同じ事の二の舞になるだけだ。
覚えておけ、クソガキが。」

こうして、Wシリーズとの戦闘……及び、カイトによる『調教』の時間は終わりを告げたのだった。

第弐拾話【ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ，ｓ～Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

あ、因みに私はピート・ペイン、好きですよ？　これも実はちょっとしたフラグでして……；；；；

そして、今一番恐ろしいのは、又版権に喧嘩売った事ですかね……

ｇｋｂｒ

もし、御叱責等を受けた場合は、原作に入れるなり、今後は控えるなりは考えていますが……；；；；

次回は、ガグン・ラウズ＆ロック・アイ戦の予定です。

実は、今回から暫くは毎回戦闘シーンが入る予定になっています。

凡そ、後三回程。……飽く迄もプロット上の話ではありますが。

実際に書いて行くと、何故か色々と次々と変わって行きますからね……。

しかも、現在進行形で……ｏｒｚ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第弐拾壱話【狂った飢餓戦士～疑心の媒体（メディア）～】（前書き）

現時刻（０３：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４７５，６４９アクセス　ユニーク２０５，３１０：人
皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、今回はフォルミッドヘイム・後編です。

少々長くなってしまいましたので、御飲物の御用意を忘れずに。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第弐拾壱話【狂った飢餓戦士～疑心の媒体（メディア）～】

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　バレリアネア塔

身動き一つ出来ず、文字通り息も絶え絶えなＷ０３が床に仰向けになっている。

それを見下すかの様に睥睨（へいげい）しているカイトが、煩わしそうに手を彼の上で軽く振ると、

Ｗ０３の身体が光に包まれ、その光が止むと、故障箇所は完全に修復され終わっていた。

「……フン。これで、逃げ帰るぐらいは一人でも出来るだろ。さっさと失せろ。」

「……くっ…！　Ｗ１０も機能を停止した……か……。仕方有るまい。

だが、撤退する前に一つ聞きたい。貴様らは、この後……どのような行動を取るつもりだ？」

「前進あるのみです。……我々には、成さねばならぬことがあります。」

「正確に言やぁ、この後はさっさと頂上迄行って、ガグン坊やをぶっ飛ばし。

それから、アインストの残党を駆逐し、修羅共に喧嘩売ってケリを付け。

最後に、アグラッドヘイムに殴り込んで滅ぼして、はいオシマイ、だ。理解したか？」

「……そう、か。……撤退する。」

そう言ってＷ０３は機能停止したＷ１０アークゲインをその場に残し、一人何処かへと去って行った。

「あ……置いてっちゃった。」

「もう商品価値が無いということで、捨てて行ったのでございましょう。」

「勿体ないのう。古来より、ゴミも拾えば宝になる……と言うのにのう。」

「こうして、シャオの部屋にはゴミの山が築かれて行く……と。御互い苦労するな、零児。」

「……分かってくれるか。」

「……これまた、しみじみと言うねえ、レイジ。苦労が偲ばれるぜ。」

「ウルサイわ！　どいつもこいつも！

っちゅーか、バカイト！！　昔のことを穿り返すでない！」

「いや今の事だろ、常識的に考えて。」「俺は、今苦労しているんだが？」「今じゃないのか？」

「ぬ……ぐ……！　ええいっ！　そんなことはどうでもいいんじゃ！

それよりも、バカイト！　ぬし、こいつどうにか直せるじゃろ！？　さっさと直さんかい！」

「……誤魔化したよ。」「誤魔化したな。」「誤魔化しぞな。」「誤魔化しですの。」

「誤魔化しは、良いこととは思われませんが。」「掃除はするべきです、小牟殿。」

「ゴマの滓を穿って取り除いてくれる。」

「ヤメんか、たわけ！　っちゅーか、みんな酷すぎじゃろ！？」

「それ、意味が違うだろ、常考（アシェン）。後な、シャオ。人……それを、自業自得と言う……！」

「わし、人ちゃうぞ！？」

「俺からしたら、どっちもガキンチョには変わらん。同じ事だ、問題無い。」

「問題、有り捲（まく）りじゃっちゅーの！」

「おまーが言うなし。」

「……ねえねえ。あの夫婦漫才、一体いつまで見てればいいの？」

「放っておけ。そんなことより、先に進むにしても、アークゲインをまずどうにかしないとな。」

「そう言えば、レイジはあの二人がイチャイチャしてても平気なの？」

「きゅ、キュオンちゃん！？　き、聞き難いことをずばっと……；；；」

「……別に俺は構わんが？　小牟から、カイトのことは色々と聞いているからな。

それに、既にカイトとも色々と話はしている。好きにすればいいさ。

小牟に害を為す訳でも無いしな。御互い楽しんでいる分には、問題無いだろう。」

「……そ、そうなんですか。」

そんな無駄話をしながら、何時の間にかカイトがアークゲインを直し終わっており、

未だ言い争いと言う名の夫婦漫才を絶賛繰り広げているカイトと小牟に声を掛け、

一行は先へ、上へと、道を急いだ。

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　道中（ヴィルキュアキント前）

オリトリア東塔（イースト・オリトリア）を抜け、道形（みちなり）に進んで来た一行は、

眼前に浮かび上がっている巨大なモノ……ヴィルキュアキントによ
うやっと気付き、

特にオルケストル・アーミーの三人は、慌てて間近に見える側迄駆
け寄った。

「あ、あれ!?　ちょっとヘンネ、アレ何?」

「ん……?　あんな所に、島みたいなものは無かった筈……。」

「アレって……『ヴィルキュアキント』じゃないかい!?」

「ヴィルキュア……キント……。それは……何ですの?　……凄く、
気になりますの……。」

アルフィミィの言葉を受け、そう言えば知らない人もいたなと気付き、

ヴィルキュアキントについての軽い説明をした。

「……ヴァルナカナイ。エンドレス・フロンティアが融合する前、海底にあった国さ。

その中心部にあった遺跡……それがあのヴィルキュアキントだったんだよ。」

「あの遺跡は、アインストを産み出していた『プラント』のような施設でした。」

「曾て、紅いミルトカイル石を砕くのに必要だった、純度の高い結晶。

……それを手に入れた場所でごんす。」

説明を聞き終えても、アルフィミィの沈黙は益々重みを増している様に見えた。

だが、考えていても解決はしない。故にそれはさておき、何故かと皆で議論していたが……。

「でも、可笑しくないか？　ヴィルキュアキントは、ヴァルナ・ストリートと融合していたぜ？」

「ハーケンさんが颯爽と現れた……あの場所ですよね？」

「それは、飽く迄一部でしょ？　……あそこに見えるのは、遺跡そのものみたいネ。」

「じゃあ、突然出現したってこと？」

「出現……と言うよりは、浮上した……と言う感じネ。誰も気付かなかっただけで、前からここにあったと考えるのが自然じゃない？」

「問題になるのは、どうして浮上したか……ですわね。」

「地形が変わる程の攻撃を受けてるんだ。その影響じゃ無いのかい？」

その疑問に答えたのは、カイト……だろうと誰もが思った。

しかし、聞こえた声は……アルフィミィのものだった。

「……いいえ、これは……『自らの意思』で、ですの。……そう。

自らの意思で……あの腕のような島は、浮かび上がったんですの。

そして、曾て滅魏城で感じた『深淵に流れ込む力』……あそこに繋がっておりますの。」

「アルフィミィちゃん……？」

「アルクオンが飛び込んだ、あの地下水路のことですか！？

では、彼の羅刹機はここに……！？」

「……私のセンサーには、何の反応も無いです。どうしてわかるんですか？

……アルフィミィさん。」

「わかりませんの……何となく、ですの……。」

相変わらず不思議な事極まりないアルフィミィ。

何故に、誰のセンサーにも感知出来ないものを、彼女は理解し、感じ取れるのか。

その誰もが思う疑問を、ハーケンが……そして、カイトが、その真実を遂に語り始めた。

「――――そろそろ、みんなに話しておくべきだろうな。……アルフィミィの正体そのものを。」

「正体……？　どういうことかしら？　確かに、アルフィミィは不思議な存在ではあるけれど。

そんな……『正体』……とまで言う程のことなの？」

「――――ああ、残念ながら、そうだ。……少し前から、予想はしていた。

この生足リトルガールは、アインストとどんな関係にあるのか、と。

そして、それを確かめる為に、カイトに何度か確認を取り……今、確信に至った。」

「……それで、その確信とは？」

そのハーケンの言葉。そして何より、カイトの表情から読み取れた、その答え。

誰かが唾を呑んだ音が聞こえた。誰とも無く発した促す言葉に、ハーケンは閉じた口を開けた。

誰もが今、予想した……最悪の台詞を伴って。

「アルフィミィは……アインストそのものだ、と言うことさ。」

“……（な・え）ッ！！？”

「……。」

「そのもの……って……ぇ？　ぇぇえええっ！！？」

「……でも、もしそうならば……成る程。

装甲にアインスト成分が混じっているナハトやアーベントと共鳴したことも……。」

「そして、あの島に反応したことも説明が出来るってのかい？」

ハッ！！　お笑いじゃないか！　敵が混ざっていたとはねえ……。」

「そんな言い方、酷いこと極まりないです！」

「……てろすよ。一応言っとくが、そちも立場的には敵であるぞよ？」

「ま、待って下さい！　このような可憐な少女が、得体の知れぬ魔物などと……！」

「可憐とは照れますの♪／／／」

「……姿形など、どうとでもなる。老いた獣の変化などがいい例だ。」

「あん、老いた獣とは照れますの♪」「わしはまだピチピチじゃっちゅうの！」

「全くだ。その程度で老いたとか……俺に対する暴言だな。」

「お前の基準で考えたら当たり前だろう、カイト。
……それに他の連中も、一皮剥けばどうなってるか分かったもんじゃない。」

「そうなのですか？　錫華姫殿、キュオン殿。」

「わ、わらわは見たままであるぞよ！」

「ピンポイントでキュオンたちに訊かないでよ！　この隠れムッツリ！」

シリアスがシリアルになるのは、最早何時もの事。

何となく空気が弛緩し始めた頃に、アルフィミィがポツンと何かを呟き出した。

「私は、自分がどんな存在でも構いませんの。
ただ、自分が何者なのか……それを知りたい……思い出したいんですの。」

「アルフィミィちゃん……そうだ、そうだよな……。」

「……カイト。アンタは何か言うことは無いのか？」

「ん？　俺か？　いや、特にはこれといって必要無いだろう。
アルフィミィは態々俺が何かを言わなくても自分で……いや。
アクセルと一緒にいれば自然と全てを思い出すだろうし、自己を確立出来るからな。」

「……そうか。なら、アインスト、という存在については？」

「ああ。そっちは、今教えてやってもいいんだけどなぁ……今、時間無ぇだろ？

取り敢えず、今の最優先事項はエイゼル坊やの所へさっさと行って、ガグン坊やをぶん殴る事。

その後、逃げ出したヴェーゼント・リヒカイトを追って、ヴィルキュアキントへ向かい、

フルボッコした後に更に奥へ進んで、アルクオンを取り戻して、虎口を脱出する。

のんびりと色々話すのは、それからだ。」

「……今の台詞の中にも訊きたいことは山程あったが……教えてはくれないんだろ？」

「モチのロンって奴さ♪　ちゃんと今迄にヒントもくれてやってる

し、も少し考えな？」

「……ＯＫ、Ｍｒ．メサイア。早い内に答えを見付け出すとするさ。」

どうやら、それでカイトへの詰問タイムは終了したらしい。

亦も少し剣呑な雰囲気に呑まれそうになったが、取り敢えず何事も無く終わってホッとした。

「アインスト……他にも色々と穏やかじゃ無いけど、取り敢えず先に進みましょ？

それなら、ヴィルキュアキントがあそこに浮上したのも、偶然じゃ無いでしょうしネ。」

「カッツェ、確証があるのですか？」

「ええ。行けばまず間違い無く分かる筈よ。

何せ、こっちにはアインストであるアルフィミィちゃんがついてるんですものね♪」

「はいですの♪　私にお任せですの♪」

「……た、逞しい……。」

「じゃ、取り敢えずそこへ向かうとするか。」

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　オリトリア北塔（ノース・オリトリア）

其処に入った途端、アルフィミィは更に奇妙な違和感を感じていた。

其処に確かに居る筈なのに、でも気配が希薄で、とても居るとは思えない……そんな感覚を。

「正面の転移装置を使えば、バレリアネア塔の最上階へ続くルートに出られるわよ。」

「では、この先にエイゼル王が？」「よし、早いとこワープと行こうぜ。」

「待って下さいですの。この部屋の一番奥、怖い……いえ、奇妙な雰囲気になっていますの。」

「流石はアインストそのものであるアルフィミィちゃん……鋭いわネ。

……あ、これは勿論褒め言葉よ？　あそこには……呪われた存在がいるのよ。」

「はいですの♪」「……。それでカッツェ、『呪われた存在』とは？」

「……アタシたちを欺いて、前王シュタール・ディープに成り代わり、

『１０年戦争』を起こした張本人……いえ、張本アインストって呼ぶべきかしら、ネ。

カイトの言葉で言うのなら、ヴェーゼント・リヒカイトって奴のことよ。」

「……え？！　ここに、あの戦争を引き起こした犯人……基、犯アインストがいたってこと！？」

「……そうね。カイトの言う通りなら、もうとっくにいなくなってるんでしょうけどネ。」

「ということらしいんだが、どうなんだ？　アルフィミィちゃん。」

「……ええ、明らかに存在感が希薄に……。間違い無く、いなくなっておりますの。」

矢張り。その言葉が、皆の胸の中を通り過ぎて行った。

誰もが危惧し、考えた。

この儘そんな存在を放っておいていいものなのか、どうか。

……だが。

「で、でも、前は倒したって……。」

「前にエイゼル坊や達が倒したのは、言わばガワだけ。その魂……思念は未だ健在で、

結界（そこ）の中に縛り付けてあったんだが、自身の力が強まって逃げ出したんだよ。」

「何ともはや……迷惑至極この上無い。」

「……確かめたいことは数多くありますが、今はその時ではありません。」

「全くです。早くしないと、エイゼル王が骨になってしまうかもしれんですのたい。」

「……一々突っ込まず、先を急ぐぞ。」

気になりはするものの、前にカイトが言った様に最優先事項は別にある。

まずはそちらを先に済まそうと、一行は目の前にある転移装置に乗り込み、

エイゼルが待っているであろう最上階へと、歩を進めた。

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　迷宮の間

～Ｂａｔｔｌｅ　１７～

「イキがるんじゃないよ、ザコ共が。捻り潰してやるよ！」

「悪のベテランという感じがしまするのです。

では私も……ザコ共が。ＫＯＳ－ＭＯＳ、やってしまえ。」

「了解です。完全殲滅します。ターゲットを捕捉しました。」

「逃しはせん！　勝負を付ける！　いくぞ！　気合いを入れろ、アシェン！」

「了解です、スパンキングマスター。では、得意の尻叩きをお楽しみ下さい。」

「誤解を招くような事を言うな。全く……カルチャーショックを受けるな。」

「重いカルチャーを、オモチャーと言う。んじゃ、偶にはわしの本気も見せちゃろうかの♪」

「そいつは重畳。真面目にやれよ？」

「パワーチャージ！　後２０分。」

「おい！　もっと早くならないのか？　それにしても、熱暴走に頼るのは感心出来んな。」

「こーしないと目立てないじゃん！」

「ワイール！　小牟、頑張るよ！♪」

「ん？　何かが間違って無いか？　しかし……どうも、真面な服が少ないな。」

「何事も個性が重要ですの♪　がんばりますの、レイジ兄さん♪」

「誰が兄さんだ。……ん？　どうした？　俺の顔に何か付いてるか？」

「う～ん、記憶が戻りそうな気が……。」

「そう言えば、記憶喪失以外に問題は無いのか？」

「それだけでも十分問題だけどな。余り気負うと、白髪が増えるぜ？　レイジ。」

「多少増えた所で変わらんさ。しかし、アクセルも苦労するな。」

「どちらかと言うと、私の方がしてますの。……貴方も苦労されておりますのね。白髪が……。」

「苦労している事は認めるがな……。ん？　モモ、余り無理はするなよ？」

「大丈夫です！　モモだって、フルパワーです！」

「ボクのフルパワーも、見せる時が来た！」

「有難みの無いフルパワーじゃの……。」

「そろそろ、姫さんもフルパワーを見せてやんなよ。」

「な、何かコツとかあるんでしょうか？」

「期待してるぜ？　プリンセス。」

「ヘンな期待ならダメですよ？」

「この際ですわ！　どちらがギリギリか……決する時が来ましたわね！」

「命知らずですこと。宜しい、受けましょう！　ではＫＯＳ－ＭＯＳ！　やっておしまい！」

「ネージュは何もしないのですか？　……所でレイジ。シャオムゥを叩き過ぎでは？」

「アレは『日課』だからいいんだ。」

「どうしてくれましょうかしらです。」

「よいよい、軽く撫でてくれよう。」

「ご主人様ぁ。失敗したら、オシオキを……？？？／／／／／／／／／」

「いかんな……最近叩き過ぎたか……？　……ん？」

「うひゃぁっ！？／／／／／／／／／／　こ、こ、こらバカイトォォォッツ！！！／／／／／／／／／／

行き成り人の尻を撫でるでないわぁっ！！／／／／／／　お、驚くじゃろがっ！／／／／／／」

「おk。今度から、宣言してから触る事にする。」

「じゃから、ハナから触るなっちゅうとるんじゃ！／／／／／　このド戯けッ！！／／／／／／／／

あ！　逃げるな！　こりゃ、マテ！！　待たんかい、こらぁぁぁぁぁ！！！！！／／／／」

「…………お前達、燥(はしゃ)ぎ過ぎだ。」

「所詮この程度だろうよ。」

「勝ちました！　ほら、てろすさん！　笑って♪」

「フッ……甘過ぎて笑っちまうよ。」

「全く……味方にすると頼りになるぜ。」

「ハッ！　……勘違いするな。ＫＯＳ－ＭＯＳを連れ帰る為だ。貴様らの為だとでも思ったか？

まぁ、今回は褒めてやってもいいけどね。」

「見事な悪デレです、黒ＫＯＳ－ＭＯＳ。……ザコ共が、刃向かうからだ。」

「あんた……敵のロボットじゃないだろうな？

あ、ロボットって言えば、ＫＯＳ－ＭＯＳ。あんた……本当にアンドロイドなのか？」

「私は器……この体は、あの方の……。Ｔ－ｅｌｏｓ、私は……いえ、私達は……。」

「……言うな。この戦いが終わるまではな。

……いい機会だ。決着を着けるか？　ＫＯＳ－ＭＯＳ……！」

「無意味です、Ｔ－ｅｌｏｓ。あの方がいない世界では……。」

「しかし……まさかＫＯＳ－ＭＯＳを助けるとはな。」「こすもすさんとは仲直りしたんですよね？」

「ハッ！　仲良しごっこがそんなに好きか？　……貴様もサヤと仲良くやっているだろう？」

「あん、これじゃ英雄失格ね、ぼうや♪」

「そんなものに興味は無い。後、ぼうやと呼ぶな。……少し大人っぽくなったな、モモ。」

「はいです！　ありがとうございます、レイジさん♪」

「際疾（きわど）さにドギマギした？　ムッツリ君？♪」

「……次に同じ事を言ったら尻を叩く。」

「……ぼうやが凄いって聞いたけど？」

「……うむ。あやつの尻叩きはヤバいぞ……。」

「駄狐よ。遊びが過ぎるのでは無いか？」

「遊びをクリエイトする小牟じゃ♪　さて零児。残虐行為手当を寄越せ～い！」

「ん？　尻を叩けばいいのか？」

「成る程……こうやって駄狐めを攻めておるのか。」

「待て。何を想像しているんだ？」

「では……私にも落ち度がありましたら……オシオキを……？？？／／／／／／」

「いや……頑張ってた……んじゃないか？」

「それで、残虐行為手当は頂けますの？」

「小牟から変な言葉を学ぶな。それよりも、アルフィミィに何か履かせてやれ。」

「生き様だと拒否されたんだな、これが。ん～……やっぱり、あんたを見てると記憶が……。」

「そいつは重畳だが、人違いじゃ無いのか？」

「人……それを、他人の空似と言う……！　パァ～イル、フォォゥｌｍ（ｒｙ」

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　迷宮の間・奥

～Ｂａｔｔｌｅ　１８～

「ほぉら、いいわよ……いらっしゃいな♪　あなた、こういうこと……初めて？」

「い、いえ……／／／　戦いであれば、日常茶飯事です。

そして、その日常こそが、修練の成果を見せる時です……！」

「ほらほら、表情が硬くてよ？　アレディ。」

「それじゃ、柔軟に対応しましょうね♪」

「柔軟……？　成る程ねえ……。さて、準備はいいかな？　ダ・フォックス。」

「ダ・フォックスを定着させようとすなっ！　わしは、森羅のアイドルマスター、小牟じゃ♪」

「あん♪　逢魔のアイドルプロジェクト、沙夜よ♪

ん～♪　湾岸でフィバってた頃を思い出すわね♪」

「む？　わらわの舞いと関係あるのかえ？　むむ……？　ヒラヒラと、はしたないぞよ？」

「悔しかったらヒラヒラさせて御覧なさい？♪」

「そのヒラヒラの腰巻き……いいですね！♪」「そのヒラヒラのスカート……いいねえ。」

「後はこのギリギリ感がポイントよ♪　て言うか、貴女……下半身お魚でしょ？」

「あん、最近のお姫様は派手ねえ。」

「色々やらねば、勝てませんもの。」

「キャッホーイ！　ボクもまだまだいける！」

「あん、競争率が高くて、みんな必死ねえ。これは、楽しめそうじゃない？　カウボーイ♪」

「ＯＫ、セクシーフォックス。楽しもうぜ？」

「そうそう♪　異世界から来た者同士、仲良くしようぜ？」

「うふふ……♪　それは口説いてるのかしら？

って、あら？　片那ちゃん、ちょっとちっちゃくなっちゃった？」

「サヤ様？　私はアルフィミィですの。それにしても、この世界の敵は本当に不思議ですの。」

「……ぬしも所謂『不思議ちゃん』じゃろが。

しかし、アルフィミィか……ぬしのシュミもアレじゃの。」

「俺の好みは年上なんだな……多分。っと、来ちまったものはしょうがない。やるか！」

「ＯＫ、エトランゼ。見せて貰うぜ？」

「ちっ……見るからに厄介だな。」

「ジョーカーを引いてしまったようじゃの。」

「へへっ♪　ジョーカーってのは、最後までとっとくもんだぜ。」

「ぬし、ボムを使えないタイプじゃな？」

「立ち塞がるなら爆破するのみ！　ですわ！」

「全く、とんだレディボンバーじゃのう。」

「……こいつの攻撃は喰らえないな。」

「素手で受けたら骨が砕けるからのう。」

「一体、何のパロディだよ！　てめーーーっ！！！」

「わわっ！？　こりゃ、バカイト！　こっちにまで石を投げるでないわっ！！

ぬぉわっ！！？　じゃ、じゃからって、岩も投げるでないわッッ！！！！

危うく、潰されてペチャンコになる所じゃったじゃろうがッッッ！！！！！！

つーか、一体どっから持って来たんじゃ、その岩！？　普通、瓦礫とかじゃろ？！」

「……てへぺろ（・ω<）～♪」

“……イラッ☆”

「ちょっと大胆だったかしら、ね。じゃ、終わったし、ヘソ比べといきましょうか♪」

「相手にとって不足無し！　受けましょう！」

「そちのヘソでは天下は取れぬ。」

「その程度のおヘソで笑わせますこと♪」

「う～ん、キュオンもおヘソ出そうかな……。」

「キュオンさん？　貴女にはまだ早くてよ？　ほら！　御覧になりまして？　貴族の技を！」

「なんというか、サーカスっぽいですの。」

「ほら！　もっと足を垂直に振り上げるのですわ！」

「貴女と違って、限界がありますのよ！？」

「あん、もうダウンなんて……イケズねえ。」

「ふむ、わらわの腰も泣いておるぞよ？　愚かなザコ共が……哀れよの。」

「ちょっとダークヒーローっぽいですの♪」「自分の手を汚さない。巧い手だ。」

「人聞きが悪い！　ちゃんと踊っておる！」

「……ぬしを見習ってヒールターンもありじゃな。」

「ケモノ風情が、訳の解らんことを……。無駄な時間を取らせるんじゃないよ。」

「シャオムゥ、戦闘にも無駄が多過ぎです。」

「厳しいんじゃ！　ダメ出しロボ共めが！」

「動きが悪かったんじゃないか？」

「う……うむ。正直、スマンカッタｏｒｚ　……ぬし、敵を手玉に取っておったのう。」

「アルフィミィ翻弄伝説ですの♪」

「ああ。よく頑張ったな、アルフィミィ。」

「は……ふ……ちょっと、クラッと来ましたの……／／／／／／」

「アルフィミィ、楽しそうでしたが？」

「人生、楽しまなければ損ですの♪」

「人生を楽しむ事に定評のあるカイトです。」

「……アンタは楽しみ過ぎだろ。」

「いやいや／／／　そんなに褒めるなよぅ♪／／／」

“褒めてない、褒めてない。”

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　空中回廊

～Ｂａｔｔｌｅ　１９～

「じゃ、用があったら呼びなさい？」

「俺の援護を頼むぜ？　ボンバーガール。」

「貴方の為ではございませんわよ？　ハーケン。ほら、爆弾を渡すから、貴女もやりなさい？

ＫＯＳ－ＭＯＳも、ワタクシの爆弾、お使いになります？」

「仕舞う隙間がありませんよ！」「収納する場所がありません。」

「私も爆弾を出したいので、くださいですの♪」

「ちょっと、どこから出すおつもり？」

「爆弾は幾つくらい持ってるんだ？」

「乙女に数を聞くなど……フケツですわっ！　もうっ……！　とっとと片付けますわよ～！」

「敵の急所を確実に突けばいい……！」

「痛みを知らせず、安らかに送ってやれい！」

「ほ～っほっほ！　蹴散らしておしまい！」

「はい。覇皇拳の蹴りをお見せします！」

「そんじゃ、あんたの足技、盗ませて貰うよ？」

「……御互いの足技はマネ出来無いのでは……？」

「アタシとアナタのキックが絡み合うのよォ♪」

「そ、それだと敵を討てません……カッツェ殿！」

「ド下品な戦いはしないようにね？」

「その言葉遣いはいいのか？　そう言えば、調整は万全なのか？　ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「躯体に問題はありませんにゃん。リミッターを解除。迎撃を行います。」

「邪鬼銃王も全力である。もっと近う寄るが良いぞ？」

「敵性体を呼び込むのは危険です。新兵装のロックを解除。新兵装を使用します。」

「何やら増えたようであるな？」「私も、刀を新調しようかなぁ……。」

「では、仕掛けて下さい。ツンギレ姫。」

「ド失礼な機械娘ね……覚えてなさい？」

「ショウタイム！　ミス・カグヤ！」

「へっ！？　オ、オウ、いえ～～す！」

「神夜姫とのハレンチ合戦、期待しております！」

「そんな戦いの予定はございません。貴女……その格好はいいのかしら？」

「あの……どっちもどっちではないかと……。でも、その槍……何か危なそうですよね。」

「ふう、人のことは言えないでしょうに。ま、精々頑張って下さいまし。」

「後でスカートを引き千切ります。コードＤＴＤを使う時が来るとはな。」

「普段から使ってるだろ。どう仕掛ける？　ネージュ姫。」

「女は度胸。正面突破よ！　では、露払いはお任せね、お姫様♪」

「そちも姫であろうに。サボるでない。わらわ、逃げも隠れもせぬぞよ？」

「はい。脱げも隠しもしません。では、出番です。行って下さい、ゴクツブシ。」

「そこまで言うことないんじゃないの！？　……ふう、気楽なもんだな、これが。」

「私の自由騎士なら、頑張りなさい？」

「おいおい。なった覚えが無いぜ？」

「人呼んで、さすらいの賞金稼ぎ……ってな。」

「うむ。ズバっと退治しちゃるかのう♪　偶には、渋くキメたらどうじゃ？」

「ＯＫ……レッツ、プレイ……。」

「俺の全身全霊、受けて貰う……！」

「こんな相手に大人気無い話だ。」

「……死凶星が見えねばいいのですが……。」

「その時は、願い事をしましょう♪」

「べ、別に貴方の為じゃありませんからねっ！／／／／／／」

「べ、別にお前達の為に敵を倒してるんじゃ無いんだからねっ！」

「……単に、アンタが邪魔だっただからだろ？」

「うん、勿論♪」

“……ハァ。”

「全然投げ足り無いですわねえ。って、あらあら、爆弾を補充しておかないと。」

「……そのスカートの中身、どうなってるんだ？」

「オマセですこと。見たい？　見たいの？」

「その爆弾……まさか産んでるんじゃないだろうな？」

「馬鹿をおっしゃい！　まだ未婚ですわ！　貴女もいい加減に、その爆弾をお使いになったら？」

「こ、これは爆弾じゃないです……／／／」

「ドロシー殿！　もう少し恥じらいというものを……／／／」

「ほっほっほ！　見えなければ同じことですわ！」

「それにしても大胆ね、アルフィミィちゃんも。」

「上がダメなら下で勝負ですの♪　私一人でも十分でしたの♪」

「調子に乗ってますね、黒パン娘。コードＤＴＤの超スーパーパワー！」

「超とスーパーが被ってるぞ？　それにしても、随分気合いが入っていたな、アクセルも。」

「そりゃ、こんだけ女の子が多けりゃな。数少ない男手として、頑張らんとな。」

「過疎化した村みたいだな。もっと堅実にいくべきだったな。」

「ま、ギャンブルもいいもんさ。次はもっとハデに決めるぜ？」

「そいつは重畳。程々にな。だが、偶には気分転換したらどうだ？」

「はい。修行の内容を変えてみます。機神拳……まだまだ奥が深い。」

「悔しそうなのに、嬉しそうですの。私は、ちょっとはお休みしたいですの。」

「修練はまだまだこれからです！」

「もう、アレディは頑張りやさんなんだから。」

「これも修練、怠りはしません。ですが、思っていたように動けなかった……！」

「世の中上手くいかないもんさ、こいつが。アルフィミィちゃんもいるし、こんなもんだろ。」

「親子みたいに息がピッタリでしたね♪　斬り捨てお疲れ様でした～♪」

「斬り捨てごきげんようですの♪　見事、撃ち貫きましたの♪」

「はい！　勝負札が決まりましたね♪　次は斬冠刀も使ってみます？」

「いろいろ大きくなってからにしますの。」

「敵性体の反応、全て消失にゃん。」

「御機嫌のようですね、コスモス殿。」

「どうして『にゃ』と言うのですにゃ？」

「ウィルスタイプのバグですにゃ。」

「？？　それじゃ、どうして『メシア』と言うのですにゃ？」

「……それが俺の運命だからさ。終生、永劫、決して変わる事の無い……。」

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　最上階

様々な仕掛けをクリアし、最上階に迄進んだ一行の目の前には……

……。

Ｗ０５ギムノス・バシレウスのボディにその魂を宿したガグン・ラウズと付き添いのロック・アイ。

そして、唯一人で彼等に立ち向かうは、フォルミッドヘイムの新王……エイゼル・グラナータ。

前（さき）のオルケストル・アーミーの数少ない生き残りにして、元隊長。

その二人が、丁度話し始めた所であった。

「お初にお目に掛かる。フォルミッドヘイムの新王、エイゼル・グラナータ。

我が名はガグン……ガグン・ラウズ。

体こそ『仮初め』の物だが、アグラッドヘイムを治める者だ。

……返して貰う為にここまで来た。

曾て我がアグラッドヘイムから分かれたこの国……フォルミッドヘイムをな。」

「……！　アグラッドヘイム……我らの故郷と呼ぶべき場所か。

だが、それがこの国を明け渡す理由になどならぬ。」

「全くよねェ。……故郷だか何だか知らないけど。」

「ほう？　故郷の話……疑いもせず、よく受け入れたものですな。

それとも……そこの救世主（メシア）とやらに、聞きでもしましたかな？」

「いいえ、全く聞いてないわよ？

カレったら、とっても気紛れで基本的には普段は何にも教えてくれないのよネ。」

「……そも、訊かずとも分かる。我も魔族。眷属の気配くらいは理解出来る。

貴様の『魂』が、その機械の器に収められているというのも、本当だろう。」

「……。」

「よう、アグラッドキング。お初にお目に掛かるぜ。アンタの悪名は色々と聞いてるぜ？」

「勿論、俺からな。……久し振りだな、ガグン坊や、エイゼル坊や。」

「……『世界の破壊者（ワールド・デストラクション）』……否。『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』か。

誠に久しいな……果たして幾星霜振りか。」

「……『宇宙の救世主（そらメシア）』……か。……相済まぬ。」

「行き成り謝んなし、タコ。そいつは俺じゃ無く、てめえの部下かハーケン達に言ってやれ。」

「う……む。……相済まぬ。」「漫才か！」「……む？」

「……まぁいいや。所で、ガグン坊や……その名を知ってるって事は、アリエルから聞いたな？」

「……直接我が訊いた訳では無い。

彼の者がそう幾度も叫んでいるのを、聞くとも無しに聞いていただけだ。」

「ハン！　大方、俺にフルボッコにされて、癇癪でも起こしてたんだろ。御愁傷様なこって。」

「正しく然り。余程腹に据え兼ねたと見えた。

だが、彼の者は何かを呟きながら何処かへと姿を眩ました。

恐らくは、二度と我らの元へと戻るつもりも無いだろう。今は貴様のことで頭が一杯の様だ。」

「嬉しい様な、嬉しく無い様な……。

まぁでも、どちらかと言えば嬉しい比重の方が大きいかねぇ。……色んな意味で。」

その意味深気なカイトの台詞に少し首を捻るも、

特にそれについて何かを言う訳でも無く、只じっとカイトを見据えていた。

其処で会話は終えたと思ったのか、今度はエイゼルの方からガグンに話し掛けて来た。

「……どうして魂だけの存在となった？」

「ああ、そりゃぁな。ヴェルトバオムの暴走で肉体を失ったんだよ。間抜けな話だがな。」

「……暴走……だと？」

「そ。このエンドレス・フロンティアが融合する際の衝撃でな。その余波に共鳴して暴走したんだ。で、その暴走は周りの世界を巻き込んでてな。

諸共に次元転移して来たんだよ。それが波国。……アレディ、お前達の国だな。」

「何と……！？」

「ま、ガグン坊やが身体を擲(なげう)って止めなかったら、暴走したヴェルトバオムがこの世界ごと完全に喰らい尽くしていたから、

或る意味グッジョブと言いたい所だが、基本的にこいつらの場合、自業自得だからなぁ。

ハッキリ言ってな。微塵も同情するに値しないんだよなぁ……。

まぁ……ドン☆マイ？」

あ～～……と言う、声や溜息が何処から、誰からともなく漏れ聞こえて来た。

何とも居畳(いたた)まれない視線と空気が、二人に伸し掛かっているのが、誰の目にも明らかであった。

「……だが……成る程。そのヴェルトバオムの力、やはり問題があるようだな。」

「え？　どうしてそう言い切れるんですか？」

「簡単なことさ。その力を十分に行使することが出来るのなら、態々ノコノコとこんな所まで、やって来るワケがないだろう？」

「そうそう。だって、そんな必要ないもの。ちゃ～んと使えるなら、ね。」

「自国の者すら扱いに困るシロモノ……か。

そんな危険なモノを後生大事に守ろうとするとは、微塵も理解出来ん考えだな。」

「……この国を明け渡せと言うのも、それに関係のあることか。」

ツッコミが次々入り、見事にグゥの音も言えないロック・アイの珍しい姿が見られた。

だが、ガグンはそれにも拘(かか)わらず黙していた己が口を静かに開いた。

「……エイゼル・グラナータよ。北にある塔の電磁バリアを解くのだ。」

「あの『思念』を封じた場所……ネ。」「クロスゲートはもう不要なのですか？」

「そうだ。一つあれば十分なのでね。……後は、『ビャクヤ』が数機あれば……な。」

「……！」「全く、大変な物ばかり盗んでいきおって！」

「異界への扉……我々の計画の役に立つのでな。」

「計画……ヴェルトバオムを成長させ、この世界を餌場……苗床として、

他の世界への足掛かりにする計画のことかい？」

「……！？」「なっ……！？　ば、バカな……！　そ、それを何処で……？！」

「当然、俺に決まってんだろ？　そんぐらい、お前だって承知之助だっただろ？　ガグン坊や。」

「……無論だ。貴様がいるとロック・アイより聞いた時から、既に覚悟はしていた。

計画の変更を余儀なくされ、尚且つ本来の目的をも変更せねばならぬ程の事態になることも。」

「そいつは殊勝なこって。其処迄俺の事を理解しているのなら……。

この後の俺の台詞も、俺の行動も、その意味も。当然、その全てを解っているんだろうな？」

「……無論と言った。では、遠慮無く我の身体……この器の肩慣らしをさせて貰おう。

ロック・アイよ、構えろ。

奴は手加減しても尚、我らアグラッドヘイムを滅ぼすに余りある程の力を有している。

油断をすれば、その瞬間我らはその存在を文字通り塵にされるぞ。」

「はっ！！　我が王よ！　既に万全調っております！」

「良い心懸けだ。ならば、俺も心置き無くお前等を打(ぶ)ちのめせるな。

ファースト・イグニッション　アクア　鎧化(アムド)」

そして、救世主(メシア)と、王とその側近(アグラッドヘイム)との、肩慣らしと呼ぶには少々激しい戦いが行われた。

ｓｉｄｅ：ガグン・ラウズ＆ロック・アイ戦

蒼い鎧に着替えたカイトは、何処からともなく蒼い銃を取り出し、

二人に向けて構えた。

「ガン・オブ・マナ　エレメント・ガン　アクア　モード：ブラスト　」

「む……？　一体、何処から取り出したのだ？」

「さて。では、行くぞ。ガグン・ラウズ、ロック・アイ。コイツが開戦の狼煙（のろし）だ。」

「「！？」」

そう言って、唐突にカイトはその長銃からまるでビームの様な銃弾を撃ち出した。

既（すんで）の所で、擦（かす）る程度の擦（す）れ擦（す）れで避けられた二人。

だが、一瞬安心した隙にカイトがその懐へと潜り込んでいた。

「この俺を相手にして一瞬でも気を抜くとは、随分と余裕だな。」

「ぬおっ！！」「ぐあっ！？」

そう言うと、その場で魔力を開放し、まるで気当たりの様に二人を吹き飛ばした。

「モード：ダブルガン　銃が遠距離ばかりの武器だと思ったら、大間違いだぞ？」

「何ッ！？」「バカな……ッ！？」

カイトが銃の形態を変えると同時に、二人に向かって突進して来た。

銃の姿が変わった事にも驚いたが、それ以上に、其の後のカイトの行動に驚いたのだ。

「ぬっ……！　くっ……！　キサマ……！！」

「ぐおっ……！　この……！　おのれぇ……！！！」

「どうしたどうした？　所詮はその程度か？」

先ず撃つ。そして、弾く。殴る。逸らす。蹴る。跳弾させる。撃ち落とす。防がせる。

凡そ本来の銃の使い方とは思えない……所謂ガンカタとでも言うものだろうか？

だが、その動き……その流れは……余りに、余りにも、綺麗だった。正に流れる水の如く……。

銃を撃った反動で、槍の柄を打ち払い。銃の腹で魔力による攻撃を流し。

時に、銃そのもので殴り付け。時に足払いし、転がった所に連射。

リロードを必要としない上に、連射も可能な銃故の型。

だが、流れ弾などは観戦しているエイゼル達の方には一切来ず、全て外れるか、必ずガグン達に当たっている。

流石に耐え切れず、何とかカイトから距離を取ろうと、ミサイルによる爆風を利用し、

二人共勢い良く飛び出し、煙に紛れて……逃がして貰った。

「くっ……ぐ…ふっ……ば、バカな……!?」「ガグン様!?」

「いや……大事無い。だが……まさか、これ程の強さだとは……。

この器がまだ機能仕切ってはいないと言う事を除いたとしても…

…尚、その強さよ……！」

「当たり前だろう？　こちとら、只の魔力馬鹿じゃねぇんだよ。舐めんな、クソガキ共。」

カイトはそう言うと、今度は双銃の腹を互いにピタリとくっつけ、両手を左右にスライドさせた。

すると、銃であったものが水に変じ。水であったものが、長槍に変じ。

その槍を眼前で幾度もぶん回し、左掌を眼前に置き、右手で柄を掴み、構えた。

……まるで、これから眼前の獲物を狩りに往く獣の如く。

「モード：ランス　さあ……今度は中距離戦だ。

貴様の鑓（やり）と俺の槍。果たして、どちらが優れ、どちらが担い手に相応しいかな？」

「……良かろう！　我が鑓にて、見事、貴様を穿ち貫いてみせるわっ！！」

突く。薙ぐ。払う。流す。振り回す。回転させる。ガグンは両手で。カイトは右手だけで。

互いに、文字通り縦横無尽に交叉させ、ロック・アイですら、入り

込む隙が無い程の激しい攻防。

拮抗しているかに見えたそれは、あっと言う間にカイトが圧倒していった。

堪らず、ロック・アイが自身の鎖で到頭カイトの邪魔をし始めたが、勢いに乗ったカイトには全くの無意味で、鎖ごとガグンを薙ぎ払い、諸共に弾き飛ばした。

「ぬぐっ……！　っハァァッ……！　ハァッッ……！！」「ガグン様！？　御無事ですか！」

「……う、うむ……大事無い。だが……奴は、あれでもまだ息一つ乱してはおらぬ……。」

「何と……！？　……くっ…！　本当のバケモノか……奴は！！」

「……侮ってはならぬ。そう言った筈だ、ロック・アイ。奴は、バケモノなどでは無い。」

「はっ……？　で、では、一体、何者だと……？」

「だから、救世主（メシア）だっつってんだろ？　……ガグン坊やの言う通り、

この俺をバケモノなんて言う、下らねぇカテゴリーなんぞに入れるんじゃねぇ。」

そう言いながら、カツ、カツ、と足音を響かせながらゆっくりとガグン達へと近付くカイト。

その様に、思わず身体が震え出して来たロック・アイ。

どうやら、今頃になってようやっとカイトの恐ろしさを認識した様だ。

……それもその筈。今迄は、毎回一瞬でカイトに優勢に立たれ、又、実際に戦った同胞からの報告のみでしか、その強さを知らなかった。

故に、今初めて真にその強さを目の当たりにし。

ガグンの警戒振りが。そして、同胞からの報告が。

全くの誇張では無い……所か、尚々足り無いと、今ようやっと実感したのだ。

「モード：ツインランス　さて……ここからは、更にギアを上げる

ぜ。

付いて来られるか？　高速戦闘を超えた……光速戦闘に。」

「ぬおぁっ！？」「ッ！？」

手にしていた槍の柄を真ん中で唐突にポッキリ折ったかと思ったら、棒状になっている片方から、もう片方と同様の、蒼く鈍く輝（ひか）る穂先がにゅっと出て来た。

その瞬間、カイトの姿が完全に掻き消え、それと同時にガグン達が吹き飛ばされた。

「Ｗ０３にも言ったがな……貴様達には、あらゆるものが足り無さ過ぎる。

情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ強さ優しさ慈悲の心……そして、何よりも……！！

速　さ　が　足　り
な　い　」

「ぐおぅあぁぁっっっ！！！！！」「ば、バカなぁぁぁあああああ！？！？！？」

そして、カイトの姿が現れたと同時に、二人は無数に傷付けられ、その場に倒れ伏した。

「どうだ？　少しは、いい準備運動になっただろう？　ガグン坊や。」

その言葉で誰もが理解した。カイトにとっては、この程度では只のお遊びにしかならないのだと。

そして、ガグンの肩慣らしと称した戦闘は。

カイトの、文字通り、『圧倒的勝利』と言う事実のみが、只、残っただけであった。

第弐拾壱話【狂った飢餓戦士～疑心の媒体（メディア）～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、ミィちゃん大活躍の巻です。紳士・淑女の方々、御楽しみにｗ

所で。今回戦ったガグン・ラウズ。又の名をガグンラーズ。オーディンｏｒウォーダンの別名で、

「逆さの予言者」ｏｒ「逆の謎解きをする者」と言う意味だそうです。

他にも、Ｓｔｅｒｂｅｎ　Ｓｃｈｌｏｓｓ（シュテルベン・シュロス）は、「永逝の城」などと言う意味合いになるそうです。

次話の後書きにて説明致しますが、アインスト達も皆ちゃんと意味があるそうです。

意外と細かい所に拘りを入れるのがスパロボクオリティ。

今度、アインストの名前を全部調べて見ると、中々に面白い発見が出来るかも知れませんねｗ

も一つ。私の副題は、基本的に曲名から取っています。

他には、ゲーム内の副題とか。一応、オリジナルもありますが。

例えば、今回の副題。『狂った飢餓戦士』は、スパロボ６４のアル＝イー＝クイスの戦闘曲です。

知るか、そんなドマイナーなモン！　と言うレベルだと思いますｗ

他にも、作中のカイトや他のキャラの台詞の中にも、何気無く曲名を入れたりもしています。

気になられた方は、暇潰しがてら御探しになられるも又、一興かと。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第弐拾弐話【揺れる心の錬金術師（アルケミスト）～明日への行進曲（マーチ）

現時刻（０９：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，４８５，５４４アクセス　ユニーク：２０６，１５１人
皆様、何時も有難う御座います。

さて、今回はヴィルキュアキント・前編です。

今話も、後書きが少々長くなっておりますが、どうか御諒承下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第貳拾貳話【揺れる心の錬金術師（アルケミスト）～明日への行進曲（マーチ）】

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　バレリアネア塔　最上階

カイトとの戦闘に敗北し、身体中ボロボロになって倒れ伏している、ガグン・ラウズとロック・アイ……主従二人の姿がそこにはあった。

だが、二人共辛うじて息はある様で、御互いに膝を笑わせながらも気力で立ち上がった。

「ぐっ……ぬ…ぬぅっ……ぬうう……！！　未だこの身体、動かぬ……か…ッ！」

「くっ……が、ガグン様……。」

「ロック・アイ……動けるか？」

「は、はい。辛うじて……。ガグン様、ここは私が囮になります。御身は、どうか……！」

「あ～、別に構わんぞ？　もう俺の用は済んだし、さっさと帰んな。邪魔だから。」

「……は？」「……ぬ？」

「いや、だからな？　お前等邪魔だから、とっとと帰(けー)れっつってんの。」

「……そんな戯れ言を信じるとでも「……いや。」……ガグン様？」

「彼奴(きやつ)は決して嘘は付かん。……誤魔化しはする。こと戦闘に関してならば騙しもする。」

「そう……だが、救世主(メシア)は、決して嘘は付かぬ。否……付く事が出来ぬのだ。」

「ま、そう言うこった。だから、とっととテメェん家へ帰れ。

後で、ヴィルキュアキントに泳いで行ってる、ガンドの末弟も帰してやっから。」

「……相分かった。では、さらばだ。フォルミッドヘイムの新王、エイゼル・グラナータよ。

今回は貴様の国……おいておくぞ。次は無い。……退くぞ、ロック・アイよ。」

「……はっ。我が王の仰せのままに。」

そう言い残し、異界の王とその側近はその場から転移し、撤退していった。

其の後、鎧を脱いだカイトの元へと、皆してゾロゾロと集まって来、恒例の話し合いが始まった。

「……相済まぬ、救世主（メシア）よ。皆も済まぬ、恩に着る。

我一人では、敗北は必至であったろう。」

「そりゃぁな。ま、取り敢えずは間に合って良かった、ってとこかな。」

「そうじゃのう。あのツンデレウルフも心配しとったぞ？」

「はい♪　困った時は御互い様ですよ♪」

「無事で何よりだよ、エイゼル。

ま、フォルミッドヘイムまで、国中穴だらけだったのには驚いたけどさ。」

「異変の兆候はあった。……ここまでとは思っていなかったがな。

……カッツェよ。

フォルミッドヘイムを封鎖している間、何が起きていたか、聞かせてくれぬか？」

「それは構わないけど……カレに聞いた方が一番手っ取り早いんじゃなくって？」

「……救世主（メシア）とお前達との話では、その意味合いが異なる。今、我に必要なのは真実では無く、

お前達が見聞きして来た事なのだ、カッツェよ。」

「……そういうことネ。いいわ、エイゼル。簡単に、経緯（いきさつ）って奴を話そうかしらネ。」

～アグアグフォルフォル～

「……そうか。妖精の姫よ、あの戦争は……。」

「もういいのよ、エイゼル王。オルケストル・アーミーの人たちに会うたびに聞いてるから。

それに、カイトからも詳しいことはそれなりに聞いていますから。

……貴方は、ちゃんと決着を着けてくれたのでしょう？

その後、妖精族がハコクに飛ばされてしまったのは、また別の話よ。」

「……。」「ネージュ姫殿……。」

「エイゼル、罪滅ぼしの前にやることがあるわよ。」

「あ、そうだよ！　まだ全っ然終わってないんだから！」

「そうだな。取り敢えず、先程の封印の所へと戻ってみるか。

アルフィミィとカイトの言葉通りならば、既にあそこには何も無い筈だからな。」

「何！？　……確かに前から反応は弱くなってはいたが……。」

「そうなのか？　どうやら、既に蛻（もぬけ）の殻らしいぜ？　二人の言葉が間違ってないならな。」

「いや……救世主（メシア）がそう言うのならば、間違いは無い。

そして……アインストと関わりを持つその娘も同意しているのならば、尚更だろう。」

相変わらず炯眼（けいがん）とも呼ぶべきエイゼルの言葉に、一瞬空気がうっとなったが、それも数瞬の事。

エイゼルの言葉の端には特にこれといった含みも無く、只その儘を言っただけなのだろう。

エイゼルの為人（ひととなり）を知っている者は、そう判断した。

そんな風に、一端落ち着いた一行はふとした疑問を持った。

「そう言えば。エイゼル王、どうして貴方『反応が弱ってる』なんてお判りになりましたの？」

「……あの場所……電磁バリアの中は、モニターされている。ヘンネ、アシェン。お前たちにクロスゲートの調査を命じた頃からだ。」

「ふむ……アシェンめが、ヘンネやこすもすと共に滅魏城に来た……あの時であるな？」

「そうだ。それを境に、国内で異常な力場が発生し、我が国に属さぬ勢力の闊歩（かっぽ）が始まったのだ。」

「それで……フォルミッドヘイムを封鎖したのでございますね？」

「うむ。そのような輩を外に出さぬようにする為に、だ。

恐らくは、最初からこの国は狙われていたのだろう。故に、今回

の攻撃が行われた。」

「まあ、間に合ってよかったぜ。少なくともあんたに関しては、ギリギリセーフってとこだな。」

「さて。んじゃ、エイゼル坊やも加えて、さっさと北塔へ戻ろうぜ？　お前も来るんだろ？」

「……うむ。我もこのままにはしておけぬ。共に参ろう。」

「やったぁ～♪　オルケストル・アーミー、全員集合だよん♪」

「うふふ♪　やっぱり、エイゼルがいないと締まらないものねェ♪」

「……王が国を開けて単身、精鋭部隊と共に外出するのは如何なものかと俺は思うがな。」

「む……。」

「まぁでも、別に構わんだろ。もう、奴等（アグラッドヘイム）はこの国には然程の興味も無いだろうしな。

修羅のアホ共は、今は力を蓄えている最中だろうし。

逆にお前が一緒に行動していた方が、向こうとしては困り金時だろうしな。」

「キントキ？　……ま、何でもいいさ。今は先を急ごうぜ？」

「……うむ。向かうは、オリトリア（ノース・オリトリア）北塔。……忌まわしき『隔離塔（かくりとう）』だ。」

ｓｉｄｅ：フォルミッドヘイム　オリトリア（ノース・オリトリア）北塔　別名：『隔離塔（かくりとう）』

一行は、先程通り抜ける際に横目で確認した、件の場所に再び戻って来た。

「……で、どうなんだい？　実際の所。」

「……間違い無く、いなくなっておりますの。」

「……うむ、何の波動も感じない。つまりは……おらぬ。」

「あらま！　本当にホントのことでございましたか！」

「て、訳だ。確認出来た所で、さっさとこれぶち破って追っ掛けるぞ？

ここに繋がっているヴィルキュアキントで、奴が……。

ヴェーゼント・リヒカイトが待っているからな。」

「うむ。構わぬが、電磁バリアを解くには時間が掛かる。何か手はあるのか？　救世主（メシア）よ。」

「ああ。ネージュ、頼む。」

「ええ！　私とフェイクにド任せなさい！　フェイクライド、アクション！」「……。」

「ネージュ姫殿。以前呼び出した時、今のようなことは言っていなかったような気がしますが。」

「まあ、気持ち的な問題ね。コール・ゲシュペンストみたいな。」

「ああ、あるある。何か掛け声入れた方が格好良く感じるよな。俺も良くやるし。」

「そんなことはどうでもいいですから、早いところブチ破りやがれですわ。」

「そんなデク人形で、本当に上手くいくのか？」

「この障壁……結構、凄い霊力を感じますけど……。」

「ま、最悪無理だったら、俺がぬっ壊すから。

どっかの光の力の研究所のバリア並みに、こう……パリンっと。」

「その必要は無くってよ！　バリアの一つや二つ、ナンボのもんかしら！

リファインド・スウェイヤー展開！　フェイク！！」「……！！」

そうネージュがフェイクライドに命じた直後、フェイクライドの腕の先に集められた力が、

バリアに直撃し、それと同時に全てのバリアが一斉に破られた。

一行の内、それを始めて見たエイゼルとＴ－ｅｌｏｓは、その威力に驚いていた。

「へえ……デク人形にしてはやるじゃないか。」

「流石は、ハウゼン家が誇る妖精機……。このバリアを一撃の下に破砕するとは。」

「んじゃ、さっさと先へ行くか。そこにある転移装置の残骸に乗ってな。」

「……成る程。その転移装置を利用して、彼の地へと転移したのか。

」

「……恐らく、そういうことですの。あの深淵へ流れ込む力……ここからでも感じ取れますの。」

「深淵へ流れ込む力……そこにアルクオンがいる……。」

「そういうこった。ほれ、さっさと行くぜ？　向こうも待ち侘びているだろうからな。」

ｓｉｄｅ：ヴィルキュアキント　入口

一行が転移して来たそこは、以前ハーケン達が来た時とはまるで様相が変わってはいたが、

しかし、床、壁、空気……そして何よりその何処からとも無く醸し出されている雰囲気が、

間違い無くここはあのヴィルキュアキントだと、其処を知る者は皆、理解していた。

「ここが……あの腕の形をした島の中ですか。」

「何か、気味が悪い場所ね……。生き物の体内みたいな……。」

「ですが、命持つ者の覇気は感じません。……まるで死んでいるようです。」

「まぁ、腕の形っつーか、まんま腕そのものだからな、コレ。」

「……救世主（メシア）よ。まさか、ここは……否、コレは……？」

どうやら、何か教えてくれる様子のカイト。それに喰らい付くエイゼル。

だが、そのカイトの口から出て来た言葉は、誰をも驚かせるに足るものであった。

「ああ。コレは……アインスト・レジセイア。働き蜂の親分の腕そのものさ。」

“なっ！？”

誰もが絶句した。この大きさで腕と言う事は、全長は一体どれ程になるのか……。

まるで全く検討も付かない。……そう、実際それを目の当たりにしたハーケン達以外は。

「こ、こんな巨大なものが……本当に腕ぇ!?　ど、どんだけドでかいって言うのよ!?」

「そんだけでかいって事さ。細かい事は記憶を取り戻した後のアルフィミィに聞けばいい。」

「……ちょっと待ってくれ。今、アンタはコレが『働き蜂』……とそう言ったな?」

「ああ、そう言ったな。」

「てことは……それを指揮し、産み出している『女王蜂』が何処かにいる……と?」

「流石はハーケン、鋭いねぇ。そいつは半分正解だな。」

「……?　一体、どういう事だ?」

「分かり易く言えば、女王蜂はいた。だが、既にとある者達によって滅ぼされている。

故に、現在はアインストを纏め上げ指揮する者が、誰も、何もいない。それが現状だ。」

「滅ぼされた？　女王蜂ってことは、コイツよりも更に大きいんだろう？

それを滅ぼした……？　まさか、アンタか？　カイト。」

「いいや？　そいつは……記憶を取り戻したアクセルが知ってるんじゃないか？　なぁ？」

「いや、なぁ？　とか聞かれてもな。今の俺には、何のことだかさっぱりなんだな、これが。」

そりゃそうだ。だが、カイトの言葉で、この場所が只の元海底遺跡では無い事は理解出来た。

皆、今迄以上に緊張感を増し、気を入れ直していた。

「……しかし、隔離塔がこの地に繋がっていたとは。

彼の偽王がアインストだと言う、何よりの証拠……と言うわけか。」

「滅ぼされた者の思念……それが行き着く場所としては相応しい場

所なんでしょう、ね。」

「ま、そりゃあなぁ。ここは文字通り、形骸化してる場所だしな。御誂え向きだろうさ。」

「……取り敢えず、先ずはここから何処に行けばいいんだ？」

「頼りはアルフィミィちゃんだな。そいつ……ヴェ……何とかって奴の気配を感じてくれよ？」

「お任せですの♪　……鼓動が……聞こえますの。」

「鼓動？　ここは確か『死んだ遺跡』の筈でしたわよね？」

「そう言っていたな。……そんな場所に鼓動だと？　どっちの方角だ？」

「ここから……南西の方向ですの。」

「この左の壁の向こう、ですね。回り込まなきゃいけないみたいです。」

「よし、んじゃ行こうぜ？　こんな気味の悪い所、さっさとオサラバしたいんだな、これが。」

「激しく同意する。此処はアインスト共の巣窟には違いないからな。」

一行は、アルフィミィが示した目的地に向かって、一路ようやっと歩き出した。

side：ヴィルキュアキント　空洞

～Battle　20～

「これもフォルミッドヘイムの為だ。爆炎にて押し通る。覚悟せよ。」

「OK、ガイコツファイター。頼んだぜ？」

「問題無い。全て爆散せしめん。」

「……以前は敵、今は味方……複雑ですこと。」

「過去の過ちは、清算せねばならぬ。」

「……いいんですか？　もう王様になられたのに……。」

「和の国の姫よ、これはやらねばならぬことだ。」

「王になって、無理をする必要があるのか？」

「王だからだ。これは責任だ。」

「エイゼル、そちが王とは……分からぬものよな？」

「……相応しいかどうかも分からぬ。」

「はあ～……戦いが続きますね……。」

「これも修練です、神夜姫殿。」

「修練の先に何を見ている？　修羅よ。」

「未だ見ぬ何かを、です。そして、この戦いを明日に繋げなければ……。」

「……ド熱心と言うか、ドまじめですこと。」

「修羅の戦い、見せて貰うぞ？」

「はい。それが我らの宿命故に。」

「男じゃったら拳一つで勝負せんかい！」

「分かりました。我が拳にて……！　急所に打ち込めれば……或いは！」

「難しいことはいいから、始めようぜ？　念仏でも唱えるんだな！ ってか？♪」

「相手が念仏を知っていればな。……後手に回ると厄介だ。やるぞ！」

「最後に勝てば宜しいんじゃなくて？　……ド面倒ですこと。吹き飛ばそうかしら？」

「そりゃ気が合うねえ、ネージュ姫様。って、こりゃまた、退屈そうな相手だねぇ。」

「見た目で判断すると痛い目に遭うぞ？　……これは、敵の出方を見た方がいいな。」

「ターゲットの分析を開始します。戦闘シミュレーションを開始します。」

「わしも妄想で補完しようかのう。……頭に数字を書き込んでいいかの？」

「書き込むな！」

「では、鎧の中は美少女、とかないのですか？」

「ない。」

「なん……だと……！？」

「……何故に其方（そなた）がそこまで驚くのだ、救世主（メシア）よ？」

「こまけぇこたぁいいんだよ！」

「……。」

「これも王と成った者の務め。……あの戦争のこと、許してくれとは言わぬ。」

「……昔の話です。今は味方してくれるのでしょう？」

「……戦いは連綿と続く。終わりはあるのか……？」

「……全ては、永劫へと回帰します。」

「……勝利の先に道が出来る、か。それもまた真理かも知れぬ。」

「全く、どんだけ爆発が好きなんだよ？」

「勝つ為に必要な装備に過ぎぬ。……見事な戦いだ、ハーケン・ブロウニング。」

「いつも通りさ。煽てるなよ。この調子で稼がないとな。」

「はい、おマンマの食い上げですのことよ。ブロウニング一家として頑張ります。」

「……それ、オルケストル・アーミーだろ。ＯＫ、ロボビューティー。お疲れさん。」

「ありがとうございます、ハーケン。戦闘終了したにゃん。通常モードへ移行します。」

「俺も昼寝モードに入りたいぜ。って言うか、いつになったら直るんだ、それ？」

「我には見える。ＫＯＳ－ＭＯＳ、貴様の魂は……。」

「今は……その時ではありません……。……私たちの心は……どこにありますか？」

「……それがプログラムだとしても、私は構わん。」

「意思、想い、心、魂。それらは、誰かに与えられる物でも、始めからある物でもない。

誰もが何時の間にか、自身の裡（うち）に持っているものだ。小難しい事を考える必要など何も無い。

只、自身が想い、考え、そうして決めて来たのならば、それをこそ『ココロ』と呼ぶ。

……俺はそう思う。己が心に依る想い……その答えとして。」

「……救世主（メシア）。」「……イエス、マイスター。」

ｓｉｄｅ：ヴィルキュアキント　空洞中心部　心臓の間

其処に来た誰もが目を見開き、驚愕し注目せざるを得なかった。

其処には、いつぞやハーケン達が見た事のあるあの存在と似通った

……ナニモノカ。

そして、その背後には、その常よりも大きな……ナニモノカよりも、遙かに巨大な……心臓。

そう。生物の心臓としては常識を遙かに凌駕する程の巨大な心臓が今も尚、脈動していたのだ。

「ズッキンドッキンしとるぞ!?　さっきからずっと響いていた心音はこれかい！」

「な、何だ……!?　巨大な……心臓!?」「その前にいる、この怪物は!?」「……！」

「……我はヴェーゼント・リヒカイト。始めに生み出され……今は最後に残る者なり。」

ヴェーゼント・リヒカイト。

フォルミッドヘイムの前王、シュタール・ディープに成り代わり、

１０年戦争を引き起こした張本（ちょうほん）アインスト。

このエンドレス・フロンティアに於いて、最初に産み出され、今は

最後に残りし者。

そして、エイゼル達、曾てのオルケストル・アーミーの総力を結集し、

辛うじて、エイゼルとカッツェ以外の全員の犠牲を払って、

隔離塔と呼ばれる事になるオリトリア（ノース・オリトリア）北塔に封じ込めた、全ての元凶（きょう）……そのものである。

「……覚えているぞ、ヴェーゼント。我が主に成り代わった貴様を……！」

「これが、あの『１０年戦争』を引き起こした……アインスト……！」

「あたしらを騙していた、シュタール王のニセモノか！」

「どうやってここまで再生したの？　……後ろの心臓が怪しいケド。」

「心の臓は、命の象徴です。もしかしたら、その力で？」

憤怒（ふんぬ）を顕（あら）わにするエイゼル。驚愕と怒りを見せるネージュ。赫怒（かくど）す

るヘンネとキュオン。

そして、怒りは懐に仕舞い込み、冷静に周りを観察するカッツェ。

各々、それぞれに反応の見せ方は違えども、その想いは皆同じであった。

――――こいつが、全ての元兇か――――と。

「ハーケン、気付いたか？　こいつの姿は……。」

「ああ、あの時……最後に飛び込んだアインストの世界。

そこで吹き飛ばした……アイツに似てる。」

「記録が残っています。ヴァールシャイン・リヒカイト。

救世主（メシア）も以前、その名を口にしています。」

「あやつか。自分の世界に帰りたいと言っておった、紅いアインストであるな？」

その言葉を聞いたアルフィミィは、何事か言葉の断片を呟きながら、

頭を抱え、蹲（うずくま）りながら呻き声を上げていた。

「自分の世界に帰りたい……？　紅い……リヒ……カイト……？　ううう……っ。」

「ど、どうした！？　アルフィミィちゃん、しっかりしろ！」

「……貴様は……何者だ……？　小さき者よ……。」

「私は……私……は……。」

自身に向けられたヴェーゼント・リヒカイトからの問いに、答える事も儘ならないアルフィミィ。

……だが、彼女の代わりに応えた者が一人……カイトであった。

「彼の者はアルフィミィ。アインストにして、アインストに非ず。アインストにしてツークンフト足り得る唯一の存在。

イェッツトと成り果てた、彼の約束の地の異形の存在を狩り、調停する……。

真なる『監察官』也。理解せよ、その本質性を。」

「貴様は……何者……否。……貴様は……一体、何だ？」

「我を忘れたか？　ならば、思い出させよう、我が名を。

我は救世主（メシア）。

『真なる救世主（メシア）』にして『無限にして無窮なる旅人』也。」

カイトのその言葉を聞いたヴェーゼント・リヒカイトは、咆哮した。

まるで歓喜の声を上げるかの様に。

まるで滂沱（ぼうだ）の涙を流すかの如く、身体中を震わせ、空洞内をも震動させ。

心の底から……魂の限りを以て、叫んだ。

……だが、それは。

「お……おお……オオオオオッッッ！！！！！　メシア……救（メ）世主（シア）ァァァッッ！！！！！

この時を……この時を……！　如何程（いかほど）待ち侘（わ）びた事か……！！！」

その咆哮に、誰もが身を竦（すく）めた。その圧倒的な気魄（きはく）に。その感情の強さに。圧倒された。

だが……カイトは、違った。

カイトは……彼だけは、彼のモノを憐愍（れんびん）の眼差しで、ずっと見詰め続けていたのだ。

「……憐れな。

己が役目……己が使命すらも忘れ、成り果てたモノがその姿か。

……もう、遅い。

既に遅過ぎる。貴様は……遣り過ぎた。貴様に与えられる救済は……唯、死、のみだ。

案ずるな。貴様も、直ぐ様送ってやろう……！　奴の……ノイ・レジセイアの下へと……！

皆、往くぞ。今度こそ……奴を、完全に屠(ほふ)る為に……！」

そして、未だ歓喜の咆哮を続けるヴェーゼント・リヒカイトとの、決戦の火蓋が切られた。

第貳拾貳話【揺れる心の錬金術師(アルケミスト)～明日への行進曲(マーチ)～】

side：ヴェーゼント・リヒカイト戦

「オオオオォォォ……！！！　メシアァァァァ……！！！！」

「……チッ。もう正常な判断も碌に付かねぇか。奴の攻撃は俺が一身に引き受ける。

その隙にお前等であいつをボコボコにしてやれ。

或る程度痛め付ければ、少しは正気にも戻るだろ。」

他の何者にも目も呉(く)れず、唯々カイトにのみ只管(ひたすら)攻撃を仕掛けるヴェーゼント・リヒカイト。

これ幸いと、自身を囮にして皆の準備を調えさせ、一気呵成(いっきかせい)に墜とすつもりの様だ。

「……命令されるのは、少々癪にド触りますけど……ま、いいでしょう。

では、最初っからノリノリで行くわよ！　シークレット・ライブ！　ヘイ、カモン♪」

「KOS－MOSさん、私たちも！」「ええ、M・O・M・O・。」

「スターアクションです！」

「覇気よ……高まれ！　これぞ、争覇の構えなり……！」

「こういう戦い方もあるんだぜ？　キャンフィールド！」

「まだだ！　有栖流……裏鬼門開放！！！」

「も一つ、オマケですの♪　魂護ですの。」

「ＫＯＳ－ＭＯＳ、我々も行くぞ！」「ええ、行きましょう、アシェン。」

「コード・エムプーサ！　でぇぇぇぇりゃぁぁぁぁ！！！！！

……が、頑張り……ました……。」「ＨＩＬＢＥＲＴ（ヒルベルト）　ＥＦＦＥＣＴ（エフェクト）発動。」

既にアレディにネージュ、ハーケンに零児、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．とＫＯＳ－ＭＯＳとアシェン、

そして、アクセルとアルフィミィによる事前準備は全て完全に完了した。

「こｗｗれｗｗはｗｗひｗｗどｗｗいｗｗ」

「……自分が指示しておいて、それは無いだろ。」「ですよねー。」

「そんじゃま、わしから行くぞ！　波乗の型！　シャオムゥゥゥウエェイィィブ！！！」

「私も続きましてよ！　カインドネス・セブン！」

「わらわも負けぬぞよ？　邪鬼銃・闘麗印（トレイン）！　ジャンジャンバリバリであるぞよ！」

「援護します。Ｔ・ＡＲＴＳ。」

小牟に続き、ネージュ、錫華、ＫＯＳ－ＭＯＳもその援護に回り……。

「続きます！　機神朧撃拳！！」

「合わせるぞ、アレディ！　二刀・一迅・樹金の型！！」

「わしも負けんぞ！　仙狐妖術・鬼門封じじゃ！」

「「ナイス（だ）！　小牟お婆ちゃん（シャオムゥ）！」」「わしはまだ現役じゃっちゅうの！」

「オープニング・ベット！　細かい事は……」「気にすんなって！　雷刃閃だ！」

「ちょいな♪」「帝返しです！」

疲れ切った上に冷却の為、床に倒れ伏しているアシェンを除き、更に全員での総攻撃。

流石のヴェーゼント・リヒカイトも無視する事は出来無くなったらしいのだが、

一々相手をするのが面倒なのか、全員纏めて攻撃して来出した。

「纏めて、地獄へ叩き込む……！　ハーデス・ライン！！」

「くっ……！　攻撃方法も、奴と同じか……！」

「だが……！　それなら、対策も立て易いってことさ！　ジャック・ポット！！」

「了解。ヴァールシャイン・リヒカイトを元に、シミュレーションします。

……行きます！　気孔掌！！」

「わしも行くぞ！　二丁・刺鎧閃（しがいせん）！　ハイヨ～♪　シルバー！」

「今です……！　猪刺花鳥（いのしかちょう）！　チェストッ！！」

「……そこだッ！！　焼き尽くす……！　二門・不知火の型！　燃え上がれぇっ！！」

「邪鬼銃王！　蹴散らすがよい！　邪鬼銃・騎駆（キック）であーる！」

曾て、ヴァールシャイン・リヒカイトと戦闘経験のあるハーケン達が、

真っ先に飛び掛かり、各々攻撃し手本を見せていた。

順調に思えた戦闘だったが……。

「ぐっ……！　おのれぇ……！　邪魔だぁぁぁ！！！　グリート・ディエティ！！」

「おわっ！？」「くっ……！」「きゃっ！」「ぬっ！」「チッ……！」「しまっ……！？」

「ハーケン！？　チッ……！　アルフィミィちゃん、一気に行くぜ！」「はいですの！」

「ネージュ姫殿！　我々も！」「勿論！　黙って見てなどいられるものですか！！」

だが、敵も然る者。ヴェーゼント・リヒカイトは両肩の鬼面から、全方位にビームを射出し、

ハーケン達を弾き飛ばした。だが、その数瞬後には、既にアクセル

達に肉迫されていた。

「ぬうう……！　ハーデス・ウェイィィ！！」

「おっと！」「わお。」「危なっ！？」「むぅっ！」

「そこだ！！　グリート・ディエティ！！！」

「今よ！　ベレイシャス・ミラー！　こういう使い方もあるのよ！」

「何！？　ぐわぁぁぁっっ！！！？」

ヴェーゼント・リヒカイトの胸部から放たれた極太ビーム砲をあっさりと避けるも、

敵はそれを狙っていた様で、バラバラになったアレディ達に全方位攻撃を仕掛けて来た。

だが、ネージュはそれをこそ狙っていた様で、その瞬間ヴェーゼント・リヒカイトの周りに、

鏡を無数に散乱させ、その全身から放たれたビームを全反射させ、全て跳ね返したのだ。

直撃を喰らったヴェーゼント・リヒカイトは、驚愕と共に、全弾直撃していた。

「その隙、貰ったぁっ！！　覇皇両断刀！　機神剛鉄甲！！　アクセル殿！　アルフィミィ殿！」

「任せな！　アルフィミィちゃん、行くぜぇっ！！」「はいですの！」

「水流爪牙！」「連続斬りですの。」「ぬっ……ぐぅうっ……！」

「舞朱雀！」「えいっ。」「ぐぅおぉっ！？」

「ばっさりだ！　こいつも持ってけ！　百虎咬！！」「カミカミですの♪　せ～のっ♪」

「ぬぐっ……ぐぅあっ！？」

「まだまだ！　風刃閃だ！！」「斬り付けまくりますの♪」

「ぐはぁぁ……っ！？」

「こいつで、締めだ！」「来迎会（らいごうえ）！」「おぉおりゃぁぁあっ！！！」

「ぬぅうおぉあぁぁあぁぁあ！！？」

縦に、左右に、前後に、上下に。言葉通り縦横無尽に二人で斬り付

け、攪乱し。
最後はアルフィミィとアクセルのW光線で吹き飛ばし。

「トドメだ！　アルフィミィちゃん！」「ラジャー、了解しております！　ライゴウエ！」

「ぬぅあっ！！？」

「斬って、斬って、斬り捲るぜぇっ！！」「グリグリ抉ってしまいますの♪」

「ぐっ！　ぐはっ！　ぐあっ！　ぬぐっ！」

「ほいっと、アルフィミィちゃん♪」「よいしょ♪　よいしょ♪　えいっ♪」

「ぐふっ……うっ……おぁっ……おふっ……ぬおぉ……！」

「抜けば魂散る光の刃……！　でぃぃぃぃやぁッッッ！！！！！」

「ぐ……ぐおおぉぉ……ぐおぉあああぁぁぁぁあぁぁぁあああぁぁぁぁ！！！！！！！！」

そして、散々に嬲られたヴェーゼント・リヒカイトは、その身体を徐々に崩壊させていった。

第貳拾貳話【揺れる心の錬金術師（アルケミスト）～明日への行進曲（マーチ）】

如何でしたでしょうか？

……あんまし、ミィちゃんを活躍させられなかったで御座るよ……ｏｒｚ

次話は到頭、アレディの宿命に一つ決着が……！　御楽しみに。

と言う訳で（？）、前話の後書きに書きました通り、アインストに関するちょっとした解説です。

少々長くなりますので御気を付けを。御存知の方は復習、乃至（ないし）はスルーして下さいね。

今回、主に解説するのは語源です。それだけでも、十分に存在の類推は可能かと思いましたので。

・Ｅｉｎｓｔ（アインスト）＝曾ての、昔、いつか、将来
・Ｊｅｔｚｔ（イェッツト）＝今
・Ｚｕｋｕｎｆｔ（ツークンフト）＝未来、何れ、将来
・Ｗｅｓｅｎｔｌｉｃｈｋｅｉｔ（ヴェーゼントリヒカイト）＝本質性

・Ｗａｈｒｓｃｈｅｉｎｌｉｃｈｋｅｉｔ（ヴァールシャインリヒカイト）＝可能性
・Ｎｅｕ（ノイ）＝新しい
・Ｒｅｇｉｓｓｅｕｒ（レジセイア）＝監視者、監査官

となります。カイトの台詞内の言葉も、合わせて表記致しました。

上記で御解りになるかと思いますが、リヒカイト達は本来フルネームで一つの意味となります。

故に、作中でのヴェーゼントとか、リヒカイトとか、ペルゼインと言った様に、

別けて呼ぶのは実は間違い……と迄は言いませんが、正しい表記ではありません。

まぁ尤も、彼等の場合はキャラ名として既に成り立ってますので、どう読もうと全く以て何の問題もありませんが。

因みに、Ｐｅｒｓ？ｎｌｉｃｈｋｅｉｔ（ペルゼインリヒカイト）＝人格となります。

又、ノイ・レジセイアにつきまして。

ＯＧ２（ＧＢＡ版）では、彼の曲は『凶星の監督官』となっていま

すが、

ＯＧｓ（ＰＳ２版）では、同曲が『凶星の監察官』となっています。

機種による音楽の差異はありますが、実は根本的な曲調は何も変わっておらず、

名前だけが変わっていると言う、珍しい曲でもあります。リメイクでもありませんので。

とまぁ、こんな所でしょうか。では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第弐拾参話【轟き、覇壊せし者～紅い阿修羅～】（前書き）

現時刻（０８：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，５０１，２０２アクセス　ユニーク：２０７，２１５人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

さて、今回はヴィルキュアキント・中編～後編です。

遂に決着が着いたアレディとアルクオン。果たしてその結果とは……！

では、今話も拙作を御覧下さい。

第弐拾参話【轟き、覇壊せし者～紅い阿修羅～】

ｓｉｄｅ：ヴィルキュアキント　空洞　心臓の間

カイト達の眼前には、ボロボロと身体が崩れ落ちていく、
文字通り形骸化しているヴェーゼント・リヒカイトの姿があった。

「ぐお……おおお……おおおおおお……！！！」

「ハッ、他愛ない。消えな……！」

「可成りの力を取り戻していたようだが……相手が悪かったようだな。」

「もう二度と……戦争なんて起こさせないんだから！」

「おお……お……まだ……我は成しておらぬ……静寂なる世界に……戻ることを……！」

「静寂なる世界……そう、修正されなければ……なりませんの……。」

「そうだ。だが、修正されるべき世界は、もう既に無い。

彼の約束の地の住人は、自らそれを拒絶し、終には彼の者をその手で滅ぼした。

故に、貴様等アインストの帰るべき場所など、もう既に無い。

唯一人……イェッツトを狩る使命を負った、ツークンフト足り得るアルフィミィを除いて。」

「……そうですの。イェッツト……アレは、もう私たちアインストとは既に異なる存在。

アレは……野放しには出来無い。必ず滅ぼさなければいけませんの。」

「お……おおおお…………おおおぉぉぉぉおおおぉぉぉおおおぉぉぉぉぉおおお！！！！！

そんな…………バカなあぁぁぁあぁあぁあぁぁぁああああぁぁ！！！！！！！！」

誰にも理解出来無かった。カイトとアルフィミィの言葉の意味も。

ヴェーゼント・リヒカイトの咆哮の意味も。

だが、二つだけ分かった事がある。

アルフィミィが記憶を取り戻した事。

……そして、ヴェーゼント・リヒカイト。彼の偽王が、完全に敗れ去った事。

その長い咆哮が終わると、ヴェーゼント・リヒカイトは空に顔を向け、何事かを呟いた。

「……おぉぉぉおお……我が意志……受け取るのだ……『最後に生み出されし者』よ……。

……さらばだ……救世主（メシア）……そして……『自己を得た者』よ……。」

「……。」「……！」

その言葉を最期に、ヴェーゼント・リヒカイトは己が身体を爆発四散させ、

その遺骸……欠片は、奈落の底へと堕ちて逝った。

「……思い出しましたの……。私は……。」

「……記憶が戻ったのか？」

「……完全ではございませんけど……少なくとも、自分が何者なのかは思い出しましたの。

ハーケンとカイトが言ったように、私は……アインスト。」

「……。」

「……救世主（メシア）の言葉から察するに、其方（そなた）は先程のヴェーゼント達とは違う存在だ、と？」

「……少なくとも、私と彼らは違いますの。

……私とアクセルは、彼らとは異なった世界からやってまいりましたの。

こちらの世界のアインストが、私たちと同じ世界から来たのかは

分かりませんけれど。」

「この世界のアインストたちもまた、異邦の民ということですか。」

「まぁ『邦』でも『民』でも無いんだがな。あれは、単なる統制機構の一部と言うだけだから。」

「統制機構？」

どうやら、又も長々としたカイトの話が始まりそうだと予感した皆は、

ちょっとした気構えをして、カイトの話に耳を傾けた。……のだが。

「そうだ。アレは本来、単なる『セカイ』を調整する為の機能でしかなかったものだ。

それが永の間の影響で、少々誤作動を起こして暴走し出した。只、それだけの話なのさ。」

「ま、また判り難い言葉を……；　そこをもうちょっと分かり易くですね……？」

「だが断る。今ので解れば良し。解らなければ気にする必要は無い。そういう事だ。」

「そんな殺生な！？」

「そんな事より、さっさと先に行こうぜ？　未だ先に道はあるんだからな。」

「……しょうがない、か。みんな、先に行こうぜ？

どうせカイトのことだ……もう教えてはくれないんだろ？」

「モチのロンドンブーツ。ほれほれ、それよりさっさと行くべ良い人、悪い人。

アルクオンがずっと待ってて暇してんだからよ。」

そのカイトの言葉に、渋々ながらも先に続く道へと歩を進める一行。

その後からまるで鼻歌でも歌っていそうな感じで、のんびりと付いて来るカイトであった。

そのカイトに、こっそり足を合わせて来る者が居た。……アルフィミィである。

「……カイト。さっきのアレは……もしかして……？」

「ん？　ああ、やっぱ気付いたか？　ヴェーゼント・リヒカイトの魂が持ってかれたの。」

「……やっぱり、そうでしたの。でも、どうしてですの？」

「ん～……ま、余り手を見せるのもつまんねぇだろ？　何せ、後事を託した奴がいるんだからさ。」

「……そうでしたの。……あ、それじゃあ……？」

其処迄言うと、何かに気付いた様子のアルフィミィが、考え事をしながら俯いていた顔を上げ、

少し驚いた様に、小首を傾げながらカイトを見上げた。

それに対しカイトは、ニヤッとした悪戯小僧の様な笑みを浮かべて答えた。

「ま、そういうこった。……勿論、他言無用な？　ちょっとしたサプライズ付きなんでな。」

「……はいですの♪　カイトも、相当なワルですの♪　あ、今山吹色のモノが何もありませんの。」

「……本当にどっからそういう事を学んで来るんだ、お前？　……ま、いいか。」

そう言うと、カイトはアルフィミィの頭をポンポンと軽く叩き、そのまま撫で始めた。

普段なら子供扱いは怒っていたアルフィミィであったが、カイトのソレは余程気持ちいいのか、

目を瞑りじっくり堪能している様で、その顔は可愛い子供の笑顔そのものだった。

ｓｉｄｅ：ヴィルキュアキント　空洞

～Ｂａｔｔｌｅ　２１～

「ボニ～～……って、いないのか。あ～、何もかも面倒臭くなって来た……。」

「呼吸など、大丈夫なのですか？」

「ん？　あ～……ま、地上はちと空気が悪いけどねえ。」

「しっかし、人魚ねえ。色々とうまそうだな、これが」

「ふふっ、鱗着(うろこ)けて出直して来な、ボウヤ。はあ、そろそろ海へ戻りたいねえ。」

「全ての命はいつか海へと還る、じゃな。」

「生か死か、それが修羅の掟……。」

「ま、逃げるって手もあるけどな。上空から狙い撃ちで頼むぜ？」

「ダルいねえ。ま、考えとくよ。」

「いけそうかい？　色白ビューティ。」

「問題ありません、ハーケン。ターゲット、有効射程圏内に入りました。」

「要するに、殴れる距離ってことだな。オールベットと洒落込もうぜ？」

「その生き方、いつか身を滅ぼすな。さて、どう攻めるべきか……。」

「武器が多いと大変ですね……。あ、それじゃ、得意の忍法でお願

いしま～す♪」

「忍法？　陰陽道だが……？　……所でその力、まさか鬼の力なのか……？」

「いいえ、乙女のパワーですの。こう見えて、意外と凄いんですのよ？」

「わらわも負けてはおらぬぞよ？　邪鬼銃王とそち……似ておるな？」

「ガトリングガンだけです、スズカ。」

「あ！　何かに似てると思ったら……ウツボだ！！」

「ウナギやらウツボやら……いい加減にせい！」

「（＊´ω`＊）＜にょろ～ん」

「カイト。その顔はエンドレス・フロンティアでも渋谷でも流行らぬし、流行らせぬからの。」

「（、・ω・、）＜ニョローン」

「……くっ……！　じゃから、こやつに萌えたら、負けじゃと言うのに……！！」

「大勝利だねぇ。こりゃいい気分だ♪　これが我らシレーナ海賊団の力さ！　ってね♪」

「あ、あれ！？　私たち海賊になってる！？　でも、何とかなったね、錫華ちゃん♪」

「計画性が無さ過ぎるぞな……。腰のうねりも足らぬぞよ？」

「け、剣を振る時はちょっと……。でも、みんな大暴れでしたね♪」

「今、バイオレンスは美しいのじゃ♪」

「……勝つ為に必要な爆発もある。」

「正に、戦術は爆発じゃ！」

「では、私も爆弾を付けてパワーアップです。」

「……バラバラになっても知らぬぞ？」

「私も全身から炎を出したいですの。」

「……我のマネは勧めぬ。」

「……爆発する時って痛くないんですか？」

「これしき、耐えるのは苦では無い。」

「みんなハチャメチャなファイターじゃの。」

「普通の技の方が少ないでごわす。戦闘終わったら放熱！　来たコレ！」

「ぬしは戦闘中もやっとるじゃろが。ふう、意外と大変じゃったのう。」

「お料理に比べたら、全然ラクです♪　刀を振り回すと、気分が晴れますね♪」

「……聞きようによってはとんでもないな、これが。戦い以外にも、楽しみにはあるぜ？」

「……すいません、余り知らないのです。これでは師匠に笑われてしまう……。」

「では、先ず私が。オホ～ッホッホッホ！　べ、別に貴方の為じゃありませんからねっ！／／／」

「分かっておりますよ、ネージュ姫殿。…？　お疲れのようですが？　小牟殿。」

「何のこれしき！　若いモンには負けんぞ！　所で……わしの魅力にキュンキュン来たかの？」

「いえ、特にありませんでした。」

「なん……じゃと……？」

「萌え萌えキュン♪」

「気持ち悪い。」「地獄に堕ちろ。」

「（´・ω・`）＜ひでぇ。……って、このネタ前にもやらなかったか？」

「細かい事はいいんじゃよ！」

「なん……だと……？！」

ｓｉｄｅ：ヴィルキュアキント　空洞　道中

沢山の小岩や瓦礫らしき、進路を塞ぐ物を次々壊しながら進むと、

大分開けた場所に出た。

其処は、曾てナハトとアーベントが二体して先に進む者を阻んでいた、恐ろしき場所。

（※……プレイヤーの内、一体何人がセーブせずに突っ込んで、地獄を味わった事だろうか。

マジあのブービートラップパネェ。三連戦とか、鬼畜にも程があるだろう……ｏｒｚ

え？　セーブしない方が悪いって？　……デスヨネー。）

そんな（メタ的な意味でも）曰く付きな場所に、丁度着いた時であった。

海から、ガンド兄弟の末弟……ジョーム・ガンドが飛び出して来たのは……。

「……ぶるるるっ。ふぅ……って、ぁあ！？　てめえら、どうやってここに！？」

「ガンド三兄弟……ジョーム殿か。」

「……アンタ、本当にここまで泳いで来たのか？　ご苦労なことだな。」

「うっせえぞ、ひょろ助がァ！！
オレが苦労してここまで来たってのに、ゾロゾロと団体でよォ！」
「そいつは重畳だ。だが、俺達も楽にここまで来れたわけじゃない。」
「挙げ句の果てにオレに会っちまうなんざ、運がねェな、てめえら。」
思わず臨戦態勢を取った皆だったが、それも直ぐに解いていた。
何故なら、皆の前にカイトがしゃしゃｒ……基、立ち塞がったからであった。
「おい、ジョーム。お前、邪魔だからさっさと帰れ。」
「あァん！？　一体、何なんだてめえは！？」
「何だ……お前も聞いてないのか？　ガグン坊やから。」
「何だと！？　……そうか、てめえか。ワールド……何とかって言うのは。」
「そういうこった。お前の兄姉もガグン坊や達もとっくに帰ってる。

お前もとっとと帰れ。

もうここには用は無いだろ？　お前達が欲しがってた情報はガグン坊やに教えてやったしな。」

「……そうかい。そんじゃ、お言葉に甘えさせて貰うぜ。

へっ……命拾いしたなァ、修羅の小僧！　あばよッ！」

そう捨て台詞を残して、ジョームは部下を引き連れて撤退していった。

「……本当に宜しいのですか？　カイト殿。」

「ん？　ああ、構わん構わん。アイツ一人ぐらい、別にどうでもいいだろ。

それよりも今はアルクオンの所に行く方が先決さ。

……お前だって早く決着着けたいだろ？　アレディ。」

「……分かりました。では、先へ行きましょう。アルフィミィ殿、この奥で宜しいのですか？」

「……はい。北へまっすぐでございますの。」

「……アルクオンは……そこに……！」

其の後、道形に直進し、転送装置らしきモノが置いてある部屋に着き、

その儘、全員で転送装置に乗って転移先へと向かった。

そして……一行が目にしたモノは……ハーケン達に絶大な衝撃を与えた。

ｓｉｄｅ：石化アインストレジセイア体内

其処は、曾てこの世界……エンドレス・フロンティアを構築したアインストレジセイアの体内。

そして曾て、ハーケン達が殴り込み、親ボスであるヴァールシャイン・リヒカイトと戦った、

あの忌まわしき……そして、消え去った筈の場所であった。

「……！　ここ何!?　急に印象が変わったんだけど!?」

「おい、ここは……！

以前の戦いで、最後に戦った……巨大なアインストの体内じゃないのか!?」

「最後に戦った場所!?　……え?　ええっ!?」

「間違い無いです！　そんな……！」

「体内……確かに、この洞穴全体が息付いているような覇気を感じます。」

アレディの言う通り、覇気……は流石に判らないが、

この場所自体が脈を打ち始めているのは誰にも何となく解った。

空気が……雰囲気が、言わずとも皆の肌に、心に、頭に……直接訴え、教えて来るのだ。

――――まるで、態と知らせているかの様に。

そして、それを証明するかの様に、アルフィミィがポツリと零した。

「蘇りつつあるんですの……。進化しつつあるんですの……。」

「蘇り、進化……？　もしかして、上の階にあった……心臓の所為か！？」

「神夜姫が言っていたな。心臓は……命の象徴だと。」

「世界が融合した時……ここと一緒になっていたということですねえ。」

「そう言えば、ぬしもいたのう、琥魔。……まさか、全員また戻って来ることになるとはのう。」

小牟の言葉……勿論、感慨深げに言った訳では決して無い。

その声色には、完全に倒しきれなかった悔しさが少し滲(にじ)んでいた。

それは、ハーケン達も一緒だった様で、より気を引き締めたのが誰にも解った。

「……ここがあの場所と同じならば、この先に『脳』に当たる中枢ブロックが存在する筈です。」

「ああ。……あのバトルラセツがいるとしたら、間違い無くそこだ……！」

「……アルクオン……。ここがお前の目指した地か……！」

その声色には、興奮と気合い……と言うよりも、悲哀の感情がより強く籠められていた。

そして一行は、彼の者が待つ彼の地へと足を進めた。

ｓｉｄｅ：石化アインストレジセイア体内　頭頂部

……カイトの存在を恐れたのか。あの後、アインスト達が地面から空から湧いて出て来たが、

ワラワラと皆を遠巻きに見てるだけで、どれも掛かって来る気配が一向に見えない。

この儘こうしていても埒が明かないと思った一行は、

警戒はしながらも敢えて無視してズンズンと先を進み、

終にはどれとも戦わない儘、頭頂部へと足を踏み入れた。

そして……其処には、中央でアルクオンが仁王立ちして、皆を待っていた。

そのアルクオンは、先頭に立って皆を先導して来たカイトの姿を見ると、即座にその場に跪いた。

初めて見た者は少し驚きはしたものの、カイトならば……、と納得をしていた。

知っている、見た者は言う迄も無く。しかし、驚きはその儘に。

「……。」

「ああ、構わん。今日の俺は脇役だからな。……お前の好きにするといい、アルクオン。」

「……。」

そうカイトに言われると、更に深く頭を垂れた後、すっくと立ち上がり、アレディ達と対峙した。

一方カイトは、その場から離れギリギリ淵の側に立って眺めていた。

「……遂に追い付いたぞ、羅刹機アルクオン。

ここが……こんな場所が……お前が目指した場所か？

お前は……相応しい争覇の中にいるべきなのだ。

……ここは敗れし者の墓標。

……お前が来るべき場所では無い！」

「……。《……敗れし者……？　墓標……？　否……。》」

アレディの心の叫び……。それに対し何も言わず、何の反応もしなかったアルクオンが、

唐突に喋り出した。……だが、それは……とてもアルクオンから出たとは思えぬ程、

恐ろしい……怨嗟（えんさ）と、恐怖と、絶望を本能に感じさせる声だった。

「……！」「ラセツキって、喋れるの！？」

「《再び……始まる……。進化と共に……新しい……静寂の世界を……。》」

「アルクオンッ！　……いや、お前は……誰だッ！！」「こ、これは……この感じは……！」

「！？　羅刹機から、何か浮かび上がって来おったぞよ！？」

「これは……さっきのヴェーゼント……！？　いや、違う……こいつは……！！」

《……我が名は……ヴァールシャイン・リヒカイト……。過去そう呼ばれたもの……。》

「ヴァールシャイン……！　間違い無い……！　あの戦いで俺が吹き飛ばした……！

やはり……お前だったのか……！！　ヴァールシャイン……リヒカイト！！！」

「そうか、ヴェーゼントが言っていた『最後に生み出されし者』……！」

「それが、どうしてアルクオンから！？」

「……物理的に肉体は存在していません。エネルギーそのもののようです。」

ヴァールシャイン・リヒカイト。

曾て己が居た、本来居(あ)るべき世界へ帰ろうと、全ての世界を繋げ探し続け、

エンドレス・フロンティアを創り上げた、ホームシックな張本アインスト。

だが、それでも結局見付からず。その世界をも失敗作として断定して破壊し、

そのエネルギーの余波で元の世界へ帰ろうと画策したのだが、

当然、それを認めないハーケン達によって討伐された……者の亡霊が、コイツである。

因みに、最後にヴァールシャイン・リヒカイトを貫いた時の衝撃によって、

エンドレス・フロンティアは融合して今の形になっている。

故に、ハーケンは或る意味創造主と言う事にもなるのだが、それは又、別の話。

（※実は、ハーケンが起こしたその衝撃により、アグラッドヘイム

のヴェルトバオムは暴走し、

ガグンは身体を失い、波国共々、エンドレス・フロンティアに瞬転する事になったのである。

故にその原因を作ったのはハーケンではあるのだが、そのハーケンが彼の者と戦った理由は、

全て神夜の為である。つまり、彼女の所為になるのか……と問われれば、それもまた違う。

抑(そもそ)も根本原因を造ったのがアインストな為、結局巡り巡って一番悪いのはアインスト。

と言う結論に落ち着くのである。以上、考察終わり。）

例えカイトから既に聞いていたとは言え、そんな彼の者との最悪な再会に、

ハーケン達が少し激昂し戸惑っていると、アルフィミィが彼の者の事をポツンと零した。

「……正確には、肉体という殻を捨てた……より純粋なもの……ですの。」

「要するに……化けて出たってことか、こいつは。」

「……凄い執念じゃ。アインストパワーには、参ったのう。」

《我の思念は彷徨(さまよ)い……再び……此処に……辿り着いた。そして待ったのだ……新しい身体を。

より強靱(きょうじん)で……より強さを渇望する……朽ちぬ身体を……！》

「この覇気の揺らめき……アルクオンの覇気と交じり合っているのか……！」

「……『憑いている』らしいな。」「器物に宿る命……まるで付喪(つくも)神(がみ)、ね。」

「アインストの霊体が、羅刹機を操っていると……！？」

《……そうだ。この『身体』は、より強い『意志の力』を求めた……。》「……。」

「羅刹機アルクオンが……望んだ……！？」

《この身体は……望んで此処迄来た。我は……呼び掛けたに……過ぎぬ。》「……。」

「アルクオンよ……お前はそれでいいのか？　修羅たちの争覇では無く……、

異邦より来たりし思念に、覇気に……その身を委ねると言うのか……!?

修羅では……駄目なのか……!?　私では……お前の『意志』になれないのか？

……まだ……修練が足りないと言うのか？」

アレディが、自身の未熟故か……！　と落ち込んでいた所に、声が掛けられた。

今迄ずっと黙って見ていた……カイトから。

「……アルクオンが、貴様を求めた？　いいや、違う。

……貴様がアルクオンを操っている？　いいや、違う。

強靱で朽ちぬ強い身体を欲した？　……最早その時点で貴様は全てを間違えている。」

《……何？》

「アルクオンは貴様を求めた訳でも、貴様に操られている訳でも無い。

……アルクオンは貴様に同情したんだ。共に強さを追い求める存在として……。

だが、それは違った。それは間違いだった。貴様は、強さを求めていた訳では無い。

その事にアルクオンは、今ようやっと気付いた。

……コレは……コイツは、自身の求めていたモノとは違う……！

と。」

《……それがどうしたと言うのだ？　救世主（メシア）よ。現に今、この身体は我の……。》

何か言おうとしたヴァールシャイン・リヒカイトの口が止まった。

何故最後迄言わなかったのか？　……否、言えなかったのだ。

何故ならば、その瞬間誰もが理解していたからだ。

……今、明らかにカイトは怒っている……と。

「アインスト。貴様等は、本来只の監視者……監察者だった。只、それだけの存在だった。

それが何時しか修正をし出し、しゃしゃり出て来やがって。

挙げ句の果てには、自身の思い通りにならないとその全てをぶち壊し、また新たに創り直し。

……まるで、テメェの気に入らねぇモノを全部ぶん投げる子供みたいだ。……なぁ？」

《……何が……言いたい？》

「――――何が言いたい――だと？　……んなモン、決まってんだろうが……！

そんな巫山戯（ふざけ）た暴虐……！　この俺が……！　救世主（メシア）たるこの俺が……！！

許すとでも思ってんのか……！！　このクソガキがあああぁぁッッッ！！！！！」

《ぬ……ぉぉおおお！？！？》

その瞬間、カイトから噴き出した圧倒的な暴力とも言える魔力の塊が、

ヴァールシャイン・リヒカイトをアルクオンから弾き出してしまった。

《ぬ……ぬぉおおおぉぉお……！！！　ば、バカな……！　我が……我……我は……！》

「テメェは其処で黙って見ていろ。過去にしか目を向けん貴様等には理解出来ん光景をな。」

《だ……だが……の、望まれぬ……者達に……我は……再び……！》

「……さっきから聞いてりゃ……うるせえな……黙ってろよ、三下。」

《……何……？》

「あんたの出る幕なんてとっくに無いのさ。
メインアクターの一機と一人は、もう舞台に上がってるんだぜ？」
「そういうこと。脇役はソデにド引っ込んでなさいな。」

未だ何か言おうとしたヴァールシャイン・リヒカイトだったが、
更にカイトからの圧力が掛かり、もう何も口にする事が出来無くなっていた、
――――そして。

「……アレディ。」
「……はい。」
「ここまで来たんですから。……頑張って。」
「……はいっ！」
「……。」
「羅刹機アルクオン……物言わぬ機兵よ。

お前が何を求めてここまで来たのか、それは訊くまい。

既に亡き者の思念と、今を生きる我が覇気……、

お前がどちらを選ぶべきなのか、この戦いにて決めるがいい……！

来い！　漆黒の羅刹機……！　轟き、覇壊せし者よ……！！」

第貳拾參話【轟き、覇壊せし者～紅い阿修羅～】

ｓｉｄｅ：アルクオン戦

「アレディ。アルクオンが今、何を求めているか……分かるな？」

「……はい。それは強さのみに非ず……！　我が心、我が覚悟、そして……我が魂を！」

「上出来だ。アレディ、無粋な横槍は俺達が全て片付ける。

お前はアルクオンとの闘争にのみ、全力を尽くせ。……いいな？」

「……承知！　……往くぞ、アルクオン！　我が争覇は……今、ここに存在（ある）する！」

「……！！！」

その言葉を皮切りに、アルクオンはアレディに襲い掛かり、アレディも同様に突っ込んだ。

そして、ヴァールシャイン・リヒカイトが産み出したアインスト達が、彼等の邪魔をする為に、

下から登って来、上から舞い降りて来、地面から現れて来た。……だが。

「……俺は言った筈だ。無粋な真似をする輩は、この俺が駆逐すると。消え失せろ、ナマモノ！」

その瞬間、目に見えていた全てのアインストは全く同時に消滅し、
遠くに見えるアインスト達は、その場から動かず遠巻きにこちらを
見ているだけだった。

「……フン、臆病者共が。ほら、お前等何やってんだ？
ちゃんとアレディの応援をしろっての。しっかり、負けてんぞ？
アイツ。」

「え？！　あ、アレディ！？」

そう言ったカイトが向けさせた視線の先には、
アルクオンの攻撃を一身に受けるアレディの姿があった。

「……！」

「ぬううっ……！　機神乱獣撃ィッ！　はぁぁぁ……ッ！！」

「……！！！」

「何ッ！？　力で……押し負けている……ッ！？　ぐ……ぐあぁぁ

あぁッ！！？」

「……今の、物凄い気の塊は……一体何だ？」

「あれは羅刹覇龍吼（らせつはりゅうこう）。アルクオンの有する、最大レンジの必殺技だな。

ハッキリ言って、今のアレディの乱獣撃よりも何倍も強い。

アレと力勝負とか自殺もイイトコだ。」

そう。アルクオンはアレディと似た業……覇気を龍の形にして飛び道具とする業を使い、

アレディもそれに応じて同じ様な業で対抗したのだが、あっさり力負けしてしまい、

その龍に吹き飛ばされた後、アッパーにより生じた衝撃波で空高く舞い上げられたのだ。

「ぐぅっ……！　……！？　ぬううっ！！」

落ちながらも、下で構えているアルクオンの攻撃に備え、身を固めるアレディ。

「……！」

だが、そんなものはお構いなしとでも言うかの様に、峻烈（しゅんれつ）な攻撃を仕掛けるアルクオン。

「……！！」

「ぬっ……！　くっ……！！　ぐあっ……！　ぐはぁっ！？」

羅刹幻殺甲（らせつげんさっこう）。拳の連打により、相手を空中へと押し上げ、弾き飛ばす業。

諸（モロ）に喰らったアレディは、壁へと叩き付けられ、呻き声を上げた。

「あ、アレディィィッッ！！」

「……待て。何をするつもりだ？」

「何って、助けるに決まってるじゃない！」

「戯けがッ！　奴の覚悟を無駄にする気か！！　今、アルクオンはアレディの覚悟を試している。

その覚悟に……漢の戦いに水を差すつもりか、愚か者がッッ！！！」

「……でも……！　でも……っ！！」

「……真にアレディの事を思うのなら、信じてやれ。
アレディは必ずアルクオンに打ち勝って見せると、な。」
「……アレディ……っ！　負けたら……本当に許しませんから……っ！！」

「……ぐっ……！　流石は……羅刹機アルクオン……強い……！
唯、只管（ひたすら）に……強い……！
だが、私とて早々負けてはいられん……！　往くぞ、アルクオン！　今度は私の番だ！！
機神朧撃拳！　てぇりゃぁっ！！」

「……！！」
壁から這（は）い出たアレディをアルクオンはずっと待っていた。彼の態勢が整う迄。
そして、今度はアレディから仕掛けた。
摺（す）り足によって、瞬時に目の前迄来たアレディに、思わず一瞬動きが止まったアルクオン。

その隙を逃さず、透(す)かさず連撃を加えるアレディ。

「まだだ！　覇皇剛衝殻！　機神剛鉄甲ぉッ！！　むぅんッ！　覇皇空円脚！！」

「……！　……！　…！？　……！！」

吹き飛ばし、殴り付け、滅多打ちにし、空へと巨体を蹴り上げた。

だが、敵も然る者。アルクオンは落ちながらアレディへと蹴りの連撃を見舞った。

「何ッ！？　しまっ……！　ぐあぁぁっ！？」

「……！！　……！！」

連続蹴りを見舞う羅刹連拳(らせつれんけん)からの、羅刹剛鉄甲(らせつごうてっこう)にて再度、空高く打ち上げられた。

――――そして。

「……！！　……！！　……！！　……！！！！！」

「ぐあッ!?　くっ……！　う……ああ……ッッ！！　……ッッッ！？！？」

連拳からの更に連撃拳。そして打ち上げた後に、落ちると同時に蹴りを放つ。

……アルクオンが持ち得る最強の連撃業――――羅刹断撃拳（らせつだんげきけん）。

さしものアレディもこれには耐え切れず、壁に減（め）り込んだ儘ピクリとも動かなくなってしまった。

「あ、アレディィィィッッッ！！！！！」

「……こいつは……。」

ネージュの絶叫が劭（こだま）する中、誰もが思った。――――これは、もうダメだと。……だが。

「何時迄寝惚けている、アレディ・ナアシュ。さっさと起きて戦え。

一体、何の為に、アルクオンは今、ここにいると思っている？

何の為に、貴様は此処迄来た？　何の為に……アルクオンは、貴

様は戦っているんだ？」

「……カイト？」

「立て……何れ王となるべき者よ……！

貴様は、此の様な所で朽ちていい漢では無い！！！」

「……カイト。……！？　あ、アレディ！？」

そのカイトの言葉が届いたのか、アレディがゆっくりと身体を壁から剥がし、

よろめきながらも、アルクオンの元へと歩み行き、息を、身体を整え、再び対峙した。

「……済まない、待たせたな……アルクオン。だが……まだ、終わってなどいない……ッ！！」

「……！！！」

そのアレディの言葉が届いたのか、アルクオンが声無き声で咆哮し、アレディに応えた。

「往くぞ、アルクオン……！　見事、我が覇気受け取り切ってみせるか……！！！」

「……！！」

「はあああああぁぁぁぁぁ……！！！！！　これぞ……！　争覇の構え……ッッ！！」

全身に気を漲(みなぎ)らせたアレディが、アルクオンに仕掛けた。己が最後の力を振り絞って。

「往くぞォッッ！！　機神剛鉄甲！　これで両断せしめんッ！！！」

「……！！！」

前に後ろに拳を打ち付け、同じ箇所のみを狙い撃って両腕に罅(ひび)を入れ。

「まだまだァァッ！！！　覇皇轟雷脚ッッッ！！！　機神乱獣撃ィィッ！！！」

「……！！」

練った気で空中に留まらせ、雷を宿した足で蹴り飛ばし、
その後を追わせる様に、覇気を龍の形に変え、何度もアルクオンを打ち付け。

「そこだッッ！！！　轟き覇せよ……！　轟覇……機神拳……ッ！！」

「……！？」

アルクオンのモーションを実体験し会得したのか、アルクオンのそれと似通った彼の攻撃は、
確かにアルクオンを怯ませ……そして。

「機神拳！　無双奥義！！　我……双覇龍と共にッ！！」

「……！！！」

気合いで弾き飛ばし、覇気の双龍でアルクオンを滅多打ちにし。

「むぅんッッ！！　これが……機神拳の神髄だァッッ！！！　いけ

ええツツッ！！！」

「……！！　……！？」

何度も何度も殴り、蹴り、叩き、打ち付け、そして……。

「真覇（しんは）……朧撃烈破（ろうげきれっぱ）ァァッツッ！！！！！」

「……！！！！！」

自身の渾身の一撃をアルクオンに叩き付け……アルクオンは、戦闘意志を放棄した。

「機神拳は――――無敵なり。」

こうして、アレディ・ナアシュは、アルクオンに遂に打ち勝ったのだった。

第貳拾参話【轟き、覇壊せし者～紅い阿修羅～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は戦闘無しの御話だけの回です。

そして、又、彼の登場ですｗ　再び株が暴落する様を御堪能下さいｗ

さて。このムゲフロの世界も折り返し地点を過ぎましたので、

少々気が早くはありますが、序でと言う事で幾つか御話があります。

1．次の世界について。次の世界は『魔法先生ネギま!』にしようと考えています。

一応、有難くも可成りの数の御要望は頂いておりますが、

誠に申し訳ありませんが、今の所全て御辞退させて頂いております。

今後も御要望は常に受け付けておりますが、恐らく今回はこの儘進むかと思われます。

ですが、なるべく御要望には応えたいと思っております。

……さて、私が何を言いたいか、御解りでしょうか？

以前から申し上げております通り、『ネギま！』世界に入ると話の流れ上、

その儘寄り道せずになのは世界迄、一直線です。

ですが、皆様の御要望にはなるべく御応えしたいと思っております。

……つまり……？　……私に言えるのは、後一言だけです。

『タイトルと登場人物は既に決まっています。』　その際は御楽しみにｗ

2．え～……実は今回からですね。

私のムゲフロｅｘに於ける技構成とかを、この後書きにて書こうかと思っています。

一話ごとに一人メインキャラを、計十回。

因みに、後二十話弱程度ある為、書かない回もありますので悪しからず。

そんなモン誰が見んだよｗ　何なの？　馬鹿なの？　死ぬの？　……ｅｔｃ．

と言う方は、どうぞスルーしちゃって下さいw　誰も読んで無くても、私は書いちゃいます。

……え？　何でそれでも書こうとしてるのかって？　俺が書きたいからさ（キリッ

と言う訳で、御覧になって下さる奇特な方々は、その儘スクロールで御願いします。

それ以外の方々は、今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、第一回目！　私の技構成　アレディ・ナアシュ　の回です。

因みに、私はA：通常時　B：孤高使用時　C：覚醒使用時　と使い分けています。

では、少々の解説と併せて御覧下さい。

A：覇皇剛衝殻→機神連拳→機神乱獣撃→覇皇空円脚→轟覇機神拳

（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：覇皇剛衝殻→機神乱獣撃×４（消費ｃｏｍ１５０％）
Ｃ：覇皇剛衝殻→覇皇両断刀→覇皇轟雷脚→機神乱獣撃→轟覇機神拳（消費ｃｏｍ１２０％）

です。基本的に私は支援＆援護を常にフル活用する事を前提で組み合わせています。
一番厄介なのは轟雷脚→乱獣撃ですが、それこそ、そこは支援を挟めば無問題です。

後、問題なのは、連続攻撃時の剛衝殻のタイミング。
これは、出が遅いのは皆さん御存知だと思いますが、
その分、実は可成り拾える範囲が大きいんです。
ですから、壁に吹き飛ばして跳ね返った直後に入れ替えれば、ほぼ確実に拾えます。
尤も、上にあげてしまった時は、それこそ慣れと勘で拾うしかありませんが；

逆に両断刀は拾える範囲が可成り狭いので、
ギリギリまで引き付けてから出さないと、二撃目がスカって落としてしまいます。
逆にもっと早過ぎるぐらいに出すと二撃目がスカっても、辛うじて三撃目が当たり、
一応落とさずに済む事もありますので、決して慌てずに見極めて下さい。

因みに、アレディの援護：機神朧撃拳は、実は地面擦れ擦れで呼ぶと、
フルヒット（１６ｈｉｔ）します。高い位置で呼んでも、ヒット数

は少ないながらも、
ちゃんと拾ってくれますので、実は結構優秀な援護だったりします。

ですので、ギリギリで硬直が解ける支援&援護の後に連打すると、
重さに関係無く、
ほぼ確実に拾ってくれる上、安易にフルヒットしてくれますので、
可成り楽です。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は、ネージュの技構成です。御
楽しみに?

第貳拾肆話【平穏という名の蜃気楼（ミラージュ）～絶望への秒読み（カウントダウン）】

現時刻（１９：５５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，５１５，３７８アクセス　ユニーク：２０８，２７５人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

さて、今回はヴィルキュアキント・後編～トレイデル・シュタットです。

今話は、後書きにてとある報告が御座いますので、

誠に申し訳ありませんが、どうか御一読頂ければ幸いです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第貳拾肆話【平穏という名の蜃気楼（ミラージュ）～絶望への秒読み（カウントダウン）】

ｓｉｄｅ：アインストレジセイア体内　頭頂部

戦意を引っ込めたアルクオンは、只じっとアレディを見据えた儘で、立ち尽くしていた。

後はアレディがその覚悟を、自身の想いをアルクオンに伝えるだけだ。

そちらはもう何の心配もいらないだろう。……だが、問題はもう一方……。

アルクオンからカイトによって追い出されたヴァールシャイン・リヒカイトは……。

「……。」

《おおおお……何故……だ……！　この……世界を……世界の……我が……！！

何故……何故……！　敗れる……！？　何故……我が再び……敗れるのだ……！！？》

「……。」

《何故……拒絶する……！？　我は……求め……貴様は……応えた……！　それを……！！》

「OK、アインストボス。幕引きの時間だ。」

「あんたは顔じゃなかったってことなんだな、これが。」

「覇気が消えていく……。最期の刻です、ヴァールシャイン・リヒカイト。」

「……。」

「我が覇気に応えよ……！　漆黒の羅刹機、アルクオン！

我が命に従い、お前が居るべき場所へと帰るのだ！」

誰もが思った。やっと……もう、これでやっと終わりだ、と。……だが。

《……お……おお……おおおおお！！！！！　み……認めぬ……！

認めぬ……認めぬ……認めぬ……！！！！　我は……！　このようなことは……！

決して……認められぬ……！！！　我が……滅びるなどと……！！？≫

「……往生際の悪い奴だな。もう、あんたに残された手は無いんだぜ？」

≪おおお……！　いや……まだ……まだだぁッ……！！　め……メシア……！

救世主（メシア）……！　救世主（メシア）……救世主（メシア）ァァァ……！！！　す……救いを……！

我に……我に救いをォォォォ……！！！　救世主（メシア）ァァァァアッッッ……！！！！≫

「……残念だが、あんたの望みは叶わないぜ？」

そう。誰もが、本当にそう思った。あれ程怒りを見せたカイトが、協力など……。

況（ま）してや、救いの手を差し伸べるなどと、一体誰が思うものか……と。

――――だが。

「……しょうがねぇなぁ。」

「……カイト？」

「救世主たる俺が、救いを直接求められて応えない訳にはいかないだろう？

この身は、『真なる救世主（メシア）』たるが故に。

叶えようぞ、其方（そなた）の願いを。ヴァールシャイン・リヒカイトよ。」

「な！？　ば、バカな……！　アンタ、自分が何を言っているか分かってるのか！？」

誰もが我が耳を疑った。誰もがその言葉を信じられなかった。……カイトの言ったその言葉を。

だが……それは、紛う事無き事実以外の何物でも無かった。

《ふ……ふはは……ふはははははは……！！！　救世主（メシア）ァァ……救世主（メシア）ァァァ……！！！

我を……！　我が望みは……！！！》

「分かっている。朽ちる事の無い、強靱な肉体……だろう？」

《お……おおおお……！！！　救世主（メシア）ァァァ……！！！》

「ならば、貴様の魂を寄り代にしてその肉体を構築してやろう。不変の肉体だ。

貴様の魂が、その思念が残っている限り、永劫存在する事が出来る肉体だ。」

「そんな……！？　そんなことをしたら、エンドレス・フロンティアは……！」

《おおおお！！！！！　早く……！　早く……我にその肉体をォォォォ……！！！！！》

「急くな。今、創る。……出来たぞ。」

「くっ……！」

《おお……おおおお……おおおおおおおおお！！！！！
これだ……！

これこそ……我が望んだ……！　決して朽ちぬ強靱な身体……！
正にィ……！！！

ふはははは……！　では……修正を……始めよう……！！！》

「チッ……！　言わんこっちゃない……！」

自身が望んで止まなかった己が肉体を得たヴァールシャイン・リヒカイトは、

手始めにとでも言わんばかりに、ハーケン達に攻撃をし……ようとしたのだが、

そう言葉の直後にその場を動かなくなった。……否、動けなかったのだ。

だが、その事に一番驚いていたのはハーケン達以上に、何より本人自身であっただろう。

《こ……これ……は……一体……どういう……こと……だ……救世主（メシア）ァァァ……！！！》

「どういう事？　お前の方こそ、一体何を言っている？　ヴァールシャイン・リヒカイト。」

「……カイト？　……アンタ……本当に一体、何を考えてやがるんだ？」

本当に誰にも理解出来無かった。カイトが一体、何がしたいのか。

……唯一人、事前にその事を聞いていた、アルフィミィを除いて。

「何を……？　何もへったくれもねぇよ。

今、俺は救世主（メシア）としてヴァールシャイン・リヒカイトを救った。

その望みを叶えてやった。

もう、その時点で救世主（メシア）としての俺の責務は終わってんだよ。

つまり、だ。……今、此処にいるのは救世主（メシア）などでは無く……。

世界の害となるモノを、此の世から排除する為だけに存在する……

……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』だ。」

《……お……おおお……おおおぉぁぁぁあああああ……！！！！！！！！！！！！》

「理解したか？　俺の行動の理由を。そして――――貴様の運命を。」

《救世主（メシア）アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！》

「ヴェーゼント・リヒカイトにも言っただろう？　……そして、貴様も聞いていただろう？

貴様等の望みが自身に対するモノに変わった時、

既に貴様等はその存在を、道を違えたのだと。

これはな……ヒトの可能性を信じられなかった……貴様等に対する懲罰だ。

……安心しな。もう、二度と……何モノにも患わされる事無く……静かに暮らせるからな。

逢いに逝け……貴様の親に。　アインスト・ノイ・レジセイアに、な。

全魔力開放　左手に混沌

カオス・エンド」

《救世主（メシア）アアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァ
アァアァアァアァ
ァアァアァアァアァアァアァアァアァアァアァアァアァアァア
！！！！！！！！！！》

そして、ヴァールシャイン・リヒカイトは、その魂ごと完全消滅したのであった。

「ふぅ……一時はどうなることかと思ったが……。」
「全くですの。サプライズにも限度がありますのよ？」
「へ？　アルフィミィちゃん、もしかして知ってたのかい？」
「はいですの♪」
でも、内容までは教えてくれなかったのですけれど……悪趣味にもほどがありますの。」
「いやいや、そんなに褒めるなよぅ♪」

“褒めてない、褒めてない。”

「ん？　でも、面白かっただろ？」

「はいですの♪　とってもドキドキいたしましたの♪」

「……お陰様で嫌な汗ダラダラだぜ。……ったく。」

どうやら、ヴェーゼント・リヒカイトとの戦いの後に、アルフィミィと話していた事はこういう事だった様だ。

全員冷や汗ダラッダラもんだった様で、カイトに厳しい目を皆して向けているが、

当の本人には全くの梨の礫である様だ。ハァ……と一様に溜息を付き、騒動は終結した。

「……。」

「アルクオン……。お前から見れば、私はまだ未熟だろう。

……だが、修練の果てに、必ずお前を使役するに足る修羅となろう。

――――私に力を貸してくれ、アルクオン。

この世界に広がる争覇……私は……勝ちたい……！！」

「……。」

アルクオンは、アレディのその言葉、その覚悟に頷いた。

遂にここに、アルクオンはアレディとその道を共に歩む事になったのであった。

「やったじゃない、アレディ！」

「ありがとうございます。ネージュ姫殿。

……ですが、これは私だけで成し遂げたことではありません。

皆さんがいなければ、ここまで来ることすら出来無かった。」

「気にするなよ、偶々さ。」

「ですが、それは修羅として……。」

「何でも一人で出来るわけじゃないですよ、アレディさん。」

「己で出来ることには限界がある。そこから目を背けてはならぬ。」

「修羅は真に孤高足り得ぬ。孤高たるは、唯一王のみ。だがそれも、己が一存による。

お前が修羅足り得るかどうかは、お前の心、お前の覚悟一つによるものだ。

学べ、全てから。精進しろ、万事を。驕るな、何もかもを。その先に、お前の道がある。」

「……そうですね、その通りです。お言葉、深く心に刻みました。」

うむ、と頷くエイゼル達。そして……カイト。

アレディは、また一つ学んだ様だ。

「後は、アルクオンをハリュウの塔に連れて行けば……貴方の旅も終わりね。」

「そうなります。ですが……いえ、まずはここを出ましょう。」

「そうじゃな。家に帰るまでが、アルクオン捜索じゃぞ？」「じゃ、早いとこズラかるよ。」

「あの～、その前に……ちょっとお宝探しなどさせて頂いても宜しいでしょうか？」

「空気の読めないメス猫めが。何を言ってやがれておられるので？」

「気持ちは分からないでもありませんけどね。」

「……帰り道だけにしておけよ。」

とまぁ、軽い遠足気分で帰ろうとした一行であったが、それを珍しくカイトが窘めた。

「いやいやいやいや。そんな暇は全く無いぞ？

もう後、幾許（いくばく）かも無い内に、此処は当然の事、ヴィルキュアキントごと崩壊しちまうから。

さっさと此処を脱出しないとペチャンコの生き埋めになっちまうぞ？」

「……マジかの！？　そいつはいかんのじゃぜ！　さっさと出んと……！」

「慌てるな。纏めて俺が転移させるから。全員いるな？　んじゃ、脱出するぞ！」

そう宣言してカイトは全員連れて、その場から速攻で転移した。

ほぼその直後、アインストレジセイアの体内は崩壊を始め、

カイト達が、アブリエータ城へと転移し終わる頃には、

ヴィルキュアキントも遙か海底深く迄、沈み込んで逝く所であった。

第貳拾肆話【平穏という名の蜃気楼(ミラージュ)～絶望への秒読み(カウントダウン)～】

ｓｉｄｅ：新ロストエレンシア　アブリエータ城前

カイトによって其処に転移して来た一行は、遠くでまるで唸り声の様な地響きを聞いた。

果たしてそれは、ヴィルキュアキントが崩壊し海の底深くに沈み行く断末魔の様であった。

「……皆さん、ご無事ですか？」

「ふう……とんだ地上激動篇じゃったのう。ちゅうか、ここはどこじゃ？」

「ここは……アブリエータ城！？」

「どういうことだい？　何で、こんな所に転移して来たんだ、カイト？」

「ん？　いや、もう橋も直ってる頃だし。ツンデレウルフにも説明しとかなきゃだろ？

何より、次に向かう先は修羅に攻め込まれ掛けているトレイデル・シュタットだろうしな。」

「……相変わらず先を読んでるのう。ちゅうか、読み過ぎてわしらには分かり難いわい。」

「こまけぇこたぁいいんだよ！　それよりも、さっさとあのワンコロのとこ行って説明して来な。

序でに、エイゼル坊やは怒られて来い。」

「む……。」「怒られちゃうの？　エイゼル。」「ルボルボですものねェ。」

「それで、アンタはどうするつもりなんだ？　口調から察するに、俺達とは別行動っぽいが？」

「ああ。俺は、ヴィルキュアキントを完全に消滅させて来る。

アレは百害あって一理無しだからな。んじゃ、ちょっくら行って来る。」

「あ、カイト！　……さっさと行ってしもうたのう。」

「……まぁ、いいさ。カイトなら何の心配も無いだろう。俺たちはさっさと中に入ろうぜ？

俺達がメギ・エルフェテイルにいた間に、こっちで他に何かあったかも知れないからな。」

ハーケンの言葉に賛同した一行は、カイトの消滅する方法に少々興味はあったものの、

取り敢えず城内に入るのであった。

一方、その頃。アグラッドヘイムでは……。

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス内

何時ものヴェルトバオムの前で、アグラッドヘイムの幹部達が一堂に会して、
何やら、協議をしている様であった。

「ロックよ。例の件、どうなっておるのだ？」

「はっ。先程、ガンド三兄弟の末弟……ジョーム・ガンドから報告がありました。

過去の大戦時に封印された、アインストの『思念』……あのシュラたちの一団に倒され、

その魂は……彼の救世主（メシア）の手によって滅されたとのことです。

それどころか、あの腕のような島そのものをも、

彼の者が放った不可思議な真白な輝きにて、一欠片も残さず完全に葬り去ったとか。」

誰からか、唸り声の様なものが漏れた。

矢張り、彼が最も厄介で最大の障害物である事は、紛れも無い事実である様だ。

「……然もあらん。彼の救世主（メシア）がいるのであれば、当然の帰結と言えよう。よい、捨て置け。

……シュタールに扮していたモノは吸収したものの、あの程度では渇きも癒えよう筈も無い。

ロックよ。早く……ヴェルトバオムの渇きを癒すのだ。」

「……はっ、仰せの儘に。ですが、今暫くは少々様子見をした方が宜しいかと愚考致します。」

「……どういう意味だ？」

渇きを癒せと言うガグンの言葉に、傍観に徹する方が良いと言うロック。

当然疑問に思うが故、問い質すガグン。

「それは、リグ・ザ・ガードが説明致します。」

「はっ。この後、恐らくは大きな戦いが起こります。

剛錬のアレディ……アレディ・ナアシュ達のシュラ一派と、

もう一つのシュラである、凍鏡のゲルダ……ゲルダ・ミロワールの一派との間に。

その証拠として、エンドレス・フロンティアに下りていた我が隊が、シュラに襲われました。」

「あらやだ、大変。貴方、無事だったの？」

「我は問題無い。だが……。」

「……調整中のビャクヤが、奪われたのだったな。」

そのロックの言葉に、思わず激昂するガグンとヒルド。

「何……！？」

「ちょっとリグ！　貴方ともあろう者が何をやっているの？」

「……伏兵に気付かなかったのだ。」

「……伏兵？　何者かね？」

「シュラたちの使う、獣の顔をした闘士たちです。牛と馬の顔を持つ、恐らくは上級のシュラ兵。

その者たち……理由は判りませんが、ビャクヤの制御コードを知っていたのです。」

失った経緯について、リグから説明を受けたガグンはロックを叱咤した。

無論ロックも自身の失態に対し、深く頭を垂れ平身低頭してガグンに詫びた。

「ロックよ……！　どういうことだ！！」

「申し訳ございません、ガグン様。先程も申し上げましたように、調整中の一機だったのです。

制御コードを完全に無効化していなかったのは、私のミスです。」

「これでこちらに残ったビャクヤは一機のみという事ね。……私が取り戻しに行きましょうか？」

「……捨て置け。一機あれば問題は無い。そうだな？　ロック・アイよ。」

「御意に。……シュラたちの戦いが終われば、また樹の渇きは癒えましょうぞ。」

「……例えどちらが勝とうとも、我々は純度の高い『魂』を得ることが出来る。」

「成る程。漁夫の利を得よう……と言うわけね？」

傍観と言う理由に納得した一同。だが、最悪一つの可能性は無いかと問うガグン。

「……その者たちが結託する可能性は？」

「それは考えられません。我はハコクにて……何度もシュラと手合わせをして来ました。

強者が生き、弱者は死す。それがシュラの世界の掟。例外はありませぬ。

……少なくとも、我が見て来たシュラたちには。」

「……何れにせよ、闘士たちの魂は我々の下に来たる、か。

彼の救世主（メシア）は、ことにシュラを憎んでいるとも聞く。

まず、彼の者たちが生きていられることは無いであろう。」

「……左様でしたか。では、残るのは恐らく……。」

「うむ。彼の者たちと行動を共にしていると言うことは、恐らくはそうであろう。」

「……我が王よ。願わくば、アレディ・ナアシュとの決着は我が手にて……。」

「うむ、良かろう。好きにせい。」

「ハッ！　有り難き幸せ。」

「……だが、果たしてそれでヴェルトバオムの渇きがどの程度癒されるか……。

ロック・アイよ。他にも手筈を調えておけ。よいな？」

「畏まりました。」

「うむ。……む！？　何者だ！？」

結論も出、只、傍観だけでは無く、他の手も考えより多くの魂を手に入れろと指示するガグン。

それに応じるロック達であった……が、其処で話は終わらなかった。

先程迄は何も感じなかった気配を、唐突にその場に感じたのだ。

それは、今迄一度も感じた事の無い初めての……得体の知れない気配であった。

「あらら。ここに来ればアリエルちゃんと会えると思って来たのに……。

アテが外れてしまいましたわね。」

「だから、アタシが言ったじゃない、ラフィ姉様。あの娘、ここにはいないよって。」

「そうでしたわねぇ。貴女の勘、相変わらず野生の獣並みにズバ抜けてますのね。」

「……それは褒め言葉として受け取っていいんだよね？　ねぇ、ラフィ姉様？」

「ええ、勿論ですわよ、ガブちゃん♪」

「……何か……ものすんごくバカにされてる気がして仕方がないんだけどなぁ。」

（……本当に勘の鋭い娘。でも結局、最後まで気付かないのよね……。

まぁ、そんなおバカな所がまた可愛いんですけれど、ね♪）

そんな漫才を、ガグン達を前にして何の緊張感も無く繰り広げている、二人組の女性。

その容姿に何となく既視感があった。

……彼女達の台詞がそれを証明していたのに気付き、ガグンから声を掛けた。

「其方たちは……あの少女とどんな関わりがあるのだ？」

「あら。これはごめんなさいね、すっかりこっちだけで話し込んじゃって。

私は、ラフィレス＝シュレスト。あの娘とこの娘の、姉ですわ。」

「アタシは、ガブリュース＝シュレスト。自己紹介はこんぐらいでいいっしょ。

取り敢えず、ウチの末っ子がどこに行ったか、誰か知らない？」

「……あの少女の姉……成る程。だが、残念だったな。

彼の者が何処へ行ったのか、我らも知らぬのでな。

彼の救世主に敗れて癇癪を起こしていたからな……。

何か対策でもしに行ったのでは無いかね？」

「あらあら。やっぱり、負けちゃったのね、あの娘。

だから言ったのに……私達全員で戦わないと勝てないって。」

「本当にしょうがないなぁ、もうっ。まぁ、いいや。強大な魔力を感じてから行けばいいっしょ。

どうせ、アタシ達が介入するまで時間掛かるだろうし。」

ガブリュースの言葉を聞いたラフィレスは、暫し考え込んだ後、徐に顔を上げ、

自身の結論を彼女にだけ聞こえる様に漏らし、其の後ガグン達へと話し相手を変えた

「そうねぇ。あの娘もそれ程馬鹿じゃ無いから、そうそうアレな事はしないでしょうし、ね。

それじゃ、教えてくれたお礼……してあげましょうか、ね♪」

「お礼？　あらあら、一体どんなことしてくれるのかしら？」

「うふ♪　も・ち・ろ・ん♪　貴方達がとっっっても喜ぶこ・と・を・よ♪」

「……ラフィ姉様。だから、それじゃ却って警戒されちゃうって、前から言ってるじゃん。」

「あら、酷いわね、ガブちゃんったら、もうっ。……ま、いいわ。分かり易く言っちゃうとね？

ヴェルトバオムの渇き……私達が或る程度は癒してあげられるわよ？」

“な……！？　何……だと（ですって）……！？”

ｓｉｄｅ：アブリエータ城　王の間

其処には、彼の狼王ルボール・ククルスが、玉座の前に仁王立ちして眼前の者を睨んでいた。

其処には、骸骨王エイゼル・グラナータが、彼に睨まれながらも対峙していた。

そして、その後ろに遠巻きに眺める様に、アレディ達がいた。

「……全く、何やってやがる……！　テメェは王なんだろうが……！

本人がほっつき歩いてどうする！！」

「……アグラッドヘイム……我らフォルミッドヘイムとは無関係ではない。

これは、我が自身の目で確かめねばならぬことなのだ。」

「そんなことは子分にでもやらせとけ！！」

厳しくエイゼルを叱り付けるルボール。エイゼルも他人事には出来無いと反論する。

しかし、その光景を見た前回の戦いを知っている者達は、皆こう思った。

お前が言うな。

「しかし……中々新鮮な光景でございますね。

カイト様が仰っていたとは言え、まさか本当にあのルボール様がお説教をなさるとは。」

「あん、前回はヤリ一本でフォルミッドヘイムにまで乗り込んだってのに、ね。」

「ルボちゃん、自分も暴れたいだけでしょ？」

「あ、あの……じゃあ一緒に行きますか？」

「ふざけるんじゃねェッ！　そこのガイコツ野郎とは立場が違うんだ！」

「世界の融合で、自分の領地の殆どが無くなっておりますものねえ。」

「成る程、それで気が立っておるんじゃな？　八つ当たりウルフめ

が。」

「茶化すんじゃねェ、年増狐が！　シュラの連中も、隣のトレイデル・シュタット辺りまで侵攻してるらしいからな。

猶の事、ここを離れるわけにはいかねェ。」

「チッ……本当にもうそこまで来てやがったのか。……何もかも、カイトの言う通りだな。」

「ん？　そういや、そのバカイトはまだかの？　あやつにしては、ヤケに時間が掛かっとるのう。」

「いや、流石のカイトさんでも、あの大きさを壊すのには時間が掛かるかと……。」

「……ぬしら、やっぱりまだあやつのことを分かっとらんのう。あやつはの……ん？」

小牟が溜息を付き、神夜達に説明を始めようとした時であった。

王の間の窓から、強烈な真っ白な光が唐突に差し込んだのだ。

一体何事か？！　と数瞬慌てた皆であったが、すぐにその騒動も収

まった。

何故なら……当の騒動を起こした本人が現れたからである。

「ふぃ～。久し振りにハッスルしちまったずぇ～い。」

「ぬおっ！？　……やっぱ、今のはぬしの仕業かの？　カイト。」

「モチのロンドンブーツよ。危うく暴走仕掛けて、命一つ使っちまったけどな。

いやはや本当に危なかった。……もうちょっと気付くの遅かったら、

エンドレス・フロンティア消し飛んでたからなぁ。アッハッハッハッハ……！！！」

「あっはっは……ちゃうわっ、ドアホッ！！！

何を軽々しく笑っとるんじゃ、戯けがッ！　わしらごと殺す気か！！」

「まぁまぁ、そんなにがならんでも。

最悪壊しちゃったら、すぐに元通りに直せばいいんだからさ、な？」

「な？　じゃないわいッ！！！　全く、ぬしは昔ッッッからそういう

う……！！！」

「いや、だって……。」

どうやら、痴話喧嘩が始まってしまった様である。

……中身は何とも不穏で危険な台詞のオンパレードではあったが。

何人か、二人と零児をニヤニヤしながら見ていたが、零児が何の反応も示さないのと、

二人の口喧嘩が余りにも自然だったので、少々興が冷めたのか、舌打ち迄して話を元に戻した。

「……コホン。話を戻すが、シュラってことは、

あのコールド・ミラーたちがまた動き出したってことかい？」

「ああ。どうやってるか知らねェが、南西部の雪原が広がり始めたらしい。

……巧いやり方だぜ。自分の領地を拡大するのに、そんな手があったとはな。」

「感心してる場合じゃないだろ。」「その方法が判ったらやり兼ねない感じだな、これが。」

「ルボール王、それは最近の話？」

「ああ、急激に広がり始めたらしい。あのジョーン・モーゼスも大慌てらしいぜ？　お笑いだな。」

「ちっ、笑い事じゃないぜ？　暴れウルフ。」

流石に皆も心配になって来た。神夜を筆頭として、何人かが早速助けに行こうと提案した。

「ハーケンさんのお父様……助けに行った方がいいんじゃ……。」

「調査とシュラ対策として、

バウンティーハンターを中心に、使えそうな連中を集めてるみたいだがな。」

「ダディ・ジョーンが賞金稼ぎを集めてる話……マークハンターが言っちょりましたのでした。」

「あやつか……今度は修羅に雇われたりしておらぬであろうな。」

「アグラッドヘイムが絡んでいる可能性も考えられます。警戒が必要です。」

「はぁ～、面倒くさいねえ。え～と、つまり……そろそろ休んでいいってことかい？」

「……で？　そのジョーンとか言う奴を潰せばいいんだろ？」

「……イイ訳無ぇだろ、ポンコツ終焉共。」「……ちゃんと話を聞け。敵は修羅の連中だ。」

「……ぶち壊された橋の修理は出来てる。行くなら勝手に行け。」

「サンクス、キング・オブ・ウルフ。そうさせて貰うぜ。」

そして一行は、一路トレイデル・シュタットを目指すのであった。

その頃、ゲルダ一派のシュラ達は……。

ｓｉｄｅ：新ロストエレンシア　アイスベルク監獄　獄主の間

凍鏡のゲルダことゲルダ・ミロワール。

そして、騒音のチョコバナナ……基、操音のヘイムレンことヘイムレン・シルバート。

その二人がこの『獄主の間』にて、何やら今後の事について話し合っていた。

「ヘイムレン、どうだ？」

「はい。あの『鏡』……異邦の業とは恐ろしいものです。

ロストエレンシアの機械技術、カグラアマハラの『戦術絡繰り』、

そしてこの鏡があれば……我が軍は大きな力を持つことが出来ましょう。

後はアレディ・ナアシュが羅刹機アルクオンを手に入れていれば

……それもまた……。」

「アグラッドヘイムとの戦いで奪った『機兵』はどうなっている？」

「……どうやら、異邦の獣羅たちと関係があるもののようです。彼らに見させてはおりますが、使えるようになるまでは、今暫く掛かるかと。」

「我ら修羅が、この異邦の地で覇を争う為にも……曾て波国で戦ったアグラッドヘイム。

何としても、決着を着けねばならぬ。しかし……その為の兵力は、未だ足りぬ……！」

「あの『鏡』の実験を始めています。きっと、御満足のいける結果を御見せ出来るかと。」

「……分かった。任せる、ヘイムレン。……む？！」

「……誰だ！？」

どうやら其処で話は一段落付いた様である。その頃を計っていたのか。それとも偶然か。

丁度話し終わった直後に、此の場に何者かが侵入して来た様だ。……二人が気付く事も無く。

曲り形にも手練れの二人に、気配すら気取らせずに此処迄近付ける

存在……。

二人の修羅が警戒するには十分過ぎる程の相手であった……のだが。

「誰だ、とは御挨拶じゃない。あたいはアンタ達に協力してやりに来たってのにさ。」

「……子供？　いや……只の子供がこの様な場所にまで来られる筈が無い……か。

貴様…ナニモノだ？」

「あたいのことはどうでもいいのよ。それよりも、アンタ達が持ってる『魔倣の鏡』。

アレ、ちょっと弄らせて貰ったから。その報告に来ただけ。」

「何……！？　貴様……一体、何をした！？」

そのヘイムレンの激昂振りに、つまらなそうに鼻を鳴らす幼女。

微塵も動揺した様子を見せず、狂ったとしか思えない程に高らかに何時迄も笑い続ける幼女に、

思わず身震いを感じずにはいられなかった二人であった。

「……フン、器量の狭いこと。まぁ、いいわ。別に大したことはしてないわよ。

唯単に、命令系統をより強化して、遅延させて、その間にシャットダウン出来る様にしただけ。

アンタ達が使う分には何の問題も無いわよ。これは飽く迄もアイツに対する処置。

……そう。あの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』に対する……ね。フッフッフ……。

アッハッハッハッハ……！　アーーーッハッハッハッハッハッハッハ……！！！！！

アイツの慌てふためく姿が、目に目に見えるわ！　アッハッハッハッハ……！！！

所詮、アンタなんかにはそんな姿がお似合いなのよ！！！！！

アーーーーッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！！！！！！」

ｓｉｄｅ：新ロストエレンシア

匠の技によって完璧に直された橋を渡ると、

右手側に巨大なビル群……トレイデル・シュタットが見えて来た。

取り敢えず外から見た限りでは健在なその様子に、ホッと一安堵の一行。

早速街中に入ろうとした一行。だが、そんな時アレディが一つ提案を出して来た。

「ハーケン殿。街に入る前に、南西部の氷原を見ておきたいのですが……宜しいでしょうか？」

「構わないぜ。それじゃ、先に南下しておこうか。」

そして、南西部に向かった一行を待ち受けていたのは、

街道や山の殆どを氷で覆われた氷の大地であった。
その余りの寒さに、メンバーの多くは悲鳴を上げていた。

「な、何て言う寒さ！」「こりゃ相当なもんだよ！」
「い、いかん……これはいかんぜよ……！」「み、身の危険を感じますの……！」
「とんでもないド寒波よ！　私の下半身も、かなりヤバいことになってますから！」

「お前たちはそうだろ。全然参考にならん。」
「そ、それは参考にならないと思います……ネージュ姫殿／／／／／／」
「とても分かり易い人達でした。本当に有難う御座います。」

「……いや、実際マズいな。俺がこっちにいた頃は、ここまでじゃ無かった。」

「この感じだと、トレイデル・シュタットまではすぐに到達しちゃいそうダス。」

「明らかに自然のものではありません。人為的な力が作用していると思われます。」

天然ボケ達にツッコミもしっかり入り、マジメに話し始めると、アレディが何かを感知した様だ。

「……風に覇気が混じっています。間違い無く、修羅の業……凍鏡のゲルダの力でしょう。」

「そりゃまた、何とも……。」

「あんなカッコしてて、本人は寒く無いんかい。……うう、わしも冷えて来おった……。」

「しかし、幾らバウンティーハンターを集めたって、こりゃどうしようもないぜ。

とにかく、街でオヤジに話を聞いてみるか。」

「ええ、その方が良いと思われます。」

「……ぶるるっ。そ、そうじゃそうじゃ！　早くわしらを温い所へ連れて行かんかい……！

年寄りには、この寒さは応えるぞ……！

……ちゅうか、カイト。何でぬし、そんなに平然としておるんじゃ？

ぬしもわしらとそう大した格好しておらんじゃろうに……。」

「ん？　……あ～、いや俺な。環境とかに何か制限を受ける事が無いんだよ、全く。

分かり易く言えば、俺自身の状態は生きていく上で、常に丁度快適になる様になってんだ。

俺が意図せずとも、自動的に、勝手に。」

「んなっ！？　ひ、卑怯じゃぞ、バカイト！

そんな便利なモンあるなら、さっさとわしらにも使わんかい！」

「いや、だからな？　これ、俺が使ってる訳じゃ無くて、自動的になってるモンなんだって。

……何だったら、お前も喰われてみるか？　【アイツ】に。そうすりゃ、貰えるかもよ？」

「……いや、やめとく。と、取り敢えずさっさと町中に入るぞ！　わしはもう限界じゃ！」

そんな事をやいのやいのとは話しながら、皆急ぎ足で其処から逃げ去り、

さっさと町中へ入り、ジョーンの元へと急ぐのであった。

ｓｉｄｅ：新ロストエレンシア　トレイデル・シュタット　執務室

一行を部屋に迎え入れ、座る者、立っている者、寝転がる者、各々様々に落ち着いてから、

ジョーンは取り敢えず挨拶から始め、カルディアに目を配った。

「オーライ、無事だったようだな、ハーケン。」

「ああ、色々あったけどな。カルディア、無事にオヤジを守ってくれた様だな、サンクスだ。」

「私は課せられた任務を果たしたに過ぎません。礼は不要です、キャプテン・ハーケン。」

「そうかい。……身体に異常も特に無いようだな。」

「はい。現在、機能に障害は認識されていません。任務に支障はありません。」

機械的な受け答えながら、取り敢えず問題は無い様に思われるカルディアに、

また別の意味でホッと一息付いた一行。それを確かめたジョーンは、

改めて話し出した。

「それにしても……以前会った時より、また少し人数が増えたようだな。

新フォルミッドヘイムのキングまで連れているとは驚いたぞ。」

「この戦い、確かめねばならぬことがある。」

「しかし、キングが国を空けると言うのは感心せんな。」

「む……。」「エイゼル、また怒られちゃってるよ？」

「……いや、羨ましい限りでな。俺も冒険をしたいものさ。

それこそカイトの様に気儘な旅路を、な。」

「……そうか？　それなりに、辛い事の方が多いぜ？」

「オーライ、その方が楽しみや幸せの味も増すってものさ。」「違いない。」

「そ、それなら一緒に参りますかしら？／／／」

「……勘弁してくれよ。親と一緒なんて、カッコ悪くてしょうがないぜ。

取り敢えず、現状を話しておくぜ、オヤジ。」

～キングクリムｚ（ｒｙ～

「オーライ、マイサン。相変わらず忙しそうじゃないか。

そして、シュラボーイ。ラセツキの件、上手くいって何よりだ。」

「ありがとうございます、ジョーン殿。ですが、私の争覇はまだ終わっていません。

今、この地の南を覆いつつある氷原。その原因たる修羅……凍鏡のゲルダを倒さねば。」

「だけどさ、あんな氷だらけの所、どうやって入るんだい？」

「……方法は無い事も無い。この街に広がる地下街、『トレイデル・ボーデン』を通ればな。」

そのジョーンの言葉に顔を顰めるハーケン。どうやら、彼も初耳の様だ。

「地下街トレイデル・ボーデン？　初耳だぜ、オヤジ。」

「つい最近発見された施設だ。

もしかしたら、世界の融合の時、この街とドッキングしたのかもな。」

「ダディ、そこを抜けるとどこへ？」

「南の出口が、問題の氷原と繋がっている筈……らしいんだが、どうだ？　カイト。」

「ん？　ああ、合ってるよ。要は其処を通って、

マークファントムに待ち惚けを喰らってるコウタを連れて行けばいいんだろ？　なあ、鞠音。」

「ん？　何だと……？」

そうカイトが部屋の横にあるドアに声を掛けると、其処から鞠音博士がぬっと出て来た。

その登場に驚く者、何でこんな所にいるのか、と訝しむ者、誰？という表情をする者。

様々であったが、敢えてそれらをガン無視して話を続けた。

「……本当に常識外ですわね、貴方。ま、いいですわ。

そこの彼の言った通り、コウタ・アズマだか、ファイター・ロアだかと名乗る少年が、

修理を終え、試運転をしていたシュラーフェン・セレストから、現れたのですわ。」

「ん？　な～んか、聞いたことあるような、無いような……？」

「てやんでえ、私もそんな気がいたしましたけど、覚えておりませんの♪」

「……いや、お前絶対覚えてるだろ。」

「成る程な。それで、ここまで連れて来たら、マークハンターと一緒に地下街に降りたと？」

「そういうことですわ。何でも『一宿一飯の恩義』ということだそうです。」

「そいつは重畳。随分と古風な少年のようだな。」

取り敢えず、これからやる事は理解した。さて、では早速行こうか、という話になった。

……そう。この儘で終われば、それで済んだ話だったのだが。

「ここに来て、また新たなゲストの来訪か。……やれやれだな。オヤジ、その地下街……トレイデル・ボーデンに降りるぜ。」

「艦長、用心して下さい。防衛機構と思われるメカに盗掘団、それにシュラも入り込んでいて、可成り危険な状態になっておりますので。」

「あ、それが用心棒さんたちを集めていた理由なんですね。」

「……だから、俺が行くと言ったんだ。まだそこまで老いぼれてはいない。」

「ですが、ダディ・ジョーン。貴方にも立場というものがある筈ですわ。」

「立場の問題じゃない。ファミリーを危険に曝したくない……それだけだ。」

「……オヤジ。」

「は～い、まいど～～♪　お菓子ショップ『ファッティ・ヘンゼル』お届けものだよ～♪」

「む……。」「あらクレオちゃん、どうしたの？　お届け物……？」

「そそ♪　そこのウエスタン大将からの注文でね♪

頼まれてた、『女の子の名前入りケーキ』を持って来たから♪これでモテモテだね、大将♪」

「……。」「……おい、ジジイ。」「ダメだ、こりゃ。」

「オーライ、スウィートスネーク。ありがたいが、タイミングが悪いな。」

「……何か言いたいことは？」

「街を出られないならば、街で冒険をするしか無いだろう。

その為には、武器が必要だ。曾ての開拓者たちが……そうであったように。」

「成る程。」

「「成る程じゃない（ねぇ）だろ。格好良く言っただけだぞ。……ん？」」

「スゴイ、息ピッタシだね♪　ってあら？　もしかして、挙ってこれからお出掛け？」

「はい。これから地下街を通り、南の氷原を目指します。」

「丁度いいや！　暫くこの街にいるから、出張商店に顔を出してよ♪　雪山にはチョコレート！　これ常識だから♪　まあ、プリンでもケーキでもいいけどね♪

あ、カイト！　今度もたっくさん持って来たから、また一杯買ってね！」

「おう。今度も纏めて全部買うぞ。その後、みんなで分けて喰おうぜ。

道中食いながらでもいいしな。」

「お～～～！！　相変わらず太っ腹だねえ～♪　毎度ありぃ～♪」

「ふむ、あの寒さである。冬山に登るくらいの用意は必要であるな。」

「流石クレオグレーテルＤＣ！　出張商店とは便利じゃのう♪

カイト！　わしには油揚げパフェを奢るんじゃぞ！」「はいはい、お好きな様に。」「うむ！」

「出張だと……？　この駄ヘビが……いつか倒さねばならん相手ニャ……。」

「OK、面目なしダディ。早速、地下街に行くぜ。……クレオの店に寄ってからな。」

「オーライ、ハーケン。俺はこれくらいでは折れんから心配するな。ハーケン、カイト。マークとあの少年のこと、頼むぞ。それから、報告もしてくれると助かる。」

「ああ。あいつらと合流したら、俺の従者遣わせるから。そいつから話を聞いてくれ。」

「……だそうだ。じゃ、ちょっと行って来るぜ。」

其の後、鞠音はシュラーフェン・セレストの最終調整をする為、カルディアを伴って赴いた。

そして、その直後。クレオを先頭にした集団が大挙して出張商店に押し寄せ、

根刮(ねこそ)ぎ商品が買われていった怪現象は、後々迄語り種(ぐさ)となったそうな。

第貳拾肆話【平穏という名の蜃気楼（ミラージュ）～絶望への秒読み（カウントダウン）】

如何でしたでしょうか？

次話はみんなのヒーローとみんなのマークの回です。

彼方此方で暗躍し出した姉妹達。果たして、成果の程は……？

それにしても、戦闘無しの会話だけで１６，０００字とか……ハハッ、ワロスｏｒｚ

前書き＆後書きも入れたら１９，０００字とか……ハハッ、テラワロスｏｒｚ

さて。前書きに書きました通り、今回はちょっとした御報告があります。

実は……私が普段使っているノーパソが到頭、御釈迦になってしまいましたｏｒｚ

例えば、変換が出来無い、半角／全角キーが反応しない、すぐ接続中になり抑も表示が出来無い、等。

今話も騙し騙し、ネット上から漢字やら平仮名・片仮名やらをコピって打っています。

今迄も結構アレな感じでしたが、遂に御臨終間近になってしまいました。

なので、ちょっと友達に頼んでＰＣを選んで貰い、設定やら何やらで時間を取られてしまいますので、

暫く更新が出来無い状態となってしまいます。
御感想に対する返信も大幅に遅れる可能性が御座いますが、どうか御諒承下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、第二回目！　私の技構成　ネージュ・ハウゼン　の回です。
はい。勿論、こんな状態でも書かせて頂きます、私のネージュ！
……エロイと思った人、素直に挙手。
A・B・Cは御覧の通り、前回と同じ仕様です。では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

A：ベノム・コーム↓ベレイシャス・ミラー↓ハンターズ・マーシィ↓レッドホット・パンプス↓グラス・コフィン（消費ｃｏｍ１００％）
B：グラス・コフィン×５（消費ｃｏｍ１５０％）
C：レッドホット・パンプス↓ベレイシャス・ミラー↓ベノム・カーマイン↓シルキィ・レース↓グラス・コフィン（消費ｃｏｍ１２０％）

です。一番面倒なのはベレイシャス・ミラーかと思いますが、
ぶっちゃけこれは鏡が当たりさえすれば、どんなに早くても重さに
関係無く落とさないので、
兎に角、鏡を当てる事だけを心懸けていれば、無問題です。

後、問題なのは、シルキィ・レース。正直、私は全キャラ&全技の
中で一番苦手な技です。
普通の重さ相手でも、タイミングが少しずれると落とし易い技の一
つだと思います。
一応苦手な方は上記の様に、カーマインの攻撃が終わった後に使え
ば、
未だ幾分かタイミングが掴み易いかと。
少なくとも、私はそれで大体シルキィのタイミングは掴めましたの
で。御参考までに。

又、フルヒットは出来ませんが、重量級相手に突撃無しで使う際に、
必ず拾える方法があります。
それは、シルキィを使っている最中に、右端に来る時があります。
その時に支援を呼んで下さい。
例えば、アンとかフェイクとか。そのタイミングで呼べば、余程ネ
ージュと相性が悪くない限り、
ほぼ確実に拾える上に、フェイクなら更に援護&支援にも続けて繋
げますので、一挙両得です。

それと是非共御薦めしたい組み合わせが、ハンターズ・マーシィ↓
レッドホット・パンプス。
マーシィは威力もゲージ回収率も決して高くは無いですが、この技

の真価は其処ではありません。
この技の素晴らしい所は、絶対に落とさない事。軽・普・重、何れも関係無く当たれば必ず拾えます。

そして、その組み合わせで一番相性が良いのは、パンプスだと私は思います。
マーシィは横飛ばしなので、パンプスの狙いも付け易いのですが、それ以上に。
マーシィのキャンセルポイントまでギリギリまで敵を引き付けてから、
キャンセルしてパンプスを使うと、１００％絶対拾えます。断言します。……軽い相手には少々危険ですが。

それから、グラス・コフィン。これは良く氷とのコンボが良く使われるかと思いますが、
私もそれから御薦め？　が一つあります。それは零児の援護。
前作とは違い、使い辛くなったと評判の零児の援護ですが、これは組み合わせ次第でとても格好良く、
又、同時にフルヒットもさせられます。

例えば、コフィンの場合。敵が落ちて来て氷棺に入る瞬間。
凍ると同時、もしくは凍る前に零児の援護が届く高さにまで敵が来た時。
その時に零児を呼ぶと、凍ると同時に零児の連続斬撃がしっかり入ります。
只、残念な事に、最後の斬撃だけ必ずスカるのが唯一の欠点。
特に気合いの入った掛け声が出た時なんかはもう……ｏｒｚ
この組み合わせを使う時は、必殺技を使わない最後の攻撃か、技構成中の最後以外を御薦めします。

逆に組み合わせとして御薦め出来無いのが、コフィンとアクミィ。
これを零児と同じ様なタイミングで呼ぶと、必ずと言っていい程、
敵を落とした後で、最後の斬撃を加える事になりますので、却って
超危険です。
アクミィの援護は、アレディの様な地面擦れ擦れでも拾える特殊な
援護でも続かない限りは、
恐らく全援護の中で唯一他の援護&支援に繋げられる技（の筈）で
すので、
逆に、技が終わった後に使った方が一番無難かと思われます。

因みに零児やハーケンの様な重量級に落とし易い援護は、
乱獣撃、マーシィ、ファイヤー・マウス等といった吹き飛ばす系統
の技があれば、
落とさずにフォロー出来るので、非常に相性が良いと言えると思い
ます。

特に零児の援護は、小牟の鬼門封じ・破天光との組み合わせが最高
に最強です。
小牟が斬り上げて結界に閉じ込める瞬間に零児を呼んで下さい。
すると、小牟が結界を破壊するタイミングと、零児が最後に斬り捨
てるタイミングが完全に一致します。
ついこの前、その最後の斬撃と結界破壊の同時攻撃が終わったと同
時に、塔の沙夜がK・O・しました。
あの瞬間は本当に鳥肌が立ちましたね……。

あ、因みに、ネージュの援護：カインドネス・セブンは、
敵が描く放物線か、打ち上げられた最高度から少し下に落ちて来た
頃合いで拾うと、

フルヒット（２０ｈｉｔ）はしない迄も、１～２ヒット程度減るだけで、ほぼ確実に拾えます。
個人的には、ハーケンのフルハウスやテキサス・ホールデムで落ちそうになった時とかに呼ぶと、
結構な確立で拾ってくれますので、重宝しています。

それと、前回書き忘れていたどうでも良い事なのですが……アレディィの技名についてです。
実は、覇皇終極波動覇（はおうしゅうきょくはどうは）以外は、読み仮名が全て１０文字以内に収まるんです。
と言う訳で何気に、ここの作者にとって非常に有り難い存在だったりしますｗ
……これ、『小説家になろう』の作者の方々にしか判らない話ですね；；；；

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は、ハーケンの技構成です。御楽しみに？

カウントダウン……3

第弐拾伍話【ファイター&ハンター～勝利者への機構（プログラム）～】（前書き）

現時刻（０１：４５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，５３７，８３３アクセス　ユニーク：２１０，０７３人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

さて、今回はトレイデル・ボーデンです。

そして、前書きと後書きだけで一日掛かるという謎現象が……
ｏｒｚ

とまぁ、それはさておき。では、今話も拙作を御覧下さい。

第弐拾伍話【ファイター&ハンター～勝利者への機構（プログラム）～】

ｓｉｄｅ：新ロストエレンシア　トレイデル・ボーデン　北通路
入口

其処に入った一行から思わず溜息と感嘆の声が漏れた。其処は正しく地下『街』だったのだ。

余りに広々とした空間。遙か高くにある天井。電源が未だに動いているエスカレーター。

向かう前に一応内容は聞いてはいたものの、
改めて目の当たりにするとこれは驚かざるを得ない。

「ここがトレイデル・ボーデン……成る程、『地下街』ね。」

「マリオン博士の言った通り、電気系は全て生きているようでありんすのです。」

「ここを南に抜ければ……氷原に出られるのですね？」

「救世主（メシア）の言によれば、そうなります。方角からしても、間違いありません。」

「あの氷原の真下を通ることになるわね。」「ならば一息に南下し、出口を目指すまで。」

そう意気込んだ皆であったが、何人かは目の光が違っていた。

もっと具体的に言うと、何人かの目が『¥』になっていたのであった。

「おっと、ガイコツキング。只ストレートに南を目指すのも面白くないぜ？」

「おい、ハーケン。何を企んでいるんだ？」

「んなモン、こいつらの目を見れば一目瞭然だろ？　零児。」

「……ハァ……そういうことか。」

「そうニャ……匂う……匂うニャァ。」

「わ、私は何もしてませんよ！？」

「お約束ご苦労様。……要するにアレでしょ？」

「そう！　お宝の匂いが香しく漂っておりますわ！」

そう。つまりはそういう事である。これだけの規模の地下街。しかも、殆ど手付かずの儘の物に。

これ程の『お宝』を前にプロの商売人……基、プロの盗掘団が目を着けない訳が無かった。

「OK、ドロボー・ミストラル。マークと、コウタってボーイも捜さなきゃいけないしな。」

「いいねえ、宝探し！

修羅と闘り合う前に、使えるモンは有効利用しとくべきなんだな、これが♪」

「探検とは、少しワクワクいたしますの♪」「ｗｋｔｋｗｋｔｋ！！！」

「余り浮かれるでないぞ？　秘境探検アクセル&アルフィミィめに、バカイト。」

「だが断る。」「何でじゃ！？」「……え？」

「……どうして、『え？　何でそんな当たり前なこと聞くの？』って顔しとるんじゃ、ぬしは！？」

「よいよい♪　では参ろうぞ？　一気に行くなら、只管（ひたすら）に南である。」

「分かりました。では、行きましょう。」

「じゃから、何でぬしは昔っからそう……！！！」

「いやだから……。」

「じゃから……！！　……じゃろうが……！！！」

「そうは言ってもな……。だから……。」

二人の痴話喧嘩をＢＧＭに、一行は辺りを散策しながらも一路、南を目指すのであった。

第弐拾伍話【ファイター＆ハンター～勝利者への機構（プログラム）～】

ｓｉｄｅ：トレイデル・ボーデン　北通路

前の宣言通り、彼方此方（あちらこちら）の部屋を弄（まさぐ）り捲り、色んな使えそうなアイテムをゲットしながら、

更に南下して行くと、向かい側から何人か見知ってる人達が歩いて来た。

「「「「……。」」」」

「おっと、クレオ？　いつの間に下りて来たんだ？」

「アン船長さんも、海賊さんらしくお宝目当てですか？」

「流石はワタクシ！　お宝と聞いては黙って……ってツッコミが遅いですわっ！

これって……どういうことですの！？」「ちょっと、まるで鏡に映したみたいじゃないさ。」

「鏡……！　もしかしたら『魔倣の鏡』の力！？

でも、あの力は誰にでもそう簡単に扱えるようなものじゃ……。」

「あん、それって……うちの子の二人が持って行っちゃった奴よね？」

「そう言えば、あの鏡にはトンデモ能力があるとかおっしゃっておりましたの。」

「もしや、あれで映したものは増える……とかじゃないじゃろな！？」

「ちょっと違うのよね。あの鏡には、心にド強くイメージしたものを具現化する力があるの。」

「逆に言えば、自分の心の奥底にあるものが何か判るって事さ。」

「ええ、そうね……。でも、その能力を使うには相当な精神力がいるから、

簡単にはいかない筈なのだけれど……。」

何か心当たりがあるのか、今迄ずっと黙っていたアレディが一言呟いた。

「――――修羅の精神力……そして覇気ならば、或いは。」

「確かに、あの鏡を盗んでったのは、あのゲルダっていうおっかない姉さんだったけどさ。」

「アレディ、確証はあるのですか？」

「この三名……共通点に気付きませんか？」

「あのチョコバナナに操られた奴等って事だろ？　アレディ。修羅たる者、一度見切った相手を再度反芻するぐらい出来なきゃ、未熟の極みだからな。」

「はい、正しく全てカイト殿の仰る通りです。」

「成る程の。修羅の仕業というのは判ったが、此奴等（こやつら）……どうするのであるか？」

「倒せばいいのよ。そうすれば、鏡の力は失われる筈。」

「まあ、いつも通りか。じゃあやるよ！」

「本物の力を思い知らせてあげますわ！」「お黙り！　跡形も無く

吹き飛ばしますわ！」
「勝った方が本物ってことでいいから♪」「そ、そういうルールなんですか？」
「あ～、面倒だし……どっちも本物ってことでいいんじゃないかい？」「いいわけないだろ！」
「バケの皮を引っ剥がしてくれる。」

「キャットファイト、レディィィーーーゴーーーーーッッッ！！！」
“うるさい（です・お黙り・お黙りゃ）ッ！！”

～光子力煎餅はいらんかね～？～

／パリンッ／／パリンッ／／パリンッ／
「これは……本当に鏡の破片なのですね。」
「これで『魔倣の鏡』が使われたことが確実になったってことね。」
「所詮はフェイクさ。……気に入らないね。」

倒すと同時に弾ける様に割れ、まるで砂の様に崩れ去っていった鏡像の三人。

取り敢えず、ホッと一息は付けたものの、余りゆっくりしていると、又、同じ事を繰り返してしまう可能性もある。先を急がねば……。

「シュラも確実に動いているな。……こいつは、余りモタモタしていられないぜ。」

「うむ、先を急ぐのだ。」「ああ、とにかく南だな。」

「ま、お宝を漁りながらだけどな。」「と～ぜんですわ♪」「ニャフフ……お宝ニャァ。」

「……どうするかね、Ｍｒ．スパンキングマスター？」

「……諦めろ、ハーケン。俺は既に諦めている。」

同時に溜息を付き肩を落とす二人。

ウキウキワクワクと彼方此方に好き勝手に走り出す何人かを、

他のメンバーが必至に後を追う姿が、何ヶ所かで見られた事は、想

像に難くない。

ｓｉｄｅ：トレイデル・ボーデン　南通路

真南に突き進もうとした一行であったが、其処は残念ながらシャッターが閉まっており、

先へ進めず、仕方なく他の部屋を物色しながら、一番大きい部屋へ向かうと、

その右奥の隅に、赤と黄色の鎧、蒼い髪の如何にも少年風の人が自販機と睨めっこしていた。

「……！」

「そのレッド＆イエローアーマー、それにブルーヘアー……。

あんたがオヤジたちやカイトが言ってたボーイだな？」

「俺はファイター・ロア。コウタ・アズマと呼んでくれてもいいぜ。
……ま、本名はそっちだからな。あんたたち、もしかして鞠音博士たちの仲間なのか？」

「ウフフ、そうよォ？　……可愛いわね、ボ・ク♪」

「て、てやんでえ！　そんなお面被って、迫って来るなよ！」

「カッツェ、程々にな。ヨソの世界から来たってことは、俺たちの仲間かも知れないんだからさ。」

「仲間？　どういう……って、アクセルさん？　あんた……アクセルさんじゃないか！？」

「え？　貴方……アクセルを知っておりますの？」

「あったりめえよ！　この人はなあ……って、アルフィミィ！？
あんた……アルフィミィじゃないか！？」「何これ？　そういうコント？」

「そういうつもりじゃねえ！　忘れちまったのか？　アクセルさん！
アルフィミィを助ける為に、俺とあんたは……！」

「そう言われてもなあ……アルフィミィちゃん、分かるかい？」

「私を奪い合う二人の男……いやんですの♪」

「満更でもない感じですが、覚えてるって感じでは全然ございません。」

態と演技している訳でも無く、普通にコウタの事が判らない風な二人に、愕然とする当人。

一体何事かと慌てながらも、二人に自分を思い出す様に直訴したのだが……。

「どういうこった！　アクセルさん！　アルフィミィ！　俺だよ！！」

「う～ん、あんたが可愛い女の子だったら、口裏を合わせてもいいんだけどな。」

「……あんた、本当にアクセルさんなのか？

もっとこう……怖いというか、かっこつけてる感じじゃなかったっけ？」

「……よく判らないんだな、これが。

アルフィミィちゃんにも、性格が違うんじゃないかとは言われたけどさ。」

「抑も、このコウタと言う小僧がこっちのことを知ってるってのは本当なのかい？」

「御天道様に誓って、嘘なんか言うかよっ！　俺はコウタ・アズマ！　浅草生まれの浅草育ち！

アクセルさんや、アルフィミィとは一緒に戦った仲間なんだ！」

疑いの目を向けられたコウタが言った一言に、思わず反応した者が居た。……浅草……だと？

「おい、待て。浅草だと……？　君は……日本から来たというのか！？」

「『アスァクスア』とかいう、異世界の地名とかいうオチじゃないじゃろうな？」

「てやんでえ、浅草は浅草だ。

雷門（かみなりもん）に浅草寺（せんそうじ）、隅田川（すみだがわ）の花火大会、サンバカーニバルの浅草だよ！」

「あん、これは……本物じゃない？」

「どういうこってすか？　この赤ガキ、そちらの世界と関係が？」

「聞きたいのはこっちだぜ！　……ん？　ラミア……さん？　いや、違う……？　あんた、誰だ？」

「どこの無表情ボインと間違えているのか知りませんが、人違いでおじゃりまする。」

「ちょっとコウタさん？　何か、喋る度にあっちこっちに誘爆しておりませんこと？」

「う……そんなこと言われてもよ……。」

「一度、整理するべきでしょう。余り時間を掛けてはいられません。こうしている内にも、ゲルダ一派の修羅たちの侵攻は続いているのですから。」

「修羅……？　修羅だって！？　もしかして、そいつは……！」

「……何か、物凄く面倒臭くなって来たんだけどさあ……。」

ドロシーの言う通り、話が出る度に、彼方此方に飛び火して行くコウタの反応。

これぱかりは流石に、アンの面倒臭いも解らいでは無い。

ハーケン達もお手上げ状態で、さも当然の如くカイトに皆の視線が向けられた。

「自爆・誘爆・御用心ってな。取り敢えず落ち着け、コウタ。俺が全部説明してやっから。

どうせ、ロアの寝坊助野郎も、未だ起きて来ちゃいねぇんだろ？」

「あ、ああ。て言うか、あんたロアのこと知ってるのか？」

「まぁな。旧知の仲って奴だ。あの寝坊助には、起きた後ちょっとした説教してやらんとな。」

「ちょっと待ってくれ。ロアってのは、コウタのことじゃないのか？」

「あ～……まぁ、そこんとこも纏めて説明してやっから、先ずは待てって。

取り敢えずは、コウタへの説明が先にした方がいいだろ。なぁ？」

「う……済まねえ、頼む。」

～カイト、全員に説明中～

「様々な世界が交じり合った……エンドレス・フロンティア？
あちこちの世界から、みんなここに集まって来て……、
挙げ句の果てに、アクセルさんにアルフィミィは記憶喪失……？
一体どうなってんだよ。
零児さん……だっけ？　あんたは俺と同じ世界から来たんじゃないのか？」
「いや……話を聞く限りでは違うな。
俺たちの世界では、何十ｍものロボットが飛び回ったりはしていない。
次元の綻びである『ゆらぎ』……そして、渋谷を初めとした『閉鎖都市』も無いらしいしな。」
「時間軸が違うのでしょうか？　モモたちみたいに。」
「いや……完全にパラレルな世界だろう。違うか？　カイト。」
「正しく。此処は異世界は愚か、平行世界さえも交じり合う無限の

開拓地だからな。」

「？　パラレルだかパラソルだか知らねえが、要するに似てるけど違う世界だってことだろ？

ならそれでいいさ。細けえことはいいじゃねえか。」

「まぁ、コウタはロアからそういう話とか説明を受けてるだろうしな。」

「ん？　いや、実はあんまりあいつからそういう話って聞いてねえんだよな、俺。」

「……やっぱり、あのアホウは一度と言わずに御説教が必要だな。……ったく。」

「……ほ、ホドホドにな？」「善処する。」「……ぜってえ遠慮する気ねえな、この人。」

カイトから或る程度説明を受けた一行は、驚愕以外の感情を示せなかった。

幾らエンドレス・フロンティアとは言っても、限度があるだろう。

地元民ですら、この時ばかりは皆同じ事を思っていた様だ。

「だけど、参ったぜ……。……俺はこれからどうすりゃいいんだ？」

「それなら一緒に行こうぜ、コウタ。あんたの言ってることが本当なら、帰る所は一緒なんだ。」

「道案内をしてくれる人がいると、助かりますの♪」

「……よっしゃ！　一肌脱ぐぜ！　二人の記憶も取り戻してやりてえし。

それに、カイトさん……だっけ？　あんた、確かロアと知り合いなんだろ？

それならロアにも話させてやりたいしな。

……あ、でも、ロアの声って俺にしか聞こえないんだったっけか……。」

「あ～、それなら大丈夫だ。アイツやエミィの声なら、俺にも聞こえるからな。」

「エミィの声も！？　ホントか！？　そいつはすげえな！」

「まぁな。今度、お前達にも聞かせてやるから、そん時は皆で沢山話しな。妹たちと一緒にな。」

「そんなことも出来るのか！　あんた、本当に凄いんだな！　すっ

げえ楽しみにしてるぜ！

そん時はうちにも寄って行ってくれよな！」

「……そうだな。久し振りに、アポロンとも会いたいしな。その時はお邪魔しよう。

八神家一同揃って、な。」「おうっ！！」

何ともノンビリとした空気に、思わず修羅の侵攻など忘れてしまいそうになるが、

そういう訳にもいかないのが、世知辛い世の中である。

改めて挨拶し直し、一行は先を急ぐ事にした。……が、一つ忘れていた事があった。

「ま、そういうわけで、これから宜しく頼むぜ、みんな！」

「こちらこそ♪　宜しくお願いしますね、コウタさん♪　……あ、そうだ。

確か、マークハンターさんと一緒だったんですよね？」

「ああ、あの人か。あの人なら、一人で南のブロックに行っちまったぜ？」「どうしてだ？」

「何でも、やることがあるらしいぜ？　敵がこれ以上入り込まないように、

南のシャッターを閉めろって言って、このカードキーを渡されてな。」

「では早速行ってみましょう。南下しないことには、先へは進めませんから。」

こうして、ファイター・ロアことコウタ・アズマを仲間に加えた一行は、

南の閉まっていた扉（シャッター）を、コウタが持っていたカードキーで開け、先へと進んだ。

……相変わらず、盗掘行為は継続しながら、であったが。

ｓｉｄｅ：トレイデル・ボーデン　南通路　出口前

其処に付いた時、丁度向こうから件の人物、マークハンターが歩いて来る所に出会(でくわ)した。

多少なりとも嫌な予感がした一行ではあったが、御互いに情報の交換だけはしようと思い、

取り敢えず挨拶から交わし始めた。

「よう、ハーケン。」「マークさん、無事だったか。」

「OK、オレンジハンター。新人を放ったらかしにするなよ。」

「オレの名はマークハンター。この仕事……その小僧じゃ荷が重い。だからオレの出番なのさ。」

「てやんでえ！　出来るか出来無いか、やってみなけりゃ分かんねえだろ！」

「いや、分かるさ……これは……オレにしか出来無いことだってな……。」

「それはそれとして。……コウタちゃんにドアを閉めさせてまで、ここで何をやってたのかしら？」

「お宝の独り占めでございますか？　……旨い話があったら教えて欲しいモンニャァ。」

「……アレディ、掌打。」「仕方ありません……！」「はニャンッ！？」

「……ふぅ。で、実際どうなんだい、マーク？」

「……まあ、色々と……な。」

「ドはっきりとしませんこと。何か掴んだ情報はあるのかしら？」

「ん？　そうだな……この真上……地上の氷結現象は、間違い無くシュラが引き起こしている。」

「やはり、そうでしたか。風に混じっている覇気や、カイト殿の言からも言質は得ていましたが、

これで確実となりました。」

「それは分かったわ。他には？」

「それから、可笑しな『鏡』を使って戦力を増強中らしい。」

「それも存じておりますわ。……さっき、ぶっ飛ばしましたから。」

「中々目新しい情報が無いねえ。」「仮面の狩人よ。他には何か無いのか？」

そう訊いた所、俄にマークハンターの雰囲気が変わった。
矢張り嫌な予感が益々、ビンビンに立っている気がして仕方が無い一行。

「じゃあこいつはどうだ？　シュラのボス、ゲルダ・ミロワールって奴が、
アレディ・ナアシュって奴を始末したいらしいぜ？　……こういう連中を使ってな！」

「……！？」「何……！？」

「片那、只今……参上いたしました。」「「……。」」

「こいつは……『逢魔』の！？」「片那ちゃん……！？」

「この反応……！　さっきの『鏡のイミテーション』と同じです！」

「そっか、牛頭ちゃんと馬頭ちゃん……今はシュラの一味になっちゃってるのよね。」

「量産し易いらしいぜ？　そんなにパワーを使わずに『鏡』で増やせるらしい。」

「あん、そうでしょうね。……元々、そういう目的で創られたコた

ちだもの。」

「じゃあこいつら……シュラの兵隊ってことかい！？」

「マ、マークさん……貴方……まさか……！」「……何か、頭が痛くなって来たぞよ？」

「まあ、そういうことさ。オレの名はマークハンター。シュラに雇われたんでな。

仕事は果たさせて貰うぜ。……それが、オレのプライドだ。」

「そのプライドを正しい方向に発揮しろよ……。」

「確かに、こんなこと俺には出来ねえぜ……。」「出来無いと言うか、普通はやらないから！」

「ちっ、オヤジの奴……もっとちゃんと人選しろよな。」

「……なんちゅう理不尽大王じゃ。酷過ぎて逆に腹が立たんぞ。」

「……マーク殿。貴方が修羅に与（くみ）したのならば、容赦は出来ません……！！」

「ああ、やってやるぜ！　いいな、お前ら！」

「……。」「確実に追い詰め、痛い目に遭わせます。」

「鬼蓮華（おにれんげ）のサビにしますの。」「マスター、愛してます。」

「アルフィミィ！　自然に混ざってんじゃねえ！　あんたはこっち側だろ！？
　って言うか、アンタ誰だ！？　何で惚気た！？」
「混ざるな自然。て言うか、混ざるな水薙。」「テヘペロ（・ω＜）☆」

そんな感じで、極普通に戦闘が始まった。

ｓｉｄｅ：マークハンター戦？

「先に仕掛けます！　アルクオン、行くぞッ！　覇皇轟雷脚（はおうごうらいきゃく）！！
羅刹断撃拳（らせつだんげきけん）！」
「……！！」

「ちいっ！　オリハルコン・パワー！！」「何ッ！？　アルクオンと同等の力を……！」

アレディの先制蹴りに吹き飛ばされたマークに、頭上から追撃するアルクオンだったが、

辛うじて姿勢を調えられたマークが、アルクオンとがっぷり四つを

組み、拮抗していた。

曲り形にも、羅刹機と同等の力を発揮しているマークに、驚きの声を上げるアレディであった。

「そのまま抑え込んでおくのですわ！　ウィッチ・ボンバー！！」

「アタシもご一緒しようかねえ……！　バブル・カノン！　そらそらそら！！」

「ぐああっ！？　くっ……オリハルコン・パワーーッ！！　邪魔だ！　まとめて喰らえ！！

おおおおっっっ！！！　フレイム・ブリットォォ！！！！」

「ぬうっ！？」「ちっ……！」「きゃあっ！」「うわっ！？」「ニャンッ！？」

身動き出来ない所に、真後ろから爆弾やら砲撃やらの集中砲火を浴び、

流石に不味いと思ったのか、火事場の馬鹿力でアルクオンから退き、自身の持っていた長砲身からの全体射撃で、皆を怯ませた……が。

「てやんでえ！　そんな花火にビビるような浅草っ子はいねえんだよ！

喰らえ！　ホワイト・ファング！！　ファイヤー・ドラゴン！！！」

「何……ッ！？　ぐあぁっ！！」

「！　今だ！！　ジャック・ポット！　コール・ファントム！」「……！！」

「ファントム・ホールデムだ！　究極！　ゲシュペンストキック！！」「……！」

「喰らえッ！！」「ぐあっ！　うぐぐっ……！！　くそっ……！　ハーケン……！！」

マークの射撃にも怯まず、弾幕の中を突っ切って行ったのは、ロアだった。

そのロアの連撃を喰らい、攻撃が止んだ隙を狙い、ハーケンとファントムが追撃した。

上手い事、全弾まともに喰らって吹き飛んだマークであったが……。

「……ふう。このアーマーが無かったらやられてたぜ。」

「……ちっ。やっぱ、この程度じゃまだ無理か。……相変わらず強いな。」

「さあて……やられっ放しも性に合わねえ。第二ラウンド、始めるとするか！！！」

そう言い放ち、マークはハーケン達に向かって猛攻を仕掛けた。

――――一方。マークが引き連れて来た片那達の方は、と言うと…

……。

side：片那A戦

「こりゃ、沙夜！　アレ、ぬしの部下じゃろ！　何とかせんかい！」

「あん、そうしたいのは山々なんだけど、あのコ達はちょっと聞いてくれそうに無いのよ、ね。」

「構わん。何れにしろ、調伏（ちょうぶく）することには変わりはない。行くぞ…！」

「了解。全兵装オープン。リミッター解除します。」

「モモも戦闘モードです！」「……グダグダ言ってないで、さっさと潰すよ。」

片那が向かって来る前に、こちらからさっさと攻撃を仕掛けた零児達。

どうやら、片那は零児達を迎え撃つ様だ。

「銀(しろがね)……居合四連(いあいよんれん)……。」

「むん……！　地禮・疾雷の型！」「水憐・参の型！」「居合五連！」「あ……あうっ……。」

流石に三人も相手にするのは分が悪かった様で、三人同時攻撃にあっさり競り負け、

自身の刀も折られてしまい、その隙を突いてＫＯＳ－ＭＯＳ達による追撃も加わった。

「続きます。連舞迅雷刀八本(れんぶじんらいとうはっぽん)！」「目障りなんだよ……！　Ｔ(トリプ)・ＳＫＹＬＬＡ(ル・スキュラ)！」

「あうっ……ああっ……。」

「まだです！　フリーズ・ショック！　ウインド・ミキサーです！」

「あ……う……っ…。」

斬り飛ばされ、蹴り付けられ、身動き出来ない儘に上空へと吹き飛ばされた。

だが、未だ彼女達の攻撃は終わらない。

「吹き飛ばします。気孔掌。」「まだだ！　火燐・零の型……爆砕ッ！　小牟！」
「ふふん。わしのレシーブを篤と見よ！　朱雀刀！　ビッグな水曜日じゃ！！」
「ああっ……あうっ……っっ……！」

あっちに吹き飛ばされ、こっちに斬り飛ばされ、終いには波ごと流されて行った。

果たして、何処に押し流されたのか……。

彼女の行方を追う前に、もう一人の片那の方を見てみよう。

ｓｉｄｅ：片那Ｂ戦

「初っ端いっちゃうよ～ん♪　紅白ロボ、撃ちまくりぃ～！」「……！！」
「あうっ……。」「私も続くぞ！　ファントム・ステップＭＡＸ！」
「ああっ……！」

「こちも続くぜ！　舞朱雀だ！」「ばっさりですの♪」

「くうっ……銀豪閃（しろがねごうせん）。」「うわっ……！？」「アクセル！？」

ヴァイスの援護射撃に追随し、アシェンが斜め上空から片那を蹴り飛ばし、

遙か上空へと蹴り上げられた彼女が落ちて来るタイミングを見計らって、

アクセルとアルフィミィが追撃したが、僅かな隙を逆に狙われて、反撃されてしまった。

「まだまだぁっ！！　アークゲイン！　麒麟・暁！！」「……！」

「アルトも！　全弾もっていけですの！」「……！」

「あうっ……あっ……！」

だが、直ぐ様態勢を立て直し、アークゲインとアルトによる即座の連携攻撃に、

思わず追撃の手を出せなかった片那。その隙を逃さない手は無い。

「そこだっ！　烈火刃！」「ライゴウエですの！」「オーケイッ！」「ああ……うっ……。」

「まだだ！　幻の足音を聞けッ！　イリュージョン・ボルト！！

吹き飛べっ！！」

「はうっ……ああっ……！」

アクセルとアルフィミィによる連撃で吹き飛ばされた片那を、更に蹴り飛ばしたアシェン。

その先には、もう一人の片那が吹き飛ばされて行く所と同じだった。

だが、その先を見る前に、最後の一人の片那を見てみよう。

ｓｉｄｅ：片那Ｃ戦

「片那……参ります。」「そうはさせぬぞよ。邪鬼銃・弾鎖！」「……っ。」

「今ぞよ！　邪鬼銃・騎駆！　続けて、邪鬼銃・封印牙！！「……っ……っ……！　銀……！」

何とな……！？」

突進して来た片那の勢いを削ごうと、先ず錫華が先制弾幕を張った。

狙い通り、一瞬勢いが削がれた片那の隙を狙って、跳び蹴りを斜め上空から喰らわせ、

その流れの儘、妖気の糸で絡めて壁際に押し込めようとしたのだが、

その妖気の糸を、片那が自身の刀で断ち切ってしまった。

「錫華ちゃん！　行って、月燐（がちりん）！！　今っ！　猪刺花鳥（いのしかちょう）！！」
「くっ……銀一閃（しろがねいっせん）。居合四連。」
「まだまだ！　こと剣術で負けるわけにはいきません！！　雨刺鋼（あめしこう）！！」
「う……うあっ……！」「如来の鉢！　チェストッ！！」

攻撃を躱された錫華を、援護しに入った神夜の月燐に阻まれた片那は次の標的を神夜に変え、

互いに剣技を競ったが、手数で神夜に圧倒的に負け、エイゼル達の居る方へと斬り飛ばされた。

「ああら、イイ位置じゃない、牛姫様♪　はいはいはいはい！！はいっ！」
「ブロンテ・ブリザーードっ！　凍っちゃえ！」
「そらっ！　斬り刻んでやるよ！　フェーダー・レイッ！！」
「むぅんっ……！　全て爆散せしめんッ！　パンツァー・ボンバー！！！」
「あっ……あうっ……ああっ……っっ……！」

「今よ！　フェイク、付いて来なさい！　ダンシング・ドライバー！！」「……！」
「ああっ！」「吹き飛びなさい！　ハンターズ・マーシィ！！　神夜さん！！」「あうっ……！」

オルケストル・アーミーの一斉連携攻撃に、ネージュとフェイクライドの連撃。

吹き飛ばされた先には、斬冠刀を構えている神夜の姿があった。

そして……その中心にいる神夜に向かい、三方向から吹き飛ばされて行く片那の姿が見えた。

「纏めて参ります……！　其の刃、阿修羅の如く……！　それぞれぇーッッ！！

楠舞一刀流秘伝――――阿羅刺（あらし）！！！

チェストォォーーーッッ！！！！！

――――我が斬冠刀に、断てぬものはありません。」

そして、三体の片那は全て、神夜の斬冠刀によって断ち切られたのであった。

――――その頃、マークハンター達は……と言うと。

side：マークハンター戦？

「行くぜ！　まずはコイツだ！　フレイム・ブリット！　最大出力だ！！」
「ちぃっ……！　みんな、散らばれ！」

「その隙、貰ったぁっ！　リボルバーライフル！」「しまった！？ぐあっ……！」
「まだだ！　こいつも喰らえ！　パワースラッシュ！！」「ぐはっ……！！」

前のマークの宣言通り、先制全体攻撃を繰り出してきた。

舌打ちしながらも、ハーケンは皆に散らばって避ける様に指示した

が、

それを狙っていたマークは、一人になったハーケンに特攻し、連続で攻撃して来た。

「危ない、ハーケン殿！」

「今度はアンタか！　喰らいな！　ファイナル・エンド！！」

「！？　しまっ……！　ぐあっ！！」

「コイツでトドメだ！　カオティック・シューター！！！」

「不味い……！　…アルクオン！？」「……！！！」

地面に叩き付けられたハーケンを庇おうと、アレディがマークに仕掛けたが、

直ぐ様反応したマークに、逆に反撃を喰らったアレディ。

だが、最後に放たれた砲撃の直撃をアレディは喰らう事は無かった。

アルクオンがアレディの目の前に飛び出し、彼の盾になって砲撃の直撃を防いだのだ。

「済まない、アルクオン。助かった。ハーケン殿、御無事ですか？」

「……。」

「……くっ、ああ。こっちは何とか大丈夫だ。……さて、こちらも

仕切り直しといくか。」
「ニャフフ……あのアホの鎧……高く売れそうニャ。」
「ちょっと！　あの鎧はワタクシが最初に目を着けておりましたのよ！？」
「おっと。アタシの方が先だよ？　これは譲れないねえ。」
「……OK、レディ・マーチャント。……行くか！」

「フッ……オレを舐めるなよ！」

真っ先に滑り出して飛び出したのは、ニャんと琥魔だった。

その後に、ドロシーとアンが我先にと追っ掛けて来ていた。

ハーケンが思いっ切り溜息を付き掛けたのも分からいでは無い。

「猫正っ！　ニャニャン！　小判の雨霰でございま～す！」
「そんな小手先の技でどうにかなるものですか！　リターン・トゥ・ホーム！！」
「おっと！　そういうことなら負けないよ？　セイレーン・ダガー！　喰らいなッ！！」

「ぐっ……！　女に攻められるのは男冥利だがな……！　そう簡単にはさせねえぜ！
　リボルバーライフル、乱れ撃ちだッッ！！！」
「ニャンッ！？」「キャァッ！」「おわわっ！？」

三人同時攻撃も、マークには然程の効果も無く、手にしていた銃であっさり反撃を喰らっていた。

だが、そのマークを後ろから強い衝撃が襲った。

「覇皇剛衝殻！！　アルクオン！　共に行くぞ！　轟覇機神拳（ごうはきしんけん）！！！」

「……！！」「何……ッ！？　し、しまっ……！　ぐああっ！！？」

「気を抜きすぎだぜ？　ジャック・ポット！　ファントム！　ニュートロン・ブラスター！！」

「……！」「ぐっ……！　クソッ……！」

「いいタイミングだぜ！　グレイト・ラッシュ！　バーナウ・ファー・ファング！！

バーナウ・ファー・ドラグッ！！！」「ぐああっ！！　や、やるじゃねえか……ッ！！」

アレディ&アルクオンの合体連撃に、ハーケンとファントムの間髪入れずのコンビネーション。

其処に、ロアの連撃も追随し、さしものマークもフラフラになって来た。

その間にハーケンがロングトゥーム・スペシャルを構えて力を溜めていた。

それに気付いたマークも、即座に砲身を構え、同じく最大威力を出そうとしていた。

「これで……ラスト・ショウダウンだ！！！　いっけえええぇぇーーーーー！！！！！」

「させるかよっ！　カオティック・シューター！！　最大出力だぜ！！！！」

「ハアアアアアアアーーーーーッッ！！！！！！」
「オオオオオオォォォォーーーーーッッ！！！！！」

互いに拮抗するかと思われた砲撃同士の衝突だったが、僅かにハーケンの方が押して来た。

「バカなッ！！？　くっ……オレのカオティック・シューターが……！！

ガアアアアァァーーーーーッッッ！！！！！

オ、オレは……マーク……ハンター……！！！」

「――――フッ。だから、言っただろ？　これで、幕引きだってな。」

ハーケンの砲撃に飲み込まれたマークハンターは、地に倒れ伏し。

これにて、戦闘は完全に終結した。

第弐拾伍話【ファイター&ハンター～勝利者への機構（プログラム）～】（後書）

如何でしたでしょうか？

次話は到頭、アイスベルク監獄に突入です。

果たして、マークの処遇と言う名の運命は如何に！　乞う御期待！

……所で。ロアと見ると毎回、某直視の魔眼の方を思い出す私は異端でしょうか？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、飽きずに第三回目！　私の技構成　ハーケン・ブロウニング　の回です。

ええ、勿論こんな状態でも頑張りますよ！　では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

A：セブン・スタッド→ベスト・フラッシュ　２ｎｄ→ジャック・

ポット↓ハイロー・ドロウ　２ｎｄ↓クアッド・ソリティア（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：セブン・スタッド↓クアッド・ソリティア×４（消費ｃｏｍ１５０％）
Ｃ：セブン・スタッド↓テキサス・ホールデム↓ジャック・ポット↓フル・ハウス↓クアッド・ソリティア（消費ｃｏｍ１１５％）

です。基本的にハーケンの技はどれも落とし難い技です。
もし、落とし易いと思った場合は、普通の重さの敵には引き付けてからの攻撃。
重い敵には早目に、少し上を狙って攻撃すれば先ず落としません。

恐らく一番の問題としては、重い敵に対する最初のセブン・スタッドだと思います。
確かに、その儘だと必ず落としてしまいます。ですが、其処で援護ｏｒ支援を呼びます。
特に私が御薦めするのが、ファントム。セブン・スタッドの四発目。
それを撃った後、ハーケンが腕を引きます。そのタイミングでファントムを喚んで下さい。
そのタイミングなら絶対に２００％拾えます。断言します。

しかも、丁度ファントム・ホールデムの、最初の同時攻撃の再現が出来ます。
物凄く格好良い上に、絶対に落とさない素晴らしいコンボです。
逆に少し遅目にファントムを喚ぶと、敵を吹き飛ばさずに真上に打ち上げる事も出来ます。
次に繋げる技構成によって、遅目に出すかタイミング良く出すか、見極めて使って下さい。
因みに。遅目に喚んだ場合は、ファントムの攻撃の方が多く当たり

ますので、
小牟の式占等で手加減が掛かった場合は、
それを選ぶ利点が発生するというせせこましい事も可能ですｗ

又、火鎖地蔵（かさじぞう）の様に、極度にブロック数が多い敵。つまり、セブン・スタッドの初撃で割れない敵。
こういう敵には、最初に支援か援護で少しでもブロックを削れば、次のハーケンの攻撃でほぼ確実にブロックが割れますので、
敵のブロック数を見極めてからそれに応じて攻撃すれば、ダメージの減少を防げます。

流石に、私の様に全ての敵のブロック数を覚えるのはアレ過ぎますが、
少なくとも、この敵は多い。この敵は少ない。この敵は丁度割れる……ｅｔｃ.
という感覚でも構いませんので、何となく慣れておくと少しは戦闘が楽になるかと思います。

又、前作同様、今作もジャック・ポット×５は非常に優秀な技構成ですので、
もし技構成に困った時や、特に技を全部使う事に拘っていない方、どうしても繋げるのが苦手という方には、是非共御薦めします。
ですが、最強技では無い為、威力が少々低めな上に、
覚えるのがレベル３７と中盤以降になってしまうのが唯一の難点ですが、
それでも十分な程使い易いと私は思います。是非一度、御試しを。

因みに、ハーケンの援護：オープニング・ベットは、普通の重さの敵相手には余り上過ぎると、
フルヒット（１３ｈｉｔ）せずにヒット数が数発分減ってしまいますが、
基本的にはほぼ確実に落とさない援護です。
ですが、誰もが四苦八苦するのが重い敵への援護だと思います。
これは、初撃のブロック割りに持って来るのが一番理想的な使い方ではあるのですが、
それも例えばブラグバルーの様なブロック数が少ない敵相手だと、
重量に関係無く確実に落としてしまい、却って自滅してしまいますので、必ず有効な訳でもありません。

そういう場合は、それこそ前回のネージュの時に書いた様に、吹き飛ばし系統との組み合わせです。
特にビームや光線の様な遠距離系統の技と組み合わせると、
万が一の場合でも或る程度は安心して使えます。
例え失敗したとしても相手は殆ど浮いた儘の状態で次に繋げられますので、一度御試しを。

もし、普通に重い敵相手にでもフルヒットさせたいと言う場合は、
私の対処法を一つ。
私が重い敵相手にハーケンの援護を使う場合は、
基本的には横に吹っ飛ばす系統の技の後に使っています。
タイミングは壁に跳ね返って来た直後。
未だ上に上がると言うタイミングで使えば、先ず大抵の確率で拾えます。
例えば、地斬疾空刀・魂断、如来の鉢、気孔掌、覇皇剛衝殻……ｅｔｃ.
遠距離系統の技を持ってるキャラの時に使えば、安心感はダンチです。是非一度、御試しを。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は、神夜の技構成です。御楽しみに？

カウントダウン……2

第貳拾陸話【修羅の饗宴～迷宮のプリズナー～】（前書き）

現時刻（１１：２０）※但し二時間遅れ５／１４（土）
ＰＶ：２，５４７，９９４アクセス　ユニーク：２１０，９６３人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

さて、今回はトレイデル・ボーデン・後編～アイスベルク監獄・前編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第弐拾陸話【修羅の饗宴～迷宮のプリズナー～】

ｓｉｄｅ：トレイデル・ボーデン　南通路　出口

／パリンッ＼／パリンッ＼／パリンッ＼

片那の鏡像も全て割り壊し、マークハンターも地に膝を着けた。

さても、そのマークハンターを今度こそぬっ殺そうと、皆で彼の周りを囲んだのだが……。

「……負けたぜ。ここまでだな。」

「ＯＫ、裏切りハンター。同じバウンティーハンターの誼（よしみ）だ。……俺が引導を渡してやるぜ。」

「そうだな、契約はここまでだ。少しこの辺りを漁ってから、戻るとするぜ。」

「……引導を渡すという言葉に対する返答としては可笑しくないか？」

「雇い主のジョーン・モーゼスに情報を伝える為に戻る……何か可笑しいことがあるか？」

「おいおい、どういうつもりだ？　あんた修羅に寝返ったんだろ？」

「舐めるな。シュラとの契約は終わった。次は前に契約した分を果たす時だろうが。」

「……は？」「……意味が分からないのですが。」

「オレはマークハンター。それが……オレという男さ……。」

「お前が契約舐めんなし、マイケルハッター。……無駄にすごい漢だ。」

「……全くだぜ、どんな理屈だよ。ホイホイとクライアントを変えるなよな……。」

「オレの生き様に文句は付けさせねえぜ？　ハーケン。
……それから、そこのお前！　オレの名前はマークハンターだと言ってるだろうが！」

「だが断る。俺にちゃんと名前で呼ばせたかったら、お前も一緒に俺達に付いて来るといい。
そうでない限りは、俺は決してお前の名前を言う事は無いし、全く違う名前を世界に流布させて貰おうか。」

「てめえ……！　上等だ！　そこまで言うなら、お前にオレの名を必ず言わせてやる！

いいか！　忘れるな！　オレの名は……マークハンターだ！！」

「ｏｋ、もう忘れた。お前さんの報告事項は俺の従者が代わりに行ってくれるから、問題無いぞ。
龍斗、頼んだ。」「畏まりました、カイト様。行って参ります。」
「おう。」

「……ま、また、突然知らない人が、どこからともなく……；；；；
アンタ……本当に一体、何者なんだ？」

「さあてな。まぁでも、俺は俺さ。それ以外に、意味は無いさ。
ほれ、それよりもさっさと行こうぜ。マイクパンツァーも遅れずに早く来いよ～。」

「オレは……マークハンターだっっっ！！！！！」

そんな騒がしい奴を加えた一行は、一路南下し出口を目指して先を急いだのであった。

第貳拾陸話【修羅の饗宴～迷宮のプリズナー～】

side：新ロストエレンシア　南西部

「ひゃああ！！　やっぱり寒いこと極まりないです！」「よ、腰痛が悪化してしまうぞよ！」
「ち、ちべたい……！」「これも修練と思えばいいのです。対処法もあります。」
「ド、ド早く！　早く教えなさい！　アレディ！！」

「はい。丹田に落とした気を練り、覇気を纏うのです。
体表と大気の境界に、覇気を通す……と言えば分かり易いでしょうか。」
「いやいや、理解出来無いから！」「難易度が高すぎるよ！　この脳筋！」
「覇気全開！　ホワッチャァ～！　……こんな感じか？　アレディ。」

「流石です、カイト殿。その覇気の使い熟し方……やはり素晴らしい……！
さあ、皆さんもカイト殿に習って、試してみて下さい。」
「……カ、カイトは特殊すぎますの。も、もっと簡単なのはないんですの？」

「う……それが不可能であれば、後は乾いた布で背中を擦るくらいしか……。」
「急に原始的だよ！？」「ちゅ、中間はないんですか？」

寒さに耐性が全くない連中には、高難易度過ぎたのか、将又ツッコム余裕も無いのか。
他に何か方法は無いのかとアレディに詰め寄る女性陣に、思わず口を入れるカイトであった。

「あ～……そんなに寒いのか？」“当たり前です（でしょう・ぞな・じゃ・だよ）！！！”

「……そ、そうか。そんなに寒いなら、俺が何とかしようか？」“……へ（え）？”

「いや、だから、この寒気どうにかしようかって言ってるんだが？」
「……ど、どうにか出来るんですか？」

「勿論。即座に出来るけど？」
“なら、もっと早くやって下さい（やりなさい・やらんか・やってよ）！！！！！”

「いや、何か面白くてつい見てた。それに聞かれなかったしさぁ。」
「普通、そんなことが出来るとは思わんわいっ！　バカイト！！」
「……て言うか、お前達が普通とか言うと、果てしなく違和感を感じるのは俺だけか？」
「……言っておくが、お前も相当なものだぞ？　カイト。」
「――――なん――――だと？」“……自覚、無かったのか。”

そんな漫才も交わしながら、寒さに震える女性陣は寄り添って身を暖め。

他の連中は、カイトがこれから一体何をするのか……興味深気に見ていた。

「ほんじゃ、いっくぞ～。詠唱破棄。ウーラニ……あ、ダメだこりゃ。」

「な、何だ？　一体どうしたんだ？　カイト。」

唐突に呪文らしきものの名を途中で呼び止めたカイト。

思わず何かあったのかと心配して訊ねたのだが……。

「いやな？　今やろうとしたの、とある世界での最上級魔法でな。俺がぶっ放すと、下手すりゃ波国ごと消し飛び兼ねないんでな、思わず止めただけだ。」

「……なんつーもんを……；；；　もうちびっと穏便に済まさんかい、バカイト！！」

「へいへい。そんじゃ……あ～……アイツでも喚ぶか。

セカンド・イグニッション　ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　メルト」

「……何にもな……ん？　何だ？　この影は……？」

おいおいと、色んな意味での呆れの声が混じった溜息が小さく谺（こだま）する中。

今度こそ、カイトが何か呪文を唱えた。だが、少し待っても何も変化が無い。

今度は失敗か？　と思った皆に上空から突如影が差して来た。

雲でも出て来たかと思った一行は、空を見上げた直後息を呑んで言葉を失った。

其処には、巨大なナニカがあった。ソレは、動いていた。ソレは、近付いて来た。

ソレの口が開いた。ソレの隙間から巨大な牙が見えた。白い吐息が漏れたのが見て取れた。

其処迄見て、ようやっと理解した。ああ……これは、巨大な生物なのだと。

では、その巨大な生物とは一体何だ？　良く観察してみると、その口らしき場所の周りには、
鱗らしきものがびっしり生えているのが見て取れる。

其処で、何人かが気付いた。先程、カイトは何と言っていたのか。

……そう。『ドラゴン』と……そう言っていた事を、思い出した。

つまり、この、巨大な、生物の、正体は……。

‘ゴガアアアアアァァァァーーーーーーッッッッ！！！！！！！！’

世界中が震撼する程の咆哮を上げ雲を吹き飛ばしたその巨体は、遂にその全体を顕した。

正に文字通り雲を突き破り、天を貫く程の超巨大なその真っ赤な躯（からだ）は、

恐らくは、エンドレス・フロンティア中から拝み倒せた事だろう。

能（よ）く能（よ）く観察してみると、その巨龍の顔の側に豆粒みたいなものが浮いている。

……それが、何時の間にか移動していたカイトであった事に気付いた者は、

恐らくはハーケン達だけであっただろう。

「よしよし、久し振りだなメルト。」‘ガウガウ！♪’

「ああ。行き成りで悪いが頼む。彼処に見える氷山の一角があるだろう？

其処の氷だけを、他に一切影響させず完全に消し飛ばしてくれ。

出来るか？」‘グワウッ！！’

「そうか、相変わらず頼もしいな。じゃ、頼んだぞ。」

‘グワアウッッ！！！　グアァァァ～～～……！

ゴガアアアアァァァーーーッッ！！！！！’

その咆哮と共に吐き出された炎は、カイトの防護障壁（シールド・フィールド）に護られたハーケン達と、

アイスベルク監獄を除いた、あらゆる箇所の氷を一瞬にして気体にし、

その気体すらもその次の瞬間、完全に蒸発して消え去っていた。

本来、只の氷山であった筈の其の連山は、自身を覆っていたものが完全に消え去り、

荒れ果てた山肌のみを只、外の空気に曝していた。

後に残った者達は、唯々その余りの威力……否、現象に呆然とする以外、何も出来無かった。

「よしよし、御苦労様、メルト。

ちゃんと、自分の力をコントロール出来る様になったんだな。偉い偉い。」

‘グアッグアッ♪　グアウッ！♪’

カイトが巨龍の鼻先を撫で、その巨龍が気持ち良さそうにカイトに甘えている。

何とも感想のし辛い光景ではあったが、微笑ましい光景には変わりなかった。

或る程度甘えて少しは気が済んだのか、巨龍は少しの間ハーケン達を見てから、

‘グワウッ！！’と一声上げ、その巨躯を忽然と消した。

それと同時に、カイトが皆の許へ戻って来て、開口一番こう言った。

「……よっと。取り敢えず、こんなもんかな？　どうだ？　これでもう寒くなくなっただろ？」

そう満面の笑みで言われては、遣り過ぎだ！　とも言えず……。

結局毒気を抜かれてツッコミせずに、黙々と先へと進んだ一行であった。

一人、不思議そうに首を傾げるカイトをさておいて。

ｓｉｄｅ：サイレント・ウォークス号　船内

「船長！　御無事でしたか！？」
「ああ、大丈夫だけど……どうかしたのかい？　ボニー。」
「いえ……御無事なら良いのですが……。先程の巨大な龍が……。」
「……ああ、あれか。いや、あれは気にしなくていいよ。
どうも、あれはカイトの従者……らしいからねえ。」

「何と！　あれ程の巨大なモノが……！？
……話には聞いていましたが、本当に凄い御方ですなあ。」

「あれ？　そういやボニー、カイトに会った事あったっけ？」
「……何を仰ってるのですか。以前、メギ城からエスピナ城へ行く途中で、
船内に休憩がてら寄られたではないですか。」
「……あ～……そういやそうだったっけ？　もうすっかり忘れちまってたよ。」

船長と副長の漫才を聞きながら、銘々に船内で寛ぐ一行。

しかし、余りそう寛（ゆったり）もしていられない。早々に、次の目的地への航路を頼む一行。

「余りノンビリもしていられれん。アレディ、この後の道程はどうなっている？」

「はい。ここから海を越えて南にいけば、波国の北部に着くでしょう。

……もう、アイスベルク監獄は目の前です。」

「それじゃ、装備とアイテムも船内でとっとと調えて、さっさと先に行きましょう。

カイト、今回もお金宜しくね？」「アイアイマム。」

「……了解だ。こちらはいつでも構わない。準備が出来次第、出発しましょう。」

何時も何処に隠し持っているのか判らないカイトのお金を使って、一行は更に大量に買い込み、

次なる目的地……凍鏡のゲルダのアイスベルク監獄へと、船を進めた。

ｓｉｄｅ：波国　北部

其処は、本来ならば猛烈な吹雪が吹き荒れている筈の場所。

だが、既にカイトが召喚した紅き巨龍（メルト）によって、その山肌は惨めな姿を晒され、

アイスベルク監獄迄の閉ざされていた筈の氷結された道すらも、ぽっかり開いていた。

「見事にツルッパゲになってしもうたのう。……お、あれかの？ゲルダとやらの城は。」

「……はい。あれが凍鏡のゲルダのアイスベルク監獄です。」

「でも、あの監獄頑丈だよね～。あのおっきい龍の炎喰らっても平気なんて。」

「ああ、そりゃ俺が護ったからさ。お前達と同様にな。
流石にあの炎の不意打ちで終わりじゃ可哀相過ぎるだろ？」

「成る程……確かにな。賞金首が跡形も無くなっちまうと、賞金も貰えないからな。」

「ＯＫ、ゴールド・イェーガー。取り敢えず、目的地は目の前にあるんだ。さっさと行こうぜ？」

「……ええ、行きましょう。」

何か考え事をしながら、心此処に有らずといった風情のアレディ。

何人か、気にはしていたものの、取り敢えずは目的地に向かって突き進む一行であった。

ｓｉｄｅ：波国北部　アイスベルク監獄　入口

其の内部は外とは違い、床も壁も天井もしっかり全面氷漬けになっており、

本来氷山の筈だった外気の寒さを想起させるには十分過ぎる程の寒さだった。

余り覚悟せずに入った一行の内、何人かはその突然の寒さに思わず

飛び上がった程だった。

「ここがアイスベルク監獄……中もコテコテの氷の塊ねェ。」

「うひゃあっ！　さ、ささ、寒いぃっ！？」「こ、これは不味過ぎるぞな……！」

「背中を擦る布……お売りしましょうか？」「……それぐらい、只でくれてやれ。」

「震えている場合ではありません。ここは敵性シュラの本拠地です。」

「気に入らんな。その本拠地……こうも簡単に入り込めるものか？」

「……ふむ、闇こすもすの申す通りである。……城門の守り的な者たちもおらぬな。」

「我らを招き入れたのか？　アレディよ、ここまで来たことは？」

「一度だけあります。ネージュ姫殿たちが、波国に瞬転される以前のことです……。」

「ん？　どうしたんだ？　アレディ。」

何やら、沈鬱……いや、感慨深げに息を付くアレディに、皆して怪訝な顔をした。

そして、少しの間アレディを眺めていると、ふう、と更に一息付いて自身の想いを吐露した。

「もし、今回の瞬転が行われなかったら、機会は巡って来なかったでしょう。
そして、ここまでの行軍……争覇の中にありながら、これ程心身の消耗を感じずに……。
こんなことは初めてです。」

「そりゃ、これだけの戦力があって、街やら海賊船やらで休み放題だもの。
……楽に決まってるじゃない？」「ですよねー。」
「……そのような意味ではありません。……上手く表現出来ませんが。」

「ストレスが少ないってことじゃないか？」
「明るく、楽しく、激しくがわしらのモットーじゃからの。」「勝手に総意にするな。」

「……感慨に耽るのは早いぜ？　アレディ。」
「そうそう。未だあの勘違いセレブとチョコバナナは倒して無いんだからさ。」

「……そうですね、行きましょう。中枢に続く昇降機は動いていないでしょう。
正面に階段がある筈です。」

そのアレディの先導で、目の前にあった巨大な階段で一行は下に降りていった。

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　上層牢獄

階段を下りた一行は、思わずその異様な光景に一瞬息を詰まらせ、

その直後、『監獄』と言う言葉の意味を即座に理解した。

何故なら其処は、紛う事無き獄中……牢屋が所狭しと並べられた牢獄だったのだから。

「成る程、これは確かに監獄……。ちゃんと、部屋が仕切られているようですわね。」

「このプリズンには、誰が捕まっているんだ？」

「ここは監獄というより……兵舎です。捕らえた敵や、凶暴な獣羅などが収監されています。」

「あ、分かった♪　それをあの笛のボウヤが操って、兵隊にしてるんじゃないのかい？」

「その通りです。他にも制御不能となった下級羅刹機などもおり、

その力は侮れません。
……過去、ここまでは来たことがあります。
ですが、牢の中にいる者たちに阻まれ……退かざるを得ませんでした。
あの頃の私は、まだまだ修練が足りなかったのです。」

自身の拳を見詰め、過去の記憶を思い出しながら、悔しそうに唇を噛むアレディ。

その反応、その台詞に、此処から先は想像以上に険しい道程だと……。

そうそう簡単に、生半可な事では進めないのだと誰もが理解し、気を更に引き締めた。

「……しかし、本当に働くね。オルケストル・アーミーに欲しいくらいだよ。」
「……って、ちょっと。そんな連中を『魔倣の鏡』で増やされたりしたら、
ますますド強くなっちゃうじゃない？」
「正に戦力増強には打って付けです。厄介な物を盗まれたでござんする。」

「だからこそ、これから奪り返しに行くんだろ？　アシェン。」
「その通りです、ハーケン殿。……どこかに抜け道がある筈です。牢も見て行きましょう。」

「……牢屋かよ。とんでもねえのが閉じ込められてるってパターンは勘弁だぜ？」
「あん、鍵が掛かって出られなくなっちゃった教師と生徒とか、ね。」
「興味深いですの♪」「そういうとんでもなさなの！？」「猥談はいい。いくぞ。」

気を引き締めた筈が、何時ものグダグダになっていたのは御愛嬌だと、或る意味諦めた一行は、
各牢屋を各々バラバラにならずに、一塊となってそれぞれ見て回った。

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　上層牢獄　南西部牢屋

北東→北西→南東と見て回って、最後に調べようとした此処……南西部の牢屋。
その中に待ち構えて居たのは、沙夜の部下であった筈の、
現在は修羅ゲルダ一派の上級獣羅の職に就いている、毒牛頭と毒馬

頭……。

そして、彼等の後ろに浮いていた百夜であった。

「おっと、そこまでだゼェッ！」「あっ！　この牛男は！？」
「ここから先には行かｓ「ヒャーハァー！！」……。」「……
……沙夜殿の獣羅か……！」

「獣羅ってのじゃないんだけど……もう、すっかり修羅が板に付いて来ちゃってるじゃないの。
だけど……貴方たちよりも、もっと驚いたものがあるのよね。」
「……。」
「……まさか、百夜ちゃんもいるとは、ね。」

「こいつは、アグラッドヘイムに持ってかれた三機の内の……一機か？」
「それが、どうしてこんな所に？」「ハッ！　奪い取ったんだろ？　その連中からさ。」
「こらっ！　貴方たち！　それをどこからどうやって持って来たんですの！？」

「我ら修羅の所業、言葉などでは紡げはせんッ！」
「あ、あのう……そこを何とか、教えて頂けないかと……。」
「これはデカい桜の木の辺りで敵から奪ってやったんだぜェ！　ヒィーハァー！！」
「……。」「話しちゃった！？」「巨大な……桜の木！？　もしかして、不死桜ですか！？」
「ここから先の情報は、二人っきりの時のお楽しみだァ～ッ！！

ブモォーーッ！！！」

相変わらず歪み無い牛であった。マジで自重しろし。

だが、御陰でアグラッドヘイムには、既に後一機しか百夜が残されていない事が判った。

その馬鹿牛に呆れながらも、仕方ないとばかりに毒馬頭が一行に喧嘩を吹っ掛けて来た。

「ぬううん！　我らの情報を知った以上、生かしては帰さんのだッ！」

「てやんでえ！　てめえらから話したんだろうが！」

「……何かもう戦う流れなんだな、これが。」「……そもそも、ぐだぐだですの。」

「……。」

「……百夜ちゃんは、残念ながら破壊しなきゃならないけど……。出来れば、ゴズィとメズィは生け捕りでね♪　こんなだけど、私の可愛い部下なの♪」

「……一気に滅ぼしたい所だが、百夜のことを訊かなければならんか。」

「仕方あるまい……！　さあ、牛じゃ！！」

何時もの如く、グダグダに始まった戦闘。

遣る気が完全に無くなったカイトが、欠伸をしながら牢屋の外の壁に凭(よ)り掛かったが、

誰も咎める声を出す者は無く、寧ろ出来る事なら自分もそっち側で寛ぎたいという様な、

恨みがましい視線が一番強かった事を、此処に明記しておく。

ｓｉｄｅ：毒牛頭

「ブモォーッ！！　嫁ェーーッ！！」

「わ、私は貴方のお嫁さんじゃありませんっ！」

「全くだ。ヒトの女に手を出すなよな？」「は、ハーケンさん……／／／／／／」

「え？　これ何て小芝居？」「ああら！　妬けちゃうわネ♪」

「チャラ衛門風情に誑(たぶら)かされおって……。相変わらず男を見る目が

無さ過ぎぞな。」

「折角あの鬼ババアの下から抜け出せたんだ！　好きにやらせて貰うぜ！　ブッハァ～ッ！！」

「！？　毒の霧など、我が爆風にて吹き飛ばしてくれる！　パンツァー・ボンバー！！」

そう叫んで来た毒牛頭が、行き成り毒霧を吐いて来た。

だが、即座に対応したエイゼルの爆風によって、掻き消されてしまった。

「駄牛風情が……挽肉にして二束三文で売り飛ばしてやるニャ。猫正っ！」

「そいつはいい考えだねえ。あたしも一口乗らして貰おうかねえ！　バブル・カノンッ！！」

「ああら！　アタシもお忘れな・く♪　スクラップ・キックよ！」

「ぶもおっ！？　おあっ……！　ぐあっ！？」

「……そんなもん、混ぜて売るんじゃないよ。全員食中毒起こして、死んじまうだろ？

でもまあ……バラバラにすんのは、賛成さね。喰らいなっ！　フェーダー・レイッ！！」

「結局、賛成するんだ。……ま、いいや！　痺れちゃえ！　ブロンテ・サンダー！！」

「ふむ。挽肉ならわらわに任せるぞよ？　邪鬼銃王！　冥土麗である！」
「ぶももももっっ！？！？」

「皆、退くがよい！　デラックスマックスアックスを使う！！　チャージ！　爆散せしめんっ！！」
「ブッハァァーーーッッ！！！！！」

毒霧が霽(は)れた直後からの、息も付かせぬ連続攻撃に、毒牛頭はもう既にフラフラの状態だ。

だが、まだ連撃は終わった訳では無かった。

「まだだ！　セブン・スタッド！！　ファントム！　プラズマ・カッターだ！！」「……！」
「続きます！　龍顎門(りゅうあぎと)の珠！　チェストッ！！　蓬莱の大枝！　燕(つばくろ)の介ッ！！」
「ぶほほおぅっ！！？」

「ナイスタイミングだ！　クアッド・ソリティア！　……ロングトゥーム・スペシャル！！

こいつで……トドメだ！！！」

「ブモオオオォォォーーーーー！！！！！」

毒牛頭は、特に何の反撃も出来ずに、あっさり吹き飛ばされた。

そして、その先には……。

一方、毒馬頭の方は……と言うと……。

ｓｉｄｅ：毒馬頭

「我ら修羅の覚悟、意地をその身に受けろ！！　ブッハァーーッ！！！」

「ちっ……！　コイツラ……こっちの方が、よっぽど性に合ってんじゃないのか！？」
「それは、言わないお約束ですの……！」「ヴァイス！　霧を振り払え！」「……！」

毒馬頭も、相棒宜しく毒霧による先制を仕掛けて来た。

しかし、アーベントの砲撃によってあっさり払われてしまった。

だが、その払われた霧の中から毒馬頭が飛び出して来、一番間近に居たＫＯＳ－ＭＯＳに突進して来た。

「！？　ぐぅっ……！」
「ＫＯＳ－ＭＯＳ！？　……中々やるじゃないか！　Ｌ（エル・ブレー）・ＢＬＡＤＥ（ド）！」
「弓矢で援護します！　凍ってください！」

「私も追撃しよう。Ｗ１０、ヒヒンと言わせてやれ！」「……！！」
「蹴り捲りまくるですのことよ……！　イリュージョン・ボルト！！」
「ヒヒィーンッ！！？」

吹き飛ばされたＫＯＳ－ＭＯＳの前に出て来たＴ－ｅｌｏｓに、Ｍ・

Ｏ．Ｍ．Ｏ．が援護し。

アシェンとアークゲインのＷコンボで、ヒヒンと吹き飛ばされた毒馬頭。

その先には、先程吹き飛ばされたＫＯＳ－ＭＯＳ達が既に態勢を調え終わっていた。

「追撃します。ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）・ＴＯＯＴＨ（トゥース）。斬撃を加えます……Ｓ・ＳＡＵＬＴ（エス・ソルト）。

続けていきます。ジン・ウヅキのパターン再生。連舞迅雷刀八本（れんぶじんらいとうはっぽん）……セイッ！」

「蜂のように舞い、蝶のように刺しますの♪」「続けて、レイヤード・クレイモヤだ！」

「ブッヒィィーーンッ！！！」

「私たちも参りますの、アクセル。」「リードされるのも悪くないんだな、これが！」

「え～い♪」「噛み砕くぜ！」「お手伝いしますの♪」

「ブヒヒンッ！？」

「はいっ♪　アルフィミィちゃん♪」「優しく……優しく……グリグリいたしますの♪」

「こいつでキメるぜ……！　コード・麒麟ッ！！　真・極（きわめ）ッ！！！」

「ぬぐあああーーーッッ！！！！！」

「まだだ……！　これで終わらせる……！　神の槍だ……！！　ディバイン・ランサー！！！」

「ヒッッヒイイイィィィーーーンッッッ！！！！！」

結局、毒馬頭も然程（さほど）の反撃も出来ずに、あっさり蹴り飛ばされた。

そして、その先には矢張り……。

他方、二機目の百夜は……と言うと……

ｓｉｄｅ：百夜

「強化……防御……。」
「コイツはオレの獲物だ……！　先手を取らせて貰うぜ！　リボルバーライフル！
　パワースラッシュ！　喰らええっ！！　カオティック・シューター！！！」
「ああうっ……！？」

初っ端、皆を差し置いてマークが百夜に突撃した。それに驚く一行の中、

一人だけその行動を予想していた者が先回りし、百夜が吹き飛ばされた先にいた。

「任せろ、マークさん！　吠えろ！　炎竜！！！」「あうっ！」
「…！？　ワタクシも参りますわ！　ボンバー！！」
「フェイクも！」「アルクオンッ！！」「「……！！！」」
「ああっ……！　あう……っ！」

慌てて追撃する一行。だが、慌てていた割にはしっかり連携は出来ており、

百夜に態勢を整えさせる隙を一切与えなかった。そして、連撃はまだまだ続く。

フェイクライドによって打ち上げられ、アルクオンによって蹴飛ばされた百夜に、

零児達が既に向かっていたのだ。

「わしに任せいっ！　玄武炸（げんぶさく）！　ウィザードじゃ！　バンブ～♪　ほいっ♪　シャオムゥゥウェイィィブ！！　破天光（はてんこう）じゃ！」

「あん、お邪魔しちゃおうかしら、ね♪　えいっ！　サクサクっとね♪

氷！　焔！　最後は楔っ！」

「続けていくぞッ！　金（ゴールド）！　火燐（かりん）！　地禮（ちらい）！　柊樹（ハリウッド）！　二門・四嗣（ししふ）！　噴陣（んじん）！！　爆ッ！！」

「あ……！　ああっ……！？　あうっ……！！」

零児達の同時連続攻撃に、流石の百夜もダメージが大分蓄積して来た様だ。

だが、又も吹き飛ばされた百夜の前には、待ち構えていた者が未だ後二人もいたのだ。

「これで終わりにしよう……！　轟覇……！　機神拳！！！　ネージュ姫殿！」

「ええ！　グラス・コフィン！！　氷の棺よ？　……お休みなさい

！」

「……ぁあっ……！！　あうっ……！」

「まだだ！　二門・不知火の型ッ！　灼き尽くせッ！！

これでトドメだッ……！！　零の型……！　爆砕ィィッ！！！」

「ぁっ……あうっ……ぁあぁっ……！！？」

零児に吹き飛ばされた百夜の先には、まるで示し合わせたかの様に、

同時に吹き飛ばされて行く、毒牛頭と毒馬頭の姿があった。

「これで決めるぞッ！　小牟ッ！！　沙夜ッ！！」

「お呼びとあらば、即参上！」「呼ばれて飛び出て……ってね♪」

「そうだ……！　その位置だ……！！

一つ……！　二つ……！　三つ……！　四つ……！　五つ……！

！　六つ……！！！

これぞ――――巴なり。」

「全く……年寄りを扱き使わせおる。」

「あん、二人共……御苦労サ・マ♪」

「ブッヒイイイイィィィィィーーーーーッッッ！！！！！」

「ヒヒイイイイィィィィィーーーーーンッッッ！！！！！」

「あああ……！！！　……機能……停止……。」

こうして、洗脳され修羅と化した毒牛頭・毒馬頭達との戦闘は終わり……。

二機目の百夜は、沙夜達自身の手によって爆破されたのであった。

第弐拾陸話【修羅の饗宴～迷宮のプリズナー～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話からは二話連続投稿になりますので、少々投稿迄時間が掛かってしまいますが、

どうか御諒承下さい。その分、より御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、懲りずに第４回目！　私の技構成　楠舞神夜　の回です。

では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

Ａ：蓬莱の大枝（おおえだ）→燕の介（つばくろかい）→猪刺花鳥（いのしかちょう）ｏｒ如来の鉢→雨刺鋼（あめしこう）→龍顎門（りゅうあぎと）の珠（消費ｃｏｍ１００％ｏｒ９０％）

Ｂ：雨刺鋼×５（消費ｃｏｍ１５０％）

Ｃ：火鼠（ひねずみ）の大衣（おおごろも）→燕の介→猪刺花鳥ｏｒ如来の鉢→雨刺鋼→龍顎門

の珠（消費ｃｏｍ１１０％ｏｒ１００％）

です。一番厄介なのは技の読み方だと思う、今日この頃の私です。
それはさておき。私は神夜に関しては、普通の重さの敵と重い敵とで技構成を変えています。
え？　だったら最初からそんな面倒臭い事しないで、Ｃのｃｏｍ１００％にしろって？
デスヨネー。……だが断る。俺の最も好きな（ｒｙ。

とまぁ、そんな小芝居も交えつつ。技の解説をしていきたいと思います。
先ず、今作の神夜の技は全体的に、落とし難い技が多いと思います。
それでも落としてしまう場合は、少し早目に出せば大概は何の問題も無く拾えると思います。
だが、俳浪華札（はいろうはなふだ）……テメェはダｍ（ｒｙ
ですが、そんな神夜の技の中でも特に落とし易い筆頭が、猪刺花鳥と雨刺鋼だと思います。

この二つの技に関しては特に、併用してはいけない技があります。
それは、アクミィの援護やドロシーの支援といった、下に叩き付ける技。
これらを二つの技と併用すると、ほぼ確実に落としてしまいますので、是非共御注意下さい。
雨刺鋼はそれこそ早目に出すしか対処法は無いかと思いますが、
猪刺花鳥に関しては私の知っている限りでは、一つ対処法があります。

それは、小牟の援護。タイミングは、敵が小牟の結界の中に入った瞬間。
丁度その時に使うと重さに関係無く、技が終わると同時に結界も途切れるのです。
実は他にも、神夜の技は小牟と可成り相性がいいものが多いんです。
例えば、龍顎門の珠。
これも、猪刺花鳥と同様のタイミングで使うと、重さに関係無くほぼフルヒットしてくれるのです！
どうやったら、上手い事多く当てられるか悩んでいる其処の貴方！
是非共、御試し下さい！

但し、雨刺鋼に関しては同じタイミングで使ってはいけません。
これは、逆にタイミングが合わず、高確率で落としてしまいます。
ですので、もし使う場合は、少しタイミングをずらして、遅めに出してみて下さい。
先ず確実に落とさずに次に繋げられます。
又、ブロック持ちの重い敵相手の初撃に雨刺鋼を持って来ると１００％落としますので、
もし、私のＢの様な技構成の場合は、
必ず初手に援護か支援を持って来て先にブロックを割って下さい。

所で、一番扱いに困るのが火鼠の大衣だと思いますが、これは初撃か最後を私は御薦めします。
理由は皆様御存知の通り、技の出が遅いからです。
最後ならば、四番目の技が終わった直後に連打すれば、基本的にはギリギリ間に合います。
ですが、初撃にする際の一番の問題点は、連続攻撃で繋げる際に拾い難い事。

一番無難な対処法は、タイミングとかガン無視で援護&支援中か、メインキャラの攻撃が終わった直後に、即座に交代する事です。
出は遅いですが、その分攻撃時間は長く、先ず当たりさえすれば落とす事はありませんので、
とにかく当てる事だけを考えて、ダメージ・威力は二の次にすれば、大抵の場合拾えます。

基本的に今作の神夜は前作に比べると、慣れと言う事も含めて、最初の内は全体的に使い難い印象が強いと思います。
そういう、特に序盤対策としては、さして拘りが無ければ、蓬莱×５か燕×５、少しレベルが上がった後は、如来×５を御薦めします。

蓬莱は、消費が１０％と少なく必ず五連撃出来る上、ゲージ回収率が高いからです。
又、燕は序盤では威力が高い方ですし、何より重さに関係無くほぼ確実に拾ってくれるからです。
特に重い敵相手に地面擦れ擦れで拾うと、ヒット数が増えるのもグッジョブΣｄ　です。
如来は……もう、言う迄もありませんねｗ　あれで拾えなかった事は私はありませんから。

因みに、神夜の援護・帝返しは、ブロック割りに使うのが一番最適だと思います。
最初の月燐で７ｈｉｔ出た場合は、必ずフルヒット（２１ｈｉｔ）出来ますので、
それを目安にするといいかもしれません。

神夜の援護は、斬冠刀で飛ばした後は確実に落としませんが、その前の月燐で落とす人は良くいると思います。私も未だに偶に落としますし。

早くても遅くても拾えたり落としたり……もう、これはハッキリ言って慣れと勘ですね。

只管(ひたすら)、実戦と練習を繰り返して何となくタイミングを自身の身体に慣れさせるしか無いと思います。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話と次々話は、残念ながら有りません。

三話後の錫華迄、御待ち下さい。……抑も、此処読んでる人ってどんぐらい居るんだろ？

カウントダウン……1

第貳拾漆話【八神はやてと八神風音～破壊という名の終焉（デストラクション）～】

皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、二話連続投稿となっております。

そして、今話はアイスベルク監獄・中編～後編です。

では、次話と併せて、今話も拙作を御覧下さい。

第貳拾漆話【八神はやてと八神風音～破壊という名の終焉（デストラクション）～】

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　上層牢獄

三人の銃で散々に撃ち捲られた毒牛頭と毒馬頭の洗脳はやっと解け、百夜は爆散した。

そちらの意味でもほっとした一行は、取り敢えず二人にこれ迄の経緯と現況を訊ねた。

「これで二機目……。残った百夜は後一機、ね。」

「ううん、ここは？　……！　……ア、アネゴ！？」「沙夜様！？では、我々は……。」

「もう、二人共。後でぼうやにオシオキして貰うから。」

「俺はやらんぞ。それに、その前に訊くべきことがあるだろう。……それと、ぼうやと呼ぶな。」

「そうである、青牛に赤馬よ。今の百夜……不死桜から運び込んだと申しておったな？」

「記憶が定かでは無いが……あの巨大な桜の木の近くで、アグラッドヘイム軍と戦ったのだ。」

「その時に、ビャクヤの奪取を？」

「オレたちは制御コードを知ってたからな。」

「あの笛吹男に何とか出来無いかと命令され……外部から入力したのだ。」

「アグラッドヘイム……確か一度、不死桜を狙ったことがあります。」

「ガンド三兄弟のヘラ・ガンドちゃんと初めて戦った時ネ。」

「彼の者たちが本格的に動き出す前に、シュラを押さえねばならぬな。」

一応正気に戻った毒牛頭と毒馬頭に経緯を訊き、ようやっと合点がいった一行。

だが、後一機しか残っていない百夜を本格的に使われる前に、急いで修羅との決着を付け、さっさとアグラッドヘイムに乗り込んで残る百夜も破壊しなくては。

そう一同が臍（ほぞ）を固めている間に、沙夜は何やら毒牛頭・毒馬頭とボソボソと話し込んでいた。

「……沙夜様。我々も一緒に？」

「貴方たちには、やって貰うことがあるのよ。残った百夜は後一機。……そろそろ帰りのルートを確保しないと、ね。」

「分かったぜ、アネゴ！　当たりは付けてあるんでさあ！」

「あん、流石はデキるコね♪　オシオキは私の方からしてあげよう

かしら♪」
「ぶもっ！？　そいつは……！」
「……諦めろ、毒牛頭よ。今回は、俺たちの落ち度だ。
……では、沙夜様。ここから先は、後ろのブロックを壊して進んで下さい。」
「オレたちが盗んだ『鏡』を運び込んだ時に使った搬入ルートがあるんでさあ！」
「了解よ♪　じゃあ、また後で、ね。」

どうやら三人の話も終わったらしく、毒牛頭と毒馬頭はその場を急いで後にした。

沙夜の動向をずっと気にし、見ていた零児は今の会話について沙夜に詰問したが……。

「……沙夜。何を話していた？」
「あん、オシオキの話よ♪　後は……この牢屋の奥に、『鏡』を運んだ搬入路があるって話。」
「それと、帰りの足を確保する為に、牛頭馬頭をミラビリス城に向かわせたぐらいだな。」
「あ、あら……；　やっぱり、貴方には全部筒抜けなのね、救世主（メシア）様；；；」
「……まあ、いい。俺たちも何れ帰らなければならん。」

「……じゃあ、『魔倣の鏡』はこの先ってことね。」
「あいつらが嘘を言って無ければだけどな。」

「……沙夜殿がいる以上、虚言を弄する理由は無い筈です。」
「そういうこった。それに関しては間違い無い。信じても構わんよ。」
「……と、カイト殿も仰っています。それに、微かな覇気の流れも感じます。
……ここはあの二人の言に従って、牢の奥を調べてみましょう。」

あっさりカイトに会話内容をバラされた沙夜であったが、
大人の対応をした零児は、敢えて放置しておく事に決めた様だ。
結局、その儘二人の言っていた牢屋の奥に続く道を探し出し、一行は先へと進んだ。

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　裏口　パイプ道

牢屋の奥から続く道を突き進み出た先には、
巨大なバルブが幾つも連なっている、広大な搬入路が広がっていた。
その大きさは最早、只の搬入路と言うだけでは無く、

裏口と言っても過言では無い程の広さだった。

「これは……搬入路というよりは、裏口でございますね。」
「……お風呂みたいな桶がありますけどもしかして……！」「落ち着いて下さい、凍乳姫。」
「あそこに水を入れられたら、あたしでもキツいよ。……カイトなら平気そうだけど。」
「何の問題もナッシング。早速、俺の寒中水泳……基、凍中水泳をば……。」
「ヤメんか、バカイト！！　見てるこっちが寒くなるじゃろが！
……うう、想像しただけで冷えて来た気がするわい。カッチカチになってしまいそうじゃ。」
「ウォーカーギャリアも男の子っ！　序でに俺も漢の子っ！」
“……『子』？”「こまけぇこたぁいいんだよ！」“……ハァ。”

寒さの所為か、飽きたからなのか……将又（はたまた）両方か。

最早、ツッコム気も完全に失せた様子の皆々であったとさ。

「……で、でも、シャオムゥさんの言ったように、
そうやってあの中を凍らして、先に進む為の仕掛けみたいですよ？」

「ＯＫ。そういうことなら、アイス風呂を入れてみようぜ？　注水する為のバルブがある筈だ。」

ハーケンの言葉の後に、周りを見渡してバルブのある位置を確認し、登るのか……と溜息を付きながら、何人かで手分けしながら栓を回して進む一行であった。

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　研究室

何とか裏口から抜け出し、先に進んだ一行の目の前にデデーンと現れたのは、

何処かで見た事のある巨大な鏡……そう、『魔倣の鏡』であった。

「あった……！　『魔倣の鏡』が……！　……良かった。
周りに敵もいないようだし……さっさとド取り返してしまいましょ♪」
「お待ちを、ネージュ姫殿。……様子がおかしい。強い力を感じま

す。」
「エネルギー反応が凄く不安定みたいです。」
「どういうことぞよ？　それに周りにある機材……修羅っぽくない感じであるな。」
「シュラーフェン・セレスト辺りから持ち出された臭いな。……何かを調整しているのか？」
「機械によって制御しようとしているんじゃなかろうなのではないかと。」

各々結果分析に基づき、銘々で結論や考えを述べていた。
それを聞いていたカイトは、取り敢えず議論が終わったであろうタイミングを見計らい、
皆に今の『魔倣の鏡』の状態を改めて正確に説明した。

「う～ん、惜しいって所かな。
毎回しょうがないとは言え、やっぱ、結論が出るには後一つ惜しいんだよなぁ。」
「？　何か知ってるの？　カイト。」

「まぁな。正確に言えば、コイツは今暴走してるんだ。」
“……暴走？”
「そう。ヘイムレンの奴が何時でも虚像の兵隊を作れる様に、常にコイツを稼働状態にして暴走させてるんだ。

それに、お前達が知らずに近寄れば、先ず確実に戦闘になるだろうし。
いい時間稼ぎにもなるし、気力・体力も多少は削れる。正に一石二鳥ってな訳だ。」

そのカイトからの説明を受けたネージュ達は、苦虫を噛み潰した様な顔になった。

エイゼルなどは、正に今カイトが言った事をしようと思っていたらしく、

むう……と、神妙な雰囲気を出していた。

「まぁ、そういう訳なんでな。恐らく、今の状態じゃネージュの命令も聞かなさそうだし。
俺がちゃっちゃと止めてやるよ。」
「カイトは大丈夫なんですの？」「壊すのは、絶対にダメよ？」
「無問題、無問題。後は結果を篤と御覧じろって話さ。」

そう皆に笑顔で言って、カイトは魔倣の鏡の前に行き、ソレに向かって高らかに命じた。

「我、『真なる救世主（メシア）』が命じる。魔倣の鏡よ、その力を封印（とじよ）せよ。」

〔……。〕

“……。”

シ～～～ンとした空気の中、全く変化が見られない魔倣の鏡。

まるで、ハーケンがファントムを喚び出した時の様に、

何だかなぁ……と言う空気が、一行の周りに漂い始めた。

つまり……それが此の上無く異常な事だと気付いていたのは、

当の本人だけだったのだ。

「……で？」「……これは……とてもイタイ空気が流れておりますの。」

「……何やっとるんじゃ、あのバカイトめは。」

「やはり、ここは我が爆散せしめん。」「だから、それはダメだって……！」

「……救世主（メシア）？」

「――――バカな……!?　俺の命を拒否した……だと!?　一体、

これはどういう事だ？

「……っ！？　まさかっ！　……！？　しまった……！」

〔……！！！〕

カイトが何に驚いているのか全く分からない一行だったが、

突然魔倣の鏡の表面が波打ち、動き出した事に驚いていた。

だが、それ以上にカイトは……驚愕せざるを得なかったのだ。

何故なら――――。

「……。」「……。」

「――――はやて。――――風音（かざね）。」

カイトの後ろに現れた虚像は――――彼の……彼が殺した筈の……
妻と、娘だったからだ。

第貳拾漆話【八神はやてと八神風音（かざね）～破壊（デストラクション）という名の終焉（エンド）～】

ｓｉｄｅ：三人称

はやてと呼ばれた女性……。

全体的に黒と白で統一された服を着、帽子を被っており、その背中には羽が生えていた。

又、その顔には、まだ幾分かあどけさが残りながらも、

それでも尚、その芯の強さが顔に表れており、誰もが美人だと認識出来る程の綺麗な人だった。

一方、風音と呼ばれた女性……。全体的に碧色と白で統一された甲冑の様な衣を纏っていた。

大体、カイトとはやての中間ぐらいの身長で、胸部に関しては圧倒的にはやてより分があった。

その黒い髪は長く、ポニーテールを碧色のリボンで結び、腰ぐらいに迄垂らしていた。

又、その女性は左手に洋風の長剣を持ち、その黒い鍔には碧色の宝石が埋め込まれていた。

その二人の女性が目を開け、驚愕の表情をしたカイトを視界に収めると、

同時にニッコリ微笑んで、カイトに話し掛けた。

「……久し振りやね、カイト兄。」「……久し振り、お父さん。逢いたかったよ。」

「……はやて……風音……ああ。ああ、俺も、お前達に逢いたかった。」

にこやかに挨拶しているカイトと、二人の女性。

一方、それを遠巻きに眺めていたハーケン達は……。

「……誰？」「確か……はやて、かざねとおっしゃっていましたの。」

「はやて……かざね……？　聞いたことがあるな……どこだ？」

「……あやつらはの。」「……ん？　小牟？」

各々がどこかで聞いたことがあると、思い出している中、小牟がポツリと漏らした。

その顔を零児が見たのは一回だけ。……あの時、九十九との決戦の前。

小牟が何かを決意し、零児に話そうとした時。あの時の辛い表情にとても似ている。

「……あやつらは……カイトの妻と娘じゃ。」

「え!?　……あんなに若くて綺麗な奥さんと娘さんが……。……あれ？　でも確かカイトさんの奥さんと娘さんって……。」

「……はい、死別しています。正確に言えば……救世主（メシア）本人によって殺されています。」

「……！！　そうだ……最初に聞いた時、ミラビリス城であの少女が言っていた……！」

そのハーケンの台詞で皆、思い出した。事あるごとに何度か話題に出た話。

カイトの死別した妻子。……否。カイトが自ら殺したと言う、

自身の家族の話を。

「何だって!?　ま、マジかよ……！　あの人……自分の嫁さんと子供を殺したのかよ！」

「戯け！　……そんな……そんな単純な話では、無いのじゃ……。」

「……一体、何があったんだ？
……あのカイトがそんなことをしなけりゃいけない理由ってのはなんなんだ？」

「……それは……。」
「……ハーケン。それは、例え事情を知っていたとしても、私たちが勝手に話していい類のものではありません。況(まま)してや、救世主(メシア)は……。」

「……そうか、分かった。ならそれは、本人に直接聞くとするさ。」

「……はい。」

どうやら、こちらはカイトの動向を見守ると言う事で結論が出た様だ。

……そして、当のカイトは。

「……本当に久し振りだな、二人共。もう……九千垓年以上にもなるか。」

「……そか。もう、そんなんになるんやね。」

「うん……私達が死んでから……ううん。……お父さんに殺されてから。」

「……ああ。もう、それくらいになる。」

カイトを見詰めていた、はやての黒い瞳と、風音の碧色の瞳がほぼ同時に閉じられた。

カイトは、その二人の一挙一動を只管(ひたすら)見詰め続けていた。

まるで、一瞬たりとも逃さぬ様……自身の記憶の裡に全て留めて置くかの様に。

それが、如何程続いただろうか。数秒？　或いは、数十分だったかも知れない。

先にはやてが。数秒遅れて風音が、閉じていたその双眸を開けた。

「……なあ、カイト兄。私達、カイト兄にお願いがあるんや。」

「……ああ、なんだ？」

「聞いてくれるの？」

「当たり前だろう？　何時も我が儘は言っても強請(ねだ)りは決してしなかった、

お前達の、珍しいたっての願いだ。聞かない訳が無いだろう？」

「ありがとう、カイト兄。それじゃあ……。」

「お願い……

死んで？」

「……ぐふっ……！？」

“――――なっ！？”

カイトが頷いた瞬間、カイトの胸を、刃物が貫いた。

はやての手にはダガーの様な短剣が握られ。風音の手には先程から持っていた長剣が握られ。

それぞれの得物で、カイトの胸を深々と貫き刺していたのだ。

……だが、皆はそれ以上の驚愕の光景を目にする事になる。

カイトは刺された儘の状態で二人に近付き、力強く……そして、優しく抱き締めたのだから。

「……カイト兄？」「お父さん……？」

「……嬉しかった。虚像とは言え。鏡像とは言え。お前達に逢

えて。本当に嬉しかった。」

「……カイト兄。」「お父さん……。」

「……でも。だからこそ、これで終わりにしよう？　はやて……風音……。」

「カイト兄……私達を、殺すの？」「あの時の様に……また、私達を殺すの？　お父さん。」

「……。」

ズプッ……！！

「――――え？」「――――あ。」

無言で胸を貫かれた幻の二人が最期に見たモノは……。

今にも泣きそうな程に、顔を歪ませたカイトの顔だった。

「は……ハハッ……。又、殺すのかって……？　……当たり前じゃないか。

お前達を殺せるのは……殺して良いのは……。

後にも先にも、俺、唯一人だけなんだからさ。

なあ……そうだろう？

……っ……っはやてぇ……！　……っ……っかざねぇっ……！！」

「……カイト。」「……救世主（メシア）。」

カイトは、己が妻子を再び貫いた自身の両腕を抱え込み、床に蹲（うずくま）り慟哭していた。

その慟哭（こえ）は……事情を知らない、誰の心をも動かさずにはいられなかった。

誰も、声を掛けられずにその儘でいると、身体を震わせていたカイトが起き上がり、

魔倣の鏡に再度話し掛（めいじた）けた。……その顔を誰にも見られ無い様にして。

「……聞こえているだろう、魔倣の鏡よ。再び命じる。その力を封印（とじよ）せよ。」

〔……。〕

「――――【我】が命が聞けぬか？」

〔…！？　……！？！？！？〕

最初のカイトの言葉にも、まだ何の反応も示さなかった魔倣の鏡だったが、

二度目にカイトが言った言葉を聞いた直後、唐突にガタガタ激しく揺れ出した。

……否。それは、震え戦(おのの)いていたのだ。……カイトの言葉で。

自身に命じているモノが……一体ナニモノなのかを理解したが故に。

震え出したその数瞬後、魔倣の鏡は完全に沈黙し、その機能を閉じた。

何事が起こったのか分からないネージュ達をさておいて、カイトは先に進んだ。

……僅かに、表情が見えない程度に振り返り、皆の歩を促してから。

「……何をしている？　さっさと先へ行くぞ。奴等はこの先だ。」

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　獄主の間

カイトの先導の儘に、先へ先へと進んで来た一行。

そして、開けた場所に出たと感じた一行は、眼前に構えている敵をやっと見定めた。

操音のヘイムレンこと、ヘイムレン・シルバート。

そして……凍鏡のゲルダこと、ゲルダ・ミロワール。

その修羅の一派の姿を。

「操音のヘイムレン。そして、凍鏡のゲルダ……！　遂に、ここまで辿り着いた……！」

「……よく来たわね、剛錬のアレディ。」「待っていたよ、アレディ君。」

「待っていた……？」「……。」

「やはり、アルクオンも連れて来ているか……ならば、好都合。……これで必要なもの全てが揃ったわ。」

「何……？」「ヘイ、全開クイーン。……どういうことだい？」「全てが揃ったとは？」

「……ヘイムレン、『アレ』を呼び出せ。」

「はい、ゲルダ様。仰せの儘に。出でよ、羅刹機……アルコンテスよ！」

「あ……熱源接近……！　この反応は……！」

何か意味深な発言をするゲルダ達。その意味を示すモノがアレディ達の前に現れた。

アルコンテスと呼ばれた羅刹機が三体。そして、氷を司る羅刹機……クロノスも三体。

計六体もの羅刹機が、ヘイムレンの命令によって現れたのであった。

「「「「……。」」」」「「「「……。」」」」
「何かと思えば……只の羅刹機ではないか。……ちと、数は多いが。」

「……ッ！？」
「ん？　確かにここに来るまでに何度か闘り合ったけど……。
アレは、そこにいる水色の奴じゃ無かったか？　でも、こいつは……。」
「黒じゃよ、真っ黒！」「成型色を変えて、もう一丁……っちゅうだけニャ。」

「……そんなことはありません、琥魔殿。この羅刹機から放たれる覇気……。」
「……気付いたようだねえ、アレディ君。」
「そう……これは、アルクオンに近い……！」「……。」
「……。」

思わず双方を見比べた一行。顔、腕、脚、装飾、全身と、隈無く嘗め回す様に見合わせた。

しかし、どう見てもその配色ぐらいにしか、共通点は見出せなかったのだが……。

「何を言ってるんだい？　そんなに似てないじゃないさ。」

「見た目が……ってことじゃないんじゃない？」
「そう……『本質的な部分』ということですの。」

「……我々も亦、羅刹機の研究を進めていた。
アルクオンが手に入ってさえいれば、もう少し早く完成したのだがな。」
「あの『鏡』を使って複製を行ったのですか？」
「これは例の鏡に写したものではないよ。ようやく完成した……我々の羅刹機さ。
後はアルクオンと闘い、学習……いや、修練を積んで貰うだけさ。
そして、完全となったアルコンテスを『魔倣の鏡』で複製するとしたら……どうだい？」

そう。それが……ゲルダ達の目的。ようやっと完成した自分達の羅刹機アルコンテス。

それに、歴戦の猛者達との戦闘経験を積ませ、更により完璧になった羅刹機を量産する。

それ程の強さを持ったものが数多いれば、今度こそアグラッドヘイムとの争覇に勝てる。

……だが、その目論見は……。

「その為に、俺たちをここまで招き入れたのか……！」
「アルクオンと同等の羅刹機を量産するですって！？」

「そうかい。……だが、残念だったな。」
「……何？」

「あのマジック・ミラーなら、カイトが完全に封印しちまったぜ？」
「ええ。アレは……恐らく私でも封印を解くことは不可能でしょうね。
　アレを元に戻せるのは、もうカイトだけね。」
「そうなのかい？　でも御姫様。僕が彼を操って解いて貰えばいいだけの話だよねえ？」
「カイトを操る？　……そういう寝言は、寝てから言うものだぜ？」

カイトが封印してしまったのなら、カイトを操ればいいと言うヘイムレン。

そんな事が出来る訳無いと、一笑に附すハーケン達。

既に火花が激しく散っている中、先程からずっと黙っていた当の本人が……。

「……それだけか？」

「ん？　それだけ……とは？」

「たったそれだけ……その程度のガラクタを量産する為だけに……。

それだけの為に……俺に又、妻と娘を殺させたのか？」

（……どうやら、あの鏡の罠に引っ掛かったのは奴のようだな。）

「（成る程……そういうことでしたか。しかし……。）　また？

……これは、これは……。どうやら貴方も、かなりの業をお持ちのようで。」

「業……そうだな。俺の業は余りにも深い。それこそ、地獄の閻魔が裸足で逃げ出す程に。

だがな……そんな事は、今は関係無い。今、関係があるのは……

……！

テメェラが……！　オレをブチ切れさせたって事なんだよ……ッ！！」

その瞬間、アイスベルク監獄が揺れ始めた。否……前の魔倣の鏡同様……いや、それ以上に。

この儘であれば、先ず確実に自身が辿るであろう未来を理解し、戦慄き始めたのだ。

だが、その心配は杞憂となった。何故なら……。

「全転移（オールムーブ）ッ！！」

その獄主の間から、全ての存在が消え失せたのだから。

ｓｉｄｅ：『独立した新世界（オンリー・ワン）』

世界が一変した。そういう表現が、一番正しいのでは無かろうか。

と、誰もが思った。

木々が、海が、空が、大地が、余りに広大なその美しい世界が。

却って、その世界の異質さを際立たせていた。

「な、何だここは……？　いや、なんなのだ、コレは……！？」

「此処は俺が創り上げた世界。何処の異世界とも繋がらず。何処の平行世界とも交わらない。

あらゆる世界から隔絶された、言わば独立した新世界。俺はオンリー・ワンと呼んでいる。」

「オンリー・ワン……。」

ゲルダとヘイムレンは鸚鵡(おうむ)返しにそう自然に呟き、

カイトの……敵の目の前だと言う事も忘れて、思わずその世界を見渡していた。

「そうだ。そして……防護障壁(シールド・フィールド)。」

「！？　これは……！？」

「それは、防護障壁（シールド・フィールド）。俺が使う絶対防御。俺が指定した対象を必ず護り抜く障壁。

分かり易く言うのならば……ソレは、俺の如何なる攻撃でも耐え得る正に絶対防御だ。」

「……だが、何故我らまで護るなどと馬鹿げた真似を……！？」

そうカイトが説明したものは、アレディ達は勿論の事、ゲルダやヘイムレンすらも別途に包み込み、確実に彼等を護っていた。

只……羅刹機達だけは除いて。

しかし、何故カイトは彼等迄護ろうというのだろうか？

そう問いを発したゲルダは、途中でその口を閉じた。……いや、閉じずにはいられなかった。

……何故ならば、その彼の形相は余りにも恐ろしく……。

そして、その答えもそれ以上に恐ろしいものだったからだ。

「何故か……だと？　決まっているだろう……？　貴様等に教える為だ。

貴様達が喧嘩を売った相手が、どういう存在かを知らしめる為のなぁ……！」

「……喧嘩を売った？　何を言っているんだい、君は。もしかして、先程言っていた事かい？

アレは、君が勝手にヘマをしただけの話だろう？　それは只の八つ当たりと言うモノだよ？」

「八つ当たりだ……？　……んな事は関係ねえ。……んなモンは、どうでもいい！

さっきも言っただろうが……！　オレはなァ……！！

今、完ッッッ全にッ！！　ブチキレてんだよッッッ！！！！！！」

そして、誰もが目にした。誰もが戦(おのの)いた。誰もが恐怖した。そして……誰もが、憧れた。

そう……誰もが理解したのだ。これが……これこそが、本当の
チカラというものなのだと。

「リミッター解除ォッッ！！！　千？条（オクティリオン）ッッッ！！！　鎖解放（フルバースト）ォォッッッ！！！！！」

その瞬間、世界の全てが魔力に塗り潰され、圧し潰された。その認識以外は出来無かった。

カイトの防護障壁（シールド・フィールド）内にいるにも拘わらず、全てを圧壊するかと思われる程の、

その膨大というには余りにも膨大すぎる……文字通り、言葉通りの圧倒的な魔力は、

中に護られている筈の皆をも地面に縫い付け、息をするのも苦しい程であった。

だが……まだ終わらない。これだけでは、まだ終わってはいなかったのだ。

「全魔力解放ッ！！！　右手に災厄……！！　左手に混沌……！！」

カイトの右手に、黒よりも闇よりも尚黒々とした、漆黒の球体。

カイトの左手に、黒でありながら白でもある、正しく灰色そのものの球体。

ソレらがそれぞれ生成された。そして、カイトはソレらを……。

「カオスッ！！　カラミティッ！！　融合ッ！！！」

そう、一つに合わせ……融合させたのだ。

一つとなったソレは、融合前の二つの球体よりも尚、一回り……いや、二回り三回り大きく。

その色は、真黒でありながら灰色に……いや、そうではない。

灰色でありながら、極めて真黒に近い配色をしていた。

カイトはそれを右手一杯に掴み、真横に振り下ろした。

すると、その球体は自身の形を変化させ、超超巨大な漆黒の剣へと形態変化したのだ。

その大きさは、柄だけでもカイトの身長を遙かに超え、

剣の先に至っては、認識出来る者は誰もいないと断言出来る程、余りにも長大だった。

その超大に長大な剣を、カイトは難なく片手で持ち上げ、上段の構えで静止した。

その際に斬られた空は、決して閉じる事無く、外の世界を……漆黒の宇宙を覗かせていた。

「　　全魔力……消費　　全魔力……注入

全魔力……固定　　」

カイトの宣言通り、カイトが自身の全魔力を剣に注ぎ込むと、

その漆黒の剣は更に大きさを変じさせ、凡そ柄は十倍に。

刃の長さに至っては、遙か何百倍、何千倍、何万倍にもなっていた。

その巨大化する過程で既に、星を何千、何万、何億と消滅させていた。

その余りの魔力量。余りの長大さ。

そして……余りの静けさに、誰もが何の声も発する事が出来無かった。

「――――篤と思い知れ……恐怖というものを。

そして、その眼に焼き付けるがいい。――――これがチカラだ。」

そう言うと、カイトは羅刹機達に向けていた刃の腹を九十度横に傾け、

刃そのものを羅刹機達へと向けた。

そして――――。

「魂を……などと、ケチ臭い事は言わん。

――――存在ごと、消え失せろ。」

――――デストラクション・エンド――――

無造作に振り下ろされただけの剣は、羅刹機達を一瞬で跡形も無く消滅させ――――――。

それと同時にその瞬間、数千極(ごく)もの世界を消滅させ――――――。

その余波で滅んだ世界に至っては……最早数える事すら不可能な程、膨大な数に上っていた。

第貳拾漆話【八神はやてと八神風音～破壊という名の終焉（デストラクション・エンド）～】

如何でしたでしょうか？

今話に出て来た言葉や単語を、幾つか解説させて頂きます。

1．？（し）とは、１０の２４乗。垓（がい）（１０の２０乗）の一万倍です。

2．ｏｃｔｉｌｌｉｏｎ：オクティリオンとは、１０の２７乗。つまり、千？（せんし）です。

そして、この数値は実は、人体を構成している原子の数と同数なのだそうです。

3．デストラクション・エンド。以前、雨季様の記念小説にて書いて頂いた、要とカイトの戦闘。

その際に使われた、カイトのエンド技の一つ。順番で言えば五番目に当たります。

実は、こういう技でした。因みに効果対象は、あらゆる世界全て。

そして、その能力は、対象全ての能力完全無効化&破壊・破滅・消滅の同時効果、というものです。

カイトの持ち得るエンド技の中で、実は一番効果範囲の広い技だったりします。

4．エンド技について。上記の番号は、カイトが習得した技順です。

威力も、効果範囲も、必要な魔力量もバラバラですからねｗ

で、順番としては、カラミティ・エンドが一番目。カオス・エンドが二番目。

エターナル・エンドが三番目。未だ能力が判明していないインフィニティ・エンドが四番目。
そして、今回のデストラクション・エンドが五番目です。

と言う事は、六番目の名称は……もうバレバレですね？ｗ　敢えて、明言はしませんがｗ
所で、七番目の名前……判る方いますかね？　結構分かり易いそのまんまな名前なんですが……。
答えは当然、未だ言いません。どちらも登場する迄、御楽しみにｗ
（て言うか、デス（ｒｙの所為で、６＆７ｔｈの能力内容に困ってるなんて言えない。）

と、こんな所でしょうか。

……え？　最後のは何かって？　ハテ、ナンノコトヤラ。幻聴か幻覚じゃないでしょうか？

では、直ぐ次の次話にて。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第貳拾捌話【永劫の救世主（メシア）～絶望という名の運命（さだめ）～】（前）

皆様、何時も御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

必要なモン詰め込み過ぎて、到頭（とうとう）初の二万字超えしちゃったで御座るｏｒｚ

それと今回、修羅戦はオマケになってないですｗ……最後の修羅戦だからかｏｒｚ

そして、ヘイムレンにすら見せ場がｏｒｚ……しょうがないよね（、・ω・、）

修羅に興味無い人は其処だけすっ飛ばして御覧下さい。ちゃんと、話は繋がりますので。

では、前話と併せて、今話も拙作を御覧下さい。

第貳拾捌話【永劫の救世主（メシア）～絶望という名の運命（さだめ）～】

ｓｉｄｅ：アイスベルク監獄　獄主の間

カイトのデストラクション・エンドによって、『独立（オンリー・ワン）した新世界』諸共数多の世界が破壊され、

元居た場所……アイスベルク監獄の獄主の間に戻って来た一行＋修羅。

唯一人、立ち続けていたカイトに倣（なら）う様に、地面に這い蹲（つくば）っていた皆も、

徐に自然に起き上がり始めた。

「クッ……ここは……元の世界に、戻って来た……のか。」

「……どうやら、そのようです。……しかし……。」

「ああ。……何だったんだ……あのバカげたモノは……。」

「ううぅ……ま、まだ……震えが、収まりません……。」

「……ふ、ふふっ……。あれ程のチカラを使ったのだ……貴様

も相当消耗しているだろう？
……愚かな。只、怒りに任せて己が力を徒に使うとはな……。」

「……フン。精々五百穣分ある命のストックの内の、一千？程度。
高々五千分の一程度の端数を失った所で、痛くも痒くも無い。」

誰もがそのカイトの言葉に絶句した。パッと聞いただけで解らない程の膨大な命の数。

その意味を理解し、尚且つ簡潔に言うと……あの攻撃をカイトは、後五千回使えると言う事だ。

ハーケン達は……そう勘違いした。……そう、それは勘違いだ。
正確には……後、『１０の５，０００乗』回、使えるのだから。

「で？　高々この程度で、『あれだけのチカラ』？　『相当消耗』？
貴様等……その程度の寡力で、この俺と闘り合うつもりだったと……？

本気でナメてんのか……テメェラ……！！！」

「うぐっ……！？！？」「うお……おおっ……！！？」

カイトは、ギリギリ二人が意識を失わない程度で、闘気と殺気をぶつけていた。

どうやら、先程の『八つ当たり』で若干とは言え、怒気も収まった様だ。……飽く迄も若干だが。

しかし、当然の如く未だカイトの怒りは収まりが付かないらしく、二人に一歩ずつ近寄っていく。

思わずじりじりと無意識に後退してしまう二人に、益々苛々が募っていく様子のカイト。

そんな文字通り一触即発の彼と修羅達の前に、あの幼女が現れた。

「何さ……情けない。一々この程度でビビっちゃってさ。」

「……又、貴様か。性懲りもなく来たのか。」

「フン……！　この前はちょっといきなりで驚いただけよ！

今度は一切の、油断も！　慢心も！　妥協もしない！

今度こそ……今度こそ……！！　アンタを殺し尽くしてやるわっ！！！

世界の破滅者（ワールド・ディザスター）ァァァーーーーーッッ！！！！！！」

「……五百穣ある、この俺の命をか？　……寝言は寝てから言え、クソガキが。

今の俺は、貴様の様な雑魚と遊んでやる気は毛頭無い。疾（と）く去（い）ね。」

「何？　アンタ到頭、歳くって耄碌しちゃったの？　頭だけじゃなくて耳まで可笑しくなった？

アッッハッハッハッハ……！！！

……言ったでしょ？

今度こそ、あたいが、アンタを、殺すのよ。」

「……そうか。俺は忠告したぞ。文句は後で受け付けん。

だが、此処では……今の俺の攻撃では一撃ももたんな。

――――ならば、用意しよう。招待しよう。

――――誘おう。真に相応しき舞台へと。」

此の場に、朗々とカイトの詠唱が響き渡った。

我が身は世界
を成す。
《I am the
bone of my world.》
力は破壊のみ、
心は破滅故。
《Destruction is
my body, and disaster is my b
lood.》

数多の世界を救いて尚。

《I had saved over the infinity worlds.》

只一度も受け容れられず。只一度も認められない。

《Hate out of world. Nor accept to existence.》

創世と消滅を繰り返し、我等は我等の途を征く。

《Over and over disappeared to create new worlds. going to our's arrival.》

我が生涯は混沌に彩られ。唯、艱難辛苦在るのみ。

《I have chaos. This is the only calamity.》

故に我が尽きぬ望みは、世界の極みにより創られる。

《So my eternal wish, Ultimate World Works.》

そして、世界は一変した。

ｓｉｄｅ：固有結界『究極の創世（アルティメット・ワールド・ワークス）』

光が、闇が、皆を包み込み……。

目を開けた一行を出迎えた光景は、正しく自然そのものだった。

草木が囁いていた。川が潺（せせら）いでいた。風が戦（そよ）いでいた。花が歌い踊っていた。

そして……綺麗な夜空に、数多（あまた）の星々が何時迄も瞬（またた）いていた。

唯一つ……その世界には動物が一体もいない事が何よりの違和感で……。

だけど今は、その有り得ない違和感が何より有り難かった。

「なるほどね……。これが、アンタの本当の世界ってなワケ……。」

「そうだ。……さて。俺の忠告を無視した罰だ。――――八つ当たりの的になって貰うぞ。」

「ハン！　そんなマネをさせると思って？　……今度こそ、殺し尽くしてやるわ……。

この……ブラウセス様から頂いた……『真の夜天の魔導書』でねぇっ！！！」

「……そうか。それは坊やから渡されたものか。……いいだろう。

坊や風情が渡したという、その『真の夜天の魔導書』とやらの力……俺に見せてみるがいい。」

「……舐めるなよ。アンタ風情が……！

ブラウセス様をナメんなァァァーーーーッッ！！！！！」

「――――来い。ネオ・ノルニル　第八席　アリエル＝シュレスト。

」

本気のカイトと、本気のアリエル。

双方の本気がぶつかる前から、吐き出している殺気と闘気で、

既に二人の周りの世界が歪みに歪み始めていた。

一方……こちらも。

「……さて。向こうは向こうで始まるようだし……僕たちも闘るとしようかねえ。」

「……ああ。最早、何も言うまい……ヘイムレン・シルバート。

そして……ゲルダ・ミロワールよ……！」

「フン……その通り。お喋りはもう終わりだ、剛錬のアレディよ。

我々の遺恨……ここで終わらせるとしよう。

お前さえ倒せば……後は影業のシンディのみだ……！」

「……いいや。我が師、シンディ・バードの元へ、お前達は辿り着けない。

私がいるからだ……！　――――剛錬のアレディ、参る――――――！！」

修羅同志の最終決戦の幕が開けた。

第貳拾捌話【永劫の救世主（メシア）～絶望という名の運命（さだめ）～】

ｓｉｄｅ：ゲルダ・ミロワール＆ヘイムレン・シルバート戦？

「では、早速僕からいかせて貰おうかねえ！　窮鼠轟襲脚（きゅうそごうしゅうきゃく）！！　鼠の行進さ！」

「なっ！？　チッ…！　一体どっから、こんな大量な……！？」

「月燐舞（がちりん）って！」「邪鬼銃王（ジャキガンオー）！　撃ち捲りぞな！」

「ヴァイス、薙ぎ払え！　アルト、レイヤード・クレイモヤ！！」

「ナイスだ、アシェン。ファントム、ぶちかましてやれ！」「おヒゲロボットも頑張るですの。」

「フェイク、纏めて撃ち貫きなさい！」「アルクオン！　蹴散らせ！！」

「「「「「「……！！！」」」」」」

ヘイムレンが自身の笛を鳴らすと、何処からともなく大量の鼠の獣（じゅ）羅（うら）が襲い掛かって来た。

その数……百？　二百？　三百？　……とにかく、ぱっと見では判別出来無い程だった。

神夜（かぐや）と錫華（すずか）が真っ先に動き、それにアシェンが続いてナハトとアーベントを仕向け、

それに併せて、全ロボット達で襲い掛かって来た鼠達を迎撃させていた。

「ちっ……しかし、この量じゃ、迂闊に攻撃にも移れないぜ……。」

「ああ……何とかして、せめて奴らへの道でも作れば……。」

「ならば、我が往こう。爆炎にて押し通る……！　ＤＸＭＡＸＡＸＥ（デラックスマックスアックス）！！　うおおおおっっ！！！」

倒しても倒しても限（きり）が無さそうな鼠達に少々辟易して来た一行は、

エイゼルのリアクティブ・アーマーの爆発によって開かれた僅かな隙を縫って、

修羅達に何人かで向かっていった。残りの複数人は、未だ鼠達の処理に困っている様だ。

「フン！　その程度の寡数で我らと戦おうというのか……愚かな。」

「てやんでえ！　やりもしねえで、そんなこと分かるもんかよ！」

「その意気やよし。だが……甘い！　我が覇気からは逃れられん！　ハァァッ！！」

「チッ……！　ドラゴン！　灼き尽くせ！！」「吹き飛べ！　カオティック・シューター！！」

特攻を仕掛けて来たロア達に、容赦なく自身の覇気を纏わせた吹雪を浴びせるゲルダ。

何とか、ロアとマークがそれをギリギリ押し留めている所に、

ヘンネが一人ワープで飛び出し、ゲルダに奇襲を仕掛けた……

が。

「後ろががら空きだよ！　セィヤァッ！　……な！？」

「……愚か者めが。我ら修羅が背後への備えを怠っているとでも思ったか？　血風冷爪斬（けっぷうれいそうざん）！」

「そういう事さ。魔斑猛旋脚（まはんもうせんきゃく）ッ！！」

「！？　うあああっ！！！」

「……！！」「ヘンネ！」「ヘンネちゃん！？」

ゲルダが何時の間にか張っていた背後の氷壁に阻まれ、ビームセイバーは届かなかった。

驚き、セイバーを抜こうとするも、ガッチリ嵌っている様で、どんなに押しても引いても一向に動く気配すら見えない。

その隙を狙った二人の攻撃を真面(まとも)に受け、ヘンネはみんなの方へと吹き飛ばされた。

「う……あ……くっ……し、しまっ……。」「ヘンネ！　ヘンネ！！」

「ちっ……埒が明かん！　一気に片付けるぞ！　小牟！　沙夜！」
「分かっておる！　沙夜！　主も手伝わんかい！！」
「あん、人使いの荒いこ・と。」

「……中央は……ここだぁッ！！！」
「セイヤッ！　チェリャッ！　えいっ！」「はぁいっ♪　そこっ！　おしまいっ♪」

「これぞ……必滅の理也。」「あん、巴の型……ってね♪」

森羅&逢魔の銃の型・巴により、残っていた鼠の獣羅は全て倒された様だ。

どうやら、陸続と続いていた大量の鼠の援軍も見えない。

もう打ち止めの様だと当たりを付けた皆は、一斉に修羅の二人に襲い掛かった。

……だが。

「ハァァッッ!!　高まれ……覇気よっ!!!!　轟嵐冷爪斬(ごうらんれいそうざん)!!!!」

「!?　しまった!!　覇気よっ!」「コフィン!　守って!」

「…ファントム!?」「……アルトッ!」「キャァッ!!」「しまっ……!」

「危ない!?　アルフィミィちゃんっ!」「え!?　あ、アクセル!?」

「ぬぅぅぅんっ!!!!　カッツェ、キュオン!　我の後ろにいるのだ!」「「エイゼル!?」」

それを予期していたゲルダが、

予め高めていた覇気による轟嵐冷爪斬で、先に皆への先制攻撃をした。

その思わぬ威力に、思わず全員で防御ｏｒ回避行動に入らざるを得なかった。

「くぅっ……みんな無事かッ！？」

「クソッ……！　ファントムが盾になってくれた御陰で、俺は無事だったが……。」

「館長。アルトアイゼンも、どうやら戦えそうになさそうでやんすのことです。」

「ワタクシの爆弾達も、どうやら完全にオシャカになってしまったようですわね……。」

「くっ……あたしのバブル・カノンも、どうやらダメみたいさね。……参ったね、こりゃ。」

何とか無事だった者達で、他の皆の状態を確認するが……。

「あ、アクセルッ！　アクセルが……！」

「ぐっ……あ、アルフィミィちゃん、無事かい？」

「わ、私は大丈夫ですの……。でも、アクセルが……！」

「な、なら……良かった、ぜ……くっ……。」

「アクセルッ！！　……私が治しますの……何としてでも……！！」

「エイゼルッ！！　また、無茶を……！」「エイゼルっ！　大丈夫？　ねえ、大丈夫なの！？」

「むぅ……我は問題無い……だが、ヘンネを置いて戦う訳にもいかぬ……！」

「キュオンも無事だったけど、ブロンテ・クラフトが凍っちゃって戦えないよ～……。」

「……それなら、二人共ヘンネちゃんをお願いネ。アタシは……ちょっとお礼参りさせて貰おうかしら、ネ……。」

盾になった者、直撃を受けた者、得物が凍り付いてしまった者達の内、

何人かが、戦闘不能に陥ってしまった様だ。

戦力の落ちた厳しい中で、どうやら第二ラウンドを始めなければならない様である。

改めて、態勢を立て直すアレディ達。そして、それを眺め、今か今かと待ち侘びている修羅達。

どうやら、第二ラウンドの鐘は今直ぐにでも響き渡りそうであった。

一方。肝心のカイトとアリエルの方は、と言うと……。

side：アリエル戦？

「フォーム・アップ！　モード・『真の夜天の魔導書』！！！」

「……ん？　バリアジャケットはどうした？　以前は着ていた筈だったが？」

「……この『真の夜天の魔導書』の本当の力を使う場合は、バリアジャケットは出ないのよ。

何せこれは、攻撃に特化された……あたいだけの特別なものなんだからね！！

その証拠が……只の『夜天の魔導書』じゃ無い証拠が、この黒い魔力光よ！！」

「……成る程な。確かにそれは、はやての使っていた『夜天の書』ではないな。」

「フン……そういうことよ。珍しく物分かりがいいじゃない。

さあ……！　今度こそ……！　殺し尽くしてやる！！！！！」

「……その台詞は聞き飽きた。御託はいい、さっさと掛かって来い……薄鈍（ウスノロ）。」

カイトの挑発に乗り、行き成り猛攻を仕掛けて来るアリエル。

……だが。

「消え失せなッ！！　デアボリック・エミッション！！！」

「……それで？」

「な！？　……くっ！　なら、これならどう！？　響け終焉の笛！ラグナロク！！！」

「……それから？」

アリエルの証明した通り、黒い魔力光を常に発光させている『真の夜天の魔導書』。

それから打ち出された攻撃は何れも、はやてのそれよりも遙かに強大な威力だった。

だが、その何れもカイトには全く、何のダメージも与える事は出来無かった。

当たる前に弾かれている訳では無い。全て直撃を喰らってから何事も無かったかの様に、

煩わしそうに振り払うだけで、消し飛ばしているのだ。

流石に、息巻いていたアリエルもこればかりには耐え切なかった様で、又もや癇癪を起こした。

「なん……でよ……！　なんでよなんでよなんでよ！！！　なんでなのよっ！！！！！

あたいは……！　今度こそ、本気でアンタを殺しているっていうのに……ッッ！！！

何で、アンタはまだ一回も死んでないのよオオオオッッッッッ！！！！！！！！！！」

「何でも何も無いだろう。貴様の攻撃では俺を殺すには至らない。……唯、それだけの話だ。」

「そんなワケ……！　そんなワケ無いじゃないっ！　なら、アンタがこの前死んだのは一体何だったって言うのよ！！！」

「答えは一つだ。俺が本気では無かったと言うだけの話だ。」

「そんな事は関係無い！　あたいの能力は、それが魔力ならどんな威力だろうと、どんな技だろうと関係無く全部無効化出来るのよッ！！

なのに……何で……！　何で、あんたにだけは……効かないのよッッッ！？！？！？」

一々金切り声を上げるアリエルに辟易しているのか、眉を顰めながら、

しょうがないといった風情で、答えを告げるカイト。

「貴様と俺では、格位が違う。背負っている覚悟が違う。受け取った想いが違う。

生きて来た時間が違う。強さが違う。存在そのものが……何もかも違う。只それだけだ。」

「……は、ハッ！　何を言うかと思えば、そんな意味も中身もない言葉で、説明できると思って？」

「只の事実だ。他に言い様は一切無い。……それよりも、もういいか？

俺は好い加減、貴様と遊ぶのは飽きてきた。そろそろ、八つ当たりをさせて貰うぞ……！」

そう言い放ち、カイトが攻撃姿勢を取った。

思わず怯み、少し無意識に後退るアリエル。

だが、何かを思い付いたのか、突然不敵に笑い出し、カイトに話し掛けた。

「くっ……！？　ふ、フン！　それにしても、アンタは本当に根っから人殺しが好きなのね。」

「……何が言いたい？」

「あら？　一々言わないと解らないの？　バカなの？　死ねばいいのにねえ……。

あ、それとも、アレ？　態々口にして欲しいの？　言って欲しいの？

アンタトコトン性根が腐り切っている上に下劣なのね。……気持ち悪い。」

「……俺は、何が言いたいと聞いているんだ。答えないのならばどうでもいい。

さっさと殺(あそんで)してやる。」

「くっ……！？　ふ、フン……それなら、一つイイ事教えてあげるわ。

ねえ……私が用意してあげた、アンタの妻と娘を、また殺した気分はどう？」

「――――なん――――だと――――――？」

ｓｉｄｅ：ゲルダ・ミロワール＆ヘイムレン・シルバート戦？

一方、再び修羅戦。どうやら、皆の態勢も直ぐに調え終わり、既に今は対峙の段階にいる。

確認出来た戦闘不能者は、８人＆２体の計１０メンバー。

背中に大怪我を負ったアクセル。それを必死に治しているアルフィミィ。

自身が凍り付いてしまった、ファントムにアルトアイゼン・ナハト。

大怪我を負っているヘンネと、それを守っているエイゼルと、武器が凍り付いたキュオン。

キュオン同様に、武器が凍り付いたドロシーとアン。

それと……。

「鼠♪　鼠♪　おっ宝っ♪　おっ宝っ♪」

「……それと、宝と餌に目が眩んだ琥魔……か。……零児。」

「ああ、分かっている。……後で、三百回尻叩きだ。……この戦闘が終わったらな。」

「おやおや。まだ始まったばかりだと言うのに、もう終わった先の事の考えているのかい？
それはちょっと早計じゃないかねえ？　……余り、僕たちを舐めないで欲しいな。」

「……ヘイムレンよ。ハーケン殿達はお前達を侮っている訳では無い。
それは……お前達の方が分かっている筈だ。」

「……確かにな。巫山戯（ふざけ）た言葉を吐きながらも、その闘志は些かも衰えた様子は見えない。
成る程……以前、妖精の城で相見えた時も感じたが、異界の闘士……中々。」

どうやら、言葉と態度が裏腹な、闘志ギンギンなハーケン達に改めて興味が湧いた様だ。

二人からも、改めて烈気が放たれた。思わず、何人か怯みそうに成る程の、烈（はげ）しい闘気を。

「フン。剛錬のアレディに羅刹機アルクオン。そして、これ程の闘気を放つ異界の闘士達……。
　ヘイムレンよ。これは、中々に楽しめそうだな。」
「はい、ゲルダ様。僕も……昂ぶりが抑えられそうにありません……！」

「行くぞ……！　凍鏡のゲルダ……！　操音のヘイムレン……！
　影業のシンディが弟子……剛錬のアレディ！　いざ、参る！！」

二人の修羅の闘志に当てられたのか、アレディが先陣を切り、その後に皆が次々と続いて来た。

「機神乱獣撃！！」「フン！　その程度、斬り裂いてくれる！！」
「これならどう！？　ジェラス・クイーン！！」
「甘いねえ！　こういう使い方もあるのさ！　奏でよう！　覇滅（はめつ）の旋律を！！」
「な！？　う、うそっ！？」

アレディの放った覇気の龍をゲルダが自身の爪でバラバラに斬り裂き。

ネージュの放った上空からの林檎爆弾も、ヘイムレンの笛からの音波で粉々にされてしまった。

「ならば、これはどうぞよ？　邪鬼銃・魔波邪（マハージャ）！！　ジャンジャンバリバリ！」

「同時攻撃に移行します。Ｘ（エックス）・ＢＵＳＴＥＲ（バスター）発射。」「わ、私も続きます！　アローです！」

「クロンダイク・モード！　フルドライブだ！」「あ～弁当！　パルメザンランチャーじゃ！」

「バーナウ・ファー・ドラグ！」「カオティック・シューター！　今度こそ喰らええぇッ！！」

「数を頼みの遠くから……か。ヘイムレン！」「はい。畏まりました、ゲルダ様！」

その一斉攻撃には流石に防がずに回避した様だ。

だが、その前にまるで示し合わせた様に二手に分かれ、

各々で各個殲滅していく腹積もりの様だ。

ｓｉｄｅ：ヘイムレン・シルバート戦

「さて……誰から頂こうかねえ。」
「ああら！　蹴り技なら負けなくってよ？　ヘアー・ハンティング！」
「では、まず貴方から倒させて頂こうか！　魔斑……猛旋脚ッ！！」
「まだまだよっ！　ラウンド・エイティ！」
「……フッ、甘いねえ！　死技（しぎ）・魔斑導獄拳（まはんどうごくけん）ッ！！！」
「そんなっ！？　にゃうんっ！！？」
「……まだまだ修練が足り無いよ。さあて、お次は誰かな？
なんなら、纏めて掛かって来るかい？　それでも、僕は構わないけどねえ。」

あっさり、オルケストル・アーミーのカッツェを蹴り競って、倒してしまったヘイムレン。

今迄何度も戦っては来たが、その言動とは裏腹に矢張り強い。

カッツェの安否を気に掛けつつも、更に気を引き締め、事に当たるハーケン達。

「余裕だな。だが……ありがたく、その言質（げんち）を頂こうか……！」
「了解。熱暴走リッパ～！　いっけぇ～！」「……む！」
「逃しません！　月燐（がちりん）舞って！　火鼠！　蓬莱の大枝！！」「おっと……！」
「白騎士よ、舞うがよい！」「闇騎士よ！　打ち貫いて！」「「…

……！！」」

ひょいひょいとこちらの攻撃を次々と躱(かわ)していくヘイムレン。

だが、流石に幾人もの同時攻撃を躱し続けるのは無理があった様だ。

段々、動きが鈍くなり徐々に攻撃が掠(かす)る様になって来た。

「くっ……！」「そこだ！　鉄球を喰らえっ！　唸れ、白狼！　吠えろ、天竜！！」

「ぐっ……！？」「今ぞよ！　邪鬼銃・美糸(ビイト)！！」「しまっ！？

……ぐあっ！」

「そこだっ！　グラス・ヒールＭＡＸ！！　ボルトッ！！！」「ぐうっ……！！」

「続きます！　燕の介！」「ぐはっ！？」

「楠舞霊術秘奥義(なんぶれいじゅつひおうぎ)……華美酒(はなみざけ)！！！」「かっ……はっ……！！！」

「貰ったぜ……！　フル・ハウス！　セブン・スタッド！！　ジャック・ポット！！

こいつでトドメだ！　……クアッド・ソリティア！！！」

「ぐ……ぐあああっ……！！！！」

一撃加えた後の流れる様なコンビネーションに、さしものヘイムレンも大ダメージを受けていた。

だが、残念ながら完全にトドメを刺す迄には至らなかった様で、辛うじて踏み止まったヘイムレンであったが……。

「くっ……！　ほ、本当に……君達は、甘い……ねえ……。僕に、最後の止めを刺さない……とは、ねえ……。」

「……いいや。パーフェクトなチェックメイトだ。俺達の役目はここまでさ。」

「……何？　……！？　し、しまっ……！！！」

ヘイムレンが驚いた事とは果たして。

その真相は……ゲルダとの戦闘をみてみれば分かるだろう。

ｓｉｄｅ：ゲルダ・ミロワール戦

「さて……では、掛かって来るといい、異界の闘士達。そして……アレディ・ナアシュよ！！」

「言われるまでも無い！　機神剛鉄甲（きしんごうてっこう）！！」「甘いッ！　凍鏡絢爛（とうきょうけんらん）陣（じん）！！」「ぐあっ！？」

「その隙、貰ったァッ！　フレイム・ブリット！！」「フェイク！　付いて来なさい！　ツイン・レーザーよ！！」「……！！」「フン！　その程度で私の氷壁が破られるとでも思ったか！」

その宣言通り、アレディを弾き飛ばしたゲルダの前後に張られた氷壁が、

彼女への攻撃を全て防ぎ切っている。

先ずはアレをどうにかしなければ、と直接叩き壊すつもりで何人かが特攻を仕掛けた。

「銃如きで私の氷壁が……！」

「？っ！（くろっち）」「銀（シルバー）！　白金（プラチナ）！」「金（ゴールド）！　柊樹（ハリウッド）！」

「それなら、これはどう？　焔（ほむら）！」「火燐（かりん）！」「至近距離での龍虎（りゅうこ）乱砲（らんぽう）じゃ！」

「まだまだ！　私も！　レッドホット・パンプス！！　フェイク！　溜まった力であの壁をドぶち破りなさい！　リファインド・スウェイヤー！！」
「……！！」

一点集中で前の壁を、フェイクライドの一撃で後ろの壁をそれぞれ破ろうとする零児達。

だが、流石に危ないと思ったゲルダが、到頭（とうとう）反撃に出た。

「！？　くっ……！　厄介な……！　ならば……纏めて、煉獄へ送ってやろう……！！　我が覇気よ……高まれ……！！　凍鏡絢爛陣（とうきょうけんらんじん）！　踊り狂え！！」
「！？　いけない！」「しまっ……！」「おわっ！」「……あんっ！」

「まだよ！　纏めて喰らいなさい！！　ハァァァァッッッ！！！　轟嵐……冷爪斬ッッ！！」

「！？　これはマズイ！！」

そのアレディの台詞は、正しく正しかった。

零児やネージュ達を吹き飛ばしたゲルダは、更に高めた覇気による吹雪を作り出し、

アレディィ達諸共、零児達に攻撃して来た。

まさかと思った小牟達は、その直撃を受け、また何人か戦闘不能な状態に陥った様だ。

「ぐっ……み、皆さん……無事ですか……？」

「……フン、他愛の無い。所詮はその程度か、アレディ・ナアシュ。

貴様でこの程度では、影業のシンディの実力も高が知れているな。」

「……言った筈だ、ゲルダよ。……私の事は何と言おうと構わない。

だが、我が師への愚弄だけは、許さないと……！」

「フン！　ならば、どうするというのだ？　その満身創痍の身体で。」

「……ハァァァァ……コォォォォ……！！！！！

高まれ……我が、覇気よッッッ！！！」

「ほう！　……まだ、それ程の力を底に秘めていたか！　面白い……！！　……む？

……成る程。やはり、貴様等は完全に撃滅しなければ、決して終わらぬと言う事か。」

何とか立ち上がったアレディの覇気に呼応したのか、何人か徐々に立ち上がり始めた。

「いいだろう。我が覇気を高められる、これ程の激闘は私自身が何より望むものだ。」

「そうそう上手くはいかんッ！　覇皇轟雷脚（はおうごうらいきゃく）！！」

「ぐっ……！　やるではないか……！　ならば、受けてみよ……！　我が最大の奥義を！！

誘おう……真なる煉獄へと！　奥義・凍鏡微塵散華（みじんさんげ）！！！　滅せよ！！」

「何っ！？　ぐ……ぐあああああっっ！！！！！！」

アレディが又先制して攻撃に移るも、矢張り氷壁に阻まれて深いダメージは与えられなかった。

だが、少しは通った様子で、少々ながらダメージのあった腹部を押さえていた。

しかし、その反撃で遠くまで吹き飛ばされ、大きなダメージを負ったアレディ。

駆け寄りたくとも、その力も出ないネージュを見て、鼻で笑うゲルダに思わず激昂した一行。

「……舐めるなよ……私達を……舐めるなッッ！！　ＬＢＬ（エル・ブレード）ＡＤＥッ！！」

「その意気やよし！　だが、それでは私には届かぬぞ！」

「フン……！　貴様も相当な節穴の様だな！」「何！？」

「今です！　ウインド・ミキサー！！」「！？　下から……！　しまった……！」

「Ｔ－ｅｌｏｓ……！」「分かっている……騒ぐな、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「「相転移砲、展開……！」」

「Ｄ（ドゥルケ）……」「Ｕ（ウルティムム）……」

「「ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ（テネリタース）！！」」

「バカな……！　うあああっっ……！！」

M．O．M．O．の竜巻によって打ち上げられたゲルダの真下で、ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓが、二人の相転移砲を同威力でぶつけあって、巨大な爆発を起こした。

それに巻き込まれ、ゲルダの双氷壁は粉々に砕け散った。

当然、その隙を逃さず、戦闘可能な皆で速攻で追撃に移った。

「！　今だッ！　火燐・弐の型ッ！！　灼き尽くせぇっ！！！」
「追撃します！　連舞迅雷刀八本！！　せぇいっ！」
「フェイク……！　アルクオン……！　追撃して……！！」「「……！！」」
「あうっ……！　うあっ……！　しまっ……！！」

一気呵成に攻め入る皆の後ろから、烈火の如き勢いで更に攻め入る影が現れた。

……剛錬のアレディこと、アレディ・ナアシュである。

「これで終わらせる……！　覇皇両断刀！！」「うあっ……！」

「まだまだ！　覇皇剛衝殻！！」「ぐふっ……！」
「アルクオン！　羅刹断撃拳！！」「……！」「かはっ……！」
「はああっ！　覇皇空円脚！！」「ぐうっ……！」
「これで終わりだァッ！！　轟覇……機神拳ンッッ！！！」

散々に打ち据えられ、空高く打ち上げられたゲルダ。

その落下に合わせて、アレディがアルクオン共々最後の覇気を高めていた。

「ハァァァッッ……！！！　我が機神拳と覇皇拳は……至高にして究極……！！！！

ぬぅんっ！！　アルクオン……！！」「……！！！」

「ああっ！　あうっ……！　っはぁっ……！！」

「高まれ……我が覇気よ……！　魔を討ち……滅する拳……！！！

覇皇――――魔滅拳ンンンッッ！！！！！」

「し、しまっ……！！！　……そんな……この、僕がァァァッッ！！！！！」

「アアアアアアアッッッ！！！！！　我が……覇気が……果てた……か……。」

「我が覇気に――――――討ち果たせぬもの無し。」

こうしてアレディは遂に、修羅達との宿命に決着を付ける事が出来たのであった。

ｓｉｄｅ：三人称

アレディとアルクオンの覇皇魔滅拳によって、ヘイムレン諸共にゲルダを打ち破った一行。

今は気絶している二人を前にして、負傷者を含め全員で何とか休んでいる最中である。

「アレディ……本当にお疲れ様。」

「ネージュ姫殿。ありがとうございます。……ネージュ姫殿は、大丈夫なのですか？」

「ええ、勿論よ。ちょっと戦闘はしんどいけど、こうしている分には、問題はないわ。」

「そうですか……良かった。皆さんも、御無事ですか？」

「ああ。アクセルの怪我がちょっと酷いが、取り敢えず皆、命に別状はないみたいだな。」

「……そうですか。それは、何よりです。」

そんな風に、大怪我はしたが、何はともあれ皆、無事で良かった。

そう御互いの、取り敢えずの無事を確認し合っていた時だった。

「テメェガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

――――彼の、あの天をも戦慄かせる叫びが聞こえたのは。

side：アリエル戦？

少し……アレディ達が戦い終えた時から遡る。

丁度、カイトがアリエルの言葉を聞いて、言葉に詰まっていた頃だ。

そのカイトの驚愕の表情を見て、更に北叟笑み、カイトに言葉を投げ付けるアリエル。

「あら……何だ、やっぱり気付いてなかったんだ♪

フフッ……そうよ♪　アレはあたいがやったのよ♪　ねえ、どうだった？

何度も、自分の奥さんと娘を殺した感想は？　ねえねえ、どうだったの？♪」

「……そうか……貴様が……貴様があれを……。」

「ん？　……フッフッフ……そうよっ！　あたいがやったの！　ってそう言ってるでしょっ！

って、アンタ聞いてるの……！？」

「そうか……貴様が……テメェが……！　はやてと風音に俺を殺させ……！！

俺にまた……！　はやてと風音を殺させたのか……！！！

テメェが…………！！　テメェがァァ…………！！！！！

テメェガアアァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

「ヒィッ！？」

そして――――カイトの蹂躙が始まった。

そう。其処から先は、決して戦いなどでは無かった。

文字通り……言葉通りの、蹂躙そのものだったのだ。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァ！！！！！！！！

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォ！！！！！！！！！」

殴った。蹴った。斬った。引き裂いた。撃ち貫いた。消し飛ばした。

…………。

一撃一撃ごとに、アリエルを殺し。その度に再生させ。また殺し。

また再生させ…………。

そして、一撃一撃与える度に、カイトもまたその命を使っていた。

――――そう、そうなのだ。

カイトは、その一撃一撃に己が命を失う事によって得たチカラを全て注ぎ込み、攻撃していた。

その様は、誰もが思い描いた――――理性を失った、只のケモノ…猛獣だ、と。

それが果たして如何程続いただろうか。

百回？　千回？　一万回？　一億回？　……全く分からないが、或る時ピタッと止んだ。

そして、身体には傷一つ付いていないにも拘わらずグダッとして、
身動き一つとれない彼女の襟を片手で掴み、空中でぶら下げている
カイトの姿があった。

「……ぁ……ぁ……ぅ……ぅ……ぁ
……。」

「……貴様を消す前に、これは返して貰おう。」

「……ぁ……！　か…し……そ…れ……ブラ……セ……様
……ぁ……い…の……。」

息も絶え絶えであったが、流石に敬愛するシュガルから貰った『真
の夜天の魔導書』を奪われ、
何とか反抗しようと身体を動かそうと頑張ってはいるみたいだが、
上手く動かない様だ。
それを眺めていたカイトは、奪った理由を微塵も話さずにアリエル
を遠くへ投げ捨てた。

「これで、最期だ。――――失せろ。」

「……ぁ。」

そのアリエルがまだ宙空にいる間に、

カイトは身動きの出来ない彼女に向けて、極太のレーザービーム砲の様なものを撃ち放った。

だが、それは……。

「ハアアァッ！！！」「セィィヤァッ！！！」

「……ぁ……ねえ……さま……。」

「……。」

二人の女性によって、断ち切られ、殴り飛ばされ、あらぬ方向へと柾(ま)げられ爆発した。

ｓｉｄｅ：三人称

その間にアリエルを優しく抱き留めた二人は、彼女を庇いながらカイトと対峙した。

……今の、完全にブチキレているカイトを前に、流石に尻込みはしていたが。

「……誰だ、貴様等は。……貴様等も、俺の邪魔をするか？」

「……生憎と。可愛い妹を見殺しにする程、人で無しには育っておりませんので、悪しからず。」

「……そういうこと。アンタとは違うんだよ……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。」

「……そうか、貴様等もネオ・ノルニルとやらか。坊やも随分と舐めた真似をしてくれる。」

「いいえ、この件にブラウセス様は一切関わってはおりませんわ。」

「そうだよ！　これは、アタシ達が勝手にやってる事だ！　ブラウセス様は関係無い！！」

「……そんな事はどうでもいい。今、大事な事は……貴様達も俺の敵だという事のみだ。」

カイトが身構えた。只それだけで、押し潰されそうな程に身を縮込ませる二人。

だが、端からカイトとは戦り合うつもりだったらしく、自身に気合いを入れると、

カイトに向かって身構えた。そして、カイトの怒気が膨れ上がった。

……あわや一触即発の時、それよりも……、と一つ前置きしてカイトに話し掛けた。

「……アンタと戦り合うのは構わないよ。こっちも、端からそのつもりで来てるんだし。

……でもさあ、その前にアンタが持ってるソレ……返してくれないか？」

「……そうですわ。それは、アリエルがブラウセス様から直接貰った大事な物。

罷り間違っても貴方の物では有り得なくってよ？」

「それとも何？　アンタ、他人の物も自分の物とでも言うつもり？」

「……貴様等こそ、一体何を勘違いしている？

抑もこれは『夜天の魔導書』などではない。」

「そんな事知ってるよ。『夜天の魔導書』よりも強力な『真の夜天の魔導書』って奴なんだろ？」

その言葉を聞いたカイトは、唐突に北叟笑んだ。否……嘲笑ったのだ。

矢張り……貴様達は何も知らないのだな……と、そういう笑みで。

困惑する以上に、その余りの不気味さに顔を顰める二人に、カイトが教えた。

――――その『真の姿』と共に――――。

「『真の夜天の魔導書』？　いいや、違う。抑(そもそ)も、これはそんな名称では無い。」

「は？　さっきから一体、何が言いたいんだよ、アンタ……！？」

「……な？　……『真の夜天の魔導書』に罅(ひび)が……！？」

そう。彼女達が驚くのも無理は無い。

何故なら、唐突に『真の夜天の魔導書』の表面に罅が入り出したのだ。

その、謎の現象に驚く二人を余所に、カイトは平然と……当然の如く話し続けた。

「こいつはな……俺が、風音の為に、娘の為だけに創り上げた……。」

罅が全体に行き渡り、力が溢れ出し始めた。……今迄とは比べものにならない程の巨大な力を。

「此の世で唯一の、インテリジェントデバイス……その名も……。」

至る所に出来た罅から、碧色の魔力光が無数に漏れ出し……そして……。

「『碧天（へきてん）の魔導書』だ。」

その美しい迄に、碧色（エメラルドグリーン）に光り輝く、その真の姿を顕した。

《――――お――――――おお……！　おおお……！！　マイ……スター……！！

マイスター……！　マイスター……マイスター……！！　マイスタァァーー！！！！！！》

「……久しいな、碧天。……済まない、お前を見付けるのが遅れてしまった。」

《何の……何の……！　こうして、私はマイスターの御側にいる……！

例え、如何程年月が掛かろうとも、如何程苦境の日々であったとしても、

こうして、今……現在（いま）……！　貴方と共にいられる……！

これ以上の幸福がありましょうか……！！！》

「……済まない、碧天。俺は……あいつらを……はやてと風音を救う事は出来無かった。

……済まない……碧天。」

《何を……何を仰います……マイスター！　マザーも、マスターも、救われたのです！

他ならぬ貴方に最期を看取って貰って……貴方の手に掛かる事で、救われたのです！

ですからどうか……その様な事は仰らないで下さい……マイスター……！

私は……私達は、貴方を最初から責めた事など一度として無い……！

最初から……全てを理解し、何もかもを許しているのですから……！！》

その『碧天の魔導書』の言葉を聞いたカイトは――――静かに涙し、カレに感謝した。

「――――ありがとう。――――有難う、碧天。

ぁぁ――――俺は……きっと、その言葉を聞きたかったんだ……。

誰かに……お前達に許して貰える事を……その言葉を……だから……有難う。」

《マイスター……御労(おいたわ)しや……。もう、貴方は自身を御責めにならないで下さい。

これからは、私も常に御側におります……。共に、永劫、貴方の御側に……。》

「……ああ、共にいよう。永劫のこの運命。二度と離れる事無く。なあ、碧天。」

《Ｙｅｓ，Ｍｅｉｓｔｅｒ．Ｗｅ ａｒｅ ａｌｗａｙｓ ｗｉｔｈ ｙｏｕ ｆｏｒｅｖｅｒ．》

そんな、予想だにしなかった光景に、驚愕……否、唖然とするしかない三人姉妹だったが、

そんな事などお構いもせずに、カイトと碧天は、更なる行動に移した。

「……さあ、碧天。久し振りに、やってみるか？」

《その御言葉……御待ちしていましたよ、マイスター！》

「フッ……成長した俺の力に気後れするなよ？　碧天。」

《何の！　マイスターこそ、既に耄碌して私の使い方、御忘れではありますまいな？》

「相変わらず良く言う……。さあ、往こうか……『碧天の魔導書』よ！！！」

《Ｙｅｓ，Ｍｅｉｓｔｅｒ．》

「《Ｓｅｔ　Ｕｐ！！！》」

碧光に包まれたカイト。その光が霽れた後に顕れたのは、風音の甲冑を身に纏ったカイトの姿。

だが、その仕様は男性用になっており、その溢れ出るチカラは更に

強大になっていた。

そのカイトは、剣となり左手に携えられた碧天を自身の顔の前に構えた。

……それは、見る人が見たら誰もが一様にこう思うだろう。

――――まるで、シグナムみたいだ、と。

「神力、霊力、妖力、オーラ力（ちから）、ザ・パワー、無限力（むげんちから）、螺旋力……最大出力。」

《全パワー最大出力……確認。全パワー注入……確認。全パワー放出……確認。》

碧剣から、渦を巻きながら様々な力が噴き出し、湧き上がり、溢れ返っていた。

「渦巻け」《逆巻け》

「吹き荒れろ」《吹き荒べ(すさ)》

「碧(へき)……」《嵐(らん)……》

「《一閃！！！！！》」

無造作に振り払われた剣の先から撃ち放たれた衝撃は、

カイトの前方全てを、悉く薙ぎ払い尽くし、その前方に広がった光景は、

文字通りの、只の荒野……そのものだった。……尤も、その数

瞬後、すぐに元に戻ったが。

だが、何より一番驚いたのは、その攻撃から辛うじて逃げられた三姉妹だった。

……これは……何と言う事だ……と。

只、それだけの想いが三人の胸中を占めていた。

しかし、だからといって、おめおめと逃げ帰る訳にはいかない。

何より……最も不可思議な疑問が、出来てしまった。……恐ろしい予想と共に。

「くっ……！　何だ……一体、なんなんだよ、今のはッ！？」

「今のは……明らかに魔力じゃ無かった……。」

「……どういうことですの？　貴方……一体……どういうことなんですのッ！！！！」

「……フン、まぁいい。今は碧天も戻って来た事だし、気分も悪くない。教えてやる。」

そして、カイトの口から語られた……その恐るべき本当の能力。

それは、誰もが恐れずにはいられなかった。

「先ず、今の俺の魔力量は、９１００垓×（１０の５００穣乗）だ。此処迄は理解しているな？

そして、今貴様達が聞いた通り、俺は他にも様々なチカラを有している。」

「神力、霊力、妖力……それ以外にも幾つかありましたわね。」

「そうだ。俺のチカラはな……ソレらを、魔力のソレと全く同数の命とチカラの量を持っている。

そしてソレらは全て、常に最大値になる様に強制的に回復される。

……つまり。神力、霊力その他、あらゆる異世界・平行世界に存在する、全てのチカラ……。

名も無き数多の無数に無窮にある全てのチカラすらも含めて、全く同数量あるんだ。

そして、ソレらが常に完全に同数量になる様に、意図せずとも自動的に調整されるのさ。

だから、例え俺の魔力を、その命を全て削り切ったとしても、次には神力や霊力が残り、

それを即座に全て消し去らない限りは、すぐに魔力もその他のチカラも完全に元通りに戻る。

……これが、俺が【原初】から与えられた、最初にして唯一の能力……。

『全て(オール)を知りし(ノウレッジ)者』――――その真の能力だ。」

何を言っているのか、分からなかった。そういう表現が一番適切で

は無かろうか。

思わず呆然としてた三人は、気が付くと同時に今言われた事を理解したくないと言う様に、

カイトに詰問した。――――そんな事は有り得ない、と。

「……そ、そんな、そんなフザケたチカラが……あるワケ、ないじゃない！？」

「そ、そうだよっ！！　そんなモン、見た事も、聞いた事も無い！！」

「そ、そうですわよ。だ、大体、一人の人間の身体に其処迄の力を蓄えられる筈が……。」

「……では、聞こうか。何故、俺が五行と契約出来たと思う？」

「え？　何故って。それは……。」

「……問い方を変えようか。

何故、神獣とも聖獣とも呼ばれている五行と、魔力しか持たない筈の俺が契約出来たと思う？」

何となく言いたい事は分かる。でも、カイトが一体何を言いたいのか、今一つ分からない。

そんな感想が表情に表れていたのだろうか。それとも、単に予想通りだっただけなのだろうか。

カイトは、特に三人からの返答も聞かずに、答えを自ら語り出した。

「例え、どれ程力が弱かろうとも、神獣は神獣であり、聖獣は聖獣だ。

つまり、契約時に必要なモノは、霊力であり、神力だ。その双方が無ければ契約は不可能だ。

当然、本来の四神の姿になる事も、四霊に成長する事も不可能だ。

つまり、だ……分かり易く言えば、魔力で契約できる神獣など、只の紛い物だ。

抑(そもそ)も、『神』獣や『聖』獣が何故、『魔』力で真に契約出来るなどと思った？

もしそれで契約出来たと言うのならば、それは本物では無い。

似せた形に作った偽物か、四神の力の残滓（ざんし）で作られた人工物以外の何物でもない。」

「で、でも、貴方が契約した五行達は……。」

「ああ、そうだ。俺が与えた魔力を使っている。魔力は最も力の行使には効率が良いからな。

故に俺は、五行との契約に必要な神力・霊力＋成長分（アルファ）に加え、魔力も常に同数量与えている。

つまり、例え五行の使う魔力が全て切れたとしても、契約が切れる等という事は決して無く、

俺が今迄に与えた神力と霊力を使い切らなければ、その契約は永劫続くんだよ。」

「「「……。」」」

「いいか？　何度でも言ってやる。

貴様等の下らん常識とやらを、俺に当て嵌めるな。

そんな下らん理を破壊し破滅させる存在が、この俺だ。……好い加減、理解したか？」

愕然、絶句。そして、絶望。

彼女達の今の感情を、表情を表すのに、これ程相応しい表現は無いだろう。

その事実から逃げたいが為に、目を背けたいが為に、認めたくないが為に……。

彼女達は……決して侵してはならない領域に踏み込んでしまった。

「……そ、それだけのチカラを持っていながら……。

貴方は、自身の妻と娘を殺した……と？」

「……あの頃の俺は、限り無く未熟だった。死者蘇生は使えなかった。只、それだけだ。」

「……は……ハッ！　それで自分の妻と娘は殺して、自分だけは今も生き続けてるって？

それで良く家族の事で怒れるわね？　だったら、何でアンタは今も生きてるのよ？

何で、その時一緒に死ななかったのよ？　それでよく……！？！？」

アリエルは、地雷を踏んだ。そういう表現が一番分かり易いだろう。

カイトの殺気は、今度こそ一切の手加減無しに、三人に降り注いだ。

「――――貴様達に何が分かる。……ああ、そうさ。俺はあの後……二人を殺した後、自殺した。

何度も、何度も、何度も、何度も……。それこそ、気の遠く

なる程、何度もだ……！

そして、ようやっと魔力分の命を削り終わった俺に待っていたのは、

その時に初めて知った、俺の能力……『全て(オール・ノウレッジ)を知りし者』の本当の能力だった。

それからも俺は、決して殺した魔力(いのち)を元に戻さずに、自らを殺し続けた。

神力分の命を削り切った。安堵した瞬間、霊力があった。再度自らを殺し始めた。

霊力分の命を削り切った。安堵した。妖力があった。また、殺し始めた。

妖力分の命を削り切った。安堵した。他の力があった。また、殺し始めた。

……そんな事を延々と繰り返した。その度に、安堵と絶望を交互に味わった。

全ての命を殺し切る頃には、世界はもう後僅かで世界そのものが自然崩壊する直前だった。

そして、俺は、ようやっと、自らの最期の命を殺し終えた。

……あの時の俺の安堵感は、何物にも代え難いものだった。

真に幸福だった……。

――――だが。その直後に俺に待ち受けていたモノは、真の絶望……唯、それだけだった。

全ての命を失った瞬間、俺は全ての命が、全てのチカラが完全に復活していた。

記憶を失った訳じゃない。感覚を失った訳じゃない。感情を忘れた訳じゃない。

自殺した事実を覚えていた。その感覚を覚えていた。その時の感情を覚えていた。

はやてと風音の胸を貫き殺した事を覚えていた。その時の感覚を克明に覚えていた。

あの時の絶望を、僅かたりとも欠ける事無く全て覚えていた。

――――その時、俺は自らの運命を知った。理解した。悟った。
そして……絶望した。

なあ……常に何かを忘れる者共よ。己が妻子を貫いた時の感覚と感情……理解出来るか？

なあ……何れ終わりを迎える者共よ。……永劫と言う名の絶望……どんな味か分かるか？

分からねえよな――――――判る訳がねぇ――――――!!

解るワケがねぇんだよ――――――!!!

テメェラ――――クソガキ共風情に――――――!!!!!

オレの絶望がワカって堪るかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

それは、慟哭（さけび）だった。

それは、嘆き（さけび）だった。

それは、感情（さけび）だった。

それは……魂の泣（さけび）き声だった。

何時の間にか碧天とのセットアップも解除し、地に降り立っていたカイト。

その彼の、空手になり握り締めていた両手からも、強く強く噛み締めていた唇からも……。

そして、その双眸からも血の涙を滂沱と垂れ流しながら、カイトは懇願（さけんで）していた。

「なあ……分かるか？

はやてと風音は……オレの妻と娘は、夫であるオレに、父であるオレに殺されたんだぞ？

その時に、アイツラはどんな顔をしたと思う？　……どんな言葉を遺したと思う？

アイツラは……オレに殺された時、笑顔だったんだぞ……？

オレに……唯一の家族に殺されて、笑顔で……『ありがとう』って……そう言ったんだぞ？

オレが……殺したのに……オレに……殺されたのに……だぞ……？

オレが……オレが……殺したのに……！　『ありがとう』って……！！

オレが……オレに……オレが……オレがァッ……ァ……ァァッ……！！！！！

アアアァァアアアァァアアアァァアアアッッッ……！！！！！！！！！！」

カイトは地面に蹲り、身体も両手も抱え込み……。

恐らく、彼にとっては初めて、他人の前で哭き崩れた。

そんな……誰もが初めて見る姿に、誰も……誰も、声を掛ける者はいなかった。

……否、出来無かった。誰もが、その想いに、絶望に涙していたから……。

そう……彼の家族である、五行でさえも。

それが、如何程続いたのだろうか。

必死に想いを堪え、嗚咽も止まらずに震えていたカイトが、涙もその儘にゆっくり立ち上がり、

三人に対して……だけではなく、あらゆる世界全てに宣言するかの様に、高らかに声を上げた。

「……っ……だから……っ……だからこそ、俺は、全てを殺し破滅させ、救い続ける。

そうする事で救われる存在がある事を知っているからだ……っ…。

綺麗事だけでは生きていけない事を知っているからだ……っ……！

それでも、救える命は絶対に救う……！　救えない命は、殺して救う……！

……全てを覚えているという事は、殺した全ての存在の想いを、恨みを、その呪いを。

その全てを常にこの身に背負い、全てが常にこの身に纏わり着いて居ると言う事だ。

それが、俺の業。救世主にして、世界を破壊し破滅させる者としての業。

だが、俺は決して歩みを止めない。決して救う事をやめない。決して滅ぼす事をやめない。

それは、救世主としての責務じゃない……。世界を滅ぼす者としての使命でも無い……。

それは……俺が俺である証。俺が八神(オレ)カイトとして生き続ける理由。

それが――――オレの覚悟だ――――

N・N（ネオ・ノルニル）よ。俺を滅ぼすと言う事は、俺の背負う物を、俺の覚悟を……その想いの全てを。

完膚無き迄に消し去り滅ぼすと言う事だ。

……俺は、今迄に殺して来た者達の為にも、そう易々と滅ぼされてやる訳にはいかん。

貴様達にその覚悟があると言うのなら。俺の想いをも全て背負う覚悟があると言うのなら。

……掛かって来い。そして、この俺を見事超えてみせろ。

その覚悟（おもい）が無いのならば……俺という存在（おもい）は決して滅ぼされてやる事は出来ん。」

何かを言うつもりだったのだろうか。長女のラフィレスが口を何度か開けた。

だが、その度に口を噤み、結局何もカイトには語る事は無く、その場を静かに後にした。

「……ここは、撤退します。いいわね、ガブリュース、アリエル。」

「……ああ、分かってるよ、ラフィ姉。」「……うん、ラフィ姉様。」

其の後。固有結界を解除したカイトは、「……後は好きにしろ」と言い残し、

一人……いや、碧天を携えて、一人と一冊は、先に静かに外へと出

て行った。

第貳拾捌話【永劫の救世主（メシア）～絶望という名の運命（さだめ）～】（後）

……如何でしたでしょうか？

ね？　オマケじゃなかったでしょう？　……あっれぇ～？　おっかしいなぁ～……？

なんで、ちゃっかり半分程メインになっちゃってんの？　いや、ストーリー的には正しいんだけどもね？

しかも、修羅戦が一番書くのに時間が掛かった件。

いやだって、ぶっちゃけ、２３人＋６体ｖｓ２人とか無理で無茶だろ。ゲーム的にも、描写的にも。

俺、頑張った！　本当に頑張った！！　超頑張った！！！　……

…オホン。

さて……では、今回も作中の言葉と能力の説明をさせて頂きます。

１．穣（じょう）とは、１０の２８乗。？（し）（１０の２４乗）の一万倍です。

現段階でのカイトの命は凡そ５００穣強ですから、その更に５００倍以上ですね。……えげつねぇ。

２．カイトの固有結界『究極の創世』について。

実はちゃっかり、以前唱えたものとは呪文の文言が違います。

どこだか分かりますか？

……答えの変更点は、たったの一ヶ所。それは、ｃｈａｏｓとｃａｌａｍｉｔｙの場所を変えただけ。

ええ、ぶっちゃけそれだけで、カイトの固有結界は完成しちゃいましたｗ　ハハッ、ワロスｗ

あ、やめて！　石投げないで！　岩はもっとらめぇ～！　……

……ゴホン。

あ、そうそう。アリエルのフォーム・アップは、某初代勇者（エ○スカイザー）の掛け声です。御存知でしたか？

え？　バレバレだって？　デスヨネー。

3．『碧天の魔導書』について。実は、最初のアリエル戦でのカイトの驚愕。あれがフラグでした。

気付いた方はいらっしゃいましたか？　……私は気付きませんでした。

いえ、実はとある日、友人と電話で話してた所、以下の様な会話がありました。

【俺：「いや～、今日もフラグ幾つも立てといたんだが、何人分かるかなぁ？」

友：「あ～……例えばアレだろ？　零児の時の、幼女の持ってた夜天の魔導書。

あれが娘の形見とかそういう事じゃねーの？　だから驚いてたんだろ？」

俺：「……成る程。その発想は無かった。」

友：「え？！　違うの！？」

（※若干脚色有り）】

話し合いの結果、その案をまるまんま採用させて貰いました。

友人、ＧＪ　Σｄ！

あ、碧天の魔導書とカイトの固有結界を含む、他の能力諸々の詳しい設定は、

次の世界の番外にて書きますので、今暫く御待ち下さい。

と、こんな所でしょうか。
……え？　内容がドシリアスなのに、作者が巫山戯(ふざけ)過ぎだって？
大丈夫だ、問題無い。

それには、ちゃんと理由があるんです……一応。次話にて、その理由が明らかに……！

……明らかにぃ……！　……なるといいなぁ……（´・ω・、）

次話は、恐らく戦闘は無しの回になるかと思います。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第弐拾玖話【覇てなき修羅道～天と地の闘争（コンクリフト）～】（前書き）

現時刻（１４：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，５８７，１２０アクセス　ユニーク：２１３，６８４人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、覇龍の塔のみです。師匠可愛いよ師匠。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第貳拾玖話【覇てなき修羅道～天と地の闘争（コンクリフト）～】

ｓｉｄｅ：波国北部　アイスベルク監獄

どれぐらい経った頃だろうか？　数分？　いや、数十分？

或る程度の時間を掛け、アレディ達は意識を取り戻した修羅（ゲルダ）達との最後の対話を終え、

今、アイスベルク監獄からぞろぞろと出て来た所だった。

一行は、先ず外の空気を吸ってホッとし、現状とこれからの指針を話し合った。

「ん～～～……！！　空気がおいし～～！」

「ふう……全くね。やっと一息付いたって感じかしら。
それで、次はどうするの？　何か宛はあるのかしら？」

「そうですね……気になること極まりないのが、
牛の人たちが言っていた……不死桜の近所で見付かった、あのからくりですね。」

「そそ。百夜、ね。だけど、問題は……。」

「そこでアグラッドヘイムが『何をしていたのか』というコトねェ。

」
「まあ、或る程度想像は付きますけれど……。」
「つまり、一番の問題は、不死桜を利用する程の事を奴らが画策していると言う事だ。」
「……そうだな……ん？　そう言えば、カイトはどうした？　姿が見えないが……。」
「む？　そうじゃのう……むむ？　ホンマにあやつ、何処におるんじゃ？」
ハーケンの台詞後、皆で辺りを見回した。……彼が、何処に居るのかという確認を。
だが、幾らキョロキョロしても見当たらない。どうするか、と思っていた所……。
「……やっと出て来たか。」
“おわっ！？　び、ビックリしたぁ～……。”
唐突にその本人に空から降って来られ、吃驚仰天した一行であった。
「？？　……アレディ。決着は、しっかり付けたな？」

「……はい。ありがとうございます、カイト殿。
貴方には……いえ、貴方にも特に感謝しなければいけません。」

「何、気にするな。皆、誰しもが誰かに大なり小なり影響されているものだ。
人生とはそうした事の繰り返しだからな。

……ゲルダ達を殺さなかったのだろう？　奴等が監獄から出て行くのを見ていた。」

「……はい。ですが……私は……。」

「その話は後だ。先ずは、シンディに報告しなければならない事があるだろう？
丁度、このすぐ真南だ。先にそちらに行ってから、不死桜へと向かえばいい。」

「……そうですね。皆さん、申し訳ありませんが、宜しいですか？」

「ああ、構わないさ。通り道でもあるしな。」

皆に同意を得、アレディ達は一路南下し、アレディの師匠シンディ・バードに諸々を報告する為、

彼女の居る、覇龍の塔へと向かった。……迄は良かった。

だが、その前に突如として強大な敵が立ち開(はだか)ったのだ。

そう、その名は……。

《それにしても、マイスター。
　逃げて行くゲルダの服がイイ感じに破けてて、物凄くェロかったですよね！》

「うん、お前はもうちょっと空気を読もうな？　碧天。」

そう、それは……シリアスブレイカーと言う名の、無惨にも打ち壊された空気の名称であった。

《何を仰る。マイスターとてあの姿をみて、
　『そこはかとなく、ェロいなぁ……』と御呟きになったではありませんか。》

「言ってねーよ!?　何勝手に俺の台詞を捏造してくれちゃってんの、お前?!」

《なん……だと……?　バカな……!　ウソダドンドコドーン!!》

「バカはお前だよ。つーか、お前のログ内、マジで漁らせろ。そんで、公開させろ。
ちょっと、色んな意味で危惧と不安が押し寄せて来たから。」

《公開して後悔するとか……ぷぷっ!　マイスターもギャグが御上手になりましたねw》

「いや、だから言ってないからね!?　お前のデータ、本当にどうなってんの?!
てか、後悔すんの!?　どんなデータそろってんだよ!?　一回マジで調べさせろ、コラ!」

《いやですねえ、マイスター。人の脳内記憶(データ)を、弄ろうだなんて……いやんえっち……ポ／／／》

「ポじゃねえよ。それと、取り敢えず、お前は人じゃないからな?」

《ナンデスト?!　私と御約束したではないですか!　私の身体を創ってくれると!
『碧天の魔導書・擬人化計画』という壮大な夢プロジェクトに参加して下さると!!!
……私の夢の中で。》

「した覚えも無いし、聞いた事も無いぞ!?　一体、本当にお前の

脳内（データ）はどうなってやがる！？
　っつーか、夢かい！　よりにもよって夢オチかい！？　『夢』だけに！？」

皆、唖然としていた。唐突に始まった、本とカイトの漫才にポカーンとしてしまったのだ。

だが、何とか辛うじて動き出せた者がいた。

その人影は、何処からか持ち出した白い物を両手に持ち、

二人の背後に立って徐に振り被り……。

スパンッ！　スパンッ！

「いてっ！？」《ナントオォーッ！？》

「こんの……戯け共めがっ！！！」

小気味良い音を立てて、人影（シャオムゥ）はその白い物（ハリセン）で二人（？）を叩（はた）いたのだ。

「行き成り何すんだよ、シャオ。」《殴ったね……？》

「そりゃ、叩くに決まっとるじゃろうが！　このバカタレ共が！」

スパンッ！　スパンッ！

「ＡＤＡ（アダ）ッ！」《みょんっ！　二度も殴った……親父にだってぶたれた事無いのに！！》

「……ちょっと待て、碧天。俺はしょっちゅうお前を叩いていた筈だが？」

《え？　何それ？　恐い。と言いますか、マイスターは私の生みの親ですので、

寧ろ私的には、母親の方が正しいかと。》

「……そんなら、父親は誰だよ？」

《……まｚ……マスター？》

「……オイ。今、母親（マザー）って言い掛けたよな？

っつーか、訂正したらもっと酷くなってんじゃねーか！

お前はアレか？　俺と風音の子供とでも言う気か？　どんな禁忌の子供だよ、オイ！？」

《決して許されざる、恋ならぬ恋……萌えませんか？》

「燃えねーよ！　てか、お前今、字違っただろ？　絶対に字違っただろ！？」

又もや、始まり出した二人（？）の漫才。小牟は再々度ハリセンで二人（？）を叩き倒した。

「じゃから、ええ加減にせい言うとるじゃろうが！」
スパンッ！　スパンッ！

「《ナイス、ツッコミだ（です）！》」

突っ込まれたカイトと碧天は、小牟に向けて親指を立てた。……碧天のは流石に幻視だったが。

「いやぁ～……それにしても懐かしいな、こういうの。本当に久し振りだ……なあ、碧天？」

《ええ！　思わず私もハッスルしちゃいましたよｗ　アッハッハッハッハ……ｗｗｗ
　でも、やっぱり物足りませんねぇ……。こう、威力というか、キレというか……。
　マザーのツッコミ力（ちから）はこんなものではありませんでしたからねぇ……。》

「そりゃしょうがないさ。はやてのツッコミは天性の才だからな。あいつを超えられるツッコミは、そうそういるものじゃないさ。」

《デスヨネー。ああ……早く御会いしたいですねぇ……。マイスターの新しいマザーと、マスターの妹にしてマイスターの浮気の結晶に。》

「……オイコラ。言うに事欠いてなんちゅう台詞を吐きやがる、このポンコツ。」

《ハッハッハ……細かい事はいいんでゲス！》

「……小牟、もういい。さっさと先へ行くぞ。……この儘では埒が明かん。」

「……～～～っっっ！！！！　……ハァ、しょうがないのう。」

「……では、参りましょう。覇龍の塔は、この儘南下すれば直ぐです。」

結局。一人と一冊のエンドレス・マンザイをＢＧＭにしながら、一行は南へと進んだのであった。

……肩をこれでもか、というぐらい落とした儘。

第貳拾玖話【覇てなき修羅道～天と地の闘争（コンクリフト）～】

side：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス

「では、ロック様。……行って参ります。」
「うむ、気を付け給え。ガンド三兄弟よ、お前たちの役目も……解っているな？」
「……問題無く。」「了解してるよ、ロック様。」「では、我々も参ります。」

「……。」「ガグン様、一先ず御別れを。」
「……あの救世主（メシア）が、奴等と共にいる。その意味……分かるな？」
「……はっ。」

「問題ありませぬ。例え、彼の者にどの様な辱めを受けましょうとも……。」
「我ら、決して違える事など、御座いませぬ。」
「うむ……分かっている。」

四人が此の場を出、不死桜へと向かった後、

残った二人……ヒルド・ブランとロックアイを再び呼んだ、ガグン・ラウズ。

「御呼びでしょうか？　我が王よ。」「何なりと。」

「……リグ・ザ・ガード達にも言ったが、あの救世主が奴等と共にいる。
……恐らく、我らの敗北は必至であろう。」

「「なっ！？」」

「……だが、決して諦める訳にはいかぬ。ロック・アイ、ヒルド・ブラン。
其方たちの命……我に預けてくれ。」

「……無論で御座います、我が王よ。」
「元より我らのこの身は、全て我が王と、我がアグラッドヘイム。
そして、ヴェルトバオムの樹に捧げたもので御座います。」
「――――うむ。だが、先ずは……彼の者たちがここへ来る迄、英気を養い待つとしよう。」
「「ははっ！！」」

ｓｉｄｅ：波国南部　覇龍の塔内部　１Ｆ

その内部。入って直ぐの中央。入り口と奥の階段との丁度中間に位置する所に、

アレディの師、シンディ・バードが佇んでいた。

……何か予感でもしていたのだろうか。どうやら、アレディ達を待ち構えてい様であった。

「師匠。剛錬のアレディ……只今戻りました。」

「よく戻りました。アレディ、ネージュ姫殿。」
「シンディ様、アレディが朗報を持って来ましたから！♪」
「それは何よりです。」

「……。」「アレディ……？」
「朗報では無いのですか？　アレディ。」

ずっと、何かに葛藤している様子のアレディ。
師の口から催促されるも、その沈黙が解けるのを皆で待ち……、
アレディ自身の口から『朗報』が報告された。

「……羅刹機アルクオンを取り戻しました。」「……。」
「アルクオン……アレディを受け入れてくれたのですね。よくやりましたね、アレディ。」

「私一人の力ではありません。ネージュ姫殿を始め、ここにいる方々の御蔭です。
私一人であったなら……志半ばで果てていた事でしょう。」
「……。」「志ボーイ、まだ気にしてたのか。」「若いのに苦労性だな、これが。」

「そして、凍鏡のゲルダ、操音のヘイムレン……共に討ち果たしました。」

「何と……！　あの者達をも退けたのですか？
凍鏡のゲルダ……私が雌雄を決するべき相手でした。
弟子の貴方に先を越されてしまったようですね。」

しかし、その師からの褒め言葉を受けても尚、アレディの沈鬱な雰囲気は変わらない。

いや、寧ろ増したとすら言っても差し支えない程であった。

又もや暫しの沈黙の後、アレディは口を開いた。

「……その事で、御話せねばならない事があります。私は……。」

「……アレディ。ゲルダとヘイムレン……殺したのですか？」
「……！！」

「どうなのですか？　剛錬のアレディ。
貴方が話そうとしている事……その事では無いのですか？」「……。」

師からの鋭い詰問に、何も答えられず沈黙するアレディ。

だが、それだけで十分だったのか……。

シンディも共に暫し沈黙し、息を一つ吐くと同時に話し出した。

「……分かりました。沈黙も亦答え……それが、貴方の出した結論なのですね。」

「剛力を持ち、命を奪う。弱者は死し、強者が残る……。ですが、それを繰り返した先に辿り着くのは、何処なのですか？永劫に同じ事を繰り返し……軈ては己も死すのでしょう。

そういうものだと、思っていました。……ですが、敵を許し……新たな争覇を目指す……。

其処には意味が在るのではないかと……此処までの旅を通して、そう思うのです。

私は、修羅として……。」

シンディの言葉で意を決したアレディは、長い……永い独白をした。

それを最後迄、黙って聞いていたシンディは、アレディの言葉が詰まった後を引き継いだ。

「……弱くなった。」

「師匠……そうです、私は……。」

「アレディ、貴方は『修羅』として……確かに甘く、そして弱くなった。」
「……はい。」
師の言葉に……何より、自身がずっと思っていた『事実』に、アレディは深く肯いた。
……だが。まだ、彼女の言葉は終わってはいなかった。
「ですが、貴男は他のどんな『修羅』よりも……強い『男』に……成りましたね。」
「師匠……。」
「この異邦の地で……修羅でありながら、その生き方を否定し、己の往くべき道を見つけた。
私はアレディ・ナアシュという『男』を弟子に持った事を……誇りに思います。
強いだけの修羅で無く、強さも弱さも……どちらも抱えた男でいなさい。
貴男は未だ若い。後は、刻が貴方の味方をしてくれるでしょう。
そうでしょう？　救世主？」

と、其処迄言った所で、シンディがカイトに向かって問い掛けた。

……救世主（メシア）と言う言葉を差し向けながら。

そして、件の救世主（カイト）は、何も動じる事無く、自然にアレディに向け言葉を掛けた。

「そうだな。……人の一生は短い。その中で学べる事など高が知れている。

なればこそ、出来得るのならば全てを内包した方が、より強く正しく真っ直ぐに生きられる。

だが、諂曲（てんごく）なるは修羅……本当に辛いのはこれからだ。

何時迄、その覚悟が保てるか。例え、如何程の絶望に遭おうとも、その意志を貫けるか。

これからが、お前の真の覚悟、想いが試される刻だ。

修練を怠るな。剛錬のアレディ、アレディ・ナアシュ。……いや、こう呼ぶべきか。

ナアシュの名を持つ者――――何れ王と成る者よ。

シンディの言う通り、力のみの強さではない。何よりも心を、その魂を鍛えろ。

仲間であるハーケン達と共に。師であるシンディと共に。

そして何より、今迄ずっとお前を支えて来てくれた、ネージュと

共に。」

「師匠……カイト殿……。

はい……！　師匠！　カイト殿！！」

二人からの褒め言葉を、そして激励の言葉を受け、見る見る内に元気を取り戻し、

先程迄の沈鬱な雰囲気が嘘だったかの様に、明るく元気に二人に返事をした。

そんなアレディを見て、微笑むシンディとカイト。

やっといつもの調子に、だけど一回り大きくなった様子を見せるアレディに、

ホッと一息付き、ネージュを始め声を掛ける一行。

「アレディ、良かったじゃない。……気持ちが、大分ラクになったんじゃないかしら？」

「はい……！　自分の争覇に生きる……その決心が付きました。

それが例え、如何程困難な道程であろうとも……！」

「そう、貴男の争覇は未だ終わってはいません。……分かっていますね？　アレディ。」

「はい。……アグラッドヘイムとの戦いに向かいます。」

だが、その前にシンディに質問を投げ掛けた。先程から皆が気になっていた事を、である。

「所で、シンディ様。先程から気になっていたのですけれど、カイトの事御存知でしたの？」

「いいえ、彼とは今この時が初対面です。」

「え？　ですが、今師匠は、カイト殿の事をハッキリと、救世主（メシア）、と……。」

「ええ。何もせずとも、此れ程の闘志を漲らせている存在など、彼の『宇宙（そら）の救世主（メシア）』以外には、在り得ないでしょう。」

「……鋭いのう、シンディ姉。というか、知っとったんかい、その名前。

バカイト……主、一体どんだけの数に手を出してるんじゃ？」

「はっはっは……もっと褒めてくれ。」《微塵も褒められていませ

んよ？　マイスター。≫

成る程と得心がいった一行。

確かに何もしてなくても、カイトからは何と無く謎の威圧感を感じる。

況してや、アレ程のチカラを魅せ付けられた今となっては、猶の事……。

「それよりも、気を付けなさい。貴方方が此処に来る少し前から……奇妙な感覚があります。」

「え？　ど、どんな感じですか？」

「波国が『削り分けられた』あの日……その時の空気と似ているのです。」

「私もそれは感じていました。まさか……あの時と同じ事が……？」

「その通りだ。これは、奴等がヴェルトバオムの力を使う前兆だな。……でも、おっかしぃんだよなぁ……アイツラが使える訳が無ぇんだがなぁ？

これだけの力を使えるだけの魂は、俺が消し飛ばしたし。」

首を傾げながら何かを呟くカイト。

それに対し、先程からずっと沈黙を保ちながらカイトの周りを浮遊していた碧天の魔導書が、

カイトに一言、自身の思っていた事を告げた。

《それなら、マイスター。あの三人姉妹が何かやらかしたんじゃないですか？》

「……ああ、成る程。あのガキんちょ共か。
確かにアイツラなら、それぐらいは容易(たやす)いだろうな。」

《何でしたら、私が直接近場に行って確かめてみましょうか？
既に彼女達の力波(りきは)は検知済みですし。》

「そうだな……なら頼めるか？　碧天。」《何なりと。》

「それなら……龍斗。済まないが、お前も一緒に行ってくれ。
お前と碧天なら相性がいい筈だ。」

「畏まりました、カイト様。では行きましょうか、碧天の魔導書。」
《ええ、行きましょう。あ、それと私の事は『碧天』と。長ったらしいでしょう？》
「分かりましたよ、碧天。では、カイト様。」

「……ああ。場合によっては、四霊も許可する。頼んだぞ。」

「！？　……畏まりました。確と。」《では、行って来ます、

マイスター。≫

唐突に現れた一人と一冊が、カイトの命を享け忽然と姿を消した。

カイトが何かブツブツ呟いていたが、それをさておいて外に出ようとした一行。

だが、突然零児が頭の古傷に手を当てた。どうやら、おっｐ……基、ゆらぎを感じた様だ。

「……長ったらしいてどういうこっちゃ。あれは、アレか？　もしかして、もしかしなくても、俺に対する当て付けか？　喧嘩売ってんのか、アノ野郎？！」

「……はぁ……全く……！？」

「ん？　どうしたんだ？　レイジ。」

「……どこかで『ゆらぎ』が起きた気がした。いや、少し違う……これが、まさか奴らの……？」

「ゆらぎ……次元のほころび……。」「え！？　じゃあ、本当にアグラッドヘイムが？」

「師匠、行って参ります……！」

「……剛錬のアレディ。貴男の新たなる争覇に、死凶星が落ちぬ事を。」

「……はいッ！！」

ｓｉｄｅ：波国南部　覇龍の塔　門前

師からの激励の言葉を貰い、意気揚々と外に出たアレディ達。

零児の反応や、カイトとシンディ達の言葉もあり、

各々情報を得ようと、各地の自分の家族や知り合いに現況を確認しようとした……が。

「取り敢えず、情報収集だな。副長に連絡をしてみるか。
副長、こちらハーケンだ。応答してくれ。……ん？　通じない……？
まだブラック・ストーンの影響があるのか？」

「あ、そういや未だ全部砕いて無かった。ちょっと待ってくれ。今直ぐ消し飛ばすから。

黄宇、水薙、鋼牙。ちょっと確認してくれ。何処にどれだけ残ってるか。」

「畏まりました、我が主。」「了解、マスター？」「は～い♪」

又もや唐突に出て来た三人が、地に手を当て、黄宇の肩に手を当て、近場の海に手を当てた。

少しの間その状態でいると、三人がほぼ同時に徐に顔を上げ、カイトに報告した。

「主殿。中々広範囲に広がっている様です。」「うん。結構な量があったよ。」

「こっちはそんなに広くはないけど、多分地上より量はあるわよ？一塊になってるみたい。」

「成る程な……。多分、水中のはヴィルキュアキント崩壊の際の残骸だろうな……。

地上のは、アインストが滅んだ後の名残と、エスピナ城の奴ぐらいだろう。

分かった、御苦労。戻ってくれ。後は俺が纏めて消し飛ばす。」

「「「はは っ！」」」

カイトがそう言うと、先程の龍斗と同様に忽然と消えた三人。

それと同時にカイトが身構え、天高く掲げた右手の先に、一瞬の内に超巨大な光球が現れた。

まるで全てを包み込むかの様に、美しく、柔らかく、温かいその光球は、

最早端も見えぬ程に巨大化すると、その成長を止め……直後、カイトの命と共に落下した。

「目標……女王蜂（アルフィミィ）とその眷属（アクセル）を除く全てのアインスト。

完全に消え去れ

救世主（メシアズセイント）の聖球」

世界が光に包まれた瞬間、誰もが感じた。

何か……得体の知れない存在が……命に近しい命が、この世界から（エンドレスワンティア）消え去るのを。

「よし、御掃除完了、っと。もういいぞ、ハーケン。これで、通信妨害は一切無くなった。」

「……あ、ああ。……副長、応答してくれ。」

「こちら、ツァイト・クロコディール副長、リィ・リーです。艦長、今の光は御覧になりましたか？」

「ああ。今のは、カイトがやったものだ。どうやら、今のでアインストは全滅したらしい。」

「成る程。道理で感度が良好になっていると思いましたよ。相変わらず物凄いですなあ。」

「全くだぜ。カイトには毎回驚かされてばっかりだ。所で、今副長は何処にいる？　何か変わった事は？」

相変わらずの出鱈目な力にパクパクと口を開閉する者、頭を抱える者等々、様々であった。

だが、取り敢えず促されたハーケンが、再度副長に連絡を取った所、即座に繋がった。

訳を話し、何か起こってはいないかと聞いた所……。

「……ダディ・ジョーンの所に来ています。丁度、連絡を取ろうと思っていました。
……可笑しな事が起きてます。」
「ちっ……やっぱりか。可笑しな事ってのは、もしかして大地が突然抉り取られて行く現象か？」

「何と！　知っていましたか……。ええ、その通りです。心当たりが？」
「ああ。そいつはアグラッドヘイムの仕業らしい、どうもな。」

「成る程……カイトの御墨付き……いや、カイトからの情報と言う所か。」
「……ま、そんなとこさ。これから、その原因の元をどうにかしようと考えている所なんでな。
町の真ん中が喰われないように、お祈りでもしててくれ。」

「その時は運が無かったと思うだけだ。……だが、街の住民が不安がっている。早い所頼むぞ。」
「ＯＫ、心配ダディ。出来るだけ急ぐとするさ。
副長、何か指示するかも知れない。ツァイトに戻ってくれ。」
「アイアイサー。では艦長、朗報を待ってますよ。」

「ああ。それと、カルディア。アンタは引き続き、オヤジの警護を頼むぜ？」「任務了解。」

そう言って通信を切ったハーケンは、やれやれとでも言いたそうに

肩を竦め、
皆に振り返り話した。

「聞いての通りだ、みんな。どうやら、新ロストエレンシアでも同じ事が起こってるらしい。」
「全く……無節操ですこと。波国や私の城だけでは飽き足らないとは……。」
「うむ……我が国も同様だ。最早余り猶予は無いようだ。」
「……愈々動き出しおったのう。超絶的最終破壊兵器が。」

「……どうやら、滅魏城も同様であるな。」
「今、丁度守天さんと錫華ちゃんが連絡を取ってたんですけど……。」

「そうか。守天オーガも大変だな。……色々な意味でな。」

そんな事を話していると、龍斗と碧天が丁度戻って来た。……相変わらず唐突に。

「カイト様。只今戻りました。」《ただー。》
「ああ、御苦労。それでどうだった?」《スルーされたで御座るよ……。》

「はい。矢張り、碧天の言っていた通り、あの姉妹達の力が混じっている様です。
正確には、あの三姉妹の内、長女と次女と思われる二人……ですが。」

「そうか……【原初】のアホの足止めをした後、合流したってな訳か。大体分かった。
もう戻っていいぞ、龍斗。」「畏まりました。では。」

《……龍斗に迄、完全にガンスルーされたで御座るよ。
悔しい……でも感じ「言わせねえよ。」……（´・ω・`）
＜ショボーン》

そんな漫才はさておき。次に向かう先を協議し合う一同。

「それで、次は何処にいけばいいのでしょうか？」

「何はともあれ、先ずはこの現象を起こさせないようにする。
……つまり、本拠地を叩くしかないわ。」

「それはいいけど、そのアグラッドヘイムの根城にはどうやって行くんだい？」

「……手掛かりは、不死桜だと思います。」
「そうねェ。以前もヘラちゃんが、狙ってたものネ。」
「そうですね……守天さんもさっき、『不死桜に似た霊力を感じた』

と言っていましたし。」
「あん、毒牛頭ちゃんと毒馬頭ちゃんの話にも出て来たし、ね。」
「ああ、百夜を奪ったのはあそこからだと言っていたな。」

「そうと決まれば、猫一直線（まっしぐら）でございます！」
「はい、行きましょう！　不死桜……武酉城（たけとりじょう）へ！」

行き先の決まった一行は、一路不死桜が鎮座する武酉城へと歩を進めるのであった。

……カイトと碧天の漫才の続きを聞きながら。

第貳拾玖話【覇てなき修羅道～天と地の闘争（コンクリフト）～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

師匠マジ可愛いよ師匠。え？　碧天の魔導書がはっちゃけ過ぎだって？　仕様です。

碧天の主な仕事は、風音とのセットアップと、カイトとの漫才ですから（キリッ　ね？　高性能でしょう？

……オホン。さて今回も恒例の（？）作中の言葉の解説です。

1. 『諂曲（てんごく）なるは修羅』とは、仏教の言葉で、『己の本心は見せずに、従順を装う』という様な意味です。細かい説明は、是非ともググってみて下さい。他にも幾つか意味がありますので。
　修羅と聞いて、真っ先にこの言葉が浮かんだ私は、少数派では無い……と思いたい。

2. 『救世主（メシアズセイント）の聖球』とは、有機物限定で、カイトが指定した特定の種族のみを、
　完全にその世界から消し去るという、対生物には圧倒的な力を持つ、えげつないカイトの専用技です。
　使える力は、聖球の名の通り、聖なる力……神力や霊力といったもののみです。
　完全に害悪のみとなった存在を消し去るには、最も効率的な技ではありますが、滅多に使いません。

といった所でしょうか。申し訳ありませんが、少々予定が狂いまして、今回も技解説は無しです。

次回は、不死桜内部に突入です。……あ、後、錫華の技解説もあります。御楽しみに？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。師匠マジ超可愛いよ師匠。

第参拾話【世界を貫く沙羅双樹～鬼哭賛歌～】（前書き）

現時刻（０４：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６０２，６６９アクセス　ユニーク：２１４，７５８人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、武酉城～不死桜内部・前編です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾話【世界を貫く沙羅双樹～鬼哭賛歌～】

ｓｉｄｅ：渾然大地（こんぜんだいち）　武酉城（たけとりじょう）

そこに来た一行が見たものは、無残にも桜ごと大地が所々抉られている、光景だった。

愕然とした後、その様に歯？みし、気が逸（はや）る一行。

「ここにも地面の大穴が……！」
「ちっ……新ロストエレンシアにメギ・エルフェテイル……そして、ここか……！」

「無差別に攻撃を始めたって事か？」
「そうじゃないみたいです……！　桜の木の上方を見てください！」

「あれは、虹の柱……！　私のエスピナ城にもあった……！」
「まさか……アグラッドヘイムがこの桜を狙った理由って、もしかして……。」

「急いで武酉城へ向かいましょう！　お父様やお師匠様に話を聞かなくちゃ！」

不死桜から伸びている曾(かつ)て見た虹柱(こうちゅう)に、不安に駆られながらも、一行は慌てず急いで神夜の父、楠舞皇(なんぶおう)……楠舞讃岐(なんぶさぬき)の元へと向かった。

第参拾話【世界を貫く沙羅双樹(さらそうじゅ)～鬼哭賛歌(きこくさんか)～】

ｓｉｄｅ：武酉城　城内　城主の間

取るものも取り敢えず、そこに真っ先に飛び込む神夜と、後に続く一行。

一人、空気を読まずにのんびり欠伸をしながら歩いて来ていたが。
……誰とは言わないよ？

「お父様！　御無事ですか！？」
「おお、神夜か。私は大丈夫だ。お前こそ元気極まりないようだな。張りを見れば判る。」
「も、もう、お父様ったら……／／／」「何この親子？」

「どれどれ……どんな風に張っているのかな？」「こら、アクセル。」
「《ダメだこいつら、早く何とかしないと。》」
「……アンタ達だけには言われたくないんだな、これが。」「《なん……だと……？》」
「……これ以上、話を脱線させるな。」「《サー、イエッサー！》」

零児に窘(たしな)められ、声を揃えて敬礼する一人と一冊＋αであった。

「……その余裕を見る限り大丈夫なようだが……楠舞皇、状況を教えて頂けないだろうか？」

「うむ……不死桜の霊力が暴走しておる。
今は『祭壇の間』の入口を封印し、その力が流れ出さぬようにしているが……。」

「内部はどのような様子なのであるか？」
「裏玄武の者達に調査をさせた。
……不死桜の中は、以前現れた謎の敵で溢れ返っている……との事だ。」
「ガンド三兄弟のヘラ殿がここを襲った時ですね？」
「その頃から既にカレらの計画は、ここまで考えられていたってワケネ。」

「うむ。それを確かめる為にも……ナンブ王よ、フジザクラの封印を解いてくれぬか？」

「……それは出来ぬのだ、フォルミッドヘイムの王よ。封じ込めた霊力が放たれてしまう。」

結論も出、何とか中に入れて欲しいと頼むが、申し訳無さそうに断る楠舞皇。

だが、其処で神夜が提案した。中に入れるルートは別にあると。

「隠し通路があります。そこからなら、霊力が逆流する事無く、入る事が出来ます！」
「よっしゃ！　そうと決まったら腹を括るぜ！　矢でも鉄砲でも持って来やがれってんだ！」
「解りました！　矢でも鉄砲でも鎧でも、御用意致しましょう！
我が『猫騒堂』……総力を挙げて御支援致します！

取って置きの在庫を出しますので、是非お立ち寄り下さい！」

「ここぞとばかりに、やりますね。」「琥魔よ、済まぬな。」

「私も神楽天原の生まれ。国の危機に立ち上がるのは当然の事！この美しき大地の為に！」

「台詞と顔が合っておりません、琥魔殿。」

「じゃが、武器・防具の仕入れには賛成じゃ。腹黒猫館にも行ってみるとするかのう。」

「土狼の店に寄るのも忘れずにな。

琥魔の事だから、どうせ此処で店を開けるぐらいの物は持って来てるだろうしな。」

ニャんとワンダフルな双方の店に行く事も決まり、これからの行き先も決定し、

一行は一路、不死桜内部に向けて出発するのだった。

……ちゃんとカイトの金で、双方の店の品物を買い占めてから。

「琥魔さんの御好意には、用心深く甘えつつ……行って参ります、お父様。」

「うむ。判っているとは思うが、隠し通路は『祭壇の間』の左だ。乙音（おとね）も向かわせておる。気を付けて行くのだぞ。」

ｓｉｄｅ：不死桜内部　祭壇の間

途中で神夜を待っていた乙音に案内され、

神夜達の言っていた隠し通路とやらの前に来た一行。

だが、何処を見渡してもそれらしき入り口は見当たらない。

一体これはどういう事かと、神夜に聞いてみると……。

「ちょっと、行き止まりじゃないの！　隠し通路っていうのはどこ？」

「勾玉以外には何も無いようですが……。」

「何かトリックがあるんだろ？　マジックプリンセス。」

「はい、任せて下さい！」

「じゃ、御手並み拝見といこうかね、これが。」

そう言うと、神夜は正面の勾玉に向かい、祈りを捧げる様に言の葉を祝(ほ)いだ。

すると、勾玉が反応し、その真下がくｐ……開き、道が出来たのであった。

「不死桜よ、楠舞家の姫が命じます。隠された道を示し給え。」

「本当に開きましたの！」「来たのう、ぬるりと。」

「流石は魔乳姫。見事な魔術っ振りでございなさいます。」

「隠し通路か。確かに、霊力が堰き止められているようだな。」

「よいよい♪　目指すは最上階……『使者の間』であるぞよ？」

「了解です。突入を開始します。」

「はい。アグラッドヘイムがこの木で何をしているのか、突き止めましょう。」

そして、一行は広くて大きい……そして、長い長い木の内部(みちのり)を歩き続けるのだった。

side：不死桜内部　入口

～Battle　22～

「浅草仕込みの喧嘩殺法、見せてやらあ！　べらぼうめ！　相手になってやらあ！」

「気風（きっぷ）の良い江戸っ子だな、コウタ。この場は何とかする。下がるんだ……！」

「守られるばかりが姫ではありません。ファイター・ロウタ、やっておしまい？」

「名前を混ぜるんじゃねえよ！　……ったく。よっしゃ、いっちょやるぜ、モスコス！」

「ＫＯＳ－ＭＯＳです、コウタ。リミッター解除。フルパワーでいきます。」

「そいつは重畳。頼むぞ、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「さあ、ケンカ祭りと洒落込もうぜ！」

「祭りじゃワッショイ！　やっちゃるかのう！　怒りの鉄拳に、全てを懸けるんじゃ！」

「拳が鉄な事には自信がありんす。よ～し！　一緒にワイヤーパンチだ！」
「待て！　俺の腕はどうなるんだよ！？」
「腕くらい飛ばさんとアカンたい。」「いや、人間には無理ですよ！？」

「……ハァ。それにしても、記憶喪失……何とかならねえのか？」

「無理に何とかする事も無いさ。とにかく、先手を取るぜ？　後は流れ次第さ。」

「要するにテキトーに、っちゅう事じゃな？　こうなったらマージャンで勝負じゃ！」

「あら、アタシのツバメ返しが唸るわよ？　ここはアタシに任せな、レイジ。」

「……いつもそれで通したらどうだ？」

「斬冠刀にてお相手つかまつりゃれります！」

「仕ります、が言えて無いぞ？　しかし、相変わらずの剣だな、神夜姫。」

「これ一本で、色々出来ますよ♪　あ、でも、援護をお願いしますね、コウタさん♪」

「お姫さんの頼みとあっちゃあ、断れねえな！」

「よいよい♪　クイックイッと♪」「ちょっと、誰の真似であるか。」

「踊りで戦えるとは、気楽だな。」

「そちもやってみい。大変さが解る。わらわもそちの演芸、見て進ぜるぞよ？」

「人の技を演芸と言うな。ん？　邪鬼銃王はどうした？」

「何時でも呼び出せる。焦るでない。」

「あんたの踊り……え～と、どうなんだ？」

「最先端の舞に文句を付けるでない。いっその事、そちに糸を繋げてくれようか。」

「これぞマリオネット・メサイア！　何でも命令して下さい、ヤンキーカラス。」

「アシェン……聞く気、ゼロだろ？　……はぁ、こいつらをスカウト出来ないかねえ。」

「誰でもいいのですか？　ヘンネ。」

「こうなったらジャンケンで勝負ですの。」

「おっと、遅出しなら得意だぜ？　早速、用意しな！　始まるぜ、レイジ。」

「もう準備は出来てるさ、マーク。一気に勝負を掛けるぞ、ハーケン。」

「ああ、飛ばしていこうぜ、レイジ。アシェン、分析を頼むぜ？」

「え～と……あ、だいじょぶ！　勝てる勝てる♪　ではＫＯＳ－ＭＯＳ、決着を付ける時が来たな。」

「相手は私ではありません。……コンディション・オールグリーンにゃ。」

「な、何だか難しい言葉ですにゃん。と、取り敢えず！　先ずはポカリと行きましょうか！」

「分かりました。全身全霊でいきます……！　これも修練……覇気を高めていきましょう！」

「堅苦（かたっくる）しい奴だなあ……肩、凝らねえか？」

「堅苦しい事に定評のあるカイトです。」

《え？》「……え？」

《マイスター……自分の事というのは、自分が一番解らないものなのですよ？》
「……ふむ、成る程。お前が自身をポンコツと認識出来ないのもそれ故か。納得した。」
《ナン……デスト……？　マイスター、ちょっと屋上に来て貰おうか？》
「……上等だ。掛かって来いや、ゴルラアアァァァァ！！！」

“ウルサイッ！！！！！”

「《……ごめんなさいｏｒｚ》」

「歯応えの無い相手だったな。ま、こいつを身に着けりゃ、軽いもんだぜ。」

「成る程、ゲット・オンするのか……終わったようだな、ＫＯＳ－ＭＯＳ。」

「周囲に反応無しです、レイジ。敵殲滅に成功。索敵モードへ。」

「今回の新世界……油断出来んな。しかし、相変わらず容赦が無いな。」

「勝利が任務である以上、当然です。……損傷は軽微。任務を続行。

」

「ガタが来ないといいがな。まぁ、結果は重畳……と言った所か。」

「はい♪　上々の出来栄えですね♪」「……そりゃ、こんだけ人数がいりゃ負けねえだろ。」

「コウタさん、凄くかっこよかったですよ♪」

「お、おう／／／　あったりめえよ！／／／　ま、まあ、ざっとこんなもんだぜ！」

「ＯＫ、アーマーボーイ。御活躍だな。」

「モモ、がんばりました！　ハーケンさん♪」「ＯＫ、頑張りガール。いい子だ。」

「でも、モモ、最近ちょっと戦闘タイプかな？」「確かにやる気を感じる格好であるな。」

「変身いいなあ……俺もドレス・オンしたいぜ。」
「あの……モモのはドレス・アップなんですけど……。」

「そういや、あんたのアーマーも特別製なのか？」

「はい。師匠から譲り受けた、大切な物です。ですが、師匠の技は

こんなものではありません。」

「どれだけ凄いんだ？　師匠ってのは。しかし……邪鬼銃王、変な技が増えたな。」

「ヘンと言うでない！　優雅と言わぬか！　見たであろう？　邪鬼銃王の勇姿を！」

「ワタクシも『バクダンオー』を開発しますわ！」

「よいよい、良きに計らえ？　いっその事、そちの装備も邪鬼銃王に着けるか。」

「間違い無く爆散するであろう。」「ファイヤージャキガンオー、かっこいいな！」

「勝手に邪鬼銃王を強化するでない。……疲れた。わらわの腰を揉むがよい。」

「了解です。折ってもいいですか？　序でにロア・アーマーも貸してくれでごんす。」

「……どうやって着ける気だよ。……なぁ、今度、浅草のカーニバルに出てみねえか？」

「いつでも、何処でも、誰とでも踊るぞよ？」

「見事なヘソ踊りだな、これが。」「戯けが。もっと全体を見るがよい。」

「……ぬしのジャキオー、良かったんでない？」「略すでない。邪鬼銃王である。」

「ジャキガンオー、働き者だな。」「操作しているのはわらわである。」

「それよりも、薬莢が凄いぞ！　片付けろよな？」「掃除は昔から男にさせておる。」

「アクセルに任せれば、安心ですの♪」「よいよい♪　男は扱き使うものである♪」

《成る程……マイスターも大分、マスターとマザーに扱き使われてましたものねぇ。》

「……その大半が、お前の悪戯の後始末と尻拭いだったがな。」

《ピーー……データ、エラー。その様な事実は、ログ内には記録されていません。》

「……よし、それなら調べてみようか。序でにちょっと弄るけどしょうがないよな？
　調査中の不慮の事故だからな。」

《……では、サヨナラッ！》

「ハッハッハッハ……何処に逃げようと言うのかね？」

《カーネルッ！？　あぁぁぁぁ……目が……目があああぁぁぁぁ……！！》

「……いや、お前、目ねぇだろ。」

side：不死桜内部　隠し通路

～Battle　23～

「オレの名はマークハンター。獲物を狩るのがオレの仕事だ。」

「ここはどうする？　バウンティーハンター？」

「ハンティングに決まってるぜ、ハーケン。折角だ、楽しもうぜ？　KOS－MOS。」

「油断は大敵です、マーク。兵装チェック、問題ありません。」

「レンタルは出来ないのか？　取り敢えず情報分析。は、面倒なので、そのまま攻撃を。」

「分かった！　……って、それでいいのか？　……どう攻める？　プリンセス・カグヤ。」

「う～んと……斬って、浮かせて、斬りましょうか♪
そう言えば、ハーケンさんと同じ、賞金稼ぎなんですよね？」

「チッチッチッチ……一緒にして貰っちゃ困るぜ？
はぁぁぁっ！　オレの覇気はどうだ？　アレディ。」
「鎧を外してお願いします、マーク殿。」

「だが、この装備なら負ける気はしないぜ。」「俺もアーマーを装着したいんだな、これが。」

「ほれほれ、ダ・ハンター！　血圧アップじゃん！」「任せろよ！やあってやるぜ！」

「勝てます。頑張りましょう、小牟殿。」「そのキラキラした若さが妬ましい……！」

「よし、それじゃ一気に行くぜ？　アシェン。」
「はい、行ってらっしゃいませ、艦長。まずは一寸刻み、五分刻みで。次に……。」
「その時点で勝っておりますの。軽く捻って差し上げますの♪」
「了解です。捻じ切りまするのです。」

「唇からナイフとかは出ないのか？」
「成る程、その武装はアリでやんす。」

《では、私も身体の中から……！》
「いや、何も出ないぞ？　基本的にお前自身が剣そのものだし。
その上、主な用途は膨大な情報蓄積装置だからな？　一応。」
《……いやですねぇ、マイスター。それぐらい私だって解っていますってば。》
「そうか。……マテ。それなら、一体何をするつもりだったんだ？」
《そんなの決まってるじゃないですかｗｗｗ
マイスターの嬉し恥ずかし赤裸々な過去のデータを大量にばら撒こうと……あ。
え……あ、ちょっと……ま、マイスター？；；；；
な、何か御顔が物すっっっっっごく恐いんですけど……；；；；
あ、ダメ……ちょ……やめ……ギャアアアアアアアアアア！！！！！》
“……本が冷や汗を流す瞬間を初めて見た。”
「オレの名はマークハンター。これぞファイナルエンド……ってな。

」
「かなりのアウトサイダーですね。」「分かってるじゃねえか。常識さ。」
「ハンターの名前は伊達じゃ無いようだな。」「おっと。男にホメられても、嬉しくないぜ？」
「マークよ、わらわの弟子にならぬか？」「俺に何を教えるつもりなんだ？　姫さんよ。」

「素晴らしい機神の操作です、錫華姫殿。」
「うむ♪　もっとわらわを褒めるがよい♪　よいよい。気分が宜しいぞよ♪」
「ＯＫ、御機嫌プリンセス。次行くぜ？　……っておいおい、そんなにがっつくなよ。」
「俺はハンターだぜ？　当然の報酬さ。いいモン持ってるじゃねえか。見せてみろよ。」
「この武器の事かしら？　それとも私？　どこを見てらっしゃったの？　オ・マ・セ・さん♪」
「え？　いや別に？　興味無いしよ。てか、アルフィミィ、それ、寒くないのか？」
「てやんでえ。私の生き様ですの。」

「この黄金のアーマーが見えねえか？」「ぬしの名はゴールド、じゃな♪」
「その鎧の下はどうなってるんですか？」
「男は、女の前では素顔を隠すものさ。しかし、アンタも可愛いカッコして、えげつないな。」

「姿形は、戦闘に影響しません。ターゲットの撃破に成功。」

「わらわの踊りも大成功であった。いっその事、コスモスオーとしてわらわに仕えぬか？」
「それは拒否します、スズカ。元の世界に帰る方法を探るべきです。」
「記憶の事もあるし、前途多難だぜ。記憶が無いまま戦うのもなあ……。」
「大丈夫。気長にいきましょうですの♪　あなたの道が終わるまでは、がんばりますの♪」
「おいおい……縁起の悪い話だな。……しかし、賞金稼ぎか。俺もなってみようかな？」
「フッ、シロートにはオススメしないぜ？　オレにも色々と都合があるんでな。」

「マーク君の家庭の事情ですの？　……少し、疲れてしまいましたの……。」
「温泉とかでゆっくりしたいのう。沙夜といい、ぬしといい……大サービスじゃな。」
「馴れ合うつもりなどない。忘れるな。……さて、どう料理してくれようか。」
「ねっちり、甚振ってくれようぞ？　むふふ……♪」

「これは残虐行為手当が付くのう♪　ほれほれ♪　わしに感謝せよ！　そして……奢れ♪」
「油売ってる場合かよ！　もうそろそろ先に行くぜ！
にしても、狐の物の怪って……本当かぁ？」
「油揚げ大好き！♪　……どうじゃ？　信じたかの？」
「油を売ってる時間など無いんだよ。」「ああ、先は長いんだ。急ぐぞ。」

「とうとうた～らり、とうたらり～♪」
《ああっ！　やめて！　お願い！　私を油塗れにするのはヤメて！　本を脂ぎらせちゃらめぇ～！！　もっと本を大事にしてぇ～！》

「さて。こんな所に、チャッカ○ンとライターがあります。」
《え、ええ。チャッ○マンとライターがありますねぇ……。
ひ、ひぎぃいいいいいぃいぃいぃ！！！！！　燃やされる！　侵される！！
思い出が領空侵犯されちゃうぅ～！　らめぇ～！　らめなのぉ～！　くぱぁしちゃらめぇ～！

あ、でも想像したらちょっと快感フレーズだったり。》

「灼熱の～♪　ファイヤァ～♪　ダ～ン～ス～～♪」
《ひぎぃ！　らめぇー！　ばよえーんしちゃらめぇ～！！》

“ダメだコイツラ。冗談抜きで早く何とかしないと。”

ｓｉｄｅ：不死桜内部　通路

不死桜内部に、木漏れ日が差し込む暖かな場所に出た一行。

其処には、ヴァナー・ガンド、ヘラ・ガンド、ジョーム・ガンド。

……ガンド三兄弟が、待ち受けていた。

「やっっっっと来やがったか！！！」

「ふう、ちょっと幾ら何でも遅過ぎやしないかい？
待ってたアタイらの気持ちにもなって欲しいもんだね。」

「……ふう。アレディ・ナアシュ。これも運命か。」

「ヴァナー殿。ガンド三兄弟……全員揃っているようですね。」
「本腰を入れて来てるって事かい。」
「あんなド綺麗な桜まで穴だらけにして！　ちょっとやり過ぎじゃ無いかしら！？」
「そうだそうだ！　ちったぁ住んでる連中の事も考えやがれ！！」

そんな、みんなの非難の声も何の其の。飄々と言い返すガンド三兄弟。

「……何、心配する事無いよ。……それ所じゃ無くなるからさ。」

「ヘイ、ツノスパッツガール。それは、もう餌場の準備は完了したって事かい？」

「！？　……ああ、そうか。そうだったね。
そういや、アンタらにはとっくにバレてたんだっけ。」

「貴方方がしようとしている事と、この不死桜と何の関係があるんですか！？」
「ま、この不死桜に生えてるあの虹の柱があるだけで、或る程度の予想は付くけどねェ。」

そのカッツェの言葉に思わず北叟笑(ほくそ)むヴァナー。

どうやら、皆が勘違いしてると思い、思わず笑みが零れてしまった様だ。

だが……。

「生憎と、そいつはちょっと違うな、カッツェ。
こいつらの目的は、この不死桜を第二のヴェルトバオムとする事だからな。」

「な、なんですって!?」「そんな……!」「うそ……!」

「この不死桜は、性質こそ真逆だが、その存在自体はヴェルトバオムと非常に似通っている。
だからこそ、此処に当初から狙いを定めていたのさ。
逸早く、その性質に慣れ親しんだ奴等だからこそ、気付けた故に、な。」

「……ちっ！　まあ、そういう事だ。既にその為の準備は終わってる。
絶対にてめェらに邪魔はさせねェ……！」
「いやいや、悪いねぇ。邪魔～するぜ?
……勝手に他人(ひと)の敷地に入り込んで、悪さをしようなんてのは、感心しないんでな。」

「ま、そういう事だな。
使者の間で待ってるリグに会う為にも、こんな所で余り時間を食ってもいられんからな。」

カイトにその真意を暴露され、歯?みするヘラとジョーム。
だが、其処にヴァナーからの仲裁が入った。……もう語る事は何も無い……と。

「……そこまでだ。もう御互いに話す事もあるまい。……ここで終わりにするとしよう。」

「……そうですね。アグラッドヘイムと戦う以上、貴方方との勝負は避けられません。

剛錬のアレディ……参ります……！」

戦闘態勢の完全に調ったアレディ達の闘志に、思わず笑みを溢すヴァナー。

だが、彼は自身の弟妹に振り返り、彼等にしか聞こえない声で、何事かを最後に話し合った。

「……ヘラ、ジョームよ。……この戦い、勝敗に意味は無い。だが、出来る事なら……勝つ！　分かっているな……？」

「当たり前だろ、アニキ！　負けるつもりなんてハナからねェぜッ！！」

「そうだよ、アニキ。どうなるのか……この目で見たいしさ。」

「……うむ、そうだな。」

（何だ……？　今、何を話していた……？）

（……相変わらず……何とも、何とも……だねぇ。）

各々の想いも入り混じり。

悲しき戦闘は、こうして幕を開けた。

第参拾話【世界を貫く沙羅双樹～鬼哭賛歌～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

これでちゃんと２３人分の～Ｂａｔｔｌｅ　Ｘ～は終わりました。

最後の～Ｂａｔｔｌｅ　Ｘ～を書いた『第貳拾参話【轟き、覇壊せし者～紅い阿修羅～】』から、

凡そ7話振りで完成（？）です。ふう……何とか計算通りに終わってくれた。

次話は、ガンド三兄弟とのバトルです。果たして、彼等の運命や如何に……！

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、御待たせ致しました第五回目！　私の技構成　錫華姫の回です。

では、前回（四話前）同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

Ａ：邪鬼銃（ジャキガン）・弾鎖（ダンサー）→邪鬼銃・精霊舞（セレブ）→邪鬼銃・封印破（フィーバー）→邪鬼銃・精霊舞→邪鬼銃・封印破（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：邪鬼銃・騎駆（キック）→邪鬼銃・精霊舞→邪鬼銃・騎駆→邪鬼銃・精霊舞→邪鬼銃・騎駆（消費ｃｏｍ１４０％）
Ｃ：邪鬼銃・封印破→邪鬼銃・精霊舞→邪鬼銃・封印破→邪鬼銃・精霊舞→邪鬼銃・封印破（消費ｃｏｍ１１０％）

です。ええ、御覧の通り、ガッツリエロセレブコンボです。
技構成＆支援＆援護次第では、たった一人で、最大３９０ｈｉｔオーバー＆１００％ゲージ回収は御手の物。
上手くいけば、単独で４００ｈｉｔすらも可能な、覇龍の塔では必須極まりない我等がズンズカ姫です。
まぁ慣れてくれれば、ウツボ姫がいなくても塔制覇は結構余裕なんですが。
菓子やアイテムをフルに使えば、例え味方がどんな組み合わせだろうと、
最上階でも二ターンで殲滅出来ますからね。

とまぁ、それはさておき。
基本的に錫華の技は、どれも重量級には高揚無しには其の儘では使えないと思われがちです。
所がどっこい。上記の様な、極端な私の組み合わせでも実は相手が重くても全くの無問題なのです！
それ所か、錫華は寧ろ高揚が無い方がヒット数が激増するので、使うと却ってダメージが減ってしまうのです。その分、非常に安定はするのですがね。

例えば封印破。これは、初撃が７ｈｉｔ。次の突進が同じく７ｈｉｔ。そして右腕のガトリングが８ｈｉｔ。
此処迄は一緒です。注目は左のガトリング。普通に使えば７～８ｈｉｔ。時折１０ｈｉｔする事があります。
ですが、これを重量級に高揚無しで使うと、１２ｈｉｔします。つまり、７＋７＋８＋１２＝最大３４ｈｉｔするのです。
因みにＴ－ｅｌｏｓの支援と精麗舞を組み合わせて使う、通称エロセレブ。これが、最大７１ｈｉｔします。

つまり、私のＣの組み合わせの場合なら、３４＋７１＋３４＋７１＋３４＝２４４ｈｉｔ。更に援護を加えると……。
因みに、ほかの援護はネージュは２０ｈｉｔ。神夜は２１ｈｉｔ。
小牟やアク＆ミィが１９ｈｉｔです。
実はＫＯＳ－ＭＯＳが味方の中では２５ｈｉｔと一番多いのですが、彼女の援護は重い敵相手にはフルヒット出来ませんので今回は除外です。

更に小牟の援護が使える場合のみ、精麗舞→封印破→精麗舞→封印破→精麗舞という荒業も出来ます。
こちらの方がヒット数も増え、より夢の４００ｈｉｔに手が届き易いです。
但し、こちらの場合でより完璧を目指すのであれば狙えるのは、小牟の援護による精麗舞を最後にし、
尚且つ、アレディやＫＯＳ－ＭＯＳの様にギリギリでもコマンドが間に合う援護か、
アク＆ミィの様に余裕で間に合う援護が、小牟の援護の前後にある場合のみです。

さて。此処で一番の問題は、どうやって重量級を高揚を使わずに落とさずに全部繋げられるか、です。
これは、実はちょっとしたコツと勘と、若干の運もあります。
先ずは簡単なものからで、封印破。これは、敵の足元を掠る様に撃つとほぼ確実にフルヒットします。
少し早過ぎると最初が４～５ｈｉｔぐらいになりますが、逆にそれならば確実に拾えます。
落とす可能性のあるタイミングは、突進する際。その間に若干の準備動作が入りますので、
余り下過ぎると、その間に落としてしまい、強制回避という泣くに泣けない事態になります。

次は、騎駆。これは基本的には重さには然程関係無く、狙う場所は錫華の斜め左上。
これは特に、早いと２００％落としてしまう技ですので、タイミングと攻撃範囲は使い続けて慣れて下さい。

それから、錫華の攻撃の要のエロセレブ。
これの最大ヒットを狙う際に必要なのは、計算、勘、反射神経……
そして、何と言っても勇気と度胸。
狙う場所は……戦闘画面時の床がありますね？　その床の奥向きに途切れている横線がありますね？
ええ、そうです。狙う場所……目標は其処です。
其の線を境にして、落ちてｏｒ吹っ飛んで来た敵の身体の、大体半身程が埋まった時！
その時にＴ－ｅｌｏｓを呼び出し、それと同時に精麗舞を発動して下さい。
その時に２２ｈｉｔすれば、大成功です。タイミングさえ合っていれば、それで７０ｈｉｔします。

ですがもし、後１ｈｉｔ欲しいという私の様な欲張りな其処の貴方！
その場合。狙う場所は、地面スレスレです。
それも、敵の高度・落下速度・重さや接地面積の差異を全てほぼ完璧に計算した上か、
長年プレイし培って来た勘の何れかが前提での、完全な度胸試しです。
（三種類の重さの中でも、表示はされませんが更に細かい区別があり、
　尚且つそれぞれの敵で接地面積迄も違いますので、それらも全て見極めなければいけません。）

そして一番難しいのが、邪鬼銃・弾鎖。これは、私も未だに良く失敗します。
個人的な成功率は大体３０～４０％程度。ですので、もし弾鎖を使う場合は初撃に使う事を御薦めします。
まぁ、抑々（そもそも）基本的に錫華が味方の中でも一番ＳＰＤが早く、大概は一番手になれる為、
敵のＥゲージが溜まって涙目、と言う事は先ず滅多に無いと思いますので、安心して失敗して下さいｗ

狙う目標は、弾鎖が当たるギリギリの箇所を出来るだけ早く当てる事。
それで、敵が半身程度浮き上がれば成功ですが、本の僅かしか浮き上がらなかった場合は失敗です。
その際は、直ぐに次の援護か支援に繋げられる援護でカバーして下さい。
もし、先に援護を二回使ってブロックを割った場合は、
諦めてその儘一度落とすか、エロセレブ一回分を諦めて下さい。

仮に一度落としてしまったとしても、強制回避が発動しなければ、大体１３ｈｉｔ程度は続きますので、その儘エロセレブコンボに繋げて下さい。
私のＡの様なコンボの場合でも、最大２１０ｈｉｔ＋弾鎖分は稼げますから。
それで魔破邪（マハージャ）を発動すれば、概算でも３３３ｈｉｔはいきますからね。十二分と言って差し支えないでしょう。

大体、上に打ち上げる攻撃の後に使った方が、個人的には成功率が高い気がします。
もし横に吹っ飛ばす攻撃の後だとしても、高めに吹き飛ばす攻撃の方が遥かに無難です。
例えば、アレディやネージュの様な攻撃。
逆に、ハーケンや零時の様な打点の低い吹き飛ばし攻撃の後は、滅多に成功しません。
単に私の腕が鈍（なまく）らなだけかもしれませんが、
零児やハーケン達の攻撃後の成功回数は片手で数える程度しかありません。

因みに、錫華の援護：邪鬼銃・闘麗印（トレイン）は、重い敵の方が圧倒的にフルヒット（２１ｈｉｔ）し易いです。
それどころか、重い敵相手の場合のみ、ヒット数が2~3ｈｉｔ増えますので非常に御得ですｗ
普通の敵にフルヒットさせるには、極力引き付けながら速度を計算した上で落下する直前で出す事です。
更に、錫華の援護はブロック割りとしても優秀で大概の敵は割れます。
流石にハーケン程のブロック割り能力はありませんが。

但し、少し堅い敵の場合は、割ったほぼ直後に落としてしまいますのでフォローを忘れると悲惨です。
気を抜かずに、慎重に見極めて下さい。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は、私の嫁の小牟の技構成です。
御楽しみに！！

第参拾壱話【互いの最終手段（ラスト・リゾート）～狩人たちの挽歌～】（前書き）

現時刻（１６：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６１７，３７９アクセス　ユニーク：２１５，７６１人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、不死桜内部・中編～後編です。

この話から、ほぼ毎回戦闘が入ります。……実は可成り大変な件ｏｒｚ

そして、小牟の解説を書き過ぎて、後書きだけで７０００字超えた件。つまり、実質１８０００字程？
だが、私は謝らない。後悔もしていない。というか、寧ろまだまだ足りないで御座るよ、後藤氏（うじ）。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾壱話【互いの最終手段（ラスト・リゾート）～狩人たちの挽歌～】

ｓｉｄｅ：ヘラ・ガンド戦

「じゃ、さっさといくよ！　喰らいな……死者の魂さ！　デッド・ソウル！！」

「きゃっ！」「危ない……！」「ニャんとっ！？」「回避行動に移ります……！」

問答無用で纏めて攻撃して来たヘラ。だが、辛うじて誰も直撃はしなかった様だ。

反(かえ)って、回避しなかったメンバーでヘラに攻撃を仕掛けた。

「御願い！　白騎士、舞って！」「闇騎士よ、撃ち貫くがよい。」「「……！」」

「わらわも続けて打ち捲るぞよ。邪鬼銃王！　ばら撒くがよいよい♪」

「わわっ！　あんたら、一人に寄って集(たか)って酷いと思わないのかい

！？」

「……それを言われるとちょっとツライぜ。」「アクセル……油断はいけませんの。」

「アルフィミィの言う通りです、アクセル。Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ最大出力。発射！」

「ちっ……やっぱ、ダメか。取り敢えず……これは避けないとねえっ！！」

残念ながらヘラの姑息な籠絡は効かなかった様だ。だが、本人も駄目で元々だったらしく、

舌打ちをしながらも、ＫＯＳ－ＭＯＳ達の攻撃を何とか躱し続けていた。

だが、流石に避け続けるのは性に合わなかった様で……。

「……このっ……！　あたいを舐めんじゃないよっ！！　ヘル・スペル！」

「！？　いけない！　……きゃぁぁっ！！」「神夜！！」「神夜ちゃん！」

「序でにまとめて喰らっちまいな！　デッド・ソウル！！」

「しまっ……！」「くっ……！　損傷度３０％……戦闘続行可能。」

「さあ……死出への旅路だよ！！　ナグルファー・ボヤージ！！！
ヨーソロー！！」

「！？　防御態勢に……！　うあああっ……！！」「ＫＯＳ－ＭＯＳ！？」「ＫＯＳ－ＭＯＳさん！！？」

ヘラの攻撃から皆を守る為に庇ったＫＯＳ－ＭＯＳが、直撃を喰らい吹き飛ばされてしまった。

思わず声を荒げたＭ・Ｏ・Ｍ・Ｏ・と、回復道具を持っていた琥魔はＫＯＳ－ＭＯＳに駆け寄り治療を始め。

同じく声を上げたＴ－ｅｌｏｓは一人で、その怒りの儘ヘラへと突撃した。

皆はそのフォローに回りながら、一気呵成に攻勢に出た。

「……貴様ぁっ！！　ＭＡＧＤＡＬＥＮ！！　Ｌ・ＢＬＡＤＥッ！」

「おわっと！　余り激昂するのはよくないんじゃないかい？　隙だらけだよ！
デッド・ｓ「おっと、そいつはどうかな？」！？　しまっ……！」

「ヨミジですの！」「玄武剛弾！　いっけぇー！！」「くっ……！」「ヴァイスリッター……！」「アーク！」「追撃だ（ですの）！！」「ぅあっ……！！」

「まだまだいくぞよ！　邪鬼銃王！　美糸である！　続けて、押し出すがよい！　封印牙（フィンガー）！！」

「もっかいだ！　舞朱雀！」「バッサリですの。」「ああっ……！　はぅっ……！！」「烈火刃だ！」「らいごうえ。」「オーケェーイ！！　神夜ちゃん！」「そんな……！！」

「神楽天原の剣……楠舞神夜、参ります！」

そして、ヘラが吹き飛ばされた先には、神夜が斬冠刀（かたな）を構えて待っていた。

「火鼠の大衣！」「あうっ……！」「俳浪華札（はいろうはなふだ）！　燕の介！！」「しまっ……！　そんな……！」「龍顎門（りゅうあぎと）の珠！　雨刺鋼！！」「ああっ……！　うぁっ……！！」

「一擲（いってき）を成して乾坤（けんこん）とします……！

吹き荒れよ、嵐っ！！　阿修羅の如く……！！

楠舞一刀流秘伝――――阿羅刺！！！」

「そ、そんな……！　あ、あたいが……このあたいが……！！！」

神夜の阿羅刺によって斬り吹き飛ばされたヘラだったが、

辛うじて立ち上がるだけの力はあった様だ。

だが……。

一方その頃。弟のジョームの方は……と言うと。

ｓｉｄｅ：ジョーム・ガンド戦

「てめェら、まとめて喰らえやァ！　ポイズン・ブレス！！」

「毒霧だと！？」「ウィザードかバズソーじゃあるまいに！！」

「あん、流石にこれは私でもちょっとヤバいわ、ね……！」

「チッ……！　アシェン、ファントム！」「了解！　アルト！　先に行け！」「……！」

ジョームが吐き散らした毒霧を、何とか皆吸い込まずに済んだが、再度のそれを警戒してか、真っ先に毒には何の効果も持たないアシェン達を向かわせた。

「ハッ！　そんな豆鉄砲がオレさまに効くワケねェだろうが！！　オラァァッ！！　グレイテスト・キャップ！　潰れろオォォッ！！！」

「「……！！？」」

「アルトッ!?　ファントム!?　……くっ！　ならば、これならどうだ！

スラッシュリッパー！　ドラゴン・スケイル!!」

「そんな掠り傷が何だってんだよォッ!!　オラァァッ!!!」「!?　ぐあっ!!」

「くっ……！　アシェンッ!!」

「こうなったら、私が爆風で一気に吹き飛ばしますわ！　皆さん、お退きなさいっ!!」

ナハトとファントムでの攻撃も、ジョームの頑丈な身体には余り期待した程の効果は望めず、

それ所か、彼の反撃によって二体ともあっさり退けられ、

アシェンも続けて吹き飛ばされた様子だ。

相変わらず毒霧の向こうでは戦況が見えず、忸怩(じくじ)たる思いだったが、

この際覚悟しろとばかりに、ドロシーが自身の爆弾を蹴り飛ばし、

その爆風で毒霧を拡散させ、

それと同時に片腕が使い物にならなくなったアシェンが、

霽(は)れた霧の向こうからジョームの攻撃によって、吹き飛ばされて来

ていた。

「!?　アシェン!!」
「か、艦長……すまんこってす。……ぐっ……!」
「ハーケン、アシェンはワタクシに任せて、アナタはあのデカブツを何とかなさい!」

「……分かった。行くぜ……レイジ!」
「ああ、行こうか、ハーケン!」

「ヘッ!　御託はいいんだよ……!　さっさと掛かって来いやァ!!」

怪我したアシェンをドロシーに任せ、ハーケン達は改めてジョームに向かっていった。

「なら、さっさといくよ!　バブル・カノン２ｎｄ!!」
「?ッ!」「白金(プラチナ)!　銀(シルバー)!」
「グッ……!　この……!　邪魔くせェッッ!!　…!?」

「それなら、こいつはどうだい?　セブン・スタッド!!　フェイクリッパー!
テキサス・ホールデム!!!」「ぬ……グアァッ!!　や、やるじゃねェか……!」

「まだだっ！　快刀乱麻！　火燐・弐の型！　不知火の型ッ！！
電鋼刹火ァッ！！」
「グハァァッ！！！　……こ、この……オレをナメんじゃねェ！！
グレイキャット・スラップ！！！」「しまっ……！？　ぐあぁぁっ！！」「零児！？」

ハーケンと零児が、三人からの援護を受けジョームの懐に入り込み、連撃を喰らわせたが、それでもまだジョームは元気な様で、二人を振り払って、反撃仕返して来た。

その直撃を喰らって吹き飛んだ零児には目もくれず、続けてハーケンに狙いを定めた……が。

「次はてめェだ！！　神だろうと殺してやるぜェ！　押し潰れろォッ！

ゴッド・マーダー！！！　ブッハァーーッッッ！！！」

「マズイ……！？　ファントム！？」「……！！」

ファントムがハーケンとジョームの間に入り、身代わりとなってその攻撃を喰らい受けたのだ。

だが、流石に碌な防御態勢も取れず、文字通り直撃を受けたファントムは、

全身から紫電を上げており、とても戦える状態では無い事は、確定的に明らかだった。

「ヘッ！　中々やるみてェだが、まだまだあめェな。そんな事じゃ、オレ様には勝てねェぜ？」

「それなら、これならどうでい！　そうりゃぁっ！！！」「な！？　アガァッ！！？」

完全に油断していたジョームに、横から飛び出たロアが後頭部に強烈な蹴りを御見舞いした。

その隙を逃さず、透かさず零児達が詰め寄り、一気に猛攻を掛けた。

「今じゃ！　波乗の型！！」「水の次は炎だぜ！　ファイヤー・ドラゴン！　燃え尽きろ！！」

「グ……アァッ！？」

「そらっ！　バブル・カノンッ！」「ウィッチ・ボンバーですわっ！」「グアァッ！！！」

「！？　ドロシー！　アシェンは？！」「応急処置は済ませましたわ！」

「済まんこってす、艦長！　追撃する……！　ディバイン・ランサー！　吹き飛べッ！！」

「ヌガアァァッ！！！」

応急処置が済んだアシェンの追撃も加わり、尚々ジョームの攻撃する暇を与えず、

怒涛の勢いで連撃を加えるハーケン達。

「アルト！　リボルビング・バンカーだ！！」「……！！」「グアアッ！！」

「あん、続きは任せて♪　居合五連！　氷！　焔！」「グ……くそおっ！！」

「まだじゃ！　破天光！　ハアアァァッッッ！！！」

「今だ！　柊樹（ハリウッド）！　金（ゴールド）！」「ジャック・ポット！　クレイモヤもだ！！」「……！」

「？っ（くろっち）！」「爆弾も喰～らえ～ですわ！」「おっと、あたしのカノンも喰らいなよっ！！」

「ミサイル、いっちゃえ！」「ホワイト・ファング！　全部喰らい付け！！」

「あ……アガアアアッッッ！！！！！　て、てめェらァァァ……！！！」

小牟の結界の中に封じ込めたジョームに向かって、全員で同時攻撃を仕掛け、

中で身動きの出来ないジョームは、物の見事に全弾直撃し、

流石の頑丈さを誇っていた彼にも目に見えてダメージが与えられている様だ。

ここで、手を緩めずにもう一押し……いや、もう二押しをしておかねば……！

「小牟！　そのまま行くぞ！　森羅万象だ！」「合点じゃ零児！！　ハアアァァッッ！！！」

「護業抜刀法奥義――――――！！

木よ散れ！

火よ渦巻け！
金よ吼えろ！
土よ轟け！

水よ疾(はし)れ！」

「ん～♪　このバッサリ感が最高なんじゃよ♪　どうじゃ、零児？　わしに惚れ直したかの？♪」

「あ……が……！　ガアアアアァァァ……！！！」

色んな意味で叫びたくなる攻撃を喰らい、吹き飛んだジョームを待っていたのは、

ハーケンによる止めの追撃だった。

「おっと……おねんねには、まだ早いぜ？　さあ、こいつで終いだ！！　斬り散らすぜ！」

「ヌガアアアッッ！！？」

「ロングトゥーム……最大出力……！　いっけえええええぇぇぇツツツ！！！！！」

「が……あ……！　ガアアアアアアアァァァァッッッツツツ！！！！！」

その巨体が、遥か向こうまで吹き飛ばされる程の衝撃。

だが、それでもまだ完全に止めを指すには至らなかった様で、

息があるどころか、まだ立ち上がって戦おうとしていた。

だが、それは……。

そして、その頃。残りの長兄、ヴァナーは、と言うと……。

ｓｉｄｅ：ヴァナー・ガンド戦

「行くぞ、アレディ・ナアシュ。そして、異界の闘士達よ……！」

「むう……！　剛錬のアレディ……参る！　ハアアッ！　機神連拳！」

「甘いっ！　グレイブ・ウィップ！！」「くっ……！　覇皇両断刀！！」

「そこだっ！　ヴォーン・ストリーム！！」「しまっ……！　ぐあっ……！？」

「おっと！　こっちも忘れないでよね！　ブロンテ・クラフト！いっちゃえー！！」

「フェイク！　協力して！　ツイン・レーザー！！」「……！」

「むうう……！！！　その程度で、私をどうにか出来るとでも思ったか！！」

最初にアレディとヴァナーによる一騎打ちの様相を呈していたが、
アレディが押し負け、吹き飛ばされた後に、キュオン達による遠距離からの反撃をしたが、
それを事も無く耐え切ったヴァナーに、ならば、と更に接近戦で追撃した。

「それなら、こいつはどうだい？　シュナーベル・セイバー！」
「悪くないな。だが、まだ甘い！」「な！？　アタシのセイバーを鞭で！？」
「ああら！　後ろがガら空きよ！」「それはどうかな？　そうらぁッ！！」
「！？　しまっ……！！」「！？　ニャァんっ！！」

瞬時に真後ろに出現し斬りつけたヘンネだったが、即座に反応したヴァナーの鞭で絡め捕られ、
その真後ろから更に蹴り込んで来たカッツェだったが、
剣ごとヴァナーの鞭で投げ付けられたヘンネに巻き込まれ、二人纏めて吹き飛ばされた。

「それなら、こいつはどうだ！　リボルバー・ライフル！！」「ぬうっ！？」
「そこだ！　ファイナルエンドォォッ！！！」
「やるな……！　だが、それでもまだ甘いッ！！
この鎖、引き千切れるか……！！　アンチェイン・ストライド！！！」
「何ッ！？　ぐあああッッ！！！」「…！？　マーク殿ッ！！」
続けてマークハンターが飛び出し、ヴァナーに攻撃を仕掛けた。
一応ダメージはそれなりに通ったらしいが、
それでも致命傷には遥かに及ばず、逆に吹き飛ばされたマーク。
鎧には所々罅（ひび）が入り、本人も起き上がるのが困難な程のダメージを負っていた。
「ぬう……！　ならば、我が道を切り開く！　デラックスマックスアックス！！！
ぬおおおッッ！！　全て爆散せしめんんッ！！！」

「ぐうっ！　流石はフォルミッドヘイムの王……その力、伊達ではないな。

だが、我らにも負けられぬ意地と覚悟があるのだ……！！

我が変幻自在の鞭……捌き切れるか！！　グレイプ・ウィップ！！　纏めて喰らええッッ！！」

「なっ！？」「きゃあああっ！！」「ぐおおっっ！？」「ウソォッ！？」「避け切れない……！」

エイゼルのリアクティブ・アーマーによる攻撃にも耐え切ったヴァナーが、

自身の鞭を縦横無尽に撓らせ、その場にいた皆に手当たり次第に振るわせて来た。

まさかの攻撃に、何人か直撃を喰らい意識を失ってしまった様だ。

「ぐ……！　流石は、ガンド三兄弟の長兄、ヴァナー殿……強い！！」

「か、感心してる場合じゃないでしょ……アレディ！」

「……分かっております、ネージュ姫殿。皆さん、御無事ですか！？」

「我は問題無い。だが……カッツェ、ヘンネ、キュオンは直撃を喰らった様だ。」

「マーク殿も、戦闘は不可能の様です……。」「ちょっと、流石に厳しくなったわね……。」

「どうした、アレディ・ナアシュ。そして、異界の闘士達よ。貴様らの実力はその程度か。」

現況を確認し、戦力の落ちた状態に少々冷や汗を流していると、まだまだダメージを然程負った様には見えないヴァナーが、言葉を掛けて来た。

アレディも何のと立ち上がり、改めて構え直して再度対峙した。

「何の！　まだまだ、戦闘（いくさ）は始まったばかり……戦いはこれからです……！」

「その意気だ。さあ、掛かって来るがいい！」

「言われずとも！　行くぞ、アルクオン！」「……！」

「む！　諸共に、暴風に巻き込まれるがいい！　ヴォーン・ストリーム！！」

「むぅんっ！　覇皇剛衝殻！！」「何っ！」「まだだ！　機神剛鉄甲！！」「くっ……。」

「今っ！　シルキィ・レース！」「しまっ！？　ぐっ……！」「毒りんごもお喰らい！　ド熱いのは如何！？　レッドホット・パンプス！！」「ぬぐっ……！　ぐあぁっ！！」

「更に燃やし尽くしてくれよう！　リアクティブ・アーマー！　最大出力！！」「がはっ……！！」

「なら、御次は冷たくして差し上げてよ？　グラス・コフィン！！　フェイク！　氷の棺ごと打ち砕きなさい！」「……！」「がはぁぁっ！！！」

右に左に、熱いのに冷たいのに。

流石のヴァナーも息も付かせぬ連続攻撃で、疲労の色が見始めた様だ。

だが、決して手を緩めずに、ここぞとばかりに更に攻撃は勢いを増していく。

「まだ終わりません！　その覇気、打ち砕く！　覇皇轟雷脚！！

ネージュ姫殿！」
「ぬああっ！？」

「宜しくてよ？　アレディ。フェイク！　行くわよ！　付いて来なさい！」「……！」

「それそれそれっ！　えいっ！　えいっ！」「……！」「ぐ……ぬ……ぐぅっ！」

「フィナーレを飾りましてよ？　ロイヤルハート・ブレイカーッッッ！！！」
「ぐあああああッッッ！！！！！」

更にアレディに蹴り飛ばされ、ネージュに滅多打ちにされたヴァナーが吹き飛ばされた先には、

既に覇気を高まり終えたアレディが待ち構えていた。

「はぁぁぁぁぁ……！！！　我が覇気よ……！　極限まで昂まれ……！！

轟覇機神拳んんん！！！」「ぬがあああ！！！」

「はあああッッ！！！　双覇龍（そうはりゅう）の名の下に！！！　我が機神拳は至高にして究極……！！」
「ぐ……！　が……！　がはぁっ！！！」

「はあああああぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！　真覇（しんは）！！　朧撃烈破（ろうげきれっぱ）ァアアッッ！！！！！」

「がっっ……はあああぁぁぁぁぁぁっっっっっっ！！！！！！！！」

アレディの渾身の一撃を喰らい、遥か先迄蹴り飛ばされたヴァナーだったが、

ボロボロの身ながらも、体中の気を掻き集めて必死に起き上がろうとしていた。

恐るべきは、その執念……いや、覚悟か。

だが、それは……既に予見していたのか。

覇気を高めていたアレディが、彼の前に立ち塞がり……。

そして、彼の攻撃の射線上には――――。

「覇皇の名の下に……いざ、参ります！

覇皇――――終極波動覇（しゅうきょくはどうは）！！！」

「ぬ……ぬぐあああ……ぬあああああああああぁぁぁぁぁッッッッッ！！！！！！！！！！」

「ッ！？　そんな……あ、あたいが……あたいが、負けるなんてぇぇぇッッ！！！！」

「が……ガアアァッッ！！！！　お、オレ様が、このオレ様ガアアアアァァァッッッッッ！！！！」

「これにて――――終極です。」

アレディの覇気の波動により、辛うじてまだ戦えたガンド三兄弟は、

その最後の闘志をも根刮（ねこそ）ぎ刈り取られ――――。

これにて、ガンド三兄弟との戦いは、終幕と相成ったのであった。

ｓｉｄｅ：不死桜内部　通路

滅多打ちにされ、倒れ伏し、膝を突きながら、辛うじて息をしている様子のガンド三兄弟。

同じく、肩で息をしているアレディ達が、そんな彼等を見下ろし、言葉を掛けた。

「終わりです……ガンド三兄弟。」

「そうだな……フフフ……。あの時の少年に……その仲間に……。敗れる事に……なろうとは、な……よく……やってくれた……。」

「は？　どういう……。」

「え……？　ガ、ガンドさんたちから、エネルギー反応！？　ぞ、

増大していきます……！」

そのM．O．M．O．の言葉を証明するかの様に、ガンド三兄弟の身体が突然光り出した。

そして、その光が徐々に……徐々に強くなっていった。

「ぐ……体が……熱い……！　アネ……キ……オレ……たち、は……。」

「ああ……負けちまったね……ジョーム。これで……あたいらの……役目は……。」

「我々も……最期のようだ……。だが、これで……更に『成長』は……進むだろう……。」

「……成る程な。アンタ達は勝っても負けても、構わなかった、と言う訳か。」

「え？　どういう意味ですか？」

「つまり。こいつらが勝てば、ハーケン達の魂を。負ければ自身達の魂を。

結局、どちらも捧げる事には変わりなかったって事さ。

それはつまり、最上部、使者の間で待っているリグも同様と言う事だ。」

カイトの説明を聞き、苦虫を噛み潰した様な顔をする一同。

だが、そんな彼等に訊ねるだけの……声を掛けるだけの時間はもう残されてはいなかった。

「……覇気が薄れていきます。もう、彼らは……。」

「アレディ、そしてその戦友達よ。待っているぞ……先に、な……。」

「アニキ、アネキ……へへ……終わっちまったなァ……。」

「今が……そうなんだね……アニキ……。」

「今まで……よく、やってくれた……。逝こう……ヘラ、ジョーム……。」

そう言い遺し、身体が光に包まれる三人。……だが。

「あ～……感動の演出をしてるとこ、悪いんだがな。

そいつは無理だ。」

その瞬間、光が完全に消え去り、三人の身体の傷はすっかり完治していた。

……当然、カイトの手によって。

「何……？！」「そんな……！？」「バカな……！？　貴様、一体何を……！！」

「何って……だから、お前達の傷を癒して、
あの独活（ウド）の大木に持っていかれそうだった魂を引き戻しただけだが？」

「まさか……！　あのヴェルトバオムの樹の力に抗える者など……！！？」

ヴァナーはその言葉を、最後まで発する事は出来なかった。

……カイトに睨み付けられ、闘気を叩き付けられたからだ。

「……ハァ。だから、あのな？

テメェラ如きの程度の低い常識とやらに俺を当て嵌めるんじゃねぇよ。

この俺が、あんな枯れゴミ風情に負けるとでも？　しかも抗うって何だよ。

この俺が、あんなゴミ屑風情より、位が下だとでも？　……抜かせよ、塵芥（じんかい）風情が。

不愉快などというレベルじゃねぇな……その罪、万死に値する。

御望み通り、芥子粒（ケシツブ）にしてやるよ。

ダーク！　喰らい尽くせ！！！」

そうカイトが言うと、三人の頭上に突如、巨大な真っ黒な穴が出現

した。
その穴は、彼等が何も言う間も無い程の物凄い勢いで三人共吸い込み、直ぐ様消滅した。

「さってと。んじゃ、さっさと使者の間に行きますか。」

「ちょ、ちょっと待って欲しいんだな、これが！　い、今のは一体、何なんだ？」

「何って……闇（ダーク）を応用して作った簡易・小型ブラックホール。奴等の目的は、ヴェルトバオムに魂を吸収させて成長させる事だ。つまり、その樹に何も喰わせなきゃいい訳だ。……要はそういう事さ。」

「成る程、つまり……どういう事じゃ？」

「さ～てな。それよりもさっさと行こうぜ～。俺はさっさと終わらせて、此処の温泉にざんぶり浸かりたいんだからよ。」

《マイスター。私も、防水加工して一緒に入れて下さいね♪》

「ダメだ。お前は絶対に、２００％覗きをするからな。」

《……何でバレてるしｏｒｚ》

「何故バレないと思ったし。お前を創ったのは他ならぬこの俺だぞ？　解らねぇ訳ねぇだろうが。
つーかお前、今ハッキリ認めたな？　覗くと明言したな？」
《……おのれ、上野介！　この恨み晴らさでおくあべしっ！！》
「……よし。やっぱどうやら、お前には再教育が必要不可欠な様だな。」
《いやー！　やめてー！　侵されるー！　私の記録内容（データバンク）に侵入される～！！》
そう言い放つと、カイト達は呆然としてる皆をいつの間にかさっさと治療し終えて置いていき、
相変わらずいつも通りの漫才を碧天と繰り広げながら、先へと進んだ。
ハーケン達がその事に気が付いて、慌てて後を追ったのは、
二人……基、一人と一冊の声が遠離（とおざか）り、聞こえなくなってきてからだった。

第参拾壱話【互いの最終手段（ラスト・リゾート）～狩人たちの挽歌～】

ｓｉｄｅ：不死桜　使者の間

あの後、カイトの後を慌てて追い縋（すが）り合流した一行はその儘、使者の間へと急行した。

其処には、先程からカイトが言っていた通り、

リグが残り最後の一機である百夜と共に待ち構えていた。

「やはり、貴公らであったか。アレディ・ナアシュ。そして……救世主（メシア）よ。」

「よう、リグ。少しは強くなったかい？」

「……修練は積んだ。だが、貴公に勝てるかと問われれば、否と言わざるを得ないだろう。」

「十分だ。それなら、アレディの良き相手となるだろう。立ち塞がる壁となるには十分だ。
……まさか、お前とてその程度の修練でこの俺に勝てるとは思ってはいないだろう？」

「……無論。」

「ならばいい。傲慢さは己が道の妨げとなる。
敵を知り己を知れば、百戦危うからず。
敵を知り己を知らざれば、一勝一敗す。
敵を知らず己を知らざれば、戦うごとに必ず敗れる。
俺の地球（ほし）での偉人の言葉だ。篤と胸に刻め。」

「確と承知。」

どうやら、二人の話し合いはそれで終わった様で、カイトは後ろに下がり、

リグは改めて、アレディ達の方へ身体と視線と、その闘志を向けた。

カイトは今回の戦いも手を出さずに傍観に徹するらしく、リグもそれを承知している様だった。

「待たせたな、アレディ・ナアシュ。」「……。」

「リグ・ザ・ガード……ここで何をしているのです？」「百夜……！　最後の一機か……ッ！」

「……そうか。やはり、ガンド三兄弟は敗れたか。……彼らはよく戦ってくれた。
その英霊は、ヴェルトバオムに更なる力を与えてくれるだろう。
……そう、ヴェルトバオムに吸収されていたのならば……な。」

「流石に気付いたか。番人の名は伊達ではないな。」

「……無論だ。もしも、彼らがヴェルトバオムに召されたのだとしたら、この場を通っている筈。
だが、貴公らが来るまで、そのような兆候は全く無かった。
故に、彼らはまだ死んではいない。だが、敵に背を向けるような者たちでもない。
恐らくは、救世主（メシア）に何かされたのであろう。……そう考えるのが、一番妥当だ。」

「ああ、大正解だ、リグ・ザ・ガード。アイツラは俺が生きた儘、捕獲している。
勿論解っているとは思うが……。」

「……うむ。我も敗れた場合、貴公に捕えられるのだろう？　彼らと共に。」

「その通りだ。よかったな？　アグラッドヘイムの凋落を共に目の当たりに出来るぞ？」

「……それをさせぬ為に、今我らがここにいるのだ。」

カイトとリグが何の会話をしているか、朧気（おぼろげ）でしか解らない一行。

だが、何をすべきかは、誰に何を聞かずとも解っていた。

彼が何を言わずともその態度が、その溢れ出させている闘志が全てを物語っていたからだった。

「……この巨木は、我らの母なる樹と良く似ている。

故に、使わせて貰おう。……この世界の苗床として。」

「……話を聞く限りじゃ、何だか面倒な上にヤバそうだねえ……。」

「この不死桜で、勝手極まりない事はさせません！！」

「……リグ殿。この場所と、貴方方の世界は繋がっている……そうですね？」

「……そう。今この木は、我がアグラッドヘイムと繋がってい

る。」

「成る程、ね。百夜ちゃんを連れて来ているのは、その同調を安定させる為ってワケ、ね。」

「……その通りだ。今、ここで散れば、その魂はヴェルトバオムに送られる。

……『使者の間』と言ったか。ここを通って、な。

我らがアグラッドヘイムの中枢、シュテルベン・シュロスの中央に聳(そび)え立つ、魂(ヴェルトバオム)の樹へと。」

「ハッ！　成る程ねえ。私たちが死のうと貴様が死のうと、結局魂は送られるって寸法かい。」

「……そういう事だ。全ては、高純度のシュラの魂が手に入らなかった故。

そして、アインストという妖物共の魂が手に入らなかった為だ。」

そのリグの言葉には、誰もが如実に反応した。

その彼の真意に、思わず皆、一瞬身震いしたからだった。

「何……？！」

「冷気を司るシュラの一派……そしてアレディ、貴公らの一派……。
あの戦いで何れかの魂が手に入る筈だった。そして、アインストの強大な魂も、だ。」

「成る程……アレディめが連中を逃がし、カイトめがその魂を消したから……。」

「そうだ。まさか、どちらも生きたまま終結を迎えるとは思っていなかった。
……そして、その魂が掻き消されるとも、な。」

「OK、予想外アーマー。……もし、俺たちかゲルダたちの内、どっちかのソウルが手に入っていたら、相当危なかったって事か。」

「……そうみてえだな。アレディ……やっぱり、あんたは正しかったみたいだぜ?」

「ありがとうございます、コウタ殿。」
「……どうやら、流れはおれたちにあるみたいだな。……ま、後はなるようにならあね。」

どうやら、それでもう御互い話す事は無くなった様だ。

此の場に充満していた闘気が、更に満ち満ちているのが、傍目にも判る程だった。

「リグ・ザ・ガード。貴方を討ち果たし、この木を守ります。
そして、波国より始まりし、貴方との因縁……！　ここで断ちます……！！」

「いいだろう、シュラよ。……ここで、諸共にヴェルトバオムの糧となるがいい。」

そして……各々の覚悟を決めた最終決戦。

その序幕が上がったのであった。

第参拾壹話【互いの最終手段（ラスト・リゾート）～狩人たちの挽歌～】（後書）

如何でしたでしょうか？

では、今回も作中の言葉の解説です。

1．乾坤一擲（けんこんいってき）について。阿羅刺（あらし）の際、神夜は作中の様に言っていますが、これは実は誤った使い方です。

乾坤一擲。乾から坤まで、つまり天地を一息で貫く。単純な意味としては、その様なものです。

「乾」・「坤」共に、八卦の言葉であり、それぞれ最初と最後に当たります。

乾（けん）・兌（だ）・離（り）・震（しん）・巽（そん）・坎（かん）・艮（ごん）・坤（こん）。これが八卦です。詳しい説明はしません。大変ですので。

一番判り易いのは八卦盤でしょうか。

これはそれぞれ対極にあるものが、真逆の位置に書いてあります。

それを見れば一目瞭然なのですが、乾と坤は上と下に書いてあります。

つまりそれを一刀にて斬るという事は、天地を一息で真っ二つにするという事に他なりません。

因みに。一擲の「擲（てき）」とは、擲（なげう）つと読み、意味は其の儘。読んで字の如し。

己が身を、一身に擲って何事をも成す。その様な意味です。

2．カイトが作中で言っている、『敵を知り～』は、孫子の兵法書の有名な言葉です。
　因みに、こちらの著者は孫武（そんぶ）であり、同じ孫子にして他の著者の孫（そんぴん）？とは別人です。
　正しい文は、『彼を知り己を知れば百戦殆（あや）うからず～』となるのですが、まぁここは敢えて解り易く。
　意味は読んで字の如しですね。解説の必要は然程無いかと。
　え？　なら己を知って敵を知らない場合はって？　それでは、戦いには抑々（そもそも）なりませんよね。

次話は、百夜＆リグ戦ｆｉｎａｌです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、続けて第６回目！　私の嫁の技構成　小牟　の回です。
小牟可愛いよ小牟。
では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。小牟可愛いよ小牟。

Ａ：白金（プラチナ）・竜巻の型→二丁・刺鎧閃（しがいせん）→鬼門封じ・破天光→小牟魔術（シャオムウウィザード）→仙孤妖術・龍虎乱砲（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：鬼門封じ・破天光×５（消費ｃｏｍ１５０％）
Ｃ：白金・竜巻の型→小牟魔術→仙孤妖術・龍虎乱砲→鬼門封じ・破天光→朱雀刀・波乗の型（消費ｃｏｍ１１５％）

です。一番厄介なのは、何と言っても水憐・参の型と朱雀刀・波乗の型ではないでしょうか。
参の型を落とす方は、大概二撃目がスカって落とす場合が多いと思います。
重い敵には適当に出しても必ず当たりますので、対策が必要なのは寧ろ普通の重さの敵。
こういう相手は大体中間より上辺りで拾うとまず確実にスカります。

つまりは、そこ以外で拾えばいいんです。地面スレスレで拾うのが確実でフルヒットも出来ます。
逆に早過ぎて出せば、ヒット数は落ちますが二撃目・三撃目が当たり辛うじて拾う事は出来ますので、
地面スレスレが苦手・怖いという方は、威力が低い事前提で、逆に早目に出してみては如何でしょうか？

次に波乗の型。前作よりも使い難くなってるこの波乗りピカチュウは、ちょっとした慣れが必要です。
普通の敵には極力低めを狙います。狙い所は最初の波柱ではなく、次の小さな波。
それの先端を当てるつもりで出すと丁度イイ感じで当たります。

問題は重い敵。これは、重いからと高い位置で拾うと、逆にほぼ確

実に落とします。
そして、当然低過ぎても確実に落とします。では、どうすればいいか。
私が個人的にいつも狙っている場所は、敵の足元。
そこに先程同様、最初の波柱ではなく小波を当てる様にすると、大体９０％ぐらいの確率で拾えます。
真上よりも、横に吹っ飛ばした後の方が拾い易いかと思いますので、一度御試し下さい。

それから、タイミングが難しいのが、連続攻撃時の竜巻。
攻撃のタイミングが遅く、僅かでも遅れると一発も当たらないし、早過ぎると高く打ち上げ過ぎて、援護か支援が間に合わない限り拾えないという曰く付きの技。
私のいつも交代させるタイミングは、剛衝殻より少し後。敵が落下し始めるかしないかの前後。
その差異は敵の落下速度によって異なりますが、基本的にはアレディィよりも少し後の方です。

アレディの剛衝殻は拾える範囲がとても広いので、どんなに早くても大概拾えますが、
竜巻は、敵に擦る様に当てないと拾えない為、そういうギリギリのポイントを見極めるしかありません。
まぁ、一番無難な方法は、最初に刺鎧閃を持って来れば、まず確実に拾えますので、
連続攻撃を主体に為さっている方は、そちらをとても御勧め致しますｗ

私が竜巻を初撃に持って来ている最大の理由は、
実は、竜巻は最初の攻撃前にキャンセルすると１０％ゲージが溜ま

るんです。
しかもその後は、（私の場合）刺鎧閃ですので、ブロック割りにも最適ですし、
その後誤って落として強制回避が発動しても、消費するのは精々２５％～５５％。
幾らでも挽回が効きますし、何より刺鎧閃は援護・支援もし易いので、尚更です。
というか、慣れて来ると刺鎧閃よりも竜巻の方が拾い易くなるという謎の怪現象が（ｒｙ

因みに、小牟魔術→龍虎乱砲は鉄板のコンボです。是非一度御試しを。
魔術と龍虎は共に、本当に地面スレスレで拾うとフルヒットします。
逆に重い敵相手には、それぞれ対応方法が異なります。
龍虎の場合は大体斜めの線を相手の腹目掛けて当てる様に撃つと、全弾ヒットし易いかと思います。
魔術の方は、爆風の攻撃範囲が意外と広いので、或る程度高くてもちゃんとしっかり当たりますので、
低めに拾わない事だけを心掛けていれば、自然と拾えます。普通の敵には逆にダメですが。

何より魔術には、気絶効果が付いていますので、気絶耐性を持っている相手で無い限りは、
実際に想定されているダメージ以上が狙えますので、是非共コンボに組み込むことを御薦め致します。
更に龍虎には麻痺属性が付いており、気絶か麻痺かの状態異常にさせ易いのもこのコンボの魅力です。

さて。ここで一番注目したい技が、鬼門封じ・破天光。
これと後に説明させて頂く援護が、小牟がヒット数に最大の貢献をしてくれるという何よりの理由です。
援護については後程記述するとして、まずはこの破天光について。

破天光を私が一番推す理由は、その特性。これは、相手を長い間空中の結界の中に固定させて、
最後にその結界を爆破し、敵を吹き飛ばすという技。なのは、皆様御存知ですね。
そう、ここで注目すべきは、「長い間」「空中の結界の中に固定」させている事。
つまり、その間は殆どの攻撃がほぼ確実に全弾ヒット出来るという訳です。

唯一相性が悪いのは、例えばアルトの支援の様な地面に強制的に叩き付ける技。
これらの場合だと、結界の外に押し出されてしまい、却ってダメージが激減してしまうのです。
そう、基本的にはダメージとヒット数が激減するだけ。まずタイミングさえ出鱈目(でたらめ)で無ければ、
例え強制的に叩き付ける技であっても、まず確実に落とさずに拾えるのが、最高に優秀な技の所以です。

では、どんな技が特に相性がいいか。
私が遊んでいる間に色々と試した結果としては以下のメンバーが特に相性がいいかと思います。
『零児・神夜・アクミィ・ＫＯＳ－ＭＯＳ・Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．・沙夜・カッツェ。』

他にも、タイミングさえ見極められれば、同様に使い勝手のいいキャラは以下のメンバー。

『ハーケン・アークゲイン・ロア・ヘンネ・琥魔・ドロシー・アン・マークハンター。』

逆に相性が悪いのが、それ以外。タイミングが絶望的に合わなかったり（特に結界破壊後の攻撃）、強制的に結界の外へ押し出したり、確実に落としたりヒット数が激減するので、御気を付けを。

この中でも、以前も書きましたが、零児との相性が最高に抜群です。結界の爆発と全く同時に最後の零児の斬撃が綺麗に入りますので、見た目もパーフェクトです。

後、タイミングが少々厄介なのが、神夜とハーケン。

この二人は特に、結界発動と同時に攻撃すると、却ってダメージが減ってしまいます。

ですので、この二人の場合は、逆に発動してから少し間を置いてから攻撃すると綺麗に次に繋げられます。

特にハーケンと零児は重い敵相手には非常に使い難い援護ですが、この組み合わせで使うと先ず確実に落としません。

ハーケンに至っては、結界破壊と敵が跳ね返って来るタイミングが、自身の攻撃とがっちり合えば、

跳ね返ってきた相手を更にステークで跳ね返すという、ビジュアル的にも格好イイので結構御勧めします。

ここで意外なのが、アクミィの援護。これは地面に強制的に叩き付ける援護なので、

小牟の援護と相性が悪いかと思いきや、本当に意外や意外。
敵が固定されているので、位置がずれずにフルヒットするどころか、少しタイミングをずらせば、横にも真上にも敵を飛ばせる超優秀なコンボだったりするのです。

他にも、M・O・M・O・・ヘンネ・ドロシー・アン・マークは、フルヒットはしないのですが、
竜巻や羽、爆風や砲撃によって、落とす事無く次に繋げる事が可能なので、
各々のタイミングさえ慣れれば、使い難い支援でも問題無く使えますので、是非一度ならず御試しを。

さてさて。では、続けて小牟の援護：仙孤妖術・鬼門封じです。
これは、単純にフルヒットさせれば19hitで終わります。ですが、これの真価はそこではありません。
以前の神夜の際にも説明しましたが、小牟の援護は他の様々な技と非常に相性がいいのです。
小牟の援護は、破天光同様に暫時、敵を強制的に空中に留める技です。
故に、始動が遅い技や、打点が狭い技、重い敵にはとても落とし易い技などと組み合わせると、
最高に相性が良く、まず余程ズレズレのタイミングでも無い限りは、確実に拾う事が可能なのです。

更に少々長くなってしまいますが、以下、各人（メインキャラ）で相性の良い（と私が思う）技を列挙しました。
皆様のコンボの御参考の一つに成れれば幸いです。

1．アレディ・ナアシュ：全ての技。特筆するなら、両断刀、乱獣撃、連続攻撃時の剛衝殻。
　両断刀は、攻撃範囲が非常に狭く極力引き付けないと二撃目がスカって落とし易いです。
　また、乱獣撃は重い敵には、地面スレスレで拾ってしまうと何度も落としてしまいます。
　そこで、小牟の援護を挟むとあら不思議。どんな重さでも、どんな位置でも必ず拾えてしまうのです。

　特に重宝するのが、連続攻撃時の剛衝殻。これは敵が跳ね返った直後のタイミングで拾わないと、
　まず確実に間に合わずに落としますが、交代前の最後の攻撃を小牟の援護にすると、
　結界が消える迄に交代すれば、確実に拾えるのです。是非、一度御試しを。

2．ネージュ・ハウゼン：シルキィ・レース、ベレイシャス・ミラー。
　特に攻撃するタイミングが判り難いシルキィや、始動が遅いミラー。
　ですが、小牟の結界が張っている最中ならば、確実に当てる事が可能です。
　但し、シルキィは結界を張ってから少し間を置いてから攻撃して下さい。
　そうすると、綺麗に最後迄決まりますので。

3．ハーケン・ブロウニング：ファイヤー・マウス、フル・ハウス、セブン・スタッド、クアッド・ソリティア。
　出が遅いマウスに、重い敵相手には非常に落とし易いハウスと

セブンとクアッド。
　これも同様に、結界の中ならば、簡単に落とさずに全部当て切る事が出来ます。
　尤も、セブン・スタッドはファントムとの組み合わせが一番格好イイと断言させて頂きますが（キリッ

4．楠舞神夜：全ての技。特筆するなら火鼠、俳浪華札、猪刺花鳥、龍顎門、雨刺鋼。
　当て難い俳浪、出が遅い火鼠、重い敵には落とし易い猪と雨。そして御勧めコンボの龍顎門。
　どれも、小牟の結界と組み合わせると、優良な技に早変わりします。
　特に、火鼠や龍顎門は、本来のヒット数以上のフルヒットが出せますので、非常に御薦め致します。
　ですが、ここで気を付けるのが雨刺鋼。これを結界発動と同時に出すと、逆にほぼ確実に落とします。
　ですので、これだけは結界発動から少しの間待ってから出すと、綺麗にフルヒットします。

5．アシェン・ブレイデル：ドラゴン・スケイル、デモンズ・ランサー改、ディバイン・ランサー改。
　技の出が遅い龍鱗、そしてついつい打点が高くなりがちで、ダメージが少々低く易いツイン・ランサー。
　これも同様に、小牟の援護があれば確実に当てられます。
　尤も、ツイン・ランサーは結界消滅後に、僅かに沈んでから使った方がよりヒット数が増えるのですが。

　だが、ミラージュ・スピン。てめぇはダメだ。幾つか有る小牟の援護と相性の悪い技の内、
　これが最も相性の悪い技と言っても差し支えないと思います。

これこそ、先程いった様に強制的に地面に叩き付ける技の筆頭。
故に、敵が必ず結界の外へ出てしまい、ダメージもヒット数も激減してしまうのです。
尤も、スピンが使い辛い人には、これも確実に当たる上、落とす事もありませんので、
只繋げるという意味では、この組み合わせも御薦めは出来ます。

6．錫華姫：邪鬼銃・弾鎖、邪鬼銃・精麗舞。
弾鎖は前回錫華の技解説の際に言った通り、
重い敵に高揚を使わずに攻撃する際には、小牟の援護は非常に重宝します。
但し、発動と同時に撃ってはこれまた落としてしまいますので、少し間を置いてからの攻撃が無難です。
精麗舞は言わずと知れたエロセレブの簡易版です。ヒット数もダメージも本物のそれには及びませんが、
十分過ぎるヒット数と絶対に落とさない確実性は、他の追随を許しません。

7．有栖零児：全ての技。特筆するなら、疾雷、快刀乱麻、不知火、四嗣噴陣。
零児の技は基本的にどれも重い敵相手には打点を高くして当てないととても落とし易いものばかりです。
ですが師匠にして相棒にして嫁の小牟の援護があれば、そんな心配は無問題。
見た目的にも、どれも組み合わせると非常に格好イイので、絶対に御奨め致します！
流石は俺の嫁と、俺の嫁の旦那。バカップル振りは健在極まりないのである。

8．ＫＯＳ－ＭＯＳ：ＳＴＯＲＭ・ＷＡＬＴＺ、Ｇ・ＳＨＯＴ、Ｘ・

ＢＵＳＴＥＲ、連舞迅雷刀八本。
氷塊の発生が遅い嵐舞踊とＸ、重い敵には必ずと言っていい程落とすガトリング。
そして、実は少し高い打点で拾ってしまうと攻撃がスカって落としてしまう迅雷。
その全てが小牟の援護で賄(まかな)えてしまうのです。因みに、他にもＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨなども合うのですが、
この技に関しては後程ＫＯＳ－ＭＯＳの技解説の際に、
何故省いたかを、他の説明と併せて話させて頂きます。

９．アクセル＆アルフィミィ：全ての技。特筆するなら、疾空刀、玄武、水流、朱雀、風刃閃。
アクミィの技はどれも一癖二癖あるものばかりですが、アクミィ自身の攻撃力も技の威力も高く、
また、その精神も非常に優秀な物が揃っており、
スタッフがもっとチートにしたかったと公言して憚(はばか)らない程の、実は物凄く強いキャラです。
ですがその分、使い熟(こな)すには慣れが非常に必要です。
その難癖の技の筆頭が上記の技辺りでは無いかと思います。

重い敵相手には、落とし易い疾空刀と舞朱雀と風刃閃。打点が今二つ判らない玄武と水流爪牙。
細かい説明は、アクミィの技解説の際にしますが、さらっと解説しますと。
基本的にはどの技も、普通の重さの敵は極力地面スレスレで。
重い的には少し高めに。
それを心掛けるとまず落とす事は無いと思われます。そこに小牟の援護を挟めばより確実です。

ですが特に困るのが、恐らく連続攻撃時の水流爪牙。

実はこの技は、剛衝殻よりも技の始動が遅く、恐らく全てのキャラの技の中で最遅だと思います。
ですので、この技こそ本当に壁に敵が跳ね返った直後。その瞬間に出さないと確実に間に合いません。
ですが、何気にこの技は攻撃範囲が広いので、多少早くても重さに関係無く拾えますので、
この技に関してだけは、引き付けとかフルヒットとか考えずに、さっさと交代して出すに限ります。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は私の嫁の小牟の旦那の零児の技構成です。御楽しみに！

小牟超可愛いよ小牟。小牟タンハァハァ。

第参拾貳話【英雄達におやすみを（グッドナイト）～休みも大事～】（前書き）

現時刻（０６：１５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６２３，４９１アクセス　ユニーク：２１６，３２３人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、不死桜・後編～温泉回です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾貳話【英雄達におやすみを（グッドナイト）～休みも大事～】

ｓｉｄｅ：雑魚戦×２

「……所でカイト。何でこいつらが、まだいるんだ？　アインストはアンタが滅ぼしたんだろ？」

「ああ、そいつらはヴェルトバオムに吸収された奴等だ。それが、溢れ出して出て来てるだけだ。問題無いから、さっさとぶっ飛ばしちまいな。」

「……そうか、分かった。それじゃ、二手に分かれて別々に倒しちまうか。」

「分かりました！　不死桜の護り手として、ここは必ず死守します！」

「うむ。これ以上、わらわ達の国を土足で荒らす様な真似はさせぬぞよ！」

そのハーケンの指示通り、敵を誘導しながら二手に分かれてそれぞれ各個撃破する様だ。

ｓｉｄｅ：雑魚Ａ戦

「取り敢えず、行きやがれです、腹黒猫。」

「了解です、アホポンコツ様！　猫の手も借りたいッ！！」

「正にその通りなんだな、これが。舞朱雀！」「ばっさりですの。」

「まだだ！　風刃閃！！」「風の刃ですのよ？」

「追撃する！　ミラージュ・スピン！　龍の鱗だよ～ん！

悪魔の槍だ！　受け取れッ！！」

「……！？」

「これで止めだ。コードＤＴＤ発動！　ソイヤッ！　ソイヤッ！

ソイヤッ！！

エイッ！　ヤッ！　キャッホゥ～！！　あ～……もう大分ダルイ。

グラスヒール……ＭＡＸ！！！」

何の攻撃行動にも移れずに、アインストはその形を跡形も無く崩した。

ｓｉｄｅ：雑魚Ｂ戦

「まずはワタクシからいきますわ！　お家にお帰りなさい？　リターン・トゥ・ホーム！！」

「ふむ、ではわらわも続くぞよ？　邪鬼銃王！　封印牙ー！　続けて精麗舞（セレブ）である！」

「……！」

「よいよい♪　邪鬼銃王！　止めの騎駆であ～る♪」

「ファントム！　ヘソプリと同時にダブルキックだ！」「……！」

「……！！」

「おっと、まだだぜ？　ジャック・ポット！　ファイヤー・マウス！　カグヤ。
ここは、アンタに任せたぜ？」

「了解です、ハーケンさん！　雨刺鋼！！　それそれそれっ！！
チェストッ！！」

「……！！！」

「楠舞神夜、参ります！　月鱗舞って！！！

松に鶴！　花に幕！　芒に月！！！

楠舞一刀流奥義……月架美刃！！！

はぅ～……舌、噛みそうになっちゃった……。」

続けてもう一体のアインストもあっさり刀の錆びになり、消え去っていった。

一方、その頃。リグの方はと言うと……。

ｓｉｄｅ：リグ・ザ・ガード戦

「我から行こう！　ぬぅん！　アックス！！　チャージ！！」

「む！　そうはさせん！　グルトップ・フォワード！！」「グッ……！」

「あら、敵はエイゼルだけじゃないわよ？　スクラップ・キック！」

「グッ……！　何の、シュラ・ナックル！　セイヤッ！！」「にゃうっ！？」

「頭上ががら空きだよ！　フェーダー・レイ！！」

「キュオンもいっちゃうよ！　ブロンテ・ブリザード！！」

「何！？　グゥッ……！！　……羽根に氷を纏わり付かせ、更に威力を増したか……！

だが、その程度では我に効かぬぞ！　纏めて吹き飛べッ！！」

「くっ……！」「わわわっ！！」

オルケストル・アーミーの先制連続攻撃にも怯まず、迎撃仕返したリグ。

だが、彼は休む暇も無く、次の相手の迎撃準備に即座に移った。

「おっと、今度はあたしらの番だねえ！　セイレーン・ダガー！！」

「む！　ならば、グルトップ・ｆ「そうはさせねえぜ！」何っ！？」

「喰らいなっ！　バーナウ・ファー・ドラグ！！」「ぐああっ！！」

反撃しようとしたリグの隙を突いた同時攻撃だったが、辛うじて耐え切った様だ。

そのリグに、更に新たな影が近づいていた。

「そこよっ！　カインドネス・セブン！！　フェイク！」「……！」

「ぐぅっ！？　ま、まだまだァッ！！！」

「ええ、まだまだよ！　ベレイシャス・ミラー！　パリンッとね！」

「がはっ……！」

「ロイヤル・キッス！　爆発していってね♪　ハンターズ・マーシィ！　狩りのお時間よ？」

「ぐぅぅぅっ……！！！」

ネージュの追撃を受けたリグが吹き飛ばされた先には、
覇気をその身に充満させたアレディが、立ち塞がっていた。
リグはその姿を認めると、よろよろと、しかし力強く立ち上がり、
構えた。
その身から溢れ出る覇気は、とても今よろけていた者とは思えない
程の裂帛（れっぱく）の気合いだった。
「――――剛錬のアレディ、参ります！」「――――リグ・ザ・ガード、いざ参る！！」
「機神剛鉄甲！」「ガーディアン・ナックルッ！！」
「まだっ！　覇皇轟雷脚！！」「くっ……！　グルトップ・フォワードォッ！！！」
「そこですっ！　轟覇……機神拳んッッ！！！」「ぐ……！　ぐあああっっ！！！」
アレディの拳と覇気によって、空高く放り上げられたリグの落下速
度に併せて、

アレディは自身の覇気を放ち、リグを更に吹き飛ばし、そのリグに自身を追い付かせた。

「ふんっっ！！」「ぐあっ！？」

「双覇龍の導きのままに……！！　高まれ……！　覇気よォォォッッ！！！」

「ぐっ……！　ぐはっ……！　ぬあああああっっっ！！！」

「これで止めです！　真覇朧撃烈破（しんはろうげきれっぱ）ァァァァァッッッ！！！！！」

「グアアアアアアアアアアァァァァァァッッッ！！！！！！！！！！」

「我が機神拳と覇皇拳は――――至高にして究極なり。」

さしものリグも、修練を積み極限迄高めたアレディィの覇気には耐え切れず――――。

ここに、遂に長年の因縁をアレディィは断ち切る事が出来たのだった。

さて。では、残り一体となった百夜は……と言うと。

ｓｉｄｅ：百夜戦

「フン！　せめてこいつぐらいは狩れないと、賞金首の名が泣くってもんさ。
　フレイム・ブリット！！　カオティック・シューター！！！」「あうっ……。」

「ガッツキ過ぎじゃろ！　ヴァイスリッター、ご～ご～！！」
「アルトアイゼン！　打ち貫けぇっ！！」「「……！！」」
「うっ……ああっ……！」

百夜に攻撃する隙も暇も与えずに、先制からの連続攻撃、そして追撃に持って行く零児達。

「続けていきます。Ｇ・ＳＨＯＴ。ガトリングガン斉射。ＳＴＯＲＭ・ＷＡＬＴＺ。跳弾による狙撃。
連舞迅雷刀八本。せいっ、せいっ！　せいやっ！！」
「ほうら……遊んであげるよ。Ｕ・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ！！」
「モモも続きます！　ウインド・ミキサーです！」
「あ……！　あうっ……！　損傷……。」

ＫＯＳ－ＭＯＳに吹き飛ばされ、Ｔ－ｅｌｏｓに足蹴にされ、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．に空高く舞い上げられ。

それでも百夜は自身の再生能力で少しづつ回復させている様だったが……。

「あん、残念だけど、それはゴメンしてね。楔っ！　ハイ、ドカン

っ♪

熱いのと冷たいのは如何？　最後は毒手よ！　って言っても、貴女には効かないけど、ね。」

「あうっ……！」

「退くんじゃ、沙夜！　ボンバー！　あ～んど、バンブー！　龍虎乱砲じゃ！　ちぇいっ！　ちぇいっ！　ちぇぇりゃぁッ！！」

「ああっ……！　あうぅっ……！！」

「いい位置だ、小牟。護業抜刀法……相手になる！　二門・電鋼刹火！！」

「ぁあっ……！？」

「まだだ！　火燐・弐の型！！　二門・不知火の型！！」

「損傷……！　損傷……！！」

「火燐・零の型！　爆砕ィィィッッ！！！」

「ああっ……！！！」

吹き飛ばされた百夜の向かう先は、準備万端に待ち構えていた小牟の結界の中だった。

「小牟！　鬼門封じ発動！」「レディ！」

「護業抜刀法奥義――――！！！」

「「木は火を生み。

火は土を生み。

土は金を生む。

そして、金は――――！！

水を生む！！！

これぞ――――森羅……万象！！！」」

「アアアアアアアアァァァァァッッッ！！！！！　……機能……停止……。」

これにて、最後の百夜も調伏し終え。

ついに、戦闘は終了した。

ｓｉｄｅ：不死桜　使者の間

リグは倒れ伏し、最後の百夜は爆散し。それぞれが、それぞれの因縁の相手に打ち勝った。

辛うじて最後の気力を振り絞り、立ち上がろうとして片膝を突いた儘のリグのみがそこにいた。

「最後の百夜、討ち取ったりぃ～！♪」

「勝負ありました……リグ・ザ・ガード。」

「……見事であった……アレディ・ナアシュよ……。
貴公は……その拳の迷いと引き換えに……大きなものを……得ていたようだな……。」

「敵性体のエネルギー反応増大。先程のガンド三兄弟と同様の反応です。ですが……。」

「ああ、その通り。リグ・ザ・ガード……覚悟はいいな?」

「……無論、だ……。我は、敗者……勝者たる、貴公らに……この身を……。」

「いい心掛けだ。ダーク、奴も喰らい尽くせ。」

そうカイトが虚空に命じると、先程と同様にリグの上空に巨大な黒い穴が現れ、

リグをその儘、呑み込んで消え去ってしまった。

戦闘前のカイトとリグの台詞からすると、どうやら生きてはいる様なのだが、

どうにも判然とはしない。

今一つ釈然としない気持ちは感じながらも、戦闘が終わり不死桜を

守れた事を実感し、
改めてホッと一息を付く一行であった。

「……ふう。一息付いた所ではあるが、まだ事態は収拾しておらぬぞ？」

「あ、そうそう。敵の国の樹と繋がってるんだよね？　今。どうするの？　これ。」

「ああ、それなら神夜の出番だ。」

「あ、はい。早速不死桜にお願いして閉じて貰いましょう。」「いや。それは無理だ。」
「へ？」「何？」「どういう意味だ？　カイト。」

「ここに流れ込んでる力は、ヴェルトバオムそのものから出ていてな。
　はっきり言って神夜一人の力で閉じる事は不可能だ。」

力不足だとハッキリカイトに言われ、ショボーンと落ち込む神夜。
神夜へのフォローも含めて、ならばどうするのかとカイトに訊(と)うハーケン。

「神夜がこの国で一番の霊力持ちなんだろ？　なら、どうにも出来ないんじゃないか？」

「ああ、それなら問題無い。ぶっちゃけ、俺一人でも閉じる事は簡単なんだが、
それじゃつまらんだろう？　だから、これを逆に利用してやるんだよ。」

「逆に利用……つまり、『閉じる』のではなく、
『開けて』向こう側に渡ろうと、そういう事ですか？」

「その通りだ、アレディ。それならば、この不死桜の特性にも合う。
こいつは本来閉じるものではなく、解放する為の樹だからな。
それなら、俺が手を貸さなくても神夜一人で十分だ。」

「成る程……そういう事か。確かに直接、敵の本拠地へと乗り込めるのならば、一番いい。」

「……そ、そういう事でしたら、分かりました。
安定させるのに少し時間は掛かりますが、早速やってみますね。」

カイトから説明を受けると、神夜は早速使者の間の中心にある大きな勾玉の前に行き、

皆が見守る中、一人祈りを捧げた。

「不死桜よ。楠舞の名に於いて命じます……！
その力を我が前に示し、異界へと繋がる門を開き給え……！」

祈りが捧げられると同時に、使者の間が明るく輝き出し、
先程武酉城に入る前に見た、あの虹とは太さも性質も異なる別の虹が現れた。
その美しさと大きさに誰もが圧巻され、感嘆の声を上げた。

「な、何とド煌(きら)びやかな虹の橋……！」
「おおっ！　すげえ！　神夜ちゃん、色々凄かったぜ！」
「エロスワカメ、うるさいです。もしかして成功でございましたりしますのか？　エロス姫。」

「はい！　歪んでいた力の流れを戻したんです！」
「そいつは重畳。確かに、この感覚……異界の門が開いたな。」
「今回は、恐竜もゾンビも来ないから一安心だな、零児、小牟。」
「「全くじゃ（だ）。」で、この橋を渡れば……え～と、フルータジアに行けるんじゃったか？」
「シュテルベン・シュロス。アグラッドヘイムの中枢部です。」

「ん？　ちょっと待ちな、お姫さん。
繋がったって事は、逆に敵が入って来ちまうんじゃねえか？」

「大丈夫ですよ、コウタさん♪
安定してない状態で使えば、どこかに飛んでっちゃいますから♪」

「ふむ、つまり向こうからは安定するまで、入っては来れぬという訳か。神夜、天晴れぞな。」
「ありがとう、錫華ちゃん♪　取り敢えず、月が出るまで待ちましょう。
その時が、不死桜は最も力が出るんです。」

神夜の説明を聞いて、取り敢えずホッと一安堵する一行。
どうやら、敵陣に攻め入るのは明朝辺りになりそうだ。

「皆さん、お宿を用意させます。今日は城下町へ戻ってのんびりしましょう。」

「……分かりました。ここは退く事にしましょう。」

「虹の橋……か。つまり、帰りはカタパルトですね、分かります。」

「や、やめい！　バカイト！　もうあんなのはコリゴリじゃ……全く。」

「……ああ、そうだな。ああいうのはもう勘弁して欲しいものだ……本当に。」

《どんだけトラウマｗｗｗ　私だったら喜んで楽しんで飛んでいくのにｗｗｗ》

“お前（あんた・貴方）は元から飛んでるだろうが（でしょう）！！”

《え？　何、この総ツッコミ？　ていうか、何この快感？　あふん、ちょっとクセになりそう♪》

“……ダメだ、このポンコツ早く何とかしないと。”

「っちゅーか、ぬしの創った本じゃろが、コレ！　何とかせんかい！」

「……済まん。流石に、こいつばっかりは俺にも無理だ。」

「なん……じゃと……？！」

《はっはっは……！　マイスターすら諦める物！　スパイｄ……基、碧天の魔導書！！》

「さ、早く城下町に戻って温泉に浸かろうぜ～。」

“お～！！”

《……E？　あれ？　何、この放置プレイ。

悔しい、でもｋ「いいからさっさと来い。」……（、・ω・、）＜ショボーン》

第参拾貳話【英雄達におやすみ（グッドナイト）を～休みも大事～】

ｓｉｄｅ：武酉城　温泉宿『白兎』

武酉城内でも最も大きいと思われる温泉宿『白兎』の前に、

神夜を先頭にぞろぞろとロボごと連れ立って来ていた。

「今日は、こちらの温泉宿でお休み下さい。」
「個室なんでしょうね？　全員一つの部屋にぶち込まれるとかは勘弁ですわよ？」
「大丈夫、個室ですよ♪　御代も楠舞家で出させて頂きます。」
「ド太っ腹！　流石は一国の姫ですこと♪」

「休息を取るのは構わぬが、次なる動きについてはどうなるのだ？」
「今晩、不死桜を安定させる為の儀式を行います。なので、明日の朝にしましょう。
今日はゆっくり、御身体を休めて下さい。
じゃ、大旦那さん。皆さんをお部屋に案内して下さい。」「……オオダンナ？」

神夜からの説明を受け、自分達が今何をすべきかは判った。
で、オオダンナって誰？　そう思った一行の内の何人かの疑問に、本人が店の中から出て来ながら、答えた。そして、琥魔が喧嘩を吹っ掛けた。

「畏まりました、神夜姫様。」
「何であんたが宿にいるんニャ。……さてはあの襤褸（ボロ）店じゃ食えな

くなったようだニャア。」
「知らなかったのか？　ここは俺の経営する宿だ。普段は他の者に任せているがな。
　やっと店を持った程度で調子に乗るんじゃないワン。……駄猫風情が。」
「……ああ？　このショボ犬が……風呂くらいでいい気になるなや。」
「あの～……このバトル、いつまで見てればいいの？」
「この二匹……本気で仲が悪いから始末に負えぬぞよ？」

「琥魔～、そんぐらいにしとかないと、今度こそ本気のスパンキングだぞ～。」
「ニャン！？　それでは参りましょうか、皆様！！」
「……見事。上手く手懐けている様だな……どうやったのか、是非共教えて貰いたいものだ。」
「ん？　店の物を根刮ぎ買って、文句を言ったら尻叩きをしただけだが。」
「……成る程。俺には出来ない訳だ。」

それからは、各々が各人の部屋に向かいながら、思い思いにのんびりと話し合っていた。

「温泉かあ。記憶が無くても、この興奮は変わらんぜ♪」
「ウフフ……こっそりと見に行っちゃう？」

「おっとぉ……マジで？　いやあ……でも……ほら、ちょっと、何て言うかさ。」
「レイジにハーケン、アレディにアクセル、それにカイトにコウタちゃんまで♪
もうほんとに選り取り見取りでアタシ困っちゃう♪」
「E！？　見に行くってそっちとか、おれを！？」
《歪みねぇ……カッツェさん、マジ歪みねぇッスわ。》

「大丈夫だ。もしも誰かがその様な不埒な真似をしようものならば、私が即座に一刀両断にしてくれる。」
「恐っ！？　ていうか、姉ちゃん誰？」
「む……私は黄宇。主殿の従者にして家族だ。碧天共々、以後宜しく頼む。
とは言っても、もうすぐ終幕ではあるのだがな。」「？？？」
「何、気にするな。それよりも、碧天。先程のは貴様とて例外ではないぞ？
例え、我等が主が娘殿のデバイスだとて、容赦はせぬ。そう心掛けよ。」
《……我が夢、潰えたり。》

「……良かろう。その性根、主殿と共にしっかり叩き直してくれる。」
《ひぎいいいいいいいいぃ！！！！！》

「「……の、覗くのはやめようか（ましょうか）。」」

「みんな温泉大好きですの♪」「まぁ、普通嫌いな女の子はいないでしょ。」
「あたしゃ海水の方が落ち着くけどねえ……。
ま、敵の本拠地への突入前だし、さっぱりして臨むとするか♪」
「あ、海水なら私が用意してあげるわよ？」
「本当かい？　それなら一っ風呂浴びた後で頼むよ。」「おっけー♪」

「……馬鹿共が。臨むつもりならもっと緊張感を持ちな。」
「Ｔ－ｅｌｏｓ、我々も躯体洗浄によるルックスの回復を行うべきです。」
「Ｔ－ｅｌｏｓさんは、たくさん助けてくれましたから！　モモ、がんばってお背中を流します！」
「……懐くな。私たちが敵同士だって事、忘れてんじゃないのかい？」

「というか、すっかりスルーしてたのですけれど……貴女どなたですの？」
「え？　私？　私は水薙。マスターの従者で恋人で愛人で性奴隷よ？」
「……す、凄く大人ですの／／／」「せいどれい……ですか？」
「Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．、今のは知らなくていい言葉です。忘れる事を推奨します。」
「は、はいです……ＫＯＳ－ＭＯＳさん。……な、何かちょっと怖いです。」

「まぁまぁ♪　詳しい事は温泉にゆっくり浸かりながら教えてあげるから♪　ね？」
「……とっても楽しみですの♪」

「……全く、似た様な声で喋られると、どっちがどっちだか判んなくなるよ。」
「「え？　そう（ですの）？」」
「……そっくりです。モモ、びっくりです！」

「まあ、いいじゃない？　異世界の温泉ってのもオツなものよ？　あん、新・天・地……って感じ？」
「どっかに、毛むくじゃらの生物とか、魔法少女に変身しそうな奴とかいないだろうな？」
「……はぁ。沙夜、俺たちも敵同士だ。それに、全ての百夜を片付け……お前は目的を達した筈だ。……俺たちが共に戦う理由も、同時に無くなった」

「そう細けえ事言うなって。別に構わんだろ？　沙夜の一匹や二匹ぐらいいたって。それに、まだ牛頭馬頭からも何の連絡も来ねえし、どうせ帰る先は一緒だろ？　何より、寝首を掻きにくれば、滅する理由が出来るっつったのは、お前だろう？　零児。」
「……と言う事らしいわよ？　それに、あのロック・アイちゃん。あの人も放置しておいたら、また喚び出されるかもしれないじゃない？」
「む……まぁ、バカイトの言う事はともかく、確かにのう……。またネット中に喚び出されたりしたら、ページが開きっ放しになって恥ずかしいからのう。」

「いつも何を見てるんすか、腐狐様。」

「おい、お前の嫁だろ零児。早く何とかしてくれよ。」

「……俺はもうとっくに諦めている。」

「……まぁ、そんな訳だから、もう少し一緒にいさせて貰うわね♪」

「……好きにしろ。」

「OK、オールメンバーズ。騒ぎの続きは温泉へ入ってからにしようぜ？

シロウ、細かい案内と説明を、ファーストメンバーに頼むぜ？」

「うむ、毎度ありだワン。」

「あ、士浪。5～6人部屋ってあるか？」

「うむ、勿論だ。うちの宿は、どんなニーズにも応えられるのが最大のウリだワン。」

「じゃ、済まんが序でに部屋風呂もついてる奴で頼むわ。

ちょっぴり家族水入らずで話したい事も山程あるんでな。

そっちの料金は、俺が別払いで全額持つから。」

「うむ、分かった。任せろだワン。」「ああ、助かる。」

「……。」「……？　コウタ殿。どうされたのですか？」

「な、何でもねえよ。早く休もうぜ？」

「は、はあ……。ならば、よいのですが。では、参りましょう、コウタ殿。」
「お、おう！　……。」
（なあロア。俺を守ってくれるのは有難(ありがて)えんだけどよ……。
せめて温泉宿に来た時ぐらいは、アーマーを解除してくれねえかな……。）

「おーい、コウタ。」「！　お、おう。どうしたんだ、カイトさん。何か用かい？」
「ああ。お前今、その鎧脱げないんだろ？　どうせ、あのバカロアの事だろうからな。」
「あ、ああ。まぁ、そうなんだが……でも、ま、俺をずっと守ってくれてる訳だし、
入りたいのは山々だが、ここは我慢するさ。」

「パンパカパーン！　そんな切なさ乱れ撃ちなコウタ・アズマ君に朗報です。」
「な、何だよ、突然に……。」
「一時的……限定的ではあるが、鎧を少しの間外しておけるって言ったら……どうする？」
「んな！？　ま、マジでか？！」
「ああ、大マジだ。まぁ、流石にずっと外しっ放しは拙いが、
俺なら数時間ぐらいは外してやるぐらいは簡単だ。で、どうする？」

「……くっ……すまねえ、ロア。でも、俺は……俺は……！
浅草育ちの生粋の江戸っ子なんでい！！　頼む！　カイトさん！！」

「うむ、よいよい。苦しゅうないぞ？　そんじゃ、温泉に浸かる時に言ってくれ。
　多分、その時の一回ぐらいしか外せないが、
　まぁ、数時間もあれば風呂上りも入れても十分だろ？」
「ああ、そりゃもう！　十分過ぎるぐらいだぜ！」

ｓｉｄｅ：温泉宿『白兎』　男湯

広い広い、広大と呼んでも一向に差し支えない程に大きな温泉。
其処に駆け込む影が四つあった。その四つの影は速度を落とす事無く、
その勢いの儘に、温泉にダイビングして辺りにお湯を撒き散らした。
※これは重大な迷惑行為です。良い子のみんなは決してやってはいけません。
　お兄さんとの約束です。いいですね？　やってしまった悪い子はティロ・フィナーレです。

「プッハァーッ！！！　気ん持ちいいいいいーーッッ！！！」
「「気持ちいいーーーッッッ！！！」」「気持ちいいんだなぁ、これが！！」

「……ハァ。カイト様、紅蓮、鋼牙。他人様の迷惑になりますから、御止め下さい。」

「細けえ事言うなって、龍斗。
そりゃ誰か居りゃ俺だって流石に少しは自重するかもしれねえけど、
今は俺達以外、誰もいないんだしよ。堅え事は言いっこ無し無しな？」

「……ハァ。では、程々に御願い致しますよ、カイト様。
特にそこで燥(はしゃ)いでる真っ赤なバカをどうにかして下さいね。」

「ヒャッハアアアァァーーッッッ！！！！！（ジャバジャバ！　バシャバシャ！！）」

「……おう、任せろ～。……（ゴインッ！）」「……（プカァ～……）。」

取り敢えず、一人温泉の中で泳ぎ回ってたアホウはカイトに粛清され、

みんなは、先に身体を洗い、それからゆっくりと温泉に浸かった。

「あ〝あ〝あ〝あ〝〜〜〜……いい、温度だぁ〜……。」
「うん……気持ちいいね〜……。」「ええ……全く以て……。」

「……何か、物凄くおっさん臭いんだな、これが。」
「あたぼうよ。こちとら伊達に９０００垓年以上も生きちゃいねえんだっつーの。
風呂の一つも楽しめねえで、永劫の旅路が出来るかってんだ、べらぼうめ。」

「……大変だな、アンタも。いや、大変で片付けるのは失礼だったか。」

「うんにゃ〜、構わねえよ〜。
どうせ、お前らにゃぁ、それこそ永劫理解出来ねえだろうからなぁ〜。
まぁ、堅苦しい事は抜きだぁ〜。今は……温泉を楽しもうぜ〜……。」

「……そうだな。旅の疲れと汚れを落として、明日への備えとしないとな。」

「うむ。……ところで、そこの少年は誰だ？」

エイゼルが顔を向けた先には、青い髪の少年がとっても気持ちよさそうに、

タオルを頭に乗っけて温泉を心行くまで楽しむ様に、鼻歌交じりで浸かっていた。

「ん～？　……ああ、ありゃコウタだ。」

「な！？　本当にあんな少年が……？」

「ああ。……俺が今、限定的にロアの鎧を外しておいてやっててな～。

まぁ、生粋の浅草っ子に風呂や温泉に入るなってのは、流石に酷だろ～……？」

「……まぁ、確かにそうだな。」

「コウタ殿。気持ち良さそうですね。」

「お～、アレディ。そりゃ、まあなあ。

浅草っ子が温泉にも入れねえってんじゃ、泣くに泣けねえからなあ。

ホント、カイトさんには足向けて寝られねえや。」

「……ええ、そうですね。私も、あの方には恐らく終生、頭が上がる事は無いでしょう。」

「だよなあ。……ま、いいや。今はゆっくり浸かって、明日の英気を養おうぜ、アレディ。」

「はい。全ては明日の為に。」

カッツェが、皆の身体を値踏みしたり、気絶してる紅蓮を襲い掛けたりと、

色んな意味で危ない場面はあったものの、男湯の方は終始比較的落ち着いた雰囲気で、

皆、思い思いにのんびり過ごしていた。

一方、女子側はと言うと……。

ｓｉｄｅ：女湯

バッシャーーーン！！！

「……あら？　今のは？」

「多分、男湯の方じゃろ。全く……いつまで経っても男共は小僧ばっかじゃのう。」

「男の子は元気が一番ですよ、小牟さん♪」
「よいよい。元気が有り余ってる内が華ぞな。」

「みんな、元気一杯ですの♪　……それにしても、温泉ってとっても熱いんですのね。」

「あれ？　アルフィミィちゃん、温泉初めて？」
「はいですの。入るのも、見るのも初めてですの♪　とってもおっきいんですのね……。」

そう言って、周りを見渡すアルフィミィの眼前には、
先程の男湯よりも何故か、尚広い風呂場が広がっていた。
……何処かに鹿威し(ししおど)でもあるのだろうか。カッポーンという音が、何処かから響いた。

「……まあ、流石にこれは広過ぎと言っても差し支えないのでしょうけど。」
「そうだねえ。これなら、あたしが泳げるぐらいは出来そうだねえ。」
「あんまり燥(はしゃ)いで、こっちにまで飛沫(しぶき)を飛ばすのはやめておくれよ？」
「ヘンネー！　一緒に洗いっこしよー！」
「はいよ。ったく、ああいう所はいつまで経っても子供だねえ。」

「あん、でも本当に広いわ、ね。ちょっと遊んだり悪戯したくなっちゃうじゃない？」
「沙夜御姉様！　それなら私もご一緒させて頂きますニャン！」
「ちょっと！　まさか、温泉の中に毒とか垂れ流しませんわよね？」
「まさか。そんなワケないじゃない、ねえ？」
「ええ、勿論ですとも！
……ただ、ちょっと即効性の媚薬を流して、破廉恥合戦を見ようとしただけニャン。」

「……アレディ……は、いないから……代わりにアシェン。オシオキしてあげて。」
「了解です、ブリリ姫。」「ブリリアント姫とちゃんとおっしゃい！！」
「捻じ切り捲るますのです。」「ニャンッ！！」「あうっ！！　わ、私までぇ……！」

風呂に入ると錆びてしまう故の腹癒せか。流石に弾薬は抜いている様だが、
思いっ切りグラスヒールで二匹の尻を蹴り上げたアシェンであったとさ。

「皆さん、楽しんでくれてるようで、よかったです♪」
「神夜……そち、男だけじゃなく、人を見る目も少しは養わねばの。

」

「？？？」

その頃、隣の男湯でどっかのキモキザが、盛大な嘘（くしゃみ）をしたとかしなかったとか。

「ＫＯＳ－ＭＯＳさん！　Ｔ－ｅｌｏｓさん！　モモ、がんばってお背中流しますね！」

「はい、お願いします、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．。」

「……懐くなと言っただろうが。私たちは敵だと、そう言っただろう？」

「……でも、今は……今のＴ－ｅｌｏｓさんは、モモたちの味方です。

だから、モモはＫＯＳ－ＭＯＳさんと一緒にＴ－ｅｌｏｓさんも洗ってあげたいんです。

……それじゃ、ダメですか？」

「……チッ。……勝手にしな。」「……Ｔ－ｅｌｏｓ。」

「は、はいです！　がんばります！」

慈愛に満ちた青い瞳で優しく微笑むＫＯＳ－ＭＯＳに見守られなが

ら、

笑顔で頑張ってＴ－ｅｌｏｓの背中を洗うＭ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．。

洗い終わった後、「……まぁ、悪くは無かったよ。」という言葉が、

二人にしか聞こえなかったのは、御愛嬌である。

ｓｉｄｅ：温泉前の休憩所

ひょっとしたら風呂より広いんじゃないか？　そう思わせる程に広い場所。

何故か設置してあるマッサージチェアやら、足のツボ押し道具やらが大量にあり、

牛乳・コーヒー牛乳・ミックスオレ・イチゴ牛乳と各種揃えており、

どうやら紛争になる事は避けられそうである。

※因みに筆者は牛乳派である。他は甘過ぎて飲めねえよｏｒｚ

……え？　そんな事聞いてないって？　デスヨネー。

“プッハァァァァーーーッッ！！！！！　美味い！　もう一杯！！”

「やっぱ風呂上りにはこれだよなぁ……。あ～……マジ生き返ったわ～……。」

「お前は何度も生き返ってるだろ、実際に。」

「こまけぇこｔ（ｒｙ」「……喋るならちゃんと喋れ。」

そんな風に男共が先に上がり、のんびり余韻を味わっていると、徐々に女子方も長風呂から出始め、男子同様だだっ広い休憩所で寛ぎ始めた。

因みに、鎧を脱いだコウタを初めて見た一部の女子（？）連中が、少し騒いだのは余談である。

そんな風に皆でほっこりほんわかしてると、零児が敢えてカイトに質問をした。

……この空気が壊れるであろう事を承知で。

「……ところで、カイト。一つ、お前に訊きたい事があるんだが。」

「ん～……？　……碧天の事か？　それとも、はやてと風音の事かな？」

「……出来れば、両方と言いたいがな。教えて貰えるのであれば、な。」

「ん～……何で、今聞きたいんだ？　別に後でも構へんやないか、なぁ？」

《お！　マイスター、今のマザーの言い方に似てましたね！》

「だろ？　俺も最近結構似て来たかな～と、思ってた所でな♪」《嘘ですよ？》

「……よし。今からお前を防水機構を外して、風呂の中に沈めよう。」

《いやー！　やめてー！　殺されるー！　冗談抜きで、それ死にますってば！！》

「……それで、カイト。どうなんだ？　……ここにいる皆が、恐らく聞きたがっている。」

「……ハァ。何でお前ら、そんなに人の事情……というか、人の不幸を聞きたがるかねぇ？

……ま、いいや。なら、飯食った後で話してやるよ。
じゃねぇと、多分飯が喉を通らないだろうからな。
後、M・O・M・O・とかアルフィミィ辺りの、子供は聞くの止めとけ。
お前らにゃ、まだまだ早過ぎる。今から聞いてちゃ、悪影響受け兼ねん。」

「だ、大丈夫です！　モモだって、もう大人です！」「子供扱いはやめて頂きたいですの……！」

「……ハァ。俺は知らんぞ？　忠告はしたからな？　……ったく。」

その後。豪華な夜食を済ませ、身も心も調えた一行が本人から聞いた話は……。

その日、一晩。宿中から啜り泣く声を止める事は出来なかった。

ｓｉｄｅ：温泉宿　『白兎』　カイト達の部屋

既に五行の皆は眠りに付き。今カイトは窓辺に腰掛けて、綺麗な月夜を眺めていた。

其処に、背後からそっと碧天の魔導書が近付き、

まるで腰を下ろすかの様に、カイトの隣にそっと降り立った。

暫く、二人の間に会話は無く、唯々只管綺麗な月夜を眺めていた。

それが如何程続いたのだろうか。ポツリと、カイトが言葉を漏らした。

「……綺麗だな。」

《はい。とても綺麗な月夜です。……どの世界でも、月夜の美しさは変わりませんね。》

「ああ。……五行の皆はどうだった？　碧天。」

《ええ、皆さんとても優しくて温かくて面白くて……そして何より。
皆さん、全員がマイスターを心より慕っているのが、とても良く判りました。》

「……そうか。」

《ええ、そうですよ。》

「……そうか。」

碧天の言葉を聞き、しんみりとそう二度答えたカイト。
またも、二人の間に沈黙が漂った。だが、その沈黙は御互い嫌なものでは決して無く。
二人の頬を緩やかで穏やかな、優しい温かい風が通り過ぎていった。

「……いい、風だな。」

《はい。この国の人達の気質が表れているかの様な、穏やかな風です。》

「……ああ。いい、風だ。」

《はい……。》

また、穏やかな沈黙が二人を包み込んだ。だが、今度の沈黙はそう長くは続かなかった。

カイトが月に顔を向けた儘、碧天に話し掛けて来たからだった。

「なあ、碧天。」《はい。……何ですか、マイスター？》

「……もう、態（わざ）と巫山戯（ふざけ）る必要は無いんだぞ？」

《……え？》

そこで、碧天は初めて今迄眺めていた月から顔を上げ、カイトの方を向いた。

カイトもほぼ同時に碧天の方へと顔を向けた。……慈愛に満ちたその眼差しと共に。

「もう、はやても風音もいない。

そして、今の俺には共に笑ってくれる家族も、また新たに出来た。

お前に話した通り、もう一人のはやてとの間に娘も出来た。……

今は幾つかは判らんがな。

……なあ、碧天。もう、お前が無理して身体を張って俺達を笑わす必要も無い。

何より、今の俺には……お前は只居てくれるだけでいい。

碧天……お前が生きて、存在してくれた……只それだけで、俺は嬉しいんだ。

はやてと風音の事を一緒に話し合い、共に笑い合える、お前が今俺の傍に居てくれるだけで。

今の俺には、それだけで、もう十分過ぎる程に幸せなんだ。」

《……マイスター。……貴方は、一つ勘違いをしています。》

「……勘違い？」

カイトからの言葉を受けて、暫時（ざんじ）、碧天は押し黙っていた。

だが、その口からようやっと出て来た言葉は、カイトの想定外の言葉だった。

《そうです、勘違いです。

……私は、無理をしてマイスター達のムードメーカーになった訳ではありません。

あれは、私が自ら望んで、貴方達の笑顔を……眩しい迄に輝くその笑顔を見たかったら。

だから……だから……私は……私……は……ぁぁ……あああああぁぁぁ……！！！！！！！！≫

「……碧天……。そうか……そうだな……そう、だよな……。」

碧天は泣いていた。この身に、身体があったなら、一体どれ程の涙を流せただろうか。

そう見ている者が悔しがる程に。――――碧天は、哭いていた。

≪で、ですから……マイスター。私は……自ら望んで、こうなったのです。

誰の求めに応じた訳でも無く。誰から強制された訳でも無く。

私自身がこう望み、こう在りたいと願ったのです。≫

「……そうか。」≪はい……そうです。≫

そして、また沈黙が二人を包んだ。二人を撫でる風は更に穏やかに緩やかに変化していた。

でも……それでも、月は先程と変わらずに其処にあった。

……そして、カイトがポツンと漏らしたその言葉を最後に、

その夜は以後、誰も何一つ言葉を口にする事は無かった。

……唯一つ。風に乗って聞こえる、皆の啜り泣く声のみを除いて。

「――――綺麗だな。今日も、月は。」

《――――ええ。とても綺麗です。今日も。》

その夜は、いつまでも二人を穏やかな風が包み込む様に撫で続け。

皆と共に啜り泣く五行の身体をも、柔らかにそっと撫でていった。

まるで――――風の音が、（もう、大丈夫だよ）と、皆に囁いてくれているみたいに――――。

五行の、皆の啜り泣く声が、また一つ大きくなった。そんな……気がした。

第参拾貳話【英雄達におやすみを（グッドナイト）～休みも大事～】（後書き）

如何でしたでしょうか？

碧天があれだけおちゃらけているのは、実はそれなりの理由があった訳です。

尤も、作中の宣言通り、今後も碧天はあの調子でいきますけどもｗ

次話は、到頭、最終決戦（ラスト・バトル）の開幕（オンステージ）。シュテルベン・シュロス第一戦目です。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、御待たせ致しました第七回目！　私の技構成　有栖零児　の回です。

では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

A：地禮（ちらい）・疾雷（しつらい）の型→二丁・樹金道（じゅごんどう）・裏→二門・四嗣噴陣（ししふんじん）→火燐（かりん）・

零の型→火燐・弐の型（消費ｃｏｍ９０％）
Ｂ：二門・四嗣噴陣×５（消費ｃｏｍ１５０％）
Ｃ：二門・不知火（しらぬい）の型→二門・電鋼刹火（でんこうせっか）→二門・四嗣噴陣→火燐・
零の型→火燐・弐の型（消費ｃｏｍ１１５％）

です。御覧の通り、零児のマイナス技能が発動しても問題無い様に組み合わせてあります。
因みに。私のＡの四嗣噴陣を快刀乱麻に替えると、消費ｃｏｍは７５％になり最も消費が少なくなります。
基本的に零児の技は、重い敵には使い難い印象があるかと思います。なので、重い敵を相手にする時は、極力普段よりも上の位置で攻撃を掠らせるつもりで攻撃すると、
大概は上手く拾えると思います。

その中でも高めじゃ無いと落とし易いのが、疾雷と快刀乱麻でしょう。
それ以外は、或る程度早めに出して置けば、先ず落とす事はありません。
焦ってキャンセルすべきでは無い場所で、次の技を発動させたりしない限りは。
零児の技は結構、地面ギリギリの位置でも何故か接地せずに繋げられる事が多いので、
是非とも慌てずに、しっかり技の最後迄、見極めて下さい。

因みに。快刀乱麻は、御覧の通り、敵を二刀の上で転がす技ですので、リフト性能が殆どありません。
なので、次に続く技が低めで拾えないものだと、折角上手く転がせても落としてしまいますので、

零の型や、辛うじて間に合う四嗣噴陣などを次に持って来る事を御薦めします。

又、疾雷は相手の足元を掠る様に出せば、重い敵相手には丁度いいです。
残念ながらフルヒットは出来ないのが惜しいのですが、
レシーブ性能は、零の型に次いで優秀だと私は思っています。
只、少々技の出が遅いので、少し早めに交代することを心掛ければ、
連続攻撃はし易いです。
因みに。疾雷は、直撃や両断の様にブロックを一撃で割れる状態であれば、
例え重い敵相手でも、絶対に落とさずに拾えますので、それも私が初撃に持って来ている理由です。

さて、ここで私が一押ししたいのが、四嗣噴陣。
これは、普通の敵ならば余程地面ギリギリで使わない限りは拾えますし、
重い敵相手になら、最初に持ち上げて撃つ銃：柊樹の銃身を敵に真下から直接ぶつける様に当てると、
先ず大概拾えます。

ですが、この技の最大の罠は、その拾い難さではありません。
実はこの技、初撃に持って来ると３００％落とします。敵にブロックがあろうと無かろうと関係無く、
必ず、絶対に落とします。ですから、私のＢの様な場合は、先ず最初に援護か支援を呼んで、
真っ先にブロックを壊してからで無いと、絶対に落とします。本当に大事な事なので何度も言います。

この技にはブロック貫通＋の効果があるので、ついつい初撃に持って来たくなりますが、
それこそが真のトラップ・オブ・コウメイ！　これは相手がどんな重さだろうと、必ず落とします。
ですので、必ず先に支援・援護でブロックを割るか、ブロックを割った瞬間に支援・援護を呼び出し、
フォローする事が必要不可欠です。当然、出が遅い援護は基本的にマズイです。
尤も、敵が落ちるタイミングを熟知していれば、どんなに遅くても支援・援護は間に合うのですが。

と、この技の問題点のみを論(あげつら)いましたが、この技の真の価値はそんな事をも払拭してくれます。
実はこの技も敵を結界で封じ込めている間が結構長く、他の支援・援護との組み合わせが可能なのです！
特に、最も相性がいいのが、ＫＯＳ－ＭＯＳのＴ・ＡＲＴＳ。これを組み合わせるタイミングは、
零児が柊樹→地禮→火燐→金と連続攻撃をします。その最後の攻撃。
金を零児が構えて敵に突き出した、その瞬間です。
それと同時に呼び出すと、ＫＯＳ－ＭＯＳのガトリングが全弾命中し、さらに吹き飛ばされた敵を、
追撃の拡散砲で、僅かの間空中に固定してくれますので、次のどんな技にも繋げ易いのです！

尤も、手刀による一撃だけ、どうしてもスカってしまのが唯一のちょっと難点ですが、
それを差し引いても、重い敵には落とし易いＫＯＳ－ＭＯＳの攻撃を確実にほぼ全弾当てられるこのコンボは、

小牟の破天光コンボや援護に次いで、非常に優秀です。

しかも、実はＫＯＳ－ＭＯＳの援護は、最後敵が地面に触れるギリギリで画面外に出ますので、必殺技の発動が間に合うので、最後の攻撃に持って来る事も可能な優秀な援護だったりします。

このＫＯＳ－ＭＯＳの援護に続けて間に合うのは、アレディの援護のみですので、次がアレディだった場合、四嗣・ＡＲＴＳ→アレディという、援護→援護という荒業が使えます。

実は他にも、アクミィの援護が最も優秀で、後にどんな援護・支援が来ても大抵は間に合うのです。

また、ギリギリで支援・援護の硬直が解けるものの後でも、唯一アレディの援護のみが、ほぼ確実に間に合うのです。

それに、支援の中にもアルク・フェイク・アークや、琥魔やマークといったものは、

特に画面外に出るのが早く、次の支援・援護にも繋げ易いので、例えば以下の様に、

支援（アークゲイン）→支援（アークゲイン）→援護（ＫＯＳ－ＭＯＳ）→援護（アレディ）→メインキャラの攻撃×５

といった、物凄い事も可能だったりするのです。

因みに、零児の援護：二刀・一迅・樹金の型は、殆どの人が重い敵には落としてしまうと思います。

そんな時こそ小牟の破天光やネージュのグラス・コフィンの様に、敵を空中に留めるものが最も相性が良く、ほぼ確実に落とさずにフ

ルヒット（１６ｈｉｔ）し易いです。
でも、そんなもん毎回使うのはめんどいという方にも、一応対処法はあります。

狙う場所は、重い敵が落下し始めたその瞬間。零児の援護は出もそれなりに遅いので、
逆にそれぐらいじゃないと落としてしまうのです。
しかも一番難儀なのが、零児の援護は技と技の間が長く空いてしまう事。
その間に落ちてしまう事が一番多いと思います。ですから、早めに拾うのです。
そうすれば、敵が落ちて来る間に丁度零児の攻撃の準備も整い、ギリギリ間に合って拾えるのです。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話は、アシェンの技構成です。御楽しみに?!

第参拾参話【遥かなる戦い，開幕（オンステージ）～傷だらけの指揮者（コンダクター）

現時刻（０３：３５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６３０，５１６アクセス　ユニーク：２１６，８９５人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、シュテルベン・シュロス最終決戦・前編です。

ようやっと、彼等との決着が付きます。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾参話【遥かなる戦い，開幕（オンステージ）～傷だらけの指揮者（コンダクター）～】

ｓｉｄｅ：不死桜　使者の間

蕭（しめ）やかな昨夜も何処吹く風か。

今、一行は敵本拠地へと向かうので、気勢が大いに上がり、

逸る気持ちを必死に抑えている真っ最中であった。

「神夜姫殿。状況は如何でしょうか？」

「はい！　安定してます！　これなら問題ありません♪」

「愈々（いよいよ）って事ね！　テンションが上がって来ましてよ！」

「ワタクシはもう昨晩からですわ！　その勢いと鬱憤を晴らす意味も込めて、
　ロボの整備もしておいて差し上げましたから！」

「「「「「「……。」」」」」」

「流石はドロシーちゃん。仕事の出来る女なんだな、これが♪」

「オ～～ッホッホッホ！！！　もっとド褒め遊ばせ！」「ちょっと、それ私の台詞よ！？」

ドロシーの整備という事で、一瞬一抹の不安が浮かんだ気がするが、どうやら杞憂であったらしく、成る程確かに整備は完璧に終えている様だ。

そんな時だった。アクセルが、アークゲインを見て何かを思い出したのか。

う～んと、唸りながら首を捻っているのを、何人かが不思議な顔で見ていた。

「あ～……そう言えば、こいつを見て思い出したんだけどさ。」

「ああ、Ｗ０３の事なら心配すんな。あいつなら勝手に付いて来るから。」

「へ？　そりゃ、どういう意味だい？」

「あ～……ま、いっか。もう言っちゃっても。あのな。
実はＷ１０には発信機が付けられててな。
Ｗ０３はそれで俺達の動きをずっと追っていたって訳さ。」

「何……ッ！？　……何で、アンタはそれを黙っていたんだ？」

「ん？　……まぁ、それはこの後解るさ。嫌が上にもな。」

又も含みの有る言葉を言うカイトに、多少げんなりした感が出て来た一行。

空気と雰囲気が萎える前に、さっさと行こうと言う事に相成った。

「所で、ハーケン。ちゃんと昨夜の内に、ツァイトには連絡したな？」

「ん？　ああ、ちゃんとあんたに言われた通りにな。
そしてら、ドクターに怒られたよ。まだ前回の戦いのオーバーホールが終わってないってな。
まぁ、副長には危機には飛んでいくとは言われたが……。」

「限度があるってか？　まぁ、あの副長ならその程度の限度も何の其ので来そうだがな。」

「……全くだ。あんな無理をするのは、もうコリゴリだぜ。」

「ふむ、確かに有能な奴よな。あの虎男は。」

「うむ……アグラッドヘイム、愈々か。」

「よし、行こうぜ。とっと終わらせて、元の世界へ帰るんだ！」

乙音に見送られ、一行は虹の橋に乗って、一路アグラッドヘイムの中枢である、

シュテルベン・シュロス……『永逝の城』へと向かった。

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス

虹の橋に連れられて、一行は其処に辿り着いた。

その場からも見える程に巨大な樹……ヴェルトバオム。

目的地がハッキリ見えている分、行き先は判り易かった。

「ここが……アグラッドヘイム……！」「到頭……やって来たのね。

」

「OK、シュラプリ。感動するのはまだ早いぜ？」

「ええ、これから大変な事極まりない戦いが待ってるんですから。」

「……そうですね。……進みましょう！」

決意も新たに進もうとした一行の眼前には、恐らく中枢部内部から出て来たと思しき、

アグラッドヘイムの兵隊達が、数多群れを成してやって来た。

前哨戦としては、少々ウンザリするその数に、皆思わず眉を顰めたが、そうも言ってられない。

何はともあれ、各々構えた……のだが。

「……？　カイト？」

「まぁ、これぐらいは手を貸してやるさ。取り敢えずお前達は前に出るなよ？

じゃねぇと、纏めて一緒に斬っちまうからな。後ろで英気を養ってな。」

そう言いながら、カイトは皆の前に出て来、いつもの呪文を唱えた。

「セカンド・イグニッション　第二形態（フル・ツヴァイス）完全体」

すると、カイトを非常に眩（まばゆ）い光が包み込み、その光が霽（は）れた後には、全身を統一感がありそうでない七色の鎧に身を包んだ、異質の存在がソコニイタ。

「ソード　ツヴァイス」

それだけ言うと、カイトの右手には何時の間にか、

これまた七色の装飾が成された西洋剣が握られており、
その剣を鞘から抜かずに腰矯(こしだ)めに構え、その儘完全に動きを止めた。
“……。”
誰も何の発言もせず、何の行動も起こさなかった。……否、出来なかった。
カイトが極限迄、集中しているのが分かったからだ。
その極度の緊張は敵側にも伝わっている様で、既に眼前にワラワラといる上に、
遥か向こうに迄、黒い敵集(だか)りが出来ているのが白地(あからさま)に見て取れる。
だが、その誰一人として、カイトに掛かって来る者はいなかった。
しかし……その沈黙に耐え兼ねたのか。
無謀にも、愚かにも、カイトに飛び掛かってしまった者がいた。
――――その瞬間、彼等の運命は確定してしまった。

「兆物一切灰燼たれ　奥義　紅蓮腕・極」

誰にも判らなかった。いつ、剣を抜いたのか。いつ、敵を斬ったのか。いつ、鞘に納めたのか。

一体……今、何が起きたのか。だが、唯一つ、確実に言える事は――――。

今の今迄、自分達の眼前にいた敵達は愚か、遥か向こうに迄出来ていた黒集りすらも、

その瞬間、ボッ、という不思議な短い音と共に、完全にその存在が消え去っていた事だった。

「解除　ふう……雑魚敵兵共は殆ど殲滅出来た筈だ。

これで、誰も消耗せずに最終決戦に臨めるな。」

「あ、ああ。……本当にデタラメな奴だな、オイ。」

「ん？　なぁに、せめてこの程度ぐらいは熟せないと、救世主は務まらんのさ。」

「……難儀だねえ、あんたも。」

「ま、それなりに楽しんでるからいいんだがな。それより、さっさと先へ行こうぜ？」

「ああ、そうだな。折角カイトが空けてくれた道だ。ちゃっちゃと進むとするか。」

相変わらずを越えたいつも以上のデタラメさに、驚愕の感情は隠さずに、

道形に沿って、目的地……シュテルベン・シュロスへと、一路向かって行った。

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス門前

渡った先からでも見えたヴェルトバオムだったが、改めて間近で見るとその巨大さに、

誰もが思わず見上げずにはいられなかった。

そして、その威圧感に圧されるのも無理は無いだろうと、誰もが同時に思った。

「あれが、アグラッドヘイムの本陣……！」

「え～と、何て言ったかのう？　ツベルクリン・ズロース……とか、そんな感じの名前じゃったような……？」

「え～と……『シュテルベン・シュロス』です、シャオムゥさん。」

「つか、好い加減覚えんかい、この駄狐。何だ、そのどっかの予防接種みたいな名前は。」

「ここからでも、凄い力を感じますの……！　あの中央にそびえているのが……！」

「『ヴェルトバオム』とかいう樹か……！　何て大きさだよ……！」

「エスピナ城にあった奴の、正に成長した姿そのもの……って感じねェ。」

「……あんなものを私の城にドッ立てる気だったとは……呆れた話ね。」

誰もが思わず気圧されずにはいられない程の力と威容を誇る、ヴェルトバオム。

アグラッドヘイムの連中が、崇めるのも解らなくはない。そう思った一行だった。

そんな時だった。何人かが、突然何かに反応し出したのだ。

「うっ……！？　この感覚は……何だ……？」

「……あん、大気中に様々な霊が蠢（うごめ）いてるって感じ、ね。」

「それが『魂』って奴なの？」

「人の想念……そして、散逸を望む意識……。」

「グノーシスがこの世界で実体化した理由……成る程、こいつか。」

「だが……それだけじゃない。これは……一体、何だ？」

例えそれにしても、これは余りにも異質過ぎる。一体、何に対して騒いでいるのか。

その答えを持つ者は……当然、この場には一人しかいなかった。

「ああ、そいつはな。俺を怖がってんだよ。」

「何……？　あんたを……？」

「ああ。現時点で、自身が脅かされる唯一の存在の出現に、初めて恐怖という感情を感じ、戸惑うと同時に、その恐怖に抗えずに、その感情の余波が暴れ回ってるんだろ。まぁ、ぶっちゃけ実害は皆無だ。俺が、お前達と共にいるからな。」

「……そういう事か。……少し、あの樹に同情しちまうぜ。」

「……ですが、油断は禁物です。カイト殿に敵を殲滅して頂いたとは言え、まだどこに敵が隠れて潜んでいるやも知れません。気を付けて行きましょう。これが最後の戦いなのですから。」

「……違うぜ、アレディ。ここから、やっと始まるのさ。このエンドレス・フロンティアを、連中の好きにはさせない。

この世界を守る為のバトル……オン・ステージと往こうかッ！！」

第参拾参話【遥かなる戦い，開幕（オンステージ）～傷だらけの指揮者（コンダクター）～】

ｓｉｄｅ：シュテルベン・シュロス内部

間近に来れば来る程、その巨大さが如実に理解出来るヴェルトバオム。

門番であるリグがいない為、門扉（もんぴ）が開きっ放しになっているのを確認し、一行は先へと進んだ。

……進んだのだが、入って直ぐの眼前に聳え立つ巨大な壁が、彼等の行く手を阻んだ。

「どうだ？　アシェン。」
「ダメです。出入口らしきものはありませんのです。」
「罠かと思ったら行き止まりかよ。参ったね、これは。」

「でも、強い霊気は……やっぱりこの奥から感じます。」
「でも、行けないものは行けなくてよ？」
「どこかに別の入口は無いのでしょうか？」

「ん？　無いぞ？　リグがいない今、ここの門扉を抉じ開けて入るしか他に道は無いな。」
「……では、どうしまするか？　引き返しまするか？」

そんな風に皆で喧々囂々やっていた時だった。

後ろから、聞き覚えのある声と言葉が聞こえて来たのは。

「その先にある反応に気付かないのか？　Ｗ０７。」
「……！？　Ｗ０３……ピート・ペイン……！」

「成る程な……カイトの言ってた通り、アークに発信機を取り付け

ていたという訳か。」

「……その通りだ……ＷＯＯ（ダブリューゼロゼロ）。」

「……！」

そのピートの発言は誰をも驚かせた。ハーケンがＷシリーズ？！という事は……。

「Ｗ……ゼロゼロ……？！　ハーケン、あんたまさか……。」

「私と同じように……人間では……ございませんの！？」

「ロボットなの！？　でもそんな風には……？」

「しかし、ハーケン殿から感じる覇気は生身の人間のもの……。」

「まあ、落ち着けよ。所謂、試験管ベイビーって奴さ。アシェンもカルディアもピートも……ここのボスのガグンも、俺の弟妹って事になるけどな。」

「……我々Ｗシリーズに血縁の概念は無い。貴様は有機モデルの試作型に過ぎん。」

「成る程。どうやら、ちゃんとサルベージは完了した様だな。」

「……ああ。貴様が修復したティンク・アベルによって、全てのデータが揃った。」

そのピートの発言は、先程のハーケンの事とほぼ同じぐらい皆を驚かせた。

要は、カイトは敵に塩を送ったと言う事なのだから。

「で、どうだい？　全ての真相を知った今の気分は？」

「……最悪……と言うのだろうな。……貴様のその訳知り顔を見ていれば猶の事。」

「人形がそれだけ言えれば十分だ。なぁ、そう思わないか？　アクセル。

いや……元・地球連邦軍特殊任務実行部隊、シャドウミラー。

特殊処理班隊長アクセル・アルマー？」

「……！？　ぐ……！　あ、頭が……わ、割れそうだ……！何で……！！」

「アクセル！？　アクセル！」

「……果てさて。こちら側とあちら側を行き来し過ぎて、脳内がパンクでもしたのかねぇ。」

「『こちら側』？　『あちら側』？　……カイト。

そろそろ、俺達にも判る様に話して欲しいんだがな。」

「ん～……だとさ、Ｗ０３。どうする？」
「……勝手にするがいい。それを止める権限は自分には与えられていない。」
「……だとさ。そんじゃまぁ、掻い摘んで教えるがな。」

ピートの暗黙の了解も得、カイトが一人黙々と淡々と話し始めた。

ハーケン達とアクセル達の衝撃に事実を。

ｓｉｄｅ：三人称

「ここことは違う、とある世界があった。そこの特殊任務実行部隊をシャドウミラーと言った。
だが、その世界は穏やかな平和が余りにも長く続き過ぎた為、腐敗の極みに陥った。
故に、実行部隊隊長であるヴィンデル・マウザーは、平和は何も齎（もたら）さない。
永遠に続く闘争こそが、文明を発展させ人類を存続させる唯一の方法だと考え、
反乱を起こすも失敗。そこで、次元転移装置を使って、別の平行世界へと跳んだ。

そして、そこでも同様に戦乱の種を其処彼処に蒔いた。だが、其処でも芽は育たなかった。

最終的に自身をも懸け、決戦に挑んだが敗れ、シャドウミラーは崩壊・消滅した。
そこにいる記憶喪失の元隊長と、唯一離反したラストナンバーW17。
ラミア・ラヴレスを除いて。」
「何ともはや……傍迷惑な者共よな……。」

「全くだ。その際の戦いで、瀕死の重傷を負い宇宙空間を漂っていたアクセルは、
同じくアインストの大親分から離反し、精神体となっていたアルフィミィと出会い、
アインストの力によって一命を取り留めた。故に今のアクセルとアルフィミィは、
言葉通り、運命共同体な訳だ。互いのどちらがいなくても、存在する事が出来なくなる。
故に今のアルフィミィは唯一の上位アインスト……所謂仮の女王蜂であり、
アクセルは、言わばハーフアインストと言える存在な訳だ。

そして同時に、その時にアクセルの恋人であった、レモン・ブロウニングも戦死している。
自身の本来の存在であり、アルフィミィのコピー元であるオリジナル……。
エクセレン・ブロウニングに殺されてな。」
“――――なっ。”

「エク……セレン……？　あ……ううっ……！　わ、私も……何か、思い出しそうな……。」

其処迄、カイトは一気に、そして淡々と話した。

誰もが混乱し、理解に苦しみ、ハーケン達へと皆の視線が注がれた。

何と言っていいか解らなかったが、何とか硬直した空気を進めようと、

神夜がハーケンに話し掛けてみた。

「も、物凄く、複雑な家庭事情なんですね、ハーケンさん……。」

「……ああ。どうやら、そうみたいだな、こいつは。」

「まぁ、過去がどうであれ、今のお前が本物ならば構わない。だろう？　ハーケン。」

「ッ！　……ああ、そうだな。そうだった。これまでの俺のヒストリーが嘘でなければいい。

……流石に母親が死んだってのはキツイが……だが、まぁ大丈夫さ。

世の中には、俺よりも辛い想いをしている奴だっている。そうだろう？　カイト。」

「……まぁな。」

どうやら其処で、ようやっと話は一段落付いたらしい。

まだ少し混乱している皆をさておき。改めて、ピートに話し掛けるハーケンであった。

「待たせたな。……さて、それでこれからどうするんだい？」

「「……こうさせて貰う。……コール・ゲシュペンスト！」」

「何……！？　こいつら……ファントムだと！？」

「正確にはそのレプリカだ。ＷＯＯ、貴様のデータをサルベージした際に入手出来たものだ。

更に、この世界で小型化した際のデータもだ。」

「成る程……アークゲインにしても、あんたが作り直したんだったな。」

ピートの号令によって現れた二体のファントムに驚きを隠せない一行。

だが、その入手経路を聞いて、良く判った。抑々（そもそも）に於いて、カイトが原因だったのだから。

思わず、何人かがカイトを睨み付けたが、本人は何の其のと飄々としていた。

「貴様らと戦う為には、これでもまだ足りんだろう。だが、もう時間が無い。
ＷＯ５を早急にコントロール下に置き、任務を遂行せねばならない……！」

「コードＰＴＰか……。」

「そうだ。ＷＯ５はコードＰＴＰに対抗する手段を持ってはいない。全てを抹消する為には、その身体……破壊される訳にはいかん！」

「しかし……敵の総大将を抱き込もうとは……浪漫がありすぎるぞよ？」

「これ以上の問答は、最早不要と断定し、作戦を開始する。
ターゲットを排除し……ＷＯ５に強制介入コードを使用する。

――――Ｗ００。これで、終わりにしよう。」

「――――ＯＫ、マイブラザー・スリー。ネバーランドへ……帰してやるさ。」

そして。最後の壮絶な兄弟喧嘩が幕を開けた。

ｓｉｄｅ：Ｗ０３　ピート・ペイン戦？

「先制する！　ロストボーイ・シューター！！」

「ちっ！　また、あの厄介なヤツか……！」

「近付けないなら、遠くから攻撃すりゃいいだけさ！　烈火刃！！」

「ヨミジですの……！」

「む！　……くっ！」

「まだまだ！　烈火刃の乱れ撃ちだ！　そらそらそらぁっっ！！！」

「ぐっ！？　……流石は……！」

「……後ろががら空きですのよ？　ライゴウエ。」「しまっ！？　ぐあぁっ！」

又も音波を放出し、アシェンやロボ達は無論、ハーケン達も容易に近付く事が出来ない。

ならばと、アクミィが遠距離から滅多撃ちをし、アクセルの攻撃している隙に、

こっそりピートの後ろに回り込んだアルフィミィが、来迎会（らいごうえ）をブッパし、

不意打ちに油断したピートはその直撃を喰らい、吹き飛んだ。

「！　今だ！　ベスト・フラッシュ！　カード爆弾もオマケだ！　R（ロイヤルストレーヤフラッシュ）・S・F！！」

「ぐうっ……！」

「まだだ！　ハイロー・ドロウ！　こいつも持って行け！　テキサス・ホールデム！！」

「ちぃっ……！！　ぐあぁっ！！！」

「追撃する！　虎の噛み付きだ……！　タイグレス・バイト！！
アシェンカッター！　いっちゃえぇ～！！」

その隙を逃すハーケン達では無く、追撃に追撃を重ねた。

だが、どうやらピートもそう易々とはやられてはくれない様だ。

「ぐうっ……！！　そう……！　いつも上手くいくと思うなァッ！！！

フェアリー・ガスト！　最大出力ッッッ！！！」

「しまっ！？　うあああああっっっ！？！？！？」「アシェンッ！？」

「油断している暇があると思うな！　カリング・シューター！　全方位発射！！」

「マズイッ！？　ぐうっ……！！」

次に攻撃に移る迄の僅かな隙を突いて、再び超音波を最大出力で発生させ、

それと同時に、無数の刃を全方位へと射出した。辛うじて皆、直撃

は避けられたが、

アシェンを背負って離脱したハーケンは、彼方此方切り傷だらけで皆の元へと戻って来た。

「くっ……！　おい、アシェン！　しっかりしろ！」

「ぐぐ……か、艦……長……。」

「ちっ……少し不味いな、これは。」

「……言った筈だ、アクセル・アルマー。そして……ＷＯＯ。これで終わらせると、な。

今度はこちらの番だ。行くぞ……っ！！」

腕の刃を構えて、ハーケン達に突進して来るピート。

どうやら、仕切り直しの第二ラウンドの鐘が、どこかで鳴った様だ。

一方その頃。偽ファントム達は、と言うと。

ｓｉｄｅ：ファントム・レプリカ戦？

「彼の黒き機兵……偽物とはいえ、相手に不足はありません！
ぬぅん！　朧撃拳（ろうげきけん）！　せいやぁっ！！」

「続きますわ！　爆弾の雨霰（あめあられ）ですわよ！」「おっと、あたしの大砲もお忘れじゃないよ！」
「……！」

アレディが真っ先に摺（す）り足で動き、敵に気付かれずに近寄って懐に入り、空高く蹴り上げた。

その後を追う様に、大量の爆風が偽亡霊（ファントム）を包んだ。

その煙が霽（は）れたと同時に、煙を纏って二つの人影が現れた。……沙夜と琥魔である。

「あん、頂きよ。せいいいっ！！！」「にゃにゃにゃにゃにゃんっ！！！」「……！？」

「その隙貰ったぁっ！！　木よ火よ土よ金よ……！　爆ッッ！！！」
「ナイスじゃ、零児！　オラオラオラ……ムダッ！　続けて参の型じゃ！
白金（プラチナ）！　銀（シルバー）！　あ～れぇ～～……。」
「……！！？」

二人にそれぞれ腕を斬り落とされ、零児と小牟に続け様に撃ち斬り飛ばされた偽亡霊。

だが、それが向かって来るのを待たずに、二体の機兵に追撃させるシュラプリ。

「ド突き回しておやり！　アルクオン！」「フェイクライド！　舞い踊れ！」

「「……！！」」「……！？」

「まだだ！　乱獣を打ち込む！　ハァァッ！！　轟き覇せよ！　轟雷脚ッ！！
ネージュ姫殿！！」

「ネージュにド任せ♪　抜け出せるかしら？　乱反射極まりなくてよ！
ガラスの棺よ！　……お眠りなさい。」

「……！！！」

「さあ、これでフィナーレよ！　これぞ、王家の最大奥義……！！

ドッ早く空中戦と参ります！　えぃっ！！

――――キュートクラウン・ブレイカーーーッッ！！！！！

……ちょっと派手過ぎたかしらね？」

こうして、為す術も無い儘、偽亡霊はその役目を終えた。

では、もう一方の偽ファントムはと言うと……。

ｓｉｄｅ：ファントム・レプリカ戦？

「こいつもオレが貰うぜ！　カオティック・シューター！　最大出力！！」

「何の！　わらわも負けぬぞよ！　邪鬼銃王！　魔破邪！！」

「キュオンだって負けないんだから！　ブロンテ・クラフト最大出力！　いっけぇー！！」

「ターゲット捕捉。行動パターン把握。Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ最大出力。」

「俺もいくぜ！　ファイヤー・ドラゴン！！　焼き尽くせぇっ！！」

「……！？！？」

初っ端、大人数での遠距離からの攻撃に、流石の偽ファントムも必死に避けようとしているが、

其処は多勢に無勢か、全てを躱し切る事は出来ずに、

技によっては最低でも掠り、最悪直撃していた。

特に最後に二撃は完全にまともに喰らってしまった様で、蹌踉いていた。

「行くわよ、ヘンネちゃん！」「ああ、分かってるさ、副長。」
「そらそらそらぁっ！！」「せぇいやぁっ！！」
「……！？」

「ぬぅん！！　マックスアックスを使う！　爆炎にて消え去るがいい！！！」「……！！！！」
「おっと……危ない。」「にゃうん！　もう、ハデにやるわねェ、エイゼルったら。」

その隙を逃さずに、前後で挟んで蹴り捲り斬り付けた二人の後に、猛突進して来たエイゼルが、自身の爆炎の斧を振るい、偽ファントムを吹き飛ばした。

「まだ終わりません！　凍って下さい！　吹き飛ばします！　ＫＯＳ－ＭＯＳさん！　Ｔ－ｅｌｏｓさん！」

「……Ｔ－ｅｌｏｓ。」「フン……言われるまでもない。」

「ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ、セイバー・モード、最大出力！」「Ｌ・ＢＬＡＤＥ！」
「……！！！！！」

偽ファントムの態勢が調う前に、Ｍ．Ｏ．Ｍ．Ｏ．が空高く巻き上

げ。

その落下に併せて振るわれた二対のブレードによって、両腕が斬られた。

そんな丸裸な偽ファントムに止めを刺そうと近付く影が一つ――――。

「黒き亡霊の偽物……捨て置けません！　俳浪華札！　ええいっ！　猪！　鹿！　蝶！　月鱗舞って！　チェストッ！！」

「……！！！」

「これにて止めです……！　はあああっっ！！

ちょいなっ！　せいっ！　もっとっっ！！

届いて！　雲耀（うんよう）の速さまで！！！

チェストオオオォォォーーーーーッッッ！！！！！

我が斬冠刀に――――断てぬモノはありません。」

見事真っ二つにされた偽ファントムは、その儘機能を完全に停止した。

丁度その頃。第二ラウンドを開始した、ピート達は……。

ｓｉｄｅ：Ｗ０３　ピート・ペイン戦？

「カリング・ブレード！　斬り捨てる！」「させるかっ！　フェイクリッパー！！」

「おっと、こっちも忘れて貰っては困るぜ？　ミズチ・ブレードも

なぁっ！」

「鬼蓮華もございますのよ？」「くっ……！　流石に多勢に無勢か！　ならば……！」

「させるかっ！　玄武剛弾！！」「ふわふわ～♪」「くっ……！」

速攻で斬り込んで来たピートを、ナイトファウルで迎撃するハーケン。

その横っ面を引っ叩く様に、アクミィが反撃して来た。

流石に３ｖｓ１では分が悪いと思ったのか、再度その場で超音波を発生させようとしたが、

咄嗟にアクミィに吹き飛ばされ、蹈鞴（たたら）を踏んだ様だ。

「貰ったっ！　ジャック・ポット！！」「ぐあっ！！」

「アーク！　麒麟・暁！！」「……！」「ぐっ……！　貴様っ！！」

「何処見てるんだい？　セブン・スタッド！　ファントム！　ゲシュペンスト・キック！！」

「……！！」「しまっ！？　ぐあああっっ！！！」

態勢も整わない儘のピートに追い打ちを掛けるハーケン達。
ピートの動きもハーケン達の連撃で、徐々に鈍くなっていってる様だ。
ここで一気に畳掛けねば、またあの超音波を放たれてしまう。
そう思ったハーケン達の脇を高速で摺り抜ける影があった。

「!?　アシェン!」「大丈夫なのか!?」
「問題はナッシングなり。追撃する!　回れ!　ミラージュ・スピン!」「何っ!?」
「まだだ!　神の槍だ!　吹っ飛べぇっ!!」「ぐあああっ!!?」

「そろそろ止めと行くか、これがな!　舞朱雀!!」「斬りまくりですの……!」
「吹き飛べ!」「ライゴウエ……!」「しまっ……!!　抜かった……!」

「その通りだ。こいつで止めといくさ……!　そらっ!!

クアッド・ソリティア!!　吹っ飛べぇッッ!!!」

「ぐあああああっっ!!!!!　……くっ……や、やはり、甘いな……。

まだ、戦闘行動は……続行、可能だ……!」

そう言って、腕も碌に上がらない儘に辛うじて立ち上がるピート。
だが、ハーケンは余裕の表情だ。……どうも、こちらを侮っているという雰囲気は感じられない。

「そうかい？　……だが、一つ忘れていやしないか？」「何……？」

「まだ、後二機……全く動いていなかっただろ？」「……！？！？しま……っ！！」

そうハーケンが言うと同時に、ピートの後ろから二体の駆動音が聞こえて来た。
それが何なのか、即座に理解したピートは直ぐ様振り返り……二体の死神の姿を見た。

「そういう事さ。アルト！　ヴァイス！　撃ち貫け！！」

「「……！！！」」

「ぐあああああっっっ！！！！！！」

「こいつで、止めさ！　ランページ・スペクター！！！」

「ぬ、抜かったあああぁぁっっっ！！！！！　任務……失敗……！！」

ナハトとアーベントによる連携合体攻撃。ランページ・スペクターによって、

ピート・ペインは、敗れた。

ここに、長きに亘る兄弟喧嘩は、遂に終息を見たのだった。

第参拾参話【遥かなる戦い，開幕（オンステージ）～傷だらけの指揮者（コンダクター）

如何でしたでしょうか？

途中長々と説明を入れましたが、要約すると大体あんな感じです。

というか、要約してようやっとあの程度で収まったと言うべきでしょうか；；；；

所で。実はＷ０３は、スタッフがすっかりその存在を忘れていて、後々思い出したけれども、

既に大筋は決まってしまっていた為に、処理に困って最期に自爆させたという、

色んな意味で可哀想な曰く付きな敵だったりします。スタッフぇ・・・。

まぁ尤も、その御蔭（所為？）で却って人形としてのＷシリーズの悲哀が浮き彫りとなり、

逆に好評を得たという、結果オーライではあったのですが。

次話は、最終決戦・第二戦目です。遂にアグラッドヘイムとの決着が付きます。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、続けて第８回目！　私の技構成　アシェン・ブレイデル　の回です。
では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

Ａ：ゲンブ・スパイク→タイグレス・バイト改→ディバイン・ランサー改→イリュージョン・ボルト→ミラージュ・スピン（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：ディバイン・ランサー改×５（消費ｃｏｍ１５０％）
Ｃ：スラッシュ・リッパー→イリュージョン・ボルト→ディバイン・ランサー改→デモンズ・ランサー改→ミラージュ・スピン（消費ｃｏｍ１１５％）

です。基本的にアシェンも高揚なくしては、重い敵相手には相性が悪いのですが、
実は、彼女も錫華同様、高揚や突撃がなくても繋げる事は容易だったりします。
尤も、彼女達に限らず、ぶっちゃけどんな敵が相手でも技構成と攻撃するタイミング次第で、
誰であろうとも、必ず落とさずに繋げる事は可能なのですが。

因みに。アシェンの場合は、重い敵が相手でもヒット数が増えるという事は基本的にはありませんので、
彼女に関しては、素直に高揚を使った方が無難です。
それでも、毎回使うのは面倒という方用にも、一応解説させて頂きたいと思います。

先ず、恐らく最も使い辛いのがミラージュ・スピンではないかと愚考致します。
これは、アシェンが敵になった時に使っているのを見て判る通り、大体アシェンの斜め上４５。辺り。
そのぐらいの位置で使うと、大概拾えます。
尤も、フルヒットさせるつもりならば、目一杯地面ギリギリまで引き付けて使わないといけませんが。
因みに、スピンは敵の重さに関係無くしっかり拾ってくれる、何気に優秀な技だったりします。
しかも、クリティカル→の効果も付いてますので、実は結構御得だったりします。

それから、ゲンブ・スパイクに関して。
実はこの技は重い敵相手にはそれこそ突撃か高揚を使わない限り、先ず確実に落としてしまいますので、
もし組み入れるのならば、必ず次の技に繋げられる様に、キャンセルするポイントを見極めて下さい。

因みに。上記の私のＡ構成の様な場合。ゲンブの斜めパンチの後、真横のパンチを打たせずに、

そのパンチの代わりに、即座にタイグレス・バイトに繋げると、重さに関係無く繋げる事が出来ます。
唯一の問題は、その技の出し所がキャンセルポイントでは無い為、少々色んな意味で無駄になってしまう事ですが、まぁ、雑魚相手にはそれでも十分だと思います。

それ以外の技は、基本的に早め高めに拾えば、重い敵相手でも先ず確実に拾えます。
え?!　そんな高いところで使うの!?
という様な場所じゃないと拾えないのもありますので、御注意を。

その筆頭が、ディバイン・ランサーやデモンズ・ランサー。
これらは、敵の足元がアシェンの髪に掠りもしない位置で拾わないと、先ず確実に落とします。
ですので、そんな位置じゃ流石に当たんねえだろ。と思わずに、使ってみて下さい。
……まぁ、一番は最初に言った通り、素直に高揚を使えばいいだけなのですが。

あ、そうそう。因みにアシェンのみ、クリティカルによるダメージが1，5倍になっており、
特にファンタズム・フェニックスの最後の一撃は、2倍ダメージです。つまりは『魂』と同効果。
なので、実は熱血が掛かると、却ってダメージが減ってしまうのです。
ですので、ロアやマークの様に熱血が支援効果で入るキャラとは絶対に組み合わせない事を御薦めします。

勿論、魂が掛かるアルクオンとならば相性がいい上に、アシェン自身が必中を使える為、
星穿(ほしうぎ)の神槍(しんそう)を装備させても、それが一切ネックにはなりませんので、御薦めの組み合わせの一つです。

アシェンは御存知の通り、どの技もヒット数が少なく、折角のＣＲＴ→が中々生かせません。
ですので、私はアーベントやヘンネといった、ヒット数の多い支援を付けています。

あ、ヒット数の為にアシェンをマークを付けるのならば、悪くないと思います。
彼の支援は一回で３８ｈｉｔ。二回使えれば合わせて７６ｈｉｔを一人で叩き出しますので、
ヒット数の少ない、アシェンや零児、ハーケンなどにはとても相性がいいと思います。
何より、彼の支援で割れないブロックは皆無です。
アレディの剛衝殻同様、特にブロックには絶対無敵な性能を誇っています。

それと、実はアーベントは火鎖地蔵(かさじぞう)以外のブロックは全て一度で割れる優秀な支援なのです。
しかも、必ず横に吹っ飛ばしますので、次のどんな技へも繋げる事が容易なのです。

因みに。アシェンの援護：ファントム・ステップＭＡＸは、
基本的に重い敵には物凄く適当に出しても、ほぼ確実に拾ってくれ

ます。
只、流石に遅れて出せば落としてしまいますが。一番の問題は普通の重さ相手。
これに何とか落とさずに当てるには、どんなに早くても敵が落ち始めてからです。
少なくとも、落ちる前に空中に上がっている最中に呼ぶと、ほぼ確実に落ちてしまい、
フルヒット（１２ｈｉｔ）は不可能です。

もし落としてしまう場合は、落とす地点とその対応策を覚える事が肝要です。
アシェンの援護で落とす場所は、必ず決まっています。それは、最後のグラスヒールの前。
リッパーを放つまではまだ大丈夫。問題はその直後に蹴りが間に合わずに、落としてしまう事です。
ですので、私が提案するその対応策としては、判り易く言えば、アシェンの最後の蹴りを当てない事です。

例えば、零の型でアシェンの蹴りが当たらない空中に留めておくとか、
ハンターズ・マーシィで、敵を空高く打ち上げるとか。
そうしておけば、最後の一撃が普通にスカってその儘宙返りで画面外へと消えます。
他にも、何とか出来る技は幾つもありますので、慌てずにしっかり見極めて繋げて下さい。

とまぁ、こんな所でしょうか。次話はＫＯＳ－ＭＯＳの技構成です。
御楽しみに！

第参拾肆話【愚か者たちの帝国（エンパイア）～Ａｇｒａｄｏ－ｈｅｉｍ～】

現時刻（２２：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６４４，０９１アクセス　ユニーク：２１７，８３７人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、シュテルベン・シュロス最終決戦・中編です。

遂に、アグラッドヘイムとの最終決戦です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾肆話【愚か者たちの帝国（エンパイア）～Ａｇｒａｄｏ－ｈｅｉｍ～】

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス内部

バラバラになり、原型を留めていない偽ファントムだったモノが二つ。

そして、体中から紫電を上げ、傍目に誰が見てももう後は無いと思う程にボロボロになった、

Ｗ０３ことピート・ペインが、辛うじて膝を突き起き上がっていた。

「……損傷率……８９％……。自分の……任務は……失敗した……ようだな……。

結局……Ｗ０６どころか……自分自身……Ｗ０３しか……処分出来ない……とは、な……。」

「……Ｗ０３……。」「自分自身？　お前……。」

「そこを……退いて貰おう……Ｗ００……。」

「……アンタ、確かカイトに自爆は封じられて無かったか？」

「……ああ、そうだ。だが……自力で出来ないのならば……誘発さ

せてやれば……いい。」

「……何で、それを戦闘中にしなかった？
そうすれば、アシェン諸共、俺も『処分』出来た筈だ。」

そのハーケンの問いに、自嘲気味な笑みを零し、その理由を告げた。

「フッ……。戦闘中には使えなかった……というのも、あるが……。
……自分の……任務遂行が……困難な状況に……陥った場合……
……。
速やかに……指揮権を……ＷＯＯに預けるように……指令を
……受けている……。
故に……使わなかった……。」

（そんな矛盾だらけになった指令を守る為に……？　……チッ。
レモン……やはり、厄介なものを遺してくれたものだな。）

そんなピートの言葉に思う事があるのか、沈黙が更に重くなったアクセル。

一方、ハーケンは一つ溜息を付いて、ピートに語り返した。

「俺に指揮権を……ね。それなら、もう分かっている筈だぜ？
アシェンもカルディアも、ファントムもアークゲインも……破壊するつもりなんてない。
……あんたも、みんな大切な俺のファミリーだからな。」

「……そうか。
ＷＯＯ……貴様が、そう判断するならば……自分が伝える事は……何も無い……。
自分は……上官となった……貴様の……道を開く……だけだ……。
……そこをどけ。」

ハーケン並びに皆が、その場を退き彼の道を開けた。
……唯一人、その前に立ち塞がったカイトを除いて。

「そこを……退けと……言った筈だ……！　全て(オール・ノウレッジ)を知りし者……！！」

「だが断る。……矢張り、貴様は何も分かっていないな。」

「何が……言いたい……！」

「何故、俺が態々お前のＡＴＡ迄、凍結させたと思っている？　何故、カルディアを助けたと思う？
　何故……俺が今、お前の前に立ち塞がっていると思っているんだ？」

「何が……言いたいと……聞いている……ッ！！」

「……ハァ。つまり、こういう事さ。」

“なっ！？！？”

そのピートの決意を聞いて尚、彼の邪魔をする事が出来るのか。
思わず何人かがカイトを睨んでいたが、そんなものがすっ飛ぶ程、皆驚いた。

何故なら、カイトがピートの怪我を全て完全に修復してしまったからだ。

「貴様……一体、何のつもりだ！？」

「ん～？　さぁね。だが、これでお前は自分一人で自由に動けるだろ？　……ハーケン。」

「…！　な、何だ、カイト？」

「何ボケーッとしてやがる。さっさとこいつに命令して、ツァイトの元へ戻してやれよ。」

「？　だが、こいつは……。」

「……何、アホな事言ってやがる。今、ハッキリこいつが言ったじゃねぇか。

指揮権はＷＯＯ、つまりお前に預けるってな。今のこいつの上司はお前だぜ？　ハーケン。」

「!?　アンタ、もしかして……最初からこれを狙って……！」

「……さてな。それより、さっさと命令しないとこいつ逃げちまうぞ？」

「あ、ああ。ピート、アンタはツァイトに戻っててくれ。後、カルディアは絶対に壊すなよ？

こいつは、命令だ。上官の命令には従うんだろ？」

「くっ……！　……仕方ない……任務了解。直ちに、ツァイト・クロコディールに戻り、

副長始め、全乗組員を護衛する。」

少し悔しそうな顔を見せたピートはそう言うと、即座に踵(きびす)を返し、その場を後にした。

去り際に、僅かに口元に笑みを残しながら。

その姿が見えなくなった所で、改めてカイトに幾つか問い掛けた。

「……カイト。アンタにまた幾つか聞きたい事があるんだが。」

「ん？　なんじゃらほい。」

「何で、ピートは副長の事を知っていた？
俺達はあいつに俺達に関する事は一切言って無い筈なんだが？」

「ああ、そりゃあいつが独自で調べ上げたんだろ。
Ｗ０３は特に隠密行動、潜入工作、情報収集、情報攪乱などの裏の仕事に、
最大の能力を発揮するタイプだからな。まぁ、今回は俺が教えてやったんだが。
龍斗に命令させて、あれを何とか直して情報を全部引き出せる様に、ってな。」

成る程。いつの間に、とは思ったが、それで幾つか疑問が氷解した。

何度も聞く前に、先んじて話してくれるカイトには大助かりだが、
まだ疑問が残っていた。

「そうか、そういう事か……成る程ね。だが、もう一つ重大な問題がある。」

「ん？　何かあったか？」

「……おいおい、忘れたのか？
俺達は……このビッグ・ドアをどうにも出来なくて立ち往生してるんだぜ？。」

「……ああ、これか。これなら、ぶっ壊しゃあいいだけだろ？　こんな風にさ。」

そうカイトが言い、掌を扉に向けると、それと同時に扉が跡形も無く吹き飛んだ。

そう、文字通り『跡形も無く』吹き飛んだのである。

皆はこの時改めて思い、確信した。

（やっぱり、何回見ても絶対に慣れない。カイト（こいつ）だけには。）

「ほれ、何してんだ？　さっさと先に行こうぜ？　扉は開いたんだからさ。」

皆がハッと気付いた頃には、カイトは既に扉の奥に進んでいた。

慌ててそれを追おうとして、何人かが思わず転んでしまったのは御愛嬌といった所だろう。

ｓｉｄｅ：シュテルベン・シュロス中枢

まるでウロボロスでも連想させるかの様な、∞（無限）の軌跡に導かれ一行がやって来たのは、

眼前に巨大な光の珠が鎮座している、玉座と呼ぶには余りに似付かわしく無い場所だった。

「うそ……！　これが……ヴェルトバオムの樹……！？」
「こんな……霊力が……！？　この樹は……！！
……でも、これは力が大き過ぎます！　こんな状態……！　いつまでも続かない……！！」

神夜とネージュが言う迄も無く、誰にも理解出来た。
ここには先程迄の比では無い程の、余りにも巨大な力が渦巻いていると。

そう驚愕する一行を後目に、ガグンが重厚そうなその口元を開け、一行を歓迎した。

「――――よく、シュテルベン・シュロスまで来た。異界の者共……そして、救世主（メシア）よ。」
「流石は霊樹フジザクラの主……このヴェルトバオムが抱えている力にお気付きですかな？」
「……そう、そういう事。もう少しで暴走状態になりそうなの。魂を貰い過ぎた御蔭でね。」

「矢張り、そうか。これは、奴等が与えた力が大半……と言う事だな。」

「……そうだ、救世主（メシア）よ。貴様に消滅させられたアインストや、吸収出来る筈だったもう一つのシュラ共の分すらをも、凌駕する

程の量をな。」

「尤も、その所為でこの力が下界に溢れ出しているようだがね。」

「……フン。まぁ、世界移動をする際に、確実に引き裂かれるこの世界がどうなろうと、

確かにお前らには関係無い話だからな。そんだけ、他人事の態度も出来るんだろうがな。」

カイトの言葉に誰もが衝撃と焦燥感を募らせた。

成る程……確かに言われてみれば、これ程の力を動かすのに、他への余波が無い筈が無い。

「全く、傍迷惑極まりないぞな！」「ちゃんと栓をしとかんかい！馬鹿者！」

「それは難しいのよ、お婆ちゃん。……今、正に救世主（メシア）が言った通りに、ね。」

非難を浴びせる皆にも飄々として返す、アグラッドヘイムの幹部達。

ガグンはそれにも構わずに、一人後ろの光珠を振り返りながら呟いた。

ロック達がその後を引き継ぎ、話を続けた。

「数多の戦士達の魂……僅かとはいえ、アインストの思念……。」
「そして、異界よりこの地に辿り着いた、人の想念の集合体……。」
「……！」「……グノーシス。」「……フン。」

「そして、フォルミッドヘイムから接収させて頂いた……クロスゲートという異界を繋ぐ門。」
「……クロスゲート……そうだ。そいつは……。」

其処迄語られると、ガグンは再度カイト達に振り向き、宣言した。

「ヴェルトバオムに蓄えられた力は、目的を果たすには十分過ぎる程のものになっている。

……故に。本来、貴様達を待つ必要など無かった。

彼奴等（きやつら）めから力を与えられた直後に、世界移動を始めても良かったのだ。だが……。」

「だが、アレディ達という未だ曾て無い最大の障害を、完全に駆逐する為に。

そして何より、この俺との決着を付ける為に。そうだろう？　ガグン坊や。」

「……その通りだ、救世主よ。今こそ、我は貴様を越えてみせようぞ……ッッ！！！」

そのガグンの宣言は、今迄発したどの言葉よりも重く、並々ならぬ決意が籠(こも)っていた。

だが、そんな彼の決意でさえも、カイトは鼻で笑い軽く遇(あしら)った。

「ハッ。寝言は寝てから祝(ほ)ざきな、ガグン坊や。

この俺と闘り合いたいなら、先ずはアレディ達に勝つ事だな。

そのぐらい出来なきゃ、俺と闘うなんざ永劫不可能だぜ？」

「無論、言われるまでも無い！　往くぞ、シュラ！　そして、異界の闘士達よ！！

最期に、お前達の魂をこの樹に捧げ……！　救世主(メシア)の魂をも捧げる事で……！！

ヴェルトバオムは、更なる遥かな次元(たかみ)へと昇華するのだ……ッ！！！」

「……貴様らも同じ存在になるがいい……！

私の部下、ガンド三兄弟……！　そして我が友……リグ・ザ・ガードの魂と共に……ッ！！」

「全て請け負ってあげましょう……！　貴方達の魂を……私達のこの手で……！！」

「そして、その時こそ……！　アグラッドヘイムは新たな旅路へと就くのだッッッ！！！！！！」

彼等から決意の言葉と共に、決死の覚悟を決めた裂帛の気合いが放たれた。

だが、こちらとて生半端な覚悟で、此処迄辿り着いた訳では無い。

「そいつは待って貰うぜ。……折角、くっ付いたばかりなんでな。」

「今が、この争覇の終焉の刻……！　剛錬のアレディ……！　いざ参る……ッ！！」

「来い……！　我らが魂……そう易々と、屠れると思うな……！！」

（さてさて。ようやっと此処迄扱ぎ付けたか。後は……俺が準備をするだけだな。）

誰（たれ）ぞ知る、救世主（カイト）の思惑。

決して誰にも判らない言葉を呟きながら、後ろに下がるカイトには誰も気にしてなかった。

そして、最終決戦の火蓋が、遂に切って落とされた。

第参拾肆話【愚か者たちの帝国（エンパイア）～Ａｇｒａｄｏ－ｈｅｉｍ～】

ｓｉｄｅ：ガグン・ラウズ戦？

「覚悟しろ！　斬り刻んでくれよう……！　逝けい！　鋼の刃よ！！」

「…！　ファントム！！」「アシェンカッターもオマケだ～い！」

「甘いッ！　ロックオンッ！　ミサイル発射ァッ！！」

「くっ……！　烈火刃！」「ライゴウエで防ぎますの……！」

ガグンの先制攻撃に少々驚くも、各々それを辛うじて迎撃した。

スラッシュリッパーにはスラッシュリッパーで撃ち落とし。

ミサイル群は、直接叩き落とす事で。

「まだだッ！！　吼えろ！！　灼熱の銃弾よ！！！！」

「チッ……！　アルト！　ヴァイス！　頼む！！」「「……！！」」

ガグンの右指から放たれた銃弾の雨霰を、アルトのクレイモヤが、着弾前に爆発させ。

ヴァイスの砲撃が、その銃弾ごと呑み込み、ガグンにもオマケで攻撃を当てた。

……当然、その程度でダメージを受ける様な、ガグンでは無かったが。

「むぅっ！？　やるな……！　流石は、あの救世主（メシア）が行動を共にしているだけはある。」

「そいつは、お褒めに与り光栄……ってな所か？」

「……艦長、お礼を言ってる余裕は無いでごんす。」

「ならば、その礼はこいつで直接くれてやる……！」

「アクセル！　魂護（マブイマモリ）ですの……！」「こいつもオマケだ！　キャンフィールド！！」

「甘いわッ！！　その程度で我が攻撃が防げるなどと思うな！！

スラッシュリッパー！　リニアミサイル・ランチャー！　ヘビー・マシンキャノン！

一斉掃射ァァァッッ！！！！！！　全て貫き穿ち、削り切ってくれるわァッ！！！」

「なっ！？」「そんな……！」「マズイ……！」「ちぃっ……！」

ガグンに特攻したアクセルを護る為に、アルフィミィとハーケンが施した防備も、

ガグンから放たれた一斉掃射に悉く撃ち砕かれ、アクセルは退かざるを得なかった。

苦々しい顔で態勢を整えている四人と、いつでもいける様に待機している四体のロボ。

それを眺めたガグンは、今にも溜息を付きそうな声で、ハーケン達に語り掛けた。

「……その程度か、異界の闘士達よ。それでは、我が剣を使うにも至らぬ……！

あの救世主（メシア）が認めた者共よ。貴様らの力はその程度ではあるまい。

我を失望させてくれるな……！！」

「チッ……好き勝手言ってくれるぜ……！」

「だが……奴の言う通りになるのも業腹だ……！」

「ああ。奴の望み以上のものを見せてやろうか？　なぁ、アクセル。」

「ああ。……さあ、やろうか……！　今度こそ……！！」

御互い、ウォーミングアップも完了といった風情で、より注意深く。

しかし、より大胆にガグンに攻め入った。……彼の笑みを視界に捉えながら。

side：ロック・アイ戦？

「では、早々に消えて貰おう。黄昏に消え去るがいい……ラグナ・ロック！！」

「ぐうっ！？」「チッ……！」「おわっ！？」「んなっ！？」「あうっ……！」

速攻で先制攻撃を仕掛けて来たロック。その威力も然る事ながら、それ以上に、

ロックの技を喰らった直後に、誰もが何かの異常を身体に感じていた。

身体の痺れや何か眩暈（めまい）の様なもの、毒を注入されたような感覚もあり、

中には、暫時気絶している者迄居た。

「ほう……中々……。思った以上に頑丈なのだな。

成る程、此処迄来られたのも偶然では無ければ、救世主（メシア）に縋（すが）った訳でも無いという事か。」

「無論です……！　確かに、カイト殿の力が無ければ、より困難な道程になったでしょう。」

「ああ。だが……あいつに頼り切れる程、俺達は生きる事を諦めてはいない……！」

「結構。では、この私自らの手で、諦めさせてあげよう。それが、せめてもの慈悲だ。」

そう言うと、ロックは自身の指先を天に向け、アレディ達は何が来てもいい様に身構えた。

すると、ロックの周囲に大小様々な光球が幾つも現れ、ロックが手を振り下ろすと同時に、

その光球から無数のレーザーが放たれた。

「貫け……！　トリック・スターズ！！」

「マズイ！！」「しまっ！」「わわわっ！？」

「グッ……！　そうそういつまでも、攻められてばかりじゃいない

ぜ！　フレイム・ブリット！」
「俺もいくぜ、マークさん！　焼き尽くせ、焔竜！！」
「フン……やはり、詰めが甘いな。スライ・ツイスター！」
「おわっ！？」「何だと……！？」

その光線は、辛うじて掠る程度で躱せた。
だが、流石にいつまでも攻撃を喰らい続けている訳にもいかないと、
マークとロアが同じく遠距離から攻撃したのだが、
ロックが二人の足元から発生させた竜巻によって、二人共空高く舞い上がり、
狙いが外れた砲撃と炎の竜は、ロックのいる真横を通り過ぎていった。

「それが、私の悪巧みだよ。では、そちらの君達は、この侮辱に耐えられるかな？
ダーティ・インサルト！！」
「な！？　ぐあっ！！」「何とっ！？　ぐうっ！！」
「零児！！　アレディ！？　くっ……あ奴め……只の優男じゃ無い

ようじゃの……！」

それを態々確認する迄も無いといった風情で、ロックは続け様に攻撃した。

それは、唐突に零児とアレディの眼前に文様として現れ、

其処から発生された衝撃波が二人を襲い、

突然のそれに防御が間に合わず、諸共に吹き飛ばされてしまった。

……尤も、頑丈な二人には然程のダメージでは無かった様だが。

丁度その頃に、吹き飛ばされたロアとマークが落ちて来たが、

二人共受け身が間に合わずに、どうやら腰を強打した様で、暫く悶絶していた。

「おやおや。大丈夫かね？　まあ、流石に腰痛で魂が送られたりはしないだろうから、
安心して貰っても構わんがね。」

「……流石にそれで送られては笑えんな。大丈夫か、二人共？」

「て、てやんでえ！　こんなもので戦闘不能になる様な江戸っ子はいねえんでぃ！！」

「チッ……！　ハンターが賞金首に狩られちゃ御笑い種だぜ……！」

「その意気です。……そろそろこちらからも参りましょう……！」

「ああ。……攻められてばかりは、性に合わん！」

「ふむ……さあ、どこからでも掛かって来給え、異界の闘士達よ……。

如何なる手段を用いようとも、その魂……全て貰い受けるまでだ……！！」

改めて態勢を整え直し、ロックに突っ込んでいくアレディ達。

こちらも、第二ラウンドの鐘が早々に鳴り響いた様だ。

ｓｉｄｅ：ヒルド・ブラン戦

「あら、やだ。おっきいのから小さいのまで寄り集まっちゃって…
…怖い怖い♪」

「む！　その余裕、カチンと来るぞな！」
「キュオンも個人的な恨みも込み込みでやっちゃうよ！」
「全くですわっ！　爆破してやりますから、覚悟おしっ！！」
「ここは到頭あたし達のフルパワーの出番かねえ……！　ほら、姫さん達も！」
「ホ～ッホッホッホ！　このネージュにド任せなさい！！」
「な、何かコツとかあるんですか……？」

「ハァ……いいから、さっさと行くよ？」
「全く……バカ共が。もっと緊張感を持てと言っただろうが。」

ナニとは言わないが、大小揃った女性達がヒルドを囲み、これからフルボッコする様だ。

おお、怖い怖い。思わず蚊帳（かや）の外にいたヘンネ達が溜息を付き、ツッコミを入れていた。

「あらあら、怖いわねえ。それなら……先にこちらからいかせて貰おうかしら。

これも私の仕事なの。恨まないで頂ける？　フェーダー・ストーム！！」

「!?　フェーダー・レイッ!!」「邪鬼銃王!　撃ち落とすがよい!」

「その魂に安らぎあれ……アンドヴァラー・ブラスト!」

「ブロンテ・クラフト最大っ!!」「X・BUSTER最大出力!」

ヒルドの先制攻撃にも、即座に対応してみせた一同。

辛うじて、こちらがダメージを負う事は避けられた様だ。

その勢いの儘、再度攻撃をされる前に何人かがこちらから斬り込んでいった。

「喰らいなっ!　シュナーベル・セイバー!」「!?　シュナーベル・ソード!」

「そのまま、押さえ付けておくのですわ!　リターン・トゥ・ホーム!」

「っ!　それは、頂けなくってよ!　代わりに、貴女が燃えて頂ける?

フィンダル・ファイア!!」

「させませんっ!　ウインド・ミキサー!」「きゃっ!!」

早速斬り付け合った、二対の堕天使（ヘンネとヒルド）。鍔迫り合いをしている二人に、爆弾を投げ付けるドロシー。

鍔迫り合いからも逃れ、爆弾も躱（かわ）したヒルドが攻撃仕返そうとするも、

M．O．M．O．が巻き上げた風により、焦点が定まらず不発に終わった様だ。

その隙を逃さず、追撃態勢に移行する一同。

「おっと、貰ったよ！　バブル・カノン・アラウンド！！」「きゃあっ！！」

「モモ、いくよ！」「はいです、キュオンさん！」

「「サンダー・アロー（です）！！」」「あっ！　あぁああっ！？」

透かさずアンが、バブル・カノンでヒルドを吹き飛ばし。

M．O．M．O．の矢にキュオンの雷を纏わせた合体攻撃を直撃させて、痺れさせ。

「錫華・美糸！　続けて、梵破である！」
「あ、ああっ！？　くっ……！　そ、そういつまでも……！？」

「逃がしません！　月鱗舞って！」「逃さなくってよ！　この乱反射、避け切れるかしら！？」

「「ベレイシャスの珠！！」」

「な！？　あああああっっ！？！？」

錫華に吹き飛ばされ、何とか痺れも少しは消え、空中に逃れようとしたヒルドであったが、

さはさせじと飛び出した姫達が、互いに月鱗と鏡をヒルドの周りに飛ばして逃げ道を塞ぎ、

月鱗をネージュのレーザーで反射させながらヒルドを切り刻み、

まるで球体の中を暴れ回る曲芸かの様に、一定の範囲をぐるぐる回り続けていた。

「邪魔だよ、退きな！　Ｕ・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ！！　消え失せな！！」「……ぁぁっっっ！！？」

「フェイク！　追撃のジェネラス・ブレード！！」「……！！！」

「か……！　は……っ！？」

その曲芸に痺れを切らしたのか、Ｔ－ｅｌｏｓが二人を押し退けて相転移砲をぶっぱした。

その結界ごと、ネージュに命じられたフェイクに斬り飛ばされ。

「キュオン！」「分かってるよ、ヘンネ！」

「「フェーダー・ブリザードッッ！！！」」

「そんな……ッ！？　あうっ……！　か……はっ……！！！」

ヘンネの羽根にキュオンの氷を纏わり付かせて、重みと威力を増やしたそれの直撃を喰らい、

ヒルドは地面に叩き付けられた。

「攻撃を続行。

偲ぶれど　築き屍　修羅の道　月見し度に　涙流るゝ」

「は……っ！　……ッッ！！？」

「月国之姫君（つきこくのひめぎみ）　使為和之世（しいわのよ）　四獣之巨神（しじゅうのきょしん）

モード：エルデカイザー

迦具夜機神剣（かぐやきしんけん）！」

「あ……ああ……！　あああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああ！！！！！！！！！！！」

「――――シオン。今度こそ……貴女の許に戻ってみせます。」

小型スーパーロボットがごとき威力を叩き付けられたヒルドは、

その直撃に耐え切れず、絶叫を上げながら倒れ伏した。

一方その頃、他の二人は……。

ｓｉｄｅ：ロック・アイ戦？

「ぬぅんっ！！　爆炎にて押し通る！！！　突進（チャージ）するッ！！」

「アルクオン！　追随しろ！！」「……！！」「ああら！　アタシもお忘れなく！♪」

「おっと、そこで止（とど）まって頂こうか。トリック・スターズ！」

「ぬぅぅぅん！！！」

エイゼルを風除けに、その真後ろにアルクオンやカッツェ達が追随してロックに押し寄せた。

ロックは平然と先程の無数の光線を打ち出して怯ませようとしたが、その突進は些かも止まる気配が無い。

「む！？　ならば、直接巻き上げるだけだ！　スライ・ツイスター！！」

「む！？　むぅぅぅぅんんッッッ！！！！！　この程度で、我が力を止められると思うな！！

喰らえ！！　パンツァー・ボンバーァァッッッ！！！！！」

「！？！？　なっ！？　ぐあああっ！！？」

少し慌て出したロックは、足元に生じさせた竜巻で、直接空高く舞い上げようとしたのだが、

その場で踏ん張りながら少しづつ、しかし確実に近付いて来るエイ

ゼルに、

思わず恐怖を感じ、その場に立ち尽くしてしまった。

気が付いた時には既に遅く、彼は眼前迄迫って来ており、

防ぐ事も出来ずにその爆風の直撃を浴びてしまった。

「序でにお喰らいなさい！　ラウンド・エイティ！！」「ぐっ……！」

「アルクオン！　羅刹覇龍吼（らせつはりゅうこう）！！」「……！」「しまっ！？」

油断した瞬間に、カッツェの蹴りとアルクオンの覇気によって吹き飛ばされたロックの眼には、

自身に近付いて来る、赤と金の鎧を纏った二人の姿が映っていた。

「さっきの分だ！　喰らえ！　ファイナルエンド！　フンッ！　ハッ！　ソリャァッ！！

カオティック・シューター！！！　ボウズ！」

「おうよ！　お返しだ！　渾身の一撃……！！　喰らえぇぇぇぇっ

！！！」

「が……ッ！　は……ッッ！！！」

マークに斬られて、殴られて、吹き飛ばされて。

その先では鉄球を構えたロアが、自身の力の限りにそれをぶん回し、

地面に叩き付けられたロックは肺から息が漏れ、呼吸が出来なかった。

そして、叩き付けられて浮き上がったロックに容赦無く追撃を加えようと、

近付く影が二つ……沙夜と琥魔だった。

「いくわよ、琥魔ちゃん。」「お任せ下さい、沙夜御姉様！」

「居合五連（いあいごれん）！」「猫の手も借りたいっ！」「鎬三連（しのぎさんれん）！」「鰹節小判！！」「が……は……ッ！！」

浮き上がっている最中で、一切身動きが出来ないところを滅多斬りされ、

息も絶え絶えなロックに、更に追撃が掛かる。

「まだだっ！！　覇皇！　剛衝殻ッ！！」「かはっ……！？！？」

「二刀・快刀乱麻！　零の型！　いけぇっ！！」「っ……！！　……ッ！？」

「そこだあっっ！！　機神剛鉄甲！！！　ぬぅんっ！！」「……ッッッ！！！」

「四嗣噴陣！　……爆ッ！！」「……ッッは！！」

アレディに吹き飛ばされ、零児に斬り飛ばされ。

右に左に、と文字通り息付く暇も無い程に弄ばれたロックの行き着いた先は……。

「フフン！　後は、わしに任せい！　森羅の宴会でも大人気！！

仙狐攻殺法奥義（せんこうさっぽうおうぎ）！　狐主封霊（こしゅふうれい）！！」

「……ッ！？　な……なん……だ……こ……れは……！？！？」

「さあ、じゃんじゃんいくぞ！

こいつが通常じゃ！

ブルマー！！

御主人様ぁ～？

やあ、あなた？？？」

「かっ……！　は……！　な……何……ッ？！」

「こいつで締めじゃ！　コスプレ斬！！」

「ば……ばかな……この……私が……！！！
こ、こんなものでえええええええええぇぇぇぇぇぇッッッッ！！！
！！！！！！！！！」

「――――おい、零児。」

「……分かっている。皆まで言うな……頼むから。後で、
尻叩き三百回だ……！」

「？？？」

カイトに突っ込まれ、項垂(うなだ)れる零児。……その呟きが聞こえる訳でも無く。

不思議そうに首を傾げる小牟に萌えながらも、後に彼女に待ち受けるであろう運命に、

思わず口元を抑え、涙汲(なみだぐ)みそうになったカイトであった。

敢えて一言付け加えるならば――――ロック、南無三(ドンマイ)。

side：ガグン・ラウズ戦？

「そうだ……そうこなくてはなァッ！！」

「アルト、ヴァイス！　牽制を！」

「ファントム！　頼む！」

「アークゲイン！　貴様もいけぇっ！！」

「「「「……！！！！！」」」」

各自からの命令によって、総勢ロボ四体がガグンに襲い掛かった。

だが、ガグンはそれに怯える事無く、嬉々として迎え入れた。

「機兵達か！　相手にとって不足無し！　ならば、真っ向勝負だ！！
スラッシュリッパー！！！」「……！！」
スラッシュリッパーでファントムの勢いを削ぎ。
「逃しはせん！！　リニアミサイル・ランチャー！！！」「……！？」
ロックオンしたミサイルで、ヴァイスリッターに攻撃させずに。
「……！！」「……。」
「諸共に、このヴェセル・スライサーで斬り裂いてくれるわっ！！
覚悟を決めるがいい！　シャイニング・クラウズ！！！
この一刀にて、散華（さんげ）せよォッッ！！！！！」
「「……！！？」」

向かって来たナハトとアークゲインを、自身の神槍で斬り払い。

あっさりと、ロボ達を迎撃してしまった。

流石に、この結果にはハーケン達も驚かずにはいられなかったが、

この程度は想定の範囲内だったのか。刹那の動揺の後、即座に再度

ロボ達に檄を飛ばした。

「ファントム！　諦めるな！」

「Ｗ１０！　もう一度だ！」

「アルトアイゼン！　貴様が撃ち貫け！！」

「ヴァイスリッター……！　全てを撃ち落とすですの……！」

「性懲りも無く、まだ続けるか……！！」

ガグンが少々呆れる中、アーベントは向かって来たミサイルを撃ち

落とし。

ファントムはリッパーを全て斬り捨て。ナハトとアークゲインは、

再度向かって行った。

「その様な姑息な手が何度も我に通じると……！」

「思っちゃいないさ、これがな！」「囮って大変ですのね。」「何！？」

つい、ロボット達のみがまた向かって来ると思い込んでたガグンは驚いた。

自分の真下に何時の間にか潜り込んでいたアクミィの声に不意を突かれ、

思わず注意がそちらに向いてしまった。

「その隙、頂きでやんす！　ファントム・ステップ！！」「ガッ……！？」

「そこだ！　雷刃閃！！」「斬りまくりですの♪」「くっ……！」

「アルト、ヴァイス！　ランページ・スペクター！！　撃ち貫け！！」

「「……！！」」「ぬあっ！！！　ぐっ……！　中々やるではないか……！」

アシェンに後頭部を蹴ん殴られ、アクミィの攻撃に惑わされ。

ロボ達の行方を見失った隙に、ナハトとアーベントが自身の眼前に迄近付いていた。

その二機の合体攻撃で開けられた腹部の穴を抑えながら、

アクセル達やロボ達を、微塵も衰えていないその闘志の儘に睨み付けるガグン。

そのガグンの背後に忍び寄る影があった。

「そいつはどうも……！　セブン・スタッド！！　吹っ飛べッ！！！」

「何っ！？　ぐああっ！！！」

「アークゲイン！」「ファントム！」

「「蹴り飛ばせ！！！」」「「「……！！！」」」

「ぐはあああぁっっ！？！？」

ハーケンのステークで背後から吹き飛ばされたガグンを、

上からファントムが、下からアークゲインが、同時に蹴り付け、

再度ハーケンの方へと吹き飛ばした。

「イイタイミングだ！　フェイクリッパー！　ベスト・フラッシュだ！！

こいつで締めるぜ……！　クアッド・ソリティア！！」「貴様ぁっ……！！　ガッ……！」

「追撃する！　回れ、ミラージュ！」「ぐっ……！」「まだだ！　吹き飛べ！　デモンズ・ランサー！！」「ぐぅぅっ……！！」「耐えられるか……！　ドラゴン・スケイルッ！！

墜ちろ……！！　ディバイン・ランサー！！　グラス・ヒールＭＡＸ！！！」

「か……ハァッ……！！？」

ハーケンのロングトゥームで吹き飛ばされたガグンは、

アシェンの追撃によって、片腕と己が神槍を蹴り飛ばされ、自身の身体も吹き飛ばされた。

「そろそろ終わりにするか……！　白虎咬！」「カミカミですの♪」
「ぐっ……！」

「風刃閃！」「斬り飛ばしますの。」「まだだ！　玄武剛弾！！」
「ふわふわ～♪」
「がふ……っ！　ぐ……ぉぉおおおっっ！？！？」

二度三度と空高く舞い上げられ、方向感覚が可笑しくなり始めて来たガグンに、
更なる追撃を掛けるアクセルとアルフィミィ。

「そろそろ締めに入るぞ……アルフィミィ！」「はいですの！」
「舞朱雀！」「バッサリいきますの……！」「か……はっ……！」

「喰らえ！　烈火刃！！」「らいごうえですの。」「吹き飛べぇッッッ！！！」

「ぬあああああッッッ！！！！！」

右に左に。そして、最後は脳天を激しく揺さぶられ、立つ事も儘ならないガグン。
そんな彼を容赦無くとある方向へと全力で吹き飛ばしたアクセル達。

そして、其処には――――。

「さあ……おねんねの時間だぜ？　ファントム！！」「……！！」「ぐっ……！？」

「ファントム！　蹴り飛ばせ！」「……！！！」「ぬあっ……！」

「アルトアイゼン、レイヤード・クレイモヤ！！」

「アークゲイン！　乱黄龍！！　ぶち咬ませぇぃっ！！！」

「ヴァイスリッター……！　パルメザン・ランチャーですの……！」

「みんな、ナイスタイミングだ……！　これが、俺達の力だ……！」

「「「「いけえええええええぇぇぇッッッッ！！！！！！！！」」」」

「ぐあああああああああァァァァァァッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！

この身体ではァァッ……！！！！　この……身体ではァァッッ……！！！！！

まだ……まだ、勝てぬと言うのか……ァァァァァァァァァ……！！！！！！！！！！！！！」

「Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ　裸の王様（ギムノス・バシレウス）」

ハーケンのロングトゥームと、ロボ達の一斉攻撃に流石のガグンも耐え切れず……。

遂に、アグラッドヘイムは、彼等に完全に敗北を喫したのであった。

第参拾肆話【愚か者たちの帝国（エンパイア）～Ａｇｒａｄｏ－ｈｅｉｍ～】

如何でしたでしょうか？

では、今回も恒例（？）の原作のネタばらしをば、幾つか。

1．ロック・アイのラグナ・ロック。言わずと知れた、神々の黄昏の事です。

そして、『ＮＡＭＣＯ×ＣＡＰＣＯＭ』に出て来る『ストライダー飛龍』というキャラがいます。

実はこの技は、飛龍とロックの中の人が、同じ稲田徹さんであり、

尚且つ、飛龍も『ラグナロク』という技を使うという、ダブルでのネタだったりします。

ロックの声を聴き、尚且つナムカプ経験者は、私同様にニヤリとしたのでは無いでしょうか？ｗ

2．ガグン・ラウズについて。どっからどう見ても、ゼンガー親分な彼ですが、

その容姿と声以外に共通点が無いと思われるかも知れませんが、所がどっこい生きてるシャツの中。

確かに彼が持っているのは、神槍であり斬艦刀ではないのですが、注目すべきはその技名。

実は、ヴェセル・スライサーを直訳すると、『斬艦』。そう、これは斬艦刀の事。

そして、シャイニング・クラウズを直訳すると、『雲耀』。その儘、ズバリです。

使う武器が変わり、技名が変わろうとも、親分成分は不滅なの

です！（キリッ　親分マジ親分。

後、書き終わってから気付いたんですが……ロックの最強技（プリズナーズ・ベノム）使って無ぇや；；；；

ま、いっか、ロックだし。しょうがないね。／人？？？？人＼「それが嫌なら僕と契約して（ｒｙ」

QB（きゅうべえ）帰れ。さて……次話は、本当の最終決戦です。

果たして、アレディ達の前に立ち塞がるラスボスとは一体！！

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

それと、はやて誕生日おめでとーーー！！！！！

何か短編でも書いてみたいけど、今そんな余裕は全く無いので御座るぅ～；；ｏｒｚ

と言う訳で、御待たせ致しました第９回目　私の技構成　ＫＯＳ－ＭＯＳ　の回です。
では、前回同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

Ａ：ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）・ＴＯＯＴＨ（トゥース）→Ｓ（エス）・ＳＡＵＬＴ→気孔掌（きこうしょう）→連舞迅雷刀八本（れんぶじんらいとうはっぽん）→Ｘ（エックス）・ＢＵＳＴＥＲ（バスター）（消費ｃｏｍ１００％）
Ｂ：ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ→連舞迅雷刀八本→連舞迅雷刀八本→ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ→連舞迅雷刀八本（消費ｃｏｍ１４０％）
Ｃ：ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ→Ｓ・ＳＡＵＬＴ→ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ→連舞迅雷刀八本→Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ（消費ｃｏｍ１１５％）

です。判る人には直ぐに判るかと思いますが、御覧の通り○○トゥースコンボ構成です。
モモトゥース、ロアトゥース等々、コンボは幾つかありますが、私が主に使用するのは、ナハトゥース。
個人的にナハ（ｒｙが一番タイミングが掴み易いからです。……まぁ後、語呂がいいってのもありますがｗ

ナハトゥースのタイミングは、ＫＯＳ－ＭＯＳが竜の牙（ドラゴン・トゥース）を地面に突き刺し、顔を上げた直後。
その瞬間にナハトを呼び出せば、完璧にコンボが決まります。
他にも、モモトゥースなら凍るタイミングに。ロアなら鉄球が振り下ろされる瞬間に。
つまり、トゥースの下から持ち上げる瞬間に合わせて、叩き付ける技や固定させる技を組み合わせれば、
威力とヒット数が跳ね上がると言う訳です。他にも幾つもあります

ので、探されるのもまた一興かと。
もし、自力で探すのがメンドイという方は、ｗｉｋｉってみて下さい。わんさか載ってますからｗ

それから気孔掌。これは、普通の敵にはＫＯＳ－ＭＯＳの眼前に来た時に。
重い敵には、ＫＯＳ－ＭＯＳの頭上を狙って放つと、落とさずに済みます。

後、迅雷刀。これは、実は引き付けずに早めに適当に出してしまうと、
逆に攻撃速度が早過ぎて落としてしまいますので、慌てずにじっくり間合いを計ってから御使用下さい。
因みに、重い敵には普通の敵よりも、若干早めに使うと安全に吹き飛ばせるでしょう。

それと、Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ。これは、技の出が結構遅いので、少し早めに出す事を心掛けると、
うっかり落としてしまう事が少なくなると思います。勿論、重い敵にはより早め高めにを心掛けて。
バスターは意外と拾う性能は高いので、最初の爆風がスカらない限りは、
例えヒット数は減っても結構な確率で拾えます。

後、落とし易いポイントは、イナズマブロー後のバスターに移る迄の間。
ブローはリフト性能は殆ど皆無ですので、問題はその前の爆風でどれだけ高く上げられるか。

だからといって、余り早く撃つと爆風に１ｈｉｔもせずに通り抜けて落ちてしまいますので、
そこは敵の重さ・接地範囲によってタイミングを見極めて下さい。

敢えて言うなら、タイミングは敵が落ち始めてから。
練習をするならば、私のコンボの様に、迅雷刀等の横に吹っ飛ばす系統の技の後の方が、
よりタイミングが掴み易いと思います。

ＶＡＬＫＹＲＩＥ（ヴァルキリー）？とＳ・ＳＡＵＬＴは、普通の敵への対策は先ず必要ありません。問題は重い敵のみ。
基本的にどちらの技も、極力早めに放てば大概拾えます。但し、フルヒットさせたい場合は訓練が必須です。
繋げる為に早めに撃てば勿論、ヒット数は減りますし、
フルヒットさせようと引き付け過ぎると、先ず確実に落とします。
ですので、本当にこれは慣れです。繰り返し使って、タイミングを身体に慣れさせて下さい。

但し、Ｇ・ＳＨＯＴ。テメェはダメだ。……断言します。この技は絶対に、重い敵相手には落とします。
早くても遅くても、落とします。少なくとも、私は未だ曾て一度たりとも拾えた事はありません。
寧ろ、何の援護も支援も『突撃』も無しにどうやったら繋げられるのか、教えてほしいぐらいです。

……ええ、つまり援護や支援、そして『突撃』の精神コマンドがあれば、問題無く繋げられる訳です。
例えば、それこそ小牟の援護や、Ｔ－ｅｌｏｓやカッツェの支援等

の様な、空中に固定出来るものがベスト。
他にも、実はリフト性能の低い、零児やハーケンの援護等とも意外と相性が良いです。
他の対処法としては、初撃に組み合わせてブロック割りに使う方法。

実はG・SHOTは全ての技（支援・援護含む）の中で、
マークの支援（38hit）に次いで、二番目にヒット数の多い攻撃（36hit）なのです。
しかも、マークの支援が得られるのは二週目以降なので、実質一番多いと言っても差し支えありません。
錫華の封印破でも最大34hit（三番目・重い敵限定・高揚無し）ですので、
『突撃』を使える為、重さに関係無いKOS－MOSのこの技が、
実質的には一番多いのです。

何故ならば、実はマークの支援はフロスト・ラティメリアやホロース・パインの様な、
普通の重さの敵の中でも軽い敵相手には、
ブロックを割ると同時に落としてしまうので、確実性は若干落ちるのです。
その点、邪神様の場合は『直撃』＆『突撃』持ちですので、確実に繋げられる超高性能な仕様なのです。

尤も、ヒット数が多いという事は、当然一発辺りのダメージも低いので、
火鎖地蔵の様な、極端に防御力の高い相手ではこちらの攻撃力が低いと、
魂が掛かっていても猶、1ばかりが羅列してしまうので使う相手にも気を付けて下さい。

それと、ブロックの無い重い敵相手の初撃になる場合や、同じく重い敵相手の連続攻撃の初撃。
この両方は『絶対に』落とします。その場合は、素直にそっと即座にコンボを組み替えて下さい。

因みに、ＫＯＳ－ＭＯＳの援護：Ｔ・ＡＲＴＳは普通の重さの敵にはフルヒット（２５ｈｉｔ）は可能なのですが、
重い敵相手には絶対に不可能です。もしどうしてもフルヒットさせたい場合には、
以前紹介した小牟の破天光や零児の四嗣噴陣などとのコンボを使用する以外には不可能です。
尤も、コンボをさせても猶、モッコス様の援護自体はフルヒットは出来ないのですが、
ヒット数増大＋ダメージアップ＋絶対不落という結果は非常に美味しいので、御薦めしますが。

因みに。普通の重さの敵に攻撃の最中にフルヒットさせたい場合。
狙うポイントは、敵が僅かに落ち掛けた時。まだ上がっている最中では、少し早いのです。
また、モスコス様の援護も出が遅いので沈み掛けた頃でないと、ほぼ確実に落としてしまうので、
引き付け過ぎず、且つ早過ぎず。とある僅かな一定のポイントを射抜く様に狙って下さい。
慣れると、自然とその位置に来た時に指が動き、成功している姿が先に幻視出来ます。
……まぁ尤も、其処迄やり込んでしまった私の様な場合は、流石に廃人と言わざるを得ませんが。

とまぁ、こんな所でしょうか。次は到頭(とうとう)最後の、アクセル&アルフィミィの技構成です。御楽しみに！

第参拾伍話【新たな世界の誕生日（バースデイ）～猛き巨神の交響曲（シンフォニー）】

現時刻（０９：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，６９４，１９１アクセス　ユニーク：２２１，７０８人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。そして、大変御待たせ致しました。

当話の本文の文字数は、２７，０００字強となっております。前・後書きも合わせたら……３１，５００字超？
……ハハッ、ワロスｏｒｚ　な、何が起こったのか（ｒｙ
酒の肴に、時間のある時に、暇潰しに、のんびりと御覧になって下さい。
一気に読むと消化不良になる危険性があります。御気を付けを。……ハァ。どうしてこうなっｔ（ｒｙ

あ、そうそう。活動報告にても御話しました通り、この話から暫く割り込み投稿という形になります。
凡そ十話前後程度ですが、どうか御諒承下さい。

さてさて、今回は、シュテルベン・シュロス最終決戦・後編です。
これでようやっと、この世界を騒がせている全ての元凶との決着が付きます。

あ、因みに。このラスボスは、塔の最上階にいるあのラスボスと同じぐらいの強さと思って下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾伍話【新たな世界の誕生日（バースデイ）～猛き巨神の交響曲（シンフォニー）～】

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス中枢

まるで神の目が如き光珠が、相変わらず不気味な程の力をギリギリで保ち続けながら、

鎮座しているこの間、そしてその眼前にガグン達は皆、倒れ伏していた。

特に、ロックとヒルドは辛うじて呻き声を発しながら、ガグンの声に応えるのが精一杯だった。

「……ロック・アイ。……ヒルド・ブランよ。」

「ク……ククク……これまで……か……。」

「……ガグン様……我々の力……御使い……下さい……。
我々は……いつも……貴方の……御傍に……。」

「新たなる地平……見せて……頂きたく……。」

「……うむ。」

そう言い、二人はガグンに別れを告げ、自らの生を終えようとしていたのだが……。

残念ながら、その計画は叶う事は無かった。何故なら……其処にはカイトがいたからだった。

「はい、残念。そいつは無理なんだなぁ、これがな。」

「「「なっ――――――!?」」」

「……おいおいおいおいっ……!?　カイト……あんた、そいつらまで助けようってのか!?」

「まぁな。序でだ。」

「何故こんなマネを……いや、まて。……そいつらまで？　それは一体、どういう意味かね？」

「ん？　……こういう意味さ。ライト、吐き出せ！」

そうカイトが言うと、カイトの右隣に突如現れた真っ白な穴から、ガンド三兄弟とリグ・ザ・ガードが、猿轡縄目（さるぐつわなわめ）で縛られながらゴロンと転がされて出て来た。

「何!?　リグ!?」「あなた達まで……!?」「どういう事だ…
…これは!!?」

「どういうって……だからこういう事。不死桜で待ち構えていたこ
いつらを倒した後、
　俺が完全に回復させて、その魂をここに送らせなかったって事さ。
おーけー?」

そう言いながら、カイトは四人の口の紐だけを外した。
すると四人はようやっと人心地付いたとでも言いたい様に、プハァ
ッっと息をし、
カイトを睨み付けた後、改めてガグン達に向き直り、頭を垂れた。

「……申し訳ありませぬ、我らが王よ。」「面目ねェ……!」

「……よい、構わぬ。貴様らが生きていた御蔭で、あれが今生
の別れとならずに済んだ。」

「……はっ。勿体無き御言葉、恐悦至極に存じます。」

「……うむ。して、救世主(メシア)よ。貴様は、真に何を企む?」

「何って、そんなん決まって――――。」

その時であった。カイトが皆に語って聞かせようとした、その瞬間。

突如現れた何者かに、カイトでさえも反応する事が出来ず間に合わなかったのは……。

「そういう事、されちゃ困るんだよね……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。シッ！」「か……ッ！？」

「そういう事ですわ。セィッ！」「な……あああっ！？！？」

“！？！？”　「！？　しまっ……！」

カイトが珍しく慌てた声を出した。だが、その気持ちは誰にも理解出来た。

今、自分たちの目の前で起きた事に誰もついていけなかっただからだ。

ロックの胸には、文字通りポッカリと穴が空いており。

ヒルドは両方の肩から、全く同時に袈裟懸けに斬り離されており。

白地（あからさま）な致命傷を負った二人は、何ら身動き一つする事は出来ずに、その直後にヴェルトバオムに吸収されてしまった。

カイトは、その攻撃が飛んで来た方向を睨み付けながら、せめて彼等は、とリグ達を即座にダークの中に押し込んだ。

「――――また、性懲りも無く貴様等か。ノルニル共……！」

「生憎と。……こちらもそれなりの決意で来ておりますの。」

「そう易々とホイホイと、はいそうですか、って帰れないんだよね……。」

「――――例え、アンタの言葉（かくご）を幾ら聞いたとしても、ね。」

「……。」

そう、それはＮ・Ｎ（ネオ・ノルニル）と称する彼女達の仕業であった。

ロックは恐らく、拳を握り固めているあの活発そうな少女に殴られて。

ヒルドは恐らく、あの長女らしき女性が両手に持っている鞭に斬り飛ばされて。

だが、そこでようやっとこちらも意識が戻って来たハーケン達が騒ぎ始めた。

「ロックとヒルドの魂が……！？」「ヴェルトバオムの樹に吸収されちゃったよ！？」

「あ……ああ……！　力が……力が……！！　信じられない事極まりないです……！！　こんな……力……！！！」

「さあ、ガグン・ラウズ？　御膳立てはして差し上げましたわよ？」

「さっさと、その力使っちまいな。」

「じゃないと……代わりに、あたい達がその力、全部貰うよ？」

「言われるまでも無い……！」

シュレスト姉妹が、ガグンに何か言っている間にも、アレディ達の困惑はまだ広まっていた。

「凄い魔力よ……！　今にも……ド弾けそう……！！」

「どうなっておりますの!?　ちょっと……ッ!!」

「……例えどちらが勝とうとも、アグラッドヘイムは転移する。出来得る事ならば、勝利し全ての憂いを無くしてから、転移したかったのだがな。」

「何ですって!?」「ロックとヒルドの魂を更に呑み込んだ所為か!?」

「い、今、どっちが勝っても……と言っていましたが!?」

「そうどちらが勝とうとも……例え、我が負け、滅ぼされようともだッッ!!!

だが……我もむざむざと、敗北を待つ気は更々無いッ!!」

ガグンは、これ以上無い程の不退転の決意で、ヴェルトバオムに告げた。望んだ。

二人に……そして、己が部下達に届く様にと……。

「ヴェルトバオムよッ!　その力を我に与えよ!!

より多くの！　より強き魂を！！　その身に宿らす為にいいいィィッッッ！！！！！！

この！　仮初めの身体にッッ！！！

新たな命を吹き込むのだアアアアァァァッッッッ！！！！！！！！！！

ヴェルトバオムよオオオオオオオオォォォォォォッッッッッッ！！！！！！！！！！」

その魂の咆哮に感応したのか。俄にヴェルトバオムが眩い程に光り輝き出し、

自身の力、その幾分かをガグンに分け与え……。

そして、彼は――――進化した。

「我が名はスヴァイサー。ヴェルトバオムの力を得て……我が身体は究極体へと変化した。

ＷＯ５と言ったか。この身体……気に入ったぞ。ここまでの力を引き出せるとは……。

貴様らを全て屠り尽くし……我がアグラッドヘイムは新たな世界を目指す……！」

遂に、元兇がその姿を顕わし。今、此処にラストバトルの幕が上がった。

第参拾伍話【新たな世界の誕生日（バースデイ）～猛き巨神の交響曲（シンフォニー）～】

ｓｉｄｅ：三人称

「ちょ、超巨大なエネルギー反応を確認しました……！　も、ものすごいです……！」

「樹の力を受けて、巨大化したって言うの……！？　こんな事が……！」

「物理的に可能なのかの……！？」

「……可能か不可能は問題じゃない……！　実際に……奴は変化した……！」

その現実に、誰もが我が目を疑った。幾ら膨大な力を有しているからといって、

樹に力を与えられただけで、こんな恐ろしい事が可能なのかと。

だが、零児の言った様に、現にその事実が自分達の目の前にあるのだ。

「それと、どちらが倒れてもと転移するはどういう事であるかッ！？」

「ヴェルトバオムに吸収された力は既に限界を越えている。何故、未だ保っていられるのか不思議な程に。……曾ての身体では……その力に耐え切る事が出来なかった……！」

「Ｗ０５のボディ……そこまでのものだったか……！」

思わず歯？みする一行。だが、彼はそんなものなど御構い無しに、ハーケン達に告げて来る。

「貴様ら程の魂……我が得たこの力……そして、救世主の魂。その何れかが敗れたとしても、その力は今度こそ限界を越え切るであろう。」

「スヴァイサーの躯体（くたい）はエネルギー許容量の限界を、既に越えているものと思われます。」

「では……打つ手は無いんですの……！？」

「チッ……！　なんて……こった……ッ！　勝っても負けてもＮＧ

って事か……！」

「それが本当なら……詰み……なのか……！？」

「……！　……カイト殿？」

その現実を直視し、つい絶望に染まりそうになった時、カイトが皆の前に出て来た。

……シュレスト姉妹は相変わらず、スヴァイサーの上に浮遊した儘で静観していたが。

「……救世主（メシア）か。……救世主（メシア）よ、一つ貴様に聞きたい。何故、貴様は我と敵対する？」

「……唐突に、何だ。」

「……以前から聞いておきたかった。曾て……貴様が我がアグラッドヘイムに訪れた時も、
貴様は、我と敵対する事になるだろう、と言っていた。……何故だ？」

「……。」

確かに、それは気にはなっていた。何故、アグラッドヘイムと敵対するのか。

何故、あれ程までに修羅を忌み嫌うのか。何故……自分達と行動を共にしているのか。

カイトが一つ深い溜息を付いて、スヴァイサーの……そして、皆の問いに応えた。

「……はぁ。何故もへったくれもねぇよ。……おい、ガグン坊や。

テメェ、俺があの時何て言ってたか……覚えてやがるか？」

「む……？　確かこう言っていたな。

『貴様が王となった時、アグラッドヘイムの在り様を変えぬ限り、俺が貴様の敵となる』と。」

「そうだ。アグラッドヘイム……いや、ヴェルトバオムの在り様は歪極まりない。

全ての存在を吸収し、自身と一つになる事が目的にして存在価値。
そんな在り様は、あらゆる存在への冒涜にして、生命体としては此の上も無く異常だ。」

確かに。本来「個」である筈のあらゆる生物を、一つにしてしまうと言うのは可笑しい。
だが、それについてスヴァイサーも反論して来た。……のだが。

「だが、それでは人は何も変わらぬ。……何も変われぬのだ！　その存在は常に「孤」！
決して永劫共にいられる訳も無く！　決して同じに成り得る事も無く！」

「……そうだな。人は何時迄経っても、常に独りだ。それは、永劫変わる事は無い。
どの世界へ行こうとも、それだけは決して変わる事の無い不文律だった。」

「そうだ……その通りだ！　故に我らは……「だが……！」……！？」

「だがな……ガグン＝ラウズよ。人は独りだからこそ、人間（ひと）を……誰かを愛せるんだ。

だからこそ俺は、人を……人間を愛おしいと想う。

だからこそ俺は、此の世に存在する全ての存在を護り抜く。

だからこそ俺は……遍く世界を救う救世主でいられる。

だからこそ……俺は――――テメェラの存在が許せねぇんだよ――――！！！」

「くっ……！　だが、ヴェルトバオムは決してその存在を……在り様を変えぬ！」

「――――それは変えられなかった訳じゃない。

……貴様が変えようと努力せず、其処から逃げ出しただけだ。」

「何！？　我が……逃げ出した……だと……ッ！？」

「そうだ。貴様は逃げ出したんだ。アグラッドヘイムを変革する事から。

ヴェルトバオムの存在に怖気付いてその在り様を変える事から。

世界に革新(はじまり)を齎(もたら)すのは、何時だって人の覚悟だ。

アレディは見事、修羅の闘争の歴史を覆そうとしている。否、実際、既にしている。

だが、貴様はどうだ？　ヴェルトバオムの意の儘に従い、部下を悉く生贄に捧げ。

挙句の果てがその姿だ。……その化け物の様な醜い姿が、貴様の望みだったのか？

……貴様は逃げたんだよ。変えられた筈の全てから……何もかも投げ出して脱兎の如く。

貴様は人に無ければならない、『覚悟(いきざま)』に背を向けたんだ。」

「ぬ……ぐ……！！　救世主(メシア)ァァァ……！！！」

「――――解るか？　ヴェルトバオムの化身よ。この俺の怒りが……！！

貴様の存在はあらゆる生命への冒涜だ。

そんな事……この俺が……救世主(メシア)たるこのオレが……！！！

許せる訳がねえだろうがアアアアアァァァァ!!!!!」

「救世主アアアアアアアアアアァァァァァ!!!!!!!!!!」

それは、激しい気合いだった。

それは、凄まじい咆哮だった。

それは、張り詰めた怒気だった。

そして…………先に動いたのは、カイトの方だった。

「序でだ……貴様に魅せてやる……螺旋とは……真の漢とはどうい

うものかをな……！

覚悟しろガグン＝ラウズ……否！　ヴェルトバオムの守護者……スヴァイサーよ！！」

「抜かせエエエエエエェェェ！！！！！」

スヴァイサーが、自身の得物『星穿（ほしうぎ）の神槍（しんそう）』を手に構えた。

カイトが両手を握り締め、気合いを入れる様に踏ん張った。

「螺旋力！　全開放！！　うおおおお！！！！！　テェェェラァァァァ！！！

ドォォォリィィィィルゥゥゥゥゥ！！！！！」

「お……おお……おおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

スヴァイサーが驚き怯み、後退（あとずさ）るのも解る。
カイトの全身から余す事無く大小無数のドリルが生え、
それらが引っ込むと同時に、カイトが頭上に高く掲げた右手から超巨大なドリルが現れた。
その大きさは優にスヴァイサーの数倍はあり、カイトの姿など完全に見えなくなっていた。
だが、僅かな間怯んでいたスヴァイサーも、流石に臍を固めたのか。
自身に気合いを入れると、果敢（むぼう）にもソレに向かって行った。

「オオオオオオオオオオ！！！！！　星穿の神槍よ！！！
貫け！！　押し穿て！！　星ごと奴を！！！
その全てを！！！　何もかもをオオオオオ！！！！！」

「んブレイクウウウウウウウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！！！」

「ハアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

互いのドリルがぶつかり合った。だが、それも数瞬と持たなかった。
ぶつかり合った直後、星穿が拉(ひしゃ)げ始め、遂にはその原型を留めずに完全に破壊され。
カイトのドリルは、辛うじて躱(かわ)させたスヴァイサーの半身をごっそり抉り取っていったのだった。

「魅たか――――これが、真の漢(ドリル)だ。」

「お…………おおおお…………オオオアアアアアアアアア…………！！！！！」

半身を失った儘、？きながらスヴァイサーは地にどっと倒れ伏した。

唖然としていたハーケン達は、ハッと我に返りカイトに声を掛けた。

「……お、おい、カイト。こいつを倒しちまったら、暴走してしまうんじゃ……！」

「おいおい。この俺がそんな真似を……「させる訳が無いでしょう？」何……！？」

「！？　バカな……！！」

アレディ達の驚愕も当然だろう。何故なら、半身を失くしていた筈のスヴァイサーが、

光に包まれた途端に、元の身体を完全に取り戻していたのだから。

だが、それに一番驚いていたのは、他ならぬスヴァイサー本人だったであろう。

自身も死んだと思っていた己が身が完全に復活し、神槍すらも再び己が手にあるのだから。

「……こ、これは……。」

「感謝してよね？　あたい達があんたを回復してやったんだから。」

「そういう事ですわ。さあ、馬車馬の様に働きなさい。それが貴方に与えられた唯一の役目よ？」

「……残念だったな、救世主（メシア）。どうやら我は、そう簡単には死ねぬ様だ。」

「……フン……抜かせ、雑魚が。ならば、貴様の始末はアレディ達に任せるとしようか。

俺は……邪魔なコイツラを始末しなければいけない様だからな。」

スヴァイサーを鼻で笑い、その視線を闘気をシュレスト姉妹に向けたカイト。

どうやら、ようやっと戦闘の構図が決まって来た様だ。

「フン！　今度は、そう簡単に勝てるなんて思って貰っちゃ困るわね！」

「そうさ！　アタシ達のコンビネーションは、ブラウセス様だって舌を巻く程なんだからね！」

「そうか……ならば今度、坊やをまた少し鍛えてやらねばな。

……貴様等程度に梃子（てこず）摺るようでは、

俺の唯一の弟子としては此の上無く恥ずかしいのでな。」

「……では、御相手願いましょうか。篤と私達の連携、御覧遊ばせ？　『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』。」

どうやら、既にこちらは臨戦態勢に移行し終わっている様で、

互いに攻撃に移るタイミングを計っている様だ。

一方、スヴァイサー達の方は、と言うと……。

「……ちっ、体良くカイトに押し付けられたはいいが、どうする？

下手に触れたら、ドカンといっちまう……！」

「……戦いましょう。」

「！　アレディ……しかし……！」「……シュラよ、何か手があると言うのか？」

「ＫＯＳ－ＭＯＳは必ず連れて戻る！！　その為ならば、何だってするさ！　……早く言いな……！」

「……はい！　私に考えがあります。スヴァイサーの動きを止めて下さい。」

「無駄な事だ。全てが無意味となる。諦める事だな……貴様達の世界も。

そして……！　貴様達自身をも……！！！　その全てをッッ！！！！」

「……全てを諦めるのは、この命が潰えた時のみでいい。

我が修練……この刻の為にあったと信じよう。

この争覇……未知なる無限の開拓地を守る為にッ！！！」

そして遂に、最終決戦の幕が上がり――――その火蓋が切って落とされた。

ｓｉｄｅ：シュレスト姉妹戦

「では、改めて名乗らせて貰いますわ。

Ｎ（ネオ）・Ｎ（ノルニル）第六席　ラフィレス＝シュレスト。『鞭使い（ザ・ウィップマスター）』ですの。」

「同じく、Ｎ・Ｎ　第七席　ガブリュース＝シュレスト！　『拳使（ザ・ナックルマスター）い』だ！」

「そしてあたいが、Ｎ・Ｎ　第八席　アリエル＝シュレスト　『魔（ザ・マジックマスター）力使い』よ！」

「ふん、下位幹部共が揃いも揃ってか。俺も舐められたものだな。」

「そんな口を聞いていられるのも今の内だけですわよ？」

「アタシ達の力を……舐めないでよね！」

「「「フォーム・アップ！！！」」」

改めて名乗ったシュレスト三姉妹。

カイトの挑発に乗り、三人同時に叫ぶと、三人を光が包み、姿を変じた。

ラフィレスは、ボンテージとでも言えばいいのだろうか？

黒い光沢を帯びた革製らしきものを、動き易そうな白い生地の服の上に着込んでいる。

両手に持っていた双鞭は、更に重く鋭く、禍々しく変じていた。

ガブリュースは、如何にも格闘少女といった身形だ。全体的に橙っぽい様相である。

極短に布地が少なく、攻撃に要点を全て置いたかの様な、防御を完全に無視した格好だ。

その両手には、何かの特殊な金属なのだろうか？　それを布地の上

に装着している。

アリエルは、正に魔法少女然とした格好で、全体的にピンク色と青色が目立つ。

帽子といい、フリフリのスカートといい、如何にも魔法少女らしく、杖に至っては、先端がハート型になっており、その中に更にハートがあるという徹底振りである。

「……フン。もういいのか？　色物集団。」

「「「貴方（アンタ）に言われたくありませんわ（無いよ・無いわよ）！！！」」」

「……まぁ、そんな御託はいい。さっさと掛かって来い。少しは遊んでやる。」

「……自分から言っときながら……グギギ……！」

「……落ち着きなさい、アリエル。感情のままに動いては、彼の思う壺よ？」

「う……わ、分かったわよ。」

どうやら、ラフィレスの一言ですぐに冷静さを取り戻した様だ。

（成る程、揺らぐ程度の信頼性でも無く、特にこれといった確執も無し……か。）

と、カイトはこの間の遣り取りのみで、其処迄判断し結論を出していた。

――――これは、連携とやらも少しは楽しめそうだ――――と。

「それでは……何時もの通り、参りますわよ。宜しくて？　ガブリュース、アリエル。」

「「勿論！」」

「――――来い！」

「言われずとも！　アタシからいくよ！！」

そう宣言すると、ガブリュースは姿を消した。……カイトも同時に。

それと時を同じくして、空中のあらゆる所で、激しい衝突音が鳴り響いた。

どうやら、カイトとガブリュースがぶつかりあっている音の様である。

スヴァイサーとの戦いに集中していたアレディ達には、恐らく見えない速度なのだろうが、

アリエルとラフィレスには確り見えているらしく、既に援護出来る様に準備は整っていた様だ。

そうこうしている内にガブリュースが姿を現した。

どうやらあっさりカイトにいなされたらしく、吹き飛ばされて出て来たが直ぐに踏み止まった。

「何だ、その程度か？　遠慮も出し惜しみもするな。さっさと三匹纏めて掛かって来い。」

「チッ……！　ラフィ姉！」

「ええ、とっくに準備は出来てるわよ？」

そう返事したラフィレスの前の空間には、斬り裂かれた様な穴がぽっかり空いており、

彼女の側から見れば、その斬り裂かれた空間の先に、

更に縦に斬り裂かれた、無数の裂け目が見えた事だろう。

「さあ、参りますわよ！　次元裂き（ディメンジョン・エア）！！」

「む！　くっ……！　何だと！？」

「フフ……貴方の全方位の次元に穴を空けさせて頂きましたの。私はここから鞭を振るだけ。

でも貴方は上下前後左右３６０。、何処から来るか判らない鞭の斬撃に怯えなさい。

セエエィヤアアァァッッ！！！！！」

そう気合いを入れると、ラフィレスは激しく鞭を揮（ふる）った。

引っ切り無しにカイトの周囲から、縦横無尽に唐突に鞭が飛んで来る。

完全に予測不可能なそれに、カイトは煩わしそうに舌打ちをしながら、

ギリギリで躱し続けている。そこに、更にガブリュースからの追撃が加わる。

「チッ……！　七面倒な……！！」

「おっと！　ラフィ姉ばっか注目してていいのかい？」「……！？」

「今度はこっちの番さ！　喰らいなッ！　ぶん殴り（ナックルバースト）！！」

「ぐ……！？　おおおッッ！！？」

『ぶん殴り』の名の通り、ガブリュースはカイトに向かって何も無い空間を殴り付けた。

すると、カイトのいた空間が、未だ続いている斬撃ごと吹き飛ばされた。

斬撃の速度も数も変わらず、どうやらカイトだけがその衝撃を受けている様だ。

「ぐっ……！　これは……空間を殴り付けたのか！！？」

「ヘッ……その通りさ！　アタシは、形があろうと無かろうと！

どんなモノでも殴り飛ばせるんだよ！　こんな具合にね！！

オラオラオラオラオラオラオラ！！！！！」

「ぬ……！　ぐ……！　クッ……！！」

上から下から、右から左から、前から後ろから。

空間ごと殴り付けられ続け、更には四方八方からの神出鬼没の鞭の斬撃も止まらず。

流石のカイトも、少々方向感覚が狂いそうに成り掛けた頃、アリエルの声がどこからか響いた。

「ラフィ姉様！　リュー姉様！」

「よし！」「いつでも来なさい！」

「チッ……！　今度は、一体何だ！？」

未だ攻撃が続けられているカイトから横目で見えたのは、

アリエルが巨大な魔力の塊を集め、巨大な光の束に収束し終えてい

る所だった。

「今度こそ、逝っちゃえぇッ！！！　広域殲滅閃光（フラッシュ・クラッシュ）！！！！！！」

「何ッ！？　ぐううぅッッ！！？」

巨大な魔力の塊を、幾百重（いくひゃくえ）にも束ねた光の収束光線として撃ち放ち。

瞬時に避けたガブリュースの真後ろから、カイトに目掛けて文字通り光速で浴びせて来た。

さしものカイトも回避は間に合わなかったが、辛うじて防御は間に合った様だ。

だが、その光線はカイトの防御をも貫き、その命を一つ削っていた。

「……成る程な。確かに、素晴らしい連携だ。

一旦攻撃に移れば、俺でさえも反撃出来ずにあっさり死ぬとはな。」

「そういう事ですわ。勿論、この程度は序の口。まだまだ、これか

らが本番ですわよ？」

「……そうか。それならば、俺も少しは愉しめそうだ。今度はこちらからいくぞ……！」

「そう簡単に、思い通りに物事が運ぶと思わない事ね……！」

御互いに構え直し、第二ラウンドを開始……しようとしていたのだが。

何とそこで、唐突に乱入者が割り込んで来たのだった。

「むぅ～……！　カイト兄ちゃん！！」

「おっと……鋼牙、どうした？　……あ～、何で怒ってる？　んだ？」

「カイト兄ちゃんばっかりズルイ！　僕だって、お姉ちゃん達と遊びたいぃー！！」

「……って、おいおい。」

と、唐突に鋼牙が出て来て、駄々を捏ね始めたのだ。

一触即発だった空気が一瞬にして萎え、思わずおいおいとカイトも零していた。

その事態を収集する為に、慌てて黄宇も出て来て鋼牙を宥めたのだが……。

「こら、鋼牙！　余り我が儘を言うものじゃない！　主殿も困っておられるだろう？」

「やーーだーーー！！！　僕も遊ぶのーーー！！！」

「あ～……まぁ、確かに暫く鋼牙も戦って無かったしなぁ。」

「……主殿、ですが。」

「まぁ、偶にはいいさ。お前達だって、結構鬱憤、溜まってんだろ？」

「……い、いえ、その……ま、まぁ、それなりには。で、ですが……！」

「やったぁ～！　えへへ～♪　だから、カイト兄ちゃん、大好きっ！！」

「はいはい。でもな、鋼牙。余り何度もこういう事はやっちゃダメだぞ？」

「は～～～い！♪」

黄宇と二人して、御互いに顔を見合わせながら溜息を付くカイト。

……今が結構、切迫している状況だと言う事を忘れていそうである。

するとそれに便乗して、龍斗達も出て来た。どうやら、みんな本当に鬱憤が溜まっていた様だ。

「……おいおい、お前達もか？」

「……申し訳ありません、カイト様。」

「……いやまぁ、構わないけどさ。じゃ、適当にお前らが決めてさっさと片付けろよ～。」

そう言うと、カイトは完全に丸投げし地面に下りて、スヴァイサーとの戦いを見学し始めた。

一方、カイトに丸投げされた五行達は、ジャンケンを始めていた。

シュレスト姉妹達は唐突に始まったそれに、折角入れた気合いも空振りに終わり、

ポカーンとしながら、その成り行きを見ていた。

……そうこうしている内に、どうやらジャンケンも終わった様だ。

「やったぁ！　僕、あの元気なお姉ちゃんね！」

「では、私はあの鞭使いと仕合うとするか。」

「……では、私があの少女の相手ですか。」

「クックック……大の大人が、ガキんちょ……それも幼女の相手か……ｗ」

「……そこ、ウルサイですよ、紅蓮。」

どうやら、そういう事になったらしい。

黄宇とラフィレス。鋼牙とガブリュース。龍斗とアリエル。と。

だが向こうも、誰が相手であろうとも退く気は無い様で、既に臨戦態勢に入っている。

「じゃ、俺様は戻ってるぜ。戦えないんじゃ、こんなお遊び見てても ツマンネェしな。」

「じゃ、私はマスターとイチャイチャしてるわね♪　マ～スタァ～？」

紅蓮は姿を消し。水薙はカイトの元へ跳び付き、両腕を絡めながらラブラブオーラ全開だ。

空中では、三ケ所で１ｖｓ１の激しいバトルが繰り広げられる様だ。

一方、地上のスヴァイサーとアレディ達は、と言うと……。

ｓｉｄｅ：スヴァイサー戦？

「しかし、動きを止めるったって、こんなデカブツどうしろってんだ？」

「ハッ！　ビビッてんなら、オレが先に行くぜ、ハーケン？　カオティック・シューター！！！」

「……相変わらずだな。なら、俺達も続くか！」

真っ先に先行したマークに続いて、皆も己が得物を手にし、その後を追った。

「いいだろう……掛かって来い！　その悉くを滅し、貴様らの魂をヴェルトバオムの苗とし！

我が力の糧とし！！　我が部下共への餞（はなむけ）としようぞ！！！」

「抜かせ……！　いくぞ、アルフィミィ！」「了解ですの……！」

「余り前に出過ぎるなよ、アクセル……！　クロンダイク……いけぇッ！！」

先に出たマークを追い越したアクミィをハーケンが援護するも、スヴァイサーには特にダメージは見られず、目隠し程度にしか効果は無かった。

「ちっ……やはり堅いか。」
「ならば、その装甲……噛み砕くまで！　白虎咬！！」「かみかみですの。」
「続きます。ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ。連舞迅雷刀八本！」
「まだだ！　イリュージョン・ボルト！　ディバイン・ランサー！！」
「こいつもだ！　貫け、ステーク！　セブン・スタッド！！」

どんなに堅かろうと、一点集中ならば……！
そう判断し、一気呵成に攻め入ったのだが……。

「――――フン。その程度か、異界の闘士達よ。」
「な!?　バカな……全く効いていない……だと……!?」
「蚊に刺された程度にも感じぬわ！　散らばれいッ！！　ブレード・インフェルノォォッ！！！」
「うおわぁッッ!?　危ないものを振り回しやがって……！！」
「フンッ！！　伊達や酔狂でこの様な頭はしておらぬわッッ！！！」

自身の周りに群がるハーケン達を、己が頭部にある刃を振り回して遠離(とおざ)け、

神槍を持ち直して構えた。それに応じて、神夜達も刀を構えて突っ込んだ。

「楠舞一刀流……！」「護業抜刀法……！」

「「いざ、参ります（参る）！！」」

「わしらもいくぞ、沙夜！」「しょうがないわねえ。」「ニャンと参りましょう！」

「来い……！」

「燕の……えっ！？」「火燐・零の……何ッ！」「水憐……なん……じゃと！？」

「氷と焔……！　そんな……！！」「猫正……うそ……！？」

「……どうした？　そんなものか……！！」

彼等の驚愕も当然だ。神夜や零児達がスヴァイサーに斬り込んだものの、

その全てを神槍一本で受け止められてしまったのだから。

そして、その儘スヴァイサーは神槍を揮い、零児達を薙ぎ払った。

「温い……！　温い温い温いわアアァァッッッ！！！！！」

「ぐっ……！　マズイ！？」

「我が神槍、受け止められはせんッ！！　穿ち抜け！　ディバイン・ドリラー！！！」

「きゃあああッッ！！！」「抜かった……！」「くっ……！！」

神槍の先端を回転させ、薙ぎ払いながら剣群ごと零児達を退けたスヴァイサーは、

続けて槍を床に刺して立て、両手についている数多の銃口を零児達の後ろで、

今にも飛び掛かろうとしていた他のメンバーに向け、その照準を合わせた。

「砕け散るがいい……！！　ゴールド・バングル掃射！！　喰らえエイィィィッッッ！！！」

「危ないッ！！？」「む、無理無理無理ぃ～！！！」「わわわわっっ！？！？」

スヴァイサーの両指から掃射されたガトリングガンには、流石に誰もが防ごうとは思わず、

全員、全力でそれから脱兎の如く、本気で逃げ回った。

その甲斐があったのか、一度の斉射が終わり、辛うじて皆軽傷程度で済んだ様だ。

だが、恐らくあれも弾が自動生成されるであろう事は、想像に難くない。

どうやら、スヴァイサーも敢えて追撃はせず、アレディ達の態勢が調うまで待っている様だ。

「ちっ……本当に厄介なモンを押し付けられちまったぜ……。」

「ですが……これは我々が……我々自身の手で越えねばならぬ試練です。」

「……ああ、分かっているさ。ここが、一つの旅の終着点なのはな。」

「ええ。……参りましょう。この争覇を終わらせる為に……！

この無限の開拓地を護り抜く為に……！！」

再び態勢を調え直したアレディィ達。

威容を顕示する自身を前にして尚、闘志の衰えた様を見せぬ彼等に北叟笑(ほくそ)むスヴァイサー。

彼等の戦いは、まだまだ始まったばかりの様だ。

丁度その頃、上空では……。

ｓｉｄｅ：ガブリュース＝シュレストｖｓ鋼牙

「えへへ♪　僕、鋼牙っていうんだ。お姉ちゃん、宜しくね♪」

「……こんなアリエルよりも小さい子供が、アタシの相手？

……いやいや、見た目で判断するのはまずい。

何てったってあの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』の従者なんだから。
でも……本当にこんな子が、そんなに強いなんて……信じられないよ……。」

「？　え～と、こんな時は確か……あ、そうだ！
……御託はいいから、さっさと掛かって来なよ。じゃないと……死んじゃうよ？」

「な！？　い、いつのまに……！？」

ガブリュースが驚くの無理は無い。さっきから独り言をぶつぶつ呟いていた時も、
ずっと鋼牙から目を離さずに、その一挙手一投足を観察していたというのに、

聞こえて来た声は自身の真後ろからだったのだから。

慌ててその場から退きながら、真後ろを振り向くと鋼牙が同じ格好のままでにこやかにいた。

「くっ……！　どうやら、本当に見掛けに惑われたら、痛い目をみるらしいね……！」

「あはっ♪　本気になってくれた♪　本当に後（これ）ろを取るだけでいい

んだね♪

じゃ、目一杯遊ぼー！　全力は出さないけど、本気は出すからね～！

お姉ちゃん、頑張ってね♪　すぐに諦めて負けちゃダメだよ？」

「――――上等。こんな子供に舐められて、おいそれと引き下がれるかッ！！」

鋼牙の挑発（本人はそう思っていないが）に乗ったガブリュースは、拳を固めて、鋼牙に特攻した。鋼牙も楽しそうに、ガブリュースの拳に合わせて来た。

右ストレートには右ストレートで。左のジャブ連打には同じく左でのジャブ連打を同じ数だけ。

どんなフェイントを混ぜようとも、全く同じフェイントを使って来たり、

そのフェイントを完全に見破って、本命の一撃に合わせて来たり。

何度やっても、どちらにもダメージが与えられない戦い方に、益々苛々が募るガブリュース。

「アンタ……！　やっぱ、アタシを舐めてんでしょ！！」

「？　ううん。最初に言ったでしょ？　目一杯遊ぼー！　って、ね♪」

「くっ……！　フザケんな……！　アタシは真面目に戦ってるんだ……ッ！！」

「え？　何？　もしかしてお姉ちゃん……僕と闘いたかったの？」

「！？！？　な……！？　く……！？」

その瞬間、鋼牙の雰囲気が瞬時に変じた。今迄の白地（あからさま）に無邪気そのものだったソレから、

敵意剥き出しの、ガブリュースが圧倒される程の闘気を伴って。

「……なぁ～んだ……それなら、そうと最初に言ってよね……。あ～あ……折角遊んでくれると思ったのになぁ……もういいや。

つまんないから、さっさと終わらせちゃおうかな。」

「…！？　が……ふっ……！？」

判らなかった。いつ殴られたのか。

そう思いながら、辛うじて吹き飛ばされた先で踏み止まったガブリュースを、

今度は下からの衝撃が襲った。どうやら、今度は蹴り上げられたらしい。

だが、何時迄もやられてばかりもいられない。

辛うじて態勢を整え、向かって来るのが僅かに見えたガブリュースは、

その彼が向かって来ている前面の空間を、力の限り殴り付けた。

「くふっ……！　こ……の……おおっ！！　ぶっ飛ばし（ブルブラスト）オオッッッ！！！！」

「うわっ！？　……へぇ～、少しは抵抗出来るんだ。でもこれ、確かに面白いね。

カイト兄ちゃんが、遊んであげたのも少しは解るなぁ。」

鋼牙の向かって来た、その勢いごと殴り飛ばしたものの、当の本人

は何処吹く風。

それ所か、楽しんでいる風の言葉すら発している。

確かに全力では無かったものの、可成り力（りき）を入れて殴ったにも拘らず……だ。

思わず、彼女が歯？みし睨み付けてしまうのも、十分納得出来る話だ。

「くっ……！　バケモンめ……！　上等だよ……！！

それなら、一撃で……！　アタシの渾身の力を籠めた一撃で、殺してやる……！！！」

「……そう。じゃ、それが僕に効かなかったら、もう降参してね？

僕、弱い者いじめって嫌いなんだ。だから、お願いね？」

「この……！！　どこまでも、どこまでも……！！！

ハアアアアアアアアアア……！！！！！　アアアアアアアアアアアア！！！！！」

「……。」

自身の力を目一杯両手に溜め、宣言通り一撃で鋼牙を倒すつもりの様だ。

一方の鋼牙は特に何かをするでも無く、それを只黙って見ているだけだった。

少々長めに時間が掛かったが、どうやら充電は完了した様だ。

ガブリュースの両手から、光が溢れ返り雷光が激しく迸っていた。

「これで――――!!　アンタも終わりだ――――!!!」

「……さっきも言ったでしょ？　お姉ちゃん。　――――御託はいいから、掛かって来なよ。」

「……死んじゃいな……!!　圧殺（ファイナル）・殴殺・滅殺!!!!!」

ガブリュースは、自身の光り輝く両手を鋼牙の身体に減り込ませると、

光が尚々輝きを増すと同時に、その光が全て鋼牙の中に吸い込まれ

てしまった。

何も起きず不思議そうに首を捻る鋼牙を身体の中から光が包み込み、その光で鋼牙が全て包まれると同時に、光ごと鋼牙が消え去っていた。

「――――ッハァァアッツツ！！！　ッハァッ！　ハァッ！　ハァッ！　……ど、どうだ……！

見たか……！　これがアタシの最強技だよ……！

流石にどんな化け物でも、生命体である以上、粒子に分解されちゃお終いさ！！！」

鋼牙の姿が見えなくなると同時に、大きく肩で息を付きながら、いる筈の無い、鋼牙がいた虚空に向かって語り掛けるガブリュース。

どうやら、そうでもしていないと、本当に消えたのか不安で仕方が無い様だ。

――――だが、残念な事にそれは、杞憂では無かった。

「――――ああ、ビックリした。」

「!??!　そ、そ、そん……なぁ……!!?　なんで……どうして……!

あれを喰らって生きていられるのよぉッ!!!!!」

「残念だったね、お姉ちゃん。僕達の身体は、抑々（そもそも）生物のソレとはちょっと出来が違うんだ。

だから、対生物用の技はね。一切、僕達には無意味なんだよ。解ってくれた?

さあ、約束だよお姉ちゃん。僕に殺されたく無かったら、降参してね?」

「……わかってるよ。アレが効かないんじゃぁ、アタシにはもう打つ手は一切無いからね。」

「うん♪　聞き分けの良い人は大好きだよ♪」

こうして鋼牙は、ストレスを少し発散させながらも、しっかり勝利したのであった。

ｓｉｄｅ：アリエル＝シュレストｖｓ龍斗

鋼牙とガブリュースが衝突し始めた頃。他方の龍斗とアリエルは。

「おやおや。どうやら、鋼牙も楽しんでいる様ですね。」

「フン。あんなお子ちゃまなんか、リュー姉様の相手じゃ無いわよ！」

「そうですか。それならば、我々も楽しみ甲斐があるというものです。」

アリエルが険しい顔になった。……どうやら、彼女とは御互いに馬が合わないらしい。

龍斗の方も、何時に無く余りいい顔はしていない。

……尤も。彼の場合は、幼女を相手にする事の決まりの悪さもあるのだろうが。

「……口の減らない男ね。そーゆー男は嫌われるわよ？」

「構いませんよ？　私はロリでもペドでもありませんし、貴女にどう嫌われようとも一向に。

さ、そんな事よりも、好い加減闘いましょうか。

一層の事、ハンデを差し上げましょう。貴女から存分に攻撃なさい？」

「くっ……！　調子に乗ってぇ～！！　上等よ！　その驕り、思い知らせてやるんだから！！」

「驕り……私は只、貴女との実力差を鑑みて、言っているだけなのですがね。

まぁ、何でも構いませんよ。さっさと掛かって来て下さい。」

龍斗の言葉に応じるかの様に、アリエルの杖の先端のハートがグルグルと激しく回転し始め、

そこから、見た目からは想像が出来ない様な真っ黒な靄（もや）が現れた。

「おや。これはまた、随分と見た目とは似つかわしくないものが出て来ましたね。」

「ハン……そんな事言ってられんのも、今の内よ！

逝きなさい……無明の彼方へ！！　漆黒の幻影（ブラック・ミラージュ）」

「む！？　……これは……成る程。」

杖から発生した真っ黒な靄の中から、眩む程の眩い光が唐突に差し込み、

思わず目を瞑った龍斗が再び目を開けると、周りは完全に真っ暗闇になっていた。

「『どう？　手足は勿論、自分の身体すら視認できないでしょ？』」

「ええ、全く何も見えませんね。……それに、貴女の声も反響して全方位から聞こえます。
成る程、確かにこれでは目の前に来なければ、どこから攻撃が来るのか全く判りませんね。」

「『そういう事。さあ、真の闇の中で悶え苦しみながら、死んじゃえ！！』」

確かに龍斗の言う通り、本当に自身の身体すらも闇の中に紛れ込んでおり、

まるで首から上だけが浮遊しているかの様にみえていた。
そんな風に、龍斗が落ち着き払って周囲を警戒しながら観察していると、
何処からともなく飛んで来た完全に不可視の光線が、龍斗の身体を貫いた。
それが、『光線』だと判断出来たのは、自身の身体を貫いていたその瞬間だけだった。

「ぐっ……！」

「『あら、どうしたの？　まさか、この程度も避けられないの？うわ、ダッサ～♪
もしかして、アンタ物凄く弱いんじゃない？
あ～あ、こんな雑魚を当てられたあたいってば、本当に可哀想ね。』」

「……ふむ、成る程。」

「『……ちょっと、アンタ聞いてんの？
このあたいが話してるんだから、ちゃんと聞きなさいよ！』」

「……はぁ、五月蠅いですねぇ。考え事をしてるんですから、話し掛けないで下さい。
全く……これだから、弱くて姑息な事しか出来ない卑怯者は嫌いなんですよ。

とかく御喋りで、その中身も意味も無く、唯々己が愚かさを顕示したいだけの雑魚は……。」

「『……こ、このあたいが、卑怯者……だって……？

――――殺す……！！　アンタだけは、絶対に殺してやる！！！！！』」

木乃伊取りが木乃伊（ミイラ）に、では無いが、挑発した方が逆に挑発に乗っかってしまった。

果てさて、アリエルが乗り易いのか、龍斗の挑発の仕方が巧かったのか。

……少なくとも、龍斗の口元が僅かに歪んでいた事に、アリエルは気付くことは無かった。

「『今度こそ、手加減も遊びもなしよ！！　蜂の巣になっちゃいなさい！

殲滅破壊光線（ブレイク・シューター）！！！　そらそらそらそらそらそらアアアアーーーッッッ！！！！！』」

「ぐっ……！　確かに……これは、厄介……！　ですねぇッ！！」

音も気配も無く、視認すらも一切出来ない全方位からの砲撃に、流石の龍斗も防戦一方だ。

だが、時間が経つにつれ、数も威力も益々増していく。

「『もう逃がしも防がせもしない！！　これで終わりよ！！　墜ちなさい！！！

全方位殲滅破壊光線（オールレンジ・ブレイク・シューター）』！！！！！！」

「回避も防御も出来ないのであれば……消滅させましょうか。

風壁爆咲（ウインド・ブレイク）」

「！？！？　な、な、な、なん……！？！？」

「言語は正しく、ハッキリと御話なさい？」

アリエルが驚くのも無理は無い。なんせ、これで絶対に倒せると本気で思っていたのだから。

ではその龍斗が何をしたかと言うと、自身の周囲に風の壁を作ると同時にその風壁を爆発させ、

自分を覆っていた闇靄を吹き飛ばし、正面にいたアリエルににこやかに話し掛けたのだ。

……先程までの、貫かれていた筈の身体も完全に元通りの儘に。

「ああ、そうだ。一つ言い忘れていました。私には、幻の類は一切効かないんですよ。
紅蓮辺りならば、引っ掛かったかもしれませんがね。
……まぁ尤も、彼ならば力尽くで破るでしょうけど。」

「――――そんな――――――！」

そう。先程迄のは、全て幻影……幻であったのだ。

傍目からは、真っ黒な靄の中に龍斗が呑み込まれただけにしか見えなかった。

そして、その靄を吹き飛ばして現れた龍斗に、

靄の前から全く動いていなかったアリエルが唐突に驚き出した、という構図だった。

「さて。では、そろそろ降参して頂けませんか？　私とて無益な殺生は好みませんので。」

「ま、まだよ！　まだそう簡単に……！？　な……なに……？　か、

から……だ、が……！？」

「先程、風で吹き飛ばすと同時に、とある植物の種も混ぜておきました。
どうやら、それが貴女に付着して、貴女の身体の中で成長している様ですね。」

どうやら、龍斗の言葉は真実の様だ。

アリエルの腕や足の中から、ニョキッと何かの植物が生えて来ていた。

その悍(おぞ)ましさに思わず身震いしたアリエルは、何とかしようと杖を使おうとしたのだが……。

「こ、こんな……もの……ぐらい、で……う、動け……な、い……！！」

「貴女が動けないのは当然です。

何と言ってもそれは、私が自ら創り上げた此の世に一種類しか存在しない植物なのですから。

それから逃れられるのは、私とカイト様。後は精々、植物の化身ぐらいでしょうね。」

「くっ……！　卑……怯……！　だ……ぁ……！！！」

「戦術と言って貰えます？　結構、難しいのですよ？

自分より遥かに実力が劣る者を、殺さずに降参させるのは、ね。

さ、どうします？

後、数分程度で貴女は自身の裡から、その植物に完全に食い殺されてしまいますが。」

「……あ、あたい……の……ま、負け……よ……。」

「結構。では、助けて差し上げましょう。……あ、そうそう。

もし不意打ちでもしようものならば、流石に即座に殺しますので大人しくしていて下さいね。」

歳の功とでも言えばいいのだろうか。言葉でも実力でも、あっさり勝った龍斗であった。

ｓｉｄｅ：ラフィレス＝シュレストｖｓ黄宇

鋼牙がガブリュースと、龍斗がアリエルと、それぞれ闘っている真っ最中。

それを待っていたかの様に、ずっと沈黙していた黄宇が唐突にラフィレスに語り掛けた。

「……さて。二人も始めた様だ。では、我々も早速参ろうか。」

「……やっっっと喋りましたわね。ですがその前に、先ずは名乗るのが礼儀では無くて？」

「……む？　貴様は、この私が名乗るに値する程の者なのかな？」

「……結構ですわ。名乗る必要はありません。

その様な戯言を利く口は必要ありませんものね。」

売り言葉に買い言葉。貰った言葉に、黄宇の瞳がキラリと光った様な気がした。

……どうやら、それは見間違いでは無かったらしい。

何時に無く、少しウキウキとしているのが、傍目からも見て取れる。

「ほう！　そうか……私の口を封じるか！　それは実に面白い！」

「……何が面白いんですの？　貴女……もしかして、戦闘狂（バトルジャンキー）ですの？」

「さてな。だが、久しく戦闘らしきモノをしていないのでな。戦いに飢えているのは間違い無い。

さあ、御喋りはもう此処迄だ。いざ、参られよ……！！」

「では、遠慮無く……吠え面を掻かせて差し上げましょう！！」

そう言うとラフィレスは、自身の双鞭（そうべん）を撓（しな）らせ、

カイトに使った先程の次元への穴を使い、黄宇へと激しい攻撃を繰り出した。

「……ふむ。成る程、確かにな。これは中々に厄介だ。だが、警戒する程の事も無い。」

「くっ……！　まだまだ……！！」

「……手数を幾ら増やしたとて、この程度では然程の意味を成さんぞ？

少なくとも、私レベルの相手ではな。」

「何故……！　どうして、一撃も当たらないんですの!?」

そう、ラフィレスが叫んだ通り、先程から己が双鞭を何百何千と振っているにも拘らず、

只の一撃たりとも掠りもしていない。

その悉くを、己が剣を抜きもせずに紙一重……いや、紙二重といった所で躱しているのである。

「何故も何も無い。貴様の攻撃と攻撃の合間には、僅かにタイムラグがある。

刹那以上も差があれば、この程度を見極め避けるのは造作も無い事だ。」

「くっ……！　本当に……何て……！！　……それならば、これはどう!!!!

次元裂き（ディメンジョン）・烈（ラムパント）!!!!!!」

「む!?　これは……!!」

ラフィレスは自身の双鞭を、力の限りに更に激しく乱打し始めた。

だが、一向にその攻撃が黄宇の元へと飛んで来ない。

黄宇が訝しんでいると、唐突に黄宇の周囲の空間が全て穴喰いだらけになってしまった。

すると、隙間が垣間見えもしない自身の周囲の穴から、無数に無限に超光速の鞭が現れた。

それも、全方位から全く同時に、逃げる場所など完全皆無なあらゆる箇所から。

これならば、避けられれは決してしないだろうと、北叟笑(ほくそ)むラフィレス。

確かに、流石の黄宇にもこれは躱す事は難しそうだった。そして、黄宇は――――。

「――――――――――――!?」

「――――ふむ。私に剣を抜かせた事は称賛に価する。だが、所詮は此処迄だな。」

黄宇は、己が剣に触れると同時に一閃煌(きらめ)かせると、

自分に向かって来た鞭を、自身に僅かでも触れる前に、その悉くを斬り飛ばしてしまったのだ。

ラフィレスの絶句も頷けると言うものだ。だが、ここでそう易々と諦めては面目が立たない。

「ま、まだ……！　まだですわっ！　まだまだ、こんな事で終われませんわッッ！！！

次元裂き（ディメンジョン）・烈（ラムパント）！！！！！」

「……馬鹿の一つ覚えか？　それは最早、私には無意味だと分かっただろう？」

「――――な、あ――――ば、バケモノが――――！！！」

ラフィレスの驚愕……否、恐怖も当然だろう。

何と黄宇は、先程同様に全方位から飛んで来る鞭を悉く斬り落としながら、

ゆっくりと、ラフィレスに向かって空中を歩いて来ているのだから。

思わず本能の赴く儘に、ラフィレスが何度も何度も鞭を振るい続けたのだが、

一向にその歩みは止まらず……遂に、ラフィレスの眼前に迄、辿り着いてしまった。

「さあ、もう此処迄来てしまったぞ？　これで、王手だな。」

「くっ……！！　ま、まだ……まだ……！！？」

自身の眼前に、慄然（りつぜん）と聳（そび）え立つ不動の存在に、身体の震えが止まらないラフィレス。

丁度、そんな時だった。……アリエルとラフィレスが、敗北したのは。

「ふむ。どうやら、鋼牙と龍斗も勝った様だな。残るは貴様のみだ。もう、諦める事だな。」

「……そう、ですか。分かりました。

では、私（ワタクシ）も……もう出し惜しみするのは、一切やめますわ。」

「ほう……未だ何か隠し玉があったか。」

「ええ。これだけは、使いたく無かったのですけれどね。この際、贅沢は言えませんわ。」

そう静かに宣言すると、ラフィレスは黄宇から離れた。

……未だ止まらぬ震えは、黄宇への怖れか、自身の技への嫌悪感故か。

それは、本人にも定かでは無さそうだが、ラフィレスは己が震えをその儘に、

自身の眼前の空間に二度鞭を振るい、先程と同じ空間を空けた。

「先に教えて差し上げますわ。今、私が繋いだ先は……貴女の体内ですの。」

「……何？　私の体内に？」

「ええ。これは、座標だの時間だの空間だのは一切関係ありませんの。

只、『貴女の体内』へ繋ぎましたの。その意味……御解りですわよね？」

「……！？」

「では、これでさようなら。直ぐに貴女の御主人様も同じ所へ送って差し上げますわ。

次元裂き・血壊（ディメンジョン・エアブラッディ）」

その瞬間、何かが潰れ引き裂かれる様な、とても嫌な音が鳴り響いた。

それと同時に、黄宇が仰け反（のぞ）りながら声にならない声を上げて、

痙攣した後、その儘身動き一つしなくなってしまった。

それを確認した後、ラフィレスは溜息を零して一言漏らし……

恐ろしい声を聞いた。

「……ふぅ。私、余りこういう残虐な殺し方は好みませんが、仕方ありませんわね。」

「――――その意見には、私も同意だな。これは、礼儀に悖（もと）る。」

「――――――――――――――――――――。」

「ん？　どうした？　何を驚いている？　……ああ、あれか？

あそこで仰け反っているのは、私を象(かたど)っただけの、只の土塊(つちくれ)だ。」

ラフィレスは、恐らく自分が今迄感じて来た以上の、想いを、感情を味わっただろう。

その恐ろしき感情の名は……恐怖。驚愕などと言うものは、当の昔にどこかへ飛んで行った。

今、彼女の全てを支配しているのは、恐怖、唯それだけであった。

故に、黄宇の言っている言葉も殆ど耳に入って来ず、只、何と無く無駄だったのだと。

自分では……いや、恐らくはシュガルでも……敵わないのだろうと確信していた。

「土塊(アレ)も、私を象っているだけではあるが、私自身に相違無い。

故に、『黄宇(わたし)の体内』という対象を、土塊(アレ)に差し替えただけの事だ。

特に驚くべき頃でもあるまい？　……ああ、だがもう貴様は武器は使えんな。

既にソレは、斬り終えてある。」

「……。」

黄宇の言葉通り、先程迄黄宇だと思っていたモノは土へと変じ、
今迄自分の手に持っていた双鞭は、既にバラバラになって、地面へ
と破片が零れ落ちて行った。

それを眺めても猶、ラフィレスは何を言う事も無く、
完全に戦意を喪失し、項垂れていただけだった。

「……ん？　……何だ、既に戦意を喪失していたか。……まぁ、
いい。少しは愉しめた。

――――それから、一つ。……忠告しておくがな。

我々が未だ、実力の億分・兆分の一も出して無い事は理解してい
るだろうがな。」

「……。」

「主殿はな。本気になり、全力を出し、尚且つ暴走した我等五行を、
只の一撃で諸共に御鎮めになられた。……その意味、解るな？
もう余り、我等に関わらぬ方が良い。それが何より、貴様等の為

だ。……そして忘れるな。

今、貴様等が生きているのは、全て主殿の恩情があったればこそだ、と言う事を。」

「……。」

黄宇は、既に脱殻の様になったラフィレスに目もくれる事無く、その場をさっさと後にした。

最後に掛けられた黄宇からの言葉に、ラフィレスは唯一反応し、また先程とは違う……しかし、より激しい震えが彼女を襲った事は、想像に難くない。

こうして、圧倒的な実力差を魅せ付けながら、三姉妹との戦闘はあっさり片が付いてしまった。

今度こそ彼女達は、完全に傍観者となり。

黄宇達はカイトの中に戻る事無く、紅蓮も再び出て来て、

皆でスヴァイサーとアレディ達の戦いを眺めていた。

ｓｉｄｅ：スヴァイサー戦？

「どうした？　来ぬならば、こちらから往くぞ……！！」

「ハッ！　そうはさせるかよっ！！」

「ＯＫ、スーパーロボッツ。マークの援護を頼むぜ！」

「「「「「……！！！」」」」」

「む！　来るか！！」

向かって来るスヴァイサーを抑えて、又もマークが先行して飛び出した。

ハーケンの指示によってファントム達がその後を追い、マークを援護した。

「……！」「何の！」

「……！！」「まだまだぁ！！」
「……。」「甘いッ！」
「……！」「効かぬわァッ！！」
「「……！！！」」「その程度かァッッ！！！」
「チィッ！　この、バケモンがァ……ッ！！！」

「フンッ！！！　この程度で我が破れるとでも思うたか、愚か者共がァッ！！！！！」

ファントムのグラン・プラズマカッターを叩き割り。
アークゲインの乱黄龍に耐え切り。
フェイクライドのジェネラス・ブレードを弾き返し。
アルクオンの羅刹覇龍吼も耐え切り。
ナハトとアーベントの同時攻撃もさしたるダメージは与えられず。
マークハンターも難なくいなされ。
それらを皆退けると、スヴァイサーは咆哮した。更なる強者はいないのかと。
それに応えた訳では無いが、それを皮切りに彼等の怒涛の反撃が始まるのであった。

「……致し方ありませんね。こうなったら、出し惜しみは一切無しに致しましょう！

猫に小判！　大量大出血大サービスでございま～す！！」

「む！？　我の視界を埋めるだけか！　その程度で……。」

琥魔が袖の下から何かを取り出すと、スヴァイサーの頭上から数多の小判が降って来、

彼の全身を埋め尽くす程だった。だが、彼の言う通り、それでは何のダメージも与えられない。

それは、彼が指摘した通り、只の目眩まし。直ぐ様、琥魔の後ろから誰かが飛び出した。

「勿論、だけではありませんわ！　ワタクシも全ての爆弾を大放出ですわよ！！」

「なら、あたしも砲弾、撃ち尽くそうかねえ！！　バブル・カノン！！！」

「くっ！　小賢しい手を……！？　ぐっ……！　小娘……がァッ！！」

小判諸共、爆弾で吹き飛ばし。爆弾諸共、砲弾で連鎖爆発させ。

飛び散った爆弾と小判の破片が、悉くスヴァイサーの身体に突き刺さっていた。

煩わしいと、反撃しようとしたスヴァイサーだったが、唐突に身体の自由が利かなくなった。

M・O・M・O・が、彼の真下から全力のウインド・ミキサーで動きを止めていたのだ。

「そうはさせません！」

「ぐっ……！　ならば……腕だけでも……動けば、よい！！　ゴールド……！？」

「そうはさせねえって言っただろうがよ！　炎の竜！　ヤツに絡み付け！！」

「ぬおおおッッ！？」

両腕のみを動かし、皆に一斉掃射しようとしたスヴァイサーの手足に、

ロアのファイヤー・ドラゴンが絡み付き、必死にその身動きをさせまいとしていた。

当然、それだけでどうにかなるスヴァイサーでは無かったが、

彼に向かって猛突進して来る者達がいた。

「だが、我の動きを封じた所で……！？」

「ならば、これならどうだ！！　パンツァー・ボンバー！！！」「ぐぅっ！？」

「フェーダー・レイ！」「ブロンテ・サンダー！　ブロンテ・ブリザード！！」

「「往ッッッけえええええーーーッッ！！！！！」」「ぐあッ……ぐあああッ！？」

防御も儘成らぬ状態で間近での爆発の直撃を受け。

更に上空から、雷と氷を纏った無数の羽根を叩き付けられ、

スヴァイサーの半身は痺れ、半身は凍り付いていた。そこへ更に追

撃する二人。

「ぬぅん！！　デラックス・マックス・アックス！！！　爆散せしめんん！！！！！！」

「そこだッ！　ラウンド・エイティ！！！」

「ぬ……ぐっ……！　貴様等ああァッ！！！」

凍り付いた半身には、エイゼルが自身の斧を何度も叩き付けながら、氷諸共爆散せしめ。

麻痺した半身には、カッツェが力の限り蹴り叩き。

だがしかし、彼等の真の連携はこれからだった。

「まだ、終わらせん！　ディバイン・ランサー！！」「ガッ……！？」

「X・BUSTER、最大出力！」「ぐっ……！」

「玄武炸でフルボッコじゃ！！」「小癪な……！？」

「零の型！　吹き飛べェェッ！！！」「ぐあああっっ！！！」

「よいよい♪　邪鬼銃・騎駆であ～る！」「ぐうっ……！！」

怒涛の連撃を加える。だが、彼等の攻撃はまだまだ終わらない。

「喰らえィッ！！　乱黄龍！！！」「ライゴウエ！」「グ……うおおおっ……！！？」

「そこっ！　雨刺鋼！！！　チェストッ！！」「ぐぐぐッッ……！！！」

「硝子の棺は如何？　グラス・コフィンッ！！！」「カ……ッ！　ハァ……ッッ！！」

「おおおおお！！！　轟覇！！　機神拳んっっっ！！！！！」「ぬあああああッッ！？！？」

「そろそろ、フィナーレだぜ？　クアッド・ソリティア！！！」「ぬがあああ！！！！！」

連撃に続く連撃。しかし、未だ彼等の攻撃は終わりを見せない。

「ふっふ～ん♪　まだまだいっくよ～！　グラビティ・ハウリング！　わおわお～ん♪」
「ぐ……！　あ……！！」
「無明の彼方へ消え去るがいい！！！」「……！！！」

「沙夜！　主もやるんじゃ！」「あん、それじゃ御相伴に与りましょうか、ね。」
「「奪気の型！！！」」「グ……アアアアアアア！？！？！？」

「参ります。偲ぶれど　築き屍　修羅の道　月見し度に　涙流るゝ
　月国之姫君　使為和之世　四獣之巨神　迦具夜機神剣！！！」
「ガ……！！！」

「参るぞ、邪鬼銃王。ジャンジャンバリバリ撃ち捲りぞな♪　邪鬼銃ん～～♪　ト～キョ～！！」
「ぬおあああ！？！？」

「続きます！　キャノン、ＶＡＬＫＹＲＩＥ一斉掃射！　Ｔ－ｅｌ

ｏｓ！」「フン。ＭＡＧＤＡＬＥＮ１６！」
「ガッ……！！」

「ＤＲＡＧＯＮ・ＴＯＯＴＨ！　Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ最大出力！！」
「Ｌ・ＢＬＡＤＥ！！」
「グ……！　ガハッ……！！　グウッ……！！！」

「「相転移砲、スタンバイ。Ｄ／Ｕ・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ！！！」」
「永遠（とわ）に眠れ――――！」「――――甘美な優しさの中で。」
「……！！！！！」

「小牟！　鬼門封じ発動！」「レディ！　はあああああああっっっ！！！！！」「グッ……！？」

「「木は火を生み。火は土を生み。土は金を生む。

そして、金は――――！！　水を生む！！！　これぞ――――森羅……万象！！！！！」」
「ガッ！？！？」

「アルト！　ヴァイス！　ランページ・スペクター！！」
「「……！！！」」「ま、マダ……！　まだだ……！？」

「まだですの！　ライゴウエ！」「グゥッ！！？」
「斬り刻む……！　ハアアアッッ！！！」「アークゲインも一緒で

すの♪」「……！！」
「ガ……！　ハァッ！？」

「アルフィミィ！」「了解ですの♪　ぐりぐり♪　えいっ♪」「カ……！？！？」

「アークゲイン！」「……！！」
「麒麟・暁！！　真・極！！！！！」「……！！！」「……
……！？！？！？」

「楠舞一刀流……参ります！　巻き起これ、嵐！！」「ぬおおおおっっ！？！？」
「せいっ！　そらっ！　もっとっ！！　煌（きらめ）け――――斬冠刀！！！
チェストオオオオォォォーーーーッッッッッ！！！！！！！！！！」

「ぬがアアアアアアッッッ！！！！！！」

「フェイク！　付いて来なさい！」「……！！」
「そろそろ、フィナーレを飾りましてよ？」「……！！」「ガッ……！　カッ……！？」

「ロイヤル……！　ハート！！！　ブラスターーーッッッ！！！！！！」
「……！！！」
「ぬあああああああ！？！？！？」

「さあ、往こうぜファントム！　こいつが、ファイナルベットだ！！！」「……！！！」

「究極！　ゲシュペンストキック！！」「……！！！」「ガアアアア！！？」

「さあ、もう終わりにしようか……！　こいつで……ラスト・ショウダウンだ！！！！！」

「ガ……！！　アアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「機神拳と覇皇拳は――――至高にして究極なり――――！！！！アルクオンンッッッ！！！」

「――――！！！！」「ガッ――――――！！　ハッ――――――！？！？」

「我が覇気の……！　そして、我々の力の全てを以て――――――！！！！

魔を討ち！！　滅する！！！！！！」

「――――――――――――！？！？！？！？」

「ここは……未知なる無限の開拓地……！！　我々の世界では無い

ッ！！！

我々の闘争は……我々だけがすべきなのだッ！！！」

「ここは……無限のフロンティア……！　俺達の世界だ……ッ！！

これで、グランドフィナーレだッッ！！！」

「この技に、我が覇気の全てを籠めて……！！！　この争覇を終極へ導かんッッ！！！！

ハアアアアアアアアアァァァァァアアアッッッ！！！！！！！！！　ムンっ！！！！！」

「ぶるあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッッッ！！！！！！！！！！」

アレディの最後の掌打により、スヴァイサーの巨躯は遥か先迄吹き飛ばされ、

ヴェルトバオムのコアであろう光珠にその巨体が減り込み、自身の動きを停止させた。

遂に、此処に――――。

彼等の一つの争覇は、終極を迎えたのであった。

第参拾伍話【新たな世界の誕生日（バースデイ）～猛き巨神の交響曲（シンフォニー）～】

如何でしたでしょうか？

どっからどうみても、スレードゲルミルの小型版でした。本当に有難う御座います。α外伝は神ゲー。

ストーリー上のラスボスとしては、ぶっちゃけスヴァイサーは只の雑魚なのですが、

その鬱憤をぶち撒けるかの如く、覇龍の塔の最上階では皆をガチで殺しに掛かる、

大人気（おとなげ）の欠片も無い、ゼンガー親分擬（もど）きです。本当に（ｒｙ

次話は……え？　もう最終話だろうって？　……フッフッフ、何を仰る兎さん。

確かに、ストーリー上のラスボスは倒しましたよ、ええ。

御覧の通り、（クッキーをみんなで喰い尽くしながらの）フルボッコで。

でも私は、スヴァイサーがこの小説に於けるこの世界のラスボスだなんて一言も言ってませんよ？

では、果たして真のラスボスとは！　一体何者なのか！？

……まぁ、バレバレだとは思いますがｗ　それは次話迄の秘密と言う事で、一つｗ

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

と言う訳で、到頭最後になりました第１０回目！　私の技構成　アクセル・アルマー＆アインスト・アルフィミィ　の回です。

では、今迄同様、少々の解説と併せて御覧下さい。

Ａ：水流爪牙（すいりゅうそうが）・連（れん）→地斬疾空刀（ちざんしっくうとう）・魂断（まぶいたち）→白虎咬（びゃっここう）・挟（きょう）→舞朱雀（まいすざく）・交（こう）→乱黄龍（みだれこうりゅうらいごうえ）・来迎会（消費ｃｏｍ９５％）

Ｂ：舞朱雀・交×５（消費ｃｏｍ１５０％）

Ｃ：舞朱雀・交→白虎咬・挟→風刃閃（ふうじんせん）・双（そう）→乱黄龍・来迎会→玄武剛弾（げんぶごうだん）・鬼菩薩（おにぼさつ）（消費ｃｏｍ１１５％）

です。技に一癖も二癖もある二人ですが、素の攻撃力も高く、技も先ず１が出る事は滅多に無い上に、

精神は優秀なものが多く消費も少ないという、実は超優秀なキャラ

だったりします。
ただ、その分『記憶の断片』（＝自動で掛かる『博打』）に大分右往左往されますが；

それにドロシーなんて付けちゃったら、さあ大変。
『奇跡』→『手加減』なんて一人（三人？）コントは日常茶飯事です。え？　なら最初からするなって？
はっ……バーロー。博打ってのはな……イタイ目みるから面白ぇんだよ……！！

でも、『奇跡』→『切り札』が出たターンに必殺技ぶっぱ。本当に美味しいです。
更に、次ターンの最初に『ド迫力』→『電瞬』が掛かった時は素で叫びました。正に……僥倖……！
御蔭で塔の火鎖地蔵、二ターンで乙ってくれました。『博打×２』マジＧＪ！　Σｄ

とまぁ、そんな事はさておき。
実はアクミィの技で、初撃で重い敵を落とさずに済む技は非常に少ないのです。
それが、水流爪牙と玄武剛弾。これは、当たりさえすればほぼ問答無用で敵を打ち上げてくれます。
但し、水流爪牙は、最後の一撃でブロックが割れるとその瞬間に敵が落ちてしまいますので、
即座に出せる攻撃か、援護か支援、もしくは『両断』の何れかを必ず使って下さい。

因みに。上述した様にアクミィは『両断』が使えますので、
それ前提でのブロックがある敵への初撃には、舞朱雀なども問題無

くフルヒット出来ます。
『両断』の消費は４０程度なので、毎戦闘使っても余裕で回復出来ますので、
面倒でなければ、消費が１０の『必中』と併せて（計５０）毎回使う事を御薦めします。

ではそろそろ技の解説をば。
アクミィの技は特に、地面スレスレで使わないとフルヒット出来ないものが多いです。

水流爪牙は以前も説明した通り、恐らく全技の中で最も始動と命中が遅い技と思われますので、
連続攻撃の際には（際のみ？）特に最大の注意を。
その分、攻撃範囲は意外と広いので、とにかく早く交代する事のみ気を付けて下さい。
少なくともこの技が、アクミィの初撃には最も適している技だと断言出来ます。

疾空刀は、普通の重さの敵には地面すれすれで拾えばフルヒットしてくれます。
但し、少々技の出が遅めなので、そのタイムラグを考え少し早めに出す様に心掛けると幾分か楽かと。
重い敵には逆に、地面近くで拾うと衝撃波に減り込んでしまいます。
すると、その衝撃波に呑まれて落としてしまいますので、
逆に衝撃波の外に押し出すつもりで放つといい具合になるかと思います。

青竜鱗も少々技の出が遅いので、少し早めに出せば重さに関係無く拾ってくれますので重宝します。

黄龍は技の出も早く、地面すれすれで拾えばフルヒットしてくれる上、大概どこで放っても拾ってくれます。
締めに使えば格好良く、途中に組み入れればどんな無茶振りでも殆ど拾ってくれる、非常に優秀な技です。
但し、重い敵には地面すれすれでは残念ながら落としてしまいますので、
その少し上辺りを狙えば、問題ありません。寧ろ、重い敵の方がフルヒットし易いとすら言えますので。

舞朱雀は、これも技の出が遅いのですが、普通の敵は地面すれすれで。
重い敵は足元を掠る様に攻撃すると、確実に拾ってくれます。
しかも、舞朱雀は最後の脳天への叩き付けに気絶効果がついていますので、
最後に締めれば、つい押しちゃったという事も無く、敵が気絶状態で次ターンに持ち込ませられますし、
途中に組み込めば、次の一撃だけはダメージ二倍になるという、どちらにしろ優れた技です。

玄武剛弾は、これこそ本当に地面すれすれで拾えばヒット数が圧倒的に増えます。
具体的に言うと、最後のミィちゃんの「ふわふわ～♪」だけで、重い敵相手に最大１５ｈｉｔ。
もしも、「何かヒット数少ない。」「何この技？　弱くね？」とか思った方は、
地面スレスレか、初撃に使ってみて下さい。吃驚する程、ヒット数とダメージが増えます。

この技はタイムラグも無く即座に出ますので、どんな技の後でも先ず落とす事無く、
どんな敵でも遥か上空へと必ず放り上げてくれます。

さて。ここで一番問題なのが、風刃閃。これが今一つタイミングが掴み難いのでは無いかと愚考致します。
実はこの技、最初の一撃はアクセルが下から斬り上げているのです。
そして、その直後に肘打ちし、三撃目で斬り下げます。

つまり、落とすポイントは最初の斬り上げ動作に間に合わない時。
それと、次の肘打ち後の斬り下げの際の落下速度に、ミズチ・ブレードが間に合わない時。

この二ヶ所さえクリア出来れば、後は絶対に落とさない上に威力も高い、とても優秀な技です。

先ず最初。これは斬り上げという事を考えて地面スレスレでは無く、その少し上を狙うと綺麗に入ります。但しこれは普通の重さの敵の場合。
重い敵の場合は、更にその少し上。大体、アクセルの身体の半分程辺り。
そうでないと、例え斬り上げが間に合っても、その後の斬り下げが間に合わずに落ちてしまいます。
慣れない内は横飛ばしから。慣れて来たら真上に飛ばす技から。
やってる内に、結局どっちからでもフルヒット出来る様になります。
個人的には、ファントム・ステップから、とかの方が使い易かったりします。

そして、アクミィの援護：雷刃閃（らいじんせん）・交（こう）なのですが、
これは実は、単体でのフルヒット（１９ｈｉｔ）は結構難しいのです。
若干技の出が遅い為、余り地面に近い位置で使うと間に合いません。
また、リフト性能は殆どありませんので、重い敵相手にはかなり高い位置からでないと危険です。
しかし、軽重はさておいても拾う性能自体は高いのですが、ヒット数が全く安定しません。
まぁ、援護としては非常に優秀ですので、その程度の差異などは全く問題にはなりませんが。

もし、どうしてもフルヒットさせたい。安定して使いたいという場合は、色んなコンボが御薦めです。
例えば、破天光、四嗣噴陣、嵐舞踊（ストーム・ワルツ）、コフィン、ミラー、フル・ハウス、フラッシュ、等々。
空中に固定させる技で、且つ横に吹き飛ばす技では無く、真上に上げる技が相性がいいかと。
四嗣噴陣の銃を構える前や、氷棺が出来る前など。大体それぐらいの長さで使えれば、いい感じです。
小牟の破天光の固定時間の長さが丁度いいので、その時間を逆算して他の技にも流用出来れば、
或る程度の多くの技とは、相性良く使えるかと思います。

とまぁ、こんな所でしょうか。以上、私の技構成と、少々の解説でした。

今迄、長々と読んで下さった方々。誠に有難う御座いました。

第参拾陸話【無限の“刻”が交わる場所で～無限の白光（インフィニティ・エン

現時刻（１３：０５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，７０２，１２４アクセス　ユニーク：２２２，２３４人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、エピローグ？です。何故『？』かは、本文を最後迄、御覧下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾陸話【無限の“刻”が交わる場所で～無限の白光（インフィニティ・エン

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　シュテルベン・シュロス

アレディとハーケンの渾身の想いを籠めた合体攻撃に吹き飛ばされ。

そして、アレディの切り札により、ヴェルトバオムの光珠に減り込んだスヴァイサー。

息も絶え絶えに、指一つ動かせぬ己が身体に何をしたと、彼はアレディに詰問した。

「ぬ、ぬおおお……！　アレディィ……！！　ナアシュゥゥゥ……！！！

我が……身体に……！！　何を……したァァァッッ！！！

う、動かぬ……ッ！？　そして……！！　何故……！

ヴェルト……バオムは……起動……せぬ、のだ……ァァァッッ！？！？」

「……『封魂』の掌打にて、覇気を封じました。

その機械の身体では、この呪縛を打ち破る事は出来ないでしょう。」

「魂を閉じ込めた、と言う事であるか。とんでもない技を隠し持っていたものであるな。」

「……元々は対羅刹機用の技です。生身の肉体を持つ修羅に対しては意味の無い技……。

師匠……感謝します。私にこの技を授けてくれた事を……。」

とまぁ、どうやらそういう事らしい。

W05……ギムノス＝バシレウスの身体を使ったのが、却って徒（あだ）になった様である。

一方、それを三人寄り添って眺めていたシュレスト姉妹は、というと。

「……ガブリュース、アリエル。」

「……ラフィ姉。」「……ラフィ姉様。」

「……貴女達も無事だったのね……良かった。」

「ラフィ姉こそ……。……でも、何なんだアイツラ……幾ら何でも強過ぎるだろ!?

それに、アイツラは確か、アイツの従者なんだろ?

だったら、アイツはアイツラより強いって事だろ？
何で、そんな奴がアタシらの攻撃で死ぬんだよ……おかしいじゃないか！！？」

ガブリュースの疑問も尤もだ。それは、ラフィレスもアリエルも、戦闘中にも思っていた。

カイトが本当に、自分達をあっさりと圧倒したあの従者達よりも遥かに強いと言うのならば、

先程迄の、あの戦闘は……自分達に殺されたあの戦闘は、

戦力的にどう考えても可笑しい……理屈に合わない。

当の本人達にも、大声で話しているのだから聞こえている筈なのだが、完全に無視されている。

「……そうね。恐らくは、遊んでいたか、悪巫山戯（わるふざけ）か、それとも……。」

「……まさか、殺させて優越感に浸った所を絶望させる為に、態と……とか？」

「……飽く迄も可能性の範疇に過ぎませんけど……それよりも今は、どうやって帰るかですわ。

……流石にこの儘では、ブラウセス様に合わせる顔がありませんもの……。」

「う……そ、そうだった……どうしよう……。」

そう、彼女達の一番の問題は其処だった。

カイト達は既に我関せずで、好きにしろと言わんばかりにこちらに気は向けていない。

逃げ帰る事は何時でも出来るのだが……どうシュガルに弁解すべきだろうか。

そんな事を、スヴァイサーの?き声を聞きながら考えていると、どうやら又もや、シュテルベン・シュロスに侵入して来る反応があった。

その声に如実に反応したのは、正に今どうやって帰るか考えていたシュレスト姉妹達だった。

「――――お前達、こんな所にいたのか。探したじゃないか。」

「!?　ミディ兄様!!?」「兄ちゃん!?」「にぃ!」

「全く……ブラウセス様が御心配なさっておいでだぞ?　さっさと

帰るぞ、いいな？」

「……誰だ、お前？」

カイトが突如現れた彼に声を掛けた。そこで初めて、彼はカイト達に目を向けた。

ああ、いたのか。そんな目線と共に。そして、彼は自ら挨拶をした。

……慇懃無礼と言う言葉が最も似合いそうな仕種で、丁寧に御辞儀しながら。

「……これは、これは、救世主様。いらっしゃったのですか……気付かずに申し訳ありません。

私は、ミディクェード＝シュレスト。

そこの愚妹達の長兄であり、Ｎ・Ｎ　第三席を任されております。以後、御見知り置きを。」

「……ほう、シュガル坊やの後釜に入った奴か。

成る程、成る程。奴の後継らしく、随分と人を食った態度じゃないか。……なぁ？」

「御褒めに与り、光栄至極。では、愚妹達は引き取らせて頂いても

？」

「……勝手にしろ。だがその代わり、一つ交換条件だ。」

「……承りましょう。」

「……シュガル坊やとアホニスの奴に伝言だ。

もう少ししたら、そちらへ殴り込みに行く。例えどんな理由があるにせよ……だ。

もしもお前らが居なければ、俺は問答無用でN・N（キサマラ）を破滅（けしとばす）させる。

……とな。特に坊やには厳命しておけ。……いいな？」

「……畏まりました。一言一句違わずに御伝え致しましょう。

……では。

行くぞ、ラフィレス、ガブリュース、アリエル。」

「……了解ですわ。」「……分かったよ、兄（アン）ちゃん。」「は～い♪

ブラウセス様～♪」

何とも気の抜ける捨て台詞を最後に残しながら、御騒がせな三人は

四人纏めて消えて行った。

カイトは依然、何か物思いに耽っている様だったが、

アレディ達は彼女達の撤退を見届けると、スヴァイサーに最期の止めを刺そうとし始めた。

「OK、プリンセス・カグヤ。邪魔者もこれで完全にいなくなった。後は……頼めるか？」

「はいっ！　皆さんの力も……貸して下さい！」

「貸してくれったって……どうすりゃいいんだ!?」

「覇気を高めるのです……難しい事はありません。」

「そうだな……念じてくれればいい。それだけで、想いは伝わる。」

「うむ！　森羅流の気力集め……魅せちゃるぞ！」

「あん、その『気』を牛姫様とド姫様に集めればいいのよね？」

「御願いします……。」

「ええ、自分達の世界をド救うという想いを……！」

自分達のすべき事を理解した彼等は心から念じた。

そして……その祈りは捧げられた。

この無限の開拓地に住む、全ての存在を救う為に。

「うむ……分かった……！　ぬううん……！！」

「何だかよくは解らないけど、要は願えばいいんだね？」

「よ～し♪　想っちゃうぞぉ～♪」

「雑念は入れちゃダメよ？♪」

オルケストル・アーミー……否、曾ての故郷（アグラッドヘイム）から別たれた者達も。

「ちっ……どこまでもおめでたい連中だ……。」

「Ｔ－ｅｌｏｓさん！　ちゃんと願って下さい！」

「この世界の調和と、秩序の為に……。」

秩序（コスモス）の名を持ち、何れツァラトゥストラに語られるであろう者達も。

「あたしのフルパワーを見せる時が来たようだねえ。」

「ええと……もっともっと私が儲かって、あの駄犬の店は潰れますように♪」

「……そんな個人的な願いをするんじゃありませんわよ。」

……まぁ、商人達も。

「ロア……！！　俺だけじゃねえ……！　お前の力も……貸してくれ……！！！」

「世界、か……。本当に混沌とした世界とは、ここのような場所の事を言うのだろうな……。」

「……アクセル？　あなた、やっぱり……。」

そして、招かれざる……否、招かれるべき異邦人（エトランゼ）達も。

「な、何を……何を……する気だ……！？」

「……ありがとうございます、みなさん！」

「この樹をド封印しますから！　神夜さん！」

「はい、ネージュさん！」

二人が前に出、ヴェルトバオムの光珠に減り込んでいるスヴァイサーに近付いた。

そして、二人で霊力を高め、皆の想いを集め、合わせ、高め――――。

「や、やめろ……！！！　わ、我が身体は……ッッッ！！」

「私達のフルパワー……しっかりと目に焼き付け遊ばせっ！！」

「霊樹よ……！　その身を鎮め、永劫の眠りの中に……！！」

「……主殿。」

「ああ――――矢張り、美しいな。人の想いは。」

「――――はい。」

「……！？　ぬ、ぬおおお……！！！

ぬおおおおおおおあああああああああああ！！！！！！！！！！」

こうして、スヴァイサーは――――その身も、心も――――。

その全てを霊樹ヴェルトバオムと同じくし……永劫、目覚める事は無かった。

「……終わった……な。」

「――――はい。この争覇……これにて、終極です……。」

皆が勝利の余韻に浸っていた時であった。

今迄、その身一つで支えていたヴェルトバオムが、己が力を失ったからか。

シュテルベン・シュロスが崩壊をし始めた様だ。

「おい、こいつは……！」

「だ、ダメじゃこりゃ！」

「それは崩れるパターンだと言っただろう！？　急いで脱出するぞ！！」

地面が大きく揺れ、瓦礫が次々に落ちて来る中を、

必死に躱して避けながら出口へと駆けて逃げ行く一行。

そんな中、独りその場に残り、最早ピクリとも動かなくなったスヴァイサーを、

悲しい瞳で見詰めるカイトがいた。

「――――バカヤロウが――――。」

そう一言。

誰に聞かせる訳でも無く。

既に、聞かせる相手には、何の反応も無く。

瞳の悲しみが、更に深みを帯び――――そして、カイトは二度と振り返る事無く。

カイトを待って、出口の側にいた五行に合流し、ハーケン達の許へと転移した。

ｓｉｄｅ：アグラッドヘイム　ツァイト・クロコディール

外に出ても振動が止まない様子に、シュテルベン・シュロス自体が崩壊し、

落ちているのだろうと当たりを付けた一行は、急いで自分達が渡って来た虹の橋へと急いだ。

しかし、そこに在った筈の虹の橋は既に消失しており、その代わりに、

何故かハーケンの母艦であるツァイト・クロコディールが、黒煙を上げながら来ていた。

「そんな……！　橋が消えてます！」

「その代わりに……これってハーケンの！？」

「どういう事だ！？　どうしてツァイトがここに！？」

「驚いている場合じゃ無いぞ、ハーケン！　虹が無い以上、俺達は地上には……！」

少なくとも、現時点で考えられる脱出方法は無い。ならば、飛べる者達だけでも。

と思ったが、どうやら上空は気流が激しく、しかもエネルギーフィールドで覆われている為、

それも不可能の様だ。万事休すとなった一行は、取り敢えずツァイトの中へと入っていった。

「何てこった……！　手詰まりかよ……！！」

「待って下さい！　では、どうやってこの艦はここへ！？」

「ハーケン！　こうなったら、やる事は一つだぞ！」

「ああ！　みんな、ツァイトに乗り込むんだ！　何か手があるかもしれない！」

side：ツァイト・クロコディール内

「艦長、やはりここでしたか。」
「副長ッ！」「リィ殿、どうしてここに！？」

「タケトリ城……ナンブ・サヌキ様から連絡を受けたのです。
不死桜から敵の国へ続いていた道が、突然断たれてしまった、と。」
「お父様が！？」「……虹の橋は、やはり切れておったか。」

「艦長達は戻られていないとの事でしたので……恐らく取り残されているのだろうと。」

「……全く、出来た部下だね。オルケストル・アーミーに欲しいぐらいだよ。」

「だが、どうやってここまで来たんだ？」

「……飛んで来たんですよ。」

「……何？　おい、ジョークは……。」

「いや、それは冗談ではない。」

「……ピート。」

リィと鞠音が、皆に事情を説明していたのだが、どうにも謎がある。
聞いてみるとジョークの様な言葉で返された。こんな時に何を……
そう思ったハーケンに、
（どうやら既に面識は終えた様で）リィの側に居たピート……Ｗ０３が正しく説明した。
「私がシュラーフェン・セレストからここに転移する時に使った座標を、
Ｄｒ．マリオンが抑えていた。それを使って、直接ここに転移して来た様だ。」
「ええ、後は前回の戦いの時と同じです。
シュラーフェンの『主砲』を使って、ワープホールを開き……ピョン、とね。」
「まさか……アレをやったのか！？」
「シュラーフェン・セレストの上をツァイト・クロコディールで駆け上がり、
その勢いの儘にワープホールに飛び込む、あの荒業だな？」
「！？　カイト……！　間に合ったのか……！」「御覧の通りさ。」

何時の間にかいたカイトが、アレでは解らないメンバーに説明した。

カイトも無事だった事にホッとする一行。だが、あれ？　と疑問が一つ湧いた。

「そう言えば……あの『主砲』ってもう使えないんじゃ……？」

「いや、別の次元へ行くのはもう不可能だが、通常転移であれば修理すれば使用可能だ。」

「……そこまでして、ここに？」

「ハッキリ言った筈です。……艦長の危機には、飛んで行く……とね。」

「――――ＯＫ、フライングタイガー。……イカしてるぜ。」

ハーケンが帽子を目深に被った。

皆からの微笑ましい、羨ましいという目線も受けながら、その想いを噛み締めた。

「ですが、その突入の所為でエンジンが焼き付いてしまいました。」

「じゃあ、お手上げじゃないかい！？　この後はどうするのさ？」

「防御用シールドを全開にし、後はツァイトの耐久力に賭けるしかありませんな。」

「対ショック用のアブソーバーも全部使いますが……、本来このような事態を想定して造られた物ではありませんわ。」

「そりゃそうでしょ！？　飛行戦艦にだって、そんな機構は付いてないよ！？」

「……と言う事は、後は運任せ、か。分の悪い賭けは好きでは無いんだがな……。」

「気が合うな。……だが、今は生き残れる可能性に賭けるしかない。」

「逆転確率は……ざっと５６００万分の１……っちゅう所かの……。」

ホッとしたのも束の間。ツァイトの現状を聞き、又も絶望仕掛ける皆。

正に、運を天に任せるしかない現況であった。

小牟の言った通り、５６００万分の１くらいの確率……いや、もしかしたらもっと……。

そんな思いと考えが皆の頭を過ぎった時であった。

「――――いや、１００％成功だ。」

“――――――――――は（え）？”

カイトが、その絶望を完全に吹っ飛ばしてくれたのは。

「……主殿？　宜しいのですか？」

「ああ。ま、いいだろ。こんぐらい頑張れば。……取り敢えずは、な。」

「畏まりました。」

「……ちょっと待ってくれ。それは、どういう意味だ？」

「ん？　何、簡単な事さ。俺がお前達を全員助けてやるって言って

んのさ。な？　確実だろ？」

「……あ、ああ。だが、急にどうしてだ？　それに、今の言葉の意味は……。」

確かに、カイトが協力してくれれば、生存確率は遥かにグッと上がる。

だが、確かにどうして？　何故に今になって、突然？　疑問は尽きなかったのだが……。

「なぁに、ちょっとした御褒美さ。後、細けぇ事は気にすんな。

水薙は、怪我人の治療を。

龍斗、紅蓮、鋼牙は、ツァイトのエンジンを含めた全修理を。

改造・改良は、鞠音達と要相談だ。

黄宇は、ツァイトごと全員をここから転移。

……そうだな、エスピナ城の側辺りがいいだろう。以上だ。」

「「「「「はっ！！！」」」」」

だが、カイトはその疑問には答えず軽く逸(はぐ)らかし、全員を五行に命じて避難させた。

そして、自身もそこから転移し……。

シュテルベン・シュロスの中には既に、人の気配は完全に消え失せていた。

ｓｉｄｅ：上空　シュテルベン・シュロス前

徐々に落下スピードを増しながら、エンドレス・フロンティアへと墜ちて来る、

アグラッドヘイムの牙城……シュテルベン・シュロス。

『永逝之城(シュテルベン・シュロス)』の名を持つそれを眼前に控えた空中に、カイトは独り佇んでいた。

「――――アグラッドヘイム。シュテルベン・シュロス。ヴェルトバオム。

そして、ガグン・ラウズ……否、スヴァイサーよ。

永に逝(とわ)(ねむ)れ――――その名の如く。」

そう呟くと、カイトは自身の力を開放し始めた。

「　全魔力解放　　全魔力放出　　全魔力消費　　全魔力固定　」

すると、カイトの左手に巨大な魔力の塊が渦を巻きながら出現し、やがて球体へと変じ。

その眩いばかりの真白い輝きを弥増しながら徐々に己が形を整え、

遂には真球になっていた。

その頃には既に、シュテルベン・シュロスは、カイトの眼前にまで迫って来ていた。

しかし、カイトは何ら焦る事無く、只静かに、己が左掌上にある真白い球体を、

シュテルベン・シュロスに向けて、押し付けた。

「　　左手に無限

噛み砕け――――全てを

インフィニティ・エンド」

その瞬間、巨樹をも包み込む超巨大なシュテルベン・シュロスは、

更に巨大な真白い輝きに一瞬にして包み込まれた。

すると、その真白い球体の中に呑み込まれたものは、その存在の如何を問わず、

あらゆるもの全てが、悉く斬り刻まれ、消し飛ばされ――――、

遂には粒子や原子の一粒に至る迄、完全に消滅してしまった。

その結果を見る事無く、純白に輝く超超巨大な球体を背に、

静かに下りて来るカイトを見た皆が、彼の背に天使の様な羽を幻視したのは、

無理からぬ事であっただろう。

――――こうして。長きに亘るアグラッドヘイムとの争覇は、完全にその幕を閉じる事となった。

第参拾陸話【無限の“刻”が交わる場所で～無限の白光（インフィニティエンド）～】

ｓｉｄｅ：エスピナ城　ネージュの部屋

「それ取って～。」「あれ？　牛乳は無いの？」「こっちにあるわよ～。」

「あちちっ！」「おいおい、こんぐれぇで情けねぇ声あげんなよな。」

「……貴方と一緒にされては、彼が可哀想でしょう？」

「……あぁん？　喧嘩売ってんのか、テメェ。」

「喧嘩はメッ！」「……分かりましたよ。」「……チッ、あいよ。」

「ンまぁーーいッッッ！！！」「そうか。気に入って貰えた様で、何よりだ。」

「美人で料理も旨くて、しかも強くて性格もいいと来たもんだ。これはいい嫁さんになるな。」

「そうか？　それは嬉しい限りだな。……ふむ。今夜辺り、主殿に求婚でもしてみるかな？」
「……しかも一途と来たもんだ。こいつは参ったね。」
「……今ならだれも気付いて無いニャ……持って帰って売るニャ。」
「させる訳無ぇだろ、駄猫。」「ニャンッ！？　瞬間移動！？」
「皆さん、楽しまれているようですね。」

そう。現在、ネージュ主催での宴会中である。
各々、或る程度羽目を外しながら、それぞれ寛いでいる所だったりするのである（一部除く）。

「全くだな。……アクセルの奴も記憶がほぼ完全に戻ってる様だしな。
……御陰で、俺も……。」
「ん？　何か言い掛けたか？」
「……いいや。只の独り言さ。アクセルの記憶が戻って良かったな、ってな。」
「ああ、そういやそうだったな。」

そう。カイトの言う通り、アクセルの記憶は既にほぼ完全に戻っていた。

その余りの覇気の違い（アレディ談）に、

“別人過ぎるだろ”

と全員からのツッコミがあった事は言う迄も無かった。

「それにしても……アレは本当に凄かったな。」

「アレ？　……ああ、インフィニティ・エンドの事か？」

「そういう技名なのか。一体、どんな技なんだ？　あのとんでもない奴は。」

「ああ、あれはな。あの球体の中に存在する全ての形あるモノを、完全に跡形も無く消滅させる技だ。対象は、一人～世界、ってとこだな。

まぁ、規模と威力と性能は、俺の力に完全に依存するんで、使い勝手はいいんだがな。」

「……はぁ。本当にとんでもない奴だな、アンタ

は。」

事も無げに言うカイトに、呆れとも、感嘆ともつかない溜息を付く皆であった。

そうこう燥(はしゃ)いでいる内に、ケーキも着き、宴も最高潮となった頃。

「んじゃ、済まんが俺はもう寝るわ。部屋、空いてるだろ？　俺が修理しといたんだし。」

「え？　ええ、まぁ。全員分ド泊めるぐらいは余裕で空いていてよ？　でも、本番はこれからじゃない？　ちょっとド早過ぎるのではなくって？」

「ま、そうなんだがな。結構、アレ疲れるんでな。少し先に休みたいのさ。構わんだろ？」

「……そうか。じゃあ、お別れは明日といこうか。みんなも、構わないだろ？」

「はい♪　私は構いませんけど……。」

「……ま、今回はバカイトも頑張った事じゃし、ええじゃろ？　零児。」

「ああ、勿論だ。では済まないが、ネージュ姫。今夜は世話になる。」

「もっちろん♪　ネージュにド任せよ？　あ、でも、寝室の準備とかは、自分でしてね？」

「はいです！　今日は、みんなでお泊りです♪」

「……ったく。どいつもこいつも、平和ボケしてるんじゃないよ。」

「Ｔｅｌｏｓ、私達も躯体を休める必要があります。」

「……それぐらい分かっている。……好きにしな。」

結局。その儘、ケーキを持って来たクレオも合わせて全員で、カイトが完全に修復したエスピナ城に寝泊まりする事になった。

――――そして。

ｓｉｄｅ：エスピナ城　空き地

翌日。朝一で起きた黄宇の朝食を、のそのそと起きて来た皆で戴き。

ようやっと皆の気分と腹も落ち着いた所で、カイトが皆に話があると言って外に出て行った。

……各々の得物を、必ず持って来る様に言い残して。

訝しみながらも、得物をそれぞれ持って来ながら外に出ると、カイトの姿が見えない。

また空かと、上空を探してみたが、それでも姿が見えない。

一体何処だろうかと、辺りをキョロキョロしていると、エスピナ城の東の方に人影が見える。

どうやら、それがカイトの様だ。

一体、朝っぱらから何だろうかと疑問に思いながらも、一行はカイトの許へと歩み寄った。

「……カイト？　一体、話っていうのはなんなんだ？」

「……ああ。……いい、天気だな、今日は。」

「ん？　……ああ、確かにそうだな。それよりも、話って……「この……。」……ん？」

「この、素晴らしい世界をお前達が救った。……まぁ、多少、俺も手助けはしたがな。」

突然、カイトが語り出した。それはハーケン達に話している様で、誰にも話してはいなかった。

誰にも言い聞かせてはいない様で、ハーケン達の心に直接語り掛けていた。

「……はい、確かに。カイト殿の助けもあり、何とかこの世界を護り抜く事が出来ました。」

「ああ。……だが、まだ終わりじゃない。」

「……え？」

一体、何を言うのだろうか。既にアグラッドヘイムは滅びた。他ならぬカイトの手で、完全に。

そして、修羅も既にアレディに敗れ、今は何処にいるのかも定かでは無い。

敵対するものが何も、誰もいない現状に、一体何を言うのか、と。

そんな皆の疑問は御見通しだったのだろう。口には出さなかったが、その疑問に答えてくれた。

「確かに。今回の戦いはこれで終わった……完全に。だが、敵はまだいる。

まだ、お前達の戦いは終わった訳じゃない。」

「そりゃそうじゃろ。沙夜めも滅ぼしておらんし、逢魔共はまだおるしのう。」

「あらやだ、怖い。」

「……いや、そういう事じゃない。お前達は、何れまた出会う。それも遠くない未来で。

そして、戦いは連綿と続く。お前達がその生を終えても猶……子の、孫の代に至っても猶。」

「……。」

どうやら、カイトの言いたい事は、皆が思っている事とは少々違うらしい。

人生が戦いだ！　などという、中途半端な哲学的な意味では無く、本当の意味での戦いだ、と。

「そう……お前達がいる限り、戦いは永遠に終わらない。

つまり、お前達の存在そのものが、争いを引き起こす原因の一つとも言える。」

「そんな……！？」「暴論だよ、そんなの！！」

「だが、要因の一つには違いない。

もし、その結果、お前達が敵に敗れた場合、その敵が他の世界に浸食しないとも限らない。

ならば……他の世界に少しでも犠牲が出る前に、

悪しき芽は先に摘み取って置くべきでは無いかな？」

「……。」

そのカイトの口から出て来た紛う事無き暴論に、誰もが閉口した。

何を言っているんだ、こいつは。……そんな意味では、決して無い。

カイトから話を聞いていた皆は、カイトのその言葉は真実なのだという事を思い出した。

事実、そういう世界が無数にあるのだ、と。そして……自分達のとある平行存在が、

実際にそういう事態になり、既にカイトの手によって滅ぼされた事が何度もあると。

それを、事実として知っていたからこそ、一笑に付す事も出来ずに黙ってしまったのだ。

――――だが。

「とまぁ、そんなものは建前なんだがな。」

「……建前？　……アンタ、本当に一体何がしたいんだ？」

その疑問は尤もである。先程から、全くカイトの意図が見えない。

この世界を護った事を誇れとでも言いたそうな言葉を零したり、その世界を滅ぼそうとしているのかの様な発言をしたりと、全く以てその意図が見えない。

――――そして、カイトは、己が真意を語った。

我が身は世界を成す。

《Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｗｏｒｌｄ.》

「何、簡単な事さ。……俺と闘えばいい。」

力は破壊のみ、
心は破滅故。
≪Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｄｉｓａｓｔｅｒ ｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.≫

「――――何？　アンタと……闘う？」

数多の世界を
救いて尚。
≪Ｉ ｈａｄ ｓｅｖｅｄ ｏｖｅｒ ｔｈｅ ｉｎｆｉｎｉｔｙ ｗｏｒｌｄｓ.≫

「ああ、そうだ。俺と闘えばいい。何、俺に勝つ必要は無い。無理だからな。」

只一度も受け容れられず。只一度も認められない。

《Ｈａｔｅ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｗｏｒｌｄ.　Ｎｏｒ　ａｃｃｅｐｔ　ｔｏ　ｅｘｉｓｔｅｎｃｅ.》

「お前達は只、俺に魅せてくれればいい。その想いを。その意志を。その覚悟を。」

創世と消滅を繰り返し、我等は我等の途を征く。

《Ｏｖｅｒ　ａｎｄ　ｏｖｅｒ　ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｎｅｗ　ｗｏｒｌｄｓ.ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　ｏｕｒ'ｓ　ａｒｒｉｖａｌ.》

「これはな――――お前達が、真にこの世界を護り抜く力があるかどうか。」

我が生涯は混沌に彩られ。唯、艱難辛苦在るのみ。

《I have chaos. This is the only calamity.》

「それを調べる為の、最後の審判者たる俺からの最終試練なんだよ。」

故に我が尽きぬ望みは、世界の極みにより創られる。

《So my eternal wish, Ultimate World Works.》

顕現【――――固有結界『究極の創世（アルティメットワールド・ワークス）』――――】

「――――さあ、無限の開拓者達よ。　情熱は未だ燃え滾(たぎ)っているか？」

そして――――その真意を顕わにした最後の審判者との、真のラストバトルが幕を開けた。

第参拾陸話【無限の“刻”が交わる場所で～無限の白光（インフィニティ・エンド）～】

如何でしたでしょうか？

と言う訳で御覧の通り、この世界での真のラスボスは、八神カイトでした。

え？　何この無理ゲー？　修正パッチ、完全無効？　バグとかってレベルじゃねーぞ？

と、正直私も書きながら思っている、今日この頃。……まぁ、何とかさせますが。

ぶっちゃけ、あれです。カイトに勝つ必要は無いんです。だって、無理ですし。

作中でカイトも言っている様に、その覚悟さえ示せればいいんです。

そして、それにカイトが納得すればいいんです。（って書いてみたけど、ちょっと嘘臭かったかな？）

さて、エピローグも含めて、後三話でこの世界も終わりです。皆様、もう少々御付き合い下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第参拾漆話【最後の審判者～龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）～】（前書き）

現時刻（１３：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，７５２，０５３アクセス　ユニーク：２２６，００５人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

大変御待たせ致しました。書いては消し書いては消しを繰り返し、
ようやっと書き上がりましたｏｒｚ

さて今回は、この世界の真のラスボスである、八神カイトとの決戦です。

果たして、アレディ達は何処迄カイトに抵抗出来るのか！！

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾漆話【最後の審判者～龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）～】

ｓｉｄｅ：固有結界『究極の創世』内

誰もが絶望していた。それはそうだろう。

彼の……カイトの実力を、一部とはいえ幾度も見て来たのだ。

しかも、アレで全力では無いであろうが、圧倒的という言葉の意味を物理的に味わったのだ。

当然、カイトもそれを見越してか、この儘で戦うつもりは無い様で……。

「……おいおい。幾ら何でも、それは流石に無理過ぎるってもんだろ……。」

「ああ、それならば大丈夫だ。こちらも当然、或る程度は手加減してやる。」

「……そ、それでも、『或る程度』なんですね……。」

「当たり前だろう？　お前達の力の程をこれから調べるんだ。

最低限度の壁は越えて貰わねばな。」

「最低限度……ね。アンタのボーダーラインじゃ、俺達は限界を越えた先を、更に超えるぐらいじゃないと無理そうだな……。」

「まぁ、必然的に超えては貰うだろうがな。……この儘、問答をしていても埒が明かない。

取り敢えずは、下準備をさせて貰おうか。

ドラゴン・オブ・マナ　エレメント・ドラゴン　第一形態（アインス）

」

そう言いながら、カイトの魔力が膨れ上がると同時に、カイトの背後に龍達が顕れた。

１５～６ｍ程の西洋龍と、全長３０ｍはあろうかという東洋龍が計１４体。

“ゴガアアアアアアアアアアアーーーーーー

ーーー！！！！！！！！”

その龍達が、一斉同時に咆哮を上げた。誰もが本能的に縮み上がる様な、恐ろしい咆哮を。

そんな彼等に、何ら気にもしないカイトは何故態々龍達を喚び出したのか説明し出した。

「ああ、こいつらは直接は戦わせないから安心しろ。……こいつらを喚び出した理由は簡単だ。

単に俺の修行不足で、毎回召喚しないとコレは装着出来ないだけなんでな。」

「――――しゅ、修行――――不足――――？」

「ん？　ああ、紛れも無く修行不足だ。……理解出来るか、アレディ？

お前達にとって最強無敵に見えるだろう俺ですら、まだ修行中の身であり。

この俺と対等に戦える奴も何人も居る上にな。

今の俺にも勝てない【奴】も……忌々しい事に世の中には居るんだよ。」

絶句などというレベルではなかった。今の言葉を、誰もが信じたくなかった。

カイトと同等？　いや、それ以上に……この最強（カイト）ですら勝てない存在……。

それは……それこそが――――本当のバケモノ――――。

「と、それはさておきだ。そろそろやろうか。俺もあんまり、のんびりとはしていられないんだ。

何せ、この世界は既に救い終わったのでな。早々にこの世界を出て次の世界に行かねばな。

俺の命がマッハでやばい。比喩無し冗談抜きで、現にこうしている間にも、な。」

「……そこまでして、俺達の相手をするのか？」

「そういう事だ。少しはその気になってくれたかな？

まぁ、ならなけりゃこの世界は滅んじまう訳だし、弥が上にもならざるを得ないだろうがな。」

「チッ……全く、本当にイヤなヤツだぜ、アンタは。」

「ふっ……さあ、そろそろ言葉は語り尽くした。

後は、お前達がその覚悟を示せればいいだけだ。見せて貰うぞ？

その覚悟（おもい）を、な。

そして――――篤と魅るがいい！

龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）！！！」

カイトがそう宣言し、片手を頭上に掲げると第一形態（アインス）と呼ばれた龍達が再度一斉に咆哮し、

各々１４個の小さな球体と変化し、全てカイトの中へと吸い込まれていった。

するとカイトの身体を光が包み、その光が徐々にその輪郭を変えていき、

光が霽れると同時に、異貌の衣装を身に纏ったカイトが顕れた。

「――――待たせたな。さあ、闘ろうか？」

今ここに、【最後の審判者】との真のラストバトルの幕が開けた。

第参拾漆話【最後の審判者～龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）～】

それは明らかに異形だった。両肩、両肘、両膝、両籠手、両足爪先。
そして、兜と鎧の胴体に龍の頭を模した装飾がそれぞれ施され。
又、両手に持っている双剣の柄も同じく龍の顔になっており、計１４体の龍が確認出来た。
その姿に一瞬見惚れていると、そのカイトの姿が掻き消えた。

「ガッ！？」

“――――！？”

「先ず、一人。」

と全く同時に、マークハンターがカイトに殴り飛ばされ、岩に激突して気絶していた。
正に刹那の出来事に誰も何の反応も出来ず、
数瞬後に慌ててカイトを中心にして円形状に皆離れたもの、冷や汗が止まらない。
そんな皆の姿を一回り眺めたカイトが徐に口を開いた。

「……どうした、何をしている？　さっさと掛かって来い。俺は言った筈だぞ？　貴様らの覚悟を……本気を見せろ、と。」

「「「うっ……！」」」

「！？　ドロシーさん！　琥魔さん！　アン船長！」

カイトが言い終わると同時に、また三人倒れ伏した。

全く動きが見えないその攻撃に、誰もが二の足を踏んでいた。

「更に三人。態々少し手加減してやってるんだ。好い加減、死地に飛び込んで来い。」

その言葉に反応したのか、ロボ達が一斉に襲い掛かって来た。

だが、しかし……。

「その程度の連打では俺は越えられんぞ、アルクオン。そんな非力では俺の結界は永劫破れんな、フェイクライド。

まだまだ連携が甘いぞ、アークゲイン。
弾薬が少な過ぎる。俺に通用させたいならばその億倍は持って来い、アルトアイゼン。
そんな距離では俺の攻撃は避けられんぞ、ヴァイスリッター。
手数がまだまだ少ないぞ、ゲシュペンスト。」

全て淡々とカイトに迎撃された。或る者は殴り飛ばされ、或る者は蹴り飛ばされ。

或る者は斬り飛ばされ。また或る者は、超光速な長距離砲撃を喰らい。

皆一撃で戦闘不能な程の致命傷を負っていた。

「くっ！？　ファントム達を只の一撃で……本当に出鱈目にも程があるだろ……！」

「どうした？　何の連携も援護も支援も無しか。今のは無駄な一幕だったな。
もうとっくに準備も済んだ筈だ。……来ないのであれば、またこちらから行かせて貰うぞ。」

「ぐっ……！　そうそう思い通りにさせるかってんだ！」

「だが、残念だったな。遅過ぎだ。」

「!?　うそd……ガッ……!」「ぁ……。」「ハうっ!?」

カイトの勢いを殺ごうとロアが勇んだものの、その速度には全く追い付けず、

擦れ違い様に気絶させられその勢いの儘、M・O・M・O・と錫華迄もが纏めてカイトに眠らされた。

「そんな……!　おかしいよ……こんなの……!　こんな……みんなあっさり……!!?」

「くっ……『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』……手加減しても猶、この圧倒的実力差か……!!」

「冗談じゃない……!　このまま終われるか……!!」

「いい意気だ。だが、エンジンが掛かるには少し遅過ぎだな。もう既に半壊している。」

カイトの言う通り、既に7人と6体が戦線離脱しており、戦意を喪失している者もいる。

どう足掻いても絶望以外の結果が浮かばない状況下だが、

それでも尚、諦めずに残った人数でカイトに向かって行った。

「そうだ、それでいい。だが、残念だ。」

「何ッ！？」

「俺の従者である五行の力を借りている、貴様ら護業抜刀法では俺には無意味だ。」

「嘘じゃろっ！？　ぁッ……！」「くそっ！　ぐぅぅっ！？」「あ、あらら……くっ？！」

真っ先にカイトは零児・小牟・沙夜を潰した。

その早業に思わず皆の動きが鈍った所で、次の標的へと狙いを定めた。

……が、そのカイトを更に背後から、充填の完了したＴ－ｅｌｏｓが狙っていた。

「退いていろ、貴様ら！　Ｕ・ＴＥＮＥＲＩＴＡＳ！！！　……これ以上形振りなど構っていられるか。」

「……いい判断だ。だが、甘いな。ここそ、更に追撃すべき

タイミングだったな。」

「――――バカな！　相転移砲の直撃を喰らっておいて無傷だと……！？」

「Ｔ－ｅｌｏｓ！　Ｘ・ＢＵＳＴＥＲ、出力限界突破します！」

「……フン。」

カイトの背後から相転移砲で強襲したＴ－ｅｌｏｓだったが、カイトが無傷で現れた事に驚愕し、

動きが一瞬固まって無防備になった彼女を援護すべく、

ＫＯＳ－ＭＯＳがオーバーヒートも何の其ので、カイトに特大の砲撃を浴びせて来たのだが、

カイトは手に持っていた剣の先をその砲撃に向けただけで、あっさりその砲撃を防ぎ切り、

特大の光線が霽れると同時にＫＯＳ－ＭＯＳは倒れ伏し、Ｔ－ｅｌｏｓも気絶させられていた。

「今のは悪くは無かったが……矢張り、所詮は機械の身体か。む？」

独り言を呟くカイトに、五方向から一斉に襲い掛かって来た。

左かアクセルが斬り付け。右からアルフィミィが斬り上げ。前からカッツェが蹴り付け。

後ろからヘンネが斬り下げ。上からエイゼルが斧に全体重を乗っけて斬り下ろし。

更に遠くには、砲撃の準備が既に完了しているキュオンの姿も見える。

其処迄確認したカイトは、誰にも見られぬ兜の中でニヤリと笑みを零し、

彼等の攻撃を避けも防ぎもせず、棒立ちの儘全て真面に喰らったのだった。

「やったか！？」

「……残念だが、その台詞はやってないフラグなのさ、これがな。」

「くっ……！　傷一つ付いていない……だと……！？」

「その程度の威力では、先ず無理だな。フンッ！！」

「ぐあっ！！？」

自身達の渾身の一撃が直撃しても猶、何らダメージを負った気配も無い。

驚愕し怯んでいた所に、カイトの気合いに吹き飛ばされた皆は地面に身体が付く前に、

既にカイトによって無力化され、地面に叩き付けられると同時に気絶していた。

「!?!?　ヘンネ!!　カッツェ!!　エイゼル!!　う、嘘…うそでしょ……!!!?

あ、あれで何のダメージも負ってないって……こ、こんなの相手にどうしろって……!?」

「フッ……だから始めに言っただろう？　貴様らでは俺に勝つ事は絶対に不可能だと。

取り敢えず貴様も眠っておけ。」

「ぇ……!?」

皆が只の一撃で全く同時に気絶させられた事に動揺し、恐怖に身体が震えて動けないキュオンに、

先程ヴァイスリッターに撃ったモノと同じ砲撃を見舞い、同じく一撃で気絶させた。

それが終わると、闘気を漲らせている残るアレディ達にゆっくりと体を向けた。

「さあ、残るはお前達五人だけだ。
今迄のも悪くは無かったが、まだこの世界を任せるには覚悟(おもい)が足りない。
残る貴様等で、一体どれだけ見せてくれるのかな？」

「チッ……ファントム達はとっくに戦闘不能。他の皆も完全に気絶しているみたいだな。」

「ですが……どれ程絶望的であろうとも、退く事も、勿論諦める事もする訳にはいきません！」

「ああ、当然だ。……いっちょ魅せてやるか、俺達の覚悟って奴を。あいつらの分までな。」

「無論！　我が覇気の全てを懸けて……！！」

「全く……ピンチになる前に、早くそうなって欲しかったのだがな。だがまぁいい。来い……！」

溜息を付きつつも、彼らのようやっとの覚悟に愉しそうな声色を出

すカイト。

そのカイトに、ハーケンの援護射撃を背に四人で向かって行った。

「クロンダイクモード……最大出力……！　行けぇっっ！！！」

「ふむ。目眩まし程度にはなるか。む？」

「そこっ！　フェイスレイヤー！　ブースト最大でド吹っ飛ばしますわよ！」

「ほう。最大速度での勢いと威力を増大させた突貫か、悪くない。」

「くっ！？　私の槍を素手で掴むなど……貴方、何処までバケモノなの！？」

ハーケンの砲撃の真後ろから、ほぼ同じ速度でフェイスレイヤーで突貫して来たネージュを、

カイトはその儘素手で掴み取り、慣性の法則も物理法則も完全に無視して勢いを殺していた。

その取っ掴んだ儘のカイトに、アレディとアシェンが左右から急接近して来た。

「懐に入り込めれば……！　剛衝殻！！　……！？」

「いただく……！！　グラスヒール！！　……なっ！？」

「キャアアアッッ！！！」

「流れは悪くないが、もう少し状況を考えた方がいいな。」

左右から迫って来た二人に、まだ掴んだ儘だった槍ごとネージュを振り回し、

二人を巻き込んで、ハーケンの方へとぶん投げたのであった。

と、丁度三人を投げ切って力が抜けたカイトの一瞬の隙を狙い、

その上空から神夜が斬冠刀を振り下ろし、重い一撃を喰らわせた。

「これで……！　チェストオオォォォォーーーーー！！！！！」

「ぐうっ……！　いいぞ……今のはタイミング、威力共に申し分無い。

そういう一撃をもっと持って来い！　まだまだ、こんなものじゃ足りんぞ！！」

交差させた両手の籠手で斬冠刀の一撃を耐え切り、更に神夜を投げ飛ばしたカイト。

嬉しそうに両手をプラプラとさせながら、飛ばされた先で起き上がったアレディ達が、

再度自身に特攻して来るのを、鼻歌でも歌っていそうな雰囲気で迎え撃った。

「その意気やよし。だが生憎と、俺にはＭっ気は無いのでな。」

「!?　しまっ……!　ネージュ姫殿!!」「アシェン!　危ない!!」

「え?　……ッ!?」「か……ハッ……!!?」

「ネージュさん!　アシェンさん!!　……!?」

向かって来ていたアレディとハーケンを更に飛び越して、

後方にいたネージュとアシェンを真っ先に堕としたカイトはその儘振り返り、

そのすぐ側にいた神夜に返す刀で、峰を当てて気絶させた。

「さて。残るはお前達二人だけだ。……さあ、もう終わろうか？」

「まだです……！　まだ……まだ終われない……！　終わる訳にはいかないッ……！！！」

「ああ……ここで諦めたら、今まで俺達がやって来た事が無駄になっちまう……！

それだけは……認められない！！！」

「決意表明は結構だがな。結果が伴わなければ、そんなものは無意味だぞ？」

しかし、無慈悲にもカイトは二人を皆と同様に一撃で沈めた……が。

「ガッ！？　ま、まだ……まだまだぁっっ！！」

「くそっ……！！　こんな所で……終われるかッ！！！」

「ほう……気力か根性か。何れにしろ、俺の一撃を喰らって気絶しなかったのはお前達だけか。」

そう、二人はふらふらながらも、辛うじて意識を保ち再び立ち上が

ったのだった。

それを嘆かわしいな、と嬉しそうにごちるカイトに、ファイティングポーズと取る二人。

……だが。

「だが、残念だったな。もうこれで終わりだと言った筈だ。」

「ガッ……！！」「ッ……ハ……ッ……！」

必死に立ち上がった彼らに、カイトは先程よりも重い一撃を苦も無く食らわせ、

アレディとハーケンは、揃って地に倒れ伏してしまった。

この瞬間、立ち上がっている者はカイト唯一人であり、カイトの勝ちは決まってしまった。

「フン。矢張り、生身の相手ではこの程度が関の山か。何度かいいのはあったのだがな。

惜しい……実に惜しいな。……この儘、終わらせるには実に惜しい。

……だが、これ以上手加減しても意味は無いしな……あ、そうだ。」

何を思い付いたのか。カイトは鎧を脱ぎ、皆が起きる迄いそいそと何事かをし始めた。

～数時間後～

「ぐ……！？　しまった……！　……え？」

「あ、アレディ！　よかった……貴方も無事だったのね。」

「……ネージュ姫殿。皆さんも御無事でしたか……ですが、これは一体？」

目覚めたアレディが最初に気付いたのは。泣きそうな顔をしたネージュのドアップ顔と、

安堵した表情を見せると同時に不安な雰囲気を滲ませている、妙な空気だった。

「さて、な。その疑問はここにいる全員共通のものなのは確かだが。それでカイト？　一体これはどういう事だ？」

「ん？　どういう事ってのは、何がだ？」

「何がって……俺達はアンタに負けた。なのに、まだエンドレス・フロンティアは滅んでいない。それどころか、まだこの空間に俺達は閉じ込められたままだ。一体、アンタは何を考えているんだ？」

「何って……面白い事？　てか、お前達が負ける事は抑々決定事項だったからしょうがないさ。っつーか、最初に言っただろうが。俺には勝てんからその必要は無い。只、覚悟を示せって。そうすりゃ、俺はこの世界を滅ぼさずにさっさと出て行くって。」

確かにそんな事を言ってた気はするが、

正直に言えば、カイトが敵に回ったというそっちの恐怖の方が先立っていて、

実の所、カイトの台詞はあんまり覚えていなかった様というのが本

音である。

「まぁ、取り敢えず戦った結果としては、現段階では不合格だ。あんなんじゃ、俺の求める覚悟には全然足りん。」

「やっぱそうか……ん？　ちょっと待ってくれ。現段階？」

「ああ。あんなんじゃ俺の方が消化不良なんでな。もう一戦お前達に闘って貰おうと思って。」

その台詞に顔を更に青くするもの。通り越して白くなっているもの。お腹を押さえている者。

等々、色んな反応を見せてはいるが、誰一人として歓迎している者はいなかった。

「そうは言うがな、カイト。俺達は、既に全力で戦って負けたんだぞ？　それとも何だ？　まさか、更に手加減して戦うって言うのか？」

「ん～、まぁ或る意味似た様なもんだが、今回はちと違う。」

「……？　一体何が言いたいんだ、アンタは？　というか、一体さっきから何をやっているんだ？」

ハーケンの疑問も尤もだ。前からではあったが、今回もカイトの言葉は全く要領を得ない。

それに何より一番気になる事は、カイトはずっと皆に背を向けた儘で話し続け、

何やら岩の上に何かを置いて何かの作業をやっていた。

「ん～、まぁちょっと待ってな……っとよし、修復完了っと。」

「ん？　修復……？」

「よっと。そんで、さっきした再戦の話なんだがな。ちょっと提案があるんだ。」

「提案……だって？　一体どんなだ？　まぁ、俺達に選択の余地は無いだろうがな。」

「よく分かってるじゃないか。まぁ、至極単純な話さ。

要はだ。～～～～～って事さ。」

“――――えええええええええええーーーーー！！！！！！！！！！！”

果たして、皆は一体何に驚いたのか。

そして、皆を驚かせる程のカイトの提案とは一体？

第参拾漆話【最後の審判者～龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）～】（後編）

如何でしたでしょうか？

はい、まぁ、当然の結果ですよね（苦笑）

ですがこれで終わっては、カイトも納得がいかないでしょう。

次話は、カイトとの決戦・後編です。果たして、カイトの皆への提案とは一体？

そして、遂に明かされるこの世界に於ける主人公とは誰か！！？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第参拾捌話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《前編》】

現時刻（１７：３０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，８１９，３５７アクセス　ユニーク：２３０，７０２人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

そして、大変御待たせ致しました。……スランプコワイｏｒｚ

さて。今回は、カイトとの最終決戦・後編《前編》です。

え？　後編《前編》じゃ、訳が分からんって？　こまｋ（ｒｙ

そして、カイトの提案、そしてこの世界に於ける主人公とは！

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾捌話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《前》

ｓｉｄｅ：固有結界『究極の創世（アルティメッドワールド・ワークス）』

龍型完全鎧化（ドラゴニックフルアムド）を装着したカイトに敗北したアレディ達。

だがしかし、目覚めてみると自分達は滅びていない所か、

カイトが自分達を無視して、何かに対して黙々と作業している。

全員が目覚めてから恐る恐るカイトに問い掛けてみるも、

相変わらず要領を得ない答えだけが返って来る。一体、何がしたいのか……。

誰にも理解出来ない儘でいると、どうやらカイトの作業が終わった様であった。

「よし、終わった！」

「……それでカイト？　一体、アンタは何がしたいんだ？　というか何をしていたんだ？」

「ん？　ああ、ちょっと碧天を黙らせてた。」

“……は？”

カイトが指差す方を見てみると、碧天の魔導書の留金部分が金属で打ち付けてあり、

何か必死にもがいているみたいだが、何も喋れずに行動で怒りを表している様だった。

「いやな？　これからシリアス全開でいこうかって時に、

こいつに突然ボケられたら、意気消沈どころか完全に萎えちまうだろ？　だから、封印した。」

“……；；；；；；；”

と言う事らしい。其処迄言うと、カイトはいつもの暗闇の中へと碧天を放り込んだ。

……と言うか、初めからそうすれば良かったんじゃあ……？　あ、それだけじゃ不安？

デスヨネー。

「とまぁ、そういう訳でな。これから俺が指名した奴だけで、俺と戦って貰う。」

「そんな無茶な……！　俺達全員で掛かっても、僅かの抵抗も出来ずにあっさり負けたアンタに、今度は、更に少数で戦ってどうにかしろっていうのか？」

「そういうこった。で、俺と戦う相手だが……態々俺が指名する迄も無い。

こいつらを見れば、な。

来い！　ソウルゲイン！　ペルゼイン・リヒカイト！　コンパチブルカイザー！」

カイトが空に手を翳し、そう声高に叫ぶと空から巨大な人型が降って来た。

ソウルゲイン。アークゲインに非常に容姿が酷似している紺碧の機兵。

似るは容姿のみにあらず、その武器、戦闘スタイル等も外見から容易に想像する事が出来た。

ペルゼイン・リヒカイト。中央に魂が浮遊している人型でありながら、鬼を従えし紅の機兵。

ヴェーゼント・リヒカイト、ヴァールシャイン・リヒカイトに酷似している事は一目瞭然。

その攻撃方法は、アルフィミィと共に旅をして来た者であれば、彼女の普段の戦闘パターンが、彼の機兵からによるであろう事は想像に難くない。

コンパチブルカイザー。全体的に赤と黄色で彩色された、雄々しい姿の巨人だ。

知らぬ者は、その大きさ。そして、どこかで見たデジャブに驚き。

それらを知る者は、己が乗機の突然の出現に心底から驚き。

暫し、この場は騒然となっていた。

「バカな……！？　ソウルゲイン！？」

「ペルゼイン……！　無事でしたの……！」

「カイザー！？　カイザーじゃねえか！　何でこんな所に……！？」

「ソウル……ゲイン？　アークゲインと名前までも似ているな……。」

「あちらも、ヴァールシャイン、ヴェーゼントと酷似しています。」

「ですが、あちらの機体は見た事がありません。コウタ殿が何か御存知の様ですが……。」

そんな皆の疑問の声を後ろに聞きながら、アクセル達はそれぞれ各々の機体へと乗り込んだ。

暫し、腕を動かし足を動かし、ポーズを取ったりして色々と確認していた。

「駆動部及び各部の損傷チェック……異常無し。各部センサー……異常無し。」

「ペルゼイン……これは……紛れも無く私のリヒカイトですの。」

「こっちもちゃんと動く。こいつは間違い無く、俺のカイザーだ。でも、何でカイトさんがこいつらを……？」

「お前らがこっちに来る時に向こう側に置き忘れてた物を、俺が引っ張って来て修理したんだ。
今お前達が自分で確認した通り、間違い無く本物だぞ？」

「オールグリーンだ。……成る程な、今度はこいつで勝負しようと言う訳か。
確かに、こいつでなら俺達にも勝機はあるかもしれんな、こいつが。」

「でも、カイトは機体が無いのですけれど……そのままで戦いますの？」

何時の間に？　と思わずにはいられなかったが、まぁカイトだし、と或る意味納得もした。

各々機体のチェックも済み、紛れも無く自分が今迄乗って来た機体だという確認も取れた。

そして同時にカイトの思惑も理解したが、カイトはどうやって戦うつもりなのだろうか？

自然と湧いたその疑問。ひょっとして生身で？　そんな埒も無い考えも浮かんだが、

カイトはその問いにニヤリと嫌な笑みを見せ付け、その問いに応え

た。

「いいや？　この儘で戦うんじゃさっきと何も変わらない。結果も、何もかもな。

だから、俺はお前らと対等の条件で戦う。

――――だが、どうせ戦うならやっぱ演出は大事だよな？

ってな訳でだ。俺はこいつらで戦わせて貰うとするか。

来い！　アルトアイゼン・リーゼ！　ライン・ヴァイスリッター！　ヤルダバオト！！」

「そんな……！？　エクセレンの……！」

「ベーオウルフ……だと……！？」

「な！？　そいつはフォルカの！？　何であんたがそれを……！！」

そう、カイトが喚び出した機体は、誰をも驚かさざるを得なかった。

アクセルの因縁のライバルであるベーオウルフことキョウスケ・ナンブの機体、

古の巨鉄：アルトアイゼン・リーゼ。

アルフィミィの素材元であるエクセレン・ブロウニングの愛機、

純粋なる者：ライン・ヴァイスリッター。

そして、アレディとは違う修羅界の羅国の王フォルカ・アルバークの乗機、

轟級修羅神ヤルダバオト。

皆、何れも各々に因縁のある相手が召喚され、その戸惑いは誰の目にも明らかであった。

そしてそれは、その存在そのものを知らずとも、軽量コンパクト化された機体を知っている、

アレディやハーケン達にも、大きな衝撃を与えたのであった。

「何、驚く事は無い。これらはお前達が知っている機体じゃない。今、俺が創り出した機体だ。
で、こいつらがお前達の相手な訳だ。そして……『風の偏在（ユビキタス）』。」

「な!?　創り出したって……って、分身した……!?」

≪≪≪ま、こういうこった。俺達が自分で創ったこの機体に乗り込みお前達と戦うってな訳さ。

それと提案だが３ｖｓ３で戦うよりも、１ｖｓ１、２ｖｓ２に分かれて戦った方が、

御互いに戦い易いだろう？　具体的に言えば、ソウルとペルゼ対アルトとヴァイス。

それと、カイザー対ヤルダで、な。どうだ?≫≫≫

そう言いながら、各々召喚した機体に乗り込む三人のカイト達。

少し躊躇った様子を見せるロアとアルフィミィに対し、

アクセルは獰猛な笑みを零しながら応じた。

「――――いいだろう。その勝負受けたぞ……！」

「……アクセル？」

「フン……乗る者が例え誰であろうともベーオウルフ相手に負ける訳にはいかんのさ、これがな。

……只の意地ではあるがな。」

「……了解ですの。私は貴方のパートナー。そして、共に同じ道を歩む者。

アクセルのサポートは私の役目ですの。」

「……ええい、しょうがねえ！　ここで引いちゃ、漢が廃るってもんだ！　やってやるぜ！！」

《いい気合いだ、三人共。では、戦（や）るとしようか。新たな未知なる無限の開拓史を記す為に。》

《余り失望させてくれるなよ？　今こそが、貴様等が真に抗うべき宿命の刻なのだからな。》

《終末の日……Ｄｏｏｍｓｄａｙ（ドゥームズデイ）はもう近い。さあ、ゴングを鳴らすがいい！！

これまでの、そしてこれからの為……この星（セカイ）の明日のために！！

！≫

今ここに、６体のスーパーロボット達による小規模な……。

しかし、セカイの命運を懸けた戦争のゴングが、鳴り響いた。

第参拾捌話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～≪前編≫】

ｓｉｄｅ：ソウルゲイン＆ペルゼイン・リヒカイトｖｓアルトアイゼン＆ヴァイスリッター？

アクセルとアルフィミィが自分達の機体の斜め下、つまりアレディ達は大丈夫かと気になり、

ふと視線をそちらに向けると、また何時の間にか現れていた黄宇達が張った結界によって、

アレディ達は護られていた。というか、これから始まる巨大戦闘にｗｋｔｋしていた。

特に心配する必要は無かったか、と杞憂に安堵し改めて偏在カイトと対峙した。

二人がこちらを向いたのを確認した偏在カイトは、二人に話し掛けた。

※因みに、見学している皆から向かって右に、ヤルダバオトとコンパチブルカイザーが。

同じく向かって左に、ソウルゲインとペルゼイン、そしてアルトアイゼンとヴァイスリッターが。

それぞれ分かれて、各々の戦場にて戦っていた。

《御覧の通り、ハーケン達ならば俺の従者が護っているから安心しろ。
あの結界は、例えＳＲＸのトロニウムエンジンが暴走した所で傷一つ付かんからな。》

「ふん……相変わらずのバケモノ共が。……だが、御蔭で貴様を倒す事に集中出来る……！」

「頑張りますの。キョウスケとエクセレンの偽物になんて負けられませんの……！」

《偽物とは酷ぇなぁ……ま、何でもいいさ。やる気にさえなってくれれば、な。》

《その通りだな。御託はもういい、さっさとかかって来い。後は……打ち貫くのみだ……！！》

「行くぞ、八神カイト……！　その亡霊（ベーオウルフ）ごと噛み砕く……！！」

「亡霊……純粋なる者……貴方の相手は私ですのよ、救世主（メシア）？」

《女王蜂たる単なる者（アインスト）……その本領、御手並み拝見といこうか？》

ソウルゲインがファイティングポーズを構え。

ペルゼイン・リヒカイトが右手に刀を構え、左手に鬼の面を纏わり付かせ。

アルトアイゼン・リーゼが左手を前に構え、杭打機が付いている右手を後ろに引き。

ライン・ヴァイスリッターが自身が常に携帯している長砲身の銃を両手で構え。

僅かな硬直の後、四人全員が動き出したのは、アレディ達が見た限りではほぼ全く同時だった。

「はっ！」《温いっ！》

アルトの突進の勢いも利用して殴り付けた、ソウルの拳を高機動で躱し。

「そこ！」《遅い！》

ヴァイスの軌道を読んだペルゼインの砲撃を、更に変異な軌道で躱し。

《脇がガラ空きだ！》「ぐっ……！」

ソウルの右脇に潜り込んだアルトが、身を捻りながら蹴り飛ばし。

《そらそらそらっ！　後ろがガラ空きだ！》「くっ……！？　きゃあぁっ！！」

実弾の連射でペルゼインを牽制しながら、背後に超高機動で回り込みビームで強撃し。

御互いに再び距離を取った所で、偏在カイトが立ち上がる二人に言った。

《そうそう、一つ言い忘れていたがな。俺の操縦技術はお前達の知る何処の誰よりも熟練（プロ）だ。》

《これも『全て（オール・ノウレッジ）を知りし者』の力の一旦だ。ま、流石に万倍の操縦技術と迄はいかんがな。》

「ちっ……だが、それならばこそ、こちらに勝機もあるという事か。本来脅威である筈の機兵に乗ると弱体化するとは、何とも皮肉な事だ、これがな。」

「アクセル、やっぱり１ｖｓ１はちょっと危ないですの。ここは協力プレイですの。」

「ああ。まずはゲシュペンストＭｋ－？を墜とすぞ。小蝿は後だ……付いて来い、アルフィミィ。」

「ラジャー、了解ですの！」

立ち上がりながら通信を終えると、ヴァイスを無視して真っ直ぐアルトに突っ込んで来た。

アルトが器用にやれやれと肩を竦めると同時に、ヴァイスの姿が何時の間にか消えていた。

それを認識した途端、アクセルとアルフィミィは何か唐突に背筋が凍る様な感覚に襲われ、

思わず反射的に後ろを振り返った。其処には案の定、ヴァイスが銃口を二人に密着させていた。

《残念だったな。気付くのが少し遅過ぎる。》「「しまっ……！」」

《そら、吹っ飛べ！》「ぐうっ！」「きゃあっ！！」

《いいタイミングだ。これだけのクレイモア、躱せまい！》「くそっ！」「あうっ……！」

銃口から噴き出したビームが密着していた二人を前方へと押し出し、

未だ態勢も整わない状態の二人へ、発射と同時に突進していたアルトの肩口から、

大量のクレイモア地雷が射出され、二人に直撃していた。

《まだだ！　そうら、打ち上がれ！　そらそらそらそらそらあっっ！！》

「ぐっ……そうそう、好き勝手にはさせん……！　青竜鱗！」

「ペルゼイン……ライゴウエですの！」

地面擦れ擦れから実弾の連射で打ち上げられた二人だったが、攻撃を喰らいながらも空中で体勢を立て直し、反撃して来た……のだが。

《ハッ！　遅いわ！　ハウリング・ランチャー！　モードX！　ハハッ！　踊り狂え！！》

「ちっ！　速過ぎる……うおっ！？　く……！」

「そんな……！　いくらヴァイスリッターでも、その速さは反則ですの……！」

《御託抜かしてる暇あったら、反撃してみせろや！　そーらそらそらそらそらそらぁっっ！！！

わおわおーん！　ってなぁ！》

「ぐあああっっ！！　くそがあっ……！」

「こ、こんな数、防ぎ切れ……！？　きゃあああっ！！！」

《ハッ！　狼の遠吠えに身を竦めた時点で、既に負けは決まってるんだぜ？》

その反撃も難無く躱した上、超高速による分身体からの、実弾・ビーム双方の雨霰の砲弾。

その分身体ですらも見る見る内に、１０、２０、５０、１００と増えて行き、

砲弾に至っては最早数える事すら出来ず、最後には何時の間にか囲まれての一斉射撃。

それによって、腕も脚も頭も打ち抜かれ、丸で達磨が如き状態になり、

偏在カイトがドヤ顔で決め台詞を決めると同時に、二体共地に叩き付けられていた。

「ぐ……は……！」「あ……うっ……。」

《おいおい何だ、だらしねぇな。ヴァイス一体でその様かよ。》

《……ま、いいさ。何も焦る事は無い。
ペルゼインにもソウルゲインにも自律修復機能が付いている。
取り敢えずは、お前達の機体が修復する迄、俺達はあちらの見学

と洒落込もうか？》

《ハッ！　そいつは名案だな。あの調子じゃ、どうせもう暫く掛かるだろうしな。
　酒でもあれば尚良かったが……まぁ、其処迄贅沢は言わん事にしよう。》

機体の修復を待つしかない二人は、忸怩（じくじ）たる思いの儘に大人しくじっとその時迄堪えていた。

衝撃によって乱れた息を整えながら、悔しそうに歯ぎしりみする声をサラウンドでＢＧＭに聞きながら、

二人の偏在カイトはもう一人の自分である、ヤルダバオトとコンパチカイザーとの戦いを、

のんびり眺め、その時を待っていたのであった。

ｓｉｄｅ：コンパチブルカイザーｖｓヤルダバオト

「くそっ、くそっくそっ！　このおっ！！　ちっくしょう！　何で一発も当たらねえんだ！？」

《……フン。》

先程からカイザーのみが一方的に攻撃し、ヤルダバオトは只管(ひたすら)躱し続けているだけなのだが、

残念ながら、カイザーの攻撃は只の一度たりとも掠りもしていなかった。

何度殴っても、何度蹴っても、何を投げても、何を撃っても。

その悉くが紙一重で躱されてしまい、全てが空振りに終わってしまっていた。

《遅い遅い遅すぎる！　余りにも愚直で一直線だ。
そんな単調な攻撃では、止まっている蚊ですら墜とせんぞ？》

「ウルセエ！　……くそっ！　明らかにフォルカが乗ってた時よりも速過ぎる……！」

フォルカも確かに強かった。でも、辛うじてこちらも相対して戦う事は出来た。

だが、こいつは違う。速さだけでも明らかに次元が違う。違い過ぎる。

その事実は認識出来たものの、一体どうすれば捉えられるのか……。

一度でも捉えさえすれば、後は怒涛の連撃で倒す事も可能だと言うのに、

全く以て、其処に至る迄の良い手が何も浮かんで来ない。

そのもどかしさに、悔し紛れに力の限り殴り付けるが、更に遠くへと跳躍され距離を開けられた。

《好い加減、単調な攻撃を躱し続けるのも飽きて来た。
そろそろこちらからも攻撃させて貰うぞ？　そうら。》

「な……っ！？　ぐ……！」

何百ｍ……いや、下手をすれば何ｋｍはあるかもしれない距離を一跳躍で詰め寄り、

その勢いの儘に飛び蹴りして来た。突然の出現に辛うじて防御は間に合ったものの、

防いだ瞬間、背後に回られ蹴りによる乱撃が打ち込まれた。

《そらそらそらそら！　さっき迄の威勢はどうしたぁっ！　せぃや

っ！！》

「がああああっ！！？　ガッ！　……ご、ゴホッ……こ……こんにゃろう……！」

蹴りの乱打による連撃で浮いた所を更に殴り飛ばされ、カイザーは地面に何度も叩き付けられた。

咳を零しながら悪態を付き立ち上がった時には既に、ヤルダバオトは背後に回っていた。

《ほう、恨み節など悠長に語っている暇があるのか。ならば、もう少し苛烈にいくか？

せぃやっ！　そらそらそら！　でぇぇやぁっっ！！》

「な！？　間に合わ……！　ぐあああああっっ！！」

更に覇気を高めた拳で殴り飛ばし、それに追い付きながら尚蹴り続け、

最後には上空に殴り飛ばした。その間もカイザーは必死に防御をしようと試みてはいたが、

その苛烈さに身動きが殆ど出来ないでいた。

《耐え切れるか！！　機神！　猛撃拳！！》

「ま、ず……！？　ガ――――？ア――――――！！！」

更に身動きが取れない空中で、力の限り蹴り飛ばされたカイザーは遥か彼方へと吹き飛び、

ヤルダバオトが着地し未だ空中にいるカイザーに背を向けた数秒後に、

ようやっと、ズドォォォンという地響きと共に墜ちて来たのだった。

腕組みをし、カイザーがゆっくりと起き上がる様を眺めていた偏在カイトが、

丸で呆れ返ったかの様な声色で、溜息と共にコウタに話し掛けた。

《……一撃も当てられず、一撃も躱せず、か。
もう少し、やってくれるものかと思っていたのだがな。もう観念して降参したらどうだ？》

「……こう……さ、ん……？」

《ああ、そうだ。敗北を認めるんだ。お前は十分に健闘した。
例え此処で楽になったとしても誰もお前を責めまい。もう十分だろう？》

「……け……な……。」

《……ん？》

偏在カイトの言葉に、カイザーの動きも止まりコウタも暫し沈黙していたが、

何事か呟くと同時に、再びカイザーをゆっくりと立ち上がらせ始めた。

「……ざけんな……って、言ってんだよ……！」

《……ほう、未だ立ち上がるだけの気力はあったか。存外しぶといな。》

「俺は……俺は、こんな所で負けらんねえんだ……。爺ちゃんにショウコにだって……。

それに、ジャーダさん達の双子にも……あいつらと……アラド達との約束だってある……！

俺が死ぬと悲しむ奴がいる……俺が死ねば泣く奴がいる……！

まだ、ロアとも話してえ事が山程あるんだ……！　俺は……俺は……！！

俺は、絶対に死なねえ！　こんな所で、死ぬワケにはいかねえんだよおぉぉっっ！！！」

そのコウタの言葉に呼応するかの様に、固有結界（セカイ）が唐突に震え出した。

それと同時に偏在カイトが自身の左後方上空を振り返り、

ニヤリと笑みを零しながら何事かを呟いた。

《フ……ようやっとお出ましか。》

「……な、何だ？」

偏在カイトの呟きとコウタの疑問に同時に応えたのは、固有結界を突き破って……否。

偏在カイトが空けた、固有結界の穴を通って現れた漆黒の戦闘機からの声だった。

「お兄ちゃん！！！」

「な！？　しょ、ショウコ！！？」

そう。結界を通って現れたのは、コンパチブルカイザーの半身であるGサンダーゲート。

そして、ロアの妹であるエミィに変身した、コウタの妹ショウコであった。

「ショウコ！　何で、お前がこんな所に！？　いや、それより、一体どうやって？」

「話は後だよ、お兄ちゃん！　カイザーは大丈夫？！　まだ動ける？！」

「あ、ああ！　勿論だ！　ショウコ、取り敢えず合体するぞ！」

「うん！」

その言葉を合図に、Gサンダーゲートはコンパチブルカイザーの真後ろへと飛び、

その儘、カイザーとドッキングし翼となり、Gコンパチブルカイザーが完成した。

「よっしゃあ！　これで百人力、いや千人力だぜ！
あ、それよりもショウコ、お前どうやってここに来れたんだ？」

「エミィが教えてくれたの。ロアがずっと眠ってて、お兄ちゃんが一人で頑張ってるって。
取り敢えず、今はこっちをどうにかするのが先！　お説教は後でするからね、お兄ちゃん！」

「うげ……それは忘れて無かったのね。」

何とも微笑ましい兄妹の会話に思わず偏在カイトのみならず、皆の口も綻んでいた。

が、偏在カイトは即座に口を引き締め、大声でカイザーに……否。

未だコウタの中で眠っているロアに向かい、丸で叱責するかの様に怒鳴り付けた。

《ふ……ファイターロア！　聞こえているだろう！　何時迄寝転けている！！
　さっさと起きんか、戯けが！　既に役者は全て揃っているのだぞ！！！》

「カイト……さん？」「あの人……ロアに話し掛けてる？」

（――――分かっている。そう怒鳴らなくても聞こえているさ、救世主（メシア）。）

偶然か、将又（はたまた）必然か。カイトの声に呼応してか、ロアがやっと目を覚ました。

その声に誰よりも逸早く反応したのは、他ならぬ一番その身を案じていたコウタであった。

「！？　ロア！　起きたのか、ロア！　もう大丈夫なのか！？」

（ああ。済まない、コウタ。心配を掛けた様だな。）

「へっ、何いいって事よ！　こうして無事に起きれたんだからな！」

「え？　あれ？　嘘……私にも聞こえる……？　ロアの声が私にも聞こえる！！」

「な……！　本当か、ショウコ！？」（何だと……？　そんなバカな……！？　まさか！）

そう。本来ロアの声は、その魂を同じくするコウタにしか聞こえない筈だったのだが、

何故か今はショウコのみならず、今此の場に居る誰にもその声が聞こえていた。

何か思い当たる節でもあったのか、ロアは「まさか！」と言い、

その意識を目の前の、今は敵として対峙している偏在カイトに向けた。

それを認識したのか、偏在カイトはふ……と一つ笑みを零し、

ヤルダバオトの肩を竦めながら、あっさり自白した。

《まぁ、そういう事だ。序でにな、念話紛いも出来る様にしといてやった。

向こうの世界へ行ってもそれは継続される。何か余程の事態でも

起きない限りはな。》

（フ……そうか、ならば確実に安全という訳だな。
お前が想定する程の余程の事態など、まず起きようがないだろうからな。）

《さて、それはどうかな？　油断大敵という言葉があるだろう？
一寸先は闇とも言うしな。》

（違いない。……さて、ではそろそろ始めようか。こちらの準備は既に整っている。）

「おうともよ！　ショウコ、いつでもいけるな？」

「もっちろん！　エミィも問題無いって！」

先程迄のボロボロだった姿は何処へ行ったのか。

気力・闘志が充実仕切っているのは誰の目にも明らかだった。

その様を見ていた偏在カイトは、嬉しそうな声色で四人に告げた。

――――更なる絶望を。

《クックック……いいだろう。ならば、こちらも相応のモノでいか

んとなあ！

篤と拝め！　そして絶望しろ！　神に抗う愚を思い知るがいい！！

ヤルダバオトよ！　偽神の名を持つ物言わぬ機兵よ！

その真の姿を、その真なる力を衆愚に魅せ付けよ！！

神化せよ！！！　ヤルダバオトオオオオオ！！！！！！≫

偏在カイトの叫びに呼応し、共に咆哮するヤルダバオトの身体が見る見る内に変化していった。

頭髪らしき部位は、雄々しき獅子の鬣（たてがみ）の如く。

真っ赤だった意匠は、神々しき真白に光り輝き。

僅かに獣の意匠を残していた姿形はより人間らしく、より人間を模したものに。

そして、全身から滲み出る覇気は、その神々しさをより際立たせていた。

「くっ……！！　もしかしたらと思ってたけど……やっぱり、そう

なるのかよ……！」

（味方にすれば非常に頼もしいが、敵に回せばこれ程恐ろしい奴もそうそういないだろうな。）

「もう、呑気な事言ってる場合じゃ無いでしょ！？　フォルカよりも強いんでしょ、あの人！？」

「ああ……次元が違い過ぎる。正直、かなりやべえぜ……。」

冷や汗を皆して掻いていると、神化してからずっと沈黙していた偏在カイトが口を開いた。

《――――さて、もういいか？　相談事をするには十分の時間を与えた。

さあ、第二ラウンドの開始と行こうじゃないか。》

「させるかよ！　こちらから先手を取らせて貰うぜ！　行くぞ、ロア！　ショウコ！　エミィ！」

（ああ。）「勿論！」（……分かった。）

《業拳にて覇道を往きしモノ――――神化せし偽神（ヤルダバオト）。

この機神の乱舞を止められるものならば、見事止めて魅せよ。≫

偽神の名を冠する機神に立ち向かうは、平行世界を彷徨い悪を打ち倒さんとする勇者達。

誰もがその行方を見守っている頃、丁度反対側でも事態が動き出していた。

ｓｉｄｅ：ソウルゲイン＆ペルゼインｖｓアルトアイゼン・リーゼ＆ライン・ヴァイスリッター？

ようやっと機体の自己修復も完了し、立ち上がったペルゼインとソウルゲイン。

それ迄、カイザーとの戦いを眺めていたアルトとヴァイスは、

その音を聞き付け再度二人に振り向き、言葉を掛けた。

《フン、ようやっと修復し終わったか。存外早かったな。》
《そうでなくちゃ困るぜ。その程度の取り柄ぐらいねえとなぁ。
只でさえ弱っちくてこちとら欠伸咬ましてるってーのに、退屈でしょうがねえっつーの。》

「む～……好き放題言われてますの。」
「……言わせておけばいい。結果が全てだ、これがな。」

《ほう、殊勝な言葉だな。では、もう敗北を認めるか？》

「抜かせ！　言った筈だ、結果が全てだと。つまり……！
ここで貴様等を倒し、その言葉をそっくりそのまま返してやるという事だ、これがな！！」

アクセルはそう叫ぶと、アルトに特攻を仕掛けて来た。
突然に来たそれにも微塵も動じる様子の見えない二機だったが、
御互いに刹那視線を合わせると、ヴァイスが僅かに後退し、アルトが前に出て来た。
どうやら、アルト一機でソウルゲインと後を追って来たペルゼインの相手をする様だ。

《来い……！　その牙、噛み砕く……！》

「そう上手くいくかな？　せえりゃあっ！！」

《《！？　何っ！！？》》

アルトに向かって行っていたソウルゲインは、アルトのバンカーを躱すと同時に飛び上がり、

アルトの背後に後退していたヴァイスへと攻撃を仕掛けた。

また、それに合わせる様にアルトへの牽制と同時に、

ヴァイスへの攻撃を兼ねたライゴウエを何度も放ちながら、ペルゼインも近付いて来ていた。

《ほう！　成る程……今度はヴァイス一機にのみ攻撃を集中させたか！》

（おい、分かってるとは思うがな……。）

（無論だ。俺は手出しはせん。存分に遊んでやれ。）

（ハッ！　言われる迄もねえ！！）

《いい度胸だ、テメェラ！　このヴァイスに追い付けるモンなら追い付いてみろやあっ！！》

「アルフィミィ！」「分かってますの……！」

どうやら、偏在カイト達の間での念話によると、ヴァイス一体で二人を相手にする様だ。

それを知らない二人はアルトを牽制するも、その動きが全く無い事を確認すると、

高速移動をしてこちらを攪乱して来るヴァイスに全神経を集中させた。

《ハッ！　遠距離専用のヴァイスに接近戦ならってか？
……甘ぇなぁ……テメェラ、トコトン甘ぇよ！！　おらぁっ！！》

「きゃあっ！　くっ……！？　――――え？　……！！？」

何としてもヴァイスに繰っ付いて接近戦に持ち込もうとする二人の意図を、

あっさり見抜いた偏在カイトは、ペルゼインを蹴り飛ばし距離を取った。

すると、長砲身の銃を小脇に抱え込み、片手でビームソードを取り出した。

そして、その儘猛烈な勢いでペルゼインに突進して来たのだった。

「きゃあああっ！！？」「バカなっ！？」

《何を驚いてやがる？

ヴァイスが遠距離専用と思われているのは、エクセレンの専用機と化しているからだろうが？

つまり、誰も接近戦をするとは微塵も思っていない。……そこが浅はかだっつうんだよ。

この高速機動の機体、乗る奴が乗れば接近戦特化にさせる事も容易だ。

……どうだ？　この方が余程、純粋なる白騎士（ライン・ヴァイスリッター）の名を冠するに相応しいだろ？》

「……チッ。」「ぅ……。」

ビームソードを目の前に翳し、中世の騎士の決闘場面を彷彿とさせる格好で語る偏在カイト。

その威圧感に思わず、アクセルは舌打ちをし、アルフィミィは小さく呻き声を上げるのであった。

それを愉しむかの様に、ヴァイスは再度剣を構えて二人に猛スピードで突撃して来た。

《そらそらそら！　こいつの分身はアンジュルグの比じゃ無ぇぞ！！》

「くっ！　速過ぎる……！　目で追い付けんとは……！　だが……アルフィミィ！」

「……分かっておりますの。――――！　……そこっ！！」

《何っ！？》

猛スピードで３６０。、あらゆる所から二人に襲い掛かるヴァイスを前に、

僅かな隙を狙おうと何かに集中するアルフィミィを守る為、只管攻撃に耐え続けるアクセル。

だが、何かを察知したアルフィミィは丸で張っていた蜘蛛の巣を広げる様に機敏に反応した。

案の定、とある通り道に透明にし気配を消させて配置していた巨大な腕の付いた一対の鬼面で、

突進して来たヴァイスを両脇からガッシリと有らん限りの力で抑え込んでいた。

《くっ！？　接近戦にしたのが仇となったか……少し、遊び過ぎた様だな……。》

「アクセル！　今……！」

「貴様は好い加減……地に這い蹲(つくば)っていろ！　舞朱雀！　でぃぃぃやぁぁっ！！！」

《チッ！　振り解(ほど)けねぇだと！？　……！？　く、クソがぁぁっ！！！》

身動き一つ出来ず藻掻(もが)いてたヴァイスは、真下からソウルゲインに真っ二つにされ、

怨嗟の声を上げながら爆散した。これで、残るはベーオウルフことアルトアイゼン・リーゼのみ。

神化したヤルダバオトと、合体したGコンパチブルカイザー。

そして、ソウルゲインとペルゼイン・リヒカイトと、アルトアイゼン・リーゼ。

激戦の様相は未だ冷めやらず。

……否。ここからこそが、真の戦いなのだ。

高く、高く、聳え立つ絶壁との――――。

第参拾捌話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《前編》】

如何でしたでしょうか？

ロボ戦は一度でいいからやってみたかったんです！ｗ

やっぱ、スパロボの名を冠してるのならば、一度はしてみないとｗ

え？　エルデカイザー？　ナニソレ、オイシイノ？

さて、次回は最終決戦・後編《後編》です。え？　わｋ（ｒｙ

いえ、実は、いざ書き始めてみると、余りにも長くなり過ぎまして……。

で、いっその事、二分割しちまえ！　と、まぁ、そういう事でして、はい。

まぁ、何とか今日中には書き上がる……書き上げたい……書き上がったら、いいなぁ……はぁ。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

第参拾玖話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《後編》

現時刻（２０：２５）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，８２１，１４１アクセス　ユニーク：２３０，８３０人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

今回は、（やっぱり昨日では間に合わなかったｏｒｚ）最終決戦・後編《後編》です。

唐突に始まった、小規模なスーパーロボット大戦。通称、ＳＲＷ。（スーパーロボットウォーズ）
いえ、特に意味はありません。

果たしてその結果とは！　勝敗は一体、どちらの手に！

では、今話も拙作を御覧下さい。

第参拾玖話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《後編》】

第参拾玖話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《後編》】

ｓｉｄｅ：ソウルゲイン＆ペルゼイン・リヒカイトｖｓアルトアイゼン・リーゼ？

ライン・ヴァイスリッターを撃破し、着地したソウルゲインと、

一対の鬼面と共にゆっくり降りて来たペルゼインは、
先程からずっと腕組みをしながら、撃破されても尚、傍観に徹していた真っ赤な孤狼と対峙した。

「五月蠅い小蠅は斬り落とした。残るは貴様だけだ……Ｍｋ（マークスリー）―？！」

《フン……良くやったと誉めてやる所だろうがな……矢張り、貴様等は未だ、甘いな。》

「……何？」

《（ヴァイスが態々貴様等に攻略され易い様に、接近戦に持ち込んでやったと言うのに。
　流石に其処に迄気付けば、十分合格点はくれてやっても良かったんだが……まぁいい。）
　それでは、俺がつまらんからな。今度は俺が存分に遊んでやるとしよう。

　掛かって来い。少しは俺も悦（たの）しませてくれよ？》

カイトの心の声迄は流石に聞こえるべくも無いが、どうやらそういう事だったらしい。

だが、アルトから感じる気迫は先程迄のヴァイスのそれとも、また自身の発した言葉とも違い、

遊び心などは一切無く、どうやら最初から本気の様だ。

それを敏感に感じ取った二人はより一層気を引き締め、アルトへと向かって行った。

「……何を訳の分からん事を。だが、最後のは理解出来た。

悦しむ暇も無い内に墜としてやろう。今度こそ終わりだ……ベーオウルフ！！」

「まいります……ヨミジですの……！」

先ず、アルフィミィが両の鬼面から極太ビームを撃ち出して来た。

それを横っ飛びで躱したアルトだったが、その眼前に映っていたのは、

その行動を予期し既に動いていたソウルゲインが、拳を繰り出す寸前だった。

「吹き飛べ！　白虎咬！！」《ちっ……やるじゃないか。》

「フ……甘いな。」《何？　……！　アルフィミィか！》

「マブイタチ、連撃ですの……！」「こいつもオマケだ、喰らえ！　青竜鱗・乱舞！！」

《中々どうして考えているじゃないか……だが、未だ未だ甘いっ！！》

白虎咬によって吹き飛ばされたアルトの上空から、

ペルゼインの鎌鼬（かまいたち）による連撃が浴びせ掛けられた。

それに呼応して、ソウルゲインも地上から青竜鱗を途切れる事無く連続で撃ち出して来た。

だが、アルトはそれらを全て躱しながらソウルゲインに徐々に近付いて行った。

「ちっ……やはり一筋縄ではいかんか！　ならば、リミットかいjj

《させん！》……！？」

《そうら……よっとおっっ！！》「が……はっ……！！」

「アクセルっ！？」

アルトは力を開放しようとするソウルゲインに更に速度を上げて接近し、

その顔をむんずと掴みその勢いの儘、地面に顔全体が埋まり込む程、思いっ切り叩き付けた。

それに驚いたアルフィミィが思わず攻撃を一瞬止めてしまった隙を突き、

ソウルゲインが地面に減り込んだ頃には既に、上空へと飛び上がっていた。

《余所見をしている余裕があると思っているのか？　そらっ！》

「しまっ……！？　くっ……！」

《まだだ！　クレイモア全弾貰っていけ！》

「ぁ……！　あああああっっ！！！」

「ぐっ……！？　アルフィミィ！　……貴様ぁっ！！」

アルトは一瞬でペルゼインと同じ高さ迄飛び上がり、踵落としで叩き落とした。

辛うじてそれは両腕で防御出来たが、一緒に落下しながらクレイモアを撃ち尽くす迄放たれ、

再び腕部、脚部、頭部を破壊され、半壊状態で受け身も取れぬ儘、地に叩き付けられた。

それに、地面から頭部を引き抜いたソウルゲインが気付き、

激昂しながらアルトへ向かって突進していった。

《怒りに任せた攻撃なぞが俺に通じる訳無かろうが！　せぃりゃっ！》

「な!?　……バカなっ!!?」

《だから甘いと言うんだ、貴様等は。有り得ない等と言う事は有り得ないんだよ。》

怒りに任せた勢いの儘、アルトを殴り付けようとした腕を自身の両腕で掴み取り、

後ろを向いてその腕を肩に担ぎ、勢いを殺さぬ儘に腰を上げ、

前方の地面へと強(したた)かに叩き付けた。所謂、一本背負いという奴である。

地面に叩き付けられたアクセルは、立ち上がっても猶喰らった衝撃以上に、

ＰＴ（パーティルパー）にされた藝当（げいとう）に驚きを隠せなかった。

「くっ……！？　まだだ……！　まだ……！？」

《好い加減、寝ておけ……！　バンカー！！》

「ぐあああああっっ！！！」「！？　きゃあっ！」

驚きの余り、一瞬集中力が途切れたアクセルに向かって突進したアルトは、

自身の右腕に付いている巨大な杭打機（リボルビング・バンカー）で、ソウルゲインの頭部を打ち貫きその勢いで、

何とか必死に立ち上がろうとしていたペルゼインの真上にソウルゲインを吹き飛ばした。

二人必死にもがいている所へ、右腕のバンカーにソウルゲインの頭部を串刺しにした儘、

ゆっくりと歩みを進めるアルトアイゼン。

遂に二機の眼前に来た偏在カイトは、右腕を振り払いソウルゲインの頭部を投げ捨てた後、

威圧感はその儘に、二人に粛々と語り掛けた。

《白騎士には勝てても、孤狼には勝てなかったか。成る程……これが貴様等の実力とやらか。

……まぁいい。もういいだろう……貴様等もそろそろ諦めたらどうだ？》

「諦める……だと……？」

《そうだ。アルトには勝てずとも、ヴァイスは墜とした。十分健闘賞ぐらいには当たるだろう。

ここで諦めた所で誰もお前達を責める者など居まい。

俺も好い加減弱者を甚振（いたぶ）るのは飽きた。

もうここで諦めろ。諦めて楽に成れ。それが何よりお前達の為だ。

≫

「諦める……？　俺が……ここで終わる……？」

「やはり……どんなにがんばっても、救世主（メシア）様には勝てませんの……？」

二人が偏在カイトの声色を落ち着けた優し気な言葉に、

非常なまでの現実の圧倒的な実力差に押し潰され、

あのアクセルでさえも、その意志が折れそうになっていた時だった。

「だから！　俺達はッ！！　アンタに絶対、勝たなきゃいけねえんだよオオオッッ！！！！！！」

彼の絶対的な意志に満ち溢れた声が、その心の叫びが聞こえて来たのは。

ｓｉｄｅ：Ｇ（グレート）コンパチブルカイザーｖｓ神化ヤルダバオト？

時は僅か遡り、ソウルゲインとペルゼインがヴァイスリッターと２ｖｓ１で戦っている頃。

こちらでは丁度、カイザーが完全体となりロアが目覚め、ヤルダバオトが神化した頃であった。

その威圧感に圧されながらも、果敢に立ち向かって言ったＧコンパチカイザーだったが……。

「バーナウ・ファー・ドラグッ！」

《……。》

更に巨大化した炎の竜で先制攻撃したが、それが直撃しても猶、

直立不動で微動だにしない神化したヤルダバオト。

「やっぱ効かないか。なら、これならどうだ！　オーバーーッ！
ビーームッ！！」

「ショルダー・キャノンもよ！」

《……フン。》

額のクリスタルと、両肩からの同時ビーム攻撃も、
ヤルダバオトが、直撃する直前に振り下ろした右腕で、一度に叩き落とされてしまった。

「ちっ……それなら、ショウコ！」

「分かってる！」

「よし！　喰らえ！　カイザー・ブゥゥメランッ！！」

《……。》

両肩の突起を結合させ、ヤルダバオトに投げ付けたが、
あっさりと掴み取り、それをポイとカイザーに向けて投げ捨てた。

だが、どうやらそれも計算の内の様で、ヤルダバオトが、自身が投げ捨てたブーメランから、

カイザーに目を向けた時には、既にカイザーは準備を終え、構えていた。

「お兄ちゃん！　エネルギー溜まったわよ！」

「よおっし！　喰らえ、必殺！　カイザーーァ！　バーーーストッッ！！」

《ほう。だが……未だ甘いっ！》

「んなっ！？　ぐっ……！　……くそっ！！」

エネルギーを胸部に充填させ、一気に解放したのだが、

偏在カイトの気合いを入れたパンチで、そのエネルギーごと殴り返されてしまった。

辛うじて防御は間に合ったものの、微塵も効いた様子を見せないヤルダバオトに、

思わず悪態を付くコウタ達であった。

「もうっ！　一体何なのよ、あの人！　幾ら何でも非常識過ぎるでしょ！？」

（それが、あの救世主（メシア）だ。あれでも未だ、大分手加減している方だ。奴の本気は……語るのも恐ろしい程だからな……。）

「……ロアが震える程って……本当にどんだけのバケモノなのよ……。」

「それでも、俺達は勝たなきゃいけない……。いや、絶対に勝つんだ！」

《……いい覚悟だが……それに伴う実力が無ければ、な。
正義無き力は暴力也。力無き正義は無力也。
さて。では、そろそろこちらからも仕掛けるとするか。》

そう言うと、ヤルダバオトはザッザッとカイザーに向かって歩き出した。

いつ掛かってこられてもいい様に、コウタ達は身構えたのだが、

その瞬間にはもう、ヤルダバオトの姿が消えていた。

何処に消えたかと一瞬逡巡したカイザーに、真後ろから衝撃が襲った。

（ぐあっ！！　くっ……何時の間に！？）

「このおっ！」

《……何処を見ている？　俺はこっちだ。》

「な、はｙ……ガッ！」

一瞬の内に後ろに回り込み、裏拳を叩き込んだヤルダバオトに、蹌踉（よろめ）きながらも裏拳で殴り返したカイザーだったが、その時にはもう既にその場にはおらず、

すかさず声がした方を見ると、自身の側頭部の真横にヤルダバオトの足が触れる寸前だった。

その衝撃にふら付きながらも、何とか立ち上がり距離を取って体勢を立て直したカイザー。

「くっ……速過ぎて、全く動きが見えなかった……。」

「い、幾ら速いって言ったって、おかし過ぎるわよ！　フォルカだってあんなに速くは……！」

（奴を他の誰かと比べてはいけない。奴は……それ程に、別次元の存在なのだ。）

《相談はもういいか？　好い加減、終わらせよう。》

「くっ……！」

そう言い放ち、ロア達の会話をぶった切った偏在カイトから、猛烈な覇気が吹き出して来た。

流石にそれ程の覇気を無視して話し続ける訳にもいかず、

咄嗟に身構えたカイザーの眼前には、既にヤルダバオトの姿は無く、

気付いた時にはもう懐に潜り込まれていた。

「！？　しまっ……！」

《遅い。爆ぜろ……！　真覇剛掌閃(しんはごうしょうせん)ッ！！》

「（ぐあああああああっっ！！！）」「（きゃあああああああっっ！！！）」

その言葉と共に突き出された拳に殴り飛ばされたカイザーは、

遥か先にある背後に聳(そび)えていた山に激突し、その向こう側へと墜ちて行った。

……カイザーが激突した山が完全消滅した事からも、その威力の凄

まじさの一端が計り知れた。

「……そら。」

「ぐっ……あ……く……。」

ヤルダバオトが一跳躍で山向こうへと飛び越え、

ボロボロになったカイザーを引き摺って戻って来た。

どうやら、見せしめの為に態とここにまで持って来て、皆に見せているらしい。

《ほう……存外にしぶといな。今のは、それなりに本気で殴ったのだがな。》

「う……うるせ……え……！　こ、こんぐらいで……くたばって、たまる……かよ……っ！」

《……その根性は買うがな。だが、そのボロボロの機体（からだ）ではもうどうしようもあるまい？》

偏在カイトの言葉もあってか、皆、再度カイザーの姿を見た。

身体中、罅（ひび）が入っていない箇所は無く、

両腕や両脚部からは破片が幾つかボロボロと零れ落ち。

胸部には紫電が走り、両肩からは煙はモクモクと立ち上っていた。

態々確認の言葉を述べる迄も無く、誰が一瞥しようとも既に限界だろうという判断は出来た。

だが……無論それに気付いている筈のコウタは、それでも尚立ち上がろうとし、

片膝を突いた儘で、息を荒げていた。……どうやら、未だ闘志は衰えず、の様だ。

《中々に頑張る。だが、何故そこまでして戦おうとする？　もう十分ではないか。

そうだ、お前達はもう十分に頑張った。もうこれ以上、抗う必要は無い。

もう疲れ切っただろう？　後は俺に全て任せて、もう休め。》

誰も聞いた事が無いであろう程に優しい偏在カイトの声色に、

やはりカイトには勝てないのか、という絶望と、

もう休んでもいい、という甘言に、疲れ切った身体を休めようという、

生物としての抗い難い自然な欲求に、次第にロア達の瞼が重くなっていった。

……そんな時だった。

「……ざけんな……。」

《……ん？》

「……ふざけんな……って、何度も言ってんだろうが……！」

《（ほう……。）巫山戯（ふざけ）るな、とは一体どういう意味でだ？　俺は本気で言っているのだが？》

「うるせえっ！！　アンタから喧嘩吹っ掛けておいて、もう休めだ？　後は俺に任せろだ？

そんなフザケた道理、この俺が認められるかってんだよ！！」

満身創痍ながらも、裂帛の気合いと共にそんな言葉を吐くコウタに、皆思わず目を瞠った。

《……誰が認めようとも、認めなくとも、現状考えるにそれが最善の方法だろう？》

「だから……うるせえって、言ってんだろうがっ！！　そんな事は関係ねえんだよ！

アンタが何でこんな事をしてるのか、俺は知らねえ。何を考えているのかも知らねえよ。

でもな……！　男には引いちゃいけねえ時がある……負けちゃならねえ相手がいる……！

そして、今は……負けても、引いても！　いけねえ時なんだよ！！

ここで諦めたら、俺達は誰とも戦えねえ！　ここで負けたら、俺達は誰も守れねえ！

だから……！　だから、俺は……俺達は……！！」

そう言いながら、カイザーは地に、膝に手を付き、ボロボロの身体で必死に立ち上がった。

そして、偏在カイトに言い放った。

自身の覚悟(おもい)を。

誰に宣言するでもなく。

誰に言い聞かせる訳でもなく。

只、カイトに向けて。

「だから！　俺達はッ！！　アンタに絶対、勝たなきゃいけねえんだよオオオッッ！！！！！」

その雄々しき様は、半壊してるとは微塵も感じさせずに、雄然と聳え立ち。

その覚悟(おもい)は、絶望に沈み掛けた誰の心をも動かし。

誰の目にも、その美しい姿が眩しく見えた。……そう、誰の目にも。

《……そうか。
では、お前達は最期の最後まで諦めずに、この俺が相手であろうとも立ち向かう、と？》

「あったりめえだ！　ロア！　ショウコ！　エミィ！」

（……ああ、分かっている。ここが、一番の踏ん張り所だな。）

「……うん！　私達なら、まだやれる！　まだ、頑張れる！！」

（……ああ。ここで全てを諦める訳には、いかない……！）

「ああ！　さあ、いくぞ！　次の一撃で、終わらせる！！」

そう宣言し、エネルギーを集め始めるGコンパチブルカイザー。
それを認めると、神化したヤルダバオトも同様に覇気を高め始めた。

《……いいだろう。では、その次の一撃に貴様達の全てを込め、懸けてみせろ。

それが、終焉だ。》

双方の宣言通り、次の一撃で全てが決まる。

それは、誰の目にも明らかであった。

そして、誰もが想った。願った。望んだ。

その結果を――――。

その頃。絶望の淵に沈み掛けていた、もう一方にも変化が表れていた。

ｓｉｄｅ：ソウルゲイン＆ペルゼイン・リヒカイトｖｓアルトアイゼン・リーゼ？

「……フ。」

「……アクセル？」

《ん？　どうした、アクセル・アルマー。何が可笑しい？》

コウタの覚悟を聞いたアクセルは唐突に、……フ、と笑みを漏らした。

訝しむアルフィミィとカイトに、アクセルは応えた。

「いや、何……俺は一体いつから、これ程気弱になったのだろうと思ってな。

そうだな……貴様が何者であろうとも、どれ程強かろうとも、俺には何も関係ない。

俺は俺の敵を、ただ撃ち貫くのみ、だ。いくぞ、アルフィミィ。」

「……はいですの！　機体の修復も、もう終わってますの。いつでもいけますの。」

そう言うと、二体共立ち上がり、再度アルトアイゼンへ向けて闘志を向けた。

そこまで見届けると、アルトアイゼンは腕組みを止め、二人に静かに問い掛けた。

《……そうか。では、貴様等も、あいつら同様に？》

「当然だ。貴様を噛み殺し、俺達は元の世界へ戻る。自分達があるべき、居るべき世界へとな。」

「……という訳ですの。もうしわけないですけれど、救世主（メシア）様。大人しく抉られてほしいのですの。」

《……そうか。では、今度こそ、加減も慈悲も要らん訳だな。……いいだろう！》

「……ちっ。いくぞ、アルフィミィ！」「……は、はいですの！」

偏在カイトから発せられる、その異常な迄の威圧感に思わず怯む二人であったが、

再度自らを奮い立たせ、眼前に佇む紅き孤狼に向かって行った。

「ライゴウエですの！」

《バカの一つ覚えか？　そんなもの、俺には最早牽制にすらならんぞ。》

「それはどうかな？　せぇりゃっ！」

《……やはり、甘いな。》

「なっ！？　……軽業師（かるわざし）か、貴様は。」

カイトの視界を覆うかの如く、丸で弾幕の様に展開されたライゴウエを、

苦も無く潜り抜けたアルトの真後ろから、何時の間にか現れたソウルゲインが肉薄していた。

だが、その気配を察知していたのか。掴み掛ろうとしたソウルゲインの腕を逆に掴み返し、

それを支点にして、ソウルゲインの更に後方。ライゴウエからも離れた地点へと一っ跳びした。

まさか、重厚なアルトアイゼンでそんな藝当をされるとは微塵も思わなかった二人は、

思わず驚愕し、攻撃の手も一旦止んでいた。

《どうした？　もう攻撃は終わりか？》

「いいや、まだだ！　格闘戦に縺(もつ)れ込ませれば、十二分に勝機はある！」

「わかりましたの。鬼菩薩……！」

《……チッ！　ちょろまかと……！》

ソウルゲインが、アルトを掴まえようと飛び掛かるが、ひょいと気軽に躱してしまう。

そこに、ペルゼインと一対の鬼面が加わり、流石のアルトも今迄の余裕は余り無い様だ。

先程から視界を遮り、隙があれば自らもアルトを捕獲しようとしてくる鬼面に、

さしもの偏在カイトも苛立ちが募って来た様で、堪らず真っ先にそちらに攻撃を仕掛けた。

《ちっ……鬱陶しいにも程がある……！　貴様等は堕ちていろ！》

ベアリング弾の直撃を喰らった鬼面は、更に穴ぼこだらけになり、その姿を消した。

だが、撃ち終わった瞬間、僅かにそちらに意識を向けていたアルトに、

ソウルゲインが即座に肉薄し、その肩を力の限りに掴んでいた。

「待っていたぞ……この時を！」

《ちっ……煩わしい事だな……！》

「褒め言葉と受け取って置こう。アルフィミィ！」

「……いきますの……マブイエグリ。」

鬼面の代わりに、渾身の力でアルトの肩を掴んで離さないソウルゲイン。

ベアリング弾を撃とうにも、肩を開けない。

ステークを打ち込もうにも、関節部も同時に抑え込まれ、腕を動かせない。

《……ならば！》

「！　しまった……！　ぐあっ！？」

ならば、と頭部にあるツノに電気を走らせ、それをソウルゲインに打ち付けた。

思わず手が緩んだ瞬間に、僅かに身を沈め回し蹴りを叩き込み、ソウルゲインと距離を取った。

そして、そのまま翻り、向かって来ていたペルゼインに逆に突進し……。

《残念だったな。吹き飛べ！　レイヤード・クレイモヤ！！》

「そんな……！　アアアアアッッ！！！」

その突進の勢いを上乗せし、破壊力が増したクレイモヤを全弾叩き付けられ、

ペルゼイン・リヒカイトは、ほぼ完全に戦闘不能となった。

《惜しかったな。途中迄は良かったのだがな。さて、アルフィミィも既に気絶している。

残るは貴様だけだぞ、アクセル・アルマー。これでも未だ戦るか？》

「……言った筈だ。そんな事は関係無い。

俺はただ、目の前（キサマ）の敵を撃ち貫き、噛み殺すだけだ、とな。」

その言葉から発せられる闘志には、些かも衰えた様子はみえない。

それ所か寧ろ、却って膨れ上がっている様子さえみせていた。

それに、溜息を付き――――付いた様に見せ付け――――アルトは

半身に身構え、
くいっくいっと指を動かし、ソウルゲインを挑発しながら言った。

《……そうか。ならば、掛かって来い。貴様の得意な格闘戦で戦ってやる。》

「……いいだろう。その言葉、後悔させてやるさ……これがな！」

そして――――最後の殴り合い（たたかい）が、始まった。

ｓｉｄｅ：Ｇコンパチブルカイザーｖｓ神化ヤルダバオト？

丁度、アルトアイゼンとソウルゲインが殴り合いを始めた頃。

ようやっと、こちらは互いに、ほぼ同時にパワーを溜め終えた様だ。

「お兄ちゃん！」

「……ああ！　行くぜ！」

《何時でも構わん。……さっさと掛かって来い。》

（いいだろう……！　ＯＧ（オーゲート）エンジン解放！）

Ｇサンダーゲートから排出された刀身の無い剣に、エネルギーが集まりそれが刀身となった。

「ＯＧエンジン、フルドライブ！！」

（Ｇサンダーゲート、出力最大……！）

刀身に限界まで力を集め、Ｇサンダーゲートの最大出力での急発進による突貫。

それと同時に、ヤルダバオトも動いた。

《いい気迫だ。ならば、こちらも相応のモノで御相手しようか……！

双覇龍よ！　一つとなりて、我が身に纏え！！》

天高く打ち上げたられた双子の龍の形を模した覇気が融合し、

一つの巨大な龍へとその姿を変じ、真下に居るヤルダバオトへと急降下し、完全に呑み込んだ。

が、その瞬間、龍の覇気を纏った儘のヤルダバオトが、悠然と一歩、二歩踏み出した。

それだけで、地面がメコッ！　と凹んだ。……ただ、それだけで、その覇気の強さが伺える。

（コウタ！）「お兄ちゃん！」（コウタ・アズマ！）

その様に、一瞬怯みそうになった四人だったが、ロア達は揃ってコウタに声を掛けた。

「（（負けるな！！））」

「お……おおおお……！！　おおおおおおおお！！！！！」

その想いに、その勢いに、自身の全てを預け任せ、剣を構えた。

そして、ヤルダバオトもそれに呼応し、龍の覇気を纏いながら猛スピードで、蹴り飛んで来た。

《これで、終わりだ……！　真覇（しんは）ッ！　猛撃烈破（もうげきれっぱ）ぁぁッ！！》

「オーバー！！　カイザー・ソードォォォォォ！！！」

《はあああああああああ！！！！！》

「「（（おおおおおおおおおおおおお！！！！！））」」

双方が衝突した、その瞬間の衝撃で周囲の地面は陥没し、大気は空間ごと抉れ。

辺りには途轍も無い衝撃波が巻き起こり、四方八方広範囲に飛び散った。

それによって刈られ、跡形も無くなった草花が……否。

草花が敷き詰めてあった筈の荒れ果てた広大な土地が、その威力の凄絶さを物語っていた。

その衝撃が四方八方に散り終えた頃、土煙が霽れて激突した二体が姿を現した。

ヤルダバオトがいた所にはカイザーが、剣を振り下ろした姿勢の儘で。

カイザーがいた所にはヤルダバオトが、直立不動の姿勢で。

それぞれ、元居た場所とは、ほぼ真反対の位置にいた。

だがしかし、どちらが勝ったのかは一目瞭然だった。

何故ならば、その直後右上半身を完全に失ったカイザーが、片膝を折ってドウ……と地に着け、

自身の剣を地面に突き立て、それを支えにして、辛うじて倒れ伏せずに居たのだから。

片や、ヤルダバオトは一瞥しただけでも、どう見ても無傷であり、

偏在カイトの勝利宣言が為されるのを、皆は顔を青褪めながら、固唾を呑んで待ち構えていた。

……だが、何時迄経っても、偏在カイトは身動き一つせず、何も言葉を発しない。

皆が訝しみ始めた頃、ようやっと偏在カイトが口を開いた。

誰もが驚愕した、その台詞を。

《――――フ。よくやった、コウタ。お前の……いや。

お前達の――――勝ちだ。》

その瞬間、ヤルダバオトの頭頂部に罅が入り、そのまま真下へと亀裂が走り、

数秒後、真っ二つに別れたヤルダバオトは粉々に爆散した。

それを合図にするかの様に、カイザーの剣からも刀身が消え、支えを失って地面に倒れ伏した。

何時の間に連れ出したのか。皆が気付いた時には、コウタ達は既に結界内に居た。

皆、その二人の安否が気掛かりだったが、意識を失ってはいるものの、

二人の肩が上下している所を見ると、どうやら二人共無事生きている様で、

それを確認出来た皆は、誰もがホッと胸を撫で下ろした。

これにて、一つの決着が付いた。

そして――――もう一つの決着も、今、正に付かんとしていた。

ｓｉｄｅ：ソウルゲインｖｓアルトアイゼン・リーゼ

「ムンッ！」

《……フッ！》

「……！　チッ！」

ソウルゲインが右拳を繰り出した。

アルトがそれを避け、左下からバンカーを突き上げた。

それを飛び退け、少し距離を取ったソウルゲインに、ブーストを掛け肉薄するアルトアイゼン。

《墜ちろ！》

「させるか！」

《ぐっ……！》

バンカーを右に躱し、その儘一回転しながら回し蹴りを、アルトの後頭部へと叩き付けた。

ブーストの勢いを載せた儘、中空へと吹っ飛ぶアルトに、今度は逆に肉薄するソウルゲイン。

「貰ったッ！」

《……くっ、だが甘いッ！！》

「な！　ちっ、またお得意のそれか……！」

だがアルトは、その姿勢からくるっと器用に半回転し、華麗に着地すると、

向かって来るソウルゲインに向かって、同様にブーストを掛け突貫した。

《そこだッ！》

「いや、違うな！」

《……貴様が、な！》

頭頂部の角に電撃を溜め、突き刺して来たアルトを避けつつ、その真横へ行き、

再度蹴り飛ばそうとしたソウルゲインだったが、今度はガッシ！と脚を掴まれてしまった。

「チッ……ならば！　青竜鱗！」

《ぬ！　……フ、中々やるじゃないか。》

「それはこちらの台詞だ、バケモノめ。ベーオウルフでさえ、そんな曲芸はせんぞ？」

《は！　狼如きに、曲芸が出来よう筈もあるまい？》

「さて……それはどうかな？」

互いに距離を開け、少し態勢を整えた。その間の僅かな会話も終わり、再び激突した。

第二ラウンドの開始である。

《貫け、アルト！》

「させん！　ソウルゲイン！」

《甘いッ！》

プラズマホーンで突貫したアルトを避けつつ、アルトの右腕を？ぎ取ろうとしたソウルゲイン。

だが、そんな行動も予期していたのか。

アルトは腕を引っ込める所か、逆に突き出し貫こうとした。

「くっ……！　だが、その腕は貰った！」

《戯けめ！　……バンカーに拘り過ぎだ。》

「ぐあっ！？　ちっ……もう少しだったものを……！」

意地でも右腕を封じようとするソウルゲインの側頭部を、

その場で飛び上がって目一杯蹴り飛ばし、一瞬腕の力が緩んだ時を見計らい、

掴まっていた腕を引き抜いて事無きを得、再度追撃した。

《今度こそ終わりだ！》

「ぐっ……！　まだだ！　青竜鱗乱舞！！」

《おっと！　そう言えば、あの機体は空も飛べたのだったな。》

「まだまだ！　そらそらそらそら！！」

《チッ……また、バカの一つ覚えで同じ事を繰り返すつもりか……む？》

空に飛ばされ、背中を向けていたソウルゲインに飛び掛かろうとしていたアルトだったが、

その場で振り向かれての青竜鱗を連打に、うっかり忘れていた事を思い出した。

その後、暫くその場に留まった儘、只管青竜鱗ばかり撃って来るソウルゲインに、

思わず舌打ちをした偏在カイトであったが、何か違和感を感じた。

だが――――それに気付いた時には、既にもう遅かった。

《土煙が……！　そうか、奴は……！？　しまっ……！》

「今頃気付いても、もう遅い！！」

地面に向けて撃ち捲った青竜鱗が、幾条もの土煙を上げてソウルゲインの姿を隠してしまった。

アルトもようやっとそれに気付いて辺りを見回したが、

その時には既に、煙を身に纏った儘のソウルゲインが、アルトの眼前に現れていた。

「今度こそ貰ったぞ！　Ｍｋ（マークスリー）－？！　そらそらそらぁッ！！」

《チッ……！　手数では奴の方が上だ……！　ここは何とか……！》

「逃がすものか！　はあああああッ！！」

『ダイレクト・アクション・リンク・システム』と『ダイレクト・フィードバック・システム』

その二つのシステムによって、搭乗者の動きが機体にダイレクトに反映されるソウルゲイン。

それが相手での連打戦は、流石のアルトも分が悪く、

偏在カイトの技量で辛うじて往なせてはいるものの、それでも尚、幾撃かは防ぎ切れていない。

《チッ……！　好い加減、煩わしいな貴様は！》

「押せよ！　ソウルゲイン！　はあああ！！」

《……調子に乗るなよ、髭男風情（マスタッシュマン）が！　吹き飛べ、クレイモア！！》

そろそろ捌き切れなくなったアルトが痺れを切らしたらしく、

肩部装甲を開け、ベアリング弾を掃射した。

――――だが、それがアルトアイゼンにとって最大の致命傷となった。

《……む？　いない……？　何処へ……！？》

「そいつを待っていたのさ……！！　飛べ！　白虎咬！！」

《ぐあああっ！！？》

肩部装甲が開いたと同時に身を沈ませ、アルトの真下へと潜り込んだソウルゲインは、

有りっ丈の力で白虎咬をアルトに叩き込み、遥か真上と吹き飛ばした。

防御が間に合わなかったアルトは、その直撃を真面に喰らい重力が勝る迄、打ち上がり続けた。

「今度こそ終わらせる、Ｍｋ－？。いや……八神カイト！！」

ソウルゲインは自身のエネルギーを全て、肘にある突起に集め、

アルトアイゼンに向かって飛び上がった。

《チッ……！　それはこちらの台詞だ、アクセル・アルマー！　そして、ソウルゲインよ！！》

上昇が止まったアルトは機体を制御し、真下から向かって来るソウルゲインに舌打ちをし、

遥か上空から逆に真下へ向かって、右腕を引いて構えながら急降下（ブースト）した。

「はあああああ！！！」

飛び上がりながら、更に肘部分にエネルギーを溜めていくソウルゲイン。

《おおおおお！！！》

更に腕を引き、より前傾姿勢になり威力を増そうとしているアルトアイゼン。

「噛み砕け！　ソウルゲイン！！」

《撃ち貫け！　アルトアイゼン！！》

「《奴よりも早くッッ！！！》」

刹那の交錯の後、アルトアイゼンが先に大音を響かせながら着地し。

その後、十秒程経った頃にソウルゲインが着地した。

どちらも着地した後は、数秒硬直した後ゆっくりと立ち上がっていたが、

皆が注目していたのは、アルトアイゼンの右腕。

リボルビング・バンカーに突き刺さっていた、ソウルゲインの左腕だった。

アルトアイゼンが自身の右腕を振り払って、ソウルゲインの左腕を投げ捨てるのと、

ソウルゲインが片膝と片手を地に着け、肩で荒く息を付くのがほぼ同時だった。

その様子を見れば、誰にも結果は予想出来た。

――――そう、その結果は――――。

《――――フ。俺の……負け、か。》

そう唐突に偏在カイトが言うと、アルトの半身がズルッと擦れ始め、真っ二つに別れたと同時に、大爆発を起こした。

……恐らく、肩部の火薬に引火し諸共に消滅したのだろう。

そして、その爆発を背にし、アクセルは既に居なくなった大敵に、こう告げた。

「ああ。俺の――――いや。俺達の、勝ちだ。」

こうして、小さな――――しかし、世界の命運を懸けた――――戦いは、

カイトの完全敗北という形で、その終焉を迎えたのであった。

第参拾玖話【鋼の救世主（メシア）～ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＢＡＴＴＬＥ～《後》】

如何でしたでしょうか？

カイトと生身で戦う？　絶対無理。絶対勝てん。

じゃあ、ロボットでなら？　……あ、案外いけんじゃね？　……カイトにチート使わせなければ。

そんな感じで、友人からの確認も得、敢えて因縁の機体にむりくり乗せて戦わせてみました。

え？　カイトの存在自体がチートだろって？　それは言わないやｋ（ｒｙ

次回は到頭エピローグになります。連続投稿致しましたので、併せて御覧下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、すぐの次なるエピローグにて。

第肆拾話【無限の“刻”を越えた地で～ＫＥＥＰ　ＴＯ　ＦＲＯＮＴＩＥＲ～】

と言う訳で、前話の後書きの通り、連続投稿二話目の今回は、到頭エピローグです。

少々短くはありますが、どうぞ最後迄、御楽しみ頂ければ幸いです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

第肆拾話【無限の“刻”を越えた地で～KEEP TO FRONTIER～】

ｓｉｄｅ：エスピナ城

コウタ、ショウコ、アルフィミィが目覚め、アクセルの傷も癒えた、戦闘終了時から凡そ一時間程経った頃。

何時の間にか消えていた固有結界と、何時の間にか復活していたカイトと、

未だ多少の警戒が残っている皆は、色々と話し合っていた。

「え？　じゃ、じゃあ、本当に……？」

「ああ。お前達が、あのタイミングで諦めていたら、俺はこの世界を滅ぼすつもりでいた。

どんな絶望の淵に立たされても、どれ程の強大な敵が相手でも、例えそれが、今迄ずっと共に戦って来た相手であっても、世界の為に戦えるかどうか。

俺はそれを確認したかったって訳さ。

だから、例えあれで俺に負けたとしても既にあの時点で、とっくに合格点は与えてたな。

まぁ、手加減していたとは言え、尚且つ打ち勝てたんだから、無問題だ。」

「……な、なら、最初から言って下さいよ～。」

「いや、こういうもんは口で言ったからって出来るもんじゃないしな。

実際に行動で見ない限りは、俺には信用出来ん。俺の人生経験上、な。」

カイトの思惑を、その詳細を本人の口から聞いてようやっと、皆カイトがしたかった事が理解出来たのだが……不満は残ると言った風情の顔の面々であった。

「ま、ネタばらしも終わったし、細かい事はさておきとして、だ。先程も言った通り、この世界はお前達に任せた。……俺に言われる迄も無いだろうがな。」

「ああ、勿論だ。この無限の開拓地を守るのは、他ならぬ俺達の役目さ。」

「はい！　私達にドーンと御任せです！」

「頼もしいな。目指すは、ＫＥＥＰ　ＴＯ　ＦＲＯＮＴＩＥＲと言うわけか。」

カイトはそう言うと、丸で愛しむかの様に目を細め、皆を一通り見回した。

それが終わると、アクセルとコウタ達に目を向け、話し掛けた。

「カイザーやソウルゲインは、戻して置いた。あちらの世界に在った場所に戻って居る。
戻った後で確認するといい。」

「それは構わねえけどよ……あんなにボロボロになっちまっちゃ、直すのに時間掛かっちまうよなあ。」

「ソウルゲインとペルゼインは自動修復機能が付いているからな。放っておいても、損傷という意味では大丈夫ではあるが。」

「ペルゼインは、向こうの世界へ行けばいつでも私と一緒ですから、大丈夫ですの♪」

何故か、カイトがニヤリと意味深な笑みを零したが、気付いた者は少なかった様だ。

そうこうしている内に、何か辺りに不穏な空気が漂い始めた。

雰囲気……という意味では無く、物理的に皆に背筋が凍り付くあの様な悪寒が走ったのだ。

唯一人、平然と……いや、不機嫌になったカイトが虚空へと目を向け、ポツリと一言漏らした。

「――――来たか。」

「……き、来た？　来たとは何が……！？」

そう小牟がカイトに震えながら声を掛けると、

カイトの斜め後ろにポッカリと、漆黒の巨大な穴が中空に唐突に顕れた。

そう……皆が感じた悪寒とは、そこから生まれ出ずるものであった。

だが、カイトは不機嫌を微塵も隠そうとはせず、

後ろを振り返らずにその儘、目を瞑った状態で後ろの【ナニモノカ】と話し始めた。

「存外遅かったな。珍しく気でも利かせたか？」

【戯けが。貴様が邪魔していたからであろうが。そんな事よりも、さっさと次なる世界へ行くぞ。
世界も時間も、待っては居らぬのだからな。】

「ああ、分かった。だが、その前にどうしても寄りたい所がある。」

【――――何？　貴様……この期に及んで、尚未だ……。】

声色は落ち着いてはいたが、その【ナニモノカ】は明らかに怒気を放っていた。

その恐ろしさは、カイトの傍で話を聞いていた小牟達が、誰よりも味わっていた。

「いや、どうしても行かなければならない。

俺が、これから救世主（メシア）を続ける為にも、決して避けては通れぬ最重要事項の確認だからな。」

【……フン、好きにするがいい。だが、分かっているな？
貴様がそうしている間にも――――。】

「無論だとも。こうして【貴様】と話している間にも、何処かで不幸になっている者が居、死んでいる者が居、滅んでいる世界が存在している。」

【……分かっているならば良い。後は好きにしろ。だが、余り待たせるなよ？】

「ああ、分かっているさ……【原初】。そう長く待たせはせん。」

何事かを言いたげな視線で、カイトを見詰めてい（る様に思え）た【原初】は、

顕れた時と同様に、又も忽然とその姿を消し、周囲の空気も元に戻った。

その瞬間、ほぼ皆が一斉に息を付いた。誰もが肩を上下させ、荒い息をしていた。

……その荒さだけでも、緊張の程が知れると言うものだろう。

何とか息を整え終え、改めて【アンナモノ】と平然と会話が出来るカイトを、

畏れを抱いた目で見ながらも、話し掛けてみた。

「か、カイト……。主、あ、あんなのと、共に旅をしておると……言うのか？」

「……ああ、まあな。これで少しは理解して貰えたかな？　俺の異常性を、な。」

「……理解、すらも出来んわい。あんな……いや、もう思い出したくも無いの。」

「だろうな。無理にする必要は無いさ。理解も、記憶する事も、な。」

「……ふぅ。今度ばかりは、ヌシに賛成じゃのぅ。」

そう言い、溜息を付く小牟に笑みを零しながら、その頭を撫でるカイト。

振り払おうかとも一瞬思ったが、そんな気力も無いし、何より撫で方がいつもと違って優しい。

零児も何も言って来ないし、何と無く今はこの儘、味わっていたいと思った小牟であった。

或る程度撫でて満足したカイトは、小牟の頭から手を離し、顔を上

げた小牟に声を掛けた。

「じゃあな、シャオ。今度は、『百一胎計画』で逢おう。」

「……へ？」

「ちょ、ちょっと、救世主（メシア）、アナタ……！」

「別にいいじゃねーか、バラしたって減るもんじゃねーし。つーか、言うつもりだったろうに。」

「こりゃ、沙夜！　一体、逢魔は幾つ計画を練っとるんじゃ！」

沙夜と小牟＆零児の口喧嘩が始まり出した。

周りで囃し立てる者、無関心を装う者、心配そうにおろおろする者、様々であった。

カイトもそれを愉し気に見詰めていたが、コンコン、と背後の空間を軽く二回叩くと、

突然、空間が縦に裂け出し、背後には真っ白な空間が真円を描いて顕れた。

それに驚き、皆の動きが一瞬止まった隙に、カイトと小牟の影が少しの間重なった。

「ゴチソウサマ。じゃ、またな、シャオ。」

そう満面の笑みで言うと、カイトはさっさと真白い真円の中へと飛び込んで行ってしまった。

皆が気付いた時にはもう既に、真円はその姿を消していた。

（今頃、シャオは涙目で真っ赤になりながら俺に怒っているだろうな。

おまけに、非常に難しい顔をしている零児に、黄色い歓声を上げてる女性陣、と。

クスクス……容易に想像できるのが、また何ともはや。）

そう心中で呟きながら、笑みを零すカイト。

だが、それも束の間。

一頻り笑った後、カイトの雰囲気がガラリと変わった。

そして――――。

（さて。では、行くとするか。

……スベテを確認する為に。）

そして、カイトは向かった。

……己がスベテを確認する為に。

N（ネオ）・N（ノルニル）本部へ――――。

アルニス＝カイゼルが。

そして、シュガル＝ブラウセスが居る場所へと――――。

第肆拾話【無限の“刻”を越えた地で～ＫＥＥＰ　ＴＯ　ＦＲＯＮＴＩＥＲ～】

その後。小牟のカイトへの怒りも或る程度収まり、渋々ながらも異

邦人の面々を見送った一同。

最後にアクセル達を見送ったハーケン達とアレディ達は、各々の居場所へと帰って行った。

そして、無限の開拓地は、開拓者達に護られながら、その存在を何時迄も其処に留め続け。

――――こうして、また、一つの世界が、皆の想いによって救われたのであった。

《ムグ、ムゴ。ムガグムゴ？
（で、マイスター。私は一体いつになったら喋ってもいいんでしょうか？）》

「あ、碧天の封じ解くの、忘れてた。」

第肆拾話【無限の“刻”を越えた地で～KEEP TO FRONTIER～】

如何でしたでしょうか？

初スランプもあり、まぁ他にも色々ありといった今世界も、これにて終わりです。

半年以上も掛かった、全４２話。長々と御付き合い頂き、心より感謝致しております。

次なる世界は、小休止的な意味合いも籠めまして、数話程、閑話扱いの話が続きます。

ですが、その閑話の最初の話。其処では、この『無限（ｒｙ』の核心に一部触れる内容となっております。

故に、出来ればその話だけは是非共、目を通して頂きたいと思っております。

後はぶっちゃけ、誰得なオマケに近い話ですのでｗ

それが終われば、次はようやっと『魔法先生ネギま！』の世界となります。

では。今世界も御覧頂き、誠に有難う御座いました。又、次なる世界にて。

チートじゃ物足りない！（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて今回は、活動報告にて御報告した通り、記念小説です。

何の記念かと言えば、何と今日は『チートじゃ済まない』シリーズを書かれている、

雨季様の御誕生日なのです！　ワーワーパチパチ！！

更に、『チートじゃ済まないｉｎネギま』の完結記念も併せまして、誠に御目出度う御座います！

という訳でして、今回は特別記念作品になります。

では、今話も拙作を御覧下さい。

ｓｉｄｅ：一条　要　ｉｎ　幻想郷

『ネギま！』の世界から、この幻想郷に引っ越して来てから、それ程時間は経っていない今。

のんびりとなのは達と日向ぼっこしていた時だった。……神様から連絡があったのは。

「やほー、要君。今、暇かい？」

「……神様？　ええ、時間はたっぷりありますが……また、何か？」

「うん、実はちょっとね、とある人に頼み事をしててさ。」

「はぁ……。」

俺は曖昧に相槌を打った。だって、嫌な予感が物凄くしてたから。胃薬を用意しておかないとな。

神様はそんな俺を知ってか知らずか無視してか。その儘、話を続け

た。

「で、その頼み事というのは、他ならぬ君の事なんだけどね。」

「……はぁ。」

今のは、溜息成分が５０％と諦め成分が５０％とが入り混じった、相槌だ。

当然お構いなしに、神様は話を続ける。

ヴィータ達は既に我関せずだ。……お前ら、俺の嫁だろ。何とかしてくれよ。

「「「「「無理（だ・だよ）。」」」」」

ですよねー。

「で、その頼み込んだ相手ってのが、あの救世主（メシア）なんだけどね。」

「なんだけどね、って言うの多いですね。……って、あのカイトに!?」

「うん、あの救世主（メシア）なんだ、済まないね。」

「いえ、それは構いませんが……良く引き受けてくれましたね。」

「……それについては、聞かないでくれるかな？」

「……あ～……はい、分かりました。」

目の前にいる神様の目が、一瞬で暗く淀みながら沈んでいくのが目に目に見えた。

……うん、よし。この話題は絶対に触れない事にしよう。そう固く心に誓った。

「それで、あいつに一体何を頼んだんですか？」

「……ブツブツ……あ、それは本人に聞いてもらえるかな？　時間も勿体無いしね。」

「はぁ……そうですか。それで、俺はいつ、どこに行けばいいんですか？」

「それなら大丈夫。今直ぐ僕が、君を彼の所に連れてってあげるか

ら。」

そう神様が言うと、地面にポッカリと穴が空き、そのまま俺は真っ逆様に落ちて行った。

……驚きはしたが声は上げなかった。そんな予感はしてたからな……！！

「……最高神ゼウス。」

「やあ、幻想郷の守護者。少々騒がせて済まなかったね。」

「いえ、それは構いませんが……宜しいので？　あの救世主（メシア）などに、彼を預けて。」

「何、構わないさ。結構、彼等は仲が良いみたいだし。

……これから彼の前に立ち塞がるであろう敵は、もっともっと強くなっているだろう。

その為にも、要君をよりチートにするには、彼が最も適任じゃないかな？

何と言っても、こちらの思惑も、彼の未来でさえも、その全てを知っているんだから。」

「……まぁ、否定は出来ませんわね。」

「うん、そういう事さ。……さて、一条要君。

今度会う時は、一体どれだけ強くなってくれるんだろうね？　楽しみにしてるよ、救世主（メシア）。」

ｓｉｄｅ：？？？

そこは何も無かった。唯々只管、真っ暗な空間が続いている場所だった。

要は、落ちると思って踏み台にして落下速度を落とす為に用意したシールドを戻し、

改めて辺りを見回した。カイトの姿も同時に探しながら。

「……よっと。……何だ……ここは？　一体、どこだ？　あいつはどこなんだ？」

「よう、要。来たか。」

「……！　ああ、カイト。……一応、神様から大まかには聞いているんだが、

えっと……俺の修行に付き合ってくれるって事でいいんだっけ？」

「まぁ、そんな所だ。取り敢えずちょっと待ってくれ。今、俺の固有結界を展開するから。」

「――――何？」

我が身は世界

を成す。

《Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ

ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｗｏｒｌｄ．》

力は破壊のみ、

心は破滅故。

《Destruction is my body, and disaster is my blood.》

数多の世界を救いて尚。

《I had seved over the infinity worlds.》

只一度も受け容れられず。只一度も認められない。

《Hate out of world. Nor accept to existence.》

創世と消滅を繰り返し、我等は我等の途を征く。

《Over and over disappeared to create new worlds. going to our's arrival.》

我が生涯は混沌に彩られ。唯、艱難辛苦在るのみ。

《I have chaos. This is the only calamity.》

故に我が尽きぬ望みは、世界の極みにより創られる。

《So my eternal wish, Ultimate World Works.》

――――そして、世界は一変した――――。

ｓｉｄｅ：固有結界『究極の創世（アルティメッドワールド・ワークス）』

まず、要はその世界を眺めて驚いた。こんな綺麗な世界が、本当に固有結界なのかと。

だが、それが普通の世界では無い事にはすぐに気が付いた。

何故なら、そこには生物……いや、正確には動物が一体もいなかったからだ。

「……これが、お前の固有結界か……カイト。」

「ああ。名前は『究極の創世（アルティメッドワールド・ワークス）』。まぁ、後は俺も良く知らんのだが。」

「……は？」

そのカイトの言葉に要は首を傾げた。……それはそうだ。

自身の心の裡を外界に展開し浸食するのが固有結界だ。

それを展開させておきながら、その能力が解らないとは一体どういう事かと。

「ん～、まぁそれはいいや。取り敢えず、お前に言うべき大事な事は、まずは一つだけ。

要、お前この世界でたった一人で暫く過ごせ。」

「……は？」

だが、それはカイトは話してくれなかった。

代わりにその口から出て来たのは、要には到底理解出来ない言葉だった。

「この世界はな。草木も変化しないし、川の水位も上昇しないし、森の木々も変化しない。

そして、空も永遠に夜空の儘なんだが、唯一風のみはその温度を変じさせる。

それによって、今が春夏秋冬、朝昼夜のいずれに当たるのか判断出来るんだが。」

「……ちょっと待ってくれ。途轍も無く嫌な予感しかしないんだが……。」

「まぁ、その想像通りだ。お前、独りでここに残って、それを理解出来る様になってくれ。」

「無理だ！　てか、一体どんな無茶振りだよッ！！　これが一体、何になるんだ！？」

その要の絶叫は尤もである。こんな風と川の音しかしない、草の匂いしかしない所に、

たった独り取り残されて、時間と時期を理解しろと唐突に言われたのだから。

だが、カイトはそれには応えず、先程の神様（ゼウス）の様に自分の伝える事だけを伝え続ける。

「因みに、この固有結界内にいる間は、外界とは完全に遮断されている。

勿論、お前が修行を終えた後で戻っても、家族には消えてすぐ戻って来た様にしかみえん。」

「……。」

最早反論する事を諦めたのか、もう何も言わず黙ってカイトの言う事を聞いている要。

……頭とお腹を手で抱えながらではあったが。

「更にここでは、どれだけ時間が経とうと寿命で死ぬ事は無いし、肉体が衰える事も無い。

この固有結界が続いている限りは、何垓年だろうと居続ける事が出来る。」

「……そんだけ分かってて、能力把握してないのか？」

「そりゃそうだ。今のは、只のこの固有結界の特徴ってだけだ。それは流石に判る。

だが、コレの能力自体はまだ何も判らない状態なんでな。」

「……相変わらず、なんつーチートな……。」

要が頭を抱えるのも肯ける。これだけでも十分に凄いとは思うのだが、

どうやらカイトの固有結界は、それは飽く迄もオマケであり、本来の能力は別にあると言うのだ。

そんな風に要が頭を抱えていると、カイトは結論とばかりに捲し立てた。

「まぁ、そんな訳でな。俺のエターナル・エンドにも耐えられたお前なら、

ここで独りでも問題無いだろ。……俺のエターナル・エンドに耐えられるんだからな。」

「……カイト、お前何気にアレに俺が耐えたの恨んでたのか？」

「ハッハッハ……マサカ、ソンナコトアルワケナイジャナイカ。」

「……絶対、嘘だ。」「とまぁ、零割の冗談はさておき。」「やっぱりか！？」

「まぁ、そういう訳で頑張って現状を把握してくれ。俺は俺で、別の場所で修行してるから。

あ、因みに、今日は６／４。つまり、はやての誕生日の朝だ。良

く覚えておけよ。じゃあな～。」

「あ、ちょっと待てって、カイト！　……あいつ、マジでどっかに行っちまいやがった……。

……はぁ、しょうがねえなぁ。何とかしてみるしかないよなぁ……。

……アイタタタ……。また、胃が痛くなって来た……。」

カイトにアッサリ見捨てられ（！？）その場にどっかと座りこむ要。

どうやら、色々な意味で諦めた様で、早速風を感じ、草の匂いを感じながら、

まずは朝昼夜の差異を理解する事にした。

……どうやら、今回の修行は、今迄以上に意味不明で、時間の掛かりそうな修行だ。

そう、臍を固めて覚悟した要であった。

ｓｉｄｅ：数十年後

「よう、要。今日は、何月何日かな？」

「……６／１２の深夜だな。何年経ったかは、残念ながら数えてなかったが。」

行き成りの台詞ではあったが、要は数瞬の後、自然と答えていた。

どうやら、カイトがさせた修行はもう問題無く終了した様だ。

「……それで、カイト。一体、この修行に何の意味があったんだ？」

「それを教える前に、要。一体、どうやって時間と日にちが判った？」

「……何と無くだ。風の熱の違いが最初に判った。

後、何と無く草木や川が話し掛けてくれてる様な気がしてな。

それを何と無く感じてたら、その内草花が俺に何かを教えてくれてる様な気がしてた。

……そんな感じでいたら、何時の間にか時間と日にちを教えて貰ってた。」

その要の説明に、カイトは一つ一つ頷いて、満足した様な笑顔を見せた。

「パーフェクトだ、要。正直、もっと掛かるかと思ったが、そんな事は無かったな。」

「……それで？　一体これが何の役に立つんだ？」

「んじゃ、ステップ2だ。その前に一つ確認したい。

要、お前『完全武装・ＯＲＴ』になってみてくれ。」

「……あ、ああ。」

「……ふむ、成る程。やっぱりな。」

要の問いに今度こそ応えるつもりらしいのだが、その前に要にとあ

る事を要求して来た。

『完全武装・ＯＲＴ』。現時点での要の最強形態と言える状態だ。

それになった要の前後上下左右から眺め、意味深な台詞を呟くカイト。

流石の要も我慢できなくなったらしく、カイトに問い掛けた。

「やっぱり……ってのは、どういう意味だ？」

「ああ。お前さ……ＯＲＴと話した事あるか？」

「……は？　ＯＲＴと……話す？　いや、意思は御互いに通じてるぞ？

だからこその、コレなんだから。」

「いや、意思じゃない。話しだ。多分、一度も無いだろ？　ていうか、出来ないだろ？」

「……いや、そりゃ無理だろ。普通に考えて。だって、アレ蜘蛛だし、人の言葉話せないだろ？」

何言ってるんだ、コイツ？　そんな意味を込めたジト目でカイトを見る要。

……まぁ、その気持ちは重々に解る。だが、当人は至極真面目な顔で語っている。

どうやら、冗談や巫山戯ている訳では無く、本気で言っているらしい。

「いやいや、ちょっと待ってくれカイト。ＯＲＴが話せるなんて事、可能なのか？」

「いや、ＯＲＴは人語を発するのは基本的に不可能だ。だから、お前がそれを理解すればいい。

その為に、お前に独りでいさせて自然との会話を強制的に覚えさせたんだ。」

「……いや、さっきから全くアンタの言ってる事が理解出来ないんだが？」

「要はな。お前、ＯＲＴを只の武装、飽く迄も単なる攻撃の一手段としか思ってないだろ？」

「……いや、そんなつもりは無いんだが。」

意思は通じている。ＯＲＴの気持ちとかは理解しているつもりだ。

しかし、カイトの目から見ればまだまだ甘いらしい。……これでも、まだまだなのか？

だが、カイトの口から出た言葉は、そんな要の葛藤をあっさりぶっちぎる話だった。

「まぁ、正直そこはどうでもいい。俺が、お前に教えられる強化方法は一つ。

お前、ＯＲＴと融合しろ。

シンクロユニゾンとかいうレベルじゃなくて、完全にＯＲＴと一心同体になれ。」

「――――な。」

「序でに、あれだ。水晶渓谷あるだろ？　ＯＲＴの固有結界。それをＯＲＴと融合した状態に、鎧として纏わせるんだ。ハッキリ言って、『完全武装・ＯＲＴ』どころじゃない程の圧倒的強さになるぞ？」

絶句した。そういう表現が一番判り易いだろうか。

要は文字通り、開いた口が塞がらない様で、何度もパクパクとしてた。

……その発想は無かったらしい。固有結界を身に纏う……抑々（そもそも）、理論上可能なのだろうか？

そんな……バカげた事が……。だが、彼（カイト）は本気で言っているらしい。

……一条要なら、それぐらいは出来る、と。

「……お前ってホント……トコトンあれだな？」

「ん？　どういう意味だ？」

「……いや、気にしないでくれ。基本的に褒め言葉だ。」

「？　……そうか。……だが、それについて、一番の問題がある。」

「……問題？　まだ、俺に何か足りないのか？」

カイトが実に神妙な顔をして、大問題だ、と呟いた。

その雰囲気から、非常に重要な事だと察し、要も気を引き締めた。

……そして、カイトの口から語られた、最も重要な、その問題とは。

「それはな……名前だ。」

「……は？」

「だから、そのＯＲＴと融合した後の名前だ。呼称が無けりゃ大問題じゃねえか。

何より、どうせなら格好良い名前にしてえじゃねぇか。なぁ？」

「……。」

要は口をあんぐりと開け、肩をがっくりと落とし、ポカーンと呆けた顔をした。

……仕方ない。こればっかりは仕方ない、うん。

だが、そんな要をさておいてカイトは唸りながら、その大事な名前を考えている真っ最中である。

「ん～……どうすっかなぁ？　俺なら……『完全融合・ＯＲＴ水晶』なんてのはどうだ？」

「……いや、普通に『水晶融合・ＯＲＴ』とかでいいだろ……。」

「そうか。じゃ、それでいいや。んじゃ、最大の問題も片付いたし。後はお前が一人で頑張れ。ちゃんとＯＲＴと『会話』するんだぞ？　いいな？」

完全に脱力仕切った要が、適当に名前を言った。カイトもアッサリとそれでいいやと言った。

……なら、最初から……いや、この先は思うまい。そう諦観した要であった。

最後にカイトの言葉を受け、要は深くしっかりと肯いた。

もっと強くなれるんだ。拒む理由など、何一つ無い。

「……ああ、分かったよ。……なぁ、所でカイト。幾つか聞きたい事があるんだが。」

「んぁ？　一体なんじゃらほい？」

「この固有結界、一体いつまで保つんだ？　後、アンタ一体何の修行をしてるんだ？」

その二つは、非常に気になってた事だった。何垓年と言ってたから相当保つとは思うのだが、

果たしてどれだけ猶予があるのか。それにカイトの修行内容というのも非常に気になる。

何せ、これだけ強いカイトが更に上を目指してする修行だ。

一体どんな修行内容なのか、全く想像もつかない。

是非共、（後者は特に）聞いてみたかった質問だった。

「あ～……ま、いっか。この結界の有効期限は五百穣年（ごひゃくじょうねん）だ。」

「……ごひゃく……なんだって……？」

「だから、五百穣年。穣ってのは、垓の一億倍だな。その更に五百倍ってな訳だ。

要は、ここでの一年に就き、俺の命が一つ失われていく計算だ。」

「……つまり、今のアンタの命は、その、ごひゃくじょう分ある……と？」

「そういうこった。まぁ、もうすぐ六百穣ぐらいにはなりそうなんだがな。」

「……アンタの成長速度も大概なもんだよ、全く。……羨ましいぜ、本当に。」

要が唖然とするのも仕方ないだろう。……だって、かくいう作者（わたし）が

一番驚いているのだから。

……何でこの救世主、此処迄命の数増えてんの？　可笑しくね？

誰か俺に教えてェロイ人！

……コホン。閑話休題（それはさておき）。もう一つの要の質問にも、カイトは応えた。

「んで、俺の修行方法だが……ま、ぶっちゃけお前と或る意味で似た様なモンかな。」

「……そうなのか？」

「ああ。俺の力はな、発想と構想さえあれば、即座にその力を使えるし発揮出来る。

だが、何より一番の問題は、その力がどういうものなのか。

その性能・効能・能力、その他諸々がさっぱり解らない事だ。」

「……驚くべきかツッコムべきか微妙な所だな……。」

「でだ。お前も知ってる通り、俺の力は余りに絶大だ。

何せ、魔力をダダ流しただけで世界が滅んじまうぐらいだ。

なんで、ぶっちゃけ修行出来る場所が無い。そりゃもう、本当に

全く無い。」

「……まぁ、そりゃそうだろうなぁ。」

羨ましいと思う反面、確かに大変だよなぁ、と改めて思う要。

その儘、カイトの説明と言う名の愚痴は続く。

「だから、この固有結界内で、その力や性能を幾億、幾兆、幾垓と試し続けて把握するんだ。

それこそ、本当に気の長くなるぐらいにな。

それにここなら、どんだけ壊そうとも瞬時に元に戻るし、

何より固有結界の能力も序でに試せる。一石二鳥ってな訳さ。」

「……それは確かに、本当に気の長い話だな。……なぁ、それって俺が見ちゃ拙いのか？」

確かに、それはカイトにしか出来ない修行方法だろう。

永劫の時を生き、尚且つその強大な力を持て余しているカイトにしか。

その修行風景が気になり、見学ぐらい出来ないかと交渉してみる要だったが……。

「いや、拙いというよりは、お前の命の保証が全く出来ないだけだ。何せ一撃一撃ごとに毎回結界が崩壊してるからな。まぁ、その度に即座に修復されるんだが。」

「……。」

「因みにな。実は、俺がいる世界とお前がいる世界は、同じ固有結界内ではあるが、

ちゃんと次元を分け隔ててるんで、こっちには何の影響も音沙汰も無い訳だ。おｋ？」

「……あ～……おーけーだ。俺は、自分の修行に集中すればいい訳だな？」

「そういうこった。んじゃ、俺も修行してくっから。お前もちゃんと……。」

「『ＯＲＴと会話しろ』……だろ？　大丈夫だ、分かってるさ。」

「……フ。ならいいさ。また、頃合を見てこっちに寄るからな。頑

張れよ～。」

そう言って、カイトはどっかのＢＢＡの様に、パックリと割れた次元の裂け目の中に入っていった。

それを見送った要は、思いっ切り背伸びをして、改めて気合いを入れ直し、

ＯＲＴとの対話と、カイトの言う完全なる融合とパワーアップに臨むのであった。

ｓｉｄｅ：更に数千年後。

要が立っていた。心を穏やかに落ち着けて。

そして、静かに宣言した。

「ＯＲＴ、完全融合（フルコンタクト）」

その瞬間、要の身体が光に包まれた。その光が霽（は）れた後にいたモノは、異形の存在だった。

背中から生えている六本の足。顔は完全に蜘蛛そのもの。口は鋭い牙が幾重にも見えている。

腕はその全てを覆う程の巨大なぶっとい一本の足になり。

足も完全に蜘蛛のソレでありながら、どうやってるのかは解らないが二本足で立っていた。

……恐らく、この姿を初めて見た誰もが、ソレが元々は人間であり、

現在も尚、確とした人間なのだ、とは微塵も想像出来ないであろう。

そんな異形の存在が、更に何か言葉を呟いた。

「水晶渓谷（クリスタル）、装着（アムド）」

そして、またその異形の存在を光が包み込んだ。

その後に立っていた存在は……正に神の化身とでも言える程に神々しかった。

全身を水晶（クリスタル）で隙無く隈無く覆い尽くし。その光沢（かがやき）は、見る者全てを魅了し。

その威圧感は、対峙する者全てを圧倒してたじろがせていた。

「ほう……もう装着は問題無いな。後は、その持続時間の向上と強さの確認だけか。」

「……ああ、そうだな。所で、アンタの言葉を真似てみたんだが、構わないのか？」

「ん？　別にいいんじゃね？　別にあれは俺だけの言葉って訳じゃねえしな。

……持続時間の方は、何度も繰り返して限界を超え続けて強制的に上げるか、

その状態に一刻も早く慣れるか。その両方ぐらいしか方法は無いだろうな。」

「確かにな。……俺にはそれぐらしか出来ないしな。」

どうやら、カイトと会話をする事は可能らしい。

だが、今現在こうしている間にも溢れ出している力を抑えるのに一苦労の様だ。

ならば良い機会だからと、カイトが提案した。

「……丁度イイ。まだ装着出来てる内に、その力試してみようじゃないか。」

「……それはいい提案だ。だが、どうする？」

「簡単だ。まずは俺の攻撃に耐えればいい。その後は、俺に攻撃すればいい。只、それだけだ。」

「了解だ。確かに、それだけなら簡単だな。」

その提案に乗る要。Ｓｉｍｐｌｅ　ｉｓ　ｂｅｓｔ．とはよく言ったものだが、果たして。

「んじゃ、まずはこれに耐えて貰おうか。取り敢えず、最初の壁は高めにするぜ？」

「ああ、何でも構わない。……どんなものでも耐えて見せる……！」

「いい心掛けだ。……いくぞ。

セカンド・イグニッション！　アロー・オブ・マナ！　エレメント・アロー！

第二形態（ツヴァイス）！！！　喰らえ……！　トリリオン・ダラー！！！」

空に突如顕れた壁が、墜ちて来た。

そういう表現方法以外に、コレを説明出来る言葉を要は知らなかった。

だが、今の自分なら……この『水晶融合・ＯＲＴ』ならば……ッ！！！

そして、要は見事耐え切った。

「ほう！　やるじゃないか！　今のは、俺の最強の対軍・対城攻撃だぞ？」

「……マジでか。」

「ああ、あの程度じゃ対界攻撃には程遠いからな。精々その程度だ。」

「……そ、そういう意味か。そうか……。」

「……だが、中々に悪くない防御力だ。見ろ、傷一つ付いてない。

恐らく、乖離剣エアの真名解放程度じゃ、傷一つ付かんだろう。」

「……マジでか。」

「ああ。恐らくは、今のお前なら俺のツヴァイス達よりは遥かに上だろう。

下手をすれば、カイザーにすら届いてるかも知れんな。」

「……マジでか……。」

そのカイトの言葉には驚愕せざるを得なかった。

確かに、『完全武装・ＯＲＴ』に比べても猶、遥かに強くなったとは思っていたが、

圧倒的に自分の予想を超え切っていた。……幾ら何でも強過ぎじゃないか？

いや、でも、八神（こいつ）カイトはそれ以上だしなぁ……やっぱ、まだ弱いのかな？

そんな事を考えていたら、カイトが何度も満足そうに頷き、

今度は少し要に近付いて、カモンカモンと手招きした。

……どうやら、耐久力はさっきのだけで十分だったらしい。今度は、力を試したいらしい。

……何か、自分よりカイトの方が楽しんでるのは気の所為だろうか？

「ほれほれ、どうした要。今度はお前の番だぞ？　早くもっと俺を楽しませろよ。」

「……少しは隠せよな。ま、いいや。それじゃ、御言葉に甘えて、いかせて貰うぞ。」

「ああ。俺は、有りっ丈の魔力を防御のみに回す。

この世界の事は一切気にするな。すぐに元に戻るからな。

お前は只、俺をその力の限り思いっ切りぶん殴る事だけを考えていればいい。

さあ、どんだけダメージを与えてくれるのか……非常に楽しみだ。」

「……分かった。それが一番判り易くて、やり易い。」

両者共に、やる事は理解した。後は、それを実行するだけだ。己の全てを懸けて。

「ああ。魔力全開放……！　さあ、来い……！　究極の一を其の身に内包せし者よ……！！」

「（八神カイト……俺の知り得る中でも最強の一角。……お前に、感謝するぞ……！）

俺の全てをこの一撃に懸けよう。……逝くぞ！　カイトオオォォッッッ！！！！！」

気分が高揚していたからだろうか。要は気付かなかった。

カイトが開放した全魔力を浴びても、微塵もたじろぐ事が無かった事に。

それを改めて目の当たりにしても、平然としていられた事に。

そして――――紫色の閃光が走り――――その瞬間、その衝撃の余波でこの世界は崩壊した。

ｓｉｄｅ：三人称

カイトは歓喜していた。あのひよっ子だった要が、これ程までに強くなってくれた事を。

今、自身が武者震いする程の力を有する程になってくれた事を。

カイトは何時に無く。そして、久し振りに高揚していた。ワクワクしていた。

……そして、眼前にいる圧倒的な存在感を放つ紫水晶の姿が消えたと同時に、

カイトはとある音を聞いた。それは、カイトにとっては実に慣れ親しんだ音だった。

それは、皮膚が斬られた音では無い。それは、肉が裂けた音では無い。

それは、血管が破れた音では無い。それは、骨が砕けた音では無い。

それは……身体が壊れた音だ。

そう、それは……自身の命が砕け散る音だった。

要は、呆然としていた。何だ、この力は。何だ、この威力は。一体何なんだ……これは……！？

正直、侮っていた。高を括っていた。過小評価していた。

幾ら強くなっているとは言え、まさか本気のカイトにはそうそう通じはしないだろうと。

幾ら力が溢れてるとは言え、まさかカイトの言った様に世界が滅ぶ事は無いだろうと。

だが、その予想は悉く覆された。その全てが自身の思ってもいなかった程の成果だったのだ。

そこで、ようやっとハッと思い出した。――――カイトはどうなった？　どこへ行った？

確かに、カイトを確り殴った感触はあった。手応えは十分過ぎる程だった。

だが、その確かに殴ったはずのカイトの姿が見えない。一体どこへいったんだ？

……そう焦っていた要は、今迄一度も感じた事の無い程の圧倒的な凄まじい殺気を感じた。

本能に素直に従い、後ろを即座に振り返った要の目に映ったのは、丸で何事も無かったかの様に立ち開り（はだか）、こちらを鋭い目付きで睨み付けている、

……今迄、要が見た事も無い、本当の戦闘時のカイトの姿であった。

流石の要もそれには僅かな怯えを自身の中に感じ、暫くその儘睨み合う硬直状態に陥った。

……かに思えたが、あっさりと早くカイトがその状態を解き、要にテクテクと近付いて来て……。

「ふんぬらばっ！！」　ゴッツンコ！

「……～～～！！！　いってえええええ！！！！！」

イイ笑顔で頭突きを咬ましたのであった。

「な、何……いきなり、何すんだよ、カイト！？」

「うっせぇ！　ったく……。

まさか、俺の防御を完全にぶち破って、俺を殺すとは思わなかったぜ。」

「……え？」

そのカイトの言葉に、要は我が耳を疑った。今、自分は何を聞いた？

何て言う言葉を……カイトは、今、言った？

そんな要の思いを知ってか知らずか。カイトは再度肯定し、その能力の詳細を語った。

「大マジだ。

今のお前の一撃は、俺の魔力を全開にした防御をあっさり抜いて俺を殺しやがったんだよ。

多分、アレだ。ＯＲＴの水晶渓谷の能力も重なったんだろう。ランクダウンさせるって奴だ。

恐らく、お前に対する攻撃も、お前に攻撃された方も、その種類

を一切問わず、

しかも、相手の格位に関わらず、絶対的にランクダウンさせるんだろうよ。

……下手すりゃ、それの御蔭でお前自身の格位も上がってるのかもな。

少なくとも、それを当てられれば、ゼウスぐらいなら一撃で殺せるぞ？

何せ、この俺を殺せるぐらいだからな。大概の奴は、一撃で終わる。」

「……。」

絶句とはこういう事か。本当の絶句と言うのはこういうものかと。

先程の比なんてもんじゃない。本当に何も言葉を発する事が出来ないのだ。

その威力の程に驚いている間に、要の『水晶融合・ＯＲＴ』はその結合が自動的に解かれた。

どうやら、此処迄でタイムアップの様だ。其処でどっと今迄の疲れが要を襲った。

それこそ、今迄の要だったなら、即座に気絶し命の危機ですらあったであろうが、

何とか、辛うじて意識は保つ事は出来た……が、身体は言う事を聞いてくれそうにない。

その場に抵抗する事も無く倒れ伏し掛けた要だったが、カイトがその身体を支えてくれた。

「は……この……疲れは……尋常じゃ……ない……な……。」

「ああ、だろうよ。その力の大きさにまだお前は慣れてないだろうし、

何より使い方も解らない上に、その力に使われているだけだからな。

少なくとも、今のお前が使うには、ここぞという最終局面。もう後が無い時のみだ。

それ以外に使いたいのなら、もっと精進する事だな。」

「は……はは……そいつは……今は……勘弁……だな……。」

「まぁ、今は休め。ゆっくりとな。時間は幾らでも、充分にあるんだからな。」

「済まん……そう……させて……貰……う……わ……。」

要はその儘、意識を失った。

その後、要が目を完全に覚ますまで、優に半年掛かり。

元の力を取り戻すまで、更に半年掛かった。

side:???

再び固有結界が解除された、謎の真っ暗な空間。

そこに、カイトと要がいた。

「済まん、世話を掛けたな、カイト。」

「何、気にすんな。こちらも充分に楽しんだからな。」

「そうか。」

「ああ。」

そう言い合い、取り敢えず御互いに握手した。一応、これでお別れではあるのだから。

「所で、俺はこっからどうやって戻ったらいいんだ?」

「ああ、それなら俺が送ってやるよ。幻想郷でいいんだろ?」

「頼む。……じゃあな、カイト。」

「ああ。……気を付けろよ、要。その力……使い所を誤れば、全てを亡くし兼ねんぞ？」

「分かっているさ。骨身に沁みる程にな。」

「クックック……確かにな。……それじゃな、要。また会おう。」

「ああ、また。」

そして、要は幻想郷へと帰って行った。

「おい、其処に居るんだろう？　スキマ妖怪。」

「……取り敢えず、御疲れ様ってとこかしら？　救世主様。」

「フン、抜かせ。一応、要の強化は施してやったぞ。これでいいんだろ？　ゼウス。」

「うん、有難う救世主。とても助かったよ。……でも、ちょっとアレはやり過ぎじゃ……；」

「あ〝ぁ〝ん〝！？　テメェラが好きにやっていいっつったんだろうが……ァア〝！？」

「……ま、まぁまぁ。落ち着いてくれないかな；；；；」

「……フン！　で？　俺はもうこの気味悪いスキマから出て行っていいんだな？」

「……え、ええ。もう構わないわ。」

「ったく……今回は偶々俺の目的とも合致したから引き受けたがな。余りこういうのは勘弁だぜ？　……【原初】の奴が煩ぇんだよ……。

愚痴愚痴と何時までも小姑みてぇによ……ったく、マジでやってらんねぇぜ……。」

「……やっぱ年取ると、誰でも愚痴っぽくなるものなのかしらね。

何と無く解る気がするわ。」

「五月蠅ぇぞ、クソガキ。その程度の歳で歳取るとか抜かすなゴラ。犯すぞ？」

「……じょ、冗談よ、勿論。」

「……ハァ。んじゃな。俺はもう行くぜ。

……ああ？　煩ぇな、今行くっつってんだろうがよ、クソ【原初】。

……ああ、ハイハイ。わぁ～ってるっての。

ほら、グチグチ言ってる暇にさっさと次行くぞ、次！」

「……本当に冷や汗モノね、彼と相対する時ばかりは……。」

「全くだよ。じゃ、要君を宜しくね。僕も暫く、仕事に集中しなくちゃいけないし。」

「ええ、任されましたわ、最高神ゼウス。」

チートじゃ物足りない！（後書き）

如何でしたでしょうか？

私に出来得る限りのチート能力を付け加えてみたのですが……；；；

雨季様。不都合や御指摘等が御座いましたら、何なりと御一報下さい。

では、改めまして。この度は、誠に御目出度う御座います。

現在連載中の作品は基より、新作もとても楽しみにしております。

今後共、応援させて頂きます。

それでは。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

真実と、衝撃と、？？？と……（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：２，８３１，４６３アクセス　ユニーク：２３１，３０８人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

本当に御待たせ致しました。ようやっと、久し振りの最新投稿になります。
今回は、何度も活動報告などでも言っている通り、
この小説『無限にして無窮なる旅人』の核心に一部触れる内容となっております。
どうか、是非共この話だけは、多少読み辛くとも御一読下さい。

それと、ちょっと後書きも長くなってしまいましたが、
そちらには、カイトの言動に対するちょっとした考察に近いものを書いておきました。
本文中で気になった事や、説明不足だと感じられたであろう事なども書いてありますので、そちらもどうぞ。

後、一つ。この話は、一部のキャラの台詞、一部の地の文を、
私の友人であるシェードブライアン氏に改稿して貰いました。
尚且つ、更に一部には、その改稿を基に再度私が推敲し書き直した箇所も御座います。

何故、彼の協力を仰いだかに関しましては、私の活動報告を御覧頂きたいと思います。
ですが、生憎と未だその仕儀には至っておりませんので、
彼が投稿してくれた際には、改めて御連絡致したいと思います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

真実と、衝撃と、???と……

ｓｉｄｅ：Ｎ（ネオ）・Ｎ（ノルニル）本部　第一席アルニス＝カイゼルの仕事部屋

「……以上が、八神カイトからの伝言です。」

「では、カイトが此処に来るのですか？　珍しいですね……彼が自ら此処に来るなんて。
　何か余程の事情なのでしょうね……。では、早速準備をしなければ♪」

第三席ミディクェード＝シュレストから、カイトからの伝言を聞いたアルニスは、

嬉々として今にも小躍りしそうな程の満面の笑みを浮かべ、

いそいそと自分の机の下に潜り込み、ゴソゴソと何かを取り出そうとしていた。

怪訝に思ったシュガルが、若干無言の時間が過ぎた後に、思わず声を掛けたのだが……。

「……アルニス様？　一体何を……それを一体、何処から御出しになられたので？」

「え？　勿論、私が仕事をしているこの机の下からですが？♪　さあさあ、こんな所でぼさっとしてないで、二人共、早速準備して下さい。

ディークは御茶の用意を。シュガルは、カイトを迎えに行ってあげて下さいね♪」

アルニスが取り出したのは、大量の御菓子が詰まったダンボール箱だった。

その量に、ミディクェードと共にたっぷり十数秒程絶句した後、おずおずと聞いた。

……のだが、何の衒(てら)いも無く平然と仕事中に貪(むさぼ)っている菓子だと言い放ったアルニス。

再度絶句してる二人に構わず、カイトを出迎える用意をする様に言い付け、

早速に、自身が今迄していた作業を放棄してしまった。

「……ミディクェード。」

「……はい。では、私は御飲み物の用意をして参ります。」

「はい♪　宜しく御願いしますね、ディーク♪」

「畏まりました。では、失礼致します。」

ウキウキ気分のアルニスに気付かれない様に、二人揃って溜息を付いた。

仕方ないとばかりに軽く頭を振ったシュガルは、

溜息を付いた時に若干眼鏡がずれたミディクェードに声を掛け、茶の用意をさせた。

彼が退出すると、シュガルは再度小さく溜息を付き、アルニスに話し掛けた。

「……はぁ。では、私は彼の来訪を他の皆に伝えて置きましょう。

どうぞ、御二人水入らずで御話し下さい。」

「有難う御座います、シュガル。ですが、私は一向に構いませんよ？　皆が居てくれても。

寧ろ、ノルニルの新メンバーをカイトに紹介出来る良い機会だと思うのですが……。」

「いえ……それは又、折を見て、と言う事にさせて頂きたいと……。

何せ、アリエル達、シュレスト姉妹が彼から這う這うの体で逃げ帰って来ておりますので。」

「あ、そう言えばそうでした。それについては、私の方から彼に謝らなければいけませんね。
解りました。では、済みませんがシュガル。その件については宜しく御願いしますね。」

「畏まりました。確と、皆に伝えて置きます。」

と、取り敢えずの御膳立ても済ませ、まだかな～？　と、鼻歌迄、楽しそうに歌っているアルニスに、シュガルは未だ退出せず、一言述べた。

「アルニス様。一つだけ、宜しいでしょうか？」

「～♪　ん？　何ですか、シュガル？」

「……彼が来る迄、未だ大分時間が御座います。」

「ええ、そうですね。ですから、私も今からもう待ち遠しくて仕方がありませんよ♪」

「ええ。ですので……ちゃんと仕事をして下さい。」

「……ぇ？」

満面の笑顔の儘、物の見事に身体ごと固まったアルニスに、シュガルは追い打ちを掛ける様に、再度繰り返して告げた。

「再度申し上げます。八神カイトが此処に来る迄、未だ幾分も時間が御座います。
ですので、彼が来る迄、仕事を為さって下さい。」

「……あ、あの……シュガル？　その、きょ、今日ぐらいは、その……ねえ？」

「彼が来る迄、仕事を為さって下さい。ネオ・ノルニル　第一席アルニス＝カイゼル様。」

「……うぅぅ……仕事モードのシュガルが意地悪をして来ます……；；」

「……はぁ。宜しいですね、アルニス様？
今日の分の書類が終わる迄、この大量の御菓子は没収させて頂きます。」

「あ……。わ、私の御菓子……私のぉ……「よ・ろ・し・い・

で・す・ね？」……。」

「……後で、ミディクェードに御茶だけは持って来させます。
ですから、何とか彼が来る迄に必ず終わらせて下さい。
最悪の場合は、私の一命を以てしてでも、彼には遠慮して貰います。」

そうシュガルはアルニスに言い付けると、今度は判り易く咋（あからさま）に溜息を付くと、

大量の御菓子を胸に抱えた儘、憂鬱そうな雰囲気を醸し出しながら退出して行った。

後に残されたアルニスは、あ～とか、う～とか、呟きつつ軽く涙目になりながら、

暫くシュガルが出て行った扉を見詰めていたが、或る程度経って流石に諦めたのか。

涙目の儘で、黙々と書類に判を押していくのであった。

～数時間後～

「アルニス様。」

「あ、シュガル。御仕事、もう全部終わりましたよ？　これで、もう何も文句は無いでしょう！
さあ！　早く、私の御菓子を返して下さい！」

「……流石です、アルニス様。確かに全て完璧に終わっていますね。
……ちゃんと、毎日こうして頂ければ、数年分の書類を纏めて熟すなどという暴挙を、
我々もアルニス様に押し付ける事も、金輪際一切無くなるのですが……。」

「そんな細かい事はいいんです！　もう終わった事なんですから！
それより、私の、おーかーしーぃー！！」

仕事をキッチリ終わらせたと言うのに、まだまだ続きそうなシュガ

ルの愚痴に、
両手をブンブン振り回しながら御菓子を返せと抗議するアルニス。
額に手を当て頭を抱えたくなりそうなのを、必死に堪えたシュガルは諦めて説教を止めて、
最初よりも少しだけ減ったであろう御菓子を、ミディクェードに持って来る様に命じた。

「（……子供か。）分かりました。では、直ちに持って来させます。
丁度、そろそろ彼も来る頃でしょうし。」

「おや。それはまた、丁度いいタイミングでしたね♪　あ、有難う御座います、ディーク♪
ではでは、早速……シュガル？
別に食べたかったのなら、言ってくれれば幾らでも分けてあげましたのに。」

早速、ミディクェードが持って来た御菓子を笑顔で覗き込んだアルニスだったが、
少し眉を顰(ひそ)めると、困った顔でシュガルにこう告げた。
だが、それも当然の如く予期していたシュガルは、また溜息を付き

つつ弁解をした。

「……その減っている分は私では無く、恐らくアリエルが食べた分でしょう。

後は、アルメイが、こっそり自分の分と併せて、皆にも均等に配っていましたから。」

「おや。流石は我らがルリルリですね♪　相変わらず最も気の利く良い子で、私も嬉しいです♪」

アルメイ＝シルリ。第十三席に位置するＮ・Ｎの暗部。通称、アルｏｒメイｏｒルリルリ。

……なのだが、彼女生来の人の良さが起因しているのか。

ついつい、皆の尻拭い役に回ったり、

何か貰い物とかをすると、すぐ皆と一緒に分けたがるのである。

最も、非常に無口で無表情な彼女からそれらを完璧に読み取るのは、

彼女に最も慕われているシュガルやアルニスでも、優に十年程を要したのは公然の秘密である。

……だがしかし。

「……アルニス様。彼女は、その呼び名を好みませんので、余り連呼為さいますと、
　また暫く不貞腐(ふてくさ)れて、アルニス様には姿を見せたがらなくなるかと思われますが。」

「……それは困りましたねぇ。とても可愛らしくて、私は大好きなんですけどねぇ、ルリルリ。」

天井裏でガタッ！　と音がした。珍しく、彼女が反応した。

今の音の立て方は、嫌がっている音だな。と二人は理解し、この話は此処迄とした。

丁度その時だった。ミディクェードが、彼の来訪を告げた、と同時に彼が踏み込んで来たのは。

「アルニス！　シュガル！　居るか！！」

「おや？　ちゃんと此処に居ますよ、カイト。今日はどうしました？」

「――――居たか。アルニス、シュガル。お前達に聞きたい事がある。……貴様等は出て行け。」

ミディクェードやシュガルの出迎えも待たず、何やら徒(ただ)ならぬ雰囲気で入って来たカイトに、

流石のアルニスもおちゃらけた雰囲気は完全に形(なり)を潜め、

ミディクェードに目配せして退出させた。

それとほぼ同時に、天井裏のアルメイの気配も、何時の間にか消えていた。

皆出て行き、少し部屋が静まり返るのを誰とも無く確認すると、

徐にカイトがアルニスとシュガルに、矢継ぎ早に詰問し出した。

「……ふん、まぁいい。先ず、貴様等に聞きたい事がある。」

「それは構いませんが、カイト。実は……。」

「お前達の、疑問も、質問も、話も、後で幾らでも聞いてやる。先ずは俺の質問からだ。」

「……分かりました。我々で答えられる事でしたら、何でも幾らでも御答え致しましょう。
シュガルも、いいですね？」

「……はっ、畏まりました。」

シュガルが頷いたのをカイトも確かに確認すると、一方的に質問をし出した。

「では、先ず聞く。今迄に【原初】と接触した事は？
お前達からでも、【奴】からでも構わない。」

「有りませんよ。」「……同じく。」

「では、誰とも言わぬ、知りもしない謎の人物や存在との接触は？」

「そちらもありませんね。」「……同じく。」

「……では、こいつに見覚えは？」

そう言うと、カイトは背後に顕れた漆黒の空間から、碧色の一冊の

本を取り出した。

ソレは、その空間から出ると同時に自動的に頁を捲り出し、或る程度捲られると、

《プッハァッ！》と言う機械的な、しかし明らかに人間味を帯びた声色で喋り出した。

《もうマイスター。私、あの儘窒息死するかと思いましたよ、喋っちゃいけない病とかで。

あれ？　御二人共、一体何処の何方で？

……あ、確か、アルニスさんとシュガル坊やさんですよね？

いやぁ、初めまして♪　いつもマイスターがお世話になってます。

あ、私ですか？　私は碧天の魔導書と言いｍ「好い加減黙れ。」

（´・ω・、）＜ショボーン》

「……あ、あの、カイト？　そのとっても饒舌な本は、一体……？」

「こいつは『碧天の魔導書』。俺が風音の為だけに創った、此の世で唯一の、インテリジェントデバイスだ。」

そうカイトが説明すると、エッヘン！　と（物理的に）無い胸を張って誇らし気であった。

はぁ～～～……と長い感嘆の声を上げるアルニスと、怪訝そうな顔

を見せるシュガル。
カイトは、そんな二人を少しの間観察していると、徐に再度二人を問い詰めた。
「……で、だ。お前達、こいつに見覚えは？」
「全くありませんね。こんな愉快な本、忘れる筈は有りませんから。」「同じく。」
「そうか。なら、こいつならどうだ？　……ほら。」
「おっと。……カイト、娘さんの大事な形見の様な物を安易に投げn……ぇ？」
「……！　な、バカな……！　こ、これは……！？」
カイトが突然、碧天を掴んでアルニスへと放り投げた。
アルニスの懐へと吸い込まれる様に投げられた碧天をしっかりと受け止め、
思わずカイトを窘めようと思ったアルニスだったが、その言葉を失っていた。
手にした筈の綺麗な碧色の本が、みるみる内に真っ黒にくすんでい

ったしまったからだ。

そして、それを見て誰よりも驚いていたのは、他ならぬシュガルであった。

「どうだ？　それならば、見覚えがあるだろう？　特に貴様ならな、シュガル坊や。」

「……そうなのですか？　シュガル。」

「……は、はい。それは、確かに間違い無く、私がアリエルに与えた物。

確か名を、『真の夜天の魔導書』だった筈ですが……これは一体どういう事なんだ、カイト？」

二人を……特にシュガルを、射殺せそうな程の眼力で睨み付けているカイトであったが、

どうやらシュガルが嘘を付いている、もしくは誤魔化そうとしている訳ではなさそうだと、

判断したカイトは、その眼力を一旦収め、鋭い眼光はその儘に二人に話した。

「……どうやら、演技では無い様だな。いいだろう、ならば話してやる。
そいつは、特別製でな。製作者である俺と、使用者である風音以外が触れると、
例えはやてであろうとも、その様に黒ずみ本来の機能を完全に失う様に出来ているのさ。

そして、俺はそれをずっと探していた。あの時……俺がはやてと風音を殺したあの時。
其処には、或る筈だった風音のデバイス、碧天の魔導書が無かった。
つまり、あの二人をあんな目に遭わせた奴が、そいつを持って行ったと言う訳だ。
それも、二人が凌辱されている様を存分に見せ付けた後でな。」

「な！？　で、では、この本は……！」

「ああ、そうだ。つまり、そいつを持ち出した奴が、二人を凌辱した犯人と言う訳だ。
いや、正確に言えば、【欲望（ディザイア）】に憑り付かれた奴と言う事さ。
だが、そいつも用意周到な奴らしくてな。
残念ながら、碧天の記憶領域からは、そいつに関するデータはすべて消去されていた。」

カイトはそう解説しながら、アルニスから碧天を受け取った。
すると、丸で逆再生でもするかの様にあっと言う間に、碧天は元に戻った。
それを眺めていたアルニスは、カイトにとある疑問をぶつけた。

「……ですが、カイト。その犯人ももうとっくに亡くなっているのでは無いですか？
我々と違って、極普通の人間かも知れません。
それに何より、その【欲望（ディザイア）】は貴方が滅ぼしたのでしょう？
でしたら、もう――――！？」

「――――貴様は、何を言っている？」

「……え？　あ……か、カイ……ト……？」

「――――もう一度、聞くぞ。貴様は、何を、言っている？

あの【欲望（ディザイア）】が滅んだ？　誰が、何時、滅ぼした、などと言った？」

そうアルニスに言うカイトは、自他共に心友だと認める彼でさえ、一度たりとも見た事の無かった……そう。

それは――――未だ、妻子への復讐に燃える、一人の復讐者の顔だった。

そして、その復讐者（八神カイト）は、心友に告げた。衝撃の真実を――――。

「貴様が何を勘違いしているかは知らんがな。【欲望（ヤツ）】は滅んでなどいない。」

「で、ですが……！　確かに、貴方が自身の業で消滅させたと……。」

「……いいだろう。少し長い話になる。座らせて貰うぞ。シュガル坊や、俺にも飲み物を。」

「……シュガル。」

「……畏まりました。……ほら、茶だ。後は自分で汲むといい。」

「ああ、貰おう。……ふぅ、旨いな。では、話すとするか。

長い、長い……八神(オレ)カイトの話を。」

ｓｉｄｅ：八神カイト

そうだな。先ずは【欲望(ディザイア)】の話からにしようか。

お前達は聞いているだろうが、あの時俺が【欲望(ヤツ)】に使った業は、

エターナル・エンドとインフィニティ・エンド。つまり、精神崩壊

と完全物理破壊だ。

……何が言いたいか、分かるか？

「精神と肉体……つまり、現界する為に必要なモノ。

その憑代であるドルゴラの存在は滅ぼせても、其処に寄生する、【欲望(ディザイア)】そのものの消滅は出来ない、と？」

「……そうか。ヤツは、概念のみの存在。『欲望』と言う名の集合体。つまり……。」

「ええ。その存在を消滅させるには、概念としての存在……つまり、魂を滅ぼさねば……。」

「消滅は決してしない。そういう事か。……だが、では何故そうしなかった？」

その答えは簡単だ。単に、あの時の俺では未だ力不足でな。

世界を崩壊させずに、【欲望(ヤツ)】のみを滅ぼす事は出来なかっただけだ。

……今ならば、恐らく出来ようがな。

その為にも、【欲望(ヤツ)】が今、何処に居るのかを突き止めねばならん。

今度こそ、完全にその存在を滅する為にも、な。

「……そういう事でしたか。」

「……所で、カイト。もう一つ気になる事があるのだが……。

お前の妻子を嬲った者、心当たりはあるのか？」

――――ある。と言ったら？

「「な!?」」そ、それならば、何故その者を未だ探しているのですか？」

探している……と言うのとは、少し違うな。……まぁ、いいだろう。では、お前達にヒントと言う名の謎掛けをしてやろう。

「謎掛け……ですか？」

「何故、そんな回り諄(くど)い事を？　……もしかして、名前を出し辛い相手なのか？」

……では、その問題……を出す前に、お前達に質問だ。

死者蘇生とはどういうものだ？　一体、どういう方法でその法が成り立つと思う？

特に、理を操作できるお前ならば、それが解るだろう？　アルニス。

「え、ええ。死者を蘇えらせる為には、その拠り所となる為の魂が無くてはなりません。
それを基とし、肉体・精神を構築する。それが、私の、私と貴方の死者蘇生です。」

「……成る程。魂に直接干渉し、それを作用させて形成させる、か。」

「ええ、その通りです。ですが、カイトそれがどうかしたのですか？」

……さて、此処からが本題だ。アルニス、お前には昔話した事があったな。

俺が、死者蘇生も含めて、諸々の力が使える様になったのは、大体何時の頃からかを。

「ええ、勿論覚えていますよ？　貴方が、今の様な力を使える様になったのは、

なった、のは――――待って、下さい。」

「……？　如何致しました、アルニス様？」

「待って……待って下さい。そうです……おかしいじゃないですか。カイトがそれらを使える様になったのは、妻子を亡くされた後。つまり、その前には使えなかった。そうです、カイトは妻子を亡くす前は使えなかった。死者蘇生が使えないと言う事は、同様に魂に干渉する事は不可能です。そう、魂に……でも、カイトの妻子は……カイトに……ですが、それだとカイトが嘘を付いている事に……でも、カイトは嘘を付かない。いや、付けない。と言う事は、妻子は確かに魂を消滅させられた？それもカイトの手で？いえ、でもカイトには不可能なのだから、つまり……。」

「……つまり、カイトには、当時魂を消滅させる事は不可能だった？では、一体誰が、カイトの妻と娘を消滅させたと……？」

「……誰が……ダレ――――あ。」

ようやっと気付いたか？　そうだ。当時の俺には、魂に干渉する事……つまり。

カオス・エンドは使えず、当然、魂を消滅させる事なんて藝当は不可能だった。

さて、此処でようやっと問題だ。

では、俺の妻子の魂を消滅させたのは一体誰だろうか？

そして、その時俺と共に居たモノとは？

当時の俺に出来ぬ事を平然と、俺に気付かれぬ様にソレが行えたモノとは？

だが当然、そんな事が出来ない俺はすぐにそんな事は気付くよなぁ。

そんな時、俺ならば一体どうしたと思う？

そして、お前達の想像通りならば、何故俺は今、生きて此処に居るのだろうな？

そして、嘘が付けない筈の俺が言った矛盾した台詞。

『俺が消滅させた』とは一体どういう意味なんだろうな？

これら全てが指し示す事とは一体、何だろうな？

……此処迄、判り易いヒント出してやってるんだ。もう好い加減、理解出来ただろう？

「「……。」」

ふん、絶句か。まぁ、いい。聞きたい事は聞いた。言いたい事も言った。

この後、お前達がどうするかは俺の知った事じゃない。好きにしろ。

だが……シュガル。

「……！？　あ、ああ。何だ、カイト？」

其処で聞き耳を立てている奴にも、後で言い聞かせてやれ。

――――貴様は何れ、この俺の手で必ず滅ぼす、とな。

「……。」

「……シュガル？」

――――フン。此処にはもう用は無い。邪魔したな、アルニス、坊や。

俺はもう行く。次の世界へな。【原初】の奴が痺れを切らして待っているんでな。

「！　ま、待って！　待って下さい、カイト！　あ、貴方は……！　そうと知って……！

そうだと、ソレだと知ってて、今迄も……！　これからも……！？」

――――セカイが俺の救いを求めている事は、紛れも無い事実なのでな。

ではな、アルニス。又、何時か出会う時もあるだろうさ。

「……カイト。バカです、貴方は、本当の……大馬鹿者ですよ……！！」

「……アルニス様。……カイト、八神カイト、か。」

《その後。アルニスとシュガルは、優に数時間もその場を動かずに、静かに涙を流していた。》

ｓｉｄｅ：アルニス仕事部屋～数時間後～

「……ズズッ！　はぁ……。あ、それでシュガル。ちょっと聞きたい事があるのですが。」

「……はい、何でしょうか？」

「さっきカイトが言っていた、聞き耳を立てていた人って誰です？」

「……それは恐らく、ミディクェードの事でしょう。
彼には、私がもしもの時の為に、部屋の側に待機していて貰っていましたので、
それにカイトは怒って大仰に言っただけかと思われますが。」

未だに涙目なアルニスの質問に、眉一つ動かさず僅かな無言の間の後、

シュガルは何時もの公務時の如く、平然と答えた。

「……成る程、そういう事でしたか。ダメですよ、シュガル。ちゃんと人払いをしなくては。
それにしても、私にも気配を気取らせないとは……。
ディークもなかなかやる様になりましたね。それについては、今度褒めてあげましょう♪」

「……ええ、御願い致します。その方が彼も喜ぶでしょう。」

「はい、御願いされました♪　……では、シュガル。今日は貴方も疲れたでしょう？
御互い、今日はこれで御開きとしてもう休みましょう。……私は、少し疲れました。」

そう言うアルニスの顔は、少々陰鬱というか、意気消沈している様が垣間見えた。

シュガルは、それならばとアルニスに同意し、自身はもう少し起きている事を告げ、

アルニスの仕事部屋を共に退出し、私室迄見送ってから今来た道を引き返して行った。

side:???

「……未だ居るか？」

「はっ。先程から御待ちかねで御座います。」

「……分かった。お前も付いて来い。」

「……宜しいので？」

「当然だ。側近にして参謀が居なくては、俺一人では奴を見抜くのは大変だろう？」

「畏まりました。……では、こちらへ。」

「ああ。」

輪郭さえもハッキリとしない漆黒の暗闇の中で、

（声から察するに）その二人組の男は何処（いずこ）かへと向かって、音を立てずに歩いていた。

十分程歩いただろうか。とある部屋の扉の前で、その二人は歩みを止めた。

片方の男の前を歩き誘導していた従者の様に付き従っていた男が、扉を開けて、先にもう一人の男を中へ招き入れ、自身は周りを警戒しながらその後に続いた。

その中は、部屋の壁に取り付けられた小さな明かりのみがある、凡そ六畳ほどの個室だった。

その部屋のベッドに、足をぶらつかせながら座っている……少女らしき人影がイタ。

その少女らしきモノは、入って来た者に気が付くとピョンと床に降り立ち、

プンプンと、丸で可愛らしい擬音を立てそうな表情で、来訪者に文句をぶつけた。

「ちょっと、ちょっと↓！　こ↓んなか弱い女の子を、こんな所に一人にしとくなんて、

　一体、どんな神経してるワケ～☆　もう、マジ信じらんなぁ～ぃ←」

「……いや、済まない。色々と予想外に長引いてしまってな。」

「ま、い↓けどねー＊　だって、どっちになっても、アタシには何の関係も無いんだし～♪」

先に入った男が、その少女に謝罪しながらもさっさと椅子に座ると、

少女も、未だぶーたれながらも、素直にベッドに腰掛けた。

少々、少女の喋り方に苛付きと、嫌悪感と……恐怖を感じながらも、

その男は、早速本題の話を切り出……そうとしたのだが。

「……それで、今日此処にお前を呼んだ理由なのだが……。」

「説明長ーい←　めんど～だね＝☆　だから、いいよー〃　協力してあ～げ～るぅ→」

「……いいのか？　そんな安請け合いをして。一体、どんな事を頼むか分からんぞ？」

何も告げてはいないと言うのに、あっさりと軽く承諾した少女に、

思わず頼もうとしたこちらが確認を取ってしまった程だ。

――――だが。

「んー☆　全然構わないよ↓　だって、どうせヤる事なんて、アイツを困らせる事ぐらいでしょー♪」

そ・れ・にぃ～☆　どうせ、アンタ達がやんなくたって、アタシがヤッちゃってたも→ん♪」

「……そ、そうか。それならば、助かる。では、動く際はこちらの指示に従って……。」

其処迄言った男の口が唐突に回るのをやめた。

口を塞がれたのでは無い。睨み付けられた訳でも無い。

只、相対するソレの雰囲気が変わった。……それだけで、ワカッタ。

この先を一言でも喋る事は、我々には許されないのだ、と。

「ヤ。」

「……。」

「わたしぃ、命令聞くの、大きら→→→い、なの♪　だ・か・ら、絶対にヤ～☆」

「……。」

「あ、でもでもぉ～♪　ちゃぁ→んと、アイツの相手はしてあげるねっ☆

だから、安心してね～♪　あ、でもでもでもぉ～♪♪♪」

其処迄は、先程言葉を止めさせた恐ろしい雰囲気を一切感じさせる事も無く、

実に軽快に、聞くにつれ寧ろ心地良いとさえ思い初めてしまった、その話す調子は唐突に止み、

一瞬で空気が一変させられたこの空間に居た、その男達はこの瞬間、確信した。

「……アイツに本格的に手を出したら、殺すよ？

だって、……アイツはアタシの――――――アタシだけの――――――獲物なんだから。」

――――自分達は、今この瞬間、確実に彼女によって一度殺された。

そして、又、この年端もゆかぬ謎の少女の手によって、再び生き返させられたのだ――――と。

「じゃ、そゆことで～♪　アタシ、もうイクね☆　ばいばぁ→い☆☆」

そう言うと、硬直している二人の男には一切構わず、悠々と一人で外に出た。

すると、ずっと何処かで待っていたのか。

唐突に現れた、恐らくは男と思しき人影が、何事かを彼女に話し掛けた。

二言、三言話し合うと、何処とも無く姿を消した。……闇に紛れ込む様に。

いや、ソレラは――――丸で、最初から闇であったかの様に――――――その姿を消した。

少女達が去った後に残された二人の男は、大量の冷や汗を掻きながらも、

これから先、自分達が思い描けるであろう未来が祝福（のろわ）された事に、

心の震えを感じずにはいられなかった。

「さぁって。森(ちゃん)？はどうなったかなぁ→♪

ちこっと泉に水を這ったんだケド、もう覆われてるコ・ロ・ア・イ？

ふつーはも～ちょっとかかるんだがねー☆

もともと素質あったもんなー、アタシのお手伝い《後押し》にも気付けないんだもんね→£

さぁて、アタシに輝かしい希望(サイアクノゼツボウ)をみせてヨネ？」

真実と、衝撃と、？？？と……（後書き）

如何でしたでしょうか？

これが、カイトの抱えている業の一部にして、核心の一つです。

ええ、これでも飽く迄も一つ。カイトに待ち受けている本当の業は、また何れの機会に。

因みに、カイトと【原初】の関係に就きましては、『ネギま！』編で。

はやてと風音の死の真相に就きましては、最後の『なのは』編にて明かすつもりですので、御楽しみに。

で、ですね。実は、今迄の話で一応、この結論に辿り着けるように、色々と細かいフラグやら、
ちょっとした「これ、バレルんじゃね？」と戦々恐々とするぐらいのネタは、ばら撒いていたんです。
以下は、それについての所謂フラグ回収ルートの説明です。

先ず初めに、第４４話目『決戦前日・後編～真実～』にてのカイトの発言。

カイトは己が手で、自身の妻子。はやてと風音を殺めたと発言しています。

で、次。第６７話目『正しき間違い（Ｔｈｅ　ｒｉｇｈｔ　ｍｉｓｔａｋｅ）』にてのカイトの発言。

「聖杯を使え」と言う言峰綺麗の言葉に対してのカイトの台詞。

「（前略）俺は既に、死者蘇生程度ならば、何時でも使える。その気ならば、既に蘇らせているよ。

そもそも、はやてと風音は俺が殺した時に、魂毎、完全に消滅させている。（中略）

魂という存在そのものを消された者は、蘇らせられない。

何故なら、蘇生の際の拠り所となる魂が無いと言う事は、そもそも存在しない事になるからだ。（後略）」

と言っています。此処で、カイトの使う死者蘇生は、魂に関わる、魂に干渉するものだと分かります。

更に、此処の発言で、はやてと風音の魂はカイト自身が消滅させたと、自身の言で言っています。

で、次。第１２６話目『救世主の思惑と最終決戦』にて。

カイトは、タバサの父であるシャルルを生き返らせています。龍斗に命じて魂を呼び寄せて。

此処で、カイトの死者蘇生とは、魂に直接カイト自身が干渉して行うものだという事が判ります。

更にこれは、カイトの死者蘇生には、当人の魂さえ自身の目の前にあれば可能だという証明でもあります。

で、最後。第１６７話目『第貳拾捌話【永劫の救世主（メシア）～絶望という

名の運命（さだめ）～】』にて。
此処で、シュレスト三姉妹の質問に対してカイトはこう言いました。
「……あの頃の俺は、限り無く未熟だった。死者蘇生は使えなかった。只、それだけだ。」と。
つまり、はやてと風音と共に居た頃のカイトには死者蘇生は使えなかったと言っています。

さて、此処で矛盾が生じます。
カイトが言うには「自分の手で二人を殺し、その魂を自分の手で消滅させた」と言う事になっています。
しかし、上記の言動をちゃんと検証し、矛盾無く繋げると、
『当時、死者蘇生が使えない＝魂の干渉出来ない＝魂の消滅は不可能』という図式が出来上がります。
ですが、カイトは何度も自身で言っている様に、嘘を付けない、付いてはいけない存在です。
（※嘘関係につきましては、後の『なのは』世界にて説明するつもりです。）

ですので、此処で様々な疑問が生じます。自分では出来なかった筈の魂消滅が何故起こったのか。
そして、一体それは誰がやったのか。その時、それが出来た存在とは。
そして、それが真実と仮定して。ならば、何故カイトは気付かなかったのか。
もし気付いていたとしたら、カイトの性格上、きっと自身の存在を懸けてもソレを滅ぼそうとするでしょう。
ですが、その仮定したモノに当時のカイトが敵う筈も無く、本当に戦ったのだとしたら恐らく惨敗したでしょう。
では、何故カイトは今も生きて、存在していられるのでしょう。
仮に、本当にソレが相手ならば、ほぼ確実に八神カイトという存在

は取り込まれてしまっているでしょう。
そしてカイトの言葉の意味。『はやてと風音の魂を消滅させたのは自分だ』という言葉の意味。
その様々な疑問を一度に解決出来る、その答えとは――――。

今回は此処迄です。ですが、もう皆様の殆どは答えに辿り着いているかと思われます。
因みに、今回抜粋したのは、カイトの過去と現在の、言動に対する矛盾点だけです。
つまり、他にも彼方此方に隠されたフラグやら何やらが、実は結構沢山……今は当然内緒ですが。
……え？　何で、こんなに一気にネタ晴らしするのかって？　……その答えこそ、非常に簡単なものです。
これから先、カイトに待ち受ける業、そして試練はこんなものでは済まないからです。
では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

それにしても、良くあんなキャラ思い付くな。俺にはあの発想（キャラ）は出せんわｏｒｚ

シュガル＝ブラウセス奮闘記（前書き）

現時刻（００：１０）
ＰＶ：２，８４７，６１７アクセス　ユニーク：２３２，３６９人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

さて、今回はタイトル通りです。まぁ、奮闘記と言う程、頑張っている訳ではありませんが；

では、今話も拙作を御覧下さい。

シュガル＝ブラウセス奮闘記

ｓｉｄｅ：シュガル＝ブラウセス　ｉｎ　私室

此処は特別区画。我々、ネオ・ノルニル幹部が寝起きし、仕事をする為だけの場所。

そして、今は未だ早朝。それは、静寂が支配する唯一穏やかな時。

私も日頃の激務の所為か。その日は珍しく、朝方迄眠り続けていた。

そんな時だった。――――その静謐（せいひつ）を破る大音が、辺り一帯に轟いたのは。

ドンガラガッシャァァーーーンッ！！！　……ズガァァァーーンッ！！！！！

「！！？　な、何事だ！？　一体、何が起きたッ！」

幾ら疲れて眠り転けていようとも、流石にあれ程の大音では起きざるを得ない。

少し眠り過ぎた事による若干の焦りと、そんな失態を犯した己への苛立ちと、

朝の穏やかな一時を壊してくれた事に対する怒りとで、

私は思わず飛び起きながら、何かに怒鳴り付けた。

すると、その私の声が聞こえたのか。透かさずミディクェードが私の下に駆け付けて来た。

「シュガル様。」

「ミディクェード。これは一体、何事だ？　何の騒ぎだ？」

「申し訳御座いません。どうやら、私の愚妹がまた、何か仕出かした様なのです。」

「……また、アリエル、か。」

「……はい。また、アリエル、です。」

私達二人の言葉で判って貰えるとは思うが……アリエル＝シュレスト。

彼女は、度々何事か騒ぎを起こしている為、私の悩みの種の一つでもあるのだ。

勿論、やらかした後は毎回必ず、ちゃんと叱っている。だが、一番の問題は其処では無い。

問題は……彼女には悪意があって、騒動を起こしている訳では無い事なのだ。

つまり、だ。下手に説教の仕方を間違えると、大変な事になるのだ。

……それはもう色々と。

「……ふぅ。事の大小はさておき、だ。好い加減、私達だけでは駄目だな。

そろそろ、アルニス様にも叱って頂かなくてはな。」

「では……？」

「ああ。私はこれからアルニス様の許に伺う。その後は、通常通りだ。
アルニス様は未だ、御就寝中か？」

「はい。それはもう、グッスリと。」

「……そうか。では、流石にそろそろ起きて頂くとしようか。
アリエルには、他の者を使ってどうにか身柄を抑える様に。事の次第は追って知らせろ。」

「畏まりました。では、アリエルには、我が愚妹共を……。」

丁度、ミディクェードがそう言い掛けた時だった。

彼女の方から珍しく――――それはもう、本当に珍しく――――声を掛けて来たのは。

「……私がやる。」

「！　……アルメイか。だが、いつもお前にばかり世話を掛けるのは……。」

「……大丈夫、私がやる。……こういうのは、慣れてる人がするのが、一番。……じゃ。」

「……行ってしまったか。しかし、珍しい。彼女が、自ら声を掛け

て迄、来るとは。」

「全くだ。では、そちらは彼女の言う通り、彼女に一任するとしよう。」

彼女の気配が消え、二人して頷きながら確認した。

すると、どうしたのだろうか？　ミディクェードが急に、言い辛そうに咳などをしている。

「畏まりました。では、シュガル様。……その、そろそろ御召し物を。

流石に、その御恰好の儘で、アルニス様の許へは……。」

「む……そう言えば、そうだったな。流石に全裸では、私も外を出歩けん。」

それで、先程から私を一度も直視していなかったのか。うむ、それならば仕方ない。

私も好い加減、服を着るとしよう。

ｓｉｄｅ：アルニス仕事部屋

「うぅ～……酷いじゃないですか、シュガル。何もあんな起こし方、しなくたって……。」

「あの轟音でピクとも目覚めなかった方が、何を仰いますか。それよりも、御仕事の続きです。」

「うぅぅ……シュガルが虐めて来ます……。」

……どの様な起こし方をしたのかは、アルニス様の名誉の為に言うまい。

只、敢えて一つだけ言わせて貰えるならば……、

アルニス様は床に寝転がっても微動だにしなかったとだけ言っておこう。

ならば……確実に目が覚める方法を使うしかあるまい？

幸い、水差しとタオルは、アルニス様の私室に常備してあるのでな。

……以上だ。

「そんな事より。今日は、私も朝方迄、寝ていた事もあり、少々多量となっております。

……流石に、以前八神カイトが来た時の様な、大量ではありませんが。」

「ああ。あの時は確か、数年分でしたっけ？　結構溜まってましたねぇ。」

「……民が、『アルニス様ならば仕方ない』と、普通ならば決して有り得ない程に、寛大な理解を示してくれていたからこそ良かったものの、

本来ならば、数年も仕事を放り出す長を頂く国など、暴動が起きても何ら不思議では無いのですよ？」

「う～……仕事中迄、説教は止めて下さいよ、シュガル……。」

「では、私が御小言を言わずに済む様、アルニス様により一層の努力をして頂きましょう。」

「……やっぱり、シュガルは虐めっ子さんなんですね……。」

……一体、誰の所為で、誰の為なのかと、小一時間と言わず一日中説教したい気分だが。

アルニス様は全て理解している上で仰っている分、尚の事性質が悪い。

そして、私がそう思って諦めている事も知っている。……やれやれ。

未だブツブツ文句を言いながらも、仕事に戻られたアルニス様に、丁度ホッとしてる頃合。

見計らった様に、ミディクェードが入って来た。

「アルニス様、シュガル様。御報告致します。」

「おや、ディーク。アリエルがまた、やんちゃをしたそうですね。今度は何でしょう？」

「毎度の事ながら、誠に申し訳御座いません。
今度こそ、キツく言い聞かせておきますので、どうか御容赦を。」

「いえいえ、いいんですよ。彼女はちょっとくらいやんちゃな方がいいんです。
それで、今日は何をやらかしちゃいましたか？」

アルニス様がそう仰られると、ミディクェードは深い溜息を付くと共に、

その甚大な被害状況と、アリエル達の現況を報告した。

「先ず、被害にあったのはハルニスの工房。ほぼ半壊状態です。現在、工房の修復に当たっているのは、ハルニス、リャノール、アルメイの三名。我が愚妹を追っているのは、その他の幹部一同です。」

「おや、それは困りましたね。私もハルには、修復を依頼していたのですが。」

「どうやら、その皆から頼まれた修復物を陳列してあった棚のみが、全壊してしまったらしく。更に、その一つの装置に驚いた愚妹が、思わずその装置ごと壁に穴を開けてしまった様で。その衝撃で、彼方此方にある棚に置かれた物が落下し損壊。一部の棚も崩落。一瞬で瓦礫の山と化した、とリャノールから報告が。」

想像するだに、絶句してしまった。それは又、何と言う事を。……俺も頼んでいたと言うのに。

流石のアルニス様も、唸っておいでだった。

アルニス様は何も仰られ無かったが、ミディクェードに続けてアリエルの現況を報告させた。

「更にリャノールとミルトからの報告です。
半壊後、脱兎の如く逃げ出した愚妹は、グラウスとガブリュースが共に居た場面に遭遇し、
うっかり口が滑って再度逃走。即座に二人が追い駆けたそうです。
その後、ネルベリとラフィレスに遭遇。同様に口が滑り逃走後、二人と合流し加わりました。
その間に、カルロス姉弟が面白そうだからと加わり、現在総勢６名で追跡中です。」

「……それは、また、何とも。」

「……まぁ、彼女らしいと言えば、彼女らしいのですが。
流石に今回ばかりは、私もちょっと窘(たしな)めないといけませんね。」

珍しく、アルニス様が重い腰を上げられる様だ。……それ程、大事な物だったのだろうか？

いや、恐らくはアリエルの為なのだろう。……だが。

「アルニス様。真逆、御自ら捜される御積もりで？」

「はい、勿論です。と言う訳で、ちょっと行ってｋ「駄目です。」
……。」

「先ずは、この書類を全て片付けて下さい。

彼女に関しては、その内捕まえたと報告が来るでしょう。書類が全て無くなる頃には。」

まぁ、そんな事だろうとは思ったが。

私に全く退く気が無い事が解ると、ガックリと肩を落として席に座り込まれた。

そして、その儘、黙々と書類に判を押していった。

何時の間にか、ミディクェードも退席していたので、

私もアルニス様同様、何時迄経っても終わらない自身の仕事を黙々とやり続けた。

～凡そ１０時間後～

「……ふぅ。取り敢えず、三万年前迄の分はこれだけか。」

夕食後に少し休憩を取り、今日の分をやらなければ。

ようやっと、今迄ドルゴラがやらずに溜めていた仕事も、残り三万年分程度に迄は減らせた。

少しは先が見えた事に安堵し、そろそろ時間か、とアルニス様を横目で見ると……。

「……ｚｚｚ」

「……矢張りか。すっかり大人しいな、と思えば。集中して気付かなかった私も私だが。」

案の定、自身の机に突っ伏して、すっかり御就寝中だ。

一応、少しは書類の束も減ってはいるものの、未だ殆ど手付かずの様だった。

「仕方ない……流石に起きて頂こうか。もういい時間でもあるしな。」

「……ＺＺＺ」

「……しかし、まぁ、本当に暢気な。

貴方がそんなだから、俺は――――いや、今は何も言うまい。」

そう。今は未だ、その時では無い。時期尚早に過ぎる。

その言葉の続きを、心の奥深くに再度仕舞い込み、アルニス様を揺り起こした。

「アルニス様、アルニス様。起きて下さい。」

「……ＺＺＺ」

「アルニス様。そろそろ、御飯の時間ですよ。」

「……ご、はん……もう、食べ……られ……むにゃ。」

「……ハァ。アルニス様、カイトが来ましたよ？」

「……！　カイト！？　カイトが来たんですか？」

「いいえ、嘘です。遅よう御座います、アルニス様。」

「……シュガル、酷いです。色んな意味で。」

しかし、毎回思うのだが……何故、アルニス様はアレで嬉々として起きられるのだろうか？

そして、アルニス様の愚痴を聞き流す仕方は、既に慣れている。

「それよりもアルニス様。私は取り敢えず今日の仕事は終わりました。アルニス様は如何程で？」

「ぅ……わ、私も、終わりましたよっ！」

「嘘ですね。アルニス様、嘘はいけません。
アリエルやカルロス姉弟達が真似したらどうするんですか？」

「……はぃ、ごめんなさい。」

肩をしょんぼりと落とすアルニス様に、再度溜息を付き、私は部屋を退出する旨を告げた。

「……では、アルニス様。私は、ミディクェードを捜して来ます。今朝から一度もこちらに顔を出しに来なかったので。」

「あ、では、私も……。」

「アルニス様？　凡そ五百枚程度の書類が残っています。宜しいですね？」

「……はぃ。」

アルニス様がシクシクと泣きながら、書類に判を押す音をＢＧＭにしながら私は退出した。

……さて。一体、何処から探そうか？

ｓｉｄｅ：中庭

方々を歩きながら探し回ったが、一向に誰とも出会わない。
もしかしたらと思い、足を中庭に向けた。……案の定だった様だ。

「……矢張りか。此処に居たのか、お前達。」

「シーッ！　シュガル様、こっちこっち！」

「そうだよ、シュガル様。バレちゃうでしょ！」

「……ああ、分かっている。それにしても、矢張り全員此処に居たか。
ハルニス、リャノール。工房はどうなった？」

全幹部一同揃い踏みで、草陰に隠れていた。……勿論、これも何時もの事だ。

そして、私は一番気になっていた事を聞いた。……当然、小声でだ。

「はい、シュガル様。工房自体は、もう完全に修復し終えています。
リアとメイの御蔭で。ですが、シュガル様に依頼された物は、未だもう少々掛かるかと。
申し訳ありません。」

「いや、何構わん。私は、アレが直りさえすればいいのだからな。時間は掛かっても構わん。他を優先してもいい。だが、確実に直してくれ。」

「はい、畏まりました。僕とリアに任せて貰えれば、どんな物でも必ず直しちゃいますから！」

「ああ。信頼している。」

その言葉を聞き、安堵した。アレは……一応、私にとっては大事な物なのでな。

尤も。ヤツやアルニス様にだけは、絶対知られる訳にはいかないが。

それを確認した後、私は屈みながらミディクェードの許へと寄った。

「ミディクェード。」

「……シュガル様。申し訳御座いません。」

「何、構わん。あれならば仕方ないだろう。今日はどれくらいだ？」

「……凡そ、六時間程。」

「……それはまた。御互いに良く飽きんな。」

「……まぁ、そういう娘ですから。否定は致しません。」

む？　一体、何の事か、だと？

ふむ……だが生憎と、態々私の口から言う様な事でも無いのでな。

それよりも、此処に私が来た最大の目的を果たさねばな。

「アリエル。」

「あ、シュガル様～？　……えへへ～♪」

……ふむ。もしかして、もしかしなくとも、自分がやった事を忘れているのでは無かろうか？

仕方ない。此処は、私も心を鬼にして、現実に引き戻そうか。

「アリエル。話がある。」

「話？　えへへ～、一体何だろう♪」

「今朝の、お前が起こした騒動についてだ。」

「……え　ぇ？」

……ようやっと思い出したか。逃げようとしても、そうはいかんぞ。

自分から、私の腕に引っ付いて来たのだからな。御望み通り、しっかり捕まえていてやろう。

「さて、では行こうか。今回は、ミディクェードのみならず、アルニス様からも、直々に御言葉があるそうだ。心して置く様に。」

「ひぃッ！！」

「では、行くぞ、ミディクェード。」

「……畏まりました。」

「だ、誰か！　助け……！」

“だが断る。”

「みんなの、薄情者ーーーッ！！！」

流石のアリエルも、我々三人に説教されて、少しは反省した様だな。

……まぁ、少し、と言うのが又、困った事ではあるのだが。

だが、確と自覚して貰わねば困る。我々は、『ネオ・ノルニル』の

幹部なのだから。

私の弟妹に……否、子供達に……否、否！

我が家族に……その自覚と――――覚悟を持って貰わねば、な。

シュガル＝ブラウセス奮闘記（後書き）

如何でしたでしょうか？

果たして、幹部一同揃いも揃って、一体何をやっていたのか。

次回は、アリエル視点での騒動の一部始終……の一部です。

因みに、全三部作！　三人目は果たして、一体誰の視点になるのか。

御楽しみに？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

アリエル＝シュレストの日常（前書き）

現時刻（００：１０）
ＰＶ：２，９７３，５９１アクセス　ユニーク：２４１，６４６人
皆様、誠に御久し振りです。大変御待たせ致しまして、申し訳ありませんでした。

さて。今回は前話の後書き通り（と言っても二か月半は経ってしまっていますが；）、
アリエル視点での騒動の一部始終……の一部になります。

久々に書き始めたら、相当長くなってしまいました。ぶっちゃけ１５，０００弱。……うん。ごめんなさい。
読まれる際は、飲み物やツマミを片手にのんびりと御覧になって下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

アリエル＝シュレストの日常

ｓｉｄｅ：アリエル＝シュレスト　ｉｎ　私室

「う……くっ……や、やめ……て……や、ゃだ……あぁぁあぁああ……！！！

や、やめてえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

っはぁっ……はぁっ……はぁっ……また、あの悪夢（ゆめ）……か……。

あの『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』に、何度も、何度も、何度も、何度も、殺され続けた……悪夢（げんじつ）。

「……ふぅ。あ～～、もうっ！！　……ホンッッッッット、嫌んなるっ。

こう、しょっちゅう夢にまで顕れられちゃ、幾らあたいだって、もたないっつーのよ……。」

ホント、一体何処まであたいを苦しめれば、気が済むのよ……あのバケモノは……！

「もう、やだ。ホント、やだ。もう、全部、何もかも、やだッ！！！

何もかも……ホント、何もかも、全部が全部……！　アイツの所

為だッ！！

――――あああああああああぁぁぁぁああああぁぁあああぁぁああああああ！！！！！」

――――ハァ。何か、思いっ切り叫んだら、結構スッキリしちゃった。

折角目覚めたんだし（目覚めは最悪だったけど）、取り敢えず起きよっかな。

「よっと。……ん〜〜〜っ！　すぅ〜〜〜……っはぁ〜。……ぃよしっ！」

やっぱ朝は深呼吸して、思いっ切り空気を身体の中に入れないとね！

「何があろうとも、あたいはあたい！　今日も一日がんばろー！　えいえいおー！」

……って、あれ？　何だろう……？

「……む？　何か今、途轍も無くイラッとしたんだけど……気の所為か。」

辺りを見回しても何にも、誰も居ないしなぁ。……多分アレだね。まだ、何と無く悪夢の時の気持ち悪さが残ってただけなんだと思う……けど。

っと、そういや今何時頃なんだろう？　……。

「……って、え？　ちょっ、う、嘘ぉっ！？　まだこんな時間なのぉっ！？」

ちょ、ちょっと待って！？　確かに何か物凄く静かだとは思ったけど！

でも、こんなに明る……って、そうだ！　あたい、いつも電気付けた儘寝てるんだってば！

か、カーテン、カーテン！　開けないと！

「そ、そう言えば、まだそんなに……ていうか、全然明るくなかった……はぁ。

　何か、今日一日は踏んだり蹴ったりな日になりそうな気がするなぁ……。」

な～んか、朝っぱらからヤな感じぃ～……ていうか、ホントに嫌な予感しかしないなぁｏｒｚ

でも、もうすっかり目覚めちゃったし……。

「う～んとぉ……こんな時間で起きてるのって、言えばぁ……あ、ハルちゃん！

　確か昨日、徹夜するって言ってたっけ。あ、でも、だったらリア姉もいるかも……。」

あの二人も大概バカップルだよね～。てか、Ｎ・Ｎ（あたいたち）の中じゃ一番アレなんじゃないかな？

……やっぱ、邪魔しちゃ悪いかな？　でも、こんな時間じゃ他に開いてる所なんて無いし。

ん～～～……。

「……ま、いっか。どうせ暇だし、何とな～く、遊びに行きたいし～♪」

よっし、そうと決めたら急がないと！　えっと、まずは……。

「……寝汗凄いな。まぁ、あんなモン見ちゃったらね……。まずはシャワーだ！」

～３０分後～

「っふぅ～～～。さて！　お・つ・ぎ・はぁ～♪　きょ・お・は～……何、着よっかなぁ～♪」

やっぱ、この服を選んでる時がいっちばん楽しいんだよね～♪

えっへへ～♪　あ、そうだ。今度街に新しくお店が出来たって、ラフィ姉が言ってたっけ。

今度みんなで行きたいなぁ。リア姉に～、ラフィ姉に～、ガブ姉に～、ルトにハルに～♪

後はやっぱ何と言っても、ルリルリだよね～♪　はぁ～……ルリルリ可愛いよルリルリ～♪

「っと、こうしてらんない。早く着るモノ決めちゃって、工房に行こっと。」

で～、その後は髪を整えて、おっきな鏡でチェック！　……うん

ん、何も問題なし！
今日もいつも通りバッチシ可愛い！　えっとご飯は……いいや！
食パン一枚ぐらいで！

「よ～し、れっつらごー！　ふ～んふふ～んふふ～ん♪　ふ～んふふふふふ～ん♪」

さあって、今日も一日中遊びまくって、遊び倒すぞ～！！

ｓｉｄｅ：アリエル　ｉｎ　工房

速攻で着いたのはいいんだけど……やっぱリア姉いるみたい。
何か楽しそうな話し声が聞こえるし……やっぱり、お邪魔しちゃ悪いかな？
そう思いながら、ちょこちょこ工房の中を盗み見てると、やっぱり楽しそうに話してる。
……あれ？　今、何か目があった様な……？

「……ハァ、仕方ない。……エル、いつまでもそんな所にいないで、さっさとこっちへ来い。」

「あ……えへへ、バレちゃってたか。」

あ、やっぱり。苦笑しながら、リア姉とハルちゃんがおいでおいでってしてくれたから、早速二人の所へ。二人に頭を撫でて貰った。ん～～、気持ちいいな～♪　……ありゃ？

「……む？　また何か、イラッと来た気がする……。」

「？　気の所為じゃない？　特に誰も何も言ってないし。ねえ、リア？」

「ん？　ああ、そうだな。」

……また、気の所為か。む～、何か気になる。リア姉が何故か溜息付いてるし。

ハルちゃんと二人して、首を傾げてた。……変なリア姉。

「あ、ねえねえ、ハルちゃん。ちょっと工房の中、大分、物増えたね。」

何と無く周りを見回してみると、何か結構あれこれ増えた気がする。大盛況？

「うん、そうだね。久し振りにみんなから同時期に修理をお願いされてさ。

君達兄妹、四人以外のみんなからね。」

「ふぇ？　じゃあじゃあ、シュガル様にアルニス様からも？」

シュガル様がお願いした物……ちょっと……所じゃなくて、物凄く気になる。

後、アルニス様のも。また、何か面白い物ないかなぁ？

「うん。今やってるのがシュガル様ので、アルニス様のは他のみんなのと一緒に置いてあるよ。

何でも、一番最後でもいいから、必ず絶対に直して欲しいんだって。」

「へぇ～、一体なんだろう？　でも、アルニス様がそう言うって事は……、

また何か面白い事でも考えてるのかな？　だったら愉しみなんだけどなぁ。」

「……あの方が引き起こされる毎度の大騒動を、面白いの一言で片付けられるのは、

後にも先にもお前だけだろうよ。全く、シュガル様とミディクェードの苦労が偲ばれる。」

「？？？」

リア姉は、溜息を付きながらそう言うとあたいの頭を撫でてくれた。

気持ちいいし嬉しいんだけど……これは褒められてるのかな？

そう思いながらハルちゃんを見ると、微笑みながら頷いてくれた。

どうやら、そういう事らしい。……えへへ～♪

暫く撫でられていると、また二人して作業に戻っちゃった。

つまんないなぁ……あ、そうだ。どうせなら……♪

「ねえねえ、ハルちゃんハルちゃん。工房（なか）、見学していってもいい？」

「ん？　うん、勿論いいよ。あ、でも、まだ修理し終わってない物もあるし、不安定な棚もあるから、手を触れる時は気を付けてね。」

「はーい！♪　えっへへ～♪」

さあ～って、許可も貰ったしぃ♪　どこから見て回ろっかな～♪

「……全く。返事はいつもいいのだがな。」

「まあまあ、いいじゃない。……何か最近は大分塞ぎ込んでたみたいだし。元気じゃないリエルは、僕達だって見ていたくないもの……ね、リア？」

「……まあ、な。『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』……出来得るならば、決して相見えたくはない相手だな。」

「……うん、そうだね。さ、僕達も気を取り直して、修理しようか。リア、今度はそれを戻して、逆側をお願い。何か大分複雑な構造してるみたい。結構、時間掛かりそうだよ。最後まで、お願いね。」

「無論だ、任せてくれ。私とて、直せる物ならば是非共、直してやりたいからな。」

ハルちゃんとリア姉が作業している間に、のんびりとあちこち眺めていようっと。
って思ってた矢先、面白い物が沢山ある棚発見！　早速調査しちゃおう！
壁に取って付けただけの木製の三段棚で、何か雑多っていうか、乱雑に置かれてる……。

「……？　あれ？　これ、何だろう？」

その中でも一際気になったのが、何か四角いだけの箱。
それ以外の物は、何と無くどんな物か類推出来るけど、これだけ何の装飾も無くて、何か変。
あたいの第六感が、それが絶対に面白い物だって告げてる！
これはもう、絶対に調べてみるっきゃない！！　早速、手に取って見てみよう！

「……ホントに何だろう、コレ？」

横を見ても引っ繰り返してもやっぱり何にもないや。……って、あ

れ？
これ何か真上に、押せるボタンっぽいのがある。押してみようっと、ぽちっとな！

「……って、うわあああああっっっ！！」

押した瞬間、勢いよく箱の中からナニカが飛び出して来た！？　よくあるビックリ箱の奴！
バネが付いていて、顔だけがその先端にくっ付いてる奴！　あれのとんでもなくでかい奴！

それが思いっ切り真上に飛び出すと、後ろに反り返って、
その反動で思いっ切りあたいの方へ、顔だけ倒れ込んで来た！　しかも顔、ものっそい怖い！
このピエロ顔、こ、ここ、怖すぎるぅっ！！？

も、ももも、もう、無理ぃいいいいいっっ！！！

「い、い、い、イヤアアアアアアアアッッッ！！！！！！」

こ、こ、怖かったぁ～……も、もう、目を開けても、大丈夫だよね？
あ、開けるよ？　開けるからね？　も、もし、まだあったら、あたい泣くからね！？

「……～～～っ！　……あ、あれ？　空……？　……あ。」

し、しまった！？　また、やっちゃった！　やっぱり、手にあたいの杖持ってるぅ！？
そ、そっと、そぅ～っと、後ろを見てみると……。

「「……。」」

「「……ご、ごめんなさ～い！！」」

そう叫んで、一直線にあたいは逃げ出した！　だ、だって、無理だもん！
リア姉、怒り出すととんでもなく怖いんだもん！　絶対にヤだモン！
悪いの、あたいじゃないモン！　あの怖い箱がいけないんだモン！！

何か後ろから物凄く怖い声が聞こえて来たけど、
思いっ切り耳を塞いだから何にも聞こえてないモン！　きっと、気の所為だモン！！

ｓｉｄｅ：本部一階　大広間（以下、三人称）

此処はＮ・Ｎ本部一階。入口入ってすぐに設けられた、文字通りの大きな広間である。
今は閑散としている其処に、一組の男女が寄り添ってソファに凭(もた)れて居た。

一人は、『螺旋使い(ザ・ドリルマスター)』グラウス＝ガンドレル。第四席に当たる。
今一人は、『拳使い(ザ・ナックルマスター)』ガブリュース＝シュレスト。御存知、第七席に当たる。

公の時とは違い、今はのんびりと二人で恋人同士の語らいをしている所であった。
丁度そんな時。入口の向こうから猛スピードで駆けて行こうとする小さな影が一つ見えた。

「……ハァ。また、何かやらかしたな？　アイツめ……。」

「まあまあいいじゃねェか。御蔭でこちとら毎日退屈しねェで済むんだからよ。」

「……あの子の騒動をそんな程度で済ませられるのは、アンタぐらいなもんよ。」

また何かやらかしたのかと、片や、溜息を付きながら自身の妹に。

「こまけェこたァいいんだよ！　今を楽しまねェでどうすんだッての。
おい、それより早く呼ばねェと行ッちまうぜ？」

片や、また面白そうな事が起こってるなと持ち前の好奇心で将来の

義妹に。

「……ハァ。はいはい、分かったよもう。ほら、ラウスも。」

「おゥともよ！　「おーい！　エル坊（アリエル）！」」

二人同時に、遠くから大声で話し掛けた。

アリエルは遠くから自身を呼ぶ声が聞こえ、思わず逃げ足を止めて辺りをキョロキョロすると、
本部入口先の大広間に、実姉と将来の義理の兄に当たる人が、二人揃って手を振っていた。
頭に耳やお尻に尻尾を生やし、思いっ切り振っているのが傍目からでも解る程に、
それはそれは嬉しそうに二人の許へと駆けて行った。

「ガブ姉！　グラ兄！」

「よォ、エル坊！　ま～た、何か面白い事してやがんな？」

「ん～～……♪　え～、と……え、エヘへ♪」

駆け寄って来たアリエルの頭を撫で回しながら、グラウスは好奇心一杯の瞳で聞いた。
アリエルは、その撫で回される心地良さを味わいながら、何とか誤魔化そうと笑ってみた。
……が、当然ながら実の姉にそんな誤魔化しが通用する訳も無く。

「……ハァ、全く『エヘへ♪』じゃないよ、本当に。で？　今度は一体、何やらかしたの？」

「べ、別に何でもないモン。そ、そんな大した事は何もなかったモン！」

ジト目で妹ににじり寄るガブリュースに。タジタジながらも決して言わないアリエル。

そんないつもの光景、というか特にアリエルの今の姿を見ていると、グラウスは先程から堪えていた笑いを堪え切れずに、思いっ切り噴き出していた。

「グ……ブフッ！！　ガッハッハッハッハッハ！！！」

「「おわっ！？　な、何？　一体、どうしたの？　グラ兄（ラウス）？」」

「え、エル坊、お、おま、身体の後ろに、そんな葉ッぱくッつけといて、プッ、ククッ！！」

「「へ？　……あ。」」

突然大声で笑いだしたグラウスに驚いた姉妹だったが、言われて気が付いた。

確かに、後頭部やら背中やらに沢山葉っぱが引っ付いている。

つまりそれは、そんな事にも気付かない程、急いで何かから逃げて来たという証でもある。

益々、睨み付ける眼を鋭くさせる姉に、更に挙動不審になる妹。

「こ～ら、アリエルっ！　好い加減白状しちゃいなさい！　今度は一体何をやらかしたワケ！？」

「な、何でもないモン！　あたい、何もやってないモン！　何も悪くないモン！！」

「い～や、嘘だ！　大体嫌な予感はしてたんだ……アンタの小さい姿が遠くから見えた時から！」

と、此処でガブリュースが思わず禁句を口にしてしまった。
あ、と慌てて口を塞ぐも既に遅く、あッちゃァ～、とグラウスも天を仰いでいた。
案の定、アリエルは顔が見えないぐらい俯き、肩と言わず全身をプルプルと震えさせ……。

「だ、だ、だだ、だ～～～れが、真正のマイクロ粒子級の極小ドチビですってぇ～～！！！」

そして、爆発した。

「いや、だから誰もそこまでは言ってないってば。」

「『そこまでは』？　『は』って事は、やっぱりずっとそう思ってたって事ねぇ？！
ガブ姉のバカッ！！　アホッ！　ガブ姉なんて大っっ嫌いっっっ！！！！」

火に油とはこの事であった。
ガブリュースにとっては何気無く出てしまっただけの言葉であったが、
それだけに無意識に本心から出てしまった為、咄嗟の判断で否定する事も出来ず、
それに対して尚の事、激昂するアリエルであった。

「……しっかしまあ毎度の事とは言え、よく『小さい』ッて言葉から、
そこまでゴチャゴチャと付け加えられるもんだな。
何だっけ？　『マイクロ粒子級』の『極小』『ドチビ』だっけ？」

「あ、こら、ばかラウスっ！？」

「ん？　……あ、しまった。」

苦笑しながらも、何とか矛先を躱させようと助け舟を出したグラウスであったが、
残念ながらその船は、数百トンもの積載量を誇る石油タンカーであった。
唯でさえ燃え盛っている所に、更なる燃料をぶち込んでしまったのである。

二人が危惧した通り、アリエルは再度俯きながら何かをブツブツと呟いている。
しかも、既にその手にはアリエルが本気の戦闘時に使う杖が握られていた。

「――――も～～～、アッタマきたッ！！　絶対に許さないんだか

らっ！！
　二人共、さっきの工房みたいに、思いっ切りぶっ飛ばしてやるんだからぁっっっ！！！」

だが、その口から出た言葉は、場の空気を鎮静させ凍らせるには十分な効果を持っていた。

「「……は？」」

「――え？　……あ。」

二人が突然固まった事にアリエルも驚いたが、改めて自分の台詞に、自身も顔を蒼褪(あおざ)めた。
そんなアリエルに、逃がすものかと二人で詰め寄った。

「ちょっと、アリエル！　今のは一体どういう意味よ！！
アンタ、今度はハルにまで迷惑掛けちゃった訳！？
それで、さっき工房の方から逃げて来たんだね！？」

「おい、それよりも一体工房の何処を壊したんだ？　……ッておい、逃げんな！
　どうせここまで言ッちまッたんだ、最後までバラしちまえ！　で、何処壊したんだ？」

「あ、う、え、えと、その……入口傍の、三段の木棚の……。」

今度は其処迄聞いたグラウスが顔を蒼褪める番であった。
その表情の変化を見てアリエルは、ハルニスが言っていた事を思い出した。
確か、彼はこう言っていなかったか？

『久し振りにみんなから同時期に修理をお願いされてさ。
君達兄妹、四人以外のみんなからね。』

その言葉を思い出し、アリエルは青褪める所か、顔色が完全に真っ白くなっていた。

「んだとォッ!?　あそこには、俺の頼んどいた奴もあッた筈だ……！
……おい、エル坊。ちョッとばかし、今回はオイタが過ぎた様だなァ、えェ、おいィ!?」

「ひっ!?　ご、ご、ごめんなさ～～～いぃぃ!!!」

「あ!　テメェ!　マテ、ゴラァァァ!!!」

「あ、ちょ、ちょっと、待ってよ!　ラウスってばぁ!!」

こうして、アリエルの逃走劇第一章は始まったのであった。

ｓｉｄｅ：管理棟一階　渡り廊下

必至に逃げ捲り、何とか一旦二人を撒いたアリエルは、この渡り廊下にて少し休憩していた。
何とか少し落ち着けた頃、廊下の先から何か話し声が聞こえる。
何と無く聞いていると、どうやらこっちに向かって歩いて来ているらしい。

その様子から、グラウス達では無いと思ったアリエルは、
体力が回復した事を確認し休憩を終わらせて、その儘声のする方へと自分から近付いた。

「――――あら？　アリエルじゃなくって？」

「む？　フンッフンッ！」

「あ、ラフィ姉にねるーだ！」

向こうから連れ立って歩いて来たのは、第六席『鞭使い（ザ・ウィップマスター）』ラフィレス＝シュレスト。
そして、第九席『筋肉使い（ザ・マッスルマスター）』ネルベリ＝ジュメイグであった。

アリエルは早速、ネルベリの異常に筋肉が盛り上がった腕に跳び付

き燥(はしゃ)いだ。
ネルベリもいつもの如く、燥ぐアリエルをより愉しませようと腕(きんにく)を盛り、上げ下げしたり、
思いっ切りぶん回したりし、丸で遊園地のジェットコースターの様に遊ばせていた。

「わぁ～～っい！　あはは～♪　筋肉すご～い♪　きんにくきんにくぅ♪」

「ふんふんふんふんぬぅぅぅっっ！！！　きんにっくぅぅぅーーーーー！！！」

「……貴方達、本当に仲良しよねぇ。」

「もっちろん♪」「マッスゥゥゥ……ルッッ！！！」

「……ま、いいけど。」

若干諦めた感でそう言うと、ラフィレスは近くにある壁に設けてあるベンチに座った。
ネルベリは相変わらずアリエルと戯れている。唯でさえ子供が大好きな彼である。
況(ま)してや、自分を慕ってくれている可愛い将来の義妹とあっては、その愛情も一入(ひとしお)だろう。

そんな微笑ましい光景を見ながらも、ラフィレスは先程から気になっていた事を口にした。

「……ねえ、アリエル？　私、一つ聞きたい事があるのだけれど。」

「まっするぅ～♪　……ふぇ？　なぁに、ラフィ姉？」

「……貴女、また何かやらかして逃げ出して来たのではなくて？」

「……ギクギクゥッ！？」

「きんっ！？　マッスールゥ！？」

真剣に見詰めて来る二対の眼に、アリエルは十秒と持たずあっさり観念した。

「……ごめんなさい。」

「……ハァ。やっぱり、またやらかしたのね、貴女。それで？　今度は一体何を？」

「えっと、その……工房を、ちょっと、壊しちゃって……。」

「マッソォー！？」

「……貴女の場合の『ちょっと』は、『ちょっと』だった試しが一度も無いのだけれど？
で、実際の被害はどれぐらいなの？」

長姉による更なる追及の手に、ちょっぴり涙目になりながらも正直に話すアリエル。
その間、ずっとネルベリがアリエルの頭を撫でてはいたが。……が。

「多分、半壊ぐらい。だって、入口近くの壁、丸ごと消し飛ばしちゃったし。」

だが、その口から出て来た言葉には、さしものネルベリもその手を止めていた。
何故ならラフィレスと一緒になって、完全に一瞬固まり驚いていたからだった。

「……は？　な、何ですってぇっ！？　貴女ねえ……！」

「ま、ま、まま、マッソォォォォォーーーッッ！？！？」

「ひうっ！？」

……まぁ、悲鳴を上げたくなる気持ちも解る。と、それはさておき。
今度は先程と真逆で、ラフィレスがアリエルに詰め寄り、ネルベリが慌てて止めに入っていた。

「あそこにはねぇ！　私がネルに頼んでおいた修理品があったのよ！？
それを、この子はよくも……！」

「ま、ままま、まっそぉ、まっすぅ～るぅ～！？」

「貴男はおだまりッ！！」

「まそっ！？　……にっくぅ～……。」

と、其処でハッと気付いた。
ネルベリに気を向けていた瞬間に、既にアリエルは逃げていたのである。
遠くで彼女の声がする。その先には既に小さくなった彼女の後姿が辛うじて見て取れる。

「ラフィ姉、ごめんなさ～～～い！！！　ねるー、助けてぇ～！！」

「ア～～～リ～～～エ～～～ル～～～～～！！！！！！」

「マソッ！？　きんっ……にっくぅ～？」

「ええ、勿論！　急いで追い掛けますわよ、ネル！
あの子をとっ捕まえて、今度こそ一晩御説教してやらなくては！
これも長姉としての責任ですわ！　いつもミディ兄様にばかり苦労は掛けられませんもの！」

ラフィレスの瞳を覗き、その想いと覚悟を感じたネルベリは突如、雄叫びを上げた。

「マッスゥゥルゥゥゥ！！！　ムンムンムンフンフンハッハッ！
きんにっく！」

「ええ、御願いしますわ――――私のネル。」

「マッソォォォォォォォォォォーーーーーー！！！！！
フンフンフンフンフンフンフンフンフンフンフンフンフンフンフ

ンフンフン！！！」

ネルベリは突然叫び出すと、ラフィレスを自身の右肩に乗せ、丸で暴走機関車の如く、アリエルが逃げた方向へとあっと言う間に猛突進して行った。

ｓｉｄｅ：某所　草場の繁み

「――――ふう。ここに隠れていれば、取り敢えずは暫く時間稼げるかも……。」

「「……こんな所で何やってるの？」」

「うわっ！？　……って、ルトとハルか。驚かさないでよ、もう。」

叢（くさむら）に隠れていたアリエルに声を掛けて驚かせたのは、双子の姉弟。第十一席『智慧使い（ザ・ブレインマスター）』ミルト＝カルロスと、第十二席『勇気使い（ザ・ブレイブマスター）』ハルト＝カルロス。

「「ねえねえアリエル。」」「何やってるの？」「かくれんぼ？」

「へ？　え、え～っと……あ、そうそう。今、かくれんぼ中なの。だから静かにしててね？」

「む～……嘘だ！　今、ちょっと考えた！」「そうだそうだ！　ホントの事教えてよ～！」

「え、と、その、え～と……あ、アハハ。」

「む～、そんな事じゃボク達は誤魔化されないぞ～！」
「そうだそうだ！　教えてくれないと大声でアリエルがここにいるぞ～って叫んじゃうぞ～！」

そう言って、徐々にアリエルに詰め寄るミルトとハルト。
この好奇心旺盛と言うには余りにも旺盛過ぎる双子に見付かったのが運のつきと思い、
アリエルは諦めて、事情とこれ迄の経緯を説明した。

「……って訳なの。だからお願い、静かにしててね？」

「「む～～～！　アリエル酷い！　ボク（僕）達もハル兄に修理頼んでたのに！」」

「だ、だからごめんってばぁ。今度ちゃんと何かお詫びするから、ね？　ね？」

そう言ってアリエルが二人に平謝りすると、暫く唸っていた二人も、其処迄言うのならしょうがないと、諦めた様な素振りを見せ、アリエルは安堵した。

「「う～～～……まあ、そこまで言うならいいけどさ。

あ、みんな～！　こっちにアリエルいるよ～！！」」

所がどっこい。グラウス達の姿が見えると、あっさりアリエルの居場所をチクっていた。

「んなっ！？　ルトとハルの裏切り者～～～！！！」

そう叫びながら、超速でアリエルはその場を脱兎の如く逃げ出していた。

「「だって、こっちの方が面白そうなんだもん♪」」

“これは酷い。”

アリエルを追い駆けて来た皆は、その最後の遣り取りを聞いただけだったが、

それだけでも十分に、三人の間の事情を何と無く察していた。

「……相変わらず揶揄われ易い子ねえ。」

「きんにっくぅー。」

「……アタシ、そろそろ真剣にあの子の将来が心配になって来ちゃったよ。」

「まあ、ソイツには激しく同意するがな。おい、其処のチビッ子二人！　お前らも手伝え！」

「「はーい！　ねるー、片腕貸して～♪」」

「マッスゥルゥ～♪」

ネルベリは、自身の空いていた片腕に跳び付いて来た双子を自慢の筋肉でガッシと支えた。
キャイキャイ燥ぐ双子も加わり……グラウス、ラフィレス、ガブリュース、ネルベリ。
そして、ミルトとハルトの双子の姉弟。総勢六人でのアリエル捕縛計画が始動していた。

ｓｉｄｅ：中庭

「う～……悔しいけど、こんな時はあたいの身体がちいｓ……じゃなくて。

大きさが大きくない事が助かるんだよね。ううん、素直に喜べないよぉ～；；ｏｒｚ」

辛うじて皆を再度撒く事に成功したアリエルは一人、中庭の草陰で項垂れていた。

少ししょんぼりした後、気配を探ろうとふと顔を上げた時だった。

丁度目の前（と言うには少し距離があるが）に、とある少女の姿が見えた。

「あ――――これは……！　い、急いでみんなを止めないと！」

ソレを見たアリエルは、自身が追われる立場だというのに、逆に皆を見付けて騒動を止めようと奔走し始めていた。

「あ、見付けたぞ、あんにゃろう！」

「アリエル！　ここであったが百年目ですわよ！」

「「みっけた～♪」」

「アリエル！　大人しくしてなよ！」

「むっふー！　きんにっくにくぅー！！」

「ちょ、ちょ、みんな、静かに！　しーーーっ！」

追っ掛けられている筈のアリエルが自分から近付いて来た上に、何やら可笑しな様子を見せる彼女に、皆思わず顔を見合わせた。
そして、当の彼女がそんな事をする理由……一つだけ思い当たる節があった。
そうだ。そう言えば、今日は誰も、今朝から一度も彼女の姿を見ていない。

「もしかして……アリエル？」

「……うん、いつもの場所で。」

「そういう事か……なら、しょうがねェなァ。おい、エル坊。さッさと案内しろよ。
そいつで今回はチャラにしといてやるよ。」

「もう、結局ラウスはこの子に甘いんだから。……ま、しょうがないけどさ。」

「さ、早く行きましょう。あの子に勘付かれてしまってからでは遅いんですのよ？」

「マッソォ～（小声）！」

「「うんうん♪　早く行こう行こう♪」」

「うんっ！」

そう口々に言うと、総勢七人の一行は、先程アリエルが立ち止り引き返した場所迄戻って来た。
そして、各々の視線の先に目当ての人物がいる事を確認すると、全員各々の能力を使い、
皆で協力し合って自分達の気配を完全に断ち、目当ての少女がいる場所のすぐ傍。

其処の、人が隠れるには十分過ぎる群生した叢中（そうちゅう）へと身を沈ませ、件の少女の様子を伺った。……どうやら今回も、案の定気付かれてはいない様だ。

「にしても、あの子、本当いつも何処にいるんだろうね？」

「……まあ、あの子の事ですもの。きっと何処にでもいるのでしょう。」

「昨日はアルニス様の部屋の天井裏に居たよ。」「一昨日はシュガル様と何か話してたよ。」

「……ホント、何処にでもいるよね。流石はあたい達のルリルリ。……可愛いなぁ。」

「全くだ。アイツがいなかったら、俺達の生活が一体どんな事になってたやら。」

「にっくにっく、きんにっくっ！」

と、皆が相変わらずの小声で思い思いに件の少女……つまり。

第十三席『闇影使い（ダーク&シャドウ）』アルメイ＝シルリへの感想を述べながら、彼女を観察していたら、何時の間にか大分時間が経ってしまっていた様であった。

何せ、アリエルに工房を半壊させられたハルニスとリャノールが、揃って中庭に皆を、というか寧ろ、アルメイを探しに此処迄来ていた事に、

誰もが全く気付かなかった程なのだから。

「……あれ？　みんな何しt……っと。」

「ん？　どうした、ハル？　……ああ、そういう事か。」

「あ、ハルちゃん、リア姉！　……あ、あの、その、工房は？」

「あ、うん。大丈夫だよ、リエル。工房はもうちゃんと直ってるよ。みんなから頼まれた修理品も、メイとリアの御蔭で何とか壊れずに済んだみたいだし。

後は今日と明日徹夜すれば、大体修理も終わるしね。リエルが気にする事は何もないよ。」

「そ、そうなんだ……よ、よかったぁ……。……その、ごめんね、ハルちゃん、リア姉。」

「……全く。幾ら我々が、お前やアルニス様の騒動には慣れっこだからと言ってだな。

もう少し、程度というか頻度というか、抑えようという努力を……。」

「ま、まあまあ、リア。
リエルだって反省してるし、何より悪気があった訳じゃないんだし、ね？」

「む……ハァ、全く。お前はいつもアリエルには甘いな。
……いや、甘いのは我々全員か。」

その言葉に、思わず苦笑する者、溜息を付く者、ニヤニヤする者、マッスルする者、と。
それぞれの反応を返したが、結局皆の意見も思いも一緒だった様だ。
各々、アリエルの頭を小突いたり、撫で回したり、抱き着いたりとしながら、
それで、この一連の騒動は終わりにするつもりの様だ。

皆、誰しもが甘いなぁとは思いつつも、これが自分達なのだからと諦めにも似た境地でいた。
一方、当のアリエルはよく分からないという感じではあったが、確かに感じられた皆からの愛情と、許して貰ったと何と無く感じたのもあって、
先程迄のどんよりとした気分は何処へやら、すっかりアリエルにも笑顔が戻っていた。

丁度そんな頃だった。
アリエル達の長兄。第三席『神霊使い（ゴッド&スピリチュア）』ミディクェード＝シュレストが此処に来たのは。

「む？　お前達、そんな所で一体何をやっている？」

「あ、にぃ！　しーっ！　こっちこっち！」

「……何？　おい、お前達。私はこの愚妹（アリエル）を捕まえろと命じた筈だが？
　何故に仲良くこんな所で一塊になっている？」

「あ～、いや、そいつは申し訳ねえ。
だけどまあ、アレを見付けちまッちャァ、そいつもしョうがなくてな。」

「ん？　……ああ、そうか、成る程。
確かに、彼女の休憩中の姿が見られるのは希少だな。」

「まあ、そういうこッた。ディーク、お前さんも最近大分激務で、身体崇ッてんだろ？
ここいらで少し休んで疲れでも取れや。どうせ、仕事も或る程度キリ付けて来たんだろ？」

「確かにそうだが……まあ、いい。確かに、私も偶には休みが欲しいからな。
　それと、アリエル。お前には後で話がある。決して逃げぬ様に。」

そう言うと、涙目になっている末妹には構わずに、
ミディクェードは、その場にドッカと腰を下ろして深く長い溜息を付いた。

果たして。それから一体何時間過ぎただろうか。
体感的にはそれ程経ったとは思わなかったが、辺りが黄昏色に染まっているのを見ると、
どうやら数時間は確実にここに皆して固まっていた様だ。
だが少なくとも、それを自覚するには外部からの声が必要だった様で。

「……矢張りか。此処に居たのか、お前達。」

その、誰にとっても、誰よりも大事で、大切で、愛おしい声を聞く迄、全く気付かなかった。

「!?　シーッ！　シュガル様、こっちこっち！」
「そうだよ、シュガル様。バレちゃうでしょ！」

「……ああ、分かっている。それにしても、矢張り、全員此処に居たか。
……ハルニス、リャノール。工房はどうなった？」

皆と同様に草場の影に隠れたシュガルは、真っ先に工房の事を尋ねた。

「はい、シュガル様。工房自体は、もう完全に修復し終えています。リアとメイの御蔭で。ですが、シュガル様に依頼された物は、未だもう少々掛かるかと。
いえ、シュガル様のみならず、恐らくは皆の分も……申し訳ありません。」

「いや、何構わん。私は、アレが直りさえすればいいのだからな。時間は掛かっても構わん。他を優先してもいい。だが、確実に直してくれ。」

「はい、畏まりました。僕とリアに任せて貰えれば、どんな物でも必ず直してみせます。」

「ああ。信頼している。」

それを確認し終えたシュガルは次に、その傍で休んでいたミディクエードに話し掛けた。

「ミディクェード。」

「……シュガル様。申し訳御座いません。」

「何、構わん。アレならば仕方ないだろう。今日はどれくらいだ？」

「……凡そ、六時間程かと。」

「……それはまた。御互いに良く飽きんな。」

「……まぁ、そういう娘ですし。それに、これが我々ですから。否定は致しません。」

「……ああ、そうだな。」

そう言うと、暫しシュガルも皆と一緒に、目の前の少女を眺めていた。

誰にも邪魔されずに一人のんびりと紅茶を嗜み、ゆっくりと休憩しているアルメイの姿を。

が、それも束の間。少し黄昏ていたと思ったら、アリエルの元へと身体を動かした。

当のアリエルは、ドキドキと嬉しさと恥ずかしさで、顔を赤らめていたが、

シュガルはそんな事を微塵も気にもせずに、アリエルに声を掛けた。

……処刑執行の開始を告げる言葉と共に。

「アリエル。」

「あ、シュガル様～？　……えへへ～♪」

「アリエル。話がある。」

「話？　えへへ～、一体何だろう♪」

「今朝の、お前が起こした騒動についてだ。」

「……え　？」

その瞬間、物の見事にアリエルの時が止まっていた。
しかし、シュガルは相変わらず気にも留めずに、
アリエルを小脇に抱えて拉致りながら、更なる死刑宣告を出した。

「さて、では行こうか。今回は、私とミディクェードのみならず、
アルニス様からも、直々に御言葉があるそうだ。心して置く様に。
」

「ひぃッ！！」

「では、行くぞ、ミディクェード。」

「……畏まりました。」

「だ、誰か！　助け……！」

恐怖心から思わず、アリエルは皆に助けを求めたのだが……。

“だが断る。”「マッスゥールッ！」

「み、みんなの、薄情者ーーーッ！！！」

“いや、どう考えても自業自得でしょ（だろ）。”「まっする。」

結局あたいは、にぃとシュガル様とアルニス様にこっぴどく叱られました。

ううう……あたいだって、あんなおもちゃが無ければ、あんな事しなかったのに。

……でも、結局あのおもちゃって誰のだったんだろう？

ハルちゃんは教えてくれなかったし、ルリルリは何故かニヤッて不気味な笑い方するし。

う～～～……やっぱ、今日は……うん。楽しかった、かな？　エヘヘ♪

最後はちょっとヤだったけど……偶にはこんな日もいいよね♪

アリエル＝シュレストの日常（後書き）

如何でしたでしょうか？

え？　微妙に台詞が違うって？　細けぇこたぁいいんだよ！

次話は、皆様御期待（？）のあの子の視点での騒動の一部始終。
その残りの一部、と言うか裏話的なものです。

その話の後は、誰得なＮ・Ｎの新メンバーの紹介。要は『番外・陸』です。
え？　どうせまた皆殺しにするんだろうから要らないって？　フッフッフ……さて、それはどうでしょう？

『番外・陸』を書いた後は、以前活動報告で書いたサプライズになります。
……アレ、サプライズになるのかなぁ？　……ま、いっか。（マテ

その後。到頭、その後に『魔法先生ネギま！』世界に入ります。
この世界では、ちょっと今迄とは違ったカイト達になると思いますので、皆様御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

アルメイ＝シルリの裏話（前書き）

現時刻（００：０５）
ＰＶ：２，９８２，２００アクセス　ユニーク：２４２，４５７人
皆様、今話も御覧頂き有難う御座います。

フハハハハ。私が次弾を装填していないとでも思ったのかね？　甘い、甘いぞおおお！！！

と言う訳で。
今回は前話の後書き通り、アルメイ視点での騒動の一部始終……の残り一部の裏話になります。

では、今話も拙作を御覧下さい。

アルメイ＝シルリの裏話

ｓｉｄｅ：幹部棟二階　アリエルの部屋

《此処は幹部棟。Ｎ・Ｎ本部に向かって東側にある、幹部専用の寝室他が完備してある場所。
そして、この部屋は第八席『魔力使い（ザ・マジックマスター）』アリエル＝シュレストの部屋。
未だ日も明けない早朝。何やら悪夢らしきものに魘（うな）されて？いている人……基（もとい）、幼女。
この部屋の主、アリエルその人が、何か呻き声を上げながら何かを言っています。》

「う……くっ……や、やめ……て……や、ゃだ……あぁぁあぁぁあ……！！！

や、やめてえええぇぇぇぇぇぇえええええ！！！！！」

《そう叫ぶと、布団を跳ね除けながら上半身のみを勢いよく起こしました。
息も荒く、寝汗か冷や汗か判らないものを大量に流しながら息を整える事、数分。

少し落ち着いたと思ったら、その儘後ろに倒れ伏し、右腕で顔というか両目を覆い、
深く長い息を付くと、何やら愚痴を大きい声で虚空に向かって零し始めました。》

「……ふぅ。あ～～～、もうっ！！　……ホンッッッッット、嫌んなるっ。
こう、しょっちゅう夢にまで顕れられちゃ、幾らあたいだって、もたないっつーのよ……。
もう、やだ。ホント、やだ。もう、全部、何もかも、やだッ！！！
何もかも……ホント、何もかも、全部が全部……！　アイツの所為だッ！！

――――あああああああぁぁぁぁぁああああああぁぁぁぁああああああ！！！！！！」

《そう、己が感情に任せて勢いの儘に長々と大声で叫びました。》

「よっと。……ん～～～っ！　すぅ～～～……っはぁ～。……いよしっ！
何があろうとも、あたいはあたい！　今日も一日がんばろー！
えいえいおー！」

《すると、それで大分スッキリしたのか。小さな、小さな身体で布団を蹴って跳ね起き、
目一杯に小さな身体で背伸びして、空気をその小さな身体の中に

沢山吸い込み、
小さな身体で今日も一日頑張るそうです。》

「……む？　何か今、途轍も無くイラッとしたんだけど……気の所為か。
……って、え？　ちょっ、う、嘘ぉっ！？　まだこんな時間なのぉっ！？
そ、そう言えば、まだそんなに……ていうか、全然明るくなかった……はぁ。
何か、今日一日は踏んだり蹴ったりな日になりそうな気がするなぁ……。」

《何かに感付いたのか、辺りの気配を探る幼女。ですが、彼女の周りには全く何もありません。
気を取り直して手元にあった時計を見てみると、何と余りにも早朝ではありませんか！
彼女は寝る時はいつも明かりを付けた儘な為、寝起きの頭では時間が把握出来ないのです。
で、改めて時間を確認した彼女は、ガクッと肩を落としました。
どうやら、何か嫌な予感が走り、陰鬱な気分に浸っている様です。
》

「う～んとぉ……こんな時間で起きてるのって、言えばぁ……
あ、ハルちゃん！
確か昨日、徹夜するって言ってたっけ。あ、でも、だったらリア姉もいるかも……。
……ま、いっか。どうせ暇だし、何とな～く、遊びに行きたいし～♪」

《と思ったのも束の間。何やら考え込んでいる様です。と思ったら

即座に思い付いた様です。
どうやら、取り敢えずの今日これからの方針が決まった様です。

（どうも彼女の言葉から察するに、向かう先はこの幹部棟の一階にある工房。
第十席『機械使い（ザ・マシンマスター）』ハルニス＝マッシルドの所の様です。其処には彼女の言う通り、
恐らくは彼の恋人の第五席『粒子使い（ザ・ミクロマスター）』リャノール＝ガジャルドもいるでしょう。）

と、行動方針を決めたら早いの何の。早速、ベッドから飛び降りると、
まずは寝汗を拭う為にシャワーをさっと軽く浴び、その後、箪笥（たんす）へ一目散に駆け寄り、
服を出し着替え、髪を整え、鼻歌を歌いながら食パンを咥えながら、
外へ勢いよく飛び出し駆け去って行ってしまいました。
……ハァ。では、しょうがないので私も彼女の後を追うとしましょう。

……何か、一瞬背筋に物凄く嫌な悪寒が走ったのは私だけでしょうか。
彼女自身が起こすであろう騒動とは、また別の何か嫌な……た、多分、気の所為でしょう。
うん、多分、そう、だと、いいなぁ……。≫

ｓｉｄｅ：幹部棟一階　工房

《此処は幹部棟の一階。その最も奥まった所にある、ほぼハルニス専用と化している工房。
出入りが結構ある入口から最も遠ざかった場所……つまり、最も喧噪から離れた場所。
故にハルニスと、その恋人であるリャノールはそれをイイ事に、いつも其処でイチャイチャイチャイチャ。時には、イタしてる事すらもある場所。

さて、今はアリエルが悪夢から目覚めてこちらに突進して来る少し前。
彼等の話から覗いてみましょう。》

「……それは構わんが、余り他人のプライベートをペラペラと喋るのは感心せんな、アルメイ。
と言うか、だな。……何故にこういう時に限って、こいつは饒舌になるのだろうな？」

「まあまあ。それぐらい別にいいじゃない、僕達は他人じゃない家族なんだし。
それに、僕はこういうメイも好きだよ？　可愛いしね。」

「……ハァ。……全く、お前はいつでも誰にでも甘いな、ハル。」

「ふふっ……有難う、リア。」

《……とまぁ、色々な意味でバレバレだった訳ですが、そこはさておき。
私の事は御気に為さらず、どうぞいつも通りバカップルの会話を。》

「……何か、少しトゲを感じるのは私だけだろうかな？」

「くすくす……。あれは、メイなりに気を使ってくれてるだけだよ。分かってるでしょ？」

「……う、うむ、まあ、な。では、遠慮無く。……で、さっきの話の続きなのだが。
今、お前が手にしているソレだが……中々複雑そうだな。」

《そう恋人のハルニスに言われると、少し渋々といった感じで元の会話に戻るリャノール。
どうやら、先程迄の話題は、今ハルニスがその手にしてる謎の箱型の物体の様ですね。》

「うん、そうだね。……これは、ちょっと僕だけじゃ難しいかも。リア、手伝ってくれる？」

「ああ、勿論だ。遠慮はするなといつも言っているだろう？　私達は、その……なんだ。
あの……あれだ。一応、その、恋人、なのだから。」

《……矢張りバカップルでした。まぁ、この会話内容を聞いただけで御判りだとは思いますが。
これも一体、私達は冗談抜きで何百回聞いた事か判らない程、毎日聞いている台詞です。
その度に、リャノールはいつもの凛とした武人然たる姿はすっかり鳴りを潜めています。
今の彼女の姿を見れば誰しもが、恋人に対して照れて顔を赤らめているだけの、
単なる可愛らしい女性としか映りません。……可愛い美人さんとか、本気で卑怯です。》

「……うん。それじゃ、お願い。ちょっとね、ここの構造が解らないから、
ここと、ここ。後、こっちの中の方を全部分解して欲しいんだけど……。」

《そんな彼女に微笑みながら頷くハルニス。彼女が益々顔を赤らめたのは御愛嬌ですね。
それはさておき。そんな可愛らしい彼女にも構わず、修理屋としての顔に戻ったハルニスは、
早速リャノールに指示を出し始めました。彼女も恋人としてのリアから、
修理屋の協力者としての顔に戻り、即刻作業に没頭し始めた様子です。》

「ああ、それぐらいならばお安い御用だ。どれ……こんな具合か？」

「……うん、少しそのままでお願い。また後で元通りに直して欲しいから。」

「分かった。いつでも構わん。好きな時に言ってくれ。」

《ハルニスに指示された箇所を粒子に分解し、空中に止まらせたリャノール。

ハルニスがこの謎の箱型物体Xの中身とその構造を調べ理解する迄、

暫く無言の時間が続きました。尤も、それは決して嫌な時間ではなく、

静かに穏やかに……そして、緩やかに過ぎていく、優しい時間でした。》

《二人が作業に没頭し、凡そ三十分程経ったという頃。丁度その時でした、彼女が来たのは。

ひょこっと工房の入口辺りの壁から、頭だけを出し中を覗いては引っ込むという、

何とも可愛らしい行動を繰り返している小動物に、私達は三人揃って気付いていました。》

「……おい、ハル。」

「……くすくす。うん、呼ぼっか。

ああしているのをじっと見ているのも可愛いけど、流石に可哀想だしね。」

「……ハァ、仕方ない。……エル、いつまでもそんな所にいないで、

さっさとこっちへ来い。」

「あ……えへへ、バレちゃってたか。」

《何故アレでバレていないと思ったのかと小一時間程問い詰めたい所ですが、それはさておき。

こっそり覗いていたアリエルは、小さな身体で目一杯元気にこちらに駆け寄って来ました。》

「……む？　また何か、イラッと来た気がする……。」

「？　気の所為じゃない？　特に誰も何も言ってないし。ねえ、リア？」

「ん？　ああ、そうだな。（こら、メイ。余計な事を言うな。色々と危険だろうが。）」

《窘められました。でも私はそんな事は一向に気にしません。これまでも、これからも。

何故か溜息を付いたリャノールを見て、不思議そうに小首を傾げるアリエルとハルニスでした。

その後、軽く話をすると、のんびりと工房内を見て回り出したアリエル。

まあいいかと、再度作業に没頭する二人。……また、静かな時間が過ぎていきました。

……人は、こういう時間の事をこう言うのでしょうね。

嵐の前の静けさ、と。》

「……？　あれ？　これ、何だろう？」

《と、嫌な予感が過ぎったのも束の間。早速、近場にあった棚から目に付いた物を手に取り、

あれこれ弄っては調べているアリエル。……もう本当に嫌な予感しかしないＤｅａｔｈ（デス）。》

「……ホントに何だろう、コレ？　……って、うわあああああっっっ！！！

い、い、い、イヤアアアアアアアアアッッッ！！！」

《……遅かった。矢張り、案の定でした。

そのビックリドッキリ面白箱は、大いにアリエルを脅かし、面目躍如でした。

ですが、その為驚き過ぎた彼女は、思わず思いっ切り魔法をぶっ放し、

工房の壁ごとソレを粉々に完全消滅させてしまいました。

しまった！　という表情をしてももう遅いです。

ごめんなさい！　という捨て台詞を残して、脱兎の如く逃げ出してしまいました。

後には、ポカーンといった表情のハルニスとリャノール、そして私がいました。》

「――――って、コラ！　アリエル！　貴様、だからあれ程――！

！！」

「ま、まあまあ、リア。ちょっと落ち着いて、ね？」

《慌てて追い掛けようと、既に遥か遠くにしか見えない逃げ出したアリエルの後姿に向かって、
リャノールは有らん限りの声で叫びましたが、それを慌ててハルニスが止めました。
思わず、リャノールはハルニスに喰って掛かりました……が。》

「ハル！　お前、これで落ち着けなどと――！」

「大丈夫だって。僕とリアがいれば、これぐらいならすぐに直せるでしょ？
それに、壊れた物は全部まだ修理中の物だったし、幸いに被害と呼べるモノは無いし、ね？」

「む……く。だがな、ハル。好い加減、ここいらであいつには……。」

《そうですね。好い加減（そろそろ）、彼女にはオシオキが必要だと私も思いますが？》

「うん、僕もそう思うけど、でもそれは後でも出来るでしょ？
まずはこっちを直すのが先決だよ。リエルはきっと誰かが気付いて叱ってくれると思うし、
僕一人じゃ流石にここは全部直せないよ。ね？　お願い、手伝ってくれる？」

「む……むむむ……ハァ、仕方ない。お前にそうまで頼まれて

は、断れんではないか。」

「……了解、です。頑張る、です。」

「うん、有難う、リア、メイ。」

《と、いう訳で、早速三人で壊れた棚と物を、どかして直してトンテンカンしました。

……ふう。一仕事終えた、労働の汗は気持ちいいものですね。》

「……それにしても、いつも思うのだがな。アルメイが、我々の前に姿を現した時と、隠れている時のこの喋り方の違いはどうにかならんものか？」

「「それは気にしたら負けだ（デス）よ？」」

「……ハァ。」

《棚の修復が終わり、元在った様に修復物を陳列し終わると、二人に御苦労様と言われました。

アリエル同様に頭を撫でて貰い、ホッと一息付きました。

「後は僕達二人でやるから、もう大丈夫だよ。メイ、本当に有難

う。御疲れ様。」

と、ハルニスに言われたので、私は休憩する事に決めました。

勿論行き先は、私だけの秘密の場所。誰も知らない、私だけの秘密の休憩場所です。

……え？　アリエルの事ですか？　それなら大丈夫です。

工房の修復中にも、ずっと外が騒がしかったのです。

多分、アリエルがまた他の場所で何かやらかして、みんなに追い掛けられているのでしょう。

ですから、態々私が何かをする必要はもうありません。それじゃ、早速休む、です。≫

ｓｉｄｅ：中庭

「……はふぅ～～～……。やっぱ、ここで飲むお茶はさいこー、です。」

まあ、お茶といっても紅茶なのですが。……はふぅ。

それにしても、やっぱ一人でのんびり休めるココはさいこーです。

静かな風の音。細（ささ）やかな草木の繁る音。漣（さざなみ）の様に騒（ざわ）めき揺れる葉っ

ぱ達。……いい音です。
疲れが癒されますぅ……ズズッ。

「……はふ。それにしても……。」

毎度の事ながら、アリエルにも困ったものです。フォローする身にもなって欲しいです。
……まあ、今回は事の発端が発端ですし、寧ろ同情しちゃいますけど。

「……そろそろだと思う、ですけど。」

……あ、やっと帰って来たです。お帰りなさい、私の子供達。
……ふんふん、成る程。そんな事になってたですか。
相変わらず、こと騒動を広げる事に関してはアルニス様と肩を並べられますね、あの子は。

「……は、ふ。あ、そう言えば……。」

私が頼んだ修理品、結局大丈夫だったんでしょうか？
一応、ハルニスは大丈夫だと言ってましたが。
……むう、少し気になります。後で確認してみましょう。
ひょっとしたら、もう既に治っちゃってるかもしれません。

う～……私のクマたろー（※犬のぬいぐるみ）。早く戻って来て下さいです。
貴方がいてくれないと、中々寝付けないです。他の子達も可愛いですけど。
やっぱ私には、貴方の大きさとふわふわ感がないと、物足りないというか物寂しいです。

「……ズズッ。……はふぅ。……あ。」

お茶がきれちゃいました。……あ、ありがとう。お菓子も持って来てくれたですか？

流石は私の子供達です。丁度お腹が空いて来た頃でした。

私に似て、非常に良く気が付くとてもいい子達です。よしよし、です。

「……ぽりぽり。……ズズッ。……みゅぅ。……おいしいです。」

今日はこの後、のんびりお夕飯までまったりしてるですぅ～～～……

……ズズッ。

で。結局、アリエルはその後、シュガル様に見付かったそうです。

ミディクェードやアルニス様も一緒になって、三人からお説教を受けたそうです。

で、しょうがないから、みんなでアリエルが解放されるまで待ってから、

みんなで一緒にアリエルを慰めながら、みんなで一緒に遅いお夕飯を食べたです。

やっぱ、ご飯は家族みんなで一緒に食べたほーが、一番おいしいです。

あ、くまタローは結局、当日帰って来てくれたです。
ハルニスが最優先で治してくれていたです。ハルニス、ホントにありがとう、です。

「あ、所でルリルリ？」

「……はい、です。大丈夫、です。誰にも、言ってません、です。」

「それは有難う御座います。……で、一体何を御望みです？」

「……（ニヤリ）。」

「……分かりました。では、私の取って置きの御菓子を三袋分あげましょう。」

「……ちょっと、ミディクェードに御報告を……。」

「し、仕方ありませんね。では、五袋分で如何です？」

「……あ、シュガル様。」

「じゅ、十袋分です！　こ、これ以上は、私も出せませんからね！」

「……大丈夫、です。私、口はとても堅いほー、です。」

「……ふぅ。では、そういう事で、御願いしますね。
あ、御菓子はどうぞ、好きなの持っていって下さいね。但し十袋分だけですよ？」

「……了解、です。任せて下さい、です。決して誰にも言いません、です。

……アリエルが驚いた、あのビックリ箱が実はアルニス様の物で、『世界の破滅者（ワールド・ディザスター）』達一行が来た時に、驚かせようとする為だけに、修理と言う名の強化を、ハルニスに内緒でコッソリ頼んでた事なんて、

……絶対に誰にも言いません、です。」

「……ほ、本当に御願いしますね。」

「……勿論、です。任せる、です。むっふー。」

アルメイ＝シルリの裏話（後書き）

如何でしたでしょうか？

と言う訳で。結局は、アルニスが発端となった騒動でした、まる。

『アルニス×アリエルとか、何それマジで怖い。』↑N・N一同の心の声

次話は、誰得なN・Nの新メンバーの紹介。『番外・陸』です。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

番外・陸（前書き）

現時刻（１４：４０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：２，９９９，３９７アクセス　ユニーク：２４３，８３７人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

御待たせ致しました。今回はＮ（ネオ）・Ｎ（ノルニル）の全情報公開の回になります。
正直、誰得？　とか思わないでもないですが、念の為。という事で一つ。
一応、後々本編で使う設定などもちょこちょこ加えてありますので、不必要では無い……といいなぁ。

あ、今回も凡そ二万字弱というフザケタ長さですので、
御飲み物片手にどうぞのんびりと御覧になって下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

番外・陸

誰が望んだか。御待たせしました？　ほぼ本編中に使われないであろう情報こと、

N（ネオ）・N（ノルニル）幹部の全データ、一挙大公開（後悔？）の回です。

先ずは、現在のN・N、及びN・N本部周辺の説明からです。

全平行世界観測機関ノルニル……改め【ネオ・ノルニル】

抑々（そもそも）、本部が異様に広かったのは、全て前幹部が個人的に所有していた物であった。

故に現在、本部そのものを極限に縮小し、本部周辺には幹部達のみが住んでいる。

そこで余った部分を住民に全て分け与え、その上でN・Nの大地を更に巨大化させ、

更に多くの住民が住める様にし、現在では兆どころか、京とも言える人数が住んでいる。

因みに、広げたのは全てアルニスの能力『世界（ワールド）』に依るモノである。

更に現在、能力の有無に拘らず皆、共にいられる様な街に造り直されている。
尤も、以前の幹部達の家、所謂貴族連中は未だに無能力者や現在の馴れ合い幹部達を、
殊の外激しく憎んでいるのは相変わらず。
その上、元々選民思想などは全くと言っていい程無い住民達の殆どが、
却って活気に満ち溢れた現状に、更に憤りを感じている始末である。
シュガルは誰よりもそれを気に掛け、何度もアルニスに進言し苦言を呈してもいるが、
アルニスは彼等もノルニルの民なのだからと言って、未だ何ら決断はしていない。

今のN・Nの存在理由は、昔通り間違った歴史を修正する事に主眼を置いている。
尤も、血気に逸った幾人かは無謀な事を仕出かしてはいるが。
少なくとも、現在の八神カイトは、N・Nにとっては憎むべき敵でも排除すべき存在でもなく、
当然、味方でもない第三者的扱いである。もしくは、アルニスの友人。
……尚。一部不満の声が上がってはいるが、事実どうしようもないのが現状である。
後は、アルニスの無二の親友という事実が、何と言っても大きい。

現在のN・N幹部は、皆元々はシュガルがいた孤児院からの出身。
つまり、シュガルの言う通り、彼等は紛れも無く『家族』そのものなのである。
其処で自分達を育み、能力を与え、更には幹部に迄取り上げてくれ

たシュガルには、
文字通り、自分達の一生を捧げても足りない程の、恩と感謝と忠節を感じている。
故に、皆にとってシュガルは父であり、兄であり、最も尊敬する師父でもあるのである。
因みに、今はシュガルのみならず、他の幹部達も皆孤児院には顔を出している。
ハルトやミルト、アリエルにネルベリに至ってはほぼ毎日顔を出しているそうだ。

上記の通り、現在人事等はほぼ全てシュガル一人で担当しており、ミディクェード達はその手伝いをしているに過ぎず、基本は皆シュガルに一任されている。
オマケに、以前の様に血と能力を最重要視していた貴族連中は、その一切を失っている。

唯一遺された土地はほぼ没収され、一族が生きていく為に必要な分しか残っておらず、
莫大な金も大地を広げる為と住民の為という名目で十分の九強程を取り上げられた。
それでも一族が生きていくには充分過ぎる程に余っているのだが、自分達が最も忌み嫌う市井の、しかも孤児院出身のシュガルに辱められた事で、
今現在彼等の、シュガル並びに現幹部、そして住民への憎悪は計り知れない。

この様な大きな火種は抱えてはいるが、今日も今日とてネオ・ノルニルは平和です。

……あ。また、アリエルが何かやらかした。

N・N本部の地理的説明

『本部』

先ず向かって正面に、横に広い二階建ての本部がある。
建物全体が頑丈な石……というかオリハルコン造りになっている。
窓は水晶で出来ており、魔法を掛けられた文字通りのマジックミラーになっている。

ここでは主に、全幹部の招集&緊急会議の為に存在する。
後、とある様々な所からの要人を出迎え、それらに関する外交的な用事を済ます場でもある。
尚、外交場は二階に設(しつら)えた会談場が幾十とある。が、N・Nの緊急会議場は二階には無い。
実は、アルニスの能力で外からも見えなくしてあるが、三階にその場所が設けてある。
この造りはシュガルからの提案で、アルニスが承(う)け容れたものである。
この場所を知る者・来れる者は、N・N幹部とアルニスが認めた者達だけである。

因みに、一階は大きな広間となっており、幹部達のみならず憩いの

場となっている。
ジュース・お菓子・お茶・娯楽雑誌・新聞ｅｔｃ．と何でも御座れの、来客も屯（たむろ）する場である。

尚。中庭は、本部の前に造られた巨大な迷路の様で、その実シンプルな造りの休憩所である。
此処は専ら、第十三席アルメイが私用する場となっており、その際は誰もが彼女の為に、音も立てずに静かにするのが暗黙の了解となっている。

『幹部棟』
本部の正面向かって右手にある、本部よりは大きい四階建ての建物がそれである。
此処はその名の通り、Ｎ・Ｎ幹部達が主に寝泊まりする為の場所である。
その内訳は、最上階の四階にアルニス。
三階に、シュガル、ミディクェード、グラウス、リャノール達、上位幹部が。
二階に、ラフィレス、ガブリュース、アリエル、ネルベリ達が。
一階に、ハルニス、ミルト＆ハルト、アルメイ達の寝室がそれぞれある。
尚、ミルトとハルトのみ本人達の強い希望により、相部屋となっている。

幹部棟は、Ｎ・Ｎ幹部に直接用がある来客の為に、一番右側の出入口に受付がある。
其処が一番喧噪に包まれ易い為、其処から最も離れた奥まった場所に、
殆どハルニス専用と化している工房がある。……が、幹部達以外は

其処には入れない。
何故なら、この工房も本部三階と同じく、巧妙にカモフラージュされており外からは見えず、
本部三階同様に、アルニスが認めた者達と、Ｎ・Ｎ幹部以外は近寄れない仕様になっている。

『管理棟』
幹部棟とは真逆に位置する、本部に向かって左手にあるのが管理棟。
尤も『棟』というよりは『塔』と呼んだ方がしっくりくるのだが、敢えて皆こう呼んでいる。
その理由は、管理棟は本部や幹部棟とは違い、縦に細長く伸びているからである。
丸でラプンツェルを思わせるかの如く、天高く聳え立つその外観は、余りにも他の二つの建物とは不釣り合いで、却ってその威圧感と不気味さを際立たせている。

何故なら、この管理棟のみは前幹部達が建て造った物を再利用しているからである。
他の二棟は、新たにシュガル達が建て直した物なのだが、これだけその儘使用している。
故に、他の二つとは余りにも威厳や外観が違い過ぎているのである。
そして、この事がまた旧貴族達が憎悪する理由の一つとなっている事は周知の事実である。

だが、その外観とは打って変わって、中に初めて入った者は誰しもが皆、驚愕する。
何故ならその中は、外観からは想像も出来ない程、余りにも広々としているからだ。
（※判り易く言えば、〇リー・ホ〇ッターの魔法のテントを想像し

て頂ければ、と。）

その内訳は、一階から凡そ階数にして一万階強程が、書架で埋め尽くされている。
要は超巨大な図書館である。図書館の中身は当然『図書館』の名の通り様々な書がある。
だが、その主分はノルニルの歩んで来た歴史書で半分以上埋め尽くされている。
尚、蔵書が増え、現在の塔の中に入り切らなくなれば、更に内装のみを増築し、
塔の中身全体が、上の階に全て底上げされる様な造りになっている。

更にその上には、階下の書架を紙とは別に電子&魔力データ化されたモノの保管庫。
そして、本来のノルニルの目的である歴史を修正する為の施設が整っている。
その施設には、本来歩むべき歴史とは異なった歩みを刻み始めた世界を自動的に感知し、
警告ランクを導き出す超巨大な機械が設置されており、常時作動している。
尚、その警告ランクがSクラス……つまり最危険ランクになった時にノルニル幹部達が招集され、
選出されたメンバーが赴き、その原因となっているモノを排除し、
最悪の場合、自らが歴史の修正者となって、その世界に足跡を残す事になる。

と、実はこの管理棟こそがノルニルにとって、最も重要な何物にも替え難い生命線なのである。

※以下から、Ｎ・Ｎ幹部の能力その他です。尚、ＩＣＶの敬称は略させて頂いております。

第十三席　アルメイ＝シルリ　『闇影使い（ダーク＆シャドウ）』
幼女　黒髪黒眼　１４０ｃｍ　……秘密。　一人称：私　イメージｃｖ：水橋かおり
愛称：アルメイ・アル・メイ・ルリルリ

肉体年齢：１２～１３歳前後　実年齢：……秘密。

好きなモノ：家族・穏やか　嫌いなモノ：貴族連中・弱いモノ虐め
好きな食べ物：紅茶・お菓子・皆での食事　嫌いな食べ物：一人で食べる食事

好きなタイプ：アルニス　嫌いなタイプ：自己中心的な人・威張る奴・虐めっ子

趣味：ヒューマンウォッチング　特技：隠密

Ｎ・Ｎみんなのアイドル兼マスコットその１。但し、本人は余り子供扱いされるのを嫌う。
尚、愛称は並べて四種類あるが、本人はルリルリと呼ばれる事を最も好まない。
基本人前では無口だが、モノローグとか解説では非常に饒舌になるタイプ。

又、団欒というものを誰よりも欲し愛している為、一人での食事をするぐらいなら、
断食した方が死ぬよりもマシという性格。
故に、基本的なＮ・Ｎでの役割は、主に騒動を抑える事と調停役、
それと報告も序でに兼任。

尚、第十三席が暗部扱いなのは相も変わらず。
尤も、それは彼女が極端に人前に出るのを嫌がってるからという事由もあるのだが。

【能力】：闇と影を操る。そのまんま。一応細かい詳細は以下の通り。

『闇』：敵を何処からともなく現れた闇の中へ引き摺り込み、全てを喰らい尽くす。
又、何処かに闇の一部さえあれば、その中に潜る事で一切の攻撃を躱(かわ)す事も可能。
更に、その闇から欠片を創り自身の分身とする事も可能で、主にそれで偵察任務を熟(こな)している。

『影』：何かの影に身を潜めたり、相手の影を操る事で相手自身を操る事が可能。
更に、影と影の間は距離の如何に係わらず、瞬時に移動が可能。
他にも、『闇』から産み出した数多の分身を様々な影の中へと潜ませ、常に連絡を貰っている。
それ故に、Ｎ・Ｎの中でも情報量・移動力だけは完全に抜きん出ている。

一言「……一人での食事は、つまらない、です。みんなで食べたほーが、美味しい、です。
　後、にゃんタロー（※パンダのぬいぐるみ）も、二番目にお気に入り、です。」

第十二席　ハルト＝カルロス　『勇気使い（ザ・ブレイブマスター）』
男の娘　茶髪茶眼　１４５ｃｍ　な～いしょ♪　一人称：僕　イメージｃｖ：加藤英美里
愛称：ハルト・ハル・チビッ子（※ミルトと纏めて）
肉体年齢：１３～１４歳前後　実年齢：な～いしょ♪
好きなモノ：楽しい事　嫌いなモノ：楽しくない事・貴族達
好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：何にも

好きなタイプ：ミルト　嫌いなタイプ：威張る人達

趣味：外遊び・人を揶揄う事　特技：場を盛り上げる事

ハルトとミルトは、双子の姉弟。因みに、ハルトが弟。
尚、ハルトとミルトの違いは、単なるショートカットの方が弟のハルト。
リボンで片側のみ小さくポニーテールっぽくしているのが姉のミルト。
それと、大体姉の後で喋るのがハルト。

御多分に漏れず、今回の十二席も基本的に十一席と行動を共にする事が前提となっている。
が、唯一つだけ、前幹部とは決定的に違う点がある。それは……彼の能力にある。
何故なら、前幹部の十二席は単独では全幹部中最弱であったが、詳細は後述するが、彼の能力は現・全幹部中最強と言っても差し支えない能力だからである。

尚、カルロス姉弟は一番最後に幹部に引き上げられた者達であり、N・Nの中では最も若く最も経験の浅い幹部達である。
……が。アルメイと同じく、みんなのアイドル兼マスコットなのは誰もが周知の事実。

因みに年齢をぶっちゃけると、大体五千けｉ……くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

【能力】：『勇気があれば何でも出来る！』を体現したモノ。解り易く言うならば以下の通り。

『勇気』：自身よりも強大な敵にはより強く。弱い敵にはより弱くなるという特異な能力。
つまり、極論を言えば、弱い者が相手であれば、最悪アリにすら負けるが、
強い者を相手にすれば、飽く迄も理論上だが、八神カイトにすら勝てるのである。

※尚、八神カイトに勝つ為には、幾つかの条件がある。
1．八神カイトとの対峙中、一瞬も気を緩ませる事なく『立ち向かう勇気』を保たせる事
2．八神カイトの如何なる攻撃に対しても、『怯えぬ勇気』を保たせる事
3．八神カイトの如何なる防備に対しても、『懼(おそ)れぬ勇気』を保たせる事
4．以上の『勇気』を八神カイトとの戦いの最中、常に保ち続ける事

上記の条件を満たしていれば、八神カイトに勝つ事が可能である。
……理論上。
が、残念ながら当の本人は争いを好まず、鍛錬も碌にしない為、結局不可能ではあるのだが。
……あれ？　これ、カイトがラスボスになってね？

一言「僕と契約して、Ｎ・Ｎに入ろうよ！　あ、ロリコンの人は入っちゃダメだよ？」

第十一席　ミルト＝カルロス　『智慧使い（ザ・ブレインマスター）』
女の子　茶髪茶眼　１４５ｃｍ　な～いしょ♪　一人称：ボク　イメージｃｖ：加藤英美里
愛称：ミルト・ルト・チビッ子（※ハルトと纏めて）

肉体年齢：１３～１４歳前後　実年齢：な～いしょ♪

好きなモノ：楽しい事　嫌いなモノ：楽しくない事・貴族達

好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：何にも

好きなタイプ：ハルト　嫌いなタイプ：威張る人達

趣味：外遊び・人を揶揄う事　特技：場を盛り上げる事

ミルトとハルトは、双子の姉弟。因みに、ミルトが姉。
尚、ミルトとハルトの違いは、『ボク』と甘え口調で言う方が姉のミルト。
『僕』と若干舌ったらずで言うのが弟のハルト。
それと、大体弟の前に喋るのがミルト。

御多分に漏れず、今回の十一席も基本的に十二席と行動を共にする事が前提となっている。
だが、そんな能力的な事とは一切関係無く、彼女は弟のハルトとは非常に仲が良く、

寝る時も、起きる時も、遊ぶ時も、食べる時も、どんな時でも常に一緒に居る程の仲である。

尚、彼女はその能力名の通り、Ｎ・Ｎ内でも１・２を争う程の才女である。

が、その無邪気さと幼さ故に、余りそういう点では滅多に目立たない子でもある。

後、ハルトの双子の姉な為、当然こっちもハルトと同い年。

つまりは五千ｋ……くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；＠：「

【能力】：単純に言えば、『勇気』の『智慧』版。『智慧があれば何でも出来る』な能力。

『智慧』：基本的に彼女は一人では決して動かない。

何故なら、彼女は純粋な戦闘力は非常に弱く、どのサーヴァント相手にも負ける程である。

彼女の能力は、主に内政面で使われる事が圧倒的に多く、彼女が入って来てからは、

ミディクェードとシュガルの負担が、凡そ８０％も減ったと巷間に噂される程である。

尚、戦闘時に運用される場合には、主に兵器運用や指揮・統率方面で活躍する。

が、彼女の能力が真に発揮するのは、上記されたような場合では無い。

その場合とは、双子の弟ハルト＝カルロスと共に戦っている最中のみである。

彼女達は、双子宜しく互いのみに通ずるテレパシーに近しいものを

持っており、
互いの考えている事が、タイムラグ無しに瞬時に解るのである。

つまり、戦闘の最中にも、その中身・手段・方法等を瞬時に何億・何兆通りもミルトが考え、
それをハルトが瞬時に理解し、現状最適な方法・手段を使い熟す。
というのが、彼女達の本来の戦闘スタイルである。
つまり、ハルトは彼女への絶対的な自信と信頼がある故、自身の双子の姉と共に戦う時にこそ、
彼の『勇気』も十全に保て、その最大の力を発揮出来るのである。
当然、その間ミルトは無防備になるので、そういう時は必ず誰かが側にいて彼女を守っている。
故に、彼女達の力が必要な場合は、ほぼ確実に最低でも三人行動が前提となっている。

一言「ボクと契約して、Ｎ・Ｎに入ろうよ！　あ、ショタコンの人は入っちゃダメだよ？」

第十席　ハルニス＝マッシルド　『機械使い（ザ・マシンマスター）』
男性　茶髪琥珀眼　１６０ｃｍ　４８ｋｇ　一人称：僕　イメージｃｖ：福山潤
愛称：ハルニス・ハル・ハルちゃん・はる・ぱるぱる
肉体年齢：１６歳前後　実年齢：凡そ三十垓（がい）歳

好きなモノ：機械・調和・穏便　嫌いなモノ：特に無し

好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：肉料理（嫌いというより苦手）

好きなタイプ：リャノール　嫌いなタイプ：自己中心的な人・威張り散らす人

趣味：機械弄り　特技：修理・修復・改良

皆の良心にして心の支えこと、工房の主・修理屋ハルニス。
基本的な容姿のイメージは、某軌跡のメインヒロインことヨシ〇アきゅん。
彼に頼んで直せない代物は無いと言われる程、修理の腕は誰よりもぴか一。
尚、基本的に彼の修理には、彼の恋人のリャノールが助手に就く事が専らである。

直し方は至って単純。リャノールが先に把握した構造を、彼女が物体の一部を粒子化し、
その中身と構造の詳細をハルニスに見せ、彼がその構造を全て理解した後、元に戻し、
改めて、ハルニスがその物体を様々な器具その他を使って修理する。
という手法である。

尚、第十席が皆の間を取り持つのは、今回も相変わらず。
が、今の幹部に皆変わってからは、特に諍い（いさか）等も起きておらず、
専らアルニスとアリエルの騒動を鎮める為に尽力するぐらいで済ん

でいる。
……まぁ、それが何よりの重労働なのは言う迄も無い事ではあるが。

【能力】：機械、と一口に言っても、様々な物がある。電気で動く物、木を組み立てただけの物。
その他、水で動く物ｅｔｃ．　数多あるが、彼の能力はそれら全てが対象となる。

『機械』：その動力・用途如何に関わらず、『機械』と称される、もしくはそうと見られる物。
その全ての操作権・使用権が全てハルニスに依拠される。それが彼の能力である。
つまり、例えどんな兵器その他であろうとも、彼にその存在そのもののマスター権が与えられ、
例え使用後であっても、方向転換・目標変更・分解・爆発その他諸々。
その一切が、彼の意志一つでどうとでもなるのである。

その能力の行使には一切の制限も無く、触れる必要すらない。
只、彼がそうと思い念じれば済むだけの話である。故に防ぐ手立ては唯一つ。
彼と肉弾戦を行い、その能力によって自身が倒される前に彼を倒す事だけである。

一言「みんな、喧嘩はダメだよ。仲良くね。あ、それと、修理品は随時受け付けていますよ。」

第九席　ネルベリ＝ジュメイグ　『筋肉使い（ザ・マッスルマスター）』
男性　黒髪緑眼　２２０ｃｍ　１３０ｋｇ　一人称：まっする？
イメージｃｖ：安元洋貴
愛称：ネルベリ・ネル・ねるー（※主に子供達からは、この愛称で呼ばれている）

肉体年齢：３０歳　実年齢：凡そ三百垓歳

好きなモノ：肉・筋肉・子供　嫌いなモノ：細いもの・弱いモノ虐め
好きな食べ物：肉・脂身　嫌いな食べ物：筋張ったもの

好きなタイプ：ラフィレス・筋肉質な奴・無邪気な人　嫌いなタイプ：ガリガリな奴・脳筋

趣味：鍛える事　特技：鍛える事・筋肉

筋肉。もしくはマッスル。その一言で全てが説明出来る稀有（？）な人間。
己が筋肉を鍛える事に究極の喜びを見出し、子供と戯れる事に至高の幸せを見出した人。
実は、アルニス・シュガルを除いた全幹部中、最年長でもある。
それ故、何気に色んな経験は最も豊富で、可成り含蓄に富んでいる。
それ所か、幹部が揃わぬ間の政務を全てシュガルが単身で取り仕切れたのは、

何もかもネルベリの御蔭ですらある。……のだが。
彼自身の性格と、普段のギャップも相俟って殆どの人にその様な認識は全くの皆無である。

普段喋る事は、基本的には「きんにく」と「マッスル」のみ。後、偶に掛け声。
だが、一旦本気で戦闘を開始するとなると、途端に今迄の彼からは決して想像も付かない程、
極めて真面目に、極々普通に喋り出す。寧ろ理知的ですらある。

……尚、極一部の特殊なファンからは、彼のイメージが崩れ去る為、是非にも止めて欲しい。
との、或る意味、熱烈且つ痛烈な応援の手紙が有ったとか無かったとか。
その手紙を読んで、泣くべきか笑うべきか歓迎するべきか、彼が一月悩んだのは、
余りにも有名なN・Nの都市伝説である。……因みに結果は、推して知るべし。

【能力】：……え？　これをどう説明しろと？　……いえ、まぁ説明しますが、一応。

『筋肉』：身体中の筋肉を好きな所に集める事が出来る。以上。……え？　ダメ？
因みに、その対象は相手を選ばないが、その場合は直接触れなければならない。
又、筋肉の質を別のモノに変化させ、攻撃を弾く・吸収するといった応用も可。
尚、残念ながら脂肪は動かせないので、盛り上げる事は不可能。…

…何処とは言わないが。

【※尚、ネルベリのみ、もう一つ能力があるらしいのだが、
恐らく永遠に日の目を見る事は無いと思われる。
……いやだって、こいつ一体どうやって活躍させｒ（ｒｙ】

一言「マッスゥゥゥゥゥルゥゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーーーーー！！！！！　きんにっく♪」

第八席　アリエル＝シュレスト　『魔力使い（ザ・マジックマスター）』
幼女　桃髪翡翠眼　１５０ｃｍ　い、言わないよっ！　一人称：あたい　イメージｃｖ：釘宮理恵
愛称：アリエル・エル坊・エル・リエル・（またあいつか……）↑
※非公式

肉体年齢：１２～１４歳前後　実年齢：だ、誰が言うもんかっ！
好きなモノ：シュガル　嫌いなモノ：八神カイト・貴族・威張る奴・怒鳴る奴
好きな食べ物：お菓子　嫌いな食べ物：野菜
好きなタイプ：シュガル　嫌いなタイプ：八神カイト・虐めっ子

趣味：探検・冒険　特技：騒動（本人否定）・大騒動（本人全身全霊で否定）

シュレスト一家の三女にして、末妹。気性の激しい猫を思わせるツリ目。ガチツンデレ。

『小さい』という言葉には某おチビさんの如く、殊の外敏感過剰に反応する。

シュガル始め、Ｎ・Ｎの皆にはデレ捲る。但しその他にはツンだデレない。特にカイトには。

以前、八神カイトにフルボッコにされた為、カイトの事が大嫌いに。更に、アリエルがシュガルに惚れている事も相俟って、尚の事、御邪魔虫的存在に。

皆のアイドル兼マスコットその四。後、最たるムードメーカーでもある。

基本的にＮ・Ｎに於ける騒動の大本その二。一は言わずもがな。だめだこいつらはやｋ（ｒｙ

だが、結局の所なあなあで終わる事も多く、アリエルが皆に好かれている証拠でもある。

だが、今回の騒動の様にアルニスが同時に関わってた場合は、ほぼ確実に大騒動になる為、

大体そのとばっちりを全てアリエルが受ける事に。

（おい、誰かあのアホを早くしょっ引いて来い！　ｂｙ　救世主）

尚、現在進行形でシュガルに猛アタック中ではあるのだが、当の本人はけんもほろろ。

実は何気に周りもこっそり後押ししており、事あるごとに二人きりにしようと画策中である。

だけどめげないアリエル。『「だって、女の子だもん！」　ｂｙ

アリエル』

しかし、億が一成功した場合をよくよく考えたら、シュガルがミディクェード達の弟に……？
その事実に彼等が気付く日は、果たしていつの日になるのだろうか？

【能力】：え、詳細？　本編を読んで貰……あ、読みたくない？
……じゃ、しょうがない。

『魔力』：この能力は、僅かでも『魔力』が通ったものならば、彼女には一切効かない。
僅かと言っても、一般人が生涯持ち得る平均的な魔力量程。
より解り易く言えば、自身に『魔力』がある事に気付かずに一生を終える人間程度の『魔力』。
その千マイクロ分の一程度の『魔力』でも通っていれば、それが如何なる物質であろうとも、
それが例え何の形も持っていなくても一切無効化され、彼女には何の影響も齎（もたら）さない。
そして、アリエルの為す行動に対し、相手はそれを一切防ぐ事が出来無い。

それは逆も然りで、例え八神カイトの様な、異常と呼べる程の余りに高過ぎる『魔力』を、
持っていたとしても、それが『魔力』である限り、アリエルには一切何ら意味を持たない。

つまり、この能力はこと『魔力』を持つ者にとっては神々以上の最大の天敵。
それが例えどんなもの……例えば、攻撃であり、防御であり、補助

であり、回復であろうとも、
それらが魔力に僅かでも触れていれば、関わっていれば、それだけで彼女には無意味となる。
その全てが無効化され、無碍（むげ）にされ、無意味にされ、無価値にされ、彼女は無敵と化す。

尚、彼女が無効化出来るのは『魔力』のみなので、それ以外の能力だった場合、
純粋な力押し同士になってしまう為、根本的にパワーの無い彼女は負け易いのが欠点。

一言「シュガル様大好きです！　愛してます！　だから、早くあたいの愛を受け取って下さい！
　あ、後、八神カイトは早く死ね。ていうか、あたいがいつか絶対に殺す！」

第七席　ガブリュース＝シュレスト　『拳使い（ザ・ナックルマスター）』
女の子　橙髪蒼眼　１６５ｃｍ　ざ～んねん♪　一人称：アタシ
イメージｃｖ：磯村知美
愛称：ガブリュース・リュー・ガブ姉・りゅ～
肉体年齢：１８歳前後　実年齢：内緒だよ♪
好きなモノ：試合・格闘技　嫌いなモノ：読書とかそういう所謂文

系関係

好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：何にも

好きなタイプ：グラウス　嫌いなタイプ：八神カイト・ひ弱な奴・なよってる奴

趣味：格闘技観戦・鍛錬　特技：真っ直ぐ行って右ストレート！（……え？　特技……え？）

シュレスト一家の次女。基本的に一本気な性格。
因みに、ラフィレスとは凡そ百歳。アリエルとは凡そ千歳。それぞれ離れている。
アリエル程ではないにしろ、ガブリュースもカイト達に苦手意識を持っている。

下街に道場を構えており、普段特に仕事も無い時はそこで弟子兼後輩の育成に励んでいる。
偶に、ガブリュース目当ての不埒な奴も現れるが、大抵皆に追い出される。

実は、彼女は自分の名前が嫌いで、一時期は「ガブ姉」と呼ぶアリエルとも不仲だったが、
或る時グラウスに言われた一言でそれも払拭され、今はすっかり仲良し姉妹である。

【能力】：真っ直ぐ行って右ストレート！で大体説明がつく。……ダメですか、そうですか。

『拳』：対象の有形無形に係わらず、殴り飛ばせる能力。
例えば、敵対象を相手の居る空間ごと殴り飛ばしたり、宇宙ごと殴り飛ばせもするし、
相手の心臓のみを殴り飛ばした、という結果だけを残らせる。
といった幅の広いものから応用迄可能。直接相手や殴る対象に触れずとも攻撃自体は可能。
解り易く言うなら、【刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）】の『結果が先に来る』、に近い事象を起こせる。

尚、この様な性格な為、搦め手で来られると極端に弱いという欠点がある。

一言「漢なら、真っ向真正面からの一発勝負だけにしな！　それなら、受けて立つよ！」

第六席　ラフィレス＝シュレスト　『鞭使い（ザ・ウィップマスター）』
女性　銀髪赤眼　１７５ｃｍ　あら、な・い・しょ♪　一人称：私（わたくし）
イメージｃｖ：沢城みゆき
愛称：ラフィレス・フィル・ラフィ姉・ふぃる
肉体年齢：２１歳前後　実年齢：ウフフ、ひ・み・つ♪
好きなモノ：撓（しな）るもの・巻き付くもの・巻き付けるもの　嫌いなモ

ノ：固いモノ

好きな食べ物：野菜　嫌いな食べ物：固形物

好きなタイプ：ネルベリ・叩き甲斐のある人　嫌いなタイプ：叩き甲斐の無い人・豚（きぞく）

趣味：ＳＭ（但し、Ｓ専門）　特技：ＳＭ（但し、Ｓ専門）

シュレスト一家の長女。ガチ女王様。だからと言ってネルベリはＭではありません、念の為。
尚、ミディクェードとは凡そ八十垓年程離れている。つまり、単純計算をすると、
シュレスト一家は計四回も、子供が産まれてはその都度孤児院に捨てられた事になる。
因みに、念の為行ったＮ・Ｎ屈指の機械によるＤＮＡ鑑定では、四人共、ほぼ確実に血の繋がった兄妹で間違いないという結果が出ている。

どういう経緯でネルベリと恋仲になったのかは永遠の謎なのだが、御互い不足も不満も全く無い様で、喧嘩した所を見た者は……そう言えば誰も居ない。
尚、アリエル程では無いものの、他のメンバーに比べればガブリュース同様、
ラフィレスもカイト達に苦手意識を持っている。特に黄宇。

【能力】：本編見りゃわかｒ……あ、済みません、解説しますです、ハイ。

『鞭』：解り易く言えば、ガブリュースの『拳』の『鞭』版。
斬り裂き、巻き付けて締め殺し、打擲（ちょうちゃく）して粉々に砕く事も出来る。
妹と同じく、その対象は一人に限らず有形無形に拘らない。
次元も空間も時間も全て引き裂ける為、彼女にとって距離と場所は何の意味も持たない。
イメージとしては真アサシンの【妄想心音（ザバーニーヤ）】が近い。
尤も、彼女の場合は仮初めなどは必要無く、直接本体そのものを叩けるという程度の違いだが。

尚、『鞭』を奪われた場合、彼女の能力は半減……と迄はいかないものの、
３０％程度は確実に落ち、戦力としては望めないのが、唯一の欠点。

一言「あら？　貴方も私にこの鞭で叩かれたいの？　なら、そこに跪（ひざまず）きなさい？」

第五席　リャノール＝ガジャルド　『粒子使い（ザ・ミクロマスター）』
女性　白銀髪碧眼　１８２ｃｍ　女性に訊ねるな　一人称：私　イメージｃｖ：ゆかな
愛称：リャノール・リア姉・リア・りあ
肉体年齢：２５歳前後　実年齢：女性に訊ねるなと言っただろう

好きなモノ：分解・再構築・平和　嫌いなモノ：争い

好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：何にも

好きなタイプ：ハルニス　嫌いなタイプ：騒々しい奴・誇りの無い者

趣味：ハルニスの手伝い・分解・再構築　特技：構造把握

通称みんなの姐さん。というか、姐御？　ラフィレス以上のボイン。何処がとは言わないが。

イメージは某緑色の髪をしたＣ○Ｃ○と、某Ｔ○Ａのテ○アを足して二で割った感じ。

若干照れ屋の気があり、未だにハルニスとの仲を揶揄われると真っ赤になる。

恐らく、上位下位含めた全幹部中、最も常識のある人。次点は間違い無くハルニス。

寧ろ、上位幹部の良心と言っても過言では無い。但し纏め役では無いので悪しからず。

だって、サボり魔・苦労人・冷徹な策謀家・我武者羅に突き進むだけの奴。

ね？　真面（まとも）な人、一人もいないでしょう？　彼女の苦労も推して知るべしである。

【能力】：『粒子』と一口に言っても様々あるが、こちらも矢張り全ての粒子がソレに当たる。

無論、原子・分子・電子ｅｔｃ．の性質も形も異なる全てのものがその対象となる。

『粒子』：此の世に存在する全ての物体・物質に於ける根本存在である、
原子や分子、もしくは電子。それら全てを自在に彼女の意思一つで思いの儘に出来る。
相手の身体を分解しバラバラにする事も出来、敵の周囲の粒子を別の物質に変えたり、
それによって、毒を発生させたり、周囲の空気を固めて動けなくさせたりも出来る。

又、己自身も粒子に分解させ、如何なる致命傷も病気も毒も避ける事が出来る。
尚、その対象は距離も相手も一切を選ばず、全て彼女の意思一つでどうとでもなる。
故に彼女には物体・物質である以上、余程強力な能力を持たない限り、決して勝てない。

つまり、彼女の最大の弱点とは、怨念や想念と言った形の無い概念のみの存在には、
一切彼女の能力は通じない。という一点のみである。

一言「因みに、マッサージも得意だ。疲れたなら、幾らでも解してやるぞ？」

第四席　グラウス＝ガンドレル　『螺旋使い（ザ・ドリルマスター）』

漢　紅髪翠眼　１９０ｃｍ　６３ｋｇ　一人称：俺　イメージｃｖ：小西克幸

愛称：グラウス・ラウス・グラ兄・らう

肉体年齢：２５歳前後　実年齢：五十垓歳ぐらい

好きなモノ：螺旋・ドリル・真っ直ぐなもの　嫌いなモノ：曲がったもの

好きな食べ物：肉・食感があるもの　嫌いな食べ物：食感がハッキリしないもの・噛めないもの

好きなタイプ：ガブリュース・真っ直ぐ芯がある奴・天の元を突破出来る奴

嫌いなタイプ：曲がった根性の奴・なよってる奴・シャキッとしていない奴

趣味：工事・工事現場の視察　特技：掘り進む事

通称みんなのアニキ。イメージが誰かは言わずもがな。ツンツン頭。尚、サングラスは無い。

豪放磊落（ごうほうらいらく）で、卑怯な事は許さないという一本筋の通った性格が、特に住民に好まれている。

基本的には、皆のリーダー役。因みに、参謀兼纏め役はミディクェード。シュガルはボス。

後、ネルベリの真面（まとも）な口調を聞いた数少ない人の一人。

現在、彼が戦闘以外で敗北したのは唯の一回だけであり、

それが、ガブリュースに告白した時であったのは、Ｎ・Ｎの間では余りにも有名な話。
普段、何事にも大概彼が先んじて行動を起こしていたのだが、この時ばかりは、彼が言おうとした矢先に、ガブリュースに先んじて言われてしまった。
尤もその御陰で、グラウスは余計に彼女が気に入り、目出度く付き合える事になったのだが。

【能力】：漢（ドリル）の浪漫。……え？　これだけじゃダメ？　……しょうがないなぁ、もう。

『螺旋』：グラウスの全ての能力の根源は『螺旋』回転である。そして、直進する事である。
一番解り易く言うのであれば、全て気合いで何とかするのが、グラウスの能力である。
理屈も道理も理も一切関係無く、全て突き進み穿ち引き裂く。
その能力に対象など勿論一切無く、時間も空間も次元もあらゆる全てを引き裂ける。

自身を渦の中心にし、周りの全ての物質を渦巻かせ、猛烈な勢いを付けて突進する、『大螺旋撃（ギガント・ドリルブレッシャー）』という必殺技を持つ。尚、上位に『超螺旋撃（テラ・ドリルクラッシャー）』というのもある。
他にも、周囲の空気やら水分やらを渦巻かせ、弾丸にして無数に撃ち放つ技もあるが、
そういう小手先の技や細かい技、漢らしくない技は大嫌いなので、滅多に使わない。
因みに、相手の体内で生成し、その中からも撃つ事が可能な、結構えげつない技でもある。

一言「俺を、俺達を誰だと思っていやがる！　天下のＮ・Ｎ幹部様達だぜ！！」

第三席　ミディクェード＝シュレスト　『神霊使い（ゴッド＆スピリチュア）』
男性　銀髪金眼　１７５ｃｍ　４５ｋｇ　一人称：私　イメージＣＶ：神谷浩史
愛称：ミディクェード・ディーク・ミディ兄様・兄ちゃん（アン）・にぃ
肉体年齢：２２歳頃　実年齢：百垓歳前後

好きなモノ：計算・策謀　嫌いなモノ：脳筋・本能・無計画・無意識

好きな食べ物：野菜　嫌いな食べ物：肉（菜食主義な為）

好きなタイプ：シュガル・計算高い人　嫌いなタイプ：脳筋・本能で生きている者・無計画な者

趣味：データ集め・データ処理　特技：書類整理・整理整頓・片付け

シュレスト一家の長男にして、一家の大黒柱。全幹部中、取っ付き難い人Ｎｏ．１。
皆の纏め役兼統率役兼参謀役。沈着冷静且つ冷酷無情がモットー。

飽く迄もモットー。
尚、修理中のハルニス、勉強・教育中のラフィレスを除くと、唯一の眼鏡属性。
内外は言うに及ばず、実の妹達にも手厳しい程、規律を重んじる事で有名……なのだが。
こと幹部達（かぞく）に関連する事であれば多少の融通は利く為、内輪（かぞく）には結構好かれている。

ミディクェードが幹部入りする迄は、ネルベリがシュガルの補佐を全てしていたが、
彼（ミディクェード）が入ってからは専ら裏方に回り、結果ネルベリが裏方担当になった。
だが、ミルトが入ってからは、ミディクェードが裏方を全て一身に引き受けた為、
ネルベリはその全てを彼に引き継ぎ、今現在の彼（ネルベリ）になった経緯がある。

それ故、実はミディクェードは、アルニス・シュガル以外にネルベリにも頭が上がらない。
……のだが。今のネルベリはあの調子な上、
元来、誰であろうともそんな事を吹聴する様な性格では決してないので、
実は、他の幹部達や妹達の誰にもその事を気付かれていなかったりする。

アルニスにも内緒で、何やらシュガルと画策しているが、果たして……。

【能力】：読んで字の如く、神力と霊力を行使出来る。
要はアリエルの『魔力』の『神力』と『霊力』版。
いや寧ろ、リャノールとはほぼ完全に真逆の能力と言った方が尚、解り易いかもしれない。

リャノールの能力は要約すれば、此の世に存在する全ての物質に干渉出来る能力である。
だが、彼はその真逆で、此の世と彼の世に存在する筈の全ての形無きモノ。
つまり、神々や霊魂、怨念や怨霊と言った、物質以外での形を持つモノ、持たざるモノ。
そういう類への絶対権（マスター）を持ち如何なる干渉をもされぬ為、彼等には完全に無敵な能力である。

詰まる所。極論を言えば、リャノールとミディクェードの二人さえいれば、
実質的に、天界・地上界・冥界の三界を制圧出来るのである。……飽く迄も極論だが。

『神力』：要は神々や天使が行使する力。その能力はアリエルとほぼ同じ内容。
相手の格位は問わず、主神・最高神・皇祖神・唯一神・創世神ｅｔｃ．であろうとも、
他の下位神や天使達と同一に扱え、その一切の干渉を受け付けない。
又、それは同時に、数多の天使や神々を従え、己が意の儘に出来るという事でもある。

『霊力』：霊魂や怨念、怨霊に冥界に住まうモノ達が行使する力の大別名（たいべつ）。冥力とも言う。

能力は、『神力』や『魔力』とほぼ同一の内容。悪魔も主にこちらで抑えられる。
悪魔も『魔力』を使えるが、大概冥界にいるモノは冥力も帯びているので、
アリエルではなく、ミディクェードが抑える事が多い。
尚、こちらも『神力』と同様に、悪魔や堕天使、冥王等、黄泉のモノを従える事が出来る。

一言「シュガル様……御労(おいたわ)しや。」

第二席　シュガル＝ブラウセス　『創造(メイク)・幻想(イリュージョンスペース)・空間・時間(タイム)』
男性　銀髪紅眼　１７８ｃｍ　５２ｋｇ　一人称：俺・私　イメージｃｖ：櫻井孝宏
愛称：シュガル・シュガル様・（シュガル）坊や
肉体年齢：２６歳頃　実年齢：五百垓歳強
好きなモノ：孤児院の子供達・家族　嫌いなモノ：弱い者虐め・旧貴族達
好きな食べ物：家族の作った料理　嫌いな食べ物：思いの籠もっていない料理
好きなタイプ：自分を慕ってくれる者　嫌いなタイプ：家族に害を

為す者

趣味：アルニスの世話（本人全身全霊で否定＆絶望）・家族の助けになる事
特技：アルニスの世話（本人以下略）・新たな家族を見付ける事

シュガルの能力は『ミスト』と言う呼称で、Ｎ・Ｎの住民に膾炙（かいしゃ）している。
創造：Ｍａｋｅ　幻想：Ｉｌｌｕｓｉｏｎ　空間：Ｓｐａｃｅ　時間：Ｔｉｍｅ　の頭文字を取って、
Ｍ・Ｉ・Ｓ・Ｔ＝ミスト　……今、「ミスト（笑）」とか思った人、全員屋上。
まるで霧を相手にしているかの様に、何の攻撃も手応えがなく、何時の間にか身動き一つ出来ぬ内に負けている。といった事由にも合わせての名である。

……幻覚を見せられながら時間を止められれば、そりゃ勝てんがな！
因みに、某異星人は関係ありません。こんなに俺と地球人との間に価値観ｎ（ｒｙ

現幹部達は皆、シュガル出身の孤児院からの抜擢であり、全て彼一人による人選。
今でも孤児院では、次期幹部候補やＮ・Ｎに入る為に……。
そして何より、自分達を救い育て援助してくれるシュガルと現・幹部達の為に、
子供達のみならず、院の大人達も皆、日々自ら能力の開発に勤しんでいる。

最近は専ら、シュガルがアルニスの監督役を務めており、内外問わず、誰からもそういう認識をされているが、シュガル本人は激しく否定している。
尚、アルニスが悪乗りしてシュガルに甘えたりする事は、既に日常だったりする。

又、日常的にアリエルから愛の告白を受けているが、本人は素知らぬ顔で振っている。
と言うのも、シュガルにとって現幹部達は皆、己が子供か弟妹の様なものなので、
彼にしてみれば、非常に複雑な事この上無いのである。

何より未だ貴族達が存在している現状で、後ろ指を指されかねない危険を冒す気は毛頭無く、
是非の何れにしろ、少なくともその答えを出すには、
貴族達を完全に排斥するか、無害になったと判断出来る迄、保留するつもりでいる。

何やらアルニスに内緒で、ミディクェードと共に何事かを策謀・画策しているらしいが……。
そして、あの無性に苛付く喋り方をする、謎の少女の正体は一体……。

【能力】：上記した様に、巷間の通称でＭＩＳＴ（ミスト）と呼ばれている。
それ以外にも、アルニスに貰った『吸収』という能力もある。詳細は以下の通り。

『創造（メイク）』：その名の通り、様々なものを生み出す能力。無論、生命

の『創造』も造作も無い。
尚、雑多な武具や防具、様々な道具等、日常生活に必要な物も『創造』出来る。
又、戦闘中ならば、敵や兵器の体内に本来あるべからざるモノをも『創造』出来、
ソレによって、内側から食い殺させる事も可能である。

尚、この能力は、ハルト・アリエル・リャノール・ミディクェードには通じない。

『幻想(イリュージョン)』：その名の通り、数多のモノに様々な幻覚を見せる事が出来る能力。
その対象は有機無機に拘らず、又、有形無形にも限らぬ全てである。
つまり、戦車や飛行機、木々や草花に雑多な虫といった、自意識を持たぬ存在は勿論、
星々や銀河、宇宙に（此岸という意味での）世界といったモノにも同様に能力を行使可能で、
幻覚……つまり、『幻想』と言う名の【幻想(ゆめ)】を見せる事が出来、
それによって、対象を己が意の儘に操れるのである。

尚、この能力は、アルメイ・ミルト・リャノールには通じない。

『空間(スペース)』：その名の通り、様々な『空間』を。もっと平たく言えば『場所』を操れる。
相手と自分の場所を入れ替えるなど朝飯前で、対象数や対象規模にも制限は一切無く、
下記の『時間』と組み合わせれば、ただ立っているだけで敵を全て死滅させる事も可能。
他にも、相手の頭部と腹部のみを入れ替える、といった様な残虐な使用法もある。

尚、この能力は、アルメイ・ミルト・ガブリュース・ラフィレス・リャノールには通じない。

『時間（タイム）』：その名の通り、あらゆる状況下での『時間』を操れる。
こちらも、対象の数も規模も相手もその一切を選ばず、様々な応用が可能。
例えば、相手の『時間』そのものを変更し、赤子にも死ぬ手前の老人にもする事が可能。
又、相手と相手の周囲の空間を諸共に時間凍結させたり、と言う事も出来る。
他にも自身の目の前の空間を『時間凍結』させ、一切の攻撃を其処で止めるという方法もある。

尚、この能力は、ネルベリ・グラウスには通じない。
更に、アルニス・ハルニスには、シュガルの能力が一切通じない。

『吸収』：この能力のみ、シュガルが自力で得た物では無く、アルニスに与えられた能力。
この能力は読んで字の如く、対象の能力を『吸収』し自身の能力とする事が可能な能力である。
だが例え、能力を『吸収』出来ても、その能力が即座に使える訳では決して無く、
充分に使い熟すには、当然それなりの鍛錬と時間が必要な、或る意味不完全な能力でもある。
尚、この『吸収』によって、シュガルは『幻想』と『創造』を手に入れた。

その対象は人で無くとも構わず、生物ですら無くとも構わない。
だが、この能力の使用範囲はそれなりに狭く、

触れる必要迄は無いものの、或る程度は近付かないと使用不可能。
それ故、前第四席カルラドの『幻想』を『吸収』した時は、
シュガルも文字通り命懸けで彼の能力を『吸収』しに行っていた。

一言「アルニス様……御願いですから、仕事をして下さい。」

第一席　アルニス＝カイゼル　『世界（ワールド）』
男性　金髪金眼　１８０ｃｍ　５０ｋｇ　一人称：私　イメージｃｖ：速水奨
愛称：アルニス様・アルニス・アホニス・ドアホニス

肉体年齢：２０歳　実年齢：凡そ千垓歳程

好きなモノ：人間　嫌いなモノ：敵・人々に仇為すモノ・民草を不幸に陥れるモノ

好きな食べ物：何でも　嫌いな食べ物：何にも

好きなタイプ：全ての人々　嫌いなタイプ：……。

趣味：人々の幸せを感じる事　特技：人々を幸せにする事

相も変わらずのグータラのんびり悪戯好きなＮ・Ｎ首領。

特に最近は、幹部達が毎日ワイワイガヤガヤやってくれているので、非常に愉しいそうだ。

抑々（そもそも）、彼は本来こういう和気藹々とした、仲間然とした組織を創り上げたかった。

だが、周りの環境が彼にそれを許さず、意図せずして今日の様な超巨大な組織となってしまい、

一時期は彼も、その目的を忘れ諸々が横行していた現状に心を痛めていたが、

生来の聖人を超えた優しさの所為で、そんな彼等を処罰出来ずにいた。

が、愚かにも八神カイトに皆が挑み、殆どが悉く彼の手で滅ぼされた事によって、

結果ノルニルは、現在の新生したN・N（ネオ・ノルニル）へと生まれ変わる事が出来た……のだが。

例えどの様な愚かな民ではあったとしても、大事な民草の一人である事は変わりなく、

民（わがこ）を失った身（おさ）としては正直少し複雑な気持ちでいたが、

前幹部第二席ドルゴラ、引いては【欲望（ディザイア）】の為した所業を聞き、その蟠（わだかま）りも消えた。

又、特に最近、シュガルとミディクェードが一緒にいる場面に多く出会（でくわ）し、

仲良き事は良きかな良きかな♪　というぐらいにしか思っておらず、

彼等が何か画策しているとは、夢にも露程にも思っていない様子である。

更に最近、彼は生まれて初めて、とあるモノに対して『憎悪』という感情を覚えてしまった。

それ故、初めて感じる抑え方の解らぬ感情(これ)をどうすればいいのか、悩んでいるらしい。

【能力】：え？　だから本編……イエ、ナンデモナイデス、ハイ。
尚、アルニスの能力が効かないのは、八神カイトと渡良瀬トキヤことアキシオン。
それ以外には【原初】のみである。……但し、登場していない人物は除いて、ではあるが。

『世界(ワールド)』：端的に言えば、世界の【理(ことわり)】を操る能力。アルニス曰く、【理】を導く能力。
「尚詳しく言えば、世界の因果律・結果・事実・真実・歴史・未来……その他。
ありとあらゆるモノの【理】を捻(ね)じ枉(ま)げる能力。」とは、カイトの言。

『ありとあらゆるモノの【理】を破壊し破滅させる』カイトの能力と比較すると、
単純な能力の性能差では、実はアルニスの方が（汎用性も含めて）上位的存在なのだが、
使用者の格位の差の為、実質的にはカイトの能力の方が上位存在になっている。
が、アルニスがその気になれば、カイトの能力と同等・同様の事をするのは造作も無く、
寧ろ、カイトの方がアルニスの能力を借りる事にも成りかねないのである。

だが抑々(そもそも)、アルニスは争いを好まない性格な上、カイトと敵対するつもりは微塵も無い為、

その検証も不可能。且つ、この理論も完全に意味を持たない。という結論が既に出ている。

一言「あ、カイト、鋼牙♪　また新しいオモチャを見付けたので、早く遊びに来て下さいね♪」

番外・陸（後書き）

如何でしたでしょうか？

多分、ツッコミ所は幾つかあったかと思いましたが；；；；

実はその気になれば、アルニスやカイトより強くなれる第十二席ハルト＝カルロス。
何気に、縁の下の力持ち第九席ネルベリ＝ジュメイグ。
どこぞの誰かさんソックリな某メンバー達、ｅｔｃ．
そして、何やら策謀中のシュガルとミディクェード。と、いつものアルニス。
それなりそれなりに個性のあるメンバーだなぁと私は思いましたが、如何でしたか？

というか。書いている内に、こんな事←を思っていた私がいました。

「……あれ？　もうこいつら主役でいいんじゃね？」

いやだって、みんな何かしら弱点あるし、背景とか寧ろ五行よりちゃんとあるし、
互いの相性とかも覚え易いし、或る程度強さも解り易いし……うん。
寧ろ、カイト達をラスボスにして、Ｎ・Ｎを主役にしたスピンオフ作品の方が人気出るんじゃあ……。
ま、書きませんけどね！　……少なくとも、『無限無窮』終わる迄は。

次話は、以前活動報告で言った筈のサプライズ話。……あれ、サプ

ライズになるのだろうか？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

とある八神はやて（よめ）の子育て日記（ダイアリー）その？（前書き）

現時刻（１７：１０）※但し二時間遅れ
ＰＶ：３，００９，９４８アクセス　ユニーク：２４４，６４１人
皆様、何時も御覧頂き有難う御座います。

そして、何時の間にか三百万アクセス突破していました。
皆様。改めまして、誠に有難う御座います。まだまだ完結には程遠い拙作ではありますが、
何とか皆様に飽きられぬ様、必ず全て書き上げてみせますので、
どうぞ今後共、カイト達と拙作を宜しく御願い致します。

さて。今回は、以前から活動報告その他にて言っていました、サプライズ（？）話。その名も……！

『とある八神（よめ）はやての子育て（ダイアリー）日記その？』

と言う訳で、特に誰の要望も無く始めたこのシリーズ（？）。
一応、最後の世界に向けての布石を、今の内からまた少しずつ打っておこうかと。
今話は、まぁ私にしては珍しくそれなりに普通の長さなので、さらっと終わるかと思います。

それと、後書き・活動報告にてアンケートを取らせて頂いております。
宜しければ、そちらも御覧になって下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

とある八神はやて（よめ）の子育て日記（ダイアリー）その？

ｓｉｄｅ：とある休日　某所

「キャッキャッキャッ♪」

「はいはい、よしよし。今日も元気やね～。」

此処は、八神一家が長期休暇の際に寄る、とある別荘である。
其処で赤ん坊をあやしているのは、我等が主人公・八神カイトの妻、八神はやて。
そして、この赤ん坊は……。

「しっかし、ほんといつでも元気だよな、風美（ふみ）は。全然泣かないしさ。」

八神風美。はやてと、カイトの娘である。因みに、御年一歳未満。

「そやね。夜泣きも殆ど無いし、私としては凄く助かってるけどな。」

「ええ、そうですね。普段の激務に疲れている主の代わりに我々が……と思っていましたが、
どうやら、それも杞憂に終わっている様で、何よりです。」

「アハハ；　心配かけてごめんなぁ、みんな。ほんまにありがとな。」

シグナムの言葉に、苦笑いしながらも感謝の言葉を述べると、皆ニッコリ微笑んで頷いた。
どうやら、はやての気持ちはしっかり届いた様だ。家族の絆は相変わらずであるらしい。

そんな絆を主従が改めて確認している最中、リイーンツヴァイとアギトが風美と遊んでいた。

「風美～♪　リイーンお姉ちゃんですよ～♪」

「風美～、アギトだぞ、ア・ギ・ト。ほら、言ってみ？」

「……ダ～♪　あう～……？」

「あらあら。二人共、まだ風美は喋れないわよ？」

「せやで？　この前、やっとハイハイし始めたばっかりなんやから。」

二人して、風美の指を掴んだり頬を突いたりしながら、風美に話し掛けてた。
尤も、風美もそれを嫌がってはいない様で、不思議そうな顔をしながらも何処か楽しそうだ。
まぁ、シャマルとはやてが思わず、その会話（？）にツッコミを入れてはいたが。

「はやての言う通りだ。大体、名前を呼ばれるなら、アタシかはやてが先だからな！」

「「え～！　姉御（ヴィータちゃん）だけずりいぞ（ずるいですぅ）！！」」

「そうよ、私だって先に呼ばれたいもの。ねえ、シグナム、リインフォース？」

「「……む。まぁ、な。」」

突然、水を向けられ思わず本音が出る二人。ザフィーラは相変わらず会話には加わらない。

ヴィータとツヴァイとアギトは、風美の傍で口喧嘩を始め、シャマルとはやてがそれを見て笑ってる。シグナムとアインはそんな様子に微笑んでいる。

そして、ザフィーラが一人暇を持て余している風美の子守をしている。

……これが、現在の八神家の日常風景である。

今日も例によって例の如く、はやての腕の中にいて、そんな風景を眺めていた風美。

丁度そんな時、一人暇を持て余していた彼女がザフィーラを見付けた。

ザフィーラもそれを察して、自ら狼形態の儘近付いていった。

「あ～、ダ～♪　うぁ～あ～♪」

「ん？　ああ、またザフィーラと遊びたいん？」

「だぁ～！」

「はいはい。ほな、ザフィーラ。」

そう言うとはやては、ザフィーラの背中に風美を乗せた。
すると、風美は小さい身体ながらも、ザフィーラにしっかりとしがみ付いた。
非常に嬉しそうな風美の様子を見てから、はやてはザフィーラとアイコンタクトを交わした。
彼はそれに頷いてから、風美が落ちない様に位置を調整しながら少し外を歩き出した。
それに気付いたツヴァイとアギトも、二人の後を慌てて追っ掛けて行った。

彼女達を見送った後、ヴィータの口から思わずポツリと愚痴が出た。

「やっぱ何だかんだ言って、アタシ達の中じゃザフィーラが一番風美に好かれてるよな。」

「そう？　……まあ、確かにね。」

「ザフィーラには我々が仕事をしている間、ずっとあの子の御守を頼んでいるからな。
我々よりも懐かれるのは、自明の理だろう。」

ポツンと出たヴィータの言葉に、思わず同意の言葉を口にするシャマル。
そんな二人に苦笑しながらも宥めるリインフォースアインであった。
「そう気にするな、ヴィータ。我々とて懐かれていない訳でもあるまい？
まあ、ザフィーラには特に懐いてるという気は解らないでも無いが。」
「もう……。皆して、そないにザフィーラいじったらあかんよ？
そういうのは、本人のいる前でするもんや。」
そう言いつつ窘めるシグナムとはやても、若干苦笑気味。というか、寧ろもっとやれ的な？
ヴィータ達もそれに苦笑しながらも、軽く肩を竦めながらも同意している様だった。
と、暫し皆でそんな歓談をしていた。そして、丁度クスクス笑いが皆から漏れていた頃だった。
風美を連れたザフィーラを遥か後にして、ツヴァイとアギトが文字通り飛んで来たのは。
「「た、た、たたた、大変だぜぇぇぇ（ですぅぅぅ）～～～！！！」」
「!?　どないしたん、二人共。そないに慌てて。……風美に何かあったん？」

「ち、違う違う！　い、いや、違わないけどさ！　でも、とにかく違うんだって！」

「取り敢えず落ち着け、二人共。……一体何があった？　何をそんなに慌てているんだ？」

嫌な予感も過ぎったが、どうやらそういう危険な事態では無いらしい。

だが、其処迄この二人が慌てている理由に誰もが皆目見当が付かず、シグナムが、二人に落ち着く様に深呼吸をさせた。

その頃、ザフィーラが出掛けた時同様、風美を背中に乗せた儘、二人とはやて達の元に着いた。

と、ほぼ同時に、何とかチビッ子達も深呼吸を終え、少し落ち着けた様だ。

「……少しは落ち着いたようやね。で、どないしたん、一体？　ザフィーラ、何か知っとる？」

「む……いえ、その……何と申し上げれば宜しいのか……。」

何やら奥歯に物が挟まったかの様な物言いのザフィーラに益々訝しむ面々。

そんなはやて達に、ツヴァイとアギトがまだ若干興奮気味に訳を話した。

「はやてちゃん！　そんなのんびりとしてる場合じゃないのですよ！　一大事なのですよ！」

「??　いや、せやから、その一大事の事情を説明して欲しいんやけど……。」

「だから、大変なんだって、マイスター！　風美が……風美が……！！」

「そ、そうなのです！　ふ、風美が……！」

「風美？　風美がどないしたん？」

二人で頬りに風美が、風美が、とばかり言っている。
皆で思わず風美を凝視してみるが、特に変わった所は無い。
いつも通り、ザフィーラにしがみ付き嬉しそうに燥いでるだけである。
で、当の本人（？）は、少々困惑気味の顔を見せながらも、風美をあやしている。

「……何処もおかしい所は無いみたいだけど……。風美がどうかしたの？　二人共。」

と、シャマルが代表して小っちゃい二人に訊ねると、二人して再度深呼吸を始めた。
で、また或る程度落ち着いてから、二人同時に叫んだ。

「「ふ、風美が……喋ったんだよ（のですよ）！！」」

“……は？　……って、いやいやいや。”

その言葉を皆が理解するのに、たっぷり十秒は掛かっただろうか。
その後、皆して思わず同時にツッコミを入れていた。……すっかり毒されて……特に二名。

「幾ら何でもおかしいだろ!?　だって、まだ一歳にもなってないんだぞ？」

「そうよ。まだこの前、ハイハイを始めたばかりなのよ？」

「少し……所か、大分無理があるのではないか？」

「ボケるにしても、もうちょっとリアリティが無いと、私らにはうけへんなぁ。」

「……と思っていたが……どうやら、冗談で言ってる様子はなさそうだな……。」

全員に突っ込まれ、涙目になっていたチビッ子達だったが、
リインフォースが見るに見兼ねてフォローしてくれた様だ。
未だプンプンと身体全体で擬音を発してはいたが、経緯というかその発言の理由を話した。

「論より証拠！　百聞は一見にしかずだぜ！　なあ、風美。この犬、なんていう名前だ？」

と、アギトが風美に向かって、ザフィーラの名前を尋ねた。

皆が首を傾げながら、少し神妙に見ていると、風美は不思議そうな顔をしながらも、
まるで、問われている事に気付いた様に、すぐに笑顔になって答えた。

「だ～……あう？　……あ～い～あ！」

「「な（ね）！！　ちゃんと『ザフィーラ（あ～い～あ）』って言っただろ（言ってるですぅ）！？」」

“……って、いやいやいやいや。”

先程よりも硬直時間は短かったが、それでもツッコミを入れる迄、五秒程は掛かっていた。

「そりゃ、確かに聞こえなくはないかもしれへんけど……流石にそれはなぁ……。」

「そうだそうだ。幾ら何でも……なぁ？」

「うむ。私もそう思って、気の所為だ、と二人には言ったのだが……。それと、私は狼だ。」

結局この調子だったと言う訳らしい。と、ちゃっかり主張交じりで経緯を話すザッフィー。
で、案の定興奮冷めやらずの儘、急いで帰って来たらしいである。

だが、実は本当の問題はこの後からであった

「そんじゃ、いっちょ試してみようぜ。なあ、風美。アタシの名前、言ってみ？」

「おいおい、ヴィータ。流石にそれは無理だろう？　ザフィーラの事も偶然だろうし……。」

……が。

「あう？　……い～あ～♪」

「は、ははは、はやて！　い、今、風美が！　風美がアタシの事、『ヴィータ（い～あ～）』って！！？」

「いやいやいや、言うてへん、言うてへんよ、ヴィータ。ちょっと落ち着き？」

慌てながら興奮するヴィータを宥めるはやて。
それを横目で見ながら、シャマルも遊び心半分、期待半分で試してみた。

「それじゃ次は私ね。ねえ、風美。私の名前、分かる？」

「シャマルまでか……。シグナム、次は私も……などと言いはすまいな？」

「な、何をバカな事を……。揶揄う相手を間違っているぞ、リインフォース。」

と、リインフォースがシグナムを揶揄い半分、心配半分で話してい

ると、
風美がシャマルを認識したらしく、彼女に手を伸ばした。どうやら抱っこして欲しいらしい。
「あ、抱っこ？　はいはい。ん～♪　やっぱ小さくて可愛いわね～♪」
「でも、シャマルの名前は流石に言わねーな。やっぱ偶然だったか……残念。」
「まあまあ。まだ産まれたばっかなんやし、そう焦らんでもええやろ？」
と言っていた時だった。風美がじーっとシャマルの顔を見詰め、一言言った。
「う～……う？　あ～う～！」
「……え？　あ～う～？」
「あ～う～！　あ～う～！」
と頬りに、シャマルを見ながら『あ～う～！』とばかり連呼している。
その意味に、シャマルが気付くのには時間は掛からなかった。
「は、ははは、はやてちゃん！　い、今、風美が！　風美が私の事、『シャマル（あ～う～）』って！！？」

「いやいやいや、せやから言うてへんて。シャマルも少し落ち着き？」

「ほら！　やっぱり名前言ってるですぅ！　風美、もうみんなの名前言えるようになったです！　凄いです！　賢いです！　エライですぅ！」

「なー！　スゲェよな！　やっぱ、マイスターの子だな！」

「ああ、間違いねえよ！　スゲー！　風美、スゲー！」

と更に興奮気味に、はやてに抱かれ直された風美の周りを飛び回るチビッ子達＋ヴィータ。

未だ半信半疑気味ながらも、少しそんな気がして来た他の面々。

「いや、幾ら何でもそれは……なあ、リインフォース。」

「……あ、ああ。だが……どう思う？　ザフィーラ。」

「む……ぬ。私に聞かれても、困る。」

「でも、一番最初に名前呼ばれた……かも、しれないんでしょう？」

「む……だからと言って、私に話を振られても、困る。……主はやて……？　…ッ！！？」

と、三人してザフィーラに意見を聞こうとするが、振られても返答のしようが無い。

困り果て、はやてに助けを乞おうとはやてを見上げると、瞬間、背

筋に嫌な悪寒が走った。
何故なら……その時ザフィーラが見たはやての顔は、彼女にとって非常に面白い……。
つまり、当の本人にとっては最悪な悪戯が思い付いた時の表情だったのだから。

……我が主は、どんなに成長し例え大人の女性になり母になっても、幼少の頃から、面白い事への飽くなき探究心を持っている、その性格は微塵も変わっていない。
この瞬間、その事実を思い出し、改めて悟らざるを得なかったザフィーラであった。

そして、はやてはニヤニヤ顔を即座に隠し、何事も無かったかの様ないつもの笑顔で……、

爆弾発言をかました。

「ん～そやね～。でも、風美は最初に名前を呼ぶ程、ザフィーラの事好きやったんやんねぇ。
まさか、一歳にも満たへんのに、愛娘の嫁ぎ先が決まるとは思わなかったなぁ。」

「…ッッ！？　な、なな、何を……！　あ、主はやてぇっ！？」

その瞬間の皆の反応は（もしもその場にいたと仮定した）第三者から見れば、

非常に滑稽且つ恐怖以外の何物でもなかっただろう。
まるで、油を指していないブリキ人形の如く、首をギギギ……と動かし、
首と顔だけをザフィーラに向け、焦点の定まらぬ目で凝視する面々。
……やっぱ物凄く恐い。

「「……ザフィーラ？」」

「い、いや、わ、私は、別に……ッ！？」

「「ザ・フィ・ー・ラ？」」

「ぬ……ぐ……ッ！　あ、主はやて！！　……クッ……ええい！」

はやてに助けを求めるが、当の騒動の張本人は後ろを向き肩を震わせている始末。
主に見捨てられ（というか騒動の張本人だし）、最早逃げ場も失った彼は全てを諦め、
観念してその場に座り込んだ。煮るなり焼くなり好きにしろという意思表示の様だ。
それを確認した皆は、ザフィーラをかごめかごめでもするかの様に徐々に取り囲んだ。
……うわ、想像したらメッチャ怖っ！？　……されてる方はもっと恐い？　そりゃそうだ。

と、あわやと言う所で、はやてが目尻の涙を隠しもせずに拭きながら、
助け舟か更なる追撃か解らない援護をした。

「まぁまぁ。皆してそないにザフィーラ苛めたらあかんよ？
多分、カイト兄からもっと酷い目に遭いそうやし。」

「へ？　カイト？　何で？」

騒動の張本人の口から出た言葉とは思えないが、それはさておき。
何故か、唐突にはやての口からカイトの名が出た事で、皆思わず動きを止めはやてに注目した。

「ん～、多分なんやけどな。カイト兄、きっと物っっっ凄い親バカやで？」

「そうなのですか？」

「多分な。と言っても、私もカイト兄からそんな話は聞いてへんけど……。
まぁ何と無く、女と母親の勘や。」

「へ～。じゃあ、益々大変だな、ザフィーラは。年端もいかない大事な愛娘を取られたんだから♪」

急にニヤニヤ顔になってザフィーラを見詰める面々。
と、丁度そんなタイミングで、また風美がザフィーラに乗りたがっていたので乗せてやった。
案の定、キャッキャッ♪　と殊の外嬉しがって喜んでいた。

「……これはもう、決定的というか、ほぼ確定だな。」

「……勘弁してくれ。」

「ザフィーラ。不束な娘かどうか、まだ解らんけど、これからも宜しくな？
い・ろ・い・ろ・と♪」

「む……ぐ……。」

一瞬、思わず返事に詰まったザフィーラに、さらなる追撃を掛ける仲間達。

「ん？　返事はどうした、ザフィーラ？　まさか、『盾の守護獣』ともあろうものが、
主の命を聞けぬ……等と、我が儘を言うつもりでもあるまい？」

「そうだぞ、ザフィーラ。ほら、男なら潔くスパッと返事しちまえよ。」

「くっ……確と、承知、致しました……。」

“イエーイ（よしっ）！！”

先程迄の囲め囲めは一体何処へいったのか。

すっかり、大成功気分でハイタッチする八神家の面々。

その光景に、思わず溜息を付くザフィーラに、何が面白いのか嬉し

そうな風美。

今日も八神家は平和である。

とある八神はやて（よめ）の子育て日記（ダイアリー）その？（後書き）

如何でしたでしょうか？

ね？　普通の長さだったでしょう？　……おっかしいなぁ。
大体二千～三千字ぐらいで終わらせるつもりだった筈のに……どう
してこうなった。

と言う訳で、風美の成長日記。今後も御楽しみに？
……後、そこ。この団欒にカイト達要らないとか言っちゃダメ！
所で、次は何歳ぐらいの話がいいとか、御要望ありますか？　とい
うか、寧ろ下さい。御願いします。ｍ（＿＿）ｍ

尚、残念ながら私は子育ての経験はありませんので、何処かおかし
い箇所等が御座いましたら、
どうか遠慮無く、御指摘頂ければ非常に有難いです。

さて、前書きで書きましたアンケート……というか、皆様に御聞き
したい事が御座いまして。
それは、解り易く言えば、次の話についてです。

一応、現在の予定では、次の話から『魔法先生ネギま！』編に行く
つもりなのですが……。
実は未だ完結しておらず、中途で止まってる話があるのです。
ちょっと話の流れ上、中々言い出し難かったのですが……それが、

『幕間（数字）』の話です。
実はこの話、ネギま！編が終わった後、ちゃんと『グランギルズ』に話が続く様に書いているのですが、
未だ途中で書き止まっており、ちゃんと完成させないと色々とマズイのです。それはもう後々色々と。

とgdgdと書きましたが、一番何が言いたいかというとですね。

『ネギま！』編に行くのは少し待って頂いて、数話程『幕間』を書いても宜しいでしょうか？

と言う事です。現在の計算では五～六話ぐらいで済むかなぁ？　という感じなのですが……。
と言う訳で、アンケートとしては以下の中から選んで頂ければ幸いです。

1．は？　幕間だぁ？　書きたいならさっさと書けや！　んで、さっさとネギま！行けや！
2．は？　幕間だぁ？　んなもんどうでもいいから、さっさとネギま！に行けや！
3．は？　幕間だぁ？　知ったこっちゃねぇよ！　好きに書けや！
4．その他。具体案・抽象案等、何でも構いません。

要約すれば、1：容認、2：不必要、3：どっちでも、4：その他になります。
尚、活動報告にても御聞き致しておりますので、感想で書くのは違う・癪に障るという方。
どうぞ、そちらにて番号のみでも構いませんので、一言頂ければ非常に有難いです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9043l/

無限にして無窮なる旅人

2011年12月2日17時59分発行